ヘタリア学園

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヘタリア学園

【Ｎコード】
Ｎ３５４１Ｄ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
天下無敵のヘタレイタリアと彼に振り回されるドイツ、寡黙で知的だけれど何処か天然の日本。学園ヘタリアのファンフィクションです。漫画を小説にしたものもオリジナルも両方あります。原作のあるお話には☆マークをつけています。ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｈｉｍａｒｕｙａ／ｔ．ｈｔｍｌ

第一話　ドイツとの出会い　☆

第一話　　ドイツとの出会い

第一次世界大戦中。イタリアとドイツは戦闘状態にありました。
厳しくありながらも整った軍服に身を包んだ端整で引き締まった顔の長身の青年。金髪碧眼でその金髪を丁寧に整髪料で後ろに撫で付けています。彼がドイツです。
「さて」
ドイツは周囲に注意を払いながら呟きます。
「相手はイタリアか。かつて栄華を誇ったローマ帝国の孫」
イタリアはやっと一つになったような相手でしたが。あの偉大なローマ帝国の孫なのです。ドイツはそれで彼が強いと思っていました。
「油断はできないな。むっ!?」
ここでドイツは目の前でやたらと揺れている箱に気付きました。
見ればそれはかなり不自然な揺れ方をしています。
「何だこれは」
ドイツはその箱を見て呟きました。見れば箱には『イタリア蜜柑』と書かれています。
「・・・・・オレンジのことか?」
そう思いましたがよくわかりません。トラップかとも思いましたがとりあえず開けてみることにしました。
「これは・・・・・んっ!?」
「うぎゃあああああ!!」
中を開けた途端に叫び声です。何と中にはデザインだけはいい軍服を着た優男がいるではありませんか。背もそんなに高くなく茶色い髪をセンター分けにしていて左側が巻いています。顔はいいのに実に締りのない顔をしています。
「イタリアか!?ひょっとして」

「ドイツじゃーーーん、御免なさい御免なさい！」
イタリアは自分から謝ってきました。まだドイツが何もしていないのに。
「俺まだ童貞だし撃っても楽しくないよ！」
「っておい」
ドイツの言葉も聞かずに泣き叫ぶばかりです。
「だから許して！何でもするから撃たないでーーーーーっ！」
挙句にはその場で泣き伏す始末です。戦争どころではありませんでした。
「あのさ、いやその・・・・・・」
ドイツも何と言っていいかわかりません。何とこれが二人の付き合いのはじまりでした。

第一話　完

２００８・１・１

第二話　捕虜にしてみた　☆

第二話　捕虜にしてみた

あまりにもイタリアが泣き叫ぶのでさっぱり戦争にならなくて。ドイツはイタリアをあっさりと捕虜にしてしまいました。流石にドイツもびっくりです。

「とにかくだ」

捕虜にしたイタリアに対して言います。

「一応捕虜にしてやる。だから大人しくするんだぞ」

「うん、いいけど叩かないでね」

今まで泣き叫んでいたのが嘘みたいに明るくなっています。

「それだけは御願いだよ」

「ああ。とにかく来い」

「うん。ところでさ」

イタリアはドイツに尋ねてきました。

「何だ？」

「ドイツの料理は美味しい？」

「・・・・・・・・・」

これにはドイツも沈黙してしまいました。

「どうなの。そこは。女の子可愛い？」

「・・・・・・・・・」

もう相手にする気もなくなって無視することにしました。そうすると。

「おーーーいおーーーい」

ドイツの背中をごすごす叩きながら尋ねてきます。

「聞いてる？おーーーいおーーーい」

「・・・・・・・・・」

当然叩かれたらいい気持ちはしません。少し頭に来て銃を向けてみると。

「御免御免！」
いきなりまた泣き叫んで謝ります。
「銃向けないで。御免って！」
こんなやり取りを続けながらとりあえず捕虜収容所まで連れて行きました。何かドイツはそれだけでくたびれるものを感じていました。

第二話　完

２００８・１・１

第三話　捕虜にしてみたらしてみたで　☆

第三話　捕虜にしてみたらしてみたで

「それでイタリアを捕虜にしたのだな」

「はい」

ドイツはとりあえず捕虜にしてみたイタリアのことを上司であるカイゼル髭の方に報告しました。

「そうですが」

「わかった。じゃあ一応監視しておけ」

「はあ」

何故かドイツの返答ははっきりしないものでした。それにはちゃんと理由がありました。

イタリアが何もしないのです。日がな一日ソーセージにモンク言いながらグータラしたり歌ったりしているだけです。それだけなのです。たまりかねたドイツが寝転がって恋人の作り方という本を読んでいる彼に尋ねました。

「御前・・・・・働くという気はないのか？」

「や、やだなあちゃんとあるよ」

彼は一応はこう答えてきました。

「今ちょっとある物がないだけで」

「そのある物とは何だ？」

そうイタリアに問います。すると返答は。

「そうだなあ。まずは美味しいパスタでしょ」

それにはじまって。

「あとオリーブオイルとワインが欲しいなあ。あとあと隣に可愛い女の子がいて欲しいしそれからそれから」

「・・・・・・・・」

ドイツはまたしても呆れました。とりあえずその第一次世界大戦もその後のドイツにとってとても大変なことも何もかも色々終わっ

たので半島に放り返したドイツでした。なお全部あげても動かないイタリアでした。

第三話　　完

２００８・１・３

第四話　俺も見せてやる　☆

第四話　俺も見せてやる

こんなイタリアとの出会いでしたがそれでもドイツとイタリアは結構仲がよかったのでした。時は移りドイツは欧州のあちこちに喧嘩を売っては勝ち破竹の勢いでした。それで世界の話題の的になっていました。

「ドイツが数々の強国の軍を破り破竹の勢いで進行中、ドイツの軍事力は」

「げ、ドイツじゃん」

お昼に大好物の一つピザを食べながらテレビでニュースを聞いていたイタリアは親友（押し掛け）の活躍を聞いてこう思うのでした。そしてそれはすぐに決心に移ったのでした。

「ドイツばっかずるい！俺だって活躍したいのに！」

「よーーし！俺もイタリア魂見せてやる！」

軽く決意した彼はすぐに行動に移るのでした。この時ドイツは色々とこれからのことを自室で考えていました。

「ふむ、最近東の最強国日本ともいい感じだな」

亜細亜の果てにある島国ですが寡黙かつ知的でありながらその戦闘力を高く買われている国です。向こうからのラブコールに応えた形で仲良くなっていたのです。

「ドイツもこれで安泰かな」

そう思った矢先でした。それを壊す電話が。

「むっ！？日本かな」

だったらよかったのですが。何と電話をかけてきたのは。

「いようドイツ」

聴き慣れたくなかったあの軽い声でした。

「俺御前の側で参加しようと思うんだ」
「また御前か・・・・・・」
電話の主はイタリアでした。こうしてドイツの安泰は虚しく消え去るのでした。

第四話　　完

２００８・１・３

第五話　砂漠でも　☆

第五話　砂漠でも

イタリアはグルメです。とにかく何時でも美味しいものがないと動かないのです。もっとも彼が凄いのは美味しいものがあったとしても動かないのですが。

そんな彼が困ったとの報告が入りました。ドイツは大慌てです。

「あの馬鹿、何をやったんだ！」

「砂漠だ、ドイツよ」

チョビ髭のとてもおっかない顔の上司が彼に言います。

「水を持って行け、いいな」

「水をですか」

「そうだ。どうやら水不足で渇きに苦しんでいるそうだ」

上司はそうドイツに言います。

「友邦を救わないのは偉大なる我が民族の栄光に関わる。いいな」

「は、はい」

今のドイツの上司はとにかくドイツの優秀性を盲信していてそれを害することは決して許さないのです。それに誰が見てもはっきりとわかるとても怖い人なのです。

「では行くのだ、すぐにな」

「わかりました」

こうして大量の水を持って砂漠に行くと。そこにはパスタを持って倒れているイタリアがいました。

「あっドイツ来てくれたんだ」

「一体何があったんだ、イギリスかエジプトか？」

「いや、それがさ」

ここで後ろに転がっている鍋を指差します。

「パスタを砂漠で茹でていたらさ。水がなくなって喉が渇いて。ワインもなくなって」

「待て」
ドイツは思わずイタリアに突っ込みを入れました。
「砂漠でパスタを茹でていたのか！？御前は」
「うん。それがどうかしたの？」
「・・・・・駄目だこいつは」
またしてもこう思わざるをえないドイツでした。この後散々怒りながらも結局は持って来た水をあげるドイツでした。するとイタリアは大喜びでまたパスタを茹でるのでありました。

第五話　　完

２００８・１・３

第六話　遅れてきたヒーロー　☆

第六話　遅れてきたヒーロー

イタリアの参戦を聞いたドイツは全然嬉しくありませんでした。
それどころか友達になっていたハンガリーに頭を抱えながら電話をしていました。
「ああ、ハンガリーか」
本当に頭を抱えています。
「ちょっと」こっちが色々とやばいことになってきたんだが
「ドイツーーーッ！」
その後ろから色々とやばいことの原因の声が聞こえてきました。
「参戦に来たよーーーっ！」
言うまでもなくイタリアです。彼はドイツの苦悩なぞ知ることもなく能天気です。
「というわけでドイツこれから宜しくーーーっ！」
びしっと一応格好はつけますが。
「二時間五十六分三十四秒九十遅れたことに対する謝罪はないのか？」
「わはーーー何時の時代もヒーローは遅れてやって来るのさ！」
電話を切りながら問うドイツに対して相変わらず能天気なままです。
「思ったんだけれど俺とドイツが組んだら無敵な気がしない！」
何処からか出したピザを食べながらもせせせと笑ってドイツに言いますがドイツは冷静なままで彼に尋ねるのでした。
「それでだ」
「うん」
「御前準備はできているんだろうな」
問題はそれでした。ドイツはそれを真剣に聞いたのですが。
「何が？」

しかしイタリアの返事は。相変わらず能天気にピザを食べながらこれでした。これにはドイツも言葉を失うばかりでした。

第六話　　完

２００８・１・４

第七話　イタリア式準備　☆

第七話　　イタリア式準備

とりあえずドイツに急がさせられて準備をさせられたイタリア。
十日後にやっと戻って来ました。
「ドイツーーーー、やっと準備できたよーーーー」
色々持って来ながらドイツに言います。本当に荷物が多いです。
「ちょーーー疲れたーーーーー」
「・・・・・・全く」
やっと来たイタリアに対してドイツはこれまた呆れていました。
「何で準備に十日もかかるんだ？」
「かからないの？」
「かかるのか？まあいい」
とりあえずはドイツもやることがあります。それは。
「見せてみろ」
本当に準備しているかどうかのチェックです。全然安心していません。
「まずはね」
そうして次々に出してきたものは
「俺が大事に取っておいたワインでしょ。後トマトも」
「・・・・・・トマトもか」
「何処でもトマトが食べられるよ」
「そ、そうなのか」
イタリアはとにかくトマトが大好きなのです。他にはチーズに生ハムにと色々ありますけれどそうしたものも全部持っています。
「他には？」
「あと白旗」
何故か二枚あります。
「これ俺のお手製なんだよ」

参りましたイタリア、もう一枚には参りましたドイツ、と書いてあります。
「これはドイツの分だよ」
「何で負ける気満々なんだ・・・・・・」
そう呟きましたがここでイタリアが持っている大きなカバンに気付きました。
「ちょっといいか」
「何が？」
「そのカバンの中身を見せて欲しいのだが」
「いやいやいや普通普通！」
カバンと取ろうとするドイツに対して必死に抵抗します。
「普通のものしか入ってないから」
「じゃあ見せてみろ」
「うん。ほら、これ」
出してきたのはパスタ一式とお鍋とスプーンでした。それを見てまたしても呆れ返るドイツでした。

第七話　　完

２００８・１・４

第八話　日本とイタリア　☆

第八話　　日本とイタリア

黒髪を奇麗に整え黒い端整な軍服に刀を持った少し小柄な黒い瞳の若者。その若者が今ドイツの家にやって来ていました。

「あの、ドイツさん」

「ああ、日本か」

この青年こそ日本。長い間鎖国をしていましたがそれを止めてから日の出の勢いで勢力を伸ばし今では太平洋の強国の一つです。何気にドイツも注目して友達にした頼りになる青年です。今日はこの彼とイタリアを交えて三人で話をするつもりだったのです。

「よく来てくれた。入ってくれ」

「はい」

日本はそれを受けてドイツの家に入ります。そうして日本のお茶を飲みながら最後の一人を待っているのですが。

「イタリア君でしたね」

「ああ」

「まだでしょうか」

「済まん・・・・・」

ドイツはまずは暗い顔で日本に謝りました。彼が飲んでいるコーヒーはもう冷めています。

「これがいつもなんだ」

「そうですか」

（どういうことだ）

心配性のドイツは考えます。

（いつもは二時間遅れ程度なのに今日は五時間でもまだ来ない）

つまりいつもの倍以上なのです。

（まさかイギリスの奇襲に遭っているのでは）

「ねーーねーー」

しかしここであの聴き慣れた声が。
「今暇ーーー？」
「むっ、あの声は」
「その服可愛いね。何ていうの？」
見れば日本と一緒に来た日本の家の和服の娘さんにイタリアが声をかけています。
「よかったら今度一緒に遊びに行かない？」
日本の女の人をナンパしています。それを見た日本は。
「まさかあの人ではありませんよね」
「お、御前何やってんだ！」
実に最悪の調子でそれを肯定してしまう間の悪いドイツでした。
「イタリアーーーーッ！」
これが記念すべき三人の初顔合わせでした。またしても苦労を抱え込むのはドイツですが。

第八話　　完

２００８・１・４

第九話　凄く真面目そうな人　☆

第九話　凄く真面目そうな人

「まあ改めて紹介する」
ドイツはとりあえずイタリアを叱ってから彼に日本を紹介するのでした。
「これから同盟を組む予定の日本だ」
「はじめまして」
日本の方からもイタリアに挨拶をしてきた。
「はじめまして、イタリアです」
イタリアはドイツに殴られた後を我慢しながら日本に挨拶を返しました。
「ちゃおーーー」
（うわーーー、どうしよう）
それと同時に心の中で喋るのでした。
（日本って噂通りに真面目そうな人だなあ）
その落ち着いた外見を見て思うのでした。確かに凄く真面目そうな人です。
（変なこと言ったらまたドイツに怒られちゃうだろうなあ。うーーん、何て話し掛けようか）
そんなことを考えていたのですがここで。当の日本が声をかけてきました。
「あの、ええっと」
「何かな」
「私かねてから貴方の絵や文学に感銘を受けていました」
「ええっ！？」
これはイタリアにとって驚きでした。
「本当に！？」
「はい、正直今日御会いできて嬉しいです」

実はイタリアは戦争以外は結構できる子なのです。とにかく戦争以外は得意なのです。それで日本もイタリアに興味を持っていたのです。これはイタリアにとっては非常に嬉しい誤算でした。
「えへへ、嬉しいな。そういえば」
「はい」
二人はこのまま楽しい話に移ります。
「俺も日本の歴史大好きだよーーーー」
「ええっ!?」
今度は日本が驚く番でした。
「新撰組とか白虎隊とか」
「本当ですか!?」
二人はこのまま非常にいいムードになっていきました。それを見てドイツは。
「何とか上手くやっていけそうだな」
ここでも気苦労ばかりがあるドイツでした。

第九話　完

２００８・１・６

第十話　気前よくプレゼント　☆

第十話　気前よくプレゼント

「おお、そうかそうか」
「そうなんだよーーーー」
イタリアはお家に帰って日本とのことを上司に上機嫌で話しています。二人で向かい合ってスパゲティにワインを楽しみながら話しています。
イタリアの上司は泣く子も黙ると言われているベニトおじさんですが。実は結構気さくで陽気ないいおじさんであったりします。イタリアに対しても普段は実に鷹揚です。
「それはいいことだ。実はわしもな」
「うん」
「日本のことは前々から気にしていたのだよ」
「そうだったんだ」
「面白い国ではないか」
持ち前のその鷹揚さをここでも発揮しています。
「実にな。それで御前と仲良くなってくれたことは」
「よかったんだね」
「実に素晴らしい」
赤ワインを一杯ぐびりとやってからまた上機嫌で言うのでした。
「それを聞いて安心した。それでだ」
「どうするの？」
「プレゼントをしなくてはな」
にこにことした顔で言います。
「御前が届けに行けばいい。我がイタリアの素晴らしき多くの文学作品を」
「ええっ、本当にいいの！？」
「何、構わない」

気前のいいことでも知られているおじさんです。ここでもそれは同じでした。

「それでは明日早速行け。いいな」

「うん、わかったよそれじゃあ」

こうしてイタリアは日本にイタリアの誇る文学作品を大量に持って来たのですがここで問題が起こっていました。しかもイタリアにもベニトおじさんにもわからないところで。

「収納場所どうしましょう・・・・・・」

その本の量があまりにも多かったのです。積み上げられた本を前に考え込む日本でした。

第十話　　完

２００８・１・６

第十一話　文化交流で気落ちして　☆

第十一話　文化交流で気落ちして

かくして日本の家にそのまま遊びに来たイタリアでした。日本の家の図書館で読書三昧です。

「やっぱりいいよね」

今見ているのは日本の絵画でした。

「日本の絵画ってさ。独特で」

「独特ですか」

「うん、浮世絵なんか特にね」

イタリアは側にいる日本にそう応えます。浮世絵の派手な色彩を楽しみながら。

「俺大好きだよーーーー」

「イタリア君にそう言って貰えると恐縮です」

日本も心なし嬉しそうです。広い何処か西洋と東洋の趣きが入り混じった図書館は実に静かです。二人で日本の絵画を見て楽しんでいるのでした。

「その辺りは絵画コーナーなので好きなように見て下さい」

「有り難う」

イタリアは日本の言葉を受けてさらに本を探します。

「じゃあ・・・・・って。ええっ！？」

しかしここで何かの本を見て。激しいショックを受けてしまったようです。

「駄目だ、勝てないよ」

イタリアの元気が急にしぼんでいっています。そのあまりもの落ち込みように日本も気付いて声をかけるのでした。

「あれ？どうしたんですか」

「・・・・・ちょっとね」

「ちょっとって」

どう見てもあまりの落ち込みようが気になった日本がイタリアの前に置かれている本を見て気付いたことは。

それは日本の家の春画でした。それを見てハッと気付く日本でした。さしものイタリアもこれにはあまりに刺激が強くまた適わないと思ったようです。

第十一話　　完

２００８・１・６

第十二話　喧嘩を売ってみた　☆

第十二話　喧嘩を売ってみた

その強さで破竹の進撃を続けるドイツでしたがイタリアは何もしていません。というよりかはドイツとしても何もしてくれなくていいのですが。

けれど彼はこのことにいささか不満でした。やっぱり彼も目立ちたいのです。

「ドイツは順調に勝ってるのに俺何もしてねーや」

自分でそのことに気付きました。手に欧州の地図を手に取ってみています。

「気合入れて俺もアフリカに行こうかなあ」

そう気紛れ的に考えて本当にアフリカに行きました。それで丁度ラクダの子供の世話をしている白い服を着て浅黒い肌の無口なエジプトの前に来ました。

「というわけで早速エジプトに来てみたよーーーー」

けれど何故かエジプトは特にイタリアを見ていませんでした。ラクダの世話をしながら後ろのピラミッドを見ているだけです。

「おいそこのエジプト！」

「んっ！？」

ここでやっとイタリアに気付きます。

「俺と勝負しろ！」

「ああ」

それに応えて小枝を出してきました。それでイタリアをペチペチと叩きだします。

「ええっ、ちょっと痛い痛いよ！」

それだけでイタリアは怯みだします。

「木振り回したら危ないよ！いたたた痛いよ！」

もう完全に負けモードです。

「御免なさい御免なさいさっきの謝るからあ！」
　このままやられっぱなしになりました。ぽこぽことこづかれて遂には。
「うわーーードイツーーードイツーー助けてドイツーーー」
「あーーもーー・・・・・・」
　それで忙しいのにわざわざエジプトまで行ってイタリアを助けるドイツでした。彼の気苦労は本当に消えることがありません。

第十二話　　完

２００８・１・８

第十三話　気付いた衝撃の事実　☆

第十三話　気付いた衝撃の事実

何とかエジプトでイタリアを助けたドイツですがその後もドイツはイタリアがヘマする度に西へ東へ奔走です。本当に忙しいです。

「ドイツーーー助けてーードイツーーー」

「ああ、わかった」

「ドイツお腹空いたーーードイツーーー」

「よし、待ってろ」

本当に東奔西走です。彼も忙しいのに大変です。これで不満が溜まらない方がおかしいです。ただでさえおっそろしい上司に周りは個性派ばかりという面々で気苦労が絶えないというのに。ドイツもいい加減不満が溜まっていました。

「あ・・・・・あの野郎」

それで一人になると言うのでした。

「砂漠でパスタ茹でるわ弓に負けるわ本っっ当に弱過ぎだぞ」

最早ここまで来ると確かに素晴らしいです。

「しかもその度俺が尻拭いだし」

そのことで不満が遂に爆発しました。

「くそっイタリアめ！腹の虫が収まらん！」

それで懐かしの黒電話を出しました。

「他の奴に愚痴こぼしてやる！」

いささか些細な方法を選ぶことにしました。ところがここでドイツは恐ろしいことに気付きました。

「イタリアしか友達いないし・・・・・・」

非常に残念なことにそうだったのです。

「日本は何考えてるかわからんし・・・・・・」

実は友達が非常に少ないドイツでした。そのことに気付いてもっと友達を持とうと思うのでした。とりあえず上司がああした人でも。

第十三話　完

2008・1・8

第十四話　見せてやるイタリア魂　☆

第十四話　見せてやるイタリア魂

今度は上司の命令でロシアと戦うことになったドイツ。戦いに行く前にイタリアに声をかけておくのを忘れません。

「じゃあ俺はロシアに行くからな」

「えっ、ロシアに！？」

「そうだ」

驚くイタリアに対して告げます。

「後はちゃんとやるんだぞ」

（本当に大丈夫なのか、こいつ）

心の中ではこう思っていますがそれでも行きました。案の定イタリアはドイツに対してこういいます。

「そんなあ！俺一人は嫌だよお」

「仕方ないだろ。日本は遠いしハンガリーもフィンランドもロシアに行くんだからな」

こう言い残してロシアに向かうドイツ。イタリアは一人になってしまいました。

「ドイツーーーー一人は怖いよ置いていかないでえ」

一人になってメソメソ泣き出します。

「イギリス怖いよーーフランス兄ちゃん怖いよーー俺一人じゃやられちゃうよーーー」

ところがあんまり泣いているのでベニトおじさんに怒られて。それであらためて決意『させられる』のでした。

「いや、俺だってドイツに頼りっぱなしじゃないぞ！」

何だかんだでキッと誓うのでした。

「イタリア魂見せてやる！」

そうして砂漠のイタリアでイギリスの部下達に対してすることは。

「何だありゃ・・・・・・」

気合を入れて白旗を振るのでした。やっぱりイタリアはイタリアなのでした。

第十四話　　完

２００８・１・８

第十五話　捕虜になっちゃった　☆

第十五話　捕虜になっちゃった

何かドイツは捕虜になってしまいました。ところが強情なドイツはどれだけ殴られても痛めつけられても全く何も言いません。いい加減痛めつける方が頭にくる程でした。

「糞っ、ドイツの野郎幾ら殴っても吐かないな」

「どうする？」

痛めつける方も仕事です。彼にばかり構ってはいられません。ところがここで彼等にとって実に都合のいいことが起こりました。

「しょうがないな。今イタリアも捕まったし」

「あ・・・・・・・」

「あ・・・・・・」

丁度ピザを食べながら連れて来られたイタリアは痛めつけられたばかりのドイツと会いました。ドイツはすぐにイタリアに何があっても言うなと思ったのですが。

「イタリア待っ・・・・・・」

「御免なさあい！」

何と何もしないうちから泣きだしました。

「何でも言うから叩かないでえ！」

「・・・・・・いや、言うなら何もしないから」

「・・・・・・泣くなよ」

まさか何かを聞く前から泣き出すとは思わなかったので聞く方も驚きでした。とりあえずイタリアから全部話を聞いたので二人を収容所に入れたのでした。

その中でドイツは。イタリアに対して言うのでした。

「御前と同盟組んで本当によかったよ」

「俺もそう思うよ」

深刻な顔で落ち込んでいるドイツに対して満面の笑顔のイタリア。

実に見事なコントラストでありました。

第十五話　　完

２００８・１・１０

第十六話　弱さの秘密　☆

第十六話　弱さの秘密

ドイツは常に思うことがありました。それはやっぱり。
「何故こいつはこんなにも弱いんだろうか」
イタリアを見て思うのでした。今二人は一緒に歩いています。
「この前すごいまずいピザを食べたんだあ」
イタリアはドイツのことなんか全然気付かずに能天気に食べ物の話をしています。
「作ったのがイギリスでさあ」
（かのローマ帝国の血を引いている筈だから元は悪くないのにな・・・・）
考えれば考える程わかりませんがイタリアは気付いていません。
するとそのイタリアから声がかかってきました。
「ドイツ見てーーー」
「んっ？」
「あそこで何かやってるよーーー」
「何だ？」
見れば学者さんが色々言っています。聞いてみると。
「トマトには先頭意欲を減退させる成分が含まれており」
その学者さんはそう皆に言っているのでした。
「継続的に摂取すると『ヘタレ』になるという研究結果が」
「うわーーーあのおっちゃんアホなこと言ってるう」
「・・・・・成程な」
けせせと笑いながらそのトマトがたっぷりと入ったピザを食べるイタリアの横で。納得した顔でメモを取るドイツでした。実は弱さの理由はそこだったのでした。イタリアのあまりもの弱さの原因がわかってとりあえずは納得するドイツでした。けれどそれでどうにかなるかというとそうはならないのが世の中の辛いところです。

第十六話　完

2008・1・10

第十七話　そういえばあの人は

第十七話　そういえばこの人は

ドイツの上司の人はとにかく滅茶苦茶怖い人なのですがこの人は意外にも菜食主義者です。お肉もお魚も食べませんしお酒も煙草もしません。ところが極めて好戦的なことばかり言っているのでした。

「戦えドイツよ！」

これがいつもの口癖です。

「優秀にして偉大なるゲルマンの誇りを胸に！」

「・・・・・何故こんなにも違うんだ」

彼はここでイタリアのことも考えるのでした。

「この人はトマトだってかなり食べているのにどうしてあいつと全然違うんだ」

そう考えて不思議で仕方なかったのですがここにも秘密がありました。それは。

「ドイツよ。あの曲を聴くぞ」

「あれですか」

「そうだ、あれだ」

ドイツに指示して出させたレコードはワーグナーのものでした。それを聞きながらこの人は悦に入るのでした。

「聴くのだ、この偉大な曲を」

聴いているのは最初はワルキューレの騎行、タンホイザーの大行進曲、ローエングリン第三幕前奏曲等です。上司のお髭のおじさんは聴いているうちにやけに好戦的な笑みを浮かべるようになっていました。ワーグナーの名物である合唱曲なんかを聴いているともう完全にあれになってきていて。遂には。

「そうだ。ドイツは負けはしないのだ。このドイツは」

「・・・・・あいつもワーグナーを聴いていれば変わるのだろうか」

そんな上司を見てふと思うドイツでした。さてさてどうなるか。
あまり期待はしていないのですがそれでも少し考えてみるのは儚い夢であります。ドイツもドイツで困っているのです。

第十七話　　完

２００８・１・１０

第十八話　ワーグナーとヘタレ

第十八話　ワーグナーとヘタレ

イタリアにワーグナーを聴かせてみることにしたドイツ。早速ドイツの中にあるバイロイトという場所に連れて行きました。何といってもワーグナーはここなのですから。

「うわーーー、ここでワーグナー聴けるなんてーーー」

バイロイトの歌劇場に入るとイタリアはもう上機嫌です。上演がはじまる前からはしゃいでいます。

「ワーグナーは好きだったのか」

「大好きだよ」

「そうか」

（それでもあれなのか。まあいい）

とりあえず聴かせることにしました。これでイタリアが強くなれば言うことはなしですから。

それで聴かせてみました。それからすぐに。

イタリアはフランスと喧嘩です。ところがすぐに。

「ドイツーーーードイツーーーー」

「・・・・・駄目なのか」

あっさりフランスにやられてしまいました。それもボロクソに。

「助けてーーーー助けてーーーー」

「ああ、わかった」

（やっぱり駄目なのか？）

心の中で考えながらイタリアを助けるドイツでした。結局ワーグナーを聴いてもイタリアはイタリアのようです。ドイツの上司とはまた違うのかどうか、はたまたそもそもあの上司は何か特別な人なんだろうか。ドイツはこれについてもまた考えてしまうのでした。

「何故なんだ、トマトだけじゃないのか」

また考えることになったドイツ。彼の悩みは本当に尽きません。

第十八話　完

2008・1・14

第十九話　イタリアの音楽

第十九話　イタリアの音楽

結局ドイツの予想といいますか淡い期待は裏切られてしまいイタリアの弱さはワーグナーを聴いても治りませんでした。あれこれとイタリア自身やワーグナーやドイツの上司のことまであれこれと色々と考えてもわからないままのドイツでしたがここでイタリアから誘いがありました。

「今度はさ、俺の国のオペラを聴いてよ」

「御前の国のか」

「そうだよ、やっぱりオペラはうちじゃない」

イタリアといえばオペラです。とにかく戦争以外には強いイタリアは音楽も強いのです。特にこのオペラはイタリアが世界に誇っている程です。他には絵も文学もファッションも歴史も。意外と何でもかんでも恵まれている幸せ者なイタリアであります。

「だからさ。今度ね」

「わかった。ではな」

こうしてドイツはイタリアのオペラを聴きに行ったのですが。ここであることに気付きました。それはこの劇場の中にありました。そう、それは。

「ブラボーーーーーッ！！」

劇中も終わってからも何かあれば叫びます。それに熱中することといえば戦争の比ではありません。

イタリアも同じです。彼なんかは舞台に花束を投げて叫んでいる程です。

「今度デートしようよーーー！」

「まさかな」

その熱狂振りを見てドイツはまたしても考えたのでした。

「戦争の分の元気をここで使い果たしているのだろうか」

そうも考えるドイツですがやっぱり結論は出ません。それで今日もまたボロ負け続きのイタリアなのでした。

第十九話　　完

２００８・１・１４

第二十話　態度が違う

第二十話　態度が違う

ある時のお話です。欧州どころか世界の台風の目、いやある人は魔王とまで呼んでいるドイツの上司のところにとんでもない報告が舞い込んできたのでした。

「大変です！」

ドイツが慌てた様子で上司に報告します。一旦部屋に入り敬礼してからの報告はやはりドイツと言えるものでありました。

「どうしたのか」

流石のドイツも少し引いています。何しろとても怖い上司なので。とりわけその鋭い目がかなり印象的な人です。

「イタリアが参戦してきました」

「何だ、そうなのか」

上司はそれを聞いても全然驚いたところはありませんでした。そうしてドイツに命じたことは。

「話は簡単だ」

「どうされるのですか？」

「イタリアの方に一個師団向かわせろ」

そう言うのでした。

「それで迎撃せよ。いいな」

「いえ、それが」

ところがドイツはここで言います。

「違うのです」

「違う？どうした？」

「我々についたのですが」

「何っ！」

それを聞いた上司の驚いたことといったら。一瞬その口髭が顔から離れたのではないかと思えた程でした。

「それは大変だ！」
「は、はい」
ドイツはまた上司の言葉に応えました。
「すぐに十個師団を応援に向かわせろ！いいな！」
「・・・・・わかりました」
上司の人もイタリアについてはドイツと全く同じことを考えているのでした。

第二十話　　完

２００８・１・１４

第二十一話　集え！！正義の下に　☆

第二十一話　集え！！正義の下に

「連合国諸君！」

ヘタリア学園内の一室で強い声が響き渡ります。学園の中は白を基調としてブラウンの柱があります。何処か教会を思わせる壮麗な建物です。

「野蛮な枢軸国をこのままにしてはおけないだろう！」

その声はまだ叫んでいます。何かを強烈に訴えるように。

「今こそ我々連合国が世界を救う時だ！」

その部屋は何かの作戦室のようです。五つの席がありそこの上座で立っている金色の奇麗な髪に青い目に丸眼鏡をかけた若者が訴えています。ネクタイの軍服が実に似合っています。彼が最近学園内で頭角を現わしているアメリカその人です。

「正義の為に共に戦おうじゃないか！」

彼の訴えは続きます。彼は何かと派手好きで尚且つ正義感が強い性格で知られています。まあそれはそれでいいと言えばいいことなのですが。

「悪の枢軸国に正義の鉄槌を！」

そう叫んで黒板を叩きます。見ればそこにはドイツ、日本、そしてイタリアが書かれているのですがどうもあまりそれぞれのキャラにアメリカ独自の感情が見られています。

「とりあえず何と弱そうなイタリアから」

見れば何と。ドイツと日本はともかくとしましてイタリアにはイタリアという名前ではなく『ヘタリア』と書かれているではありませんか。どうもアメリカもイタリアは弱いとわかっているようです。

第二十一話　完

2008・1・17

第二十二話　僕はヒーロー　☆

第二十二話　僕はヒーロー

アメリカは続いて会議の参加者達に説明をはじめます。今度の話の内容は。

「では今回の戦いでの各国の役割分担を決めようと思う」

かなり重要な話です。参加者達の顔も真剣なものになります。

「読み上げるから手元の紙を参考にしてくれ給え」

「ゴクリ」

参加者達の喉が鳴ります。そうしてアメリカが言うには。

「えーーまず最初にだ。イギリスが僕の援護に回って」

まずはそれでした。

「次にフランスが僕の援護」

「えっ！？」

皆それを聞いて驚きの声をあげます。

「それから中国が僕の援護に回って」

「・・・・・・・・・」

皆次第に呆れた顔になっていきます。

「最後にロシアが大役僕の援護だ！」

「・・・・・・・・・」

「あのさ質問だけれど」

大柄で白っぽい髪に紫がかった瞳の純朴な顔立ちの若者が立ち上がってアメリカに尋ねます。彼はロシアといいます。学園で一番の怪力だと言われています。

「アメリカ君は何をするのかな」

「うん、ロシア」

アメリカはそのロシアの質問に満足そうに頷いて答えます。

「実にいい質問だ」

「それで何？」

「ヒーローさ！」
自信に満ちた声で格好よくポーズまでつけて答えます。これこそアメリカでありました。やっぱりいいか悪いかは別にしまして。

第二十二話　　完

２００８・１・１７

第二十三話　スコーンは命　☆

第二十三話　　スコーンは命

「却下」

見事な茶色の髪に緑の目を持っている頭の切れそうな顔の青年が右の親指を下にやってアメリカの言葉を退けます。イギリス、かつては学園のリーダーだった人です。

「そんなアホな作戦いいわけあるか！」

そう言ってアメリカの意見を却下したのですがアメリカは少し怒った顔でそのイギリスに言い返します。

「また君か。本当にイギリスは昔から否定が好きだね」

「俺が一番否定してえのは御前の存在自体なんだがな」

大好物の紅茶を飲みながら彼も怒った顔です。あまり仲がよくなさそうです。イギリスの言葉は続きます。

「田舎者の集まりの癖してリーダーぶるの止めろよな。大体恩も忘れて独立しやがって」

さらには。

「御前頭の中までハンバーガーじゃねーのか？」

なおアメリカはハンバーガー野郎と言われています。中国はラーメン野郎、ロシアはピロシキ野郎ときてイタリアはマカロニ野郎、日本はお握り野郎です。ドイツはソーセージ野郎と言われています。そのアメリカがハンバーガーを出されたので少しムッとしてイギリスにまた反撃です。

「じゃあ僕も言わせてもらうが」

「何だよ」

「この間君の家に遊びに行った時に出されたスコーン」

「ああ」

「あれすごーーーーーーーくまずかったぞ」

「何だと手前！」

それを聞いたイギリス激昂します。ちなみに彼はローストビーフ野郎だそうです。それでもスコーンをけなされてイギリスは激怒してアメリカの胸倉に掴みかかります。

「人が折角作ってやったのにそう言うのかよっ！」

「えっ、あれ君の自作だったのか！？」

言い争いは続きます。こうして連合国の会議は続いていくのでした。

第二十三話　　完

２００８・１・１７

第二十四話　赤と青　☆

「おい、二人共」
アメリカとイギリスの喧嘩を光の強い金髪に青い目と顎にうっすらと髭を生やした美青年が止めます。
「その辺にしないか。今は大事な会議中なんだぞ」
「あっ、フランス」
「うわっ、フランスが正論言ってきた」
アメリカとイギリスはお互いを小突き合いながらそれぞれその美青年フランスを見てとりあえず落ち着いてきました。
「その程度にしておこうぜ」
「そうだな」
最初に矛を収めたのはアメリカでした。
「僕も大人げなかったようだ」
「あっ、手前」
イギリスはアメリカが矛を収めたのを見て抗議します。
「何大人ぶってんだよ！」
「全く御前等は」
フランスは呆れたように立ち上がって二人にお説教をはじめます。
「喧嘩する前にしなきゃいけないことが沢山あるだろう？」
「そうだよな」
「ああ。それで一体それは何だ？」
「決まってるじゃないか」
フランスは爽やかな笑顔を浮かべながら二人に言うのでした。
「そのダッセエ軍服どうにかするとかさ」
「君が派手過ぎるんだ！！」
「おめーが派手過ぎるんだよ！！」
「何！？」

見れば何と青いコートに赤いズボンといったフランスの井手たち。
けれどそれを言われたフランスの顔が余程かんに触ったのかピシッ
と怒りに歪みました。

第二十四話　　完

２００８・１・１８

第二十五話　分配はこうしよう　☆

「大体なあ！」

今度はイギリスとフランスの喧嘩がはじまりました。

「手前イタリア二号機の癖に偉そうにするな！」

「な、何ィ！？」

流石にイタリアを出されてフランスも黙っていられません。

「それは昔の話だろ！！」

「今だってそうじゃねえか！！」

「待たせて悪かったある・・・・・んっ！？」

部屋に入って来たのは黒い髪を後ろで束ねた黒い髪の一見若く見えるアジア系の男でした。連合国の一人中国です。

「またイギリスとフランスとアメリカが喧嘩しているあるか」

「僕はもうしていないよ」

「そうあるか。それにしても」

中国は何だかんだと言いながら黒板の方に向かいます。見ればそこには二番目の御題で彼等が勝った場合の分配をどうするかが書かれています。

「私ならこんな議題一秒で終わらせられるある」

「一秒でかい？」

「そうある。こうやって」

アメリカに応えながらドイツとイタリアと日本を中国のものにしていました。

「好！」

書き終えてから言います。

「今日の仕事は終わったし皆帰るよろし」

「あっ手前！！」

フランスの頬をつねっているイギリスがそれに気付きました。
「何勝手に最重要部分決めてるんだよ！」
「しかもよお」
フランスも気付きました。
「韓国も日本の下にあるのに誰も引き取り手いねえのかよ」
「そういえばいたな」
アメリカもふと韓国のことを思い出しました。
「ロシアどうかな」
「僕はいいよ」
「それでだよ！！」
イギリスがまた中国に叫びます。
「それじゃ滅茶苦茶問題あるだろうが！」
「没有問題！！」
けれど中国は自信に満ちた声で答えます。
「人口比ある」
その中国をアメリカがダイナマイトチョップを浴びせて窘めます。
「何で連合国ってこんな奴等ばっかりなんだ！？」
フランスがその横で呟きます。何かチームプレーが全く期待出来ないのは事実のようです。

第二十五話　　完

２００８・１・１８

第二十六話　素敵な関係

第二十六話　素敵な関係

この連合国五国の関係は実に素敵です。どんな関係かといいますと。

まずはアメリカとイギリスです。この二国は。アメリカがイギリスから独立してアメリカは常にイギリスと戦えるようにしています。とりあえずそういうのが面白いんだからという脚本家さんの仮面ライダーにありそうな良好な関係です。

さっきも喧嘩したイギリスとフランスは一番仲が悪いです。それこそ毎度毎度喧嘩してきた関係で。簡単に言うと鷹のチームの応援団と鴎のチームのサポーターの間の如き微笑ましい緊張が常にあります。

中国とイギリスもまた阿片と紅茶をどうにかして手に入れようとした関係であるのです。毎年日本の家で年末年始に殺される御年寄りと討ち入り集団みたいな円満な間柄です。

イギリスだけ目立ちますが甘いですロシアもいます。

ロシアとイギリスがまずロシアの行く先にいつもイギリスがいたのでロシアが内心凄く面白く思っていません。まあ強いて言うのなら北斗と南斗でしょうか。拳王と聖帝の如き。間に入れば何が起こるかわかりません。

中国とロシアは中国が伝統的に北にある勢力を警戒していてロシアが中国の庭に入っていたことがあるのでこれもまた縁があります。光の巨人と暗黒の皇帝の方の様に伝統があり熟成したものがある縁でありましょう。

アメリカとロシアもまた。アメリカはアラスカという広い場所をロシアから買ったのですがその北にある寒い海の向かい側にロシアがいるのでほんの少しだけ意識しています。赤い炎を使う何年高校にいるかわからない人と青い炎のバンドを組めないバンドマンの様

な素敵な意識を持ち合っています。
　あとついでに言えばロシアは最後には他の四人を自分の家に入れてあげようと考えています。枢軸国三国と比べると本当に素晴らしい関係です。何でまとまっているんでしょうか。

第二十六話　　完

２００８・１・１８

第二十七話　落ち着いて話してみよう　☆

第二十七話　落ち着いて話してみよう

「とりあえずだな」

フランスがいい加減騒ぎが嫌になって皆に言ってきました。

「ちょっと落ち着いて作戦立て直さないか」

「そうだな」

最初にイギリスがフランスの考えに乗ります。

「癪だけれどそうだな」

「そうだね」

「そうあるな」

「えっ！？」

ロシアと中国も賛成したのを見てアメリカが驚きの声をあげます。

「僕の案駄目なのかい！？」

「駄目以前の問題だ！」

イギリスが一刀の下に切り捨てました。そして彼が黒板に三人の似顔絵の下に色々と書いていきます。

「まず位置関係で分けるとだ」

ドイツとイタリアの間にはイギリスとフランスが。日本のところにはロシアと中国が書かれます。

「こんな感じだろ」

「んっ！？待ってくれよ」

ここでアメリカがまた言ってきます。

「君意図的に僕を忘れてないかい？」

「あっ！？じゃあ」

実はそうなのですがそれでも答えます。

「御前日本担当。後ヨーロッパ来なくていいからな」

御前と顔合わせたくないしな、と小声でいいながらアメリカに答

えます。もっともそんな小声を聞いたところで気にするアメリカでもなく平気で応えて言うのでした。
「よしわかった」
顔を上げて言います。
「全力を尽くそうじゃないか！ところで」
「ところで？」
ここでアメリカは地図を広げますがそれはアメリカの地図でそこには。
「で、日本って何処だ？」
「出たよ！アメリカ人！」
何とアメリカだけ書かれた地図です。アメリカは他の国には実はかなり無関心なようです。

第二十七話　　完

２００８・１・２０

第二十八話　密偵　☆

第二十八話　密偵

何はともあれ今日の会議は無事終わりました。アメリカは四人の纏まりのある信頼すべき仲間達に対して言います。
「じゃあ今日の会議はこれで終わりということで」
「ああ」
「わかったある」
仲間達がそれに応えます。
「今日の話は重要機密なので漏らさないように」
実際のところかなり騒いでいるので部屋の外からも聞こえていそうですがそう断りを入れます。
「最新の注意を払ってくれ。以上！」
「うん」
「うん！？」
何故か五人以外から声が。見てみれば。
何故かそこにはイタリアがいます。平気な顔で着席して話を聞いています。
「ねえねえ」
彼は唖然とする五人に対して聞いてきます。
「この後御飯？御飯なのかな？」
「な・・・・・何でイタリアが平然と座ってるんだ！？」
「ちょっと待てコラ！」
イギリスとフランスが最初に言い出します。
「どうなってんだここの警備は！！」
「普通にドアから入ったんだけれど」
「ドア！？閉めた筈あるぞ！」
「鍵は僕が壊したから」
「ちょっと待てロシア！」

「御前どんな怪力なんだよおい！」
騒ぎが異常に大きくなっています。それを遠くで眼鏡をかけて変装しながら聞いているドイツは呆れた顔でメモを取っています。
「やはりイタリアにスパイは無理か」
わかっていましたが。それでも呆れずにはいられないのでした。

第二十八話　　完

２００８・１・２０

第二十九話　ジャガイモはどうして食べる　☆

第二十九話　ジャガイモはどうして食べる

とりあえず自分の仕事は終わらせたドイツ。最後に敵地であるフランスにおいてフランス料理を食べてこれからのことを考えることにしました。

場所は如何にもおフランスといった感じの優雅なレストラン。そこでこれからのことを考えるのでした。

「情報は掴んだ。後は」

心の中で呟いています。変装はしたままです。

「後でイタリアを回収せねばな」

「お客さん」

ここでウェイターが彼に聞いてきます。

「何がいいんだい？」

「とりあえず適当に作ってくれ」

「あいよ！あっ、そうだ」

ウェイターはここでふと気付いたようでした。ドイツに声をかけてきました。

（フ、フランス）

何とこの店は彼自らウェイターをしています。凄い店ではあります。

「お客さん！」

「あ、ああ」

フランスが来たので驚きながら応対するドイツです。

「湯加減の方だけれど」

「じっくりとやってくれ。ポテトはな」

「わかったよ。ケチャップはいるかい？」

「いや、いい」

慌てながらもその声に答えます。
「大丈夫だ」
「そうかい。それじゃあ」
暫くしてジャガイモが来ました。適当なものと注文したらこれが来たのです。
「ふむ」
言うまでもなくジャガイモはドイツの大好物なので思わずにんまりと微笑みました。それで少し得意げになって思うのでした。
(気付いていないようだな。意外に俺の変装もいけるかも知れないぞ)
ところがここで。
「・・・・・おい」
フランスが彼に声をかけてきました。
「!?」
「御前ドイツじゃないのか!?」
「な・・・・・何故ばれたっ!?」
驚くドイツに対してフランスが指差したものとは。
「それ見てみろ」
「うっ・・・・・しまった!!」
ジャガイモをグチャグチャに潰していたのです。ついつい自分の癖を曝け出してしまったドイツでした。油断大敵。

第二十九話　　完

２００８・１・２０

第三十話　悪魔の微笑み　☆

第三十話　悪魔の微笑み

とんでもない乱入者はありましたが会議は終わり解散となりました。フランスはロシアに声をかけてきました。

「よおロシア」

「何かな」

ロシアは大人しい顔で彼に顔を向けました。

「御前あんな会議だったけれどずっと笑顔だったな」

「え、ああ」

ロシアは彼の言葉に応えます。

「結構タフだよな。お疲れさん」

「うん。皆がわいわいやってるの見るの結構好きなんだ」

ロシアはその静かな物腰で答えます。

「知ってると思うけれど僕の住んでるところって広くて寒くて雪ばっかりでさ」

「ああ、ロシアだからな」

これはあまりにも有名なことです。当然フランスも知っています。

「そんなところにずっと一人でいたからああいうのいいなって思うんだ」

「そっか」

フランスはそんなロシアの話を聞いてしんみりとした気持ちになりました。

「そういや御前んちって結構大変だったんだよな」

「それに」

「それに？」

けれどここでロシアの様子が何かおかしくなりました。

「皆の顔ももうそろそろ見納めになると思うし」

「どういうことだ？そりゃ」

「あのアホ面共がどう命乞いするか想像すると笑えちゃってさ」
「・・・・・・っておい・・・・・・・」
氷、いや悪魔の微笑みを浮かべるロシアでした。さしものフランスも見てはいけないものを見てしまって凍り付いてしまいました。

第三十話　　完

２００８・１・２３

第三十一話　雪は友達！？　☆

第三十一話　雪は友達！？

連合国は協同して軍事訓練も行っています。今日ロシアは中国と一緒に雪山に降下訓練です。

「ええと」

ロシアは飛行機の上で中国と向かい合って座っています。そこで説明書を読んでいます。

「飛行機から飛び降りて突撃すればいいんだね」

「そうある」

中国はそうロシアに答えます。下は雪山で雪が降り続けています。

「パラシュートつけるよろし」

「いや、大丈夫だよ」

けれどロシアはそれを断ります。

「下は雪だからパラシュートはいらないよ」

「えっ！？」

中国はロシアのその言葉を聞いて驚きます。

「雪って凄く柔らかいんだよ」

「大丈夫あるか！？」

「僕程雪に詳しい奴はいないよ」

けれどロシアは自信満々でこう言うのでした。

「まあ見ていてよ」

そう言って飛び降ります。

「ウォッカーーーーーーッ！！」

結果は。

「ピロシキ野郎が謎のダイブを敢行して骨折したらしいぞ」

フランスが言っています。

「何があったんだ」

「それはいいけれどよ」

その彼にイギリスが応えます。
「何だ？」
「何で御前がここにいるんだよ」
実はフランスは今イギリスの家にいるのです。イギリスは趣味の刺繍をしながらフランスの怒った顔で言います。
「田舎帰れよワイン野郎が」
「あーー、御前の刺繍邪魔しに来たんだ」
「帰れ」
何があってもこの二人はこの二人みたいです。

第三十一話　　完

２００８・１・２３

第三十二話　上司の毒舌

イギリスの上司はやたらと太っていて口の悪い人です。イギリスに対しても時々毒舌をかましますがそれは多くは敵国に対して向けられます。

しかも同盟国に対しても。フランスにはとりわけ容赦がありません。

「蛙は帰ったか」

「ええ、今」

イギリスは何とかフランスを追っ払ったことを上司に報告しています。上司はそれを聞いてフランスを蛙と言ったのです。

「全く。今だに青い服を着ていて」

「確かにそうですね」

「あいつは昔からだ」

ここで随分と昔話を出すのです。

「コルシカから来た小男の時から、いやそれ以前からだったな」

「ええ」

「青い服ばかりを着ている。だから弱いんだ」

「だからなんですか」

「我々を見ろ」

その巨大な胸を張って見せてきたのは。

「これが我々の色だ。青だ」

「ええ」

「ウェリントンの色だ、わかるな」

「そうですね。じゃあ戦争は我々の方が」

「いや、そうはいかない」

けれど何故かここで急に毒舌が鈍くなる上司でした。

「あいつはあれで結構強いぞ。油断するな」

「そうなんですよね」
しかもイギリスも何故かそれを認めて頷きます。
「多分今回もな。ある程度は」
「期待しますか」
そんなことを言っているうちにフランスはドイツに華麗に負けてしまいました。それを聞いたイギリスの上司は葉巻を吸いながらまた毒舌を発揮するのでした。
「蛙は蛙だな、所詮は」
忌々しげに言います。
「まあいい。ソーセージ野郎は抑えておいてアジアで挽回を」
とか言っていたら虎の子の艦隊が日本に瞬殺されました。これには流石の上司も。
「・・・・・・今は一人で泣かせてくれ」
「・・・・・・わかりました」
鬼の目にも涙というやつでしょうか。一人自室に消えて当分出て来ませんでした。

第三十二話　　完

２００８・１・２３

第三十三話　これでも負けるか　☆

第三十三話　これでも負けるか

思いも寄らない奇襲もあってフランスに鮮やかな大勝利を収めたドイツ。あさりとぶちのめされたフランスを見て言います。

「酷くあっさりした奴だったな。まあいい」

もう彼に構っている暇はありません。既にイギリスがスタンバイしていたのです。一緒にいたイタリアに声をかけます。

「行くぞイタリア」

「あーーーい」

イタリアはそう応えながらも倒れ伏しているフランスに声をかけます。実はこの二人兄弟関係にもあるのです。

「おーーいフランス兄ちゃん」

一応フランスは生きているのです。喧嘩に負けただけで。

「また負けちゃったね」

そういいながら頭をコツコツ殴ります。すると。

「え・・・・・あれ！？」

フランスが復活してきました。そうしてイタリアの左腕をしっかりと掴んできて。

「ドイツーーーー！」

またドイツに救援要請です。

「フランス兄ちゃんまだバリバリ元気だよーーー！」

イタリアの腕を掴んでいます。顔は完全に憤怒です。

「死ねや・・・・・」

「痛い痛い！また負けとか言ったの謝るからさーーー！」

「謝って済むか・・・・・！」

「ド、ドイツーーーーッ！」

けれどドイツはもうイギリスとの戦争準備に向かっていません。

「御免なさい御免なさーーーっ！」

かくして瀕死のフランスにボコボコにされるイタリアでした。何処までも弱い彼なのでした。

第三十三話　　完

２００８・１・２４

第三十四話　何がしたいのか　☆

第三十四話　　何がしたいのだか

フランスにも勝ってイギリスとの戦争の準備をドイツだけは何とか終えまして。とりあえず一休みして息つくドイツとイタリア。今はとりあえず平和です。

のどかでぽかぽかとした日差しが降り注ぐ昼下がり。昼寝にはもってこいの状況です。二人はその日差しの中で二人仲良く並んで座っています。本を読んでいるドイツにイタリアが声をかけます。

「ねーねードイツ何してんの？」

「読書だが」

「サッカーしようよ」

イタリアはその読書するドイツに声をかけるのでした。

「折角いい天気だしサッカーしよーーー」

「それも悪くないが」

本を読みながらのせいでしょうか答えるのに時間を置いているドイツにイタリアはまた声をかけます。かけながらドイツの手をポンポンと叩いています。それがまた結構執拗でもあります。

「ねーードイツサッカーしよーーー」

それまで片手でポンポンしていたのが両手になっています。

「ねーーサッカーサッカードイツーーードイツーーー」

あげくには右手でドイツの手を押さえて左手でサミング。そうした一連のあまりと言えばあまりもの訳のわからない行動に遂にドイツは言いました。

「何がしたいんだ御前は！！」

「何がって？」

「・・・・・わかっていないのか」

自分では全然わかっていないイタリアでした。それでも何故か許すドイツでした。

第三十四話　完

2008・1・24

第三十五話　眠れ緋の華

第三十五話　眠れ緋の華

日本の歴史は長いです。それで実は結構なお爺さんですがあまり知られていません。昔の独特の鎧兜なんかは学園でもかなりの人気です。

「それで作ってみました」

日本はゲームやアニメを作るのも得意ですがここでその鎧を着けた武士の格闘ゲームを作ってみたのでした。何か一人で何十人何百人も吹き飛ばす凄いゲームです。

それがまた学園内で大人気です。派手で明るく誰もが熱中します。ところがそのゲームをしていて中には沈む人も出て来ました。

「あのキャラクターの話はな」

「ないよね」

ドイツもイタリアもそう言うのでした。他の皆も。

「駄目でしょうか」

「駄目っていうかね」

イタリアが沈んだ顔で日本に答えます。

「最初から最後まで。あんまりにも悲しくて」

「ちょっとね。救われなさ過ぎるよ」

「せめて最後は救われて欲しいある」

最後までやったアメリカも中国も沈んでいました。

「俺も。やっていてな」

悲劇の好きなドイツも。今回ばかりは何とも言えない顔になっていました。

「最後の歌も。奇麗だが」

「そうですか。私的には一番気に入っているストーリーなのですが」

「奇麗なのは奇麗でいい話だけれど」

「あまりに。悲し過ぎるんだよ」

日本の話は時として皆にはあまりにも悲しいようです。その美しいけれどあまりも悲しい話に皆うなだれるばかりでした。

第三十五話　　完

２００８・１・２４

第三十六話　嫌いなんだぜ

第三十六話　嫌いなんだぜ

まあ色々と個性派な面々の集うヘタリア学園です。その中でも太平洋系列はそのメンバーの数も個性も突出しています。あの日本やアメリカや中国なんかもこの中にいます。

しかしその中でもとりわけ個性が強いといえば。一人物凄いのがいます。

「何でもかんでも起源は俺なんだぜ！」

そう言ってはばからない無意味なまでに根が明るく自己主張が激しくついでに言えば目だって仕方のない若者の名は韓国。背はかなり高くて足も長いし筋肉質の締まった身体つきでかなりスタイルはいいです。顔は童顔で髪は一本凄い巻き毛になっています。韓国の家の服を愛用しているとても愛国心の強い少年です。

彼はまあとかく目立ちます。しかも常に一人ではありません。

「俺はとにかくあいつが嫌いで仕方ないんだぜ！」

こう言いながらいつも日本の側にいます。嫌いだ嫌いだといつも言っているのにどういうわけか日本の側から離れません。それがとても不思議ですらあります。

「いつもいつもわからねえんだけれどよ」

イギリスはそんな彼を見て言います。なお彼にしろフランスにしろどういうわけか韓国には殆ど意識されていません。韓国は日本ばかり見ているのです。

「あいつ本当に日本が嫌いなのか？」

「それは俺もすげえ疑問に思ってるんだよ」

何だかんだでイギリスの家にあがりこんでクッキーを食べているフランスが応えます。

「普通嫌いだって言ってる奴の側にいつもいたりはしねえよなあ」

「だったらあれか」

鋭いイギリスにはすぐに察しがいきました。
「素直じゃねえだけか」
「素直じゃねえっていうか」
こういうことには誰よりも敏感なフランスはこう言い換えます。
「あんなストレートな愛情表現もそうそうねえだろ」
「そうなるのか。やっぱりな」
今日も何だかんだで日本の側から離れず常に騒がしい韓国でありました。

第三十六話　　完

２００８・２・５

第三十七話　韓国と上司

第三十七話　韓国と上司

一応韓国は日本が嫌いといつも主張しています。それは彼の上司の人も同じです。しかも代々同じような主張を繰り返しています。

「日本を越えろ！」

「日本に勝て！」

「日本を凌駕しろ！」

「日本を克服しろ！」

全部違う人の発言です。それでも言っている内容は誰も大体というか全く同じになっているのがとても面白いと言えば面白いです。日本以外にとっては。

歴代の上司は何かにつけ韓国にも日本の悪口だの日本の変なところを教えます。それで韓国はそれを完全に信じているのです。

「とにかく日本は悪い奴なんだぜ！」

学校でもいつもこう主張しています。

「日本にやられたんだぜ！」

「日本に負けたんだぜ！」

「日本に勝ったんだぜ！」

「日本ではこうなんだぜ！」

「日本にはないんだぜ！」

何かにつけ誰にでも日本のことを言います。彼の会話の殆どが日本に関するものになってしまっているのですが彼だけが気付いていません。

「何かよお」

今度はフランスの家にあがりこんでいるイギリスが韓国について言います。やっぱり彼とフランスは韓国には意識されないままです。

「あいつ日本のことばっかり言ってるよなあ」

「それと起源以外言ってねえぞ」

起源の主張は彼の趣味だったりします。実に変わった趣味です。
フランスもそれは知っているのです。
「誰かの話題つったら日本だよな」
「そんなに日本が気になるのかよ」
「なるんだよ」
さりげなくイギリスにワインを勧めながら言います。
「おっ、悪いな」
「ああ。しかし何だかんだ言いながらあいつは」
韓国はいつも日本の側にいます。それで。
「日本にはこの音楽を聴かせてやるんだぜ！」
「日本にはこの漫画を読ませてやるんだぜ！」
全部日本の音楽や漫画にそっくりですが何かあるといつも最初に日本に見せたりしてその反応を見るのが彼の常です。本当に不思議です。
「日本が気になって仕方ないんだろ」
「俺達の評価なんて全然気にしないのにな」
何だかんだでやっぱり日本の側にいたくている韓国のようです。

第三十七話　　完

２００８・２・５

第三十八話　俺達つながるんだぜ　☆

第三十八話　俺達つながるんだぜ

今日も韓国は相手の迷惑なぞ見事なまでに意識せず日本の隣にいます。今日はスコップを持って日本に対して一方的に宣言です。

「御前と俺を結ぶトンネル掘るんだぜ！」

家の猫をあやしている日本に言います。

「費用は御前持ちだぜ！」

華麗と言っていい域に達している身勝手な言葉ですが日本はあっさりと韓国に対して突っ込み返します。

「えっ、でも」

「何だぜ？」

「韓国さん私のことといつも嫌いと仰っていますし」

なお日本の鈍感さは学園一とまで言われています。あしからず。

「別にいらないと思うのですが」

「えっ・・・・・・」

それを聞いて絶望に陥る韓国の顔の凄いこと。まるで伝説と言うよりは歴史に残る大事件になってしまっている昭和四十八年最終戦の後のどこかの虎球団の応援団の如きです。その顔を見て日本も問い返します。

「えって何ですか？えって」

「・・・・・・・・・」

しかし韓国は答えられません。ギリシア神話に出て来るあの髪の毛が蛇になっている女怪メデューサを見た様に動きません。

「あれ、大丈夫ですか？ちょっと」

「・・・・・・・・・」

韓国は答えられません。固まったままです。言える筈もありません。本当のことを言ってしまえばもう少し掘っていますから。そのまま日本から何を言われても岩石そのものになってしまったかのよ

うに固まったままの韓国でした。

第三十八話　　完

2008・2・6

第三十九話　ドラマを見せてやるんだぜ　☆

第三十九話　ドラマを見せてやるんだぜ

韓国は日本を自分の家にしょっちゅう呼びます。暇があると呼びますしなくても呼びます。まず日本を家に呼ぶのですから本当に気になって仕方ないのがわかります。わからないのは当の日本だけだったりします。

「今日は日本に我が素晴らしき韓国ドラマを見せるんだぜ」

韓国の趣味の一つです。彼はドラマが大好きでいつも見ています。その内容は少しどころではないレベルで日本の家のドラマにそっくりなのですが。

「きっと大泣きするんだぜ」

少なくとも韓国はいつも大泣きします。実は案外涙脆いのです。

「と思ったけど」

しかし隣にいる日本は無反応です。

「さっきから無言なんだぜ。おい日本」

日本に声をかけます。

「ちゃんと見てるか？」

「いえ、前から思っているのですが」

「何だぜ？」

日本はもう何十回も何十作も韓国のドラマを見ているのでかなりの通になっています。それで韓国に対して問うのです。

「何故韓国さんのお家のドラマはヒロインとくっつかない方は悲惨な目に遭うのでしょうか」

「ま、まあ」

「まあ？」

韓国は額に汗をかきながらコメントします。何かやけに苦しそうなのが日本から見てもわかります。その苦しいままでのコメントは。

「結局のところあれなんだぜ」
「あれといいますと」
「だから」
そして言う言葉は。
「気にしたら負けなんだぜ」
「負けって・・・・・・」
あまりにも強引な韓国のコメントでした。その強引さには日本も反論のしようがありませんでした。

第三十九話　　完

２００８・２・６

第四十話　無双なんだぜ

第四十話　無双なんだぜ

日本のゲームも何だかんだで大好きな韓国。ところが歴史ゲームでは異常に嫌いなキャラがいます。それは誰かというと。

「こいつだけは許せないんだぜ！！」

「抹殺してやるんだぜ！！」

ドラマと同じ位大好きなネトゲで熱中しています。見ればお猿さんに似た小柄なおじさんのキャラに対してムキになって攻撃を仕掛けています。

それはかつての日本の上司でお百姓さんから日本の家を纏めるにまで至った凄い人です。けれど韓国の家に喧嘩を仕掛けたことがあるので韓国は大嫌いなんです。

それは普通のゲームでも同じです。シュミレーションでも格闘でも何でもまずこの人に総攻撃を浴びせるか処刑してからはじめる程です。

「そんな優秀なキャラ殺したらねえ」

「勿体ないじゃないか」

「いいんだぜ」

皆の忠告も聞き入れません。

「他に優秀なキャラは一杯いるんだぜ。まずは超時空天下人を抹殺しないと俺ははじまらないんだぜ」

「超時空天下人って」

「何なんだか」

最早完全に現実と仮想の区別がついていません。しかしそんな彼も日本の女の子は本音では大好きなので女性キャラには熱中しています。何気に萌えや露出の多いキャラが好きなようです。ところが。そんな彼でもあの話は。

「日本・・・・・・」

「何でしょうか」
日本に対して凄くレアなことに深く沈んで言います。
「あの結末は・・・・・・あんまりなんだぜ」
「やっぱり眠れ緋の華はそうですか」
「せめて最後は救われて欲しいんだぜ」
「その結末も他のキャラでちゃんとあるんですが」
それでも駄目みたいです。本音では最後はハッピーエンドが好きな純粋な若者みたいです。

第四十話　　完

２００８・２・６

第四十一話　そっくりさん!?

第四十一話　そっくりさん!?

韓国は物真似が好きです。しかし好きなだけで決して得意ではないのです。それはいつも日本の真似をしているその内容からもわかります。

「あの、これは」

「トンチャモンなんだぜ」

オレンジ色のやけに可愛くないネコ型ロボットを誇らしげに見せて言います。

「ウリナラのオリジナルキャラなんだぜ」

「いえ、それは」

日本はそのトンチャモンに対してクレームをつけます。

「うちのネコ型ロボットの」

「そ、それは気のせいなんだぜ」

誤魔化しますが目がかなり泳いでいます。

「俺はちゃんと日本のを見て」

「やっぱり私のを!?」

「あ、しまった」

嘘が極めて下手です。

「それはその。つまり」

こんな調子です。それでもいつも真似をしています。中でも特に凄かったのは。

「・・・・・あの、韓国さん」

「何だぜ?」

「幾ら何でもこれは」

今度は何と。赤い彗星の人のそっくりさんなんですが下半身はタイツです。とにかく物凄い格好に成り果てています。そいじょそこいらの同人誌よりも。

「格好いいんだぜ」
「いえ、全然」
日本はきっぱりとそれを否定します。
「何というか。スパロボなら」
「スパロボなら?どうなるんだぜ?」
「縮退砲を受けているところですが。格闘ゲームなら竜虎乱舞を」
「・・・・・・日本もきついんだぜ」
こうして赤い彗星は訂正させられるのでした。けれどこれで懲りるような御仁では到底なくやっぱりまた真似をして日本を困らせるのでした。

第四十一話　　完

２００８・２・８

第四十二話　火遊び大好き

第四十二話　　火遊び大好き

韓国は赤い色が大好きです。唐辛子も好きですし赤い服も最近はよく着ます。その中で最も好きな赤は火の赤だったりします。

何かというと火を点けて遊びます。騒ぐ時はいつも点けます。それで一度こんなことがありました。

「とにかく暇なんだぜ」

やっていたゲームもクリアして漫画も小説も丁度読んでしまって何もすることがなくなった時でした。実は彼はいつも何かをしていないと退屈で仕方がなくなる鮫みたいな人なのです。

その退屈に耐えられる人ではないので結果として。遊ぶことにしました。けれど外で遊ぶような道具も手許にありません。こうした時はないものは徹底的にないものです。

それで仕方なくマッチと紙を持って来て。することは。

「理由はないけどやるんだぜ！」

いきなり騒ぎだして火を点けます。すると忽ちのうちに家に燃え移って火事となりました。こうして韓国の家は見事に燃えてしまったのでした。

消防隊は来るわ上司はカンカンになるわ。韓国は思いきり怒られてしまいました。それで頭にタンコブを貰ったりもしたのですがそんな彼がどうして火を点けたかというとそのコメントがこれまた非常に素晴らしいものでした。

「だから理由はないんだぜ」

「理由がなくて火を点けたっていうのか・・・・・・」

あまりもの奇天烈な理由に呆然とする皆でした。こんな彼ですが最近では学園内で頭角を表しているそうですから世の中本当に複雑怪奇です。

第四十二話　完

2008・2・8

第四十三話　いつもするんだぜ　☆

第四十三話　いつもするんだぜ

韓国の多彩な趣味の一つで誰かの家の国旗を燃やすというものがあります。時々アメリカや中国の国旗を焼いてどえらく怒られたりしますが普段は日本の国旗を焼きます。何と何処から買っているのかわかりませんが百枚セットで持っています。

「さあ今日も朗らかに一枚いくんだぜ」

「あの、韓国さん」

早速燃やそうと満面の笑顔で日章旗を出す韓国に日本が尋ねます。

「私のことが嫌いなのに貴方はどうして」

「何だぜ？」

「私のふりをしたり私の料理を他の国で作ったりするんですか？」

日本はいつもこれが不思議でなりませんでした。かなり鈍感なところもある彼にはそれがどうしてなのかわからないのです。それで尋ねるのでした。

「えっ、いやそれは」

またへそ曲がりなことでは学園一の韓国も。返事に困ります。

「それはその」

「何故なんですか？」

「んっ！？」

たまりかねた韓国は咄嗟に誤魔化すことにしました。

「あれは何だぜ！」

急に空を指差して叫びます。

「鳥か！？飛行機か！？何だぜ！」

「あれはただの仮面ライダーです」

日本は冷静に答えます。

「仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディですね」

「オンドゥルウラギッタンディスカーーー！ザヨゴーーーーッ！」

「だから誤魔化さないで下さい」
それでも何とか追及から逃れた韓国でした。その後何故かどっかの誰かに騙されたその空を飛んでいる人達が乱入してきたからです。この人達があまりにも騙され易くて助かった韓国でした。

第四十三話　　完

２００８・２・８

第四十四話　起源の主張なんだぜ

第四十四話　起源の主張なんだぜ

韓国の趣味の一つ、本当に趣味の多い彼ですがその中で一番凝っている趣味は起源の主張です。とにかく何でもかんでも自分の国に起源があると主張します。

特に日本にあるものに関しては。目に入るものは全て自分のところに起源があると主張しているんじゃないのかと思える程なのです。例えば。

「ソメイヨシノの起源はウリナラなんだぜ！」

「あれは人口的に配合される花ですよ」

「柔道の起源はウリナラなんだぜ！」

「柔術からですよ」

「相撲の起源はシルムなんだぜ！」

「あの万能壁画での主張は無理がありませんか？」

一つ一つ論破されていますが全く堪えません。彼の頭の中には足りないものがとても多いのですけれど懲りるという機能もないのです。ですから全然堪えないのです。

それがまだ日本だけならよかったのですが。最近は他の国にも。

「イギリスのベッカム選手は韓国起源なんだぜ！韓国人なんだぜ！」

「何処をどうやったらそんな結論になるんだ？」

イギリスは彼が何を考えて何を言っているのか本気でわかりませんでした。

「ベッカムは紛れもなく俺の国で生まれ育った選手なんだが」

「俺が主張しているから絶対なんだぜ！」

「だったら証拠出せよ」

彼は呆れているだけです。そもそもどういうわけか韓国は欧州勢を怖がりませんしイギリスもフランスも彼に対しては妙に弱いところがあるのです。相性がかなり悪いようなのです。

しかし彼にだけ言っているのではないのです。よりによって。
「アメリカインデイアンの起源はウリナラから出て来た移民がそのまま残ったものなんだぜ！」
「孔子も漢字も起源はウリナラなんだぜ！」
「何か面白いことを言ってるみたいだね」
「ちょっとこっちに来るある」
彼に声をかけてきたアメリカと中国の後ろにはやけに屈強な彼等の家の人達が勢揃いしています。どう見ても怖い人達です。
「悪いけれど退散するんだぜ」
ところが韓国も伊達に足が長いわけではありません。そのコンパスを活かして見事に駆け抜け。呆気なく彼等を振り切ってしまいました。
「駆け足、マラソンの起源もウリナラなんだぜ！」
「それ、絶対に違う」
何処からかギリシアの声が聞こえてきたような気がしますがそんなことをいちいち憶えている韓国ではないのでした。

第四十四話　　完

２００８・２・１１

第四十五話　代用品じゃないんだぜ　☆

第四十五話　代用品じゃないんだぜ

韓国は何かあるとすぐに日本の家の国旗を焼きます。常に持っているので百枚ストックになっています。国旗をいちいちこんなに持っているのは彼だけです。

ところが。百枚でも千枚でも使っていたらなくなります。それで。

「しまった！国旗がもうないんだぜ！」

毎日燃やしていたのでなくなったのです。そもそも国旗はそう簡単になくなるものではないのですけれど。

「ああーーー、俺はこれからどうやって過ごせばいいんだぜ！！」

何故か日本の国旗がなくなって泣き叫ぶ韓国です。本当に不思議な光景です。ところがここからもっと不思議な光景になるのでした。

「この切なさは何なんだぜ。それもこれも日本のせいなんだぜ」

何故かこうした結論に至ります。しかしここで新聞のチラシに。

「国旗一万枚で十万ウォン！？」

国旗を一万枚も売っている人は普通はいないのですが。そして買う人も。

「これだぜ！」

とりあえず韓国はその普通はいない人でした。それで早速注文します。

「ヨボセヨーーー国旗一万枚セットで」

まずはお家の電話で注文です。

「えっ、柄ですか」

ここからが肝心です。

「真ん中に赤い丸です」

日本の家の旗といえばこれです。言わずと知れた日章旗。

「はい、宜しく御願いします」

こうして日本の家の旗を注文しました。

「珍しいですね。私の家の以外の国旗持ってるなんて」
「奇麗な色だろ」
日本にその旗を見せて説明します。真ん中に赤い丸の緑の旗を。
「バングラデシュの旗なんだぜ、これ・・・・・・」
沈んだ顔で説明します。間違えて注文した韓国でした。

第四十五話　　完

２００８・２・１１

第四十六話　日の丸の使い方　☆

第四十六話　日の丸の使い方

韓国はとにかくいつも日本の家の旗を持っています。従ってその使い方もただ燃やしたりするだけではないのです。なお本来の旗の使い方は韓国は知りません。聞いても忘れてしまいますので必然的に知らないのと同じなのです。

「例えばなんだぜ」

日章旗を奇麗に二枚つなげて作るものは。

「こうすることもできるんだぜ」

「シャツですか」

「その通りなんだぜ」

日本に対して誇らしげに説明します。当人に対して。

「他にはこうして」

今度は頭に被ります。

「頭に巻いて」

「巻いて？」

「ガキュートにするんだぜ」

いささか女性的なファッションを見せてきます。ちなみに彼の服の好みは誰にも言いませんが日本のをそのままという感じです。なお皆はわかっています。

「他にはこうすることもできるんだぜ」

国旗をベンチの上に敷いて日本に見せます。

「どうぞ。ここの上に座るといいんだぜ」

「遠慮します」

「まあこういうふうにも使えるんだぜ」

何故日本が断ったのかは気にしないでさらに言います。

「最後にはこうして」

「こうして？」

おもむろにハサミを取り出して真ん中の赤い部分を切り取ってすることは。

「だーーれだ？」

「人の旗を勝手に切らないで下さい」

切り取った後の穴から顔を出す韓国に突っ込みを入れる日本でした。とにかく色々と日本の旗ばかり見て使っている韓国でした。

第四十六話　　完

２００８・２・１１

第四十七話　まずは釜で　☆

第四十七話　まずは釜で

「あの、イタリア君」
日本が困った顔でイタリアに声をかけます。
「ちょっといいですか？」
「やっほーーー、日本」
暗い感じになっている日本に対してイタリアはいつもの調子で底抜けに明るいです。
「どうしたの？何だか今日暗いよ」
「実は今日起きたら庭の畑が燃えていて今まで育てていた作物が皆燃えてしまいまして」
「ええっ！？」
イタリアはその話を聞いて思わず自分のことのように驚きました。
「それで国民の皆さんにひもじい思いをさせるのは辛いので」
「うん、最後まで言わなくていいよ、わかったよ」
ここまで聞けばすぐにわかりました。
「それは一大事だよ。そうだ」
ここでイタリアは自分の家からあるものを取り出して日本に渡すのでした。
「これ何個か持って行って。返さなくていいから」
「すいません」
そんなイタリアの好意に心から礼を述べます。そのイタリアが日本に渡したのはパスタでした。言うまでもなくイタリアの大好物です。
「このお礼はきっと」
「そんなのいいって。困った時はお互い様だよ」
「有り難うございます」
こうして日本の手にイタリアのパスタが渡りました。ところが。

「・・・・・釜じゃ炊けませんね」

まずはお米みたいに炊いてみて失敗する日本でした。果たしてパスタは上手く日本に食べてもらえるのでしょうか。

第四十七話　　完

２００８・２・１４

第四十八話　色々努力しています　☆

第四十八話　色々努力しています

「わはーーー、いいことした後は気持ちがいいな」

日本にパスタをあげたイタリアは自分のしたことに上機嫌でした。

「俺も歌ったらお腹空いたしお昼にしようっと」

そう言いながら鍋でパスタを茹でだします。なおイタリアの中ではパスタを茹でるのは常識です。常識なので誰にも言ってはいません。

その頃日本は。スパゲティをそのままお地蔵様にお供えしています。

「うーーーーん・・・・・・・」

「今日も上手くできたぞ。早速食べよっと♪」

上機嫌なままでパスタを食べだします。食べながらふと日本のことが脳裏に浮かびました。

「そういえば日本も今頃パスタ食べてるのかなーーーーー」

「うーーーーん・・・・・・・」

この頃日本は何を思ったのかマカロニを畑に撒いています。パスタがどんなものか全くわかっていなかったりします。困った顔であれこれ考えてはいるのですが答えは出ないのです。

しかしイタリアにはそんなことは思いも寄りません。それで能天気というかお気楽にこんなことを考えるのでした。

「日本のパスタかあ。醤油味のパスタなんか美味しそうだよなあ」

「・・・・・国民の皆さん不甲斐なくて申し訳ありません」

結局この日はパスタの作り方も食べ方もさっぱりわからずお腹が空いたまま落ち込むしかなかった日本でした。リベンジはまた今度ということになりました。ですがそのリベンジを成功させるのこそが日本であったりします。何だかんだで凄い彼です。

第四十八話　完

2008・2・14

第四十九話　日本のパスタ

第四十九話　　日本のパスタ

パスタとは何かと考えた日本。やがてその形が麺類に似ていることに気付きました。そのことに気付けばもう後は早いものでした。すぐにたっぷりと入れたお湯が煮立ったお鍋にパスタを入れて茹でだします。こうして遂にパスタの食べ方を見出したのでした。

「成程、こうして食べるのですか」

食べてみるとこれが中々。うどんや蕎麦とまた違い美味しいものです。このパスタもまた日本の好物の一つに加わることになりました。

一旦のめり込むと深くなるのが日本の性質です。早速イタリアのパスタのソースを色々と作ったり買ったりしてそれをパスタにかけていって楽しみます。オリーブにもチーズにも慣れてもう立派なパスタ通になっていました。

ところが日本はいつもここで止まらないのです。いつも他の国の料理に対してしているように早速自分の国の料理風にアレンジをはじめたのです。見ればそれは。

「な、何これ！？」

「何なんだそれは」

イタリアもドイツも日本の作ったパスタに驚きです。何とそのソースが彼等の見たことも聞いたこともないようなものだったからです。

「タラコスパと納豆スパです」

「タラコと納豆！？」

「そんなものをスパゲティのソースにしたのか」

「はい。和風でと考えまして」

二人に対してそのスパゲティを出しながら答えるのでした。

「まあどうぞ。召し上がって下さい」

「う、うん」
「わかった」
二人は狐につままれたような顔でテーブルにつきます。そうしておもむろにフォークを使って口に入れます。すると。
「あれ、これって」
「美味いな」
「色々と味付けを考えまして」
日本は二人の横に立って答えます。
「それで作ってみたのですが。御気に召されて何よりです」
「うん、最初はびっくりしたけれど」
「こうして食べてみると。いいものだな」
「有り難うございます」
あらためて二人に礼を述べる日本でした。

第四十九話　　完

２００８・２・１４

第五十話　パスタになると

第五十話　パスタになると

パスタになると何故か出て来るのはドイツの上司です。この人は意外にもベジタリアンでそれこそ料理にラードさえ使いません。そんな極めつけのベジタリアンなのです。

それでスパゲティが大好物なのですが味付けはかなり難しいです。何しろお肉もお魚もラードさえも使わないのです。ドイツの料理が大変です。

「日本のタラコスパは」

「却下」

即刻突っぱねられました。

「タラコは魚の卵だな」

「はい」

（くっ、流石に御存知か）

どんな難しい本でも読破して三週間前の報告も平気で憶えているこの人にはまず下手なことを言っても通用しません。勿論怒らせたら楽しい結果が待っています。世界で一番怖い人の一人であることは間違いありません。

「では納豆スパは」

「腐っているのではないのか？」

健康管理にも気をつけています。お薬は特に好きです。

「駄目だな」

「では一体何を召し上がられますか」

「肉も魚も使っていないものだ」

注文はまずこれが本当に絶対条件です。

「そして腐ったものもだ」

「それでは何を」

「ペペロンチーノか」

スパゲティにはかなり詳しいです。
「それをもらいたい。いいか」
「ではいつもと同じ感じですね」
「うむ。それが駄目ならトマトでだ」
野菜はオッケーですので当然トマトもいけます。
「頼むぞ」
「わかりました。それでは」
「おっと」
ここで料理に取り掛かろうとするドイツを呼び止めます。
「飲み物だが」
「はい、何を」
「苺ジュースを。デザートはチョコレートケーキをな」
「畏まりました」
意外と食べ物は子供っぽい上司さんでした。けれどとても怖い人なのは変わりません。

第五十話　完

２００８・２・１５

第五十一話　パスタあれこれ

第五十一話　パスタあれこれ

スパゲティはあちこちで食べられているので皆それぞれの調理方があります。アメリカのスパゲティになるとそれはもうかなり豪快です。

「ミーソソースはミートボールですか」

「ああ、そうなんだ」

皆を家に招いて誇らしげにそのミートソースを出して説明しています。

「量だけじゃないから。さあ食べてくれよ」

「はい」

「僕も作ったあるぞ」

料理、とりわけ麺ならこの人の中国も作ります。

「豚肉で餡をかけてソースで味付けしたものあるぞ」

「おっ、これも中々」

「元々パスタはうちから伝わったものあるからな」

胸を張りながら皆に説明します。

「是非楽しんで欲しいある」

こんな感じです。皆それぞれのスパゲティをつくって腕を競っています。そしてこの人もまた。

「よし、皆これだ」

イギリスがボロネーゼを皆に対して作ります。

「是非味わってくれ。いいな」

ところが。

「ってどいつもこいつも何処に行きやがったあ！」

イギリスの料理が出て来ると何故か急に何処かへと消えていく皆でありました。もう皆彼のことはよくわかっているのでした。もっとも後に残されたイギリスにとっては納得できないことであります

し自覚できないことでもありました。
「俺の料理の何処が悪いんだよ・・・・・・」
意外や意外、自分の料理には結構自信があったりします。それでもフランス辺りに言わせればその腕たるや恐ろしいものなので。誰にも得意不得意がありますが。彼に関してはそれが料理でありまたそれを自分では自覚していないというとんでもない悪循環の中にあるのでした。どうしたらいいのやら。

第五十一話　　完

２００８・２・１５

第五十二話　ここでも使うんだぜ

第五十二話　ここでも使うんだぜ

さて、皆の中には当然韓国も入っています。とりあえずスパゲティの起源は置いておいて彼のスパゲティは何かといいますと。

「俺は何だってできるんだぜ！」

そう言いながらいつも料理をしますが彼の味付けはとにかく辛くてしかも大蒜を多量に使うので癖が強いとの評判があります。それが果たしてスパゲティに合うのか、と皆不安だったりします。

「唐辛子も大蒜もスパゲティにはよく使うんだけれどね」

「とうより定番、いや必須だな」

イタリアとドイツがそう話しています。

「けれど韓国の味付けだと」

「どうなるか、だな」

「けれどまああれだぜ」

フランスがここで言います。

「イギリスのよりはずっといけるだろうさ」

「・・・・・俺の料理は一体何なんだ」

とりあえず皆韓国のスパゲティを待ちます。そうして暫く待っていたら。

「できたんだぜ！皆食べるんだぜ！」

持って来たそのスパゲティを見てみると。

「やっぱり・・・・・」

「さあ食うんだぜ！」

スパゲティにもキムチを入れていました。皆まずそれに絶句です。けれど韓国は一向に平気です。

皆とりあえずイギリスよりはましだろうと心の中で思うというか願いながらそのスパゲティを口に入れます。すると。

「あれっ、これって」

「意外と」
何と結構いけるようです。実に不思議なことに。
「これはまた」
「何と」
「俺は何をやっても天才なんだぜ！」
皆の横でまた自慢です。
「それにスパゲティの起源はウリナラなんだぜ！美味くできて当然なんだぜ！」
「俺の国なんだけどなあ」
イタリアの突っ込みも聞きません。結局最後は趣味である起源の主張でしめる韓国でありました。

第五十二話　完

２００８・２・１５

第五十三話　また捕虜になったよ　☆

第五十三話　　また捕虜になったよ

イタリアとドイツはまた捕虜になってしまいました。しかも今回は日本も一緒で三人仲良くといった有様です。捕虜になった日本は激しく落ち込んでいます。

「不覚・・・・・・」

「大丈夫だよ」

落ち込んでいる日本をイタリアが彼の肩を叩いて慰めます。

「ドイツが何とかしてくれるよ」

「俺がか」

横で話を聞いていたドイツはいつものように思わず突っ込みを入れます。

「御前も何かしろ」

そんなことを言っている間に落ち込んだ日本はとんでもない行動に出ました。何といきなり刀を取り出してきたのです。

「神風日本にあるまじき屈辱。これでは国民に申し訳ないです。かくなる上は・・・・・・」

と切腹しようとしていたところでイタリアに気付きます。何かリュートをどっからか取り出してきてにこにこしています。

「って何しているんですか？」

「いやあ、捕まった時暇かなあ、って思ってね」

捕まることはもう前提です。

「それでリュート持って来ていたんだーーーー」

「何か」

日本はそんなイタリアを見て切腹を止めます。それで溜息と共に突っ込みを入れます。

「貴方見てると全部どうでもよくなります」

「おーーーい」

ここでドイツが二人に声をかけます。
「抜け道掘ったぞーーーーー」
実に見事なまでに個性の分かれている三人であります。

第五十三話　　完

２００８・２・１７

第五十四話　会議の後で　☆

第五十四話　会議の後で

ドイツとイタリア、日本の三国は同盟関係からいつも会議を開きます。ただドイツとイタリアは欧州、日本はアジアにあるので日本が通うのには随分苦労があります。彼もそれはわかっています。

「私だけ家が遠いので毎回苦労するんですよね」

それで車か何かを開発しようとも思っています。しかしそれはまだ構想の段階です。

その日本にある日の会議の終わりにイタリアが声をかけてきました。

「やっほーーー日本」

見れば自分の国の車を軽快に乗りこなしています。

「もしかして帰るとこ？」

「ええ、そうですが」

「よかったら送ってくよ」

「すいません」

日本はその好意を受けることにしました。

「じゃあお言葉に甘えさせて頂きます」

「うん、それじゃあ乗って」

「はい」

こうしてイタリアの車に乗ったのですがこれがまた。

「えっ、ちょっとこれは」

ガンガンに飛ばしています。

「飛ばし過ぎてやいませんか！？」

「えーー普通普通」

あくまでイタリアの感覚ではそうです。

「これ位が一番風感じられて俺好きだよーーー♪」

全然人の話を聞いていません。

「い、いやでも制限速度とか大丈夫なんですか！？」
「いや、それ俺まだ食べたことないんだよね」
実はイタリアにそんなものはありません。何はともあれとんでもない速さで日本に着きましたがこの時には日本はもうノックアウトされていました。
「おおーい日本着いたよ。おーーい」
もっと安全な車を自分で作ろう。そう心に誓った日本でした。

第五十四話　　完

２００８・２・１７

第五十五話　お友達になりたいな　☆

第五十五話　お友達になりたいな

最近ドイツの家にやけにロシアから手紙が届くようになりました。

『ドイツ君へ。仲悪いままでいるのはお互いよくないので友達になりましょう　ロシア』

「あいつ昔は俺を見る度に攻撃してきた癖に何是今こんな手紙を？」

ドイツにとっては怪しくて仕方がありません。何しろあのロシアです。ドイツの警戒心は赤信号が灯る程でした。

『ポーランドの土地欲しいよね？欲しいよね？欲しいよね』

しつこい位に手紙に書いています。

『二人で半分こしませんか？』

「いらんいらん」

しかしドイツはそれを受けようとはしません。

「極力関わりたくないしな」

それが本音です。学園で一番怖いと言われていてアメリカや中国、日本といった強豪と平気で渡り合っているような相手です。しかも一度にまとめて。そんなのと誰も関わりたくないものです。

それでもロシアからの手紙は続きます。几帳面なドイツは毎回それに目を通します。

「全く・・・・・・。毎日毎日よくネタが尽きんな・・・・・・んっ！？」

何と今度の手紙は。

『友達になってくれないなら君の友達を一人消して僕がそこに入ります　ロシア』

「・・・・・・・・」

「えーロシアと友達になるの？」

「・・・・・・ああ」

イタリアが家に遊びに来た時に答えます。

「仲悪くなかったっけ」
「・・・・・せめて御前が強かったらな」
「何のことーーー？」
何はともあれこうして独露不可侵条約が結ばれようとしていました。

第五十五話　　完

２００８・２・１７

第五十六話　使えるかも　☆

第五十六話　使えるかも

「ロシアの奴には参ったな」
ロシアのとんでもない手紙にはさしものドイツも困っています。それでいつもぐうたらしているイタリアを見ずにはいられませんでした。
「イタリアが強くなってくれれば俺も安心できるんだが」
見果てぬ夢ですがふと思ってしまうのです。しかしそれでも今は必死なので本を読んでどうやってイタリアを強くするか考えます。その本によると。
「報告によるとドイツ人指揮官に率いられたイタリア兵は勇敢にかつ効果的に戦ったのか」
黙って本を読んでいてもとても信じられない話です。少なくとも今そのドイツの前で兎を抱いて昼寝しているイタリアを見る限りは。しかしそれでもドイツは考えるのでした。
「これは使える手かも知れないな」
それで早速イタリアを起こして軍事訓練開始です。
「というわけで今後の為にも御前のことを色々指導することにしたわかったな」
「イエスサーーー！」
とりあえず返事はいい感じです。
「今日から俺のことは隊長と呼ぶように」
「はい、隊長！」
掛け声はいいのですがすぐに。
「早速逃げ出したい気持ちで一杯であります！」
「はいランニング三週追加な！」
はじめからこれです。骨が折れそうだ、とドイツは今から不安で一杯になるのでした。

第五十六話　完

2008・2・17

第五十七話　脱兎の如く　☆

第五十七話　脱兎の如く

イタリアを走らせるドイツ。しかしイタリアを監督するのと自分の性分から一緒に走っています。

「あーーーん、辛いよーーーーしんどいよーーーー」

「もっとシャキシャキ走れ！」

泣き言を言うイタリアの横から喝を入れながら走ります。

「これが終わったら昼食にするからな」

「終わったら？」

「そう、終わったらだ」

「ぼえーーー、辛いよーーーー」

とか何とかいいながらもまともに走っています。そんなイタリアを見てドイツは心の中で思うのでした。そのイタリアを見ながら。

（何だかんだでちゃんとついてきているな）

少し見直してきています。

（やっぱりこいつはやればできるんだ）

「うぷーーー・・・・・」

ところがそう思った矢先にイタリアは一呼吸置いて。

「ってこら！」

いきなり猛烈なダッシュを開始したのでした。ドイツも驚く速さです。

「感心した矢先に逃げ出すなーーーーーっ！！」

恐ろしい速さです。しかも持続力もかなりのもの。よく考えたら彼はサッカーが大好きですから走るのはお手のものなのです。しかしそれでも恐るべき速さであります。

「こら待てイタリアーーーーーーッ！」

ドイツも追い掛けますがそれでも速い。

「何で逃げ足はそんなに速いんだーーーーーっ！？」

とりあえず戦闘以外では色々と凄いイタリアです。けれど二人は遠くで猫と遊んでいる日本には気付かないのでした。

第五十七話　完

２００８・２・１７

第五十八話　イタリアと猫　☆

第五十八話　　イタリアと猫

ドイツから必死に逃げたイタリア。まだ泣いています。
「ああ・・・・・今日のドイツやけに気合入っていて怖いよ」
彼にしてみればどうしてドイツがそんなに気合が入っているのか謎です。全く見に憶えのないことなのです。ところがとりあえず安全なのでふと周りを見るとそこには。
「わーーー可愛い」
そこには一匹の可愛い茶色の猫がいました。イタリアはすぐいその猫を抱っこします。
「ここに住んでるってことはドイツの猫かな？」
実はドイツの家の中で特訓をしているのです。そう、ドイツの家の中で。
「ドイツもこれ位可愛かったらいいのになあ」
何気に無茶なことを言っています。とりあえずそのドイツがいないのでもういつものお気楽モードに突入です。それで猫を抱いてゴロゴロと転がりだして。
「にゃんこ可愛い」
猫を抱いて言っています。
「にゃんこにゃんこにゃんこ～～～」
正直かなり恥ずかしいです。しかも何故か猫の表情は変わらないですし鳴いたりもしません。かなり無口な猫です。スコティッシュ＝ホールドみたいです。
「かわ・・・・・・」
ところがここで。
「うごふっ！」
何かが急に出て来てイタリアの顔を踏みつけます。上を見てみれば。

「悪いがそんな風にはなれんな」
「ぎゃあああっ！ド・・・・・・ドイツ！」
イタリアは忘れていましたがここはドイツの家の中です。しかも彼は脱走兵です。ドイツが追いかけない筈がなかったのです。こうしてイタリアは捕まってしまいました。しかしそんな彼に抱っこされても鳴かないし表情も変えないこの猫。かなりの大物かも知れません。

第五十八話　　完

２００８・２・２１

第五十九話　強くなったのは　☆

第五十九話　強くなったのは

「ちょっと今日は念入りに指導する必要があるな」
ドイツは怒りに満ちた顔でイタリアを捕まえて言います。
「さて、どうしようか」
「御免なさい御免なさい！」
しかもただ捕まえているだけではありません。スリーパーホールドをかけて締め付けています。イタリアはそんなドイツに必死に謝ります。
「頚動脈締めないでーーーーーっ！」
とりあえずそこは離してもらいました。そこは。
「全く」
それでもイタリアを離しません。
「次はちゃんと真面目にやるように」
「うう・・・・・御免ってば。許して隊長」
後ろからドイツの小突きを受けながら言います。
「腕反対に曲がっちゃいそうなんだけれど」
後ろで腕がグギグギ言っています。ドイツの力もあってかなりやばいです。しかもドイツは離そうとしません。横ではあの猫が変な鳴き声をたてています。鳴くことはできるみたいですがやっぱり表情は変わらないのですけれど。
しかしあのイタリアです。そっからも隙を見ては脱走しドイツにこってり絞られるのでした。
「だって怖・・・・・御免なさいごめんな・・・・・あ」
ゴチゴチ
「きゃあーーーーーーーっ！」
メキコ
「ちょ・・・・・ギブギ・・・・・あぎゃあああああっ！」

こんな調子です。それで結果は。
「何かドイツがやけに強くなってるらしいぞ」
フランスがまたイギリスの家で言います。イギリスはシュークリームに見えないわけでもないものを食べながら話を聞いています。
「ふーーーん、それでイタリアは」
「それがな」
フランスは報告書を呆れながら見てイギリスに答えます。
「戦争してないのに死に掛けてるらしい」
「何でだよ」
「俺が知るか」
結局強くなったのはドイツでありました。

第五十九話　　完

２００８・２・２１

第六十話　それで日本は

第六十話　　それで日本は

イタリアがドイツによって死に掛けていてドイツが有り得ないパワーアップを果たしているその頃。残る一人日本は何をしていたかというと。上司に呼び出されていました。

「韓国のことだがな」

「はい」

この頃韓国は日本の家にいたのです。殆どというか全く日本と同じ扱いを受けていてロシアの家にいる人達と比べたらそれこそ天国の様な中にいました。この度その韓国にも訓練を施すことになったのです。それで韓国自身は日本とお揃いの軍服を着て上機嫌だったのですが日本の上司は彼のことで日本に対して話をしていたのです。その話とは。

「韓国と一緒にいる時はこれを守ってくれ」

「これですか」

「そうだ、これだ」

そう言って差し出してきたのは一枚の紙でした。そこに書かれているのは。

1. 何時如何なる時でも唐辛子をふんだんに使わせること。
2. 恨みを持ち脱走の原因になるので決して殴ってはいけない。
3. 掃除用バケツと食事運搬用バケツの違いをよく言って聞かせること。
4. 危機に陥ると銃を投げ捨てて『哀号』と泣き叫ぶので韓国人兵一人につき日本人兵二人を組ませること。

この四つでした。それを見て日本が言うことは。

「あの、これは」

「兄が弟を教え諭すように」
上司の大好きな言葉の一つです。
「いいな」
「・・・・・わかりました」
何気に苦労している日本でありました。

第六十話　　完

２００８・２・２１

第六十一話　ムスタング　☆

第六十一話　　ムスタング

アメリカはイギリスを自分の家に呼びました。そうして新しい戦闘機のカラーリングをイギリスに見せるのでした。

「どうだい？新しい戦闘機ムスタングだよ」

何か機首の部分に人の顔が描かれています。というか鮫みたいなのが。

「このデザインがいいと思うんだけれど」

「何だよ」

けれどイギリスは醒めた目です。

「急に呼び出してこんなもん見せたかったのかよ」

溜息混じりに言います。

「こんな（アホな）デザイン俺には無理だよ」

さりげなく馬鹿にします。

「流石（アホの）アメリカだな」

「それはよかった」

そんなイギリスの言外の言葉なんか聞かずに言います。

「半分は君の」

こっから重要。

「（ことをボコボコにする）為に作った機体だからね」

「何・・・・・」

それを聞いたイギリスは固まります。言外で何を言っているのかは彼にもしっかりわかるからです。少なくともそれに関しては彼はプロであります。ブラックユーモアは伊達ではありません。しかしここでアメリカの技術者が彼のところに来て囁くのでした。

「ちょっと」

言いながら注意します・

「それはまだ秘密って言ったじゃないですか」

「あっ、そうだったね」
「・・・・・この野郎、またしても」
「まあ内緒にしておけばわからないからいいよね」
「そうですよね」
「聞こえてるんだよ、おい」
何だかんだで凄く仲の悪い二人でした。本当に友達同士なのかどうか。甚だ疑問です。

第六十一話　完

２００８・２・２４

第六十二話　呪いの椅子　☆

第六十二話　呪いの椅子

ムスタングのことで頭に来たイギリス。アメリカに復讐するべく今日の連合国会議ではアメリカの席をこっそりとイギリスの椅子に代えておきました。彼も彼でやることが実に暗いです。そのせいか友達がいなかったりするんですが本人は気付いてはいません。概して人は己のことには気付かないものです。

「この椅子ならな」

何とこの椅子は座ると死ぬ椅子として有名なハズビーズチェアです。イギリスにも実に碌でもないものがあったりします。

ところが。急にやって来たロシアが。

「あっお早うイギリス君」

そののろいの椅子に向かいます。

「今日はやけに早いんだね」

何とその椅子に座ります。それを見たイギリスの焦ることといったら。

「ちょっと待て！何いきなり座ってるんだよ！」

ところが。ロシアは暢気に歌っています。それどころか椅子の方が震えて。

「どうなってるんだよ・・・・・・」

続いてとんでもない異変が。

何と呪いの椅子が壊れてしまいました。不気味な、人間そのままの叫び声をあげて粉々に砕けてしまったのです。

「え・・・・・何！？どうしたの！？」

「の、呪いの椅子が・・・・・・」

これには流石にイギリスもビックリです。

「どうなっているんだこいつは」

どうやらロシアにはそんな呪いよりもずっと怖い何かがあるよう

です。それが何なのかは誰も知ろうとしまｓねんが。彼は何者なんでしょうか。

第六十二話　　完

２００８・２・２４

第六十三話　どうして友達に

第六十三話　どうして友達に

皆凄く不思議なのがどうしてそれまでとりわけ上司同士の間で物凄く仲の悪かったドイツとロシアが接近したのかということです。何しろあのロシアとドイツです。どうしてなのか皆それについてあれこれと考えますがどうしても答えが出ません。まあその内容はお互いに攻撃しないことと一緒に別の国を攻めるといういささか剣呑なものですが。

実はドイツはこの時色々な相手を向こうに回していました。

「イギリス、フランスにだ」

この二国だけではありません。

「ギリシアにノルウェーにデンマークにオランダに・・・・・・」

無茶苦茶敵が多いです。かなり大変なのは言うまでもありません。しかも相棒があのイタリアとあっては。ドイツの苦労は並大抵ではありません。そうした事情があっての同盟なのでした。しかしそれだけの敵を相手にするドイツの上司も凄いです。

それでロシアは。

「いやあ、実はドイツ君もねえ。色々と」

実は攻める気満々だったりします。しかも部下を一杯ドイツに向けています。これで本当にお友達なんでしょうか。

けれど二人には共通点がありました。それは」

「やはりイギリスとフランスがな」

「二人共ねえ。最近何か」

何と両方共あまりイギリスとフランスが好きではないのです。ドイツはわかりますがロシアまでです。本当に彼は連合国なんでしょうか。しかも。

「中国君もアメリカ君もねえ」

「まあドイツ君とも何かある前にね」

素朴にとんでもないことを考えているロシアでありました。

第六十三話　　完

２００８・２・２５

第六十四話　ボリス＝ゴドゥノフ

第六十四話　ボリス＝ゴドゥノフ

ロシアは素朴だけれどとんでもなく怖いです。そんな彼ですが結構繊細なところもあったりします。

「音楽はやっぱりいいよね」

無類の音楽好きでいつも聴いています。武骨な音楽も民謡も繊細な音楽も何でもいけます。とりわけ好きなのがチャイコフスキーです。

「あとはイタリア君のオペラもいいよね」

「あっ、俺の国の音楽好きなんだ」

「大好きだよ」

にこりと笑って答えます。

「歌だってほら」

「うわ、凄く上手いや」

これにはイタリアも驚きです。意外や意外、ロシアは歌が上手かったのです。しかもダンスも。コサックダンスだけではなくバレエなんかも。イタリアが見ても驚くレベルです。

「フランス兄ちゃんよりも上手いかも」

「悔しいけれどそうかもな」

フランスもそれを認めます。

「あいつにバレエを教えたのは俺だったんだけれどな」

「そうだったんだ」

「僕もオペラ作ってみたんだ」

自分でも作曲します。さらに凄いです。

「へえ、どんなの？」

「ちょっと見せてみろ」

「うん、こんなの」

ボリス＝ゴドゥノフという作品です。
「是非観て聴いてみてよ」
「うん、それじゃあ」
「わかったぜ」
イタリアとフランスは誘いに乗って観劇しました。ところが感想は。
「音楽はいいんだけれどねえ。ストーリーも」
「ただな。どうもラストが」
「あれ、こういうのは駄目かなあ」
「最後が陰惨なのがな」
フランスはそう言って言葉を濁します。それが二人には少し合わなかったようです。

第六十四話　完

２００８・２・２５

第六十五話　地雷に挑戦　☆

第六十五話　地雷に挑戦

本当に辛抱強くイタリアへの訓練を続けるドイツ。その忍耐力の凄さは神懸かりクラスです。おそらく世界一ではないでしょうか。

今日もお気楽にしか見えないイタリアに対して訓練を行っています。しかもあのロシア領内で。かなり勇気があります。

「では次の訓練だ」

草陰に隠れながらイタリアに言っています。

「この地雷を敵の陣地に埋めてくるだけだ」

「それだけ？」

「そう、それだけだ」

イタリアに対して細かく説明します。

「この程度ならできるだろう？」

「うん、できそう」

それでも返事は何か不安なものです。ドイツから見て。

「なるべく敵に見つからないように動くんだぞ」

それでも念を押します。何しろイタリアですから。

「なおここはロシアの陣地だから気をつけ・・・・・・・」

といった矢先にもう動き出しています。

「って話を聞けーーーーーっ！」

一人で勝手に地雷を埋めました。

「やったーーードイツやったよーーーーー」

ドイツに手を振って大喜びです。

「一人でできたよーーーーー」

イタリアは大喜びです。しかし後ろには。

恐怖の戦車Ｔ－３４が迫っています。最強とすら言われるとんでもない戦車です。ロシアのとても偏っていますが非常に恵まれた才能を傾けたとんでもない戦車です。それを見たドイツは。

「撤収ーーーーーっ！撤収ーーーーーーーーっ！！」
必死にイタリアに対して叫びます。やっぱりイタリアはイタリアでした。

第六十五話　完

２００８・２・２８

第六十六話　ヘルメットは嫌い　☆

第六十六話　　ヘルメットは嫌い

何とか恐怖のミッキーマウス戦車ことＴ－３４から命からがら逃れたドイツとイタリア。ドイツはカンカンになってイタリアに対して怒っています。

「本当に御前は危なっかしくて見ていて心配だ！」

何を今更、といった言葉ですがそれでもドイツは言います。そもそも何でイタリアに対して訓練しているかその目的を少し忘れかけています。

「これからは若しもの時にだ！」

イタリアに対してあるものを手渡しながら怒り続けています。

「ヘルメットを被っておけ！いいな！」

「あっ、悪いけれど」

ところがそのヘルメット、しかもドイツ製の耳までガードしてくれる有り難いヘルメットを受け取ったイタリアはそのヘルメットを放り投げて捨ててしまいました。

「いらない。御免ね」

それを見たドイツは一瞬動きを止めましたがすぐにまた激怒して。

「いきなり捨てるな！ちゃんと被れ！」

無理矢理イタリアの頭に被せます。

「何を考えている！」

「ぎゃあああ！ごごご御免よお！だって！」

「だって・・・・・何だ！？」

「ヘルメットって被ると縮みそうなんだもん・・・・・」

実はドイツは一八〇でイタリアは一七二・イタリアはそれを気にしているのでした。ドイツはイタリアにそう言われて何も言えませんでした。

第六十六話　完

2008・2・28

第六十七話　実は一番

第六十七話　実は一番

さて、イタリアは自分の背のことを気にしていますがまああまり大きくはないです。この学校では皆男は大体一七〇が標準です。つまりそれ以下だと小柄になってしまうわけです。しかもこの学校は今のところは男が多かったりします。

意外にも小柄とされているドイツの上司で一七五あります。だから本来彼は小柄ではないのです。もっともドイツは一八〇あったりしますが。

「何かよく考えたらさ」

「何だ？」

ドイツはイタリアの話を聞きます。

「俺ってそんなに背が低くないんだ」

「まあそうだな」

イタリアのその言葉に頷きます。

「そんなところだ」

「それじゃあさ」

連合サイドはそんなに低くないです。中国が少し目立つかな、といったところですがここは人が多くて高い人も低い人もいるし結構難しいです。ロシアがかなり大きいですけれど。

「一番低いのは」

「私でしょうか」

ここで出て来たのは日本でした。

「やはりそうなりますか」

「ま、まあそうかもね」

「だが日本」

見れば確かにあまり大きくはありません。日本もそれは自覚しています。二人にフォローされても。

「仕方ないです。事実ですから」
結局自分の背のことを自覚せざるを得ない日本でした。しかも彼かなりのお爺ちゃんだったりしまう。穏やかな外見に似合わず中々謎の多かったりする彼でありました。

第六十七話　完

２００８・２・２８

第六十八話　トリプル　☆

第六十八話　トリプル

二人でやるのも飽きたのでしょうか今回は日本も参加しての訓練です。ドイツは早速二人に聞きます。

「ではまず兵士の基本の心得からいくぞ」

「いえすさーーー！」

「えっ！？えっ！？」

もう早速ノリノリのイタリアに対して日本は明らかに戸惑っています。

「何ですか、急に」

「それでは上官が歩いてきた時は？」

「はい隊長！」

イタリアがドイツの質問に答えます。

「イタリア人らしくシカトして歌うたって飯食って寝ます！」

「敬礼だ、敬礼！」

そんな二人、というかイタリアを見て日本は思いきり引いています。それで手を挙げて二人に尋ねるのですがやっぱり思いきり引いています。どうにも生真面目な日本にはあまり、というかかなり合わない雰囲気のようです。

「あの」

「何？日本」

「さっぱりついていけないんですが」

イタリアに問われてこう二人に答えます。手を小さく挙げて質問した後で。

「いや」

ドイツはその日本に言います。汗をかきながら。

「イタリアの真似はしなくていいからな」

（というかしないでくれ。日本だけが頼りなんだからな）

「できるできるって」
ドイツの心の言葉をよそにイタリアは朗らかに日本の肩をぽんぽんと叩いて言います。
「日本ならできるよ」
「で・・・・・できるかなあ」
そんなイタリアの言葉をよそに不安で一杯の日本でした。何かかなり勘違いしているようですけれど。

第六十八話　　完

２００８・３・２

第六十九話　絶妙のトリオかも　☆

第六十九話　絶妙のトリオかも

日本の不安をよそに三人での訓練は続きます。何気に連合国の五人よりずっと仲がいいのは気のせいでしょうか。とにかく三人の変な訓練は続いています。

「よしではもう一度最初からだ！」

「イエ・・・・・・」

日本がそれに応えようと手を挙げたそれより先にイタリアが手を挙げていて。

「ノーーー！サーーー！」

「また絞られたいのか！」

またしてもこの流れです。イタリアの辞書に懲りるという文字はありません。なにはともあれ訓練を続けて。ドイツも本当にタフです。

「次！」

イタリアを指差して問います。

「敵が降伏を求めてきた時はどうする！？」

「はい隊長！」

イタリアが返礼し元気よく答えます。

「イタリア人らしく素直に投降して歌うたって飯食って寝ます！」

「後半さっさと一緒だろ！」

全然いじくっていません。見事ですらあります。しかしドイツはめげずに。

「次！では日本答えてくれ！」

（本当に頼むぞ）

ドイツの心の中の言葉がまたしても。

「隊長！私は日本人らしく！」

「むっ！？」

期待できるかと思ったら。
「『善処します』『また今度』『考えておきます』と曖昧な返答をします！」
実はあまりにも有名な日本の十八番です。
「ちなみに答えは全部『いいえ』です！」
これが日本です。彼ははっきりとはノーと言わないので何かと言葉を読み取るのに大変な人だったりするのです。
それで三人であれこれ話しているのですが草陰でそれを見て泣いている人がいます。見れば。
「こんな馬鹿三人組に俺は負けたのか・・・・・・」
フランスでした。実は彼の勝率は暗黒時代ぶっちぎりの頃の虎の野球チーム並なのです。意外とあれな彼であります。

第六十九話　完

２００８・３・２

第七十話　面接用椅子　☆

第七十話　面接用椅子

イギリスはめげません。めげていてはフランスだの他の個性的な面々だのと付き合えません。ましてやメンバー全員と仲が悪いのに五人の常任生徒会の役員にはなれません。しかも友達が少ないのにやってはいけません。凄い人間関係ではあります。

そのイギリスが家で働いてもらう人を募集する為に面接をはじめました。まず面接をして採用するかどうか決めるのです。テストはなしで待遇は最初からかなりの好条件を出しています。彼にしろ人が欲しいのでそうしたのです。ところが。

「人が来ないというのか」

「はい」

イギリスは申し訳なさそうに上司に報告します。

「わからない。条件はこれ以上ない程度いいというのに」

「御飯は俺の手作りです」

「そうだよな」

「真心のこもった」

問題はこれではないかと思うのですが。しかもそれを募集のポスターに堂々と書いていたのです。これで人が来たらそれこそ奇跡です。なおかつ。

「面接の時の椅子まで奮発したんですよ」

「ほう、細かいな」

「はい、気配りです」

実は彼は結構それができます。他の四人と違って。

「豪華な椅子を用意しておいたんですが」

「それで来ないのか。全く不思議だな」

「こちらに落ち度は全然ないというのに」

実はその椅子はあの呪いの椅子なのでした。しかもそれもポスタ

ーに堂々と載せていました。料理と合わせてこれで募集というのも本当に凄いです。何はともあれ結局人が全然来なくてがっくりと肩を落とすイギリスでありました。しかし最後までどうしてなのかはわかりませんでした。

第七十話　　完

２００８・３・２

第七十一話　遠い昔の日

第七十一話　遠い昔の日

フランスがまだ若くてついでに馬に乗るのは上手でしたがイギリスにこてんぱんに負け続けて上司共々これからどうしたものかと悩んでいたある時のお話です。

「私は貴方の為にここに来ました」

いきなりこう一人の少女に言われました。何か小柄で豊かな色彩の栗色の髪に青い澄んだ瞳をした髪の短い女の子です。美少女と言ってもいいでしょう。そんな娘がかなりやばい状況のフランスのところにやって来たのです。

「ってあんた、誰なんだ？」

「フランスの為に、イギリスを倒し」

「そう言ってくれるのは有り難いけれどさ」

しかし今の彼は。クレーシーとかあちこちで負けてそれでこのブールジュに引き篭もっていたのです。家はかなりの部分をイギリスとその部下達が占領しちゃっている笑うに笑えない惨状であります。

そんなフランスのところに来たこの少女は何者なのか。フランスは彼女に尋ねます。

「あんた、名前は？」

「ジャンヌです」

少女はこう名乗ってきました。

「ジャンヌ？」

「そう、ジャンヌ＝ダルク」

少女はまた名乗ります。

「それが私の名前です。いざ戦場に」

まだ武器も持っていないというのに高らかに叫びます。

「フランスの為に。貴方の為に」

「俺の為か」

それまでいじけていたフランスの心に何かが宿りました。
「そうだよな。俺だって」
今自分が腰に下げている長い剣を見て呟きます。そして。
「イギリスの野郎に勝ってやるか。こうなったらとことんまでな」
こう決意するのでした。一人の少女に励まされて。

第七十一話　　完

２００８・３・３

第七十二話　少女と共に　☆

第七十二話　少女と共に

そのジャンヌと一緒に戦うことになったフランスですが。実はこのジャンヌが。

「んーーーーー・・・・・・」

「んーーーーーって・・・・・・」

やっぱり女の子です。非力です。剣を持ち上げられないのです。何とか馬は乗れますがそれでも。女の子ですから全然頼りないのです。フランスも見ていてハラハラします。大丈夫なのかとさえ思います。

「いいよ。俺が戦うから」

「戦うのですね」

「ああ、やってやるさ」

必死に頑張る彼女を見て誓うのでした。

「だからさ。見ていてくれよ」

「はい、そして私も戦場に」

「来てくれるんだな」

「貴方の為に。戦います」

目を輝かせて言うのでした。

「そして必ず最後には勝利を」

「ああ、やってやるさ」

それまでなかった程にフランスの身体に力が宿ります。その力を胸に今黒い鎧に身を包んで弓矢を持つイギリスに向かうのでした。

「来たな、今度も負けないぜ」

「生憎今度はそうはいかないんだよ」

不敵な笑みを浮かべてイギリスに言い返します。

「俺だってなあ、やる時はやるんだよ！」

「何っ！？そういえば御前横にいる女の子は！」

「さあ、行きましょう！」
ジャンヌが一緒に突進しフランスに声をかけます。
「勝利の為に！」
「ああ、負けっぱなしじゃないんだよ！」
今まで散々に負けていたイギリスに立ち向かいそうして勝っていき。遂にフランスはイギリスとその部下達を家の殆どから追い出すことに成功しました。けれどその時もうジャンヌの姿はフランスの横にはありませんでした。そして。
「あれっ、確か隣に」
フランスもまたジャンヌのことを忘れていました。
「誰かいたような。誰だったっけ」
けれど幾ら考えても思い出せません。遠い遠い昔の日のお話です。

第七十二話　　完

２００８・３・３

第七十三話　思い出したあの日

第七十三話　思い出したあの日

フランスはずっと忘れていました。イギリスとの戦争のことは覚えていても彼女のことは忘れていました。革命というのが起こって上司がめまぐるしく替わりました。そのうちにコルシカから来た小柄な人が上司になって彼に対して言うのでした。

「ジャンヌのことだが」

「誰ですか、それは」

「何故忘れているのだ」

上司はフランスが彼女のことを完全に忘れていることに驚きました。そして彼に言います。

「あのイギリスとの戦争の時だ。御前の側にずっといた」

「ずっとですか」

「馬鹿な、どうして覚えていないんだ」

上司にとってはそっちの方が不思議でした。

「あれだけ助けてもらったのに」

「助けてもらった。俺が」

「そうだ」

また上司に言われます。

「忘れているならまた教えてやる。いいか」

上司は必死になってジャンヌのことをフランスに教えます。そうして遂にジャンヌのことを思い出したフランスは。ジャンヌの像を造って彼女に対して言うのでした。

「悪いな、今まで」

少し俯いて申し訳ない顔で。

「忘れていたよ。けれど」

あの時何があって彼女と共に何をしたのかを思い出したのです。辛い戦場での戦いも家の一部を取り戻した時の喜びも。何もかおを

思い出していたのです。そしてそれはフランスの心に今度こそ深く刻み込まれ。

「もう忘れない。いいな」

強い言葉で言うのでした。そしてジャンヌの顔を見て笑うのでした。その時何故か像のジャンヌの顔が微笑んだように見えました。

第七十三話　　完

２００８・３・３

第七十四話　声の主は

第七十四話　声の主は

かくして上司に言われてやっとジャンヌのことをようやく思い出したフランス。しかし彼は忘れていたことをずっと悔やんでいました。悔やんでも悔やみきれません。それでこの日も家の中にあるジャンヌの本を見て後悔に苛まれていました。ところがここで何処からか謎の声が聞こえてきました。

「一体何をそんなに悲しんでいるのですか？」

「そりゃよ、あんた」

フランスはその声に応えます。

「俺は気付いたんだよ。自分の馬鹿さ加減に」

「馬鹿さ加減に？」

「そうさ、俺は馬鹿だった」

声の方を振り向かずに言います。

「ずっと忘れていたんだからな」

「忘れていた？誰を」

「だからよ」

やっぱり声の方を振り向きません。何をやっているんでしょうか。と思ったらずっと本を読んでいます。こう見えても中々読書家で本が好きなようです。その横にワインを置いているのはさりげないお洒落なのでしょう。

「俺の為に戦ってくれたあいつのよ」

「あいつっていいますと？」

「だからよ」

ここで声の方を振り向きました。やっとです。

「あいつだよ。俺の為に戦ってくれたジャンヌをよ」

「ジャンヌですか」

「そうだよ。一体何処に行っちまったんだ・・・・・って。えっ

！？」

振り向いたその先にいたのは何と。さて誰なのか。

第七十四話　　完

２００８・３・６

第七十五話　生きていたとは

第七十五話　生きていたとは

何とそこにいたのは。全く予想していなかった出来事が。

「それは誰のことですか？」

ジャンヌがいました。あの時のままの姿で。フランスの驚くことといったら。

「っておい、何でいるんだ！」

ジャンヌを見て叫びます。

「死んだんじゃなかったのか！」

「死んだ？誰が」

ジャンヌはそう言われてもピンと来ない顔をして首を傾げています。

「私は少しいなかっただけですが」

「けれどイギリスの野郎に捕まってよ」

「逃げ延びたのです」

しかしジャンヌはこう答えるのでした。

「逃げ延びたぁ！？」

「そうですよ。だって私は」

ここでこれまたフランスが忘れていた衝撃の事実が。何か日本よりもずっと若い筈なのに記憶力が可哀想なことになっているような気がしないでもないですが。

「聖女なのですよ」

「ああ、そうだったっけ」

やっぱり完全に忘れていました。

「そういえばそうだったな」

「そうです。だからここにいるのです」

「そうか。しかしよかったよ」

フランスはジャンヌを見ながらあらためて笑顔になりました。

「生きていてくれたんだな」
「ええ」
「それでな、ジャンヌ」
立ち上がって彼女にまた声をかけます。
「ずっとうちにいるのか？」
「勿論です」
にこりと笑ってフランスに答えるのでした。
「私はその為にいるのですから」
「そうだよな。それじゃあこれからも」
「はい、宜しくお願いしますね」
「こちらこそな」
こうして思わぬ形でフランスのところに帰って来たジャンヌ。フランスにとって有り難い助っ人が戻って来たのでした。

第七十五話　　完

２００８・３・６

第七十六話　挨拶の代償　☆

第七十六話　挨拶の代償

イタリアはすっごくフレンドリーな人です。けれど日本は違います。彼は凄く物静かでその行動も控えめです。枢軸の三人の中だけではなく学園でもかなりのものです。ここに大きな違いがあります。凄く重要だったりします。

それでイタリアが挨拶します。

「日本おはよーーーー」

そう言いながらハグハグします。ドイツはこれに対しては内心非常に戸惑いを感じているのですがそれでも何とか付き合います。何だかんだで友人に気を使うのがドイツなのです。

ところがドイツより生真面目で実は天然でマイペースな日本が相手となると。勝手が全然違うのです。

ハグハグしてついでにその頬っぺたに軽いキスをして。これが普通の相手なら問題はないのですがとにかく日本なのです。それで怒った日本が言うことは。

「何てことをするんですかっ」

ぷんぷんと怒り出します。

「えっ、何で怒るの？」

「私ははじめてなんですよ」

「俺もだけれど」

「それでもです」

なお日本はかなり若く見えますが枢軸の三人、ついでに日本に何かと厄介になっている韓国も入れた四人の中では最年長です。韓国は自分が一万歳だとか五千歳からまた途方もない数の水増しというか出鱈目というかホラというかを自称していますがそれでも実は日本が一番年上です。それではじめてというのは彼は今まで何をやっていたんだということになりますがまあそれも日本らしいといえば

らしいでしょう。その後の行動もまた実に日本です。
「と、とにかくですね」
「う、うん」
戸惑うイタリアに対して言う言葉は。
「責任は取ってもらいますからねっ」
「えーーーーーっ」
何故か女装、しかも金襴どんすを着て出て来た日本。どうも彼の天然もかなりのようです。

第七十六話　　完

２００８・３・６

第七十七話　ドイツだとどうか　☆

第七十七話　ドイツだとどうか

何とかかんとかで日本の天然な事態から逃れたイタリア。しかしそれで懲りるような彼ではなく今度はドイツに対して声をかけるのでした。

「ドイツおはよーーーー」

「ああ」

フレンドリーなイタリアに対してドイツはいつもの無愛想です。けれどこれはいつものことなのとそんなことをいちいち気にするイタリアではないのでノープロブレムです。

そしてイタリアは。さらにドイツに対して注文をつけます。実はこれもいつものことです。

「ハグしてーーーハグしよーーー」

「ああ、わかった」

ドイツはあまり表情を変えずに応えます。それを受けて、まあ受けなくてもするのですがイタリアはハグをしようとします。ところがここで思わぬ事態が。

「ほっ、あれ！？」

あることが起きました。

「おぶおりゃ。ありゃ」

何と背が違うのです。イタリアとドイツを比べると八センチの違いがあります。勿論ドイツの方が高いのです。イタリアはいつもハグの時にこのことを忘れてしまっているのです。

「うう・・・・・届かないや」

「ま、まあそうだな」

ドイツは届かなくて悲しいイタリアに対して言います。

「どうしようかな、これじゃあ」

「ああわかったわかった」

そしてこんな時にいつも合わせるのがドイツです。あえて自分からしゃがんで。
「これでいいんだな」
「うん。けれど」
ドイツの気遣いは嬉しいのですがそれでも。
「しゃがまれて。悔しい」
「それは仕方ないだろ」
背の問題だけは仕方ないのでした。ちなみにイタリアの家のオペラ歌手には彼よりも遥かに高い女の人がいたのでイタリアはこの人には勝てませんでした。レナータ＝テバルディという人です。

第七十七話　　完

２００８・３・６

第七十八話　大昔のお話　☆

第七十八話　大昔のお話

若い頃の中国。それでも顔があまり変わってはいないのは気のせいではなく彼が仙人だからです。一説には四千歳だそうです。もっとも皆が皆結構お歳なのは内緒ですが。韓国に至っては自分で一万歳とか言っています。

そんな中国がぼやきながら道を歩いていました。昔なので周りは木で一杯です。

「全く毎日毎日あちこちで政争ばかりしていて嫌になるあるな」

彼の家はそれが昔から激しいのです。血生臭いことも結構あったりします。それをぼやいていると前から小さな黒髪の子供がやって来ました。

「んっ！？、見慣れない奴あるな」

彼はその男の子を見てすぐにわかりました。新しい国だと。それで声をかけました。

「新しい国あるね。ちっちゃいある」

まずは思ったことを言います。彼らしく。

「こんな狭い所で生まれて大変そうあるね」

「そうですか」

「多分そうある。ああ、僕は」

今度は自分の名前を名乗ります。

「中国ある。わからないことがあったら聞くよろし」

「わかりました」

答えはしますが何か。表情がありません。それでも中国は子供に対して尋ねます。

「御前名前何というあるか？」

「名前ですか」

「そうある。何あるか？」

すると彼が名乗ったのは。
「こんにちは日の落ちる処の中国さん」
「なっ！？」
いきなりこう言われてむっとした顔になった中国でした。
「私は日本です」
「し・・・・・失礼な奴ある！」
これが日本と中国の出会いです。何気に失礼なことを言っている日本でありました。

第七十八話　　完

２００８・３・６

第七十九話　文字ですが　☆

第七十九話　文字ですが

日本と中国の付き合いがはじまりました。暫く付き合っているうちに中国はあることに気付きました。

「こいつ絵は描くのに字は書かないある」

そのことに気付いたのです。見れば書くのではなく描いています。中々上手い絵ですが。

「若しかして字を知らないあるか？」

中国はそんな彼を見てこう思いました。それで自分の字を薦めることにしました。

「日本これ使うよろし」

漢字を見せて言います。

「それは何ですか？」

「漢字という便利なものある」

「漢字ですか」

「そうある。これを使えば」

ここでさらにいいことを教えます。彼にとっては完全に善意です。

「お手紙を書けるようになるあるぞ」

「そうですか。それでは」

早速漢字を使ってみる日本でした。また上達がかなり早いです。中国もそれを見て言います。

「早速使っているあるか。感心あるな」

ところが。暫くして日本は別の文字を書きだしました。それは・

「何ある、その字は」

「平仮名ですが。どうでしょうか」

「な・・・・・・」

中国が見たこともない変わった文字を日本が作ったのを見て驚いて。それで言う言葉は。

「こいつ、ひょっとしてとんでもない奴ではないあるか？」

悲しいことにそれは当たっていました。しかも隣にはあの韓国までいます。何気に周りに所謂とんでもない人が多い中国でありました。けれど彼にはその自覚はありません。後に自分の家の北に今揉めている人達よりもずっと凄い人が出て来ることも知りません。意外と仙人なのにわからないこと気付かないことが多いのは何故でしょうか。仙人が千人いてもわからないのだと俗に言われています。

第七十九話　　完

２００８・３・６

第八十話　弟と思っていたら　☆

第八十話　弟と思っていたら

日本と中国の交流は続いています。日本の成長は素晴らしいもので中国も舌を巻く程です。今日はからくり人形を作って中国に見せています。

「どうでしょうか」

「アイヤーーー、凄いある」

中国はそのちょんまげでコトコトと動く人形を見て驚きの声をあげます。彼でもこんなものを作るのは中々骨が折れることだったからです。

「日本は成長が早くていいあるね」

素直に日本を褒めます。何しろ隣に学園でもぶっちぎりの奇人変人というか空気を読まないというかとてつもない方向に全力で突っ走る人がいますから余計に目立つのです。

「僕も鼻が高いある。あっ」

ここで頭を丸めて黄色い僧衣を着た男の人に気付きます。中国の知り合いというよりは舎弟というかそうした存在であるチベットです。中国は彼に気付いて日本を彼の前に出してきました。

「チベットじゃないあるか」

「どうも、中国さん」

二人はまずは挨拶を交えます。

「丁度いいところに来たある。日本ある」

「日本！？」

「そうある」

胸をそらせてチベットに日本を紹介しています。何か随分上機嫌です。

「御家族さんですか？」

「そうある！」

ここで中国は調子に乗ってとんでもないことを言いました。
「私の自慢の弟あるよ！」
こう宣言したのですがここで。その日本がチベットの側に来て。
手を横に振ります。そのうえで小声で違う違うと。チベットもそれを受けてああやっぱり、といった感じで頷きます。
「否定すんなある」
そんな日本に突っ込む中国ですか。もう負けてしまったので何もできませんでした。

第八十話　　完

２００８・３・６

第八十一話　イタリア兄登場

第八十一話　　イタリア兄登場

いきなりドイツのところに。何かイタリアによく似ていますが顔はもっとはっきりとした感じでもっと大人に見える感じの結構顔のいい青年がやって来ました。

「おいドイツ！」

「何だ御前は」

「御前に言いたいことがある！」

ドイツを指差して叫んできます。声もイタリアに似た感じです。けれど何か印象が違います。

「折角統一できたっていうのにな」

「イタリアのことか？」

「そうだ。あいつのことだ」

かなり怒って言います。

「俺はな」

「イタリアに似ているが。誰なんだ？」

「見てわからないのか？」

「！？」

それでわかるかどうかというと。残念ですがドイツは結構そういうのは苦手なので。わからないのです。

「そういえばイタリアに」

「そうだよ、それだよ」

ここでまたドイツに対して言います。

「俺はイタリアーノ＝ロマーノ」

「ローマ。ということはだ」

「そうだよ、あいつの兄貴だよ」

今わかった衝撃の事実です。そういえば確かにかなり似ています。

「やっとわかったのか」

「すまん」
「わかったのならいいけれどな」
一応はそれをよしとします。ところが。
「それでだ」
「ああ」
「御前弟とつるんでるよな」
「・・・・・そうだったのか」
一方的にまとわりつかれて一方的にピンチに追い込まれているような。ドイツはそう思っているのですがどうも彼は違うようです。
「ドイツドイツってよ」
「まあそれはな」
否定しません。というかこれはできませんでした。本当のことですから。
「あいつと付き合うの今後一切止めてくれよな」
「・・・・・何でこうなるんだ」
またしても出て来たドイツの周りの困った隣人でした。彼は何か得体の知れないものに取り憑かれているのでしょうか。上司といい。上司が一番困りものですが。

第八十一話　　完

２００８・３・７

第八十二話　やっぱり兄弟

第八十二話　やっぱり兄弟

イタリア兄の話は続きます。一方的にドイツに対して言っているだけですが。

「大体だ」

ドイツに対して何か優越感を少し見せながら話します。なおドイツは何も言いません。

「ゲルマン系は野蛮な田舎者で生理的に好かないんだよな」

「悪かったな」

かなり酷いことを言われてもドイツは怒りません。そうでなければ隣人と上司に付き合えないからです。

それでも少しむっとしたのか。彼はイタリア兄に対して反撃に出ました。

「そうは言うがな」

「何だ？」

「御前の弟もだ」

ここでイタリアのことが話に出ました。

「あいつがどうしたんだ？」

「こう言っては何だがゲルマン系の血が濃いわけだが」

実はそうなのです。イタリアとドイツは昔かなり付き合いがよかったですしオーストリアもいましたから。それで結構そうなっているのです。しかしこれはイタリア兄にとっては言ってはならない言葉でした。

「五月蝿い！」

ムキになって言い返してきました。

「御前なんかぶん殴ってやるっ！」

「何でそうなるんだ？」

「黙れ！」

泣き叫びながらドイツに向かいますが。
自分でこけて自分で倒れました。それで逃げ帰ってイタリアに手当てしてもらって。
「こんな怪我して何があったの？」
「五月蝿い！全部御前のせいだ？」
「ええっ、何でなの？」
やっぱり兄弟でした。喧嘩にからっきり弱くておまけに抜けているのは同じなのでした。なお彼の好物はパスタです。弟も同じです。そこは本当にそっくりです。ついでに言えば女の子も大好きでワインも音楽も大好きです。本当に兄弟なのです。何処までも。

第八十二話　　完

２００８・３・７

第八十三話　赤い悪魔

第八十三話　赤い悪魔

見事自爆したイタリア兄。しかしこれで懲りる彼ではなくまたドイツの前に出て来て高らかにリベンジを宣言するのでした。

「いいかソーセージ野郎！」

「今度は何だ？」

ジャガイモ野郎と並ぶドイツの仇名がまず炸裂です。他にもギドニーパイだのビールだのザワークラフトだのアイスバインだのがありますがやはりドイツといえばこのソーセージかジャガイモなのでした。なおこの二つにビールをプラスすればドイツは満足します。ただし痛風には要注意の組み合わせです。

「今日こそローマ占領のリベンジをしてやる！」

「・・・・・そうか頑張れ」

自分を指差して宣言するイタリア兄に対して呆れながら応えます。その間に相手は懐から何かを取り出してきました。

「今日は御前をやっつける為に秘密兵器を用意してきたんだぜ」

「秘密兵器か」

「そうさ。今日でむかつく御前ともさよならだ」

不敵かつ邪悪な笑みを浮かべての言葉です。そうして出してきたものをドイツに投げます。それはドイツのこめかみにぴん、と当たっただけでした。

「！？変なものを投げて」

きたと思ってイタリア兄を見てみるとそこにいたのは。

赤い手榴弾を咥えて誇らしげに仁王立ちしているイタリア兄でした。これは危ない。

「だから逆だ逆ーーーーーーーーっ！！」

「何っ・・・・・・うわあーーーーーーーっ！」

哀れ爆発に巻き込まれ自爆するイタリア兄。そんな彼を見てドイ

ツは一言。
「揃いも揃ってこの兄弟は・・・・・・」
やっぱり兄弟なのでした。

第八十三話　完

2008・3・7

第八十四話　昔々のイギリス

第八十四話　昔々のイギリス

何かと孤独な傾向の強いイギリスですがそれは昔からでした。この時も友達を連れて一緒に歩いている宿敵フランスに対して言われていました。

「よお、友達いないイギリス君じゃないか」

「う、五月蝿い！」

そのフランスに対して何とか言い返します。

「喧嘩じゃ俺に勝てない癖に！」

「何ィ！？この前の百年戦争勝っただろうが！」

「それだけだろうが！」

「獅子心王の時はどうだよ！」

こうしていつもの喧嘩です。とかくフランスと喧嘩ばかりです。たまりかねた彼はまずは家に帰りませんでした。

「ちっきちょーーー、ヨーロッパにいるとすっげえすさむよな」

かなり自分にも責任はありますがあまり自分のことは考えていません。そんな彼がいつも行くのはアメリカの家でした。そこにはまだ子供のアメリカがいたのです。

「イギリス、また来てくれたんだ」

犬の相手から彼に顔を向けて尋ねます。まだ随分と幼いです。

「ああ、元気だったか？」

イギリスは屈んで彼の頭を撫でながら声をかけます。

「悪いな、中々来れなくて」

「いいよ」

けれどアメリカはそんなイギリスを笑って許すのでした。

「こうして来てくれただけでも嬉しいぞ」

「そうか」

それを聞いてさらに上機嫌になるイギリス。にこにこと笑ってア

メリカにまた言います。
「御前といると何かすげーー和むよ」
「本当？」
「本当さ・・・・・・んっ！？」
ところがここで気配に気付いて壁の方を見てみると。
「・・・・・げっ」
フランスが覗いていました。そこからにやにやと笑いながらイギリスを見ているのでした。やっぱりそうそう和めないイギリスでした。

第八十四話　　完

２００８・３・７

第八十五話　料理の腕は

第八十五話　料理の腕は

信じられないことですがイギリスは料理が好きです。とてつもなくまずいものを作るのですが自分には自覚がなく作るのは大好きなのです。舌に深刻な問題があると言われています。

ここでさらに問題なのはその料理を他人にも作ることです。アメリカに対してもこれは同じでした。

「わーーー、嬉しいな」

まだ子供のアメリカは純粋にそれを喜んでいます。

「イギリスの作った料理久し振りだよね」

「ああ」

イギリスは微笑んでアメリカに対して答えます。

「こうやっているも作ってやれればいいんだけれどな」

料理好きの台詞です。ただしグルメの台詞ではないのですが。

「そういえばさ」

ここでアメリカがイギリスに尋ねます。

「何だ？」

「僕生まれたてでよくわからないんだけれど」

「それで？」

「これって美味しいものなのかい？」

「えっ、ああ！？」

そう言われて急に狼狽を見せるイギリスでした。

「馬鹿だな！おい！」

立ち上がってアメリカに対して叫びます。

「美味いに決まってるだろ！」

「そうか。これが美味しいものなんだ」

「そうだよ！」

無理矢理そういうことにします。

「これが美味しいんだ！わかったな！」
「うん」
　これがアメリカが味音痴になった原因でした。これが最近まで治らず、もう一人いたカナダは今でも激烈に料理が下手でそれこそパスタのアルデンテすら知らないのもまたイギリスのおかげなのでした。今まで一体どんな料理を作って食べてきているのか。彼の料理のセンスと味覚についてはとかく謎が多いのでした。そのまずさは最早核兵器なのでありました。ちなみに彼は最近まで烏賊が食べられることも知らないのでした。実は。

第八十五話　　完

２００８・３・７

第八十六話　おっかない上司　☆

第八十六話　おっかない上司

ロシアがドイツと友達になるということになってまず決まったのはロシアがドイツの家に遊びに来て一泊することでした。そのことでドイツとその上司は大忙しでした。

「あれは何処だ」

「あそこにあります」

「そうか」

上司はドイツの報告を聞いてまずは頷きました。

「あとウォッカも用意しておくように」

「わかりました」

「私はいいからな」

ここでも酒を飲まないのがドイツの上司です。

「とにかくロシアの機嫌を損なうな。今のところはな」

「今のところはですか」

引っ掛かる物言いですがとにかく準備は進みます。ドイツは大忙しでそのことを友人の一人であるフィンランドにこぼしています。ベレー帽を被った金髪碧眼の青年です。軍服はドイツのものよりもさらに地味で背もそんなに高くありません。どっちかというと目立たない感じです。その彼がドイツと並んでドイツの家の中で話をしています。北欧風のシックな街中を。

「何かドイツさんも上下関係で苦労しているんですね」

「全くだ」

手帳を手にメモを見ながら愚痴を零しています。

「毎日毎日。この間なんか聖杯探しに行かされたんだぞ」

ドイツの上司が好きな舞台神聖祝典劇のお話ではありません。リアルです。

「あるのかないのかわからんというのに」

「そうですか。けれど」
ここでフィンランドはふとドイツに言います。
「あんまり上司の人の愚痴言うと牢屋に入れられたりしません？」
これはジョークですが生憎ドイツにジョークは通じません。
「何処の世界に自分の国を牢屋にぶち込む上司がいるものか」
「けれど」
ここからはジョークではありません。
「ドイツさんの上司ならやりかねないような。あと向こうの上司も」
「うっ、それは・・・・・・」
笑えない言葉でした。とんでもない上司を持っているというところはドイツとロシアは似ているようです。

第八十六話　　完

２００８・３・７

第八十七話　コルコルコルコル　☆

第八十七話　コルコルコルコル

ロシアはこの時着ていく服を選んでいました。何を着ていくのか必死に考えています。

「どうしよう」

服を選びながら困っています。

「何を着ていこうかな。これといった服が」

「どうしたんですかロシアさん」

強引にロシアの家の使用人になっているリトアニアが彼に声をかけます。茶色の髪を伸ばして清潔に揃えた中性的な顔立ちの青年です。やっぱり彼も軍服です。

「普通の軍服でいいと思うんですけれど」

「だってドイツとイタリアだよ」

「はあ」

ロシアが気にしているのはそこでした。

「軍服がお洒落な国で有名じゃないか」

「まあそうですね」

確かにドイツもイタリアも軍服が格好いいです。イタリアは服のセンスはいいのです。

「下手な服着ていって恥ずかしい思いしたら嫌だし」

「そうなんですよね」

こおでリトアニアはついつい気を緩めてしまいました。

「ロシアさん豪勢な服は飾りゴテゴテで質素なのは超質素！」

そのアンバランスさがロシアです。

「けばいかださいかどっちかしかないですもんね！」

ロシアに対してこの言葉。生身の人間がグロンギに立ち向かうようなものです。そしてリトアニアはすぐにそれを知ることになりました。

「コルコルコルコルコルコルコル・・・・・・」
「あああああああああっ！」
恐ろしい顔をして呟くロシアを見て慌てて言葉を訂正します。
「でも個性的！個性的っていうか！」
「シベリア行きのチケット用意するかも」
「それだけは！それだけは！」
やっぱりロシアはロシアです。とてつもない怖さを持っているのでした。

第八十七話　　完

２００８・３・７

第八十八話　いらない子　☆

第八十八話　いらない子

リトアニアがロシアの優しさに触れて涙を流していたその頃。イタリアは暢気に寝て夢を見ていました。その夢は。

日本とドイツがいました。何か話をしています。

「今度はあいつ抜きだな」

「そうですね」

そんな話をしています。面白いお花を見つけたイタリアはそれを二人に見せようと近付いたのですが何かおかしいのです。その話を聞いていると。

「イタリアはいらないな」

「そうですね」

イタリアのことを話しているのでした。

「また寝返られたら嫌ですし」

「好きにすればいいさ」

それをまたイタリア兄が軽く笑い飛ばすのでした。

「戦争は仲間裏切っても勝てばいいんだからな」

「ええっ、兄ちゃん何言ってるの！？」

イタリアはショックを受けたところに兄の言葉を聞いて大弱りです。

「二人は友達なのに。それに」

ドイツに近付いていいます。

「ドイツ、俺弱いけれど頑張るよ。だから俺のこと忘れないで」

それにドイツが振り向いた時に目が覚めました。そして慌てて服を着て叫ぶ言葉は。

「ドイツーーーーーーッ！」

隣に寝ていたドイツに足を投げ出して泣き叫びます。

「俺のこと忘れないで、御願いだからーーーーーーっ！」

「な、何だ！」
寝ているところにいきなり足を受けて驚くドイツ。見てみれば自分の上に立って泣いて震えているイタリアが。しかも服は上だけ着ていてトランクスすら穿いていません。とんでもない格好です。
「降りろ、それから服を着て泣くな」
まずはこう言います。それでも普段の冷静さが幾分消えてしまったドイツでした。

第八十八話　　完

２００８・３・７

第八十九話　聞く奴を考えよう　☆

第八十九話　聞く奴を考えよう

思いきり不安になったイタリア。フランスに対して朝早くに電話をかけました。

「フランス兄ちゃん、俺どうしたらいいんだよ・・・・・・」

「なっ、何で御前が電話を!?」

敵の筈のイタリアから電話がかかってきてまずびっくりです。

「この不良がっ、不良が!」

自分が高校生には見えない、少なくとも何回も留年しているような外見なのは気にしていません。

「ワインはやらねーーぞ!」

とは言っても。何故かイタリアにはあまり何も言わないフランス。急に大人しくなって彼に尋ねます。

「まあいい。それで何の用だよ」

「うん。俺のこと忘れて欲しくない人がいるんだけれどそんな時どうすればいいのかなって思ってさ」

「んっ!?」

フランスはイタリアのその言葉を聞いて意外といった声になりました。

「長い間御前と腐れ縁やってるが珍しいな」

「そうかな」

「まあいい」

ここでフランスになるのでした。

「要は忘れさせなきゃいいんだろ?」

「うん」

電話の向こうの邪悪な笑みには気付かずフランスの言葉に頷きます。

「それでどうしたらいいかな」

「ケツでもまくて見せとけ」
冗談で言います。
「わかったな」
「うん、わかった」
これでわかったと思ったイタリアは早速日本に対して尋ねます。
「日本日本、俺のお尻見たい？」
「見てどうしろというのですか？」
早速困った顔で突っ込まれるイタリアでした。何を考えているのやら。

第八十九話　　完

２００８・３・７

第九十話　やっぱりお兄ちゃん　☆

第九十話　やっぱりお兄ちゃん

「フランス兄ちゃん・・・・・・」
「また御前か・・・・・・」
そうは言いながらもちゃんと相手はするフランスでした。
「全然駄目だったよ」
「っておい」
声が泣いているのも聞きながら言葉を返します。
「素で返されちゃったよ・・・・・・」
「本当にやったのかよ御前！」
「えっ、だってフランス兄ちゃんがやれってーーやれってーーー」
「このお馬鹿お馬鹿っ！」
流石に本当にやるとは思っていなかったので呆れ顔です。けれどそれでもやっぱりイタリアには寛容なフランスです。今度は真剣にアドバイスするのでした。
「普通にそいつに直接言いたいこと伝えてみればいいだろう？」
「そうなんだ」
「あっ、御前昔からお馬鹿だから」
馬鹿にはしていても親身なアドバイスを続けます。
「紙に書いておくの忘れんなよ」
「わかった、やってみるよ」
「全く・・・・・・頑張れよ」
「・・・・・・うん」
こうしてフランスのアドバイスを受けたイタリア。長々と紙に書いてそれを読みながらドイツに近付きます。
「できたし早速」
物陰から顔を出して言います。しかもカクカク震えて。
「コンニチハイタリアデス。コンニチハイタリアデス・・・・・・」

「今日御前大丈夫か？」
かえってドイツに心配されるイタリアでした。

第九十話　　完

２００８・３・７

第九十一話　怪文書　☆

第九十一話　怪文書

ドイツの家にお邪魔していた日本。ついでにドイツの家を掃除していてあるものを発見しました。
「ドイツさん、掃除していたら」
「いや、日本」
割烹着姿の日本を見て恐縮しながら言います。
「そんなに気を使わんでも。別に掃除しなくていいからな。自分でしているし」
「そうなのですか」
「ああ。それでだ」
日本が手に持っているものにふと気付きました。
「それは何なんだ？」
「掃除していたら見つけたのですが」
「？何だ」
「どうぞ」
「ああ」
受け取ってみると何か得体の知れない変な字で色々と書いています。読むのはかなり困難です。まるでグロンギの言葉のような。
「何やら怪奇文章の様なものが記されていますが」
「あいつ、そんなことを」
「わかるんですか、何が書いてあるのか！？」
「・・・・・ああ。長い付き合いだからな」
「凄いですね、ドイツさん！」
日本には何が書いてあるのかわかりませんでした。オンドゥル語ではないかとも思ったのですがどうやら違うようです。
「それでですね」
「ああ」

そのあとドイツが取った行動は。
「唐突に何はじめる気なんですか？」
「ヴルストでも煮ようかなと思ってな」
何故か急にソーセージを茹でだすドイツでした。何をするつもりでしょうか。

第九十一話　　完

２００８・３・７

第九十二話　鋼鉄協約　☆

第九十二話　鋼鉄協約

ヴルストを持ってイタリアのところに行ったドイツ。猫を抱いて座り込んでいる彼に声をかけます。

「イタリア。少し話があるんだがいいか？」

「あっ、ドイツ」

ギギギギ、と音を立てて振り向くところが奇怪です。

「コンニチハイタリアデス！」

「別にロシアと仲良くなったからといって御前を忘れたわけじゃないからな」

不器用に断りを入れます。

「えっ、ドイツ俺の考えてることわかるの！？」

「まあそういうわけだ」

「そういうわけって」

「約束するからとにかく小指を出せ」

「今変なこと考えていたからちょっと凄い恥ずかしいけれど」

「わからんから安心しろ」

イタリアの考えがわかる程ドイツは鋭くはないのです。残念ながら。何はともあれ小指を結び合って。

「これって何なの、ドイツ」

「日本式の約束の仕方らしい」

「日本の！？」

「そうだ。これから多分危ないことも多くなるからな」

これは容易に想像がつきました。何しろ周りは変な国ばかりのドイツですから。

「御前と俺で協約を結ぼう」

「俺と？」

「御前が危なくなったら絶対に援護してやるからな。もうそんなこ

とで気を病むな」
「そうなんだ」
「けれどあれだぞ」
これは一応言います。イタリアには無理だとわかっていても。
「俺が危なくなったら御前も援護するんだぞ。期待はしないが」
「えへへ、ドイツと協約かあ」
「ああ、それと」
ここであれを出します。
「一緒にどうだ？」
「あっ、うん」
最後は仲良く並んで座ってお日様の下でヴルスト、つまりソーセージを食べる二人でした。

第九十二話　　完

２００８・３・７

第九十三話　自慢したら

「兄ちゃんただいま」
「ああ」
ドイツと指きりげんまんしたイタリアは上機嫌で家に帰って来ました。見れば今日は家にはイタリア兄がいます。一応家族ですのでソファーに座ってカプチーノを飲んでいます。
「兄ちゃんの家はもう暑いのかな」
「まあな。ところで御前」
「何？」
「またドイツの家にいたのか？」
「そうだよ」
何気なくイタリア兄に答えます。
「それがどうかしらの？」
「あんなゲルマンの田舎者なんかと仲良くなって楽しいか？」
顔を弟に向けて尋ねます。
「どうでもいいが」
「ドイツは堅苦しいけれどいい奴だよ」
少なくとも何だかんだで仲はいいです。
「今日だって協約結んだんだ」
「協約！？」
「そうだよ。それでいつも付けているペンダントくれたし」
ドイツ名物のあの鉄十字です。誇らしげに兄に見せて話を続けます。
「今日はちょっと幸せだった・・・・・・」
ぶちっ
ところがイタリア兄はそのペンダントを引き千切って遠くに放り投げてしまいました。これは酷い。

「何てことするんだよ兄ちゃん！折角ドイツがくれたのに！」
「ええい五月蝿い！」
泣いてぽかぽかと殴ってきた弟をあしらいながら叫びます。
「ドイツドイツって五月蝿いんだよ！」
「ドイツはいい奴だよ！」
こうして喧嘩になりました。その後で。
「ドイツ御免！ペンダント御免！」
寝る前のドイツに電話をかけて謝ります。
「兄ちゃんが！御免！」
「・・・・・言いたいことはわかるから落ち着け」
結局厄介ごとを回されるドイツでした。

第九十三話　　完

２００８・３・７

第九十四話　ロシアの上司　☆

第九十四話　　ロシアの上司

ロシアの上司はこれまたとってもおっかない人です。どれだけ怖いかというとロシアにあの「コルコルコルコル・・・・・・」という言葉の意味を教えた人という位です。口髭を生やしてすぐにシベリアに人を送ろうとしますし人使いも半端ではないです。

けれどロシアを熱心に指導しています。そのせいかロシアがどんどん怖くなっているような気もしますが元々ロシアの上司だの先生だのというのは他の家から見ればとてつもなくおっかない人達ばかりなのであまり変わらないかも知れません。

そのロシアのところに今日もリトアニアが忙しく向かっています。少しでも遅れるとそれこそ韓国が日本にされたと転がりながら泣き叫んでいるようなことを本当にされるからです。ロシアの周りにいるというのは本当に大変なのです。

「ロシアさーーーん」

何とか時間に間に合わせてロシアの部屋の前に来ました。家が滅茶苦茶広いので移動するだけでも大変です。美麗なのに何故か殺伐としたロシアの家の中を。

「紅茶持って来ました。あとウォッカも」

ついでにジャムも。ロシアといえばやはりこれです・

「くつろいで下さい・・・・・・んっ」

部屋の扉のところに行くと中からロシアともう一人の声が。

「・・・・・この声って」

思わず逃げたいと思ったリトアニアでした。リトアニアにとってもロシアの上司はとても怖い人だからです。それでも意を決して入ろうとするとさらに話し声が。

「それでね」

ロシアが親しげに上司に話しています。何故かこの上司と合うロ

シア。実に不思議です。
「ポーランド攻め落としたらね」
ロシアの言葉が聞こえます。
「ドイツと半分こにして別荘建てるんだ」
「ほう、それはいい」
「えっ・・・・・・」
今の二人の言葉を聞いてポーランドは驚愕でした。
「ロシアさんがポーランドを・・・・・・」
リトアニアの顔が一気に青くなります。彼にとっては聞いてはいけない言葉でした。

第九十四話　　完

２００８・３・７

第九十五話　いい思い出！？　☆

第九十五話　　いい思い出！？

ロシアとその上司の話を聞いたリトアニア。まずは何気なく紅茶を渡してそれから急いで自分の部屋に戻って電話をかけます。

「ロシアさんポーランドのことをまた倒す気だなんて」

何と過去にも同じことをしていたのです。流石はロシアです。

「とにかくポーランドにそのことだけでも伝えなきゃ！」

電話をかけながら凄く不安になっています。

「大丈夫かな」

懐から写真を取り出します。そこには幼い日のリトアニアと金髪をセンターで分けた緑の目の何か如何にもいい加減そうな表情の少年がいます。彼がポーランドです。実は二人は長い付き合い手かつては連合王国だったのです。

「ポーランド、どうか無事でいてくれ」

そう思いながら思い出すのはポーランドに無理矢理子分にされたり一緒に住ませられたうえお菓子も取られて生活も合わせられて。まんまどこぞの我儘な高校生のポーランドでした。

「今日から子分な」

「御前俺と住むの強制な。生活も俺に合わせてな」

「御前のサコティスも俺のものだしーーーーー」

ポーランドのその時のことも思い出して。

「あんにゃろーーーーーっ！」

本当に対人関係には苦労しているリトアニアです。そもそもあのロシアの秘書をやっているというところが彼の運のなさを見事に表していますが過去にもこんなことがあるのでした。隣人は選べないのがヘタリア学園のいいところです。ドイツも日本もそうですが。

第九十五話　完

2008・3・7

第九十六話　楽天家　☆

第九十六話　楽天家

とりあえずポーランドに電話をかけてみました。リトアニアは急いで電話に声を送ります。

「もしもしリトアニアだけれどポー・・・・・・」

「げっ、リト！」

いきなり電話の向こうから叫んできました。

「朝からマジ何の用よ！」

「何の用って言われても」

「ちょっと御前今朝よ」

電話の向こうのポーランドはまだパジャマです。寝惚けた顔で電話に出ていて口元には涎の後まであります。

「こんな時間に電話とかマジ有り得んし」

「緊急なんだよ！」

リトアニアは必死にポーランドに対して言います。

「ロシアさんが御前の家攻めるって！」

「え・・・・・え？何その話攻め・・・・・・？」

ここでやっと気付いたポーランドでした。

「何だよそれマジ有り得んし！」

ポーランドがまた叫んだので思わず耳を指で塞ぐリトアニアでした。

「ロシアマジおかしい！俺今週は家のペンキ塗り替えする予定なのに！」

何も準備していませんでした。当然気付いてもいませんでした。

しかもこっからがポーランドでした。

「あーーマジ朝から焦った」

急に平気な様子になりました。

「で、それはいいとしてこの間さあ」

「真面目に俺の話聞いてえ！」
世間話をはじめたポーランドにもう半泣きで叫びます。彼の苦労は尽きません。

第九十六話　　完

２００８・３・７

第九十七話　本当に心配　☆

第九十七話　本当に心配

「あーーバルシュキ食ったらちょい落ち着いたかも」
ポーランドはもうくつろぎだしています。
「マジポーランド調子よくない？」
「あの、ポーランド」
リトアニアはそんなポーランドに対して心配そうに尋ねます。
「さっき俺が言ったこと覚えてるかな」
「ハァ？」
「ハァ？じゃなくてさ」
また不安が心の中で増大して胃を締め付けるのを感じます。
「どうなの？そこんとこ」
「つーーかマジ心配するなよ」
リトアニアの心配なんか全く届いていません。
「ドイツとかこの前倒したことあるしーーー」
記憶の中でドイツの親戚のプロイセンに勝ってその上でガッツポーズする自分自身が浮かびます。その横ではリトアニアがポーランドに難しい顔をしています。
「大丈夫くねえ？」
「あれは俺がいたからでしょーーーが！」
早速突っ込みを入れます。
「御前単独で負けてたでしょ！」
「そうだったけ」
「そうだよ！」
都合の悪いことは忘れるのがポーランドです。
「まあいいや。俺おしっこしたくなってきたし」
「えっ、おしっこって」
「じゃあまたな」

「えっ、待って！」
けれどポーランドはもう電話を切ってしまいました。
「ねえちょっとポーランドポーランド」
返事はありません。リトアニアの予想通りでした。
それでもポーランドが心配なリトアニアは家の人をポーランドのところに送ってから連絡を入れます。
「ねえポーランドの様子はどう？」
不安に満ちた顔で周囲まで見回しながら電話で尋ねます。
「ロシアさんの兵行っていない？ドイツさんとかも」
「今のところは何もないですねーーー」
何処までも心配性なリトアニアでした。しかも報われません。

第九十七話　　完

２００８・３・７

第九十八話　楽しくない夢　☆

第九十八話　楽しくない夢

散々ポーランドのことを心配して疲れ果てたその日。リトアニアは夢を見ました。ポーランドと一緒にロシアと喧嘩して負けた時の思い出です。

雪の中でロシアに負けました。それまでいじめられっ子だったロシアがえらく強くなっていたのです。

「わーーい勝っちゃった。ロシアは強いんだよーーー」

倒れる二人に対して自慢します。しかし自慢で終わりはしませんでした。リトアニアに近付いて彼に言うのです。

「ねえ君は賢そうだから僕の家で雇ってあげる」

「えっ・・・・・・」

「負けたんだから選択権ないよ」

一応ありますがその時はどうなっても知らないというのがロシアクオリティです。

「そんなのやだよ！」

ロシアの怖さはこの時から有名だったのでリトアニアは何とか逃げようとします。

「ポーランド！」

ロシアに手を掴まれてもポーランドに助けを求めます。

「ねえ起きてよポーランド！」

ポーランドは起きました。ところが。

「その顔マジ受けるしーーーー」

笑っていました。自分も負けたのに全く実感していません。しかもその間に後ろからオーストリアやプロイセンが迫っているのにです。

「あ・・・・・・」

夢の中で叫びます。ただし声が現実に出ています。

「あんにゃろおおおーーーーーーーーっ！」
「何っ！？」
「何ですかっ！？」
目を醒まして叫ぶリトアニアの声に驚いてバルト三国の同志エストニアとラトビアも驚いて飛び起きます。本当に周りにあまり人材のいないリトアニアでした。というかどうしてポーランドとタッグを組んでいるのか本当に不思議です。

第九十八話　　完

２００８・３・７

第九十九話　それでも心配して　☆

第九十九話　それでも心配して

昨日の夢が頭にきたけれど気になって仕方がないイタリアは。今日もポーランドに電話をかけるのでした。実に律儀です。報われていませんが。

「あのさ、リトアニアだけれど」

「おう、リトか。昨日の話か？」

「うん。ちゃんと準備はじめた？」

彼女かお母さんみたいに尋ねます。

「そこんところどうなの？」

「もーーちゃんとしとるしーーー」

電話の向こうでこう答えてきます。

「準備してないとかマジ有り得んくない？」

「よかったーーー」

それを聞いてまずは安心したリトアニアでした。

「俺心配して昨日眠れなかったんだよ」

「それでさーーーー」

ここでそのポーランドの準備が話されます。本人から。

「俺の家にエンジンつけて飛行機みたいに飛ばせんかなあ～～～？」

「あああああ・・・・・・」

「ぴゅーーーんって」

やっぱり準備なんかせずにこんな下らないことを考えているポーランドでした。しかもこれで終わらないのが彼の凄いところです。

「で、その後御前の家にドーーーン！これってどうよ」

「もっと真面目に生きようよ！」

「えっ、俺いたって真面目だけど」

「何処がだよ！だからちゃんと考えて！」

今まで相棒にいつも思っていた言葉が出ました。

「あとそれも止めてね！」
「わかってるって。冗談に決まってるしーーー」
彼の苦労はまだまだ続きます。というか終わるんでしょうかこの苦労。

第九十九話　　完

２００８・３・８

第百話　その手は駄目だろ　☆

第百話　その手は駄目だろ

「まあ安心しなって」
「安心できないんだけれど・・・・・・」
電話での話は続いていました。とことん何も考えていないポーランドに対して心配性のリトアニアのやり取りが続いていました。
「一応俺だって手は打ったしさ」
「どんなの？」
「御前等絶対マジびびる手だって」
「！？」
ここで玄関からロシアの驚いた声が。
「ちょ・・・・・・何か変なの来てるよおーーーーっ！」
「あっ、御免」
リトアニアはロシアのその声を聞いてそちらに向かいます。すると。
「ど・・・・・どうしたんですかロシアさん」
「何かあったんですか！？」
ラトビアとエストニアがロシアに脅えながら尋ねています。
「わかんないけれど何か怖い手紙が来たんだ」
「手紙！？」
「うん、これ」
リトアニアがその手紙を見せてもらいますと。それは匿名希望とありながら出された先がポーランドの不幸の手紙でした。リトアニアはそれを見てまずが呆然。
「首都がワルシャワになるって・・・・・・」
「どーーよ」
電話に戻ったリトアニアにポーランドは得意げに語ります。
「あいつフランスの髭以外に友達いないからすっげーー焦ってなか

った？」

「あのねーーーー・・・・・・」

リトアニアは呆れながらポーランドに答えます。

「友達は少なくても部下は一杯いるんだよ・・・・・・」

周りではその借り出される部下達がこれからのことを思って泣いていました。当然その中にはリトアニアも含まれているのでした。

第百話　　完

２００８・３・８

第百一話　出会いの時　☆

第百一話　出会いの時

「このままじゃポーランドも俺みたいになっちゃうのかなあ」

リトアニアはまだ心配し続けています。あまりにも心配し過ぎて疲れてしまいこっくりこっくりとしだしました。その中でポーランドとはじめて会った時を夢に見ました。

「うわだっせえ、また御前ロシアにボコられてやんの」

ロシアに袋にされたリトアニアを見てポーランドが言います。

「しかも今日は瀕死じゃん」

ロシアに容赦というサービスはありません。他にも多くのサービスがないのですが。

「あと一回ロシアが来たらマジ死なねえ？」

「う・・・・・五月蝿いなあ」

倒れ伏しながらそのポーランドに言います。

「もう俺多分消えるんだからほっといてよ」

「ふーーーん」

ポーランドはそんなリトアニアの言葉を聞いて何かを思ったようです。それでここで左手を差し伸べてきたのでした。

「俺の言うこと聞くんだったら御前を助けてもいいけど？」

夢はここで醒めました。これが二人の出会いだったのです。それからポーランドの我儘やＤＱＮぶりに振り回されたりもしましたが結局思うことは。

「・・・・・何とかなんないものかなあ」

やっぱりこれでした。どうしてもポーランドが心配で仕方のないリトアニアでした。あれこれとロシアに脅えながらも彼のことが気懸かりであり続けています。

第百一話　完

2008・3・8

第百二話　シェスタ　☆

第百二話　　シェスタ

遂にロシアがドイツに来るその日になりました。話を聞いたイタリアはとりあえずロシアがどんな奴か覗いておくことにしました。

「悪いが今日は遊んでやれないからな」

ドイツからこう言われていますが気にしていません。偵察開始です。

「怖い人だったら真っ先に逃げよう」

それと一緒にこうも考えています。この辺りがイタリアです。なおこれで今まで戦ってきました。ドイツに言わせると違うのですが彼もまた戦っているのであります。

「すいませーーーーん」

ここで低い声域ですが大きな声が聞こえてきました。

「ソビエトからの者ですがーーーーー」

「おっ、来たな」

今の声を聞いて顔を出します。

「どんな奴かな。実はロシアって話に聞いているだけなんだよね」

しかもその聞いた話をかなり忘れています。こうしたところも本当にイタリアです。とりあえずでかい人の後ろで困った顔をしている人が見えてついでに時計塔も。そこにある時間は。

「えっ、もう三時じゃないか！」

イタリアは時計の時間を見てびっくりです。それですぐに服を脱いで毛布の中にくるまって。

シェスタに入りました。何時でも何処でもシェスタはする。それが彼なのでした。イタリアはイタリアらしく、それを見事に貫いていると言えます。言い換えればポリシーがないのがポリシーだとも。実にイタリアであります。

第百二話　完

2008・3・8

第百三話　くるるん　☆

第百三話　　くるるん

今日はイタリアが自分の兄を日本に紹介する日です。とりあえず兄は日本は嫌いではないというのでまずはそれが安心でした。上司といい何故か日本に関しては妙に好意的なイタリアーナです。戦争での強さが違うせいでしょうか。

「日本はいいんだね」

「何でも生真面目な人間だと聞いているがな」

「そうだよ。すっごい真面目だよ」

けれど天然なのですがイタリアもそうなのでそれは気付いていません。

「俺や兄ちゃんとは大違いだよ」

「おい、俺もか」

「だってそうじゃない」

やっぱり微妙な間がある二人です。何とかかんとか話している間に日本のところに来て。それで兄を紹介します。

「俺の兄ちゃんなんだ」

「宜しくな」

「はい」

日本はイタリア兄に挨拶を返します。けれどその視線の先は。

「あれ、日本」

イタリアがそんな日本に声をかけます。

「何かあったの？」

「いえ、別に」

こう答えますが実は。視線はイタリア兄のアホ毛に向けられているのです。そのくるるんとした毛に。イタリアに似ていますが何処か違う、その微妙なくるるんとした感じに日本は魅せられてしまったのです。

（何ですかそのくるるんは何ですかそのくるるんは）

これは日本の心の言葉です。

（それは山菜大好きな日本人に対する挑戦ですか？）

そう思いながらぜんまいを思い出してむしりとりたい気持ちでうずうずしていたのでした。やっぱり何処か天然でわからないものがある日本でした。本人は自覚していませんが。これがまた実に日本らしいと言えばらしいのでありますが。

第百三話　　完

２００８・３・８

第百四話　可哀想な三人

第百四話　可哀想な三人

リトアニアだけがロシアの家にいるわけではありません。金髪碧眼のクールビューティーなメイドさんのベラルーシもいますが一番目立つというか不幸にしてロシアの側にいるのはリトアニアと金色の髪を短く切って青い眼に眼鏡をかけたエストニアと同じく金髪に紫の目の小柄な男の子エストニアです。この三人はいつもロシアの側で震えています。

「いよいよ明日だね」

「うん」

「正直一緒に行きたくないけれど」

三人揃って明日のことを話しています。

「けれど行かないとどうなると思う？」

「考えたくないよ、それ」

エストニアがリトアニアに対して答えます。

「シベリアかな」

「折檻じゃないかな」

ラトビアの予想はこうでした。

「ロシアさんの」

「・・・・・それは凄く嫌だね」

「そうだね」

三人でそんな話をしています。気分は余計に暗くなるだけです。暗いのを通り越して暗黒になってしまうレベルにまで。

「けれどとりあえず明日だから」

「僕達も準備するか」

「そうだね」

諦めてこう言い合います。

「枢軸側の人達の方が優しいような」

「イタリアもドイツさんも」
「特に日本さん。韓国が羨ましいよ」
最後はないものねだりで締めました。三人の不幸はこれからも続くのでした。とりあえず苦労もまた続きます。それから逃れるには移住かドイツにつくか。本当に苦労も不幸もついて回るものであります。三人にとっては。

第百四話　　完

２００８・３・８

第百五話　お友達

第百五話　お友達

何故か日本には友達がいないと言う人達がいます。それは不思議なことに日本の家の中での言葉です。色々とお付き合いを様々な人としている筈なのにこう言うのです。

ですがこうした人達は大抵信用されていません。何故ならそれは嘘だと一発でわかるからです。何故ならいつも日本の側にいる人がいるからです。その人は。

「よお日本！」

韓国が今日も日本の家にやって来ました。

「来てやったぜ！」

「そうですか」

「来たくなかったけれど来てやったんだぜ」

こう言いながらいつも来ているのです。

「それで早く何か出すんだぜ」

「もう出しています」

毎回毎回来るので用意してあるというわけです。

「はい、お刺身です」

「何だ、またそれかよなんだぜ」

そう言いながらも食べます。

「俺の家の起源なんだから珍しくも何ともないんだぜ」

「天麩羅も納豆もですか？」

「その通りなんだぜ」

こう言いながら御馳走になってゲームとかで遊んでそれから帰ります。こうしたことをいつも続けています。

そして時には。

「呼びたくないけれど今日来るんだぜ」

日本を自分の家に誘います。

「俺の手料理たらふく食わせてやるんだぜ」
「あの、韓国さん」
日本はいつもこんな調子の韓国に尋ねます。
「どうして貴方は私のことをいつも嫌いだと仰るのにいつも私の側におられるのですか」
「あっ、あれは何だぜ！」
ここでまた仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディの登場です。やっぱり騙されて向かって来た二人に阻まれてそれ以上は聞けなかった日本でした。それにしてもこの二人はあまりにも騙され過ぎです。

第百五話　　完

２００８・４・８

第百六話　お留守番

「それじゃあ後は頼んだよ」
「はい」
内心嫌で嫌で仕方ないバルト三国を引き連れてドイツに出発したロシア。留守番にベラルーシを置いています。彼女は無表情にロシアに返事をしました。
「行ってらっしゃいませ」
「うん、じゃあね」
「あああ・・・・・・」
「お家に帰りたい・・・・・・・・」
「僕達のお家・・・・・・・」
後ろの三人が半分泣きながらロシアについて行きます。何はともあれベラルーシ一人になりました。そこにロシアの上司であるともおっかない人が来ました。
「ああベラルーシ」
「はい」
その上司にも表情を変えず答えます。
「実はな。グルジアと話をしていたのだが」
「グルジアですか」
「うむ、そうだ」
この上司とその片腕の気色悪い額の広い人の出身地でもあります。ロシアの部下の中ではとても怖い存在だとされています。
「どうも家の者が騒いでいるようだ。それで」
「わかりました」
相変わらず表情を変えずに頷きます。
「ロシアさんのいない間に済ませて」
「ロシアが帰って来てから本格的にだな」

「そうですね」
話が剣呑なものになっていました。
「まずは内側を完全に統制してだ」
「その通りです」
メイドなのに何故か持っているナイフが光ります。彼女も一体何者なのかその正体は全く不明であるのです。知った人はいますがもう何処にもいないだけで。

第百六話　完

２００８・４・８

第百七話　アイスの罠　☆

第百七話　　アイスの罠

枢軸トリオと戦う連合ファイブ。その中でアメリカに対して祖国から様々な物資が届けられています。イギリスがそれが入った木の箱からあるものを見つけてアメリカに言います。

「おい物資の中にアイスがあるぜ」

「えっ」

その時たまたまチョコレートを食べていたアメリカの手が止まりました。

「俺アイス食わないし御前これ食べるか？」

「ア・・・・・アイス！？」

なおここにはカナダもいましたが二人は彼に気付いていません。出番は何時やら。

「君もたまには気が利くじゃないか！」

何気になのかわざとなのかさりげなくイギリスに対して酷いことを言っています。食べていたチョコレートを素早くお腹の中に入れて銀紙をとりあえずポケットの中に押し込んでダイビングです。目指すはイギリスではなく彼が持っているそのアイスです。

「アイスーーーーーーーッ！！」

叫びながら。しかし彼は受身を取るのに失敗しました。その前に着地にも失敗しました。それで。

見事怪我をして入院です。流石にこれには皆呆れてしまいました。

「それでもアイスは食べるんだな」

「そうだよ」

見舞いに呆れた顔でやって来たイギリスに答えます。見ればベッドに寝ながらアイスを食べています。

「僕はアイスがないともう動けないんだよ」

「もっと太るぞ」

「それでも君のスコーンを食べるよりずっとましさ」
「・・・・・そうかよ」
入院してもイギリスへの悪口は欠かさないアメリカでした。本当に仲間なんでしょうか。この彼にしろイギリスにしろ他の面々にしろ。友好的な関係が非常になくて連合国というのがまた実に見事ですらあります。何故か『いいんだよ！そういうのが面白いんだからさ』って言う人の脚本みたいな人間関係にも思えます。実に微笑ましいです。

第百七話　　完

２００８・４・９

第百八話　甘いもの大好き

第百八話　甘いもの大好き

アメリカだけに限らず枢軸トリオの一角である日本もまた甘いものが大好きです。特に船に乗っていると食べる他に楽しみがありません。それで船の中で甘いものを食べられるように色々と工夫をしています。その工夫の仲でもとりわけ会心の出来はこれでした。

「大和です」

「・・・・・・でかいな」

日本の誇る戦艦大和を見せてもらったドイツの第一の感想です。

「十八インチ砲九門に副砲六門、それに多くの対空装備を配しています」

「海の要塞か」

流石に日本の誇る巨大戦艦です。シルエットの美しさもさることながらその巨大な勇姿。ドイツも息を飲みます。

「そして何時でも甘いものが食べられるように」

「むっ！？」

「中には羊羹とラムネを作る機械もあります」

「羊羹とラムネか」

「はい、船旅は長く窮屈ですので」

それが第一の理由です。

「それで造ってみました。如何でしょうか」

「そうだな。悪くはない」

ドイツもそれに頷きます。

「ただ」

「ただ。何ですか？」

「羊羹なのか。ううむ」

ドイツはそれが引っ掛かるようです。

「ケーキだったらなおいいのだが」

「前向きに善処します」
日本が前向きに善処しますと返答をする、つまりそれは無理ということでした。まあそれは置いておきましてとにかく凄い戦艦なのは確かです。

第百八話　　完

２００８・４・９

第百九話　ジェラート

第百九話　ジェラート

日本は羊羹とラムネですがとにかく美味しいものが大好きというイタリアというと。当然羊羹ではありません。では何か。

「やっぱりこれだよね」

出してきたのはジェラートでした。

「これがないと駄目だよ。戦車の中でも作れるよ」

「戦車の中でジェラートか」

「駄目かな」

こうドイツに問い返します。

「最後はこれで締めないと俺駄目なんだ」

「それはいいがだ」

しかしドイツはここで言います。

「イタリア、ジェラートはまだいい」

「まだいいんだ」

「甘いものは体力補給に必要だ」

あくまで実用性から言うドイツでした。

「しかしだ」

「うん。しかし？」

「他のものは何なんだ？」

ドイツが言うのはそこでした。

「他のものって？」

「パスタに果物に生ハムにワインにその他色々なものだ」

全部食べ物です。

「何故こんなにいるのだ。チーズはいいとして」

「だって全部必要だよ」

イタリアからすればそうなのです。

「パスタがないと俺動けないし」

「ジェラートだけじゃないのか」
「あとワインも。フルコースがあってそれをお腹一杯食べてからじゃないとやっぱり」
「・・・・・勝手にしろ。全く」
そんなイタリアに呆れてしまうドイツでした。イタリアはやっぱり何かが違っていました。甘いものだけに留まりはしないのが彼でした。とりあえずイギリスでは考えられないお話です。

第百九話　　完

２００８・４・１０

第百十話　ドイツの食事

第百十話　ドイツの食事

そのドイツはというと。これまた至って質素です。

硬い黒パンにソーセージにジャガイモにザワークラフト。これにアイスバインがつけば上出来といったものである。何かスープもありますがそれは大したものではありません。

それ等をおもむろにお腹の中に入れるだけです。本当にそれだけです。

「ドイツっていつもそうなんだ」

「そうだ」

イタリアの質問に対して答えます。

「戦場だ。贅沢は言わん」

「本当にそれだけ？」

イタリアは少し頑ななドイツに対して尋ねます。

「本当にそれだけで満足できるの、ドイツ」

「量はあるからな」

まずはこれでした。

「それにだ」

「それに？」

「栄養は考えてある。味もそんなに悪くない」

「あっ、本当だ」

ちょっとつまみ食いすると確かに。一見して粗食ですが味自体は悪いものではありませんでした。

「これは中々。けれど寂しいような」

「いや、全く寂しくはない」

けれどドイツはこう反論するのでした。

「全くな」

「！？どうしてかな」

「これがあるからだ」
出してきたのはビールでした。
「これさえあれば。もう何もいらない」
「ビールなんだ、やっぱり」
「どうだ。一緒にやるか」
さりげなくイタリアにもそのビールを勧めます。
「確かビールも好きだったな」
「うん。ぞれじゃあ」
「うちの上司には内緒だぞ」
「わかってるよ」
お酒を飲まないドイツの上司には内緒でした。実はドイツの上司は菜食主義者でお酒も煙草もやらない生活自体は修道僧みたいな人でして。この人に気遣ってドイツは中々ビールを飲むのも一苦労なのでした。困ったことです。

第百十話　　完

２００８・４・１０

第百十一話　南セントレイア　☆

第百十一話　南セントレイア

「ドイツさん！」
いきなり日本がドイツのところに普段の物静かで落ち着いた彼からは想像もできない剣幕で彼に問い詰めます。
「ロシアさんとお友達になるって正気ですか！？」
「あ、ああまあな」
ドイツは日本のその剣幕に引きながらも答えます。
「上司からの命令でな」
「絶対駄目です！」
日本はそれを全否定してきました。
「あの人は水爆実験の影響でできた怪獣なんですよ」
他にはアメリカや中国も似たことを言います。ロシアへのイメージは何かあまりよくない国が多いようです。
「ビルを薙ぎ倒し火を吐く化け物なんですよ！？そんな人と」
「日本！？」
何処かのプロ野球選手と勘違いしているようです。こんなことを街で大笑いしつつ言っていて警察に連行された日本の家の人もいますが。
「きっと友達になんかなったらただ利用されるだけですっ！」
「いや、それはまあ」
ある程度はわかっていることです。けれど日本はさらに暴走します。
「それでもロシアさんと友達になられるんですか？」
「ま、まあな」
上司に逆らったら何するかわからない人ですし。
「仕事だからな」
「じゃあもう日本止めます！」

今度はこう言い出しました。
「日本止めて南セントレイヤになってやる！」
「落ち着け日本！」
何気に切れたら何するかわからない日本でした。彼の暴走はまだ続くのでした。

第百十一話　　完

２００８・４・１１

第百十二話　解散

第百十二話　解散

それで何と上司までもが切れていきなり解散となりました。日本はこう言っています。

「複雑怪奇です」

「・・・・・複雑怪奇か？」

「まあそれは置いておいてだ」

イギリスもフランスも日本の今の行動には？でした。

「何でここで解散なんだ？」

「普通はしないよな」

「何でするんだよ」

イギリスはフランスにこう言い返します。紅茶とコーヒーをそれぞれ飲みながら首を捻っています。

「何かわからねえけれどよ」

「ああ」

フランスがイギリスに話します。

「ロシアとドイツが仲良くするのが嫌らしい」

「ロシアかよ」

「あいつロシアと仲悪いよな」

「俺と同じでな」

実はイギリスもまたロシアと仲が悪いのです。それでもまだ日本やアメリカや中国とロシアとの仲よりはましですが。それでも仲が悪いのは事実です。何気に敵が多いロシアです。本人は至って平気ですが。

「それでらしい」

「いや、仲悪くてもよ」

それを聞いてもイギリスは首を捻ります。

「ここで解散総辞職はねえだろ」

「複雑怪奇でもな」
フランスも同じです。
「訳わからねえことするな、あいつも」
「全くだ」
どう考えても今回の日本の行動が理解できずに。首を捻り続ける二人でありました。けれど日本は至って本気なのでした。解散の理由は日本にしかわからないのでしょう。

第百十二話　　完

２００８・４・１１

第百十三話　水道　☆

第百十三話　水道

ロシアがやって来るその日。日本の話を聞いて少し不安になっていたドイツでした。そのことでどうにも落ち着かないでいると家の窓の外から声が聞こえてきました。

「何だ、騒がしいな」

「うわーーー、凄いやこれーーー！」

ロシアの声でした。

「捻るだけで水が出てるよ。これ何て機械なのかな」

「危なくないですか？

窓から見てみればロシアが水道の蛇口を捻っています。そこから水が出ているのでびくりしているのです。横ではエストニアがそれを覗きながら心配そうに見ています。

「これあれば何処でも水が飲めるね。これ持ってっていいかな」

「わあーーー本当だ」

ラトビアが無邪気に出て来ました。それで手にその水を当ててみます。

「捻るだけで水が出るんですね」

そのことに喜んでいます。ところが水がはねてそれがロシアの顔に当たって。瞬間的にリトアニアとエストニアの顔が恐怖で真っ青になりました。

「ロシアさん御免なさい、御免な・・・・・ぎゃあああああああ！！」

「待って！」

袋にしだしたロシアをリトアニアが止めます。

「落ち着いて下さいロシアさん！」

「ラ・・・・・ラトビアァァーーーーーーーッ！」

エストニアの絶叫が響きます。ぼこられて断末魔の如き絶叫をあ

げるラトビアとそれを気遣って叫ぶエストニア、必死にロシアを止めようとするリトアニア、笑顔でラトビアを袋にするロシア。四者四様のその惨状を見ていきなりドン引きするドイツでした。先が実に思いやられます。

第百十三話　　完

２００８・４・１１

第百十四話　天国と地獄

第百十四話　天国と地獄

悲惨な目に遭っているバルト三国の面々。似たような立場の人として韓国がいます。韓国は日本の家で暮らしているのです。

ところがその生活は使用人どころか。かなり待遇が違います。

「ほら、白い御飯だぞ」

「白い服じゃなくてもっといい服を用意したからな」

「おかずもしっかり食べてな。キムチか？いいぞ、どんどん食え」

「勉強でわからないところがあれば何でも聞いてくれ」

「ノートに鉛筆。用意しておいたからな」

日本の上司がとにかく世話をやきます。完全に家の子と同じです。その扱いは日本とほぼ同じです。かつての上司のところにいた時より遥かにいい位です。部屋だって立派なものです。

ところが本人は。

「俺って日本とその上司にいじめられていたんだぜ」

血色のいいツヤツヤとした顔で奇麗な服を着ての言葉です。

「それこそえげつなくてよ。無理矢理日本の家に連れて来られて働かせられて鞭で打たれて。それはもう悲惨で悲惨だったんだぜ」

「本当かな」

「絶対嘘だよ」

「ロシアさんに比べたら日本さんなんて」

それを聞いたバルト三国の面々の言葉です。

「あんなものじゃないっていうか」

「本当に強制労働と鞭だから」

「しかもシベリア行きのチケットにコルホーズ」

見事なフルコースです。

「そんなのに比べたらねえ」

「天国じゃないか」

「御馳走があって勉強させてもらっていい服着て部屋もいいし。完全に家の子扱い」
「兄が弟を教え諭すように！」
ここで日本の上司の声が三人にも聞こえます。
「労りと慈しみの心を以って！」
「接してもらえるなんて」
「しかも実行に移すなんて」
「どれだけいいんだろう」
本当にロシアと一緒にいるのは大変なことなのでした。

第百十四話　　完

２００８・４・１２

第百十五話　やっぱりロシア　☆

第百十五話　　やっぱりロシア

「こんにちは、ドイツ君」
泣いているラトビアと彼を慰めるエストニア、引いているリトアニアを引き連れてロシアの挨拶です。ドイツは思い切り引きながら彼に挨拶をします。
「あ、ああ。まあ」
慎重に言葉を出します。
「と、遠いところからわざわざよく来てくれたな」
「うん、今日は宜しくね」
「あ、ああ」
まずはフレンドリーな握手からでした。
「君の家に来るの楽しみだったんだ。お庭に感動したよ」
「そうなのか」
「君とはあまり接点ないからあらためて自己紹介していいかな」
「ああ、何だ？」
意外な程話が普通に進んでいます。ドイツもびっくりです。
「僕の名前はロシア。世界で一番大きな国だよ」
まずはそこからでした。
「好きなものはピロシキとウォッカかな。僕の燃料、ふふふ」
（何だ、ロシアって）
そんなロシアの言葉を聞きながら心で思うドイツでした。
（思ったよりまともそうか？）
ところが。
「趣味はポーランド分割だよ。今度やったら四回目かな」
「・・・・・そうか」
やっぱりロシアなのでした。明るくはっきりととんでもない発言でした。なおこのポーランドの家を分割したのはロシアだけでなく

ドイツの親戚であるオーストリアやプロイセンも一緒です。ポーランド自身はオーストリアの家に厄介になってイタリアと仲良くやっていました。プロイセンは今はドイツの家で一緒にいたりします。ドイツが西、プロイセンが東であります。上司はどっちも同じように扱っています。

第百十五話　完

２００８・４・１３

第百十六話　刺客　☆

第百十六話　刺客

ロシアに引きながらもドイツは接待を続けます。ロシアを応接間に入れて話すのでした。

「そこに御前の席があるから適当に座ってくつろいでいてくれ」

「うん、わかったよ」

ロシアがそれに頷いて席を探すとその席には。

「ねえ僕の席に何か変なの一杯ばら撒いてあるんだけれど」

「うっ、それは」

マキビシでした。よく日本の家の忍者なんかが使うあれです。そう、日本の家でです。何故かそれがあったのです。複雑怪奇なことに。

「何時の間にそんなものが」

「さあ。僕が気付いたらもだったよ」

「誰がこんなものを」

とりあえず訳がわからないのでドイツはそのマキビシをどけようとします。言うまでもなく彼が置いたものではありません。色々とドン引きすることしきりですがお客さんに対してそんなことをするドイツではないのです。というよりかは普通の人はまずこんなことはしません。

どけようとするそこに。今度は。

ガッ

いきなり上から短刀が来ました。何か縄がついていてちょっと鉤爪が出ている。椅子に突き刺さったそれを見て完全に固まるドイツでした。本当に色々あるロシアの訪問です。なおドイツは動いていません。というよりは固まってしまっていたのです。さしもの彼も

硬直してしまう事態が続いて起こるこのロシアの訪問、何かに呪われているようです。ロシア以外の誰もが恐怖におののくか硬直するかしながら話は進みます。

第百十六話　　完

２００８・４・１３

第百十七話　曲者　☆

第百十七話　曲者

その謎の攻撃を見たロシア。何処からか槍を取り出してきました。その槍で天井のあるポイントを突き刺すのでした。

「そこかっ、えいやっ！」

「ちょっと待て！」

ドイツはそのロシアに突っ込みを入れます。その槍で天井は見事破壊されています。

「人の家の天井に何するんだ御前は！」

ところがその壊れたところから。何と黒装束の日本が出て来ました。壁と一緒に見事に落下です。

「あっ・・・・・・！」

「うわあああーーーーーーっ！」

「ラトビアアアァァァーーーーーーッ！」

しかもラトビアの上に落下してリトアニアとエストニアの絶叫が。何と不幸なラトビア。

「やあ日本君こんにちは」

ロシアは日本が出て来ても全然平気な様子です。

「奇遇だね」

「ああどうも」

日本もラトビアと彼を気遣う二人をスルーしてロシアに言葉を返します。

「奇遇ですね」

「ラトビア、ラトビアーーーーッ！」

「で、何やっているんだ御前は」

「この人は放っておいたら何するか」

ドイツに言い返します。

「ですから若しもの時に備えての監視です！」

「監視！？」
「そうです、監視です！」
それが日本の反論でした。
「とりあえず私のことは置物か何かだと思って続けて下さい」
「置物なら試し撃ちしてもいいよね？」
居座る日本とにこにこした顔でピストルを取り出すロシア。いい加減ドイツは頭痛を感じてきました。

第百十七話　　完

２００８・４・１４

第百十八話　ロシアとの関係

第百十八話　　ロシアとの関係

日本とロシアはこんな関係です。すっごく険悪、というか日本がとにかく嫌っているのです。かつて派手な戦争をしてその後家のお金が大変なことになったこともあるからです。とにかくいつもロシアを警戒しているのです。

しかもこれは日本だけではありません。例えばアメリカは。ロシアの話を出されると。

「ああ、それでさ今度」

「このハンバーガーどうかな。美味しいよ」

ロシアの話をしようともしません。それでいて家の人達を一杯ロシアに向けていたりもします。北極の寒い海の向こうにいるロシアをいつも警戒しているのです。ただ言葉に出したくないレベルで嫌いなのです。何気に物凄く仲が悪い二人です。

そしてもう一人。中国はというと。

「長城は何の為にあると思うある？」

「あいつだけは油断できないある」

昔からお家の北にいる人達ととんでもなく仲が悪いこの人は当然のようにその北にいるロシアと険悪な関係にあります。中国が一番嫌いな人はロシアなのです。

とまあこの三人はとかくロシアが嫌いです。あんまりにも険悪な関係なのでお互い口も聞きません。ところが。

「ロシア！？中々いい奴なんだぜ」

韓国は結構ロシアが好きなようです。

「あのでかさとパワフルさ、気に入ってるんだぜ」

どうも人それぞれのようです。もっとも何気にロシアは日本との戦争の時に韓国を自分の家に入れてしまってそれからバルト三国の面々みたいに使ってしまおうと考えていたのですが。何故か彼はそ

れを知らないのでした。知らないというのは時として幸せなことです。

第百十八話　　完

２００８・４・１４

第百十九話　恐怖の差し入れ　☆

第百十九話　恐怖の差し入れ

緊張が続く日露関係。ここで日本は何時の間にか和服に着替えておはぎを出してきました。そもそもそのおはぎも何処から出して来たのでしょうか。

「そうでした、私ロシアさんに差し入れ持って来たんですよ」

「何だそれは」

「おはぎです」

ドイツの質問に答えます。

「私の家の伝統的なお菓子ですよ」

「へーーー、これが日本のお菓子なんだ」

ロシアはそのうちの一つを手に取って興味深げに見ています。

「変わった感触してるね」

「お好きなだけどうぞ」

「ふむ」

ドイツは今の二人を見てまずは少し落ち着きました。

「二人共意外に冷静だな」

殺し合いをはじめるのかと危惧していましたがこれが案外なのです。ついでにバルト三国の面々もいただいています。

「じゃあ僕達も」

「日本さん頂きますね」

「ただ」

ここで日本が一言。皆が食べた後で。

「一つおはぎに混ぜてはいけない異物が混入されていますが」

「うぎゃあああああああああっ！」

「ま、まさかそれって！」

「ラトビア！ラトビアアァァァーーーーーーーーッ！」

響き渡るラトビア、リトアニア、エストニアの絶叫。しかしロシ

アはそんな恐ろしいＢＧＭを後ろにしても全く平気なのでした。
「僕のじゃなかったみたいだよ」
「運がいいですね」
「・・・・・やっぱりこうなるのか」
胃薬を飲むドイツ。とりあえず絶叫というＢＧＭは無視しています。そうでもしないととてもやっていけないからです。ラトビアはまたしても不運に遭うのでした。どうも彼は不幸の神様に愛されているようです。そんなものに愛されても有り難くもありまｓねんが。

第百十九話　　完

２００８・４・１５

第百二十話　手間のかかる相棒　☆

第百二十話　手間のかかる相棒

嵐の中の独露会談。日本が来るわバルト三国は巻き込まれるわで本当に大変です。その三国の一つリトアニアは気分転換も兼ねてポーランドに電話をします。その横では今回大当たりのラトビアが泣いていてエストニアが慰めています。

「あーーもしもし俺だけれど」

ポーランドを呼びます。

「ポーランドそっちはどう？」

「おーーリト丁度いいところにかけてきたし」

「丁度いいところって？」

「今度電球代えるからこっち来てくれん？」

「それ位自分一人で取り替え出来るでしょ」

すぐにポーランドに答えます。正直今はそれどころじゃありませんし。

「何言ってるのさ。俺が電球持って御前がテーブル回すんよーーー」

「えっ！？」

ポーランドはいきなり変なことを言い出しました。

「俺一人じゃ無理だし」

「テーブルに上って手首回せばいいだけでしょ」

呆れた声のリトアニアの突っ込み。しかしそれを聞いたポーランドは何故か黙ってしまいました。そして十秒後。やけに長い十秒でした。

「ははははははははは、いやそんなん知ってたし！」

「し・・・・・知らなかったの！？」

「だから知ってたし！」

「ちょっと、ちょっとポーランド！！」

相変わらず物凄く手間のかかるポーランドでした。リトアニアが尽くす奥さんになったのも無理はないことでした。言うまでもなく彼は男なのですが。奥さん気質というものは性別にはあまり関係ないようです。

第百二十話　　完

２００８・４・１５

第百二十一話　服も着ずに　☆

第百二十一話　服も着ずに

普通とは全く違った意味でとってもいい雰囲気のロシア訪独の中でイタリアは。焦りながらドイツの家に向かっていました。

「うわーーーもうこんな時間だよ」

ドイツの家の時計搭の時間を見てびっくりしています。今までシエスタしていたのです。しかもトランクスまで脱いで。

「ドイツの友達見る筈だったのに・・・・・・あっ」

ここで彼は気付きました。

「でも遊んでもらえるから別にいっかーーーーー」

そんなことを考えながらドイツの家の応接間に来て挨拶です。

「ドイツお仕事終わったーーーーーっ？」

扉を開けてドイツに呼び掛けます。

「ドイツーーー、サッカー、サッカーしよーーーーっ」

ところが部屋の中にはドイツとロシアだけではありませんでした。日本もいてバルト三国もいてとても怖い雰囲気です。

しかし。あのイタリアです。そんなことには気付きません。彼は空気に気付かないのです。

「こんにちはイタリアです」

右手をチョキにして陽気に挨拶です。部屋の雰囲気に気付かずに。言葉尻に星マークまでつけて。

「こんにちはロシアです」

そしてロシアも同じ様にチョキで言葉尻に星マークをつけて返事を返します。リトアニアはそのロシアのにこやかさを正確に見抜いていました。

「あっ、完全見下しモードだ」

けれどそれは口には出さないのでした。やっぱり怖いからです。何か言っても一言突込みを入れるだけの日本とは違うのです。

第百二十一話　完

2008・4・16

第百二十二話　友達を探せ

第百二十二話　友達を探せ

ドイツがやたらと強くなっているので危機を覚えたイギリスとフランスは。とりあえず彼を抑える為に友達を作ることにしました。

「といってもなあ」

まずはフランスが腕を組んで苦い顔を浮かべます。

「何か頼りになるのはいないしな」

「相手がドイツだからな」

イギリスも言います。

「これといっていないな」

「スウェーデンとかスペインは中立でいくつもりらしいしスイスは論外だしな」

「ああ、あそこはな」

絶対に誰とも友達にならないし怖いので二人もスイスはスルーです。

「ハンガリーとかフィンランドはあっちについたしな」

「オーストリアは居候になったしバルトの奴等はロシアに飲み込まれた」

「・・・・・おい、いねえぞ」

フランスはとんでもない事実に気付きました。

「友達になれるのが。どうするんだよ」

「いや、いるだろ」

しかしここでイギリスが言います。

「あいつがな」

「・・・・・あいつか」

「とりあえず話をしに行こう」

深刻な顔になったフランスに同じく深刻な顔で告げます。

「期待せずにな」

「・・・・・そうだな」

どうも何か曰くつきの相手のところに行くようです。二人の足取りは実に重く顔には絶望がありました。一体誰と会いに行くのでしょうか。どっちにしろいい相手ではないようですが。二人の苦労もまた中々尽きないのでした。苦労はこの学園では沸いて出て来るものなのですから。

第百二十二話　　完

２００８・４・１６

第百二十三話　そのお友達　☆

第百二十三話　そのお友達

二人の向かった先はポーランドのお家でした。そこでお茶とお菓子を食べながらお話です。まずは話し終えた終えたイギリスがポーランドに対して提案します。

「というわけでポーランド」

「ああ」

「俺達と同盟結んで俺達に対抗しないか？」

「ドイツ自身も最近大分力をつけてきているしな」

フランスも真剣な面持ちです。真面目な時は真面目です。

「で、ポーランド」

「うん」

何かポーランドの返事は気合がないです。二人に反比例して。

「御前はこの件どう考えてるんだ？」

「ん・・・・・・」

真剣な面持ちの二人に対して答えます。二人も彼の言葉を心なし身構えて待っています。

「その話はリトから聞いた」

「そうか、リトアニアからか」

「流石はリトアニアだな」

二人もリトアニアは評価しています。それで期待したのですが。

「あーーー、で別にその話は俺的にどうでもいいんよーーーー」

リトアニアから聞いた時とほぼ同じ態度です。

「それより今度家をピンクに塗ってみようと思うんよーーーつかマジそれええと思わん？」

「もう五回目・・・・・・」

実は五回もこのことをポーランドに話している二人でした。ここに来て。

「俺もうこの子にどう接したらいいの！？」
「諦めるな！」
イギリスが泣き出したフランスを勇気付けます。
「きっと何時か理解してくれるさ！」
絶望的な言葉のやり取りです。果たして彼等の努力は報われるのでしょうか。何かあまり努力が実らずに不幸が訪問してきてばかりの二人ですけれど。

第百二十三話　　完

２００８・４・１７

第百二十四話　準備万端　☆

「まあそれでだ」
イギリスは何も期待していない目で部屋の中を見回しながらポーランドに尋ねます。
「ポーランドは何か準備しているのかな」
「あーー、その話？」
相変わらずお気楽モードです。
「それならもうとっくの昔に済ませたしーーーー」
あまり信頼できない返事です。
「そうそうマジ聞いてーーーー」
「ああ、何だ」
「言ってみてくれ」
フランスもイギリスも一応話は聞きます。
「俺新しくすっごいの買ったんよーーー」
「おお本当か！」
「御前もやるじゃないか！それならそうと早く言・・・・・」
二人はこの直後凍り付きました。まるで真冬のシベリアで寒中水泳をしたように。
「うん、やっぱ今の時代馬だけじゃいかんと思って」
にょきっと出て来たのは小さい馬でした。
「おーーー、来たしーーー」
二人はその馬を見て凍り付いたのです。
「でえーーー、ポニー飼いはじめたんよーーー」
ポニーの頭をいとしげに撫でながら二人に説明します。
「どーーよ、これマジ可愛いと思わん？」
「この御時世に戦車じゃなくて、馬！？」
「馬！！」

「うん、これ超いいんだけどーーー」
フランスとイギリスの仰天しきった顔を見ても全く平気です。
「馬じゃねえか馬ーーーーー！」
「馬！馬！！」
「馬じゃねえか！」
「いやポニーだし」
二人の言葉にも気兼ねなく返します。
「・・・・・なあイギリス」
フランスは何時になく遠い目をしています。そのうえで彼の左肩に手をかけて言います。
「俺ちょっと色々自信なくなってきたんだけれどさ」
「今日だけは気が合いそうだな」
イギリスも遠い目をしています。最早そうなるしかありませんでした。

第百二十四話　　完

２００８・４・１７

第百二十五話　何処までわかっていないんだ

第百二十五話　何処までわかってないんだ

遠い目になり、それがやがていよいよラストの戦いになろうとしていたジャイアントなゼブラマスクの方と闘う時の額に傷がある悪役だけれど本当はとっても優しい人やそれを見守るファン達の様な目になっていたイギリスとフランスに対してポーランドはさらに言います。

「っつか俺マジで考えてるんだけどーーーー」

「ああ、何だ」

「言ってみてくれ」

本当に優しい目になっています。達観すらそこにはあります。

「ドイツが来ても俺一人で追い返せるしーーーー」

「あのドイツをだな」

「それは凄いな」

二人の目がさらに優しいものになり悟りすら見えてきました。子供に対するコントが五十五番の人達みたいです。

「そっから俺ドイツに攻め込んでやっつけてやろうと思ってるんよ。それどうよ」

「そうだな」

「いいんじゃないのか？」

全然期待していませんがそれは優しい目に掻き消されています。

「是非な」

「頑張ってくれ」

「応援してくれるんよね」

「任せてくれ」

二人は答えます。

「暖かい声援を送るさ」

「その時。健闘を祈る」
「そんでさ。俺が入れたコーヒー」
話はコーヒーにいきます。やっぱりというか何というか全くわかっていないポーランドです。
「イギリス飲まんかったよね。紅茶にする？今から」
「いや、いいから」
何時になく優しい断りの言葉でした。
「御前が入れてくれた最後のコーヒーかも知れないからな。飲ませてもらうよ」
「美味しいな、本当に」
「最後じゃないしーー、ピンクの家にしたらまた呼ぶしーーーーー」
「これからすっごい楽しみだな」
「ああ、本当にな」
二人は今を見てはいませんでした。遥か彼方を見ていました。気のせいか苦難の時にはいつも姿を現わすあのお日様の様な大ちゃんな方が見えてきました。
「これからよくなるよ！」
「ならねえよ」
心の中で突っ込みを入れる二人でした。

第百二十五話　　完

２００８・４・１８

第百二十六話　フランスさんのコメント　☆

第百二十六話　フランスさんのコメント

「それじゃあまあ」
「俺達はこれで」
二人は静かに席を立ちました。
「あっ、帰るん？」
「ちょっと用事があってな」
「悪いな」
「えーーーー、何で帰るん？」
リトアニアも心配している空気の読めなさをここでも見事に発動させています。しかも天然で。
「訳わからんしーーーーー」
「用事だから」
「またな」
こう言い残してポーランドに背を向けますがその時の二人の心の言葉は。

さらば・・・・・さらばポーランド！！

未完

こんな感じでした。その後フランスは自分の秘書みたいな存在の茶色い髪を後ろで束ねたブラウンの瞳の素朴な美少女セーシェルのインタビューを受けていました。
「逃げたとかじゃないッスよ。あの時は相手の意見も尊重すべきだと思ったしね」

椅子にくつろいで話す姿勢だけは優雅です。
「愛ってのは押し付けちゃ駄目なんだよ」
「そうなんですか」
「だから逃げたとかびびってたんだとかじゃないんだって！」
何故か聞かれる前に言います。
「相手とハートとハートがつながってこその同盟だと思うんだよね。それって愛ととても似てるんじゃないかな？」
「何か仰る意味がよくわかりませんけれど」
「だからビビッてなんかないってば！」
強引にコメントを終わらせます。何か話がかなり大変なことになっているのだけはわかるフランスへのインタビューでした。

第百二十六話　　完

２００８・４・１８

第百二十七話　皆トランクス派です　☆

第百二十七話　皆トランクス派です

「全く御前は！」
ドイツは殆ど全裸で来たイタリアをガミガミ叱っています。
「起きたらまず服を着ろと毎日言ってるだろ！」
「毎日だったのですか」
横で聞いている日本はそのことを聞いて呆れ顔です。
「あと着るのは上じゃなくて下を優先しろ！」
「御免、御免ってばドイツ」
イタリアはそのドイツに謝ることしきりです。
「悪気があったわけじゃないんだよ。本当に御免」
「悪気があったら完全に変質者だ。まあいい」
ここでお説教は終わりです。
「とにかくこれからは気をつけるように！」
「うん・・・・・・」
「とりあえずこれでも穿いておけ！」
こう言ってズボンを出してきました。それは。
何と自分が今さっきまで穿いていたズボンです。言うまでもなくドイツは今ズボンを穿いていません。トランクスです。上が軍服で下がトランクスというのは。実に間抜けな格好です。しかも前にいるイタリアは上にセーラーを羽織っただけでほぼ全裸です。それを見たロシアは。
「ハハハハハハハハハハ」
完全にまことちゃんを描いている人の笑いです。
「ドイツ君は本当に面白いなあ。ハハハハハハハハハハ」
不気味な笑いです。それこそ漫画で最後のページ見開きだと永遠に心に刻み込まれることでしょう。笑うロシアの顔もそんな雰囲気です。

「何この華悪崇な空間・・・・・・」
リトアニアはもうこの状況に耐えられませんでした。頭を抱えて苦しんでいます。本当に苦労が耐えないどころか泉から沸いて出て来る状況です。

第百二十七話　　完

２００８・４・１９

第百二十八話　ブリーフは駄目

第百二十八話　ブリーフは駄目

男は皆トランクス、まあ日本は時々褌だったりしますがこれには理由があります。実は誰かがとあるサイトを見てしまってからトランクスでほぼ統一されたのです。

「あれはねえ・・・・・・」

「悪夢だ・・・・・・」

皆そのサイトを見て口々に言います。

「試しに見てみたがあれはないだろ」

「俺もあれは駄目だ」

フランスもそのサイトを見終わってげっそりとしています。彼にしてはとても珍しいことに。

「一体何があったのでしょうか」

皆のその異常事態に気付いた日本。ふと気になってそのフランスに尋ねました。

「一体何事ですか？どんなサイトなのですか？」

「・・・・・・裏〇〇〇」

フランスは椅子に燃え尽きたボクサーそっくりの姿勢でうずくまったまま日本に答えました。

「それだけだ」

「はて」

それを聞いてもわかりかねる日本は腕を組んで首を傾げます。何が何だかわからないので試しにその裏〇〇〇という単語をネットで入力して検索してみました。そして。

「これは・・・・・・」

「夢みたい・・・・・・先生に（以下略）」

「俺の先生」

「ひゃっかんブギ」

「俺が一番セクシー」
そういった作品群でした。そこにブリーフの方々も一杯いたのです。どうにかこうにか最後まで見終わった日本は。沈み込み蒼白になった顔で一人呟くのでした。
「・・・・・・よくわかりました」
以後ブリーフに強烈なトラウマができてしまいました。今学園ではトランクスが飛ぶように売れています。というか元々トランクスが多かったのですが。ブリーフにトラウマができたのも無理はない話でした。

第百二十八話　　完

２００８・４・１９

第百二十九話　二回目でした　☆

第百二十九話　二回目でした

このままでは絶対に話が進みません。ドイツは遂に強硬策に出ました。

「とにかくだ」

「皆出て行ってくれ」

ロシア以外の皆に告げます。

「二人で話がしたいからな」

「えっ、遊んでくれないの」

「またな」

イタリアにはこう答えます。続いて日本に顔を向けて。

「悪いが御前もな」

「わかりました」

日本はロシアを見ながら渋々頷きます。その後ろでは。

「骨休めができるよ、やっと」

「ああ、今日も怖いことが多いね」

「ううん、何時までこんなことが続くんだろう」

例の三人がいつもの調子です。本当に三人の不幸と苦労は終わりません。こうしたことでもささやかな幸せに思える程なのです。

その時イタリアは。まだズボンを穿いていませんでした。トランクスも。

「実はね、日本」

「はい」

「前にもこんなことあったんだよ」

にこにこと笑ってこう日本に話します。

「その時もドイツに怒られてね」

「二度目！？」

これには日本もびっくりです。

「学習して下さい！」
「学習って？」
そんなことができるイタリアではありません。
「何それ」
「・・・・・とにかくですね」
そんなイタリアにまだ言います。
「ズボン穿いて下さい」
「うん」
やっとズボンを探しに行きます。下半身丸出しでドイツの家をうろつき続けるイタリアでした。

第百二十九話　　完

２００８・４・２０

第百三十話　ロシアのサービス　☆

第百三十話　　ロシアのサービス

二人きりになると。ロシアはにこりと笑ってドイツに言ってきました。この笑みこそが恐怖だと多くの人が言うその笑みで。

「さて。二人きりになったところで大事な話をはじめようか」

「ああ」

「まあ僕は皆がいる方が好きだけれど君は嫌でしょ」

「まあそうだな」

それは否定しないドイツでした。しかしロシアはそのドイツにさらに言います。

「さっきまでの色々なことは気にしないで。痛くも痒くもないから」

にこにこと笑いながら首をメトロノームみたいに振ってドイツに言います。

「気にしてないから。全然気にしてないから」

本当に気にしていないのでしょうか。

「きにしてきにして」

「・・・・・わかった。すまん」

ドイツの謝罪を聞くとすぐに元に戻って。今度は長い言葉です。

「で、話は戻るけれど僕と君の不可侵条約。これ位の条件は出していいよね」

「条件？」

「ポーランドの半分は絶対僕にね。あとリトアニアとラトビア、エストニアも正式に僕のものとして認めてくれてそっからフィンランドとルーマニアの東のところも。それでイタリアも欲しいなあ、欲しいなあ。貰っていいよね、別に。有り難う、僕暖かい場所欲しかったんだ、というわけで決定だよね」

「早過ぎる！」

ドイツが思わずクレームをつけました。

「どさくさに紛れてイタリアとか言うな！」
「あっ、気付いたんだ」
「他のところにも気付いている！ゆっくり言え！」
流石にクレームをつけます。
「あとこっちの意見も聞け！」
「ロシアにそんなサービスないよ」
平然として答えます。やっぱりロシアなのでした。

第百三十話　　完

２００８・４・２０

第百三十一話　小さかったのが　☆

第百三十一話　小さかったのが

イギリスはアメリカのところに入り浸っていました。昔のお話ですが。

小さかったアメリカに癒されていたのです。けれどそこにばかりいられる筈もなく。

「じゃあ今日はこれでな」

「もう帰っちゃうの？」

「俺もここにばかりはいられないんだ」

実に残念そうに言います。

「そんなの嫌だ！帰るなんて許さないぞ！」

「また来る！また来る！」

何とか必死にアメリカを宥めています。

「だから心配するな！」

「嫌だよ・・・・・帰らないでくれよ」

アメリカは遂に泣き出しました。手には銃を持っていても心細そうです。

「こんな広いところで一人は怖いよ。心細いよ」

「それは俺も経験あるから」

伊達に友達がいないわけではありません。流石イギリスです。

「また来るから安心しろ」

「本当だよな」

「ああ。だから御前も頑張って強くなれ、今度は紅茶持って来てやるからな」

「わかったよ。それじゃあ」

この時はそれで別れました。それで次来てみると。

「あっ、紅茶持って来たぞ」

「よおイギリス」

いきなり背の高い青年の登場です。
「えっ、ちょ、ちょっと」
「僕だよアメリカだよ」
「う、嘘だろ」
何時の間にか自分より大きくなったアメリカに唖然としています。
「そんなわけあるかよ・・・・・・」
子供は大きくなるものですが。幾ら何でも急に大きくなったのでびっくりしているのでした。

第百三十一話　　完

２００８・４・２１

第百三十二話　スタンド

第百三十二話　スタンド

ロシアはとかくおっそろしい青年です。彼自身もとても怖いのですがそれだけではありません。まず上司です。
「あの人、どうにかならないんですか？」
「どうにかなると思う？」
「・・・・・・いえ」
ラトビアはリトアニアの返答に涙を飲んで頷きます。
「そんなわけないですよね。あの人は」
「絶対に何か喋ったら駄目だよ、あの人の前では」
「・・・・・・はい」
「陰口も」
これがすぐにばれて折檻になるのがロシアの家の素敵なところです。こうしたことにかけては学園一なのがロシアと彼の家です。
「絶対にね」
「つまり黙っていろと」
「そういうこと」
「あと。僕ずっと気になっているんだけれど」
エストニアがおずおずとリトアニアに尋ねます。
「何？」
「ロシアさんの後ろに時々見える白い人だけれど」
その人について尋ねるのでした。
「あの人、何なのかな」
「冬将軍っていうんだよ」
「冬将軍？」
「うん、ロシアさんが戦争した時」
その時のことをまず話します。
「出て来て雪と寒さで相手を動けなくさせてそれでロシアさんを助

けるんだよ」
「そんなのもいるんだ」
「だから。あの人と戦争するのも大変なんだよ」
「・・・・・わかったよ」
「ううん・・・・・何時までこんな怖ろしいところで生きていくんだろう」
次から次に知りたくもないとんでもない事実がわかるロシアでした。それに振り回される三人でもありました。

第百三十二話　　完

２００８・４・２１

第百三十三話　覚えてない

第百三十三話　覚えてない

イタリアは色々と皆から大目に見てもらっています。どうにも憎めないからです。けれど物覚えはあまりよくはありません。

「そういえばイタリア君の子供の頃ですが」

「うん、何かな」

イタリアの家でドイツも一緒になって三人仲良く食事をしているところで不意に日本がイタリアに尋ねてきました。

「どんなふうだったのですか？」

「覚えてないよ」

ピザを食べながら明るく答えます。

「どんなのだったかな」

「覚えてないってイタリア君」

「うん、どういうわけか本当に覚えていないんだよ」

「俺もだ」

何とドイツもでした。

「おかしいな。フランスの上司のナポレオンが去ってプロイセンの奴と一緒に住むようになるまでは覚えていない」

「そうなのですか」

「特に子供の頃は」

ここで腕を組んで考える顔になりました。

「どうだったかな」

「それでも何かドイツとはずっと昔から一緒にいるような」

「そうだな」

ドイツもイタリアの言葉に頷きます。

「何でだろうね」

「わからない。一体どういうことなんだ」

「何故そうなのか私にはわかりませんが」

日本は二人の話を聞きながら言います。三人はパスタやピザを楽しみながら話を続けています。

「本当に何かあるようですね」

ここでイタリアとドイツの子供の頃のお話です。さてさてどういったものなのでしょうか。何気に随分と色々な面子が出るお話かも知れません。

第百三十三話　　完

２００８・４・２２

第百三十四話　ちびたりあ　☆

第百三十四話　　ちびたりあ

昔々のお話ですが。生まれたばかりのイタリアは丁度今イタリアのお家があるところにあったローマ帝国というお家でフランス兄ちゃんやロマーノ兄ちゃんとか色々な国と一緒に楽しく過ごしていました。

けれどある日お爺ちゃんのローマ帝国がイタリアを連れてこの家を出て行ってしまったのです。今もその確かな理由はわかりません。昔々のお話です。

それまでとても強かったお爺ちゃんは凄く優しい人になっていました。元々芸術も好きな人でしたがそれがさらに強くなってイタリアに絵を教えてあげたりもして二人で仲良く暮らしていました。他にも歌や音楽といったものも教えてもらいました。

イタリアは絵も歌も好きなうえにとても上手だったのでお爺ちゃんも大喜びでした。料理まで教えてくれてイタリアはとても楽しい日々を過ごしていました。

イタリアは思いました。

「絵を描くのも歌を歌うのもお料理をするのもとてもルネサンスなき分で楽しいな」

無邪気な思いでした。

「フランス兄ちゃんや神聖ローマ帝国やあとスペイン兄ちゃんやロマーノ兄ちゃんだったかな」

何気に兄弟や親戚がとても多いイタリアなのでした。

「皆に見せて聞かせてあげたいな。僕の絵や歌」

子供らしい考えでした。それを簡単に表現すると。

「早く皆にまた会いたいな」

こう思っていたのです。願いは適えられましたが。

何と皆いじめっ子になっていたのです。イタリアの子供の頃はも

うかなり酷いものだったのです。何故か彼は覚えていませんが。ドイツも。

第百三十四話　　完

２００８・４・２２

第百三十五話　味方はいない　☆

第百三十五話　味方はいない

昔々イタリアは芸術と貿易しかない欧州のいじめられっ子でした。その頃はそんな時代だったのです。それであのフランスがイタリアにちょっかいをかけています。

「おいイタリア」

その頃はお髭もなくとりあえずまともそうではありました。

「今度御前の土地ちょっと欲しいんだ」

「あ、あげるから」

イタリアは震えながらフランスに応えます。泣いてもいます。

「髪の毛引っ張っちゃやだよーーーー」

イタリアのアホ毛を触っているのです。何故かイタリアはここを触られると弱るのです。当然それをわかってやっているフランスです。

「そうそう、今度カントゥッチーニ一杯くれよ。あれ好きなんだ」

「あっ、俺も絵欲しい」

茶色の短い髪と同じ色の目をした明るい顔のやや童顔の青年もそれに応えます。スペインです。イタリアは弱いので強いフランス兄ちゃんやスペイン兄ちゃんの言いなり状態だったのです。からかわれっぱなしでした。

「よーーしいい子いい子」

イタリアを抱っこして笑うフランスです。

「お礼に高い高いしてやるぞ」

「やーーーっ、下ろして怖いーーーーーー」

「御前ホンマちっちゃいまんまやなあ」

スペインはフランスに意地悪されて泣いているイタリアを見て言います。

「絵ばっかり描いてるから大きくならへんのとちゃうか？」

「おい御前等！」
そんなイタリアにも味方が！？ここで二人の後ろから声が。
「イタリアを放せーーーーっ！」
そう言って現われたのは金髪碧眼の凛々しい顔立ちの少年。青いマントと帽子がよく似合っています。その彼は。
「イタリアは俺とローマ帝国になるんだからな！」
神聖ローマ帝国でした。一番イタリアを狙っている人です。味方なんている筈もなかったのです。

第百三十五話　　完

２００８・４・２３

第百三十六話　追っかけ

第百三十六話　追っかけ

神聖ローマはいつもイタリアの北の方にあるお家にいます。けれど何かあるとすぐにイタリアのところに来るのです。そしていつもこんなことをイタリアに対してしつこい位に言います。

「俺と一緒になれ！」

「俺の家に来い！」

「二人でローマ帝国だ！」

執拗にイタリアに対して迫ります。逃げても逃げても追いかけてきます。

「待てーーーーーーーっ！」

「嫌だよーーーーーーっ」

この頃は大好きな女の子ではなく全くどうでもいい男に追いかけられているイタリアでした。とにかく神聖ローマのアプローチが強引でしつこかったのです。

「神聖ローマになれーーーっ」

こんな感じでイタリアのお家に来ては家の中に入って橋で待ち伏せして追いかけて。イタリアは逃げ回るだけですがとにかく神聖ローマはしつこかったのです。

「そういえばだ」

ドイツはふと思い出したことがあります。

「子供の頃いつも誰かを追いかけていたな」

「えっ、誰なのそれ」

「さて。それは」

ピッツァを食べながら能天気な顔で尋ねてくるイタリアに対して首を傾げて応えます。

「忘れた。誰だったかな」

「そうなんだ」

「そういえばドイツさんもイタリア君も何だか」
ぽつりとした感じで日本が言います。
「第一次世界大戦で出会ったようには思えない程仲がいいですね」
「そうか？」
「そんなことないよ」
日本の突っ込みにそれぞれ否定するドイツとイタリアです。全ては遠い遠い昔のお話だったのです。

第百三十六話　　完

２００８・４・２３

第百三十七話　お兄ちゃんの注意も　☆

第百三十七話　お兄ちゃんの注意もとにかく神聖ローマがイタリアばかり追いかけるので見るに見かねたフランスが。二人を読んで注意しました。
「神聖ローマはイタリアばかり追いかけるのは止めろよな」
こういう時だけは何故かいいお兄ちゃんになって注意します。
「イタリアもされっぱなしになってるからいけないんだぞ」
こうイタリアにも言います。何故かイタリアにはトーンが優しいです。
「だって神聖ローマ怖いんだもん」
「御前がうちに来ればいいだけの話だ」
それでもイタリアは怖がって神聖ローマは相変わらずです。神聖ローマはあくまでイタリアと一緒にいたいのです。
「だからうちに来い。絶対悪いようにはしないからな」
「それはお爺ちゃんが駄目だって言ってたもん」
「そのお爺ちゃんがローマ帝国なんだろ」
神聖ローマが憧れているそのローマ帝国です。ドイツにありながらも心はイタリアに向けられているのがこの神聖ローマなのです。
「どうしてもか」
「どうしても」
「よし、わかった」
これでわかったとフランスもイタリアも思いました。ところが。
「じゃあ力づくでも」
「やーーーーーーっ！」
「ちょっと待てこら！」
イタリアを引き摺って行こうとする神聖ローマ。思わず叫び声をあげるイタリアとそれを必死に止めようとするフランス。
「人が言った矢先に！もう許せねえ！」

フランスは遂に剣を抜きました。神聖ローマも受けて立ちます。
「前から手前はいけ好かねえと思ってたんだよな」
「それはお互い様だ」
「なあなあイタちゃん」
殺し合いをはじめる二人をよそにスペインがイタリアのところに来ます。そうして」
「あんな奴等放っといてチュロス食わへんか？」
「うん」
漁夫の利を狙うスペインもいたのでした。さてさてイタリアは果たしてどうなるでしょうか。

第百三十七話　　完

２００８・４．２４

第百三十八話　何故か嫌いじゃない

「何かな」
「何だよ」
何故か今日もイギリスの家にいて二人でお互いの悪口を言い合いながらもワインにスコッチを飲み合っている二人。ここでフランスがぽつりと言い出したのでした。
「イタリアもここに呼ぶか？」
「イタリアもかよ」
「ああ、何か急にあいつを呼びたくなったんだよ」
こうイギリスに答えるのです。
「何でか俺もわからないけれどな」
「御前結構イタリアのこと気にかけてるよな」
「まあな」
イギリスにそれを指摘されても否定しません。ワインを一口飲んでから答えます。
「昔から付き合いあるしな。それに」
「それに？」
「悪い奴じゃないだろ」
こう言うのです。
「あいつは」
「それでも御前あいつ馬鹿にはしてるよな」
「それはそうだけれどな」
これも認めます。何故か今日はやけに素直です。外見はフランスで中身は別の国なのでしょうか。
「それでも。嫌いじゃないんだよ」
「嫌いじゃないか」
「何でか俺もわからないけれどな」

「そういえば俺もだ」
実はイギリスもそうなのでした。彼もイタリアは嫌いではありません。
「へたれで抜けてるけれどな」
「何故か憎めないんだよな」
「そうだよな。不思議な奴だよ」
「じゃあ呼ぶか？」
「そうだな」
こうしてイタリアは二人に呼ばれて御馳走されることになったのですがそれがどうしてかは彼は知りません。イギリスとフランスだけが知っていることなのでした。そうしたことは決して口には出さない二人ですけれど。

第百三十八話　　完

２００８・４・２４

第百三十九話　謎の病気

第百三十九話　謎の病気

さて、とにかくあれな行動も非常に多いフランスが動きました。隣にイギリスだのスペインだの神聖ローマだのがいてもお構いなし。彼等をよそにイタリア侵攻です。理由はあれこれつけていますが誰も信じてはいませんでした。

とにかくイタリアはこの時から激烈に弱かったのですからフランスは見事な快進撃を続けました。瞬く間にイタリアの大事な部分を次々と占領していきます。ところが。

「な、何いいぃぃ～～～～っ！？」

オロチの大地の人か車田な世界の人みたいな声をあげるような状況になってしまったのです。お金がなくなったのです。フランスの弱点はちょっと動くとそれだけでお金がなくなるのですが今回もそれが出てしまったのです。

しかも。ここでフランスの身体に異変が。

「何じゃこりゃあああ～～～～～っ！」

この時代にはないジーパンの刑事さんかこれまたこの時代にはないヨーランでいつも試合前に出ようとして結局実況解説になる何処ぞの男な塾の二人みたいな声でした。身体のあちこちに斑点ができてそこから恐ろしいことになる病気だったのです。

この病気には流石に参ったフランス、遂にイタリアから撤退です。かくしてイタリアは助かったのです。ところが。

「あれはイタリアの病気なんだよ！」

フランスはそう必死に主張しだしたのです。

「だからイタリア病だ！」

「違うよ、フランス兄ちゃんがかかったんじゃない」

けれどイタリアはこう主張するのでした。

「だからフランス病だよ」

「いや、待てよ」
しかしここでフランスはスペインを見るのでした。
「御前がアメリカの家に寄ってからこの病気がはじまったような気がするんだけれどよ」
「そ、それは気のせいや」
疑惑をかけられたスペインはそれを必死に否定します。
「俺かてわからんで困ってるんやで。それでどうしてなんや」
「本当か？」
「本当かなあ」
二人は疑惑の目でスペインを見ます。けれど真相はわからなかったのでした。

第百三十九話　　完

２００８・４・２５

第百四十話　知ってはいた

第百四十話　知ってはいた

「あの時のフランス兄ちゃんには本当に参ったよ」
イタリアはその時のことを日本とドイツにも話しています。
「勝手に来て勝手に俺のせいにするんだから」
「あいつらしいな」
「そうですね」
ドイツと日本は実にフランスらしいと納得することしきりでした。
フランスの人望がよくわかります。
「まあ俺実はフランス兄ちゃんが来ること知っていたんだけれどね」
「何っ！？」
「えっ！？」
二人は今度は驚きの声をあげました。
「御前今何て言った！？」
「イタリア君はそのことを知ってたんですか！？」
「だってわかるじゃない」
いつもの能天気な調子で二人に答えます。
「ああ来るなって。わかってたんだよ」
「それで準備は？」
「しなかったよ」
チーズとベーコン、それにトマトがたっぷりと上に乗ったピッツァを食べながら二人に答えます。
「当然」
「・・・・・それは何時わかったんだ？」
「何ヶ月か前に」
充分な時間があったのでした。ドイツの言葉に答えます。
「わかってはいたけれどね」
「で、何で準備をしなかったんですか？」

今度は日本が問い掛けます。
「何となく」
「何となくってイタリア君」
日本は呆然としています。
「それじゃあどうしようもないですよ」
「こいつはその時からこいつだったのか」
ドイツは頭を抱えています。
「全く。困った奴だ」
「でさ、二人共」
その二人に相変わらずの能天気で声をかけます。
「ピッツァ食べる？美味しいよ」
イタリアはその時からイタリアで。今もイタリアなのですか。そしてこれからもイタリアなのでしょう。

第百四十話　　完

２００８・４・２５

第百四十一話　落ち込む理由　☆

第百四十一話　落ち込む理由

イタリアが野原で楽しく兎や犬と遊んでいると。とはいってもやっぱり犬には後ろから帽子を噛まれていますが。それでも遊んでいるといつも元気なスペインが落ち込んでいるのに気付きました。草原の高いところに三角座りになってしょぼんとしていたのです。

「あれ、スペイン兄ちゃんが寂しそうにしてる」

それに気付いて彼に声をかけます。

「ねーーーねーースペイン兄ちゃん」

「ああ・・・・・イタちゃんか」

見れば顔も落ち込んでいます。普段とは全然違います。

「どうしたの？」

「一つだけ言うとくで」

その暗い声でイタリアに言います。

「今のうちやで」

「今のうち？」

「そや」

こうイタリアに言うのです。

「今のうちに好きなこと全部しといた方がええで」

「えーーーっ！？」

イタリアはその言葉の意味がわかりませんでした。その間にも帽子を後ろから犬に噛まれていますがそれには気付いていません。かなり悪い犬みたいです。

「何でなの、それって」

「あんたもそのうちわかるで」

やっぱり寂しい顔をしての言葉でした。見たら背中には何かハプスブルクという名札が貼られていてそのうえフランスが苦戦しています。苦戦している相手は茶色の髪を後ろで撫で付けた眼鏡の気品

のある美青年です。一体誰なのでしょうか。少なくともイタリアにとってはいい人ではないことは確かなようです。とりあえずイタリアにとっていい人はこの時代いないのでした。

第百四十一話　　完

２００８・４・２６

第百四十二話　あの時は

「あの時は驚いたで、ホンマ」
スペインがフランス相手に色々と話をしています。今度はスペインがフランスの家に来ています。やっぱりやることといえばお酒なのですが。食べ物も一杯置いてあって楽しくお話というわけです。
「気付いたら御前と宿敵になってたからな」
「それがあいつの家のやり方なんだよ」
フランスは不機嫌な顔でスペインに対して言います。
「気付いたらいきなりだったろ」
「そや。何か上司が変わってて」
「俺のところもな。上司の奥さんになってな」
「ああ、あれな」
これはスペインも知っていることでした。ワインとエスカルゴ、それにパエリアを食べながら二人は話しています。
「御前のとこもそうなったんやったな」
「御前のところはそれであれだろ？」
フランスもワインを飲みながらスペインにまた言います。
「上司が」
「ああ。まあそれで一時期羽振りがよおなったんやけれどな」
「一瞬だったな」
「ホンマむかつくで、イギリスの奴」
「ああ、わかるよそれは」
イギリスととかく仲の悪いフランスがこれに頷かない筈がありませんでした。
「あいつなあ。土壇場になったら強いんだよな」
「俺も勝ったと思ったんやけれどな」
「御前俺には結構勝ってるじゃねえか」

「そやったっけ」
「そやったっけじゃねえよ」
憮然としてスペインに言い返します。
「ったくよお。イギリスやアメリカには負けるんだからな」
「じゃあゲリラやろか」
「・・・・・それだけは止めろ」
過去を色々と思い出しながらワインを酌み交わすのでした。何気に腐れ縁の二人であります。

第百四十二話　　完

２００８・４・２６

第百四十三話　貴公子登場　☆

第百四十三話　貴公子登場

暫くしてイタリアは。スペインの言葉の意味がよくわかることになりました。

「・・・・・・よくわかりました」

何とニューフェイス、オーストリアさん登場です。茶色の髪の毛を優雅に後ろに撫で付けた眼鏡のよく似合う気品のある人です。いつもアスコットタイや白い、ブラウス、それに青いコートといった貴族的な服装です。イタリアはそのオーストリアさんのものになってしまったのです。

「というわけで今日から貴方はこのオーストリアが所有致します」

こうタンコブまで貰ってメソメソしているイタリアに対して話しています。

「貴方には私の召使いとして働いてもらうことになります」

「召使いですか」

「そうです」

イタリアの質問にも答えます。

「なお貴方の土地の産業、政治等は私が指揮致します」

つまり完全に自分のものとするわけです。非常に厳しいです。少なくともイタリアにとってはとんでもない話です。けれどオーストリアさんはそれに意を介さずさらに言葉を進めていくのでした。

「貴方は私に忠実に従っていればいいだけです」

「忠実にですか」

「そうです。では最後に」

まずは言葉を一旦区切ってイタリアに問います。

「何か質問はありますか？」

「御飯にパスタ出ますか？」

「出ません」

こんな時にまでパスタのことを聞くイタリアもイタリアですが即答するオーストリアも流石でした。何はともあれイタリアの苦しい苦しい、それでいて何故か懐かしさもある不思議な召使い生活がはじまるのでした。

第百四十三話　　完

２００８・４・２７

第百四十四話　オーストリアさんのこと

第百四十四話　オーストリアさんのこと

「大変だったのですね、イタリア君も」
「大変どころじゃなかったよ～～～～」
イタリアは日本に対してお話しています。幼いあの時のオーストリアとのことを。
「御飯は少ないししょっちゅう怒られたし」
「その割には今でもオーストリアさんと仲いいですね」
「うん、悪い人じゃないし」
いつもの能天気な顔で答えます。何故かオーストリアを恨む気持ちは今の彼からは全く見受けられません。それが不思議と言えば不思議ではあります。
「色々といいこともあったしね」
「確かに悪い奴ではない」
ドイツもそれは認めるのでした。少し考える顔で。
「ただな。あいつは」
「どうされたんですか、ドイツさん」
「どうもな」
今度は複雑な顔をして日本の質問に答えます。
「俺は苦手だ」
「苦手なんですか？確か同居されて」
ちょっとしたことがあって今ドイツはオーストリアと同居しているのです。実はドイツにとってはこれがあまり面白くないことだったりします。
「だからだ」
「だからですか」
「何であいつはあんなにケチなんだ。しかも」

「しかも？」
「プロイセンと仲悪いしな」
ドイツの同居人です。昔は別々に暮らしていた時期もあったのですが今ではまた同居しています。
「だが上司の命令だからな。仕方ない」
「いいじゃない、皆いたら賑やかで」
「・・・・・・そうはいかない。俺の家はな」
家の中にまで悩みのあるドイツ、彼から苦労が消えることはないのでした。何故か苦労に愛されてしまっている彼なのでありました。

第百四十四話　　完

２００８・４・２７

第百四十五話　悪戯は許しません　☆

第百四十五話　悪戯は許しません

イタリアはオーストリアさんが管轄する神聖ローマ帝国の家で召使いとして働くことになりました。この家は色々な人が同居したり召使いとしたりでイタリアもその中にいるのです。つまり神聖ローマの中の一人になってしまったのです。

召使いとして今日はモップがけです。小さい身体で必死に頑張っています。

「うんしょっと」

何とかやっていますがそれでも。メイド服とエプロンに汗が滲んでいます。

「ちょっと大変だな。それにしても」

少し壁を見ます。すると廊下の壁に一列に絵が一杯並んでいるのでした。イタリアはそれを見て感嘆することしきりです。

「うわーーー、オーストリアさんのお家の絵凄いなあ」

素直に驚くばかりです。そしてそれを見て思うことは。

「僕も昔みたいに絵を一杯描きたいな。ここ絵の具ないのかな？」

絵のことです。絵を描くことが大好きなイタリアは素直にこう考えたのです。

それで探してみたのですが見つかったのは。

「インクと筆しかなかったよ」

その二つだけでした。

「これじゃ何にも描けないよ」

それで落ち込んでいたのですがここでオーストリア産の肖像画を見つけました。それでついつい悪戯心を起こして。

「そうだ。こうしてみよう」

無邪気にその肖像画にお髭を描きました。よくある悪戯です。けれどそこに非常に間の悪いことにオーストリアさん御本人が来られ

てしかもそれを見つかって。
お仕置きとして木にくくりつけられるイタリアでした。
『パスタを与えないで下さい』
「ううっ、お腹空いた・・・・・・」
めそめそと泣くことしかできないイタリアなのでした。弱いと大変です。

第百四十五話　　完

２００８・４・２８

第百四十六話　オーストリアさんとお菓子

第百四十六話　オーストリアさんとお菓子

昔はオーストリアさんはイタリアにとってとても怖い人でした。
ところが今は。
「やれやれ、また貴方ですか」
「うん、また来たよ」
結構オーストリアさんのお家にお邪魔して楽しくやっています。
何故か凄く仲がいいのです。
「俺はパスタ作るからオーストリアさんはお菓子を御願いね」
「ジェラートは作りませんよ」
一応はこう釘を刺してきます。
「貴方はいつもあれですから」
「ええ～～～、ジェラートないんだ」
「そのかわりザッハトルテを作ります」
こうイタリアに言うのでした。
「それでいいですね」
「ザッハトルテなんだ」
ザッハトルテと聞くとイタリアの顔が一気に明るくなりました。
ジェラートを作らないと言われて困った顔になっていたのが一瞬で消えてしまいました。
「そうです。それでいいですね」
「うん、御願いするよ」
「わかりました。もう貴方が来ることはわかっていましたし」
「あれっ、俺何も言っていないけれど」
ズボラなイタリアは連絡を全くせずに来たのです。実にイタリアらしいです。
「それでどうして」

「わかりますよ。貴方の行動は」
すっと微笑んでイタリアに言うのです。
「だからもう事前にザッハトルテの準備をしていたのですよ。後は飾りつけだけです」
「そうだったんだ」
「ワインはトカイでいいですね」
「トカイもあるんだ」
オーストリアさんが大好きなとても美味しいワインです。それもあると聞いてやっぱりイタリアは笑顔になります。
「用意がいいね」
「貴方も少しは用意しなさい」
一応はこう叱ります。
「いつもいつもドイツや私に頼ってばかりで。昔からそうなのですから」
そうは言っても顔は笑っているオーストリアさん。何だかんだでイタリアが嫌いではない彼なのでした。

第百四十六話　完

２００８・４・２８

第百四十七話　大好きな時　☆

第百四十七話　大好きな時

「貴方はもう少し慎重になるべきであって」

オーストリアさんは規則や規律にはとても厳しい人です。それでドジなイタリアはよく怒られます。しかも。

「反抗は許しません」

「うわあああああああああ・・・・・・」

ちょっとでも反抗すると物凄い勢いで踏み潰されてしまいます。それもいつもです。そんな有様でしたのでイタリアはオーストリアさんが怖くて怖くて仕方ありませんでした。

けれどそんなオーストリアさんが大好きになる時間がありました。それは」

「イタリアですか」

「あっ、すいません」

オーストリアさんのピアノを扉を少しだけ開けて覗くようにしてこっそりと、隠れて聴いていたその時です。不意にオーストリアさんがイタリアに対して声をかけてきたのです。

「そんなところに立っていないので部屋に入りなさい」

「いいんですか？」

「構いません」

こうしたことには凄く鷹揚なオーストリアさんなのです。そして。

「席はあります。ちゃんと座って御聞きなさい」

「わかりました」

言われるままちょこんと席に座って音楽を聴きます。イタリアはオーストリアさんの奏でる奇麗な音楽が本当に大好きなのでした。苦しい時や困った時があればいつもオーストリアさんの曲を聞いて苦しい召使い生活の慰めとしていたのです。

第百四十七話　完

2008・4・29

第百四十八話　スカラ座

第百四十八話　スカラ座

「ここですね」
「うん、そうだよ」
イタリアは今日は日本とドイツをミラノのスカラ座に案内しています。見るだけで豪華絢爛な世界のオペラハウスの中でもとりわけ立派なオペラハウスです。二人をそこに案内したのです。
「ここはオーストリアさんが建ててくれたんだ」
「あの方がですか」
「あいつの音楽好きは際立ってるからな」
ドイツも素直に感心しています。
「何時見ても見事なものだ」
「色々あって俺のものになったんだけれどね」
イタリアはそのスカラ座をにこにことしながら見て二人に説明します。
「オーストリアさんが建ててくれなかったらやっぱりなかったんだよね」
「そうですね、確かに」
「今じゃオーストリアさんに凄く感謝してるよ」
こうも言います。
「あの時は怖い思いもしたけれどね」
「オーストリアさんの音楽ですか」
「ねえ日本、ドイツ」
イタリアはまた二人に声をかけてきました。
「何でしょうか」
「何だ？」
「ここの次はオーストリアさんのところへ行こうよ」
「オーストリアさんのところへ」

「そうだよ、ウィーン国立歌劇場」
言わずと知れたスカラ座と並ぶオペラハウスです。最早殿堂ともなっています。
「そこにね。どうかな」
「いいですね、それは」
「悪くないな」
にこりとしている日本に対してドイツは少し複雑な顔です。やはりオーストリアですから。
「ではここでまずは椿姫を観て」
「それからウィーンでフィガロの結婚にしようよ」
「わかりました」
こうして三人はオペラハウス巡りをすることになりました。オーストリアさんが今も愛している音楽を聴く為に。

第百四十八話　　完

２００８・４・２９

第百四十九話　家に帰ってみると　☆

第百四十九話　家に帰ってみると

当時イタリアは神聖ローマのお家にいたのです。当時は随分と広いお家でオーストリアさんのお家と一緒になっていて他にも一杯色々な人がいました。ですが本来は神聖ローマのお家だったのです。ですから当然ながら神聖ローマもいるわけです。イタリアは今まで彼とはこのお家では会ってはいませんでした。ただ単に神聖ローマが外にばかり出ていたからです。だから彼には会わなかったのです。

ですが彼のお家ですから何時かは会うもので。それがこの時でした。

「只今」

その神聖ローマがお家に帰って来ました。

「あいつ等制圧してって・・・・・」

ここでお掃除をしているイタリアに会いました。

「イタリアがうちにいる!?」

「言っていませんでしたか?」

オーストリアさんがここで彼に言います。

「我が家の使用人の一人となったのですよ」

「そ、そうだったのか」

イタリアをまじまじと見ながら応えます。

「イタリアが。うちに」

「ええ。ですが」

「ですが。何なんだ?」

実はあまりオーストリアさんが好きではないので態度はよくないです。神聖ローマはじっとイタリアを見ています。その雰囲気がちょっと。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「少し怖いのですが」
オーストリアさんがイタリアを見詰める神聖ローマに対して言います。
「イタリアが怖がっていますよ」
「ちょ、ちょっと」
「あ、ああ」
「お止めなさい」
「わかっている。だが」
それでも怖い目でイタリアを見続ける神聖ローマでした。何かが取り憑いたかの様にイタリアを見詰め続けています。

第百四十九話　　完

２００８・４・３０

第百五十話　相互補完

第百五十話　相互補完

今日も一緒にいる日本、イタリア、ドイツの三人。日本がいつものようにイタリアとドイツを見て口を開きました。

「仲がよくて何よりですね」

「うむ。こいつは目を離すと何をするかわからないからな」

「ドイツは頼りになるからね」

そう言い合います。

「家の景色も食べ物も気候もいい」

「いざっていう時の心強い存在だと」

「相互補完というわけですね」

日本はそんな二人の関係をこう言い表しました。

「それは非常にいいことです」

「日本はそうした人いないの？」

「確かいなかったか？」

イタリアとドイツは日本に対して問います。

「何か日本のお家じゃ孤立してる孤立してるって五月蝿い人がいるけれど」

「あれは只の大嘘吐きです」

残念なことに世の中には平気で嘘を吐く人もいるということです。

「殆どの人がわかっていますから」

「だといいけれどね」

「それでいるのか？」

「認めたくはないです」

表情を消してこう二人に答えます。

「いないと思っています」

「いないと思うって」

「どういうことだ？」
二人にはこれがわかりません。
「いるってこと？」
「思うということは実際は」
「ではいません」
日本の顔が今度は暗くなりました。
「そういうことにしておきましょう」
「！？何か今の日本って」
「おかしいぞ。どうしたんだ」
二人はこの時聞こえていませんでした。遠くからマンセーーーーと大声で叫ぶ声が。日本もそれはあえて聞こえないことにしていたのです。大人の事情というやつです。

第百五十話　　完

２００８・４・３０

第百五十一話　夢が適って　☆

第百五十一話　夢が適って

イタリアをまじまじと見据える神聖ローマ。見詰めるというものではなく見据えるといった方がしっくりくるのが彼です。とにかく男塾みたいな効果音を実際に出してイタリアを見据えています。これで後ろに龍とかが出ればそれでもう完全に車田な世界です。見ればそうしたポーズにまでなっています。

それとは正反対にイタリアはガタガタ震えています。それも当然のことで神聖ローマが滅茶苦茶怖いからです。神聖ローマに自覚がないのがかなりあれなところです。

「ご、御免なさい・・・・・・」

イタリアは怖いので何もしていないのに謝ります。

「何でもするから叩かないで」

実際のところ神聖ローマはイタリアを叩いたりはしません。しかしこう思われているのです。理由は簡単でやっぱり怖いからです。

しかしイタリアが怖がったようにはなりませんでした。神聖ローマは急に踵を返してイタリアに背を向けました。そうしてそのまま自分の部屋に帰っていきます。

「えっ！？」

イタリアはそれを見て頭にクエスチョンマークです。

「あれっ、どうしたの？」

これはこれで驚くイタリア。ところが自分の部屋に帰った神聖ローマはベッドの上に転がって。枕を抱いて暫くすると。

「やったーーーーーーーーーー！！」

大喜びでゴロゴロと転がりだしました。

「あはははははははは、わーーーーーい！！」

完全に子供です。大喜びです。実はずっとずっとイタリアをどうしてもどうしても何があっても自分の家に入れたかったからです。

願いが適って本当に嬉しかったのです。
「五月蝿いですよーーーーっ！」
隣からオーストリアさんの声が聞こえてもまだ喜んでいます。とにかくイタリアが来て本当に嬉しい神聖ローマなのでした。夢が適うということがこんなにも嬉しいとは思ってもいなかったのです。

第百五十一話　　完

２００８・５・１

第百五十二話　歯噛みする人

第百五十二話　歯噛みする人

神聖ローマの家はオーストリアさんが管轄していました。けれどお家にいるのはオーストリアさんと神聖ローマ、イタリア達だけでなく他にも一杯います。スペインも上司の関係でしょっちゅうお家にやって来ます。

「今日はチョコレート持って来たで」

「チョコレートといいますと」

「ほら、あれやがな」

いつもの調子でオーストリアさんにお話しています。几帳面で優雅な感じのオーストリアさんと比べてずっとくだけた感じです。それがスペインの持ち味でもあります。

「俺今新大陸にようさん土地持ってるやろ」

「ええ」

「そっから持って来たんや。砂糖を入れて甘くしたらめっちゃいけるで」

「お砂糖をですか」

オーストリアさんはお砂糖と聞いて目を少し動かしました。お砂糖はこの時は凄く高かったのです。

「それはまた」

「あと他にもあってな」

スペインはオーストリアさんの空気を読まずに言葉を続けます。

「このトマトとか唐辛子とか煙草とか。イモもあるで」

「また随分あるのですね」

「どれでも好きなもんやるわ」

羽振りがよかったので気前もよかったのです。

「俺の家今めっちゃ調子ええからな。どんどん持って行ってや」

「はい」

こんなふうに神聖ローマとその周りは賑やかでした。ところがそれを妬む人が。

「今に見てろよ！」

フランスでした。オーストリアさんに出し抜かれてそれ以降日陰者の彼が物陰から二人を除いて歯噛みしています。彼もこのままでは終わりそうにはありません。果たしてどうなっていくのでしょうか。とりあえずフランスのしつこさは尋常ではないということは覚えておかないといけないかも知れません。あと謀略も達者だということと変態さんであるということも覚えておきましょう。

第百五十二話　　完

２００８・５・１

第百五十三話　そっと御馳走　☆

第百五十三話　　そっと御馳走

「パスタ落ちてないかなあ・・・・・・」

イタリアは今もかなりよく食べますがそれは昔から同じでした。小さいのに食いしん坊だったのでまかない食ではとても足りません。ですからいつもお腹を空かせていました。この日も何と生ゴミ捨て場まで見て食べられるものを探していました。

「駄目だよ、これはやっぱり」

生ゴミを見て諦めます。

「食べられないや、こんなの」

イタリアはこの頃からグルメでした。ですからまずそうなものは食べられないのです。結局この日もお腹を空かせたままでした。

ですが神聖ローマはそんなイタリアを離れたところから見て思うところがありました。やっぱりイタリアが大事なのです。それで自分が持っていたロールキャベツをそっと置いていきます。実はこれは神聖ローマが自分で作ったものなのです。当然自分で食べるつもりでした。彼にとっても大切な御飯だったのです。それをあえてイタリアの為に置いていったのです。

「あっ」

イタリアもそれに気付きました。

「あんなところに御飯が」

それでロールキャベツに近付いて食べます。けれどその味は。

「まずいよ、これ」

「うっ・・・・・・」

イタリアと神聖ローマではもう舌が全く違ったものになっていたのです。当然豊かなイタリアは美味しいものを食べているわけで。それに気付かなかった神聖ローマ、迂闊と言えば迂闊でした。けれどイタリアのことを大切に思うその気持ちは紛れもない真実なので

した。

第百五十三話　完

2008・5・2

第百五十四話　ソーセージとパスタ

第百五十四話　ソーセージとパスタ

今日のイタリアはドイツと一緒に御飯を作っています。日本はその横でデザートの抹茶ジェラートを作っています。日本はふとイタリアに尋ねます。

「今日のイタリア君のパスタはソーセージを入れていますね」

「そうだよ、ちょっと趣向を変えてね」

ソーセージを少し小さく切ってそれからガーリックと一緒に炒めています。もうトマトソースも用意しています。

「こうしてみているんだ」

「やっぱりドイツさんのソーセージですよね」

「結構これがいけるんだよ」

にこにことして日本に言います。

「ドイツの食べ物と俺の食べ物をミックスさせるとね」

「成程」

「確かにいい」

ドイツもイタリアのその言葉に頷きます。

「イタリアの料理の味付けは俺の料理にも合うのは確かだ」

「ドイツさんが作っておられるのは」

「ジャガイモのピザだ」

それでした。

「こいつのピザをジャガイモとチーズ、バターをメインにトッピングしている」

「あとハムもですね」

「これは俺のだ。どうだ?」

「はい、美味しそうです」

正直にドイツに対して答えます。

「では私も抹茶ジェラートの他に奮発して」
「何を作るの？」
「抹茶ケーキを作りましょう」
ジェラートはイタリア、ケーキはドイツというわけです。こうした気遣いは流石日本です。
「今から」
「じゃあ俺パスタに梅干入れてみるよ」
「俺は納豆を入れるか」
「それは止めて下さい」
日本から正式にお断りの言葉が来ました。珍しくはっきりと。
「合いませんから」
「そうなんだ」
「では止めておくか」
何処まで本気かどこまで天然なのかわからない三人でした。何はともあれ今日も仲良くやっているのでした。

第百五十四話　　完

２００８・５・２

第百五十五話　欧州の名花　☆

第百五十五話　欧州の名花

麗しい砂色の長い髪に森の如き緑の瞳、頭の花飾りも映えます。白いお肌の美少女ハンガリーさん、やっと出て来てくれました。待ちに待った女の子の登場であります。

神聖ローマのお屋敷にはイタリアと同じような境遇のハンガリーさんという女の子がいます。可哀想な境遇ですがとても明るくていいお姉さんです。オーストリアさんのお側にいつもいます。イタリアのこともお姉さんとして随分可愛がっています。今日はハンガリーさんのお部屋でお洋服を着せてもらっています。

「ほら、よく似合うわよ」

イタリアに自分の家の服を着せてにこにこしています。

「イタちゃんかわいーーーーー」

「何か違う気がするけれど」

違和感を感じながらも可愛い服なので。

「まあいいか」

納得することにしました。ハンガリーさんはそのイタリアを神聖ローマのところに連れて行きます。

「神聖ローマ見て見てーーーー」

イタリアもイタリアでにこにこしてその服を神聖ローマに見せます。

「ハンガリーさんの服着せてもらったんだーーーー」

「えっ、御前」

普段とは違うイタリアにさらいドギマギです。

「何て格好なんだ」

そう言ってふるふる震えています。イタリアはそれがどうしてかわかりません。

「えっ何？どうしたの？」

訳がわからず困っているイタリアと相変わらず震えている神聖ローマ。ハンガリーさんはそんな二人を離れて見てくすくすにこにこしているのでした。

第百五十五話　　完

２００８・５・３

第百五十六話　実はアジア系です

第百五十六話　実はアジア系です

「えっ、そうだったの！？」

「初耳あるぞ」

「まさかとは思いましたが」

米中日の太平洋トリオが驚きの声をあげました。何とハンガリーさんがアジア系だったのですう。実はアメリカもそれなりにアジアの血が入っていたりします。彼は色々なところの血が入っているのです。

「そうは見えないけれどな」

「目が緑色あるぞ」

「それにお顔も」

「もともとのルーツがそうなんですよ」

当のハンガリーさんがにこにこと笑って三人に説明しています。

「東から流れてこっちに来ましたから」

「それを考えるとフィンランドさんと一緒ですね」

日本はフィンランドの名前を出しました。

「彼もアジア系ですから」

「そうですね。けれど今じゃオーストリアさんとかなり近くなっていますけれど」

「僕にもね」

ここでひょっこりとロシア登場です。

「実は僕もアジア系の血が濃いんだよ。知ってたかな」

「・・・・・嫌になる位知ってるよ」

「知りたくないあるが」

「残念なことに」

三人の顔色が一辺に変わります。やはり仲が悪いです。それまで

ハンガリーさん中心に和やかなムードだったんがロシア中心の殺伐としたムードになっています。

「ハンガリーちゃんとも結構縁があるよね」

「・・・・・私、オーストリアさんとのお付き合いがあるので」

見ればハンガリーさんも表情を暗くさせています。ロシア、一体どういった人間関係なんでしょうか。少なくともあまりいいものではないようですが本人は至って平気なので問題はないのでした。周りにとっては大問題なのですけれど。

第百五十六話　　完

２００８・５・３

第百五十七話　その時お兄さんは

第百五十七話　その時のお兄さんは

イタリアがオーストリアさんのところで苦労しながらも楽しくやっていた頃イタリア兄は何をしていたかというと。スペインのところで厄介になっていたのです。

とはいってもあれです。全然働きません。何を教えても身に着けません。とりあえずスペインを困らせてばかりです。

「何でこんなん手に入れたんや」

こう言う人までいます。かくいうスペインもその一人です。とかく我儘で手間ばかりかかるのに使えないのです。最悪といってもいいです。勿論喧嘩は激烈に弱いです。厄介者に他なりません。

けれど何故かスペインはそんなイタリア兄を可愛がっています。シェスタを教えたりします。

「昼になったら寝るんや」

「わかった」

フェスタも。

「お祭りになったら騒ぐんや」

「もうやってるぞ」

やっぱり兄弟なのでこうしたところはイタリアそっくりです。よく考えたら弱いところもイタリアそっくりだったりします。スペインには全然なついていませんが。

ある日。偉そうにパンを食べてクッションの上でくつろいで。居候とは思えない程のでかい態度でスペインに対して尋ねていました。その尋ねることとは。

「女の子にもてるいい方法ないか？」

「女の子にか」

「ああ、そうだ」

それをスペインに対して尋ねるのです。本当に兄弟です。

「あったら教えてくれ。知ってるか？」
「そんなもん御前これしかあらへんやろが」
スペインはすぐに彼に答えてきました。
「あるのか。何だ？」
「これやこれ」
赤いマントを出してきてヒラヒラさせます。闘牛です。やはりスペイン、闘牛が大好きなのでした。それをイタリア兄にも教えますがこれは結局彼には無理だったようです。とかく厄介者でしかないイタリア兄でしたがスペインは可愛がっていたのです。お金も随分かけて。

第百五十七話　　完

２００８・５・４

第百五十八話　壮絶な厄介者

第百五十八話　壮絶な厄介者

スペインにとってイタリア兄は厄介者でした。しかし世の中には何でも上には上がいるものです。厄介者という話にしてもそれは同じでイタリア兄すらも上回るとんでもない厄介者がいたのです。それは誰かというと。

「私の家にですね」

日本が名乗り出ます。

「それはもう凄い方がおられるのですが」

「ああ、あいつか」

「あいつだな」

イギリスとフランスにはそれが誰かすぐにわかりました。

「すぐに女の子に強引に声をかけてやたらと起源の主張をしていつも傍若無人で己を振り返ることがなくて懲りなくて人の話を聞かないのです」

「あらためて聞くとすげえな」

「何かグレードが斜め上にアップしてねえか？」

「しかも戦争では」

どうかというと。

「真っ先に逃げてそのうえ唐辛子を好きなだけあげないと普段の労働すらできませんし食べる量は凄く多いですし。困っているのです」

「けれどあれだろ？御前のところの上司は」

「いいって言ってるんだろ？」

「それにも困っています」

困っていることだらけです。

「せめて台湾さん位に頑張ってくれれば」

「何で御前の上司はその台湾冷遇してんだよ」

「明らかに扱いに差があるだろ」

「わかりません、本当に」
日本にもこれはわからないのでした。
「上司は。若しかして人を見る目が」
今日も日本の家で理不尽に騒がしく響き渡るマンセーーーーの声。
日本の家もかつては物凄い厄介者を抱えていたのです。三十六年の間。

第百五十八話　　完

２００８・５・４

第百五十九話　絵描きさん　☆

第百五十九話　絵描きさん

ある日神聖ローマはイタリアに声をかけました。その手には絵の道具があります。これは随分と意外な組み合わせでありました。剣ではないのですから。

「な、なあイタリア」

「んっ、何？」

「その、つまりだな」

恥ずかしそうです。視線をイタリアから外しているところが結構可愛いです。

「絵を教えて欲しいんだが」

「えっ！？」

イタリアはそれを聞いてまず驚きでした。

「いいけれど神聖ローマ絵描くの？」

「だから教えて欲しい。御前絵が上手いからな」

「うん、それだったら」

そういうことでした。イタリアは話を聞いて早速二人で描きはじめました。描くのは兎です。二人並んでキャンバスに描いていきます。けれど神聖ローマは今一つ晴れない顔をしています。

「くそっ、中々上手く書けないな」

「そうかな。上手いよ」

イタリアから見てもそうです。はじめてにしてはかなりです。けれど彼は浮かない顔なのです。

「何処が悪いの？」

「足だ」

彼は答えます。

「足がどうもな」

「ああ、そこはね」

イタリアは神聖ローマのところに来ました。それで自分の筆で描いて教えてあげます。
「こうだよ」
急に彼に隣に来られて顔を真っ赤にさせた神聖ローマ。慌てて離れて。
「きょ、今日は帰る」
「ええっ、もう!?」
「用事ができた」
そういうことにしてそそくさと姿を消すのでした。遠い遠い、もうイタリアも覚えていない古いお話です。イタリアも神聖ローマもお互いのことすら忘れてしまっているような。そんなお話なのでした。

第百五十九話　　完

２００８・５・５

第百六十話　今の絵は

第百六十話　今の絵は

あの時、イタリアが覚えていない古い時代から自分と経った今も皆結構絵を描いています。今では皆が皆それぞれ独特の絵です。

「日本の絵ってあれだよね」

「何でしょうか」

イタリアが日本に声をかけます。ドイツもいていつものトリオです。

「何か女の子が多いよね。しかも可愛い」

「否定はしません」

日本もそれは隠しません。

「しかも猫や兎の耳や尻尾つけて。そういうのが好きなんだ」

「可愛いではないですか」

日本はイタリアに答えます。

「ですから好きなんです」

「そうだったんだ。じゃあ俺もそういうの描こうかな」

「御前はそういう絵は描かないのだな」

ドイツがそのイタリアに突っ込みを入れます。

「またどうしてだ？」

「だってあれじゃない」

イタリアはあっけらかんとして言います。

「俺の家の女の人の絵ってさ」

「ああ」

「裸が多いじゃない、昔から」

実はそうなのです。イタリアは昔から大胆な裸の絵が好きなのです。

「だからそっちばかり描いちゃってさ。それでなんだ」

「だから猫耳とかは描かれないのですね」

「裸は芸術だよ」
言い切りもします。
「フランス兄ちゃんも言ってるじゃない」
「あいつはまた問題外だ」
ドイツはフランスに対しては顔を顰めさせました。
「それに御前あいつのところに御前の絵が随分あるが」
「どうしよう、あれ」
イタリアはその話になると困った顔になります。
「兄ちゃん返してくれるかな」
「難しいでしょうね」
日本の御言葉、あのフランスが相手ではどうしようもないのでした。

第百六十話　　完

２００８・５・５

第百六十一話　不穏な空気　☆

第百六十一話　不穏な空気

最近どうにもこうにもおかしくなってきました。次第に神聖ローマの家の中が不穏な雰囲気に覆われていっていたのです。家の中のリーダー格であるオーストリアさんに対して家の中の人も外の人もつっかかってくるのです。オーストリアさんは適度に対処していますがそれでもです。

「何なのよ、あいつ等」

オーストリアさんが言われるのを覗いているハンガリーさんはイタリアを抱えて苦い顔をしています。

「最近やけにデカイ顔しちゃって」

「何でしょう」

「理由こじつけてオーストリアさん叩きたいだけじゃないの」

それはもうはっきりしています。はっきりしているのですがそれでもやっているのです。何せそれが目的なのですから。結局のところ理由はどうでもいいしどうとでもできるものなのですから。

「外の連中も変な動き見せているし」

「そうですよね、何か」

「とにかくこのままじゃ心配よ」

ハンガリーさんは不安げな顔を隠せません。イタリアもオロオロしています。二人はこれからのことに不安を感じて仕方がありません。

「皆肉親なのに、それでも」

「はい」

「その肉親同士で殺し合いはじめなきゃいいけれど」

オーストリアさんもいささかお疲れです。そして神聖ローマは一人自分の部屋の中に閉じ篭もってイライラとしていることが多くなりました。不穏な雰囲気は瞬く間に神聖ローマの家やその周りを飲

み込んでいっていたのです。何かが嫌な感じに変わろうとしていました。

第百六十一話　　完

２００８・５・６

第百六十二話　ドイツの家

第百六十二話　　ドイツの家

ドイツの家は大きく分けて二つです。西にそのドイツの家があって東にプロイセンの家があります。金髪碧眼なのはドイツと同じですが彼は結構鋭い顔をしていて何かずるそうな感じもあります。目が特に鋭くで髪型もオールバックではありません。

一時期彼はロシアのお友達で別々に暮らしていました。けれど今はまた一緒に暮らしているのです。

「結構別居していた時が長かったよな」

「そういえばそうだったな」

二人はある日そんな話をしていました。

「御前と別れたのは何時だったか」

「！？ええと」

プロイセンも覚えていないのです。

「何時だったかな」

「とにかく俺達は別々だった」

「ああ」

これだけは確かなのです。

「俺がまあバイエルンだのフランクフルトだのと纏まったり別れたり色々あったが御前は東で一人だったんだな」

「そうだったな。それで俺が強くなって」

「御前の家に入る形で一つになったな」

ドイツが言います。

「そうだったそうだった」

この時の記憶ははっきりしているのです。大体プロイセンの上司にフリードリヒという人が出る前後からです。

「それで上司があの人になって完全に何か変わったな」

「それから戦争があってまた分かれてな」

「そう思うと本当に色々あったな。しかしな」
ここでプロイセンはあることを思い出しました。
「どうした？」
「俺も御前も。何か一時期の記憶が抜けているな」
「！？そうなのか」
「オーストリアの下にいて。それから」
「そんなことがあったのか」
「何があった」
やはり二人は覚えていません。プロイセンは腕を組んで考え込みますがそれでも思い出せません。
「あの時。とても嫌なことがあった」
「何だったんだ、それは」
二人もイタリアも覚えていないのです。その時の遠い遠い記憶は。
もう消えてしまっていました。

第百六十二話　完

２００８・５・６

第百六十三話　ロンリー＝ノーブル　☆

第百六十三話　　ロンリー＝ノーブル

ある日イタリアが起きて部屋から出ると家が静まり返っていました。とても広くて豪奢なお家にいるのはイタリアとハンガリーさん、それにオーストリアさんだけでした。オーストリアさんは呆然として自分の後ろに立っている二人に対して背を向けたまま声をかけてきました。

「丁度よいところに来られましたね」

「は、はあ」

ハンガリーさんは呆然としたままオーストリアさんに対して答えます。

「あの、オーストリアさん」

イタリアも戸惑いながらオーストリアさんに声をかけます。

「皆は」

「イタリア」

静かで優しい言葉でした。けれどイタリアの方を振り向きはしません。

「外に行って水を汲んで来なさい」

「えっ」

「早く！」

言葉が強いものになりました。それでもいつもの強さではありません。無理をして強くさせている、そんな感じでした。ハンガリーさんも戸惑いながらオーストリアさんに声をかけます。

「あの、オーストリアさん一体何が」

「何、簡単なことですよ」

応えて二人に身体を向けてきました。これまで見せたことのないとても寂しげな顔です。その顔で二人に対して言うのです。

「私は一人になってしまったようです」

「一人にって。それじゃあ皆は」
「・・・・・そういうことです」
何かが決定的に壊れてしまったのです。オーストリアさんにとってもイタリアにとっても神聖ローマにとっても。もう二度と戻らない何かが壊れてしまったのでした。

第百六十三話　　完

２００８・５・７

第百六十四話　オーストリアさんのお友達

第百六十四話　　オーストリアさんのお友達

かつては一人になってしまったオーストリアさん。けれど今は孤独ではありません。オーストリアさんの周りには色々な人がいます。今でもイタリアがいますしハンガリーさんもいます。それに同居しているドイツもいます。

「何で俺は同居しているんだ」

「文句を言うとゲシュタポがマジで来るから言うなよ」

ドイツと同居しているということはプロイセンもまたオーストリアさんと同居しているのです。なおプロイセンとオーストリアさんの仲は滅茶苦茶悪いです。けれど文句を言うととても怖い上司の直属の部下の丸眼鏡にチョビ髭の人が目を光らせるのでとても言えないのです。黒い服のその人は冗談抜きに怖い人なのです。その下には金髪で男前ですがとても冷酷で残忍な人もいますし。

しかもオーストリアさんの音楽に憧れてかあの人まで。

「オーストリアさんの音楽ってとてもいいよね」

ロシアまでオーストリアさんが好きなのです。かつては長い間親しい御友達同士でした。二人で組んでフランスと戦ったこともある間柄です。といってもロシアはよくフランスと御友達になるので関係はかなり複雑なのですが。

「音楽っていいよね。心が洗われるよ」

「げっ、ロシアさんまで」

ロシアが大嫌いなハンガリーはオーストリアさんのお家にロシアが来ると無意識のうちに身構えてしまいます。

「何でこんな人まで来るのよ」

「だって僕音楽大好きだから」

こうしたことは大好きなのです。他にもバレエや文学やポスター

も大好きなのがロシアです。意外なことに繊細な一面もあるのです。
「だからいいじゃない」
「そうですね、本当に」
「けれど何かロシアさんのオペラって血生臭いお話が」
「ラトビア、そこから先は言ったら駄目だよ」
リトアニア、ラトビア、エストニアは今日もそのロシアさんのお供でとぼとぼとついて来ています。とにかく御友達の多いオーストリアさんであります。黙っていても人が集まる人はいるものです。

第百六十四話　　完

２００８・５・７

第百六十五話　ハンガリーさんの予感　☆

予感　　第百六十五話　　ハンガリーさんの

一人になってしまったオーストリアさん。けれどすぐに助っ人がやって来ました。

「御前の状況は聞いたで」

スペインです。彼は鎧兜に身を包んだ精鋭達を引き連れてオーストリアさんの前にいます。かなり頼りになる姿です。

「何ややばいことになっとるらしいけど我がスペインは全力で御前に加勢するで！」

「有り難うございます、おかげで助かります」

「同じ信仰やろ。難しいこと言うな」

オーストリアさんはカトリック、スペインも同じカトリックです。それに対して家を出て行った人達は最近出て来たプロテスタントです。宗教の理由もそこにはあるのです。けれどスペインの加勢はそれだけが理由ではありませんでした。

「上司も言うてるしな」

「そうですか」

この時のスペインの上司はオーストリアさんの上司の人と同じ家の人なのです。かつては完全に同じ人でありました。

「しかしまあ何やな」

ここでスペインは緊張を解いて苦笑いを浮かべて言います。

「御前ってホンマ敵多いな」

「お黙りなさいお馬鹿さん」

オーストリアさんも負けてはいません。

「貴方と同じ敵ですよ」

「それもそうか。まあ俺考えてるんやけれどよ」

「はい」

「イタちゃんの方からそっちに入ってくから」
「イタリアからですか」
「ああ、そや」
こうオーストリアさんに話しています。それを聞いたハンガリーさんの顔が見る見るうちに蒼ざめています。
「オーストリアさん、まさか」
「そっちの方があいつ攻めるのに都合がええやろ」
「そうですね」
「貴方が今度戦う相手って・・・・・・」
二人の話を聞いて不安な顔になります。どうしようもない位に陰惨な、しかもそれと共にとても長い長い戦いがはじまろうとしていました。

第百六十五話　　完

２００８・５・８

第百六十六話　漁夫の利は続かない

第百六十六話　漁夫の利は続かない

本当に仲が悪いのか甚だ疑問ですがこの日もイギリスとフランスは一緒にいます。生徒会の話をしているということですが二人してお酒を飲んでいるのでそれは建前のようです。何か昔の話をしています。

「で、俺はあの時弱っていたオーストリアとスペインに止めをさしたわけだ」

「御前いつもそればかりじゃねえか？」

「いいじゃねえか。勝てばいいんだよ」

何気に案外敗北が続いているフランスです。この前完全に格下と思われていた日本、続いてベトナムに惨敗しています。暗黒時代の虎のチームより勝率が低いのは内緒です。

「で、気付いたら」

「その時に手に入れたもの全部なくなったんだよな」

「御前が悪い」

イギリスに責任転嫁です。

「あの時御前がオランダとオーストリアに手を貸すからだろうが」

「御前のあの時の上司がスペインに変な色気出すからだろ」

「・・・・・あの上司には正直参った」

凄い女好きでグルメで建築好きでファッショナブルで芝居好きで贅沢三昧の太陽王だったのです。この人は戦争も大好きでフランスもその時はしょっちゅう戦争していたのです。

「おかげであれから暫く俺は財布は空で身体も疲れてよ」

「それで前のオーストリアやスペインに止めをさしたっていう戦争で手に入れたものも消えたわけだよな」

「負けるのは嫌いだ」

負けっぱなしだからこそ説得力のある言葉だった。

「あとあんな滅茶苦茶な上司も」
「御前のとこの上司も大概な人が多いからな」
「・・・・・ああ」
ドイツとは違った意味で中々個性的な上司に恵まれているフランスでした。それで手に入れたものを失うことも多かったのです。ほぼ自業自得ですが。

第百六十六話　　完

２００８・５・８

第百六十七話　一緒になりたいんだ　☆

第百六十七話　一緒になりたいんだ

「お・・・・・おいイタリア」

不穏な空気に支配されている家の中。そんなある日のことです。

神聖ローマは庭のお掃除をしているイタリアに声をかけてきました。

「あっ、神聖ローマ」

彼が怖いイタリアは声をかけられて早速怖がっています。

「ちゃ・・・・・ちゃんとお掃除してるよ。だから大丈夫だよ」

けれど神聖ローマは普段と違いました。とても思い詰めた顔で。

じっとイタリアを見詰めているのでした。そして言います。

「イタリア」

まずは彼に手を差し伸べてきました。

「本当に俺とローマ帝国にならないか？」

「えっ・・・・・・」

こう告白してきたのです。

「そして二人で世界で一番強い国を作ろう、俺は御前と二人で誰にも負けない素晴らしい国を作りたいんだ、あのお爺さんのローマみたいにな」

「・・・・・ううん、いい」

けれどイタリアは。俯いて首を横に振るのでした。神聖ローマの申し出を断ってしまったのです。神聖ローマはイタリアのその返事を見て言います。

「何でだ！御前だってこんなところで一生過ごしたくないだろ！？」

そうイタリアに問います。半分怒りながら。

「御前だってあの強かったローマ帝国に戻りたい筈だ、フランスだのスペインだのにいじめられるのはもうたくさんだろ！？トルコに狙われたくないだろ！？」

「だって・・・・・」

「だって・・・・・何だ!?」
「お爺ちゃんは」
イタリアは泣き出しました。そのうえで言うのです。イタリア自身がいつも思っていた神聖ｒローマへの本当の気持ちを。それはとても痛々しいまでの想いでした。

第百六十七話　　完

２００８・５・９

第百六十八話　そのままでいて欲しい　☆

第百六十八話　　そのままでいて欲しい

イタリアは泣きながら、けれど真剣に神聖ローマに対して言います。

「だってお爺ちゃんは大きくなり過ぎて滅んだんだよ」

もうローマ帝国はいないのです。遠い彼方に消えてしまったのです。イタリアはそのことを思い出してとても悲しい気持ちになって泣いたのです。

「お爺ちゃんの身体」

彼はさらに言います。神聖ローマに。

「あちこち傷だらけで凄い辛そうだったよ」

多くの戦いで傷を受けてしまったのです。ローマ帝国は栄光の分だけ深い傷をあちこちに受けてしまっていました。イタリアはそのことを知っているのです。

「あんなふうになった神聖ローマなんか見るの嫌だよ」

「イタリア・・・・・・」

「だから神聖ローマ」

彼の手を取って言います。もう既に小さな傷が幾つかあります。

「ローマ帝国になったら駄目だよ、だから御願い」

そうしてまた言います。

「このままの神聖ローマでいて、ずっと」

「イタリア・・・・・・」

イタリアから手を離しました。戸惑う顔で。

それから彼の顔をじっと見ます。けれど何て言えばいいのかわかりません。戸惑って、とても悲しい顔を見て最後には。

踵を返して走り去ります。後に泣いているイタリアを残して。二人は白い花びらが舞う中を別れました。遠い遠い昔のお話です。

第百六十八話　完

2008・5・9

第百六十九話　家を出る前に　☆

第百六十九話　家を出る前に

皆が神聖ローマのお家から出て行きます。一人、また一人と。その目に暗い決意を抱いているのは皆同じです。いよいよ戦いがはじまろうとしています。その中には神聖ローマもいます。皆が彼にも声をかけます。

「神聖ローマ、準備が済んだらすぐに出発するからな」

「ああ」

神聖ローマも出る準備をしています。けれどその時にも懐に何か持っています。

「あとこれだけだ。これを運んだら」

「何だよその絵は」

皆彼が持っているその絵を見て言います。

「絵なんかかさばるし置いてきゃいいのに」

「いや、それでもな」

彼はその絵をどうしても持って行くのでした。見ればその絵は。

「何それ好きな子？」

「オーストリアの召使いだったあいつじゃねえか」

イタリアの絵でした。絵の中でにこりと笑っています。

「そんな絵置いていってもいいだろ」

「それでもな」

彼は手放そうとしません。どうしてもそれを持って行きます。

絵を見ながら彼は思い出していました。これまでのイタリアとの思い出を。やっぱり離れたくありません。それでも家を出なければなりません。これでお別れだと思うと心から悲しくなったのです。けれどその時でした。

イタリアがいました。神聖ローマの目の前に。彼を見た神聖ローマの目が動かなくなりました。その心も。

第百六十九話　完

2008・5・10

第百七十話　今までのことは　☆

第百七十話　今までのことは

「神聖ローマここにいたんだ」
「えっ、御前どうして」
自分の前に現われかけてくるイタリアを見て驚くことしきりです。
あたふたとしています。比較的冷静な彼にしては珍しい様子でした。
「おはよーーーー」
「何でここがわかったんだ!?」
「何となくだよ」
「何となくでわかったのか。まあいい」
釈然としないながらもイタリアに対して言います。
「止まれ!」
「!?」
「それ以上近付くな!」
こうイタリアに言うのでした。
「そうだ、その辺りでいてくれ。いいな」
「うん」
とりあえず自分の前で止めます。そのうえでイタリアに対して言うのでした。
「何で御前は追いかけると逃げる癖に俺が逃げるとおっかけて」
全身に汗をかいて顔を真っ赤にさせながらの言葉でした。
「折角合わないように早起きしたっていうのに」
「神聖ローマ?」
「・・・・・あのな、イタリア」
無理矢理自分を落ち着かせて次の言葉を出しました。
「御前に一つ言わなきゃならないことがあるんだ」
「言わなきゃいけないこと?」
「今まで御免」

視線を逸らして少し俯きながら彼に謝るのでした。彼にしては精一杯の、誠意を込めた謝罪です。

「もうさよならだから安心しろ」

お別れの言葉でした。もう神聖ローマの他の皆は出発しています。本当にイタリアと神聖ローマにとってお別れの時になっていました。

第百七十話　　完

２００８・５・１０

第百七十一話　出発の時　☆

第百七十一話　出発の時

神聖ローマに言われても。イタリアは何が何かわかりませんでした。彼はその時の神聖ローマのこともお家のこともあまりよくはわかっていなかったのです。けれどそれでも戸惑いながらも彼に尋ねます。

「それって・・・・・・」

いつもよりもずっと言葉が出ません。それでも言います。

「どういうことなの？一体」

「・・・・・・そのままの意味だ」

神聖ローマは悲しい顔で言います。

「・・・・・・もう俺はこのまま。ずっと御前と」

「神聖ローマ」

周りの人達がその神聖ローマに声をかけます。

「もう時間だ。馬車も出発するぞ」

「ああ、わかってる」

皆の言葉に頷きます。そして遂にイタリアに背を向けて。

「じゃあな。元気でやれよ」

「まっ・・・・・・」

やっぱり中々声が出ません。けれどイタリアは何とか声を出します。

「本当に行っちゃうの？・・・・・・やだよ」

言葉を出すとそれと一緒に神聖ローマとの思い出も蘇って。辛くて困った筈なのに何故か今ではいい思い出です。

「そんなの。これで終わりなんて」

けれどどうしていいかわかりません。おろおろするだけです。それでも何とか、いえイタリア自身の口から自然に出たのでした。その言葉が。

「神聖ローマァ！」
彼を最後に呼びます。振り返った神聖ローマも少し泣いていました。堪えてはいましたが。
「イタリア・・・・・・」
イタリアの方を向き直ると二人はあらためて見詰め合いました。
まるでそれが運命で最初からそうなるものなのだと決まっていたかのように。二人見詰め合うのでした。

第百七十一話　　完

２００８・５・１２

第百七十二話　別れじゃない

「また会おうよ！」
こう彼に叫ぶのでした。
「僕達、また会おうよ」
「会おうよって。けれど」
神聖ローマは立ち止まって。唇を噛み締めて言うのでした。
「もう俺は。俺達は」
「生きていれば絶対会えるから！」
それでもイタリアは言い返します。
「生きていれば。何時かまた」
「・・・・・会えるのか」
「僕は何があっても生き残るよ」
泣きながら神聖ローマに対して言います。
「それこそ何があっても。弱いけれど」
「生き残るんだな」
「うん」
こくりと頷いて神聖ローマの言葉に頷きます。
「だから神聖ローマも生きていて。それで何時か会おうよ」
「・・・・・そうだな」
神聖ローマもまた。イタリアの言葉にこくりと頷くのでした。
「生きていれば。絶対にまた何時か会えるよな」
「そうだよ、絶対に」
「・・・・・わかった」
またイタリアの言葉に頷きます。
「それじゃあ。俺達はまた会おう」
「うん、また何時か絶対にね」
「けれど。暫く会えなくなる」

これはもうどうしようもありませんでした。けれどその中で神聖ローマは。イタリアに対して言うのでした。
「今だから言うな」
「何？」
「俺は。俺達は」
最後の告白でした。男と男の。今まで黙っていて心の中にだけ隠していた告白を今するのでした。長い長い、遠い昔のお話です。誰も覚えていない遥か彼方のお話です。

第百七十二話　　完

２００８・５・１２

第百七十三話　告白　☆

第百七十三話　　告白

「ずっと友達だ。いや、ずっとそうなりたかったんだ」
「神聖ローマ・・・・・・」
彼は遂に本音を言います。自分が今まで思っていたことを。
「ずっと前から、俺が生まれた時から御前と友達になりたかった。一緒にいたかったんだ！」
「そうだったの・・・・・・」
「けれど暫くお別れだ。じゃあな！」
身を翻します。皆そんな神聖ローマを温かい目で見ています。今ばかりは。
「イタリア、この戦いが終わったら絶対会いに行くからな！」
「うん、待ってる、待ってるよ」
イタリアもそれに応えて言います。二人共泣き笑いの顔になって。
「お菓子一杯作って待ってるからね！」
「ああ、楽しみにしているぞ！」
「あと怪我とか絶対しないでね」
イタリアは立ち去ろうとする神聖ローマに対してまた声をかけます。
「病気も。だから絶対に会おうね！」
「ああ！」
「絶対だよ絶対！」
「当然だ！何時までも何時までも俺達は」
神聖ローマも言います。最後に手を振って。イタリアの方を振り向いて彼をずっと忘れないようにじっと見て言います。イタリアもまた同じように神聖ローマを見て言葉を返すのでした。本当に心からの友人達がそうであるように。
「何百年経っても俺達はずっと友達だ！世界で一番の友達だ！」

「うん！」
この後神聖ローマは長い長い戦いに身を投じました。遠い遥か彼方になってしまった時代のお話です。

第百七十三話　完

２００８・５・１３

第百七十四話　今はどうかというと

「何かさ、俺とドイツってさ」
「何だ、今度は」
また一緒にいる二人。イタリアがいつものようにドイツに声をかけてきてドイツがそれに応えます。
「すっごく大事なこと忘れてるような気がするんだけれど」
「そういえばそうだな」
イタリアに言われてドイツも気付きます。
「何かな。重要なことをな」
「何かな？」
イタリアにはそれが何なのかさっぱりわかりません。
「何だったかな、それ」
「俺にもわからない。だが」
ドイツも言います。
「とても大事なことだったな。俺と御前との約束でな」
「約束ってしてたっけ」
「今週のことではないでしょうか」
日本が二人に対して言ってきました。
「今週は三人でピクニックの予定ですよ」
「あっ、そうだったね」
「そういえばそうだったな」
二人は日本の言葉を聞いてそれだったかとそれぞれ頷きます。やはりここでもあまり確かな顔にはなっていません。イタリアはともかくとしてあのドイツですらそうです。
「ピクニックかあ」
「さて、何を持って行くか」
「私はお握りです」

こうした時の日本の定番です。
「ドイツさんはソーセージですか」
「そのつもりだ」
「じゃあ俺はパスタ、お水たっぷり持って行くよ。お菓子もね」
「お菓子もか。まあいいだろう」
何故か今回はそれで大目に見るドイツでした。今の二人はこんな感じです。けれど昔のことは覚えていません。遠い遠いにあった悲しい別れ。今の二人はいつも一緒にいますけれど。

第百七十四話　　完

２００８・５・１３

第百七十五話　サンタさんとバイキングさん

第百七十五話　　サンタさんとバイキングさん

フィンランドは昔デンマークの家にいました。けれどあまりいい関係ではなく結構苦労していました。フィンランドはまだましでしたが一緒にいた金髪碧眼の大柄で何処か茫洋とした眼鏡の青年スウェーデンがどうにもこうにも。やたらとデンマークに反抗的だったのです。

「俺、デンマークの下にはいない」

いつもこう言ってデンマークと喧嘩です。それでしょっちゅう喧嘩ばかりしていて最後にはブチ切れてデンマークの家で大暴れです。またその時の暴れ方が壮絶でした。

「俺の家ではこうやる」

こんなことを言って斧だの巨大なバイキングソードを出して縦横無尽に暴れまくったのです。実はスウェーデンは昔海賊でそれこそとんでもない暴れん坊だったのです。無口なのですがそのやることはワイルドなのです。

「あいつが来たら食い物なくなるんだよ！」

イギリスの言葉です。しかも途方もない大食漢で行く先々で食べ尽くすのです。暴れるにはそれに見合う体力が必要だということでしょう。

それで散々暴れて家を出ます。ところが滅茶苦茶になった家の中で呆然としていたフィンランド。とりあえずとんでもないことに気付きました。

「あれ、そういえば僕」

とりあえずデンマークの家が滅茶苦茶になったので自由です。ところが彼の周りにはあのロシアやポーランド、リトアニアコンビといった手強い面々が多いのです。ロシアなんか手強さも半端ではないですがやることの恐ろしさが。

そんなのが前にいて一人でやっていけるかどうか。フィンランドは考えてみるととんでもない現実も前にいるのに気付きました。それに気付いた彼が採った選択とは。

「・・・・・・一緒に行かせて下さい」

「・・・・・・ん」

こうしてスウェーデンと一緒に家出することになったのでした。

彼にとっては苦難のはじまりでもありました。

「大丈夫なんでしょうか」

第百七十五話　　完

２００８・５・１４

第百七十六話　フィンランドの好み

第百七十六話　フィンランドの好み

フィンランドは日本が好きです。憧れていると言ってもいい程です。それは何故かというと。

「いや、本当に凄いですよ」

日本のことになると顔を輝かせて言います。

「あのロシアさんをやっつけるなんて」

「そうでしょうか」

「それが凄いんですよ」

あまり自覚していないような日本本人に対しても主張します。

「だってあのロシアさんですよ。世紀末に力で君臨し全てを力で支配する」

ロシアの場合案外間違っているとも言えないのが恐ろしいところです。流石と言うべきか何と言うべきか。やっぱりロシアはフィンランドも恐れているのです。

「そのロシアさんに勝ったんですから。凄いですよ」

「そういえば同じことをトルコさんにも言われます」

「当然ですっ」

自分のことではないのですが誇らしげな顔で日本に対してまた言います。

「それだけ凄いんですよ。僕だって結局負けたんですから」

「ですが善戦されていましたし私は」

「私は？」

「『勝ったことにされている』とある作家の方に言われました。私の国の」

「ああ、あのガイエスブルグ」

いきなりフィンランドの言葉が変わりました。

「何もわかっていないだけですから気にしなくていいですよ」

「そうですか」
「このZだって」
何故かここで日本の漫画雑誌を出してきて日本に説明します。
「ガイエスブルグのは全然面白くないですよ。面白いのは光の巨人や仮面のサイボーグ達のお話ですしね」
「その二つは確かにそうですね」
「世の中わからない人はいますよ」
フィンランドは日本を励ますようにしてまた声をかけます。
「けれどわかる人はわかりますから。僕みたいに」
「有り難うございます」
最後に日本ににこりと微笑みます。何気にお友達や慕ってくれる人が多いのかも知れません。今日もガイエスブルグは嫌われているだの友達がいないだの言っていますが自分への批判は耳に届いていません。滑稽なことに。

第百七十六話　　完

２００８・５・１４

第百七十七話　怖いんですけれど　☆

第百七十七話　怖いんですけれど

フィンランドがスウェーデンと一緒に家出したその夜。二人はまずは野宿です。大きな白い満月が見える寂しい道の横で寝袋を出して寝ようとしています。その時にフィンランドがスウェーデンに対して話しています。

「デンマークさんのお家飛び出したのはいいですけれど」

まずはそこから話しています。

「これから僕達どうなるんでしょうね」

「これからか」

「はい。自由になれたのはいいですけれど」

それはいいことですが。それでも不安が強いのでした。不安の方がずっとですけれど。

「周りは強国だらけで何か怖いじゃないですか。これから不安で」

「！！」

「あっ！」

今の不安という言葉でいきなりスウェーデンが顔を一変させたので慌てて言葉を引っ込めます。

「べ、別にスウェーデンさんと一緒なのが不安じゃないですよ」

「そうか」

「まあ悩んでても仕方ないですし今日はもう寝ましょう」

「おめえがそうしてえんならな」

「そうですか。それじゃあ」

「ん・・・・・・」

「お休みなさい」

こうして二人は寝転がります。フィンランドは寝転がりながらもあれこれ考えています。

（デンマークさんんい耐えかねて勢いてこの人と一緒に出て来ちゃ

ったけれど色々不安だなあ）
　不安が尽きないのでした。
（けれど悪い人じゃなさそうだし）
　ところがこう思っていると。何と目の前に眼鏡を外してじいいーーーーーーーーっとフィンランドを見て寝ているスウェーデンがいます。それで。
「おひゃあああああああああああ！！」
　とんでもない叫び声をあげるフィンランドでした。流石にこれは怖いです。

第百七十七話　　完

２００８・５・１５

第百七十八話　最終兵器

「スウェーデンの料理！？」
「何かあったかな」
「知りませんよね」
枢軸トリオはスウェーデン料理と聞いても今一つわからず首を傾げていました。
「バイキングなら知っているが」
「あれ料理じゃないよね」
「やはり。申し訳ないですがこれといって」
「ああ、知らなくてもいいですよ」
そんな三人にフィンランドが言います。
「というか知らない方が幸せです」
「えっ、そりゃ違うよ」
顔を背け気味にして語るフィンランドにイタリアが言います。
「やっぱり料理は一つでも知らないとそれだけで不幸だよ」
「そうだな。スウェーデンのことも知っておきたい」
「その通りです。ですからフィンランドさん」
ドイツと日本も言います。三人にしてみれば一体どんな食べ物が興味津々なのです。それで少ししつこく頼んでいます。
「是非。その料理を御願いします」
「はあ。そうですか」
三人の言葉を聞いてがくりと肩を落としてからスウェーデンを呼びます。すると彼は一つ変に膨らんだ缶詰を持って来ました。そのうえで三人に対して告げます。
「料理ではないがシュールストレミングだ」
「シュールストレミング！？」
「一体何だそれは」

「初耳ですね」
イタリアもドイツも日本もその缶詰が何かわかりません。それであえて尋ねます。
「魚の缶詰だ。三人共食べるんだな」
「勿論だよ」
「御馳走してくれるんだな」
「では喜んで」
「わかった」
スウェーデンは無愛想に頷きます。しかしその横では顔を真っ青にしてひきつらせたフィンランドがいます。彼は少しずつ部屋から逃げていっていました。
「じゃあ僕はこれで」
「あれ、フィンランド何処に行くの？」
「急用を思い立ちましたので」
缶詰に刃が立てられたその瞬間にフィンランドは慌てて部屋から出て扉を閉めます。部屋で起こる惨劇から自分は逃げて。とりあえず以後スウェーデン料理のことは決して口に出さなくなってしまった三人でした。シュールストレミング、その名は最早学園では伝説の最終兵器となったしまっています。スウェーデンが誇る。

第百七十八話　完

２００８・５・１５

第百七十九話　寒くなくなったけれど　☆

第百七十九話　寒くなくなったけれど

スウェーデンの顔を間近に見て固まったフィンランド。何とかこの場を取り繕うとします。愛想笑いをしてから彼に言います。

「あはははははは」

まずはこれからでした。そのうえで。

「月が奇麗ですね」

「そっが」

けれどスウェーデンはこれだけです。全然何も動じた様子はありません。

「それにちょっと寒いですよね」

「んだべが」

(怖えええええええええええ)

いい加減心の中で叫びだしました。

(あーーーやっぱり怖いよこの人。僕この人と暮らすの普通に無理だよ)

心の中ではこう思っているのですが言えません。かわりにやっぱりこの場を取り繕う言葉を述べます。

「僕の勘違いからも知れませんけれどね」

「んだか」

(どうしよう。僕この人の属国になるの止めようかなあ)

そんなことを考えだすフィンランドでした。その間にスウェーデンが近寄ってきていることにも気付きません。まだあれこれと考えています。

(明日の朝一で逃げれば)

あれこれ考えていると急に。スウェーデンが抱きついてきました。

「え・・・・・・」

「温いか?」

（怖い！）

心の中での言葉です。けれどこうも思うようにしました。

（悪い人じゃない。ちょっと会話が通じないだけで）

自分で自分に言い聞かせます。

（うん、きっとそうだ、そうだよね）

そうは思っても怖いものは怖いです。フィンランドも何かと大変なのでした。

第百七十九話　　完

２００８・５・１６

第百八十話　決意を思い出して

「御前も何かと大変だったんだな」
「大変っていいますかね」
フィンランドは今日はドイツと一緒にいます。そのうえであの時のことを思い出して話をしているのです。
「怖かったですね、やっぱり」
「そうか」
「スーさんの話しませんし」
「確かに無口だな」
「だから余計に怖いんですよ」
こうドイツに語ります。
「イタリアさんみたいにお喋りじゃないですしね」
「あいつはまた特別だろう？」
ドイツはイタリアに対してはこう述べます。
「あれは」
「まあそうですけれどね。日本さんみたいに穏やかなオーラがあるわけじゃないですし」
「全然違うな」
「そうなんですよ。けれど」
それでも言うのでした。
「僕。お隣がロシアさんなんで」
「・・・・・あいつか」
どれだけ怖いかはもう言うまでもありません。
「それで。結果としてまあそういうことで」
「あいつしかいなかったんだな」
「けれどあれですよ」
ここでフィンランドの表情が明るくなりました。

「慣れてみると無口ですけれど親切な人ですしね」
「そう言うのは御前だけだと思うがな」
「けれど。リトアニア君はともかくロシアさんやポーランド君なんかは」
「あの二人はまた別格だ」
ドイツも顔を俯けさせて目を閉じて言います。
「周りにいい国がないと苦労するな」
「そうなんですよね、本当に」
こうしたところは同じの二人でした。あまり嬉しくはないことです。

第百八十話　　完

２００８・５・１６

第百八十一話　何だこのプレッシャーは　☆

第百八十一話　何だこのプレッシャーは

二人でとりあえず歩き続けるスウェーデンとフィンランド。やがて二人は一軒の小さな家に辿り着きました。質素ですが頑丈な造りで何となくささやかなお家です。

「あっ、この家って」

「どした？」

「ひょっとしたら」

フィンランドはひょっとしたらと思って扉をノックしました。すると暫くして出て来たのは。

「はい。どちら様ですか？」

「あっ、やっぱり！」

出て来たのはエストニアでした。ここはエストニアのお家だったのです。フィンランドはエストニアの姿を見て大喜びです。

「エストニア！会いたかった！」

まずは彼に抱きつきます。

「会いたかったよーーーーーーっ！」

「わっ、フィンランド！」

フィンランドに抱きつかれたエストニアはまずは驚きます。

「どうしたの、デンマークさんのところじゃなかったの！？」

「まあ色々あってそれで」

「そうなんだ。って・・・・・んっ！？」

ここでエストニアは後ろにもう一人いることに気付きました。それは。

「うわあああああ、怖あああああああああああああああっ！！」

威圧感たっぷりのスウェーデンを見て思わず声をあげます。失言癖はラトビアと同じみたいです。

「あっ！？」
「ちょっとエストニア！」
聞こえなかったスウェーデンをよそにフィンランドが叫びます。
「何で昨日一日僕が我慢していたことをあっさりといっちゃうの！」
「け、けど！」
「スーさん怒っちゃったじゃない！」
怒っていません。あしからず。そう見えるだけです。
「スーさん怒っちゃったじゃない！」
「御免、けれど」
もう一度スウェーデンを見ます。そのうえでまた。
「でもやっぱり怖いよ！」
「怖い怖いって言わないの！」
早速大騒動です。自分が何をしなくても嵐を巻き起こすスウェーデンでした。これもある意味才能でしょうか。

第百八十一話　完

２００８・５・１７

第百八十二話　これも才能です

第百八十二話　これも才能です

バルト三国。ラトビアには一つ彼自身にとって困った癖があります。それは何かというと。

「そうですよね、ロシアさんってガサツなところありますから」

「あっ・・・・・・」

リトアニアが顔を青くさせてしまった時にはもう遅く。ロシアの無表情でのお仕置きフルコースを早速受けます。

「うぎゃあああああああああっ！！」

「ラトビアアアアアアアーーーーーーーッ！」

エストニアの絶叫も響き渡ります。今日もロシアのお仕置きを受けるのです。今日も、というところが実にロシアチックでいい感じです。

「ううん、何時までこんな生活が・・・・・・」

「だからラトビアは余計なことを言うからそうなるんだよ」

リトアニアが泣いているラトビアに対して言います。

「せめて黙っていないと」

「けれど言葉が自然に」

「出るの？」

「何処をどうすればいいのか」

「口にチャックしたらどうかな」

エストニアがこうアドバイスしてきます。

「そうしたら多分」

「黙っていろってことですね」

「・・・・・・それが一番だよ」

「そうだね、やっぱり」

リトアニアとエストニアの暗い顔。結局それしかないのでした。

それで黙っています。けれど今度は間違えてロシアの食器を下げ

る時にソースをロシアの手にこぼしてしまってそれでやっぱり。
「うぎゃあああああああああああっ！！」
「だから不注意なんだって！」
「ラトビアアアアアアアアーーーーーーーッ！！」
どうやらただ単にドジなようです。けれどそのドジで己の命の危険を作ってしまうラトビア、彼に明るい未来はあるのでしょうか。
とりあえずロシアと一緒にいない未来は。

第百八十二話　　完

２００８・５・１７

第百八十三話　心配になる　☆

第百八十三話　心配になる

「失礼なことを言って申し訳ありませんでした」
とりあえず仕切りなおしです。エストニアの謝罪から再開となります。
「僕はエストニアです」
「ん・・・・・・」
スウェーデンは茫洋と返事をします。
「俺はスウェーデンだ」
「スウェーデンさんですね」
「そうだ。そしてこれが」
フィンランドの方を向いて一言。
「女房だ」
「な、何言ってるんですか！」
フィンランドはすぐに言葉を返します。
「嫌なジョークはよして下さいよ！」
彼はこの時はそう思っていました。エストニアは今のスウェーデンの発言で固まっています。
「僕男ですし」
「ジョーク？」
ところがスウェーデンは。無表情にこう問い返してきたのです。
やっぱり真顔です。
「えええええええええっ！？」
その言葉と真顔を見て驚くフィンランド。
「ちょっと、マジなんですか！？よして下さいよおーーーーーーっ！」
「フィンランド・・・・・・」
エストニアも真顔です。焦るフィンランドと本気のスウェーデン

を見て心の中で呟きます。
（僕は君のことからがとても心配です）
そう心の中で思っていても動けないものがありました。迂闊に動いたらどうなるか保障はできない、そんなロシアと一緒にいることから身に着けた生きる知恵です。あまり覚えたくも身に着けたくもなかった知恵ですが。それでも身に着けてしまっているエストニアなのでした。

第百八十三話　　完

２００８・５・１８

第百八十四話　三人の運勢

第百八十四話　三人の運勢

バルト三国で運勢を占いにいきました。その結果は。

「うわっ、やっぱり」

リトアニアが引いたのは大凶でした。彼はそれを見て思わず声をあげました。

「わかっていたけれどここで出るなんて」

「やっぱりそれが出たんだね」

「全く、ポーランドといいロシアさんといい」

気苦労が耐えません。とりあえず日本の隣にワープできればいいのになんて夢を見ちゃっています。それはそれで色々とありそうですけれど。

「俺はやっぱり大凶なんだな」

「それで僕は」

エストニアは凶でした。彼はそれを見て溜息をつくことしきりです。

「凶か」

「何かこのおみくじおかしいんじゃないの？」

リトアニアはふとこう思ったりもします。

「何でこんなに凶が多いんだろ」

「それでも出てしまったものは戻せないよ」

「そうだね。やっぱりエストニアも」

「・・・・・うん」

運がないのでした。けれどリトアニアよりはましでした。

それで最後の一人は。

「な、何なんですかこれ！」

出て来たのは何と。無限凶でした。有り得ません。

「こんなのあるんですか！」

「ラトビア、これって」
「はじめて見たけれど」
「はじめてとかどうこういう前に僕が無限凶なんて！」
「・・・・・・けれど納得できるよね」
「・・・・・・はい」
リトアニアの言葉に頷きます。
「認めたくないですけれど」
「何で僕達はこんな役回りなんだろう」
最後にエストニアの言葉が空しく響きます。なおこの日の夜ラトビアはまたロシアに余計なことを言って無表情のロシアから折檻を受けるのでした。やっぱり無限凶でした。

第百八十四話　　完

２００８・５・１８

第百八十五話　いきなり言うか　☆

第百八十五話　いきなり言うか

何はともあれエストニアとの再会を喜ぶフィンランド。そこにラトビアもやって来ていい雰囲気になります。スウェーデンはその光景を黙って見ているだけでしたがここでふと口を開いて言うのでした。

「おいそこのおめえ」

「僕ですか？」

「そだ」

エストニアに対して答えます。

「んでそこのちっけえの」

「ぼ、僕！？」

今度はラトビアに対しても。急に声をかけてきたのです。

「まとめて俺んちにこ」

「うえええええええええええええっ！？」

皆それを聞いてびっくりです。いきなり凄いことを言ってきました。これまたスウェーデンらしいといえば非常にらしいのですけれど。

「そ、それはちょっと」

「まずいって言うか」

いきなり言われた二人はドン引きです。それでエストニアがラトビアに言います。

「困るよね、ラトビア」

「は、はい」

ラトビアも引きながらエストニアに答えます。

「ポーランドさんに聞いてみないと」

「な、何でこの人って」

フィンランドも困った顔をしています。

「こうもいきなりなんだろう。しかもいつもいつも」
「ポーランドか」
スウェーデンはその茫洋とした顔で考えていました。
「あいつ、どげん奴だったかな」
実はそれについてはあまり考えていないのでした。何気にというかかなり何を考えているのか全くわからない人であります。フィンランドも苦労しています。

第百八十五話　　完

２００８・５・１９

第百八十六話　苦労人

「何かねえ、本当に」
「どうかしたんですか？」
リトアニアがフィンランドのところでぼやいています。フィンランドが彼の言葉に突っ込みを入れます。
「いやさ、疲れることが多くて」
「ポーランド君とのことですね」
「あとロシアさんもね」
そちらもあるのでした。
「何ていうかさ、ポーランドは我儘だしロシアさんはあんなのだし」
「はい」
今更言っても仕方ないことを愚痴っています」
「どうにかならないからね。本当に」
「どうにもならないですか」
「そうなんだよ。全く」
こう言って溜息です。
「どうしたものかなあ」
「ドイツさんはどうですか？」
「あの人凄く怖いし」
ラトビアからもドイツを頼ろうと言われていますがそれは断るのでした。
「だから。何かこう支えが欲しくて」
「そうですか」
「スウェーデンさんもね」
「・・・・・大変ですよ」
目を閉じて顔を俯けさせてリトアニアに答えます。
「言っておきますけれど」

「わかるよ、それ」
言うまでもないことでした。
「凄くね」
「そうですか、やっぱり」
「凄い人だからね」
「そうなんですよ。何を考えているかわからなくて」
「苦労するね」
「全くです」
溜息をつき合うのでした。苦労の尽きない二人であります。幸せの星は二人にはないです。

第百八十六話　　完

２００８・５・１９

第百八十七話　意外なことにも　☆

第百八十七話　意外なことにも

騒動を聞いてやって来た人がいます。ラトビアとエストニアを舎弟みたいにしていたポーランドです。相棒のリトアニアも一緒にいます。彼はスウェーデンの前に来ると彼を見上げて言います。

「話聞いたーーースウェーデンだっけ？」

「んだ」

スウェーデンは彼の問いに答えます。

「御前マジ有り得ないんだけどーーー」

「有り得ない？俺が？」

「いきなり来てエストニアとラトが欲しいって駄目に決まってるし」

「なして？」

スウェーデンもかなり凄いです。ここでなして？とは。

「何でってうーーん・・・・・何ていうか」

こう言われると言葉に詰まりますがポーランドも伊達にポーランドではありません。はっきりと言い返します。

「俺が許さんっていうか俺が嫌だから！」

「そか」

「そうだし。絶対絶対」

スウェーデンを見据えて言います。

「御前なんかに渡さんから！」

「そうか」

（じゃーーーしゃーねーな）

スウェーデンは応えながら頭の中で考えていました。

（ま、二人だけで暮らすのもえーーがなーーー）

かなりあっさりとこう考えていました。淡白です。しかしここで何とそのポーランドが。

言うだけ言ってリトアニアの後ろに隠れてしひまったのです。皆

かなりびっくり。何とポーランドは人見知りだったのです。後はフィンランドとリトアニアの話になって丸く収まるのでした。しかしスウェーデンもかなり強烈なキャラなのでした。

第百八十七話　　完

２００８・５・２０

第百八十八話　女房役は大変

第百八十八話　女房役は大変

ポーランド。後先考えないで行動して極端に楽天家で人見知りです。何気どころではなく困った人です。そしてそんな彼に一番困ってるのが。

「ピンクの家っていいと思わん」

「だからまだ言ってるの？」

リトアニアです。相変わらず家のペンキ塗りのことを言うポーランドに呆れているのです。

「最近お家のお財布危ないんでしょ？そんなのでいいの？」

「そんなのＥＵ入ったしーーーー、しかもＮＡＴＯもあるしーーーー」

「ＮＡＴＯはお金とは関係ないじゃない。それにロシアさんだって」

「平気平気」

「平気って？」

「あいつ来たら戦車でもう」

「その戦車は元々ロシアさんのでしょ」

相変わらずの調子です。二人の付き合いは最近さらに親密ですがそれだからこそ。

「全く。そんなので大丈夫なの？」

「リト御前心配し過ぎ」

自分が楽天家過ぎなのですがそれは気付いていません。

「平気だし、全然」

「それはそうとさ、ポーランド」

リトアニアはここで話を変えてきました。

「今日韓国君ここに来るんだよね」

「あっ、御前会ってくれる？」

何故か態度が急に変わりました。こそこそと隠れる感じです。

「俺ちょっと。忙しいしーーーー」
「会わないと駄目だって。あまり知らない人でも」
「それでも何か怖いしーーーー」
こんなことを言っても代わりに会うリトアニアでした。世話焼き女房は大変です。

第百八十八話　完

２００８・５・２０

第百八十九話　おっとりとしたお兄さん

第百八十九話　　おっとりとしたお兄さん

最近どうもおっとりした人が目立ちます。というか騒がしい人が多いのでそういう人が逆に目立ってしまうだけですが。

このギリシアもそうです。茶色い髪に黒い目をしていて肌は少し日に焼けています。物静かで穏やかな青年です。

ですが穏やかというよりはスローモーだとも言われています。とかくおっとりとしていて動きもそんな感じです。それが慣れていない人には結構いらいらくるものがあります。

「おいギリシアよ」

「何だ？」

フランスの言葉に応えます。やっぱりおっとりとした調子です。

「御前もう少し早く動いた方がいいと思うんだが」

「早くか」

「ああ、ちょっとだけな。そうじゃないとお兄さん困るんだよ」

見れば買い物で並んでいます。ギリシアが先頭にいて買った品物を出しているのですがそれが遅れているのです。すぐ後ろにいるフランスがそれを注意したのです。

「皆待ってるんだからな」

「わかった」

とは言ってもやっぱり遅いです、非常にゆっくりとした動きです。それで品物を出しているので時間はさらに遅れていきます。

「本当に急いでいるのか？」

「必死だ」

本人はこう言います。

「だから少し待っていてくれ」

「いや、俺はいいんだがな」

後ろでは怒っている人が並んでいます。しかしそれでもギリシア

の調子は変わりません。相変わらずのスローモーで品物を出していった。時間が悠久に過ぎていくのでした。よりによって混雑しているスーパーで。

第百八十九話　　完

２００８・５・２１

第百九十話　筋肉好き

第百九十話　筋肉好き

ギリシアは古い歴史を持っています。神話が有名ですが芸術もまた有名です。とりわけ彫刻はかなりのものです。

「これはいい」

「そうだよね」

ドイツとイタリアも感心することしきりです。日本もうんうん、と納得したように頷いています。三人は丁度ギリシアのところに遊びに来ているのです。

「特にこの男の人達がいいですね」

日本が言うのは裸の男性の像でした。大理石でできています。

「凄くリアルで美しくて」

「筋肉を表現するのは得意だ」

ギリシアはこう日本に答えます。

「それでだ」

「そうなのですか」

「待ってよ、それじゃあ」

得意と聞いたところでイタリアはあることに気付きました。

「ギリシアってひょっとしたら」

「ひょっとしたら。何だ」

「凄い筋肉質なんじゃないの？」

そう予想したのです。

「その服の下は。どうなの？」

「こんな感じだが」

こう応えて脱ぐとそこには。筋肉モリモリの肉体美がありました。おっとりとした顔立ちですがその肉体たるや見事なものです。贅肉なぞ微塵もありません。

「どうだ」

「すごっ・・・・・・」
「鍛えてあるな」
イタリアもドイツも絶句です。あのドイツでさえも。
「一応俺の身体をモデルにしているが」
「それでだったんだ」
謎が一つわかりました。
「彫刻がああなのは」
「とりあえず筋肉には自信がある」
本人も答えます。
「鍛えてるからな」
意外なことでした。それにしても見れば見る程。その童顔に合わない見事な肉体美なのでした。

第百九十話　　完

２００８・５・２１

第百九十一話　一つだとは思わないこと

第百九十一話　一つだとは思わないこと

イタリアといえばパスタです。一番有名なのはやっぱりスパゲティですがそれだけではありません。今日ドイツと日本に振舞っているのは。

「むっ、これは」

「広いですね」

今日は幅広のスパゲティでした。あの細いものとは全く違います。

「こんなパスタもあったのですね」

「どうかな、今日のは」

作ったイタリアは二人に対して様子を窺います。

「今日はフェットチーネなんだけれど」

「フェットチーネ。何だそれは」

「幅の広いパスタだよ」

その外見そのままを伝えます。

「スパゲティとはまた違う種類なんだ」

「こんなパスタもあったのか」

「驚きですね」

「まあ食べてみてよ」

あらためて二人に対して勧めます。

「美味しいからさ」

「美味いのか」

ドイツは今一つ懐疑的です。ところが日本は。

「美味しそうですね」

表情こそ変わりませんがこう言いました。

「これはまた」

「美味いのか！？」

「食べてみればわかります」
そのフェットチーネを見ながらドイツにも答えます。
「さあ。ですから」
「わかった・・・・・・んっ！？」
実際に食べてみるとこれがかなり。
「・・・・・美味いな」
「はい、確かに」
日本も食べています。そのうえでの言葉でした。
「美味しいです」
「そうでしょ。けれど日本」
イタリアはここで日本に対して尋ねます。
「何でしょうか」
「どうしてこれが美味しいってわかったの？」
彼が気になったのはそこです。
「まだ食べてもいなかったのに」
「はい、それは」
日本はそれについて語ります。どうやら謎があるようです。果たしてその謎とは。

第百九十一話　　完

２００８・５・２２

第百九十二話　日本にもあります

「これです」
今度は日本が二人に御馳走します。ここで出して来たのは。
「あれっ、これって」
「似ているな」
イタリアとドイツは日本が出してきたそれを見て同時に声をあげました。見ればそこにはフェットチーネに非常によく似た幅の広いおうどんがあったのです。
「似ているっていうかそっくりだよ。日本、これ何ていうの？」
「きし麺です」
日本はこの麺の名前を言いました。
「うちの家の尾張さんのところの麺です」
「へえ、そんなのあったんだ」
「色々あるのだな」
「味噌煮込みにしました」
見ればだしの色がかなり濃いです。葱に鶏肉まで入っていて非常に美味しそうです。日本はそれを三人分出してきたのでした。
「尾張さん風に」
「何か凄く美味しそう」
「ああ。これもな」
二人はその味噌煮込みうどんを見て唾を飲み込みます。さっきフェットチーネを食べたばかりだというのに。
「美味しいです。ですから是非共」
「うん、それじゃあ」
「これも食べてみよう」
器用に箸を使って食べてみるとこれがまた。
「あっ、確かにかなり」

「美味いな」
「まさかイタリア君もこうした麺を御存知とは思いませんでしたが」
日本はイタリアに対して述べます。
「食べてみると。どちらも美味しいですね」
「そうだね。とってもね」
こうして日本のきし麺とイタリアのフェットチーネに舌鼓を打つ三人でした。意外と似た食べ物はどの国にもあるものです。

第百九十二話　　完

２００８・５・２２

第百九十三話　生徒会長は誰だ

第百九十三話　生徒会長は誰だ

ヘタリア学園には五人の常人の生徒会役員がいます。アメリカ、イギリス、フランス、中国、ロシアの五人です。増やそうかというお話もありますがとりあえずこの五人が役員をしています。

その五人の上に生徒会長がいます。これを誰にするかがまたいつも議論になっています。

「今回はそっちでいいだろ」

「そっちのメンバーで出してくれ」

イギリスとフランスがアメリカ、中国、ロシアに対して言っています。今丁度生徒会室で会議中です。

「ああ、こっちでいいんだね」

「ただしな」

ロシアに応えるイギリスの顔がここで変わりました。

「あいつだけは止めておけよ」

「わかってると思うがな」

「あいつ！？ああ、日本だね」

「安心していいある。あいつは力が強すぎてそもそも生徒会長にならないのが暗黙のルールある」

「残念だが日本じゃねえ」

イギリスはアメリカと中国に対してはっきりと述べました。

「韓国だよ、韓国」

「あいつは止めておけ」

韓国を出してきました。

「あの馬鹿だけは駄目だからな」

「タイがいるだろう。他に幾らでも」

二人はやけに韓国を嫌がっています。

「だから他の奴なら誰でもいいからな」

「わかったな」
「うん。じゃあ他にいい人連れて来るよ」
「頼むな」
「絶対だぞ」
二人はロシアの素朴な返答を聞いてとりあえず安心しました。あくまでとりあえずですが。

第百九十三話　完

２００８・５・２３

第百九十四話　目立ちたいんだぜ

第百九十四話　目立ちたいんだぜ

韓国は今日も誰も何も聞いていないのに派手に自己主張しています。

「俺こそが相応しいんだぜ！」

今日は学校の校庭でまだはじまってもいないのに選挙演説です。

「俺こそが生徒会長に！なるんだぜ！」

一人でメガホンとタスキをして演説というか自己主張をしています。

「そもそもこの学園の起源は俺！だから俺が生徒会長になって学園を正しい方向に案内してやるんだぜ！」

「なあ、あの馬鹿だけれどよ」

「何だ？」

イギリスがフランスに声をかけて。フランスもそれに応えます。

「何でああなんだ？」

「知らん」

一言でした。

「俺が知りてえよ」

「そうか」

「イギリスの起源は俺！」

「何っ！？」

いきなりこんな宣言をされてイギリスもびっくりです。

「だから俺はイギリスの上に立って生徒会長になってやるんだぜ！」

「ちょっと待ておい！」

流石に今の言葉は聞き捨てなりません。フランスと一緒に韓国のところに飛んで来ました。

「今何て言った今！」

「んっ！？あんた」

韓国は猛烈に抗議するイギリスに気付きました。そのうえで彼に

対して尋ねます。
「誰なんだぜ？太平洋では見ない顔なんだぜ。そこの髭の兄ちゃんも」
「見ないって御前・・・・・・」
「まさか俺達の顔と名前さえ知らないで生徒会長になるつもりかよ」
「しかも起源だけ出してかよ」
唖然です。流石に何も言えなくなりました。実は日本しか見ないうえに太平洋の外はあまり知らない韓国なのでした。これで生徒会長になるというのです。勇者です。

第百九十四話　　完

２００８・５・２３

第百九十五話　他にやることはあっても

第百九十五話　他にやることはあっても

欧州組は欧州組で集まることが多いです。この集まりをＥＵと言いますが太平洋でも最近ＡＰＥＣだの拡大会議だので集まっています。言うまでもなくこの中には韓国も参加しています。

「そういえば誰かおられませんね」

「あれ、そうなのか？」

「人数は足りているあるぞ」

日本もアメリカも中国も気付いていませんがカナダもいます。とりあえず彼のことは置いておきまして今回の主役です。

「それで皆が俺に投票してくれたら凄いことになるんだぜ！」

ここでも生徒会長のことを言っています。本人は完全に立候補する気です。他の議題を一切無視して太平洋の面々に対して話というか一方的に主張しています。

「学校が変わる位の！凄いことなんだぜ！あっ、これは」

さりげなく贈りものを出してきました。それを皆に配ります。

「気にしなくていいんだぜ。応援とかそんなのは全然意識しなくていいんだぜ」

「意識しないでいいのですか」

「勿論！あっ、日本は絶対に来なくていいんだぜ」

こう日本に対して言うのです。

「日本の応援はいらないんだぜ。だからこれを受け取らなくてもいいんだぜ」

「わかりました」

韓国がこう言う場合は逆ですのでさりげなく受け取ります。彼との付き合いは少しコツがいるのです。

「それでは」

「皆、じゃあそういうことなんだぜ」

強引に支持を取り付けました。自分自身の脳内で。
「それはいいんだぜ」
「じゃあそれで決まりだな」
「そうあるな」
「揉め事もなく決まってよかったよ」
アメリカ、中国、ロシアはこれで話が決まったことにしました。
なおイギリスとフランスの忠告は聞いてもいません。かくして生徒会長の選挙は次の局面に入るのでした。イギリスもフランスもこの時迫り来る大きな災厄には気付いていませんでした。

第百九十五話　　完

２００８・５・２４

第百九十六話　有り得ないと思っていた

第百九十六話　有り得ないと思っていた

イギリスとフランスはＥＵの集まりの後で二人で話をしていました。話す場所はフランスの家で二人でワインとフランスの料理を味わいつつ優雅にお話です。その話す内容は。

「で、生徒会長はどうなるんだろうな」

「タイだろ」

イギリスは何事もないように答えます。

「タイなら話がわかるし馬鹿もしねえしな。丁度いい」

「そうだな。全く韓国が出て来た時は心臓が口から飛び出たぜ」

「全くだ。しかしよ」

イギリスがここで尋ねます。

「何だ？」

「あいつって確か絶対に諦めないんだったよな」

「ああ、そうらしいな」

このことは広く知られています。

「何でもな。諦めるという頭がないらしいな」

「だとしたらひょっとすると」

イギリスはふと不吉なものを感じました。

「あいつまさか本当に」

「不吉なこと言うんじゃねえよ」

フランスの顔が恐怖らしきもので強張ります。

「幾ら何でもあの三人がそれを止めるだろ」

「そうか。そうだよな」

「ああ。だからだ」

半分以上自分に念押ししているようなフランスの言葉です。

「ここは安心してタイを迎えような。いいな」

「ああ、そうだな」

イギリスもまた自分に言い聞かせるようにしてフランスの言葉に頷きます。二人が今いる部屋の窓から北斗七星が見えます。何故か双子星もはっきりと見えています。

第百九十六話　　完

２００８・５・２４

第百九十七話　聞いちゃいねえ

第百九十七話　聞いちゃいねえ

かくして生徒会長が決まったとの報告が三国からあがりました。
それを聞いたイギリスとフランスは。まずはアメリカ、中国、ロシアの三人と話し合いの場を設けることにしたのでした。
「意外と早かったな」
「それで誰なんだ？」
まずは三人のそれを尋ねます。
「タイだよな」
「あいつなら問題ないからいいな」
二人はこの瞬間までこう思っていました。ところが。
「うん、韓国に決まったよ」
「決定ある」
「っておい！」
「御前等人の話聞いてるのかよ！」
アメリカと中国の返答にいきなりヒートアップして返事です。
「だからそいつだけは駄目だって言ってるだろ！」
「何でそいつなんだよ何で！」
「何でってもう決まったし」
ロシアは至って平気な顔です。まるで他人事です。
「だからもう変わらないよ」
「本人のたっての希望でね」
「だから決定したあるよ」
「・・・・・くっ、こいつ等」
「完全に投げやがったな」
それだけははっきりわかるのでした。そのうえでフランスがイギリスに対して言います。
「なあイギリス」

「何だ？」
「これからが凄く楽しみになってきたな」
「まあな」
イギリスも一応はこう答えます。
「何かわくわくしてきたぜ」
「全くだな」
言いながら目が死んでいます。魚屋の冷凍烏賊の目になってしまっている二人でありました。

第百九十七話　　完

２００８・５・２５

第百九十八話　イギリスの切り札！？

第百九十八話　イギリスの切り札！？

イギリスとフランスが遠い目になっているその頃。当の韓国はというと。

「さあ、いよいよ俺の時代なんだぜ！」

相変わらずのスーパーハイテンションです。無意味なまでの。

「こっから学園は変わるんだぜ！俺の手によってな！」

「くそっ、あいつ何であんなに元気なんだよ」

「馬鹿は風邪ひかねえってのは本当なんだな」

イギリスとフランスはとっくに会長になったと思っている韓国を忌々しげに見ています。今だに彼を生徒会長にしたくなくて仕方ないのです。

「全くよお。どうすればいいんだよ」

「あいつ生徒会長になったらどうなると思う？」

「考えたくもねえ」

イギリスの言葉です。

「そんな事態はな」

「全くだぜ。しかしよ、このままじゃ」

「わかってるさ。手はある」

「あるのかよ」

「ああ、あれをやる」

暗い顔になっています。それで出すものは。

「まあ見ていればわかるさ」

「何だよ、ここは」

二人は暗い階段を下りていきます。そして真っ黒い扉の前に立ってイギリスがそこを開けるとその部屋にあったのは。

「これが俺の切り札だあ！韓国、絶対生徒会長にはさせねえからな！」

「な、何いいいいーーーーーーーーーーーっ！」
フランスの絶叫が響き渡ります。さあ部屋にあったのは何か。イギリスの切り札が炸裂しようとしています。

第百九十八話　　完

２００８・５・２５

第百九十九話　異端審問は気にしない

第百九十九話　異端審問は気にしない

何とそこにあったのは巨大な魔法陣。どっからどう見ても黒魔術の場所です。イギリスも何時の間にか黒いマントを羽織っています。どっからともなく出て来たもののようです。

「いきなり何をするつもりなんだよ」

「俺のこの魔術であいつを再起不能にしてやるんだよ」

それがイギリスの切り札だというのです。実は彼は魔術が大得意なのであります。何気に訳のわからない特技であります。

「これでな。あいつを呪って生徒会長に立候補できなくしてやるんだ」

「そうか。それであいつを止めるんだな」

「これならいける」

彼は断言します。

「完璧にな。さあ出でよ魔界の住人達！」

剣呑な目で叫びます。

「あの韓国を再起不能にさせてやれ！」

「果たしてどうなるかな」

フランスは比較的醒めています。何かあまり信頼していないようです。

「あいつに御前の魔術が通じるかどうか」

「通じなかったら終わりだよ」

得体の知れない書物まで右手に持って開いています。変な文字が一杯書かれてもいます。

「それこそな。全然な」

「全然っていうかこうでもしねえと止められないんだな」

「・・・・・あの馬鹿を止めれる奴がいないからな」

既に半分諦めています。果たしてイギリスの魔術は韓国に通じるのでしょうか。しかしこの魔術が発動された時その韓国は。

「イギリスの起源は俺なんだぜ！」

相変わらずです。まさに無敵です。頭の中に何も入っていないだけかも知れませんが。それでもとりあえず無敵なのでした。世の中無知に基く勇気程強いものはありません。この彼こそまさにそれなのであります。

第百九十九話　　完

２００８・５・２６

第二百話　やっぱり無理でした

第二百話　やっぱり無理でした

イギリスがその黒魔術を発動させたことはさせましたが。しかしそれでも韓国に変わったところは全くありませんでした。

「おい、全然変わってねえぞ」

「な、何でだ！？」

イギリスも呆然としながらフランスに対して応えます。

「俺の呪いは完璧な筈だ。それでどうしてなんだよ」

「わからねえが魔法が通じないのか？」

「そんな筈がない。見ろ！」

指差すと。不気味な白いものが韓国に取り憑いています。

「悪霊を取り憑かせたんだぞ！それでどうして平気なんだよ！」

「ひょっとしたらあいつは」

フランスがあることに気付きました。

「魔法とか呪いが通じないのか？」

「まさか」

イギリスはそれを必死に否定します。

「そんな筈がない！何故だ！」

「いや、確かあいつがつくとその国が負けるだろうが」

「何っ！？」

俗にそう言われているのです。

「ひょっとしたらそれは呪いでよ」

「おい、じゃあ悪霊の呪いよりも強い呪いを持っているっていうのか！？」

「そうじゃねえのか？」

フランスはこう予想してきました。

「ひょっとしたらよ」

「馬鹿な、俺の呪いさえ・・・・・・」

どうやらイギリスの呪いさえ通じないようです。韓国は相変わらず凄いテンションで我儘一杯というレベルを超えてハチャメチャな選挙演説を行っています。こうして最後の切り札も効果がありませんでした。

第二百話　　完

２００８・５・２６

第二百一話　選挙間近

第二百一話　選挙間近

イギリスとフランスは韓国を結局どうすることもできないまま選挙の日が近付いてきて。その韓国の演説はさらにヒートアップしています。

「俺の家のドラマは一番面白いんだぜ！」

「御前の家に海外留学に行ってやるぜ！」

「あれもこれも起源は俺なんだぜ！」

「・・・・・あれは選挙演説か？」

「そう思えるようになったら少しは休めよ」

イギリスとフランスは韓国のその演説か何かわからないものを聞きつつ暗澹たる顔になっています。

「それでだ」

「ああ」

そのうえでイギリスはフランスの言葉に応えます。

「何か解決案はあるのか？まだ」

「あの魔術が最後の切り札だって言ったよな」

「やっぱりそうか」

「もうねえ」

結論が出てしまいました。

「何もねえ。どうすりゃいいんだ」

「対抗馬はいねえのか？」

フランスはそれも尋ねました。

「俺達が誰か出してよ。今からなら間に合うだろ」

「対抗馬か」

「そうだよ。誰でもいい」

フランスはここまで言います。

「あいつじゃなかったらな」

「・・・・・そうか。じゃあ探してみるか」
「とりあえずあいつだけは駄目だからな」
「そうだな」
こうして彼等は遂に対抗馬を探すことにしました。果たしてその人はいてくれるのでしょうか。そして二人の願いは適うのでしょうか。それはまだわかりません。知っているとすれば北の夜空に輝く七つの星の二つ目の星のところの双子星だけではないでしょうか。

第二百一話　　完

２００８・５・２７

第二百二話　探せばいない

第二百二話　　探せばいない

何としても韓国を生徒会長にさせない為に対抗馬を探しはじめたイギリスとフランス。ところがそういった立候補者が中々いないのでした。

「太平洋はいねえか」

「あの三国が決めたらもう駄目みてえだな」

太平洋は言うまでもなくアメリカ、中国、ロシアの場所です。日本もいます。それで誰も選ぶことができないのでした。既にこの地域での立候補者が韓国なのですから。

「じゃあ俺達の中で出すか？」

「誰がいい？」

こうして候補者を選んでみますがしかし。

いません。何と誰もいません。

「イタリアは駄目か」

「あいつは下手したら役員になるぞ」

実は役員を増やそうという話もあるのです。日本やドイツ、インドがその対象ですが実はイタリアも少しだけ言われることがあるのです。だから駄目なのです。

「ポーランドは・・・・・駄目か」

「あいつはそういうの興味ねえしそれに韓国よりましな程度だ」

「そうだな」

だから駄目なのです。頼んでも断られることは目に見えていました。

「じゃあ誰がいいんだよ」

「バルト三国から選ぶか？」

「おっ」

フランスの今の言葉を聞いたイギリスの顔色が少し変わりました。

「それ、中々いいぞ」
「いいか？」
「ああ、じゃあそれだ」
フランスに対して言います。
「あの三人の中から選ぼう。それでいいな」
「よし」
フランスはイギリスの言葉に頷きました。これが果たして打開策になるのでしょうか。二人は是非そうなって欲しいと願っていますが。

第二百二話　　完

２００８・５・２７

第二百三話　スカウトしてみた

第二百三話　スカウトしてみた

こうしてバルト三国の誰かを生徒会長に擁立することにしたイギリスとフランス。まずは長男的存在のリトアニアに目をつけます。

「あいつだったら問題ないな」

「そうだな。頭がいいし真面目だし面倒見もいいし」

二人のリトアニアに対する評価はかなりいいものです。やはり見るべきものは見ています。

「あいつならやってくれるな」

「じゃあ早速」

リトアニアの家に行って声をかけます。しかし」

「あの、悪いですけれど」

「駄目なのか!?」

「すいません、実は」

イギリスに応えながら言うのでした。

「最近またポーランドの世話がありますので」

「あいつか・・・・・・」

「そうか、あいつがいた」

イギリスとフランスはここで思い出しました。リトアニアはポーランドの相棒なのです。とかく手のかかるポーランドの。ですから。

「生徒会長をやる余裕がないです」

俯いてまた二人に答えます。

「申し訳ないですけれど」

「・・・・・そうか。ならいい」

「変な話を持って来て悪かったな」

「いえ。ポーランドは生徒会長に誘わないんですか?」

「・・・・・韓国よりはましだろうがな」

「そうですか」

イギリスの右斜め下に向けた顔が全てを物語っていました。彼にしろ人はじっくり選んでいるのです。その人材の為の今回の生徒会長候補人材スカウトなのですから。かくしてリトアニアのスカウトは残念ながらなかったことになったのでした。あと残り僅か二人です。

第二百三話　　完

２００８・５・２８

第二百四話　今度は眼鏡っ子を

第二百四話　今度は眼鏡っ子をリトアニアに断られてもめげないイギリスとフランス。今度はエストニアに声をかけることにしました。

「あいつは真面目な優等生だしな」

「どっちかっていうと書記向けだけれど悪くないな」

こう言い合って決めました。それでエストニアの家に行ってリトアニアの時と同じように誘うのでした。ところが今回の返答も。

「気持ちは有り難いんですけれど」

「・・・・・駄目か」

「すいません」

フランスがエストニアの俯いた顔を見つつ彼の言葉を聞いています。

「僕も事情がありまして」

「事情って御前の家は最近」

「お金回りはいいんですよ」

彼の経済は今フィンランドとの付き合いのおかげで絶好調なのです。ところが事情はお金だけではないのです。彼の場合は。

「ただ。それでも」

「それでも？」

「誰とは言わないですけれどね」

「・・・・・そうか」

イギリスはその人ことでもう誰のことかわかりました。当然フランスも。

「僕としては受けてもいいんですけれどもう候補者決まってるんですよね」

「一人はな」

その一人があくまで問題なので今に至るのですが。

「それでもう一人を探してるんだよ」
「でも駄目か」
「最初に決まっていればせめて」
「・・・・・それは言わないでくれ」
「俺達も今どうしても逃げたくて悩んでるんだよ」
「そうなんですか」
何かエストニアが目の前のイギリスとフランスの後ろにあるものを見ました。それは天に輝く二つの禍つ星でした。それが見えた時。
（これは。この人達のこれからは）
彼にはわかりました。けれどあえて言いませんでした。言ってもどうしようもないですから。

第二百四話　　完

２００８・５・２８

第二百五話　最後の切り札も

第二百五話　最後の切り札も

さて、残るはラトビアのみ。しかしイギリスもフランスも希望を捨ててはいませんでした。

「泣き虫だしチビだし」

「運がないし要領も悪いけれどあいつしかいない」

何気に消去法です。これを使っている時点で何か絶望的な暗黒臭が漂っているのですが二人はそれは見ようともせずいざそのラトビアのところに向かうのでした。

そしてラトビアに生徒会長に立候補するのを薦めます。ところが。

「ぼ、僕はいいです」

ガタガタと震えながら二人に答えるのでした。

「それだけは、それだけはいいです」

「それだけはってよ」

「ちゃんと俺達ばフォローするからよ」

こうも言うのですがここで。ラトビアは言うのです。

「役員にはロシアさんいますよね」

「あ、ああ」

「まあな」

隠せる筈もないことなので正直に答えるしかありませんでした。

実際にロシアは学園の常任委員の一人です。そのせいでかなり力も強いのです。

「だからいいです。若し生徒会長になったら！」

ここでラアとビアの記憶がフラッシュバックします。

「またんなことやこんなことが！僕それだけは！」

「お、おいラトビア！」

「しっかりしろ！」

「御免なさい御免なさい！」

二人が止めるのも聞かず叫びだします。
「ですから鞭も強制労働もシベリアも！うぎゃあああああーーーーーーーーっ！」
「こ、こいつの過去はどうなってるんだ！」
「ラトビア！ラトビアーーーーーーーーッ！」
恐慌状態になったラトビアを必死に介抱するのでした。もう生徒会長どころではありません。こうして遂に二人の希望はパンドラの箱の中に消え去ってしまいました。

第二百五話　　完

２００８・５・２８

第二百六話　生徒会長になったら

第二百六話　生徒会長になったら

こうして希望が全部向こうから逃げてしまったイギリスとフランス。もう観念してとりあえず今のところ唯一の生徒会長候補の話を聞くことにしました。学校の至るところに韓国の選挙ポスターが見えますがそれはあえて見ないことにして彼のところに向かいます。見れば彼は自分の机のところで昼食です。キムチをおかずにカルビ丼をガツガツと平らげています。

「あんた達確かイギリスとフランスだったよな」

「ああ、そうだ」

「ちょっと時間あるか？」

「あるんだぜ。俺の選挙演説なら何時でも聞かせてやるんだぜ」

「ああ、それで聞きたいことがあるんだ」

イギリスは何か死んだような達観したような目で彼に告げます。

「いいよな」

「ああ、いいんだぜ。それで何なんだぜ？」

「御前生徒会長になったら何をするつもりなんだ？」

今度はフランスが彼に尋ねます。

「それを聞きたいんだがいいか？」

「でかいことなんだぜ」

韓国は大意張りで宣言します。

「でかいこと大きいこと、派手なことワイルドなことを次々にしてやるんだぜ。学園の大改革なんだぜ」

「でかいこと、大きいことか」

「もっと具体的に言ってくれねえか？」

二人は頭痛を必死で抑えながらもう一回彼に尋ねます。

「それだけじゃわからねえからよ」

「だからな」

「だから具体的に言ってるんだぜ」
しかし彼はこう言うのです。飲み物のメッコールを飲みながら。
「でかいこと、大きいこと、派手なこと、ワイルドなことをしてな」
「・・・・・そうか、よくわかったよ」
「御前の考えはな」
「期待しているんだぜ、これからな」
「ああ、凄く楽しみだよ」
「お兄さん何か天国が見えてきたよ」
ポーランドに対するよりも優しい目になったしまった二人でした。
こうして二人は完全に何もかも、ありとあらゆる希望を捨て去ったのでありました。

第二百六話　　完

２００８・５・２８

第二百七話　しかし意外な存在が

第二百七話　しかし意外な存在が

生徒会長のことに関して完全に諦めてしまったイギリスとウランスの二人。絶望のどん底を彷徨っていました。しかしここで思いも寄らぬ人物の話を聞いたのです。

「スイスってしっかり者だよな」

「そうだよな」

学園を行き交う面々の話を小耳に挟んだのです。二人でベンチに並んで座って絶望していましたがこの話を聞いて二人は顔をあげました。

「そうだよ、あいつだ」

「あいつがいたんだ」

顔を上げて言い合います。それと共に顔に希望を浮かべだしていました。こうなれば人間というものは俄然として元気になってくるものです。

「あいつに生徒会長になってもらおう」

「しっかりしているし強いし頭もいい」

韓国とは正反対の人物のようです。

「あいつが出たら韓国なんか問題じゃないぞ！」

「ああ、あのスーパー馬鹿が生徒会長にならなくて済むんだ！」

やはり韓国への評価が物凄いです。二人の心境がそのまま出ています。

「そうと決めればな」

「ああ」

ニヤリと笑って言い合います。

「あいつの家に行って推薦を約束しよう」

「俺達の全面的なバックアップを保障してな」

勿論本気です。とにかく韓国にだけは生徒会長になって欲しくは

ないのです。イギリスとフランスの偽らざる心境なのでした。
「よし、じゃあよ」
「行くぞ希望の先に！」
二人でベンチから飛び起きてそのまま駆けていきます。二人は今目の前に希望を見ていました。ただしそれ以外のものは何一つ見えていません。このときスイスがどういった人なのか知っていた筈なのに忘れていました。迂闊と言えば迂闊ですが何処かが抜けている二人でした。

第二百七話　　完

２００８・５・３０

第二百八話　凄い挨拶

第二百八話　凄い挨拶

いざスイスの家に駆けていく二人。完全に希望以外は見えていません。

「おいスイス！」

「いい話があるんだけれどよ！」

満面に笑みを浮かべて。しかしその二人に対して。

いきなりスイスの家から小銃が出て来ました。そして。

「う、うわっ！」

「何だいきなり！」

二人の足元に派手に斉射です。これを受けて二人も足を止めました。

「お、おい俺達はだな！」

「御前を学園の生徒会長に推薦したいんだよ！喧嘩を売りに来たんじゃねえ！」

「生徒会長！？不要！」

抗議する二人の目の前に姿を現わしたのは。金髪をおかっぱ気味のショートヘアにして青緑の目を持った一見女の子みたいな外見の中性的な小柄な少年でした。彼は小銃を手にし緑の軍服と白いベレー帽を身に着け颯爽と立っています。この少年こそスイス、二人の希望・・・・・の筈です。

「知っているだろう、我輩は誰とも手を結ばないと！」

「生徒会長は別じゃねえか！」

「悪い話じゃねえぞ！御前に権限はかなりあるんだからな！」

「言った筈、我輩はそういったものにも興味はない！」

ヨーロッパでは今でも最大の実力者である二人を前にしても平気です。凄い強さです。

「そして我輩の家に断りなく立ち寄れば」

「立ち寄れば！？」
「この程度では済まん。それでもいいのか！」
「だからよ！俺達は！」
「御前にだな！」
「問答無用！」
それ以上聞こうともせずまた小銃を出してきました。
「話すことはない！帰れ！」
こう言い渡してまた発砲するのでした。二人はほうほうのていで逃げ出す破目になりました。希望というものは時として幻でしかないのです。

第二百八話　　完

２００８・５・３０

第二百九話　遂に選挙当日

第二百九話　遂に選挙当日

イギリスとフランスの必死の努力も空しく遂に選挙当日となりました。当然ながら二人にも選挙権があります。というよりはこの二人も入れた常任役員のこの五人が投票しないとどうしようもないのです。

「棄権するか？」

フランスが登校しながら横にいるイギリスに対して言いました。

「こうなったら」

「棄権か」

「ああ。どうだ？」

実はこの五人のうちの誰か一人でも棄権したら生徒会長にはなれないのです。役員五人の権限はかなり大きいものなのです。それで我儘勝手し放題な人達が三人程度いるのが問題にもなっています。といっても誰も何も言えないのでありますが。

「それでな」

「それで他に誰がなるんだ？」

イギリスはフランスの提案に対して尋ねます。

「何処の誰が。なるんだ？」

「・・・・・・いないか」

「そうだよ、誰もいないんだよ」

そこを強調します。結局探しても誰もいなかったその事実を。

「誰もな」

「・・・・・日本でも擁立できたらな」

「あいつは強過ぎるだろうが」

「人材っていない時には本当にいないんだな」

「全くだ」

ぶつくさと不平を述べながら向かいます。二人の運命の日がいよいよやって来ようとしていたのでした。もう運命は決まっているのではありますが。

第二百九話　　完

２００８・５・３１

第二百十話　かくして晴れて

第二百十話　かくして晴れて

選挙の結果。韓国は目出度く生徒会長になったのでした。

「やったんだぜーーーーーーーーーっ！」

一人しか候補者がいなかったので当然ですが見事生徒会長就任です。放送を通じて韓国の勝利宣言が口内に響き渡ります。

「俺が生徒会長になったんだぜ！優勝なんだぜ！」

「優勝じゃねえだろ」

「そもそも御前一人じゃねえか」

一人はしゃぐ韓国の後ろでイギリスとフランスが沈んだ顔でいます。

「全く何でこんなよ」

「訳のわからねえ奴が生徒会長なんだよ」

まだ不平不満に満ちています。しかし二人の苦労はこれで終わりではありませんでした。

「じゃあ君達二人には」

「この仕事をやって欲しいある」

「宜しくね」

アメリカ、中国、ロシアの手で二人の机にどんどん書類の山が積まれていきます。気付けば机が完全に埋もれてしまっています。

「おいちょっと待て！」

「何だその見たこともねえ書類の山は！」

「だって今度の生徒会長デスクワーク苦手だから」

「それで二人がその分やることになったある」

「僕達は会長のサポートになったから書類仕事できなくなったし」

さりげなくどころか堂々と自分達の分の仕事も置いていくのでした。

「何で御前等の仕事まであるんだ！」
「しかもおい！生徒会長がやらかしたトラブル処理までもかよ！」
「あいつ一体今まで何やってきたんだ！」
「フランスの起源は御前のところじゃねえぞ！」
さりげなく起源までそうなっていました。こうして新生徒会長就任と共にワーカホリックになってしまった二人でありました。
「今度の生徒会長はまともなのを俺達が推薦するか」
「その時まで俺達が過労死していなきゃな」
まだぶつぶつと不平を言う二人でありました。

第二百十話　　完

２００８・５・３１

第二百十一話　禁句　☆

第二百十一話　禁句

ある日イタリアはフランスの家に遊びに来て。実に何気なく彼に対して言いました。

「ねえフランス兄ちゃん」

「んっ、何だ？」

「昔兄ちゃんが色々盛って行った絵だけれどさ」

それを聞いた瞬間に空気が一変しました

「そろそろ返してーーーーモナ・・・・・・」

「ロイヤルデモンシード！」

世界の黒と白が逆になる必殺ブローが炸裂し。イタリアは吹き飛ばされてしまいました。

「フ、フランス兄ちゃん！」

イタリアは起き上がりながらフランスに対して尋ねます。

「いきなり何するんだよーーーーー」

「よーーーしイタリア」

けれどフランスは抗議するイタリアのところに来て言うのでした。

「そんなに言うんだったら今日は兄ちゃんと二人だけで戦争でもしようか」

「せ、戦争！？」

「デビルプロポーズっていう必殺ブローもあるんだけれどよ。御前もコーザノストラってあったよな」

「うわあああああああああああ・・・・・・」

何よりも喧嘩が苦手なイタリア。こう言われてはどうしようもありません。

「御免なさい御免なさい」

「わかればいいんだよ」

（ふう、危なかったぜ）

こうして毎回毎回イタリアの言葉を煙に巻いているフランスでありました。どうにも意外とフランスらしいというか何気にせこいです。

第二百十一話　　完

２００８・６・１

第二百十二話　そういえば元々は

第二百十二話　そういえば元々は

フランスは今でこそ絵も上手いです。けれどかつてはそもそも絵なぞ描いてはいませんでした。実に粗忽な少年だったのでした。

けれどイタリアと再会してから。絵が上手くなったのです。

「兄ちゃん、ここはこうやってね」

「ああ」

イタリアに教えてもらいながら絵を描いています。まだ小さいイタリアに。

「それでここはこうして。そう、こんな感じなんだよ」

「そうだったのか、こうやるのか」

「うん、兄ちゃんかなり絵上手いよ」

「そうか」

褒められて機嫌がよくなりました。

「じゃあもっと描いてみるな」

「うん。どんどん自分で描いていくといいよ」

イタリアに教えてもらってからより一層描くようになりました。その結果。

今のフランスがあるのです。今日も絵を描いています。そこにまたイタリアがやって来ます。フランスも彼は気持ちよく出迎えます。意外とイタリアには甘いところがあります。

「ねえ兄ちゃん、ところでさ」

「絵の貸し借りの話はなしだぞ」

「いや、そうじゃなくてさ」

「じゃあ何なんだよ」

「料理だけれど」

今度のお話は料理です。

「よく考えたらフランス兄ちゃんの料理って俺の料理の影響とかな

い？」
「それは気のせいだ」
こう言い繕うのでした。
「だから気にするな」
「そうかな。けれど何か」
「オーロラエクスキュージョン！！」
フランス人の技なのに何故か英語で必殺技を出します。何気に技はよく持っているフランスなのでありました。他にも薔薇を使う漢字まみれの技も一杯持っています。どういった趣味なんでしょうか。

第二百十二話　　完

２００８・６・１

第二百十三話　はわわわわわ　☆

第二百十三話　はわわわわわ

大昔のお話。フランスがまだ若くてイタリアがおちびちゃんだった頃。この頃からイタリアは弱くてあちこちから攻められていました。というかそれでいて何もしていなかったのもまたイタリアです。

一体何なんでしょうか。

「はわわわわわ・・・・・・」

その攻められたイタリアが思いきり焦っています。

「兄ちゃん・・・・・じゃなかった御主人様、敵が来ちゃいました」

「ああ、そりゃ大変だな」

フランスはそれを聞いても案外平気です。

「よし、こうなったらだ」

「はい」

「御前盾になれ」

素っ気無くとんでもないことを言います。流石と言うべきか。

「えっ！？」

「だから盾になれ。いいな」

弱いから何も反論できません。こうしてイタリアはタテリアとなったのですが武器を持ってガタガタと震えているだけでありました。

「うあーーー、これって」

「可哀想」

敵も同情するしかありませんでした。しかもここで。

「よし、今だ！」

「わーーーーーーっ！」

神聖ローマが出て来てまたイタリアを自分のところに入れてしまおうとしまう。イタリアの受難は本当に凄いものだったのです。

「くそっ、こうなるんだったらあいつを盾にするんじゃなかった！」

「じゃあどうするってんだよ」
「正式に俺の家に入れて飼っておくべきだったぜ」
「勝手にしろ、この馬鹿」
イギリスではなく神聖ローマからの突っ込みでありました。実は東西に敵を多く抱えて盾でもないとやっていけないフランスであるのです。

第二百十三話　完

２００８・６・２

第二百十四話　トイレはどうなった

第二百十四話　　トイレはどうなった

ある日のことです。フランスの上司の人が我儘を言い出しました。

「宮殿に住むぞ、大きくて華麗な宮殿にだ」

「それで何処に？」

「ベルサイユだ！」

「げっ！！」

ベルサイユと聞いてフランスは絶句です。何しろあそこは碌に水もない僻地です。たまたま上司の休む場所があるだけの辺鄙な場所です。あそこにでかい宮殿を置くなんて途方もないことです。

けれど言い出したら聞かないこの上司、本当に宮殿を建てさせます。フランスもその大工事に駆り出されて連日くたくたです。

「何だよ、これって」

万里の長城かピラミッドか。そんな途方もない建築物を造っている気分です。周りの家の人達もへとへとです。まずお水を確保するだけでも大変です。

しかもお庭も整理してフランスの上司がオレンジの木が欲しいと言えばそれを植えて。かかるお金は途方もないものになりフランスの財布はピンチです。

「何で俺の財布ってこんなに簡単にお金がなくなるんだ？」

その原因のかなりの部分が上司達にありますがそれは言えないのでした。かくして何とかその宮殿は建ったのですが建ててみてわかったことは。

「あれっ、この宮殿って」

「トイレがないぞ」

設計ミスでトイレはあることはあっても凄く少ないのでした。そしてその結果として。

宮殿の隅やカーテンの陰、折角造ったお庭なんかがトイレになっ

てしまいあちこちが非常に汚い有様になってしまいました。もう臭くて臭くて仕方がありません。

「トイレが欲しいな」

「・・・・・無理言わんで下さい」

上司の今度の我儘は流石に聞けませんでした。かくしてフランスはこのとても臭い宮殿に住む破目になってしまったのでありました。困った上司でありました。

第二百十四話　　完

２００８・６・２

第二百十五話　カラフル万歳

第二百十五話　カラフル万歳

今日はアメリカが皆を呼んでパーティーです。まずはサラダにスープにステーキにハンバーガー。とまあオーソドックスなメニューが続きます。

「何かアメリカさん料理の腕あがっていません？」

「そういえばそうあるな」

日本と中国が料理を色々と味わいながら言います。

「ステーキも柔らかいですし」

「ピザもサンドイッチもいいあるぞ」

「僕も色々と勉強したんだよ」

アメリカは明るい声で彼等に答えます。

「その成果だよ。何時までもイギリスみたいにはいかないからね」

「さらっと俺の名前を出すんじゃねえよ」

「御前、ゆで卵すら作れないだろ」

イギリスはあえなくフランスに突っ込みを入れられて終わりです。何はともあれいい雰囲気でパーティーは進んでいきます。

そして遂にデザートの登場です。言うまでもなくアメリカが作ったものです。皆それを見て。

「・・・・・何だこりゃ」

「おもちゃか？」

「ははは、面白いジョークだね」

こんなことを言われても全く平気です。

「これが僕の作ったお菓子だよ、ケーキだよ」

赤や青のカラフルなケーキです。目玉があって尚且つ派手なデコレーションで。それを見てお菓子というのは確かに無理があります。

「さあ皆これも食べてよ。美味しいよ」

「・・・・・遠慮します」

とりあえず日本は棄権するのでした。皆もかなり引いていますがやっぱり彼は気付いていません。気付かないふりをしているだけかも知れませんけれど。

第二百十五話　　完

２００８・６・３

第二百十六話　でかけりゃいい

第二百十六話　でかけりゃいい

アメリカの料理は一つ大きな特徴があります。それは。
「うわ・・・・・・」
日本は自分の前に置かれたステーキを見てびっくりです。彼にとってみればとんでもない大きさなのです。でかいステーキがじゅうじゅうといってていてそこにこれまた大きなバターが置かれているのです。
「これはまた」
「!?日本」
「小さいの?」
中国と誰かが驚く日本に尋ねます。何か赤いカエデのマークの服を着ている人です。
「いえ、これはかなり」
「あれっ、やっぱり小さかったかな」
アメリカも驚いている日本に対して言います。
「じゃあもう一枚焼く?」
「いえ、いいです」
しかし日本はアメリカのその申し出を断るのでした。
「これ一枚で充分です」
「それで大丈夫なの?」
アメリカはそれでも日本のステーキが小さいと思っているのでした。
「何なら本当にもう一枚」
「いえ、本当にいいです」
日本は断り続けます。どうやら本心を隠しているようです。
「これでもう」
「そう。じゃあいいけれど」

（アメリカさんこれで小さいとは）

目の前のそのステーキを見つつ心の中で呟きます。

（一体どんな胃袋をしておられるんでしょう。果たしてこの一枚いけるかどうか）

内心冷や汗をかいています。彼にとってみればこのステーキとの勝負は運命の一戦なのでした。とかく何かと量の多いアメリカの食べ物なのであります。見ればサラダもパンもポテトもデザートも何もかもであります。

第二百十六話　　完

２００８・６・３

第二百十七話　まずいなんてものじゃない

第二百十七話　まずいなんてものじゃない

アメリカはこうですがまあとかく料理で馬鹿にされるのがイギリスです。何しろ料理が六品しか作れないですしそのうえゆで卵まで作れないのですから。

「御前、マジで才能ないなんてものじゃねえんじゃねえのか？」

「しみじみと同情するんじゃねえよ」

フランスの言葉に突っ込み返しますがそれも元気がありません。

「俺はちゃんと作っているぞ」

「何処がだよ。全然じゃねえか」

しかしフランスはその言葉を信じません。

「で、ゆで卵は作れるのか？」

「あれ難しくてわからないんだけれどよ」

「・・・・・もういい」

かなり絶句でした。返す言葉もありません。しかしそれでまた話を聞くフランス。ひょっとしたらイギリスに対して彼なりの気持ちがあるかも知れません。

「インスタントラーメンは作られるよな」

「日本のあれだよな」

「ああ、作ってみろ」

ここでさっとそのインスタントラーメンを出します。用意がいいです。

「ほら、頼むぞ」

「ああ、湯を沸かしてだな」

「そんなの聞くまでもねえだろ」

そうは思いながらも作らせます。それで暫くして出て来たのは。

「作ってみたぞ」

「・・・・・インスタントラーメンなんだぞ、おい」
「だから水の中にそのまま入れて煮込んだんだよ。湯になってから三分な」
「・・・・・・何処のミスターの息子なんだよ、おい」
なおこの後寒いのでドラム缶にガソリンぶっ掛けて火を点けて大爆発を起こしたイギリスでした。まさに二代目ミスターに匹敵する逸材であります。

第二百十七話　　完

２００８・６・４

第二百十八話　上には上がいるんだぜ

第二百十八話　上には上がいるんだぜ

イギリスはこんなのですが太平洋にも逸材がいます。あの韓国です。

彼は普段激辛ながらそこそこ味付けには定評があります。中々のグルメでもあります。

それでこのことに関しては評判のいい彼なのですが時として。誰もが我が目を疑って吹き飛ぶ様な凄まじい料理を作ってしまうのです。それは。

「できたんだぜ！素材を生かした新メニュー！」

「素材を生かしたですか」

「それは期待できるね」

「でもいつもの激辛じゃないあるか？」

「今日は大蒜も唐辛子も使っていないんだぜ！」

家に招いている日本、アメリカ、中国に対して元気よく答えます。もっとも彼の元気というのは多分に非常に危険な匂いがする場合が多いのですが。

「だから安心するんだぜ！」

「辛くない韓国さんの料理」

「何かそれを聞くと新鮮だね」

「じゃあ早く持って来るよろし」

「さあ、食うんだぜ！」

いきなり何処からかその料理を出してきました。それは。

何と硬い御飯の上に鮎が頭から突き刺さっています。鮎の尻尾だけが見えています。それも何尾もで尚且つ半生です。これは酷い。

「ウリジナルメニュースケキヨ丼！！気合入れて食うんだぜ！」

「・・・・・スケキヨ丼ですか」

「何か食べただけで凄いことになりそうなんだけれど」

「味見してみたあるか？」
「味見！？俺の料理はいつも最高に美味いに決まってるんだぜ！」
つまりしていないのです。
「わかったら早く食うんだぜ！無料なんだぜ！」
「・・・・・わかりました」
「じゃあ覚悟を決めて」
「食べるある」
その後見事胃薬のお世話になった三人でした。人は時として恐ろしいことをしてしまうものです。韓国はその頻度がかなり高いだけなのです。ついでに言えばその内容も。

第二百十八話　　完

２００８・６・４

第二百十九話　イギリス式寿司

第二百十九話　イギリス式寿司

どうにもこうにもある意味において韓国にあっさり抜かれてしまった感のあるイギリス。それでも彼は諦めてもいないし認めてもいませんでした。

「俺は料理が下手なんだじゃねえ」

「いい加減認めろっての」

フランスはそんな彼に呆れたように声をかけます。

「言っておくがあの生徒会長は普段は御前よりずっと料理上手だからな」

「じゃあ俺はあのスーパー馬鹿以下かよ」

「だからそれを認めろつってんだろ」

フランスの言葉は容赦がありません。しかし駄目出しをされたら余計に燃え上がる性質のイギリス、ここで一念発起です。あることを決意するのでした。

「だったら俺はやってやるぜ」

「無駄な努力パート幾つだ？」

「俺は寿司を作ってやる」

フランスの言葉なぞお構いなしに宣言です。

「寿司だ、やってやるぞ」

「まあ頑張れ」

「日本の天握りが美味かったからな、あれを作ってやる」

かくしてお寿司を作りました。それを日本に対して見せます。

「さあ日本、寿司を作ってみたぞ」

誇らしげに日本の前で胸を張ってさえいます。

「是非食ってくれ、御前のもの程じゃないと思うが美味い筈だ」

「お寿司、ですか」

「そうだ、寿司だ」

イギリスはそのつもりです。しかし日本は首を傾げるばかりです。
「・・・・・これはお寿司には見えないのですが」
「何っ!?」
「・・・・・・幾ら何でもこりゃないだろ」
日本の横でフランスが頭を抱えています。何とそのお寿司とは御飯で天麩羅を巻いてその上に海苔を巻いたものです。正直言ってお握りにしか見えません。
「これはよ」
「何が悪いんだよ、一体」
わかっていないのは本人ばかり。全く以って料理の才能に見放されているイギリスであります。

第二百十九話　　完

２００８・６・５

第二百二十話　そういえば食べない

第二百二十話　そういえば食べない

イギリスのお寿司は見事大失敗に終わりました。しかしこの日本のお握りというものも実は結構評判が分かれてしまっているのです。

「僕は海苔はいいよ」

アメリカは困った顔をして海苔を遠ざけます。

「海草とかそういうのって気持ち悪くてね」

実は彼は海草とかは食べないのです。ステラーカイギュウみたいにむしゃむしゃと食べても海草は食べないのでありました。

「僕は冷えた御飯は絶対無理あるぞ」

中国は冷えた御飯には手をつけません。

「それだけは食べないある」

彼は冷えた御飯は何があっても食べません。前にそれを出されてむっとした顔になったことさえあります。それ程嫌いなものなのです。

こういった感じで実は人気が分かれる日本のお握りですがここで意外な食べる人が。といってもいつも日本の側にいる人なので誰もが知っています。

「お握りも俺が起源なんだぜ！」

韓国です。彼はこう言ってはばからず日本が握ったお握りをどんどん食べています。

「アメリカの兄貴も中国の兄貴も食べないんなら貰います！俺の起源のお握りは最高なんだぜ！」

「最高なのはいいけれど」

「お握りは御前起源ではないあるぞ」

こういう言葉は自然と耳を通り抜ける不思議な構造をしているのでケンチャナヨです。韓国は両手にお握りを持ってそれをどんどん口の中に放り込んでいます。

「美味い、美味いんだぜ！」
「美味しいのはわかりましたが韓国さん」
「何だぜ？」
日本の問いに動きを少しだけ止めます。
「何故貴方は私のことをいつも嫌いと言いながら何かと私の家に来て私の料理を誰よりも召し上がられるのですか？」
「それは日本以外は誰でも知ってるっつうかうざいんだけれどよ」
「どうせ俺達のことは視界に入らないんだろうがな」
イギリスとフランスは韓国の横で愚痴たれています。何故か韓国には全く相手にされず彼がいる場では端っこにいるだけの二人なのでした。

第二百二十話　完

２００８・６・５

第二百二十一話　やる気を殺いでみよう　☆

第二百二十一話　やる気を殺いでみよう

日本とアメリカの仲が悪かった時のことです。アメリカの上司がふとアメリカに対して尋ねました。

「御前がやる気をなくす場合はどんな時か？」

「自由の女神が不細工になったらやる気なくすぞ」

中々アメリカクオリティな言葉です。実に彼らしくていい感じの返答です。

「それが一番だな」

「よし、それだ」

上司はアメリカのその言葉に我が意を得たりといった顔で頷きました。

「象徴だ！」

「象徴！？」

「そうだ、日本の象徴の富士山を赤くしてやるのだ！」

こう言い出したのです。

「そうすれば流石の日本人もやる気をなくすだろう。どうだ？」

「よし、じゃあ早速！」

アメリカも乗り気でした。それで実際にやろうとしたのですがこの計画は結局のところ実行には至りませんでした。それが何故かというと。

「大きかったんだよな」

アメリカはその時のことを思い出して素っ気無く日本に言います。

「それで駄目だったんだ。僕は頑張るつもりだったけれど上司がギブアップしちゃってね」

「あの、それですけれど」

日本は本気でそのアメリカに対して言ってきました。

「樹海とか危険なんで止めて下さいね」
「樹海!?それって食べられるの?」
「食べられません。というか下手したらそのまま生きて帰られないんで絶対に入らないで下さいね」
「そうなんだ」
実は富士山の周りについて何も知らなかったアメリカでありました。本気で富士山を真っ赤にしようと考えていたのがかなり凄くもありますが。けれど本人はこのことに関しては何故か自覚がないのでした。これもまたアメリカチックではあります。

第二百二十一話　完

２００８・６・６

第二百二十二話　富士山も色々

第二百二十二話　富士山も色々

そのアメリカが真っ赤にしようとした富士山ですが。実は赤い富士山もあるのです。

「これです」

こう言って皆に紹介したのは浮世絵です。そこに描かれているのは何と赤い富士山です。既に描かれていたのです。

「昔の絵ですが」

「うわあ、凄い絵だね」

イタリアもその浮世絵を見て驚くことしきりです。

「写楽とか北斎だよね」

「そうです。これは北斎です」

「凄いよ、本当に」

絵では定評のあるイタリアも感心してばかりです。

「こんな絵が描けるなんて日本は凄いや」

「全くだ。赤い富士山か」

あのプライドの高いフランスも素直に認めています。

「このセンスには脱帽だな。見事なものだ」

「有り難うございます」

「よし、閃いたぞ」

しかしフランスも伊達に絵で自信があるわけではありません。ここでふと頭の中に何かが宿ったのです。

「この浮世絵を俺の絵にも取り入れてやる」

「あれっ、兄ちゃんの絵とは全然違うのに？」

「だからだよ。色々と方法があるんだよ」

不敵に笑ってイタリアに応えます。

「まあ見ていなって」

「うん」
こうして描きだしたフランス。出来上がったその絵を見てみると。
「何と・・・・・・」
「これはまた」
「ゴッホだ」
その派手な色彩でこれでもかという程絵の具を塗りたくったとてつもない絵を皆に見せています。
「これを描けたのは浮世絵のおかげだな」
額の汗をぬぐいながら満足した顔で述べます。絵も色々とお互いに影響し合っているようです。少なくともフランスのこの絵は日本あっての物種なのは間違いありません。

第二百二十二話　　完

２００８・６・６

第二百二十三話　ＫＹ軍団

「なあイタリア」
アメリカはある時イタリアに対して声をかけました。
「さっき空気読めってイギリスに言われたんだけれどさ」
「うん」
「何処の本屋にあったらあるんだい？」
「ああ、それ俺も言われたよ」
イタリアも同じことを言われていたのでした。
「イギリスにね。何か俺達ばかり言われるね」
「そうだよな。それって作者の名前何ていうのかな」
「どおくまんじゃないの？」
随分と濃い漫画家の名前が出て来ました。大阪テイストであります。
「確か」
「どおくまんは暴力大将か花園高校だったんじゃないの？」
「そうだったっけ」
何気によく知っているアメリカです。懐かしの八十年代週刊少年チャンピオン番長テイストです。ここで石山東吉だの松田一輝だの積木爆だのと来れば完璧です。学園ものではなく完全に訳のわからない日本全土を巻き込んだ番長抗争ものとなってしまいます。日本の家の漫画にはかつてこうした壮絶極まる世界もあったのです。何故か韓国ではそれが現実のものになってしまったようですが。
何はともあれその本を二人で探してみますがありません。イタリアはどうしてないのかわかりません。
「あれっ、どうしてないんだろう」
「きっとある筈ないんだけれど」
「イギリスもせめて作者名と出版社位教えてくれればいいのに」

「全くだよ。けれどないんなら仕方がないね」
「・・・・・うん」
実はわかっているアメリカですがわざとイギリスに乗っているのでした。けれどそのことは口には出さずにそのまま化けているのです。案外そうしたとこもあったりする彼であります。口に出すことはないのですけれど。

第二百二十三話　　完

２００８・６・７

第二百二十四話　マイペースな人達

「なあギリシア」
「何だ？」
「空気って何や？」
のどかな野原で。スペインは並んで座っている相方のギリシアに対して尋ねてきました。
「最近空気読めとかそういう言葉出るやろ。あれって何や？」
「それはわからない」
ギリシアはぼんやりとした顔で前を見ながらスペインの問いに答えます。
「俺もな」
「そっか、わからへんか」
「わからないが大切なものだな」
スペインは今度はこう答えました。
「何か話ではな」
「そうやな。空気ないと人間生きていられへんからな」
ここで妙な勘違いが入りました。しかしこれがまた実にスペインらしく自然なのが困ったことではあります。
「やっぱりそれ考えたら大事やな」
「そうだな。ところでだ」
「何や？」
「空気を吸わないか」
ギリシアもギリシアでずれてきています。これまた彼にとっては自然であります。
「前にある川が奇麗なせいかここの空気は美味い」
「そういえばそやな」
「たまにはこういう場所でゆっくりしながらな。どうだ？」

「ええな、じゃあそうするか」
のどかにギリシアの言葉に頷くのでした。
「今日はゆっくりしてたらええな」
「たまにはな」
そう言いつつ今日ものどかに過ごすスペインとギリシアでした。
のどかに過ごしても一日は過ごせるのであります。平和にマイペースに。

第二百二十四話　　完

２００８・６・７

第二百二十五話　空気は凍るもの

第二百二十五話　空気は凍るもの

「空気っていうと？」
ロシアにとって空気とは何なんでしょうか。リトアニアが恐る恐るロシアに対して尋ねるのでした。
「空気がどうかしたのかな」
「は、はい」
震えながらもロシアに対して尋ねます。
「空気が読めるかどうかですけれど」
「読めるよ」
穏やかに笑ってのロシアの返事です。
「僕もね。それは読めるよ」
「そうなんですか」
リトアニアはそれを聞いてよかった、と思うのですがところが。
ここでロシアの取った行動は普通の国では絶対にないものでした。
「ほら、こうするじゃない」
ふうっと息を出します。すると。
空気が凍ってそれが文字になります。それを読んでみせます。
「ホールドニースメルチだね」
「は、はあ。そういう意味ですか」
「こうしたら読めるじゃない。違うかな」
にこりと笑ってリトアニアに尋ねます。
「僕はこう思うんだけれど」
「そうですね。それだと読めますね」
「僕だってこうすれば空気は読めるよ」
ロシアはまた言います。
「ちゃんとね」
「空気はそうして読むことではないような」

「この前僕間違えて空気を読んで」
「ラトビア、もう言わないでおこうよ」
意味は違うとわかっていても何も言えないバルト三国。彼等は彼等で空気を読まないと生きていけないのです。ラトビアはかなりできていないかもですが。もっともそのせいで不幸に遭うというのは実に不幸なことではあります。

第二百二十五話　　完

２００８・６・８

第二百二十六話　中国兄貴の告発

第二百二十六話　中国兄貴の告発

「空気を読めない奴あるか？一人最強を知っているあるぞ」

中国が忌々しげにこう答えます。

「あいつのあの馬鹿っぷりにはほとほと参っているある」

まるでロシアに対して言うように嫌悪感を見せている中国。彼がそこまで言う相手とは果たして誰なのでしょうか。

「全くあの大馬鹿三太郎は」

「マンセーーーーーーーーーーッ！！」

ここで無意味なまでにハイテンションな声が聞こえてきました。

「俺って空気を作り出すことができるんだぜ！」

韓国登場です。彼はそのハイテンションなまま発言を続けています。

「こうやって息をするだけでいいんだぜ！空気を作っているんだぜ！」

かなり何を言っているのかわかりません。

「さらに俺は燃やすの大好きなんだぜ！これで空気を作っているんだぜ！しかも煙文字を読むのも大得意なんだぜ。俺は空気を読むことの天才なんだぜ！」

「あの馬鹿に空気を読む技術を身に着けさせれば」

中国はそんな彼を忌々しげに見ながらさらに言います。

「僕はどれだけでも御馳走してやるある。どうあるか？」

「・・・・・遠慮します」

「不可能なことだと思います」

「多分イギリスさんがグルメになることよりも」

バルト三国はもう最初からギブアップでした。

「世の中こんなに空気が読めない人がいるなんて」

「僕なんかそれだけで毎日死にそうなのに」

「世の中何て不公平なんだ」
「さあ、今日もあちこちに遊びに行ってやるんだぜ！」
三国の嘆きなぞ韓国の耳には入りません。
「ウリナラマンセーーーーーーーーッ！」
最早空気を読もうということすら完全に訳がわからない斜め上に解釈している人もいるのでした。

第二百二十六話　　完

２００８・６・８

第二百二十七話　こんな人もいます

第二百二十七話　こんな人もいます

日本の家にはかなり変わった人がいます。職業は脚本家で小説家で現場監督で用心棒ですがこれがまたかなりの人です。

書くのが異常に早く傲慢な態度をわざと取ってそれでアンチを作って楽しんでいます。しかもそれに対するコメントがまたかなりのものです。

「いいんだよ！それが面白いんだから」

こんな態度です。

料理も好きでやたらと話はダークネスなのにギャグも入れたりして。かなり独特の作風を誇っています。そんな人ですのでかなり目立ちます。挙句にはこんなことも引き起こしました。

「あいつとあいつの会話の最後よお」

スコッチを飲みながら脚本を務めたある番組の打ち上げ会で話をしています。

「おめえの禿で締めといたんだけれどよお」

本人を前にして堂々のコメントです。

「プロデューサー連中に反対されてよお。ちっ」

言わなくていいことを平然と言います。とかく物凄い人です。

それで賛否両論な人なのですがこの人を見て憧れた人がいます。

全く正反対の個性を持っているラトビアです。

「いいなあ、羨ましいなあ」

こう言って尊敬することしきりです。

「僕もあんなふうに好き勝手にやってみたいなあ」

こう思うのでした。憧れです。けれどそれは無理な憧れでした。

「けれどこれロシアさんにやったらどうなると思う？」

「簡単に想像できます」

リトアニアに対して答えます。

「それこそもう」
「だから絶対に真似しちゃ駄目だよ」
「・・・・・はい」
わかっているからこそ絶対に出来ないのでした。憧れていてもできることとできないことがあるのです。

第二百二十七話　　完

２００８・６・９

第二百二十八話　ポテト

イギリスもジャガイモを食べます。ドイツ程ではないですがやっぱり食べます。ただしその際に一つ面白い癖があったりします。

「フライドポテトな」

この呼び方にこだわるのです。

「これはフライドポテトだ」

「フレンチポテトではないのですか」

「そう、フライドポテトなんだよ」

たまたま家に遊びに来ていた日本に対して説明しています。見ればそのフライドポテトらしきものが焦げた目玉焼きと一緒に雑然と置かれています。

「俺はフライドポテトを食べているんだよ」

「間違ってもフレンチポテトではないのですね」

「あいつがジャガイモなんて食うものか」

勝手にそういうことにしてしまいたいようです。

「だからフライドポテトなんだよ」

「成程」

「それで日本」

「はい」

ここで話が変わります。

「そっちでもジャガイモ食うんだよな」

「ええ、カレーに入れますし」

「そうか、カレーにか」

「あと煮っころがしにしたり」

このことも話します。

「そうして食べますけれど」

「カレーか。最近好きなんだよな」

「そうなんですか」
「俺作るの得意なんだよ」
自分ではこう思っているのです。
「何なら今度御馳走してやるよ」
「前向きに考えさせて頂きます」
こっそりとこの申し出は断られるイギリスでありました。何気に日本もイギリスの料理のことは知っているのでありました。知らぬは本人ばかりなりであります。

第二百二十八話　　完

２００８・６・９

第二百二十九話　ロシアのやる気　☆

第二百二十九話　ロシアのやる気

さて、アメリカは今度はロシアのやる気を殺ごうと上司に言われました。この上司も何気に諦めの悪い人みたいです。もっともアメリカとロシアの仲の悪さを考えれば当然のことでありますが。

「御前はロシアに二十五センチ用のコンドームを大量に注文しろ」

「二十五センチか」

「そうだ、その大きさだ。いいな」

「わかったぞ」

こうしてロシアにそのサイズのコンドームを注文することになりました。アメリカは早速ロシアに電話をかけます。

「よう、ロシア君に聞きたいことがあるんだ」

「何？」

まずはオーソドックスに話がはじまります。

「二十五センチのコンドームとやらを作られるかい？」

「えええっ！？」

ロシアはそれを聞いてかなり驚いています。

「そんなサイズ作ったことないよ！」

「ないのか」

「そうだよ、そんなサイズ」

ロシアはもう困っています。

「けれど僕の上司がロシアのがいいって言っていてね」

「わかったよ。じゃあ頑張ってみるよ」

アメリカに強く頼まれたのでロシアも応えました。けれどあまり自信はなさそうです。

「けれど期待はしないでね」

こうしてロシアのそのサイズのコンドームを注文しました。する

と。

「何かとても小さいものでも頼んだのかい？」

何と来たのはＸＳサイズのコンドームでした。ロシアの作るの大変だったという書き添えまでついています。ロシアにとっては二十五センチで小さいようです。九センチという人もいる世界なのに。ある意味凄いことであります。

第二百二十九話　　完

２００８・６・１０

第二百三十話　コンドームの恩恵

第二百三十話　コンドームの恩恵

あまりおおっぴらには言えないですがこのコンドーム。皆を凄く助けています。どういうふうに助けているのかはあえて言いませんがそれでも助けているのは事実です。特にフランスは昔のことを思い出して言うのでした。

「あの時は大変だったな、本当に」

「あの時って？」

「だからよ、御前のとこに攻め込んだ時だよ」

イタリアに対して言います。かなり大昔のお話です。

「あの時な。コンドームさえあれば」

「コンドームさえあれば？」

「あんなとんでもない病気に襲われずに済んだんだよ」

その時を思い出しての言葉です。

「ったくよお、あの時は地獄だったぜ」

「そういえばあの時兄ちゃんお家の人達が」

「身体にあちこち紫色の斑点が出来るわ痛くなるわで地獄だったんだよ」

その時のことを思い出しただけで身体が震えるフランスでした。

「あの時はな」

「俺のところにもそういう人一杯いたよ」

「しかもよ、この前のドイツとの戦争の時なんか」

忌まわしい思い出はまだ続きます。

「上司の一人があの病気で頭おかしくなって大変だったんだよ」

「そうだったんだ」

「ったくよお、何であんな病気があるんだ」

そのことを疎ましがることしきりです。もっともイタリアでもそれで異常があったのでは、と見られている上司が昔いました。スペ

インの家から来た鋭利な策謀家の美男子の上司であります。黒い服が大好きな人でした。

「せめてコンドームさえあればな。防げたのにな」

「けれどあったらあるだけ使うんじゃないの？兄ちゃんの家だと」

「そこは御前と同じだな」

そういうところは似ているところもある二人なのでした。

第二百三十話　　完

２００８・６・１０

第二百三十一話　イギリスの風邪　☆

第二百三十一話　イギリスの風邪

イギリスが風邪をひいてしまいました。まあ誰でも風邪はひきます。イタリアだのポーランドだの韓国だのは何故か風邪を知らないようですが。

とりあえずイギリスが風邪をひいてしまったのは事実です。それを聞いて真っ先にやって来たのはやっぱりこの人でした。

「ざまーーーみろ！日頃の行いが祟ったんだな！」

フランスです。何だかんだでイギリスのところにやって来てこんなことをおお威張りで言って悦に入っています。ところがイギリスに反応がないので。

「ってマジかよ」

イギリスが無反応なので少し心配になってきました。

「全然反応ねえじゃねえか。こいつまさか」

「・・・・・・・・・」

「お、おい！」

ここにきて慌ててイギリスに声をかけます。

「本当に大丈夫なのか！ま、まずい！」

一人で騒ぎだしました。こうなると本気で心配です。

「どうしたんだ、本気でやばいのか！？」

「フランスかよ・・・・・・」

「おっ、気付いた」

自分の馬鹿騒ぎのせいだとは気付いていません。あしからず。

「俺はいいから御前あっち行け・・・・・・」

「とりあえず生きてるみたいだな。で、御前何が欲しいんだ？」

「何もいらない」

苦しい顔でフランスに対して告げます。

「御前も風邪気味だろ？だから・・・・・・」

「違う！イギリスじゃねえ！」
何しろイギリスがフランスを気遣うのです。天変地異が起こったかのように。
「イギリスに変なウィルスが感染したーーーーーーーーーっ！大変だーーーーーーーーっ！」
「・・・・・御前、俺を何だと思ってるんだ」
風邪をひいてもやっぱりイギリスとフランスの関係は相変わらずなのでした。そもそもフランスは何故いつもあえて嫌いな相手のところにやって来るのでしょうか。

第二百三十一話　　完

２００８・６・２１

第二百三十二話　風邪って何だ

第二百三十二話　風邪って何だ

「イギリスが風邪？」
「うん、そうらしいんだ」
ポーランドはケーキを食べながらリトアニアとお話中です。ここでもリトアニアが作ってくれたお菓子をやっぱりリトアニアが淹れてくれたコーヒーと一緒にです。尽くす奥さんも大変です。
「かなり酷くて。イギリスさん参ってるそうなんだ」
「風邪ねえ」
ポーランドはケーキの苺にフォークを突き刺しながら話を聞いています。
「そういや風邪って辛いんか？かかったら」
「かかったらってポーランド」
リトアニアは今のポーランドの言葉に対して顔を顰めます。
「ひょっとして今まで風邪にかかったことないの？」
「風邪？俺身体丈夫だしーーーーー」
ポーランドの返事はこうでした。
「そんなん全然ないし。リト、御前はあるん？」
「そりゃあるよ。俺だって色々あるから」
内心呆れたものを感じつつポーランドに答えます。
「それでもポーランド風邪ひいたことかなかったんだ」
「だからわからんのよ。風邪ってどんなんか」
そのことをまた言ってみせます。
「イギリスにはお見舞い持って行かないと駄目かな。何がいい？」
「そうだね。あの人味覚はあれだから」
もう誰もが知っているイギリスの料理のセンス。その味覚たるや最早何処ぞの料理番組の女性タレント達すら凌駕しかねないものがあるのです。

「お薬にしようよ。風邪薬」
「じゃあタムシチンキがええのん？」
「・・・・・それ、水虫とかタムシのやつだから絶対に駄目だよ」
風邪をひかないからそうしたことはわからないポーランドでありました。

第二百三十二話　　完

２００８・６・２１

第二百三十三話　風邪とハンバーガー　☆

第二百三十三話　風邪とハンバーガー

イギリスの熱は収まりません。フランスもいい加減心配になってきました。やっぱりイギリスのことが気になって仕方のないフランスであります。

「まずいな、これってよ」

体温計は四十度です。

「かなりやばいだろ、こりゃ」

「やあイギリス！」

ところがここで新たな来客です。

「新しい飛行機を作ったんだけれど」

「んっ、アメリカかよ」

「ああ。ところでイギリスは何で寝ているんだい？」

「見てわかるだろ」

少し呆れながらアメリカに答えます。

「風邪だよ」

「風邪？」

「風邪引いて寝込んじまったんだよ」

「ああ、何だそんなことかい」

アメリカはそれを聞いて平然として答えます。

「それならこうすればすぐに治るよ」

そう言って出してきたのは何とハンバーガー。それをイギリスの頭の上に置いたのです。何ともシュールな光景であります。

「あれ、全然治らないな」

「当たり前だよ」

フランスは完全に呆れながらアメリカに言葉を返します。

「何だよこれ、ハンバーガーじゃねえか」

「僕ならこれで一発で起き上がるんだけれど。そもそもフランス」

「何だよ、今度は」
「風邪って何なんだい？」
真顔でフランスに尋ねてきました。もう何も言葉がないフランスでありました。
「・・・・・嘘だろ、それって」
勿論アメリカも風邪はひくわけで。わざと言っている実に癖の悪いところもあるアメリカでありました。

第二百三十三話　　完

２００８・６・２２

第二百三十四話　ロシアと風邪

第二百三十四話　ロシアと風邪

寒い国でも風邪はあります。当然ながらロシアでも風邪をひくことがあります。そうした場合彼はどうやってその風邪を治すのでしょうか。

「リトアニア、ウォッカを何瓶も持って来て」

「はい」

まずは親友のウォッカです。

「それでね。替えの下着を何枚も用意して」

「はい、こちらに」

シャツにトランクスが何枚も出されます。よく見れば大柄なロシアに相応しいかなりのサイズのものです。

「それで。こうやって」

今度は服を何枚も何枚も着込みます。大きなロシアがさらに大きく見えます。

「これでいいや。後は寝ておくよ」

「お薬はいいんですか？」

「うん、いらない」

にこりと笑ってリトアニアに答えます。

「ウォッカがあるからね」

「そうですか」

こうして寝ながらウォッカをどんどん飲んでそのうえで眠り続けます。そうして次の日にはもう。

「やあ、おはよう」

すっかり元気になってベッドから出て来ました。

「汗かいたらすっかりよくなったよ」

「汗をかいたらですか」

「うん。風邪を治すにはまずそれだからね」

穏やかな笑みと共にリトアニアに述べています。
「お薬よりもね。僕はこっちの方がいいんだよ」
「そうだったんですか」
実は結構ナイスなロシアの風邪の治し方でありました。案外医者としての才能があるようです。もっともかつての上司は歯医者と称して歯を馬鹿力で引っこ抜くという世にも恐ろしいことをしてはいましたが。

第二百三十四話　　完

２００８・６・２２

第二百三十五話　イタリアには甘い　☆

第二百三十五話　　イタリアには甘い

「暇だな」
「そうだな」
いつもの様に二人だべっているイギリスとフランス。何気に友達が少ないのかもです。ここでフランスがふと言ってきました。
「暇だしドイツの悪口でも言いふらすか」
「暇潰しで情報操作すんな」
とは言ってもフランスの話に乗るイギリス。早速サングラスだけで変装してあちこちにドイツの野郎裏であくどいことしていてな」
「おい聞いたかドイツの野郎裏であくどいことしていてな」
「それはもう酷いの何のって」
二人で頑張って言いふらしています。その結果。
「えっ、ドイツって酷いな」
「最悪だよ、それ」
こうしてドイツの悪い噂が広まっていきます。このことで二人は上機嫌になりました。
「おいおい、何か凄い勢いでドイツの悪い噂が広まっていくな」
「ああ、そうだな」
イギリスは得意満面の顔でフランスに応えます。
「やってみると意外と上手くいくものだな。じゃあ次は」
抜け目のないイギリス、ここですかさず次の手を打ちました。
「イタリアのでも考えるか」
「ええっ！？」
しかし何故かここで驚きだすフランス。
「ちょっと待て！」
「！？どうしたんだよ急に」

「確かにあいつはお馬鹿だ！」
まずは馬鹿にしています。
「弱いしヘタレだ！」
「そのままじゃねえかよ」
「だが悪い奴じゃないんだ、悪い奴じゃ！」
何故か必死にイタリアを庇います。
「だからあいつには止めておこう。いいな」
「・・・・・いきなり何なんだよ、必死になってよ」
イギリスにはわかりませんでした。何故かイタリアにはあまり何も言わないフランスでありました。

第二百三十五話　　完

２００８・６・２３

第二百三十六話　本当に何も言わない

第二百三十六話　本当に何も言わない

とかくドイツとイギリス、あとオーストリアには色々と言うのがフランスです。口の悪さとか言わなくてもいいことを好んで言うところはラトビアや日本の家の某脚本家さんと似ているのでしょうか。これがとにかくしつこくてボキャブラリー豊富なのです。

「ったくよお、ゆで卵も作れねえ海賊あがりの幽霊マニアがよ」

「ジャガイモとソーセージばっかなんだよ。禿と痛風になっても笑ってやるよ」

「音楽と菓子以外に何かあるのかよ。ベートーベンは御前の国の作曲家じゃねえぞ」

こんな調子です。趣味は悪口ではないのかと思えるレベルです。けれどこれがイタリア相手になると。

「ま・・・・・まあそうだな」

急に歯切れが悪くなるフランスであります。

「お馬鹿ちゃんだな。まあそういうところだな」

不思議と馬鹿にはしているようですがあまり何も言いません。それを不思議に思ったセーシェルがフランスに対してインタヴューします。

「どうしてイタリア君には何も言わないんですか？」

「だってよ、悪い奴じゃねえだろ」

ここでも少し戸惑いながらの返答です。

「だからよ。どうしてもな」

「言わないんですか」

「だから。あいつはいいだろ？」

何か話を強引に終わらせようとさえします。

「あいつは弱いしヘタレじゃねえか。それでいいんだよ」

「いいって」

「それよりよセーシェル」
挙句に話を誤魔化してきました。
「ブイヤベース作ろうぜ、御前のところの魚や貝でな」
「はあ」
「ジャガイモのソースでな」
「ブイヤベースはトマトですよ」
やっぱり動揺しているフランスでした。何だかんだでイタリアには言わないフランスであります。

第二百三十六話　　完

２００８・６・２３

第二百三十七話　イタリアに言っても　☆

第二百三十七話　　イタリアに言っても

フランスはイタリアにはあまり言わないのですがイギリスはここで発想を少し転換してきました。イタリアに対してドイツの悪い噂を流してみることにしたのです。こういうところが本当にイギリスらしくていいです。

変装をして彼に近付いて。

「ドイツが御前のことを嫌いだって言っていたぞ」

「えっ！？」

いきなり言われたイタリアはイギリスだと気付かず驚きます。

「御前はヘタレで一人じゃ何も出来ない役立たずだからもう家に遊びに来るのは止めて欲しいってさ」

「そんな、ドイツがそんなことを」

「本当さ。だからドイツと付き合うのは止め・・・・・・」

「ねえドイツ」

何とイタリアはここでドイツ本人にそのことを聞くのでした。

「俺のこと嫌い？」

「って直接聞くのかよ！」

これにはイギリスもびっくりです。予想外でした。

「何て野郎だ」

「それでどうなの、ドイツ」

「ふむ、そうだな」

尋ねられたドイツは戸惑いながらイタリアに対して答えます。

「嫌い・・・・・・ではない」

「そうなんだ、よかった」

かくしてこの工作は失敗です。イギリスは落胆することしきりです。フランスに慰められる程度です。

「何かすげーー悔しいんだけれどよ」

イギリスはフランスとバーで飲みながら背中を丸めています。
「あの仲良しっぷりが何か腹立つよな」
フランスもそれを認めます。どうにも友人の少ない二人のようです。

第二百三十七話　　完

２００８・６・２４

第二百三十八話　イタリア兄は

第二百三十八話　　イタリア兄は

イタリアはドイツと仲がいいです。けれどイタリア兄は違うので問題は複雑です。何しろ彼はドイツが嫌いなことで有名ですから。ただし彼が一方的に嫌っているだけではあります。

「ったくあのソーセージ野郎の何がいいんだよ」

「全くだ」

「何処がいいんだよ」

それを見たイギリスとフランスがすかさずそのイタリア兄に吹き込んできます。こうした時の動きの速さは流石です。変装も完璧です。

「あいつな、色々と悪いことしているんだぜ」

「学園のドンになろうとしているしな」

「そんなことはわかってるんだよ」

イタリア兄はむっとした声で二人に答えます。二人が誰かはわかっていませんがそれでも言うのです。

「あんな大柄でマッチョの何処がいいんだ」

「それは関係ねえだろ」

「ちょっと違うんじゃねえのか？」

逆に二人が突っ込みます。しかしイタリア兄は引っ込みません。

「あいつは何かっていうとドイツドイツだ。オーストリアといいどうしてあの系列に弱いんだよ」

「御前もちょっとは血が入ってねえか？」

「そういえばそうだよな」

「いいんだよ、俺のことは」

自分のことは棚に上げます。

「あの野郎、毎年毎年大勢で観光旅行で来るしよ、騒がしくて困るんだよ」

「観光客はいいじゃねえか」
「御前もかなり儲けてるだろうに」
「それはそれこれはこれなんだよ。俺はとにかくあいつが嫌いなんだ」
「・・・・・そうか、わかった」
「俺達の出る幕はねえな」
イタリア兄に対しては工作の必要はありませんでした。けれど何か妙な悔しさを味わう二人でありました。上手くいき過ぎたらそれはそれで案外面白くないようです。工作も結構複雑で楽しみ方に癖があるものであります。これが結構。

第二百三十八話　　完

２００８・６・２４

第二百三十九話　白鳥の騎士

第二百三十九話　白鳥の騎士

イタリアの家と同じ位オペラが有名なドイツの家。とりわけ有名な作曲家といえばやはりワーグナーです。他にもかなりいますがやはりドイツといえばワーグナーです。

「やっぱり実に素晴らしいですね」

「うん、本当に」

今日は日本、イタリアを連れてそのワーグナーの作品を観ています。観ている演目はローエングリン、ワーグナーの代表作の一つです。

「この音楽とローエングリン自身がまた」

「実に素晴らしいよ」

「そうだな。ワーグナーの作品じゃ俺もこれが一番好きだ」

ドイツもそれは同じでした。舞台を見ながら話を続けています。

「色々と思い出もあるしな？」

「思い出といいますと」

「あの上司の人のこと？」

「ああ、あの人もそうだったな」

かつての上司のことを思い出します。あのチョビ髭の上司を。

「ワーグナー、特にこのローエングリンが好きだった」

「そうでしたね、本当に」

「あの人は特にね」

「そしてあの人もだったな」

ドイツの脳裏に遠い昔の記憶が蘇ります。

「あの人も」

語れば語る程昔のことが蘇ってきます。その記憶が彼を包んでいきます。

「白鳥の騎士」

ドイツはこの言葉を呟きます。
「あの人がなりたくてもなれなかったもの」
遠い遠い昔の記憶がはじまります。ドイツの心の中で。それは彼にとって決して忘れられない、懐かしくもあり腹立たしく美しく、そして悲しい記憶であります。

第二百三十九話　　完

２００８・６・２５

第二百四十話　バイエルンの上司

第二百四十話　バイエルンの上司

ドイツの数多い上司の一人でした。この人の名前をルードヴィヒといいます。

とても奇麗な顔をしていて背が高く。女の人なら誰でも惚れ惚れするような人でした。ルードヴィヒ王は幼い頃から古典が大好きである日オペラをドイツと一緒に観ることになっていました。

「ワーグナー？」

「はい、ワーグナーです」

ドイツは馬車の中で王に説明します。

「今はドイツにいません。問題を起こして」

「問題ねえ」

「他にも借金や差別発言や女性問題やらある人物ですが」

「とんでもない男みたいだね」

「否定はしません」

「女の何処がいいのだか」

王様は女の人が好きではありませんでした。だから今の言葉は自然に出たのです。

「けれどまあいいさ。それで演目は何だったかな」

「ローエングリン」

ドイツは静かに語りました。

「それです」

「ふん。ローエングリン」

話を聞いても別に期待していないようでした。

「まあ観てみるよ。いいね、それで」

「わかりました」

こうして王様ははじめてワーグナーの作品を観ることになりました。白鳥に曳かれた舟に乗り姫を救う白銀の騎士、彼の姿とその音

楽に触れた王様は。全てが変わってしまいました。
「ワーグナー、これがワーグナー」
観終わってからも。まるで魂を抜かれたかの様に呟くのです。
「何て素晴らしいんだ。これこそが僕の全てだ」
これが全てのはじまりでした。王とワーグナーの出会い、ドイツの白鳥への記憶はここからはじまるのでありました。

第二百四十話　　完

２００８・６・２５

第二百四十一話　即位してまずは

二百四十一話　即位してまずは　　第

ローエングリンを見てからというもの王様はワーグナーに夢中です。寝ても醒めてもワーグナーのことばかり考えていて彼の音楽を聴いてオペラを観るだけではありません。ワーグナーは本も書いていますがその本も貪るようにして読んでいます。

そして王様が遂に十八歳の若さで即位すると皆この物憂げな美男子の王様を熱狂的に迎えました。けれど王様が最初にドイツに言った言葉はこれでした。

「ワーグナーを僕のところに連れて来て」

「えっ、ワーグナーをですか」

「そう、今すぐに」

こうドイツに言うのです。

「僕のところに連れて来て。いいね」

「ですがあの男は」

「評判なんかどうでもいいんだ」

悪名高いワーグナーですが王様はそんなことには構いませんでした。

「それよりも僕はワーグナーと会ってその音楽を聴きたいんだ。いいね」

「どうしてもですか」

「そう、どうしても」

強い言葉になっています。

「聴きたい。だからね、御願いだよ」

「・・・・・わかりました。それでは」

内心思うところが色々ありました。けれど上司の言葉ですから逆らえません。ドイツは自分の気持ちを押し殺して王様の言葉に従う

ことにしたのでした。
「すぐに探して連れて来ます」
「頼むよ。ワーグナー」
夢うつつの感じでワーグナーの名前を呟くのでした。
「もうすぐ貴方に出会えるのだ。やっと」
こうして王様の前にワーグナーは連れて来られました。王様ははじめてワーグナーに出会って感激することしきりでした。けれどこれが。悲劇のはじまりだったのです。

第二百四十一話　　完

２００８・６・２６

第二百四十二話　ワーグナーの横暴

第二百四十二話　ワーグナーの横暴

王様はまずワーグナーが抱えていた多額というレベルでは済まされない借金を全て肩代わりしました。当然バイエルンのお金からです。

「あの、あれだけの額の借金を全てですか」

「いいじゃないか、これ位」

王様は個人の借金とは思えない額を肩代わりしても平気でした。

「ワーグナーは偉大な音楽家だよ。その彼に不自由があってはならないから」

「ですが今度は政治に口出ししますし」

「彼は立派な思想家でもあるんだ」

王様はこのことからもワーグナーを認めているのです。ワーグナーも自分は政治にも一家言あると信じて疑っていません。実際にそれでお尋ね者となっていたのです。

「だからそちらでも頼りにしているよ」

「女性問題は」

「芸術家には付き物さ」

これも気にしていません。

「僕は女性には興味はない。だから構わないさ」

「左様ですか」

「それよりもだね」

ここで自分からドイツに対して言います。

「ワーグナーにどんどん援助してあげよう」

「作曲にですね」

「それだけじゃない。歌劇場も造ってあげるんだ」

「ワーグナーの為だけに！？」

「そう、ワーグナーは凄いことを言ってるんだよ」

王様は恍惚とした顔でドイツに語ります。
「自分の作品だけを上演する歌劇場を造るんだって。凄いじゃないか」
「確かに」
ドイツにとっては馬鹿げたことです。けれど王様は違う意見です。
「だから是非。生活も不自由させてはいけないし作曲の為にもね」
王様はここから少しずつ何処か世間とずれていきました。世間が、そして他人と会うことが嫌になってきてしまったのです。王様でいることに疲れてしまったのでしょうか。そうして段々と変わっていって。悲劇が進んでいくのでした。

第二百四十二話　　完

２００８・６・２６

第二百四十三話　少しずつ

第二百四十三話　少しずつ

王様はワーグナーのことばかり考えて。遂にはこんなことを言い出してきました。

「お城だ」

「お城！？」

「そう、お城を建築するんだ」

こうドイツに対して命じるのでした。

「白鳥の城を。あちこちに一杯建築するんだ」

「あの、陛下それは」

ドイツはその王様に対して戸惑いながら述べます。もうお城の時代ではないのです。そんなものを建築しても全くの無駄だからです。お金も凄くかかります。唯でさえ王様はワーグナーのことでお金を随分と使っているというのにです。周りにとってもドイツにとってもとんでもないことです。止めるのも当然です。

「御言葉ですがあまりにも無意味ではないかと」

「いや、無意味じゃない」

けれど王様はドイツの言葉を聞き入れませんでした。

「ワーグナーの世界をお城にするんだ。だからいいんだ」

「ワーグナーの」

「そう、そして僕はそこに住むんだ」

またしてもとんでもないことを言います。

「一人でね。だから建築して欲しい」

「一人で・・・・・」

王様がそんなことをできる筈がありません。ドイツにとっても皆にとってもとんでもないことです。けれど王様は頑として聞き入れないのでした。

「最近僕とワーグナーのことに皆あまりにも冷たい」
一人呟くのでした。
「いいじゃないか。僕だって人間なんだ、もう一人でいたいんだ」
それが王様の願いでした、けれどこれが適うことはなく。王様はどんどん孤独を愛するようになりました。もう周りの人達とも会おうとはしなくなってきていました。

第二百四十三話　　完

２００８・６・２７

第二百四十四話　誰も診ていないのに

第二百四十四話　誰も診ていないのに

王様は次第に誰と会わなくなって夜に起きて昼に寝るようになって。どんどん孤独になってきました。それで周りの人達は王様をどうかしようと思いだしました。そしてそれは実行に移されました。彼等にとっても彼等なりにそうしなくてはならない事情があったのです。

「もう王様でいることは無理だよな」

「そうだな」

そう言い合うのでした。

「だからもう」

「退位して頂くしか」

「ドイツさん、そういうことで」

そのうえでドイツに話すのでした。

「御願いします」

「王様については」

「仕方ないか」

ドイツも王様には散々悩まされていたのでそれに賛成することにしました。個人的には色々思うところがあるのですがそれは心の中に押し殺しました。そのうえで皆と話し合って。王様に退位してもらって別の王様を上司に迎えることにしたのです。こうしたことは昔からよくあったことなので馴れてはいました。けれど決して気持ちのいいものではありません。

そしてお医者さんにこう言わせました。王様はもうおかしいと。そう言わせたのです。

けれど王様は。それを聞いて悲しそうにこう呟いたのです。

「誰も僕を診てはいないのに。どうしておかしいなんて言えるんだ」

その通りです。誰も王様を見ていないのです。けれど誰も見てはいない、見られなくなったから王様はおかしいとされたのでした。王様はある場所に移されることになりました。王様ではなくなって。けれどこれが本当の悲劇のはじまりでした。

第二百四十四話　　完

２００８・６・２７

第二百四十五話　そして遂には

十五話　　そして遂には　　第二百四

王様は治療ということで幽閉されてしまいました。湖のほとりに僅かな人達だけをお供に。そこでの王様は静かですが沈んだ様子でした。

「やっぱり少し」

ドイツはそんな王様の話を聞いて。唇を噛み締めて言うのでした。

「可哀想だと思うが」

「何言ってるんですか」

「そうですよ」

けれど皆はドイツのそんな言葉も退けてしまうのでした。

「人とも会わないし夜にワーグナーばかり聴いて」

「薄気味悪いしおかしかったじゃないですか」

「本当におかしかったのか？」

ドイツはそれでも思うのでした。

「あの人は本当に」

王様が本当におかしかったのかと思うのでした。ドイツは王様とお話したことがあるのでその時のことを思い出します。記憶に残っている王様はロマンチストですが音楽のことも文学のこともわかっていてワーグナーのことも全部知っていてそのうえで。とてもおかしいとは思えないのでした。

「むしろあの人を認めない俺達の方が」

ドイツはこうも思うのでした。

「悪いんじゃなかろうか」

そう考えだしていました。そしてある日のことでした。

「えっ、その話は本当か！？」

「はい、そうです」

「今しがた」
　ドイツのところにとんでもない話が飛び込んできました。その話は。ドイツが考えもしなかったことでした。

第二百四十五話　　完

２００８・６・２８

第二百四十六話　消えてしまった王様

第二百四十六話　消えてしまった王様

王様は自殺してしまったのです。湖に入って。こうして皆の前から永遠に姿を消してしまったのです。

ドイツは王様が自殺してしまったその湖のところに来ました。そのうえで話を聞いていました。ドイツの後ろには皆が控えて。ドイツと一緒にその湖のほとりにいます。皆とても悲しい顔をしています。本当は王様のことが好きだったのでしょうか。

「ここでなんだな」

「はい、そうです」

「ここで王様は」

「そうか」

ドイツは後ろにいる皆の説明を聞いています。とても沈痛な顔で。

「ここでか。自殺したんだな」

「最後にこう言い残されたそうです」

「何てだ？」

「僕は全ての人から永遠に謎でありたいと」

「そう言われたんだな」

「そうです。そして」

「そうか、わかった」

ここまで話を聞いてまた頷きます。さらに沈痛な顔で。

「・・・・・本当にもっとよくお話して理解するべきだった」

王様のことを思い出して言うのでした。今までの思い出を。

「そうしたらこんなことにはならなかったのにな。ワーグナーとのことも」

遠くにはお城が見えます。王様があらん限りの情熱を込めて築かせていたあのお城が。王様が最後の最後まで愛していたワーグナー

の世界をこの世に映し出したあのお城が。静かにその白い姿を山の上に浮き上がらせていたのでした。

第二百四十六話　　完

２００８・６・２８

第二百四十七話　今ではもう

第二百四十七話　今ではもう

王様がいなくなってからもう長い年月が経ちました。王様が何かと建築させていたお城はドイツの家の中の名所の一つとなって毎日多くの観光客がやって来ます。ドイツの友人達も時々やって来ます。

「奇麗ですね」

「うん、何度見てもね」

今日は日本とイタリアが来ています。ノイスヴァンシュタイン城を見て感激しているのです。

「地下には白鳥の舟と泉ですか」

「ローエングリンとタンホイザーを表わしているんだ」

ドイツはそう日本に説明します。

「あの人が好きだったんだ。どちらもな」

「そうだったんですか」

「ここでよく遊んでおられた」

このことも話します。

「よくな。俗世を忘れる為に」

「あの人って人間嫌いだったんだよね」

「ああ、そうだった」

今度はイタリアの言葉に答えています。

「そうなったんだ。なられたんだな」

「そうだったんだ」

「あの時は困った」

あの時のことを思い出します。

「けれど今ではな」

「どうなの？」

「懐かしいな」

目を閉じて二人に言うのでした。

「あの時のことも。このお城もな」
「好きですか？」
「ああ、好きだ」
日本の言葉と共に目をまた開いて泉を見ます。貝殻もあり白鳥あってとても幻想的です。その幻想を見ながら呟くのでした。
「奇麗だよな」
「そうですね」
多くのことがあった王様との思い出は今でもはっきりと覚えています。けれどそれは嫌なものではなく悲しく、そして懐かしい。ドイツの中ではそんな思い出になっているのでした。

第二百四十七話　　完

２００８・６・２９

第二百四十八話　長いんですけれど

第二百四十八話　長いんですけれど

　ワーグナーといえばニーベルングの指輪です。空前絶後のこの大作、今日はバイロイトに皆を呼んで観劇です。バイロイトはワーグナーの楽劇の為だけにある歌劇場、まさにワーグナーファン、即ちワグネリアンの聖地です。ここに来られるというだけで感激する人だっています。ところが皆の反応は。

「長いんだよなあ」

「合計四日か、また」

　楽しみでありながら何処か困惑しているのがわかります。

「一作一作も長いしなあ」

「それで四日なんて」

「嫌か？」

　ドイツがその困惑している皆に対して問います。その指輪の観劇のことを。

「俺の上司は大好きなんだが」

　そのチョビ髭のおじさんです。この人はそれこそワーグナーばかりでも飽きない人です。何を隠そうワーグナーを盛んに宣伝している一人でもあります。

「この作品を観るのは」

「だって四日ですよ」

「合計十五時間」

　ここまで長い作品は勿論他にはありません。これだけです。

「長過ぎるなんてものじゃないし」

「しかも内容は凄く濃いし」

　ただ長いだけがワーグナーではないのです。その内容の濃さでもまた非常に有名なのです。ワーグナーは唯では済まないのです。

「聴くともうそれだけでへとへとだしねえ」
「僕最後に立っていられるんでしょうか」
皆最後まで大丈夫なのか不安で不安で仕方ありません。そして実際に最後まで観終わるともうそれだけでへとへとになって倒れてしまった皆でありました。

第二百四十八話　　完

２００８・６・２９

第二百四十九話　ファンタジーならこの人　☆

第二百四十九話　ファンタジーならこの人

「おい、イギリス」
またフランスがイギリスの家に来ています。毎回毎回何かといえばイギリスの家に来ているような気もしないではありません。けれど今回は事情がいつもとは少し違うようです。
「会議するってよ」
こう言いながらイギリスの部屋のドアをノックしているのです。
「会議だ会議」
さらにノックを続けます。
「いねえのか？・・・・・んっ！？」
フランスはここで気付きました。扉が開いているのです。
「開いてるじゃねえか。なら」
その扉を開けて中を覗き込みます。
「イギリス、いるんだろ？」
覗き込んだ姿勢でイギリスを呼びます。
「おい無視するなよ。返事しろ」
言いながら部屋を見ます。するとそこには。
小さなユニコーンやレプラコーンにフェアリー達がいます。イギリスは自分の机で寝ています。その彼の周りに妖精達が集まっているのです。
「何だこりゃ」
「あっ、やばい」
「隠れろ」
妖精達はフランスに気付いて慌てて姿を消します。皆煙みたいに一瞬で姿を消しました。後に残っているのは寝てしまっているイギリスだけです。

「何なんだ今のは・・・・・・」

フランスも今自分が見たものを信じられなかったです。確かに妖精達がいました。けれどそれは本来ならいない筈なのに。いない筈のものを見てしまい唖然とするフランスなのでした。けれど実はこういった存在はイギリスには見えているわけで。そこが何かと複雑な事情ではあります。イギリスは昔からこうした存在とは親しいのです。人間の友人となるとどうにもこうにも恵まれてはいないようでありますが。世の中とかく上手くはいかないものであります。

第二百四十九話　完

２００８・６・３０

第二百五十話　妖精だけじゃない

第二百五十話　妖精だけじゃない

イギリスにいるのは妖精だけではありません。他の人達もいます。

「ここなんだ」

「如何にもって感じの場所だな、おい」

フランスを連れて来たのはボーリィ牧師館という場所です。一目見ただけで薄気味悪さ全開の場所です。妖気さえ見えてしまいそうな有様です。

フランスがふと壁を見ると変な文字があります。

「これ誰が書いたんだ？」

「それがわからねえんだよ」

イギリスのコメントもふるっています。

「気がついたら自然に浮かんでたんだよ」

「そうか。そういえばよ」

「何だ？」

「窓から人が見えるよな。ここって今だれもいないんだよな」

「ああ、そうだが」

「・・・・・何人もいるぜ」

窓から二人を覗いているのです。白い人達が無数に。

「それに前から女の人が来るんだけれどよ」

「ああ、確かにな」

います。しかもその人は宙を少し浮かんでいてすうっと壁を通り抜けてしまいました。それを見ただけでこの人が普通の人でないことがわかります。

中に入ろうとも思うのですがこれがまたとてもできません。得体の知れない不気味な妖気が館の周りに満ち満ちているからです。それに気圧されてとても行けないのです。

しかも見えるものは見えます。

「窓から首のない女の人が見えるのは俺の気のせいか？」
「俺は牧師さんも一緒に見えるんだが」
「・・・・・俺もだ。おい、こっちに来たぞ！」
「窓を通り抜けやがった！これってやっぱり！」
「に、逃げろーーーーーーーっ！」
「こいつはマジモノだ！」
流石の二人も窓を通り抜けて宙を飛びながら薄ら笑いを浮かべてやって来る牧師を見ては逃げ出しました。イギリスにはこんんな場所もあるのです。

第二百五十話　　完

２００８・６・３０

第二百五十一話　中国の幽霊

第二百五十一話　中国の幽霊

幽霊がいるのは当然イギリスだけではありません。長い歴史を持っている中国でも幽霊はかなり多いです。やはり歴史が長いだけあってその数や種類も半端なものではありません。中でも最も恐ろしいのは。

「あのさ、あの部屋だけれど」

「おかしいどころではないのですけれど」

中国の家に泊まったアメリカと日本が強張った顔で中国に対して言うのでした。

「女の人が首くくるんだけれど」

「しかも何回も」

「何っ、二人共あの部屋に入ったあるか！？」

話を聞いた中国の方が驚いています。その顔を真っ青にさせて二人に言うのでした。

「あの部屋は駄目あるよ！下手したら二人共首をくくるところだったあるよ！」

「えっ、僕達が首を！？」

「そうだったのですか」

「あそこにいるのは怨霊あるよ！しかもかなり悪質な奴あるよ！」

二人に対して説明を続けます。

「首くくった人間がなる奴でそれこそ部屋に入るだけでもう」

「そんな恐ろしいのだったんだ」

「じゃあ私達は・・・・・・」

「すぐに御祓いするよろし！」

何時の間にか道士が来ています。それと一緒に御祓いまでもうはじまっています。

「お金は後でいいあるからな！」

「ここでもやっぱりお金なんだね」
「何だかそれは」
中国の現金さに少し呆れる二人です。けれどそれでも何とか御祓いはしてもらうのでした。中国にも怖い幽霊がいるということです。あまりいいことではなかったりしますけれど。

第二百五十一話　　完

２００８・７・２４

第二百五十二話　それを早く言え

第二百五十二話　それを早く言え

中国にいるとんでもなく怖い怨霊、しかし怨霊というものはどの国にもいるものです。この前危うくたたられそうになった一人であるアメリカにしろそうです。しかもそれは必ずしも人であるとは限らなかったりします。これがまた実に怖かったりします。

「あの家だけれどね」

「一見何の変哲もない古い家ですが」

「何かあるあるか？」

今度は日本と中国がアメリカに対して尋ねます。見ればごく普通の古い家がそこにあるだけです。二人の目から見ればそうとしか思えません。

「中に住んだ人が次々と死んでるんだよね」

「えっ、次々にですか！？」

「じゃあ中に入っただけでも危ないあるか！？」

「うん、そうだよ」

驚く二人に対しての平気な顔で答えています。

「だから中に入ったら要注意なんだよね」

「要注意、ですか」

「また何が起こったあるか」

「うん、最初に住んだ人が奥さんと黒猫を殺してね」

ここで黒猫が言葉に出て来ました。

「壁に埋めたんだけれどそこの壁を掘り起こしたらそこに奥さんの亡骸と死んだ筈の黒猫が生きたままいたんだよね」

「黒猫が・・・・・・」

「それはまた不吉あるな」

二人の中でも黒猫は不吉な存在だとされています。見れば誰もいない筈の家の窓に一匹の黒猫がいます。そして緑色の光を放つ瞳と

何かを考えているような不気味な顔で日本達を見ているのでした。

第二百五十二話　　完

２００８・７・２４

第二百五十三話　大きいのは羨ましい

第二百五十三話　大きいのは羨ましい

イタリアは今日もドイツの家に遊びに来ました。勿論事前のアポはなしです。

「ドイツーーーー、カンノーリ作ったけれど食べる？」

「わっ、こら！」

間の悪いことにドイツは今シャワーを浴びている最中でした。頭も洗っていてオールバックじゃなくなっています。

「シャワーの中に入って来るな！いつも言ってるだろ！」

「御免御免」

「全く、いつもいつも」

いつもなのがイタリアらしいです。本当にイタリアです。けれどそのイタリアの様子が少し変です。何か視線が下を向いているのです。

「どうした？」

「いや、何かドイツのってさ」

下を見ながら話を続けます。

「俺のと随分違うなあって思って」

「あーーーー、それはな。ちょっと耳貸せ」

「うん」

それで話を聞くと。イタリアの態度が豹変しました。

「嫌だよ、嫌だよそんなの！」

「待て！早まるな！」

取り乱して何故か窓から飛び降りて帰ろうとするイタリアを必死に止めるドイツです。

「この先変わるかも知れないだろ！」

「変わらないよ！そんなの絶対！」

「手術しろ手術！」

「嫌だよ痛いのは！」
「フランスの上司の人だって一人手術しただろうが！」
「その後首と胴体が大変なことになっちゃったじゃないかーーーーーっ！！」
自分で自信のないイタリアでありました。イタリアにもコンプレックスがあるということなのでしょう。

第二百五十三話　　完

２００８・７・２５

第二百五十四話　実は昔からです

第二百五十四話　実は昔からです

イタリアのコンプレックスですが実は昔こんなことがありました。

イタリアの家では芸術が有名ですがその中で全裸の青年の見事な銅像があります。かつてイタリアが小さかった時代に作られたものである有名な鼻が曲がってしまった彫刻家であり画家の人の作品です。

この銅像はかなり有名で皆が知っています。しかしこの銅像がまた。

「小さいよね」

「皮がねえ」

皆ひそかに見てくすくす笑ったりもしています。イタリアもそれは気付いています。

「小さいって言われるし皮まで言われるし」

「気にするなつってんだろ」

イタリア兄が落ち込む弟に対して言っています。

「言っても仕方ないことだしな」

「仕方ないんだ」

「作った人かモデルになった人がそうだったんだろう」

だから小さいし皮があるということのようです。

「俺もそうだしな」

「兄ちゃんも・・・・・・」

今わかった衝撃の事実です。

「昔から俺の家ではそうなんだ。だから気にするな」

「昔からだったなんて」

「安心しろ。それでもやりたいことはできる」

その通りですが負け惜しみの言葉なのは確かです。

「だから気にするな。いいな」

「けれど無理だよ、これって」

それはどうしても否定できないイタリアでありました。その見事な銅像を兄弟で見つつ落胆しているのでありました。ダビデの前で。

第二百五十四話　　完

２００８・７・２５

第二百五十五話　一位なんです

第二百五十五話　一位なんです

「ねえ日本」
「何でしょうか」
泣きそうな顔にクールな日本。いつもの風景でありますが今回は少しばかり事情が違うようであります。見ればドイツとのことを日本にお話しているではありませんか。それで今回は少し違った泣いた顔になっているイタリアであります。
「こんなことがあったんだよ」
こう日本に語っています。
「それでね、俺」
「ま、まあそれは」
話を最後まで聞いた日本の態度がよそよそしいものになってきています。sおわそわとさしてやけに落ち着かないのが奇妙ですらあります。
「いいのではないでしょうか」
「いいの？」
「はい、イタリア君はですね」
顔が青くなってさえいます。明らかに普段の日本とは違います。
「俺は？」
「自信を持っていいと思います」
その青い顔でイタリアに告げています。
「それに関しましては」
「自信を持っていいんだ」
「はい」
念押しさえ出て来ました。
「明らかに。私はそう思いますが」
「そうなんだ。けれど」

ここでイタリアもふと気付きました。
「ねえ日本」
「何でしょうか」
「どうして今顔が青いの？態度もおかしいよ」
「気のせいです」
無理矢理そういうことにしてきました。
「ですからお気になさらずに」
「そうなんだ。それじゃあ」
とりあえずイタリアには気付かれずに済んだ日本ではありました。
そこは少しラッキーと言えばラッキーなことでありました。

第二百五十五話　　完

２００８・８・５

第二百五十六話　そんなの関係ねえ

第二百五十六話　そんなの関係ねえ

イタリアも日本もあることで本当に悩んでいるのですが最初からそんなことでは全く悩んでいない人もいます。エジプトはこの日イタリアの作った銅像を静かに見ていました。

「何でこの銅像は」

「んっ、どうしたの？」

「皮があるんだ」

偶然そこにいたリトアニアに対して問うています。

「おかしいだろ、これは」

「あれっ、そうなる人もいるよ」

リトアニアにとっては今のエジプトの言葉の方がおかしいようです。

「だってこればかりは体質とかもあるからさ」

「皮は切るだろ」

エジプトは驚いているようなリトアニアに対してまた述べます。

「普通は大人になる前にな」

「そうかな。そこまでは」

「俺の家ではそうだ」

またはっきりとリトアニアに述べます。

「大人になる前に切る。だからあんなふうにはならない」

「そうだったんだ」

「俺の家の周りの宗教じゃ全部そうだぞ」

今度は宗教のお話になりました。

「トルコだってな。大人になる前に切っている。だから俺の家ではあんなふうにはならないんだよ」

「皮をねえ」

「だからわからない」

エジプトはこうも言います。
「あんな皮があるのがな。まるで大人じゃないみたいだ」
「子供に見えるのは事実だけれど」
あまりにもずけずけしたエジプトの言葉にリトアニアはよく言えないのでした。
「それでも皮のことを連発して言うのはなあ。どうかなあ」
本音は中々言えないリトアニアでありました。ひょっとしたら彼もではないでしょうか。決して言うことなぞないでしょうけれど。

第二百五十六話　　完

２００８・８・５

第二百五十七話　ティーシャツ

第二百五十七話　ティーシャツ

最近スペインはよくティーシャツを着ています。
「いや、やっぱり夏は気軽でええわ」
いつも呑気でお気楽な彼ですが夏になるとそれが余計にパワーアップするそうです。正装なんてせずにもうそんな気軽な格好で毎日を過ごしています。
けれど問題はそのティーシャツのデザインです。何とそこに書いてある文字は。
『黙れ』
一言です。見る人に喧嘩を売っているような言葉が書かれています。それを見てドイツはかなり呆れた顔でスペインに対して尋ねます。
「何だ、その言葉は」
「ああ、これな」
スペインはドイツの呆れた顔に気付くことなくいつものペースで言葉を返します。
「うちの上司の言葉なんや」
「上司の？」
「ちょっとベネズエラの奴に言うたんや」
こうドイツに説明します。
「騒がしいから黙れってな。それをそのままロゴにしてな」
「そうだったのか」
「どや、ええ言葉やろ」
空気を読まずにドイツに賛成を求めます。
「俺結構気に入ってるんやけれどな」
「・・・・・そうか」
あえて突っ込まずにただ話を聞くだけに留めたドイツでありまし

た。もう突っ込む気力もなかったのでしょうか。それとも暑さで弱っているのかも知れません。どちらにしろどうにも今日のドイツは静かでした。

第二百五十七話　　完

２００８・８・６

第二百五十八話　また出て来たこの人

第二百五十八話　また出て来たこの人

日本もティーシャツを着ます。これは誰でもそうなので驚くことはないのですがこの人まで。何とティーシャツにとんでもない言葉を書いています。スペイン以上の。

『どけ、俺が行く道だ』

『俺のこと好きにならない奴は邪魔なんだよ』

『俺は今心の中で御前を殴った』

物凄い言葉です。およそティーシャツに書く名前ではありません。けれど日本はこのティーシャツを着ているのです。

「・・・・・それは誰の言葉だ」

また出て来たドイツ。日本よ御前もかと内心思いながら彼に尋ねます。

「御前の言葉じゃないのはわかるんだが」

「この人です」

日本がすぐに出して来たのは。またあの人でした。殆ど名物ともなっている某脚本家で小説家で料理人でそっちの筋の人で工事現場の現場監督で用心棒の人です。かなり偉そうにそこに立っています。

「この人の御言葉をティーシャツにしたのですが」

「そうか、その人か」

「おう、何か暇だな」

脚本家さんはティーシャツなぞ見ることなく日本とドイツに声をかけてきます。実に尊大な態度でかつ気さくであります。

「河豚でも食いに行くか?それともすっぽんにするか?」

「夏にそれか」

「いいんだよ、そういうのが面白いんだからさ」

強引に話を決めてしまいました。こうしてとんでもない言葉が入

ったティーシャツを着て夏に河豚を食べることになったドイツと日本なのでした。

第二百五十八話　　完

２００８・８・６

第二百五十九話　何故か影が薄くなる

第二百五十九話　何故か影が薄くなる

無意味なまでの個性の強さと強烈なまでの自己主張で知られる韓国。今では生徒会長まで務めていて学園のあらゆる会議に出席しています。

「だから何でこんなの生徒会長にしたんだよ」

「あいつ等、全部俺達に押し付ける気かよ」

イギリスとフランスは相変わらず他の三人への愚痴を出す日々です。不平不満に満ちた顔でいつも韓国のフォローをしているのです。とにかく韓国は生徒会長だけあってありとあらゆる会議に出ているのですから苦労もひとしおです。

ところが。ここで意外なことがわかりました。

「おい、今回もだぞ」

「何、今度もかよ」

イギリスとフランスはあることに気付いたのです。

「あいつまた発言なしだ」

「聞いているだけかよ」

何と韓国は皆が集まる会議では殆ど喋らないのです。

「何かかえって会長がいるのかどうか不安視する声もあがってるぜ」

「そこまでかよ」

二人にとっては意外では済まされない事態でした。

「何でここで喋らないんだ?」

「わからねえ。どうしてなんだあの目立ちたがり屋が」

それがどうしてかは二人にはわかりません。しかし韓国は何故か皆が集まると案外喋らず無口になってしまうのでした。

「会長、何か一言」

「・・・・・ああ、わかったんだぜ」

今回もこれだけでした。とにかく皆がいる場所では大人しい韓国、

学園での大きな謎が一つできたのでありました。

第二百五十九話　　完

２００８・８・７

第二百五十九話　日本がいても

第二百六十話　日本がいても

とにかく不思議なことに皆がいる場所では影が薄くなる韓国。それが不思議で仕方ないイギリスとフランスはここである実験をすることにしました。

「やっぱり韓国っていえばあいつだよな」

「ああ、あいつしかねえよな」

韓国がいつも口に出すのは日本です。一体何処の国の人間なんですかと聞きたい位いつも日本のことを言っていますからここで日本の名前が出るのは当然の帰結でした。

彼等は日本が出席している集まりに韓国を連れて行くことにしたのです。とかく日本のことでは騒がしくうざくなる彼の性質を熟知してのことです。

「さて、まあ騒ぐだろうな」

「騒がない筈がねえよな」

会場の柱に隠れて二人でひそひそと話をしています。そこから韓国を覗いているのです。いささか趣味が悪いと言えば悪いかも知れませんが似合っている格好なのも事実です。

「問題はどんな騒ぎ方だが」

「見ようぜ」

こうして韓国を見回ります。日本の周りには多くの人達が集まっています。生徒会長である韓国も韓国で忙しく動いています。ところがです。

「なっ、あいつまた!?」

「何もコメントなしかよ!」

何故かここでも一言も話さない韓国でした。ずっと静かに色々と応対をしているだけでした。

「何も話さないで終わるなんてよ・・・・・」

「しかも日本がいて」

二人には実に意外な結果でした。とにかく何故か皆の中にいると静かになって目立たなくなってしまう韓国でありました。これは本当に不思議なことであります。何人かとか二人とかだといつもの有様になってしまうのですからこのギャップが実に奇怪でもあります。

第二百六十話　　完

２００８・８・７

第二百六十一話　ジェラート　☆

第二百六十一話　ジェラート

「薬屋の親父いるか！」
ドイツがいきなり薬屋に飛び込んできました。かなり焦っているのがすぐにわかる有様です。
「大至急薬を見繕って欲しいんだが！」
「何ですかドイツさん」
その薬屋の親父はかなり戸惑いながらもドイツに応対しました。
「騒々しいですよ」
「済まんが急用なんだ。できるだけ早くできるか？」
「お薬をですか」
「そうだ。それでだ」
ドイツの説明がはじまりました。
「腹痛用だ。すぐに痛みが止まるのがいいな」
「はい」
「あと苦いのは止めてくれ。できれば甘いのがいい」
「そうですか。それじゃあこれは」
市販品を出してみます。ところがドイツの説明はまだ続きます。
「そうだ、飲むのは俺じゃない」
「ドイツさんじゃないのですか」
「だから色々な国の奴に効くのを頼むぞ」
「ふむ。そして」
「それからだ！」
さらに説明が続きます。
「出来れば食欲が抑えられるとなおいい！」
「あのですね」
ここで親父は気付いたのでした。
「最初から戦車の中でジェラート食べ過ぎて腹痛起こしたイタリア

さんのものだって言って下さいよ」
「・・・・・まあそんなところだ」
やっぱりここでもイタリアなのでした。ドイツもまた何故かそんなイタリアを放っておけずわざわざ薬を買いに来たのであります。

第二百六十一話　　完

２００８・８・８

第二百六十二話　ジェラートがないと

第二百六十二話　ジェラートがないと

イタリアは戦場でもグルメです。パスタは当然のことですが他のメニューもかなり見事なものであります。

「生ハムにワインに凍らせた野菜に果物か」

「あとトマトもあるよ」

にこにこと食べながらドイツに応えています。ドイツはその横でいつもの様に呆れ顔です。けれどイタリアはそのことに気付いてもいません。

「美味しいね、今日も」

「ここは戦場だぞ」

「さてと」

イタリアは全部食べ終えたところであるものを探しだしました。

「あれがないとね。最後は」

「何だ？」

「ほら、これ」

戦車から取り出してきたものは。

「これがないと駄目なんだよ」

「ジェラート！？戦車の中でか」

「うん、そうだよ」

いつもの呑気な調子でドイツに答えます。

「俺の家の戦車ジェラート作れるんだよ。凄いだろ」

「・・・・・確かにな」

ある意味において、ですがそれは言わないドイツでした。

「これがないとね。やっぱり」

「やっぱり。何だ？」

「俺動けないんだ」

こうドイツに言います。

「最後にこれがないとね」
「あれだけ食べてまだ満足しないのかこの男は」
「いやあ、今日も美味しいなあ」
呆れているドイツをよそにジェラートを美味しそうに食べます。
「これを食べている瞬間が一番幸せだよ」
「それパスタの時もワインの時も言ってるぞ」
何処までも生活を楽しんでいるイタリアでした。

第二百六十二話　　完

２００８・８・８

第二百六十三話　誰かがいる

第二百六十三話　誰かがいる

連合ファイブはお互い微妙な関係ですがそれでも集まって会議をすることが多いです。最近では五人以外にも参加者がいたりします。

「生徒会長であり戦勝国である俺なんだぜ！」

「だから御前はあの戦争には何の関係もなかっただろうが」

「っていうか御前あの時日本の家にいただろ？戦場で見たぞ」

イギリスとフランスが韓国にまたしても呆れ顔で突っ込みを入れますが彼の耳にはそんなことは一切入りません。とりあえず彼も何故かいますがいなかったことにはされます。

「とにかくだ」

イギリスは勝手に席に座った韓国をひとまず放置して話を進めます。

「今五人だよな」

「ああ、そうだぜ」

フランスがイギリスの言葉に応えます。彼も韓国はいないことにしています。

「俺と御前と」

「アメリカ、中国、ロシア」

「確かに五人だよな」

顔触れを見ても確かに五人です。ちゃんと揃っています。しかし。

「一人多くねえか？」

「ああ、多い」

フランスの言葉にイギリスが頷きます。

「インドは今は呼んでねえし」

「誰がいるんだ？」

「背後霊か？」

イギリスは己の得意分野を出してきました。

「まさかとは思うけれどよ」
「おい、もうそのネタは止めろよ」
怖くなったフランスがそれを止めます。けれど何故か一人多いみたいです。果たして誰が来ているのでしょうか。
「俺こそはそのもう一人！戦隊で言えば光栄の追加メンバーなんだぜ！」
「だから手前は今回には一切関係ねえって一万回は言ってるだろうが」
「ついでに言えば今回の戦隊ものは追加二人で金銀なんだぞおい」
相変わらずの疲れ切った突っ込みを入れるイギリスとさりげなく日本への知識も垣間見せるフランスでありました。なおもう一人は間違っても韓国ではありません。本人が勝手に思い込んでいるだけです。

第二百六十三話　　完

２００８・８・９

第二百六十四話　ここでも一人多い

太平洋の会議でも。いつもの非常に個性的な顔触れの他にやっぱり一人多いのが常です。

「あれ、やっぱり多いですね」

「うん、多いね」

「多いあるぞ」

日本とアメリカ、中国は太平洋諸国の会合で席とメンバーが一つ多いことに首を傾げています。

「まずは僕達四人に」

ロシアがメンバーを数えています。

「韓国さんに香港さん、台湾さんに」

「オーストラリア、ニュージーランド、メキシコ、タイ、ベトナム、シンガポール、ブルネイ、マレーシア、インドネシア」

「フィリピンにメキシコ、パプワニューギニアにチリにペルーあるか。皆いるあるぞ」

アメリカと中国もメンバーはちゃんと把握したのでした。

「けれどやっぱり一人多いね」

「誰あるか？」

「まさか」

ここで日本は変な結論に至りました。

「あの伝説のムー大陸から」

「ははは、日本君それはないよ」

ロシアがそれを笑って否定しました。

「だってあれはおとぎ話なんだし」

「そうですか。では一体誰が」

「イタリアが紛れ込んでいるとかじゃないかな」

「だったらすぐわかるあるぞ」
アメリカに中国が突っ込みを入れます。
「しかしやっぱり一人多いのは何故でしょう」
「モンゴル君はまだここには参加していないしね」
やっぱりここでも何故か一人多いのです。話に不気味なものすら漂ってきました。果たして誰かいるのかいないのか、謎が謎を呼びさらに謎を呼んで遂には訳がわからなくなりそうです。
しかも皆気付いていませんがそのもう一人は目には入っているのです。けれどそれでもそれが誰なのかわからない。まるで石ころ帽子を被ったかの様にです。これはこれで非常に凄いことではありますが。

第二百六十四話　　完

２００８・８・９

第二百六十五話　アメリカの家の北へ

第二百六十五話　アメリカの家の北へ

アメリカの家の北の途方もなく広大な森と湖の寒い大地には。謎の生物がいるとされています。

「謎の生物っていうかよ」

「あからさまに名前が覚え易いよな」

その秘境に来ているのはイギリスとフランス。実は冒険マニアであるイギリスにこれまたそれが結構好きでもあるフランスがついて来ているのです。

「オゴポゴだったか」

「そうだよ、それだよ」

随分と変わった名前ではあります。確かに覚え易いです。

「何でも湖にいるらしいな」

「じゃあ御前のところのネッシーと同じか」

言わずと知れたイギリスの家の名物の一つです。

「あれそもそも何なんだ？」

「俺も知らねえよ」

実はネッシーの正体はイギリスも知らないのです。

「恐竜って噂もありゃでかいあざらしとかって噂もあるしよ」

「全然わからねえんだな」

「あの有名な写真は嘘だったしな」

あの写真は嘘でしたがそれでも他の目撃談が一杯あるのも事実だったりします。何故かそういった無数の目撃談や写真までなかったことにしたい人もいるようでありますが。全てを否定できるわけではないというのに。

「けれどまあ。いるんだろうな」

「そうか。さて、着いたぜ」

「おっ、もうか」

「ああ。北の秘境」
それはアメリカに家にあります。
「そもそもここ誰の家だったっけ」
「さあな。アメリカじゃねえのは確かだがな」
イギリスの返答は曖昧です。何はともあれ謎の湖の前に辿り着いた二人でありました。

第二百六十五話　　完

２００８・８・９

第二百六十六話　オゴポゴ

第二百六十六話　オゴポゴ

さて、湖に到着した二人。早速湖の中を調べだします。すると早速巨大な生物の反応がありました。

「もう来たぜ」

「早いな」

湖を見ればそこに。やけに巨大な水影が映っています。それが何かはもう言うまでもありません。

「オゴポゴだな」

「ああ、間違いないな」

そう、二人が探しているオゴポゴです。それが早速出て来たのです。ところが。

二人はすぐにあることに気付きました。その水影を見て。

「あれ、恐竜じゃねえんじゃねえのか」

「少なくとも首長竜じゃねえな」

シルエットの首は短いです。それに後ろ足は一つのひれになっています。

「モササウルスとかでもねえよな」

「じゃあ恐竜じゃねえな。何だ？」

二人はさらに調査を続けます。何と勇気のあることにあえてボートまで出して湖にこぎ出します。そして近寄ってみますが意外に攻撃はありませんでした。

「大人しいな」

「そうだな。それに」

フランスはそのオゴポゴの肌を湖に手を入れて触ってすらいます。その感触は。

「鱗じゃねえ」

「鱗じゃねえか」

「俺達の。哺乳類の肌だ」
彼は答えました。
「これはな」
「っていうとこれは」
「少し調べてみるか」
真剣な顔でイギリスに言います。
「若しかしたら。恐竜と同じ位凄いものになりそうだぜ」
「そうだな。ひょっとして」
真剣な顔の二人の脳裏に浮かんだのは。大昔にいたという昔鯨類でした。アメリカの北には多くの謎がまだ眠っています。しかしここにいるのは本当に誰なのでしょうか。

第二百六十六話　　完

２００８・８・９

第二百六十七話　八人目ですけれど　☆

第二百六十七話　八人目ですけれど

「さて、と」

サミットが開かれています。最近ではオブバーザーも呼んでかなり賑やかです。その中で日本は皆が揃ったと見て声をあげたのでした。

「皆さん揃いましたしそろそろ会議をはじめますか」

「いや、日本」

けれどここでイギリスがその日本に対して言ってきました。

「ちょっと待ってくれ」

「何かありますか？」

「まだ誰かいないような気がするんだが」

「あれっ、呼んでる人は皆いるよ」

アメリカは辺りを見回して言いました。

「中国だってインドだってブラジルだっているしね」

「イタリアいるか？」

「いるよ」

イタリアがドイツの声に応えました。

「あと俺もいるぜ」

「僕も」

フランスとロシアもいます。

「やっぱり全員いるよ」

「いや、席が一つ空いているんだよ」

イギリスはその空いている席を指差しました。

「呼んでる奴は全員いるのにな」

「おかしな話あるな」

「段々恐くなってきたのですが」

日本が顔を暗くしたここで。アメリカによく似た顔で髪を少し長

くさせた眼鏡の青年が部屋に飛び込んで来ました。
「御免！今日は酷いことがあったんだ！」
彼はまずはこう皆に叫びました。
「朝起きたら昼過ぎだったんだ！」
「・・・・・誰ナンダアンタ一体」
ここで皆が思ったことです。何と皆カナダのことを忘れていたのでした。こんなカナダさんなのでした。

第二百六十七話　　完

２００８・８・１１

第二百六十八話　とにかく存在感がないんです

第二百六十八話　とにかく存在感がないんです

とにかく誰にも覚えてもらえないカナダさん。あの日本ですらそうなのがかなり悲しいです。今日本とドイツ、イタリアでそのカナダについてお話をしています。

「カナダさんといいますと何かありましたっけ」

「確か連合側だったな」

ドイツもぼんやりと思い出すだけです。

「後は。あったか」

「確かホットケーキに」

日本は人差し指の先を自分の顎に当てて考えだしました。

「シロップをかけますがそのメイプルシロップの産地でしたっけ」

「後は熊がいて寒かったか」

「その他には何かあったでしょうか」

「ねえねえ」

ここでイタリアが二人に対して尋ねます。

「カナダって奇麗な娘いるのかな」

「さて、どうでしょうか」

「残念だが知らないな」

聞かれてもそれすらも二人は知らないのでした。

「聞きませんが」

「いるともいないともな」

「そうなんだ。じゃあ御飯美味しいのかな」

「どうでしょう。一応食材豊富なアメリカさんのお隣だそうですが」

だそうではなくてその通りですが日本もカナダのことは本当によく知らないのです。

「イギリスさんに御厄介になっていたんでしたっけ」

「フランスにもらしいが。どうなのかな」
とにかく全く知られていないカナダなのでした。果たしてここまで影の薄い国が今まであったでしょうか。そうした意味で凄い国であります。少なくとも滅多なことではここまで目立たないではいられません。皮肉ではなく。

第二百六十八話　　完

２００８・８・１１

第二百六十九話　お互い覚えられない　☆

第二百六十九話　　お互い覚えられない

こんなとことんまで目立たないカナダさんですがちゃんとお家はあります。以前アメリカに自分の家にしてしまおうかと言われたこともありますがそれでも今でもちゃんとお家はあります。しかもこのお家はかなり広いです。

ただしいる人達はかなり少ないです。その広いけれどがらんとしたお家の中のこれまたかなり広い部屋の中でカナダは。一匹の白い熊と向かい合ってお話をしていました。

「ねえ熊子さん」

「何かな、君」

「僕頑張ってるよね」

「うん」

熊はこのことはちゃんと認めてくれました。

「確かに頑張ってるよね、凄く」

「家だってそこそこお金あるしサミットのメンバーだし太平洋の会合にもいつもちゃんと出ているし働いているし」

カナダも努力しているのです。それでもなのです。

「けれど。どうして目立てない、誰も覚えてくれないんだろう」

しょげかえって言います。

「必死にやってるのに。どうしてかな、熊吉さん」

「わからないね。運かな」

「運かあ」

「ところでさ」

ここで熊さんはカナダに問い掛けます。

「何？」

「君誰？」

最早飼い主に向かって言う言葉ではありません。

「誰だったかな、君」
「・・・・・カナダだよ。覚えてくれよ」
「そうだったんだ」
「頼むよ、熊一郎君」
カナダもカナダで熊さんの名前を覚えていないのでした。もう存在感のなさが危機レベルにまで達しているカナダなのでありました。

第二百六十九話　　完

２００８・８・１２

第二百七十話　濃い人には覚えてもらえない

第二百七十話　濃い人には覚えてもらえない

国としては個性が無いと言われる日本です。中の人達もよくそうだと言われるのですが実際のところはこれがかなり。極めて個性的な面々がこれでもかという程にまで揃っています。

「オンドゥルウラギッタンディスカーーーーーーーーーーッ！」

「やはりそういうことだったか」

「ダレナンダアンタイッタイ・・・・・・」

「これ食っていいかな」

「ウゾダドンドコドーーーーーーーン！」

「アンナアンデカアーーーール！」

この二人の空飛ぶ騙され易くて動けば周囲に迷惑をかけるライダー達もそうですしこの脚本家兼シェフ兼工事現場監督兼用心棒兼その筋の人なんかもかなり個性が強いです。

「御前の願いは聞く！」

一言で殆ど原爆実験しまくっているような状況の作品にまで飛び込む様な人です。幾ら叩かれようがアンチがいようが平気な人です。

他にもアメリカの家で活躍しているライトの人やゴーマニズムな漫画家とか様々な人材がいます。とりあえず日本人が個性的な人が多いのは確かなようです。

ところがカナダは。こうした人達からは全く気付かれていなかったりします。

「そういえば確か日本ハムにいた助っ人の」

日本はふと野球関係で記憶を辿ります。

「ウィルソンでしたっけ。あの身体は頑健なのに怪我ばかりしていて守るのも走るのもあれですが打つのは凄かった人」

「・・・・・その人しか覚えてくれていないんだ」

「たまたま日本ハムを取り仕切っておられたのが親分さんでしたから」

「渇っ！」

ここでもその助っ人よりも元監督の親分さんの方が目立ってしまっているようです。ついでにその孫娘のクイズ番組での強烈さやベッケンバウアーにも押されて。やっぱりカナダの家の人までどうにも目立てないのでした。七つの星の脇にあるあの死の星なんかは誰でも知っているのに。

第二百七十話　　完

２００８・８・１２

第二百七十一話　違うんですけれど　☆

第二百七十一話　違うんですけれど

カナダが街を歩いていると。いきなり後ろから手刀が飛んで来ました。存在感はないですが不幸に遭うことではラトビア並かも知れません。

「手前アメリカかあ！」

色が黒くて少し太った縮れ毛を後ろで束ねた髭のお兄ちゃんです。アメリカの宿敵キューバです。

「積年の恨みだ喰らえやっ！」

「たわば・・・・・じゃなくてめいぷるっ！」

いきなりいい迷惑です。けれど何とかキューバの方を振り向いて言います。

「何するんだよ。僕はアメリカじゃないですよ」

「ああん！？どう見てもアメリカやろがこの眼鏡！」

元々スペインのところに入っていたのでスペインの言葉に似ているキューバの言葉遣いです。

「嘘ついてもばればれなんやぞ！」

「いいですか僕はカナダです」

間違えられてまた殴られるのは嫌なので言い返します。

「似てるってよく言われるけれどアメリカとは別、あんなのと一緒にしないで下さい」

何気にアメリカには迷惑しているようです。

「むしろ僕はアメリカには迷惑しているんですよ」

「おお、そうやったんか」

これを聞いてキューバは納得したかに見えましたが。

「アメリカの子分の奴か。やっぱ手加減せえへんで」

「いやだから・・・・・何でこうなるのーーーーーーっ！！」

怒りを露わにして手をボキボキとさせるキューバでした。本当に

カナダは不幸を招き寄せる体質であるようです。何処の学校の三男坊の総長なのでしょうか。

第二百七十一話　　完

２００８・８・１３

第二百七十二話　山口

第二百七十二話　山口

キューバはアメリカとともにかく仲が悪いです。彼とは過去に色々とあったせいですがそれでも性格はかなり明るいです。アイスとスポーツが大好きです。

「野球なんか特にそうですね」

「まあ野球だけやないけれどな」

日本に対して応えます。何故か日本は大好きなようでこの辺りが複雑ではあります。

「バレーでも何でもな。身体動かすのは好きなんや」

「そうですか」

「ところで日本、覚えてるか？」

そのうえで日本に対して尋ねます。

「はい、何でしょうか」

「あのピッチャー、そやそや山口だ」

ここで日本のお家の人の名前が出て来ます。

「あいつの剛速球は凄かったな」

「まだ覚えておられるのですか」

「あんな凄い剛速球は俺も見たことあらへん」

感嘆して首を満足気に横に振ってさえいます。

「忘れろっていう方が無理やな」

「そこまでですか」

「ＷＢＣにあいつが出て来たらなあ」

言葉が楽しげなものになっています。

「俺はもっと御前のチームに負けてたやろな。ホンマ凄い奴やった」

「有り難うございます」

「けれど次は負けへんで」

顔が引き締まり不敵な笑みになります。

「今度は俺が優勝や。楽しみにしとけや」
「こちらも。いい勝負を期待しています」
握手をし合う二人でした。微かに笑っている日本の口元が印象的です。スポーツに関しては真剣でしかも男気のあるキューバなのでした。

第二百七十二話　　完

２００８・８・１３

第二百七十三話　言い返せるわけがない　☆

第二百七十三話　言い返せるわけがない

不幸にもキューバにぼっこんぼっこんにされたカナダさん。こんな日常が毎日なのですからアメリカを微妙に怨んでいました。微妙なのは人格者ということでしょうか、毎日迷惑しているというのに。

「アメリカのせいでまた・・・・・」

タンコブだらけになった頭でボロボロになった姿でよろめきつつ言います。

「今日こそは奴にがつんと言ってやるんだ」

そう誓ってアメリカの派手で大きな家に行きます。彼がいるのはわかっていましたから入るなりいきなり大声です。

「ちょっといいかいアメリカ！」

精一杯大きな声です。

「君のせいで僕は迷惑しているんだ！」

それが今では身体に出ているからわかり易いです。

「もうちょっと日頃の行いをよくしたらどうなんだ・・・・・って」

「んっ！？何だいカナダ」

アメリカは丁度チェーンソーを持って何かをしていました。はっきり言って恐くてとても近寄れたものではありません。

「あっ、別に」

びびって尻込みするカナダです。

「今日はいい天気だね」

ガガガガガガヴヴィーーーーーーーーーーーン

チェーンソーの音が鳴り響く中でアメリカが彼に尋ねます。

「用があって来たんだろう？何だい？」

「あっ、うん確かにそうだけれど」

鳴り響くチェーンソーが五月蝿くて声が聴こえにくくなっていま

す。

「別に大した用じゃないんだ。ははは」

こんな調子でいつもアメリカに言えないカナダなのでした。不幸な人はラトビアだけではないようです。

第二百七十三話　　完

２００８・８・１４

第二百七十四話　不幸は相乗します

第二百七十四話　不幸は相乗します

カナダは運がないです。とにかくないです。その運のなさはまさにあのラトビアにも匹敵するものがあるでしょう。今日は白熊に咬まれてついでにまたアメリカと間違えられて全然知らないアラブの人に殴られました。

「何で僕だけこんな・・・・・・」

「カナダさんだけではないですよ」

ここでそのもう一人の不幸の申し子ラトビアが登場です。

「僕だって。ロシアさんが側にいていつも」

「それは大変だね」

ロシアについてはカナダもよく知っています。何しろいつもアメリカとロシアの仲の悪いのに家がお互いの近所にあるという理由で巻き込まれていますから。とりあえずアメリカと同じ位迷惑な人がいると思っています。

「あの人と一緒なんて」

「昨日もコルコルコルコルと言われて・・・・・・」

後は何があったのかはもう聞くまでもありません。

「ううん、何時までこんなことが続くんでしょう・・・・・・」

「僕もアメリカが横だからねえ」

不幸に遭いっぱなしなのでした。

「色々あるよ、本当に」

「どうやったら終わるんでしょう」

ラトビアの見果てぬ夢です。

「こんな生活、もう嫌なんですけれど」

「残念だけれど当分終わらないと思うよ」

ここでカナダは諦めたような言葉を出しました。

「どうやらね」

「何でそんなことがわかるんですか？」
「ほら、だって」
丁度目の前からトラックが突っ込んで来ます。恐怖の居眠り運転です。何と二人がいればそれだけ不幸がさらに襲い掛かって来るのでした。それに気付いた時二人はとりあえず生きていることだけには感謝するのでした。他に感謝することはとてもできませんでしたけれど。

第二百七十四話　　完

２００８・８・１４

第二百七十五話　ジェイソン　☆

第二百七十五話　　ジェイソン

大した用事ではないと言いましたが。それでもカナダは勇気を出すことにしました。アメリカには言わないとわからないということは彼もよく知っていたからです。もっとも言ってもわからない時が多いのがアメリカの困ったところですけれど。

「あのね、言うけれど」

「うん」

「君が世界中で威張り散らすから被害を受けるのは僕なわけで」

間違えられて殴られたりするからです。本当に迷惑しているのがよくわかります。

「それをなおしてもらえたらいいかなあっ、って思ってさ」

言いにくかったですが何とか言いました。しかしここでアメリカを見ると。

「えっ！？」

眼鏡が少しずれてその横に動いたままのチェーンソーを持っています。物凄い迫力があります。これでホッケーマスクを被ったらもう。カナダはそのチェーンソーに映る自分の顔を見ました。はっきりと怯えています。

「なななーーーんてね！」

それで慌ててこの場を取り繕いました。

「僕はそんなことこれっぽっちも思っちゃいないよ！ははははは！」

「そうじゃなくて聞こえなかったんだよ」

実はそうだったんです。聞いただけなのにチェーンソーが物凄い効果を出していただけなのです。

「今何て」

「ははははは、僕達は親友だよな！」

無理矢理そういうことにして。

「それじゃあ！」
逃げるようにアメリカの家を去りました。やはりカナダではアメリカに言うのは難しかったのです。
それで家に帰って。落ち込みながらクマ二郎に言います。
「今日も奴に何も言えなかったよ、クマ吉さん」
「君誰？」
「カナダだよ！」
クマ二郎さんにもやっぱり名前を覚えてもらっていませんでした。
実に踏んだり蹴ったりです。

第二百七十五話　　完

２００８・８・１５

第二百七十六話　メイプルシロップ

第二百七十六話　メイプルシロップ

皆でホットケーキを食べていました。ホットケーキと言えばやっぱりあれです。皆食べる前にあれを探しました。

「そうそう、あれあれ」

「あれ何処かな」

探しても何故か見つかりません。それでも探しているとそれが急に出て来ました。

「はい、どうぞ」

「あっ、有り難う」

「悪いなどうも」

それはメイプルシロップでした。やっぱりホットケーキと言えばこれです。もうこれがあるのとないのとでは大違いです。しかも色が赤く変わるまでかけると最高の美味しさになります。見れば皆早速そのメイプルシロップをホットケーキにたっぷりとかけています。

そのうえでホットケーキを食べながら。誰かが言うのでした。

「そういえばさっきシロップ出したの誰だ？」

「さあ」

何故か誰も知りません。

「俺じゃないぞ」

「私じゃないですよ」

皆心当たりもありません。けれど誰かが出したのは間違いないのです。

「誰が出したんだろうな」

「一応数は揃ってるけれどな」

数合わせをしたら皆います。けれど何故か誰が出したのかはわからないのでした。これでは怪奇現象そのものです。皆不安を抱きだしました。

「まさかイギリスの妖精がまた？」
「日本の妖怪！？」
妖しい存在が次々と出て来ます。
「じゃあこれは悪戯！？」
「いや、ちゃんとしたメイプルシロップだ」
これは間違いありませんでした。皆ちゃんとホットケーキにシロップをたっぷりかけています。これだけは間違いありませんでした。
「けれど誰が？」
「このシロップを」
「・・・・・何で皆誰も」
ここでそのシロップを出した人が悲しい声で呟きます。
「僕のこと気付かないかな。折角出してあげたのに」
やっぱりカナダでした。何をしても結局は目立てない彼なのでありました。

第二百七十六話　　完

２００８・８・１５

第二百七十七話　差し押さえ　☆

第二百七十七話　差し押さえ

「ねえクマ三郎さん」
またクマ二郎さんの名前を間違えているカナダでした。そんな彼がクマ二郎さんに相談することは。
「何で僕はこんなにも目立たないのかな」
「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」
「君の飼い主のカナダだよ」
オンドゥル語で返されて余計にへこむ始末です。
「だから。何で僕は目立たないのかな」
「それはわかってるんだよ」
クマ二郎さんは意外なことにも的確なアドバイスをしてくれました。
「君はカナダだってわかりにくいんだよ」
「わかりにくいんだ」
「そう」
本当に的確に答えてくれます。
「だからカナダっぽい見た目にしたらいいさ」
「そうか！」
これで見事光明を見出したカナダでした。
「顔が駄目なら別の部分でアピールすればいいんだ！」
「そうそう」
こうして道を見出したカナダさん。早速してみたことは。
「というわけで額にメイプル描いてみたよ」
確かに目立ちますがかなり気の毒な姿になっています。
「へえ、メイプルねえ」
しかもよりによってアメリカに見せています。
「これでもう君と間違え・・・・・えひゃい！」

何といきなりアメリカの一撃です。額をバーーーンと押されて気付いた時には。

「あれ？今何が起こったんだい？頭が少し痛いけれど」

「君が素直になっただけだよ」

何と額にはメイプルではなくアメリカの旗のマークが。何時の間にか差し押さえとなってしまったカナダでした。とかく不幸が続きます。

第二百七十七話　　完

２００８・８・１６

第二百七十八話　料理の腕は

第二百七十八話　料理の腕は

人間誰しも食べます。食べないと生きてはいけません。当然ながらカナダも料理を作ります。今日は遊びに来たイタリア兄弟におもてなしです。グルメで有名なこの兄弟が相手です、腕の見せ所と言っていいでしょう。

「よおし、頑張るぞ」

やっぱりカナダもここぞと思い気合が入っています。腕をまくってもう料理の準備にかかっています。

「やっぱりイタリアの二人だから」

料理するメニューはもうおおよそ決めていました。

「やっぱりこれだよね。パスタパスタ」

スパゲティです。ソースはトマトメインにガーリックと茸。パスタのソースとしてはかなりオーソドックスなものであります。無難な選択と言うべきでしょうか。

まずはソースを作ってパスタを茹でます。ここまでは何の問題もありませんでした。パスタをじっくりと茹でてそれから出してオリーブをからめてソースもかけて。それからようやく二人に対してどうぞです。

「ささ、どうぞどうぞ」

「あっ、スパゲティなんだ」

「これはいいな」

二人共大好物のスパゲティを見てまずは御満悦です。

「しかもガーリックにオリーブまで効かしてくれて」

「チーズまで添えて。言うことなしだな」

「だから。是非食べて欲しいんだ」

にこにこと二人に言います。

「僕のスパゲティ、ささ」

「うん、それじゃあ」
「早速」
こうして早速そのスパゲティを食べた二人ですが。以後カナダの家で料理を食べないようになりました。実はカナダは元々イギリスに育てられていたのです。そしてそれからずっと影が薄くて料理を誰からも教えてもらったことはないのです。つまり料理の腕は。
「コシが全然ないなんて言われたよクマ四郎さん」
「僕はアストロ超人じゃないぞ。ファイナル大魔球も投げない」
さりげなく突っ込みを入れるクマ二郎さんでありました。カナダの受難は続きます。

第二百七十八話　　完

２００８・８・１６

第二百七十九話　ケベック　☆

第二百七十九話　　ケベック

カナダにも国歌があります。幾ら目立たないといっても国なのですから当然ながらあるのです。それで今日は皆で集まって歌っていると。

何故か英語とフランス語になっています。とんでもなく仲の悪い二国の言葉で歌われるとなると。やっぱり深刻なトラブルになるのでした。

「おい御前等ちゃんと英語の歌詞で歌えよ」

英語派が最初に文句をつけます。

「ここはカナダだぞ」

「嫌だね」

しかしフランス語派も喧嘩腰にそれを拒みます。

「この歌はフランス語で歌ってこそ最高の響きになるんだからな」

「そうだそうだ」

「何ィ!?」

「ちゃんと歌えよ」

「あっ、どっちでも歌っていいよ」

双方の間に囲まれた当のカナダは戸惑いながらこう言います。しかし喧嘩になるのでした。

「御前等この前そのフランスに変なフランス語だって言われたじゃねえか!」

「フランス語ってねえってな!」

「あんた手前やるのか!」

「受けて立つぞアングレーズ!」

「うわあああっ!止めてよ皆!」

早速殴り合いの喧嘩です。カナダの制止も聞きません。こうしてこの騒ぎは発展しまくって新しい国ケベックができました。と思っ

たら。
「うわあああああっ！！って夢か・・・・・・」
まずはこのことにほっとするカナダでした。
「夢で本当によかったああ！モントリオールだけは勘弁！」
お隣さんだけでなく中でも悩みのあるカナダでした。受難は何処までも続くのでした。そう、何処までも何処までも。永遠に続くのです。

第二百七十九話　　完

２００８・８・１７

第二百八十話　そのイギリスとフランス

第二百八十話　そのイギリスとフランス

どうしてカナダがこんなことになったのは。はじまりはこの二人にあります。

「だからよ、最初御前が入ってずっと人間が残っただろ」

「いや、御前が俺から取ってそっから変なことやったからだろ」

イギリスとフランスが言い合っています。そのカナダでのイギリス系とフランス系の仲の悪さのことです。

「それであなったんだよ」

「俺はあそこじゃ何もしていねえぞ」

今回ばかりはイギリスも何もしていないのでした。

「そもそもカナダってよ。気付いたら俺から独立していたしよ」

「気付いたらかよ」

「正直覚えていねえんだよ、あいつのこと」

かなり無責任な言葉ですがそれでもカナダなら仕方ないと思えるのが不思議です。

「どんな奴だったかな。アメリカはよく覚えているんだけれどよ」

「御前それかなり酷い言葉だぞ」

「じゃあ御前覚えてるか？」

「いや」

実はフランスもこれに関しては同じなのでした。

「正直言って全然な」

「覚えてないか、やっぱりな」

「言われるまでカナダに行ったことすら忘れていたぞ」

「俺もだよ」

とにかくカナダのことは覚えていないのでした。

「ルイジアナのことは覚えているけれどな」

「何でこんなに覚えていねえんだ？」
「わからねえ。そういやあいつ料理どうだったっけ」
「一応御前のところにもいたんだろ？」
「ああ」
なおフランスは彼に料理を教えたのかどうか一切覚えていません。もう記憶の片隅にも残っていなかったりします。
「一応はな」
「じゃあ上手いじゃねえのか？」
「そうかね」
当の彼等ですらこうです。その目立たないカナダがどうなっているかさえも実は気付いていなかったのです。こんなことまで覚えてもらえないカナダなのでした。

第二百八十話　完

２００８・８・１７

第二百八十一話　とにかく困ったので　☆

第二百八十一話　とにかく困ったので

家の中でイギリス系とフランス系の仲が悪くて困っているカナダ。思い余ってよりによって不幸の元凶であるアメリカの家に言って彼に相談するのでした。どうもこの人はあまり人選ということに関してはセンスがないようです。

「イギリス系とフランス系が仲良くしてくれないって？」

「そうなんだ」

沈痛な顔で頷くカナダでした。

「僕はどうしたらわからないんだ、本当に」

「ははは、そんなの簡単だよ」

アメリカはそんなカナダの悩みを一笑に伏してしまいました。彼らしく。

「僕の家を見て御覧よ」

「君の家をかい？」

「そうだよ、人種の坩堝とか呼ばれて色々な人達が暮らしているわけだけれどさ」

それがアメリカです。

「けれど逆に細菌は色々な奴がい過ぎているせいでそういう争いは少ないんだよ」

「そうなんだ」

「まあジョークでお互いネタにすることは多々あるけれどね」

そのジョークがこれがまたどぎつくて。日本辺りは引いてドイツなんかは顔を顰めてしまうのですが彼は気にしていないだけです。

そんな彼の言葉はさらに続きます。

「君の家ももっとオープンな感じにしたらどうかな」

「ううん」

それを聞いて考えるカナダでした。

「色々な国の人と暮らすって言うのは良いかも知れないなあ」
こう考えだしたカナダでした。それがどうなっていくのか。カナダにとっては正念場でありました。

第二百八十一話　　完

２００８・８・１８

第二百八十二話　人がいないんですけれど

第二百八十二話　人がいないんですけれど

アメリカはそれこそうじゃうじゃと人間がいます。アメリカの家自体もかなり大きいですけれど中にいる人達の数も半端ではありません。そのうえ大きい人が多いですからこれまたかなりのものです。尚且つ個性まで強いというおまけ付きです。

それに対してカナダはどうでしょうか。確かにお家は広くてそこにいる人達も大きい人が多いですけれどその数は。これがまた実に。

「いないんだよなあ」

「君誰？」

「だからカナダだって」

またクマ二郎さんに言われています。カナダは家の人達の数がかなり少ないのです。そのおかげで家の中は何処もがらんとしたものです。

それで寂しささえ漂っています。どう見てもクマ二郎さんのお友達やヘラジカやクズリやオオヤマネコの方が多いです。動物は豊富なのですけれど。

「人が増えないのはどうしてなんだろう」

カナダの悩みの一つでもあります。

「もっとこう。人が多くて」

「寒いからじゃないの？」

クマ二郎さんの容赦のない突っ込みです。

「寒いと誰も来ないよ」

「じゃあ暖房を利かしてもっと温かくして」

「人に知られていないと来ないよ」

「それはそうだけれど・・・・・・」

「人間以外は沢山いるけれどね」

「何か湖から見えるけれど」
やたら大きな影が水面に見えています。またオゴポゴです。動物に関してははっきりしているのもしていないのも多いのですけれどそれでも人間は少ないです。こういうことにも悩みが尽きないカナダでした。
「海岸に何か来てるけれど」
「またなんだね・・・・・・」
ついでに時々海岸に恐竜みたいな死体が辿り着いたり。それなりにスリリングなのにやっぱり知名度は低いままなのでした。

第二百八十二話　　完

２００８・８・１８

第二百八十三話　やって来るのはこんな濃い面子　☆

第二百八十三話　　やって来るのはこんな濃い面子

アメリカのアドバイスで思いきりオープンになることにしたカナダ。早速家の新しい住人を募集しだしました。

「というわけで僕カナダは新しい住人を歓迎します！」

派手に宣伝して大規模なキャンペーンまで行っています。

「暮らし易いアットホームな雰囲気と安い物価ならおそらく何処にも負けないよ！」

こうした感じでキャンペーンを行います。目立たない彼にしてはかなり頑張っています。その頑張っているという自覚はありました。

「ふう、こんな感じかな」

実感があるのでにこにこしています。

「これで色々な国から人がやって来たら」

既にそうした光景が頭の中に思い浮かんでいます。

「皆でポテトキャセロール一緒に食べたりするんだあ！」

日本や他の温厚で爽やかでフレンドリーな人達に囲まれて朗らかに笑う自分自身を想像してもううっとりです。そこには薔薇色の未来がありました。その未来を胸に家に帰って来てみると。

「おかえりある」

「おかえりだぜ」

「やあ、ちょっとお邪魔してるよ」

何故か中国と韓国、ついでにアメリカまでいます。個性派国家が山盛りの太平洋においてとりわけ濃い面子です。カナダは三人を見て卒倒しそうになりました。

家の中はもうかなりのものです。アメリカがカナダのめぼしい品物を買い漁ったり中国の家の人達が集まってそこで早速騒ぎだしたりもっと騒がしくて傍若無人な韓国が好き勝手やったりして。家はカオスになり果ててしまいました。

「何でこんなことに・・・・・・」
頭を抱え込むカナダでした。
「頑張れ僕・・・・・・。未来の未来は今にありだ、だから」
とは言ってもカオスになってしまった家はどうしようもありません。よりによってイギリスやフランスよりも濃い面子に占拠されそうなカナダなのでした。

第二百八十三話　　完

２００８・８・１９

第二百八十四話　来て欲しい人達は

第二百八十四話　来て欲しい人達は

忽ちのうちに濃い面子に席巻されてどうしようもないカオスになって怪しい人達まで紛れ込んでいて様々な問題が起こってしまっているカナダ。そんな笑うしかない状況でも彼が来て欲しいような人達は家の前すら通らないのでした。

「このまま動物とＵＭＡと濃い面子とかだけで生きていくの嫌なんだけれど」

誰だってそうですがそれでも来て欲しい人達は来てくれません。泣きそうになっている彼の前をそんな来て欲しい人の一人である日本が偶然通ったのでした。

「あれ、日本」

日本の姿を見て満面に笑みを浮かべます。

「来てくれたんだ、あのさ」

遊びに来てはどうかと誘おうとしました。ところが。

「はて」

カナダの声は聞いたのですが辺りを見回すだけです。

「空耳でしょうか。どなたか私を呼ばれたような」

「あのさ、日本」

なおも日本を呼びます。

「今から僕の家遊びに来ない？美味しいものも（注：自己採点）一杯あるんだけれど」

「やはり誰もおられませんね」

日本の目には映っていないのでしょうか。

「おかしなこともあるものです。一体どなたなのか」

「ああ、日本」

ここでドイツがやって来ました。

「そこにいたのか。実はイタリアがな」

「ドイツさんが呼ばれていたのですね」
日本はこう考えるのでした。
「成程、そういうことでしたか」
「あの、僕の姿見えてる？」
見えていないようです。日本はドイツと一緒に何処かへ行ってしまいました。
「・・・・・あの、何で来て欲しい人達は来てくれないのかな。家がどんどん凄いことになっていってるんだけれど」
もう中国の言葉やら韓国の言葉やらアメリカ人の商売の話やらで無茶苦茶になっている家がカナダの後ろにありました。本当に世の中は上手くいかないものです。

第二百八十四話　　完

２００８・８・１９

第二百八十五話　間違えられても　☆

第二百八十五話　間違えられても

「あっ、おいアメリカ」
イギリスが学校の中でアメリカを見つけて声をかけます。
「今度の会議のことだけれどな」
「あっ、イギリスさんこんにちは」
まず声が違いました。
「僕は違いますよ」
「えっ！？あれっ」
イギリスはその声を聞いて誰かと思い困った顔になります。
「アメリカじゃねえな。誰だったっけ」
「何度目なんですか。ですから僕はカナ・・・・・・」
彼もまた困った顔で言おうとします。けれどここでフランスがたまたまやって来て。
「おい、そいつは確か・・・・・・カナダだぞ」
「ああ、そうか」
覚えていないイギリスなのでした。
「そうだったな、そういえば悪い悪い」
「頼みますからいい加減覚えて下さいね」
「まあ俺似のサラサラヘアー以外で見分けつかないしな。仕方ないさ」
「何だと！」
もうカナダを放置して自分達の喧嘩をはじめています。
「俺がぼさぼさ頭みてえじゃねえかよ！」
「そうだろ！御前は身体中パンクじゃねえか！」
「何ィ！？」
（どいつもこいつも好き勝手言いやがって。しかも放置して）
今喧嘩している二人を見て内心歯軋りするカナダです。

（そりゃ確かに僕は目立たないさ。けれど今日こそ言うぞ）
「ですよね、あはは」
「いやカナダ本当に御免な」
「いいですよ、別に」
結局言い返せないカナダでありました。そんなこんなで彼はいつも生きています。

第二百八十五話　　完

２００８・８・２０

第二百八十六話　今度は魚群探知機で

第二百八十六話　今度は魚群探知機で

カナダは目立たないけれど頑張っています。漁業にも精を出しています。確かに料理の評判は芳しくはないですがそれでもそっちも頑張っています。

それで今日も漁に出ています。一緒にいる家の人達があれよこれよという間に鮭やらマスやら美味しい魚をどんどんと獲っています。

「今日も大漁だね」

「そうですね」

「いい感じですね」

太平洋の濃い面子とは違ってカナダの人達は至って物静かです。その人達がにこにこと笑いながら大漁を喜んでいました。ところがその時に。

「何じゃこりゃあああああああっ！」

「どうしたの？太陽が何かあったの？」

「ち、違いますよ！」

魚群探知機を見ていた人が突然騒ぎ出したのです。しかも尋常な様子ではありません。

「これ見て下さいこれ！」

「凄い魚の群れでもあったとか？」

「そんなのじゃないですよ、ほら！」

「ほらって・・・・・えっ！？」

カナダも見てまずびっくりです。

「これってまさか」

「何でこんなのが出て来たんだ！？」

「わからない、けれど！」

何と魚群探知機に出ているシルエットは首が長くて丸い胴体にヒレが四つついた。そう、俗に言われているあれです。

「やっぱりこれって」
「嘘だろ・・・・・・」
「まさか」
皆そのシルエットを見て呆然です。しかもかなり大きいです。
「こういうのは一杯いるんだよなあ、僕の周りって」
いい移民や良識あるお友達には恵まれませんが何故かこうした存在にはとかく縁があるカナダでありました。何故かわかりませんが。

第二百八十六話　　完

２００８・８・２０

第二百八十七話　キャッチボールをしても　☆

第二百八十七話　キャッチボールをしても

カナダは野球好きです。それで野球の本場アメリカとキャッチボールをしたりします。

「カナダキャッチボールしないか？」

「いいよ、じゃあやろうね」

こう言い合って早速キャッチボールをはじめます。ところが。

「じゃあ行くよ」

「よし来い。どんなボールでも・・・・・アカイ！」

アメリカのボールがカナダの顔に炸裂します。

「ちょっとアメリカ、速過ぎるよ」

「悪い悪い、それじゃあ」

スローに投げたつもりでした、アメリカは。

「次ことは・・・・・バナオノ！！」

今度は急所に直撃です。これは痛い。

「だから速いって！」

「よし、もっとスローボールで」

「ゲターーーーーーッ！」

何処かの拳法伝承者にやられたみたいな声になっています。

「だからもっと遅く！！」

「それなら・・・・・」

「ワーーーーターーーーーーーベーーーーーーッ！！」

頭に直撃です。これに切れたカナダは遂に言います。

「だから君はせっかちなんだって！」

半泣きで言います。

「おかしいよ！もっとスローに生きたらどうなんだよ！」

「何っ、それは違うよ！」

これで反論しないアメリカではありません。当然のように言い返

します。
「君がスローモーなんだよ！」
「何だって～～～～～」
本気になったカナダは遂に攻撃に出ました。拳を振りかざします。
「この野郎～～～～頭にきたぞ～～～～～」
「はっはっは、遅いよ」
ポカポカとやっても軽くあしらわれます。どうしてもアメリカには勝てないカナダなのでした。しかも彼が勝てない人はこの人だけではないのでありました。少なくともスローさと不幸さにかけては。不幸さではラトビアというライバルがいるにしろです。

第二百八十七話　　完

２００８・８・２１

第二百八十八話　どうしてもドベに

第二百八十八話　　どうしてもドベに

カナダが考えたくもないし来て欲しくもない濃い面々がひょっとしたら欧州よりも粒揃いで尚且つグレードアップしたレベルでいる太平洋。カナダはその太平洋の一員です。望んでいようが望んでいなかろうが場所は選べないのでここにいます。

「さて、今日は親睦会を兼ねた運動会ですが」

日本が言います。

「皆さん足の速い方ばかりで。年寄りには辛いですね」

「そんなこと言ったら僕なんか四千歳あるぞ」

中国なんかは日本より年上ですが出ます。

「それに比べたら日本はまだまだ若いある」

「今回も僕は一番だよ」

当然ながらアメリカもいます。アメリカはトップの常連です。

「さて、気合入れるか」

「一万歳の俺が行くんだぜ！」

韓国もまた気合が入っています。

「日本には負けないんだぜ！」

彼の特徴として日本に勝てればそれでいいと考えていることです。日本に負ければ凄く悔しがりますが他の人に負けても日本に勝てればそれでいいという人なのです。

「じゃあ僕も」

ロシアまでいます。

「やろうかな」

こんな面子ではじまるレース、今回もアメリカがトップで歳のわりにトップ集団を占める日本と中国、体力任せにやり遂げていくロシア、日本に勝てなくてもそこそこ以上に健闘の韓国、大体こうした面子は頑張っています。他の皆も頑張りました。けれど順位はつ

くものでして最下位は。果たして誰なのかといいますと。
「おや、最下位の方がおられませんが」
日本は皆の順位をチェックしてから首を傾げます。
「おかしいですね。もう一人おられるのですか」
「あれ、いる筈だよ」
「誰かいないあるか？」
「俺はいるんだぜ」
「僕もちゃんといるよ」
「やっぱり皆さんおられますね」
日本も皆いると思って安心すると共に首を傾げます。最下位の人だけいないのですから。
「順位を間違えたんでしょうか、一人多く出してしまいましたか」
「さあ、完走目指して頑張るぞ～～～～」
日本は気付いていませんでした。まだカナダが走っているのです。スローモーでしかも濃い面子の中で影が薄いとなると。悲劇が起こってしまうのでした。

第二百八十八話　　完

２００８・８・２１

第二百八十九話　子供の頃のはじまり　☆

第二百八十九話　子供の頃のはじまり

とかく目立たないうえに不幸が飛んで来るカナダ。今日も悩むこととしきりです。

「何で僕は目立たないって言われるんだろう」

周りは大自然、彼の名前を全然覚えてくれない熊さん達で一杯です。熊先生がいないことだけがせめてもの救いです。

「メイプルシロップとか美味しいんだけれどなあ」

それだけだったりしますが。物思いに耽りながら昔のことを思い出します。

「昔は結構皆からちやほやされていたのに」

「おいカナダ」

若き日のイギリスに声をかけられていました。

「今日は御前の兄弟に会わせてやるぞ」

「僕の兄弟？」

「ああ、そうだ」

まだ幼いカナダ。おずおずとそのイギリスに尋ねるのでした。

「それってどんな人なの？」

「そうだな」

少し考えてからカナダに対して答えてきました。

「少将やんちゃな奴だな」

「やんちゃなんだ」

「けれど気に入ると思うぞ」

「そうなんだ、よかった」

（僕の兄弟かあ）

兄弟がいることにまずは嬉しいカナダでした。

（仲良くなれたらいいなあ）

「おーいアメリカ」

イギリスがその彼を呼びます。
「ちょっとこっち来ーーーーーーーい！」
そのアメリカを呼びます。さてさて、アメリカはどんな子なのかと期待で胸が膨らむカナダでありました。これからの彼の人生希望はすぐに絶望になってしまうのですが。

第二百八十九話　　完

２００８・８・２２

第二百九十話　ロシアじゃないよ

第二百九十話　　ロシアじゃないよ

カナダは寒いですがとても広くて色々な動物達がいます。けれどその動物達は実はある国の動物達と同じ種類のものがとても多いのです。これは気候のせいとかつてその国とは地続きだったせいであります。生物学的には中々興味深いことではあります。そしてその国とは。

「クズリいるよね」

「うん」

カナダはロシアの質問に対して答えます。彼がふと尋ねてきたのです。素朴に。

「ヘラジカいるよね」

「うん」

「狼もいるよね」

「いるよ」

そうした動物達が一杯いるのがカナダです。

「あと北極には」

「シロクマとかホッキョクギツネとかアザラシとかが」

「何だ、やっぱり一緒だね」

「えっ、一緒って!?」

「カナダ君は僕の家で住むべき人なんだよ」

にこやかに笑ってカナダに言います。カナダにとっても恐ろしいことこの上ない言葉です。それで真っ青になってロシアに尋ねます。

「それってどういう意味!?」

「だって住んでる動物達が一緒じゃない」

ロシアの言い分はこうなのでした。

「だからさ。だったら僕の家においでよ。動物達も一緒だし楽しいよ」

「いや、それはアメリカが」
「アメリカ君のことは気にしなくていいからさ。さあ」
「お断りしまーーーーーーーーーす！」
慌ててその場からダッシュで逃げるカナダでありました。実はロシアはこういうことは誰にでも言ったりするものですがカナダには耐えられなかったのです。もっともロシアにこう言われて真っ青にならない人もいなかったりするのでありますが。それでも寒いのにサウナの中に三十分はいたかのように不健康極まりない汗をかいてしまったカナダなのでした。本当にカナダの周りには彼がいて欲しいような人はあまりというかほとんどというか下手をしなくても全然いないか気付いてもくれないのでありました。
「死ぬかと思ったよクマ七さん」
「じゃあ僕は投げられてホームランボールを捕るのかい？」
「御免、間違えた」
ついでにまたクマ二郎さんの名前も間違えてしまうのでした。

第二百九十話　　完

２００８・８・２２

第二百九十一話　幼い日の出会い　☆

第二百九十一話　幼い日の出会い

イギリスがアメリカを呼びました。それから少し経ってから部屋の扉が開いて。そこから出て来たのはカナダによく似た小さな子供でした。

「んっ？何だいイギリス」

「う・・・・・うわあ！」

カナダは不覚にも彼を見て思わず叫び声をあげてしまいました。

「来たあああああああっ！」

「あれっ、君は」

アメリカは彼に気付いてすぐに側にやって来ました。カナダに比べるとずっと活発なのはどうやらこの時からのことだったようです。

「僕と同じ顔なんだね」

「う、うん」

戸惑いながらアメリカに答えました。

「はじめまして」

「こちらこそ」

挨拶はしっかりと済みました。

「僕は英領カナダです」

まずはカナダから名乗ったのでした。

「宜しく」

「うん、宜しく。僕はアメリカ」

何故か英領というのが抜けています。

「宜しくね」

「あの、君が僕の」

カナダはさらに言おうとします。けれどアメリカはもう飽きてしまっていました。この頃からアメリカはアメリカだったようです。

「イギリス！お腹が空いたぞ」

「そうか。じゃあ何か作ってやるよ」
「あっ・・・・・・」
一人置いてけぼりにされたカナダでした。当然イギリスも彼の存在を忘れていたのでした。その時のことを思い出してカナダは呟くのでした。
「御免、やっぱり昔からこうだった・・・・・・」
何処までも目立つことのできない星の下にいるカナダなのでした。幼い頃からそうだとは最早運命なのでしょう。本人にとっては実に不幸なことに。

第二百九十一話　　完

２００８・８・２３

第二百九十二話　彼の方が有名

「おいあれ見ろ！」
「すげえ、本当にいたのかよ！」
今日もカナダの家にあるオカナガン湖に沢山の人が集まっています。お目当てはこの湖に現われる謎の生物オゴポゴです。そのコブやシルエットを見て皆驚きの声をあげているのです。
「まさか見られるなんて思わなかったよ」
「そうだな。しかし何て大きさなんだ」
湖面に見えるシルエットはかなりの大きさです。言うまでもなく人間なんか一呑みではないかと思える位です。そんなのが出て来るのですからこの湖はかなり有名です。
けれど。その持ち主というと。
「流石アメリカだよなあ」
「ああ、ビッグフットだけじゃなかったんだな」
多くの人がここをアメリカだと思っていたのでした。
「オゴポゴか。覚えたぜ」
「他にもチャンプとかジャージーデビルとかいるしな。奥の深い国だぜ」
「あの」
そんな彼等にカナダが尋ねます。
「確かにチャンプとジャージーデビルはアメリカの家にいるらしいけれど」
「んっ！？」
「ビッグフットは僕の家でも出て来るよ。それに」
「それに？」
誰だという感じで自分を見る皆に話します。
「オゴポゴは僕の家に出て来るＵＭＡなんだけれど」

「そう言うあんたは誰なんだい？」
「人間だからＵＭＡじゃないようだけれどな」
「だからカナダなんだって・・・・・・」
何と家のＵＭＡよりも知名度の低いカナダなのでした。これはある意味本当に凄いことです。

第二百九十二話　　完

２００８・８・２３

第二百九十三話　小さい人　☆

第二百九十三話　　小さい人

大きいのに哀しいまでに目立てないカナダ。けれど世界は本当に広いもので小さい人もいます。一応国家であるという人です。

シーランドです。世界最小、国民は四人という国です。彼ができたのはイギリスが大いに関係しています。

イギリスが第二次世界大戦中に海の上に作った要塞が一つありました。これがシーランドになったのです。実はイギリスが戦争が終わってから忘れていたものをシーランドの今の上司が独立宣言をして国家となったのです。そんなクにです。

とても小さな身体ですが心はとても大きいと自認しています。今も十九ユーロで爵位を授与していたりします。こうしたことから名前を世界中に売っているのです。

何時かは彼を完全に忘れ去っていたイギリスだってひれ伏すような巨大帝国になるのが夢です。常にその努力は欠かしていません。

「こっち水漏れしてるんだけれど」

「こっちもです」

「あっ、はい」

工具を手に国民に応えています。

「今なおしていますからちょっと待っていて下さーーーーーーい」

「頼むよ、早く」

「この要塞もできて六十年だからねえ」

「国になって四十年」

建物でそれだけ歴史があるということは。

「あちこちガタがきてるからねえ」

「なおしていかないと駄目だからね」

「そうなんですよね、実は」

小さな身体がもうあちこち辛いことになっていたりします。それ

でも頑張るシーランドなのでした。大きいのに目立てない人もいればこうした人もいたりするのです。世の中というものは本当に広いものです。井の中の蛙何とやらといった人もいたりしますけれど。

第二百九十三話　　完

２００８・８・２４

第二百九十四話　記憶力が最近

「おいイギリス」
「何だ？」
今日もイギリスはフランスに声をかけられています。彼もそれに応えます。
「最近御前もの忘れ激しくねえか？」
「そうか？」
自分ではあまりそうは思っていないイギリスでありました。それが顔にも声にも出てぼんやりとした感じになっちゃっています。
「俺は別にそうは思ってねえけれどな」
「カナダ御前のところだったよな」
「そうだったか？」
いきなりこうです。自分がカナダを引き取っていたことも殆ど忘れてしまっているのです。
「そういやあいつ俺のところにいたっけ」
「ちゃんと覚えてろよ。じゃあシーランドは？」
「誰だそれ」
やっぱり覚えていませんでした。
「今はじめて聞いた名前だけれどよ」
「やっぱり覚えてねえじゃねえか」
「っていうかシーランドって誰だ？」
真剣な顔でフランスに尋ねます。
「俺本当にそんな奴知らねえんだけれどよ」
「御前が前の戦争で海に要塞作っただろ」
「いちいち覚えていねえよ」
これが実に重要な言葉でした。
「そんなのよ」

「そのうちの一個が国になってんだけれどよ」
「・・・・・マジか」
今はじめて知った衝撃の事実でした。その顔でフランスに対して問います。
「何時の間にそんなことになってんだよ」
「・・・・・御前昼飯何食った？」
「まだ食ってねえよ」
「さっきパンとハムエッグとコンソメスープとサラダと紅茶とビスケット食っただろうがよ」
「そうだったか？」
「・・・・・こいつ本当に大丈夫なんだろうな」
本当に記憶力がやばいことになっているイギリスでした。外見はまだ若いというのに。
「御前冗談抜きで何歳なんだ？」
「年齢のことは聞くな。まだ確か二十代だ」
「確かっておい・・・・・」
また一つわかりました。年齢への記憶も怪しくなっているのでした。これは冗談抜きで危険です。

第二百九十四話　　完

２００８・８・２４

第二百九十五話　挨拶をしても　☆

第二百九十五話　挨拶をしても

シーランドは国家であると自認しています。ですから当然ながら国際会議にも出席します。誰も呼んでいませんがそれでもやって来るのです。

今日は世界会議なので頑張って来ました。職務を全うする気です。折角ですからあちこちの国に挨拶をすることにしました。

まずはスイス。スーツに背中のライフルが実にアンバランスです。その彼に声をかけます。

「あっ、おはよーーーございまーーーす」

しかし挨拶はありません。元々すこぶる無愛想な彼ですが有り得ないまでに無愛想です。けれどそれにへこたれるシーランドではありません。

「おはよーーーございまーーーす」

イタリア兄にも声をかけますがやっぱり返事はありません。それでもへこたれずに今度は。

「声が小さかったかな。それじゃあ」

後ろ姿の黒髪の人に声をかけます。

「おはよーーーございまーーーす」

シーランドの声にぴくりと反応したのは日本です。挨拶を返そうとしますが。

「あ・・・・・」

ここで脇ににょきっと出て来たのはイギリスです。怖い顔でいます。それを見て日本はさりげなく彼に気を使って。

シーランドにぺこりといちれいするだけでした。それだけでそっとその場を去ったのでした。そんな彼を見てシーランドは思うのでした。

「何だよ皆揃いも揃ってあんなにシャイで」

自分の周りのことは気付いていません。
「それじゃあ全然モテねーーーですよ」
こう言うのでした。何処の国にも国と認められていないとは気付いていないのでした。

第二百九十五話　　完

２００８・８・２５

第二百九十六話　そもそも出来たのは

第二百九十六話　そもそも出来たのは

イギリスはこの時滅茶苦茶困っていました。ドイツが彼の国の生命線である海を潜水艦で荒らし回っていたからです。しかも自慢の海軍が。

「また沈んだってのか！」

「はい、見事に」

「見事にじゃねえよ。どうなってんだよ」

海軍もその潜水艦にコテンパンにやられています。前の戦争でもそうでしたが今回もかなり念入りにやられています。海軍があてにならないのです。

「どうしましょうか」

「どうしましょうかってよ」

家の人に言われても中々考えが纏まりません。何しろイギリスといえば海軍なのにその海軍があてにならないのですから。けれど海は何とかしないといけません。さもないと戦争に勝つどころかパンも紅茶も満足に見ることさえできないのですから。

悩みに悩んだ彼が考え出した結論は。これでした。

「海に要塞を築くぞ」

「要塞ですか」

「ああ、何個も築く」

こう決断したのです。

「これであのソーセージ野郎を食い止める。絶対にな」

「海軍が駄目なら要塞ですか」

「ああ。これならいけるだろう」

「そうですね。それじゃあ」

「早速築いていきましょう」

「戦争に勝つ為だ」

もう形振り構ってはいられないのでした。
「何だってやってやる。絶対に生き残ってやる」
こうして海の上に要塞を築いていったのです。こんな苦労もあって戦争には何とか勝つことができました。けれどそのうちの一つの存在は見事に忘れていて。これがシーランドとなるとは彼は夢にも思わなかったのです。
「シーランド公!?知らねえな」
「御前の国の人間じゃねえのかよ」
フランスに尋ねられてもこんな調子でありました。

第二百九十六話　　完

２００８・８・２５

第二百九十七話　やっと気付いて　☆

第二百九十七話　やっと気付いて

シーランドは少し考えながらサイダーを飲んでいるとふとあることに気付いたのでした。それもかなり基本的なことがです。

「そういえばシーランド君皆に認められていないんだったよ」

誰にも国家として認められていないのです。ここが重要です。

「忘れてたです。それなら」

それならそれですぐに行動に移る彼です。動きは迅速です。

「あの人のよさそうなのから攻めてみようっと」

こう言って近寄ったのはリトアニアです。中々目のつけどころがいいです。

「すいませーーーーん」

「俺？」

「はい。国になるにはどうするといいですか？」

何気なく聞いたのですがリトアニアは驚いた顔で彼に言うのでした。

「えっ、君国になるつもりなの！？その小さい身体だと無理じゃない？」

「平気ですよ」

「平気って・・・・・・」

リトアニアをじっと見ている人がいます。何とロシアです。これは怖い。

「一つの国になるってすごーーーーく大変なことなんだよ」

壁のところから見ているロシアには気付いていませんが。それでもいつもロシアを意識しているのでまああまり大して変わりはないです。

「因縁つけられて自分より強い国に攻め込まれたり分化を奪われたり」

実際の経験からの言葉です。だからこそかなり説得力があります。

「強くないと何時消滅してもおかしくない世界だよ。辛いことの方が遥かに多いし」

「それでもシーランド君は平気ですよ」

「そうなんだ。君は強いね」

まずはシーランドのそんな心を認めるリトアニアでした。その微笑みは実に優しい包容力のあるものでした。ずっとロシアが見ていますけれど。

第二百九十七話　　完

２００８・８・２６

第二百九十八話　だから天国と地獄なんだって

第二百九十八話　だから天国と地獄なんだって

毎度毎度の韓国の主張です。

「日本には何もかもを奪われたんだぜ！」

「韓国に資源ってあったの？」

「僕知らないけれど」

「何かありましたっけ」

バルト三国はそんな韓国の主張を聞いて首を傾げています。韓国の資源といってもこれと言って思い浮かべることがない三人なのです。

「恐ろしい目に遭ったんだぜ！特に文化と文字と名前は！」

「全部日本さんの家で研究されて残ってますよね、韓国君の文化」

「そうだよね、おかげで勉強し易いよ」

「日本さん几帳面だから」

エストニアもリトアニアもラトビアも実際に今日本の家の韓国に関する本を読んでいます。実に丁寧に細かいところまで書かれているいい本です。

「悲劇なんだぜ！俺は地獄を味わったんだぜ！」

「そのわりにあの時すっごく血色のいい顔でしたよね」

「僕達なんか。あの時」

「もうあの時のことは言わないでおこうよ」

エストニアもラトビアもリトアニアもあの時のことは思い出したくないのです。あまりにも辛くて。ところが韓国は日本の家に厄介になっていた時は凄く血色がよかったのです。もう生き生きとしていました。

「このことは忘れないんだぜ！国をなくしたっていう悲しみと絶望

は！」
「そりゃ立て続けにあんなこと何度も何度もしたらねえ」
「よく併合だけで済んだと思うよ」
「僕達なんか一回でもあんなことしたらそれこそロシアさんから何されるか」
　日本とロシア、まさに両極端であります。その違いがこの四人にも実によく出ています。背景にはオッフェンバックの天国と地獄の曲が延々とかかっています。

第二百九十八話　　完

２００８・８・２６

第二百九十九話　すずらん　☆

第二百九十九話　　すずらん

「俺は応援するから」
流石は人格者のリトアニアです。心からの言葉をシーランドに告げてその場を後にします。ロシアが見ていたことは気付かないままで。
「是非頑張ってね」
「有り難うございます。けれど」
ここでシーランドは言い忘れていたことがありました。
「シー君一応今でも国なんだけれど・・・・・まあいいか」
リトアニアが行ってしまいましたから。そっとロシアが隠れたのが不気味ですが二人は気付いていません。気付かない方が幸せなこともあります。
「あっ、シー君認めてもらうの忘れてたよ」
シーランドはこのことにも気付くのでした。迂闊と言えば迂闊です。
「次会う時は認めて・・・・・ふぎゃっ！」
いきなり後ろからぶすりと。仕事人でしょうか。この世界には何かと物騒な人達もうろうろしていたりします。
驚いて後ろを振り向くシーランド。そこには何故かラトビアがいました。花を持って。
「貴方は？」
「ラトビアです。御免なさい」
「は、はあ」
「あとこれ」
ラトビアが持っている花をよく見ればそれは何と。
「フィンランドさんのお家の花でした」
「えっ、それってまさか・・・・・」

「はい、すずらんです」
「へぎゃあああああああああああああああっ！」
毒があったりします。いきなり思わぬトラブルに巻き込まれてしまったシーランドでありました。不幸は向こうからやって来ることもあるのです。

第二百九十九話　　完

２００８・８・２７

第三百話　実は前科があった

第三百話　実は前科があった

「えっ、またあの人か！？」
「はい、あの人です」
イギリスは家の人から話を聞いてまずは呆然としました。
「いきなり襲われまして」
「あの人何かそういう話多くないか？」
「どうにもこうにも」
イギリスの上司一族の後継者の人です。色々とスキャンダルがあちこちで報道されたりしたことがありますが実は無欲で平和と薔薇を愛するそんなに悪くはない人です。けれど外見もぱっとしないところがあって今一つ人気がないのも事実です。そしてあまり運がいいとは言えなかったりします。
「何故でしょうか」
「俺の運のなさが移ったか？」
イギリスは自覚があったりします。
「ひょっとして」
「まさか」
「あの人の後頭部は俺に移らないだろうな」
「・・・・・それ禁句ですよ」
あえて誰もそれには突っ込みません。言ってはいけないことです。ドイツの家ではそうしたことで困っている人が非常に多いのは内緒です。
「済まない。しかしなあ」
「ラトビアさんですね」
「あいつ、やっぱりストレス溜まってるのか？」
今度は犯人について話をします。
「よりによって花をさすなんてな」

「あの人はそれ位で処罰なんて幾ら何でもと仰っていますが」
「そうだよな。それにしても」
イギリスは腕を組みつつ首を捻って言います。
「ロシアの横って。やっぱり辛いんだろうな」
「引っ越してみます？フランスから離れると思って」
「あそことアメリカと中国とついでに韓国の横は嫌だぞ」
「左様ですか」
「しかし韓国は何時になったら俺とフランスのことを覚えるんだよ」
今挙げた全部の国と海を挟んで隣同士の日本のことは考えていないのでした。イギリスもまだまだ甘いです。

第三百話　　完

２００８・８・２７

第三百一話　記憶力が可哀想な兄ちゃん　☆

第三百一話　記憶力が可哀想な兄ちゃん

「おいシーランド！」
「あっ、イギリスの野郎」
ここで最近まで見事なまでもシーランドのことを忘れていたイギリスが登場です。思い出せばすぐに動くのが彼です。
「こんにちはですよ」
「こんにちはですよじゃねえ！」
かなり怒ってシーランドに言い返します。
「御前何一丁前に国顔してるんだよ！」
「この間はシー君を国と認めてくれで有り難うですよ」
「認めてねえ！」
流石にこれはイギリスも覚えていました。というよりは教えられて思い出したのですが。
「あれは俺のじゃないとだけ言ったんだ！」
「そうだったんですか？」
「そうだよ！」
実はシーランドの家で騒動が起こった時にイギリスの家の警察があそこはイギリスじゃないからと言って動かなかったことがあったのです。こういった経緯からシーランドは自分を国家だと思うようになったのです。イギリスはうっかりと忘れてしまっていたのです。
「とにかくだ」
シーランドを捕まえて言います。
「今日こそは俺の家に帰ってもらうからな」
「えっ、嫌ですよ！」
それは全力で否定するシーランドでした。
「シー君はシー君なんですから！」

「だから俺の家の人間だろ御前！」
「全然覚えていなかったじゃないですか！」
近頃本当に記憶力が困ったことになっているイギリスです。これが上司の御曹司さんみたいに髪の毛にも至らないことを祈ります。ドイツの家の多くの人みたいに。もっとも最近ではフランスも気にしているみたいですけれど。

第三百一話　完

２００８・８・２８

第三百二話　かわりばんこで

第三百二話　かわりばんこで

ドイツの家では髪の毛のことで悩みを抱えている人がかなり多いです。この点では世界中で同じ様な人が多いのですがドイツはそれが目立ちます。

「ビールとソーセージのせいか」

ドイツもこのことは薄々にしろ勘付いています。何しろ彼の食事ときたら。

「この二つとジャガイモにバターをかけてアイスバインにだが」

「やあ、それはあまり髪の毛によくないね」

ロシアがここでやって来ました。

「野菜はザワークラフトだったっけ」

「そうだが」

「もっとバランスよくね。食べないと駄目だよ」

「だがそういう御前は」

ドイツはそのロシアに対して言うのでした。彼にしろ。

「家の上司が薄い人と濃い人交代になっていないか？」

「そういえばそうだったっけ」

そういうことはあまり見ていなかったロシアでした。実はロシアの家の上司は髪の毛が多い人の後は少ない人が、少ない人の後は多い人という奇妙な法則があるのです。それで今現在の上司は薄かったりします。

「それを考えると御前のところも」

「ううん、やっぱり危ないかな」

「寒いから髪の毛ないと大変じゃないのか？」

「ああ、それは大丈夫」

けれどこの質問にはすぐに答えるロシアでした。

「帽子があるから。毛皮の帽子」

「ああ、あれか」
「けれど髪の毛のまま外に出て薄かったら確実に風邪ひくだろうけれどね」
「じゃあ俺の家の人の多くは」
「風邪薬を用意しておく？それかウォッカを」
「風邪薬にしておいてくれ」
こう答えるドイツなのでした。髪の毛の悩みは彼にとっては結構深刻なのでした。

第三百二話　完

２００８・８・２８

第三百三話　兄弟仲悪過ぎる家かも

「いいから今日は帰るぞ！」
イギリスはシーランドを羽交い絞めにして言います。
「家で大人しくしてろ、いい加減に！」
「嫌ですよ！」
しかしシーランドも聞き入れません。必死に抵抗します。
「兄弟仲なおしてから出直せですよ！」
「それとこれとは話が違うだろうが！」
完全に言い争いになっています。
「御前そんな小さい身体でこの先やってけると思ってんのか！」
「思ってますよ！」
シーランドはへこたれません。
「思ってるから頑張ってるですよ！」
「昔を思い出すわーーーー」
「そうだな」
スペインとフランスはそんな二人のやり取りを暖かい目で見ています。かつての自分達やイギリスのことを思い出しているのでしょう。
「そうやってシー君を小さいからって馬鹿にしないで欲しいですよ」
「むっ！？」
その言葉に思わず彼を放して聞くイギリスでした。もう向かい合っています。
「イギリスの野郎は知らないかもだけれどシー君は世界中にシーランド男爵がいるんですよ」
「そうだったのか？」
「そうです。そのうちイギリスの野郎を越えるような大帝国に」
「あっ、御前ん家」

窓の向こうから花火みたいな爆発が見えたのでした。
「今えらいことになったみたいだぞ」
「な、何故ですか！」
「俺が聞きたいよ」
流石に彼も家が爆発するなんてことはないわけでして。驚いています。当事者は驚くというレベルではないですけれど。やっぱり前途多難なのは確かなようです。
「大丈夫です、爆発の数だけ強くなれるです！」
「そりゃ暴れた数だけじゃねえのか？」
「何故知ってるですか」
「まあ色々あってな」
意外とテレビも観ているイギリスでした。

第三百三話　　完

２００８・８・２９

第三百四話　何時の間にか公認

第三百四話　何時の間にか公認

「しかしあいつ国民つってもたった四人だぞ」
イギリスはまたフランスの家で愚痴っています。
「それで国ができるか。軍なんか一人なんだぞ」
「一人か」
「ああ、一人だ」
はっきりとフランスにも答えます。
「いつも兵隊がライフル持っている。それだけだ」
「十一人いねえんだな」
「いる筈ないだろ」
フランスの言葉に答えます。
「四人しかいないのにどうして急に七人も増えるんだ」
「いやよ、デンマークがな」
「ああ」
「あいつから公認のチームにしてやるって言われたらしいんだよ」
「何なんだよ、それ」
その話を聞いてまた呆れるイギリスでした。
「気付いたらそのチームにあいつから公認受けたらしいんだよ。それでらしいな」
「だからあいつの所は四人しかいねえんだぞ」
このことが強調されます。
「それでどうして」
「デンマークは御前の所かって聞きてえらしいけれどどうするんだ？」
「・・・・・わからねえよ。っていうかよ」
「ああ」
「今の俺の心境一言で言おうか？」

こうフランスに言うのでした。
「何だったらよ」
「じゃあ言ってみな」
「ウゾダドンドコドーーーーーン・・・・・・」
「よくわかったぜ」
「悪いな」
オンドゥルになっているのでした。とかく彼の知らないうちに彼が想像しないようなことが起こっていて疲れ果ててしまっているイギリスなのでした。

第三百四話　　完

２００８・８・２９

第三百五話　めげない人

「爆発しちゃった！」
流石のシーランドも泣いています。
「シー君のお家爆発しちゃいましたよ！」
「御前そりゃうちの馬鹿生徒会長よりパンクだぞ」
イギリスが横で呆れながら突っ込みを入れています。とりあえず突っ込みを入れてからフォローです。
「そんなに落ち込むなよ。皆何ともなかっただろ？」
「それはそうですけれど」
幸い皆無事でした。けれどシーランドは落ち込んだままです。
「僕の立った一つの国土が・・・・・・」
「なあ」
イギリスはここで彼に言いました。
「何だったらうち来るか？物置が一つ空いていてな。御前さえよかったら」
「けれどこんなことでシー君はくじけていられません！」
勇者王並のアグレッシブさを見せてきました。イギリスの言葉を聞かずに。
「シー君には立派な国になるという夢があるんですよ！」
「・・・・・御前ちょっとは人の話をだな」
「目指せ！」
ＢＧＭは勿論勇者王誕生！です。一人熱くなるシーランド。
「Ｇ８入りですよーーーーーーー！！」
「そうか・・・・・・」
「そうですよ！そして世界のリーダーに！」
「・・・・・・何であの馬鹿生徒会長を思い出すんだ俺は。
ついでに相変わらず無意味なまでに自己主張が激しく異常なまで

に個性の強い生徒会長まで思い出していい加減突っ込むのも疲れてきたイギリスでした。彼の周りには奇人変人ばかりが集まるようです。そもそもこの学園にはまともな人がかなり少なかったりするのですが。実はイギリスも含めて。

第三百五話　　完

２００８・８・３０

第三百六話　生徒会室にはこいつがいた

第三百六話　生徒会室にはこいつがいた

シーランドに疲れ果てて生徒会室に入ったイギリス。幾ら疲れていても生徒会での仕事はあるのです。

「やれやれ、ったくよお」

愚痴りながら部屋に入ると。いきなり訳のわからない言葉が耳に入ってきました。

「よし！今日の仕事は俺の一万歳の誕生日記念ポスターの作成なんだぜ！」

「ヒドォオヂョグッテルトヴットバスゾ（翻訳：人をおちょくってるとぶっとばすぞ）」

またしてもオンドゥルになってしまったイギリスですが無理もありませんでした。韓国が己の机にある書類の山を無視して馬鹿なことを言っているからです。何と自分の誕生日記念のポスターを勝手に刷っています。

「これを学校中に貼って宣伝するんだぜ！学校の皆で俺の誕生日を祝うんだぜ！」

「おう、来たか」

一人勝手に騒いでいる韓国のすぐ側の席でフランスが事務処理をしています。最近生徒会長がまともな仕事を一切しないので彼とイギリスがそういう仕事をしているのです。

「遅いぞおい」

「それより今度はどうなってるんだ」

その騒いでいる生徒会長を指差してフランスに尋ねます。

「こいつは何時の間に一万歳になったんだ？しかも仕事をする気はあんのか？」

「あるぜ」

「嘘だろ」
「手前が仕事だと思っている仕事をやってんだよ」
「・・・・・そうか」
つまり生徒会の仕事は目には入っていないのです。これは最初からですけれど。
「じゃあ今日もかよ」
「ああ、今日もだ」
フランスは言いながらイギリスの机に書類の山を置きます。韓国の机の上にあるのと本来のイギリスの分と。フランスは空いている席三つのをしています。
「頼むぜ」
「あの三人は何処に行ったんだよ」
「さぼりだ」
実に酷い話であります。
「韓国が騒ぐ日はいつもそうだろ」
「あいつ等、こういう時は逃げやがって」
韓国の馬鹿騒ぎを聞きながら生徒会の仕事までしなくてはいけないイギリスでした。本当に気が休まる時間が全くない彼であります。

第三百六話　　完

２００８・８・３０

第三百七話　イギリスの野郎もびっくり　☆

第三百七話　　イギリスの野郎もびっくり

「全く・・・・・・」

生徒会の仕事も何とか終わらせてへとへとの状態で家に帰ったイギリス。家に帰るとまずは郵便箱に手を入れます。

「おっ、あったな」

一通入っていました。それを取ってから玄関に入って愚痴です。

「あいつも懲りねえなあ。国になって面倒くせえことしかないってのにな」

実際に生徒会長なのに生徒会の仕事を全く頭に入れようとしない韓国のかわりに色々やってきたのですからこのことを余計に感じています。そのことを感じながらそれでもシーランドに対して気遣いも忘れません。

「まあ戻って来たら物置位は貸してやるか」

実は部屋を一つとってあったりします。物置どころか。既にシーランドの名前の看板まで用意しています。ちなみに手紙は生徒会の追加の仕事のことでしたがそれは見ないでゴミ箱行きにしてしまいました。もういちいち見るつもりもないのでした。何しろ韓国から自分のポスターをフルカラーで刷ってくれという文字が封から透けて見えましたから。独特のハングル文字で。

「俺は紳士だからな・・・・・・んっ！？」

ここでメールです。見てみると。

「何だフランスからか」

『よお、今日も一人か？俺は今セーシェルちゃんと一緒だぜ』

実は生徒会の仕事が終わってワイン飲みながら韓国と仕事さぼってどっかに行った三人のことを愚痴っています。

『そうそう、何か面白いもの見つけたぜ。フランスから愛を込めないで』

「面白いのって何だよ」
とりあえずそのＵＰＬを開いてみました。するとそこにあったのは。
『シーランド売ります』
「・・・・・何がどうなってるんだよ、おい」
流石にこれは予想していなくて唖然とするイギリスでした。流石の彼も国家が売りに出されたなんて話は聞いたことがないからです。かつて戦争ばかりしていた獅子心王という彼の昔の上司はイギリスの心臓を売ってもいいなんて豪語していましたけれど。これははじめてなのでした。

第三百七話　　完

２００８・８・３１

第三百八話　海からの自由

第三百八話　海からの自由

「さあ、今日も頑張るですよ」
「はい」
シーランドのお家にはいつも一人の兵隊さんがいます。上司の人は普段は家にはいないのでシーランドとこの兵隊さんがお留守番です。兵隊さんはいつもライフルを手に頑張っています。
「今日のお仕事はですね」
「何でしょうか」
「警備です」
こう兵隊さんに伝えます。
「他は自由時間です。頑張って下さいです」
「わかりました」
敬礼の後で警備につきます。といっても何かをするわけではありません。ライフルは持っていますがシーランドと一緒にテレビを観たりトレーニングをしたり。かなりのどかに暮らしています。
けれど急に何か変な人達が外からやって来ました。空から二人の謎の人達がやって来たのです。
「コロモノコロカラヒーローニアコガリチタ！」
「アンナルンゲナデャカール！！」
訳のわからない言葉を話しながら雷や炎を放ちつつ何かを攻撃しています。シーランドに訪れた危機かも知れません。
「あっ、あれは！」
「わかってるですよ！」
シーランドはそれを見て早速行動に移りました。早速携帯に電話を入れます。
「はい、何か来ました！」
まずは上司に報告します。

「すぐに援軍を御願いしますですよ」
こう電話を入れました。すると忽ちのうちに四方八方から小船に乗った兵士達が集まって来ました。
「シーランド軍参上！」
「御呼びでしょうか！」
何と何処からかシーランド軍が馳せ参じてきたのです。シーランド、まだ小さいというのにかなり侮れないようです。なおこの空から来た人達はただの仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディでした。何か動けばそれだけで騒動になる実に困った人達です。

第三百八話　　完

２００８・８・３１

第三百九話　売れました　☆

第三百九話　売れました

何と国家として売りに出されたシーランド。しかも売れました。おまけに買ったのがあのスウェーデンなのでした。もうイギリスは何が何だかわかりません。妖精達と一緒に携帯で情報を見つつ唖然です。

そんな彼を他所にそのスウェーデンとシーランドが子犬を抱いて楽しく遊んでいます。

「あはははははははは」

「快適インターネット、インターネット」

本当に仲睦まじいです。そんな彼等のところにイギリスがやって来て声をかけます。

「ちょっといいか？いや」

かなり戸惑っています。

「駄目なら別にいいけれどな。駄目だよな、やっぱり」

「いんや」

しかしここでスウェーデンが一言言ってそれから。

親指を立てて後ろにスイングです。混ざれと言う合図です。

「えっ、いいのかよ」

「んっ・・・・・・・」

「イギリスの野郎も一緒に遊ぶですよ」

「あっ、ああ」

シーランドにも誘われて後は仲良く三人で遊びます。こうして一緒に遊んだ時間がとても楽しかったので。彼はそれが終わってからもにこにこと歌っていました。

「快適インターネット、快適インターネット」

「・・・・・御前、悪霊にでも取り憑かれたのかよ」

そんな彼を見て引きながら突っ込みを入れるフランスでした。普

段のイギリスとは全く違っていましたから。
「違うさ、シーランドがな」
「やっぱりおかしい、悪霊に憑かれたんならエクソシストか夢幻紳士に頼めよ」
「・・・・・また随分マニアックだな、おい」
「大人のが一番好きだな」
意外と漫画やアニメにかなり造詣の深いフランスなのでした。しかも趣味がいいようです。

第三百九話　　完

２００８・９・１

第三百十話　どれが誰なのか

「夢幻紳士ですか」
「ああ」
その夢幻紳士が日本の家の人だと聞いたイギリスは。早速日本に聞いてみることにしたのです。どういった人で何をしているのかを。
「大人がどうとかって聞いたけれどよ」
「一応ですね、どなたも格好は同じなのです」
「格好は？」
「はい、黒いスーツにアイボリーネックのスカーフで」
随分とお洒落な外見です。
「魔術師の帽子を被られて。冬にはマントみたいなのを羽織られて」
「何か凄いファッションだな」
「それで。三人おられます」
「三人！？」
「はい」
イギリスの言葉に対してこくりと頷いて答えます。
「三人おられるんですよ、実は」
「ええと、確か名前は」
「どなたも同じですよ」
イギリスはそれを聞いて話がわからなくなってきました。
「どなたも。格好も御名前も」
「同一人物じゃないのか？」
「違います。子供の方と少年の方と青年の方」
日本はこうイギリスに説明します。
「三人おられるんですよ」
「そうだったのか。じゃあ青年の方は」
「どなたも探偵です。ただ」

「ただ？」
「この方はとても女性の方にもてまして」
日本は淡々とですが重要なことを語っていきます。
「何かとトラブルも起こしますがそれでもお仕事を頼まれますか？」
「・・・・・そういう事態になったらな」
トラブルと聞いてまずは頼まないことにしたイギリスでした。最近トラブル続きなのものですから。

第三百十話　　完

２００８・９・１

第三百十一話　再会したけれど　☆

第三百十一話　再会したけれど

ベンチに座って風船を持っているシーランドの前にふと誰かがやって来ました。その彼は。

「えっと、その隣いいですか？」

「わっ、この間の花挿し野郎じゃないですか」

ラトビアでした。ふと出て来てシーランドに尋ねてきたのです。

「何ですか、一体」

「何かって言われても」

「風船が目当てなら一個あげますよ。ほら」

「別にいいよ。それに僕は君よりずっとお兄さんなんだよ」

「あれっ、そうなんですか？」

「そうだよ。今日は国のお兄さんとしてアドバイスしに来ました」

こう言いつつシーランドの横に座り。そうして話に入るのでした。

「友達は作っておいた方がいいよ」

「そうなんですか」

「僕も独立の時周りに協力してもらいましたし」

ついでにその後のことも色々思い出します。そうするとついつい涙が出て来ます。

「本当に・・・・・友達いないと色々と心も身体もきつくなるから」

「実体験バリバリで語られると切ないですよ！」

流石にこれは引きます。何しろイギリスとロシアではもう違うなんてものじゃないですから。シーランドは何とか泣き出してしまったラトビアを慰めて言います。

「そんな隣で泣くなですよ。僕まで悲しくなるじゃないですか」

「有り難う、僕の方がお兄さんなのに」

「僕達は弱小国ですが頑張っていればきっと何時か道は開けますよ」

「その台詞僕が言いたかったんだけれど」
逆にシーランドに励まされるラトビアでした。トラウマだけはどうしようもないようです。

第三百十一話　完

２００８・９・２

第三百十二話　僕じゃ駄目かな

シーランドに励まされ何とか元気を取り戻したラトビア。けれどその彼が帰り道一人で歩いているとそっと物陰から誰か出て来ました。随分と物静かでおどおどとすらしています。

「ねえラトビア」

「そ、その声は」

ラトビアが最も恐れている声です。

「何かと困っているようだけれどどうなの？」

「い、いえ」

そちらを振り向くことなく答えています。

「別にないですけれど・・・・・・」

「僕じゃ駄目かな、そういう時の力って」

「は、はあ」

「何かあったら頼りにしてくれればいいから」

「わ、わかりました」

恐怖はここまで告げるとすっと消えました。ラトビアは全身から冷や汗をかいてガタガタ震えていました。

家に帰るとすぐにこのことをリトアニアとエストニアに話します。二人共彼の話をしみじみと聞いてうんうんと頷くことしきりです。

「わかるよ、それって」

「僕だってねえ。何度かきたくない汗をかいたことか」

「ううっ、本当にもうこんな生活嫌です」

ラトビアはまた泣いています。

「ドイツさんとか頼りにできません？」

「あの人はちょっと・・・・・・」

リトアニアはドイツは苦手なのでした。

「怖いしさ。プロイセンさんとは色々あったから」

「僕はもうちょっと様子を見るべきだと思うけれど」
エストニアの意見はこうです。どうしても考えが一つになれないようです。一つになっても不幸は降り注いできてしまうのですけれど。

第三百十二話　完

２００８・９・２

第三百十三話　またサミット　☆

第三百十三話　　またサミット

「それでは皆さん揃いましたので」
今日もサミットです。日本が参加者全員に声をかけています。
「はじめましょうか」
「あっ、ちょっと待ってくれ」
けれどここでイギリスが暗い顔で言ってきました。
「前回の反省も含めて確認していいか？」
「確認ですか」
「ああ。何か変なんだよな」
とりあえず覚えている人を確認するイギリスでした。
「カナダいるよな」
「いるですよーーーー」
「皆さんちゃんとおられますよ」
日本がイギリスに答えます。
「ゲストの方々も皆さん」
「それでも何かおかしいんだよな」
「気のせいでは？」
日本から見れば何もおかしいところはありません。メンバーは確かに全員いるのですから。
「私は別に」
「ああ、そうだよなあ」
数を数えてみてもちゃんと皆います。やはり揃っています。
「おかしいな。それでも」
「そうですよ」
そのカナダが彼に言います。
「このイギリスの野郎」
「イギリスの野郎！？」

今の言葉ではっとしたイギリス。ここで気付いたのでした。
「って御前かシーランド！」
カツラと眼鏡を外してその正体を暴きます。
「な、何でわかったんですか。エスパーですか！」
「その言葉でわかったんだよ！」
「しまったです！」
こうして謎が解けました。何とシーランドが紛れ込んでいたのでした。

第三百十三話　　完

２００８・９・３

第三百十四話　カナダは何処だ

第三百十四話　　カナダは何処だ

「おかしいと思ったんだよ。何かな！」

「迂闊でしたです。こんなことになるなんて」

正体がばれても平気なシーランドでした。しれっとしています。

「カツラの毛を抜くなんて。折角パパが用意してくれたのにです！」

「御前は家でアニメでも観てろ！」

「イギリスの野郎のアニメは面白くないです！日本さんのアニメの方がずっといいですよ！」

「じゃあ仮面ライダーキバかゴーオンジャーでも観てろ！」

「あれは特撮です！アニメじゃないです！」

完全に話がそっちにいっています。けれどここで日本はあることを思い出したのでした。

「それでですね」

「んっ！？こいつなら俺が摘み出すからよ」

「いえ、カナダさんです」

肝心のカナダのことに気付いた日本なのでした。実は彼が気付くまでカナダのことは完全に忘れてしまっていたのです。

「シーランドさんはいいとしてカナダさんは何処に」

「・・・・・何で誰も気付いてくれないんだよ」

いることにはいます。ただ席に座っていたら彼に気付かなかったロシアに上から座られてしまっているだけです。存在感がないということは実に不幸なことです。

「おられました」

「ああ。しかし」

日本もイギリスもこれには呆然としています。

「ここまで存在感ねえのかよ、こいつ」

「流石にこれは予想できませんでした」

「予想とかそんなのいいから誰か助けてくれないかな」
ロシアは一向に気付く気配がありません。全く以って存在感のない彼なのでした。見れば影もかなり薄くなっています。何かの呪いにすら見えます。

第三百十四話　　完

２００８・９・３

第三百十五話　人間椅子の感想　☆

第三百十五話　人間椅子の感想

結局ロシアは最後の最後までカナダに気付きませんでした。日本とイギリスがカナダを椅子から抜き出した時にはもうおせんべいかクッキーみたいになっていました。

「どうだ、今の気分は」

「藤子先生の漫画に出たみたい」

確かにそんな具合に上手く潰れています。風でひらひらと舞ってさえいます。

「何時までこんなことが続くんだろう・・・・・」

「諦めろ」

イギリスの冷たい言葉でした。影が薄いと誰からも冷たくされるという特典があるのです。忘れられてしまうからですが彼にとってはこれも不幸の源です。

「影が濃くなりたいよ」

彼の嘆きの言葉です。そしてその彼をおせんべいかクッキーみたいにした張本人は帰るその時まで気付かずお供をしているベラルーシに言うのでした。

「今日の椅子だけれどね」

「はい」

ベラルーシはクールに応えます。クールビューティーなメイドさんであります。

「結構座り心地がよかったよ」

カナダが下にいたせいですが本人は知らないのです。気付いていないのです。

「そうだ」

「何か」

「新しい椅子を買おうかな」

ふとこう思うロシアでした。
「座り心地のいい椅子。どうかな」
「お好きなように」
二人のお話はこれで終わりでしたがこの話を家で聞いたリトアニア達はまたしても恐怖に震えるのでした。
「人間椅子、まさか」
直感がそう感じさせています。三人の不幸もまた終わりません。特にラトビアのそれは。

第三百十五話　　完

２００８・９・４

第三百十六話　国境は何処までか

第三百十六話　国境は何処までか

カナダは目立たないですがお家は広いです。けれど何処までがお家なのか実はまだよくわかっていなかったりします。今時そんな家も凄く珍しいのですけれど。

「いや、だから北に海があるじゃない」

カナダ本人は海のことを皆に話して説明します。

「北極海。あそこって氷が多いし凄く寒いし冷たいし」

「僕の国境ははっきりしているけれどね」

ここでアラスカを持っているアメリカが言います。

「それで何で君のところははっきりしていないのかな」

「いや、だからさ」

アメリカにも説明します。

「それは。色々気候でややこしいから」

「今は平気だけれどね」

ちなみにアメリカは寒さにかなり強いです。もっと言うなら暑さにも凄く強いです。つまり身体がかなり頑丈なのです。だからこそここまで見事に育ったのですけれど。

「そうだ」

その頑丈なアメリカがここで言います。

「じゃあ僕が君の家の境を決めてあげるよ」

「えっ、君が！？」

アメリカが名乗り出て来たのを見て早速嫌な予感を感じるカナダでした。

「君がするの？」

「ほら、こうして」

早速取り出したペンで書きますが何と。アメリカとカナダの境を勝手に決めているのでした。

「こうすればいいじゃないか。万事解決だよ」
「万事解決って僕のお家のところかなり取っちゃってるじゃないか！」
さりげなくとんでもないことをしようとしています。
「バンクーバーにモントリオール、プリンスパート、ウィニペグまで」
「オタワとケベックは残るからいいじゃないか」
「・・・・・駄目だよ」
こんな時にもアメリカに泣かされる運命のカナダなのでした。

第三百十六話　　完

２００８・９・４

第三百十七話　カナダのお友達　☆

第三百十七話　　カナダのお友達

「おいちょっとそこの御前」
キューバがカナダに申し訳なさそうに声をかけます。
「ほわあ、何ですか！」
この前殴られているのでカナダは彼に声をかけられてびっくりです。
「御免なさい！何かわからないけれど御免なさい！」
「いや、この前アメリカと間違えて殴っただろ」
「ああ」
「その・・・・・悪かった」
何と謝罪しに来たのでした。
「御前がカナダだってわからなくてな」
「そうだったんですか」
「こんなん詫びにならねえけれどさ」
「それは」
「アイスだよ」
見ればバケツみたいなアイスです。キューバはアイスクリームが大好きなのです。そのせいでどうも太り気味ですけれど。
「よかったらこれ食ってくれよ」
「はあ。それでしたらまあ」
カナダもアイスが大好きなので受け取ります。そのうえで言います。
「それにこの間のことは気にしていないですから。いや本当に」
「すまねえな。頭に血がのぼっちまって。申し訳ねえ」
「はあ」
「今度俺の家来てくれよ」
そしてカナダを家に招待するのでした。

「歓迎するぜ」
「キューバさんの家にですか」
「ああ、御前の家とはまた違って面白いと思うぜ」
「有り難うございます」
棚から牡丹餅とはまさにこのことです。こうしてカナダはキューバの家に行くことになったのでした。ついでにアイスまで貰って。
この時はほくほく顔でありました。

第三百十七話　　完

２００８・９・５

第三百十八話　また間違えられる

第三百十八話　また間違えられる

こうしてキューバの家に招待されたカナダでした。上機嫌でお洒落をしてキューバの家に来ました。

「アロハシャツなんてはじめてだよ」

寒いから着たことがないのです。もう最初からうきうきとしています。

「キューバの家って暑いらしいし明るいし。楽しみだなあ」

こんなことを考えながらそのキューバのお家の玄関まで来ます。すると早速出迎えのキューバが待っていました。ところが彼はいきなり怒りだしました。

「手前アメリカやんけ！」

また彼をアメリカと間違えています。

「何しに来たんやあ！帰れ！」

「だ、だからあ！」

「おめえの席ねえからな！」

「ライフにならなくてもいいじゃない！僕だよ！」

「って御前まさか」

「だからカナダなんだって」

例によって間違えられてしまったのでした。

「カナダなんだよ。本当に覚えてよ」

「わ、悪い・・・・・」

「何でアメリカと間違えるんだよ」

「ちょっとな。服が」

「服！？」

「ほら、御前いつも厚着やろ」

このことをカナダ自身に言うのでした。

「厚着やからや。それで覚えてたから」

「ひょっとして僕の顔は？」
「すまん」
いきなり謝罪です。
「正直覚えられへん。今見ててもアメリカと間違えそうやわ」
「頼むよ。本当に顔で覚えてよ」
「これがイタリアとか韓国やとすぐに覚えるんやけれどな」
「また個性なんだ・・・・・・」
やっぱり個性の薄さに悩まされるカナダでした。ついでに髪の毛までストレスで薄くなってしまいそうであります。

第三百十八話　　完

２００８・９・５

第三百十九話　寝る時は

第三百十九話　寝る時は

今日は日本のお家にドイツとイタリアが遊びに来ています。しかもお泊りというのが三人の仲のよさを表わしています。

「実は一番家に来られるのは韓国さんでして」

「ふうん、そうなんだ」

「意外だな」

イタリアとドイツは日本の話を聞いて少し意外といった顔になっています。

「いつもあれだけ日本につっかかるのに」

「それでも家に来るのか」

「専用のお布団まで用意してあります」

韓国の家はオンドルなのですが彼用のお布団まであるのです。それだけいつも日本の家に来ているということです。

「お部屋まで」

「そうなんだ。あっ、俺はソファーで休ませてもらうからいいよ」

「俺もだ」

「それはいいのですがイタリア君」

「何？」

「どうして貴方は寝る時いつも裸なのですか？」

見ればもうトランクスまで脱いでいます。今にも寝るような勢いです。

「裸なのは。せめてトランクスはですね」

「あれっ、俺の家いつもこうだけれど」

「そうだぞ。俺も結構な」

見ればドイツもです。裸で寝ようとしています。

「裸で寝るが」

「ドイツさんまで。せめてトランクスはですね」

「ええっ、そんなのきついよ」
「寝る前にシャワーを浴びているからいいだろう？」
「よくありません。本当にせめてトランクスだけは御願いします」
どうしても裸で寝ることには抵抗のある日本でした。誰にも苦手なものはあるのでした。

第三百十九話　　完

２００８・９・６

第三百二十話　オンドルです

第三百二十話　オンドルです

韓国の家は結構寒いので工夫が凝らしてあります。湿気の多い日本の家が畳なのと同じでそれへの対処をしてあるのです。

それがオンドルです。このおかげで冬も暖かいのです。けれどこのオンドルという名前のせいでちょっと勘違いする人もいます。

「オンドゥルウラギッタンディスカーーーーーッ！」

あの仮面ライダーオンドゥルがやって来て言うのです。完全に自分が呼ばれたと思っています。

「あんた誰なんだぜ」

「オデガギタガラニハダイジョウブダ！パンツハワタサン（翻訳：俺が来たからには大丈夫だ！そいつは渡さん！）」

「だから何て言ってるかわからないんだぜ。日本の家の人なのはわかってるからとりあえずあがるんだぜ」

こう言うといつも人が増えます。いつもこのオンドゥルと一緒にいるこの人です。

「これ食っていいかな」

こう言って多量のものを食べ尽くしていきます。それこそどんなものでも平気でたいらげてしまいます。しかもこの二人だけではありません。

「オラァクサムヲムッコロス！」

「オデノベルトーーーーーーーッ！！」

仮面ライダームッコロと仮面ライダームッキー、合わせて四人です。四人で韓国の家にお邪魔して何でもかんでも食べて騙されて普通に切れて騒動を起こしていきます。はっきり言ってかなり迷惑です。それで日本の家に抗議してもこうした場合には日本は出て来ないでかわりに出て来る人はこんなことを言います。

「君には悪いことをしたと思っている」

「じゃあ早く謝るんだぜ」
「だが私は謝らない！」
「な、何言っているんだぜ！」
こんな調子です。さしもの韓国もこれには絶句です。日本の家は迷惑という意味でも実に個性が強い面々が集まっているのでした。しかも一番凄いのはこの人達が正義の味方ということです。世の中というものは実に恐ろしい現実が存在しているものです。

第三百二十話　　完

２００８・９・６

第三百二十一話　様子が変です

第三百二十一話　様子が変です

どうも最近イタリアがもじもじしています。誰の目から見てもかなり怪しい光景です。まずドイツが彼に尋ねました。

「最近どうしたんだ？」

「いやね、ちょっと」

「何か言いたそうだが」

「そうですね」

日本もそれに気付きました。言われてみれば最近イタリアは何か言いたそうです。けれどそれでも言わないのです。もじもじとしていて普段の彼とは明らかに違います。しかもよく見れば最近あまり歌っても女の子に声もかけていないのです。あまりにも変です。

「何かあったんですか？本当に」

「まあ大したことじゃないけれどね」

一応こうは言います。

「それでも。ちょっとね」

「ちょっと。何だ？」

「やっぱりおかしいですよイタリア君」

「ううん、じゃあ言おうかな」

やっぱり何かを隠しているのでした。

「言っても皆驚かないよね」

「まあ滅多なことではな」

「驚かないですから」

「わかったよ。それじゃあさ」

二人に保障されえやっと言う決心をつけるのでした。しかし問題はそれが何かということです。ドイツも日本もそれが何なのか全くわからないので首を傾げているのです。

「何なんでしょうね」

「さてな」
幾ら考えてもそれが何なのかわかりません。その間にイタリアは電話で誰かとお話をしています。
「じゃあそういうことでね」
「わかりました」
女の子の声みたいです。本当に何なのか。謎がわかる時が来ようとしているのだけは確かです。果たしてそれが何なのかまでは皆まだわかりませんけれど。それでも何かがわかろうとしているのは間違いありませんでした。

第三百二十一話　完

２００８・９・７

第三百二十二話　妹でした

第三百二十二話　妹でした

イタリアは皆を集めました。そこには自分のお兄さんもいます。
皆を集めたうえでようやく発表というわけです。
「じゃあ言うよ」
「ああ、いいぜ」
「それで何があるんだ」
「実はさ、俺」
皆に言われて遂に告白タイムです。明らかに何かがあります。
「あのさ」
「何なんだよ」
「何かあるんだよな」
「妹がいるんだ」
いきなりこう言うのでした。
「実は妹がさ。いるんだけれど。驚いた？」
「ふうん」
「何かって思えば」
「そんなことだったんだ」
ところが皆イタリアの衝撃の告白に全く驚いた様子はありません。
平気な顔をして応えるだけです。イタリア兄でさえも。これにはイタリアの方が衝撃でした。
「えっ、皆驚かないの？」
「俺にもいるぞ」
「私もです」
「俺にも一人な」
「俺の妹は世界一の美人だぜ」
「いや、かなり大きくなってねえ」
「手間がかかるある」

「いつもよくしてくれるよ」
ドイツも日本もイギリスもフランスもアメリカも中国もロシアも言います。何と皆お兄ちゃんで妹がいるのでした。かなりびっくりです。
「皆にもいたんだ」
「俺にもいるぞ」
イタリア兄もここで弟に告白です。
「一人な」
「えっ、じゃあ俺の妹でもあるの！？」
「そういうことだな。っていうか御前今まで本当に知らなかったのか！？」
「・・・・・初耳だけれど本当に」
「何でだよ」
思わず弟に突っ込んでしまいます。皆に妹がいたという衝撃の展開、どうやら妹達の素性が明らかになる時が来たようです。しかしどうしてイタリアは自分の妹の存在を知らなかったんでしょうか。それがどうにもこうにも不思議ではあります。

第三百二十二話　　完

２００８・９・７

第三百二十三話　トップバッターは

「それで俺の妹だけれど」
「呼んだ？お兄ちゃん」
出て来たのは少し背が高くて蜂蜜みたいな色の金髪を後ろでお団子にした黒い目の女の子です。何か随分と元気がいいです。
「私のこと」
「ああ、レナータ」
イタリアはその女の子を笑顔で見て応えます。見ればイタリアより少し背が低い位で女の子としてはかなりのものです。中国と同じ位ですから大体一七〇でしょうか。
「レナータ＝ヴァルガスです」
「そう、レナータっていうんだよ」
あらためて妹を皆に紹介します。
「俺の自慢の妹なんだけれど」
「趣味はお料理です」
まずは自分から言います。
「あとは歌とお洒落です。遊ぶのも大好きです」
「イタリアと大して変わらないんじゃないのか？」
「そうですよね」
ドイツと日本は彼女の言葉を聞いて言います。
「外見は流石に違うがな」
「やっぱり兄妹ですね」
「あれっ、これがイタリアの妹とかそういう感想はないの？」
「残念だが全くな」
「イタリア君のお家の女性の方というイメージしか」
「パスタや他の料理だって凄く上手なんだよ」

「だったら余計にだ」
ドイツが最後に突っ込みを入れます。どうも紹介はイタリアにとっては期待外れだったようです。けれどイタリア妹がどんな娘なのか皆はまだよく知らないのでした。

第三百二十三話　　完

２００８・９・８

第三百二十四話　ここは兄とは大違い

第三百二十四話　ここは兄とは大違い

「そんなに変わらない？」

「全くと言っていいと思うぞ」

「イタリア君には申し訳ないですが私もそう思います」

またドイツと日本がイタリアに述べます。

「御前によく似ているな」

「そうですね。性格も」

「ううん、確かに言われるけれど」

「だって兄妹ですから」

妹の方は至って平気です。全く気にしていないあっけらかんとしたものです。

「そっくりなのも当たり前ですよ」

「いやさ、御前がそう言うと」

「だって本当のことじゃない」

困った顔になる兄に対しても平気な顔で言います。

「兄妹だしそっくりなのは」

「だけれどさ」

兄が困った顔であたふたと妹に言っています。ところがここで急に。皆のところに何処かの悪の組織の戦闘員がやって来ました。

「イーーーーーーッ！」

「あわわ、おっかないのが出て来たよ」

イタリアは彼等の姿を見てもう怖気付いています。早速白旗を振る始末です。

「俺はいいイタリア人だよ！ほら、ショッカーに叔父さんがいるんだよ！」

「誰なんだそれは」

ドイツが思わず突っ込みますがイタリアは戦闘員達に捕まってしまいました。ドイツと日本がその彼を助け出そうとしたその時に。
「お兄ちゃんはやらせないわよ！」
何とイタリア妹が出て来ました。そうして素手で戦闘員達を瞬く間に蹴散らし無事兄を救出です。かなり強いです。
「お兄ちゃん大丈夫？」
「あっ、うん」
「強さは大違いのようだな」
「イタリア君より戦場では頼りになるのでは？」
イタリア妹、実は兄と違ってかなり強いのでした。ここは兄とは大違いでした。

第三百二十四話　　完

２００８・９・８

第三百二十五話　ドイツの妹

第三百二十五話　ドイツの妹

イタリアの妹が皆に紹介されてから次は。どういうわけかそれぞれの妹さんを皆に紹介することが順番になっています。そういうわけで次の人は。

「それで俺の妹だが」

「ドイツにも妹いたんだ」

「だから言っただろうが」

こうイタリアに言い返します。

「皆にいるとな。当然俺にもだ」

「そういやそうだっけ。俺会ったことないけれど」

「私もです」

イタリアも日本もドイツの妹に会ったことは一度もなかったのでした。考えてみれば変なことではあります。友人の家族と顔を合わせたことがないのですから。

「それでどういった方ですか？」

「ここにいるんだよね」

「ああ。ワルトラウト」

「はい、お兄様」

名前が呼ばれると何かドイツによく似た背の高いしっかりとした身体つきの女の子が出てきました。髪はショートでやっぱり金髪碧眼、整った顔立ちでギリシア彫刻を思わせるものがあります。

「で、これが俺の妹だ」

「はじめまして、皆さん」

そのドイツ妹は兄の横で静かに頭を下げます。やはり大きいです。ドイツと比べても遜色ない程です。こんな大きな娘は滅多にいません。

「ワルトラウトです。兄がいつもお世話になっています」

「何かドイツの妹らしいね」
「そうですね」
その娘を見てイタリアと日本は言います。どうやら彼女は兄によく似た妹のようです。けれど何故かお互い話をすることの少ない兄と妹でした。兄弟揃ってお堅いようです。

第三百二十五話　　完

２００８・９・９

第三百二十六話　大きいからこそです

第三百二十六話　大きいからこそです

ドイツの家はイタリアの家に比肩する程オペラが有名です。あのワーグナーがとりわけ有名ですがドイツ妹はこのワーグナーの歌を得意としています。

「けれど難しいんですよね、ワーグナーって」

「そうそう、あれはね」

オペラにかけてはこの人のイタリアが彼女の言葉に頷いています。やはり女の子には強いです。

「声域だけじゃなくて時間も長いからね。体力が凄くいるよね」

「特に難しいのがトリスタンとイゾルデのイゾルデとニーベルングの指輪のブリュンヒルテで」

「ああ、両方歌うんだ」

「はい」

イタリアの質問にこくりと頷いて答えます。

「どちらも好きでやりがいのある役ですが歌うには覚悟がいります」

「そうだよね。けれど歌えるってのは凄いよ」

「そうですか」

「ドイツの妹だけあって背が高いし」

何かイタリアよりもまだ高そうです。

「それがいいんだろうね。じゃあさ、今度だけれど

「今度ですか」

「うん。俺の家でニーベルングの指輪全曲上演するからよかったら出てくれるかな」

「わかりました。それでは」

「何か実に上手く誘っているような気がするのは気のせいか？」

ドイツは二人のやり取りを見ながら思います。

「まああいつは極端に変なことはしないから声をかけてもいいのだ

がな」
　何故か妹に声をかけられているのに相手がイタリアだと妙に寛大なドイツなのでした。この辺りがやっぱり気心の知れた同士なのでした。
「もっとも変なことをすれば容赦しないがな」
「嫌だなあ、そんなことするわけないじゃないか」
　ドイツのこの言葉にはやっぱり焦ってしまうのでした。

第三百二十六話　　完

２００８・９・９

第三百二十七話　大和撫子

第三百二十七話　大和撫子

「さあて、いよいよだね」
「御前は過度に期待し過ぎだ」
今度は日本の番なのですがイタリアはもう期待でウキウキワクワクといった状況です。日本の妹はどんな娘なのかと楽しみで仕方ないようです。
「日本の女の子って小柄で凄く可愛いから。どんなのかな」
「だからだ。落ち着け」
「俺落ち着いてるよ」
「何処がだ」
こんな話をしているとその日本がやって来ました。その横にいるのは。
「妹です」
「はじめまして」
皆の前でぺこりと頭を下げたのは黒い琥珀の瞳におかっぱの黒髪の小柄な女の子です。セーラー服がとてもよく似合っています。
「本田環です」
「へえ、環っていうんだ」
「はい。兄がいつもお世話になっています」
「こんなに可愛いなんて思わなかったよ」
イタリアはもう日本妹に近寄っています。それで早速彼女に声をかけています。
「日本と似てるけれどとても女の子らしくてね。おまけにちっちゃいし」
「はあ」
「よかったら今度俺の家に遊びに来ない？」
もうこんなことを言っています。日本妹はそんな彼を見上げて少

しおどおどした様子です。
「パスタ御馳走するしさ。他にも美味しいものや楽しい観光場所一杯あるよ」
「わかりました。では兄に相談してから」
「いいよいいよ。俺は何時でもいいからさ」
「あの、イタリア君」
横から日本が彼に言ってきました。
「妹を家に誘うのはいいですが私も同行させて頂きますので。その場合は」
「ううっ、日本も案外ガード固いんだ」
妹に関してはお兄ちゃんらしい日本でありました。イタリアも彼がいては上手くいきませんでした。

第三百二十七話　　完

２００８・９・１０

第三百二十八話　七変化

お家に誘うのは日本に防がれてしまったもののイタリアはイタリアです。まだ日本妹に声をかけ続けています。こうしたところは流石と言うべきでしょうか。

「そのセーラー服凄くいいね」

「有り難うございます」

「ところで日本の家っていったらさ」

話は彼がリードしています。おどおどとした感じで大人しい彼女はイタリアに言われるままといった感じです。

「着物だけれど。君着物着るの？」

「家では着る場合が多いです」

「ふうん。それだったらさ」

それを聞いてイタリアはここぞとばかり彼女に言います。

「一度見せて。どんな感じなの？」

「着物ですか」

「君が着物着てるの見てみたいんだ。だからさ」

「あの、兄さん」

「別にいいですが」

兄に顔を向けて尋ねるといいとのことでした。

「そうですか。それでは」

ここで何とセーラー服を勢いよく脱ぎます。まるでマントを剥ぎ取るように。するとそこから姿を現わしたのは。

桃色の艶やかな着物姿です。帯は赤で。とてもよく似合っています。

「如何でしょうか。これで」

「着替えるの。凄く早いんだね」

「はあ」

「いや、凄いよ。本当に凄いよ」
イタリアは感心しているようです。
「やっぱり日本の女の子っていいよ。とても可愛くて」
「有り難うございます」
「けれど二人でイタリア君のお家に行ってはいけませんよ」
最後に日本の釘が来ました。こうしたところはやはり厳しいです。

第三百二十八話　　完

２００８・９・１０

第三百二十九話　青い目のハイスクールクイーン

第三百二十九話　青い目のハイスクールクイーン

枢軸トリオの妹達の紹介の後は連合ファイブです。実質四番手はこの人でした。

「僕なんだ」

「くじ引きの結果あるぞ」

「それじゃあね」

中国とロシアに言われて送られたのはアメリカでした。早速アメリカの横にブロンドを首の付け根で切り揃えた青い目の元気そうな女の子が出て来ました。

凄いのはそのファッションです。ジーンズは右足が半ズボンになっていて大きな胸がはっきりとわかるタンクトップです。それだけで随分目立っています。

「宜しくね」

挨拶もドイツ妹や日本妹と違って随分元気がいいです。背も高いし如何にもアメリカの女の子といった感じです。

「シェリル＝ジョーンズよ。兄貴がいつもお世話になってるみたいね」

「何かあれですね」

「そうだな」

日本とドイツはこのアメリカ妹を見ながら話をしています。

「如何にもアメリカさんの妹さんって感じで」

「逆に落ち着くな」

「好きな食べ物はハンバーガーにフラウドポテトにアメリカンドッグにフライドチキンよ」

「それなのに僕だけメタボを気にしてこいつは胸にばっかりいっちゃってね」

「兄貴のそれは筋肉よ」
「そうかなあ」
こんな話をしているところですぐにドーナツやらアイスクリームやらが出て来ますが二人共そういったお菓子を美味しそうに食べだします。しかも物凄い量のそれ等を。
「将来太るかも知れませんね、この方」
「俺もそう思う」
日本とドイツには何となくアメリカ妹の未来が見えました。食べるのもいいのですが気をつけることは気をつけていかないといけません。

第三百二十九話　　完

２００８・９・１１

第三百三十話　フラッパーガール

第三百三十話　フラッパーガール

アメリカ妹の趣味は食べるだけではありません。野球やバスケ、ソフト、ラクロスといったスポーツも好きですが音楽も好きです。その音楽も色々です。

「うわ、凄い量だね」

イタリアは彼女が持っているＣＤの数とジャンルの多さにまず驚かされました。

「ジャズにゴスペルにブルースにって」

「うちの家ってアフリカ系も多いし兄貴もこういうの好きだしね」

人種的にはかなり多彩なアメリカです。彼のお家にはアフリカから来た人も多いので彼等の音楽も非常に多いのです。アメリカもサックスを得意としています。

「だから私もね。好きなんだよ」

「そうなんだ」

「それでも一番好きなのはやっぱり」

言いながら取り出してきたのは。

「これかしら」

「ロックなんだ」

「そう、これ」

取り出してきたのはエレキギターでした。早速それを奏でだします。

「実はヴォーカルなんだ」

「ふうん」

「これをね。こうやって」

立ち上がっていきなり歌いはじめました。

「こんな感じで。どう？」

「いいよ、それもかなり」

イタリアもお墨付きを与えるレベルです。
「派手でね。それにしてもあれだね」
「何？」
「また凄く賑やかな感じの曲だよね」
彼女の曲を聴きながら述べます。
「アメリカの家の曲らしくて」
「うちじゃこうなのよ。いつもフラッパーにね」
「成程ねえ」
その半分半ズボンのジーンズによく似合った歌でした。どうやら彼女の服は中身が出ているもののようです。

第三百三十話　　完

２００８・９・１１

第三百三十一話　何歳かは秘密

第三百三十一話　何歳かは秘密

ここでイギリスかと思えば意外にも中国でした。ジャンケンの結果ですからこれはどうしようもありません。かくして中国が呼んだのは。

「この娘あるが」

「うわ、これはまた・・・・・・」

「いいね、かなり可愛いよ」

イタリアとアメリカがまず感嘆の声です。小柄で黒髪をお団子にした中国服の女の子、けれど身体が小さいので服がぶかぶかです。

「王岩光というある」

ぺこりと頭を下げて皆に挨拶をします。

「いつも大兄がお世話になっているある」

「うちの家の人間はとにかく数が多いあるが美人も多いある。その中でもこいつは一番あるぞ」

「そうだよね、昔から」

イタリアもこのことはよく知っているのでうんうんと頷きます。やはり可愛い娘を探すことにかけては彼は超一流です。それがここでも発揮されています。

「中国の家の女の子って服も可愛いしね」

「そうあるぞ。だからまた遊びに来るある」

「うん。けれどさ」

ここでイタリアはさらに言います。

「この娘幾つなの？中国が確か四千歳だから」

「歳は聞くなある」

中国妹の目が一気に吊り上がってイタリアに言ってきました。

「えっ！？」

「女の子に歳を聞くなんて最悪あるぞ。イタリア男は天然だから困

るある」
　ずけずけと言われてびびっているイタリアの横でアメリカが中国に声をかけます。
「また随分気が強い娘だね」
「それで僕も困ってるある。うちの女は皆こんな感じある」
「僕の家みたいだね」
　その横ではイタリアが半泣きの顔になっています。外見は可愛くても中身が可憐だとは決して限らないのです。例え誰であっても。

第三百三十一話　　完

２００８・９・１２

第三百三十二話　やっぱり得意なものはこれです

第三百三十二話　やっぱり得意なものはこれです

意外と気の強い中国妹、その趣味及び特技というと。

「美味しいねこれ」

「そうだな」

イタリアとドイツが食べているのは彼女の作った中華料理です。

それを食べて舌鼓を打っているのです。

「これは広東料理ある」

中華鍋を手に中国妹が皆に説明します。

「大兄も得意あるが私もこれが大好きある」

「他にも北京、上海、四川とあるけれどやっぱりこれが一番かも知れないある」

中国も出て来て説明します。流石のイギリスも美味しそうに食べています。

「特に海の幸はいいあるぞ」

「それで食事の後は音楽あるが」

「君音楽できるんだ」

「勿論ある」

小さな胸を張ってイタリアに答えます。

「胡弓や琴が得意ある」

「凄いね、何でもできるんだ」

「そうあるぞ。けれど一番得意なのは」

また中国が説明に出て来ます。

「体操と拳法ある。強いから注意するあるぞ」

「ほお、胸はないがお尻はいい形してるな」

止めとけばいいのにフランスが彼女のお尻に手をやると。早速わかりました。

「触るなある、この痴漢！」
「う、うわっ！」
何と服の袖から無数の武器が出て来ました。さしものフランスも紙一重ですらかわすことができず標本みたいに壁に貼り付けられてしまいました。服の端という端を様々な武器で壁に貼り付けられています。
「死ぬかと思ったぞおい」
「暗器も得意あるから気をつけるよろし」
「セクハラは許さないある」
「それでもこれはねえんじゃねえか？おい」
「自業自得だよ」
皆フランスには同情しませんでした。とにかく意外と以上に外見よりもおっかない中国妹でした。

第三百三十二話　　完

２００８・９・１２

第三百三十三話　妹さんは違いました

第三百三十三話　妹さんは違いました

「あの、兄さん」

背は高いですが金髪碧眼で穏やかな感じの奇麗な女の子がそっとロシアのところにやって来ました。金髪はさらさらとしていて楚々とした外見です。

「どうしたのですか？皆さんこんなに騒がれて」

「ああ、ガリーナ」

ロシアはその女の子に顔を向けて名前を呼びます。

「今皆がそれぞれの妹さんを紹介しているところなんだよ」

「妹さんをですか」

「そうだよ。だからガリーナもね」

「はい、それでは」

穏やかに微笑んでロシアに答えます。そうして皆の前に出て来て挨拶をします。

「はじめまして、皆さん」

「あっ、また可愛い娘が」

「誰なんだ、あれは」

イタリアとイタリア兄が同時に声をあげました。

「ガリーナ＝ブラギンスキです。ロシアの妹です」

「えっ、ロシアの妹さん！？」

「嘘だろ！？」

皆今までで一番驚いています。

「あのロシアの妹さんがこんな」

「可愛いなんて」

「嫌だなあ皆、ガリーナは特別だよ」

ロシアはこう言って笑っています。

「僕の自慢の妹なんだからね」
「ふうん、そうなんだ。けれどロシアの家の女の子って何か皆」
「ああ、イタリア君」
またしても女の子に近付こうとする、具体的にはロシア妹に近付こうとするイタリアにロシアが声をかけます。
「一つ言っておくけれどね」
「何？」
「妹にちょっかい出したらシベリアに案内してあげるよ」
「・・・・・・わかったよ」
流石に今までみたいにはいきませんでした。ロシア妹には最凶、いえ最強のガードマンがいました。

第三百三十三話　　完

２００８・９・１３

第三百三十四話　今はいいのですが

第三百三十四話　今はいいのですが

兄とは全く違った楚々とした外見でしかも控えめで温和な性格のロシア妹。手を触れただけでもガードマンがにこやかに寒い場所に連れて行ってくれそうですがそれでも大人気です。イタリアは気をつけながら彼女とお話をしています。

「兄はとても優しいんですよ」

「そうなんだ」

皆これは全然信じていません。

「いつも私を可愛がってくれて。上司の方にもよく言って下さいますし」

「あのロシアがねえ」

「私みたいな娘を奇麗だって言ってくれますし」

「いや、ガリーナさん凄い奇麗だよ。実際」

イタリアはこれは保障します。

「凄く。スタイルもいいしさ」

「そうでしょうか」

「うん、凄く奇麗だよ」

このことをまた言います。

「だから安心してよ。ガリーナさん自信を持ってね」

「そうですか。それでは」

「うん、絶対にね」

こう言ってロシア妹を慰めたのですがその帰り道に。イタリア兄が沈んでいるのを見つけました。

「どうしたの兄ちゃん」

「・・・・・あれ見ろよ」

彼が指差した先にはロシアの女の人達がいます。ロシア名物と言ってもいいお婆さん達です。ロシアではお婆さんがいつも頼りにさ

れるのです。見てみれば。
凄く太っています。ロシア妹とは違って。しかも皆です。尚且つそのうえお髭まで生やして。完全にロシア妹とは別人になっています。イタリアもそれを見てびっくりです。
「何、あれ」
「ロシアの女の人だよ。歳を取ったらああなるみたいだぞ」
「うちの家みたいじゃない。それじゃあ」
二人が知った衝撃の事実でした。歳を取れば変わってしまう、これは人の常なのでした。

第三百三十四話　　完

２００８・９・１３

第三百三十五話　眼鏡にツインテール

第三百三十五話　眼鏡にツインテール

「で、やっと俺かよ」

何か随分待たされたといった感じのイギリスでした。やっと自分の妹が紹介できるので少し嬉しそうですが素直ではないので顔には出さないようにしています。

「全く、どいつもこいつも個性的な妹ばかり出しやがってよ」

「お兄様」

けれどここで茶色のツインテールに緑の目に眼鏡をかけた小柄な女の子が出て来ました。ブレザーの制服に黒いハイソックスを端整に着こなしています。

「不満を述べられるのはあまり宜しくないと思いますが」

「ああ、そうだな」

何故かこの女の子の言葉には素直に頷きます。そのうえで皆に紹介します。

「こいつが俺の妹だ」

「はじめまして皆様。ギネス＝カークランドです」

礼儀正しく皆に答えます。

「趣味は執筆と骨董品収集、それにお茶です」

「そういうことだ。宜しくな」

「何か全然イギリスと似てないね」

イタリアはそのイギリス妹を見て言います。

「っていうか本当に兄妹なの？眉毛の形が全然違うし」

「眉毛は言うんじゃねえよ」

眉毛を言われるとかなり不機嫌になるイギリスでした。

「俺は親父似なんだよ。それでこいつはお袋似でな」

「ふうん、そうだったんだ」

「そうだよ。まあお茶でも飲んで話の続きをするぞ」
「コーヒーはあるの？」
「コーヒーは嫌いですので」
イギリス妹がイタリアに答えます。
「ですから紅茶を」
「やっぱりイギリスの妹みたいだね」
今のところで見抜くのは流石にイタリアでした。見るべき所は見ています。

第三百三十五話　　完

２００８・９・１５

第三百三十六話　血は争えない

第三百三十六話　血は争えない

皆イギリス妹の淹れたお茶にクッキー等のお菓子を楽しんでいます。イギリスでの非常に数少ない美味しい食べ物です。そのクッキーを食べながらフランスが彼女に尋ねます。

「ところでマドモアゼルよ」

「ミスという意味ですか？」

「そうそう、それそれ」

こうイギリス妹に返します。

「あんた料理とかはできるのかい？」

「それだよね」

イタリアもそこが気になるところでした。

「イギリスってさ。料理は本当に駄目だからね」

「御前等何で俺の料理はいつもけなすんだよ」

「まずいからだよ」

「フランス兄ちゃんに同じだよ」

「ちぇっ」

ここまで駄目出しされてはイギリスも言い返せません。皆そんな彼をよそにまたイギリス妹に対して尋ねます。

「それでどうなの？」

「お料理の方は」

「一応こちらに」

こう言って指し示してきたのはトーストにハムエッグ、ポタージュにギドニーパイ、ローストチキン、鱈の燻製にベーコンを焼いたもの、スコーン、オートミール、各種果物です。物凄い豪華です。

「うわ、これはまた」

「凄いね」

「イングリッシュブレイクファストです」

皆に一連の料理の名前を伝えます。
「お味は如何でしょうか」
「美味いな」
「ああ」
皆イギリスではじめて美味しいものを食べて驚きです。本当に意外でした。
「イギリスの妹がこんなに料理上手なんて」
「作れるのはこれだけです」
「・・・・・やっぱりイギリスの妹か」
結局血は争えないのでありました。イギリス妹もまたイギリスの家の人でした。

第三百三十六話　　完

２００８・９・１５

第三百三十七話　兄貴はあんなのなのに

第三百三十七話　兄貴はあんなのなのに

連合ファイブもいよいよ最後、遂にあのフランスの妹の番になりました。皆ここでかなり不安な顔になっています。

「大丈夫かなあ、フランス兄ちゃんの妹さんだから」

「変態に決まってるだろうが」

イタリアもかなり不安な顔でイギリスは最初から決め付けています。他の皆も大体同じです。誰もがフランスの妹ということで不吉なものを感じているのです。

「俺の妹だぜ。とびきりの美人だぜ」

「御前みたいなのだよな」

「決まってるじゃねえか」

思い切り疑念に満ちた顔のイギリスに対しても明るい、白い歯をキラリとさせてまでの返答です。

「俺みたいな美形なんだよ」

「そうか、御前そっくりか」

「何かやっぱり怖いなあ」

イギリスもイタリアも不安でいると背の高い長い金髪を後ろでまとめた黒い目のマドモアゼルがやって来ました。実に堂々とした外見です。

「はじめましてですわ。ナタリー＝ボルショワでございます」

頭をぺこりと下げてスカートの両端を摘んで。見事な淑女でした。

「兄がいつもお世話になっています。趣味は絵画とバレエ、料理です」

「どうよ」

この淑女の横でフランスが誇らしげに腕を組んでいます。

「俺の妹は。美人だろ？」

「そうだね。性格もかなり普通だしね」
「俺のところ以上に血がつながってるかどうか不安にならないか？」
「いや、別に。俺そっくりじゃねえか」
「御前がそう思うんならそれでいいけれどな」
幸いなことにその性格や行動は兄とは全く違うフランス妹でありました。兄妹といっても全く似ていない中でもこの二人はかなりのものでした。

第三百三十七話　　完

２００８・９・１６

第三百三十八話　タッグ

第三百三十八話　タッグ

フランス妹はバレエが大好きです。それはロシア妹も同じで二人はいつも仲良くバレエの練習に励んでいます。

「アンドウトロア、アンドウトロワ」

「宜しくてよ、ガリーナ」

「お姉様も」

ロシア妹がフランス妹をお姉様と呼んでいます。フランス妹は彼女にとってはまたとないパートナーであるだけでなく先輩であり親友でもあるのです。まるで少女漫画のそれのようです。

「明日はコンクールの発表会ですし」

「ええ。最後の打ち合わせでしてよ」

「はい」

「おお、今日もやってるな」

フランスは二人の練習を見て声をかけました。

「感心感心ってな」

「明日コンクールですから」

「そういえば俺もそうか」

「お兄様も明日バレエを？」

「いや、俺は絵の方だよ」

こう妹に答えます。

「そっちの方でな。ちょっとな」

「左様ですか」

「ああ。じゃあガリーナちゃんよ」

「はい」

今度はロシア妹に声をかけます。

「頑張ってな」

「有り難うございます」

「それでお兄様」
ここでフランス妹が兄に声をかけます。
「絵ですわね」
「ああ。それがどうしたんだ？」
「今度は裸体画以外も御願いしますね」
「わかってるさ。ちゃんとやってるからよ」
「お兄様のそういうところが心配ですから」
妹にまで変態なのを心配されているフランスでした。彼のことはもう誰もがわかっていることでありました。

第三百三十八話　　完

２００８・９・１６

第三百三十九話　黒一点

第三百三十九話　黒一点

皆は妹ですが一人だけ違う人がいました。それはハンガリーです。彼女は言うまでもなく女の子なのですが彼女だけは妹がいないのです。

「兄なんですけれど」

「あれっ、お兄さんなんだ」

「はい、そうなんですよ」

静かに笑ってイタリアに答えます。

「名前はフェケテ＝ヘーデルヴァーデといいまして」

「実は僕がそうなんだよ」

今までハンガリーの後ろにいたやけに明るそうな金髪に緑の目とハンガリーと同じ髪と目の色のお兄さんが言ってきました。どうやら彼がそのハンガリーのお兄さんのようです。

「いや、皆いつも妹によくしてくれてるようで嬉しいよ」

「その兄なんですけれど」

「ちょっと待てよい」

イギリスが早速彼を注意します。見れば彼はイギリス妹に声をかけているのです。

「ねえねえ、今度よかったらさ。うちの家で紅茶でも」

「ハンガリーさんのお家も紅茶なのですか」

「紅茶でもコーヒーでも何でもあるよ、今はね」

「俺の妹に勝手に声かけんじゃねえよ、おい」

しかもイギリス妹だけでなく他の皆の妹さん達にも次々に声をかけていきます。何故かロシア妹にだけは声をかけないのは危険を察してのことなのでしょう。

「まあこんな兄ですけれど宜しく御願いします」

「いや、どうもこの学校男ばかりでうんざりしていたら」

ハンガリー兄はまだ女の子達を物色しています。
「妹さん達は美人揃いじゃないか。僕はとても嬉しいよ」
「もう、兄さんはいつもそうなんだから」
何気に兄には苦労している模様のハンガリーであります。オーストリアさんとは正反対の彼については。

第三百三十九話　　完

２００８・９・１７

第三百四十話　特技は同じです

第三百四十話　特技は同じです

ハンガリーは普段はおしとやかで大人しい女の子ですけれどいざとなれば強いです。その辺りがどうも抜けたところがあってリトアニアをやきもきさせているポーランドとは違います。

とりわけ乗馬は得意です。女の子ですが本当に馬に乗るのは上手です。

「私の家は平原ですから」

それが理由なのでした。

「ですから。馬に乗るのは得意なんですよ」

「おかげで俺は何かあったらいつもこいつの馬に噛まれてるよ」

プロイセンが横から言います。

「ったく、いい加減にしろよ」

「それは御前が悪いんじゃないのか？」

ここで妹と同じように馬に乗ってきたハンガリー兄がそのプロイセンに声をかけます。

「いつもいらんことしてるからじゃないか」

「何で御前まで馬に乗るのが上手いんだよ、おい」

「御前がまた下手過ぎるんだよ」

「何っ！？」

「何で馬に乗った時に背筋を立てるんだよ」

それがプロイセンの馬の乗り方です。バランスが悪い乗り方だったりします。確かに見栄えはいいのですが。

「丸めないと危ないだろうが」

「俺には俺のやり方があるんだよ」

ひねくれ者なので当然ハンガリー兄の言葉も聞きません。

「人のやり方に口出しするなよ」

「じゃあオーストリアさんからシュレージェン返せよな」

「そうよ。いつもいつも他人の迷惑になることばかりして」
「くっ、この兄妹何時か思い知らせてやる」
「だからそういうスタンスが敵を作るんだと言っているのにこいつは」
ドイツが横で呆れていました。彼にとってプロイセンは非常に手間のかかる相棒であります。考えようによってはイタリアよりもまだ。

第三百四十話　完

２００８・９・１７

第三百四十一話　呼んでないです

「さて、トリは俺なんだぜ！」
「おめえは呼んでもいねえんだがな」
「どうあっても話に入って来るかよ」
イギリスとフランスのうんざりした顔での突っ込みは完全にスルーというか最初から目に入らない韓国がここで登場です。当然誰も呼んではいないのですがそんなことを気にする彼ではありません。
「俺の妹は最高の美形なんだぜ！こんな美人はいないんだぜ！」
「もう、オッパ」
相変わらずのハイテンションで騒ぐ彼の横に何時の間にか小柄な女の子がいました。
「あまり騒がないで欲しいニダ。ウリが恥ずかしいニダ」
「おっと、これは悪いことしたんだぜ」
その女の子は髪の毛を後ろで束ねた細面で白い顔をしています。目はぱっちりとしていて黒いです。当然ながら髪も黒で服はチマチョゴリです。
「俺の妹、任秀美なんだぜ」
「皆さん、はじめましてニダ」
ぺこりと頭を下げます。
「韓国の妹ニダ。オッパがいつもお世話になっているニダ」
「美人だけじゃないんだぜ。頭がよくて芸術の才能なんかそれこそ歌にフィギュアスケートにバレエにそれこそ何でもありの天才少女なんだぜ」
「だからそんなこと言わないで欲しいニダ」
「俺は嘘言ってないんだぜ」
こう言って妹の言葉を聞こうとしません。

「本当のこと言って何が悪いんだぜ。御前は最高の妹なんだぜ」
「だからそういうのが恥ずかしいニダ。止めて欲しいニダ」
「何か馬鹿な兄貴を持つと苦労する妹の典型的だな」
「今からでも遅くねえからあいつじゃなくて妹さんを生徒会長にしねえか？」
イギリスとフランスは顔を真っ赤にして恥ずかしがる韓国妹を見て話しています。
「少なくとも真面目に仕事してくれるぞ」
「できればそうしたいんだけれどな、俺も」
それができたらそもそも最初から生徒会長になっていないわけで。
韓国妹に親近感を抱かずにはいられない二人でした。

第三百四十一話　　完

２００８・９・１８

第三百四十二話　本当に多才でした

第三百四十二話　本当に多才でした

韓国の過剰広告そのものの宣伝は皆聞いてはいませんでしたが確かに韓国妹は多才でした。兄に似ず謙虚で慎み深い性格だけではなかったのです。

本当にバレエもフィギュアも得意ですし学業も優秀です。常に訳のわからない方向に物凄い勢いで突き進んでいく兄とは違い安定感があります。その中で最も得意なのは。

「お見事です」

あの音楽の本家オーストリアさんですら手放しで絶賛するその歌唱力。ソプラノの中でもとりわけ高いコロトゥーラ＝ソプラノで超絶的な技巧を見せています。オーストリアさんのピアノにも完全に息を合わせてきます。

「まさかこれ程までとは思いませんでしたよ」

「カムサハムニダ」

オーストリアさんの言葉ににこりと笑ってぺこりと一礼です。

「ウリナラは音楽には五月蝿いので子供の頃から歌っていますニダ」

「子供の頃からですか」

「はい」

にこりと笑ってオーストリアさんに話しています。

「今も毎日歌っていますニダ」

「それはいいことです。喉に気をつけて頑張って下さい」

「ああ、そこにいたんだぜ」

そしてここで馬鹿兄登場です。

「秀美、レッスンなんだぜ」

「オッパ、もうそんな時間ニダか」

「俺がピアノ弾くから一緒にするんだぜ」

「わかったニダ。じゃあオーストリアさん」

「はい、これで」
こうして韓国妹はレッスンに入ることになりました。この時おっとりしたオーストリアさんは気付いていませんでしたが何と韓国がピアノが弾けるのでした。これがちょっとした大騒動になることはこの時誰も知りはしませんでした。

第三百四十二話　　完

２００８・９・１８

第三百四十三話　夢なんだぜ

第三百四十三話　夢なんだぜ

韓国の特技はあまりにも意外なことにピアノとオーケストラの指揮です。これがまたとんでもないレベルで最近この分野でも活躍が目立つ日本や中国よりもまだ上なんじゃないかって言われる位です。アメリカの家のメトロポリタン歌劇場やオーストリアの家のウィーン国立歌劇場でも通用する程です。

「おいおい、本当にすげえよ」

「まじかよ、おい」

イギリスもフランスもびっくりしています。今目の前で行われている韓国のピアノ演奏は文句なしに学園トップクラスです。ガサツで傍若無人、無礼千万の彼からは想像もできない繊細な演奏にあんぐりです。

それが終わってアンコールに応え意気揚々の韓国を迎えます。流石にタキシードはまだ着られているという感じです。

「御前こんなにピアノ美味かったのかよ」

「驚いたものなんてもんじゃねえぞ」

「当然だぜ！」

その二人に対する韓国の返事はいつもの無意味なまでに自信に満ちたものでした。

「何せ俺は！」

「御前は？」

「何だ？」

「将来オーケストラの指揮者とピアノ演奏家を目指してるんだぜ！」

ＢＯＫＡＡＡ

この宣言と共に会場が大爆発に巻き込まれました。今の韓国の爆弾宣言が本当に爆発を起こしてしまったのです。当然イギリスもフランスも瞬時にボロボロになりあちこち黒焦げです。

「どうしたんだぜ？俺は本気なんだぜ」

「手前は本気の発言で爆発起こせる能力があるのかよ！」

「フェニックス幻魔拳よりも効いたぞおい！」

爆発に巻き込まれてもそれでもクレームをつけるイギリスとフランスです。

「本気でなるつもりかよ、おい！」

「お兄さん今までの人生で一番驚いてるんだけれどよ！」

「それは俺の指揮と演奏を見て言って欲しいんだぜ」

「くっ、残念だが上手いことは上手いよ」

「けれどよ、絶対に合ってねえだろ」

何故か韓国を止められない二人でした。韓国の暴走はさらに続きます。

第三百四十三話　　完

２００８・９・１９

第三百四十四話　オテロ

第三百四十四話　オテロ

イタリアの家の有名な作曲家ヴェルディ。そのあまりにも勇壮で時には暗く静かに燃え上がり続ける炎を思わせる音楽が有名です。その彼の代表作の一つにオテロがあります。

「この作品は本当に凄いんだよ」

「その通りです」

イタリアの言葉にオーストリアさんが同意して頷いています。

「とにかくね、主役のオテロの歌が凄くて」

「全体としても。完成度はあまりにも高いものです」

その音楽もかなりのものなのです。ですから非常に完成度が高い素晴らしい作品でも実際の上演はあまり多くはありません。それだけ難しい作品なのです。

けれどオーストリアさんのお家の人の指揮とオーケストラ、そこにイタリアのお家の歌手の歌を聴いた韓国が思い立ったのです。この作品を是非自分も指揮してみたいと。そして素晴らしい作品にしてみたいと。

「俺はやるんだぜ、絶対にやるんだぜ」

「えっ、本当に!?」

「貴方の腕前は認めますがそれでもこれは」

「任せるんだぜ」

何時になく真剣な顔の韓国です。あの根拠が何処にあるのかわからない明るさと自信は今はないです。

「俺は絶対にやる、素晴らしいオテロにしてみせるんだぜ」

「本気なんだね」

「やれるのですね」

「やってやるんだぜ。最高のオテロにしてやるんだぜ」

本当に本気でした。もう決意は完全に固まっています。

「それならやってみたらいいよ」
「健闘を祈ります」
二人も韓国のその心を知って頷きました。韓国は本当にオテロの上演にかかりました。果たして彼はこの困難な作品を無事成功させられるのでしょうか。途方もない挑戦がはじまりました。

第三百四十四話　　完

２００８・９・１９

第三百四十五話　テノールはこの人

第三百四十五話　テノールはこの人

かくしてオテロを演奏することを決めた韓国、忽ち皆そのことで話が持ちきりです。

「絶対無理に決まってるだろ」

「大体主役は誰なんだよ」

イギリスとフランスはそこを指摘します。このオテロという作品は主役、この作品のタイトルにもなっているのでタイトルロールと呼びますがオテロはそれがとりわけ難役なのです。二人の指摘するのはそこでした。

「一代で一人いればいいって位だぞ、歌える歌手は」

「前はいたがな」

イタリアのお家にいたマリオ＝デル＝モナコ。その鋭い剣を思わせる歌唱は最早伝説になっています。彼はこのオテロにおいて最高と評されていたのです。

しかしこの人はもういません。となれば歌えるのは。誰もいないのではないのかと皆思いました。けれど韓国はここではっかいりと断言したのです。

「皆何もわかっていないんだぜ」

「何もわかってねえだと!?」

「あれに匹敵するオテロ歌いがいるのかよ!」

イギリスとフランスが速攻で突っ込みましたが彼は平気な顔です。そうしてその平気な顔で皆に答えました。

「マリオ＝デル＝モナコは確かに凄い歌手だったけれど今あの人に匹敵するオテロ歌いは確かにいるんだぜ」

「って誰だよ、それ」

「いたか!?そんなの」

「この人なんだぜ」

と言って紹介したのは今世界で三本の指に入る大テノール、プラシド＝ドミンゴでした。スペインのお家に生まれた人気実力共にナンバーワンのテノールです。

「この人なら大丈夫なんだぜ。デル＝モナコさんのオテロとはまた違った最高のオテロを魅せてくれるんだぜ」

「ま、まあその人ならひょっとしたらな」

「できるかもな」

さしものイギリスとフランスもこの人を見ては納得するしかありませんでした。まず歌手は手に入れました。けれどまだクリアすべき課題は残っていました。

第三百四十五話　　完

２００８・９・２０

第三百四十六話　オーケストラは

第三百四十六話　オーケストラは

まず最大の問題である歌手の問題はクリアしました。けれどまだまだ課題は残っています。

「オーケストラはどうするんだよ」

「オーストリアのウィーン管弦楽団か？」

言わずと知れた世界最高峰のオーケストラです。ドイツのベルリン管弦楽団、フランスのパリ管弦楽団にも匹敵します。その実力は並大抵のものではありません。

「あそこは前のオーストリアの家の人が使ったぞ」

「またそれか？」

「俺は二番煎じはしないんだぜ」

韓国はここでもまたはっきりと答えました。

「あくまで俺には俺の考えがあるんだぜ」

「じゃあ何処にするんだよ」

「俺のところか？」

「そう、フランスのところのバスティーユ管弦楽団なんだぜ」

「あそこか」

それを聞いたフランスの目が光りました。韓国はクラシックではフランスと関係がありましてそれでフランスのオーケストラにも詳しいのです。バスティーユと聞いたフランスはまずそこで納得しました。

「どうやら御前の目は確かみてえだな」

「借りていいんだぜ？」

フランスに対して尋ねます。

「バスティーユを」

「ああ、好きなだけ使えよ」

気前よく笑って答えます。

「どうやらこの舞台、大成功になりそうだな」
「!?そうなのか」
「ああ、こいつは本物だ」
フランスは怪訝な顔になった相棒にはっきりと答えます。
「最高のオテロ、やってくれるぜ」
フランスの韓国への評価が明らかに一変していました。何かが大きく変わろうとしていました。少なくともフランスは今それをはっきりと感じ取っていたのでした。

第三百四十六話　　完

２００８・９・２０

第三百四十七話　いよいよ開幕です

第三百四十七話　いよいよ開幕です

こうして韓国のオテロの上演はその準備が順調に進められていきました。その間皆あれこれと疑問視していました。それは勿論舞台が無事上演できるかどうかといった話でした。

「無理に決まってるよな」

「ああ、幾ら何でもオテロなんてな」

「あいつじゃ無理だろ」

最初から駄目出しをしている人もいます。

「どう考えてもな」

「失敗するさ」

「まあそういうのははじまってから言えばいいさ」

フランスはそんな話を平然と聞き流していました。

「全ては舞台がはじまってからさ」

「彼を随分と高く買っておられますね」

そんな彼にオーストリアさんが声をかけてきました。

「貴方にしては随分と珍しいですが」

「俺は正当な評価をしてるだけだぜ」

フランスは涼しく笑ってオーストリアさんに言葉を返します。

「あいつに対してもな」

「そうですか。それだけですか」

「ああ。それで御前はどうなんだ？」

珍しくオーストリアさんに対して友好的に尋ねます。

「音楽なら御前だけれどその辺りはどうなんだよ」

「おそらく貴方と同じ意見ですよ」

オーストリアさんは静かに笑ってフランスに答えます。

「それについては」

「そうか。じゃあ全てははじまってからだな」

「はい。ですが」
「ですが。何だ?」
「今からはじまるのが楽しみで仕方ありません。彼のオテロを観るのが」
「ああ、全くだぜ」
二人だけはわかっているようでした。このオテロがどうなるのか。
リハーサルも終わりいよいよ開演です。

第三百四十七話　　完

２００８・９・２１

第三百四十八話　開幕

さて、遂に開幕です。いきなり嵐の場面です。
「!?これは」
「おい、いきなりかよ」
韓国の指揮は最初から冴え渡っています。オーケストラのボックスにおいて真剣そのものの表情で指揮を執っている彼の姿はいつものあれな様子は何一つとしてありません。
「この音楽、凄いな」
「ああ、しかも」
観客席の皆は最初から舞台に飲まれていました。
「この音楽、オーストリアの時とは違って何か」
「ああ、優しいな」
そう、優しい感じになっていたのです。激しいながらもそこに心があり。何かをいとおしむような音楽になっていたのです。激しさと熱さでは随一のヴェルディの作品だというのに。
「包み込んでついて行くみたいに」
「そんな感じだな」
「まだまだこれからだぜ」
フランスはロイヤルボックスで楽しそうに笑っています。一緒に連合ファイブのメンバーもいますが彼等、とりわけロシア以外の三人は完全に飲み込まれています。彼等は失敗すると思っていたのです。
「この舞台、まだはじまったばかりだからな」
「凄いね、韓国君」
ロシアは素直に韓国を褒めます。
「こんなに素晴らしい音楽センスあったんだ」
「まさかとは思ったぜ」

フランスがそのロシアに対して応えます。
「俺の所のバスティーユの連中借りるとは思わなかったぜ。しかも随分と鍛え上げてくれたしな」
「そうだったんだ、君のお家のオーケストラだったんだ」
「そうさ、そして」
舞台が大きく動いていました。まるで英雄がそこに来るかの様に。
「来るぜ、遂にな」
「来た・・・・・・」
英雄が出て来ました。褐色の肌にメイクした彼が。
「喜べ！」
その一言で全てが決まりました。ドミンゴ演じるオテロの登場です。韓国の指揮はそのオテロと完全に一つになっていました。

第三百四十八話　　完

２００８・９・２１

第三百四十九話　韓国式オテロ

第三百四十九話　韓国式オテロ

上演は続きます。それはオーストリアさんのお家の人の指揮、上演とは全く違います。けれどその内容はそれに匹敵するものでした。

「何だよ、この舞台」

シェークスピアの地元であるイギリスも唖然としています。そのあまりもの質の高い上演に。韓国の式はドミンゴの歌に沿い離れません。あくまでオテロを立て、それでいてかれを包み込んでいるのです。

「オーストリアのやつも凄かったがこれもかなりのものだぞ」

「そうだろ。俺はあいつがバスティーユを選んだ時点でやると思っていたんだよ」

「あそこでか」

「ウィーンを選んだら多分ここまではなっていなかったな」

こう断言さえするフランスでした。

「ここまではな」

「なっていなかったか」

「ああ、絶対にな」

ここでも断言でした。

「なっていなかった。ウィーンならオーストリアの家のそれの二番煎じになっていたな」

「そうか」

「けれどあいつはバスティーユを選んだ」

フランスはあくまでそこを指摘します。

「歌手のドミンゴは今最高のオテロ歌いだがな。それだけじゃねえんだよ」

「オーケストラもか」

「そうさ、あいつはわかっていたんだ」

我を捨てて指揮を続ける韓国を見ます。
「オテロのことが何もかもな。だからこそのこの演奏さ」
「ただの馬鹿じゃなかったのかよ」
「こんなのできるのは天才か。それとも」
そして言います。
「天下無双の大馬鹿野郎だけだ。やってくれたぜ」
韓国の指揮と演奏は続きます。そしていよいよクライマックスを迎えるのでした。

第三百四十九話　　完

２００８・９・２２

第三百五十話　カーテンコール

第三百五十話　カーテンコール

最後の第四幕、遂にオテロは自害しました。自分が殺してしまった妻に近寄りそうして息絶えます。これでオテロは全て終わりです。幕が下りてカーテンコールです。

まずは歌手達の登場です。とりわけ主役を務めたドミンゴには拍手が鳴り止みません。彼は満面に笑みを浮かべてその拍手を受けています。本当に満ち足りた顔です。

何度も何度もカーテンコールに出ます。花束が投げ込まれます。これは観客から歌手への最高の贈り物の一つです。

そして最後に指揮者がカーテンコールに応えに出て来ます。タキシードを着た韓国の顔はもう疲れ切っています。それでも満ち足りた顔で笑みを浮かべています。

「ブラボーーーーーーーーーッ！！」

「よかったぞ！！」

ドミンゴを上回る拍手と歓声でした。

「よくやったな！」

「まさかとは思ったがな！」

皆拍手を惜しみません。ロイヤルボックスにいるフランス達も一斉に立ち上がり拍手です。そのうえで。

「あれを投げ込むぜ」

「ああ」

「わかったよ」

「了解ある」

「それじゃあ」

イギリスもアメリカも中国もロシアも笑顔で頷きます。そうして五人で一斉にとりわけ大きな花束を投げ込みます。赤に青に黄色に白に紫に。見事な花束が韓国に与えられます。

「またやれよ！」
フランスが声をかけます。ドミンゴと並んで拍手を受けている彼に。
「最高のオテロをな！」
「今回のオテロはこの人のおかげなんだぜ」
やっぱりいつもの韓国とは違いました。最後の最後までオテロをいとおしむ音楽を続け最後の最後は彼を鎮魂するように終わらせた彼は。ここでもドミンゴを立てたのでした。
「この人こそ褒めて欲しいんだぜ」
「ブラボーーーーーーッ！！」
そんな彼を皆はさらに絶賛します。本当に珍しいことでした。クラシックになると意外な一面を見せる韓国でありました。

第三百五十話　　完

２００８・９・２２

第三百五十一話　妹二人目

「おい、一つ言い忘れていたけれどな」
イタリア兄が急に皆に声をかけてきました。
「俺にも妹がいる」
「レナータだよね」
イタリアは自分の共通の妹の名前を出して応えました。
「今遊びに行ってるけれど」
「違う、もう一人いるだろうが」
「そうだったっけ」
「そうだったっけって御前」
いきなりとんでもないコメントの弟に内心呆れます。けれど二人は長い間別々に暮らしていたのでそれは無理もないことなのです。こう見えても意外と複雑なイタリアの家庭環境です。本人達からはあまり窺うことはできませんが。
「この前言ったぞ」
「何時？」
「三年位前にパスタとピザをワインをやりながら言っただろうが」
「それっていつものことだし」
ワインのせいで忘れてしまっていたようです。本当にいい加減です。
「もう一人いたんだ」
「ああ。今から紹介するからな」
かなり強引に話をまとめるイタリア兄でした。
「その為にわざわざここまで呼んだんだからな」
「用意いいんだね」
「当たり前だ」
真剣な顔でイタリアに対して答えます。

「妹の紹介なんだからな」
「けれど何で今になって紹介するの？兄ちゃん」
「俺も妹もこのことを忘れてたんだよ、悪いか」
「それってお互い様なんじゃ」
皆イタリアと同じことを思いますがそれでもイタリア兄は強引にそういうことにしてしまいました。かくしてイタリア兄の妹紹介となるのでありました。

第三百五十一話　　完

２００８・９・２３

第三百五十二話　意外と小柄でした

「おいルチア」
イタリア兄がイタリアのお家の女の人の名前を呼びました。
「もういいぞ。皆そろってるぞ」
「わかったわ、お兄ちゃん」
それに応えて黒髪を肩のところまで伸ばしてカチューシャをした黒い目の女の子が出て来ました。眉が少し濃くて気の強そうな顔です。白いフリルのあるワンピースを着ていて肌は少し日焼けしています。健康そうな美少女です。
「ルチア＝ヴァルガスよ」
「これがその俺の妹だよ」
ルチアと呼ばれたその女の子は皆に軽く一礼します。イタリア兄が皆に説明します。
「妹その二ってわけだ」
「こう見えてもレナータよりは年上よ」
「ふうん、、そうだったんだ」
「そうだったってね、小兄ちゃん」
イタリアはこう呼ぶようです。
「お兄ちゃんで何でこのことを知らないのよ」
「だって聞いてなかったし」
「聞いてなかったしって」
「俺の家って四人兄弟だったんだ」
「さあ」
何故かここでルチア、大イタリア妹は首を横に振りました。
「それはどうかしらね」
「どうかしらって何で？」

「だって私の知らない兄弟がいるかも知れないし」
「知らないって。自分の兄弟じゃない」
「じゃあお兄ちゃんは知ってるの？」
ぶしつけな質問でした。
「そこのところは。どうなの？」
「そう言われるとちょっと」
今丁度知らなかったばかりです。答えるに答えられないイタリアでありました。本当に兄弟というものは何時何処にいるのか全くわからないものであります。

第三百五十二話　　完

２００８・９・２３

第三百五十三話　ハートを磨くっきゃない！　☆

第三百五十三話　　ハートを磨くっきゃない！

最近イギリスがトレーニングに熱心です。何故トレーニングをしているかというとそれは強くなる為です。意外と弱かったりする相棒とはそこが違います。なお相棒は彼がトレーニングしている間少し以上に変態なことをしでかしていたり絵を描いたりセーシェル達と遊んでいたりします。実に気楽です。

イギリスは今日も爽やかに汗をかいています。今日のメニューを終えて満足な顔をしています。

「よし、今日も随分鍛えたな」

汗を拭きつつ言います。涼しい風がトレーニングの後の彼を迎えています。

「俺のことを貧弱だって言った奴等を驚かせてやるぜ」

「おおいイギリス！」

ここでアメリカの声が聞こえてきました。

「イギリス！一時間位探したよ！」

そのアメリカが来ます。見ればでかい車をロープで持って引き摺りながら走っています。

「君のこの車乗ってみたいんだけれど」

笑顔でイギリスに言ってきます。

「鍵貸してくれないかい？」

「おい、その車」

「悪い、勝手に持って来たよ」

「持って来たよじゃなくて何トンもあるんだぞ」

「ああそうなんだ。意外と軽いね」

「意外とっておい・・・・・・」

流石にアメリカの馬力には適いませんでした。次の日中国がイギ

リスの家に来てみるとイギリスはお菓子を食べて漫画を読みつつゴロゴロとしていました。
「今日はトレーニングしねえあるか？」
「昨日で完全に止めた。何か無駄だ」
「無駄あるか」
「俺にはあんな芸当できねえよ」
やはり彼は普通なのでした。あまり普通の人がいない学園なのでありますけれど。

第三百五十三話　　完

２００８・９・２４

第三百五十四話　力と技と

第三百五十四話　力と技と

アメリカの売りはその圧倒的なパワーです。そして中国の売りといいますと。

彼は技です。料理や様々な手先の器用な技術だけでなく拳法も有名です。その種類も実に多彩なものです。

「八極拳に螳螂拳なんかが特にいいあるが」

「ああ、君そういうの上手だよね」

格闘技大好きのアメリカと日本が彼の家で直接本人から説明を受けています。

「要は鍛錬ある。何日も何年も修行していって身に着けるものあるぞ」

「ローマは一日にしてならずっていうやつだよね」

「その通りある」

アメリカの言葉に答えます。そのうえで実技も見せます。

「修行を積めばこんなこともできるあるぞ」

こう言って気孔を出したりもします。百歩離れた場所にある木の人形を壊したりもします。やっぱり中国の技は素晴らしいものです。

「確かアメリカもできたあるな」

「ソニックブームとかパワーウェーブとかメガスマッシュとかだよね」

「それある。僕の家から伝わったと聞いているあるが」

「君の家の人も多いからね、僕の家は」

「これこそが極意の一つある。よく覚えておくよろし」

「うん、それじゃあ」

「そういえば中国さん」

ここで今まで黙っていた日本が口を開いてきました。

「中国さんは武器を使われる場合は技よりも力を重視されていませ

んか」
「そうあるか？」
「ほら、大斧とか関羽のあの大刀とか」
関羽のそれなぞは二十キロ以上あります。
「ああいうのはどうなんでしょうか」
「重さもまた大事ある」
これが中国のコメントでした。
「それを扱える力も。力と技あるぞ」
「それを言うと何かブイスリーですね」
「僕の妹は健在あるぞ」
「けれど御両親は」
「気付けばいなくなってる気がするある」
何歳かわからないのは伊達ではないです。妹以外は中々宮内な部分もあったりする中国でした。ただし妹は新しい映画の方に近いのでそれが彼にとって残念です。

第三百五十四話　完

２００８・９・２４

第三百五十五話　彼は技です

「そういう日本はどうなんだい？」
「私ですか」
アメリカは今度は日本に尋ねてきました。
「そうだよ。君はあまり力はなさそうだけれど」
「否定はしません」
本人もそれは認めます。
「何分小柄ですので」
「そうなんだ、やっぱり」
「日本は完全に技系あるぞ」
中国がアメリカに説明します。
「その技がまたどれを取っても凄いある」
「へえ、そうなんだ」
「空手や柔道は僕の国から来たものがそもそものルーツあるな」
「ええ、そうでしたね」
中国の言葉に頷きます。空手は中国から沖縄、そして日本に入ったのです。柔道は中国のそうした体術が日本に入り戦場で鍛えられ柔術になりそれを日本の家のある先生が柔道として整えたものなのです。日本の武道にはこうした歴史があります。
「その他にも古武術がありますが」
「古武術って？」
「そう、まず着物と袴を着まして」
「うん、何か格好いいね」
アメリカは日本の説明を興味津々で聞いています。
「それで行うものです。気を使うこともあります」
「日本も気を使うんだ」

「はい、こうやって」
言いながら右手に青い気を溜めてそれを地面に向かってアンダースローで投げます。すると気は地走りで一直線に向かっていきます。動作も技もかなり格好いいです。
「烈風拳といいます。空中で投げるものは疾風拳、手に溜めて空中で手刀にするのは飛翔日輪斬、突撃する場合は邪影拳になります」
「凄いや、日本にはそんなものがあるんだ」
「気は僕が教えたあるがここまで応用するとは思わなかったある」
「そうだったんだ。よし、僕も」
アメリカはここで何かを決意しました。
「その古武術を身に着けてみるか。頑張るぞ！」
こうして日本の古武術を学びはじめたアメリカでした。それが何故か彼のお家で悪い人が身に着けて街の支配者にまでなってしまうとはこの時は誰も気付いていませんでした。

第三百五十五話　　完

２００８・９・２５

第三百五十六話　この人は完全にこうです

第三百五十六話　この人は完全にこうです

どちらかというと技寄りのバランスタイプの中国、どちらかというとパワー主体のアメリカ、技に突出した日本。太平洋の三人は大体こんな感じです。それぞれで個性が出ていて中々面白いものです。

ところでこの人はどうかというと。また実に個性的であります。

「皆それぞれ癖があって面白いよね」

「そ、そうですね」

ロシアが三人を見て感想を言っています。横ではリトアニアがいつものように震えています。

「確かに」

「僕も格闘技は好きだよ」

「サンボですね」

「うん、特にコマンドサンボ」

にこりと笑ってリトアニアに答えます。

「柔道も好きだしレスリングもいいけれどね」

「力系が多いですね」

「だって最後にものを言うのは力じゃない」

如何にもロシアといった言葉です。

「腕力と体力さえあれば何とでもなるよ」

「そうなんですか」

「け、けれどロシアさんってあれですよね」

ここでラトビアがガタガタ震えつつ言います。

「力だけっていうか。それしか芸がないっていうか」

「あっ、ラトビア・・・・・・」

「また・・・・・・」

「他にはって・・・・・・ぎゃあああああああーーーーーーっ！！」

「ロシアさん！ロシアさん！落ち着いて！」
「ラトビアアアアアアアアアアーーーーーーーーーッ！！」
その力をたっぷりと味わうラトビアでした。確かにロシアの力は相当なものです。そしてそれを向けられる人は確かに不幸であります。悲しいことです。

第三百五十六話　　完

２００８・９・２５

第三百五十七話　妹さん達は

第三百五十七話　妹さん達は

お兄さん達はこんな有様ですが妹達はどうなのでしょうか。中国妹は暗器の使い手として有名ですが彼女だけがこういう分野において有名なのではありません。例えばアメリカ妹は。

「いや、兄貴に言われてね」

「そうあるか」

「そうだよ。これね」

早速マーシャルアーツの構えを取ります。格好は赤い帽子に青いジャケットとジーンズ、それに白いズボン。中国妹は赤い中国の上着と帽子に青いズボン。どちらも何かのゲームそのままの格好です。

「兄貴も得意なマーシャルアーツ。護身用にってね」

「パワーウェーブとかやれるあるか？」

「勿論、パワーゲイザーだってやれるよ」

「それはいいことある」

何気に物騒な会話をしています。そんな彼女達です。

そしてここにもう一人います。日本妹です。赤い袴と白い上着でおずおずと立っています。

「そういえばあんたはさ」

「何が得意あるか？」

「私は柔術と合気道です」

こう二人に答えます。

「兄さんに言われまして」

「おっ、同じだね」

「やっぱりそうあるか」

「はい」

ぺこりと頭を垂れて二人に答えます。

「そうなんですけれど」

「それはいいさ。ところで」
「どんな技が使えるあるか？」
「紅流柔術とかですけれど」
中々しぶいです。飛龍とは。
そしてここで。イタリアが来て後ろから日本妹に声をかけようとします。
「ねえ君、今度さ」
「むっ！？」
一瞬日本妹の目の色が変わりました。そして。
「紅流奥義、秘泉」
「えええええっ！！？」
いきなり動き出し技を繰り出してきました。後ろに逃げて危うく危機を脱したイタリアでしたが。それでもその技の恐ろしさは見ることができたのでした。日本妹も何気にかなり強いです。

第三百五十七話　　完

２００８・９・２６

第三百五十八話　日本妹の技

第三百五十八話　日本妹の技

意外や意外、かなりの戦闘力を持っていることがわかった日本妹、彼女が得意なのは合気道や柔術だけではないこともわかってきました。

「他にも薙刀等も」

「薙刀ってあれあるか」

「かなり強いんじゃないの?それって」

中国妹もアメリカ妹もまたしてもびっくりです。実際に薙刀を扱うその腕はかなりのものです。どうやら日本妹の戦闘力は素手だけではないようです。

「これも兄に言われまして」

「心身を鍛えることにもなりますし」

剣道着を着た日本が出て来て説明します。

「それでやるように勧めたのですが予想以上に上達しましたね」

「兄さん」

「今日も鍛錬に励んでおられるようで何よりです」

「有り難うございます」

「それで環」

妹の名を呼んできました。

「少し技を見てみたいのですが」

「技ですか」

「ええ。その恋女房の技」

言いながら竹刀を出してきた日本です。

「是非共今」

「わかりました。それでは」

「稽古といきましょう」

それぞれ防具まで着けて稽古をはじめますが見ていたアメリカ妹

と中国妹のコメントです。
「いやさ、本当に凄かったんだよ。どっちもスピーディでテクニシャンでさ」
「互角だったあるぞ。日本さんと互角に闘えるなんて流石に思わなかったある」
リーチの差はあるがそれでもでした。やっぱりかなり強い日本妹でありました。

第三百五十八話　　完

２００８・９・２６

第三百五十九話　ブリティッシュ＝エッグ　☆

第三百五十九話　　ブリティッシュ＝エッグ

やけに誇らしげな今日のイギリスです。何か持って来て物凄く嬉しそうに言います。まるでアメリカのお家の雑誌が欧州をけなす時のようです。

「御前等聞いて驚け！」

「何だ？」

「何だい？」

「何あるか？」

ここにいないロシア以外の生徒会の面々が応えます。

「長年の研究の末遂に完璧なゆで卵を作れる機械を発明したぞ！」

後ろにあるその機械を指差して誇らしげに言うのです。彼の嬉しそうな理由はそこにありました。

「我が大英帝国の英知を結集させて作った最先端のゆで卵製造機で構想に数年と開発にさらに数年かかった」

まるで鬼の仮面ライダーの構想の様に時間をかけていることがわかります。あれは一年もかけたのですけれどもっとです。

「とまあそんなわけで」

途中長いので誰も聞いていませんでした。

「長年の苦労の甲斐あって上手いゆで卵ができるようになったんだ」

その周りでは皆彼の相手をせずにそのゆで卵を食べだしています。けれどイギリスはそれに気付くことなく話を続けます。

「他の国には真似できないような技術でな」

アメリカに至ってはイギリスの頭にそのゆで卵をぶつけて殻を割りだしました。ここでやっと気付いたイギリスは平気な顔でゆで卵を食べているアメリカを見て。

「・・・・・人の話は聞けよ、御前等」

「つまり美味いゆで卵を作れるようになったんだよね」
「それだけあるよな」
アメリカと中国はこう言います。
「っていうか俺なんかこの程度何時でも作れるぜ、おい」
料理には絶対の自信があるフランスにはこう言われる始末です。
イギリスの発明は華麗なまでにスルーされてしまったのでありました。

第三百五十九話　　完

２００８・９・２７

第三百六十話　卵は色々

第三百六十話　卵は色々

イギリスがゆでた卵は勿論鶏のものです。けれど世の中には色々な卵があります。

「これなんかどうでしょうか」

「何だよ、これ」

イギリスは日本が出してきた卵を見て顔を顰めさせます。赤く粒々のとても小さな卵の集まりです。

「変なやつだな。蛙の卵か？」

「いくらですが」

こうイギリスに説明します。

「鮭の卵で元々はロシアさんのお家で食べておられたそうです」

「へえ、鮭の卵かよ」

「はい、御飯にかけて食べると凄く美味しいです」

「ああ、確かにな」

実際に食べてみるとその通りです。いくら丼を食べてみてイギリスも納得です。日本はさらに別の卵も出してきました。

「今度はこれです」

「何だ、こりゃ」

「たらこです」

今度出してきたのはピンク色の細長くぶよぶよとしたものでした。いくら以上に変わった外見であります。

「お茶漬けにして食べると美味しいです」

「へえ、今度はお茶漬けなのか」

「お魚の卵も色々とありまして」

シーフードが好きな日本らしい言葉です。

「こういう食べ物もあるんですよ」

「凄いな、日本はいつもこんなの食ってるのかよ」

「確かイギリスさんも鮭は食べられる筈ですが」
「キャビアは知ってるけれどな」
「・・・・・左様ですか」
やっぱり魚の卵が食べられることは知らなかったイギリスでした。なおこれは関係ない話ですが彼は烏賊を食べられる、しかも美味しいということも知らなかったのです。本当に食べ物にかけては何の才能も素質も見ることができないイギリスでありました。

第三百六十話　　完

２００８・９・２７

第三百六十一話　今度はビールです　☆

「御前等聞いて驚け！」
またしてもイギリスが高らかに皆に声をかけています。今いるのはフランスとロシアです。何かお酒が好きそうな面々であります。
「長年の研究の末遂に！」
前と同じ様な台詞を続けているのには本人は気付いていません。
「ビールの泡が奇麗に出る機械を発明したぞ！」
「ビールなんだね」
「ああ、そうだ」
ロシアに対して胸を張って答えます。やっぱりここでも対応が前とそっくりです。
「そうだろ、凄いだろ」
「確かに凄いかも」
ロシアはいきなりそれでビールを飲みだします。無類の酒好きである彼にとってはごく自然な行動であります。ビールはもう水と同じです。
「我が大英帝国の」
また同じことを言おうとするといきなりフランスが彼の頭をビールを並々と入れたジョッキで叩いてきました。もう一方の手にはナッツがあります。
「うるせえ」
「手前！」
売り言葉に買い言葉。早速二人の喧嘩がはじまりました。
「ビールはぶつける必要ねえだろ！」
「いーーや、ぶつける必要あるな！大体つまみはナッツだけかよ！」
「それだけで充分じゃねえか！」

「せめて魚のフライ位用意しろ！」
「そんなのいらねえだろ！」
「いるに決まってるだろ！」
「今日も皆平和だね」
二人の喧嘩をよそにロシアは一人泡が奇麗に出ているビールを楽しんでいます。気付けば彼が一人でビールを飲み干してナッツを食べ尽くしています。けれどもうそんなことはどうでもよくなっている相変わらずの二人でありました。

第三百六十一話　　完

２００８・９・２８

第三百六十二話　ビールとくれば

第三百六十二話　ビールとくれば

ビール大好きといえばドイツです。ワインも好きですがやはりメインはビールです。

「ビールとくればやはりな」

「これだよね」

「ウルストですね」

イタリアと日本が応えます。三人で仲良くソーセージを食べながらビールを飲んでいます。

「茹でたウルスト、これとビールがね」

「特に黒ビールが最高です」

「その通りだ。しかし日本」

「はい」

ここでドイツは日本に声をかけます。

「何かテーブルに緑の袋が一杯見えるがそれは何だ？」

「これは枝豆です」

こうドイツに答えます。

「我が国の食べ物ですが」

「枝豆か」

「大豆です」

「じゃあ豆腐と同じか？」

「そうです。お豆腐もこちらに」

もうそれもテーブルの上にありました。冷奴に揚げに湯葉に。各種豆腐料理が揃っています。

「置いてあります」

「ビールで大豆料理か」

「けれど美味しいよ」

早速枝豆を食べたイタリアがドイツに言います。

「ビールと本当に合うし。あっさりしていて」
「そうなのか」
「私は夏はいつもこれです」
日本は冷奴を食べています。生姜醤油で実に美味しそうです。
「夏バテにもいいです。お豆腐は」
「そうか。確かに」
ドイツは揚げを食べてからビールを飲みますがそれは実際に。
「美味いな」
「そうだよね、本当に」
彼等は三人で仲良くビールと御馳走を楽しみました。どうして枢軸と連合でこんなに仲が違うのでしょうか。特にイギリスとフランスは。

第三百六十二話　　完

２００８・９・２８

第三百六十三話　フランス兄ちゃんのお家で

第三百六十三話　フランス兄ちゃんのお家で

久し振りにフランスのお家に遊びに来たイタリア。馬鹿にしていながらも何故かイタリアに対してはあまり何も言わず寛容なフランスはドイツやイギリスやオーストリアに対する態度とは正反対の顔で迎えます。

「あいよーーー、勝手に上がってくれって・・・・・・」

ここでイタリアを見て少しびっくりです。

「って御前イタリアなのか」

「？そうだけれど」

「いや、この前来たのってよ」

目を少し丸くさせながらイタリアに対して言います。

「金髪でやたら元気のいい背の高い女の子だったからな。あれは一体誰だったんだ？」

「あれ！？妹だけれど」

イタリアはこうフランスに説明します。

「この前紹介したじゃない。兄ちゃんもいた筈だよ」

「ああ、そういえばそうだったかな」

どうもイギリス並に最近記憶があやふやになっているようです。

「そうか。あれがなあ」

「そうだよ」

「いや、全く」

ここでフランスはいつものフランスになっていくのでした。

「別嬪さんだよな、本当に」

「俺もそう思うよ。自慢の妹だよ」

「そうだよな。フランス領になればいいのに」

こんなことを言い出します。

「いいなあ。欲しいなあ、フランス領になればいいのにな」
「に、兄ちゃん!?」
「全くな。何でならないんだよ、御前も妹さんも」
怖い目で呟きだします。どうやら本音は中々黒いものを抱え込んでいるようなフランスでありました。それを見せてはお話になりませんけれど。

第三百六十三話　　完

２００８・９・２９

第三百六十四話　イタリア妹は強かった

そんなイタリア妹がフランスの家に遊びに来た時です。この時は彼女はフランス妹と楽しく談笑していました。

「そうそう、あの時は大変だったわよね」

「そうでしたわね、お互いに」

「全く、うちの兄貴は二人共肝心な時に頼りないんだから」

「お兄様も。何処か抜けていて」

「あれっ、ナタリー」

ここでそのお兄様が出て来ました。

「お客さんか？」

「はい、レナータさんが遊びに来られています」

「レナータ？っていうと誰だ？」

イタリア妹の顔を見て言います。

「どっかで見た気がするんだけれどよ」

「イタリアさんの妹さんですよ」

「ああ、そういえばそうだったか」

言われてこのことを思い出します。やっぱり記憶力が怪しいことになっています。

「あのイタリアのな。そうなのか」

「どうも、はじめまして」

イタリア妹が元気よくフランスに返事します。

「お邪魔してます」

「ああ、こりゃまた別嬪さんだな」

こう言いながらさりげなく近付いてイタリア妹の手を取ります。そこから手の甲に接吻するつもりでしたがここで。彼にとっては思わぬ出来事が起こりました。

「！？」
「とりゃあああーーーーーーーーっ！」
いきなり投げられてしまいました。気付けば壁に背中から叩き付けられているフランスでした。逆さ磔みたいになって壁に張り付いています。
「何が一体どうなったんだよ」
「ナタリーさんは痴漢撃退のプロでして」
「すいません、咄嗟に身体が反応しちゃいました」
フランスは痴漢と間違えられてしまったのです。彼にとっては不名誉なことですが自業自得ではあります。
お兄さんとは違って中々強いイタリア妹です。ただ一番凄いのはこういうことがあってもそれを忘れてしまっていたフランスです。ジャンヌのことを長い間忘れていたのは伊達ではないようです。

第三百六十四話　　完

２００８・９・２９

第三百六十五話　やっぱり女好き

第三百六十五話　やっぱり女好き

イタリア兄妹は今日は二人でフランスのお家に遊びに来ています。
あれこれ言うイギリスに対するのとは違ってやっぱりイタリアに対しては寛容なフランス兄ちゃん、実に気前よく兄妹に本を貸してあげたりしています。
「折角来たんだしこれでも読めよ」
「これ何？」
「レナータちゃんが読んだことない珍しい本さ」
「何か見たこともない言葉が一杯なんだけれど」
「そういえばそうだね」
イタリアも妹の言葉に続きます。
「俺の家の言葉って兄ちゃんの家の言葉と似ている部分多いんだけれどね」
「ジュテームって言葉もあるね」
イタリア妹はここで面白そうな言葉を見つけました。
「何て意味かしらこれって」
「ああ、それな」
ここでフランスはイタリア妹に対して言います。
「ちょっと俺に言ってみて」
「フランスさんに？」
「そう。さあ、ジュテームって」
「ジュ・・・・・？」
「お兄様」
ところがここで。フランスの後ろからフランス妹の声が聞こえてきました。
「その声はナタリーか！？」
「その通りでございます。その行動はセクハラになりましてよ」

「いや、俺はただこの娘に家の言葉を教えてあげてるだけなんだけれどな」
「それでしたらわたくしが務めさせて頂きます」
「いや、やっぱりそういう仕事は俺がさ」
「わたくしが務めさせて頂きます」
「・・・・・わかりました」
何と兄より妹の方が強いのはフランスでも同じでした。どうもお兄ちゃん達は今一つ頼りないといった家が多いようであります。これもまた困ったことであります。

第三百六十五話　　完

２００８・９・３０

第三百六十六話　ここでも兄は困った人でした

第三百六十六話　ここでも兄は困った人でした

「全くフランスの野郎もどうしようもねえな」
イタリア妹に対するセクハラのことはイギリスの耳にも入っていました。イギリスはそれを聞いていつも通りフランスを馬鹿にしていたのです。
「そんなことだから変態呼ばわりされるんだよ」
「それに関してですがお兄様」
兄の横で何かをしているイギリス妹が彼に声をかけてきました。
「その後どうなったのかもわかりました」
「ああ、それでどうなったんだ？」
「その後はナタリーさんが中心になってお話を進められたそうです」
「まあそうだろうな」
イギリスはそれを聞いて納得した顔で頷きます。
「あいつに任せたらまた同じことするからな」
「やはりナタリーさんはしっかりした方です」
「妹さんはな、そうだな」
このことに関してはイギリスも認めることにやぶさかではないようです。
「しっかりしてるよ、本当に」
「その通りです。そしてですね」
「今度は何だ？」
「お食事ができました」
何かをしているかと思えば料理を作っていたイギリス妹です。
「イングリッシュ＝ブレイクファストです」
「ああ。じゃあもらうか」
「それでお兄様」

「んっ、今度は何だ？」
「このゆで卵を茹でる機械ですが」
何とまだありました。
「これは使わなくても美味しい卵料理ができるのですが」
「いいじゃねえか、美味しいゆで卵が作れるんだからよ」
「私は使わなくてもこの通りなのですが」
見ればイギリスの目の前には見事なゆで卵があります。料理の腕では妹に完全に負けているイギリスでした。これまた困ったことであります。

第三百六十六話　　完

２００８・９・３０

第三百六十七話　女装大好き　☆

第三百六十七話　女装大好き

今日はハロウィン、ポーランドとリトアニアの二人も参加です。
「ハロウィンってあれだろ？」
ポーランドがリトアニアに対して尋ねています。
「菓子を騙し取ればいいんだっけーーー？マジよくない？」
「う、うんそんな感じ」
犬の格好をしているリトアニアがポーランドに対して答えます。
けれどポーランドの格好はといいますと。
「何でポーランド女装してるのかな」
見ればリボンにドレスです。どういうわけか彼は女装しているのです。
「気にしない方がいいのかな」
この友人にはいつも振り回されていますが今回もです。しかもポーランドは最初にお邪魔するお家の名札を全然見ていませんでした。これはかなり危険です。
「そんじゃあまずここだしーーー」
「うん、そこだね」
しかもリトアニアもそのお家の名札を見ていません。最早自殺行為です。
「一、二で出て来た奴驚かすしーーー」
「うわあ、何だか」
ポーランドがチャイムを鳴らす時にリトアニアは思わず言いました。
「俺はじめてだから緊張するなあーーー」
しかしその緊張は一瞬で済みました。何故ならそのお家の人が出て来たからです。果たしてその人とは。
「ポーランドとリトアニアが今だに来ないんですけれど」

「さっき見たよ」
エストニアはラトビアに小さい声で話します。
「ロシアさんのお家にそのまま入って行ったのをさ」
「・・・・・そうなんですか。じゃあ今日は」
「間違っても行っちゃ駄目だよ」
「はい・・・・・」
頷くことしかできないラトビアでした。行けばどうなるかは彼は骨身に沁みて知っているからです。知りたくないことですけれど。

第三百六十七話　　完

２００８・１０・１

第三百六十八話　幽霊じゃないのに

第三百六十八話　幽霊じゃないのに

ハロウィンは街中で行われています。今日の日本はアメリカのお家で中国ともう一人と一緒にいます。

「ハロウィンですよね」

「うん、今日はね」

三人ともう一人でお菓子やジュースをつまみながら話をしています。

「楽しいよ。皆がお化けに化けて家にやって来てね」

「それでお菓子をあげるんですね」

「そういうこと。皆持って来てるよね」

「はい、こちらに」

「この通りあるぞ」

和菓子に月餅に他にも一杯あります。アメリカはドーナツを多く置いています。三人で食べながらお化けを待っているのです。

「準備は万端だね。後は誰か来るのを待つだけだけれど」

「それあるがもう一人来ていないあるか？」

「もう一人って？」

アメリカは中国の言葉に顔を向けます。

「ここにいるのは僕達三人だけじゃないか」

「韓国さんはあちこち回っておられますしね」

「けれど間違いなく誰かいるあるぞ」

「んっ！？そういえば」

ここでアメリカも気配を感じました。

「誰かいるような気もするな。誰だろ」

「幽霊とかじゃないですよね」

「生きている気配あるが。生霊あるか？」

「さて、これは一体」

「参ったなあ、リアルで幽霊なんか出たら洒落にならないよ」
三人は気付いていませんでした。もう一人がいるということに。
「お菓子まで持って来ているのに何で僕のことに三人共気付かないの？」
「ダリナンダアンタイッタイ」
「だから君の飼い主のカナダなんだって」
ハロウィンでも目立つことのできない彼でした。なお彼のお家に来た人はハロウィンの間一人もいませんでした。誰も彼のお家に気付くことがないからです。殆ど蜃気楼です。

第三百六十八話　　完

２００８・１０・１

第三百六十九話　おねだり　☆

第三百六十九話　　おねだり

ドイツもハロウィンに参加しています。彼はドラキュラの格好をしています。本当はルーマニアの家の人なのですがオールバックだからという理由でこの格好なのです。フランケンにするかとも言われましたがアメリカにもう取られてしまいました。なお中国がキョンシー、日本は落ち武者になっています。アンデットばかりです。

「結構似合うな、相棒」

「そうか」

「まあ俺はこういうのはあまり好きじゃないけれどな」

「そうは見えないがな」

見ればプロイセンは西洋の騎士の格好をしています。あちこちが血に濡れて青いメイクをしているのは幽霊騎士だからでしょうか。彼までアンデットです。ディスペルやジルワンがかなり怖そうです。

「楽しんでないか？それなりに」

「そうか？イタリアに言われて仕方なくなんだよ」

「またあいつか」

「ったくよお、あの能天気野郎」

いつもの悪態に入ります。

「毎度毎度俺達のところに来てな。弱い癖に」

「その割に毎回毎回俺にあいつと仲良くしろと言うのは何故だ？」

「それは気にするな」

強引に話を消してきました。

「フランスとかイギリスと付き合うよりずっといいだろ？だからだよ」

「それだけが理由に思えないがな」

「おっ、誰か来たぞ」

ここで早速家のチャイムが鳴りました。

「じゃあ行くか」
「ああ」
二人で玄関を出るとそこに立っていたのは。犬の耳と尻尾をつけたイタリアでした。
「隊長、お菓子欲しいであります」
「・・・・・いきなり最初で御前か」
「お菓子頂戴、ドイツ」
「・・・・・ハロウィン位人の話は聞け」
「俺ちゃんと聞いてるけれど」
「そう思っているのは御前だけだ」
うんざりとした顔でイタリアに対して言うドイツなのでした。ハロウィンでもイタリアはイタリアです。

第三百六十九話　　完

２００８・１０・２

第三百七十話　結局あげます

第三百七十話　結局あげます

「それでさ、ドイツ」
イタリアはドイツの表情なぞ見ようともせず彼に言います。
「お菓子だけれど」
「その前に言うことがあると思うが？」
「ああ、お邪魔します」
「だからだ。トリックザトリートと」
「まあ待てよ」
ここでプロイセンが二人の間に入って来ました。
「こいつは悪気は全然ないんだよ。そんなに怒るな」
「怒ってはいないが」
「それに今日はハロウィンだ。堅苦しいことは抜きにしような。それでイタリア」
「うん」
プロイセンはイタリアに顔を向けて親しげに声をかけます。イタリアも愛想よく彼に応えます。
「お菓子だよな。どれがいいんだ？」
「何でもいいよ。もらえるのなら」
「そうか。それならな」
ここで早速色々かお菓子を出してきました。
「持ってけ。何ならもっとやるぜ」
「うわ、こんなに貰っていいの？」
「いいさいいさ、ハロウィンだからな」
いつものプロイセンとはまるで別人みたいです。少なくともオーストリアさんやフランスに対するのとは全く別人になっています。
「どんどん持って行けよ。俺達も後で御前の家に行くしな」
「うん、楽しみに待ってるよ」

「じゃあまたな」
こうして笑顔で別れます。二人になるとドイツは上機嫌のままのプロイセンに声をかけました。
「あいつには随分と優しいんだな」
「そうか？気のせいだろ」
「気のせいには見えないがな」
実はプロイセンもイタリアが気に入っているのでした。何だかんだでイタリアには甘い二人なのでした。

第三百七十話　　完

２００８・１０・２

第三百七十一話　ハイパー孤立

第三百七十一話　ハイパー孤立

このお祭りには皆が参加しています。当然イギリスも参加しているのですが。

「来ないね」

「来ないよね」

お家の人達がそんな話をしています。

「皆来ないのはどうしてかな」

「折角待ってるのにね」

「何でだよ」

マントを羽織った魔法使いに扮しているイギリスが不機嫌な顔で呟いています。

「何で誰も来ないんだよ」

「お菓子たっぷり用意してるのにね」

「お茶だって」

見ればお菓子は種類も量もふんだんにあります。意外とお菓子はよさげです。

「それなのにどうして誰も来ないんだろうね」

「おかしいよね」

「どうしていつもこうなんだよ！」

いい加減イギリスが怒りだしました。

「皆俺の所には来ないんだよ！どうしてなんだよ！」

「そんなに嫌われてたっけ」

「別にそうじゃないよね」

とりあえず他の生徒会のメンバーとは仲がよくなくてしかも生徒会長に存在を忘れられていてもあまり嫌われているとは言えないです。ところがそれでも。

「このままずっと誰も来ないってことは」

「ないと思うけれど」
「大丈夫だ、大丈夫だよ」
半分自分に言い聞かせています。
「絶対に誰か来るからな、絶対にな」
「そうあって欲しいですよね、本当に」
「誰か来ないのかなあ、真剣に」
「・・・・・来てくれよ」
切実な言葉になっています。
「さもないとよ。俺はこのまま」
しかし家の外には皆いるのです。けれど窓の外から見えるものを見て。
「あれ、本物だよなあ」
「行くの止めようぜ」
「ああ」
実は妖精達が見えているのでした。それで皆寄り付かないのです。イギリスだけが気付いていないことでありました。

第三百七十一話　　完

２００８・１０・３

第三百七十二話　やっとやって来たのは

第三百七十二話　やっとやって来たのは

かなり長い間待っているイギリスです。とにかく誰も来ないのでふてくされています。

「くそっ、いつもこうなんだよ」

愚痴まで言い出しています。

「子供の頃からな。家に来るのは誰もいなくてよ」

「まあまあ」

「そんなにしょげないで下さいよ」

妖精達がお菓子やジュースを差し出してイギリスを慰めます。

「海賊だの悪党だの言われてよ。上司は時々変な人だったりしたしよ」

「変な人っていいますと」

「壁ぶっ壊してそのまま戦争に行った人とか奥さん次々にとっかえた人とかよ。もう色々い過ぎてわかりゃしねえよ。今の人の息子さんも何だか」

スキャンダルがあったりするのです。そういうことには事欠かないのがイギリスの上司達なのです。

「何で俺の家はこうなんだよ。中にも外にも」

「ですからほら。クッキーでも」

「ロイヤルミルクティーですよ」

「けれど御前等がいて有り難いよ」

彼等はイギリスにとっては実に有り難い友人達なのでした。

「おかげで寂しくないよ」

「有り難うございます」

「じゃあ踊りでも」

「ああ、悪いな」

こうして妖精達の踊りや歌がはじまりそれを楽しむイギリスでし

た。そしてそれが終わった時にふと家のチャイムが鳴りました。
「来ましたね」
「ああ。じゃあ行って来るな」
「行ってらっしゃい」
彼等の声を受けながらお客さんに会いに行きます。それは悪友フランスでしたがそれでも内心とても嬉しいイギリスでした。
「ちっ、御前かよ」
「誰も来ないだろうから来てやったぜ」
「来るなって言ってただろうが」
こうは言っても内心は違うイギリスなのでした。素直でない彼です。

第三百七十二話　　完

２００８・１０・３

第三百七十三話　何故遅れたか　☆

第三百七十三話　何故遅れたか

イギリスの家に入ったフランス。お菓子をつまみながらこれまでのことを話しています。

「実はもっと早く来てやるつもりだったんだよ」

「それで何で遅れたんだ？」

「いや、実はな」

その時のことを話します。狼男のつもりで犬耳の彼は最初日本の家に行きました。出て来たのは日本妹です。

「はーーーい。あっ、フランスさん」

「ああ、環ちゃんなんだ」

「兄さんは中国さんと一緒にアメリカさんのお家にいますよ」

「そうか。それじゃあさ」

「ええ、お菓子ですよね」

日本妹もこの辺りの事情はわかっています。すぐにお饅頭やお団子を出そうとします。ところがここでフランスは言わなくてもいいことを言ってしまったのです。

「お菓子をくれても悪戯するぜ」

「えっ！？」

「股間のモンスターがな」

「・・・・・それで遅れたんだな」

「ああ」

話を聞いて呆れ果てているイギリスに対して笑いながら答えます。

「さっきまで事情聴取受けてたんだよ、日本の家のお巡りさんにな」

「そういうことだったのかよ」

「最近の女の子はガードが固いよな。お兄さんちょっと困っちゃったよ」

「それで刑務所に放り込まれても文句言えねえぞ、おい」

「それも一興ってやつか？」
「勝手にしろ、この馬鹿野郎が」
本当にとんでもないことを笑ってするフランスでした。ハロウィンでもやっていいことと悪いことがあるのは言うまでもありません。

第三百七十三話　　完

２００８・１０・４

第三百七十四話　フランスと狼

とりあえずイギリスのお家でお菓子を食べているフランス。ここでふとイギリスは彼に尋ねるのでした。

「今の御前の格好ってよ」

「ああ」

「やっぱりあれか？」

こうフランスに尋ねます。

「野獣か、やっぱり」

「それなんだよ。それで狼男なんだ」

「確かジェヴォダンだったな」

イギリスは考える目になっています。

「あれが出たのは」

「大変だったぜ、あの時は」

フランスも真剣な顔になっています。

「戦争よりえらいことになっていたからな」

「そもそもあれは本当に狼だったのかよ」

「さてな」

イギリスの質問に首を捻るフランスでした。

「狼っていうわりには随分とな」

「おかしなこと多いよな」

「大体狼って人襲わないだろ」

「本当はそうだよな」

「けれどあの野獣は襲ったよな」

「有り得ないってか」

「しかもあれだけ。子供ばかり狙ってな。おかしいって言えばあまりにもおかしいよな」

フランスはこう考えていました。

「俺が仕留めたけれどな。それでも正体は今もわからねえ」
「死体もうないよな」
「埋めたさ。何処に埋めたのかは忘れちまった」
「そうか。それじゃあ」
「今となっちゃ全くわからないさ」
何気に不思議な話もあったフランスなのでした。その野獣の正体が何だったのかは今も彼のお家の中であれこれと言われていることなのであります。けれど何だったのかは今だってわかっていない、とても不思議な存在なのです。狼かどうかさえわからないような。

第三百七十四話　　完

２００８・１０・４

第三百七十五話　オーストリアさんは心配性　☆

第三百七十五話　オーストリアさんは心配性

イタリアは最後にオーストリアさんのお家に来ました。それでやることはやっぱり。

「オーストリアさん、お菓子お菓子」

「はいはい、わかってますよ」

オーストリアさんはおねだりするイタリアに対して応えています。

「お菓子ですね。ハンガリー」

「はい、オーストリアさん」

これは犯罪です。可愛らしい魔女の格好のハンガリーが出て来て銀のテーブルの上にお菓子をたっぷりと持って来たのです。にこやかな笑顔と一緒に。

「昨日から準備して待ってたのよ」

「うわあ、やっぱりオーストリアさんとハンガリーさんだ」

流石にイタリアに対してかなり甘いです。というかドイツの親戚の人達はイタリアに対してかなり好意的なのですけれど。オーストリアさん然り。

イタリアは早速オーストリアさんのお菓子をつまみます。これがまた。

「やっぱりオーストリアさんのお家のお菓子は美味しいなあ」

「だからといって一人で食べるものではありませんよ」

「わかってます。じゃあオーストリアさんもハンガリーさんも」

「ええ、それでは」

「コーヒーもあるわよ」

三人で仲良くお盆を囲んでお菓子を食べだします。オーストリアさんがそっと一言言いながら。

「美味しいからといってお菓子ばかり食べるのもよくありませんよ」

「はい、パスタもお肉もお野菜もワインもたっぷりと食べています」
「それなら大いに宜しいです」
「じゃあ今度はイタちゃんのお家で仲良く三人で」
「ドイツも呼んでね」
仲睦まじくお喋りをしながらハロウィンの最後の時間を過ごします。三人にとっては本当に楽しいハロウィンでした。

第三百七十五話　　完

２００８・１０・５

第三百七十六話　今は魔女ですけれど

第三百七十六話　今は魔女ですけれど

ヘタリア学園きっての名花ハンガリー。今でこそ穏やかで優しい女の子ですが昔はかなり違っていました。ここにちゃんと証人がいます。

「いや、滅茶苦茶強かったんだよ」

一部では銃をメインで使う仮面ライダー達と同じ匂いがすると言われているフランスのコメントです。

「プロイセンの野郎に負けているオーストリアを攻めたらな。いきなり出て来てな」

どう聞いても彼が悪いのですがそれは棚に上げて言います。

「こてんぱんにやられたぜ。強いの何のって」

「俺もあの時は随分やられたぜ」

次に出て来たのはプロイセンです。

「特に馬に乗るのが上手いんだよ。フライパンまで持ち出してな」

「オーストリアの大事なところ返せってな」

「あの女帝陛下にも忠実だったしな」

「全くだぜ」

彼等は自業自得と言うべきですがそれでも散々やられてしまったのです。フランスはともかくプロイセンまで退けているのですからその戦闘力はやっぱり確かなものです。

「確かに頼りになる」

ドイツもそれは認めるところです。

「日本は遠い、イタリアはあれだ」

ドイツの悩みの種はまずそのどうしようもなく弱いイタリアなので彼も話に出るのです。

「フィンランドも強かったがあいつもいざという時に頼りになった。

ロシアとやり合う時はいつも頼りにさせてもらっている」
「私はあまり大してオーストリアさんやドイツさんのお役に立ててはいませんけれど」
　そうは言いながらも軍服姿も実によく似合っています。今でこそメイドであったり魔女であったり麗わしの女子高生であったりしますけれどかつては。勇敢で心強い女騎士であったハンガリーなのです。お兄さんよりもまだ強かったというお話です。

第三百七十六話　　完

２００８・１０・５

第三百七十七話　雷が呼んだもの　☆

第三百七十七話　雷が呼んだもの

神聖ローマは窓から空を見上げて呟きます。夜の漆黒の世界に青い稲光りが見えます。それと共に不気味な雷鳴と雨の音も。外は嵐でした。

その嵐を見ていると。後ろから声が聞こえてきました。

「し・・・・・神聖ローマ」

「んっ！？」

「一緒に寝てもいい？」

見ればそこにはめそめそと泣いているイタリアがいました。

「雷怖いの」

「ちょっと待て！」

「何が？」

「その前に服を着ろ！」

狼狽しまくってイタリアに対して言います。

「幾ら男同士でもそういうことはちゃんとしておけ！いいな！」

「う、うん」

こうして何とかイタリアに服を着せて自分のベッドに入れました。

それでもイタリアはまだ震えています。

「全く。御前はいつもいつも」

「御免。けれど一人で凄く怖かったから」

「ハンガリーがいるだろ？いつも一緒にいるじゃないか」

「けれどハンガリーさんは女の子だから」

だから一緒に寝ることはできないのでした。

「だからここに」

「全く。まあいい」

何だかんだでイタリアのことを許しています。

「何時でも来い。困った時はな」
「うん・・・・・・」
「俺はずっといるからな」
真っ暗の部屋の中。その天井を見つつ言います。子供の時の二人の嵐の中の夜でした。イタリアも神聖ローマも覚えていない。記憶の彼方にあるお話です。

第三百七十七話　　完

２００８・１０・６

第三百七十八話　毎年恒例なのです

第三百七十八話　毎年恒例なのです

日本の家に遊びに来ているドイツとイタリア。けれど今日は何か勝手が違います。

「何だこの風は」

「しかも凄い雨だけれど」

「台風です」

日本が二人に説明します。既に家は厳重に戸締りをして窓も雨戸をきつく閉めています。何処か要塞を思わせる堅固な姿になっています。三人はその中で過ごしています。

「我が家を毎年夏か秋になれば訪れるものでして」

「ああ、アメリカのハリケーンと同じか」

「中国のお家にも来るよね」

「その通りです。水をもたらしてくれるのは有り難いですがとにかく凄い荒れ様でして」

日本が説明しているその間にも外からは物凄い雨と風の音が聞こえてきます。三人は日本のお家の中で車座になってお話をしています。

「とにかくこうして厳重に戸締りをして難を避けるしかないのです」

「大変だな。これが毎年か」

「こんなの来て大丈夫なの？」

「いつものことですから」

見れば日本は至って落ち着いたものです。

「他に地震や雷や火事もありますが」

「日本の家ってそういうのが多いね」

イタリアは日本に対して言います。

「戦争とかは少ないけれど」

「はい。怖いのはこの四つです」

日本もはっきりと答えます。
「特に地震とこの台風は。困ったものです」
「土砂崩れとかなかったらいいけれどね。何かありそうだよ」
「ううむ。何もなければいいが」
イタリアもドイツもかなり怖そうです。けれど慣れている日本だけはいつもと変わらず二人を丁寧にもてなしているのでした。やはり慣れです。

第三百七十八話　　完

２００８・１０・６

第三百七十九話　不思議な夢　☆

第三百七十九話　不思議な夢

神聖ローマと一緒に寝ているイタリア。彼はその夜とても不思議な夢を見ました。

目の前に変わった、見たこともない、絵本での中国のそれに似ているようで全然違う門のところに人がいます。絹の変わった形の様々なリボンや細長い中央にイタリアやフランスの家の紋章に少し似た丸い紋章がある旗が風にたなびき木の扉や建物が並んでいます。何重もの塔もありますがそれも木造でイタリアの前には木のお面を被ってやっぱり中国に似ているようで似ていない不思議な格好の人がいます。

「あの、ここ何処ですか？」

イタリアはその人に尋ねます。

「見たことないの一杯なんですけれど」

カラカラカラカラカラ・・・・・

何処からか木の音が聞こえてきます。お面の人はイタリアに背を向けて前に進みだしました。まるで彼を誘うかの様に。

「何処行くの？それにここは」

答えてくれませんけれど本能的にこの人について行きました。周りの旗はやっぱりどれも細長く見たこともない文字で色々と書かれています。そして辿り着いた先には木に青紫や薄い桃色、白の花々が咲き誇り翠のお池と紅い木の橋があります。そこで不思議な歌を歌いながら赤や青、黄色の糸で奇麗にしたボールを蹴っている人に会いました。

「落ちたよ」

そのボールが飛んで来たので拾ってその人に声をかけました。す

るとその人は。
「貴方は？」
「君・・・・・誰なの？」
　イタリアが見たことも聞いたこともないとても不思議な世界にいるその人は。小柄で黒髪の何処か中性的な青年でした。幻想的な草色の見たこともないデザインの服を着てそこにいるのでした。けれどその穏やか顔にイタリアはすぐに目がいくのでした。彼が誰なのかはまだ知らないのですが。不思議な夢の中、それはまるでおとぎ話の世界でした。

第三百七十九話　　完

２００８・１０・７

第三百八十話　幻想の世界で

「君・・・・・誰？それでここは？」
「私は日本です」
青年はイタリアに対して答えてきました。話し方もとても穏やかでイタリアはこのことにまずは内心ほっとしました。いつも怖い人とばかり会ってきましたから。
「そしてここは日本という国ですよ」
「日本？」
「そうです。御存知ありませんか？」
「そういえば何か聞いたことがあるけれど」
少し前に中国の方から帰って来て色々と本の中で言っている人のことを思い出しました。確かその人が日本という国についても書いていたのです。
「黄金が一杯あるっていう国？ここが」
「一杯かどうかはわかりませんがありますよ」
日本と名乗った青年は穏やかにイタリアに答えました。
「あまりありませんが」
「そうなんだ」
「そして貴方は」
「僕イタリア」
今度はイタリアが名乗りました。
「ヨーロッパっていう場所にいるんだけれど」
「ヨーロッパ」
こう言われても今一つピンとこない感じの日本です。
「そんな場所があるのですか」
「食べ物が美味しいよ」
イタリアはこう日本に説明します。

「パスタっていってね。細長くてつるつるとした」
「細長くてつるつる」
こう言われた日本はあるものを思い出しました。
「麺でしょうか」
「麺!?麺って何?」
「丁度お昼です。よかったらイタリア君も」
「うん」
「御一緒しますか?うどんかそうめんでも作りますよ」
「うん、食べさせて」
夢の中でイタリアと日本は話をしていました。幻想の中の、二人も知らない、そんなお話です。周りからはやはりイタリアが聴いたこともない不思議な楽器で不思議な曲が流れています。竹の音が響き鐘の音はイタリアのお家のそれよりも低く、そして何処か無常を感じさせるものでした。

第三百八十話　　完

２００８・１０・７

第三百八十一話　変わった食器

第三百八十一話　変わった食器

日本と名乗る不思議な青年に案内されてやって来たのはこれまた不思議な部屋でした。床は木でも石でもなく何か草を丁寧に織り込んだような、そんな変わったものでした。

「何か凄い変な床だけれど」

「畳です」

日本はイタリアに厚い敷物を渡しながら答えました。

「そしてこれは座布団です」

「座布団っていうんだ」

「その上に座って下さい」

「うん」

日本に言われるまま座ります。イタリアは普通に三角に座るのですが日本は膝を折り曲げてそのうえに座ります。これまた変わった座り方です。

二人はとても低い木造のテーブルを間に置いて向かい合っています。程なくして二人の前に底の厚い陶器の食器と二本の細長い棒が出されてきました。

「棒！？」

「お箸です」

日本がまたイタリアに説明します。

「これをこうして持って」

「な、何か難しいね」

「それで食べるのです。さあどうぞ」

「どうぞってこれをなんだ」

「そうです。さあお召し上がり下さい」

「それじゃあ」

「他にもありますので」

気付けば同じような食器に今度は御飯とその上に何か揚げ物を置いています。どちらもイタリアが見たことも聞いたこともない料理、それ等とお箸という不思議な道具、紙と細い木の窓、どれ一つ取ってもとても不思議な光景に戸惑ってばかりのイタリアでした。

第三百八十一話　　完

２００８・１０・８

第三百八十二話　パスタでないけれど

「これ、パスタじゃないよね」
「これがうどんです」
日本はイタリアにまた説明します。
「小麦から作った麺のうちの一つです」
「小麦からなんだ。じゃあパスタと一緒なんだね」
「さっきから随分パスタと仰っていますが」
「僕のお家にある料理の一つなんだ」
イタリアは日本にパスタについて説明をはじめます。
「小麦粉をね。練ってそれから作るものなんだけれど」
「やはり麺と似ていますね」
「けれど味は違うね」
うどんを実際に食べてみて答えます。
「このスープの味も」
「おつゆがですか」
「これはおつゆっていうんだ」
「そうです。鰹節や昆布からとったものでして」
またイタリアが聞いたこともない名前の食べ物が出て来ました。
「如何でしょうか」
「凄く不思議な味」
その黒っぽくて熱いおつゆというものを食べながら日本に答えます。
「確かな味なのにとってもあっさりしていて。このおうどんにもよく合うね」
「天丼もどうぞ」
日本は御飯も勧めてきます。
「これもはじめてですか」

「揚げ物をこんなふうに食べるんだ」
「はい。最近やってみた食べ方でして」
「これも美味しい。凄く」
不思議な料理を堪能するイタリアでした。日本と一緒の不思議な時間はまだ続くのでした。夢の中でイタリアは。うどんと天丼をゆっくりと楽しむのでした。

第三百八十二話　　完

２００８・１０・８

第三百八十三話　御飯の後で

第三百八十三話　御飯の後で

うどんと丼というとても変わったお昼御飯を食べたイタリアは。
また日本に声をかけられました。
「召し上がられましたね」
「うん、美味しかったよ」
にこりと笑って日本に話します。
「お米をこうして食べるんだ」
「我が家では主食です」
「パンみたいなものなの？」
「パン！？」
パンと聞いてもわからない顔をする日本でした。
「何ですか？それは」
「あっ、日本は知らないんだ」
イタリアは日本の言葉を聞いて彼がパンを知らないということを察しました。
「パンはね、小麦粉から作ってね。丸くて練って」
「お饅頭みたいなものですか」
「お饅頭？」
「はい、これです」
また食べ物が出て来ました。白く丸いものです。一見すると何かの宝物にも見える、それ位奇麗な食べ物でした。
「これも小麦粉を練って作りますが」
「ふうん、そうなんだ」
「食べてみて下さい」
「うん」
言われるままに食べてみます。すると。
「美味しい。中にあるのは」

「餡子です。小豆から作ったものです」
「砂糖とは違った甘さだね。これも凄く美味しい」
「食後にお茶をどうぞ」
「お茶なんて高価なものまであるんだ」
「我が家でも最近急にポピュラーになったものですが」
「それでも凄いよ。こんなに普通にお茶が飲めるなんて」
日本の出して来た緑色のお茶も飲みます。イタリアの驚きはまだ続くのでした。

第三百八十三話　　完

２００８・１０・９

第三百八十四話　日本の家の遊び

第三百八十四話　日本の家の遊び

お饅頭とお茶も食べ終えたイタリア。もう満腹になったところでまた日本が彼に声をかけてきました。

「さて、もう満足ですね」

「うん、お腹一杯」

イタリアもこのことを認めます。本当に満足した顔になっています。

「有り難う。もう充分だよ」

「それではですね」

ここでまた日本は彼に言います。

「遊びますか？何かをして」

「何をしてなの？」

「色々とあります」

こう彼に話します。

「例えば将棋や囲碁、後は和歌も」

「和歌って？」

「詩を作り合うものでして」

「詩をお互い作るんだ」

「はい。こうして」

早速何処からか出して来た筆で細長く切った紙にさらさらと書いていきます。

「作ります。如何でしょうか」

「随分短い歌だね」

「五七五七七です」

またイタリアにとってははじめて聞く言葉でした。まるで暗号のようです。それでいて何か魔法の様なものも感じるからそれが不思議でありました。

「その文字数で作っていきます」
「凄く短い詩なんだね」
「外に出て風景を見ながら作っていきますか？」
日本はイタリアに提案してきました。
「イタリア君さえ宜しければですが」
「うん、それなら御願い」
イタリアは日本のその申し出にこくりと頷いて答えます。あまり事情をよく察してはいませんが悪いようにはならないことは感じていました。
「外に連れてって。それで一緒に」
「作りますか、和歌を」
「二人でね。作り合うんだね」
「その通りです」
こうして二人は和歌を作り合うことになりました。和歌を作ることになった二人はまずは庭に出ました。もうその手には筆と紙があります。

第三百八十四話　　完

２００８・１０・９

第三百八十五話　鐘の音

第三百八十五話　鐘の音

竹の林に清らかなお池。下は小石が敷かれ小鳥の鳴き声も聴こえてきます。二人はそんなお庭に出たのです。

「ここで詩を作るの？」

「宜しければ他の場所でもいいですが」

「ううん、ここでいいの」

日本の申し出に首を静かに横に振って答えるイタリアでした。

「ここで。とても奇麗だから」

「奇麗ですか」

「こんな場所見たことないよ」

イタリアのお家にもこんな場所はありませんでした。静かで寂しさもありますがそれでいて美しく。彼はこの相反するような三つのものを感じつつ筆と紙を持っているのです。

「不思議な場所だね」

「不思議ですか」

「僕のお家だって奇麗だよ」

このことには自信を持っています。

「けれどこんな場所はないんだ」

「イタリア君のお家はどんな場所ですか？」

「あのね、太陽がとても奇麗でね」

まずはお日様のことを話します。

「それで海が何処までも青くて。オレンジの屋根の白いお家が並んでいて教会が一杯あって」

「教会？」

これは日本の知らない言葉でした。

「それは一体」

「お坊さんがいる場所だよ」

「お寺みたいなものですか」
「お寺？」
「ほら、あの音です」
ここで遠くから鐘の音が聴こえてきました。さっき聴いたあの独特の鐘の音です。
「あれを鳴らす場所です。あそこにお坊さんがおられるのです」
「そうなんだ。日本にも教会があるんだね」
勘違いですがこう思ったイタリアです。静かな鐘の音が彼の心に滲みていきます。

第三百八十五話　　完

２００８・１０・１０

第三百八十六話　お花に気付いて

第三百八十六話　お花に気付いて

暫く日本とイタリアは二人で和歌を作っていました。日本がイタリアの和歌を見て言います。

「お見事です」

「そんなにいいかな」

「はい。御自身のお気持ちをはっきりと表わされていますね」

「僕のお家の詩ってそうなんだ」

こう日本に答えます。

「それでなんだけれど」

「それでいいと思いますよ。イタリア君はイタリア君ですから」

自分の流儀とは違うのですがイタリアのやり方も認めています。

「いい歌です」

「有り難う」

「ところでイタリア君」

日本はイタリアを褒めた後でまた彼に声をかけてきました。

「お茶にしませんか、ここで」

「お茶なの」

「はい。喉が渇きましたので」

「そういえば」

日本の言葉で自分もそうなのに気付きました。暫く和歌を作っていてそれで喉が渇いてしまっていました。

「僕もそうだよ」

「それではあちらで」

「わあ、凄い奇麗」

日本が指し示した場所は藤の木の下でした。紫色の葡萄にも似た花が木から垂れ下がってまるで夢の様な風景です。さっきも見ましたがそれでもやっぱり奇麗です。

「あそこの席で。どうぞ」
「そうだね。それじゃあ」
日本の言葉に従ってその藤の木の下に向かいます。目の前のその花を見ながらイタリアは。日本と一緒に緑色のお茶を飲むのでした。緑と紫。二つの世界が彼を優しく、静かに包み込んでいました。

第三百八十六話　　完

２００８・１０・１０

第三百八十七話　藤娘

第三百八十七話　藤娘

暫くそのお花を見て休んでいると。ふと目の前に思いも寄らぬ幻想的な風景がはじまりました。

藤の木から一人の可愛らしい女の子が出て来て。見れば傘を頭に被ってその手には藤の枝を持っています。それで静かに舞を踊りはじめたのです。

「この娘・・・・・誰なの？」

「私の妹です」

横にいる日本がイタリアに説明します。

「環といいます」

「環さんなんだ」

「ええ。歌や踊りが得意でして」

こういうところは日本にとても似ている感じです。小柄でおどおどした感じはありますがそれでも可愛らしくそれでいてうるわしい舞を舞っています。

「時々こうして踊っているのです」

「そうなんだ」

「さあ環」

日本は自分の妹にも声をかけてきました。

「貴女の舞をイタリア君にも見せてあげなさい」

「わかりました、お兄様」

「お兄様・・・・・」

イタリアは二人の話を聞きながら舞を見ています。お酒に酔ったり藤の中を舞うようにしていき遂には。まるで彼女そのものが藤の木になったしまったかのようでした。

「まるで藤の精みたい・・・・・」

見終わったイタリアの感想です。

「夢みたい。こんなに奇麗なお家や人がいるなんて」
うっとりとして呟くのでした。彼にとってはどれもこれもがあまりにも美しく幻想的な世界でした。イタリアはそのまま幻想の中に浸るのでした。まるで身体がその中に沈んでいき心も一緒になっていくような。彼がこれまで味わったことも感じたこともない本当に不思議な感覚でした。

第三百八十七話　　完

２００８・１０・１１

第三百八十八話　夢から覚めて

第三百八十八話　夢から覚めて

「イタリア」
「ううん・・・・・・」
「おい、イタリア」
「誰？日本？」
「日本っておい」
聞き慣れた声でした。
「誰なんだ、それは」
「その声は神聖ローマ？」
「そうだ」
目を開ければそこにいたのは。何と神聖ローマでした。彼はもう着替えてベッドの中にいるイタリアに声をかけてきていたのです。イタリアはまだ寝ていたのです。
「もう起きろ。御飯の時間だぞ」
「日本は何処に行ったの？」
「だからそれは誰なんだ」
目をこするイタリアに対して聞いてきました。
「聞いたこともない名前だぞ」
「嘘だよ、ずっと一緒にいたのに」
「ずっと一緒に？」
「うん。おうどんっていうの食べたり和歌を作ったりして」
言いながら起き上がります。けれどそこは。
神聖ローマのお家でした。彼が今住んでいる。勿論そこには日本の姿はありません。
「あれ？日本いないんだ。それに藤の木もないし」
「藤の木とは何だ？そんな木も聞いたことはないぞ」
「紫の色のお花が一杯垂れ下がってとても奇麗なんだけれど」

「葡萄の実じゃないのか？」
「だから違うよ。それはさ」
神聖ローマにあれこれと説明しますが彼には全くわからない話でした。全ては夢の中のお話、イタリアがまだ小さい頃に見たとても不思議な夢のお話でありました。遠い遠い昔のお話。イタリアがまだ神聖ローマと一緒に暮らしていた。彼ももう覚えていないようなお話です。

第三百八十八話　　完

２００８・１０・１１

第三百八十九話　ふと目に入ったお花

第三百八十九話　ふと目に入ったお花

さて相変わらず日本のお家で台風を楽しんでいるイタリア。閉めきられた窓の中でドイツとその日本と三人であれこれとお話に興じています。

「それでさ、あの時ね」

「あの時は参った」

ドイツがイタリアの横で苦い顔になっています。

「こいつがイギリスに降伏して泣きついてな」

「あれっ、それが普通じゃないの？」

「普通なわけがあるか」

ムキになった顔でそれを否定します。

「例え降伏しても誇りは忘れるな」

「そんなことを言ってもさ」

「まあ御二人共落ち着いて下さい」

日本がいいタイミングで二人の間に入ります。

「ところでこの缶詰は美味しいですか？」

「うん、とても」

「いけるな」

見れば鯖の味噌煮やアスパラガスなんかを食べています。

「日本って缶詰もいいんだね」

「中々参考になるな」

「そうだね。・・・・・んっ！？」

ここでイタリアはあるものに気付きました。それは。

花瓶に入れてある一輪の花です。淡い紫色で連なって咲いているそのお花は。はじめて見た筈なのに何故か懐かしい感じがしたのです。

「このお花って」

「どうかしましたか？」
「あっ、うん」
日本の問いに応えます。
「おかしいな、何処かで見た気が」
「何処かで」
「うん。何処だったかなあ」
イタリアは記憶を辿りはじめます。彼の中で何かが動こうとしていました。

第三百八十九話　　完

２００８・１０・１１

第三百九十話　藤の優しさ

「このお花何ていったっけ」
「藤です」
日本がイタリアに答えます。日本にとってはとても馴染みのあるお花ですがイタリアとドイツにとっては本当に変わったお花なのです。はじめて見たのですし。
「藤の花ですが」
「藤っていうんだ」
「変わった花だな」
ドイツがイタリアの横から言います。
「日本にはこんな花もあるのか」
「木に咲く花でして。枝をこうして花瓶に入れています」
「そうだったのか」
「そうか、藤なんだ」
イタリアはまだその藤を見ています。
「そうなんだ。藤かあ」
「それがどうかしたのですか？」
「あっ、ちょっとね」
その藤の花を見ながら日本に話します。
「何処かで見たことがあるような気がするんだけれど」
「イタリア君が藤の花を見たのははじめてではないのですか？」
「うん、そうだよ」
自分ではそれはわかっています。それもはっきりとです。けれどそれでも思ってしまうのですからやっぱり不思議なことであります。
「それでも。何か」
「おかしな話だよね」
「御前が覚えていないだけではないのか？」

「それはないと思うよ」
ドイツに答えます。
「だって。はっきりとわかってるから。今はじめて見たのは」
「それで何か記憶にあるのか」
「おかしいよね。何でだろ」
イタリアは首を傾げるばかりです。実に奇妙なことです。そして誰もわかっていませんでした。それが夢のせいだということは。誰にもわかる筈のないことでありました。

第三百九十話　　完

２００８・１０・１１

第三百九十一話　やっとスポットライトが

第三百九十一話

やっとスポットライトが
「あっ、日本さん」
「おや、貴方は」
日本に眼鏡の大人しそうな青年が声をかけてきました。無意味なまでに個性が強く尚且つ騒音レベルで自己主張をする隣人を一人持っている彼にとっては新鮮なタイプです。
「僕のこと知っていますか？」
「確かエストニアさんでしたね」
「はい、そうです」
覚えてもらっていてまずはほっとするエストニアでした。
「この前ロシアさんと一緒にドイツさんのお家で御会いしましたよね」
「ああ、あの時の」
日本が忍者になって一服盛ろうとしてラトビアが大変な目に遭ったあの時です。
「リトアニアさんとラトビアさんと御一緒でしたね」
「そうです。実はですね」
「はい」
「今日は日本さんに僕のお家に来てもらいたくてお邪魔しました」
「エストニアさんのお家にですか」
「はい。どうでしょうか」
日本の顔色を窺うようにして尋ねます。
「それで。今から」
「そうですね」
日本はエストニアの申し出を受けて少し考えます。
「それでは。宜しいでしょうか」

「来てくれるんですね」
「丁度今は何もありませんしエストニアさんのお家にお邪魔したこともありませんしね」
「そうなんですよ。ですから是非」
「私にですね」
「どうぞどうぞ、こっちです」
手を引くようにして日本を自分のお家に案内するエストニアでした。こうして日本のはじめてのエストニアへの訪問がはじまりました。

第三百九十一話　　完

2008・10・1

3

第三百九十二話　紹介のはじまり　☆

第三百九十二話　紹介のはじまり

「首都はタリンです。ここです」
早速エストニアのお家に到着しました。エストニアは日本に説明をはじめます。
「観光がメインです」
「静かな街ですね」
日本は教会の塔やその街並みを見てエストニアに述べます。
「落ち着いていて。何処かのどかで」
「僕の家は何処もこんな感じですけれどここは特にそうなんですよ」
「静かで奇麗なんですね」
「はい」
にこにこと笑って日本に説明を続けます。
「戦火を免れて中世そのままの街並みを楽しめます」
「成程。我が家の金沢等と同じですね」
日本はここで自分のお家の街と彼の街を重ね合わせます。
「そういうことですか」
「そうですね。観光客も同じ位です」
「私の家とですか」
「はい。観光にも力を入れていまして」
何気に地道に頑張っているのです。日本から見れば遠くの国ですけれどそれでも頑張っているエストニアです。
「実はロシアさんよりも観光客は上でして・・・・・・」
「何っ！？」
しかしこう言った瞬間に後ろの壁からにょきっとロシアが顔を出してきて。
「すいません！何でもありません！」
「事情はあるのですね」

「・・・・・はい。申し訳ないですけれどこのお話はまた今度ということで」
「わかりました」
真っ青になったまま俯いてしまったエストニアでした。何気に日本がロシアを見る目がとても怖かったりします。日本とロシアの関係を知らなかったことを忘れてしまった自分の迂闊さが内心腹立たしくもあります。ドイツでのお家での恐ろしい騒動も思い出してしまい余計に顔が青くなってしまうのでした。

第三百九十二話　　完

２００８・１０・１３

第三百九十三話　狼は噛みます　☆

第三百九十三話　狼は噛みます

「タリンもいいですけれど他にもお勧めの場所があるんですよ」
「そこは一体何処ですか？」
エストニアの日本案内は続いています。後ろではラトビアも楽しく過ごしています。何気に不幸なオーラが漂っているのは本人だけが気付いていません。
「ヒーウマー島といいまして。とてものどかでいい場所ですよ」
「ヒーウマー島ですか」
「日本さんにわかり易く言うとエストニアの北海道ですね」
確かに日本にとってはわかり易い言葉です。北海道といえばのどか、日本の中ではこうインプットされています。エストニアもそれがわかっての表現です。
けれど二人は気付いていませんでした。ラトビアもいることに。彼が不幸を招き寄せてしまう体質なのはわかっていても。
「それにここは名物の動物もいますよ」
「鹿か何かですか？」
「狼です」
中々格好いいのが出て来ました。
「もう珍しくなった野生の狼がいてですね。少し周りを見れば」
「あれですね」
「そうあれです・・・・・・って」
草の集まりを覗いていたラトビアが頭から噛まれていました。その野生の狼に。
「ラトビアアアアアアアアアッ！」
「大丈夫です。狼は人を食べませんから」
「そういうことじゃなくてやっぱりこんなオチなの、僕達って！」
「ううん、もうこんな生活嫌です・・・・・・」

頭から噛まれながら泣くラトビアでした。珍しい野生の狼に噛まれるとは。彼の不運はどうも桁外れのもののようです。

第三百九十三話　　完

２００８・１０・１４

第三百九十四話　日本にもまだいるかも

「大丈夫ですかラトビアさん」
「は、はい。何とか」
噛まれた場所はまだ痛いですがそれでも何とか日本に言葉を返して応えるラトビアでした。
「驚きましたよ。まだ狼がいることに」
「あっ、そういえば日本さんのお家って」
「もう狼いないんですよね」
エストニアもラトビアもこのことを思い出しました。実は日本の家にはもう狼はいなくなったとされているのです。
「いなくなってはじめてわかるんですよね、いつも」
「はい。とても残念なことに」
「その筈なのですが」
しかしここで日本はふと言葉を変えてきました。
「お家で時々おかしなものを見たりします」
「おかしなものっていいますと」
「我が家の狼は少し変わっていました」
日本のお家にいた狼は他の狼とは違う点が多かったのです。草原にいずに森にいましたし人の後ろについて歩いてくる習性もあったのです。これを送り狼といいました。
「獲物を皮ごと丸呑みしていたのですが」
「へえ、そうなんですか」
「皮が入ったうんこを見ることがあります」
日本はこのことを二人に言います。
「奈良の方でですけれど」
「ああ、あの怖いマスコットの」

「そうです。まだ見たっていう噂もあったりしますし」
「いればいいですね」
「そう思いますが。どうなのやら」
少し期待はしていても実際はどうなのかわからない。それがもどかしい日本でありました。狼から思いも寄らぬお話となったのでした。

第三百九十四話　　完

２００８・１０・１４

第三百九十五話　その生い立ちはというと

第三百九十五話　その生い立ちはというと

「ところでエストニア君は」
「はい」
今度は日本からエストニアに声をかけてきました。
「ドイツさんとロシアさんの間にお家がありますね」
「非常に悲しいことですけれどそうです」
「一体どんな感じでしたか？」
「ドイツさんっていうかプロイセンさんですけれど」
言わずと知れたドイツの相棒です。ドイツやイタリアには優しいですが相手にはとにかく謀略を使ったり強かったりでやりにくい人です。ちなみに友達が少ないことでも有名です。
「何かっていうと攻めてきました」
「それはまた大変ですね」
「その時にキリスト教を叩き込まれました」
「教えてもらったのではなくてですか」
「教えてくれるような人じゃないですから」
枢軸トリオ以外は皆知っていることです。
「それでもう。プロイセンさんの他にはポーランド君やリトと一緒に住んだり挙句にはスウェーデンさんと一緒に暮らしたり」
「スウェーデンさんとですか」
「これが凄い大変なんですよ」
何しろあの彼ですから。無口でそれでいて何を考えているのかわからない。とにかくとても怖いお人なのです。
「フィンランドがどうして平気で付き合えるのかわからない位で」
「大変だったんですね」
「しかもこれが前半です」

驚くべき衝撃の事実でした。
「後半もあるけれどいいですか？」
「ええ、是非」
「それじゃあ」
こうして後半も語られていきます。本当に受難しかないエストニアの生い立ちです。

第三百九十五話　　完

２００８・１０・１５

第三百九十六話　その頃プロイセン達は

第三百九十六話　その頃プロイセン達はドイツのお家に同居というか目出度く統一がなったプロイセンとドイツ。プロイセンはそのお家の中でドイツと一緒にコーヒーとお菓子を楽しんでいました。

「なあ相棒」

「何だ？」

「いつも思うんだが御前案外料理上手いな」

「俺はそうは思わないが」

「いや、美味いぜ」

ドイツの作ったチョコレートケーキを食べながらドイツに言います。

「このケーキにしろ何でもな」

「これでもオーストリアやイタリアには負けるが」

「あいつ等は特別なんだよ。いいか、俺なんてな」

「ああ」

「つい最近までコーヒーすら忘れてたんだよ」

今度はコーヒーカップを持ってドイツに言います。

「こんなの長い間飲んだことなかったぜ」

「コーヒーをか？」

「代用だったんだよ。代用コーヒー」

そう言いながらまたコーヒーを飲みます。

「大豆とかで作ったな。まずいの何のってな」

「そんなものがあったのか」

「そういうのと比べたら御前の作ったものは本当に天国の食い物だぜ」

「御前も大変だったんだな」

「それはお互い様だぜ。ところでな」

ここでプロイセンは話を変えてきます。
「今度の旅行は何処に行くんだ？」
「そうだな。イタリアは今年ももう何度も行ってるしな」
「エストニアにするか？ここは」
「たまには静かな場所にするか」
そんなことを話す二人でした。今はとても平和に過ごすことができている二人でした。

第三百九十六話　　完

２００８・１０・１５

第三百九十七話　フルボッコにされたうえに

第三百九十七話　フルボッコにされたうえに

「来たんですよ、あの人が」
「ロシアさんですか」
「不幸なことにそうなんです」
日本に対して答える言葉がさらに暗いものになっています。このエストニアだけでなくリトアニアにしろラトビアにしろ同じですけれど。特にラトビアは。
「スウェーデンさんがロシアさんと派手な戦争をはじめて」
「確かあの辺りで一度物凄い戦争があったそうですね」
「ええ。北方戦争です」
あの時のことを思い出したエストニアの表情が暗澹たるものになっています。よく見ればラトビアの顔はもっと悲惨なものになっています。
「デンマークさんやノルウェーさんまで来て」
「そしてその結果はどうなったのですか？」
「・・・・・ロシアさんのお家に入れてもらいました」
入れて『もらいました』と言っていますが実際は。もう壮絶なものだったのです。話している本人も言葉が詰まってしまう位に。
「それからはずっと」
「それで今なんですね」
「気付いたらまたロシアさんのお家にいたってこともありましたし」
一回独立できたことがあります。けれどそれはすぐに消えてしまいましたが。
「今もどうなるか」
「だからドイツさんのところにお世話になりましょうよ」

横からラトビアが泣きそうな顔で言います。
「こんな生活何時まで続くんですか？本当に」
「是非韓国君と場所を交換して欲しいんですけれど」
さりげなく夢も言っています。とにかく不幸なことは一通り経験してしまっているエストニアでありました。世の中は時として不公平であります。

第三百九十七話　　完

２００８・１０・１６

第三百九十八話　スタンドじゃないし　☆

第三百九十八話　スタンドじゃないし

リトアニアはポーランドのお家でまた彼と一緒にいます。本当に相変わらずの調子のポーランドはお菓子をつまみながらリトアニアに言ってきました。

「リト、御前最近誰かに怨まれた？」

「えっ、別にそんなことはない筈だけれど」

相方の今の言葉に少し驚いた顔で応えます。

「何でそんなこと言うの？また」

「最近御前の後ろに何か見えるしーーーーー」

「ちょっとポーランド」

今の言葉は正直言ってかなり怖かったです。

「そんな筈ないじゃない。俺が悪霊に取り憑かれてるみたいじゃないか」

「何か時々御前の後ろに怖い顔の女の子いるの気のせい？」

「怖い女の子て？」

「メイドの服着た金髪の女の子」

ポーランドは言います。

「時々見えるっていうか。怖い顔見えるんだよ」

「誰だよ、それ」

「いや、俺も知らん奴だし」

いい加減な性格なので他人のことはあまり覚えていなかったりします。

「どっかで見た気もするし」

「誰なんだよ、それって」

言われてかなり怖い気分になったリトアニアです。けれど彼もポーランドも気付いていないことが一つありました。気付いたらその

場でショック死してしまいそうなことを。
　ポーランドのお家の外から二人を怖い顔で見据えて青白い炎を発している女の子がいたのです。その金髪のメイドさんです。果たして彼女は誰なのか。それを知れば二人は本当にショック死してしまうでしょう。世の中知らなくていいことも多かったりします。

第三百九十八話　　完

２００８・１０・１６

第三百九十九話　それでも頑張ってます

第三百九十九話　それでも頑張ってます

「色々と大変でしたよ、本当に」

「そうでしょうね」

エストニアの苦労話が終わりました。日本は彼の言葉に静かに頷いています。

「私はそうした苦労はしていませんが」

「左右がアメリカさんと中国さんでしかも隣に韓国君で北にロシアさんでもですか」

何気に日本も凄い位置にお家があります。本人はあまり意識してはいませんが。

「海が間にありますので」

「海ですか。有り難いですね」

ロシアとは本当に隣で側にドイツとプロイセンがいておまけにポーランドやあまり海が役に立たない状況でスウェーデンがいて。やっぱりエストニアの方が凄い位置にいることに自分で考えて納得してしまったエストニアでした。

「僕にも海はあるんですけれどね」

「それでもいい街並みが残っていますね」

「戦禍だけは避けることができました」

「それは何よりです。僥倖ですね」

「運がいいですか」

そう言われて少しだけ気持ちが上向きました。

「そうかも知れませんね。最近景気もいいですし」

「ではこのまま頑張ればどうでしょうか」

「そうします。何故か僕は野生の狼にも襲われませんし」

「そもそも狼は人を襲わないものですが」

「何でそれで僕は襲われるんですか？」
ラトビアにとってはとんでもない不幸です。
「あの、戦禍には遭うし。僕一番ロシアさんにお仕置きされるし」
「ラトビア、それ言わない方がいいよ」
エストニアはそんなラトビアを慰めます。何だかんだでほんの少しだけ運があるエストニアでした。彼はまだ運があると言えます。

第三百九十九話　　完

２００８・１０・１７

第四百話　だから後ろにいるし

第四百話　だから後ろにいるし

「・・・・・なあリト」
「どうしたの？また」
一緒に街を歩いていてもポーランドは冷や汗をかきつつリトアニアに向かっていました。
「御前お払いしてもらった方がよかね？最近洒落にならないしーー」
「洒落にならないって何かあるの？俺に」
「後ろ。見てみ」
「後ろ？」
ポーランドに言われて振り返ってみます。けれど彼の目には何も見えません。ポーランドにはそれがさっとリトアニアの死角に入り込んだのが見えます。
「何か見えん？俺見えるし」
「何もいないじゃない。何言ってるんだよ」
「いや、マジ見えるって」
「だから俺は何ともないよ。元気だしね」
明るい笑顔でポーランドに応えます。
「ところでさ、ポーランド」
「ああ」
「今度の休み何処行く？やっぱり遊園地？」
「・・・・・二人で行くのがよかね？」
やっぱりここでも冷や汗と一緒にリトアニアの後ろを見ています。
「三人だと怖いしーーーー」
「だから二人じゃない。俺とポーランドでさ」
「御前がそう思うんならいいけど。俺は忠告したし」
「忠告って大袈裟だよ。本当におかしいよ」

彼は気付いていませんでした。自分の後ろでベラルーシがとっても怖い顔をして青い炎を全身から沸き起こらせていることに。ポーランドはそれを見て冷や汗をかいているのです。案外自分の後ろにあるものは見えないものなのです。

第四百話　　完

２００８・１０・１７

第四百一話　連合戦隊を作ってみました

第四百一話　連合戦隊を作ってみました

連合の五人が集まっている時に不意にフランスが他の四人に声をかけてきました。

「ところでよ」

「俺達って五人だよな」

「今更何言ってるんだ？そんなの最初からわかってるだろうが」

イギリスが少し挑発が入った感じで彼に言葉を返します。

「だから五大国なんだろ」

「いや、五人だからよ」

フランスがこだわっているのはそこでした。

「あれじゃねえか。ほら、日本の家の特撮の」

「ああ、あれだね」

「戦隊ものあるな」

アメリカと中国がここでわかりました。

「あれどれも面白いよね」

「いつも楽しませてもらってるある」

「俺達もそうだよな」

フランスはその戦隊と自分達を重ね合わせて話すのでした。

「連合戦隊ってな。どうだい？」

「うん。それいいかも」

ロシアが最初にフランスの提案に乗ってきました。

「皆でそれぞれ名乗りを挙げてね。いいと思うよ」

「そうだろ？じゃあ少し考えてみようぜ」

「何かこういう話になると皆乗るな」

イギリスは自分も含めて結構乗り気なのを感じながら言います。

「まあ俺も嫌いじゃないけれどな」

「特撮嫌いな奴は日本の家で変な宇宙人にブロンズ像にされるぞ」

「それか色々組み合わせたやたら強い怪獣に襲われるんだったな」
こう言ってフランスのブロンズ像に返します。
「どっちも最悪じゃねえか」
何気に怖い存在には恵まれている日本の家なのでした。

第四百一話　　完

２００８・１０・１８

第四百二話　炎神戦隊

「色分けだけれど僕がリーダーだからレッドな」
アメリカはまず自分の色を決めてしまいました。
「それでいいよね」
「どうせ駄目だつってもレッドなんだろうが」
イギリスはこう彼に突っ込みます。
「最近レッドリーダーじゃねえ場合も多いだろうがよ」
「それでもレッドはリーダーさ」
アメリカは笑顔でイギリスに返します。
「轟轟とか炎神とかな」
「じゃあ僕はブルーあるな」
次は中国が決めてしまいました。
「それでいいあるな」
「結構合ってるんじゃね？」
フランスがそれに頷きます。
「御前の青はよ」
「じゃあこれでいくある」
「それじゃあ僕は家に木が多いからグリーンで」
今度決めたのはロシアでした。
「それでいいよね」
「勝手にしろ。じゃあ御前はイエローだな」
イギリスはロシアがグリーンを取ったところでフランスに言いました。
「イメージとしてな」
「えっ、君がイエローだよ」
「それしかないある」
「宜しくね」

「おいちょっと待て！」
三人に勝手に決められてイギリスが抗議します。
「何で俺がイエローなんだよ！俺こそブラックじゃねえか」
「だって君カレーが大好きじゃないか」
「それが理由かよ。すげえ懐かしい作品だな」
アメリカに言われてついつい納得するイギリスでした。実は最近カレーに思いきりはまっている彼なのです。
「美味いんだから仕方ないだろ」
何とかカレーの美味しさはわかるだけのものができてはきているみたいです。

第四百二話　完

２００８・１０・１８

第四百三話　これはかなり

第四百三話　これはかなり

「で、俺はネタ担当かよ」
ブラックに決定したフランスはかなり不満そうでした。どうもブラックについて何かと思うところがあるようです。
「ダッシュ豪快なんだな」
「ああ、それとね」
アメリカが開き直りかけている彼にさらに言います。
「風邪に備えて毎日乾布摩擦してあとは」
「まだあるのかよ」
「額をできるだけ広く見せてね」
「・・・・・待て」
流石にこの注文には顔を強張らせます。
「額広く見せるって何だよ！俺がハ○みてえじゃねえかよ！」
「あれ、違うの？君の国ってそういう人かなり多いじゃない」
「そりゃ目の錯覚だ」
無理矢理こういうことにしました。確かにフランスのお家はドイツと並ぶ眩しい国ですが。なおこれは人によっては指摘されると死ぬ程怒ります。
「っていうか青だってやばいだろうがよ」
「僕は髪の毛は全然平気あるぞ」
「ちっ、何で俺が」
「いいじゃねえか。人気あるからよ」
イギリスがふてくされるフランスに対して言います。
「かっこよすぎるって言ってみな。あと人生においてそれが何の意味がある？とかよ」
「じゃあダンスの時は満面の笑顔見せてやるよ」
こうして居直って実際にやってみると子供達には。

「あはは、ブラックの笑顔笑っちゃうよね」
「皆から踏まれてるよ。かっこよすぎる」
「やっぱりネタ担当じゃねえかよ」
かくしてネタ要員となってしまったフランスなのでした。

第四百三話　　完

２００８・１０・１９

第四百四話　ヒロインじゃありません

第四百四話　ヒロインじゃありません

フランスがブラックでイギリスがイエローなわけで。イエローというと。

「ダンスの時の腰か？」

「ああ、それは魔法の場合だから違うよ」

アメリカから説明がしました。

「君の場合はスマイル満開だから」

「おい、じゃああれかよ」

スマイル満開と聞いてすぐにわかりました。

「あの決めポーズかよ」

「そうだよ。ああ、いざっていう時は鹿児島の言葉で頼むよ」

イギリスにとって過酷な注文が続きます。

「ミニスカートはないから安心していいから」

「当たり前だ。しかしあのポーズかよ」

どんなポーズなのか知っているからこそ余計にブルーになります。

イエローなのにブルーでした。

「あれはな。かなりな」

「やってみる？」

「・・・・・やりたかねえ」

本音そのものでした。

「あのポーズだけは。かなりな」

「大丈夫ある。そのうち馴れるあるぞ」

「御前はブルーだから言えるんだろうが」

とにかくかなり嫌そうなイギリスです。けれど作っている料理はひそかに滅茶苦茶甘くさせています。何気に乗っているのかも知れません。

「とにかくだ。あれをやるとだ」

それで実際に掛け声つきでやってみると。
「あはは、イギリス恥ずかしいよね」
「っていうか男があのポーズするなって」
「眉毛も剃れよ、スマイルきめえよ」
「・・・・・この連中にマシンで体当たりしていいか？」
「子供に攻撃したら正義のヒーローじゃねえだろうが」
子供に思いきり馬鹿にされてうんざりとした顔になるイギリスに言うフランスでした。何気に彼もハンドルに手がいっていますけれど。

第四百四話　　完

２００８・１０・１９

第四百五話　ネタ要員二人

第四百五話　ネタ要員二人

かくして見事イエローとブラックになった二人ですが。はっきり言ってそれが凄い不満だったりします。当然と言えば当然ですが。

「まあライダーの方のあのジンジンロックよりましか？」

「っていうかあいつはさっさと無残に死んでしまえよ」

何気に何でも他人のせいにする暴力野郎が嫌いなイギリスです。そんな人間は誰にも好かれないのは当然ですけれど。

何はともあれ二人が出て来るといつも子供達の笑いが出るようになっています。しかも正面から思いきりからかってきます。

「またブラックの生え際凄いことになってるね」

「だからそのポーズ似合わないよ」

「何で俺達が出るとこうなんだ？」

「他の三人だとそうはならねえのによ」

「だってブラックじゃない」

ふてくされる二人にロシアが言います。

「この配役だとブラックがネタ要員なんだから仕方ないよ」

「じゃあ俺は何なんだよ」

そう言われても納得できない立場なのがイギリスです。

「何で俺までネタ要員なんだよ」

「ヒロインの位置なのにヒロインじゃないからだよ」

言われてみれば確かにその通りです。

「それにスマイル満開のあのポーズよ」

「ちっ、やっぱりそうかよ」

「それが嫌ならライダーなんてどう？」

さりげなく黒い世界にイギリスを誘います。

「ほら。あの似非関西弁使っていて今凄いやさぐれてるあの」

「あいつはもう死亡フラグビンビンに立ってるだろ？っていうかあ

いつは死んでくれ」

今一番嫌いなキャラを話に出されてさらに不機嫌になるイギリスでした。普段は紳士になろうとしていますがどうしてもネタ要員になってしまっています。

第四百五話　完

２００８・１０・２０

第四百六話　ロシア流ドキドキ愉快

第四百六話　ロシア流ドキドキ愉快

ネタ要員二人はこんな有様ですがロシアはといいますと。グリーンですがここで大きな問題点がありました。

「グリーンって確かドキドキ愉快だったよな」

「ああ、その通りだ」

イギリスとフランスがそこを指摘します。グリーンは明るくていい子なのです。少なくとも黒さは全然ないキャラなのです。

「それで何で御前がグリーンなんだよ」

「ドキドキ愉快なんだぞ。わかってるのか？」

「勿論わかってるよ」

素朴な笑顔で二人の声に答えます。

「僕だってわかってるよ。ドキドキ愉快だよね」

「ああ。それでどうなんだよ」

「できるんだよな」

「まずはポーズね。ドキドキ愉快」

ポーズを取りますがそれは結構さまになっています。にこにことした笑顔もいい感じです。

「どうかな？」

「ポーズはいいな」

「それでどういう愉快なんだよ」

「うん。それはね」

ここでたまたま通り掛ったラトビアをちらりと見ます。そのうえで小声で呟きます。

「コルコルコルコルコルコル」

「うぎゃあああああああっ！聞きたくない言葉が何処からか！」

ラトビアのトラウマを見事につきます。

「シベリア、スターリン、ロマノフ」

「うわあああああああああああっ！！」
「ちょ、ちょっとラトビア！！」
「ラトビア！ラトビアァアアアアアアアアアアーーーーーーッ！！」
トラウマで泣き叫びだすラトビアとその彼を必死に止めるリトアニアとエストニア。さながら地獄絵図のようです。ロシアはその有様を見てからにこりと笑って二人に言います。
「こういうドキドキ愉快なんだけれど」
「・・・・・わかりたくねえけれどわかったよ」
「っていうか御前本当にヒーローか？」
その点においては二人よりも疑問なロシアでした。けれどロシア流ドキドキ愉快がどんなものかだけはよくわかったのでした。

第四百六話　　完

２００８・１０・２０

第四百七話　ズバリ正解

第四百七話　ズバリ正解

とっても怖いドキドキ愉快もありますが全体的に子供達の人気は上々の連合戦隊。参謀役はブルーの中国でした。

「クイズ問題なら何でも大丈夫あるぞ」

「いや、それはいいんだよ」

「流石に長生きしてるしな」

ネタ要員二人がその彼に対して言います。

「けれどよ。何で喋り方がいつも通りなんだよ」

「違うだろ、ブルーは」

「ああ、あれあるか」

中国の方も二人が何を言いたいのかわかりました。

「言葉の後ろはっす、あるな」

「そうだよ、それだよ」

「何であれにしねえんだよ。やっぱり今のブルーはあれだろ？」

何故か他のメンバーへの絡みがくどいものになっている二人です。完全にネタ要員になってしまっているのが内心面白くないのでしょうか。

「だからよ。ズバリ正解でよ」

「言ってみろよ」

「えっ、別にいいじゃない」

「ねえ」

ところがここで後ろから子供達の声が。特撮といえば子供達です。

「違和感ないよね」

「そうそう、全然」

「子供達がこう言っているから別にいいと思うあるが？」

「くっ、何で俺達にはあそこまでぼろくそにからかいやがるのに」

「この連中は・・・・・・」

イギリスもフランスも子供達に言われてはどうしようもありません。特撮では子供は絶対の存在なのですから。
「こうなったら子供からアイスキャンデーを取り上げて砂場荒らしてやろうか」
「俺は悪の心に囚われて詐欺師になってやる」
「・・・・・それをやったら完全に偽者扱いされるあるぞ」
中国に突っ込まれ空しくそれを止めることになった二人でした。
どうもかなりすねているようです。

第四百七話　　完

２００８・１０・２１

第四百八話　卵料理だけではありません

第四百八話　卵料理だけではありません

料理は基本としてブルー担当です。ですが何しろ中国です。その料理の幅は。

「卵料理だけじゃねえのか！」

「これがブルーの料理かよ！」

「あれは栄養バランスに偏りができているある」

イギリスとフランスに食べさせつつ説明しています。

「だからいつも思っていたある。こうして色々なものを出すべきあると」

「てっきり本当に卵ばかりだと思っていたからな」

「御前はその卵料理すら満足に作れないだろ」

フランスがイギリスに突っ込みを入れます。

「あのやたら甘い料理はどうするんだ？」

「うるせえよ。この前遂に妹から駄目出し喰らったよ」

「姉ちゃんじゃなくてよかったな。あの鹿児島のよ」

「俺には姉貴はいねえからな」

そんな話をしています。ここでその料理担当のブルーがブラックに対して声をかけます。

「御前は料理しないあるか？」

「何かブラックは料理しねえみてえなんだよ」

こう中国に言います。

「今はな。何かプロデューサーに言われてな」

「何て言われたあるか？」

結構リアルな話にもなっています。

「今まで通り身体張ってネタを担当してくれってよ」

「・・・・・それ俺も言われたよ」

これはイギリスも同じでした。

「出番増えるからってよ」
「かっこよすぎるだの額だの乾布摩擦だので満足しないでくれってな」
「ネタ要員も大変あるな」
「ったくよお、子供には眉のことまで言われるしよ」
「御前はまだましだぞ。俺なんか禿扱いだぞおい。ダンスの時の笑顔が爆笑とかよ」
最後はいつもダンスで締めているのですがそこでも注目されているフランスでした。この二人今回も受難なのでありました。卵料理だけではないことにはほっとしていますけれど。

第四百八話　　完

２００８・１０・２１

第四百九話　エンジン全開

　第四百九話　エンジン全開
「さて、遂にリーダーの僕だな」
「ああ、わかったからよ」
「やっぱりそれは欠かせないんだな」
「当然さ、僕はレッドだよ」
　ふてくされまくっているネタ要員二人に平然と返します。
「だったら一番目立たないと。だからこれも必要なんだよ」
「ったくよお。最近じゃリーダーはレッドじゃない場合も多いってのによ」
「何で今回はレッドがリーダーなんだよ。しかもスケボーまで持ってよ」
　アメリカはスケボーまで持っています。それに乗って敵を攻撃するという派手な攻撃をするのです。これがまた子供達に人気なのです。
「さあ、早く敵を倒しに行こうか」
「って最近枢軸の奴等とも関係良好だろ？」
「悪の組織もねえじゃねえか」
「いや、これがあるんだ」
　突込みを入れる二人に突っ込み返します。
「ちゃんとね。学園を汚して回るとても悪い奴等が」
「あれか？ぞよとかなりとかおじゃるとか」
「あの連中は流石にいねえだよ」
「いや、いる！」
　アメリカはまだ断言しています。
「その辺りにいつも。だから僕達は戦わないといけないんだ！」
「じゃあ敵って何なんだよ？」

「いたら紹介してくれよ」
「ほら、そこにいるじゃないか」
そう言ってアメリカが指差したのは何と。
「ああ。ゴキブリか」
「そういやこの連中は何処にでもいるな」
「そういうことだ。じゃあ連合ファイブ出撃だ！」
生徒会の仕事も楽ではありません。彼等も中々大変でありました。

第四百九話　　完

２００８・１０・２２

第四百十話　レッドがリーダー

第四百十話　レッドがリーダー

伝統的にこうしたチームのリーダーはレッドです。だからアメリカがレッドです。けれどそれに不満なのがイギリスとフランスでした。

「ったくよお、俺がイエローで」

「俺がブラックでよ」

カレーとネタなのが凄く嫌なのでした。今だに。

「何であいつがレッドなんだよ」

「俺達やけに虐待されてねえか？」

「けれどイエローやブラックがリーダーだったこともあるじゃないか」

アメリカはこのことを二人に対して言います。

「確かそうだったよね」

「ゲキだってレッドが馬鹿みてえに目立ってただろ」

「まあメガとかアバレは曲がりなりにもリーダーだったけれどな」

ここではイギリスとフランスではっきりと明暗が出てしまいました。

「そういや中国の色もリーダーだったことあるしな」

「グリーンだってな。ロシアの」

「その時その時でリーダーは変わるんだよ」

アメリカはこのことをあえて二人に話します。

「だから別に気にすることないじゃない」

「ちっ、こんなんだったら去年の方にするべきだったぜ」

「じゃあ俺は何時出るんだ？色は白で出番かなり後だろうが」

「そういやそうだったな」

「しかも御前かなり存在感薄くなるぞ。それでもいいのか？」

「・・・・・いや、やっぱり遠慮したい」
それはそれで不都合があるイギリスでした。どうにもこうにも何か恵まれないものが出てしまっている彼なのでした。心中密かに黄色をいいリーダーにしてくれるプロデューサーを期待していたりします。
「何でイエローリーダーだけこけたんだよ。青も緑も成功させた奴がよ」
それがついつい愚痴にもなっているのでした。

第四百十話　　完

２００８・１０・２２

第四百十一話　追加メンバーは

第四百十一話　追加メンバーは

今丁度五人ですかこういう手のメンバーには最近は途中から追加メンバーが入るのが定番です。しかも強いというのもまた定番です。

さて、それでこの五人への助っ人は。

「二人来るらしいよ」

「二人？」

「二人かよ」

ロシアの言葉にイギリスとフランスがまず応えます。

「誰と誰なんだ？」

「色は何なんだろな」

「まず色は金と銀らしいよ」

ロシアはこう説明します。

「それで男女ペアなんだって」

「へえ、そりゃ珍しいな」

イギリスは男女ペアと聞いてまずこう言いました。

「普通一人の場合が多いんだけれどな」

「ああ、そうだよな」

フランスもそれに頷きます。しかしここで大きな問題がありました。

「女の子？誰なんだよ」

「俺達の妹か？」

イギリスとフランスが次に考えたポイントはここです。

「誰かいたか？俺達のメンバーで」

「妹達は妹達で何かするらしいけれどな」

「そりゃ完全にセーラームーンかプリキュアかどれみだな」

「・・・・・御前本当によく知っているな」

イギリスに突っ込みを入れます。とにかく誰なのかさっぱりわかりません。その二人にロシアが言います。
「アメリカ君と中国君が連れて来るってさ」
「台湾と日本か？」
「まさかな。あいつ等は枢軸だしな」
やっぱりどう考えてもわかりません。しかしその謎はすぐに二人にとって最悪の形で解消されたのでした。

第四百十一話　　完

２００８・１０・２３

第四百十二話　兄妹でウィングス

「やあお待たせ」
「追加メンバーあるぞ」
ここでそのアメリカと中国が戻って来ました。けれど戻って来たのは二人だけでやって来た人はいません。
「あれ、いねえじゃねえかよ」
「その二人は何処なんだよ」
「うん、何でも派手にいきたいらしくてね」
「今向こうで準備中ある」
「準備中かよ。しかも派手に」
「金と銀か。確かに派手だしな」
イギリスとフランスは二人の話を聞いてまずはそれに納得します。けれどまだ誰と誰なのかさっぱりわからないのでした。しかしここでジェット機とヘリコプターが飛んで来て。
「!?俺達の車じゃねえぞ」
「何だありゃ！」
「ブレイク限界！」
「キラキラ世界！」
それと共に声が聞こえてきました。そして金と銀の戦隊スーツに身を包んで出て来たのは。
「ゴールド！華麗に参上なんだぜ！」
「シルバーニダ。宜しく御願いしますニダ」
「ちょっと待てよい！」
「何で御前なんだよ！」
イギリスとフランスはゴールドを見て瞬時に表情を変えました。何とそこにいたのは韓国だったのです。
「御前連合じゃねえだろ！」

「っていうか日本の家にいたんだろうが！」
「俺はちゃんと連合メンバーだったんだぜ。知らないのはおかしいんだぜ」
「おかしいっていうか御前の顔あの時向こう側でしか見てねえぞ！」
「ちゃんと説明しろおい！」
まさかの追加メンバーでした。衝撃のリアルを越えたリアルの展開に二人は我を失っています。何故この二人なのか。謎が謎を呼びさらに訳のわからないものにしています。

第四百十二話　　完

２００８・１０・２３

第四百十三話　そもそもいたのかどうか

第四百十三話

そもそもいたのかどうか

「だから御前あの時は日本の家にいただろうが！」

「何でそれでここにいるんだよ！」

イギリスとフランスの抗議が行われています。しかし当の韓国は全く平気な顔をしています。韓国妹は兄の横で困った顔です。

「だから説明しろ、おい！」

「しかも金と銀って何なんだよ！」

「俺はあの時ちゃんと連合にいたんだぜ」

韓国本人のコメントです。

「中国兄貴の家でちゃんとな」

「初耳あるぞ」

中国も今はじめて聞いたことでした。

「そんなことは」

「だよなあ」

「何処にいたんだよ、じゃあ」

「上海なんだぜ。そこで亡命政府作っていたんだぜ」

どうやらそうらしいです。けれど誰も知らないのでした。

「日本が負けた時にアメリカさんにも認めてもらってたんだぜ」

「ええと。第三国？」

アメリカは何とか記憶を辿って思い出しました。

「それだったっけ」

「ほら見るんだぜ、俺はちゃんと連合なんだぜ」

こう力説します。けれどイギリスとフランスは全然納得していません。

「誰も認めていねえんじゃねえのか？」

「第三国って連合じゃねえって意味だろうが」
「とにかく生徒会長自ら追加メンバーなんだぜ」
二人の言葉なぞ完全に無視してそういうことにしてきました。
「わかったら七人で決めポーズなんだぜ」
「くそっ、誰か生徒会長代えろ」
「誰でもいいからよ、こいつじゃなきゃよ」
まだこのことを愚痴る二人でした。どうにもならなくても。

第四百十三話　　完

２００８・１０・２４

第四百十四話　大体銀は誰だったんだ

「まあ御前が金なのはわかった」
「全然納得できねえがもういい」
とりあえずこのことは諦めるイギリスとフランスでした。ですが。
「けれど何で妹さんが銀なんだ？」
「そりゃ金と銀が兄妹なのは知ってるけれどよ」
「欠員だったんですニダ」
韓国妹がおずおずと二人に説明します。
「それで私が」
「俺が決めたんだぜ」
欠員だったので韓国が強引に決めてしまったようです。
「追加メンバーが二人だからいいんだぜ」
「・・・・・まあな」
「それにヒロインは一人いないと駄目だしな」
完全に女っ気とは無縁だったのでこれは欲しいところだったのです。
「しかしよ。誰かいなかったか？」
「ああ。銀にな」
ふとこのことを思い出す二人でした。
「むしろ金が誰なんだって話があってよ」
「銀の方が決まってた気がするんだよ」
二人はふと己の記憶を辿っていきます。
「誰だったかな」
「誰かいたんだよ」
「？俺は知らないんだぜ」
韓国が知る筈もありませんでした。

「まあそれはいいんだぜ。じゃあ秀美」
「はいニダ」
「俺達の専用ポーズをするんだぜ」
二人で爆発を背景にポーズです。皆何かを忘れているのですけれどそれをどうしても思い出せないのでした。

第四百十四話　　完

２００８・１０・２４

第四百十五話　どうしても思い出せないのです

第四百十五話

どうしても思い出せないのです

「あいつだよ、ほらあいつ」

「あいつって誰だよ」

フランスがイギリスに突っ込みを入れます。

「それだけでわかる訳ねえだろうが」

「だからあいつだって。名前が出ねえんだよ」

「で、そのあいつがどうしたんだよ」

「あいつがシルバーになる筈だったんだよ、確か」

彼が言っているのは本来シルバーになる予定のメンバーのことでした。

「あいつがな。けれどどうしても思い出せないんだよ」

「ああ、そういえば誰かになる予定だったな」

「誰だった？」

イギリスは首を傾げだしました。

「誰かよ。寒い国で目立たない奴で」

「寒いつったらトルコじゃねえしな」

「ええと、スウェーデンは今回中立だったしな」

「誰だったかな」

「僕はもういるよ」

その寒い国の人が名乗り出ます。

「ドキドキ愉快じゃないか」

「それはわかってるんだよ。だから御前じゃないし」

「本当はゴールドが誰なのかって問題だったんだけれどな」

「そっちは勝手に決まったしな」

だから違うのでした。

「じゃあ誰なんだろうな、本当に」

「男だったんじゃねえのか？」
イギリスはこのことも少し思い出しました。
「けれど誰だった？本当に」
「わからねえぞ、俺にも」
皆何とか思い出そうとしますがそれでも出て来ません。本当にそれは誰なのか、謎は余計に深まっていきます。けれどどうしてもそれが誰なのかはわからないのでした。五人集まっても全くなのでありました。

第四百十五話　　完

２００８・１０・２５

第四百十六話　その人は彼でした

　第四百十六話　　その人は彼でした
この頃カナダは。一人自分のお家でにこにことしていました。
「ねえ熊八さん」
「今度は水爆打法で兄貴を空高く投げるんだな」
　ここでも名前を間違えているカナダです。
「そもそもダりナンダアンタイッタイ」
「またそこでオンドゥルなんだね。だからカナダなんだって」
　相変わらずお互いのことを知らない二人です。
「とにかくさ。僕やったんだよ」
「どうしたの？」
「戦隊に選ばれたんだよ、戦隊に」
　上機嫌で熊さんに言います。
「戦隊に。追加メンバーだけれどね」
「ああ、あの生徒会でやってる戦隊？」
「そうだよ。何でも炎神連合戦隊っていうらしいけれど」
「そういえば君あの戦争に参加していたんだ」
「うん。皆も僕の活躍を当てにしてくれていたんだよ」
　自分ではこう思っているのですが実際のところは。敵はおろか味方にさえその存在を半分以上忘れられてしまっていたのが実情だったのです。
「だから頑張ったんだ」
「そうだったんだ」
「それでその僕が遂に戦隊に」
　感無量といった様子です。
「嬉しいじゃない、やっぱり」
「よかったね」

「さあ、頑張るよ」
目をきらきらさせて言います。
「これからはレンゴウシルバーだからね」
「ボウケンシルバーみたいな呼び名だね」
彼は全く気付いていませんでした。シルバーは既に決まっていることに。しかもコスチュームは皆のそれぞれのカラーに黒いズボンじゃなくて半ズボンで銀色になっていることに。本当に全く気付いていませんでした。

第四百十六話　　完

２００８・１０・２５

第四百十七話　気付いたら勝手に

第四百十七話　気付いたら勝手に

戦隊メンバーに選ばれたと思ってうきうきとした気持ちで生徒会に参上したカナダ。ところがいざ生徒会室に入ってみるとそこには。

「・・・・・誰、この人」

「んっ!?レンゴウシルバーだけれどよ」

「それがどうしたんだ?」

銀色のジャケットに黒い半ズボンの韓国妹を指し示してイギリスとフランスがカナダに言います。

「で、ゴールドは韓国なんだよ」

「兄妹で追加メンバーになったんだよ」

「・・・・・あの、僕は?」

淡々と説明してくる二人に対して尋ね返します。

「僕はどうなったの?」

「んっ!?そういえば御前誰だ?」

「学校で時々見る顔だけれどよ」

「だからさ、カナダなんだって」

やっぱり完全に忘れられていました。

「カナダなんだけれど。レンゴウシルバーになるって話の」

「そういやそういう話もあったか?」

「誰かがなるって話あったけれどよ」

「だから何で兄妹で追加メンバー独占してるの?僕は?」

「仕方ねえだろ、生徒会長が勝手に決めたんだからよ」

「文句は会長に言ってくれ」

二人の返答は実に無責任かつ投げやりなものでした。

「あの会長って。言っても無駄じゃないか」

「じゃあ諦めるんだな」

「運が悪いと思ってな」
「そんな・・・・・あんまりだよ」
あらためて己の影の薄さに嘆くカナダでした。悲しいことに嘆いてもどうにもなることではありません。それがまた彼を嘆かせることになるのですが。

第四百十七話　　完

２００８・１０・２６

第四百十八話　しかも相談してくれる人まで

第四百十八話

しかも相談してくれる人まで

泣く泣く追加メンバーの座を諦めるしかなかったカナダ。このことをキューバに電話で話します。

「そうか、それは災難やったな」

「そうなんだよ。何でいつもいつも」

「まあここは楽しいこととして忘れるんやな」

キューバはきっぷのいい声でこう言ってくれました。

「どや？今度の休み俺の家に来るか？」

「君の家に？」

「そうや。明るい太陽の下で思いきり遊ぶとええ」

こうした時本当に彼の明るさときっぷのよさが有り難いです。

「それで明るくなるやろ。来るか？」

「来ていいの？」

「遠慮すんなや。困った時はお互い様や」

「有り難う、そう言ってもらって大分気が晴れたよ」

「アイスも用意しとくからな」

「うんっ」

こうしてカナダはキューバの家に行って気晴らしをすることになりました。その次の休み。キューバの家に辿り着いてみると。

「手前アメリカ！」

そのキューバにアメリカと間違えられました。

「何しに来やがった！喧嘩なら何時でも受けて立つで！」

「だから何で皆僕のこと覚えてくれないの！」

お約束の展開でした。

「このまま誰からも忘れられる人生なんてもう嫌だよ！本当にどうにかならないの！」

「キューバはわかるけれど君誰？」
「だからカナダなんだって熊一さん」
「今度はアストロワンなんだね」
漫画のキャラクターよりも同居人に覚えてもらっていないカナダでした。幾ら濃い漫画といってもこれはあんまりなことであります。

第四百十八話　　完

２００８・１０・２６

第四百十九話　マジでこのままいくなんて

第四百十九話

マジでこのままいくなんて

「まさかよ、ゲストだと思ったよな」

「思いたかったの間違いだろ？」

フランスがまたイギリスに突っ込みを入れています。

「あのままあいつがゴールドで居座るなんてよ」

「それでリーダーぶってるけれどどうなんだ？」

「知らねえよ」

言葉を変えれば知りたくもないです。知ってどうなるかというとこれがどうしようもない問題ですから。つまりどうしようもないことになっていました。

「で、あの三人はどうしたんだ？」

「こういう時はいつもいなくなるだろうが」

「そうだったな」

アメリカ、中国、ロシアの三人はこうした時にはいつも何処かに行きます。韓国が変なことをするとその尻拭いはいつもこの二人なのです。

「くそっ、何が連合ウィングスだ」

「戦隊は基本的に五人だろうが」

三人の場合もありますが大抵は新規加入メンバーが入るのでそうなります。つまり韓国兄妹の方がリーダーなのですが少なくとも韓国はそう思っていないのです。

「けれどよ。あいつ生徒会長だろ？」

「・・・・・ああ」

忌々しい現実がまた一つ。

「そうだよ。だからリーダーつってもな」

「通るのかよ」

「そういうことだ」
フランスの口調がこれまた実に忌まわしげです。
「あいつ、前は地獄がどうとかだったんだけれどな」
「最近ネタになってきているってのにな」
それでも現実は変わりません。やっぱり韓国がゴールドとして傍若無人の振る舞いを続けています。しかもあの三人は何故かこういう時にいません。

第四百十九話　　完

２００８・１０・２７

第四百二十話　七人揃った時には

第四百二十話　七人揃った時には

「さあ、今日も頑張って悪を倒そうか」
アメリカが皆に言います。
「今日の悪はだ」
「この連中あるぞ」
「今度は蜂かよ」
「それもスズメバチか」
イギリスとフランスは中国の言葉に顔を向けます。見ればビデオにしっかりと巨大なスズメバチの巣があります。学校の体育館の裏です。
「やれやれってやつだな」
「よりによってな」
「ああ、それは平気だよ」
ここでロシアが二人に言います。
「ちゃんと七人いるしさ。それに」
「それに？何かあるのかよ」
「巨大ロボなんて言うなよ」
「ほら、これ」
こう言って出して来たのはそれぞれのカラーの蜂への防護服でした。当然全部で五着あります。
「これ着て皆で行くんだよ」
「やっぱりそうなるのかよ」
「そういえばいつも五月蝿いあいつは何処に行ったんだ？」
見れば韓国兄妹がいません。何故か今は。
「普段は五月蝿くて仕方ないのによ」
「何処に消えたんだよ」
「それがリーダーの僕にもわからないんだ」

「僕もある」
「僕もね。何処にいるんだろ」
三人も知らないのでした。
「まあ気付けばそのうち出て来るだろうから」
「気にしないで行くあるぞ」
「それでいいよね」
三人でまたイギリスとフランスに言います。とりあえず五人がまず出ます。そんな五人を遠くから見つつ叫んでいる影がいました。
「真打ちはここぞという場面に出るんだぜ！」
「兄さん、いい加減真面目にやった方がいいニダ」
「俺はいつも大真面目なんだぜ！」
妹の言葉も聞いちゃいません。何処までも困った韓国なのでした。

第四百二十話　　完

２００８・１０・２７

第四百二十一話　ガイアークではないですが

第四百二十一話　ガイアークではないですが

かくしてスズメバチの巣の前に来た五人。周りにはもうスズメバチ達が怒り狂って彼等を取り囲み盛んに突き刺してきています。防護服を着ていないとかなり危険です。

そんな彼等をまず無視してアメリカが四人に言います。

「とりあえずは火でいぶそう」

「やっぱりそれあるな」

「そうだよね。下手にやっても逆効果だし」

中国とロシアがそれに賛成します。

「そういうことだよ。じゃあまずはイギリス」

「俺か」

「火の魔法を使ってくれないか？」

いきなり番組が違います。

「ぱぱっとね」

「そりゃマジレンジャーだろ？これ炎神じゃなかったのか？」

「まあ細かいところはいいからさ。ぱぱっと」

「わかったよ。じゃあ行くぜ」

「うん。それでフランスは」

「俺はどうするんだ？」

「イギリスのサポート」

フランスはそれでした。

「それで中国は拳法でハチを落としておいてくれ」

「わかったあるぞ」

「僕もハチを倒していくから。それでロシアは」

「僕は？」

「呪いでハチの動きを止めておいてくれ」

これまた番組が違いますしそのうえ正義の味方のすることではありません。
「それを頼むよ」
「わかったよ。それじゃあ」
「よし、今こそ学園に害なるハチを倒す時！」
アメリカは高らかに宣言します。
「皆やろう。正義は僕達にあるんだ！」
「それはいいけれどよ」
「御前ハチにたかられまくってるぞ」
アメリカがとりわけハチに刺されています。服を着ているから平気ですが。それにしてもやたらと大きい巣でしかもハチの数も膨大でした。

第四百二十二話　　完

２００８・１０・２８

第四百二十二話　防護服も着ないで

第四百二十二話　防護服も着ないで

五人はそれぞれスズメバチ退治を進めていきます。ハチは確かに多いのですがそれでも駆除は順調です。こうしてめでたくあと一歩となったところで。

「ははははははははははははは！！」

何処からか高笑いが聞こえてきました。

「真打ち登場なんだぜ！」

「ちっ、やっぱり出て来やがったか」

「それも都合のいいタイミングでな」

ハチの巣をいぶし続けるイギリスとフランスがその声を聞いて早速うんざりした顔になります。

「だから御前は連合じゃなかっただろうがよ」

「それで真打ちもねえだろうが」

「ブレイク限界！」

「キラキラ世界！」

名乗り言葉が叫ばれました。

「レンゴウゴールド！」

「レンゴウシルバー！」

木の上から名乗りです。本当に何時かの間にかいます。しかも何と韓国だけは防護服を着ていません。流石の二人もこれにはびっくりです。

「手前何考えてんだおい！」

「相手はスズメバチだぞ死にたいのかよ！」

「生憎だけれど俺は不死身なんだぜ」

当然ながら二人のその言葉は全く聞いてはいません。都合の悪いことはそもそも耳に入ったりはしないのが韓国の体質ですし。

「それに！」

「それに？」
「もうハチ来てるんだけれどよ」
「見るんだぜ。これが俺の必殺技！」
今度は必殺技ときました。
「ホーネットスプリーム！」
聞いたこともない技の名前です。しかし技を叫ぶと共にスズメバチ達が韓国に向かっていきます。そして今衝撃の展開がはじまるのでした。冗談抜きに斜め上の事態になろうとしているのでありました。

第四百二十二話　　完

２００８・１０・２８

第四百二十三話　変身蜂男

第四百二十三話　変身蜂男
「これが俺の技なんだぜ！」
「な、何だよそりゃ！」
「また変なことはじめやがったぞこいつ！」
イギリスとフランスが驚いて言います。何と韓国の全身を無数のハチ達が覆ったのです。まるで怪物の様な姿になってしまっています。
「さあ、これでハチは怖くないんだぜ」
「で、どうするんだよ」
「とりあえず凄いことはわかったからよ」
「そのまま燃やせってことじゃないの？」
ロシアはさりげなく怖いことを言います。
「ハチが全部集まったしさ」
「いや、幾ら何でもそれはねえだろ」
「死ぬぞ、マジで」
「大丈夫ニダ。それの用意はしてあるニダ」
韓国妹がここで皆に言います。
「用意！？どうするんだよ」
「こいつ巻き込んだらまずいだろ」
流石に二人もそれはしません。
「兄さんがこのままダイビングするニダ」
「ダイビング！？」
「そうなんだぜ。俺がこのままその火の中にダイビングして」
丁度イギリスとフランスが今まで燃やしていた火を指差します。
「それでハチは一網打尽なんだぜ。マンセーーーーーーッ！！」
「どっちにしろ人間離れしたもんだよな」

「まあそれでハチを倒せるのならいいか？」
イギリスもフランスも納得はしていませんがそれでもここは彼に任せるのでした。というか何かを言うこともできなくなっていたのでした。あまりにも無茶苦茶な展開に。

第四百二十三話　　完

２００８・１０・２９

第四百二十四話　不死身なのかも

第四百二十四話　不死身なのかも

かくして全身にハチをまとい火の中に飛び込んだ韓国。しかしそれで死ぬような彼ではなくハチ達が紅蓮の炎に包まれていくだけです。

そして火の中から躍り出たその時には。もうハチだけがいなくなっていました。

「これで万事解決なんだぜ！」

「おいおい、マジでハチを倒しちまったぞ」

「どれだけ破天荒な技なんだよ」

イギリスとフランスが韓国が無事なだけでなくハチを全て倒してしまったことに驚いています。

「まあとにかくこれでな」

「話は終わりなのか？」

「さて、後は巣だけれど」

「もうハチはいなくなったある」

今まで結構暇になっていたアメリカと中国が言います。

「これを処分するだけだね」

「蜂蜜も採れるあるぞ」

「あっ、いいねそれ」

ロシアが蜂蜜と聞いてにこりと笑いました。

「やっぱりね。ハチっていえばそれだよね」

「ハチの子も美味しいですニダ」

韓国妹がさりげなく言います。

「とにかくこれで皆楽しく終われますニダ」

「じゃあ俺は蜂蜜たっぷりかけたケーキがいいんだぜ」

何だかんだで一番の功労者の言葉です。

「おいそこの二人」
「いい加減名前覚えろよな」
「何で俺達の名前を覚えねえんだよこいつ」
「クッキーとケーキが欲しいんだぜ。それも早くなんだぜ」
「ああ、わかったわかった」
「今回は御前に助けられたからな」
流石に今回は彼の話を聞くしかありませんでした。何はともあれ無事スズメバチは退治されたのでした。

第四百二十四話　　完

２００８・１０・２９

第四百二十五話　新たな任務は　☆

二十五話　　新たな任務は　　第四百

ドイツはあのおっかないちょび髭の上司に呼ばれていました。そのうえで一通の手紙を受け取りました。

「その手紙の中が御前の今回の任務だ」

「今回のですか」

「そうだ。よく読むようにな」

「何でまた手紙なんだ？」

ドイツはそれがまず気になりました。

「回りくどいな。大体だ」

嫌なものを感じながら手紙を開いて中身を見ます。

「こういう時は嫌な任務なのだがな」

とか思いながら手紙を読んでいると。

オーストリアを御前の家で保護下に置くべし。いざという時は殴ってもいい

こんなことが書いていました。それを読んだドイツは早速。

「これは無理だ！」

上司に対して言います。

「俺が嫌だ！あいつと同居なんて！」

「上官命令だよ上官命令」

しかし上司はこう言ってドイツの抗議を退けます。

「我が家での規律はわかっていると思うが」

「ううう・・・・・・」

「上官の命令には絶対服従」

まさに鉄の規律なのです。ドイツの家らしく。ただ他の家と違う

のはこれに逆らった場合は何をされるか全くわからないということです。こうした意味ではロシアの家と同じだったりします。

「わかったね」

「くっ・・・・・・」

わかりざるを得ませんでした。こうしてオーストリアさんを併合することになったドイツ。早速暗澹たる思いにとらわれてしまうのでありました。

第四百二十五話　　完

２００８・１０・３０

第四百二十六話　相棒も嫌がっています

第四百二十六話　相棒も嫌がっています

「おいっ、何であいつと一緒になるんだよ」
「御前もそう思うか」
「当たり前だろうが」
プロイセンに話すと彼も思いきり嫌がっています。
「御前はまだいいぜ。しかし俺はな」
「随分と喧嘩してきているな」
「そうだよ。あいつと俺の仲なんてな」
まさに宿敵同士です。とはいっても多分にプロイセンに問題があったりするのですが。それでも彼がオーストリアさんを嫌いなのは事実です。
「言うまでもないだろうがよ」
「じゃあ御前も反対か」
「反対も反対、大反対だ」
やっぱりこうでした。
「まああの人オーストリアの家の出だからな」
「そうだ。だからそうなったようだ」
「ったくよお。つっぱねられなかったのかよ」
「逆らったら強制収容所行きだぞ。問答無用でな」
「・・・・・そうだったな」
実に愉快なドイツ式反論ではあります。反論される方はたまったものではありませんけれど。
「じゃあどうしようもねえか」
「いざとなれば武力行使もいいと言われている」
「あいつを殴るだけならともかく同居するのは絶対に嫌なんだけれどよ」

「だがそれを言ってもだ」
「ああ。どうしようもねえな、もう」
こう言って憮然とした顔になるプロイセンでした。彼等にとっては本当にどうしようもない状況になってしまおうとしているのでありました。

第四百二十六話　　完

２００８・１０・３０

第四百二十七話　本人は賛成でした　☆

百二十七話　　本人は賛成でした　　第四

「だからドイツ御願いだよ！」
「止めてよ！」
「仕方ないだろう！」
ドイツが必死に引き止めるイタリアとハンガリーに対して言います。
「これも仕事なんだ！」
「オーストリアさん併合するの止めて！」
「そうよ！オーストリアさんの気持ちも考えるべきよ！」
「だからドイツ止めようよドイツ！」
オーストリアさんが好きな二人は何とかドイツにしがみついて止めようとします。ドイツはオーストリアさんのお部屋の前で動きを止めています。しかしドイツの力は強いです。遂に二人を押し切り扉を開けて叫びます。
「オーストリア、御前を我が国に併合する！御前が従わない場合は武力を行使してでも・・・・・・」
かなり意を決しての宣言です。本当にやる気でした。いざとなれば後ろの二人ともです。ところがこの時優雅にお部屋でコーヒーを飲んでくつろいでいたオーストリアさんはというと。
「ああ、はい。別に構いませんが」
「・・・・・・ってオい」
どいつも思わずオーストリアさんに対して突っ込みを入れます。
「俺はかなり深刻に来たんだが」
「そうだったんですか。私は別に」
「別にってそんな・・・・・・」
「オーストリアさん・・・・・・」

イタリアもハンガリーも呆然としています。二人も大騒ぎしたというのに。結局周りが騒いでいただけで併合される本人は至って静かな今回の併合劇でした。何だかんだといってこうしてオーストリアさんはドイツの家に入ることになったのでありました。

第四百二十七話　　完

２００８・１０・３１

第四百二十八話　併合といえばこの人です

第四百二十八話

併合といえばこの人です

オーストリアさんはドイツに併合されました。ちなみにこの人も併合されていました。

「俺なんかよ、地獄だったんだぜ」

「また御前か」

ドイツも韓国の言葉を聞いていてうんざりとしています。

「御前はレンゴウゴールドだったんじゃなかったのか」

「あの時俺の家は大変だったんだぜ」

勿論ドイツの言葉も聞いてはいません。勝手に話しはじめます。

「日本が狡猾で卑劣で。俺の家を無理矢理併合して」

「ここぞという時に御前の上司が信じられないミスをし続けたからじゃないのか？」

「俺は必死に反対したんだぜ。それでも」

「御前が一番日本の家に入りたいって言っていたと覚えているんだが」

やっぱりこうしたドイツの突っ込みも耳には入りません。

「挙句にこき使われて虐待されてよ。地獄だったんだぜ」

「毎日遊んで勉強して顔色がつやつやしている地獄だったのか」

そんな凄い地獄は当然ながら何処にもありません。

「だからオーストリアさんの気持ちはわかるんだぜ。俺も併合の地獄がわかっているんだぜ」

「俺が一番よくわかる」

ドイツの言いたいことはまさにこれでした。

「あの時の日本の気持ちがな。苦労したんだな」

家に帰るといつもオーストリアさんがいるのです。けれどオーストリアさんは貴族です。自分では積極的に動く方ではありません。

それでドイツの苦労も二倍なのです。プロイセンは五月蝿いですし。
　それでもそんなことは気付くことなくあれこれ言い続ける韓国でした。見れば着ている服も靴も全部日本から貰ったものです。本人だけがわかっちゃいません。

第四百二十八話　　完

２００８・１０・３１

第四百二十九話　これが居候の態度か　☆

十九話　　これが居候の態度か　　第四百二

こうしてドイツの家の居候となったオーストリアさん。しかし態度は全く変わりません。喉が乾いたらこれです。

「喉が乾きましたね。お茶を入れてくれませんか？」

「それ位自分で入れろ」

すぐに突っ込むドイツです。かなり呆れ顔です。

「そうですか。ではイタリアを呼んで入れてもらいますか」

「ほら、入れたぞ」

電話でイタリアを呼ぼうとしたので速攻でそのお茶を差し出します。ドイツもうんざりです。ところがこれで終わるオーストリアさんではありません。

「あとお茶菓子等あれば尚宜しいのですが」

「買いに行け！」

流石に今度は怒りました。

「俺を顎で使うのは止めろ！御前は本当に居候か！」

「そうですか」

こう言われても平気ですし。

「たまには自分で作るのも一興かも知れません」

「是非そうしてくれ、いいな！」

「ではケーキが焼きあがるまでイタリアを呼んで音楽会でも開きますか」

「戸棚の奥にシュトーレンがあるぞ。今忙しいからコンサートなんかは止めてくれ」

全てにおいてこんな調子なのでした。オーストリアさんの極端なマイペースにうんざりさせられているドイツでした。しかもここで呼ばれてもいないのに。

「オーストリアさん、お元気ですか？」
「御機嫌伺いに来ました」
「・・・・・御前等最近いつも来るな」
イタリアとハンガリーまで来るのでした。本当にドイツは厄介な居候を抱えてしまいました。

第四百二十九話　　完

２００８・１１・１

第四百三十話　居候に切れています

第四百三十話

居候に切れています

こんな物凄い態度の居候のオーストリアさんですがこれに切れている人がいます。言うまでもなくドイツの相棒であるプロイセンです。

「あいつは何とかならねえのかよ」

「だから俺に言うな」

「御前に言わなくて誰に言うんだよ」

かなり理不尽な言葉です。

「上司に言ったらどうなるかわかってるんだろうが」

「まあゲシュタポに連れて行かれて拷問の後で強制収容所だな」

「だから言えねえんだよ」

そういうところはロシアと全く変わらないこの時のドイツの状況でした。口髭のおじさんへの反論なぞ考えられないことだったのです。

「それでだ」

「ああ。今度は何だ？」

「あいつがピアノとか独占して困ってるんだけれどよ」

実は音楽大好きなプロイセンなのです。彼のお家だったところからあのワーグナーが生まれていたりしますからそれは尚更です。

「俺が使いたくてもよ。どうしろってんだよ」

「ピアノなら俺の家にもあるから使え」

うんざりとした顔でプロイセンに言います。

「それで我慢しろ。いいな」

「おっ、悪いな」

「バイオリンやフルートもある」

ドイツもかなり音楽が好きです。

「だからだ。それ使って不満は抑えろ。いいな」
「わかったぜ。しかし何でこんな事態になっちまったんだよ」
「それ以上言うと黒い服の人達に連れて行かれるぞ」
やっぱりどうしても不平不満は言えないのでした。とにかく居候に不満を抱えまくっている二人、特にプロイセンなのでありました。

第四百三十話　　完

２００８・１１・１

第四百三十一話　怒ったらショパン　☆

第四百三十一話　怒ったらショパン

ドイツはイタリアと仲がいいことで有名です。ドイツ自身はどうにも振り回されていてイタリアが一方的に慕っている感じですが皆はそう思っています。プロイセンもイタリアには優しいですしあのおっかないドイツの上司でさえもイタリアに対してはかなり好意的なので殆ど国家ぐるみのお付き合いとなっています。ところがこの人は一言言うのでした。

「この御馬鹿さんが」

「そういえばこいつも家の一員になったんだったな」

オーストリアさんです。この人はドイツにこう注意してきたのです。ドイツはオーストリアさんの顔を見てかなりうんざりしています。

「どうしてイタリアと同盟を組んだのですか」

「それは色々事情があってな」

「事情？何ですか」

「味方は一人でも多い方がいいだろう。だからだな」

「無駄です」

ドイツの言い訳をばっさりと切り捨ててしまいました。

「どうせこうして話をしている間にも白旗を量産しているに違いありませんよ」

「まあそれはな」

否定できません。何しろイタリアです。そのへたれっぷりは他ならぬドイツ自身が最もよくわかっています。

「私がどれだけ怒っているか」

「ああ」

「今からピアノで表現しましょう」

「・・・・・じゃあやってみろ。しかし何で俺の周りはこんなのばかりなんだ」

そうは思いながらもオーストリアさんのピアノを聴きます。その曲は。

「理解して頂けましたか？」

「御前の怒りはショパンか」

「勿論シューベルトやバッハもあります」

やはりこういうところはオーストリアさんなのでした。怒っていても優雅であるのでした。

第四百三十一話　　完

２００８・１１・２

第四百三十二話　それでもイタリアに対しては

それでもイタリアに対しては
「こんにちはーーーーー」
「また御前か」
またしてもイタリアの訪問です。
「何でそういつもいつも来るんだ」
「オーストリアさんに会いに来たんだ」
ドイツの文句にも至って平気な顔です。
「お元気かな。何処におられるの？」
「オーストリアならあっちだ」
こう言ってわざわざ部屋まで案内します。口ではどうこう言ってもやっぱりイタリアに対してはかなり親切なドイツであります。
「さあ、ここにいるぞ」
「おや、イタリア」
ここで扉が開いてそのオーストリアさんが出て来ます。
「来たのですか」
「うん。また音楽聴かせて」
「はい、いいですよ。ですがその前にお茶にしましょう」
優雅に微笑んでイタリアに対して言いました。
「丁度ザッハトルテが焼きあがったところです。イタリアも来ると思い用意してあったのですよ」
「わあ、有り難う」
「コーヒーはウィンナーで宜しいですね」
「全然オッケーだよ。やっぱりオーストリアさんは優しいなあ」
「同盟を結ぶのには反対じゃなかったのか？」
「それはそれ、これはこれです」
ドイツのいぶかしむ目に対してはこう返します。

「イタリアはいい子ですよ。ですから何かと暖かい目で見てあげましょう」
「・・・・・何でうちの国の人間はこうもイタリアに対して優しいんだ」
そう言うドイツもかなりのものですが。何はともあれイタリアにザッハトルテとウィンナーコーヒーを御馳走するオーストリアさんでありました。

第四百三十二話　　完

２００８・１１・２

第四百三十三話　下着まで文句を　☆

第四百三十三話　下着まで文句を

「家に帰りたくないんだが」

「ああ、俺もだ」

ドイツとプロイセンが並んでうんざりとした顔になっています。二人共まだ結婚もしていないのにそんな日々を過ごすようになっていました。もっとも学生なので結婚していないのは当たり前と言えば当たり前なのですけれど。

その理由はやっぱりオーストリアさんです。この人が家に来てから二人は家に帰りたくなくなって仕方がないのです。

「どうしてまだ使える下着を簡単に捨ててしまうのですか！」

今度はドイツが破れてしまったトランクスを捨ててしまおうとしているのを見つけて起こっています。何かと細かい人だったりします。

「フランツ＝ヨーゼフ陛下がこれを御覧になられればどれだけ嘆かれると思っているのですか！」

「いや、だからな」

ドイツも反論します。なお彼は無駄遣いはしないしものを大切にする方で学園でも有名なのですけれど。

「それ穴空いてるだろ」

「こんな穴位何ですか！」

しかしオーストリアさんはまだ言います。

「これ位なら平価は全く気にされませんでしたよ！この御馬鹿さんが！お渡しなさい！」

半ば強引にドイツのトランクスを手に取るとそのまま。何とつぎはぎをしだしたのです。かなり貴族とはかけ離れた姿になっています。

「こんな男に下着をぬわれるとは・・・・・・」
「気持ちはよくわかるぜ相棒・・・・・・」
「でもお我慢なさい」
こんな日々を送るようになってしまったドイツとプロイセンなのでした。同じゲルマンでももう行き方が全く変わってしまっているのでした。

第四百三十三話　　完

２００８・１１・３

第四百三十四話　皇帝であっても

第四百三十四話　皇帝であっても

オーストリアさんの上司だったフランツ＝ヨーゼフ帝はとにかく凄い質素倹約な人でした。そして他にもそんな上司を持っている人がいたりします。

「そうですか、貴方のところもなのですね」

「はい、おかげで私も常に心身を引き締めさせて頂いています」

日本でした。この人も上司は帝と呼ばれる方でその生活たるや凄いものでした。

「軍服の裏が破れていましてその時はですね」

「どうされていたのですか？」

「縫われました。お食事も質素であられて」

「ふむ、お見事です」

オーストリアさんの上司とそうしたところは同じでした。オーストリアさんも感心です。

「御子息であられる殿下の宮殿も質素にと仰られていまして」

「そこまでですか。それはまたかなりのものですね」

「それから二代後の方も素晴らしい方でした」

これが一代でないのが日本の上司の方の家の素晴らしいところです。

「寝室までがかなり質素なものでして」

「このこと、帝にお話しておきます」

感心したオーストリアさんはこうまで言うのでした。

「今日はいいことを教えて頂き有り難うございます」

「いえいえ」

「あいつの上司もだったのか」

「皇帝っていうのは世界一過酷な職業なのかよ」

ドイツもプロイセンもびっくりです。世の中どうも偉いからには偉いなりに色々と苦労があるようです。

第四百三十四話　　完

２００８・１１・３

第四百三十五話　こうしたことにはお金をかけます　☆

かくしてオーストリアさんが縫ったトランクスをはくことになってしまったドイツ。とてもやりきれない気持ちです。

「全く。何ということだ」

「ドイツ」

ここでそのオーストリアさんがドイツを呼びます。

「リンツァートルテを作りましたので召し上がりなさい」

「・・・・・わかった」

何はともあれオーストリアさんの言葉に頷いてそちらに行きます。

そうして食べてみると。

「ふむ。やはり御前が作るトルテは美味いな」

「当たり前でしょう」

ドイツの褒め言葉に当然といった様子でした。

「シナモンはわざわざベトナムから取り寄せたものですから」

「ベトナムからか」

「へー是ルナッツはこの大変な時期に無理を言ってトルコのギレスンから」

「何・・・・・・」

それを聞いてまずは唖然とします。しかし唖然としたのはこれだけではありませんでした。

「ジャムはイタリアから質のいいフルーツを作る農場を丸ごと買い上げて新鮮なまま送ってもらい一日がかりで作ってますから」

「そこまでするのか」

「何か？」

「・・・・・・いや」

返す言葉もありません。言えた言葉といえば。

「つくづく御前は不思議な奴だ」
「それがオーストリア人ですから」
まさにオーストリアさんです。こうしたことにはふんだんに手間隙とお金をかけるのでした。

第四百三十五話　　完

4

２００８・１１・

第四百三十六話　ドイツの家でやっています

第四百三十六話　ドイツの家でやっています

オーストリアさんのお菓子は有名です。イタリアもオーストリアさんのお菓子が大好きです。

「やっぱりね。オーストリアさんのお菓子は」

「イタリア、貴方のパスタも」

「どちらも凄く美味しいですよ」

ハンガリーまで加わって三人で楽しく食べています。本当にこの三人は仲がいいです。

「イタちゃんもパスタがまた美味くなったわね」

「そうかな。俺そんなに上手くなっていないよ」

「トマトの使い方が上手くなってるじゃない。ガーリックもね」

「有り難う。やっぱりパスタっていったらそれだから」

「ドイツ」

ここでオーストリアさんは第四者の名前を呼びました。

「貴方も出て来なさい」

「三人で何をしているかと思えば」

「食べているのです」

こうドイツに述べます。

「見ればわかると思いますが」

「それはそうだが。しかし」

「しかし？」

「どうしたのドイツ」

「どうして俺の家で食べているんだ」

呆れた顔で三人に言うのでした。

「イタリアやハンガリーの家じゃなくどうして俺の家なんだ」

「気にしてはいけませんよ」

「そうだよドイツ」
オーストリアさんとイタリアがドイツに対して言います。
「上司の人には俺が言っているしさ」
「安心して下さい」
「上司までこいつには優しいのか」
何とドイツの上司の許可を得ているとのことです。何処までもイタリアには優しいドイツの家でありました。

第四百三十六話　　完

２００８・１１・４

第四百三十七話　フランスのからかいに対しても　☆

第四百三十七話　　フランスのからかいに対しても

フランスはオーストリアと昔かなり仲が悪かったです。どう考えてもコミュニケーションに深刻な問題があるのですが彼自身は気付いていません。それでオーストリアさんがドイツの居候になったことを聞いて昔のことを思い出し早速からかいに来ました。暇なのでしょうか。

「よう！すっかり一般庶民のオーストリア！」

まず自分自身のことを放っておくのはこの人の定番です。

「いい姿じゃねえか！」

高笑いと共に言いますが対するオーストリアさんは。

「これはお褒め頂いてどうも」

こんな調子です。あまり相手にはしていません。

「まあ折角だし惨めなお坊ちゃんと記念写真でも撮っておくか」

「つくづく貴方って暇な人ですね」

オーストリアさんの突っ込みも聞いちゃいません。彼は人の話は基本的には聞かないのです。ついでに言えば相手の態度も気にはしません。

それでまあ記念写真となったのですが映っているその姿は。邪悪な笑みになっているフランスと優雅に微笑んでいるオーストリアさんの対比でした。勝敗は。

「おい、今日はやけに飲んでるじゃねえかよ」

「何でこんなに敗北感に包まれてるんだよ」

フランスは飲んでるところをイギリスに突っ込まれています。

「俺はまだ居候じゃねえってのによお」

「何かわからねえがオーストリアでもからかって返り討ちにあったのか？」

「どうしてわかったんだ？」

「いつものことだろうがこのエスカルゴ野郎」
イギリスにもお見通しでした。かくしてフランスの全面敗北でこのお話は終わったのでありました。

第四百三十七話　　完

２００８・１１・５

第四百三十八話　そもそも仲が悪い原因は

第四百三十八話　そもそも仲が悪い原因は

フランスとオーストリアさんは昔とにかく仲が悪かったです。その関係が欧州における一つの軸となっていた位です。そもそもどうしてそんなに仲が悪かったかというと。

「あれな、フランスが悪いんだよ」

「それはもうわかっているつもりでしたが」

イギリスから話を聞いている日本が答えます。アジアにいる彼はこの関係のことをあまり知りません。だからこそイギリスから話を聞いているのです。

「それでまたどうして」

「あいつんとこの上司がな。代々オーストリアにライバル意識を持っていたんだよ」

「ほほう」

「ヴァロアだのブルボンだの。名前が変わってもな」

「オーストリアさんの上司の方を嫌っておられたのですね」

「そういうことさ。マリー＝アントワネットまでな」

言わずと知れたフランスのかつての上司の奥さんです。小柄でも胸が大きかったことで知られています。

「ずっと仲が悪かったんだよ。それこそあちこちで喧嘩していたぜ」

「ライバル意識の結果ですか」

「ただな。フランスはあまり勝ってねえんだよ」

ここがポイントです。

「しょっちゅう負けてたな。俺も結構オーストリアに味方したしな」

「そういえばイギリスさんもフランスさんとは」

「あいつがいい目見るのは俺も嫌だ」

イギリスの本音です。

「それよりオーストリアが音楽奏でる方がいいさ。そういうことなんだよ」

「成程、よくわかりました」

とにかく敵の多いフランスなのです。オーストリアさんにこのイギリスにあとはドイツ。プロイセンとも派手にやったことが多いですしこの人の人間関係はかなり問題があるようです。

第四百三十八話　　完

２００８・１１・５

第四百三十九話　星は光りぬ　☆

第四百三十九話　星は光りぬ

今イタリアとドイツはアフリカに来ています。イギリスと喧嘩する為です。

それもとりあえずお休みになって今は二人でくつろいでいます。夜にテントの前で座って二人で楽しくコーヒーを飲みながらお話です。

「ふう、日本今頃何してるかな」

「右にアメリカ、左に中国を相手にしているらしいな」

「そうなんだ。それにしても本当に今日もよく撤退したなあ」

「普通に駄目だろそれ」

まずは軽く突っ込みを入れるドイツでした。くつろいでいてもこれは忘れません。

「だってイギリス容赦しないんだもん」

「当たり前だ。とりあえず近状報告話そうか」

「うん。どんなの？」

「こっちが俺と御前を合わせて二十五万」

二人も色々と戦っている場所があるのでここではこれが精一杯なのです。

「対する向こうはアメリカも入れて四十八万だ」

「うわっ、多いなあーーーー」

「アメリカがいるからな」

「御免・・・・・」

イタリアは何故かここで急に謝りだしました。

「どうして謝るんだ？」

「兄ちゃんがすぐに帰っちゃったせいでドイツに迷惑が」

「だから泣くな！」

泣き出したイタリアに対して言います。

「そのことは気にしていないから安心しろ！」
「本当に？」
「ああ、本当だ」
そんなことをいちいち気にしていたらイタリアのお家とは付き合えないからです。ドイツもわかっています。
「ああ、でも俺兄ちゃんも分も頑張るからね」
「それは有り難いが無茶はするなよ」
「うん・・・・・・あっ」
「流れ星か」
ここで二人の上に流れ星です。砂漠のほんの一時の安らぎの時間でした。

第四百三十九話　　完

２００８・１

１・６

第四百四十話　バルバロッサ

第四百四十話　バルバロッサ

ドイツが戦っていたのはアフリカだけではありませんでした。むしろここはサブでメインは東でした。ドイツの東といえばロシアです。広大なロシアに大軍で雪崩れ込んでいたのです。

「おい相棒」

「どうした？」

青い刑事の人とは違ってすぐに応えるドイツです。隣にはプロイセンがいます。

「このままあいつの首都まで一直線だな」

「ああ、そうだ」

二人は今装甲車に乗っています。それの上で前を見ながら話をしているのです。周りは戦車や装甲車、それに歩兵。空は無数の航空機で占められています。

「一気に行くぞ」

「よし、速攻は俺の十八番だ」

プロイセンはこう言って不敵な笑みを浮かべます。そのうえでまたドイツに対して言います。

「遅れるなよ、俺にな」

「それはいいのだがな」

ですがここでドイツはふと思うのでした。

「時間がな。大丈夫かな」

「んっ！？どうしたんだ？」

「いや、イタリアを助けてギリシアと戦ったな」

「ああ」

その時の話です。なおここでもイタリアはギリシアに負けまくってドイツに助けてもらったのです。本当に援軍には十個師団必要な人達なのです。

「それで思わぬ時間を喰った。冬にまでロシアを倒せればいいんだがな」
「冬か。確かにな」
冬と聞いてプロイセンの顔も引き締まります。
「それが一番怖いな。ここじゃな」
「そうだ。だから冬が来る前にな」
「モスクワだ。いいな」
「わかっている」
二人は前を見据えて進撃を続けます。まずは快進撃です。しかしそれから先のことはまだ二人には全くわからないことであったのです。

第四百四十話　　完

２００８・１１・６

第四百四十一話　星に願いを　☆

　第四百四十一話　星に願いを
「イギリスが頭痛で家に帰りますようにイギリスが頭痛で家に帰りますように」
「何してんだ御前は」
　ドイツはいきなり夜空に向かって言い出したイタリアに対して突っ込みを入れます。
「ドイツ知らないの？流れ星に願いごとすると叶うんだよ」
「またそんな子供みたいなことを」
　ドイツはイタリアの無邪気さに呆れてしまいました。
「大体頭痛程度で帰るものか」
「そうかなあ」
「そうだ。もういいから御前は寝ろ」
　こう言ってイタリアをテントに押し込みます。
「明日に備えてな」
「ドイツは？」
「俺が寝たら誰が見張りをするんだ？」
「あっ、そうか」
　言われてみればその通りです。何しろこのテントには二人しかいないのですから。
「それじゃあ交代になった起こしてね。お休みドイツ」
「はいはい、お休み」
　イタリアをベッドに送り込んでやっと一人になりました。夜の砂漠に一人きり。何故かほっとした気持ちになるドイツでした。
　その中でコーヒーを飲みつつイタリアのことを少し考えます。
「毎回毎回世話が焼けるな」
　こうは思いつつも面倒を見ているのが彼なのですが。

ところがここでうと上を見上げて。また流れ星が見えたことに気付きました。
「ふむ。またか」
ここで先程のイタリアの言葉を思い出すドイツでした。夜の砂漠というものは人をロマンチストにさせるようです。

第四百四十一話　　完

２００８・１１・７

第四百四十二話　タイフーン

第四百四十二話　　タイフーン

快進撃を続けるドイツとプロイセン。二人はロシアの家の奥深くにまで入り込み遂にはモスクワまであと僅かの距離にまで達しました。

「あと何キロだ？」

「二十四キロだ」

「そうか、もう少しだな」

「北はレニングラードを包囲して南はウクライナに達するな」

「このまま行けば勝てるぜ」

プロイセンは装甲車の上で隣で頭だけ出しているドイツに対して言いました。

「このままいけばな。じゃあ後はだ」

「そうだ。モスクワに総攻撃だ」

それしかありませんでした。全軍既にその準備を終えています。

「だが敵もな」

「軍事パレードからすぐに前線に出て来やがったな」

「どうする？」

プロイセンに対して尋ねます。

「まだ雪には少し早いが」

「フランスみたいに馬鹿やるつもりはねえよ」

これがプロイセンの返事でした。

「ここで一気にな」

「雪が来る前にか」

「ああ。行くぜ相棒」

「わかった。それではな」

こうして二人は総攻撃に移りました。流石にモスクワの護りは堅

いものがありましたがそれでも前に進んでいきます。そうして遂にあと八キロまで達しました。ところがここで。

「何っ、早いぞ！？」

「まさか。こんな時に」

二人は上から降ってくる白いものを見て愕然としました。雪でした。あの冬将軍が二人の前に姿を現わしたその瞬間でありました。二人の暗転の時でもありました。

第四百四十二話　　完

２００８・１

１・７

第四百四十三話　ドイツの願いごと　☆

第四百四十三話　ドイツの願いごと

「イタリアの泣き虫がなおりますように。イタリアが何処でもパスタを食べたがる病気が治りますように。あいつがジェラートで腹を壊さないようにして欲しいところだな」

いきなり物凄い勢いて流れ星に御願いしだしたドイツでした。

「それとイタリアがいい加減まともな手榴弾作れるようになりますよう。イタリアの兄貴が勝手に殴り掛かって一人でにこけるのもそろそろ止めてくれるとなおよし」

あまりにも多い御願いに流れ星が爆発してしまいました。しかもドイツの御願いはこれで終わりではなかったのです。

「あーーー、あと上司もいい加減まともな人が欲しいしオーストリアがもうちょっと時代や周りに合わせてくれるといいし相棒の敵が減るといいし日本の考えがはっきりわかるようになりたいし日本の横にいる変なのが生徒会で騒いでるのもどうにかして欲しいしロシアも大人しくなって欲しいしイギリスもフランスもアメリカも中国も・・・・・・」

延々と御願いが続きます。そもそもドイツのストレスはどれだけ深いのでしょうか。流れ星もふらふらになって落ちていきます。そしてその中で呟くのでした。

「ドイツさん、そりゃあ無理ってもんですよ」

ふらふらしながら落ちていきます。そして落ちた先は。

「というわけで明日はあの二人に総攻撃を仕掛ける。数でも装備でも士気でもこっちが勝ってるからまず・・・・・・ぐふっ！」

頭にもろに流れ星が誰かの頭に突き刺さってしまいました。その結果。

「イギリスが頭痛で撤退したそうです」

「流れ星の願いが適ったのか？」

「よかったじゃない、ドイツ」
世の中本当に何が起こるかわかりません。とりあえず頭に流れ星が突き刺さり一時撤退する破目になってしまったイギリスなのでした。
「何でこんなことになるんだよ・・・・・」
とりあえず彼だけが不幸になるのはいつものことですけれど。

第四百四十三話　　完

２００８・１１・８

第四百四十四話　冬将軍が来ました

第四百四十四話　冬将軍が来ました

「お、おい、これ何なんだよ！」
プロイセンが思わず叫んでいます。
「ガソリンが凍ったぞ！戦車も飛行機も動かすことができないぞ！」
「その前にこの吹雪だぞ」
ドイツは防寒着を何枚も来て吹雪に耐えています。
「飛行機も飛ぶことはできないし戦車も前には」
「くっ、何て雪だよ・・・・・・」
「ところでコート足りてるか？」
ドイツはプロイセンにコートのことを尋ねました。
「寒くはないか？」
「寒くて腕が凍えそうなんだけれどよ」
「手袋を忘れるな」
「寒さで動かせなくなるからか？」
「いや、違う」
それは違うというのでした。
「銃に指が張り付く」
「何っ！？」
思いも寄らぬ言葉でした。
「凍ってな。それに凍傷にでもなったらだ」
「指がなくなるってわけかよ」
「そうだ。だから手袋はしておけよ」
「わかった。それにしてもよ」
「何だ？」
「ロシアだけじゃなかったのかよ」
プロイセンは忌々しげに言うのでした。
「相手はよ。何だよこの寒さと吹雪は」

「冬将軍だな」
ここでドイツは言いました。
「これこそがな」
「冬将軍、これがかよ」
「そうだ。どうやら長い戦争になりそうだな」
「・・・・・ああ、全くだぜ」
二人の長く辛い戦争のはじまりでした。これから二人はロシアと、そしてその冬将軍と長く辛い戦争を繰り広げていくことになるのです。

第四百四十四話　　完

２００８・１１・８

第四百四十五話　流星光

第四百四十五話　流星光

見事頭に流れ星を受けたことのあるイギリス。戦争が終わってから日本に対してこのことを話していました。

「何であんなことが起こったんだかな。わからねえんだよ」

「またそれは災難でしたね」

「ああ。全く何が何だかよ」

確かに怪奇現象のようなものです。隕石に当たるのならまだ魔法でありますが。それでも納得がいかないものではありますけれど。

「流れ星って何なんだ？」

「逆立ちになってピアノを弾くようなものではないでしょうか」

日本はここで急に変なことを言ってきました。

「それは」

「何だそりゃ」

「私の家にそういう人がいまして」

仮面ライダーや脚本家さんに続く新たな変な人のようです。

「学生服を着ているのですが背中に流星の刺繍を入れていまして」

「また随分と変わった服装だな」

「随分思わせぶりな変な行動ばかり取られます。正体は不明です」

「っていうか本当に逆立ちになってピアノを弾くのかよ」

「はい」

最早奇人変人というレベルすら超えています。

「私もおかしな人だと思っているのですが」

「っていうかそいつ半分人間じゃねえぞ」

ここで横からフランスが日本に突っ込みを入れます。

「暴魔、確かはぐれ暴魔だったんじゃねえのか？横にやたら背の高い姉ちゃんいるだろ」

「ええ、赤い丈の短いドレスを着られています」

「どっかに消えたと思っていたんだけれどな。やっぱり生きていたのかよ」
「そういえばちょっと前にそうした番組が私の家であったような」
「・・・・・何で日本の家はこんなに奇人変人が多いんだ？」
「妖精がいる御前が言うんじゃねえ」
流れ星から訳のわからない人のお話になるのでした。日本の家も本当に多くの人がいます。

第四百四十五話　　完

２００８・１１・１０

第四百四十六話　抱き締めた心の小宇宙

第四百四十六話　抱き締めた心の小宇宙

日本では他にもお星様にまつわる人がいます。本当に人材豊富です。今度はギリシアが日本に対して話すのでした。

「そういえば御前の家の漫画家さんの人が」

「はい。何でしょうか」

「俺の家に教皇がいるとか言っていたな」

「アテネにですね」

日本ではそれこそ誰でも知っていることです。最早伝説にまでなっている永遠の名作であります。

「そこにおられると。私も聞いていますが」

「何か何時の間にかそうなってた」

ギリシアはのんびりとした調子で日本に答えます。

「ついでにその下に十二人黄金の鎧を着たのもいた」

「黄金聖闘士ですね。光の動きと第七の感覚を持っている」

「それだ。いい奴等なんだな」

「どなたも正義の為に闘う方々です」

その正義の言うことはそれぞれ違いますが根幹にあるのは人間の正義だからそうなります。例え蟹でも山羊でも魚でも。時々髪の毛が黒くなってしまう人もまあそれは同じです。

「安心して下さい」

「わかった。ならいい」

「はい」

「他にも海や冥界や天界の神様も出て来ているがあれは何なんだ」

「敵です」

説明は一切不要のコメントでした。

「ですから御注意を」

「わかった。ところで日本」
ギリシアの質問はこれで最後でした。
「天界の映画の続きは何時になるんだ」
「それはまだ未定です」
ということでした。日本もお星様が好きです。とりわけギリシアに関するお星様のお話が好きなのでこうなってしまうのでありました。遂にギリシアにも出て来たのでありました。

第四百四十六話　　完

２００８・１１・１０

第四百四十七話　アジアといえば

第四百四十七話　アジアといえば

アジアといえば人の数がもう滅茶苦茶多いです。日本でも平気で一億超えています。欧州から見ればその数は驚異的なものです。その人の数のせいもあって目立っています。その中でもとりわけ有名な人達といえば。

「日本と中国だよな」

「そうだよな、やっぱりあの二人だよ」

皆口々にこの二人を出すのが常です。

「この二人なくしてアジアは語れないだろ」

「インドもそうだけれどな」

「あと一人いるけれど絶対に思い出したくねえ」

「思い出すなよ、思い出したら出て来るけれどな」

イギリスとフランスはここである人物を強烈にスルーします。とにかくいないことにしたいようです。

というわけでこの二人が有名なのですが。一つ重要なことがあります。

「そういえば女の子がいねえんじゃねえのか？」

「あっ、そういえば」

実はそうなのでした。

「日本と中国の妹しかいねえよな」

「・・・・・キラキラ世界もまあいるけれどな」

「それ以上は言うなよ」

やはりそれから先は言わないイギリスとフランスでした。

「誰かいねえのか？女の子」

「お兄さんが声かけたくなるようなな」

とりあえず探してみますがいません。何故か女の子かなり少ないです。

「ちょっと待て、何でこんなに女の子いねえんだよ」
「どっかにいねえのかよ、アジアンビューティーがよ」
何時の間にか美女を探し回るイギリスとフランス、何時の間にか二人のお話になってしまっています。
「とりあえずあの島に行こうぜ」
「そうだな」
遂には中国の南の方にある島に辿り着きました。そしてそこにいたのは。

第四百四十七話　　完

２００８・１１・１１

第四百四十八話　遂に出たアジアンビューティー

第四百四十八話　遂に出たアジアンビューティー

島に辿り着いた二人を出迎えたのは。
黒髪のロングヘアには桃の花の飾り、ピンクのチャイナドレスを着た小柄な女の子。顔立ちはまさにこれこそといったアジア風の美少女、やはりいたのです。
「おい、遂に巡り合ったぞ」
「ああ。アジアの秘境に今な」
イギリスとフランスは自分達の目の前に出て来たその美少女を見て喜びの声をあげます。
「美少女がよ」
「お兄さん感動しちゃったよ」
「イギリスさんとフランスさんですか？」
その女の子は少し変なものを見る目で二人を見ながら言ってきました。
「ひょっとして」
「俺達のこと知ってるのかよ」
「何処かで会ったか？」
「何処かでも何も台湾ですけれど」
自分から名乗ってきました。
「覚えていませんか？」
「！？そういえば香港の奴の近くにそんな国があったか」
「だよな。そういえばよ」
最近太平洋にあまり来ていないので疎くなっている二人でした。
彼等以上に濃い面々、とりわけブレイク限界がいるので近寄っていないのです。
「中国の親戚か何かだったよな」

「日本のとこにも世話になっていた」
「はい、そうです」
二人の名前を出されて微妙な顔になる彼女でした。こうして二人が出会った美少女台湾、彼女の存在がクローズアップされるのでありました。

第四百四十八話　　完

２００８・１１・１１

第四百四十九話　どうにも複雑なものが

第四百四十九話　　どうにも複雑なものが

「それにしてもこの娘な」

フランスは台湾をまじまじと見ながらイギリスに言いました。

「あれだよな。細かいアクセサリーはアメリカの家のだよな」

「んっ、そういえばそうだな」

見ればそうでした。

「鞄とかな。そういうのは」

「それで服は中国のものだよな」

「どう見たってな」

チャイナドレスはまさにそれそのものです。これを中国のものではないと言い切れたらそれはもう神です。

「で、メイクは日本のものだぜ」

「御前そこまでわかるのかよ」

「俺は一回見たものは女の子に関することならすぐにわかるんだよ」

「またそりゃすげえ能力だな」

「戦隊もののスーツの中の人だってわかるぜ」

「イエローの人奇麗らしいな」

「ああ。演じているあの娘に負けない位な」

ここまで来ると超人ですがフランスならではです。とにかく台湾が日本やアメリカや中国の影響をかなり受けているのは確かです。

「けれど台湾ちゃんよ」

「またどうしてなんだ？」

二人はあらためて台湾に対して尋ねます。

「日本はともかくあんな連中の真似なんかしてよ」

「どういうわけなんだよ」

「色々あるんです」

すこしむっとして言う台湾でした。

「お話していいですか？」
「ああ、是非な」
「どういう事情なんだよ」
「わかりました。それでは」
二人の言葉を受けてあらためて話しはじめます。台湾の生い立ちもまた実に複雑なものがありました。

第四百四十九話　　完

２００８・１１・１２

第四百五十話　誰かを立てれば別の誰かが

第四百五十話　誰かを立てれば別の誰かが

台湾は元々中国の近くにいました。けれど中国は彼女のことは殆ど知らないといった有様でした。これは上司も同じで台湾と聞いても今一つ以上にぴんと来ない感じでした。

「そんな国があったのか？」

「島らしいあるです」

「そうか。まあどうでもいいだろ」

中国の上司は龍ですけれどこんなふうに台湾には至って無関心でした。それでずっと放置されていて気付いたら日本の家に入っていました。

「とりあえず日本になりました」

「そうなんですか」

台湾と日本のはじめての出会いはこんな感じでした。結構嫌がったりもしましたが最後は日本とその上司の為に物凄く頑張りました。

「日本さんの為なら・・・・・・！」

オーストリアさんがピンチの時のハンガリーもかくやという活躍ぶりでした。ジャングルの中を突き進み食べ物をその中から調達して。まさに鬼神でした。

その後はアメリカとのお付き合いが深くなりました。アメリカは台湾に対して何かと関心を寄せています。気付けば台湾はエストニアと同じでＩＴにも成功していてコンピューターにとても強くなっていました。他の産業も成功して今では結構なお金持ちです。それを見て中国が興味を持ってすこし強引にお付き合いを深くしようとしてきています。

けれど日本とのお付き合いもかなりのもので。日本のお家のファッションや流行を勉強していたりもします。つまり台湾はこの三つのお家の影響を常に受けているわけです。

「誰かを立てれば別の誰かが立たないし」
そんなふうな状況なのです。
「困っているんです。私のお家は大きくはないですし」
「あんたも結構大変なんだな」
「あの個性の強い連中に囲まれていてな」
「おまけに変な半島の男の子も近くに」
「あいつのことは言わなくていいからよ」
「聞かなかったことにしておくな」
その話題になると二人の方から断ってきました。とにかく周りに個性の強い面々が揃っていて苦労している台湾なのです。

第四百五十話　完

２００８・１１・１２

第四百五十一話　最初の頃の台湾

第四百五十一話　最初の頃の台湾

台湾は生まれてから上司という上司もなく殆ど家の人達とだけ暮らしていました。島の中で皆で生きていたのです。

「そう言うとセーシェルみたいな感じか？」

「そうだよな」

イギリスとフランスは台湾自身の話を聞いてまずは彼女を思い出しました。

「っていうとな」

「あいつだよな、同じ島国だしな」

「最初に来たのがオランダさんでしたけれど中国さんの上司の一人が来たり」

その名も国姓爺、勇敢な武人で日本のお家の血も入っていました。この人が実質的な台湾の最初の上司でした。真面目に台湾に色々教えてくれそうでしたが意外と早く退場してしまい中国の上司の一人で北から来た人に中国と同じように監督されることになったのです。ところがここでまた。

「私は何も言われませんでした」

「何も！？」

「っていうと放任かよ」

「はい、本当に何も言われなくて」

完全にほったらかしだったのです。その人はそもそも根本的に台湾を自分の監督する場所とは思っていなかったので彼女を放任していたのです。よく教えていたのは中国で彼女については覚えてもいないふしがありました。

「あの頃は学校にも通っていなくて毎日山の中で遊んだりしていました」

「外見に似合わずワイルドみたいだな」

「そうみたいだな」
「あの時はあの時で結構楽しかったです」
こう言って少しにこりと笑いはします。けれどその笑みはよく見たら。
「セーシェルっていうよりハンガリーに似ていねえか？」
「そういえばそうだよな」
何処となくそんな感じなのです。考えてみればハンガリーは元々アジアの娘なので当然と言えば当然でした。

第四百五十一話　　完

２００８・１１・１３

第四百五十二話　日本と台湾と韓国と

第四百五十二話　日本と台湾と韓国と

「日本さん、おはようございます」
「はい、おはようございます」
台湾がその可愛らしい笑顔を日本に向けて挨拶をします。うじゃうじゃと学校中でもとりわけ濃い面子をこれでもかと放り込んでそのまま放置した感じの太平洋グループではかなり異色のカップルに見えます。日本は全然そうは思っていないようですけれど。
「この前日本さんにお借りしたあのＣＤですけれど」
「中島美嘉ですか」
「はい。あれ凄くいいですよね」
「彼女の歌は凄くいいです」
これは日本も認めるところでした。
「台湾さんが御気に召されたようで何よりです」
「日本さんの女の子の服装とか音楽ってとても参考になるんですよ」
見れば台湾の格好は制服の着こなしもアクセサリーも全部日本のお家の女の子そのものです。本当に参考にしているのがわかります。
「ですから宜しければまた何かお貸し下さいね」
「ええ、どうぞ」
「それで今度は日本さんのお料理なんかも」
「ふん、日本の料理なんかは俺の二番煎じなんだぜ！」
ここで生徒会長韓国が登場です。
「日本の料理も俺が起源なんだぜ！わかったら台湾は俺に学ぶんだぜ！」
「あんた、何処から出て来たのよ」
台湾の目が急に冷めたものになっていきます。どうも彼女は韓国が好きではないみたいです。
「いつもいつも急にだけれど」

「俺は神出鬼没なんだぜ！わかったら早く俺に学ぶんだぜ！」
「全力で遠慮してあげるわ」
いつもいつもこんな調子の日本の周りです。とりあえずいつも周りには最低この二人はいる日本、それがいいのか悪いのかはまた別問題であります。

第四百五十二話　完

２００８・１１・１３

第四百五十三話　日本の教育は

第四百五十三話　日本の教育は

日本にいた頃の台湾。それまで野生児だった彼女はいきなり教育を受けることになったのです。

「まずは学校に行ってだな」

「学校って何ですか？」

最初はこんな感じだったのです。とにかく野山を駆け巡るばかりで学校に行ったこともなかったのです。これでは何もかも知らなくても当然のことでした。

そして手を洗ったり鉛筆とかを使ったりすることも教えてもらって。台湾は瞬く間に野生児からおしとやかな女の子に変わったのです。それは最早別人みたいでした。

「よし、台湾も韓国も立派になったものだ」

当時の日本の上司はそんな彼女を見ていつもこう言って微笑んでいました。日本の上司はどちらかというと韓国の方を可愛がっていましたがそれでも台湾のことも忘れてはいなかったのです。台湾のお家もどんどん奇麗に立派になっていき悪いことをする家の人もいなくなってしまいました。

その結果が今の台湾のお家です。今もその頃の名残が一杯残っています。

「このダムなんか覚えていますよね」

「ええ、私の家の人が造ったものでしたね」

「そうです。このダムのおかげで今も美味しいお米が食べられるんですよ」

満面の笑顔で日本に話しています。

「そのお米だって日本さんのお家の人達のおかげで」

「そうだったのですか」

「そうだったのですかって日本さんも色々と私の為にしてくれたじ

ゃないですか」
「はて」
けれど台湾のこの言葉には首を傾げる日本でした。
「そうだったのですか。最近どうも物覚えが悪くなっていまして」
「もう。御自身のされたことですからちゃんと覚えていて下さいよ」
そんな日本の天然なところには不満を見せる台湾でした。けれどそんな日本の隙のある所も結構好きなわけで。複雑な女心であります。

第四百五十三話　　完

２００８・１１・１４

第四百五十四話　いざ戦いになると

第四百五十四話　　いざ戦いになると

おしとやかになった台湾ですけれどやっぱり野生児としての心は残っていました。それが見事に発揮されたのはあの戦争の時でした。

何しろ派手な戦争だったので日本は台湾に対しても兵隊さんを募集しました。募集してやって来た台湾の人達の数がこれまた物凄いものでした。

「まさかこんなに来るなんて」

「だって日本さんがピンチなんですから」

何と陸軍将校の軍服を着た台湾が日本に対して言います。

「私達も是非」

「戦われるのですか」

「はい、任せて下さい」

拳を握り締めて日本に言葉を返します。

「絶対に。日本さんを助けてみせます」

こう言って戦争に参加していきなり。

「皆、行くわよ」

「はい！」

「まずは我々が！」

いきなりジャングルに飛び込んで誰も通り抜けられそうにない深い密林の中を突破していきます。そうしてまず無理だと思っていた作戦を次々に成功させていったのです。

しかも命令に忠実で勇敢で。本当に日本を見事に助けていました。

「いや、こんなに凄いなんてな」

「全くです」

日本の上司も日本もこれには驚きでした。

「こんなことなら士官学校にも入れるべきだったな」

「何で入れなかったんですか？」

「まあそれは言うな」
「はあ、そうですか」
何故かここでは口ごもる日本の上司なのでした。とにかく台湾のその強さは確かに日本を助けました。おしとやかな外見に似合わない野生児の台湾なのでした。

第四百五十四話　　完

２００８・１１・１４

第四百五十五話　今はとてもややこしいことに

第四百五十五話　今はとてもややこしいことに

日本の家にいた台湾でしたがその日本が戦争に負けて台湾は日本のお家から離れることになりました。すると彼女はたちまちのうちにとても複雑な環境に置かれてしまうことになったのです。

上司はとても偏屈な人になったかと思えば和服まで見事に着こなして日本語をナチュラルに喋ったりもできる物凄い日本通というか日本人だった人になったり銀行員を思わせるクレバーな人になったり結構土着的な人になったり。とてもめまぐるしく変わってかなり大変です。しかも皆が皆台湾に勉強しろ勉強しろと言うので台湾は何時の間にか野生児から学園では成績優秀な美少女という評価になっていました。

おまけに外の国々が。しきりに声をかけてくるのです。しかも濃い面々が。

「台湾さ、今日はこのパソコン貸してあげるから」

「パンダ贈るあるぞ。どうあるか？」

まずはアメリカと中国です。とにかくあれこれと台湾に対して近付いてきて言って来るのです。かなり有り難迷惑な域にまで達しています。

日本もいますし。けれどこの人は自分からは動かないのでどうしても台湾の方から声をかけなくてはいけません。本当はそういうタイプではないのにです。

「あの、日本さん」

「はい」

「今度。よかったらお料理でも」

「ええ、いいですね」

誘えばお付き合いに乗ってくれる日本ですがそれでも積極的な人

ではないので。先の二人とは適度に、日本には自分からとかなり疲れるお付き合いになっています。止めにあの彼もいますし。

「俺は生徒会長、学園の起源なんだぜ！」

「あんたこの前私と付き合わないとか言ってなかった？」

「あれ？そんなの覚えていないんだぜ」

事実は覚えていないのが韓国です。架空世界のことは凄く覚えていても。

「まあいいんだぜ。とにかく今度飯おごるんだぜ」

「帰ってくれたらね」

韓国に対してはいささか冷たいです。こんな台湾の他の国々との関係です。

第四百五十五話　　完

２００８・１１・１５

第四百五十六話　韓国とロシアには

第四百五十六話　韓国とロシアには

韓国とはお世辞にも仲がよくない台湾。というか韓国の傍若無人さと台湾の慎ましやかさとがかけ離れているせいです。けれど韓国は言っています。

「同じ日本に虐められていた同士、絆があるんだぜ」

「私は別に虐められていなかったし」

台湾はそんなことは全く思っていません。韓国にとってはあしからずという形で。

「あんただってそうじゃない。むしろあんたは」

「俺はそれこそ地獄だったんだぜ」

韓国の方がその時の日本の上司に可愛がってもらっていたのですが韓国は事実を覚えないのでそんなことは勝手に架空世界のお話の記憶になっています。

「それこそロシアの家にいた方が」

「ああ、それいいよね」

ここでにゅっとロシアが出て来ました。

「韓国君僕のことが好きなんだっけ」

「好きだぜ。今度色々と楽しく遊ぶんだぜ」

「うん、僕もそうしてもらえると嬉しいよ」

にこりと笑うロシア。少し離れた場所にいた日本とアメリカと中国がその笑みを見て顔を強張らせていますが気付いていないのは韓国だけです。

「あとさ。台湾さん」

「は、はい」

台湾はその三人が顔を強張らせているのを見ながらロシアの言葉に応えます。

「何ですか？」

「最近頑張ってるよね。僕も応援しているからね」
「あ、有り難うございます」
三人の顔がさらに強張るのを見ながらロシアに返事を返します。その内心はまさに蝦蟇の脂汗です。台湾はロシアとのお付き合いはあまりしていませんしこれからも控えていこうと思ったのでありました。

第四百五十六話　　完

２００８・１１・１５

第四百五十七話　お金持ちだったりします

第四百五十七話　　お金持ちだったりします

まああれこれと大変な状況で苦労人な台湾ですがそれでも頑張っているおかげで。学校の成績もいいですし尚且つお金持ちでもあります。しかも尋常なレベルではありません。

「えっ、そんなにお金あるの？」

「はい、そうですけれど」

密かにＩＴで頑張ってお金に困らなくなっているエストニアが台湾の状況を聞いてびっくりしています。

「ＩＴの他にも通商や他の産業もやっていますから」

「けれどそれを全部成功させたんだよね」

そうそうできることではありません。

「凄いよ、何でまたそんなに」

「色々と勉強するべき人も多かったですし」

「ああ、そういえば確かに」

日本にアメリカに中国です。どの国も確かに頭を抱えるレベルで問題の多い国、特にアメリカと中国は周囲に対してもそうですがそれでも馬鹿ではありません。とりわけビジネスに関してはどの国もかなりの手腕を持っています。そういうものを見ていけばやっぱり。

「そうだよね。勉強できるよね」

「それに一歩間違えたら大変なことになりますから」

ここで台湾の声が少し曇ります。

「誰かの機嫌を損ねたら」

「ええと。ロシアさんクラスが三人？」

「はい」

凄く簡単に力だけを言えばそうなります。

「ですから」

「・・・・・よくそんな状況で生きていけるね」

「とりあえず海が周りにありますから」
「それでもそんなに明るくなれるなんて。僕には絶対に無理だよ」
自分が今までどれだけロシアの脅威に晒されてきたのかを思い出すとトラウマで倒れそうになってしまうエストニアでした。とにかく台湾はそんな状況でも陽気なのであります。かなり強い心の持ち主です。

第四百五十七話　　完

２００８・１１・１６

第四百五十八話　ちなみにロシア式ビジネスは

第四百五十八話　　ちなみにロシア式ビジネスは

とにかく必死に頑張ってお金持ちになっている台湾。ここに一人とりあえず力と資源と人には困っていない国があります。あのロシアです。

とりあえず売るものはあります。暖かい場所には困っていても持っているものは幾らでもあります。問題はそれをどう使うかなのですが。

「売るけれど」

「・・・・・今時そんな商売のやり方だし」

「けれど文句つけたら駄目だよ」

ただものを置いてそこで売るとだけ言っているロシアに流石のポーランドも絶句です。失言しそうになる彼をリトアニアがフォローしています。

「買う?どう?」

「ああ、くれ」

「これ位でいいか?」

けれど貴重な資源なので皆買います。欧州組はそれでかなり助かるのです。けれど少しでもロシアの気に入らない額だとどうなるか。それは。

「そのお金じゃ売らないよ」

「何っ!?高過ぎるって!」

「そうだよ、この額じゃ!」

「だったら売らないよ」

あっさりとこう返します。そこには妥協はありません。そして妥協どころか。

ロシアと資源の後ろには兵隊さんが一杯控えています。しかも既

に完全武装して銃口を向けています。何時何をしてもおかしくはない状況です。これは怖いです。
「君達、用意しておいてね」
「はい」
「何時でもいけます」
しかもロシアも彼等にこう言います。皆それを見て結局は。
「・・・・・・買うよ」
「その額で」
「有り難う」
こんなビジネスです。確かにアメリカにしろ中国にしろ押し売りみたいなことは得意ですがそれでも流石にここまではありません。これがロシア式なのでしょうか。
「・・・・・・何で何をやってもこんなに怖いわけ?」
「ロシアさんだから」
リトアニアの一言でした。何処までいってもロシアはロシアのようです。

第四百五十八話　　完

２００８・１１・１６

第四百五十九話　南にありますので

第四百五十九話　南にありますので

台湾は暑い国です。実は日本のどの島よりも南の国にあります。ですから。

「相変わらず夏に来ると凄いですね」

「そうですか？」

「はい。年寄りにはこたえる時があります」

外見に似合わず実は結構ご高齢の日本、台湾の暑さに結構参っているところがあります。けれど台湾は至って平気な顔をしています。

「どうにもこうにも」

「今日は涼しい方ですよ」

「これでですか」

「ええ。日本さん今まで何処におられたんですか？」

「北海道の方へちょっと」

よりによって日本の最北の地です。

「そこでヒグマを見ていました」

「熊ですか」

「はい。これが中々獰猛でして」

「らしいですね。お話に聞く限りは」

台湾はヒグマは知りません。北の方の生き物は大きいとは聞いていますがそれでもよくは知らないのです。これも暖かい国にいるからです。

「けれど寒いですから蛇はいませんよね」

「あまり見た記憶はありませんね」

日本も首を捻りつつ己の記憶を辿ります。ですがやっぱり北海道で蛇を見た記憶はありませんでした。

「そういえば」

「うちには一杯いますからね。もうそれこそ」

「そういう場所には行きませんから」
「わかってますよ」
にこりと笑って日本に答える台湾でした。日本に対してはそうです。ところがある人には。彼女にも人の好き嫌いがあるのです。

第四百五十九話　　完

２００８・１１・１７

第四百六十話　蛇の穴

第四百六十話　蛇の穴

韓国が例によって頼まれもしないのに台湾のお家にやって来ました。家に入って来て開口一番に言う言葉がまた凄いものでした。

「飯食わせて面白い場所に連れて行くんだぜ」

「・・・・・はい、まずは御飯よ」

そのあまりもの傍若無人さに頭にきた台湾は彼の前にどん、と大きな水槽を出してきました。その中にいるのは。

「なっ、何だぜこれ！」

「自分で料理してね。活け造りでね」

「こんなの食えるわけないんだぜ！冗談じゃないんだぜ！」

「うちじゃ食べてるけれど」

むすっとした顔で韓国に対して告げます。見れば水槽の中は蛇の群れです。台湾においては蛇も食べるのです。中国でも食べますが実は彼の影響だったりします。

「はい。どうぞ」

「・・・・・遠慮するんだぜ」

食い意地にかけてもかなりなものの韓国もこれには食欲をそそられませんでした。そこで彼は次の目的に話をやるのでした。

「食い物はいいから面白い場所に連れて行くんだぜ」

「はい、ここよ」

井上ワープで案内されたその場所は山の奥深くでした。一見ただの山の奥ですが少し足を踏み入れただけで。

出るわ出るわ無数の蛇が。しかも種類も様々です。そのまま図鑑が出来そうな程蛇がうじゃうじゃと山のあちこちから出て来るのでした。

「・・・・・ここ地獄じゃないかだぜ！？」

「うちの山ってちょっと入れば何処もこうだけれど。どう？面白い

場所でしょ」
「折角だがこれ以上入るのは遠慮するんだぜ」
「大丈夫よ。どれも猛毒持ってるから」
「・・・・・余計に遠慮するんだぜ。見たらヒャッポダまでいるんだぜ」
　噛まれたら百歩歩くうちに死ぬというあの胸に七つの傷を持つ人や世紀末覇者が使う某拳法の如き蛇までいるのです。台湾の山もかなり物騒です。

第四百六十話　　完

２００８・１１・１７

第四百六十一話　お世話になった人

第四百六十一話　お世話になった人

台湾は日本の家にいました。けれど植民地ではなかったので首輪もされませんでした。そして多くのいい人達によくしてもらってきたのです。

「長い髭を生やしたお巡さんがおられて」

その人には学校の勉強を教えてもらったり生活の世話をしてもらったりしていました。その人のことは台湾のお家の神様を祭る場所である廟に今も祭っています。今もそこまで大切に思っている人なのです。

「その人にもよくしてもらったし。ダムも」

台湾のお家にはとても大きくて立派なダムがあります。これも日本の人だったのです。凄く頑張ってそのダムを台湾の為につくってくれたのです。

他にも色々な人がいて台湾の為にしてくれました。台湾がフィリピンで戦っていて危なくなった時にこう言って助けてくれた人もいます。

「君はもう帰るんだ」

「けれど、私は日本の家の人間ですから」

「いや、君は台湾なんだよ」

こう言うのでした。

「君は台湾だよ。だから君は生きて帰りなさい」

「私が・・・・・台湾だから」

「そして私は日本の家の人間なんだよ」

台湾に対して微笑んで言ってきた言葉でした。

「だから責任は私が取るからね」

「そうなんですか」

「だから。行ってくれ」

また微笑んで声をかけてきました。
「いいね」
「・・・・・わかりました」
こうして台湾は帰ることができました。そうした人達に助けられて今がある台湾。そうした日本の家の人達のことは今も忘れてはいないのです。

第四百六十一話　　完

２００８・１１・１８

第四百六十二話　わしは好きだぞ

百六十二話　　わしは好きだぞ　　第四

今も日本にはそんな台湾を好きであってくれている人がいます。その人は漫画家です。あの脚本家や仮面ライダー達に負けない位個性の強い眼鏡をかけた傲慢な人です。

「わしは日本が好きだ！」

いつもこう言ってはばかりません。

「そしてわしは日本が好きな台湾が好きだ！今台湾は生まれようとしている！」

「私ずっといるんだけれど」

その漫画家さんの強引な主張には戸惑いながらもそれでも有り難かったりします。やっぱり人間というものは普通は自分を好きでいてくれる人を好きになるものですから。

「だから。いいかしら」

「わしはあんたのことを漫画に描こう」

そしていきなり言い出しました。

「あんたのこれまでのことと今。そしてこれからもな」

「私の全部をですか」

「いいか？」

眼鏡の奥の鋭い目で問うてきました。

「それで」

「ええ。それじゃあ御願いします」

「わかった。じゃあ待っていてくれ」

こう言って暫くして持って来た漫画は。もうこれ以上はないという程に台湾を可愛く奇麗に描いてくれていました。それを見て内心かなり照れ臭かったりしますが上司の人達まで丁寧に描いてくれているので嬉しかったのです。

「あんたの家の料理のことも描いておいたぞ」
「他にも。こんな細かいところまで」
「描いておいた。駄目か？」
「いえ」
よく描いてもらっているのでやっぱり。こう言ってしまうのでした。
「有り難うございます」
かなり傲慢で強引な人ですけれどそれでも好きになるのでした。
やっぱり自分を好きであってくれる人は有り難いと思う台湾なのでした。

第四百六十二話　　完

２００８・１１・１８

第四百六十三話　神様までいました　☆

第四百六十三話　神様までいました

「おい乙女よ」

突然ハンガリーに声をかけてくる人が出て来ました。脚本家や漫画家だけでは済まないようです。

「御前に神様からの有り難い予言じゃ」

「神様なんですか、貴方」

「左様じゃ」

いきなりこれです。はっきり言って滅茶苦茶胡散臭いです。ライダーでミニスカ中学生の悪魔や天使の格好を見ているようです。

その胡散臭い神様が言います。

「明日フランスに会ったら真っ先にフライパンで殴りなさい」

「えっ、神様が比と殴ること勧めていいんですか？」

「よいのじゃよ」

「よいのじゃよって・・・・・けれど」

「わしが言いたいのはこれだけじゃ」

言いたいことを言うと後はそのまま消えていこうとしています。

「さらばじゃ」

「さらばじゃって神様、ちょっと」

「お賽銭には金貨一枚と葡萄酒とソーセージを頼むぞ」

「何でそんなに即物的なんですか？」

「いいんじゃよ。そういうのが面白いんじゃからな」

「・・・・・貴方、まさか」

とりあえずあの脚本家かその人とよく組んでいる巨匠監督を疑いましたがとりあえず神様は消えてしまいました。そして目が覚めるとベッドの中でした。

「何だったんだろう、今の夢」

とりあえず夢なのはわかりましたがやたらとリアルな部分もあっ

たりした変な夢でした。とりわけ最後の台詞がかなり気になって仕方がありません。

「テレビの観過ぎかしら。ニホンさんから借りた特撮の」

部屋にはテレビとＤＶＤもあります。その周りに散乱しているのは仮面ライダーのものが多いです。そのせいかしらと自分に納得させるハンガリーでした。

第四百六十三話　　完

２００８・１１・１９

第四百六十四話　フライパンで殴るのは

第四百六十四話　　フライパンで殴るのは

ハンガリーはいつもフライパンを持っています。普段は出て来ないのですが誰かを殴る時になると気が付いたら手に持っている実に不思議なフライパンなのです。

そしてそれで何をするかというと。

「あれで殴られると痛いんだよな」

「ああ、全くだぜ」

フランスとプロイセンが言います。この二人の共通点と言えば。

「オーストリアと何かあったらよ」

「絶対に出て来て殴って来るんだよな」

そうだったのです。オーストリアさんの敵は自分の敵、絶対に許すことはできません。だからこそその手に持っているフライパンを振るうのです。そしてこれがまた実に効果があるのです。

「効くんだよな。ロイヤルデモンシード並に」

「スコルピオンクラッシュかと思ったぞ、俺は」

自分達に問題があるとは考えない人達なので勝手なことを言っています。ですが勿論フライパンは人を殴る為だけにあるのではありません。普段は何に使うかというと。

「もうすぐしたら朝御飯できますから」

「今日は何ですか？」

「ソーセージと卵を炒めています」

メイドの服でオーストリアさんの為に朝御飯を作っています。もうテーブルにはホットミルクにクロワッサン、それとジャムがあります。何処かオーストリアさんのものでありながらフランスの雰囲気も漂っています。

「それでいいですよね」

「いつもすいませんね、ハンガリー」

オーストリアさんは優雅にハンガリーに御礼を述べます。
「朝を作ってもらって」
「オーストリアさんの為ですから」
オーストリアさんの為にあるフライパン、普段は本来の目的の為に使われているのでした。もっともいざという時には、なのですけれど。

第四百六十四話　　完

２００８・１１・１９

第四百六十五話　やっぱり殴りました　☆

第四百六十五話　　やっぱり殴りました

「どうしよう・・・・・」

神様からフランスをフライパンで殴るように言われたハンガリー。

けれど流石にそれにはかなり戸惑っていました。

「神様はああ仰っておられたけれど本当に殴っていいのかしら」

何も知らず口笛を吹きながら呑気に学校を歩いているフランスを見つつ内心かなり困っています。どうするべきかと。

「やっぱりよくないよね」

こう思いはじめました。

「何の罪もない人を殴るなんて」

「おーーーいたいた」

ハンガリーが内心あれこれ考えてそれでとりあえず殴らないでおこうと決めかけたその時にフランスは窓を覗いていました。見れば誰かを覗いています。はっきり言って出歯亀に見えます。

「ピアノ弾いてら」

見ればフランスは部屋の中のオーストリアさんを覗いています。オーストリアさんは今日も優雅にピアノを弾いているのです。フランスはそのオーストリアさんを見て言います。

「オーストリアも顔と振る舞いはいいんだけれどな」

フランスもそれは認めています。

「これで家が近くて大人しかったら絶対にフランスに入れてやるのに」

実に勝手なことを言っています。

「本当に顔はいいよ、顔はね」

「やっぱり・・・・・」

ハンガリーは今のフランスの言葉を聞いて結局決心しました。

「このフライパンで」

両手に強くぎゅっと握り締めています。
そうして次に取った行動は。どうしてもそうなってしまう運命なのでした。

第四百六十五話　　完

２００８・１１・２０

第四百六十六話　頼りになるパートナー

いつもフライパンを持っているハンガリーはやっぱりオーストリアさんにとっては強い味方、いざという時のパートナーであります。けれどパートナーを持っているのは彼だけではありません。

「俺はよ。何て言ってもな」

「俺なのか」

「そうだぜ、相棒」

プロイセンは楽しそうに笑いながらドイツの肩に手をやります。

「やっぱり御前がいないとな」

「そういえば御前とは長い間離れ離れになっていたな」

「色々とあったからな」

プロイセンもそれは認めます。

「それでもまた統一されたしな」

「そうだな。確かに統一自体はいい」

何だかんだで認め合っている二人です。そしてドイツといえば彼をこの上なく頼りにしているもう一人の存在を忘れてはいけません。その彼は。

「ドイツーーーーー、今日も来たよーーーーー」

「また御前か」

イタリアです。彼を忘れてはいけません。

「今日さ、スパゲティ作るつもりなんだけれど」

「俺の家でか」

「駄目かな。シーフードとトマトでさ」

「全く。それなら御前の家で作ればいいだろう」

とか何とか言いながら家に入れます。そのうえ台所まで貸します。

「オリーブはそれ、フライパンはそれ、鍋はそれ。チーズも置いて

おいたからな」
「あっ、有り難う」
「くれぐれも汚すなよ。後が大変だからな」
「何だかんだ言っていつも世話を焼くんだよな、イタリアには」
プロイセンがそんなドイツを見て言います。ドイツをパートナーにしている人は結構多いようです。

第四百六十六話　　完

２００８・１１・２０

第四百六十七話　出会いの時のことを

第四百六十七話　出会いの時のことを

ドイツは今日も何時の間にか自分のところに来ているイタリアと一緒にいます。本当に仲がいいです。イタリアはその時にふと言ってきました。

「何かこうして一緒にいるとさ」

「どうしたんだ？」

「色々思い出すよね」

「まあな」

ドイツもイタリアと一緒にいて本当に色々なことがありました。砂漠に水を持って行ったりエジプトやギリシアとの戦争に助けに行ったり武器をあげたり。何か彼ばかり苦労していますがそれでも色々なことがあったのは事実です。事実は認識は変えることはできますがそのことがあったということは決して変えることができないのですから。

「そうだ。ドイツは覚えてる？俺達が第一次世界大戦で一緒だった時のこと」

「・・・・・あの時か」

ドイツにとってはある意味凄い衝撃的な出来事だったのでよく覚えています。

「全く。御前ときたら」

ドイツは少しうんざりとした調子でイタリアに言うのでした。

「あの時から頼りなかったな」

「だってさ。戦争嫌いだし」

口を尖らせて言います。

「痛いし怖いし。あんなのよりサッカーとかオペラの方がいいじゃない」

「俺もサッカーとオペラは好きだがな」

「それに最近じゃ野球だってやるし」
結構色々とスポーツはしているイタリアです。
「どうかな？ドイツもやってみる？」
「その野球をか？」
「日本からゲームも借りたし。実況パワ何とかっていうの」
「とりあえずそのGのチームは邪悪な感じがするから選ばないぞ」
「ああ、それは俺も」
密かに不吉なチームは外す二人でした。二人にとってはかなり色々あった出会いですが今ではそれも懐かしい思い出なのでした。

第四百六十七話　　完

２００８・１１・２１

第四百六十八話　学習はしても

第四百六十八話　学習はしても

ドイツとイタリアが砂漠でイギリスと戦争をしていた時です。二人は共同戦線を張っていたので当然同じ戦場で戦います。その時イギリスはあることを思いつきました。

「ちょっとやってみるか。まさかとは思うけれどな」

とりあえずやってみることにしました。この時は彼もまさか成功するとは思っていなかったことがこの『まさか』という言葉に出ています。そのやってみることとは。

「おい、イタリア」

「呼んだ？」

イタリアを呼ぶとすぐに顔をひょっこりと出してきました。驚くのは隣に隠れているドイツですがイギリスも驚くしかありませんでした。けれどとりあえず出て来たので。

「よしっ！」

「うわっ、撃って来た！」

イギリスが撃って来ました。イタリアはそれを受けて慌てて逃げ出します。

「危ないじゃないか！折角名乗り出たのに！」

「・・・・・戦場で敵に呼ばれて顔を出す奴がいるか」

ドイツもこれには頭を抱えます。とりあえず逃げ出したイタリアを無理矢理引き摺って戦場に戻して怒った後で言いました。

「とにかくだ。俺に呼ばれない限り頭を出すな」

「・・・・・わかったよ」

イタリアもこれで何とか頷きました。とりあえずこれで大丈夫だとドイツが安心して戦場で彼の名前を呼びます。向こう側にいるのはやっぱりイギリスです。

「おいイタリア」

「呼んだ?ドイツ」
またひょっこりと頭を出します。それでまたイギリスに撃たれて。
「うわあっ、危ないじゃない!死んじゃったらどうするんだよ!」
「・・・・・こいつはどうにかならないのか」
「まさかまた出て来るとは思わなかったぞ」
頭を抱え続けるドイツと向こう側で呆然とするイギリス。やっぱりイタリアはイタリアです。

第四百六十八話　　完

２００８・１１・２１

第四百六十九話　ベルギーさん猫祭り　☆

第四百六十九話　ベルギーさん猫祭り

イタリアが小さい頃猫耳を付けて遊んでいたことがあります。オーストリアさんはそれを見てハンガリーに尋ねました。

「何ですか？イタリアのあの格好は」

「ベルギーさんのお家で猫祭りなんですよ？」

「ベルギーの家でですか」

「はい。ペストが流行った時沢山の猫が魔女の使いとして駆除されちゃったそうなんです」

「それはまた非合理的ですね」

オーストリアさんですらこう言いました。ペストは鼠のダニが媒介するものですから猫を殺してしまったらどうしようもありませんから。けれどその時はよく知られていなかったのです。

「それでその猫ちゃん達を供養する為に猫の格好をするお祭りなんですよ」

「成程、そうだったのですか」

「はい、それでですね」

ここでハンガリーはあるものを取り出してきました。そして。それを頭に被ってみます。すると彼女も忽ち猫娘に変わってしまいました。これはまた実に。

「どうですか？」

「どうですかと言われても」

何と答えていいかわからず困惑した顔になるオーストリアさんです。

「私は。特に」

「さあ、オーストリアさんも」

「私は遠慮します」

こう言って顔を真っ赤にさせてしまうオーストリアさんでした。

けれど何となくそのお祭りが好きになってしまったので。
「とりあえずベルギーにはですね」
「はい」
「そのお祭りを続けるように言っておいて下さい」
「わかりました」
そんな猫祭りです。世界には色々なお祭りがあるものです。

第四百六十九話　　完

２００８・１１・２２

第四百七十話　ペストの怖さ

第四百七十話　ペストの怖さ

欧州を何度も席巻してその度に恐怖のどん底に陥れてきたペスト。けれど日本はそんなペストのことを全く知らないのです。

「そのペストというのはそんなに怖かったのですか」

「思い出したくもないな」

「俺も」

ドイツもイタリアもペストと聞いただけで顔を真っ青にさせています。

「あれはな。身体のあちこちに斑点ができてな」

「動くのも辛くなるまでに痛くなるんだよ」

こう日本に話します。

「そしてだ。最後は身体が真っ黒になってだ」

「もう終わりなんだよ。それで」

「とにかく恐ろしい病気なのですね」

「日本は知らないのか」

「私の家では流行ったことがないので」

だから知らないのです。

「どういったものか。しかし当時の欧州の事情を見てみますと」

「どうなんだ？」

「道の端に排泄物やゴミを捨てていたのですよね」

「そうだよ」

「それはそんなことをしたら」

「その時は知らなかったんだ」

だからこそなのでした。当時の欧州といえばそれこそ壮絶な状況だったのです。日本から見れば卒倒するまでに。

「全くな」

「それでだったんですか」
「流石に今はないよ」
当然です。
「流石にね」
だから今はペストも流行らないのです。世の中には日本も知らなかった病気が一杯あるのでした。

第四百七十話　　完

２００８・１１・２２

第四百七十一話　垂れ耳猫

第四百七十一話　垂れ耳猫

イギリスはとにかく犬や猫が好きです。ちゃんと妖精やフランス以外にも友達がいるのでした。これは彼にとっては凄く幸せなことです。

その猫の中でも結構変わった猫は。これです。

「スコティッシュ＝フォールドっていうんだよ」

「耳垂れてるんだな」

フランスはイギリスが持っているその猫を見て言います。見れば顔が丸くて鼻が少し豚さんみたいで耳が垂れています。大きめの身体で毛が絹みたいに奇麗です。殆ど鳴きません。

「これが一番目立つな」

「中には立ってるのもいるけれどな。いい感じだな」

「ああ。中々以上に可愛いな」

「たまたま家で生まれたんだ」

イギリスはこの猫の出生についても話します。

「こうした耳の垂れた猫がな」

「そうなのか。それが遺伝してなんだな」

「そうなんだよ。これで大人しくて人なつっこくてな」

イギリスはそのスコティッシュ＝フォールドを床に置きますがすぐに彼の足元に来て身体をすりすりさせてきます。人を全く怖がりません。

「飼いやすいんだよ。いい猫だぜ」

「いい猫だけれど何か気になるな」

「何だよ」

「こいつ太り過ぎじゃねえか？」

そのイギリスにすりすりしているスコティを見て言うフランスです。

「何かよ。腹がやけに出てよ」
「結構太りやすい猫なんだよ。油断したらすぐにな」
「それでか」
「ああ。ついつい餌をやり過ぎちまうとすぐにこうなるんだよ」
人なつっこくて優しい性格でも中々困ったところもあります。けれどとても可愛らしいスコティッシュ＝フォールドなのでした。特にその垂れ耳が。

第四百七十一話　　完

２００８・１１・２３

第四百七十二話　猫の耳の秘密

第四百七十二話　猫の耳の秘密

イタリアはドイツにもその猫祭りのことを教えました。ドイツはそれを聞きながら家の猫の相手をしていました。彼は基本的に犬派ですが猫も嫌いではないのです。

「面白い祭りがあるんだな」

「そうだよ。ドイツも来てみる？」

「ああ。一度行ってみるか」

どいつもまんざらではありません。イタリアの言葉に頷きます。イタリアはここでドイツが猫に対してあることをしているのに気付きました。

「あれっ、何してるの？」

「耳をな」

ドイツもイタリアに対して説明します。

「こうして触るとな」

「うん」

見れば猫の両耳を手の指で優しく触っています。意外と優しい手つきです。

「猫が喜ぶ」

「あっ、本当だ」

見れば本当です。耳を触られている猫は目を細めさせて喜んでいます。あまりにも細くなってしまってその目が糸みたいになってしまっています。

「喜んですね」

「猫は喉だけじゃない」

ドイツは言います。

「こうして耳を触っても喜ぶんだ」

「そうだったんだ」

「他には額もな。こうしてな」
今度は額を人差し指の先で触ります。こうしても。
「喜んでくれる」
「猫って色々なことで喜んでくれるんだ」
目を細めさせて喉をごろごろ鳴らす猫を見て言う二人でした。猫も色々な方法で喜ぶのでした。

第四百七十二話　　完

２００８・１１・２３

第四百七十三話　食いしん坊万歳　☆

第四百七十三話　食いしん坊万歳

「なあアメリカ」

イギリスが今日もハンバーガーを食べているアメリカに対して声をかけます。

「御前そんなに毎日色々食べて大丈夫なのか？」

「えっ？」

とにかくよく食べるのがアメリカなのです。その食べっぷりといったら。少食の日本から見れば想像を絶するレベルだったりします。

「大丈夫だよ。味付けは毎日変えてるからさ」

そのイギリスの言葉に対してこう返します。

「だから飽きないんだよ」

「いや、そういう問題じゃねえよ」

イギリスはここに至ってストレートに言うことにしました。やっぱりアメリカに対してはストレートが一番なのでした。

「体重とか体調とかそういうのはいいのかよ」

「全然大丈夫だけれど。もう体力が有り余ってさ」

「だったらいいんだけれどな」

とりあえず話はこれで終わりました。確かに体調はいつも絶好調です。けれど体重はといいますと。実は結構気にしていたのです。家に帰るとこっそりトランクス一枚になり。それから体重計に乗ってきます。

「毎日かなり身体動かしてるし。大丈夫だよな」

そう自分に言い聞かせながら見てみます。慎重に慎重に。何だかんだ言ってやっぱり気になって怖くて仕方ないのです。体重計はあまりにも無慈悲なものですから。

そうして見てみた出て来た体重を見てみると。

「神様、そりゃないだろう・・・・・」
思いきり落胆するアメリカでした。
「冗談も程々にしてくれよ。確かに僕はハンバーガー大好きだけれどさ」
アメリカにとっては嫌な結果でした。とかく体重計というものは無慈悲なものであります。

第四百七十三話　　完

２００８・１１・２４

第四百七十四話　日本のスタイル

第四百七十四話　日本のスタイル

日本はとにかく痩せています。あまり食べないのです。その食べなさっぷりにドイツもイタリアもいつも驚いています。

「またそれだけか」

「それだけでいけるの？」

「はい、大丈夫です」

今日の日本のお昼はざるそばだけです。それに対してドイツもイタリアも量では彼の優に倍はあります。ですから日本の少食ぶりが余計に目立つのです。

「私はいつもこれだけあれば」

「何か日本って本当に食べないよね」

「それでよくもつものだ」

二人にとっては本当に驚くべきことです。しかもその食べ物も。

「おそばってカロリー低いんだったっけ」

「はい、そうです」

「他にもお野菜とかお魚とかばかりだし」

「日本の食べ物は殆どがそうだな」

「私は油っこいものが苦手なのです」

天麩羅やそういったものにしろかなりあっさり風味にしているのが日本の家の料理です。

「ですからそれで」

「そうだよね」

「だからいつもそんなに痩せているのか」

「痩せている方が健康にもいいですし」

天然のダイエットのようです。

「ですから。私はこれで」

「そうなんだ。じゃあ俺も日本の食べ物食べてみようか」

「俺もそうするか」
二人の意見はここで一致しました。
「マミーが最近かなり凄いことになってるし」
「健康にもいいのなら。痛風がやはり気になる」
やっぱり食べ過ぎはあまりよくないようです。日本のスタイルはその点かなりいいものであります。

第四百七十四話　　完

２００８・１１・２４

第四百七十五話　フランスが吹き込むと　☆

第四百七十五話　フランスが吹き込むと

体重を見て愕然となってしまったアメリカ。流石にこのままではいけないと思いあることを決めました。もうそれは言うまでもないことでした。

「とりあえず今日から少しダイエットしようかな」

これしかありませんでした。

「それで誰かいい方法知らないかな。イギリス以外で」

イギリスの食事は値段もカロリーも高めでしかも味はかなりあれだからです。最近は結構舌が肥えてきているアメリカなのです。

とりあえず彼はスルーして人を探すことにしました。アメリカはすぐにフランスに会いました。

「フランスは美食家なのに痩せてるんだよな」

すらりとしていてスタイルはいいのです。性格は置いておいて。

「ちょっと聞いてみるか。よし」

こう決めて彼に声をかけます。

「おーーいフランス」

「何だ？」

「フランスはいつも美味しいものばかりかなり食べてるよな」

「ああ」

フランスは気軽にアメリカに答えます。

「それでどうして痩せてるんだい？」

「そりゃあれだよ」

フランスは笑いながらアメリカに話します。

「その分消費してるからな」

「消費って？」

「だからよ、つまり」

ここから先フランスはアメリカに教育上非常に宜しくないうえに下手をしなくても十八禁指定されることをアメリカに吹き込んだので後で学校の先生達からとても怒られることになりました。
「ちっ、何で俺が怒られなきゃならねえんだよ」
「御前本当に何時か捕まるぞ」
イギリスが愚痴を垂れるフランスに対して突っ込みを入れます。
これはアメリカには参考にならないことでした。

第四百七十五話　　完

２００８・１１・２５

第四百七十六話　太らないと生きていけない

第四百七十六話　太らないと生きていけない

ベラルーシはクールビューティーなメイドさんです。スタイルもかなりいいです。

ところが彼女のお家やロシアのお家のお婆さん達はどうかといいますと。立派なものです。その立派な御身体を暖かいコートに包んでさらに立派に見えます。ポーランドもリトアニアもそんな彼女やロシアのお家のお婆さん達を見て不思議で仕方ありません。

「とにかく若い時は妖精みたいでも大人になったらあれだしーーー」

「俺の家も結構そうだけれどあれは何でかな」

「太らないと寒いから」

ベラルーシは落ち着き払った声で二人に告げます。

「だから。太るの」

「寒いから？確かにロシアさんのお家ってかなり寒いけれど」

「けれど幾ら何でもあれじゃね？」

「シベリアに行けばわかるわ」

二人にとってはブロックワードに限りなく近い響きを持つ言葉でした。

「シベリアにね。そうじゃなくてもモスクワに行けば」

「・・・・・遠慮しておくから」

「そこまでしてわかりたくないしーーー」

二人はこう言われて沈黙しました。その寒さは二度と味わいたくないものでしたから。

ロシアにしろ自分のお家のお婆さん達が皆太っていることはわかっています。けれど彼はそんなお婆さん達が大好きなのです。

「太ってる方が頼もしいじゃない」

にこりと笑いながらこう言うのです。

「いざって時何でもやってくれそうで」
実際ロシアのお家ではお婆さん達の生活の知恵が凄い役に立っています。痩せていなければいけないというのも国によって違うのでありました。

第四百七十六話　　完

２００８．１１・２５

第四百七十七話　今度は中国に聞きました　☆

第四百七十七話　今度は中国に聞きました

イギリス、フランスと続いてアメリカが尋ねた相手は中国です。とりあえずレンゴウレンジャーは何だかんだでよく顔を見合わせているようです。

「君はどうやってその体型維持してるんだい？」

中国もかなり食べる方です。何かと大食漢が多い学園のようです。

「少し聞きたいんだけれど」

「減肥あるか？そんなの簡単あるよ」

「簡単って？そうなの？」

「御飯を食べる時にこれを飲むある」

「これって君のお家のお茶だよね」

「そうある。これを飲めば本当にすぐ痩せるあるよ」

こう言いながらアメリカにそのお茶を差し出します。アメリカは実際にそのお茶を飲んでみますけれどこれがどうにも。

「うっ、これはどうにも合わないかも」

「すぐ慣れるあるぞ」

「だといいけれど」

「あとはこれあるな」

中国は次にお肉を出してきました。そのお肉はというと。

「マトンだよね」

「そうある」

お肉の匂いでわかったのです。マトンは独特の匂いがありますから。

「これは昔から減肥にいいと評判あるぞ」

「美味いよ中国！」

お茶には難色を示したアメリカも羊はいけました。

「これなら幾らでも頑張れるよ！よし、やるぞ！」
食べてやる気を起こしたアメリカ。けれどいざ体重計に乗ってみるとこれがどうにも。
「だから何で減らないのさ、神様。身体だって動かしてるし羊食べてお茶も頑張って飲んでるのに。数字ってどうしてこう無慈悲なんだよ・・・・・・」
やっぱり減っていないのでした。アメリカのダイエットはまだ続きそうです。

第四百七十七話　　完

２００８・１１・２６

第四百七十八話　羊には抵抗があります

第四百七十八話　羊には抵抗があります

羊は昔から皆かなり食べています。中国でもそうですが欧州各国でもそうですし当然アメリカでも。美味しいので皆牛や豚と同じ様に食べています。

ところがその中で日本だけは。皆が羊を食べていてもそれにはあまり箸をつけないのです。ある日それに気付いたのはセーシェルでした。

「日本さんどうかされたんですか？」

「実は少し」

応えながらもやはり羊には箸を近付けずに他のものばかり食べています。

「私は羊はあまり」

「何かあるんですか？」

二人はお魚をメインに食べています。日本の魚好きはかなり有名ですがセーシェルも周りが海なのでお魚は大好きなのです。それも獲り立てが大好きだったりします。

「羊に」

「匂いが少し」

日本はこうセーシェルに答えました。

「ですから。どうにも」

「匂いですか」

「羊のお肉は匂いがしますよね」

「はい」

マトンはそうです。その独特の匂いが皆の食欲をそそるのですが彼はその匂いに抵抗があるのです。だからいつも、そしてこの場でも羊には箸をつけないのです。

「それがどうにも」

「だからだったんですか」
「はい。ですから私は今は」
こう言ったうえでセーシェルと一緒にテーブルの上にある見事なお魚を食べるのでした。意外と知られていない日本の味の好みであります。

第四百七十八話　　完

２００８・１１・２６

第四百七十九話　日本に聞いてやっとでした　☆

第四百七十九話　　日本に聞いてやっとでした

最後の最後で日本に尋ねることにしたアメリカ。ひょっとして交友関係はあまり広くはないのでしょうか。それも頷けることではありますが。

「そういえば日本は僕の知り合いの中で一番痩せているような」

そのことに気付いて声をかけたのです。

「おーーーい日本」

「何でしょうか」

「君はどうやっていつもその体型を維持しているんだい？」

「えっ、ダイエットですか？私は別に」

していないというのです。

「普通に三食食べていますしおやつもいただいていますが」

「な・・・・・何だってーーーーーーー！？」

アメリカにとっては驚くべきことでした。声がそのままＭＭＲになってしまっています。

「どうやって！？それでどうして痩せられるんだい！？」

「私の家の料理はどれもカロリーが低いので」

「そうか、カロリーだったんだ」

ここでやっとわかったアメリカでした。

「だから痩せられるんだ、だったら」

こうしてアメリカは日本のお家に来て日本の家の料理を食べることにしました。その結果。

「あーーー、やっぱり食べて痩せるのって凄くいいよねーーーー」

「それはそうとして」

日本はそのアメリカに対して思うのでした。

「何で毎日私のお家に来るんですか？」

「まあ気にしないでよ」
こういうところはやっぱりアメリカでした。何はともあれ彼は日本の家の料理と自分で作ったダイエットマシーンで無事痩せるのでありました。とりあえず彼にとっては無事に終わったダイエット戦争なのでした。

第四百七十九話　　完

２００８・１１・２７

第四百八十話　辛いのもいいんだぜ

第四百八十話　辛いのもいいんだぜ

日本も非常にすらりとした体型ですがその彼の側にいつもいようとする不思議な習性を持つ韓国もスタイルはかなりいいです。徴兵制で鍛えられているせいもありますがとにかくそのスタイルは見事なものです。おまけに背も高いし脚も長いのでこれであれでなければと皆が思ってさえいますが。

その彼にダイエットのことを聞くと。

「それは俺の家の料理を食べれば一発なんだぜ」

何の根拠もない言葉に聞こえますがそれでも断言します。

「もう一発で痩せられるんだぜ」

「何でなの？」

韓国のことをよく知らないイタリアが彼に尋ねます。

「どうしてそんな簡単に痩せられるの？」

「これを食べてみるんだぜ」

こう言って出してきたのはどれも真っ赤で焼いたか煮たかそんな料理ばかりです。お肉もお魚もお野菜も何もかもが唐辛子で真っ赤でそのうえぐつぐつとさえしています。何処をどう見ても辛くて熱そうなものばかりです。

「これを毎日食べるんだぜ」

「これをなんだ」

「そうだぜ。さあ、どんどんやるんだぜ」

イタリアが実際に韓国のその料理を食べてみるとやっぱり。

「凄く辛いし熱いね」

「だからいいんだぜ。汗をたっぷりかいて力もつけてさらに動きまくれるからいいんだぜ」

どうやら韓国の無意味なまでのハイテンションと行動力の秘密でもあったようです。何はともあれダイエットにはよさそうな韓国の

料理なのでした。
「けれど。ここまで辛いのはね」
「それがいいんだぜ」
あまりにも辛さにイタリアは困ったようでありましたが。

第四百八十話　　完

２００８・１１・２７

第四百八十一話　連合戦隊に対抗して

生徒会で結成している連合戦隊。この存在のことはもう学園中に広まっています。殆どお笑い集団として認識されているとしてもです。

それはイタリア達にも伝わっています。それでイタリアがドイツ達に言うのでした。

「俺達も作らない？戦隊」

「俺達もか」

「うん。ほら、こっちだってメンバーいるし」

こうドイツに話します。

「だからさ。どうかな」

「メンバーは誰だ？」

「まずは俺とドイツと日本」

やはりこの三人は外せないのでした。

「それとハンガリーさんと日本の家にいる台湾も入れてね。女の子が二人もいるよ」

「ああ、あの二人か」

その二人の名前が出て来てドイツも乗ってきました。

「それとさ、プロイセンも入れて」

「これで六人だな」

「最近の戦隊はもっと多かったりするからオーストリアさんも入れようよ。これでいいよね」

「御前の兄貴はどうするんだ？」

「ちょっと。兄ちゃんはね」

急に口ごもるイタリアでした。

「ドイツと組みたくないっていうしそれにラテン戦隊結成するらし

いし」
「何でも戦隊なんだな」
「駄目かな。俺達も戦隊作るのは」
「そうだな。やってみよう」
ドイツも反対はしませんでした。こうして彼等も戦隊を結成することになりました。

第四百八十一話　完

２００８・１１・２８

第四百八十二話　特捜戦隊

第四百八十二話　特捜戦隊

まずはメンバーが集まりました。イタリアが早速言います。

「俺がレッドでさ。ドイツがブルーで日本がグリーンでね」

「その色分けか」

「それでドイツがリーダーになるね」

「レッドがリーダーじゃないのか？」

「うん。最近はそれでもいいから」

こうドイツに答えます。

「それにいつもリーダー格じゃない。頭もいいししっかりしてるし」

「ううむ」

それだけイタリアに頼りにされているということでした。悪い気はしていませんがそれでも。急にリーダーになってしまったので気持ちの整理ができていないのです。

「それでいいよね」

「まあいいとしよう」

それでもとりあえず頷くドイツでした。

「それでな」

「それで日本が皆の参謀でね」

「わかりました」

「ハンガリーさんはイエロー、台湾はピンクでどうかな」

「はい、わかりました」

「私は小柄だからピンクなんでしょうか」

台湾はふとこう思ったりもしました。もう皆それぞれの色のユニフォームを着ています。女性陣は何とミニスカートです。これは素晴らしい。

「プロイセンはホワイトでブレイクでね」

「頼むぜ、相棒」
「この場合相棒はイタリアになるんだがな」
プロイセンが笑顔でドイツの肩を叩きますがドイツは突っ込み返しました。
「それは違うのか」
「まあ気にするなってことだ」
「それでマスターはオーストリアさんで御願いします」
「わかりました」
「・・・・・こいつが指揮官か。よりによって」
ドイツはそのことが不安だったりします。ですが何はともあれ枢軸戦隊も結成されたのでした。

第四百八十二話　　完

２００８・１１・２８

第四百八十三話　塚田Pのいつものパターンです

第四百八十三話　塚田Pのいつものパターンです

とりあえずリーダーはドイツ、スウジクブルーです。けれど皆これで納得しています。一番それでいいと言っているのはよくリーダーをやるカラーとされているイタリアです。彼は言うのでした。

「やっぱり俺達の中じゃドイツがリーダーなんだよね」

「俺がか」

「落ち着いているし皆を助けてくれるし真面目だしね」

「だが本来は御前がリーダーなんじゃないのか？」

ドイツもカラーのことでイタリアに対して問います。

「レッドは本来そうだと聞いているが」

「ああ、最近そうでもないみたいだよ」

けれどイタリアはこうドイツに言葉を返すのでした。

「最近ね。実質ピンクだったりブラックだったり」

「女の子もなるのか」

「あとはドイツみたいにブルーがなったりグリーンがなったり。女の子だとイエローがなったりもしてるじゃない」

「色々なんだな、最近は」

「そうだよ。まあ確かに昔はいつもレッドがリーダーだったけれど」

連合戦隊は確かにレッドであるアメリカがリーダーですけれど。それでも後から気がついたら入っていた何処かの誰かさんが仕切ろうとしています。それで変に目立っていますが。

「今は違うよ。色々その話によって違うよ」

「だから俺がリーダーでもいいのか」

「そういうこと。だから頼むよ、リーダー」

「うむ、わかった」

ドイツもそれで納得することにしました。

「そういうことならな。頑張ってみるか」
こうして彼もリーダーで納得することになりました。ひょっとすると連合戦隊よりもしっかりとしたリーダーかも知れません。

第四百八十三話　　完

２００８・１１・２９

第四百八十四話　レッドがあれになるのもパターンです

第四百八十四話　　レッドがあれになるのもパターンです

イタリアがレッドです。ですが最近のレッドは。

「全く御前は」

「いやあ、御免御免」

また何も考えずに行動してミスをしてドイツのフォローを受けています。イタリアに何かあればすぐに助けに来るのがドイツの仕事なのはここでも同じでした。

「ちょっと失敗しちゃったよ、今回は」

「いつもだろうが」

とか何とか言いながらイタリアを助けます。何時の間にか他の皆もやって来てイタリアを助けます。凄くいいチームプレイです。

「だが。無事なんだな」

「うん、それは大丈夫だよ」

ドイツの横で立ち上がりながら答えます。

「それはね。逃げてきたから」

「駄目だろうが、それは」

呆れた顔で突っ込みを入れるドイツですがそもそも言ってもいつものことなので控えることにしました。とか何とか言っている間にピンチは終わったのでした。

「とにかく御前はだ」

ピンチが終わってからお小言です。ドイツはイタリアを叱ります。

「もうちょっとしっかりしろ。そして考えて行動しろ」

「御免なさい」

「全く。最近のレッドはこんなのばかりなのか？」

「そうなんだけれど。中には俺よりもっと凄いのがいたりするし」

「あの拳法を使う奴か。あれは確かにな」

「あそこまではやらないから、俺でも」
「そうだな。御前でもあそこまではな」
中にはイタリアなぞ比べ物にならない、それどころか韓国をも凌駕するレッドがいたりするのです。流石にそこまではいかないイタリアなのでした。

第四百八十四話　　完

２００８・１１・２９

第四百八十五話　知恵袋はグリーン

第四百八十五話　知恵袋はグリーン

ブルーのドイツがリーダーでレッドがイタリアで。まずはこの二人がいるのですが続いては日本です。いつも落ち着いて物静かな彼がグリーンになっています。

「頼りにしているよ、参謀」

「私が参謀ですか」

「うん。だからグリーンなんだよ」

イタリアは明るく日本に対して言います。

「大体参謀はブルーかグリーンじゃない」

「確かに」

その通りです。時々ピンクが参謀になっていたりしますが大抵はブルーかグリーンがそのポジションです。彼等の場合はブルーはリーダーなので流れ的に彼が参謀になってしまうのです。

「私になりますね。ドイツさんがリーダーですし」

「そうだよ。何かあった時は宜しくね」

「わかりました。それではその時は」

日本は礼儀正しくイタリアに対して答えます。こうして枢軸戦隊は参謀も決まりました。

ですが日本の特徴として基本的に無口でしかもこれといって前に出るタイプではありません。また何処か天然なのでそれが結果として中々作戦が出ないことにもなりました。

しかもその作戦が時々。ロシア以上に血も凍る恐ろしい作戦になってしまうのです。

「ここは特攻です！」

切羽詰った状況になったところで。日本はこう皆に主張します。

「爆弾を抱いて敵に飛び込みましょう！死なば諸共です！」

「そうですね、そうしましょう！」

しかもそれに日本が大好きな台湾が賛成します。
「まずは私達が行きます！ですから」
「皆さん続いて下さい！今こそ命を賭ける時です！」
「・・・・・・少し落ち着け」
リーダーのドイツがうんざりとした顔で日本と台湾を止めます。
「平山さんのプロデュースじゃないんだからな」
こんな参謀です。何気に一番危険なメンバーだったりするのですからバランスが非常に悪いことになっています。

第四百八十五話　　完

２００８・１１・３０

第四百八十六話　シンキングポーズは

第四百八十六話　シンキングポーズは危険な参謀日本。彼は考えるポーズはこの枢軸戦隊限定で実に独特のものがあります。その考えるポーズは何かといいますと。

「逆立ちして考えるんだな」

「そうなのです」

実際に逆立ちをした姿勢でドイツに答えます。中々見事な逆立ちで壁に寄りかかっています。

「こうして考えるといい案が浮かぶのです」

「・・・・・いい案か」

この前何とか必死で止めた特攻のことを思い出すドイツでした。あの後とりあえず助かった一同ですがあのまま日本の暴走を許せば今こうしてここにはいませんでした。最近ドイツも日本のそうした危険さに気付いてそのうえ振り回されているのです。

「まあ何か出ればいいな」

「はい。それでですね」

「何だ？出たのか」

そこにかなり不安なものを感じました。また特攻とか言い出しそうで。そのことに危険なものを感じていると。

「今度のライダーは鬼にしようと思います」

「何だ、それか」

とりあえず特攻だのそうした危険なことではないのでほっとしました。しかしここで安心するのはまだまだ日本のことをわかっていない証拠です。何故なら。

「プロデューサーはあのT氏にしようと思っているのですが」

「やっぱりそういう考えになるのか」

逆立ちをしたままクールに述べる日本の言葉を聞きつつ暗鬱とした顔になってしまいます。

「あの人は止めておけ」
「かなり優秀ですが」
「幾ら優秀でも予算も納期も他人のことも一切考えないコントロール不能な人間は。劇薬にしかならないぞ」
言いながら自分の上司も思い出すドイツでした。やっぱり参謀に問題があるのがこのチームのようです。困ったことであります。

第四百八十六話　　完

２００８・１１・３０

第四百八十七話　デカイエロ

第四百八十七話　デカイエロ

何か問題の多いのが二人もいて大変な男性陣ですが女性陣は充実しています。というかこのことにおいては一人しかいない連合戦隊を遥かに凌駕しています。

「やっぱりあれだよね。女の子が二人もいて嬉しいよ」

「あら、イタちゃんたら」

イタリアの言葉ににこにことしているのはハンガリーです。彼女がイエロー、黄色いミニスカートの制服が最高です。やはり女の子がいないとどうにもなりません。

彼女と台湾で黄色とピンク、この組み合わせこそが最強です。ハンガリーの人気も鰻登りです。

しかも強い。かなり強いです。馬に乗るのも上手いですしいざという時頼りになります。とりわけマスターであるオーストリアさんがピンチの時は獅子奮迅の働きを見せます。

「で、どうして俺のピンチには来ないんだ？」

「だって貴方のこと嫌いだから」

けれどプロイセンには厳しかったりします。仲間とは思っていないふしさえあります。

「それに貴方強いじゃない。一人でもいけるでしょ」

「じゃあ俺一人でこの前みたいにまたまた騙されてやって来る仮面ライダー二人相手にしろっていうのかよ」

「いいじゃない。今回だって三人来ているし」

「三人！？」

プロイセンがその言葉に首を傾げて後ろを振り向いていると。何を勘違いしたのかあのライダー三人が本当にそこに立っていました。

「オバエカワヅボドバ！（翻訳：御前か悪者は！）」

「ゴゴディア〝ッダガビャグベンベダ（翻訳：ここで会ったが百年

目だ）」
「オラクサムヲムッコロス！（翻訳：俺は貴様をぶっ殺す！）」
オンドゥル、ダディ、ムッコロ揃い踏みです。またまた何処かの誰かに騙されてプロイセンを悪い奴だと勘違いしているようです。どうも騙されることに関して学習能力がないようです。
「じゃあ頑張ってね」
「頑張ってねっておい！しかもこいつ等敵に回ったら普段よりさらに強いぞ！どうなってんだ！」
「だから何でこうも一癖あるのばかりなんだ」
プロイセンを助けに向かいながら頭を抱えるドイツでした。彼女は彼女でチームワークに偏りがあるようです。

第四百八十七話　　完

２００８・１２・１

第四百八十八話　実はそういうのが大好きだったり

第四百八十八話　実はそういうのが大好きだったり

ハンガリーと台湾でヒロイン二人なわけですが二人の美人度と連合戦隊にはないその仲のよさのおかげで。どうも二人のあれな漫画が日本のお家で大量に生まれてしまっています。

「申し訳ありません。どうも皆さん変なふうに影響されてしまって」

「所謂やおいというわけですか？」

「まあ今回は百合ですが」

ちょっと開けばハンガリーと台湾が二人であんなことやこんなことを。しかもそういう場合に限って絵がやたら上手いです。本職の漫画家さんが描いたイラストを元にしたフィギュアまで出てしまっています。まあこれは危なくはないのですけれど。

「ですが私の家ではこうしたものは。注意を呼び掛けることはできますが」

「いえ、いいですよ」

けれどハンガリーはにこりと笑ってそれはいいというのです。

「だって。私の家も」

「ハンガリーさんのお宅も？」

「実は。皆がこんなものを」

出してきたのは何と。やらないかな世界です。流石に布団を敷こう、な！はないようですが。とりあえずお好きな人にはたまらないですがそうでない人にはトラウマもののビデオがこれでもかです。見ればハンガリー顔がかなり紅潮してしまっています。

「作ってるんで」

「それでしたら私もですけれどね」

「そういえば日本さんのところもですね。お互い様ですね」

「そうなりますね。しかしそれにしても」

あらためてその漫画の中のハンガリーと台湾を見てみると。

「あのプロデューサーさんも狙っていたのでしょうか」
「そうじゃないんですか？かなりのヲタクさんですよね」
「そうらしいですね。あの人の先輩はアニメを罵倒していましたが」
漫画の中ではあまりにも激しいハンガリーでした。冗談抜きで台湾と。世の中困ったことを考える人もいるものであります。

第四百八十八話　　完

２００８・１２・１

第四百八十九話　ヒロインはピンク

第四百八十九話　ヒロインはピンク

五人目は台湾です。彼女はピンクの制服にやはりミニスカートです。本当に枢軸戦隊は女の子が二人もいてとても華やかになっています。

彼女は行動派です。芯が強く拳法もできます。おかげでハンガリー共々戦力としてかなり役に立っています。おまけに山岳地での動きもかなり速いです。

「うわ、凄いや」

勿論戦力としては一番頼りないイタリアは台湾のその動きにびっくりしています。

「うちの女の子って二人共凄いんだね」

「とりあえず御前は戦闘を何とかしてくれ」

ドイツはそればかりはどうしようもないことをイタリアに言います。

「全く。日本の作戦は危険だしこいつはこんなのだし」

男性陣にはすこぶる問題がありますがそれを女性陣がカバーしている形です。しかも台湾はただ強いだけではありません。色々な特技も持っています。

「手先、器用だな」

「日本さんに教えてもらいましたから」

機械も上手く扱うことができるのです。

「ですから」

「そうか。余計に頼りになるな」

「あと。料理も作っておきました」

そちらも万全でした。

「宜しければどうぞ」

「済まないな。それじゃあ」

「俺も料理は作ってるよ」
「私もです」
イタリアと日本もです。とりあえず美味しい食べ物には困らない枢軸戦隊です。何だかんだ言って枢軸戦隊は和気藹々とした感じになっています。この雰囲気のよさは連合戦隊にはないものでありました。

第四百八十九話　　完

２００８・１２・２

第四百九十話　お風呂大好き！？

第四百九十話　お風呂大好き！？

戦隊でピンクがメインヒロインなのはもう常識になっています。一人の場合は違っていたりしますが二人いる場合はまずピンクは絶対にいてメインになります。従ってこの枢軸戦隊も台湾がメインヒロインとなります。実際は台湾と同じ位ハンガリーにも人気が集まっていて相当凄いことになっていますが。

この戦隊のピンクの特徴は変装に早着替えです。そして大好きなものは。

「確かにお風呂は好きですけれど」

台湾もそれは認めます。

「けれど。こうしたお風呂は」

「ちょっと駄目なの？」

「はい」

台湾は今泡風呂に入っています。そこから顔だけ見せています。

「アメリカさんのお風呂じゃなくて。日本さんのお風呂が」

「やっぱり台湾は日本さんみたいね」

「ええ。けれど」

「どうしたの？」

「ハンガリーさんまでどうして」

何故か浴槽の中にハンガリーもいるのです。二人向かい合って泡風呂の仲にいるというわけです。

「お風呂の中におられるんですか？」

「だって。私達そういう関係ってよく描かれるから」

「そういう関係って」

「ファンサービスよ」

そういうことらしいです。確かに可愛い女の子二人の混浴というのは。一度あのそれが面白いんだからな脚本家がやったことですが

かなり刺激が強いです。
「そういうことだから気にしないでね」
「だったらいいですけれど」
内心はハンガリーが何かしそうで怖い台湾でした。彼女もハンガリーのお家は何で有名になっているのか知っているのでありました。
実は妖しいハンガリーです。

第四百九十話　完

２００８・１２・２

第四百九十一話　ホワイトは孤独です

第四百九十一話　ホワイトは孤独です

正規の五人の後は追加メンバーです。まずはホワイト、スウジクブレイクはプロイセンです。

「やっぱり俺がいなくちゃ枢軸は駄目だよな」

「貴方はいりません」

「おい、いきなり何なんだよ」

ハンガリーに面と向かって言われて早速喧嘩です。

「俺がいなくてどうするんだよ、一体」

「オーストリアさんもおられますから」

きつい顔でプロイセンを見ながらのハンガリーの言葉です。

「ですから貴方はいりません。帰って下さい」

「追加メンバーにそれかよ、ちょっと待てよ」

「イタちゃんもいますし日本さんもおられます」

人材はいるのです。それも円満な人格と言ってもいい人達が。

「台湾ちゃんもいますしリーダーはドイツさん。これだけいて貴方がいる理由はありませんから」

「そこまで言うか！？折角参加してやるのによ」

「どうしてもというのなら御一人でどうぞです」

遂には駄目出しです。完全に一方的に言われ一人残されたプロイセンにいつもの様にドイツがフォローに来て声をかけます。するとプロイセンはいつもより弱い声でドイツに対して尋ねてきました。

「御前はずっと俺の相棒でいてくれるよな」

「そのつもりだから安心しろ。一緒に戦うからな」

「済まねえな」

とりあえず相棒はいてくれたプロイセンでした。それでも人間関係のまずさが戦隊でも出てしまっていました。彼にとっては自業自得と言うには少し可哀想な状況です。

「とりあえず御前は六番目だからな」
「わかったよ、悪いな」
ドイツには結構素直なプロイセンでありました。

第四百九十一話　　完

２００８・１２・３

第四百九十二話　相棒と呼ぶのは本当は

第四百九十二話　相棒と呼ぶのは本当はこのチームではいつもプロイセンがドイツを相棒と呼びます。けれど本来は彼が相棒と呼ぶのではありませんでした。
「本当は俺がドイツを相棒って呼ぶんだよね」
「そうだ」
ドイツはイタリアのその問いに答えます。
「そして俺がいつも俺を相棒と呼ぶなと言うんだがな」
「けれどドイツそういうこと言わないしね」
「そういう言葉は好きじゃない」
自分に向けてくる好意は結構素直に受け取るドイツなのです。何しろ周りにフランスだのロシアだのスウェーデンだのがいて大変な今までででしたから。
「だからだ」
「だよね。じゃあプロイセンが相棒って呼ぶのもいいんだ」
「そうだ。一向に構わない」
やはりそうでした。
「御前が俺を相棒と呼ばないのはもうわかっていたしな」
「だってドイツはドイツだから」
極めて好意的にドイツに対して言います。
「相棒っていうよりはドイツっていつもみたいに言う方が自然だし」
「だからか」
「そうだよ。ほら、プロイセンが来たよ」
「よお、相棒」
そのプロイセンがドイツを相棒と呼びました。
「今日は二人でパトロールに行くか」
「ああ、そうだな」
ドイツも彼の言葉に頷きます。やっぱりこのチームでの相棒はこ

の二人なのでした。イタリアがその二人をにこにことしながら見ています。何だかんだで比較的和気藹々として温かいムードのいつもの枢軸戦隊なのでした。ハンガリーとプロイセンのそれを除いては。

第四百九十二話　　完

２００８・１２・３

第四百九十三話　ノーブルマスター

第四百九十三話　ノーブルマスター

とりあえずプロイセンを含めた六人がメンバーの枢軸戦隊ですがここにもう一人加わります。正規メンバーとは少し違いますが所謂皆のまとめ役みたいなものです。

所謂スウジクマスターですがこれはオーストリアさんがなっています。ところがオーストリアさんがマスターをしていることはどうも戦隊の中でも賛否両論だったりします。

まずは賛成派です。

「オーストリアさんが俺達のボスなんだ。宜しくね」

「また一緒に頑張りましょう。期待していますね」

イタリアとハンガリーです。二人はオーストリアさんとはお付き合いが長くしかも友好的なのでオーストリアさんがメンバーにいて大喜びです。次に中立派です。

「私は別にそれでいいと思います」

「私もです」

日本と台湾の太平洋組はこんな感じです。二人もオーストリアさんには悪い感情は一切ないのでオーストリアさんがいてくれても構わないです。どちらかといえば賛成派に近いです。

問題はこの二人です。そもそもあのとてつもなくおっかない上司に無理矢理命じられて自分達の家に入れることになったドイツとプロイセンです。この二人、特にプロイセンはこのことでいつも不平たらたらで相棒のドイツに対して言うのでした。

「俺がブレイクなのはいいけれど何であいつまでいるんだよ」

「たまたまマスターが空いていたししかも俺達の家にいたからだ」

「すっげえ嫌なんだけれどよ」

他のメンバーに言っても聞いてくれないのでドイツに対して言うのです。

「あいつが一緒なのはよ」
「我慢しろ」
リーダーとしてというより相棒としての言葉になっています。
「俺も凄く心配なんだからな
「我慢できなかったらどうなるんだよ」
「収容所だ」
「・・・・・・わかったぜ」
さしものプロイセンも上司には逆らえません。どうやら一番危険なのは二人の上司のようです。

第四百九十三話　　完

２００８・１２・４

第四百九十四話　戦うわけではないですが

第四百九十四話　戦うわけではないですが

そもそもマスターはボスなので前線に出ることはあまりありません。もっともオーストリアさんは戦うことはあまり得意ではない人ですが。それでもオーストリアさんはこのチームに欠かせないメンバーになっています。それは何故かというと。

「お茶が入りましたよ」

こう言って皆を呼びます。

「さあ召し上がりなさい」

「うわあ、今日も凄いや」

「そうですね。手が込んでいますね」

イタリアとハンガリーがまずオーストリアさんのお菓子を見て言います。オーストリアさんはそのコーヒーと料理、とりわけお菓子で皆の士気をあげているのです。これは非常に大きいです。

「物凄く美味しいし」

「今日も有り難うございます」

「礼には及びません」

二人の言葉を受けながら破れた服を縫っています。

「私はできることをしているだけですから」

「しかしだ」

けれどドイツがここでそのオーストリアさんに対して言うのでした。

「幾ら何でも戦闘で破れた制服は縫わずに捨てるべきだと思うが」

「何を言っているのですかお馬鹿さん」

早速オーストリアさんはドイツを叱ります。

「こうしたことをちゃんとしないとお金は幾らあっても足りませんよ」

「その食材へのよりによってまさかの復活をするあのプロデューサ

ー並に使っても言うのか」
「いいじゃないですか。そういうのが面白いんですよ」
何故かあの脚本家になっているオーストリアさんでした。けれどオーストリアさんもオーストリアさんで皆の役には立っているのでした。しかも今縫っているのはドイツの制服だったりするのでした。

第四百九十四話　　完

２００８・１２・４

第四百九十五話　連合と枢軸で

第四百九十五話　連合と枢軸で

こうして見事七人揃った枢軸戦隊。丁度七人いる連合戦隊とはライバル関係にあると言っていいです。それで顔を合わせたら結構いがみ合ったりもします。

「枢軸戦隊なんか相手じゃないんだぜ！この俺がやっつけてやるんだぜ！」

「だから御前本当は向こうじゃないのか？」

「日本にいたんだろう？あの時」

また韓国にイギリスとフランスが突っ込みを入れます。相変わらずゴールドがおかしいです。

「まあいい。それにしてもだ」

「御前等には負けないからな」

「負けないと言われてもだ」

イギリスとフランスに言われましたがドイツはどうにも微妙な顔をしています。

「相手が相手だからそんなに張り合うこともないと思うが」

「そうだよね。何せメインの仕事がお掃除なんだし」

イタリアがドイツの横で能天気に言います。

「それで何で張り合うのかな」

「いいじゃねえかよ。そっちはヒロインもう一人いるんだろ？」

「二人だったか？」

「三人だったか」

ドイツが少し考えてから連合戦隊に答えます。

「ゲストのあの薔薇のタトゥの女と映画も入れると」

「こっちはメンバーの都合上で一人なんだよね」

「しかも敵がかなりお笑いに走ってるある」

「それはそちらのプロデューサーさんの影響では？」

日本がアメリカと中国に突っ込みを入れます。
「あの人の悪役はいつもどんどん陽性になりますし」
「とにかく。ウリだけじゃ寂しいものがあるニダ」
「何かその辺りは羨ましいよね。何とかならないのかな」
韓国妹とロシアも言います。少なくとも女の子では枢軸戦隊が圧勝しているのでありました。

第四百九十五話　　完

２００８・１２・５

第四百九十六話　後の三人ですが

第四百九十六話　後の三人ですが

ドイツが言うには何とまだ三人もヒロインがいるという枢軸戦隊。
華やかにも限度がありますがそれは果たして誰なのでしょうか。
「まず科学者がこいつでな」
「どうもです」
何とドイツ妹です。生真面目な動作で頷いています。
「そしてあの薔薇のタトゥの女は」
「あれっ、そんなに女の子いましたか？」
台湾がふとそのことに気付きました。
「いなかった筈ですけれど。女の子達は女の子達で戦隊作っていませんでしたっけ」
「確かアメリカ妹がレッド、中国妹がブルー、日本妹がピンク、フランス妹がイエロー、イギリス妹がグリーン、ロシア妹がシャインだったっけ」
「無理矢理スイス君とリヒテンシュタインちゃんをご両親役にしたのよね」
イタリアとハンガリーも言います。
「ですからそんなにおられないのでは？」
「イタリアの家の姉妹はラテンメンバーになったしな」
プロイセンもそれを思い出しました。
「じゃあ後の二人は一体？」
「誰なんでしょうか」
ここで大きな謎が出て来たのでした。
「そもそもゲストだったではないですか」
オーストリアさんも言います。
「特にいないのでは？特に薔薇の方は一度亡くなられていますよ」
「それはライダーですけれど」

日本がオーストリアさんに突っ込みを入れます。
「しかし本当に一体」
「誰なんだろう」
大きな謎が生まれました。後の二人は果たして誰なのか。そもそも宇宙規模の戦隊というのも凄い話です。

第四百九十六話　　完

２００８・１２・５

第四百九十七話　まずは一人目です

第四百九十七話　まずは一人目です

とにかく誰なのかメンバーすら知らないその残る二人のヒロイン。まずそれが誰なのか考えたプロイセンはこんなことを言い出しました。

「御前の上司じゃねえのか？」

「私のですか」

「そうだよ。御前の上司のマリア＝テレジア陛下じゃねえのか？」

こうオーストリアさんに尋ねるのでした。

「何とかマザーって感じでよ」

「それは魔法の方ではないですか？」

「あっ、そうか」

「はい。他にもヘドリアン女王やベルバラも演じておられましたね」

「名優だったよなあ」

そんな話になりました。どうもこの人ではありませんでした。

しかしプロイセンはここで思い出したのです。その人が誰かというと。あの伝説のヒロインなのでした。

「ワルキューレだよ、ワルキューレ」

「あの人か」

ドイツもその人が誰かわかったのです。プロイセンを強くさせたその人です。あのかつてドイツの上司がひたすら恋焦がれたワーグナーもヒロインにしたあの戦乙女なのでした。これは凄い。

しかしプロイセンは一人がその人だとわかると。急にしおれてしまいこんなことを言い出しました。

「やっぱり。会わないでおこうな」

「しごかれるからか」

「それがまた半端じゃねえんだよ」

こう言って逃れるプロイセンでした。彼にも怖い人がいるのでし

た。

第四百九十七話　完

2008・12・6

第四百九十八話　そして最後の一人です

第四百九十八話　そして最後の一人です

こうしてまずは一人わかりました。最後の一人は黄金になっています。ですが間違っても韓国でないことは確かです。

「ゴールドは俺しかいない筈なんだぜ」

「だから御前は黙ってろつってんだろ」

「いい加減人の話を聞けよ」

イギリスとフランスのうんざりした突込みがまた入ります。彼は自分以外に金色がいることをあまりというかさっぱり理解していないのです。

とりあえず韓国の話は置いておいて枢軸戦隊の最後の一人です。まずブレイクことプロイセンの上司の一人であるということがわかりました。そしてその最後のメンバーですが。

「はい、この方でした」

「そうか、日本のだったか」

「そうです。今御本人が名乗られました」

こう言って出て来たのは日本のお家の人でした。何と。この世界にも出て来たのでありました。

「実は私だったのよ。意外だったでしょ」

尾張美弥子さんでした。ある意味似合っているかも知れません。ですが彼女を見てドイツはどうにも釈然としないものを感じていました。

「確かよその学校の生徒会長じゃなかったか？」

「そんなの気にしたら負けよ。一応皆この学校にいるんだからね」

「・・・・・道理で太平洋のメンバーが異常に多いわけだ」

そのことについても納得するドイツでした。何はともあれ最後の一人もわかったのでした。

「後はイラスト描く人もいますしね」

「あのプロデューサーのその手の速さは全然期待できないぞ」
「折角上手いのに残念ですね」
「俺達の戦隊に至っては描くことすらなかったしな」
最後はその話になるのでした。とりあえずキタコーのメンバーまでいることがわかったのでした。本当にどんな学校なのでしょうか。

第四百九十八話　　完

２００８・１２・６

第四百九十九話　やっぱり兄貴は兄貴　☆

第四百九十九話　やっぱり兄貴は兄貴

イタリア兄がイギリスとの戦いの前に弟に対して話しています。心なし偉そうであります。

「よし、馬鹿弟」

いきなりこんなことを言ってから話に入ります。

「これから対イギリス作戦を御前に伝える」

「はい、兄ちゃん」

けれどイタリアはそんな兄の話を素直に聞きます。何故か彼は平気なのです。

そしてその作戦とは。これがまた実にイタリアでした。

「敵に会ったら真っ先に戦う意志がないことを示せ」

やはりこれです。はっきり言ってイタリアと全く同じです。

「そうすれば撃った奴等が悪役だからな」

「そうなんだ」

「その通りだ。以上だ」

本当にこんなことを言うのでした。ドイツが呆れるのも無理はありません。けれどここでイタリアは二人の側に置かれている装甲車のことを言います。

「ねえねえ兄ちゃん、これ何に使うの？」

戦う為のものですから戦わないと意味がないものなので。無意味に威圧感だけはそこそこありますけれど。

「あーー、それはだな」

イタリア兄が少し困った顔で説明しようとするとそこに。報告が入りました。

「イギリス軍来ました！」

それを聞いたイタリア兄の行動の早いこと早いこと。瞬く間にその装甲車に乗って逃走です。勿論イタリアを置いて。

「兄ちゃーーーーーーーーーーん！」
こういう時の為に使うのでした。やっぱりイタリア兄はイタリアの兄なのでした。

第四百九十九話　　完

２００８・１２・７

第五百話　そのフォローはいつも彼です

第五百話　そのフォローはいつも彼です

戦場からは全力で逃げるまさにヘタレのイタリア兄弟。そしてそのフォローをするのはいつもこの人です。完全に予定調和です。

「東のことは一時プロイセンに任せてアフリカに行って来い」

「またですか」

「気にするな」

ドイツ人らしく何故かイタリアが好きな上司に言われてのことです。幾ら助けても変わらない気もするのですがそれでも助けに行かされるドイツでした。おまけに見送るプロイセンもオーストリアもイタリアには優しいので。何でいつもこうなるんだとか思いながらもアフリカに行くと。何とその二人がいないのでした。

「まさかアフリカから逃げ出したのか？二人共」

充分考えられることだったのでその可能性を疑っていると。そこにイタリア兵達が来てドイツに言うのでした。

「あっ、ドイツさん。御二人ですけれど」

「ああ。何処にいるんだ？」

「捕まりました」

いきなりこれです。

「御二人共。イギリス軍に」

「ちょっと待て」

流石にこれは今は予想していませんでした。話を聞いて顔を曇らせるドイツでした。

「本当に二人共か」

「どうしましょうか」

「どうしたもこうしたもない」

呆れながらイタリア兵に答えるドイツでした。

「早く二人を助けに行くぞ」
「は、はい」
「全く。姿を見ないと思えば」
捕まっているのでした。幾ら何でもあんまりです。
「こんなことか。どうしたものか」
その翌日には話を聞いたドイツの上司から万難を排してイタリア兄弟を救出しろとの達しがありました。この上司はどうしてここまでイタリアを助けてドイツも幾ら上司の命令とはいえイタリアを助け続けるのでしょうか。何はともあれ結構友人には恵まれているイタリアではあります。

第五百話　　完

２００８・１２・７

第五百一話　イギリスへの疑惑　☆

第五百一話　　イギリスへの疑惑

見事に捕まってしまったイタリア。それで捕虜としてとりあえず牢に入れられてみると。そこで兄弟の感動のご対面となったのでした。

「あれっ、兄ちゃんどうして先に捕まってるの？」

「五月蝿い！御前があの時止めなかったせいだ！」

いきなり弟のせいにしています。八つ当たりです。

「全部御前のせいだ！」

「何でそうなるの？」

「理由はどうでもいい！」

こう叫んで弟に八つ当たりを続けます。するとあまりにも五月蝿いのでイギリスが注意しに来ました。

「御前等五月蝿いぞ。少し静かにしろ」

「すいませんイギリス様！」

「様！？」

兄がイギリスを様付けなのでまず驚くイタリアです。

「こいつが一人で騒いでいたんです！」

しかもまた弟のせいにしています。実に駄目兄ちゃんであります。その駄目兄ちゃんはイギリスに対して平謝りに謝りながら御願いするのでした。

「本当に御免なさい。だから昨日みたいな食事はもう止めて下さい」

「いや、あれは俺が普通に」

「ちょっと待ってよイギリス！」

イタリアは兄がいじめられていると思ってイギリスに抗議しました。

「兄ちゃんいじめるの駄目だよ！」

「弟、御前って奴は・・・・・・」

「だから昨日のは俺が普通に」
兄弟の感動の和解となったわけですがどうもイギリスにとっては腑に落ちないどころではありませんでした。彼は別にイタリア兄をいじめたつもりはなくただ普通に自分が作った御飯をあげただけでしたから。それで言われるイギリスなのでした。

第五百一話　　完

２００８・１２・８

第五百二話　そのイタリアの食事は

第五百二話　そのイタリアの食事は

もう完全に駄目出しをされてしまったイギリスの食事。毎度のことですがあまりにも落ち込んでしまった彼はふと思い立ったのでした。

「そんなに言うんならな」

思い立ったらすぐに動きます。イタリア兄弟に対して言うのでした。

「ちょっと御前等の戦場での料理作ってくれないか？」

「うん、いいよ」

「じゃあちょっと待ってろ」

幸い材料はありましたので早速作らせました。すると出て来たのは。

「・・・・・おい、ちょっと待て」

まずはパスタ、野菜料理が出て来て魚に肉料理。しかも食後の果物にワインまで出て来ます。いきなり信じられない種類と量です。

しかも味も。イギリスが食べるものと比べるともう月とスッポンです。イギリスも食べてみて唖然です。何もかもが彼の上をいっていましたから。

このことに驚きを隠せないイギリス。けれどここでイタリアが言うのでした。

「あっ、御免」

「どうしたんだ？」

「これ普通に粗末なコースだったよ」

「俺達は普段はもっと派手なコース食ってるよな」

「そうだよね。間違えたよ」

「これで粗末なのか！？」

驚くイギリスに対して二人はさらに言います。

「だから。明日は普通のコースにするから」
「悪いな」
「何て奴等だ・・・・・・」
話を聞いて驚くことしきりです。二人の食事は彼のそれを遥かに凌駕していたのでした。

第五百二話　　完

２００８・１２・８

第五百三話　助けを呼んでも　☆

第五百三話　助けを呼んでも

とにかく捕虜になってしまっているイタリア兄弟。イタリア兄は仕方なくスペインを助けに呼びます。捕虜の場所に電話を置くイギリスは何を考えているんでしょうか。

「おいこらスペイン、捕まっちゃったぞ！」

自分が悪いのは棚にあげています。しかも見張りは弟にさせています。どうにもこうにも弟に対して冷たいのは相変わらずのようです。困ったことです。

「助けに来いこの野郎！」

「悪い、俺無理やわ」

「ふざけんな！」

弱々しい声のスペインに対して怒鳴ります。

「スペイン内戦忘れやがって！」

「兄ちゃん声大きいよ！」

怒鳴る兄を驚いて注意するイタリアです。実はスペインで内戦が起こった時にイタリア兄弟はドイツと一緒にスペインを助けたのです。その時向こうにロシアがいたり上司がゲルニカでやらかしたりもしています。

「見つかっちゃうよ！」

「ロマーノ、ホンマにすまん」

スペインも心から謝罪します。

「けれどな、俺」

「何だよ」

「あと五百本薔薇作らなあかんから」

「薔薇！？何で薔薇なんだよ」

「内職やわかってくれや」

「・・・・・ああ、よくわかったよ」

流石にイタリア兄もこれ以上は言えなくなりました。そんなスペインの横では彼の上司が怖い顔をしています。スペインも大変だったのです。

第五百三話　　完

２００８・１２・９

第五百四話　イギリスも何とかしたいのです

第五百四話　イギリスも何とかしたいのです

イタリア兄にその料理を駄目出しされてしまったイギリス。彼は彼なりに料理を作るのが好きですからかなりショックでした。皆から色々言われているその料理の腕ですがそれでも言われるのはやっぱりショックなのです。それで悪友であり料理ならお手のもののフランスに対して電話で連絡します。

「ああ、生きてるよな」

「何とかな」

ドイツにこてんぱんにやられてしまいましたがそれでもフランスは生きていました。最近どうもその勝率がマモノに取り憑かれたようになっていますがそれでも生きてはいます。

「ならいい。ちょっと頼みたいことがあるんだけれどな」

「何だよ、一体」

「御前のとこのコックかしてくれないか？」

「俺のところのか？」

「ああ、何だったら御前自身が来てくれてもいいんだ」

かなり切実な声で彼に頼みます。

「どうだ？アフリカに。あまり戦わなくていいからな」

「断る」

けれどフランスは強い言葉でこうイギリスに返すのでした。

「絶対に貸さないし俺も行かないからな」

「何でだよ、こっちいるのはアメリカだけだし中国は日本にかかりっきりだしロシアとはあれだしよ。御前しかいねえんだぞ、今は」

「味音痴うつされたら嫌だ」

「何ィ！？味音痴！？俺がかよ」

「どうせイタリア兄弟でも捕虜にしたんだろ」

「ああ」
実は既に見抜いていたフランスでした。
「勝手に自分達で作らせとけ。じゃあな」
ここまで言って一方的に電話を切ったフランスでした。一人残されたイギリスはうんざりとした顔になって。
「何でいつもこうなるんだよ・・・・・・」
この台詞でした。とかく料理の運には見放されてしまっている彼なのでした。

第五百四話　　完

２００８・１２・９

第五百五話　イタリアの一日

第五百五話　イタリアの一日

気がついたらドイツにいつものように助けてもらっていたイタリア兄弟。これでまた晴れて戦いの日々となりました。

ところが。朝イタリアが中々起きてきません。九時になってようやくテントから出て来た程です。

それから一時間程何かあれこれ朝御飯をしっかり食べて顔を洗って歯を磨いて。それから一時間お茶とお菓子を楽しんで過ごします。

「もう十一時なんだが」

「ああ、そろそろはじめるよ」

あまりにも何もしないので心配になって声をかけてきたドイツに明るく応えます。

「さてと、準備をして」

「普通は昨日のうちにしないか？」

何はともあれその準備です。けれどそれも一時間で途中であっても終わって。もうお昼なのでイタリアらしくパスタやチーズがふんだんにある食事を楽しみます。勿論ワインもあります。

それが終わったらシェスタです。二時間は寝てからまたお茶の時間です。あっという間に四時になっています。そろそろ夕方です。

「今日は色々あったね」

「何もなかったんだが」

ドイツは呆れながらイタリアに対して言います。

「今戦争なんだぞ。それで御前は一体何を」

「あっ、晩御飯の時間だ」

今度は晩御飯です。お昼よりも豪勢なディナーを楽しんで後は歯を磨いて寝るだけです。ところがイタリアはここからが本番でした。

「じゃあちょっと街まで行ってここの女の子達とお話して来るから」

「だから御前は戦いに来ているんだぞ」

ドイツは呆れ果てながらもイタリアに言います。
「本当に何をやっているんだ」
「まあまあ」
「まあまあじゃない」
これがイタリアの一日でした。本当に見事なまでに戦ってはいないのでありました。

第五百五話　　完

２００８・１２・１０

第五百六話　それにひきかえ日本は

第五百六話　それにひきかえ日本は

「総員起こし五分前」

まずはこの声がかかります。皆それぞれの寝床の中で身構えます。

そして五分後起床ラッパが鳴り響きます。皆それで一斉に寝床から飛び起きます。

すぐに着替えて飛び出て。整列もあっという間に済ませます。

「番号！」

「一！」

「二！」

「三！」

きびきびとした動作で顔を左に向けつつ述べていって。まずは人員点呼でした。それが終わってから掃除等をして一日がはじまります。これが日本の軍隊でした。

「ふむ、凄いものだな」

ドイツは最初からキビキビとして規律正しい日本の家の軍隊を見て感心しています。

「俺の家も凄いが日本の家もな。食事も早いし八時には国旗掲揚も終わりか」

「これが普通なのでは？」

日本は真面目にドイツに返します。

「やはり。軍隊なのですから」

当然その日にすることは前日に準備しています。あらゆることへの手入れや配慮は欠かしていません。まさに寸分の隙もない、日本の性格が実によく出ています。

「これ位のことは」

「確かにそうなんだがな」

ドイツも日本のその言葉に頷きます。

「ところがな。これがだ」
「これが？」
「あいつはな。違っていてな」
イタリアの能天気な顔が脳裏に浮かびます。
「困ったことにな。おかげで俺も悩みが尽きない」
「イタリア君のことですね」
「その通りだ」
日本の見事な規律を見ても嘆息するしかないドイツでした。とにかくイタリアのそのいい加減さを何とかしたくて仕方のないドイツなのでした。

第五百六話　　完

２００８・１２・１０

第五百七話　それで一緒にさせてみました

第五百七話　それで一緒にさせてみました

イタリアのいい加減さと日本の几帳面さを同時に見たドイツ。ここで彼はあることを思いついたのでした。

「そうだな。やってみるか」

こう言ってイタリアを日本のところに預けてみることにしたのです。預ける先はあの海軍です。日本においてもとりわけ規律厳格なことで知られています。そこでイタリアに几帳面さを身に着けてもらいついでにヘタレさをなおしてもらおうと思ったのです。何気に凄い野心的です。

こうして日本のところに入ったイタリア。お兄さんも一緒ですがここで。

「あっ、この食器借りるね」

「このナイフはかなりいいな」

いきなり二人は日本が出した食器を平気で持って行きます。しかもこれに終わりませんでした。

「六時になんて起きられないよ」

「飯は美味くていいが女の子は何処なんだ？」

海軍の人達もびっくりです。何と彼等の規律を全く無視して呑気なことをしだしているのです。しかも御飯を食べたらあとは寝てしかも女の子を探し回ってです。芸者を口説くのも忘れません。

日本はおおよそ予想していましたから特に驚いてはいません。けれどドイツに対してはこう言うのでした。

「私のところではちょっと」

「そうか、駄目だったか」

「上司の一人がこんな連中と一緒に戦うのかと泣いておられました」

「気持ちはよくわかる」

日本はまだいいです。同じ戦場にはならないですから。けれどド

イツは。
「だから俺も大変なんだ」
「ドイツさんの苦労が少しわかった気がします」
「じゃあこっちで引き取るからな」
「御願いします」
結局日本のところでも相変わらずなイタリアなのでした。砂漠でも海でも彼は彼なのです。

第五百七話　　完

２００８・１２・１１

第五百八話　イタリアはいないけれど

第五百八話

イタリアはいないけれど
確かに日本にはイタリアが側にはいません。けれど彼がいるのでした。
「俺がアジアのエースなんだぜ」
韓国です。彼はこの時日本の家にいました。今はいなかったとか言っていますがこれは彼以外の誰もが証言していますので本当のことです。それでこの時彼は日本の家の上司にかなり可愛がられていたのです。
学校の勉強もいつも教えて文房具も服も奇麗なものばかりです。汚かったお家や部屋も奇麗になって尚且つ日本と同じ待遇で植民地扱いもされていませんでした。ですから当然軍にもいたのですが。
「これがまたあれでして」
「全然駄目なのか」
「唐辛子がないとそもそも動きません」
ドイツにこのことを言います。
「動いても前線では逃げ出しますし後方ではいらんことをしますし」
「イタリアみたいなものか」
「しかもいつも根拠のない自信を持っています」
やはりここが韓国です。
「上司の方々はとかく目をかけているのですが」
「俺の家と同じか」
ドイツの上司がこれまたイタリア大好きなのでそのせいだったのです。
「全く。困ったことだな」
「どうにかならないのでしょうか」
「それは俺も同じことを言いたい」

ドイツも同じでした。
「あいつがしっかりしてくれればな。いいんだが」
「私は台湾さんもいてくれていますが」
それでもその台湾には何故かちょっと冷たいのが日本の上司なのでした。この辺りの理屈がどうしてもわからない日本でありました。

第五百八話　　完

２００８・１２・１１

第五百九話　それでもやっていけていたのは

第五百九話　それでもやっていけていたのは

とにかくイタリア兄弟という壮絶なあれが一緒にいてもドイツは強いのでした。彼自身がかなりのものなのと頼りになる相棒がいてくれたからです。その相棒とはやはり彼でした。

「相棒、東はとりあえず俺に任せておけ」

「済まんな」

「ポーランド、フランスに続いてロシアか。腕が鳴るぜ」

プロイセンです。とにかく腕っぷしと策略なら彼に勝る者は欧州にもそうはいません。ドイツの家が強いのは彼とこの相棒が一緒にいるからです。そのおかげでこの前の戦争も負けはしましたがドイツの家には一兵も入れませんでしたし今度の戦争でも破竹の勢いです。まさに最高のパートナーです。

それにハンガリーとフィンランドもいました。二人共その大人しい外見からは想像もできない程強いです。オーストリアさんはあまり動いてはくれませんがこの二人の存在も頼りになっていました。

「それじゃあドイツさん、こっちは」

「私達にやらせて下さい！」

「本当に頼りになるな」

ドイツも二人の頑張りに感謝しています。何気に周りに頼りになる人が多いドイツなのでした。

ところが。上司は相変わらず。

「イタリアに助けに行け」

「やはりイタリアは外せないな」

こう言うのでした。大好物のスパゲティを食べながら。なおこのスパゲティにはラードもシーフードも一切使っておらず完全に菜食となっています。

とにかくイタリアばかり気にかけている上司です。そしてドイツもまた。

「仕方のない奴だ」

何だかんだ言ってイタリアを助けるのです。それがどうしてかというとずっと昔からなのです。どうしてもイタリアをまず助けに行くドイツなのでした。

第五百九話　　完

２００８・１２・１２

第五百十話　日本にはこの人がいてくれました

第五百十話　日本にはこの人がいてくれました

こうして何だかんだと頼りになる人に恵まれているドイツ。けれどこの時の日本はというと。一応タイやインドネシアやインドが味方になってはくれましたが実際のところつながりはあまり強いものではありませんでした。しかも戦力として頼りになるのは台湾だけだったのです。その彼女の起用も上司が。

「やっぱり韓国を中心に使いたいな」

やっぱり韓国を贔屓するのです。とりわけ陸の人達が。そのせいで彼女は冷遇されていました。

「それでもいいんですよ」

「宜しいのですか？」

「はい、今の私があるのは日本さんと日本さんのお家の方々のおかげですから」

笑顔でこう言うのです。

「ですから。頑張ります」

「御願いしますね。私も頑張りますが」

「何なら日本さんの分も頑張りますから」

その笑顔で述べてどんな山道も乗り越えて食べ物を調達したり道を開いてくれます。そうして日本の進撃も撤退も助けてくれるのでした。

けれど指揮をするのは彼女ではなくあくまで下っ端扱いです。それでも彼女は本当に頑張ってくれています。

「そこまでされなくても」

「ですから。いいんですよ」

どんなに苦しくても笑顔を忘れません。

「私は日本さんの家にいますから」

「台湾さん・・・・・・」
「この戦い、日本さんに傷つけさせません」
どれだけ辛い状況でも日本を庇ってくれました。
「ですから。勝ちましょう」
「はい、絶対に」
日本は二人でどんな辛い戦場も戦いました。台湾と二人で。あの戦争で今はあまり誰も知らなくなった二人の絆でもあるお話です。

第五百十話　　完

２００８・１２・１２

第五百十一話　戦場ではあれなのに

第五百十一話　戦場ではあれなのに

日本のところには韓国もいました。ところが彼は戦場以外では威勢はいいのですが肝心の戦場ではからっきしなのです。

ピンチになると銃を投げ捨てて泣き叫びます。はっきり言ってイタリアよりあれです。身体は大きいのに意外と弱いのです。

そんな彼ですが何故か日本の上司は彼を大事にしています。それで戦場にもいるのですが全く役に立っていません。そんな彼ですが確かに筋肉質で強そうなのは強そうなのです。

「外見はいいのですがね」

日本もとりあえず背が高くて体格にも恵まれている韓国についてはこれだけは認めます。

「ですが。どうしたものでしょうか」

その激烈な弱さに困っているとある日。変な連中に韓国妹が絡まれていました。

「ああ、そうしたことはちょっと」

日本が行ってその変な連中を止めようとしたらそれより先にかっ飛んで来た人がいました。

そうしてその連中を瞬く間に叩きのめしてしまったのです。その人とは。

「俺の妹に手を出す奴は誰であろうが許さないだぜ」

韓国でした。戦場でのあれっぷりからは想像もできない勇敢さと強さを見せていました。

「秀美、大丈夫かなんだぜ」

「オッパ、ウリは大丈夫ニダ」

「それはよかったんだぜ。俺は御前の為なら何でもするんだぜ」

はっきり言って強いです。本当に。戦場とは完全に別人です。

「そういうことなのですか」

日本は遠くから韓国のその活躍を見て納得しました。
「韓国さんはこういう時に強いんですね」
「秀美の為に俺は頑張るんだぜ」
「オッパ、格好いいニダ」
けれど戦場では本当にあれなので。どうもイタリアに似ているところもある韓国なのでした。

第五百十一話　　完

２００８・１２・１３

第五百十二話　人材豊富でしょうか

第五百十二話　人材豊富でしょうか

今では日本の家には韓国も台湾もいません。けれどそれでも相変わらず賑やかです。しかも個性的な顔触れがズラリと揃っています。

「そういえば貴女もでしたね」

「そうよ。皆もいるから」

尾張もいます。そしてどうやら他の皆もいるようです。他の家に比べるとあまり広くはないのですがこれで結構人は多いのです。

そしてそのうえ。こんな人達もいます。

「ウゾダドンドコドーーーン！（翻訳：嘘だそんなこと！）」

「これ食っていいかな」

こんなことを叫びながらイタリアが作ったスパゲティを暴食している二人の仮面ライダーもいます。いつも二人で騙されて騒動を大きくするうえに敵に回った時に異常に強くなるわ四人になったらそれがさらに二乗されるわ所長は殆どいないのに火種を置いていって謝罪もしないので家の人達はあてにしていない正義の味方ですがそれでもいます。とりあえず日本発祥のお騒がせ人物になっています。

そしてこの人も。あの脚本家です。

「おい日本、河豚食いに行くぞ」

「河豚ですか」

「そうだよ。やっぱりこの季節は河豚だよ」

何故か工事現場でアルバイトをしていてその帰りに日本を誘うのです。

「何なら俺が作るか？河豚鍋にてっちりよお」

「そこまではいいですが」

「遠慮するなよ。御前は俺達の国家なんだからな」

何だかんだでフレンドリーに日本に対して言います。

「こだわりだの遠慮だのは人付き合いをつまらなくする縛りなんだ

よ。俺がいいって言ったらいいんだよ」
「そういうものですか」
「おうよ。わかったら行くぜ」
「わかりました」
他にも色々な人がいます。本当に何かと個性的な顔触れが揃っている日本の家であります。

第五百十二話　　完

２００８・１２・１３

第五百十三話　日本へ行く前に　☆

第五百十三話　日本へ行く前に

少しばかり前のお話です。アメリカがその時の彼の上司に声をかけられました。

「アメリカ、御前ちょっと日本に行ってくれないか？」

「何でまた日本なんだい？」

「この近辺での捕鯨量が年々減り続けているのだ」

「アメリカのだよな」

「そうだ」

当時はアメリカも鯨を捕っていたのでした。意外な事実でしょうか。

「これが由々しき問題だ。だから日本に開国及び近海での捕鯨許可を求める」

「ええと、つまり」

上司もかなり難しい言葉を使っているのでアメリカも少し戸惑っています。とりあえずメモ帳を開いて再び上司に尋ねます。

「もうちょっと簡単に言うと？」

「そうだな、まあ」

ここで上司は本当に簡単に言いました。

「敵等の友達になって来い」

「とりあえずわかったぞ」

こうしてアメリカは海にめがけて叫びはじめました。

「君が好きだーーー、だから顔を見せてくれよーーーー」

「ど、どうしたアメリカ！？」

イギリスはそんなアメリカを見てびっくりして声をかけます。

「遂におかしくなったのか！？」

「ああ、今鯨と友達になる練習してるんだよ」

けれど当のアメリカはあっけらかんと答えます。日本と友達にな

る前にまずは、なのでした。どうにもこうにもそのベクトルがとてつもない方向に行ってしまっているのですけれど。

第五百十三話　　完

２００８・１２・１４

第五百十四話　鯨も色々です

第五百十四話　鯨も色々です

アメリカは鯨と友達になろうとしていますがこの鯨にしろ色々な種類がいます。お魚を食べるものもいればプランクトンを食べるものもいます。大きさも小さいものもいればそれこそ船よりも大きいものもいます。本当に色々な鯨がいるのです。その中でも最も凄いのは。

「あれは海の王者だ」

片足の船長さんがアメリカに対して説明します。

「白く巨大な鯨だ」

「白く巨大な鯨だって！？」

「そう、モビーディック」

随分と禍々しい名前です。

「まさに不死身だ。あれこそ海の王者だ」

「凄いな、海にはそんなのがいるのか」

「わしの永遠の仇敵だ」

船長さんは苦々しい声で言います。

「この片足を奪ったな」

「そいつは今何処にいるんだい？」

「海だ」

なお真面目に答えています。

「海にいるのだ。あれは」

「この大海原にそんなに凄いのがいるのか」

結構単純なところもあるアメリカはこれで納得しました。

「海って本当に凄いんだな」

「海こそまさに世界そのものだ」

船長さんはアメリカに対してこうも言いました。

「男のロマンがそこにある」

「よし、それなら僕も」
アメリカはその大海原を見て意を決しました。
「日本と友達になって。白鯨をやっつけてやるんだ」
何故か白鯨にまで話が及びます。何はともあれアメリカと日本の出会いの時が近付いているのでした。ただそれがどういった結果になるのかはアメリカは考えていませんでした。日本に至っては当時はアメリカという国の存在さえ知らない有様なのでした。

第五百十四話　　完

２００８・１２・１４

第五百十五話　何故鯨だったかというと

第五百十五話　何故鯨だったかというと

アメリカは鯨の為に日本に行くことになりましたがそもそもどうして鯨が必要だったかというとこれは食べる為ではありません。アメリカは昔から鯨は食べないのです。

まず必要だったのは油です。鯨の油から蝋燭やランタンの油を作っていたのです。そして骨は女の人のスカートの骨組みにしたりコルセットに使っていました。とにかく鯨から何でも作って使っていたのです。

けれどアメリカは人が多いので当然それだけ鯨が必要になるわけで。そのせいで日本に行くことになったというわけなのです。

「鯨って何でも使えたからね」

アメリカは当時のことを思い出しながら言います。

「便利だったんだよね」

「けれど鯨の肉は召し上がられなかったんですよね」

「あれ食べられるの」

「美味しいのですが」

アメリカに鯨のことで色々言われているので日本も不満があるのでした。

「それこそお刺身や唐揚げやステーキにしてもいいのです」

「けれどそれは駄目だよ」

ここでアメリカは真面目な顔になって日本に言いました。

「鯨は人間の次に頭がいいから。だから食べたら駄目なんだよ」

「では牛が人間の次に頭がよかったらどうなるのですか？」

日本はアメリカの言葉にすぐにこう返してきました。

「その場合は。どうなるのでしょうか」

「まあその場合はその場合さ」

だからといって己の考えを曲げるアメリカではありません。

「牛は人間の為の肉なんだよ。だから」
「左様ですか」
やっぱりこう言うのでした。とにかくアメリカは昔は鯨をたっぷりと捕っていたのです。このことだけは紛れもない事実なのであります。誰が何と言おうと。

第五百十五話　　完

２００８・１２・１５

第五百十六話　中国では鯨は

第五百十六話　中国では鯨は鯨は中国でも知られています。けれど彼は鯨を食べようとはしないのです。何でも食べると言われている彼がどうして鯨を食べないかというと。

「そもそもあれは神獣ではないあるか？」

「神獣ですか」

「そうある。僕の家では昔はそう考えていたある」

こう日本に説明するのです。

「海にいる途方もなく大きな神獣として。考えていたあるが」

「食べようと思われなかったのですか？」

「全くある」

日本の問いにも首を横に振ります。実は今でも鯨は食べないのです。

「というよりか美味しいあるか？あれは」

「美味しいのですが、それもとても」

「それがわからないある」

日本に言われても首を横に振るばかりの中国です。本当に鯨は食べないのでした。

「あんなものが食べられるなんて想像もできないある」

「中国さんが食べないものがあるとは」

「けれど目には昔から興味があったあるぞ」

ここで中国は思わぬことを言ってきました。

「目には。あれは夜に光ると言われていたある」

「目がですか」

「それはあまりにも高価なので鯨が死んだ時やたまたま浜に打ち上げられた時に拾ってそれを手に入れようと思っていたある。もっとも滅多に手に入らないものと言われていたあるがな」

「目が宝石みたいに考えられたいたのですか」
「どうやら実際は違うようあるがな」
中国でも鯨は知られていましたがこうした扱いでした。鯨も国によってどう見られているかはかなり違っているのでした。

第五百十六話　　完

２００８・１２・１５

第五百十七話　鯨以外にもいたりしました

第五百十七話　鯨以外にもいたりしました

何故か海の話になると皆止まりません。今度はロシアの番です。
「今のお家の東の方まで辿り着いた時だけれどね」
「ああ、あの時ね」
「来ないでもよかったあるぞ」
「とりあえずそこにだけいて頂ければ」
アメリカも中国も日本もこのことにあまり歓迎的でないのは置いておきまして何はともあれロシアはそのシベリアを突っ切って太平洋に辿り着いたのです。そしてそこで見たのは。
「いたんだよね。物凄く大きな動物が」
「ステラーカイギュウですか」
「そうだよ。これがまた美味しくてね」
にこにことしながら皆に話します。
「銛で突き刺して捕まえたんだよ。まあ上がって来るのは五匹のうち一匹だけだったけれど」
「五匹のうち一匹だけですか」
日本はそのあまりもの無駄遣いにまず絶句しました。
「それはまた」
「捕り過ぎてもういなくなっちゃったけれど」
「あれ、それでもいるんじゃないの？」
「そんな話は聞いた覚えがあったりするあるぞ」
「そうですね。何か時々聞きますが」
「ああ、あのカイギュウまだいるんだ」
ロシアは三人に言われてそのことに気付きました。
「あのカイギュウが。そうなんだ」
それで興味を持ったロシアは人を派遣しました。その人といえば。

「やっぱりこういうのって俺達の役回りなんだね」
「うう、寒過ぎます・・・・・・」
「ラトビア！寝るなラトビアアアアーーーーーーーーーッ！！」
やっぱりこの三人でした。本当にいるかどうかわからないうえにいても滅多に見つからないであろうそのカイギュウを探して極寒の海を船で延々と巡るのでした。

第五百十七話　　完

２００８・１２・１６

第五百十八話　海といったらこの人ですが

第五百十八話　海といったらこの人ですが

真打といいますか何といいますか。海といえばやっぱりこの人です。

イギリスですが彼もまた鯨はかなり捕っていました。その時にも他の時にも結構鯨以外のものを見てしまっているのです。

「これは本当の話なんだよ」

真剣そのものの顔で皆に話しています。

「俺が軍艦で海を渡っていたらな、その横をでかくて細長いものがすうって横切ってな」

「大きくて細長い生き物がですか」

「そうだよ。俺以外にもその船にいた皆が見た」

イギリスはこうも日本に説明します。

「だから間違いない。あれはいたんだよ」

「あの幻のシーサーペントがですか」

「ほら、ええと、あいつだ」

とりあえず誰かの名前を思い出そうとしますが出て来ません。

「アメリカの北にいてしょっちゅう名前も出したかねえうちの馬鹿会長が遊びに来て迷惑しているあいつだよ。料理がクソまずいあいつがな」

「料理についてはノーコメントですが」

「そんなことはどうでもいいからよ、とりあえずあいつだよ」

「あの方ですね」

「そう、あいつな」

イギリスも日本もその人の名前を覚えていないのでした。ちなみにその会長にしろよく遊びに行くわりにはその人の名前を全く覚えていなかったりします。

「あいつもよく見るっていうあれだったんだよ」

「私の家のクッシーやイッシーみたいなものでしょうか」
「そうだろうな。俺の家のネッシーとかモラグみたいなな」
「それを御覧になられたと」
「ああ、そうだ」
またそのことをはっきりと言うイギリスでした。
「嘘じゃねえぞ。海には本当にまだ何がいるかわからないからな」
「そうですね。本当に」
実は日本も非常に心当たりがあることなのでイギリスの言葉に頷くことができました。何しろそうした死体を拾ったことがありましたから。

第五百十八話　　完

２００８・１２・１６

第五百十九話　個性の薄い国家の筈なのに

第五百十九話　個性の薄い国家の筈なのに

決して謝らない所長に傍迷惑なことこの上ない仮面ライダー達に工事現場の監督でもあり料理人でもあり番組の全てを取り仕切りありとあらゆることが何故か自分のせいになる脚本家といいはっきり言って中の人達の個性が薄いと言われている日本の家の人達は異常な程個性派揃いです。この前出て来た人にしろそうです。

「私が出て来て何か悪いことでもるんだぎゃ？」

尾張です。赤味噌が大好きでとにかく何でもかんでもお味噌をつけて食べます。そのこだわりはお金に対するものに匹敵します。

「とにかく私はこれが大好きと言っとりゃーーーす。そこを納得するだがね」

こう言って味噌カツに海老にきし麺にういろうをいつも食べています。その尾張と仲の悪い人が大阪です。

「食べ物もお金もわいは負けへんで」

どっかの寝てばかりで涙とか泣くとかいう言葉で起きて大暴れする傍迷惑なイマジンの喋り方で自己主張します。金髪で小柄ではっきり言ってかなり柄が悪いです。

「わいは日本さんの台所や。日本さんの財布は任せときや」

「何たわけたこと言っとりゃーーーす。日本さんを支えてきてるんわ私のところの人材だがね」

「あん！？太閤さんはうちに城を築かれたやろが」

「その太閤さんにしろ信長さんにしろついでに家康さんもうちから出とるだがね」

いつも歴史から言い争いをしている二人です。これが食べ物にも発展するのです。

「やっぱりうどんはあれや。けつねうどん、薄口醤油でな」

「味噌煮込みうどん、海老の天麩羅があったら最高や」
「何ィ!?けつね否定すんのかい」
「そっちこそホンマに天下の台所か?けつねなんてたわけたもん食うなんてアホだぎゃ?」
いがみ合いに発展するのもいつものことです。けれど当の日本はそんなことには目もくれません。
「まだまだいますので」
「何でこんなに個性が強いのばかりなんだ?」
日本のさりげない言葉にイギリスも突っ込みを入れます。そう、まだまだいるのでした。

第五百十九話　　完

２００８・１２・１７

第五百二十話　能登とドンゴリ

第五百二十話　能登とドンゴリ

続いては金沢の能登です。他の漫画でも出ていますけれどそれは言わない約束です。黒髪が長めで中性的な外見をしています。

「放送部宜しく御願いします」

「それはいいが何で闇払い出せるんだ？」

「それはまあ何となく」

「何となくで草薙流古武術が使えるのかよ」

フランスもそのことにびっくりです。彼は古武術も使えるのです。けれど普段は物静かで歌とか和菓子が好きです。まだ尾張や大阪よりは個性が薄い感じです。

そしてもう一人。仙台ですが彼女は黒髪を左右に分けた可愛らしい女の子です。フランスも彼女のことは知っていました。

「あれだろ？独眼竜の」

「え、ええまあ」

気弱にフランスの問いに応える仙台でした。

「そうですけれど」

「何かその割りにあまり強くなさそうだな」

「ああ、こいつの仇名はドンゴリっていうねん」

大阪がここで出て来てフランスに説明します。

「ドンゴリ！？」

「大砲の弾のドンって音聞いて五里逃げるからやねん」

またも負けたか第八連隊の大阪が言ってもあれですがそれでも彼は言います。

「他にも昼飯がないっていうて帰ったりな。まあこれは俺でも帰るけれどな」

「そうか。何か」

話を聞いたフランスが思い出したのは。

「イタリアに似てるな、何処か」
「あんたにも似てへんか?強そうで意外とっていうのが」
「・・・・・それは言うんじゃねえよ」
「何気に暗黒時代ぶっちぎりの阪神のチーム打率より勝率悪いやろ?最近のあんた」
「だからそれを言うんじゃねえ!阪神の打率って何なんだよ!」
それはまさに底辺という意味です。流石にこの言葉には切れてしまったフランスでした。

第五百二十話　　完

２００８・１２・１７

第五百二十一話　うどん対決

第五百二十一話　　うどん対決

何が何なのかわからないまま尾張と大阪でうどん対決をすることになりました。尾張が出してきたのは天麩羅きし麺、大阪はけつねうどんでる。どちらも切り札を出してきたと言えます。

審査員は五人です。連合ファイブの面々が特別に呼ばれて審査員になりました。審査員になった席でそのまま憮然とした顔をしているのはフランスです。

「俺の勝率が阪神以下だと!?大阪の野郎、これでまずかったら頭虎刈りにしてやるぞ」

こんなことを考えていました。他の四人は今は落ち着いています。そしてそれぞれのうどんが運ばれてきたのでした。

「へえ、これがなんだ」

「結構美味しそうあるな」

アメリカも中国もそれぞれ自分の前に置かれたそのけつねうどんを見て言います。

「この薄い揚げがきつねかな」

「確かそうある」

中国がアメリカに答えます。

「日本では狐は揚げを食べるとされているある。だからこれがうどんに入っているある」

「成程ね」

そしてその味はというと。とりあえず虎刈りを主張している人のコメントです。

「美味いじゃないか、畜生」

この評価でした。彼にとっても美味しいですし他の四人も同じです。大阪のけつねうどんはとりあえずは皆に受け入れられました。

「これで決まりやな」

「さあ、それはどうかしら」
尾張が不敵な笑みを浮かべて大阪に対して言います。勝負は最後の最後までわからない、まだ尾張のものが残っていたのです。
「うちが勝つだぎゃ」
尾張の言葉で言います。今から。

第五百二十一話　　完

２００８・１２・１８

第五百二十二話　後半のおうどんは

第五百二十二話　後半のおうどんは

次は尾張のきし麺です。それを前にして今度はイギリスが驚きの声をあげました。

「これ俺が前寿司に入れてた海老のフライじゃねえか」

「・・・・・御前、海老フライで寿司作ってると思ってたのか？」

「違うのか？」

「全然違うに決まってるだろ」

フランスはもう呆れて言う言葉もありませんでした。それでも言いますけれど。

「これ天麩羅だよ。日本の揚げものなんだよ」

「そうだったのかよ」

「何でこいつが審査員なんだよ。一人だけあからさまに駄目じゃねえかよ」

そうは言っても五人一組なので今更言ってもはじまりません。何はともあれ今度はそのきし麺を食べることになったのです。

食べるとこれがまた。かなり美味しいです。普通のうどんとは違ったその平べったい麺が何とも言えません。それを食べてにこにこしているのはロシアです。

「いいよ、イタリア君のフェットチーネみたいでね」

「フェットチーネ！？何だそりゃ」

「だからもう御前は何も言わないで食ってろ」

フランスがまたうんざりした顔でイギリスに言います。何はともあれ尾張のきし麺も好評なのでした。こうしてどちらも食べ終わってから。

「じゃあ後はあれだけやな」

「勝つのはうちだがや」

二人で顔を見合わせて言い合います。さて、どちらが勝つのか。

後はそれだけでした。
「ここでわいが勝って大阪こそが天下の美味所やって知らしめたるわ」
「何たわけたこと言っとりゃーーーす。勝つのは私だぎゃ」
こんな調子でお互い睨み合っているのでした。闘いはいよいよ決着です。

第五百二十二話　　完

２００８・１２・１８

第五百二十三話　判定は

第五百二十三話　判定は

さて、いよいよ判定です。けつねうどんと天麩羅きし麺どちらが上か。運命の判定は五人の手に委ねられました。けれど日本の家の人達はかなり戦々恐々です。

「これってやっぱり」

「どっちが勝っても血の雨だべ？」

能登と仙台が怯える顔でこれからのことを心配していました。

「そうですよね。二人共敗北を認めるような人じゃないですし」

「ギャレンさんは頼りにならないし」

「ブレイドさんも何しでかすかわからないし」

何気に家の人達にトラブルメイカーとしか思われていないライダー二人でした。

「とにかく。このままじゃ」

「大惨事だべ」

二人だけでなく皆がこれからのことに凄く不安を覚えています。ですが判定は絶対に出されるわけで。その運命の判定の結果は。

互角でした。アメリカ、中国、ロシア、フランスの四人は互角の判定を出してきたのでした。

「どっちも同じ位よかったよ」

「堪能させてもらったある」

「味は違ったけれど美味しさは互角だよ」

「見事だったぜ」

それぞれのコメントです。とりあえずはここまでは互角です。そして最後の一人は。

「何かよ。どっちも完全に同じ味だったんでわからなかったんだけれどな」

「・・・・・こいつはそもそも問題外だからな」

フランスが日本の家の人達にこの判定は無視するように言いました。
「気にするなよ」
「っていうか幾ら何でもけつねときし麺は同じやないやろ」
「こんな人はじめて見たぎゃ」
「っていうか麺の広さ以外に何かあるのか？」
当のイギリスはまだ全然わかっていません。
「同じだろ？やっぱりよ」
やっぱりイギリスはイギリスなのでした。

第五百二十三話　　完

２００８・１２・１９

第五百二十四話　またまた登場脚本家

第五百二十四話　またまた登場脚本家

とりあえず大阪と尾張のうどん対決は引き分けに終わりました。ですがまだ皆あれこれと色々なものを食べているのでした。

「フォアグラの量桁間違えてこんだけあるのかよ」

フランスがとにかく大量にあるフォアグラを見てびっくりしています。

「それにすっぽん鍋に豆腐に鯖にって。変わった組み合わせだな」

「おう、俺が作ったんだよ」

ここであの脚本家が出て来ました。

「どうだ、美味いだろうが」

「あんた、脚本家だよな」

フランスはまずそのことを突っ込みました。

「それで何で料理まで作ってるんだ？麻婆豆腐なんて特別に大蒜効かしてるしよ」

「まかないさんに作らせてんだよ。俺は何もしてねえよ」

「実は御本人さんがいつも作っておられるんです」

日本がさりげなく皆に説明します。

「そういうことですので」

「そうだろうな。これは男の料理だよ」

フランスはそのことをすぐに見抜きました。

「美味いけれどあれだな。何か濃いものがあるな」

「いいんだよ、それが面白いんだから」

この定番の台詞で返します。

「違うか？料理ってのは生き様なんだよ」

「まあそれはな」

料理には絶対の自信があるフランスもその言葉には頷きます。

「その通りさ」
「わかったら河豚食うぞ、河豚」
「ですからそれは」
日本が河豚が出て来たところで脚本家を止めます。
「もう料理が一杯ですので」
「そうか。じゃあまた今度だな」
「はい。その前にエッセイ御願いしますね」
「そんなの書けねえよ。それに忙しいしな」
「一時間もあればできると思いますが。貴方なら」
とか何とか言ってるうちにエッセイも書くことになりました。この人もかなり個性が強いです。

第五百二十四話　　完

２００８・１２・１９

第五百二十五話　黒船襲来　☆

第五百二十五話　黒船襲来

話はまた過去に遡ります。とにかく鯨が欲しいアメリカは日本にかなり強引にやって来ました。当然それで日本は大騒ぎになってしまいました。

「く、黒船だあーーーーーーーーーーっ！」

「黒船が来たぞーーーーーーーーーーっ！」

「でけえーーーーーーっ！」

皆黒船を見て大騒ぎです。さっそくみんな喧々諤々の議論に入ります。まずは強硬派の水戸の意見です。眉の太い一本気な青年です。

「追い返すべきだっぺ！」

彼は強硬に主張します。

「あんな変な奴を日本に入れるべきじゃねーーべ！」

「こんだから水戸は時代遅れっつわれんですよ」

続いて穏健派です。金髪の落ち着いた青年である会津が溜息と一緒に言います。

「俺はこれからを考えて共存が一番ええど思います」

「うっせえ！おめは外人の味方だべ！」

「自分の意見を言っただけです」

「ごっじゃっぺ言ってんでねーーべよ！」

とりあえず二人はこんな有様です。それで大阪がさりげなく日本本人に尋ねます。

「ほんで日本はんはどないにお考えで？」

「外出る位なら死にます・・・・・・」

「な・・・・・・」

「ちょ、ちょっと日本さん！」

「ま・・・・・・待ってえええーーーーーーーっ！」

皆が止めるのも聞かずに襖を閉めてしまってそれで終わりでした。

何とこの時日本は引き篭もりでそれが二百年目に達していたのでした。

第五百二十五話　　完

２００８・１２・２０

第五百二十六話　今はとてもとても

第五百二十六話　今はとてもとても

何と二百年も引き篭もっていた日本。今では考えられないことです。

何故なら今では。とかく色々な話し合いに呼ばれてかなり忙しい立場だからです。

「上司の方も大変ですが私もまた」

「けれどいいじゃないですか」

台湾が横からにこりと笑って日本に言います。

「それだけ皆日本さんを頼りにされて好きなんですよ」

「そうなのですか」

「そうですよ。ほら、サミットにＡＳＥＡＮ拡大外相会議にＡＲＦにＡＰＥＣ」

ざっとこれだけまず出て来ます、

「それに東アジアサミット。まだ他にも色々ありますよね」

「少なくとも引き篭もっている余裕はないということですね」

「そういうことですよ。私だって色々出ていますし」

友達が少ないと言われている台湾でもあちこちに顔を出したりしています。今は誰でもそうしないとやっていけないのがこの学校なんです。

「日本さんは太平洋グループの中心メンバーの一人ですから。頑張って下さいね」

「はあ。それでしたら」

「ああいうのもいますけれど」

「よお日本、久し振りなんだぜ！」

日本の側には絶対にいる二人がこれで揃いました。

「今日は生徒会長として御前に命じることがあるんだぜ」

「はあ、今日は何でしょうか」

日本は少し呆れた調子で韓国に尋ねます。
「今日はとりあえず野球をするんだぜ。相手は俺なんだぜ」
「野球はこの前やったのでは？」
「この前はこの前。また別なんだぜ」
「そうなのですか」
「それとちょっと助けて欲しいんだぜ。今俺の家はお金がなくて死にそうなんだぜ」
こんな調子で皆日本を頼りにして集まってくるのでした。どうも勝手に来る人もいますけれど。それでももう引き篭もってはいられない日本なのでした。

第五百二十六話　　完

２００８・１２・２０

第五百二十七話　もう読んでいました　☆

七話　　もう読んでいました　　第五百二十

引き篭もりとか強硬とか融和だとか言っている間にもうアメリカは船から降りてきました。この行動力は昔から健在でありました。

「もう降りてきいはったけれどどないします？」

大阪がそんなアメリカを見ながら日本に対して尋ねます。

「腹括るしかあらへんわ」

「も、もうですか」

日本もこのスピードには驚きでした。

「まだ心の準備もできていないですよ」

「けれどほら」

本当に降りてきています。もうとっくにです。

「ホンマにどうします？」

「こうなったら苦肉の策です」

日本も腹を括りました。というか無駄なあがきに近いです。

「英語わかりませんで通しましょう」

「そうでんな。じゃあそれで」

実はこの時日本はオランダ語の通訳はいましたけれど英語の通訳はいなかったのです。これは日本が引き篭もっていた二百年間ずっとでした。

それで今回は逃げようとしたのですがところが。実際に大阪がアメリカ達に話してみると。

「あーーー、来たとこ悪いんやけれど俺等オランダ語しか」

言おうとしたら何とそこに。

「えっ？ああ、そうなん・・・・・・」

大阪はアメリカ側の話を聞いてその顔をどんどん暗くさせました。

そうして日本に対してその暗い顔で言うのでした。

「そんなん予想してオランダ語通訳既に連れて来てました」
「万事休すですか・・・・・・」
かくしてアメリカとの話し合いとなるのでした。アメリカももう
そんなことはわかっていたのでした。

第五百二十七話　　完

２００８・１２・２１

第五百二十八話　今ではオランダとは

第五百二十八話　今ではオランダとは

「そういえば日本は昔はオランダとだけ付き合っていたんだよね」
「はい、そうです」
日本は今日はイタリア、ドイツと一緒にいて昔のことを話していました。
「あの時はそうでした」
「そうだったのか。あいつとは」
ドイツもその話を聞いて頷きます。
「二百年もか。付き合いは長いな」
「はい。結構細々としてですが」
「それでも二百年続いたのは凄いことだよ」
イタリアは素直にそのことを賞賛します。
「だってさ。二年か三年で喧嘩別れなんてこともよくあるしね」
「全くだ。それこそイギリスとフランスなんてな」
この二人はまた特別ですけれど。それでもやっぱり二百年もお付き合いが続くというのはやはり珍しいことなのであります。この学校では。
「それで今はどうなの？」
「今ですか」
「うん。オランダとは」
イタリアは日本に今のオランダとのお付き合いを尋ねます。
「どうなのかな。付き合いあるの？」
「そういえば」
言われてはたと気付く日本でした。
「ありませんね」
「あれっ、ないんだ」

「あの時の騒ぎでお付き合いが何処かに行ってしまい」
黒船だ幕末だの話になっている間にです。
「それで気付いたら今はイタリア君やドイツさんとこうしていて」
「うん」
「太平洋グループの付き合いもありますし。ありませんね」
そのまま今に至るのでした。どうやらその縁は今では消えてしまっているようであります。

第五百二十八話　　完

２００８・１２・２１

第五百二十九話　アメリカの自己紹介　☆

第五百二十九話　アメリカの自己紹介

「はじめまして日本」

日本の無駄なあがきを何なく払いのけアメリカは日本とご対面となりました。

「僕はアメリカだよ。趣味は早撃ちと冒険と考古学だぞ」

いきなり何処かの鞭を持ってる人になっています。けれど日本には何と言っているのかよくわかりませんでした。

「えーーと、今何と？」

「名前はアメリカで趣味は助平やで」

「随分と変わった方ですね」

大阪の結構以上に変な通訳を聞いて頷きます。その間にもアメリカはどんどん日本に対して言ってきます。

「じゃあここに来た理由だけれど」

「ああ、はい」

通訳の大阪が日本に通訳してから彼に尋ねます。

「何でここにきはったんですか？」

「えっ、あっと何だっけ？」

実はそのことは忘れてしまっていたアメリカでした。とりあえずメモを開いて確かめてから。

「そうだ」

それで思い出して日本に言った言葉は。

「鯨と友達になりに来たんだよ！」

「帰れ」

「大変夢があって宜しいですが御自宅でなさって下さい」

アメリカの言葉に氷の表情で一言で返す日本。その氷の表情と言葉を通訳する大阪の苦労がしのばれる一幕でした。やっぱりアメリ

カはこの頃からアメリカでした。日本はこの頃から常に何処かの国に振り回されているところがあったようです。けれどとりあえずここから彼の引き篭もりが急になおったのですからそれはそれこれはこれでいいのでしょうか悪いのでしょうか。それは誰にもわかりません。

第五百二十九話　　完

２００８・１２・２２

第五百三十話　とりあえず大阪は

第五百三十話　とりあえず大阪は

日本とアメリカの通訳をして苦労をしていた大阪。そんなこともありましたが今は彼は日本の中ではグルメとして名を売っています。

「そん中でもやっぱりこれやろ」

彼の一番のお気に入りと言っていいのはたこ焼きです。言わずと知れた大阪のソウルフードです。

「これ食わな力でえへんしな」

「そういえば貴方は何かあるといつもたこ焼きですね」

「日本さんも好きでっしゃろ？」

「ええ、まあ」

好きか嫌いかと問われればやっぱり日本も好きなのでした。

「食べやすいですし安いですしね」

「しかも美味い」

三拍子揃っているのです。これがたこ焼きのいいところです。

「蛸は刺身にしても茹でても天麩羅にしても酢の物にしてもええけどやっぱりこれが一番やで」

「そうですね。お酒にも合いますし」

「そやそや」

二人だけでなく皆も集まりながら和気藹々とたこ焼きを楽しみます。けれどそんな日本のお家の面々を見てイギリスとフランスは唖然としています。

「毎度毎度あの家の食生活はわかんねえな」

「蛸っていったら迷惑なだけだろ!?牡蠣食いまくってよお」

二人は蛸は食べません。それどころか悪魔の生き物とさえ思っています。ですから日本の家で蛸がやたら食べられるのが奇怪に思えて仕方ないのです。それで唖然とした顔になっているのです。

「けれど。たこ焼きって本当に美味そうだな」
「そうだな。あのソースの香りもな」
二人もそれは認めざるを得ませんでした。
「蛸は食う気にはなれねえけれどな」
「それでもな。あれだけはな」
二人にもたこ焼きだけは興味を抱くのでした。そんなとても不思議な食べ物、それはたこ焼きなのです。

第五百三十話　　完

２００８・１２・２２

第五百三十一話　アメリカへのお茶　☆

五百三十一話　アメリカへのお茶

第

「そ、そうじゃなくてね」

一旦母国に戻ってそっからまたやって来たアメリカは頭にタンコブを作っていました。そのうえでまた日本に対して言います。

「開国してくれないかな」

「開国！？」

「そうなんだ。僕の上司がね、そう言ってるから」

「まあその話は置いときまして」

通訳の大阪が日本にかわって言います。

「お茶飲む？っちゅーいています」

「あっ、飲むよ！」

お茶と聞いてアメリカはすぐにその明るさを取り戻しました。この回復力は凄いです。

「日本茶はじめてだぞ！」

とりあえずはこれでその場を逃れました。けれどそれでも話の解決にはなっていないわけで。日本は深刻な顔で大阪に相談をします。

「どうしましょうね。いい案が全く思い浮かびません」

「しゃありませんな」

大阪も思い浮かびませんね。けれど彼はここでふと考えたのでした。

「ここは素直にお上さんに相談しましょ」

「お上といいますと」

「日本さんの上司のさらに上のあの人ですわ」

中々複雑な構造になっているのが日本のお家なのです。何はともあれその上司のさらに上にいる人にお伺いを立ててみると。

「あの、上・・・・・」

けれどそこにいはのは神主の服になって一心不乱に祈りお祓いをしている上司でした。
「ア～～メ～～リカ～～～帰りたまあええ～～～～」
叫びながら祈っています。
「帰れ～～～～帰れ～～～～」
「・・・・・・・・・」
日本も大阪もそんな上司を見て何も言えませんでした。とても相談をできる状況ではありませんでした。そうして何も言えないままアメリカのところに帰るとアメリカは実に陽気に日本のお茶を飲みながら二人に問うのでした。
「どうしたんだい二人共。暗いよ」
「いえ、何も」
日本の未来が不安になって仕方のない二人なのでした。

第五百三十一話　　完

２００８・１２・２３

第五百三十二話　日本の上司は

十二話　　日本の上司は

日本にも上司がいます。直接の上司は結構変わります。関白さんだったり将軍様だったり総理大臣だったりします。けれどいつもその上に上司の上司がいるのです。

「まあ師匠の師匠みたいな感じでしょうか」

「何かそれって水瓶座の黄金聖闘士みたいだぎゃ」

尾張が日本の話を聞いて言いました。

「けれど日本さんの上司やねんな」

「はい、そうです」

日本は大阪に対して答えました。

「そうなります」

「ちゅうことはわい等の上司でもあるわけや」

「すっごい偉い人なのはわかりゃーーす」

「そうなのですが。あまり馴染みがなかったりします」

日本はここでふと首を傾げるのでした。

「今は違いますが長い間直接の上司とばかり御会いしていまして」

「そういやそうでんな」

「私も御会いしたことあまりないわ」

この二人だけでなく水戸も会津もです。直接の上司と会うことはやたら多くてもです。

「それで。どうもこれといって馴染みのないところがあって」

「けれど日本さん」

ここで水戸が出て来て日本に力説します。

「あの方は物凄く古い方でそれこそ日本さんが幼い頃から育ててこられてきた方だっぺ。だから」

「はい。色々とお世話になっているのは間違いありません」

日本が幼い頃というとどれだけ古いわかりませんがそれでもなのです。
「ですが。今もあまりにも尊い方なのでお話できないのですよね」
「それは確かに」
「やっぱり。どうしても」
これは皆も同じなのでした。日本の家の上司の上司の方はあまりにも尊いお方なのでした。

第五百三十二話　完

2008・12・2

3

第五百三十三話　凄まじい要求でした　☆

第五百三十三話　凄まじい要求でした

「早く陣痛か何かで帰ってくれないかないでしょうか」

日本はとにかくアメリカに早く帰ってもらいたくて仕方ありません。けれどアメリカはそんな日本の考えには構うことなくまた言ってきました。

「日本は世界をもっと知るべきだよ」

「世界をですか」

「そう。世界には色々な国があって素晴らしい様々な文化があるんだ」

外の世界のことを日本に話します。

「そういう別の国々と会うのも悪くないだろう？」

「確かに」

「僕も世界に出て毎日がわくわくの連続なんだぞ」

「他の国ですか」

アメリカの言葉に日本の心が動きました。確かに知らないことを知っていくというのは実に嬉しいことです。歳のわりに好奇心旺盛な日本にとっては実に魅力的な言葉でした。

（若しかしてそんなに悪い人じゃないんですかね）

こうも思いだしました。

（考えが少し若いようですが）

「それでね。僕の方の要求だけれど」

ここでアメリカは自分の要求を日本に話しはじめました。

「まず函館と下田の開港でアメリカ人が自由に歩ける地区を作ってもらってね。できるだけ広く。そうそう、下田には奇麗な領事館が欲しいしアメリカ人に優しく」

まだ続きます。

「薪に水に食べ物に石炭も欲しいしビップ待遇は絶対に。さもない

と上司が怒るって言ってるよ」
「・・・・・・・・・」
「あんた、何者だっぺ！？」
その無茶苦茶な要求のオンパレードに絶句する日本の横で水戸がファイティングポーズです。やっぱりこの頃からアメリカはアメリカでした。

第五百三十三話　　完

２００８・１２・２４

第五百三十四話　今は今で

第五百三十四話　今は今で

昔はアメリカのとんでもない要求に閉口してしまった日本ですが今では。対馬で困ったことになっています。

「全く。韓国さんには毎回困ったものですが」

今度は韓国です。そのゴーイングマイウェイは相変わらずですが今回はプラスアルファだったのです。何と勝手にムクゲの花を植えていっているのです。

「これを植えたら島が奇麗になるんだぜ」

そう言いながらせっせせっせとムクゲを植えていっています。その後ろで日本の家の人達が怒っていてもやっぱり気にしちゃいません。

「さて、これでまた一本植えたんだぜ」

「すぐに持ち帰ってくれませんか」

日本はその韓国に対して言います。

「対馬の景観やそういったものに関わりますので」

「んっ！？奇麗になるんだぜ」

「それでもです」

あえてそれ以上は言いませんがあくまで韓国に対して言います。

「そもそもここは私の家ですから」

「えっ！？俺の家の筈なんだぜ」

「私の家です」

最近また訳のわからないことを言って対馬に来ているのです。それでムクゲを植えたりもしているというわけです。

「そもそも私の家にいつも来られて色々とされていますが」

「まあそれは気にすることないんだぜ」

「気にします。早く持ち帰って下さい」

「ちぇっ、日本はいつも心が狭いんだぜ」

「オッパ、そんなことしていたら何時か観光に行けなくなるニダよ」
妹にも横から言われてやっとムクゲを元に戻す韓国でした。本当に困った人であります。

第五百三十四話　　完

２００８・１２・２４

第五百三十五話　アメリカの新しいお友達　☆

第五百三十五話　　アメリカの新しいお友達

さて、日本に物凄い要求をしてしかも認めてもらって意気揚々として祖国に帰ったアメリカですがその彼をイギリスが尋ねると何とそこにいたのは。

「おいアメリカ・・・・・・って」

まずはびっくりでした。

「何だよそいつ！」

見れば真っ白でやたら大きな魚みたいな生き物とそのアメリカが明るく遊んでいるのです。これまたかなり異様な光景です。けれどイギリスはその生き物が何なのかすぐにわかったのでした。

「御前本当に鯨と友達になったのか」

うん、これが中々苦労してね」

「苦労って御前」

鯨と友達になるのに苦労したと言うアメリカの話を聞いてここでイギリスは少しばかり同情するものを感じました。それでふとアメリカに対して言うのでした。

「御前さ、そんなに友達欲しいんだったら」

あえて何気なくを装ってアメリカに対して言います。

「お・・・・・俺が友達になってやろうか」

「えっ！？」

「だからさ、俺が」

こう言うのでした。それを聞いたアメリカは。

「イギリス・・・・・・君・・・・・・」

「ああ、どうだ？」

さあどうなるか運命の時です。アメリカの返答は。

「やーーーなこった☆」

「ははは、手前このやろーーーー☆」

最後は明るいですがイギリス的には内心とてもむかつく結果になりました。やっぱりアメリカはイギリスが好きではないのでした。そんな困った人間関係しかないイギリスなのでした。

第五百三十五話　　完

２００８・１２・２５

第五百三十六話　それでも何故かこいつとはいつも

第五百三十六話　　それでも何故かこいつとはいつもそんな友達が中々できないイギリスですが結局のところ寂しくはありません。家に帰れば妖精達もいますし何時でも何処でも結果としてこの人と一緒にいるからです。

「クリスマスなのに皆俺を呼ばねえんだよ」

「御前去年のクリスマスで何したか覚えてねえのかよ」

不平不満を垂れ流しているフランスに対して言います。

「あれだけのことやっておいてな」

「ちぇっ、些細なジョークじゃねえか」

「誰もそうは思わねえよ」

フランスの家でワインや七面鳥、ケーキを囲みながら話をしています。やっぱりフランスが作った豪華絢爛なクリスマスディナーです。

「ところでよ。皆は皆で今楽しくやってるのか」

「太平洋じゃ緑のケーキやピザやクリスマス商戦やらで凄いことになってるぞ」

「で、ロシアのあのサンタはクリスマスの後で動くのか」

「そうらしいな」

何処も結構かなりカオスのようです。

「あっちのクリスマスは騒がしいみたいだな」

「せめてクリスマス位は静かにしてえよな」

「御前が言うんじゃねえよ」

その去年大惨事を引き起こした彼に対して言います。

「御前だけはな」

「俺だって静かな時は静かだぜ」

フランスは七面鳥を食べながらイギリスに対して言い返しました。

「流石にな」

「そうだな。そういう時もあるな」
「そうさ。御前が前にいると嫌になってついつい静かになっちまうんだよ」
「それは俺もだよ。何で御前なんかと」
とか何とか言い合いながらもクリスマスは二人で過ごしたのでした。こうしていつも腐れ縁のフランスと一緒にいたりするイギリスなのでした。

第五百三十四話　　完

２００８・１２・２５

第五百三十七話　クリスマスに襲撃

第五百三十五話　クリスマスに襲撃

韓国は毎日日本の家に来ます。招待されていようがされていなかろうが来ます。当然ながらクリスマスも同じです。

「さて、今日も飯を食ってやるんだぜ」

「ちょっと図々しいんじゃないの？」

「そうニダ」

台湾と韓国妹が意気揚々と日本に向かう彼に対して言います。この二人も色々と日本の家にお邪魔していたりします。

「日本さんにだって都合があるし」

「オッパが行かない時は日本さんを家に呼んでるのも迷惑かけてないニダか？」

「そんなのは考えたことないんだぜ」

これこそまさに韓国です。

「けれどクリスマスは俺が起源だから日本の家にも行ってやるんだぜ。七面鳥とワインとケーキとクリスマスプレゼントを貰ってやるんだぜ」

「全く。そうやっていつもいつも」

「あんまりにも図々しいニダよ」

二人のクレームなぞ意にも介さずそのまま日本の家に入りました。ところがそこにいたのは当然ながら日本や尾張や大阪だけではなくて。

あの四人のライダーがまずいました。そうしてプラズマチョンチョンこと所長まで。韓国はとりあえずこの人達を無視しようとしますがここでこの人達と同じ位個性の強い人が出て来ました。

「おう、丁度いいところに来たな。今俺の飯を皆に食わせてるところだ」

「どうも韓国さん」

あの脚本家の後ろで日本が席に座って七面鳥を食べていました。
「丁度いい。御前等も食っていけ」
「ちょっと待つんだぜ。その前に何で工事現場で働く破目になってるんだぜ!?」
「こら、新入り!」
韓国だけ何故か工事現場に連れて行かれてしかも現場監督もやっている脚本家にどやされます。
「もっとリキ入れて働らかんかい!」
「丁度作品のエキストラを探しておられたんですよ、この方が」
「脚本家がエキストラ探してるなんて聞いたこともないんだぜ・・・・・」
さしもの韓国もこの人には勝てませんでした。クリスマスに力仕事をやらされる韓国なのでした。

第五百三十五話　　完

２００８・１２・２６

第五百三十八話　これ食ってもいいかな

第五百三十六話　これ食ってもいいかな

いきなりエキストラとして働かされ脚本家にどやされた韓国。とりあえずギャラを貰って元の服に着替えてテーブルに着きますが台湾や妹は尾張達と明るくおしゃべりに興じています。そして彼の目の前にいるのは。

「ヨグギタナ（翻訳：よく来たな）」

「タドジグャドル（翻訳：楽しくやろう）」

よりによって四人のライダーの中でも最もあれなオンドゥルとダディでした。二人はそこいらにあるものを無茶苦茶に貪っています。仮面なのに何故か食べています。

「何で俺の席はこんなところなんだぜ」

「そこしか空いていなかったんだよ」

脚本家が彼に言います。

「まあ気にするな」

「気にしない方が凄いんだぜ」

「はい、韓国さんのお料理です」

流石にうんざりとしている韓国のところに日本が来て料理を置いてくれました。七面鳥のローストです。

「あの人が焼いたものです」

「へえ、美味そうなんだぜ」

「あの人は料理も達人なので」

そちら方面でもかなり有名な人だったりするのは日本の家では誰でも知っています。その人の七面鳥のローストと聞いて韓国は早速かぶりつこうとします。ところがここで。

「これ食ってもいいかな」

「パンツハワタサン！（翻訳：そいつは渡さん！）」

いきなりダディとオンドゥルが手を伸ばしてきて韓国のロースト

を強奪しました。そうして瞬く間に貪り食ってしまったのでした。
　これで怒らない人もいません。韓国は早速怒ろうとすると見事な連携であの所長が出て来て。
「だが私は謝らない！」
「・・・・・この連中でどうやってアンデッドと戦えたか知りたいんだぜ」
「まあそれは気にしないで」
　とりあえず日本からローストをもう一皿貰ってことなきを得ることは得ました。しかし韓国でも対抗できないまでに凄まじい脚本家とライダー達なのでした。日本の家には本当に色々な人がいます。

第五百三十六話　　完

２００８・１２・２６

第五百三十九話　逆にこっちが呼んでみました

第五百三十九話　逆にこっちが呼んでみました

とりあえずその脚本家の七面鳥とケーキを堪能した韓国。今度は日本を自分の家に招待することにしました。

「今度は御前が俺の家に来るんだぜ」

「私がですか」

「もう皆に声はかけてあるんだぜ」

こういうことは何でも勝手に決めてしまうのが彼であります。

「だから気にすることは一切ないんだぜ」

「はあ。それでは」

「とりあえず待ってるんだぜ」

こう言い残して日本のお家を後にしました。その時台湾と韓国妹も一緒でした。二人は韓国に対して尋ねます。

「幾ら何でも急じゃないの？」

「そうニダオッパ。幾ら何でも今日すぐには無理ニダよ」

「後片付けは後にしてすぐに来ればいいんだぜ」

彼の考えではこうです。ところが台湾はその言葉にすぐに突っ込みを入れました。

「あの几帳面な日本さんが後片付けしない筈がないじゃない」

「そうニダ。遅れるか下手すれば来れないニダよ」

「そんなことはケンチャナヨなんだぜ。日本は絶対に来るんだぜ」

「何でいつもこんなに楽観的なのかしら」

「オッパ、いい加減そのゴーイングマイウェイは何とかするニダ」

そもそもそれが何とかなっていれば生徒会長になっていたり連合戦隊にいないわけで。言っても無駄なのはまさにこのことです。

そんな彼が家に戻るとまず招待した皆がいます。そして。

「どうもです」

「なっ、何故御前がもういるんだぜ・・・・・・」
何故か韓国の前に日本がいました。いきなり起こった怪奇現象でありました。それは何故起こったのか。クリスマスの奇跡かどうか。いきなりミステリーです。

第五百三十九話　　完

２００８・１２・２７

第五百四十話　これぞ井上ワープ

第五百四十話　これぞ井上ワープ

何故かこう韓国の目の前にいる日本。唖然とする韓国にかわって台湾がその日本に対して尋ねます。

「あの、後片付けは」

「ライダーの方々がやって下さっています」

「それでですか」

「けれどどうしてニダ？」

今度は韓国妹が彼に尋ねます。

「日本さんさっきまで日本さんのお家にいたのに」

「それは俺の特殊能力なんだよ」

ここで日本の後ろからあの人が出て来ました。そう、またまた登場某脚本家です。この人までいるのでした。

「この俺のな」

「お、御前までどうしているんだぜ！？」

「俺がちょっと書くとキャラクターが瞬間移動するんだよ」

脚本家は誇らしげに笑いつつ韓国に対して答えました。

「それでな。一気になんだよ」

「な、何て滅茶苦茶な奴なんだぜ」

「こういうこともできますよ」

日本は携帯を取り出してきました。そうしてこう言いました。

「すぐに来て下さい」

こう言ったらもう韓国達の後ろに四人のライダー達がいます。日本の居場所も何も全く言っていないというのにです。これまた実に不思議な現象です。

「ほら、来られましたね」

「何で居場所も言っていないのにすぐに来られるんですか？」

「しかもいきなり来たニダよ」

「ワープってやつだ」
脚本家が台湾と韓国妹に対して言います。
「俺がいるとこういうこともできるんだよ。驚いたか」
「は、はあ」
「かなり」
「どういう現象かはあまり考えないで下さいね」
最後に日本が言います。とにかく色々なことができる脚本家なのでした。噂では何でもかんでも彼のせいにすることができるそうですし。

第五百四十話　　完

２００８・１２・２７

第五百四十一話　大体こうした人なのです

第五百四十一話

大体こうした人なのです

そんな不可思議というか摩訶不思議な特殊能力まで持っている脚本家ですがこれは日常生活にも遺憾なく発揮されています。

「例えば私が呼ばれます」

「日本さんがですか」

いきなり自分の国を呼び出すゴーマニズムもこの人独特です。台湾は話を聞いてその奇麗な眉を顰めさせています。

「はい。その場合はいきなりこうです」

「俺だ。すぐに来い」

脚本家自身で言います。

「いつもそれだよな」

「そうです。それだけなのですよ」

本当にそれだけなのが凄いです。

「それで何処にいるのかは」

「聞けないです」

日本は台湾に対して答えます。確かにそういうことが聞けるような人ではありません。残念ながら。

「それで周りに聞いてそれで行くのです」

「それで御会いできるんですか？」

「そういうのはいつも何とかなるんだよ」

今度は脚本家が答えます。

「簡単にな」

「はあ。簡単にですか」

「だから気にすることはないんだよ。細かいことはどうにでもなるんだよ」

「場所を言わないことが細かいことですか」

「この方にとっては実に些細なことです」
また日本が説明します。
「しかもいつも御会いできるから不思議です」
「世の中色々あるんだよ。細かいことなんてどうにでもなるもんなんだよ」
「何でこんな人が日本さんのお家にいるのかしら」
台湾はこのことだけはどうしてもわかりませんでした。実は個性派ばかりの日本の家でもとりわけ個性的なこの脚本家さん、知れば知る程物凄い人であります。誰も真似できないレベルで。

第五百四十一話　　完

２００８・１２・２８

第五百四十二話　そういえば韓国のドラマだって

第五百四十二話　そういえば韓国のドラマだって

「不自然な奇人変人が日本には多過ぎるんだぜ」
「あんたの家鏡あるの？」
「オッパ、それはウリナラでは言えないニダよ」
韓国の脚本家への不満はすぐに台湾と韓国妹に否定されてしまいました。
「大体あんただってね」
「人のこと言えないニダよ」
「俺はあんな瞬間移動とかはしないんだぜ」
「してるニダ」
よりによって妹に速攻で突っ込まれました。
「ちゃんと何かあるとしているニダよ」
「記憶にないんだぜ」
「何言ってるのよ、あんたの作るドラマって」
「そうニダ」
また台湾と韓国妹が彼に突っ込みを淹れます。
「気付いたらすぐに人が後ろにいたりするじゃない」
「生き別れとか擦れ違いとかも滅茶苦茶に多いニダ」
実は韓国のドラマはそうなのです。メロドラマの比率が日本のそれよりも遥かに多いのはどうやら韓国の趣味ですがそれでもその演出はかなりあれなのです。
「それでどうして脚本家さんのこと言えるのよ」
「流石に携帯で呼んだだけで数秒はなかったと思うニダが」
「それが不自然なんだぜ」
韓国はそこが違うとあくまで力説します。
「呼んで数秒で来たら何の苦労もいらないんだぜ。俺のドラマはち

ゃんとまともに瞬間移動しているんだぜ」
「瞬間移動の何処がまともなのよ」
「何時の間にか後ろにいるのも殆ど東映ニダよ」
どう考えても韓国もまたおかしな演出が得意なようです。話は結局のところ彼にとっておかしな方向にいってしまうのでした。そんな騒がしいクリスマスでした。

第五百四十二話　　完

２００８・１２・２８

第五百四十三話　親分になったスペイン　☆

第五百四十三話　親分になったスペイン

昔のお話です。オーストリアさんはスペインと結構以上に深いお付き合いがありました。それは上司が同じ家だったからですがその関係でお友達でありました。

ある日オーストリアさんがスペインのところに来て言いました。その時一緒にまだちびだったイタリアも一緒でした。

「スペイン、貴方にこの子の兄の支配権をあげましょう」

「兄ちゃんのこと宜しく御願いしますね」

「ええーーーーーーーっ!?」

スペインにとっては思いも寄らない話でした。

「本当にええんか!?俺でええんか!?」

「私は嘘は言いません」

オーストリアさんは確かに嘘は言いません。嘘は。

「やっと俺にも子分が・・・・・・」

スペインはこの話を受けて天にも昇らんばかりになりました。

「ずっと勘違いしとったけど意外にオーストリアええ奴やんか」

そもそも今までどういう国だと思っていたのでしょうか・

「ごっつうれしーーーーーーーーっ!」

と思っていたのもほんの少しの間でした。やって来たのは食い散らかして寝ている駄々っ子でした。スペインはその子を見てすぐにわかりました。

「何や・・・・・・」

落ち込んだ顔で呟きます。

「扱いにくいの押し付けられただけやな」

実はそうなのでした。そのことがわかって思いきり落胆するスペインでした。けれどこれが彼とイタリア兄の交流のはじまりとなったのです。何はともあれ。

「まあ宜しくな」
「世話になってやる」
こんな調子ではじまった二人の関係でした。

第五百四十三話　　完

２００８・１２・２９

第五百四十四話　実は元子分だったりします

第五百四十四話　実は元子分だったりします

「よおスペインの兄貴」
キューバがスペインに声をかけてきました。
「最近元気そうで何よりやな」
「ああキューバか久し振りやな」
スペインも明るい調子でキューバに言葉を返します。
「最近バッカニアはやっとらへんよな」
「それはもう大分昔の話やんか」
「あっ、そうやったか」
「アメリカの野郎のパイレーツ＝オブ＝カリビアンはともかくとして俺は今はもう真っ当にやってるさかい」
「そやったな。これは済まんな」
こんな調子で話をします。何時の間にかキューバが持って来た果物とスペインのワインで楽しくやりだしています。結構いいムードです。
「それで最近観光の方はどないや」
「アメリカの野郎のおかげでちょっと」
「そうか。それはちと辛いな」
「上司は相変わらず頑張ってくれてるんやけれどな」
キューバの上司はかなり有名な人だったりします。何だかんだでとんでもない状況だったキューバの家を立て直したりもしましたし。今でもアメリカと果敢にやり合っています。
「それでも。まあ」
「あの元上司の人はどないした？」
「元気でやっていたらいいんやけれどな」
「そうか。格好ええ人やったけれどな」

スペインもその人のことは知っています。ふらっとキューバの家を出てそれっきりなのです。

「まあそんな辛気臭い話は置いておいてや」

「ああ」

「飲んで食うか。久し振りに会ったんやしな」

「そやな。今日は二人水いらずや」

二人共陽気にお酒に果物を楽しみだします。同じラテン気質として今でも気が合うようです。二人共アメリカには思うところがありますし。

第五百四十四話　　完

２００８・１２・２９

第五百四十五話　一応言ってはみますけれど　☆

第五百四十五話

一応言ってはみますけれど

「ええかロマーノ」

それでも親分になったことは事実なので。スペインはイタリア兄に対して言いました。

「今日から御前の親分はこのスペインや」

珍しく真面目な態度です。

「親分の言うことはよう聞くようにな」

「ちぇっ、御前かよ」

けれどイタリア兄の態度はかなりぞんざいなものでした。

「どうせだったら可愛い女の子がいいっつーかよ」

「何を言うとるんや御前は」

「まあ別にいいけれどさ」

「御前自分の立場わかっとんのか？」

勿論わかっている筈もありません。とりあえずイタリア兄弟のあれっぷりはこの時代から健在でしたから。もう見事なレベルで。

「御前は子分や。親分の言うこと聞かんかい」

「で、何しろっていうんだよ」

「早速俺のこの家を掃除するんや」

「やり方知らねえ」

「・・・・・何なんやこいつは」

こんな状態でスペインの言うことを全然聞きません。それで落ち込んでいると隣にフランスがやって来たのでついつい零しました。

「俺ロマーノ支配する自信ないわ」

「じゃあくれ！」

欲張りなフランスはすぐにこう言ってきました。

「俺に頂戴！今すぐ頂戴！」

「御前にだけはやらんから安心せえ」
けれどイタリア兄は渡す気はないのでした。こんな状況でスペインはイタリア兄の親分をやっていたのでした。

第五百四十五話　　完

２００８・１２・３０

第五百五十六話　欲張りなのですけれど

第五百五十六話　欲張りなのですけれど

スペインにイタリア兄をくれと言って見事に断られたフランス。実は彼がこうして何かを欲しがったのはこれがはじめてではありませんでした。

イタリアもそうですし他にも色々と。アメリカを欲しがった時もあります。

「今は国は欲しがったりしねえぜ」

「じゃあ何が欲しいんだよ」

「そうだな。愛だな」

イギリスにいつもの調子で言います。

「愛だよ。今欲しいのはな」

「愛だったらそこいらにあるんじゃないのか？」

「わかってねえな。愛は出会うものなんだよ」

勝手にこんなことを主張するのでした。

「生徒会長と災厄は降って来るもんだけれどな」

「あいつの話は出すんじゃねえよ。また何か馬鹿やるだろうが」

「それもそうだな」

何か話に出しただけでそういうことをしかねないのでここは自重しました。けれど愛に関してはあくまで自重しないフランスなのでした。

「だからよ。可愛い女の子なんてな」

「そんなに可愛い女の子に会いたかったら日本に行けよ」

「日本！？アイドルか？」

「日本には一杯いるぞ。俺の国よりもな」

「そういや松浦亜弥ちゃんや紺野あさ美ちゃんがハロプロ卒業するんだったな」

何故かフランスはこんなことを知っていました。

「菊地彩香ちゃんも何とか復帰できたしここはいっちょ秋葉原にでも行くか」
「御前何でそんなこと知ってるんだよ」
「これこそが愛なんだよ。愛故にってな」
こんな勝手なことを言っています。本当に見境がないフランスです。

第五百四十六話　　完

２００８・１２・３０

第五百四十七話　兄貴のスペイン語講座　☆

講座　　第五百四十七話　　兄貴のスペイン語

今日はスペインはイタリア兄に対して講義です。講義のテーマはスペインの言葉、即ちスペイン語です。

「ええか、スペイン語では『キスして』は『キスしたって』」

どうも方言っぽいのは気のせいです。

「他にも『してくれへん？』とか『してえ』ってのもよお使うんや」

「そうなのか」

「しかしや」

ここで大きなパンを勝手に取り出してかじっているイタリア兄に対して言わずにはいられませんでした。

「なあロマーノ、御前ちゃんとスペイン語やる気あんのか？」

「御前の家の言葉覚えにくいぞ、ちくしょうが」

ありません。それだけはわかります。そこのスペインの上司で美人ですけれど何処か危ないというか暗いものがる女王陛下が通り掛かってスペインに尋ねてきました。

「スペインや、イタリア兄の教育は進んではりますか？」

「あっ、それがその」

進んでいないのとあとこの上司のことをよく知っているスペインはかなり引きながら答えます。

「あんまり・・・・・」

「そうでっか」

「よし、わかったぞ」

ここでイタリア兄が急にやる気になってきました。

「あの人に『キスしたって』だな！」

「おいこらちょっと待たんかい！」

流石にこれにはスペインもびっくりです。

「あの方で実践するのは止めんかい！」
「ちぇっ、ケチだな御前も」
「御前は死にたいんか！」
こんな調子のスペインとロマーノの関係が続くのでした。

第五百四十七話　　完

２００８・１２・３１

第五百四十八話　スペインの上司達ですが

第五百四十八話　スペインの上司達ですが

「よお考えたら凄い人ばっかりやったな」

スペインは今までの自分の上司の人達を振り返って思うのでした。

「今は俺の家の上司だった人の流れだよな」

「そうや」

こうフランスに返します。何だかんだでまた二人でいます。

「御前のとこから来た人も思えば長いわ」

「その間フランコの旦那が入ってな」

「ナポレオンの時の御夫婦も壮絶やったしなあ」

この時のことを思い出して溜息のスペインです。

「絵にもなっとるけれどな」

「あのゴヤって人の絵だよな」

「そや。あまりええ思い出はないなあ、あの時は」

ナポレオンとゲリラをやって戦って血みどろになったりその上司の人達がとんでもない間抜けなことを繰り返したりだったので。スペインはあの時の記憶は出来るだけ思い出さないようにしているのです。

「オーストリアの上司さんと同じ家やったときもなあ」

「あのフェリペって人以外は、だったよな」

「最初のカルロス様はよかったんや」

ちなみにこの人はオーストリアさんの上司も兼ねていました。

「けれどフェリペ様の時の話はイタちゃんの上司がどえらい有名なオペラにしてもうて」

「ドン＝カルロだろ。あれ元はドイツの家の人のだぞ」

「ああ。そんでフェリペ様以降はどんどんで」

はい、どんどんです。

「で、最後の人なんてなあ」
「ああ、御前の家にとって二度目のカルロス様か」
「困ったもんや、あの時が一番」
「気持ちはわかるぜ。俺の家だってあの時の上司は代々滅茶苦茶派手好きで宮殿に宴会に戦争でな」
その時フランスも上司のかなりのワンマンで相当凄いことになっていたのです。
「お互い大変だったよな」
「何か俺あんまりええ上司おらんな」
「よく考えたら俺もだ」
そういうところは何気に同じな両者なのでした。持つべきものは上司です。

第五百四十八話　　完

２００８・１２・３１

第五百四十九話　取り替えて欲しいんや　☆

第五百四十九話　取り替えて欲しいんや

スペインがちょっと外出して家に帰ってみると。何か台風が暴れ回ったみたいになっていました。

その中心にはイタリア兄がいて今は平気な顔でピザを食べています。スペインは呆然としながらも彼に対して尋ねます。

「ロマーノ、御前何してんの？」

「決まってるだろ、掃除だよ掃除」

平気な顔でスペインに答えてきました。

「しろっつっただろうが」

「こらあかんわ」

イタリア兄があまりにも平気な顔をしているので返す言葉もありませんでした。それでも何とかしたいのでとりあえず友人になっているオーストリアさんに相談してみることにしました。

「元はといえばあいつに押し付けられたしなあ」

けれど大喜びで受け取ったのですから文句は言えません。この辺りオーストリアさんもかなり強かであると言えるでしょう。

そんなこんなでオーストリアさんのお家に行ってみるとイタリアがにこにこと笑ってお掃除をしています。しかも何もかもピカピカにしています。

「ピカピカやて」

それを見て心から羨ましくなったスペイン。オーストリアさんに会うといきなり。

「オーストリア頼むわ！」

こう叫ぶのでした。

「イタちゃんと取り替えたって！」

「な・・・・・何ですかいきなり」

「とにかく何とかしてくれ！あいつと交換してくれや！」
こう叫ぶのでした。それだけイタリア兄に困っているスペインでした。けれどオーストリアさんがそれに対して頷く筈もありませんでした。
「そんなこと認められる筈がないでしょう」
「何でや、それって・・・・・・」
己の不明というか愚かさを噛み締めるしかありませんでした。こんなスペインとイタリア兄の関係は他の人まで巻き込んでしまっていたのでした。

第五百四十九話　　完

２００９・１・１

第五百五十話　それでも似ているところは

第五百五十話　それでも似ているところはイタリアとイタリア兄。本当に性格が違います。はっきり言ってしまえばオーストリアさんは笑顔でいられてスペインは頭を抱えてしまう羽目になりました。

けれどそんな兄弟ですけれど似ているところはあります。まずは。

「御免なさあああああああああいっ！」

「俺が、俺が悪かったあああああっ！」

こう言って戦う前から敵に対して泣き叫ぶのです。

「だから御願い、殴らないでえええええええええええっ！」

「俺はいいイタリア人だ！ロンドンに親戚がいるんだ！」

「いや、捕虜になるんだったらいいんだけれどな」

これにはイギリスもびっくりなのでした。何しろ戦う前から泣き叫んで降伏してきたのですから。

戦争では二人共こうです。そして料理は。

「兄ちゃんもそれなんだ」

「ああ、やっぱりこれだろ」

二人共お昼はスパゲティを作っています。

「あとワインもだな」

「うん、俺もちゃんと用意してあるよ」

「チーズにピザもあるよな。トマトもな」

「勿論だよ。全部あるよ」

二人共お料理には抜かりがありません。それでスパゲティを作って食べます。

「御前には色々と思うところがあるがスパゲティは相変わらず上手いんだな」

「え～～～～っ、思うところって何だよ」

イタリアは兄の今の言葉にかなり残念です。

「折角二人で同じもの作って一緒に食べてるのに」
「いいだろ。それで食べ終わったらな」
「うん。昨日会ったギリシアの女の子のところに行こうね」
「ああ、そうするか」
女の子が好きなのも同じでした。とりあえず兄弟なのはわかる二人であります。

第五百五十話　　完

２００９・１・１

第五百五十一話　反省したそばから　☆

　第五百五十一話　反省したそばから

結局オーストリアさんには断られてしまいました。やっぱりオーストリアさんはこういうことに関してはかなり手強かったです。

それで気落ちして家に帰ってみると。いきなりイタリア兄がご立腹でした。

「只今・・・・・・」

「帰って来やがったなスペイン！」

「いきなり何や御前は」

「御前なんか帰って来るな！どっか行けこの野郎！」

「なっ、何で殴るんや御前はちょっと待て！」

いきなりポカポカとやられたスペインには事情がわかりません。けれどふと気付いたのでした。自分がオーストリアさんにイタリアと取り替えてくれと言ったことを。それは確かに兄としてはかなり悔しいことです。

イタリア兄の気持ちは考えていませんでした。自分の駄目さにここで気付きました。それで反省してイタリア兄に対して答えました。

「御免なロマーノ。俺が悪かったわ」

「そうだ！御前のせいだ！」

「ホンマやな」

これで納得しようとしました。ところが。

「この家広過ぎるんだよ」

何かイタリア兄の調子がおかしいです。

「トイレ何処なんだよ、畜生・・・・・・」

何とおもらしをしていました。これは大変です。

「とりあえず外でせんかい！見つからんかったらな！」

「そうか、それがあったか」

「こいつは・・・・・・ホンマに大丈夫なんかい」

やっぱりこんなオチでした。スペインとイタリア兄、二人の話はこんなことばかりではじまったのでした。

第五百五十一話　　完

２００９・１・２

第五百五十二話　トイレがないといえば

第五百五十二話　　トイレがないといえば

イタリア兄はスペインのお家でトイレを見つけることができませんでした。ところがそもそもそのトイレすらなかった場所もあったのです。あのフランスのベルサイユです。

「いや、造ってから気付いたんだよ」

「トイレがないことにかい」

「そうなんだよ。いや、あれには困ったぜ」

こうスペインに対して説明します。

「一応おまるはあったけれどな」

「それで足りたんか？」

「いや、全然」

スペインの問いに対して首を横に振って答えます。

「全然足りなくてな。庭とかカーテンの裏とかでやってな」

「じゃあこの宮殿は滅茶苦茶汚かったんかい」

スペインは気付きました。そう、今二人はそのベルサイユにいるのです。そのかつては滅茶苦茶汚かったその宮殿に。

「そこのカーテンの端とか」

「そうだな。もうかなりな」

「確か宮殿を造るのにも滅茶苦茶苦労したんやったな」

「二百年かかったしな」

それだけ物凄い宮殿なのでありますが。

「しかも水を引いたり建設さえ苦労したしな」

沢山の人が大変なことになったりもしました。

「それでできたらトイレがなくてな」

「何かそれ考えたらあまりええ宮殿やないな」

「あの時の上司が凄かったんだよ。派手好きでな」

太陽王、その我儘にはフランスも振り回されたのです。今でも彼

にとってはあまりいい思い出ではないようです。

第五百五十二話　　完

2009・1・2

第五百五十三話　どっちもトマト

第五百五十三話　どっちもトマト

イタリアもイタリア兄も料理にやたらとトマトを使います。もうスパゲティなんか真っ赤です。

「やっぱりトマトとチーズだよね」

「少なくともソーセージ野郎みたいにジャガイモばかりじゃないぞ」

これがイタリア料理の基本です。そこにオリーブを加えれば完璧です。

こうしていつも料理を作っているイタリア兄弟ですが。もう一人トマト好きがいます。

「あれ、兄ちゃんもトマト使うんだ」

「ああ、そうや」

スペインです。見ればこの人も料理にかなりトマトを使っています。しかも大蒜もです。

「やっぱりこれやろ。トマト入れたら最高の味になるさかいな」

「そうだよね、やっぱりトマトだよね」

「御前もそういうのがわかってきたみたいだな」

「わかったも何もトマトは俺が新大陸から持って来たもんやぞ」

こうイタリア兄に言い返します。

「それを御前等が使ってな」

「あれっ、そうだったっけ」

「初耳だぞ」

そんなことは奇麗に忘れてしまっている二人でした。

「そういえば前はトマト使っていなかったような」

「パスタにだってな」

「だからや。トマト伝えたんは俺やからな」

「何かそれ考えたらスペイン兄ちゃんに感謝しないとね」

「お礼は女の子でいいぞ」

「・・・・・御前はちと謙虚にならんかい」
イタリア兄にはこう言うスペインでした。何はともあれトマトが大好きな三人でありました。

第五百五十三話　　完

２００９・１・３

第五百五十四話　大蒜も必要です

第五百五十四話　大蒜も必要です

イタリアもイタリア兄もスペインもトマトだけを料理に使うわけではありません。オリーブもありますしもう一つこれがあるのです。そのこれとは何かというと。

「よし、大蒜は入れたな」

「たっぷりと入れたよ」

相変わらずパスタを作っていますがここでイタリアは兄の言葉に答えます。

「ちゃんとね。ほら」

「ああ。やっぱり大蒜もないとな」

「いい味が出ないんだよね」

「そうやねんなあ」

見ればスペインはパエリアにその大蒜をたっぷりと入れています。

「大蒜もないとな。やっぱり料理はあかんわ」

「何かそういうところまで兄ちゃんと同じなんてね」

「思えばおかしな話だな」

「おかしいも何も俺等同じラテン系やろが」

だから結構似ている部分もあるのです。実は宗教まで同じだったりします。

「そやから食べるもんかてな」

「けれどフランス兄ちゃんはちょっと」

「違うと思うぞ」

「あいつは結構北の方の血が入ってるんや」

イギリスとの腐れ縁がここでも関係しているのです。

「そやからああいう奴になったんや。大体あいつの南の方の料理かてな」

「そういえば大蒜多いね」

「オリーブもな」
「やっぱりラテンはそれやトマトにオリーブに大蒜や」
この三つは欠かせないのでした。こうして今日も料理にふんだんにこの三つを使う三人でありました。

第五百五十四話　　完

２００９・１・３

第五百五十五話　道草

イタリアがまだ小さかった頃のお話です。
この時イタリアはオーストリアさんに言われておつかいに出ていました。このおつかい自体はすぐに終わったのですけれど。
「あっ・・・・・・」
その後でイタリア兄に出会ったのです。
「兄ちゃん、どうしてここに？」
「俺か？俺はスペインに言われてここに来たんだよ」
つまり彼もおつかいというわけです。それにしてもオーストリアさんにしろスペインにしろ中々勇気のある決断をするものであります。
「ここにな」
「そうだったんだ」
「しかし何で御前に会うんだ？」
イタリア兄はここでイタリアに出会ったことを言います。
「よりによって。何でなんだよ」
「何でって言われても」
「頭に来たから少し遊ぶぞ」
そしてこんなことを言い出したのです。
「ここでな。いいな」
「僕は別にいいけれど」
「よし、じゃあ久し振りに一緒に遊ぶぞ」
次にイタリアにこう言ってきました。何となくふてくされた調子ではありますけれど。
「いいな、二人でな」
「う、うん」
「全く。今日はどうしたっていうんだよ」

まだぶつぶつと言っています。
「御前なんかと会うなんてな」
そうは言っても久しぶりに二人で遊ぶのでした。そのまま二人は道草となったのです。

第五百五十五話　　完

２００９・１・４

第五百五十六話　実はわかっていました

第五百五十六話　実はわかっていました

オーストリアさんはこの時自分の家にいました。その横にいるハンガリーがそのオーストリアさんに対して尋ねます。

「イタちゃんですけれど」

「おつかいに行かせました」

ハンガリーに対して穏やかに答えます。

「ちょっとお砂糖を切らしていたので」

「お砂糖ならありますけれど？」

ハンガリーはまだ事情がよくわかっていません。

「それでしたら昨日私が」

「では間違えたのですね」

オーストリアさんはハンガリーにそう言われて自分で言うのでした。

「まあそれならそれでいいです」

「そうですか」

「ちょっとローマまで行ってもらいましたが」

「ローマっていったら」

ハンガリーはここでわかりました。流石に彼女の勘は見事なものです。

「そうだったんですね。オーストリアさんもわかっておられて」

「ハンガリー」

あえて穏やかな声をハンガリーにかけてきました。

「貴女も今日はゆっくりしなさい」

「はい？」

「お菓子を焼いてあります。それを召し上がりなさい」

「は、はい」

ハンガリーはオーストリアさんのその言葉に頷きました。

「それでは。御言葉に甘えて」
「たまにはこうした日があってもいいでしょう」
オーストリアさんは静かにこう述べられました。何気に優しいオーストリアさんです。

第五百五十六話　　完

２００９・１・４

第五百五十七話　わかっていましたから　☆

第五百五十七話　　わかっていましたから

道草をすればどうなるか。ましてやイタリアならどうなるか。それは言うまでもないことでイタリアは遅刻してしまいました。それでオーストリアさんに平謝りです。

「御免なさい、オーストリアさん」

泣きながら謝罪します。

「ちょっと遅くなっちゃいました」

けれど何故かオーストリアさんはイタリアに背を向けています。そしてこんなことを言うのでした。

「その様子ですと会えたようですね」

「はい？」

「いえ、気のせいですよ」

こう言うのでした。イタリアには全く訳がわかりません。きょとんとしているとここでまた言ってきたのでした。

「独り言です」

「そうなんですか」

「それよりもです」

オーストリアさんはイタリアにさらに言ってきました。

「今日は部屋にいなさい」

「はい？」

「そんな顔で家事をされても困ります。

こう言ってイタリアを部屋に下がらせてしまいました。そのうえで何をするかというと。

何と自分が家事をするのです。これにはハンガリーもびっくりして言葉もありませんでした。

「あの、オーストリアさん・・・・・・」

「御気になさらずに」

「はあ、そうですか」
食器を洗うオーストリアさん。何か意外にもさまになっていてこれもまたびっくりです。何はともあれイタリアにとってはいい一日になったようです。

第五百五十七話　　完

２００９・１・５

第五百五十八話　実は家事は得意です

第五百五十八話　実は家事は得意です

イタリアを下がらせて自分が家事をしたことのあるオーストリアさん。ドイツのお家に居候というか厄介者になっていた時もその能力を遺憾なく発揮したりもしていました。

「洗濯も食器洗いもできるのか」

「よくやっていましたので」

こうドイツに答えるのでした。見れば洗濯物も食器もピカピカです。

「それでなのですよ」

「確か御前貴族だったよな」

「貴族でも家事はします」

オーストリアさん御自身の御言葉です。他ならぬ。

「それだけですが？」

「しかしイタリアやハンガリーも一緒にいただろうに」

「大体自分でしなくてどうしますか？確かにイタリアやハンガリーも家事をしていましたが」

「そうか。何でも自分でか」

「貴方もそうではありませんか」

オーストリアさんはドイツもそうだと言うのです。

「家事は色々とやっておられるではありませんか」

「さもないと汚くなるからな」

実はドイツも家事はいつもしているのです。

「それでだ。不潔だと大変なことになる」

「確かに」

それで鼠からペストが流行ってえらいことになったことがありましたから。清潔にするのは命の為であったりもするのです。

「とにかく。家事は自分で、でもですね」

「そういうことか」
　こうしてオーストリアさんは上品に家事を行うのでした。その姿がまた実に絵になっているから面白いのですが。

第五百五十八話　　完

２００９・１・５

第五百五十九話　そして時間があれば

第五百五十九話　そして時間があれば

意外と家事が得意なオーストリアさん。けれどオーストリアさんといえばやはりお菓子です。本当に時間があれば作っていますが今日もでした。

「また今日も作ったのか」

「はい」

ドイツに対してそのお菓子を差し出します。オーストリアさんの分もありますから一緒に食べろということでした。もうクリームを上に置いたウィンナーコーヒーまで用意してあります。

「今日はザッハトルテです」

「そうか。それにしても今日はコーヒーのクリームが凄いな」

「気付きましたか」

「ああ。これはイタリアのミルクを使ったのか？」

「いえ、デンマークのものです」

やはりここでもこだわりを見せています。

「そこから取り寄せて作りました」

「そうか。デンマークからか」

相変わらず手間隙かけて作っています。時間も技術もお金も趣味は惜しみません。

「そしてこれを食べ終わったらです」

「今度は何だ？」

「歌劇の用意をしてあります」

オーストリアさんはただお菓子で有名なだけではありません。音楽でも凄く有名な人です。何しろオーストリアさんのお家は今でも音楽の中心とさえ言われている程ですから。

「それを観ましょう」

「作品は何だ？」

「モーツァルトです。如何ですか？」
「そうだな。ではよかったら」
実はドイツもオペラ好きだったりします。ザッハトルテとウィンナーコーヒーを楽しみながら歌劇のことを思うのでありました。

第五百五十九話　　完

２００９・１・６

第五百六十話　モーツァルトです

第五百六十話　モーツァルトです

歌劇はそのモーツァルトです。言わずと知れた音楽の天才、その曲に失敗作はないとまで言われている人です。もっとも失敗作はあるという人もいたりしますが。

「今回は魔笛ですが」

「ストーリーがかなりわからんがな」

とりあえず途中で善玉と悪玉が入れ替わって何とも妙なことになってしまうのがこの作品です。ドイツもそれは知っていましたがどうしてそうなってしまったのかはどうにもよくわからないのです。

「あれか」

「はい。それで宜しいですね」

「ああ。モーツァルトは音楽と歌を楽しむ」

ドイツは言います。

「それはもうわかっているつもりだ」

「それでは」

こうしてその魔笛が幕を開けようとしています。ところがここでドイツはあることを思い出しました。それは。

「そういえば夜の女王は誰なんだ？」

「御安心しなさい。フランスの妹です」

「ああ、あのナタリーという娘だな」

「彼女が歌います」

こうドイツに話すオーストリアでした。

「韓国の妹も呼んでいますが」

「あいつの妹も夜の女王を歌えたんだな」

「声域が同じですので。ただ御安心なさい」

「むっ！？」

「モーツァルトの曲はどれだけ難しくても歌える人は必ずいます」

オーストリアさんは言います。
「そう、夜の女王でもその時代に必ずいるのです。モーツァルトの音楽は人間の音楽なのですから」
「そうだったな。そこがうちのワーグナーと違うところだな」
実はドイツの家のワーグナーはいつも歌手を探すのにまず苦労しますので。この辺りはオーストリアさんのお家の人が羨ましいドイツなのでした。

第五百六十話　　完

２００９・１・６

第五百六十一話　俺達もやってみました

第五百六十一話　俺達もやってみました

レンゴウ戦隊にスウジク戦隊、学園ではそうした戦隊チームを作っています。それを見てポーランドが言うのでした。

「なあリト」

「どうしたの？ポーランド」

「俺達も戦隊チーム作らん？」

こうリトアニアに提案してきました。

「俺等だけで。どうよ」

「戦隊チーム！？」

「メンバーもいるしーーーー、何かいけそうじゃね？」

「戦隊ねえ」

リトアニアはポーランドの言葉を聞いて考え込みました。

「言われてみればそうかな。じゃあやってみる？」

「まずは俺と御前と」

言いだしっぺのポーランドと相棒のリトアニアはやはり外せません。またしてもリトアニアはポーランドに付き合わされて借り出される形になってしまっていますけれど。

「で、後は」

「エストニアとラトビアだよね」

「これで四人だしーーーー、どうよ」

「あとはベラルーシかなあ」

ここでリトアニアは出してはいけない名前を出してきました。

「これでどうかな」

「リト、そいつは駄目だと思うけどどうよ」

「えっ、いいじゃない。女の子もいていいじゃない」

「けれど御前この前」

「この前！？何かあったかな」

「気付いていないのならいいけれどよ。けれどあいつは何色になるんだよ」
「まあそういうところもおいおい話しあってね」
こうして何はともあれバルト三国とポーランド達でも戦隊チームを作るのでした。彼等も彼等で集まって何かをしたいようであります。

第五百六十一話　　完

２００９・１・７

第五百六十一話　爆竜戦隊

第五百六十一話　爆竜戦隊

こうしてポーランドとバルト三国、それにベラルーシが集まりました。何か何気にエストニアとラトビア、それにポーランドがベラルーシを見て怯えていますけれどリトアニアは違います。

「じゃあレッドはポーランドね」

「あ、ああ」

ベラルーシの方を警戒する目で見ながらリトアニアの言葉に頷きます。

「俺はそれでいいし」

「で、エストニアはブルーね」

「やっぱりそうなるんだ」

これは予想通りでした。知的なエストニアは自分でもブルーになるんじゃないかと思っていましたがその通りになったのでした。これははまっていると言えるでしょう。

「ラトビアはイエローでね」

「わかりました。この黄色の服を着ればいいんですね」

「うん。本来はキュロットだけれどあれって女の人のだからズボンに代えておいたから」

「有り難うございます」

「それで俺はブラックで」

「まとめ役になるよね」

エストニアがここでリトアニアに言ってきました。

「リーダーにね。それでいいよね」

「うん。まあポーランドもいるしね」

リトアニアが実質リーダーで指揮官になるのでした。ちょっと変則的です。

「で、ベラルーシは」

「私はこれでいいわ」
もうベラルーシは自分で選んでいました。その色は。
「白でね」
「そうなんだ。もう決まっていたんだ」
「バルトキラー」
しかも普通にホワイトとは言いません。
「面白そうなポジションね」
自分で表情を変えないで言います。何か他の四人とは明らかに異質な感じがするのが不気味です。何はともあれこれでバルト戦隊も完成したのでした。他の戦隊以上に不安要素はありますけれど。

第五百六十二話　　完

２００８・１・７

第五百六十三話　レッドなんだし

第五百六十三話　レッドなんだし

レッドはやっぱりこの人しかいませんでした。ポーランドが堂々とレッドになっています。

「俺って赤が超似合ってね？どうよ」

「似合うことは似合うね」

リトアニアが得意になっている彼に対して言います。けれどそのリトアニアの顔はいつもこの人を見ている不安げなものなのが気になります。

「けれど。それでもポーランド」

「何よ」

「このパターンだとポーランドは三人のまとめ役なんだよ」

爆竜戦隊ではそうなります。リーダーは実際にはブラックのリトアニアですけれど赤、青、黄色の実働部隊の中ではそうなるのです。これはかなり。

「だからさ。しっかりとしてよ」

「大丈夫だしーーーー、俺ってリーダーいけてね？」

「だから、しっかりしてよね」

ポーランドの言うことが全く信じられなかったりします。

「本当にレッドが基本なんだから」

「大丈夫だしーーー、ところでリト」

ここでポーランドはいつもの能天気な調子でリトアニアに尋ねてきます。

「俺達の相手今何処にいるん？俺ちょっと暇だしーーーー」

「だから。相手とかじゃなくてね」

やっぱりわかっていませんでした。リトアニアは内心溜息です。

「ちゃんとやってよ、お掃除もう頼まれてるんだから」

「おう？じゃあ行って来るし」

やっぱりポーランドはポーランドでした。ここでもリトアニアは相棒に振り回されそうです。

第五百六十三話　　完

２００９・１・２４

第五百六十四話　そもそもレッドがリーダーとは

第五百六十四話　そもそもレッドがリーダーとは

このグループではリーダーはリトアニアになります。ブラックですがリーダーなのです。中心人物はレッドですけれどリーダーは違っていたりします。

「何か最近そういうの多いよね」

「そうなの？」

イタリアに言われてリトアニアは少しびっくりでした。

「普通リーダーはレッドじゃないの？」

「だってうちだとドイツがリーダーだし」

「ああ、そういえばそうだね」

スウジク戦隊ではリーダーはブルーのドイツになっています。リトアニアもそれを聞いて思い出します。

「スウジクはね」

「そうだよ。だからバルトだってそんなに変じゃないよ」

「そうなるんだ。何かブラックの俺がリーダーっておかしいんじゃないかって思ってたけれど」

この辺りは謙虚なリトアニアです。

「俺がリーダーでもいいんだ」

「まあレンゴウ戦隊はレッドのアメリカがリーダーだけれどね」

実際はシルバーの韓国妹以外は全員リーダーだと主張していたりしますけれどとりあえずそうなっているのがレンゴウ戦隊です。

「俺のところだってそうだし。最近は普通だよ」

「だったらいいけれどね。そうか、別にいいんだ」

ここでリトアニアはポーランドをちらりと見ます。相変わらず能天気な調子です。

「確かに。ポーランドがリーダーって怖いしなあ」

「そう?ポーランドいい奴だよ」
「いや、そういう問題じゃないから」
この辺りはわかっていないイタリアでした。やっぱりリーダーになるのはカラーの問題ではないようです。

第五百六十四話　　完

２００９・１・２４

第五百六十五話　ブルーは知性派です

第五百六十五話　ブルーは知性派です

このバルト戦隊ではブルーはエストニアです。まずはこれは多くの人が異論のないところでした。

「僕がブルーでいいんだ」

「だってエストニアしかいないから」

リーダーのリトアニアの言葉です。

「俺達の間でブルーっていったらね」

「そういうものなんだ」

「そうだよ。それでだけれどね」

「うん」

ここで話が微妙に変わってきました。リトアニアの態度が少しよそよそしくなります。

「エストニアって女装いける？」

「女装！？何で？」

「いや、実はこの戦隊だとブルーは女装したことがあるんだよ」

「えっ、そうだったの」

リトアニアの言葉を聞いてかなりびっくりしているエストニアです。

「女装したことがあったんだ、ブルーが」

「セーラー服だけれど。どうかな」

「ううん、それはちょっと」

やっぱりこの申し出には複雑な顔になっています。エストニアにはそうした趣味はありませんから当然と言えば当然なのですけれど。

「勘弁して欲しいね」

「そうだよね。やっぱりそれはね」

「とりあえずブルーはやらせてもらうけれど」

トリケラトプスのおもちゃを手にしながらリトアニアに答えます。

やっぱりこの戦隊も色々とあるのでした。とはいってもレンゴウ戦隊よりはまとものようですが。

第五百六十五話　　完

２００９・１・２５

第五百六十六話　女装をするのは

第五百六十六話　女装をするのは

とりあえずエストニアはブルーになってついでに女装もしないことになりました。けれどどういうわけか誰かが女装をしなければならないのでした。

「そういえばあのプロデューサーさんって結構女装好きだよね」

「そうだよね。幼女が好きだって言われてるけれど」

リトアニアとエストニアは何気に変な話をしています。

「ゴーオンジャーでも女装あったし」

「コスプレ自体が好きなのかも」

「それだけれど」

話が女装に戻ります。

「誰が着るかだけれど」

「ラトビアがオーソドックスになるのかな。けれど服のサイズが」

「あっ、リト何それ」

ところがここでレッドのポーランドがのこのことやって来ました。

「いい服じゃね？セーラー服なんてよ」

「ああ、ポーランド」

「よかったら俺着ていい？俺こういう服好きなんよ」

ここでポーランドの女装癖が出て来ました。こうした変わった趣味も持っているのが彼の特徴ですがこの場合は好都合と言えば好都合なお話でありました。

「けれどこれって女装だけれど」

「それ全然平気だし。じゃあ俺着るし」

いつも通りかなり強引にリトアニアから服を受け取ったポーランドでした。こうして何はともあれ女装する人は決まったのです。それにしても何気に戦隊はコスプレが多いようです。実は幼女はあまり出ていなくてむしろコスプレの方が多かったりしますがこれは皆

あまり言いません。

第五百六十六話　　完

2009・1・25

第五百六十七話　イエローなのですが

第五百六十七話　イエローなのですが

ポーランド、エストニアときて今度はラトビアです。黄色い服を着た彼が言うまでもなくイエローです。けれど。

「僕はプテラノドンなんですね」

「それで駄目？」

リトアニアが心配そうな顔でそのラトビアに対して問います。

「他にも恐竜のマスコットはあるけれど」

「それはいいんですけれど何か最近」

「どうしたの？」

「ロシアさんがプテラノドン気に入られたみたいなんです」

ここでこの名前が出て来ました。

「ひょっとしたら僕もプテラノドンごと」

「何言ってるんだよ、そんなことないよ」

リトアニアはロシアの名前が出てギクリとしましたがそれでも何とかラトビアを励まします。

「だってロシアさんはレンゴウ戦隊じゃないか。もうあの鮫に似た車だって持ってるし」

「けれどロシアさんですよ」

ここ重要です。残念なことに。

「欲しいものがあったらそれこそ」

「うう、じゃあ十個の恐竜のマスコットもやっぱり」

「全部欲しいなんて言うんじゃ。確かこの戦隊ってホワイトがあれでしたよね」

そのホワイトこそが一番怖いのがこのチームの特徴だったりします。

「ベラルーシってやっぱり」

「考えちゃ駄目だよ、考えないでおこうよ」

流石にリトアニアも怖くなってきたのでした。
「そういうことはさ、明るく」
「なれたらいいですね」
暗くなるラトビア。しかもそんな彼の後ろから白い服のベラルーシがじっと見ています。何かチームワークは今までの戦隊で一番危なそうというかあからさまに仲間じゃない人がいたりするのでした。

第五百六十七話　　完

２００９・１・２６

第五百六十八話　女だったら

第五百六十八話　女だったら

このバルトイエローですがラトビアは黄色い上着に黒いズボンと何気にレンゴウイエローことイギリスと同じような服装になっています。しかも共通点はもう一つあります。

「俺の位置って実は女の子だったんだよな」

「僕もなんですよ」

こうした共通点があったのでした。

「何か滅茶苦茶可愛い女の子でよ。黒のロングヘアーにぱっちりとした目のな」

「僕の場合はショートヘアでスタイルが物凄くよくて」

どちらも得点はかなり高いようです。

「そんな娘と比べられるからな。大変なんだよ」

「僕はそこに幼女がどうとか言われますよ」

またここで幼女が出て来ました。

「何でかわからないですけれど」

「あの人一時期結構幼女話に出してたみたいだからな」

そのプロデューサーです。

「そのせいなんだけれどな」

「けれど実際はあまり出してないですよね」

「それよりコスプレだしな」

実はこっちの方がずっと多いのです。本当に。

「俺だってな。何かスマイルとかポーズが変なことになってるしな」

「僕何であの美人さんじゃないんだって言われます」

これはどちらも仕方ないことでした。

「ったくよお。こっちは男だから仕方ないだろう」

「スウジク戦隊は女の子多くてそこは羨ましいですね」

「全くだ。紅四点なんてな」

「世の中不公平です」
最期にはスウジク戦隊への羨望になるのでした。どうにもこうにも位置が辛いことになっている二人でありました。

第五百六十八話　　完

２００９・１・２６

第五百六十九話　リーダーは苦労人

第五百六十九話　リーダーは苦労人

遂にリトアニア登場です。リーダーの彼はブラックです。

「けれどこのブラックってかなり変わってるよね」

「ロボットには最後の方まで乗らなかったしーーーー」

相棒のポーランドが彼に対して言います。

「それに最初の八話位変身してなかったんじゃね？」

「そうだよ。中盤いなくて黒い鎧に乗り移られたことあったし」

「つうかいざって時以外は力発揮していないんじゃね？」

ポーランドの突っ込みは続きます。

「ブラックって」

「やっと変身できたと思ったら凄い弱かったし」

そういうこともあったのでした。なお所帯持ちでもあったという衝撃のキャラでもありました。

「それにアクの強いメンバーをまとめるのに苦労してたし。けれどそれって」

「どしたよ」

「俺と。似てるかな」

こう思えてきたのでした。

「やっぱり」

「じゃあハマリ役じゃね？」

誰のせいで苦労しているのかは考えることのないポーランドでした。

「リトとブラックって」

「そうかも。ブラキオサウルスだって結構好きだし」

「じゃあ当たりだし。リトがブラックでマジよくね？」

「いいのかなあ、やっぱり」

ポーランドに言われても今一つ確証が持てないリトアニアでした。

付き合いが長いのですがそれだけにわかっていることはわかっているのでした。残念なことに。

第五百六十九話　　完

２００９・１・２７

第五百七十話　本当に苦労しています

第五百七十話

本当に苦労しています

その苦労人の司令官でありリーダーでもあるそのリトアニアのバルトブラックですが彼はリアルでも苦労していました。その苦労の元は数多いです。

「だからポーランド、真面目に生きようよ」

「俺普通に真面目に生きてるしーーーー」

まずポーランドはいつも適当です。今日も自分の家をピンクに塗ろうかどうしようかなんてどうでもいいようなことを考えているのでした。

「それよりポニーってマジ可愛くね？一頭どうよ」

「俺達は恐竜でしょ。どうしてそうなるの」

「まあまあ」

まずポーランドはいつもの調子です。そして他の苦労の元は。

「うぎゃあああああああーーーーーーーーーーーーっ！！」

「ラトビア！ラトビアアアアアアアアアーーーーッ！！」

「だからどうしてラトビアはいつも余計なこと言うの！」

今日もラトビアがロシアにお仕置きされています。エストニアがいつものように叫んでリトアニアが何とかラトビアを助け出します。バルト戦隊の天敵はやっぱりロシアです。

こうした苦労の中で癒しといえばベラルーシなのですがこれが。

「だから御前後ろにいつもスタンドいるしーーーーー」

「そんなのいるわけないじゃない」

「っていうか見えるし。バルトキラーはマジやばいし」

「五人目の仲間で紅一点じゃない。そんなこと言ったら駄目だよ」

リトアニアは気付いていませんが彼の後ろでそのバルトキラーこ

とベラルーシが物凄い破壊のオーラを撒き散らしてきています。彼の苦労は耐えることがありません。

「あれっ、俺コーヒー三つ淹れたかな。二つだったのに」

「だから後ろにいるし」

リーダーの苦労は何時までも続くのです。

第五百七十話　　完

２００９・１・２７

第五百七十一話　遂に五人目ですけれど

第五百七十一話　遂に五人目ですけれど

バルト戦隊は一応五人メンバーとなっています。ところがこの五人目が一番とんでもなかったりします。

「何でこんなところまでモデルの番組通りなんですか！？」

「女の子なのは有り難いけれどね」

ラトビアとエストニアが嘆くことしきりでした。

「それでも。あんな怖い人が僕達の仲間だなんて」

「そもそも仲間なのかな」

このこと自体が疑問というのも実に素晴らしいことです。他の戦隊にはないことです。

「あの人」

「全然思えません」

ラトビアの今の言葉が全てを現わしています。

「僕達って実質四人ですよね」

「そうだよね。何かいつもロシアさんと一緒にいるし」

そのレンゴウグリーンとです。

「僕達と一緒に何かしたりしないし」

「本当に仲間なんですか？」

「僕もとてもそうは」

思えないのでした。

「本当にね。敵の組織を乗っ取っていてもおかしくないし」

「これで鰐がいつも一緒にいたら」

「そのままですよね」

「何で僕達だけこんなのなんだろう」

「いつもいつも・・・・・。まともな女の人が欲しいです」

ラトビアはこう言って嘆くことしきりでした。とにかく紅一点すらとんでもないレベルで大変なことになっているバルト戦隊でした。

何か得体の知れない呪いめいたものさえ感じられる程です。その呪いの元が隣のとてつもなく大きな人から来ているのかも知れませんが。

第五百七十一話　　完

２００９・１・２８

第五百七十二話　恐怖のバルトキラー

第五百七十二話　恐怖のバルトキラー

白い服に身を包んだバルトキラーことベラルーシ。とりあえずリーダーのリトアニアは彼女を仲間と思っています。とりあえず彼は、です。

「いいじゃない。ベラルーシが五人目で」

「御前それでいいの？マジで」

さしものポーランドも今回は真顔でリトアニアに問います。

「あいつが五人目で」

「あれ？おかしいかな」

「おかしいっていうか。どうせなら」

ここでポーランドは言うのでした。

「サンバルカン。よくね？」

「それだったら俺が入れないよ。だから爆竜になったんじゃない」

「それはそうだけれどよ」

それでも言いたいことは言いたいのです。ポーランドとしても。

「御前最近後ろに何かいるしーーー」

「ブラキオサウルスのこと？」

その黒いブラキオサウルスのぬいぐるみを見て言います。

「それって」

「違うし。だから御前の後ろ」

そのバルトキラーが怖い顔をして露とアにあの後ろに立っているのです。

「マジ俺達四人でいいって。まず御前が危ないしーーー」

「だからポーランドは心配性なんだって。大体戦隊っていったら五人が普通じゃない」

「それも戦隊によるしーーー、だから御前」

言ってる側から何か得体の知れない恐怖のオーラに蝕まれていく

リトアニアでした。黒い鎧よりこちらの方が危険なことになっていました。

第五百七十二話　　完

２００９・１・２８

第五百七十三話　実際に動いてみますと

第五百七十三話　実際に動いてみますと

何はともあれバルト戦隊起動です。実際に動いてみますといきなり。

「キラーいないしーーーーー」

「何て予想通りなんだ」

ポーランドが最初に気付いてエストニアが困った顔になっています。

「彼女何処に行ったのかな」

「本当に悪の組織のボスになってるんじゃないですか？」

ラトビアはここで碌でもないというか本当にありそうな予想を立ててきました。

「彼女だったらやっぱり」

「それはないと思うよ」

けれどリーダーのリトアニアはこう言うのでした。

「まあそれはね。幾ら何でも」

「けれど彼女ですからね」

エストニアはこんな中でも冷静に考えていました。

「ひょっとしたらロシアさんのところにいるのかも」

「それって充分に有り得ますよね」

ラトビアはロシアの名前を聞いただけで泣き出しそうな顔になってしまいました。

「やっぱり。もう」

「だから大丈夫だよ。そんなことないって」

リトアニアはどういうわけかベラルーシを信じています。これがどうしてもわかりませんけれど。

「ベラルーシにはベラルーシの都合があるんだよ。それより今は」

「どうするん？リト」
「俺達四人だけでも頑張ろうよ。少なくとも四人いるんだしさ」
「それはそれでいいんですけれど」
「何で僕達っていつもこうなんでしょう」
エストニアとラトビアの言いたいことはこうでした。
「何かすれば絶対ロシアさんとかベラルーシが関わるし」
「苦労ばかりが増えて」
やっぱり戦隊を作っても幸運からは離れてしまっているバルトチームでした。しかし本当にベラルーシの行方が気になるところでした。

第五百七十三話　　完

２００９・１・２９

第五百七十四話　本当にそこにいました

第五百七十四話　本当にそこにいました

そのベラルーシですが何処にいるかというと。やっぱりここでした。

「何でかいつもいるんだよね」

レンゴウグリーンのロシアがレンゴウブラックことフランスに愚痴を零しています。

「ベラルーシ。バルト戦隊には入らずに」

「で、御前はここにいるわけだな」

「うん」

今ロシアはフランスのお家に逃げてきています。そこで二人でワインを飲みながらお話をしているのです。

「ちょっと。いさせて」

「それはいいけれどよ」

フランスはそれはいいのでした。

「しかし。御前の妹さんなあ」

「困ってるんだ。何か凄く怖くて」

「それはよくわかるぜ」

フランスですらこんなことを言います。

「何ていうかな。威圧感あるよな」

「そうでしょ?それにいつも僕と結婚しようって」

一応兄妹になります。血縁関係はというとちょっとわからないというかどうにもこうにもややこしいことになっているようなのでありますが。

「だから。距離置きたいんだよね」

「その妹さんバルト戦隊にいるんだろ?」

「爆竜戦隊でキラーだよ」

「それだけでよくわかったぜ」
最早説明不要でした。
「どうにもならねえんだな」
「バルト戦隊はどうでもいいけれどベラルーシがねえ」
何とこのロシアですらもてあましているのがベラルーシなのでした。日本もアメリカも中国も同時に敵に回しても全く平気な彼ですら恐れるバルトキラー、一体何者なのでしょうか。とりあえずただのメイドの女の子ではないことだけはわかりますけれど。

第五百七十四話　　完

２００９・１・２９

第五百七十五話　大体この三人だって

第五百七十五話　大体この三人だって

バルト戦隊はとにかくキラーが本当に五人目なのかどうかというレベルで問題があります。けれど軸になっているこの三人にしろ実は気になるところがありました。

「俺達ってさ、バルト三国って言われてるけれどさ」

「はい、実は」

「結構民族も言語もバラバラなんですよね」

何と実はそうなのでした。それはお付き合いにも見事なまでに出ています。

「俺はやっぱりポーランドと一緒にいるし」

「ロシアさんと一緒なのはもう。ドイツさんがいいです」

「やっぱりフィンランド君とは付き合い易いんだよね。気が合うしお祭だって楽しいし」

はっきりと出ています。

「何かさ、ポーランドの奴ってあんなのだけれど放っておけないし付き合い長いし」

「僕、日本さんやイタリア君やドイツさんみたいな人とお友達になりたいんですけれど」

「このままフィンランド君と仲良くしていっていいかなあって思ってます」

ここで注目すると一人だけ仲間外れがいます。

「ラトビア、それにしても」

「頼りになる人いないの？」

「誰か、いないですか？」

そう、それはラトビアでした。

「できたら日本さんの隣なんて」

「あの半島？あそこは生徒会長がいるけれど」

「あの生徒会長みたいな性格になってもいいの？」
「それはちょっと・・・・・・」
流石にそれは勘弁して欲しいラトビアでした。バルト三国といっても決して一枚板ではない、それどころか実は結構バラバラな彼等なのでした。

第五百七十五話　　完

２００９・１・３０

第五百七十六話　この二人の絆が一番

第五百七十六話　この二人の絆が一番

こうした実は他人同士の三人ですがその中でリトアニアはいつもパートナーがいます。それはやっぱりこのポーランドです。

「だから。そこはもっとしっかりしないと」

「こんなの適当でいいしーーーー」

いつもの通り何事にも適当なポーランドをフォローしようと必死です。けれどその中でも当のポーランドは能天気な調子です。

「これでどうよ？」

「駄目だよ。だからこうしてね」

何だかんだで世話を焼いてポーランドを手伝っています。ロシアから離れたらこの二人は早速また一緒になって動いているのでした。

そして今もです。ポーランドもポーランドで。リトアニアの家との行き来が盛んです。そうして彼が困っているとすぐに助けるのです。

「リト、ここはこうした方がよくね？」

「ああ、こうすればいいんだ」

閃きはかなりいいポーランドです。あと科学もかつてキュリー夫人を出していたりもしてそこそこ以上にできたりするのです。

「成程。こうするんだ」

「そうだし。じゃあ終わったらコーヒーよくね？」

言いながらまたいつもの調子になります。

「それでよ。お菓子でよ」

「そうだね。終わったらね」

リトアニアもそんなポーランドに合わせます。

「これが終わったら時間ができるし。二人でゆっくりとね」

「家の色も色々考えてるしーーー。何かピンクじゃなくてオレンジ

がよくね？」
「オレンジ？それはちょっと」
こんな話をしながら今も二人で仲良くしています。こうして二人はいつも一緒なのでした。

第五百七十六話　　完

２００９・１・３０

第五百七十七話　ブラックと脚本家さん

第五百七十七話　ブラックと脚本家さん

リトアニアはバルトチームのリーダーです。尚且つブラックなのですがこのブラックには一ついわくがあります。それは。

「えっ、チンピラに刺されて死ぬ！？」

「おう、そうだ」

日本の家のあの某脚本家がリトアニアに対して語るのでした。

「それで死ぬんだよ。どうだ？」

「最終回にそうやってですか」

「俺が考えた今だかってない最期ってわけだ」

脚本家さんは得意満面に驚くリトアニアに話します。

「まあ安心しろ。次回作のＶＳじゃ何事もなかったかのように生きてるからな」

「それでも仲間の結婚式の時にそれは」

流石にこれはリトアニアも聞いたことのない結末でした。

「ないんじゃ？」

「ないからやるんだよ」

この脚本家さんは持ち前の横紙破りのスキルを発動させてきました。

「違うか？今までないことだからな」

「だからやるんですか」

「おう。御前もどうだ？」

ここでリトアニアにもそれを薦めます。

「最終回にな。ちょっとな」

「けれど爆竜戦隊の最終回って」

この作品もこの作品で独特の最終回だったりします。

「最後は皆のそっくりさんが出て来て」

「何だ、じゃあそっちがいいのかよ」
「ええ。というか貴方確かその年仮面ライダーで」
「ああ、いい思い出だな」
その年はこの脚本家さんが大暴れしたのです。
「またああいうの書くからな。楽しみにしておけよ」
「それじゃあまあ」
何気に不安なリトアニアだったりします。とにかくリトアニアは最終回で誰かと誰かの結婚式の中チンピラに刺されて死ぬことは避けられたのでした。

第五百七十七話　完

２００９・１・３１

第五百七十八話　脚本家さんはどうかというと

第五百七十八話

脚本家さんはどうかというと

この日本のお家にいる脚本家さんはお家の用心棒でありシェフでもあります。一番有名なのは工事現場の監督ですが一番多い引き受けるお仕事は用心棒です。

何をするかというと番組がピンチになると。すぐに出て来るのです。

「俺が日本を守ってるからな」

「今回も御願いします」

日本はこの人のことがわかっているので対応も冷静です。

「それでですね。今回は」

「ああ、何だ？」

「この仮面ライダーですけれど」

何と鬼をモチーフにした仮面ライダーです。斬新といいますか本当に仮面ライダーなのかどうかと首を傾げる人までいる程です。しかも車で移動したりしています。

「ちょっと後半何とかして欲しいんですけれど」

しかし話が急なのとこのライダー、前半お話が全然進んでいないので。この脚本家さんも引き受けてくれるかどうか疑問です。けれど脚本家さんは言いました。

「日本の願いは聞く！」

「引き受けてくれるのですね」

「俺に二言はない」

何と快諾してくれたのでした。

「それで三十話から四十九話までだな」

「はい、巻になりますけれど」

和風のお話ですので巻になるのでした。

「そこまで。御願いしますね」
「よし、じゃあ何があっても終わらせるからな」
早速脚本を書きはじめています。またこれがかなり早い。
「安心して任せてくれ。いいな」
「そういうことで。御願いします」
確かに物凄いキャラですけれどいざという時には頼りになる、そんな脚本家さんでした。

第五百七十八話　　完

２００９・１・３１

第五百七十九話　フランス兄ちゃんのグルメ

第五百七十九話

フランス兄ちゃんのグルメ

今では学園で一番のグルメを自称しているのがフランスです。その料理の見事さだけはあのイギリスも認めるところです。

「確かにそれだけは認めてやるよ」

限定はしていますけれど認めていることは認めています。これはかなり凄いことです。

そんなフランスですけれど今もその腕を見せ続けています。そのうえ学園の皆を唸らせています。本当に見事です。

「俺の料理を味わったら他のもんは食えないぜ」

「そこまではいかねえぞ」

早速イギリスが一言付け加えます。

「俺の紅茶を忘れるんじゃねえよ」

「御前紅茶しかねえだろうがよ」

フランスも負けてはいません。やっぱりこの二人はいつもの調子です。

ところがです。このフランスの料理の腕が昔からかというと。ここで疑問が生じるのでした。

「そういえば御前の昔の料理ってよ」

「何だよ」

「今みたいな感じだったか？」

イギリスはふとそのことを言うのでした。

「昔は自分と違ったもん作ってなかったか？」

「うっ、それはよ」

イギリスに突っ込まれたフランス、言葉を急に止めてしまいました。

「まあな。ちょっとな」

「何か覚えてるのだと今のとは全然違うよな」
味については甚だ疑問な彼でも気付くことでした。
「違ったか？何か味がな」
「そうだったか？昔からこんなのだったぜ」
「そうか。だったらいいんだけれどな」
「ああ、そうだよ。気にするなよ」
何故かとても焦って顔中から汗を噴出しているフランス。どうやら彼にとってこのことは触れてはいけない何かがあるようです。さて、それは一体何なのでしょうか。謎が一つ生まれたその時でありました。そしてこれが皆の過去を映し出すことにもなるのでありました。

第五百七十九話　　完

２００９・２・１６

第五百八十話　イタリアのパスタだって昔は

第五百八十話　　イタリアのパスタだって昔は

イタリアといえばやっぱりパスタです。もう何かがあれば食べている、そんな食べ物です。

ところがこのパスタにしろ。イタリアはドイツと日本に対して言うのでした。

「昔はとてもいつもこんなふうに食べられなかったんだよね」

「そうだったのか」

「ああ、そうですね」

ドイツはその辺りの事情はわかりませんでしたが日本はすぐにわかりました。

「私の国でもうどんといえば昔は御馳走でしたから」

「あのうどんがか」

「はい、何しろ作る人が少なかったので」

日本はこうドイツに説明します。

「それでなのです。イタリア君のパスタも高かったのですね」

「俺が小さい時はとても高かったんだ」

もうイタリアも殆ど覚えてはいない昔々のことではありますけれど。

「だからね。もうその時なんて滅多に食べられなかったんだ」

「このマカロニもか」

三人は丁度マカロニを食べています。

「食べられなかったのか、そんなに」

「そうだよ、全然」

イタリアはあらためてドイツに説明します。

「食べられなかったんだ、今みたいにはとても」

「そうか、本当に今とは全然違うのだな」

「案外そうした食べ物は多いですね」
日本はここで言いました。
「ドイツさんのところにもそうした食べ物はないですか？」
「俺のところにもか」
「ええ、何か」
「そうだな。そうえいばあれがそうだったな」
そうした昔は食べられなかったりした食べ物がドイツにもあるようです。さて、それは一体何なのでしょうか。ドイツも案外そうした食べ物があるようです。

第五百八十話　　完

２００９・２・１６

第五百八十一話　ドイツとジャガイモ

第五百八十一話　ドイツとジャガイモ

ドイツといえばやはりジャガイモです。しかしこれは最初からドイツの側にあったわけではないのです。これはあまりにも意外な事実であります。

「確かアメリカさんが見つかってからでしたね」

「そうだ。それまでは見たこともなかった」

日本の指摘に対して答えます。

「まさかこんなものがあるなんてな」

「そうですね。私もサツマイモを知ったのは最近のことですし」

日本はどちらかというとサツマイモの方が好きなようですけれどこのサツマイモにしろアメリカがいる広い新しい場所から来たものだったりします。

「それまでは全く」

「だが。これがあるおかげで俺は変わった」

とはいってもその頃のことはドイツも殆ど覚えていないわけですけれど。どういうわけかイタリアとドイツは自分達が子供の頃のことは殆ど覚えてはいないのです。これがかなり不思議なことであるのですが。

「これのおかげでな」

「どう変わったの？」

「身体が大きくなって食べ物に困らなくなった」

イタリアにまずはこう答えます。

「そのおかげで力も強くなった」

「そうだったんだ。そこまで」

「それまではオーストリアやフランスに押されてばかりだったんだがな」

昔はドイツもそれ程強くはなかったようです。
「だが。これを知ってな」
「つまり今のドイツさんがあるのはこのジャガイモのおかげですね」
「そうだ。さあ、どんどん食ってくれ」
早速茹で上がったジャガイモにバターを添えて日本とイタリアに出します。
「オーソドックスだがジャガイモの丸煮だ。どんどんな」
「はい、それでは」
「うわあ、いつもだけれどとても美味しいよ」
日本とイタリアはそのドイツのジャガイモをとても美味しそうに食べます。何とこのドイツの象徴とも言える食べ物はつい最近彼に伝わったのでありました。

第五百八十一話　　完

２００９・２・１６

第五百八十二話　どうして伝わったのかというと

第五百八十二話　どうして伝わったのかというと

ドイツとジャガイモ。最早切っても切れない関係にあるこの二つですが実は最初はそうではなかったようです。

「最初は何かと思った」

「ふうん、外見が悪いから？」

「聖書にも載っていないしな」

相変わらずそのジャガイモを食べながらイタリアに対して答えます。

「それでな。食べられるのかとても不安だった」

「私は普通に食べていましたが」

日本の家にはこの時聖書はなかったのでその点に関してはかなり自由なのでした。そのせいか日本は今でも食べ物にはかなり無頓着なところがありますけれど。

「それでだ。どうしても食べられなかったが」

「それでそこでだ」

何故かここでプロイセンがしたり顔でひょっこりと三人の前に出て来ました。

「俺が相棒にジャガイモの美味さを教えてやったってわけさ」

「えっ、そうだったの！？」

「ああ。で、相棒はここまで大きくなったんだ」

そのドイツのジャガイモを食べながらドイツの横に来て楽しげに笑いながらイタリアと日本に対して説明するのでした。

「俺がジャガイモを教えてやってな」

「それはその通りだ」

ドイツもそれを認めます。

「そのことは御前に感謝している」

「当たり前だ。俺達はパートナーだぜ」
ドイツは西、プロイセンは東。ドイツの家の両輪であります。
「こいつがしっかりしていないと俺も困るからな」
「まあこいつもこいつでジャガイモについては抵抗があったんだがな」
「おいおい、それまで言うのかよ」
自分のことをばらされて困った顔になってしまうプロイセン。どうやら彼にしてもジャガイモに関しては色々あったようです。ジャガイモのお話はまだ続くようです。

第五百八十二話　　完

２００９・２・１６

第五百八十三話　ジャガイモは嫌いでした

第五百八十三話　ジャガイモは嫌いでした

プロイセンはこの時オーストリアさんと戦争したりフランスと戦争したりポーランド分割したりととにかく強くなろうとしていました。時間があれば畑を開墾したりしていました。

これは全てプロイセンの上司の命令でした。あのフリードリヒ大王です。この人はとにかくプロイセンを強くしようと頑張っていたのです。

そんな中である日上司はプロイセンにこの食べ物を紹介したのです。

「何ですか、これ」

「ジャガイモだ。アメリカの方の野菜だな」

「野菜ですか」

土にまみれてゴツゴツしていて外見はとても悪いです。ちょっと見たら石ころに見えます。上司はそれを彼の前に出して紹介したのです。

「これからはこれも食べろ」

「これ食べられるんですか？」

「痩せた土地でも育つししかもよく採れる」

このことだけを聞くと夢の様な作物ではあります。プロイセンのお家は寒い場所にあって作物はあまり採れないのがネックですから。

「だからだ。これも食べろ」

「けれどこれって」

プロイセンはその顔を思いきり顰めさせて上司に言いました。

「聖書にもないですし毒もありそうですし」

「食べたくないか」

「ええ、まあ」

珍しく上司の命令にもかなり消極的です。
「これはちょっと。食べられるとは思いませんし」
これがプロイセンとジャガイモの出会いでした。実はその出会いはかなり悪いものであったのです。けれどこれがすぐに大きく変わることになるのでした。

第五百八十三話　完

２００８・２・１７

第五百八十四話　大王の機略

第五百八十四話　大王の機略

上司にジャガイモを食べるように言われたプロイセン。けれど彼はこの作物を全く食べようとしません。毒がありそうだのまずそうだの聖書にもないだの色々と言ってとにかく食べようとしないのです。

これに対して上司はどうしたかというと。無理矢理食べさせようとはしませんでした。ただある日急にこんなことを言い出したのです。

「ジャガイモを食べていいのは貴族だけだ」

こんなことをです。

「いいか。貴族以外はジャガイモを食べてはいけない」

これにはプロイセンも入っています。プロイセンは国ですから貴族より上になりますけれどそれでも貴族ではありません。この辺り結構複雑だったりします。

何はともあれかくしてプロイセンはジャガイモを食べられなくなりました。畑には兵隊まで立っています。けれどこうしたことを言われてはかえって食べたくなるのが人情です。

これは国であるプロイセンも同じで貴族以外の皆とコソコソ話をします。そうしてそのうえで兵隊の目を盗んでこのジャガイモを食べてみることにしたのです。

「夜にこっそりとな」

「はい、行きましょう」

「それで食べてみればいいですよね」

こうして夜に畑に密かに忍び込んでこのジャガイモを食べてみました。何故か兵隊は動かずプロイセンも国の皆もジャガイモを食べることができました。

この話はすぐに上司の耳にも入りました。けれど上司はそれを聞いてもプロイセンや皆を罰しようとはせず満足そうに笑うだけでした。

「よし、上手くいったな」

実はこの人がプロイセン達にジャガイモを食べさせようと考えた作戦だったのです。そして作戦は大当たりでこれがプロイセンとジャガイモの本当の意味での出会いとなったのです。

第五百八十四話　　完

２００９・２・１７

第五百八十五話　ロシアでもジャガイモは

第五百八十五話　ロシアでもジャガイモは

ドイツではプロイセンの上司が結構苦労してジャガイモを広めました。その介あっての今というわけですが。けれどこれは何もドイツだけのことではなかったのです。

「そうそう、ジャガイモってね」

ロシアがドイツのこの話を聞いて言うのでした。

「ああした外見だから食べ物なのかどうか本気で不安になるんだよね」

「そういえばロシアさんも最初はジャガイモは」

「うん、食べなかったよ」

リトアニアに対して答えます。

「ドイツ君と同じような理由でね」

「そうでしたよね。けれど今は」

ちゃんと食べています。そもそも寒くてあまりにも有名なロシアにおいてジャガイモがなければどうなってしまうか。このことも考えるまでもないことであります。

「食べてるよ。美味しいよね」

「またどうしてなんですか？」

「上司の人の大好物だったんだ」

ロシアはこのことを言いました。

「ほら、あのドイツ君のお家から来た女の人」

「えっ、あの人ですか！？」

リトアニアはその人のことを聞いてギクリ、とした顔になりました。

「あの人がそうだったんですか」

「自分のエネルギーの源だって言ってね。いつも食べていたから僕

も」
「そうだったんですか」
リトアニアはそのギクリ、とした顔のままロシアに応えます。
「はあ。あの人が」
「食べてみたら美味しくてね。そうだ、今日も帰ったらジャガイモを食べようかな」
「それはいいと思いますけれど」
「何かあるの？」
「い、いえ別に」
この辺りは決して言わないリトアニアでした。けれどその表情は変わらないのでした。そのギクリ、となった顔は。

第五百八十五話　　完

２００９・２・１８

第五百八十六話　エカテリーナさん

第五百八十六話　　エカテリーナさん

ロシアのかつての上司は結構怖い人が多いです。雷帝は何かあればとんでもないヒステリーかそういった類のようになってそれこそ血も凍るような行いを繰り返しました。

最近ではグルジアから来た口髭の人もそうですし今の人も世界的に見ればかなり怖い人です。その他にも豪放磊落な大帝も他の国ではおおよそ考えられない人です。

そうした上司の中にある女帝がいます。その人の名前をエカテリーナといいます。けれどこの人は元々ロシアのお家の人ではありませんでした。

「ドイツから来られたんですか」

「そうです」

エカテリーナさんはロシアに会った時このことを説明しました。丸く優雅な目をしていて顔の細長い。少し見ただけではとても優雅な雰囲気の人です。何気にスタイルもよさげです。

「ただ。結婚する人があれでは」

エカテリーナさんはロシアの上司になるべき人の奥さんになる為にロシアに来たのですけれどこの人がまた。もうどうにもならない人でロシア人なのにプロイセンの上司を敬愛してやまないような人でした。もう結婚する前から不安で仕方ないのでした。これはエカテリーナさんだけでなくロシアもです。

「ただ。ロシアでしたね」

「はい」

「貴方とはこれからも時間があればお話をしたいと思っています」

けれどロシアには優しい声をかけるのでした。

「それで宜しいですね」

「僕はそれで」

素朴なところもあるロシアはそれで納得しました。
「御願いします」
「さて。それではロシアの言葉に歴史に」
早速勉強をはじめるのでした。
「あとは文学に芸術に。フランスのものも勉強しながら」
エカテリーナさんはロシアに着くなり早速勉強をはじめました。
何とこの人は物凄い努力家なのでした。さて、この人は一体どうなっていくのでしょうか。

第五百八十六話　　完

２００９・２・１８

第五百八十七話　勉強のかいあって

第五百八十七話　勉強のかいあって

エカテリーナさんは旦那さんとの不仲や姑さんであるこの時のロシアの上司の人の口やかましい小言にも耐え一人黙々と勉強を続けました。そして旦那さんがロシアの上司になって暫く経った時でした。

「おい、あの人は駄目だ」

「駄目なんてものじゃない」

旦那さんの評判は散々でした。もうやることなすこと何から何まで出鱈目であっという間にロシアのお家を滅茶苦茶にしてしまったのです。それでロシアのお家の人達がこぞって怒りだしたのです。

「こうなったらあの人に俺達の上司になってもらおう」

「そうだな、それがいい」

こうしてロシアのお家の人達はエカテリーナさんに御願いしました。自分達の上司になって欲しいと。

「ドイツ生まれなのにかよ」

「ああ、そういえばそうだよね」

ロシアはこのことをフランスに突っ込まれましたが今そのことに気付いた感じでした。

「あの人ドイツから来たんだっけ」

「それで御前の上司になったのか」

「まああの人しかいないって感じだったから」

エカテリーナさんの出自には全くこだわっていなかったのでした。この辺りはおおらかと言うべきでしょうか。

「それでエカテリーナさんにお声かけたらね」

「あっという間にクーデター成功ってわけだな」

「うん、本当にあっという間だったよ」

軍服を着て颯爽と馬に乗ったエカテリーナさんを見て皆熱狂的な

声をあげました。これで決まりでした。
　エカテリーナさんは旦那さんに代わってロシアの上司となりました。こうしてロシアはまともな上司を迎えることになったのです。
「それからだったよね。フランスさんと余計にお付き合いが深くなったのって」
「だったな。あの人俺の家の音楽や本が大好きだったからな」
「あの時はオーストリアさんと三人で結構楽しかったね」
「あいつとはそれより前には色々とあったけれどな」
　この辺りは微妙でしたけれどそれでもロシアとフランスのお付き合いがこれまで以上に親密になったのもエカテリーナさんの頃からでした。そしてそれは当然ロシアにも影響するのでした。

第五百八十七話　　完

２００９・２・１９

第五百八十八話　ロシアへの英才教育

第五百八十八話　　ロシアへの英才教育

エカテリーナさんはロシアの上司になりました。とりあえず旦那さんがどうなってしまったのかは皆あえて言いません。おおよそのことはわかっていてもです。

そのことは置いておいてエカテリーナさんはすぐに善政を敷きました。ロシアは持ち直し人々はこれまでよりかは結構ましな生活になりました。少なくとも人の数は増えました。

エカテリーナさんの行動は政治にだけ及んだのではありませんでした。やはりこの人は文人でもあります。ですからその方面にも力を入れ武骨だったロシアにも豪華絢爛なバロックやロココといったものが入って来たのです。

「これはオーストリアさんからの音楽ですね」

「そうです。そしてこの本はフランスのもの」

エカテリーナさんはうっとりとした顔でロシアに説明するのでした。場所はエル＝ミタージュ。エカテリーナさんがあらたに作らせたフランス風の美しい宮殿です。そこで二人でお話中というわけです。

「素晴らしいですね」

「そうですね。僕にはあまりよくわからないですけれど」

「大丈夫よ。貴方ならわかるわ」

エカテリーナさんはここでロシアに言うのでした。

「貴方ならね」

「どういうことですか？」

「これからは貴方も音楽や文学を勉強しなさい」

エカテリーナさんはロシアに命令しました。

「いいですね。他には絵画やバレエもです」

「ええっ、僕がですか」

いきなり言われてロシアもびっくりです。
「僕が芸術や文学なんて」
「貴方には素晴らしいセンスが眠っています」
エカテリーナさんは真面目な顔でロシアに告げます。
「だからです。いいですね」
「はあ。わかりました」
とりあえず上司の言葉は絶対なので従いました。こうしてロシアは音楽や文学といったものも勉強することになったのでした。果たしてどうなるでしょうか。

第五百八十八話　　完

２００９・２・１９

第五百八十九話　やってみると本当に

第五百八十九話　やってみると本当に

「大丈夫ですかね」
「貴方なら大丈夫です」
エカテリーナさんに言われるまま文学や芸術、音楽をはじめてみたロシア。フランスのそういったものを参考にしてとりあえずはじめてみます。エカテリーナさんは太鼓判を押していますがロシア自身もお家の人達もかなり不安であります。
「本当にできるのかな？」
「ちょっと。無理なんじゃないかな」
何せ今までそういったものとは全く無縁の寒く血も凍る様な恐ろしい世界で生きてきたのですから。やれるかどうかというと無理だと思うのが当然です。けれどはじめてみるとすぐに。
「えっ！？」
「嘘だろ！？」
「そんな馬鹿な」
何と意外や意外、文学も芸術も音楽もかなりのものです。どうやらエカテリーナさんの見た通りロシアはその方面をセンスを持っていたのです。しかもかなり繊細かつ優雅な。
「ピアノまでできるなんて」
「特に文学と音楽が凄いな」
「凄いなんてもんじゃないよ」
ロシアのお家の人達も唖然としています。ロシアの書く詩や小説はどれも素晴らしいもので忽ちのうちに学園でも話題になりました。あれよこれよという間にその方面においてはあのイギリスやフランスとも比肩する程の評価を得るようになりました。
「まさかこんなに評判になるなんて」
「言った筈です。貴方はできると」

エカテリーナさんは自分でも驚いているロシアににこりと笑って言うのでした。
「私の見た通りです。これからもこの方面でも頑張るのですよ」
「はい。じゃあ今度は絵画でも」
絵まで描きます。
「頑張ってみますね」
「どんどん頑張りなさい。それが貴方の為にもなるのですから」
「わかりました。それじゃあ」
こうしてロシアは精進を続けていきます。しかし最も力を入れたのは他のものでした。

第五百八十九話　　完

２００９・２・２０

第五百九十話　バレエが一番です

第五百九十話　バレエが一番です

ロシアはとりわけ文学と音楽にその抜群の芸術センスを発揮しました。けれど彼がそのセンスを最も見せたのはこの二つではなかったのでした。

では何に発揮したのかというと。これでした。

「おいおい、これはまたすげえな」

コーチ役のフランスも舌を巻くばかりです。

「こんな短期間でここまでやれた奴なんて見たことねえぞ」

「そうなの？」

「ああ、見事だ」

フランスも賞賛するばかりです。今ロシアはバレエをしているのです。

「御前踊りの才能あったんだな」

「昔からコサックダンスはよくしていたけれど」

「いや、あれとは別にな」

少なくともコサックダンスとバレエは違います。ロシアは今素晴らしい動きと優雅さでバレエをしているのです。本当に本場であるフランスが目を未貼る程に。

「すげえよ。こりゃ俺も負けてられねえな」

「フランスさんよりもってそこまでは」

「マジだよ。もう俺が教える必要もないのかもな」

ロシアはあっという間にバレエのメッカになってしまったのでした。あっという間にそのフランスと比肩する程にまでなりました。本当にあっという間でしかも凄いのはロシアだけではありませんでした。

「ではお兄様」

「うん、今日は二人でね」

ロシア妹も抜群のバレエのセンスを見せます。二人で白鳥の湖をやるとそれこそ芸術とはどういったものかを見せるようなものになります。そしてバレエからフィギュアスケートやシンクロナイズドスイミングもやって。ロシアのセンスは何処までも磨かれ素晴らしいものになっていくのでした。ロシアはただ大きくて寒いだけではない、意外なところで繊細なセンスを発揮するのでありました。

第五百九十話　　完

２００９・２・２０

第五百九十一話　中国でのお芋

第五百九十一話　中国でのお芋

新世界から伝わったジャガイモ。これは世界中に伝わりました。当然ながら中国にも伝わっています。

やっぱり彼もジャガイモを食べないわけではありません。ですが自慢の中華料理には何故かそのメニューは少ないです。これはまた実に意外なことです。

「あれっ、ジャガイモ食べないの？」

「食べることは食べるあるぞ」

こうアメリカにも答えます。

「けれど僕はどちらかというとこれある」

そう言って出して来たのはもう一つのお芋であるサツマイモです。これもまた言わずと知れた新世界から皆への贈り物です。赤い皮の下には黄金色のお芋があります。

「このサツマイモの方が好きある」

「あっ、こっちなんだ」

「お米と同じ位食べているあるぞ」

見ればもう焼き終えています。ホカホカと湯気が立っていてそれがまたサツマイモをとても美味しそうに見せています。最早暴力的なまでの威力を見せています。

「うちの家に来てからは」

「それでこれを食べてどうなったんだい？」

「人が増えたある」

食べ物が増えれば人も増える。自明の理です。

「これを食べるようになってから」

「君の家って元々人が多かったそうだけれど」

中国が人が多いのは本当に昔からです。けれど今は昔よりずっと多いのです。どうしてこんなにいるんだという位です。

「それでも増えたの」
「全てはこのサツマイモのおかげある」
中国は言います。
「いいか悪いかは別にして」
人が多過ぎると困ったこともあるわけで。この辺りはちょっと微妙だったりします。けれどサツマイモはちゃんと食べる中国なのでした。

第五百九十一話　　完

２００９・２・２１

第五百九十二話　今の料理は実は

第五百九十二話　今の料理は実は

サツマイモをかなり食べる中国ですがやっぱりその料理はかなり有名です。大きく分けて四つの料理大系を持っています。けれどこの料理が実は。

「最近形成されたと聞いていますが」

そうしたことには何気に詳しい日本が中国に尋ねます。

「確か。上司の方が辮髪の方だった時に形成されたとか」

「その通りある」

中国もそのことを認めます。

「実は広東にしろ北京にしろそうある」

「そうですね」

「四川は唐辛子がないとどうにもならないあるが麻婆豆腐なんかは出来たのは本当に最近だったりするある」

「私の家に伝わったのも最近ですし」

実はそうったりするのです。意外なことに。

「広東といえばそういえば」

「上司のあの人が時々行っていたある」

中国にとっては少し昔のことです。何しろ一説では四千年生きていますから。日本にしろ外見はともかくその実年齢はわかったものではありませんけれど。

「乾隆帝あるな」

「その方が広東で料理を楽しまれていたようで」

「その時から広東の料理はかなりよくなっていたある」

本当に最近のようです。

「北京では羊あるが羊はモンゴルのところから来た上司の主食だったあるしな」

「そうですね。中国さんの今のお料理になったのはつい最近ですね」

「昔の料理も一応作れるあるが」
覚えてはいるのです。
「それでも今の料理は。やっぱりできたのは最近あるな」
「そうですね。本当に」
そんな話をしながらテーブルを囲んでその広東料理を食べています。やっぱり中国で海鮮ものといえばこれか上海です。二人でその広東料理を楽しむ日本と中国でした。

第五百九十二話　　完

２００９・２・２１

第五百九十三話　昔の中国の食べ物は

第五百九十三話　昔の中国の食べ物は

とにかく色々な料理を作ることができるので有名な中国。けれど昔は決してそうであるとは言えなかったのです。もっとも彼にとっての昔とは相当なものですけれど。

「商の時だったあるかな」

「商って？」

「かなり昔だと思うのですが」

アメリカも日本もそうした時代のことは知らないです。というよりかは最近まで本当にあったのかどうかさえ謎であった時代だったりします。中国はそうした時代から生きているようです。

「あの時は干し肉を作るだけでも大変だったある」

「あんなのを作るのでも大変だったんだ」

「私も普通に作っていますが」

「とにかく技術ももものも何もなくてどうしてもそうなってしまうある。食べ物はそのものがないとどうしようもないあるからな」

「アイスクリームだってミルクと卵と砂糖がないと駄目だからね」

「だからですか」

二人もそう言われて納得しました。

「家畜も殆どいなかったしそれで羊なんかは最高の御馳走で。そうした中でやっと干し肉を最高の御馳走にしていたある」

中国は二人にさらに話します。

「お米もなくて稗や粟が主食だったあるな」

「それって鳥の餌じゃないの？」

「たまにお菓子にも使いますが」

「とにかくそういうものしかなかったある」

当時はそうなのでした。

「お米がうちの家の南の方で食べられるようになったのはもっと後

からだったある。麦もまだ少なくてそういったものを食べていたある。今食べたらまずくてとても食べられたものではないあるが」
「そうだろうね。鳥の餌だからね」
「食べられないというわけではないですけれど」
「箸もなかったあるしな」
とにかく何もなかったみたいです。中国も最初から今のようになったわけではないということです。ｙあはり何事も一日にしてならずです。

第五百九十三話　　完

２００９・２・２２

第五百九十四話　酒池肉林

第五百九十四話　酒池肉林

そうして何かを食べたり作ったりするのにも苦労していた時代。その時代の中国の上司の人がある日いきなり彼に対して言うのでした。

「まずは池を造って水ではなく酒を入れよ」

「酒あるか！？」

「そして周りの木々には干し肉を吊るして枝のようにする」

その当時での最高の御馳走をです。

「よいな。そうしてそこで宴をするのだ」

「酒の池に肉の林」

食べるのにも今よりもずっと苦労していた時代です。お酒もそうあるものではありません。それで酒の池を造るとなるともう。想像を絶する話です。

しかも肉の林です。どれだけの贅沢かわかりません。中国もこれには絶句です。

「いいな」

「わかりましたある」

上司の命令は絶対なのはこの時代でも一緒ですから従わざるを得ません。中国は家の人達と一緒にかなり苦労してその酒池肉林を完成させました。それを完成させると上司はその中で好きなだけ遊びます。他にも途方もない贅沢を続けて国のお金は瞬く間になくなっていきます。

「これは困ったあるな」

「あの男は駄目だな」

ここで中国の最高の上司である龍が彼に言ってきました。中国の上司も何人かいるみたいです。

「替えるとするか」

「替える？」
「ほら、来るのだ」
西の方から早速人を呼んできました。
「今日から御前の上司はこの人だ。これからはこの人を上司とするのだ、いいな」
「何か急に決まったあるな」
こうして酒池肉林は上司が替わったので終わりました。なおこれが以後中国の上司交代のパターンの一つになりました。俗に易姓革命と言います。

第五百九十四話　　完

２００９・２・２２

第五百九十五話　アメリカンポテト

第五百九十五話　アメリカンポテト

ジャガイモやサツマイモはアメリカの方から伝わったのですから当然アメリカもそういったものを食べます。お家にドイツの方から来た人もかなり多いのでそれもあってかなり食べます。

「もう主食っていう位食べてるよ」

「パンよりもですか」

「そうだね。パンと同じ位かも」

日本に応えて述べます。

「もうね。朝も昼も晩もってね」

「そうなのですか」

「ほら、これとか」

今はマッシュポテトを食べています。

「マッシュポテトだけれど。どうかな」

「味はいいと思いますよ」

日本はそのマッシュポテトを食べてみて答えます。

「アメリカさんも最近お料理の腕をあげられましたね」

「僕だって料理してるからね。そうか、そんなに美味しいんだ」

「美味しいことは美味しいです」

日本はそのことは認めます。

「ですが」

「ですが？」

アメリカは日本の言葉が止まったのを見て何かあると気付きました。

「何かあるの？マッシュポテト美味しいって言ってくれてるのに」

「量が」

日本はここでその量について言うのでした。

「これは。また」

「量が！？」
「私には多過ぎます」
見れば日本の前にそのマッシュポテトが山盛りになっています。
それこそバケツみたいな食器にうず高く積まれているのです。本当に凄い量です。
「これだけのものは。ちょっと」
「あれっ、そんなに多いかな」
アメリカはそんなふうには全く思っていません。
「これ位いつも朝に食べてるけれど」
「いつも朝にですか」
日本はアメリカのその発言に唖然としています。とにかく量が凄いのがアメリカです。

第五百九十五話　　完

２００９・２・２３

第五百九十六話　その量がとにかく

第五百九十六話　その量がとにかく

アメリカはとにかく物凄い量を食べます。そのバケツ山盛りの如きだけでなく他のものも一緒に食べるのですから驚きです。

「マッシュポテトだけじゃなくてサラダもそれだけあるか」

「うん」

隣にいる中国に対して答えます。勿論食べながら。

「しかもベーコンは」

「五百グラムだよ」

ベーコンもそれだけです。ステーキみたいな大きさのベーコンをあっという間に食べていきます。

「しかも卵料理は目玉焼きあるな」

「朝に卵はお約束だよね」

そっちは二つですけれど目玉が二つなので合計四つです。おまけに茹で卵まであります。

そこにパン。バターやジャムをたっぷりと付けて食べます。それを何枚も食べてミルクもごくごく飲んで。それからグレープフルーツまで食べます。勿論スープまであります。

「僕も食べるあるがそれでも物凄い量あるな」

「食べないと身体がもたないじゃないか」

アメリカは食べ終えてから平然としてこう返します。

「だからね。食べるんだよ」

「それはわかったある」

中国もそのことには頷きます。

「ただ」

「ただ？」

「朝からそれあるか」

そのことを言いたいのでした。

「朝からそれだけよく食べられるものある」
「昼や夜はもっと食べるよ」
平気な顔で言葉を返すアメリカでした。とにかく本当によく食べるのでした。それだけ食べればお家の人に体重で困ったことになっている人が多い野茂当然です。

第五百九十六話　　完

２００９・２・２３

第五百九十七話　何と実話だった

第五百九十七話　何と実話だった

アメリカはとにかく何でもやたらと食べます。それはお菓子でも同じでとりわけアイスクリームは大好きです。

「やっぱりアイスを食べないと動けないよね」

「アイスですか」

「うん。日本だってアイス好きだろう？」

日本に対しても尋ねます。

「この前だって美味しそうに食べてたし」

「はい。好きなことは事実です」

実際に日本もアイスクリームは大好きです。今もアメリカと二人で食べています。日本はバニラでアメリカは何かやたらと青いアイスという違いはありますけれど。

「ですが」

「どうかしたのかい？」

「そのアイスですが」

日本はアメリカのそのアイスクリームに対して言いたいのでした。

「容器が」

「んっ？普通じゃないかな」

見ればそのままバケツに使えそうなとんでもない大きさの容器です。アメリカはそのバケツ容器に入れられている鮮やかな青のアイスクリームを食べているのです。

「もっと大きい容器だってあるよ」

「もっとですか」

「僕アイス好きだから」

返答になっていません。アメリカは日本がどうして容器のことを言うのかわかっていません。これもアメリカには結構以上によくあ

ることでありますけれど。
「もっと大きいのだってあるよ。よかったら一つどうかな」
「いえ、私は」
日本はそれは断りました。
「今食べているのだけで充分ですから」
「ふうん、そうなんだ」
流石にバケツみたいなアイスクリームは食べられない日本でした。
アメリカはとにかく食べます。

第五百九十七話　　完

２００９・２・２４

第五百九十八話　色々な国の食べ物が

第五百九十八話　色々な国の食べ物が

アメリカは言わずと知れた移民の国です。ですから色々な国から来た人がいます。そしてそれはただ色々な国の人がいるというだけには終わらないのでした。

「今日は僕の国の料理あるな」

「うん。この海鮮料理美味しいね」

海鮮麺に海老蒸餃子に海鮮炒飯です。他にも鱶鰭餃子もありますし小龍包や豚腹煮込みもあります。やっぱり量はかなりのものです。

「あとデザートは」

「これは私の国のお菓子ですね」

見れば和菓子です。日本風のお饅頭まであります。

「日中ですか、今日は」

「まあハンバーガーもあるけれどね」

「それはそもそもルーツはドイツだったあるな」

流石に中国は食べ物のことに詳しいです。

「昨日はスパゲティ食べていたあるし」

「うちの家は色々な国の人がいるからね」

やはりこのことが大きく影響しています。

「だからね。こうして今もね」

「色々なものが食べられると」

「そういうことなんだ」

見ればアメリカは今お箸を使っています。普段はフォークとナイフ、それにスプーンですけれど料理によっては使えるのでした。しかも意外なことに結構器用に使っています。

「さあ、だからね」

「僕達もあるか」

「食べ物は皆で食べるのが美味しいからね」

「それでは。御言葉に甘えまして」
今は三人で楽しく食べはじめました。何気にそこにロシアを呼んでいないことに微妙なものを感じますがそれは三人共言わないのでした。

第五百九十八話　　完

２００９・２・２４

第五百九十九話　誰も見向きもしない人も

第五百九十九話　誰も見向きもしない人も

カナダもやっぱりジャガイモを食べます。ところが。

「何でまた来て欲しい人は誰も来ないんだろう・・・・・」

腕を振るって料理を作ってそれでパーティーをしても来て欲しい人は誰も来ないいつものパターンです。来るのはやっぱりアメリカとか中国とか韓国とか濃い面子です。来れば間違いなく騒いで家の中を汚し回ってそのまま帰ってしまう。そんな国の人達ばかりやって来ます。

今回もそれで皆が皆食い散らかして飲み散らかして後はそのままです。しかもお料理は何が出ていたのか全く覚えていないのでした。

「あれっ、そういえば何食ったっけ」

「適当なもん食ったような気がするけれどな」

「あれだけ食べて料理の感想ないの！？」

驚くべきことです。

「折角頑張って作ったのに。パンケーキだって焼いたのに」

「ところでジャガイモは？」

ここでクマ二郎さんがカナダに尋ねます。

「出てたんだよね」

「マッシュポテトとかフライドポテト一杯作ったよ」

カナダはそのクマ二郎さんに答えます。

「ちゃんとね、クマ九郎さん」

「そいつ確か二十巻でやっと出て来た十八歳でいきなりエリート社員でヘリ操ってた奴だよな」

「そうだよ」

またしてもクマ二郎さんの名前を間違えています。

「折角それも一杯作ったのに感想がないなんて」

「だってアメリカと同じメニューだから」

クマ二郎さんはカナダに容赦ない突っ込みを入れます。
「覚えられなくても当たり前だよ」
「ううん、何で何をやっても目立てないんだろう・・・・・・」
それは最早天才の域に達していました。とにかく何をしても目立てないカナダなのでした。

第五百九十九話　　完

２００９・２・２５

第六百話　食べさせる奴を考えろ

第六百話　食べさせる奴を考えろ

目立ちたい、有名になりたいけれどそれがどうしても適わないカナダです。けれど今は折角作っても何の感想もなかったジャガイモ料理について感想が聞きたかったのです。それで自分とは正反対に黙っていても勝手に目立って注目される日本を呼んで料理の感想を貰うことにしました。ところがやって来たのは。

「美味いもの食べてやりに来てやったんだぜ！」

「何でこの人が来るの？」

「御前が間違えたからだよ」

よりによって韓国がかわりに来てうんざりとした顔になるカナダにクマ二郎さんが答えます。

「日本と韓国の位置はちゃんとわかっておかないとな」

「ううん、よりによって・・・・・・」

愚痴を言っても仕方ありません。来た人は仕方ありません。とりあえずそのジャガイモ料理を韓国に出して感想を貰うことにしました。ところがその感想が。

「まずくて食えたものじゃないんだぜ」

こんな感想でした。

「イギリスのと同じ位まずい。こんなの料理じゃないんだぜ」

「そこまで言う？」

「唐辛子がないんだぜ」

何処からか大量の唐辛子を出してマッシュポテトにかけだしました。そしてフライドポテトにはコチュジャンをたっぷりと塗ります。そうしてから食べるのでした。

「これで何とか食えるようになったんだぜ。カナダの料理は料理じゃないんだぜ」

「そこまでこきおろす！？しかも何その物凄い赤は」

もうマッシュポテトもフライドポテトも真っ赤になっています。
そのまま韓国のお家の料理になっています。
「まだ欲しいんだぜ」
「そんな食べ方ないよ。しかもおかわりまで要求するし！」
「だから呼ぶ相手を間違えるとこうなるんだよ」
そのまずいジャガイモ料理を真っ赤にしてから食べてそのうえおかわりまで要求する韓国に唖然とするカナダ。その彼にまたクマ二郎さんの突込みが入るのでした。

第六百話　　完

２００９・２・２５

第六百一話　日本はどちらもです

第六百一話　　日本はどちらもです

カナダはジャガイモでも目立てませんでした。けれど特に何もしなくても目立っている人はいます。世の中時としてかなり不公平であります。

それは誰かというと日本です。この人は特に何も言わなくても皆から注目されます。この辺りは個性の差なのか星の巡り合わせなのかわかりませんが実際にそうなのですからあれこれ言っても仕方ありません。

その日本もまたジャガイモやサツマイモを料理に使います。しかも彼は両方です。

「日本の家のお粥あるな」

「はい、そうです」

日本のお家に来て御馳走になっている中国に述べます。

「お粥にサツマイモを入れてみました」

見れば白いお米のお粥の中に切ったサツマイモがあります。赤い皮と黄色い中身が実によいコントラストを見せています。

「これがかなり美味しいのです」

「確かに。その通りある」

中国は食べてみてそれを実際に知りました。

「御飯の味とサツマイモの甘さが程よく出ているある」

「あとジャガイモでも作っています」

そう言って出してきたのは肉じゃがでした。ジャガイモと玉葱、それに糸こんにゃくと牛肉。これはかなり豪勢です。

「これもどうぞ」

「僕はジャガイモはあまり食べないあるが」

中国は一応そう前置きはします。

「けれど。これもいい味あるな」

「どうもです」
「日本は両方使うのあるな」
そして今度はこのことを日本に言うのでした。
「それは結構珍しいあるぞ」
「どちらも美味しいですから」
これが日本の返答でした。
「ですから。両方共いただきます」
こうしたことでもかなり柔軟なのでした。日本はいいと思うことは何でも取り入れる人なのです。

第六百一話　　完

２００９・２・２６

第六百二話　アレンジもしています

第六百二話　アレンジもしています

日本はただいいものを取り入れるだけではありません。何かしらの形でアレンジすることも忘れません。それはお芋にしろそうでした。

「うわ、凄い色だね」

アメリカは日本が差し出してきたソフトクリームを見て思わず声をあげました。

「赤紫のソフトなんてはじめて見たよ」

「サツマイモを入れたアイスです」

日本はそのアメリカに対して言います。

「それでこの色なのです」

「へえ、サツマイモのアイスなんだ」

アメリカもはじめて見て聞くものでした。

「そんなの作れるんだ」

「サツマイモのお菓子は他にもあります」

見れば次から次に出て来ます。どれだけあるのかわからない程赤いお菓子が出て来ます。

「甘いので作り易くて」

「それでも凄いね」

アメリカはその赤紫のアイスを貪りながら日本に応えます。

「僕こんなに作られないよ」

「そうなのですか」

「ジャガイモのパンケーキはあるけれど」

これはドイツから伝わった料理です。アメリカは色々な国の人達を受け入れてきたのでその人達の料理を作れるのです。けれど日本はそれより遥かに上なのでした。

「それでも。こんなにはね」

「そのアイスはどうですか？」
「うん、美味しいよ」
上機嫌で食べ続けています。
「これが終わったら他のお菓子も食べていいかな」
「はい、どうぞ」
アメリカは心ゆくまで日本のお家のサツマイモのお菓子を食べるのでした。本当に取り入れたものは上手にアレンジしてしまう日本でした。器用であります。

第六百二話　　完

２００９・２・２６

第六百三話　サツマイモの最初は

第六百三話　サツマイモの最初は

日本がお芋を食べるようになったのは結構最近です。とりあえず山芋や里芋はここから外します。

例えばサツマイモですが日本は他のお家に伝わってきていたその間もそれがどういったものか知りませんでした。けれど江戸の頃に当時の上司にお家の学者さんがこのサツマイモを紹介したのです。

「これがサツマイモと申すものか」

「はい」

学者さんは上司に慎んでそのサツマイモを見せます。

「こえがそうでございます」

「見たところ実に変わったものであるな」

上司も最初は目を驚かさせました。何しろやたらと大きくて太った形をしていてそのうえ赤紫の皮なのですから。これが変わっていると言わずして何と言うでしょうか。

「そしてこれを食するのか」

「左様です」

学者さんはまた上司に答えます。

「痩せた土地でも多量に採れますし味もよいのです」

「ふむ。味もか」

「既に茹でてあります」

用意がかなりいいです。

「後は皮を剥かれて。どうぞです」

「あいわかった」

上司は学者さんの言葉を受けて言われた通りその皮を剥いて食べはじめます。するとこれが本当に。

「美味いな」

目を細めさせて言いました。

「このサツマイモと申すもの、実によい」
「左様でございますか」
「余は気に入ったぞ。これはいいものだ」
こうしてこの上司の声でサツマイモが広まったのです。当然ながらこれはすぐに日本の口に入ることになったのです。

第六百三話　　完

２００９・２・２７

第六百四話　昔の日本の食べ物は

第六百四話　昔の日本の食べ物はサツマイモを食べるようになったのは本当に最近のことです。しかも最近食べるようになったのはこのサツマイモだけではありません。他のものもそうだったりします。

「この天麩羅にしろです」

サツマイモの天麩羅もそこにはあります。

「ポルトガルさんがお家に来られてから食べるようになりました」

「へえ、如何にも日本の食べ物なのに！？」

「案外最近のことなのだな」

「そうです。お刺身やお寿司もちょっと海から離れると食べられませんでした」

驚くイタリアとドイツに対してさらに話します。

「傷むので。冷凍技術がないととても」

「ああ、そうだよね。お魚って傷みやすいから」

「どうしてもそうなるな」

二人も日本の話に頷きます。日本はさらに鱧のお吸い物も出してきました。

「京都までもつのはこの鱧だけでした」

「この怖い顔のお魚が？」

イタリアのお椀には鱧の頭が入っています。顔だけ見れば確かに怖いです。

「そうです。ですから鱧は京都の料理ではかなり重要です」

「何かそれ聞くと不思議だね」

「そうだな。しかしこの鱧は」

ドイツは鱧を食べながら難しい顔を見せてきました。

「随分と小骨が多いな」

「小骨には注意して下さい」

日本もそれは言います。
「鱧は味はとてもいいのですがとにかく小骨が多いので」
「そうみたいだね。けれどとても美味しいよ」
「そうだな。味はいい」
二人は鱧の味には合格点でした。こうしたものを広く食べられるようになったのもつい最近のことですから和食も中々面白いものがあります。

第六百四話　　完

２００９・２・２７

第六百五話　ブリティッシュ＝ポテト

第六百五話　ブリティッシュ＝ポテト

イギリスもジャガイモを食べます。食べ物のことではとかく色々と言われているこの人ですけれどジャガイモはちゃんと食べます。けれどその評判がいいかというと。

「御前、他に料理方法知らねえのか？」

「何がだよ」

いつものようにフランスに突っ込まれています。

「御前フイッシュアンドチップスとかフライドする以外にジャガイモの食い方知らねえのか？」

「じゃあ聞くが他に何があるんだよ」

やっぱりこんな有様です。

「あとはカレーに入れるだけだろ？それか茹でてバター塗って食うか」

「だから他にねえのかよ」

「それで充分じゃねえかよ」

全くわかっていません。理解できる基礎がそもそもありません。

「その三つか四つの料理方法だけでよ。違うか？」

「ドイツとか行ってみろ」

呆れ果てたフランスはこう彼にアドバイスします。

「もっとな。他に料理方法あるからな」

「そんなにあるのかよ」

「そうだよ。しかも何だよこれ」

イギリスが茹でたジャガイモを食べながら抗議します。

「このイモは中が全然火が通っていなくて固いしこっちは茹で過ぎて皮取ったらすぐボロボロになるし」

「そうか？うちの牛は食えるぞ」

「牛と人間を一緒にするんじゃねえよ」

そもそも牛にジャガイモをやってるでしょうか、この人は。

「本当に人間が食えるもの作れよ。こんなの韓国の八つ墓丼並にひでえぞ」

「・・・・・・幾ら何でもあんなとんでもねえ兵器と一緒にするなよ」

挙句にはこんなことまで言われます。ジャガイモにかけてもやっぱりイギリスはイギリスでした。

第六百五話　　完

２００９・２・２８

第六百六話　ジャガイモのドレス

第六百六話　ジャガイモのドレス

なおフランスもジャガイモは中々食べませんでした。あんまり食べないので上司からも言われましたがお家の人達と一緒にそれには難色を示してばかりだったのです。

「そんなの食べなくても俺は平気ですよ」

「パンだけではやっていけないだろうに」

「だから大丈夫ですって」

本当は大丈夫じゃないのにあくまでこう言い張ります。

「ですから俺はあんなの食べませんって。パンだけでもう」

「そこまで言うのか」

とにかくジャガイモを食べようとはしませんでした。けれど上司は彼に何としてもこのジャガイモを食べさせたかったのです。それで彼が悩んでいると奥さんがこう言ってきました。

「それなら私に考えがあるわ」

「考え!?」

「ええ。ドレスにちょっとね」

奥さんは自分のドレスにある工夫をしてみたのです。それは。

何とドレスにジャガイモの花の模様を入れてそれで公の場に現われたのです。これは目立ちます。

「ジャガイモの花か」

「へえ、案外いいじゃない」

フランスのお家の人達はそれを見てジャガイモに注目しました。そうして見てみると見方も変わります。こうなると次第に食べたくなるもので。

こうしてフランスもジャガイモを食べるようになりました。一旦食べてみるとこれがかなり美味しくて。彼もその虜となってしまったのでした。

「上手くいったね」
「食べてもらうには色々と方法があるのよ」
奥さんは御主人であるフランスの上司ににこりと笑って話します。
「中にはこんな方法もね」
「成程。フランスには効果的みたいだね」
「そういうこと」
奥さんの機知がものをいいました。フランスでもジャガイモが食べられるまでには色々とあったのでした。

第六百六話　　完

２００９・２・２８

第六百七話　食べ過ぎです

第六百七話　食べ過ぎです

フランスは食べることに物凄い情熱を持っています。それは代々の上司の人達も同じで特に凄かったのが太陽王とも言われているルイ十四世でした。

この人は背は小柄と言ってもよかったのですがそれでも。とにかく物凄い量を食べました。

「あの、まだ食べられるんですか」

「お腹が空いて仕方がないんだ」

同席していてあまりにも食べるので驚いているフランスに対して平然と答えています。

「もう何皿食べたかな」

「七十皿は食べてますよ」

幾ら一皿一皿にあるものは少なくてもです。もうそこまで食べているのでした。

「それでもですか」

「あと三十皿ちょっとはいけるな」

「はあ、そうですか」

回転寿司でもここまで食べません。とにかくよく食べます。しかも満腹になると。

「あれを」

あるものを持って来させます。見ればそれは。

ガチョウの羽です。それを口の奥に突っ込んで刺激してさっきまで食べたものを吐き出します。

それからまた食べるのです。こうまでして食べ続けます。もう尋常なことではありません。

しかしそうしなくてもとにかく食べます。お肉にしろ野菜にしろふんだんに食べます。あまり大きくないのにどうしてそこまで入る

のかという位です。
「腹の中に何かいるんじゃねえのか？」
フランスはこうも疑いました。
「ひょっとして。サナダ虫か何か。あれだけ食べてもそんなに太られないしな」
確かに物凄く食べても太りません。この人のお腹の中には本当に虫がいたのかも知れません。それを踏まえてもとにかく物凄い量を食べる上司でした。フランスの上司にはこんな人もいました。

第六百七話　　完

２００９・３・１

第六百八話　騎士に叙任

フランスの上司も代々濃いというか個性的な人が多かったのですがライバルであるイギリスの上司も負けてはいません。中には御后様を次々と変えて強引に教会まで作ってしまった上司もいます。

「とにかくわしはわしのやりたいようにやる」

「そうですか」

イギリスもこの人に従うしかありませんでした。ちょっとでも諫めるとその時の気分次第で何をされるかわからないからです。ロンドン塔に入れられるのなんて甘い位のことが。

そんな上司でしたがある日のこと。教会の司教さんと一緒に食事を摂っていました。食べているのは物凄く美味しそうなステーキです。上司が物凄く美味しそうにそのステーキを食べているのを見て司教さんは言ったのでした。

「羨ましいです。そこまで見事に食べられるとは」

この時はそのまま率直な賞賛の言葉でした。けれど司教さんは調子に乗ってついつい言ってしまいました。

「その胃袋を買いたいものですか」

「よし、売ろう」

上司はすぐにその言葉に返しました。そうして司教さんからお金をふんだくると何も言わせず牢獄に入れてしまいました。それまでの流れはまさに疾風でした。

司教さんを牢獄にぶち込んだ上司。お金も手に入れたので上機嫌です。それで剣を抜いて今食べているそのステーキに当てて言うのでした。

「味もよかったし儲けさせてもらった。御前を騎士にしよう」

こうしてこのステーキは騎士になったのです。名付けてサーロインステーキ、名前の由来はそこからでした。

「で、それがその騎士殿かよ」
「ああ、そうだ」
イギリスはそのサーロインステーキをフランスに振舞っています。大きなステーキの上にバターが置かれ湯気が立っています。
「どうだ?美味いだろ」
「御前が焼いたのじゃなかったら美味かっただろうな」
けれど味はそんなふうでした。折角の騎士も調理する人次第のようです。

第六百八話　　完

２００９・３・１

第六百九話　美味しくない理由は

第六百九話　美味しくない理由は

スイスは日本のお家ではチーズやバターで有名です。日本の中ではそうしたものを美味しくいただいているイメージがあります。けれどそれはあくまでイメージでしかありません。イメージと現実は時として違うのです。

そのスイスのお家の主食はパンです。そのパンを今いつもの通りイタリア、ドイツと三人で食べてみますと。

「このパン相変わらず美味しくないよ」

「どうしてこう御前のパンは今一つなんだ」

「当然である」

困った顔になっているイタリアと少し憮然となっているドイツに対して言います。日本はあえて何も言いませんがやっぱり美味しいとは思っていないようです。

「我輩は味よりも安全を優先させている」

「安全とは？」

「その年に取れた小麦は保管しておく」

日本に対してもこう言います。

「何かあった時の非常食としてだ。保管しておくのだ」

「いざという時にそれをパンとして炊かれるのですね」

「そういうことだ。だから今食べているこのパンは去年の麦を使ったものだ。だから普通のパンより味が落ちるのは当然である」

「そんなのだとずっと美味しくないパンだよ」

イタリアは安全よりも味の方を優先させて考えているのでした。

「こんなの食べていて楽しい？俺なんか悲しくなってきたよ」

「悲しみたければ悲しむといい」

スイスはそんなイタリアはスルーです。

「我輩は困らん。一向にな」

「何でスイスっていつもこうなんだろう」
「確信犯であるだけにイギリスより困ったことだな」
ドイツも言います。とにかく二人はスイスのそうしたやり方に不満です。日本もそうであるようですがあえて言いません。この辺りは個性の違いでしょうか。それでもパンを食べる口が普段より進んでいないところに日本が今どう思っているのかが出ているようです。

第六百九話　　完

２００９・３・２

第六百十話　けれど美味しく食べることも

第六百十話　けれど美味しく食べることも

とにかくスイスのお世辞にも美味しいとは言えないパンを困った顔で食べている枢軸トリオ。彼等はとにかくパンのその味に辟易していましたがそんな彼等にスイスが言ってきました。

「そのまま食べるよりいい食べ方があるぞ」

「そうなの？」

困った顔から泣きそうな顔になっていたイタリアがスイスの言葉に顔を向けました。

「もうこのパン食べるの嫌になってたけれど。あるの」

「そうだ。まずチーズを用意する」

「うん」

早速チーズが出されてきました。心なしかそのチーズの味も普通の国で普通に出されるチーズとは何かが違うようですが。それでもチーズはチーズです。

「このチーズを鍋に入れる」

「入れたな」

ドイツがスイスが実際にそのチーズを中に入れたのを見て言いました。

「確かに今な」

「そのうえで白ワインも入れて火をかける。そのまま溶けてきたチーズをかき回していく」

そうしていくと何か別物みたいになってきました。それまで固まっていたチーズが溶けて独特の風味にワインの香りまで混ざっていい感じになってきました。三人はその様子をじっと眺めています。

「そしてこの中に細かく切ったパンを串に刺したものを入れて食べるのである。それがこのフォンデュだ」

「成程、そうした食べ方があるのですね」

日本はスイスがそうして料理を作ったのを見て納得した顔で頷きました。
「溶かしたチーズを付けて食べるのですか」
「そうだ。少し手間がかかるが美味い」
「本当だ」
イタリアは早速そのフォンデュを食べだしています。
「ソーセージやベーコンにも合うし。いい感じだね」
「そうだな。ワインにも合うしな」
ドイツはワインも出しています。こうして今度は四人で楽しく食べることができたのでした。

第六百十話　　完

２００９・３・２

第六百十一話　ギリシアの場合は

第六百十一話　ギリシアの場合は

「俺か」
「はい。ギリシアさんもジャガイモを食べられますね」
日本は今日はギリシアのお家にいます。そのうえで彼に尋ねていました。
「確か。そうしたお料理もあったと御聞きしています」
「ムサカのことか」
「ムサカ？」
「茄子とジャガイモと肉を使った料理だ」
まずは材料を日本に対して述べます。
「俺は好きだ。その料理が」
「そうなのですか。ムサカというのですか」
「今日も作っている」
実は今日もなのでした。
「何なら食べるか」
「宜しいのですか？」
「一緒に食べる人間がいるとそれだけで楽しい」
ギリシアはいつものスローペースで話を続けます。
「トルコ以外とは」
「トルコさんとはですか」
「日本なら全く平気だ」
こうも日本に述べます。
「だから。早く食べよう」
「わかりました。それでは御言葉に甘えまして」
「これだ」
早速そのジャガイモと茄子とお肉から作ったムサカが出て来ました。それはオープンで焼かれた実に美味しそうなものです。

他にも色々な食べ物があります。胡瓜とよーぐるとの若えものや挽肉を葡萄の葉で包んだもののやギリシアのパン、それにパイのデザートです。そういったものが出されました。当然ワインもです。

「これが俺の国の料理だ」

「美味しいですね」

「そう言ってもらえると嬉しい」

一応嬉しそうです。

「どんどん食べてくれ」

「はい、有り難うございます」

こうして日本はギリシアの料理を楽しむのでした。ギリシアもジャガイモを食べているのでした。

第六百十一話　　完

２００９・３・３

第六百十二話　イタリアとギリシアの縁

第六百十二話

イタリアとギリシアの縁

実はイタリアとギリシアは古い古いお付き合いがあります。それでお互いよく知っています。それがどうしてかというと。

「こいつの爺ちゃんが俺のお袋にしょっちゅう声をかけていた」

「そうみたいだね。何か爺ちゃん凄い女好きだったから」

「その時親父は死んでたから一応そのあたりは大丈夫だった」

どうやらギリシアは母子家庭で育ったようです。この辺りどの国もかなり不明ですが。なお日本は噂ではあの世まで奥さんを迎えに行った人がお父さんだそうです若しくは全く謎の物凄い偉い人だという噂もあります。上司の上司の方のご先祖様にしろかなり凄いお話が一杯あります。

「しかし。御前の爺様はうちのお袋にとかくしつこかった」

「そうそう、ギリシアのお母さんだけじゃなかったんだよね」

ローマ帝国はそれで終わるような人ではなかったのです。

「エジプトのお母さんにも声かけてたしそれこそあちこちの」

「その辺りは同じだな」

ギリシアはイタリアを見つつ言いました。

「女好きなところは」

「そうかな。俺そんなに女好きかな」

「一応戦いに関すること以外は似ていると思う」

義理死は朴訥にイタリアに述べます。

「それだけはあれだがな」

「ちょっとそれは。兄ちゃんもそうだけれど」

これでも一応その喧嘩にも強かったローマ帝国の孫です。

「しかしだ。俺の家に来るのはいい」

「うん」

「だが。女の子に声をかけまくるのは止めろ。困っている」
「そんな、それじゃあ何の為にギリシアに行くんだよ」
こう言われると泣きそうな顔になるイタリアでした。やっぱりローマの孫ではあるようです。

第六百十二話　　完

２００９・３・３

第六百十三話　レンゴウブラックも昔は

第六百十三話　　レンゴウブラックも昔は

学園きってのグルメであり料理の鉄人とされているレンゴウブラックことフランス。とりあえず自分では格好よ過ぎると思ってはいます。

「だから額やべえだろうがよ」

「ダンスの時の笑顔きめえよ」

今日も子供達から温かい声援を受けています。何故か彼とレンゴウイエローことイギリスは子供達から特別な扱いを受けています。

そんな彼の特技は言うまでもなく料理です。今日も腕によりをかけて作っています。その繊細にして優美な味こそが彼の持ち味です。

「どうだ、俺の料理は今日もいいだろ」

「ああ、まあな」

何故か今日もイギリスにその料理を食べてもらっています。何だかんだで本当にいつも一緒にいます。

「食い物だけはいいな、食い物はな」

「それだけじゃねえんだがな」

フランスはさりげなく料理以外もアピールしますがイギリスはそれは聞こえなかったことにしています。けれどイギリスはここであることをフランスに対して言いました。

「そういえば御前昔はよ」

「何だ?」

「こんなに料理うまかったか?」

不意にこうフランスに尋ねたのでした。

「昔はどんなの作ってた?俺よく覚えていねえんだけれどよ」

「そんなのは思い出さなくていいんだよ」

フランスは何故かこの話になると急に元気がなくなってきました。

「いいな。気にするなよ」

「気にするなって言ってもよ」
あまりにも急に態度が変わったのでイギリスも変に思いました。
「どうしたんだよ、急に」
「だから気にするなって言ってんだろ」
フランスはあくまでこのことになると話を誤魔化します。本当に何があるんでしょうか。

第六百十三話　　完

２００９・３・４

第六百十四話　昔のフランスの料理は

第六百十四話　昔のフランスの料理はかつてのフランス。当時の彼もやっぱり料理はしていました。けれどその料理たるや。

「おお、今日も美味いものを作ったな」

「はい、腕によりをかけましたよ」

当時の上司に対しても誇らしげに言っています。

「どうですか？この牛の丸焼き」

「いいな。香辛料も塩も効いていてな」

「胡椒高かったですけれどね」

見事なまでに大きなその牛を丸ごと焼いただけの料理です。塩も香辛料もただ多量に使っているだけです。当時はあまりにも高価だった胡椒をふんだんに塗っただけで。何か繊細とか優美とかそういったものは一切ありません。本当に大雑把な代物です。

「それでもやりましたよ」

「凄いな、奮発したんだね」

「ええ、やりましたよ」

見たところ上司もそれで満足しているようです。フランスの作ったその牛の丸焼きに満足しています。

「それで明日はですね」

「うん、明日は」

「白鳥のシチューに洋ナシです」

「おお、それはいい」

どうも野菜はあまり食べないみたいです。

「では明日も楽しみにさせてもらおうか」

「はい、御願いします」

上司もフランスも手づかみで料理を食べています。お皿は固いパンでそれをそのまま食べてもいます。食器はスープのスプーンだけ

です。スープもお世辞にもいいものとは言えません。
それでも上司もフランスもそれで満足しているみたいです。何かえらく大雑把な食べ物でありますがそれでも。これが昔のフランスの料理であり食べ方なのでした。

第六百十四話　　完

２００９・３・４

第六百十五話　それが変わったのは

第六百十五話　それが変わったのは

かなり長い間とにかく優美とか繊細とか豪奢とかそうした料理とは全く無縁であったフランス。けれどある上司がイタリアのお家から奥さんを迎えた時にそれが一変しました。

「これは一体何なのですか！？」

「何なのって御馳走ですけれど」

フランスは自分の料理を見て目を剥いてしまったその人に対してきょとんとしながらも答えます。

「フランスで一番の」

「それが御馳走なんて」

上司の奥さんはフランスの言葉にさらに目を剥きそうになっています。

「恐ろしい。酷い話だわ」

「酷いですかね」

「そうは思わないがな」

フランスも上司も全くそうは思っていないのでした。そんな訳がないと思っているのでした。けれどそれが変わってしまったのです。

奥さんはフランスの料理を見てからすぐに行動に移りました。繊細な味付けにフォアグラにトリュフにアイスクリームといった様々なお菓子にそれにフォーク。そういったものをどんどんフランスにも上司にも紹介してきたのです。

「な、何だよこれって」

「世の中こんなに美味いものがあったのか」

フランスのお家の人達もびっくりです。彼等はこんなものを食べたことはなかったのです。それで食べてみると。まさにレボリューションでした。

「すげえ、これが料理か」

「何と・・・・・・」

これがフランスの料理が変わったはじまりでした。何とそのはじまりはイタリアからなのでした。

第六百十五話　　完

２００９・３・５

第六百十六話　フォークって何だ

第六百十六話　　フォークって何だ

上司の奥さんが実家のイタリアから持って来たものの中にフォークというものがありました。その二又のものを見てフランスはやっぱり何が何なのかわかりませんでした。とりあえず何かを突き刺すものだろうということがわかるだけです。

「何だこりゃ」

「これで食べ物を突き刺してそれでお口の中に入れて食べるのです」

奥さんは目を丸くさせているフランス達に対して答えます。

「手を汚さないようにして」

「えっ、食い物って手で食うものじゃないんですか！？」

少なくともフランスは今までそう思っていたのです。もっともそれはイタリア以外の殆どの国でそうでしたので彼がおかしいわけではありません。

「これで食うんですか」

「そうです。そして食べ物を落とした時服が汚れないようにこれを用意します」

今度は白い布を出してきました。それを首にかけて。

「こうすれば服が汚れません」

「服って汚れるものなんじゃ？」

「それも違います。服が汚れたら汚いではありませんか」

「はあ。そういうものですか」

「そういうものです。とにかくです」

奥さんは少し強引にまたフランス達に言います。

「今度からはこのフォークで食べるのです。いいですね」

「うう、食べにくい・・・・・・」

「馴れればそうではありません」

けれど奥さんはあくまでフランスに命じます。

「さあ。ですから食べなさい」
「わかりました」
こうしてフランスもお家の人達もそうやってフォークで食べるのでした。けれど本当に中々馴れなくて上司も結構後まで手で食べているのでした。

第六百十六話　　完

２００９・３・５

第六百十七話　そして出て来たあの上司

第六百十七話

そして出て来たあの上司

フランスが美食に目覚めてから暫く経って出て来たのがあの上司でした。そう、言わずと知れた太陽王です。趣味は戦争に女性に建築に美食に喜劇ととにかく派手でしかもお金のかかる王様でした。とりあえずこの王様によってただでさえちょっとしたことがあると空になってしまうフランスの財布は慢性的な赤字になってしまいました。

「さて、今日手に入れたのはこのブルーダイアだが」

「また随分高そうなのを買いましたね」

宝石を集めるのも趣味でした。今回も何かインドか何処かから手に入れたというダイアを手にしているのでした。

「そしてだ。今日の食事はだ」

「はい。何ですか？」

「まずスープは四種類」

スープからしていきなりこれだけです。

「雉丸ごと一羽にヤマウズラ一羽、サラダは大皿一杯にだ」

「はい」

「それに」

何とまだ続くのでした。

「肉汁と大蒜に漬けた薄切りの羊肉、大きなハムの塊二つに皿一杯に菓子と果物とジャムを頼む」

「・・・・・そんなに食べられるんですか？」

その途方もない量にフランスも驚いています。

「本当に」

「大丈夫だ。では早速用意してくれ」

「はあ、わかりました」

本当に食べきれるかね、とか思いながらもとりあえずそれだけ料理しました。そうしてその膨大なものを出すとこれが本当に食べきってしまうのでした。ペロリです。

「うむ、美味かったぞ」

「はあ」

「さて。後は政治をしよう。オーストリアやイギリスに勝ってまた多くのものを手に入れるか」

こんな調子でとかくお金のかかる上司でした。フランスはこの後そんな上司が続きお金がとにかくないわ料理はかなり作るわで結構大変なのでした。

第六百十七話　完

２００９・３・６

第六百十八話　この人も凄かったです

第六百十八話　　この人も凄かったです

「肉五十キロに鶏六羽、卵三十個、ハムとラードを一キロずつ」

いきなりプロレスラーが食べるような量です。

「バター二・五キロに砂糖と果物五キロずつ、野菜十キロ、パン十キロ」

そして止めは。

「コーヒー一キロ」

フランスが流罪になったあのナポレオンに毎日送っていた食事の量です。流石に一人でこれだけ食べませんがそれでも相当な量です。

これだけのものを食べていたナポレオン。彼の食事もまたかなり独特でした。どう独特かというと。

「とにかく早く持って来てくれ」

「はい、今できました」

とにかく食べるにあたってはかなりせっかちですぐに食事を持って来るようういつもせかすのです。そうして食べはじめるのですがこれがとにかく異常に早いのです。

「御馳走様」

「えっ、もうですか!?」

何とフルコースを五分です。本当にあっという間です。

「もう食べたんですか」

「食べることに時間をかけても仕方ないじゃないか」

ナポレオンはこう驚くフランスにいつも返すのでした。

「だからだよ」

「はあ、そうですか」

しかも食べた後がまた。随分と散らかっています。

お肉の骨はあちこちに投げ飛ばしていますししかも手掴みで食べていました。流石にこの時代になるとフランスのお家ではフォーク

とナイフを使ってエレガントに食べるようになっていました。
けれどこの人は違っていてこんな調子でした。だから食べるのが早かったという一面もありますが。
「じゃあお風呂に入るから。もう用意はできていますね」
「またお風呂ですか？今日四回目ですよ」
「お風呂はいい。気分転換としては最高だ」
「毎日、一日に四回も風呂に入るなんてどう考えても異常だろ」
こんな極めて個性の強い人でありました。なおフランスのお家の人は当時滅多にお風呂に入りませんでした。何年かに一回といった感じであったのです。

第六百十八話　　完

２００９・３・６

第六百十九話　風呂好きでこれでした

第六百十九話　風呂好きでこれでした

こんなかつては恐ろしいまでに風呂に入らない生活をしていたフランスでしたがまあこの時は欧州ではどの国も大体同じようなものでした。フランスのことをいつもとかく言っているイギリスですら。

「全くな。フランスの不潔さにも参っていたんだ」

「そもそも何年かに一回だけお風呂というのは」

とりあえず日本の常識からは考えられないことです。

「あまりにも」

「そうだろ。その時の俺の上司なんて物凄い奇麗好きだったんだぜ」

イギリスはここぞとばかりに自分のお家のことを話します。

「もうな。女の人でな」

「ああ、あの方ですね」

日本にはそれが誰なのかすぐにわかりました。イギリスを何とか持ちこたえさせてそのうえで後の発展の基礎を築いたあのバージンクイーンです。今の上司の上司の方はその二代目の御名前であります。

「そうさ。あの人の奇麗好きは凄かったんだぜ」

「どういった方なのですか？」

「聞いて驚いてくれよ」

イギリスはとても楽しそうに話の前置きをしてきました。

「何とな。年四回も風呂に入っていたんだ」

「・・・・・年四回もですか」

「凄いだろ。フランスなんか何年に一回だぜ」

イギリスはとても誇らしげに日本に対して話します。

「年四回。やっぱり俺の上司は違うよな」

「そうですね。まあ確かに」

日本はあえて言いたいことは言いません。

「その通りですが」
何となく五十歩百歩という言葉も思い出した日本でした。やっぱりあえて言いはしませんけれど。

第六百十九話　　完

２００９・３・７

第六百二十話　この時から清潔でした

第六百二十話　この時から清潔でした

こんな物凄いイギリスやフランスでしたが当時日本はどうだったかというと。今とあまり変わりません。やっぱりかなり清潔でした。

「へえ、上司の人達なんて毎朝入ってたんだ」

「はい、そうです」

今はイタリアとドイツを自分のお家の温泉に呼んでお話をしています。野外の温泉がとてもいいです。

「それが日課でした」

「その時にお風呂が日課だったんだ。凄いね」

「他のお家の人達も最低何日かに一回は入っていました」

「それはまた凄いな」

ドイツもその話を聞いて感心することしきりです。

「最低で何日かに一回とはな」

「確かにお風呂が好きでない人もいましたが」

世の中その辺りは本当に人それぞれです。やっぱり日本でもそうです。

「それでもそうした人も一週間か二週間でしたね。今でもですが」

「その時の俺達で一週間や二週間っていったらもう」

「信じられない話だった」

彼等にしてはそうだったのでした。やっぱりナポレオンは相当変わっていたのです。

「日本って本当に奇麗好きだったんだね」

「こうした湯舟のお風呂の他にもサウナもありましたし」

「ほう。それはいいな」

ドイツはここでまた日本に対して感心しました。

「俺もあれは結構好きだが。そうか、そういったものもあったんだな」

「皆さんそうしたものに入っていました。昔から」
日本は昔からお風呂によく入っていたのでした。やっぱり清潔なのはいいことです。三人でそのことを確かめ合いながら温泉を楽しむのでした。

第六百二十話　　完

２００９・３・７

第六百二十一話　サウナ大好き

第六百二十一話　サウナ大好き

フィンランドのお風呂はサウナです。寒い国なのでこれはかなりいいです。

「ぬくもるな」

「そうですよね。だからいいんですよ」

スウェーデンと一緒に入っています。二人共腰にタオルを巻いてそのうえで入っています。サウナに入っていますから当然ながら全身汗だくです。

「寒さの後でこの暑いサウナにっていうのが」

「そだ。それがいい」

喜んでいるようにはあまり見えないのは気のせいではありません。

「それでこの後」

「はい、お水に入ってまたサウナに入ってそれを繰り返して」

サウナの基本です。そうやってどんどん汗をかいて身体の悪いものを出していきます。健康にはそれがとてもいいのです。

「身体も洗って。それでいきましょう」

「そだな。であがったら」

スウェーデンはそれからの話もします。

「どうする？飲むか？」

「勿論ですよ。ビールにワイン」

「んだ」

実はフィンランドはかなりの大酒飲みです。スウェーデンでも同じです。寒いとどうしてもお酒が飲みたくなってしまうのです。これだけはどうしようもないのです。さむいさとお酒の組み合わせだけは。

「もう用意してますから。早速飲みましょう」

「サウナの後は酒だ」

やっぱりスウェーデンはお酒が好きです。
「楽しくやるだ」
「ですよね。また二人で飲みあかしましょう」
こうしてサウナの後はいつも二人仲良く飲む二人でした。仲良きことは美しきかな、それはサウナにも言えるのでした。もっとも逆の場合も言えたりするのですけれど。けれど二人は仲がいいです。そうして心ゆくまでお酒とそれと一緒にある食べ物も堪能するのでありました。

第六百二十一話　　完

２００９・３・８

第六百二十二話　やはりロシアは凄い

第六百二十二話　やはりロシアは凄い

サウナは当然ながらフィンランドにあるだけではありません。寒い国の代表といえばロシアですけれどこの国もお風呂といえばサウナです。火曜日には用意して水曜日に入るというのは昔で流石に今は入ろうと思えばそれこそ毎日入ることができます。寒いロシアにとっては有り難いことです。

なおロシアは言わずとしれたお酒の国です。お酒に関することになると普通に暴動が起こるとさえ言われています。若い女の子が昼にジュースみたいにビールをごくごく飲んでいたりします。とにかくお酒がないと何も動かない国なのです。

それでお風呂に入る前に豪快に飲んでいてそのうえで入るなどということも結構あります。その日もそうでした。よりによって日米中と話し合いの後でウォッカをしこたま飲んだうえで四人でサウナです。三人は赤ら顔で上機嫌でサウナに入って行くロシアを見て言い合うのでした。

「あのさ、ロシアって確かさっきウォッカを」

「ボトル一本は平気で空けていましたよ」

「そんな状態で入ったら大変なことになるあるぞ」

三人の方が不安になっています。ウォッカをボトル一本空けてからサウナに入るとどうなるか。下手をすればとんでもないどころではありません。けれどロシアだけは全然平気でそのまま入るのでした。

「いやあ、気持ちいいよね」

ロシアは一緒にいる三人に対して明るい声で言います。タオルが敷かれている木の席に座っています。三人はいぶかしむ顔でロシアを見続けています。けれど彼は至って平気です。

「やっぱり皆で入るのが気持ちいいよね。こうして汗をかいてね」

「何か見たところ平気みたいだけれど」
「何故でしょうね。普通死んでもおかしくないのですが」
「というか日常みたいあるぞ。あれで」
三人はそんな彼を見て言い合います。確かにロシアは全く平気です。お酒をしこたま飲んでサウナに入っても。本当に平気な顔をしています。
「さて。じゃあサウナの後は皆で飲もうよ。いいお酒用意してあるんだ」
「やっぱり平気みたいだね」
「お酒飲んでサウナに入っているというのに」
「どういう身体あるか」
お酒を飲んでサウナに入っても全く平気、流石はロシアでした。
真似をしたら確実に死んでしまいそうですけれど。

第六百二十二話　　完

２００９・３・８

第六百二十三話　お風呂の入り方色々

第六百二十三話　お風呂の入り方色々

とにかくお風呂といえば日本です。サウナもお湯のお風呂も水風呂もありますがただそれだけではありません。そのサウナにしましても。

「スチームサウナ！？」

「はい、水蒸気を使ったサウナです」

イタリアとドイツをそこに案内して説明します。

「最近我が国で人気なんですよ」

「ふうん、サウナっていっても色々あるんだね」

「そうなのです。他にこうしたお風呂も」

「あっ、赤ワインのお風呂！？」

「そういえば日本では酒風呂もあると聞いたが」

ドイツはそのことを思い出しました。

「それのうちの一つか」

「そうです。ほかには菖蒲や柚子を入れたものもあります」

見ればそうしたお風呂ももう用意されています。実は三人は今は日本のお家のスーパー銭湯にいるのです。そこで三人でくつろいでいるのです。

「屋外のお風呂もあります」

「何か日本ってお風呂の入り方も色々あるんだね」

イタリアはこのことをはじめて知ったのでした。

「俺なんて大抵シャワーだけなのに」

「俺もだな」

イタリアやドイツはそういうことが多いのです。この辺りは文化の違いです。その他にも風土気候の違いといった要素も存在していたりしてそういった事柄が影響しているのではありますが。

「湯舟に入るのもサウナに入るのも色々なんだ」

「また一つ勉強になったな」
二人はそのことに感心した顔で頷きながらその柚子のお風呂に入っています。入りながら日本が出して来たお酒を飲んで。中々楽しい日本のお風呂の入り方でした。

第六百二十三話　　完

２００９・３・９

第六百二十四話　入浴剤

第六百二十四話　入浴剤

日本のお家では普通に湯舟に入る時でも工夫を凝らしたりします。ただお湯に入るにあたっても入れるものがあったりします。それは。

「あれ、これは」

「はい、入浴剤です」

日本妹が台湾と一緒にお風呂に入る時に説明します。二人は今からお風呂です。日本の物事にかなり憧れている台湾は今日は日本のお家に遊びに来てお風呂にも入れてもらっているのです。

「これを入れてからお風呂に入るとですね」

「あっ、お風呂の色が変わりましたね」

奇麗な乳白色になります。もう中身が全然見えません。

「何か温泉みたいですね」

「そうなんですよ。温泉を再現したりするものなんです」

日本妹はにこにこと笑って台湾に説明を続けます。

「身体も普通のお風呂よりあったまりますし。いいものですよ」

「へえ、凄いですね」

もうお風呂に入る前からうきうきしている台湾でした。

「それじゃあ今から入りましょう」

「待って下さい。まずは身体を洗ってから」

「そうでしたね。まずは」

言われてからそのことを思い出しました。

「身体を洗って」

「お背中流します」

日本妹はもうタオルに石鹸を付けています。白い泡がぶくぶくと立っています。

「さあ、台湾さん」

「有り難うございます、環さん」

二人は仲良く身体を洗いあってそのうえで湯舟に浸かるのでした。
た湯舟に入るだけでもこうして楽しむのが日本のお家の流儀なのでした。それは台湾にも伝わるのでした。

第六百二十四話　　完

２００９・３・９

第六百二十五話　温泉だらけ

お風呂大好きな日本です。そのせいか本当にお家のあちこちには温泉があります。それがまた随分と多いのです。

「一体幾つあるんですか？」

「さて」

台湾の問い掛けにも首を傾げるだけです。

「幾つあるのでしょうか。数えたこともありません」

「数えたこともですか」

「あまりにも多くて」

日本自身もどれだけあるのかわからないのです。それだけ多いということです。

「例えば街中で温泉が出ます」

「温泉が街中でですか？」

「はい、出るのです」

これまたちょっとないことです。日本のお家では石油が出ることはありませんが温泉はそれこそあちこちで出るのです。それが日本のお家なのです。

「そういった場合はですね」

「どうなるんですか？」

「スーパー銭湯にします」

そうなるのでした。ただ温泉が出るだけでは絶対に終わらないのです。

「そうして皆で入るのです。そうしたスーパー銭湯も多いので」

「じゃあ本当に幾つあるのかわからないんですね」

「温泉が涸れてもそのままスーパー銭湯はできますし」

この辺りはお水があればできますので。

「だからです。本当に幾つあるのかわからないのです」

「何かそういうのも凄いですね」
台湾はとにかく豊富にある日本の温泉が羨ましくなったのでした。
そうして今日もその温泉に日本妹と一緒に入って楽しい時間を過ごすのでした。

第六百二十五話　　完

２００９・３・１０

第六百二十六話　温泉にいつもあるものは

第六百二十六話　温泉にいつもあるものは

温泉はとにかくそれだけで終わったりはしません。日本のお家ではそこから色々なものを揃えるのです。例えばこういったものもあります。

「あれ、これって」

「お饅頭ですよ」

日本妹が台湾に答えます。その時台湾は温泉の場所に何故かいつもお饅頭があるのに気付きました。当然日本のお家のお饅頭で中は餡子が入っています。

「それがどうかしましたか？」

「そういえばですね」

ここで台湾はあることに気付きました。

「日本さんのお家って絶対に温泉にお饅頭ありませんか？」

「はい、そうですね」

日本妹も言われてその言葉に頷きます。

「温泉には絶対にありますよね」

「何でなんですか？」

台湾はあらためてそのことを日本妹に尋ねました。

「そうやって温泉に絶対にお饅頭があるのは」

「名物ですよ」

「名物ですか」

「はい、そうです」

こう台湾に答えるのでした。

「温泉には名物が付き物ですので」

「ああ、それでですか」

台湾はこれでやっと日本のお家の温泉にお饅頭があるのかわかったのでした。

「それでお饅頭が絶対に温泉にあるのですね」
「実は温泉だけとは限りませんし」
　このあたりがまた随分と面白かったりします。
「他の場所にも何かあれば絶対にお饅頭かそういったものがありますよ」
「じゃあ今ここにある全部のお菓子も」
　丁度台湾の前に何かありとあらゆるお菓子が集まってきています。お饅頭だけでなくもなかやお煎餅にチョコレート、他にも色々とあります。
「そういった名物ですか」
「はい。好きなものをどうぞ」
　こう言って台湾にそのお菓子を食べるように勧めます。台湾はそのお菓子を日本妹と二人で明るく食べるのでした。

第六百二十六話　　完

２００９・３・１０

第六百二十七話　究極の攻撃　☆

ラトビアはいつもガタガタブルブルビクビクと震えています。その原因と理由は誰も言わないですけれど皆知っています。けれどあえて誰も言いませんしラトビア本人にしろそうです。

ですがその原因と理由の人はというと。これが全く自覚がないのです。世の中というものは実に困ったこともままにしてあるものです。

「ラトビアっていつも震えてるよね」

その原因と理由の人がその震えているラトビアを見て言います。皆それが誰なのか知っていますけれどやっぱり言わないのでした。

原因と理由の人には自覚がないのです。それでその自覚がないままラトビアの両肩を持って尋ねるのでした。

「ねえ震え止まらないの？」

「ひっ！？」

ラトビアは原因と理由の人に掴まれたのとその顔を見て顔を一気に蒼ざめさせました。ただでさえ白っぽい顔が一気に蒼白になりました。

「ねえラトビア震えはどうしたら止まるの？」

「御免なさい御免なさい・・・・・・」

ラトビアはその人の問い掛けを他所に泣きながら謝罪の言葉を述べます。そうしているうちに遂に。

口から何か出て来ました。ラトビアの姿をした天使です。ところがそういったものも原因と理由の人には見えなくて。この人は震えが止まったと喜んでいるだけです。

「よかった。震えが止まったよ」

「最後に誰かパートナーが欲しかったです。心からのお友達・・・・・・欲しかったです」

「ラトビア、死ぬなラトビアアアァァァァーーーーーーーーッ！！」

ここでいつものエストニアの絶叫です。とりあえず何とか意識は取り戻すことができたラトビアでしたがそれでもです。その身体の震えは結局なおりませんでした。そもそも原因と理由の人に自覚がないのですからどうしようもないことなのでありますけれど。

第六百二十七話　　完

２００９・３・１１

第六百二十八話　そもそも三国といっても

第六百二十八話　　そもそも三国といっても

ラトビアはバルト三国の一員だと皆から言われています。それで皆この三人はいつも一緒にいると思っています。けれどこれが実際はかなり違うのです。

「よおリト」

「ああポーランド」

まずリトアニアですがいつも何かあるとポーランドと一緒にいます。長い間同じ家に暮らしてきたパートナー同士ですから今でもその絆は強いものがあります。何気に世話焼きのリトアニアばかり苦労しているような気もしないではありますが。

それでエストニアも。ロシアのお家から出た後はこの人も頼りになるパートナーを見つけたのです。その人は。

「じゃあ今度はそれでいきましょう」

「はい、そうですね」

フィンランドと仕事の打ち合わせをしています。独立してからの彼はＩＴに活路を見出し同じくそこに力を入れているフィンランドとの交流を深めていっているのです。今では。

「今日も楽しかったですね」

「はい、とても」

エストニアがフィンランドのお家のお祭に参加して楽しんでいるのです。何かと大会に出ては活躍したりして。この人もいいパートナーを見つけて頑張っています。

ところが最後の一人ラトビアはというとこれが。

「誰かいません？」

悲しいまでに孤立しています。

「できればどなたかパートナーに。そうだ、ドイツさんなんか」

と思って見てみてもいつも相棒のプロイセンやらイタリアと一緒

です。ラトビアが入る隙はありません。しかもお隣には相変わらずあのロシアがいます。

「僕じゃ駄目かな、ラトビア」

「あ、あわわわわわわわわ・・・・・・」

ロシアに声をかけられてまた震えてしまいます。果たしてラトビアにパートナーは現われるのでしょうか。

第六百二十八話　　完

２００９・３・１１

第六百二十九話　名誉ある孤立

第六百二十九話　名誉ある孤立

ラトビアは確かにお友達が欲しくて仕方ありません。けれどそういう人は彼だけではありません。そうした人は他にもいるのが現実です。

「御前、最近俺とばかり話をしていないか？」

「まあそうだな」

プロイセンです。今日も相棒のドイツと一緒にいます。もっとはっきり言えばドイツどだけいつも一緒にいます。他の人と一緒にいることはまあないです。

「一緒にいるのもな」

「そうだな。最近新しい友達はできたか？」

「いいや」

二人で向かい合ってコーヒーを飲みながらの話です。プロイセンの表情は平然としていますがドイツはかなり心配そうなものです。

「相変わらずイタリアや日本達と一緒だぜ」

「俺としてはな」

ドイツはここであらためて彼に対して告げます。

「御前にはもっと友達ができて欲しいんだがな」

「俺は別にいいけれどな」

ところが本人はそうしたことは殆ど気にしてはいませんでした。

「一人でいるのには馴れてるし御前もいるしな」

「俺がか」

「それで充分なんだよ。俺はな」

実はそうなのでした。彼はそうしたことに気にはしていなかったのでした。

「昔に比べたら今はずっと周りに誰かいてくれているからな」

「というよりは昔があまりにも酷過ぎたぞ」

ドイツは相棒のかつての状況を思い出してうんざりとした顔になりました。
「全く。確かに最近はましになったがな」
「ましになったらそれでいいじゃないのか？」
「もっとよくなれ」
二人の意見はここで見事に食い違っていました。とりあえずプロイセンは今も友達が少ないのでした。何気に強がりにも聞こえますけれど。

第六百二十九話　　完

２００９・３・２０

第六百三十話　この人は友達は

第六百三十話　この人は友達はラトビアもプロイセンも友達がいなかったり少なかったりしますがとりあえず物凄い俺様な人でも友達が慕ってくれる人が多かったりします。この辺りは本当に人それぞれです。

日本のお家にいるあの某脚本家ですがこの人は物凄い俺様です。けれどちょっと電話をするだけで。

「また随分と集まりましたね」

「人は自然と集まるもんなんだよ」

日本に対して答えています。この人は少し何かを言っただけであちこちから人が集まってきます。それも物凄い話で集まります。

「今回も場所も時間も話していなかったのですか」

「ああ、そんなのは話す必要もない」

脚本家さんは日本に対して平然と答えます。

「別にな」

「その二つこそが重要なのでは？」

日本の突っ込みは至極妥当ですけれどそうした突込みが届くような人ではありません。といいますかやはりこの人と常識は全く無関係なものです。

「しかし。それでも」

「何だ？」

「多いですね、今回も」

日本は周りを見回して言いました。見れば部屋の中には四人のライダーだけではなく日本のお家の色々な人もいます。とにかく物凄いオールスターです。

「この方々全員にですか」

「ああ。まかないに作らせてるんだよ」

実はこの人が作った料理を振舞っているのですが常にそうしたこ

とを言う人ではありません。
「ほら、御前もさっさと食え」
「はい、それでは」
実は日本もその中に入っているのでした。この脚本家さんは言葉の裏にあるもので人気があるのでした。

第六百三十話　　完

２００９・３・２０

第六百三十一話　顔触れがどうにも

第六百三十一話　顔触れがどうにも

今学園内で野球大会をやっています。とりあえず顔触れはアメリカだの中国だの台湾だの韓国だのキューバだのフランスだのイタリアだの何か濃い顔触れが揃っています。

その中にはやっぱり日本もいます。とにかく個性的な面子が揃っています。けれどその中にもしっかりとこの人もいるのでした。

「よし、レンゴウシルバーにはなれなかったけれど頑張るぞ！」

「ダリナンダアンタイッタイ」

「だから君の飼い主のカナダだってクマ五さん」

「バム打法だったか？試合中に怪我して終盤に復帰してきた奴だったな」

「そうだよ」

とりあえず久し振りのオンドゥル語を受けながら困った顔でクマ二郎さんに返すカナダでした。この人もいるのですけれどやっぱり全然目立ちません。しかもこの野球大会。物凄い逸材まで登場しています。

「どや！こいつを打てるんなら打ってみんかい！」

キューバがここぞとばかりに叫んでいます。何と一六四キロの剛速球に一五一キロの高速スライダーを投げる怪物じみた左腕を持って来たのです。こんな人パワプロで改造コードを使わないと出ません。

「こいつはこの前の大会で負けた日本にぶつけたる！日本、打てるもんやったら打ってみい！」

「わかりました。それでは私も正面から受けましょう」

日本も何時になく真剣な面持ちです。というかバットが刀に見える程です。

「御会いしたその時には」

「おう、正面からや」
キューバは不敵な笑みを浮かべて日本に返します。
「戦って勝ったる。楽しみにしてるで」
「はい、こちらこそ」
まずはこの二人の対決があるのでした。そしてカナダはというと。
とりあえずイタリアとの勝負になりました。
「あれ、二人共いないけれど」
けれど何故か二人の姿は見えないのでした。一体何処に行ったのでしょう。

第六百三十一話　　完

２００９・３・２１

第六百三十二話　冗談抜きで考えた人誰なんだ

第六百三十二話　冗談抜きで考えた人誰なんだ

さて、日本とキューバの対決が注目される野球大会ですが参加国は十六国です。個性的な顔触れなのはいいのですがここで一つ深刻な問題が起こっていました。それは。

「えっ、またこのカード？」

「前やったじゃないか」

日本のお家の人達が対戦相手の発表を見て思わず声をあげました。まずは中国と戦ってそして韓国と戦ったのですが何とまた韓国と試合をすることになったのです。

「しかも韓国って準決勝リーグにまで出て来てるから」

「下手こいたら四回戦うのか？」

「っていうか両方決勝にまで出たら五回？」

何か凄い割合での対戦率です。皆そのことに気付いて首を傾げてしまっています。

「ええと、九回試合してそのうち五回が韓国って」

「どうなってんの！？」

「何か因縁があるのでしょうか」

日本もこれには困った顔になっています。他の参加国の面々も大体同じチームと戦うのですが日本はとりわけ韓国とだけ戦っています。何しろ半分かそれ以上は韓国との試合ですから。

「本当にこれは。この戦いの割り当てを考えた人は誰なのでしょうか」

「何度でも日本を倒してやるんだぜ！」

けれどその対戦相手である韓国は物凄いハイテンションになっています。彼のテンションが高いのはいつものことですけれど。

「この前の雪辱、絶対晴らしてやるんだぜ！」

こんな調子です。とりあえず日本はこのあまりにも多い韓国との対戦に困った顔になっていて韓国はハイテンションです。そんな中でキューバと戦う日本でした。

第六百三十二話　　完

２００９・３・２１

第六百三十三話　バヂディダリナンダアンタイッタイ　☆

第六百三十三話　バヂディダリナンダアンタイッタイ

この濃い顔触れが集まった野球大会。その中でカナダも試合を進めていました。今日はイタリアとの試合です。

「よーーし、次はイタリアさんのところとだな。頑張るよ」

「果たして上手くいくかな」

「うーーん、自信ないけれど全力だよ！」

クマ二郎さんの言葉にも明るく答えます。とりあえずは溌剌としているカナダでした。その明るい顔で試合に挑みます。

「さあ試合だぞ。頑張ろうねクマ三郎さん」

「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」

「だからカナダだよ」

いつものやり取りの後でイタリアに挨拶をしようとします。ところが。

「あ～～ちゃお、イタリアだよ。ピッツァ大好き！」

目の前にいたのは随分とでかくてしかも目つきが悪くてガムをくちゃくちゃさせている人でした。何かアンチョコみたいなのを持っています。

「えーーーと、何だ？」

そのアンチョコを見ながらさらに話しています。

「んあーーー、パスタも好き」

「誰！？」

カナダもクマ二郎さんも驚きです。とりあえずここでは何とかオンドゥルになりませんでした。けれどそれでも。

「えっ！？お、俺カナダ意外に誰って言って」

「落ち着いてクマ六さん」

カナダはまだ名前を覚えていません。

「イタリアさんイメチェンしたんだって。きっと」
「ふううう」
ガムを膨らませているそのイタリアらしき人を見ながらクマ二郎さんに言います。けれどそのカナダも全然自信がないのでした。ある意味日本と韓国の対決がこれでもかという程度続くのよりも衝撃の展開となりました。

第六百三十三話　　完

２００９・３・２２

第六百三十四話　絶対にイタリアじゃない　☆

カナダとクマ二郎さんは何とか我を保ちながら話を続けています。とりあえずカナダがそのイタリアらしき人を見ながらクマ二郎さんに言います。

「ほら、くるくるついてるし」

よく見れば、というレベルではありますが。

「イタリアさんだよ。ごっついけれど」

「う、うん。くるくるついてるよな」

クマ二郎さんもそれを見てとりあえずそうだと思うようにしました。

「イタリア・・・・・・、イタリアだよな。そうだよな」

「そうだよ。イタリアさんだよ」

二人でそう思うように必死に努力する二人でした。ところがここでそのイタリアらしき人がくしゃみをしながら言った言葉が。

「ファ・・・・・・ファック！」

「ファック！？」

「イタリアがファック！？」

これまた衝撃の展開です。二人は一瞬の沈黙の後でまずクマ二郎さんが取り乱しだしました。

「だ・・・・・誰だ御前ーーーーー！」

「落ち着いてクマ一さん。落ち着いて！」

前足をばたばたさせて錯乱するクマ二郎さんを必死に止めるカナダでした。

「今ファックって言っただろ！ダリナンダオバエーーーーーーーッ（翻訳：誰なんだ御前）！！」

「ヘイユーーー！アイムイタリーーーー！」

「誰ナンダーーーーースパイラル！」
最早試合どころではありません。しかもその時イタリア兄弟は珍しく仲良くテレビ観戦でした。とりあえず明らかにイタリアのお家の人ではない方々とのイタリア戦を行ったカナダでした。けれど試合の感想は。
「誰か気になって試合に集中できなかったよ」
「そうだね・・・・・・」
クマ二郎さんもカナダも疲れ切った顔になっていました。またしてもこんな役回りのカナダでありました。

第六百三十四話　　完

２００９・３・２２

第六百三十五話　アメリカのクリスマス　☆

第六百三十五話　　アメリカのクリスマス

「おーい日本いるかい？」
いきなり日本のお家に風変わりな赤い服の人がやってきました。
白くて長いお髭が凄く目立ちます。
「メリークリスマス！」
「な・・・・・・何奴！」
日本はいきなり見知らぬ人がやって来たのですぐに刀を抜きました。
「泥棒なら容赦はしません！」
「日本、僕だよ！」
ところがこの赤い服の人は日本に対して釈明するのでした。
「アメリカだよ、アメリカ！」
「あ・・・・・アメリカさんですか」
「そうだよ。僕だよ」
「何か妙に老けていませんですか？」
とりあえず日本はこの人がアメリカなのは認識しました。けれどそれでもまだ落ち着きを取り戻してはいませんでした。目が座っています。
「ああ、これはサンタさんの格好だぞ」
「欧米人は老けるのは早いと着ていましたがこれ程とは」
日本はまだわかっていません。こうした辺りは本当に天然です。しっかりしているようで天然なのは相変わらずみたいです。
そんなことを言いながらアメリカのお髭を引っ張りますとアメリカも困ってしまいました。
「痛い、顎が伸びちゃうじゃないか」
「あっ、すいません。それにしても今日は何の用ですか？」

「ああ、今度うちでクリスマスパーティー開くんだ」
こう日本に説明しだしました。実に陽気な顔で。
「その招待状をね。届けに来たんだよ」
「取れた！」
アメリカはここでそのお髭を取りました。そうするといつものアメリカになるのでした。とりあえずやっといつものアメリカになりました。

第六百三十五話　　完

２００９・３・２３

第六百三十六話　日本のクリスマスは

第六百三十六話　日本のクリスマスは

今ではどの国でもクリスマスを御祝いします。当然日本もそうですけれどこの人のお家のクリスマスは他のお家のそれとはかなり違っています。

「えっ、また随分とカップルが多いんですね」

「はい、最高のデートの日になっています」

日本妹がお家に来てそのあまりものカップルの多さに驚いているハンガリーに対して説明しています。

「彼氏が彼女にプレゼントをしてディナーを御馳走して」

「何か男の人だけ損をしているような」

「そういう日なんです」

こうハンガリーに対して説明します。日本妹も今は一人でいます。お兄さんは皆と一緒にパーティーに出ているからです。つまり留守番というわけです。

「この日は。そうなんです」

「そうなんですか。まあ何処にでもそういう日はありますよね」

「それで夜にデートをします」

丁度今夜です。本当に皆夜に歩いています。

「そうしてクリスマスツリーを見るのですけれど」

「何か普通のモミの木じゃないですね」

「大抵科学合成の木です」

プラスチックやビニールでできています。そこに様々なものをつけて飾っています。そういうふうになっているのでした。

「確かに本物のモミの木もありますけれど」

「そうなんですか。あっ」

ここで雪が降りはじめました。すると辺りはさらにいいムードの中に入りました。

「雪、ですね」
「この日の雪が一番喜ばれるんですよ」
日本妹は上を見上げながらハンガリーにまた説明します。
「雰囲気。出ますよね」
「はい、とても」
今は女の子二人だけの二人ですがそれでも雰囲気は充分でした。
二人もこのクリスマスの雪の中に身を置いて楽しむのでした。日本のクリスマスを。

第六百三十六話　　完

２００９・３・２３

第六百三十七話　まさに戦隊のピンク　☆

第六百三十七話　まさに戦隊のピンク

「クリスマスですか」
アメリカから招待状を受け取った日本。けれどその表情は今一つ浮かないものでした。自分の口からその理由を言います。
「私クリスチャンじゃありませんし」
「いいんだよ」
けれどアメリカはそんなことにはこだわりません。
「日本はお祭り好きだって聞いたからさ。絶対呼ぼうと思っていたんだよ」
「そうだったんですか」
「そうさ。去年なんか凄かったんだぞ」
もうアメリカのペースになって話をしています。
「大きなツリーやケーキとかあってね」
「はあ」
「そうそう、去年のクリスマスの写真あるからそれ見るかい？」
「どんなのですか？それ」
「こんなのだよ」
こう言って出してきたのは複数の写真です。見るとそれは。
まずは青いケーキでした。もう真っ青です。
「去年はこんな巨大なケーキだったんだぞ」
「凄く・・・・・青いです」
合成着色料バリバリです。色は戦隊のブルーみたいです。
そしてもう一つの写真ですがこれもまた。
「毎年こんなにサンタさんも来るんだぞ」
「来るってレベルじゃないですよ！」
どれだけいるのかわかりません。アメリカを中心に無数のサンタ

がいます。そうした写真を全て見た日本の感想はといいますと。
「いや、私はちょっと。青いケーキは結構です。歳ですし」
「大丈夫、今年は青じゃないぞ」
「何色ですか？」
「蛍光ピンクさ！」
これが本当にケーキの色だったりします。
「暗くなると光る凄いケーキだぞ！」
「絶対行きません」
やっぱりアメリカのケーキでした。とりあえずクリスマスは余計に物凄いケーキを出すアメリカのお家なのでした。本当に食べられるのでしょうか。

第六百三十七話　　完

２００９・３・２４

第三百三十八話　戦隊ケーキ

第三百三十八話　戦隊ケーキ

アメリカはとにかく考えられない色のケーキを作ります。間違っても日本のそれみたいに繊細で淡い色を使ったケーキなぞ出しません。これぞアメリカといった物凄い色のケーキを作るのがこの家です。

青やピンクだけではないのです。もう赤や黄色、緑。他には黒や白もあります。とりあえずどのケーキも合成着色料全開でとてもはっきりとした色合いになっています。

そのケーキを見た日本と中国の感想です。

「これがケーキですか」

「おもちゃじゃないあるよな」

「何言ってるんだ、ちゃんとしたケーキだぞ」

アメリカはとても不安な顔を見せてきた二人に対してとても明るい声で言葉を返します。

「そんなの見ればわかるじゃないか。冗談がきついよ、君達は」

「いえ、冗談じゃないですけれど」

「このお菓子は。ちょっとあるな」

さしもの二人も引いています。とりわけ日本は手をつけようとすらしません。

けれどアメリカはばくばくと食べています。まるで何ともないようです。そんな彼に。日本は恐る恐る尋ねるのでした。

「美味しいのですか？」

「ああ、とても美味しいよ」

にこりと笑って日本に答えてきます。

「ジュースも美味しいし。最高だよ」

「ジュースもですか」

「このジュースも」

中国はそのジュースを見て暗い顔になります。
「随分とカラフルあるな。赤に青に黄色に緑にピンクに」
「完全に侍戦隊の色ですね」
「その通りあるぞ」
実に色彩豊かなアメリカのお菓子です。とりあえずアメリカは食べても平気みたいです。流石にシルバーやゴールドがあるかどうかはわかりませんけれど。

第六百三十八話　　完

２００９・３・２４

第六百三十九話　来て欲しい理由は　☆

第六百三十九話　来て欲しい理由は

日本が来ないと聞いたアメリカ。すると急に残念そうな、悲しそうな顔になりました。そうしてその顔で日本に対して言うのでした。

「日本来てくれないのかい？」

「私はちょっと」

「折角友達になったんだし一緒にクリスマスを祝いたいんだ」

こう日本に言うのでした。かなり切実な顔です。

「君が来てくれると思って今年計画立てちゃったんだよ」

「えっ・・・・・・」

自分の為にそこまでしていたとは。日本にとっては驚くべきことでした。

「日本が来てくれないと寂しいクリスマスになると思うんだ」

「私がですか」

「そうだ。御願いだよ」

表情を拒むものから聞くものにした日本に対してさらに言います。

「君の協力が必要なんだ」

「協力ですね」

「うん、そうだよ」

「わかりました」

元より頼まれると断れない日本。ここで遂に頷きました。

「まあ協力位なら」

「ほ・・・・・本当かい！？」

アメリカは日本のその言葉を聞いて明るい顔になりました。

「よかった。これで」

「はい。これで」

「今年のクリスマスは日本のおごりだあ～～～！」

「そういうことですか！」

かくして日本にこってりと怒られるアメリカでした。全く以って困った人であります。クリスマスだけでなくいつもこんな調子なのですから尚更困ったことです。

第六百三十九話　　完

２００９・３・２５

第六百四十話　アメリカだけではないですし

第六百四十話　アメリカだけではないですし

何だかんだでアメリカのフォローをしたり助けてあげたりしている日本。しかもこれはアメリカだけではないのが実に大変です。

「そういえば日本には結構世話になっているあるか？」

「そういえばじゃないでしょ」

台湾が中国の何気なくな言葉に突っ込みを入れます。

「あんたのところのお財布のかなりの部分が日本さんに縁の下で支えてもらってるでしょ」

「うっ、否定できないある」

「アメリカさんも」

「ははは、そういえばそうだ」

まずはこの二人ですが台湾にしろ心当たりは思いきりあります。

「私だって。日本さんとのお付き合いがなければ何もかもやっていけないし」

「何か皆そうだよね。太平洋の人達は」

「貴方誰ですか？」

「・・・・・台湾さんまで知ってくれないんだ」

とりあえずカナダも日本とは結構なお付き合いがあります。台湾に至ってはそれこそ自我ができてから今に至るまでかなりの間日本に助けてもらっています。それを考えると台湾は日本に申し訳なくすら思っています。

「昔は学校やダム作ってもらって今もタレントさんとか一杯応援させてもらったり色々なこと教えてもらってるし」

時にはちょっと言うこともありますけれどそれでもそうした理由で日本が好きな台湾です。そして日本にお世話になっているということでは。

「野球五回やって結局負けたんだぜ！」
今日も学校で騒いでいるこの人です。
「日本に負けるのだけは我慢ならないんだぜ！今度はフィギュアで勝負なんだぜ！」
「あいつが一番日本さんにお世話になってるのに。昔から」
台湾は韓国と仲があまりよくないので嫌そうな目で見ながら呟きます。
「それで何でいつもあんなこと言うのよ。何もわかっていないのね」
台湾にとっては溜息の話です。けれどそうしたことには一切コメントすることのない日本でした。台湾の本音にも気付いていなかったりしますけれど。

第六百四十話　　完

２００９・３・２５

第六百四十一話　女の子達も

第六百四十一話　女の子達も

いつもは兄達の影に隠れてしまいがちな妹達。けれどちゃんと自己主張はしています。実はお兄さん達も彼女達には頭があがりません。

今そんな彼女達が集まって色々とお話をしています。何のお話かというと。

「だから。兄貴達もやってるんだし」

「私達もということですね」

「そうそう、それそれ」

アメリカ妹がイギリス妹に対して言っています。

「それもさ。連合とか枢軸とかそういう変な軸はなしで」

「私達だけで、ですか」

「そういうこと。どうかな」

アメリカ妹の提案のようです。

「私達のチーム。どう？」

「中々よさそうあるな」

中国妹は少し考えてからアメリカ妹の提案に賛成してきました。

「ただ。ドイツ妹はスウジクに、ベラルーシはバルトに取られてるあるから」

「イタリアさんのところも御二人もですわ」

フランス妹も言ってきました。

「四人の方は残念ですが」

「あと韓国さんの妹さんも」

「あの馬鹿兄貴がついて来ないのはいいんだけれどね」

アメリカ妹は日本妹の言葉に応えて述べます。どうも彼女達の間でも生徒会長の評判は今一つなようです。

「まあとにかく。人はいるから」

「はい。それじゃあ」
「チーム結成よ。名付けて恋姫戦隊」
何か結構あれなチーム名ではあります。
「それでいいわね」
「まあ一応は」
「それでいいある」
日本も中国も賛成してこうして女の子達のチームができました。
遂に四つ目のチームというわけです。

第六百四十一話　　完

２００９・３・２６

第六百四十二話　魔法戦隊

こうしてチーム結成となったのですがまずはイギリス妹がグリーン、日本妹がピンク、フランス妹がブルー、中国妹がイエロー、アメリカ妹がレッドとなりました。何か順番が他のチームと少し違います。なおコスチュームは全員それぞれの色のジャケットで下はミニスカートにブーツ。やっぱり女の子のメンバーはこれです。皆実によくわかっています。

こうしてチームを結成したところで。アメリカ妹が言うのでした。

「この配色ってことは」

「はい。リーダーは私になります」

イギリス妹が言うのでした。

「どうか宜しく御願いします」

「そうよね。何か今回名乗りも順番がかなり違うわね」

「色もお兄様達の色とはかなり違いますわね」

フランス妹も言います。

「私のお兄様は黒なのに私はブルー」

「コイヒメブルーあるな。私はイエローあるし」

「それで私がピンクなのですね」

日本はまさに花も恥らうといった感じになっています。

「色が同じなのはアメリカさんだけですね」

「そうよね。しかも兄貴はリーダーだけれど私はリーダーじゃなくて」

「ではリーダーを譲りましょうか？」

「ああ、それはいいよ」

アメリカ妹はイギリス妹の今の申し出を右手を横に振って断りました。

「それはね。あたしはもうこれでいいから」

「そうですか」
「リーダーは兄貴だけで充分」
何気に兄に反発を覚えているようです。
「さて、何はともあれこれで色分けも決まったね」
「そうですね。けれど私がピンクなんて」
日本はヒロイン専用の色にかなり嬉しいようです。実はいないことも多い色だったりしますけれど。

第六百四十二話　　完

２００９・３・２６

第六百四十三話　まずは緑のリーダー

第六百四十三話　まずは緑のリーダー

「そういえばこの戦隊ではじめて緑がリーダーになったのでしたね」

「はい。兄弟の一番上の方でしたので」

リーダーのグリーンことイギリス妹に日本妹が説明しています。

「それでリーダーになったのです」

「大地のエレメントですか」

緑は大地、魔法の世界ではそうなっているのです。今皆ミニスカートの上に魔法使いの黒くて長い法衣をまとっています。

「成程。それで私は時間のある時は畑仕事をして」

「アネキ農園って名前の」

「また随分と物凄い名前ですね」

「あのプロデューサーさんのお遊びだと思って下さい」

ちょっと農園の名前には不満みたいです。確かにお世辞にもセンスのいい名前ではありません。

「ですから」

「わかりました。では皆さん」

黒い法衣を勢いよく脱ぐともうそこにはミニスカートが。これが中々どころかかなりいいです。

「早速料理ですが」

「そういえばお料理は」

「とりあえずブレイクファストです」

そのブレイクファストがこれでもかという程出て来ました。

「食べて下さい」

「魔法で作られたんですね」

「はい、そうです」

すぐに出て来たのはそれが理由でした。皆まずはその料理に舌鼓

を打ちます。ですが。
「けれど私が魔法で出せる料理はこれだけですので」
「やっぱり。そうなのですか」
結局魔法が使えても料理の腕とかは変わらないみたいです。とりあえず材料費がいらないということだけはとてもいいことですけれど。

第六百四十三話　完

２００９・３・２７

第六百四十四話　精霊はこれです

第六百四十四話　精霊はこれです

イギリス妹は大地の魔法を使います。魔法を使うには精霊との契約が必要です。そしてその精霊はといいますと。

タウラス、緑色の牛の姿の精霊です。けれどそのタウラスを見た皆の感想は。

「番組違うあるか？」

「何か弁護士先生が出てきそうな気がしてきました」

「ゾルダだよ、これ」

「私も。お家の脚本家さんが出てきそうで」

皆その牛を見て他の作品のキャラクターを思い出したのです。銃で戦ってファイナルベイントは一斉射撃という物凄い攻撃を放つ弁護士ライダーです。やっぱりこれにも日本のお家のあの脚本家さんが絡んでいます。とにかく色々な場所に出て来る人ではあります。

「そんな気がします」

「何故牛が緑なのでしょう」

当のイギリス妹もそれが不思議なのでした。

「そういえばあのライダーの牛も大地から出て来ていますが」

「はい。牛は大地の生き物だからそうです」

日本妹がイギリス妹にここでも説明します。

「それでなのです」

「そうですか。それで緑の大地といいますから」

「その通りです。攻撃力と防御力はかなりのものですよ」

その辺りはまさに大地、まさに牛なのでした。

「ですからギネスさんの戦い方も」

「あまりそういう戦い方は私には合わないのですが」

「それは仕方ないです。我慢して下さい」

「緑も牛も好きなのですけれど。その辺りはわかりました」

とりあえずこのことは素直に受け入れたイギリス妹でした。そうして今日も趣味の紅茶を楽しむのでした。どうやら精霊は気に入ったようです。

第六百四十四話　　完

２００９・３・２７

第六百四十五話　終わりのダンスが最高

第六百四十五話　終わりのダンスが最高

このチームでは二番目はピンクです。日本妹がピンクなのですが本人はどうしても恥ずかしそうです。

「風の精霊フェアリーですか」

「風でピンクっていうのもないけれどね」

「ちょっと強引だと思うあるぞ」

アメリカ妹と中国妹が彼女に言います。何故かわかりませんけれどこのチームでは風はピンクなのです。どうしてなのかは誰にもわかりません。

「それで私何かキャラが変わってるんですけれど」

「そういえば何か能天気なキャラってことになってるね」

「一人称が環ちゃんあるな」

「何か。全部無理です」

実際はお兄さんに似てかなり天然なところがある彼女ですけれど能天気ではないのです。この辺りが微妙だったりします。

「私。どっちかっていうとブルーの方が合ってるような」

「このチームじゃブルーが実質まとめ役だしね」

「まあそれは置いておくある」

二人はこの話を強引に終わらせました。けれど実際に学園や街では。日本妹とブルーのフランス妹、とりわけ日本妹が大人気でした。

「あっ、コイヒメピンクだ」

「ピンクのポストに変身してよ、ポストに」

「僕扇風機がいいな」

「踊って踊って」

こんな調子でいつも子供達に囲まれています。他の面々も大人気ですけれど彼女がとりわけ人気があります。

「何で私がこんなに？」

「ピンクってヒロインの色だからよ」
「それにキャラクターあるな。能天気なお姉さんも人気が出るあるぞ」
「そうなんですか」
子供達の言葉に応えて踊りながら応える日本妹でした。何気にこのダンスが人気があったりします。少なくともレンゴウチームのイエローやブラックとは全然違う扱いです。

第六百四十五話　　完

２００９・３・２８

第六百四十六話　ピンクの色は

第六百四十六話　ピンクの色は

言うまでもなく日本の花といえば桜です。桜こそ日本を象徴する花で日本のお家の人達はこの桜をこよなく愛しています。そしてその桜の色といえば。

「ただ。この色は大好きです」

「どうしてですの？」

ブルーのフランス妹が日本妹の言葉に対して尋ねます。

「ピンクで宜しいのですね、やっぱり」

「はい。桜の色ですから」

こう答えてからフランス妹に対して微笑んで見せます。

「だから。大好きなんです」

「そうですか。花の色だからですのね」

「私の国は春になると桜が咲き誇ります」

それが日本という国です。学校でも並木道でも公園でも。至るところで桜が咲き誇ります。皆桜を見てその心を楽しませます。それが日本人というものなのです。

「その桜の色ですから」

「だからですか。いいことですね」

「いいことですか」

「そのお話を聞いてわかりましたわ」

お兄さんとは全く違う物静かで気品のある微笑みで日本妹に対して応えたのでした。

「桜と。ピンク色のよさが」

「ナタリーさんもですか」

「はい。ですから私も」

そしてここで言うのでした。

「その桜を。見てみたくなりましたわ」

「そうですか。それでは今から私の家に御一緒に」
「有り難うございます。それでは」
「はい」
こうしてピンクとブルーは日本のお家でその桜を楽しむのでした。
桜は今まさに満開です。その満開の千本桜が二人を出迎えるのでありました。

第六百四十六話　　完

２００９・３・２８

第六百四十七話　実質的に参謀

第六百四十七話　実質的に参謀

続いてブルー、フランス妹です。長身に見事なプロポーション、その姿での青いジャケットとミニスカートが映えます。何かピンクよりずっと胸が目立ちます。

「そういえば実際もこの戦隊では妹さんの方が胸が大きかったんですよね」

「そうでしたわね、確か」

それが少し残念そうな日本妹に対してフランス妹が答えています。

「あと忍者の装束も着ておられましたね」

「くの一で」

「思えば魔法では女性陣がかなり優遇されていましたね」

「あのプロデューサーさんはいつもそうなんですよ」

こんな話をしているのでした。実際ピンクとブルーがこのチームではかなり人気があります。その人気のある二人ですがブルーの役割はといいますと。

「ここはこうしてですね」

五人の会議の時には方針ややり方を提案することが多いです。

「こうしたらどうでしょうか」

「そうですね。それで行きましょう」

イギリス妹もそれで納得します。いつも彼女の提案で話が動いているところがあります。

つまりこのチームの参謀なのです。とりわけひらめきが物凄いです。それで何かをしているところさえあります。

「ナタリーさんが参謀でよかったです」

「そうですか？」

「だって。スウジク戦隊は兄さんが参謀なのですけれど」

日本妹はここで溜息をつきました。スウジク戦隊ではスウジクグ

リーンこと日本が参謀を務めています。けれどこの参謀が窮地に陥ると。

「ここは特攻しましょう！潔く散華するのです！」

「だから落ち着け日本！玉砕して何になるというんだ！」

「それこそがもむのふです！さあ靖国で会いましょう！」

「落ち着けと言ってるだろ！ここは全員撤退だ！」

「敵に背を向けるなどと！」

ドイツとのとんでもないやり取りです。日本は窮地ではすぐに特攻や玉砕を主張するのです。そんなお兄さんを知っているからこそ日本妹はフランス妹を有り難く思うのでした。

第六百四十七話　　完

２００９・３・２９

第六百四十八話　水と自由

第六百四十八話　水と自由

誰でも知っていることですけれどフランスのお家の旗はトリコロールです。青、白、赤の三色です。この配色こそフランスの象徴になっています。まさにフランスです。

そして今フランス妹はブルーです。このことについて当のフランス妹はどう思っているのかというと。

「いいことですわ」

「いいことなのですね」

「はい。青は自由の色です」

穏やかに笑って日本妹の言葉に応えるのでした。

「ですから大好きです。このチームでは水でしたね」

「そうです。精霊はマーメイドです」

「奇麗な精霊でこれも有り難いですわ。環さんのフェアリーも奇麗ですね」

「そうですか」

「はい。水と自由」

その穏やかな笑みのまま話をしてきます。

「この二つがなければ人は生きられませんから」

「そうですね。水がなければ何もできません」

日本妹もフランス妹のその言葉に対して頷きます。

「それに自由がなければ」

「人であるとは言えません。後の二つもですけれど」

「平等と博愛ですね」

「世の中。それがわかっていない人もいることが残念です」

フランス妹はここで少し寂しい顔になるのでした。

「しかもこの三つを大切にしようと言っている人こそが」

「私のお家でも。そうですね」

日本妹も思いあたるところがあって彼女も寂しい顔になりました。
「そうした人達がいて」
「本当の意味でわかって欲しいのですけれど」
「全くですね」
二人はこのことを思って寂しい顔になってしまいました。世の中中々理想通りにはいかないものです。

第六百四十八話　　完

２００９・３・２９

第六百四十九話　ボクサーではありません

第六百四十九話　ボクサーではありません

四人目は恋姫イエロー、中国妹です。彼女が黄色なのは何故か似合います。

「中国っていったら黄土だからでしょうか」

「多分そうあるな」

日本妹の問いにも答えます。自分でも何となくわかっている感じです。

「うちの家では黄色はいい色ある。だから私も気に入ってるある」

「確か土の色でしたね」

「そうある」

五行思想です。それによると黄色は土で中央にあります。非常に縁起がよい色なのです。

「それを着れるから凄く嬉しいある」

「それで精霊は雷でガルーダですけれど」

「神鳥あるな。さらにいいある」

中国妹はもう有頂天になりそうでした。しかもです。

「あと中国拳法ですけれど」

「実際はボクサーだったあるな。次男さんで」

「はい、そうです」

魔法の方はそうだったりします。中国妹の色の人です。

「そこは違いますけれど」

「別にいいある。どちらにしろ拳で戦うある」

言いながら構えに入ります。動きも見事です。ですが黄色でこれをやると。

「ちょっと。激拳みたいあるな」

「あの作品ではないですよ」

この娘達は魔法なので違います。勇気の証なのです。

「そこはちょっと」
「あれだったらメインヒロインあるがかなり影が薄くなってしまうあるからな」
「やっぱり魔法の方がいいんですね」
「私は今で満足あるよ」
にこにこと笑いながら拳法の練習に入りました。その動きはやはり見事なものです。

第六百四十九話　　完

２００９・３・３０

第六百五十話　見破るのが得意

六百五十話　　見破るのが得意　　第

　中国妹は元々頭の回転が早くてその上鋭いです。それはこの戦隊でも変わりません。それで色々なものを見破ることができます。
「そこあるな・・・・・・っ！」
「な、何故わかったんだぜ！」
　今日も生徒会の仕事をせずに何か変なことを言ってやっている会長の変装を見破って捕まえました。そうして生徒会室に引き摺っていきます。あとはイギリスとフランスがその会長に無理矢理仕事をさせます。もっともすぐに脱走して同じことの繰り返しになってしまうのですけれど。
　何はともあれ中国妹はその鋭さを遺憾なく発揮しています。それは仲間の中でも同じで。末っ子ポジションでも集まるとセンターになるアメリカ妹も素直に称賛する程です。
「凄いね、いつもながら」
「兄さんが結構いい加減なところあるからこうなったかも知れないある」
　中国妹は自分ではこう考えているのでした。
「それはシェリルも同じではないあるか？」
「まあ私もね。兄貴のいい加減なところはね」
　じっくりと見てきたのです。何気に皆お兄さんには色々思うところがあったりします。思っていないのは多分日本妹とドイツ妹位です。
「見てきてるけれど」
「その分私がフォローしてきたある」
　中国のお家の女の子も大変です。
「それでそういうことをしても兄さん達はうちの家の女は怖いなん

て言うある」
「ああ、それうちも」
どちらも恐妻家が多いだの女の子の気がとても強いだの言われていたりします。
「失礼するある。こっちはフォローしてるだけなのに」
「全くだよね。向こうはそういうの全然わかっていないのよね」
案外こうした悩みも持っているのでした。女の子も大変です。

第六百五十話　　完

２００９・３・３０

第六百五十一話　五番目がレッド

第六百五十一話　五番目がレッド

「レッドがリーダーじゃなくて末っ子ってねえ」
アメリカ妹はそれがかなり不満みたいです。ミニスカートから物凄い足を見せていて胸も勢いよく出ています。そのスタイルを見せながらも口はぼやいています。
「ファイブマンと逆じゃないの？」
「よくそんな古い作品御存知ですね」
「ああ、うちでパワーレンジャーやってるからね」
実はアメリカのお家でも戦隊ものはやっていたりします。それぞれの人種に合わせたカラーになっていて動きも日本のものとは違っています。このことを日本妹に対して言うのでした。
「それで知ってるのよ」
「そうだったんですか」
「それで精霊は火でフェニックスだったわよね」
何はともあれ自分の受け持ちの精霊について日本妹に尋ねます。
「確か」
「はい、そうです」
「あとサッカーやってるんだったっけ」
このことも日本妹に対して尋ねます。
「そうだったわよね」
「それもですけれど」
「私サッカー苦手だから」
お兄さんと一緒で彼女もサッカーはあまり好きではありません。好きなのはやっぱり野球にアメフトにバスケ、それホッケーです。どれもアメリカのお家の代表的なスポーツです。
「だから野球でいいわよね」
「野球だと忍風戦隊の緑の人になってしまいますけれど」

「じゃあバスケにしとこうかしら」
こんなことを言っていました。とりあえずサッカーをやるつもりはないアメリカ妹でした。お兄さんに似て彼女も我儘なところがあるようです。

第六百五十一話　完

２００９・３・３１

第六百五十二話　結局野球にしまして

第六百五十二話　結局野球にしまして

結局野球を選んだアメリカ妹。それを早速魔法にも使ってみますけれど。

「環に教えてもらった漫画読んでやってみるよ」

「まずはバットあるな」

「うん、まずはこれを出してね」

中国妹に見てもらいながら練習をしています。早速そのバットを出して練習スタートです。ボールが来てそれをバットで打つと。

「ジャコビニ流星打法炎バージョン！」

「おおっ！」

それを見て中国妹も思わず声をあげます。何とボールを打つとバットが幾つもの炎の球に分かれてそれがそれぞれ飛ぶのです。これはかなり凄いです。

打ったアメリカ妹もにんまりしています。どうやら自分でも会心の出来のようです。打ったバットも何時の間にか元に戻っています。

「どうかしら、これって」

「いいあるな。かなり強力あるぞ」

「やっぱりね。得意なジャンルに魔法を使わないとね」

「その通りあるな。私も雷を拳法に使ってるあるし」

実は中国妹もそうなのでした。それぞれ魔法をアレンジして使っているのです。

「そうしないと魔法も生かせないあるぞ」

「だよね。何か私達のチームが一番そういうのしっかりしてるわよね」

「というか他のチーム、特に兄さん達とリトアニアさん達のチームは」

スウジクチームは例外なのでした。このチームが一番仲間うちがしっかりしていますから。
「あんまりと言えばあんまりあるぞ」
「そうだよね。どっちも追加メンバーがねえ」
とりわけバルト戦隊はそうなのでした。今もリトアニアが気付かないうちにバルトキラーことベラルーシに指を折られています。それを考えるととても上手くいっている恋姫戦隊でした。

第六百五十二話　　完

２００９・３・３１

第六百五十三話　蛙の王女様

第六百五十三話　蛙の王女様

さて、恒例になってしまっている追加メンバー。このチームの追加メンバーは誰かというと。

「宜しく御願いします」

ウクライナでした。弟さんとはうって変わって大人しくしかも黒いところのない娘さんです。しかも巨乳で金髪碧眼の童顔、髪型はウクライナ独特のあの編んだもの、このチームは追加メンバーにまで恵まれていました。

「くそっ、あっちは何であんなに何もかもが恵まれてるんだよ」

「こっちは追加メンバーあれだぞ。大体何でレンゴウ戦隊にいるんだ」

それを見たイギリスとフランスの悔しくてたまらないような声です。この二人はいつもレンゴウゴールドが引き起こすトラブルの後始末をしているのでストレスが物凄く溜まっているのです。他にはバルト戦隊なんかも追加メンバーが敵か味方かわからなかったりします。追加メンバーといえど本当に色々です。

「私は恋姫シャインですか」

「だから服も立派なのですわね」

フランス妹が言います。ウクライナの服は青を主体とした派手なものでしかも当然ながらブーツにミニスカートです。これはやっぱり外せません。

「けれど似合いますか」

「そうですか。よかった」

ウクライナは追加メンバーになって大喜びです。けれどそんな彼女を遠くで見ているレンゴウグリーンことロシアはかなり複雑な顔をしていました。

「姉さん、レンゴウ戦隊に入ればよかったのに」

「だったらあいつどけて入れるか？俺は大賛成だけれどよ」
「ゴールドによ。けれど向こうが手放すか？あっちには御前の妹さんも追加メンバーなんだろ」
「そうなんだよね。だから向こうには僕もちょっと何も言えないんだ」
　ロシアはイギリスとフランスに対して答えます。
「どうにかならないかな。本当に」
「俺はとりあえずゴールドを誰か他の奴にできりゃそれでいいんだけれどな」
「そもそも何でうちにいるんだ？あいつあの時日本の家にいただろうが」
　とにかくゴールドを誰か別の人にしたくて仕方のない二人でした。
適わぬ夢は誰もが持っているものです。

第六百五十三話　　完

２００９・４・１

第六百五十四話　列車と猫

第六百五十四話　列車と猫

恋姫シャインことウクライナ、彼女が持っているものは列車と猫です。この二つをチームにいる時は絶対に手放しません。まずは猫ですが。

「何か声があれですね」

日本妹はその猫の声を聞いて言います。

「あの戦闘民族の王子様の息子さんのお声に似ているような」

「戦闘民族の息子さんですか」

「はい。どうしてでしょうか」

こうウクライナに説明しながら首を傾げています。猫はオスでとてもヤンチャな猫です。何でもウクライナのお家でも悪さばかりしているとか。

「あの王子様も。最初はよかったのですけれど」

「確かずっと噛ませでしたっけ」

「はい、本当にただの時間稼ぎでした」

日本妹も酷いことを言います。事実ですけれど。

「いつも最初は威勢がいいのですけれどやっぱり負けて。弱音を言われるのがパターンです」

「その息子さんにお声がですか」

「そうです。思えば不思議ですね」

それがどうしてかはわかりません。そもそもこのチーム集合場所に野菜を植えていたりします。流石にこの野菜は喋ったりはしませんけれど何故か置いていたりします。中々変な趣味です。

「それと列車ですが」

「移動に使って下さい」

ウクライナはにこりと笑って日本妹に言います。その巨大な胸が

目に入ります。日本妹の小さな胸とは実に好対称になっています。
「皆さんで」
「宜しいのですか？」
「その為にありますから」
凄く気前がいいです。
「ですからどうぞ」
「有り難うございます。それでは」
「ロシアちゃんのシベリア鉄道みたいに長くはないですけれど」
それでも列車があるのは有り難いです。恋姫戦隊は列車まで手に入れたのでした。本当に色々と恵まれています。

第六百五十四話　　完

２００９・４・１

第六百五十五話　お母さんです

第六百五十五話　お母さんです

このチーム、結構以上に大所帯です。何とまだ追加メンバーがいます。

「スウジク戦隊の次に多いのですね」

「あのプロデューサーさんアイドルと大所帯が好きですので」

ふと思ったイギリス妹に対して日本妹が答えます。

「それでなんです。それでそうした作品が成功します」

「そのようですね。それで七人目はどなたなのですか？」

「私です」

出て来たのはロシア妹です。白いジャケットにやっぱり彼女もミニスカートです。何処かチェンジマーメイドを思わせる素晴らしい格好です。

「私が七人目です」

「貴女がですか」

「はい」

お兄さんとは違って静かで気品のある微笑を浮かべます。

「白といえば私らしくて」

「そうですね。お兄さんの緑は多分」

「シベリアの木の色だと思います」

何気に怖いものがあります。ロシアのお家ではシベリアといえばあまりよくない行き先だからです。ロシアや上司の人が時々シベリア行きのチケットを用意してくれますけれどそれはいつも行きだけで帰りはなかったりします。

「絶対に」

「そうですね。それでは貴女の白は」

「多分。雪の色かと」

自分で何となくわかっているみたいです。

「それで白なんだと思います」
「そうですか。やはりそうなのですね」
「はい、私の国はとにかく雪が多いですから」
どうしても雪からは逃れられないロシアですけれど。彼女もまたそのおかげで白なのでした。けれど名前はホワイトではなく恋姫マザーとなったのでした。

第六百五十五話　　完

２００９・４・２

第六百五十六話　氷のエレメント

第六百五十六話　氷のエレメント

そのロシア妹が使う魔法はこれです。これこそロシアのお家の人といったものです。

「お見事ですわ」

フランス妹が彼女が使ったその魔法を見て言います。見れば流れる滝をそのまま凍らせています。

「貴女の氷の魔法。噂通りはありますわね」

「生まれた時から氷には親しんできましたから」

この辺り本当にロシアの妹さんです。

「それでなんです。氷使えるのは」

「それでなのですね」

「はい。ただ姉さんは違いますけれど」

ウクライナのことです。実はロシアは周りにお姉さんと妹さん達がいるのです。女の子に囲まれてはいるのです。今もお家に残っているのはこのロシア妹だけですけれど。

「姉さんは太陽の魔法なんです」

「そうですね。温かいのがいいと仰ってますから」

「私も。本当は」

ロシア妹はここで本音を話しだしました。

「暖かい場所がいいです。それで暖かい魔法が」

「それは仕方ありませんね。適性がありますから」

「そうなんですよね。それはわかっていますけれど」

けれど、なのでした。

「いざという時はいつもこの氷が助けてくれますけれど」

「私のお家のナポレオンさんが貴女のお家に攻め入った時も」

「はい。あの時はお兄様方に失礼しました」

「いいのですわ、お兄様方にはいい薬になりました」

何気に兄に結構厳しいです。
「それは御気になさらずに」
「すいません」
何処か控えめで無欲なロシア妹です。この辺り何かロシアとは兄妹には思えない程です。確かにロシアも普段は無口でお酒さえあればいいという人ではあるのですけれど。

第六百五十六話　完

２００９・４・２

第六百五十七話　黒一点

「よっし！俺最高！」
ハンガリー兄はもう得意の絶頂です。何故かというと。
「恋姫戦隊の八人目なんだよな！こんないいことないよ！」
「何で兄さんが？」
妹であるハンガリーはこのことが不思議で仕方ありませんでした。
どうして自分のお兄さんが女の子ばかりのチームにいるのか首を傾げています。
「女の子だけの戦隊に」
「何でもお父さんって役らしいんだ」
ハンガリー兄はこう妹に話します。
「それでなんだよ。俺がメンバーでたった一人の男になったんだよ」
「何かそれだとイタちゃんの方が喜びそうだけれど」
女の子大好きといえばやっぱりイタリアです。実際に恋姫戦隊ともかなり仲がいいですけれど。こうした時弱くてもその明るくて憎めない性格は本当に得です。
「それでも。兄さんなのね」
「いいだろ、俺がお父さんで」
「別に。それは」
ハンガリーはそのこと自体は別に何とも思っていませんでした。
「思わないけれど」
「何だよ、つれないな」
「私は私のいる戦隊で満足してるし大変だし」
「大変なのか？」
「だって。参謀が日本さんよ」
ここが実はスウジク戦隊の最大最悪の弱点だったりします。
「もうピンチになったらすぐに特攻だの玉砕だのっていう作戦立て

るのよ。しかも台湾ちゃんがそれにいつも賛成するしイタちゃんは戦力として頼りにならないしプロイセンの馬鹿はいるし」
「すげえ大変だな」
「ドイツさんがいてくれてるけれど。それでもね」
「日本さんの妹さんうちの戦隊にいるぞ。しかもピンクでな」
「気をつけてね。あの日本さんの妹さんだから」
「・・・・・・ああ」
やっぱりいいことばかりではなさそうです。黒一点もかなり大変なようです。

第六百五十七話　　完

２００９・４・３

第六百五十八話　やっぱり来たイタリア

第六百五十八話　やっぱり来たイタリア

確かに不安要素はありますけれどそれでもミニスカートの女の子七人に囲まれている状況となったハンガリー兄。やっぱり物凄い幸せです。

「やっぱりあれだよなあ。女の子がいると全然違うよなあ」

にへらにへらとした顔になっています。そんな幸せの絶頂の彼ですがここでスウジク戦隊からイタリアが来ました。それでハンガリー兄に対して言ってきました。

「俺も入れてよ。何か凄く楽しそうじゃない」

「えっ、イタちゃんスウジクレッドじゃない」

ハンガリー兄はそののこのことやって来たイタリアに対して少し驚いた顔になって言いました。

「そっちには俺の妹とか台湾ちゃんとかドイツの妹さんとか一杯いるじゃない」

「いやあ、それでもね」

そのいつもの能天気な顔で言うイタリアでした。

「ドイツの訓練厳しいし。それにこっちも女の子一杯いるから」

「やっぱりそれが理由か」

予想はついていましたけれど実際に聞くともっと納得しました。

「何かイタちゃんらしいな」

「駄目かな。それで」

イタリアはハンガリー兄に尋ねます。

「俺がそっちに遊びに行っても」

「私は構いませんよ」

「私もある」

「私もね」

後ろから女の子達の声がします。

「イタリアさんなら是非」
「何時でもいらして下さい」
女の子達からも歓待の声です。イタリアは何だかんだで女の子達にも人気があるようです。
「そうだな。まあイタちゃんならいいか」
そして当のハンガリー兄も結局頷くのでした。
「じゃあ何時でも来ていいから」」
「有り難う。恩に着るよハンガリー兄さん」
こうしてハンガリーの黒一点はなくなりました。けれどイタリアならいいか、やっぱりこう思って許してしまうハンガリー兄なのでした。

第六百五十八話　　完

２００９・４・３

第六百五十九話　居残りとやって来た二人

第六百五十九話　居残りとやって来た二人

確かにハンガリー兄もいるこのチームですけれどやっぱり女の子のチームです。従ってこの人は普段は司令官みたいにいつも残っています。

「あれっ、俺っていつも居残り？」

「ニャア」

ウクライナの猫が鳴きます。流石に人の言葉は喋りません。あとやっぱり喋らない野菜と一緒に。一人お留守番をしています。

「何か寂しいな。折角戦隊に入れてもらったのに」

「そうだよね。皆いなくなったし」

遊びに来ていたイタリアが彼に応えます。

「おかげで俺も寂しいよ」

「っていうかイタちゃんスウジク戦隊の方は？」

「ドイツの特訓が怖くて逃げてきたんだ」

今回もなのでした。

「というわけだからちょっと匿ってよ」

「俺はいいけれど」

彼はいいのです。けれどイタリアがいないとすぐに探し出す人がいます。それはやっぱりこの人です。

「イタリア！今度はここにいるのか！」

「げっ、ドイツ！」

早速ドイツがやって来てイタリアを見つけてしまいました。丁度ハンガリー兄と一緒にジェラートを食べている彼を。

「全く、訓練になるといつも逃げ出して何考えてるんだ！」

「御免なさい御免なさーーーーい！」

捕まりながら泣き叫んでいます。いつものパターンです。

「とりあえず謝るから首絞めないで！凄く痛いから！」
「ドイツも大変なんだな」
ハンガリー兄は泣き叫ぶイタリアを連行していくドイツを見ながら呟きました。
「何だかんだ言っていつもイタちゃんの面倒見てるしな」
そうしたこともちゃんと見ていたりします。今日もどの戦隊もそれぞれのチームらしく動いているのでした。

第六百五十九話　　完

２００９・４・４

第六百六十話　和気藹々

　第六百六十話　和気藹々
「それで今度はこうしましょう」
「はい、じゃあ私はここで」
「私はそっちに行かせてもらいますね」
　恋姫戦隊の作戦会議はいつもまとまりがいいです。女の子同士仲良く顔を合わせて楽しくお話をしながら作戦を決めていきます。作戦会議自体が終わってもそこから楽しくお茶会や一緒にお料理をしたりして時間を過ごしていきます。とにかく物凄く雰囲気がいいです。
「いいねえ、この雰囲気」
「全くだな」
　今日はイタリア兄が来ています。イタリアは今ドイツに思いきりしごかれている真っ最中です。遠くからそんなイタリアの悲鳴と日本が特攻を叫んでいる声が聞こえてきます。
「俺の方のラテン戦隊もそれなりに雰囲気はいいんだがな」
「何かイタちゃんのとこが関わると何処も雰囲気がよくなるんだな」
「あとは女の子だな」
　ここが要点のようです。
「いるといないとで全然違うぞ。女の子が追加メンバーになってるところなんかはな」
「ああ、レンゴウとバルトだよな」
　ハンガリー兄は真っ先にこの二つのチームが脳裏に思い浮かんだのでした。
「バルトはリーダーのブラックばかり苦労してるな」
「あいつはそういう星回りなんだろ？」
　イタリア兄はこうハンガリー兄に述べます。

「特にレンゴウはな」
「あそこはまた最悪だな」
ここでそのレンゴウ戦隊の声も遠くから聞こえてきました。
「今日もブレイク限界なんだぜ！生徒会長のプロマイド無料配布なんだぜ！」
「だから何で俺達がやるんだ？」
「こいつが何かやろうとしたらいつもあの三人いなくなるしよ」
「兄さんも顔は悪くないから静かにしているといいニダ」
今日も韓国の生徒会活動にブツクサ文句を言っているイギリスとフランスでした。この二人の受難はとりあえず生徒会長が代わるまで続きそうです。

第六百六十話　完

２００９・４・４

第六百六十一話　のんびりしているので気付かなかった

第六百六十一話　　のんびりしているので気付かなかった

ギリシアはとりあえず今日ものんびりしています。普段からおっとりしていますけれど今日は特にです。野原に座ってただその風景を眺めているだけです。

「ギリシアさんはお外が好きなのですね」

「好きだ」

そこにやって来た日本に対して答えます。やっぱりのどかな声です。

「そして風景を見るのも」

「そうですね。お外はいいものです」

風流を愛する日本にとっても外の景色はいいものです。四季を楽しむのがこの人の趣味ですから。

「ただ。それにしても」

「どうしたんだ？」

「ギリシアさんのお家で最近殴り込みがあったのですが」

「殴り込み。そんなことがあったのか」

「はい、あの聖域に」

とりあえずその存在は皆知らない筈ですけれど知っている。そんな不思議な場所です。

「それで派手な戦いがあったそうですが」

「二百六十三年前にもあった」

ギリシアはぽつりと答えました。

「その時も後で気付いた」

「そして今もですか」

「多分。気付いたら終わっている」

ギリシアはこうも言います。のどかな顔で。

「だから。俺は何もしない」
「そうなのですか。ですが私のお家の漫画家さんがこのことを描かれていますが」
「後で見せてくれ」
自分のお家で聖戦が起こっていても後になってからやっと気付くギリシアでした。そうしたのんびりとしたところが本当に彼です。

第六百六十一話　　完

２００９・４・５

第六百六十二話　けれどイタリアには少し厳しい

第六百六十二話　けれどイタリアには少し厳しい

こうしたのんびりとしたギリシアですけれど締めるところは締めます。それは何だかんだでいつもやって来るイタリアに対してでした。

「ねえねえ君時間ある？」

今日も女の子に声をかけています。イタリアは誰かのお家に行くと絶対に女の子に声をかけます。それで日本のお家にはじめて来た時は日本に不審者と思われていた位です。本人はそんなことは一切気にはしませんけれど。

「よかったらさ、今度俺の家でさ」

「イタリア」

そんなイタリアに対してギリシアが横からぽつりと声をかけます。

「何をやっているんだ、また」

「何って女の子に声をかけてるんだけれど」

何でもないといったように能天気に答えます。

「それがどうかしたの？」

「少しは遠慮しろ」

のどかな口調が少しだけ厳しいものになりました。

「来るのはいいが何人に声をかけているんだ」

「だってさ。ギリシアのお家も可愛い娘がいるし」

イタリアは人の話を聞きません。

「だったら声かけないと。そうでしょ？」

「どうしてそうなるんだ。声をかけるのは一時間に一人だけだ」

「えっ、そんなあ」

制限をかけられて泣きそうな声をあげます。

「一時間に一人って。滅茶苦茶厳しいじゃないか。そんなことされ

たら俺」
「とにかく少しは遠慮しろ」
ギリシアが言いたいのはこのことでした。
「いいな」
「わかったよ。ちぇっ、ギリシアも厳しいなあ」
こうして締めることろは締めるギリシアでした。とはいっても一時間に一人は許可しているのですけれど。

第六百六十二話　　完

２００９・４・５

第六百六十三話　どんなポスターにしようか　☆

どんなポスターにしようか

イタリアが珍しく悩んでいます。それで日本に相談してきました。

この展開も結構以上に珍しいものがあります。

「日本、ポスターのデザインが思いつかないんだよ」

「どんなポスターですか？」

「何かこうね」

イタリアは悩んでいる顔で日本に言います。この人の悩んでいる顔もまた物凄く珍しいことなのですけれど。

「もっと仲良くなりたいなーー、みたいなデザインなんだけれどね」

「それでしたら」

やっぱり日本です。すぐに答えてくれました。

「私の家に伝わるいい図案がありますよ」

「それってどんなの？」

「こういったものです」

こうしてイタリアは日本にその図案を教えてもらって早速自分のポスターのデザインに使うのでした。そしてそれをドイツに対して見せました。

「ねえねえドイツ」

「今日は何だ？」

「俺ドイツのポスター作ったんだけれど」

「そんなものわざわざ作ったのか」

少し困った顔をしましたがまんざらでもないようです。

「それで貼っていい？」

「まあ構わんがな」

「わかったよ、それじゃあ」

こうしてイタリアはそのポスターを貼っていったのですがそのポ

スターは。何とドイツとにイタリアの相合傘でした。
「何だそのポスターは！」
ドイツはそのポスターを見て早速怒ります。
「回収回収！」
やっぱりイタリアでした。ドイツは今回もそんなイタリアに呆れ返るのでした。

第六百六十三話　　完

２００９・４・６

第六百六十四話　けれどドイツの人達は

第六百六十四話

けれどドイツの人達は
このイタリアのポスターにおかんむりになったドイツ。けれどそんな彼に対してプロイセンが言うのです。
「いいじゃねえかよ、イタちゃんらしいじゃねえか」
「何で御前はいつもイタリアの肩を持つんだ？」
「だって俺イタちゃん好きだからよ」
楽しそうに笑ってドイツに答えます。
「いい奴じゃねえか。フランスのエスカルゴ野郎とかロシアのピロシキ野郎とかと比べたらよ」
「比較する相手があんまりじゃないのか？」
「他にはあのザッハトルテ野郎とかよりずっとよ」
なおオーストリアさんはドイツのお家にいます。何気に内外にいい顔触れがいないドイツのお家です。
「いいだろ？愛嬌があって憎めなくてよ」
「まあそうだな」
これはドイツも認めるところです。
「少なくとも困った目に遭わせられても極端に頭にきたことはない」
「それがイタちゃんのいいところなんだよ。見ろよこのポスター」
そのイタリアが別に作ったポスターを相棒に見せます。それがまた。何とドイツがイタリアを守ってくれるさと書いてあります。仲良く並んでいる二人と一緒に。
「こういうの見てるとついつい面白くなってよ」
「それで守るのか」
「そうさ。だから俺もイタちゃんとこ行ってくるぜ」
この人もイタリア観光が大好きだったりします。
「パスタ食って太陽の光浴びてな。たまらねえよな」

「そうだな。ではまた二人でイタリアの家に行くか」
「おうよ、そうしようぜ相棒」
こうしてプロイセンの言葉で機嫌をなおすドイツでした。ドイツもプロイセンもイタリアを大切に思っていることは間違いありません。

第六百六十四話　　完

２００９・４・６

第六百六十五話　珍しい兄弟会議　☆

第六百六十五話　珍しい兄弟会議

折角頑張って作ったポスターでしたが怒ったドイツに全部はがさせられたイタリア。寝る時になってもそのことでめそめそとしています。

「はあ・・・・・。結構頑張って作ったんだけれどなあ」

「さっきからうるせえな。どうしたんだよ」

同じベッドの隣で寝ているイタリア兄が尋ねてきました。どうやらお金とかそういった関係で一緒の部屋でベッドも同じみたいです。

「うん、ドイツと仲良しポスター作ったら貼っちゃ駄目だって」

「そりゃ御前あれだよ」

ドイツが嫌いなイタリア兄はそれを聞いてここぞとばかりに言ってきます。

「あのジャガイモに嫌われてるんだよ」

「えっ・・・・・・」

ドイツに嫌われていると言われたイタリア。咄嗟に今までのことを思い出しました。それはどういった光景かというと。

トマトの箱の中に隠れていてドイツに見つかって泣き叫んだ初対面の時。何かというとドイツに頼っている時。勝手に喧嘩売ってぼこぼこにやられてやっぱりドイツに助けてもらっている時。敵がやって来て泣きながら白旗振ってる時。軍事訓練であのレドパイナップルを口に咥えてドイツを呆れさせている時。こんなシーンばかりです。本当に壮絶にドイツに迷惑ばかりかけています。

「参った・・・・・」

ここでイタリアも気付いたのでした。

「どうしよう、むしろ好かれる要素がないよ」

「さて、明日は何食おうかな」

このことに気付いて愕然となっているイタリアとは違ってイタリ

ア兄は至って能天気です。その顔で寝てしまいました。弟はこれまでのことに気付いて悲しい顔をしているのに。とりあえず裸でベッドの中にいるままで愕然としているイタリアなのでした。今更気付いたのかという感じではありますけれど。

第六百六十五話　　完

２００９・４・７

第六百六十六話　裸はいやらしい

第六百六十六話　裸はいやらしい

イタリアはいつもイタリア兄と一緒のベッドで寝ています。けれどこれを見て日本が驚いた顔で叫ぶのでした。

「イタリア君何やってるのですか！」

「何って寝てるんだけれど？」

絶叫した日本に対して何でもないといった言葉で返します。

「それがどうかしたの？」

「寝ているって裸で二人でですか」

「そうだけれど」

「何かおかしいか？」

イタリアだけでなくイタリア兄まで起き上がって彼に言ってきます。二人共その顔は何処かおかしいところがある？といったものでした。けれど日本はその二人に対して言うのでした。

「兄弟で同じベッドで」

「けれど俺の家兄弟のベッド一つしかないから」

「だから一緒なんだけれどな」

「だったらせめて裸ではなくて」

日本はそこも気になっていたのでした。彼はいつも寝る時は寝巻きを着ています。裸になることは寝る時でもないのです。

「服を着て下さい。パジャマでも」

「えっ、そんなのいいよ」

「下着も面倒臭いな」

二人は完全に裸になって寝ているのです。

「もうさ。寝る時位はね」

「ラフな格好でいたいものだ」

「そんなのだと本当に危ない世界にしか見えません」

「何処かおかしいのかな」

「さてな」
日本が言っていることがどうしてもわからないみたいです。とにかく寝る時はいつも裸でしかも兄弟で同じベッドの二人なのでした。

第六百六十六話　　完

２００９・４・７

第六百六十七話　動くのはいいことだけれど　☆

第六百六十七話　動くのはいいことだけれど

結局お兄さんのアドバイスは何の役にも立ちませんでした。向こうも向こうで役に立ってもらう気は最初からなかったみたいでもう気持ちよく寝ています。その中でイタリアは泣きながらとにかくどうしようかと思いながらベッドから出ました。そうして服も滅茶苦茶に着ながら。

「こうやって悶々と寝てても仕方ないよ！」

彼にしては珍しく能天気ではありません。

「とにかくドイツに直接聞こう！」

こう決心して家を出ました。服を着るのもいい加減なままで。そうして家を出たイタリア。その頃あのスイスのお家ではスイスが左手に熱くさせたブランデーを持ちながら窓から月夜を眺めていました。

「月を見ながらの一杯というのも悪くないものである」

彼は言うのでした。

「まあ我がスイス領の眺めが素晴らしいからであるが」

実は結構ナルシストかも知れません。かなりすました人でありますけれど。そのまま感慨深い顔で一人呟くのでした。

「こうして耳を澄ませば聞こえる」

目を閉じて呟きます。

「木々のざわめきもいいものだ」

「ドイツーーーー、ドイツーーーー、ドイツーーーー」

しかしここでイタリアが。おまけに殆ど丸裸の格好で。

「また御前かーーーー！」

「げっスイス、今日だけは見逃してよ」

早速銃を取り出すスイス。当然見逃すわけもなくイタリアを発砲

しながら追いかけます。
その時フランスはワインとチーズで楽しく夜を過ごしていましたけれど。
「こうして月を見ながらの一杯ってのもいいもんだな」
「今日こそは殺す！」
しかしそのすぐ前を逃げるイタリアと銃を放ちながら追い掛けるスイスが通り過ぎます。
「裸でスイス領を通るとは許せん！」
「御免なさい御免なさい！」
おかげで何もかもぶち壊しです。フランスも唖然でした。

第六百六十七話　　完

２００９・４・８

第六百六十八話　月夜の晩に

第六百六十八話　月夜の晩に

月の出る夜にお酒を楽しむのは実にいい趣味です。何といっても風情があります。しかし月夜にやることは他にもあるのです。

「エロイムエッサイムエロイムエッサイム」

イギリスは月夜の中で黒いフードを被ってそのうえで呪文を唱えています。そうしてその手には得体の知れない本があり前には魔法陣があります。

「我は求め訴えたり」

呪文を唱え続けています。そうしてそれが終わると。

魔法陣から何か出て来ました。イギリスはそれを見て会心の声をあげます。

「よし！召喚成功だ！」

何かが出て来たのを見て思わず叫びました。

「これでいい！後はこいつを使ってシーランドの奴を今度こそ家に連れ戻す！」

実はまだ連れ戻していなかったのでした。

「あと生徒会長も交代だ！あの馬鹿も今度こそ年貢の納め時だ！」

以前魔法が通用しなかった為今度は何かを呼んだみたいです。この人もかなり諦めが悪いです。

「さあ、召喚されし精霊よ、俺の願いを聞け！」

「ダリナンダアンタイッタイ」

「これ食ってもいいかな」

しかし出て来たのは青いライダーと赤いライダーでした。オンドゥルとダディのいつものお騒がせコンビでした。

「何で御前等が出て来るんだ？」

「ってあんたが呼んだんじゃないか」

「オレァキサマノヨウナヤツヲブツノメシタイ！（翻訳：俺は貴様のような奴をぶちのめしたい！）」

「・・・・・相変わらず何言ってるかわからねえしよ」

間違えてこの二人を呼んでしまったのでした。結局これでイギリスの二つの目論みは失敗に終わるのでした。この二人が絡むと話はいつも大きくなって収拾のつかないことになってしまうので。

第六百六十八話　　完

２００９・４・８

第六百六十九話　イタリア突攻　☆

第六百六十九話　イタリア突攻

ドイツは今日もハードな一日を過ごしました。同じ一日をほぼ同じスケジュールであってもイタリアがお気楽なのに対してこの人がハードなのも個性の違いでしょう。寝る前のシャワーを浴びながら今日のことを思い出していました。

「今日も仕事が多くて大変だったな」

何しろ上司が上司ですし。精神的な疲れもあるのかも知れません。今日のことを思い出しながら頭を洗っていました。

「今日はさっさと寝ることにしよう」

こんなことを考えていると不意にでした。シャワールームにイタリアが入ってきました。しかも殆ど全裸で泣き叫びながら。

「ド・・・・・・ドイツーーーーーーッ！！」

その泣き叫ぶ顔でドイツに尋ねます。

「ね、ねえドイツ、俺のこと好きーーーーーーーーーー！？」

「何っ、イタリア御前・・・・・・」

これにはドイツも唖然です。とりあえず今言おうとしていることを考えます。

「そんなことをここで聞くな」

「服を着ろ」

「第一そんな格好でここまで来たのか？」

この三つを出そうとしますがそれが言えません。あまりもの事態に硬直してしまっているからです。ドイツをしてもどうにもならないこの出来事、果たして一体どうなるのでしょうか。

そしてその頃日本は。

「おや、油が」

家の油がなくなっていることに気付いたのでした。

「買いに行きましょうか。コンビニでも」
そんなことを考えていました。そうして外に買いに出たところ気持ちが変わってドイツのお家に向かいます。この三人は何か運命で結ばれているかのように一緒になるところがあるようです。だからこそ今三人で一緒にやっているのでしょうか。最近三人だけではないですけれど。

第六百六十九話　　完

２００９・４・９

第六百七十話　スイスは怖い

第六百七十話　スイスは怖い

スイスはとにかく自分のお家に誰かが無断で入って来るのを嫌います。誰でも大なり小なりそうなのですけれどこの人は特にです。イタリアのように撃たれる人が後を絶ちません。それはこの人達にしろ同じです。

「とにかくだ。一歩でも足を踏み入れたらだ」

「どかんだぞ。こんな怖い奴いねえぞ、おい」

ドイツとフランス、はっきり言って仲の悪い二人の意見がここで一致するのでした。とにかくスイスのお家に少しでも許可なく足を踏み入れたら恐ろしいことになるのです。

そんなスイスです。周りのお家からはかなり怖がられています。それで自分の立場を守っているのですが日本のお家の人の中にはこんなことを言う人もいます。

「スイスみたいになればいいのよ」

「そうよ、絶対に中立を守ってね」

何も考えずに言っています。スイスのことを知らずに。けれど周りの国の殆どは日本がそうなったら滅茶苦茶困ります。けれど台湾はここでこんなことを考えるのでした。

「日本さんがスイスさんみたいになったら」

ここで頭の中でそうなった場合の日本を想像します。完全重武装でさながらランボーかコマンドーかカラミティガンダムか仮面ライダーゾルダのような。そんな姿を想像したのです。

「いいですよね、それも」

「おっかないことを平気で言う奴なんだぜ」

韓国は台湾のその言葉を聞いてガタガタしています。

「日本がそんなふうになったらそれこそ」

「貴方はエンドオブワールドで一撃よね」

「縁起でもねえんだぜ、日本は今のままで充分なんだぜ」
この人にとってはまさに悪夢なのでした。その完全重武装になったスイス化した日本、殆どの国はそんなものは全く望んでいないのでありました。けれど能天気な人達は相変わらず言っているのでありました。

第六百七十話　　完

２００９・４・９

第六百七十一話　怒られてもイタリア　☆

第六百七十一話　怒られてもイタリア

「全く御前は！」

これはお決まりの展開でした。ドイツにガミガミ怒られます。ドイツはとりあえず下にタオルだけ巻いてそのうえでまだ裸のイタリアに対して怒っています。

「どうして下もはかないで外に出るんだ！」

「御免なさい慌ててて」

「そもそも何でここに来たんだ！？」

しゅんとしているイタリアに問います。思えばそれがわからないことですから。

「あのさ、ドイツは俺のことどう思ってるのかなって」

しゅんとしてかつもじもじとしながらドイツに対して答えます。

「ほら、俺っていつもドイツに迷惑かけてるし」

本当にいつもです。

「今日のポスターも嫌そうだったから。だから」

「ああ、そんなこと気にしていたのか」

ドイツにとってはそんなことはどうでもいいことです。そんなことを気にしていたらイタリアとは付き合えません。

「だから嫌いではないと何度も言っているだろうが」

「本当！？嬉しいよ！」

嫌いではないと言われるとすぐに有頂天になります。

「じゃあこのポスター貼っても」

「それは駄目だと言っているだろう！」

「うぎゃあああ御免なさい！」

またしてもドイツに締められます。

「裸締め止めて、止めてえええええええええええっ！」

やっぱりイタリアです。結局こんな展開になってしまうのも彼な

らではでした。ドイツも相手をするのに本当に一苦労であります。

第六百七十一話　　完

２００９・４・１０

第六百七十二話　それでイギリスはどうしているか

何故か二人のライダーを召喚してしまったイギリス、大弱りです。
何しろ話を勝手にややこしくするのが二人も来ているのですから。
おまけに何故か後の二人も来ています。
「オラァクサムヲムッコロス！（翻訳：俺は貴様をぶっ殺す！）」
「俺が何したってんだよ！」
「オデノベルトーーーーーーーッ！」
「もうとっくに変身してるだろうが！」
その二人に突っ込みを入れます。しかしそれで事態が収まるわけがなく家の中は滅茶苦茶になってしまっています。早くどうにかしないといけない状況です。
それでとにかく四人を本拠地である日本のお家に連れて行きます。その途中仮面ライダーオンドゥルが前を見ていなくて後ろからバイクではねられたり仮面ライダーダディに敵と間違えられて撃たれたりと道中でもう何度も死にそうにないました。それでやっと日本のお家に到着すると。
「何っ、日本いねえのかよ！」
「そうだ」
しかもお家のお留守番はあの所長です。
「少し席を外している」
「それで何処に行ったんだよ」
「さて」
所長はその問いには首を傾げるのでした。
「何処かに行ったとは思うがな」
「何で留守番のあんたが知らないんだ？」
この所長はそういう人だったりします。所長なのに肝心なことは

一切しないのです。長い間チベットに行っていたりもしました。
「所長なんだろ?それに」
「私とて知らないことはある」
「いや、留守番だから普通行き先位聞くだろ」
「君には済まないことをしたと思っている」
何しろ家の中は滅茶苦茶になっておまけに道中何回も殺されかけていますから。けれどそれでもこの所長は言うのでした。そう、この言葉を。
「だが私は謝らない!」
「・・・・・日本の家も大概とんでもねえのばかりだな」
このことを知ったイギリスでした。何とかライダー達は引き取ってもらいましたが散々な夜でした。

第六百七十二話　　完

２００９・４・１０

第六百七十三話　おねだりもいつもだし　☆

第六百七十三話　おねだりもいつもだし

とりあえず少し首絞めただけで許してあげたドイツ。何だかんだでイタリアにはかなり甘いです。許してあげたうえで彼に言うのでした。

「わかったから早く帰れ」

そしてこうも言うのでした。

「何だったら送ってやるからそこで待っていろ。ズボンの俺のを貸してやる」

「はい隊長！」

早速いつものイタリアに戻っています。

「御願いがあるであります！」

「何だ？」

「あのあのっ、嫌いじゃないをもっと簡単に言って欲しいであります」

少しもじもじしながらドイツに言うのでした。

「そうしたら帰ります」

「・・・・・何を言い出すんだ御前は」

ドイツはイタリアに対してまたしても呆れることになりました。けれど呆れながらも彼に言うのでした。

「俺は御前みたいにそういう表現はあまり得意じゃないんだが。まあそれでもな」

結局言います。困り果てながらも。

「好きなことは好きだ」

「本当でありますか！？嬉しいであります！」

これで大喜びです。しかし何しろイタリアです。それならそれでこんなことを言うのでした。

「もっと言って欲しいであります。満足したら帰ります」
「帰還条件を変えるな！」
やっぱりイタリアでした。本当に困った人です。それでもドイツはこんなふうにも思うのでした。
「まあいいか。こいつなら」
これも人徳になるのでしょうか。得なキャラクターではあります。

第六百七十三話　　完

２００９・４・１１

第六百七十四話　同居人もイタリア好き

第六百七十四話

同居人もイタリア好き

ドイツは何だかんだでイタリアの面倒を見ています。これがプロイセンになるともっと凄いです。彼はイタリアのお家に遊びに行くことがドイツよりも好きだったりします。

「何せな、相棒と離れてた時は陣営が違っただろ」

「ポーランドやハンガリーと一緒だったな」

「あとロシアな」

ドイツの問いに顔を暗くさせて答えます。

「中国の野郎とはいつも喧嘩してやがったしな。向こう側じゃあいつ日本やアメリカといつもいがみ合っていたしな」

「思えば殺伐としていたな」

「御前とも何だかんだで言い合いにもなっていたしな」

この頃はイデオロギーや何やらで世界中が仲が悪かったのです。プロイセンもそのせいでドイツと仲が悪かった時があったのです。

「けれど。また一つになりたかったしな」

「ああ。俺もだ」

このことは二人はいつも思っていたのです。

「ずっとな。本当にな」

「全くだぜ。それで一つになれて晴れてイタちゃんのところにも遊びに行けるしな」

このことが凄く嬉しいのです。

「いいよなあ。あの気候に料理にな」

「まあそうだ」

ドイツはここでは本音を隠しています。

「悪くはないな」

「また行こうぜ、イタちゃんの家にな」

ついこの前行ってきたばかりなのにまたこんなことを言うのでした。
「楽しくやろうぜ、楽しくな」
「全く。仕方のない奴だ」
けれど彼が行くとなったらいつも一緒のドイツなのでした。口では言わないですけれどドイツもイタリアのお家が大好きなのです。

第六百七十四話　　完

２００９・４・１１

第六百七十五話　カオスなのはわかります　☆

第六百七十五話　カオスなのはわかります

ドイツのお家に油を借りに来た日本。辿り着いたその時にはもう夜でした。けれどこれはそれだけ遠かったせいではなく時差でした。この世界も中々複雑です。

「こっちはもう深夜ですか」

その真っ暗闇の中を進みながら呟きます。

「油をお借りしようと思っただけですが意外と冒険になっていますね」

そんなことを思いながらドイツのお家に入ると。何か騒ぎが。

「まだ起きていらっしゃいますかね。おや」

その騒ぎが日本の耳にも入りました。それでまずはほっとした日本でした。

「よかった。まだ起きて」

いてよかったと思ったのは一瞬でした。ドイツともう一人の声が聞こえてきたのです。

「だから好きだと言っているだろう！」

ドイツの声は怒鳴り声に近いものでした。

「よし帰れっ！」

「もう一回御願いします！」

そして今度はイタリアの声も聞こえてきました。

「まだ言えというのか！」

「・・・・・何ですか一体」

日本はその騒ぎを聞いて何か頭の中が混乱してきました。

「全く中の状況が想像できないのですが」

それで唖然としていると今度はお家の中で爆発まで起こります。

もう何が何だか。

「はあはあ。好きだ、これで満足か？」
「ひゃっほおおおおおおお俺も大好きだよ！」
星矢な世界の如く派手な効果音まで轟いてきました。
「落ち着け馬鹿者！」
「ドイツーーーーーーッ！！うわあああああーーーーーーーーっ！」
まるでア＝バオア＝クーの攻防です。日本はお家の外で唖然としたままその騒ぎを聞くのでした。

第六百七十五話　　完

２００９・４・１２

第六百七十六話　日本のお家では

七十六話　　日本のお家では　　第六百

日本のお家でもお月様はとても人気があります。夜になるとそのお月様を見上げながら一杯、というのはこの人のお家でもよくあります。今日はイタリアもドイツも呼んでそれで三人で楽しく一杯でした。

「日本の酒もいいものだな」

「そうだね」

ドイツとイタリアは杯に入ったそのお酒を飲みながら話しています。

「しかもこの月はな」

「何か俺のところから見るのより奇麗じゃないの？」

「それはないと思いますが」

イタリアの問いにはこう返します。日本も自分のお家のお酒を飲みながら二人とお話をしています。

「ただ。私のお家では月は昔からよく歌にされます」

「あの短歌だよね」

「はい。例えばです」

ここで百枚のかるたを出します。そこにはかなりの数のお月様を詠った和歌がありました。それだけ見てもかなりの数であります。

「この百人一首にしろ」

「ふむ。確かに多いな」

ドイツはその百人一首を見ながら日本に答えます。

「それだけの数があるのか」

「そうなのです。勿論他にも多くの歌があります」

「やっぱり日本って凄いよね」

イタリアはお酒を美味しく飲みながら言うのでした。

「お月様もこうして奇麗な和歌にできるんだからね」
「そうだな。それを知れば月がさらに美しく見えるな」
「ええ。それは私も同じです」
三人で同じ月を見上げながらお話をする三人でした。三人の関係もまた満月と同じでとてもいいものでした。

第六百七十六話　　完

２００９・４・１２

第六百七十七話　最初は疎遠でした

七十七話　　最初は疎遠でした　　第六百

ドイツとプロイセン、今ではドイツのお家の両輪となっていますが最初はそうではありませんでした。お互い見知らぬ関係に近いものがあったのです。

「まあ最初は俺もな。相棒のことは知らなかったんだよ」

「そうだったな」

プロイセンもドイツもお互いのことを振り返って言います。

「俺も御前のことは知らなかった」

「神聖ローマの頃は・・・・・あれ！？」

プロイセンはその時のことを思い出そうとしてもどうしても思い出せなかったのです。

「いや、その時俺達何してた？」

「そういえば覚えていないな」

「ああ。俺は結構東でポーランドとかハンガリーと色々あったのは覚えてるんだけれどな」

「そうだったのか」

プロイセンはそのことは覚えていましたけれど神聖ローマの中でのことは覚えていないのです。

「まあそれでもだ。フリードリヒの親父がオーストリアの野郎と派手にやり合って」

あらためてその時からの話になります。

「そこからだったな。御前と会ってな」

「再会してな」

「ああ。殆ど初対面みたいなものだったけれどな」

そこからプロイセンとドイツの本格的な付き合いがはじまったのです。お互いが頼りにしている相棒同士ですが最初は一体どういっ

たものだったのでしょうか。
「思えばかなり昔の話だよな」
「全くだ。それからも色々あったしな」
「懐かしいぜ、本当に」
そんなことを言い合いながら昔のことを思い出していくのでした。

第六百七十七話　　完

２００９・４・１３

第六百七十八話　オーストリアとの戦争の後で

第六百七十八話　オーストリアとの戦争の後で

オーストリアさんの上司の即位に文句をつけて参戦したプロイセン、この時は首尾よくシュレージェンを手に入れたのですがハンガリーには結構やられましたし次の戦争ではオーストリアさんとハンガリーだけでなく政策を一転させてオーストリアさんの味方になったフランスやスウェーデン、おまけにロシアまで敵に回してどえらい目に遭いました。けれど何とか生き残りました。それが終わってからやっと落ち着いてジャガイモを食べていると。隣にやたらと大きくてごつい人を見つけたのです。

「あれ、御前」

「そうだ。丁度御前の国の西にいある」

当時はバイエルンとも呼ばれていたドイツです。彼がここでプロイセンの前に出て来たのです。

「バイエルンだがな」

「ほお、昔から結構有名だったな」

「そうだったのか」

「しかし御前前は・・・・・・いや」

ここで何を言おうとしたのか忘れてしまったプロイセンでした。

「何だったかな。とにかくな」

「とにかく。何だ？」

「御前最近俺の味方になったりオーストリアの野郎の味方になったりしてるよな」

「実際どちらにつくかその場で上司が決めている」

この辺りは実に欧州らしいです。

「別に御前は嫌いじゃないから安心しろ」

「じゃあオーストリアの野郎はどうなんだよ」

「正直少し苦手だ」
どうもこの頃からオーストリアさんは苦手だったようです。
「あの雰囲気にはな。どうもな」
「まあ今は俺のところもあいつと講和してるけれどな」
プロイセンも今はそうしてはいます。
「それでも。やっぱり好きじゃねえな」
「そうか」
最初はそんなやり取りからでした。丁度七年戦争が終わった辺りのことです。

第六百七十八話　　完

２００９・４・１３

第六百七十九話　落ち着く暇もなく

第六百七十九話　落ち着く暇もなく

プロイセンがフリードリヒ親父の下でめきめきと力をつけてから暫く経った時にフランスのお家が大変なことになりました。革命が起こってそれで上司がどんどん変わって遂にあのナポレオンがフランスの上司になったのです。

ナポレオンはとにかく物凄く強かったです。戦争をすれば必ず勝つ。戦争では実は結構負けが多いフランスが常勝の天才レベルにまでなったのです。このことに皆驚いていましたがそのせいで欧州は次々とフランスの手に落ちていって。遂にプロイセンとも全面衝突することになったのです。

「ナポレオン！？どうってことねえよ」

プロイセンはその英雄を前にしても自信たっぷりでした。今回は犬猿の仲のオーストリアさんとも仲良く組んでそのうえでナポレオン率いるフランスに対して戦いを挑むのでした。

「今回は絶対勝てるな」

「そうだといいのですが」

自信満々のプロイセンに対してオーストリアさんはかなり慎重な様子です。

「フランス軍は手強いです。私もロシアもイギリスも何度も負けていますし」

「俺なら大丈夫なんだよ」

プロイセンはオーストリアさんの言葉にこう返して満面に何処か邪な笑みでした。

「まあ見ていな。俺があのすみれ伍長をどうやってやっつけるのかをな」

「では勝てるのですね」

「ああ、今からイエナに行って来る」
フランス軍とそこで戦うことが予想されているのです。
「そこでフランスをひれ伏させてやるぜ。楽しみにしてなよ」
「それでは。期待させてもらいます」
オーストリアさんは意気揚々と出発するプロイセンを見送ります。
その目はかなり冷静というか醒めたものでした。まるで全部わかっているかのように。あえて何も言わないかのようにプロイセンの後姿を見送るのでした。

第六百七十九話　　完

２００９・４・１４

第六百八十話　オーストリアさんの予測は

第六百八十話

オーストリアさんの予測は
プロイセンを見送ったオーストリアさん。この人にいつも側にいるハンガリーが声をかけてきました。今まで何も言わなかったのはやっぱりプロイセンが嫌いだからでしょうか。
「オーストリアさん、あいつは」
「大丈夫かどうかですね」
「はい。勝ったら勝ったで凄く嫌ではありますけれど」
やっぱりこうした感情は強いようです。
「それでも。フランスが勝ったらまずいですし」
「今フランスはかなりの強さです」
オーストリアさんは冷静な顔で述べます。
「少なくともナポレオンには誰も勝てません」
「そうですよね。あんなに強いなんて」
まさに無敵と言ってもいい強さでした。それでオーストリアさんだけでなくロシアもイギリスも敗れているのですから。その強さはどうしようもない程だったのです。
「幾らあいつでも。やっぱり」
「少なくとも今彼とフランスには誰も勝てません」
オーストリアさんはこう断言しました。
「とりあえず。どうするべきかは今後じっくり考えましょう」
「ナポレオンに勝てる方法をですね」
「無敵の人間なんて存在しません」
また断言でした。
「ナポレオンといえど弱点はあります。それを見極めていきましょう」
「わかりました。それでは今から」

負けが込んでいてもそれでも諦めるわけにはいきませんでした。オーストリアさんは今はナポレオンについて研究することにしたのです。明日の為に。

第六百八十話　　完

２００９・４・１４

第六百八十一話　もろに負けました

六百八十一話　　もろに負けました

「さあ、エスカルゴ野郎」

プロイセンはイエナでナポレオン率いるフランス軍を待ち構えています。その軍服姿が実に凛々しいです。

「早く来い。その常勝街道も遂に終わりだぜ」

「うむ、その通りです」

「我がプロイセンが本気になればフランスなぞ」

彼の後ろにいる兵士達も自信満々です。皆かつてのオーストリアさん達との一連の戦争に勝ってきたことで絶対の自信を持っているようです。

「負ける筈がありません」

「今度こそフランスを」

「ああ、その通りだ」

プロイセンも腕を組んで自信満々の顔でした。

「俺達のかつての上司は誰だ？」

「はい、フリードリヒ大王です」

「あの方です」

皆誇らしげにその名前をプロイセンに対して答えます。

「あの方が我等を育ててくれました」

「あの方の御名前に誓って敗北なぞ有り得ません」

「そうさ。だからここで勝つんだ」

プロイセンはまた誇らしげに言いました。

「フリードリヒ親父の栄光にかけてな」

こうして満を持してフランスに戦いを挑むのでした。けれど結果は。

「やったぜ！また勝ったぜ！」

「私に勝てる相手はいない！」
フランスの圧勝でした。ナポレオンの水際立った指揮によりフランスはこの戦いでも鮮やかな勝利を収めたのです。つまりプロイセンはどうなったかというと。
「ば、馬鹿なこの俺が・・・・・」
車田正美の漫画で負けた時のようにはいつくばってしまっています。彼にとってはまさかの大敗北なのでした。

第六百八十一話　　完

２００９・４・１５

第六百八十二話　負けた結果として

六百八十二話　負けた結果として　　第

フランスに敗れたプロイセン。当然敗者には過酷な現実が待っています。フランスから物凄い規模で国の大事なところを取られてしまいました。

「俺が取られたのかよ！？」

「因果応報ね」

嘆くプロイセンに対してハンガリーの冷たい言葉が届きます。

「結局のところは」

「ちっ、しかも何か勝手に帝国まで解体させられたしよ」

それまでは一応名前があったのです。神聖ローマは気付いたら何処かに消えてしまっていてドイツ、この時はバイエルンの王様を上司にしていたこの人がいましたけれど。

「しかもあいつまでナポレオンの禿の下に置かれたしよ」

「それだけじゃないわよ。ポーランド君もイタちゃんもよ」

「くそっ、イタちゃんまで取るとは何て図々しいチビだ」

ナポレオンへの悪口が止まりません。

「あんな馬鹿みたいに食うのが早くてしかも風呂狂いが偉そうな顔しやがって」

「あんたが言うかとも思うけれどあの人については同意よ」

ハンガリーもナポレオンは嫌いのようです。実に面白くなさそうな顔をしています。

「オーストリアさんもあの人には散々にやられてるしね」

「このままじゃ終わらねえからな」

プロイセンは歯噛みして拳を握り締めています。

「絶対によ。あのチビハゲとエスカルゴ野郎を叩きのめしてやるからな」

「ええ、私もね」
珍しく意見が一致していたプロイセンとハンガリーでした。本当にこの時は二人もナポレオンとフランスの前に散々だったのです。

第六百八十二話　完

２００９・４・１５

第六百八十三話　ナポレオンの失態

第六百八十三話　ナポレオンの失態

プロイセンはおろかオーストリアさんもロシアも徹底的にたたきのめしているフランスのこの時の上司ナポレオン。この人はとにかく戦争に強いです。それだけの当時のフランスのお家では物凄い英雄でした。

「何か俺がこんなに勝てるなんて嘘みたいですよ」

「何を言っている」

これまでも結構以上に負けが込んでいたフランスに対しても言います。

「御前はやったらやれるんだ」

「そうなんですか」

「それに私もいる」

やはりこれが大きいです。

「安心して戦え。いいな」

「はい、これからもですね」

「次はいよいよイギリスだ」

やっぱりイギリスとはかなり仲が悪いのでした。この仲の悪さは本当に宿命です。

「いいな、あいつの家に殴り込むぞ」

「海を渡ってですね」

「そうだ。スペインも抑えた」

スペインも既に勢力圏内でした。スペインの上司は強引にこの人の一族の人に交代させられました。もっともそれまでもフランスの上司のお家の縁者の人だったのですけれど。

「そしてだ。最後にだ」

「ええ、やりましょう」

ところがこれが物凄い敗北になるのでした。トラファルガーで華麗な敗北です。その結果ナポレオンは他の国にイギリスとの交際を絶つように言います。さて、これがどうなっていくのか。それが大きな問題なのですがまだこの人もフランスも全く気付いていませんでした。人間ミス、しかも致命的なものに気付くのは後になってからです。しかもそれは一つとは限らないのです。

第六百八十三話　　完

２００９・４・１６

第六百八十四話　大陸封鎖とスペインと

第六百八十四話

大陸封鎖とスペインと

まず他の国にイギリスとの交際を止めるように言いました。確かにこれでイギリスはかなり困りました。

「だから何で俺はいつも一人になるんだよ！」

これまた宿命的なもののようです。けれど他の国の人達はもっと困ったのです。

「僕イギリス君に木を売りたいんだけれど」

まずロシアがそれで困ってしまいました。

「俺だってそうだよ。このままじゃやっていけねえよ」

そしてこのプロイセンも。彼等にとってイギリスからのものを買わないと困ってしまうのです。ロシアなんかはイギリスが造る船の為の木材を売ってそれでお金を手に入れてましたから余計にです。それでもうナポレオンの言葉にもフランスの言葉にも従わずに勝手に商売を行うロシアでした。

当然これにナポレオンはかんかんです。しかもここで。

「スペインの家の人間が逆らっているだと！？」

「はい、そうなんですよ」

フランスが困った顔でナポレオンに報告します。怒ったナポレオンはすぐにフランスに対して言いました。

「すぐにスペインに行って黙らせろ。いいな」

「わかりました。それじゃあ」

とりあえずスペインと話をします。けれど彼自身は案外素直でした。

「いや、俺はええねんや」

「じゃあ何でこんなに抵抗してるんだよ」

「家の連中がな。まああんまりここには来ん方がええで」

「ふざけるなよ。俺だって事情があるんだ」
上司の命令ですから聞かないわけにはいきません。それで実際にスペインのお家に兵隊を置いて監視をしていると。
「うわっ、撃たれた！」
「何処からだ！」
「わからん！」
何処からともなく攻撃を受け続けるのでした。これこそゲリラ、フランスはスペインでとんでもない目に遭うことになったのでした。まるで潰瘍が出来たように。

第六百八十四話　　完

２００９・４・１６

第六百八十五話　ロシアに攻め込んだら

第六百八十五話　ロシアに攻め込んだら

ナポレオンは中々支配が及ばないどころかゲリラといった抵抗を見せてきたスペインの人達に手を焼いていらいらとしていました。しかもここでロシアがイギリスとの交際を再開したのです。これで怒らない筈がありませんでした。

「ロシアを攻めるぞ！」

彼は高らかに宣言しました。早速物凄い数の兵隊が集められました。

そうしてパリから一路モスクワを目指します。これを受けてロシアの上司はロシアと臣民達に対して言うのでした。

「ここは逃げよう」

「えっ、何もしないんですか？」

ロシアは上司の言葉を聞いてまずは驚きの声をあげました。

「だってナポレオンさんもフランスさんも攻めて来るのに。それはまずいんじゃないんですか？」

「大丈夫だ。君のその背後にいる人に活躍してもらう」

「僕の後ろにいる人に」

「そうだ、その人だ」

この時のロシアの上司は彼の背中を指差して言うのでした。こうしてロシアの上司は彼と臣民達を連れてフランスから逃げます。ナポレオンがフランスを引き連れて辿り着いたモスクワは完全にもぬけの殻でした。

「誰もいませんね」

「ロシアが来て話をするのを待つとしよう」

ナポレオンはこう判断しました。この時彼はわかっていませんでした。何故ロシアの上司がロシアの背中を指差したのか。そう、そ

れは暫くして大活躍する人でした。
「な、何じゃこりゃーーーーーーーーーー！！（声：松田優作）」
「この寒さ、何だよこれ！」
真っ白い人が来て思いきり吹雪を吹かせます。これこそロシア最凶の守護者冬将軍です。その寒さと威力は最早戦略兵器です。
かくして冬将軍の猛威を受けたナポレオンとフランス達、ほうほうのていで祖国に逃げ帰ります。しかしここでまた。

第六百八十五話　　完

２００９・４・１７

第六百八十六話　恐怖のコサック

第六百八十六話　恐怖のコサック

祖国に逃げ帰るナポレオンとフランス、ところが無事帰れませんでした。ここでロシアの上司はロシアと自分の軍に対して命じるのでした。

「追うんだ、いいね」

「じゃあコサックですよね」

「そうだ、それで後ろから攻めてくれ」

「わかりました」

こうしてロシアの切り札コサックが投入されました。馬に乗り刀を操る精悍なこの騎兵達の強いこと強いこと、その追撃を受けるフランス軍にとってはたまったものではありませんでした。

「一体何処から出て来るんだ？」

「まだあの怨霊はついて来るしよ、このままじゃ生きて帰れねえぞ」

しかも冬将軍はまだ大活躍しています。何とかロシアの領土から出ようと思ってもそれすら難しい状況でした。そしてその中で彼等が頼るべきナポレオンはというと。

「ではな。先に帰っている」

「えっ、御一人でですか！？」

フランスも今のナポレオンの言葉を聞いて唖然です。

「ちょっと待って下さいよ、俺や大陸軍はどうなるんですか！」

「自分で帰れ、いいな」

「そ、そんな今もコサックと冬将軍が・・・・・うわあああーーーーーーーーーーっ！」

フランスと兵隊さん達の絶叫が雪の大地に響き渡ります。それは吹雪の中で空しく轟いていました。

何とかフランスも自分の国に帰ることができました。しかしその

姿はもうかつての栄光は見る影もありませんでした。生きているのが不思議な程です。あちこちしもやけで痩せ細ってしまっていて尚且つ傷だらけです。本当に酷い状況だったのがよくわかる姿です。

「しかもこういう時に限ってよ」

周りの国が一斉に騒ぎだしました。受難はロシアだけでは終わらなかったのです。

「神よ、これが報いなのですか！？」

「まだだ！」

ナポレオンに対して誰かが告げるのでした。

第六百八十六話　　完

２００９・４・１７

第六百八十七話　大変なのはそれからでした

第六百八十七話

大変なのはそれからでした

ロシアで散々な目に遭って退散したナポレオンとフランス。それを見て皆遂に思うのでした。

「今だな」

「そうだな」

早速オーストリアさんが言いました。こう。

「今こそあの人達を叩いておく時ですね」

「今ですか」

「はい、プロイセンに連絡を取って下さい」

こうハンガリーに言うのでした。こうしてオーストリアさんはプロイセンと会うことになりました。その席でオーストリアさんは言いました。

「今こそフランスを叩く時ですよ」

「ロシアに負けた今だからかよ」

「それだけではありません」

オーストリアさんはそれだけではないとここで言いました。プロイセンは今の言葉に目を鋭くさせました。

「それだけじゃねえ？まだ何かあるのかよ」

「はい。ナポレオンの弱点がわかりました」

「弱点！？あいつにそんなものあるのかよ」

ナポレオンといえば不敗の将軍です。それこそ戦って勝てる相手ではありません。そんな人に弱点があるのかと眉を顰めさせて問わずにはいられませんでした。

「あります。そこを突けば勝てます」

「何かわからねえけれど策があるんだな」

「どんな人でも弱点があります」

オーストリアさんは真剣に、かつ優雅に語りました。
「そう、例えその人に勝てはしなくとも」
「!?どういうことだよ」
プロイセンはオーストリアさんの今の言葉でさらにわからなくなりました。とにかくオーストリアさんには何か考えがあるようです。

第六百八十七話　　完

２００９・４・１８

第六百八十八話　弱点はここでした

第六百八十八話　弱点はここでした

オーストリアさんはここで遂に今まで散々に負けていたナポレオン率いるフランスに戦いを挑むことにしました。プロイセンやロシア、イギリスも一緒です。主な人達はライプチヒに集まりそこで戦うことになりました。

「何かここで素晴らしい音楽家が誕生したようですか」

「えっ、そうなんですか！？」

オーストリアさんがふと呟いたこの場所で今フランスと皆の戦いがはじまりました。ここでオーストリアさんはまずハンガリーとプロイセンに対して言うのでした。

「ナポレオンとは戦わないことです」

「えっ、何でですか！？」

「あいつと戦わなくてどうやって勝てっていうんだよ」

「ナポレオンではなく他の将軍達と戦うのです」

オーストリアさんの考えはこれでした。

「ナポレオンと戦っても勝てはしません」

それはもうよくわかっていたのです。戦ってそれで普通に勝てる相手ではないことは。ナポレオンはそこまで手強い相手なのでした。

「ですが他の将軍達と戦えばです」

「そうですね、それでしたら私達も」

「勝てるな」

「そうです。そしてフランスは多くの戦いを経て優秀な兵士を失ってきています」

戦えば兵隊さんは減ります、これは常識でした。

「それに私達も鍛えてきました。かつてとは違います」

「そうだな。この時の為に俺も鍛えなおしていたんだ」

「私だって」

「さあ、今こそ勝利の時です」
オーストリアさんの右手が高々と掲げられます。
「いざ、進撃です」
こうしてライプチヒでの戦いがはじまりました。オーストリアさん達の他にロシアとスウェーデンも参加してとてつもなく大きな戦いになり幕が開きました。

第六百八十八話　　完

２００９・４・１８

第六百八十九話　流石に負けました

第六百八十九話　流石に負けました

さて、圧倒的な数の相手を前にしたナポレオンとフランス。まだロシアでの惨敗の痛手は消えていません。そう簡単に消えるものではありませんが。

「しかも向こうの総司令官はです」

「スウェーデンの上司だな」

「はい、前俺の家の将軍だったあの人ですよ」

その人をスウェーデンの上司に送り込んだのが他ならないナポレオンでした。ところがこの人はナポレオンの為でなくスウェーデンの為に働いているのです。スウェーデンにとってはいいことですがナポレオンにとってはたまったものではありません。

当然その人だけでなくオーストリアさんにプロイセンにハンガリーにロシアにそのスウェーデンに。とにかく物凄い面子です。フランスはこれでもかという程敵を向こうに回してしまっています。

「しかしだ。我々も数は集めた」

「はい」

「そして私がいる」

ナポレオン自身のその軍略についても自信がありました。

「だからだ。絶対に勝つ」

「そうですよね。確かにロシアじゃ負けましたけれど」

このことは流石に隠せませんでした。変に鼻っ柱の強いフランスでも。

「きっと勝てますよね、絶対に」

「そうだ。だから安心して戦え。いいな」

「この戦いには俺の全てがかかってますからね」

それだけまずい状況なのも事実です。フランスにとって。

「やってやりますよ。本当にね」
「私もだ。全てを賭けて戦う」
ナポレオンにとっても正念場でした。こうして今本当の意味での彼等の生きるか死ぬかの戦いに挑むのでした。少なくともナポレオンにとっては。

第六百八十九話　　完

２００９・４・１９

第六百九十話　負けたフランスは

十話　負けたフランスは　第六百九

ライプチヒの戦いの結果はどうなったかというと。連合軍の作戦勝ちでした。ナポレオンは見事敗北しあえなくフランスに戻っていきます。この惨敗を受けて彼は失脚しそのうえで遠島となりました。そして残されたフランスはどうなるかというと。

「私がいるから安心しなさい」

「私もだ」

ここで出て来たのがタレーランとフーシェでした。かつてナポレオンに仕えていましたしそれより前の上司にも仕えたりしていました。二人共その人間性については甚だ疑問です。というよりはどう見ても滅茶苦茶胡散臭い人達です。

「まあ私が他の国には話しておくから」

「少なくとも悪いようにはならないさ」

「大丈夫なんですか？」

そう言われてもまだ不安なフランスでした。

「賠償金とか俺の大事なところとか取られたりしません？」

「まあナポレオンが取った場所は返させられるな」

「オランダも家から出て」

フランスは今はオランダを自分のお家に入れているのです。これもナポレオンの功績でした。

「あとイタリア君も返してね」

「スペインからも引いて」

「何だ、それじゃあ完全に逆戻りじゃないか」

フランスはそれを聞いて思わず言ってしまいました。

「折角ぶいぶい言わせてたのによ」

「それでも何かを失うよりはずっとましだよ」

「その程度で済むのだから」
「それもそうか」
苦い顔ですがそれでも頷くしかありませんでした。
「今の俺じゃな。生きているだけでもな」
「生きているだけで終わらせないから」
「それは私達がやっておく」
かくしてこの二人が動きだしたのでした。さて、ナポレオンの遺産というか作った敵で困ったことになりそうなフランス、彼はどうなるでしょうか。

第六百九十話　　完

２００９・４・１９

第六百九十一話　被害者だ

第六百九十一話　被害者だ

さて、ナポレオンの責任を取らされることがまず確実なフランス。そのフランス代表としてウィーンに向かったタレーラン。既に彼の目の前には各国とその上司達が勢揃いです。これはどうにもならないのではと思える状況でした。

フランスもこれは駄目だと思いました。それで諦めた顔でタレーランに言うのでした。

「幾ら何でもこれは無理なんじゃないのかな」

「大丈夫だ。まあ見ていてくれ」

そう言うとその各国とそれぞれの上司達に対して言いました。フランスを見せながら。

「見て下さい、今のフランスを」

「えっ、俺を？」

「このボロボロになってしまった身体を。これがどうなったかです」

「どうなったか！？」

「それは」

「ナポレオンのせいです。ナポレオンが彼をこうしたのです」

何ということでしょうか。タレーランはここでナポレオンを糾弾しだしたのです。そのナポレオンの責任を糾弾する場所においてです。

「そしてです」

「そして！？」

「な、何なんだ！？」

皆タレーランのその言葉にまず度肝を抜かれています。しかしここでタレーランはさらに言うのでした。

「今フランスを責めても何にもなりません。フランスにはまだ力は

あります」
「確かに」
「それにもうスペインもオランダも独立したし残るのは本土だけだしな」
あるのはそれだけなのでした。今のフランスに残っているのはそれだけなのです。
「ですから。フランスの上司は元に戻しそれで終わらせるべきなのです」
「そうだな。ここはな」
「それでフランスの話は済ませるか」
皆これで話は終わらせました。こうしてフランスは助かったのです。
それどころかタレーランはそのまま平然と話し合いに入っていきます。さらに驚きの展開です。
「何て恐ろしい奴なんだ」
「国内はフーシェがまとめている。これでもう大丈夫だ」
見事フランスを救ったタレーラン、しかしこれで話は終わりではありませんでした。ここからまた動くのでした。

第六百九十一話　完

２００９・４・２０

第六百九十二話　会議は踊る

第六百九十二話　会議は踊る

欧州の殆どの国と上司が集まっての会議は続いていました。主導はオーストリアさんですがここで上司のメッテルニヒは言うのでした。

「それぞれの国の利害の調整も重要だが」

「はい」

「話はそれだけじゃない」

こう言うのです。

「それと共に情報も集めてそれを活かしていこう」

「情報をですか」

「そうだ。各国のな。今後の為にだ」

「では会議は」

「あまり進まないだろうし進めることもない」

メッテルニヒはわかっていたのです。この会議がどいったものかを。

「それよりも舞踏会や音楽会、それにお菓子でも食べながらそのうえで各国の話を聞きだしていくぞ。いいな」

「わかりました。それでは」

こうしてオーストリアさんはメッテルニヒの言葉に従い各国の情報を集めていくのでした。会議は遅々として進みません。踊っているだけです。

メッテルニヒの読み通りでした。しかしここでまたしても思わぬ展開となったのです。

「ナポレオンが！？」

「遠島先から出て来ただって！？」

「それでフランスに戻って皇帝になっただと！？」

まさか、まさかの展開です。皆思いも寄らなかったこの展開に右往左往です。とりあえずそのナポレオンを何とかしないといけません。

「会議どころじゃないぞ！」

「軍を集めろ！」

「戦争だ！また戦争だ！」

こうして会議は一時中断となりました。フランスもまた上司が変わりました。ここでタレーランは平然と言いました。

「それでは。皇帝陛下の下に参ろう」

「あんた、良心とかあるんですか？」

「何処かにあるさ」

かくしてフランスはともかくタレーランとフーシェもまたナポレオンに仕えました。この展開もまた予想外のものでした。

第六百九十二話　　完

２００９・４・２０

第六百九十三話　ナポレオン復活

第六百九十三話　ナポレオン復活

何が起こったかというとナポレオンが遠島先から脱出したのです。ウィーンでの会議があまりにも進んでおらず皆の関心がそこにいっている間にそのうちに脱出したのです。そうしてそのうえでフランスに帰ってきました。

復権していたフランスの上司は次々に討伐の軍隊を送ります。ところが送ったその討伐軍がその都度ナポレオンのところに入ってしまいます。kろえではナポレオンに対して兵隊をわざわざ与えているようなものです。

「な、何だというのだ」

これには上司も唖然です。フランスはこれを見てどうなるのかと不安になりました。けれどタレーランとフーシェはここでも全く冷静なのでした。

「よし、これで決まりだな」

「後は最後の討伐軍であるネイ元帥が投降すればもう終わりだ」

二人はその最後の討伐軍まで撤退することを予測していたのです。そうして遂にその最後の討伐軍まで投降しました。これでもう決まりでした。

上司は逃げ出してナポレオンは皇帝に戻りました。パリは彼の大好きなすみれの花で一杯に飾られとても奇麗な姿になっています。

「これからどうなるんだろうな」

「何、もうわかっているさ」

「百日といったところか」

ここでも二人は冷静なままでした。

「百日過ぎればまたウィーンに行くことになる」

「既に国内で手は打っておくとしよう」

二人はナポレオンの行く末が見えているようでした。皇帝に戻ったナポレオン、しかしその結末はわかっている人にはわかっているようでした。けれど本人は気付いていません。フランスにしろ今後どうなるのか予測がつきかねていたのでした。

「本当にどうなるんだ？これから」

フランスは首を傾げながらも今はナポレオンに仕えるのでした。

第六百九十三話　　完

２００９・４・２１

第六百九十四話　ワーテルローへ

六百九十四話　　ワーテルローへ　　第

皇帝に戻ったナポレオンに対して欧州の各国は一斉に反発します。当然どの国も軍隊を集め今にもフランスと戦わんとしています。

「それでまたイギリスと戦争ですか」

「そうだ、ワーテルローに向かう」

ナポレオンは兵を集めてそのうえでフランスに対して話すのでした。

「そこにはイギリス軍とプロイセン軍が待っている」

「またあの連中が」

「大丈夫だ、勝てる」

ナポレオンは断言さえするのでした。

「私がいるからな」

「わかりました。それじゃあ行きましょう」

フランスは革命以降の自分の流転ぶりに困惑しながらも今度はワーテルローに向かうのでした。以前と比べるとかなり質が落ちている兵士達と共に出征する彼に対してまたあの二人が声をかけてきました。

「この戦いを凌げばそれで終わりだからな」

「後は私達に任せていてくれ」

「前と同じなんだな」

とりあえずこの二人の人間性は全く信用していませんがそれでもその能力は信用してそのうえで戦争に向かいました。

まずはイギリス軍もプロイセン軍も軽く蹴散らしたナポレオンでした。

「くそっ、やっぱりあいつは強いぜ」

「畜生、俺は一時戦線離脱だ」

プロイセンは傷が深く一旦戦場から離れます。ナポレオンはその彼に追撃の兵を向けそのうえでイギリス軍との決戦に挑むのでした。彼の全てを賭けた勝負です。

「この戦いに勝つ。そして私は皇帝であり続ける」

「とりあえずプロイセンの奴が戻って来るまでに決着つけないと駄目っぽいな」

フランスにはそれがわかっていました。そしてその追撃の兵がプロイセンに追いつかないことも予想していました。何もかもがナポレオンに対して運命の結果を見せようとしていたのでした。

第六百九十四話　　完

２００９・４・２１

第六百九十五話　追っ払った相手が

プロイセンを退けてイギリスとの決戦に挑んだナポレオンとフランス、しかしイギリスも必死です。

「ここが正念場だ。踏み止まれ！」

「はい！」

イギリスの指揮官ウェリントンの指揮の下イギリス軍は果敢に戦います。イギリスも必死です。地の利を活かしてとにかく必死に粘ります。多くの将兵を失っていますがそれでも頑張っています。フランス軍はそれに対して騎兵を投入したりしてその防御を崩そうとします。その介あってフランスはイギリスをあと一歩まで追い詰めました。

「よし、あともう少しだ」

ナポレオンはここで勝利を確信しました。それで一気に勝負を決めようかと最後の兵力を投入しようとしたところで迷いました。その迷いの間にイギリス軍は護りを固めていて思うように攻められず。そして遂に彼等が来たのでした。

「よし、何とか間に合ったぜ！」

プロイセンとその軍が遂に到着したのでした。黒い軍服が一斉にフランス軍に襲い掛かります。こうしてフランスは敗れてしまったのでした。

「ま、負けた。私が・・・・・」

ナポレオンも呆然となっています。何とか戦場を離脱することはできましたがそれでもでした。これでナポレオンは遂に完全に終わったのでした。

「予想通りだったな」

「ああ、そうだな」

落ちぶれてそのまま今度はさらなる離れ小島に遠島されるナポレオン。タレーランとフーシェはそんな彼を見て冷たく言うのでした。
「神よ、これが報いなのですか」
「まだだ！」
その小島で嘆くナポレオンにまた誰かが答えていました。何はともあれこうしてナポレオンは失脚したのでした。
「では会議の続きだ」
「ああ、じゃあな」
そしてフランスはタレーランに連れられてまたウィーンに向かうのでした。戦いはこうして終わりでしたがそれでもフランスの話は続くのでした。

第六百九十五話　　完

２００９・４・２２

第六百九十六話　会議は終わり

第六百九十六話　会議は終わり

会議は終わりフランスはこれといって何もされないどころかむしろその立場をよくしました。ナポレオンがしでかしたことを考えると奇跡のようです。

「また何でこんなふうになれたんだかな」

「全ては私のおかげだ」

「私のな」

自分でも呆気に取られている彼に対してタレーランとフーシェが答えます。二人は言いながら少し反目し合っていますが。それでも彼等がフランスを救ったのは事実でした。

そうして助かったフランスですが彼だけでなく地位を高めた人がいます。プロイセンです。

「何かあいつまた偉くなっちゃいましたね」

「そうですね」

オーストリアさんがハンガリーの言葉に応えていました。

「これでまたさらに」

「それにドイツですけれど」

「何か存在がクローズアップされてきましたね」

「はい、今は上司の人が色々いますけれど」

ドイツの存在も注目されてきたのです。確かに今は上司が一杯いてお家は何が何だからわかりにくい状況ですがそれでもです。気付けば彼はそれなりに大きくなろうとしていました。

「プロイセンがあいつにかなり好意的ですし」

「放ってはおけないかも知れませんね」

ナポレオンとの戦争は終わりましたがそれでもです。それとは別にまた話が動こうとしているのでした。しかしそれはまだ。

「俺は一体これからどうすればいいんだ」
「とりあえずジャガイモ食え」
「わしの仕事が終わったら向こうに回れよ」
それぞれの上司達に言われるのでした。何となく昔のイタリアみたいな状況に似ています。ドイツはまだまだ何をしていいのかわからない状況なのでした。

第六百九十六話　　完

２００９・４・２２

第六百九十七話　少しずつわかってきて

第六百九十七話　少しずつわかってきて

「俺はこのままでいいのだろうか」
色々な上司を持っているドイツは次第にこんなことを考えるようになってきました。
「このまま色々な上司を持っているだけで」
「おい、ヴェスト」
そんな彼にプロイセンが声をかけてきたのです。
「何悩んでるんだよ。困ったことがあったら俺に言えよ」
「そういう御前は確か」
「おうよ、プロイセンだよ」
いつもの何処か邪悪な笑みでドイツに応えるのでした。
「まあ俺は東にいて御前は西だよな」
「そうだな。東西か」
「俺も今相棒が欲しいと思ってるんだよ」
「相棒？」
「そうだよ。相棒だよ」
こんなことをドイツに話してきました。
「相棒が欲しいと思っていてよ。どうだ？」
「どうだって言われてもな」
ドイツもその言葉には心動かされますがそれでも今は決断をしようとしません。
「少し考えさせてくれ」
「まあ今はブルフェンシャフトやら革命騒ぎやらあってごちゃごちゃしてるけれどな」
ナポレオンの影響が欧州各地にあってそれで結構大変なのです。
ドイツもそうですしプロイセンもオーストリアさんもです。それで

複雑な状況でもあるのです。
「まあそれでもな。ゆっくりとな」
「考えればいいか」
まずはプロイセンが声をかけてきました。これがまずはじまりでした。ドイツとプロイセンの間で何かが生まれようとしていました。

第六百九十七話　　完

２００９・４・２３

第六百九十八話　オーストリアさんまで出て来て

トリアさんまで出て来て

ドイツとプロイセンが話をしているのはオーストリアさんも見ていました。ハンガリーが警戒する顔でオーストリアさんにそっと耳打ちするのでした。

「いいんですか？あんな奴がドイツに出て来たら」

「当然よくはありません」

答えは決まっています。オーストリアさんにしろプロイセンが力をつけるのは好ましくありません。確かにナポレオンに対しては共闘しましたがそれでも仲がいいわけではないのです。

「そうですね。できれば私が」

「ドイツさんとお話されるんですね」

「はい。そうします」

穏やかですがそれでも出るのでした。そうしてこの人もドイツに対して声をかけます。

「貴方とは一度お話したいと思っていまして」

「御前もか」

「はい。まあザッハトルテとウィンナーコーヒーでも飲みながら」

「最近どうなっているんだ？」

ドイツはこの前プロイセンにも声をかけられていたので最近のこのもてぶりが不思議に思えてなりませんでした。

「俺は一体どうなったんだ」

「貴方が気にされることではありませんよ」

オーストリアさんはこのことにはあえて答えようとしませんでした。

「ただ」

「ただ。何だ」

「時が来たのでしょう」
そのかわりにこんなことを言うのでした。
「貴方が一つになる時が」
「何かわからないがそうなのか」
ドイツはオーストリアさんの言葉に腕を組んで考えだしました。
「つまり俺の相棒は誰かということか」
ドイツにも何となくわかってきたのでした。これから自分がどうなっていって何をすべきかを。

第六百九十八話　　完

２００９・４・２３

第六百九十九話　深まる対立

第六百九十九話　深まる対立

やがてドイツがどうなっていくかということでドイツだけでなくプロイセンやオーストリアさんまで入って来るようになりました。まずプロイセンが言います。

「やっぱりよ、俺とヴェストで二人でやっていくべきなんだよ」

「御前とか」

「そうだ、これからは相棒と呼ばせてくれ」

ここではじめてドイツを相棒と呼ぶプロイセンでした。

「それでいいな」

「相棒か。友達でもないんだな」

「友達よりもずっと上だ」

何とプロイセンはそこまで本気だったのです。

「俺と二人で欧州最高の国を作るんだ。いいな」

「ううむ、それも悪くないな」

プロイセンの珍しく邪悪なもののない真剣な表情の前にドイツも腕を組んで考える顔になります。ところがオーストリアさんもオーストリアさんで言うのでした。

「相棒は構いません」

それはいいというのでした。

「しかしです。私と三人で国を作りましょう」

「何っ、三人でか」

「はい。私達三人の他にはハンガリー達もいます」

当時のオーストリアさんのお家はとにかく大所帯だったのです。色々な人達がいました。

「皆で楽しくやりましょう。如何ですか？」

「人は多い方がいいか」

「馬鹿言え、雑魚が幾らいたってどうしようもねえよ」
しかしプロイセンはこれに強硬に反対します。
「ここはよ、俺と相棒だけでやるんだよ。なっ、相棒」
「ううむ、本当にどうしたものか」
ドイツは本当にどうするべきか思案していました。しかし彼が中々決断を下せないでいるうちにプロイセンとオーストリアさんの対立は激化していき。そして遂には戦争にまでなるのでした。

第六百九十九話　　完

２００９・４・２４

第七百話　戦争はありましたが

第七百話　戦争はありましたが
　プロイセンとオーストリアさんのドイツを巡る対立は激化し遂に戦争となりました。戦争自体は本当に呆気なく終わって結果としてはオーストリアさんは負けました。
　それでプロイセンはかつてのようにオーストリアさんの大事な場所をしこたま貰おうとしました。ところがここでプロイセンの上司、あのビスマルクが出て来たのです。
「大事なところも賠償も取ることはない」
「えっ、何でですか！？」
「今はオーストリアに勝っただけで充分だ」
　こうプロイセンに言うのです。
「それにだ。ここで情をかけて向こうに恩を売っておく」
「恩をですか」
「そうだ。またすぐに戦争になる」
　語るビスマルクの目がきらりと光りました。
「その時とその後にな。オーストリアとは仲良くしておきたいのでな」
「すぐにって何処とですか？」
「またその時にわかることだ」
　今は言おうとしないビスマルクでした。
「それよりもだ。これでドイツは完全に御前の相棒になった」
「はい、それは」
　少なくともこれは確かになりました。オーストリアさんのお家を退けてそのうえでドイツと晴れて正式にパートナーの関係になれたのです。
「これで満足して今は力をつけるのだ。いいな」

「わかりました。それじゃあ」
こう言ってオーストリアさんに勝っただけで何もしないのでした。
しかしこれで終わりではなくビスマルクはそれから先をしっかりと見据えていたのでした。

第七百話　　完

２００９・４・２４

第七百一話　仕組まれた罠

第七百一話　仕組まれた罠

プロイセンはオーストリアさんを退けてからもドイツとのお付き合いを深めていきます。しかし残る最後の一つの関門がありました。

「フランスだ」

この国なのでした。この国が何もしてこない筈がありません。今までにも散々と介入してきました。つまりフランスを退けたその時にドイツは完全に一つの国となれるのです。

それがわかっているビスマルクはフランスと戦争をする口実を虎視眈々と狙っていました。そんな時にフランスはプロイセンの上司が温泉で休養している場所にお邪魔してメキシコの上司のことで話をしたのでした。

「じゃあこっちの上司の家の人が入るってことでいいですね」

「そうですな。こちらから人は出しません」

そんな軽い話だったのですがこの話を聞いたビスマルクが仕掛けてきました。何とこのお話の内容を悪い部分だけ抜き取ってそれを新聞に流させたのです。

「何だこりゃ！」

「フランスめ、調子に乗りやがって！」

プロイセンだけでなくドイツのお家の人達も激怒です。これでフランス憎しの論調になりました。

こうなればフランスも乗ってきます。忽ちのうちに双方の関係は急激に悪化、今にも戦争が起こらんばかりでした。

フランスの上司はプロイセンと戦えば負けるとわかっていました。理由は簡単で強いからです。しかしそれでもせざるを得なくなり戦いはフランスのお家の人達の大部分が思っているような楽勝のものではありませんでした。何しろプロイセンはもう戦いの準備まで整

えてしまっているのですから。
「上手くいきましたね」
「これで陛下が即位できるぞ」
プロイセンもビスマルクもにんまりです。今まさに戦いがはじまろうとしていました。そしてその結果はもう見えていました。遂にプロイセンとドイツで国が出来上がろうとしていました。
「何か俺は始終外野じゃないのか？」
「気にするな」
ただ、ドイツ本人の出番はこれといってないままでありました。

第七百一話　　完

２００９・４・２５

第七百二話　ドイツ帝国成立

第七百二話　ドイツ帝国成立

フランスに勝ったプロイセンはその象徴とも言えるベルサイユ宮殿において上司が皇帝に即位しドイツと共に一つの国となることができました、これこそドイツ帝国、今ここに誕生したのです。

「相棒、これで俺達は晴れて一緒の国だぜ」

「そうだな。これでな」

「そろそろイタちゃんも一つの国になる頃だしな」

この頃はイタリアも統一されようとしていたのです。あちらの家は南北ですがその南北で一緒になろうとしていたのです。

「何かこうして二人で一つの国を作っていくのもいいものだぜ」

「一つの国になるのはいい」

ドイツはそれはよしとしました。

「しかしだ。大変なのはこれからだぞ」

「ああ、わかってるさ」

プロイセンはそれもよくわかっていました。そうでなければ今まで国として生きていません。国家が生きていくのもこれはこれで大変なのです。

「フランスの野郎も黙っていねえしイギリスもいるしな」

「あとロシアだ」

ドイツの東に位置するとてつもない大国です。その恐ろしさは言うまでもありません。

「あの国もあるんだぞ」

「ああ、あいつとはやりあわないようにしような」

答えるプロイセンの顔も剣呑なものになっています。

「それはな」

「何はともあれこれからは二人だ」

それは確かでした。
「二人でやっていこう、何時までもな」
「ああ相棒、俺達は何時でも一緒だぜ」
こうして二人は遂に一緒になれたのでした。西と東、ドイツという国が遂に統一されました。

第七百二話　　完

２００９・４・２５

第七百三話　二度の戦争を経て

第七百三話　二度の戦争を経て

ドイツとプロイセンは二人で一つの国家になって生きていきました。二度の大きな戦争も経ました。そのどちらにも負けて遂に領土を占領されて。それで連合側がこう決めたのです。

「もうあいつ等分かれさせるか」

「ああ、そうだな」

イギリスとフランスも話しています。もう彼等はドイツとプロイセンに暴れ回られるのに辟易していたのです。それで二人を別れさせようと考えたのです。

それはすぐに実行に移されました。ドイツは西にプロイセンは東に。それぞれ別れさせられプロイセンはロシアの方につけられたのです。そしてドイツはアメリカ達の方にです。

「もう俺達は二度と一緒になれないのかもな」

「そうかもな」

二人はもう一緒にはなれないと諦めました。こうした形で別れさせられればもうそれで同じになることがないのが欧州の今までだったからです。二人の仲はこれで終わりだと誰もが思いました。

「これからは敵同士ってことになるな」

「そうだな。ロシアとアメリカの仲が悪くなってるしな」

当時今まさに、でした。やっぱりロシアとアメリカの仲は上手くいくものではなかったのです。

こうして対立が激化しようとしている中で二人は別れさせられました。そして冷戦がはじまりました。

「この門もな」

プロイセンは苦い顔で自分のお家にあるブランデンブルグ門を見ました。

「ここも開くことはないな。二度とな」
門は堅く閉じられていました。彼の首都まで東西に分けられ何もかもが別れさせられていました。けれどそれでもドイツとプロイセンはお互いのことを悪く思っていませんでした。そのままずっとお互いのことを見続けていたのです。
「また一緒になりたいな」
「何時か絶対にな」
こう思い続けていました。思っても仕方ないとはわかっていてもです。

第七百三話　　完

２００９・４・２６

第七百四話　時代が変わり

第七百四話　時代が変わり

こうした状況が結構続いていました。そのまま西と東に別れたまま。プロイセンは東ドイツ、ドイツは西ドイツとして。一人で住んでいましたがロシアの上司が代わると。話が急に動いてきたのでした。

「おい、前まではこんなに一緒に話とかできなかったのによ」

「ああ、変わってきたな」

「相棒、俺達まさかよ」

プロイセンの顔が明るい笑顔になっていて興奮して顔が少し紅潮していました。

「また一緒になれるかも知れないぜ」

「一緒にか」

「ああ、まさかとは思うけれどな」

この時はまだそんなことは想像はしてもとても現実のものではなかったのでした。

「あの門だって開いて壁だってな」

「なくなるのか」

「ひょっとしたらだぜ」

こうは言っても期待を抑えることはできなくなっていました。二人は今壁を挟んで話をしています。二人を分けているその忌々しい壁をです。

「この壁がなくなってな」

「一緒にか。じゃあその時はだ」

「来るとは思えないけれどな」

やはりまだ現実のものとは考えられないのでした。

「ひょっとしたらな。その時はな」

「ああ。また一緒に生きよう」
「きっとだぜ」
時代が変わろうとしていました。そう、何かが。二人はそのことを感じ取っていて今来たるべき日を見ていたのです。彼等が想像すらできなかった日に。

第七百四話　　完

２００９・４・２６

第七百五話　まさかこうなるとは

第七百五話　まさかこうなるとは

ロシアの上司の人が物分りのいい人になってから少しずつその関係が近いものに戻ってきたドイツとプロイセン。けれどこの関係はそれだけで誰も元のように一つになれるとは思いませんでした。それは当人達も同じです。

けれどここで彼等にとって思いも寄らぬ事態になりました。何とプロイセンのお家の人達がどんどんドイツのお家に入り込んでいきました。その勢いは誰にも止められるものではありませんでした。それが止められず遂にプロイセンの上司も折れてしまうと。プロイセンもドイツもハンマーを持って壁の前に集まりました。

「もうこんなもんいらねえからな！」

「そうだな。俺達を阻むものはもう必要ない」

二人だけでなくそれぞれのお家の人達まで総出で出て来てそのうえで壁を壊していきます。そしてあの二度と開かれることはないと思われていたあの門も開きました。まさかの展開がここまで起こったのです。

「後は相棒、残ったのは」

「ああ、それだけだ」

またそれぞれ笑顔で言い合うのでした。何かと笑顔が苦手な二人なのにこの時ばかりは満面の笑みでしかもそこには純粋な喜びがありました。

「また一緒になれるな」

「そうだ、もうすぐだ」

二人で言い合います。

「二人がまた一緒になったらな」

「そうだ。本当の意味でドイツに戻れるんだ」

「西？東？そんなのもう沢山だ」
プロイセンはたまりかねたように言うのでした。
「そんなの国を弱くする為の縛りじゃねえか」
「そうだな。もうそんなものは必要ない」
こうして二人はまた一緒になることができました。ドイツとプロイセンの統一、今やっと実現したのです。

第七百五話　　完

２００９・４・２７

第七百六話　今はしんどいですが

第七百六話　今はしんどいですが

一つに戻れたドイツとプロイセン、けれど何もかもがいいというわけではありませんでした。

「悪いな、俺が頼りなくて」

プロイセンは他の誰にも見せない申し訳ない顔をドイツに対して見せていました。

「おかげで御前には迷惑かける」

「気にするな」

けれど彼は言うのでした。

「それはな。大したことはない」

「けれど今の俺はな」

見ればプロイセンのお家もお家の人達も何かドイツと違います。ドイツのお家やお家の人達は立派なものを着ていたり使っていたりしているのにプロイセンはどうにもこうにもみすぼらしいのです。悪い言葉で言えば。

「こんな有様だからな」

「今は今だ」

ドイツはまた彼に言いました。

「これからはわからない。それに」

「それに？」

「昔は違った」

昔のことも話すのでした。

「昔はな。御前が声をかけてくれて統一されたからな」

「そうだったな。昔はな」

「今度は俺が御前を助ける番だ」

ドイツは言うのでした。

「御前をな。それだけだ」
「悪いな。早いうちに俺も何とかなるからな」
「焦るな。少しずつよくなっていくものだからな」
二人に戻れてからもまだ色々と問題はありますけれどそれでも二人に戻れたことは嬉しい二人でした。パートナーはやっぱり有り難い存在なのでした。

第七百六話　完

２００９・４・２７

第七百七話　ギリシアのお母さん

第七百七話　ギリシアのお母さん

普段からとてものんびりとしているギリシア。いつも猫と一緒だったり何か哲学的なことを考えていたりします。こうしたギリシアにもお母さんがいたのです。

「確かビザンツ帝国さんでしたね」

「そうだ」

日本の質問に答えています。亜細亜と欧州、それぞれ住んでいる場所は違いますけれどそれでも結構仲のいい二人であります。

「もう今はいないけれどな」

「そうでしたね。これは失礼しました」

「いや、いい」

このことはいいとしたギリシアでした。

「それでもだ」

「覚えておられるのですね。お母さんのことを」

「あいつが来たりして大変だった」

ギリシアはぼそりとですが昔のことを思い出して話すのでした。

「もうな。あいつのお爺ちゃんがな」

「ああ、イタリア君の」

日本もこの辺りの歴史には確かな知識があります。

「ローマ帝国さんですね」

「あいつが来て何かと大変だった」

「そんなにですか」

「強かったことは強かった」

ギリシアもこのことはよく覚えてはいました。

「そこはあいつと違ったがな。女好きなのはだ」

「同じだったのですね」

「後であいつも来るとは思わなかった」
前の戦争のことです。
「もっとも爺様と違って何かやたらと弱かったし愛嬌もあったがな」
「大変だったのですね。何かと」
「昔のことだし今はどうでもいいけれどな」
ギリシアも歴史が長いです。そのせいもあってかイタリアのお家とは結構縁があったりするのでした。

第七百七話　　完

２００９・４・２８

第七百八話　攻めて来た時のイタリア

第七百八話

攻めて来た時のイタリア

イタリアはギリシアに戦争を仕掛けたことがありました。あの時のことなのですがこの時のイタリアもやっぱりイタリアなのでありました。

「やいギリシア俺と勝負しろ！」

いきなりやって来ていつものようにのどかに過ごしているギリシアに対して喧嘩を吹っかけたのです。なおこの話はドイツには一切していなくて上司の独断でした。この上司は物凄いことにイタリアを強いと思っていたのです。それで行進をローマ帝国のそれにしたりしていた程です。

威勢は物凄くいいです。しかし実際の強さというともう今では誰でも知っていることなのですけれど。殆ど何も用意していなかったギリシアがちょっと棒でぺしぺしだすと。何かエジプトの時と同じ展開なのですけれど。

「わっ、ちょっと危ないじゃないか！」

これだけでイタリアは怯んでいます。

「御免、御免て！俺が悪かったよ！」

自分から喧嘩を売っているのにそれでも負けています。それどころか泣いている始末です。

「ドイツーーーーー、ドイツーーーーーーっ！！」

「全く。見ないと思ったらまたこんなことか」

ドイツが呆れながらも助けてくれました。なお彼はこの時ロシアとの大勝負の準備をしていましたけれどそれを延期せざるを得ない破目になりました。しかも大切なトラックを物凄く使ったうえでです。

そしてドイツに多大な迷惑をかけたうえでギリシアに入ったイタリアですが何をしているかといえば。
「ねえ君可愛いね」
「あっ、これ食べていいんだ。有り難う」
これまたいつもの流れでギリシアのお家の奇麗な女の子達と楽しくやっていたのでした。何か他の人のお家に行くといつも女の子に声をかけるイタリアなのでした。
「迷惑だから帰れ」
「えっいいじゃない。折角遊びに来たんだし」
「喧嘩を売ってきたのは御前だ」
ギリシアも呆れるイタリアの能天気さなのでした。

第七百八話　　完

２００９・４・２８

第七百九話　上司変わり過ぎ

　第七百九話　上司変わり過ぎ

　ドイツとプロイセンが一つの国を作ろうとしていた頃フランスは上司がとにかくころころ変わっていました。王様だけで二回もお家が変わっています。

「けれど私がいた頃の血筋がまだ残っていたんでしたっけ」

「少なくともヴァロアからなんだよな」

　見事生きていたジャンヌに対してフランスが答えます。

「今の。ええとよ」

「オルレアン家の方ですよね」

「そうそう、それそれ」

　言葉は自然とトンボライダーになっています。

「その家の人なんだよな、今」

「けれど今あの人」

　ここでジャンヌが言うのでした。

「家を出てしまいましたけれど」

「えっ、マジかよ！？」

「革命が起こってますけれど」

「おいおい、またかよ！」

　フランスはここで周りが滅茶苦茶騒がしいことに気付きました。そういえば最近またお家の中が不穏な雰囲気になっていました。これもいつものことですけれど。

「また起こったのかよ！」

「それでまた共和制ですけれど」

「何なんだよ、おい」

　また共和制になったと聞いてフランスはもう言葉がありません。

「ひょっとしてここからまた帝政とかなるんじゃねえだろうな」

「けれどナポレオンさんはもういませんが」
「だよな。大丈夫か」
そう思ったのは早計でした。何とここでその思わぬ事態となるのでした。

第七百九話　　完

２００９・４・２９

第七百十話　報いはこれでした

七百十話　報いはこれでした

共和制にまたなってしまったフランス。ところがここで意外な人が出て来たのです。

「私が政権を取った暁には！」

「あれっ、あの人って確か」

「ああ、あの人の親戚の人だよ」

フランスはまたジャンヌに答えています。

「ルイ＝ナポレオンっていうんだよ」

「そうですよね。御名前聞いてまさかって思いましたけれど」

「今物凄い人気なんだよ。ぶっちぎりでダントツなんだよ」

「それじゃあ大統領ですか？」

「そうかもな」

そして本当に大統領になってしまうのでした。しかも大統領になってからも権限を伸ばして気付いた時にはまた。フランスの上司が皇帝になってしまっていたのでした。

「あの、あの人もやっぱり」

「もう何が何だかわからねえよ」

また帝政になってフランスはまたまた唖然でした。

「王様からジロンド、ジャコバン、あの人、王様のお家が二回に共和制で」

「それでこれですよね」

「こんだけ変わったら覚えるの大変じゃねえかよ」

国にまで言われる始末です。

「ったくよお。まあボナパルトのおっさんみたいに頑張ってくれたらいいけれどな」

「そうですよね。やっぱりあの人を思い出しますよね」

「だから人気があるんだろうな。やっぱり」
ジャンヌもフランスも結構能天気なものでした。ところがこの時ある人のお墓では。こんなやり取りがありました。
「神よ、これが報いなのですか！」
「そうだ！」
天から声が聞こえてきます。この人への報いはこれだったみたいです。歴史は繰り返す。一度目は悲劇、二度目は喜劇という言葉もあります。

第七百十話　　完

２００９・４・２９

第七百十一話　ここが大きな違いでした

第七百十一話　ここが大きな違いでした

皇帝になった二代目の上司さんですが初代の方の評判もあり人気は上々でした。あの人が大好きだったすみれのお花も国中でまた咲き誇るようにもなっています。

気前もよかったので皆この人を支持していました。けれどメキシコでｈ失敗したりマルクスとかいう人に批判されたりしているうちに評判が落ちてきてそのうちにプロイセンとフランスの仲が急激に悪化してきまして。皆ここでこの人をせっつくのでした。

「戦争しましょう！」

「プロイセンと戦争です！」

こう言って急かすのですがこの人は決して乗り気ではありませんでした。腕を組んで難しい顔で一人呟くだけでした。

「あのプロイセンと戦って勝てるわけないじゃないか」

この人はプロイセンと戦っても勝てないとわかっていたのです。今や飛ぶ鳥を落とす勢いのプロイセンに対してフランスはナポレオンがいません。それで勝てる筈もないというのです。

ところが皆この上司を急かします。こうしてこの人は仕方なくプロイセンと戦争をするのですが。

「な、何で俺がこんな目に！？」

フランスはセダンでプロイセン軍の捕虜になってしまっていました。実に華麗に。

「何でこんなことになっちまったんだ！？」

「やはりここに自分で来てよかったな」

上司は嘆くフランスの横で一人頷いていました。

「おかげで戦争での損害を最低限に抑えられる。降伏でな」

「降伏・・・・・この俺が」

フランスはあまりもの屈辱に唖然としています。
「何でこんなことになっちまったんだよ！」
「やはりわしは叔父上には及ばなかったか」
上司の人はこんなことも言うのでした。
「叔父上には。戦いにおいては特に」
流石に軍事的才能は一世には遥かに及ばないのでした。こうしてフランスはプロイセンとの戦争に実にあっさりと負けてしまったのでした。

第七百十一話　　完

２００９・４・３０

第七百十二話　捕虜になったのははじめてでは

第七百十二話　捕虜になったのははじめてでは

華麗にプロイセンの捕虜になってしまったフランスですが実は捕虜になったのはこれがはじめてではありませんでした。かつてオーストリアさんとイタリアでやり合った時にも見事に捕まったことがあったのです。

その時も上司と一緒でした。上司と一緒にオーストリアさんの前に引き出されています。くくられてかなり惨めな格好です。

「御感想は？」

「ああ、最悪だぜ」

フランスは忌々しげにオーストリアさんに対して答えます。

「まさかよ、捕まるなんてな」

「ですがその割に態度が大きいようですが」

「釈放したらいいものやる」

捕まったその場でフランスに対して言うのでした。

「金だけじゃなくてな。色々とな」

「その言葉偽りではありませんね」

「ああ、約束するぜ」

こんなことを話してそのうえでやっと釈放されました。かつてはこんなことがあったのです。

「それで今かよ」

「で、感想はどうだよ」

今回もくくられて勝ち誇るプロイセンの前に引き出されています。

「俺に負けた感想はよ」

「今回も最悪だぜ」

今回も、なのでした。

「ったくよお。あれか？やっぱり金と大事なところをよ」

「アルサスとロートリンゲンは貰ったぜ」
かなりのお金と大事なところを取られてそのうえでベルサイユ宮殿にまで乗り込まれてそこで戴冠式を行われるという屈辱を受けたうえで自由になったのでした。フランスは捕虜になってかなりの屈辱を味わったのでした。
「今に見てやがれ！」
復讐を誓わずにはいられません。それが最初の大きな戦争の一因にもなっていくのでした。

第七百十二話　　完

０

２００９・４・３

第七百十三話　流石は中国　☆

第七百十三話　流石は中国

日本はものを作るのが滅茶苦茶得意です。それを売っていきていますがあまりにも受注が多く時として疲れてしまいます。それでこの時も疲れてしまって少しぼやいていました。

「困りましたし疲れましたね」

今回は歳のせいではありません。外見はとにかく若く見えますけれど実際この人の年齢が幾つかは不明だったりします。気付けばもうかなりの歳月を過ごしている人ですが。

その一体実際何歳なのかわからない日本のぼやきはさらに続いていました。

「ものが売れるのはいいのですが作るのが間に合いません」

受注の多さに困っています。嬉しい悩みではあるのですがやはり疲れるものは疲れるのです。それでぼやいていますとそこにお隣にいる中国がやってきました。

「日本！助太刀するあるよ！」

「レンゴウファイブのブルーである貴方がですか」

「何言ってるあるか、同じ太平洋グループのメンバーあるぞ」

ＡＰＥＣだのＡＲＦだのＡＳＥＡＮ拡大外相会議だの他にも東アジアサミットだの色々な場で中国と一緒なのです。その殆どにアメリカも台湾も韓国もロシアもあとどうしても誰からも名前を覚えてもらえない人もいますけれど。

「ここは一つ提案ある」

「はい、何でしょうか」

また変な提案なんだろうと思いながらも話を聞く日本でした。

「僕の家でも似たようなもの作るある！」

実に誇らしげに言います。

「そうすれば僕と日本で両得よろし！」
「ちょっと言いたいことがあるのですか宜しいでしょうか」
「何あるか？」
ここから延々と小言です。中国お得意のコピー、これにかなり困っている日本だったりします。

第七百十三話　　完

２００９・５・１

第七百十四話　ライオンキング

第七百十四話　　ライオンキング

日本にとって困った隣人は中国だけではありません。勿論あの生徒会長もその一人なのですがアメリカにしろそうです。しかも彼は自分のものがコピーされると物凄く文句を言いますけれど自分に関しては。

「あの、アメリカさん」

「ああ、何だい日本」

自分のところにやって来た日本に対して応えます。

「あのアニメ映画ですけれど」

「ライオンが主人公の映画かい？」

「あれは明らかに私の国のアニメだと思うのですが」

ジャングルで白いライオンが活躍する映画です。とあるプロ野球のチームのマークにもなっています。そのおかげで日本ではライオンといえばこれになっています。

「それについてはどう思われますか？」

「えっ、あのアニメ観たことないけれど？」

しかしアメリカはとぼけます。物凄い度胸です。

「全然。僕知らないよ」

「確かアメリカでも放送されていましたけれど」

「北斗の拳の間違いじゃないのかい？それとドラゴンボールなら知ってるけれどさ」

こんなことを言って知らんふりです。やはりアメリカ、いざという時の度胸は見事なものです。こうして日本の疑惑の目をスルーして何処かに行きます。あえなくスルーされた日本を台湾がそっとやって来て慰めます。

「アメリカさんにも困ったものですね。けれどいちいち気にされて

いても仕方ないですよ」
「そうですね。ですが」
「ですが？」
「いえ、何も」
この台湾にしろ前まではそういうことを思いきりやっていたわけで。本当に周りにいい意味でもあまりよくない意味でも困った国が多い日本であります。いつも皆が周りにいて声をかけてくれるので寂しくはないのですけれど。

第七百十四話　　完

２００９・５・１

第七百十五話　キティちゃんじゃない　☆

第七百十五話　キティちゃんじゃない

何だかんだで中国は日本からキティちゃんのぬいぐるみを貰いました。この辺りの気前のよさが本当に日本らしいです。

それで大喜びの中国は早速そのキティちゃんを上司に見せます。ちなみに中国の上司は龍です。何か宇宙人や鯨を友達に持つ人がいたり妖精がお友達だったり色々な人がいるレンゴウチームです。

それで上司に自慢する中国。にこにこしながら話しています。

「日本からキティちゃん貰ったあるよ。可愛いある」

「んっ！？」

上司の龍はまずその可愛いキティちゃんを見て目を顰めさせます、そうしてそのうえで中国に対して言うのでした。

「その人形ちょっとおかしくないか？」

「えっ！？」

そう言われて中国も戸惑います。何しろ龍ですから。中々見えないものが見えたりします。もっとも中国自身も仙人かも知れないのですが。

「まさか凶の相が出ているあるか？」

「口がねえじゃねえか」

上司が言うのはこのことでした。それですぐに口を書き込みますが何か企んでいるような不気味な笑みで。それを見た中国は泣き叫びながら上司をぬいぐるみで叩きます。

「わかった！悪かったよ！」

「こんなのキティちゃんじゃないある！絶対違うある！」

「だから叩くなよ！」

「早くなおして欲しいある！こんなの嫌ある！」

何か妙に可愛いものが好きな中国です。もっともそのキティちゃ

んはすぐに口を消してもらいました。しかし上司も中々凄まじいセンスを持っているものであります。
「そんなにセンス悪いか？」
「問題外ある」
しかも自覚もないのでありました。

第七百十五話　　完

２００９・５・２

第七百十六話　韓国だとどうなるか

七百十六話　　韓国だとどうなるか　　第

日本のものをコピーしているのは中国だのアメリカだのかつての台湾だのだけだのではなく。その頂点に立つといえばやっぱりこの人だったりします。

「よし、我ながら最高のデザインなんだぜ」

何か絵を描いて誇らしげな顔をしています。

「やっぱり俺は天才なんだぜ」

「あの、韓国さん」

その絵を見た日本が早速彼に突っ込みを入れます。

「その仮面を被って紫のタイツの人ですけれど」

「格好いいんだぜ？俺が考えたキャラなんだぜ」

「その人は赤い彗星ではないのですか？」

日本のお家にいたらもう誰もが知っている人です。主人公のライバルにして永遠のアンチヒーロー、関わった女の人はお話をしただけでかなりの確率で死んでしまう、時々議長になっていたり大尉になっていたりする人です。

「何かえらく変わっていますけれど」

「あれっ？俺はただ描いただけなんだぜ」

しかし韓国はこう言ってしらばっくれます。

「ただ。気にしなくていいんだぜ」

「そうなのですか？そういえばこのキャラも」

今度は魔女っ子キャラを指差して韓国に言います。

「おジャ魔女ではないのですか？」

「そういえば主役の声の人があんまり美人で驚いたんだぜ」

「そうしたことまで御存知ですし。まさか」

「だから気のせいなんだぜ」

無理矢理そういうことにしてしまおうとしています。
「気にしない気にしない。考え過ぎはストレスの元なんだぜ」
「貴方とのお付き合いが一番それなのですが」
何気に日本もわかっていますが言ってわかる人でもありませんので。人付き合いは本当に大変です。

第七百十六話　　完

２００９・５・２

第七百十七話　エチゼンクラゲ　☆

第七百十七話　　エチゼンクラゲ
「ねーーねーー日本」
イタリアが上手にスープの中にある白くて透明なものを箸に取って日本に見せながら尋ねます。
「このスープの中にあった透明なものは何なの？」
「あーーー、それはですね」
ここで隣にたまたまいた中国をちらちらと見ながらイタリアに答えます。
「エチゼンクラゲですよ」
「何で僕を見ながら言うあるか！」
「いえ、何となく」
そこはあえて答えないのが日本流です。けれど視線の先でわかってしまうのであまり意味はありません。本当に日本流はこうした時にとても便利です。
イタリアはその中でまだ食べ続けています。今度は羊羹を食べています。日本の甘いものもオッケーのようです。
「じゃあさ」
「はい」
また同じような言葉のやり取りが行われます。
「この羊羹の中の白いつぶつぶは何なの？」
「ああ、それもですね」
また中国の方を見るのでした。
「まあ何といいますか」
「また僕あるか」
「意外と食べたら美味しいのが驚きですが」
実はエチゼンクラゲは食べたら美味しかったのです。

「最初大量に出て来た時はどうしようかと思いました」
「とりあえず気にするなよろし」
さりげなく自分のことは誤魔化す中国でした。何はともあれクラゲが食べられてそれが幸いでした。

第七百十七話　　完

２００９・５・３

第七百十八話　クラゲではなかったら

百十八話　　クラゲではなかったら　　第七

「それはそうとさ、クラゲでよかったよね」

イタリアはエチゼンクラゲの料理を食べ終えてから日本に話をしていました。

「食べられて」

「そうですね。これが食べる時に毒があれば大変なことになっていました」

「食べる時にそれも大変だけれど」

ここでイタリアはふと言うのでした。

「こっちが食べられたらもっと大変だよな」

「確かに」

イタリアは何気なく言ったのですが日本はここでとんでもないことを思い出しました。

「巨大な怪物だったりしたら」

「昔日本の特撮でそういうの出なかった？」

イタリアはまたふとした感じで言ってきます。

「何か巨大なさ。それで基地ごと食べた」

「シルバーブルーメですね」

懐かしのウルトラマンレオに出て来た怪獣です。

「あのお話は今でもはっきり覚えています」

「俺も観てびっくりしたよ。いきなり基地がそれで壊滅したからね」

「それが円谷です」

日本はイタリアに対して説明します。

「普通のやり方では満足しないのです。何もかも」

「凄いよね、あそこは何でも」

「特撮は東映とあそこです」

日本はこうまで断言するのでした。
「今後も宜しく御願いします」
「シルバーブルーメ以外はそうさせてもらうよ」
笑顔で応えるイタリアなのでした。やっぱり彼もあの円盤怪獣は嫌なようです。

第七百十八話　　完

２００９・５・３

第七百十九話　円盤は実は

七百十九話　　円盤は実は　　第

円盤といえば宇宙人、宇宙人といえばアメリカですが実際のところこれはあちこちに出ています。日本にも出ますし中国にも他の国にもです。

「私の国の古い本にもそれらしき人がいますしね」

「そういえば僕の家の山海経にも」

二人はそれぞれ本を出しながら言います。

「天狗か何かと思ったのですが空から来たということは」

「あまりにも出て来る国の人間の姿が異様ある。宇宙から来たとしても不思議ではないあるぞ」

「ああ、そういえば君の家の本だったっけ」

アメリカは中国のその古い本の一つである淮南子を手にしてまた話します。

「これの崑崙って凄くおかしくない？」

「ああ、それもあるな」

中国はその淮南子を見ても言うのでした。

「よく考えてみれば。確かに崑崙は宇宙からの何かでもおかしくないある」

「本当に宇宙人ではなかったのですか？」

日本も言います。

「崑崙から来た人達は」

「そうだよね。普通下半身が蛇とか頭が牛とかないじゃない」

「昔はそれで普通だと思っていたあるが」

実は中国の最初の方の上司だった人達なのです。

「今思うと。おかしいあるな」

「はい。やはり妙です」

「昔からそういう人達っていたのかな、やっぱり」
三人でそれぞれ言い合って考えます。けれどこうした話の常として結論は出ませんでした。少なくとも昔からそういうものを思わせるお話はあるようです。

第七百十九話　　完

２００９・５・４

第七百二十話　けれどこんな宇宙人は嫌だ

第七百二十話

けれどこんな宇宙人は嫌だ

宇宙人といえば日本ではそれこそ特撮で一杯出て来ます。とりわけ何十メートルもある光の巨人のお話ではもう飽きる位出ています。

その宇宙人の人達ですが。台湾が観て言うのでした。

「何でこのシリーズの宇宙人て極悪人ばかりなんですか？」

「悪人だらけですか」

「そうですよ、特にこの人達」

インコみたいな顔をした縞々模様で分身している宇宙人と赤い目に黒い顔をしていて白い身体の人達です。何か見ただけで物凄い悪の波動を感じます。

「極悪非道じゃないですか。卑劣ですし」

「まあその人達は一番酷い方ですが」

「他にも卑劣な宇宙人が異常に多いですよね」

凶悪な宇宙人や卑劣な宇宙人がてんてこもりの世界だったりします。

「何なんですか？これって」

「風刺といいましょうか」

日本はその理由を台湾に話します。

「色々なことを風刺にして出しているのがこのシリーズの真意でして」

「何か学校の色々な人達に悪い意味で似ている宇宙人もいるような」

台湾はふとこのことにも気付きました。

「気のせいですか？」

「多分気のせいです」

日本はそういうことにしました。そういうことにしないと後でややこしいことになるからです。

「ですから素直に特撮を楽しんで下さい」
「あえて気付かないふりをして、ですね」
「その通りです」
こんな話をしながら二人で観ています。その時に映っているのは今度は異次元人でした。何を隠そうこれが一番卑劣な人達でした。
「何か怖くてこれ以上観られません。気持ち悪い奴等ですね」
「私も。何かトラウマになりそうです」
実はこの異次元人のせいで視聴率が振るわなかったりしたのです。風刺も過ぎると子供が怖がってしまうものなのであります。

第七百二十話　　完

２００９・５・４

第七百二十一話　俺らも作るで

百二十一話　俺らも作るで　第七

スペインはこう見えても色々な国の親分だったことがあります。それはもう途方もない数で中南米の国の殆どがそうだったりします。

「まあ昔の話や」

「そのおかげで俺も言葉がこうなっとるんやけれどな」

キューバが陽気に笑いながらスペインに告げます。実はこの二人の仲はあまり悪くはありません。

「あと俺にや。イタリアんとこのロマーノもやったやろ」

「そやったな。あいつも俺の子分やったことがあるんや」

けれどスペインはこのことを思い出して少し暗い顔になってしまいました。

「何か苦労ばっかりしたわ」

「まあまあ。けれどそれでも縁があったんや」

キューバはこう言って少し落ち込んでしまったスペインを慰めます。

「ええことにしとけや」

「そやな。そうするわ」

「それでや」

そしてここでスペインに提案してきたのでした。

「最近何処もかしこもチーム作ってるし俺らも作ってみいへんか？」

「俺らも！？」

「そや。ラテンだけでな」

こう提案するのです。

「どや？そのロマーノとかイタリアんとこの妹さん達入れてな。結構ええやろ」

「ああ、それ面白いかもせえへんな」

スペインも話を聞いて面白そうだと思ったのです。
「ほなそれやったら」
「ああ、早速皆集めて作るで」
こうして今度はスペイン達でチームを作るのでした。何かあっちこっちにチームが出来ていきます。

第七百二十一話　　完

２００９・５・５

第七百二十二話　轟轟戦隊

第七百二十二話　轟轟戦隊

こうしてメンバーが集められたのですがまずはスペインにキューバにイタリア兄にそれにイタリアのところの妹二人、ルチアとレナータです。合わせて五人が集められました。

「それで色分けとかはどうなったんだ？」

「まずは俺がレッドや」

スペインがイタリア兄の問いに答えます。スペインはまず赤でした。

「親分やからな。別にええやろ」

「まあな。それじゃあ御前がリーダーか」

「そや。俺がレッドでリーダーや」

実はレッドがリーダーのチームは学園では他にレンゴウ戦隊だけだったりします。意外なことに。

「それでブラックは」

「俺やな」

キューバが気さくに笑って言います。

「俺がブラックや。ラテンブラックってな」

「じゃあ俺はブルーか？」

イタリア兄は何となく気付いたのでした。

「だったら」

「ああ、やっぱりわかったんやな」

「何かこの色分けだとな。冒険するんだよな」

「そうや。それでイエローとピンクは」

スペインはここで女の子二人を見るのでした。

「ルチアちゃんがイエローでレナータちゃんがピンク。これでどや？」

「うん、私の方はね」

「それでいいわよ」
二人はにこりと笑ってスペインの言葉に答えます。これで決まりでした。
かくしてまた出来上がった戦隊チーム、何か皆が皆作っていきますがスペイン達もでした。今回もまた結構アクの強そうなチームであります。

第七百二十二話　　完

２００９・５・５

第七百二十三話　冒険します

第七百二十三話　冒険します

このチームの大きな特徴は何と言ってもただ戦うというか学園の掃除をするだけではないのです。そう、もう一つというかそちらの方が重要なのです。

「そう、宝物を探すんや」

「へえ、それって面白いかも」

レナータがスペインの言葉を聞いて明るい声をあげます。

「宝物ね」

「プレシャスしゃな。それを探すのがメインの目的っていうのはどないや？」

「いいかも。何せ他のチームってお笑いに走ってるからね」

「特に生徒会のレンゴウチームがそやな。イタちゃんとことかポーランドのとこもかなりあれやけれどな」

実は他のチームはお掃除以外では殆どお笑い扱いされていたりします。特に酷いのはレンゴウチームだったりします。ちなみにこのラテンチームはリーダーは勿論スペインでサブリーダー兼参謀がレナータになっています。

「それとは一線を画してや。冒険するで」

「わかったわ。じゃあそういうことでね」

「よっしゃ、ほな今から俺の指示で皆動くんや」

そうしてここで皆を集めます。

「ラテン戦隊、ゴーや」

「それでリーダーの呼び名は何てするの？」

レナータはこのこともスペインに対して尋ねます。

「やっぱりリーダーかレッドなの？」

「いや、ここはもっとちゃう名前を考えてるんや」

スペインは少し間を置いてからレナータに答えました。
「チーフってのはどないや？」
「ふうん、チーフね」
「そや。これでどうや？」
「いいんじゃないの？格好よくて」
「よし、じゃあこれで決まりやな」
こうして目的とスペインの呼び方も決まりました。何気に和気藹々としたチームです。

第七百二十三話　　完

２００９・５・６

第七百二十四話　制服は

第七百二十四話　制服は

今のところ全部のチームに制服があります。それぞれのカラーに合わせて制服の色も決めているのですけれどそれはこのチームでも踏襲されています。

スペインが赤、キューバが黒、イタリア兄が青、ルチアが黄色、そしてレナータがピンクです。そうしてもう一つ踏襲されていることがあります。

「女の子はミニスカートなのね」

「それが決まりなのね」

「そや、これは絶対に外せへんらしいんや」

最悪キュロットか半ズボンです。ただし男だと絶対にズボンです。だからイギリスやラトビアはズボンなのです。

「絶対にな」

「何かそれってあからさまなサービスのような気がするけれど」

「ねえ」

勿論ルチアとレナータもミニスカートです。そしてこのミニスカートがまた。

「何かスウジクとか恋姫のそれよりも短いっていうか」

「今までで一番短くない？」

「デザインしてくれた人のグッジョブや」

スペインは能天気に言います。

「まあ下には黒いスパッツはけばええからな。安心するんや」

「っていうか何でそこまでしてミニなの？」

「ハンガリーさんも台湾さんもそれ言ってるけれど」

「だからや。ちらりとするのがええんや」

スペインの言葉は実にあからさまなものでした。

「ＰＴＡが五月蝿くてスパッツになったのはかなり悲しいことやけれどな」
「それまでが極端過ぎたんじゃないの？」
「チェンジマンとかシリーズ違うけれどシャイダーとかスピルバンとか」
何気にそんなことも知っている二人でした。何はともあれ生足出しは意固地なまでに守られるのでした。もっとも侍の人達は少し違いますが。

第七百二十四話　　完

２００９・５・６

第七百二十五話　チーフは赤です

第七百二十五話　チーフは赤です

スペインのカラーは赤、それは決まっていることですがこのチームリーダーの権限が他のチームに比べて結構以上に大きかったりします。

「何か俺が実際に作戦決めたりするんかいな」

「そうや。結構責任重大やぞ」

「そうやな。何か肩が重いな」

キューバにかなり呑気に応えます。リーダーであることはそれだけで何か重いものがあるのですがこの人はあまりそうしたものは感じられません。

けれどそれでもリーダーなのでやることはやらないといけません。ところがこのチームは。

「まあ今日も適当に楽しくやろうぜ」

「言われなくてもやってる」

まずはイタリア兄がこんな調子で言葉を返してあとはシェスタです。そしてルチアやレナータは結構しっかりしていますがお兄さんのフォローで大変です。

「ほらお兄ちゃんしっかりしなさい」

「ちゃんと起きて服も着て」

お兄さんというよりは手のかかる大きな弟です。そしてキューバだけがまともですがこの人もしょっちゅうアメリカとある人を間違えてしまいます。

「だから僕はカナダなんだって！」

「あっ、悪い」

こんな色々とあるメンバー揃いですがリーダーは相変わらず呑気です。能天気にのんびりして。

「まあゆっくりとコーヒーでも飲んで落ち着こうや」
「おうよ。そやったらアイスもあるで」
キューバもアイスを出して皆で食べだします。
「お掃除も後で皆でゆっくりとやってな」
「気楽にいこうで」
それでもチームの雰囲気自体は穏やかで和やかなものです。しかもとても明るくて。皆楽しくやっているチームであったりします。

第七百二十五話　　完

２００９・５・７

第七百二十六話　食べ物を作ると

七百二十六話　食べ物を作ると　　第

スペインはレッドですがその色はちゃんと料理にも出ています。とにかくトマトを大量に使うのです。

「これはそもそも俺が新大陸から持って来たもんやしな」

「だからそんなに使うのか？」

「そや。美味しいし身体にもええ」

イタリア兄に応えながらお料理を作っています。それはスペインの名物料理であるパエリアです。当然そこにもトマトをたっぷりと使います。

そこに大蒜もオリーブもです。この辺りはイタリアのお家の料理と同じですが味付けは違います。その辺りは簡単に言うとスペイン風です。

そしてお菓子も赤いものが多いです。闘牛のマントも赤で赤尽くしです。

「赤はええ色やで。目立つしな」

「青よりも目立つのは確かだな」

「ただな。実は牛は赤とかそういうのはわからへんかったりするんやな」

今は闘牛をしながらイタリア兄に説明をしています。みらびやかなマタドールの服も赤です。そのうえ金色まで使っていて物凄い派手な服です。

「それで何で牛が向かって来るんだ？」

「マントをこうたなびかせるやろ」

実際にマントをたなびかせてみせます。すると牛が向かってきます。

「こうやるとや。来るから」

「それでそこを突くわけだな」
「そういうことや。赤いので興奮するわけやないんや、これが」
言いながら牛をかわしてそのうえで突きを入れます。
「後はこの牛をや」
「何だ？ステーキにするのか？」
「そやな。赤い血の滴るのがええな」
やっぱりここでも赤でした。スペインと赤はかなり似合っているのは確かなようです。スペイン自身も赤が大好きなのでいい具合になっています。

第七百二十六話　　完

２００９・５・７

第七百二十七話　ブラックですがホットです

第七百二十七話　ブラックですがホットです

ラテングラックはキューバです。よくブラックはクールなキャラなのですがこの人は違います。陽気で気のいいチームのムードメーカーの一人です。

「飾ったり自分隠すのは性に合わへんからな」

気さくに笑ってこう言います。

「それよりも俺らしくや。まあアイスでも食って話でもしよか」

「そやな。このアイス甘うてめちゃ美味しいわ」

その横ではスペインがそのアイスを楽しい顔で食べています。そのアイスを毎日食べているせいで少しメタボ気味なのですがそれでもあまり気にはしていません。

「そういえばブラックってクールだけれど」

レナータがふと言います。

「他のチームのブラックもあまりクールじゃないわよね」

「そういえばそうやな。レンゴウのところのフランスもそうやしバルトのところのリトアニアも」

「リトアニアさんなんかリーダーだし」

レナータはまたキューバに対して言いました。

「かなりの苦労性だしね」

「それ考えたらブラックがクールってわけやないんやな」

「っていうかそれ昔の話なんじゃないの？」

レナータはとりあえず思い出してみましたが確かに最近そうしたブラックはいません。

「フランス兄さんなんか特に」

「あれはちょっとやり過ぎや」

キューバはフランスの話になると顔を少し曇らせました。

「お笑い特撮のネタ要員やからな、あれは」
「ダンスの時の顔もあれだったし」
「少なくともこのチームにダンスはないし俺はあそこまで崩れへんからな」
　ホットで気さくでも下ネタには走らないキューバでした。その口には煙草が格好よくあります。

第七百二十七話　　完

２００９・５・８

第七百二十八話　トレジャーハンター

七百二十八話　トレジャーハンター　　第

キューバのいた場所は昔は海賊の集まる場所でした。今ではサトウキビやバナナの栽培、それに何といっても観光で有名な国ですけれど昔は海賊がいて大暴れしていました。それで今もお宝を集めることは得意だったりします。

「速き冒険者つっても海がメインやけれどな」

「そういえば私達って海に強いメンバーばかりよね」

「そうね」

ルチアとレナータがそのことにふと気付きました。

「私達だって海でやってきたし」

「スペイン兄ちゃんだってそうだしね」

「それを考えたら同じなんやな」

キューバは煙草を楽しげにくるらせながら述べました。

「俺等ってな」

「それでキューバさんもやっぱり海のお宝集めるのは得意なのよね」

「やっぱり」

「その通りや。名付けてバッカニア」

もう早速海賊の服を着ています。

「素早く動いてそうして勝ち取っていくんや。こうやってな」

「あっ、もう集めてきたの」

「うわ、凄いわねこれって」

キューバが二人に見せてきたのは宝箱の中に満杯の金貨でした。

これは確かに凄いです。

「皆で山分けでどうや？」

「何かプレシャスって凄くいいかも」

「そうよね。このチームって最高かも」

二人は笑顔で言います。ところがここでリーダーが来て言うのでした。

「ああ、それ俺が昔海の中に忘れたもんやわ」

「おいおい、しっかりしてくれんと頼むで」

キューバはそんなスペインの言葉を聞いて苦笑いでした。その横ではイタリアの妹二人が残念な顔です。プレシャスといってもそれがそっくりそのままメンバーのものになるわけではないみたいです。

第七百二十八話

２００９・５・８

第七百二十九話　女好きはブルー

七百二十九話　女好きはブルー　　第

三人目はイタリア兄です。彼の色はブルーです。このチームでブルーといえば三番目でしかも軽いです。おまけに女好きときてはこの人以外いないのでした。

「何か滅茶苦茶適当な理由じゃないか？」

「そうか？めっちゃ会ってると思うんやけれどな」

本人は不服ですけれどスペインも他のメンバーもそれで合っていると見ています。この辺りは個人の認識の違いが出てしまっています。

「それで俺のヒロインは誰なんだ？」

「ああ、それはなしや」

何とも悲しい現実です。

「女の子はなしや。残念やったな」

「何だ？じゃあリヒテンシュタインちゃんを風の忍者とかにはしないのかよ」

「全然キャラちゃうぞ」

ここまで強引なことは流石にできなかったのでした。そもそもそれをやると。

「じゃあ御前はずっとあそこの兄貴と喧嘩したいんか？」

「それは遠慮しておく」

誰もスイスと揉めたくはありません。そもそもこのチームにしろ他のチームにしろ特にそうした敵はいないのです。敵といえば学校を汚す不埒な輩といったところでしょうか。

「じゃあ今日もあれか」

「そや、掃除や」

スペインは早速箒を出してきました。

「今日も頑張るで。ええな」
「わかった。まあ仕方ないな」
こうして彼はお掃除をはじめました。お宝探しもいいのですがこうしたお掃除もこの人達の大事なお仕事なのでした。見れば他のチームもせっせとお掃除をしています。

第七百二十九話　　完

２００９・５・９

第七百三十話　ナンパしても実は

百三十話　　第七

　ナンパしても実は
ラテンブルーことイタリア兄、当然ながら戦力としては全く頼りになりません。この辺りは本当に兄弟で同じです。兄弟揃って弱いのはもう誰もが知っていることです。
「まあ喧嘩や俺に任せるんや」
キューバがいつもの気さくな笑みで言います。
「そういうことは得意やからな」
「じゃあ俺は何をすればいいんだ？」
「情報収集でもしてくれや」
こう彼に言うのでした。
「女の子から情報聞き出してな」
「わかった。じゃあそうさせてもらう」
こうして得意のガールハントから情報収集にかかります。ところがその情報が思ったより手に入らないのでした。
「何でや？情報集まってへんぞ」
「子絵をかけたのがリヒテンシュタインだった」
何と彼女だったのです。あの。
「声をかけた途端にあいつの兄貴が出て来て追っ払われた」
「だから御前何であいつに声かけるんや」
「女の子になら誰でも声をかけるのが基本だ」
「あからさまにあれやろが」
流石のスペインチーフも窘めずにはいられません。
「もうちょっと情報持ってそうな娘に声かけろや」
「じゃあハンガリーか？」
「そいつもスウジクチームやろが。相手は考えんかい」
実はそういうことは考えていないイタリア兄でした。どうにもこ

うにも情報収集においても使いどころが難しい人のようです。困ったことに。

第七百三十話　　完

２００９・５・９

第七百三十一話　とにかくスカートの丈が

第七百三十一話

とにかくスカートの丈が
黄色が女の子なのはチームによって違いますがこのチームでは女の子です。勿論その場合は制服はミニスカートです。ラテンイエローことルチア、しかもこのスカートがこれまた。
「何でこんなに短いのよ」
「いやあ、あのプロデューサーさんってホンマわかってはるわ」
スペインはスカートが気になって仕方のないルチアの横でにこにことしています。
「スカートの丈が短いのはええことや」
「お兄ちゃんにはいいことでも私はちょっと」
「嫌か？」
「ちょっと動いたらすぐ見えそうなんだけれど」
しかもルチアのスカートはひらひらしたものです。レナータのそれがタイトなのと比べるとかなり危険です。しかもとにかく短いのです。
「っていうか何か女の子がチームにいると絶対に足見せないと駄目なのね」
「まあそうや。その辺りはわかってくれや」
「ライダーは女の子ズボンが多いのに？」
番組が違えばそうなるのです。しかしです。
「あっちもヒロインいるのに」
「そういえばあっちは半ズボンになることが多いけれどな」
「半ズボンはまだ見えないからいいけれど」
ルチアはまだ自分のスカートをちらちらと見ています。
「アクションも多いのに。洒落にならないわよ」
「まあその時はあれや。黒スパッツをはいてやな」

「スコートじゃないのね、もう」
「何ならすコートにするか？俺は別にええで」
「どっちにしろ見えること前提なのね」
それがわかってまた嫌な顔になるルチアでした。この辺りは仕方のないことでした。

第七百三十一話　　完

２００９・５・１１

第七百三十二話　キャラも違っています

第七百三十二話　キャラも違っています

ルチアは少なくともお家の兄二人よりはずっと強いです。しかも二人に比べるとかなりしっかりしています。イタリア女は強いのです。

「何かうちのチームも女の子が頼りになるんやなあ」

「っていうかお兄ちゃん達がだらしなさ過ぎるのよ」

プレシャスを見つけてきたルチアは相変わらず喧嘩はからっきし弱くて逃げ去った兄の背中を見つつスペインに対して述べます。

「喧嘩弱過ぎるし迂闊だし」

「けれどそれがイタリアちゃうんか？」

「あくまで男限定よ」

言いながら眉を顰めさせています。それもかなり。

「男がだらしないとね。女は必然的に」

「しっかしせんとあかんのやな」

「そういうこと。もっともスウジク戦隊なんてヴェネチアーノお兄ちゃんがいても物凄く強いけれどね」

「まああそこはリーダーがしっかりしとるし」

そのドイツです。というよりかは彼以外にリーダーができないチームなのですけれど。

「プロイセンもおるしなあ。日本までおるし」

「ロマーノお兄ちゃんは威勢だけはいいけれど」

ルチアの不満はなおも出されていきます。

「いざ喧嘩になったらさっぱりだから」

「まあ頼むわ。御前とレナータが戦闘の際の要やからな」

「お兄ちゃんとキューバさんも頼りにしてるのよ」

「えっ、俺もか？」

「そうよ。結構やるじゃない」
実はスペインも昔は結構強かったのです。今もその強さは欧州では上の方だと言われています。呑気な顔をしているのですけれど。
「頼むわよ、いざって時には」
「まあそうさせてもらうわ」
相変わらず呑気なスペインです。けれどこのチームも何だかんだで雰囲気がいいです。はっきり言えばレンゴウチームが悪過ぎるのですが。

第七百三十二話　　完

２００９・５・１１

第七百三十三話　深き冒険者

七百三十三話　深き冒険者　　第

五人目はレナータ、彼女がラテンピンクです。ピンク色のジャケットにそれにミニスカート、それにブーツ。やっぱりスカートはかなり短くなっています。

「おめえの席ねえからとか言わないの？」

「ああ、それは役がちゃうからええわ」

キューバが彼女に説明します。ついでに言えば海の中にその服のまま飛び込んでプレシャスを手に入れるというのもいいと言われています。

「それで御前の役割やけれどな」

「何だったっけ。ただのメンバーじゃなかったよね」

「一応サブリーダー兼参謀やけれどな」

「っていうかそれって私のカラーとは全然違うんじゃないの？」

レナータはその役割を聞いて思わず言葉を返してしまいました。

「参謀？そもそもサブリーダーってうちのチームじゃうちのロマーノ兄貴がなるんじゃないの？」

「それか俺やったんやけれどな。あいつも俺もそういうカラーやないしな」

キューバも自分はそれに向いていないと思っているのでした。この辺りは自分でもわかっているようです。確かにこの人もサブリーダーとか参謀とかいう人じゃないです。

「そやから御前がや」

「参謀ねえ。あまりカラーじゃないけれど」

そう言われても首を傾げるばかりのレナータです。

「まあとにかくよ。私以外にそれできる人がいないのよね」

「おらんなあ。まあそうことやから頼むわ」

「わかったわ。できるかどうかはわからないけれど」
「そういうことやからな。まあ色々と大変やろけれどな」
「とりあえずパスタ作って皆で食べましょう」
腹が減っては、ということでしょうか。何はともあれラテンチームの参謀は彼女になるのでした。何か今一つ合わない感じでありますけれど。

第七百三十三話　　完

２００９・５・１２

第七百三十四話　作戦中は

第七百三十四話　作戦中は

かくしてチームのサブリーダー兼参謀になったレナータ。ですが参謀といいましてもあまりすることはありませんでした。

「あれ、私が特に言わなくてもやっていけてるの」

「いけてるっちゅうか平和にやっていけとるわ」

スペインは明るく笑って彼女に答えます。

「俺等のチームって結構和気藹々ってしとるしな。平和やったら特にあれこれ考えて動く必要もないみたいやな」

「チームの雰囲気って大事なのね」

「まあスウジクチームみたいに特攻とかは考えへんでええからな」

日本の悪い癖です。窮地に陥ると玉砕戦術をすぐ主張しだします。いつも台湾がそれに賛成して大変なことになってしまうことが常なのです。

「あと作戦行動中はや」

「お掃除とかの間よね」

このチームではそうした時を作戦行動と言うのです。この辺りは結構格好をつけていたりします。あまり意味はないような気もしますけれど。

「その時に何かあるの？」

「あれや。それぞれのコードネームで呼ぼうで」

こうレナータに対して提案するのでした。

「例えば俺はレッドで御前がピンクや」

「あっ、それって格好いいわね」

レナータはスペインの言葉を聞いて頷きます。

「それじゃあ皆その名前でね。格好よくね」

「そや。冒険は格好ええものやからな」

スペインににこにこと笑って言います。
「やるとなったらとことん格好よくやりたいしな」
「そうよね。そうか、ピンクかあ」
レナータは自分のカラーについて思うのでした。
「いいじゃない。色で呼び合うのよ」
「ほな決まりやな」
こうして作戦行動中の呼び方も決まるのでした。このチームもかなりいい感じになってきているようです。

第七百三十四話　　完

２００９・５・１２

第七百三十五話　ラテン六人目

百三十五話　　ラテン六人目　　第七

恒例の追加メンバーですがここで一つ問題がありました。何しろこのチームはラテン戦隊です。ラテン系でないとメンバーにはなれないのです。

「それで六人目いるんだよな」

「そや」

スペインはイタリア兄の問いにいつもの明るく呑気な調子で返事を返します。

「それはもうおるで」

「おるでって言われても誰なんだよ」

イタリア兄にはそれが誰なのかさっぱりわかりませんでした。

「俺がいて妹達がいてキューバがいて」

「それで俺やな」

「じゃあこれで全員じゃないか。一体誰がいるんだよ」

「昔御前の爺ちゃんとそいつのお母さんが付き合いあった人や」

スペインはまた言葉を返したのでした。

「さあ、誰や？」

「エジプトじゃないよな」

これはわかります。エジプトはどう見てもラテン系ではありません。元々はセムとかハムとかいう系列の人だったらしいのですが今ではかなりわからなくなっています。

「フランス兄貴もあいつの妹も別のチームだしな」

「それにその連中母ちゃんよおわかってへんやろ」

「そういえばそうだな。となると」

ふとイタリア兄もそれが誰かわかったのでした。

「あいつか」

「そや、あいつや。一応ラテンにも入るしな」
「何かかなり強引だな、おい」
これでイタリア兄もその六人目が誰かわかったのでした。さて、その遂に登場する六人目のメンバーとは一体誰なのでしょうか。

第七百三十五話　　完

２００９・５・１３

第七百三十六話　ラテンシルバー

第七百三十六話　　ラテンシルバー
　最後の六人目は何とギリシアでした。スペインから皆に紹介された彼はとはいっても緊張した様子もなくやっぱりとてものんびりとした調子です。
「宜しくな」
「まさかギリシアさんだったなんて」
「意外っていうか」
「とりあえず友達がいるのは嬉しい」
　こうは言っても表情はあまり変わらなかったりします。
「楽しくやろうな」
「そういえばうちにしろギリシアさんのお家にしろ」
「そうよね」
　ルチアとレナータはここであることに気付いたのでした。それは。
「お宝一杯よね」
「もう少し何処か掘っただけでね」
「あと俺の家は猫も多い」
　ギリシアはここで急に訳のわからないことを言ってきました。
「そちらも宜しくな」
「ああ、俺も猫は好きやしな」
　キューバはそんな彼に対してもいつもの気さくさで返します。彼もかなりの大物です。
「あと俺の家の周りの海にもお宝がどっさりやしな」
「そうだな。俺も海は好きだ」
　何か噛み合わないようでそれでいて上手くいっている会話です。
そうしてギリシアは今度は皆に対してあるものを渡してきました。
それは。

「あと身体にいいから」
「これだけは忘れないんだな」
「シルバーだからな」
イタリア兄に応えながら渡してきたのは生野菜でした。何故かそういうものも常に持っている不思議なシルバーなのでした。

第七百三十六話　　完

２００９・５・１３

第七百三十七話　プレシャス探し

百三十七話　プレシャス探し　　第七

このチームは何といってもお宝探しがメインです。そうしたことを考えますとやっぱりイタリアやギリシア、キューバのお家の人達がいることが有り難いです。

そのお宝探しですがどうするかというと。

「今日はここを掘るのか」

「ここ掘れわんわんや」

ギリシアにスペインが応えています。六人でそれぞれつるはしやスコップを持ってそれでギリシアのお家にいます。他には一輪車やそういったものも持って来ています。当然皆それぞれのカラーの制服でそのうえ手袋までしています。

「さて、早速掘ってみるか」

「何が出て来るか俺にもわからない」

ギリシアはぽつりと言います。

「それでもいいんだな」

「それが面白いからええんや」

スペインもある意味大物です。何が出ようが構わないというのですから。

こうして皆で掘ります。それでまず見つかったのは。

「女神像やな、これは」

「アフロディーテだ」

ギリシアはその女神像を見て述べます。

「それに神殿まで出て来たぞ」

「そんなもんまで埋もれてるんか」

「俺の国では普通に出る」

流石にこれは予想していなかったので少し驚いているスペインに

対してギリシアはごく普通に答えます。
「それにさっき何が出て来るかわからないからいいと言っていなかったか？」
「そういえばそっか」
何か自分でも納得しているスペインでした。こうしてお宝はまずは神殿だったのでした。

第七百三十七話　　完

２００９・５・１４

第七百三十八話　キューバの近くの海は

第七百三十八話　キューバの近くの海は

冒険は普通にギリシアとかで発掘するだけではありません。他にも秘境に飛び込んでそこでお宝を探し出すこともあります。むしろこちらの方が本当の冒険なのかも知れませんが。

「まあ俺の近所の海も大概危ないけれどな」

「そうなんか？」

「大蛸出るらしいで」

いきなりとんでもないものが出て来るようです。

「それこそな。何十メートルのがや」

「御前の国の周りはそんなえげつないのがおるんか！？」

これは洒落になりません。普通の蛸なら美味しくいただけますが何十メートルともなると流石にそうはいきません。というかこちらが食べられてしまうレベルです。

「ジョーズだけやないんかい」

「他にも恐竜が出るって噂があるな」

おまけに大蛸だけではありませんでした。

「それで昔アメリカの奴の少年四人が襲われたとかそれより前には海軍が出る位の騒ぎがあったらしいしな。まあどっちもホンマかどうかわからへんけれどな」

「何かえげつない話あるなあ」

スペインもこれには流石にびっくりです。

「昔中南米を探検した時のことを思い出したで」

「あの時恐竜に会わへんかったんか？」

「んっ！？そういえば」

ここでスペインは昔のことを思い出してみました。そうして何となく思い出したのは。

「結構おったような気がするわ。海でも見たような気がするしな」
「そやろ?何だかんだ言っておるもんみたいやで」
「みたいやな。何かお宝よりも気になるもんがあるな」
冒険をしていると時としてそうした存在に出会うこともあるようです。世の中わかっていないことはまだまだ多くあります。

第七百三十八話　　完

２００９・５・１４

第七百三十九話　結構一杯います

第七百三十九話　結構一杯います

そうした正体不明の生物といえばやっぱりある人の国にいているオゴポゴですが他にも色々といます。例えばこの人のお家の。

「えっ、あれってインチキ写真やったんちゃうんか？」

「インチキ写真だったのはあれだけだったんだよ」

イギリスがスペインに対して話していました。

「あれだけな。他の写真は目撃例は否定できない奴が多いんだよ」

「そうやったんか」

イギリスの北の方になるネス湖という湖には昔から謎の生き物がいると言われています。その正体は色々と言われていますが全くの不明のままです。

「けれどホンマにおるにしても何でコブがあったりなかったりそれも幾つもあったり色々あるんや？」

「さてな。そう言われるとな」

イギリスも首を傾げてしまいます。

「俺もわからん。どうしてかな」

「しかもツノがあったりなかったりもするやろ」

謎はそれだけではなかったりします。

「それがわからへんねんやけれどな」

「ツノもわからないがそもそも何なんだ？」

イギリスも考えるしかありません。

「流木にしても動きが多かったりするし湖の上からあがっていたって話もあるしな」

「ホンマに一つの種類の生き物か？」

「そう言われると余計に自信がないな」

目撃されるといってもそれが一つとは限らなかったりします。

「牛の死体とかアザラシとか本当に恐竜とか色々言われてるけれどな」
「何なんやろな」
「俺もそれが知りたい」
何とも謎に包まれたネス湖の怪獣です。最近とんと見かけませんが本当にその正体は何なのでしょうか。それは今もわかっていません。

第七百三十九話　　完

２００９・５・１５

第七百四十話　こんな事件もあったのです

第七百四十話

こんな事件もあったのです

これはドイツがイタリアとはじめて出会った第一次世界大戦の時のことです。この時ドイツは潜水艦を使ってイギリスの船をどんどん沈めていました。それでこの日もイギリスの船を見事に撃沈して海に上がってその様子を見守っていました。

船は爆発して火を噴いています。それで海の水やら荷物やら何やらを吹き上げています。その時あるものが吹き上げられたのを見たプロイセンが驚いてドイツに対して叫びます。

「おい相棒あれ見ろ！」

「どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもねえ！あれは何だ！」

「！？あれは！！」

ドイツもそれを見て驚きの声をあげます。何と船の爆発から見たこともないものが上に吹き飛ばされていたのです。それは十メートル以上もある細長いものでした。

四つの小さな足のようなものがあって尻尾や首は鰐にとてもよく似ています。けれどここは欧州の北の方の海です。つまり鰐がいる筈がないのです。

「鰐じゃねえぞ、絶対」

「うむ、それは間違いない」

プロイセンもドイツもそれは確信していました。

「こんなところに鰐は棲めない。寒いからな」

「じゃああれは何なんだよ！」

プロイセンはまた驚いて彼に対して言います。

「鰐じゃなかったら何だ！？あんな生き物見たことねえぞ」

「わからん。あれは一体」

その吹き飛ばされてしまった謎の生き物はやがて海に落ちてそれっきりでした。後は何も見えませんでした。

けれど二人はその謎の生き物を確かに見たのです。いる筈のない生き物、その正体は今になってもわかっていません。ただ二人はその謎の生き物によく似た昔の生き物を知っているのでした。

「これだな」

「ああ、間違いない」

二人が真剣な顔で図鑑に載っているその生き物を見ています。それは紛れもなく大昔の恐竜でした。

第七百四十話　　完

２００９・５・１５

第七百四十一話　イギリスでは他にも

第七百四十一話　イギリスでは他にもあまりにも有名なネッシーがいるそのイギリスですが実は他にもいたりします。妖精や幽霊だけでなく他にもいるということがかなり凄いです。

「モラグっていうんだけれどな」

「モラグ？また変わった名前だな」

「はっきり言えばネッシーと同じだよ」

こうドイツに対して説明しています。

「恐竜だって言われてるしな」

「何か御前の国は妖精以外にも色々といるのだな」

ドイツはこのことにも気付いたのでした。

「ネッシーの目撃例もかなり古いしな」

「そうなんだよな。まあ普通にペット捨てる奴もいるしな」

これはこれでかなり問題です。

「それでピューマとか出て来て大騒ぎになったんだよ」

「それはまたかなり深刻な問題だな」

ドイツはイギリスのその話を聞いてまた言いました。

「ペットを捨てるというのもな」

「まさかとは思うがネッシーやモラグもそうした捨てたり逃げ出したりしたペットなんじゃねえか？」

イギリスはこんなふうにも考えだしました。

「鰐とか大蛇とかよ。有り得るだろ」

「しかしそれなら昔から目撃例はない筈だが」

ドイツはそこを指摘します。その頃にはイギリスのお家の人達はそんなペットは飼っている筈もないからです。精々犬とか猫といったところでそれもかなり実用的なものでした。

「確かネッシーの最初の目撃例は七世紀辺りだった筈だが」

「だよな。じゃあやっぱり恐竜なのか？」
結局答えは出ませんでした。正体のわからない動物はこの時代でもいるのでした。

第七百四十一話　完

２００９・５・１６

第七百四十二話　アルプスにもいます

第七百四十二話

アルプスにもいます

確かにイギリスのネッシーはあまりにも有名ですが欧州にも他にもそうした生き物の噂はあります。例えばイタリアの北にあるアルプスのところにいると言われているのは。

「タッツェルブルムって何なのかな」

「ああ、あれは何なんだ？」

イタリアとドイツが話をしています。この不思議な生き物のことはイタリアだけでなくドイツもよく知っています。アルプスはドイツにもあるのですから。

「何かやたらと大きくて胴の長いトカゲみたいな生き物だがな」

「そうだよね。オオトカゲ？」

イタリアは首を少し傾げさせて言いました。

「あれってやっぱり」

「しかし後ろ足がないしな」

ドイツはこのことも気になるのでした。

「いや、あったか？目撃例によってはあったりするな」

「だよね。これも気になるし」

どうもこの辺りはあやふやだったりします。けれど大抵はないといいます。

「そもそも爬虫類だったら何で寒いアルプスにいるんだろ」

「両生類という説もあるしな」

どうも話が混乱しているのです。足があったりなかったり。爬虫類だったり両生類だったり。要するに正体不明の存在なのです。

「何なんだろう、本当に」

「わからないな。ネッシーもわからないがあれもわからないな」

「昔からいるって言われてて見た人もいて」

「間違いなく存在しているのだがな」
いるのはわかっていても正体はわかっていない、そんな生き物がアルプスにもいるのでした。イタリアもドイツもこの生き物が本当は何なのかまだわかっていないのです。

第七百四十二話　　完

２００９・５・１６

第七百四十三話　この国には多いです

第七百四十三話

この国には多いです
「そんなの僕の国には一杯いるよ」
イギリスやドイツの話を聞いたアメリカは明るく言うのでした。
「もうね。数えきれない位ね」
「おい、それは本当かよ」
イギリスの話は知っていたフランスですがアメリカのその話を聞いてびっくりでした。
「御前の国が幾ら広いっていってもそんなにいるのかよ」
「そうさ。見てくれよ」
こう言ってまず指差したのは五大湖でした。カナダとの国境でもあるこの湖はアメリカにとってとても重要な場所です。ミシシッピー河の源でもありその果たしているものはとても大きいのです。その湖にいるというのです。
「ほら、あそこに泳いでるじゃないか」
「何だありゃ」
フランスもその泳いでいるものを見て声をあげました。
「やたらでかくてしかも首が長いって。まさか」
「そうさ、あれがチャンプだよ」
アメリカは何故か胸を誇って言います。
「イギリスのネッシーみたいなものだよ。どうだい、僕の家にもUMAはちゃんといるんだぞ」
「何か御前の家にも本当に色々なのがいるんだな」
フランスはそれを聞いて何かどうにも複雑な顔をしています。
「そういや他にもいたよな」
「そうさ、まだまだいるんだぞ」
アメリカはやっぱり胸を誇って言うのでした。

「チャンプだけじゃないんだぞ」
「宇宙人といい鯨といい。こいつの家もどうなってんだ?」
フランスも首を傾げてしまいます。本当にアメリカのお家も色々な存在がいるのです。正体不明な方々まで。

第七百四十三話　　完

２００９・５・１７

第七百四十四話　それでこんな人も

第七百四十四話　それでこんな人も

東に五大湖あれば西にロッキー山脈あり、アメリカは自然もまたとても雄大です。しかしこのロッキー山脈にまでＵＭＡがいるのでした。

「あの森の中をうろついてる黒くてでかいのがそれなんだな」

「ああ、早速見たんだな」

一緒にいるフランスに対して応えます。見れば二人がいる森の前の方に黒くて大きい人に似た生き物が歩いています。二人はそれを見て話をしているのです。

「そうだよ。あれがビッグフットなんだよ」

「ビッグフット？」

「そうさ。僕の家にいるＵＭＡの一つでね」

やっぱりこれもなのでした。確かにその正体は不明です。

「熊じゃないのはわかるかな。あれは絶対に熊じゃないぞ」

「っていうか御前の家に猿とかああいうのいなかったよな」

生物の分布ではそういうことになっているのです。ですからアメリカのお家にはとても今日の前に歩いているような生き物はいない筈なのです。けれど何故かいます。

「じゃあやっぱりよ」

「だからあれもＵＭＡなんだ」

やっぱりそれでした。確かにその正体がはっきりしませんから。しかもこのビッグフット、相変わらず森の中を歩いています。

「チャンプにビッグフット。しかも海からは訳のわからねえ生き物の死体が流れ着いたりってよ」

フランスはそのことをぼやくようにして言うのでした。

「こいつの家は本当にどうなってるんだ？」

「凄いだろ、何ならトカゲ人間も見てみるかい？」
「だからそれ本当に地球の生き物か？恐竜よりやばいんじゃねえのか？」
次から次に出て来る謎の生き物、アメリカの不思議はさらにあるのです。この広い国にはまだ多くの謎があるのでした。

第七百四十四話　　完

２００９・５・１７

第七百四十五話　そのトカゲ人間

百四十五話　　そのトカゲ人間　　第七

「そのトカゲ人間だけれどさ」
アメリカはそのトカゲ人間の話をフランスに対して話します。
「プエルトリコとかにいてやたらと素早くてね」
「何度も言うがそれ本当に地球の生き物か？」
フランスはこのことをかなり疑っています。
「冗談抜きにどっかの星から来てねえよな」
「さあ。そこまではわからないけれど」
実はアメリカにもわからないことなのです。
「うちの国の家畜の血を吸ったりして結構凶暴なんだ、これが」
「やっぱりそれ地球の生き物じゃねえだろ」
フランスにはそうとしか思えないのです。
「血を吸うって。そりゃそういう生き物だっているけれどよ」
「それで困ってるから捕まえようとしたら」
「ああ。どうなったんだ？」
「ガラダとか言って逃げ出したんだ。おかしいよね」
「絶対に地球の生き物じゃねえ」
フランスはそこまで聞いて確信したのでした。
「そういえばまだいるんだよな、他にもよ」
「ジャージーデビルもいるぞ。ほら見てくれ」
アメリカが上を指差すとそこに何か得体の知れない生き物が飛んでいます。見たところ大昔にいた恐竜そっくりです。あの翼竜です。
「ああいうのもいるし。僕の国には本当に多いね」
「それにありゃ何だ？」
フランスはまた得体の知れない生き物の存在に気付いたのでした。
「あの生き物はよ」

そしてまた発見するのでした。怪しい生き物が本当に尽きないアメリカです。

「そういえばあれもいたっけ」

「そういえばじゃねえだろ。何処まで色々な生き物がいるんだ？」

かく言うフランスでもいないわけではないのですがアメリカ程ではありません。何しろ地球の生き物かどうかさえわからない奇怪な存在がうろうろしているような国なのですから。

第七百四十五話　　完

２００９・５・１８

第七百四十六話　殆ど悪魔です

四十六話　　殆ど悪魔です　　第七百

「あれ。何なんだ？」

フランスはこれまで以上に自分の目をごしごしとしてそのうえで目を瞠っています。そうでもしないと今自分が見ているものを信じられないからです。

「人間じゃねえよな、絶対に」

「ああ、あれまだいたんだ」

アメリカはその小屋の側にいる奇怪な人を見ても平気です。何と身体は人間ですけれど頭は羊です。ちゃんと角まで生えています。とりあえず確実に人間ではありません。

「もう死んだと思ってたんだけれどね」

「だから何なんだよあれ」

フランスはとにかくその奇怪な羊人間を見てアメリカにさらに問います。

「流石にあれとトカゲ人間は地球の生き物じゃねえだろ」

「そうだよね。気付いたらあそこにいたんだ」

アメリカは落ち着いてフランスに説明します。

「何だろうね。物凄く不思議だけれど」

「だからあれも地球の生き物か？」

「何か軍があれこれしてその結果出て来たとか言われてるけれど」

実際のところそんな噂もあるみたいです。

「けれど何なのかな。皆気味悪がって近寄らないけれど」

「化け物か悪魔か？」

フランスはもうＵＭＡとさえ思っていません。

「インフェルシアとかそこらへんから来た何かかよ」

「ううん、本当に何なんだろう」

羊人間は二人の前で呑気に山の中を歩き続けています。
「ひょっとしたら悪魔なのかもね」
「ああ、そうでも俺は驚かねえよ」
フランスも今回は言葉がありません。奇怪どころではないこの羊人間、本当に正体は何なのでしょうか。

第七百四十六話　　完

２００９・５・１８

第七百四十七話　野獣

第七百四十七話　野獣

「そういえば御前のところのこういった存在ってよ」
「昔洒落にならねえのが出たぞ」
「そうだったよな」
フランスはイギリスの問いに答えていました。答えるその顔がうんざりとしたものになっています。どうも彼にとってはいい思い出ではないようです。
「野獣だったな、確か」
「そうさ、ジェヴォダンに出たな」
まだフランスの上司が王であった時代のお話です。その時フランスのジェヴォダンという場所に物凄く大きくて凶暴な獣が出たのです。
その獣が暴れて多くの恐ろしいことが怒って。フランスも頭を抱えていたのです。
「これはもう戦争だ」
当時の上司もその出来事に頭を抱えて言いました。
「すぐに軍隊を連れて話を収めてこい」
「えっ、軍隊ですか！？」
「そうだ、軍隊だ」
上司は本気でした。こうして軍隊が集められてそのうえでフランスをジェヴォダンに向かわせました。しかしここで聞いた話がまた。
「えっ、窓のところに座っていた！？」
「狼が！？」
フランスと共にジェヴォダンに来た軍勢はそれを聞いて目を見張りました。
「そんなことってあるのか？」

「狼が窓の縁に座るなんて」
「おかしいなんてものじゃないな」
フランスは話を聞いて首を傾げるのでした。
「そもそもやってることが狼じゃねえしな。一体全体どうしてなんだ？」
「狼にしては襲う部分がおかしいですよね」
「首とか」
「狼は首なんて狙わないしな。やたらと首が狙われてる人間が多いのは何でなんだ？」
フランスはそれがどうしても気になるのでした。そして野獣が本当に狼なのかどうか考え込むのでした。

第七百四十七話　　完

２００９・５・１９

第七百四十八話　おかしなことが多過ぎます

「毛深い男が森の中にいて近くで野獣を見たって人がいた!?」
フランスはそれを聞いてまた首を傾げるのでした。
「何かこれもおかしいよな」
「ですよね。じゃあその男が野獣なんですか?」
「そうなりますよね」
「だよな。そう考えるのが自然だよな」
フランスは兵士達に対しても答えます。
「そのおっさんが野獣だってな」
「けれど狼なんじゃ?」
「違いますか?」
「大体狼って群れなすぞ」
フランスはこのことも言うのでした。
「野獣は一匹だろ。狼は一匹で行動したりしねえぞ」
「ううん、そういえばそうですよね」
「クルトーもそうでしたし」
昔パリでそんな狼も出て来たのです。冬のパリを恐怖のどん底に陥れた狼王でした。
「あと狼って家畜を襲いますよね」
「家畜より人間、それに女の子や子供を好んで襲いますし」
「おかしなことだらけだな」
まさに考えれば考える程でした。フランスにとっても。
「狼の行動じゃねえことばかりじゃねえか」
「ですね。しかもやたらと大きかったりしますし」
「まさか狼男では?」
「有り得るかもな」

フランスもその可能性は否定しませんでした。ここまでおかしなことが多ければです。

「冗談抜きでな。じゃあ銀の弾丸でも用意するか？」

「それもですか」

「ああ、とりあえずはな」

フランスは本気で銀の弾丸を用意しました。話は魔物退治の方向にも向かうのでした。

第七百四十八話　　完

２００９・５・１９

第七百四十九話　とにかく追い詰めて

第七百四十九話　とにかく追い詰めて

「くそっ、今日は何処にいるんだ！」

「あそこに出たとの報告です！」

この野獣は神出鬼没でもありました。ジェヴォダンの深い森の中を自由に動き回ってそのうえで犠牲者を襲っていきます。フランス達はこのことにさらに手を焼いていました。それで焦燥にもかられて精神的にも追い詰められていました。

「これじゃあどっちが狩られてるかわからねえぜ」

「そうですよね。今日も捕まえられませんでしたし」

「やっぱり狼なんでしょうか」

「わからないな、冗談抜きでな」

フランスも今では野獣が本当に狼なのかわからなくなっていました。

「人間にも思えるしな」

「とにかく退治しないことにはどうしようもありませんね」

「このまま放ってはおけませんし」

「まさかと思うが銀の銃弾も用意しとくか」

狼男の可能性も否定できなくなっていました。とにかく何が何でも野獣を退治しないとジェヴォダンの平和は戻りません。連日連夜必死に捜し回っていました。

毎日こうして捜していましたけれど見つからず。フランスは次第に焦りを強くさせていました。

「お疲れみたいですね」

「俺にとっちゃ身体の中のことでもあるしよ」

ジェヴォダンもまたフランスの一部ですからこれも当然のことです。

「そこに変なのがいてそれに国民が苦しんでいたらよ」
「フランスさんにも色々とあるんですね、やっぱり」
「そういうことさ。とにかく早く何とかしねえとな」
フランスはぼやきながらも言います。
「もっと大変なことになっちまう」
「ですね。これ以上騒ぎを大きくしない為にも」
「野獣を何とかしましょう」
フランスは何とか野獣を倒そうとします。そうしてその努力が実って何とか倒すことができたのです。そう、何とかです。

第七百四十九話　　完

２００９・５・２０

第七百五十話　正体は不明のまま

第七百五十話　正体は不明のまま

野獣を何とか倒せたのですがわかったことといえば。何と全く何もわかりませんでした。野獣の正体は不明で多くの人が襲われた事実だけが残されました。

「で、正体はわからなかったのかよ」

「一応でかい狼みたいな奴だった」

フランスはイギリスに対して述べます。

「一応はな。そいつを倒したらそれで野獣は出て来なくなった」

「じゃあやっぱり狼なのか？」

「それにしちゃおかしな部分が多過ぎるだろ」

「そうだな。俺もそう思う」

イギリスも狼のことは知っているのでこう答えました。

「首を狙う？何か訓練されてたのか？」

「だろ？それがどうしてもわからないんだよ」

フランスは今もこのことを妙に考えているのでした。

「今でもあれこれ国民と一緒に考えてるんだけれどよ」

「答えは出ないのか」

「考えれば考える程わからねえ」

首も左手も横に振るばかりです。

「何なんだろうな、本当にな」

「実際は銀の銃弾で倒したわけじゃないんだろ？」

「それはなかったけれどな。狼男じゃなかったのは間違いないとは思うぜ」

「思うだけかよ」

「いや、とにかくおかしなことが多過ぎるんだよ」

フランスはとにかくまだ野獣が何だったのかさっぱりわからない

のでした。
「とにかくあんな奴ははじめてだ。本当にな」
「そうだな。俺も野獣は狼には思えないな」
「御前もそうなんだな」
今だにこの野獣が何だったのか、フランスはわからないでいるままです。

第七百五十話　完

２００９・５・２０

第七百五十一話　野人

第七百五十一話　野人

広い中国、当然ながら怪しい生き物も存在しています。何を隠そう今では中国のマスコットとも言えるパンダにしろかつてはそんな扱いでした。

けれどパンダの他にも不可思議な存在がいます。例えばある山奥には。

「昔からこの辺りに野人がいると言われてるある」

「何か今にもビッグフットなんかが出そうな場所だね」

「ヒバゴンがいてもおかしくはないです」

アメリカと日本も中国が紹介したその山を見て言います。

「そういえば昔から中国さんの山では神様がいると言われていましたが」

「神様だけでなく妖怪とかそういった存在もいると言われていたある」

山に色々なものがいるのはどの国でも同じです。聖邪が混在しているのが山なのです。

「それでここにはその野人がいるあるが」

「何か全身毛に覆われていてそれでやたらと大きいらしいね」

「そうある。昔からいるとされているある」

その存在はかなり昔から言われているようです。

「果たして何者なのかはわからないある。女の子を攫うという噂もあったある」

「何かそれを考えると危ないのですね」

「そうだね。ビッグフットなんかはいるだけだけれど」

日本とアメリカはまた言います。

「ここの野人は違うかも知れないんだな」

「最近は特におかしなことをしないみたいあるが」
中国はその辺りはかなり自信がないみたいです。顔にそれが出ています。
「それでも。正体がわからない生き物がいるのは気持ちがよくないある」
「確かに。中国さんのお家には昔からそういう方々が多いようですし」
そもそも上司も龍だったりしますし。中国のお家にもやっぱりこうした生き物がいます。

第七百五十一話　　完

２００９・５・２１

第七百五十二話　鹿で魚を釣る

第七百五十二話　鹿で魚を釣る

野人だけでなく他にもいます。湖にもいる生き物がいます。それは決して恐竜とは限りません。中国にもそういう噂がないわけではないですがこの湖にいるのは。

「ああして鹿を置いておくとある」

「ああ、あれハリボテだね」

「何か妙に似ているようで似ていないのですが」

ふまたアメリカと日本が中国の説明を聞いています。湖のほとりに鹿のハリボテを置いています。とりあえずそれを置いて離れたところから見ているのです。そのハリボテがどうにもこうにも精巧なようでそうでないのです。

「まあそれはいいとしまして」

「それで何が出て来るんだい？」

「見るよろし」

中国が言うとそこで、でした。何と湖から物凄く大きな魚が出て来てそのうえでその鹿のハリボテを飲み込んでしまいました。それで瞬く間に湖の中に消えてしまいました。

「あれがこの湖にいる生き物ある」

「ええと。鮫かな」

「鯨ではないですよね」

流石に二人も今出てすぐに消えた魚を見て唖然としています。

「あれだけ大きな魚がいるなんて」

「どういう湖なのですか？」

「下手に近付いたら食べられるかも知れないから調べられないある」

さしもの中国もこの湖にはお手上げのようです。

「そもそもあんな大きな魚がいるものあるか？」

「河や湖にはいなかった筈だけれど」
「オオナマズやピラルクより大きいですし」
二人も知らないこの巨大な魚、中国もまた物凄い生き物がいます。
世の中というものは本当に永遠の謎でもあります。

第七百五十二話　　完

２００９・５・２１

第七百五十三話　まだできたばかりなのに

第七百五十三話

まだできたばかりなのに

野人の話はもう長い間有名ですが中国で最近一番有名なそうした生き物はやっぱり韓国との国境にある山の湖にいる生き物です。それが何なのかはやっぱりわかっていません。

「恐竜なんだよね、やっぱり」

「さて、どうあるかな」

アメリカの問いにも首を捻る中国でした。

「恐竜ならもう遥か昔のことあるな」

「そうだよね。それは確かに」

「あの湖はまだできて三百年しか経ってないある」

「あれっ、それだけなんだ」

「それだけある。だから恐竜がいる筈がないある」

そうなのでした。できてまだ三百年でどうして恐竜がいるのか。いる筈がありません。

「だから間違いなく別の生き物あるが」

「さて。それでも問題はそれが何かですよね」

日本は首を捻りながらその湖を見ています。

「果たして。何なのか」

「この辺りにいる大きな生き物が湖の中に入るとかじゃないのかい？」

アメリカは軽くこう考えました。

「ほら、虎とかだと普通に水の中に入ったりするじゃないか」

「だとしてもあまりにも大きいあるぞ」

しかしそれでも疑問点はあるのでした。

「それにあの辺りの虎はもう残ってはいないと思うあるが」

「あっ、そうなんだ」

「では何なのでしょうか」
「それが不明ある」
結局今回も正体はわかっていません。本当に何が何なのかわからない生き物は中国にも一杯います。

第七百五十三話　　完

２００９・５・２２

第七百五十四話　パンダ以外にも

第七百五十四話　パンダ以外にも

中国にも正体不明の生き物は一杯いますが正体がわかっている生き物でもかなり変わった生き物がいます。パンダだって最初はそうでしたしお猿さんにもそうしたのがいます。

「うわっ、毛がブロンドなのか」

「これがあのパンダよりもさらに貴重とされている」

「そうある、これがその猿あるよ」

またアメリカと日本に生き物を見せています。それは確かに毛が金色です。本当に見たこともないようなお猿さんです。

「物凄く貴重でそれこそ僕の家ではパンダより有り難いあるぞ」

「ふうん、そんなに貴重なお猿さんなんだ」

「ですが中国さん」

ここで日本が言うのでした。

「そのお猿さん台湾さんがお店で売っていたことがありますよ」

「あいつに渡した覚えはないあるぞ」

中国はすぐにその顔を顰めさせて日本に答えます。

「他にも絶滅危惧種やら希少価値の動物やら一杯いなかったあるか？」

「はい、いました」

何気に発覚した台湾の衝撃の事実です。

「ではあれはやはり」

「突っ込んでも全力で否定するある」

可愛い顔をしていますが台湾も台湾でやりくりが上手なのです。

そうでなければアメリカと中国と韓国と同時に付き合えません。三人に比べると大人しいですが日本もかなり個性的ですし。

「僕もどうしてこの猿を手に入れたのか不思議あるがな」

「中国さんが売られたのではなくてですか？」
「とりあえず僕は知らないあるぞ」
けれど中国の目が少し驚いています。どうやら心当たりがないわけではないようです。稀少な動物でもいつも大切に保護されているというわけではないようです。

第七百五十四話　　完

２００９・５・２２

第七百五十五話　この国にもいますが

第七百五

十五話　この国にもいますが

「やったよクマ五さん」

「誰？」

「カナダだよ」

まずはいつものやり取りからはじまります。正体がわからない生き物がいるといえばやっぱりこの人です。あのオゴポゴだけではないのです。

「恐竜もいるしビッグフットもいるしね。やっと僕にスポットライトが当たるんだよ」

「けれどビッグフットはアメリカじゃなかったのかい？」

「カナダにも出るんだよ、実は」

そうだったりするのですがアメリカに出るので皆アメリカの不思議な生き物だと思っているのです。カナダは何処までもアメリカのせいで目立てません。

「他にも五大湖は僕のところにも接しているけれど」

「チャンプってアメリカの生き物って言われてるよな」

「実はそうなんだよ」

カナダにいてもアメリカのものになる、これは正体不明の生き物に限ったことではないですが。どうしてもそうなってしまうのであります。

「どうしよう、皆わかってくれないし」

「オゴポゴは？」

「あれは違うか」

それだけはちゃんとカナダ専属です。滅多にいないとても人格者の不思議な生き物かも知れません。カナダにとっては有り難い生き物です。

「あれはちゃんと僕の国にいてくれるしね」
「そうだよな。ちゃんとカナダにいてくれるからな」
「正体が全くわからないけれど」
とりあえず昔鯨ではないかと言われていますが詳しいことはわかりません。恐竜という説もありますし。
「それでも僕のところにだけいてくれるからね」
「そうだよな。じゃあオゴポゴの宣伝をしようよ」
「うん。オゴポゴには感謝しないとね」
カナダの数少ない有名人？となっているオゴポゴ、果たしてその名はもっと広まるのでしょうか。それは神のみぞ知る、というものです。ただしその神様が十冥神とかそういった存在なのかどうかはわかりませんが。

第七百五十五話　　完

２００９・５・２３

第七百五十六話　こっちだけが有名に

第七百五十六話　こっちだけが有名に

オゴポゴの宣伝をはじめてみたカナダ、早速その湖に皆が来て見てくれます。

「おおっ、あそこにシルエットが見えるぞ」

「本当だ、湖の中にいるぞ」

湖の中に何か大きなものが泳いでいるのが見えます。それを見れば確かにオゴポゴはいます。何しろかなり昔から目撃例がありますしいる可能性はかなりあります。

「凄いや！オゴポゴは本当にいたんだ！」

こんなことを叫ぶ人もいます。

「まさか本当にいるなんて」

「今すげえ感動してるよ」

皆オゴポゴを見られて感激することしきりです。そのことに喜んでいます。

ところが皆。カナダのことには全く気付いていません。気付くどころかオゴポゴが何処にいるかということすらわかっていないのでした。

「あれっ、アメリカじゃないの？」

「ここってアラスカだよな」

何と多くの人がアメリカにいるのかとさえ思っているのでした。皆カナダのことに気付いてもくれません。

「カナダ？何処そこ」

「アメリカの州じゃないの？」

こんなことまで言う人もいました。とにかくカナダのことは誰も気付いていません。

「また僕のことを誰も気付いてくれないよ」

「オゴポゴだけが有名になってるぞ」
「だよね、また」
こうしてまたしても覚えてもらえないし気付いてもらえないカナダでした。けれど相変わらずオゴポゴは出ますし魚群探知機には恐竜のシルエットが出て来るのでした。

第七百五十六話　完

２００９・５・２３

第七百五十七話　日本にいるのもかなり

日本にいるこうした存在は。何故か異常に多いです。
「おい、何でこんなにいるんだ!?」
ちょっと調べてみたイギリスも驚いて声をあげます。
「あちこちにいるじゃねえか。どうなってんだよ」
「そういえば結構いますね」
本人だけがあまり自覚していないのはいつものことでした。やっぱりちょっと以上に天然です。
「クッシーにイッシーに他には」
「あちこちにそうした恐竜みたいなのいるよな」
「恐竜とは限りませんが」
「まあどっちにしろあちこちにいるよな」
本場と言ってもいいイギリスですらびっくりするレベルでいるのです。
「何だ?ヒバゴン?」
「山に出て来て何か暴れたりするようです」
「これは俺の国にはいねえぞ」
そもそもイギリスには猿はいません。ですからこうした怪しい生き物はいないのです。
「あと絶滅した筈の動物かよ」
「大和さんがたまにニホンオオカミを見たと仰っています」
この生き物は一応は絶滅したとされています。
「本当かどうかはわかりませんが」
「けれど俺もこの前日本の家の中で毛が混ざった糞を見つけたぞ」
実はそれがニホンオオカミの糞だと言われているのです。
「あれってやっぱりよ」

「ではやはりいるのでしょうか」
「何かいるとは思うぜ」
「ううむ、だとしたら私の国にはやはり」
「これだけ山と森があれば何がいてもおかしくはないぜ」
日本はとにかく山と森が多いです。それを見れば確かに何がいてもおかしくはない状況でした。日本も不思議な生き物が一杯いるようです。

第七百五十七話　　完

２００９・５・２４

第七百五十八話　何だこの蛇は

第七百五十八話　何だこの蛇は

そんなイギリスが日本のお家の中を歩いていますと。不意に目の前に蛇が出て来ました。

「んっ！？徒の蛇じゃねえな」

イギリスはその蛇を見て目を顰めさせます。見ればその蛇は。

「何だ？ビール瓶みてえに太いな」

まず目に入ったのはその体型です。蛇にしては異様に太いのです。不自然なまでに。

「蝮に似てるみたいだけれど何だ？」

しかも尻尾はやけに小さくて。随分と変わった形をしています。そのうえ動き方が奇怪でした。尺取虫そっくりの動きをしています。やっぱり普通の蛇ではありません。

しかもちょっとイギリスが近付くと彼に気付いて。尻尾を咥えて輪になって転がっていくのでした。イギリスはそれを見て呟きました。

「スナークか？」

けれどその蛇が何なのかさっぱりわからず。それでこのことを日本に対して話しました。

するとそれだけで日本の顔が見る見るうちに変わって。蒼白にさえなって彼に言うのでした。

「イギリスさん、貴方はあの蛇を見たのですか！？」

「そうだけれどよ。何かあるのか？」

「あれは幻の蛇なんですよ！」

日本は珍しく感情的になって話すのでした。

「あれこそは。幻の蛇なんです！」

「幻の蛇？何だそりゃ」

「ツチノコですツチノコ！」
日本はその蛇の名前を言います。
「それなんですよ。本当にいたんですか！」
「ツチノコ？そういえば」
イギリスはここで自分が見た日本の正体不明の生き物の図鑑を思い出したました。そういえばそこに確かにあの蛇がいました。何と彼はツチノコを見つけたのです。

第七百五十八話　　完

２００９・５・２４

第七百七百五十九話　ツチノコ騒動

第七百五十九話　ツチノコ騒動

「えっ、ツチノコをですか！？」
「そうなんだよ、間違いない！」
イギリスは真剣そのものの顔で日本に対して話していました。
「あれはよ、ツチノコだった！俺は見たんだよ！」
「まさか。そんな」
けれど日本はそれを聞いても信じる顔ではありません。唖然としてまさか、といった顔になっています。そしてそれは声にも出ています。
「あれは本当はいない筈ですが」
「じゃあ俺が見たのは何なんだよ」
「そう言われましても」
日本にしてもわかりません。少なくともイギリスの言っていることが本当のことだとはとても思えません。そこまで信じられないことだったのです。
「私にもわかりません」
「図鑑にあった通りだったんだよ」
イギリスの驚いた言葉はまだ続きます。
「本当によ。やたらと太い蛇でよ」
「それで頭が蝮に似ていて尻尾が」
「小さくてよ。それがツチノコでなくて何なんだよ」
「確かに。ツチノコ以外の何者でもありません」
勿論日本もそれがツチノコの姿であるのはわかります。彼の国にいると言われている正体がわからない生き物ですから当然と言えば当然ですが。それでもまだ信じていないのです。
「じゃあイギリスさんが見たのはやっぱり」

「そうだよな。ツチノコだよな」
「はい、間違いありません」
日本は真面目な顔で答えます。
「ツチノコです」
やっぱりそれでした。何とイギリスは本当にツチノコを見てしまったようです。

第七百五十九話　　完

２００９・５・２５

第七百六十話　ツチノコの好きなもの

第七百六十話　ツチノコの好きなもの

こうしてイギリスの話を聞いた日本、イギリスがツチノコを見たという場所に向かいあるものを出しました。それが何かといいますと。

「酒かよ」

「はい、お酒です」

お酒を樽で置くのでした。イギリスはそれを聞いて日本で言われているあることを思い出しました。

「そういえば御前の国じゃ蛇は酒が好きだったんだな」

「うわばみという言葉がありますから」

「そうだったよな。だからここで出したのか」

「そうです。ツチノコもお酒が大好きですので」

「蛇が酒を飲むのかよ」

イギリスはそれが本当だと聞いて腕を組み首を捻ります。彼の国ではこうしたことは言われないのでどうにも納得できないものがあるのです。

「しかもツチノコがか」

「これで捕まると思います」

日本はその置かれた樽を見ながらイギリスに話します。

「ただ。気をつけて下さい」

「何かあるのかよ」

「ツチノコには毒があるそうです」

やっぱり日本はツチノコのことをかなり知っていました。

「ですから噛まれないように注意して下さい。血清もありませんし」

「毒もあるのかよ。そう思うとやばい生き物なんだな」

「そういう説もあります」

実際のところはそれが本当かどうなのかわかりませんけれど。それでも用心に越したことはありません。二人はまずはお酒を置いてそのうえでツチノコを待つのでした。

第七百六十話　完

２００９・５・２５

第七百六十一話　本当に飲んでいます

十一話　　本当に飲んでいます　　第七百六

日本とイギリスは物陰に隠れてことの成り行きを見守っています。その中でイギリスはそのやたらと太い眉を顰めさせてそのうえで日本に対して尋ねました。

「なあ、本当にツチノコって酒飲むのか？」

「そうらしいですね」

日本はイギリスの質問に対して少し曖昧に答えました。

「話によると」

「酒を飲む蛇かよ」

やはり何度聞いても納得できないものがあるのでした。

「何だからな、それってよ」

「普通はないと仰るのですね」

「酒が好きな蛇・・・・・・いや人間以外の生き物っているのかよ」

「考えてみればそれが物凄く不自然なのですが」

日本もこのことは感じています。

「ではやはりイギリスさんも」

「ああ、ちょっとないだろ」

やっぱりこう考えていました。彼はツチノコがお酒を飲むとはとても思えません。けそれでまず来るとは思っていませんでした。ところが。

「っておい！」

「あの蛇ですよね」

「そうだよ、あの蛇だよ」

イギリスは小声で日本に対して答えます。見ればそのやたらと太い蛇を見るのでした。それは間違いなくイギリスの見たあの蛇でした。

「ツチノコだよな、あれが」
「はい、そうです」
日本もまた彼の言葉によって頷きます。
「あれがツチノコです」
「まさか本当に酒に寄って来るなんてよ」
「私も正直なところ驚いています」
あえて表情は見せませんがそうなのでした。
「ツチノコが本当にいるなんて」
ツチノコ達はそのままお酒を飲みはじめました。やはりお酒を飲む奇妙な蛇なのでした。

第七百六十一話　完

２００９・５・２６

第七百六十二話　お酒を飲むだけではなく

第七百六十二話

お酒を飲むだけではなく

日本とイギリスの前でお酒を飲み続けるツチノコ達は次から次に集まってきます。そうしてそのうえでお酒の入った樽は忽ちのうちに空になってしまいました。お酒を飲み終えたツチノコ達はそのうえで少しずつその場を後にします。日本もイギリスも一部始終を見ていました。

一匹もいなくなったうえででした。日本とイギリスは物陰から出てそのうえで周囲を見回します。ツチノコ達は一匹も残っていませんでした。

「結局全部飲みやがったな」

「そうですね。まさかとは思いましたが」

日本も正直なところ驚いています。お酒を飲む蛇がどれだけ不自然な存在かということです。その目で見ても信じられませんでした。

「蛇がお酒を飲みますか」

「だよな。んっ！？」

ここでイギリスの耳に入ったのは。

「何だこりゃ」

「いびきですね」

「ああ、何処からなんだ？」

そのいびきが聞こえる方に顔を向けるとそこは崖の上でした。とても普通の人が登れるものではありません。そしてそこにいたのは。

あのツチノコ達のうちの一匹でした。その崖の上で丸くなって寝ています。そしていびきはというと。

「あいつ、いびきまでかくのかよ」

「そうみたいですね、どうやら」

イギリスも日本もそれを見てまたしても我が目を疑います。

「蛇がいびきをかいていますね」
「そんなことが有り得るのかよ。爬虫類がいびきか？」
「本当に爬虫類なのでしょうか」
「どうだろうな。これはマジでわからないぞ」
「はい、全くです」
その正体がさらにわからなくなってきたツチノコです。少なくともいびきをかく蛇というものはいない筈ですが。一体何なのでしょうか。

第七百六十二話　　完

２００９・５・２６

第七百六十三話　しかも捕まえられない

第七百六十三話

しかも捕まえられない
「おい、とにかくだ」
「はい」
イギリスが日本に対して言います。日本もそれに応えます。日本も実際のところツチノコから目を離していません。じっと見上げています。
「あれ捕まえようぜ」
「そうですね。捕まえたら物凄い大発見ですから」
以前青いネコ型ロボットとお友達のガキ大将が捕まえたことがありますがそれでも日本自身が見つけたことはないのです。とにかく物凄い発見なのは確実です。
それですぐにツチノコを捕まえようと崖の方に向かいます。そうしていびきをかいて寝ているツチノコをすぐに捕まえようとしますが。
「あれっ、さっきまでここにいたのによ」
「見つかりませんね」
崖の上に辿り着いたその時にはもうツチノコはいませんでした。まるで煙のように何処かへと消えてしまっていました。
「何でなんだ?寝ていたんじゃなかったのかよ」
「私達の気配に気付いて逃げたのではないでしょうか」
「ちっ、だとしたら思ったよりも手強い奴だな」
イギリスは思わず舌打ちしてしまいました。
「俺達の気配に気付いて目を覚まして逃げるなんてよ」
「野生動物ですからね」
その理由はここにありました。
「やっぱり私達の気配にも気付くかと」

「そうか。そう簡単には見つからないってことかよ」
「その通りかと」
ツチノコを捕まえることはできませんでした。しかし発見したのは事実です。どうやらツチノコは間違いなく日本にいるようです。それだけは確かになりました。

第七百六十三話　　完

２００９・５・２７

第七百六十四話　呼び名も色々と

百六十四話　　呼び名も色々と

「うちのところではバチヘビって言うだべ」

「わいのところではノヅチって言うで」

仙台と大阪がそれぞれ言います。

「あれってツチノコって言うだべ？」

「そういえばそんなこと聞いたことあるで」

どうもツチノコはその地域によって呼び方が違うようです。

「私はツチノコと呼んでいたのですが」

「それはいいけれどよ、つまりツチノコは昔からいたのかよ」

イギリスが突っ込みを入れたポイントはそこでした。

「そんな昔からそれぞれ呼ばれるみたいによ」

「そうなんですよね。実は昔から目撃例がありまして」

今はじめてそのことをイギリスに話す日本でした。

「皆さん色々と呼んでいたんですよ」

「しかもだよ」

イギリスはさらに突っ込みを入れます。流石に鋭い、彼は次から次に気付いていくのでした。この辺りの鋭さがやはり今のイギリスを築いていったのでしょう。

「御前の国のあちこちの人が言うってことはよ」

「全国にいるということですね」

「そうだよ。考えれば考える程おかしな生き物だな」

分布もかなり広いことになるからです。思えばこのことも不自然であります。

「本当に何なんだろうな」

「さて、本当に何でしょうか」

日本も首を傾げるばかりです。

「一体全体。ツチノコとは」
「冗談抜きで蛇には思えないしな」
「はい、いびきをかきますから」
とにかく不思議な生き物です。本当にその正体は何なのでしょうか。

第七百六十四話　　完

２００９・５・２７

第七百六十五話　ロシアにしても

五話　　ロシアにしても　　第七百六十

「何か皆のところには一杯正体がわからない生き物がいるんだね」
「そうみたいですね」
リトアニアがロシアに対して応えています。
「何か色々と」
「それってちょっと羨ましいな」
ロシアはこのことが羨ましく思っていました。
「僕のところにもいるみたいだけれど」
「ステラーカイギュウは目撃例があるだけですけれどね」
「うん。まだ本当にいたらかなり嬉しいけれどね」
実際のところはよくわからなかったりします。確かに目撃例はあるのですが最近はありません。もう四十年はありません。ロシアはそのことも寂しいと感じています。
「どうなのかな、本当のところは」
「何分かなり広い場所ですしね」
オホーツクやベーリングといってもかなり広いです。それこそ日本が丸ごと入ってしまうような。そこまで広い場所ですから何かを見つけようにもかなり苦労するのです。
「何処にいるのやらですよ」
「他にもそんな生き物いるみたいだしね」
「あれですか」
リトアニアはロシアの言葉を聞いてふと気付きました。
「あれも本当にいるのでしょうか」
「それでだけれどね」
ここでお話が暗転。
「うう、やっぱり僕達が出張ですか」

「いつものパターンだけれどね」
「何度もやっていますけれど慣れないですね、全く」
ラトビア、リトアニア、そしてエストニアがシベリアに出張しています。三人はロシアに言われてそこにいる生き物を探しています。これまたとんでもない旅になりそうです。

第七百六十五話　　完

２００９・５・２８

第七百六十六話　シベリアにいるのは

第七百六十六話　シベリアにいるのは

三人が出張しているシベリア。その壮絶な吹雪に覆われたツンドラ。三人はその針葉樹林の中である生き物を探しています。それは。

「高さは大体二メートルを超える位で」

「あれっ、結構小さいんですね」

「そうみたいなんだよ。案外ね」

リトアニアがラトビアに話していました。

「それで身体は全身が毛に覆われていてね」

「牙が生えていてですか」

「しかも鼻はわかるよね」

「はい、それは」

三人はその生き物の姿をチェックし合っています。そうしてそのうえで森の中を見回しています。けれど森の中にはそうした生き物は見えません。

「狼にクズリに鹿に」

そうした生き物は見えます。

「後は狐ですね、あれは」

「そうだね。とりあえず動物はいるけれど」

リトアニアがエストニアに答えます。

「やっぱりあれは見えないな。本当にいるのかな」

「いてもおかしくはないですけれどね」

エストニアも見ています。このシベリアも広さは物凄いものでそれこそ日本が幾つも入ります。とにかく途方もない広さのロシアです。

「これだけ広いと」

「しかも見つからなかったら」

ラトビアはここでその場合考えられるケースを想定しました。それは。

「やっぱりあれですよね。ロシアさんに」

「それは言わないでおこう」

リトアニアがそこから先の彼の言葉は止めました。彼等にとってそれだけは考えたくはないことであったからです。何はともあれ三人はシベリアである生き物を探し続けています。

第七百六十六話　　完

２００９・５・２８

第七百六十七話　森の中に見えたものは

第七百六十七話　森の中に見えたものは

極寒の地シベリアを探すというか彷徨う三人、食べ物とウォッカを持ってきたおかげでとりあえず餓えることも凍えることもありません。ですがそれでも寒いものは寒いのです。

「うう、やっぱり寒いですね」

「ウォッカまだ飲むかい？」

「いえ、さっき飲みましたから」

ラトビアはリトアニアから勧められたウォッカを今は断ります。そうして三人でツンドラの中を進んでいきます。ですが行けども行けども見つかりません。

「やっぱりいないんですかね」

「そんなことはないと思うけれど」

リトアニアは一応はこう答えます。

「確かに見たって話があるし」

「そうなんですよね、実際に」

エストニアも色々と森の中を見回しながらリトアニアに答えます。

「いることはいると思うんですけれど」

「それに見つからなかったら」

ラトビアの脳裏にそうなった場合想定されるというか確実にやって来る未来が思い浮かびました。何度も経験していることですし。

「ですから何としても見つけないと」

「そうなんだよね、どうしても」

「けれどこの物凄く広い森の何処にいるのかな」

リトアニアもエストニアも探します。けれどそれでもでした。

「しかし何とか探さないと」

「そうなんだよね、やっぱり」

「探さないと。とにかく」
三人で周囲を見回しながら森の中を歩いていきます。そうして遂に。それを見つけたのでした。
「あっ、あれですよね」
「うん、間違いないよ」
「やっと見つけましたね」
ラトビアもリトアニアもエストニアも三人でその姿を見て声をあげます。これでやっと見つけたのですがそれでもそれは一瞬で。けれど見つけたのは事実でした。

第七百六十七話　　完

２００９・５・２９

第七百六十八話　報告をしますと

第七百六十八話　報告をしますと

「あっ、あれ本当にいたんだ」
「はい、間違いなく見ました」
リトアニアはこうロシアに述べています。やっとシベリアから帰ってきたのです。それで三人で見たその謎の生き物のことについて話すのでした。
「三人で。それで」
「これが写真だよね、まさか本当にいたんだ」
「いたことはいたのですけれど」
しかしここでリトアニアはまた言うのでした。
「けれどそれでも」
「そうだよね。やっぱり数は物凄く少ないよね」
ロシアはそのことも言いました。
「そもそも滅んだって思われてたし」
「一応新しい骨とか牙も見つけましたけれど」
それも見つけることは見つけました。ですがそれでも確かな個体は捕まっていないのです。それがネックなのでありました。
「肝心の生きたままのは捕まえられませんでした」
「あっ、当分はそれでいいよ」
けれどロシアはそれはそれでいいというのです。リトアニアはそれを聞いて首を傾げました。どういうことかわからないからです。
「だってさ、僕の国にもＵＭＡがいるってわかったからね」
「だからですか」
「そういえばあの辺りの湖に恐竜もいるそうだね」
「はい、その話も聞きました」
リトアニアはそのことも調べることができました。

「あとカフカスにも正体不明の類人猿が」
「僕の国にも結構いるんだね。よかったよ」
ロシアはそれを聞いて微笑みます。どうやら自分の国にもそうした存在が多くいるとわかってそのことが嬉しいようです。ささやかですが確かな喜びでした。

第六百六十八話　　完

２００９・５・２９

第七百六十九話　ギリシアの昔々

第七百六十九話　ギリシアの昔々

のんびりとしたギリシアにも子供の頃がありました。ギリシアが物心ついた頃ははっきりしないところがあります。とりあえずトルコと一緒にいた時間もあるのですがその時のことはギリシアにとってはいい思い出ではないので誰もあえて言いません。けれど子供の頃の記憶となるとこれがまた本人ですら覚えていないところがあるのです。

「とりあえず覚えていることは」

「どういった幼年時代だったんですか？」

「父さんと母さんがいた」

このことは流石に覚えています。日本にも答えることができます。

「けれど母さんは結婚する前はイタリアの爺ちゃんに声をかけられてた」

「何でもエジプトさんのお母さんにも声をかけられていたとか」

イタリアの女の子大好きなところは祖父譲りなのです。

「そう聞いていますが」

「そうだ。とはいっても俺が生まれる前なので知らない」

むしろ知っていたら怖い話です。

「それでローマがいなくなってビザンツ帝国になった」

「それがギリシアさんの幼年時代だったのですか」

「考えてみたらあの時は結構色々やった」

今のギリシアからは想像もできないことでありますが。

「イタリアの親父のところに行ったりカルタゴに行ったりした」

「本当に色々行かれたのですね」

「エジプトにも行った。いい上司もいた」

その時の上司のことも思い出すのでした。

「あれはあれでいい時だった」
「そうだったのですか」
その時のことを思い出して懐かしさに浸るギリシアでした。この人も色々な過去があるようです。

第七百六十九話　　完

２００９・５・３０

第七百七十話　ユスティニアヌス帝

第七百七十話

ユスティニアヌス帝

そのギリシアの上司だった人でいい上司といえばやはりこの人です。言わずと知れたユスティニアヌス帝です。まずこの人はギリシアにあるものを渡してきました。

「これ。何だ」

「絹だ」

見れば非常にさらさらとして奇麗な布です。ギリシアもはじめて目にするものでした。

「中国から取り寄せたものだ」

「何かいい生地だな」

「蚕という虫が出す糸から作る。卵も餌になる桑も持って来た」

こうした用意のいい人だったのです。だからこそ名君と言われていました。

「御前にはこれを作ってもらいたい。いいか」

「わかった」

こうしてギリシアは絹を作るようになりました。これによりギリシアはかなりお金持ちになることができました。

けれどそれだけではなくこの人はかつてのローマ帝国が大好きだったのでビザンツ帝国もそうなることを夢見ていました。それでギリシアはお母さんと一緒にあちこちを転戦しました。

ある時はカルタゴ、ある時はエジプト。そしてイタリアにもお邪魔したことがあります。

「何かここにいる奴とまた会う気がするな」

「またですか」

「そうだ。何時かきっと」

イタリアに来た時はこんなことも言いました。何か予感があった

のでしょうか。
　あちこちを転戦して大きくなったギリシア。上司はその大きくなったギリシアを上手に育てていました。けれどやがて東の方にいる宿敵ペルシアとの戦争が激しくなりギリシアはそれにかかりっきりになりました。
　そのペルシアとの戦争が続くうちに何時の間にかペルシアからイスラム帝国になっていました。突如として変身したこの国はとても強く。ギリシアは多くの大切な場所を失ってしまいました。
「あいつ等にとって凄くいい場所だった」
　ギリシアはぽつりと言いました。昔々のギリシアは戦争もよくやったのです。

第七百七十話　　完

２００９・５・３０

第七百七十一話　とにかく強かった

第七百七十一話

とにかく強かった

イスラム教徒達はとにかく強くギリシアは苦戦どころではありませんでした。瞬く間に追い立てられ遂にはギリシアの心臓だったコンスタンティノープルにも迫られてしまいました。本当にあっという間に迫られてしまったのです。

「ギリシアさん、ここを取られたら」

「本当にまずいですよ」

「わかってる」

けれどギリシアはいつもののんびりとした態度を崩していません。こうしたところが実にギリシアらしいですがそれでも今はそれどころではありません。

皆が必死の形相で焦りを見せています。もう城壁に物凄い数の軍団が迫ろうとしています。ギリシアはそれを見て皆に言いました。

「じゃああれを出す」

「あれといいますと！？」

「まさか」

「そう。あれなら守れる」

ギリシアは静かに述べました。

「だから安心していい」

「そうですか、あれなら」

「あれなら守れますか」

「だから使う。このギリシアの炎」

言いながらその炎を出しました。何か物凄い道具です。それを城壁につけて早速使います。すると予想を遥かに超える威力でした。

「うわっ、何だこれは！」

「駄目だ、退却しろ！」

それを受けたイスラム軍は忽ちのうちに撤退してしまいました。こうしてギリシアは窮地を脱したのです。

ですがそれからギリシアは長い間イスラム教徒達との戦いに入りました。それはとても長くそして激しい戦いでした。ギリシアはその中で疲れていってしまいました。

「困ったな。かなり」

「そうですか？困ってるんですか？」

「あまりそうは」

皆それを見てもあまり信じられません。ギリシアはとてものんびりとしたままだったからです。そんなギリシアの戦っていた頃のお話です。

第七百七十一話　　完

２００９・５・３１

第七百七十二話　名前の語源はここからでした

第七百七十二話　名前の語源はここからでした

「さて、名前ですけれど」
「決めかねてるんだな」
「はい、どうすればいいでしょうか」
日本がギリシアに対して相談しています。相談を受けているギリシアも決断を下しきれないでいます。どうも色々と考えているようですが。
「オルフェにしようかエノクにしようか」
「それが問題なんだな」
「はい、敵の種族の名前を何にしましょうか」
こうギリシアに相談していたのです。今度のライダーの敵の種族の名前を何にするのか決めかねていたのです。どうやらその名前はギリシア風のようなのでギリシアに相談しているようです。
「それが決められなくて」
「そうだな。どちらがいいかだな」
ギリシアも考えてはいます。けれど彼もどちらにするか決めかねていました。
「蘇ってきているが」
「どちらにしたらいいのでしょう、本当に」
二人でこう考えていたその時です。たまたま通り掛ったあの某脚本家が二人のところにやって来ました。なおこのライダーは脚本は全てこの人が書くことになっています。
「どうしたんだよ、そんなに悩んで」
「はい、実は」
日本が脚本家さんに事情を話します。すると脚本家さんの返答はこうでした。

「じゃあオルフェノクでいいじゃねえかよ。合わせてよ」
「それでいいのですか」
「おうよ、これで万事解決だな」
「はあ。確かに」
「よし、話は終わったし河豚でも食いに行こうぜ」
「俺もか」
ギリシアまで連れて行って河豚を食べに行くことになりました。
日本とギリシアがあれこれ悩んでいたお話は脚本家さんの手によって一瞬で終わってしまったのでした。

第七百七十二話　　完

２００９・５・３１

第七百七十三話　助けを呼んだら

第七百七十三話　助けを呼んだら

何とかイスラム教徒達を退けはしましたがそれでも彼等の物凄い勢いは止まりません。ギリシアは何度も危機に陥り敗北も重なっています。それがあまりに続くので苦境に追い込まれた彼は。ここで遂に一つの手段に出ました。

「助けを呼ぶか」

「助けをですか」

「ああ。ここは呼ぼう」

こう国の人達に対して言います。そうしてそのうえで西の方の人達に声をかけました。するとそこからやって来たのは。

「よお、助けに来たぜ」

「助太刀させてもらう」

フランスや神聖ローマ帝国といった面々でした。彼等は物凄い大軍を引き連れてやって来ました。ギリシアはその大軍を見てぽつりと言いました。

「そんなに呼んだ覚えはないが」

「いやよ、義を見てせざるはって言うだろ？だからだよ」

「遠慮することはないからな」

そうは言いながらもフランスと神聖ローマはいつも通り何か険悪なムードにあります。そうしてそのままギリシアの領土を通ってイスラム教徒達と戦争に入ります。勢いは凄まじくそのまま勝利を重ねていきます。そうして聖地エルサレムを忽ちのうちに陥落させてしまったのです。

「よし、やったぜ！」

「後はここに国を建てるぞ。人も移住させてな」

実はフランスや神聖ローマの狙いはここにあったのです。彼等は

ただギリシアを助けに来たわけではなかったのです。かなり乱暴にです。

「何かあの連中勝手なことしていますけれど」

「どうします？」

「とりあえず様子を見る」

ギリシアはとりあえず助かったので放置することにしました。けれどイスラム教徒達も負けてはいません。やがて戦いは激しくなってきました。話は混沌としてきまして。あらたな局面に入るのでした。

第七百七十三話　　完

２００９・６・１

第七百七十四話　三国同時侵攻

第七百七十四話　三国同時侵攻

さて、イスラム教徒達は物凄い勢いで反撃に出て来ました。その主役はこの時のエジプトの上司でした。その名もサラーフ＝アッディーン、サラディンでした。

「進め！整地エルサレムを奪還するのだ！」

「うん」

無口なエジプトはサラディンの言葉に頷きながらエルサレムを目指します。そしてそこを占領していた人達を鮮やかに破ってしまったのです。

「フランスの家の人間を捕まえた」

エジプトはそのフランスの上司の一人を捕まえたのです。サラディンはその彼を見て言うのでした。その手に氷を入れた水の瓶を持って。

「王は王を殺さない」

こう言って彼を助けたのです。そうしてそのうえでエルサレムを解放したのです。イスラム教徒達の反撃はここに至ったのです。

「おい、洒落になってねえぞ」

「折角手に入れたエルサレムを奪われたなんてな」

「どうするんだよ、おい」

フランスと神聖ローマだけでなくイギリスも話に加わってきました。

「こうなったら軍を出すしかないな」

「よし、じゃあ俺も行こう」

「何か俺の上司が凄い乗り気なんだよ、自分も行きたいってよ」

この時のイギリスの上司は獅子心王です。とても戦争が好きな人です。この人が参戦するということでフランスの上司も神聖ローマ

の上司も参加することになりました。何と三国とその上司が出陣する空前絶後の遠征になったのです。
「サラディンよ、見ているのだ！」
イギリスの上司が声も高々に宣言します。
「必ず聖地エルサレムを奪還する。覚悟せよ！」
こう言いながら聖地を目指します。今イギリスは遠い地においてかつてない激戦を迎えようとしていました。

第七百七十四話　　完

２００９・６・１

第七百七十五話　神聖ローマ離脱

第七百七十五話　神聖ローマ離脱

三ヶ国は海と陸から聖地を目指します。しかしまず神聖ローマが離脱してしまいました。

「悪いがこれで帰る」

「おい、何でだよ」

「こんなところまで来て帰るのかよ」

「上司が死んだ」

イギリスとフランスにこう言うのでした。

「たった今溺れた。もう戦争どころじゃない」

「溺れたっておい」

「こんなところでかよ」

イギリスもフランスもこれにはびっくりです。まさかの事態です、というよりか武人が溺れるというのもお世辞にも褒められた話ではありません。

「そうだ。だから俺はもう行くことができない」

「ちょっと待てよ、それでも俺のところの上司は乗り気だぞ」

イギリスの上司はあくまでやる気満々です。引き返すつもりは一切ありません。それだけ戦争が大好きなお人なのです。

「それで御前だけ帰るのかよ」

「俺には俺の都合がある。そういうことだ」

こう言って本当に帰ってしまいました。それで残ったのはイギリスとフランス、当然ながらこの時からとても仲が悪かったです。

残された二人はやっぱり喧嘩をはじめてしまいました。それも上司達までが。

「俺はこうやるんだよ！」

「いいや、俺のやり方でやるんだよ！」

やっと辿り着いた砂漠の地で大喧嘩です。予想通りとはいえかなりあれです。
「手前とはやってられねえ！」
「それは俺の台詞だよ！」
折角やって来たというのにこの有様です。もう結末は見えていました。

第七百七十五話　　完

２００９・６・２

第七百七十六話　フランスが帰った後で

第七百七十六話

フランスが帰った後で
「フランスは帰ったのか」
「そうだよ」
イギリスは憮然とした顔でギリシアに答えていました。もう残っているのは彼一人です。
「何でもあいつはあいつでやることがあるらしいんだよ」
「そうか」
ギリシアはただその話を聞いているだけです。二人共この頃はまだ小さいのですけれどそれでも性格はこの頃から全然変わっていないようです。
「それじゃあ頑張れ」
「御前は何もしないのかよ」
「俺は俺で色々とある」
あまりそうは見えませんがこうイギリスに答えるのでした。
「だから助けることはできない。悪いな」
「本当かよ」
「本当だ」
何かあからさまに怪しいですがこういうことにして立ち去るギリシアでした。そうして一人残されたイギリスはどうなったかといいますと。
「いざ聖地エルサレムへ！」
あくまで聖地を目指すと言っています。
「サラディン何するものぞ！この獅子心王の敵ではない！」
「何があっても聖地に行くんですね」
「そうだ、それまで決して敵に背は向けない」
上司は断言します。なおこの人は完全に本気です。しかも本気に

なったら物凄いです。以前出陣の時に決して敵に背は向けないと言って自分の城の壁を壊してそこから出陣したような人です。そんな人がこの時のイギリスの上司なのです。

「いいな、では行くぞ」

「ええ、それじゃあ」

一人になったイギリスはこうして灼熱の砂漠で戦い続けるのでした。チェーンメイルの上から着ているサーコートがやけに暑いです。けれどこれがないとチェーンメイルが日差しで焼けて物凄く辛いです。戦いにも暑さにも日差しにも困っているイギリスなのでした。

第七百七十六話　　完

２００９・６・２

第七百七十七話　激戦

第七百七十七話　激戦

イギリスはイスラム勢力との本格的な戦いに入りました。熱砂と地の利を心得る精悍なマムルーク、そして何よりも名将サラディン、苦戦は確実でした。実際に彼は何度も危うい状況に陥りました。

ある時はサラディンに追い詰められ今まさに全軍を殲滅させられるところでした。ですがここでイギリスの上司は言うのでした。

「騎士団を密集させろ！」

「騎士団をですか」

「そうだ、そしてそのうえで突撃を敢行する！」

上司の命令は続きます。

「いいな、私の言う通りにしろ！」

「わかりました、それじゃあ」

イギリスはこの時は彼の言葉に従うしかありませんでした。そうして実際に騎士団を密集させてそのうえで突撃を敢行します。そのうえで何とか窮地を脱したこともありました。

戦いは何度も何度も続きイスラム勢力の執拗な攻撃の中でエルサレムを目指していました。そうして遂に聖地が見える場所にまで至りましたが。

「駄目だ、補給が心配だ」

「けれどももうすぐなんですよ」

上司はここでエルサレム入城を退けたのです。そうして撤退するというのです。

「それでここで下がるなんて」

「補給を絶たれてそれで攻められたら終わりだ」

しかし上司はこう言ってそのまま下がります。上司は自分の盾で聖地を見えないようにしてそのうえで言うのでした。

「聖地を奪還することができない者は聖地を見る資格がない」
この言葉を残しての撤退でした。イギリスも遂に聖地を奪還することができなかったのでした。

第七百七十七話　　完

２００９・６・３

第七百七十八話　その間ギリシアは

第七百七十八話

その間ギリシアは
各国が聖地でキリスト教徒の為というよりは自分の為に戦っていたその頃ギリシアはずっと後ろにいました。そうしてそのうえで色々と考えてはいました。
「多分イスラム勢力はこのまま聖地を奪還する」
「やっぱりイギリスやフランスじゃ無理ですか」
「そうだな。多分無理だ」
ギリシアにもその状況が見えているのでした。
「だからだ。俺は今は戦力を整えておく」
彼はそのつもりなのでした。
「イスラム勢力に備えて」
「わかりました。それでは」
普通はこのまま順調にいく筈でした。ですが実際は彼はこの時身体の調子が思わしくなくどうにもこうにも満足に何かをすることができませんでした。そうしてそのうえ心臓とも言えるコンスタンティノープルを陥落させられたりして二転三転の迷走ぶりでした。そして何とかこうした騒動を収めた時に目の前に現われたのは。
「おや、丁度いい場所におあつらえむきの豊かな土地があるねい」
仮面を被り豪奢なターバンに曲がった刀、シミターを持った背の高い颯爽とした男が姿を現わしました。彼は一体何者なのか、今ギリシアの運命に大きく関わることになる人物が姿を現わしたのです。
「すぐにあの国を家に入れますか」
「いや、それは早いんだねえ」
しかし今彼はそれをしようとはしませんでした。
「まずは地盤を固めてだ。あいつを俺の家に入れるのはそれからだねい」

「わかりました、それでは」
彼は一体何者なのか、そしてギリシアはどうなるのか。かなり身体が弱ってしまった母親であるビザンツ帝国は今まさに倒れんとしています。運命が大きく変わろうとしていました。

第七百七十八話　　完

２００９・６・３

第七百七十九話　トルコ襲来

第七百七十九話　トルコ襲来

そのトルコがギリシアに向けて進撃してきました。その強さは圧倒的なものでした。この時のギリシアもビザンツ帝国も忽ちのうちに敗れてしまいました。

ギリシアは母親と引き裂かれそのうえその母親は完全に孤立無援となってしまいました。ギリシア自身もトルコの中に入れられてしまいました。

「これで子分ができたねい」

「俺は子分か」

「そうさ。まずは御前が最初の子分でここからどんどん増やしていくのさ」

その仮面の下から楽しそうな声をあげています。

「それで御前のことだがね」

「何だ。全部御前に合わせろとでもいうのか？」

「いいや。俺は他人に対して何かを強制するってことはしねえさ」

やはり声は楽しそうです。しかしここでこんなことも言うのでした。

「御前の生活の習慣とかは文句はつけねえさ。そのままでいな」

「本当にそれでいいのか？」

「いいのさ。好きにしな」

またこう言うのでした。

「そのかわり必要な時には働いてもらうぜ」

「必要な時にはか」

「そうさ。それだけってわけよ」

こうしてギリシアはトルコの家に入れられることになったのでした。トルコに入ったギリシアはこれまで通りの生活を送ることがで

きました。ところがそれでもお母さんのビザンツ帝国は完全に取り囲まれてしまい。その命はまさに風前の灯火となろうとしていました。

「さあて、コンスタンティノープルももうすぐ俺のものだねい」

トルコは今まさにビザンツ帝国の心臓を手に入れようとしていました。しかしここで彼を一つの強敵が襲ったのでした。

第七百七十九話　　完

２００９・６・４

第七百八十話　ハンガリーの攻撃

百八十話　　ハンガリーの攻撃　　第七

「そう簡単にやらせるかよ！」

颯爽と馬に跨った男の子がトルコに向かっていきます。その後ろには精悍な騎兵達が続いています。その男の子の名前はハンガリー、一直線にトルコに向かうのでした。

「俺がいる限りはトルコだか何だかわからない奴には好きにはさせないからな！」

実はこの時ハンガリーはまだ自分が男の子だと思っていたのです。それで一直線にトルコに向かいますがトルコはあまりにも強かったのでした。

「見た、来た、勝ったってのはこのことだねい」

鮮やかに勝利してみせたトルコは上機嫌で言います。

「ハンガリーも案外楽な相手だったねい」

「くそっ、何て強さなんだこいつは」

「さて、それじゃあ本当にコンスタンティノープルを俺のものにするかねい」

ハンガリーを一蹴してそのうえでいよいよビザンツ帝国の心臓を手に入れようとします。しかしここであの軍勢が来たのです。

モンゴル、そして彼を率いるティムール。彼が来たのです。この恐怖の騎馬軍団に対してもトルコは怯えを見せませんでした。

「確かに手強いけれど俺にも意地があるんでい」

シミターを手に迫り来るモンゴルの騎馬軍団を見据えています。

「それじゃあよ。全軍進撃だぜ！」

「おおっ！」

こうしてトルコはモンゴルと戦います。ところが連戦で疲れていたのとモンゴルがあまりにも強かったのでさしものトルコも敗れて

しまいました。
　上司まで捕虜になってしまったトルコ、ただ地面に倒れ伏すだけでした。とても立ち上がれません。
「何て強さでい、全く」
　けれど彼はまだ生きていました。生きていれば必ず再び立ち上がることができる、トルコもまた同じでした。そう、彼はまた立ち上がるのでした。そしてその時は暫くして本当にやって来たのでした。

第七百八十話　　完

２００９・６・４

第七百八十一話　遂に取り囲み

第七百八十一話　遂に取り囲み

モンゴルとの戦いから復活したトルコ、その強さはさらに増していました。彼の軍隊には精鋭イエニチェリもいます。

「まあこいつ等が俺の切り札だねい」

白い肌をしていてフェルト帽を被った彼等こそがトルコの誇る軍の中心です。それに圧倒的な国力も持っている彼は遂にビザンツ帝国を取り囲み。その心臓であるコンスタンティノープルに迫ったのでした。

「じゃあいよいよですね」

「そうさ。ここで落とすんでい」

コンスタンティノープルのその三重の巨大な城壁を見て周りの者に応えます。この戦いは彼の上司まで参加している物凄い規模のものです。総兵力は十五万、トルコだからこそ集められる数です。

その数で以って街を取り囲み攻撃を仕掛けます。しかしコンスタンティノープルもまた難攻不落を謳われたビザンツ帝国の心臓、容易には陥落しません。

三方が海に囲まれそしてその残る一方が三重の城壁に守られています。その為攻めるだけでも難しいのです。何とか攻めようとしますが果たせません。それでトルコは奇策を考えました。

「よし、船を陸にあげるんだねい」

「えっ、船をですか！？」

「陸にですか」

「その通りでい。そうして奴等の兵力がない方に回すんだねい」

何とこんなことを考えだしたのです。そうしてトルコの船を陸にあげて山を超えさせて。いきなり行われたその行動にビザンツ帝国もびっくりです。

気付いた時にはもうトルコの艦隊はビザンツ帝国の艦隊のいない場所にいました。そうしてそこから街を睨んでいました。
「さて、もう一つ仕掛けるとするかい」
「まだあるんですか」
「俺は何でも徹底的にやる主義だからねい」
トルコは不敵な笑みを浮かべています。遂にこの偉大なる街を手に入れるのでしょうか。

第七百八十一話　　完

２００９・６・５

第七百八十二話　次の切り札は

第七百八十二話　次の切り札は

船を一旦陸にあげてそれから海に戻すという奇策を実行したトルコ、しかし切り札はまだあるのでした。

「今度はこれでぃ」

「大砲ですか」

「これで城壁も何もかも吹き飛ばしてやるんでぃ」

何と今度は新兵器です。とてつもなく巨大なその大砲を持って来て攻撃を仕掛けます。そうやってコンスタンティノープルの城壁を遂に破壊してしまいました。

こうなれば後は彼のものです。大軍で雪崩れ込みそうして遂に。ビザンツ帝国を倒すと共にコンスタンティノープルも彼のものにしてしまったのです。

上司は街に入りここを首都としました。そうしてトルコもその強さをさらに磐石なものとしたのでした。

ですが街に入ったトルコは。ここで思わぬ行動に出たのです。

「キリスト教徒はそのまま信仰を続けていいぜ」

「えっ、イスラムだけじゃないんですか？」

「そういえばユダヤ教徒も他の宗教も」

この時点でもう結構以上に大きくなっていたトルコには様々な民族や宗教の人達がいたのです。しかしトルコはその彼等に対してあくまで寛大なのでした。

「認めてしまうのですか？」

「イスラムだけでなく」

「前にも言ったが俺は無理強いは嫌いなんでぃ」

仮面の下からでもはっきりとわかる上機嫌の言葉でした。

「だからいいってことよ。認めればな」

「そうですか」
「ギリシアにも伝えておきな。俺の家にいて手伝うだけでいいってな」
実はギリシアにもかなり寛大なのでした。トルコはただ強いだけではありませんでした。そこには見事なきっぷのよさもあるのでした。

第七百八十二話　完

２００９・６・５

第七百八十三話　東に西に

第七百八十三話　東に西に

コンスタンティノープルを陥落させたトルコ、最早何の憂いもありません。後は東でシリアを奪いエジプトに雪崩れ込みそのまま自分の国に入れてしまいました。

「同じイスラム教徒だからそのままでいいねい」

「何だ？俺の好きなようにしていいのか？」

「俺の言うことさえ聞いてくれればいいってことよ」

ここでもトルコの持ち前のきっぷのよさが出ました。

「それだけでな。どうでい？」

「そうだな。じゃあ御前の家に入らせてもらう」

「素直でいいねい。ああ、ピラミッドとかには一切手をつけねえから安心しねい」

こうしてエジプトもまたトルコの軍門に下りました。そうしてそのままカルタゴの辺りまでいってしまいアラビア半島まで掌握しました。チグリス＝ユーフラテス河の辺りも掌握してまさにイスラム世界の支配者となったのです。

「まあペルシアなんてのもいるけれど俺に適う筈もないねい」

まさにその通りでした。トルコは圧倒的な兵力を持っているだけではありませんでした。それに加えて大砲とイエニチェリ、何と彼等は鉄砲を装備していたのです。

その鉄砲の前に他の国々は為す術もありません。そうしてその進路は東だけでなく西にも及び欧州にも攻め込んできていたのです。

バルカン半島侵略を推し進めそのまま進撃を続けます。ハンガリーがまた来ますがやっぱり敗れてしまいました。そして遂に。

「私のところに来ましたか」

「すいません、オーストリアさん」

敗れたハンガリーが泣きながらオーストリアさんに対して言っています。
「トルコの奴が遂に」
「いえ、それはいいです」
それどころではありませんでした。トルコの大軍が遂に来たのです。オーストリアさんもまたトルコの猛威の前に晒されることになったのです。

第七百八十三話　　完

２００９・６・６

第七百八十四話　あの時は怖かったのですが

第七百八十四話　あの時は怖かったのですが

かつてトルコと幾度も激しい戦いを繰り広げてきたオーストリアさん。ですが何故かオーストリアさんのお家にはトルコを舞台にしたオペラの名作があったりします。

「後宮からの逃走でしたよね」

「はい、モーツァルトです」

日本に対して説明しています。今ウィーン国立歌劇場でその歌劇を観ています。まずは一度聴いたら忘れられない明るい序曲です。それからイスラムの世界に誘われていくというようになっているのです。

「如何ですか？この作品は」

「素晴らしいことは素晴らしいのですが」

日本もそれは認めます。

「それでもです。確かオーストリアさんはトルコさんと仲が悪かった筈ですが」

「それでも異国情緒とはいいものです」

これがオーストリアさんの返答でした。

「例え相手がトルコであってもです」

「それでですか」

「コシ＝ファン＝トゥッテにしてもです」

これまたモーツァルトの歌劇です。オーストリアさんの音楽的財産は非常に多くかつ素晴らしいものが揃っています。やはり音楽はオーストリアさんです。

「アルバニアの国の人達、つまりトルコの家の人に化けたりしていますね」

「ええ、そういえば」

「貴方の御国も出していますし」
魔笛です。実は主人公達は日本の服だったりします。
「異国情緒はいいものです。ですから歌劇に取り入れているのですよ」
「成程、そういうものも音楽に入れていっているのですね」
「その通りです。それはモーツァルトだけではありませんよ」
とにかく音楽にかけてはそうした才能に非常に恵まれているオーストリアさんと御国の人達なのでありました。それも非常に。

第七百八十四話　　完

２００９・６・６

第七百八十五話　その旗は

十五話　　その旗は　　第七百八

無敵トルコ軍の精鋭イエニチェリ、その強さは最早欧州の恐怖の的でした。あまりにも強いのでその軍楽が聴こえただけで皆逃げ出してしまう程です。

鉄砲を装備していて物凄い火力を誇っています。しかもいつも行動できます。数があるだけではありません。まさにトルコ軍の象徴でした。

そんな彼等でしたが旗が何かといいますと。とても意外なものでした。

「あれが旗だったんですか」

「おう、そうなんでい」

トルコは上機嫌で話しています。彼の大好きな日本に尋ねてもらったからです。

「どうでい、結構粋な旗だと思わねえかい？」

「何故また鍋を旗にされたのですか？」

何とその旗は鍋だったのです。イエニチェリの鍋は旗、これまた非常に斬新ですがただ斬新というわけではありません。とても変わっています。

「どうしてまたこれを」

「だってよ、軍隊も食わなきゃなんねえだろ？」

「はい」

これは言うまでもありません。何につけても食べないとお話になりません。腹が減っては、といいますがまさにその通りなのです。

「だからでい。こうやって鍋を旗にしてるってわけだい」

「成程、つまりあれですね」

ここまで話を聞いた日本はそれがどういうことかわかったのでし

た。
「腹が減っては、ということですか」
「そうよ、簡単に言えばそうさ」
トルコも日本のその言葉に対して頷きます。
「そういうことでな。イエニチェリの旗は鍋だったってわけでい」
「それを考えたら凄くいいですね。確かに食べないとどうしようもありませんから」
日本も納得することでした。かなり考えているトルコの旗なのでした。

第七百八十五話　　完

２００９・６・７

第七百八十六話　風流も解します

百八十六話　　風流も解します　　第七

トルコは強いだけではありませんでした。欧州の面々は強さから暴虐だの残忍だの非道だの散々言っていましたが実際のところは違いました。料理も凄かったのですが音楽もお花も大好きだったのです。音楽はまずは。

「うわっ、やっぱり本場は違いますね」

「これがグラスバンドってやつでい」

今日もお邪魔してきた日本に対して誇らしげに語っています。軍隊の行進と共に演奏されるその音楽は素晴らしいものがあります。実はグラスバンドは彼の国ではじまったものなのです。

「オーケストラもいいがこういうのもいいもんだろ？」

「はい、確かに」

日本は真面目な顔でそれを聞いています。

「こうして聴いているととても勇壮な気分にもなれます」

「しかもよ、それだけじゃねえぜ」

ここで日本に対して周りを見るように告げます。するとその周りは。

何と様々な色のチューリップに飾られています。辺り一面チューリップが咲き誇っています。まるでオランダがそこにあったようにです。

「この美しさ。いいだろ？」

「はい、音楽にお花ですか」

「俺だってよ、戦ってるだけじゃなかったんだよ」

その仮面の下で楽しそうに日本に話します。

「また気が向いたら来るといいさ。是非な」

「はい、今度はギリシアさんも御一緒に」

「・・・・・あいつは呼ばなくていいからよ」
それだけは断ります。相変わらずトルコとは犬猿の仲なのです。
「まあ何時でも来てくれよ。あいつとロシア以外は呼んでいいからな」
「はい、それではまた」
「何かいつもオプションで二人来てるけれどな」
見ればまた台湾と韓国が一緒に来ています。何処に行っても一人では済まなくなっている日本なのでした。

第七百八十六話　　完

２００９・６・７

第七百八十七話　独立したギリシアは

七話　独立したギリシアは　第七百八十

歴史は流れやっと独立できたギリシア。イギリスやフランス、それにロシアにかなり支援を受けていました。そうやって独立しましたが暫くは静かなままでした。

「それで御前はこれからどうするんだ？」

イギリスが彼に尋ねてきました。

「何なら色々と話を聞いたり何かできることもあるからな」

「ああ」

けれどギリシアはそれを静かに聞いているだけでした。彼からは特に動こうともしません。それでそのままのどかな生活に入ったのです。

トルコは次第に大変な状況になっていっていきましたがギリシアは本当にのどかに過ごしていました。最初の世界大戦も終わってまた暫く経って二度目の世界大戦になりました。すると家にイタリアが来るようになったのです。

「御前を呼んだ覚えはないが」

「まあいいじゃない。お爺ちゃんからの縁でな」

何とも勝手なことを言って遊んでいます。

「ねえギリシア、トマトない？」

「人の家に攻め込んできてそれはないだろ」

とは言っても何故かイタリアには殆ど怒っていません。実はギリシアに対してもぼろくそに負けてそれでドイツに助けてもらったのがイタリアなのでした。

「トマトならそこにあるがな」

「じゃあ早速オリーブ使って料理するね」

「何を作るんだ？」

「パスタ」
ギリシアに来てもパスタなのでした。流石はイタリアです。
「それ作るから。食べる？」
「ああ、それじゃあな」
こうして二人でイタリアが作ったパスタを食べはじめました。何だかんだでイタリアとは仲が悪くないギリシアなのでした。

第七百八十七話　完

２００９・６・８

第七百八十八話　今でものどかに

第七百八十八話　今でものどかに

二度目の戦争も終わって落ち着いたのですがギリシアは最初から落ち着いていました。周りはあれこれ賑やかで彼にもロシアが声をかけてきたりアメリカが援助してきたりして騒がしかったのですけれど彼自体はのどかでした。

そのまま猫達と遊んでいたりしていました。そして気付いた時には彼はＥＣにも入っていたのでした。もうあっという間に入っていました。

「御前もＥＣに入ったしこれからはずっと一緒だな」

「欧州としてか」

「ああ、御前も俺も欧州の一員だ」

彼に言っていたのはドイツでした。彼がＥＣの中心なのでそれで話をしていたのです。

「これまでは色々とあったがな。これからは仲良くやらせてもらいたい」

「トルコ以外ならいい」

これがギリシアの言葉でした。

「トルコ以外ならな」

「あいつだけは駄目なのか」

「駄目だ」

実にあっさりと言葉を返します。取り付く島もないといった感じでした。

「あいつとだけはできない」

「そうか。絶対に駄目か」

「他の奴となら良いける」

周りの猫達の相手をしながらドイツに話します。

「例えばイタリアとも」
「ねえギリシア、皆優しいよね」
見ればイタリアはそのギリシアの女の子達と楽しく遊んでいます。
相変わらず女の子が大好きです。
「おかげでさ、俺だって」
「あいつはいいんだな？」
「いい。トルコじゃないから」
とにかく今でもトルコは駄目なギリシアでした。

第七百八十八話　　完

２００９・６・８

第七百八十九話　東南アジアの女の子

第七百八十九話　東南アジアの女の子

白いアオザイに黒く腰まである髪を後ろで束ねた女の子。黒い琥珀の如き目をしています。物静かな雰囲気で透き通った感じの物凄い美人です。太平洋グループにいる娘ですが何故かあのフランスが避けています。それが気になったセーシェルがどうしてなのか彼に尋ねますと。

「俺はなあ、あいつにこてんぱんにやられたことがあるんだよ」

「フランスさんがですか」

「そうだよ。一度は俺の家に入れたよ」

相変わらず女好きのようです。

「けれどな、俺がドイツにぼこぼこにされてその時に日本が出て来て何か自分の家に入れてよ」

「ああ、あの時の戦争ですね」

「そうだよ。それで戦争の後もう一回家に入れようとしたら」

その時にされたようです。

「滅茶苦茶強かったんだよ。あっという間にディエンビエンフー陥落させられてよ」

「ってフランスさんの勝率って一番弱い時の阪神より下だったんじゃ」

何気に酷いことを言うセーシェルです。

「確か」

「それは言うなよ、頼むから」

何気に凄く気にしていることだったりします。実はフランスはあまり勝ってはいなかったりするのです。

「とにかくよ、あの娘だけはよ」

「それであの娘誰なんですか？」

「ベトナムだよ」
その国名も言います。
「あの娘がそうなんだよ」
「ああ、あの人がそうなんですね」
セーシェルもここでその女の子、ベトナムを見ます。
「太平洋に物凄く喧嘩の強い女の子がいるって聞いていましたけれど」
「ったくよ、あの辺りには色々な奴がいるぜ」
流石のフランスも苦手な女の子がいるのでした。二人目のアジアンビューティ、彼女も凄い美人さんなのでした。

第七百八十九話　　完

２００９・６・９

第七百九十話　眼鏡をかけた好青年

第七百九十話　眼鏡をかけた好青年

「ナマステ」

にこやかに笑う眼鏡の青年、垂れ目で収まりが少し悪い黒髪の人です。やっぱり太平洋グループにいます。ベトナムと結構近くの場所にいつもいる彼は誰なのでしょうか。

「だからよ、こいつ生徒会長にしとけばよかったんだろうが！」

「何であいつにしたんだ！タイにしてたらこんな苦労はしなかったんだろうがよ！」

イギリスとフランスは今でも生徒会長について不満を爆発させています。ここでフランスが言ったのがこの人です。そうです、英仏がこの人ならいい、とまで太鼓判を押してくれた人です。

「ったくよ、何であいつになったんだよ」

「お兄さんその辺りの経緯かなり知りたいな、知ったら絶対怒るけれどよ」

「まあ過ぎたことですからね」

しかしその生徒会長にならなかった本人は至って呑気です。

「仕方ないですよ、その辺りは」

「おめえがよくても俺達はよかねえんだよ」

「何だよこの仕事の山」

タイに文句を言うその間も生徒会の仕事をやっています。今日もまた物凄い量の書類を決裁しています。何故か生徒会長が仕事を余計に作る上に彼はデスクワークが激烈にできないからです。おまけに生徒会長絡みの話になると何故か他の三人は姿を消してしまうのです。

「落ち着いて下さい。そうだ、トムヤンクン作ったんですけれど」

タイは明らかに怒っている二人に対して微笑を絶やさずこの料理

を勧めてきました。
「どうですか?御一緒に」
「ああ、食わせてくれるのか」
「それじゃあよ」
「はい、とても美味しいですよ」
「あいつはよ、料理も熱くて辛いのしかねえからな」
「たまにはそうじゃないのも出せってんだよな」
こんなことを言い合いながらそのトムヤンクンを食べた二人。ここでもその激辛に火を吹くことになってしまいました。どうやらこの人が生徒会長でも辛いものからは逃げられなかったようです。本当に太平洋グループは個性派ばかりです。

第七百九十話　　完

２００９・６・９

第七百九十一話　フランスだけではなかったのです

第七百九十一話　フランスだけではなかったのです

ベトナムはかつての宗主国だったフランスを見事に破りました。しかしそれだけでは終わらなかったのです。

その後はアメリカが出て来ました。いつもそうなのですがこの時アメリカはとてもロシアと仲が悪く彼と仲のよかったベトナムを自分の陣営に無理にでも引き込みたかったのです。

「よし、その為にには何としてもやるんだ！」

自ら物凄い数の大軍と装備を送り込んでベトナムの国に入って来ました。これはもう誰もがベトナムの負けだと思ったのですが彼女はジャングルの中に入って粘り強く戦い。そうして彼を退けてしまったのです。

「そんな、僕が負けるなんて」

アメリカも茫然自失でした。これまで不敗だったアメリカを破ったのですから。皆ベトナムの強さに唖然としました。けれどそれで終わりではありませんでした。

「それなら次は僕あるな」

今度は中国でした。彼もかなりの大軍を率いてベトナムに雪崩れ込みます。これもベトナム劣勢と言われたのですがやっぱり勝ってしまったのです。

「僕まで負けたあるか」

今度は中国が呆然となるのでした。何と生徒会の三人を立て続けに破ったのです。この強さに皆もうベトナムに攻め込もうとはしなくなりました。

「そんなこともありましたね」

けれど当のベトナムにとってそれはもう昔のことなのでした。

「今はそれよりも」

そっと台湾のところに来ました。同じアジアの女の子ですが二人が横に並ぶともうそれだけで絵になります。

「人付き合いの方が大切ですから」

「そうよね。やっぱり喧嘩するよりはね」

台湾もにこりと笑って彼女に応えます。

「そっちの方がずっといいからね」

「ええ。ですから」

今ではお付き合いに力を入れています。そのかつては戦ったアメリカや中国とも。この美人さんもかなり苦労をしてきたのです。

第七百九十一話　　完

２００９・６・１０

第七百九十二話　こちらも結構に

七百九十二話　　こちらも結構に　　第

ベトナムのすぐ近くにあるタイ、彼もまた人付き合いはかなりいいです。何かというといつも日本を自分のところに呼んでいたりします。

「どうですか？この麺と炒飯は」

「はい、今日も凄く美味しいですね」

今日『も』というところに二人の付き合いの深さが出ています。

「辛くてそれでいてあっさりしていて」

「そうなんですよ。辛くてもあっさりなんですよ」

タイはにこりと笑って日本に言います。

「これアメリカさんや中国さんにも御馳走したんですけれどね」

「どうでしたか？」

「はい、評判はかなりいいです」

ここでもにこりとしてそれでいて穏やかな笑みです。

「僕の料理皆笑顔で食べてくれます」

「美味しいですから」

日本も彼に微笑みで返します。

「それも当然です」

「他には台湾さんや韓国君にも来てもらってますよ」

「あっ、そうなのですか」

「ええ、今も」

気付けばもういました。何と韓国が日本の右に、台湾が左に。二人共いつも通り日本の横にいたのでした。

「俺がいるのは本当に偶然なんだぜ」

「あんたそう言っていつも日本さんの横にいるじゃないの。少しは迷惑考えたら？」

「ほら、いますよね」
「ええ。何時の間に」
「さあ。皆で食べて下さいね」
その台湾と韓国の分の麺や炒飯も出します。彼もかなり人付き合いが上手です。東南アジアの二人は穏やかですが人付き合いもかなり頑張っているようです。

第七百九十二話　　完

2009・6・10

第七百九十三話　アオザイの魅力

百九十三話　アオザイの魅力　　第七

この学校は皆制服なのですが当然のこと皆征服の他に私服も持っています。そしてベトナムの私服というのがこれまた非常にいいものなのです。

「うわ、これはまた凄いわね」

「そんなに凄いかしら」

「凄いわよ、そんなに体型がはっきり出ていいの？」

同じアジアの女の子である台湾が驚きながらベトナムに対して言っています。ベトナムの私服といえばアオザイです。白や薄い青のそのアオザイを着ているベトナムは物凄く目立ちます。今彼女が着ているその白いアオザイもかなり魅力的です。あまりにも魅力的なので同じ女の子である台湾の方が困っている程です。

「男組が皆見ているわよ」

「別にいいけれど。それは」

ベトナム自身はそんなことは気にしてません。何しろアオザイを着ていると皆が見ますから。だからもう慣れているのです。

「そんなことはね」

「いいの？私なんかチャイナドレス着るのかなり勇気がいるけれど」

「普段から着てればいいのよ」

ベトナムはあっさりと言いました。

「チャイナドレスもね。いつも着ていればなれるわよ」

「スリットから足がはっきり見えるからそれはかなり」

困るというのでした。

「困るんだけれど。あんたは特に困らないのね」

「だから慣れればいいのよ。いつも着てね」

「だからそれがどうもね」

それはどうしても難しい台湾でした。どうやらベトナムの方がこうしたことにはかなり度胸があるようです。アジアンガールズもそれぞれです。

第七百九十三話　　完

２００９・６・１１

第七百九十四話　仏様それぞれ

第七百九十四話　仏様それぞれ

タイは仏教の国です。上司は必ず仏教徒でなければならないとちゃんと決められている程仏教は大事にされています。当然ながらそれはタイ自身についても言えます。

「やっぱりお坊さんは大事にしないといけませんよ」

「そうですね。それは確かに」

このことには日本も頷きます。日本においても仏教は定着しています。ただしタイの仏教徒日本のそれでは何もかもが全く違っています。

「それにしても日本さんの仏教は物静かですね」

「そうでしょうか」

「はい。ほら、法衣だって黒ですし」

タイは今自分でその法衣を着たお坊さんを紹介しています。タイの方のお坊さんは黄色と赤の法衣です。それに対して日本は黒が基調です。本当に全く違います。

「そこが全然違いますよね」

「確かに。私の国のそれとタイさんのそれは全く違っていますよね」

「そうですよね。お寺にしても」

「ここまで違いますからね」

タイの石造りのお寺と日本の木造のそれも全く違います。そうしたものを見ていると本当に同じ仏教とは思えません。日本もタイもお互いのものをそれぞれ見て驚きを隠せません。しかも当然出されるものも全く違っています。

「タイさんのお国らしいですね。お寺の料理は辛いですね」

「日本さんのお寺はお茶ですか。和菓子がとても美味しいですよ」

二人共お互いのものを食べて笑顔になっています。そうしてお互

いを確かめ合っているとそこに韓国が来てまた言います。
「二人が仏教を信仰できるようになったのも俺のおかげなんだぜ。お釈迦様だって俺の国の人なんだぜ」
「この人も確か仏教が多いんですよね、確か」
「そうらしいのですが。最近キリスト教にも凝ってらして」
日本が韓国の話を流しながらタイに話します。とりあえず韓国はここでも自分の趣味である起源の主張を言うのでありました。

第七百九十四話

1

２００９・６・１

第七百九十五話　暗いイメージも消えて

第七百九十五話

暗いイメージも消えて

かつてベトナムは悲惨な戦争を長い間行ってきました。それで長い間暗いイメージがありました。ベトナム自身の容貌が何処か儚げなのも影響しているのかも知れませんがとにかく暗いというイメージが強い国でした。

ところが今ではそんなイメージは完全に消えてしまいました。日本にそのベトナムの街を案内しています。日本は屈託のない笑みを浮かべてそのうえで楽しく働く人達を見て言うのでした。

「皆さん明るいのですね」

「そうですよ。日本さんもわかってくれたんですね」

「はい、申し訳ないですが今までは」

「それはわかっています。我が国についてはどうしても」

本人が一番わかっていることでした。自分についてしまった暗いイメージのことは。それがわからない程ベトナムはうっかりさんではありません。

「そうしたイメージがあるのは」

「そうなのですか」

「はい。それで今はどうですか？」

あらためて日本に尋ねてきました。

「日本さんは我が国についてどう思われますか？」

「明るいですね」

日本は道行くベトナムの人達を見て言いました。その明るい人達を。

「しかも穏やかで」

「有り難うございます、それではこの明るさを楽しんで下さいね」

「ええ、喜んで」

ここでベトナムはそっと日本に食べ物を差し出します。それは生春巻きｔベトナム風の炒飯、それにベトナムのお米で作った麺です。それを差し出してきたのです。

「どうぞ。街を見ながら食べて下さいね」

「はい、有り難うございます」

今ではこうして観光に力を入れているのでした。もう誰もベトナムを暗い国だと見ている人はいません。その奇麗な顔と共に。

第七百九十五話　　完

２００９・６・１２

第七百九十六話　微笑みの青唐辛子

第七百九十六話　微笑みの青唐辛子

「日本はベトナムに行ったよ」

「それで僕達がこっちある」

アメリカと中国はタイに来ています。この三国は結構以上に最近タイやベトナムといった国々に顔を出しているのでした。なお日本にはいつも台湾と韓国が一緒に来ていますので実質三国でお邪魔しています。

「それで今日もこの辛い料理なんだね」

「タイは暑いから丁度いいあるな」

「そうですよね。やっぱり暑い場所には辛い料理ですよ」

タイが二人に穏やかに微笑んで答えます。

「ですからこの青い唐辛子を」

「いや、それはちょっとどうかな」

「あまりにも刺激が強過ぎるあるぞ」

二人はその青い唐辛子を見ると少し引きました。今はタイからふんだんに御馳走してもらっているのです。タイ料理自体には舌鼓を打っていてもそれだけは、でした。

「だからできれば青でね」

「それを頼むある」

「そうですか？ならこれは引っ込めますね」

タイは二人の言葉を聞いて青唐辛子は引っ込めるのでした。その殺人的なまでに辛いその唐辛子は最早兵器と言ってもいい辛さですから。

「それではこちらを」

「そうだね。赤唐辛子だったらいけるよ」

「うちの四川料理もそうあるしな」

「けれどこの辛さがいいんですよね」
タイはその中で青唐辛子の料理を食べています。勿論自分で作ったものです。
「もう暑い時には特に」
「凄いなあ、そんな辛いの食べてもいつも笑えるんだから」
「だから微笑みの国あるな」
「そうかも知れませんね」
自分でもそれは認めるのでした。やっぱりタイは微笑みです。

第七百九十六話　　完

２００９・６・１２

第七百九十七話　アジアンガールズ

第七百九十七話　アジアンガールズ

台湾とベトナムは言うまでもなく女の子です。どちらも長い黒髪のとても可憐な容姿をしています。それで学園での人気もかなりなのですが。

「御前は二人には声かけないんだな」

「かけないんじゃなくてかけられねえんだよ」

フランスはイギリスの質問にすぐに嫌そうな顔で答えます。

「ベトナムには負けたしよ」

「そういえばそうだったよな」

彼にとってはそれはかなり痛い敗北だったのです。イギリスに例えるとインドをなくした時と同じ位でしょうか。そこまで痛い敗北を喫していたのです。

「台湾もあれでよ」

「大人しそうな娘じゃねえか」

実は最近イギリスは太平洋への知識が乏しいです。欧州にどっぷりと浸かってしまうようになったのです。彼は欧州にあるから当然ですが。

「あの娘に何かあるのかよ」

「アメリカに中国にロシアが関わってきてしかもあの名前も言い出したくねえ生徒会長もいるんだぜ、近くによ」

「・・・・・何だそのうんざりするような顔触れは」

イギリスもどん引きするような面子です。

「あと日本もいたよな、近くに」

「それで何でもないって思えるか？喧嘩とかも滅茶苦茶強いんだぞ」

実は一癖も二癖もあるのです。

「ベトナムだってよ。そりゃもうよ」

「そうか。外見は可憐でも中身は凄いんだな」
「そうだよ。料理は美味いけれどな」
実は二人は今はベトナムのお家に来ているのです。そこで料理を食べています。
「このうどんなんてな」
「美味いか？これ」
「御前はマジで味覚何とかしろ」
とりあえずイギリスの味覚にはクレームをつけます。しかし本当に中身はとても強いアジアンガールズなのでした。

第七百九十七話　　完

２００９・６・１３

第七百九十八話　タイの周りも

第七百九十八話　タイの周りも

　ベトナムにしろ台湾にしろ周りはとても大変です。ですから何をするにしても気遣いが必要です。しかしそれは彼女達だけに限ったことではないのです。

　タイにしろそれは同じです。色々な国の人達がやって来るだけではなく周りにある国々も色々です。彼のお付き合いはその周りの国ともあるのです。

「いや、この前のＡＳＥＡＮの会合ですけれど」

「僕も出ていたよね」

「僕もあるな」

　アメリカと中国が彼の言葉に応えます。最近ＡＳＥＡＮの会合にはこの人達や日本も呼ばれることがとても多いのです。ＡＳＥＡＮは最近かなり発言力があります。

「そういえばあの会合には色々な国が集まっているけれど」

「個性が強い国ばかりあるな」

　とりあえず二人は自分達のことは置いています。

「そんなに大変なの？やっぱり」

「苦労しているあるか」

「いえ、そういうわけではないですけれどね」

　あえて謙遜して言うタイでした。

「何かとありますし。特に」

「特に？」

「誰あるか？」

「いえ、誰ということはないですよ」

　この辺りはあえて答えないタイでした。

「何でもありませんから。気にしないで下さい」

とは言ってもちらりと見たのは自分の東の方です。そこにいるのは女の子ですが果たして彼女は誰でしょうか。どうやらタイにも少しライバルといった存在がいるようです。そしてそのライバルとは誰なのか。どうにも複雑な彼の周りとの関係であるようです。

第七百九十八話　　完

２００９・６・１３

第七百九十九話　二人の密かな関係

第七百九十九話　二人の密かな関係

台湾は今日はタイのお家にお邪魔しています。それで色々なことをお話しています。

「それでこれからはこのことはこうするのね」

「はい、それで行きたいと思っています」

こんなやり取りを続けていきます。そうしてそのうえで話を決めています。お話自体はとても順調で台湾にとってもタイにとっても満足できるものになりました。けれどお話が終わってから台湾はすぐに帰ろうとしたのです。

「じゃあ今日はこれで」

「あれっ、もう帰られるんですか？」

「実はまだ用事があるから」

こうタイに対して言うのでした。

「だからね。悪いけれど」

「そうですか。用事ですか」

タイはそれを聞いて仕方ないな、という顔を見せました。少なくともこの時まではそれで話が済みました。ところが、でした。

「ちょっと。ベトナムのところに行かないといけないのよ」

「・・・・・・・・・」

ベトナムと聞くと一瞬、本当に一瞬ですがタイの表情が消えました。普通の人ならそれにすら気付かないところでしたが太平洋でもクッシの苦労人である台湾、そのことに気付いたのです。

（あれっ、まさか）

「ならしょうがないですね」

タイはいつもの微笑みに戻ってまた言ってきました。

「今日はこれで、ということですね」

「ええ。御免ね」
「いいですよ、台湾さんにも都合がありますし」
やはり今も穏やかな微笑みを浮かべてはいます。
「それではまた今度」
「ええ、またね」
こう別れの言葉を交えさせて別れはします。ところがそこにあるのはどうにも。随分と複雑な事情のようです。

第七百九十九話　　完

２００９・６・１４

第八百話　本当に微妙なのですが

百話　本当に微妙なのですが　第八

今日は太平洋のメンバー皆で集まっています。そのうえでパーティーを開いているのです。

皆それぞれ料理を持って来てそのうえで楽しく飲み食いしています。ところがここで台湾は一人どうも今一つ浮かない顔をしているのでした。

「何かあったのですか？」

そんな彼女に日本が問うてきました。

「何か浮かない顔をされていますけれど」

「はい、実はですね」

ここで台湾はちらりとベトナムとタイの方を見ます。当然ながら二人もちゃんとこのパーティーに参加しています。そうしてそのうえで自分達の料理も持って来ているのです。

「あれ、見てくれます？」

「ベトナムさんとタイさんですか」

「はい、どうでしょうか」

日本にも見てもらうことにしたのです。そうして日本が実際に見てみますと。

ベトナムにしろタイにしろお互い何も言いません。ですが何か雰囲気が微妙です。そしてたまたま視線が合うと。

何か得体の知れない火花がほんのごく一瞬ですが見られました。けれど二人はそれはお互いすぐに外し合ってそれで終わらせます。けれど確かに火花がありました。

「まさかと思いますが」

「日本さんにも見えましたよね」

台湾はそれに気付いた日本に対しても言いました。

「確かに」
「はい。そうですか、あの御二人は」
日本はその顎に右手を当てて言うのでした。
「そういえばカンボジアさんやラオスさんが間にいますけれどお隣と言ってもよかったですね」
「そうなんですよね。結構似ている部分もあったりしますし」
それで微妙な関係なのでした。どうもこの二人の関係は表には出ませんがそれだけに根が深いものであるようです。

第八百話　　完

２００９・６・１４

第八百一話　北欧の人達

第八百一話　北欧の人達

北欧にいるのはスウェーデンとフィンランドだけではありません。確かにこの二人も重要なメンバーなのですが他にもいるのです。

「何かやっとですよね」

「やっと？」

「ほら、ですから」

フィンランドが相変わらずな調子のスウェーデンに対して言っています。

「僕達のメンバー。やっと全員揃いましたね」

「揃ったか」

何かスウェーデンだけはあまり自覚がないようです。それとも自覚していてもいつもの態度がそのまま出ているだけなのかはわかりません。しかしそれでもいつものスウェーデンではあります。

「それで誰だ？」

「誰だっていいますと？」

「俺とおめ以外のメンバー誰だ？」

威圧感を漂わせながらフィンランドに尋ねます。

「そなにメンバーいたか？」

「いますと、あと三人」

何と三人もいるのでした。

「ちゃんと。全部で五カ国だったじゃないですか」

「そか」

何かとりあえず納得はしたみたいです。

「いたか」

「いますよ。デンマークさんにノルウェーさんにアイスランド君」

これがそのメンバーらしいです。

「ほら五人。ちゃんといますよね」
「そだな。いるな」
けれどそれを聞いてもいつもの調子のスウェーデンでした。やっぱり何処か何かが違う、そんなこの人だけは相変わらずなのでした。

第八百一話　完

２００９・６・１５

第八百二話　そのメンバーとは

第八百二話　そのメンバーとは

スウェーデンとフィンランド以外の北欧のメンバー、そう言われて日本が真っ先に思い出したことは何だったかといいますと。スウェーデンやフィンランドには少し意外なことでした。

「北欧といいますとやはりあれですね。ニーベルングの指輪ですね」

「あれっ、日本さんそれは」

フィンランドはその日本の言葉を聞いて少し目を丸くさせて問い返しました。

「あれですよ。ドイツさんのお家の人が作った楽劇で」

「ですが北欧神話の神々が出ていますので」

日本はだからだと言うのです。

「ですから思い出したのですけれど。ドイツさんは北欧のメンバーではないのですか」

「それが違うんですよね」

フィンランドはこのことも日本に対して話します。

「だってほら、デンマークさんのお家から北のスカンナジビアがメインですから」

「そうですか。それでドイツさんは入らないんですね」

「そういうことです。もっともあの楽劇に出て来る神々がノルウェーさんのお家の神様達なのは本当のことですよ」

これは本当だというのでした。

「北欧のね。ドイツさんの神様でもあるのですよ」

「そうなのですか。北欧でなくてもですか」

「ドイツさん僕達の血も入ってますし」

結構色々入っているのがドイツなのです。

「ですからそうした影響もあるんですよ」

「成程、そうでしたか」
「はい。それで僕達は五人です」
その数も日本に教えるのでした。
「それはよく覚えておいて下さいね」
「わかりました」
とはいってもフィンランドもうっかりしていました。果たして本当に五人メンバーかというと。何しろ追加メンバーというのは付き物なのですから。

第八百二話　　完

２００９・６・１５

第八百三話　まずはワイルドな人

第八百三話　まずはワイルドな人

さて、そのスウェーデンとフィンランド以外の三人ですがまずは誰かといいますと。結構背が高くてワイルドな外見のお兄さんです。威勢のよさそうな表情で眉があがっています。癖の強い精悍な髪は金髪で目は見事な青です。その人が出て来たのでした。

「よお、俺がデンマークだっぺ」

「ああ、貴方があのデンマークさんですか」

「そうだっぺ。あんた日本さんだっぺな」

「はい。皆さんそう呼んでくれます」

日本はデンマークに対して静かに一礼して答えます。

「お話は窺っていました」

「スウェーデンとフィンランドからだっぺな」

「そうです。確か御二人は」

「いやあ、昔は結構言い合ったもんだっぺ」

スウェーデンとフィンランドはデンマークさんのお家から飛び出ているのです。そのことは三人共今でも結構覚えていたりします。

「それでも今は仲良しだっぺよ」

「そうなのですか」

「あんたのとこと一緒だっぺ」

そして何故かここで日本のことを言ってきました。

「昔は一緒で別れても。それでも仲良くやっているっぺな」

「私のところがですか」

こう言われても日本自身には今一つ以上に実感の湧かないことでした。

「心当たりが少しありませんが」

「じゃあ今来ている二人は何だっぺ？」

ここでまたしても日本の側にいる台湾と韓国を指差すのでした。
「いつも一緒にいるっぺ。仲のいい証拠だっぺ」
「そういえば御二人はいつも私と一緒に」
「あっ、たまたま行く場所が同じでしたから」
「俺もそうなんだぜ。仕方なくなんだぜ」
とか何とか言いながら今日も日本と一緒にいる二人でした。この関係はデンマークのところでも健在なのでした。

第八百三話　　完

2009・6・16

第八百四話　白鳥と人魚

第八百四話　白鳥と人魚

デンマークで一番有名なものと言えば。やっぱりこれです。

「やはりデンマークさんのお家に来たらこれを見なければいけませんね」

「皆そう言うだっぺな、確かに」

今日本は海のところに置かれている人魚姫の像を見ていました。

デンマークのお家に来ると皆まずこれを見るのです。

「誰もが彼もがここに来てくれるだっぺ」

「非常に奇麗で可哀想なお話ですよね」

当然そのお話のことは日本も知っています。

「人魚姫は」

「可哀想だけれど奇麗だっぺ」

デンマークも人魚姫のお話になると少しセンチメンタルな表情になってきました。

「そう思うといいだっぺ」

「そうですね。可哀想ですが奇麗」

言葉を逆にしただけですがそれでもかなり違う印象を受けるようになりました。

「そう考えるといいですね」

「その通りだっぺ。他には白鳥もいるだっぺよ」

「はい」

周りを見れば今多くの白鳥達がいました。皆とても奇麗な姿でたたずんでいます。

「醜いアヒルの子が実は」

「これ程美しい白鳥だったというお話ですね」

「俺はあの人のお話の中でもこれが一番好きだっぺ」

デンマークは明るい笑顔に戻って日本に話します。
「やっぱり。ハッピーエンドが最高だっぺな」
「はい、私もそう思います」
日本も彼のその言葉に頷きました。
「では今日はここで白鳥も見させてもらいますね」
「ああ、好きなだけ見るといいっぺさ」
デンマークも笑顔で応えます。そうして二人は美しい白鳥達をずっと見続けるのでした。

第八百四話　　完

２００９・６・１６

第八百五話　ミステリアスな青年

第八百五話　ミステリアスな青年

北欧ファイブの中でもとりわけミステリアスな雰囲気を持つといえばやはりこの人です。少しプラチナがかったブロンドに神秘的な紫の瞳を持つ青年ノルウェー、次は彼が出て来たのでした。

「こいつは俺の親友なんだっぺ」

デンマークが満面の笑顔で皆に紹介します。

「それこそ子供の頃からの付き合いで深い絆で結ばれてるんだっぺ」

「本当にそうか？」

しかしこう主張する彼に対してドイツが怪訝な顔で問います。

「御前がそう思っているのならいいが」

「ドイツは何でいつもそう言うんだっぺ？だから怖いって言われるんだっぺ」

「いや、俺がどう思われるかではなく御前がノルウェーにどう思われているかだが」

「だから親友同士なんだっぺ」

あくまでこう言うデンマークでした。

「現にこうして今だって一緒にいるっぺ。俺達はいつも一緒だっぺ」

「そうか。御前がそこまで思っているのならな」

ドイツもそれ以上言おうとはしませんでした。

「それでいい。俺は何も言わない」

「御前もイタちゃんがいるだろう？やっぱり持つべきものは友達だっぺ」

「友達は確かに有り難いがな」

イタリアだけでなく日本もいてしかも相棒までいるドイツは比較的恵まれているかも知れません。何しろ当のデンマークはというと。

「デンマーク」

「何だっぺ？親友」
「このチーズ美味しいけれど売っどるあんたは別にいいけ」
「そうけ。じゃあ俺は売り子止めるっぺ」
微妙にケチをつけてきています。しかしデンマークだけは気付いていないのでした。

第八百五話　　完

２００９・６・１７

第八百六話　この人も見えます

八百六話　　この人も見えます　　第

　ノルウェーといえば北欧神話です。そしてこの北欧神話には実に様々な種族が出て来ます。ドイツのお家の作曲家であったあのワーグナーの作品にも出て来るあの人達です。

「巨人に小人だが」

「それがどうしたっけ？」

「御前見えるんだよな」

　彼に尋ねているのはイギリスです。その妖精が見えると言って周りから奇人変人扱いされているこの人です。

「あの連中が」

「んだ。あんたも見えるんだな」

「そうだよ、見えるんだよ」

　イギリスはここぞとばかりにノルウェーに対して話します。

「御前も見えるのか。奇遇だな」

「そだな。トロールとかドヴェルグとか」

「ああ、御前の国に今でもかなりいるぞ」

　イギリスの言葉が上ずってきました。どうやら彼の他にも見える人がいると知って機嫌がよくなったようです。

「明るく楽しく生きてるな、今でも」

「じゃああんた戦いの時に空に見えっか？」

　今度はノルウエーの方からイギリスに尋ねてきました。

「あの片目の神様。それと鎧兜で武装した女の人達」

「ドイツも見るっていうあれか」

　その人達が何者かも当然のように知っているイギリスです。

「見えるぜ。本当に俺達似てるよな」

「そだな」

「じゃあよ、今度こそＥＵに入らないか？もう席用意して待ってるんだけれどよ」
「それはいい。僕は僕一人でええけ」
この誘いは断るのでした。何かどうにも不思議な青年です。何はともあれ彼もまた北欧の重要なメンバーなのです。

第八百六話　　完

２００９・６・１７

第八百七話　足元のその鳥は

　第八百七話　　足元のその鳥は

北欧ファイブも遂に最後の一人、今度はアイスランドです。この人はノルウェーの弟にあたりやっぱり目はまるでアメジストのような紫、髪はお兄さんとは少し違っていて完全にプラチナブロンドです。無口で中性的な面持ちの男の子です。

「こいつは俺の弟と一緒だっぺ」

デンマークが彼を左手で思い切り抱き寄せて明るく言います。

「いつも可愛がってるんだっぺな」

「確かにそうかも」

アイスランドもそれは少し認めているみたいです。彼の足元にいつもいる黒くて飛べない太り気味の鳥はどうやらあのオオウミガラスのようです。イタリアはまずそれに気付きました。

「あれっ、その鳥って確か」

「気にしないで」

アイスランドは静かにそのイタリアの言葉に答えます。

「折角今ここにいるから。いじめないで」

「そうだね。いてくれて俺も嬉しいしね」

イタリアもこう言ってそれ以上オオウミガラスを見ようとしませんでした。アイスランドの言いたいことが心に直接伝わったからです。

　そのオオウミガラスにはデンマークも気付いていましたがあえて何も言わないのでした。やっぱり明るく陽気に笑いながらイタリアに勧めてきました。

「じゃあイタちゃん」

「うん。何かな」

「これから温泉だっぺ」

こうイタリアに対して言ってきたのでした。
「こいつの家には温泉が滅茶苦茶多いんだっぺ。これから三人で入るんだっぺ」
「一緒に入ろう」
アイスランドも勧めてきました。こうしてイタリアはこの二人と一緒にアイスランドのお家でその温泉に入るのでした。温泉は日本だけではないのでした。

第八百七話　　完

２００９・６・１８

第八百八話　温泉の中で

第八百八話　温泉の中で

イタリアはアイスランドのお家でデンマークも交えて温泉に入ります。アイスランドは外はとても寒いのですがその温泉の中はというと。

「何この温泉」

「どうしたっぺ？イタちゃん」

「凄くあったかいよ。熱い位だよ」

「これがこいつのいいところなんだっぺ」

デンマークはもう完全にくつろいでいます。温泉の中で身体を思い切り伸ばしながらそのうえでイタリアに対してアイスランドのことを話すのでした。当然アイスランドも二人と一緒にこの温泉に入っています。三人で熱い温泉を楽しんでいるということなのです。

「外はクールでも中は熱い奴なんだっぺ」

「そうだったんだ。アイスランドって」

「そう言われています」

外見からもそうですが言葉からもそれは窺えません。何しろアイスランドはとてもクールな顔立ちと言葉遣いだからです。それで実は熱いと言われても想像できないことでした。

「デンマークさんや兄さんから」

「ふうん。意外だね」

イタリアだけの意見ではないことです。

「何か北欧の人って物静かなイメージがあるんだけれどね」

「そっか？それはあのスウェーデンの奴とか俺の親友だけだっぺ」

相変わらずノルウェーは心の友と思っているデンマークでした。

「フィンランドはそうでもないし俺は全然違うっぺ」

「そういうものかな。そういえばノルウェーやフィンランドは温泉

のかわりに」
「サウナだっぺ。それもあったまるだっぺ」
「そうだね。北欧って結構熱いものがあるんだね」
イタリアはそのことに気付いたのでした。
「何かさ、北欧もかなりいいよね。寒いけれど熱くて」
「おうよ。じゃあこれからもっと熱くなる為に飲み明かすだっぺ」
次にはこんなことまで言うデンマークでした。やっぱりこの人はとても明るいです。そしてアイスランドは静かにその横にいるのでした。その内面を見せないまま。

第八百八話　　完

２００９・６・１８

第八百九話　五人いるので

第八百九話　五人いるので

北欧のメンバーは五人です。五人いればどういった話が出て来るのか、もうそれはお決まりのことでした。

「五人ですからね」

「そうだっぺ、俺達もやるっぺ」

デンマークはフィンランドの言葉に満面の笑顔で乗ってきました。

「あれだっぺな、やっぱり」

「はい、あれですよね」

「あれ？」

ノルウェーはその問いに対して静かに問い返しました。彼はあまりよくはわかっていないようです。五人いればそれで何ができるかということが。

「何をするつもり？一体」

「だからあれだっぺ」

デンマークは怪訝な様子を見せているその親友と思っている人にも笑顔を見せて話をします。彼ははっきりわかっているのが見て取れます。

「チームを作るんだっぺ」

「チーム？」

「だから他の色々なチームがあるだっぺ？レンゴウとかスウジクとか」

「ですから僕達も作りましょうよ」

フィンランドも言います。

「ここは是非」

「悪くないんじゃ」

ノルウェーもそれに賛成はしました。

「ただ言いだしっぺはリーダー。そこんところ宜しく」
「わかってるっぺ。じゃあここでも御前と一緒だっぺな」
「できる限り一人でやって欲しい」
「よし、リーダーだからどんどんやっていくっぺ」
やっぱりノルウェーの言葉はあまりデンマークに届いてはいません。本当に彼だけが親友と思っている関係ですがそれでも五人でチームを作ることになったのでした。

第八百九話　　完

２００９・６・１９

第八百十話　百獣戦隊

第八百十話　百獣戦隊

北欧の五人でチームを作ることになりましたがここでメンバーの割り当てが問題になりました。まずはレッドですがもうこれはこの人しかいませんでした。

「やっぱりそれは俺だっぺな」

「はい、宜しく御願いします」

デンマークがレッドです。フィンランドもそれと一緒に決まったのでした。

「それで僕はイエローですね」

「そうだっぺ。御前がサブリーダーになるっぺ」

「はい。じゃあやらせてもらいます」

「僕はブルーか」

「そうだっぺな。御前にぴったりの色だっぺ」

デンマークはノルウェーに対して答えます。何時の間にか服まで用意されています。確かに皆それぞれの色の服が目の前に置かれています。

「それでいいっぺな」

「とりあえずは」

ノルウェーも賛成しました。どうも表情がないせいで何を考えているのかわからないのは相変わらずですが何はともあれ彼はブルーになったのでした。

「スウェーデンさんはブラックです。大きいですから」

「んだな」

スウェーデンはいつもの無愛想な威圧感に満ちた様子で頷きました。この人は既にその黒の服を着ています。結構以上に似合っている感じです。

「そだら俺はこれだ」
「はい。それでアイスランドさんは」
「白なんだ」
「ヒロインの色ですけれど御願いしますね」
「とりあえずわかった」
これで五人の色が決まりました。名付けてホクオウチーム。レンゴウ、スウジク、バルト、恋姫、ラテンに続いて六番目のチームが今誕生したのでした。

第八百十話　　完

２００９・６・１９

第八百十一話　レッドがリーダーです

百十一話　　レッドがリーダーです　　第八

「よし、俺がレッドだっぺな」
デンマークが早速名乗りをあげます。
「それでいいっぺな」
「勝手にすればいい」
「んだ」
そのデンマークに対してノルウェーとスウェーデンが応えます。
「どのみちレッドに合うのはあんたしかなか」
「そだからな」
こうして彼がレッドになりました。そうしてリーダーになったのですが本当にあっさりと決まったので皆かえって拍子抜けでした。
これは他のチームから見てもそうでした。
「あれっ、随分穏やかに決まったんだね」
「こんなもんだっぺ？あんたんとこもそうだったっぺよ」
こうリトアニアに対して言うデンマークでした。
「確かあんたがブラックでリーダーで」
「それはそうだけれど」
その通りですがあまりにもあっさりと決まったので驚いているのです。
「俺のところはまあ。ポーランドがリーダーしたくないっていうから」
「ここはやっり俺だっぺ」
デンマークは胸を張って得意げに言います。
「北欧つったら。あんたがバルトのリーダーなのと同じだっぺ」
「まあ他のチームもレンゴウチーム以外はかなり普通に決まってるけれど」

とりあえずあのチームだけは例外です。メンバー同士の関係がどうして一緒にいるのかわからない位ですから。
何はともあれデンマークははっきりとしたリーダーになりました。レッド＝リーダーという一番よくある構図に収まったのでした。
「よし、じゃあ元気にいくっぺ」
「五月蝿いから静かにするだ」
「ああ、そうだっぺな」
笑顔でノルウェーに応えますがやっぱり相手の本心は見えていないのでした。

第八百十一話　完

２００９・６・２０

第八百十二話　武ではなかったり

第八百十二話　武ではなかったり

レッドといえばどうしても真っ先に突っ込む熱いタイプである場合が多いです。このデンマークにしろそう思われているふしがあって実際に彼も元気のいい性格です。

ですがこれが意外に。趣味はかなり穏やかだったりします。

「へえ、牛の世話上手いんだあ」

「これでずっと生きているっぺ」

だからだとイタリアに応えます。明るく楽しくやっていますがその扱いはかなり穏やかなものであります。手つきも繊細です。

そうして時間があると本を読んでいます。しかも童話です。この人が読む童話といえば。

「アンデルセンだよね。やっぱり」

「俺は子供の頃からこれを読んでいるっぺ。何度読んでもいいものだっぺ」

「それはあれかな。俺の家のクオレと同じかな」

イタリアは自分のことに当てはめて考えてみました。

「デンマークにとってアンデルセンって」

「そうかも知れないっぺな。イタちゃんもクオレ大好きだっぺ？」

「うん、読んでるとほろりとするんだ」

イタリアにとってクオレとはまさにそうした本なのです。そしてデンマークにとってもアンデルセンといえばです。

「デンマークも同じだよね」

「悲しい話が多いっぺ」

デンマークはここで少しばかり悲しい顔を見せます。

「けれど。そこにある深いものが最高にいいんだっぺ」

「そうだよね。本当にね」

二人で楽しく話しをします。アンデルセンは本当に彼にとってはかけがえのない本なのです。デンマークの趣味は全く威勢のいいものではなく繊細なものでありました。

「じゃあイタちゃん、チーズでワインはどうだっぺ」

「あっ、いいね。それじゃあ」

こうしてチームを超えたお付き合いもしています。デンマークはこうした性格ですがその趣味は本当に繊細なものでした。

第八百十二話　　完

２００９・６・２０

第八百十三話　モイモイサブリーダー

第八百十三話　モイモイサブリーダー

このチームでは二番目は黄色になっています。黄色が二番目になるのは結構珍しいかも知れません。

その二番目でサブリーダーが誰かというと。サブリーダーは参謀でもありますのでかなり重要なポジションです。それに選ばれたのは。

「僕ですか」

「やっぱり御前だっぺ」

デンマークがにこりと笑ってフィンランドに告げます。

「温厚で頭の回転がよくてしかも粘り強い」

「そんな、褒め過ぎですよ」

フィンランド本人は謙遜しますが本当にその通りです。彼のその安定した性格は確かに参謀向きです。他のチームにはスウジクグリーンこと日本のように窮地になると特攻とかを強硬に主張する参謀もいますからそうした人と比べると確かにかなりいいです。

「けれど僕でいいんですよね」

「そうだっぺ。色々と大変だろうが頼むっぺ」

「はい、わかりました」

こうして参謀になったのですがよく考えてみればこのチーム、デンマーク以外はとにかく喋りません。スウェーデンもそうですがノルウェーにしろアイスランドにしろ。無口とかそういうのを通り越して異様な雰囲気すらあります。スウェーデンに至っては物凄い威圧感を発しています。

「そんな連中の参謀になったのか」

「ええ、まあ」

ドイツの少し引いたような問いにも応えます。多少困ったような

笑顔にはなっていますが。
「デンマークさんに頼まれまして」
「御前も何かと大変だな」
彼と同じく苦労人のドイツだからこそわかることでした。
「まあ頑張れ。やっていればいいこともある」
「そう思ってますけれどね。あはは」
笑っていますがどうしても濃い面々に囲まれて苦労することになったフィンランドなのでした。もっともどのチームも苦労を背負ってしまっている人はいるのですけれど。このドイツ然り。

第八百十三話　　完

２００９・６・２１

第八百十四話　けれどかなり有能な参謀です

第八百十四話

けれどかなり有能な参謀です

かくしてチームの苦労を一身に背負うことになったかも知れないフィンランドですが持ち前の粘りと人柄でチームを上手くまとめています。何しろあのスウェーデンも彼の言うことなら素直に頷くからです。

「ではスーさんはそちらを御願いしますね」

「わかった」

威圧感に満ちているのは変わりませんがそれでも頷いてその通りにやってくれるのは事実です。この人に言うことを聞いてもらえるのはそれこそ荒れ狂うバンダースナッチをつなぎ止めるのと同じ位難しいです。

ノルウェーにしろアイスランドにしろフィンランドの言葉は素直に従ってくれます。リーダーのデンマークはそれを見てにこにことしています。

「いやあ、やっぱりフィンランドが参謀でよかったっぺ」

彼もまたフィンランドの指示通りに動いています。

「おかげで俺は考えなくていいし本当に楽だっぺよ」

「ちっ、何て羨ましいんだよ」

「全くだ」

しかしそんな様子を見てイギリスとフランスが思いきり嫉妬していました。

「なあデンマークよ、追加メンバーいらねえか？」

「ちょっと一人いるんだけれどよ」

そしてさりげなく彼に追加メンバーを提案するのでした。

「金色のな。生徒会長が一人いるんだけれどよ」

「どうだ？そっちのチームも追加メンバーいるんだろ？」

「ああ、それはいいだっぺ」
デンマークは二人のその申し出をあっさりと断ってしまいました。
「もうそれもフィンランドがスウェーデンの言葉を入れて決めてくれたっぺ。いやあ、本当に優秀な参謀だっぺ」
「ちっ、こいつは何もしなくていいのかよ」
「何て恵まれた奴なんだよ。俺達に比べてよ」
またしても二人には生徒会長のデスクワークの代理の仕事が待っているのでした。少なくともこの二人はあまり恵まれてはいないようです。

第八百十四話　　完

２００９・６・２１

第八百十五話　青い不思議青年

十五話　　青い不思議青年　　第八百

三番目はノルウェー、ホクオウブルーです。この人がチームの青というのもこれまた実に簡単に決まったことでした。

「やっぱりこいつはブルーのポジションだっぺ」

「それだけ？理由は」

「そうだっぺ。まあ他にも海に面している部分が多いとか色々理由があるっぺ。けれどやっぱり最大の理由はそれだっぺ」

こうノルウェーに話すのでした。そして赤と青という戦隊ではまさに対象でありいつもある色になってにこにことしています。

「俺とノルウェーの絆を考えればやっぱり赤と青だっぺ」

「あんた何気に熱いけ」

けれどノルウェーは相変わらず素っ気無くデンマークをいびっています。

「離れるけ。だから」

「おっと、そうだっぺな」

そしてデンマークはこのことに全く気付きません。

「それじゃあ離れるっぺよ」

「そうしてくれろ。熱いの苦手だから」

これはいびっているのですがそれ以上にノルウェーが熱さに弱いということもあります。何しろ彼は寒い国にいるのですから。

その彼はいつも妖精達とお話していてそのうえで何かあればすぐに出せるものがあります。それは。

「おお、これだっぺ」

それはオーロラです。デンマークは自分が親友と思っているその人が出したそれを見て上機嫌になります。

「これこそが親友の必殺技だっぺ。最高だっぺ」

「これはたっぷり見て欲しい」
ノルウェーも今回ばかりは結構デンマークにフレンドリーです。
「さあ、まだ出すから。二人で見るけ」
「そうだっぺな。いや、流石は俺の親友だっぺ」
何だかんだでノルウェーもデンマークのことを大切に思っているのかも知れません。少なくとも彼等は今は二人でそのオーロラを見るのでした。

第八百十五話　　完

２００９・６・２２

第八百十六話　鮫ですけれど

第八百十六話　鮫ですけれど

まずデンマークがライオンでフィンランドが鷲です。あまりイメージに合わないかも知れませんがこのチームは動物をモチーフにしていますのでこうなります。

そしてノルウェーが何かといいますと。鮫です。海を暴れ回る鮫になります。ところが彼は自分が鮫だと言われてもあまり実感がないようです。

「そもそもスウェーデンが水牛でアイスランドが虎だけど」

「やっぱり合いませんか？」

「僕が鮫というのもどうかと思う」

やはりフィンランドにこう述べるノルウェーでした。

「合わない。鮫じゃないと思う」

「じゃあ何がよかったんですか？」

「クラーケンか」

これまた伝説上の動物を話に出してみせるのでした。海を支配する巨大な生き物でありその正体は蛸だとも烏賊だとも言われています。時にはエイや鯨だとも言われます。

「それがよかった」

「まあノルウェーさんのところには昔からいるって言われていますしね」

このことはフィンランドも知っています。

「やっぱりそれがよかったですか」

「けれどデンマークが決めた」

ここでそのデンマークのことを話に出すのでした。

「だからそれもいい」

「そうですか。それならいいですけれどね」

フィンランドもそれを聞いてにこりと笑います。
「じゃあ水中戦は頼みますよ」
「そちらは空をな」
「はい、空なら任せて下さい」
ノルウェーはかつてバイキングでしたしフィンランドはあのロシア相手に空で大暴れした経験があります。意外にもこの二人がチームの武の柱でもあるようです。

第八百十六話　　完

２００９・６・２２

第八百十七話　怖いブラック

第八百十七話　怖いブラック

四人目、ホクオウブラックは遂にこの人です。スウェーデンが黒い服を着て立っています。

「あはは、何か凄い似合ってますね」

「そか」

その威圧感たっぷりのスウェーデンを見てフィンランドは苦笑いと愛想笑いを混ぜたとても不思議な笑いを出していますが当のスウェーデンはただ一言で応えるだけです。

「そだったらいい」

「そうですか。そうなんですね」

「それでブラックだが」

唐突に自分の色に対して尋ねてきました。

「何すればいい？」

「まあこのチームのブラックはですね」

フィンランドは彼に応えて述べます。ブラックといってもレンゴウブラックことフランス、バルトブラックことリトアニア、ラテンブラックことキューバと他にもいます。面白いことにチームごとにそのポジションが違います。この辺りは結構以上に面白いものがあります。

「力技担当でして」

「力技か」

「はい、突撃したりもしますし」

流石牛だけはあるということです。

「ですからスウェーデンさんはいざって時の切り込み隊長ですね」

「わかった。じゃあ早速」

何処からか剣や斧を出してきました。あのバイキングの馬鹿でか

いものをです。
「倒す奴さ呼んでくれ」
「あの、やることは掃除ですから」
そんなスウェーデンを今日も止めるフィンランドでした。やっぱりこの人は今一つ以上にわかりません。無表情というかとても怖い感じは黒い服のせいで余計に増しています。

第八百十七話　　完

２００９・６・２３

第八百十八話　けれど意外と気がききます

第八百十八話

けれど意外と気がききます

こんな物凄く威圧感たっぷりのスウェーデン、最早ホクオウチームはこの人のせいでとても怖いチームになっています。この辺りはロシアがいるレンゴウチームやドイツがいるスウジクチームに負けていません。勝っていたから何だというものではありますが。

今日も五人で学園や街を掃除しています。けれど皆スウェーデンが怖くて寄り付きません。けれど何故か犬や小鳥はこの人の周りに集まってきます。

スウェーデンは彼等に餌をやって食べ残しはちゃんと後片付けをしています。本当にまめに動いています。

「あっ、感謝するっぺ」

「有り難うございます」

そして皆に対してそっと買って来たジュースを差し出したりもします。休憩の時にそれを出してくれる心配りもここで見せてくれます。

無口で物凄く怖いですが結構優しいみたいです。けれどやっぱり皆この人を怖がっています。

「でかいしねえ」

「何かプレッシャーが」

けれど仲間うちではかなり打ち解けてきています。デンマークはスウェーデンの背中をばん、と叩いて明るい声で言うのでした。

「よし、今日も頼りにしてるっぺよ」

「そか」

こう言われてもいつもの調子だったりします。

「わかった。それじゃあな」

「そうだっぺ。じゃあまた掃除するっぺよ」

「わかった。やるだ」
無表情は変わりませんがすぐに立ち上がってそれからどんどん掃除をしていきます。黙々と働いていくその姿は本当に頼りになります。
実はいい人のスウェーデン、顔は怖いですけれど気が利きます。今日も周りには犬や小鳥達が集まっているのでした。動物にはわかるのでしょう。

第八百十八話　　完

２００９・６・２３

第八百十九話　白い虎

第八百十九話　白い虎

ホクオウファイブも遂に最後の一人、アイスランドの登場です。
この人の服は白でした。
「そういえばうちのチームは女の子いないっぺな」
ここでデンマークはこのことに気付きました。
「どのチームにも一応女の子いるのに寂しいだっぺな」
「まあ仕方ないですよ」
フィンランドがこう言って少し寂しそうなデンマークに対して答えます。
「僕達全員男なんですし」
「そうだっぺな。妹もいないっぺしな」
妹がいるというのはそれだけでもうかなりいいことのようです。
なお女の子が一番多いのは女の子だけのチームである恋姫チーム以外ではスウジクチームが一番です。しかもこのチームは女の子がしっかりしていておまけに強いという素晴らしさであります。
「贅沢言うのはよくないっぺか、やっぱり」
「男は男だけでいいじゃないですか」
またこう言ってデンマークを慰めます。チームのお母さんはしっかりといます。
「それでアイスランド君ですけれどね」
「ああ、あいつそういや何処だっぺ？」
「ロシアさんが見ていますよ」
見ればその通りでした。何かロシアがとても興味がありそうな顔でアイスランドを見ています。どうやら何かしらの事情があるようです。
「あれはどうしたんでしょうね」

「ううん、あいつが出て来たらかなりまずいだっぺよ」
デンマークもロシアを知らないわけではありません。フィンランドは余計にです。その怖さはもっと知っています。
「すぐにアイスランドのところに行くっぺ」
「はい、そうしましょう」
こうして彼等がアイスランドのところに行きました。ロシアは今は無言で去りましたがどうも不穏な空気も漂っているのでありました。

第八百十九話　　完

２００９・６・２４

第八百二十話　簡潔な文体

第八百二十話　簡潔な文体

アイスランドは文学青年です。この人が書いた本はサガと呼ばれ世界的に有名なものです。皆が読んでいますがその文章はとても特徴的です。

「とにかく簡潔なんだね」

「うん」

イタリアの問いにもいつもの無表情で答えます。

「そうなんだ」

「この簡潔な文章って。確か」

「ハードボイルドだ」

「そうそう、それだったよね」

イタリアは今度はドイツの言葉に頷きました。

「こうした文体ってそう言われてるよね」

「そうだ。しかしこうした文章を昔から書いてきたんだな」

「書く時間はあったから」

アイスランド自身も簡潔な言葉でした。

「けれど書くと何かこうなったんだ」

「そうか。それは何となくわかるな」

ここでドイツはちらりと窓の外を見ました。見るとその外は一面吹雪と氷の世界です。こんな世界にいては文章が簡潔になるのも当然かも知れません。

「俺の国の冬よりもまだ厳しいしな」

「そうかも。けれどこの文章どうかな」

「いいと思うよ」

イタリアはにこにことしてアイスランドに答えました。

「これからも読んでいいよね、このサガ」

「うん、読んで」
表情からはわかりませんが嬉しいのは確かなようです。アイスランドは今も一人静かに何かを書いている時がありますがこれも簡潔な文体なのでした。

第八百二十話　完

２００９・６・２４

第八百二十一話　追加メンバーまで

二十一話　追加メンバーまで

ホクオウファイブは五人です。ファイブだから五人ですが追加メンバーもいます。追加メンバーもかなり重要ですが時として全然呼んでもいないのに強引になってくる人がいたりします。そして今回もそんな人なのでした。

「シー君がそうなのですよ！」

「あれっ、貴方がなんですか？」

フィンランドは銀色の服を着て出て来たシーランドを見て少し驚いた顔をしていました。

「貴方が六人目ですか」

「そうなのですよ。驚きましたか？」

「驚いたも何も」

フィンランドは実は今までシーランドを国と思っていなかったのです。ですからここで出て来ても何と言っていいかわからなかったのです。そもそも追加メンバーが出て来るとも思っていませんでした。

「六人目ですか」

「そうなのですよ。頼りにしていろですよ」

「はあ。それじゃあ宜しく御願いします」

「シー君は狼なのですよ！」

しかも動物まで自分で決めています。海の国なのに何故か狼です。

「それも銀狼。最高に格好いいですよ！」

「狼ですか。エストニア君のお家にはまだ野生の狼がいますけれど」

「身体は小さくても心は大きいのですよ。だから安心して任せろなのですよ」

しかしここでイギリスが出て来ました。彼にとってみてはまたシ

ーランドが勝手なことをしていると思っているから当然です。呆れながらも二人が話をしているところにやって来て。シーランドの手を引っ張って連れて行きます。
「邪魔したな、うちの小さいのが」
「はあ」
「こらーーーですよ！」
連行されていくシーランドはそのイギリスに対して抗議します。
「シー君に何てことするんですか！イギリスの野郎に言われる筋合いないですよ！」
「生徒会長だけでも頭抱えてるのに何でこんな奴までいるんだよ」
イギリスも実に苦労が絶えないのでした。なおそれでもシーランドはスウェーデンの推薦で見事六人目となったのでありました。

第八百二十一話　　完

２００９・６・２５

第八百二十二話　イギリスが何を言っても

第八百二十二話

イギリスが何を言っても

シーランドがホクオウ戦隊の六人目になったことが不満で仕方のないイギリスは当然ながら五人のメンバーに抗議をしに行きます。けれどその相手が問題でした。

「アイスランドとは鱈のあれで苦手になっちまったしなあ」

以前鱈の取り合いで喧嘩をして他の国が全部アイスランドについて痛い目に逢ったことがあったのです。

「ノルウェーは何考えてるかわからねえしデンマークは言っても豪快に笑うだけで俺の言うことを聞いてくれそうにもねえしな」

どうも北欧の国々には苦手意識が強いようです。

「ここはあいつか」

それでも相手を見つけてそのうえで向かいました。その人のところに辿り着いて声をかけます。

「なあフィンランド、話があるんだけれどよ」

彼だけがいると思っていたのです。ところがそこにいたのは他にも。

「げっ、御前もいたのかよ」

「んだ」

スウェーデンまでいるのでした。相変わらず物凄い威圧感を漂わせながらそこにいます。しかもその場にはシーランドまでいるのでした。

「あっ、イギリスの野郎なのですよ」

そしてイギリスを指差して言ってきました。

「ホクオウシルバーは負けないのですよ。六人目は強いのですよ！」

「くそっ、何でこいつまでいるんだよ」

「友達だ」

そのこいつが威圧感をそのまま発しながら言ってきます。
「シルバーだからな」
「そうですよ。シー君がシルバーなのですよ」
「・・・・・何でこんな展開になっちまうんだよ」
もうイギリスにもどうしようもありませんでした。こうして彼はすごすごと帰りその後ろからシーランドがスウェーデン達と楽しく遊ぶ声が聞こえるのでした。

第八百二十二話　　完

２００９・６・２５

第八百二十三話　六人揃えば

第八百二十三話　六人揃えば

このホクオウチーム、六人揃えばまさに無敵です。そのチームワークも思った以上に遥かにいいものです。少なくともレンゴウチームよりは遥かにいいです。

「何でうちのチームだけこんなに仲が悪いんだよ」

「御前の過去が大きく影響してるに決まってるだおるがよ」

ホクオウチームの仲のよさに歯軋りするイギリスに対してフランスが言います。

「戦力はこっちがダントツなのによ」

「まあ言っても仕方ないから諦めろ」

こう言ってとりあえずイギリスのジェラシーを止めます。それを抜きにしてもこのチームのチームワークもかなり卓越したものです。

その卓越したチームワークで動いている六人。シーランドが勢い余ってこけようとしたらすぐにスウェーデンがその身体を支えます。

「あっ、どうもです」

「んっ」

無表情ですがフォローは見事です。まるで何でもないようにさりげなく守ってくれるのが実にヒーローらしくて素晴らしいです。

お互いの足りないところをさりげなく支え合うこのチーム、それはデンマークとノルウェーの間でも同じです。

口ではさりげなくいびっていますがデンマークが掃除し忘れたところをそっと掃除するノルウェー。やっぱり彼もフォローが見事です。

「何かうちのチームってかなりいいですよね」

「おうよ、チームワークは最高だっぺよ」

デンマークが明るくフィンランドに対して答えます。

「ちょっとばかり女の子がいないのが困るだけだっぺな」
「そうですね。本当にそれだけですよね」
「とりあえず応援してくれる女の子募集だっぺ。これじゃあ太陽戦隊だっぺよ」
女の子のメンバーが一人もいなかった伝説の戦隊のことまで話に出る程女ッ気のないこのチーム、しかしヒロインぎないかというとそうでもないのでした。

第八百二十三話　　完

２００９・６・２６

第八百二十四話　ダブルヒロインでした

ホクオウチームには女の子がいません。これがとてもネックになっています。しかしそれでもヒロインがいないかというとそうでもなかったりします。

「フィンランドってあれだよな」

「ああ、完全に女房役だよな」

皆がフィンランドを見てこう言います。やっぱり彼がチームの縁の下の力持ちになっていてそれで皆を支えてあれこれと世話をしているのです。

それを考えると彼はヒロインであるといえます。そして本人もそのことに関してどうもまんざらではないようであります。

「あっ、それじゃあ僕がヒロインってことで」

にこりと笑って言います。普段からスウェーデンの女房役なのでそれに対して賛成だったりします。やっぱり何だかんだでしっかりとしています。

そしてもう一人ヒロインがいました。今度は不思議ちゃんです。

「僕なの」

「そう、御前だよアイスランド」

「丁度ホワイトでヒロインの色だしな」

皆今度はアイスランドをヒロインだというのです。言われてみればその顔はかなりオンアンお子を思わせるものです。中性的な美少年ですから。

「だからヒロインだよ」

「それでいいよな」

「別に構わないよ」

特に表情を崩すことなく皆に対して答えます。

「じゃあ僕がヒロインね」
「よし、じゃあそれで決まりだな」
「このチームはヒロインが二人だ」
女の子がいなくてもヒロインはいるのでした。そう思うとこのチームも贅沢なものです。少なくともヒロインが一人しかいないあるチームよりはずっといいです。
「そりゃうちのことじゃねえかよ！」
レンゴウブラックことフランスの絶叫が響きます。女の子大好きの彼のチームがよりによってヒロイン一人だけなのでした。

第八百二十四話　　完

２００９・６・２６

第八百二十五話　凄い変わったカップル！？

第八百二十五話　凄い変わったカップル！？

台湾と韓国はいつも一緒にいます。どうしていつも一緒にいるのかといいますと二人がいつも日本と一緒にいるからです。それで二人はいつも一緒にいるのです。

「あんたと一緒になっても面白くとも何ともないんだけれど」

「何でいつもこいつと一緒にいるかわからないんだぜ」

けれど二人の仲はあまりよくはありません。というよりか悪いです。それでも二人が一緒にいると周りはこう言うのです。

「美男美女のカップルだよなあ」

「見ただけじゃな」

二人共アジア系の顔立ちをした凄い美形なのは間違いありません。台湾は可憐な美少女ですし韓国は背が高い美形です。二人共制服姿もよく似合っています。

けれどその制服の着こなしにしろ。二人は言い合うのです。

「あんたの着こなしって日本さんのそれにそっくりじゃない」

「御前の方こそ日本の家の女の子のまんまなんだぜ」

特に台湾はそうです。わざとスカートを折り込んでかなり短くしていますしお化粧やアクセサリーの使い方もそのまま日本のお家の女の子のものです。つまり二人共そのまま日本の真似をしています。

けれど二人の大きな違いは。日本に似ていると言われると。

「そうですか？日本さんみたいですか」

「あんな奴と一緒にするななんだぜ！」

片方はにこりとして片方は謝罪と賠償を求めてきます。これだけの違いがあります。

けれどやっぱりこの二人はいつも日本と一緒にいます。

「日本さん、このお弁当どうぞ」

「この漫画借りるんだぜ。感謝するんだぜ」
こう言って何だかんだで日本の左右を固めています。ドイツがそんな日本を見て言います。
「あいつも何かと苦労しているな」
苦労人だからこそわかることでした。けれど二人共やっぱりいつも一緒なのでした。

第八百二十五話　　完

２００９・６・２７

第八百二十六話　嫌い合っているのに

第八百二十六話　嫌い合っているのに

仲の悪い台湾と韓国。それでも一緒にいるのはイギリスとフランスの関係と同じです。けれどこの二人は女の子と男の子なのでそれが大きな違いです。

けれど仲が悪いので。それぞれ日本を挟んで喧嘩をすることもしょちゅうです。

「だからあんたはね。気が向いたら何でも自分が起源にしないの」

「御前の方こそ俺に起源にされるように頑張るんだぜ」

「あのですね。もう少しお静かに」

頭の上であれこれと言われている日本にとっては困ったことなので一応注意します。

「今寝ようとしているところなので」

丁度日本は自分の家で寝ようとしているところでした。こんな時まで二人はいつも日本の側にいます。とにかく何時でも一緒なのです。

この日はこれで帰りましたがそれでも帰り道二人は一緒にそれぞれのお家に帰ります。その時まであれやこれやと言い合っています。

「あんたのせいで日本さんに追い出されたじゃない」

「それは俺の台詞なんだぜ。御前が騒ぐからなんだぜ」

二人夜道を並んで歩きながら言い合っています。

「全く。あんたには進歩ってのがないの？」

「御前の方こそ可愛げがないんだぜ。女の子ならもう少しおしとやかにするんだぜ」

「あんたに言われたくないわよ」

「こっちもなんだぜ」

口喧嘩をしながら夜道を歩いてそうして。然るべき場所に着くと。

「じゃあまた明日ね」
「お休みなんだぜ」
何だかんだで挨拶はして手を振り合って別れます。そうしてまた次の日朝御飯を食べている日本の横でまた言い合いです。
「だからあんたはね」
「御前の方こそなんだぜ」
こんな調子です。やっぱり二人はいつも一緒です。日本の横で。

第八百二十六話　　完

２００９・６・２７

第八百二十七話　子供の頃の台湾

第八百二十七話　子供の頃の台湾

こんな微妙な関係の台湾と韓国ですが最初の出会いの頃はどうだったかといいますと。

台湾が日本のお家に入ったのは順調に流れてではありませんでした。まだ小さい子供だった台湾は物凄い暴れん坊だったのです。

どういったふうに暴れん坊だったかというとまさに野生児でした。台湾の密林の中を駆け巡り何もない中を暮らしていたのです。

日本がそこに入るといきなり襲い掛かってきました。殆ど仮面ライダーアマゾンでした。

「何だ御前は！」

引っ掻いて噛み付こうとしながら日本に対して言います。

「あたしの家に何しに来たんだ！」

「貴女がまさかと思いますが」

「あたしがどうかしたのか！？」

「台湾さんですか？」

とりあえず台湾を落ち着かせてから尋ねるのでした。

「まさかと思いますが」

「だったらどうするんだ」

台湾は日本の兵隊さんに抑えられながらもまだ抵抗しながら彼に問い返します。

「一体何をしに来たんだ」

「貴女はこれから私の家の一員です」

日本は穏やかな調子で彼女に言いました。

「日本のお家に。ようこそです」

「日本！？何処そこ」

台湾は自分の他にも国があることを殆ど知らなかったのです。一

応中国の中にいましたが殆どほったらかしにされていたからです。
「一体どんな場所なの？一体」
何が何なのかわからないまま日本のお家に入れられたのでした。
そうして首輪ではなく奇麗な服を貰ってそれから。日本と一緒に色々なことを勉強することになったのです。

第八百二十七話　　完

２００９・６・２８

第八百二十八話　先生とお巡りさん

百二十八話　先生とお巡りさん　　第八

日本の家に入れられた台湾は最初物凄い暴れました。どうしようもない暴れん坊で皆どうしたものかと困ってさえいました。衛生とかそうしたこともなくて阿片なんかも吸っていたりと酷いものでした。もうどうしようもないのかもと思う人もいましたがそれでも日本も日本のお家の人達も台湾と粘り強く接しました。

そんな時代の名残で台湾には六人の先生達のお墓とあるお巡りさんの像があります。台湾は今こういったものをとても大事にしています。

「あれっ、これまだあったんですか」

「はい。ダムを作ってくれた先生の像もありますよ」

台湾は自分の国にやって来た日本に対してにこりと笑って答えます。

「私に色々と教えてくれたりよくしてくれた人達ですから」

「そういえばこうした人達もいましたね」

「あの時の私はどうしようもない娘でしたけれど」

台湾もその時のことを思い出して照れ臭そうに、恥ずかしそうに苦笑いを浮かべます。

「けれど今は」

「そうだったのですか。この方々が台湾さんを」

「日本さんと一緒に色々教えてくれたんじゃないですか」

「ああ、そういえばそうでしたね」

この辺りのことはあまり覚えていなかった日本です。

「あの時は台湾さんと一緒でしたね」

「この人達がいてくれたから今の私があるんです」

台湾は今度はとてもいとおしげにお墓や像を見て言います。

「日本さん、私ずっと忘れませんから」
「そうですか。ずっとですね」
「何があっても。この人達と日本さんのことは」
自分の知らないところで物凄い恩義を受けている日本とそのお家の人達でした。本人達は自覚していませんしそれについて何も思ってはいませんけれど。

第八百二十八話　　完

２００９・６・２８

第八百二十九話　最初の出会いの時は

八百二十九話　最初の出会いの時は　　第

日本やそのお家の人達に丁寧に育てられていた台湾ですがある日のこと。急にその日本から声をかけられました。

「今日は貴女に会ってもらいたい人がいます」

「私にですか？」

言葉遣いもかなり落ち着いて女の子らしいものになっていました。

「誰ですか。その人って」

「この前うちに来ることになった人でして」

日本はこう台湾に話します。

「その人に御会いして欲しいのですがいいですか？」

「はい。それじゃあ」

日本のその言葉に頷いてそのうえで会いにいきます。するとそこにいたのは。

背の高い少年でした。顔立ちは整ってはいますがかなりやんちゃそうです。その彼が日本から貰ったと思われるカラフルな何処か中国の服に似た服を着ていました。

「この人です」

「貴方は一体誰？」

「俺か？俺は韓国なんだぜ」

韓国は台湾に対してこう名乗りました。

「これから日本の家の一員になることになったんだぜ。宜しくなんだぜ」

「貴女と同じように私のお家で育てられることになりました」

日本がここでまた台湾に対して説明します。

「二人共仲良くして下さいね」

「はい」

台湾は日本の言葉に素直に頷きます。そうして挨拶が終わると韓国は日本の上司に丁寧に案内されていきます。軍服を着た上司の人です。

「さあ。それじゃあまずは君のところに木をたっぷり植えるからな」

「何か私のところよりも扱いいいのかしら」

子供心にそんなふうにも思う台湾でした。彼女には日本の上司は直接来て案内してくれることは殆どなかったからです。

第八百二十九話　　完

２００９・６・２９

第八百三十話　二人の扱いの差

八百三十話　　二人の扱いの差　　第

台湾は普通に日本のお家の人達に丁寧に育ててもらっていました。けれど韓国はそれ以上でした。何かというと日本の上司で陸軍の人が来ては親切丁寧に指導してくれるからです。

「はい、橋を作ったからね」

「学校も用意したから。ここでハングルを勉強するんだよ」

並ぶ順番も日本が最初なのは当然ですが韓国はいつもその次です。その後で他の大阪や会津が来ます。台湾は一番後ろがいつもでした。とりわけ韓国は自分のお家の文字を勉強させてもらえたのです。

「これが俺の文字なんだぜ」

韓国は今でも誇らしげに言います。

「日本に奪われたけれど復活したんだぜ」

「何が奪われたよ」

台湾はそんな彼の言葉を聞く度に思うのでした。

「日本さんとのその上司の人に教えてもらっていたのに」

「名前だって奪われたんだぜ」

同時にこの話もするのでした。

「だから凄く大変だったんだぜ」

「名前だって」

その時韓国も台湾も日本のお家の人の名前を名乗ることが許されていました。けれど韓国は使いたいと上司の人に言えば上司の人がすぐに認めてくれました。言えばそれで終わりだったのです。

それに対して台湾は言ってもそこから許してもらうことが必要でした。そこまで差があったのです。

「私なんかよりずっと日本さんや上司の人達に大切にしてもらっていたのに」

台湾はそのことを思いながら韓国を見ることがあります。

「どうして日本さんをいつも悪く言うのよ。それっておかしいじゃない」

こう思っていますからやっぱり仲はよくありません。同じ日本にいたことはあっても二人の間にある溝は思った以上に深く広いものなのです。

第八百三十話　　完

２００９・６・２９

第八百三十一話　兵隊さんになるのも

第八百三十一話　兵隊さんになるのも

韓国は日本の上司の人、とりわけ陸軍の人達に物凄く可愛がられていました。かといっても台湾のことも決して邪険にしていたわけではないのですがやはりその扱いの差はかなりのものでした。

「凄いだろう、日本兄さんと上司の人にこんなの貰ったんだぜ」

「えっ、その服ってまさか」

「そうなんだぜ。陸軍将校なんだぜ」

何と韓国が陸軍の、それも将校の軍服を着ているのです。この頃の日本のお家の軍隊は誰でもなれるものではありませんでした。おまけに将校にもなると。何と韓国がそれを着ているのです。

「俺の前の上司の方も日本の上司になってるしその人からもお褒めの言葉頂いたんだぜ」

「あんたのお家の上司の人までそうなの」

韓国のかつての上司の人は今は日本のお家にいます。しかも驚くべきことに日本の上司のさらに上司の方の血縁者にまでなっています。つまり物凄く偉い人になっているのです。

「私には上司の人なんていなかったのに」

いることはいましたけれど殆どいないも一緒でした。一応中国のお家の中にいましたけれど全くのほったらかしだったのです。

「あんたは上司の人までいてしかも日本さんのお家の上司になってるなんて」

「御前もそうなるといいんだぜ。頑張ってなるんだぜ」

韓国は能天気に笑いながらその軍服を皆に見せています。上司は仕方ないですが韓国の軍服を見て自分も着たいと思った台湾は必死に努力しました。けれど。

彼女は兵隊さんにはなれませんでした。陸軍の人は今一つ彼女に

いい顔をしなかったのです。
「もう少し時間が必要だ」
「まだ早い。勉強を続けなさい」
こう言って彼女を今は軍に入れようとしなかったのです。彼女は韓国に比べるとあまり扱いではありませんでした。

第八百三十一話　　完

２００９・６・３０

第八百三十二話　バナナに込められたもの

第八百三十二話

バナナに込められたもの

日本が枢軸同盟に加わってアメリカやイギリスと全てを賭けた戦争をはじめた中で遂に。台湾にも声がかかったのでした。

「貴女もよかったらですが」

「はい、勿論です！」

台湾は日本の誘いにすぐに応えました。

「私頑張ります！日本さんの為に！」

こう言って彼女はすぐに兵隊さんになりました。そうして各地を転戦する日本と一緒に戦いました。

ジャングルも持ち前の身体能力で踏破して敵を破り活路を開き。日本が傷ついたり食べ物が少なくなって困っている時にはそのジャングルの中からバナナ等を持って来て彼に手渡したのでした。

「貴女の分は」

「私はもう食べましたから」

やつれた顔でにこりと笑って言うのでした。

「だから日本さん食べて下さい」

「そうですか」

日本は彼女が本当は何も食べていないのはわかりました。けれど彼女のその気持ちを受け取ることにしてその差し出されたバナナも受け取ったのでした。彼女の心を。

日本にとってはとても辛い戦いになってきました。けれど台湾はその日本の側から離れませんでした。多くの国が日本に対して宣戦布告をしてきてさらに辛い状況になってきていたのに。

「私、日本のお家にいますから」

あちこち傷だらけになって疲労の極みの中にあってもまだ立っていました。

「ですから何があっても日本さんと一緒に戦います」
「台湾さん・・・・・・」
彼女は最後の最後まで戦いました。日本と一緒に。傷ついて自分も辛かったのにそうしたことは一切言わずに。その軍服を脱がなかったのです。

第八百三十二話　　完

２００９・６・３０

第八百三十三話　今も好きだから

百三十三話　　今も好きだから　　第八

戦争が終わって台湾は日本から離れることになってしまったのですがそれでも日本のことは忘れてはいませんでした。交流はずっと続いていたのです。

「日本さんのお家から出てもいいですよね」

「まあいいだろう」

新しく上司になってくれた人もそれは認めてくれました。この人は元々中国の上司だったのですが色々とありましてそれで台湾の上司になった人なのです。

「それはいい」

「有り難うございます」

こうして台湾は日本とのお付き合いを続けました。そして今では日本のお家の女の子のファッションやヘアースタイルを参考にしていつもお洒落をしています。

「そうですか。お侍なんですね」

「はい。どうでしょうか」

今日は日本のお家で人気の侍戦隊を一緒に観ています。

「かなり斬新だと思いますけれど」

「いえ、凄く面白いです」

台湾はその黒い目をキラキラと輝かせて日本に答えました。

「こうしたことを考え出すことができるのもやっぱり日本さんですよね」

「おっと、侍は俺が起源なんだぜ」

なおこの番組を日本と一緒に観ているのは台湾だけではありません。やっぱり韓国もいました。何だかんだで日本の側にいたいようです。

「そもそもこれはサムラビが起源なんだぜ」
「だからあんたの趣味はどうにかならないの？」
そんな韓国に呆れはしていますがそれでも韓国とも一緒にいます。
この三人のお付き合いは周りが思っている以上に深いもののようです。

第八百三十三話　　完

２００９・７・２５

第八百三十四話　黒子の中の人達

第八百三十四話　黒子の中の人達

日本のお家には黒子という人達が大勢います。その姿は見えているのですがそれでもいないことにはなっています。一応見えない存在ということです。

「それでも何かしら。気になるのよね」

「そもそも中には誰が入っているんだぜ」

台湾も韓国もこのことが気になって仕方ありません。

「やっぱり中にどなたかいるのは間違いないけれど」

「問題は誰かだぜ」

それでたまたま側であれこれとお仕事をしている黒子さん達の覆面をぱっと取っていますとそこから出て来たのは。

「ウェーーーーーーーーーーーーイ!!」

「アンナアンデカヤァーーーーーール」

何と黒子は仮面ライダーでした。オンドゥルとダディ、この人達だったのでした。

「クサムカァ!クサムガミンナヲ!（翻訳：貴様か!貴様が皆を!）」

「オデノカラダハボドボドダ!（翻訳：俺の身体はボロボロだ!）」

物凄く元気なのですが勝手にそう思い込んでいるダディです。何はともあれいつものように勝手に勘違いして台湾と韓国に攻撃を仕掛けてきました。

敵に回った時には異常に強い二人から逃れてそれで別の黒子さんのお面を取ってみると今度出て来たのは。

「オラァクサムヲムッコロス!（翻訳：俺は貴様をぶっ殺す!）」

「オデノベルトーーーーーーッ!（翻訳：俺のベルトーーーーーっ!）」

今度は仮面ライダームッコロと仮面ライダームッキーです。何と黒古さんの正体はライダー達だったのでした。

「他にも所長さんや脚本家さんが中におられたりしますよ」

「そんな危険な人達が黒子さんだったんですか」

「日本も物騒過ぎるんだぜ」

黒子の正体がわかって唖然とする二人でした。やっぱり日本のお家は何かがあります。

第八百三十四話　　完

２００９・７・２５

第八百三十五話　生徒会秘書

第八百三十五話　生徒会秘書

生徒会で最も問題になっていることはもう誰もが知っています。それは肝心の生徒会長が仕事を全くしないことです。韓国はとにかく生徒会の仕事をしません。

「それで俺達にばっかり仕事が来るんだよな」

「あの野郎、手前の宣伝や起源の主張ばかりしてるじゃねえかよ」

イギリスとフランスは今日も不平不満をぶちまけながらその韓国の代わりに生徒会の仕事をしています。二人の机の上は書類がうず高く積まれています。それを処理するだけでも大変です。なお生徒会の他のメンバー三人は何処かに消えています。アメリカも中国もロシアも自分達が生徒会長に推薦したというのに韓国が絡んでいる仕事には全く手をつけようとしません。考えてみなくても非常に無責任な話であります。

それでイギリスとフランスが韓国の分の仕事をそれぞれ分担したうえでしているのですがここで二人が気付いたことは。今まで気付きもしなかったことでした。

「そういえば俺達がやった仕事誰がまとめてるんだ？」

「ああ、そういえばそうだな」

フランスはイギリスの言葉からそのことを思い出しました。

「誰が秘書をやってるんだろうな、そういえば」

「それだよ。何かそこんところが凄く引っ掛かるんだよな」

そんな話をしているうちに二人が思うようになったことは。

「その秘書役探さないか？この生徒会のよ」

「そうだな。一体誰がやってくれているのか興味があるな」

こうして二人はその密かに秘書をしてくれている人を探すことにしました。思えば生徒会長が全く仕事をしていないのにそれでも生

徒会が動いているのですから実に不思議なことです。
「だからあいつだけは会長にするなって言ってただろうがよ」
「そんなこと言ってもどうしようもねえけれどな」
不平不満は今でも消えることがない二人でした。これも当然と言えば当然のことでありますが。

第八百三十五話　　完

２００９・７・３０

第八百三十六話　会長の日常

第八百三十六話　会長の日常

その全然仕事をしない会長。彼は生徒会室には殆どいません。全くいないと言っても過言ではありません。そんな彼がいつもいる場所といえば。

「またあんたそこにいるのね」

「何か不満でもあるのかなんだぜ」

「あるわよ。どうして嫌いだ嫌いだって言いながらいつもそこにいるのよ」

韓国に言っているのは台湾です。見れば韓国は今日も日本の隣にいて遊んでいます。とりあえず日本がどう思っているかどうかとかそういうことはいつも通り一切考えていません。あくまでゴーイングマイウェイな韓国であります。

「日本さんの隣にばかり」

「私は別にいいのですが」

日本もこれまたいつも通りでありますが自分の本音は隠しています。もっともこれがこの人にとってプラスになったことはあまりなかったりします。

「日本もこう言ってるんだぜ。だからいいんだぜ」

「全く。いつもいつも我が儘なんだから」

台湾はそんな韓国に呆れることしきりです。ところがこの人にしろ。

「日本さん、お隣いいですか？」

「あっ、はいどうぞ」

「有り難うございます。それでは」

この人も日本の隣に来るのでした。これもいつも通りです。そのうえ。

「日本さん、今度のお休み二人で何処かに行きませんか？」
「何処かにですか？」
「はい、よかったら私のお家にでも」
こんなことを言って日本を誘っています。
「お料理作って待ってますから」
「何！？じゃあ俺も行くんだぜ」
「だからあんたは呼んでないでしょ」
「そんなことは関係ないんだぜ。御前の家の料理にしろ起源は俺の家なんだぜ」
「そんなの初耳だけれど？」
「今わかったんだぜ」
こうしたいつもの日常を過ごす韓国でした。けれどやっぱり生徒会のお仕事は全くしないのでした。

第八百三十六話　　完

２００９・７・３０

第八百三十七話　それで秘書は誰か

第八百三十七話　それで秘書は誰か

とりあえず生徒会に秘書がいるらしいということはわかったのですが問題はそれが誰かということです。とりあえず候補者は。

「あの三人は絶対にねえな」

「するわけがねえ」

アメリカに中国にロシアはその候補者から真っ先に外されてしまいました。韓国が関わるとまず姿を消す三人がそんな仕事をする筈がないからです。なお三人は生徒会の役員であります。そうした意味ではイギリスやフランスと同じ立場なのです。

まず三人は候補者から抹消されました。続いての候補者は。

「あいつは。どうなんだろうな」

「あいつって誰だ？」

「だからあいつだよ」

イギリスはこうフランスに対して話すのでした。

「あいつだよ。ほら、名前出て来ないけれどな」

「？誰だよ本当に」

「何か一人いただろ？アメリカに似た奴」

とりあえずその人の顔は脳裏に浮かんできたイギリスでした。ですが名前は中々出て来ません。それで困っていますがそれでも出て来ません。

「何かよ。いただろ、ほら」

「そういえばいたな」

ここでやっとフランスもその顔が脳裏に浮かんできました。

「誰だった？あいつよ」

「そうだよな。誰だった？」

とにかく名前が出て来ません。咄嗟に出て来た名前は。

「リトアニア・・・・・・は違うか」
「あいついつもポーランドと一緒だからな。それはないな」
「そうだよな。あいつが生徒会長だったらな」
何気に願望も出しています。けれどその人の名前はどうしても思い出せないイギリスとフランスでした。果たしてその人は誰なのでしょうか。

第八百三十七話　　完

２００９・７・３１

第八百三十八話　その候補者の人

第八百三十八話　その候補者の人

「ねえクマ九さん？」

「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」

「君の飼い主のカナダだよ」

まずはいつものやり取りからです。カナダはわざと名前を忘れてしまっているクマ二郎さんに対して言っています。今この人は自分の部屋の中で暖炉にあたりながらくつろいでいます。その中でクマ二郎さんとお話をしているのです。

「僕生徒会の仕事何かやってたっけ」

「やってなかったんじゃないのか？」

クマ二郎さんはこうカナダに返します。

「御前が生徒会室に出入りしているなんて見たこともないし聞いたこともない」

「そうだよね。生徒会かあ」

ここで少し羨ましいものを感じるカナダでした。

「アメリカがいつもあそこでスポットライト浴びてるしなあ。僕も参加させてもらえたらなあ」

「その前に日本やドイツが入るんじゃないのか？」

クマ二郎さんはかなり現実的なことをカナダに言いました。

「やっぱりその前に」

「そうなんだよなあ。レンゴウ戦隊だって結局何時の間にかあぶれてたし」

気付いたら韓国が自分の妹をカナダがなる筈のシルバーに入れてしまっていたのです。しかもそれを誰も止めないしそもそもカナダがシルバーになる予定だったことも知らなかったのです。

「僕が生徒会に入ってもねえ」

「やっぱり誰も気付かないぞ」
「やれやれ。どうやったら目立てるのかな」
まずはそこからなのでした。どうやら秘書はこの人ではないようです。そのことだけはわかるここでのお話でした。なおイギリスとフランスはカナダのことはもう完全に忘れてしまっているのでした。

第八百三十八話　　完

２００９・７・３１

第八百三十九話　こいつかも知れないから

第八百三十九話

こいつかも知れないから

その正体不明の生徒会秘書ですがこれがかなり有能です。まるで靴屋さんの小人のように気付けば仕事をしてくれています。そこまで有能な人となるとやはり限られてきます。

「リトアニアでもないとするとだ」

「フィンランドじゃねえよな」

フランスはふとこの人のことを思い浮かべました。

「あいつも結構やるしな」

「けれどあいつはあれだろ？」

イギリスはそのフランスの言葉に対して突っ込みを入れました。

「バルトチームの大切な参謀だからな」

「だからそっちに専念してるか」

「ああ、だからない」

「だとするとハンガリーとか台湾もねえな」

「俺達の妹連中もな」

候補者がこうしてどんどん消えていきます。しかしここで一人浮かんできました。

「スイスかもな」

「スイスかよ」

「ああ、あいつは切れる」

フランスが言うこと、それは事実です。スイスは何も常に武装しているだけではないのです。頭が切れて財テクも得意なのです。だからこそ今までやっていけているのです。

「あいつじゃねえか？ひょっとしてよ」

「じゃあ調べてみるか？」

「ああ、そうしようぜ」

こうしてフランスはイギリスを連れて秘書がスイスかどうか調べに行くのでした。けれどこれはかなり命知らずなことであることを二人は見事に忘れていました。やはり二人共最近記憶力がかなり危ないことになっているようです。

第八百三十九話　　完

２００９・８・１

第八百四十話　歓迎は鉛の雨

第八百四

十話　歓迎は鉛の雨

いざスイスに乗り込んで尋ねることにしたイギリスとフランス、しかし二人を招待してくれたのは歓迎の花吹雪などではなく鉛の弾の雨でした。

「うわっ、ちょっと待ておい！」

「俺達は話を聞きに来ただけなんだよ！」

「話だと！？」

いきなり銃を派手にぶっ放したスイスはそのうえで二人の話を聞く態度になりました。

「話とは何だ？我輩にか？」

「そうだよ、そう！」

「何で話を聞きに来ただけなのに撃たれないといけないんだ？」

「顔が怪しいからだ」

それだけで撃つスイスもかなりのものです。もっとも確かにこの二人の行動は最近あまりにも怪しい一面が強かったりするのですが。

「だから撃った。それだけだ」

「それだけで撃つのかよ、手前はよ」

「俺達とは結構長い付き合いなのにかよ」

「付き合いの深さは関係ない」

この辺りのシビアさが実にスイスです。

「我がスイスに入ろうとする怪しい輩は誰であろうとだ」

「ちっ、相変わらずだなこいつは」

「どうせなら生徒会長案内してやるよ」

フランスは何気にとんでもないことを言っています。

「それで是非生徒会長交代の事態にしてくれよ」

「どうせあの馬鹿げた生命力と強運で無事なんだろうがな」

韓国は不死身と思える程の生命力と桁外れの運の強さがあったりします。それは置いておいてとにかく二人はスイスに対して尋ねることにしました。とんでもない歓迎セレモニーの後で。

第八百四十話　　完

２００９・８・１

第八百四十一話　それで聞いてみました

百四十一話　　第八

　それで聞いてみました

　スイスが出してくれたチーズフォンデュを食べながら話をはじめた三人。とりあえずイギリスとフランスがそのスイスに対して尋ねます。

「確かめたいことがあるんだけれどよ」

「いいか？」

「うむ。何だ？」

　スイスは二人の前に座って腕を組んでいます。それが如何にもスイスらしい格好です。

「話を聞こう」

「御前生徒会の仕事とかしてねえよな」

「秘書とかな」

　実に単刀直入にスイスに尋ねます。

「ひょっとしてだけれどよ」

「そこんところどうなんだよ」

「我輩はそんな仕事はしていない」

　実にはっきりと否定しました。

「そもそも我輩は学園のどんな仕事にも関わっていないが」

「そうだよな。やっぱりな」

「御前じゃねえか」

　わかっていても尋ねたことでした。けれど結局それではありませんでした。

「わかった。じゃあいい」

「邪魔したな」

「とりあえず我輩が思うことはだ」

　スイスはここで二人に対してアドバイスをしてきました。

「今の生徒会長は何とかした方がいいぞ」
「何とかなるんだったらこんなに苦労はしてねえよ」
「大体推薦した三人が真っ先にいなくなるって何なんだよ」
　このことを言われると殆ど条件反射で怒る二人でした。怒っても仕方のないことですがそれでもこれが二人にとっての急所になっているのでした。

第八百四十一話　　完

２００９・８・２

第八百四十二話　ヒントが一つ

第八百四十二話　ヒントが一つ

スイスではないことはわかりました。ところがそれでも誰かが秘書をやってくれているのは間違いありません。イギリスとフランスはそれで一旦生徒会室に戻りました。仕事をする為です。

「ちっ、またあの三人いねえよ」

「俺達だけであいつの仕事をするのかよ」

例によって二人の机の上には韓国がする筈の仕事が山の様に積まれています。当然他の三人はそんな仕事をする筈がなく何処かに消えています。その生徒会長も何処かに行っています。

「あいつ等最近全然出て来ねえな、生徒会にな」

「ったくよ、手前等が推薦した会長だろうがよ」

殆どイギリスとフランスへの嫌がらせになっています。二人はぶつくさ不平を言いながらもそれでも仕事をはじめようとします。しかしここで目に入ったものは。

「あれっ、この髪の毛ってよ」

「長いな」

ふと生徒会長の机の上に一本の髪の毛が落ちていることに気付いたのです。

「それも黒いぜ」

「黒くて長い髪の毛かよ」

二人はその髪の毛に注目するのでした。

「黒くて長い髪の毛つったら中国だけれどよ」

「あいつの毛はもっと硬いぜ」

フランスはその髪の毛を触りながら言うのでした。

「これは女の子の髪の毛だな」

「とするとだ」

イギリスはすぐに推理してしまいました。
「秘書は女の子か？ひょっとして」
「みたいだな。しかも黒くて長い髪の毛の女の子か」
二人は推理を続けます。どうやら謎が解けてきたようでした。少なくとも重要な手懸かりが手に入りました。

第八百四十二話　　完

２００９・８・２

第八百四十三話　セーシェルはどうか

第八百四十三話　セーシェルはどうか

黒くて長い髪の女の子、こう断定すると人が限られます。何しろ女の子でしかも黒い髪と言うと本当に限られた人しかいないからです。

「台湾は・・・・・・ねえな」

「あいつはずっと日本と一緒にいるからな」

「ちっ、何で日本はあんな可愛い娘にいつもついてもらえてるんだよ」

イギリスはここで何気に日本に嫉妬を感じてしまっています。

「黒髪の美少女かよ。いいじゃねえかよ」

「ついでにあの馬鹿生徒会長も一緒なんだがな」

「・・・・・あいつは遠慮しておくな」

その生徒会長のせいで今も迷惑しているからこの反応は当然のことでした。とりあえず台湾は消えました。その次にもう一人のアジアンガールも。

「ベトナムもないな」

「あいつはあいつで忙しいしな」

ベトナムはお家の商売に精を出す日々を送っているのです。意外と以上に商才があって今ではベトナムの体調も鰻登りだったりします。

「だからないよな」

「そうだよ。っていうとだ」

ここで出て来た人は。

「セーシェルか？」

「あいつか？」

「ああ、あいつだって黒髪で長いだろ」

流石フランス、そうしたところはちゃんとチェックしています。

「だからあいつじゃねえのか？」
「あいつか。どうかな」
「調べてみる価値はあると思うぜ」
「そうだな。じゃあ調べてみるか」
イギリスはフランスのこの提案に乗りました。こうして今度はセーシェルについて調べてみることになりました。

第八百四十三話　　完

２００９・８・３

第八百四十四話　絶対に違うと思う

第八百四十四話　絶対に違うと思う

イギリスとフランスはセーシェルが生徒会の秘書ではないのかと思いました。それでこっそりと彼女を見てみることにしました。

簡単に言えば覗きです。見方によっては完全に変態ですがそれでも二人にとっては諜報活動になっています。その諜報活動の中で見えたセーシェルの姿は。

「おい、ちゃんと掃除しろよ！」

「何だよその大雑把な洗濯は！」

「大体これでいいわね」

セーシェルは自分の部屋も洗濯もかなり適当にやっています。部屋は丸くお掃除して洗濯はそれこそ洗濯機に適当に入れてそれから曇りでもいい加減に出して外に干すだけです。お料理も何かイギリスのそれよりも大雑把なものです。

そんなずぼらな日常を送っているのでした。イギリスもフランスもそんなセーシェルを見てこう結論を出しました。

「こいつじゃねえな」

「ああ、絶対にな」

生徒会の謎の秘書はその仕事ぶりを見ているととても几帳面です。絶対にずぼらなセーシェルではないと確信したのです。

こうしてセーシェルは生徒会秘書ではないと断定されました。しかし本人はそんなことには全く気付かずに相変わらずずぼらなことを続けています。

「アイロンはこれでよしね」

「ただベッドのマットの間に挟んでいただけじゃねえかよ」

「しかもしわくちゃじゃねえかよ」

今度はセーシェルがベッドの間から取り出した制服を見て物陰で

言う二人でした。
「しかもそのパジャマ、いい加減よれよれじゃねえかよ」
「本当に何処までずぼらなんだよ」
何処までもずぼらなセーシェルでした。なお二人は彼女をずっと覗いていたのですがこのことについて特に実感も自覚もないのでした。

第八百四十四話　　完

２００９・８・３

第八百四十五話　じゃあ誰が秘書なんだ

第八百四十五話

じゃあ誰が秘書なんだ

セーシェルの可能性は消えてしまいました。かといって妹達でもなさそうです。妹達はそれぞれ楽しく遊んでいます。お兄さん達の苦労とはまた別の世界で生きているようです。

「あいつ等じゃねえんだな」

「日本の妹も中国の妹も違うからな」

妹達で黒髪といえばこの二人ですがやっぱり違いました。日本妹は髪を短めに切っています。中国妹はお兄さんがそもそも韓国関連のお仕事になると何処かに消えてしまいますのでこの人もやる筈がありません。なおイタリアの上の妹も黒髪ですけれどこの人はラテン戦隊でもありますしイタリアのお家の人らしく結構いい加減なところがあります。だからこの人でもないです。

「それじゃあ残る一人は」

「あいつの妹さんか」

二人はここでわかったのでした。

「何かあの娘もな。大変だな」

「ああ、兄貴があんなのだしな」

二人はその娘のことを話すのでした。

「やれやれってやつだな」

「全くだ。どうしたものだよ」

イギリスとフランスはその娘にかなり同情的でした。果たしてその娘は誰なのでしょうか。

「そうだな。今度な」

「あの娘にお菓子を買ってやるか」

「そうしような。レディーファーストでな」

「そうするか」

こうした話をするのでした。さて、その娘は誰なのでしょうか。
とりあえずイギリスとフランスはその娘の為にお菓子を買ってあげたのでした。

第八百四十五話　　完

２００９・８・４

第八百四十六話　この人が秘書なのでした

第八百四十六話　この人が秘書なのでした

　韓国妹は自分のクラスで今日も皆と明るく楽しく遊んでいました。お兄さんがとてつもないあれですがこの娘はいい娘です。それで皆とも仲良く遊ぶことができています。

　その韓国妹のところにやって来たのはイギリスとフランス。クラスの皆は生徒会、ひいては学園のリーダー格が二人も来たので驚いています。

「あれ、スマイル満開眉毛じゃないか」

「格好よすぎる髭親父もいるな」

「俺達って何でこんなにあれこれ言われるんだ？」

「知るかよ。どうせネタコンビだよ」

　周り、しかも実は太平洋という他所の系列の下級生達にあれこれ言われながらクラスの中を進んでいます。子供達だけでなく下級生からもこう思われている二人です。

「まあそれは置いておいてな」

「ああ。お菓子な」

　二人の手にはそれぞれプリンやケーキがあります。どちらも多くの女の子が好きなものです。それを持ってやって来たのです。

「あっ、イギリスさんとフランスさん」

　韓国妹は二人が自分の前に来たのに気付きました。それで顔をあげると二人はそれぞれ自分が持っているお菓子をその前に置いて言うのでした。

「いつも御苦労さん」

「差し入れだぜ」

　そのうえでにこりと笑うのでした。

「よかったら食べてくれよ」

「無理せずにな」
「御苦労さんって」
韓国妹はどうして二人がそんなことを言うのかわかりました。それでも何と返事をしていいのかわからず目を点にさせているとまた二人が言ってきました。
「悪いけれどこれからも宜しくな」
「頑張ってくれているのは見えているからな」
こんな話をして今は彼女のクラスを後にします。騒動はハッピーエンドに終わりました。

第八百四十六話　　完

２００９・８・４

第八百四十七話　イギリスの落とし子！？

第八百四十七話

イギリスの落とし子！？

香港は黒い髪に少し細い目をした人です。歳はまだ若くて少年と言ってもいい程です。中国のお家に元々いた人なのですが色々な事情からイギリスのお家に厄介になっていたのです。

それが最近までのことで今はイギリスから離れて中国のお家にいます。とはいってもかなり好き勝手にやっていますけれど。

「あいつはなあ」

その香港に対してイギリスが言います。何かあまり面白くなさそうな顔です。

「色々とやりにくい奴なんだよ」

「あれっ、そうなのですか？」

日本がそのイギリスに対して問い返します。

「私は別にそうは思いませんけれど」

「そりゃ御前はいつもあいつの家に行って遊んでるからな」

日本は香港のお家のお得意様の一人なのです。いつも買い物をして香港の料理を食べて楽しくやっています。それで香港に対しては非常にいい感情を持っているのです。

日本から見たら香港はとてもいい人です。ところがイギリスから見たら違うのです。

「あんなにアクが強くてやりにくい奴もな。いねえよ」

「そうなのですか」

「だから御前にとっちゃいい奴なんだよ」

とどのつまりはそうでした。あくまで日本から見ればそうなのです。

「けれどな。俺から見たらな」

「違うのですね」

「昔はよかったぜ」
同時に昔のことも懐かしんでいます。
「昔はよ。何でも好きにやれて力もあったのによ」
「今はないのですね」
「あったらあの馬鹿も生徒会長になってねえよ」
結局のところそうなのでした。
「ったくよお。あいつにも好き勝手させなかったのによ」
そしてまた香港のことを言うのでした。イギリスにとって香港は手に負えない困った存在だったようです。

第八百四十七話　　完

２００９・８・５

第八百四十八話　言葉使いは

第八百四十八話　言葉使いは

「そうなのよ」

香港は女の子みたいな言葉を使います。

「その時イギリスがあんなことをして。私は困ったことになったのよ」

「そうだったのですか」

日本は香港のその話を真面目に聞いています。誰の話でも真面目に聞くことができるのは日本の長所であります。

「イギリスさんは昔からだったのですね」

「ええ。何処かクレイジーで抜けているのよ」

言葉に英語も時々入るようです。

「私も何て言っていいかわからなかったわ」

「そうですね。そんなことがあれば誰でも困ります」

日本は香港の言葉に頷いています。

「本当に」

「ええ。そうなのよね」

「何で御前はそんな言葉遣いなんだよ」

イギリスは香港の喋り方にあからさまに嫌そうな顔で言いました。

「ちょっとは普通に喋れよ」

「喋ってるわよ」

けれど香港はあっさりとイギリスに言葉を返すのでした。

「ほら、ちゃんと」

「ちゃんとじゃねえだろ。男なんだから男の喋り方をしろよ」

イギリスの言いたいことはこれでした。

「ちゃんとよ。喋れるだろうがよ」

「私はちゃんと喋ってるわ」

けれど香港はあくまでこう返します。
「そんなふうに言われるのは心外よ。セクハラだわ」
「セクハラじゃねえよ」
イギリスにとってさらに悪い状況になっていっています。
「何でこんな奴に育ったんだよ」
「さて。元からなのではないでしょうか」
日本が何気に重要なことを言いました。実際のところはそうなのかも知れません。

第八百四十八話　　完

２００９・８・５

第八百四十九話　中国の家生まれなので

第八百四十九話

中国の家生まれなので
香港はお料理と買い物で皆を集めてそれで生計を立てています。
中国のお家の生まれらしく商売はかなり上手です。
「あいつそういうのは上手いんだよな」
「そのようですね。私も勉強させてもらうべき部分が多くあります」
日本はまたイギリスとお話をしています。何気に誰とでも合わせられる日本です。
「そういえばイギリスさん最近お家の方は」
「冗談抜きでやばいんだけれどな」
体調もです。今は皆体調があまりよくありませんがイギリスをはじめとして欧州組は冗談抜きで危険な状況だったりします。なお太平洋組では韓国がそうでしたが彼はそもそも不自然なまでに丈夫で尚且つ異常なレベルで悪運が強いので何とかやっていたりします。
そんなお話をしている時に。不意に香港のお家から派手な爆発音が響いてきました。
「な、何だ!?」
「戦争ですか!?」
パパパパパパパパパン、と派手な爆発音が響いてきます。それも一度ではなく二度、三度とです。イギリスと日本はその爆発音を聞いてすぐに香港のお家に向かいました。
すると何も起こってはいません。至って平和です。見れば香港はただ単に爆竹を鳴らしているだけでした。
「お祭だから鳴らしてるだけよ」
「それでも限度があるだろうが！」
イギリスは思い切り怒って香港に抗議します。
「一体幾ら爆竹鳴らしたんだ！」

「普通の量よ」
「あれだけの音立てて普通かよ！」
思い切り怒っていますが香港は平気な顔です。
「これからはもう少し抑えてやれ。いいな！」
「聞こえないわね」
「くっ、こいつは・・・・・・」
話を全然聞いてもらえないイギリスでした。どうもイギリスにとって香港はかなりやりにくい子のようです。

第八百四十九話　　完

２００９・８・６

第八百五十話　しかも香港の肩を持つ人が

第八百五十話

しかも香港の肩を持つ人が
「いやあ、いいお祭あるな」
「本当だよね」
中国とアメリカはにこにこしながら香港に対して声をかけてきています。
「爆竹はお祭の時にこそふんだんに使うべきあるよ。その調子ある」
「お祭だとやっぱり派手にやらないとね」
「御前等これが五月蝿いと感じないのかよ」
イギリスはその二人に対しても抗議します。
「一瞬本当に戦争かと思ったぞ」
「何言ってるあるか。爆竹は大量に使ってこそあるぞ」
「そうそう。花火だってそうじゃないか」
「くっ、こいつ等一体どんな神経してやがるんだ」
どうも派手好きな人達とイギリスでは感覚がかなり違うようです。
しかもこの人達には別の意図もあるのでした。
「このままどんどんやるよろし。イギリスがさらに困るあるぞ」
「何かあったら僕にも言えばいいから。他のお家のことにあれこれ言ったらよくないからね」
「わかったわ」
しかも香港は二人の言葉に頷きます。
「それじゃあこの調子で派手にやっていくわ」
「よし、それこそ僕の家の人間あるぞ」
「やっぱり太平洋は派手にいかないとね」
「こいつ等わざとやってやがるのか」
そのことはとてもよくわかるイギリスでした。
「こいつ等といいあの馬鹿会長といい太平洋の奴等はこんなのばか

りなのかよ」
「台湾さんがいますが」
「あの娘はあの娘で気が強いから苦手なんだよ」
日本の言葉にこう返します。本当に今では太平洋では居場所がないイギリスでした。考えてみればこの人は欧州の人なのでそれも当然と言えば当然なのですが。

第八百五十話　　完

２００９・８・６

第八百五十一話　昔はよかった

八百五十一話　昔はよかった　　第

こんな有様で香港からかなり邪険にされている感じのイギリスでありますが昔はそうではありませんでした。かつては本当に物凄い力を持っていましたので香港なんかめじゃありませんでした。と思いきや。

「昔からな。あいつはな」

「大変だったのですか」

「ああ言えばこう言うでな」

こう日本に答えるのでした。しかしこの人よく見たら太平洋の人でお話している人は日本だけです。カナダは自分からその存在を忘れていますし生徒会長はまだこの人の名前を覚えていなかったりします。まあこの会長はかなりあれな人なのでとりあえず置いておいていいのですが。

「洒落にならない位手がかかったな」

「百五十年程度イギリスさんのところにおられましたよね」

「それでも全然変わらなかった」

全然なのでした。

「気付いたら金持ちになってやがったがな」

「気付いたらですか」

「ああ、気付いたらだよ」

この辺りかなり放任もしていたようです。

「それで今は中国のところに返したけれどな」

「それで後悔はされていますか」

「いや、全然」

今の言葉にイギリスの本音がはっきりと出ているのでした。

「何かよ、アメリカといい手のかかる奴ばっかり来るからな俺のと

ころは」
「では韓国さんを預かってもらえるでしょうか」
「そいつはもっと遠慮してやるから安心してくれ」
「左様ですか。今私は困ってるのですが」
「俺もあいつにはかなり困ってるから同じだよ」
何気に日本がいつも隣にいるもう一人のことを依頼しようとしたら断りました。この辺りはまだしっかりとしているイギリスなのでした。

第八百五十一話　完

２００９・８・７

第八百五十二話　香港料理とは

第八百五十二話　香港料理とは

香港はとにかく料理上手です。しかもその料理が一つではないのです。それこそ中国の料理全てができると言っても過言ではありません。

「凄い、これって」

同じような立場の台湾もびっくりです。その香港の料理を食べてみて。

「広東料理だけじゃなくて上海や四川の料理もできるのね」

「当然北京料理もできるわよ」

四大料理は全部マスターしているのでした。

「何なら欧風にアレンジしたのもあるわよ」

「そんなことまでできるの」

台湾はさらに驚きました。彼女もまた料理で日本をはじめとして色々な人達を自分のお家に引き寄せていますので料理にはうるさいです。その台湾が香港の料理を食べて驚いているのですから相当なことです。

「欧風も」

「一応イギリスのところにもいたから」

「えっ、けれどあの人料理は」

イギリスの料理については台湾もよく知っています。

「それこそ。人間の食べるものじゃないっていうけれど」

「それはあの人が作るからなのよ」

香港も実に酷いことを言います。

「妹さんが作ったのは美味しいでしょ。それに私が作ってもね」

「そうね。美味しいわ」

早速その香港が作った欧風料理が出て来ました。見ればイギリス

のお家のメニューです。
「結局はイギリスさんのお料理が下手なだけなのね」
「あの人そうしたセンスは全然ないのよ」
「何か俺最近滅茶苦茶な扱いじゃねえか？」
「気にするな。俺もだ」
何気にフランスから慰められるイギリスでした。やっぱり彼は料理の才能は全くないようです。少なくとも香港よりはないのは間違いありません。

第八百五十二話　　完

２００９・８・７

第八百五十三話　今度はごつい人です

第八百五十三話　今度はごつい人です

太平洋には実に色々な人がいます。個性派揃いと言えば聞こえはいいですが殆ど破天荒な人ばかりです。物静かな日本ですらその個性は物凄いものがあります・

そんな中でニューフェイスです。金髪に黒い目で髪は金色の癖がありそうな感じでおまけに糊の様に太い眉毛と何処かイギリスに似た人ですがかなりごつくて筋肉質な人です。この人は誰かというと。

「オーストラリアでごわす」

自分で名乗ってくれました。オーストラリアです。何か喋り方にかなり訛りがあります。

「趣味は農業にカンガルーやコアラを愛することでごわす」

「いざという時は頼りになるんだよ」

タイがオーストラリアのことをこう説明します。

「気は確かで力持ちでね。僕のお友達の一人なんだよ」

「友達は多いでごわす」

オーストラリアも少し調子に乗って言います。

「それこそ太平洋の全部の国が友達でごわすよ」

「そうだよね。僕だけじゃなくてね」

「日本ともアメリカとも中国とも親友でごわす」

自分で言います。

「けれど日本には鯨を食べることを止めてもらいたいでごわす」

「それはあまり言わない方がいいんじゃないかな」

タイはこのことは少し止めます。

「日本さんも怒るよ。そんなこと言ったら」

「親友だからこそ言うでごわすよ。鯨を食べることはよくないでごわすよ」

どうもあまり空気を読まない人のようです。
「だから言うでごわすよ。鯨は頭のいい生き物でごわすから」
「こういう人だよ」
タイは何なく相手をしていますがどうも難しいところのある人のようです。しかしタイの目が全く笑っていないような気がするのは気のせいでしょうか。

第八百五十三話　　完

２００９・８・８

第八百五十四話　豪快さんです

八百五十四話　豪快さんです　　第

このオーストラリアですが得意料理といえば。大きな羊肉を焼いてどかんと出してきます。そのうえで集まっている太平洋の皆に御馳走します。

「ビールもたっぷりとあるでごわすと。どんどん飲み食いするでごわす」

「はあ。それでは」

日本はその大きな羊肉を前にして少し戸惑った顔をしています。

「それでしたら」

「日本は少食でよくないでごわす」

またしても空気を読まない発言をするオーストラリアです。一緒にいる皆も今の彼の発言にはいささか引いています。

「だから何でここでこんなこと言うのかしら」

「日本さんに対して失礼よ」

濃い顔触れの中で苦労しているベトナムと台湾が特に引いています。特に台湾は日本が言われたのでいささかおかんむりのようです。

「だからたっぷりと食べるでごわすよ」

「食べていますよ」

実際に日本は日本で食べています。羊肉やオージービーフのステーキをフォークとナイフで一口ずつ口に入れています。当然ビールも飲んでいます。

「ですから御安心を」

「うちは羊も牛も沢山いるでごわす」

オーストラリアは農業や牧場もかなりあるのです。

「だからこんな美味しいものが沢山食べられるでごわすよ」

「確かにね。このオレンジも美味しいし」

「本当に食べ物には困らないのね」
「だから皆どんどん飲み食いするでごわす」
ベトナムと台湾に応えるようにしてまた言います。
「腹一杯食べないと許さないでごわすよ」
こうして皆にどんどん御馳走するのでした。オーストラリアも中々面白い人です。

第八百五十四話　　完

２００９・８・８

第八百五十五話　鮫はいつもです

第八百五十五話　鮫はいつもです

オーストラリアの周りは海ばかりです。これは日本や台湾と同じですがかなり違う部分があります。それは。

「あの、オーストラリアさんあの三角のヒレはまさか」

「おう、鮫でごわす」

海水浴場で砂浜に出ているところで海にその三角のヒレを見つけた日本に対して答えるオーストラリアでした。

「おいどんの家にはいつもいるでごわすよ」

「いつもですか」

「アオザメにイタチザメにシュモクザメにヨシキリザメ」

どれも凶悪な人食い鮫ばかりです。

「そうそう、それにホオジロザメもいるでごわすよ」

「ホオジロザメっていうとあのアメリカさんの映画に出て来た」

「確か日本の海にも時々出るでごわすな」

「とても危険な鮫です」

日本もその鮫についてはよく知っていました。やはり周りが海だけはあります。

「そんなのがうようよしているんですか」

「何、慣れたらどうってことないでごわす」

けれどオーストラリアはそんなことはあまり気にはしていないようです。

「今もちゃんとガードはしているでごわす。それに鮫が出たら」

「その時は？」

「海から出てプールで泳ぐだけでごわす。プールには鮫はいないでごわすよ」

「いたら怖いですよ」

日本は実際に海の中に鮫がいる光景を想像しながらオーストラリアに答えます。
「そんなことになったらそれこそ」
「まああの鮫はシュモクザメでごわすな。もう行ってしまったでごわす」
見ればもうそのヒレは何処かに消えていました。なおシュモクザメとはあの両目が離れてトンカチみたいな頭になっている。とても変わった形の鮫です。
「だからもう大丈夫でごわす。さあ、泳ぐでごわすよ」
「プールで泳がせてもらいます」
流石にもう海には入ろうとしない日本でした。無理もないことです。

第八百五十五話　　完

２００９・８・９

第八百五十六話　陸にも一杯

八百五十六話　陸にも一杯　　第

海は鮫だらけのオーストラリアですが陸にあがると。今度はお腹に袋を持つ動物達が一杯います。

「あっ、カンガルーか」

「こっちはコアラあるな」

陸にはアメリカと中国が来ています。どうも日本は貧乏くじを引いたっぽいです。

「それに小さなワラビーもいるし」

「フクロアリクイや他にも色々いるあるな」

「うちの家は変わった動物の宝庫でごわす」

これがオーストラリアの自慢の一つでもあるようです。彼は胸を張ってアメリカと中国に自慢しています。

「こうした有袋類は殆どオーストラリアだけでごわすよ」

「そうだよね。オポッサムなんかはうちの国にもいるけれど」

「カンガルーは他の国にはいないあるな」

「小さな子供をお腹の中に入れて育てる」

オーストラリアは言います。

「とても優しい動物でごわす。まさに我が国の象徴でごわす」

「それはいいけれどさ」

「何とかならないあるか？」

ところがここで二人はこんなことを言ってきました。

「ちょっとこのカンガルー達」

「ボクシングを挑んでくるあるが」

見れば二人はカンガルーに取り囲まれて殴られています。それも大きなカンガルーばかりです。

「結構以上に痛いんだけれど」

「止めさせるある」
「カンガルーはボクシングをするものでごわす」
けれどオーストラリアはこう言って話を聞いていません。
「だからここは大人しく逃げるでごわすよ」
「ちぇっ、それしかないのか」
「どうも腑に落ちないあるぞ」
二人は仕方なくカンガルー達から逃げるのでした。どうも可愛いだけではないようです。

第八百五十六話　　完

２００９・８・９

第八百五十七話　ＵＭＡも沢山います

第八百五十七話　ＵＭＡも沢山います

オーストラリアにいるのは普通の動物だけではありません。一体何なのかわからない生き物も一杯います。それこそ海にも陸にも一杯います。

「先程何か異様に大きな鳥が飛んでいるのが見えたのですが」

「ああ、あれはまだ何なのかよくわかっていない鳥でごわす」

オーストラリアはこう日本に対して答えます。

「おいどんも何なのかわかってないでごわすがとりあえず大きいでごわすな」

「あとカンガルーも普通のより大きいものを見たのですが」

カンガルーにもそういうのがいたというのです。

「あれは一体」

「それもわからないでごわす」

オーストラリアにもわからないというのです。

「あのカンガルーに襲われた人間もいるでごわすが」

「だとしたら問題なのでは？」

普通に考えればそうです。日本でなくてもこう考えます。

「幾ら草食性の動物でもれは」

「だから何なのか調べているでごわす」

日本に対して答えはします。

「それでも何なのかはわからないでごわす、まだ」

「果たして全てわかる時が来るのでしょうか」

「それもわからないでごわす。海にも一杯いるでごわすし」

「そうですね。本当に」

日本は今度はボートの傍にいるやたらと大きな海蛇みたいな生き物が映っている写真を見ています。この写真もまたオーストラリアのお家の海で撮れたものでとても不思議な写真です。

「こうした生き物もいますし」
「けれど特にあれでごわす」
ここでオーストラリアはある生き物について言うのでした。その生き物とは何でしょうか。

第八百五十七話　　完

２００９・８・１０

第八百五十八話　いなくなった筈の生き物

第八百五十八話

いなくなった筈の生き物

その意気ものとは大きな狼を思わせる生き物でした。縦縞が何処か虎を思わせます。けれどそれは剥製で動くことのないものでした。

「これは確か」

「フクロオオカミでごわす」

それがその生き物の名前でした。

「これは確かに絶滅した筈でごわすが」

「そういえば見たという人が結構おられますね」

「そうでごわす。確かに絶滅した筈でごわす」

オーストラリアはまたこの言葉を出すのでした。

「それでも見た人が多いでごわす。ということは」

「まだ絶滅していないのでは？」

日本が出した答えは当然の流れでした。

「やはり。まだ」

「それでもまだ確かな個体は捕まっていないでごわす」

それはまだだというのです。

「捕まっていないというからには確証はないでごわすよ」

「そうですね。それはその通りです」

オーストラリアが今言ったことはまさに正論です。覆すことのできないまでの。個体が捕まっていないと確かだとは言えないのです。

「若しかしたら僅かに生き残っているのかも知れないでごわすが」

「この生き物も探しておられるんですね」

「その通りでごわす。それでもやっぱり見つからないでごわす」

「何か見つからないものばかりのような気がしますが」

何気に鋭いことを言う日本です。

「何故でしょう。こうした生き物はいつも」

「おいどんもそれが知りたいでごわす」
オーストラリアにしろそれが不思議なのでした。とにかくこの生き物がまだ生きているのかということについては確かなことが言えない現状なのでした。

第八百五十八話　　完

２００９・８・１０

第八百五十九話　その生まれは

十九話　　その生まれは　　第八百五

オーストラリアは自然に囲まれていますがその出生は気付いたら生まれているといったものでした。そうして気付いたらイギリスがお家にやって来ていました。

「あんた誰でごわすか？」

「俺はイギリスっていうんだけれどな」

イギリスは辺りを見回しながらオーストラリアに対して答えます。

「しかしこんなところにこんなでかい大陸があったんだな」

「いるのはおいどんだけでごわすか？」

「ああ、そうみたいだな」

見たところ他にいるのは動物達だけです。他には誰もいません。オーストラリアと動物達以外は僅かに最初から住んでいる人達がいるようですが数は僅かのようです。本当に誰もいないと言っても過言ではない程に人がいません。

「ここはな」

「そうでごわすか。おいどんだけでごわすか」

「それで御前今日から俺の家の人間だぞ」

イギリスは続いてこうオーストラリアに言うのでした。

「それでいいな。御前俺の家に来い」

「何かよくわからないけれどわかったでごわす」

オーストラリアもそれでいいというのでした。

「それじゃあおいどんは今日から」

「俺の家の人間な。わかったな」

「わかったでごわすよ」

こうした流れでオーストラリアはイギリスのお家の一員になりました。けれどそこではどうだったかというと。

ほったらかしでした。イギリスはこの人には物凄い放任主義だったのです。時々人がやって来る位でした。

「何か前と変わらないでごわすな」

こんなことを思いながら以前と大して変わらない日々を送るオーストラリアなのでした。

第八百五十九話　　完

２００９・８・１１

第八百六十話　名前が紛らわしい

第八百六十話　名前が紛らわしい

オーストラリアはオーストラリアです。ところがこの名前を聞くと皆よく間違えます。

「オーストリアさん？」

「いいや、おいどんはオーストラリアでごわす」

こうオーストラリアは皆に答えるのが常です。

「オーストリアではないでごわすよ」

「あれっ、そういえば外見が全然違うし」

「ノーブルじゃないし」

その外見は全然違います。雰囲気なんてもっとです。そんなオーストラリアですが彼はそんなに困っていません。ところがオーストリアさんはというと。

「いつも思うのですが」

「困ってるんですね」

「その通りです」

こうハンガリーに対して実際に困った顔で答えるのでした。

「どうも私に名前が似ている人がいると思ったら」

「私も見ましたけれど似ているのは名前だけでしたよ」

それだけです。本当にそれだけです。似ているのはそれだけで他の部分は何一つ似ていないのです。

「それで間違えられるのは」

「腑に落ちません」

だから不満なのでした。

「ですがあの人に言うのも何ですし」

「ちょっと言いにくいですよね」

「彼には何の落ち度もありませんし」

だからこそ余計にタチが悪いのです。本人に落ち度がないから何も言えませんから。オーストリアさんも言うに言えないのです。
「イギリスがせめて名前を考えていてくれれば」
「じゃあどんな名前がよかったんでしょうか」
「オーストコリアというのなら間違えらなかったのですが」
オーストリアさんはふとこんな名前を口に出すのでした。
「これはどうでしょうか」
「それで呼んだらオーストラリア君本気で怒っちゃいますよ」
「難しいものです」
一人困った顔でいるオーストリアさんなのでした。

第八百六十話　完

２００９・８・１１

第八百六十一話　鼻の絆創膏

第八百六十一話　鼻の絆創膏

オーストラリアのトレードマークは鼻にある絆創膏です。他にはイギリスそっくりの太い眉もありますが本人はまずこの絆創膏を皆に見せてそれで自己紹介をするのが常です。

この絆創膏が何かといいますと。本人が言うには。

「海で鮫と格闘していた時に出来た傷でごわす」

「それは本当ですか？」

日本がオーストラリアの言葉に突っ込みを入れます。

「鮫と格闘して出来た傷なのですか」

「まあそういうことにしておいて欲しいでごわす」

オーストラリアは笑ってこう述べるのでした。

「おいどんとしてはその設定が一番嬉しいでごわす」

「左様ですか」

「鮫がとにかく多くて困ってるでごわす」

オーストラリアの周りの海はそうなのです。とにかくかなり多いのです。

「鯨だけならよかったでごわすが」

「では食べましょう」

「それは絶対に駄目でごわす。とにかく」

彼は日本の捕鯨には大反対なのです。とにかく話をしているうちにオーストラリアは本当のことを言うのでした。

「牧場で牛の世話をしている時に牛の角でやられたでごわす」

「海ではなく陸だったのですか」

「そうでごわす。あの時は死ぬかと思ったでごわす」

「生きていて何よりですね」

「牛も羊も注意が必要でごわす」

その牛と羊が多い国だからこそ言えることです。オーストラリアはその牛と羊の肉を輸出しているのです。それもかなり大規模に。

「日本も気をつけるでごわすよ」

「そうですね。鹿と同じ様に注意します」

何故かここで鹿のことを話に出す日本でした。鹿に何かあるのでしょうか。

第八百六十一話　　完

２００９・８・１２

第八百六十二話　日本の鹿は

第八百六十二話　日本の鹿は

日本は鹿のことをオーストラリアとの話の中で出しましたがこの鹿は日本の奈良にいる鹿のことです。ここでは鹿がとにかく多いです。

「可愛いでごわすな」

「可愛いことは可愛いのですが」

今オーストラリアは日本と一緒にいます。その周りには多くの鹿達がいます。鹿達は草を食べたりおせんべいを食べたりして。とてものどかでかつ楽しそうです。

オーストラリアはその鹿を見ていてどうもそんなに凶暴には見えませんでした。それで首を傾げさせながら日本に対して尋ねるのでした。

「そんなに凶暴でごわすか？」

「今子供のお弁当を強奪してますよね」

「あっ、本当でごわす」

見ればその通りでした。遠足に来ている子供のお弁当を奪って食べています。しかもお肉まで。

よく見ればゴミ箱をひっくり返してそこから残り物を食べたり雑誌まで食べています。尚且つその態度は傍若無人、実に悪質です。

おまけに子供がやり返したら背中を見せたところで仕返しに体当たりを仕掛けています。とにかくかなり酷いことをしています。オーストラリアはそういった光景を見て理解したのでした。

「酷いでごわすな」

「実際困っています」

日本はその目を少しだけ困ったようなものにさせていました。

「食べ物はいつも沢山あげているのですが」

「幾ら何でも肉を食う鹿がないでごわすよ」
「お米と一緒に口の中に入れてしまうのですがそのまま食べてしまうのです」
「まるでトナカイでごわすな」
トナカイが時々肉を食べるのも知っているオーストラリアでした。
とにかく鹿達が食べるのはおせんべいだけではなかったのです。
実はとても困った存在である鹿達なのでした。

第八百六十二話　　完

２００９・８・１２

第八百六十三話　鯨は食べるな

八百六十三話　　鯨は食べるな　　第

日本は鯨を食べます。けれどオーストラリアは鯨を食べません。そしてオーストラリアはアメリカ以上に鯨を大切にしています。このことが二人の鯨を巡る関係を非常に滅茶苦茶なものにしています。

とにかく鯨を食べることを許そうとしないオーストラリアと意地でも食べようとする日本、日本が捕鯨に出ればオーストラリアは船をやってこれを邪魔しに来ます。

「鯨を食べることは許さないでごわすよ！」

「いいえ、絶対に食べます」

両者は引きません。海の上で激突してもです。そしてオーストラリアの妨害にも関わらず日本は鯨を食べるのがいつもです。

「鯨なんか食べていいと思っているでごわすか！」

「鯨を食べるのは我が国の文化です」

日本の主張は文化です。

「我が国の文化についてとかく言われる覚えはありません」

「ぬうう、言うでごわすな」

はっきり言って口下手なオーストラリアはこう言われると言い返せません。挙句には日本のお家の人達がネットで彼のことを批判しだしました。

「鯨は絶対に食べるぞ！」

「オーストラリアに言う資格はあるのか！」

「ええい、五月蝿いでごわす！」

オーストラリアはかなり追い詰められてしまいました。

「鯨は人間の次に頭がいい生き物でごわす！だから食べては駄目でごわすよ！」

「では牛が人間の次に頭がいいと食べないのですか？」

「うっ、それは」
日本にこう言われるともう完全にその言葉を止めてしまいました。
「やっぱり食べるでごわす」
「では私も鯨を食べます」
「ううう・・・・・・」
これで決まりでした。オーストラリアはそれでも鯨を食べさせまいとしますが日本に負けたのは事実でした。

第八百六十三話　　完

２００９・８・１３

第八百六十四話　しかもこの辺りでした

第八百六十四話　しかもこの辺りでした

常に日本とオーストラリアが鯨を巡って激しい攻防を続けている南太平洋ですが思えばこの辺りは日本にとっては先の戦争以外にも思い出のある場所です。

「この辺りでしたね」

「そうでごわすな」

今日は日本もオーストラリアも一緒にいます。どうも鯨のこと以外ではこれといって仲が悪いわけではないようです。

「あの不思議な死骸が見つかったのは」

「ニューネッシーでごわすな」

それです。かつて日本が吊り上げた不思議な生き物の死骸はこの辺りで見つかったものなのです。

「あれは一体何だったのでごわすかな」

「ウバザメや鯨やそういった意見もありますが」

「しかしあの姿形は」

日本はここで言うのでした。

「やはり恐竜ではないでしょうか」

「そうでごわすな。おいどんもそう思うでごわす」

この可能性はどうしても否定できないのでした。

「あそこまでそっくりだと。どうしてもでごわす」

「ええ。まさか本当に恐竜が」

「いても不思議ではないでごわす」

オーストラリアもこう考えているのでした。実のところは。

「そういえば日本のところにも恐竜かも知れない生き物が結構いるでごわすな」

「ではオーストラリアさんのところも」

「おいどんのところはそれこそそうした生き物で一杯でごわす」
それがオーストラリアです。
「だとするとおんしが吊り上げたあの生き物は」
「やはりそれでも不思議はないですね」
「そう思うでごわす」
まだまだ地球には謎が一杯あるようです。それにしても日本が吊り上げたあの生き物は本当に何だったのでしょうか。

第八百六十四話　　完

２００９・８・１３

第八百六十五話　鮫よりも恐ろしい

第八百六十五話　鮫よりも恐ろしい

オーストラリアの海で泳いでいると時々。物凄い大きさのクラゲが浮かんでいたりします。たまたまオーストラリアのお家で泳いでいたイタリアがそれを見つけて大騒ぎです。

「な、何だよこのやたらと大きなクラゲ！」

「ああ、それはカツオノエボシでごわす」

オーストラリアが平然とイタリアに対して説明します。

「時々泳いでいる場所にも来るでごわすよ」

「へえ、っこれカツオノエボシっていうんだ」

イタリアは無邪気にそのカツオノエボシに近付いて触ろうとします。ところが一緒にいたドイツが血相を変えてそのイタリアを後ろから羽交い絞めにして止めました。

「馬鹿っ、死にたいのか！」

「ええっ、死にたいって大袈裟じゃないの？」

「大袈裟なものがあるか。カツオノエボシには猛毒がある！」

博識など何時は当然ながらこのことを知っていました。

「その毒にやられたらショック死する恐れがある。そうでなくとも恐ろしいまでに膨れ上がるんだぞ1」

「そ、そんなにおっかないの！？」

そのことをはじめて知って大いに驚くイタリアでした。

「このクラゲって」

「そうでごわす。それでおいどんも注意しているでごわすが」

「じゃあ俺にも注意してよ」

イタリアはこうオーストラリアに突っ込みを入れました。

「ドイツが止めてくれなかったらもう少しで刺されるところだったじゃないか」

「とにかくここからは立ち去るでごわす」
イタリアの話をあまり聞いてはいません。
「いいでごわすな」
「そうだね。死にたくないし」
「というかこんな恐ろしいものが浮かんでいる場所で海水浴などできるのか」
ドイツが言うことがもっともでした。本当に恐ろしいものがオーストラリアの海には浮かんでいます。

第八百六十五話　　完

２００９・８・１４

第八百六十六話　またまた鯨

第八百六十六話　　またまた鯨

今日も日本とオーストラリアは鯨を巡って激しい攻防を繰り広げています。何かオーストラリアがテレビで日本が鯨を食べることについて抗議をしています。

「これが虐殺でごわす！許されないことでごわす！」

「それ以上に私の船に環境団体の船を殴り込ませないで欲しいですね」

日本も負けてはいません。彼も案外言う時は言うのかも知れません。

「もっともそれでも鯨は捕らせてもらいますよ」

「何故食べるでごわすか、あんな素晴らしい生き物を」

「鯨を食べることも私の家の文化だからです。だからそもそもです」

日本はさらにオーストラリアに対して言い返します。

「貴方は牛や羊が人間の次に頭がよかったら食べないのですか？」

「ううん、それはでごわすな」

こう言われると口下手なオーストラリアは困ってしまいます。これで言い争いは終わりになるのがいつものことですがそれで捕鯨反対を諦めるオーストラリアではなく。

「ええい、突入でごわす！」

「さあ、こちらです」

また船に突入してきた人を日本は礼節をもって応対します。

「お茶とお菓子でも」

「あっ、これは」

「これはどうも」

オーストラリアのお家の人達はついついそれに応じてしまいます。

そうして日本からお茶とお菓子をいただいた後で。

「お帰りはあちらです」
「有り難うございます。それでは」
「お邪魔しました」
これで帰るのでした。日本も案外以上にやってくれます。けれどしてやられたオーストラリアはそれでも。こう叫ぶのでした。
「絶対に捕鯨は止めさせるでごわすよ！」
何故か捕鯨反対にムキになっています。しかもこの人は捕鯨をしている国が日本だけだと思っているふしがあるのでした。

第八百六十六話　　完

２００９・８・１４

第八百六十七話　青い唐辛子

百六十七話　青い唐辛子　　第八

唐辛子は赤いというのが多くの人の認識です。これはフランスも同じでイタリアやスペインのお家ではいつも赤い唐辛子を見ます。

「イタちゃんとこもそやけどやっぱり唐辛子と大蒜とオリーブとトマトの組み合わせやな」

「それはいい組み合わせだな」

フランスもスペインの今の言葉には賛成でした。

「御前の料理のセンスはいいのは確かだぜ。俺には及ばないけれどな」

「俺に及ばんのは余計や」

この一言はスペインによって否定されました。それでも全体の雰囲気は和やかに二人でスペインの作った料理を食べています。

こうして楽しく料理を食べている最中に。ふとスペインが言うのでした。

「そういえばあれやな」

「んっ？あれって何だ？」

「いや、唐辛子やけれどな」

スペインは丁度その唐辛子を食べながらフランスに対して言いました。今彼が食べているのは十八番の一つであるパエリアです。そこに唐辛子を入れているのです。

「これ赤いやろ」

「ああ、今更何を言ってるんだよ」

フランスにとってみればこれは当然のことです。唐辛子は赤い、赤くなくて何だというのが彼の認識なのです。

「唐辛子っていえば赤いじゃねえか」

「それがちゃうんや」

けれどここでスペインは言うのでした。
「青い唐辛子もあるんや」
「青い唐辛子？そんなのあるのかよ」
「そうや。何でもタイのところにあるらしいで」
「へえ、一体どんなのなんだ？」
フランスはスペインの話を聞いてその青い唐辛子に興味を持ちました。果たしてどんなものなのか、学園きっての美食家である彼の自負心を大いに刺激したのでした。

第八百六十七話　　完

２００９・８・１５

第八百六十八話　とりあえずお友達を呼びました

第八百六十八話

とりあえずお友達を呼びました

とりあえずタイのお家に行ってそれでその青い唐辛子とはどんなものか食べてみようと思ったフランスですが一人で行くのも面白くないなと考えました。それで誰かを誘おうと思ったのですが。当然イギリスは無理でした。

「御前青い唐辛子なんてあるの信じるか？」

「唐辛子？そんなの食えるのかよ」

「・・・・・冗談でも本気でも今の御前の言葉で何もかもわかったぜ」

完全に呆れてしまったフランスでした。何だかんだでいつも一緒にいるイギリスですが今回は流石にこの人は一緒になりませんでした。

それで誘ったのは。今回は女の子でした。

「私なんですか」

「ああ、これからタイのところに行こうって思ってるんだけれどよ」

こうセーシェルに対して言って誘うのでした。

「どうだ？青い唐辛子を一緒に食いに行かないか？」

「青い唐辛子？面白そうですね」

明るいセーシェルはそれを聞いてすぐに明るい顔で頷くのでした。

「何か美味しそうですし」

「少なくとも食べたことはねえからな。どんな味なのか確かめたいよな」

「そうですね。どんな味なんでしょう」

セーシェルもかなり乗り気になっています。彼女にとってもかなり面白そうなお話のようです。

「唐辛子っていえば辛いですけれど」

「それも辛いのかな。どうかな」
「それは食べてのお楽しみですね」
「そういうことだな。じゃあ今からな」
「はい、タイさんのところに行きましょう」
こうしてフランスはセーシェルと一緒にタイに向かうことになりました。女の子と一緒なので今回の彼はかなり上機嫌でありました。後でその上機嫌も吹き飛ぶような目に逢うのですけれど。

第八百六十八話　　完

２００９・８・１５

第八百六十九話　そのタイの唐辛子

第八百六十九話　そのタイの唐辛子

「青い唐辛子が食べたいの？」
「ああ、そうなんだ」
「いいかな？」
フランスとセーシェルは早速タイに来ました。そうして彼に御願いしています。
「何かそういうのがあるって聞いてな」
「どんな感じなの？」
「美味しいよ。とても凄くね」
タイはその二人に対してにこりとしたいつものスマイルを浮かべて答えました。
「それじゃあすぐにね。出すから」
「ああ、どんな料理なんだ？」
「私凄く楽しみにしてるからね」
二人は今はとても明るい顔でした。タイもとても明るい顔です。その料理を待つ間に他のタイ料理を食べながら二人であれこれとお話をしています。
「何かタイさんのお家のお料理も」
「ああ、美味いな」
フランスも認める美味さでした。
「まあ俺の味に比べたら落ちるがな」
「けれどこれはこれで美味しいですよ」
セーシェルはもうがつつく感じになっています。とにかくかなり美味しいのは間違いないです。タイのソーセージも麺類も何もかもがかなり美味しいです。赤い唐辛子とコリアンダー、それにナムプラーでの味付けが見事です。

その見事な料理を楽しんでいるとやがてタイが戻ってきました。
その手にあるのは。
「はい、これですよ」
「おお、遂に来たか」
「それが青い唐辛子を使ったお料理なんですね」
二人は今天国に着いたとさえ思いました。ところがそれは大きな勘違いでした。天国でありながら地獄でもある、そんな恐ろしいものを見ることになるとはこの時は全く思ってもいないのでした。

第八百六十九話　　完

２００９・８・１６

第八百七十話　天国であり地獄であり

第八百七十話　天国であり地獄であり

その青い唐辛子を使った料理を目の前にしたフランスとセーシェル。その独特の色彩を見てまずはにこにこにことしています。

「これがその青い唐辛子の料理かよ」

「それじゃあ早速」

器用にお箸とスプーンを使いながらそのうえで食べようとします。

そうして早速一口食べてみますと。

「！！」

「！！」

「どうかな」

タイは穏やかな微笑みで料理を食べてみた二人に対して尋ねます。

「この料理は」

「こ、これは・・・・・・」

「かなり・・・・・・」

二人は顔はおろか全身から汗を流しながらタイに答えはじめました。

「う、美味いな」

「はい、美味しいです」

そのことは認めることができました。味自体はです。

「け、けれどよ。この辛さは」

「何ていうか」

そうです。その辛さは恐ろしいまでのものだったのです。その辛さを味わって二人は今まさに地獄にいるような気持ちでもあったのです。

「すげえ、殺人的なまでだぜ」

「ここまで辛いなんて」

「この辛さがいいんですよね」
タイは相変わらずにこやかに微笑んでいます。
「そう思いませんか？」
「ま、まあそうだな」
「美味しいことは美味しいわ」
しかしその辛さには負けてしまった二人なのでした。食べ物というものには天国と地獄が同時に存在する時もあるのです。

第八百七十話　　完

２００９・８・１６

第八百七十一話　それで考えたことは

第八百七十一話　それで考えたことは

　青い唐辛子の恐ろしさを味わったフランスはここであることを思いつきました。それが何かといいますと。

「あいつに食わせてみるか」

「あいつっていいますと？」

「もっと言えばあいつ等だな」

　こうセーシェルを相手に言うのでした。

「あいつ等にこの青唐辛子を食わせてやるぜ」

「？何か話がよくわからないんですけれど」

　セーシェルはその話を聞いても首を傾げるばかりです。フランスが何を考えているのかわかりかねています。とはいってもあまりいいことを考えていないことは感じ取っています。

「それでどうするんですか？」

「まずはこれを使った料理を作るんだよ」

「はあ」

「それもイギリスが作ったやつをな」

　これは酷い。青唐辛子だけでなく彼に作らせるというのですから。それでどうこうならない方がおかしいです。

　しかしフランスはそれをあえてするというのです。悪魔の如き所業を今はじめようとしていました。

　早速イギリスに声をかけます。青唐辛子を使った料理を作って欲しいと。その腕は物凄いあれですがそれでも作ること自体は好きなイギリスは上機嫌で答えました。

「御前が俺に料理を作って欲しいなんて珍しいな」

「ちょっと御前の料理を食べたい奴がいてな。ああ、これもう好きなだけ使っていいからよ」

「ああ。それじゃあな」
　こんな話をしながらそのうえでイギリスに青唐辛子を差し出します。そうしてそのうえで作らせます。出来上がったのは緑というか青というかのえげつない色彩の料理でした。何はともあれイギリスは作りました。後はフランスが動くだけです。
「よし、じゃあこれをあいつ等に食わせてやるぜ」
「それであいつ等っていうのは誰なんですか？」
　セーシェルにはそれが誰なのかまだよくわかりません。何故ならフランスがつっかかる相手は非常に多いからです。この人の人間関係もイギリス並に問題があるようです。

第八百七十一話　　完

２００９・８・１７

第八百七十二話　食べさせる人達です

第八百七十二話　食べさせる人達です

フランスはイギリスが作った青唐辛子の料理を持ってある場所に向かいました。セーシェルも一緒についていきましたが彼が来た場所は何とドイツのお家でした。

「ドイツさんのお家じゃないですか」

「おう。ついでにオーストリアとプロイセンもいるからな」

「プロイセンさんはわかりますけれどオーストリアさんまで一緒なんですか？」

「どうも最近上司同士での付き合いが結構あるらしいからな。それでらしい」

「そうなんですか」

こうしてフランスはドイツ達のいる場所に入ってそのうえでその料理を差し出すのでした。ところがオーストリアさんもいるということはハンガリーもいます。三人にその料理を見せたらいきなりオーストリアさんの横に控えていたハンガリーのフライパンで頭を思いきち殴られてしまいました。

「な、何しやがるこの騎馬女！」

「オーストリアさんに何食べさせようっていうのよ！」

「俺もいるんだが」

「俺はいいのかよ」

ドイツとプロイセンは無視されていささか不満ではありました。

「それイギリスの料理じゃない。美食家のオーストリアさんにそんなの食べさせようなんてあんたそれでも人間なの！」

「ああ、それはイギリスの料理だったんですね」

オーストリアさんもここで気付きました。今日もおっとりしています。

「道理で何か妙だと思った筈です」
「そんなの食べさせようなんてどういう魂胆よ！プロイセンに全部食べさせなさい！」
「おい、俺かよ！」
「しかも俺の家で何を騒いでいるんだ」
ドイツもかなり言いたげでした。その中でフランスは結局ハンガリーに追い出されてしまいました。こうしてフランスの計画は無惨に費えてしまったのでした。

第八百七十二話　　完

２００９・８・１７

第八百七十三話　イタリアにはしません

第八百七十三話　イタリアにはしません

ハンガリーにフライパンで殴られてオーストリアさん達にその青い唐辛子を使ったイギリスの料理を食べさせることに失敗してしまったフランス。しかしそれで諦めるような彼ではありません。誰かに嫌がらせをするということも彼の得意技の一つなのですから。

「さて、他の奴に食わせてみるか」

「それで誰に食べさせるんですか？」

「それが問題なんだよな」

とりあえずオーストリアさんに食べさせることしか考えていなかったのです。そのオーストリアさんで失敗してはもう一度計画を練り直すしかないのも当然でした。

それでどうしようかと考えていたのですがここでイタリアが通り掛りました。いつものように能天気に女の子を探して歩いています。

「あっフランス兄ちゃんこんにちは」

「おう、今日も元気みたいだな」

二人はにこりと笑い合って手でも挨拶をします。実に仲のいい様子です。

フランスはそのイタリアを笑顔で見送ります。そんな彼を見たセーシェルが彼に尋ねました。

「イタリアさんに食べさせようとは思わないんですね」

「ああ、あいつはいいんだよ」

こう言って動かないのでした。

「あいつにこんなの食わせたら可哀想だからな」

「可哀想ですか」

「あいつは確かにお馬鹿だけれど悪い奴じゃないからな」

ここでもイタリアにはこう言うのでした。

「だからいいんだよ。何もしなくてもな」
「そうなんですか」
「かといってこれはイギリスが作ったからあいつに食わせることもできねえしな」
もう一人の候補者も自然に消えてしまいました。
「さて、どいつに食わせるべきかな」
「それでも食べさせたいんですね」
とにかく誰かに食べさせないと気が済まないフランスなのでした。

第八百七十三話　　完

２００９・８・１８

第八百七十四話　北欧にしても

第八百七十四話　北欧にしても

青唐辛子を使ったイギリスの作ったスペシャルメニュー、フランスはこれを誰かに食べさせたくて仕方がありません。それで今度は北欧の方に行ってみました。けれどここで彼は気付いたのでした。

「ああ、あそこはあまり効果がねえだろうな」

「効果がないんですか？」

「だってよ。これ辛いだろ」

今更なことをセーシェルに言います。唐辛子が辛いのは最早自明の理です。

「辛いと食ったら熱くなるからな、身体が」

「それはそうですけれど」

「だったらあんな寒い場所の連中が食ってもあまり関係ねえんだよな。かえって喜ばれるだけだぜ」

「喜ばれたら駄目なんですね」

「当たり前だろ、これは悪戯なんだからな」

それにしても随分と諦めの悪い悪戯者であります。

「だからよ。食って困る奴に食わせないとな」

「食べて困る人って」

「ポーランドに食わせようとしてもリトアニアがいつも傍にいるしな」

彼が注意して見ているのでこれもできないのです。

「そうじゃなくてもバルトの連中も寒い場所にいるしな」

「じゃあロシアさんなんかはやっぱり」

「あいつとは付き合いが深いからそんなことはしないんだよ」

この辺りは義理を考えてのことでしょうか。お付き合いは大事です。

「何かこう考えたら欧州で食わせられる奴いねえな」
「そうなんですか。じゃあ諦めます？」
「馬鹿言え。絶対に誰かに食わせるからな」
やっぱり諦めないフランスでした。こうして話はまだ続くのでした。

第八百七十四話　　完

２００９・８・１８

第八百七十五話　太平洋に持って行っても

第八百七十五話　太平洋に持って行っても

欧州で食べる人は結局誰もいませんでした。フランス自身のしがらみもあってあえて食べさせようとしない人もいましたがそれでも誰もいなかったのは事実です。

けれどそれでも悪戯として誰かに食べさせたくて仕方のないフランスは今度は欧州を出ました。そうして向かう先は。

「太平洋ですか」

「ここにいる連中には食わせても別に困ったりしないしな」

今では太平洋には居場所がないフランスにとってそんなことをしても何も問題はないのでした。

それでこの青唐辛子を使ったイギリスの料理を持って来たのですが皆すぐにわかってしまいました。何故なら太平洋にはタイがいるからです。

「あれ、これって僕の青唐辛子を使った料理ですよね」

「げっ、そういやここは御前のホームグラウンドだったな」

「ってフランスさんそんなこと忘れてたんですか？」

セーシェルも今のフランスには呆れてしまいました。何と彼はタイが太平洋にある国家だということを見事に忘れてしまっていたのです。

「ひょっとして」

「しまった、完全に忘れていたぜ」

「しかもそれイギリスさんの料理じゃないですか」

タイにこのことまで見抜かれてしまいました。そう、イギリスの料理です。その味については太平洋においてもかなり有名になっています。ありのままに。

「僕はちょっと遠慮させてもらいますね。お気持ちだけ受け取らせ

てもらいます」
　太平洋の面々は皆これに倣いました。辛いものが大好きの韓国ですら立ち寄ろうとしない惨状です。こうしてフランスの目論みは失敗したのでした。
「くそっ、ここでも失敗かよ」
「もういい加減諦めたらどうですか？」
　流石にセーシェルもこう言いました。果たしてフランスは諦めるのでしょうか。こういうことになると妙なまでに意固地なところのある彼ですけれど。

第八百七十五話　　完

２００９・８・１９

第八百七十六話　そして食べた人は

百七十六話　　そして食べた人は　　第八

「ったくよお、本当に誰も引っ掛からねえな」

「せめてフランスさんのお料理だったら食べたかも知れないですね」

「俺の料理に青唐辛子は合わねえんだよな。中々」

そうしたものは決して作らないフランスでした。この辺りはかなりのこだわりを見せます。けれどそれでも諦めきれないのでした。

それでも今は疲れたので休憩しています。ところがここで通り掛った人がいました。それは。

「ああ、久し振り」

「誰だ御前」

フランスは見慣れない青年が通り掛ってきたので怪訝な顔をしています。セーシェルも同じように目をぱちくりとさせています。

「見慣れない顔だけれどよ」

「って僕カナダだよ」

カナダでした。何と今回も忘れられているのでした。いい加減誰にも覚えてもらえないのもここまでくると凄いものです。

「カナダなんだけれど」

「ああ、そうだったか」

ここでやっと思い出した『ふり』をするフランスでした。

「ところでよ。御前これ食うか」

「あっ、くれるんだ」

カナダは青唐辛子を知りません。なお太平洋のメンバーですがここでも皆から気付いてもらっていません。何処までも不遇な人であります。

「それじゃあもらっていいかな」

「おう、食えよ」

こうしてカナダがこのとんでもない料理を食べることになりました。すると。

「ダリナンダアンタイッタイ！？（翻訳：誰なんだあんた一体！？）」

家に帰って来たカナダを見て今回は思いきり引いているクマ二郎さんです。

「カナダだよ。わからないかな」

「わからない。というか何だその唇は」

青唐辛子のおかげで唇が腫れてしまったのです。まるでタラコです。しかもイギリスの料理はやっぱりあれでした。それがカナダにとって余計にダメージでした。

「クマ六さん、何で僕ばかりこんな目に逢うのかな」

「目立たないからに決まってるだろ」

「そうだよね。いい加減誰かに気付いてもらいたいなあ」

結局酷い目に遭ったのはカナダでした。この人にはありとあらゆる災厄が襲い掛かってくるようです。災厄だけは彼の相手をしてくれます。

第八百七十六話　　完

２００９・８・１９

第八百七十七話　この人が作ると

第八百七十七話　この人が作ると

カナダを地獄に送り込んだ青唐辛子、そのうちの半分はイギリスのせいですがこの青唐辛子を他の人が使うとどうなるかといいますと。

「こんなのは使い方次第でどうにでもなるんだよ」

「そうなのですか」

「そうだよ。いいか」

あの某脚本家が日本に対して言っています。祖国が相手でもその俺様ナ態度は全く変えないところがこの人ならではです。

「例えばな。中華料理に使うにしろだ」

「はい」

「加減をしたり何時入れたりするか。それでかなり変わるんだよ」

「つまり普通の赤い唐辛子と同じなのですね」

自分もまた料理が得意な日本はそれで話がわかってきたのでした。

「特別に考えることはないのですか」

「特別に考えるとかえって駄目なんだよ」

こうも日本に言います。

「それよりもな。普通に考えてやってくんだよ」

「わかりました。それでは私も」

「ただし。普通のより辛いのは頭の中に入れておけよ」

このことは強く忠告するのでした。

「さもないと大変なことになるからな」

「はい。確かに」

日本は脚本家さんの言葉に頷きます。それはもうカナダの被ったダメージを見てわかっていることだからです。

「それではそのように」

「大体こんなのがわからないと料理なんてできないんだよ」
傲岸不遜な言葉が続きます。
「カナダもイギリスもよ。だから料理が駄目なんだよ」
「実名出すのはどうかと思いますが」
「国名だから別にいいじゃねえかよ」
何はともあれこの人が作ると青唐辛子を使った料理も絶品になるのでした。やっぱり香辛料も使い方次第のようです。

第八百七十七話　　完

２００９・８・２０

第八百七十八話　そもそもホットケーキ以外は

第八百七十八話　そもそもホットケーキ以外は

青唐辛子を使ったイギリスの料理にとても酷い目に逢ったカナダですがそもそもこの人にしろその作った料理はといいますと。

「そういえば御前まともな料理作ったことあるのか？」

「えっ、どうしたんだよ」

急にクマ二郎さんにこう尋ねられて驚いた顔になっています。

「いつも作ってるじゃないか。何でそんなことを急に」

「だって御前の作る料理まずい」

同居人に随分と酷いことを言われています。

「パスタはのびてるし肉の焼き方も悪い。はっきり言ってアメリカの作る料理は最近かなり美味くなってきているのに御前のは全然変わらない」

「そうかなあ。そんなに酷いかなあ」

実は料理のことまで頭が回っていなかったのです。とにかく自分をアピールしてそのうえでお家に色々な人が来てくれるように頑張ったりケベックの人達を何とか宥めようとしたりで必死だったからです。影が薄くても問題は次から次に降りかかってくる人です。

「僕の料理って」

「じゃあ聞くけれど御前の作ったものホットケーキ以外に食べてくれる人いるか？」

「そういえばいないなあ」

このこともはじめて気付いたのでした。

「じゃあ何？僕ってそんなに料理下手なんだ」

「イギリスとどっちが酷いんだ？多分太平洋じゃ最下位だぞ」

「最下位ってちょっと」

ここまで言われると流石に困った顔になるカナダです。

「世界の半分位がいてそのうえこんなに個性的な国家が一杯ある太平洋で最下位って」
「本当にまずいんだから仕方ないだろ」
「そんな。どうして僕だけいつもこんな星回りなんだろう」
目立たないだけでなく不幸は襲って来るしあれこれ言われたりするカナダでした。確かにそんな星回りのようです。

第八百七十八話　　完

２００９・８・２０

第八百七十九話　食べる人もいます

第八百七十九話　食べる人もいます

某脚本家さんが作ったその青唐辛子を使った料理、まず日本が食べることになりましたがこの人だけ食べるというのもどうにも寂しいものです。それで出て来たのはあのライダー達です。

「ゴリグッデイイドガ（翻訳：これ食っていいのか）」

「これ食っていいかな」

毎度おなじみ仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディです。この二人が呼ばれました。

「何か暫くぶりですね。貴方達と御会いするのも」

「ワーヴドゥタタカッデイダ（翻訳：ワームと戦っていた）」

「渋谷でゼクトと共同作戦だった」

どうやら人間に戻っていようがバトルファイトが終わっていようがこの人達の戦いは続くようです。

「仮面ライダーカブト　明日のその先にでのお話ですね

「ゾルダ、ゾリダ（翻訳：そうだ、それだ）」

「天道達と一緒だった」

こんなお話をしながら食べる用意をしていると何時の間にか仮面ライダームッコロとか面ライダームッキーもやって来ました。そうして一緒に食べはじめたのです。そしてその味は。

「あっ、これは」

「ルバイ！（翻訳：美味い！）」

「いい味だな」

オンドゥルとダディがまず言います。後の二人もかなり満足しています。

「タイさんが作った青唐辛子の料理とはまた違う味ですね」

「言うなら俺風だよ」

脚本家さんは得意そうに笑って日本に答えます。
「どうだい、いい味だろう?」
「確かに。タイさんのそれとはまた違った味です」
「青唐辛子は美味いんだよ。ちゃんと作ったらな」
「成程」
日本もライダー達も納得する言葉でした。つまりイギリスはどうかということでもありますが。何はともあれ非常に美味しい脚本家さんの料理なのでした。

第八百七十九話　　完

２００９・８・２１

第八百八十話　キューバも何も言えない

第八百八十話

キューバも何も言えない

「それでこれが御前の料理やねんな」

「うん、そうなんだ」

カナダは自分の作った料理を仲のいいキューバに御馳走しています。とりあえず料理の腕を磨こうと思ったからです。それでキューバに協力してもらうことにしたのです。

「よかったら食べてよ」

「そやけどなあ」

けれどキューバは食べる前から難しい顔を見せています。

「これはちょっとなあ。どうなんや」

「どうなんやって？」

「いきなりパスタはのびてもうとるし」

キューバもこのことを指摘するのでした。

「味加減も見ただけでわかるわ」

「見ただけでわかるの？そんなの」

「塩とか砂糖とか塊になって入っとるし胡椒かて固まっとるし」

「あれ、溶かして入れないと駄目なの？」

そのことにかえって驚くカナダです。

「調味料って」

「いや、普通はそうするやろ」

キューバはかなり呆れてカナダに突っ込みを入れます。

「それも相当入れとるし。ドレッシングも油と酢が完全に分かれとるし肉かて黒焦げになってるがな」

「全部駄目なんだ」

「悪いけれど俺もちょっとこれはな」

難しい顔になって言うのでした。

「食べられそうにもないわ」
「そんなに酷いんだ」
言われてやっと自覚するカナダでした。
「僕の料理って」
「まあ次頑張るんやな」
最後のキューバの慰めの言葉がかえって辛いカナダでした。こうしたことからもこの人は目立てないでいるのかも知れません。何かと残念なことですが。

第八百八十話　　完

２００９・８・２１

第八百八十一話　新しいチーム

第八百八十一話　新しいチーム

タイとベトナム、それにオーストラリア。太平洋の三国は結構交流があります。タイとベトナムの関係は少しばかり微妙な空気もありますが。

それでも二人共表立ってあれこれ言うこともありませんのではまとまっていると言えます。ここでオーストラリアがこんなことを言いました。

「今考えたでごわすが」

「ええ」

「何ですか？」

ベトナムもタイもオーストラリアの言葉に目を向けます。オーストラリアはその二人に対してさらに言うのでした。

「チームを作らないでごわすか？おいどん達の」

「チームっていうと」

「レンゴウチームやスウジクチームみたいなものですか」

「そうでごわす。それでごわす」

まさにそれだというのです。

「それをおいどん達で作りたいのですが」

「そうね。いいかも」

「僕達三人でしょうか」

「後二人入れたいでごわす」

オーストラリアはもう二人欲しいというのです。

「おいどん達三人とプラス二人という形でどうでごわすか」

「私はそれでいいと思うわ」

「僕もです」

ベトナムもタイもそれで異存はありませんでした。オーストラリ

アの意見に賛成して頷きます。
「じゃあ早速後の二人を入れましょう」
「まずは香港君ともう一人は」
すぐにメンバーの選定にかかります。さて、五人目は誰なのでしょうか。

第八百八十一話　　完

２００９・８・２２

第八百八十二話　忍風戦隊

第八百八十二話　忍風戦隊

オーストラリアとベトナム、そしてタイの三人が軸になります。そこに二人が加わるというのが新たにできたタイヘイヨウチームなのですがその二人は。

「私でいいのよね」

「よく来てくれたでごわす」

オーストラリアは自分と同じ様にイギリスのところにいた香港のことはよく知っています。それでにこやかに彼を迎えるのでした。

「では早速頼むでごわすよ」

「わかったわ。イギリスの前で爆竹鳴らせばいいのね」

「それは時と場合を考えてね」

「あまりやらない方がいいです」

ベトナムとタイは爆竹はそっと止めます。とりあえず四人目は決まりました。

「けれど五人目は」

「誰なんですか？」

「一応いるのでごわすがおいどんも知らない人でごわす」

オーストラリアはこう三人に言うのでした。

「果たして誰でごわすか」

「何かそこに誰かの気配がするわよ」

香港が皆が今いる場所のあるポイントを指差しました。

「気配だれだけれど」

「？そういえば」

「何か見えますね」

ベトナムもタイも見えるだけです。

「蜃気楼かしら」

「五人目の人はまだいないのでしょうか」
実はいました。いますけれど誰も気付いてくれないのです。その人は。
「やっとチームに入れたと思ったのに」
カナダでした。何と五人目は彼でした。
「何この扱い。皆酷過ぎるよ」
「いつものことじゃないのか？」
最後にクマ二郎さんの言葉が突き刺さります。今回も目立てそうにないカナダでした。とりあえず五人揃いましたけれど。

第八百八十二話　　完

２００９・８・２２

第八百八十三話　三人と二人

第八百八十三話　三人と二人

　このチームは赤、青、黄色の三色に紅と群青といったカラーリングです。いつもの三色にその二色といういささか普段と変わったカラーリングになっています。

「これ何故なんでしょうね」

「これはそれぞれ流派が違うからでごわすよ」

　オーストラリアがこうタイに説明します。

「おいどん達三人と香港、カナダでは違うのでごわす」

「それでなんですか」

「そうでごわす。イギリスの系統と東南アジアでいけばこれもこれで三人と二人でだったでごわすが」

「南と北になったのね」

　ここでベトナムが言いました。

「そういうことね」

「その通りでごわす。だからおいどんが赤で」

「私が青で」

「僕が黄色なんですね」

　オーストラリアが赤、ベトナムが青、タイが黄色というわけです。三人共このカラーリングが中々似合っています。

「そして私が紅なのね」

「僕群青なんだ」

　香港は納得しているようですがカナダはあまりそうではないようです。何処となく浮かない顔をしていることからそれがわかります。

「何か群青ってカラーじゃないかも」

「しかもカナダの方が年上よね」

「そうだよ。それで僕が弟の役っていうのは何でかな」

「目立たないからでごわす」
オーストラリアの今の言葉はどうしようもないまでにカナダの急所を衝きました。
「だからでごわすよ」
「そんなにはっきり言わなくても」
これにはカナダも何も言い返せません。
「やっぱりそれでなんだ。本当に目立ちたいな、一度位は」
チームでも目立たなさが言われるカナダなのでした。苦労は尽きません。

第八百八十三話　　完

２００９・８・２３

第八百八十四話　それでも一緒です

第八百八十四話　それでも一緒です

三人と二人でそれぞれ別々の流派ということになっていますが五人はいつも一緒にいます。それはやっぱり五人一緒にいるのがこのチームだからです。

「確か最初は敵対関係にあったのよね」

「そうでごわす」

香港にオーストラリアが説明します。

「二人組が三人組に戦いを挑んで中盤までその流れであったでごわすよ」

「大変だったのね」

それを聞いてそのまま言う香港でした。

「そんな調子じゃ」

「そうでごわす。このチームではそれがないのが本当に救いでごわす」

「私一人でそんなことしても何にもならないし仲間内で争うのも仕方ないわ」

「あの、僕もいるんだけれど」

今の香港の一人という言葉にはすぐに突っ込みを入れるカナダでした。

「若しかして忘れてる？僕のこと」

「あっ御免なさい、実は」

「また忘れられたんだ・・・・・・」

カナダにとっては非常に辛いことです。何とパートナーにまで忘れられるのですから。これが辛くない人というのもいないものです。

「何で僕ってこういつも・・・・・・」

「とにかくいつも五人でやるでごわすよ」

オーストラリアはこのことはしっかりと言うのでした。
「仲間割れは厳禁でごわすよ」
「そんなの考えたこともないよ」
温和なカナダでは本当にそんなことは考えもつかないことでした。
「大体君とは長い付き合いじゃないか。香港とも一緒にやってきているし」
「それならいいでごわす。後の二人もその点は大丈夫でごわすしな」
何気にタイとベトナムの微妙な関係には気付いていなかったりします。もっとも二人共あえて言わないので気付かないのも仕方ないことですが。

第八百八十四話　　完

２００９・８・２３

第八百八十五話　リーダーは豪快さん

第八百八

十五話　リーダーは豪快さん

「おいどんがリーダーでごわすな」

「このチームはレッドがリーダーだし」

「そうなりますね」

オーストラリアに対してベトナムとタイが告げます。見ればもう三人共それぞれのカラーリングのユニフォームにその身を包んでいます。

「だから貴方がやるといいわ」

「頑張って下さいね」

「よし、ではやるでごわすよ」

オーストラリアは胸を張って言います。

「それでそっちはお兄さんは香港になったでごわすな」

「そうなるわね」

「何か僕がリーダーになったりすることって自分でもイメージ湧かないし」

その辺りは自覚するしかないカナダでした。こうしてオーストラリアがリーダーになったのでした。

日本のお家の油紙の笠を持って現われてそのうえで日本のお家の忍術を使う。意外にもオーストラリアはどちらも無難にこなしています。

「上手いわね」

「何だかんだで日本とは付き合いが深いでごわすからな」

オーストラリアは移し身の術を見せたうえで香港に対して答えます。

「だからこうしたことも結構できるでごわす」

「じゃあ問題はないわね」

香港はそんなオーストラリアを見て安心したようでした。
「リーダーでやっていけるわね」
「おいどんはやるでごわすよ」
オーストラリアはその言葉に力瘤さえ入れています。
「頑張って」
「そうするといいわ」
結構リーダーが引っ張るチームのようです。意外な程に身のこなしも俊敏で忍者としても相応しいと言えるのでありました。

第八百八十五話　　完

２００９・８・２４

第八百八十六話　忍術の使い道

第八百八十六話　忍術の使い道

オーストラリアはどちらかというとパワーファイターですがこのタイヘイヨウレッドでは中々の技も見せます。皆それを見て少し驚いてさえいます。

特に忍者発祥の国日本は。オーストラリアのその忍術を見て言うのでした。

「上手いですね、本当に」

「日本のを見てやっているでごわす」

オーストラリアはにこりと笑って日本に対して言います。

「こうして術を極めて」

「そうして忍者にならられるのですね」

「その通りでごわす。敵もいるでごわすからな」

「敵？」

敵と聞いて首を傾げさせる日本でした。

「敵といいますと誰でしょうか」

「おいどんの愛する鯨を食べる奴等でごわす」

忍術を身に着けても空気を読む術は身に着けていないようです。

「その連中でごわす」

「では私とホクオウチームなのですね」

「誰であろうと鯨を捕ることは許さないでごわす」

オーストラリアはこう言いながら日本と対峙しはじめました。日本もそれを受けて立ちます。既に日本は忍者装束ですしオーストラリアは自分の赤い制服です。それぞれ背中に背負っている忍者刀に手をかけています。

「いいでごわすな」

「捕鯨は日本の文化です」

日本も引きません。
「それを邪魔するのならば私も」
「何としても鯨達を守ってみせるでごわす」
どうやら彼の忍術は鯨の為のようです。何気に物騒なことにもなってしまっています。この対峙はスウジクチームとタイヘイヨウチームの他のメンバーが間に入って収まりましたが。それでもどうにも物騒なオーストラリアの忍術であります。

第八百八十六話　　完

２００９・８・２４

第八百八十七話　アオザイではなくて

第八百八十七話　アオザイではなくて

二番目はタイヘイヨウブルーことベトナム、彼女はチームにいる時はアオザイではありません。自分の色の青いユニフォームですがこうしたチームにお決まりのミニスカートです。これが結構以上に好評だったりします。

「やっぱり女の子の脚っていいよね」

「そうそう」

チームの外でもかなりの人気です。ただベトナムはあまり嬉しそうでもないようです。

「何かミニスカートって」

「嫌でごわすか？」

「慣れてないから」

こうオーストラリアに答えるのでした。実際にミニスカート姿の時は今一つ浮かない顔です。

「だからちょっと」

「まあそのうち慣れるでごわすよ」

オーストラリアはこう言って彼女を宥めます。

「このユニフォームにはズボンもあるでごわすから少しずつ慣れるでごわす」

「そうしようかしら」

これで一応は納得してユニフォームを着続けます。その他のことはかなり無難にこなしています。

「動き速いね」

「ずっとジャングルの中で戦ってきたから」

訓練中にカナダに対して答えます。

「だからこれ位はね」

「何か物凄く強いみたいなんだけれど」
「ベトナムはかなり強いでごわすよ」
オーストラリアがここでカナダに対して言います。
「おいどんも一度アメリカや韓国と一緒に戦争をしたことがあるでごわすがな」
「そういえばアメリカどころか中国まで退けてるんだよね。顔は凄く奇麗なのに」
ただ奇麗なだけでなく強さも兼ね備えているベトナム、ひそかにタイヘイヨウチームのポイントゲッターなのでした。アオザイを着なくても彼女は強いのでした。

第八百八十七話　　完

２００９・８・２５

第八百八十八話　アルバイトは

第八百八十八話　アルバイトは

タイヘイヨウチームは皆時間があるとアルバイトをしています。肉体労働や保育園のお手伝いと結構以上に働き者です。そしてベトナムのアルバイトはというと。

何と演歌を歌っています。演歌歌手をしてそれでアルバイトをしているのです。

「何で演歌なのかな？」

「さて。私にもわかりません」

イタリアと日本がベトナムのその歌を聴きながら首を傾げています。コンサートにベトナムと同じアジアンガールの台湾の誘いでスウジクチーム全員で来ているのです。

「どうしてここで演歌なのか」

「元ネタがそうだからなの」

ベトナムは歌い終えたところでスウジクチームの面々に答えました。今彼女は演歌歌手に相応しい着物姿です。その格好も見事に似合っています。

「だから演歌歌手なの」

「何か妙なところで元ネタに忠実だよね」

「確かに」

イタリアと日本はベトナムのその言葉を聞いて言いました。

「それに歌、上手いよね」

「はい、お見事です」

「カラオケでいつも練習しているから」

だからだというのです。

「演歌じゃなくてアイドルの歌も歌えるわ」

「じゃあそっちもやってみたらどうかな」

「そうですね。どなたかとユニットでも組まれて」
「じゃあ私となのかしら、その場合は」
台湾が二人の話を聞いて思いました。演歌歌手でもあるベトナムはアイドルの歌もいけるのでした。やっぱり多芸な彼女です。

第八百八十八話　　完

２００９・８・２５

第八百八十九話　気は優しくて

百八十九話　　気は優しくて　　第八

三人目は黄色というのは非常によくあるパターンですがそれはこのチームも同じです。タイヘイヨウイエローはタイです。いつも穏やかな笑みでにこにことしています。

しかし頭の切れは見事です。すぐに気付いて的確な判断を皆に伝えてくれます。

「あっ、ここはこうしてですね」

「すぐにあそこに行きましょう」

皆はその言葉に従って動きます。タイが言えばそれで動きます。まさに皆の参謀です。

「ベトナムも参謀ができるしうちのチームは頭脳には困っていないでごわすな」

オーストラリアはそんな彼等を見て満足しています。

「おかげで動くのが非常に楽でごわす」

「僕はそんなことは別に」

けれどこう言われても謙遜するタイです。

「ただたまたま気付くだけですから」

「気付くところがそもそもいいのでごわすよ」

オーストラリアはそのタイに対して言います。

「気付いてくれないとどうしようもないでごわすよ」

「そうなのですか」

「おいどんはどうも鈍感でごわすからな」

自分で自分のことは結構わかっているつもりのオーストラリアです。それでも実はそれ以上のものがあったりするのですけれど。

「だからこれからも頼むでごわすよ」

「わかりました。それじゃあ」

タイはにこりと笑って彼の言葉に頷きます。
「宜しくやらせてもらいます」
「頼むでごわすよ、これからも」
「はい」
本当に温厚でそれでいてよく気がつく人です。少なくともレンゴウチームには間違ってもいないような人であります。

第八百九八十九話　　完

２００９・８・２６

第八百九十話　保育園でのアルバイト

第八百九十話

保育園でのアルバイト

タイのアルバイトは保育園のお手伝いです。その時猿の神様に変装することもあります。

「あっ、ハヌマーン！」

「ハヌマーンだ！」

子供達はそのタイの姿を見て一斉に歓声をあげます。

「ハヌマーンが来たよ！」

「ゴモラをやっつけるんだ！」

タイはそんな子供達を見て彼自身もにこにことなります。彼の楽しみは子供達が笑顔になることなのでとても嬉しいのです。

けれどそれを見たベトナムが。こう言うのでした。

「ハヌマーンは光の戦士のお友達じゃなかったかしら」

「そうですけれど」

「それは少し問題よ」

こうタイに突っ込みを入れるのでした。

「私達は戦隊だから」

「それは僕もわかってるんですけれどね」

「それでもなの」

「子供達が喜んでくれますから」

だからしているというのです。

「だってそうじゃないですか。子供達の笑顔を作るのが僕達の仕事でしょう？」

「それはその通りよ」

ベトナムもこのことはよくわかっています。

「確かに。ああいう笑顔の作り方はどうかと思うし」

「はい。あれはかなり」

見れば保育園にはレンゴウチームも来ています。イエローことイギリス、ブラックことフランスが子供達に笑われています。
「あはは、スマイル満開のポーズおかしい！」
「笑顔がきもい！格好よすぎるって何！？」
「くそっ、また俺達は笑いものかよ」
「子供に対して怒るわけにはいかねえしな」
二人は笑いものにされて不満ですが子供に怒るわけにもいきません。少なくともタイは笑われてはいませんからかなりいい方であります。

第八百九十話　　完

２００９・８・２６

第八百九十一話　紅の戦士

第八百九十一話　紅の戦士

三人の次は二人です。タイヘイヨウカブトは香港です。紅色が実によく似合っています。

「私のところでは赤は演技のいい色だから嬉しいわ」

「着こなしも上手いでごわすな」

オーストラリアは彼に対しても笑顔で声をかけています。

「何かお洒落でごわす」

「褒めてもらって嬉しいわ。それでだけれど」

「ああ。何でごわすか？」

「得意技はこれよ」

言いながら出してきたのは爆竹でした。

「これを使って派手やるわよ」

「おっ、いいでごわすな」

その爆竹を見たオーストラリアはまた笑顔になりました。

「それを派手に鳴らせば如何にも戦隊らしくていいでごわすよ」

「敵にぶつけるのにも撤退の時に鳴らすのも」

「色々と使えるでごわすな」

「例えば」

ここでイギリスが二人の前を通りかかりました。そのイギリスの足元に火を点けた爆竹を名放り投げたのです。すると。

「う、うわっ！敵襲か！？」

「こういうことにも使えるわよ」

「うん、最高に使えるでごわす」

「って御前等何てことしやがるんだ！」

いきなり足元に爆竹を鳴らされたイギリスにとってはいい迷惑です。

「今度やったら承知しねえからな！」
「忘れているから安心して」
「気にすることはないでごわすよ」
けれど彼等は平気な顔です。結局悪戯されっぱなしのイギリスなのでした。

第八百九十一話　　完

２００９・８・２７

第八百九十二話　アルバイトでは

第八百九十二話　アルバイトでは

オーストラリアはその強靭な肉体を使っての建築業を営んでいます。何を運んでも持っても平気です。やっぱり力仕事はこの人です。何でも屋ですがそれでも肉体労働が多かったりします。

その同じアルバイトの場所に香港もいます。彼はオーストラリアに比べて非力なのですがそれでも無難にこなしています。

「力あまりないのによくやれるでごわすな」

「力じゃなくて技よ」

香港は言うのでした。

「最低限の力で技を使えばほら」

「おおっ、見事でごわすな」

何と重いドラム缶を指だけで軽々と持っています。本当に力を使っていません。

「中国拳法を応用したでごわすな」

「そういうことよ。暮らしの中に修行ありよ」

「それはチームが違うでごわすがな」

何気に突っ込みを入れるオーストラリアです。

「しかしそれでも見事でごわす」

「他には高い場所での仕事も自信があるわ」

見ればそれもです。的確にこなしています。まるで普通の場所にいるかのように軽々と動いてみせています。

力のオーストラリアに対して技の香港、まるで初代仮面ライダーの様です。それに気付いたオーストラリアが笑いながら言います。

「香港が銀色でもそれはそれで面白いでごわすな」

「そうね。それも確かにね」

香港もそれについてまんざらではありません。ですが今はタイへ

イヨウチームなのでその色はありません。残念ですが。
「私が一号で」
「おいどんが二号でごわす」
それぞれの変身ポーズもしてみます。思った以上に絵になっている二人でした。

第八百九十二話　　完

２００９・８・２７

第八百九十三話　空気キャラ

第八百九十三話　空気キャラ

チームには時々ですが空気キャラというものが存在します。最近のチームではあまりいないようですがこのチームでは見事空気キャラ復活でした。

「あれ、タイヘイヨウチームって四人？」

「確か後で助っ人来るから五人じゃないの？」

皆完全にこのチームを四人だと思っています。何気に追加戦士のことも言っていますが何はともあれ誰も最後の一人には気付いていません。

「まあバルトチームも基本四人だけれどな」

「一応五人だけれど」

「このチーム五人なんだけれど」

タイヘイヨウクワガことカナダは一人ぽつんとしていました。

「やっぱり僕目立たないんだ」

「私はちゃんと覚えているわよ」

「僕もですよ」

落ち込む彼に対してベトナムとタイが慰めの言葉をかけてくれました。

「だから安心して」

「仲間は覚えていますから」

「何か仲間の人にまで忘れられたことがあったしね」

実はこの人はレンゴウシルバーの予定がその席をゴールドに何時の間にか入った韓国が自分の妹をシルバーにしてしまっていたのです。しかもレンゴウチームの皆はそもそもカナダがチームに入る予定だったことすら完全に知らなかったのです。これはある意味とても凄いことです。

「けれどこのチームは違うから」

「だから安心して」
「さあ、お掃除に行きましょう」
「うん。行こうクマ一さん」
「誰？」
「君の友達のカナダだよ」
いつも一緒のクマ二郎さんとは相変わらずです。けれど何とかチームに入れたのでほっとしてもいます。このチームも他の顔触れはかなり濃いのですけれど。

第八百九十三話　　完

２００９・８・２８

第八百九十四話　アルバイトをしていても

第八百九十四話

アルバイトをしていても

カナダは皆に剣道を教えるアルバイトをしています。日本の剣道をこの人も教えているのです。

「最近アメリカも剣道をやっていたりするけれどこうして実際にやってみるといいものだね」

「先生、教えて下さい」

「先生！」

子供達が先生、先生と集まってきます。けれどカナダは素通りされます。

子供達が集まるのは日本の周りです。何と言っても剣道と言えば日本です。だからこそ子供達も日本の周りに集まって教えてもらうのです。

「面はこうですか？」

「胴は」

「面はこうです。そして胴は」

日本は親切丁寧に子供達に教えています。子供達は日本に教えてもらった通りに身体を動かします。

「そうですか、こうですか」

「こうですね」

「はい、その調子です」

ここでも日本は大人気です。ところが誰もカナダのところには行きません。そもそも気付いてもいないのでした。

「そりゃ剣道っていったら日本さんだけれどさ」

カナダはかなり悲しい顔になって言います。

「それでもさ。僕も一緒にいるんだし」

「剣道の起源は俺なんだぜ！」

無闇に個性が強烈で自己主張の塊の韓国にも完全に負けています。何もかもが目立たないカナダ、アルバイトでお金は入っていますがそれでも目立てないことには変わりがないのでした。

「僕の家だけのものってないしなあ」

「気を落とさないことね」

さりげない香港の慰めも今のこの人には辛いものでした。本当に何処までも目立つことのできない可哀想なカナダであります。

第八百九十四話　　完

２００９・８・２８

第八百九十五話　追加戦士は誰か

百九十五話　追加戦士は誰か　　第八

とりあえず五人揃うことは揃ったタイヘイヨウチーム、しかしここで一つ問題が起こりました。

「六人目は誰でごわすか？」

「さあ」

「誰なんでしょうか」

オーストラリアの今の質問にベトナムもタイも答えることができませんでした。勿論香港もカナダもです。実は六人目が誰なのかまだわかっていないのでした。

「誰かいる筈よ」

「けれど誰なんだろう」

既に太平洋にいる面子は皆それぞれチームに入っています。誰がいるのかどうかさっぱりわからない状況なのです。

皆とりあえず誰なのか探そうと思っていますと。その前に緑の服を着た仮面の人がやって来たのでした。

「いよいよ俺の出番だねえ」

「トルコさんじゃない」

「一体どうしたんですか？」

香港とカナダがここで出て来たトルコに対して尋ねます。

「緑の服ということはまさか」

「トルコさんがその六人目ですか？」

「まあそういうことになるねい」

トルコは仮面の下でにこにこと笑いながら言うのでした。

「まあタイヘイヨウにはいないが気にするねい」

「タイヘイヨウにいないって」

「うちのチームはタイヘイヨウなんですけれど」

「気にしたら負けでごわすな」
首を捻るベトナムとタイに対して言うオーストラリアでした。
「だからいいでごわすよ」
「有り難いねい。じゃあ俺が六人目だねい」
「歓迎しますよ」
「宜しく」
何はともあれ六人目として迎えられたトルコでした。どうもチームに入りたいと言えば誰でも入られるようです。

第八百九十五話　　完

２００９・８・２９

第八百九十六話　正体がわからないのが

第八百九十六話　正体がわからないのが

六人目、タイヘイヨウシュリケンことトルコのカラーは緑です。
そして正体は全くわかっていなかったりします。
「何時でも仮面を着けているでごわすな」
「素顔は見せないのがシンケンジャーだから丁度いいねい」
明るい声でオーストラリアに返します。
「俺の素顔は日本にも見せないことにしてるからねい」
「日本にもでごわすか」
「それこそ何があっても見せないことにしてるんでい」
「死んでもでごわすか？」
何気にとんでもない質問をするオーストラリアでした。
「それでもでごわすか」
「一度死んでもＶＳで生きていたことになるから全然関係ないねえ」
実はそんなことがあったりしました。トルコ自身も昔モンゴルに散々に敗れてもそこから見事立ち直った物凄い過去があったりします。
「だから何があってもこの仮面は外さないんでえ」
「それはそれで見事なポリシーでごわすな」
オーストラリアもそんなトルコを認めて頷きます。
「立派でごわすよ」
「褒めてくれて嬉しいねい。じゃあ俺も頑張らさせてもらうとするかいねえ」
こんなことを言いながらゆるりと前に出て皆と一緒にお掃除をするのでした。
その動きはかなり見事なものです。皆それを見て言います。
「かなり頼りになる助っ人でごわすか？」
「そういえば元の人も本気になったらあの喋り方になるし」

「考えてみればそっくりですね」
そのことにも気付いたのでした。
「そう思えばまさしくこのチームの六人目になるべくしてなったのね」
「そうみたいだね」
トルコが加わったのはどうやら半ば運命だったようです。こうして最後の一人も加わったのでした。

第八百九十六話　　完

２００９・８・２９

第八百九十七話　忍者ですから

第八百九十七話　忍者ですから

タイヘイヨウチームは忍者をモチーフとしています。忍者といえばやっぱりこの人です。

「そういえば私のお家の忍術を使っておられるのですね」

「その通り、悪いが拝借させてもらってるでごわす」

リーダーのオーストラリアが日本に対して説明します。

「別にいいでごわすな」

「ええ、それは構いません」

日本もそういうことにはいちいち何も言いません。

「ただ。忍術は使えるのですか？」

「当然でごわす。おいどんもこうして」

実際にここで消えてみせます。すぐに姿を現わして次は。

分身の術に木の葉隠れです。かなり器用にこなしています。

「この通りでごわす。どうでごわすか」

「かなり上手ですね。じゃあベトナムさんやタイさんも」

「見ていて」

「この通りです」

二人も見事に忍術を使いこなしてみせます。やっぱりかなりのものです。

「香港さんはもうわかっていますし」

「私の体術はわかってくれてるのね」

香港の場合は既にカンフーで鍛えているのはわかるからです。当然この人も見事にこなしています。そして次の一人は。

「トルコさんもお上手ですね」

「日本のものなら何でも大好きだからねい」

トルコは大好きな日本の前で上機嫌で話してきます。

「色々勉強して工夫してきてるんだねい」
「それは何よりです。そういえば仮面も」
「隠すのが忍者だからねい。丁度いいってわけでい」
「そうですね。確かに」
五人の術は見事でした。けれどやっぱり一人忘れているのでした。
日本ですら。

第八百九十七話　　完

２００９・８・３０

第八百九十八話　消えるのは得意です

第八百九十八話　消えるのは得意です

日本は五人には気付いていました。けれど最後の一人のことは完全に忘れていました。追加戦士よりも忘れられているその人というのは。

「あれっ、日本さん僕に気付いてくれていないけれど」

「誰？」

「君の飼い主のカナダだよ」

クマ二郎さんに返すのはこの人でした。ここでも日本に気付いてもらえなかったのです。

「だからいい加減覚えて欲しいんだけれど」

「けれどこれはいいことだぞ」

落ち込むカナダにこう言ってくるクマ二郎さんでした。

「だって忍者は隠れるのが仕事なんだろう？」

「そうだけれど」

「じゃあ気付いてもらえないのはいいことだ」

こう彼に話すのです。

「隠れているのと同じだから」

「そういうものかなあ」

「そういうもの。だから安心してチームにいればいい」

カナダへのアドバイスです。

「そのまま。気にせずにこのままでいけばいい」

「影が薄いのもいいことなのかなあ、それって」

「時と場合によるな」

それについてはこういうことでした。

「とりあえず忍者としての御前はそれでいいぞ」

「けれどチームのメンバーとしてはどうなの？」

「空気キャラ程度悲しいことはないな」
「だよねえ。実際は空気じゃない人だったのに」
ある意味空気空気だと言われるだけましだったりします。本当にそういう意味でも空気のカナダでした。

第八百九十八話　　完

２００９・８・３０

第八百九十九話　御昼を一緒に

百九十九話　御昼を一緒に　　第八

今日もポーランドとリトアニアは一緒にいます。ポーランドがリトアニアを自分のお家に呼んでそのうえであれこれと家事をしてもらっているだけなのですがそれでもリトアニアは何故かそんなポーランドと一緒にいるのです。

「それでお掃除大変だしーーーーー」

「前に掃除した時何時なの？」

「そんなの忘れたしーーーーー」

こんな調子です。とにかくいい加減です。けれどリトアニアは真面目に掃除をするのでした。ポーランドはどうかというと自分のお家なのに随分と適当にしています。

それで終わってから一休みと二人でコーヒーを飲んでいます。その時ポーランドがリトアニアに対して言うのでした。

「それでリト」

「どうしたの？」

「もうすぐお昼だけど何がいいのん？」

こう彼に尋ねるのでした。

「御前が作るん？それとも俺が作るん？どっちにする？」

「そう言われると」

リトアニアは少し微妙な顔になってそれから答えました。

「いつもだけれど一緒にいるし」

「じゃあ二人で作らね？」

ポーランドはこう彼に提案するのでした。

「二人で。何か作るってのいいし」

「そうだね。いつもどっちかが料理作ってるし」

料理は片方がもう片方の分まで作るのがこの二人の常です。けれ

ど今回は。
「今回は趣向を変えて二人で作る？それじゃあ」
「たまにはいいしーーー。そうしね？」
「そうだね。た・jまにはいいよね」
リトアニアはにこりと微笑んでポーランドの言葉に答えました。
その百万ドルの微笑で頷く彼でした。

第八百九十九話　　完

２００９・８・３１

第九百話　二人で作りはじめて

第九百話

二人で作りはじめて

こうして二人一緒に御昼御飯を作ることになったリトアニアとポーランド。二人並んで台所にいるとそれだけで色々なことを思い出したりもするのでした。

「なあリト」

「どうしたの？」

「戦いに行く時はいつもこうして二人で料理したの覚えてね？」

ポーランドがこうリトアニアに言ってきたのでした。

「そういうの。どうよ」

「そうだね。そうした時とかはいつもだったね」

リトアニアもその昔の日々を思い出してポーランドに応えます。

「勝った時も負けた時もね」

「行く時も帰る時もこうして二人で並んで色々やってたし」

「いつもそうだったね。お野菜洗ったり」

「そうだったしーーーー」

今丁度お野菜を洗っているリトアニアでした。ポーランドはお肉の用意をしています。

「あとは何かをする時はいつもそうだったね」

「俺がいて御前がいて」

何気に自分を先に出すポーランドでした。

「そうしていつもやってたしーーーー」

「懐かしいな。本当にいつも一緒だったね」

リトアニアは昔を見る顔になりました。最近は違いましたが本当にいつもポーランドと一緒にいたのです。

「俺だけ妙に苦労していたような気もするけれど」

「それは気のせいだしーーーー。俺はオーストリアさんのところに

お世話になってただけだしーーーー」
「オーストリアさんだったらいいじゃない。俺なんてそれこそ」
こうしたあまりよくないことも思い出します。それでもリトアニアは結局こう言うのでした。
「それでも。今はこうしてね」
「一緒ってやっぱりよかね？」
「そうだよね。本当にね」
やっぱり二人の絆は健在です。とても穏やかな顔でいるリトアニアとポーランドなのでした。

第九百話　　完

２００９・８・３１

第九百一話　作るものは

　第九百一話　作るものは

「それでよ、リト」

「どうしたの？」

「豚足これでよくね？」

　ポーランドはこう言いながらリトアニアに豚足をじっくりと煮たものを出してきました。

「これでどうよ」

「いいと思うよ。それじゃあ後はそれを」

「細かく刻めばいいしーーーー」

「そうそう、そうやってね」

「それで御前は何作るん？」

「俺はヴェーダレイとツェペリナイだけれど」

「御前相変わらずそれ好きなん」

「うん、かなり好き」

　血で作ったそのソーセージとジャガイモのお餅を仕上げにかかっています。ポーランドは豚足の他に鶏のレバーも出してそれでもあれこれとしています。彼が扱っているのは豚肉だけではありませんでした。

「それにしてもポーランドって相変わらずお肉好きだね」

「元々馬に乗ってたし。それも御前もじゃね？」

「そうだけれどね。それとお野菜は」

「スープは御前が作ってるんだな」

「うん。サラダはそれだね」

　見ればポーランドはもう人参と林檎のサラダを作っているのでした。他には生クリームを添えた胡瓜のサラダもあります。当然ですがリトアニアが作っているそのスープにもお野菜がたっぷりと入っ

ています。食べるのはお肉だけではないのがいいです。
「あとザワークラフトはもうあるし」
「野菜もこれでよくね？」
「そうだね。それとパンとワインもあるし」
「デザートはサコティスでよかね？」
「うん。じゃあこれでいいね」
こうして二人でそれぞれの国の料理を作るのでした。作り終えてそのうえでテーブルに着きます。二人でいつも通り楽しくお話をしながらの昼食となりました。

第九百一話　　完

２００９・９・１

第九百二話　二人で食べながら

第九百二話　二人で食べながら
料理を作り終えてから二人で食べることになりましたが気付けばもうお昼の二時です。けれど二人共結構遅い時間の筈なのに平気な様子です。
「こうしてお昼は食べてね」
「夜は軽くがいいしーーーー」
実はポーランドのお家ではお昼は結構遅いのです。今みたいな時間に食べてそのうえであれこれとします。夜は本当に軽くしか食べません。
「それでポーランド、さっきの豚足は？」
「ほい、ガラレッタ」
ここで豚の足の名残を残したゼラチン質のものを出してきたのです。リトアニアは早速そのガラレッタというものを食べはじめたのです。
「あっ、美味しいね」
「俺の国の料理だし。美味しいに決まってるし」
「そういうこと言わなければもっと美味しいのね」
いつもの調子のポーランドに少し呆れながらも食べ続けるリトアニアです。
「全く。けれどこうして二人でまた食べられるようになったのってね」
「やっぱり俺御前と一緒にいるのが一番合ってるわ」
ポーランドは本気でこの言葉を告げました。
「だからよ。今度は俺が御前の家行くな」
「何時でもいいよ。時々エストニアとラトビアも来てくれるしね」
「あの二人はいいけれどベラルーシやばくね？」

ポーランドは彼女に関してはかなり警戒を持っていたりします。
「あいつとは付き合うのは止めた方がいいと思うんだけどよ」
「別にやばくないよ。何言ってるんだよ」
気付いていないのはリトアニアだけだったりします。何故か彼女のことには全く気付かない彼なのでした。

第九百二話　　完

２００９・９・１

第九百三話　フライパンは何処だ　☆

フランスといえば料理です。何か他にもあれやこれやと得意なものがあると自慢していますし実際にそれはある程度以上嘘ではありません。そうした人ですがある日自分の家にあるフライパンを探していました。

「どないしたんや」

スペインがその彼に声をかけます。

「何か色々探してるやないか」

「いやよ、家のフライパンがよ」

自分の家のキッチンの中をあちこち探し回りながらそのスペインに答えるのでした。

「ないんだよ。それも一つもな」

「フライパンがないって？」

「そうだよ。このままじゃ料理が作れねえんだよな」

こう言って困った顔になっています。

「御前知らないか？フライパンな」

「俺も今来たばかりやからな」

スペインもこう尋ねられて一緒に探してあげています。けれどそれでも見つからないのです。何故か一つもです。

「けれどホンマにないな。前来た時はあほ程あったのにな」

「何処に行ったんだ？本当に」

「フライパンなんか誰が何に使うんや？」

スペインも首を捻るばかりです。

「あんなもん取っても何にもならへんやろ」

「そうだろ？本当に誰が何で取って行ったんだ？」

とにかくフライパンがないと料理がかなり制限されるのでフランスも頑張って探しています。

「あんなのよ。このままじゃ煮物だけしかできねえぞ」
「それも困るしなあ」
「オムレツが食えねえじゃねえかよ」
とにかくフランスの家の台所からフライパンが全部なくなってしまったのでした。さて、一体誰が取って行ったのでしょうか。

第九百三話　　完

２００９・９・２

第九百四話　それで持っていた人は

第九百四話

それで持っていた人は

とにかくフライパンがなくて困ったフランスですが次の日スウジクチームとふとしたことから喧嘩しそうになると。それが何故かよくわかることになったのでした。

「な、何で御前等がそれ持ってるんだ!?」

「決まってるでしょ、あんたの家から借りたのよ」

スウジクチームには当然ハンガリーもいます。彼女がチームを代表してそのうえでそのフライパンを剣のようにしてフランスに突きつけています。

「何か台湾ちゃんが今日あんたと揉める気がしたっていうから」

「糞っ、何でそんなことがわかるんだよ」

女の子の勘ということでしょうか。それともでかくて個性が強くておまけに抜けたところの多い面々に囲まれて苦労しているからでしょうか。台湾の直感はかなりのようです。

「ニュータイプよりすげえじゃねえかよ」

「それで拝借したけれど正解だったみたいね」

「ちっ、こっちは一人かよ」

イギリスはまた生徒会長の尻拭いをしています。後の三人は適当にやっています。それで今ここにいるのは彼だけなのです。それに対して向こうは五人揃っています。おまけにプロイセンまでいます。流石にオーストリアさんはフライパンを持っていません。

「おまけに武器まで持っていやがるしよ。何だってんだよ」

「それでどうするの？やるのやらないの？」

「とりあえずフライパン返せ」

ハンガリーの言葉に対してまずはこう言うのでした。

「そうしたらこっちが引くからよ。このままじゃ料理できねえだろ

うがよ」
「それじゃあ私達の勝ちでいいのね」
「ああ。勝手にそう思っておいてくれ」
渋々ながら戦わずして負けを認めるフランスでした。本当に彼にとっては踏んだり蹴ったりの事態でした。

第九百四話　　完

２００９・９・２

第九百五話　俺の家だし　☆

第九百五話　俺の家だし　☆

今日もリトアニアはポーランドの家で遊んでいます。本当にいつもこの二人は一緒です。この日はチェスをして遊んでいます。

「ポーランドは攻めるのに重点置き過ぎるから駄目なんだよ」

チェスはリトアニアが勝っています。それもかなり優勢です。

「さて、追い詰められたけれどどうするの？」

「えっ、マジ有り得んからーーーー！」

もう後がないというところでやっとこんなことを言い出しています。

「こんなんすぐ逃げられるしマジでーーー！」

「こういう頭脳戦だったら絶対負けないんだからね」

流石にこういう勝負になるとリトアニアは強い。この二人ではポーランドが攻撃担当、リーダーでリトアニアが防御担当、参謀のようです。

「こうなったら切り札だしーーー！」

「切り札って？」

「ポーランドルール発動！」

ポーランドはいきなり訳のわからないことを言ってきました。

「ずっと俺のターン！」

「えっ、何それ！？」

リトアニアが驚いている間にも勝手なことをしていきます。何とチェスの駒を自分で動かして瞬く間に勝っていくのでした。

「その自分ルール、ちょっと！」

言っている側からリトアニアが負けていきます。

「これもうチェスじゃないよ！ただの駒同士の喧嘩だよ！」

「俺の勝ち！」

気付いたらもうリトアニアの負けでした。本当にあっという間でした。
「ってかリトの顔が面白いんだけどーーー」
「もーーー、ポーランドはいつもこうなんだから・・・・・」
あまりにも納得のいかない負け方にぐったりとなるリトアニアでした。本当に実にポーランドらしいです。それがいいか悪いかは別としまして。

第九百五話　　完

２００９・９・３

第九百六話　勝ったんだぜ

第九百六話　勝ったんだぜ

ポーランドもかなり我が儘というかリトアニアを振り回していますが太平洋には彼以上にゴーイングマイウェイな人がいます。言わずと知れたこの人です。

「俺はあの時日本に勝ったんだぜ！」

「だからあんたあの時日本さんと一緒にいたでしょ」

早速台湾に突っ込みを入れられている韓国、この人はもっと凄いです。

「あの時俺は連合側にいてちゃんと戦っていたんだぜ」

「じゃあ何で日本さんの上司の人達の中にあんたの上司の人もいたのよ」

この揺るぎない事実が今台湾によって突っ込まれます。これは皆知っていることなのですが韓国は何故かその事実が頭の中に全く入らないのです。

「上司の上司の人の家族にもいたじゃない。何でそれで連合側にいるって言えるのよ」

「いたのは気のせいなんだぜ」

強引というのもおこがましい言葉でした。

「俺はあの時ちゃんと連合側にいて証拠もあるんだぜ」

「そんなの何処にもないじゃない」

実はありません。これも皆知っていることです。

「それにとにかく日本には何でも絶対に負けないんだぜ。今度野球やる時も絶対に勝つんだぜ」

「はいはい、五回もやったわよね」

台湾は前のＷＢＣのことも突っ込みます。

「全く。日本さんも災難よ、こんな訳のわからないのと五回もって」

「何だ?台湾妬いてるんだぜ?」
今度は韓国がぶつくさ言う台湾に対して突っ込みを入れました。
「悔しかったら俺みたいになるんだぜ。そうしたら日本も御前をライバルだと思うんだぜ」
「日本さんあんたのこと何も思っていないしそもそも私は」
日本のことをふと脳裏に思い浮かべてそれから言うのでした。
「ライバルじゃなくて他の関係になりたいんだから」
「それって何だぜ?ライバルじゃなくて他の関係?」
「あんたには関係のないことよ」
きつい顔で言い返します。とにかく我が道を行き他のことには一切目が向かない韓国なのでした。

第九百六話　　完

２００９・９・３

第九百七話　女装も好きです

第九百七話　女装も好きです

とにかく困ったちゃんなポーランドですが彼には一つ変わった癖があります。それが何かといいますと。

「どーーよ、これ」

「どーーよ、ってまたやったの」

リトアニアは今のポーランドの格好を見てもまったく動じていません。学校の女の子の制服を着ているのです。当然下はスカートで髪型もそうしたふうにしています。

「女装。何か思い出したようにしてない？」

「俺女装結構好きだしーーーー」

「好きとかそういうのじゃなくて何で女装するの？」

リトアニアはそもそもそのことが不思議で仕方ありませんでした。

「俺の方がおかんだって言われること多いのに」

「じゃ俺娘？」

「そんなわけないじゃない」

今のポーランドの言葉はすぐに否定しました。

「何でそうなるんだよ。俺がお母さんだったらポーランドはお父さんじゃない」

「けど誰も子供いないんじゃね？それってどーーよ」

「だから。夫婦でもないし」

そもそも男同士です。それで夫婦というのもかなりあれです。

「全く。その女装せめてスカートの下に何かはいたら？」

「そっか？俺結構平気だしーーーー」

「風邪ひくよ、素足だと」

リトアニアが心配しているのはこのことなのでした。

「だからスパッツかタイツかはいてね」

「ちぇっ、リト心配性過ぎるし」

けれど何だかんだでリトアニアの言うことは聞くポーランドでした。こうしたところが本当にお母さん、お嫁さんなリトアニアでした。

第九百七話　　完

２００９・９・４

第九百八話　女装も凄いです

第九百八話　女装も凄いです

ポーランドは女装が好きです。けれど太平洋にはまさにナンバーワンの女装の達人がいます。それが誰かといいますと。

「うわ、何時見ても凄いね」

「全くあるぞ」

アメリカも中国も驚くその人、何と日本です。日本は自分の国の女の人の着物を着て白粉を塗って完璧に女性になりきっています。そうしていつも舞台に立つのです。

歌舞伎で女形を演じているのですがその衣装もお芝居も踊りも見事なものです。とりわけ藤娘や揚巻、清姫、雪姫やそういった役は絶品です。もう見ているだけで惚れ惚れとします。

それでお化粧を取ったらいつもの日本に戻ります。その踊りも普段の武道の足捌きに戻ってしまいます。

「本当に日本さんって凄いです」

いつも傍にいる台湾もそんな日本を見て驚くばかりです。

「あんなに奇麗な女の人にもなれるなんて。私よりもずっと奇麗じゃないですか」

「そうでしょうか。私は自分ではまだまだだと思っていますが」

「いえ、本当ですよ」

台湾からしてみたらそれは謙遜でしかない言葉でした。

「そんなに奇麗で。私にも女形やらせて下さい」

「ですが台湾さんは女性の方ですが」

日本は見事なまでの突っ込みを入れました。

「それで女形というのは」

「あっ」

そして言われてそのことに自分でも気付く台湾でした。

「そうですよね。それはちょっと、ですよね」
「普通にお化粧をされてそうなってもいいと思いますが」
「そうですね。それじゃあ日本さんを参考にさせてもらいます」
こうしてまた一つあるものに目覚めた台湾なのでした。本当にこの人は日本が大好きです。日本は気付いてはいないのですけれど。

第九百八話　　完

２００９・９・４

第九百九話　かつてのイギリスは

第九百九話　かつてのイギリスは

今でこそ子供達のヒーローの一人になれているイギリスですが昔は長い間友達というものが一人もいませんでした。見事なまでにいなかったのです。

「今は一応いつも五人いるからましか」

「御前誰なんだぜ？」

「手前には聞いてねえから安心してキムチうどん食ってろ」

いきなりいつもの如くイギリスの顔を見て尋ねてきた韓国に対してあっさりと返します。ついでにかなりうんざりした顔になっていますが。

「大体手前は何時まで生徒会長やってんだ。日本ばかり言葉に出して俺やフランスは殆ど眼中にねえようだけれどな」

「俺は日本にさえ勝てればそれでいいんだぜ」

「だからわかったからキムチうどん食ってろ」

実は生徒会には今彼と韓国しかいません。まことに孤独な状況であります。それでも今はイギリスは孤独感を味わってはいません。

「もうすぐしたらフランスも戻って来るからな。それにな」

「ああ、フランスさんこちらでしたか」

ここで日本が生徒会室に入って来たのでした。

「ちょっと来て欲しいのですが」

「ああ、どうしたんだ？」

「新聞部のインタヴューを受けて欲しくて。生徒会のお仕事も手伝わせてもらいますよ」

「いや、生徒会の仕事はいいけれどな」

それについてはいいというイギリスでした。

「それでもインタヴューか。ちょっと待っていてくれよ」

「はい、わかりました」
（今ではこいつもいてくれるしな）
心の中でこんなことも言うイギリスでした。
（寂しくないからな）
「次はこの仕事をやるんだぜ」
「・・・・・たまには自分で仕事をやれよ、こら」
考えている傍から生徒会長に山の如き仕事を押し付けられてむっとした顔にはなります。けれど今は寂しくないイギリスなのでした。

第九百九話　　完

２００９・９・５

第九百十話　家に帰っても誰かが

第九百十話　家に帰っても誰かが

「お兄様お帰りなさいませ」

「ああ、先に帰ってたんだな」

生徒会の仕事と新聞部のインタヴューを終えてお家に帰ってみるともう妹が先に帰っていました。彼女は私服着替えてリビングでお茶を飲んでいます。

「俺がいない間に何かあったか？」

「特にありませんでしたわ。ただ」

「ただ。何かあったのか？」

「シーランド君が来ていますけれど」

「あっ、イギリスの野郎じゃないですか！」

そのシーランドは何とイギリス妹の前に座っています。そうして彼女が淹れたお茶を飲んでいました。

「何でここに来たのですか！」

「ここに来たも何も俺の家だろうが」

イギリスは条件反射的にシーランドに対して突っ込みを入れました。

「大体御前が何でここにいるんだ？俺から独立したって言ってたんじゃねえのかよ」

「私が御呼びしました」

ここでイギリス妹がお兄さんに話すのでした。

「それでここに」

「何で呼んだんだよ」

「同じ学校の人を御呼びして悪いのですか？」

これがイギリス妹の返事でした。

「別に不都合はないと思いますが」

「御前はよくても俺にはあるんだけれどな」
一応こうは返します。ところが。
「まあいい。御前がそれでいいっていうんでしたらな」
「はい。それでは後で晩御飯を作りますので」
「いい加減美味しい料理作るですよイギリスの野郎」
「御前に言われたかねえよ」
何だかんだで今は多くの人がいつも傍にいてくれているイギリスでした。少なくとも寂しくはないようで何よりであります。

第九百十話　　完

２００９・９・５

第九百十一話　まずはドイツ　☆

第九百十一話　まずはドイツ　☆

今までは一人でやっていけたのですがいい加減寂しくなって誰か友達が欲しくなってきた時期のイギリスのお話です。とにかく友達が欲しいのでめぼしい人に対して声をかけてみることにしました。

最初に声をかけたのはドイツです。この頃ドイツはプロイセンと一緒の家族になってまさに飛ぶ鳥を落とす勢いでした。そのドイツのお家の前に来たのです。

お花を持ってドイツを待つイギリス、かなりドキドキしています。

「さて、どうなるかな」

扉の前で今にも心臓が飛び出そうな顔になっています。

「ドイツと何て話したらいいのかわからねえな」

そんなことを考えていますとそのドイツが出て来ました。

「んっ、何だ朝っぱらから」

「で、出たっ！」

そのドイツを見て思わず叫んでしまったイギリスでした。

「お、おいドイツ」

イギリスはドイツに対して花束を差し出しながら言うのでした。

「御前と友達になってもやってもいいぞ！」

花束を差し出すその手が震えています。けれどその花束を見てドイツは言うのでした。

「結構だ」

こう言って扉を閉めてしまいました。これでドイツとのお話は消えてしまったのでした。

「くそっ、何で駄目なんだ」

イギリスは唖然としています。けれど扉の向こうではそのドイツがプロイセンと共に話をしていました。

「相棒、あいつと組むなよ。組んだら自然とロシアとやり合うことになるからな」
「あいつとロシアは今犬猿の仲だからな。相手にしないのが吉だな」
「そういうことだ。いらん厄介ごとは避けないとな」
「その通りだな」
こうした事情があったのでした。けれどこれはイギリスにとっては気付かないことなのでした。

第九百十一話　　完

２００９・９・６

第九百十二話　孤立は嘘の人

第九百十二話　孤立は嘘の人

日本は何かと家のマスコミの人達から孤立していると言われます。けれど日本自身はこの人達の言うことを全く信じていなかったりします。

「今では仮面ライダーの人達も騙されなくなっています」

「えっ、あの人達もなんですか」

話を聞く台湾もこのことに驚きです。何しろ仮面ライダーといえばすぐに騙されて話を大袈裟にしてしまうのがいつものことなのですから。

「何しろ珊瑚礁に自分で文字を入れてそれを他人のせいにしたり猥褻なデマコーグを外に流しても一向に反省しない人達なのですから」

「そんな人達私の家だけじゃなくて他の国だったらすぐに報道資格剥奪ですよ」

「他にもマクドナルドの店員じゃない人をそうだということにして内部告発させましたし」

「詐欺師そのものですね」

話を聞いて呆れるばかりの台湾でした。幾ら何でもここまで悪質な人達がいるとは夢にも思わなかったのです。

「そんな人達だったんですか」

「はい。もう私の国でも信じている人はいません」

これが現実でした。

「ですから私もあの人達は信じていません」

「嘘がばれた詐欺師なんて誰も信じませんよね」

これが現実です。信じる方がおかしいです。

そして実際に日本が孤立しているかといいますと。今日はアメリカ、明日は中国、次の日はタイに行ってそこからベトナム、一日休

んでそれからオーストラリアと。まさに引っ張りだこです。
おまけにいつも傍には台湾がいておまけにもう一人。
「日本、ラーメン作ったから食わせてやるんだぜ！」
この人もいます。果たしてこれで孤立しているのでしょうか。ガイエスブルグな小説家さんかマスコミでもない限りそうは見えません。まさにこれぞ嘘も百回言えば何とやらですがもう日本もお家の人達も騙されないのでした。

第九百十二話　　完

２００９・９・６

第九百十三話　それで最後に行き着いたのは　☆

第九百十三話　それで最後に行き着いたのは　☆

「今一番くたばって欲しいのは何つってもロシアだしな」

ドイツにお友達になってもらうことを断られたイギリスはそれからもあれこれと考えていました。

「フランスの野郎は論外だし北欧とかの連中はなったとしてもお互い何もねえしな。オランダやベルギーも何かドイツやフランスとかえって揉めそうだし」

本当に友達になってくれそうな人が少ない人です。

「オーストリアやイタリアはドイツと一緒で友達になってくれそうにねえな。スイスはそもそも絶望的だ」

消去法で欧州の国がどんどん消えて残った国は。

「日本はどうかな。けれどあいつもな」

日本といえばこの時イギリスが持っていたイメージはとにかくわからない奴でした。今もそう思われていることが多い人ですけれど。

「確かにあいつはたった数十年ですげえ強くなったけれど西と東じゃ考えが違うだろうから受け入れてもらえるかな」

そんなことを考えながらまたしても花束を持って日本のお家の前に立っています。

「断られて世界中の笑いものになったら嫌だな、やっぱり」

とか考えていたら急に家の扉が開いて出て来たのは。

「うわあああああああっ、日本かよ！」

「はい、そうですけれど」

「いきなり何の用だ！何で出て来やがったんだ！」

「うちの前に立っていたものですから」

「あっそうか。ここ御前の家だったな」

今そのことを言うイギリスでした。

「ま、まあそうなんだけれどな」
「それで何の御用件ですか？」
「ちょっと御前と話がしたいんだけれどな」
こうしてイギリスと日本は二人でお話をすることになりました。
二人のお付き合いはこの時から深くなっていくのであります。

第九百十三話　　完

２００９・９・７

第九百十四話　今のイギリスは

第九百十四話　　今のイギリスは

本当にお友達を作ることに苦労したイギリスですが今は生徒会で苦労しています。もっとも実質的に苦労しているのはこの人とフランスだけだったりします。

今日も生徒会のデスクワークを二人机を並べてうんざりとした顔でしています。その中でふとフランスに対して言うのでありました。

「確か太平洋の連中って学園の生徒数の半分はいたよな」

「中国だけじゃなくてアメリカや日本もいるんだぞ。韓国の家の連中だって数結構いるだろ」

「だよな。それで何であいつ等の仕事は十分の一もねえんだ？」

このことが不満で仕方のないイギリスです。それも当然ですが。

「何か生徒会長が代わって仕事が十倍になったんだけれどよ」

「言って話が解決しねえからな。生徒会長が代わるまでな」

「ちっ、やっぱり生徒会の役員増やそうぜ。御前サミットのメンバーの追加提案してるしそれと抱き合わせでいいだろ」

「日本とかドイツも入れてかよ」

「そうだよ。増やせよ」

このこともずっと話されていたりします。

「四人位よ。サミットは六人だろ？」

「けれどそれやったら韓国が絶対にどっちにも入れろって五月蝿いけれどいいのか？」

「生徒会長だけで我慢しろって言えばいいだろ？」

「それで話がわかる奴だったら何の苦労もいらねえだろうがよ」

「くそっ、何であんな奴が出て来たんだよ」

イギリスはつい最近まで韓国のことを知りませんでした。気付いたら太平洋の方に背も態度もでかい若手がいたのです。本当に気付

いたらだったのです。
「生徒会長にまでなったしよ」
「まあ愚痴っても仕方ねえから仕事していこうぜ」
「ああ、わかったよ」
今は何だかんだで宿敵フランスといつも一緒だったりします。仲が悪いのですがこの人といつも一緒にいるようになっています。

第九百十四話　　完

２００９・９・７

第九百十五話　会って話をしてみると　☆

第九百十五話　会って話をしてみると　☆

「実はですね」
「あれっ、御前もそうだったのかよ」
「はい、私も探していたのです」
日本はこうイギリスに話すのでした。実のところ日本も迫り来るロシアの脅威に対抗する為にお友達が欲しかったのです。それで丁度いい頃にイギリスが日本のお家にやって来たというわけだったのです。
「ですが私で本当にいいのですか？」
「御前でいいって？何でだよ」
「いえ、ですから私の様な東の小さな島国とお友達になっても」
「いいんだよ、御前で」
けれどイギリスはこう日本に対して話すのでした。
「御前の方こそ俺でいいんだよな」
「いえ、イギリスさんとお友達になれるなんて」
日本はイギリスにこう言われてかなり謙遜していました。
「まさか。そんな」
「いいんだよ、それにしてもこの饅頭か。外が白くて中が黒いやつ」
「はい、それがお饅頭ですが」
「いいな、これ」
二人でこんな話をするようになりました。けれどそれをそっと物陰から覗いた日本の上司は困っていました。
「まずいな、あいつイギリスと友達になるつもりじゃないだろうな」
この人はそのことをあまりよくは思っていませんでした。
「ロシアと友達になって欲しいのにな」
この人はこの人で考えがあってそう願っていたのでした。ロシア

と揉めたら大変なことになることがわかっていたからです。二人の交流はいきなり暗礁に乗り上げようとしていました。

第九百十五話　　完

２００９・９・８

第九百十六話　ロシアと他の国の関係

第九百十六話　ロシアと他の国の関係

「ロシアさんとあの御三方ですか？」

「私は他人の関係にはあまり立ち入らないようにしているから」

タイとベトナムはいつもこう言って関わらないようにしています。ロシアと日本、アメリカ、中国の三国は今もロシアとあまりいい関係ではありません。

「時々名指しで言い合うこともありますし」

「あくまで国と国のことだから」

何だかんだと理由をつけて入ろうとしません。何があっても不思議ではないからです。それだけロシアと三国の関係はよくはないのです。

「ロシアさんとですか？できれば仲良くしたいですね」

「何言ってるんだよ、昨日もロシアと楽しく話したよ」

「隣同士だから関係は深いあるぞ」

一応彼等はこう言います。けれどその間にあるものはといいますと。

「見えますよね、あの険悪なオーラ」

「下手したら戦争になりかねない時も結構あったし」

言葉には出さなくてもオーラでわかるのです。三国とロシアの間には実に剣呑なオーラが漂っています。

「しかもロシアさんってあの人達を前にしても平気ですし」

「しかも同時にだから」

今丁度三国とロシアが向かい合っています。誰も顔にこそ出していません。けれどオーラは物凄いです。よく見たら日本は密かにその刀の柄に手をやっています。

「ただすぐにお互い別れてくれますから」

「見ているだけでいいわ。けれど間に入ったら大変なことになるから」

その場合どうなるかは誰もがわかることでした。どちらも殺気全開の中に入ってしまえばもうそれだけで。

こんな三国とロシアの関係なのでした。日本がどうしてイギリスと仲良くなりたかったのか、非常によくわかるのでした。今もこうなのですから。

第九百十六話　　完

２００９・９・８

第九百十七話　その夜に早速　☆

第九百十七話　その夜に早速　☆

日本と色々お話できて上機嫌になれたイギリスでした。やっぱり友達がいないせいでしょうか。他の人とお話できたことがとても嬉しいようです。自分の家に帰って絵が一杯飾られている豪奢な部屋で休んでいてもにこにおとしています。

「今日は日本と少しいい感じになれたみたいだな」

こう呟いて満足しています。ところがここで家の人がやって来てそのうえで言うのでした。

「大変ですイギリスさん！」

「何だ？どうしたんだ？」

「日本の上司がロシアを訪問したそうです！」

「何っ！？」

それを聞いて思わず席を立ったイギリス、すぐにその人に対して尋ねます。

「ロシアとか！？」

「何でも日本とロシアを仲良くさせようとしているのではないかと。そうした分析が出ていますが」

「そうか、下手にロシアと揉めるよりはってことかよ」

イギリスはその辺りはすぐに察しがいきました。それ以外には考えられません。だからです。

「そして日本は日露協商を結んで我が国とは敵対する可能性がありますが」

「・・・・・そうか」

それを聞いてイギリスはまずは肩を落としました。そのうえで言うのでした。

「そうなったとしても大丈夫だ」

「大丈夫なのですか？」
「別に一人は慣れてるからな！」
こう言います。
「別によ！それでな！」
「だといいのですが」
果たしてイギリスはどうなるのか。このまま友達がいないままでしょうか。その辺りはまだよくわかりませんでした。とりあえずピンチなのは確かです。

第九百十七話　　完

２００９・９・９

第九百十八話　友達が少なくても

第九百十八話　友達が少なくても

友達がいなかったことで有名なイギリスですがロシアも負けてはいません。長い間友達といえばフランスとあとはオーストリアさん位でした。二人位でしたがあまり寂しいとも思っていなかったのです。

「家に帰ると人が一杯いるしね」

「そうですよね。確かに」

そのロシアの隣にいるリトアニアが暗い顔で応えます。

「俺だっていますしエストニアも」

「ラトビアもいるじゃない」

「ええ。確かに」

この三人の他にウクライナやベラルーシもです。家の構成員はかなり多いのです。けれど殆どの人があまり幸せそうな顔をしていませんが。

「それでロシアさん」

「どうしたの？」

「アメリカさんと中国さんが今日もそれぞれのお家の人達と一緒に言ってきていますけれど」

「じゃあ二人のお家の前に皆集めて」

実にさりげなく言います。

「棒とか持ってね。冬将軍さんにも出てもらってね」

「それやったら大変なことになりますけれど」

「大丈夫だよ」

けれどロシアは平気な顔で言うのでした。

「戦争になっても冬将軍さんがいるからね」

「はあ。本当にやるんですか」

「いざとなったらしないと。リトアニア達も来てくれるよね」
「・・・・・・はい」
行かなかったらシベリア旅行に回されます。それを考えますと行かなくてはなりません。本当にロシアの家にいるとある意味においてとても楽しいです。空気はいつも寒いですが。

第九百十八話　　完

２００９・９・９

第九百十九話　幾万の星の下で　☆

第九百十九話　幾万の星の下で　☆

かくしてまたしても一人になることを覚悟したイギリス、今は何故か一人で荒野にいます。そこで星を見ながらお茶を飲んで勝手に黄昏ています。

「あーー、星が鬱陶しいぜ」

「イギリスさん」

誰かの声がしますが聞こえていません。

「いいさ。何時だって一人でやってきたんだ。これからもな」

「イギリスさん」

ここで日本が出て来ました。そのうえで彼に声をかけてきました。

「よかった、ここにいらしたんですね」

「日本！？」

イギリスも日本が出て来てびっくりです。

「夜分遅くにすいません」

「何で御前が！？確かロシアと」

そしてさらに日本に対して言うのでした。

「別れの挨拶なんか聞きたくないからな！」

「そうじゃないんですよ。あれは上司が勝手に言ったことで」

「えっ、そうだったのか！？」

どうやらそのようです。上司と日本の考えが違っていたようです。

「私もいきなりのことでびっくりしまして」

「そうだったのか。何てこった」

「それで急いでイギリスさんのところに来たわけなんです」

そういうことだったのでした。日本もロシアとお友達にはなりたくなかったようです。それよりもイギリスと、というわけなのでした。

「私は是非共イギリスさんとお友達になりたいのです」
「日本、それは本当か！？」
「はい」
「そ、そうか」
イギリスは呆然としてその話を聞いています。その彼に対してイギリスは言いました。
「それは俺もだ」
「イギリスさん・・・・・・」
「御前がその気なら今からでも友達になろう」
しかしイギリスはここで見事にイギリスたる由縁を発揮するのでした。
「だが勘違いするなよ！俺の為だからな！」
こんなことを日本に対して言い出したのです。
「御前の為なんかじゃないんだからな！」
（これまた随分と露骨な人ですね）
日本はその言葉を聞いて心の中で思いました。こうしてイギリスは日本にとってかなりいい条件でお友達となったのでした。

第九百十九話　　完

２００９・９・１０

第九百二十話　この時からいました

第九百二十話　この時からいました

「あの時日本さんはかなり悩んでいたんですよ」

台湾が日本とイギリスがお友達になった時のことを思い出して皆に話しています。

「もう本当に。けれど物凄い勢いで家を出られて」

「そんなことがあったんですか」

「大変だったのね」

「はい。丁度韓国でロシアさんと睨み合っていまして」

お話をしている対象はタイとベトナムです。その二人と話をしているのでした。

「負けるとしか思えない戦争をする為に。それでやっと勝てたんですから」

「あの戦争で日本さんが負けていたら今の台湾さんもなかったのですね」

「当然日本さんも」

「そうです。けれどイギリスさんがお友達になってくれて」

台湾はその時のことを思い出しながら二人に話すのでした。

「日本さんに協力してくれたこともあって。日本さんも必死に戦われて」

「あの時の日本さんは確かに凄かったですね」

「まさか勝てるなんて思わなかったわ」

二人もその時の日本の戦いは見ていました。鬼気迫ると言ってもいい迫力でロシアと戦いそのうえで掴んだ勝利だったのです。

「僕達も励まされましたし」

「誰でもやればできるって」

「はい。私もそれを見て思ったんです」

台湾はここでその手を拳にしました。
「やれるんだって。今では日本さんのお家にはいないですけれど」
今は独立しています。けれど日本のお家に一緒にいた時のことはずっと覚えているのです。忘れられるものではありません。
「あの時の日本さんみたいに頑張っていきます」
「そうですね。僕も」
「やっていくわ。いざっていう時は」
その時から日本のお家にいて日本を見ていた台湾なのです。その記憶は今も彼女の中にはっきりと残っているのです。

第九百二十話　　完

２００９・９・１０

第九百二十一話　とばっちりを受けた人　☆

第九百二十一話　とばっちりを受けた人　☆

日本とイギリスは晴れて友人関係となりました。このことには誰もが驚きましたがそのことについてイギリスはお家の人に対して話すのでした。

「日本さんと友人になられたんですか」

「ああ、そうさ」

にこにことしながらお家の人に対して答えています。

「一応利用してやろうかと思ってな」

「そうなんですか」

それがただの裏返しの言葉であることはあまりにもはっきりしていますのでお家の人ももう突っ込みません。しかもイギリスはここでこう言うのでした。

「よし、それじゃあな」

「はい。どうされますか？」

「フランスの港を閉鎖しろ」

イギリスとフランスは元々仲が悪いのですがそのフランスが日本の不倶戴天の敵ロシアとお友達だからです。そうするというのです。

「そしてロシアへのうちの家の炭の輸出停止だ」

「ロシアにもですか」

「あと日本に有利な情報を世界に出来るだけ早く流せ、そして外交でも日本有利に工作だ」

「そこまでされるんですか！？」

お家の人もびっくりでした。やたらと日本の為に動いています。

しかもそれはさらに続き。

「ロシアに不利な情報も一緒に流せ。止めにフランスはドイツ、オーストリア、イタリアの三国と睨み合わせるんだ、あいつ一人でな」

「わかりました。しかしそこまで日本さんの為に」
「いいんだよ、日本はそこまでしてやらないと勝てないからな」
またこんなことを言いはします。ですがやけに日本の為に動き回るイギリスでした。
しかしこれで被害を被った人はどうかといいますと。
「もうイギリスの野郎だーーーい嫌い・・・・・・」
フランスが項垂れた顔で呟きます。彼にとってはとんだとばっちりでした。

第九百二十一話　　完

２００９・９・１１

第九百二十二話　今の友人関係

第九百二十二話　今の友人関係

イギリスは日本の為にあれこれ動き回ってそのうえで彼を勝たせました。そしてその日本ですがこの人はどうかといいますと。

ロシアとの派手な戦争の後で韓国がお家に来たのですが彼への対応は上司の肝煎りもありかなりのものでした。このことはあまりにも有名になっています。それは台湾に対しても同じであったので今の二人を作った基と言っても過言ではありません。

今も同じで世界中にお友達がいるのですがそのお友達に対して実に気前よく何もかもをあげたり手助けをしたりしています。その世話焼きぶりもかなり有名です。

「日本にはいつも助けてもらってるんだよね」

「気付くとそこに必要なものを置いてくれているある」

アメリカにしろ中国にしろいつもフォローしてもらっているのです。そうした気配りを常に欠かさないのです。

太平洋の国は何処もこうして日本に縁の下から支えてもらっています。ところが日本自身がフォローしながら気付かない国もあったりします。それぞれの意味で。

「俺は何でも自分でやれるんだぜ！日本の手助けなんていらないんだぜ」

「はて。カナダさん？何処の方でしょうか」

韓国とその日本がそれぞれ言います。

「俺みたいな凄い奴は日本なんかいなくても全然平気なんだぜ」

「カナダさんへ送った大量の車の資料があるのですけれど」

「あの、韓国の奴はともかくとして何で日本さんが気付かれないんですか？」

台湾もそんな日本に対して今回ばかりは呆れています。

「私もカナダさんなんて人は知らないですけれど」
「最近歳のせいか今一つ覚えていなくて」
「けれど車送ったのに気付かれないんですか？」
「ええ。何処のどなたなのでしょうか」
こんなこともあったりします。けれどそれでも日本のフォロアーぶりが見事であるのは変わりません。台湾もそんな日本にいつも助けてもらっていたりしています。それであえて強くは言わないのでした。

第九百二十二話　　完

２００９・９・１１

第九百二十三話　実はストレスなのかも　☆

第九百二十三話　実はストレスなのかも　☆

晴れて何とかロシアに勝つことができた日本ですがその後もイギリスと友達同士でありました。そんな中で日本はイギリスに対して言うのでした。

「やはり私のこれからの時代のことを考えますと」

「あ。どうしたんだ？」

「英語も覚えるべきですかね」

真面目で心の細かい日本はこうも考えていたのです。

「どうでしょうか、その辺りは」

「ああ、御前がそのつもりならな」

イギリスは日本のその言葉を受けて言いました。

「俺が教えてやってもいいぞ。俺の国の言葉だからな」

「そうですか。それでは御願いできますか？」

「ああ。まずは簡単なのからな」

こう言ってから言った言葉は。

「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｐｅｎ．　何となくわかるか？」

「ええと」

「俺は生まれてから一度も言ったことなかったりするけれどな」

「つまりイズは『は』みたいなものでしょうか」

「大体そんな感じかな」

「そうですか。それでは」

こんな感じで勉強していて日本はすぐに文章にしてみました。この辺りの適応の速さが流石です。

「こんな風に使えばいいのでしょうか」

「えっ、御前もう文章を何個か作ったのかよ」

その適応の速さにイギリスもびっくりです。それで覗いてみます

と。

アメリカ　ｉｓ　すっとこどっこい
アメリカ　ｉｓ　おたんこなす

こんな言葉が並んでいます。それを見たイギリスが日本に対して尋ねます。

「何か不満でも溜まってるのか」
「ありませんよ、そんなもの」
「本当か？」

この辺りは信じられないイギリスでした。とにかく文章まで作れるようになった日本でした。

第九百二十三話　　完

２００９・９・１２

第九百二十四話　とにかく適応が凄いです

第九百二十四話　とにかく適応が凄いです

イギリスに英語を教えてもらった日本ですがそれより前には中国に漢字を教えてもらいそれもすぐに身に着けています。アメリカの文化にしろすぐに身に着けてしまいます。何かと適応能力は物凄いものがあります。

「凄いよね、いつも」

「そうでしょうか」

イタリアに言われていますが今一つ実感がないようです。

「私は別に」

「俺なんかさ、ドイツに今だに合わせられないんだよ」

イタリアはここで自分のことを話すのでした。確かに彼はドイツに合わせられていません。もっと言えば合わそうという気もなかったりします。

「それなのに日本はドイツとも合わせられてるじゃない」

「そうでしょうか」

「確かに合わせてくれているな」

そのドイツも言います。

「俺としても日本が合わせてくれているから非常に有り難い」

「はあ。それならいいのですが」

「おかげで俺も楽になっているところがある。何しろだ」

ここでイタリアを見るドイツでした。日本を見る目とは微妙以上に違っています。

「こいつときたら完全にマイペースだからな」

「何かドイツと俺って全く波長が違うし」

自分ではこう言うイタリアでした。

「だから苦労するんだよ。何していいかわからないし」

「少なくとも敵が来たらすぐに白旗を出すのは止めろ」
ドイツはイタリアに対して告げます。
「それと逃げ出すのもだ。いいな」
「ちぇっ、ドイツは厳しいなあ」
何だかんだでイタリアにはかなり甘いのですがそれでも。一向にドイツに合わせられないイタリアなのでした。

第九百二十四話　　完

２００９・９・１２

第九百二十五話　矢追さん　☆

百二十五話　矢追さん　☆　第九

あれはもうかなり昔と言っていいでしょうか。少なくとも今このことを本当だと断言できる人はあまり残っていないようです。

アメリカのある農場主が自分の農場でとんでもないものを見つけたのです。アメリカはそれを聞いて早速その農場があるロズウェルに来ました。

するとその農場主の人が早速彼にあるものを手渡してきました。

「それがこの落ちていた変な金属なんですけれど」

「見た目は普通の鉄板のようだが？」

アメリカはそれを見てまずはそう思いました。

「別に何もおかしなところが」

「いや、これがですね」

ここで農場主はアメリカに見せてみるのでした。それは。

「こうやって切ってもぐしゃぐしゃにしても」

実際にアメリカの目の前でナイフで切ったりぐしゃぐしゃにしてみたりします。ところがこの金属はすぐに元通りになってしまうのです。

「こうなっちゃうんですよ」

「す、凄いじゃないか！」

アメリカはそれを見て心の底から驚きます。しかもすぐ側には訳のわからないものが落ちてもいます。かなり物凄い有様です。

「しかもそれは何処に落っこちていたんだい！？」

「ああ、その円盤にですけれど」

「そうだよ、これだよ！」

アメリカはその訳のわからないものを見てさらに叫びます。

「どう見てもＵＦＯじゃないかあっ！」

驚きはそれを通り越して興奮にすらなっています。アメリカはその興奮の中で確信しました。

「これは世紀の大発見だぞ、宇宙人は本当にいたんだ！」

アメリカはすぐにこのことを上司に報告しに帰りました。まさに世紀の大発見でした。

第九百二十五話　　完

２００９・９・１３

第九百二十六話　絶対に正気じゃない

第九百二十六話　絶対に正気じゃない

「これはまさに三百人委員会の陰謀だったんだよ！」

「そう！あの地球外からの知的生命体の仕業だったんだよ！」

「ノストラダムスだ！ノストラダムスが攻めて来る！人類滅亡の序曲だ！」

「一九九九年七月だ！絶対に何かが起こる！人類滅亡だ！」

始終こんなことを喚き散らしている方が日本のお家にいます。日本のお家に数多くいる困った人達の中でも屈指の人であります。

もう二十四時間凄まじいテンションで喚いています。しかも何でもないことを人類滅亡だのノストラダムスだのと解釈できる超絶スキルの持ち主であります。日本のお家の中ではほぼ完全に隔離されてすらいます。

「あの人が何を言っても気にしないで下さい」

「何か人類滅亡とか世界がどうとか宇宙人とか言っているが何なんだあれは」

「ただの単語です」

呆れながらその人を見ているドイツに対してこう説明する日本でした。

「ですから御気になされないで下さい」

「そうか。ならいいんだがな」

「けれど日本。あの人言っていることが何か矛盾しまくってるよ」

イタリアはその人の話を聞いて冷静に突っ込みを入れました。日本のお家のお菓子を食べながら。

「何で同じ日に全く違う理由で人類が滅亡するの？その日俺達何回滅亡しないといけないんだろうね」

「それはあの人にしかわからない理屈です」

日本もこう返すしかありませんでした。
「とにかく何を言っても人類滅亡かノストラダムスに至ります。ですから全くいないと思って下さい」
「ただの騒音なんだな」
「それだけなんだね」
「はい、その通りです」
「世界は破滅するんだよ！大地震と大津波と人類総洗脳計画と携帯電話でな！」
この人は相変わらず訳のわからないことを叫んでいます。一体何を言っているのか本人ですらわかっていないかも知れませんがそれでも叫び続けるのでした。

第九百二十六話　　完

２００９・９・１３

第九百二十七話　報告しますと　☆

百二十七話　報告しますと　☆　第九

アメリカはまさに喜び勇んで上司に報告しました。けれど上司はその報告をすぐになかったことにしてしまったのです。

「僕が嘘吐きだとでもいうのか！？」

「あれはただの気球だ」

上司は強引にそういうことにしてしまおうとしています。

「この件に関しては全て忘れることだ、いいな」

「いいなっていい筈ないじゃないか。僕は確かに見たんだぞ」

「いいや、あれは気球だ」

話になりません。とにかくそれで気球ということにされてしまいました。それでも納得できないアメリカはまだ言っていました。

「絶対気球なんかじゃないぞ、あれは絶対に」

こう言って止まないアメリカですがその彼の肩を優しく叩いた人がいました。それは。

「落ち込んでいた僕を彼は優しく慰めてくれたんだぞ」

「そうだったのかよ」

イギリスはアメリカの話を聞いていました。その時にアメリカと一緒にいたのは。

「俺が僕と彼の出会いだったんだよ」

灰色の肌にやたらと大きい黄色い目をした小人でした。その奇妙な人をイギリスに紹介しています。

「どうだい？いい奴だろう？」

「そうだな、まあ」

イギリスはその明らかに人間ではない人を見てこう言うことしかできませんでした。

「御前の友達はバリエーションが豊富だな」

「ははは、友達は多くて色々いるのが一番さ」
「まあそうだけれどな」
こうとしかコメントしようがなかったのです。とにかくあまりにも壮絶な流れになっています。何しろアメリカは宇宙人と友達になっていますから。
「うちの学園の生徒じゃねえよな」
「勿論違うぞ」
果たしてこの人は何処から来たのでしょうか。それすらも一切謎であります。

第九百二十七話　　完

２００９・９・１４

第九百二十八話　そもそも太平洋といえば

第九百二十八話

そもそも太平洋といえば

「それでアメリカは鯨の他に宇宙人とも友達になりやがったんだよ」

「どっからどう突っ込んでいいのかわからねえんだが」

イギリスから話を聞いているフランスもこう返すだけでした。

「何だそりゃ。宇宙人って何なんだよ」

「俺もどう言っていいかわからなかったんだよ。俺は見ていて頭がおかしくなりそうだったぜ」

「だろうな。俺も話を聞いていて何て言ったらわからねえよ」

彼ですらこんな有様でした。とにかくアメリカが平気な顔をして付き合っている友達というのが実はとんでもない存在なのです。アメリカ自身に自覚はありませんが。

「まあ中国の上司は龍でオーストラリアも鯨と付き合えて日本の中にも結構色々な存在がいるんだよな」

「ロシアもいるぞ、そこにな」

「ああ、あいつも太平洋の連中に入っていたな」

そもそも色々な存在が一杯いるのが太平洋みたいです。宇宙人だけではないようです。

「それに韓国の野郎も太平洋だしな」

「あいつもか。無駄に人材が豊富な場所だな、おい」

「学園の生徒の四割か半分はいるからな。しかしその半分がどいつもこいつも個性派ってのは何なんだよ」

「気のせいか中国の奴いつもパンダと一緒にいねえか？」

「気のせいじゃねえよ。あいつにとっちゃパンダは絶対の存在なんだよ」

中国が一番大切にしている生き物です。このパンダに何かをすればそれだけで怒ってしまうのが中国です。学校にまでパンダを連れ

て来ている中国も凄いものです。
「だからな。もうな」
「俺達も結構以上に個性が強いって思うんだけれどな」
「あの連中はそれ以上だな」
「というかぶち抜いてるじゃねえかよ」
そのことを再認識することになりました。宇宙人だけではなかったのです。個性派ばかりの太平洋組なのであります。

第九百二十八話　　完

２００９・９・１４

第九百二十九話　ライミーは差別用語　☆

第九百二十九話　ライミーは差別用語　☆

その謎の宇宙人をアメリカから紹介してもらっているイギリス、今もアメリカと一緒に宇宙人とお話しています。

「そういえばさ。彼に質問とかあるかい？」

「質問かよ」

「そうさ。好きな食べ物とか誕生日とかな」

「そうだな」

イギリスは彼の言葉を聞いてからそのうえで述べました。

「じゃあ一個だけ」

「ああ、じゃあ言ってくれよ」

こう話をしてからそのうえで謎の宇宙人に尋ねました。その尋ねた内容とは。

「ど・・・・・何処の星から来たんだ？」

かなり引いていますし怖れてもいます。どっからどう見ても学園の関係者ではないですし地球の人でもないからです。見えるとしたらそっちの方が怖いです。

こう尋ねますと謎の宇宙人は答えました。その言葉とは。

「ホシトカイウナ！ファッキンライミー！」

いきなり差別用語で罵ってくれたのでした。

「ブチコロスゾファッキンライミー！」

「何でこの星の言葉知ってんだこいつ。そもそも何でこの星に来たんだよ」

「いやあ、よかったよ」

アメリカはイギリスのことなんて全く気にしないで宇宙人がイギリスを罵倒しているのを見て笑っています。やっぱりこの二人の仲は微妙です。

「あんなに見詰め合ってくれて。お互い気に入ってくれたんだな」
「本当にどの星から来たんだ、一体」
「ファッキンライミー、タマニハウマイモノツクレ」
アメリカは空気をわざと見ていませんし読んでいません。気のせいか謎の宇宙人がイギリスを罵倒してイギリスが困惑しきっているのを見て喜んでいるようです。

第九百二十九話　　完

２００９・９・１５

第九百三十話　この人達は大丈夫でした

第九百三十話　この人達は大丈夫でした

「それでイギリスにも紹介したけれど」

アメリカは今度は太平洋の面々に対してその謎の宇宙人を紹介します。けれど太平洋組は宇宙人を見ても全く平気な顔をしています。

「そうですか。何か私の国のテレビ番組でお姿を拝見したことがあるような気がしますが」

「それで好きな食べ物は何あるか？」

「どうでしょうか。これからお寺に行きませんか」

「アオザイ着たいのなら貸してあげるわ」

「一緒に鯨を見に行くでごわす。楽しいでごわすよ」

日本も中国もタイもベトナムもオーストラリアも至って普通に接しています。台湾は宇宙人に対してお茶を差し出してさえいます。

「熱いですから気をつけて下さいね」

「ワルイナ、ジャアモラウナ」

宇宙人は彼等に対してはイギリスに対するよりもずっと穏やかです。お茶を飲んで御馳走してもらって中々いい感じです。

「ソレデアノトキヒカリノクニノセンシガナ」

「そうですか。あの方々も出て来られたのですね」

日本は宇宙人の話している内容がわかっていました。彼の話を聞きながら頷いてさえいます。

「それは大変だったでしょう」

「オワッタコトダカライマハイイオモイデダケレドナ」

「じゃあこのラーメン食べるよろし」

「アリガトウナ」

「くそっ、何で俺にはあんな態度だったんだよ」

太平洋組とは仲良くやっている宇宙人を見て忌々しげに呟くイギ

リス。その彼に対してフランスが尋ねます。
「けれど悔しいか？」
「いや、自分でもわからねえけれど今回はそういうのはねえな」
「だろうな。正体不明だしな」
今回ばかりは悔しい思いをしていないイギリスでした。まさか宇宙人が出て来るとは思っていなかったですから。

第九百三十話　　完

２００９・９・１５

第九百三十一話　恐怖が目の前に

三十一話　恐怖が目の前に　　第九百

ロシアは一見するととても素朴な青年です。けれどロシアをただ素朴だと思っている人は学園ではほぼいません。アメリカや中国だけでなくあの日本ですらもロシアに対しては敵意を露わにさせることがあります。例えば昔韓国の上司がロシアに寄って日本を邪険にした時なんかは。

「これは本当に戦いを覚悟しなければいけませんね」

刀を手に身構えた程です。それから実際に派手な戦争をしています。そうしたことを考えますとやっぱりロシアはロシアです。とても怖いものがあります。

「日本君？そうだね」

そしてそのロシアは日本についてどう考えているかというと。まず彼の後ろにいるバルト三国が一斉に蒼ざめてそれから話がはじまります。そのお話とは。

「もう一度決着つけたいなって思ってるよ。ああ、アメリカ君も中国君も一緒でいいよ」

にこりと笑うその顔に黒いオーラが漂っています。

「三国一度でね。どちらにしろ三国とは色々とあるしね」

「だからロシアさんに日本さんのお話したら」

「いつもこうなんですよ。あの、後で大変なことになりかねませんから」

「御願いですからロシアさんの前で日本さんとアメリカさんと中国さんのお話はしないで下さい」

リトアニアもエストニアもラトビアもそんなロシアを見てガタガタ震えています。ロシアのその黒いオーラに満ちた笑顔はそのままでした。

「そうだね。今度日本君と北方領土についてお話するし。じっくりと二人になってお話してね」
「ど、どっちかが確実に死ぬかも」
「さもなければ剣呑な睨み合いか」
「大変なことになりますよ」
けれどロシアは至って平気な様子です。まるで慣れているといったような態度です。そうしてその態度でまた言うのでありました。
「さてと。じゃあ日本君は来てくれるかな」
「いいでしょう。参ります」
日本も受けて立ちました。さてさてこの会談果たしてどうなるのでしょうか。

第九百三十一話　　完

２００９・９・１６

第九百三十二話　お互い何も言わないのに

第九百三十二話　お互い何も言わないのに

日本とロシアが二人で会談する場を設けている建物を見ながらイタリアがかなり引いています。何故なら建物の中から凄まじい殺気が発せられているからです。

イタリアは引いたままでドイツに対して尋ねました。

「ねえ、あの建物の中ってまさか」

「そうだ。日本とロシアがいる」

ドイツですら容易には近寄れない雰囲気です。見れば彼もその顔に汗をかいています。

「迂闊に近寄るな。刀で斬られるか棒で殴られるぞ」

「そうだね。建物に近寄っただけで危ないのがわかるよ」

二人は見ているだけです。当然バルト三国も近寄れません。近寄ったら本当に何をされるかわかったものではないからです。

「中で何が行われてるんでしょうね」

「殺し合ったりしてませんよね、御二人共」

「否定できないからね、それも」

エストニアもラトビアもリトアニアも青い顔でその建物を見ています。やがて二人は無言で出て来ました。幸いどちらも傷も怪我もありません。争った跡もありません。ですが。

「うわ、今も物凄い殺気を出してるよ二人共」

「どうやらお互い一言も話すことはなかったみたいだな」

見れば日本とロシアは互いにその顔を背け合っています。そしてただ殺気だけをみなぎらせ合っています。ドイツはそんな二人を見て結局会談では一言も話されなかったのを悟ったのです。

「当然会談は物別れだ」

「みたいだね。けれどある意味何もなくてよかったよ」

「全くだ。あの二人が顔を合わせるとどうにもならないからな」
ドイツですらどうにもならないこの二人の関係、まさに一触即発です。二人も殺気をみなぎらせ合いますが周りはもっと緊張させられているのでした。

第九百三十二話　完

２００９・９・１６

第九百三十三話　オーストリアさんもまた　☆

第九百三十三話　オーストリアさんもまた　☆

これはドイツとオーストリアさんが同居していた時のお話です。

とにかくイタリアのことで苦労していたドイツは朝起きてもイタリアのことを思い出して少し疲れた顔をしています。それにしてもオールバックでないドイツは他の人に見えて仕方ありません。

「昨日はイタリアがまたへまをして大変だったな」

そんなことを呟きながらそのうえでまずは顔を洗いに洗面所に向かおうとしているとです。不意に前から音が聞こえてきました。

「何だ？」

見てみるとです。オーストリアさんが昨日の夜食のお皿を入れたお盆を持っています。けれどそのお皿を落として割っていました。なおオーストリアさんは今トランクスです。貴族でも誰でも下着はトランクスです。

オーストリアさんがお皿を落としたのを見たドイツは何かを言おうと思いました。けれどそれよりも前にオーストリアさんがドイツの気配に気付いて振り向いてきてこう言ってきたのでした。

「お忘れなさい！」

「・・・・・御前、髪はまだあげていないのか」

「そうです。とにかくです」

とりあえず髪型のことを突っ込むことしかできなかったドイツに対してさらに言うオーストリアさんでした。

「このことは忘れてしまうのです。いいですね」

「・・・・・わかった。あとな」

「あと。何ですか？」

「ズボンははけ。男の下着は見たくもない」

「では女の子ならいいのですか？」

「イタリアじゃあるまいしそんなことは言わない。安心しろ」
「イタリアは素直にこうした時笑って応えてくれますよ」
何かこんな話を朝からする二人でした。何はともあれ割ってしまったお皿は片付けます。そこでオーストリアさんのお手伝いをするのもまたドイツらしいです。

第九百三十三話　　完

２００９・９・１７

第九百三十四話　この人の家では

第九百三十四話　　この人の家では

　かつてドイツはオーストリアさんと一緒に住んでいましたが日本もまた台湾、そして韓国と一緒に住んでいました。その時韓国はとにかく日本の上司に可愛がられていました。

「文武両道、まずは学問をして武芸に励むことだ」

「わかったんだぜ。それじゃあやってみるんだぜ」

　上司がつきっきりで懇切丁寧に教える毎日です。台湾に対しても基本的にはそうなのでしたがやっぱり彼女の扱いは韓国のそれよりも何処か冷たくて家事も結構疲れる方をすることが多かったりしたのです。

　日本のお手伝いでお掃除やお洗濯もする毎日でした。けれどそれでも文句一つ言わないでせっせせっせと働く毎日でした。

「これは私がやっておきますので」

「いえ、いいですよ」

　お皿を洗うこともしていました。日本がしようとしたらあえて自分が出て来てするというのです。毎日毎日頑張っていました。

　そんな台湾の頑張る姿を見て日本は。いつもこう思っていました。

「台湾さんはきっと素晴らしい女性になりますよ」

「俺はもう立派な才色兼備の美男子なんだぜ」

　韓国は最初からこんなことを言っていました。この人は基本的にずっと変わらないみたいです。

「さあ、今日も上司の人に色々と教えてもらうんだぜ」

「台湾さんがもう少し成長されたら」

　日本は温かいで台湾を見ながら言うのでした。

「必ずいい国になられますね」

「日本さんとずっと一緒にいてそうして」

台湾もまたこんなことを考えていたのでした。
「世界で一番素晴らしい国になろう。二人で」
今は台湾も韓国も日本とは別々に暮らしています。けれどこんな時代も確かにあったのです。三人が一緒に日本の上司の下にいて韓国と台湾が育てられていた時代が。

第九百三十四話　　完

２００９・９・１７

第九百三十五話　俺のせいか　☆

第九百三十五話　俺のせいか　☆

オーストリアさんがお皿を割ったお話は朝御飯の後でも続いていました。今は髪もセットして奇麗に着飾ったオーストリアさんがドイツに対して言います。

「全部貴方のせいです」

「何で全責任が俺に押し付けられているんだ？」

当然ながらドイツにとっては納得できないことです。納得できる人の方がおかしいです。それでドイツはこうオーストリアさんに対して反論するのでした。

「大体御前は居候の癖に態度がでかいぞ」

「静かになさい」

確かに態度が大きいです。何か適当な流れで居候になったというのにです。

「我が国の偉人が残した言葉があります」

「偉人だと？モーツァルトか？」

「違います。この人です」

こう応えてそのうえで出してきたその偉人とは。

「不幸の中にあっても王者の生活であった。この生活の核心は高貴であった」

「いい言葉だな」

「ルートヴィヒ＝フォン＝ベートーベンの言葉です」

「ちょっと待て」

優雅に語るオーストリアさんに対してドイツが咎める顔で告げます。

「ベートーベンはドイツの音楽家の筈だが」

「違いますよ。オーストリアです」

けれどオーストリアさんはこう反論するのでした。
「この御馬鹿さんが」
「御馬鹿さんでもなくドイツだった筈だ」
それでオーストリアさんはこう主張します。どちらにしろ何か話がお皿から変わってきています。ドイツにとっては納得できない流れなのは同じでありますが。

第九百三十五話　　完

２００９・９・１８

第九百三十六話　オーストリアさんの昔

第九百三十六話

オーストリアさんの昔

昔のオーストリアさんのお家は賑やかでした。色々な人がお家の中にいたからです。

「本当にオーストリアさんにはお世話になったんだよね」

「私なんて今もよ」

イタリアとハンガリーがその昔のことを思い出して笑顔でお話をしています。

「今思うといい思い出だよ」

「オーストリアさんとずっと一緒にいて助けてもらったりしていてね」

「俺なんかも何時の間にかいたしーーーー」

そしてそれはポーランドも同じなのでした。

「リトがロシアのとこに行って困ってたけどオーストリアさんのところに入ってそれでやっていけたしーーー」

「あれからちょっと間一緒にいたしね」

「御前とも出会えたし。っていうか御前相変わらず元気で何よりっていうか」

「だよね。ポーランドも元気そうで何よりだよ」

すっかりイタリア達の同窓会になっています。皆オーストリアさんと一緒にいたのです。

「俺あれから一人で暮らせるようになったけれど今でもオーストリアさんとはお付き合いあるよ」

「私なんかもうオーストリアさんとずっと一緒よ」

今もお隣同士のハンガリーはそのことがとても嬉しいのです。かつては一緒に暮らしていたことが今でもこの人にとって有り難い財産なのですから。

「何があっても離れないわよ」
「私はそんなに人気があるのですか」
けれど本人はその自覚はないのでした。
「有り難いことですね」
「ですからまた皆で集まってパーティーしましょう」
「パスタ用意しておくよ」
「バルシュキあるしーーーー」
今もオーストリアさんの周りは一杯人が集まるようです。何はともあれ幸せに暮らしているのでした。

第九百三十四話　　完

２００９・９・１８

第九百三十七話　ベートーベンはどちらの人か　☆

第九百三十七話

ベートーベンはどちらの人か　☆

オーストリアさんからいきなり爆弾発言を受けてしまったドイツ、当然黙っている筈もなくオーストリアさんに対して速攻で講義します。

「御前はいいとこ取りするな！」

「何がいいとこ取りですか」

「そもそもあの上司押し付けた癖に！」

今になって言うことでした。あの上司とは言うまでもなく髭のあの人です。下手をしたら世界で最も怖いかも知れない人です。

オーストリアさんの髪のマリアツェルを引っ張りながら抗議します。オーストリアさんはそれを受けてすぐにドイツに対して反論します。

「マリアツェルを引っ張るのはお止めなさい」

「それは止めてやるがだ」

ドイツは引っ張るのはそれで止めました。けれど真剣な顔で言い返します。

「ベートーベンはボン生まれだろうが。だから絶対にドイツ人だ」

「いいえ、彼は偉大なるオーストリア人ですよ」

けれどオーストリアさんはあくまでこう主張するのでした。

「その根拠もあります」

「根拠？あるのか」

「はい。彼はコーヒー豆を六〇粒数えて飲んでいました」

これが根拠というのです。

「この生真面目さまごうことなくオーストリア人です」

「それが根拠なのか」

「それに長い間私の国で住んでいましたよ」

そんな話をして言い合っているとです。不意に窓のところからフランスが出て来て二人に対して言うのでした。
「じゃあフランス人でいいじゃねえかよ」
あえて二人に嫌がらせをして言うのでした。
「フランス人にしちゃいなよ」
こう言い残して姿を消します。それだけですがそれでもそう言われて何か拍子抜けした二人はそれで言い争いを止めたのでした。毒も時には、なのでした。

第九百三十七話　　完

２００９・９・１９

第九百三十八話　それじゃああいつと同じだ

第九百三十八話　それじゃああいつと同じだ

フランスがドイツとオーストリアさんにそんなことを言ったことはイギリスの耳にも入りました。話を聞いたイギリスは流石に困り果てた顔で当人に対して言うのでした。

「御前よ、それは幾ら何でも止めておけよ」

「何だよ、ただからかっただけだぜ」

フランスにしてはたったそれだけでした。本当にそれだけでそれ以上の悪気はなかったのです。けれどイギリスはそのフランスに対して言うのでした。

「それだったら御前あいつと同じだぞ」

「あいつ？あいつって誰だよ」

「うちの生徒会長だよ」

このうえなく不吉なものに満ちた顔での今の言葉でした。

「あの大馬鹿野郎と同じだぞ。あいつは気が向けばいつも起源の主張するだろうが」

「それは知ってるけれどよ」

もうそれで有名人になっています。韓国といえばまさに起源の主張です。それに一体どういった意味があるのか甚だ不明ですがそれでも彼の趣味になっています。

「他の国の偉人も関係なくても自分のとこの人間にしちまうだろうが」

「げっ、そういえばそうだったな」

フランスもそれに気付いてぎくりとした顔になります。そう言われると彼も困り果ててしまいます。

「流石にあいつみてえな馬鹿にはなりたかねえからな」

「だったら自重しろ」

くれぐれもといった感じでのイギリスの言葉でした。
「いいな。あいつみたいになりたくなかったらな」
「ああ、わかった」
フランスも今回ばかりは深刻な顔で頷きます。
「おれもあそこまで激烈馬鹿とは思われたくねえからな」
「そういうことだ」
珍しくしみじみとした会話をする二人でした。フランスも今回ばかりは深く反省したのでした。

第九百三十八話　　完

２００９・９・１９

第九百三十九話　盗撮で来ました　☆

第九百三十九話　盗撮で来ました　☆

走り去ろうとしましたがあえなく捕まってしまったフランス。まずは少し殴られてからドイツとオーストリアさんに問い詰められます。

「何で御前がここにいるんだ？」

「いや、イギリスがやれっていうからな」

一応そういうことらしいです。何しろドイツとフランスは敵同士なのですから。連合と枢軸は何だかんだで対立関係にあり続けています。

「それで盗撮・・・・・・いや諜報活動でな。お邪魔してたってわけだ」

「そうだったのか」

「だがもう遅いぜ」

スパイでありながら見事な態度です。フランスはふてぶてしい態度で二人に対して言います。

「俺は重要なシーンを押さえたからな」

「重要なシーン？」

「フランスさんの使っていたカメラの現像終わりました」

ここでフィンランドが出て来て二人に言います。

「御覧になられますか？」

「はい、お貸し下さい」

オーストリアさんがフィンランドから受け取ってそのうえで見ます。するとその写真は。

どれもこれもオーストリアさんのばかりです。トランクス姿のものや寝ているもの、お花のお世話をしたり頭に小鳥が乗って困っていたり。何処かを見ていたり歯磨きをしているものまであります。

それを見たオーストリアさんは顔色を変えて何か得体の知れない棒を取り出しています。そうしてこう言うのでした。
「これはお仕置きが必要なようですね」
「おい、ちょっと待て！ドイツ御前からも何か言ってくれ！」
「よし、やれ」
何とか言いました。こうしてフランスの運命は決定しました。
「それでは」
「イギリスが・・・・・うわあああああああっ！」
こうしてお仕置きを受けてしまったフランスでした。もっとも多分に自業自得なのでありますが。

第九百三十九話　　完

２００９・９・２０

第九百四十話　お仕置きの後で

第九百四十話　お仕置きの後で

あえなくオーストリアさんからお仕置きを受けたフランス。帰ってイギリスに対してあれこれと不平を言います。

「御前のせいでえらい目に遭ったじゃねえかよ」

「御前がわざわざベートベンをフランス人ってことにしろなんて言うからだろうが」

イギリスはこのことを知っていました。それで彼にこのことを言うのでした。

「だからそうなったんじゃねえか」

「ちっ、それはそうだけれどよ」

事実なので認めないわけにはいかないフランスでした。事実というものは結局最後には露わになってしまうものだからです。

「まあよ。それで写真はなくなったぜ」

「仕方ねえな。ところで一つ聞きたいんだけれどな」

イギリスはふとフランスに対して言うのでした。

「御前オーストリアに勝ったこと少ないんじゃねえのか？」

「何っ！？」

「三十年戦争以外は勝ってねえだろ。直接戦ってよ」

「そ、そりゃ気のせいじゃねえのか」

事実を言われてギクリとなってしまっています。実はその三十年戦争もいい加減ぐだぐだになってきたところで出て来てそれで勝っています。

「御前のよ」

「いや、イタリア手に入れる戦いでもスペインの上司を決める戦いでもオーストリアの上司にいちゃもんつけた戦いでも全部負けてるじゃねえかよ」

イギリスはこのことをよく知っていました。
「ナポレオンも結局最後は負けてるよな。オーストリアも喧嘩は大して強くないけれどな」
「勝負は時の運なんだよ、だから時々は俺だってな」
「しょっちゅうっていうかオーストリアに殆ど勝ってねえじゃねえかよ」
「くっ、痛いところを衝きやがる」
実はそうなのでした。この人も喧嘩は大して強くはなかったりします。なおこの前ベトナムに見事なまであっさりと負けていたりします。

第九百四十話　　完

２００９・９・２０

第九百四十一話　左利き

第九百四十一話　左利き

遠い遠いもう多くの人が覚えていない時代のことです。神聖ローマはオーストリアさんのお家に入れられたイタリアに絵を教えてもらっていました。その時にイタリアはあることに気付いたのです。

「あれっ、神聖ローマって」

「どうしたんだ？」

「左利きだったんだ」

このことに気付いたのです。見ると神聖ローマは筆を左手に持っています。そうしてそのうえで絵を描いているのです。

「今気付いたけれど」

「ああ、これか」

イタリアにそのことを言われた神聖ローマは答えます。実は彼は生まれながらのサウスポーなのです。

「俺もドイツ騎士団もそうだ」

「ドイツ騎士団もそうなの」

「あいつもな。左利きだ」

このことをイタリアに対して言います。実は彼等は左利き同士なのです。

「神聖ローマ帝国の中にいる奴は左利きが多いんだ。俺とかあいつとかな」

「ふうん、そうだったんだ」

イタリアがはじめて知ることでした。このことは。

「神聖ローマだけじゃないんだ」

「それでもいいか？」

このことを話したうえで何故かイタリアに対して尋ねるのでした。

「俺が左利きでもそれでも」

「そんなの別に構わないよ」
イタリアはあっけらかんとして神聖ローマに対して答えます。
「だって神聖ローマは神聖ローマじゃない。それでどうして何か思ったりするの？」
「そうか。有り難う」
「有り難うって別に何ともないじゃない。さあ、絵を描こうよ」
神聖ローマの言葉の意味はわかっていない幼い日のイタリアでした。遠い遠い昔のお話です。イタリアも殆ど覚えていない時代のお話です。

第九百四十一話　　完

２００９・９・２１

第九百四十二話　この人達も左利きです

第九百四十二話　この人達も左利きです

「そういえば相棒よ」
「何だ？」
丁度プロイセンとドイツが一緒に新聞部の原稿を書いている時です。不意にプロイセンがドイツに対して声をかけてきたのです。
「御前も左利きなんだな」
「そうだがそれがどうかしたのか？」
「いや、俺も生まれてからずっと左利きだしな」
見れば二人共左手にペンを持っています。そうしてそのうえで原稿を書いています。どうやらこの新聞部は手書きで原稿を書いているようです。今では珍しいかも知れません。
「そういうところも同じなんだって思ってな」
「俺もずっと左利きだ」
ドイツはそのペンを持ちながら述べました。
「物心ついた時からな」
「それで絵とかも描けるよな」
「無論だ。実は絵を描くのは好きだ」
そういうことも好きだったりします。実は結構な風流人であるドイツなのです。
「他のことをするにも左手ですることが多いな」
「それで御前昔イタちゃんに何か言われなかったか？」
プロイセンはこうもドイツに対して尋ねました。
「何かよ。言われただろ」
「そういうことはいつもだから覚えていないのだがな」
ドイツはこう彼に答えます。
「そういうこともあったか」

「あったんじゃねえのか？まあ俺もあまり昔のことは覚えてないけれどよ」

プロイセンも実のところフリードリヒ大王以前のことはあまり覚えていなかったりします。

「御前が昔イタちゃんといたのを見た記憶があるんだよ」

「そうなのか」

左利きの二人はこんな話をしたのでした。昔のことはもう遠い彼方の話になっています。

第九百四十二話　　完

２００９・９・２１

第九百四十三話　アメリカに出て来て　☆

第九百四十三話　アメリカに出て来て　☆

ロシアから最初の独立を果たしたリトアニアでしたがとても貧しい状況でした。それでイギリスに紹介してもらって来た先は。

「なあアメリカ」

「んっ、何だい？」

「リトアニアを御前の家で働かせてくれないか？」

「ど、どうも」

リトアニアは少しおどおどした様子でアメリカに挨拶をします。これが最初の出会いでした。

「ああ、それならいいよ」

「いいんですか？」

「僕も丁度人手が欲しかったんだよ」

「あっ、そうなんですか」

これで話はほぼ決まりました。それでアメリカは今度は地図を開いたのですがその地図は自分の国の地図でした。

「それでリト何たらって何処にあるんだい？」

「御前はいい加減世界地図買え！」

「馬鹿だなあ、ちゃんと世界地図だぞ」

わざとイギリスの話を聞いていません。さりげなくイギリスに悪意を持っているのかも知れません。しかしリトアニアはイギリスの予想以上でした。

「あっ、俺の家はですね」

「うん」

「アメリカさんがここだとここら辺りですよ」

「へえ、ちょっと近いんだな」

「えっ・・・・・・」

これにはイギリスもびっくりでした。けれどリトアニアは真剣にほっとした顔で言うのでした。
「アメリカさん何か真面目そうなんで俺安心しました」
「おいちょっと待て」
流石に今のリトアニアの言葉にイギリスは突っ込みを入れました。
「御前それお世辞だよな！？絶対にそうだろ！」
「いえ、お世辞じゃないですけれど」
けれどリトアニアは本気でした。これがアメリカとリトアニアのお話のはじまりです。

第九百四十三話　　完

２００９・９・２２

第九百四十四話　この国だけは多分無理

第九百四十四話　この国だけは多分無理

「まあアメリカは住みやすいあるからな」
「そうですよね」
リトアニアは今度は中国と楽しくお話をしています。中国は世界中に別荘を持っているのでそれでアメリカのことも知っているのです。
「あと日本は一番いいあるな。日本は癖が強いあるが気候も食べ物もいいあるぞ」
「へえ、そうなんですか」
「何気にアメリカの北の方もいいある」
カナダの名前は中国にも知られていません。最早この影の薄さは神懸かり的ですらあります。
「ただし。韓国だけは駄目あるな」
「えっ、中国さんも駄目なんですか」
「一度行ってみればいいある」
暗い顔でリトアニアに対して語るのでした。
「恐ろしいものが見られるあるぞ」
「それってロシアさんやポーランドよりもですか」
リトアニアも本能的にそれを察しました。考えてみれば生徒会長でありながら馬鹿騒ぎばかりしているあの人は確かに凄まじいものがあります。
「そんなに物凄いんですか」
「ロシアの国の人間も辟易する程ある」
中国は真剣そのものでかつ暗い顔で語るのでした。
「だからあの国に行く時は気をつけるあるぞ」
「わかりました。韓国ですね」

「目立つからすぐにわかる筈ある」
「ええ、生徒会長さんですし」
こうして韓国だけは警戒するリトアニアでした。世の中ロシアよりまだ凄い国があるのです。中国ですら別荘を置けないような国が。

第九百四十四話　　完

２００９・９・２２

第九百四十五話　凄くいい生活　☆

百四十五話　凄くいい生活　☆　第九

「おはようリトアニア」

「はい、おはようございます」

アメリカが起きるともうリトアニアが朝御飯の用意をしてくれています。アメリカはそれを見ながら彼に尋ねました。

「ところで僕の」

「眼鏡でしたら洗面台にありましたよ」

「あっ、そうなんだ有り難う」

そして眼鏡をかけて時計を見てみると。もう学校に行く時間でした。

「えっ、もうこんな時間じゃないか」

時間を確認してまずは大いに驚くアメリカでした。

「大変だよ遅刻しそうだよ」

「準備も食事もできてますよ」

「準備もなんだ」

食事だけではなかったのです。何とそっちもできていたのです。しかも食事もかなり立派なものです。食べる量がとても多いアメリカでも満足できるような。

「あとは着替えだけして下さい」

「うん、それじゃあ」

「俺もすぐに出られますから」

リトアニアは明るい顔でアメリカに告げます。

「ですからいってらっしゃい」

「うん、じゃあまずは生徒会の仕事をしてくるか」

最近会長絡みになると中国、ロシア共々いなくなるので結果として殆どしていないのですがそれでも今日はやる気です。意気揚々と

学校に向かうアメリカです。
　イギリスはそんなアメリカのお世話をするリトアニアを見てこう思うのでした。
「あのアメリカと結構普通に暮らしてるなんてよ」
　彼にはそれがとても信じられません。リトアニアを心から心配する顔になって見ています。
「若しかしてあいつ相当無理してんじゃねえのか？おい」
　それでリトアニアに声をかけますと彼はうきうきとした顔で言うのでした。
「ああ、もうこの生活本当楽！」
「おい、それは本気かよ！」
　見たところ本気の顔です。最早イギリスには想像もできないことでした。

第九百四十五話　　完

２００９・９・２３

第九百四十六話　ロシアでは

ロシアの家は滅茶苦茶寒いです。流石にお家の中は窓が三重にしてありますし暖炉もあって暖かいです。けれど一歩外に出るともうそこは極寒の地であります。

毎朝早くに起きて井戸を汲んで水を仕入れるわけです。当然ロシアに水道なんてものはありません。だからドイツのお家でとても驚いたのです。

おまけに水はいつも凍っています。そのお水を溶かすこともしないといけません。

「毎朝思うけれど」

「大変だよね、とても」

エストニアもラトビアも泣きそうな顔になりながら毎朝このお仕事をしていました。リトアニアもそれは同じです。

そして朝の一連のお仕事をしてからロシアを起こして朝御飯を食べてもらいます。けれどあったかい食べ物が大好きなロシアは御飯少しでも冷めていると。

「うぎゃあああああああああああああっ！！」

「ラトビア、ラトビアアアアアーーーーーーーーーーーーッ！！」

こうなります。朝からかなり怖い日常が繰り広げられるというわけです。

そしてロシアのお風呂はサウナです。これはフィンランドも同じですが中に入る人が違います。少しでも支障があればまた絵断末魔の如き叫び声がお家の中に響き渡ることになります。

ロシアにしろ何かタガは外れた上司ばかりなのでそれなりに苦労はしているのですが問題は彼の身の回りの世話をする人達です。やっと辛い一日が終わり最後のサウナで汗をかきながら話します。

「また朝早く起きて井戸の凍ってる水出してね」
「ですね。それからロシアさんの朝御飯作って」
「それでお仕置きなんですね」
リトアニアもエストニアもラトビアもこんな生活を送っていたのです。本当にアメリカでの生活とは全く違います。
「確か韓国君と台湾さんは日本さんのところで楽しく過ごしてるんだよね」
「特に韓国君は日本さんの上司のお気に入りだし」
「何でこんなに差があるんだろう。同じ学園の国なのに」
まさに天国と地獄でした。この人達にとっては韓国や台湾がとても羨ましい国々だったのです。

第九百四十六話　　完

２００９・９・２３

第九百四十七話　勿論わざと出しています　☆

第九百四十七話　勿論わざと出しています　☆

リトアニアが心配になってきたイギリスはわざわざアメリカのお家に訪ねてきました。確かに口は素直ではありませんがそれでも面倒は見ようとして世話焼きでもあるのがわかります。

そのイギリスがアメリカのお家に入ると。アメリカはまず彼に対して言ってきました。

「珍しいな。君が僕の家に訪ねて来るなんて」

「いや、実はな」

あまり元気のないような顔でそのアメリカに対して答えるのでした。

「リトアニアが元気かどうか気になってな。それだけなんだがな」

「ふうん、そうだったんだ」

「そうだ。それでそれでリトアニアは何処なんだ？」

「コーヒーがあるけれど君飲めるか？」

「いや、いい」

コーヒーと聞いてむっとした顔になって返すイギリスでした。

「コーヒーはな。紅茶はないのか？」

「レモンティーならあるぞ」

「それもいい」

レモンティーと聞いてもむっとした顔になるイギリスでした。

「それもな」

「じゃあ日本の緑茶や中国の烏龍茶はどうだい？」

この辺りは流石に色々な国から人が集まってできた国です。飲み物にしろ様々です。

「お茶だぞ。しかも君のミルクティーより美味いぞ」

「いいからリトアニアは何処なんだ？」

いい加減イギリスも頭にきてきました。
「早く連れて来い」
「他には韓国のメッコールもあるぞ」
「あいつの名前は出すんじゃねえ！いいから早くリトアニア出せ！」
遂に切れたイギリスでした。とりあえずアメリカの飲み物は飲まないのでした。

第九百四十七話　　完

２００９・９・２４

第九百四十八話　コーヒーがなくても

第九百四十八話　コーヒーがなくても

ドイツはいつもコーヒーを飲みます。プロイセンもそれは同じなのですが時々何かコーヒーみたいなのを飲んでそれで済ませていたりします。そのコーヒーが何かといいますと。

「またそれか」

「ああ、何か愛着があるんだよ」

相棒に対して答えます。見ればそれはコーヒーそっくりですがコーヒーではありません。そうしたものでした。

「飲んでいてもあまり美味いとは思わないんだけれどな、実際な」

「それでも飲むのか」

「結構長い間飲んでいたからな」

言いながらそのコーヒーみたいなものを飲みます。飲みながらあまり美味しそうな顔をしません。それでもプロイセンはそれを飲むのでした。

「それでだけれどな」

「それでか」

「御前はずっとそれ飲んでいたんだよな」

ここでドイツに対して尋ねるプロイセンでした。

「本物のコーヒーをな」

「ああ。御前とは違ってな」

「それが本来の姿なんだろうけれどな。飲んでみるとな」

「いいか」

「まずいけれどやっぱり昔を思い出したりもするからな」

それで飲んでいるみたいです。昔の思い出に浸る為に。

「ロシアの野郎とつるんだり相棒ともギクシャクしてあまりいい時代じゃなかったけれどな」

「それでも昔だからか」

「そういうことさ。昔を思い出すのも悪くないからな」

こう言ってそのコーヒーのようなものを飲むプロイセンでした。

飲み物一つ取っても何かしらの思い入れがあったりするものなのです。

第九百四十八話　　完

２００９・９・２４

第九百四十九話　何があっても平気です　☆

第九百四十九話　何があっても平気です　☆

「おいリトアニア」
「あっ、はい」
リトアニアはアメリカの声に応えます。
「イギリスが君に会いたいってさ」
「俺に何か用ですか？」
「あっ、ああちょっとな」
リトアニアに応えようとして彼を見ると。何故か陸にあがっている鯨と遊んでいるリトアニアでした。
「ちょっと待って下さいね。この子が離してくれなくて」
「何で鯨が陸の上にあがってんだ？」
イギリスはそれも不思議でしたがさらに不思議なことが今起こるのでした。
何といきなり上空に円盤が出て来てリトアニアを引き上げます。
イギリスはそれを見てドン引きなのですがリトアニアは喜んでいます。アメリカが上機嫌で笑っているのはまずいいとしまして。
「いきなりキャトるの止めてって言ってるじゃない」
「ダッテリト」
「こいつまだ地球にいたのかよ」
イギリスはあの謎のリトルグレイの姿を認めても驚いています。
「何しに来てんだ？本当に」
「クジラトバッカリ遊ブノガ悪イ」
「わかったよ、御免」
「ははは、こりゃいいや」
アメリカはそんなリトアニアを見て笑って言います。
「リトアニアは本当に人気者だな」

「いや、そんなことないですよ」
その恐ろしい光景を完全に引いた顔で見ているイギリスでした。
最早何も言えません。

第九百四十九話　　完

２００９・９・２５

第九百五十話　リトアニアの相棒は

第九百五十話　リトアニアの相棒は

「大体俺ってそんなに焦ってないしーーーー」

「っていうか一回本当に焦ってみようよ」

リトアニアはいつもポーランドに対して言っています。何だかんだでいつも一緒にいる二人でした。これは昔も同じことですけれど。多分これからも。

「大体ポーランドはいつも能天気過ぎるんだよ。そんなんだとドイツさんに嫌われるよ」

「あいつが今一番うざいしーーーー。リトあいつまたぼこらね？」

「ってドイツさんとのお付き合いがあるじゃない。だから駄目だよ」

「ちぇっ、あいつオーストリアさんと違って無愛想だしーーーー。あのプロイセンもまだいるしーーー」

「また一緒になれたからよかったのかな、あの人達も」

「けれど強くなったんじゃね？俺達みたいに」

こんな話をしながら二人で西の方を見ています。その西の方にドイツがあるのです。だからこそそっちを見て二人で話しをしているのです。

「また二人になって」

「それで何かとドイツさんが無理をして体調がよくないみたいだけれどね。それでもやっぱり強くなったのは間違いないと思うよ」

「俺達だってそうじゃね？」

ポーランドはここでリトアニアに対して言うのでした。

「リトがロシアの家から出られてまた一緒になれて何か調子よくね？」

「それはそうだね」

リトアニアはこのことはすぐに認めました。

「俺もポーランドとまた一緒にいられるようになって調子があがっ

てきてるよ」
「やっぱり二人がよくね？俺達ってさ」
「そうだね。やっぱりね」
何だかんだで結局はポーランドに合わせてあげるリトアニアでした。ポーランドもそのリトアニアといつも一緒にいないと気が済まないのでした。

第九百五十話　完

２００９・９・２５

第九百五十一話　適応できる秘密　☆

あのアメリカの家に見事なまでに馴染んでいるリトアニア、それを見たイギリスが彼に対して尋ねました。
「おい、聞きたいことがあるんだけれどな」
「何ですか？」
「どうやったらそんなに適応できるようになるんだ？」
深刻になった顔でリトアニアに対して尋ねます。
「それがそもそも不思議なんだけれどな」
「どうしてっていいますとね」
ここでリトアニアは遠くを見て達観し、それでいて暗い過去を感じさせる、そんな顔になってからイギリスに対して答えました。
「まずポーランドと朝から晩まで一緒に暮らしてみてですね」
「あいつか」
ポーランドのことはイギリスもよく知っています。とにかく手のかかる相手です。手のかかるどころではないというのがこれまた実に厄介なのでありますが。
「あいつと一緒に暮らしてたんだな、それも長い間」
「あとですね」
しかもまだあるのでした。
「ロシアさんに侵略されてみればわかりますよ」
「・・・・・あいつは遠慮したいな」
ロシアの名前が出るとイギリスも殆ど沈黙してしまいました。
「あいつのところにもいたのか、それで」
「そこまで経験すればよくわかりますよ」
「ああ、わかった」
話を聞くだけでもう充分でした。
「だからなんだな」

「はい、本当に色々ありましたんで」
過去を語らせるとその殆ど全てが苦労話といっていいリトアニアでした。だからアメリカの家でも普通に適応できているのでした。それにはしっかりとした理由があったのでした。

第九百五十一話　　完

２００９・９・２６

第九百五十二話　それでもいつも一緒

第九百五十二話　　それでもいつも一緒

ポーランドと朝から晩まで一緒にいればわかるとまで言ったリトアニア。けれどそれでも何だかんだでいつも二人一緒にいたりします。

「えっ、またポーランドさんのところに行くんですか？」

「うん、ちょっとね」

こうラトビアに言ってからすっとポーランドのところに行きます。見ればポーランドもリトアニアを迎えに来ています。

「よお、じゃあ今日は何処行くよ」

「日本さんのところに行く？この前誘われていたんだ」

「あっ、それよくね？」

日本の名前を聞くとポーランドも結構乗り気な顔になりました。

「日本って気前いいし親切だしな。俺も好きだしーーーー」

「けれどさ、ポーランド」

ここでリトアニアはポーランドに対して言うのでした。

「日本さんって俺達よりずっと年上だからね。そこは注意しておいてね」

「えっ、まじで！？あんなに若い顔してるのに？」

「そうなんだよ。日本さん本人も一体幾つかわからない位らしいし」

「有り得んって。俺達より年下に見えるって」

「だからその辺りは気をつけてね」

ポーランドにしっかりと忠告するのでした。そのうえで二人一緒に行きます。

「それで今日は何見せてくれるん？あの人」

「さあ。歌舞伎も能も狂言も何でもあるしね、日本さんのところには」

そうした独自の文化を多く持っているのが日本です。二人もその

ことがわかってきているのです。
「だから楽しみだね」
「ああ。じゃあ行くし」
こうして二人で日本に向かいます。今もポーランドと朝から晩まで一緒ですけれどそれでもその仲はかなりよかったりします。リトアニアもポーランドもお互いから離れようとは全く思わないのでした。

第九百五十二話　　完

２００９・９・２６

第九百五十三話　ブラックスマイル　☆

リトアニアがアメリカのお家にいた時にふとロシアが訪ねてきたことがあります。その時のお話です。

「こんにちはアメリカ君、ちょっといいかな」

「あれっ、ロシア」

誰もあえて言いませんが物凄く仲の悪い二人だったりします。勿論お互いもそれがわかっていますのでアメリカも意外な顔になりました。

「何で君が僕の家に？」

「リトアニアがお世話になっているって聞いたからね」

だから来たというのです。

「どうかな、大丈夫彼」

「ああ、彼は働き者だし性格もいいしね」

アメリカはまずはリトアニアを絶賛します。

「おかげで助かってるよ。何なら今呼ぶけれど」

「ううん、それはいいよ」

本人を呼ぶかと言われるとそれは断るロシアでした。

「仲良くやってるのならいいんだ」

「そうか」

「リトアニアって我儘ばっかりして口下手だから僕心配で」

これだけ聞くとロシアも結構優しいのかも知れません。そう内心思ったりしたアメリカです。

「それで僕心配でね。けれど何か君達上手くやってるみたいでよかったよ」

「全然大丈夫だよ」

「あの子ちょっと人より心配性で世話焼きだけれど」

アメリカの両肩にそれぞれの手を置いての言葉です。
「これから大事にしてあげてね」
「うん、それじゃあ」
「まあ」
ここからがロシアでした。何を言ったかというと。
「僕のお古だけれどね」
とても黒く怖い笑みで言うのでした。とりあえずその笑みは無意識のうちにシャットアウトできたのはアメリカだからでした。

第九百五十三話　　完

２００９・９・２７

第九百五十四話　妹さんはまともです

第九百五十四話　妹さんはまともです

「お兄様には少し困ったものです」

ロシア妹がこう言って皆の中でぼやいています。

「ああして怖いところがありますから」

「ああ、うちの兄貴言葉には出さないけれど何時かあんたの兄貴潰そうと思ってるから」

「兄さんには気をつけておくことある。兄さん昔から自分の北にいる国には敵意を持つあるからな」

アメリカ妹と中国妹がそのロシア妹に対して言います。

「今も仲悪いしね、兄貴達」

「今は仲良くやれていてもすぐにいがみ合うようになるから気をつけておくことあるぞ」

「そうなのです。私もそれを知っていますから」

ロシア妹としてもそれはよくわかっています。だからこそ心配なのです。

「しかもお兄様あれで大抵のことは一人でできてしまいますし」

「というよりかは不死身ではないのですか？」

今度は日本妹がロシア妹に尋ねます。

「あの人は何があっても暫くしたら立ち上がってきますし。お兄様と一騎打ちの後でも立っていましたし」

「負けてもどれだけダメージを受けてもお兄様は死ぬことがありません」

この辺りも実にロシアです。

「それはいいのですけれどあの怖さがありますから」

「自分の国の人間に対してもだからねえ」

「あの怖さとここぞという時に出て来る冬将軍は反則あるぞ」

ロシアにはスタンドまでいるようです。厄介な人には厄介なもの

が備わっています。
「あんたには優しいみたいだけれど」
「皆にはあまりそうではないあるぞ」
「だから困っています。もう少し怖くなければ皆さんとも上手くやっていけるのですけれど」　そもそも一人で普通に生きていられるから余計に厄介です。妹の心配もよそに今日もとても怖いロシアなのでした。

第九百五十四話　　完

２００９・９・２７

第九百五十五話　一緒に寝よう　☆

第九百五十五話　一緒に寝よう　☆

「な、なあリトアニア」
アメリカが普段よりいささか謙虚な面持ちでリトアニアに声をかけてきました。
「御願いがあるんだけれどさ」
「どうしたんですか？」
「今日は一緒に寝てくれないか？」
こうリトアニアに対して頼んできたのでした。
「ちょっとね映画を見てね」
「あ、成程」
画面を見れば何かゾンビが出ています。それだけでわかってしまったリトアニアでした。
「よくわかりました」
「それでなんだ」
こうしたやり取りの後で二人でアメリカのその大きなベッドの中に入るのでした。アメリカはその中で小さく震えています。
「よかったよ。今日は絶対に一人じゃ寝られなかったよ」
「怖いのを見たらいつもこうなんですか？」
「そうなんだ。子供の頃はイギリスと一緒に寝てもらったんだけれどね」
本当に昔々のおはなしですがかつてもそうだったようです。
「けれどいつも彼の方が先に寝てね」
「ああ、やっぱり」
その話を聞いて納得した顔で頷くリトアニアでした。
「それで結局いつも怖い思いをしていたんだ」
「イギリスさんらしいですね。けれどアメリカさんも」
ここでリトアニアはアメリカの方を見て言うのでした。

「子供の頃から変わってないんですね」
「申し訳ないけれどね」
「いえ、いいですよ」
リトアニアはにこりと笑ってアメリカに対して応えます。
「一緒にいる方が楽しく寝られますしね」
「そうか。ならいいんだけれどね」
こうして二人は一緒のベッドの中でお話をはじめました。話は何時しかリトアニアの昔のことに移っていくのでした。

第九百五十五話　　完

２００９・９・２８

第九百五十六話　シングルベッド

第九百五十六話　シングルベッド

ロシアのお家ではリトアニアは一人で寝てはいませんでした。いつもこの二人と一緒に寝ていました。

「じゃあ寝るけれど」

「はい」

「いい加減ハンモックとか吊るしません？」

リトアニアに対してエストニアはすぐに頷きましたがラトビアはこう言うのでした。

「一人用のベッドに三人ってやっぱり辛いですよ」

「けれどさ。それだと毛布がないよ」

リトアニアはそのラトビアに対して言いました。見れば確かにベッドの上には毛布は一枚しかありません。ロシアのお家で毛布が一枚だけというのも過酷ではあります。

「ハンモックを吊るしても」

「じゃあやっぱり一人用のベッドに三人ですか」

「うん、それしかないよ」

「ううん、寝る時もこんな生活なんですか」

ラトビアはここでも泣きそうな顔になっています。

「せめて毛布だけでも欲しいんですけれど」

「そうですね。何処からか調達できればいいのですが」

「このお家にはないよ」

リトアニアは今度はエストニアに述べました。

「余分なものは何もね」

「そうですか。じゃあやっぱり今日もこのベッドに三人で」

「ううん、本当にこんな生活嫌です」

ラトビアは本当に泣きそうな顔です。

「独立してせめて一人で温かく寝たいです」

「それは儚い夢だね、俺達には」
最後にリトアニアがこう言いました。この時は本当に三人共大変でした。

第九百五十六話　　完

２００９・９・２８

第九百五十七話　幼い頃の思い出です　☆

第九百五十七話　　幼い頃の思い出です

☆

「俺もですね」

アメリカの子供の頃の話を聞いてリトアニアも自分のことを言ってきました。

「子供の頃はポーランドと一緒に寝ていましたよ」

「ああ、君の元相棒だな」

「ええ、一時期ですけれどね」

本当にいつも一緒にいたのです。同居人みたいなものでした。

「毛布取られるので最終的には別々になりましたけれど」

「そうだったんだ」

「ええ、それでもずっと一緒に暮らしてましたけれどね」

寝ている場所が変わっただけだったのです。やっぱり二人はいつも一緒だったのです。

「そういえばだけれど」

ここでアメリカはリトアニアに尋ねました。

「何で君達はばらばらになったんだい？」

「分かれた理由ですか？」

「そうだよ。大国だったんだろう？」

まさに二人で一国だったのです。その絆はかなり強いものだったのです。

「それでどうしてなんだい？」

「ロシアさんに分割されたんですよ」

話すリトアニアの顔が暗いものになります。どうやら彼にとってはあまりいい思い出ではないみたいです。

「それでポーランドはオーストリアさんの方に行って俺はロシアさんの方に」

「そうだったんだ」
「苦労したんだな、それはまた」
あえてロシアのことは言わないアメリカでした。何故なら彼もロシアと仲が悪いからです。リトアニアもそれはわかっていますのでロシアの話はここで引っ込めました。そうしてさらに二人の思い出を話していくのでした。
「それでですね」
「うん、それで？」
ベッドの中での話は続きます。そうして夜は更けていくのでした。

第九百五十七話　　完

２００９・９・２９

第九百五十八話　今では別々のベッドに

第九百五十八話

今では別々のベッドに

「なあリト、ベッドだけれどさ」

「何？またシーツ入れるの手伝ってくれっていうの？」

ロシアからまた独立できたリトアニアはまたポーランドと付き合いをはじめています。この二国はお互いが健在だとすぐに何でも一緒にするのです。

「前入れたじゃない。いい加減それ位覚えてくれないかな」

「だって結構面倒だしーーーーー」

こう言っていつも覚えようとしない適当なポーランドなのです。

「それに御前こういうの上手いからよかね？俺はピンクのシーツにして」

「シーツの色はどうでもいいけれど誰のおかげで上手くなったと思ってるのさ」

それでもちゃんとポーランドのシーツを入れてあげます。やっぱりこの人は世話やきさんです。

「アメリカさんはちゃんとしていたのに」

「俺アメリカと違うし。そんなのどうでもよかね？」

リトアニアにもいつもの平然とした様子で返します。

「それよりもよ。御前どうよ」

「どうよって？」

「御前のベッドいけてる？ちゃんとしてる？」

「もうそんなの朝起きた時にしてるよ」

起きたらすぐに自分のベッドはしっかりと整えるリトアニアなのです。そうしたところはまさに軍隊、それも日本の軍隊並のしっかりとしたものがあります。

「ポーランドがいい加減過ぎるんだよ」

「まあそれでも寝られたらよくね？結局寝たら乱れるんだしーーー」

「全く。少しは真面目に生きようよ」

とはいってもやっぱりポーランドと一緒にいるリトアニアなのでした。そしてポーランドもリトアニアと一緒にいるのでした。

第九百五十八話　　完

２００９・９・２９

第九百五十九話　その成り立ちは　☆

第九百五十九話　その成り立ちは

☆

「元々ですね」

リトアニアのベッドの中でのアメリカへのお話は続いていました。

「戦争で大きくなった国だったので戦争はそんなに強くないんです」

「そうだったんだ」

「一応最後まで抵抗したけれど結局戦争が増えただけでしたし」

言いながらポーランドと一緒だった時のことを思い出すのでした。

「でも今思えばポーランドに振り回されてたあの頃が一番楽しかったかなあ」

「それじゃあまた一緒になればいいじゃないか」

「あはは、そうですね」

アメリカの今の言葉に笑顔になって応えます。

「そうできたらいいですね」

「よし、それだったら僕が」

妙なところで正義感の強いアメリカが彼の今の言葉に応えました。

「正義の為なら協力するぞ！」

「また、そんな日が来たら」

けれどそう言っている間にリトアニアの目がとろんとなってきて。

それに言葉もあやふやになってきてそうして。

「また一緒に麦畑・・・・・・」

「っておいリトアニア」

それで寝てしまったのです。それで残されたアメリカはといいますと。

「僕を置いて寝ないでくれよ！」

実はまだホラーのことを覚えているのでした。どうもかなり長い時間が経ったようなのですがそれでも彼はそのことを覚えているの

です。
「一人じゃ怖いじゃないか。リトアニア！」
けれどもうリトアニアはすやすやと寝ています。その頃アメリカのお家のリビングではリトルグレイが震えながらもアメリカのそのホラー映画を観ているのでした。

第九百五十九話　　完

２００９・９・３０

第九百六十話　怖い笑顔

第九百六十話　怖い笑顔

相変わらず日本のお家においてその傲岸不遜な態度を維持している某脚本家さんですが今日もいつもの様に脚本を書いています。そうして出来た脚本が映像になりますと。

「何か今回のライダーの笑顔が怖いですね」

「そうだよ。役者も頑張ってくれたしな」

かつていじめっ子として名を馳せた人がテレビにいます。物凄い笑顔でこう言っています。

「久し振りだね」

「私は御前のおかげでまっとうな人間になれたんだよ」

完全に洗脳されている笑顔です。特に目は。けれどその演技力は見事です。怪演と言ってもいいです。

「どうだよ、俺の脚本をここまでやってくれるなんて凄いだろ」

「そうですね。しかしこの人の笑顔は」

「怖いか？」

「はい」

脚本家さんと一緒にその番組を似ている日本ははっきりと答えました。

「ある意味子供が怖がるのではないですか？」

「いいんだよ、そういうのが面白いんだからな」

日本の問いに対していつもの調子で答えます。

「子供が怖がらないとな。そこまでならないと駄目なんだよ」

「番組としてですか」

「そうだよ。今回は俺の脚本を皆でよく映像にしてくれたよ」

こんなことも言う脚本家さんでした。

「俺は設計図を書くのが仕事だからな。皆それを作品にしてくれてるんだよ」

「この役者さんもですね」
「そうだよ。じゃあまた脚本書くか」
言いながら物凄い速さで執筆していきます。どうやら意外と謙虚といいますかシャイなところもあるようです。

第九百六十話　完

２００９・９・３０

第九百六十一話　上司がいなかったので

第九百六十一話　上司がいなかったので

「思えば俺達ってあれじゃね？」

「あれって？」

「ほら、昔離れ離れになった時のことな」

ポーランドはリトアニアにその昔のことを話してきました。

「あの時上司がしっかりしていればそうならなかったんじゃね？」

「そうだね。それはね」

このことはリトアニアもよくわかっていました。何しろ二人が離れ離れになってしまった時といえばです。もう二人の上司が何人もトップの座を争っていてどうにもならない状況だったのです。

そしてそこをロシアやプロイセン、オーストリアさんが出て来てです。気付いたら二人は離れ離れになってしまっていたのです。今はまた二人で仲良くやっていますけれど長い間離れ離れになっていたのです。

「思えばしっかりした上司の時は有り難かったしーーーー」

「俺も。ロシアさんやオーストリアさんには俺の上司も頑張ったけれど」

それでも結局は離れ離れになってしまったのです。二人にとってはあまりいい思い出ではありません。

「その後二人共また独立できたけれど」

「御前はロシアにまた戻って俺はドイツとプロイセンの奴に負けて」

「それからポーランドさんがロシアさんの友達ってことにもなったしね」

実に混沌とした展開だったのです。そしてリトアニアがやっとロシアの家からまた独立できて今は二人助け合って何でもしているのです。国は別々ですけれど。

「やっぱりしっかりした上司と御前がいて欲しいってわけよ」

「俺もなんだ」
そう言われると少し嬉しくなるリトアニアでした。それで微笑んで言葉を返すのでした。
「俺もだよ、それは」
こんな二人です。長い間離れ離れになってしましたけれどその絆は今も健在なのでした。

第九百六十一話　完

２００９・１０・１

第九百六十二話　ラトビアの軍服

第九百六十二話　ラトビアの軍服

ラトビアも軍服を着ています。軍服は皆もよく着ますがその時によってデザインがかなり変わったりします。例えばイギリスやフランスがそうです。

「あの赤い軍服はもう目立つからな。着ないことにしているんだよ」

「青は大好きなんだけれどよ。撃たれるからな」

こうした理由で今は二人共昔と比べてかなり地味な軍服を着ています。日本は冬と夏とでその軍服の色が変わっていたりします。

「はい、冬はこれです」

黒い詰襟の軍服です。あのいつもの白もいいですが黒も似合います。

「海軍は夏と冬で色が変わりますから」

それで冬は黒というわけです。日本も陸軍の軍服を持っていることは持っているのですがいつも海軍の軍服なのはそちらの方が似合っていてしかも格好いいからでしょうか。

こんなふうに皆それぞれ軍服をその時によって変えています。そしてラトビアもそれは同じなのです。

「えっ、ラトビアその軍服は」

「ちょっと。どうかと思うけれど」

リトアニアとエストニアがある日ラトビアの軍服を見て言いました。見ればラトビアは縦に長い帽子に先がブッチャーのそれの様に尖った靴に民族衣装を思わせる服といった格好です。かなり独特なものです。

「最近の感じにした方がいいんじゃないかな」

「その方が似合うと思うし」

「えっ、そんなに駄目なんだ」

ラトビアは二人に言われてそのことに気付きました。

「じゃあどうすればいいんですか？」
「まあ皆と同じようにかな」
「そうした方がいいよ」
「じゃあ」
こうして軍服のデザインを変えたのでした。時として変わった軍服を着ていた人もいたのです。

第九百六十二話　完

２００９・１０・１

第九百六十三話　作ったのはいいけれど　☆

第九百六十三話　作ったのはいいけれど　☆

「お帰りなさい・・・・・・あれ」

リトアニアがいつものようにアメリカを出迎えるとです。彼はいつもよりいいお肉を出してきたのでした。

「今日は随分言いお肉買ってきたんですね」

「ああ、最近お家の仕事が上手くいってさ」

アメリカはいつも学校の帰りに晩御飯の材料を買ってそれで帰って来るのです。それで今日は普段よりもいいお肉を買って来たのです。

「奮発なんだぞ」

「そうですね、じゃあこれでステーキを焼いて」

「うちの工場が全部今流行の機械化になったんだ。格好いいだろ」

「へえ、それは凄いですね」

リトアニアもそれを聞いて素直にびっくりです。アメリカはこの頃飛ぶ鳥を落とす勢いで力をつけてきていたのです。それでこうした機械化もできるようになっていたのです。

「どんなものでも早く一杯作れるんだぞ」

とても元気で威勢のいいアメリカでした。けれどその次の日には。

「あれ？今日はミンチ肉なんですね」

「うん・・・・・・」

アメリカはリトアニアに対して一番安いお肉を手渡した後で深く沈み込んでしまっていました。

「ちょっと今日はこれなんだ」

「それにアメリカさん」

リトアニアはその深く沈み込んでいるアメリカを見ながら尋ねました。

「何か暗いですよ」
「ものを大量に作ったのはいいけれど」
ものを大量に作ったのはよかったのです。ところが。
「何処に売ろう・・・・・・」
ものがあったらそれを売らなくてはいけません。実はそこまで考えていなかったのです。そしてこれがとんでもない事態を引き起こしてしまったのです。

第九百六十三話　　完

２００９・１０・２

第九百六十四話　日本の弱点

第九百六十四話　日本の弱点

日本のお家では一つ問題になっているというか困ったことがあります。それはテレビや新聞の言っていることが殆ど信用できないのです。

「新聞何で嘘つくんや？」

ある日大阪がその新聞を見ながら言いました。何と珊瑚礁にＫ・Ｙと自分達で書いたのを環境破壊だと言って自作自演していたのです。他の国だったらそれだけで新聞社として終わりです。

「それに何だぎゃ？テレビとネットじゃ言っていることも報道していることも全く違りゃーーーす」

尾張も言います。テレビは何か自分達に関わりがある組織や団体にとって都合の悪いことは報道しないのです。報道しても真実をそのまま報道しません。

「こんなのだったらネットを見ている方がいいだぎゃ」

「ほんまや。もう新聞はテレビ欄だけで充分や」

大阪も新聞を読まなくなりました。

「もうテレビ雑誌で済ませてもええやろ」

「テレビはドラマとアニメだけで充分だぎゃ」

こうして皆次第にテレビや新聞から離れていっています。日本もそれは同じで。

「最近ネットが発達していますからね」

それで情報収集や分析を行うようになってしまっているのです。

「経済のことも新聞やテレビによっては全く出鱈目を述べているのであてにならないのです。ネットの方がずっと役に立ちます」

「それで日本最近新聞読まなくなったんだ」

イタリアは日本からその話を聞いて納得しました。

「そういう事情があったんだね」

「そうです。ネットはいいですね」
イタリアに対してゴーヤチャンプルを差し出しながら述べます。
「こうしたお料理のレシピもすぐにわかりますし」
「そうだね。確かにいいよね」
イタリアもネットについてはその通りだと認めます。とにかく信用されるに値しない日本の新聞とテレビなのでした。

第九百六十四話　　完

２００９・１０・２

第九百六十五話　お別れになって　☆

第九百六十五話　お別れになって　☆

恐慌になってしまってそれこそこの世の終わりの如く物凄いことになってしまったアメリカのお家です。そんな中リトアニアは必死にアメリカを気遣っていました。

「アメリカさん大変なことになったけれど」

彼をさりげなく気遣い続けます。けれどここで世界で一人だけ元気だった人がやって来たのです。

「リトアニアみーーーっけ♪」

「うぎゃあああああ！！」

その声と顔を見聞きして思わず悲鳴をあげてしまいました。

「ロ、ロシアさん！！」

「久し振りだね。元気だった！」

「ひ、ひぇえええええええ！！」

リトアニアをいきなり肩に担ぎます。相変わらず物凄い力です。

そしてリトアニアを担いでから。アメリカに対して言うのでした。

「リトアニアは僕が預かるからね」

「そうか」

アメリカも今は何も言えません。力が落ちているだけでなく気力も落ちているからです。さしものアメリカもどうしようもありません。

それがわかっているからロシアはここで。さらに言うのでした。

「君じゃもう面倒見られないもんね」

「・・・・・ああ」

気落ちしきったその顔で答えるアメリカでした。

「彼を頼んだよ」

「やったぁ！」

「ちょ、ちょっと！」

リトアニアにとってはとんでもない流れです。それで言おうとしますがもうどうにもなりませんでした。アメリカとの楽しい日々が今終わろうとしています。

第九百六十五話　　完

２００９・１０・３

第九百六十六話　恐怖の懲罰大隊

第九百六十六話　恐怖の懲罰大隊

皆もう知っていることですがロシアと日本はとても仲が悪いです。それこそ何時何が起こってもおかしくない位なまでもお互い殺気を放ち合う関係です。

その関係は二人の間だけに留まりません。ロシアにはお家の大勢の人達がいます。その人達が彼と日本が一度睨み合うとです。

「あの、日本さんって刀持ってますよね」

「そうだよ。あのやたらと切れるのをね」

「しかもあの人の剣技って物凄いんだよな。それこそ人なんか真っ二つで」

ラトビアとエストニア、リトアニアがいつもの如く駆り出されています。そうして今まさに殺気に満ちて立っている日本の前に行きます。

「何か御用でしょうか」

「いえ、ちょっと来ただけです」

「ですから気にしないで下さい」

「とりあえずここにいるだけですから」

普段とは全く違って白い闘気が見える日本に対して言います。日本は三人に対しても殺気や闘気を見せています。しかもそれはかなり攻撃的なものです。

「ロシアさんは何処でしょうか」

「え、ええとそれはですね」

「今はちょっと中国さんのところで」

「ウクライナとベラルーシがアメリカさんの方でして」

「そうですか」

三人の焦りまくっているうえに真っ青になってしまっている顔での返答をまずは聞く日本でした。けれどすぐにこう言ってきたので

した。
「では待たせてもらいましょう、ロシアさんを」
「あの、僕達は何もしませんから」
「ですからまあ落ち着いて下さいね」
「落ち着いているみたいですけれど」
今にも刀を抜こうとしている日本を前に己の不幸を嘆く三人でした。ロシアのお家にいる時の生活はこんなふうだったのです。

第九百六十六話　　完

２００９・１０・３

第九百六十七話　別れの笑顔　☆

「リトアニア」
アメリカはその自分の家からロシアの家に引き戻されようとしているリトアニアに対して声をかけました。
「はい。何ですか？」
「今まで色々有り難うな！」
ロシアに担がれたまま応えてきたリトアニアに笑顔で御礼を言うのでした。これまでで最も屈託のない笑顔で。
「このゴタゴタが終わったら何時でも遊びに来てくれよ」
「は・・・・・・はい」
リトアニアは泣きそうな顔でアメリカに対して応えました。こうしてリトアニアの出稼ぎ生活は終わったのでした。そうしていつも通りといいますかまたしてもロシアのお家に戻ったのです。
「やっぱりリトアニアがいないとね」
「は、はあ」
ロシアの明るい無邪気な笑顔と言葉を受けています。あの恐怖に満ちたロシアの広いお家の中で。
「頑張ります」
「あっ、リトアニア」
「帰ってきたんですね」
その彼をエストニアとラトビアが出迎えます。ところがその二人は。
「な、何があったの二人共！？」
「ちょっとリトアニアの分まで頑張っていたらね」
「大変だったんですよ」
今にも倒れそうな状況でリトアニアに話すのです。
「それでもやっと帰ってきてくれたから」

「僕達も何とか生き残れそうです」
「生き残れそうって・・・・・・」
あらためてロシアのお家の恐ろしさを確認するリトアニアでした。
その生活に再び戻ることも自覚せざるを得ないのでありました。

第九百六十七話　　完

２００９・１０・４

第九百六十八話　エストニアの友人

第九百六十八話　　エストニアの友人

ロシアから独立できたエストニアですが独立しただけでこれからどうするかというと物凄く不安な状況でした。リトアニアは早速ポーランドが来てくれましたが彼にはそうした相手が思い当たらなかったのです。

「困りましたね。誰かいてくれるといいのですけれど」

誰がいてくれるのかと考えていたらです。目の前にある人がいたのです。

「独立したんですよね」

「あっ、はい」

フィンランドがいたのです。彼はその穏やかな笑顔で彼に顔を向けています。

「そうですけれど」

「ならこちらに来ませんか？」

こう言ってエストニアを誘ってきました。

「お祭やってまして、今」

「お祭ですか」

「よかったらエストニアさんも参加して下さい」

「けれど僕フィンランドさんのお家の人じゃないですけれど」

「そういうことは気にしなくていいですよ。お祭なんですから」

いいというのです。そしてエストニアをそのお祭に招待して。

「さあ、これからもよかったら来て下さいね」

「はい、それじゃあ」

「スーさんもいますし」

この人の名前も出て来ました。

「皆で楽しくやりましょうね」

「あの人はちょっと・・・・・ですけれど」

エストニアもスウェーデンは苦手だったりします。あまりにも威圧感が凄いので。けれどこうして一緒にいてくれるお友達が見つかったのでした。エストニアにも救いの神様はいました。

第九百六十八話　　完

２００９・１０・４

第九百六十九話　幼い頃の思い出　☆

第九百六十九話　幼い頃の思い出　☆

ロシアのお家に帰って来たリトアニア。その異常なまでに広いそのお屋敷の中を動き回って仕事しながら困り果てた顔で独り言を言っていました。

「ううん、帰ってきてからというもの寝る間もなく働きづめだよ。絶対ありゃロシアさん相当怒ってるなあ」

ロシアは顔には出しません。ただその行動に出るだけです。にこやかで素朴な笑みを浮かべながら恐ろしいことをする人なだけです。

「アメリカさんとは仲悪いって聞いてたけれど酷過ぎるよ」

これは有名なことだったりします。北極海を挟んで睨み合う形となっているからです。

「昨日も寝ていないもんなあ・・・・・」

一休みにソファーに座ります。するとすぐにうとうとと寝てしまいました。その中でリトアニアが見たものは。

「なあリト」

「だから止めてよね」

ポーランドにちょっかいを出されてそのポーランドやラトビア、エストニアと一緒に奇麗な麦畑の中で青空を見上げながら楽しくやっていた昔のことです。その昔のことを思い出しながらうとうとしています。

「だからポーランド・・・・・」

夢の中で言おうとしたところで目が覚めます。すると横にロシアが座っていました。

「ぎゃあああああ、起き抜けにロシアさんかっ、すいませんうとうとしてて」

「何の夢見てたの？」

ところが今のロシアは穏やかでした。こう尋ねてきたのです。

「い、いえそのまあふにゃふにゃしたものです」
「そうなんだ」
「え、ええまあ」
正直何されるかわからないのでびくびくしながら応対をするリトアニアです。けれど今のロシアは穏やかでした。そうしてその穏やかな中で話が続けられていくのでした。

第九百六十九話　　完

２００９・１０・５

第九百七十話　お米の好み

第九百七十話　お米の好み

欧州では大抵麦かジャガイモを食べます。それに対してアジアではお米です。中国は麦を食べる場合も多いですが大抵の人はお米を食べます。

とりわけお米に五月蝿いのは日本です。この人はそれこそ自分のところのお米しか食べません。太平洋きってのお米の作りテであるタイのお米もあまり食べようとはしません。

「口に合いませんので」

「いつもこう言われるんですよね」

日本に自分のところのお米を御馳走しようとしてもこう言って断られるので実際困っています。

「日本さんってあの粘りのあるお米しか食べないんですよ」

「あれがお刺身や納豆には一番合いますので」

それが理由です。つまり和食には日本のお米というわけです。これは考えてみれば当然のことですが。

「ですからタイさんのお米は申し訳ありませんが」

「それじゃあこれはどうですか？」

タイは少し考えてから炒飯にして出してみました。するとです。今度は日本も美味しそうに食べます。それはいけるようです。

「美味しいですね」

「僕の家のお米は日本さんのお家の料理には合わないってことですね」

このことがタイにもわかりました。

「結局のところは」

「そうなるでしょうか。少なくともこのお米ではあまりお刺身には合いません」

「僕の家の料理ってことになるんですね、僕の家のお米は」

考えてみれば当然のことです。それで日本のお家のお米には日本の料理ということです。

「それに当てはめていけばよかったんですね」

「はい、そうですね」

こうして今はタイの料理を美味しく食べる日本でした。タネがわかればどうということのないお話でした。

第九百七十話　　完

２００９・１０・５

第九百七十一話　ロシアの夢　☆

第九百七十一話　　ロシアの夢　☆

リトアニアはロシアに話しました。自分が見たその夢のことを。
「小さい頃のことっていうか。たまに見るんです」
「たまに？」
「はい、一番楽しかった頃の夢とか」
それを見るのだと。ロシアに話していきます。
「その夢みたいになったらいいなって思ってるの？」
「あっ、ですね。それは本当に夢みたいな」
（ってちょっと）
ここで自分で自分に突っ込んだリトアニアでした。言ってそれでやっと気付いたのです。
（ロシアさんに言っちゃ駄目じゃないか！危ない危ない話題変えないと）
「あっ、そうだ」
流石にこれ以上言ったら何されるかわからないので話題を変えました。
「ロシアさんには夢とかありますか？」
「うーーーん、そうだなあ」
ここでロシアは少し考えてから答えるのでした。
「話していい？」
「ぜ、是非聞かせて下さい」
（話題誤ったかも）
言ってからまた気付いたリトアニアでした。表情が強張っています。
（きっと怖いこと考えてそうだよ）
「あったかいところでひまわりに囲まれて暮らすことかな」

（あれっ、以外に可愛い・・・・・・）

リトアニアはそう思ったところで寝てしまいました。ロシアはそのリトアニアを見て自分のかわりに何故か本物のパンダを置いて静かに立ち去りました。こうしてリトアニアはこの時はゆっくりと休むことができたのでした。

第九百七十一話　　完

２００９・１０・６

第九百七十二話　幸せとは

第九百七十二話　　幸せとは

「僕はこうしていられるだけでもう満足なんだよね」

「えっ、それだけでかよ」

ロシアの数少ない友達であるフランスはロシアの今の言葉を聞いて驚きの声をあげました。何しろ彼は今はストーブのある暖かい部屋の中でウォッカを飲んでいるだけだからです。後は本があるだけでとても質素です。ウォッカと一緒に食べているのはまさにロシアの大地の味と言っていい黒パンです。本当にそれだけです。

「それで満足なのかよ」

「確かに暖かい場所がいいけれど今はこれで満足だよ」

大きな椅子に座ってそれで穏やかに笑っているだけです。

「他に何か必要かな」

「いやよ、女の子とかお菓子とかよ。あと音楽に部屋の装飾に。服だってもっとな」

「そういうのもあっていいけれど特に求めないよ」

ロシアは静かにフランスに対して答えました。

「暖かい場所とウォッカ、それに食べられたらね」

「そうか、無欲なんだな」

実はロシアはかなり無欲だったりします。その無欲さは特筆すべきものがあります。なおフランスはとにかく贅沢者です。贅沢をすれば欲が出てしまうのは自明の理です。

「それだけでいいなんてな」

「ひまわり、もっと欲しいけれど」

ロシアの花です。

「けれどないなら」

「ひまわりなら俺の家に来ればいいさ」

フランスはにこりと笑ってロシアにこう言ってきました。

「ゴッホが愛した場所があるぜ。そこに招待してやるよ」
「本当？じゃあ今度ね」
「ああ、楽しみに待ってるんだな」
こうしてフランスはロシアを自分のお家に招待するのでした。幸せは案外素朴でささやかなものなのかも知れません。

第九百七十二話　　完

２００９・１０・６

第九百七十三話　ゴッホ

第九百七十三話　ゴッホ

フランスがロシアを招待した場所はまさに一面ひまわりでした。
そのひまわり畑を見てロシアは喜びの声をあげます。
「うわあ、凄いよ本当に」
「気に入ってもらえたみたいだな」
「フランス君っていつもこんな世界にいるんだ」
「まあここはそうだな」
フランスにはそうした場所もあるのです。彼の国は欧州では広いので暖かい場所もあるのです。
「ここは食い物も美味いしな」
「いいよね、ひまわりを見ながら美味しいもの食べられて」
「御前の国じゃいつも寒い中か」
「うん、そうなんだ」
このことを少し寂しい顔で認めるロシアでした。
「昔から今もね。暖かい場所にいたいけれど」
「こうしてひまわりもあってか」
「ひまわりっていいよね」
ロシアは遠くを見るような目になって言いました。
「こうしてさ。いつも輝いていてね」
「太陽みたいにな」
「僕の国はいつも雪が降ってるから」
それこそがロシアです。いつも雪が降っていて降り積もっている。ロシアはいつもその中で暮らしているのです。
「こうした場所が本当に羨ましいよ。ねえフランス君」
「ああ。何だ？」
「また来てもいいかな」
「何時でも来いよ。ワインと御馳走も用意しておくからな」

「有り難う」
今回は珍しく素朴なままのロシアでした。彼の幸せは本当にささやかなものです。

第九百七十三話　完

２００９・１０・７

第九百七十四話　この人達とは別です

第九百七十四話　　この人達とは別です

「そうですか。ロシアさんがですか」

「それじゃあアラスカに海軍を集結させようか」

「長城から南、いや東北はもう何があっても渡さないあるぞ」

ロシアが何かするとあからさまに身構えるこの三人ですがこの人達やイギリス以外にもロシアとの関係が微妙とかいうものではない人達もいます。例えば。

「まあ僕とあの人は隣同士ですしねえ」

「色々とあったねい。忘れろっていうのはできねえ相談だな」

フィンランドとトルコです。この人達は過去本当にロシアと色々ありました。

「大変だったんですよ。もう空と陸で激戦だったんですから」

「多くは言わねえ。けれど歴史を見てくれい」

トルコに至っては自分からあえて言わない程です。彼にとってロシアは言葉にも出したくない様な相手なのです。

「だからだねい。俺が日本を大好きなのは」

「あのロシアさんを負かすなんて凄いですよ」

二人はそのうえで日本をいつも褒めるのでした。

「そうそうできるものではないねい」

「僕も日本さんみたいに強くなりたいな・・・・・って無理ですかね」

「あのですね」

台湾がそんな二人に少し引いた顔で突っ込みを入れます。顔には汗があります。

「このことで日本さんに言うと冗談じゃ済みませんから」

「おっ！？日本とロシアが一緒にいるじゃねえかい」

「何か物凄い殺気が出てますけれど」

「ですから。あの人とロシアさんの仲は今でもですから」
「いいじゃねえかい。やれやれい」
「また日本さんが勝ちますよ」
二人は日本を応援し続けます。けれど台湾は心配なのでした。何しろ若し何かあったら確実にどっちか死ぬレベルなのですから。

第九百七十四話　　完

２００９・１０・７

第九百七十五話　サウナだと

第九百七十五話　サウナだと

フランスにひまわりを見せてもらったロシアはその御礼にフランスを自分の国に招待しました。この二国は昔から何かと仲がいいのです。

そうしてまずフランスを招待したのはサウナです。二人でその熱気がこもる中に入ります。

「フランス君はサウナには入らないんだったよね」

「ああ、国にいる時は入らないな」

フランスはロシアの横に座りながら答えます。入ってすぐですが裸の身体はもう汗だらけになっています。サウナの中の温度はかなりのものになっています。

「大抵シャワーだな、今は」

「お水が硬くてあまり浸かることもできないんだよね」

「そうなんだよな。日本なんかは好きなだけ入ってるけれどな」

この辺りの違いも文化なのです。日本はお風呂でフランスはシャワーというのもです。

「サウナっていうのはな」

「どうかな、それで」

フランスに対して少し遠慮したような様子で尋ねます。

「このサウナは」

「ああ、いいもんだな」

そのお髭から汗を滴らせながらの返答です。

「こうして汗をかくっていうのもな」

「いつもこれで身体奇麗にして身体の悪いもの出してるんだ」

サウナは健康にもいいのです。ロシアが不死身なのもこれと関係あるのかどうかはわかりませんが。

「お酒もね」

「まあそれはあまりお勧めしねえがな」
流石にお酒を飲んでサウナに入るというのはフランスも賛成できませんでした。
「それでも。いいものだな」
「僕のお家に来た時は好きなだけ入っていいよ」
ロシアと二人でサウナを楽しむフランスでした。二人は久し振りに仲良く過ごしているのでした。

第九百七十五話　　完

２００９・１０・８

第九百七十六話　女は怖い

第九百七十六話　女は怖い

ロシアの古いお友達はフランスだけではありません。オーストリアさんもそうなのです。

この二人の付き合いも長いものです。それこそオーストリアさんがプロイセンと揉めだした時からの付き合いです。それ以降ずっとお友達だったのです。

「あいつがいつも後ろにいやがったんだよ」

当のプロイセンはこう言ってうんざりとした顔になっています。

「俺がオーストリアと戦っていたらよ、あいつがすぐに後ろに出て来てよ」

「それで最後まで戦えなかったんだな」

「そうだよ。俺はいつもあいつが後ろにいたんだよ」

こう相棒のドイツに対しても話しています。本当にこの二人の友人関係には悩まされてきたのです。

「七年戦争の時なんかな、エスカルゴ野郎まで出て来てな」

「あれは御前の上司が女の人を馬鹿にしたからだと思うが」

当時のプロイセンの上司フリードリヒ大王は女の人が嫌いでした。それで馬鹿にした言葉を言ったのですが当時はオーストリアもロシアも上司は女の人だったのです。そしてフランスの上司の参謀というか愛人の人も女の人でした。それでその三国を一度に敵に回してしまったのです。

「ある程度以上自業自得だったと思うが」

「それからも何かっていうとあの二国を意識してやってきたんだよ」

「複雑だな、御前の歴史も」

「そうだよ。両方共ぶん殴ってやりたかったけれどな」

プロイセンの本音です。

「結局それはできずじまいでよ、今に至るんだよ」

「そうか。それで今はロシアとオーストリアは特に仲が良くも悪くもないがそれはどう思う？」
「願ったり叶ったりだな。っていうかどっちも孤立しておけよ」
とはいっても簡単にそうはならないわけで。そうは言っても両国と付き合っていかないといけないプロイセンなのでした。

第九百七十六話　完

２００９・１０・８

第九百七十七話　互いの上司は

第九百七十七話　互いの上司は

ロシアとオーストリアさんは長い間お友達でした。それでよく一緒にフランスやプロイセンと戦ってきました。時にはロシアがオーストリアさんの上司に反抗したハンガリーをお仕置きしたこともあります。

ですが上司同士がいつも仲がよかったわけではありません。確かにどちらもプロイセンの上司は嫌いではありましたが。

ロシアの上司がエカテリーナ女帝だった時この人はドイツの方から来た人でした。それは問題なかったのですがオーストリアさんの上司であるマリア＝テレジアにかなり引け目を感じていたのです。

「あんなにいい夫を持ってしかも子供達も大勢いて」

「何かいいですよね」

ラトビアがこう言って早速上司の命令を受けたロシアにお仕置きされるのはこの時も同じです。そして女帝はずっとオーストリアさんの上司のことを考えるのでした。

「私だって。孫のアレクサンドルがいるわよ」

そしてオーストリアさんの上司の方もです。エカテリーナ女帝についてはあまりよく思っていないのでした。

「成り上がり者でしかも男の人と」

こう言うのです。

「あんなふうになってはいけません」

この人は家庭を大事にする人でした。ですから女帝を好きではありませんでした。お互いによく思っていなかったのです。

「女帝は僕の為に凄くいいことをしてくれる人なんだけれど」

「マリア＝テレジア陛下あっての私ですが」

ロシアもオーストリアさんもそんな上司達の状況には少し困っていました。確かに両国の関係はいいのですがそれでも上司同士がそ

ういう感情を持っているとやはりやりにくいのです。
「参ったなあ。もう少し仲良くしてくれないと」
「私としても困るのですが」
けれどこの二人の仲は悪いままでした。この関係はどうにもならないのでした。
そんな上司もいた二人でした。それでも長い間仲はよかったのです。

第九百七十七話　　完

２００９・１０・９

第九百七十八話　落ち着いたら

第九百七十八話　落ち着いたら

ロシアには一つ面白い癖があります。それは自分の体調がよくなるとすぐにフランスとオーストリアのところにお邪魔するのです。本当にそれはいつものことです。

「おお、また来たのか」

「ようこそ」

そしてフランスもオーストリアさんもそんなロシアを快く迎えるのです。そうしてすぐにお友達になるのです。

「いい奴だぜ。素朴で力もかなり強いしな」

「音楽がよくわかっています。料理も上手ですし」

二人のロシアへの評価はこうしたものです。少なくとも日本やアメリカや中国が言う言葉ではありません。

「あいつと友達になれると俺も調子がいいんだよな」

「やはり付き合いは長いです。波長が合いますね」

そして同時にイタリア兄弟にもしきりに声をかけますがこちらには怖がられています。ですが怖がるだけで済む方がまだ幸せだったりします。

「いやあ、やっぱりあの人達とお友達になってる時が一番いいよね」

「そうですよね、本当に」

ロシアの体調がいい時も悪い時も働かされるリトアニアは暗い顔になっています。

「それで明日はどちらに？」

「ドイツ君とお話しようかな。それともウクライナお姉ちゃんにしようかな」

「・・・・・そうですか」

どちらもかなりあれです。ロシアとの関係はかなり微妙です。下手をすればまた何があるかわかりません。

「それじゃあ明日は」
「ああ、ベラルーシが来たらいないって言っておいてね」
さりげなく妹は避けています。落ち着いても苦手な相手はいるようです。例えロシアであってもです。けれど周りが大変なのは変わらないのでした。

第九百七十八話　　完

２００９・１０・９

第九百七十九話　トマトもジャガイモも

第九百七十九話　　トマトもジャガイモも

今日本とドイツとイタリアのいつもの三人で御飯を食べています。お握りにパスタにジャガイモ等がふんだんにあります。その中でふと日本が言いました。

「ところでこのトマトもジャガイモも食べるようになったのは最近ですよね」

「そうだよね、本当にね」

「今までなかったことだな」

イタリアが作ったパスタの中にはトマトがあるのです。やっぱりイタリアの料理にトマトは欠かせません。

「アメリカのところが発見されてからなんだよね」

「それまでは食べたこともなかった」

「それを考えれば本当に最近ですね」

日本もそのことをよく思うのでした。

「私もジャガイモだけでなくサツマイモを食べるようになったのはごく最近のことですしね」

「俺はプロイセンが食べているのを見て食べるようになった」

ドイツがジャガイモを食べるようになったのはそれからだったのです。そしてそれはイタリアも同じなのでした。彼が言うにはです。

「俺もさ、スペイン兄ちゃんに教えてもらってからだったんだよね」

「私はサツマイモは上司に勧められて食べるようになりましたが」

ジャガイモは何か気付いたらという感じだったのです。

「どうもその辺りはよく覚えていないところがありますね」

「いいんじゃない？美味しいし」

イタリアはかなり簡単に考えて言いました。

「それで」

「全く御前はいつもそうして気楽だがな」

そんなイタリアに対してドイツが小言を言います。そんないつもの日常を過ごしている三人なのでした。

第九百七十九話　　完

２００９・１０・１０

第九百八十話　虎が煙草を

第九百八十話　虎が煙草を

「それだけ大昔の話だったんだぜ」
韓国が皆に対して話しています。何か起源がどうとかそういう話ですがとりあえず皆に対して話しています。
「そう、虎が煙草を吸っていた位の昔なんだぜ」
「何っ！？」
「煙草！？」
イギリスとフランスがここでいつもの様に韓国の言葉に目を顰めさせます。目の中の瞳がなくなって眉も目と同じ形になっていて実に不吉な感じです。
「御前煙草はアメリカのところから来たやつだろうがよ」
「御前の国の昔ってのはそんな最近なのか？」
とりあえず虎が煙草を吸うかどうかは別問題でした。それは置いておいてです。
「何かそれって話が矛盾してるだろうがよ」
「どうなってるんだよ」
「煙草はずっと昔からあったんだぜ」
けれど韓国はいつもの様に二人の言葉を自然にシャットアウトしてそのうえで言うのでした。
「それこそ。俺の家では檀君の頃からあったんだぜ」
「嘘つけ、五千年前からかよ」
「そんな訳あるかよ。大体御前幾つだよ」
「俺か？一万歳なんだぜ」
いきなり仙人になってしまう韓国でした。
「中国の兄貴よりずっと年上なんだぜ。世界のありとあらゆる文明も俺が起源なんだぜ。煙草も最初から知っているんだぜ」
「最早何が何だかわからねえよ」

「っていうか五千歳から九千歳になってもう一万歳かよ」
二人の突っ込みは続きますが韓国には一切効果がありません。二人ですらどうにもならない相手、ポーランドよりも遥かに強烈なのが存在しているのでした。

第九百八十話　完

２００９・１０・１０

第九百八十一話　食べる前から

第九百八十一話　食べる前から

以前ドイツはイタリアが弱い原因はトマトを食べるせいだと思っていました。ところが彼がトマトを食べるようになったのは最近のことです。イタリアはずっと弱かったのです。

「子供の頃のあいつか？」

「めちゃ弱かったで」

フランスとスペインがその時のことを証言します。

「もうよ、ちょっとこづいただけでよ」

「力も弱かったし泣き虫やったで」

今と全然変わりません。ちなみにそれはイタリアがトマトを食べる前のお話です。子供の頃イタリアはトマトを食べたことがなかったのです。

「あんまり可哀想だったんで俺のところに入れてやるつもりだったんだよ」

「俺の家の人間があそこの上司やった時もあったんやけれどな」

スペインが言うのはチェーザレという人のことのようです。とにかくその頃からイタリアはお話にならない位に弱かったことは間違いありません。

「もう全然やっだったんだよ」

「俺等の他にもオーストリアにぼろくそやられとったわ」

そんな状況だったのでした。ドイツはその頃のことは何故か全く覚えていないのですがそれでもそのことを確かめてから言うのでした。

「つまりずっと弱かったのか」

自分の横で能天気にそのトマトとチーズがたっぷり入ったマカロニを食べているイタリアを見ながら言いました。

「こいつは。あのローマ帝国の孫なのにか」

「ああ、ドイツも食べる？」
　イタリアは能天気な調子でドイツに自分が食べているマカロニを勧めてきました。トマトだけでなくオリーブもガーリックも効かしたとても美味しそうなのをです。
「ほら、とても美味しいよ」
「では貰おうか」
　今はそのイタリアの勧めに従うドイツでした。しかしどうやらイタリアの弱さの原因はトマトではなかったようです。

第九百八十一話　　完

２００９・１０・１１

第九百八十二話　ローマ帝国は

第九百八十二話　ローマ帝国は

ローマ帝国はとても強かったです。けれど当時のローマの食事といいますと。

「ああ、そうだったな」

「うん、そうだよ」

イタリアはその当時のローマ帝国の食事をドイツに見せて応えています。日本も一緒です。

「この頃はパスタはなかったな」

「それで薔薇とかも一杯食べていたんだ」

見れば食事に薔薇が散りばめられています。紅や白でみらびやかなまでです。

「それにこれは」

「ああ、それ鶯の舌なんだ」

日本が気付いたあるものに対しても答えるのでした。

「他には孔雀の脳味噌もあるし駱駝の踵とかもあるよ」

「かなり変わったものを食べていたのだな」

ドイツはそうしたものを見ながら述べました。

「それにワインは水で割ってか」

「そうなんだ。ただね」

ここでイタリアは一つだけ注意するようにして二人に対して言うのでした。

「鉛の食器は使ってないからね」

「鉛！？」

「それを食器にですか」

「お爺ちゃんは鉛の杯とか鍋を使うことが好きだったんだ」

その頃ローマ帝国は鉛を使うことを好んでいたのです。イタリアはこのことをよく知っていました。

「とても危ないからね。それはね」
「そうか、使っていないのだな」
「それだけは」
「そうだよ。それ以外は全部普通のお爺ちゃんの頃の食事だよ」
鉛のことを話したうえで二人にまたローマ帝国の食事を勧めるのでした。それはかなり美味しいものでした。

第九百八十二話　　完

２００９・１０・１１

第九百八十三話　絶対に治らない

「俺前から思ってたんだけれどな」
「んっ、何だ？」
イギリスがうんざりしきった顔で自分と同じ様にうんざりしきった顔になっているフランスに対して声をかけてきました。
「イタリアもポーランドもあまり賢いって言えないよな」
「ああ、まあそうだな」
二人共楽天的で何も考えていません。その結果としてドイツやリトアニアが困っているのですがそれでも二人で仲良くやっていけてはいます。それはどちらもです。
「昔からだよな、あいつ等」
「御前もよく知ってることだろ、それは」
フランスも言葉を返します。欧州にいればよくわかることです。
「もう昔からだからな」
「そうだよ。それでだよ」
ここで話は本題に入るのでした。
「あの馬鹿も昔からなんだよな」
「最近とりわけ悪化したらしいがな」
うんざりとした顔をそのままにして前を見るのでした。それも二人一緒にです。
「ずっと前からな」
「ってことはだ」
イギリスは今のフランスの言葉を受けてある結論を出したのでした。
「あいつは悪化することはあってもましになることは絶対にないんだな」
「治ることともな」

「くそっ、まだ任期が終わらねえのかよ」
今日もうんざりとした顔で韓国を見ている二人でした。相変わらず仕事は何もしないで自分の宣伝や起源の主張ばかりしている生徒会長はさらにヒートアップしています。

第九百八十三話　　完

２００９・１０・１２

第九百八十四話　唐辛子もでした

第九百八十四話　　唐辛子もでした

「それで唐辛子はその頃に俺の国に入ったんだぜ」

「ちょっと待ちなさいよ」

韓国のいつもの自分の歴史語りに突っ込みを入れたのは台湾です。

「その頃ってアメリカさんはっきりと見つかってないじゃない。唐辛子はあそこから来たんじゃない」

「いや、あったんだぜ」

韓国は言い張りますがそれでも台湾の言っていることが事実です。実際のところ韓国が唐辛子を知ったのは結構最近のことなのです。凄く意外ですけれど。

「ちゃんと俺の国にあったんだぜ」

「確かあんたが唐辛子を知ったのって」

台湾は韓国に突っ込みを入れ続けます。何と韓国を抑えられる人がいたのです。

「あれでしょ。日本さんと戦争した時に日本さんが置いていったんじゃない」

「あの戦争は大変だったんだぜ」

その戦争のことを思い出した韓国はいつもより三割増しでハイテンションになってきました。

「日本が俺の国の偉大な文明を全て破壊してしまったんだぜ。だからまた昼飯おごってもらうんだぜ」

「偉大な文明？」

「そうなんだぜ。半万年の歴史を誇りユーラシア全土から北米に至るまで影響を及ぼした偉大な文明なんだぜ。日本はそれを完全に破壊したんだぜ」

「あんたそれって」

さしもの台湾も今の韓国の話には唖然となりました。けれども何

とか気を取り直してそのうえで韓国に対して突っ込み返したのでした。
「日本さん滅茶苦茶凄いじゃない。それだけの文明を根絶したなんて」
「日本は凄くないんだぜ。凄いのは俺なんだぜ」
「あんたの話していること聞いていたらいつも日本さんが超人に見えるわよ。確かにいい人だけれど」
さりげなく本音を見せる台湾でした。とにかく今日も相変わらずのこの二人です。

第九百八十四話　　完

２００９・１０・１２

第九百八十五話　兄弟なのに全然違う　☆

第九百八十五話　兄弟なのに全然違う　☆

イタリアの兄弟がまだ小さかった時のことです。スペインがイタリア弟に対して声をかけました。

「よお元気かイタちゃん」

「いらっしゃいスペイン兄ちゃん」

まずは明るい挨拶からです。ここからスペインはイタリア弟に対して言うのでした。

「おすそ分けやけどトマト食うか？」

「持って来てくれたんだ。うん、食べるよ」

こうしてイタリア弟はスペインがくれたトマトを彼の膝の上で食べはじめました。

「兄ちゃんの作るトマトは凄く美味しいね」

「お世辞言っても何も出んで。そやけど」

イタリア弟を見ながら思うのでした。

「イタちゃんホンマ素直で可愛いわ」

イタリア弟との時間を満喫してから家に帰りますと。イタリア兄が仕事の途中で寝ていました。

「何やってんねん御前は！」

「ああん、何だ？」

「何だとちゃうわ何だとは！」

こう言って怒りますが声が大きいだけです。

「何で御前はいつもこうなんや！ちょっとは仕事覚えんかい！」

「仕事って何だ？」

「仕事もわからんのか！散らかしまくてからに！片付けるのは俺やぞ！」

「じゃあ片付けろ」

本当に全然何もしません。そうして寝起きでお腹が空いたのかそ

の場でトマトをむしゃむしゃとしだします。それを見てスペインは思うのでした。

「こいつスペイン語の前に礼儀作法仕込んだろうかいな」

とはいっても何もしません。何故か彼には甘いスペインなのです。

第九百八十五話　　完

２００９・１０・１３

第九百八十六話　とにかくトマト

第九百八十六話　とにかくトマト

スペインとイタリア兄弟はトマトが大好きです。とにかく料理に使って使って使っていきます。もうパスタなんかは真っ赤になっています。

「おかげで目がちかちかするな」

「けれど美味しいよね」

スパゲティを前にしているドイツに対して言うイタリアでした。

「こうしてトマトをたっぷり入れると」

「そうだな。確かに美味い」

ドイツも食べてみて言いました。

「味もな。いいものだ」

「だからどんどん食べてよ」

イタリアはサラダにもチーズを使った料理にもトマトを使っています。ドイツはそれを食べていくのでした。かなり上機嫌にです。

「もうさ、ドイツにも食べてもらいたくてね。今日はたっぷり作ったんだし」

「俺の為か」

「うん、そうだよ」

こうドイツに言うのです。

「ドイツにもトマトの美味しさわかってもらいたくてね」

「そうだったのか。それでか」

イタリアの今の言葉を聞いて少し考える顔になるドイツでした。

そうしてそのうえで言うのでした。

「済まないな、本当に」

「謝る必要なんてないよ。俺とドイツの仲じゃない」

イタリアは明るくドイツに対して言いました。

「ほら、だからどんどん食べてよ」

「ああ、それじゃあな」
こうして二人で楽しくトマトを使った料理を楽しむ二人でした。
トマトもまた二人の絆を作っていました。

第九百八十六話　　完

２００９・１０・１３

第九百八十七話　ロマーノ君の里帰り　☆

第九百八十七話　ロマーノ君の里帰り　☆

ロマーノが里帰りする時です。スペインが気になってついつい声をかけてきました。

「ほんまに一人で大丈夫なんか？」

「ああ、三日程度帰って来る」

こうスペインに対して述べるロマーノでした。

「ちょっとな」

「俺がついてこか？」

彼が心配なスペインはこう声をかけました。

「何やったらな」

「大丈夫に決まってるだろうが」

こう言って無理に帰っていくロマーノでした。けれどその道を見てとても安心できないスペインでした。何しろスペインからロマーノの実家までにフランスがいて神聖ローマがいてオーストリアさんとハンガリーが周りにうじゃうじゃいるのです。しかも口にするのも恐ろしい相手もいます。

「大丈夫なわけないやろが」

スペインはすぐにこう結論を出しました。

「どう考えてもこの帰り道は危険やって」

今から実家に帰ろうとするロマーノを見ながら呟きます。

「只でなくてもロマーノってすぐに油断するし」

この辺りはイタリアも同じです。やっぱり兄弟です。

「やっぱ家に着くまで俺がついてかなあかんか」

こう思って前に出るとです。そこにいる人に当たってしまいました。

「あっ、すいません・・・・・・」

謝ろうとします。しかしそこにいたのは。

「ロマーノ可愛いよロマーノ」
「げっ、御前は」
熱い目と荒い声でロマーノを見ているフランスでした。
「俺のものになればいいのに」
何とまだ諦めていなかったのです。そうしてフランスとスペインはそれから何と四回も戦争をすることになったのでした。

第九百八十七話　完

２００９・１０・１４

第九百八十八話　フランスの喧嘩相手

第九百八十八話　フランスの喧嘩相手

「昨日はオーストリアとやり合ってよ。大変だったんだよ」
「ああ、そういえば君戦場にいたね」
ロシアがフランスの話を聞いて応えています。この二人の仲は今も健在です。今はロシアのサウナの中で汗をかきながらお話をしています。
「オーストリアさんに負けてたよね」
「あれはたまたま運が悪かっただけなんだよ」
自分ではこう言い繕います。
「そういう時もあるさ」
「それでその前の日は？」
「スペインとな」
一昨日はスペインと戦争していたのです。
「まあ引き分けってことにしておいてやるよ」
「オーストリアさんとスペイン君って上司が同じ家の人だしね」
それでフランスは長い間東と南から挟まれていたのです。それが彼にとっては非常に辛かったのです。戦争をしたら必ず挟み撃ちにされましたから。
「そうなって当然だよね」
「ったくよお、あいつ等何かっていうと俺につっかかってきてよ」
「それで今日は何処となの？」
ロシアは素朴にフランスに尋ねます。
「三日前は確かハンガリーさんとだったけれど」
「ああ、あの女とは今日は何もなしだよ」
あくまで今日は、です。本当に敵の多い国です。
「今日はイギリスとだよ。あいつにだけは負けるわけにはいかねえ」
「大変なんだね」

ロシアはそれを聞いてぽつりと言いました。
「それじゃあ気付けにウォッカでも飲んでよ」
「ああ、悪いな」
サウナでお酒をがぶ飲みです。それでたっぷりと汗をかいてからイギリスとの戦争に向かいます。その結果は言うまでもないものでした。

第九百八十八話　　完

２００９・１０・１４

第九百八十九話　フランスは欲張り　☆

第九百八十九話　フランスは欲張り　☆

「また御前かい！」
「げっ、スペイン！」
いきなり掴みかかってきたスペインに対して驚きの声をあげるフランスでした。胸倉を掴まれてしまいました。
「これでもう四回目やぞ！」
「だってイタリア欲しいんだもん！」
こう言って何としても諦めないのでした。驚いたことにこの人はロマーノだけでなくイタリア兄弟をどちらも欲しいのです。
「全く何度締めたら懲りるんや！」
そんなことを話している間にロマーノは二人に気付いてしまいました。それですぐに走り去ってしまったのです。
「御前のせいで見つかってしもうたやろが！」
「俺のせいじゃねえよ！」
そんなことを言ってももう手遅れでした。ロマーノは逃げ去ってしまってそのうえで二人が来ない場所にまで行ったのでした。
「何なんだよ、あいつついて来やがったのかよ」
そのことが嫌だったのです。
「何であいついっつも俺につきまとうんだ、畜生め」
そしてその理由を考えるのですが。
「あいつもやっぱり爺ちゃんの遺産目当てなんだろうな」
暗い顔になって言いました。
「だろうな。俺にあるのは爺ちゃんが残してくれた遺産位だし」
自分のことについて考えてしまうのでした。
「俺自身は戦っても弱いし手だってそんなに器用じゃないし」
考えれば考えるだけ暗くなってしまいます。
「何やってもヴェネチアーノには絶対に勝てないしな」

暗くなる一方でした。ロマーノはその中で一人沈んでいくのでした。

第九百八十九話　　完

２００９・１０・１５

第九百九十話　ドイツでも

第九百九十話　　ドイツでも

イタリアも二人で一国ですがそれはドイツも同じです。東のプロイセンと西のドイツ、この二人で一緒なのはビスマルクが上司だった頃からです。

一時離れ離れになっていましたが今は違います。二人に戻ってお互い何とかやっています。

「俺達はまあ仲がいいよな」

「そうだな。何故かお互い文句を言うつもりにはならないな」

ドイツがプロイセンの言葉に応えます。やっぱりこの二人は仲がいいです。

「それでだ、相棒よ」

「どうしたんだ？」

「イタちゃんとこは俺達みたいに上手くはいってないみたいだな」

「そうだ。困ったことにな」

イタリアのことになると親身になる二人でした。

「ロマーノも悪い奴じゃないんだがな。何故か俺達を嫌ってるしな」

「そうだ。だからどうしようもない」

二人の忠告を聞かないのです。

「どうしたものかな」

「そうだよ。それで何かいい考えがあるか？」

「あってもそれを実行に移すことはできん」

それが問題なのでした。

「果たしてどうするべきかも思いつかんしな」

「参ったな。俺も何とかしたいんだがな」

「全く。困った奴等だ」

ここで溜息をつくドイツでした。

「手がかかるな」

「それがまたいいんだけれどな」
そうは言っても絶対にイタリアを見捨てない二人でした。どうも昔からそうみたいですが。

第九百九十話　　完

２００９・１０・１５

第九百九十一話　考えてみると　☆

第九百九十一話　考えてみると

☆

「考えてみればそうか」

ロマーノは暗い考えを続けていました。

「俺にあるのは爺ちゃんが残してくれた遺産位だからな。昨日だってな」

そのスペインのお家を混乱に陥れたそれです。

「掃除しようとしたらいきなり本棚ぶっ壊しちまったし」

実はそうだったのです。彼は善意でしたのですがそれが裏目に出てしまったのです。世の中生きていればこうしたことは誰にもままあることでありますが。

「それに昔から絵を描いても貿易してもいつもあいつの方が上手いんだよな。それに俺全然爺ちゃんに似ていないしな」

弟に対して強いコンプレックスがあるのです。これは決して口には出しませんけれど。

「そんな俺なんてな。誰もな」

そんなことばかり考えていますと木の枝から小鳥のさえずりが聞こえてきました。実際にそちらの方を見てみますと確かに小鳥がいました。

「あっ、御前笑うなよ！」

ロマーノはその小鳥に対して文句をつけました。

「鳥みてえな顔してんじゃねえよ！」

そしてかなり理不尽なことを言います。

「くそっ、そんな高いところから見下しやがって！」

けれど小鳥はその表情を変えません。当然のことですが。

「何で小鳥にまで馬鹿にされるんだよ、俺は」

こう言われても小鳥には訳がわかりません。ただ首を傾げさせる

だけです。
　ロマーノはそんな小鳥を見て気分が少しだけ落ち着きました。首を傾げるその動作を見て幾分か癒されたのです。やはりこの動作は彼にとっても可愛いものだからです。
「まあいいか」
　こう言って小鳥を許してあげることにしました。とはいっても小鳥には何が何なのかわからないことでありますが。

第九百九十一話　　完

２００９・１０・１６

第九百九十二話　マカロニウエスタン

第九百九十二話　　マカロニウエスタン

イタリアも西部劇を作っています。これが意外なまでに面白い出来だったりします。少なくとも雰囲気はかなり出ています。

けれどイタリアにはアメリカの西部みたいな場所はありません。それを何処で撮影しているかといいますと。

「それじゃあスペイン兄ちゃん今日も場所借りるね」

「ああ、好きなだけ使ったらええよ」

スペインは気さくにイタリアに応えます。イタリアはわざわざスペインまで来てそのうえで西部劇の撮影をしているのです。

撮影は順調です。今回もいい作品ができそうです。

そうして撮影が終わるとイタリアとスペインは一緒のテーブルに座って。御飯を食べるのでした。

「それじゃあワインを出してね」

「パエリア出すで」

「俺はこれ持って来たんだ」

マカロニでした。それにトマトとガーリックで味付けしたかなり美味しそうなものを出してきたのです。やっぱりイタリアは料理上手です。

「マカロニ好きだよね、兄ちゃんも」

「ああ、大好きやで」

スペインは気さくに答えます。

「イタちゃんの作ったのは何でも美味しいしな」

「兄ちゃんの作ったものもね。かなりだよ」

楽しく談笑しながら御飯を食べます。そうしてそれが終わってからまた撮影です。こうして楽しく撮影を行うのでした。

イタリアは西部劇をこうやって作っています。本当に楽しくです。

「そうか、スペインで撮影していたのか」

「そうだよ。中々雰囲気出てるでしょ」
「確かにな。面白いしな」
ドイツも素直に認めることでした。イタリアの西部劇も中々面白いのでした。

第九百九十二話　　完

２００９・１０・１６

第九百九十三話　よりによって呼んだのは　☆

第九百九十三話　　よりによって呼んだのは　☆

フランスはこの時物凄く敵の多い国でした。それは長い間そうだったのですけれどこの時はイギリスだけでなくオーストリアさんも敵でしたしスペインもでした。そのスペインに負けたフランスはとても悔しかったのです。

「くそっ、最近あいつ調子に乗り過ぎだぞ」

「それはどの国のことですか？」

「スペインだよ、今度はな」

こうお家の人にも答えます。

「あいつにまた負けたんだよ」

「またですか」

「そうだよまただよ」

かなり忌々しげな口調になっています。やっぱり怒っています。

「あいつによ。こうなったら奥の手を使うか」

「奥の手ですか」

「そうさ、あいつを呼んでやるんだよ」

「あいつとは？一体誰ですか？」

お家の人はそう言われてもわかりません。それまでの会話ですとあいつとはスペインのことを指していましたが何しろその人に対する助っ人なのですから。

「誰でしょうか、本当に」

「すぐにわかるさ。よし、ピエール」

早速小鳥を一羽出してきたのですた。

「行け、いいな」

何はともあれ賽は投げられました。こうしてフランスは助っ人を呼んだのです。

「あいつだけじゃねえ。オーストリアもこれで動けなくなるからな」

ぼろぼろになっている顔で一人笑うフランスでした。何はともあれまた一人出て来るのでした。

第九百九十三話　　完

２００９・１０・１７

第九百九十四話　何人も出て来ます

第九百九十四話　　何人も出て来ます

フランスはいつもイギリスと喧嘩しています。なお長い間イギリスと喧嘩するのと同じ位オーストリアさんとも喧嘩ばかりしていました。

「上司同士がそもそもかなり仲が悪かったですね」

「御前の上司が悪いんだよ」

フランスはこうオーストリアさんに対して言い返します。相変わらずの減らず口です。

「大体よ、ベルギーの辺りは俺のテリトリーなんだからな」

「さて、そうだったのでしょうか」

そう言われてもオーストリアさんはフランスとは違う認識です。オーストリアさんにとっては当時のベルギーはこの人のものでしたから。

「貴方は他にもイタリアに介入してきたり三十年戦争の時も介入してきましたね」

「御前その後で俺とも戦争したよな」

横からイギリスが参戦してきました。

「スペインの上司決める戦争じゃ俺とオーストリア一緒に相手にしてたよな」

「何で御前等一緒になって俺に戦争してきたんだよ」

これまた実に身勝手な言葉です。

「おかげで負けちまったじゃねえかよ」

「スペインの上司は貴方のお家の方になったのですからそれでよしとしなさい」

「あの時の御前は一人勝ち過ぎたんだよ」

それでへこまされたのです。フランスの栄光は案外短かったのです。

「その後もナポレオンが出て来ましたね」
「あいつには手こずったな」
「その時も二人で向かってきやがって」
フランスはその時のことも思い出して忌々しげな顔になります。
「そんなに俺が強くなるのが嫌だってのかよ」
「はい」
「御前が弱くなるんなら何だってしてやるよ」
本当に敵の多いフランスです。一度自分を見詰めなおしてその原因を考えた方がいいのかも知れません。

第九百九十四話　　完

２００９・１０・１７

第九百九十五話　仮面の男　☆

ロマーノは水を飲もうとしながらまた考えていました。
「これから俺どうしたらいいんだろうな」
やっぱり暗い考えです。しかしその暗い考えは突如として中断させられてしまうことになりました。
その後ろにいきなり出て来たのは。水面にその姿がはっきり映っています。
「何だ・・・・・誰だよおい！」
慌てて後ろを振り向きます。
「危ねえな、何するんだこの野郎！」
「別に斬るつもりじゃねーーーって」
その仮面の男はロマーノに対して言います。
「焦んねえでくれやい」
「誰だよ御前は！」
ロマーノはその仮面の男に対して抗議します。
「怖いぞ畜生！」
「全くロマーノの奴は」
その頃スペインはまだロマーノを探していました。
「ほんまに何処に行ったんや」
あちこち探しているのでした。
「一人じゃ危ないっちゅうのに」
「ひぎゃあああああああっ！」
「あの声は！？」
ロマーノの叫び声でした。そしてそちらに行くと。
仮面の男がロマーノを捕まえていました。
「何だい随分簡単に捕まっちまったな」
「畜生離せ」

ロマーノは完全に捕まって襟首を掴まれています・
「呪うぞこの野郎」
「こりゃ愉快だな。大漁大漁」
果たしてこの男は誰なのか、スペインにとって最大最強の敵が姿を現わしたのでありました。

第九百九十五話　　完

２００９・１０・１８

第九百九十六話　双頭の鷲

第九百九十六話　双頭の鷲

オーストリアさんとスペインはかつて同じ上司の下にいました。
それで今も何かと縁があったりします。
「思えば貴方とは長い付き合いですね」
「ほんまやなあ」
ですがその個性はそれぞれ全く違っています。オーストリアさんはまさに貴公子ですがスペインはおおらかです。実に対称的であります。
「御前とはあの頃から仲ええからな」
「多少はいざかいもありましたがね」
「最初何か生真面目な奴が来たって思たんや」
スペインにしてみたらオーストリアさんはそうした相手なのでした。
「俺がロマーノ引き取って御前がイタちゃんやったしな」
「貴方はイタリアが欲しかったのでしたね」
「そや。けれどロマーノもあれでや」
そのロマーノの話をするスペインでした。
「ええとこあるさかいな」
「随分と手がかかっていたようですが」
「それがまたええんやて。それにしてもあいつも」
ここでスペインはさらに言いました。
「あれやな。トマトとオリーブとガーリック大好きやな」
「イタリアもですよ。その辺りは貴方の影響でしょうか」
「そやな。そういう御前はドイツの影響は受けてへんねんな」
「ドイツの方が影響を受けるべきですし」
何気にドイツへの対抗意識も見せています。
「しかし。ドイツはドイツですから」

「そうか。御前のとこは結構はっきりしてるんやな」
こんなことを話していました。そんな二人なのでした。

第九百九十六話　　完

２００９・１０・１８

第九百九十七話　その男トルコ　☆

第九百九十七話　その男トルコ　☆

スペインもその彼を見ました。何と彼は。
「げっ、トルコ！」
その時トルコはアジア、アフリカ、ヨーロッパの三つの大陸にかけて広大な領土を持ち圧倒的な軍事力で多くの民族を支配していました。まさに向かうところ敵なしでした。
スペインにしても絶対に相手にしたくありません。恐ろしい強さなのは言うまでもないからです。
「ど、どないしたらええんや」
物陰に隠れながら必死に考えます。
「このままやとロマーノが。けれどな」
そのトルコの圧倒的な強さを思うとです。
「あいつは敵にしたくないしな。フランスとトルコやったらや」
軍事力も何もかもが比較になりません。何しろこの時のトルコは欧州全土を合わせたのと同じ位の強さを持っていると思われていたからです。
それで考えているとです。そのトルコに捕まっているロマーノがめそめそしながら言うのでした。
「畜生スペインの野郎」
彼に対する愚痴でした。
「助けに来いよ。来いって畜生」
「ロマーノ・・・・・」
そのロマーノの声を聞いてスペインは思うのでした。
「いつもああ素直やと可愛いんやけれどな」
そうは言ってもロマーノはロマーノです。とにかくロマーノを巡って恐ろしい相手を敵にしようとしていました。
「死ぬかも知れんな、俺」

スペインはこうも思いました。
覚悟を決める時が近付いていました。さあスペインはどうするのでしょうか。

第九百九十七話　　完

２００９・１０・１９

第九百九十八話　トルコの強さ

第九百九十八話　トルコの強さ

トルコの強さは圧倒的でした。それは日本も聞いていました。

「トルコさんは凄い方なのですね」

「おいおい、よせやい」

大好きな日本に褒められてトルコも上機嫌です。

「おめえに言われたらこっちも気恥ずかしいじゃねえかい」

「いえ、本当にです」

日本は心からトルコを凄いと思っています。そしてそれを言葉にはっきりと出しています。

「軍事力だけでなくその文化も」

「そう言うねい。ほら、これやるねい」

言いながらチューリップを出してきました。日本へのプレゼントです。

「俺の大好きな花でい。やらあ」

「あっ、有り難うございます」

そのお花を受け取った日本も微笑みます。

「トルコさんはチューリップもお好きなのですか」

「好きだねい。花の中でも一番だねい」

好きだというのです。

「日本も花は好きだろ？あの桜はいいねい」

「はい、大好きです」

日本はまた微笑んでトルコのその言葉に応えます。

「何でしたら今度うちに来て下さい」

「おっ、本当かい？日本に来ていいのかい？」

「どうぞ。是非四季の花を御覧になって下さい」

トルコを自宅に招く日本でした。二人の仲はどちらかというとトルコが一方的に日本が好きなのですが日本もまんざらではありませ

ん。もっとも日本の側にはいつもあの二人がいたりしますが。

第九百九十八話　　完

２００９・１０・１９

第九百九十九話　スペイン参上　☆

第九百九十九話　スペイン参上　☆

「離せ！出せ！」
トルコに捕まったロマーノは檻のある車の中に入れられてしまいました。そこから騒いでももうどうしようもありませんでした。
「こうも簡単に南イタリアがあっさり捕まるとは思いませんでしたね」
「まあ何だい」
トルコは少し上機嫌な様子でお家の人の言葉に応えています。
「それはひとえに俺が強いからだな」
「確かに」
「牛、牛！」
しかしここで遠くから叫び声が聞こえてきて。そうして出て来たのは。
本当に牛でした。何と車に体当たりをして檻を完全に破壊してしまいました。
「何でい、何処のどいつだい！？」
「俺や！」
こう言って出て来たのは。
「ちょっと御前待たんかい！人の保護国に何やっとんじゃ！」
「誰だてめえは！」
トルコはその彼に対して問い返します。
「何かひょろっちいなおい！」
「御前初対面の人間にそれはないやろが」
彼はまずそこに突っ込みを入れます。そうして名乗った名前は。
「情熱の国スペインや！」
「てめえか、あの新大陸を持っているってのは」
「そや、勝手にロマーノを御前の領土にするのは俺が許さへんぞ！」

こうして彼はトルコの前に立ちはだかりました。これが彼等の出会いでありスペインにとっては生傷だらけになるはじまりでありました。

第九百九十九話　　完

２００９・１０・２０

第千話　トルコの入るスペース

第千話　　トルコの入るスペース

ある日トルコはいつも日本の側にいる台湾と韓国に声をかけました。

「おいてめえ等」

「ちょっとはスペース空けるとかそういう気は起こらねえのかい？」

「スペースって何がですか？」

「聞いたことのない言葉なんだぜ」

二人はトルコのその言葉にきょとんとした顔になります。

「私達別に何も占領してませんけれど」

「それで何で空けろとか言うんだぜ」

「てめえ等がいつも日本の側にいるから俺があいつと話できないんでえ。何とかなんねえか？」

「何とかって言われましても」

「俺は別にあいつとはいつも一緒にいないんだぜ」

二人には自覚のないことでした。そう言われてもこう返すだけです。

「トルコさんも日本さんとお話したいんでしたら」

「何でい？いていいっていうのかよ」

「はい、そうしたらどうですか？」

台湾はこうトルコに提案してきました。

「三人で」

「俺は日本とサシでいたいんでい。それにしてもてめえ等何でいつも日本の側にいやがるんでい」

「まあ日本さんには昔からよくしてもらっていて。御縁があってのことですけれど」

「俺はあんな奴大嫌いなんだぜ。けれど俺のいるところにたまたまあいつがいるんだぜ」

「とにかくそこからどく気はねえってわけかい。面倒な奴等だぜ」
トルコはそのことはよくわかりました。何があっても日本の側から離れようとしないこの二人のことは。それで納得するしないは別のお話でありますけれど。

第千話　　完

２００９・１０・２０

第千一話　トルコとスペイン　☆

スペインはトルコの前に立ちはだかりました。その彼に対してトルコは仮面ですが眉を顰めさせて言いました。
「いいじゃねえか、ちょっとばっかしよお」
「あかん、絶対にあかんわ」
スペインはこう言って引こうとしません。彼にも意地があります。
「とにかくや。ロマーノやその家に攻め込む様なことがあったら」
剣を抜きます。そしてもうロマーノは牛の背中に保護しています。
「俺が先に御前のことボコボコにしたるわ！」
「それは宣戦布告っつーー意味かい！」
今のスペインの言葉を聞いたトルコは不気味な笑顔を浮かべてきました。
「俺も元々欧州全土を攻めるつもりだったしついでにスペインも手に入るって考えりゃお得な話だわなあ」
何時刀を抜くかわかりません。手の動きも不気味です。それにしてもトルコも物凄いことを言います。流石と言うべきでしょうか。
「それじゃあ今ここでやるいうんかい」
「さて、御前次第だねぃ」
本当に何時刀を抜くかわかりません。
それにトルコの後ろには赤い帽子に白い服の一団が控えています。その手には。
「イエニチェリかい」
「この連中は強いのは知ってるな？」
トルコはここでも不気味な笑顔を見せてきました。
「さて、どうするねぃ？俺と戦うっていうのかい？」
「やったるわ」
スペインも覚悟を決めていました。

「ロマーノを守る。絶対にな」
引くつもりはありませんでした。こうして戦いがはじまることが決まりました。

第千一話　完

２００９・１０・２１

第千二話　二人共苦戦でした

第千二話　二人共苦戦でした

スペインとトルコが喧嘩することが決まった時そのスペインとオーストリアさんの上司の人は同じ人でした。それで結果としてオーストリアさんもトルコと戦うことが決まったのです。

「あの時は大変でしたね」

「すまんな、御前まで巻き込んでもうて」

「いえ、どちらにしろ私もトルコと戦わないといけなかったのです」

そうした状況だったのです。オーストリアさんの領土にも迫って来ていましたから。

「その証拠にルーマニアが」

「そやったな。あのおっかないのが上司で頑張ってたんやな」

ルーマニアはオーストリアさんのすぐ隣でした。そこでもトルコは戦っていたのです。

「それを考えたらってことやな」

「はい、私は陸でトルコと戦いました」

「それで俺は海でやったな」

「海でも陸でも」

「トルコは強かったわ。それも滅茶苦茶」

本当にその強さは尋常なものではありませんでした。二人がかりでも苦戦する程でした。

「俺もボロボロになったし」

「私も何度も死にそうになりました」

「強いのはわかってたけどあそこまでとは思わんかったわ」

「全くです。あれだけの相手にはお目にかかったことがありません」

スペインもオーストリアもその時のことを思い出して言うのでした。

「強敵なんてもんやなかったな」

「何かを間違えていれば二人共消えていました」
そこまでの相手だったのです。恐るべきはトルコでした。

第千二話　　完

２００９・１０・２１

第千三話　ここは地獄　☆

対峙するトルコとスペイン、スペインはここでの戦いを覚悟していました。しかしトルコはふと踵を返してしまいました。
「でも今日はアシュレ食いたいしとっとと帰るわ」
「えっ、帰るんかいな」
「そうだねい。まあそういうことだねい」
そう言って馬に乗るとです。スペインに顔を向けて言うのでした。
「じゃあ次に会うときゃ戦場だな」
「くっ・・・・・・」
このトルコの台詞は最高に決まりました。スペインはぐうの音も出ません。こうして颯爽と帰って行くトルコ、後に残ったのはスペインだけでした。その残ったスペインは。
「何なんやあいつは・・・・・・」
少し呆然としています。それでここでロマーノが気付くと。
「あれ？ここは天国か？」
「ああ、御前気付いたんやな」
「天国じゃねえや」
牛の上からスペインを見て言うのでした。
「そうか、地獄だな」
「何で地獄やねん」
「スペインがいるからだよ」
「おい待たんかい」
今のロマーノの言葉に速攻で突っ込みを入れます。
「今の言葉はどういう意味なんや」
「そのままの意味だよ」
こう言い返してから寝てしまうロマーノでした。何はともあれこの場はロマーノを守りきったスペインなのでした。

第千三話　完

2009・10・22

第千四話　マカロニがあると

第千四話　　マカロニがあると

イタリアもロマーノもパスタが大好きです。それは何といってもスパゲティがメインですがその他のパスタも色々と大好きです。マカロニもそのうちの一つです。

「何か多いですね、マカロニと一口に言っても」

「そうなんだよ。形が色々とあってね」

「それだけ俺達が好きってことでもあるんだよ」

日本に対して説明しながらそのマカロニを茹でてソースも作っている二人でした。

「日本だって色々な麺類食べてるじゃない」

「あのうどんにしろ結構細かい種類があるだろ」

「ああ、それと同じなのですね」

こう言われると日本にもよくわかります。右手を顎に当てて納得した顔で頷きます。

「おうどんと」

「そうだよ。そういうものだよ」

「そしてな」

ここでマカロニが茹で上がりました。そうすると。

「それでパスタ全部に言えるけれど」

「まずはこうするんだよ」

水を切ってそのうえでお鍋に戻してかけたのは。

オリーブオイルでした。たっぷりとかけます。

それとパスタのソースをかけます。それで終わりではありませんでした。

「あとやっぱりこれだよね」

「これがないとな」

最後にチーズを上からかけます。これで完成でした。

「やっぱりチーズがないとね」
「日本の唐辛子と同じだな」
「成程、そういうことですね」
日本はここでまた納得しました。パスタに必要なオリーブやソース、チーズはおうどんのおつゆや具、それに唐辛子みたいなものなのでした。

第千四話　　完

２００９・１０・２２

第千五話　上司に怒られても　☆

トルコの手から解放されてスペインのお家に戻ったロマーノ。それでまた使用人としての生活に戻りました。
「結局あいつの家に戻ってきちゃったぞこの野郎」
ロマーノはそのことが不満で仕方ありません。それでぶつくさと不平を呟きながらお掃除をしていたのですがここで。
スペインの上司の声が聞こえてきました。
「あんな奴くれてやったれや！」
物凄く怒っているのがわかります。
「大した役にも立たんやろが！」
「それはその・・・・・・」
「折角大陸で稼いだ金をあんな奴の為に使うなんてアホか！」
スペインはこの頃新大陸から物凄いお金を稼いでいたのです。けれどそれはロマーノの為に使う破目になっていたのです。
「トルコ相手になんぼ使ったと思ってるんや、赤字やで！」
「すんまへん・・・・・・」
「御前にはちょっとお金の使い方教えたらなあかんなあっ！」
「だってロマーノは大事な・・・・・うぎゃあああああっ！！」
折檻スタートです。この時代のスペインの上司の折檻は物凄いものでした。それこそ血が凍るレベルでありました。
その恐ろしい折檻を自分の為に受けているスペインを見てロマーノは。心の中で少し思いました。
「あいつそんなことしてやがったのかよ」
「ほら、まだまだ続くで！」
「か、堪忍して下さいや！」
「畜生・・・・・・」
「うわあああああああああっ！！」

折檻を受けて絶叫するスペインを見ながら思わずにはいられないロマーノでした。彼もやっとスペインが自分をどう思っているのかわかったのでした。

第千五話　　完

２００９・１０・２３

第千六話　この人達は幸せでした

第千六話　この人達は幸せでした

スペインはロマーノの為に上司から折檻を受けながらも戦っていました。そして日本はといいますと。

韓国と台湾がお家に入った時にはです。上司自ら言うのでした。

「あの二人の為には幾らでも出すぞ」

「幾らでもですか！？」

「そうだ。幾らでもだ」

何と会津や仙台に回すべきなんじゃないかというお金まで遠慮なく注ぎ込みだしたのです。とりわけ韓国にはこれでもかという程お金を注ぎ込みました。

軍を置いて学校を建てて橋をかけて木を植えて。上司の中でも優れた人がわざわざ出向いて積極的に韓国にあれこれと教えたのです。お金と共に。

気付けば韓国は元の上司の時から比べてかなりよくなりました。というよりか台湾と並んで日本と殆ど同じ様な状況にさえなかったのです。

「あの二人、特に韓国の為には何時でも幾らでも出せるぞ」

「韓国さんの為にはですか」

「御前も面倒を見ることを忘れるな」

日本にいつもこう言う上司でした。

「いいな、御前にとって韓国は弟、台湾は妹なのだからな」

「はあ。そうですか」

こうして日本の上司はお金も何もかもを二人の為に使うことを惜しみませんでした。その結果二人はとても立派になることができました。

その話を聞いてスペインは思わず言ってしまいました。

「日本の上司って何でそんなに物分りがよかったんや?俺なんか上

司にめっちゃ怒られたんやぞ」
「何分正義感が強くて義侠心に満ちた方ばかりでしたので」
もっともそれが日本にとってよかったかといいますと。そのことについてはあえて誰も何も突っ込みません。台湾のことはともかくとしましてもう一人のことについては。

第千六話　　完

２００９・１０・２３

第千七話　寝る時に来て　☆

第千七話　寝る時に来て　☆

一日が終わってほっとしているスペイン。服を脱いでそのうえでベッドに向かいます。

「今日も怒られてばっかりやったなあ。かなん一日やったで」

トルコのことで上司に怒られていたのです。

「まあええわ。はよ寝よか」

こう呟いてベッドに入ろうとするとそこに自分の枕を持っているロマーノがやって来ました。

「んっ？ロマーノかいな」

ロマーノはスペインのベッドに向かって来ます。スペインはその彼に声をかけます。

「若しかして一緒に寝たいんか？って待たんかい」

何とロマーノはスペインのベッドの中に入ったのです。スペインはそんな彼を見て言います。

「何人のベッド占領しとるんや！」

トランクス一枚で彼に抗議します。

「あのな、俺のこと嫌いなのはわかっとるけれどな」

実際それはわかっていたりしまう。この辺りロマーノはイタリアとは違います。そしてスペインもオーストリアさんとは違います。

「そんなあからさまな嫌がらせはな」

「ありがとよ」

けれどロマーノはベッドの中からこう呟いてきました。

「えっ、今何て」

「ん・・・・・ありがとよ」

こう言ってきたのでした。

「トルコとのことな」

「ロマーノ、御前」

ちらりと本音を見せたロマーノでした。スペインもその彼の言葉を間違いなく聞きました。本当に素直ではありませんけれど。

第千七話　　完

２００９・１０・２４

第千八話　ロマーノの寝る時

第千八話　　ロマーノの寝る時

ロマーノはかなりよく寝る人ですがいつも寝る時はイタリアと一緒です。それも裸になって寝ます。

「いい加減女の子が側にいて欲しいんだがな」

「それじゃあ妹達は？」

「それやったら冗談抜きでまずいだろうが」

洒落になりません。もっとも兄弟で裸で同じベッドの中にいるというのも非常もまずいことなのですが。それはとりあえず置いています。

「誰かいないのかよ、嫁さんでもな」

「ああ、そういえばいないね」

イタリアもこのことに今やっと気付きました。

「っていうか俺達学生だからいなくて当たり前じゃない」

「ちっ、それもそうか」

「そうだよ。それじゃあドイツの妹さんとかフランス兄ちゃんの妹さんとかは？ロシアの妹さんなんかも凄く奇麗だよ」

「何処も兄貴がな」

特にロシアがそうです。妹に何かしたらそれこそ恐ろしいことになるのが目に見えています。流石のロマーノもわかっています。

「日本の妹なんか可愛いけれどあそこはあそこで」

「ちょっと変なことになったら自害しそうだよね」

「蝶々さんみたいにな」

自分達のお家のオペラなのでよく知っています。

「全く。誰かいないのかよ」

「今のところはいないんじゃないかな。じゃあ寝ようか」

「そうだな」

そんな話をした後で寝るのでした。今日も二人は平和でした。

2016

第千八話　完

2009・10・24

2017

第千九話　少しだけ仲良く　☆

「えっ、今何て言うたんや？」
「ああ・・・・・ありがとよ」
ロマーノはとても気恥ずかしそうにスペインに対して御礼を言うのでした。
「だからな。ありがとって言ってんだよ、畜生」
「ロマーノ、御前」
「トルコと戦ってるんだよな、俺の為に」
そのことに対しての御礼なのでした。彼もそれがわかったのです。
そのことに何も言わない程ロマーノも馬鹿ではありません。
それで御礼を言うと。スペインは笑って彼に言ってきました。
「えーーー何、それほんまか？御前もかわええとこあんなあ」
「触るなよ」
頭を触るスペインにこう言うのでした。
「別にええって。俺が強くてかっちょええの分かってくれたらな」
言いながら頭の毛を触ります。イタリア兄弟が生やしているあの一本だけ長い毛です。
「ロマーノもいつもこう素直やったらかわええのになーーー」
笑いながらその毛を握っているとロマーノは弱っていきます。それに我慢できなくなってスペインにフライングヘッドバットを浴びせます。
「そこは触るな！」
「ぐはっ！」
「そこを触られると弱いんだよ」
「す、すまん」
流石にそこを触られたら我慢できません。最後はこんなオチでした。けれど少しだけ仲良くなれた二人なのでした。

第千九話　完

2009・10・25

第千十話　仮面同士で

第千十話　仮面同士で

トルコといえば仮面です。いつもお洒落な仮面を着けています。

「まあこれがダンディズムだねい」

「確かに格好いいですね」

「日本に褒めてもらえるのが何よりだねい。やっぱり着けてるかいがあらあ」

日本に褒められて上機嫌になるトルコでした。ところがここで仮面といえば、という人達が出て来ました。

「ウゾダドンドコドーーーーーン！」

「オデノカラダハボドボドダ！」

久し振りに出て来た仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディです。この人達は相変わらず騙され易くて敵に回った時にこそその本当の戦闘力を発揮する正義の味方をしています。

「オバエガアダラジイライダーカ（翻訳：御前が新しいライダーか）！」

「ゾリドゥボアンディッドゥナドカ（翻訳：それともアンデットなのか）」

「ああ、これが御前の家のライダー達だねい」

「はい、騙され易い人達なので注意して下さい」

「何かややこしい人達だねい。そういえばあと二人いなかったかい？」

とりあえず今出て来た二人を置いておいて日本に尋ねるトルコでした。

「確かあの二人は」

「オラァクサムヲムッコロス！」

「オデノベルトーーーーーッ！！」

言っている側から出て来ました。仮面ライダームッコロと仮面ラ

イダームッキーです。まさに呼べば現れる、です。それで来てくれるのが役に立つヒーローなのかどうかはともかくとして。
「ああ、揃ったねい」
「それでどうされるのですか？」
「丁度いいねい。皆俺の家に来な。当然日本も」
もてなし好きでしかも日本大好きのトルコにとってはこの四人もいいお客さんでした。かくして今回は騙されることなく日本と一緒に楽しい時間を過ごせた四人のライダー達でした。

第千十話　　完

２００９・１０・２５

第千十一話　牛さんと虎さん

第千十一話　牛さんと虎さん

今日も韓国は生徒会長の仕事そっちのけで自己アピールに勤しんでいます。

「この学園の虎なんだぜ！」

「あんたが虎って何よ」

そんな韓国に突っ込みを入れられる数少ない人である台湾が彼に対して言います。

「何処が虎だっていうのよ」

「最強の俺が虎でなくて何なんだぜ？」

極めつけで根拠の無い主張です。韓国らしく。

「俺の国は昔から虎とされていたんだぜ。だからそれでいいんだぜ」

「言ってる意味わからないし。大体あんたが虎だったらね」

「何なんだぜ？」

「私は牛よ」

それだと主張する台湾でした。

「堅実で真面目な牛よ。あんたは酔っている大虎じゃない」

「俺？俺は酒には自信があるんだぜ」

嫌味や悪口なぞ一切効果がない韓国でした。この特性はかなり凄いです。少なくとも自分自身は一切不幸になりはしません。

「だったら一緒に飲まないか？マッコリあるんだぜ」

「いいわよ。とにかくあんたが虎だって言い張るんならね」

むっとした顔になっての言葉です。

「私は牛なんだから。覚えておきなさいよ」

「何かよくわからないけれどわかったんだぜ」

こんなふうに返す韓国でした。

「つまり俺は虎男で御前は牛女なんだぜ。それでいいんだぜ」

「何かその言い方はあまりよくはないけれど」
それでもとりあえずはそれでいいとした台湾でした。こうして彼女は牛ということになりました。

第千十一話　完

２００９・１０・２６

第千十二話　この三人は言うまでもありません

第千十二話　この三人は言うまでもありません

韓国が虎で台湾が牛ならです。この人達はもう誰もがそれだと言い切るものでした。

「僕は鷲だな、やっぱりな」

「僕は龍あるぞ」

「僕は熊だよね。それしかないよね」

アメリカと中国、それにロシアがそれぞれ言います。

「鷲が一番格好いいよな」

「パンダもそうあるが何といっても龍が象徴あるからな」

「熊可愛いよね。力も強いし」

三人はまさにそれです。他の動物はまず考えられない程です。見ればそれぞれを象徴する動物もいつも側にいます。アメリカは他に宇宙人や鯨がいますし中国はそのパンダもいますがとにかく上司だったりお友達だったりします。

三人はこうした動物達ととても親しいです。まさにパートナーと言ってもいいです。

「私もいつもこの子と一緒にいるけれど」

台湾は自分の右手にいるその牛を見ながら言います。

「何か違うみたい」

「違っていて当然ですよ」

違っている気がして少し寂しく思った台湾に日本が穏やかに言ってきました。

「台湾さんは台湾さんですし牛さんは牛さんですから」

「じゃあ私とこの子はこのままでいいんですね」

「はい、そう思います」

また台湾に告げるのでした。

「それで」

「そうですね。じゃあ違うっていうふうには考えないでこれがいいって考えることにします」
「それがいいかと」
日本のこのアドバイスで救われた気持ちになった台湾でした。彼女にとってとても有り難い言葉でした。

第千十二話　　完

２００９・１０・２６

第千十三話　アメリカの周り

第千十三話　アメリカの周り

アメリカは殆ど宇宙人と同居しています。そして陸にあがる鯨もいます。ですがそれだけではありません。

「最近どうかな」

「あまり調子はよくないんだよな」

鷲が応えます。アメリカの象徴とも言える鷲です。それも一緒にいるのです。

「どうもな」

「そうか、それじゃあしっかりと何でも食べるんだ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

白頭鷲です。アメリカと言えばという位よく知られている鷲が今アメリカがくれた御飯を食べています。その隣には宇宙人もいます。

「そういえば君は何を食べているんだ？」

「何デモ食ベテイケル」

宇宙人はこう彼の質問に答えます。

「御前ト同ジモノヲナ」

「そういえばそうだったっけ。いつも何か食べてるよね」

「タダシライミーノ食ッテルモノハオ断リダ」

それは嫌だというのです。相変わらずイギリスは嫌いなようです。最初にどの星から来たんだと言われたことをまだ怒っているようです。

「ダカラ御前ノ家ノ食べ物ガイイ」

「そうか、じゃあハンバーガーでも食べようか」

鯨もいます。オキアミを食べています。

「皆で仲良く楽しくな」

「ソウスルトイイ。俺達トモダチ」

色々なお友達がいるアメリカなのです。人間以外でも友達になれ

るのです。

第千十三話　完

2009・10・27

第千十四話　リトルグレイの他には

第千十四話　リトルグレイの他には

アメリカのお友達リトルグレイですが宇宙人といえば彼とされています。けれどどうやら宇宙人はこの人だけではないようなのです。

「何かＵＦＯって色々な形のものがありませんか？」

「そうなのですよね。幾らでもありますよね」

日本がタイの言葉に頷いていました。

「葉巻型のものだったり大きかったり小さかったり」

「本当にどれだけあるかわかりませんよ。それに」

タイはさらに言うのでした。

「宇宙人にしてもリトルグレイさんだけじゃなくて」

「多くの方がおられますね。中には三メートルはあった方もいましたし」

「ロボットみたいなのとか怪獣みたいなのとか」

「色々おられますね、本当に」

そうした人が一杯いるのです。少なくとも目撃されています。

「では宇宙におられるのは」

「リトルグレイさんだけではないということですね」

「そうですね。他にもおられます」

日本はそれは確かだと認識しました。

「だとすれば宇宙でも戦争やそうしたことがあるのでしょうか」

「宇宙戦争ですか。何か話が凄くなってきましたね」

「ええ。宇宙も案外私達の世界と変わらないのかも知れませんね」

「だとしたら」

ここでタイはふとある人を思い出しました。その人は。

「イタリア君みたいに能天気な人とかドイツさんみたいに堅苦しい人がいるかも知れないんですね」

「宇宙の御二人ですか。何かありそうですね」

何故か銀色のタイツの様な服を着てそれで触覚を生やしている二人を思い浮かべる日本でした。そしてそこでもイタリアはドイツに怒られていました。

第千十四話　　完

２００９・１０・２７

第千十五話　パンダの食べ物

第千十五話　　パンダの食べ物

中国にいるパンダですが食べ物が笹であることは有名です。けれど実は笹だけを食べているわけではありません。

「困ったらこういうものも食べるぞ」

「お肉もなのね」

「そうある、羊の肉ある」

中国がベトナムに対して説明しています。この二人の関係もわりかし微妙なものがあります。お隣同士はどうしても色々とあるものであります。

「笹がなくなって本当に困ったらこれを食べさせているある」

「笹がなくなる時もあるのね」

「花が咲いたら危ないあるよ。とにかくパンダに何かあったら僕も困るある」

中国にとってパンダはなくてはならない動物です。とにかくパンダに対しては万難を排して守っているのが中国なのです。

「それで食べさせるようにしているある」

「それでパンダはお肉が好きなの？」

「実際のところあまり好きではないある」

やっぱり笹が一番好きなようです。

「それでも笹がなくなったら仕方ないあるよ。食べてもらっているある」

「非常食なのね」

「地震が起こってしまった時は本当に心配したある」

この前の四川の地震の時です。

「慌てて人をやって被災者とパンダの保護をしたあるよ」

「人とパンダは同じだけ大事なのかしら」

「当然ある。パンダあるぞ」

ここでもそれを言うのでした。
「パンダに何かあったら僕は生きていけないあるぞ。中国の象徴あるぞ」
「そういう気遣いを台湾や私にも見せたらいいのに」
「大きなお世話ある」
パンダは大事にしていますがどうも周りの女の子にはそうではないようです。どちらを大事にするべきかは一概に言えないことでありますが。

第千十五話　　完

２００９・１０・２８

第千十六話　龍は何歳か

第千十六話　龍は何歳か

パンダが中国にとって掛け替えのない動物なら龍は上司です。中国にとっては人間の上司よりもさらに上の場所にいる上司です。その付き合いもかなり長いです。

「御前との付き合いは何年だったかな」

「もう四千年になるあるな」

それだけ長いお付き合いなのです。中国もかなりの高齢です。

「その頃の御前と今の御前はあまり変わっていないな」

「自分でもそう思うある。ただ」

ここで昔のことを思い出す中国でした。

「昔は同時に何人も上司がいて喧嘩していたりやたらと建築が好きな上司がいたりして大変な時も多かったあるな。中で喧嘩していた時も多かったある」

「そうだったな。わしもだ」

龍はここで中国が生まれる前の話をします。

「腰から下が蛇の夫婦と一緒に働いたり頭が牛の奴と薬を作ったりしていたのだ。目が四つあったのと一緒に文字を作ったりもしたのう」

「そういうことがあってから僕が生まれてきたあるな」

「そうじゃ。御前が生まれた時の上司は夏だったかな」

「確かそうだったある」

実はこの頃のことはあまり覚えていない中国でした。何しろ物凄い昔ですから。

「それで今あるが」

「四千年か。長いようで短いのう」

「それでも僕達は今でも一緒あるな」

「何時までも一緒だぞ。いいな」

「そのつもりある」
やっぱり中国にとって一番の上司はこの龍なのでした。二人の絆はかなり深いものがあります。

第千十六話　　完

２００９・１０・２８

第千十七話　熊です

第千十七話　熊です

カナダのお家にはクマ二郎さんがいますが熊はこの人のお家にだけいるのではありません。ロシアのお家にもいつも熊がいます。

「熊はまさに僕の家の象徴なんだよね」

ロシアは素朴に微笑んでいつも言います。

「大きくて力があって。頼もしいよね」

「外見は可愛いんだけれど」

ウクライナがその熊を見ていつも言います。ついでに弟も見ています。

「けれど物凄く怖いのよね。凶暴だし」

「そうなんですよね」

ラトビアがここでウクライナに対して声をかけてきました。

「ちょっと何かしたら噛むし爪があるし。叩かれたらそれだけで吹き飛ばされてしまいますし」

「ええ。何かまさに」

ここで二人でロシアを見て。言うのでした。

「ロシアさんそのままですよね」

「顔を見たら穏やかなのに。人付き合い下手だし」

そうした意味でもまさにロシアそのものです。

「ですから世話をするのがとても怖いんですよ」

「わかるわ。ラトビアちゃんいつもロシアちゃんと熊ちゃん両方からとんでもない目に遭っていたわよね」

「熊の世話僕の担当でしたから」

とんでもない仕事もあるものです。なおロシアのお家にいるとこの他にも色々ととんでもない仕事があります。ロシアのお家は厳しいのです。

「ですから今も熊を見ると」

「私も。怖くて」
そんな熊がいつもロシアにはいます。本当にロシアそのものの様にお家の中にいて少し下手なことをしてしまったラトビアがはたかれて吹き飛ばされています。

第千十七話　　完

２００９・１０・２９

第千十八話　究極恐怖冬将軍

第千十八話　究極恐怖冬将軍

ロシアのお家にいるのは熊だけではありません。彼の後ろにいつもいて見守っている人と言っていいのかわからない存在がいます。それは。

「うわ、今年は特に厳しいぞ！」

「何でこんなに寒いんですか！」

冬将軍です。その恐ろしさはリトアニアやエストニアといったこの存在のことをよく知っている人達ですら恐怖してしまう程であります。

「ストーブ、ストーブ出さないと！」

「毛布にコートも！さもないと凍死するから！」

二人は早速防寒の用意をします。それで何とか整えますがこうしたことがいつもなのです。冬将軍の威力はまさに極めつけであります。

誰かが来てもそれは同じです。ロシアのお家に来ると。

「今年もいい寒さですね」

「こんにちは、オーストリアさん」

今日のお客さんはオーストリアさんです。ロシアはお付き合いが長いこの人を笑顔で迎えました。

「冬将軍がいるけれど気にしないでね。お家の中はあったかいから」

「はい。しかし貴方の後ろにおられる方は」

軍服を着て兜を被ったお髭の人です。何か真っ白くてそれを見ているとどうにも人間ではないように思えます。スタンドなのかも知れません。

「冬になると本当に元気になられますね」

「それで困ってるんだ、実は」

ロシアにしても寒さと雪と氷に囲まれたくはないのです。ですが

ロシアにはいつも冬将軍がいるのです。
「けれど敵が攻めて来たら守ってくれるし。有り難い存在だったりするんだよね」
「その辺りが微妙ですね。確かに恐ろしい寒さですが」
オーストリアさんも認める冬将軍、いつもロシアの後ろにいて彼を守っているのでした。

第千十八話　　完

２００９・１０・２９

第千十九話　いつもフランスと

第千十九話　いつもフランスと

長い間本当に忘れていました。けれど今は違います。

「俺にはいつも天使が一緒にいるからな」

「ああ、彼女かよ」

イギリスはその天使が誰なのか問わずともわかりました。もう言われなくてもわかることです。少なくとも彼にとってはそうなのです。

「長い間忘れていたのに一旦思い出すとかよ」

「まあな。やっぱりあの天使が一緒にいると心強いぜ」

「あの時はフランスさんが頑張ったからですよ」

けれどその天使ジャンヌは微笑んでこう言うのでした。

「私は何もしていませんよ。神の御言葉に従っただけです」

「いや、それでなんだよ」

けれどフランスはジャンヌに対して微笑んで言葉を返します。

「だからな。俺はこいつに勝てたし」

「悪かったな」

イギリスはむっとした顔でフランスに言い返します。

「あの時はずっと俺が勝ってたんだがな」

「けれど俺に天使がついてからだよ。俺が勝ちだしてな」

「百年も戦争していてずっと勝っていたのによ」

ジャンヌ登場で形勢が逆転してしまったのです。それで最後の最後にフランスが奇跡の勝利を収めたというわけなのです。

「負けちまったな」

「これも全部ジャンヌのおかげだぜ。俺にはそれ以来勝利の女神がついてるんだよ」

「ですからフランスさんが頑張ったからですよ」

謙遜して言うジャンヌでした。けれどフランスの横にはいつも確

かに天使がいるのでした。

第千十九話　　完

2009・10・30

第千二十話　この人はいません

第千二十話　この人はいません

フランスの横にいつも一緒にいる天使ジャンヌ。けれど彼に栄光をもたらしてくれたもう一人の人はといいますと。

「あの人はもういねえんだよな、これが」

「いてもらっては困ります」

今度はオーストリアさんが彼に対して突っ込みを入れています。

「おかげで私も皆も戦いに惨敗続きでしたから」

「あの頃はよかったぜ」

フランスはその栄光の過去も思い出すのでした。

「俺は確かに強かったからな」

「今もジャンヌさんが一緒ではないのですか？」

「ああ、天使はいつも一緒だぜ」

それで幸せの筈です。しかしです。

「けれどどうやらジャンヌはあれなんだよ。最後の最後に俺に勝利をもたらしてくれるんだけれどな」

「それまではですか」

「ああ。ドイツとプロイセンの二人にな」

ここで困った顔になるのでした。

「いつもぼこぼこに殴られてそれでやっと勝つっていうのの繰り返しだからな。前の戦争もその前の戦争もな」

「いいではないですか。最後に勝っていれば」

「それでもぼこぼこにやられるんだぜ。その度に植民地にしていた奴等は独立していくしよ」

「植民地はやがて独立するものです」

この辺りオーストリアさんはとてもシビアに言います。

「ですから最後に勝っているだけ貴方は運があるのです」

「まあそう言えばナポレオンがあれだけ暴れ回った後でも俺はやっ

ていけたしな」
「それでいいとしなさい」
オーストリアさんの忠告は何時になく生真面目でシビアなものでした。確かにいつもぼろぼろになって勝っているフランスなのでした。

第千二十話　完

２００９・１０・３０

第千二十一話　昔のイギリスは　☆

第千二十一話　昔のイギリスは　☆

今もあまり人間のお友達が多いとは言えないかも知れないイギリスですが昔はもっといませんでした。というか人間のお友達はいませんでした。

「ふう、何かいつも人間は俺だけだな」

横にユニコーンを置いて一人で呟いていた子供の頃のイギリスです。

「兄さん達は俺を見ると弓矢を撃って来るしいつもフランスの野郎が因縁つけてくるし」

この見事な人間関係はこの頃からでした。それで正直かなり困っていました。

けれどこの人に声をかけてきた人がいました。

「おい」

「何だ？」

「俺だ」

こう言ってやって来たのは神聖ローマでした。当時西欧でフランスと張り合っていたあの国がです。イギリスの前に大勢引き連れてやって来たのです。

「今日は御前に贈り物がある」

「神聖ローマ、何なんだ！？」

そう思っているといきなり大勢で動き出しました。

「な、何をするんだ！？」

そう思っている間にも動き回る神聖ローマです。イギリスを置いて。

「御前にいいものをやるからな」

「それはいいけれどよ。一体」

呆然としたまま神聖ローマに対して問い返します。

「何をするんだよ、本当に」
「すぐにわかる」
イギリスの質問には答えません。とにかく何かを造っていることは間違いありませんが。

第千二十一話　完

２００９・１０・３１

第千二十二話　ガーデニング

第千二十二話　ガーデニング

イギリスのお家はいつもお庭が奇麗です。彼が毎日丁寧に手入れをしているからです。だからとても奇麗に整っているのです。

「御前庭は奇麗なんだな」

「ああ、花とか好きだからな」

またお家に来ているフランスに対して話します。

「それでなんだけれどな」

「そうか。まあ花や緑があるのはいいものだからな」

フランスにしろお花は好きです。ですからイギリスのお庭を見るのもまんざらではありません。というか実は結構気に入っていたりします。

「それもな」

「そうだろう？じゃあいいよな」

「ああ、それでだけれどな」

「何だよ」

「ここには日本も招待してるんだよな」

フランスは彼のことを話に出したのでした。

「あいつの庭や花もかなり独特だけれどよ。そういうのは真似しないんだな」

「ちょっとな。真似しにくいな」

少し困った顔になって答えるイギリスでした。

「俺の家にあいつの庭はな。ミスマッチだろ」

「合わないな、確かにな」

頭の中で想像してみましたがどう考えても合いません。フランスの頭の中でイギリスのお家に日本の庭、何か別の世界が二つ並んでいるようです。

「止めた方がいいな」

「だからしないんだよ」
　こういうことも考えているイギリスでした。合わないものはやっぱり合わないのでした。

第千二十二話　　完

２００９・１０・３１

第千二十三話　合わないけれど　☆

第千二十三話　合わないけれど　☆

神聖ローマがイギリスのところにいきなり建てたものは。何とイタリア建築の豪華な建物でした。それをいきなり彼のところに建てたのです。

「このイタリア建築は俺からの贈り物だ」

「何勝手に家建ててんだ、おい！」

これにはイギリスも驚いてしまう他ありませんでした。

「大体御前の家の中で建てればいいじゃねえかよ！」

「気候が合わない」

「じゃあ俺の家はもっと合わねえよ！」

イギリスが言うのも道理です。実際に合わないのです。これではどうしようもありません。

それでもイギリスはそのイタリア風のお家の中に入ってそのうえで。神聖ローマに対して言うのでした。

「けれど折角作ってくれたから住んでやるからな」

「イタリア建築は素晴らしいぞ」

神聖ローマはこのことを彼に言います。

「よかっただろ、それでも」

「まあな。それでもよ」

イギリスはこう思わざるを得ませんでした。

「気候が合わねえんだよな、どうしても」

「我慢しろ、そこは」

「じゃあ御前も我慢しろよ」

「俺の家は寒いからそれは無理だ」

「俺の家なんてそれを言ったら寒い上に雨が多いんだよ」

この頃から変わらない雨の多いイギリスです。

「全くよ。まあいいか」

「楽しんで住め」
そんなやり取りの後で家に入ったイギリスなのでした。

第千二十三話　完

２００９・１１・１

第千二十四話　霧のロンドンエアポート

第千二十四話　霧のロンドンエアポート

イギリスは雨がとても多いです。それに霧もです。それは相当なものであります。

「こう手をかざしても見えないんだな」

「ああ、凄いだろ」

実際に手をかざしてみて確かめるフランスに対して告げるイギリスでした。今二人は霧の中にいてそこで手をかざすとその手が見えなくなってしまうのです。それだけ深くイギリスの霧なのです。

「この深さな」

「何かこの深さは変わらないんだな」

「変わって欲しいけれど変わらないんだよ」

今二人はイギリスの空港のいますが何も見えません。何処に何があるのかさっぱりです。

「おかげで今だってな」

「見えないんだな」

「どうしたらいいんだろうな」

イギリス本人もどうしたらいいかというのです。

「この霧な」

「とりあえず我慢するしかないんじゃねえのか？昔みたいによ」

「やれやれだな。ロンドンもずっと霧だらけだったしな」

しかもここで雨です。

「雨もひっきりなしだしな」

「困ったことだよな」

「その点御前の国はいいよな」

フランスに顔を向けて少し羨ましそうに言います。

「霧が深くなくてもいいんだからな」

「そう思うだろ」

「このことだけはな」
霧の中でも減らず口は変わらないイギリスでした。けれど本当に何も見えないのでした。

第千二十四話　完

２００９・１１・１

第千二十五話　オリンピア　☆

第千二十五話　　オリンピア　☆

かつて学園はまさに帝国主義でした。何かとギスギスしていた時代です。

「何か最近居心地が悪いな」

フランスは自分のことは置いておいて少しうんざりとしていました。

「もうな。こうラブアンドピースっていう感じでな」

こんなことを考えているとふとギリシアに気付きました。何かを掘っています。

「あれっ、こんなとこで何掘ってるんだ？」

「母さんが残したオリンピアの遺跡を発掘している」

「オリンピア？」

「そうだ。ここは古代の競技場でオリンピュアという祭があったらしい」

このことをフランスに対して話すのでした。

「祭の最中は戦争を止めて青年達がスポーツに励んだそうだ」

「悪いがあまり興味ないなあ」

フランスはそれを聞いても今一つ関心を覚えませんでした。

「悪いけれどな」

「多分母さんも見ていた・・・・・・これはないか」

「何だ？」

「オリンピュアはな」

ここでギリシアはそのお祭のことをフランスに話すのでした。

「出場者全員男でしかも裸だったからな」

「おい、何だよその素敵な祭は！」

裸と聞いて早速興味を持ったフランスでした。

「最高じゃないか！」

これがはじまりになりました。何とも不純極まるはじまりです。
ですがはじまったことは紛れもない事実でありました。

第千二十五話　　完

２００９・１１・２

第千二十六話　まさにお笑い担当

第千二十六話　まさにお笑い担当

フランスのレンゴウチームでの評価は皆同じものです。お笑い担当です。

「ブラックは普通渋くて格好いい役じゃなかったのか？」

「そんなのは二十世紀戦隊だろ。最近じゃ結構ガオとかアバレとか結構お笑いだぞ」

「っていうか最近の戦隊は皆そうか」

そんな話をイエローことイギリスとしていました。実際にフランスのやることは。

まず負けます。戦ってもあまり勝てません。

「くそっ、ドイツにやられっぱなしじゃねえかよ」

「御前同じ数じゃ勝てねえんじゃねえのか？」

あまりにもドイツに勝てないのでイギリスも呆れています。

「そういえば日本にも負けたしその後ベトナムにも負けたよな」

「アジアンガールズって何であんなに強いんだよ」

自分の弱さはとりあえず棚に上げています。

「台湾といいよ。おかげで負けちまったじゃねえかよ」

「勝てない御前が悪いだろ。見ろよ、そんなこと言ってる間によ」

「げっ、何時の間にこんなに仕事が来たんだよ」

気付いたら自分の机の前に書類が山積みです。言うまでもなく生徒会の仕事です。

それをやっていきますがここでコーヒーを零してしまって。

「手前それはねえだろうがよ！」

「何か俺ミスばっかじゃねえかよ」

「だからお笑い担当なんだよ」

イギリスも呆れる抜けっぷりです。

「しかしこのチームって本当に女っけねえな」

「御前イエローだから女役になるんじゃねえのか？」
「流石にあの娘は可愛過ぎるから真似できねえよ」
元になっているチームの女の子のことを言っているようです。
「御前の元はそもそもがお笑いかかってるけれどな」
「最初から最後までネタ飛ばしてたからな、あの人」
「ガオといいアバレといいボウケンといいな」
「そうだよな」
どうもキャラと配役が合っているようです。それを考えるとやはりフランスがお笑い担当なのは必然なのでしょうか。

第千二十六話　　完

２００９・１１・２

第千二十七話　逮捕しちゃうぞ　☆

第千二十七話　逮捕しちゃうぞ　☆

フランスはアテネで一人壮大な夢が実現したことを喜んでいました。

「男同士の熱い戦いの舞台になるんだな」

このことを心から喜んでいるのです。

「ぶつかり合う鍛え抜かれた肉体美・・・・・・いいねえ」

「んっ！？何だ俺が一番乗りじゃなかったのか」

ここでイギリスが来ました。そのフランスを見て。

「御前何て格好してんだよ！」

「んっ！？」

何と全裸です。何も着ていません。その彼を見て驚くのも道理です。

「イギリス、御前空気読めよ」

「何が空気だよ！」

「オリンピックなんだぜ」

「だからそれがどうしたんだよ！」

「神聖な舞台に何で服が必要なんだ？」

こう言うのです。

「だから御前も脱げ！世話の焼ける奴だな！」

「やかましい！脱ぐ位なら決闘だ！」

「よし、最初の競技はフェシングか、受けて立つぞ！」

「だから服着ろ！股間のものが見苦しいんだよ！」

こんな調子で大変な騒ぎになっているとです。急にフランスの至近で銃弾が炸裂しました。撃ったのは誰かといいますと。

「醜いものを見せないでもらおう」

「あっ、ああ・・・・・・」

スイスでした。何といきなり発砲です。けれどこれでフランスは大人しくなってお巡りさんに連れて行かれるのでした。

第千二十七話　　完

２００９・１１・３

第千二十八話　実は凄い身体

第千二十八話　実は凄い身体

いつものんびりとしているギリシアですがいざ脱いでみるとこれが実にです。

「本当に彫刻みたいだな」

「そうか」

「ああ、かなり凄いぜ」

フランスも認める肉体美です。

「まんま彫刻みたいじゃねえか」

「特に何もしていないが」

「何もしていなくてそうなるのか？」

「ただ身体を動かしてるだけだ」

それが理由みたいです。

「けれどスポーツはあまり得意じゃない」

「それでもそこまでの肉体あったらすげえぜ。俺でもそこまではなってません。フランスは内心羨望すら覚えています。

「やっぱりそういう肉体美はいいぜ。あと胸毛とかは処理してるんだな」

「母さんが好きでなかったみたいだから」

彫刻とかでは胸毛等はあまりありません。どうやら全て処理していたみたいです。

「ローマ帝国もそういうのは処理していた」

「あの爺さんはともかく家の人はだな」

「髭を剃っているのは昔の上司に言われたからだ」

「ああ、アレクサンドロス大王か」

この人もギリシアの上司だったことがあるのです。

「何か結構御前のファッションも歴史があるんだな」

「そうか」

自分ではあまり自覚していませんが。実はそんなギリシアなのでした。

第千二十八話　　完

２００９・１１・３

第千二十九話　あの時は困りました　☆

第千二十九話　あの時は困りました　☆

大昔のお話です。ローマ帝国が物凄く強かった時です。その時ローマ帝国の上司はネロという人でした。

芸術を愛して気前のいい人でしたがむらっ気のある性格と能力なので困ったこともありました。そして気紛れか芸術やそういったものが好きなせいかこんなことを言い出したのです。

「オリンピアの競技に参加したいな」

「えっ、陛下がですか」

「そうだ。特に歌いたいんだ」

皇帝はとりわけ歌が好きでした。それでその競技には何としても参加したいというのです。ところが。

皇帝は歌が好きで歌うことも大好きです。ところが歌声はとても酷いものでした。つまり下手の横好きという類のものだったのです。

それでも皇帝は皇帝ですから権力があります。それで競技に参加したのですが。

これまた実に酷い歌でした。予想通りに。それで皆辟易したのですがやっぱり皇帝です。競技に優勝してしまったのです。

他にも色々な競技で優勝しました。皆彼を褒め称えます。内心思ったことを隠して。

「困ったことになったな」

金髪の長髪に青い目をした背の高い逞しい青年がローマ帝国に対して言ってきました。この人がローマの親友であるゲルマンです。

「あの人の周りはえらく不満に思ってるぞ」

「そうなんだよな。あれでいいところもある人なんだけれどな」

ローマ帝国も皇帝の周りが不穏になってきているのは気付いていますので困っています。

「どうしたものかな」

「このままだと上司が代わるぞ」
「ああ、けれど何か周りの人達も今一つだしな」
「そうだな。少し荒れるかもな」
不穏な空気が漂ってきました。さて、一体どうなるのでしょうか。

第千二十九話　　完

２００９・１１・４

第千三十話　薔薇を忘れない

第千三十話　薔薇を忘れない

結局なってしまいました。ローマ帝国は大騒ぎになってネロはいなくなってしまいました。それから国は荒れましたが暫くして落ち着きました。

そうしてネロのお墓ができたのですがローマ帝国も帝国の人達も彼のお墓にいつも参りました。そして薔薇を常に捧げたのです。

「また薔薇を捧げたのか」

「ああ。あの人は薔薇が大好きだったからな」

ローマ帝国がそのネロのお墓の前でゲルマンに対して話します。紅の薔薇で飾られています。

「だからなんだよ」

「色々と問題のある人だったのにか」

「確かに問題はあったさ」

ローマ帝国は墓碑を見ながらゲルマンに答えます。

「けれどいい人だった。俺達にも気さくだったし色々と手を尽くしてくれたりもしたしな」

「そうだったな。俺のことも考えてくれたりした」

ローマ帝国だけでなくゲルマンのことも考えてくれる人だったのです。

「だからか。こうして薔薇を捧げるのは」

「そうさ。俺は好きだった」

墓碑を見たまま微笑んで言った言葉です。

「これからこの人がどう言われるかはわからないがな」

「そうか。じゃあ俺も好きでいよう」

「悪いな」

「いい」

ローマ帝国の今の言葉にはこう返すのでした。

「気にすることはない」
何気に気遣いも見せるゲルマンでした。ネロの薔薇に囲まれたお墓の前で。まだ学園の人が殆ど生まれてもいない大昔のお話です。

第千三十話　　完

２００９・１１・４

第千三十一話　伝えたいことがあるんだ　☆

第千三十一話　伝えたいことがあるんだ

☆

「それで用件は何なんだ？」

イギリスがフランスに対して尋ねます。今日は彼に家に招かれているのです。

「御前がこんなにもてなすなんて何か裏があるんだろう？」

「・・・・・・驚かないで聞いてくれ」

リラックスしているイギリスに対してフランスは沈んだ顔で述べます。

「結婚・・・・・・してくれないか？」

「・・・・・・待て」

今のフランスの言葉にまずは止まって。それから言いました。

「エイプリルフールは今日じゃねえぞ」

そしてこう彼に冗談めかして言いました。

「何だよ御前カレンダーも買えない位やばいのかよ」

「カレンダー位は何とか買える・・・・・・」

「その暗い反応は何なんだ？」

イギリスもいぶかしんでいますとフランスはここであるものを出してきました。それは。

「ほらよ」

「それ婚姻届だよ馬鹿」

「いいやこれはカレンダーだ！」

そう言ってイギリスの手を強引に掴んできました。暗鬱な表情が怖いです。

「カレンダーだからな！」

「おい待て！今日何か怖いぞ御前！」

「気のせいだ！」

「それで何で婚姻届にサインさせようとしてるんだ！」
「それも気のせいだ！」
「気のせいなんかじゃねえよ！」
何か恐ろしいことになってきました。明らかに今日のフランスは普通ではありません。

第千三十一話　　完

２００９・１１・５

第千三十二話　結婚できたら

「ずっと憧れてたのよね」
「そうね。今もでしょ」
「ええ、まあ」
台湾がベトナムに対して話しています。少し切なげな顔が如何にも少女チックです。
「それはね。あの時からそれは変わらないわ」
「日本さんの家に入ってからね」
「最初は何この人って思ったのよ」
はじめて会った時のことを思い出して話すのでした。
「何か薄い感じするじゃない、日本さんって」
「一見したら個性が弱いのよね。実際はかなり強烈な個性を持ってる人だけれど」
「けれど一緒にいたらわかるのよ。とてもいい人だって」
話すその目は憧れを見ています。そのうえでベトナムに話を続けるのでした。
「上司の人もそうだったけれどとても優しくしてくれたし」
「それで思ってたのね」
「結婚できたらねってね」
今ここで女の子同士だからこそ言えることを言うのでした。
「けれどそれはできなくて」
「今は一人ね」
「ええ。もう結婚できないけれど」
そのことが少し寂しそうです。
「一緒にいられるだけいたいとは思ってるわ。あいつも一緒にいるけれどね」
「まあ韓国は仕方ないわよ。それでも一緒にいたらいいじゃない」

「できるだけずっとね」

今も日本のことを想っている台湾でした。彼女にとっては日本と一緒のお家にいた時間はとても貴重な思い出なのです。当の日本は気付いていませんけれど。

第千三十二話　　完

２００９・１１・５

第千三十三話　死にそうなのでした　☆

「おいこら！」

イギリスは何とかフランスから逃れようと彼に抗議します。

「どういうつもりだよこれ！」

「仕方ないだろ！俺だってこんなことしたくないんだよ！」

これが本音でした。

「実は俺の家スエズ運河のあえで滅茶苦茶不況で」

「それは聞いてるけれどな」

フランスも何かと大変だったりします。

「それで御前と一緒にならないと」

「どうだってんだよそれで！」

「俺死ぬかも知れないって上司が！」

「そんな理屈で結婚なんてするかよ！」

そしてその婚姻届を滅茶苦茶に書きまくって。

「こんなものこうしてやる！」

「うわあああああっ！」

それを見て絶叫するフランスでした。

「御前何てこそするんだよ！」

「ざま見ろ！」

危機を脱したと見たイギリスはフランスに青い顔のままですが胸を張って言い返しました。

「婚姻届っていうのは無理矢理書かせるものじゃねえんだよ！」

「この鬼畜！悪魔！」

流石にフランスも命がかかっているのでこの事態には泣いています。

「俺が死んでもいいのかよ！」

「そう言って今まで死んだことあるのかよ！」

「うるせえ！」

騒動は続きます。さて、フランスは無事イギリスと結婚できるのでしょうか。まず無理ですけれど。

第千三十三話　　完

２００９・１１・６

第千三十四話　不死身な国

第千三十四話　不死身な国

フランスは死にそうになったことが何度もあります。それはイギリスも同じです。その度に何とか立ち直ってきたのですがこの国はどうかといいますと。

「まあ大丈夫だよ」

「って御前もう復活してきたのかよ」

フランスがロシアに対して突っ込みを入れています。

「この前だぞ。瀕死の重傷負ったのは」

「あれ位何でもないよ」

けれどロシアは至って平気な様子です。見たところ怪我とかもありません。

「だってさ、いつものことだし」

「いつも！？」

「そうだよ。病気や怪我なんていつもじゃない」

ロシアにとってはそうらしいです。

「だから何でもないよ。あれ位はね」

「そうなのかよ」

「だから平気だよ」

その大柄な身体も健在です。本当に普段と変わりありません。

「それどころか前よりも力がついたみたいだよ」

「復活する度にか？ってことは」

「そうかもね。僕って何かある度に強くなるからね」

それがロシアだったりします。伊達にあそこまで大きくなったわけではありません。

「だから何でもないんだ、あれ位の怪我はね」

「フェニックスの聖衣みたいな奴だな」

フランスがイメージしたのはそれでした。とにかく不死身なロシ

アでした。それこそ何があってもすぐに回復しておまけに焼け太りする人なのでした。

第千三十四話　　完

２００９・１１・６

第千三十五話　最後の手段　☆

どうしても結婚にはいそうですかと言わないイギリス、考えてみなくても当然のことなのですがこのことに業を煮やしたフランスは。お家の人達を呼んでこう言うのでした。

「こうなったら最後の手段だ！」

「はい！」

「俺達も死にたくありませんから！」

彼等にしても命がかかっているから必死です。それでフランスの言葉を聞いて。

「捕まえろ！」

「わかりました！」

「逃がさないぞイギリス！」

「おいちょっと待て！」

捕まったイギリスは当然のように抗議します。

「一体何する気なんだよ！」

「大丈夫だ、やれる」

フランスはイギリスの問いに答えずに一人呟いています。

「聞いてるのかおいフランスちょっと待て！」

「大丈夫、頑張れる」

フランスはイギリスに答えずに呟き続けています。

「俺ならできる、やれるんだ」

「って御前目が完全にいってるぞ！」

「俺ならできる、大丈夫大丈夫・・・・・・」

「大丈夫なわけねえだろ！」

「やれる、一緒にやっていけるんだ・・・・・・」

「そんなわけあるかーーーーーーーーっ！」

こんな顛末でした。結局何とか逃げたイギリスは当分フランスと

顔を合わせようとせず。フランスも何とか生き残ってそれでこの話はなかったことになったのでありました。

第千三十五話　　完

２００９・１１・７

第千三十六話　一緒といえばこの人達

第千三十六話　一緒といえばこの人達

イギリスとフランスの結婚は見事に破談に終わりました。しかし一緒にいたといえばやっぱりこの人達です。

リトアニアとポーランドは長い間一緒に住んでいました。そして今も何かあると一緒にいます。ポーランドがかなり我儘を言ってはいますが。

「それでさーーーー、リト」

「今度は何なの？」

そのポーランドに何だかんだ合わせているリトアニアです。

「全く。しっかりしないと本当にね」

「よかね？別に適当でも」

「よくないよ。だからしっかりするところはしっかりしないと」

こう言ってもポーランドの態度は変わりません。そんな彼にリトアニアは困っていますがそれでも合わせ続けているのですから立派です。

そんなリトアニアの存在は皆から見てまさに憧れです。そしてポーランドは。

「羨ましいものだ」

ドイツが素直に言っています。

「ああした世話焼きがいてくれているというのはな」

「御前には俺がいるしイタちゃんがいるじゃねえかよ」

そのポーランドを見て羨ましがるドイツに対してプロイセンが笑いながら言ってきます。

「相棒がいる生活ってのはいいもんじゃねえかよ」

「俺はリトアニアみたいな奴が一緒にいてくれるポーランドが羨ましいのだがな」

「何か俺が世話焼きじゃないみたいだな、それだと」

「御前は感謝している」
プロイセンに対してはです。
「しかしイタリアにはだ」
「けれど何だかんだでイタちゃんの面倒見るんだな、御前は」
「放っておけんのだ、あいつは」
イタリアとドイツもそうした意味でいい関係です。一緒にいて幸せになれている人達はポーランドとリトアニアだけではないようです。

第千三十六話　　完

２００９・１１・７

第千三十七話　仲の悪い人達

第千三十七話　仲の悪い人達

学園内でも有名な対立関係は幾つかあります。そもそも生徒会からしてそうです。

まずイギリスとフランスです。けれどこの二人は何だかんだで一緒にいたりするので皆実際のところはそんなに心配していたりはしません。

「ああ、またやってるやあの二人」

「気が済むまでやらせておくか」

こんな調子で放っておかれています。それにしても生徒会のメンバーなのに学園の皆からあまり尊敬されていないようであります。

次にアメリカ、中国とロシアです。アメリカと中国もこれまた微妙な時がありますが二人はそれぞれロシアとかなり深刻な対立関係にあります。これは洒落になりません。

「あの三人だけはな」

「あまり入らない方がいいよな」

「どっちについても何されるか」

わからないのは目に見えているからです。三人共表情には出さずにオーラで周りに示していますから余計に怖いです。この三人もまたこんな関係です。

その他にも洒落にならない関係が多々あります。フランスはオーストリアさんやドイツともあまり仲がよくありませんがオーストリアさんは適当にあしらっていますしドイツの場合は彼の方が明らかに強いのでこれまたあまり問題にはなっていなかったりします。

日本と韓国についてですが。

「あんただからそんなに嫌いなのに何で日本さんの側にいつもいるのよ」

「それは気のせいなんだぜ」

今日も生徒会の仕事をほったらかしにして日本にまとわりついている韓国が台湾に怒られています。
「そういう御前もあれなんだぜ。日本の側にいるんだぜ」
「それは気のせいよ、気のせい」
どうも韓国と台湾の方が問題です。どうもこの二人日本を巡っていつも喧嘩しています。

第千三十七話　　完

２００９・１１・８

第千三十八話　関わり合いになりたくない

第千三十八話　関わり合いになりたくない

韓国と台湾の仲の悪さは学園内でかなり有名です。とにかく日本の側であれやこれやと言い争いばかりしています。けれど生徒会はそのことについて何も言いませんし見ようともしません。まずは二人のいる太平洋側の三人ですが。

「ああ、そうなんだ」

「ノーコメントある」

「別にいいじゃない。元気があって」

台湾については微妙なものを持っているアメリカと中国はあえて触れようとしません。そしてロシアはそもそも二人のことにあまりというか殆ど関心がありません。

そして残る二人はどうかといいますと。

「あの馬鹿が何をやったってな」

「知らねえよ、何も見えないからな」

イギリスとフランスは不機嫌を露わにさせてこう言い返します。二人は生徒会長でもある韓国が絡むとどうしてもこんな態度になってしまうのです。

「喧嘩する位なら少しでも書類仕事しやがれってんだ」

「冗談抜きに生徒会長としての仕事をやれよ」

いつも代理で仕事をしている二人は不平たらたらです。

「ったくよ、何であいつが生徒会長によ」

「冗談抜きで今からでも代えてやりてえよ」

そして二人の喧嘩についても何も言わないのです。

「大体台湾強いだろ？大丈夫だろ」

「いつもあいつが勝ってるじゃねえか。俺達の出る幕じゃねえよ」

そして実際に二人の喧嘩を見ると。

「龍尾乱風脚！」

「アイゴッ！」

台湾の旋風脚が見事に炸裂しています。どうやら本当に彼女の方が強いみたいです。

第千三十八話　　完

２００９・１１・８

第千三十九話　仲の悪いとはっきりと

第千三十九話　仲の悪いとはっきりと

仲が悪いとすぐに関係がはっきりと周りにもわかります。それはお互いが隠していてもそれでもわかってしまうのです。

例えば日本とロシアですが。この二国の仲の悪さは皆が知っていることです。

「うわ、また日本さんとロシアさんが一緒だよ」

「まずいよこれは」

リトアニアとエストニアがまず二人が一緒になっているのを見て困った顔になっています。

「喧嘩にはなっていないけれど」

「お互い物凄いオーラ出してるし」

二人共状況が状況なら今にもその手に持っている刀や鉄の水道管が恐ろしいことに使われてしまいそうです。そんな緊迫した状況です。

「何であの二人よく一緒になるんですか？」

ラトビアはそもそもそれが不思議です。

「おかげで殺気を周りに撒き散らして怖いんですけれど」

「何だかんだでお隣同士だからね」

リトアニアが言いました。

「それでよくああして一緒になるんだよ」

「何かそれはお互いにとっても僕達にとってもいいことではないですね」

エストニアは真剣な顔で言い切りました。

「どうしたものでしょうか」

「ううん、この殺気が怖いです・・・・・・」

ラトビアは本気で嫌がって泣いてすらいます。

「どうしてこんな関係ばかりなんですか？ロシアさんって」

「まあロシアさんだからね」
リトアニアの言葉は身も蓋もないものでした。
「それは仕方ないよ」
「何かあったら逃げる用意をしておかないと」
エストニアはもうその準備をしています。そんな周りにどても迷惑な二人の仲の悪さなのでした。

第千三十九話　　完

２００９・１１・９

第千四十話　一番凄い関係

第千四十話　一番凄い関係

日本とロシアの様に殺伐とした仲の悪い関係も怖いですが学園で一番仲が悪いといえば。

「あいつの顔は見たくない」

「あいつかい！？だいっ嫌いだねい」

ギリシアとトルコがお互いに言います。この二人の仲は学園で最も有名です。

とにかく何があれば大喧嘩をします。普段からお互い睨み合いお話することなぞ全くありません。勿論好き嫌いのアンケートでも。

トルコが一番嫌いなのはギリシアになります。ギリシアが一番嫌いなのもトルコです。それで物凄く仲が悪いのですがとても困ったことになっています。

「おかげで周りが迷惑なんだけれど」

「仲直りしてくれないかな」

皆困った顔で二人に言います。

「何時巻き込まれるか」

「実際にキプロスはあれだし」

当然ながら両者の関係はそのまま周りも巻き込んでいます。とても困ったことにです。

「せめて喧嘩をしないまでにね」

「してくれたらいいけれど」

「そう心掛けている」

「わかってるさ。安心しねい」

とはいってもやっぱり二人の仲は悪いままです。

「そうか。トルコと喧嘩だ」

「あいつだけは許さねえ。やってやるよ」

また些細なことで喧嘩になろうとしています。これには生徒会も

困っていて。実質二人で仕事をしているイギリスとフランスも頭を抱えています。

「昔はそれを利用できたんだけれどな」

「今は傍迷惑なだけだよ」

こう言って困っています。生徒会ですら手がつけられないトルコとギリシアの関係なのです。

第千四十話　　完

２００９・１１・９

第千四十一話　けれど日本は好き　☆

第千四十一話　けれど日本は好き　☆

「まあ日本のことはトルコより好き・・・・・だと思ってる」

ギリシアが大勢の猫達に囲まれながら長い話をはじめました。

「昔から仲がよかったし日本の文化も結構好き・・・・・？かな。侍には一度会ってみたいな、と思う」

話はさらに続きます。

「それと日本にはとても感謝している。最近の俺は他の国からの買い物が多くて毎年赤字を出していた。それを遠くから色々応援してくれたのは日本・・・・・だったし」

日本は色々といいことをしているのです。それはギリシアに対してもです。

「うん、中古車買う時も絶対に日本のにしてる。日本のは中古でも壊れにくいし」

ここまで話してです。日本に来て彼に会うのでした。

「それで今日は侍じゃなくて神社が見てみたい」

「はい、では御案内しますね」

「？これが日本の神様？」

大きくて太い赤と白の綱が目に入りました。

「それは呼ぶ道具です」

「神様をか」

「はい、お賽銭を入れてそれで呼び出すのです」

「金がないと神も出勤しないのか」

ギリシアは日本の話を聞いてこう考えたのでした。

「中々人間らしい神様だな」

「ですね。それで呼び終わったら願い事をします」

綱を手に取って動かすギリシアに対してさらに説明します。

「それで御願い事は」

「これってトルコ死ねって思えばいいのか？」
「もう少し柔らかい表現をして下さい」
こんな時でもトルコが嫌いなギリシアなのでした。結局この御願いはしませんでした。当然ですが。

第千四十一話　完

２００９・１１・１０

第千四十二話　二人の御願いは

第千四十二話　　二人の御願いは

日本とくれば絶対に出て来るこの人達、台湾と韓国も今日は二人一緒に日本の神社にお参りしています。とはいってもここでも仲が悪いですけれど。

「何であんた今日もいるのよ」

「それはこっちの台詞なんだぜ」

こう言い合いながらお参りをしています。それで御願いをするのですが。

「日本さんともっともっと仲良くなれますように」

「日本は俺の召使いになるんだぜ」

二人はそれぞれこう御願いをしました。どちらも日本とのことを御願いしています。

けれど御願いしてから。また喧嘩に入る二人でした。

「何よ召使いって。日本さんがあんたみたいなのに使われる筈ないでしょ」

「仲良くって何なんだぜ。そんなふざけたこと言ってるから駄目なんだぜ」

「私の何が駄目なのよ」

「全部そうなんだぜ」

こんなことを言い合いながら喧嘩を続けます。それを見た日本の神主さんが呆れた顔で。二人に対して言ってきました。

「神聖な神社の境内でその様なことは」

「こいつが悪いんですよ」

「こいつのせいなんだぜ」

取っ組み合いの最中で神主さんに対して答えます。

「私はですね、日本さんと私の仲がですね」

「俺は昔俺をいじめていた日本の奴をなんだぜ」

「御願いはいいですから静かにするのです」
神主さんはそんなことよりも、というのでした。
「宜しいですね」
「はい、じゃあ」
「今日はこれ位にしてやるんだぜ」
神社の中でも仲の悪い二人でした。けれどやっぱり二人共日本のことを思っているのでした。

第千四十二話　　完

２００９・１１・１０

第千四十三話　本当にいた

第千四十三話　本当にいた

ノルウェーには一つ物凄く有名な伝説があります。それは海にまつわるものです。

「出るだ、嵐の時」

「あれだっぺな、オランダ人」

「そうだべ、あれを見た時は本当に驚いた」

こうデンマークに対して話しています。

「それは確か御前も」

「もう何度も見てるっぺよ。あれは怖いっぺ」

「嵐の中に現れる幽霊船」

それがオランダ人の様です。

「あれは本当に存在しているだ」

「ああ、それ俺も見たぞ」

イギリスが彼等の話に入って来ました。海といえばこの人です。

「嵐の中に何かいるって思ったらな」

「あれは七年に一度丘の上にあがってくるだ」

「そうらしいな。それで永遠の恋人を見つけるんだよな」

イギリスもこの話は知っているのでした。

「伝説のさまよえるオランダ人。今もいるのか？」

「もう消えたんだっぺか？」

ここでデンマークはこんなことを言いました。

「確かもう」

「その噂も聞いてるだ。けれど確証はないだ」

「それが問題だな。まだいるのかどうか」

「僕はいると思ってるだ」

ノルウェーはそう考えているというのです。

「多分。今もこの海の何処かに」

「いるのかよ。まだ」
イギリスは海を見ながらノルウェーの言葉を聞いています。そこに広がっているのは今はとても静かな海です。けれど今も何処かにオランダ人がいるのかも知れません。

第千四十三話　完

２００９・１１・１１

第千四十四話　オランダ人捜索隊

第千四十四話　オランダ人捜索隊

このさまよえるオランダ人のお話は日本にも伝わっています。日本もその話は知っています。それで彼も今もいるのかどうかと思っているのです。

「果たしてどうなのでしょうか」

「いるって思えばいるしいないって思えばいないんだよ」

この時日本に自分の手料理を振舞っていた某脚本家さんが日本に対して話しました。

「実際のところな。いると思うか？」

「そう言われますと」

脚本家さんの作った麻婆豆腐を食べながら応える日本でした。

「果たしてどうなのでしょうか」

「まあ太平洋にはいないな」

脚本家さんはそのことは間違いないと思っているようです。

「こんな賑やかな場所には合わない奴だしな」

「そうですね。言われてみれば」

太平洋の海にそうしたオランダ人の幽霊船は合いません。それを考えますとさまよえるオランダ人がいるのはやはり大西洋の、それも北の海になります。

「ここにはいませんか」

「何なら大西洋に行くか？」

ここで脚本家さんが提案してきました。

「今からな」

「今からですか」

「じゃあ飯食ってからだ」

かなり強引に決めてしまいます。実にこの人らしいです。

「それでいいな」

「はあ、それでは」
　こうして日本と脚本家さんはオランダ人の捜索に出撃することになりました。珍道中になるのかサスペンスになるのか、それはまだ誰にもわかりません。

第千四十四話　　完

２００９・１１・１１

第千四十五話　助っ人は

第千四十五話　助っ人は

日本と某脚本家さんはいざさまよえるオランダ人を捜しに出発することになりました。しかし二人だけで大海原に出るというのはやはり問題があります。

「二人だけではどうかと思いますが」

「ああ、わかってるさ」

日本は大きな、それこそ戦艦みたいな船の前に脚本家さんに対して言います。すると脚本家さんもこう言葉を返してきました。

「それは俺もな」

「ではどうされるのですか？」

「今から人を呼ぶ」

こう言うのです。

「それも何人も呼ぶからな」

「何人もといいますと」

「日本には色々な奴がいるんだ」

確かに色々といます。い過ぎてわからない位です。

「その連中を今から呼ぶからな」

「今からですか」

「ああ、とにかくありったけ呼ぶ」

話をかなり大きくしています。この辺り実にこの人らしいです。

「それでいいな」

「まあお話が解決するのなら」

日本もやぶさめではありませんでした。

「それで御願いします」

「わかった。それじゃあな」

こうして脚本家さんが人を集めることになりました。果たしてどれだけの人が、またどんな人が集まってくるのでしょうか。これは

これで大きな騒ぎになろうとしていました。

第千四十五話　　完

２００９・１１・１２

第千四十六話　その呼び方は相変わらず

第千四十六話　その呼び方は相変わらず

脚本家さんが人を呼ぶことになりました。すると今度は一体どうやって人をこの大きな船まで集めるかということが問題になります。今二人は港にいてその大和みたいな戦艦の前にいるのです。

とても二人で動かせる船ではありません。人が沢山必要なのは間違いありません。日本はそのことも気になって脚本家さんに尋ねました。

「本当にどれだけ集められるんですか？」

「集められるだけうんと集めるから安心しろ」

「集められるだけですか」

「ああ、じゃあ今から集めるぞ」

こう言って取り出してきたのは。

携帯電話でした。それを取り出してきたのです。

そうしてその携帯で。

「おう、俺だ」

こう誰かに電話をかけました。

「すぐに来い」

場所は一切言っていません。おまけに誰かさえ言っていません。

「あいつとあいつも連れて来い。そっから周りにも来いと言え。いいな」

そうした電話を何回かしました。それだけでした。

「これでよしだ」

「それだけで人が来るのですか」

「俺はいつもこうやってるからな」

これが本当のことですから凄いです。

「安心しろ。これで大丈夫だ」

「確かにいつもこれでやっていけていますからね」

このことは日本も知っていました。かくして今から人が来ることになったのです。

第千四十六話　　完

２００９・１１・１２

第千四十七話　集まったのは

第千四十七話　集まったのは

こうして物凄い人の集め方をした脚本家さんですが本当に人が来るかといいますとほんの二十秒程度で来てくれました。何処なのか全く言っていないのにです。

「井上ワープですか」

「ああ、それだ」

脚本家さんは日本に対して言います。

「これを使えば誰だって集められるからな」

「相変わらず物凄い技ですね」

日本も賞賛するしかありません。理屈や常識を一切無視した技なのは間違いありません。

何はともあれやって来たのはまず大阪に会津、金沢、水戸、尾張、そして仙台でした。日本のお家の人達が来てくれたのです。

「呼ばれたんで来たで」

「それで何の用ですか？」

大阪と会津が日本に対して尋ねます。

「何かでかい船を用意してるけれどな」

「これに乗って何処かに行くんですか？」

「ああ、これから大西洋まで行くんだよ」

脚本家さんがその集まってきた面々に対して言います。

「さまよえるオランダ人を探しにな」

「えっ、オランダ人って」

「またそれは」

仙台と金沢がそれを聞いて驚きの声をあげます。

「また無茶ですよ」

「いるのかどうかもわからないのに探しに行くなんて」

「いいんだよ、そういうのが面白いんだからな」

ここで脚本家さんの決め台詞が出て来ました。これで何もかもが決定です。この面々を連れて行くことにしたのでした。

第千四十七話　　完

２００９・１１・１３

第千四十八話　他にも来ました

第千四十八話　他にも来ました

来たのはこの六人だけではありませんでした。何か色々と来てくれます。

あの傍迷惑な四人のライダーもいますが他にもぞろぞろ来ます。

妙に多いです。

「日本にはこれだけの人がいたのですね」

「そうだな。俺もはじめてわかった」

日本も脚本家さんもかなりアバウトなところがあるようです。

お洒落な外見の博多に朴訥とした鵜殿、小柄な彦根、大柄な奈良、明るそうな舗家、目つきの鋭い府内、眼鏡の伊予、覆面の赤福、ぼうっとした諫早、美少女津軽、顔のいい春日部、そして真面目そうな富山です。いきなりこれだけの人達が出て来ました。

「これまた多いですね」

「これだけあればいけるだろ」

脚本家さんはその顔触れを見ながら日本に対して言います。

「しかし本当に思ったより多いな」

「何か人間以外にも来てくれていますね」

見れば妖怪達まで助っ人に来てくれています。日本は普段は見えないのですが何故か今回は見えます。

「ただ。あのライダーの方々も御一緒なのが気になりますが」

「大丈夫だろ、妖怪の相手をするのは鬼だからな」

とりあえずライダーと妖怪達のバトルはないようです。

「まあ騙す相手もいねえし安心しろ。オランダ人に会う途中に何かに出会ってもあいつ等がいればちゃんと戦ってくれるからな」

「つまり戦闘用なのですね」

その為のライダーなのですから当然と言えば当然です。

「ではこの顔触れで」

「よし、出航だ」
当然日本が船長になって出航です。こうしていざ日本ファミリーいきなり総員登場でオランダ人捜索に向かうのでありました。

第千四十八話　　完

２００９・１１・１３

第千四十九話　いざ出航

第千四十九話　いざ出航

人も集まり出航です。さて、日本を出発してどの航路を採るかですが。

「北周りにはしないんですか」

「寒いから止めた方がいいだろ」

脚本家さんが船長である日本に対して言います。

「それとも凍えながら延々と行くか？船には冷暖房があるがそれでも北極は辛いと思うがな」

「そうですね。それでは止めた方がいいですね」

それを聞いて頷く日本でした。

「では南から」

「おうよ、じゃあ長旅もついでに楽しもうぜ」

こうして彼等は南からインド洋に入ることにしました。本当に長い旅のはじまりです。

「何か凄いことになってるけれど」

「そやけどかなり面白いで」

尾張と大阪が楽しく見張りをしながら話をしています。

「このまま幻の幽霊船を探しに行くんやからな」

「そうよね。食べ物も美味しいし」

船の食べ物は美味しく、海軍からの基本です。

「楽しい旅になりそうね」

「旅はええけど一つ気になることがあるんやけれどな」

ところがここで大阪はこんなことを言ってきたのです。

「後ろからついて来る二隻の船ってやっぱりあれなんやろな」

「そうね、間違いないわね」

尾張はその二隻の船を見てすぐにわかりました。

「あの二国ね」

「やっぱりついて来るんやな、日本の後ろに」
その二隻の船にそれぞれ乗っているのは誰か、どうも日本のメンバーだけでは話は終わらないようです。

第千四十九話　　完

２００９・１１・１４

第千五十話　その二隻の船は

第千五十話　その二隻の船は

日本の大和の如き大きな船の後ろについてきている二隻の船にそれぞれ乗っているのは。いつもの二人でした。

「何であんたがここにいるのよ！」

「そういう御前こそ何で俺の後ろについて来るんだぜ！」

台湾と韓国です。やっぱりこの人達でした。しかもいつも通り喧嘩しています。

「私は日本さんが心配だからついて来てるのよ」

「日本がまた悪さしないように見張りとして来ているんだぜ」

それぞれ理由を言います。

「あんた日本さんに悪いことなんてされたことないじゃない」

「無理矢理家に入れられたんだぜ」

「あの時は何処をどうやったらあんな器用な家の入り方ができるのっていう話だったでしょ」

その韓国が日本の家に入った経緯については台湾も知っています。何しろ一時期三人で一緒の家に住んでいましたから。

「あんたの家の上司の人達がおかしなことばかりするから」

「五月蝿いんだぜ、とにかく日本は悪い奴なんだぜ」

最早理屈も何もありません。

「だから生徒会長である俺がこうして」

「そういえばあんた生徒会長だったわね」

ふとこのことを思い出した台湾でした。

「じゃあ余計にこんなところで遊んでいいわけないじゃないの、さっさと生徒会室に戻りなさいよ！」

「五月蝿いんだぜ、御前の方こそ帰るんだぜ！」

「何ですって！もう許さないわよ！」

こうして二人は砲撃戦をはじめてしまいました。日本はレーダー

と見張りからその報告を受けて言いました。
「後ろにいるのは誰でしょうか。騒がしいのですか」
「まあ気にするな。いつものことだ」
それだけで済ませる天然の日本と些細なことにしか思わない脚本家さんでした。そんな騒ぎをよそに航海は続きます。

第千五十話　　完

２００９・１１・１４

第千五十一話　生徒会は平和に

第千五十一話　生徒会は平和に

韓国が日本の後をついていくということはそのまま生徒会には出て来ないということであります。これはとんでもないことなのですが生徒会のメンバーの反応はといいますと。

「あれ、韓国君いないね」

「またどっかに行ったあるな」

「仕方ないな、本当に」

ロシアと中国、アメリカの反応は別にいてもいなくてもいいといったようなものでした。推薦したのはこの人達ですが全く意に介していません。

そしていつも迷惑しているこの人達はといいますと。

「やたぜ、暫くそのまま消えておいてくれ」

「もう二度と来なくていいからな」

こう言って心から喜んでいます。本当に楽しそうです。

仕事も随分と減ってしかも楽なものになっています。この人達にとってはいいことづくめであるようです。

その仕事もすぐに終わってお家に帰ることができています。このことにさらに喜んでいます。

「このまま二度と出て来なかったらいいな」

「そうだな。それで何処に行ったんだ？あいつは」

「何かまた日本について行ったらしいな」

イギリスはこうフランスに答えました。

「何かな。またみたいだな」

「そうか。そのまま二度と帰って来なかったらな」

「いいんだけれどな」

「全くだ」

こう言って束の間の平和を楽しんでいます。何と会長がいないと

それだけで生徒会はかなり楽になるようです。考えてみれば物凄い会長であります。

第千五十一話　完

２００９・１１・１５

第千五十二話　後で来ます

第千五十二話　後で来ます

イギリスとフランスが平和を満喫している頃。韓国は何をしていたかといいますと。

船の上で豪華な食事を楽しんでいます。しかも物凄い量です。

ついでにそこに台湾も来ています。彼女は彼のその豪華な食事を見て怪訝な顔で言いました。

「あんたこんなのいつも食べてるの？」

「船にいる間はそうなんだぜ。船じゃ食べることが一番の楽しみだからなんだぜ」

「それはそうだけれど」

「だからいいんだぜ。それに俺は太らない体質だから余計にいいんだぜ」

「で、お金は？」

ここで台湾はかなり核心的な部分を尋ねました。

「あんたこの物凄く贅沢な食事のお金は？何処からなの？」

「お金？そんなのはもう確保してあるんだぜ」

韓国は涼しい顔で彼女の問いに答えます。

「それは生徒会から出しているんだぜ」

「えっ、生徒会って！？」

「生徒会の運営費から出ているんだぜ。だからこれだけ好きに食えるんだぜ」

「ちょっと、それって」

それを聞いてすぐにわかった台湾でした。今彼がしていることがどれだけやばいことなのかを。もう少し聞いただけでわかることでした。

「まずいなんてものじゃないんじゃ」

「金はイギリスとフランス持ちなんだぜ。だから幾ら食べても平気

なんだぜ」
　またしてもこの二人でした。台湾も話を聞いているだけで二人に同情せずにはいられませんでした。
「あの人達も災難ね。本当に」
　そして生徒会ではトマホークの如き請求書が山の様に来て二人の前にうず高く積まれていました。二人はそれを見て絶叫せずにはいられませんでした。
「早く任期終われ！」
「何処をどうやったらこれだけ食えるんだよ！」
　結局何処にいても二人に災厄をもたらす韓国でした。これは物凄い才能ではあります。

第千五十二話　　完

２００９・１１・１５

第千五十三話　流石です

第千五十三話　流石です

韓国が物凄い御馳走を食べている頃日本と他の人達は何をしていたかといいますとこの人達も凄い御馳走を食べていました。

テーブルの上にまさに山海の珍味が並んでいます。これは日本のお金で揃えたものですが問題はそれを作った人が誰かということです。その作った人は。

「相変わらずお見事です」

「んっ？作ったのは俺じゃねえぞ」

某脚本家さんが日本に対して答えます。

「俺じゃなくてな」

「では誰なのですか？」

「賄いさんが作ってくれたんだよ」

こう言うのでした。

「だから俺じゃねえ。御礼を言われる筋合いはねえな」

「そうなのですか」

「ああ。まあ食おうぜ」

日本と皆に対してさらに食べるように勧めるのでした。

「量はかなりあるからな」

「そうよね。何かこんな美味しいものがいつもふんだんに食べられるって」

「最高やな、ほんまに」

尾張も大阪もこのことも満足しています。

「おかげで楽しい船旅になりそう」

「昼寝もできるし。言うことないわ」

「そうですね。ノルウェーさんの近くの海まで楽しい旅になりそうです」

日本も言います。とにかく今は楽しい船旅の中で過ごす日本達で

した。

第千五十三話　完

2009・11・16

第千五十四話　嵐が来ても揺れても

第千五十四話　嵐が来ても揺れても

海には嵐がつきものです。そして船は揺れるものです。けれど日本も皆もそれで全く困った様子はありません。

この日は外は大嵐でしたが皆中に入って穏やかに過ごしています。見張りの人も今は雨天用の見張りのボックスに入ってそこから見張りをしているのでした。

「この船全然揺れないのね」

「ニーー、ニーー（翻訳：有り難いことだよ）」

津軽と赤福は艦橋にいます。そこでも全く揺れず皆穏やかな顔をしています。

船酔いしている人は誰もいません。それは何故かといいますと。

「やはり船が大きいのはいいことですね」

「そうですよね。それで大助かりですよ」

金沢が日本に対して応えます。

「揺れないですし何が来ても怖くないですし」

「何しろ大和ですからね」

そのまさに大和という巨艦を意識せずにはいられない日本でした。見れば外観も武装もそのままです。まさに軍艦です。

「冷暖房は完備ですし」

「ラムネや羊羹も作れますしね」

「食べることにも困りませんし揺れない。最高の船ですね」

「そうですね。ところで日本さん」

ここで金沢は日本に対してさらに声をかけるのでした。

「後ろの人達は」

「まだついて来ているのですね」

「はい、どうしましょうか」

「この嵐ですから何もなければいいのですが」

そう言いながらレーダーに映るその二隻の船を見ているのでした。
さて、その二人はどうなっているでしょうか。

第千五十四話　　完

２００９・１１・１６

第千五十五話　揺れに揺れて

第千五十五話　揺れに揺れて

二人がそれぞれ乗っている船は日本達が乗っている船と比べるとかなり小さいです。まさに巨大戦艦と駆逐艦位の差があります。ですから。

「す、凄い揺れるわね」

「物凄いんだぜ」

二人はまずそのことに驚きました。

そして揺れるとどうなるか。問題はこれでした。

「ふ、船酔いが」

「どうにもならないんだぜ」

今度はそれに悩まされました。気分が悪くなるどころではなく本当にノックアウトされています。それでどうしようもなくなっています。

「それじゃあどうします？」

「引き返しますか？」

それぞれの国の人達が心配して声をかけます。

「ここから。どうしますか？」

「もう日本さんについて行かずに」

ところがです。二人共伊達にいつも日本の後をついていっているわけではありません。この程度で帰るかというともう答えは出ています。

「い、いえ大丈夫だから」

「これ位何ともないんだぜ」

こう言って帰ろうとしません。そのまま行くことにしたのです。

しかし船は何かあると揺れます。二人共その度に。

「海って辛いのね」

「日本の奴結構頑丈だったんだぜ」

二つのことがわかったのでした。海のことと日本のこと、それはかなり重要なことでありました。とにかく海の嵐は物凄いものです。

第千五十五話　　完

２００９・１１・１７

第千五十六話　日本の差し入れ

第千五十六話　日本の差し入れ

日本の船から見ても二人の船はかなり揺れています。まさに大海の中の小舟です。

「大丈夫ですかね」

「大丈夫じゃねえだろうな」

それを見て言う日本に対して脚本家さんが答えます。

「あれだけ揺れていたらな」

「そうですね。御二人共それではかなり酔っておられますね」

そのことを考えた日本はです。空を飛べる仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディに対して御願いをしたのです。二人は偵察要員になっているのです。

「それでは御願いしますね」

「ワカッタ」

「ココハ任セテクレ」

それぞれ全く頼りにならない返事でした。何しろ勘違いはいつものことでそこから大騒ぎを引き起こすことがいつもの人達だからです。

けれど今回は二人もちゃんとしてくれました。日本に頼まれたものを二人にそれぞれ届けたのです。それは何かといいますと。

「日本さんからですか」

「これを只で。まあ貰ってやるんだぜ」

台湾と韓国にそれぞれ渡したもの。それは酔い止めのお薬でした。つまりそれを飲んで楽になって欲しいということだったのです。

二人はそのお薬を早速飲みますと。

「あっ、何かかなり」

「楽になったんだぜ」

こうして二人の船酔いは止まりました。日本からのささやかな贈

り物、これに今回も助けられた二人でした。そして日本はそのことについて何も言わないのでありました。

第千五十六話　　完

２００９・１１・１７

第千五十七話　喜望峰かそれとも

第千五十七話　喜望峰かそれとも

一行はそのままインド洋を進みます。ここで日本が皆に尋ねました。

「これから進む道ですが」

「はい」

「どうするんですか？」

「二つありますが」

アフリカ大陸の地図を皆に見せながら話すのでした。

「喜望峰か紅海かです」

「紅海の方が短いですよね」

「そうです」

こう答えました。

「それに対して喜望峰はかなり長くなります」

「何か凄い時間がかかりそうですけれど」

「それもかなり」

皆それを聞いて述べます。

「何か。それを考えたら」

「紅海からスエズ運河に入るべきでは？」

「そうだよな」

皆その考えに至りました。

「ここはやっぱりな」

「それに地中海で遊べるし」

「では決まりですね」

日本は皆の意見を聞いて述べました。

「紅海に入りましょう」

「ええ、それじゃあ」

「それで」

こうして日本は地中海に入りました。そこで待っていたのは。

第千五十七話　　完

２００９・１１・１８

第千五十八話　もてなし大好き

「よお、日本でねえかい」
「あっ、トルコさん」
まずはトルコが出て来ました。彼は明るく日本一行に声をかけてきます。
「何か幽霊船を探してるってな。わざわざ日本からよく来たねい」
「もう御存知だったんですか」
「ああ。話は聞いてたぜ」
こう日本に対して言うのでした。
「御苦労なことだな。それでだ」
「はい、それで？」
「まあ一休みしねい。御馳走用意しておいたからねい」
こう言って日本とその一行を宴の場に連れて行くのでした。
するとそこにはトルコが作った料理が並べられていました。量も種類もかなりのものです。
「さあ食いねい」
トルコは仮面の下を満面の笑顔にさせて日本達に告げます。
「遠慮はいらねい。楽しめばいいさ」
「うわ、こんなにたっぷり」
「しかも量まで」
「こう見えても俺は料理が好きでねい」
意外な一面です。
「それを日本達に食べてもらえるんなら有り難い話さ。さあ食いねい食いねい」
「トルコさん、申し訳ありません」
「いいってことよ。後ろの連中も呼びねい。楽しくやるのが一番でい」

何と韓国と台湾も呼ぶというのです。流石トルコ、かなり太っ腹であります。

第千五十八話　　完

２００９・１１・１８

第千五十九話　チューリップの中で

第千五十九話　チューリップの中で

「いやあ、あれなんだぜ」
「あれって何よ」
トルコのもてなしを受けて御満悦の韓国に対して台湾が突っ込みを入れます。彼女もかなりのもてなしを受けてお肌がすべすべになっています。
「また急に言い出して」
「トルコっていい奴なんだぜ。それに」
ふと辺りを見ますとそこは一面チューリップが咲き誇っています。それを見ても御機嫌の韓国です。とにかく目に見えるものも皆とても奇麗です。
「赤や黄色や白のチューリップがとても奇麗なんだぜ」
「あんたお花好きだったの」
「何かおかしいんだぜ？それが」
「食べるのばかりだと思ってたから」
実際に韓国はトルコでも食べまくっています。これだけ美味しいものばかり食べまくってよく太らないものだと感心するだけ食べまくっています。それで台湾が突っ込みを入れるのも当然と言えば当然でした。
「違ったのね」
「これでも俺は詩人なんだぜ」
最も似合わないことを平然と言います。
「だからこういう花鳥風月も大好きなんだぜ」
「それ日本さんの言葉だし。それでも」
台湾もふと周りを見ます。その色とりどりのチューリップの咲き誇っている様子を。

それを見ると自然に笑顔になります。そしてこう思うのでした。
「日本さんと一緒に見られたらなあ」
「んっ？何か言ったんだぜ」
「あんたには関係ないことよ」
韓国の問いには冷たいです。けれどこう思ったのは事実です。

第千五十九話　　完

２００９・１１・１９

第千六十話　ライバルは多い

第千六十話

ライバルは多い

台湾は日本と一緒にチューリップを見て回りたいと思いました。けれど今日本の横にはトルコがいます。もうぴったりと張り付いて離れません。

台湾はそれを物凄く嫌そうな顔で見ています。どうにかして自分が代わりたいのですがそれがどうしてもできないのです。

「トルコさんはホストだし。それだけは無理よね」

「何だぜ？日本の奴がどうかしたんだぜ？」

「いつも日本さんの隣にいたいのに」

韓国に対してさりげなく本音を言っています。

「何でいつも隣に誰かいるのかしら。特にあんた」

「俺？俺はいないんだぜ」

そのことに対して何の自覚もない韓国です。

「あんな奴の隣にいても何にもならないんだぜ」

「あんたが一番鬱陶しいのよ」

ここでまた台湾の本音炸裂です。

「一緒に住んでいた時から日本さんの隣にいようとして。何で私より可愛がられていたのよ」

「それは間違いなんだぜ。俺は日本とその上司にいじめられていたんだぜ」

やはり自覚のない彼でした。

「その俺によく言うんだぜ」

「あんたやトルコさんだけじゃないし」

台湾の溜息は続きます。

「ギリシアさんもいるし枢軸の人達も。ライバルが多いのは厄介なことね」

「何かわからないけれど相談なら乗ってやるんだぜ」
「じゃあ消えて」
今の言葉には物凄い棘がありました。
「まずあんたがライバルだから」
時と場合によっては棘のある台湾なのでした。けれど台湾の悩みはまだまだ続くのでした。

第千六十話　　完

２００９・１１・１９

第千六十一話　映画より怖い

第千六十一話　映画より怖い

トルコの次はギリシアに歓迎される日本一行、彼等と一緒に台湾と韓国も歓迎を受けます。その日本に対してギリシアがあることを話してきました。

「俺の国の神話だが」

「ギリシア神話ですね」

「読んでくれているな」

こう穏やかで素朴な調子で日本に対して尋ねてきたのでした。

「あの神話は」

「はい、面白いですね」

ギリシアのお話についても詳しい日本なのでした。それでその神話のお話ですが。

「ですが八つ裂きとか人を食べたりとかそういうお話が目立ちますね」

「それが刺激になっている」

ギリシアはこう言うのでした。

「話は壮絶な方が面白い」

「だからですか」

「そうだ。話は壮絶であるからそれで面白くなる」

だからいいというのでした。

「例えば神様が浮気して嫉妬をするというのも」

「それからの話の展開が凄まじいのですが」

「昔からそうだった。俺の国の神様達も英雄達もとても人間臭い」

「しかしそれであんなに残酷なことも多いのでしょうか」

日本はそのことに首を傾げてもいました。

「それがどうも私には」

「それもまた人間だ」

ギリシアが言うにはそうでした。とにかくギリシアの神話は物凄いものがあります。

第千六十一話　　完

２００９・１１・２０

第千六十二話　ゴッドを思い出します

第千六十二話　ゴッドを思い出します

日本のお家の人達はギリシアのお家の中を見回っています。所謂観光です。その中で大阪が仙台に対して言っていました。

「なあ、思うんやけれどな」

「どうしたの？」

「こういう神殿とか神話とか聞いてたらな」

こう彼女に言うのでした。

「何か昔の仮面ライダー思い出さへんか？」

「ああ、エックスね」

その仮面ライダーが何かすぐにわかった仙台でした。

「あれよね、確か」

「そうや。何かアポロン宮殿とかあってな」

「ううん、言われてみればそうね」

仙台も大阪の言葉に対して頷きました。

「何かそういうのを思い出すわね、確かに」

「そやろ。何かアポロチェンジ！とかいうてな」

「ええ。ただこの話フランスさんの前じゃできないのよね」

ふとこんなことも言う仙台でした。

「だって後半にフランスさんの尊敬してやまないあの人が出て来るから」

「昔の上司のあの人やな」

「よりによって悪人軍団になっていて」

考えてみれば物凄い名前です。よくもこんな名前を付けたものだと感心すらします。

「蜘蛛と一緒になってるからね」

「他にもバイキングとか楊貴妃とかジェロニモとかおったな」

「あとフランスさんのお家だと怪盗もね」

「何か結構多いな」
何気に危ない設定も多かった日本の昔の特撮です。実はギリシアに関しても結構あれな設定があったりするのでありますが。

第千六十二話　完

２００９・１１・２０

第千六十三話　イタリアとスペインからも

第千六十三話　　イタリアとスペインからも

ギリシアを後にした日本一行は今度はシチリアに入ろうとしました。するとそこで待っていた人達は。

「やあ日本」

「やっと来たな」

「楽しみにしとったで」

そこにはイタリア兄弟とスペインがいました。三人共にこやかに笑ってそのうえで日本一行を迎えてくれたのです。

そして早速でした。彼等に美酒と御馳走を振舞います。パスタに肉料理にパエリアに。物凄く美味しい食べ物がこれでもかといあります。

そうしたものを食べながら日本達は彼等に尋ねました。

「どうして皆さんでお待ちしていたのですか？」

「友達じゃない、当然だよ」

「だから待っていたんだ」

「そやから遠慮せずに食べるんや。それで飲むんや」

だからだという三人でした。そうしてそのうえでさらに振舞います。

とにかく物凄い歓待を受けています。日本はその中で呟くでした。

「そうですか。友達なんですね」

「そうだよ、俺達友達だよ」

イタリアはにこりと笑って日本に告げます。

「今更何言ってるんだよ」

「それはそうですが」

「遠慮しないでよ、俺と日本の仲じゃないか」

「有り難うございます」

何処かぎこちない日本でした。それは一体何故でしょうか。どう

やら彼にはかなり複雑な事情があるようです。だとすればそれは何か、謎が浮かび上がってきました。

第千六十三話　　完

２００９・１１・２１

第千六十四話　孤立

第千六十四話　孤立

よく日本の中で日本は孤立しているという人がいます。しかしそれは本当でしょうか。

「別にそんな気はしませんよね」

「にーーー（翻訳：その通りだ）」

金沢に対して赤福が答えます。

「にーーー（翻訳：それは外に出てみればわかることだ）」

「そうですよね。日本さん行く先々で歓迎されてますし」

「それによ」

ここで尾張が後ろを指し示します。するとそこにはいつもの二人がいます。

「あの二人いつもいるでしょ」

「そうだよね。本当にいつもね」

「全然孤立しとらんで」

大阪もそれははっきりと感じていました。

「全然な。むしろかなり人気あるで」

「それで何故孤立と言うかだよね」

奈良はそれが不思議で仕方ありませんでした。

「そりゃ韓国さんの北の方にある困った国とは付き合いがないけれど」

「付き合ってくれないと困る人が言ってるのかしら」

津軽はそう思いました。

「ひょっとして」

「ああいう人とはお付き合いしたら駄目だと思うんですがね」

会津はぴしゃりと言いました。

「悪い人と付き合うべきではありません」

どうやらその悪い人と付き合いたい人もいるようです。世の中と

いうのはまことに奇怪な一面もあります。その悪い人と元からつながっていなければいいのですが。そういう人は。

第千六十四話　　完

２００９・１１・２１

第千六十五話　トロヴァトーレ

第千六十五話　トロヴァトーレ

スペインは日本の前で歌を歌います。その歌はイタリアのお家の歌でした。

「また随分と派手な歌ですね。確かヴェルデイでしたね」

「そやで。これイタちゃんのお家のその人の曲なんや」

「トロヴァトーレ第三幕より『見よ、恐ろしい炎を』ですね」

日本はその曲が何の曲かすぐに言い当てました。

「それですね」

「その通りや。やっぱり知ってたんやな」

「あの人って結構スペイン兄ちゃんのお家を舞台にした作品が多いんだよ」

イタリアはこのことを日本に対して話します。

「他にも『ドン＝カルロ』とか『運命の力』とかね」

「あと『エルナーニ』もそうですね」

「いや、イタちゃんの作品がそのまま俺の家の宣伝にもなってくれてるしな」

スペインも悪い気はしていないのがわかります。

「おかげで万々歳や。特にこの曲がええやろ」

「物凄く劇的な曲ですね」

ヴェルデイの曲はそうしたものが多いのですがこの局はとりわけそうなのでした。それも一度聴いたらそう簡単には忘れられないまでです。

日本は前からこの曲を知っていました。それでもあらためてこう思ったのです。

「いや、本当に凄いですね」

「とにかく高音出して派手にいかなあかんのやけれどな」

「スペイン兄ちゃんこの曲得意なんだ。お家にもいい歌手の人が一

杯あるしね」
「俺の家でサルエスラってのもやってるしな」
音楽のうえでの仲もいい彼等でした。こうしたことを見ているとやっぱり絆は今でも強いものがあると感じさせるものがあるのでした。

第千六十五話　完

２００９・１１・２２

第千六十六話　忘れられる人

第千六十六話　忘れられる人

スペインとイタリアは音楽に関しても仲がいいままです。ところがここでふとロマーノがそのイタリアに対して言ってきたのでした。

「もう一人いただろ」

「もう一人って？」

「だから。ヴェルデイってシェークスピアも好きだっただろ？」

言うのはこのことでした。

「それは忘れてないだろ」

「ああ、そうだったよね」

言われてこのことを思い出したイタリアでした。

「そういえばそうだったよね」

「だからだよ。あいつのことはいいのかよ」

「ううん、何か俺ってイギリスとあまり縁感じないんだよね」

イタリアは離れているせいもあってイギリスとはドイツやフランスやオーストリアさんの様なお付き合いはありません。確かに関係はありますが深いものではないのです。

ですからそれを言われてもです。あまり実感が湧かないのでした。

「こういうのってね」

「じゃあいいのか」

「いいんじゃないかな。本人も別に何も言って来ないし」

「そうだな。じゃあそれでいいか」

ロマーノもそれで納得してしまいました。

「俺もあいつには特に何も思わないしな」

「だからなんだ」

こうしてあっさりとスルーされたイギリスでした。ですが彼が物陰から見ていたことには気付かない二人でした。やはりイギリスは友人関係に非常に問題があるようです。

第千六十六話　完

2009・11・22

第千六十七話　英仏対決

第千六十七話　英仏対決

イタリア兄弟とスペインのもてなしを受けた日本一行はそのまま地中海を出てノルウェーの海にまで向かいます。しかしここで予想通りのアクシデントが発生しました。

「俺が歓待するんだ！」

「いいや、俺だ！」

イギリスとフランスが喧嘩をしていました。どっちが日本を歓待するかということで喧嘩をしているのです。しかし日本は実にもてます。

「俺はずっと日本の友人だったし今でもそうなんだよ！だからだ！」

「俺は日本の文化にも理解が深いんだよ！だから俺だ！」

物凄い言い争いです。当人をほったらかしで喧嘩をしています。

「どうしてもっていうんならやるか！？」

「喧嘩か、高く買うぞこの野郎！」

そのまま本当に喧嘩に入ろうとしたところで日本について来ている韓国が来ました。そうして喧嘩をする二人に対して言うのでした。

「生徒会長が言うんだぜ。喧嘩は止めるんだぜ」

「・・・・・手前は今まで会長の仕事ほったらかして何を遊んでやがったんだ？」

「おまけにあの請求書は何なんだよ。俺達が全額負担ってどうなってんだ？」

韓国が出て来ると一気に彼に対してうんざりした目を向ける二人でした。しかし韓国はそんな視線には全く気付きません。およそそんなことにビクともしません。

そしてその平気な顔で言うのでした。

「どっちも平等に歓迎を受けてやるんだぜ。だから安心するんだぜ」

「手前は何も歓迎してねえよ」

「っていうか台湾も何でいるんだ？」
結局韓国に押し切られる二人でした。この心に何の闇もない傍若無人さはある意味極めて貴重です。少なくとも本人はかなり幸せです。

第千六十七話　　完

２００９・１１・２３

第千六十八話　共同で開催

第千六十八話　共同で開催

韓国によって強引に共同で日本を歓迎することになりました。けれどそもそもが仲の悪い二人です。早速お互い言い争いをはじめています。

「御前の料理と酒ばっかりじゃねえかよ」

「じゃあ御前の家の食い物は人が食えるのかよ」

フランスの突っ込みは実にきついです。

「いつも思うがよ」

「俺の家の飯に文句つけるのかよ」

「事実を言ってんだよ、事実をな」

とにかく料理とお酒はフランスになりました。それで舞台はイギリスになりました。

「ちっ、ベルサイユは今掃除中だ」

「流石に今はトイレあるんだろうな」

「当たり前だ。流石に昔みたいに汚くはないから安心しろ」

それは保障できましたがそれでも掃除中ということで使えないのでした。

それでイギリスの宮殿になりました。ところがこの宮殿がこれまた。

「何かもう生きてない人がうろうろしてねえか？」

「んっ、それがどうかしたのか？」

イギリスはそれを言われても何ともない顔です。

「そんなの普通だろ？」

「普通なわけねえだろ。それにしても何人そういう人がいるんだよ、ここは」

「さあな。結構いるみたいだけれどな」

その数はイギリスにもわからないのでした。

「まあ気にするなよ。いいな」
「気にしないでいられるかよ。ったくどうなるんだ？」
フランスは自分の横に親しげに来て声をかける幽霊を見ながら歓迎の準備をしていきます。どうもかなり波乱がありそうです。

第千六十八話　　完

２００９・１１・２３

第千六十九話　幽霊船を探す前に

第千六十九話　幽霊船を探す前に

「だからな、気をつけておけよ」
「そうですか」
フランスはそのイギリスの用意したお屋敷に出て来る幽霊のことを日本に話しました。日本もその話を聞いて頷いています。それも真剣な顔で。
「出て来るのですね」
「ああ。一応害はないみたいだけれどな」
このことはわかっているフランスでした。
「それでもな。幽霊は幽霊だからな」
「わかりました。それでは」
「あと料理と酒は俺が用意しておいたからな」
やはりこれはフランスでした。
「楽しんでくれよ。俺もいるからな」
「有り難うございます」
「そういえば御前等ノルウェーのところに行くんだよな」
「ああ、そうだ」
脚本家さんがフランスに対して答えます。
「さまよえるオランダ人を見つけにな。日本から来たんだよ」
「あれ幽霊船なのは知ってるよな」
「勿論だ。呪いを受けてそれで彷徨っているのもな」
「幽霊船を探す前にってわけだな」
フランスは話を聞いてこう呟きました。
「何かそれも因果な話だよな」
「そうかも知れませんね。ですがそれもいいと思います」
日本はそれを受け入れるのでした。そうしていざその幽霊屋敷へと向かうのでした。

第千六十九話　完

2009・11・24

第千七十話　幽霊屋敷にて

第千七十話　幽霊屋敷にて

イギリスとフランスが歓待するその宴で日本一行を待っていたのは。二人の他にそのこの世のではない多くの人達でした。

「本当におるやんけ」

「まさかって思ったけれど」

大阪と奈良が思わず言ってしまいました。

「本物やな、しかも」

「心霊写真撮れるし」

奈良が実際にカメラを出して撮影してみると本当に心霊写真になってしまいます。それを見ても明らかに幽霊がいるのがわかります。間違いありません。

「何かもう御馳走よりも」

「幽霊の方に注目してしまうわね」

津軽と尾張もそちらばかり見てしまっています。

「折角美味しいのに」

「それでも幽霊ばかり」

そしてそれを聞いたイギリスが言うのでした。

「俺の勝ちだな」

「これを勝ちっていうのかよ」

「日本達が注目してくれてるからな。勝ちは勝ちだよ」

胸を張って誇らしげにフランスに対して言っているのでした。

「それでいいな。負けを認めるんだな」

「幽霊が出る場所なんか俺の国にも一杯あるんだよ」

けれどフランスはこうイギリスに言い返したのでした。

「それこそな。ベルサイユだってな」

「あれ本当なのか？出るっていうのは」

「何なら来てみろ。上司がまだいるからな」

何気にフランスにもそんなお話があります。この話まだまだ続くのでしょうか。

第千七十話　　完

２００９・１１・２４

第千七十一話　フランスの幽霊

「俺の家も結構出るからな」
「何かそういう家ばっかりだよな」
「ニーーーーー（翻訳：全くだよな）」
春日部の言葉に赤福が頷いています。
「学園にいる人達って」
「ニーーーーー（翻訳：イギリスの料理音痴野郎だけじゃないんだな）」
「こいつ何か知らないが俺のこと言ってるな」
勘のいいイギリスは赤福が何を言っているのかわからなくても馬鹿にされているのは感じ取りました。
「何か最近俺もフランスも馬鹿にされてばかりだな」
「ニーーーー（翻訳：気にするな。自分の個性がそうさせてるんだからな）」
やっぱり赤福はイギリスにかなりのことを言っています。何はともあれフランスが話をするのでした。
「それで宮殿とかで絵を描いてたりするんだよ、これが」
「またそれは随分と現実的な幽霊さんですね」
日本はフランスのその話を真面目に聞いていました。
「出て来て驚かせたり襲い掛かったりはされないのですね」
「ああ、あそこの上司達はな」
しないというのです。
「まあ生前から結構温厚な人達だったしな」
「そうですか。それはいいことですね」
「俺のところもな。こいつのところもあの牧師館の連中とかはいるがおおむね安全だから安心していいぞ」
そういう幽霊なら皆特に驚かないのでした。

「だから今度来てみろよ」
「はい、それでは」
日本は宴を受けながらそのうえでそんなお話も聞くのでした。何かと面白い話が多いイギリスとフランスでした。幽霊のお話までも。

第千七十一話　　完

２００９・１１・２５

第千七十二話　生徒会長は止めません

第千七十二話　生徒会長は止めません

日本一行はイギリスとフランスに別れを告げてそのうえでいよいよノルウェーに向かおうとします。それで台湾と韓国も彼等について行こうとします。ここでフランスがイギリスに尋ねてきました。

「あいつ捕まえないのか？」

「じゃあ聞くが捕まえたいのか？」

今出航する韓国の船を見ながらフランスに問い返すイギリスでした。

「あの馬鹿にずっと家にいて欲しいのか？」

「嫌に決まってるだろ」

フランスの返答も決まっていました。

「あの馬鹿が来たらな。それこそな」

「そうだろ？じゃあわかるな」

「あの野郎、全然仕事の話しなかったな」

今ここでこのこともうんざりとした顔で言うフランスでした。

「っていうか遊んでばかりじゃねえかよ」

「仕事したらしたで俺達に跳ね返してきやがるしな」

それが韓国なのです。仕事はしませんがしたらしたでトラブルを起こす。ある意味物凄い人であります。

「面倒な奴だな」

「全くだよ。早く任期終わらねえかな」

「今度はもう少しまともな生徒会長推薦しようぜ」

「そうだな。あいつよりはまともなのをな」

「俺達で選ぶか」

今度こそは自分達に迷惑をかけない国を生徒会長に推薦しようと強く決意しているのでした。今の様な悪夢をもう二度と繰り返させない為です。

「あいつよりましな奴をな」
「っていうか今あいつの船沈めたいんだがな」
「船が沈んでも死ぬ奴じゃねえしな」
「何処までもしぶとい奴だ」
韓国の船を見送りながらそんな話をしていた二人でした。とにかく生徒会では恵まれていない二人でした。

第千七十二話　完

２００９・１１・２５

第千七十三話　いよいよノルウェーの海へ

第千七十三話　いよいよノルウェーの海へ

日本が艦橋で脚本家さんの言葉に応えています。
「いよいよ来たな」
「そうですね」
「そのノルウェーの海だ」
「さまよえるオランダ人が出るという」
「皆覚悟はできてるな」
脚本家さんが日本の他の人達に対して問いました。
「そっちの方はな」
「はい、それはもう」
「何時出て来てもいいです」
「腹は括ってますよ」
それぞれ強い言葉で脚本家さんに対して返すのでした。その中には一応主戦力である四人のライダー達もいます。皆スタンバイできているのでした。
「もう本当に幽霊船が出て来ても」
「御祓いでも何でも」
「いいか、戦いになっても怯むなよ」
脚本家さんも本気になっています。実はこの人の趣味は身体を鍛えることだったりします。それでその体力もかなりのものなのです。しかも空手や柔道をやっていたこともあります。
日本もかなりの強さです。そして他の人達も会津とかは腕に覚えがあります。まさに何時幽霊達が出て来ても戦えるといった状態です。
「さあ、それでだ」
「はい、今からですね」

こうしてそのノルウェーの海に入りました。さあ、さまよえるオランダ人はいるのでしょうか。

第千七十三話　　完

２００９・１１・２６

第千七十四話　荒れる海

ノルウェーの海に入った日本一行を乗せた船、しかし彼等は幽霊船よりまず最初の強敵に遭遇したのでありました。その敵が何かといいますと。

「な、何だよこれ」

「嵐か！？とんでもない嵐だぞ」

嵐です。海も空も真っ黒になってそれで激しい波と豪雨が船を襲います。巨艦といえどその嵐の中に大揺れに揺れてしまっています。

「ゆ、揺れる！」

「何かに捕まらないと！」

「船は大丈夫なの！？」

皆必死にそれぞれの位置について奮闘しています。

「このままじゃ本当に沈む。っていうか」

「嵐の中に」

大和の如き巨艦でもそうなってしまいそうな程の嵐なのです。本当に右に左に揺れています。

「非常灯の用意を！」

「そして非常食も！」

指示が次々と下ります。

「応急班準備を！」

「破損箇所ありませんか！」

嵐の中日本一向は必死にその自然の猛威と戦っています。

今にも沈みそうなその中で戦う彼等、前に見えるのはその真っ黒く重苦しいものになってしまった空と海、それに豪雨だけです。聞こえてくるのは波と暴風、それだけでした。

「この場を乗り切らないと」

「オランダ人には」

まずはそれでした。自然と死闘を繰り広げることになった彼等でした。

第千七十四話　　完

２００９・１１・２６

第千七十五話　嵐の中の二人

「こ、この嵐は！」
「かなり厳しいんだぜ！」
台湾と韓国も日本一行と同じように嵐の中にいます。そうしてまさに木の葉の如く揺れています。その中で何とか必死に耐えています。
ですが大和の如き巨艦が揺れているのです。駆逐艦と同じ大きさの二人のそれぞれの艦が揺れない筈がありません。それこそ物凄い揺れ方です。
「し、沈む！？」
「このままじゃやばいんだぜ」
二人共それぞれの艦の中でそのことを本気で心配していました。
「けれどここで踏ん張らないと」
「オランダ人が見られないんだぜ」
それでもここまで来たらです。逃げる理由はありません。何としてもさまよえるオランダ人を見ないといけません。もっともその理由の半分以上は日本について来たいということですが。
それで何とか踏ん張る二人でした。その厳しい嵐の中を。
「何かに掴まってそれで凌いで」
「船酔いした奴は休んでおくんだぜ」
二人も日本と同じことを言います。
「何とか。この嵐を凌いで」
「さもないと生きることすらまずいんだぜ」
本気で命の心配もしている二人でした。
とにかく物凄い揺れ方です。二人の艦は今にも嵐の中に飲み込まれそうです。
「こんなことなら日本さんとずっと一緒にいたかったわ」

「日本に飯食わせてもらう予定だったんだぜ」
こんな時でも日本のことは考える二人でした。ある意味日本はかなり幸せです。

第千七十五話　完

２００９・１１・２７

第千七十六話　それはいました

第千七十六話　それはいました

激しい嵐の中に日本は艦橋で必死で指揮にあたっていました。とにかくそれで手が一杯です。

嵐は相変わらず激しいです。揺れに揺れる艦の中で皆何とか生きているといった状況です。

そしてその中で日本は前を見ていました。そこから嵐の海が見えています。

「嵐は止みませんね」

「そうだな。けれど前には何もないからな」

「はい、それが救いですね」

見張りからも報告はありませんしレーダーにも何もかかりません。そう、今は日本一行の巨艦の周りには台湾と韓国それぞれの艦しかありません。筈でした。

しかし日本は今見たのです。脚本家さんや他の人達もです。それを確かに。

「!?あれは」

「まさか!?」

三本マストの帆船です。それが嵐の中にいました。

嵐だというのに全く揺れることなくそこにある船を皆確かに見ました。そしてすぐに察したのでした。

「あの船が」

「間違いないわ」

「さまよえるオランダ人」

不気味な青さをたたえたその船を見て皆確信したのでした。

「本当にいたんだ」

「まさかと思ったけれど」

まさしくそれでした。レーダーには何も映っていません。けれど

皆その目で確かに見たのです。
「いた、確実に」
「ここに」
それが見えたのは一瞬でした。それでも皆確かに見たのでした。
その不気味な幽霊船を。それは間違いなく嵐の中にいました。

第千七十六話　　完

２００９・１１・２７

第千七十七話　二人も見ました

第千七十七話　二人も見ました

日本一行がそのさまよえるオランダ人を見た時でした。台湾と韓国も揺れる船の中でその姿をはっきりと見てしまったのでした。

「ちょ、ちょっとあれってまさか」

「本当にいたんだぜ！？」

こう言ってそれぞれの艦橋において大いに驚くのでした。

「さまよえるオランダ人、実際に」

「オペラの中だけじゃなかったんだぜ」

そのことに心から驚く二人でした。一緒にいるそれぞれの国の人達もです。

「それも話に聞いたままの姿で」

「嵐の中に」

それは間違いなくいました。見間違えようがありません。

その船は一瞬で消えました。けれど二人も間違いなく見たのでした。

「嘘じゃないのね」

「いたんだぜ」

実際に見てまずは呆然となる二人でした。

「あの伝説のオランダ人が」

「この世に」

そして幽霊船が消えた時にはでした。何時しか嵐も消え去っていました。今さっきまであれだけ激しく暴れていたというのにです。

そしてです。残っているのは日本一行を乗せたその巨艦と二人がそれぞれ乗っているその艦です。それだけが残っているのでした。

「じゃあ見たし」

「用は終わったんだぜ」

話は確かにこれで終わりました。しかしです。オランダ人は二人の目にも確かに見えたのでした。

第千七十七話　　完

２００９・１１・２８

第千七十八話　何と見たうえでした

日本はお家に帰ってからドイツに対してこのことを話しました。するとドイツは日本に対して驚くべきことを告げたのでした。そのこととは。

「あの幽霊船は作曲者自身も見たそうだ」

「作曲者といいますとやはり」

「そうだ、ワーグナー自身もだ」

その人も見たというのです。

「見たことがあるそうだ」

「そうだったのですか。それで作曲されたんですね」

「その通りだ。信じられない話だがな」

それでも現実だというのです。

「ある事情であの海に出た時に嵐に遭ってだ」

「私達の様にですね」

「そうしてその中で見たのだという」

ここは日本達と全く同じでした。どうやら嵐の中に出て来るのがさまよえるオランダ人の特徴の様です。実に幽霊船らしいと言えます。

「そしてそれをオペラにしたというわけだ」

「左様でしたか」

「そうなのだ。世の中どうやら」

ここでドイツは懐疑的な、それでいて難しい顔になってさらに述べてきました。

「科学だけでは説明できないことは実際にあるな」

「そうですね、それはその様ですね

「確かにな」

そのことがわかった今回の長旅でした。それは決して無駄ではなかったのでありました。

第千七十八話　　完

２００９・１１・２８

第千七十九話　いきなり登場　☆

第千七十九話　いきなり登場　☆

明日はワシントンで連合国の会議です。それで例の五人が集まってそれで会議を開くことになりました。

それでイギリスもアメリカの家に泊まることになりました。彼はいつもの如く憎まれ口を叩いています。何故かお友達の連合国の面々にはそうして日本には妙に優しいのが彼の不思議なところです。ついでに言えば生徒会長には本気で言いますがこの人には何の効果もあります。

「家を新しくしたらしいが随分安っぽい内装だな」

「ははは、君の家みたいに古臭くないからな」

早速アメリカに笑顔で切り返されています。この辺りの人間関係がとても微笑ましいです。

そのアメリカがさらにイギリスに対して言います。

「部屋ではくれぐれも騒がないでくれよ」

「御前がいなけりゃ騒がねえよ」

こう言って自分が泊めてもらう部屋の扉を開けました。するとそこには。

何かいました。暗い部屋の中に不気味な顔があります。土気色をしていて微笑んでさえいます。そして目は白く淀んでいます。それはまさに。

「お、おいアメリカ！」

それを見て叫んだイギリスでした。

「俺の部屋に何かいるぞ！」

「ははは、何だい」

アメリカはそんなイギリスの言葉を聞いて笑顔になっています。

「ちょ、ちょっと来い！何なんだこいつは！」

「全くイギリスらしいなあ。騒がないって言って騒いで」

「だから誰なんだよこいつ！」
「通りすがりの仮面ライダーじゃないのかい！」
「あの連中な訳あるか！やっと長旅から帰って休んでるんだろうが！」
いきなりこれです。今日も賑やかな連合ファイブです。

第千七十九話　　完

２００９・１１・２９

第千八十話　気付いてもらえない人

第千八十話　気付いてもらえない人

その頃中国は何者かの気配を感じていました。それで顔を顰めさせています。

「誰かいるようあるが」

「今度は君かい、中国」

アメリカは彼に対しても声をかけます。

「まさか君も何かいるというのかい？」

「呼んだのは僕達だけあるな」

「そうだよ。連合国の面々だけだよ」

「じゃあ誰あるか？」

中国はアメリカの話を聞いたうえで首を傾げるのでした。果たして誰がいるのかです。

「僕達以外に」

「枢軸の面々は来てないよ。生徒会長も今回は来ていないし」

「あいつだけは来たらすぐにわかるあるぞ」

それは当然ながら無意味なまでに騒がしいからです。あの強烈な自己主張とアクの強さは最早誰にも負けないものがあります。

「何か異様に薄い影を感じるある」

「影が薄い？」

「そうある。それでいて僕達の仲間みたいな」

「あれ、連合国って主要メンバーは五カ国だよ」

だからこその連合ファイブです。

「君もそれはよくわかってる筈だけれど」

「その通りあるが。何かもう一人いるような気がするある」

「そういえば僕もそんな気がするけれど。まあ気にしないでいいね」

カナダのことは今回も忘れてしまっているのでした。本当に、本当に酷い扱いを受け続けているカナダであります。

第千八十話　完

2009・11・29

第千八十一話　ユニコーン大好き　☆

第千八十一話　ユニコーン大好き　☆

「ははは、幽霊だなんて」
「ファッキンブーーーー」
アメリカがリトルグレイと鯨を連れてイギリスを笑っています。
人間以外の友達にも恵まれているアメリカなのでした。羨ましいかどうかは別にしまして。
「イギリスは本当に夢があるよな」
「本当にさっき見たんだよ！」
イギリスはこのことを強調します。
「幽霊だ！しかも邪悪そうなな！」
「けれど君よくユニコーンの幻覚見た話してくれたじゃないか」
「あれも幻覚じゃねえ！」
イギリスはこのことはさらに強く強調します。
「断じてな！」
「そんなこと言って本当は寂しいんじゃないのかい？君は友人が少ないからね」
「御前は不純だから見えないんだ、本当にユニコーンは可愛いんだぞ！」
イギリスはムキになって説明をはじめました。
「毛並みなんかさらさらで触り心地が抜群だし寂しい時には一緒にいてくれるしマジで凄く可愛いんだぞ！ユニコーンは幻覚じゃないんだからな！」
「君大丈夫かい？」
「大丈夫ってのは何だ大丈夫ってのは！」
怪訝な顔になったアメリカに対してさらに言い返します。
「俺は何ともない！」
「いやユニコーンっていうのは」

「本当にいるんだよ！」
妖精は見える人にしか見えません。果たして彼の他にそうした純粋な人達はいるのでしょうか。

第千八十一話　完

２００９・１１・３０

第千八十二話　いてもこんな人達

「あっ、いるね」
「俺にははっきりと見えるんだぜ」
「おい、御前等かよ」
イギリスがあのうんざりとしきった顔でロシアと韓国に対して言っています。顔が真っ暗になって目が白くなっています。相変わらず物凄い顔です。
「よりによって御前等が見えるのかよ」
「可愛いね。見てるだけで落ち着くよ」
「こいつは俺の国起源なんだぜ。今決めたんだぜ」
「手前の国にこんなのいたか？何でもかんでも起源主張するんじゃねえよ」
こうは言っても人の話を聞く機能自体がインプットされていない韓国です。それを言われても全く平気な顔で騒いでいるのでした。
「とにかくだ。御前等は見えるんだな」
「雪の中にいたらやっぱり寒いかな」
「こいつに乗って日本に自慢してやるんだぜ」
確かに二人共かなり子供っぽいことを考えてはいます。
「可愛いよね、それにしても」
「じゃあ俺の妹へのプレゼントにするんだぜ」
「待て、それは俺の国の妖精だ」
イギリスはここで韓国を止めます。
「勝手に持って行くんじゃねえ。手前は何考えてんだ」
「俺の口が起源ってなったからいいんだぜ」
「だから何時そうなったんだ！手前の頭の構造は一体どうなってんだ！」
ユニコーンが見える人達はこんな人達なのでした。イギリスもか

なり頭が痛い話でした。何故こうした人達しか見えないのかそれがわからないイギリスでした。

第千八十二話　　完

２００９・１１・３０

第千八十三話　本当に出ましたが　☆

第千八十三話　本当に出ましたが　☆

イギリスはとにかくアメリカに言って彼をその幽霊を見た部屋の前に連れて来ました。アメリカはその部屋の前でも余裕綽々です。
「それで君が幽霊を見たのはこの部屋かい？」
「ああ、そうだ」
イギリスはもう震えはじめています。本当に見たと思っているからこれも当然です。
「ここでさっきな、本当にいるからな」
「けれど僕もたまにこの部屋使うけれど」
アメリカの家ですからこれも当然です。
「幽霊なんて出なかったぞ」
「はっきり見たんだ！」
「またまた」
必死の顔のイギリスに対して笑って返します。
「驚かそうたってそうはいかないよ」
「じゃあ御前開けてみろよ！」
イギリスはさらに必死に言います。
「マジで黒い変な顔の気持ち悪いのがいるからな！」
「それじゃあ開けてみるよ」
アメリカは笑いながら部屋を開けようとしたら扉の方から開いてきました。
「あれっ！？扉が自然に」
「五月蝿いぞ・・・・・・」
その黒い変な顔が出て来ました。
その後はもう言うまでもありません。一人ベッドの中で震えることになったアメリカなのでした。本当に幽霊がいるのだと思い知ったことになりました。

「二回も起こされたじゃねえかよ・・・・・・」
その正体は実はフランスでした。彼もいたのです。連合国ですから。

第千八十三話　　完

２００９・１２・１

第千八十四話　この人も裸族

第千八十四話　この人も裸族

フランスは裸で寝ています。それはイタリア兄弟と同じです。日本はそのことについてあまり感心しないといった顔で言うのでした。

「私はあまり。どうにもですが」

「おいおい、寝る時はそれが一番いいんだよ」

フランスはその日本に対してお兄さんみたいな余裕の態度で言います。

「あの開放感がいいんじゃないか」

「そうでしょうか。寒くて風邪をひいてしまいそうですが」

日本が気にしているのはまずそのことでした。

「寝る時にこそ温かくしなくてはいけませんから。野球のピッチャーでは夏でも長袖のシャツを着て寝ている人がいましたが」

「そりゃまた極端だろ」

フランスはその人が四百勝した人とは知らなかったりします。

「夏は当然裸だよ」

「それでベッドの中にですよね。汗とかで汚れませんか？」

「俺の国は乾燥してるからあまり汗かかないしな」

この辺りは日本とフランスの気候の違いが出ています。

「それに日本より寒いんだぜ。汗なんてな」

「ですがそれはそれで寒くないですか？」

「それは掛け布団を余計に多く被ってだな」

そうするというのです。

「だから大丈夫なんだよ。いいんだよ」

「ですがおトイレの後とかは」

「うっ、それはな」

何だかんだで言われるフランスでした。どうも裸で寝ることには抵抗がある日本の様です。そしてそれには彼にとって確かな理由が

あるのでした。

第千八十四話　完

2009・12・1

第千八十五話　これがはじまりで　☆

第千八十五話　これがはじまりで　☆

ある時フランスが妙にいらいらして何か必死にやっていました。
「あああああああ、くそっ！」
見ればボックスに手を入れています。
「取れねえじゃねえかよ！」
「何やってんだよ」
そこにイギリスが来て尋ねます。何か何かと一緒になる二人です。
「ゴミ箱の前でよ」
「指輪をこの中に落としたんだよ」
「その中にだな」
「ああ、けど全然取れなくてよ」
「おっさんだから身体硬くなってんだろ」
やはりフランスにはきついイギリスです。
「あと中年太りだろ、だから歳なんだよ」
「じゃあ御前はできるのかよ」
おっさんと言われて頭に来たフランスは思わずこう言い返しました。
「マジでこれ結構しんどいぞ」
「出来る出来る」
イギリスは特に考えることなく答えました。
「御前と比べたら俺の方がスマートだからな」
「よし、じゃあやってみろ」
こうしてまずはボックスの中を覗くとです。指輪はすぐそこに見えています。
「何だよこの位すぐじゃねえのか？」
その指輪を見てこう言うイギリスでした。けれどこの二人が揃って話が簡単に終わる筈がありませんでした。

第千八十五話　完

2009・12・2

第千八十六話　そもそも何故そうなったのか

第千八十六話　そもそも何故そうなったのか

ことあるごとに喧嘩をしてやまないイギリスとフランス、それぞれの妹達にお話を聞いてみますと。これが実に素っ気無いものでした。

「お兄様はフランスさんと喧嘩しないと生きていけないのです」

「あれがお兄様の生きがいですから」

こう尋ねたイタリアに対して答えるのでした。

「ですから特に不思議に思われることはありません」

「風物詩と思って下さい」

本当に実に素っ気無いです。何でもないといった感じです。

「そうなんだ。それだけなんだ」

「私達の間では何もありませんので」

「あくまでお兄様達だけですから」

妹さん達は至って平和です。お兄さん達があなだけみたいです。

「あまり五月蝿いと何処か別の場所に行ってもらえばいいですから」

「御気になされないで下さい」

「そうだね、そうするよ」

話を聞いたイタリアもそれで納得するのでした。

そうしてこれでこの話を終えて。二人にそれぞれ声をかけるのでした。

「それじゃあさ、今から何処か行かない？」

「おい待て」

「俺の妹に何声かけてんだ？」

ここでその二人が出て来てクレームをつけるのでした。

「暫く見ないと思ったら何してやがんだ」

「大体俺の妹だったら御前の姉妹になるだろ？そこんとこ考えろ」

威嚇する顔でイタリアに言う二人でした。どうもこうした場合は

共同戦線となるようです。

第千八十六話　　完

2009・12・2

第千八十七話　まさにいつもの展開　☆

第千八十七話　まさにいつもの展開　☆

イギリスが指輪を取ろうとしているのを後ろから見ているフランス。ここでふと碌でもないことを考えてしまいました。実に彼らしく。

「あっ、もう少しだ」

「ああ、こいつ今俺が見えてねえな」

ゴミ箱に顔を突っ込んでいますから当然です。

「それなら」

「くそっ、何だか転がるなこれ」

「アンドゥイエット！」

ここで彼を後ろから蹴りました。こんなことをしたのです。

「うわっ、何だ！？」

「敵に背を向けるたあ御前も警戒心が足りねえな」

「あっ、この野郎！」

イギリスはゴミ箱の中からフランスに抗議します。彼からは見えていませんがフランスはもう勝利を確信して悠然と笑っています。

「御前はめやがったな！」

「今こそ俺が勝つ時だ！」

実はトータルで言いますとイギリスに負けている時の方が多かったりします。これはイギリスに限らずオーストリアさんやドイツに対してもですけれど。

「こら！出せ！」

「さあ、俺の勝利を讃えろ！」

言いながらイギリスのお尻を叩きます。

「御前何する気だよ！」

「俺の家で戦利品として飾ってやるからな」

勝ち誇るフランスはそのまま流れに乗ります。さて、どうなるのでしょうか。

第千八十七話　　完

２００９・１２・３

第千八十八話　喧嘩が得意ではない人にまで

第千八十八話　喧嘩が得意ではない人にまで

自分は強いと言ってはばからないフランス、ですがその戦歴はといいますと。

「ナポレオン以外で負けたと言えば三十年戦争のあれだけでしょうか」

オーストリアさんは昔のことを思い出しながら言うのでした。

「そうでしたね。確か」

「あの人弱いですから」

ハンガリーははっきりと言い切りました。

「口だけで。スペイン継承戦争でもオーストリア継承戦争でも何でも」

「ナポレオンに対しても最後ライプチヒで勝ちましたしね」

「結局最後は負けちゃうんですよね」

それがフランスだったりします。

「ほら、二度の世界大戦でもドイツさんにいつも負けてたじゃありませんか」

「殴られっぱなしでしたね」

それはもう無惨な有様だったのです。

「何か見ているだけでここまでやられるのかという位にまで」

「それでいつも威勢はいいんですよ」

それでやられるのです。

「そういうところ。イタちゃんに似てますね」

「そうですね。本当に」

「イタちゃんはもっと弱いですけれど」

その弱さはまさに天下一品、そもそも戦い自体に向いていません。

それは何とフランスもだったのです。

「あの人も見栄えだけで」
「兵器とかはいいんですけれどね」
それでも勝てないフランスなのでした。実際に彼には負けた記憶があまりなかったりするオーストリアさんでした。あまり喧嘩が強くないこの人でもです。

第千八十八話　　完

２００９・１２・３

第千八十九話　そしていつもの結末　☆

「さて、それでだ！」
「今度は何するってんだよ！」
ゴミ箱に頭を突っ込んだままフランスに対して抗議します。
フランスは自分の国旗を持って来てそれをイギリスのお尻に突き刺します。その柔らかい部分に見事に刺さりました。
「いてっ、何したんだ！」
「よし！今日から御前も立派なフランス領だ！」
「おいちょっと待て！」
「これでドーバー海峡も俺のものだ。ナポレオンもできなかったことが今できたんだぜ！」
「う、うわあああああああっ！」
これがイギリスに受け入れられる筈もありません。勿論急に暴れだしました。
「手前何てことしやがるんだ！」
「ははははは！遂に俺の勝ちだ！」
「させるか！」
ここでイギリスは全身に力を込めました。そうして取った行動は。
思いきり起き上がってそれでゴミ箱をフランスに対してぶつけます。フランスもこれは考えてはいませんでした。全くの予想外でした。
そのゴミ箱がフランスを直撃しました。それを受けた彼は気を失ってしまいゴミ箱の下で倒れます。そしてイギリスもそれでゴミ箱の中で力尽きてしまいました。後に残ったのは死屍累々たる有様だけでした。
「一体何があったのかなあ」
「どうせまた喧嘩でもしていたのだろう」

いぶかしむイタリアに対してドイツが述べます。
「いつものことだ」
「そうだね。本当にね」
周りから見ればこれで終わりでした。本当にいつも通りの二人です。

第千八十九話　　完

２００９・１２・４

第千九十話　喧嘩の後はいつも

第千九十話　喧嘩の後はいつも

とにかく喧嘩が絶えないイギリスとフランスですが喧嘩の度に二人共暫く立てなくなってしまいます。これが恒例行事になってしまっています。

「おや、今日は生徒会誰もいませんね」

日本が生徒会に来てそのことに気付きました。生徒会長は相変わらず外で自分のことだけに専念していますし他の三人は彼が動くと何処かに消えてしまいます。それで大抵はイギリスとフランスが切れそうな顔で仕事をしているのですがその二人がいないのです。

「また喧嘩をされてお休みのようですね」

「そうみたいだね。じゃあまた明日来ようよ」

「そうですね。それではこれで」

イタリアに言われてそれで生徒会室を去る日本でした。

その頃イギリスとフランスはそれぞれのお家で寝込んでいました。その喧嘩の結果二人共力尽きてしまったのです。

「ちっ、何でいつもこうなるんだよ」

「あいつと喧嘩した後はいつもこうだな」

二人共それぞれのベッドの中で呟いています。

「喧嘩に勝ったのはいいけれどな」

「その度にこの有様ってのもな」

怪我だけでなく全身がぼろぼろになっています。まさに満身創痍です。

その状態で寝込んでいますがそれでも仕事が来ます。勿論生徒会の仕事です。この仕事はひっきりなしにやって来るのでした。

「ったくよ、寝ていてもこれはあるのかよ」

「生徒会も大変だぜ」

その傷だらけの姿で何とか起き上がってそれで仕事をする二人で

した。喧嘩をしてもそれでも二人の苦労は絶えないのでありました。

第千九十話　　完

２００９・１２・４

第千九十一話　はしゃぐイタリア　☆

第千九十一話　　はしゃぐイタリア　☆

ドイツがイタリアを助ける為にアフリカ戦線に来ていた時のお話です。ドイツは真剣そのものの顔でイタリアに対して言いました。

「この辺りはイギリスの軍隊が多いから静かに行動しろよ」

「了解です隊長！」

イタリアはとても明るい声でドイツに応えます。

「隊長！隊長！」

そしてすぐに騒ぎだしました。不時着した戦闘機が砂漠にあったのです。見ればイギリスの戦闘機です。間違いありません。それでした。

「飛行機です！飛行機発見です！」

「馬鹿者！静かにしろ！」

その飛行機を見て大はしゃぎのイタリアを叱ります。しかしそれで止まるイタリアではありません。この辺り本当にいつも通りです。

「イギリス発見！」

しかも戦闘機の中にはイギリス本人がいました。

「直ちに挨拶しちゃいます！」

「するな！逃げろ！」

こうしてイタリアを連れて逃げます。

そして辿り着いたのは。砂漠の遠くでした。

「隊長、ピラミッドです」

「御前は」

今度はピラミッドを見てはしゃぐイタリアに呆れて。

「黙って歩けないのか」

それでもイタリアについていています。何だかんだで優しいドイツです。

第千九十一話　完

2009・12・5

第千九十二話　日本が隣でも

第千九十二話

日本が隣でも
「それでイタリア君」
「どうしたの、日本は」
「今は座禅をしているのですが」
今イタリアは日本のお家に来ています。それで座禅を体験しているのです。
その時に日本にあれこれと声をかけてきたのです。それで日本が彼に言うのでした。
「ですからお静かに」
「えっ、座禅って喋っちゃいけないの！？」
日本に言われてもこんなことを言う始末です。
「それって結構寂しくない？辛いよ」
「いえ、座禅はそういうものですので」
この辺りとてもしっかりしている日本です。
「お静かに御願いします」
「ちぇっ、座禅って辛いなあ」
彼にとっては特にです。こうしたじっとして黙っているということは彼にとってはとても辛いことであるのです。
それで困っているとです。また言うイタリアでした。
「けれどまあいいや。俺は俺で楽しく」
しかしです。ここで座禅に付き物のあの大きなへらを持ったお坊さんが来てです。イタリアの肩にそのへらを当ててそのうえで。
「喝！」
こう叫んで肩を叩くのでした。
痛くはありません。けれどそれを受けてイタリアは。
「こうなるんだ」

「座禅は無心でするものです」
日本の言葉が届きます。それはどうしても苦手なイタリアでした。

第千九十二話　　完

２００９・１２・５

第千九十三話　最強イタリア機甲部隊　☆

イギリスは何処かに隠れているイタリアを探していました。幾ら弱くても敵なので探し出してやっつけなくてはいけないからです。
それで探していました。茂みの中なんかもです。
「イタリアはこの辺りにいる筈なんだがな」
こう言って探しているとです。不意にその前にある茂みからイタリアが飛び出て来ました。
「わははは油断したなイギリス！」
「げっ、イタリア！」
「イタリア機甲部隊ここに参上！」
「何っ、機甲部隊だと！」
この時機甲部隊といえばまさに切り札、精鋭部隊です。それを聞いてイギリスはすぐに身構えました。ところがです。
出て来たのは生身のイタリアだけ。それに気付いたイギリスはまず考えました。
（何だ！？機甲部隊って何処をどう見ても御前生身じゃないか！）
それこそ誰が見てもです。
（まさかイタリアでは人型の機甲を作ることに完成したのか？）
そんなことを考えているとです。ドイツがやって来てイタリアを殴って背負っていきます。
「邪魔したな」
「何っ、機甲部隊を素手で」
まだよく把握していないイギリスでした。
「何が一体どうなってるんだ」
実は戦車とかそうしたものは殆ど持っていなかったイタリアでした。つまりは。
「折角機甲部隊作ったのに」

「あれの何処がだ」
ドイツにこう言われるような部隊だったのです。尚これは残念ながら日本もでした。

第千九十三話　完

２００９・１２・６

第千九十四話　日本は今でも

第千九十四話　日本は今でも

日本も流石に今は機甲部隊を持っています。それもかなり凄いものをです。

「何か日本の機甲部隊ってかなりなんだって？」

「そうだな。数も装備も結構なものだな」

イタリアとドイツがそれぞれ言います。

「九〇式戦車とか八七式対空自走砲とかだよね」

「性能が凄いらしいな」

「性能はいいのですが」

ところがここで日本が難しい顔で言うのでした。

「ただ。値段がですね」

「値段って？」

「高いのか？」

「はい、かなり高いのです」

そうだったのです。日本が頭を抱えている問題の一つなのです。

「ドイツさんの戦車と比べると二倍以上でして」

「待て、そんなに高いのか」

ドイツがそれを聞いてまず引きました。

「二倍以上もするのか」

「はい、なお艦艇になるとさらに凄くて一隻千二百億円のものもあります」

「何でそんなに高いんだ」

ドイツは艦艇の値段を聞いてさらに驚きます。イタリアはもうそれが兵器の値段なのかと呆れています。

「それでは幾ら性能が高くても問題だぞ」

「そうですね。本当に困っています」

「かなりおかしいよ、それって」

二人は日本に対して言います。今は今で問題を抱えている日本の機甲部隊なのでした。

第千九十四話　　完

２００９・１２・６

第千九十五話　本当に役に立たない

第千九十五話　本当に役に立たない

スペインはロマーノを子分にしていました。その時といえば。

「御前ほんまに何かまともにできるものあるんか」

またお掃除でお家の中をかえって滅茶苦茶にしてしまった彼に対して呆れながら言うのでした。

「掃除もまともにできんのかいな」

「何だよ、してやってるんだろ」

「それでこんなん言うしな」

こう言ってさらに呆れます。もう呆れるしかありませんでした。

「どうやねん、それって」

「いいだろ？じゃあ何もせずに昼寝していたらいいのかよ」

「まだその方がええわ」

「そうか、わかった」

それを聞いたロマーノはすぐにでした。実際に寝てしまいました。

スペインはこの彼にさらに呆れてしまいました。

「御前何なんや？それでええんか」

「いい。昼寝して飯が食えるんだからな」

「何でこんなん貰ったんや」

今更ながらこのことを後悔しています。

「何もできんし口ごたえするし。どうにもならんな」

「まだ食った後の食器に痰を吐かないだけましだろ」

「そんなんする奴おったら幾ら何でも俺でも怒るわ」

流石にそれはありません。下品の極みです。けれど世の中本当にこうした人がいるというのが凄いです。本当に色々な意味で世の中は広いです。

「御前はそこまでいかんけれどな」

「じゃあそれでいいな」

こう言ってそのまま昼寝するロマーノでした。本当にこんな彼です。

第千九十五話　完

２００９・１２・７

第千九十六話　日本のところの二人

第千九十六話　日本のところの二人

スペインはロマーノに手を焼いていました。そしてそれからずっと後に日本も台湾と韓国をお家に迎えました。するとこの二人もでした。

「そうしたことをしてはいけません」

二人に注意することもしばしばでした。ですが台湾はすぐによくなってそれで真面目に働くようになりました。

韓国も上司が気に入っていましたのでそれで随分といい感じになりました。日本は二人の面倒をよく見ていました。

「私ずっと日本さんと一緒にいたいです」

「俺もなんだぜ。このまま三人でいるんだぜ」

「そうですね。できればそうしていきたいですね」

日本も二人に微笑んで言いました。

「このままずっと三人で」

「いられたらいいですね」

「日本の国は三人で一つなんだぜ」

こんなことを言い合っていた時代も確かにありました。けれど今は。

「日本さんのところにいた頃が懐かしいけれど」

台湾は言うのでした。

「けれど今はこれで。やっていくしかないから」

「日本のところから出られてよかったんだぜ！」

韓国はこう言う始末です。

「独立が一番いいんだぜ。俺は俺なんだぜ」

「昔のことですから」

日本自身もこう言うだけです。

「今はとは違います。それだけです」

かつては三人一緒に仲良く暮らしていた時代がありました。日本のお家はその頃は日本の人達だけではなかったのです。そんな時代も確かにありました。

第千九十六話　　完

２００９・１２・７

第千九十七話　同じことをやって　☆

とをやって　☆

ギリシアが右手の人差し指で日本の頭をこんこんこん、と叩いています。見ればその左手には日本語の本があります。それを読んでいるようです。

「何ですか？」

「コ、コンニチハ」

こう日本に挨拶をします。

「ワタシハコンバンハ」

「こんにちは」

こう挨拶を返す日本です。

「あと後半のこんばんは、はいりませんよ」

「そうなのか」

「はい、そうです」

このやり取りの後でまた日本の頭をこんこんこん、と人差し指で叩きます。それからまた彼に対して声をかけるのでした。今度は。

「カ、カレーライスハ食べ物デスカ？」

「タベモノデス」

こんなやり取りを十五回続けました。そんなギリシアです。

それでその後で。ふと気付きました。

「そういえばカレーは元々インドの食べ物か」

「はい、そうです」

まさにそうだと答える日本です。

「それが何か」

「いや、変わった和食なんだな」

ギリシアからはそう思えたのです。とにかくのどかなやり取りでした。

第千九十七話　完

2009・12・8

第千九十八話　日本語話せます

第千九十八話

日本語話せます

ギリシアは結構真面目に日本語を勉強しています。その中で日本語にかなり堪能な台湾に気付きました。

「そういえば台湾は」

「日本さんのところにいて今も日本さんのこと勉強してますから」

「そうだったな」

だからなのです。台湾は日本の言葉をとてもよく知っています。

そして彼女の上司だった人は特に凄いです。

「あの人は日本さんの言葉そのまま話せるんですよ」

「それは凄いな」

「昔は日本さんのところにいましたから」

ここでもこのことが生きているのでした。

「もう普通にお話できるんですよ」

「日本のところにいたからか」

「私から見てもとても日本さんが好きな人ですし」

日本にいたことがあってそれでなのです。日本のことをよく知っているからこそ好きなのです。日本にはこうした人がいてくれるのです。

「だかたなんですよ」

「そうか。だからなんだな」

「他にも日本さんのお家の呼び方で自分の名前を言ってもらいたいお爺さんもいますし」

そうした人もいてくれているのです。

「今でも日本さんの言葉は生きているんですよ、私の国では」

「いいな、それは」

「懐かしい時代があったからなんですよ」

台湾の目がその昔を見る温かいものになっていました。
ギリシアもそんな台湾を見て微笑んでいます。温かいある一日のお話でした。

第千九十八話　　完

２００９・１２・８

第千九十九話　今度は猫に　☆

第千九十九話　今度は猫に　☆

日本とギリシアのお話は続きます。ギリシアは今度はこんなことを言うのでした。

「生まれ変わったら猫になりたい」

「どうしたんですか急に」

今のギリシアの言葉を聞いた日本は問い返します。

「猫になんて」

「猫になってＧＤＰとか貿易赤字とかそういうものと無関係な生活がしたい」

だからだというのです。

「毎日好きな場所で空を見ながら昼寝でもして」

「お昼寝ですか」

「そうだ、気ままに生きてみたい」

こう言ったうえでこうも言うのでした。

「多分叶わないだろうけど」

「それではですね」

そのギリシアに対して猫耳を被せてあげたギリシアでした。するとです。

「何だこれは」

「どうでしょうか、これで」

あらためてギリシアに尋ねる日本でした。

「猫になれましたか？」

「私は猫悟郎さんですか？」

「どうして猫悟郎さんなんですか？」

「何となくだ」

そんなのどかなギリシアでした。日本もそんなギリシアと一緒にいて実は心が癒されているのでした。のどかもいいものであります。

第千九十九話　完

2009・12・9

第千百話　スコティッシュフォールドヒーリング

第千百話　スコティッシュフォールドヒーリング

「こいつが生まれた時は驚いたな」

「ああ、こいつな」

フランスがイギリスが抱っこしている猫を見て言います。見れば丸い顔と目をしていて垂れ耳でぬいぐるみみたいな毛並みをした猫です。その猫はスコティッシュフォールドといいます。

「御前の国の中で数少ないまともなものだからな」

「おい、そりゃどういう意味だ」

まずは恒例のやり取りからです。

「それでこの猫がどうしたってんだよ」

「だからまともだって言ってんだよ。ただな」

「何だ？」

「こいつすぐ太るだろ」

フランスはその猫の短めの手足と何処かずんぐりとした体型を見て言うのでした。

「放っておいたらすぐにな」

「ああ、もう簡単に太るんだよ」

イギリスもそのことを認めます。

「油断したらすぐにってやつだ」

「そうだろうな。それにしてもこいつは」

ついついその垂れ耳をいじってしまうフランスでした。するとそれで気持ちいいのか猫は目をまるで糸の様に細めさせてしまいました。

「確かに可愛いな」

「そうだろ。見ていて癒されるぜ」

猫の中でもとりわけ癒される存在なのでした。そんなスコティッ

シュフォールドを見て二人は今とても幸せに時間を過ごしていました。

第千百話　　完

２００９・１２・９

第千百一話　猫になりました

第千百一話　猫になりました

ギリシアは猫が好きです。いつもその周りには猫が一杯います。日本がそのギリシアと一緒にいることを見たハンガリーはあることを考えました。

「それで私もなんだけれど」

「うわあ、凄く可愛いよハンガリーさん」

イタリアは猫耳を付けてみたハンガリーを見て笑顔で言いました。

「似合ってるよ、とても」

「そう。有り難うイタちゃん」

彼に言ってもらって御機嫌になったハンガリーです。

「それじゃあこれを付けてね」

「何処に行くの？」

「オーストリアさんのところに行くのよ」

「そうなんだ。じゃあ俺も」

イタリアもその猫耳を付けてオーストリアさんのところに行きました。そうして二人で彼の前に姿を現わすとです。

オーストリアさんは最初は無表情でした。けれど暫くして言いました。

「そうですね。それでは今の曲は」

「何にするんですか？」

「猫踏んじゃったにしましょう」

「えっ、俺達踏まれるの？」

「聴きたくなければ別にいいですが」

曲のタイトルを聞いて少し驚いた声をあげるイタリアに対して言います。既にピアノの前でスタンバイしながらです。

「それならそれで」

「いや、何かそれも面白そうだし」
「御願いしますね」
「わかりました。それでは」
こうして猫になった二人はオーストリアさんのピアノを聴くのでした。その曲はとても楽しいものでした。

第千百一話　　完

２００９・１２・１０

第千百二話　日本の猫

第千百二話

日本の猫

日本にも猫が一杯います。もうお家の中に溢れ返っています。畳の上にも廊下の上にも屋根の上にもお庭にもです。とにっかう一杯います。

「一体何匹いるんだ？」

「さて、どれだけでしょうか」

家に来ているドイツに対しても首を傾げさせて答えます。

「私自身よくわかりません」

「それだけ多いのか」

「はい。他の動物もですが」

犬も一杯います。兎とかハムスターとかモルモットもです。こうしたペットの類は大好きな日本らしいお家の中になっています。

「かなりいますので」

「そういえばだ」

ドイツはそれぞれ丸くなって寝ていたり柱で爪研ぎをしたり御飯を食べている猫達を見ながらあることに気付いたのです。

「猫の中にだ」

「何かありますか？」

「尻尾が二本のやつがいるが」

その猫に気付いたのです。

「あれは一体何なのだ？」

「はて。そんな猫がいるのですか」

日本はそれを聞いて少し意外そうな声で応えました。

「尻尾が二本ですか」

「あれは何だ？」

「さて。私は見たことがありませんから」

実は今日本の側で丸くなっている猫がそうだったりします。猫もそれぞれみたいです。

第千百二話　　完

２００９・１２・１０

第千百三話　それは似合わない

第千百三話　それは似合わない

イタリアとハンガリーが猫耳になったことを聞いたドイツ、しかし彼はそれを身に着けることは決してありません。それは何故かといいますと。

「俺はそういう可愛いものは似合わん」

「自分でわかってるっていうのかよ」

「そうだ」

こう相棒のプロイセンに対して答えるのでした。

「御前もそう思わないか？」

「ああ、それはな」

実はそれはプロイセンも思っていることでした。ドイツにそういうものは似合いません。誰がどう見てもです。そのオールバックだけではありません。

「止めた方がいいぜ」

「そういうことだ。だからしない」

「とはいっても俺もする気はないしな」

プロイセンも自分で自分のことがわかっているのでした。

「イタちゃんとかだから似合うんだよ。俺達には似合うものじゃないな」

「だからしない。それでいいだろう」

「じゃあ誰かにやるか」

自分のお家にあるものはそうしようと決めたのでした。

「日本か誰かにあげるな」

「そうだな。日本がいいな」

ドイツは少し考えてから述べました。

「日本なら上手く使ってくれるだろう」

「じゃあそれでいいな」

こうしてドイツのお家の猫耳は日本に渡されることになりました。
実は日本からのプレゼントだったりしますが。

第千百三話　　完

２００９・１２・１１

第千百四話　オーストリアさんの耳

第千百四話　オーストリアさんの耳

猫耳を付けてオーストリアさんの前に出たイタリアとハンガリーでしたが今日オーストリアさんのお家にお邪魔してみますとこれが。

「えっ、オーストリアさんも」

「猫耳付けてみたんですか」

「如何でしょうか」

自分の髪の色と同じ猫耳を付けてみたオーストリアさんが二人に対して尋ねます。

「これは」

「うん、何か凄く似合ってるよ」

「絵になってますよ」

一見すると驚くべきものですが少し見てみるとです。これがかなり似合っているのでした。

「オーストリアさんも何か」

「猫が似合うんですね」

「私も猫は嫌いではありませんし」

こんなふうなことも言うオーストリアさんでした。

「それで試しにと思いでしたが」

「いいよね、凄くね」

「そうね。とてもね」

二人はまた言います。今度はお互いにです。

「可愛いしそれでいて」

「気品があって」

「では皆でお菓子を食べましょう」

ここでいつもの優雅な笑みを浮かべて二人に言いました。

「ザッハトルテでも」

「じゃあ俺も猫耳付けて」

「私も」
二人は懐からそれぞれ猫耳を出して付けます。そうして三人仲良く猫になってオーストリアさんのお菓子を食べるのでした。

第千百四話　　完

２００９・１２・１１

第千百五話　連合と猫

第千百五話

連合と猫

日本の手から猫耳は連合の五人とついでに一人にも渡りました。五人はまず会議室でそれぞれの席の前に置かれているその猫耳を見ます。

「これを付ければいいんだよね」

「そうすれば猫耳になれるぞ」

アメリカがロシアの言葉に答えます。

「そうすればすぐだな」

「何か簡単に猫になれるんだね」

「それはわかったあるが」

中国も当然その猫耳を見ています。それで言うのでした。

「これを付けるのは何か面白そうな反面怖くもあるな」

「そうか？俺は結構いいと思うぜ」

フランスはそれを見ても喜んでいるだけです。

「何かよ。愛嬌があってよ」

「俺は猫は好きなんだがな」

イギリスは少し微妙な顔です。

「どうなんだろうな。これを付けたら妖精とかみたいになるのか？」

「そうじゃないのか？御前の家に一杯いるあれな」

どうもフランスも時々あの人達が見えるようです。この辺り流石イギリスと長い間付き合っているだけはあります。見事ではあります。

「あれみたいになれるんじゃないか？」

「そう思うと悪くねえか？これも」

「俺は付けてみることにしたぜ」

まずはフランスが乗りました。猫耳はこうして連合にも広まりま

した。

第千百五話　完

2009・12・12

第千百六話　妹達の猫耳

第千百六話

妹達の猫耳

猫耳は男組だけでなく彼等の妹達にも手渡されました。こうしたところは本当に気が利く日本です。流石です。

それでその猫耳を付けてみるとです。

皆注目します。そして口々にこう言うのでした。

「可愛さ倍増ってやつ？」

「萌えっていうか」

「まさにペット」

「メイドにしたくなったよ」

こう言うのです。何か物凄い反応です。

それを目の前にした彼女達は。かえって怖くなりました。

「流石にこれを皆の前に着けて出たら」

「こうなるから」

「以後は厳禁よね」

「そうしましょう」

こう言ってそれを封印してしまうことにしました。けれどそれを聞いたイタリアは。

「そんなの困るよ。折角皆可愛かったのね」

「あのね、お兄ちゃん」

その彼にイタリア妹が言い返します。

「それで私達に変に注目が集まるから困るのよ」

「けれど御前ラテン戦隊じゃミニスカートで皆に注目されてるじゃないか」

ラテンピンクです。戦隊の女の子はミニスカートか半ズボンです。

これはもう鉄則になっています。最近それが遂に破られましたが。

残念なことに。

「それはよくて猫耳は駄目なの？」
「わかったわよ。じゃあお兄ちゃんの前だけね」
こうしてそれぞれのお兄さん達の前だけで猫耳を着けることになりました。本当にこれの威力は凄まじいです。

第千百六話　　完

２００９・１２・１２

第千百七話　一番バッターは

第千百七話

一番バッターは
連合ファイブにも猫耳が渡りました。そしてまずは。
「俺がやるぞ！」
「げっ、よりによって御前かよ！」
イギリスは思わず叫んでしまいました。何とフランスが着けたのです。
髭のお兄さんが猫耳です。これは。
「・・・・・お世辞でもねえがえげつない格好だな」
「そうか？じゃあこれでどうだ！」
今度は服を脱いでです。トランクス一枚になったのでした。その姿でまた言うのです。
「この格好ならどうだ！」
「余計悪いよ」
イギリスはまた彼に突っ込みを入れました。
「っていうか何だよその格好は」
「俺の方が似合うんだよ！」
フランス自身はこう力説します。
「学園一ファッショナブルな俺なら何でもな！」
「けれどトランクスは脱がないんだな」
「これ脱いだら停学になるからな」
ですからそれは流石にしないのでした。
「前にも何回かなってそれで先生達にもマークされてんだよ」
「何でそれで生徒会やれんだよ、おい」
イギリスはそのことにも突っ込んでしまいました。
「とにかく猫耳はどうなんだよ」
「気に入ったな」

フランスはそのまま猫耳をつけ続けるのでした。最初からいきなり濃い人が壮絶な展開をやってみせたのでありました。傍迷惑なことにです。

第千百七話　　完

２００９・１２・１３

第千百八話　猫自体は

第千百八話　猫自体は

そんなフランスの壮絶な展開を見てしまったイギリスでした。しかし彼は決して猫嫌いではありません。それどころかです。

「イギリスさん、イギリスさん」

「ああ、御前か」

長靴をはいた黒猫が二本足で歩きながら彼のところに来ました。

「来てくれたんだな」

「はい、あまりお元気そうじゃないですね」

「フランスの奴がまたやったんだよ」

うんざりとした顔でその黒猫に話すのでした。

「またな」

「フランスさんも懲りないですね」

「あいつの辞書にそんなのはねえよ」

ここで少し笑顔になるイギリスでした。

「それはもうわかってるだろう？」

「はい、確かに」

これは黒猫も知っていることでした。彼もフランスとは会ったことがあるからです。フランスも時々ですがこうした方々を見ることがあるのです。

「ああいう人ですからね」

「だからな。まあ相手はしてやったよ」

イギリスはここで何故か寛容な顔になりました。

「あいつのな」

「お疲れ様です」

「じゃあお茶でも飲むか？皆も呼んでな」

こうして黒猫達と楽しくお茶を飲むのでした。彼は猫そのものは

大好きなのです。その証拠に今の彼はとてもにこやかで奇麗な笑顔になっています。

第千百八話　　完

２００９・１２・１３

第千百九話　イギリスの耳

次はイギリスが着ける番です。その彼の場合は。
「俺の家って猫の種類多いんだけれどな」
「ああ、そういえばそうだな」
フランスは彼の今の言葉に突っ込みを入れました。
「御前猫色々な種類飼ってるからな」
「犬もだけれどな。だから何を着ければいいんだ？」
イギリスはそのことに悩んでいました。まず着けることが前提になっています。
「それでよ」
「何でもいいんじゃねえのか？」
フランスはこのことには特にこれといってアドバイスをしませんでした。
「何でもな」
「そうか。じゃあこれな」
こう言って着けたのは普通の猫耳でした。本当に普通のです。
ただし色は彼の髪の色と同じです。それで違和感は全くありません。
「これでどうだよ」
「何か可愛いっていうよりまんま猫人間だな」
その姿を見たフランスの感想です。
「それで肉球着けたらそのままだな」
「そうか。そんな感じか」
「それより御前の国にそんな二本足で歩く猫結構いるだろ」
フランスもこのことは知っていました。見たこともあるからです。
「あんな感じだな」
「そんなものか」

イギリスはこんな感じでした。妖精みたいでありました。

第千百九話　　完

２００９・１２・１４

第千百十話　怖い猫

第千百十話　怖い猫

ロシアのお家にも猫がいます。けれどその猫は。
「な、何か他の国の猫より大きくないですか？」
「大きいよ、それに」
「何か威圧感あるし」
ラトビアの言葉にエストニアとリトアニアが答えます。今三人はそのロシアのお家の猫を見ていますがやっぱり大きくて怖いのです。
「やっぱりペットは飼い主に似るんですか？」
「そうじゃないかな、犬だってそうだし」
「ロシアさんのお家って何でもかんでもこうなんだよな」
そしてその猫のお世話もしないといけないのですがこれがまた。少し機嫌を損ねるとです。もうそれだけで噛む、引っ掻くなのです。それで今日もまたラトビアが被害を受けて。
「うぎゃあああああああああああっ！」
「ラトビア、ラトビアーーーーーーーーーーーッ！！」
いつもの様にラトビアとエストニアの悲鳴が聞こえます。本当にいつも通りです。
顔を引っ掻かれたラトビアは泣きながら二人の手当てを受けます。これもいつも通りです。
「猫の後は何のお世話ですか？」
「・・・・・熊だよ」
リトアニアがうんざりとした顔でラトビアに答えます。
「だからね。今度もね」
「覚悟が必要なんですね」
「お世話しないとロシアさんに怒られるから」
「結局同じなんだよね、この国の動物達もロシアさんも」
ラトビアもリトアニアもエストニアも困り果てた顔になっていま

す。これがロシアです。まさにロシアです。

第千百十話　　完

２００９・１２・１４

第千百十一話　猫になっても怖い

第千百十一話　猫になっても怖い

「それで僕もね」

フランス、イギリスと来て次はロシアの番です。学園の中でインドと同じ位怖いといわれているこの人ですが一体どういった評価になるといいますと。

「どうかな」

「えっ、ロシアさんが」

「猫だし」

リトアニアとポーランドがそのロシアを見てまずはドン引きしました。ただ髪の色と同じ猫耳を付けただけなのですがそれでもです。威圧感は変わりません。

「ま、まあ何ていうか」

「変わらないしーーーーー」

何か変なことを言えばどうなるかわかっているので二人共こう言うだけです。こうした時はあまり力の強くない国はこう言うしかありません。しかしです。

力があって尚且つロシアと仲の悪い場合はどうなるかといいますと。ロシアと仲が悪い国はアメリカなり中国なり結構いますが特にこの人の反応は際立っています。

「私をたばかろうとしても無駄です！」

日本はそのロシアを見て目を完全に座らせています。

そしてその手には。刀があって今にも抜かれようとしています。

物凄く危険な状況です。

「今度は一体何のつもりですか」

「嫌だなあ、遊んでるだけだよ」

ロシア本人は素朴にこう答えます。

「ほら、似合うよね」

「似合っていようがいなかろうが。私の目は誤魔化せませんよ！貴方だけは！」

物凄い殺気を撒き散らしながらロシアと対峙するのでした。この人とロシアの関係はどうしようもないものがあります。

第千百十一話　完

２００９・１２・１５

第千百十二話　猫の呪い

第千百十二話　猫の呪い

中国でも猫は飼われています。主にペットです。
「犬と同じでたまに食べたりするあるが殆ど食べないあるよ」
中国は何でも食べることで有名ですが猫も食べたりします。ですが実際のところは犬にしろ猫にしろ滅多に食べません。やはりメインは豚です。
「それであるが。うちの猫は」
「そういえば君の国も猫の妖怪いたな」
「猫の顔をした神様もいましたね」
アメリカと日本が彼にこう尋ねます。
「何か猫を使った呪いで昔大騒ぎになったんだって？」
「そうある。それで隋の時は大変だったあるよ」
それこそ国が上に下にのとんでもない騒ぎだったのです。上司の奥さんの一族の人がその呪いを使って上司を害しようとしたのです。そのことは何と中国の歴史にもはっきりと書かれています。
「そういうこともあったある」
「それで猫も神様でしたね」
「そうある。猫も大切な神様あるよ」
中国では神様が一杯いますがその中にはそうした神様もいるのです。
「御利益もある有り難い神様あるよ」
「つまり君のところも猫は親しみがある生き物なんだね」
「昔から」
「だから猫は好きあるよ」
好きな動物はパンダだけではないのです。
「それでシナティちゃんはどうあるか？」
「あれは止めて下さい」

日本はそれには憮然とした顔になります。彼にとってそれもあまりよくないことであります。

第千百十二話　　完

２００９・１２・１５

第千百十三話　中国猫

第千百十三話　中国猫

中国も猫耳を付けてみました。これへの評価は。

「意外といけるよな」

「ああ、似合ってるよ」

イギリスとフランスもこのことを認めます。

「いい感じだよな」

「少なくともロシアみたいに無闇に威圧感もねえしな」

だからいいというのでした。この二人も褒める時は褒めるようです。

「しかし中国にも猫って結構多いんだな」

「ああ、見たらあちこちにいるんだな」

中国のお家の中を見ればです。パンダ以外にも犬や猫が一杯います。そうしてそのうえで寝転がったり遊んだり爪を研いだりしています。本当に多いです。

「うちの家の人間は猫が好きな人間が多いあるよ」

中国自身もそれを認めます。

「まあ可愛がるよろし」

「虎や豹がいるのはおっかねえがな」

「何か無闇に凶暴だしな」

「虎を素手で倒せたら豪傑に認定されるあるぞ」

中国はここで二人にこんなことも言いました。

「それこそ凄い評価を受けるあるが。どうあるか？」

「いや、流石にそれは遠慮しておくな」

「俺もだ。虎を素手では無理だ」

二人はこう言ってそれは断りました。

「水滸伝とかそういうふうにはいかねえよ」

「やってみたい気もするがな」

何はともあれ中国の猫耳を見るのでした。それは中々いけました。

第千百十三話　　完

２００９・１２・１６

第千百十四話　トリが近付き

第千百十四話　トリが近付き

これまで連合ファイブは四人までが猫耳になりました。そのうえで遂にアメリカにまで順番が回ろうとしています。彼もそれを自覚して言います。

「さて、何を着けようかな」

「猫耳といっても色々あるからね」

「そうなんだよ。僕に似合う猫耳といえば何かな」

こうイタリアに対して応えるのでした。

「君は自分の髪の毛の色に合った猫耳を付けていたな」

「うん、そうだよ」

イタリアはアメリカの問いに明るく答えます。

「それが一番自然に似合うからね」

「よし、じゃあ僕もだ」

ここで青や赤の猫耳はしまうのでした。

「普通に髪の毛に合わせるとするよ」

「髪の毛を青や赤に染めてはしないんだ」

「ははは、髪の毛を染めたら後が怖いからね」

だからそれはしないというのです。

「君だって髪の毛は大事だろう？」

「うん、それはね」

イタリアにしろそれは同じです。何といっても髪の毛は長い友達です。髪の毛がなくてもいいという人もそれこそ滅多にいるものではありません。

「確かにね」

「だから僕は自然にいくのさ」

こうしてアメリカの猫耳は決まりました。何事も自然に、です。

第千百十四話　完

2009・12・16

第千百十五話　アメリカンキャット

第千百十五話　アメリカンキャット

アメリカも猫耳を付けてみました。するとです。

「何かあまり変わり映えしねえよな」

「っていうか普通な気がするのは何でなんだ？」

今回もイギリスとフランスが批評しています。二人から見るとそう見えるのです。それだけ今のアメリカは自然な姿に見えます。

「普段からハロウィンとかで見ているからか？」

「本当に自然に見えるな」

「ははは、そうなんだ」

あまりいい評価を言われていないようですがアメリカ本人は平気なようです。

「それはいいや」

「おい、俺はあまり褒めてねえんだが」

「正直褒めてるつもりはねえぞ」

イギリスもフランスもそれはきっぱりと否定します。とにかく皮肉が通用しません。

「しかし本当に違和感ねえよな」

「それは確かにな」

何となく褒め言葉になってきています。

「それでよ。御前そのままここまで来たんだよな」

「生徒会室まで」

「ああ。皆から注目されていたぞ」

アメリカは実に明るく二人に答えます。

「やっぱり皆から注目されるのはいいな」

「まあ御前がそれでいいならいいけれどな」

「俺も同じ意見だ」

アメリカにはこれ以上突っ込まない二人でした。かくして連合フ

ァイブは全員猫になってみたのでした。

第千百十五話　　完

２００９・１２・１７

第千百十六話　この人まで

第千百十六話　この人まで

「なあリト」

ポーランドがいつもの様にリトアニアに声をかけます。この二人は本当にいつも一緒です。

「俺も猫耳日本から貰ったんだけれどどうよ」

「また日本さんから貰ったの？」

「あいつ気前いいから大好きだしーーーー」

「それはいいけれど御礼はちゃんと言っただろうね」

「御礼？一応サンキュって」

これだけだったりします。この適当さが本当にイタリアです。

「言っておいたしこれでよかね？」

「まあ日本さんは優しいからそれで済むけれど」

それ位でなければ韓国の隣にはいられません。まして左右にはアメリカと中国がいて北にはロシアです。とにかく生徒会長がまず問題ですが。

「とにかく貰ったんだね」

「二つあるけれどどうよ」

しかも一個ではないというのです。

「一個は俺でもう一個は御前で」

「あれ、俺のもあるの」

「日本は二つくれたんだよ。何かリトにも宜しくって」

「その辺り本当に日本さんだなあ」

リトアニアはあらためて日本の気配りに気付きました。

「あの人も最近代わった上司とマスコミに苦しめられてるらしいけれど」

「じゃあ早速着けるしーーーー」

ポーランドはもう着けだしています。そしてリトアニアも日本に

感謝しながらそのうえでその猫耳を着けるのでした。

第千百十六話　　完

２００９・１２・１７

第千百十七話　何か怯えているみたいな

第千百十七話　何か怯えているみたいな

ポーランドとリトアニアだけでなくエストニアとラトビアもその猫耳を着けてみました。するとラトビアは何かが違います。

「何でそんなに垂れてるの？」

「それは僕も知りたいです」

こうリトアニアに答えます。見れば彼の耳は前に倒れています。それはまさに。

「ラトビアなのにこれじゃあ」

「スコティッシュフォールドだよね」

エストニアがここで言います。

「この耳は」

「何でこうなるんでしょうか」

「いつもがたがた震えてるからじゃね？」

ポーランドもかなり心配している顔で彼に言います。彼にしては珍しく心配している顔であります。

「あのロシアのせいで」

「やっぱりそうですか？」

ラトビアはそれを聞いてさらに震えます。

「けれどスコティッシュフォールドってその猫自体にもよりますけれど」

「まあ猫って大体傲慢で偉そうだけれどね」

「そうですよね。けれど僕ってやっぱり」

「猫にあまり見えないような気がするけれど」

リトアニアもそれは否定できませんでした。

「何か猫っていうよりはね」

「いじめられている使用人ですか？」

「うん、そんな感じかな」

動物ではありませんでした。というよりはロシアの家にいる時の彼そのものです。その垂れ耳が余計にそう見させているのでした。

第千百十七話　　完

２００９・１２・１８

第千百十八話　この二人は猫になっても

第千百十八話　　この二人は猫になっても

結構なメンバーに猫耳が行き渡りました。台湾と韓国にもです。

「やっぱり日本さんってお洒落だわ。こんな可愛いものを考えるなんて」

「猫耳は俺起源なんだぜ」

「だからあんたの起源じゃないでしょ。何でもかんでも起源っていうそのおかしな趣味は何時になったら終わるのよ」

猫耳を着けていても仲の悪い二人です。

「全く。このドラ猫が」

「そう言う御前はとんだメス猫なんだぜ。御前になんか言われたくはないんだぜ」

「言ったわね、大体あんたはね昔から日本さんだけじゃなくて上司の人にまでいつも目をかけられているのに」

何気に嫉妬めいたものも言っています。

「それで何で日本さんのものをいつも起源だって言うのよ」

「あいつは俺が育てたんだぜ」

何処かのプロ野球の元監督みたいなことも言います。

「だからあいつのものは全部俺起源なんだぜ」

「そんな訳ないでしょうが」

本当に猫耳を着けてもいつもと変わらない二人です。

そして二人が騒いでいるその最中に。凄い人にも猫耳が行き渡りました。

「猫耳であるか」

「如何でしょうか」

「くれるものは貰っておくである」

こう日本に答えています。

「有り難くな」

「わかりました。それでは」
この人は誰でしょうか。最後の最後で物凄い人に渡ったのでした。

第千百十八話　　完

２００９・１２・１８

第千百十九話　トリの前に

トリの前に

タイにも渡った猫耳ですが彼が着けてみるとです。それがやけに黒いものなのでそれを見たベトナムがその彼に思わず言ってしまいました。

「貴方のところの猫みたいね」

「シャム猫ですか」

「ええ、それみたいよ」

まさにそれだというのです。

「見てみたらね」

「あの猫は僕の家の象徴みたいなものですからね」

そう言われてまんざらでもないタイです。

「そうですか。それみたいですか」

「ええ。本当にそんな感じね」

またタイに対して言います。

そうしてベトナムも着けてみますと。彼女の場合は。

「猫というより黒豹ですね」

「豹なの」

「はい、そんな感じです」

すらりとしたスタイルのベトナムは確かにそう見えるものでした。

その長い黒髪が彼女をさらにそうしたように見せています。

「黒豹ですね」

「黒猫っていうのかしら、この場合は」

「あっ、そうですね」

タイは彼女のその言葉を受けて頷きました。

「確かに。この場合はそうですね」

「そうよね。私は黒猫よね」

このことを確かめることになりました。二人はシャム猫と黒猫なのでした。

第千百十九話　　完

２００９・１２・１９

第千百二十話　もらえなかった人

第千百二十話　もらえなかった人

皆日本から猫耳を貰ってそれぞれ着けて遊んでいます。それはスペインとキューバも同じです。キューバは何か随分と男らしい感じですがここでふとスペインに言われるのでした。勿論彼も猫耳を着けています。

「誰か貰ってないのおったか？」

「あれっ、そんなのおったか？」

キューバはスペインの今の問いに首を傾げました。

「とりあえず皆に行き渡ってるだろ？」

「御前の友達で誰かおらへんかったか？ほら、誰かおったやろ」

「俺の友達で？」

こう言われても首を傾げるばかりのキューバです。

「俺の知ってる奴は誰も着けてるで」

「あれっ、そうやったか？」

「北欧の連中も確か貰ってるぜ」

キューバはこのことも確かめていました。

「だからそんな奴は誰もいなかったと思うで」

「そうやったかな。ほな俺の気のせいか」

「そやろ。じゃあ兄貴」

「ああ、今から御前の家でな」

「アイスもリキュールもあるで。楽しくやろか」

実はこの二人の仲はそんなに悪くなかったりします。それである人のことを完全に忘れて二人でお酒とアイスクリームを楽しむのでした。

そしてこの時。ある人が自分の家で一人へこんでいました。

「何で僕だけ日本さんに忘れられるんだろう、いつもいつも」

カナダでした。彼は完全に忘れられていました。

第千百二十話　　完

２００９・１２・１９

第千百二十一話　最後に出て来たのは

第千百二十一話　最後に出て来たのは

日本はとりあえず知っている人全員に猫耳をあげました。しかしその中には誰もが驚くような物凄くおっかない人もいたのです。

「我輩であるが」

「・・・・・全然可愛くねえんだけれどよ」

カナダが思わず言ってしまいました。スイスの猫耳です。

その威圧感はまさにバッターボックスでの王貞治、監督の時よりも怖かったあの時です。極めつけのプレッシャーをそこに放っています。

「御前も日本に貰ったんだな」

「左様である」

その通りだと言います。

「どうであるか」

「だから可愛くねえしよ」

まずはそこにありました。とにかく可愛さとは別世界にあります。

「それにだよ」

「それに。何だ」

「怖いんだよ」

しかもです。怖いのです。銃まで持っていますのでそれがさらに助長されています。

そんなスイスを見てです。フランスは非情に怯えています。彼は案外戦争に弱いのですがそれでも力はあります。その彼が怖がっているのです。

「あのさ、もうちょっと穏やかにな。威圧感とかなしでな」

「無理である」

これが返答でした。

「我輩はこのままである。変わることはない」

「・・・・・そうか」
こう言われてはどうしようもありません。スイス猫はとても怖いままです。

第千百二十一話　　完

２００９・１２・２０

第千百二十二話　やっと登場

第千百二十二話　やっと登場

スイスは物凄く怖いです。けれどその彼の側にはいつも小柄で少し垂れ目の楚々とした女の子がいます。髪はブロンドで赤がかった紫のドレスを着ていてとても可愛いです。

「あれっ、あの娘は誰なんだ？」

「凄く可愛いよね」

フランスとイタリアがまず彼女に気付きました。やっぱりこの二人です。

「あんな娘いたんだな」

「誰なのかな？」

「妹である」

けれどここでスイスが出て来ました。

「我輩の義理の妹であるが。何だ」

「げっ、スイスの妹か！？」

「それなら何も手出しできないじゃないか」

彼が出て来てフランスもイタリアも泣きそうな顔になってしまいました。

「折角可愛いと思ったのによ」

「せめて名前だけ教えてくれないかな、せめて」

「名前だけならいい」

スイスもそれはいいとしました。そしてその名前は。

「リヒテンシュタインである」

「そうか、リヒテンシュタインか」

「わかったよ。名前だけにしておくよ」

二人もこれで引き下がりました。

「折角可愛いのにな」

「スイスが横にいたら」

二人は泣く泣く引き下がりました。ここでやっとリヒテンシュタイン登場です。

第千百二十二話　　完

２００９・１２・２０

第千百二十三話　記憶にございません　☆

「あっ日本さんの久し振りですね」
リトアニアは日本を見て挨拶をしました。
「前は友人共々色々お世話になりました」
「えっ！？」
日本はリトアニアに声をかけられてこう返しました。
「あれから俺達頑張って今は何とか二人でやってます」
リトアニアはそのまま話し続けます。
「もうロシアさんはこりごりです」
（誰でしたっけこの人は）
しかし日本はリトアニアのことが全くわかりません。何処の誰なのかさえです。
「他のバルト三国の二人も元気でやってますよ、ラトビアがロシアさんに身売りされましたけれど」
（バルト三国？余計にわかりませんね。歳のせいでしょうか）
日本は実際には物凄い高齢さったりします。
（一国も思い出せない、誰でしょうかこの人は。ですがここで名前窺ったら失礼ですし）
密かに考える顔になっています。顎に手を当てて。
（ええとリヴァニア？）
間違えています。
（そんな感じの名前だったような。ですが間違ったりしたらそれこそ失礼ですし。というかこの人が男の方か女の方どうかもわからないわけで勇気をもって聞くべきですかね）
まだまだ考えています。
（勇気を振り絞って聞くべきですかね。いや、私も日本男児、これ

位簡単に切り抜けられます）

そして出した言葉は。

「ああ、お元気そうで何よりです。お友達に宜しく伝えて下さい」

こう答えるのでした。笑みを浮かべて。こうしたところが日本です。

第千百二十三話　　完

２００９・１２・２１

第千百二十四話　嫌でも覚えます

第千百二十四話　嫌でも覚えます

日本は時々国の名前を忘れてしまいます。ですが誰にでも言えることですがしょっちゅう見ている名前だと覚えるものであります。

「俺の名前は覚えてくれてるよね」

「はい、忘れる筈がありません」

表情を出すことなくイタリアに対して答えます。

「イタリア君とはいつも御会いしていますから」

「それは俺もだな」

ここでドイツも出て来ます。

「俺のことも覚えていてくれているな」

「当然ドイツさんもです。ですが」

「ですが。何かあるのか？」

「それ以上に最近あの人の名前を思い出してしまいます」

こう言って遠くでいつもの様に生徒会の仕事をせずに騒いでいる韓国を見ます。本当にいつも通り仕事を全くしません。自分の宣伝と起源の主張ばかりしています。

「やたらと出て来るので」

「ああ、韓国だね」

「最近欧州でも何かと騒がしいが」

世界のあちこちで騒いでいるのです。趣味の海外留学で何処にでも出て来るようになってしまっているのです。頼まれもしないのにやって来ることもざらです。

「それでなんだね」

「最近俺も名前を覚えたが。しかしあいつは」

「太平洋のメンバー以外のことは殆ど知らないですから。何を言われても気にしないで下さい」

自分のことはやたら言って目立ちますが他の国のことはまず覚え

ない韓国なのでした。けれど日本のことはやたら知っていたりします。

第千百二十四話　　完

２００９・１２・２１

第千百二十五話　お世話になったのに　☆

第千百二十五話　お世話になったのに　☆

リトアニアがアメリカに会った時のことです。アメリカは彼のことを忘れてしまっていました。この辺り彼の相棒とは全く違っています。

「えーーと、忘れたわけじゃないんだ」

「あんなに一緒にいたのにですか！？」

「ほら、顔はわかるんだよ。君だよね」

「はい、俺ですよ」

「だから顔はわかるんだよ」

それはわかるというのです。確かに覚えてはいる様子です。けれどアメリカは困った顔をしてリトアニアを指差して言います。とにかく思い出せないのです。

「ええと、名前は確か」

「そうです、名前は」

「リトアンナ・・・・・じゃなかったよな」

「違います」

それも微妙に違います。

「ですから俺は」

「ええと、メタアニアじゃなかった」

「それも違います。ですから君は」

「ええと、リトとアニアで」

ここでやっとつながりました。そうして言う名前は。

「そうだ、リトアニアだよ。リトアニアだよね」

「そうです、俺です」

「御免、やっと思い出したよ」

ここでやっと名前が出て来るのでした。アメリカだとこうなってしまいました。

第千百二十五話　完

2009・12・22

第千百二十六話　流石相棒

「ねえポーランド」
「何よ」
またお家の中でポーランドと一緒にいる時にです。リトアニアはふと彼に対して尋ねました。
「ポーランドは俺のこと忘れないよね」
「いきなり何なん？」
「だからさ、俺の顔とか名前とか」
彼の方を振り向いて尋ねるのでした。
「そういうの忘れないよね」
「当たり前じゃね？」
彼はこうリトアニアに返してきました。
「俺達すげえ長い付き合いだしーーーー。リトも俺のこと忘れる？」
「いや、全然」
自分のことに当てはめて考えるとよくわかりました。
「それは全然ないね」
「そうじゃね？俺達って付き合い長いしそういうのはないんよ」
「そうだね。それはないよね」
言われてみると確かにです。付き合いは深く長いです。それで忘れるかどうかというともうそれは愚問と言っていいようなものでした。
「じゃあ俺達はずっとお互いのことを覚えていて」
「忘れないで生きてけるしーーー。今だって一緒にいてるし」
「やっぱりね、俺もポーランドとはずっと一緒にいるからね」
ふと忘れるということすらありません。それはポーランドも同じです。そんないつも一緒にいてお互いを念頭に置いている二人なのでした。

第千百二十六話　完

2009・12・22

第千百二十七話　中国だとこう　☆

第千百二十七話　中国だとこう　☆

「あんた誰あるか？」
「えっ、誰って」
リトアニアは中国に開口一番こう言われていきなり戸惑ってしまいました。そうなってしまうのも当然です。いきなり言われたのですから。
「何度か御会いしてるじゃないですか。ロシアさんの隣にいつもいましたから」
「あいつの名前は出さないで欲しいある」
ここでもロシアとの仲の悪さを見せる中国でした。やっぱりこの二人の仲の悪さは相当なものであります。もうどうしようもないまでにです。
そんな一幕があってから中国はまたリトアニアに対して言うのでした。
「名前言うある」
「本当に覚えていないんですか？」
「僕が忘れてるかも知れないある。だから言うよろし」
またこう言います。
「そうしたら思い出すかも知れないある」
「あの、覚えてもらってないんですか？」
「だから言ってみるある」
中国はあくまでこう言います。
「さもないと思い出せるものも思い出せないある」
「俺ってそんなにマイナーかなあ」
リトアニアは自信をなくしてしまいました。
「最近何とかやっていけるようになってきたのに」
「こっちは太平洋ある。欧州のことは知らないことも多いあるぞ」

ここでも率直に言う中国でした。結局忘れられていることが後でわかったリトアニアでした。

第千百二十七話　　完

２００９・１２・２３

第千百二十八話　お友達だから

第千百二十八話　お友達だから

「俺ってそんなに影薄いのかな」
リトアニアはアメリカと中国とのそれぞれのやり取りの後でこうエストニアとラトビアに対してぼやきました。三人で仲良くコーヒーを飲みながらです。
「何か最近そんなこと思うんだけれど」
「僕はいつも意識してるけれど」
「僕もですよ」
ですがエストニアとラトビアはこう彼に答えました。
「同じバルト三国じゃないですか」
「僕は今お友達も探していますけれど」
「そうだよね。俺もポーランドがいるし」
「僕もフィンランドさんという新しい頼りになる友達ができたし」
「僕、誰かいないのかなあ」
何気にそれぞれの関係が出てしまっています。この辺り実にシビアであります。
けれどリトアニアはここでわかりました。彼を知っていていつも忘れないでいてくれる人達はちゃんといるのです。勿論ポーランドもその一人です。
「そうだね、俺には皆がいるんだ」
「よおリト」
ここでそのポーランドもやって来ました。
「お菓子焼いたんだけれどどうよ」
「あっ、悪いね。それじゃあ」
そのポーランドも迎えて四人になります。そうして四人で仲良く。
「お茶会にしよう、あらためてね」
にこりと笑って三人に言いました。彼の周りも温かい雰囲気にあ

ります。

第千百二十八話　完

2009・12・23

第千百二十九話　流石イタリア何ともないぜ　☆

第千百二十九話　流石イタリア何ともないぜ　☆

アメリカと中国に名前を忘れられていて悲しい気持ちになったリトアニア、今度はイタリアと会いました。日本には覚えてもらっていたと自分では思っています。この辺りは知らぬが仏というお話でありますけれど。

そのイタリアはリトアニアに会うとすぐにとてもフレンドリーに近寄ってきて。それで気さくに明るく声をかけてきたのでありました。

「いよーーーう、元気だった？」

「うん、何とかね」

「そう、それならよかったよ」

実に気さくに彼に声をかけます。

「それじゃあ今から御飯でも食べに行かない？」

「そうだね、それだったら」

「パスタがいい？それともピザがいい？」

「ええと、どっちにしようかな」

「ああ、両方がいいよねやっぱり」

身体はあまり大きくはありませんが食べる量は多いイタリアです。

「それじゃあ早速食べに行こうか」

「うん、それじゃあ」

「ワインもあるしね」

イタリアはそれも絶対に忘れないのでした。

「それじゃあ乾杯しようよ」

「お昼からワインなんだ」

「俺のところじゃこれが普通だよ」

こう言います。

「だからね」

「まあそれだったら」
イタリアに流されてそのまま行ってしまいます。けれど今は悪い気はしていないリトアニアでした。

第千百二十九話　　完

２００９・１２・２４

第千百三十話　実は覚えてないのも流石

第千百三十話　実は覚えてないのも流石

リトアニアと楽しい昼食を採ったイタリア、上機嫌で自分のお家に帰ります。ここでロマーノに対してそのことを尋ねられるのでした。

「誰と一緒に食べてたんだ？」

「さあ」

いきなりこう返します。

「誰なんだろ、そういえば」

「何か北の方で見た奴だな」

「ポーランドといつも一緒にいるけれど名前は何だったかな」

実はそれを全然知らなかったのです。それでも一緒に食べたのです。

「あの人は」

「とりあえずポーランドの友達なんだな」

「それは間違いないよ」

このことはとりあえずわかるのでした。

「けれど誰かまではちょっと」

「そうだな。何とかいったけれどな」

随分と滅茶苦茶な言葉です。誰にだって名前はあります。けれどロマーノはリトアニアの顔はわかっても名前は全然知らなかったのです。

「まあ悪い奴じゃないみたいだしな」

「そうだよ。一緒に食べたけれど悪い感じはしなかったよ」

「じゃあいいか」

それでいいとなるのでした。

「俺も何か食うか」

「そうしたらいいよ」

こうしてロマーノもお昼を食べました。二人は本当にこんな調子です。

第千百三十話　　完

２００９・１２・２４

第千百三十一話　クリスマスに生徒会

第千百三十一話　クリスマスに生徒会

遂にクリスマスとなりました。生徒会でもその話題で持ちきりです。しかしいつもの様に生徒会長の席には人が座っていません。

「あの馬鹿は仕事納めの日に何処にいやがるんだ？」

「手前の家でクリスマスパーティーだそうだ。最初からいないと思っておけ」

イギリスとフランスは今日もうんざりとした顔になっています。そうなるのも道理です。

「どうせいたらいたで余計な仕事を山みてえに出してくれるんだからな」

「そうだな。クリスマスからニューイアーまではせめて平和であって欲しいからな」

内心会長が早く交代して欲しくて仕方のない二人でした。何はともあれクリスマスです。会長不在をせめてもの幸運をしたうえで五人で話がはじまります。

「じゃあこのケーキでも食べてだな」

「ピザはどうあるか？」

アメリカと中国がそれぞれ出してきました。青いケーキに何か素材が怪しそうなピザをです。けれどイギリスとフランスは両方共に手をつけようとしません。

ただロシアは平気な顔でどっちも食べています。それで平気です。

「美味しいよね」

「こいつは何食っても平気なんだな」

「やっぱり不死身じゃねえのか？」

二人はそんな彼を見て思いました。そうして何だかんだで三人だけがお腹を満足させたところで。アメリカが言うのでした。

「じゃあサンタになろうか」

「サンタにか？」
「それで皆のところを回るあるか」
「そうさ、今からな」
こうイギリスと中国に答えてです。何かがはじまろうとしています。

第千百三十一話　　完

２００９・１２・２５

第千百三十二話　五人のサンタ

第千百三十二話　五人のサンタ

アメリカは五人全員のサンタの服を出してです。そのうえで言うのでした。

「それじゃあ皆にプレゼントを配りに行こうよ」

「それで出したんだ」

「そうさ、銘々のあげたいものをあげるんだ」

ロシアに答えます。何気に贈る相手の欲しいものを渡そうと考えてはいません。この辺りも実にアメリカらしいと言えばらしい話であります。

「じゃあ行くか、五人で」

「何かいきなり話が決まったな」

フランスは思わずこう呟いてしまいました。けれど何だかんだで五人共もうサンタの服を着ています。何だかんだで乗り気の様です。

「まあいい。行くとするか」

「そうだね。最初は何処に行こうかな」

ロシアは温厚な笑みを浮かべて言いました。

「そうだな、暖かいところがいいね」

「俺はオーストリアとドイツとハンガリーとベトナム以外なら何処でもいいけれどな」

「御前まだそんだけの相手と揉めてるのかよ」

「僕は韓国は行かないあるぞ」

イギリスはフランスに突っ込みを入れて中国はそこはお断りと言います。そしてアメリカ自身にしてもこんなことを言い出す始末です。

「僕はキューバは素通りだな」

「あれっ、キューバ君のところはあったかいのに」

ロシアはキューバのところに行きたかったみたいです。何はとも

あれ五人のクリスマスの押し売り活動が今幕を開けました。傍迷惑なことに。

第千百三十二話　　完

２００９・１２・２５

第千百三十三話　北欧の五人は

第千百三十三話　北欧の五人は

サンタさんといえば北欧です。けれど今年はその五人がサンタをすることがかなり強引に決まったのでフィンランドも穏やかなクリスマスを楽しむことができています。けれど。

「あの、パーティーですから」

「ん！？」

スウェーデンはクリスマスでも相変わらずです。五人集まって仲良くやっている筈のクリスマスパーティーでも物凄い威圧感を出しています。

「そだな」

「そうですよ。さあ笑って」

「わかった」

けれど笑いません。というよりか笑えません。まるでナイトハルトズィーガーの如く笑いません。この人の笑顔を見た人はいるのでしょうか。

アイスランドは物静かに飲み食いをしています。この人もマイペースです。

デンマークは親友だと思っているノルウェーに対して盛んに声をかけています。

「さあ飲むって楽しむっぺ」

「もうそうしてるだ。気にしなくていいだ」

「そうだっぺ。じゃあこのまま楽しくやるっぺよ」

こう言ってそれで楽しんでいます。この人達もまた相変わらずです。

そんな北欧ファイブですがお母さん役のフィンランドはそんな皆を見てそれでも穏やか笑みを浮かべてそこにいるのでした。そして言う言葉は。

「やっぱり皆一緒が一番ですよね」
「そだな」
その言葉に頷いたのはスウェーデンでした。相変わらず顔は笑っていません。けれどいつもと同じ様にフィンランドの隣にいるのでした。

第千百三十三話　　完

２００９・１２・２６

第千百三十四話　そういえばこの五人は

第千百三十四話　そういえばこの五人は北欧ファイブですが実は面白いことが一つあります。それが何かといいますと。

「僕とアイスランド君は違いますよね」

「そうだって。俺の上司は物凄く古い家の人だっぺよ」

「俺の上司の家はかつてオーストリアと戦争したりナポレオンと因縁があったりしただ」

「おらの家もそだ。色々あっただ」

デンマークとスウェーデン、ノルウェーの三人の上司は実は王家なのです。けれどフィンランドとアイスランドの二人は大統領なのです。この辺りが違うのです。

「そういえば連合ではイギリスさんだけ、枢軸では日本さんだけが王様でしたっけ、一番偉い上司が」

「日本は皇帝でなかったっぺか？何でも滅茶苦茶古い家の人って話だっぺ」

何とデンマークの上司のお家よりも古い家だったりします。しかも王より上にあるのです。

「皇帝か。もう欧州ではいないっぺよ」

「そうですよね。僕の上司は何年かで替わりますから実感できないですけれど日本さんのところは凄いですよね」

「そういえば枢軸は皆皇帝が上司にいたことがある」

アイスランドがそのことを指摘しました。

「ドイツもプロイセンもオーストリアもイタリアも」

「そうだっただ。そういう意味では皆同じだ」

ノルウェーが弟さんの言葉に頷きます。

「おら達は元々一つの家だったがあそこは皆皇帝がいただ」

「まあうちは王様でいいっぺよ」

デンマークはそれで満足しています。
「うちの上司は最高っぺ。何の文句もねえっぺよ」
「そだな。上司にはこれからもずっと幸せでやって欲しいだ」
「んだ」
ノルウェーとスウェーデンもデンマークの言葉に頷きます。この三人の上司は王様で彼等はその王様を慕っているのです。

第千百三十四話　　完

２００９・１２・２６

第千百三十五話　殆ど殴り込み

第千百三十五話　殆ど殴り込み

そんな楽しいクリスマスを過ごしていた五人でしたがここであのサンタ達がやって来ました。まさに殴り込みみたいな形でやって来ました。

「メリークリスマス！」

「メリークリスマスじゃねえっぺ！」

いきなり大きな橇で部屋に飛び込んできたからこう言い返すのも当然です。よくも部屋に置かれているものが何も壊れなかったものです。

「いきなり部屋に飛び込んで来るとはどういう了見っぺ！」

「殆ど戦争みたいなんですけれど」

フィンランドも思わず呟いてしまいました。

「本当に」

「そうだっぺ。とにかく何の用だっぺ？」

「まあ俺達はサンタだからな」

「プレゼントしに来たんだよ」

イギリスとフランスがこう五人に説明します。説明しているその間にもサンタ達は橇から降りてきています。そうしながら話をするのであります。

「ほら、これな」

「受け取ってくれよ」

「何だ、これ」

ノルウェーがその受け取った箱を見て呟きます。

「気になるけれど」

「まあ俺達の心だと思ってくれよ」

「とにかくプレゼントは渡したからな」

こう言い伝えるとそのまま立ち去ります。騒ぎだけ残して去った

みたいな五人でありました。

第千百三十五話　　完

2009・12・27

第千百三十六話　プレゼントは何と

第千百三十六話　プレゼントは何と

北欧の五人に手渡されたそれぞれのプレゼント。それは一体何かといいますと。

「ええと、青いケーキに」

「ピザに」

「ウォッカに」

「それとローストチキンに」

「ワインだっぺ」

飲み食いするものばかりでした。見事なまでに。

五人はとりあえずそれを見てまずどうするか考えました。けれどここでいきなりパーティーに飛び込んで来たシーランドが言うのでありました。

「そんなの食べればいいですよ」

「そだな」

スウェーデンがシーランドのその言葉に頷きました。

「食べればそれで何の問題もない」

「そうですね、プレゼントですし」

フィンランドもスウェーデンのその言葉に笑顔で頷きました。

「それじゃあ皆で」

「そうだね。皆で楽しいパーティーを再開しよう」

アイスランドもそれに賛成しました。

「六人で仲良く」

「シー君も入っていいですか」

「そのつもりで来たんだっぺ？遠慮することないっぺよ」

「そんだ。六人になっただけだ」

デンマークは満面の笑顔で。ノルウェーは何処か微笑んだ顔で彼に言います。こうしてシーランドも入れた六人でプレゼントを飲み

食いするのでした。ただしシーランドへのプレゼントはその時いなかったのでありませんでした。

第千百三十六話　　完

２００９・１２・２７

第千百三十七話　この関係はパス

第千百三十七話　この関係はパス

今度はギリシアとトルコに向かおうとしますが。ここで欧州系の三国はパスするのでした。

「何か僕トルコ君とはずっと昔から仲悪いしね」

「俺はちょっと顔出しにくいんだよな」

「俺もな」

ロシアとイギリス、フランスはこう言って行こうとはしないのでした。

「だから頼むな」

「二人で行ってくれ」

こう言ってアメリカと中国だけを行かせるのでした。しかしこの両国はといいますと。

「そういえばギリシアとトルコって仲悪かったな」

「確かそうだったあるな」

実はこの関係について詳しくないのです。

「まあそれでも韓国と台湾程じゃないな」

「あそこまで大人気ない関係も滅多にないある」

こう言って全く意に介していません。それで向かうのですが。

この時もまた。ギリシアとトルコはいがみ合っています。いつも通り険悪です。

「御前は何処か行け」

「へっ、ここは俺の家の場所でい。だからいいんだよ」

いいというのである。

「それでどうだっていうんでい」

「見るのも嫌だ」

ギリシアもここまで言います。

「何処か行け」
「だからここは俺の家の場所なんでい。行くのは御前だけでい」
こう言ってです。あくまでそこから下がろうとしないのです。
「わかったらさっさと行くんでい」
「嫌だ」
こんな調子です。二人の関係は相変わらずです。

第千百三十七話　　完

２００９・１２・２８

第千百三十八話　空気をわざと読まない

第千百三十八話　空気をわざと読まない

そんな二人の間に入ったのは。その二人のサンタです。アメリカと中国です。

「やあ、メリークリスマス！」

「今日はとりあえず宗教は無視するある」

こう言って二人の間に入ってです。それでプレゼントを贈るのでした。

「ほら、時計だぞ」

「鳩時計あるぞ」

二人にそれぞれ鳩時計を手渡すのでした。

「さあ、これを楽しむんだ」

「中々面白いあるぞ」

「面白いのか」

「まあくれるんならもらっておくけれどねい」

こう言ってその贈りものを受け取る二人でした。二人にしてもプレゼントを受け取ることにはまんざらではありません。それでなのです。

「鳩時計か」

「また面白いものだねい」

「そうだろ？それじゃあプレゼントはあげたぞ」

「これでいいあるな」

こうして二人のところを去るのでした。来るのもいきなりでしたが去るのもいきなりでした。本当に一撃離脱なのでした。

それで去って。二人は帰路で話をするのでした。

「やっぱりああいう状況じゃ」

「すぐに帰るのが賢明あるな」

それがよくわかっている二人でした。誰に生徒会長が毎度引き起こす厄介ごとをイギリスとフランスに押し付けている訳ではないのです。

第千百三十八話　　完

２００９・１２・２８

第千百三十九話　プレゼントを貰っても

ギリシアとトルコはプレゼントを貰いました。しかしです。
「御前は何処かに行け」
「それはこっちの台詞でい」
相変わらずいがみ合ってばかりです。
「俺はずっとここにいる。御前の顔は見たくない」
「ここは俺の家でい。何処にいようが俺の勝手でねいかい？」
相変わらずの様子であります。そうやっていがみ続けているうちに時間だけが過ぎていきます。そしてその中でギリシアがトルコに対して言います。
「そういえば御前は」
「今度は何だってんだい？」
「ムスリムだったな」
このことを指摘するのでした。
「そういえば」
「それがどうしたってんでい」
「何故クリスマスを祝う」
ギリシアの指摘はかなりストレートなものでした。
「宗教が違うというのにだ」
「俺の国は昔から宗教が多いんでい」
これはその通りです。トルコはかつては大帝国でした。それでその中にある宗教の数もとても多かったのです。ついでに言えばその人口の多さもかなりのものでした。
「キリスト教もあったのは覚えてねえのかい？」
「そういえばそうか」
ギリシアもそれを聞いて納得するのでした。トルコはイスラムだ

けではないのです。

第千百三十九話　　完

2009・12・29

第千百四十話　昔のトルコでは

第千百四十話

昔のトルコでは
かつてトルコが物凄い大帝国だった頃ギリシアは。彼のお家の居候でした。
「御前は嫌いだ」
「それでも俺の国にいるから俺の居候なんでい」
こう言っていつも不平を垂れるギリシアを怒っていました。
この付き合いは長かったです。しかしです。
ギリシアはトルコに一行になびきませんでした。全くです。
彼が物凄く強かった時にお家に入ったのですが。
「俺は俺だ」
「可愛くない奴だねい、全く」
トルコもその仮面を顰めさせざるを得ません。
「最近俺のところにはおめえだのハンガリーの親戚だの厄介な奴ばかり来ているのはどういうことなんでい」
「御前の家に入りたくないだけだ」
ギリシアは言いにくいことをはっきりと言いました。見事なまでに。
「たったそれだけのことだ」
「可愛くない奴だねい。ちったらにこりと笑いやがれ」
「笑う気もない」
のんびりとしていますがああ言えばこう言うです。
「御前が何かまずいことになったら笑ってやる」
「ああわかったさ。そういえばルーマニアもいたねい」
「あいつは強いぞ」
ギリシアはぽつりと言いました。
「精々痛い目を見ろ」

「ったく、どういう性格してるんでい」
昔からこんな関係の二人でありました。それが今でも続いていて物凄く仲が悪いのであります。

第千百四十話　完

２００９・１２・２９

第千百四十一話　一人ぼっちは嫌だ

第千百四十一話　一人ぼっちは嫌だ

ラトビアのクリスマス。とりあえずお呼びはかかっていません。それも誰からもです。彼は自分のお家の中でぽつんとなってしまっています。

「うう、リトアニアはポーランドと一緒で」

リトアニアはやっぱりクリスマスもポーランドと一緒にいるのでした。まさに二人は一つです。その絆はバルト三国よりも強いかも知れません。

そしてエストニアもまた。

「エストニアはエストニアでフィンランドさんと予定があって。何で僕には誰もいないんだろう」

こうした時二人が羨ましくなります。ましてやいつも隣というか周りに台湾と韓国が呼ばれなくてもいる日本や無二の相棒や兄弟がいるドイツやイタリアなんて。夢みたいな話です。

「結局誰かお友達作らないといけないのかな」

「よお、いるか？」

「プレゼントあげに来たぜ」

ところがその彼のところにサンタ姿のイギリスとフランスがやって来ました。

「ほら、これな」

「受け取ってくれよ」

「あれっ、イギリスさんにフランスさん」

ラトビアは泣きそうになっていたのを途中で止めて二人に顔を向けました。

「何でここに？」

「今年は生徒会でサンタやってんだよ」

「だからなんだよ」

それで来ているというのです。
「それで何だ？」
「他に贈り物が欲しいみたいだな」
二人は寂しそうにしているラトビアに気付きました。さて、何がはじまるのでしょうか。

第千百四十一話　　完

２００９・１２・３０

第千百四十二話　橇に乗せられて

第千百四十二話　橇に乗せられて

イギリスとフランスは今のラトビアを見て。すぐにこう言いました。

「とりあえずプレゼントは家に置いてな」

「俺達と一緒に来いよ」

「えっ、一緒にって」

まずは二人のその言葉に驚きました。

「一体何処に行くんですか？」

「ちょっとな。面白い場所にな」

「少なくとも今ここにいるよりはずっとよくなるぜ」

イギリスとフランスはラトビアに対して微笑みを向けながら答えます。

「とりあえずロシアの橇じゃなくてな」

「俺の橇に乗れよ」

「あっ、はい」

フランスの橇に乗ることになってそれで、です。ラトビアは外に出ることになりました。

お家の外は夜です。そして雪です。その雪の聖夜の中で。

ラトビアは橇で空を飛びます。それがまた非常に。

「寒いですけれど。奇麗ですね」

「ははは、これも贈り物の一つか？」

橇を操るフランスは笑いながら彼に応えます。

「まあ折角のクリスマスだ。楽しくやらないとな」

「そうですね。泣くクリスマスなんてのは」

「クリスマスじゃねえさ。ナイスボートよりもよくないぜ」

何気に日本のアニメのこともお話に出してです。そのうえでラトビアを連れて行くのです。さて、五つの橇が向かうのは今度は何処

でしょうか。

第千百四十二話　完

2009・12・30

第千百四十三話　ラトビアも皆で

第千百四十三話

ラトビアも皆で

フランスに連れて行かれたラトビアですがその先は。ポーランドのお家でした。家の外は何だかんだと言ってもまだピンクには塗られていません。

「あれ、ポーランドのお家なんですね」

「ああ、そこで楽しくやれよ」

フランスが笑って後ろにいる彼に対して言います。

「充分にな」

「そうですか。それじゃあ」

「一人のクリスマスなんて面白くとも何ともないぜ」

フランスはこうも言いました。

「だからな。楽しく過ごせよ、いいな」

「はい、すいません」

「礼はいいぜ。後はな」

「他にも何もあるんですか？」

「だからクリスマスだぜ」

彼が言うのはこのことでした。とにかく今日はクリスマスなのだというのです。そう、クリスマスといえば何なのか、それはもう言うまでもありません。

「あいつの家に着いたらやるからな」

「そうですか」

「楽しみにしてろよ」

また後ろにいるラトビアに対して言いました。

「いいな、クリスマスだからな」

「はい、それじゃあ」

そんな話をしながらポーランドのお家に着きました。ラトビアの

一人だけのクリスマスは終わったのです。

第千百四十三話　　完

2009・12・31

第千百四十四話　皆でのクリスマス

第千百四十四話　皆でのクリスマス

フランスの案内でポーランドのお家に入るとです。そこにはポーランドとリトアニアだけでなくベラルーシやウクライナまでいました。

「あれっ、皆いるんだ」

「うん、今日はお兄様サンタだから」

「リトアニアちゃんが呼んでくれたのよ。皆でどうかって」

それでベラルーシもウクライナもいるのです。中々楽しいクリスマスです。

「食べ物もワインもあるよ。俺ケーキ焼いておいたよ」

「皆いる方がいいしーーーー。ほら、ラトビアも入らね？」

リトアニアとポーランドにも迎え入れられてそれで楽しいパーティーに加わりました。そしてここでフランスから皆へのプレゼントです。それは。

「ほら、クリスマスにはこれも必要だろ？」

「えっ、それですか」

「ああ、楽しんでくれよ」

リトアニアは思わず声をあげてしまいました。何と出て来たのはオーケストラです。フランスも随分と気前のいいことをしてくれます。

「クリスマスソングでも何でも楽しんでくれよ」

「それってまさかあれじゃね？」

ポーランドもその言葉が興奮でうわずっています。それも無理もないことです。何しろそのオーケストラは。

「パリ管弦楽団じゃね？」

「そうさ。奮発したんだぜ」

フランスは切り札を出して来たのです。見事です。

「だからな。皆で楽しんでくれよ」
「有り難うございます、フランスさん」
ラトビアはあらためて彼に御礼を言います。彼にとっては最高のクリスマスがはじまるのでした。

第千百四十四話　　完

２００９・１２・３１

第千百四十五話　ドイツ系

第千百四十五話　ドイツ系

今度はドイツ系のところですが。フランスがどうにも難しい顔になっています。考えてみなくてもそれは至極当然のことであります。

「オーストリアがいるんだよな」

「御前一体あいつと何回喧嘩したんだ？」

「さてな」

イギリスの問いにもこんな調子で返す始末です。

「俺も覚えちゃいねえよ。実際物凄い数なのは確かだけれどな」

「それだけ喧嘩している相手のところに行くのかよ」

「他にはドイツもいやがるしプロイセンもいるしな」

何かとドイツ系とは悶着があったフランスです。というよりかは一体何回ドイツ系と喧嘩してきたのかわからない位であります。

「そんなところに行くのはな」

「まずいな、やっぱり」

「ああ、かなりまずい」

「俺もな。ちょっとな」

実はそれはイギリスもなのでした。

「ドイツとはな。オーストリアはともかくな」

「あれっ、オーストリアさんっていい人だよ」

ロシアはこう言います。実はこの人とオーストリアさんは昔から仲がいいのです。ロシアとフランスの関係と同じ位深く長いお付き合いです。

「それじゃあ僕達が行くね」

「ああ、頼むな」

「それでな」

こうして今回行くメンバーが決まりました。何か五人揃って行くことの少ない五人です。

第千百四十五話　完

2010・1・1

第千百四十六話　皆の状況は

「全くよお」
「一体何を怒ってるんだ？」
ドイツが頭にヒヨコを乗せたまま怒っているプロイセンに対して問い返しています。
「今年のクリスマスは何なんだよ」
「何かおかしいところがあるか？」
「何でオーストリアの奴とかハンガリーまでいるんだよ」
彼はそれで怒っているのです。相変わらずこの二人とは仲が悪いです。
「ベルギーとかオランダはいねえのかよ」
「あの二人はあの二人でやっている」
ドイツが怒る彼に述べます。
「だから今ここにはいない」
「ちぇっ、あの二人とかイタちゃん達でも呼べばよかったんだよ」
彼はここでもイタリアです。やっぱりイタリアが好きなのです。
「それで皆で楽しくな」
「それか日本だな」
「日本もいないのか？あいつだってな」
「あいつはあいつでややこしいことになっている」
だから無理だというのです。
「韓国と台湾が日本の家に押し掛けてだ。動けなくなっている」
「あの二人は何時でも日本のところにいるよな」
「それで来られない。だから俺達ドイツ系とハンガリーだけだ」
「ちっ、何か寝覚めの悪そうなクリスマスだぜ」
こう不平を言うプロイセンでした。けれど何だかんだで勢いよく飲み食いはしているのでした。結局彼も楽しんでいるのでありまし

た。

第千百四十六話　完

2010・1・1

第千百四十七話　やっぱり仲が悪い

第千百四十七話　やっぱり仲が悪い

こうしてドイツ系の三人とハンガリーがクリスマスを一緒に過ごすことになりました。しかしその仲はといいますと。まずハンガリーがプロイセンに対して言います。

「あんた邪魔」

「おい待て」

こう言われたプロイセンはむっとした顔でハンガリーに対して言い返します。

「ここは俺の家だ」

「それがどうしたっていうのよ」

ハンガリーも負けてはいません。彼女もかなりむっとした顔です。

「あんたがいるだけでかなり不愉快なのよ。どっか行ったら」

「どっかって何処なんだよ」

「知らないわよ。自分で考えなさい、そんなことは」

「あのな、いい加減にしろよ」

プロイセンも今の言葉にはかなり怒ってしまいました。

「俺の家だっつってんだろ、大体御前等呼んだ覚えなんてないんだがな」

「ドイツさんに呼ばれたのよ」

「相棒も何でこんなの呼ぶんだよ」

「まさかクリスマスまでこんなことになるとは思わなかった」

ドイツも困った顔になっています。

「やはりお祝いの日でも仲は悪いんだな」

「だから何でイタちゃん達とか日本を呼ばねえんだよ。あの連中ならこんなことにならねえだろうがよ」

「日本を呼んだら韓国が勝手に来るのだがいいのか？」

「・・・・・いや、俺は生徒会じゃないからそれはいい」

流石にこう言われるとプロイセンも大人しくなりました。生徒会長はとりあえず悪名という意味で皆からよく知られている人なのでありました。

第千百四十七話　　完

２０１０・１・２

第千百四十八話　ザッハトルテに

第千百四十八話　ザッハトルテに

そんな仲の悪いクリスマスを過ごしているドイツ系とハンガリーですがここで一人静かにしていたオーストリアさんが皆に対して言ってきました。

「ケーキがありますよ」

「あっ、そうなんですか」

「ザッハトルテですよ」

こうハンガリーに対して応えます。

「如何でしょうか」

「はい、それじゃあ」

まずはハンガリーが笑顔でオーストリアさんの言葉に応えます。

「頂かせてもらいますね」

「はい、どうぞ」

こうしてまずはハンガリーがオーストリアさんのそのザッハトルテを食べはじめました。そして今度はドイツとプロイセンにも声をかけるのでした。

「では頂くか」

「仕方ねえな、貰ってやるよ」

こうして二人もそれぞれ言うのでした。プロイセンもそのザッハトルテを食べます。その味は。

「美味いな」

「美味しいですかか」

「ああ、それは認めてやるよ」

プロイセンもそのことは認めるのでした。オーストリアさんのザッハトルテは確かに美味しいのです。それもコーヒーに滅茶苦茶合います。

「本当にな」

「クリスマスは優雅にです」
何時の間にかお部屋にはオーケストラまで来ています。指揮者までいます。
そうしてそのうえで優雅な時間がはじまります。皆もこれには納得です。ドイツのお家でもやっと普通のクリスマスがはじまるのでした。

第千百四十八話　　完

２０１０・１・２

第千百四十九話　サンタが来ても

第千百四十九話　サンタが来ても

そんな騒いでいるドイツ達のところにサンタが来ました。見れば結局フランスもいます。今回は五人全員でやって来たのでした。

「何だ、一体」

ドイツがその彼等に対して問い返します。

「まさかと思うがクリスマスプレゼントか？」

「そうだけれど駄目かな」

ロシアが素朴な顔で彼に応えます。

「素敵なプレゼントをたっぷりと持って来たんだよ」

「欲しいと言った覚えはないが」

「まあそう言うな」

フランスが明るく笑いながらドイツに対して言います。

「今日はクリスマスだからな。楽しく受け取ってくれよ」

「くれるってんなら貰っておくけれどな」

プロイセンは実に彼らしいことを述べて出て来ました。

「それで何を暮れるんだ？」

「はい、どうぞ」

ロシアの声と共に五人がそれぞれプレゼントを出してきました。けれど基本的にドイツ系と仲が宜しくないフランスだけは出しませんでした。

「まあ俺はな。遠慮するってことでな」

「貴方のプレゼントもいいのですが」

その彼に対してオーストリアさんが言います。

「それでもですか」

「今回は遠慮してくれよ。そういうことでな」

こう言って彼だけはプレゼントを贈りませんでした。結果として一人に一つずつプレゼントが渡ったのでありました。数としては合

っていました。

第千百四十九話　完

2010・1・3

第千百五十話　いいプレゼント

第千百五十話　いいプレゼント

サンタさん達が帰った後で。ドイツ達はその中を開けてみました。
そうして出て来たのは。
薔薇でした。ただしそれは本当のお花ではなくブローチです。それも黄色いものです。
それを見たオーストリアさんが言いました。
「友情ですね」
「花言葉ですね」
「はい、そうです」
その通りだとハンガリーに対しても答えます。
「間違いありません。これは花言葉です」
「しかもだ。これはだ」
今度はドイツが言います。見ればそれぞれの箱の中にはレターも入っています。そこにはフランス語でこう書かれていました。
『ドイツ系はドイツ系で仲良くやれよ』
間違いなく彼の国の言葉で彼の文字でした。彼が書いて入れていたのです。
「それじゃあな」
「あいつかよ」
プロイセンはそれを見て呟きました。
「何か不吉な感じもするな」
「それでも悪い気はしませんね」
ハンガリーがここで言いました。
「こうしたプレゼントを貰うと」
「そうだな。じゃあせめてクリスマスだけはだ」
ドイツがまた言います。
「仲良くしてくれ、相棒」

「へっ、わかったぜ。御前に言われたら仕方ねえよ」
流石のプロイセンもドイツに言われては仕方ありませんでした。
こうして彼等のクリスマスは平和に過ごせるようになりました。

第千百五十話　完

２０１０・１・３

第千百五十一話　ラテンクリスマス

第千百五十一話　ラテンクリスマス

イタリアはロマーノやスペイン達も入れて楽しいクリスマスを過ごしています。見ればそこにはキューバもいます。

キューバは上機嫌の顔で彼に対して言いました。

「イタちゃんのクリスマスってな」

「気に入ってもらえたかな」

「ああ、かなりええな」

その上機嫌の顔で彼に言うのでした。

「山まで全部ライトアップするんやな」

「そうだよ。もうとにかく派手に明るくいきたいからね」

「それで御馳走も食べてな」

ロマーノはそれをどんどん食べています。見ればかなり食べています。そのすらりとしたスタイルの割に食べる量はかなりのものです。

「楽しく過ごすんだよ」

「ええもんやな」

キューバはそんなクリスマスにご満悦です。

「こっちはいつも夏やからこうした過ごし方はないからな」

「そうやったな。キューバやからな」

「そや。そういうのはないんや」

スペインにも答えます。このことばかりはどうしようもありません。キューバといえばやっぱり常夏の国ですから。冬のイベントについてはどうしても疎いものになってしまうのであります。

それでこうしたクリスマスには憧れさえ抱いているのです。見ているその目がうっとりとさえしています。

「ええもんやな。冬も」

「しっかり厚着はしておいてね。冷えるからね」

イタリアはこのことを注意しました。寒いのは確かですがそれでも楽しく過ごしている彼等でした。

第千百五十一話　　完

２０１０・１・４

第千百五十二話　夏のクリスマス

第千百五十二話　夏のクリスマス

楽しいクリスマスを過ごしながら。イタリアはちらりとキューバに対して尋ねました。

「ねえ、ところでさ」

「何や？」

「キューバのクリスマスってどんなのなの？」

そのことを彼に尋ねるのでした。

「やっぱりお祝いはするよね」

「するけれどささやかなもんやで」

こう答えるキューバでした。

「その日は休日になって家で少し美味しいものを食べる位やな」

「ふうん、こんな風じゃないんだ」

「雪も降らへんしどうしてもな」

ここで少し苦笑いになってしまうキューバでした。

「クリスマスは盛り上がらへんわ。それは仕方ないわ」

「そんなものなんだ」

「だからこうしたクリスマスは物凄いショック受けるわ」

そうした理由もあったのです。キューバにしてもそうした事情や理由があるのでした。やっぱり常夏だとそれはそれで寂しい思いをしたりもするのです。

「ほんまにな」

「それだったら来年も来てよ。もっと楽しく過ごそう」

「ええんか？来年も」

「うん、楽しくやろうよ」

こう言って彼を誘うのでした。とても気さくで人懐っこいイタリアのいい面が出ています。こうしてイタリアとキューバの仲はよくなっていくのでした。

第千百五十二話　完

2010・1・4

第千百五十三話　イタリアには皆で

第千百五十三話　イタリアには皆で

「メリークリスマス！」

イタリアのお家にもサンタさんが来ました。今度は五人全員です。

「あっ、フランス兄ちゃんに生徒会の皆がサンタさんなんだ」

「よおイタリア、プレゼント持って来たぜ」

フランスが右手でウィンクしながらイタリアに対して言葉を返します。

「可愛い娘ちゃんだけはないけれどな。色々と持って来たぜ」

「わあ、有り難う」

「さあ、これある」

「どうか貰ってくれ」

中国は何か偽者臭いシナティちゃんのぬいぐるみにアメリカは何か妙にマッチョなヒーローのイラストです。二人の趣味が実によく出ています。

それを貰ったイタリアもロマーノもかなり微妙な顔になっています。そうしてその微妙な顔で二人に対して尋ねるのでした。

「ねえ、これって」

「クリスマスプレゼントだよな」

「そうあるぞ」

「いやあ、喜んでくれて何よりだよ」

二人はイタリア兄弟が喜んでくれていると思っています。この辺りの認識が流石です。何はともあれ二人のクリスマスプレゼントはそれなのでした。

イギリスとフランスはオーソドックスに紅茶セットとワインです。

そして最後の一人ロシアは。

「僕はこれなんだ」

「あっ、これって」

イタリアはロシアのプレゼントを見てびっくりしました。何とトルストイの戦争と平和だったのです。
「愛読書なんだ。是非イタリア君達に読んでもらいたくてね」
それをプレゼントするというのです。何気に文学にも造詣の深いロシアなのでした。イタリア兄弟もこのプレゼントにはにっこりとなりました。

第千百五十三話　　完

２０１０・１・５

第千百五十四話　クリスマスは仲良く

第千百五十四話　クリスマスは仲良く

イタリア兄弟のクリスマスに来ているスペインとキューバですがこの二人とアメリカは仲がよくありません。キューバに至っては最早お付き合いが全くないレベルです。

けれど今日は二人はアメリカに対して何も言いません。中国がそれを見て二人に尋ねるのでした。

「今日は一体どうしたあるか？」

「まあクリスマスやしな」

「今日騒ぐなんて無粋なことはせえへんのや」

それが理由だといいます。二人も幸せな日には何もしないのです。それで静かにしています。ただ御馳走とワインを楽しんでいるだけです。

アメリカも二人にはあえて何も言いません。それどころかプレゼントを置いている程です。

「今日は聖夜だからな。喧嘩なんて御免だよ」

「その通りあるな。いつも喧嘩ばかりしていたら身体がもたないある」

これには中国も納得します。けれどここで二人はあの会長のことを思い出したのでした。

「中には一年中謝罪しろ御飯を食べさせろという人もいるけれどな」

「あいつはまた別格あるからな」

そのテンションの高さだけは桁外れの韓国です。なお韓国が今何処にいるのかは五人の中で考える人すらいない状況です。探せばそれで面倒なことになるからです。

何はともあれイタリアでの穏やかなクリスマスは終わりました。

五人は次のクリスマスの場所に向かいました。

「さて、次は何処だったかな」

「オランダだったあるな」
アメリカに中国が応えます。
「思えばあの二人に会うのも久し振りだな」
「そうあるな。元気あるかな」
今度はオランダのところに向かうのでした。さて、オランダの他に誰がいるのでしょうか。

第千百五十四話　　完

２０１０・１・５

第千百五十五話　初登場でメリークリスマス

第千百五十五話　初登場でメリークリスマス

金髪を立たせて青い目をした細い眉がぴんと上がった長身の青年、彼がオランダです。彼はふわふわの茶髪を切り揃えてカチューシャをした女の子と一緒にいます。オランダは彼女に声をかけました。

「なあベルギー」

「どうしたの？」

「いや、何かクリスマスなのにな」

まずはこう前置きしてベルギーに対して言うのでした。

「俺達ってあまり変わらない感じだな」

「そうね。何かクリスマスって感じはしないのは確かよね」

ベルギーもそれは認めました。首を傾げるその動作が結構可愛いです。

「私が焼いたお菓子もね」

「ワッフルだしな」

「ケーキもあるけれどね」

「それでもケーキもいつも食べているしな」

「ええ。ただツリーがあるだけで」

本当にそれだけです。ツリーがある以外は何も変わりがありません。本当にそれ以外は何も変わりのない二人のクリスマスなのです。

「それ以外は何もね」

「ないな、本当にな」

「けれどそれでも落ち着いて過ごせるし」

「それもいいのかな」

「私はそう思うわ」

こんな話をしながら二人きりのクリスマスを過ごす二人でした。賑やかに過ごしているドイツやイタリアの面々とはそこが違うのでありました。

第千百五十五話　完

2010・1・6

第千百五十六話　この二人の仲は

第千百五十六話　この二人の仲は

オランダとベルギーは今一緒にいます。けれど国家としては別々です。それぞれ別の上司がいてその人達の下にいるのであります。その二人ですがかつてはスペインやオーストリアさんの下にいたことがあります。その時のオーストリアさん達はどうだったかといいますと。

「凄かったよな、結構」

「スペインもね」

二人はその時のことになるとあまりいい顔をしません。

「宗教を信じることについても口やかましかったし」

「他にも色々とね」

そうした意味ではイタリアと同じ境遇だったようです。

「少しでも反抗したらな」

「思いきり踏みつけられたし」

全く一緒です。イタリアと同じ様に二人もまたオーストリアさんに色々と厳しく教育されていたのです。そしてまずはオランダがなのでした。

「俺が独立してな」

「それから私もそうなったわよね」

「思えば長かったよ」

オランダはその昔のことを思い出しながら述べました。

「あの時の戦争はな」

「あんた苦労したもんね。私は色々あってあんたの家にいたりして今があるけれど」

「そうだったな。俺も御前も歴史があるよな」

「全くね」

そんな昔のことを思い出すこともある二人です。二人にも歴史が

あります。

第千百五十六話　完

2010・1・6

第千百五十七話　二人のところにも来て

第千百五十七話　二人のところにも来て

その二人のところに来た五人、けれど今回は勝手が違いました。

何故かといいますと。

「何かあまり会ってないよね」

ロシアがこうオランダとベルギーに対して言うのでした。

「そうだったよね」

「ああ、そうだよな」

「ロシアさんとは。フランスとはともかく」

ここで二人はフランスを見るのでした。あまりいい視線ではありません。

「呼ばれなくてもいる奴はいてもな」

「あまり嬉しくないし」

「ちっ、何だってんだよ」

名指しで言われたフランスはかなり不満そうな顔になります。

「折角プレゼントを持って来てやったのによ」

「それでプレゼントって何なんだ？」

「また変なのじゃないの？」

「何言ってるんだ、ちゃんとしたおもちゃだぞ」

クリスマスプレゼントとしてはかなり当たり前のものを持って来たというのです。

「それだからな」

「何か御前にしてはありきたりなんだな」

「いつも変なものばかり持って来るのに」

「だから俺を信頼しろ」

とはいってもあまり信頼するような様子のない二人です。お付き合いが長い分それだけ仲がよくないのでしょうか。どうもそんな感じです。

けれど五人のプレゼントは受け取りました。二人共わりかしちゃっかりしているようです。

第千百五十七話　　完

２０１０・１・７

第千百五十八話　平和なままで

第千百五十八話　平和なままで

五人からのおもちゃはそれぞれの国の子供達が遊んでいるものでした。オランダとベルギーは二人が去った後でそれを見て少し拍子抜けしました。

「何かって思ったがな」

「意外と平凡ね」

「そうだな」

こう二人で言い合うのでした。

「また何が出て来るかって思っていたら」

「これが結構ね。何かがっかりしたところもあるわ」

「がっかりか」

「だってこういうのって驚いて幾らじゃない」

だからだというベルギーでした。

「それでこれだけっていうのは。そうじゃないの？」

「言われてみればそうか」

オランダもそれで納得するところがあります。

「それもな」

「そうでしょ？とにかくね」

「ああ、今度は何だ？」

「このおもちゃで遊びましょう。どうせだから」

ベルギーは微笑んでオランダに対して提案してきました。

「それでいいわよね」

「そうだな。暇潰しにもいいしな」

「じゃああらためてメリークリスマスね」

微笑んで言い合う二人でした。二人のクリスマスは平和に終わったのでした。

第千百五十八話　完

2010・1・7

第千百五十九話　サマークリスマス

第千百五十九話　サマークリスマス

オーストラリアのお家にタイとベトナム、それに香港が来ています。オーストラリアはまず一人足りないのではないかと言いました。

「もう一人呼んでないでごわすか？」

「あれっ、そうですか？」

「ちゃんと四人いるわよ」

タイとベトナムは周りを見回して言います。いるのはこの四人だけです。

「日本さんのところに台湾さんと韓国君が行ってますし」

「太平洋の面々はとりあえずここにいるわよ」

「では皆いるでごわすな。わかったでごわす」

彼等もカナダのことは忘れているのです。彼が目立てる日、その存在に気付いてもらえる日は何時になるのでしょうか。

オーストラリアのクリスマスはです。何と夏です。三人はそのことにまず驚きです。

「雪は降らないのね」

「雪!?オーストラリアは今夏でごわすよ」

オーストラリアはこう香港の言葉に応えます。

「それでどうして雪が降るでごわすか？」

「つまりあれなのね」

香港は彼の言葉を受けて言いました。

「ここでは夏は寒くて冬が暑いのね」

「そういうことでごわす。おいどんの国では冬はいつもこうでごわすよ」

「へえ、何か凄いですね」

「私達の国はいつも暑いからね」

タイとベトナムのお家ではそうです。二人は雪を自分のお家では

見たことがありません。
「こういうクリスマスも」
「かなり驚くけれど」
こう言いながら夏のクリスマスに入るのでした。これまたかなり変わったクリスマスであります。

第千百五十九話　　完

２０１０・１・８

第千百六十話　サーフィンをして

第千百六十話　サーフィンをして

四人が今いる場所は砂浜です。水着にはなっていませんがそれでも砂浜にいます。そこでバーベキューをしながら一緒に過ごしているのです。

招かれた三人もそれぞれ自分達が作った料理を持って来ています。当然ケーキもありますが野外の食事を最初に楽しんでいます。

オーストラリアはビールを爽やかに飲みながら。明るい顔で言うのでした。

「これがうちのクリスマスでごわす」

「ううん、サーフィンを目の前に見るクリスマスっていうのも」

「凄いものね」

タイとベトナムはまだ驚いています。

「波を見ながらメリークリスマスというのも」

「私の国もクリスマスでも暑いけれど」

「そして羊のバーベキューでごわす」

オーストラリアも実際に今それを食べています。

「さあ、どんどん食べるでごわすよ」

「これはワインは合わないメニューですね」

「そうよね。やっぱりビールね」

「美味しいわよ、ビール」

タイとベトナムだけでなく香港も飲んでいます。四人で楽しみながら野外のクリスマスを楽しんでいるということなのであります。

「ビールでメリークリスマスというのもいいものですね」

「最初はびっくりしたけれど」

「クリスマスもそれぞれでごわす」

オーストラリアは一番笑って言います。確かに物凄く変わっているクリスマスでありますがそれでも楽しいクリスマスであることは

確かです。

第千百六十話　完

2010・1・8

第千百六十一話　夏に来たら

第千百六十一話　夏に来たら

ここにも五人が来ました。しかし。
「あっ、ベトナムいるんだ」
「ちょっと困ったあるな」
「全くだな、こりゃ」
アメリカに中国、それとフランスがベトナムがいるのを見て困った顔になりました。何故なら三人は過去ベトナムと戦争をして負けているからです。この三人とそれぞれ戦っていずれも勝利しているベトナム、奇麗な顔をしていてその強さは尋常なものではありません。
「まあいいか。ここは」
「何でもないふりをして」
「行くとするか」
こうした状況においての身の処し方はもうわきまえています。というか図太くいくだけですが。実際アメリカも中国も今ではエトナムのお家とそれぞれ仲良くやっていたりします。そうしたところもわきまえているベトナムなのです。
そうしてオーストラリア達四人の前に来るとです。いきなり爆竹がイギリスの足元で派手に鳴りました。彼はそれは誰がやったのかすぐにわかりました。
「こら香港！」
「お祝いにはやっぱり爆竹よ」
「それでも限度があるだろうが！」
こう言って彼を怒りますが聞いていません。そんなことを話しているうちにプレゼントの時間です。
「はい、じゃあこれね」
「テレビゲームでごわすな」

「それにソフトもですね」
「有り難う」
オーストラリアもタイもベトナムもこのプレゼントにはにっこりと笑います。今回のプレゼントも喜んでもらえた五人でした。

第千百六十一話　　完

２０１０・１・９

第千百六十二話　逆プレゼント

第千百六十二話　逆プレゼント

五人が来ているのは夏です。それもサンタの格好で、です。つまり。

「暑いね」

まずロシアが言いました。

「暑くて羨ましいけれど何かな。この服は合っていないのかな」

「というか思い切り場違いなんじゃないかしら」

ベトナムが彼に突っ込みを入れます。

「夏にサンタの格好なのは」

「そうですよ。ここではサンタさんも水着でサーフィンをしますしね」

タイも言ってきます。見ればロシアだけではなく五人共汗だくになっています。夏の日差しの中でサンタの格好というのはやはり問題です。

「ですからそれは」

「そうでごわす。そんなサンタさん達にでごわす」

オーストラリアはここで笑いながらあるものを出してきました。

それは。

アイスクリームでした。それもたっぷりとです。それ五人の前に出してきたのです。

「好きなだけ食べるでごわす」

「あっ、くれるの」

ロシアが五人を代表して明るい顔になりました。

「若しかして」

「勿論でごわす。まだプレゼントを贈る先はあるでごわすな」

「後は日本のところだけだな」

イギリスが答えました。

「まあ台湾や韓国とかもいるがな」
「じゃあこれを食って英気を養うでごわすよ。暑い時にはこれが一番でごわす」
　こう言って五人にアイスを御馳走するのでした。オーストラリアからの逆プレゼントは五人にとってはまさに福音でありました。

第千百六十二話　　完

２０１０・１・９

第千百六十三話　都合よく思い出した

第千百六十三話　都合よく思い出した

いよいよ最後の日本のところに行くことになりました。しかしどうもイギリスとフランスがかなり不満な顔をしています。

「あの馬鹿会長もいるからな」

「あいつにプレゼントって何だ？何でも起源にしそうだぞ」

こう言って行きたがりません。かなり嫌がっています。

アメリカや中国も内心あまり行きたくありそうではありません。何しろ韓国には二人共、特に中国は起源やら何やらと言われているからです。つくづく迷惑な会長です。

それで皆日本に行く前に一クッション置きたい思っていたりしました。するとです。

ふとロシアが言うのでした。

「セーシェルさんのところには行ってないんじゃないかな」

急に彼女のことを思い出したのです。

「皆のところには行ったけれど」

「ああ、そうだったな」

「あいつがいたな」

イギリスとフランスの顔が一気に晴れやかになりました。

「あいつがいたんだ、そうだ」

「そうだ、まずはあいつのところだ」

その晴れやかになった顔で言うのでした。

「ついでにエジプトも呼んでおくか」

「二人に渡せばいいな」

こう言ってすぐにセーシェルのお家に向かうのでした。本当にエジプトまで呼んで。他の三人も二人に引っ張られる形で向かうのでありました。

「あの馬鹿の顔を見る前にな」

「心の余裕を持っておきたいからな」
とにかく会長には痛い目に逢っている二人です。何処か守りに入っています。

第千百六十三話　　完

２０１０・１・１０

第千百六十四話　その頃エストニアは

第千百六十四話　その頃エストニアは

エストニアはバルト全体で楽しい一時を過ごした後でフィンランドと仲良く変なお祭クリスマスを楽しんでいました。最近の二人のアツアツぶりはかなり凄いです。

そんなフィンランドと楽しく過ごしながらです。彼はある人に電話を入れていました。

「はい、セーシェルさんのところに行けばですね」

微笑みながら携帯の向こう側の人に話し掛けています。

「エジプトさんもおられますから。三人で仲良くされて下さい。間違っても日本さんのところには行かないで下さいね。大変なことになりますから」

彼も日本の事情は知っていました。

「そういうことで。それでは」

こう電話をしたのでした。そうして切ると。

「あっ、エストニア君。今度はですね」

「はいフィンランドさん」

「ラトビア君も呼んで下さい」

こんなことを言ってきたのでした。

「それで三人でサウナに入りましょう」

「クリスマスサウナですね」

「はい、そうです」

それを彼に提案してきたのです。

「三人でどうでしょうか」

「そうですね。ではラトビアも呼んで」

そうして呼ばれたラトビアはとても楽しそうです。サウナの中でフィンランドとエストニアの横に入って楽しく笑っています。

「やっぱり皆と一緒が一番いいですよね」

彼もクリスマスは一人ではありませんでした。少なくとも寂しい思いはしなかった彼でした。そしてあの人もです。

第千百六十四話　　完

２０１０・１・１０

第千百六十五話　一人じゃなくなったので

第千百六十五話　一人じゃなくなったので

セーシェルのお家にエジプトとウクライナが来ています。どうにも今一つ以上に接点が見当たらない不思議な顔触れではあります。それでも三人共結構上機嫌です。

「一人でクリスマスってやっぱり寂しいですからね」

「そうなのよ。実際どうしようって思ってたのよ」

ウクライナは今にも泣きそうな顔でセーシェルに対して言います。泣きそうではありますがそれでいて笑ってもいる不思議な顔になっています。

「このままだとって」

「そうですよね。私誰かのお家に遊びに行こうって思ってたんですけれど」

この辺りは流石にセーシェルである。

「こうしてエジプトさんとウクライナさんが来てくれて何よりですよ」

「イギリスとフランスに来てくれと言われた」

珍しいことにエジプトが話しました。

「それでだ」

「私はエストニアちゃんにここに来たらいいよって言われたのよ」

「それでなんですか」

「そうなのよ。けれど実際に来てみて」

「どうですか？」

「とても楽しいわ」

今度は泣きは入らずににこりと笑っての言葉です。

「こうしてセーシェルちゃんのお家に来られてね」

「じゃあ南国のクリスマス、たっぷり楽しんで下さいね」

「うん、それじゃあ」

こうして三人で楽しいクリスマスとなりました。ウクライナにとってもセーシェルにとってもエジプトにとっても。とてもいいクリスマスになるのでした。

第千百六十五話　　完

２０１０・１・１１

第千百六十六話　ウクライナのクリスマス

第千百六十六話　ウクライナのクリスマス

三人で仲良くケーキや御馳走を食べながら。セーシェルがふとウクライナに対して尋ねてきました。

「そういえばウクライナさんはいつもクリスマスはどうされているんですか？」

「それがね」

ここでまた少し涙が目に出て来ます。

「いつも一人なのよ」

「いつもですか」

「昔は皆と一緒だったけれどね」

ソ連というとても大きなお家にいた時代です。今はもうありません。

「それでも今は一人なのよ」

「そうなんですか」

「日本さんなんかあれよね。自然と人が寄って来るわよね」

「少なくとも二人は確実に」

その二人が誰と誰なのかは言うまでもありません。これが日本にとって果たしていいことなのかどうかはまた別としてとにかくいつも二人が傍にいる日本です。

「いますよね」

「私そういう人いないから」

これがウクライナの現状です。

「だから羨ましいのよ。クリスマスもね」

「御一人ですか」

「慣れないの。それが」

ウクライナは寂しそうに言いました。

「こうして今みたいな楽しいクリスマスにね」
そんな寂しい思いをしている彼女でした。けれど今年は違うのでありますす。こうして三人一緒ですから。

第千百六十六話　　完

２０１０・１・１１

第千百六十七話　そこに五人サンタ

第千百六十七話　そこに五人サンタ

三人が南国のクリスマスを和気藹々と楽しく過ごしていますと。
そこに五人のサンタがやって来たのです。
「あれっ、ウクライナまでいるのかい」
「これは思いも寄らなかったあるな」
アメリカと中国は彼女の姿を認めて少し驚きの声をあげました。
「まあ別にいいけれどね」
「プレゼントはちゃんとあるから安心するよろし」
「っていうかさっきエストニアから連絡あっただろうがよ」
「話はちゃんと聞いてろよ」
イギリスとフランスが彼等に少し言います。
ここで問題はロシアです。ウクライナを前にして少し微妙な顔になっています。どう声をかけていいのか困っているのです。二人の事情のせいで。
「ええと」
「あの、ロシアちゃん」
それはウクライナもです。二人共向かい合ったまま困っていると です。ここでセーシェルとエジプトが出て来て二人に対して言うのでした。
「クリスマスじゃない。今日だけはね」
「楽しくやるといい」
こう二人に言ったのです。これで話は収まりました。
「そう。それだったら」
「私も。今日はね」
「はい、姉さん」
ロシアは穏やかな笑顔でそのプレゼントを差し出します。ウクライナもそれを受け取ってです。今日だけはわだかまりのない二人な

のでした。

第千百六十七話　完

2010・1・12

第千百六十八話　プレゼントでも幸せに

第千百六十八話　プレゼントでも幸せに

五人が三人に贈ったプレゼントは。

「あっ、コンサートへのチケット」

「いいもの貰った」

セーシェルとエジプトはそのチケットやブローチ等を見て微笑みました。五人は今回も趣向を凝らしたプレゼントを贈ったのです。

そしてロシアのウクライナへのプレゼントは。

「あっ、それ凄くいいですよね」

「ええ、そうね」

マトリョーシカです。ロシアのお家のおもちゃです。一つを空けるとまたなかにマトリョーシカがあってそれが延々と続く人形です。それがクリスマスプレゼントだったのです。

「まさかこれとは思わなかったわ」

「それにこれって」

セーシェルはそのマトリョーシカを見てさらに言います。

「手作りですよね」

「そうよね。ロシアちゃんがわざわざ」

「作ってくれたんですよ」

「ロシアちゃんって昔からそういうところもあるのよ」

ウクライナは微笑んでセーシェルに言いました。当然エジプトにもです。

「こうしてね。自分で作ったりするのよ」

「へえ、あんなに大きな手でなんですね」

「それでも案外器用なのよね。昔から」

そしてただ器用さだけを感じたのではありませんでした。他のものも感じ取って今日はとても幸せな気持ちになれたウクライナなのでした。

第千百六十八話　完

2010・1・12

第千百六十九話　遂に最後で

第千百六十九話　遂に最後で

セーシェルのところも無事に巡りました。さて、またしてもイギリスとフランスの顔色が悪くなっていきます。まるで病気にかかったみたいです。

「日本のところかよ」

「あいつもいるんだよな」

「今台湾さんから聞いたけれどいるって」

ロシアが何でもないといった調子で二人に対して言ってきます。

「どうするの？それで」

「行くしかねえだろ」

「ったくよお、家で大人しくしてろよ」

二人はうんざりとした顔で言っていきます。とにかく本当に嫌なのがわかります。

それでも行かなくてはいけません。それで最後になった日本のお家に向かうのでした。

「まあクリスマス色々な家回ってるしな」

「最後にそういうのもあるか」

ここで二人はこんなことも思うのでした。

「だからな。それじゃあな」

「いざ、日本に」

何とか自分自身を納得させて向かいます。

そんな二人に対してアメリカと中国はです。確かに韓国のことは知っていますが二人と比べるとかなりリラックスした調子です。

「さて、じゃあ行くか」

「最後ある。僕達も歓迎してもらうあるぞ」

気前のいい日本が何をしてくれるのか期待している様です。そんな悲喜こもごもの中で皆で向かうのでありました。その最後の目的

地にです。

第千百六十九話　完

2010・1・13

第千百七十話　その日本の家では

第千百七十話　その日本の家では

日本の家においては盛大なクリスマスパーティーが行われています。日本のお家の人達の他に脚本家さんやライダー達、そしてあの二人もいるのです。

「さあ、どんどん食ってやるんだぜ！」

韓国は他の人のお家でもいつもの調子です。底なしで飲み食いしています。

それに対して台湾は謙虚にパーティーの片隅にいようとします。けれどそんな彼女を皆が日本の隣に連れて行くのでありました。

「まあまあ、そんなところにおらへんで」

「ここに来るっぺ」

こう言って彼女を日本の隣に連れて行くとそこには韓国もいました。何だかんだと言ってもいつも日本の隣にいたがる彼なのでした。

こうして三人一緒になるとです。お決まりの展開になります。

「ちょっと、あんたはね」

「何なんだぜ？」

「もう少し静かにしなさい。それにどれだけ食べてるのよ」

「バイキングだからいいんだぜ」

このパーティーはバイキング形式で行われているのです。従って色々なものが食べ放題なのですが韓国はその中でも滅茶苦茶に食べているのです。彼は学園の中でもかなりの大食で知られています。

「けちけちするのは一番よくないんだぜ」

「あんたは遠慮ってものを知りなさい、大体昔からね」

こんな調子で喧嘩をはじめる二人です。本当に相変わらずです。

そしてその隣ではライダー達まで騒いでいます。脚本家さんも言わなくていいことを言っています。まさに日本のお家のパーティーなのでありました。

「サンタだけだな、後は」
その脚本家さんが言いました。さて、最後はどういったことになるのでしょうか。

第千百七十話　　完

２０１０・１・１３

第千百七十一話　食べてます

第千百七十一話　食べてます

日本は台湾と韓国に囲まれながらいつもの顔でいます。泰然自若といってもいい顔で立っています。

「あれ、何も召し上がられないんですか？」

「何でもかんでも美味しいでりゃーすよ」

会津と尾張が彼に声をかけます。

「この七面鳥でも」

「ういろうもきし麺もあるだぎゃ」

「たこ焼きもあるで」

大阪も出て来ます。何かクリスマスとは思えない料理もあります。

日本はそういった料理を聞いて静かに言いました。

「食べてますよ」

「本当だっぺ！？」

水戸はそれを聞いて思わず言い返してしまいました。

「見たところあまり食べてないっぺよ」

「いえ、これでもです」

日本が言うにはです。そして彼の前を見ると。

結構な量のお皿が積まれています。台湾は台湾で、韓国は韓国で。

それぞれうず高く積まれています。それを見ると確かにです。

「この通り」

「本当だっぺな」

「そうやな、これは」

水戸と大阪だけでなく皆それで納得します。日本も楽しんでいます。

「皆さんの心尽くし、頂いています」

そしてこうも言うのでした。何処までも謙虚な日本です。

第千百七十一話　完

2010・1・14

第千百七十二話　韓国の食事量

第千百七十二話　韓国の食事量

韓国も食べます。この人の食べる量は相当なものです。
優に三人分は食べています。しかもまだ食べています。
それを見た台湾はです。呆れた顔で彼に対して言うのでした。
「ちょっとあんたね」
「何なんだぜ？」
「少しは遠慮したら？」
こう彼に対して言います。
「ここ日本さんのお家なんだけど」
「招かれたらその好意に応える。だから食べてやってるんだぜ」
この傍若無人、まさに彼です。ただあまりにも堂々としていてしかも嫌味さがないので何故か憎めません。かなり得な性格ではあります。
「どれもこれも美味いんだぜ」
「そうなの？あんたどの料理にも唐辛子凄いかけてるじゃない」
実はそうして食べているのです。もうどの料理も真っ赤にしてです。
「それでそんなこと言えるの？」
「んっ？何かおかしいんだぜ？」
しかし当人はこう言って返すだけです。
「食べ物は何でも辛くないと駄目なんだぜ。お菓子はうんと甘くなんだぜ」
「あっきれた。あんたの食事っていつもそうなのね」
「辛いのは身体にいいんだぜ。エネルギーが出るんだぜ」
「それ以上エネルギー出してどうするのよ。全く」
台湾はそんな彼を知っていても呆れる次第です。とにかくどんどんその真っ赤にした料理を遠慮なく食べていく韓国です。彼にとっ

てはクリスマスも最高に幸せなものです。いつもそうですけれど。

第千百七十二話　　完

２０１０・１・１４

第千百七十三話　五人も来て

第千百七十三話　五人も来て

そんな賑やかなクリスマスですがそこに遂に五人も出て来ました。
まずはライダー達の熱い歓待を受けます。
「バデ！（翻訳：待て！）」
「ダリダ！（翻訳：誰だ！）」
「だからサンタだよ」
「アンドットじゃねえから安心しろ」
こうオンドゥルとダディに言って最初の応対を終えます。何はともあれこれからです。
「よお、来たぜ」
「何かここが一番賑やかだな」
イギリスとフランスが挨拶をします。
「それでだ。何だ？」
「何か一杯いるな。台湾と韓国だけじゃないんだな」
「私の家の皆さんも集まってくれましたので」
日本が彼等の言葉に説明します。
「それでなのです」
「そうか。それでか」
「こんなに多いのか」
二人もこれで納得しました。
「まあ数が多くてもな」
「もう構わないけれどな」
「構わないのですか」
「ああ、もう最後だ」
「だからだよ」
二人だけでなく五人全員が気さくに笑ってです。日本だけでなく皆に対して言います。五人の長い旅もここが終着点なのでした。

第千百七十三話　完

2010・1・15

第千百七十四話　皆への贈り物

「さあ皆！」
「何でも好きなものを取っていくあるよ！」
アメリカと中国は自分達の袋を逆さまにしてそこからプレゼントの箱をどんどん出していきます。まるでバケル君のお父さんの財布です。
「もう余ってるからね」
「数も問わないあるよ」
「何か凄いことになってるんだぜ」
「本当、こんなことになるとは思わなかったわ」
韓国も台湾もこの展開には驚いています。
「けれどよ、何かこれって」
「そうよね。凄い有り難いわ」
プレゼントを好きなだけ貰っていいからです。これには皆驚いています。そして実際皆色々なクリスマスプレゼントを手に入れています。
「一杯あり過ぎて」
「もう何が何だか」
「最後だからね」
ロシアが穏やかな笑みでその彼等に言います。
「残り物には、って言うしね」
「そうだな。それを考えたら俺達は運がいいな」
脚本家さんはプレゼントは受け取っていません。けれど満足した顔になっています。
「こんなことになるんだからな」
「そうですね。そういえば貴方は」
「何だ？」

「クリスマスに奇跡を起こされたことがありますね」
日本は脚本家さんにこんなことを言ってきました。この人は過去何をしたのでしょうか。

第千百七十四話　　完

２０１０・１・１５

第千百七十五話　人として

第千百七十五話　人として

脚本家さんは個性的な脚本を書くことで知られています。色々なことであまりにも有名になってしまっている人ですがそのキャラクターの結末を描くのがとても印象的なことで有名です。

その中である作品において。キャラクターがクリスマスの日に死んだのです。日本はそのお話のことを脚本家さんに対して話しました。

「あの時何故ワームとしてでなく人として死なせたのですか？」

「あれか」

「はい、爆発した後で爺やさんの傍で死にましたよね」

その作品もで屈指の名シーンです。

「あれはどうしてなんですか？」

「あいつが人間だったからだよ」

脚本家さんはこう答えるのでした。

「あいつがな。人間だからだったんだよ」

「人間だったからですか」

「姿形なんてどうでもいいんだよ」

「それはですか」

「ああ、人間ってのは心が人間だから人間なんだよ」

脚本家さんははっきりと言いました。

「だからあいつは人間として死なせたんだよ」

「そうだったのですね」

「そうさ。それにクリスマスだっただろ？」

その日のことも話します。

「それだったらな。奇跡があってもいいじゃねえか」

「成程」

脚本家さんはわかっている人でした。普段は傲慢ぶっていますが

実はわかっている人なのです。

第千百七十五話　　完

2010・1・16

第千百七十六話　このライダー達にしても

第千百七十六話　　このライダー達にしても

脚本家さんは今度は四人のライダー達を見ます。四人共仮面を着けている筈なのにそれでも物凄い勢いで食べています。どうして食べているのか謎です。

「この連中だってそうだろ」

「ムッコロさんですか」

「そうだよ。元はアンデットだっただろ？」

「はい」

仮面ライダームッコロは最初は人間ではありませんでした。けれど今は違います。オンドゥルにしても一時期人間ではなくアンデットになってしまっていました。

「それでも今はどうだ？アンデットか？」

「いえ、人間です」

日本はこのことはきっぱりと言うことができました。

「間違いなく人間です」

「そういうことだよ。元はアンデットでも心が人間ならな」

「人間ですね」

「姿形なんてどうでもいいんだよ」

脚本家さんはまたこのことを言います。

「大事なのは心なんだよ」

「それですか」

「心がな、人間を人間にするんだよ」

脚本家さんの考えです。この人の作品には常にこの意識があるのです。

「逆に言えばな」

「人間の姿形でも心が人間でなければですね」

「そういうことさ」

クリスマスにこんなことを言った脚本家さんでした。クリスマスはただ楽しむだけの日ではなくなっていました。

第千百七十六話　　完

２０１０・１・１６

第千百七十七話　五人にもプレゼント

第千百七十七話　五人にもプレゼント

サンタとして皆にプレゼントを配った五人ですが日本が彼等の前に来て。そっとリボンで飾って包装した箱を出してきたのでした。

「どうぞ」

「おい、これって」

「まさか」

「はい、プレゼントです」

微笑んでイギリスとフランスの問いに対して答えるのでした。

「どうぞです」

「けれどよ、俺達ってよ」

「サンタなんだけれどよ」

二人はこう言って戸惑いを見せます。

「サンタがプレゼントを貰うっていうのはな」

「ちょっとな」

「サンタがプレゼントを貰っていけないという決まりはありませんよ」

日本が言うにはそうなのです。確かにそうした決まりは何処にもありません。

「今日は御苦労様でした」

「そうか。それならな」

「悪いな」

五人は日本の言葉を受けてようやく受け取ることにしました。こうしてサンタさん達にもプレゼントが贈られることになったのです。

そのプレゼントはそれぞれにとって最高のものでした。日本はそうしたことも考えてプレゼントを贈ったのです。

「悪いな、ここまでしてもらってな」

「本当にな」

「御気になさらずに。プレゼントはそういうものですから」
こう言って御礼はいいという日本でした。五人にとっても最高のクリスマスになったのでした。

第千百七十七話　　完

２０１０・１・１７

第千百七十八話　雪の中での御馳走

第千百七十八話　雪の中での御馳走

お家の外は雪です。けれど中はとても暖かいです。皆はその暖かいお家の中で御馳走とワインに囲まれて楽しくやっているのでした。

「いやあ、日本のお家の食べ物ってな」

「何でも美味しいあるな」

アメリカも中国もその御馳走に満足しています。

「とても。美味しいぞ」

「味付けが豪快でそれでいて繊細あるな」

「この方が主に作ってくれました」

日本はここで手で脚本家さんを指し示したのです。

「他の方は私も含めてお手伝いさんでした」

「へえ、そうだったんだ」

ロシアはわざわざ出してもらったウォッカを飲みながら話を聞いています。

「この人が」

「違うよ、それはよ」

けれど脚本家さんはそれを否定するのでした。そしてこんなことを言います。

「賄いさんが作ってるんだよ、全部な」

「こんなことを言うのですけれどね」

「俺も見たんだぜ。全部この人が作ってたんだぜ」

台湾と韓国も証言します。

「日本さんにはいつも働いているから休んでいろって仰って」

「それでだったんだぜ。料理の腕も凄いんだぜ」

「脚本だけではない方なのです」

そんな脚本家さんの御馳走を食べて五人のサンタの長い長いお仕事は終わりました。最高のクリスマスが今ゆっくりと幕を下ろしま

す。

第千百七十八話　完

2010・1・17

第千百七十九話　けれど一人だけ

第千百七十九話　けれど一人だけ

皆それぞれ楽しいクリスマスを過ごせました。しかしです。

一人だけそうではありませんでした。カナダはです。

「ええと、サンタさんは？」

「来なかったな」

クマ二郎さんがカナダに対して言います。

「誰も」

「ええと、クリスマスだったよね確か」

カナダもそのことを確かめずにはいられませんでした。

「今日って」

「そうだったがそれがどうかしたのか？」

「何でサンタさん来なかったのかな」

このことが不思議で仕方ないのです。何しろクリスマスといえばサンタですから。カナダが言うことも一理あるといいますか当然であります。

「どうしてなの？」

「忘れられたんじゃないのか？」

クマ二郎さんは言いにくいことをはっきりと言いました。

「これは」

「いや、それって」

カナダも薄々わかっていることだったので言われてかなりショックです。

「酷いじゃないか。僕だけ忘れるなんて」

「けれど誰も来ない」

これが現実です。カナダのお家には誰も来ませんでした。彼とクマ二郎さんだけでクリスマスを送ったのでした。非常に寂しいものだったのは言うまでもありません。

第千百七十九話　完

2010・1・18

第千百八十話　サンタの方でも

クリスマスの終わりに日本のお家で楽しく過ごす五人のサンタ達。
その中の一人中国がふと気付いたかの様に言い出してきました。
「誰か忘れていないあるか？」
「誰かって誰をだい？」
「何か一人残っていた気がするある」
こうアメリカに対して答えます。
「一人だけあるが」
「気のせいじゃないのか？」
アメリカは笑ってこう返します。
「それは君の気のせいだよ」
「そうあるか」
「そうだよな。名簿を見てもな」
「もう全員に配ったぜ」
イギリスとフランスも言います。見れば名簿は全部チェック済みです。ちゃんとそうしたものまで用意しているのでした。
「だからよ。もう誰もいないからな」
「気にしなくていいだろ」
ここまで言うとパーティーに気持ちを戻すのでした。そうしてです。
皆でクリスマスを楽しみます。けれどここで日本がふと言いました。
「カナダさんはどうなったのでしょうか」
「あれっ？そういえばいたかな」
ロシアも彼のことは忘れていました。
「もう回ったと思うよ」
「そうですか。だといいのですが」

これで本当に終わりでした。結局カナダのことは忘れられたままクリスマスは終わりました。

第千百八十話　　完

２０１０・１・１８

第千百八十一話　オーストリアさんの昔の上司

第千百八十一話　オーストリアさんの昔の上司

オーストリアさんは貴族の御曹司です。その気品はまさに欧州随一です。音楽性とこのことにかけてはまず誰も勝てはしないでしょう。

そんなオーストリアさんのライバルはフランスでした。とにかくフランスがしょっちゅうオーストリアさんに絡んできたのです。その仲はどういったものかというと。

「イギリスに対するのとどっちが悪かったのかな」

「どちらとも言えないまでだったぜ」

プロイセンがイタリアに対して答えます。二人をよく知っているこの人がです。

「何かっていうと喧嘩していたからな」

「それは何だったかな」

「そりゃあれだよ。上司同士の仲が悪かったんだよ」

それが理由だったのです。

「欧州のあちこちで張り合っていたしな。だからなんだよ」

「それで俺の取り合いもしてたんだ」

「そうさ。その仲の悪さってきたらな」

こうイタリアに話し続けます。

「俺から見ても相当だったからな」

「そうだったんだ、上司同士が」

イタリアはそれを聞いてまずは納得しました。

「それでオーストリアとフランス兄ちゃんは仲が悪かったんだ」

「今は流石に上司がお互い違いからそういうことはないけれどな」

「そうだね」

「昔は凄かったんだよ、あの二人の仲は」

そういうわけで仲が悪かった二人でした。そのオーストリアさん

の上司とはどういう人だったのでしょうか。

第千百八十一話　　完

2010・1・19

第千百八十二話　最初の出会いは

第千百八十二話　最初の出会いは

オーストリアさんが生まれたのはかつては神聖ローマの端っこの場所でした。東に行けば敵しかいない、そうした場所に生まれました。

この人は敵と戦う為に生まれたのです。けれど力はあまりありませんでした。

そのオーストリアさんのところに。ある日スイスが来て言うのでした。

「おい、御前の上司だ」

「上司ですか」

「そうだ。我輩の上司と同じ人になったぞ」

まだ幼い二人がこう話をしていました。

「というよりは我輩の上司がそのまま御前の上司になる」

「つまり私と貴方は」

「そうだ。同じ上司を持って一緒にやっていくことになった」

そうだというのです。

「御前とは生まれた頃から付き合いだが」

「はい」

「今度は同じ上司の下でやっていこう。いいな」

「わかりました。それでは」

「御前と組むとは少し意外だが」

こんなことも言います。

「これも何かの縁だ。しっかりと神聖ローマを守っていこう」

「ええ、そうですね」

こうしてオーストリアさんは高い鼻を持っているその人を上司に迎えたのでした。この人は何と神聖ローマの上司にもなってしまいました。

これが出会いでした。そうしてオーストリアさんと上司の関係は切っても切れないものになっていくのでした。

第千百八十二話　　完

２０１０・１・１９

第千百八十三話　オーストリアさんだけでなく

第千百八十三話　　オーストリアさんだけでなく

オーストリアさんの上司のお家はそれは物凄い家でした。何しろ上司を務めていたのはオーストリアさんだけではなかったです。

「あの頃は結構懐かしいで。物凄い上司もおったけれどな」

「スペインさんのところはそうでしたよね」

まず出て来たのはスペインとハンガリーです。特にこの二人が有名です。

「それでもフェリペ二世みたいな人もいてくれたしな」

「私は色々あってオーストリアさんと一緒にいられるようになってかえってよかったですよ」

ハンガリーにとってはその方がよかったみたいです。何しろ今もオーストリアさんと一緒にいることが多い位お付き合いが深いものになっているからです。

「俺達やだけやあらへんしな」

「そうですよね。イタちゃん達も」

イタリアの二人もそこに入るのです。この人達もオーストリアさんのお家にいたのです。

「あの時は何だかんだでね」

「楽しい時も多かったな」

「御前は全然遠慮せんかったな」

スペインが昔のことを思い出して呆れた顔でロマーノに対して言います。

「ホンマ苦労したぜ」

「別に来たくて来た訳じゃない」

「それでも手がかかったで。昔のことやけれどな」

「昔のイタちゃんって凄く可愛かったんですよ」

ハンガリーはにこにことして昔のイタリアの話をします。

「本当に」

オーストリアさんの上司のお家のことは皆の中ではいい思い出になっています。そんなお家なのです。

第千百八十三話　　完

２０１０・１・２０

第千百八十四話　日本の上司のお家は

第千百八十四話　　日本の上司のお家は

「僕の家にはエンペラーはいないからね」

「僕の家ではいなくなったある。だからあそこだけあるな」

あのアメリカと中国がこう言っていささか残念ながらも認めるしかないのが日本の上司です。その人のことはもう誰もが知っている物凄いお家です。

それこそオーストリアさんのお家の上司だった人達すら遥かに凌いでいます。名門ということで知られているタイの上司のお家もこの人達には一歩引いてくれる程です。

「日本さんのお家の伝統そのものですからね」

タイはにこりと笑ってそのことを認めてくれます。このお家の下に日本と他の日本の人達もいます。昔は台湾と韓国も一緒にいました。

台湾もその時のことは懐かしさと一緒に覚えています。

「とても聡明な方でしたね」

台湾がとりわけよく覚えているのは前の上司の上司の人です。今では日本のお家においても伝説とさえなっている素晴らしい方です。

「ああした方がおられて日本さんは幸せですね」

こうまで言ってくれます。しかしこの人だけは違います。

「エンペラーなんかじゃないんだぜ。キングなんだぜ」

何故か素直に認めようとしません。

「俺は日本の兄貴なんだぜ。兄貴が弟より風下に立つことはないんだぜ」

「だからそれ自体がおかしいじゃない」

台湾がいつもの様に呆れた顔で韓国に突っ込みを入れます。

「あんたが何で日本さんより年上なのよ」

「俺は一万歳なんだぜ。だからそれは当たり前なんだぜ」

「そんな筈ないから」
何故かこんなことを言う韓国です。この人だけは日本の上司の上司の人を素直に認めようとしないのでした。

第千百八十四話　　完

２０１０・１・２０

第千百八十五話　結婚が得意でした

第千百八十五話　結婚が得意でした

オーストリアさんのお家の上司だった人達はかなり有名人が多いです。それはもうイギリスやフランスと比べてもかなりのものです。

「まあ向こうは物凄い名門だからな」

「俺の家と張り合うな」

「御前の家は二回程家が替わってるだろうがよ」

イギリスが突っ込みを入れます。フランスのお家の上司も名門でかなり長い歴史を誇っていますがカペー、ヴァロア、ブルボンとその都度直系が絶えて傍流になっているのです。その家のままであるとも言えますが一応違う家ということになっているのです。

「それでも御前の家も確かに名の知れた人は多いな、俺の家程じゃねえけれどな」

「馬鹿言えよ、御前の家より多いよ」

「何っ、もう一度言ってみろよ」

「ああ、何度でも言ってやるよ」

例によって喧嘩をはじめる二人です。そんな二人を見てオーストリアさんが言います。

「思えばイギリスやフランスとも長い付き合いですね」

「そうですよね。どちらも上司の人達が結婚したことがありましたし」

「懐かしいことですね」

オーストリアさんは隣にいるハンガリーの言葉に応えて微笑みます。

「それも」

「そのおかげであそこまでなりましたしね」

「はい、幸いなるハプスブルグ」

オーストリアさんは微笑んだまま話します。

「汝は結婚せよ」
その結婚によって凄い家になったのです。ただ戦争をしたりするだけがいいというのではないのです。

第千百八十五話　完

２０１０・１・２１

第千百八十六話　その婚姻関係は

第千百八十六話　その婚姻関係は

オーストリアさんは婚姻政策により大きくなった上司を持っていました。けれどその関係はというとです。日本が見ても首を傾げさせてしまうものでした。

「何か近親婚が多くないですか？特にスペインさんのお家の上司だった方々と」

「はい、実はそうだったのです」

オーストリアさん自身もそのことを認めます。

「ですがそれは貴方のお家の方も昔はそうでしたね」

「それはその通りですが」

日本の上司の上司の方々も昔は叔父と姪やそういった間柄で結婚されることが多かったのです。とはいってもかなりの大昔のことでありますが。

「エジプトさんのお家もご兄妹等で結婚されていましたね」

「そうでしたね。ただ私の場合はです」

「何か複雑なことになっていますね」

家系図を見ればそうなっているとしか言えないものです。流石に系譜が四角になっているとかそういうことはないにしてもです。

「これでは何か問題が起こったりしませんか？」

「実際にスペインの上司の方々で問題が起こりました」

本当にそうなっていたというのです。

「おかしな上司の方が出られたこともありました」

「確かファナという方の血の影響だったとか？」

「その説もあります。実際スペインはその上司の方々のおかげでかなり苦労もしました」

「そうですか、やはり」

日本はそれを聞いて納得しました。結婚もいいですが時として恐

ろしいことになってしまうのは実際にあることのようであります。

第千百八十六話　　完

２０１０・１・２１

第千百八十七話　一番有名な人は

第千百八十七話　一番有名な人は

オーストリアさんのかつての上司の人のお家はとにかく歴史的に有名な人が多いです。その中で一番有名な人は誰かといいますと。

そのことをイタリアが何となく聞いてきました。

「オーストリアさんの上司の人で一番有名な人って誰なのかな？」

「正直即答に困りますね」

オーストリアさんはまずはこう言葉を置きました。

「何分有名な人が多いので」

「そんなに多いんだ」

「ルドルフ大帝もそうですしマクシミリアン一世にカルロス五世、フランツ＝ヨーゼフ帝もよく覚えています」

本当に結構多いです。こうしたところにもう歴史が出ています。

「ですが一番といいますと」

「誰なの？それで」

「やはりあの方ですね」

こうイタリアに対して言ってきました。

「マリア＝テレジアです」

「あの女の人？」

「ハプスブルク家には珍しい女性の当主であられましたが」

御主人が名目上の主でしたが実験は完全に握っていたのです。

「それでも。よく覚えていますよ」

「そうだね。やっぱりあの人だよね」

「はい、思えば懐かしいですね」

オーストリアさんはウィンナーコーヒーを片手に微笑んで言います。その時のお話が今からはじまろうとしているのでした。オーストリアさんとマリア＝テレジアのお話が。

第千百八十七話　　完

2010・1・22

第千百八十八話　日本の頑張り

第千百八十八話　日本の頑張り

日本の上司の上司の方のお家はそもそも何時から存在していたのかすらはっきりしません。途方もなく長い歴史を持つお家なのです。

「何か俺が生まれる前からあったんだよな」

「はい、それは間違いなく」

こうイギリスに対して話す日本でした。

「私が気付いたらもうおられました」

「そもそも日本も一体幾つなんだ？」

「さて、最近わからなくなってきました」

日本にしろ相当長生きしています。この辺りは本当に長いです。

「そうですね。昔はあの方々のお墓も作っていましたし」

「これか？今目の前にあるでかいのか？」

二人は丁度仁徳帝の御陵の前にいます。無茶苦茶大きいです。

「こんなのを大昔に作ったのかよ」

「かなり苦労しましたが」

「そういえば奈良の大仏もよ」

「あれも苦労しました」

「苦労でできるレベルじゃねえぞ」

最早その域を超えています。それだけ大きいです。

「ったくよ、よくこんなものを昔に作れたものだ」

「頑張ったのでしょうか、私は」

「頑張ってるよ。っていうか頑張り過ぎだよ」

こう言って日本を褒めます。あまり褒めていないように聞こえますがそれでも褒めています。とにかく日本は昔から日本なのでした。

第千百八十八話　完

2010・1・22

第千百八十九話　即位してから　☆

第千百八十九話　即位してから　☆

オーストリアさんのお家で最も有名な上司であったマリア＝テレジア。その美貌の女帝が即位した時オーストリア中で祝福しました。

「オーストリア大公万歳！」

「女帝陛下万歳！」

まさに国を挙げての祝福です。金髪碧眼で透き通る様な肌、まるで絵から出た様に整った美貌、白いドレスに身を包んだ女帝はとても美しい人です。

その女帝がオーストリアさんのところに来てです。笑顔で言うのでした。

「今日から私が上司ですよ」

「おめでとうございます」

オーストリアさん自身も美貌の女帝陛下に恭しく一礼します。この人にとってははじめての女性の上司でもあります。それでいつもより緊張してもいます。

そのオーストリアさんのところにです。お手紙が来ました。女帝はそれを見て言うのでした。

「あら、遅い祝福でしょうか」

「どうやらプロイセンからですね」

「プロイセンからですか」

そのお手紙を読んでみるとです。何と宣戦布告でした。

『どうもこんにちは、最近めきめきと力をつけて今や貴方達より強いプロイセンです。この度は女帝陛下の即位おめでとうございます。ですが俺は認めません。認めて欲しかったらオーストリアのシュレージェンを頂きたく存じます。応じない場合は攻める準備をしています』

こう書いてあります。これが全てのはじまりでした。

ここから欧州を巻き込んで大喧嘩になりました。それこそイギリスもフランスも出て来てロシアまで参戦してです。何かもう誰がどっちについているのか一見してわからないようになる位めまぐるしく対立構図が変わったりしてです。そんな馬鹿げた騒ぎになっていくのでした。

第千百八十九話　　完

２０１０・１・２３

第千百九十話　日本の方の女の人

第千百九十話　日本の方の女の人

日本でも女性の上司の上司の人はいました。というよりは最初がそもそもそうだったと言われています。

「確かあれだよな」

「はい、天照大神です」

この神様のことをイギリスに話します。

「その神様が私の上司の上司の方の祖先とされています」

「神話から続く家ってまだあったんだな」

これはイギリスにとっては驚くべきことです。

「そういうのって凄いな」

「韓国さんは一万歳で檀君の末裔だと仰ってますが」

「あいつのことは言うな」

毎回毎回生徒会長には苦しめられていますのでそれには反論します。

「それはな」

「左様ですか」

「そうだよ。言うな」

そのことを日本にも言います。

「まあとにかく神話の時代からか」

「そういうことになっています」

「やっぱり凄いよな」

イギリスはあらためてまた言いました。

「その頃からの家なんてな」

「今でも儀式に様々な伝統が残っていますから」

そうしたことも残っているのです。本当に日本の上司の上司のお家は歴史が深いです。その深さに勝る家は他にはありません。

第千百九十話　完

2010・1・23

第千百九十一話　プロイセンの言い掛かり

オーストリアさんに対して喧嘩を売ったプロイセンですがその時のことを今ドイツに尋ねられています。

「あの時は何でそうしたんだ？」

「そりゃ俺が強くなる為だよ」

プロイセンは笑ってドイツに対して説明します。

「当たり前だろ？それはよ」

「御前が強くなる為にか」

「そうだよ。強くなる為に手段は選んでいられないだろ」

彼は笑いながら話します。

「だからなんだよ」

「それはどうかと思うがな」

「国と国の関係だからそれでいいんだよ」

かなりマキャベリストな発言です。

「強くなる為にはな」

「それであいつの上司が女の人だからと理由をつけたんだな」

「ああ。しかしな」

「しかし。何だ？」

「女の上司ってそんなにいいものなのか？」

このことには怪訝な調子で尋ねるプロイセンでした。

「俺は女の人を上司に持ったことはないから知らないんだがな」

「それは俺にもわからん」

ドイツもこう答えるしかありませんでした。実は彼も女の人の上司は持ったことがないのです。そうした意味で二人共とても男性的です。

この話になるとプロイセンもドイツも黙ってしまいました。やっ

ぱり実感のできないことなのです。

第千百九十一話　　完

２０１０・１・２４

第千百九十二話　女性の上司とは

第千百九十二話　女性の上司とは

ドイツもプロイセンも女の人の上司を持ったことがありません。しかし他の国の中にはそうではない人も結構いたりします。一番有名なのはやっぱりイギリスです。

「俺は女の人の上司は大好きだぜ」

「そういえば御前は女の人が上司になるとだな」

「ああ、それだけで身体の調子がよくなるんだよ」

明るい笑顔でドイツに対して答えます。

「何かもうそれだけでな」

「それがどうしてかはわからないが」

「ジンクスだよ。とにかく女の人の上司もいいものだぞ」

「そういうものか」

それを言われてもやはり実感できないドイツです。

「そんなにか」

「オランダだって女の人の上司だろ？」

実は彼もそうだったりします。女の人が一番偉い上司なのです。

「日本だって何人も女の人の偉い人がいるぞ」

「あいつもだったのか」

「女の人でもいいものなんだよ」

イギリスはとにかくこう主張します。

「今だってな」

「御前の今の上司も女の人だったな」

「ああ、色々あったが生きてるしな」

本当に第二次世界大戦後のイギリスは色々ありました。それでも生きていられるのもそのせいだというのです。女の人が上司だからだというのです。

「だからいいものだぞ」

とにかく彼にとってはそうなのでした。女の人の上司もいいそうです。

第千百九十二話　　完

２０１０・１・２４

第千百九十三話　音楽の方が　☆

第千百九十三話　音楽の方が　☆

プロイセンがオーストリアさんに攻め込んできました。当然ながらオーストリアさんはそれに対してすぐに軍議を開きました。ここまでは自然な流れでした。

「私のシュレージェンがプロイセンによって占領されました！」

オ＾ストリアさんは高らかに言います。

「兵を集め直ちに取り返しに行きますよ！」

「そうです。ではすぐに兵を」

女帝もそれで賛成です。しかしその他の大臣の人達が心配そうな顔で言ってきました。

「質問です」

「何ですか？」

「やはり私達も戦うことに？三月には音楽祭が」

まずはここからです。

「聖歌隊のいない生活は発狂してしまいます」

「ピアノがないと生きていけません」

「そうだ、ハイドンを連れて行こう」

「オーケストラを連れて行けないなら参加しません！」

皆口々に言います。こうしたところは流石オーストリアさんの人達です。そしてオーストリアさん自身も皆の言葉を聞いて頷いて言うのでした。

「そうですね。それでは止めましょう」

「確かにそうですけれど」

女帝も音楽が大好きです。けれど流石に少し怒って言います。

「駄目です！」

流石にそれは止められてしまいました。かくしてオーストリアさんも出陣することになりました。果たして戦争はどうなるのでしょ

うか。

第千百九十三話　完

2010・1・25

第千百九十四話　参戦国は

第千百九十四話　参戦国は

プロイセンは彼だけで戦争をしているわけではありませんでした。まず重要なポイントはオーストリアさんと戦争をするのです。となればこの人が出て来ます。

「俺の登場だな」

「おう、宜しく頼むぜ」

「任せとけって」

フランスが出て来ました。そして上司のお家が同じになったスペインも出て来ました。

「それで俺もなんやな」

「御前にも期待してるからよ。これで三人だな」

そうしてです。オーストリアさんの方にはです。

「フランスとは相変わらず揉めてるからな」

「そういうことで御願いします」

まずはオランダが来ました。そしてフランスが出て来ると聞いてこの人が動かない筈がありませんでした。それが誰かといいますと。

「よし、フランスの相手は任せろ！」

イギリスです。この人も来ました。

「いつも通りでいいな」

「はい、それでは」

オーストリアさんもイギリスもこの時からフランスとかなり仲が悪かったのです。というよりかはフランスがいらんことをするからです。それでいつもこの二国と戦争をしていたのです。

かくして参戦国は決まりました。けれどそれだけで済みそうにもありませんでした。

「イギリスの動きが怪しいですから」

女帝はすぐにそのことを察しました。そうしてある国に向かうの

でした。果たしてその国とは何処なのか。まさに欧州全体を巻き込む戦いになってきていました。

第千百九十四話　　完

２０１０・１・２５

第千百九十五話　いよいよ開戦　☆

第千百九十五話　いよいよ開戦　☆

オーストリアさんが出陣するとです。すぐにプロイセン達に報告があがりました。

「来ました！オーストリアです。イギリスも一緒です！」

「ああ、分かった」

プロイセンが報告に応えます。既に銃を手にしています。同じく銃を手にしたフランス、斧を持っているスペインも一緒です。ただプロイセンは自信満々の顔ですがフランスとスペインは少し戸惑った顔をしています。何か少し怖がっているように見えないわけでもありません。

「あの女帝はあくまで戦うつもりか」

「おいおい、逃げないのかよ」

フランスはそのことに少し驚いているようでした。

「外交的には圧倒的に劣勢だってのによ」

「俺という強国の初舞台にオーストリアが前座で出てくれるわけだな」

プロイセンはこう言って自信満々のままです。何故かというとです。

オーストリアさんの軍勢を見てです。彼は今から勝ったみたいに笑っています。

「貧弱な装備と寄せ集めの兵とはオーストリアも堕したものだな」

そのイギリスと一緒のオーストリアさんを見て笑っています。

「御前は長い間油断し過ぎた。だが俺はその間に兵を育て力を蓄えてきた」

つまり富国強兵に務めてきたのです。

「今からあの坊ちゃんの命乞いを聞くのが楽しみだな」

高らかに言っています。

「よし、いよいよ開戦だ！」
「なら俺もだ」
「俺もや」
何故かフランスとスペインは頼りなさそうです。けれどこれで戦いがはじまったのでした。

第千百九十五話　　完

２０１０・１・２６

第千百九十六話　寄せ集めでも貧弱でも

第千百九十六話　寄せ集めでも貧弱でも

オーストリアさんの兵隊も装備も継承戦争の時は確かにいいものではありませんでした。しかしそれだけで戦争が決まるかというとそうではなかったりします。

ベトナムはです。碌に軍事の専門教育を受けていない兵達と殆ど裸足の装備で、です。自分の国の独立を勝ち取ったことがあります。その時の強さたるやです。まさに鬼神だったと言われています。同じアジアンガールズの台湾がです。その時のことを話します。

「本当に凄かったんですよ。誰が来てもどれだけダメージを受けても倒れなくて」

「碌に装備もなかったのにか？」

「はい、勝ち抜きました」

こうドイツに対して話しています。

「いざとなれば素手でジャングルから出て来てです」

「まるで野獣だな」

「かなり頭のいい野獣でしたよ」

何と野獣であるという部分は否定されませんでした。

「そう言いますと」

「それだけ強かったのか」

「とんでもなく。本当にアメリカさんや中国も倒されましたし」

「あの二人もか」

学園でも強豪の二人ですらだったのです。

「オーストラリアや韓国も。あと確かフランスさんも」

「無茶苦茶強いな、それはまた」

ドイツも驚いています。

「そこまで強いのか、何もなくても」

「はい、とにかく」

こういう人もいます。戦争は兵隊や装備だけで戦うものでもありません。

第千百九十六話　　完

２０１０・１・２６

第千百九十七話　素晴らしき粗食　☆

第千百九十七話　素晴らしき粗食　☆

とにかくフランスをやっつけたい一心でオーストリアさんに協力することになったイギリス、この頃は何かというとオーストリアさんと仲良くしていました。常にフランスと喧嘩していたからです。二人共この頃から人間関係に極めて深刻な問題を抱えていました。

そのイギリスがです。誇らしげにオーストリアさんに対して話していました。

「それは俺はあのエスカルゴ野郎に果敢にも立ち向かったんだよ」

こう如何にも自慢げに話しています。

「そうしたらあいつびびってな。それでな」

「それは凄いですね」

オーストリアさんの返答にはあまり感情が見られません。どうやらよく聞いているお話のようなのでもうかなり聞き流している感じです。

けれどイギリスはそのことに気付かずです。さらに言います。

「そうだろ、あいつなんか目じゃねえんだぞ」

「ああ、そうです」

ここでオーストリアさんはさりげなくお弁当の中からおかずを一つ出してイギリスに渡してそれから言います。

「これ食べますか？」

「あ、ああ。有り難うな」

そしてそえを食べてみるとです。イギリスは感激して言います。

「美味いな！御前何これ、戦場でもこんな贅沢なもの作ってるのか？作ったの一流シェフなのか？」

「私です」

それは外れでした。オーストリアさんはこうそのイギリスに対して答えました。

「我が国では粗食ですよ」
「そうか、これが御前のところでは粗食なんだな」
「貴方の食生活が本気で心配です」
がっくりと肩を落とすイギリス、こんなところでもその料理のまずさが出てしまいました。

第千百九十七話　　完

２０１０・１・２７

第千百九十八話　この人達からも

第千百九十八話　　この人達からも

「まずいのです！イギリスの野郎もっと勉強するのです！」

シーランドがイギリスの食べ物にいきなり駄目出しでした。

「よくこんなもの出せたのです。これでは小学生の家庭科の授業の方がずっとましなのですよ」

「俺の料理はそのレベル以下だってのかよ」

流石にここまで言われてはイギリスも黙っていられませんでした。

「大体御前はそもそも俺のところの人間じゃねえかよ」

「シー君はもう独立したのですよ」

「してねえ。何時の間にそうなったんだ」

この辺りの関係はかなりややこしいです。しかしイギリスもここまで面と向かって言われてはその目を白くさせて黒いオーラを放ちざるを得ませんでした。

とにかくイギリスの料理はまずいと凄く評判になっています。おかげであの生徒会長を夕食に招いてもです。彼は唐辛子やコチュジャンをこれでもかと入れてからでないと食べません。

しかもそうして元の味を完全になくして食べながらです。こう言うのでした。

「こんなまずい料理食っていたら味が馬鹿になるんだぜ」

「手前はそれだけ辛いもの食っててそう言えるのかよ」

イギリスの料理は彼にも駄目出しでした。

「ったくよ、俺の味がわかる奴はいねえのかよ」

「オラァクサムヲムッコロス！（翻訳：俺は貴様をぶっ殺す！）」

仮面ライダームッコロのイギリスの料理の感想はこれでした。挙句にはワイルドムッコロになって大暴れしようとさえしています。本気でまずかったようです。

とにかく何か変わり種三人にも完璧なまでに駄目出しされたイギ

リスでした。それで流石にフランスに相談するのでした。
「何とかならねえか？俺の料理」
「なるわけねえだろうが。手前一体何百年料理作ってんだ？」
それでも一向に上手くならないというのもです。物凄い才能ではあります。

第千百九十八話　　完

２０１０・１・２７

第千百九十九話　友達は選びなさい　☆

第千百九十九話　友達は選びなさい　☆

オーストリアさんはプロイセン、フランスを相手にしていました。
そうしている間に第三の敵スペインがイタリアに攻め込みました。
そうしてイタリアを捕虜にされてしまいまして急遽イタリア半島に向かうことになりました。
「貴方と戦うことになるとは。さて、イタリアを返してもらいましょうか」
お互いに軍を率いて対峙しながらスペインに対して告げます。
「あと友人は選びなさいと言ったでしょう」
「いやあ、上司の家がな」
しかしここでスペインは言うのでした。
「フランスと同じ家やから俺今フランスに頭上がらへんねん。そやからフランスの味方や」
「全く。貴方の上司はいつもいつも」
「んな訳でオーストリアには悪いんやけれどイタちゃん俺にくれへんか？」
「まああの方はかなりあれな方ですから」
こう言われるフランスもフランスで凄いです。
「貴方も苦労させられているんですね」
「そんでイタちゃんとうちのロマーノずっと離れ離れやったやろ？」
「そうでしたね。それは確かに」
「そやから俺の家で兄弟仲良く暮らすのもええかな、って思ってな」
ここでスペインは本気になりました。その手に持っている斧を前にやってきます。オーストリアさんもその手に持っている剣を出してきました。
「一騎打ちですか。原始的な貴方らしいですが」
「おう乗ってくれるか？やっぱその辺りは御前らしいな」

「何か大変なことになったけれど」
スペインの捕虜になっているイタリアはおろおろするばかりです。縛られていてもです。イタリアにおいて両国の戦いがはじまろうとしています。

第千百九十九話　　完

２０１０・１・２８

第千二百話　友達はそれぞれ

第千二百話　友達はそれぞれ

リトアニアはいつもポーランドと一緒にいます。二人の絆の深さについてはもう言うまでもありません。誰もが認めるパートナー同士です。

エストニアも最近ではフィンランドという新しく、かつ頼りになるパートナーができました。二人の関係もかなり良好なものになっています。

こうしてバルト三国のうちの二国はお友達と仲良くやっています。けれどラトビアは。

「誰かいませんか？」

その小さな身体で一人言っています。

「誰か。僕のお友達になってくれる人いませんか？」

「私と誰かお友達になって下さい」

そしてウクライナもです。この人もお友達になってくれる人を探しています。

「ドイツさんとイタリア君みたいな関係になってくれる国ありませんか？」

「日本さんみたいに皆に囲まれているふうになりたいんですけれど」

二人共涙目で皆に言っています。

「ですからどうか」

「お友達になって下さい」

こう言いますが誰も手を挙げてはくれません。そのドイツとイタリアは二人仲良くですし日本は韓国と台湾がいつも一緒にいてそれで昨日はアメリカ、今日は中国、明日はタイとベトナム、続いて明後日はオーストラリアとあちこちの家を回っています。この人達と比べるとです。

「一人じゃ寂しいです」

「ですから誰かお友達になって下さい」
この人達の苦労はかなりのものです。とにかく誰かお友達がいるのはとても有り難いことです。それで二人は必死に探していますが。
「友達ってできねえ時には全然できねえんだよな」
そのお友達のなさで苦労したイギリスの言葉です。彼にとってはこの二人は自分の過去を見ているようなものなのでした。

第千二百話　　完

２０１０・１・２８

第千二百一話　どちらを選ぶか　☆

「ちょ、ちょっとオーストリアさんもスペイン兄ちゃんも」
捕まっているイタリアが慌てて二人に対して言ってきました。
「戦争は駄目だよ。そんなのしても被害が出るだけだよ」
ちなみに彼のお家のところで戦争をしていたりします。
「だからさ、ここは剣とか斧とかなおしてさ。あと縄が痛いから。凄く痛いから！」
「大丈夫ですよイタリア」
オーストリアさんが穏やかな口調でイタリアに対して言います。
「この人甲斐性なしですので本気で戦ったりしません」
「そうやそうや」
スペインもイタリアを見て言います。
「御免イタちゃん」
そしてイタリアのところに来てそうしてその縄を解いてあげます。
こうしたところは優しいです。とはいっても最初からおっかないところのない人ですけれど。
「これ終わったら兄ちゃんと暮らせるようにしてやるからな」
「えっ、兄ちゃんて」
この場合はロマーノのことです。それを聞いてイタリアは戸惑った顔になります。けれどスペインはうっとりとした顔で話しだしたのでした。
「そしたら毎日一緒にいられるんやで。朝起きて夜寝るまで一緒なんや」
どうもこの人も寂しがりのようです。
「三人でな。ええ生活やろ」
「そんなの嫌だよ！」
けれどイタリアはこう言ってそれで全速力でオーストリアさんの

ところに駆けていきました。彼のオーストリアさんのところへの復帰でイタリアでの戦争はあっという間に決着がついたのでした。

第千二百一話　　完

２０１０・１・２９

第千二百二話　そもそも長い間

第千二百二話　そもそも長い間

イタリアとロマーノはそもそも長い間別々に暮らしていました。
それは彼等のところにオーストリアさんとスペインが来る前からです。
「全く。御前とはな」
「どうしたんだよ、兄ちゃん」
「いや、一緒にいた時がそもそも短いよな」
このことをイタリアに対して言うロマーノです。
「爺ちゃんがいた時からな」
「そういえばそうだよね。俺ドイツと一緒にいる時も多かったし」
「あんな奴の何処がいいんだ」
二人が仲がいいのがかなり気に入らなかったりします。
「日本はともかくな」
「日本はいいんだ」
この辺りの関係は結構複雑なのかも知れません。
「御前の趣味とかは俺には合わなかったりするしな」
「ミラノとか嫌い？」
「俺はシチリアの方がいい」
二人のお家のそれぞれの場所です。
「ナポリもいいだろ？あそこもな」
「俺ジェノバが好きなんだけれど」
それぞれの街を出します。実は二人共それぞれの街への愛着がかなり強いです。これはイタリアの特徴でもあります。二人共そうなのです。
それで今も。何となく微妙な感じです。
「やっぱり俺は一人の方がいいのかもな」
「兄ちゃん、そんなこと言わないで一緒にいようよ」

二人で暮らすようになってもです。何処か距離のある二人です。

第千二百二話　　完

２０１０・１・２９

第千二百三話　振られたスペイン　☆

　第千二百三話　振られたスペイン　☆

物凄い速さでオーストリアさんのところに駆けていったイタリア、スペインの方には見向きもしません。そしてそのうえでオーストリアさんに抱きついてすらいます。

　困るというか気の毒なのはスペインです。流石にこれにはショックを隠せません。

「イタちゃんちょっと待ってや！」

　こうイタリアに言います。

「嫌って何やの嫌って！」

「ちょっとこれは」

「かなり」

　スペインの人達も唖然です。何と言っていいのかわかりません。

　そのスペインはがっくりと肩を落として。そのうえで呟きました。

「そうか、そやな」

　そのスペインの言葉です。

「やっぱオーストリアの方がええよな」

　そして笑顔を作って言います。

「振られてしもたな、俺」

「そうですね」

「これは」

「じゃあええわ」

　こう言って撤退に入ってです。オーストリアさんとイタリアに対して告げます。

「オーストリア、イタちゃん幸せにしたれよ」

「スペイン、貴方」

　そしてオーストリアさんが彼に言う言葉は。

「貴方のその笑顔三日後には忘れると思います。

「ちょっと待て、三日か！」
「はい、三日です」
こうしてイタリアでの戦いは終わりました。けれどオーストリアさんの苦しい戦いはまだ続きます。

第千二百三話　　完

２０１０・１・３０

第千二百四話　スペインのお友達

第千二百四話　スペインのお友達

イタリアに振られたスペインですが実はお友達は多いです。彼を好きだったり慕っていたりする人がかなり多かったりするのです。

「俺も好きやで」

キューバもです。彼とスペインの関係はどういったものかといいますと。

「俺が生まれた時に兄貴分やったからな」

「御前はその時から明るくて気風のいい奴やったな」

どうやらキューバは昔からキューバだったみたいです。

「他にも日本の家に行ったりもしたな」

「ポルトガルさんが最初でしたがそうですね」

日本もその昔のことを思い出してお話に加わります。

「他にも新大陸の方には随分とですね」

「そや。それに欧州にも友達は多いしな」

「そうだよね」

今度はイタリアが登場です。

「俺スペイン兄ちゃん好きだよ。同じラテンだしね」

「フランスとは喧嘩したりせんかったりやけれどな」

ここでスペインはふと彼のことも思い出します。

「あとオーストリアとは上司の家が同じやったこともあるし」

「スペインさんも様々な御関係をお持ちなんですね」

「ああ。昔からの付き合いが多いけれどな」

こう日本にも答えます。

「今もそんなのやな」

「成程」

そんなスペインです。そのお友達は本当に多いです。

第千二百四話　完

2010・1・30

第千二百五話　イギリス薄情　☆

スペインを退けたオーストリアさんでしたがやはり第一の敵はプロイセンです。彼をどうするかなのですが最初の戦いはというとです。

これが実にあっさりと負けました。オーストリアさんは戦争はあまり得意ではないのです。

それでぼろぼろになったオーストリアさんに対してプロイセンは勝ち誇って言います。

「ははは、何だ御前ずいぶん弱いじゃねえかよ」

「お、お放しなさい」

それでもオーストリアさんは心はまだ負けてはいません。それには理由があります。

けれどその間にもプロイセンは勝ち誇ってです。そのうえでこんなことも言うのでした。

「おい絵師を呼べ！オーストリアの負け面を後世まで残してやるよ！」

「ううん、イギリス」

ここでその頼みの綱のイギリスを呼びました。彼にとっては今は彼が頼りです。

しかしイギリスはいませんでした。その代わりに木に紙を貼り付けています。そこに書いてあるのは。

『俺はフランスだけ殴りたいのでそっちは中立に回る』

こう書いてあります。それで本人はいないのでした。

「イギリス・・・・・」

これには敵のプロイセンも呆然です。そして何故かオーストリアさんと一緒になって言います。

「薄情だろ、これは」

「貴方の役に立たなさは後世まで語り継ごうと思います」
「俺はイギリスも相手にしてやるつもりだったさ」
プロイセンも言います。
「まあいい。とにかく俺は勝ったからな」
「くっ、戦いはまだこれからですよ」
確かに戦いはまだ続くのでした。何しろオーストリアさんにはまだ敵がいるのですから。

第千二百五話　　完

２０１０・１・３１

第千二百六話　戦争には弱いのですが

第千二百六話　戦争には弱いのですが

オーストリアさんは戦争は得意ではありません。そしてそれは昔からです。

「全く。御前はだな」

スイスがそのオーストリアさんに対してむくれた顔で言います。

「元々戦う為に生まれたというのにだ」

「戦うことは好きではありませんし」

そもそもそうした性格があります。オーストリアさんは戦争とかそういったものが嫌いなのです。それで得意ではないのです。これは性格ですから仕方がありません。

「それに私は」

「婚姻政策に頼るな」

スイスはこのことを批判しました。

「スペインに対してもフランスに対してもそうだったな」

「ベルギーもでしたが」

「それがいかんのだ。何故それに頼る」

「一滴の血も流さずに勢力を拡大できますから」

だからオーストリアさんのお家は昔からその婚姻政策を使ってきたのです。この人はそれによって勢力を拡大してきたのです。こうしたやり方もあるのです。

「それに子供もできていいのではないですか？」

「それに頼るから駄目なのだ」

スイスも頑固に言います。

「そんなのだから昔から弱いのだ」

「それはわかっていますが」

「全く。仕方のない奴だ」

そうは言って嫌っている態度でも何故かオーストリアさんに対し

ていつも忠告するスイスなのでした。

第千二百六話　　完

２０１０・１・３１

第千二百七話　漁夫の利　☆

プロイセンに負けてしまったオーストリアさんはそのまま倒れていました。するとそこにフランスとスペインがやって来ました。
「おっ発見！」
そのオーストリアさんを見ての言葉です。
「オーストリアこんなところでくたばってら」
そしてこんなことも言うのでした。
「昔は最強だった大国があんな成り上がりの国に負けるとはなあ」
「おい待て」
スペインは今の言葉にすぐに突っ込みを入れました。
「それ俺に言われてるような気分になるわ」
「まあそれもあるんだけれどな」
「余計に待たんかい」
そんなやり取りの後でスペインは言いました。
「とりあえずこいつをオーストリア兵を見つけ出したうえで引き渡すか」
「そうだな。まずはこれを」
フランスはオーストリアさんの服を漁って何かを取ろうとしています。やっていることは殆ど何処かの盗人です。スペインはそんな彼を見て速攻で止めに入りました。
「待たんかい、御前はまた他人が倒した相手から取るんかい？」
「まあこれはよ。身体が勝手にな。本能ってやつだよ」
「理性で止めんかい、そんなことは！」
「こうして負けた奴から何か取るのって常識だろ？」
「御前が勝ったわけちゃうやろ！」
実はそれでも獲ろうというフランスだったりします。この辺り非常に手癖が悪いです。というよりこの人は自分で勝ったことはある

のでしょうか。

第千二百七話　完

2010・2・1

第千二百八話　フランスの勝率

第千二百八話　　フランスの勝率

オーストリアさんから取ろうとしていたフランス。しかしこの人とオーストリアさんの戦争は数多いのですがそれに勝った割合はといいますと。

「三十年戦争以外全敗じゃねえかよ」

「あれっ、そうだったか？」

「御前イタリア戦争でもスペイン継承戦争でも負けてるだろうが」

イギリスにこのことを突っ込まれています。

「ナポレオンも最後はあれだったよな」

「ちっ、そういえばそうか」

「オーストリアは喧嘩は大したことねえのに何でいつも負けるんだ？」

イギリスも言います。なお彼に対しても似たような勝率のフランスです。

「しかも三十年戦争の時に手に入れたものスペイン継承戦争とかで全部なくしたよな」

「あれはあの時の上司が俺の体力を無視して戦争やりまくってたんだよ」

かの太陽王です。この人は戦争が大好きでもあったのです。他にも建築が好きだったのでフランスの財政は大変なことになったりしました。

「それでなんだよ」

「けれど他の戦争にも負けてるよな」

イギリスの突っ込みは相変わらず容赦がありません。

「イタリアですら負けても最後は勝利者側にいるんだぞ」

「俺だっているよ、二度の世界大戦でもな」

「けれど俺やオーストリアとやり合った時は殆ど負けてるよな」

「ちっ、何で勝てないんだよ」
実は口で言う程大して勝ってはいないフランスです。そもそも何故喧嘩の強さではあれなオーストリアさんに負け続けるのでしょうか。

第千二百八話　完

２０１０・２・１

第千二百九話　純粋な子供の　☆

「嫌だな、スペインよ」
フランスはすねた顔をしてみせてスペインに対して言うのでした。
「これは純粋な子供の好奇心なんだぜ」
「そう見えると思うか？」
「御前みたいな大人にだけはなりたくねえな」
「体力あったらつつきたいわ、ほんま」
イタリアでオーストリアさんに完敗したのでそこまで体力がないのです。
「というか御前と俺対して年齢変わらへんぞ」
「それもいいじゃねえか。まあとにかくな」
「何かゲットするんやな」
「勝ったら当然だろ？」
「御前勝ってへんし」
とか何とか言っている間にも何処を手に入れようかと見ているフランスでした。スペインはそんな彼に言います。
「御前前俺がイギリスに負けた時も後から来て国境のところ取ってったよな。それでそうやって手に入れたら後はいつも」
「よし、プラハゲット！」
物凄くいい場所を手に入れようとしています。
「この綺麗な街は俺のものだ！」
「御前は前からそういう奴やった」
スペインは全く話を聞いていないフランスにそれでも言うのでした。
「そうやって負けた相手の横から出て来てや」
「それが政治ってやつなんだよ」
「で、すぐに手放すんやな」

それがフランスです。ある意味とてもわかりやすいです。

第千二百九話　　完

２０１０・２・２

第千二百十話　実際に戦うと

第千二百十話　実際に戦うと

負けた相手を横から攻めるのが得意なフランスですが実際に戦ってみるとです。かつて自分の植民地だったベトナムとの喧嘩ですが。

「俺にはディエンビエンフーがあるんだ！」

難攻不落の要塞の中で豪語しています。

「これがある限り俺は負けはしないぜ！ベトナムみたいなか弱い女の子にはな！」

ところがです。見事に負けてしまいます。誰もが驚くまでに。

「日本さんと比べたらずっと容易い相手でした」

「俺負けたのか？ひょっとして」

「何だよ今の惨敗は」

イギリスもそんな彼に呆れてしまっています。

「本当にあっさり負けたな」

「っていうかベトナム強過ぎるだろ」

「確かにあいつあれでかなり強いな」

イギリスもそれは認めます。実際にかなりの強さでした。

しかしです。今回はそれ以上にフランスの弱さが目立っています。呆気なくボロ負けした彼の姿は今は見るも無残なものです。

「それでも御前は」

「何か気付いたら負けてたんだよ」

「弱いな、真面目に戦うと相変わらず」

「御前には勝ったじゃねえか」

「百年戦争の時はな」

その他には数える程しかなかったりします。実は口で言う程強くはないフランスです。こうしてベトナムはあっさりと彼から独立したのでした。

第千二百十話　完

2010・2・2

第千二百十一話　最強の助っ人　☆

第千二百十一話　最強の助っ人　☆

プロイセンに緒戦で負けてしまったオーストリアさん、上司である女帝にそのことを報告します。

「というわけで負けましたが何か」

「髪の毛埃がついていますよ」

女帝も結構冷静です。どうもオーストリアさんが負けることは予想していたいみたいです。この辺りは流石上司であるだけはあります。

そうしてです。女帝はこうオーストリアさんに対して言うのでした。

「案ずることはありません、既に手は打ちました」

「といいますと」

「助っ人です」

そしてその助っ人とは。彼女でした。

「オーストリアさーーーん！」

ハンガリーです。自分の軍も率いています。

「ハンガリー、貴女がどうしてここに！？」

「十万の兵を連れて来ました、私も一緒に戦います！」

「駄目です、危険過ぎます！」

「大丈夫です、敵はプロイセンとフランスですよね！」

既に敵が誰かも知っているのでした。

「それならすぐにでも！」

「どうして私の為にそこまで」

「オーストリアさんを傷付ける奴は私が許しません」

よく見ればその目が座っています。結構怖いです。

「ですから。何があってもあの二人は」

こうしてオーストリアさんに頼りになる助っ人が馳せ参じてきま

した。戦いはここで大きく変わるのでした。

第千二百十一話　　完

２０１０・２・３

第千二百十二話　どうして来てくれたのか

第千二百十二話　どうして来てくれたのか

オーストリアさんの助っ人に来たハンガリー、そもそも彼女がどうして来てくれたかというとです。それには女帝の頑張りがあったのです。

「この方が必死にオーストリアさんのピンチを伝えてくれたんですよ」

「そうだったのですか」

「貴方の為ならばですよ」

女帝はこうオーストリアさんに対してお話します。

「その為にはそれこそです」

「申し訳ありません」

「御礼はいいです。そのかわり」

女帝はここで少し厳しい顔になってオーストリアさんに対して言ってきました。

「貴方も少し頑張るのです」

「わかってはいます」

「なら戦いなさい。フランスは大したことはありません」

オーストリアさんの宿敵については一蹴です。まるで何ともないといった感じです。

「これから貴方とハンガリーにはプラハに行ってもらいますので」

「そこでフランスを撃退しろというのです」

「その通りです。わかりましたね」

こうオーストリアさんに告げます。

「では今から」

「わかりました、それでは」

「私がいるから絶対に大丈夫ですよ」

ハンガリーは既に完全武装をしています。そのうえでどちらかと

いうと彼女が引っ張っていきます。いよいよオーストリアさんの方も反撃に出て来ました。

第千二百十二話　　完

２０１０・２・３

第千二百十三話　プラハ奪還

第千二百十三話　プラハ奪還

フランスはオーストリアさんの中でも重要な場所の一つであるプラハを手に入れて御満悦でした。しかしそこに誰かがやって来ました。それは。

「えっ、ハンガリーかよ」

「あんたもやっつけてやるわよ！」

そのフライパンを手にフランスに対して向かって来ます。

そしてそのフライパンでフランスを思いきり殴ってです。

「プラハはオーストリアさんのものよ！」

殴ってから言います。

「あんたなんかのものじゃないんだから！」

「どうしてここで御前が出て来るんだよ！」

「決まってるわよ。オーストリアさんの為よ」

実にわかりやすい理由です。その理由でフランスをやっつけてプラハを奪い返そうとします。そしてそれは成功したのでした。

「ちっ、何て強さなんだよ」

「悪い？私が強くて」

「女なのに何て強さなんだよ」

フランスが言うのはこのことでした。

「ったくよ、じゃあプラハから撤退してやるよ」

「さっさと逃げ帰りなさい」

「ひょっとして俺今回何も手に入れてないんじゃねえのか？」

フランスはこのことにも気付きました。

「プラハも手に入れられなかったしよ」

所詮火事場泥棒をしてもこんなものです。フランスはイギリスとの戦争で多くのものを失いましたしこの戦争では何も手に入れられませんでした。

第千二百十三話　完

2010・2・4

第千二百十四話　スウジクチームの女の子

第千二百十四話　スウジクチームの女の子

ハンガリーはとにかく強いです。彼女はスウジクイエローですが彼女だけが強いわけではありません。

同じスウジクチームのスウジクピンクこと台湾もです。彼女もかなり強いのです。

あの戦争の時に日本の助っ人に出て来てです。そのうえで大活躍をしたのです。

「私だって同じだったんですよ」

台湾はこの時のことを思い出しながら述べます。

「本当に。ハンガリーさんと一緒で」

「貴女は日本さんの為なのね」

「はい、日本さんも大変でしたから」

だから戦ったというのです。彼女も日本の為に立ち上がったのです。

そしてその強さを見せました。ハンガリーと同じくです。

「一応韓国もいたんですけれどね」

「あれっ、韓国って連合チームにいるけれど」

「勝手にそこに入ってるだけなんですよ、あれは」

実はそうだったりします。彼はその時日本のお家にいたのですからレンゴウチームにいることは不自然なことなのです。本人が何を言おうともです。

「だから気にしないで下さい」

「そうだったの」

「こいつ等どうしてあんなに強いんだ？」

フランスはその二人を見ながら言います。

「ハンガリーといい台湾といいよ。しかも美人だしよ」

なおレンゴウチームのヒロインはレンゴウシルバーこと韓国妹だ

けです。その他の六人は全員男です。特に最初からいる五人は全員男です。

それがかなり羨ましいフランスでした。女の子が強いチームはかなり華があるのは確かです。

第千二百十四話　　完

２０１０・２・４

第千二百十五話　結果はこうでした

第千二百十五話　結果はこうでした

欧州全体を巻き込む大騒ぎとなったオーストリア継承戦争でしたが何とか終わりました。戦いが終わってみるとオーストリアさんはシュレージェン以外は何とか守り抜くことができました。

「ハンガリーのおかげですね」

「けれどシュレージェンが」

ハンガリーはそのことが残念でなりません。オーストリアさんとしてはほっとしていますがこの辺りはそれぞれの認識の違いが出ています。

その継承問題にしても女帝の御主人が皇帝になることが決まりました。最初はそれも取られてしまいましたが結果としてまたハプスブルク家に戻ることができました。

そしてプロイセンはといいますと念願のシュレージェンを手に入れました。彼にとっては満足すべき結果と言っていいでしょう。

「よし、何とか成功したぜ」

他の地域を手に入れることはできませんでしたが満足すべき状況でした。彼にしてもこのことに非常に満足しています。しかしそれは彼だけです。

気付いてみればフランスとスペインは。何も手に入れていませんでした。

「あれっ、俺何もなし？」

「俺もかいな」

それどころかお金をかなり使ってしまいました。二人にとってはあまりいい状況ではありませんでした。

そしてイタリアは。何かお家を少し取られたのと家の中で戦争をされてです。結構踏んだり蹴ったりの目に逢ってしまいました。

「何か今回も一方的にやられちゃったよ」

彼が一番迷惑でした。そしてイギリスは。

何処かに行ってしまっています。完全に死んでしまった人の扱いです。一連の参加した国々の状況はこうしたものでした。しかしこれはまだ終わった話ではありませんでした。

第千二百十五話　　完

２０１０・２・５

第千二百十六話　女を馬鹿にすると

第千二百十六話　女を馬鹿にすると

プロイセンの上司フリードリヒ大王は男の人です。この人は不思議なところがありましてどうも女性を好きではないようです。その周りにはいつも青年士官やそうした人ばかりがいます。

音楽に食事にコーヒーに学問にと嗜好を見せていますがこの人は女性は近付けません。そしてこんなことも言うのです。

「女なぞ子供を産ませる道具でしかない」

「おお、流石フリッツ親父だぜ」

プロイセンはそんなプロイセンの言葉にかなり賛同しています。

「そうだよな。親父はだからいいんだよ」

「女なぞ何の役にも立たないものだ」

この人はこう言ってはばかりません。しかしです。

オーストリアさんの上司は言うまでもなくあの女帝です。おまけにハンガリーもいます。この二人がフリードリヒ大王のその言葉に何も思わない筈がありません。

「女は子供を産むしかできないですって！？」

「今度はそんなことを」

二人はかなり怒っています。しかもこの二人だけではありませんでした。

当時はフランスの上司でかなり重要な位置にいる人も女の人でした。ポンバドュール夫人です。この人も大王の話を聞いておかんむりです。

「そうですの。それでしたらこちらにも考えがありましてよ」

細面のその顔をぴくぴくとさせています。丁度プロイセンとの仲が悪くなってきた時です。そしてプロイセンにとってあまりよくないことはさらに続きます。

何とロシアの上司もです。この時は女の人でした。しかもそもそ

もフリードリヒ大王が大嫌いでした。お話に出て来ただけで思いきり不機嫌になる程です。

「すぐにプロイセンに兵を向ける用意をするのです」

オーストリアさんの上司並にプロイセンの上司を嫌っています。とにかく女性には嫌われている人なのです。

第千二百十六話　　完

２０１０・２・５

第千二百十七話　女帝の決断　☆

戦争が終わってみるとシュレージェンを奪い取られたままでした。ロシアが参戦しようとしてきたりして大騒ぎになりましたがとりあえずそうした状況で終わったのです。

物凄い数の相手でしたからそれで済んでよかったと思うべきかも知れませんが女帝はそれでも不満でした。その整った顔に深い憂いをたたえて言うのです。

「結局シュレージェンは取られてしまいましたね」

「はい、プロイセンは私からシュレージェンを強奪したままです」

「それをどうするかですが」

「陛下、オーストリアさん」

ここでハンガリーが出て来て言います。

「あいつのことですからまたやって来ますよ」

「どうしたんですかいきなり」

「だってあいつは凄い昔からオーストリアさんを狙ってたんですよ」

ハンガリーは既にそのことを察していたのです。勘もかなり鋭いです。

「あいつがシュレージェンだけで満足してるわけありません」

「その通りですね。私も油断していました」

女帝が彼女の言葉に頷きます。ここでハンガリーは暴走します。

「きっと変態なあいつのことですから奪った後であんなことやこんなことをその他もろもろするつもりですよ。もう本当にあいつだけは」

「落ち着きなさい」

オーストリアさんがその彼女を宥めている間に女帝はある決断を下しました。この人も負けてはいません。

「オーストリア」

「はい、何でしょうか」
「貴方に協力して頂きたいことがあります」
あらためて言うのでした。
「貴方には少し抵抗があるかも知れませんが」
窓を背にして言います。その姿は何か後光がさしているようでした。女帝は今大変な決断をしたのです。

第千二百十七話　　完

２０１０・２・６

第千二百十八話　名君でした

第千二百十八話　名君でした

オーストリアさんの上司だった女帝ですがこの人は普通の人ではありませんでした。オーストリアさんはこの人のことを今でも懐かしい顔で語るのです。

「まず十六人の子供がおられました」

「十六人ですか」

日本がその話を聞いています。相変わらずこの人は聞き上手です。

「女の人がですよね」

「そうです。尚御主人は一人でした」

何と御主人を物凄く愛してもおられたのです。御主人は結構もてたのですがその浮気心を御主人に気付かれないようにそっと抑える術もお心得ていたというのですから凄いことです。

「十六人のお子さんの母親であると共に女帝のお仕事もされていました」

「それは凄いですね」

「私はあの人によって随分と変わりました」

微笑んで昔のことを語るのでした。

「鍛えなおしてもらいましたし」

その内政にも力を入れたのです。軍隊もです。

「そして私はまた強くなることができました」

「まさにその方あってのことなのですね」

「今もあの方の思い出ははっきりと覚えています」

オーストリアさんはさらに語ります。

「私の家の至るところにある宮殿や歌劇場もそうですし」

「それだけ思い出を残された方なのですね」

「素晴らしい方でした、本当に」

ふと壁の方を見るとそこに女帝が御主人と一緒に誇らしげな微笑

みを見せています。その多くの子供達に囲まれて。

第千二百十八話　　完

２０１０・２・６

第千二百十九話　その手紙はない　☆

第千二百十九話　その手紙はない　☆

女帝がオーストリアさんに命じた決断、それは物凄いものでした。
何と一通の手紙を届けよというのです。
「この手紙をフランスに送ります」
「なっ・・・・・・」
そこに書いてある一文は。
『親愛なるフランス様私と友達になって下さいませ　オーストリア』
こう書いてあります。それを見たオーストリアさんは何時になく狼狽しています。まるで引いてはいけないカードを引いてしまったかのように。
「それは断固拒否します！」
しかしそれを既に読んでいた女帝はすぐにハンガリーに命じます。
「ハンガリー押さえて下さい！」
「光栄です！」
ハンガリーも何気に意味深いことを言ってオーストリアさんを後ろから取り押さえます。こうしてオーストリアさんは捕まって動けなくなりました。
それでも口は自由なのでそれで対抗しようとします。
「私があの方とどれだけ仲が悪いか知ってるでしょう！？」
「それでもプロイセンに勝つ為です」
「止めて下さいあんな人と友達になる位なら」
オーストリアさんはまだ抗議します。既に手紙を持った鳩が飛び立ってもです。
「何処かでお花でも売って暮らします！あ・・・・・・」
ここで鳩が飛び立ってしまいました。それを見届けたオーストリアさんは。

「あっ、オーストリアさん」
「全ては終わりました」
ぐったりとしてしまいました。しかしこれで賽は投げられたのです。

第千二百十九話　　完

２０１０・２・７

第千二百二十話　何故仲が悪かったのか

第千二百二十話　何故仲が悪かったのか

フランスは仲の悪い人が多いです。その中でもイギリスとオーストリアさんは有名なのですが何故オーストリアさんと仲が悪かったかというとです。

「向こうが神聖ローマ帝国を牛耳っていたからな」

「それでなのですか」

「ああ、しかもスペインまで押さえてたしな」

ここでもお話を聞くのは日本です。とにかく色々な人のお話を聞いています。

「俺はフランドルが欲しいのに。ああ今のベルギーな」

「その方を巡っても悶着があったのですね」

「それがはじまりだったんだよ。俺があいつを家に入れたくてもな」

この頃からかなり多情なフランスでした。

「そこによ、あいつとその上司が来てな。当時はマクシミリアン一世だったか」

「あの銀の鎧を着られた」

「そいつがローエングリンみたいに出て来たんだよ」

本来ならば物凄く絵になる光景です。しかし今のフランスにとっては忌々しい記憶です。何しろ敵がやって来たのですから。まさにテルラムントです。

「それでベルギーを取られてな」

「ついでにオランダさんもですか」

「そうだよ。そこからなんだよ」

フランスとオーストリアさんの仲が悪くなｔったのはです。

「スペインも抱き込まれてそれから延々と挟み撃ちに遭ってよ」

オーストリアさんの上司も容赦しなかったのです。

「何かあったら絶対にあいつと揉めてたな」

「そうだったのですか」
そんなフランスとオーストリアさんだったのです。フランスの敵はイギリスだけではない、というかこの人の人間関係は下手をすると生徒会長のそれより凄いかも知れません。

第千二百二十話　完

２０１０・２・７

第千二百に十一話　恋文　☆

鳩は放たれました。その鳩はすぐに何事もなくフランスのところに辿り着きました。そしてフランスはそのお手紙を何なく受け取りました。

「ああ、手紙だ」

「ピエール三号ってことはオーストリアからかいな」

「ああ、そうみたいだな」

一緒にいるスペインに応えながら見るとです。その内容は。

「うわっ、凄い内容だなこりゃ」

「ちょっと待たんかい」

しかしここでスペインが突っ込みを入れました。その手紙とは何かといいますと。

「それエロイーズさんのお手紙やないけ」

「おっとっと、間違えた間違えた」

「わざとやろ。あの人かなり昔の人やないけ」

ちょっと内容はここでは出せないようなとても恥ずかしいものです。とにかく文章全体が物凄いです。本当にシスターが書いたのか疑ってしまう程です。

何はともあれ話を戻すとです。一体何を書いてかといいますと。

「それでオーストリアは何ていうてるんや？」

スペインはまたフランスに尋ねます。

「また戦争かいな」

「ああ、それはな」

「それで何や？」

「ただのラブレターさ」

その同盟の申し込みの手紙をスペインに見せて話します。これぞ外交革命、欧州が大きく動こうとしていました。そう、一つの対立

軸が消えようとしていたのです。

第千二百二十一話　　完

2010・2・8

第千二百二十二話　この人は関係ありませんでした

第千二百二十二話　この人は関係ありませんでした

オーストリアさんとフランスが喧嘩をしてばかりいた時です。その間スイスはずっと沈黙を守っていました。彼はいつもこう言っていました。

「オーストリアがどうなろうと知ったことではない！」

この辺り因縁の深さを見せてくれます。この人とオーストリアさんの関係は何処までいっても非常に険悪です。とはいってもスイスが一方的に嫌っているのですけれど。

しかしフランスと仲がいいかというとです。

「あの様に破廉恥な男は言語道断である！」

「俺は破廉恥な男だったのかよ」

「自分で自覚せんかい」

すぐにスペインがフランスに突っ込みを入れます。

「さもないと魔のＢブロック左座席に座ることになるぞ」

「そこに座ったら絶対に死ぬじゃねえかよ」

こんなやり取りをしながらスペインに返します。そのうえでスイスの話を聞いています。

「とにかくである。我輩は誰にもつきはしない」

「中立だってことだな」

「左様である、敵は必ず倒す」

本気です。目が座っていて尚且つその手には銃があります。それで本気でないとは誰も思いません。何よりも雄弁に物語っています。

「それだけである」

「ちっ、オーストリアと仲が悪いから期待していたのによ」

「ドイツにもイタリアにもつきはしない」

この人は実に徹底しています。こうしてあくまで一人でいること

を貫いています。この辺り硬派であります。その心根やよし、と言うべきでしょうか。

第千二百二十二話　　完

２０１０・２・８

第千二百二十三話　衝撃が走り　☆

「えっ、御前とオーストリアが友達!?」
「兄ちゃんとオーストリアさんが!?」
「時代は変わるものだな」
「本気か!?あの二国だけはないと思っていたのに」
「やんのは構わんけどこっちまで飛ばさんでよーーー」
スペイン、イタリア、スウェーデン、イギリス、ポーランドのそれぞれの反応です。誰もがこの友人関係の成立に反応しています。
何しろ長年敵対してきた二人です。その二人が友人関係となったのです。この出来事はまさに欧州中を震撼させたのです。
特にオーストリアの宿敵になったプロイセンはです。コーヒーを零して驚いています。
「フランスとあの眼鏡が同盟って嘘吐け!」
全力でそれを否定しようとします。
「あいつ等顔を合わせれば嫌味の応酬してるような仲なんだぞ!」
「残念だが本当だ。それはな」
プロイセンの上司フリードリヒ二世が彼に告げます。厳しい顔をした男の人です。
「それをコーヒーを零すな。勿体ないぞ」
「確かにあいつ馬鹿で変態だけれど強さは本物だぜ!」
プロイセンにしろ国力ではフランスに勝てません。フランスの国力は応酬では随一と言ってもいいのはこの頃からでした。
「そんなのが敵になったらよ。オーストリアだけじゃなくて」
「だがあいつが勝てない国が一つだけあるではないか」
「勝てない国か。オーストリア以外にも」
「そうだ。手を打っておいた」
流石にこうしたところは抜かりがありません。女帝も凄いですが

この人も凄いです。応酬は再び風雲急を告げようとしていました。

第千二百二十三話　　完

２０１０・２・９

第千二百二十四話　フランスとドイツでも

第千二百二十四話　　フランスとドイツでも

フランスは今は応酬第二です。とにかくドイツが物凄く強くなってしまいました。ドイツは欧州でダントツになってしまっています。しかしそのドイツも日本と比べるとです。今では実力差がはっきりと出てしまっています。それだけ日本が強くなってしまっているのです。

「あいつの強さは何なんだ？」

「仕方ないだろう。人口が違う」

「いや、それでもチートだろあれは」

フランスは日本のその国力を見て言います。

「俺と御前を一度に相手にできるじゃねえかよ」

「上司に大きく左右されるがな」

「いや、それはこっちも同じだからな」

実際のところどの国も上司の質は変わっていないのかも知れません。もっとも日本の場合はマスコミがブレーンになっている上司の質はあんまりなものがありますが。

「だからよ、日本はよ」

「勝てないというのだな？」

「前の戦争で一度も勝てなかったんだよ」

ドイツだけでなく日本にも散々に打ち破られていたのです。本当にフランスの戦闘力は実際には口程にもないのです。

「全然な」

「そして国力でもか」

「何であんなに強いんだよ」

とにかく日本の国力に唖然となっています。

「マスコミがどれだけ無能で卑劣でもあれだけ力があったらやっていけるだろ」

「そういうものか」
「ああ、どうにでもなる」
フランスはここまで言います。とにかくこの二人でも日本には勝てなくなっています。尚マスコミと学校の先生の質の低さでは日本は他の国の追随を許さなかったりもします。これは褒められたことではありませんが。

第千二百二十四話　　完

２０１０・２・９

第千二百に十五話　息をしていません　☆

第千二百に十五話　息をしていません　☆

フリードリヒ二世は一通の手紙をプロイセンに対して見せてきました。そうしてそのうえで彼に対して教えるのでした。

「イギリスだ、イギリスが御前の味方になるそうだ」

手紙の中にはフランスを殴りたいから味方につく、これは俺の為で御前の為じゃないと書いてあります。随分酷いことを書いています。

けれどプロイセンはその手紙を見てとりあえずほっとしました。

「マジっすか、よかった・・・・・って？」

ここで窓を見るとです。一通の鷹がある場所を目指して飛んでいます。その鷹、そして行く先はといいますと。

「あれはオーストリアの鷹じゃねえか！あの方角はロシアか！」

そしてプロイセンは恐ろしいことを悟りました。彼にとってはとてもです。

「ま・・・・・まさかあの女狐」

女帝は遠大な計画を立てていました。それは。

「フランス、そしてロシアと手を結びプロイセンを包囲します！」

何とフランスだけではなかったのです。その他にも神聖ローマ帝国の中の諸侯やスウェーデンまで味方につけました。まさにプロイセン完全包囲です。

その包囲網を形成する中でハンガリーが女帝に申し出てきました。

「女王様、一つお伝えしたいことがあります」

「はい、何かしらハンガリーちゃん」

女同士ということもあってかかなりフレンドリーなやり取りです。

「それで」

「オーストリアさんがですね」

そのオーストリアさんを連れて来て青い顔で言うのでした。

「さっきから息をしていないんですけれど」
フランスとのことが致命傷になっていました。まずこの人の方が問題でした。

第千二百二十五話　完

２０１０・２・１０

第千二百二十六話　三枚のペチコート

第千二百二十六話　三枚のペチコート

何故女帝がフランス、ロシアと友達になれたかといいますと。ロシアは元々オーストリアさんとかなり仲がいいにしてもです。それには事情がありました。

まずフランスの上司の一人に物凄く発言力のある女の人がいたのです。ポンバドゥール夫人という方がその人です。

そしてロシアの上司はオーストリアさんのところと同じで女帝でした。エリザベータ女帝という人です。この二人はフリードリヒ二世が大嫌いでした。

「女は子供さえ産んでいればいいんだ」

二世はよくこんなことを言っていました。これで女の人に好かれる方が不思議です。

「あのプロイセン王を懲らしめてやるのです！」

「私の前でプロイセン王の話をしないように！」

夫人もロシアの女帝もこう言って二世をこの上なく嫌っていました。

そうしてです。そのうえでそれぞれフランスとロシアに対して言うのでした。

「打倒プロイセン！」

「何があっても倒しなさい！」

こうしてオーストリアさんのところの女帝の声に応えたのです。勿論プロイセンが力をつけてきてそれが邪魔になってきたということもありますが。

こうして三人の女性が手を組みました。しかもハンガリーまでいます。

「くそっ、女なんて大嫌いだ」

実はプロイセンは女の人の上司を持ったことがありません。ずっ

と男ばかりです。
今もその時のことを思い出してです。ドイツに話したりします。
「俺の相棒が男で本当によかったぜ」
「あれは御前も上司もかなりまずかったと思うぞ」
ドイツは極めて冷静にプロイセンに対して言います。その時のプロイセンはまさに女の敵でした。というより女の人に嫌われまくっていました。女は怖しです。

第千二百二十六話　　完

２０１０・２・１０

第千二百二十七話　ピンク大好き

第千二百二十七話　ピンク大好き

この時のロシアの上司は女の人でした。その名前はエリザベータ女帝といいます。外見はとても綺麗なのですがとにかく癖の強い人でした。

「私の前であの男のことは言わないように！」

とにかくフリードリヒ二世が大嫌いでした。つくづく女の人には人気のないというか徹底的に嫌われてどうしようもない御仁でありました。

この人のことを言うと瞬時に激怒しました。そして自分の苦手な学問のこともまさに言ってはならないことでした。とにかくすぐに怒る人でした。

そして特にです。ピンク色のことになるとです。

「私だけです！」

ピンクの服を着ていいのはエリザベータ女帝だけだというのです。

「私だけが着ていいのです」

「じゃあ他の人が着たらどうなるんですか？」

「何の容赦もしません」

ロシアの問いに一言で答えるのでした。

「その相手にはです」

「じゃあ僕もですよね」

「当然です」

自分の国に対してもです。こんなおっかない上司が次から次に出て来るというのがロシアです。ある意味物凄いことです。

「その際は覚悟しなさい」

「わかりました」

「私はピンク色が大好きなのです」

そしてこのことも宣言しました。そうしてこの時ロシアのお家で

はピンク色はこの人だけに許された色になったのです。こんな人なのでした。

第千二百二十七話　　完

２０１０・２・１１

第千二百二十八話　女好きの上司ばかり

第千二百二十八話　女好きの上司ばかり

この時代フランスの上司はとにかく女好きな人ばかりでした。どれだけ女好きな人ばかりだったかといいますとそれこそ子供の数が物凄いことになっている人ばかりだったのです。

「太陽王とか凄かったな」

「あの人と十五世がな。あとアンリ四世もな」

こうイギリスに対しても話します。少しうんざりとしたような顔になってもいます。

「どの人も壮絶だったな」

「そしてあれだったな。アンリ二世は」

どうも同じ名前の人が多いです。

「二十歳年上の恋人がいたよな」

「ああ、ディアヌ＝ド＝ポワティエな」

フランスはこの名前を出すのでした。

「凄く綺麗な人だったけれどな」

「ナポレオンの奴も結構あれだったし最近もそういう奴多いよな、御前の上司」

「そういう御前の方もヘンリー八世は何なんだよ」

フランスがここで反撃に出ました。

「幾ら何でもあれはないだろうがよ」

「あの人はまた特別だったんだよ」

イギリスはこの上司のことを出されると急に言葉を濁しました。

「まあそれ以降ヘンリーって名前の上司はいないからいいじゃねえか」

「そういえば本当にいないな」

「そうだよ、だから特別だったんだよ」

イギリスはこう力説します。

「だから気にするな」
「いいや、するな」
そのまま言い争いになる二人でした。どっちの上司も女好きの人が多いみたいです。

第千二百二十八話　　完

２０１０・２・１１

第千二百二十九話　平和な日本　☆

第千二百二十九話　平和な日本　☆

七年戦争で欧州が大変な時です。日本では杉田玄白がオランダの解剖学の本を日本語に訳していました。後の解体新書のことです。

その玄白先生に日本が声をかけました。髪の毛が一本もない人のよさそうなお爺さんです。

「玄白さん玄白さん」

「何でしょうか」

「よかったら私も手伝いましょうか？」

「ああ、有り難いです」

こうして日本が一緒になりましたがまずは。

「杉田」

「はい」

暫く間を置いてまた。

「杉田玄白」

「はい」

「杉田玄白でーーーす」

「静かにして下さい」

こんなやり取りをするのでした。

日本はそれからものどかに時間を過ごしました。何も問題も不安もありませんでした。

「このまま静かに過ごしていたいですね」

「草木みたいにですな」

「はい、本当にそんな感じで」

こう大阪にも答えます。本当にのどかです。

「このままずっと」

「そうですなあ」

そんな平和な時代でした。今では想像もできません。

第千二百二十九話　完

2010・2・12

第千二百三十話　草花の様に

第千二百三十話　草花の様に

日本の平和は二百年でした。その間何の戦争もなく人々は平和に暮らしあらゆる文化や産業が栄えとても穏やかに過ごしていました。

「凄くいい時代だったんだね」

「今思えばとても懐かしい時代です」

こうイタリアに対しても答えます。

「外のことはあまり知ることはありませんでしたが」

「それでも外国の本は読んでいたじゃない。オランダから貰ってたんだよね」

「はい、それは」

蘭学はたしなんでいたのです。それもかなり。

「それで医学も学んでいましたし」

「やっぱり凄いよ。鎖国していたっていうけれど」

その中でも学ぶことは学んでいたのですから確かに日本は凄いです。

「いや、だから今があるんだね」

「私の今がですか」

「これだってあれだって」

歌舞伎や浄瑠璃、落語にと。様々なものを見ながらイタリアは目を輝かせています。

「全部凄いよ。戯作だって浮世絵だってあったし」

「そういったもの全てがですか」

「凄いよ、これだけのものがあったなんて」

「そうですか。凄いんですね」

「自分でそういうのには気付かなかったの？」

「あくまで楽しみでしたから」

そんなマイペースだった昔の日本です。その中で素晴らしいもの

を築き上げたのです。

第千二百三十話　　完

2010・2・12

第千二百三十一話　平和な女帝

第千二百三十一話　平和な女帝

「ご幼少のみぎりから」
「そうでしたよね」
オーストリアさんとハンガリーが微笑み合いながら話しています。
女帝のことを話しているのです。
「御両親の仲がとてもよくて」
「ようやくお生まれになられた方でしたしね」
「私は女性の方でも一向に構いませんでした」
オーストリアさんもそれでよかったのです。
「そしてあの方とずっと一緒で」
「そうですよね。私も」
「女性の上司もまたいいものです」
語るオーストリアさんが優しい笑顔になっています。
「むしろ無闇に好戦的な方よりもです」
「穏やかな方だと」
女帝は確かに戦いましたがそれは必要故のことだったのです。その本質は平和を愛する人であり続けていたのです。とても女性らしい心の人でした。
「七年戦争の後はこれといって戦争もされず」
「私もオーストリアさんも平和に過ごせましたよね」
「全てあの方がおられたからですね」
「はい、本当に」
ハンガリーがにこりと笑って答えます。
「けれどいざという時は誰よりも強くて」
「おかげで私も被害は最低限で済みました」
バイエルンもザクセンもついでにフランスもスペインも退けることができたのですから。本当に素晴らしい女帝でした。

第千二百三十一話　完

2010・2・13

第千二百三十二話　ロシアだとどうか

第千二百三十二話　ロシアだとどうか

「ロシアさんの上司が女性の方だった場合ですか」
「そうだね。対応を変えるつもりはないね」
「いつもと同じある」
ロシアの上司が女の人だとどうしますか、日米中にアンケートしてみました。
すると三人共あまり態度を変えません。日本に至ってはその手の刀が銀色に光っています。
「エカテリーナ二世の頃を思えば」
「ＨＡＨＡＨＡ、日本は極端だなあ」
「僕はいつも通りあるぞ」
実際にはアメリカも中国も目は笑っていません。かなり剣呑な気配です。
そしてロシアもです。女性の上司であってもです。
全然変わりません。物凄い恐怖のオーラを放ち続けています。
「僕は僕だよ」
「そうです、ロシアさんはロシアさんです」
「いやあ、普段通り気兼ねなく付き合わせてもらうよ」
「何も変える必要はないある」
三人とロシアの間に走る殺気が物凄いです。本当に何も変わりません。
そしてその四人の間にいる人は。
「何か結局この四人ってこうなんだね。巻き込まれたらどうしよう」
「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」
「だからカナダだよ」
こうクマ二郎さんに答えています。しかしカナダはこの四人程力は強くないので対抗できません。それで巻き込まれないように気を

つけていますが。
「巻き込まれたらどうなるかな」
「消えるんじゃないかな」
その危険は実際にあります。カナダも大変だったりします。

第千二百三十二話　完

２０１０・２・１３

第千二百三十三話　混浴でした　☆

第千二百三十三話　混浴でした　☆

かつてイタリアとハンガリーがオーストリアさんのお家に一緒にいた時です。皆この時代は朝にお風呂に入っていました。

しかも混浴でした。それでこんなこともいつもでした。

「おはよう、イタちゃん」

「あっ、ハンガリーさんもお風呂ですか？」

イタリアは服を脱いだところでハンガリーに気付きました。ハンガリーのプロポーションはかなりのものです。美人なだけではありません。

「あの僕後で入りますのでお先に」

「いいわよ、一緒に入りましょう」

けれどハンガリーは表面上は気さくにお姉さんの度量で言います。

「気にしないでいいから」

「そ、そうですか」

こうして二人でお風呂に入るとです。イタリアの顔は真っ赤ですがハンガリーはにこにことしています。

「えへへーー、一緒にお風呂ってはじめてだね」

「やっぱり僕先にあがりますから。ゆっくり入って下さい」

イタリアはすぐにあがろうとします。けれどハンガリーはその彼女にすすす、と近寄ってです。そのうえで真っ赤になっているイタリアを後ろから抱き締めて。

「可愛いなあ・・・・・」

「ちょ、ちょっと離して下さい」

身体を摺り寄せてさえいます。かなり危ない情景です。

女の子に声をかけるのは大好きなイタリアですが案外こうしたシチュエーションには弱いみたいです。今もこのことを思い出すとです。

「恥かしいよ、やっぱり」
「あら、気にしなくてもいいのに」
けれどハンガリーは平気です。この辺りは本当に変わりません。

第千二百三十三話　　完

２０１０・２・１５

第千二百三十四話　混浴だったと聞いて

第千二百三十四話　混浴だったと聞いて

ハンガリー自身からこの混浴の話を聞いたのは台湾でした。彼女にとっては是非共そうしたことをしたい相手は誰かといいますと。

「では私も日本さんと」

「かなりストレートね」

「はい、やっぱり日本さんといつも一緒にいたいですから」

本当にかなりストレートです。何も隠してはいません。

「けれどそれはかなり勇気が」

「私のところじゃ昔は普通だったけれど」

「私のところでは違いますから」

この辺りは結構お堅い国なのです。台湾のお家は案外そういうところには厳しいのです。

「ですから」

「何かあまり面白くないことね」

「私も今回ばかりはそう思います」

台湾は顔を俯けさせて言いました。

「日本さんとお風呂の中でも一緒に」

「韓国は男同士だから平気みたいだけれどね」

「あいつはずるいんですよ」

完全に感情です。

「だってそうでしょう？日本さんの上司の方々に特別目をかけてもらっていましたし今だってああして私よりもずっと有利に日本さんにいつもまとわりついて」

「有利なのかどうかはわからないけれど何だかんだでいつも日本さんの傍にいようとしてるわね」

「男の子か結婚したら日本さんと一緒にいられるんですけれど、本当にいつも」

そんなことも思う台湾でした。彼女にとってはそんな存在の日本なのです。

第千二百三十四話　　完

２０１０・２・１５

第千二百三十五話　ゲイビデオ

第千二百三十五話　ゲイビデオ

台湾がハンガリーのお家に行くとです。あるものが大量に目に入りました。それが何かといいますと。

「あの、これって」

「あれっ、見つけたの」

台湾にその見つけられたものを見せられてかなり焦るハンガリーでした。

「ちゃんと隠していたのにそれでも見つけるなんて」

「隠していたってこんなの一杯持ってるんですか」

何とそれはゲイビデオです。美少年や美青年達があれやこれやとお好きな人にはたまらないお話がこれでもかと出てきます。

「ハンガリーさんも何か」

「いいじゃない。趣味なんだし」

ハンガリーはその顔を赤くさせながら答えます。

「そうでしょ？誰にも迷惑はかけてないわよ」

「いえ、そういう問題じゃなくて」

台湾はそのうちの一つをビデオに入れて観てみます。するとその内容もかなりハードです。もう観ている方が恥ずかしくなるようなものです。

それを見てです。ハンガリーをじっと横目で見ながら出す言葉は。

「凄く綺麗なお顔してるのに」

「だから誰にも迷惑はかけてないわよ」

ハンガリーの返答はかなり苦しげです。

「私だけの趣味なんだから」

「まさかオーストリアさんもそんな目で」

「ま、まあそれはね」

今回はかなりピンチなハンガリーです。やっぱりかなり後ろめた

いのでした。

第千二百三十五話　完

2010・2・16

第千二百三十六話　やらないか

第千二百三十六話　やらないか

さて、ゲイですがその本場は何処かといいますと。何と日本だったりします。彼のお家ではそれこそそっちの方は昔から普通のことでした。

「それで捕まった人間は一人もいねえのか」

「捕まる方がおかしいのでは？」

こうイギリスに対しても平気な顔で答える日本です。

「同性愛で捕まる方が」

「そうか？俺の家の作家捕まって大変なことになったぞ」

オスカー＝ワイルドという人です。

「それでもそっちはやらないかとか凄く大きいですとかなんだな」

「はい、こんなのもあります」

イギリスに対して出してきたのはです。何と熊先生でした。

「如何でしょうか、これは」

「・・・・・壮絶だな」

その髭だらけの顔の先生が生徒を守る為にやくざ屋さんにナチュラルに・・・・・という展開は最早異次元です。イギリスはその人の漫画を他に何作か読んでついでに夢みたい・・・・・先生にという漫画も読んでそこから日本に対して言うのでした。

「感想聞きたいか？」

「はい、それでは」

「・・・・・ブリーフってやつにトラウマができた」

その下着がやけに出て来たからです。

「人間こんな世界も描けるんだな」

「抵抗ありますか」

「俺の国もこういう話多いけれどな。それでもな」

その衝撃の世界を知ってしまったイギリスでした。彼は今物凄く

悪質な乗り物酔いをしてしまったかの様な顔になってしまっています。

第千二百三十六話　　完

２０１０・２・１６

第千二百三十七話　逃げても見られる　☆

第千二百三十七話　逃げても見られる　☆

ハンガリーから逃げてきたイタリア、水浸しのままでとりあえず逃げられたことをよしとしています。そしてそこに通りがかったのは。

「あっ、神聖ローマ」

「イ、イタリア！」

神聖ローマは彼の姿を見て思わず叫びました。

「御前は何という格好をしているんだ！」

「だってお風呂入ってたから」

「それはわかった！」

問題はそこではなかったのです。

「いいから早くだ！」

「早くって？」

「身体を拭け、そして服を着ろ！」

何故か顔を真っ赤にしてイタリアに言います。

「いいな、早くだ！」

「う、うん」

「さもないと風邪をひくぞ。全く困った奴だ」

こう言いながら自分のマントを脱いでです。そのうえで彼にかけて。

「ほら、タオルを取りに行くぞ」

「わかったよ。それじゃあ」

「ではだ。今からだ」

こうして神聖ローマは彼を保護しました。そしてそれを遠くから見るハンガリーはすっかり興奮した顔になって息を荒くさえさせています。

「可愛い、二人共・・・・・・」
この人もかなりそういうところには興味があるみたいです。

第千二百三十七話　　完

２０１０・２・１７

第千二百三十八話　今ではシャワーですが

第千二百三十八話　今ではシャワーですが

ドイツがシャワーを浴びているといきなりイタリアが飛び込んで来ることがあります。

「ドイツ、大変なんだよ！」

「また御前か！」

いきなり飛び込んでこられたドイツとしてはたまったものではありません。

「どうして御前はだ。いつもいつも」

「だから大変なんだよ。イギリスの奴がね」

「あいつには一人で対応できないのか」

「だってあいつ物凄く強いんだもん」

イタリアから見れば誰もが強かったりします。

「俺一人じゃとても」

「わかった。まずはシャワーを浴びる」

ドイツはイタリアの話を聞いてから述べました。

「まずはそれからだ」

「うん、じゃあ」

こうしてシャワーを浴び終えてから服を着ていざ、というところで。ふとイタリアを見ると。

水浸しです。ドイツは呆れながらまた彼に言います。

「着替えろ、そして身体を拭け」

「えっ、何で？」

「今シャワールームに入ってそれで濡れているんだ、早くしないと風邪をひくぞ」

「あっ、何時の間にこんなに濡れてたんだろ」

「全く。いつもいつもだが」

そんなイタリアに呆れてしまっています。しかしそれでもです。

ドイツは結局のところイタリアの為に動きます。何だかんだでイタリアにとって頼りになる人です。

第千二百三十八話　　完

２０１０・２・１７

第千二百三十九話　お風呂を教えてくれたのは

第千二百三十九話　お風呂を教えてくれたのは

ハンガリーはオーストリアさんのお家に入るまではトルコのところにいました。とはいってもやっぱりオーストリアさんの方がずっと好きな人でありますけれど。

そのトルコがです。ハンガリーに対してお風呂を教えたのです。

「御前も入るんでい。女は女湯があるからねい」

「気付いてたんですか？私が女の子だってことに」

「そりゃ気付くもんだねい。だってこの頃胸が大きくなってきてるじゃねえかい」

「あっ・・・・・・」

「それで気付かない方がおかしいねい。まあ綺麗にしてきな」

「は、はい」

こんなはじまりでした。何はともあれハンガリーはお風呂というものを知りました。

そして今もです。台湾達と一緒に入っています。ところが。

「フランスさんのぞいたりしません？」

「普通にするわよ」

一緒にお風呂に入っている台湾に対して答えています。

「あいつはそういう奴じゃない」

「そうですよね。それじゃあやっぱり」

「気をつけてね」

真面目な顔で台湾に対して話します。

「あいつのやることはね」

「はい、わかりました」

「そういうことだからね」

言いながら周りを警戒しています。そうしてそのうえで誰か覗いていないかどうか警戒しています。お風呂に入るのも結構大変です。

第千二百三十九話　完

2010・2・18

第千二百四十話　フィンランドのお風呂

第千二百四十話　　フィンランドのお風呂

フィンランドのお風呂といえばやっぱりサウナです。サウナに入ってたっぷりと汗をかきます。これが彼のお家のお風呂なのです。

「いや、いつも気持ちいいですね」

「そうですよね。サウナって凄くいいですよね」

独立してから物凄く仲がよくなったエストニアに対して笑顔で話しています。当然二人で一緒にサウナに入ってそれで話をしています。

「こうして温もるんですよね」

「寒いですからね。僕のお家もそうですけれど」

「寒い場所にはサウナですよ」

フィンランドはにこりと笑って述べます。

「あったまってそれからですね。それからは」

「お酒ですね」

「はい、ビールでも何でもありますよ」

ロシアと同じでこうしたお酒はよく飲まれるようです。それも寒いからです。

「じゃあサウナの後は二人で」

「今日はスウェーデンさんはいないんですか」

「いえ、後から来られるそうです」

ちゃんと来るそうです。と思ったら。

「入る」

「えっ、もう来られたんですか？」

サウナに入って来る人がいました。それがスウェーデンでした。

「それでサウナに」

「んだ」

殆ど無言の威圧感でサウナに入って来てです。それからは物凄い

プレッシャーを周囲に与え続けています。サウナの雰囲気は見事に一変してしまいました。エストニアにとっては怖いことに。

第千二百四十話　　完

２０１０・２・１８

第千二百四十一話　こんな想像を

第千二百四十一話　こんな想像を

ハンガリーはフランスを嫌っています。ついでに言えばプロイセンも嫌いなのですがフランスの場合はその理由が実にはっきりとしています。

「あんな変態。オーストリアさんにちょっかいばかりかけて」

「けれどそれでもいつも負けてない？フランス兄ちゃん」

「それでも許せないのよ」

こうイタリアに対しても言うのでした。

「いつもいつもオーストリアさんにね。絶対に許さないんだから」

「けれどハンガリーさんって」

ここでイタリアはふと言います。

「何かオーストリアさんがピンチの時にしか出ないような」

「えっ、それは」

「結構やられてから出て来てないかな。俺の気のせい？」

「き、気のせいよ」

こう答えながらもかなりうろたえています。

「それはイタちゃんの気のせいよ」

「そうなんだ。だったらいいけれど」

「気のせいだからね」

かなり必死に説明しています。

「私別にオーストリアさんのやられてる姿を見てそれから先を想像してあまつさえ興奮しているなんてことは全くないからね。それは安心してね」

「何か凄く焦ってるけれど」

「これも気のせいよ」

本当に必死に言い繕います。ハンガリーかなり必死です。

第千二百四十一話　完

2010・2・19

第千二百四十二話　昔のハンガリーは

第千二百四十二話　昔のハンガリーは

「あいつはなあ」

ハンガリーと古い付き合いのプロイセンが語っています。

「あれなんだよ。昔は自分のことに気付いてなかったんだよ」

「人も国も中々己には気付かないものだな」

「それがかなり違うんだよ」

こう相棒のドイツに話すのでした。

「男だって思ってたんだよ」

「何っ、男だとか」

「ああ。って御前その時いなかったか？もう」

「そういえばいたが。記憶がないな」

何故か昔の記憶はないドイツです。イタリアといつも一緒にいる理由も実際のところはよく認識していなかったりするのです。これは意外なことにです。

「何かあったのかさえな」

「俺は結構昔のこと覚えてるからな」

プロイセンもプロイセンで名前があれこれ変わって過去は色々あったのです。

「まあそれでもな。あいつだけれどな」

「そうか。男だと思っていたのか」

「意外だと。外見はあれだからな」

はっきり言って美人です。それは誰もが認めるところです。

「けれど昔は全然違ったんだよ」

「子供の頃の話だろうが。それでもだったのか」

ドイツもはじめて知った衝撃の事実でした。ハンガリーは今でこそ美しい乙女ですがかつては自分を男だと思っていたのです。遠い遠い昔のお話です。

第千二百四十二話　完

2010・2・19

第千二百四十三話　フランスを成敗してから　☆

オーストリアさんにちょっかいをかけようとしていたフランスをいつも通りフライパンで成敗したハンガリー、すぐにオーストリアさんを心配して声をかけます。

「大丈夫ですか？」

「ええ、有り難うございます」

服が少し乱れていますが何とか無事でした。

「おかげで助かりました」

ですが服が乱れています。それでオーストリアさんもハンガリーに対して言います。

「あまり年頃の女の子が見るものではありませんよ」

「あっ、そうですね」

ハンガリーもそのことを言われて気付いたような顔になりました。とはいってもなっただけなのでありますが。その顔の裏はまた違います。

「それじゃあ後ろ向いていますね」

「はい、暫く御願いします」

こうしてハンガリーは後ろを向きます。オーストリアさんはその間に服を整えます。

しかしその間にです。ハンガリーはこっそりと携帯を出して。

それで密かに撮影です。その顔が物凄いものになっています。

「オーストリアさんってやっぱり美形よね。色気もあるわ」

こんなことを言って物凄く興奮しています。かなり怖いです。

「後でこれを写真にして保管しておいて」

「終わりましたよ、ハンガリー」

すぐにオーストリアさんが言ってきました。ハンガリーはそれを

聞いて携帯をさっと収めてしまいます。その間の動きはまさに稲妻です。

何事もなかったかの様に振り返るハンガリー、しかしその顔はとてもにこにことしています。

第千二百四十三話　　完

２０１０・２・２０

第千二百四十四話　ハンガリーにならって

第千二百四十四話　　ハンガリーにならって

スウジクチームでハンガリーと並んでチームの花となっている台湾、彼女もまた日本に対してはかなりの感情を持っています。

「あの馬鹿がいつもまとわりついて困ってるんですよ」

「あら、生徒会長なのに？」

「はい、日本さんのことが嫌いって言いながらいつも日本さんの隣にいるんですよ。そこは私の場所だって言っても全然聞かないんですよ」

こうハンガリーに対して言っています。何気にその場所が本当に自分の場所なのかどうかは全く気にしてはいません。完全に主観です。

「とんでもない奴ですよね」

「そういう場合はやっつけるのよ」

ハンガリーはここでとんでもないアドバイスをします。

「貴女だって強いんだから」

「だからですね」

「そうよ。その拳法でね」

何気に強い台湾です。第二次世界大戦では大活躍したりもしています。顔は綺麗なのですがその腕はかなりのものなのです。まさに綺麗な花には棘がある。

「やればいいじゃない」

「そうですね。それじゃあ」

そして台湾もハンガリーの言葉に頷きます。

「そうします」

「頑張ってね。それで私みたいにね」

「やります、日本さんゲットです」

気付かないうちに物凄い騒動の中心に置かれている日本でした。

本当に何も知らないうちにです。

第千二百四十四話　　完

2010・2・20

第千二百四十五話　ドスケベ同盟へ　☆

「いやあ、嬉しいぜ」
「ほんまやなあ」
「生徒会長としても大賛成なんだぜ」
フランス、スペイン、そして韓国の三人がハンガリーの前ににこやかに出て来ました。そうして得意満面で彼女にお誘いをかけています。
「前から素質があると思っていたんだよ」
「今日から女の子も加わるんやな」
「あと一人でまたチーム結成できるんだぜ」
「私は違います！」
ハンガリーは必死に三人にクレームをつけます。
「私は清純な愛です！」
「そう、清純だからこそいいんだよ」
勿論フランスの言葉です。
「清純だからな。お兄さんだって清純な愛は大好きなんだぜ」
「まあこいつの清純は普通とはちゃうけどな」
「エロスの起源も俺なんだぜ。だから加入するんだぜ」
「何で貴方はいつも起源を主張するんですか？」
ハンガリーにもわからないことです。
「それも生徒会の仕事してます？」
「ちゃんとしてるから何の問題もないんだぜ」
「ここまで自覚しねえ奴が世の中にいるってことが全く信じられねえ」
これはフランスの言葉です。しかし何はともあれです。
ハンガリーにドスケベ三人がお誘いをかけてきました。ハンガリーにとっては甚だ不本意なことではありますが。

第千二百四十五話　完

2010・2・21

第千二百四十六話　ポルノ大好き

「いやあ、やっぱりいいよね」
「いいんですか」
「無修正は最高だよ」
アメリカが明るい声で日本に答えています。
「何に関して無修正がいいかはあえて言わないけれどね」
「アメリカさんもお好きなのですね」
「僕だって男だよ。嫌いな訳ないじゃないか」
物凄い居直りですがその通りです。男なら嫌いな人間はいない、それこそ阿部さんや熊先生みたいな趣味の人でない限りはです。それはありません。
「そんなことはさ」
「そうですか」
「そういう日本はどうなんだい？」
アメリカは日本に対して尋ねます。
「君の家のゲームはアニメはかなりなんだろう？」
「そうでしょうか。私の家は別に」
「ほら、最近じゃアニメで」
ここでアメリカが話に出してきたものはといいますと。
「聖痕のとかさ」
「あれはそういうアニメではありませんが」
「えっ、そうなんだ」
それを言われてもすぐには信じないアメリカでした。
「けれど実際に無修正版だと」
「あれはあれです」
無理にそういうことにする日本でした。実際のこころ結構苦しい日本の弁明です。

第千二百四十六話　完

2010・2・21

第千二百四十七話　新たに加わるトリオ

第千二百四十七話　新たに加わるトリオ

「俺はそこまで酷いか？」

「だから俺は違うつってんだろうがよ」

「私はあくまで二次元なのですが」

ドスケベ同盟にドイツ、イギリス、そして日本が呼ばれました。

この三人もそれはそれでかなり物凄いからだというのがその理由です。

「俺の家はそこまで変態のものはないつもりだが」

「だからな、酒のせいなんだよ。俺は特におかしなことはだな」

「二次元もそれに入るのですか」

「だから何でこんなに多いんですか？」

ハンガリーはもう泣きそうな顔になっています。

「変な性癖の人が」

「何なら御覧になられますか？プレイされますか？」

日本がそのハンガリーにさりげなく勧めるゲームは。

「クロスデイズですが」

「一体何時出るんですか？そのゲーム」

ハンガリーはさりげなく日本に尋ねます。

「最近それがかなり不安になってきていますけれど」

「さて。何時になるのでしょうか」

何と日本自身も知らないことでした。

「一応三月にはなっていますが」

「そう言って何度も延期になってますよね」

「はい、今度は発売されるのでしょうか」

こんなことを言う始末です。本当に何時発売されるのでしょうか。

そしてまた家系が恐ろしいことに。

第千二百四十七話　完

2010・2・22

第千二百四十八話　中国は昔から

第千二百四十八話　中国は昔から

金瓶梅、中国の家の古典です。しかしこれが。

「物凄い内容ですね」

「過去何度も発禁処分になったある」

中国がその本を読んでいる日本に答えます。

「今では只の古典あるが」

「只のとは言えないのでは？」

日本はここでも見事な突っ込みを入れます。

「水滸伝の裏話ですか」

「主人公が違うある。ついでに言えば作品の中に出て来る御馳走あるがあまり食べ過ぎない方がいいことも言っておくある」

「そうですね。かなりコレステロールが高そうなものばかりですね」

何気に料理もよく出ています。

「食欲にそっちの方もですか」

「まあそういう本ある。結末あるが」

「結局水滸伝に戻るのですね」

「そうしなければ話が成り立たないある」

だからだというのです。

「もっとも水滸伝でもかなり壮絶な場面が出たりするあるが」

「三国志より派手ですね」

「女性関係もある。そういう小説だと思ってくれればいいある」

「封神演義もそうですね」

「とにかく色々な本がうちには昔から存在しているある」

流石に歴史が長いだけはあります。中国もそうした話についてはかなり詳しいです。流石は仙人か何かだけはあります。最近韓国の方が年上だと言っていますが。

第千二百四十八話　完

2010・2・22

第千二百四十九話　外面は真面目

第千二百四十九話　外面は真面目

台湾はかなりおかたい国です。それでいやらしい話とかが出るとかなり怒ったりするのです。それでよく声をかけるイタリアはいつも彼女に怒られます。

「ですから私はそういうのは嫌いなんですっ」

「えっ、けれど女の子って声をかけられるのがステータスなんじゃないの？」

「違います」

この辺りに二人の違いが見事なまでに出ています。

「私はですね。そもそも男の人は恋人だけで」

「ちぇっ、台湾は真面目だなあ」

イタリアもこう言われては帰るしかありませんでした。しかしです。

こうしたことに興味がない人なぞいないのです。台湾にしても。

「貴女も結構」

「駄目ですか？」

「いえ、かなりいいわ」

ハンガリーがかなり危険な目で台湾のベッドの下から出て来たものを見て興奮しています。

「そうなの。こういうのが好きなのね」

「日本さんにはお見せできませんけれど」

「あら、あの人だって結構凄いから」

「そうなんですか」

「浮世絵とか見ればわかるわ。物凄いものがあるから」

何気にそんなことまで知っているハンガリーです。

「だからね。そんなに気にすることはないわ」

「そうですか」

けれどそれを言われても日本に対してはそういうところを見せたくない台湾でした。乙女心は繊細でかつとても複雑なのです。

第千二百四十九話　　完

２０１０・２・２３

第千二百五十話　あけっぴろげ過ぎる

第千二百五十話　あけっぴろげ過ぎる

タイも一見すると真面目です。ですが。

「貴方のところはいつも来る度に凄くなっているわね」

「そうでしょうか」

「ええ、凄くなってるわ」

何気にライバル関係にあるベトナムに言われています。二人の間には誰も何も言いませんが気付かざるを得ない程の緊張が漂っています。

「女の子のことも男の子のことも」

「男の子がお化粧してもいいですよね」

タイはその温和な笑みと共にこう主張します。

「ベトナムさんだって笑うのはお好きでしょう」

「それはね」

ベトナムもそれは否定しませんでした。

「ただ」

「ただ？」

「ここまで開放的にはなれないわ」

こう言うのです。

「貴方みたいに」

「まあ隠しても仕方ないですしね」

タイの考えではそうなのです。彼は隠すべきものは実は何があろうと笑顔の裏に隠しますがその必要がないと思ったら隠すことはない人なのです。

「ですから」

「そうなの。だからなのね」

「はい、そうです。

こうベトナムに話すのでした。彼も中々以上のものがあります。

第千二百五十話　完

2010・2・23

第千二百五十一話　イギリスも変態　☆

第千二百五十一話　イギリスも変態　☆

「よおイギリス」

フランスが全裸で大事な場所を隠して猫耳という異常そのものの格好でイギリスに対して話し掛けてきました。

「一緒に開放的な気分になってみないか？」

「その格好で話し掛けるな！」

流石にこれにはイギリスも抗議します。

「俺まで変態に見られるだろうが！」

「オナ○ーマラソン・・・・・・」

しかしフランスはここで言います。しかも尻尾まであります。一応猫になっているつもりではあるようです。変態さんにしか見えませんが。

「世界で一番エロい都市」

こうした言葉を聞いているうちにイギリスは俯いていきます。そうして表情も暗くなっていきです。そうして遂には。

「この間御前の家の性教育用ビデオ観たけれどあれまんまＡＶだったけれど普段どんだけ過激なＡＶ観てんだよ」

ここで遂に陥落でした。日本シリーズ最終戦で王と長嶋に打たれて遂に崩れ落ちたあの鉄腕稲尾の如く崩れ落ちたイギリスでした。

そしてフランスはにこやかにその彼の肩を叩いて。

「結局御前も仲間なんだよ」

「俺は、あれはな・・・・・・」

「楽になっちまえよ。なっ？」

「けれど御前みたいにはできねえからな」

「何、これもちょっと勇気を出せばできるさ」

そうらしいです。

「何ならつなぎの作業服がいいか？」

そちらはまさに闇の世界でした。イギリスもまんざらではありません。

第千二百五十一話　完

２０１０・２・２４

第千二百五十二話　よく考えたらカオス

第千二百五十二話　よく考えたらカオス

日本のお家の有名な古典の源氏物語ですがイタリアがこれを読んでまず言ったことは。

「凄過ぎない？光源氏って」

「何がでしょうか」

「だってさ。お父さんの奥さんとの間に子供を作ってるんでしょう？」

「それははっきりとはなっていないことになっています」

無茶苦茶怪しいというかそうとしか思えないにしてもです。一応そうなってはいます。そしてこの他にもあれやこれやなのです。

「この時代は奥さん何人いても普通だったんだよね」

「はい、そうです」

「けれどこの人何人の人とお付き合いしてるの？」

イタリアは読みながら言います。

「次から次に出し」

「女性を魅了する方ですから」

「小さな女の子を引き取って奥さんにしたりもしてるよね」

今では一歩間違えれば犯罪です。

「地方にいた時にもそこで女の人と恋愛関係になったりとか」

「ですからもてる方ですので」

「それで子供三人しかいないんだ」

思えばこれもかなり奇妙なことではあります。

「ここまで色々な人とお付き合いしたのに」

「それが因果なのでして」

「登場人物も多いし。凄い作品だよね」

確かにある意味では凄い作品ではあります。日本のお家にはこんなとんでもない名作もあるのです。

第千二百五十二話　完

2010・2・24

第千二百五十三話　聖痕のクェイサー

第千二百五十三話　聖痕のクェイサー

最近日本ではじまったあるアニメですがこれがまた。修正されているのならいいのですが無修正版がです。物凄いことになっています。

「こ、これは・・・・・・」

「かなり・・・・・・」

ハンガリーと台湾もそのアニメを観て呆然かつ興奮しきることしきりになってしまっています。

「凄いなんてものじゃ」

「ここまでやるんですか」

こう言って唖然となっています。そこまで凄いのです。

もうブラとかショーツとかそういったレベルではありません。SMに授乳に丸出しにノーパンに。もうそんな域にまで達しているのです。最早真っ当なアニメではありません。

「声優さんって確か」

「あの軽音楽部の」

その作品に出ていた声優さんが思いきり乱れているのです。二人はそれを観てもさらに言います。

「ここまでするんですね、日本さんのお家の人達って」

「何ていうか」

こう言いながら興奮した顔でアニメを最初から最後まで観ます。

その感想は。

「凄かった・・・・・・」

「こんな素晴しいものが放送されてるなんて」

物凄い感想です。

「日本さん恐るべし」

「お見事です」

何故か日本をかえって尊敬してしまっています。とにかく二人にとってはこうしたことでさえも尊敬することなのです。女の子達もその実は興味があることなのです。

第千二百五十三話　　完

２０１０・２・２５

第千二百五十四話　異形の花々

日本の場合アニメだけではありません。特撮の小説もです。日本はあるライダーの小説を読みました。なお書いたのはあの脚本家さんです。

そして読み終えてから。脚本家さんに尋ねるのでした。

「あの、この内容は」

「どうだった？」

「物凄いですね。これがライダーですか」

「ああ、本当はこういうのが書きたかったんだけれどな」

脚本家さんは悪びれない顔で言います。

「どうだよ。中々のものだろ」

「中々というよりは」

これが日本のコメントです。

「こんなのとても放送できませんよ。ただでさえあの時のライダーは歴代ライダーの中でもかなりヘビーなストーリーだったというのに」

「だから書かなかったんだよ」

脚本家さんは相変わらず悪びれない態度です。

「それでああいう感じにしておいたんだよ」

「それでなのですか」

「そうだよ。それでどうだ？」

脚本家さんから日本に尋ねてきたのです。

「この小説な」

「そうですね。何といいますか」

日本は一呼吸置いてから言いました。

「蛇の人が一番格好いいですね」

このことを感想に留めるのでした。内容についてはあまりにもハ

ードなので言えないのでした。

第千二百五十四話　　完

2010・2・25

第千二百五十五話　女ものだけではなく

第千二百五十五話　女ものだけではなく

その壮絶なアニメに絶句してしまったハンガリーと台湾。しかし日本のお家の中にあるそうした凄いものはそれだけではなかったのです。

「これもかなり」

「そうですよね」

ハンガリーの大好きな方面のものを発見しました。そしてそっちもなのでした。

「あからさまっていうか」

「物凄い内容ですよね」

「男同士の純愛・・・・・・」

ハンガリーはその同人誌というものを読みながら完全にいっています。

「星○にトルー○ーにシュ○トみたいな古典だけじゃなくて」

「今のも随分とありますよね」

「人間○失格みたいなドラマのものまで」

ハンガリーは色々見つけながら興奮の極みにありました。

「素晴しいわ。日本さん」

「ここまで凄いものをお持ちだなんて」

「素敵よ」

また思わず言葉を出してしまった台湾でした。

「日本さん、最高です」

「オーストリアさんもですか」

「是非日本さんのところから輸入しないと」

こんなことまで言います。

「台湾、貴女もどんどんね」

「はい、わかっています」

二人はそのまま日本の同人誌を読んで買っていきます。彼女達にとってはまさに桃源郷でした。

第千二百五十五話　　完

２０１０・２・２５

第千二百五十六話　戦隊の同人誌も

第千二百五十六話　戦隊の同人誌も

「ねえ日本」
「何ですか？」
「この同人誌だけれど」
イタリアはこう言って日本のお家の同人誌を日本自身に見せます。
するとそれは日本達スウジクチームの元になった戦隊のピンクとイエローの同人誌でした。
「これってハンガリーさんと台湾のポジションの娘達だよね」
「はい、そうです」
「その娘達が凄いことになってるんだけれど」
こう言って同人誌の中を見せるとです。本当に壮絶でした。
「ちょっとこれって凄過ぎないかな」
「私もそう思います」
日本もそれは否定しませんでした。
「ですが我が国にはです」
「昔からこういう本多いの？」
「同人誌の世界は特別でして」
こうイタリアに説明するのです。
「それこそ独自の文化になっています」
「えっ、同人誌が文化にまでなってるんだ」
「意外ですか？」
「いや、それってかなり凄いよ」
イタリアは驚きを隠せないまま日本に対して述べます。
「そうか、それも日本なんだ」
「はい、その通りです」
あらためて日本の凄さがわかったイタリアでした。その内容も含めてです。

第千二百五十六話　完

2010・2・25

第二百五十七話　カマボコではありません

第二百五十七話　カマボコではありません

今日も韓国は相変わらずです。生徒会長とかそういうのを抜きにしても傍若無人の限りを尽くしています。勿論会長の仕事なんか全くしません。気付きもしません。

イギリスとフランスが怒りの顔で仕事をしているのをよそに今はフィンランドのお家にお邪魔しています。そのうえでサウナを御馳走になっています。

「いやあ、気持ちいいんだぜ」

「御気に召されたようで何よりです」

「酒飲んだ後に入るサウナは格別なんだぜ」

「あの、それって」

フィンランドはそんな韓国にまずは驚きました。

「自殺行為ですけれど」

「俺は全然平気なんだぜ」

その程度でどうにかなる韓国ではありません。彼はまさに風一つひかない身体なのです。それはそれで周りにとっては有り難いことではありませんが。

「それどころか酒が抜けて気持ちいいんだぜ」

「そうなのですか」

「それにしてもなんだぜ」

酒が抜けるのを感じながら言う韓国でした。

「何か御前を見てると」

「見てると？」

「カマボコを思い出すんだぜ」

フィンランドのある場所を見ての言葉でした。

「うちの家じゃサウナの中で間違えて噛み付いた人がいるんだぜ」

「あの、それは幾ら何でも」

やっぱり韓国は中の人達も違います。最早ある意味超人の集まりです。

第千二百五十七話　　完

２０１０・２・２７

第千二百五十八話　本当の話です

第千二百五十八話　本当の話です

「何でこんなに放火が多いんだ？」

「火を点ける理由も尋常じゃねえぞ」

イギリスとフランスが韓国で頻発している放火の理由を見て呆れた顔になっています。韓国のことには呆れることに尽きない二人です。

「何だ？世の中がいたたまれなくなってだと？」

「スプリンクラーが作動するかどうか見たくて？それで放火するのかよ」

イギリスとフランスはその理由を見て呆れています。

「放火で捕まった奴が出てすぐに放火か」

「夫婦喧嘩の腹いせにか。しかも自分の家に」

しかも放火の数が尋常ではありません。物凄い件数です。

「世の中ここまで放火が多い国があったのかよ」

「理由も尋常なものじゃねえしな」

「俺も家の連中も火が大好きなんだぜ」

その韓国が胸を張って二人に言います。

「だからどうってことないんだぜ。普通なんだぜ」

「いや、全然普通じゃねえよ」

「御前他の国でそれはするんじゃねえぞ」

イギリスとフランスはかなり真剣な顔で韓国に言います。

「まかり間違ってもな」

「それはだけはするなよ」

「けれどよ。放火も文化なんだぜ。俺の国じゃ殆ど日刊放火マガジンなんだぜ」

「そんな雑誌はねえよ」

「っていうか日刊かよ」

あらためてうんざりとした顔になって返す二人でした。一番凄いのは本当の話だということです。

第千二百五十八話　　完

２０１０・２・２７

第千二百五十九話　ブリタリアエンジェル異伝

とにかく何も仕事をせずに余計な仕事ばかり増やしてくれる生徒会長にうんざりしているイギリスとフランスですがここで遂に。何らかの対抗手段を取ることにしました。それは。

「それでだ。あいつをな」

「ああ、魔法をかけてそれでまともにさせるんだな」

「それでどうだ？」

イギリスはかなり非現実的とも思える案をフランスに言いました。

「俺の魔法でな」

「それであいつが少しでもまともになるのならそうしろ」

フランスも最早打つ手がないといった感じです。

「いいな」

「ああ、わかった」

こうしてイギリスは天使の格好になって韓国の前に出ました。しかしです。

「あんた誰なんだぜ？天使に知り合いはいないんだぜ？」

「手前はいい加減欧州のことに関心持ちやがれ」

またうんざりとした白目で突っ込みを入れるイギリスでした。

「まあいい。とにかくこの魔法を受けろ」

「んっ！？」

その魔法を右手のステッキから放ちました。するとです。

韓国は忽ちのうちに小さくなりました。子供になったのです。

「さて、これでいい」

「これでちょっとはましになるのか？」

「普通はなるからな。まあ小さい頃から教えなおせばいい」

こうしてイギリスとフランスで韓国を教えなおすことになりました。なお生徒会の仕事もやりながらです。

第千二百五十九話　完

2010・2・28

第千二百六十話　子供の頃から

第千二百六十話　子供の頃から

「マンチェーーーーーーーッ！！」
子供韓国が元気よく叫んでいます。
「イギリスの起源は俺なんだぜ。フランスの起源は俺なんだぜ」
「だからそれは違うだろうがよ」
「何処をどうやったらそんな理屈になるんだ？」
イギリスとフランスがまた韓国に突っ込みを入れます。
「とにかくだ。欧州は御前とは全く関係ないんだよ」
「それはわかれよ」
「けれど俺一万歳なんだぜ」
それでわかる韓国では当然ながらありません。それでこんなことを言って返してきたのでした。本当に何も変わってはいません。
「世界で一番古いんだぜ。だからそれも当然なんだぜ」
「当然じゃねえよ」
「どういう理屈なんだ？」
これには流石のイギリスとフランスも唖然です。しかしそれでもまだ突っ込みを入れて教えなおそうとします。
「サッカーもウリナラ起源なんだぜ。あとベッカムのルーツは俺の家なんだぜ」
「それ本当か？」
「そんな訳ねえだろ」
速攻でフランスに答えるイギリスでした。
「だから何でそうなるんだ？」
「俺もわからないんだよ」
「とにかくありとあらゆるものの起源は俺なんだぜ」
子供の頃から変わらない韓国の様です。果たしてどうなるでしょうか。

第千二百六十話　完

2010・2・28

第千二百六十一話　その子供の頃は

第千二百六十一話　その子供の頃は

そもそも韓国が子供の頃です。この辺りが実ははっきりしないところがあります。

「何か気付いたらいたあるぞ」

「もっともそれは私達もですが」

中国も日本もかなりの高齢ですがそれでも韓国が何時いたのかはっきり知らなかったりします。

「多分日本より年下あるな」

「私韓国さんが小さい頃家に遊びに来ていたのを覚えていますから」

所謂通信使です。

「かなり長い間小さかったような気がするあるな」

「そうでしたね。李氏朝鮮の間までですか」

ここで韓国の名前のことまでわかりました。

「実は最初お家の人達も三つに分かれていました」

「高句麗、百済、新羅だったあるな」

そもそもお家も複数に分かれていたのです。

「それが一つになって」

「今に至るあるよ」

「そこから高麗になってり李氏朝鮮になったり」

その時代で名前が変わるということは実はよくあることだったりします。中国にしてもその名前があれこれと変わっていったりします。

「モンゴルさんと喧嘩したりもしていましたが」

「それであいつの下にいたこともあったある」

モンゴルはこの二人とも悶着があったりします。物凄く強かったのです。

「あれで結構高齢の筈ですよ」

「それは間違いないある」
意外や意外、韓国も結構高齢だというのです。それで本当は何歳かといいますと。

第千二百六十一話　　完

２０１０・３・１

第千二百六十二話　一万歳はない

第千二百六十二話　一万歳はない

イギリスとフランスはとりあえず韓国の歳を聞きました。少なくとも結構高齢なのもわかりました。これは本当に意外なことですが。

「つまり下手したら俺達より年上なのか？」

「最悪でも同じ位なんだな」

相変わらず子供の姿のままの韓国を傍に置いて話をしています。

「意外とな」

「そうだったんだな」

「マンチェーーーー」

韓国は相変わらずです。二人の横で騒いでいます。何か基本的に普段と変わりません。

そんな彼をよそに二人は検証に入りました。やはり彼は見た目以上に高齢なのです。

しかしです。それでもです。

「絶対に一万歳はないな」

「ああ、ない」

それはよくわかるのでした。

「というかエジプトでもそこまで歳取ってないからな」

「ああ。あれは母親の代だからだしな」

この辺りはギリシアも同じです。

「それを考えてもかなり歳なのはわかったな」

「何だかんだで歳食ってるのは確かなんだな」

それはわかったのでした。とにかく韓国は結構高齢です。

「外見とか性格見る限り全然見えねえんだけれどな」

「今でも何処の馬鹿ガキなんだと思ってるけれどな」

そんな韓国です。やっぱり一万歳はありませんでした。

第千二百六十二話　完

2010・3・1

第千二百六十三話　昔は少し違っていた

第千二百六十三話　昔は少し違っていた

「まあ昔の韓国さんはですね」
「こんなのだったんだな」
「変わってねえんだな」
「いえ、少し違っていました」
日本はこうイギリスとフランスに話すのでした。
「何故か私を弟だと思っているようでしたが起源の主張はしませんでした」
「えっ、そうなのか？」
「あれってこいつのライフワークじゃなかったのか？」
二人は今の日本の言葉にかなり意外な顔になりました。
「俺はてっきりこいつの習性とばかり思っていたんだけれどな」
「ＤＮＡのレベルで組み入れられているんじゃなかったんだな」
「はい、それは違いました」
日本が言うには本当のことらしいと。話を聞いて思う二人でした。
そしてそれは本当のことでした。
「そうしたことは昔は言いませんでした」
「じゃあ最近になってからなんだな」
「あの訳のわからねえ趣味は」
「はい、実はそうです」
こう二人に話します。
「そうしたことはしませんでした」
「何かこいつも変わったりするんだな」
「それが意外だけれどな」
二人はあらためて韓国のことを知りました。彼は今は豪快にいびきをかいて寝ています。そんな彼を見ながらそのうえで話をするのでした。

第千二百六十三話　完

2010・3・2

第千二百六十四話　起源の主張とは

第千二百六十四話　起源の主張とは

「そういえば韓国さんのあの趣味は」
「何時になってからああなったんだ？」
「俺達については殆ど言わねえけれどな」
「韓国さんは欧州にはあまり興味のない人ですので」
これも韓国の習性の一つです。実は彼は欧州のことにはあまり関心がないのです。その分やたらと日本ばかり見ていたりするのです。
「ですから」
「それでか。日本のものばかり起源だっていうのは」
「あと中国と。それとアメリカもだな」
「はい、そういうことです」
人も国も興味のあること以外には中々気付きません。そうした事情がしっかりと存在しているのでした。
「ですから」
「そういうことでか」
「俺達にはか」
「どうも力をつけられてから主張されるようになりました」
これはかなり意外なことでした。イギリスとフランスにとってはです。
「それまではなかったのです」
「そうだったのか」
「それまではか」
「どうも最近になってそうなってしまったので」
日本の話は続きます。
「はしかみたいなものではと」
「随分悪質なはしかだな」
「何時終わるんだ？このはしかは」

思わずこう突っ込んだ二人でした。中々奇妙な事情もわかってきました。

第千二百六十四話　　完

２０１０・３・２

第千二百六十五話　実は離れ離れ

第千二百六十五話　実は離れ離れ

韓国は実のところ一人ではありません。もう一人兄弟がいたりします。

「ああ、あいつな」

「あえて名前は出さないけれどな」

二人もよく知っている相手です。何故名前を出さないかといいますとそれが名前を出すのがはばかれるまでに評判の悪い人だからです。そうした人もいるのです。

韓国がお兄さんなのか弟さんなのかわかりませんがとにかくこの人にも兄弟がいます。しかしその兄弟は特に一万歳とかそういうのではありません。

「当たり前だがな。光の巨人じゃねえんだからな」

「ほっといたらそのうち本当に二万歳とかなりそうだけれどな」

この辺りがまさに韓国です。彼は昔は五千歳と言っていました。それが九千歳になって今では一万歳なのですから。仙人もびっくりです。

そしてその自称一万歳ですが。それについてもです。

「一万歳の兄弟かよ」

「こいつの言ってることが本当だったらだな」

イギリスとフランスは一応そう仮定して話します。

「まあ有り得ないことにしてもな」

「合わせて二万歳か」

「考えてみれば壮絶な話だな」

「っていうかよ」

ここでフランスは言います。

「ローマ爺ちゃんよりずっと年上じゃねえか？」

「そうだな。明らかにな」

一万歳とは言ったものです。そこまでいくと確かに物凄いことではあります。ある意味において。

第千二百六十五話　　完

２０１０・３・３

第千二百六十六話　元に戻してみました

「ところでよ」
「何だ？」
フランスがここでイギリスに声をかけてきてイギリスも応えました。
「こいつもう元に戻さねえか？」
「元にかよ」
「このままにしておいても特に何の意味もねえだろ」
だからだというのです。
「だからな。どうだ？」
「言われてみればそうだよな」
イギリスも言われてみて頷くのでした。
「それならだな」
「ああ、戻そうぜ」
「よし、わかった」
それに頷いてです。イギリスは魔法を使って韓国を元に戻しました。はっきり言って元に戻っても何も変わってはいません。中身が同じだからです。
「やっと戻れたんだぜ。謝罪と賠償として昼飯奢るんだぜ」
「ああ、わかった」
イギリスが舌打ちする顔で彼の言葉に応えました。
「俺が御馳走してやる。ちょっと待ってろ」
「御前の飯はまずいから嫌なんだぜ」
実に無造作に放たれるこの言葉。
「フランスの飯の方がまだずっとましなんだぜ」
「こいつにまで言われるかよ、俺の料理は」
「俺の飯がましかよ。手前の味覚はどうなってやがるんだ」

イギリスだけでなくフランスまでカチンとさせる韓国。本当に何も変わっていません。

第千二百六十六話　　完

２０１０・３・３

第千二百六十七話　そのフランスの料理も

韓国はフランスの料理を御馳走になりました。フランスは作りながら物凄く不満そうな顔をしています。心底嫌なのがわかります。

「くそっ、何でこんなことになってやがるんだ」

「そんなに作るの嫌か？」

「冗談抜きでここから帰りてえ」

こうイギリスにも答えます。

「大体あいつ俺の料理美味いって言ったことねえしな」

「そうだったのかよ」

「ああ。御前の飯なんかもっとだよな」

「かなり引っ掛かる言い方だがその通りだよ」

イギリスもそのことを否定しませんでした。

「あいつが一番まずいって言うからな」

「ったくよ、何が好きなんだよ」

遂にはこんなことも言うのでした。

「あの馬鹿みてえに辛くて暑い料理の他はよ」

「そういう料理作ったらどうだよ」

「俺の味付けじゃねえから絶対にしねえ」

これはフランスのポリシーでした。彼は自分の料理にはとにかく自負がありました。だからこそこう言ったのです。つまりプライドです。

「何があってもな」

「そうか。まあ作るんだな」

「ああ、それでも作るさ。今すぐここから立ち去りたくてもな」

こんなことを言いながら作っていきます。彼も大変です。

第千二百六十七話　完

2010・3・4

第千二百六十八話　食べてみても実際に

第千二百六十八話　食べてみても実際にフランスはかなり嫌々ながら作ったその料理を韓国に食べさせます。そしてその食べた本人の感想はどうかというとです。

「まずいんだぜ」

「お兄さん無差別攻撃したくなったよ」

フランスはそのコメントにこう返しました。予想していたとはいえ彼を怒らせるのには充分過ぎる程のコメントでした。

「それで何でまずいんだ？言ってみろ」

「味がしないんだぜ」

だからまずいというのです。

「ぬるくてチーズとか弱い味ばかりで食った気が全然しないんだぜ。ヨーロッパの奴等はこんなものを食ってるから日本に負けるんだぜ」

「おう、そこで日本が出て来る根拠がもうわからねえがな」

フランスは自分を必死に抑えながら言います。

「それでもう食わないんだな。下げるぞ」

「我慢して食ってやるんだぜ。やっぱりこれなんだぜ」

こう言ってキムチの素や夥しい量の唐辛子を出してです。それを料理の上にこれでもかとかけてです。そのうえで食べはじめるのでした。

「これで何とか食えるんだぜ。あまり見ない顔でも言うが味付けは勉強した方がいいんだぜ。俺の国じゃこんなのは一発で潰れるんだぜ」

「わかったからとっとと全部食って帰れ」

フランスは目を白くさせて暗い顔で韓国に告げました。

「それから二度と来るんじゃねえぞ。生徒会長も一期だけにしておけ」

「っていうか手前Ｇ２０にも入ったよな」

イギリスもこのことを言います。
「それで何で生徒会長にもなってんだ?学校の決まりで会長は強い奴は力持ち過ぎるからなれねえ決まりになってるだろうがよ」
そんな決まりも何のそのです。二人の言葉は完全に耳に入らない韓国でした。

第千二百六十八話　　完

２０１０・３・４

第千二百六十九話　大体会長になったのも

第千二百六十九話　大体会長になったのも

思えば韓国が会長になった時です。二人は最初に思ったのです。

「あいつそこまで力ない訳じゃねえだろ」

「自称だけれどアジアじゃ三番目だぞ」

フランスがうんざりとした顔で自分と同じ表情になっているイギリスに対して言います。

「自称にしてもそれなり以上の力はあるからな」

「それで何で会長に立候補したんだ？」

イギリスが言いたいのはそこです。なおオーストリアさんもかつて生徒会長だったことがあります。これはかなり絵になる姿であります。

「あいつはよ」

「何も理解してねえんだろ」

フランスは見事正鵠を得ました。

「結局はよ」

「それでか」

「ああ、それしか思い浮かばないだろ？」

「確かにな」

イギリスも頷きます。確かにその通りです。

「あいつの場合はな」

「そういうことだろうな。しかしな」

「しかし？」

「なっちまったのは事実だ」

それは事実です。否定しようがありません。

それで今二人はとても苦労しているのです。苦労しているのは生徒会で二人だけです。この辺りも非常に不公平なようになっています。

第千二百六十九話　完

2010・3・5

第千二百七十話　そもそも欧州じゃない

第千二百七十話　そもそも欧州じゃない

「大体よ、アジアだろあいつ」
「今更何言ってんだよ」
「言いたくもなるぞ。あいつ欧州じゃねえだろうがよ」
イギリスは今回はこのことをフランスに対して言います。
「そうだろ？それで何で俺達があれこれあいつの為に苦労しないといけねえんだよ」
「生徒会だからな」
「ちっ、太平洋の三人はあいつ絡みになるとすぐに何処かに消えるしな」
理由は簡単です。韓国を知っているからです。しかも韓国といえば彼なのですが。
「日本もよ。生徒会に入れるか？それであいつ受け持ちにしてよ」
「それはいいけれどよ。どっちにしろ最近じゃサミットにも来てるんだぞ」
韓国はそれが自慢だったりします。尚これは日本に無理を言って招待してもらってそれがはじまりだったりします。けれどそれでも参加していることは事実です。
「Ｇ８からＧ２０になったからな」
「増やすのも考えものだな」
フランスはあらためてこう思うのでした。
「さもないと碌でもないことになるな」
「全くだ。とにかくな」
「ああ」
「あいつ担当いねえのか？」
イギリスはかなりうんざりとした顔になっています。
「一昔前だったらあんなの好きにさせなかったのによ」

「俺達ももうそんな力ねえしな」
この辺りに悲しいところがあります。もう二人には韓国位力がある相手はどうにもすることができなくなっているのです。大英帝国もフランス連合も昔の話です。

第千二百七十話　　完

２０１０・３・５

第千二百七十一話　昔は壮絶でした

第千二百七十一話　昔は壮絶でした

「韓国君？そういえば昔モンゴル君と一緒にいたよ」

ロシアがこのことをイギリスとフランスに話します。

「あの時の彼は凄い目に遭っていたね。もう唖然とする位にね」

「だよな。モンゴルだからな」

「日本の比じゃねえから」

日本なんか甘いという言葉すらおこがましい、それがモンゴルのやり方でした。それこそまさに地獄の様な統治だったのです。

「ハンガリーとかポーランドもモンゴルのこと言う時は青くなるからな」

「あいつの下だったのか」

「もうね。僕以上に凄い目に遭っていたから」

実はロシアにしてもモンゴルには相当な目に遭っています。それはもう彼の性格が全く変わってしまう程です。そこまで壮絶だったのです。

「けれど彼それはあまり覚えてないみたいだよね」

「それで何で日本のことは言うんだ？」

「あんな甘い統治他にねえだろうが」

けれど韓国が言うのは日本のことばかりです。

「あれがわからねえよな」

「全くだ。それにしてもな」

二人はここであらためて韓国を見ます。いつもの様に台湾と日本の傍を争っています。

「だからあんたはどきなさい」

「嫌なんだぜ」

「本当に恐ろしい目に遭ったら今もああして傍にいないよね」

ロシアが何気に核心を衝いたことを言います。実際のところはそ

うなのです。

第千二百七十一話　完

2010・3・5

第千二百七十二話　恐怖の統治

第千二百七十二話　恐怖の統治

モンゴルの統治はどんなものだったか。ハンガリーが証言してくれました。

「ロシアさんそのままでした・・・・・・」

真っ青な顔で言います。気丈な彼女がです。

ウクライナもです。涙顔で言います。

「凄かったのよ。もうね、夜も寝られない位にね」

そこまで凄かったというのです。まさに苛烈そのものだったのです。

「日本さんですか？モンゴルさんとはとても比べられませんよ」

「そうよ。もうね、天国と地獄位違うから」

「天国と地獄か」

「マジでそうだったんだな」

イギリスとフランスは二人の話を聞いてそのことを確信するのでした。

「それで韓国が言うのは日本に対してだけか」

「全然わからねえな」

しかもです。彼の場合はそれだけではなかったのです。

「あいつの昔の上司もな」

「酷過ぎたからな」

その酷さがこれまた筆舌に尽くし難いものだったのです。韓国の昔の上司の政治はそれこそリアルで北斗の拳とかバイオレンスジャックとかそういう世界だったのです。

それと比べれば直後の日本の上司の政治とは。まさに別物だったのです。

「その頃は理想の時代だったっていうんだよな」

「何処がだ？って思うんだけれどな」

それでも韓国はモンゴルやかつての上司については何も言いません。言うのはやっぱり日本に対してだけ、それが彼なのです。

第千二百七十二話　　完

２０１０・３・５

第千二百七十三話　昔の韓国は

第千二百七十三話　昔の韓国は

日本と韓国の付き合いは実はかなり長かったりします。かつて日本のお家にいたことがはじまりではないのです。それよりもずっと前からなのです。

「それこそ私が若い頃からですね」

「えっ、そんなになるのか！？」

「そんなに古いのかよ」

イギリスとフランスはそこまで古いと聞いてかえって驚きました。

「日本の若い頃ってよ」

「かなりだけれどな」

外見は若く見えますが日本も実際のところかなりお爺さんだったりします。スウジクチームの中では最も高齢であったりします。

「そんなに古いのかよ」

「何かそういう話あるのか？」

「私の家の上司には韓国さんがまだ百済や新羅とか別々の上司がおられた時代にあちらから来られた人も結構おられましたし」

「そうだったのか。百済とか新羅の時代からか」

「そういえば源氏物語にも占い師出て来るよな」

フランスはこのことを指摘しました。

「確かな」

「はい、韓国さんが高麗さんというお名前だった時ですね」

韓国も名前が結構変わっていたりします。

「あの頃実際におられたようですし」

「そうか、本当に古いんだな」

「日本と韓国の付き合いもな」

実はそうだったのです。かなり古い付き合いなのです。

第千二百七十三話　完

2010・3・6

第千二百七十四話　アメリカにしても中国にしても

第千二百七十四話　　アメリカにしても中国にしても

アメリカにしてもです。実は韓国との付き合いは結構長かったりします。それは彼と日本が黒船で出会った時と比べてもそんなに変わらない程です。

「ついでっていう感じだったんだけれどな」

アメリカはその時のことを明るく話します。

「それでも韓国は気付いたら日本の家にいたな」

「僕はそれこそ漢だった頃からの付き合いある」

中国はそうだったのです。

「高句麗とかいう家だったあるな。昔は」

「君が一番長い付き合いだな」

アメリカは明るく中国に対して言います。

「僕も彼との付き合いには君のそれを参考にさせてもらっているよ」

「それは何よりある。昔から付き合うのに苦労する奴だったある」

「ＨＡＨＡＨＡ、そうなのか」

アメリカはそれを聞いても笑うだけです。

「彼はずっと変わらないのか」

「昔はあんな起源病はなかったあるがな」

「っていうかあの病気は何だってんだ」

「さっぱり理解できねえんだけれどな」

イギリスとフランスにとっては韓国は付き合うのに非常に難しい相手であり続けています。

「しかしこいつ等あいつとの付き合いは平気みたいだな」

「太平洋じゃあれが普通なのか？」

流石にそんな筈はないのですがこんなことまで考えてしまうようになってしまっている二人なのでした。とにかく無意味なまでに個

性が強く有り得ないまでに自己主張の強い彼だからです。

第千二百七十四話　　完

２０１０・３・６

第千二百七十五話　モンゴル撃退成功

第千二百七十五話　　モンゴル撃退成功

あの恐ろしいまでの力を誇ったモンゴルですがそれでも敗れたことはあります。その破った人達の方がかなり凄いと言われています。

「あの時は苦労しましたね」

「はい、大変でした」

日本とベトナムです。一見すると大人しい二人ですがその戦闘力については誰もが知っています。最早言うまでもない位です。

「あの時のモンゴルさんといえばです」

「まさに敵なしでしたから」

その彼が二人のところにも攻め寄せてきたのです。それに対するだけでもかなり大変だったのです。ましてや勝つなどとはです。

それでも勝ったこの二人はやはり凄いです。それでも今は遠い彼方です。

「思えばあの時のことは」

「もう遠い記憶の彼方ですね」

「神風が吹きましたが」

「私はジャングルに入りました」

日本はおまけに島国です。それも大きかったのです。

「とにかく激しい戦いでしたが運もありました」

「本当ですよね。まさか勝てるなんて思いませんでした」

それでも戦わないといけない時があります。そして二人にとってはモンゴルとの戦争はまさにそうしたものだったのです。しかし二人は勝ちました。

「何とかなりましたしね」

「ええ、確かに」

こんな話をするのでした。二人の全てをかけた戦いだったのです。

第千二百七十五話　完

2010・3・8

第千二百七十六話　韓国の名前は

第千二百七十六話　韓国の名前は

モンゴルに負けてその下にいた時の韓国の名前ですが。今とは違っていました。

「あれは仕方なくだったんだぜ」

「それであの名前にしていたの？」

「そうだったんだぜ。御前はモンゴルの恐さを知らないからわからないんだぜ」

こう台湾にも話すのでした。

「それこそ。この世のものとは思えない程だったんだぜ」

「それで名前もだったのね」

「ああ。殆ど強制的に変えさせられたんだぜ」

日本にいた時は自分から日本の名前を欲しがった韓国ですがモンゴルの時は勝手が違っていたようです。どうやら本当にとんでもない状況だったみたいです。

「若し逆らえば」

「どうなったの？」

「死、あるのみだったんだぜ」

これが冗談じゃなかったのです。

「上司なんか奥さんは絶対に向こうの人だったし」

「奥さんまで決められたのね」

「それで生まれた人が次の上司になって延々と繰り返させられたんだぜ」

「じゃあ上司の人殆どモンゴルの人だったのね」

そうした結婚と継承を繰り返せばどうなるかは言うまでもありません。

「あんたのあの時の上司って」

「一番偉い上司がそれで他の上司もどんどんモンゴルから来て」

そこまでやられていたのです。
「本当にあの時は大変だったんだぜ」
「日本さんよりずっと酷かったのね」
こっちはリアルなのでした。だからこその恐怖だったのです。

第千二百七十六話　　完

２０１０・３・８

第千二百七十七話　それで結局日本は

第千二百七十七話　それで結局日本は

台湾は韓国に対して言います。
「結局あんたのところの人って」
「何なんだぜ？」
「日本さんのお家にいる時で倍に増えてるのよね」
台湾にしろ日本のお家にいた時に人の数がかなり増えています。とりわけ韓国に至っては倍にまでなったのです。これはかなりのことです。
「それにダムも造ってもらったし。木だって植えてもらったし」
「元々人が増えてきていて近代化の芽もあって木は日本が伐採したんだぜ」
けれど韓国は台湾の言うことと全然逆のことを言います。
「それこそこの世でもっとも恐ろしい支配だったんだぜ」
「それはロシアさんでしょ？」
台湾にしてもロシアのことは知っています。
「ロシアさんだったらもう行楽どころじゃないわよ」
「行楽だって無理矢理行かせられたんだぜ」
「強制行楽って何なのよ」
台湾はそのはじめて聞く言葉に首を捻りながら言葉を返しました。
「そんなのある訳ないでしょ。っていうか何それ」
「だから強制連行と同じなんだぜ」
「強制連行もね」
台湾はこのことも知っています。
「前から言いたかったのよ、あんたにこのことでね」
「言いたかったこと？それは何なんだぜ」
こうして台湾は韓国に対してこのことを話しはじめました。思えばこの人も随分と苦労性です。

第千二百七十七話　完

2010・3・9

第千二百七十八話　所謂強制連行

第千二百七十八話　所謂強制連行

台湾は韓国に対して言います。
「あんたあの時日本さんのお家にいたのよ」
「無理矢理入れられたんだぜ」
「だから自分から入りたいって言ってたじゃない。一進会とかで」
そうした事情から話す台湾でした。
「私もだったし。日本さんのお家にいたら日本さんの用事で働くのは当然でしょ」
「そんなの俺の知ったことじゃないんだぜ」
「知ったことよ。だから日本さんの上司の人に言われて日本さんと一緒に働いていた。これって全然強制連行じゃないのよ。日本さんのお家に呼ばれてもね。そもそもよ」
「まだ言うんだぜ？」
「言うわよ。お仕事を日本さんのお家でしろと言われただけだしあんた殆ど自分のところで働いていたじゃない」
来てもらうのにも手間隙がかかります。それならそこで働いてもらうのに越したことはありません。今よりもずっと移動に手間隙がかかる時代でしたから。
「そうでしょ？何が強制連行よ」
「俺も連れて行かれたし家の人間も随分連れて行かれたんだぜ」
「あのね、八百四十万人も強制連行したって幾ら日本さんでも無理よ」
こんな桁外れの数字まで出ている始末です。
「それだけの圧倒的な力があれば日本さん今頃学園も何もかもを支配しているわよ」
「だから日本は学園支配を目論んでたんだぜ。凄く悪い奴だったんだぜ」

「日本さんそんな野望とかないし。大体その論理だと」
論理かどうか怪しいですがそれでも台湾は言います。
「あんたその悪い人の片棒担いでいたってことになるんだけれど」
台湾の言うことはかなり厳しいです。実際のところ韓国はこの時日本の上司にかなり可愛がられていたわけで。実情は韓国の主張とは全然違うのでした。

第千二百七十八話　　完

２０１０・３・９

第千二百七十九話　結構幸せ

第千二百七十九話　結構幸せ

過去は色々とあった韓国です。しかし結局のところは。

「あいつの悪運は尋常じゃないです」

台湾が言います。

「困った時には日本さんがいますし。ピンチになっても何故か生き残りますし」

国としてはあまり大きくないのにです。

「だから今まで生き残っていますし」

「確かに運は凄いな」

「そうだよな」

イギリスとフランスもそれは頷くところでした。

「それもかなりな」

「凄まじいレベルでな」

二人で言います。

「しかもあいつあれだけ迷惑なのにそれでも人間として愛敬もあるんだよな」

「妙にな」

確かに起源の主張病があって仕事を全くしないで訳のわからないことばかりしていてもです。不思議と嫌われる人間ではありません。

「何でかわからないけれどな」

「だよなあ。孤独な奴でもないしな」

「だっていつも日本さんにまとわりついてますから」

韓国が日本を見ないことは絶対にありません。

「寂しい筈がないですよ。私だって日本さんといつも一緒にいたいのに」

「いや、いつも一緒にいないか？」

「それには賛成できないぞ」

イギリスとフランスは台湾の今の言葉には突っ込みを入れました。
彼女もいつも日本の傍にいますから。

第千二百七十九話　　完

２０１０・３・１０

第千二百八十話　Ｇ２０になっても

第千二百八十話　Ｇ２０になっても

サミットも何時の間にか大きくなり今では二十国を数えるようになりました。そしてその中には彼も含まれているのです。

「ったくよ、この顔触れにいるのに生徒会長はねえだろうが」

「何度止めとけって言ったんだよ。本当に就任しやがるしよ」

イギリスとフランスは例によって韓国を見ながらぶつぶつと言っています。

「しかし。それでも二十人か」

「増えたな、本当に」

中国もいますし他の国々もいます。とにかく増えています。

そしてその韓国ですが。いることにはいますが。

「あれっ、君は何も言わないのかい？」

「とりあえずホスト役だから言うある」

「何もありません」

アメリカと中国に対してはそれなりに低姿勢の韓国です。しかも何故かこれといって発現しようとしません。彼にとっては珍しいことにです。

「今は皆さんの言葉を聞かせてもらいます」

「だからよ。国際会議だと何も言わないのは何でなんだ？」

「いつものハイテンションは何処に行ったんだ？」

イギリスとフランスはここで発動した韓国の謙虚モードに首を捻ります。

「日本もいるのによ」

「こうした場所だと静かになるんだよな」

韓国の訳のわからないところです。

「人見知りとは全然縁のない奴なのにな」

「何でなんだ？」

それが謎なのでした。そんな訳のわからないところもある韓国です。

第千二百八十話　完

２０１０・３・１０

第千二百八十一話　日本だけでもチームを

第千二百八十一話　日本だけでもチームを

日本のお家には色々な人達がいます。それこそどれだけいるのかわからない位です。仮面ライダーや脚本家さんだけではないのです。

その中でふと会津が言いました。

「私達もチームを作りませんか？」

「ちゅうとあれやな」

それを聞いた大阪がすぐに応えました。

「日本さんを中心にしてやな」

「はい、それでいこうかと」

まさにその通りだというのです。

「尾張さんはもうスウジクチームに一応入っていますし」

「そやな。じゃあそれでいこか」

大阪が賛成して日本に話してみます。すると日本も。

「わかりました。それでは」

一も二もなく賛成してくれたのでした。

「ただ。チームは何でしょうか」

「それはもう決まってるで」

「あれしかりません」

大阪も会津もすぐにこう言ってきました。そのチームは。

「日本ちゅうたらあれや」

「あれにしましょう」

「そうですか、あれですか」

日本もすぐにわかりました。そのチームとは果たしてどういったチームなのでしょうか。何はともあれまた新たなチームの結成です。

第千二百八十一話　完

2010・3・11

第千二百八十二話　女性陣二人は

第千二百八十二話　女性陣二人は

かくして日本を中心に結成されることになりましたがチームは普通は五人です。日本はその二人のことを会津と大阪に対して尋ねました。

「それでどなたが入ってくれるのでしょうか。二人ですが」

「東北の二人です」

「それでどや？」

こう言って連れて来られたのは仙台と津軽でした。

「えっ、私？」

「戦隊なんだ」

何か対応が対称的です。仙台は何処かおどおどとしているのに対して津軽は何か楽しそうです。この辺りに個性が出ていると言えます。

「とりあえず喧嘩とかしないですよね」

「だったらいいけれど」

「喧嘩とかはありませんから」

当然リーダーになることが決まっている日本が二人に対して話します。

「ですから安心して下さい」

「そうですか。それだったら」

「御願いします」

「これで決まりですね」

「そやな。五人揃ったで」

会津と大阪が笑顔で言います。

「しかし。東北が三人ですか」

「まあええやん。追加メンバーもあるしな」

それも既に決まっているのでした。話はどんどん動いています。

第千二百八十二話　　完

２０１０・３・１１

第千二百八十三話　侍戦隊

第千二百八十三話　侍戦隊

こうしてまずは日本と会津、大阪、仙台、そして津軽の五人でチームが結成されたのでした。しかし問題はそのチームの名前です。

「それで何なのですか？」

「ニホン戦隊です」

会津がこう日本に答えます。

「日本の中だけで構成されていますから」

「だからなのですね」

「それでは駄目でしょうか」

日本に問い返しもする会津でした。

「日本さんが駄目なら他の名前を考えますが」

「何ちゅうても日本さんがリーダーなんやし」

大阪も言います。見れば日本が上座でそこに座っています。やはり一国であるというのは非常に大きいです。まさに殿様です。

「それは当然やで」

「私は別にいいです」

日本はいつもの謙遜モードでした。

「では。そのニホン戦隊なのですね」

「はい、戦隊でもチームでもそこはいいですが」

「それで決まりやな」

「まさか日本の中だけでチームができるとは」

日本も内心驚いています。

「ライダーだけではなくなってきましたね」

こうしてさらに陣容が濃いものになっていく日本でした。もうそれは止まりません。

第千二百八十三話　完

2010・3・12

第千二百八十四話　黒子がいます

第千二百八十四話　　黒子がいます

この戦隊には大きな特徴があります。それが何かというとです。黒子が周りにいます。そして皆の仕事を手伝ってくれたり身の回りのお世話をしてくれるのです。これはかなり有り難いことです。

「いや、これはかなり」

「助かりますよね」

仙台と津軽もこのことにかなり喜んでいます。

「お掃除にお料理もお洗濯も上手ですし」

「おまけに出て来る時は陣も作ってくれますし」

まさにいたせり尽くせりなのです。おかげで皆何をするにも非常にスムーズにいっています。困るということは全くありません。

「有り難い人達ですよね」

「本当に」

「若しかするとこの戦隊が一番恵まれているかも知れませんね」

日本もお茶を受け取りながら言います。

「もう何もすることがありませんし」

「本当ですね。どのチームにもこうした人達はいませんよ」

「いや、おかげでわし等かなり楽してるで」

会津に大阪もこのことに満足しています。

「こんないいチームになるとは思いませんでした」

「ごっついええわ。こんなのでええんかいな」

「もっともこの戦隊の敵はかなり凶悪ですがね」

ここで日本が言います。

「それは注意しないと」

「そうですか。悪霊みたいなのがですね」

「出て来るんやったな」

流石にそういうのとは戦いませんが。それでもどうやらいいこと

ばかりではないみたいです。

第千二百八十四話　　完

2010・3・12

第千二百八十五話　爺や登場

第千二百八十五話　爺や登場

この戦隊はとにかく協力者といいますかバックアップが尋常ではありません。この辺り日本のお家の底力が見えないわけでもありません。

そして爺やまでいます。この人が誰かといいますと。

「貴方でしたか」

「おう、俺になった」

何と某脚本家さんです。この人が爺やになったのです。しかも服装は和服です。これがかなり似合っていて渋さすら醸し出しています。

「宜しくな」

「またどうして貴方なのですか？」

「脚本家が俺の舎弟なんだよ」

女の人ですがそうなっているのです。

「その縁でだ。別にいいだろ」

「ええ、まあ」

日本にしても特に反対する理由はありません。

「それでしたら」

「じゃあ決まりだな。俺が爺やだ」

「はい、宜しく御願いします」

「じゃあ早速書道だ」

脚本家さん主導で五人が集められて修業に入ります。

「俺が書道を教えてやる。感謝するんだな」

「あっ、そういえばこの人って」

「書道できたんだ」

何と書道五段だったりします。意外なところで特技を見せるので

した。

第千二百八十五話　完

2010・3・13

第千二百八十六話　特技を遺憾なく

第千二百八十六話　特技を遺憾なく

その書道の腕前で五人を鍛える脚本家さんですが他にも色々と教えるのでした。柔道に空手もです。流石に剣道は専門家ではありませんが。

それがまたかなり強いです。五人も驚いています。

「ええと、脚本家なんですよね」

「そうやったよな、確か」

「ああ、そうだ」

脚本家さんはりりしい空手着姿で会津と大阪に対して言います。

「俺が脚本家でなくて何なんだ？」

「けれど何で」

「こんなに強いんや？」

「俺の趣味は身体を鍛えることなんだよ」

ここであらたにわかった趣味でした。

「だからなんだよ。他に釣りもするがな」

「そんなに多趣味な方だったとは」

「かなり意外なんやけれど」

「安心しろ、御前等をみっちりと鍛えてやる」

最早爺やではありません。

「もう一人増えてもそいつも鍛えてやるからな」

「これは凄いことになりましたね」

殿である日本も静かに言います。

「まさかこうした状況になるとは思いませんでした」

「そうですね。これは」

「かなり凄いことになってますよ」

仙台と津軽も言います。中心が殿様ではなく脚本家さんになってしまっています。これもかなり凄いことです。

第千二百八十六話　完

2010・3・13

第千二百八十七話　圧倒的なリーダー

第千二百八十七話　圧倒的なリーダー

黒子の人達に脚本家さんまで揃って遂にメンバーとなりました。まずはリーダーでもあるシンケンレッドこと日本です。殿様でありますしそのポジションはかなり高いです。

「ここまで地位の高いレッドは今までいたでしょうか」

「そう言われますと」

「おらんかったんちゃうかな」

会津と大阪もちょっと心当たりがありません。

「まず圧倒的ですよね」

「殿様やしな」

「そうですよね。なかったですよね」

日本にしろ心当たりがない位です。

「ビッグワン位ですよね」

「あそこまでいきますかね」

「そこまで圧倒的なんやな」

とにかく日本の地位が半端ではありません。日本はスウジクチームではグリーンでありますがその時とも比較にならないまでに地位が高いです。

「ですが何しろ私達の母国ですから」

「気にすることないですよ」

仙台と津軽はこう彼に告げます。

「リーダーであるのも当然ですし」

「日本さんですから」

「どうもすいません」

日本は殿様の席から二人に対して応えます。殿様であっても謙虚なのは変わらない日本でした。かなり謙虚なお殿様の誕生となりました。

第千二百八十七話　完

2010・3・14

第千二百八十八話　本当にかしづかれる

第千二百八十八話　本当にかしづかれる

日本が殿様でありリーダーであるこのニホンチームですがその指揮統率も当然日本が行っています。それがかなり的確だったりします。

「お掃除はまずはお庭からしましょう」

「そして最後はゴミを捨ててですね」

彼の指揮の下で皆的確に動きます。皆の動きもそれもあってかなりいいです。

「何か日本さんの指示って」

「そうですよね」

仙台と津軽もその中で言います。

「周りも場所も私達も考えてくれていて」

「物凄く動きやすいですよ」

「そう言って下さって何よりです」

日本も二人の言葉を聞いて安心しています。

「私としましても皆さんと一緒だと何かとやりやすいです」

「やっぱり同じ国だからですよね」

「そのせいですよね」

「はい、やはりそれが大きいと思います」

これは自分でも自覚しているのでした。

「同じ国の人達がやはり一番ですね」

「そうですよね。やっぱりこうして同じ国同士で何かやるのって」

「やりやすいですよね」

「私はあまりリーダーには向いていませんが」

自分ではそう考えている日本なのです。

「ですがこのチームは何かとやりやすいですね」

同じチームであるということをこの上なく有り難いと思っている

日本なのでした。

第千二百八十八話　完

2010・3・14

第千二百八十九話　青い歌舞伎役者

第千二百八十九話　青い歌舞伎役者

ニホン戦隊二番手は多くのチームで見られるようにブルーです。ニホンブルーは誰かといいますと会津です。彼がブルーになるのでした。

「しかしこのポジションは」

「滅茶苦茶濃い役やで」

「そうですよね。歌舞伎役者で己を戒める為に水を浴びたりしていましたし」

大阪に突っ込まれながらこのことを言います。

「水を使いますし、実際に」

「参謀のポジションの筈やったんやけれどな」

「何か別のことしてましたよね」

「殆どお騒がせ要員やったな」

実際のところそうした役だったのでした。けれど会津はどうかというとです。

「私はあそこまで無茶をするつもりはありませんから」

「それはないんか」

「ないというよりできません」

これは会津の性格故でした。

「それに歌舞伎にしてもです」

「嫌いではないやろ？」

「むしろ上方歌舞伎の大阪さんの方が詳しいのでは？」

実際に大阪の歌舞伎への知識等はかなりのものです。それについては日本のお家の中でもトップクラスであると言ってもいい程です。

「そうではないですか？」

「まあそうかもな」

けれど会津がブルーなのでした。これは変わりません。

第千二百八十九話　完

2010・3・15

第千二百九十話　この人が参謀に

第千二百九十話　この人が参謀に

この戦隊では本来は違うのですがその性格故にブルーが参謀になりました。日本はその彼を穏やかに迎え入れるのでした。

「では御願いしますね」

「どうも」

この温厚なところがやっぱり日本です。何はともあれこの人も日本に迎え入れてもらえました。そして何かあるとすぐに日本やメンバーに対して助言をします。

「日本さん、ここはこうしましょう」

「皆さん、すぐにあちらに向かいましょう」

その判断もタイミングも見事です。正直他の戦隊と比べてもかなり見事な参謀です。というよりかは明らかに参謀が機能していないチームも多かったりします。

「私も参謀には向いていないようですし」

日本も自分でこう考えています。

「会津さんの存在が非常に有り難いです」

「日本さんっていざとなったら特攻するさかいな」

会津がその日本に対して言います。

「そらやっぱりそういうところは参謀にはな」

「向いていませんか、やはり」

「危険やで」

そもそもそうした事態を避けるのが参謀ですから。そのせいでスウジク戦隊はドイツがリーダーだけでなく参謀も兼ねています。あまりにも特攻とか玉砕ばかり主張するのでドイツが兼任する事態になったのです。

「ですが私が務めさせて頂きますので」

「はい、御願いします」

まさに適材適所です。しかも強い。ニホン戦隊にとっては欠かせないとても頼りになる参謀です。

第千二百八十話　　完

２０１０・３・１５

第千二百九十一話　グリーンになったのは

第千二百九十一話　グリーンになったのは

三番目はニホングリーンです。それが誰かというとです。

「俺やな」

「大阪さんがグリーンですか」

「何か合わへんかな」

「そこまでは思いませんが」

日本はその大阪を見ながら言います。この戦隊では他の戦隊の様に雑魚エットがないので普通の服で緑のそれを着ているのです。

「ただ」

「ただ？」

「キャラクターが違いますね」

日本が言うのはこのことでした。

「この戦隊でのグリーンははねっ返りの方でしたが」

「まあそれはそれ、これはこれっちゅうことで」

大阪はそれは気にはしていませんでした。これは日本も同じです。

「それでなんですけれど」

「どうされたのですか？」

「俺料理もできますさかい」

言いながら早速自分でも用意をしていきます。

「何なら食べますか？」

「たこ焼きでしょうか」

「他にはお好み焼きとかきつねうどんとか何でもありますで」

「それでは皆さんで」

日本は他のメンバーも呼ぶのでした。ブルーもグリーンもキャラは全く違うのでした。

第千二百九十一話　完

2010・3・16

第千二百九十二話　カレーも独特

第千二百九十二話　　カレーも独特

ニホングリーンこと大阪は料理上手です。けれどその中にはいささか風変わりな料理もないわけではありません。

例えば鰻丼ですが御飯の中に鰻を入れていたりします。これが大阪の方では名物だったりします。

「どないや？」

「あっ、こうした食べ方も」

「いいですね」

仙台と津軽は実際に食べてみて言います。

「こうした鰻丼もあるんですか」

「成程、意外ですね」

「それにカレーもや」

それもあるのです。

「カレーはこういう感じやがな」

「へえ、これはまた」

「面白いですね」

出て来たのはカレールーと御飯を最初から混ぜてその真ん中に卵を置いたものです。これはかなり変わったカレーでした。少なくとも他にはありません。

「名付けて織田作之助カレーや。どうや？」

「昭和の味がしますね」

日本はそのカレーを食べながら言いました。

「それにデザートは」

「勿論あれです。二つの御椀に入れた善哉ですさかい」

「夫婦善哉ですね」

「そうです。あれですわ」

デザートも一風変わったものです。けれどその味は確かなのでし

た。

第千二百九十二話　完

2010・3・16

第千二百九十三話　ドンゴリピンク

第千二百九十三話　ドンゴリピンク

ピンクが誰か、とはいっても二人しか残っていませんけれど。
「私がなんですか」
「はい、貴女です」
日本が告げたのは仙台に対してでした。彼女がニホンピンクになるのでした。
「宜しく御願いしますね」
「わかりました。けれど」
ここで仙台は言うのでした。結構怯えた様子で。
「私強くないですけれど。戦いも嫌いですし」
「いえ、そうでもないと思いますが」
けれど日本はこうそのニホンピンクに対して言うのでした。
「貴女も頑張っているではないですか」
「そうでしょうか」
「はい、前の戦争の時も」
第二次世界大戦の時です。
「それにロシアさんとの戦争の時も」
「どちらもそれこそ日本さんの命運を賭けた戦いでしたから」
それこそお家の皆が命懸けで戦った戦争だったのです。まさに生きるか死ぬかの瀬戸際だったので皆が必死になって戦ったのです。
「ですからそれは別に」
「私の家にそうした人はいませんから」
日本はさらにこう言いました。
「貴女にも期待しています」
「そうなんですか」
自分では中々わからないことのようです。こうして仙台がピンク

になるのでした。

第千二百九十三話　完

2010・3・17

第千二百九十四話　参謀ではありませんが

第千二百九十四話　参謀ではありませんが

この戦隊では本来参謀はピンクでした。けれどそれは既にニホンブルーこと会津がやっています。ですからそうはならないのでした。

「じゃあ私は」

「お料理はできますし何かキャラが違いません？」

「そうですよね」

こう会津にも応えます。

「それでもいいんですか」

「別にいいと思いますよ。他の戦隊では性別まで違っていたりしますから」

「イギリスさんとかですか」

「あそこまで露骨にネタになるよりはずっといいですよ」

何せ子供達にまでスマイル満開の時のポーズがきもいと言われているイギリスです。それと比べたら確かにどれだけいいのかわかりません。会津もそれを言うのでした。

「ですから」

「そうですね。じゃあ私は私のやれることを精一杯たらせてもらいます」

「それでいいと思います」

「わかりました。それにしてもこの扇子は」

仙台は今扇子を持ってそれで構えています。

「奇麗ですね。武器にするのは惜しい位に」

「ですが中々強力な武器です」

「そうなんですよね。刀もありますし」

まさに日本の武器です。

こうして仙台も自分のできることをするのでした。日本戦隊もかなりまとまりがいいです。やっぱり同じ国同士というせいでしょう

か。

第千二百九十四話　完

2010・3・17

第千二百九十五話　赤くてもイエロー

第千二百九十五話　赤くてもイエロー

津軽といえばやっぱり林檎です。それでも津軽はこの戦隊においてはイエロー、ニホンイエローとなるのでした。

「どうしてでしょうか」

「何となくではないでしょうか」

日本はこうその津軽の問いに答えます。

「ですからあまり気になされなくても」

「いいんですね」

「そう思います。しいて言えばキャラの素朴さが似ているのかも知れません」

そういう理由でイエローらしいです。けれどメンバーになったのは事実ですしそれで決定しました。何はともあれ彼女がニホンイエローです。

その津軽ですが。何気に言葉は凄いです。

「普段はわかる人がいなくて普通の言葉にしてます」

「そうなのよね。私も」

そしてそれは仙台も同じなのでした。

「方言って難しいから」

「私の方言なんか特に」

津軽の言葉は特に凄かったりします。

「濁音が凄くて皆聞き取れないっていうから」

「あの作家さんもそれで苦労したらしいわね」

「ああ、あの人ですね」

津軽と言えばまさにあの人です。もう言うまでもありません。

「そうです。その方言で」

「わかりにくいからね。だから」

それであえて標準語を話しているのです。方言も大変です。

第千二百九十五話　完

2010・3・18

第千二百九十六話　冬景色

第千二百九十六話　冬景色

津軽と言えば林檎に雪です。あの作家さんの他にはそういったもので有名です。

「もう冬景色なんかは凄いですよ」

「ああ、歌になってるな」

大阪もそれは知っています。

「海峡のあれやな」

「はい、そうです」

「あれええ歌やん」

大阪は気さくにこう津軽に対して言います。

「聞いていてじんとくるで」

「大阪さんについて歌った歌も多いですけれどね」

「まあ演歌の定番やな」

実際に大阪について歌った歌も多かったりします。

「けれど一番ようさんかかる歌はな」

「虎ですか」

「そや、六甲おろしや」

もうこれしかありません。大阪を支配していると言ってもいい歌です。

「あれが一番ようさんかかるな」

「けれど阪神は西宮なんですよね。大阪ではないですよね」

「それでも大阪の心になってるんや。大阪いうたらやっぱり阪神や」

これはどうしても引けないものがあります。とにかく大阪といえば阪神です。あの縦縞のユニフォームこそがそのシンボルなのです。

「そやから六甲おろしや」

「そうなんですね」

こういう理由からでした。何気に大阪の方がよく歌われてますが

それでも津軽の曲はもう永遠になっています。

第千二百九十六話　　完

２０１０・３・１８

第千二百九十七話　寿司の戦士

第千二百九十七話　寿司の戦士

この戦隊にも六人目の戦士がいます。その追加戦士ですがこの戦隊においてはそのポジションが極めて独特なものだったりします。

「お寿司ですからね」

「そうですよね」

日本と津軽が言います。何と六人目は侍ではないのです。

「寿司職人、さて」

「誰でしょうか」

「こいつになったぞ」

爺である脚本家さんがここで連れて来たのはです。能登でした。

「こいつがなったからな。ニホンゴールドだ」

「そうですか。貴方だったのですか」

「はい、僕になりました」

その能登が日本の前に出て来て答えます。

「宜しく御願いします」

「六人目になったのはやはり海の幸の影響でしょうか」

「多分そうだと思います」

こう日本に対して答えます。

「やっぱり」

「そうですか。それでは宜しく御願いしますね」

「はい、こちらこそ」

「これで全員だな」

脚本家さんは六人を見回してから言いました。

「じゃあ河豚でも食うか、河豚な」

何故かここで河豚を出すのでした。この人の好物だからです。

第千二百九十七話　　完

2010・3・19

第千二百九十八話　職人としての腕は

第千二百九十八話　職人としての腕は

ニホンゴールドは居合もしますが基本は寿司職人です。ですから屋台を持っていてそのうえでお寿司を皆に振舞うのです。このこともかなり特徴的です。

「しかし屋台のお寿司というのも」

「今では殆どないですよね」

「そうですよね」

能登も仙台と津軽の言葉に応えて頷きます。

「最初はありましたけれど」

「最初とは江戸時代のことですね」

日本がそのお寿司を食べながら言いました。マグロです。

「あの頃は馴れ寿司の代用品でしたからね」

「はい、それを手早く食べられるようにと」

「なったのですね。そうでしたね」

「はい、そうです」

まさにその通りなのでした。

「それで今のお寿司になったんですね」

「この前までは高級料理の代名詞でしたが」

これは事実です。今でもそう考えられていますが前はもっと凄かったのです。

「今は回転寿司もありますしね」

「冷凍技術が発達しましたから」

能登はこのことを言いました。

「そのおかげで」

「そうですね、本当にいい時代になりました」

六人でお寿司を食べながらの話でした。特にマグロが絶品なのでした。まさにマグロ万歳です。

第千二百九十八話　完

2010・3・19

第千二百九十九話　影武者は向こう

第千二百九十九話　影武者は向こう

この戦隊はレッドが二人います。けれど祖国ということもあり日本が影武者ではありません。影武者はもう一人いるのです。それが誰かというとです。

「この場合は向こうが影武者になりますが」

「それやったら誰になるんや？」

会津と大阪がそのことに対して言います。

「日本さんが影武者の筈がありません」

「そやけど誰になるんや。ちょっとわからへんで」

「はい、その影武者ですが」

いつも通り殿様の席にいる日本が答えます。

「妹です」

「ああ、そうですよね」

「お姫様ですから」

仙台と津軽がここで納得しました。

「この戦隊のもう一人のレッドは女の人ですから」

「そうなりますよね」

「はい、だからです」

こう話す日本でした。

「妹が影武者になります」

「何か凄いですよね」

ここで能登も言いました。

「御二人とも戦隊二つ掛け持ちでそのうえで、ですから」

「そうですね。かなり恵まれていますね」

その日本妹が七人目の戦士にして影武者だったのです。本当に恵まれています。

第千二百九十九話　完

2010・3・20

第千三百話　お姫様が影武者

第千三百話　お姫様が影武者

お姫様に相応しい奇麗な袴姿で出て来た日本妹ですがこの人が影武者です。黒子達は日本に対するのと同じ様に日本妹に対して恭しく仕えています。

「そんなに気を使わなくても」

「気を使って当たり前だ。お姫様なんだからな」

爺である脚本家さんも言います。

「影武者とか何とか以前にお姫様なんだぞ。それを自覚しろ」

「そうですか」

「とにかくこれで全員だな」

脚本家さんが仕切って言います。

「頑張れよ、七人でな」

「はい、それでは」

「頑張ります」

日本と日本妹がそれぞれ頷きます。やっぱりその中心にいるのは日本です。

「それにしても一国で戦隊できるなんて」

「凄いですよ」

仙台と津軽はこのことを言います。

「それも七人ですよ」

「滅多にないですよ」

「そうですね。本当に我が国だけで戦隊ができるとは」

日本も少し驚いている様子です。

「凄いことです」

「だからだ。余計に頑張るんだな」

しかも爺までいます。とにかく贅沢な戦隊であります。

第千三百話　完

2010・3・20

第千三百一話　だから違う

第千三百一話　だから違う

ニホン戦隊は爺までいれば黒子達までいる実に恵まれた戦隊です。
そしてそれを見てやけにあれやこれやという人も出て来ました。
「あんなの不公平なんだぜ。俺達も何かやるんだぜ」
「だから手前は生徒会長の仕事しろ」
「いい加減何回言わせるんだ？」
イギリスとフランスが例によって韓国に対して突っ込みを入れます。
「ったくよ、本当に生徒会の仕事何一つしないでよ」
「それで何やるんだよ」
「そんなことは全然気にしなくていいんだぜ」
韓国がこの二人の言葉に何かダメージを受けたり思ったりといったことはありません。こうしたところは見事ですらある程です。
「それより戦隊としてやることがあるんだぜ」
「そもそも手前は連合国にいなかったんだが」
「日本の方にいたよな。証拠写真あるぞ」
二人の今の言葉も聞かれずです。そのうえで韓国の勝手な話が続きます。
「じゃあやることが決まったんだぜ」
「何だ？言っておくが爺も黒子もいねえぞ」
「あの戦隊は特別だぞ」
「俺達には俺達のやり方があるんだぜ」
この言葉だけは正論に見えます。
「だからそれをするんだぜ」
「いい加減こいつは自分が連合国じゃないってわからねえのか？」
「そもそもそこからかよ」
うんざりとするイギリスとフランスを尻目にです。お話が妙な方

向にいっています。

第千三百一話　　完

2010・3・22

第千三百二話　それで三人は来ない

第千三百二話　それで三人は来ない

こうして韓国がまた何かをやることが決まってです。集まったメンバーは。

「だから何であいつが動くとあの三人は来ないんだよ！」

「推薦者だろうが！」

アメリカ、中国、ロシアの三人の姿が見えません。いるのは二人の他は本人と韓国妹だけです。本当にその三人は影も形もありません。

「どうなってんだ？あいつ等が来ないとどうするんだよ」

「毎回毎回俺達に押し付けやがってよ」

「少数精鋭でいいんだぜ」

しかもそれでどうにかなる韓国ではありません。

「じゃあ早速はじめるんだぜ」

「くそっ、こいつが最低限まともだったらな」

「というか欧州にもこんなのいねえぞ」

イギリスとフランスはぶつくさ言いながらとりあえず韓国と一緒にある場所に向かいました。韓国が案内したその場所が何処かといいますと。

「何だ？中古車コーナーじゃねえかよ」

「こんなところに何の用なんだ？」

「俺達はこれなんだぜ」

韓国は自信に満ちた声で一台の大きな車を指差します。それは。

「キャンピングカーなんだぜ」

「んっ！？キャンピングカー？」

「そんなの何で必要なんだ？」

今一つ自分達の戦隊のモチーフがわかっていない二人でした。そのキャンピングカーにこそこの戦隊の全てがあるというのにです。

何はともあれまたお話がはじまりました。

第千三百二話　　完

２０１０・３・２２

第千三百三話　車があると

第千三百三話　車があると

キャンピングカーを手に入れたレンゴウ戦隊、ここでようやくあの三人も出て来たのです。

「本当に最近実質俺達二人だけだな、生徒会」

「生徒会長の選挙が待ち遠しいな」

イギリスとフランスはそんな三人を見てこんなことも言います。

何はともあれ全員揃ったのは事実でそれは喜ばしいことではありました。

そして車に乗ってみるとです。これが。

「快適だな、これはまた」

「ああ、中でも暮らせるしな」

キャンピングカーは中でも生活できることが大きいです。皆このことに満足しています。

「いやあ、いいもの買ったな」

「全くある。中でこうして料理もできるある」

「お酒も飲めるしね」

アメリカ、中国、ロシアの三人は中で飲み食いを楽しんでいます。

そして運転をしているのは韓国です。ところがこの人に運転をさせると。

「おい、どんだけ乱暴な運転なんだ！」

「待て、このままじゃ崖に落ちるぞ！」

イギリスとフランスが彼のあまりものとんでもない運転に抗議します。

「ちょっとは落ち着いて運転しろ！」

「死んだらどうするんだ！」

「大丈夫なんだぜ。俺は今まで事故なんて起こしたことないんだぜ」

自分だけがわかっていません。

「だから安心するんだぜ」
　こんなことを言って猛スピードで滅茶苦茶な運転をします。車を運転すると余計に韓国になってしまう彼なのでした。

第千三百三話　　完

２０１０・３・２３

第千三百四話　運転手交代

第千三百四話　運転手交代

流石に韓国に運転させると命が幾つあっても足りません。かくして選手交代となりました。そうして運転手に選ばれた人はといいますと。

「頑張ってやらせてもらいますニダ」

「ああ、頼むな」

「いつもこういう仕事ばかりで悪いな」

韓国妹が務めることになりました。韓国はとりあえず車の中でキムチを食べさせて大人しくさせています。

こうして韓国妹が運転をするとです。この運転は。

「おお、かなり丁寧だよな」

「しかも上手いな。あいつの妹さんには思えないな」

上手なのでした。少なくとも命の心配をすることはなくなりました。

「これはいいな」

「ああ、かなりな」

「それで何処に行きますニダ？」

韓国妹はここでイギリスとフランスにその行く先を尋ねました。

「ただドライブするだけでしょうか。それとも何処か目的地が」

「ああ、それな」

「今のところないんだよ」

正直今は暇だったりするのです。それでこう言う二人なのでした。

「まあ適当なところ走ってくれ」

「好きな場所をな」

「わかりましたニダ。それでは」

こうして今はのどかなドライブを楽しむ一行でした。キャンピングカーを使っての旅もかなりいいものです。手に入れて正解と言え

ました。

第千三百四話　完

2010・3・23

第千三百五話　オランダ今昔

第千三百五話　　オランダ今昔

オランダは昔から日本とお付き合いがあります。その関係はそれこそ何百年にも渡ります。かなり古いお付き合いだったりします。

「昔は西洋の学問は蘭学と呼んでいました」

「そうだったよな。それで俺の国の本とかよく翻訳していたよな」

「はい、良沢さんや玄白さんが」

これは江戸時代のことです。

「思えば江戸時代がはじまってからでしたね」

「ああ、日本との付き合いがはじまったのはな」

四百年以上のお付き合いですからやっぱりかなり古いです。もっともそれより前にも日本は南蛮、つまり西洋とのお付き合いをはじめてはいました。

けれど一番長いお付き合いになったのはオランダなのでした。この人と日本はそれこそかなり長い間二人だけのお付き合いを続けてきていたのです。

「あの時実は色々とあったんだよ」

「そうだったのですか」

「日本はのんびりとしていたけれどな。こっちはスペインから独立したり」

最初はそれでした。

「イギリスと喧嘩したりスペインと喧嘩したりな。フランスに強引に自分の家に入れられて洒落にならない状況だった時もあったんだよ」

「オランダさんも大変だったのですね」

「黙っていたけれどな」

こうした自分にとって不利なことは言わなかったのです。彼にも意地があります。

「まあそれでもな」
「はい、長いお付き合いのままですね」
日本とオランダ、二人のお付き合いはかなり長いものです。本当にかなり長いです。

第千三百五話　　完

２０１０・３・２４

第千三百六話　日本に来たのは

第千三百六話　日本に来たのは

オランダはわざわざ日本のお家に来てそれでお付き合いをはじめました。けれどそうしたのはこの人だけではなかったのです。例えば。

「俺その前から日本のところに来てたんやで」

「三浦安針って知ってるか？」

スペインとイギリスです。この二人が出て来ました。

「ポルトガルと一緒に日本のところに来たんやけれどな」

「丁度あの徳川って上司になった頃だったな。ウィリアム＝アダムスって人だったんだよ」

「結構日本を見回って面白かったで」

「結局日本で死んだんだよ」

二人も日本とのお付き合いはかなり古くにはじまりました。けれどそれは長い間途絶えてしまってもいました。日本が引き篭もってしまったからです。

「どないしてるんかって思ってたけれどな」

「久し振りに会ったら何かかなり独特な家になってたな」

二人が日本に再会したのは本当に久し振りのことでした。

「いや、ほんま日本の家はあの時からめっちゃ独特やったけど」

「江戸の街なんかもう凄いことになっててな。変われば変わるもんだよ」

「俺はずっと出島にいた」

オランダも実際はそのお付き合いは限られていました。何しろ日本は引き篭もりだったからです。これではどうしようもなかったのです。

「それも何だかな」

「そやな、あの頃の日本は急に引き篭もりになってもうて」

「気付いたらああなってたからな。凄い話だよな」
三人の日本とのお付き合いも紆余曲折があったのです。というよりかはやっぱり日本はかなり変わっている部分があります。本人は自覚していませんが。

第千三百六話　　完

２０１０・３・２４

第千三百七話　最初に来た時

第千三百七話　最初に来た時

「最初に日本のところに行ったんはポルトガルやったな」
「ザビエルさんですね」
日本がスペインの言葉に対して応えます。
「あの時のことは忘れられません」
「鉄砲も伝わったんやったな」
「はい、そうです」
その鉄砲が当時戦国の世だった日本をかなり変えました。その時日本は尾張だの仙台だのとそれぞれの人が互いに争う状況だったのです。
「特に織田信長さんがお好きでした」
「そやったな。それでキリスト教も伝わって」
実際はこっちを伝えることが目的だったのです。けれど日本の上司の人達はどちらかというと貿易の方に興味がある人が多かったのです。
「色々なもんが伝わったんやったな」
「そうですね。それからスペインさんも来られて」
「俺その時めっちゃ羽振りよかったからな」
今よりずっと羽振りがよかったのです。それこそ日の沈まぬ大国でした。
「それで来た時めっちゃ驚いたもんやで。こんな国あるんかいなって」
「そこまで驚かれたのですか」
「驚いたって。そんで日本のもんが色々伝わって」
「こちらも多くのものが伝わりました」
お互いにそうだったのです。決して悪いお付き合いではなかったのです。

「思えば懐かしい時代ですね」
「ほんまやな」
その時のことを思い出して懐かしい顔になる二人でした。彼等にとってはいい思い出でもある日々なのです。

第千三百七話　完

２０１０・３・２５

第千三百八話　ただしこれは駄目でした

「けれどなあ」
「どうされましたか？」
「いや、その時一番驚いたことや」
スペインはしみじみとした感じで日本に対して話してきました。
「日本では男同士でもよかったやろ」
「ああ、そっちのお話ですか」
日本はスペインの話を聞いてすぐに察しました。彼が何について言っているかをです。
「昔からあるお話ですから。平安時代の頃にも普通でしたし」
「それや。それに驚いたんや」
「クロスデイズなお話もですね」
「あれが普通にある。もう信じられへんかったわ」
スペインにとってはまさにそうだったのです。当時の彼にとってはそうしたことは問題外というかまさに身の毛もよだつおぞましいものでした。
「おまけにそれある殿様に言うたらめっちゃ怒ってたし」
「大内さんですね。他にもそういう趣味を持たれている方は多かったですよ」
「どんな人がおったんや？具体的に」
「先程お話した織田信長さんも」
この人はそっち方面でもかなり有名な人です。だからといってそれで悪く言われたことは全くありません。
「それに去年のドラマで出ておられた上杉謙信さんもその前の前の年にも出ておられた武田信玄さんもです。信玄さんにはお相手に身の潔白を証明する手紙まであります」
「それが凄かったんや。全然普通やったからな」

「それがおかしかったのですか」
　このことも自覚していない日本なのでした。とにかく当時から日本は来た人に衝撃を与える国だったのです。

第千三百八話　　完

２０１０・３・２５

第千三百九話　残っている名前

第千三百九話　残っている名前

イギリスと日本の出会いも古いものです。日本の上司が徳川家康だった時代にもうはじまっていたのです。それだけ古い間柄であります。

「そうなんだよな。古いんだよな」

「そうですね。三浦安針でしたね」

「ああ、ウィリアム＝アダムスな」

「今町の名前になっていますよ」

日本はこうイギリスに話します。

「安針町として」

「おっ、そうなのか！？」

お家の人がまさかそんなことになっているとは思っていなかったイギリス、このことにはかなり驚きます。そうしてそのうえで日本に対して言うのでした。

「それはまた凄いな」

「はい、徳川さんが気に入っておられた方なので」

「あの時日本まで行くのはかなり冒険だったしな」

これはスペインもポルトガルも同じです。何しろ日本は遠いですから。

「そうか、そうしてくれているのか」

「はい、あの時のことは私も今でも覚えています」

「有り難うな」

イギリスはその話を聞いて日本に微笑みを返します。

「あの人も喜んでくれる」

「どうも。それでは今からその町に行きますか」

「ああ、そうするか」

二人でその安針町に行きます。二人の思い出は意外な場所にもあ

りました。

第千三百九話　完

2010・3・26

第千三百十話　そしてオランダ

「俺が来た時はだ」
「そして貴方ですね」
「ああ、俺が来たのはかなり後だったんだな」
「別にそうとも言えないと思いますが」
そのオランダです。彼が日本に来たのは大体イギリスと同じ頃でした。ポルトガルやスペインよりは後で新顔と言えば新顔であったのです。
「いや、それでも後だな」
「そうですか」
「しかし。その俺がな」
ここでオランダはその口調としみじみとしたものにさせるのでした。
「日本と一番長い付き合いになったなんてな」
「上司の方針でしたし」
「まあ出島にずっといたがな」
長崎のその場所です。オランダはそこから日本とお付き合いしていたのです。
「あそこのことも今では懐かしいな」
「懐かしいですか」
「もうあそこもないんだよな」
「跡地はありますよ」
「けれどもうないんだな」
このことに感慨を感じてもいます。
「あそこと本国を行き来してな。ずっと付き合っていたな」
「そうですね、あの時は」
日本にとってもオランダにとっても懐かしい時代です。色々あっ

たとしてもです。

第千三百十話　　完

2010・3・26

第千三百十一話　この人ともお付き合いが

第千三百十一話　この人ともお付き合いがオランダの他には中国ともお付き合いがありました。しかしこれも長崎に限られていました。

「その結果としてここに僕の別荘が置いてあるある」

中国がその別荘を前にして言います。

「日本にも幾つかあったあるな」

「はい、他には横浜と神戸に」

中国は世界中に別荘を持っています。しかし韓国だけにはどうしても置くことができませんでした。さしもの中国ですら駄目というのですからある意味脅威です。

「ありますね」

「けれどここのが一番歴史的には馴染みあるかな」

「そうですか。やはり江戸時代からだからですね」

日本がそのことについて尋ねます。

「この別荘との縁は」

「その通りある。もっともここでは麺は名物にしているある」

「長崎ちゃんぽんですね」

「僕の料理とはかなり離れてしまっているあるが美味しいことは確かある」

そのたっぷりの野菜と太い麺と豚骨スープがとても美味しい麺類です。

「さて、今日は日本にその長崎ちゃんぽんを振舞うある」

「どうも有り難うございます」

「日本の家の他の面子も呼ぶある。今はサービスしておくある」

「いいのですか、それで」

「食べるのは大人数の方がいいある。さあ早く呼ぶよろし」

こうして日本のお家の人で暇な人が全部呼ばれてちゃんぽんを食

べさせてもらいました。長崎ちゃんぽんはこれまた最高の味なのでした。

第千三百十一話　完

２０１０・３・２７

第千三百十二話　蝶々夫人もここ

第千三百十二話　蝶々夫人もここ

「そうそう、ここが舞台なんだよ」
「そうですね。あのオペラは」
日本は今度はアメリカと一緒にいます。いる場所はグラバー園のところです。アメリカはそこに来てとても楽しそうに話をしています。
「ここが舞台ですね」
「いや、あのオペラはいいね」
本当はイタリアのお家の人が作曲したオペラなのですがアメリカはそれでもかなり上機嫌で日本に対して話をしています。本当に嬉しそうに。
「僕の家の人は情けない役だけれどね」
「ですが多くの名テノールが歌っている役でもありますね」
音楽的にはそれ程難しい役ではないですし出番もあるし歌う場面もしっかりとあるしでテノールの登竜門の一つになっている役なのです。
「あの役は」
「そうなんだよ。そうか、ここで歌うのかい」
「歴史ある場所で」
「そして長崎の奇麗な街も海も一瞥できる場所で。見えるよ」
アメリカはその海を見てとても楽しそうに言います。
「そうか、ここから来て蝶々さんのところに来るのか」
「そうです、ここに」
「何か日本の妹さんの歌も聴きたくなったよ」
「ある晴れた日にですね」
「うん、よかったら聴けるかな」
「はい、それではカステラでも食べながら」

こんな話をしながら海を見る二人でした。この街には音楽もあるのです。

第千三百十二話　　完

２０１０・３・２７

第千三百十三話　グラバー園

第千三百十三話　　グラバー園

「ここはよく覚えてる場所だからな」
「そうですね。元はイギリスさんのお家の方の場所でしたし」
「蝶々夫人には使われてるけれどな」
今日はイギリスがグラバー園に来ています。そのうえで長崎の街と海を見ながら日本と話をしています。それが本当に気持ちよさそうです。
「俺もあのオペラは好きなんだよ」
「左様ですか。それは何よりです」
「いい作品だよな」
イギリスは微笑みながら言います。
「イタリアの音楽は確かに見事だよ」
「はい、イタリア君には感謝しています」
「蝶々さんはここでピンカートンを待っていたんだな」
イギリスはオペラの話をします。
「ずっと。三年も」
「そうですね。ここから長崎の海を見て」
勿論日本もその海を見ています。そうして二人で話しているのです。
「そうしてですね」
「そうだよな。そう思うとな」
イギリスは今度はグラバー園を見ます。そのイギリスのお家の人の建てた家をです。
「この家もいいものだよな」
「そうですね。ここにあるだけで奇麗ですし」
「ああ、あの人も喜んでるかもな」
こんな話をしながら二人で海を見ているのでした。その長崎の海

を。

第千三百十三話　完

2010・3・28

第千三百十四話　漫画にも出ました

第千三百十四話　漫画にも出ました

「そういえばな」
「はい」
「この人この前漫画にも出たよな」
「仁ですね」
日本のお家の人の漫画です。現代のお医者さんが幕末にタイムスリップしてそのうえで生きるというお話です。かなりの大河ロマンです。
「はい、あの方の目をなおしています」
「そうだよな。それに出てたよな」
「あの頃は若かったのですね」
「ああ、若かった」
また言うイギリスでした。
「この銅像は歳とってからのやつだけれどな」
「そうでしたね。今まで少し忘れていました」
グラバー園にはそのグラバーさんの像もあります。そこでは立派なおじさんの姿になってそのうえでそこにいます。少なくとも若い時の顔ではありません。
「そのことを」
「そうか。まあそれでな」
「はい」
「紅茶でも飲まないか？中でな」
日本に対して微笑んでこう提案してきました。
「折角思い出の場所にいるんだ。二人でじっくり話さないか？」
「そうですか。それでは」
グラバー園に紅茶の香りが漂うことになりました。それは懐かしい香りでもありました。

第千三百十四話　完

2010・3・28

第千三百十五話　呼ばれてないのに登場

第千三百十五話　呼ばれてないのに登場

「俺も昔から付き合ってやってるんだぜ！」

「貴方を呼んだ覚えはないのですが」

日本はいきなり出て来た韓国に対して突っ込みを入れました。

「何故ここに？」

「細かいことはいいんだぜ」

そんなことを気にする韓国ではありません。最早横紙破りという域すら超えています。

「とにかく俺も昔から日本と付き合ってやってるんだぜ」

「そういえば韓国さんは」

ここで言ったのは日本妹でした。

「昔よくお家に来ていましたよね」

「そうなんだぜ。江戸時代なんだぜ」

それ以前から交流はあったのですがその時代がかなり有名なのでした。

「他にも源氏物語で占い師として出ていたんだぜ」

「そういえばそうでしたね」

日本妹もその言葉には頷きます。

「ただ。御呼びしましたっけ、今」

「だから細かいことはいいんだぜ。俺も昔から付き合ってやってるんだぜ」

「あの、それでですが」

今度は日本が彼に対して言います。

「貴方は昔からそうした振る舞いですが変わらないのですか？」

「何かおかしなところがあるんだぜ？俺は全然普通なんだぜ」

「いえ、自覚されていないのはもうわかっていますので」

だからいいというのでした。日本も言うことは言います。

第千三百十五話　完

2010・3・29

第千三百十六話　傍若無人

第千三百十六話　傍若無人

「まあよ。俺達の家でも徹底的にやってくれてるからな」
「日本の家だと特になんだろうな」
イギリスとフランスは韓国が日本のお家で何をしてきたか完璧なまでに察することができました。それだけわかりやすいということです。
「何だ？鶏でも盗んでたのか？」
「それで家の人と喧嘩したとかな」
「その通りです」
日本妹が二人の言葉に応えます。
「よくわかりましたね。他にも色々と」
「まあそうだと思ったけれどな」
「確か台湾の家でも派手に交通事故やらかしたんだよな」
人の家にお付き合いでやって来た上司の一人がそういうことをしてくれたのです。そしてこれはほんの氷山の一角なのです。他にもあれやこれやとやらかしてます。
「しかし。交流で来て鶏泥棒か」
「しかも喧嘩までしてか」
「絵もあります」
日本妹はここで絵を出してきました。鳥獣戯画の如き見事な絵に表されている光景はまさに鶏を盗み喧嘩をするその有様です。それ以外に見せません。
「こういうお付き合いでした」
「そうか、あいつは昔からあいつなんだな」
「見事なまでに全然変わらねえな」
「はい、韓国さんは何があっても韓国さんです」
そんな見事な絵が日本には残っています。本当に韓国は昔から変

わっていません。

第千三百十六話　完

2010・3・29

第千三百十七話　三日会わないと

第千三百十七話　三日会わないと

日本といえばイタリア、そしてドイツとのお付き合いです。ですがこの二人との交流は本当に新しいものだったりします。

日本は憲法を作るにあたってプロイセンのところにお邪魔したことがあります。その時にドイツとも会っていますがその前に欧州を旅した時にはじめて会った位です。

「その時の日本がなあ」

「御前は殆ど覚えてなかったな」

「ああ、丁度フランスと派手にやったり上司が皇帝になった時だったからな」

「そうだったな。俺も一緒に色々と仕事していたな」

「相棒も覚えてなかっただろ」

「残念ながらそうだ」

この時二人はまさか日本が今みたいになるとは思っていませんでした。気付けば大国になっていたのです。しかも憲法まで作ってです。

「いや、それであの戦争の時はな」

「そうだな。俺達が終わった後でも一人で戦っていたしな」

「凄い奴になったよな」

「あの時殆ど覚えてもいなかった相手がな」

「海軍が特に凄かったな」

日本はこの時物凄い海軍を持っていました。あの連合艦隊です。

「俺達なんて潜水艦を揃えるしかなかったのにな」

「あれはあれで有効だったが」

「それでもやっぱり水上艦揃えてこそだからな。本当にあっという間に凄い国になったよな」

「男子三日会わざれば。中国の言葉だが国もそうだな」

二人共この言葉を噛み締めるのでした。本当に日本は二人にとっては気付けば物凄い国になっていた、そうした国なのです。

第千三百十七話　　完

２０１０・３・３０

第千三百十八話　オリンピックでは

第千三百十八話　オリンピックでは

イタリアとのお付き合いも新しいです。そんな中でこんなお話があります。

オリンピックを開催するにあたってです。日本の東京かイタリアのローマか、まさにこの二つの街のどちらかになりました。日本側としては絶対に自分達で開きたいものです。

「こうなったらイタリアの上司の人に御願いしてみよう」

日本の上司の一人がこう決意しました。そのうえでその時のイタリアの上司に面会に行きました。あの親方、ムッソリーニにです。

そして会いに行って言いました。是非共オリンピックの開催地を東京に譲って欲しいと。そう直訴したのです。

イタリアの上司の人はその言葉を聞いてです。微笑んで答えたのでした。

「いいだろう」

「いいのですか？」

「貴殿のその真摯な態度に心打たれた」

だからだというのです。

「だから喜んで譲ろう。素晴しいオリンピックにしてくれ」

「有り難うございます、それでは」

「貴殿の様な人材がいる国なら」

イタリアの上司は日本の上司に対してさらに話します。

「必ずや素晴しいオリンピックにしてくれる。期待している」

「はい、何としても」

こうしてオリンピックは東京で開かれることになりました。これは戦争前のお話です。

日本はこのことを今でも覚えています。それでイタリアに対して感謝しています。

「あの時はどうも」
「いいよ、あの時のあの人が本当に素晴しかったんだから」
イタリアは微笑んでこう返すだけです。二人のお話の中の一幕です。

第千三百十八話　　完

２０１０・３・３０

第千三百十九話　モナコさん

第千三百十九話　　モナコさん

モナコは眼鏡の女の子、楚々としていながらも頭のよさそうな顔をしていて栗色の髪を左で束ねてセットにしています。服もお嬢様チックで小柄な身体によく似合っています。

この人はよくフランスと一緒にいます。それがどうしてかといいますと。

「俺が後見人だからな」

「御前がか。大変だな」

ドイツは彼の言葉を聞いてまずは同情する言葉を出しました。

「それはまた」

「そうだろ？俺もこう見えても面倒見てやってるんだぜ。やっぱりモナコとは古い縁だしな」

「モナコがな」

彼が言うのはモナコに対してでした。

「本当に大変だな」

「ちっ、そっちかよ」

「そうだ。モナコも大変だな」

こう言うのです。やはりモナコに同調しています。

「どうしてそうなった？モナコもまた」

「縁ですから。フランスさんとは」

モナコはこうドイツの問いに答えます。

「お家の中にもフランスさんのお家の人が多いですよ」

「ふむ、そうなのか」

「それにイタリアさんのお家の人も」

この人もだというのです。

「おられますけれど」

「余計に大変だな、それはまた」

フランスとイタリアに挟まれているのです。確かにこれはかなり大変です。

第千三百十九話　　完

２０１０・４・１

第千三百二十話　赤と白

第千三百二十話　赤と白

モナコの旗は赤と白です。それが上下二列に配されています。この配色を見てふと言ったのがポーランドです。

「何か俺のと同じだし」

「あっ、逆ですよね」

モナコの方もこう返します。

「ポーランドさんのお家の旗とは」

「そうだし。まあそれって結構面白くね？」

「面白いですか」

「旗の由来は違うみたいだけれどよくね？似た旗があっても」

「そうですね。何か親近感沸きますし」

モナコもにこりと笑ってポーランドのその言葉に頷きます。

「私のお家の旗は他にもインドネシアさんのお家の旗にそっくりですし」

「っていうか見分けつかんのよ、あれって」

ポーランドだけがそうではなかったりします。

「俺もあいつの旗見て思ったし。モナコのとどう違うん？」

「大きさが違います。私のお家の旗の方が正方形に近くなっています」

「成程。そういうことだったん」

「はい、そうなっています」

ポーランドに対してにこりと笑って答えます。

「それにしても。それぞれの国旗で似ていたりするものですね」

「日本なんか特にそうじゃね？」

ここで何気なく日本の名前を出すポーランドでした。

「結構色々な国に真似されてるけど。あれなんかそうじゃね？」

「そうですね、あの人も」

何故かここで顔を曇らせるモナコでした。何かあるのでしょうか。

第千三百二十話　　完

２０１０・４・１

第千三百二十一話　鮪嫌い

第千三百二十一話　鮪嫌い

そのモナコがある時です。こんなことを言い出してきました。

「鮪食べたら駄目です。大西洋では鮪食べることも誰かに輸出することも禁止しましょう」

こう言い出したのです。これに驚いたのは鮪が大好きな日本です。

「それをされたら私としては困るのですが」

「食べ過ぎです。それに私は鮪食べないから全く関係ありません」

「えっ、それはあまりにも勝手ではないですか？」

今のモナコの言葉には日本も唖然です。そしてそれから顔色が見る見るうちに変わっていきます。それを見た韓国妹がすぐにお兄さんに対して言います。

「まずいニダよ、日本さん本気になっちゃったニダ」

「本気って日本が怒ったんだぜ？」

「そうニダ、このままだと恐ろしいことになるニダ」

「それに鮪を禁止されたら俺の方も日本に輸出していたり食べたりするからあまりいいことはないんだぜ」

「じゃあ今回は兄さんもニダな」

「その通りなんだぜ。日本に賛成するんだぜ」

生徒会長だから中立でいるべきなのでしょうが今回は違いました。韓国もここは本気で頷いて日本の側につくことにしたのです。

「俺は日本が正しいと思うんだぜ」

「誰が反対しようと同じよ」

モナコも意地になっています。

「私は鮪を食べることは許さないから」

「貴方が許さないならそれで結構」

しかし日本はこう言います。その目はかつて三度の大きな戦争をしてきた時と同じになっています。まさに何かが起こる時の目でし

た。

第千三百二十一話　完

2010・4・2

第千三百二十二話　何かをする時の日本

第千三百二十二話　　何かをする時の日本

「今の兄さんは」
「その通りニダよ」
日本妹と韓国妹が日本の後ろでひそひそと話をしています。今の日本がどれだけ本気なのか、二人がわからない筈がありません。
「覚えてますよね、貴女日本さんのお家にいたことありますし」
「日本さんは普段はとても優しいニダ。けれど戦争をする時は」
「はい、物凄い強いですから」
「しかも徹底的にやる人ニダ」
伊達にあっという間に強国になったわけではないのです。何しろ日本一人でアメリカや中国に対峙することもできますし彼一人でロシアと向かい合っても大丈夫です。恐ろしいことにその力はドイツとフランスという欧州でも最強クラスの国々が手を組んで相手になれるというレベルです。物凄い強さです。
「そういう人ですから本気になったら」
「うちの兄さんどころではないニダ」
「だから今回は若しかしたら」
「今のところは日本さんにとって不利ニダが」
それでもです。日本はこれまでも。
「ロシアさんとの戦争も勝ってますし」
「それに高度成長も」
「モナコさんは兄さんのことを知らな過ぎます」
「劣勢でも日本さんは戦う人ニダよ」
実際にモナコを恐ろしい顔で見ている日本でした。しかし当の日本はといいますと。
「負ける筈ないわ。欧州の皆だって賛成してくれているし」
負けることはないと思っています。さて、どうなるでしょうか。

第千三百二十二話　完

2010・4・2

第千三百二十三話　中国も参戦

第千三百二十三話

中国も参戦

「僕としてもこれは反対あるよ」

「あれ、兄さんもあるか」

中国妹がお兄さんに対して尋ねます。

「やっぱり何かを食べられなくなるというのは反対あるな」

「その通りある。中国人はまず四つ足のものは」

そこから話すのでした。

「机や椅子以外は全部食べるある」

「では空を飛ぶものは？」

「飛行機以外は全部食べるある」

「では海のものは」

「船以外全部食べるある。鯨については食べることは今のところないあるが」

こういう人なのです。勿論野菜や果物の類は毒がない限り全部食べます。尚二本足のものについては妹もあえて聞くことはありません。

「とにかくある。食べるものは何でも食べるある」

「じゃあ鮪もそれが理由で」

「そうある、反対ある」

だからだというのです。

「モナコが何を言おうが反対あるよ」

「わかったある。では日本さんに言っておくあるよ」

「そうしてくれると助かるある。さて、では今日は」

ここで話が変わりました。

「フカヒレスープにするあるよ」

彼も参戦となりました。鮪戦争はかなりの規模になってきました。

第千三百二十三話　完

2010・4・3

第千三百二十四話　モナコの誤算

第千三百二十四話　　モナコの誤算

韓国も中国も日本についてです。モナコも焦りを感じだしていました。そんな彼女にフランスが言うのでした。彼がモナコの保護者なのです。

「なあ、幾ら何でもシーシェパードとかと付き合うのはよ」

「日本だったらすぐに引っ込むと思っていたのに」

モナコは日本には強硬に言えばそれで終わると思っていたのです。確かにそれはその通りですが時と場合があります。彼女はそれがわかっていないのです。

「どうしてこんなことに」

「おい、その日本だがな」

「はい、本気なんですね」

「どうするんだよ、一体」

フランスも困った顔で彼女に言います。

「本気になったあいつは俺でも相手をできないんだぞ。そんな奴とだな」

「いえ、まだです」

しかしモナコも引けません。ここまで来たらです。

「私もまだ。ここで引くわけには」

「まだやるってのかよ」

「絶対勝てます」

彼女なりの勝算があるのです。

「私やフランスさん達がそうだと言えばこれ位のことは簡単にどうとでもなります。だって欧州の人達皆が私に賛成してくれてるじゃないですか」

「まあな。しかし今の御前はな」

フランスはそんなモナコに言いたくて仕方なかったりします。し

かし今のモナコが聞く耳持たないのはわかっていますので言いません。何気に敗北フラグを見ていました。

第千三百二十四話　　完

２０１０・４・３

第千三百二十五話　この人まで参戦するとは

第千三百二十五話　この人まで参戦するとは

「まああれよ。絶対にこっちにつく人はいるから」

「韓国ですら向こうについてもってことはあいつか」

フランスはモナコの強気の言葉を受けて返しました。

「オーストラリアだな」

「そうよ。あの人日本さんと仲悪いよね」

「あの日本の家の中で戦争しろとまで言う人間が出て来てる程だからな」

そこまで仲が悪くなっている要因は鯨です。オーストラリアは何が何でも日本に対して鯨を食べさせまいとします。しかし日本は絶対に食べようとします。その結果として両国の関係は極端に悪化しているのです。

そしてモナコもそれを知っています。ですから彼女も彼は絶対にこっちにつくと見ていたのです。そしてそれは殆どの人が思っていました。

当の日本もです。それは当然だと思っていました。

「あの人は絶対に敵に回りますね」

「そうですね。あの人だけは」

日本妹もそれは当然と見ていました。しかしです。

「鮪を食うなとは言語道断でごわす。それは許されないことでごわす」

「えっ、まさか」

「オーストラリアさんまでこちらに？」

「日本に鮪を食うなとは何事でごわすか。おいどんはモナコの考えに反対でごわす！」

日本も日本妹もびっくりです。そしてもっと驚いたのはこの人です。

「どうして!?何であの人まで向こうに」
「俺もこれは想像できなかったな。何か思っていたよりもずっとこっちの形勢不利になってるみたいだな」
フランスですらこう言います。モナコの読みはどんどん崩れていきます。日本を孤立させるつもりが自分が孤立しています。まさに想定の範囲外の状況です。

第千三百二十五話　　完

２０１０・４・４

第千三百二十六話　何故味方になったのか

第千三百二十六話　何故味方になったのか

誰もが驚いたオーストラリアが日本側についての鮪戦争への参戦でした。そしてその理由をこっそりと尋ねますとこう返答が返ってきました。

「おいどんの国は鮪を養殖しているでごわす」

「それでなんですか」

「その通りでごわす。だからでごわす」

こう日本妹に対して答えます。

「おいどんとしても日本が鮪を食べてくれるのは好都合でごわす」

「それでなんですか」

「その通りでごわす。さて」

あらためてモナコを見て言います。

「どうするでごわすか？日本だけでも御前に勝てる相手ではないでごわすよ」

「うっ、それでも私は」

「そう、日本だけでもでごわす」

オーストラリアは意味深げな言葉をさらに続けてきます。

「日本の家には色々な人がいるのを忘れているようでごわすな」

「！？そういえば」

モナコはそれを聞いてぎくりとなりました。実はそうなのです。日本の家には個性的な人達がこれでもかという程います。その戦力もかなりのものです。

「あの人達まで」

「おいどんでなければ相手にできないでごわす」

オーストラリアは勝手にそう思っています。何だかんだで彼は日本の力を見誤っています。しかしそれでも今はこうモナコに言うのでした。

「御前の相手になる国ではないでごわすよ」
一転絶対的劣勢に追い込まれたモナコ。しかも今度は日本の家の人達まで出て来るのでした。

第千三百二十六話　　完

２０１０・４・４

第千三百二十七話　各都道府県までもが

「鮪食わせろ！」
「規制なんて許さないわよ！」
何と日本のお家の人達まで総出で出て来ました。
「人種差別とかそんなんやったらな」
「こっちも容赦しないから」
「えっ、何処からこれだけの数が」
その日本のお家の人達を前に唖然となるモナコでした。
「いたのよ。聞いてないわよ」
「って御前よ」
フランスがモナコの横で呆れています。呆れながら彼女に言うのでした。
「日本のこと碌に知らないでやってるのかよ」
「確かアジアの島国よね。お魚ばかり食べる」
「それだけじゃねえよ。人口も一億二千万なんだぞ」
「そんなにいたの！？」
「しかも国力二位だぞ。俺とドイツが一緒になってやっと戦えるんだぞ」
「貴方一人じゃとてもなの・・・・・・」
それを聞いてまたしても唖然です。何しろモナコはそのフランスの保護を受けているからです。
それで唖然となっていますがさらにです。日本のお家の人達は団結してモナコに抗議してきます。
「食べられないんだったらこっちにも考えがある！」
「絶対に食べてやるから！」
「しかも一致団結してるなんて」
「どうなるんだ？こりゃかなりまずいぞ」

フランスですらこう言う事態です。何と日本の人達全部が立ち上がったのです。

第千三百二十七話　　完

２０１０・４・５

第千三百二十八話　証言者は語る

第千三百二十八話　証言者は語る

その日本という国全体の底力はです。太平洋では誰もが知っています。あの韓国ですら内心日本のその力を最も恐れている程です。

「日本が核兵器持ったら俺は絶対に持つんだぜ」

この言葉に全てが表われています。学園一の蛮勇を誇る彼ですらこんな風なのです。他の人達はもう推して知るべしといったところです。

「本当にいざという時は桁外れに強いですから」

台湾も真剣な顔で話します。

「あの戦争の時だって。何でこんなことができるんだってことを次々とされていましたし」

「確かアメリカとの硫黄島の戦いで」

ベトナムも言います。

「完全包囲されて制空権も制海権もなくて爆撃とか艦砲射撃とかこれでもかという位受けて攻められても海兵隊を二万も倒したって聞いたけれど」

「それ本当の話だから」

台湾はベトナムに対しても言いました。尚ベトナムはそのアメリカも中国も退けています。戦闘力においては神懸りの域に達しています。

「大体戦争の序盤の進撃とか。沖縄での戦いとか」

「異常に強いし粘り強いわよね」

「だから絶対に本気にさせたら駄目な人だから」

長い間日本のお家にいたからこそわかることです。

「あのロシアさんだって負かしたじゃない。絶対に勝てないって思ったのに」

「そうよね、そういう人だから」

とにかく日本は強いです。いざとなれば一致団結して敵に向かいます。モナコはこのことも全く知らないで日本に喧嘩を売ってしまったのです。

第千三百二十八話　　完

２０１０・４・５

第千三百二十九話　鮪も鯖も

第千三百二十九話　鮪も鯖も

「大体な」
またしても参戦者です。しかも。
「おい、また日本の家の人だぞ」
「一体どれだけいるのよ・・・・・・」
フランスに言われたモナコは頭を抱えています。只でさえ韓国、オーストラリアという脅威の両翼までいるというのにです。日本の家から次から次に出て来るのですから。
その頭を抱えた彼女の前にです。今度出て来た人は。
「他人の食い物にあれこれ言うのはいい趣味じゃねえよな」
「やっぱり出て来たんだな」
フランスはその人を見て言います。あの某脚本家さんです。
「食っていいとか食ったら駄目とか飯をまずくする縛りじゃねえか。そんな規制は絶対反対するからな」
「何て強烈な個性の人なのよ」
「強烈なのは人間性だけじゃないからな」
この人の場合は特にそうです。
「書く脚本も凄いからな」
「ううん、こんな人までいるなんて」
モナコは脚本家さんを前に引いています。
「どうしたものかしら」
「鯖もねえじゃねえかよ」
脚本家さんはここで鯖がないことに気付きました。
「モナコの奴は鯖の食い方も知らねえのかよ。だから鮪食うなとか訳わからねえこと言うんだな」
「それとこれとは関係ないでしょ」
こう言い返しますが弱いです。かくして新たな参戦者も相手にし

なければいけなくなったモナコでした。

第千三百二十九話　　完

2010・4・6

第千三百三十話　戦い前の御馳走

「さて、後でとっておきの奴等が来るけれどな」
「あの人達ですね」
「ああ、呼んでおいたからな」
脚本家さんはこう日本に対して話します。二人の周りには日本のお家の人達が揃っています。本当にかなりの数の人達がいます。
「もうすぐ来るからな」
「それでその前にですか」
「ああ、食え」
何か料理をしています。それは。
鮪を使った料理です。それを日本達に振舞うのです。
「これ食ってモナコの奴を退けるぞ」
「はい、やりましょう」
日本もモナコの言葉に対して頷きます。そのうえで鮪のトロのお刺身を食べます。すると。
その味が口の中でとろけます。最高の味です。
「やはりいいものですね、鮪は」
「獲り過ぎなら少し制限すればいいんだよ。食うなっていうのは問題外なんだよ」
「そうですね、本当に」
「あれこれ食うなとかいう奴は嫌いだ」
脚本家さんははっきりと言いました。
「だからだ。徹底的にやってやるからな」
「はい、頑張りましょう」
日本もお家の人達も脚本家さんを囲んで決意を固めます。そんな彼等の前には鮪のお刺身にカブト煮といった御馳走がありました。

第千三百三十話　完

2010・4・6

第千三百三十一話　ライダー参戦

第千三百三十一話　ライダー参戦

次々と参戦してくる日本のお家の人達。そして遂に子供達のヒーローまでやって来ました。

「バグドグワゼド！（翻訳：鮪食わせろ！）」

「オリババンタイダ！（翻訳：俺は反対だ！）」

まずは仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディです。とりわけ食い意地の張っている仮面ライダーダディはかなり怒っています。

そのうえでモナコの上を飛んでです。しきりに抗議します。

「仮面ライダーまで出て来るなんて・・・・・・」

「あいつ等敵になったら強いから気をつけろよ」

「物凄く迷惑ね、それは」

またしてもフランスの言葉に応えるモナコでした。確かに仮面ライダーまで参戦してきたのはモナコにとってはかなり痛いことでした。

しかもライダーは二人だけではありません。

仮面ライダームッコロに仮面ライダームッキーも来ました。四人のライダーが全員揃ってしまったのです。

「ボナゴムッコロス！（翻訳：モナコぶっ殺す！）」

「ビィドゥドグイボドルボングヅゲヅナ！（翻訳：人の食い物に文句つけるな！）」

「それにしても物凄い言葉ね」

「あれがオンドゥル語だ」

フランスはかなり余裕があります。しかしです。

「で、どうするんだ？敵は物凄いことになってるぞ」

「あの脚本家やライダーなんて聞いてないわよ」

「けれど日本の家にはああいうのもいるからな」

「どういう家なのよ」
それを考えていなかったモナコでした。かくしてヒーローまで参戦です。

第千三百三十一話　完

２０１０・４・７

第千三百三十二話　完全包囲

第千三百三十二話　完全包囲

ライダーの参戦まで得た日本はです。一気に攻勢に出て来ました。最早こうなっては誰にも止められるものではありません。そう、誰にもです。

日本の家の人全員でモナコに攻め寄せてです。完全包囲です。そこには韓国やオーストラリアまでいます。

「鮪賛成なんだぜ！」

「食べても別にいいでごわす！」

日本のお家の人に混ざって言っています。勿論日本のお家の人達もいます。

「鮪禁止反対！」

「人種差別反対！」

「嫌がらせするな！」

最早モナコに打つ手はありません。ただ囲まれているだけです。

「な、何でこんなことになるのよ・・・・・・」

「まさか日本がここまでやるなんてな」

フランスにしても想定の範囲外でした。日本がここまでするとはです。

「おい、投票でもな」

「負けたの？」

「惨敗だ」

肝心の投票でもそうなのでした。

「どうするんだ？まだ何かするか？」

「何かって言われても・・・・・・」

モナコも完全に弱気になっています。包囲されてしまってはです。

「もうどうしたらいいのよ。折角鮪規制できると思っていたのに」

相手があまりにも悪かったです。もうモナコにはどうすることも

できませんでした。彼女にとっての敗北、日本にとっての勝利は近付いていました。

第千三百三十二話　完

２０１０・４・７

第千三百三十三話　敗北しました

第千三百三十三話　敗北しました

日本側の思いも寄らぬ頑張りと物凄い人材の活躍によって鮪禁止はなりませんでした。日本にとっては大勝利、モナコにとってはまさかの大敗北でした。

そのモナコは。敗北を認めてからも呆然としています。

「日本ってあんなに強かったの・・・・・・」

「だから強いなんてものじゃねえんだよ」

フランスがそのモナコに対して言います。

「俺とドイツだぞ。わかるな」

「そんなに強いって言ってくれたらよかったのに」

「言って聞いたか？」

フランスはここでモナコにもう尋ねます。

「それで聞いたか？あの時」

「それは」

「そうだな。御前は日本をわかっていなかった」

つまり敵のことを知らないで喧嘩を売ったのです。

「その結果という訳なんだよ」

「じゃあ日本がわかっていたら」

「こんな喧嘩は売らなかっただろうな」

フランスはさめた口調です。

「そういうことだ。まあ鮪は後で俺が規制案出しておくからな」

「禁止じゃないのね」

「もうそれは無理さ。禁止がいいところだな」

こう言ってその規制案を出すというのです。少なくともフランスは日本のこともわかっています。そして鮪のこともわかっているのでした。モナコと違って。

第千三百三十三話　完

2010・4・8

第千三百三十四話　皆がいる

第千三百三十四話　皆がいる

勝利を収めた日本はというと。モナコのお家の周りからは去りました。勝ったらもう包囲をする必要はないということです。ここで徹底的に攻めて潰すということはしませんでした。

「目的さえ達せられれば私はそれでいいです」

「いいのか？また仕掛けて来るかも知れないぞ」

脚本家さんが一応このことを忠告します。

「それでもか」

「はい、今はこれでいいです」

こう言って去るというのです。

「また何かしてこられたらその時はまた」

「やってやるのか」

「私も本気になりました」

その通りでした。その目は本当に本気のものです。

「ですから」

「そうか。じゃあその時は俺もいるからな」

「有り難うございます」

「わいもおるで」

「私もいますので」

そして日本のお家の他の人達も言ってきます。皆がいます。

「もう二度とあんなこと出させへんで」

「何があっても」

「はい、その時は宜しく御願いします」

日本にはこんなに頼りになる人達がいます。他には台湾もいてくれています。頼りになるかどうかは疑問ですがライダー達まで。決して一人で戦うわけではないのです。

第千三百三十四話　完

2010・4・8

第千三百三十五話　恐怖の両翼

第千三百三十五話　恐怖の両翼

太平洋にはこれでもかと色々な国家があります。欧州の比ではなく強烈な個性を持った国家ばかりです。なおその中には日本も入っていたりします。

しかしその中でもです。この二国は別格です。

「ある意味最強やな」

スペインが唸るその二国とは。韓国とオーストラリアです。

「全ての起源は俺なんだぜ！」

「鯨は駄目だが鮪はいいでごわす」

韓国はばしっとポーズを決めオーストラリアはコアラを抱いています。またそのコアラが不敵な笑みを浮かべ何か物凄く不気味です。

「俺は皆の一番上の兄貴でもあるんだぜ」

「おいどんのお家の野生動物が皆を待っているでごわすよ」

「韓国もあれやが御前の家今まで結構野生動物死んでへんか？」

流石にスペインも突っ込みを入れざるを得ません。

「フクロオオカミってまだおるんか？」

「多分いると思うでごわす」

随分とあやふやな返事が返ってきました。

「何なら探してみるでごわすか？」

「御前が見つけんかい。っていうかほんまこの連中ある意味凄いわ」

二人を見て完全に呆れています。

「まさに太平洋の両翼やな」

「じゃあ俺が右なんだぜ」

「おいどんが左でごわすか」

「ああ、どっちがどっちかはええけれどな」

スペインはそれは問題にしていません。とにかく強烈な個性の二人です。

第千三百三十五話　完

2010・4・9

第千三百三十六話　考えない両翼

第千三百三十六話　考えない両翼

その太平洋の両翼ですが非常に困ったことがあります。それが何かというとです。

「考えないんですよね」

「そうなのよね」

台湾と香港が困った顔で言います。ただし香港の表情はいつもと変わりません。台湾だけが困った顔になっていたりします。

「もう何一つとして」

「それで行動力だけはあるから」

ある意味最悪です。

「本当にどうしたものか」

「もてあましているのよ」

「サッカーの起源は俺の国なんだぜ」

「とりあえず日本に抗議するでごわす」

こんな調子です。オーストラリアに至ってはこの前モナコを完膚なきまで叩きのめした日本に対して喧嘩を売ろうとさえしています。

しかも韓国もです。日本に対して言います。

「鶏食いたくなったから貰ってやるんだぜ」

「鯨を食うことは許さないでごわす」

オーストラリアと協同しているわけではありませんが動きが合っています。二人でその日本に対して文句を言うのです。やはり何も考えずに。

「さあ、早く寄越すんだぜ」

「鮪だけ食うでごわす」

「こんな調子だから」

台湾も肩を竦めさせて呆れています。何時かとんでもないことになりそうですがそれでもわかるような二人ではありません。

第千三百三十六話　完

2010・4・9

第千三百三十七話　猫耳フランス

第千三百三十七話　猫耳フランス

フランスは時々猫耳を生やしたりします。しかも尻尾まで生やします。

「御前のその尻尾だが」

「耳はいいのかよ」

「それも気になるがまずは尻尾だ」

ドイツはうんざりとしたような顔でフランスに対して言います。彼のあんまりなファッションに言いたいことをどうしても我慢しているようです。

「それがだ」

「これかよ」

「どうして生やしているのだ？まさかとは思うが」

「安心しな。幾ら何でも後ろの穴とかはないからな」

「それを言うな。ダイレクト過ぎる」

ドイツはこのことにはすぐに言いました。

「しかしだ。とにかくだ」

「それでどうやって生やしてるかだよな」

「そうだ。どうしているのだ？」

「ちゃんと紐を腰に縛って着けてるんだよ」

そうだというのです。

「尻尾の先にな。二本の白い紐があってな」

「それを後ろから回して腹のところで括ってか」

「そうだよ。驚いたか？」

「まさかと思った。流石に後ろはなかったか」

ドイツにしてもその可能性を心配していたのです。とりあえずわかったフランスの尻尾の着け方です。何故か動いてもいる尻尾ですが。

第千三百三十七話　完

2010・4・10

第千三百三十八話　前を隠せ

第千三百三十八話　前を隠せ

フランスのその猫耳姿ですが最大の問題はです。彼は裸なのです。

「そんなに裸が好きか」

「ああ、大好きさ」

またしてもドイツのうんざりとした顔の言葉に応えます。右目をウィンクしてみせてとても明るい顔です。ドイツとは完全に正反対にです。

「やっぱりな。開放感があるぜ。自由だよな」

「殆どスーパーフリーな自由だな」

「そうか？これこそが真の自由だけれどな」

そんなヌーディストなことを言うのでした。

「ギリシアの昔の彫刻とか絵画とかだって裸ばかりじゃないか。ローマ爺ちゃんだって裸が好きだったしな。あの時のオリンピックだってな」

「今は違う」

ドイツの見事な突っ込みでした。

「今はそれはないだろうが。それに昔にしてもだ」

「昔にしてもかよ」

「普段は服を着ていた。御前みたいにそうそう裸になっていたわけではない」

「俺だってたまにだぜ」

流石にいつもというわけではありません。当然といえば当然ですが。

「それはな」

「しかもだ。隠せ」

ドイツの今度の言葉はこれでした。

「前は隠せ。せめてな」

そのフランスを見て言います。それもそのままのフランスでした。

第千三百三十八話　　完

２０１０・４・１０

第千三百三十九話　やはり同類！？　☆

その猫耳フランスがイギリスに声をかけます。
「よおイギリス」
「何だってんだ！？」
流石にその格好で来られては誰でも言葉を荒らいものにさせます。
イギリスも当然です。
「一緒に開放的な気分になってみないか？」
「話し掛けるな！同類に見られるだろうが！」
イギリスでなくても言います。その格好は誰がどう見てもド変態です。仕方ありません。
しかしです。フランスはここでぽつりと言います。
「オ○ニーマラソン・・・・・・」
「うっ・・・・・・」
その言葉を聞いたイギリスの顔が強張りました。
「世界で一番エロい都市」
「そ、それはだな」
イギリスかなり苦しそうです。何か強烈な心当たりがあるようです。
フランスはさらに言います。ここぞとばかりに。
「この前御前のところの性教育のビデオ観たけれどまんまアダルトだよな」
「あ、あれはだな」
「あれで教育用だったら御前普段どんな凄いの観てるんだよ」
「だからあれは」
こうなってはどうしようもありません。フランスはあえて温かい声でそのイギリスに対して告げました。
「御前も仲間なんだよ。認めて楽になれよ」

「お、俺は違う・・・・・・」
肩を叩くフランスにさらに言いますが。かなり苦しい立場になったイギリスなのでした。

第千三百三十九話　　完

２０１０・４・１２

第千三百四十話　少佐

第千三百四十話　　少佐

イギリスは同性愛の人も多いです。昔とはうって変わって、です。
「確か昔オスカー＝ワイルドはそれで捕まっていますね」
「昔の話だからな」
イギリスは平気な顔で日本に対して返します。
「それもな」
「昔の話ですか」
「それよりも日本、御前の家の漫画で俺の家の人が出てるだろ」
「ああ、あの少佐ですか」
「ＭＩ６のな。髪の長いな」
「はい、あの王様にいつもやられている人ですか」
「あの人だってそうじゃねえか」
イギリスはその人の話をするのでした。
「同性愛者だよな」
「もう節操がない位に」
「顔はいいけれど変態なんだな」
「王様はそう言っていますね」
その十歳の王様にいつもしてやられていたりします。勝っているのは腕力だけで弱みを握られまくっていてそれで何かとしてやられているのです。結構苦しい立場にいたりする少佐です。
「最初は最愛の人とか言っていましたけれど」
「今じゃ変態か」
「はい、そういう関係です」
「俺の家の人だから応援したいんだけれどな。確かに変態だからな、あの人は」
イギリスも難しい顔になります。そんな日本のお家の漫画のキャラクターです。

第千三百四十話　完

2010・4・12

第千三百四十一話　テレビでも

第千三百四十一話　テレビでも

イギリスは凄いです。何とＡＶビデオがです。
「あの、イギリスさあ」
「どうした？」
お家に遊びに来ていたイタリアの言葉に応えます。イタリアはテレビの前でかなり戸惑った顔をしています。イギリスにとってはそのことがわかりません。
「そんな顔してよ」
「幾ら何でもこれはないんじゃないかな」
イタリアはその顔でイギリスに対して言います。
「エッチなビデオをテレビで放送するのはさ」
「うちはそういうのにオープンになったんだよ」
「そういう問題じゃないんじゃない？」
イタリアにしては珍しくキレの悪い言葉です。
「これはさ」
「そうか？別にいいだろ」
しかしイギリスは平然として返します。
「むしろ隠してる方が駄目だろ。ここはオープンにいかないとな」
「オープン過ぎるよ、かなりさ」
「そうか。イタリアにもまだこういうのはわからないんだな」
何故か少し得意そうに言うイギリスでした。
「どうやら俺はこのことでは一歩先に出てるみたいだな」
「そうかな。先に出てるとかそういう話なのかな」
イタリアはイギリスのその言葉に首を傾げさせます。イタリアにとってはそうなることでしたがイギリスは得意そうに笑っています。
そんな二人でした。

第千三百四十一話　完

2010・4・13

第千三百四十二話　あっちの方面も

第千三百四十二話　あっちの方面も

イタリアは何だかんだでイギリスのテレビを観続けています。それまでは普通のＡＶだったのですがここで、です。番組が変わり出て来たのは。

「やらないかなんだね」

「だからよ。何でもオープンにいかないとな」

ここでもこう言うのでした。

「そうじゃないと駄目だろ」

「だから凄過ぎるんだけれど」

イタリアはさっきよりも戸惑っています。

「幾ら何でもこっちの方面は危ないよ」

「だから今時そんなこと言うなよ」

幾ら言われても平然としているイギリスでした。

「これ位な。いいじゃねえかよ」

「よくないと思うけれど。お坊さんとか怒らない？」

「どうだろうな。怒りそうではあるけれどな」

むしろ怒らない方が不思議です。かつてお坊さんに髪の毛を切られそうになったイギリスですがその時とは時代が違うのも事実でありますが。

「まあ今のところは大丈夫だぜ」

「そうなんだ、凄いね」

「やっぱり凄いか」

「ここまでやれるなんて」

イタリアも唖然とするイギリスの今でした。彼もお兄さんはオープン派ですがそれでもです。

「ううん、信じられないなあ」

「俺の家も凄いだろ」

最後は腕を組んで自慢するイギリスでした。そんな彼でした。

第千三百四十二話　　完

２０１０・４・１３

第千三百四十三話　渦中の森

第千三百四十三話　渦中の森

ポーランドが交通事故に遭いました。彼のことになると何につけても、自分のことでも放っておいてやって来る人がいます。そう、彼です。

「ポーランド、大丈夫なの!?」

「ああ、リト」

彼の入院先に行くと右手と左足にギプスをして頭に包帯を巻いてベッドに寝ているポーランドがいました。リトアニアに顔を向けて声を返しています。

「来てくれたん」

「来てくれたじゃないよ。一体急にどうしたの?」

リトアニアはかなり焦った顔で彼に対して問います。

「ロシアさんのお家でって。まさか」

「ああ、あれ事故だから」

ポーランド本人の言葉ではそうなっています。

「だから気にせんでええし。ロシアも現場にいなかったし」

「そうなんだ、一応そうなんだ」

それを聞いてまずはほっとするリトアニアでした。しかしです。

「けれど。ロシアさんだからなあ」

「御前真相知っていてもそれで言えるん?」

ポーランドがこうリトアニアに対して囁きます。

「ちなみに俺真相知らんけど。怪我した本人だけど」

「それ言ったら交通事故じゃ済まないよね」

「そういうことだから。交通事故だから」

無理にでもそういうことになってしまうのでした。何はともあれ相棒の危機には真っ先に駆け付けてくるのがリトアニアなのでした。

第千三百四十三話　完

2010・4・14

第千三百四十四話　世話女房

リトアニアは入院しているポーランドにつきっきりになってです。もうあれやこれやと世話を焼きます。
「ほら、林檎剥いたから食べてよ」
「何か欲しいものある？本でも何でも言ってくれたら持って来るから」
「っていうか御前いつもいてね？」
ポーランドはつきっきりで看病してくれるリトアニアに対して尋ねました。
「御前のことはええのん？」
「学校はちゃんと言ってるから」
「いや、学校だけじゃなくて。御前ずっと病院にいね？」
「ちゃんとお風呂とかは入ってるから。学校のシャワーとかでさ」
「だからそういうのじゃなくて。御前何時寝てるん？」
「何時って。ちゃんと寝てるよ」
リトアニアはずっとポーランドの傍にいます。枕元に座ってそのうえで彼の言葉に応えるのでした。
「ちゃんと毎日ね」
「場所は？」
「ここ」
今度の返答は一言でした。
「ちゃんとここで寝てるよ。寝袋も持って来たし」
「ここでって。御前そこまでするん」
「心配だからね。長い付き合いじゃない」
ポーランドを本当に心配する顔で見ながらの言葉でした。
「いつもこうだっただろ？だから余計なこと気にしなくていいからさ」

「有り難うな」
多くの言葉はいりませんでした。この一言だけで充分でした。ポーランドに何かあったらすぐに駆け付けて全力で助ける、そんな頼りになるパートナーです。

第千三百四十四話　　完

２０１０・４・１４

第千三百四十五話　離れ離れだった時も

第千三百四十五話　離れ離れだった時も

リトアニアとポーランドはいつも一緒です。けれどかつてはそうではなかった時もあったのです。

「俺がオーストリアさんのとこにいて」

「俺がロシアさんのところにいて・・・・・・って俺滅茶苦茶損してるような」

これはいつものことですがあらためて自分の運のなさに気付いたリトアニアでした。よりによってロシアですから確かに運に恵まれていません。

それは置いておいて二人はいつも一緒でいられた訳ではないのです。かつてはこの様に離れ離れだったのです。そしてその時もリトアニアは。

「ポーランド大丈夫かな」

ポーランドのことを気にかけていたのです。

「困ってないかな。オーストリアさんに厳しくされてないかな」

こんなことばかり考えていました。

「やっぱり俺がもっと頑張って独立を維持していたら」

こうも思うのでした。思っても仕方ないことですが。

そしてそのポーランドもです。

「リトどうしてるか知らん？」

時々人に聞いたりしていました。

「元気ならいいしーーー。どうなん？」

お互いのことを気にしていたのです。そして長い時を経てです。

リトアニアは何とかロシアから完全に独立してポーランドもロシアの衛星国から離れました。そして二人はまた一緒にいられるようになったのです。

「今は国は別々だけれどね」

「そんなの大したことないしーーー」
今ではいつも一緒です。多くの苦難がありましたが。

第千三百四十五話　　完

２０１０・４・１５

第千三百四十六話　三国といっても

第千三百四十六話　三国といっても

リトアニアは俗にバルト三国の一国と呼ばれています。けれど実際はこうした風にどっちかというと、というか完全にポーランド寄りです。本当に長い付き合いですから。

そしてエストニアはです。どうかといいますと。

「あっ、フィンランドさん」

「エストニア君、また僕の家に来てくれませんか？」

二人はにこやかに言葉を交えさせます。

「パーティーの準備ができていますよ」

「有り難うございます、それでは」

こうしてエストニアも新しいパートナーを見つけています。二人の仲もかなりいいです。リトアニアは昔からの相棒と、エストニアは新しいパートナーと。いつも一緒です。

しかし残ったラトビアはです。どうかといいますと。

「誰か僕とお友達になって下さい」

こうなっています。

「誰かいませんか？ＥＵのどなたか」

「そうよね、私も」

そしてそれはウクライナもでした。

「私と誰か。お友達になって下さい」

「できれば日本さんみたいな優しくて頼りになる人が」

「生徒会長や台湾ちゃんはいいわよね」

ウクライナは切実に二人を羨ましく思うのでした。

「日本さんが隣にいてくれて」

「そうですよ。僕達なんかもう」

そんな孤立している二人でした。完全に孤立しています。

第千三百四十六話　完

2010・4・15

第千三百四十七話　イタリアが思い出したこと

第千三百四十七話　　イタリアが思い出したこと

「ああ、そうだ」

イタリアはいつもの様にお家に来たドイツと一緒にいる時にふと思い出したのでした。

「最近ポーランドに会ってないや」

「そうだったのか」

「やっと同じＥＵになれたのに最近会ってないんだ」

「そういえば御前もあいつもかつてはオーストリアのところにいたな」

「俺の方が先だったけれどね」

所謂ポーランド分割によってです。その時にリトアニアはロシアのところに連れて行かれてそのうえで苦難の道を歩むことになったのです。三回行われています。

「その時はよく一緒に遊んだなあ」

「ハンガリーともよく一緒にいたな」

「うん。あれっ、ドイツもいなかった？」

イタリアはふとこんなことを言いました。

「そういえばさ。神聖ローマ？あれ？よく思い出せないや」

何故かイタリアの記憶はここでかなりあやふやなものになりました。

「オーストリアさんのお家に入る前のこともよく覚えているのに」

「そういえば俺もだ」

そしてそれはドイツも同じでした。

「何故だ。あの時のことはあまり思い出せん」

「ドイツ確かいたよね」

「ああ、それは確かだが」

「どうして思い出せないんだろう、そこだけ」
何故かその時のことは覚えていない二人です。けれど何かあったのは間違いありません。

第千三百四十七話　　完

２０１０・４・１６

第千三百四十八話　けれどポーランドのことは

第千三百四十八話　けれどポーランドのことは

「それでもさ、ポーランドのことは」

「覚えているな」

イタリアとドイツはこのことは確かに覚えていました。

「オーストリアさんのところに来て」

「結構いたな」

「そうそう、それで第一次世界大戦の時に独立してね」

「御前はその前に独立したな」

「うん、上司ができてね」

ガリバルディの活躍によって独立できたのです。サルディニアから来た上司がこの時のイタリアの上司になったのです。これがイタリアが独立した時のお話です。

「それでだったんだ」

「ポーランドもあの時は苦労していたな」

「だよね。けれどずっと仲がよかったんだよ」

「今もだな」

「うん、とてもいい奴だよ」

イタリアは明るい笑顔で答えます。

「やっとロシアさんから離れて今は幸せに自立を目指して頑張っていてね」

「俺の家にもよく来る。相変わらず適当でいい加減な奴だがな」

こうしたところはイタリアと似ているのでしょうか。

「しかし悪い奴ではないな」

「そうだよね、昔からね」

「人見知りはするが」

「あれっ、そうなんだ」

彼の人見知りは知らないイタリアでした。誰とでも仲良くなれて

しかも嫌われない、イタリアのいいところです。

第千三百四十八話　　完

２０１０・４・１６

第千三百四十九話　実は相棒が羨ましい

第千三百四十九話　実は相棒が羨ましい

ポーランドとリトアニアの関係は問題もないわけではありませんがそれでもまさにパートナー同士です。その関係は非常に素晴しいものです。

そんな彼等を見ている人がいます。それは日本でした。

「いいものですね」

「いいと思うんだな」

「はい、イタリア君にはロマーノ君がいますし」

こうプロイセンに対して答えます。確かにその仲はあまりよくないけれどです。それでもかけがえのない兄弟同士でありパートナー同士であることは事実です。それは否定できないことなのは間違いありません。

「それに貴方とドイツさんもまた」

「ああ、最高の相棒だぜ」

プロイセンは嬉しそうな笑顔で日本に対して答えます。

「やっぱりな。東と西が一緒になってこそだからな、俺達は」

「そうですよね。いいですよね」

ここで日本の目が少し遠いものになりました。

「そうしたパートナーがいるというのは」

「その通りだ。しかしよ日本」

プロイセンは今の日本を見て気付いたのでした。

「どうしたんだよ、急に」

「急にといいますと」

「何か遠くを見ているけれどよ、どうしたんだ？」

「いえ、別に」

あえて言いませんでした。しかし実はこう思っていたのです。自

分もそうしたパートナーが欲しいものだと。日本のささやかな願いでありました。

第千三百四十九話　　完

２０１０・４・１７

第千三百五十話　パートナーはいなくても

第千三百五十話　パートナーはいなくても

実はパートナーが欲しかったりする日本。しかしその周りはいつも誰かがいます。決して寂しくはありません。

「日本、来てやったんだぜ！」

「日本さん、韓国なんか放っておいてですね。これから私のお家で私の料理を」

まずは韓国と台湾です。本当に日本の周りにいます。そして他にも。

「やあ日本、面白いゲームないかな」

「日本、新しい漫画を貸して欲しいある」

アメリカと中国もしょっちゅう来ます。二人との関係もかなり親密です。どちらとのお付き合いにもかなり問題を抱えているのも事実ですが。

しかもです。他の人達も。

「日本さん、また来て下さいね」

「楽しみにしていますから」

タイとベトナムもです。二人は笑顔で日本に対して言うのでした。おまけにオーストラリアも何だかんだで来ています。

「鯨食うのは反対でごわすが鮪はいいでごわす」

こんなことを言いながらです。それでも日本の傍にいることが多いです。

そして極めつけは。この二人です。

「やっぱり日本さんはいいですよね。優しいうえに頼りになります」

「全くでい。あんないい奴他にはいねえな」

フィンランドとトルコが満面の笑顔で言います。こんな調子で日本の周りはいつも多くの国や人に囲まれています。孤独とは全く無縁であります。

そしてそんな日本を見てカナダはぽつりと言うのでした。
「いいよなあ、いつもあれだけ皆に見てもらっていて」
誰にも気付いてもらえない国もあるのですから。確かに日本は恵まれています。パートナーこそいませんが友人は物凄くいるのですから。

第千三百五十話　　完

２０１０・４・１７

第千三百五十一話　リトアニアの知らない友人　☆

第千三百五十一話　リトアニアの知らない友人　☆

「いやーーー、リトと出掛けるなんて久し振りだしーーー」
「あんまり騒いじゃ駄目だよ」
雨の日の二人での外出です。リトアニアがポーランドに対して言っています。
「えーーー、折角の買い物だしパーーーッといかん？」
「けれど今国々の間でとても緊張してるでしょ」
相変わらず心配性です。リトアニアが何処までもポーランドのことを大切に思っています。それは変わることがありません。
「それでなくてもポーランドは色々な国から狙われてるし」
「まあそうかね？」
「そうだよ。俺だってさ」
リトアニアの心配性な言葉は続きます。
「凄く心配なんだよ。ロシアさんとかプロイセンさんとかいるじゃない」
「あっ、イタリア！」
リトアニアが離している間にポーランドはたまたま通り掛ったイタリアに駆け寄ります。そしてイタリアの方も彼に気付いてです。
「ポーランド、ポーランド！？」
「久し振り。元気、元気じゃね！？」
「うん、凄く元気だよ！」
「えっ、あの人見知りのポーランドが」
リトアニアは今自分の目の前で起こっていることが信じられずに呆然となっています。
「楽しそうに人と話してる？」
「ああ、リト」

その人見知りからの言葉です。
「ちょい紹介していい？」
「紹介って」
ポーランドが紹介するその人とは。リトアニアにとって思いも寄らない展開となりました。

第千三百五十一話　　完

２０１０・４・１９

第千三百五十二話　ポーランドは昔から

第千三百五十二話　　ポーランドは昔から

今日はリトアニアのお家に二人でいます。二人で向かい合って座ってそのうえでお菓子を食べながらお話をしているところでした。

「それにしてもポーランドは」

「何なん？」

「人見知りだよね」

「まあそうじゃね？」

「そうじゃねって。自分のことだし」

「俺ずっとリトといたしーーーー」

リトアニアと一緒にいる分他の人とはいなかったりします。リトアニアにしてもバルト三国といいながら実際はいつもポーランドと一緒にいます。

「それでもよかね？」

「まあね。俺にしても」

ここでリトアニアも言います。

「ポーランドと一緒だったら安心できるし」

「俺一人嫌いだしーーーー」

ポーランドの難しいところです。寂しがり屋なのですがそれでも一人でいることは好きではありません。いつも二人でいたい人なのです。

「だからこうして一緒にいるしーーーー」

「そうだけれどね。それでだけれど」

「今度は何なん？」

「ＥＵでも一緒にやっていこうね」

「そんなの当然だし。言うまでもなくね？」

人見知りしてもリトアニアとはいつも一緒です。そんなポーラン

ドです。

第千三百五十二話　完

2010・4・19

第千三百五十三話　あのポーランドが　☆

第千三百五十三話　あのポーランドが

☆

「こんにちは、イタリアヴェネチアーノです」
「俺達が分割されてた頃の仕事仲間ーーー。マジいい奴だって」
イタリアがリトアニアに対して名乗ります。ポーランドも彼に対してイタリアを紹介します。もうそれだけでかなり仲がいいことがわかります。
「えへへ、あの頃は色々夢語り合ったりしたよねーーー」
「お互い独立できてよかったし。それであの時俺さーーー」
「何これ・・・・・・」
リトアニアはイタリアと楽しく話すポーランドを見て唖然としながら。こう呟くのでした。
「俺の知らないポーランドがいるんだけれど」
そして思い出すことは。
「じゃあ頑張ってね」
「は、はい・・・・・・」
後ろに鞭を持ったロシアがいます。そしてこき使われているかつての自分の姿です。ロシアにいた頃のリトアニアの思い出です。お世辞にもいい思い出とは言えません。
けれど目の前のポーランドはです。楽しくイタリアとお話しています。
「そうだったんよ」
「あっ、そうだったんだ」
「そんで御前今どうなん？日本さんと知り合いってほんまなん？」
「うん、いい人だよ。親切で謙虚でね」
「そういう人滅多におらんしーーー。御前も新しい友達見つけたでよかったし」

こんな話をしています。
物凄く仲がいいことがわかるポーランドとイタリアです。リトアニアが知らなかった相棒の友人関係でした。彼も意外と顔が広いです。

第千三百五十三話　　完

２０１０・４・２０

第千三百五十四話　イタリアが好かれる理由

第千三百五十四話　イタリアが好かれる理由

「ポーランドとイタちゃんって友達だったのかよ」
「そうだよ。プロイセンは知らなかったんだ」
「ああ、初耳なんだよこれが」
プロイセンがイタリアとお話をしています。プロイセンはドイツの相棒らしくイタリアに対してかなり好意的です。むしろドイツより親切な位です。あのドイツよりもです。
「そうか、イタちゃんって友達多いんだな」
「そうかな。俺は別に」
「付き合いやすいんだよな。嫌味なこともないしな」
そのイタリアを好きなプロイセンの言葉です。
「だからなんだよ。実は俺もな」
「プロイセンも？」
「イタちゃん好きだからな。何かあったらすぐに言ってくれよ」
「うん、有り難う」
「相棒もいるからな」
言うまでもなくドイツのことです。
「アジアには日本もいるだろ。イタちゃんの為なら皆一肌脱ぐからな」
「何か悪いね、いつも」
「愛嬌もあるしな。イタちゃんならいいんだよ」
本当に物凄く甘いです。
「まあ日本は韓国と台湾がいつも一緒だから騒がしくなるけれどな」
「俺騒がしいのも大好きだから全然平気だよ」
「そうだよな。本当にイタちゃんはいい奴だよ」
だからイタリアが好きなプロイセンなのでした。イタリアの気候

や風景や食べ物が大好きなのも言うまでもありません。ドイツよ二人でイタリアの為なら何でもする人なのです。

第千三百五十四話　　完

２０１０・４・２０

第千三百五十五話　ポーランドだって

第千三百五十五話　ポーランドだって

イタリアと意外なまでに仲がいいことを知ったリトアニア。実は内心嫉妬を感じないでもありませんでした。

しかしです。こう思いなおしたのです。

「俺達も別々だった時期長かったし」

分割は二人にとっても大きいことだったのです。

「それにポーランドだってポーランドの付き合いがあるし」

彼にしてもバルト三国として一くくりにされることが多いです。実際にはその二国よりもポーランドと一緒にいることが多いのですけれど。

「それも当たり前かな」

こう思うようになってきています。

「ポーランドがイタリアと付き合っても」

「なあリト」

ここでそのポーランドが彼に声をかけてきました。

「どうしたん？そんなに悩んで」

「あっ、何でもないよ」

そのポーランドに対して慌てて言葉を返しました。

「別にさ」

「そうなん。それで今度は何処に行くん？」

「そうだね。日本さんのところとかどうかな」

「ああ、あの人料理上手いし親切だしよかね？」

「うん、じゃあ今度は日本さんのお家に行こう」

「そうする？じゃあ俺またお洒落してくしーーーー」

何だかんだいってもポーランドはリトアニアといつも一緒にいます。そうした意味ではリトアニアはポーランドの一番のパートナーであり続けています。

第千三百五十五話　完

2010・4・21

第千三百五十六話　三国の関係は

第千三百五十六話　三国の関係は

バルト三国と一口に言われています。しかしそれぞれの付き合いはどうかというとです。

「ポーランド、それじゃあ日本さんのお家に行こうよ」

「ああ、今からな」

まずリトアニアはポーランドといつも一緒です。その絆は欧州でも随一と言ってもいい位です。今もとても仲のいい二人です。

そしてエストニアはといいますと。

「あっ、フィンランドさん」

「エストニア君、今からパーティーしますけれどどうですか？」

「はい、今から行かせてもらいます」

最近本当にフィンランドと仲がいいです。そのお付き合いでかなり豊かにもなってきています。彼も最高のパートナーを迎えることができています。

そしてラトビアですが。彼も何とか孤立から抜け出せてはいます。

「やっと、やっとＥＵに入ることができました」

こう言って感涙しています。

「もうこれで完全に孤立とかそういうことはなくなりました」

「一体どういう過去だったんだ」

ドイツがそのラトビアに対して尋ねます。

「まあ御前もこれからＥＵの一員だからな。色々と頼むぞ」

「はい、ドイツさんと一緒にいられるだけでも有り難いです」

「そこまでロシアの隣は怖いか」

「物凄く怖いです」

まんま本音を言っています。

「生徒会長は何であんなにいい場所にいるんですか？日本さんのお隣なんて僕が行かせてもらいたいんですけれど」

「言っても仕方ない。諦めろ」
欧州と太平洋でここまで違います。ラトビアはある意味壮絶な貧乏くじを引いています。

第千三百五十六話　　完

２０１０・４・２１

第千三百五十七話　一人だと

第千三百五十七話　一人だと

珍しく一人でいるリトアニア。しかし何か落ち着きません。
「どうしてるかな、あいつ」
一人になっても考えるのは彼のことです。
「今こうしているうちにもロシアさんが、いやドイツさんだって」
こんなことを考えて仕方がありません。
それで携帯を手に取ってです。すぐに連絡しました。
「あっ、ポーランド？」
「何なん？」
「いや、元気にしてる？」
こう尋ねるのです。
「今元気にしてる？どうなの？」
「えっ、俺いつもと変わらんしーーーー」
電話の向こうのポーランドはいつも通りお気楽な調子です。
「それよりどうしたん？声落ち着きないけど」
「ちょっと気になってさ。今暇？」
「今日本さんのとこいるしーーーー」
「ああ、そうなんだ」
それを聞いてまずはほっとしたポーランドでした。
「それだったらいいんだけれど」
「うん、それで御前も来ん？」
ポーランドの方から誘ってきました。
「日本さんのとこ。どうなん？」
「うん、それじゃあ」
日本と聞いて安心したリトアニア、すぐにポーランドのところに行きます。日本のところではなくポーランドなのが彼なのです。

第千三百五十七話　完

2010・4・22

第千三百五十八話　日本が出したもの

第千三百五十八話　日本が出したもの

日本のお家でも一緒になったポーランドとリトアニア。日本はそんな二人を前にしていつもの静かな微笑みを浮かべています。

「御二人はいつも仲がいいですね」

「あっ、はい。長い付き合いでして」

「もう数百年になるしーーーー」

「そうですか。数百年ですか」

尚日本はそれ位は平気で生きています。外見からは想像できないのですが彼はかなりの高齢だったりします。枢軸で一番年上なのです。

「その頃私は確か室町時代でしたね」

「室町っていうと」

「あの金閣寺じゃね？」

「はい、あの頃になりますね」

やはりその頃でした。

「あの頃もまた懐かしいものです」

「そうでしたか。その頃だったんですね」

「俺達の付き合いも長いけれど日本さんって結構高齢じゃね？」

「その長い間に知ったものですが」

こう言って二人に出してきたものは。

善哉でした。二つずつ、合わせて四つです。

「どうぞ。御二人に相応しいと思いまして。夫婦善哉です」

「カップルだからですね」

「この場合はパートナーじゃね？」

「そうです。ではどうぞ」

二人に勧めた善哉はとても美味しいものでした。二人の味がするものでした。

第千三百五十八話　完

2010・4・22

第千三百五十九話　リトアニアの背中　☆

第千三百五十九話　リトアニアの背中　☆

ポーランドとイタリアの仲のよさに複雑な気持ちのままのリトアニア。ポーランドのお家でお泊りになってもそれは消えませんでした。

「なあリト」

「何？」

「折角の泊まりなのに顔がマジ辛気臭くない？」

「な、何でもないよ」

リトアニアは咄嗟にそのことを否定します。

「それよりお風呂いいかな」

「ああ、ええよ」

「それじゃあ」

こうしてリトアニアはそそくさとお風呂に入りました。ポーランドはそんな彼を見て流石におかしいと思わざるを得ませんでした。

それで、です。

「今日のリトマジ有り得んし。こうなったら」

そしてやることは。

「お風呂のぞいてやるしーーーー」

二人は一緒にお風呂に入ることも多いです。別に怪しい関係ではありませんが相棒同士子供の頃からそうして一緒になっているのです。

それでお風呂をのぞくとリトアニアがいました。しかしその背中は。

見事なまでに傷だらけです。ポーランドはそれを見て黙ってしまいました。

「俺の知らないリトいるしーーーー・・・・・」

ロシアのところにいるのは本当に辛いことです。それが身体に出

ています。
　それでそっとのぞくのを止めてお風呂場のところを後にしたポーランドでした。相棒同士でもお互いに知らないことがあるのでした。

第千三百五十九話　　完

２０１０・４・２３

第千三百六十話　この人は奇麗

第千三百六十話　この人は奇麗

「うんうん、その気持ちわかるんだぜ」

韓国がポーランドやリトアニアのかつてのオーストリアさんやロシアのところに入れられていた時のことを聞いて納得したように言います。

「俺も大変だったんだぜ。日本の統治はそれは恐ろしいものだったんだぜ」

「えっ、けれどあんた滅茶苦茶血色よかったしーーーー」

「かすり傷一つないじゃない。強制労働とか全然していないじゃない」

「俺は辛いことは全部経験してきたんだぜ」

けれど本人はこう言います。

「日本の奴に七奪を受けたんだぜ。それで何もかもがぼろぼろになったんだぜ」

「あんたの国何もないしーーーー」

「日本さんに奪われたにしては物凄く豊かになったし」

しかもこの人多くの人に言われていますが日本の上司に贔屓されていました。それこそ一緒にいた台湾よりもまだです。別格扱いだったのです。

「上司で中将までいた人いたし」

「それで何処が過酷だったのかな」

二人にしてみればそうとしか思えないことです。そもそもその頃韓国は日本のお家の立派な一員としていたのです。もう二人とは待遇が全然違っていたのです。

「あんたハングル日本さんに教わったんちゃうの？」

「俺達自分の国の言葉なんてさ。とてもだけれど」

特にリトアニアはそうでした。

「一回ロシアの世話なってみ？よくわかるしーーー」
「物凄いからさ」
けれど二人の言葉は届きません。韓国の中ではまさに日本の統治こそが究極の虐政なのです。何処がどう虐政なのかわかりませんが。

第千三百六十話　　完

２０１０・４・２３

第千三百六十一話　欧州組でも

第千三百六十一話　欧州組でも

日本だけでもチームを作れました。もっともこれは侍という非常に大きなくくりではありますが。しかしそれを見たオランダがベルギーに対して言いました。

「俺達も作ってみないか」

「作るってチームを？」

「ああ、丁度数もいるしな」

数も揃っているというのです。

「まずは俺と御前だ」

「ええ」

これで二人です。

「それにモナコも入れる」

「あの娘もなのね」

「そしてリヒテンシュタインだ」

彼女もだというのです。

「そして残る一人はだ」

「それがかなり問題じゃないかしら」

ベルギーはここまで話を聞いて呟きました。

「スイスは。ちょっと」

「しかし残りはあいつしかいないぞ」

「だから無理に入れなくても四人でいいんじゃないかしら」

「戦隊は基本五人だぞ」

「それでも。スイスは」

オランダは何とかスイスを入れようとしています。しかし相手はあのスイスです。果たして上手くいくのでしょうか。他のチームより難しそうです。

第千三百六十一話　完

2010・4・24

第千三百六十二話　意外とあっさりと

第千三百六十二話　意外とあっさりと

「チームを作るのであるか」
「ああ、俺とベルギーとマルタとな。それで」
「我輩とリヒテンシュタインであるな」
「それでどうだ？」
オランダはこうスイスに対して提案するのでした。
「五人でな。丁度五人のチームもあるしな」
「今の天使達ではなく獣であるな」
何気にどのチームなのかをしっかりとわかっているスイスでした。
「そうであるな。よかろう」
「えっ、いいのか！？」
スイスがあっさりと答えてきたのでこれにはオランダも驚きです。
「本当にいいのか？そんなに簡単に」
「我輩も皆と遊びたい時もある。それでは駄目か」
「いや、こっちとしては参加してくれるんなら有り難いけれどな」
それはその通りなのですがあっさりと認めてきたことにです。オランダはこのことに対して驚いているのです。もう信じられません。
「そうか、それでいいんだな」
「男に二言はない」
硬派です。実は学園屈指の硬派だったりします。
「では我輩もな」
「ああ、じゃあ頼むぜ」
「うむ、こちらこそだ」
こうしてスイスはあっさりとオランダ達のチームに加わることになりました。これで五人揃いました。

第千三百六十二話　完

2010・4・24

第千三百六十三話　顔触れはというと

第千三百六十三話　顔触れはというと

五人が集まりました。その顔触れを見ますと。

まずは言いだしっぺのオランダです。五人の中で一番背が高いのでかなり目立ちます。最初にこの人が出るのは当然と言えるでしょうか。

「最初は俺で」

「次は私ね」

その次はベルギーです。兄妹で参加となっています。

そしてもう一組か兄妹です。スイスとリヒテンシュタインです。

「こうして皆さんと一緒に何かするのも悪くないですね」

「御前がそう言うのならいいのではある」

スイスは少し憮然とした顔ですが妹の言葉に頷きはしています。

「それなら」

「はい、じゃあ五人でさせてもらいましょう」

リヒテンシュタインは穏やかに微笑んで言いました。

最後の一人はです。モナコです。

「鮪では負けたけれどね」

「しかもあっちは完全養殖に成功したそうだな」

「残念だったわ。それでも気を取り直してね」

「とりあえずそれは忘れろ」

オランダが彼女に対して言います。

「五人でやっていくからな」

「ええ、わかったわ」

この五人でやっていくことになりました。欧州の面々だけで結成したこのチーム、名前はそのまま欧州戦隊となったのでした。

第千三百六十三話　完

2010・4・25

第千三百六十四話　獣拳戦隊

第千三百六十四話　獣拳戦隊

メンバーが決まれば次にすることはです。そのモチーフとなる戦隊を決めることです。とはいっても今のところ五人のチームで空いているのは限られています。そのチームは。

「獣の力であるか」

「ああ、中国のがモチーフだけれどいいよな」

「構わないのである」

スイスはオランダの問いにそのまま答えました。

「我輩としては何の問題もない」

「女の子達もそれでいいな」

オランダは女の子達にも尋ねました。

「獣拳でいくぞ」

「ええ、わかったわ」

女の子達を代表してベルギーが答えます。

「それならそのチームでね」

「ああ、ちょっとライオンとカメレオンはいないがな」

一番人気がありそうなこの二つがなかったりします。

「五人だ、それでいいな」

「何なら連合戦隊からブラックの人とグリーンの人呼ぶ？」

モナコがこんなことを言いました。

「フランス兄さんとロシアさん」

「何気に凄い顔触れですね」

リヒテンシュタインがそのメンバーを聞いて言いました。

「せめて他の人がいいような」

「我輩もそう思うのである」

何はともあれ五人ではじまりました。残る二人はどうなるのでしょうか。

第千三百六十四話　完

2010・4・25

第千三百六十五話　レッドはやっぱり

第千三百六十五話　レッドはやっぱり

五人のメンバーが決まりました。そして次は色分けです。最初は何といってもレッドですがこのチームではやはりこの人でした。

「オレンジ軍団でもレッドでいいんだな」

「まあこのチームバイオレットでも紫だしね」

ベルギーがお兄さんに対して言っています。レッドはオランダでした。

「だからいいと思うわよ」

「そうか、それならな」

「リーダーにはならないけれどいいわよね」

「ああ、それは別にな」

構わないと答えるオランダでした。

「構わないさ」

「そう。だったらいいけれど」

「赤か」

実際に赤いジャケットを着てみるとです。似合っています。

「赤もいいもんだな。気に入った」

「兄さんの国旗にも元々赤があるじゃない」

ベルギーはこのことを指摘します。

「だったら元々ね」

「そうか、言われてみればそうだな」

「とにかくレッドは兄さんだからね。頑張ってね」

「わかったさ。まず最初は俺だな」

こうしてまずはレッドが決まりました。リーダーではありませんがやっぱりレッドが一番目立ちます。オランダがそのレッドになったのです。

第千三百六十五話　完

2010・4・26

第千三百六十六話　あそこまではしない

第千三百六十六話　あそこまではしない

オランダがレッドとなりました。しかしです。

彼は少し憮然とした顔になってです。そのうえでこんなことを言うのでした。

「このチームのレッドはかなりあれだけれどな」

「そうよね、これまでにないレッドよね」

ベルギーもこのチームのレッドが本来どういった人なのか知っています。野生児というくくりさえ越えてしまっているレッドなのです。

「ちょっと以上に凄いわよね」

「俺はああいうのはしないからな」

「しないっていうよりできないんじゃ？」

「そう言うかもな」

このことを否定しないのでした。

「あれは無理だ」

「私もそこまで言わないから安心して」

ベルギーにしてもそれはわかっていました。

「兄さんはああしたキャラじゃないからね」

「そもそも何だあのレッドは」

オランダの顔は今度はいぶかしむものでした。

「破天荒とかそういうのじゃないだろ」

「失敗してるかしらね」

「してるとしか思えないからな」

こうも言うのでした。

「だから無理だ」

そのままの自分で通すことにしたオランダでした。そしてそれは正解なのでした。外見的にも。

第千三百六十六話　完

2010・4・26

第千三百六十七話　ブルーワッフル

第千三百六十七話　ブルーワッフル

レッドの次はブルーです。ブルーになったのはベルギーでした。

「えっ、ブルーは私なの」

「そうだ。嫌か？」

「このチームってブルーは女の子だったかしら」

「女の方が多いから仕方ないだろ」

「だからなのね」

「ああ。じゃあ頼むぞ」

お兄さんのオランダに言われてです。これでベルギーがブルーになりました。その服は勿論。

「ミニスカートなのね」

「このチームじゃ女はそうだったからな」

黒いミニスカートです。それもかなり短いです。太腿がはっきりと出ています。

そのスカートを自分でも見ながらです。ベルギーは言いました。

「皆の注目凄く浴びそうね」

「ああ。最近じゃ半ズボンのヒロインもいるけれどな」

「私は特にスカートに抵抗ないからいいけれどね」

実際にミニスカートの方が人気が出ます。これは間違いありません。尚他のチームでもハンガリーや台湾、イタリア姉妹に恋姫戦隊はミニスカートです。ベトナムもそうです。

それでベルギーもミニスカートなのですが。青いジャケットに黒いミニスカートのその配色にも思うのでした。

「結構いい感じね。はっきりした濃い青だし」

「そうだな。じゃあブルー宜しくな」

「ええ。ワッフル焼くから食べてね」

戦隊のメンバーになってもやっぱりワッフルは欠かせません。ベ

ルギーといえばワッフルです。何はともあれワッフルがないと駄目な彼女です。

第千三百六十七話　　完

２０１０・４・２７

第千三百六十八話　ダンスでは

第千三百六十八話　ダンスでは

この戦隊でもしっかりと踊ります。映画も入れて踊っていない戦隊も非常に珍しかったりしますがこの戦隊でもダンスはあります。

ベルギーも踊ってみてです。こう言うのでした。

「やっぱり最後は踊ったらいい感じに終わるわね」

「そうだな。明るく終われるな」

「例えどんな仕事をしてもね」

ベルギーも踊り終えて笑顔になっています。そしてその笑顔にも言いました。

「ただね。フランスみたいにね」

「ブラックのあの笑顔か」

「ああいう笑顔はネタになるからね」

「あいつはそもそも存在自体がネタだしな」

これはフランスだけではありません。元になっているブラックの人もそうだったりします。ちょっと格好よ過ぎるというのも困りものです。

「まああいつはあいつだ」

「私達は私達ね」

「そうだ。しかしこのダンスだけれどな」

今も練習をしながらベルギーに言う。オランダでした。

「やっぱり拳法のなんだな」

「そうね。中国ならいい感じじゃない？」

「台湾とか香港な。あの連中は本場だから上手だろうな」

「私達よりもね。多分ね」

こんなことも話していました。ダンス一つを取っても色々なものがあります。オランダとベルギーは戦隊を組んではじめてこのことがわかったのでした。

第千三百六十八話　完

2010・4・27

第千三百六十九話　黄色とは思えない

第千三百六十九話　黄色とは思えない

リーダーになるオウシュウイエロー、それになったのは誰かというとです。

「我輩でいいのだな」

「ああ、本当は女の子がやってたけれどいいだろ」

オランダがスイスに対して言います。見ればスイスが黄色い服と黒いズボンという格好になっています。それを見れば彼がどの色になっているのかは明らかです。

「それでな」

「わかった。ではこのままやらせてもらう」

「頼むな。それでだけれどな」

「うむ」

「御前リーダーだからな」

本人にもこのことを伝えるのでした。

「それでいいよな」

「御前がリーダーではないのか」

「このチームはイエローがリーダーだからそれでいいんだよ」

それでだというのです。

「俺は別にリーダーになりたいわけじゃないしな」

「左様であるか」

「そうさ。じゃあ頼むな」

「了解した」

きびきびとした声と動作での返答でした。

「では早速訓練にかかろう」

「ああ、頼むな」

何か今までのチームでドイツに匹敵する程までにしっかりしたリーダーです。スイスは今燃えています。

第千三百六十九話　完

2010・4・28

第千三百七十話　完全武装ですし

第千三百七十話　完全武装ですし

オウシュウイエローになったスイス、彼は言うまでもなくお金を持っています。そして持っているものはそれだけではないのです。銃を何丁も持っています。そしてその銃達を構えてそのうえで言うのです。

「我輩と戦うならば容赦はしない！」

「だから誰もそんなこと言ってねえだろ」

お隣のフランスが彼に突っ込みを入れます。

「っていうか拳法なのに武装するのかよ」

「戦いにはこれが一番なのである」

「戦隊っていうかライダーになってるじゃねえか。それもゾルダによ」

「ああした完全武装は好きである」

実際に武装しているから実に相応しい言葉になっています。

「他にもカラミティも好きである」

「中の人ゾルダと同じだしな」

何気に武装派が好きなスイスです。

その完全武装したリーダーです。その彼に逆らえるのは。

実は仲間達は色々言えます。そしてスイス自身話をよく聞きます。

「仲間は大事にしなくては駄目なのである」

「そうか？俺のチームにはそんなのねえぞ」

フランスがそのスイスに対してまた突っ込みを入れます。

「ロシアとアメリカ、中国とか俺とイギリスとかよ。大体会長が強引に入ってるしよ」

「そもそも何故組んでいるのであるか」

「戦争相手のイタリア達に対抗しての組み合わせなんだよ」

それで今も組んでいるのです。しかし何十年もこの組み合わせで

生徒会をやっていますからこれも凄いことであります。しかしスイスみたいなリーダーがいないのも事実なのでした。

第千三百七十話　　完

２０１０・４・２８

第千三百七十一話　バイオレットでもパープル

第千三百七十一話　バイオレットでもパープル

眼鏡っ娘ですが鮪のせいで日本の人達からはすこぶる不人気になってしまっているモナコが四人目のバイオレットなのでした。しかし。

バイオレットとなっていますがその服は紫色です。紫のジャケットで下はやはりミニスカートです。

モナコ本人もそれを気にしていて。こう言うのでした。

「これでいいのかしら」

「いいんだろうな」

オランダが素っ気無く答えます。

「それでな」

「幾ら何でも橙色と紫は違い過ぎるけれど」

「チームによっては青でも実際は水色だったりするだろ」

「あっ、そういえば」

モナコはオランダの今の言葉に気付きました。

「青が女の子の場合はよくそうなるわね」

「それと同じだよ。まあ最近青は男が多いけれどな」

「忍者と魔法位かしら。つまりタイヘイヨウと恋姫なのね」

「ああ。だからそれも気にするな」

「けれどあまりにも無理があるわよ」

モナコはそれでも言うのでした。

「バイオレットとパープルを一緒にするのは」

「そう言うな。チームになっただけでもいいことなんだからな」

「それでもなのね」

オランダの言葉にとりあえず納得することにはしました。しかしこの配色は確かにかなり強引です。これでいいのかという位であります。

第千三百七十一話　完

2010・4・29

第千三百七十二話　必殺技は

「参ったわね」
モナコはよくこの言葉を口にするようになりました。
「本当にね」
「何が参ったの？」
「ああ、このキャラはこれが口癖だって言われたから」
こうベルギーに対して答えます。
「それで言ってるだけだから。気にしないで」
「そうなの」
「それでだけれど」
このことを話してからまた言います。今度のお話は。
「私の技って変わってない？」
「鮪を使うこと？」
「レーサーかって思ったけれどそれなのね」
またしても鮪です。最早取り憑かれています。
「鮪、鮪って。何でこうなったのかしら」
「日本さん怒らせたからだと思うけれど」
日本も怒ります。そして怒ると枢軸国の中で最も恐ろしかったりします。そんな人を怒らせたモナコも迂闊といえば迂闊であります。怒らせなくてもいい相手でしたし。
「それって」
「うう、日本さんなのねやっぱり」
「多分ずっとついて回るから。諦めた方がいいわよ」
「鮪食べないのに。どうしてこうなるのよ」
逆に言えば食べないのに食べる日本に文句をつけたのが間違いでした。やっぱり怒らせてはいけないのでした。

第千三百七十二話　完

2010・4・29

第千三百七十三話　白はいいもの

第千三百七十三話　白はいいもの

最後の五人目、オウシュウホワイトです。それはリヒテンシュタイン、彼女でした。

「私なのですか」

「そうだ、御前なのである」

スイスが強い言葉でリヒテンシュタインに対して言います。その白いジャケットと黒のミニスカートという好対照の服装の彼女に対してです。

「御前がその五人目、ホワイトなのである」

「白。いいですよね」

リヒテンシュタインはその色を素直に喜んでいます。

「落ち着いて。それに奇麗で」

「そうであるな。あと」

「あと？」

「何かあればすぐに我輩に言うのである」

強い言葉でした。

「例え誰が来ても我輩が相手をするのである。レンゴウチームでもスウジクチームでも誰が来ても絶対に負けはしないのである。御前に言い寄る男は絶対に許さないのである」

「いえ、私はそんなことされないですし」

けれどリヒテンシュタインはその落ち着いた声で返すのでした。

「それにお仕事はお掃除や誰かのお助けですしそんなことは」

「しかしそれでもなのである。何かあれば」

「お兄様が助けてくれるんですか」

「そうである。だから安心するのである」

戦隊になってもスイスはスイスです。妹は絶対に守る、そして常に目に入れても痛くない程可愛がっている、妹離れしていません。

第千三百七十三話　完

2010・4・30

第千三百七十四話　お髭はありません

第千三百七十四話　お髭はありません

リヒテンシュタインは何か鏡を見ています。そして自分のお顔にお髭を付けようとしています。スイスはそんな彼女を見て声をかけてきました。

「何をしているのであるか」

「いえ、このチームでのホワイトはお髭ありましたから」

「だから御前も付けるのであるか」

「付けないといけませんか？」

「それは別にいいのである」

こう言ってそれは止めさせようとします。

「女の子に髭なぞいらないのである。だからいいのである」

「いいのですか」

「そうだ、いいのである」

また言うスイスでした。

「むしろそのままでいるべきである」

「そうですか。そのままでいいですか」

「御前は今のままで充分過ぎる程いいのである」

何気に本音まで出しています。

「だからである。わかったであるな」

「はい、それじゃあ」

「わかったらもうそんなことはしないのである」

スイスの言葉は少し厳しくなっています。

「いいであるな、それは」

「このままなんですね。本当に」

妹をできるだけありのままであり続けるようにさせています。やっぱりスイスはシスコンなところがあります。

第千三百七十四話　完

2010・4・30

第千三百七十五話　追加戦士

「五人だけじゃないわよね」
「ああ。ちゃんといるから安心してくれ」
オランダがベルギーに対して答えています。
「二人な」
「ということはあの二人？」
「ああ、緑と黒だ」
その二人だというのです。
「実際は最後の方まで敵で壮絶な最期を遂げるけれどな。そういう細かいところはあまり気にしないでくれ」
「強引ね、何か」
「だからそういうところは気にしないでくれ。それでその二人だがな」
「誰であるか、それで」
「欧州の人ですよね」
「やっぱり。オウシュウ戦隊だから」
スイスとリヒテンシュタイン、それにモナコもオランダに対して尋ねます。
「オーストリアやフランスなら断るであるぞ」
「欧州の方ですとポーランドさんでしょうか」
「だったらリトアニアさんも一緒になるのかしら」
「いや、この二人だ」
オランダがこう言って指し示したのはです。
「この二人でいいか」
「あっ、その人達なの」
「まあいいであるぞ」
ベルギーとスイスがまず言いました。他の二人も納得した顔で頷

きます。その二人とは一体誰でしょうか。五人がとてもよく知っている人達の様です。

第千三百七十五話　　完

２０１０・５・１

第千三百七十六話　この人達も掛け持ちに

第千三百七十六話　この人達も掛け持ちに

出て来たのはイタリアとドイツです。二人はそれぞれ五人に対して言ってきました。

「宜しくね。俺がグリーンでね」

「俺がブラックになる」

「この御二人が来られるなんて」

「かなり凄くない？」

リヒテンシュタインとモナコは二人を見てかなり驚いています。

「欧州で最強のドイツさんと」

「明るいムードメーカのイタちゃんが加わるなんて」

「あれ、俺はちゃん付けなんだ」

イタリアはモナコの今の言葉に対して突っ込みを入れます。

「モナコの方が年下なのに。それはないよ」

「いいじゃない。付き合い長いし」

それで強引にいいとしてしまうモナコでした。

「私とイタちゃんもね」

「それはそうだけれどさ」

「むしろ我々五人よりも強いであるな」

スイスも二人を見て言います。

「これは予想外である」

「助っ人が強いのはいつものことだけれどな」

オランダもここで言います。

「まあ七人でやっていくからな。それでいいな」

「わかったわ。光ＧＥＮＪＩね」

最後にベルギーが言いました。何か随分懐かしいグループ名です。

第千三百七十六話　完

2010・5・1

第千三百七十七話　ここでのイタリアは

第千三百七十七話　ここでのイタリアは

緑のジャケットに黒いズボンです。何かレンゴウチームのロシアと同じ様な服です。実は緑の人は案外少なかったりするのですけれど。

それでもイタリアはその緑と黒を上手に着こなしています。そのうえでオランダに対して言います。

「これでいいんだよね」

「ああ、こっちのチームでも頑張ってくれ」

オランダもこうイタリアに対して返します。

「宜しくな」

「うん。それにしてもこのチームって女の子多いからいいよね」

「三人だからな」

「朗らかでいいよね。やっぱり女の子がいないとね」

「そう言うイタちゃんのところも女の子多いだろ」

オランダはスウジクチームのことを言います。

「しかもかなりの大所帯だしな」

「そうだけれどね。けれどここにも女の子が多くて嬉しいよ」

それはそれ、これはこれというわけです。

「今度ベルギーとデートしたいな、なんて思ってるけれど」

「あまり変なことしなければいいけれどな」

「ワッフル一緒に食べるんだ」

「ああ、それ位ならいい」

オランダは微笑んでイタリアに対して答えました。

「やっぱりイタちゃんはイタちゃんなんだな」

「あはは、俺は変わらないよ」

イタリアの参加により和気藹々となったムードになりました。この人は戦いが問題ではないのです。

第千三百七十七話　完

2010・5・2

第千三百七十八話　戦いは苦手ですけれど

第千三百七十八話　戦いは苦手ですけれど

イタリアは戦えません。その弱さはもう誰もが知っています。このオウシュウチームにおいてもそのことは誰もが知っていることです。

「元々戦うことは目的ではないのである」

「スイスもいるしね。ドイツもいるし」

「少なくとも他の連中にちょっかいは出させないであるがな」

スイスはこうイタリアに対して答えます。

「とりあえずやることは掃除や人助けである。イタリア、貴様もしっかりとするのである」

「えっ、けれど俺しっかりしたことなんて一度もないよ」

それもまたイタリアです。

「それでもいいのかな」

「しっかりするのである。スウジクチームとは違うのである」

スウジクチームはドイツもいれば日本もいます。女の子もハンガリーに台湾と頼りになる娘ばかりです。おまけにプロイセンまでいますから物凄く充実したチームです。少なくともイタリアを笑顔で助けてくれる人ばかりです。ドイツは困った顔で助けてくれますが。

「御前もしっかりとするのである」

「ううん、スイスは厳しいなあ」

「確かにこのチームにもドイツはいるのであるが」

イタリアを一番助けてくれる人です。

「しかし御前もチームのメンバーであることを忘れるなである」

「わかったよ。俺なりにしっかりとするよ」

「我輩が鍛えなおすことも考えているのである。よく考えるのである」

イタリアにとってもスイスは怖い存在です。少なくともスウジク

チームのように心優しい人達ばかりではないのは確かです。とはいってもレンゴウチームよりはずっとましな人間関係ですが。

第千三百七十八話　　完

２０１０・５・２

第千三百七十九話　実質メイン

第千三百七十九話　実質メイン

最後のオウシュウブラック、言わずと知れたドイツです。やはりこの人しかいません。

「確かこの戦隊だとライバルキャラで敵の首領扱いだったな」

「それが今回の俺か」

「ああ、実質主役の一人だった」

かなり破格の扱いだったのです。そして今ドイツも一人だけ黒い上着とズボンです。その黒い服がとても似合っています。はっきり言って格好いいです。

「そういうキャラだけれどな」

「そうか。何か追加戦士には思えないな」

「それでこの戦隊のメイン戦力もやってもらうからな」

しかもこうも言われました。

「いいな、それで」

「俺はスウジク戦隊のリーダーなんだが」

スウジクブルーとして活躍しています。尚そこではレッドはイタリアです。そして参謀はグリーンの日本なのですが彼は感情が昂ぶると玉砕戦術ばかり言うので実際はドイツが参謀もしています。そんな大変な状況です。

そして今度はオウシュウ戦隊の実質メイン戦力だと言われました。その感想は。

「何でこんなに負担が来るんだ」

「結局御前が頼りなんだよ」

オランダは素っ気無く言います。

「欧州で一番強いだろ。だから頼むな」

「それでか。俺も呼んだのは」

「ああ、まあ頑張ってくれ」

こうしてドイツもオウシュウ戦隊に入ることになりました。しかしそれは彼にとっては今一つ納得いかないところもあるものでした。

第千三百七十九話　　完

２０１０・５・３

第千三百八十話　それでお掃除の時も

第千三百八十話　それでお掃除の時も

「ドイツーーーー、ドイツーーーー」

イタリアがお掃除の途中でドイツを頼ってきました。何かスウジク戦隊の時と全く同じ展開です。そのイタリアがドイツに対して言うことは。

「ゴミ箱が重くて持てないんだよ。半分持ってくれる？」

「ああ、わかった」

ドイツは呆れた顔をしながらもゴミ箱を半分持って二人で焼却炉まで持って行きます。そしてこれだけではありませんでした。その他のこともである。

とにかく何かあればイタリアを手伝って助けます。しかし他のメンバーは皆それぞれしっかりとやっています。まずいのはイタリアだけです。

それでドイツはです。リーダーのスイスに対して言いました。

「結局俺はイタリアのフォローの為にいるのか」

「結果としてはそうであるな」

それを認める発言をするスイスでした。

「しかし御前がメイン戦力になっているのは事実である。だから頑張るのだ」

「ああ、わかった」

困った顔をしながらも頷くドイツでした。

「いつものことだしな」

「しかしそれでもイタリアは助けるのだな」

「縁だからな」

だから助けると口では言います。

「放っておけん。全く、日本の様にしっかりとしてくれればな」

「日本も日本でかなりわからない奴であるがな」

今回も苦労することになるドイツでした。本当にままならないものであります。

第千三百八十話　　完

２０１０・５・３

第千三百八十一話　七人で仕事をして

第千三百八十一話　七人で仕事をして

全員、つまり七人揃ってそれでお仕事をしてみますと。やっぱりドイツが忠臣になります。指示も実際は彼が出してそれで動いている程です。

オランダはそんなドイツを見てです。満足している顔です。

そしてその顔で、です。スイスに対して言うのでした。

「いい感じだな」

「左様であるな。よく動いてくれる」

「リーダーの御前も立ててくれるだろ」

「あいつはそういうことは絶対に忘れないのである」

そこがドイツのいいところであります。さもないとこれでもかという位個性の強い面々ばかりが集まっているスウジクチームなぞまとめられません。このチームでもそれは同じです。

「そこがいいところである」

「そうだな。何かこのチームは当たりか？」

「私は当たりだと思うわ」

ベルギーが出て来て言います。

「見事にね。当たりよ」

「そうか、それならいいんだがな」

しかしその中で、です。イタリアだけは。

「ドイツーーー、幾ら何でもそれは厳し過ぎるよ」

「いいや、やるからにはしっかりやらないと駄目だ」

「お掃除なんて適当でいいじゃない」

「そういうところが御前のよくないところだ」

この人だけは同じでした。けれど何だかんだでこの二人もいつも一緒です。オウシュウ戦隊でもそれは変わらないのでありました。

第千三百八十一話　完

2010・5・4

第千三百八十二話　リーダーも

第千三百八十二話　リーダーも

スイスがリーダーを務めていますが彼はもっぱらです。妹であるリヒテンシュタインのフォローに専念しています。努力家で一生懸命ですがまだ至らないところもある妹のをです。

「すいません、お兄様」

「気にすることはないのである」

何かというとすぐに出て来て妹をフォローします。

「兄妹でしかも同じチームなのである」

「だからなのですね」

「それだけで充分です」

連帯感はここでも発揮されています。

「さあ、ゴミは我輩が集めておく」

「はい」

「御前は落ち葉をまとめておくのである」

「わかりました」

丁度落ち葉の掃除をしているところでした。この場でもこの人は妹へのフォローを忘れません。とてもいいお兄さんです。

そんな彼を見てです。オランダも言うのでした。

「俺もお兄さんらしくしようかな」

「そんなの別にいいわよ」

けれどベルギーはこう自分のお兄さんに返すのでした。

「だって。兄さんは兄さんじゃない」

「だからか」

「らしくでいいわよ、本当にね」

こう言って今のオランダのままでいいというのでした。この兄妹も言葉には出しませんがその仲は結構以上にいいようであります。

第千三百八十二話　完

2010・5・4

第千三百八十三話　リヒテンシュタイン　☆

第千三百八十三話　　リヒテンシュタイン　☆

スイスの妹リヒテンシュタインは最初は髪の毛を左右三編みにしていました。しかし今はショートです。それを最初見た時スイスはかなり驚きました。

お兄さんと同じ茶色がかった金髪に緑の目を持った可愛い女の子で服は赤がかった紫のドレスの彼女に問うのでした。

「その髪はどうしたというのだ！」

「切ってみました」

「左様であるというのか」

「さっぱりしたと思いますが」

「そうであるが問題はそこではないのである」

スイスは抗議めいた言葉で言い返します。

「いきなり男の様な短髪にして何があったというおだ」

「お兄様の真似です」

リヒテンシュタインは素っ気無い感じで答えます。

「可愛くはないでしょうか」

「むっ、それは」

そう言われるとです。リヒテンシュタインはかなり戸惑いました。暫く固まってです。そのうえでの言葉は。

「まあいいのではないのか」

「有り難うございます」

「似合っているである」

何気に物凄いことも言っています。

「では今度はそれでいくといいである」

「はい」

こうしてリヒテンシュタインはお兄さんと同じ髪型になりました。面白い経緯ではあります。

第千三百八十三話　完

2010・5・5

第千三百八十四話　ベルギーの言葉

第千三百八十四話　ベルギーの言葉

「なあ兄さん」
「どうしたんだ？」
「うち喋り方変わったから」
いきなりオランダに対してこう言うベルギーでした。
「よろしゅうな」
「何か日本の方にそんな喋り方する奴いるな・・・・・・っていうか」
オランダはその喋り方からある人を思い出しました。それは。
「スペインと同じ喋り方だな」
「よお考えたらうちスペインさんのとこにおった時間長かったし」
「それは俺もだけれどな」
オランダはここで微妙な顔になりました。彼はスペインのところとその時の上司と一緒に大戦争をしてそのうえで独立した経緯があるからです。今ではそんな遺恨はないにしてもです。
そのスペインと同じ喋り方をする妹に対してです。オランダは言うのでした。
「それでいいんだな」
「何か話してみるとええ感じやし」
「御前がいいのならそれでいいけれどな」
オランダもここで折れました。
「それならな」
「ほなこのままいくで」
「ああ、好きにしろ」
オランダは少しぶっきらぼうです。
今も一緒にいることが多い妹に対してかなり優しいお兄さんです。
ちなみにスペインとベルギーは宗教も一緒だったりします。同じカ

トリックです。

第千三百八十四話　完

2010・5・5

第千三百八十五話　胸がない　☆

リヒテンシュタインはスイスと一緒にお買い物に出ました。その時服をあえてスイスと同じものにして外出したのです。それが何故かというとです。

「お兄様と同じものを着たくて」

「だからであるか」

「はい、密かに夜縫っていました」

「勝手にしたらいい」

静かにこう言うだけでした。けれどその手はリヒテンシュタインのそれを握って離しません。何兌換だ言ってその絆は強いものです。

そしてお店に入るとです。お店の人がこう言ってきました。

「あらまあ、可愛い弟さんだこと」

「あっ、いや」

スイスはすぐにお店の人に答えました。

「こやつは・・・・・・」

「えっ、それってやっぱり・・・・・・」

けれどリヒテンシュタインはここで気付きました。というよりかはわかりました。何しろ自分自身のことです。わからない筈がありません。

「私の胸が」

「うっ、それは・・・・・・」

「胸は。どうしても」

「気を落とすなである」

スイスはすぐに妹のフォローに入りました。

「好きなものを選ぶがいい」」

「はい」

こうして好きなものを選ばせるのでした。妹への優しい気遣いで

した。

第千三百八十五話　完

2010・5・6

第千三百八十六話　鯖がない

第千三百八十六話　鯖がない

リヒテンシュタインは胸がありません。そして日本には鯖がないとそれだけであれこれと動いてしまう人がいます。その人はといいますと。

「いいか、鯖は最高の魚なんだよ」

「そうなのですか」

「ああ、鯖は美味いだろ」

あの某脚本家さんです。自分の国に対しても相変わらず俺様口調です。

「あの鯖がないというのはそれだけで駄目なんだよ」

「では今夜は」

「おう、鯖料理だ」

実際にそれを作るというのです。

「脚本書いたらすぐに食わせてやる、楽しみにしてろよ」

「ですがお家の人は多いですけれど」

「いいんだよ、そういうのが面白いんだからな」

ここでいつもの決め台詞が炸裂です。

「大勢で美味いもん腹一杯食うのが一番いいだろ」

「確かに。それはその通りです」

「そうだろ？わかったらな」

「はい、それでは」

「書くのはすぐに終わるからな」

九十分の脚本を三日で終わらせる人です。その他にも脚本を瞬く間に書いていきます。尋常ではない速筆でも有名な人なのです。

「それから鯖だ。待ってろよ」

こうして自分の国や他の人達にも自分の料理を振舞うのです。態度は俺様ですが実はいい人の様です。

第千三百八十六話　完

2010・5・6

第千三百八十七話　隠したい相手　☆

第千三百八十七話　隠したい相手　☆

スイスはリヒテンシュタインにリボンを買ってあげました。彼女がそれを実際に髪の毛に飾ってみせます。そのうえで見てみますとです。

かなり可愛いです。似合っています。リヒテンシュタインの方でもお兄さんに対して尋ねてきました。

「どうでしょうか」

「うむ、そうだな」

横の方をそのリボンで飾っています。それを見るとです。

「よいと思うのである」

（むっ）

しかしです。ここで気付いたのです。あの人が来ています。

それでさっと動いてそのうえで隠します。しかしリヒテンシュタインはそのことに気付かずにです。ただリボンのことだけをお兄さんに対して尋ねるのでした。

「本当でございますか？」

「その通りである」

言いながらまた答えます。

「いいものである」

「そうですか。それでお兄様」

「何であるか？」

「どうされたのですか？」

さっ、さっ、っと動くお兄さんへの言葉です。

「一体」

「何でもないのである」

「そうですか？」

その先にはオーストリアさんがいるのです。スイスとオーストリ

アさんの関係はどういったものなのでしょうか。

第千三百八十七話　　完

２０１０・５・７

第千三百八十八話　昔の誓い

第千三百八十八話　昔の誓い

プロイセンがまだオーストリアさんと仲が悪くなくそもそも名前がドイツ騎士団だった頃です。神聖ローマともあまり一緒にいることはありませんでした。

彼は東にリトアニア、ポーランドがいてそちらにかかりっきりでした。そして神聖ローマは神聖ローマで身体があまり強くなかったのです。けれどその時でもです。

「おい、相棒」

「何だ？」

「俺は何があっても御前の味方だからな」

こう神聖ローマに対して言っていたのです。

「それこそ何があってもな。俺達は一緒だからな」

「ゲルマンか」

「そうだよ。同じ爺様持ってる間じゃねえかよ」

つまりこの二人は親戚同士なのです。けれど今は結構別々です。

「だからだよ。いいな、俺達は何時か一緒の家に住もうぜ」

「俺の家に来るのか」

「それだけじゃないさ。俺と御前が一緒になれば絶対に誰にだって文句は言わせないからな」

彼はこうも神聖ローマに話すのでした。

「いいな、だから俺達はずっと相棒だ」

「わかった。頼りにしているぞ」

「ああ、何時か絶対に最強の国家を作ろうぜ」

「イタリアも入れてだな」

神聖ローマはさりげなくイタリアのことも話に出しました。

「それでずっとだな」

こんな昔の日々でした。今ではプロイセン自身も覚えていない昔

の日々。ドイツもイタリアも一緒にいますが彼も忘れていることです。

第千三百八十八話　　完

２０１０・５・７

第千三百八十九話　避けていたのに　☆

第千三百八十九話　避けていたのに　☆

リヒテンシュタインにリボンを買ってあげてそのお店を後にしたスイス。お昼になっていたのであらためて彼女に対して尋ねました。今丁度スーパーに来ています。買ってからお昼を家で、というわけです。

「さて、何を食べたいのだ？」

「チーズフォンデュがいいです」

「左様であるか」

こんなことを話しているとです。ばったりと。

オーストリアさんと会いました。スイスとオーストリアさんは難しい顔になりますがリヒテンシュタインは穏やかな笑顔で挨拶をしました。

「御機嫌麗しゅう」

「何故貴様がここにいるというのか」

「食材を買いに来ただすが何か不都合でも」

お互い微妙な空気です。それでオーストリアさんが買っている食材がちらりと見えました。すると。

「あの様な高価な食材を普通にであるか」

食事にはお金をかけるのがオーストリアさんです。

「我輩にしても普段は節約しているがだ」

「どうしました？兄様」

リヒテンシュタインが一人呟くお兄さんに対して尋ねます。

「こんなものは何時でも買えるのである」

まだ言うスイスでした。高級チーズに手を伸ばそうとしてできないでいるのです。そして手に取ったのはいつもの安いチーズです。

「別に値段ではなく味を気に入っているのである」

「私もですけれど」
リヒテンシュタインはここだけ何とか聞けました。それであまりわからないうちにお兄さんのフォローをしていました。

第千三百八十九話　完

２０１０・５・８

第千三百九十話　高くても安くても

第千三百九十話

高くても安くても

「イギリスの野郎は駄目駄目なのですよ」

「本人を前にして言うとはいい度胸だな」

イギリスが目を真っ白にさせて黒いオーラを放ちながらシーランドに対して言います。

「俺の料理食って何が不満なんだ」

「こんなのは豚さんの餌以下なのですよ」

よりによってこんなことを言います。

「どんな食材使ってもこれじゃあもう作らない方がましなのですよ」

「そこまで言った奴は生徒会長だけだぞ、おい」

その生徒会長はおまけに料理にコチュジャンを多量にぶち込んで食べたのです。そうでないとこんなものは人間が食べられないとまで言ってです。

「大体御前は何時まで家出して」

「とにかく才能なさ過ぎなのですよ」

話を聞いていません。

「どうやったら何百年も上達しないのです」

「何百年かよ」

「そうですよ。イギリスはどれだけ作っても全然上手くならないのですよ」

ある意味才能かも知れません。

「もうどうしようもないのですよ。高級食材がただのゴミになってしまうのですよ」

「うるせえ。じゃあ食うな」

「はいです。スウェーデンさんのところにお招きされてますのでそこに行くですよ」

こう言ってそのままスウェーデンのところに行きます。一人残ったイギリスは自分でそのシーランドが食べていたものを食べてみます。するとその味は。

「いいじゃねえか」

本人だけがわかっていません。本当に味覚がどうかしているかも知れません。

第千三百九十話　　完

２０１０・５・８

第千三百九十一話　オーストリアさんのお誘い　☆

第千三百九十一話　オーストリアさんのお誘い　☆

そのオーストリアさんがです。二人に対してこう言ってきました。
「そろそろお昼ですし」
「だから何だというのであるか」
「御馳走しますのでお昼御一緒しませんか」
「有り難うございます」
「結構である！」
リヒテンシュタインはそれに応じましたがスイスは断るのでした。
「我輩達は二人で食べるから御前は一人で食べるのである」
スイスは怒っていますがオーストリアさんは適当に聞き流しています。流石いつも『あの』フランスと顔を合わせているわけではありません。
「貴様の顔を見ながらの食事なぞ全部コーヒーの味がするのである！」
「お兄様、それはどういう意味ですの？」
「こういう意味である！」
リヒテンシュタインにもこんな意味不明の言葉で返します。最早論理も何もありません。
しかしここで、です。こうした考えに至ったのです。
御馳走を受ける↓おごってもらえる↓節約になる↓節約は素晴しいこの四段論法です。スイスはこれに気付いたのです。
そうなれば話は決まりです。矛を収めてオーストリアさんのお招きに応じてです。今はレストランの中でメニューを見ながら言うのでした。
「節約の為であって御前と一緒に食べたいわけではないのである」
「知ってますとも」

オーストリアさんも完全にわかっている口調でした。
「貴方は昔からそういう人でしたからね」
こんなやり取りをして一緒に食べる三人でした。これがいつもだったりします。

第千三百九十一話　完

２０１０・５・９

第千三百九十二話　日本の御馳走

第千三百九十二話　日本の御馳走

日本の場合はです。御馳走しますよと彼が言う前にです。

「日本、来てやったんだぜ！」

「やあ、何かいい香りがするなあ」

「美味しいものがここにあるあるな」

「鯨を食べていないでごわすな」

韓国だけではありません。アメリカに中国にオーストラリアにです。賑やかというか強烈なまでにアクの強い人達がわんさとやって来るのです。

その四人が来てです。日本に対して言うのでした。

「客人にはたらふく食わせるんだぜ」

「ダイエットにいいメニューを頼むな」

「そうあるな。火を通したものが一番ある」

「肉出すでごわす。キーウィも欠かせないでごわす」

「皆さんを御呼びした記憶はありませんが」

日本はその四人に対して突っ込みを入れます。

「この前も来られてますし。特に韓国さん、貴方は昨日も来られてますね」

「そんなことは気にしたら駄目なんだぜ」

シーランドもびっくりの強引さです。

「人間細かいことを気にしたら駄目なんだぜ。わかったらさっさと御馳走をたらふく出すんだぜ」

「天麩羅に寿司がいいな」

「実はお刺身も食べられるあるぞ」

「芸者さんも呼ぶでごわす。お酒も必要でごわす」

「帰って下さい」

こうは言いますがです。結局自分も含めて五人で食べることにな

りました。日本も何かと大変です。

第千三百九十二話　　完

２０１０・５・９

第千三百九十三話　ギスギスした仲で　☆

第千三百九十三話　ギスギスした仲で　☆

「そもそも御前はなのだ」
「あの時は貴方が悪かったのです」
「悪くはない、御前が弱かったのが駄目なのである」
スイスとオーストリアさんは言い争っています。そうしながらお昼を食べていますが雰囲気はお世辞にもいいものではありません。むしろギスギスとしています。
そのギスギスとした仲でふとリヒテンシュタインのお口の周りが汚れているのに気付いたスイスはです。すぐに彼女のそのお口の周りを拭ってあげたのでした。
「こら、はしたないのである」
「あっ、すいません」
「そうしたことはしないのである」
こう言いながら拭ってあげます。しかしです。
ここで、です。スイスは思い出したのです。
「そういえばあの時も」
「貴方が」
オーストリアさんもでした。そのことを思い出したのです。
「はしたないのである」
「すいません」
子供の頃のスイスとオーストリアさんがいました。この時二人はいつも一緒でした。あまり喧嘩が強くないオーストリアさんはいつもスイスに助けてもらっていました。そうしてです。
スイスはオーストリアさんに何かと世話を焼いていたのです。この時のことを思い出して。
「ま、まあそういうこともあったのであるな」
「昔のことですね」

二人で言います。何か気まずいものがそこにはありました。

第千三百九十三話　　完

２０１０・５・１０

第千三百九十四話　昔のハンガリー

「そういえば昔のハンガリーさんってさ」
「どうしたの、イタちゃん」
「オーストリアさんと仲が悪かったって本当なの？」
こう本人に尋ねるイタリアでした。
「そんなこと聞いたんだけれど」
「昔はね。そうだったわよ」
実際にそうだったとイタリアに話します。
「けれどかなり昔よ。私が子供の頃のことよ」
「そうなんだ。そんなに昔なんだ」
「ええ。私もあの時は子供だったしね」
「けれどあの時から乱暴だったんだよこいつは」
イタリアに対しては非常に親切なプロイセンが来てイタリアに対して話します。
「もうよ、それこそいつも馬に乗って暴れ回っていてよ。俺のところにもいちいちつっかかってきてくれたしな」
「というかあんたもあの時何かっていうとリトちゃんやポーランド君と喧嘩していたじゃない」
プロイセンと仲が悪いことで有名なハンガリーが反論します。
「その頃からイタちゃん達以外友達いなかったじゃない」
「へっ、今じゃ相棒がいるからいいんだよ」
言うまでもなくドイツのことです。彼にとってドイツは最早なくてはならない存在です。東と西の絆です。
「まあよ、昔のこいつとオーストリアの坊ちゃんはな」
「そうなんだ、仲悪かったんだ」
「ああ、凄くな」
「だから昔のことじゃない」

ハンガリーは何故かその頃のことの話をされるのは好きではないようです。何があったのでしょうか。

第千三百九十四話　　完

２０１０・５・１０

第千三百九十五話　乱入者　☆

「ははは、見てたぜ！」
いきなり茂みからプロイセン登場です。頭に葉っぱまで乗せて。
「この腐れ坊ちゃんよ。いいか騙されるな！」
スイスとリヒテンシュタインへの言葉です。
「そいつは今すんごく見栄張っているぞ！」
「何かと思えば貴様であるか」
「聞いて驚けよ！こいつはな、普段超けちけち野郎なんだぜ！」
オーストリアさんのところに来て言いますが何か口調が生徒会長みたいになっています。
「家での食事は超質素なもんばっかだしよ、服も古臭えのばっか着てよ！」
「それは節約の為ですが」
「だったら節約した分朝食豪華にしろよ！」
かつてドイツの上司に言われて同居した時のことを覚えているのです。
「残りもんとかそんなん嫌だからな！」
「変わらんな」
スイスはそんなオーストリアさんの今を聞いて溜息です。
「全くもって」
「何だか」
けれどここでリヒテンシュタインが言いました。
「兄様と少し似ていますね」
「あれ程ではないのである」
「そうでしょうか」
「流石にあいつよりはましである」
まだ言っているプロイセンを見ながらの言葉です。やがてプロイ

センは呆れた顔で迎えに来たドイツに連れて行かれました。相変わらずこの人も交流の仕方に問題があります。

第千三百九十五話　　完

２０１０・５・１１

第千三百九十六話　プロイセンの友人

第千三百九十六話　プロイセンの友人

ドイツはいつもプロイセンをフォローしています。プロイセンもドイツに何かあればすぐに助けます。二人の絆はいつも強いものです。

「しかし。本当にオーストリアとは相変わらずだな」

「いいじゃねえかよ。あいつとの因縁は知ってるだろ」

「それはな」

知っていると返すドイツでした。

「知ってはいるがな」

「そういうことだよ。相棒だってわかってるじゃねえかよ」

「しかしそれでもだ。あんなのだと友人がいなくなるぞ」

ドイツは相棒のそうしたことを心配しているのでした。

「御前がそうだとだな。俺としても気になるのだが」

「大丈夫だよ、イタちゃんがいるからよ」

ドイツの家の人間らしくイタリアが好きなプロイセンです。

「いい奴だよな、イタちゃんってよ」

「御前はあいつを甘やかし過ぎだ」

「そうか？いい奴じゃねえかよ」

だからいいというのです。

「イタちゃんと一緒だと楽しいしよ。相棒、御前だって何だかんだでイタちゃんに対して世話焼いてるじゃねえかよ。上司に言われる前によ」

「あいつは放っておけんからだ」

「だろ？友達だからだよ」

「それはその通りだが」

ドイツもそう言われては頷くしかありませんでした。プロイセンもドイツがいてくれてイタリアがいてくれているのです。

第千三百九十六話　完

2010・5・11

第千三百九十七話　妹からのプレゼント　☆

第千三百九十七話　妹からのプレゼント

☆

「今日は有り難うございました。それでこれを」
「何であるか？」
「どうぞ受け取って下さい」
リヒテンシュタインはこう言ってスイスにあるものを出してきました。
「いつもの御礼です」
「だからそんなものはいいのである」
「私からの気持ちですから」
こう言って彼女にしては珍しく少し強引に受け取ってもらいます。
「お部屋で着て下さい。では私はこれから休みますので」
「有り難く頂いておく」
スイスも御礼を言って自分の部屋に入ります。そこで一緒に添えられているお手紙を開いてそのうえで読んでみるとです。そこにはこう書いてありました。
『兄様へ、今日は嬉しかったです。いつも感謝しています。
これは私がいつもこっそり編んでいたものです。
こんなことしかできませんがよかったら使って下さい』
「全く、あいつは」
スイスはここまで見て言います。
「気を使わなくてもいいのである」
とはいっても嬉しかったりします。
それで中を開いてみるとです。出て来たのは。
フリルが一杯あるパジャマでした。スイスはそれを見て。
「・・・・・・・・・」
絶句でした。流石にこれは想定していませんでした。

第千三百九十七話　完

2010・5・12

第千三百九十八話　フリルが似合わない

第千三百九十八話　フリルが似合わない

ある日スウェーデンがフリルが一杯付いたフランスが着るみたいな服を来てやって来ました。デンマークはそれを見てびっくりして彼に言いました。

「御前何だっぺそれ！」

「お洒落だ」

「お洒落じゃねえっぺ。全然似合ってねえっぺよ！」

最早絶叫になっています。

「真恋〇無双の卑弥呼並にとんでもないっぺよ、今の御前！」

「幾ら何でもそこまではいかないだ」

ノルウェーが横からデンマークに対して言います。

「というか言ったら出そうだから言ったら駄目だ」

「そうだっぺな。思い出しただけで背筋が寒くなるっぺ」

世の中出て来てはいけない人もいます。

何はともあれ今のスウェーデンの格好はです。皆が唖然となるに充分でした。いつも彼と一緒にいるフィンランドもかなり引いています。そしてあらたに親友となったエストニアに対して言います。

「スウェーデンさん時々ああいうことしますから」

「気にしなくていいですか」

「はい、意外とあれでお茶目なところあるんですよ」

こうは言いますが顔は思い切り引いているものです。

「御気になさらずに」

「だったらいいんですけれど。それにしても迫力のある人ですね」

「はい。それは否定しません」

フィンランドも素直です。とにかくいきなりフリルひらひらの服を着てみたスウェーデンなのでした。何故そうしたかは不明でありますが。

第千三百九十八話　完

2010・5・12

第千三百九十九話　昔の記憶　☆

「またハンガリーにやられおって！」
幼い頃のことです。スイスがぼろぼろになって倒れているオーストリアさんを助けながら怒っています。
「貴様それでも騎士か、その度に我輩が回収しているのだ」
「申し訳ありません」
「何度目だ、言ってみろ！何度目だ！」
「五十一回目です」
「五十二回目だ！」
一回数が多かったみたいです。
「全く。どれだけ弱いのであるか」
「そうですよね。私は戦う為に生まれたというのにいつもこうで」
その時から戦争はあまり強くないオーストリアさんでした。ですが何故か最後は勝っているか最悪のダメージは受けないことが多かったりします。
「その度に貴方はこうして迎えに来てくれるんですね」
「鍛えろ！」
スイスはそのオーストリアさんに対して怒ります。
「いい加減本当に勝ってみるのである！」
「ええ、やってみます」
「今度は迎えに来ないのである！」
これを言うのも五十二回目だったりします。
「わかったであるな！」
「はい、今度は」
こんなことを話しながら帰っていく二人でした。スイスはこの時ずっとオーストリアさんを助けていたのです。遠い遠い昔のお話です。

第千三百九十九話　完

2010・5・13

第千四百話　ハンガリーさんも昔は

第千四百話　ハンガリーさんも昔は

「私昔はお転婆だったのよね」
「えっ、ハンガリーさんもだったんですか」
台湾はハンガリーの告白に驚いています。
「そんなにおしとやかなのに」
「本当よ。昔はオーストリアさんとそれこそ何十回も戦争してね」
その時のことを思い出しながら台湾に話すのでした。
「凄かったんだから」
「そうだったんですか」
「馬に乗るのも得意だったし」
ハンガリーにポーランドはです。馬に乗ることがとても上手かったのです。それで戦場を駆け巡っていたのです。つまり騎士だったのです。
「それでね」
「そうだったんですか。けれどオーストリアさんと何十回もですか」
「驚いた?昔は仲悪かったのよ」
「何か私と日本さんみたいですね」
台湾はここで自分のことに当てはめました。
「それって」
「ああ、そういえば貴女も昔は日本さんに中々だったのね」
「なつかなくて。日本さんを困らせていました」
「そう考えたら私達って同じなのかもね」
「そうですね。けれど今は」
今はとても奇麗になった二人です。あの時のお転婆ぶりはもうとりあえずは隠れているのでした。とりあえずなのではありますが。

第千四百話　完

2010・5・13

第千四百一話　笑顔が苦手

第千四百一話　笑顔が苦手

スイスが笑ったところを見た人はといいますと。これが滅茶苦茶少ないです。例えばこの人の笑顔なんてもう誰でも見ているのにです。

「僕なんかよく笑うよね」

「けれどロシアさんの笑顔って何か」

物凄く珍しいロシアと台湾の組み合わせです。何か後ろでその組み合わせを見て物凄く焦っている人が三人程いますがまずは気にしてはいけません。

「迫力ありますけれど」

「嫌だなあ、僕はただ静かに笑っているだけだよ」

笑顔自体は何でもありません。しかし周囲に撒き散らしている物凄い威圧感がそこにロシアがいることを教えています。その二人がスイスを見ながら言います。

「スイス君も真面目一方じゃ駄目なんだよ。もっと楽しいことを考えないとね」

「そうですよ。もっとこう日本さんと一緒にいる時を考えてみるとか」

台湾は何気に自分のことを言っています。

「そうしてみたらどうですか？」

「そうであるか。しかし我輩はである」

「例えばさ。ポーランドを分割するとか誰かをシベリアに送るとかイギリス君やフランス君に韓国君を押し付けるとか太平洋の三人を軍門に下すとかさ」

滅茶苦茶物騒な話ばかりです。

「そういうことを考えたらどうかな、いつもね」

「御前はいつもそういうことばかり考えているのであるか」

スイスもどん引きです。
「他は考えないのであるか？」
「芸術、文化にウォッカかな」
何かそういうことばかりです。ある意味ロシアの方が凄いです。

第千四百一話　　完

２０１０・５・１４

第千四百二話　その組み合わせを見て

第千四百二話　その組み合わせを見て

ロシアと台湾が一緒にいるのを見てです。二人の後ろで物凄い顔をしている人達がいます。まずはアメリカと中国です。

「あれ、珍しい顔触れだね」

「台湾の奴、まさかあいつと」

アメリカは顔は笑っていますが眼鏡の奥の目が全く笑っていません。中国に至ってはかなり不安な様子です。

「ふうん、台湾ってロシアのことが好きなのかな」

「台湾を抱き込まれたら厄介あるな」

この二人はこれ位で済んでいます。しかしこの人はです。

刀を持ち出して。かなり剣呑な様子です。

「ロシアさんが台湾さんと組むとなると！」

日本は刀を手に取り乱しています。

「私にとってまさに危機！一刻の猶予もなりません！」

「ははは、落ち着いてもいいんじゃないのかい？」

「そうある。まだ正式に交際すると決まったわけじゃないあるぞ」

「いいえ、そうなるに決まっています！」

日本は二人の言葉を聞こうともしません。

「今のうちにロシアさんを！斬らなければ！」

「だから何でロシアにはそこまで取り乱すのかな」

「気持ちはわかるあるがもうすこし」

「いいえ、ここは何としても！」

本当に刀を抜いてしまいました。

「ロシアさんを斬り！そして憂いを！」

こうして相当取り乱してしまっている日本でした。しかし実際にロシアと台湾は交際しているのでしょうか。かなり疑問ではありますが。

第千四百二話　完

2010・5・14

第千四百三話　そのカップルは駄目

「あの二人だけは駄目です！」
「そうか、そんなことになっているのか」
日本から話を聞いたドイツは物静かです。
「かなり珍しい組み合わせだな」
「ロシアさんが台湾さんと仲良くなれば恐ろしいことになります」
日本は目が本気です。
「それこそ世界を制圧し私のところにも色々してくるでしょう」
「世界制圧はないんじゃないのか？」
「あの人だけはわかりません」
日本はかつてロシアがソ連という物凄く大きな家のリーダーだった時には本気で思っていたふしがあります。日露戦争というか明治維新の頃からロシアには物凄い恐怖を抱き続けてきたのです。
「そう、あの人は全長百メートルで口から火を吹き」
「それはもう人間じゃないだろ、国か？」
「そうした人ですよ。油断していたら本当に台湾さんが」
「同盟を組まれたら困るか」
「こうなればです」
刀を持っています。こうした話になると常ですが。
「台湾さんのところに行って直談判して」
「止めろ」
流石にドイツもそれは止めました。
「かえって大変なことになるぞ」
「いいえ、私は行きます！」
こうなってはもう誰にも止められません。日本が大変なことになっています。

第千四百三話　完

2010・5・15

第千四百四話　この二人も

「だから落ち着きなさいよ」
「ははは、できない相談だな」
「そういう状況ではないある」
アメリカはとてつもなく巨大な、ＲＰＧのラスボス戦前に持っているようなガンを持っています。中国も何か関羽が持っているような物凄い刀を持っています。
「さて、ロシアと台湾が結婚なんてしたら」
「交際でも駄目あるな」
「そこまで嫌なのね」
香港はそんな二人を見て呟きます。
「ロシアさんが台湾さんと仲良くするのは」
「そうだよ。台湾のお家の場所があれだからね」
「ベトナムも駄目あるがな」
ちなみにベトナムは少し前までロシアと仲がよくてそれで周りの家全部と対立していました。今は周りの家全部と仲良くしていたりします。人付き合いが物凄く上手なようです。
「とにかく。今回はね」
「実力行使でも止めるある」
「しかし。中国兄さんは商人なのにそんな重い武器も使えるのね」
「魔法も使えるあるよ。魔術師も僧侶も錬金術師も超能力者も全部ある」
「僕もさ。魔法も全部使えるのさ」
「ウィザードィの外伝の魔法ね」
香港はその魔法が何かすぐにわかりました。
「とにかく。本気なのはわかったわ」
そんなチートな二人も本気になりました。尚日本は僧侶でありま

すがテクニカル攻撃も得意です。この人も無茶な設定です。しかも侍と忍者とモンクも兼ねています。

第千四百四話　　完

２０１０・５・１５

第千四百五話　日本を止めないと

第千四百五話　日本を止めないと

「えっ、日本がかよ」
「困ったことにだ」
ドイツはプロイセンに対して日本がロシアが台湾と仲良くすることに猛反対して刀まで持ち出していることを話しました。するとプロイセンは青い顔になって言いました。
「おい、あいつが本気になったらよ」
「止められないか」
「俺と御前の二人がかりでも難しいだろ」
「そうだな。フランスかイギリスでも一緒にいてくれないとな」
欧州最強タッグのドイツの二人でも日本を単独では止められないのです。どれだけ日本の底力が凄まじいかです。伊達にロシアと単独で向かって勝ったわけではありません。
「無理だな」
「どうするよ。どっちを呼ぶんだよ」
「来てくれるかどうかわからんな」
「イタちゃんとこの兄弟巻き込んだら可哀想だしな」
プロイセンはこのことは自然に除外しました。
「やっぱりな」
「というよりかあいつは戦力としてはだな」
「ああ、それはわかってるからな」
わかっていての言葉でした。
「とにかくだよ、そんな日本止めるなんてな」
「アメリカか中国だな」
「けれどロシアが相手だろ？ってことは」
「あの連中も同じだ」
それを聞いて思いきりへこむプロイセンでした。最早打つ手なし

になったのでした。

第千四百五話　　完

2010・5・16

第千四百六話　殺しに行く直前

第千四百六話　殺しに行く直前

アメリカはその巨大なガンを、中国は何十キロもある薙刀みたいな関羽が持っていた刀を持ってです。今まさに何処かに出ようとしています。

その二人に対して香港が二人の背中に尋ねます。

「今から行くの？」

「ははは、様子見だよ」

「それだけあるよ」

香港に振り向いて答えます。その時にガンも刀も嫌になる位輝きます。

「それだけだからさ」

「とりあえずは何もないあるよ」

「全然信じられないわね」

その二人に突っ込みを入れた香港でした。

「とても」

「嫌だな、僕達だって話し合いで解決できたらそれでいいさ」

「あいつが何もしなかったらある」

「したら？」

迂闊にも聞いてはいけないことを聞いてしまった香港でした。その瞬間に二人の周りに何か物凄いプレッシャーがこみ上げてきました。

それを背負いながらです。こう言う二人でした。

「そうだね、その時はね」

「どちらが生きるか死ぬかあるな」

「そうなんだ」

「まあ何もないさ」

「日本もいるあるからな」

「この場合日本さんが一番心配だし」
こうして二人はロシアと台湾の様子見に出ました。殺気が広い太平洋に満ち満ちていました。

第千四百六話　　完

２０１０・５・１６

第千四百七話　台湾本人は

第千四百七話　台湾本人は

「ロシアさんねえ」
「どう思ってるの？」
香港が台湾に対して聞いていました。
「それで」
「特に何も思ってないしお付き合いも殆どないけれど」
「ないのね」
「ええ。少しお話しただけよ、この前にね」
それだけだというのです。話を聞いてみると本当に些細なものです。
「それだけなんだけれど」
「事情はわかったわ」
香港はそれを聞いて述べました。
「それだけだったのね」
「本当にね。けれどそれがどうかしたの？」
「いえ、別に」
何とです。香港はここで何が起こっているのかを本人に話さないのでした。しかもこれはわかってやっていることだったりします。恐ろしいことにです。
「聞いただけだから」
「そうなの」
「けれど事情はわかったわ」
こう答えはします。
「それじゃあ後はどうにでもなるわね。根拠無根ならそれでもう」
「何のことなの？」
台湾はまだ全く気付いていませんでした。周りがどうなっているのか。その頃三人が今まさに何かをしようとしていました。

第千四百七話　完

2010・5・17

第千四百八話　三人揃って

第千四百八話　三人揃って

日本はアメリカ、中国と合流しました。三人は今台湾のお家の前にいます。そこで張り込んでいます。勿論その手には武器がちゃんとあります。

「この妖刀村正ならあの人でも」

「いやいや、このガンならもう家でも何でも吹き飛ばせるよ」

「関羽が使っていたものある。これを受けて無事で済む奴はいないあるよ」

本気です。本気で戦うつもりです。

そのままずっと張り込んでいます。勿論あの人が来たらその時点で、です。

しかし幾ら待っていても来ないままです。そして真夜中になってです。

「来ませんね」

「あれっ、今日は来ないのかな」

「じゃあ僕達も今日はこれで帰るあるよ」

それぞれこう言ってお家に帰りました。けれど学校でも学校から帰ってもです。台湾のお家の前に張り込んでいました。鋭い台湾がそれに気付かない筈がありません。

「三人共何してるのかしら」

「気にしなくていいから」

素っ気無く告げる香港でした。

「そのうち終わるから」

「そのうちって」

「そう、そのうち終わるわ」

自分のお家の中からいぶかしむ顔で三人を見る台湾に対しての言葉です。

「そのうちね。気にしなくていいわ」
「そうなの」
台湾が気付いてしまいました。けれど三人はまだ張り込み続けています。三人の方は気付かれたことを悟ってはいません。

第千四百八話　　完

２０１０・５・１７

第千四百九話　その時のロシアは

第千四百九話　その時のロシアは

「いやあ、いつも悪いね」
「いえ、構いませんよ」
ロシアはオーストリアさんのお家にいました。そこのウィーン国立歌劇場においてオペラを観ているのです。今丁度バレエの場面です。
ロシアはバレエが大好きです。シンクロナイズドスイミングにしてもアイススケートにしてもです。バレエの応用ができるから得意なのです。それで今笑顔でそのバレエを観てオーストリアさんに対して笑顔で言っています。
「オーストリアさんのお家って音楽が一杯でいいよね」
「そういえば貴方は音楽好きですね」
「うん、大好きだよ」
にこやかな顔で応えます。
「それにオーストリアさんとは長いお付き合いだよね」
「そうですね。オーストリア継承戦争の時からですしね」
その時にお友達になってからなのです。二人の付き合いも本当に長いです。
「僕ってさ。太平洋じゃお友達あまりいないしね」
「そうですか。あそこでは」
「日本君もアメリカ君も中国君もね。あんな感じだし」
この三人との関係は最早学園中で有名です。
「ベトナムさんは最近また仲良くなっているけれど」
「そちらでは大変なのですね」
「実はね。あっちにも進出していきたいけれど」
「ではお友達をもっと作られることですね」
「そうだね。誰がいいかな」

とはいっても実はこれといって思い浮かばなかったりします。実際はそんなロシアなのでした。

第千四百九話　　完

２０１０・５・１８

第千四百十話　最早話を聞く状態じゃない

第千四百十話　最早話を聞く状態じゃない

ロシアがどう思っているかは別としてです。日本もアメリカも中国も何がどうなろうと彼と台湾の関係を成立させようとはさせないつもりでした。

それで、です。今も台湾のお家の前で張り込んでいます。

それを見た韓国ですらです。引きながら台湾に対して言うのでした。

「日本達は何をしているんだぜ？」

「さあ。私も何でかわからないけれど」

「とりあえず何かやったら大人しくなるかも知れないんだぜ」

韓国はこう言ってさりげなくキムチ壷を出そうとします。

「人間腹が一杯ならかなり落ち着くんだぜ」

「それ今あの三人の前に出したら命の保障はないけれど」

台湾はさりげなく怖い注意をします。

「それでもいいの？」

「止めておくんだぜ」

如何に蛮勇の韓国でもです。今回ばかりはよくわかりました。それだけ凄まじい殺気が三人から放たれているからです。韓国がわかる程にまでなのです。

「じゃあとりあえずは」

「放っておくべきよ。近付いたら本当に何されるかわからないわよ」

三人共既に武器に手をかけています。それぞれ銀色の眩く輝いてすらいます。

「だからね。今はね」

「そもそも何でああいう感じになってるんだぜ？三人共」

「さあ。何でかしら」

まだわからない台湾です。どうやら彼女はこうしたことに対して

は今一つ鈍いところがあるようです。意外と言えば意外なことですが。

第千四百十話　　完

２０１０・５・１８

第千四百十一話　放置は続く

「放っておいていいから」
「そうですか？」
「何か近寄っただけで何されるかわからない状況だけれど」
タイとベトナムが香港に対して言います。日米中の三国は相変わらず台湾のお家の前に張り付いています。勿論武器を持って物凄い殺気を撒き散らしています。二人もそれを見て言うのです。
「あのまま放っておいたら何時か」
「近寄った人が大変なことに」
「近寄らなかったらそれでいいから」
しかし香港はここでこう言うのでした。言われてみれば確かにその通りです。要は近寄らなかったらそれでもう大丈夫なのです。
「それだけだから」
「確かにすぐにわかりますし」
「あれだけのプレッシャーだと」
三人は今彼等を離れたところから見ています。そのうえであれこれと話をしているのです。
「お一人だけでもかなり目立ちますしね」
「そうね。それが三人だし」
「あれで気付かない方がおかしいわ」
香港は極めて冷静です。
「ほら、虫さえも避けてるから」
「あっ、トンボが」
「本当に」
トンボも三人の側を通ろうとして慌てて引き返していきます。そんな三人は今も張り込んでいます。そして皆その三人を放置し続けています。

第千四百十一話　完

2010・5・19

第千四百十二話　台湾さんの本音

第千四百十二話　台湾さんの本音

「やっぱりあれですね。優しくてよく気がつく人がいいですよね」

「そうよね。しかも礼儀正しくて気品があって」

「芸術や文化にも理解があって」

「喧嘩なんか強くなくても別にいいのよね」

台湾とハンガリーがにこにことして話をしています。どうやら好みの男の人のことを話しているようです。この辺りはやっぱり女の子です。

「はい、やっぱりまずは性格ですよね」

「そうそう」

「それを考えたら日本さんは」

「オーストリアさんもいいわよね」

お互いにその二人のことを言いました。

「あの人ってとても優しいですから」

「あら、じゃあ告白してみればどうかしら」

「何度言っても気付いてくれないんですよ」

台湾はここで困った顔になるのでした。

「上司の人も凄く応援してくれる人がいてくれたんですけど」

背が高くて顔の細長い人でした。台湾は元は日本のお家にいました。その上司の人もその時代で若い頃を生きてそれで日本のことをよく知っているのです。

「それでも。日本さんが」

「あの人はそういうことに鈍感だからね」

「それで困ってます。どうしたらいいでしょうか」

こんなことをハンガリーとお話していたのです。台湾は実はロシアではなく彼の方に関心があるようです。これは意外なことですが。

第千四百十二話　完

2010・5・19

第千四百十三話　気付かないまま

第千四百十三話　気付かないまま

相変わらず台湾のお家の前で張り込んでいる三人。韓国がそんな三人を見ながら台湾に対して言います。

「俺でも気付いてるんだぜ」

「私が日本さんをどう思ってるかってこと？」

「いつも一緒にいるんだぜ。わからない筈ないんだぜ」

こう言います。なお彼もいつも日本の傍にいたがります。

「あれでは気付かない方がおかしいんだぜ」

「やっぱりね。そうなのね」

「それで何で日本は気付かないんだぜ」

韓国ですら言うことでした。

「そっちの方がずっとおかしいんだぜ」

「それが日本さんのいいところなのよ」

何とこんなことを言いだしてきました。

「日本さんがイタリア君みたいに女の子が大好きでロマーノ君みたいにあちこちに声をかけるような人だったら絶対にこう思ってはいないわ」

「つまりあの日本だからいいんだぜ？」

「ええ、そうよ」

お家の中からその前に張り付いている日本をじっと見ながらの言葉です。もう日本を見る目が他の人を見る目とは全く違っています。

「その通りよ」

「御前本当に昔からそうなんだぜ。何一つ変わっていないんだぜ」

「変わるつもりもないし。何時か日本さんとね」

こんなことも考えているのでした。台湾もその心は純粋な乙女ということです。もっとも相手の方は全く気付くことはないようですけれど。

第千四百十三話　完

2010・5・20

第千四百十四話　三人が知ったこと

第千四百十四話　三人が知ったこと

台湾とロシアを何があっても一緒にさせまいとしている三人ですがその彼等のところにです。こんなニュースが入ってきました。

「えっ、ロシアがウクライナに！？」

「ベラルーシが戻ってきているあるか」

「またお姉さんと妹さんと一緒にですか」

ロシアがウクライナとまた仲良くなろうとしていてベラルーシが接近してきていることを聞いたのです。三人はかつてはソ連という大きな家に一緒に住んでいたのです。

「じゃあ台湾に対しては」

「何もないあるか」

「そうなのですか」

そしてこのことも聞きました。ロシアは台湾に対しては特に何も思っていないこと、そして台湾もロシアに対して思うところがないということをです。

それを聞いてからです。三人はすぐに台湾のお家の前から去りました。それと共にあの物凄いプレッシャーも消えてしまっています。

「じゃあこれでいいや」

「あいつが台湾と一緒にならないとそれで充分ある」

「はい。一時はまさかと思いましたが」

こうしてこの騒動は終わりました。しかしそんな三人を見て香港と韓国が言いました。

「あれでは全然駄目ね」

「日本だけでなくアメリカさんも中国兄貴も全然わかってないんだぜ」

韓国が珍しくまともなことを言っています。恐ろしいことに。

「女心ってやつに無理解過ぎるんだぜ」

「三人共妹さんまでいるのに」
それでもわからないことはわからないようです。尚ロシアにも妹はいますし韓国にもいます。果たして彼等はいいお兄さんなのでしょうか。

第千四百十四話　　完

２０１０・５・２０

第千四百十五話　自然消滅

第千四百十五話　自然消滅

ある日急にでした。台湾のお家の前から三人がいなくなりました。本当にある日急にいなくなってです。そのうえで平和が戻ったのです。

「いなくなったわね」

「まあそうなると思っていたわ」

香港がクールな目で台湾に言います。

「こうね」

「なるって思ってたの？」

「事実無根な話は何時か消えるわ」

醒めた顔と声でした。

「それならね」

「消えるものなの」

「そう、それで終わったのよ」

こう台湾に対して告げます。

「それでね」

「そういうものなのね」

「そういうものよ。ただ」

「ただ？」

「気付いていないのね」

何もわかっていないような台湾を見ての言葉です。

「そうなのね」

「何が？」

「気付いてないのならいいわ」

そこまで突っ込んで言う香港ではありませんでした。かくしてこの騒動は自然消滅となりました。

第千四百十五話　完

2010・5・21

第千四百十六話　妹が興味を持っても

第千四百十六話　妹が興味を持っても

とにかくロシアと台湾が付き合うことには大反対だった日本ですがそれは彼女に対してだけではありません。お家の人達についても同じです。

特に日本妹がです。お付き合いでロシアのお家に行こうとしてもです。

「それはいけません」

「駄目ですか？あの、あちらの妹さんとお話しに行くだけなのに」

「私も同伴しましょう」

刀を手にしての言葉です。

「是非共」

「あの、またですか？」

「またです。あのロシアさんのお家ですから」

「そうですか。それでは」

日本妹は困った声でありましたがうなずくのでした。そうしてでした。

日本は妹についてロシアのお家に来ました。そこでロシア妹と会うのですが。

「お兄さんはいませんね」

「はい、いません」

「ならいいです」

ロシア妹の言葉を聞いてまずは頷きます。しかしその目は殺意に満ちています。

「若しいれば」

「そう仰ると思ってフランスさんのお家に行ってもらいましたので」

ロシア妹が気を利かしてくれたのでした。

「御安心下さい」

「妹に何かあれば。その時は」
刀に手をかけて言う日本でした。とにかく仲の悪い日本とロシアです。

第千四百十六話　　完

２０１０・５・２１

第千四百十七話　無二のパートナー

第千四百十七話　無二のパートナー

「おいどんにも妹がいるでごわすよ」
「ニュージーランドさんですね」
「えっ、どうしてわかったでごわすか」
日本に突っ込みを入れられて物凄く狼狽するオーストラリアでした。
「日本、まさか忍者を使って調べたでごわすか」
「そうではないですけれどお隣同士でいつも一緒におられるじゃありませんか」
日本の突っ込みは実に的確です。
「それでわからないというのは」
「今まで誰にも言っていなかったでごわすが」
「それでもわかります」
またオーストラリアに対して突っ込みを入れます。
「生まれた時からずっと一緒におられますよね」
「それはその通りでごわす。おいどん達はいつも一緒でごわすよ」
「妹ですか。私には国家と国家での妹はいないのですよね」
兄弟もいません。お家の人はこれでもかという位個性派ばかりですけれど。
「それが少し羨ましいですが」
「ははは、思う存分羨ましがるでごわすよ」
日本の今の言葉に大笑いで返すオーストラリアでした。
「ニュージーランドはおいどんにとってはかけがえのないパートナーでごわすよ」
「そうですよね。本当に」
「とはいっても日本はいつも二人が一緒でごわすな。おいどんは一

人でごわすが」

言うまでもなく韓国と台湾です。日本がオーストラリアとお話をしているとです。今日もまた彼のところにやって来るのでした。日本も寂しいことはないのでした。

第千四百十七話　　完

２０１０・５・２２

第千四百十八話　眉毛の女の子

第千四百十八話　眉毛の女の子

「私も太平洋の人間ばい」
イギリスそっくりの眉毛と目元の女の子です。髪の色と目の色はオーストラリアのものです。オーストラリアと比べると小柄なこの娘がでした。
「ニュージーランドばい。趣味は羊を飼うことばい」
「ニュージーの家では羊が凄く多いでごわすよ」
オーストラリアも妹のことを紹介します。
「おいどんの家もそうでごわすが」
「っていうか羊の方が断然多いじゃねえかよ」
イギリスが二人に対して言います。
「御前等の家ってな」
「おう、これはイギリス兄貴」
「久し振りばい」
「最近御前等とはかなり疎遠だけれどな」
実はこの二人もイギリスの関係者だったりします。かつてはイギリスのお家の中で育てられていたこともあります。そんな関係なのです。
「しかし。それでもまだ上司は同じだけれどな」
「おいどん達もそれぞれの上司を持つでごわすか？」
「それもいいばいね」
「ああ、もう勝手にしろ」
最近ではそういうことを止めなくなっているイギリスでした。
「俺はもう太平洋には殆ど関係がないからな」
今ではかなり自由に生きているこの兄妹でした。この二人もまた太平洋の国家でした。つまりその個性はかなり強烈なようです。

第千四百十八話　完

2010・5・22

第千四百十九話　いつも一緒ですから

第千四百十九話　いつも一緒ですから

オーストラリアは日本との交流がかなり深くなっています。色々とあったりしますがそれでも交流が深くなっていることは確かです。

そしてニュージーランドはいつもオーストラリアと一緒にいます。従って日本とニュージーランドのお付き合いも中々深いものになっています。

「ほんなごつ日本さんともお付き合いすることが多くなってきましたね」

「はい、確かに」

日本も彼女の言葉に応えます。

「以前はそうではなかったのに」

「そうですよね。今ではかなり」

「お付き合いはするのが一番ですね」

過去ずっと引き篭もりだったことは今ではこう変わっています。日本も変われば変わるものです。すっかり国際派になっています。

「ニュージーランドさんともこうして」

「それでなんですが」

そしてニューズーランドはここであるものを勧めてきました。

「キーウィどうですか？」

「あの果物ですか」

「丁度いい具合に熟れてますから。どうでしょうか」

「はい、では御言葉に甘えまして」

「お兄ちゃんも呼んでますから。三人で食べましょう」

「はい、それでは」

こうして三人でそのキーウィを食べることになりました。本当に今では三人でいることも多くなりました。確かに色々とあったりはしますがそれでもです。

第千四百十九話　完

2010・5・23

第千四百二十話　羊は駄目です

第千四百二十話　羊は駄目です

日本はニュージーランドにキーウィを御馳走になりました。キーウィのサラダまであって中々豪勢です。そしてサラダの後は何かというとです。

「さて、それじゃあ」

「サラダの次はお肉でごわす」

こう言ってです。二人が日本に勧めてきたものは。

お肉はお肉です。しかしそれは。

「これは羊ですか」

「はい、その通りですばい」

「どうでごわすか」

「羊は少し」

日本の顔が曇ってきました。彼にしては珍しくです。

「匂いが強いので？」

「あれ？それがよかとって思うんですが」

「そんなごつ言っとおたらいかんでごわす」

ニュージーランドもオーストラリアも方言を出して日本に対して言います。

「羊はよかお肉ですばい」

「カロリーも少ないし安い。牛もよかけれど羊もよかものばってん」

「それはわかっていますが」

こうは言っても日本の顔は曇ったままです。

「私は羊は今一つ」

「ううん、それで鯨は食うでごわすか」

「日本さんの趣味はわからんとです」

「鯨は別です」

このことははっきりと言う日本でした。かくして日本と羊のお話

がはじまったりするのでした。

第千四百二十話　　完

2010・5・23

第千四百二十一話　この妹も鯨は

第千四百二十一話　　この妹も鯨は

「何であんなものを食べるんばい」
「そうでごわす、わからないでごわすな」
オーストラリアがニュージーランドの言葉に対して頷いています。
「鯨を食べるなんて」
「それは絶対に許さないばい」
二人でこんな話をして日本の捕鯨に対して反対しています。
「例え何があっても鯨を食べることは許されないばい」
「その通りでごわす。だから日本の捕鯨は許さないでごわす」
こう言ってそれで今日も日本の捕鯨にクレームをつけます。しかしです。
当の日本はです。その手に刀を持っています。そして言うのです。
「反対されるならそれでいいです」
日本もそれでいいと返します。
「しかしです。やるというのなら」
刀の唾に指をやって。そうして。
「私も遠慮はしません」
「あれっ、何で食べ物になると」
「強くなるばい？」
いつもは何も言わない日本なのにこう言うからです。二人はかなり驚いています。
「しかし。それでもでごわす」
「鯨の命がかかっているばい」
二人も引きません。一触即発の状況になっています。
海には鯨が溢れています。日本はその鯨を見て言います。
「鮪も鯨も。食べさせてもらいます」
完全に本気でした。彼も引きません。

第千四百二十一話　完

2010・5・24

第千四百二十二話　他の国は逃げてます

第千四百二十二話　他の国は逃げてます

「日本さんがああなったら」
「まずいんだけれどね」
台湾とベトナムがオーストラリア、ニュージーランド兄妹と対峙している日本を見て言います。
「刀に手をかけてるのに」
「それでも引かないなんてあの二人何を考えてるのかしら」
実は二人は日本が食べ物のことになったらどれだけ本気になるのか知りません。かつて干戈を交えたことがあるのですがそれでもです。
「まずいんだけれど」
「止められる人いないし」
こうなった日本はどうしてもです。誰も止められないのです。伊達にあのロシアとの戦争に勝っているわけではありません。それはとてもです。
しかし二人は引きません。何か最初から勝ったつもりでいます。
「どうしてもというならでごわす」
「私達を倒してみせるばい」
「仰いましたね」
日本の目が完全に座りました。
「それなら」
「あっ、これは」
「いよいよまずいわね」
台湾とベトナムは日本の本気を見ました。そして三人の周りを見ると。
誰もいません。どっちについてもまずいことになるのがわかっているからです。何しろ日本に至っては刀まで持っているからです。

誰も近寄らないのも道理です。さて、この話はどうなるでしょうか。

第千四百二十二話　　完

２０１０・５・２４

第千四百二十三話　鮪では協力

第千四百二十三話　鮪では協力

鯨のことではいがみ合う日本とオーストラリアにニュージーランド。しかしこれが鮪になりますと話が少し違ってきたりします。少しどころではありませんが。

「鮪は食べるものでごわす」

「その通りばい」

こう言うのです。

「だから賛成でごわす」

「食べるなという方がおかしいばい」

「これがわからないのですが」

日本妹も首を傾げながら言います。

「何で鯨は駄目で鮪はいいのかが」

「利益になるからでしょう」

日本がこう妹に答えます。

「そのせいです」

「それでなのですか」

「それしかありません。この人達は鯨は食べませんから」

それで鯨が増えても減っても基本的には問題がないのです。この辺りの事情は実に身勝手と言えば身勝手なものが見えたりもしています。

「ですから」

「何か聞いていてあまり気持ちいいことではありませんね」

「私もそう思います」

「まあ鮪では協力するからいいでごわすな」

「これは別ばい」

しかし二人は悪びれる様子はありません。何かかなり神経が太いところがあるようです。

第千四百二十三話　完

2010・5・25

第千四百二十四話　羊は主食

第千四百二十四話　羊は主食

鯨は駄目で鮪はいいオーストラリアとニュージーランドの兄妹ですがその二人の食べる量はかなりのものです。特にオーストラリアは身体が大きいのでそれだけ量が多いです。

オーストラリアもです。自分の身体を誇示しながら言います。

「ラグビーやっているとどうしてもこうなるでごわす」

「ラグビーな。御前好きだからな」

イギリスが彼の言葉を聞いて述べます。なおラグビーは元々はイギリスが起源だったりします。サッカーからはじまったものなのです。

「あれは激しいしな」

「殆ど格闘技でごわす。だからそれだけに」

「食わないと駄目だな」

「その通りでごわす」

それで食べる量が余計に多いのです。そしてその食べるものは。

「羊好きだな」

「肉といえばこれでごわす」

脛や胸の肉をどんどん食べていきます。

「毎日食べても飽きないでごわす」

「それでもかなり食べるな」

イギリスも驚く程です。

「しかも結構味付けが俺のと違うな」

「イギリスの料理はまずいでごわす。だからあんな味付けは絶対にしないでごわす」

「御前もそれを言うのかよ」

オーストラリアにも否定されるイギリスの料理でした。太平洋で彼の料理に文句を言わないのはカナダとそうしたことは言わない日

本だけになっています。酷い場合食べてももらえません。

第千四百二十四話　　完

２０１０・５・２５

第千四百二十五話　最近の二人

第千四百二十五話　最近の二人

オーストラリアとニュージーランドはかつてはイギリスのところにいました。その頃に大きくなって今に至ります。そうしてことを見てもイギリスとの関係が深いことがわかります。

しかし今はです。日本をはじめとしたアジアの国と関係が深いです。

「近いからでごわす」

「ご近所さんと仲良くするのが一番ばい」

二人が言うにはこれが理由です。

「今ではイギリスよりもご近所さんでごわす」

「ちゃんとやっていくばい」

「そういえば貴方が最初にＡＰＥＣを提唱されましたね」

日本もこのことを話します。

「太平洋に入られるということですね」

「そういうことでごわす。おいどん達もアジアでごわす」

「そういうことだから宜しく御願いしますばい」

「はい、それにつきましては」

日本もすぐに頷いてきました。

「宜しく御願いします」

「もうこの世界で生きていくでごわす」

「私等は友人同士ばってん」

「私以外にもいますしね」

アジアは日本だけではありません。それこそ物凄い数の国があります。その中には。

「アメリカさんもいますしね」

この人も最近アジアにかなり入ってきています。今は彼等は欧州から離れてです。そのうえでアジアとのお付き合いが深くなってき

ています。

第千四百二十五話　完

2010・5・26

第千四百二十六話　少し距離が

第千四百二十六話　少し距離が

アメリカもオーストラリアもニュージーランドも今ではアジアにかなり入っています。しかしその中で一人少し距離を置いている人がいます。それが誰かといいますと。

台湾です。台湾は皆の集まりから少し離れてです。ぽつんとしています。

ベトナムがその彼女に声をかけてです。こっそりと尋ねます。

「やっぱりまだ」

「はい。私はやっぱり」

「そうよね。生徒集会にも出られないし」

そうした国もあるのです。かなり例外ですけれど。

「他にも色々と」

「こうした会議には顔は出せますけれど」

「何か言うことはだからね」

「仕方ないですね」

台湾は寂しい顔で微笑んで言いました。

「このことは」

「私も。ちょっと前までアメリカや中国とやり合って難しい立場にいたけれど」

「私は。上司の関係もありますから」

「けれど何時かはね」

「はい、いつも日本さんの横にいられて何か言えるようになりたいです」

今日本の横には韓国だけがいます。とはいっても皆の集まりの中においては何故か存在感がなくなってしまう人でありますけれど。

「その時が来るように頑張ります」

「何時かきっとね」

そんな少し寂しいものがある台湾でした。もっとも集まってお話している中ではまたまた鯨で日本がオーストラリアの兄妹と対立していますが。アジア太平洋も複雑です。

第千四百二十六話　　完

２０１０・５・２６

第千四百二十七話　ＥＵに入ったから

第千四百二十七話　ＥＵに入ったから

「大体何でなんだ？」

イギリスがオーストラリアとニュージーランドに対して尋ねます。

「御前等昔は俺とばかり付き合っていたのによ。アメリカとかアジアの連中と今みたいに親密になったんだ？」

「それはおはんのせいでごわす」

「その通りばい」

「俺の？」

「そうでごわす」

イギリスに対して言うのです。今みたいにアメリカやアジアの人達とのお付き合いを深くした理由は。彼にこそそれがあるのだといいます。

「おはん、ＥＵに入ったでごわすな」

「ああ、あの時はまだＥＣだったけれどな」

「それでおいどん達もでごわす。自分達のお付き合いの相手を探して」

「それでＡＰＥＣを設立したばい」

オーストラリアが言いだしっぺだったのです。それが今の状況のはじまりだったのです。

「そういうことでごわす」

「イギリスさんとの付き合いが薄くなったのは事実だったからばい」

「俺だってな。実際あの時は」

それを言われるとです。イギリスも弱ってしまいます。何しろこの二人はかなり彼に依存していたからです。第二次世界大戦まではかなりのものでした。

「仕方なくだな」

「おいどん達も仕方なくでごわす」

「そういうことばい」
こうした事情があったのです。二人も考えています。

第千四百二十七話　　完

２０１０・５・２７

第千四百二十八話　最初は入っていなかったのに

第千四百二十八話　最初は入っていなかったのに

「それでもでごわす」

「困ったことばいね」

オーストラリアとニュージーランドが頭を悩ませていることがあります。それは彼等が提唱して皆に集まってもらったそのＡＰＥＣのことです。

「日本と一緒になってリーダーシップを発揮するつもりだったでごわすが」

「それが今では」

日本はそのままリーダー格です。何しろ力が桁外れです。自分では高齢と言っていますがその力は相当なものです。

「アメリカに中国が来てリーダー格になってしまったでごわす」

「最初は入れるつもりはなかったばい、二人共」

それでも気付いたら入っていたのです。呼ばれなくてもやって来て参加してしまう、この二人の特技の一つです。それがいいか悪いかはともかくとしまして。

「お陰でおいどん達は」

「影が今一つ薄いばい」

このことに悩んでいるのです。尚二人共カナダよりはずっと目立っています。カナダはこの集まりに最初からいますがそれでも全く気付いてもらっていません。

「これからごげんするでごわすか」

「このままいくしかないばい。結局は」

「そうでごわすな」

オーストラリアも困った顔で妹の言葉に頷くしかありません。

「個性派ばかりでごわすし」

「誰一人としてまともな人がいないのは気のせいばい？」

そう言う二人の個性もそれぞれかなりのものです。少なくとも誰にも気付いてもらえないカナダよりはずっと恵まれていると言えます。

第千四百二十八話　　完

２０１０・５・２７

第千四百二十九話　数が多い

第千四百二十九話　数が多い

太平洋といえばまず気付くのはです。人の数が多いのです。やっぱり中国がダントツですがアメリカも相当多いです。日本にしても一億を超えています。タイやベトナムもその数はかなりのものです。

「えっ、そんなにいるんだ」

「はい、驚かれました？」

「台湾で二千万もいるんだ」

イタリアは台湾の言葉を聞いてかなり驚いています。

「多いんだね、結構」

「お家は狭いですけれど人は多いんです」

台湾は少し苦笑いでイタリアに答えます。

「それで苦労もありますけれど」

「日本だって一億いるしね。欧州にそこまで人がいる国ってないからね」

「そうですよね。太平洋は人口が多いのが普通ですから」

「ううん、何か全然違う世界なんだね」

イタリアはこのことをあらためて認識しました。

「本当に」

「そうですね。私なんかよりずっと人が多い国も一杯ありますし」

「二千万いたら欧州じゃちょっとしたものだけれど」

「太平洋ですから」

二千万で少ない方です。そして台湾より人が多いこの国は。

「クマ一さん、何で何千万もいるのに目立てないのかな」

「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」

「君の飼い主のカナダだよ」

どうしても目立てないのでした。

第千四百二十九話　完

2010・5・28

第千四百三十話　この人の数も

第千四百三十話　この人の数も

「俺の家は実は七千万いるんだぜ」
「ああ、北の方と合わせたらだよね」
ロシアが韓国の言葉に突っ込みを入れます。
「確かそれだけになるよね」
「そうなんだぜ。日本のせいで随分減ったけれどそれだけいるんだぜ」
実は日本のお家にいた時に倍に増えています。それでも彼はこう信じ込んでいます。
「統一はまだだけれどそれだけいるんだぜ」
「いいよね、七千万かあ」
ロシアは純朴な笑顔のままこう言いました。
「農奴の数としてはかなりいいね。シベリア再開発とかね」
「何か言ったんだぜ？」
「何でもないよ」
ここに日本やアメリカや中国がいれば間違いなく一触即発でした。しかし幸い今ここにいるのは韓国とロシアだけです。ちなみに韓国は日本がどうしてロシアと戦争したのかを知りません。
「そうかあ、早く統一できたらいいね」
「色々と問題があるけれどそう思うんだぜ」
「それでね。統一したらね」
ロシアは純朴な笑顔のままです。その笑顔でさらりと言います。
「どうかな。もっと親しいお友達にならない？」
「考えておくんだぜ」
韓国は特に考えることなく答えました。しかしです。
「七千万の人口の大国なんだぜ」
「七千万のシベリア開発用の人達だね」

ある意味両者の思惑は完全に一致しています。韓国は気付いていませんが。

第千四百三十話　　完

２０１０・５・２８

第千四百三十一話　人口については

第千四百三十一話　人口については

「そういえばですが」
「どうしたんですか？」
「私と貴女は人口は同じ位でしたね」
オーストリアさんがこうハンガリーに言いました。
「そうでしたね」
「はい、私の方が少し多かったと思います」
「そうでしたね。そしてドイツは」
「プロイセンとも一緒ですからかなり多いですよ」
ドイツのことも話に出ます。
「欧州で一番多いですから」
「それでも日本よりは少ないのでしたね」
「はい、日本さんはあれでかなり人が多いですから」
自分では小さな国と言っていてもです。実際はかなり多かったりする日本です。
「ですから」
「こうして考えてみると面白いですね、人口も」
「本当ですよね。フランスの数が多いのは困ったものですけれど」
つまりそれだけフランスみたいな人が多いということですから。
「イタちゃんも人口結構多いですしね」
「ロマーノと合わせて。結構いますね」
「ですよね」
「人口というものも面白いものです」
オーストリアさんはこう言いながら優雅にコーヒーとお菓子を楽しんでいます。そしてハンガリーもそれにお付き合いしているのでした。

第千四百三十一話　完

2010・5・29

第千四百三十二話　数で攻める

「お、おいまたこんなに来たのかよ！」
「幾ら何でも多過ぎるだろ！」
イギリスとフランスがびっくりしています。何と日本とアメリカと中国が二人のお家に自分達のお家の人達を大勢連れて来たのです。所謂観光客です。
彼等は忽ちのうちに二人のお家を席巻してしまいました。しかもです。
「マナー悪過ぎるぞおい」
「だからここは御前等の家じゃねえんだぞ」
おまけにやりたい放題です。特にアメリカの人達と中国の人達がです。日本のお家の人達も結構だったりしますがこの人達よりは大人しいです。
「こいつ等、しかも何て数だ」
「桁が一つ違うだろ」
「ははは、アメリカは人も数も多いからさ！」
「人の数が多いのは昔からあるぞ」
二人は全く気にしていません。気にしなくてはいけないところでしょうが。
「それでイギリス、フランス聞きたいんだけれどな」
「観光名所を教えて欲しいあるぞ」
「家の観光名所は全部御前等の観光客に制覇されたよ」
「家の連中に聞け。何処にでもいやがるからな」
イギリスとフランスは白目になって怒った顔で言います。
「しかもそこの生徒会長の一団」
「キムチをレストランに持って来るのは止めろ。匂いが移るだろうがよ」

何と韓国までいます。合わせて四国の恐怖の連合軍です。イギリスとフランスのお家の中は忽ちのうちに大混乱となりました。

第千四百三十二話　　完

２０１０・５・２９

第千四百三十三話　キムチの匂いは

第千四百三十三話　キムチの匂いは

「だから御前はな」
「キムチ以外はねえのかよ」
「キムチは完璧な食べ物なんだぜ」
韓国はレストランにまでそのキムチを持ち込まれて怒っているイギリスとフランスに対して平然と返します。本当に欧州には強いです。
「それで他に何が必要なんだぜ？」
「御前の食い物絶対に大蒜と唐辛子入れるよな」
「しかも煮るか焼くのばっかりだよな」
「刺身だってあるんだぜ」
ちゃんとそうした生ものも食べたりはします。
「何なら食わせてやるんだぜ」
「別にいいからな」
「また食う時に起源とか言うんだろ」
「刺身の起源は俺の家なんだぜ」
本当にこう言います。
「だからコチュジャンをつけて食べるんだぜ」
「やっぱり赤いじゃねえか」
「辛い料理だろうがよ」
つまりキムチと同じです。二人は例によって目を白くさせて怒った顔でいます。しかし韓国は二人に言われても何ともありません。本当に平気です。
「だからキムチは止めろ」
「レストランに持って来るな」
「大丈夫なんだぜ。俺は平気なんだぜ」
二人の言うことは実に完璧にスルーです。こうして今もレストラ

ンにキムチを持ち込む韓国でした。

第千四百三十三話　　完

２０１０・５・３１

第千四百三十四話　韓国もおもてなしは

第千四百三十四話　韓国もおもてなしは

「あの、韓国さん」
「何なんだぜ、日本」
「貴方はいつも私のことを嫌いだと言っていますが」
こう韓国に対して言います。
「しかし何故何かあると私をお家に呼ぶのですか？」
「そうよね。本当にいつも呼ぶわよね」
日本の隣には韓国と同じくいつも日本の傍にいる台湾がいます。この三人は結果としていつも一緒にいます。仲がいいとは思えませんがそれでもです。
「何でなのよ」
「暇だから呼んでやるんだぜ」
韓国は笑顔で大嘘をつきました。
「わかったらさっさと食うんだぜ。今日は特別に御馳走を山程用意してやったんだぜ」
「それもいつもではないでしょうか」
日本は自分の前にこれでもかと置かれている韓国のお家の料理を見て言います。全部彼と韓国妹が作ったものです。種類も数も量も相当なものです。
「韓国さんはお客にはいつもこれだけ出していませんか？」
「お客さんはもてなすのがウリナラの礼儀なんだぜ」
だからだといいます。
「わかったら食うんだぜ。遠慮したら許さないんだぜ」
「はあ、それでは」
「台湾、御前も食うんだぜ。お客さんは腹一杯食うんだぜ」
「わかったわよ。あんたの料理って癖はあるけれど美味しいし」

こうして今日も韓国のお家で御馳走を食べる二人でした。韓国もお客さんはかなりもてなす人なのです。

第千四百三十四話　　完

２０１０・５・３１

第千四百三十五話　フランスもびっくり

第千四百三十五話　フランスもびっくり

フランスが太平洋の面々をお家に呼びました。何故呼んだかというとずばり自慢の為です。

「まああれだよな。料理は俺が一番だよな」

「確かに美味いぞ」

「そうあるな」

アメリカと中国もこのことは認めます。

「君の料理は優雅で気品があって」

「味も豊かある」

「そうだろ？やっぱり俺のこの繊細な料理こそがな」

「こんなの全然味がしないんだぜ」

ところがです。ここで韓国が言いました。この人も呼んでいたのです。

そうしてそのフランスの作ったお料理にコチュジャンや唐辛子をこれでもかと入れていきます。もう元の味も何もあったものじゃありません。

「おい待て」

フランスもこれには目を真っ白にさせて怖い顔でクレームをつけます。

「御前何してんだ？それで何て言った？」

「味がしないんだぜ。こんな弱い味じゃ食った気がしないんだぜ」

こう言ってその真っ赤な料理を食べはじめます。

「こうして辛いものじゃないとどうしようもないんだぜ」

「俺の料理にここまで見事なクレームつけてくれるなんてな」

フランスも本気で怒っています。

「お兄さん今かなり頭にきてるよ」

「じゃあまともな料理作るんだぜ。どうしようもないんだぜ」

韓国はそう言われても全く平気です。フランスも怖くないみたいです。

第千四百三十五話　　完

２０１０・５・３１

第千四百三十六話　傍若無人の理由

「なあ日本、あいつは一体どうなってるんだ？」
「私にですか」
「ああ、いつも一緒にいるからな」
フランスは日本に対して韓国について尋ねています。
「それでなんだけれどな。どうなってるんだ、一体」
「韓国さんは辛いものでないと食べられないのです」
「それも酷いが何であんなに無礼千万なんだよ」
「韓国さんは欧州にはあまり興味がないので」
これが理由だというのです。
「それでなのです」
「俺やイギリスもか」
「そうなのです。全く気にしていません」
韓国が見ているのは基本的に日本だけです。日本ではどうなのか、日本がそれをしているのか、そこから自分の行動を決める人でもあるのです。
「ですから」
「とんでもねえ奴だな、おい」
「欧州には韓国さんみたいな方はおられないのですね」
「あんな強烈な奴いねえよ」
フランスはこのことは断言するのでした。
「っていうか御前んところは昔確か」
「二度と併合しないことになっています」
かつて韓国が日本のお家にいたことはです。日本においては最早絶対に繰り返してはならないことに決まっているのです。理由は言うまでもなくです。そんな無意味に強烈な韓国です。

第千四百三十六話　完

2010・5・31

第千四百三十七話　ボルシチ

第千四百三十七話　　ボルシチ

韓国に妙に関心があるらしいのがロシアです。この人のお料理といえばやっぱりこれです。

「また作ってみたけれどね」

「ああ、それか」

フランスがその彼が作ったお料理を見て言います。それは。

「御前ボルシチ好きだよな」

「やっぱりね。ずっと食べてきているものだしね」

「それとピロシキだよな」

「うん、どちらも好きだよ」

素朴な顔での言葉です。

「僕、食べ物は贅沢じゃなくてもいいから」

「そういえば御前の料理っていつも家庭料理ばかりだよな」

「うん、家庭の味が好きなんだ」

これは本音です。彼はかなり無欲なところがあるのです。

「だからね。こうしたボルシチなんかもね」

「ああ、何度食っても美味いしな」

「よかったらどんどん食べてよ。量はたっぷりとあるからさ」

「悪いな、それじゃあ言葉に甘えてな」

こうしてボルシチを食べるフランスですがここでふと彼のことを思い出してです。そのうえで尋ねます。

「ところでこのボルシチにキムチとかコチュジャンとか入れる奴がいたら御前どうするんだ？」

「そうだね。その場合はね」

真っ黒いオーラを身にまとってです。そのうえでの言葉は。

「どうなるんだろうね。シベリアかなあ」

「・・・・・そう言うと思ったぜ」

果たして韓国は何時地雷を踏むでしょうか。何時踏んでもおかしくないですが。

第千四百三十七話　　完

２０１０・６・１

第千四百三十八話　コリアンダー

第千四百三十八話　　コリアンダー

タイはその料理にコリアンダーをかなり使います。これこそが彼の料理のトレードマークと言ってもいい位にこれでもかと使います。

「後は青唐辛子ですね」

彼はよくコリアンダーの匂いを身体にまとっていたりします。慣れると美味しいものを感じさせてくれる匂いであります。

「これがないと何か物足りないんですよ」

彼がこう話している時にです。ベトナムも自分のお料理を作っていました。見ればそれは生春巻きとビーフンですが見ればそれもです。コリアンダーを入れています。

「やっぱりこれよ」

笑顔で言いながらそのコリアンダーを入れているのです。

「これがないとね。どうしようもないわよ」

こう言います。しかしタイとは何故かあまりこのことについてお話をしません。というかタイとベトナムはそもそもお互いで何かを話したりすること自体があまりありません。

皆それに気付いています。しかしあえて言いません。

台湾がこっそりと日本に対して言います。どうしてそうなのかをです。

「お隣同士と言ってもいいですから。ですから」

「複雑なものがあるのですね」

「二人共頭がいいからあえて何も言いませんけれど」

それでも思うところがあるのです。お家同士も密かなライバル関係にあったりします。

「ですから」

「わかりました」

「日本さん、トムヤンクンどうですか？」

「生春巻きありますよ」
ここで二人同時に食べ物を勧めてきます。よく見れば二人の間には微妙な緊張があります。火花が静かに散っている、そんな関係です。

第千四百三十八話　　完

２０１０・６・１

第千四百三十九話　調味料は大事

第千四百三十九話　調味料は大事

「そういえば日本さんのお料理ってお醤油がメインなんですね」
「それとお味噌ですね」
こう台湾の質問に答えます。
「みりんもありますが。この二つがないと私の家ではお料理は考えられません」
「特にお醤油ですよね」
「そうですね。お醤油はまさに命です」
こうまで言います。
「これがないと。本当にどうしていいかわかりません」
「それも大豆のお醤油ですね」
「しょっつるもたまに使いますが」
所謂お魚から作ったお醤油です。タイやベトナムにおいてはナムプラーと呼ばれているお醤油のことです。かなり匂いがするものでもあります。
「やはり大豆のものですね」
「日本さんのお家のお料理となりますと」
「とにかくこれです」
そのお醤油だというのです。
「ないと何もできないと言っていいです」
「成程、じゃあお醤油は貴重ですね」
「勿論です。なければ困ります」
また言う日本でした。
「本当に」
「わかりました。じゃあ一緒に食べましょう、お醤油を使った日本さんのお料理を」
「はい、それでは」

こうして二人で日本のお料理を食べるのでした。そのお醤油を使ったお料理をです。

第千四百三十九話　　完

２０１０・６・２

第千四百四十話　お醤油は

第千四百四十話　お醤油は

「元々僕の家で作られたものあるな」
「ああ、これも君が作ったものだったんだ」
「そうですね。お醤油も中国さんのお家からのものです」
アメリカと日本が中国の話に頷いています。今は三人でそれぞれのお料理を食べています。そのどれにもお醤油をかけて食べています。
「いや、君の料理にかける情熱は昔から凄かったんだね」
「そうですね。お陰で美味しいものを食べられます」
「しかし日本は醤油ばかりあるな」
「私はこれがないとどうも」
「塩分採り過ぎあるぞ」
中国は少し心配する顔で日本に言います。
「塩分の採り過ぎは身体にあまりよくないある」
「そうだよな。僕も最近よく言われるぞ」
かく言うアメリカは糖分も物凄いです。お醤油にしてもかなりかけています。
「気をつけないとな」
「実はそれでドイツさんに言われましたが」
「当然ある。僕でも気になるある」
実際中国も結構お醤油をかけています。三人共それぞれのお料理に結構以上にお醤油をかけてそのうえで食べているのです。
「気をつけるよろし」
「しかし。塩分はです」
日本はここで珍しく反論します。
「ないと困りますから」
「それでも採り過ぎじゃないかい？」

「その通りある」
その二人もですが。しかし日本が塩分を採り過ぎなのは紛れもない事実です。

第千四百四十話　完

２０１０・６・２

第千四百四十一話　あれはない

第千四百四十一話　あれはない

「なあ、日本」
「あのことですね」
「俺一点も入れてないんだけれどな」
イギリスもかなり困惑した顔です。その顔で日本に対して話しています。
「それで俺が勝ったってのはな」
「わかっています、それは」
日本はかなり落ち込んだ顔になっています。それがどうしてかといいますと。
「私もあんな試合ははじめてです」
「オウンゴール二点な」
「彼等は何をしていたのでしょうか」
「キーパーはよかったよ」
イギリスもそれは認めます。
「けれどな、それでもな」
「オウンゴールは」
「どうしようもないからな」
「大丈夫なのでしょうか」
日本はとても心配した顔です。
「この状況で」
「俺が言えるのは頑張れってことだけだな」
イギリスも気遣ってはいます。彼にしてもかなり納得のいかない勝ち方でしたがそれだからこそです。日本を気遣っているのです。
このことは間違いありません。
「それだけだ」
「わかりました」

日本にとってはあまりにも痛い敗戦でした。今の上司がいなくなることは嬉しいことでも。

第千四百四十一話　　完

２０１０・６・３

第千四百四十二話　野球もサッカーも

第千四百四十二話　野球もサッカーも

日本の対戦カードはかなり壮絶です。顔触れを見ただけでお家の人達が『これは駄目だ』と諦める位です。物凄い顔触れの中にいます。

「オランダさんにデンマークさんにカメルーンさんですが」

「誰が考えたんですか？その顔触れ」

「抽選で決まりました」

その顔触れを聞いて唖然とする能登に対して答えます。

「それで」

「あの、そういえば野球は」

「九回のうち五回が韓国さんとの試合でしたね」

「あれもかなりでしたけれど」

他に同じチームと五回戦った国はいないのにです。何故か韓国と五回戦ったのです。皆最後は嫌になって決勝は罰ゲームとまで言っていました。そんな状況だったのです。

「そして今回はこれです」

「抽選に行く人考えた方がいいんじゃないですか？」

「私も最近そう思っています」

日本自身も考えていることでした。

「これはあまりにも」

「そうですね。本当に」

「とにかくもうすぐワールドカップですが」

その壮絶な顔触れとの戦いが近付いていることからは逃れられません。実は日本は野球は得意でもサッカーはあまり得意ではないのです。

「頑張ります」

「そうして下さい」

こんな状況です。果たしてどうなるでしょうか。

第千四百四十二話　　完

２０１０・６・３

第千四百四十三話　絶対にまずい

「しかしです」
自分のチームを見てです。日本は溜息です。
「得点力がありませんね」
「そうやなあ」
大阪が彼の言葉に応えて頷きます。
「確かにキーパーはええんやけれどな」
「オウンゴールの二人はどうでしょうか」
「頼むからルール覚えて欲しいな」
これが大阪の二人への言葉でした。
「ホンマにな」
「ルールをですか」
「まずはそれからや、あの二人は」
つまり問題外だというのです。
「ルールを知らんでサッカーはできんやろ」
「確かに。その通りですね」
おかげであの試合はイギリスに一点も入れられていないのにそれでも負けています。これをマジックや奇跡と言わずして何と言いましょうか。野球ですが三原マジックや仰木マジックよりも凄いです。
「しかしあの二人も外せませんし」
「とにかくハングリー精神もないしな。それもやばいし」
「ハングリーですか」
「意地でも勝つ、野球にはあるんやけれどなあ」
「そうですね、サッカーにはあまり」
それがないのです。それで負けている一面もあります。課題は山積みの日本チームです。

第千四百四十三話　完

2010・6・4

第千四百四十四話　野球でも

第千四百四十四話　野球でも

日本はここで大阪に対してです。あることを尋ねました。

「その野球ですが」

「何でっしゃろ」

「阪神は毎年ここぞという時に負けていませんか？」

大阪といえば阪神です。阪神は何だかんだで日本のお家の至るところにファンを抱えているチームです。しかしこのチーム案外あっさり負けるのです。

「本当に見事なタイミングで」

「それが阪神やさかい」

大阪もそれを言われると弱いです。

「あのＷＢＣの日本みたいにはいかへんわ」

「オリンピックの私達みたいなものですね」

ＧＧ佐藤がヘマをやらかしたあの時です。

「ああしたようなものですね」

「昔からスター選手は一杯おるのになあ」

それこそ星の数程います。阪神のスター選手はその背番号と共にファンの心に永遠に残っています。

「特に藤村、吉田、小山、村山、江夏、田淵、江本。ラインバック、掛布、バース、岡田、真弓、新庄、井川、金本兄貴もそうやしな」

「それだけの人材が過去にいたんですね」

「巨人が悪いんや」

球界の超悪性腫瘍の話も出ます。

「金ばっか使って選手強奪しくさって汚い手ばかり使うからな」

「マスコミですから」

ついには巨人批判にもなりました。しかし巨人は批判されて当然でありますからこれはいいのです。

第千四百四十四話　完

2010・6・4

第千四百四十五話　今度もやった

第千四百四十五話

今度もやった
「ええとですね」
「ああ、あいつなあ」
「またやらかしましたね」
「今度は相手を怪我させましたか」
日本は困り果てた顔で大阪と能登とお話しています。
「オウンゴールの次は」
「相手はアフリカの人やしなあ」
「アフリカで開かれる大会なのに」
それでもやらかしたのです。しかももうすぐ大会だというのです。
「直前でやからな」
「最悪のタイミングとしか言いようがありませんね」
二人も頭を抱えています。日本の人全員が困っています。
「あの監督も実は結構問題なんちゃうか？」
「前に監督やった時カズさんを外しましたし」
「ええ、カズさんは我が国のサッカーの為に必死にやり続けてるのに」
この話もします。その人が選んだ代表がです。オウンゴールに今度は相手を怪我させたのです。監督の責任ではないにしてもあまりにも酷いです。
「しかし、これは」
「厄介やで」
「どうしましょうか」
「大会が凄く心配です」
日本は遂にこう言いました。本気で心配しています。果たして大会はどうなるでしょうか。只でさえ壮絶な顔触れの中にいるという

のにです。

第千四百四十五話　完

2010・6・5

第千四百四十六話　とにかく大会

第千四百四十六話　とにかく大会

何はともあれ間も無く大会です。しかし日本は浮かない顔です。
一緒にいる韓国もそれに気付いて彼に声をかけてきたのでした。
「何落ち込んでるんだぜ、もうすぐなんだぜ」
「はあ、しかし」
「俺なんか楽しみで仕方ないんだぜ、優勝目指すんだぜ」
「韓国さんはそのおつもりですか」
「当たり前なんだぜ、出るからにはそれしかないんだぜ」
相変わらずのポジティブシンキングです。
「日本は無理でもしっかりやるんだぜ」
「しっかり、ですか」
「それで何の問題もないんだぜ」
何気にいいことを言っています。
「アメリカさんにはポスターも描いてもらったし気合が入るんだぜ」
「あの白虎ですね」
「あれはいいんだぜ。気に入ったんだぜ」
韓国は上機嫌で話します。
「日本の侍もその次によかったんだぜ」
「ポスターはいいのですが」
しかし、なのでした。
「それでも。あれは」
「何か今日の御前しおしおなんだぜ」
「ええ、ついつい考えてしまいまして」
とにかく日本にとってははじまる前から嫌なことばかりです。本当に早く終わって欲しいとさえ思っています。

第千四百四十六話　完

2010・6・5

第千四百四十七話　助っ人はやり過ぎ

第千四百四十七話　助っ人はやり過ぎ

「そんなに困ってるんならよ」

某脚本家さんがここで日本に対して言ってきました。

「あれじゃねえかよ。助っ人呼べよ」

「助っ人ですか」

「おう、あの四人な」

脚本家さんはここで物凄い人達の名前を挙げてきました。

「あの四人ならどうだ」

「仮面ライダーは力が強過ぎて駄目です」

「駄目か」

「強過ぎますよ、それにスピードもありますし空を飛べたりもするじゃないですか」

「わかった、じゃあなしだな」

脚本家さんはそれで納得しました。しかしです。

サッカーの話から急に変えてです。こんなことを言ってきました。

「じゃあ河豚でも食いに行くか」

「河豚ですか」

「ああ、ちょっと付き合え」

自分の祖国であっても遠慮なく俺様なのが実にこの人らしいです。日本もわかっているのでそれに対してあれこれ言いはしません。もうツーカーの仲です。

「それでいいな」

「河豚は少し季節を外しているのでは」

「んっ、そうか。それならな」

脚本家さんは日本のその言葉を受けてでした。ふと表情を変えてからこう言ってきたのです。さて、日本は一体どうなるのでしょうか。

第千四百四十七話　完

2010・6・6

第千四百四十八話　美食地獄

第千四百四十八話　美食地獄

日本は脚本家さんにです。京都まで連れて来られました。そしてです。

「御前に一つ面白いことを教えてやるさ」

「面白いことですか」

「ああ、美食地獄だ」

にやりと笑ってそのうえで、です。こんなことを言うのです。

「これから色々な料亭を回る。そこに出る料理を全部食わせてやる」

「全部ですか」

「残そうと思っても残せないからな」

今度の言葉はこれでした。

「もう絶対にな」

「それはどうしてですか？」

「それは決まってるだろ」

今度は不敵な笑みになってです。こう言いました。

「美味いからだ」

「美味しいからですか」

「ああ、だからだよ」

それでだというのでした。そうして。

日本を連れてです。料亭を巡っていきます。

「ほら、食え」

「はい、それでは」

幾度も幾度もお店を回ってです。日本は満腹なのにそれでも幾らでも食べられます。それはまさに美食地獄と言っていいものでした。

そんな地獄を味わった日本です。しかし脚本家さんはまだ日本と一緒にいます。今度は何をするつもりでしょうか。

第千四百四十八話　完

2010・6・6

第千四百四十九話　食べ終わって

第千四百四十九話　食べ終わって

美食地獄を巡らさせられた日本。終わってみるとすぐに脚本家さんから声をかけられました。

「どうだ、今の気持ちは」

「満足しました」

「落ち着いただろ」

「はい」

脚本家さんの問いにそのまま答えます。

「とても。さっきまでとは全然違って」

「美味いものをたらふく食ったからだよ」

脚本家さんはここで、です。にこりと笑って言ってきました。

「だからなんだよ。人間美味いものをたらふく食ったらそれで大抵のことは乗り切れるんだ」

「成程、だからですか」

「ああ、もうこれでいいな」

その落ち着いた日本に対して述べます。

「じゃあな。ワールドカップも頑張れ」

「勝っても負けてもですね」

「気にするのは治安だけにしろ」

言うのはこれだけでした。脚本家さんが言うのはです。

「わかったな。それだけでいいからな」

「それが一番問題だとも思いますが」

「それは仕方ない。選んだ奴を怨め」

まさにそんな状況だったりします。とにかく今度のワールドカップの場所はかなりやばいのです。それこそこの世に北斗の拳の世界が出て来たようなものです。

その都市の名はヨハネスブルグ、さてどうなるでしょうか。

第千四百四十九話　完

2010・6・7

第千四百五十話　まさに魔界都市

第千四百五十話　まさに魔界都市

「ドイツーーーー、ヨハネスブルグって何？」
「無法地帯だ」
ドイツはこうイタリアの問いに答えます。
「行けば死ぬ」
「死ぬんだ」
「そうだ、至るところ無法者ばかりだ」
まさにそんな場所だというのです。当然この二人もワールドカップに出ます。しかし二人の表情は晴れません。それも当然のことです。
「南アフリカ自体の殺人事件の数が半端ではない」
「そんなに凄いんだ」
「イタリアの人口だと年間二万程度か」
「それ程度って数じゃないから」
イタリアはその数を聞いてももう泣きそうになっています。
「何だよそこって。戦場？」
「戦場ではないが戦場に近い」
ドイツも深刻な顔で語ります。
「いいか、行くと決まってるから命を賭けろ」
「う、うん」
「イギリスやフランスとの戦争の時よりも困難だからな」
「とにかく物凄い場所なのはわかったよ」
「命の保障は一切できん」
ドイツは本気で言っています。
こうして皆そのヨハネスブルグに行きます。果たして大丈夫なのでしょうか。

第千四百五十話　完

2010・6・7

第千四百五十一話　緑の大地

第千四百五十一話　緑の大地

デンマークのお家自体はさして大きくはありません。しかしそれでもそのお家の他に別荘があります。そこが物凄く大きかったりするのです。

「ちょっとグリーンランドに行って来るっぺ」

「久し振りに行くだな」

「ああ、思い出したっぺ」

だからだとノルウェーに対して答えます。

「それで行って来るっぺよ」

「おめが見つけた場所だったな」

「そうだっぺ。けれどあそこには人は殆どいないっぺよ」

それがどうしてかといいますと寒いからです。人は暮らしにくい場所にはあまり集まりません。

「それでも気が向いたから行くっぺよ」

「あそこは寒いだ。気をつけるだ」

「ああ、わかってるっぺよ」

こう話して行くとです。やっぱり寒いです。デンマークと何故か同行してきているノルウェーも完全武装です。そうでもしないと生きていられないのです。

その寒さの中で、です。ノルウェーが言います。見えるのは一面の雪と氷だけです。

「なしてここが緑の大地だ？わかんねぞ」

「俺も今ではわからんっぺよ」

デンマークも首を捻っています。

「雪と氷ばかりだって。殆どスノーランドだっぺ」

「そっちの方が相応しい名前だな」

「今ではそう思うっぺ」

そんな場所だったりします。何処が緑なのでしょうか。

第千四百五十一話　　完

２０１０・６・８

第千四百五十二話　緑と氷

第千四百五十二話　緑と氷

グリーンランドにあるのは雪と氷だけです。アイスランドにあるのも同じでやっぱり雪と氷だけしかありません。木が殆どないのです。

「慣れてるから」

アイスランドはぽつりと言います。

「燻製だって作れるし」

「そか。それでも生きていけるだな」

「うん、何とか」

こうお兄さんであるノルウェーに対しても答えます。

「兄さん達のお家は木が一杯あるよね」

「木には全く困らないだ。あと水にも」

寒いですがそうしたものには困っていません。

「海があるから漁もできるだ」

「僕も海には困ってないから」

それでよくタラを獲って食べています。

「別に」

「そか」

「うん、アイスランドの名前は伊達じゃないし」

雪と氷に覆われているからこの名前になったと言われています。

とにかく寒いです。

「だから慣れてる。羊の燻製食べる？」

「食べる」

ノルウェーはぽつりと答えます。

そうして今は兄弟でその羊の燻製を食べるのでした。それは木を使ってはいませんがそれでも美味しいものです。アイスランド名物です。

第千四百五十二話　完

2010・6・8

第千四百五十三話　アイス大好き北欧

第千四百五十三話　アイス大好き北欧

デンマークはアイスランドから帰るとです。まずアイスクリームを食べました。勿論その隣にいるのはノルウェーです。何だかんだで彼はデンマークの横にいつもいます。

彼もアイスを食べながら。そのうえでデンマークに尋ねます。

「御前これ好きだな」

「ああ、アイス大好きだっぺよ」

実際に彼も好きだったりします。とても美味しそうに食べています。

「毎日これを食べないと駄目っぺ」

「そだな。僕も好きだ」

ノルウェーもかなり食べていたりします。

「このアイスは」

「美味いっぺよ。まずはこれがないと駄目っぺ」

デンマークはとても美味しそうに話します。

「さて、それならっぺ」

「それなら？」

「後は歯を磨いて寝るっぺ」

もう夜です。そうするというのです。

「それでいいっぺな」

「いいと思うだ。アイスランドも喜んでただ」

「あいつあれで喜んでたっぺ？」

「うん、喜んでただ」

ノルウェーだからこそわかることです。

「だから安心するだ」

こう話をしてから寝るのでした。それが終わりでした。

第千四百五十三話　完

2010・6・9

第千四百五十四話　この二人もアイスは

第千四百五十四話　この二人もアイスは

「美味しいね」
「ああ、めちゃ美味いな」
カナダとキューバが一緒にいます。そのうえでにこにことしています。
見れば二人共アイスをバケツの様に大きなケースから食べています。二人共アイスはそうしていつもかなりの量を食べているのです。
その時です。キューバがカナダに尋ねます。
「寒い国でもアイスって人気やねんな」
「そうだよ。暖かい部屋の中で食べるんだよ」
それがカナダのアイスの食べ方です。
「それもいいものだよ」
「成程な。うちじゃ暑い中で食べるんやけれどな」
「それもいいね」
カナダはその主張も認めます。
「寒い部屋で食べるものじゃないからね」
「そうやな。寒い中では絶対に無理やな」
それはキューバも言います。
「とても食べられへんな」
「その通りだよね。暑い中でこそだよね」
「食べるものや。しかしあれやな」
キューバはここで自分が食べているアイスを見てです。そのうえでまたカナダに言います。
「これは癖になるな」
「確かにね。毎日食べるようになるね」
そんな恐ろしい魅力を持っているのがアイスクリームです。まるで絶世の美女の様な魅力を持っているのです。

第千四百五十四話　完

2010・6・9

第千四百五十五話　アイス色々

第千四百五十五話　アイス色々

アイスは誰でも好きですがこれが日本になるとです。凄いアイスを作ったりします。

「へえ、赤いアイスなんだ」

「緑のアイスあるな」

「はい、薩摩芋と抹茶のアイスです」

それぞれアメリカと中国に話します。日本はアイスにそうしたものを使ってみせているのです。

「如何でしょうか」

「いや、かなり美味いぞ」

「そうあるな。最初はびっくりしたあるが」

二人もその味には太鼓判を押します。

「その他にも色々なアイスがあるんだな」

「日本はこうしたアレンジが凄いあるな」

「ここに至るまで色々なアイスができまして」

日本はこうも話します。

「中には物凄いものもあります」

「うん、あれだな」

「あまり食べたくないあるな」

何かアイスではなく奇食みたいなのも一杯ありました。本来アイスに入れるものじゃないだろう、というようなものがこれでもかとあります。

「あれも食べられるんだな」

「味はどうあるか？」

「あまりお勧めしません」

日本はあまり明るくない顔で二人にこう話します。その味についてはお世辞にも、というわけでした。もう見ればそれだけでわかる

ことですが。

第千四百五十五話　完

2010・6・10

第千四百五十六話　ラーメンはない

第千四百五十六話　　ラーメンはない

「こんなのイギリスでも作らないんだぜ！」
「おう、いきなり言ってくれるな」
イギリスはむっとした顔で生徒会室でアイスを食べる韓国に対して言います。
「やっと俺の名前を覚えたと思ったらその言い草かよ、手前はよ」
「日本のこの味噌ラーメンアイス、食えたものじゃないんだぜ」
「味噌ラーメンとアイス？何だそりゃ」
「他には海胆や馬刺しのアイスなんかもあるんだぜ」
「それがアイスか？」
ここまで聞いてです。イギリスも首を傾げさせました。
「別の食べ物じゃないのか、そりゃ」
「他にはキムチもあるんだぜ」
「絶対合わないだろ、そりゃ」
流石のイギリスもこう思わざるを得ませんでした。食べていなくてもです。
「っていうか日本はそんなものを作ってるのかよ」
「とりあえずキムチは許すんだぜ」
この辺りは流石韓国でした。まずはキムチです。
「しかしその他は許せないものが多いんだぜ」
「そんなの食えるのか？」
「だからまずくて食えたものじゃないんだぜ。御前の料理以下なんだぜ」
「基準は俺かよ」
相変わらず無礼千万な韓国です。イギリスもいい加減頭にきています。しかし実際にそのアイスを食べてみるとです。イギリスも納得しました。

「ひでえなんてものじゃねえな」
イギリスですらうんざりするものがありました。あわびのアイスは流石にありません。

第千四百五十六話　完

２０１０・６・１０

第千四百五十七話　仕事は当然しない

第千四百五十七話　仕事は当然しない

見れば日本のアイスを次から次に食べている韓国。その彼にイギリスはふと気付いて尋ねました。

「御前仕事は？」

「ちゃんとしてるんだぜ」

即答でした。しかし食べているだけです。

「どうやって俺の格好よさを学校の皆に宣伝するか考えているところだぜ」

「それでその後はどうするんだ？」

「俺のいけてる写真集を配布するんだぜ。それで写真も考えているんだぜ」

「そこに生徒会の仕事はあるのか？」

「それが生徒会の仕事なんだぜ」

見事なまでに言い切りました。最早そこには一点の曇りもありません。

「そういうことなんだぜ」

「手前次の生徒会長選挙には絶対に出るな」

イギリスは殆ど殺人未遂犯の顔になって言います。

「こんな会長見たことねえぞ」

「そうなんだぜ？俺みたいなイケメンの会長は今までいなかったんだぜ？」

「誰もそんなこと言ってねえ」

韓国の耳は凄いです。都合の悪いことは全部シャットアウトできるのです。そして自分の都合のいいように聞こえてしまうという構造なのです。

「どう聞いたらそうなるんだ」

「それで御前も手伝うんだぜ。役員だから当然なんだぜ」

「何処をどうやったらその理屈になるんだ」
　こうして何故か韓国の宣伝の雑用をやらされるイギリスでした。
彼にしては全く腑に落ちません。しかし韓国はそんなことは全然気にしません。

第千四百五十七話　　完

２０１０・６・１１

第千四百五十八話　この人まで巻き添えに

第千四百五十八話　この人まで巻き添えに

「なあ、生徒会長は本気で真剣に選ばないと駄目だな」

「ああ、そのことについては同意するぜ」

フランスはうんざりした顔で仕事をしています。そうしながらイギリスの言葉に頷いています。

「次はまともな奴をだな」

「選ばないとな」

「あいつあれで女の子に結構人気あるらしいしな」

フランスはその生徒会長の話をします。

「顔があれだろ？それで背が高くて足も長いしな」

「外見だけかよ」

「ああ、ないのは頭だけだ」

「一番必要なのが決定的に欠けてるんだな」

「そういうことだ」

こううんざりとした顔で話すのでした。

「それでどうするんだ？この仕事」

「何で生徒会の仕事とは別にあいつの写真集の発行までしないといけないんだ？」

二人はこのことがどうしてもわかりません。何故か今の会長の仕事が自分達に回って来るのです。そしてそうした時には他の三人は何故かいつもいなくなります。

「太平洋の連中はあんなのを野放しにしてるのか？」

「確かついこの前まで日本のところに厄介になっていたな」

「甘やかされまくってたんだな」

そのものずばりです。

「同じ日本のところにいても台湾とは全然違うな」

「ああ、本当にな」

これは個性の問題でした。とにかくまたしても何故か韓国の仕事をする羽目なっている二人でした。

第千四百五十八話　　完

２０１０・６・１１

第千四百五十九話　中国とローマ

第千四百五十九話

中国とローマ

中国は四千歳と言われています。ローマ帝国のことも知っていたりします。

「あれは上司が劉氏だった頃あるな」

「ああ、その頃か」

「その時代でしたか」

アメリカと日本は中国のその話を聞いて言います。

「君にしてみたら記憶にある頃なんだな」

「それもはっきりと」

「よく聞いていたあるぞ。ローマ帝国のことは」

実際にそうだったのです。中国にとってはその頃のこともよく覚えていることなのです。

「カルタゴとかと喧嘩していたことは知らなかったあるが」

「その頃のローマは知らなかったのか」

「確か大秦王でしたね」

「そうある、そうした風に呼んでいたある」

中国は当時ローマ帝国の上司をこう呼んでいました。

「やたらと強くて大きな奴がいるとは聞いていたある」

「直接会ったことはないんだな」

「ローマ帝国さん御自身とは」

「ないある」

実際にそうだったのです。

「縁がなかったある。人の交流はあったあるが」

「そうかあ。直接はないのか」

「しかしかなり昔のお話ですね」

二人もそのことはよくわかりました。中国はこの頃のこともよく

覚えているのです。

第千四百五十九話　完

2010・6・12

第千四百六十話　ベトナムの年齢

第千四百六十話　ベトナムの年齢

中国は仙人とさえ言われています。そしてその南にいて奇麗で頭もいいうえに恐ろしく強い才色兼備のベトナムもです。実はその年齢は。

「聞けないあるな」

「レディーにそういうことを聞くのは失礼だぞ」

中国とアメリカは何故か彼女を避けます。どうも前に戦争をして負けてしまったことが二人にとってはあまりいい思い出ではないようです。尚フランスもそうですが彼はあまりにも負けた数が多いのでそんなことをいちいち気にしてはいられないのです。そこはある意味凄いです。

しかしその年齢はです。実際に気になります。

それでセーシェルがです。こっそりと聞きます。

「日本さん御存知でした？」

「名前は小さい頃から」

知っていたといいます。

「私が小さい頃はまだ日本さんも小さかったわね」

「そうですか」

「日本さんと直接会ったのは中国が唐っていう名前の頃に長安でね」

会っていたというのです。

「その頃からね」

「そしてそれ以前にも御存知なんですね」

「そうよ。何か私達って妙な縁があるのよね」

日本のことをにこりと笑って話します。

「同じ頃に生まれたみたいだし」

「同じ頃だったんですか」

少なくともかなりの高齢です。日本もそうですがベトナムも本当

のところ幾つなのでしょうか。

第千四百六十話　　完

2010・6・12

第千四百六十一話　最初の上司は

第千四百六十一話　最初の上司は

「思えばね。中国ところから独立した時だけれど」

「確か微姉妹って人ですよね」

「そうよ、あの時私はまだ小さかったけれどね」

ベトナムが自我を持ったのは丁度この頃だったのです。やっぱりかなり昔のことのようです。

「もう中国は二千歳位だったわね」

「つまりそれだけ昔なのですね」

セーシェルはベトナムの年齢をおおよそ知りました。やっぱりかなりのお歳です。

「そうだったのですか」

「あの時中国のところから軍隊が来て反乱として抑えられたけれど」

「それでもその時からですね」

「その時の微姉妹が私の最初の上司なの」

実際にそうだったというのです。

「まだ若い人達だったけれど立派だったわ」

「一体お幾つ位の人達だったんですか？」

「十四歳と十三歳だったかしら」

何とその位だったというのです。

「それで象に乗ってね。格好よかったわよ」

「十四歳と十三歳で上司だったんですか」

「そう、私もその時小さかったけれどそれでも中国と戦ったのよ」

ベトナムはにこりと笑ってこうセーシェルに話します。

「物凄く懐かしい思い出よ」

「はあ、そんな昔のですか」

まだ若いセーシェルにとっては驚くべきことでした。何とベトナムは下手をしたらローマ帝国並の御歳の様です。意外なことにです。

第千四百六十一話　完

2010・6・13

第千四百六十二話　日本にしても

第千四百六十二話　日本にしても

ベトナムと同じ位かそれ以上にお爺さんと言われている日本でありますが昔零式艦上戦闘機という名機を造ったことがあります。何故零式だったかというとです。

「皇紀二六〇〇年でしたので、できたのが」

「ええと、皇紀二千六百年っていいますと」

台湾がそれを聞いてふと頭の中で考えます。

「確か。西暦で一九四〇年ですよね」

「はい、そうです」

「紀元前にはじまるんですね」

「一応その頃に我が国の最初の上司の上司の方が出られたとされています。私はその時のことはあまり覚えてはいないのですが」

日本はその人から十代程の上司の上司の方については記憶があやふやになっています。殆ど覚えていないといっても過言ではありません。

「どうも」

「というと日本さんは」

しかしここでわかりました。その歳が。

「そうだったんですか」

「よくお爺さんと言われますが」

お爺さんどころではありません。スウジク戦隊の中ではダントツの高齢です。というよりかそこまでいきますとローマ帝国よりも高齢です。

「ローマ帝国さんのことは知りませんでした」

「私も知らないですけれど日本さんってそんな昔からおられたんですか」

台湾は日本の歳をおおよそですが知ってしまいました。日本もま

た仙人かそれに近いまでに高齢なのでした。確かにお爺さんであります。

第千四百六十二話　　完

２０１０・６・１３

第千四百六十三話　ライバルとは

第千四百六十三話　　ライバルとは

誰も何も言いませんがタイとベトナムはライバル関係にあります。二人もお互い何も言いませんが何気にあまり仲がよくなかったりします。

そのタイがです。こんなことを言います。

「僕が気付いた時にはもうベトナムさんはおられましたし」

「そういえばタイさんは」

「はい、結構若いつもりですよ」

こう日本に答えます。

「欧州の人達と同じ位ですかね」

「ポーランドさんやハンガリーさんとですね」

「はい、大体そんな感じだったと思います」

何気に若いことをアピールしています。

「僕が気付いた時には本当にですよ」

「ベトナムさんはおられましたか」

「あの人の方がお姉さんになりますね」

「そうですね。では私は」

「はい、お兄さんです」

日本はそうだというのです。

「日本さんはお兄さんですね」

「成程、年齢も面白いですね」

「ええ、確かに」

タイはいつもの癒しの微笑みです。

「僕が若いということもわかりましたし」

意識してかどうかはわかりませんがベトナムへの牽制にも聞こえます。そんな言葉でした。

第千四百六十三話　完

2010・6・14

第千四百六十四話　間にいる国は

第千四百六十四話　間にいる国は

あまり仲がよくないタイとベトナム。周りもお互いも何も言いませんがどう見ても仲がよくありません。しかし両方共これといってことを荒立てたりはしません。

それが何故かというとです。台湾が日本に対して言います。

「やっぱり間に国があるのはいいことですね」

「そうですね、確かに」

日本も台湾の言葉に納得した顔で頷きます。

「カンボジアさんとラオスさんですね」

「はい、あの人達がいてくれていますから」

「ですから御二人は衝突しませんね」

「いいことですね」

台湾はこのことを素直に喜びます。

「喧嘩にならないことは」

「ただ」

しかしここで日本は言いました。

「カンボジアさん達は大変ですね」

「大変ですか」

「御二人共頭がいいですし」

タイもベトナムも外交はかなり上手いです。タイプこそ違いますがベトナムは頭の回転が速くタイは頭がいいです。そこが厄介でもあります。

「しかもラオスさん達に比べてかなり強いですし」

「人口が違いますからね」

「そんな御二人に囲まれてというのは大変ですね」

彼等のことを気にかける日本でした。喧嘩にならないけれどその

代償か困っている国もあるようです。

第千四百六十四話　　完

2010・6・14

第千四百六十五話　お米が好き

第千四百六十五話　お米が好き

ベトナムの得意料理はまずは生春巻きですがその他にビーフンも得意です。これはお米から作る麺類です。

日本もよくこのビーフンを食べます。今日はそのベトナムのお家で彼女が作ったそのビーフンを食べています。その時に日本は言いました。

「そういえばですね」

「はい、何でしょうか」

「ベトナムさんは本当にお米を使うのが上手ですね」

「お米は年三回採れますし」

ベトナムはにこりと笑って答えました。

「ですからもうあるだけ使いますよ」

「年三回ですか」

「それだけ採れればもう食べ物には困りませんから」

「そうですね。それは確かに」

日本もこのことはしっかりと答えます。

「それを考えたらお米がこれだけ使われるのも当然ですね」

「そうですよ。それで味はどうですか？」

ベトナムは今度はビーフンの味を日本に尋ねました。

「このビーフンは」

「はい、見事です」

日本はそのビーフンを食べながら答えました。

「とてもいいものです」

「それは何よりです」

その言葉を聞いてにこりと笑うベトナムでした。ベトナムはとにかくお米を使った料理が得意です。その中にはこうしたものもあります。

第千四百六十五話　完

2010・6・15

第千四百六十六話　米櫃

ベトナムもお米が好きですがやっぱり東南アジアでお米といいますとタイです。とにかくそのお米の量が半端なものではありません。

「はい、炒飯です」

「どうも」

日本は今日はタイのお家で御馳走になっています。まずは上に目玉焼きが置かれたとても美味しそうなタイ風炒飯を御馳走になります。

そしてそれで終わりではなく、です。次に出て来たのは。

カレーでした。緑色のタイ風カレーです。

「これもどうぞ」

「鶏肉を使ったカレーですか」

「どうですか？これも」

「いただきます。しかしタイさんのお家は何時来ても」

「何時来ても？」

「美味しいお米の料理が多いですね」

このことではベトナムと同じです。

「本当に」

「お米が沢山採れますからね」

タイはにこりと微笑んで答えました。

「だからです」

「そうですね。年三回採れますね」

「はい、だからですよ。さあ、どんどん食べて下さいね」

お米が多く採れる理由はベトナムと同じでした。お米の料理が多いのには理由がある、タイもベトナムもその辺りの理由は同じでした。

第千四百六十六話　完

2010・6・15

第千四百六十七話　黒い稲妻

第千四百六十七話　黒い稲妻

眼鏡をかけた黒い肌の青年カメルーン。その得意スポーツはサッカーです。

「相変わらずお見事ですね」

「サッカーはドイツから教えてもらったものだがな」

こう日本に対して言います。

「それでも今ではこんなものだ」

言いながら足でボールを自由自在に操ってみせます。本当に見事です。

「どうだ？」

「私も練習はしているのですが」

「日本さんはどっちかっていうと野球の方が得意だよな」

「はい、どちらかといえば」

「野球もよさそうだけれどな」

何気にそちらにも関心を見せています。

「それでも俺はメインはやっぱりこれだな」

「サッカーですね」

「ああ。今度の試合は頑張ろうな」

「はい、こちらこそ」

日本もこう返しはします。しかしその内心はといいますと。

「果たして勝てるかどうか」

このことを心から心配しています。

「カメルーンさんだけではありませんから」

「スポーツは互いに正面から全力でぶつかり合うものだからな。気持ちよくやろうな」

「え、ええ」

カメルーンの言葉に応えはします。しかし内心はかなり不安だっ

たりする日本です。

第千四百六十七話　　完

2010・6・16

第千四百六十八話　恐怖の街で

第千四百六十八話　恐怖の街で

そのまま地震が起こった後の関東か魔界都市か核戦争後の世界の街において日本とカメルーンは対戦することになっています。しかしです。

「勝てる気がしませんね」

「残念ですけれどね」

「本当に」

日本に対してお家のサポーターの人達も言います。皆かなりしょげています。まだ試合は一試合もはじまってはいないというのにです。今からそうなっています。

「何か物凄いカードですからね」

「カメルーンさんだけでも怖いのに」

「デンマークさん」

「しかもオランダさん」

野球の時の韓国との五回の試合に匹敵する凶悪な展開です。

「最近スポーツくじ運悪過ぎないですか？」

「上田利治さんがくじ引いてるんですか？」

「有り得ますよね」

「上田さんはそれでも育成と采配と人間性がよかったですが」

日本はかつて阪急ブレーブスを率いた名将のこともよく覚えています。

「しかし今回は采配や人間性はともかく」

「ぶっつけ本番ですからね」

「育成は」

「このまま戦うしかありませんから」

それで今からしょげてしまっているのです。とにかく一勝でもしたいのですが一勝することすら想像できない、そんな状況の日本な

のでした。

第千四百六十八話　完

2010・6・16

第千四百六十九話　オウンゴールキング

「これは・・・・・」
「おい、何だよ今の」
イギリスと対戦の時のことです。イギリスも呆れています。日本自身も困惑するしかありません。
「俺一点も入れてねえのに勝ったぞ」
「はい、確かに」
「幾ら何でもあれはないだろ」
イギリスは勝ったというのに全然楽しくなさそうです。
「何だよ、オウンゴール二点ってのは」
「私の方は三点入れたことになりますが」
「けれど負けたよな」
「はい、確かに負けました」
日本は呆然としながら認めました。
「私が」
「御前のところの選手大丈夫か？」
「かなり不安です」
「俺のところも今回は大丈夫かって思うけれどな」
日本のそれはイギリスのそれを遥かに凌駕するものだったのです。最早弱いとかそういう問題ではなかったのです。
「冗談抜きで健闘を祈るぜ」
「はい、何とか」
「相手は強豪ばかりだけれどな」
「恥ずかしくないプレイをします」
その恥ずかしいプレイをしてしまった自分のチームを見てしまってからの言葉ですから笑えません。日本の不安材料がまた出てきました。

第千四百六十九話　完

2010・6・17

第千四百七十話　韓国対ギリシア

第千四百七十話　韓国対ギリシア

最近身体の調子が冗談抜きで危ないギリシアは韓国との試合でした。しかし韓国はサッカーについてあまり評判がいいとは言えません。

「今度もやるんじゃないかなあ」

「そやな」

イタリアとスペインが韓国を見ながら話しています。

「俺あの時の大会についてはいい思い出ないし」

「俺もや。あれはないで」

日本との共催の時です。その時のことは二人はあまり話したがりません。今も二人共あまり面白くなさそうな顔でお話をしています。

「日本は野球で五回も戦ったけれどね」

「うわ、めっちゃきついなそれは」

スペインをしてこう言わしめるものでした。

「それ罰ゲームちゃうんか」

「しかも決勝もだったし」

「日本に対する嫌がらせそのものやな」

「九回の試合のうち五回が韓国相手だったしね」

「嫌がらせにしか思えへんな」

スペインの言葉は多くの人が思うことでした。

「まあ今回は主催国があいつやないし流石にあんなことにはならへんと思うけどな」

「そうだね。けれどギリシアどうなのかな」

「俺達もやばいけどあいつはほんま大丈夫かいな」

二人の目の前にいるギリシアは今にも倒れそうな顔になりながら試合に向かっています。それに対して韓国は比較的顔色がいい状況です。

第千四百七十話　完

2010・6・17

第千四百七十一話　勝ちました

第千四百七十一話　勝ちました

「よし、やったんだぜ！」
見事ギリシアに勝った韓国大喜びです。
「このまま決勝リーグなんだぜ？」
「どうしたらその発想に辿り着ける？」
ドイツはそんな有頂天の彼に対して突っ込みを入れました。
「御前の対戦相手にはあのアルゼンチンがいるんだぞ」
言わずと知れた最強国家の一つです。サッカーの天才児と謳われたあの英雄が今では監督をしています。そのアルゼンチンもまた韓国の相手なのです。
「俺でも危険な相手だ。何故それで決勝と言える」
「んっ？俺に勝てない奴はいないんだぜ」
しかし韓国は平気な顔で答えます。
「今の俺は絶好調なんだぜ。誰であっても絶対に勝てるんだぜ」
「そう思っているのならいいがな」
ドイツは今はこう言うに留めています。
「しかし。何があっても後悔するな」
「後悔？何なんだぜそれは」
完国はドイツのその言葉に対して突っ込み返します。
「知らない言葉なんだぜ。日本の言葉なら知らないんだぜ」
「いや、そもそも御前は三十六年程日本だった筈だが」
ドイツの言葉も韓国には通用しません。
「とにかくだ。何があっても騒ぐなよ」
「俺は騒がないんだぜ、何があっても」
自覚することは決してありません。かくしてアルゼンチンに負けてしまった韓国でした。

第千四百七十一話　完

2010・6・18

第千四百七十二話　負けてやっぱり

第千四百七十二話　負けてやっぱり

「アイゴアアアアアアアアアアッ！！」
「いやあ、予想通りだな」
「相変わらずうざいある」
アメリカと中国は泣き叫んでそこらへんを転がり回る韓国を見ています。
「アルゼンチンに負けたことも叫ぶことも」
「わかっていたあるが本当に五月蝿いあるな」
「アルゼンチン、アルゼンチン強過ぎるんだぜ！！」
やっぱり負けたことがかなり悔しいみたいです。
「一点入れたのがやっとだったんだぜ！」
「一点入れただけでもよかったんじゃないのかい？」
「それだけでも凄いあるぞ」
「四点入れられたんだぜ。こんな屈辱は野球で日本に負けた時以来なんだぜ！」
つまりつい最近のことです。
「キムヨナしかいないんだぜ、今の俺には！」
「ああ、スケートはロシアがいるからなあ」
「何時ひっくり返されても不思議ではないあるな」
「アイゴオオオオオオオアアアアアアアアアッ！！！」
韓国はさらに嘆き悲しみます。あちこちを激しく転がり回りながら。
「ギリシアに勝ったのが今では夢なんだぜ！」
「夢、そう夢」
そのギリシアが出て来て呟きます。
「今の俺の状況は夢じゃない」
本当に今にも死にそうです。果たしてギリシアは大丈夫なのでし

ょうか。韓国はとりあえず置いておいて。

第千四百七十二話　　完

２０１０・６・１８

第千四百七十三話　カメルーンに勝ちました

第千四百七十三話　カメルーンに勝ちました

「まさかとは思いましたが」
「ああ、俺も驚いたで」
オランダがいつもの無表情を少しだけ崩してそのうえで日本に対して言っています。何と日本はカメルーンに対して勝ってしまったのです。
「まさか勝つなんてな」
「はい、私も驚いています」
「カメルーンは呆然となってるけれどな」
見ればその通りでした。カメルーンは唖然とした顔で立ったままになっています。その表情を見ればそれだけで一目瞭然です。
「まあとにかくよかったな」
「有り難うございます」
「さて、次は俺やがな」
オランダは自分の名前を出してきました。
「ええな、正面からぶつかるで」
「はい、御願いします」
「オレンジ軍団の力見せたるわ」
彼は言いました。
「ほんまのサッカーや。楽しみにしておくんやな」
「本物のサッカーですか」
「このワールドカップ、優勝するのは俺や」
いつもの顔に戻っています。
「その力見せたるわ」
オランダが燃えています。日本との勝負は物凄いものになりそうです。

第千四百七十三話　完

2010・6・19

第千四百七十四話　まさかのイエローカード

第千四百七十四話　まさかのイエローカード

「終わってしまったことを言っても仕方ないが」
「おい相棒、何だありゃ」
ドイツは憮然となっていてプロイセンは激怒しています。
「何であんなにイエローカードが出るんだよ」
「その結果負けてしまったが」
「審判おかしいんじゃねえのか！？」
プロイセンは本気で疑っています。
「そうじゃないとあれだけイエローカードでないだろ」
「九枚だったな」
「そんな試合韓国での試合だけだぜ、おい」
日韓共催のワールドカップはそれこそ恐ろしいものだったのです。
通称モレノの笛と呼ばれるまともなスポーツファンなら唖然となる判定があったりしました。
そして今回もです。ドイツに九回もイエローカードが出たのです。
これは。
「日本のマスコミ以上におかしいな」
「まあ日本のマスコミは共産主義か社会主義の連中ばかりだからな」
これは日本だけだったりします。
「しかし。それにしてもだ」
「ああ、一敗かよ」
「辛いことになったな」
ドイツは腕を組んで難しい顔になっています。
「このままでは下手をするとな」
「ああ、有り得るな」
予選落ちを心配する二人でした。まさかの一敗が二人の心に重く

のしかかります。

第千四百七十四話　完

2010・6・19

第千四百七十五話　負けて当然

「よし、このまま決勝に行くで」
「選手の方々は頑張ってくれたのですが」
オランダと日本はそれぞれ言っています。
「ドイツでもブラジルでもぶっつぶして俺が優勝や」
「やはり決勝進出は難しいですか」
本当にそれぞれの表情を見せています。
「オレンジ軍団ええな。何時でも相手を潰せるようスタンバっとけや」
「しかしまだ戦います。諦めませんよ」
「そうや、お兄ちゃん頑張ってや」
「日本さん、デンマークさんに何があっても勝って下さいね」
ベルギーと台湾がそれぞれ二人に対して言います。
「うち応援してるさかいな」
「そして頑張って決勝リーグに」
「ああ、わかっとる」
「有り難うございます」
二人もベルギーと台湾に対して言葉を返します。とりわけ台湾の顔は必死なものになっています。まるで自分のことであるようにです。
そして日本に対してさらに言います。
「頼みましたからね」
「決勝、何があっても行かせてもらいます」
「はい、応援していますから」
そっとタオルにスポーツドリンクを日本に手渡します。見ればレモンの蜂蜜漬けまでも。オランダはそれを見てふと思うことがありました。

第千四百七十五話　完

2010・6・20

第千四百七十六話　日本はもて過ぎ

第千四百七十六話　日本はもて過ぎ

オランダは台湾にタオルやスポーツドリンクやレモンを差し入れしてもらっている日本を見てです。ベルギーに対して言いました。

「日本の彼女なんか？あの娘は」

「ちゃうで日本さんは彼女も奥さんもおらへんで」

「けれどあれは」

「日本さんはもてるさかい」

だからだというのです。

「それであああなんや」

「そうか。それでか」

「日本さんみたいにもてたいん？」

ベルギーはこうオランダに尋ねます。

「お兄ちゃんもやっぱり」

「いや、そうやないがな」

日本を見たまま妹に対して言葉を返します。

「けれどあれやな。日本はいつも周りに誰かがおるんやな」

「もてもての人やな」

「ああ」

妹のその言葉に頷きます。

「ほんまやな。欧州であそこまでもてるのはおらんで」

「オーストリアさんはいつもハンガリーさんが傍にいてくれてるけれどな」

「それでも日本程やない。あの娘だけちゃうしな」

何だかんだで韓国までやって来ています。この二人は常ですし何かというと誰かが傍に来ています。日本は本当にもてています。

第千四百七十六話　完

2010・6・20

第千四百七十七話　この人まで負けました

第千四百七十七話　この人まで負けました

「何でや・・・・・・」

「ドイツだけでなく兄ちゃんまでって」

「今回どうなってるんだ！？」

イタリア兄弟が負けて呆然となっているスペインを見てびっくりしています。二人にしてもこのことはまさに予想外のことでした。

「俺達もうかうかしていたら危ないけれど」

「それでも今回は波乱しまくりだろ」

こう言って驚きを隠せないのでした。

「下手したら予選落ちも」

「ああ、あるな」

それも言うのでした。

「今回まさかの事態が起こりまくってるけれど」

「韓国でやった時みたいだな」

しかしこれはです。二人にとってもスペインにとってもブロックワードでした。それで二人とも暗い顔になってしまってそのうえで言いました。

「ま、まああの時のことはさ」

「忘れるか」

「そうだね、やっぱりね」

「その方がいいな」

「これから気を引き締めていかへんとな」

スペインは落ち込みながらもこう言いました。

「予選落ちなんてしていられへんで」

このことは彼にとっては絶対でした。とにかくこの大会は波乱続きでした。

第千四百七十七話　完

2010・6・21

第千四百七十八話　デンマークの自信

「さあ、やるだっぺよ！」
デンマークは力瘤を作って拳で言っています。
「決勝進出だっぺ！」
「それ目指してるだか」
「当たり前っぺ。日本を破って決勝進出だっぺよ」
こう親友と思っているノルウェーに対しても言います。
「そして目指すは優勝だっぺ」
「まあ頑張るだ」
ノルウェーは何か無表情に彼に告げます。
「是非」
「ああ、そうするっぺよ」
「優勝するならするといいだ」
本当に何か表情がありません
「応援はするだ」
「有り難うっぺ。親友」
「その前にヨハネスブルグの街には気をつけるだ」
このことを言うのは忘れないのでした。
「あそこはかなり危ないだ」
「そうっぺよ。本当に銃弾が飛び交っていて恐ろしいっぺ」
「日本よりもその方が怖い気がするだ」
「というか何であの街でやることに決まったっぺ？」
「それはおらも知らね。何でだ」
何はともあれデンマークも戦う気満々です。日本対デンマークのカード、戦う前からもう一触即発といった状況にありました。さて、どうなるでしょうか。

第千四百七十八話　完

2010・6・21

第千四百七十九話　圧倒的

第千四百七十九話　圧倒的

「同胞も負けたんだぜ」
「物凄かったわね、あれは」
いつもはあれこれといがみ合っている韓国と台湾ですが台湾も今日ばかりはその相手に対していささか同情的なようです。それがどうしてかといいますと。
「七点だからね」
「野球でも惨敗なんだぜ」
「サッカーだと余計にね」
「俺もアルゼンチンに大敗したんだぜ」
韓国は今もこのことを引き摺っています。
「それで同胞も負けたんだぜ」
「七点。大きいわね」
「俺は今回何なんだぜ!?」
大泣きしています。既にです。
「何かボロ負けする為に来てるんだぜ。また決勝リーグに出たいんだぜ」
「えっ、けれど決勝に出たら」
ここで台湾は少し引きながら韓国に対して言いました。
「いるわよ、スペインさんやイタリアさんが」
「あの連中がどうかしたんだぜ?」
「あんた、只じゃ済まないわよ」
韓国でのワールドカップの時のことです。
「それでもいいの?」
「ううん、何かサッカーやるのが嫌になってきたんだぜ」
自業自得な部分もありますがこんな気持ちになってきた韓国でした。何かと大変です。

第千四百七十九話　完

2010・6・22

第千四百八十話　選手までボイコット

第千四百八十話　選手までボイコット

「いやあ、参ったねえ本当に」
「もう参ったとかいうレベルじゃねえよな」
「全くだよ。お兄さんもうお手上げだよ」
フランスは肩をすくめさせてやれやれといった顔をしています。
その顔でイギリスに対して言っています。
「まさか選手がボイコットするなんてな」
「試合大丈夫か？」
「さあな。どうしようもねえんじゃねえかな」
最早この域まで達すると怒るとかそういうレベルを超えています。
それでフランスも今はこんな風に実にさばさばとしているのです。
したくてなっているのではないのですが。
「ここまで来たらな」
「選手が練習しないなんてな」
「監督と大喧嘩したからな」
チームがバラバラという訳です。
「ちょっとなあ。まずいよな」
「だから試合どころじゃねえんだろ」
「そうなんだよ。何かもうあの馬鹿が生徒会長になった時とかポーランドの奴に言って聞かせた時と同じだな」
「絶望か」
「絶望も派手になるともう笑うしかねえよな」
フランスはこんなことも言いました。
「本当にな」
「大変だな、御前も」
「同情はいらないさ、飲もうぜ」
さりげなく自棄酒に入ります。この人はどうなってしまうのでし

ょうか。

第千四百八十話　完

2010・6・22

第千四百八十一話　サッカーを抜きにして

第千四百八十一話　サッカーを抜きにして

試合が決まっている日本とデンマーク、しかし今は試合のことを忘れて二人で仲良く飲んでいます。デンマークが自分のお家に日本を誘っています。

デンマークが出してくるのは豚肉料理です。それを次から次にこれでもかこれでもかと出してきます。

日本もこれには驚きです。それでこんなことを言います。

「デンマークさんは豚がお好きなんですか」

「ああ、大好きだっぺよ」

その通りだとにこりと笑って答えるのでした。

「うちの家は一番豚食べるっぺよ」

「そうだったんですか」

「中国よりも多いっぺな」

中国では豚がそのままお肉となっています。その中国以上だというのです。

「もう肉っていったらこれっぺ」

「成程、それでなのですか」

「ほら、酒も飲むっぺ」

言いながらビールを出してきました。

「豚にはビールだっぺよ」

「そうですね。合いますね」

「そうだっぺ。だから飲むっぺ」

陽気に笑って日本に対して言います。

「遠慮はいらないっぺよ」

「はい、それでは」

今日は二人仲良く豚とビールを楽しむ二人でした。今は試合を忘れています。爽やかなスポーツマンらしさに包まれたいい雰囲気で

す。

第千四百八十一話　完

2010・6・23

第千四百八十二話　北欧は兄弟

第千四百八十二話　北欧は兄弟

デンマークは言わずと知れた北欧の一国です。そして北欧諸国は何かというと五人一緒にいます。そんな五人なのです。

「やっぱり皆で集まるのがいいですよね」

「んだ」

スウェーデンがフィンランドの言葉に対して頷きます。

「一人だと寂しいだ」

「はい、僕もそう思います」

スウェーデンだけでなく最近ではエストニアとも仲のいいフィンランドらしい言葉です。

「こうして五人一緒だと一番いいですよね」

「僕もいつも一緒」

「当たり前だっぺよ」

デンマークがアイスランドに対して言います。

「御前はノルウェーの弟っぺよ。だったら当然だっぺ」

「僕の兄さん」

その言葉を受けてノルウェーを見ます。

「これが」

「文句あるだか？」

「ない」

お兄さんにはこう返します。顔はそっくりです。

「ないけれど。ただ」

「ただ？」

「元々五人が兄弟の様な気がする」

こう言うのでした。言われてみれば確かにその通りです。本当にいつも一緒なので段々似てきたところもあるような五人であります。

第千四百八十二話　完

2010・6・23

第千四百八十三話　最下位

「ふう、終わったな」
「ああ、終わったな」
「もう終わるなんて思っていなかったぜ」
フランスはとても清々しい顔でイギリスに対して言っています。
何もかもが終わってしまった、そんな清々しい顔で言っているのです。
「こんなこともあるんだな」
「今の気持ちはどうなんだ？」
「何とも言えないぜ」
爽やかな顔での言葉です。
「本当にな」
「そうか。何ともか」
「ああ、不思議だよな」
フランスは何か出家するみたいに言葉を続けていきます。
「もう全てがどうでもよくなった感じだぜ」
「そこまでか」
「俺は優勝を目指してたんだよ。それがな」
「最下位か」
「チームも監督も何もかもが駄目だったからな」
そのせいで負けたと。自分でわかっていました。
「それじゃあどうしようもないよな」
「まあ終わった話だからな」
「四年後だな」
フランスの心はもうそこに向かっていました。そうして遠くを見ているのでした。

第千四百八十三話　完

2010・6・25

第千四百八十四話　決勝進出なんだぜ

第千四百八十四話　決勝進出なんだぜ

「マンセーーーッ、マンセーーーーーッ！！」

韓国が万歳をしています。

「やったんだぜ！決勝進出なんだぜ！」

「何か日本さんのところのマスコミもそれ言ってるわね」

台湾が言います。何故かわかりませんが日本のマスコミは日本よりも韓国の方を褒めることが多かったりするのです。不思議なことにです。

「まあ勝ったのね」

「アルゼンチンには負けたけれどそれでもなんだぜ」

「四点ねえ」

惨敗です。しかし韓国はもうそんなことは忘れています。

「よくそこまで負けたわね」

「けれどもうそれは忘れたんだぜ」

本当に忘れるのが韓国です。

「だからもういいんだぜ」

「いいの」

「そう、いいんだぜ」

本当に忘れるのが韓国です。

「さて、それでなんだぜ」

「それでどうするの？」

「俺は決勝で優勝するんだぜ」

こうはっきり言いました。

「御前はそこで俺の優勝を見ているんだぜ」

「こけて血まみれになってもいつもみたいに絶叫しないでね」

台湾はこのことだけは言いました。かつてドイツに負けて絶叫し

まくっていたことをよく覚えていたからです。カーンのあの守備力の前に。

第千四百八十四話　　完

２０１０・６・２５

第千四百八十五話　遂にキックオフ

第千四百八十五話　遂にキックオフ

「さあ、やるっぺよ」
「はい」
デンマークが先に言いました。今彼は日本と対峙しています。二人が睨み合うのは緑のグラウンド、観客席はもう満員になっています。
「それでは今からですね」
「遠慮はしないっぺよ。思い切りやるっぺ」
「私もです」
どちらも真剣な顔で言い合います。
「この勝負に勝てば」
「決勝リーグ進出っぺ」
「勿論それで終わりではありません」
日本もそこから先を見ていました。
「それからもまた」
「その通りっぺ。そしてそこに進むのは」
デンマークはあえて余裕の笑みを浮かべています。しかしその目の色は険しいです。彼ももう心の余裕がなくなってきているのです。
「俺だっぺ」
「それを今から決めましょう」
「そうっぺな。それじゃあ」
「いざ尋常に」
「勝負！」
二人の戦いがはじまりました。かつての北の覇者と太平洋を席巻した侍、両者の熱い戦いが今南アフリカにおいて幕を開けました。

第千四百八十五話　完

2010・6・25

第千四百八十六話　青い炎

第千四百八十六話　青い炎

台湾と韓国は日本とデンマークの戦いを観客席から見ています。
韓国は至って呑気にこんなことを言います。
「まあ今度は幾ら何でも難しいんだぜ」
「日本さんが負けるってこと？」
「デンマークは滅茶苦茶強いんだぜ。それで勝つ方が難しいんだぜ」
「けれどカメルーンには勝ったしオランダには善戦したし」
台湾は日本の側に立って言います。
「だから今度も」
「デンマークの強さは半端じゃないんだぜ。それで勝てという方が無理なんだぜ」
「いえ、わからないわよ」
けれど台湾は言いました。
「見てよ、日本さん」
「どうしたんだぜ？」
「オーラが燃えているわ」
台湾はかつての日本の姿をよく見ていました。日清、日露の国家存亡の戦争に勝ち第二次世界大戦で奮闘した日本の姿をです。ここぞという時の彼をいつも見ていました。
「青くね」
「青い炎！？」
「そうよ、あれが出ている時の日本さんはさらに違うわ」
強さが桁違いだというのです。
「だからきっとね」
「勝てるっていうんだぜ？」
「そうよ、絶対にね」
台湾はわかっていました。日本がこうした時本当に凄いことを。

今その日本が戦います。

第千四百八十六話　　完

2010・6・25

第千四百八十七話　勝った・・・・・・

第千四百八十七話　勝った・・・・・・

信じられないことにです。日本はデンマーク相手に勝負を有利に進めています。台湾が見た青い炎は本物であるのかも知れません。

「いけるわ、これは」

台湾もそれを見て言います。

「このままいけば」

「お、おい。相手はデンマークなんだぜ」

韓国もそれを見て驚きを隠せません。

「それでまさか」

「そのまさかよ」

台湾はにこりとしていません。真剣な顔で応えます。

「このまま。勝てるわ」

「勝てる、デンマークに」

「いけるわ。ほら、これで三点目よ」

今日本は三点目を入れました。これで三対一です。

試合は進んでいきます。日本の守りは見事なものです。

そうしてです。遂に。

ホイッスルが鳴りました。勝者は。

「本当に勝ったんだぜ・・・・・・」

「そうよ、勝ったのよ」

韓国も日本も驚きを隠せません。

「日本さん、やったのよ」

「あの地獄のカードで。本当に」

しかし日本は勝ちました。これは事実です。本当に勝ったのです。

第千四百八十七話　　完

2010・6・26

第千四百八十八話　戦いの後で

第千四百八十八話　戦いの後で

決勝に進むことになった日本、それとは逆にデンマークは予選落ちとなりました。勝者と敗者が対象的なまでに浮き出てしまています。

そのデンマークがです。日本のところに来ました。そのうえで。

「見事だっぺ」

「私がですか」

「そうだっぺ。最高のプレイだったっぺよ」

日本に対して微笑んで、です。そのうえでこう言ってみせたのです。

「やったっぺな。しかもクリーンだったっぺ」

「有り難うございます」

日本にとってはです。クリーンファイトと呼ばれることが一番嬉しかったのです。日本はスポーツではとりわけ正々堂々と戦うことが好きだからです。

「その御言葉慎んで受けさせて頂きます」

「決勝に進んでも気合入れるっぺよ」

デンマークはそれからも言うのでした。

「いいっぺな。クリーンで最高のプレイでいくっぺよ」

「わかりました、それでは」

「じゃあな。また会うっぺよ」

デンマークは笑顔でグラウンドを後にします。

「次に会う時は勝つっぺよ」

「私もです」

二人は笑顔で別れました。そうしてそのうえで、です。

日本は決勝リーグに向かうのでした。いきなりパラグアイという強敵です。しかし彼はまずは最高でかつクリーンなプレイを心掛け

るのでした。

第千四百八十八話　完

2010・6・26

第千四百八十九話　イタリアまでもが

第千四百八十九話　イタリアまでもが

「負けちゃったね」
「おい、これはどういうことなんだよ」
ロマーノがイタリアに対して怒っています。何とフランスだけでなくこの人までもが予選落ちとなってしまったのです。
「前は優勝したのにね」
「フランスの野郎も負けてるしな」
「兄ちゃんだけでなく俺まで予選落ちなんて」
「今回の大会はどうなってんだ？」
二人共泣きそうな顔になっています。まさかの敗退だったからです。
「けれど。負けたのは事実だしね」
「仕方ないか？」
ロマーノは何とか納得してきました。
「言ってもどうにもならないしな」
「そうだね。兄ちゃん、これからどうする？」
イタリアは前を向きはじめていました。持ち前の明るさと立ち直りの早さがここで発揮されてきています。こうしたところは流石イタリアです。
「時間ができたけれど」
「そんな時は決まってるだろ」
ロマーノもすぐに言葉を返してきました。
「ここはな」
「うん、ここは」
「パスタとワインだ、飲んで食うぞ」
「うん、わかったよ」
こうしてまずは憂さ晴らしをするのでした。今回本当に波乱続き

です。

第千四百八十九話　完

2010・6・27

第千四百九十話　何とか決勝へ

第千四百九十話

何とか決勝へ

スペインもです。今回はかなり危うかったのです。それで遊びに来ていたオーストリアさんに対してこんなことを言われたりもしています。

「どうしたのですか、今回は」

「何か調子が悪いんや」

困った顔でオーストリアさんに対して答えます。

「不思議と動きが悪くてな」

「中南米勢は元気ですが」

「そやけど俺は何か調子が出えへんのや」

困った顔で言います。

「何でかわからへんけれどな」

「それで決勝には行けましたか？」

「一応な。それはでけたわ」

何とか勝ちました。それはです。

「けれどめっちゃ危うかったわ」

「そうですか。それでも決勝には進めたのですね」

「そや。優勝目指すで」

それは目指すと言います。しかしどうにも表情は晴れません。

「フランスやイタリアは負けたけれどな」

「ヨハネスブルグをソウルと思ってやればどうですか？」

「ああ、何かめっちゃ腹が立ってきたで」

オーストリアさんは意識してかしないでかスペインの急所を突きました。するとスペインもその表情を変えました。鋭いものがそこにはあります。

何はともあれ決勝までは進めたスペイン、とはいっても本当の戦

いはこれからだったりします。

第千四百九十話　　完

2010・6・27

第千四百九十一話　ほぼ決勝

第千四百九十一話　ほぼ決勝

「さあ、全然遠慮はしねえからな」
「それはこちらも同じだ」
イギリスとドイツが対峙しています。二人は決勝の一回戦で激突となったのです。まさに決勝に相応しい強豪と強豪の対決です。
「俺も久し振りに優勝したいしな」
「日韓共催の時は無念だったが今回は違う」
お互いに優勝を目指しています。
「その為には悪いが手前には一回戦負けをしてもらうからな」
「イギリス、正面から貴様を倒す」
「おう、正々堂々と倒してやるからな！」
スポーツとなるとフェアプレーを何よりも大事にするのがイギリスです。流石にロビンマスクとケビンマスク、キン肉王家と肩を並べるロビン王朝の国だけはあります。
「行くぜドイツ！」
「来いイギリス！」
今ホイッスルが鳴りました。
「ベッカムがいなくてもな。その分勝ってやるぜ！」
「皇帝ベッケンバウアーと覇王カーンの心は今もある！」
二人の足にです。彼等の心が宿りました。
「負けられないからな、絶対に！」
「俺は勝つ！」
緑のグラウンドに炎が宿りました。
こうして戦いがはじまりました。それはまさにジェットランドの再現でした。決勝はいきなり物凄いカードの対決となったのでした。

第千四百九十一話　完

2010・6・28

第千四百九十二話　また転がって

第千四百九十二話　　また転がって

「アイゴアアアアアアアアアアッ！！」

「負けたことがそんなに悔しいのね」

「悔しいし悲しいんだぜ！！」

また韓国が床を転がって叫んで悲しみを表現しています。台湾がそんな彼に対して呆れた顔で突っ込みを入れています。何処かでというかいつもの光景です。

「ウルグアイ！強かったんだぜ！」

「勝てると思っていたの？」

「イタリアやスペインには勝ったんだぜ」

「あんたあの試合を再現したら今度こそ相手が本気で切れるわよ」

台湾はあえて何があったのかは言わないでこう告げました。

「命の保障ないから」

「俺は欧州は全然怖くないんだぜ」

韓国は何故か欧州各国に対しては滅茶苦茶強いです。これはサッカーだけでなくありとあらゆることに及んでいます。時々イギリスやフランスの名前を忘れたりもします。

「しかし中南米には負けたんだぜ」

「実力の違いでしょ」

「俺は強いんだぜ」

それでも勝てると思っていたのです。

「その俺がこうして負けたんだぜ。四強までいった俺が」

「それもドイツさんに負けたでしょ。だから今度の大会までもっと強くなりなさい」

「アイゴアアアアアアアッ！！」

ここでまた転がって泣き叫ぶ韓国でした。台湾はその嘆き悲しむのまで騒々しい彼を呆れた顔で見ているのでした。とりあえず慰め

て。

第千四百九十二話　完

2010・6・28

第千四百九十三話　ジャッジメント

「ッたくよお、あれはねえだろうが」
「明らかに入っていましたね」
日本が呑んだくれてくだをまいているイギリスに対して言いました。彼もお付き合いで飲んでいます。
「そうだよ、あれは入ってたよ」
「今回妙に誤審が多いですが」
「それでもあれはねえだろ。日本のところの剣道でいったらあれだろ？」
剣道を出す辺りに結構こだわりがあるみたいです。
「面が奇麗に入っても一本にならなかったみたいな」
「剣道の先生達は厳しいので中々一本を取ってくれませんがそうなりますね」
剣道や柔道の審判は厳しい先生達ばかりなので中々一本を取ってくれません。尚買収は問題外の世界だったりします。そこも厳しいのです。
「確かに」
「誰がどう見ても入ってたのにな」
「それでも一点になりませんでしたね」
「あの審判絶対に許さねえぞ」
イギリスも流石に怒り心頭です。
「呪ってやるからな」
「ロイヤルネービーを送り込まれないのですか」
「一人だから呪ってやる」
それでだというのです。
「とにかく今度のことは絶対に忘れないからな」
「まあ落ち着いて下さい」

イギリスにとっては嘆き悲しむべき今回の事態、本当に幾ら悔やんでも悔やみきれるものではありません。

第千四百九十三話　　完

２０１０・６・２９

第千四百九十四話　負けてもサバサバ

第千四百九十四話　負けてもサバサバ

「いやあ、負けちゃったよ」
「何かあまり悲しそうでも悔しそうでもないわね」
アメリカ妹がサッカーに負けて家に帰ってきた兄を見て言います。
「野球やアメフトの時と全然違うじゃない」
「何かそれ程エキサイトしないんだよな」
だからだというのです。
「それでなんだよ」
「エキサイトしないの」
「何かね」
また妹に対して話します。
「サッカーってのはね。やっぱり僕はその野球やアメフトの方がいいね」
「それとバスケね」
これにホッケーを入れて四大スポーツです。特にバスケにおいてはアメリカに勝つのはまず不可能な程に圧倒的な強さを発揮しています。
「それね」
「そうだな。バスケで誰かに負けたら凄く悔しいな」
アメリカはバスケについて言いました。そのバスケについてです。
「けれどサッカーは」
「思い入れの違いね」
結局はそれでした。
「やっぱりそれがあるかないかなのね」
「そうだな。とにかくサッカーはこれで終わったぞ」
本当にあっさりしたものです。アメリカにとってのワールドカップはこれで終わりでした。

第千四百九十四話　完

2010・6・29

第千四百九十五話　終わりました

「兄さん、お見事でした」
「有り難う」
日本はうっすらと微笑んで妹の言葉に応えました。
「今回のワールドカップは素晴しかったです」
「試合が、でしょうか」
「そうです。レベルは間違いなくあがっています」
それは誰が見ても明らかなまでです。今回のワールドカップにおいて日本は間違いなくその腕をあげてきていました。下馬評を完全に覆してです。
「このままいけばもっと強くなります」
「努力を怠らないということですね」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのです。
「野球と同じですね」
「そうですね。野球も最初は遊びみたいなものでしたが」
それが大きく変わっていって今に至るのです。
「今では世界で戦えるようになっています」
「ですから。サッカーも」
「はい、やります」
また微笑んでの言葉です。
「例え何があろうとも」
「御願いしますね。応援していますから」
妹の言葉を受けてです。日本はサッカーにもさらに打ち込むことを決意したのです。日本のサッカーは本当にまだまだこれからです。

第千四百九十五話　完

2010・6・30

第千四百九十六話　観戦しているだけでも

第千四百九十六話　観戦しているだけでも

「いやあ、いい試合が続くあるな」
「兄さんは今回は出られなかったのにそんなに悲しそうじゃないあるな」
「観るだけでもいいものあるぞ」
中国はこう妹に対して答えています。
「まさかイタリアやフランスが予選で負けるとは思わなかったあるが」
「あれは私もびっくりしたある」
中国妹にしても予想外の出来事でした。
「特にフランスさんは」
「僕もフランスは優勝候補だと思っていたある」
中国にしてもフランスが予選で負けるとは全く思っていませんでした。本当にまさかの敗北、予選落ちだったのです。しかし負けてしまった事実は覆りません。
「あれはないある」
「そうあるな。ちょっと」
「そうした思わぬ展開もあるから今回は面白いある」
「日本さんもアメリカさんも韓国さんも決勝まで進んだあるしな」
「そういえば韓国は落ち着いたあるか？」
「パラグアイさんを応援するとか叫んでいたある」
その日本の対戦相手です。
「いつもと同じある」
「つまり騒がしいあるか」
「どうするあるか？韓国さんは」
「放置するよろし。どうせいつものことある」
韓国についてはこんなものでした。中国は今回は試合を観て楽し

んでいるだけです。

第千四百九十六話　完

2010・6・30

第千四百九十七話　まさに決勝

第千四百九十七話　まさに決勝

ドイツとイギリス、共に優勝候補同士の対決です。二人だけでなく観客にまで物凄い緊張が漂っています。まさに戦場といった感じです。

「勝つのは俺だからな」

「いや、俺だ」

イギリスもドイツも互いを見据えながら言います。

「悪いがこの勝負貰った」

「へっ、俺だってそろそろ優勝したいしな」

イギリスは何時にも増して不敵な笑みでドイツに対しています。

「ここから王朝を築いてやるぜ」

「ロビン王朝みたいにか」

「ああ、そうさ」

日本の漫画キン肉マンのことは二人も知っています。日本においては核戦争後の世界を舞台にした漫画と同じだけよく知られている漫画です。

「それをサッカーでも築いてやるさ」

「なら俺はだ。帝国を築いてやろう」

皇帝ベッケンバウアーにちなんだ言葉です。

「この戦いに勝ってだ」

「俺はフランスとは違う。絶対に勝ってやるからな」

何気に予選敗退した人のことも話に出しています。

「さて、やるぜ」

「今からな」

こうしてイギリスとドイツの対決がはじまりました。それを見て呑気なことを言っているのは選挙に負けた日本の今の上司だけです。

第千四百九十七話　完

2010・7・25

第千四百九十八話　予選すら出てない人

第千四百九十八話　予選すら出てない人

リトアニアもポーランドも試合を観ています。ポーランドは自分のお家のテレビでリトアニアと一緒に観戦していますがここでふとリトアニアに対して言いました。

「なあリト」

「どうしたの？」

「最近ロシアが不機嫌なのどないしたんよ」

「ああ、あれね」

リトアニアはその理由はもう知っていました。話を聞いてすぐに顔を暗くさせました。そしてその理由をポーランドに対して話します。

「だってロシアさん今回は」

「そういや出てないしーーー」

「だからなんだよ」

ロシアは今回予選にすら出ていないのです。

「負けたからね」

「それで不機嫌なん？」

「そうなんだ。だから今のロシアさんの傍に行ったら駄目だよ」

「何か韓国がそのロシアの前でウルグアイに負けて泣いて転がっていたのはどうなるん？」

韓国はまだ嘆いているのです。

「あれは」

「絶対に危ないから。真似しないでね」

「ふーーーん、じゃあ俺暫くロシアのところには行かないわ」

「そうしてね、本当に」

二人は難を避けることにしました。しかし中にはその難があることにすら気付かない人もいたりします。危険は身近にあるものです。

第千四百九十八話　完

2010・7・25

第千四百九十九話　イギリス敗れたり

「くっ・・・・・・」
「勝ったか・・・・・・」
がくりと右膝をつくイギリス、その前にはドイツが立っています。
強豪同士の対決はドイツに軍配があがったのでした。
しかしそのドイツは笑っていません。疲れきった顔でイギリスに対して言うのでした。
「見事だった」
「へっ、負けたのにか」
「そうだ、敗れたとはいってもだ」
それでもだというのです。
「見事だった」
「褒め言葉か？」
「事実だ」
それだというのです。
「噂通りの強さだった」
「そうか。それならな」
イギリスはここで立ち上がりました。そしてドイツに言う言葉は。
「今度はだ。俺が勝つからな」
「そう言うのだな」
「ああ、次はこうはいかないぜ」
不敵な笑顔と共に告げます。
「それを言っておくぜ」
「わかった。それならだ」
こうして再戦を誓い合う二人なのでした。イギリスは確かに敗れました。しかしそこには確かな誇りがありました。騎士と呼ぶに相応しい誇りが。

第千四百九十九話　完

2010・7・26

第千五百話　オレンジ軍団

第千五百話　オレンジ軍団

「兄ちゃん調子ええねんな」
「ああ」
オランダはベルギーの問いに応えています。今彼は周囲の予想をも上回るまでの強さで勝ち進んでいっているのです。とにかく強いです。
「今回は特にな」
「オレンジ軍団快進撃やな」
「当然や」
オランダはそれを当然だというのでした。
「そして目指すのはや」
「優勝やな」
「そや」
まさにそれだというのです。自信に満ちた声で。
「絶対優勝する。オレンジ軍団はな」
「これまでオレンジ軍団は確かに強かったけど」
強いのは事実です。しかしです。
「ドイツとかフランスとかイタちゃんに押された感じやったさかいな」
「これからはちゃうで。俺は勝つで」
そして言う言葉は。
「俺は生きる」
何か某脚本家さんの言葉になっています。
「生きて・・・・・勝つ！」
「そや、その意気やで」
ベルギーもそんなお兄さんに対して言います。オランダの快進撃は続きます。

第千五百話　完

2010・7・26

第千五百一話　無敵艦隊もまた

「よっしゃ、今回めっちゃ調子ええで」
「何か絶好調やな」
「ああ。こんなことはじめてや」
スペインは笑顔でキューバの言葉に応えています。キューバは元々スペインのお家にいたので今でもお付き合いがあるのです。
「サッカーは元々好きやったけれどな」
「それでも今回は勝ち進みまくってるな」
「若しかしたらや」
ここでスペインの顔に不敵な笑みが宿ります。
「俺優勝できるかもな」
「そういえば優勝はまだやったな」
「ああ、まだやった」
このことを言うのでした。
「だから今度こそな」
「ブラジルもドイツもアルゼンチンもおってもか」
「ああ、勝つで」
不敵な笑みはそのままです。
「絶対にな。無敵艦隊出撃や」
「今度こそほんまに無敵やねんな」
キューバは何気にかつてイギリスに負けてしまったあの無敵艦隊のことを言います。スペインにとってはあまりいい思い出ではありません。
「その言葉嘘やないな」
「俺は嘘は言わんで」
スペインは今絶好調です。例え自分自身は風邪をひいていてもです。

第千五百一話　完

2010・7・27

第千五百二話　ドイツ敗れる

第千五百二話　ドイツ敗れる

「ドイツ負けちゃったんだ」
「ああ、負けた」
いささか無念そうにイタリアに対して答えています。
「この大会はこれで終わりだ」
「優勝候補がどんどん負けていく大会だね」
かく言うイタリアもです。フランスのことといい今回の大会は本当に波乱尽くめです。デンマークにしてもそれは同じことです。まさか、でした。
「凄いことになってるけれど」
「アルゼンチンには勝ったがな」
その韓国がボロ負けした相手です。
「しかしな。負けた」
「ブラジルも負けたよ」
今このニュースが入ってきました。
「優勝候補がまた」
「凄いな、あのブラジルがか」
ドイツはそれを聞いて流石に目を瞠りました。
「負けたか」
「何かスペイン兄ちゃんとオランダが調子いいけれど」
「このまま決勝でぶつかるか？」
ドイツはこの可能性について考えはじめました。
「勝ち進めば」
「そうかもね。何か予想外のカードだけれど」
最早オレンジ軍団と無敵艦隊を阻むものはありません。運命の戦いが迫ろうとしています。

第千五百二話　完

2010・7・27

第千五百三話　予想外の決勝

「まさかこのカードになるなんてな」
「予想できなかったよ」
ロマーノとイタリアもかなり戸惑っています。
「スペイン兄貴とオランダか」
「俺出たかったなあ」
イタリアは何気に予選敗退となってしまった自分のことを嘆いています。済んでしまったことは仕方がありませんがそれでもなのでした。
「やっぱり」
「俺もだ。しかし負けたからな」
「うん、しょうがないよね」
自分達のことはこれで終らせるしかありませんでした。そうしてあらためてその決勝のカードを見てみるとです。本当に意外です。
「どっちが勝つかな」
「さてな」
ロマーノはイタリアの問いに対して首を傾げさせて返します。
「俺にはわからないぞ」
「俺にも。どっちも確かに強いけれど」
強いことは確かです。けれどどちらもドイツやブラジル程ではないと思われていたのです。だから余計に言われているのです。
「どっちかなんて」
「試合が終わるまでわからないな」
「そうだね」
その決勝がはじまります。今南アフリカのグラウンドに両雄が立っています。

第千五百三話　完

2010・7・28

第千五百四話　激突

「ほなはじめようか」
「そやな」
オレンジのユニフォームのオランダが紅のユニフォームのスペインに対して応えます。緑のグラウンドに両者の色が輝いています。
「これからな」
「覚悟はええな」
「覚悟するのはそっちだ」
まずは舌戦からでした。スペインは不敵な笑みを浮かべていてオランダはいつもの無表情です。
「まあ独立のことは置いておいたる」
「そんなん忘れたわ」
実はオランダはかつてスペインのお家にいたことがあります。けれど物凄い大喧嘩の後で独立したという過去があったりします。
「今はサッカーで勝負や」
「オレンジ軍団の力見せたるわ」
オランダがこう言うとです。
スペインもまた。こう言いました。
「ほな俺もや」
「無敵艦隊やな」
「そや。その力見せたるで」
アルマダと言われたその力をです。見せるというのです。
「ほなええな」
「来い。倒したるわ」
今最後の戦いがはじまりました。さて、最後に立っているのはどちらでしょうか。ホイッスルは鳴りました。

第千五百四話　完

2010・7・28

第千五百五話　栄冠は

第千五百五話　栄冠は

スペインが満面の笑顔でガッツポーズをしています。勝者は彼でした。

「やったで！」

「優勝や！やったで！」

「負けてしもうたで」

それに対してオランダは悔しそうです。

「ここまで来てな」

「けれどようやったで」

その彼にベルギーが言います。

「準優勝やん」

「喜ぶべきっていうんか？」

「ここまで来れるだけでも凄いんちゃうん」

「それもそやな」

オランダはベルギーに言われてそう考えました。

「ここまで来るだけでも大変やった」

「そやろ？お兄ちゃん物凄い頑張ったで」

その兄の頑張りを讃えるのでした。

「ほんまにな」

「そやったらええけれどな」

「そや。それでな」

「ああ」

「お祝いしよか」

こう兄を誘って、でした。オランダも敗れたりとはいえその栄冠は確かに受けました。敗者にも栄冠がある、スポーツとはそういうものです。

第千五百五話　完

2010・7・29

第千五百六話　わかっていない愚か者

第千五百六話　　わかっていない愚か者

「日本さん今回は健闘でしたね」
「有り難うございます」
日本はフィンランドの言葉を受けて御礼を返しています。
「私も驚いています」
「よくやりましたよ。ただ」
「はい。ただ？」
「あの田中ガイエスブルグは相変わらずですか」
フィンランドはここで珍しく嫌そうな顔をしました。日本のお家にいるもう最近書いてすらいない作家のことです。
「スポーツでも駄目とか言っていますか」
「はい、相変わらずです」
日本もこうフィンランドに答えます。
「私の家にいて私のことをいつも罵っています」
「ああした奴は何で家を出て行かないんでしょうかね」
フィンランドはそれがとても不思議でした。
「日本さんも日本さんのお家も大嫌いなのに」
「甘えているのでしょう」
日本はこうその人について言いました。
「結局のところは」
「五十を過ぎてそれですか」
「甘える人は幾つになっても甘えますから。ですから」
「成程、そうなのですね」
「はい、そう見ています」
それで捨て置かれている田中ガイエスブルグでした。もう作家としても人間としても終焉を迎えていますが本人は全く気付いていません。とりあえずあの十三巻は最低最悪でした。

第千五百六話　完

2010・7・29

第千五百七話　戦いの後で

第千五百七話　戦いの後で

「全然いいことなかったなあ」
「いい加減もう忘れろ」
イギリスがうんざりとした顔で泣きそうな顔のフランスに対して言います。
「言っても仕方ないだろ」
「まあそうだけれどな」
それでも言わずにいられないのでした。
「今回の俺はよ。何だったんだ？」
「勝負は時の運だっていうだろ」
「それでも全然いいところがなかったぜ」
フランスにとってはです。この大会で思い出すことといえば悪いことばかりです。いいことがここまでない大会というのも珍しい位です。
「御前は決勝進めたじゃないか」
「一応はな」
「この前は準優勝だったのにな」
「優勝候補だったよな」
フランスは大抵そうなります。サッカーに関しては強いのです。
「それでも負けるか」
「予選落ち、嫌な響きだぜ」
「だからもういい加減忘れろ」
イギリスはとにかくこう告げます。
「わかったな」
「わかっているんだがな」
それでもでした。傷心のフランスです。

第千五百七話　完

2010・7・30

第千五百八話　枢軸でも

第千五百八話　枢軸でも

「俺だけなんだよなあ」
「だからそう言うな」
ドイツはドイツで、です。泣いているイタリアを宥めています。
「そうしたこともある」
「この前は優勝したのに」
前回では鉄壁の防御を見せつけてです。そのうえで勝ったのです。
「それが今回は」
「反省すべきところは反省しろ」
ドイツの言葉は正論でした。
「わかったな」
「それで次の大会にってことだよね」
「そうだ。次がある」
サッカーに限らずスポーツは大抵そうです。高校野球は違いますがそれでもスポーツはそれで終わりというわけではないのです。
「だからだ」
「ううん、それじゃあまた今度だね」
「別に負けたら強制的に丸坊主になる訳でもないしな」
「それおかしいし」
そうしたおかしな指導をする教師が日本にはいたりします。凄いことにそうした教師は自分が丸坊主になることはないのです。これが日本の素晴しい教師です。
「とにかく次を目指すよ」
「そうしろ」
大会の後は悲喜こもごも、そんな状況でした。

第千五百八話　完

2010・7・30

第千五百九話　それは違います

第千五百九話　それは違います

今日本の侍が大人気です。これは昔からですが今特に人気があります。

「怨敵退散！」

フィンランドが水色の鎧に白い陣羽織と頭巾の姿で居合いをしています。すると無数の氷の柱が起こって辺りをそれで支配します。

そしてそのうえで。こう言います。

「実によきこと！」

「そのキャラがお好きなのですか」

「軍神最高に格好いいですよね」

日本に対して満面の笑顔で言います。

「何でこんなに素晴しいんですか？」

「実際にかなり高潔な方でしたが」

「日本さんのお家にはかつてこんなに素晴しい侍達が大勢いたんですね」

「ですがそうした技は使えませんでした」

日本はこのことは断ります。

「残念ですが」

「えっ、バサラ技は使えなかったんですか」

「殆ど仙術か超能力ですから」

だから無理だというのです。

「とても」

「そうなんですか。侍になれば使えると思ってたんですが」

「侍は侍ですから。武士とも呼びますが」

それでも無理だというのです。侍といえども万能ではありません。

この辺り忍者になるとさらに誤解されてしまっているのが問題です。

第千五百九話　完

2010・7・31

第千五百十話　中の人が同じ

第千五百十話　中の人が同じ

「何故我輩であるか」
「だって声が」
フィンランドはその軍神の姿のままスイスのところに行きます。
スイスは相変わらずの軍服に完全武装といった姿です。戦国なところはありません。
「それでなんですけれど」
「心当たりはないがあるであるな」
「あるんですか」
「あれは我輩であって我輩でない」
こうフィンランドに対して言います。
「一応言うが侍戦隊のあれも我輩であって我輩でない」
「そうだったんですか」
「そうである、大体それを言えばだ」
「はい」
「日本はどうなる」
その日本は、というのです。
「それこそあちらこちらの世界に日本であって日本でない者が大勢いるではないか」
「あっ、そういえばキューバさんにも声が似ていますね」
「その通りだ。できるだけ声のことは言うな」
フィンランドに対する注意です。
「きりがないからな」
「そうですか。そういえばリヒテンシュタインちゃんはツンデレの」
「だから言うなと言っているのである」
声は大事です。スイスにしても日本にしてもリヒテンシュタインにしてもです。尚スイスのその声の人は凄い美人さんだとの噂もあ

ります。

第千五百十話　完

2010・7・31

第千五百十一話　侍なのかどうかすら

第千五百十一話　侍なのかどうかすら

「何度見ても凄いですね」
「そこまでですか」
「はい、格好よ過ぎですよ」
「全くだねい」
フィンランドだけでなくトルコまでやって来てそのうえで日本に対して言います。親日国家のツートップと言ってもいい両国がです。
「真田幸村も伊達政宗も」
「信玄も謙信も最高だねい」
「とにかく思い切った演出を考えていました」
日本も二人にこう話します。
「それが成功したようですね」
「はい、大成功ですよ」
「信長のダークヒーローぶりもいいねい」
トルコは織田信長をプレイしながら言います。見ればその圧倒的な強さと悪に徹したその格好よさがです。声ともあいまって最高の雰囲気を醸し出しています。
「このゲームはまるねい」
「侍の限界は超えていると思いますが」
日本はここでこんなことも言いました。
「それでもいいですね」
「面白くて格好よければいいんじゃないですか？」
「そうだねい。これも日本でい」
二人はそのことには特に思うことがないようです。むしろこれもまた日本の持ち味なのだと受け止めて楽しんでいるのでした。それもかなり。

千五百十一話　完

2010・8・1

第千五百十二話　海賊はいない

「面白いけれどやり過ぎだよな」
「自覚はしています」
日本は今度はイギリスに対して応えています。イギリスもまたそのゲームをしています。そのうえで日本と話をしているのです。
「それもかなり」
「この四国の奴本当に領主か？」
イギリスの言葉になっています。
「海賊にしか思えないんだけれどな」
「よく言われます」
「何かよ、完全に海のあれだろ」
イギリスはその紫の海賊でプレイしているのでした。
「モデルはあれか？キャプテンか？」
「意識はしていました」
あまりにも有名なあの宇宙海賊です。
「海賊といえば真っ先に思い浮かびましたので」
「そうだろうな。それでか」
イギリスもそれを聞いて納得しました。
「もう完全に海賊だな」
「ですが大名ですので」
つまりイギリスの言葉で領主だというのです。
「海賊行為はしません」
「かなり矛盾してるな、この外見でな」
どうも腑に落ちないイギリスです。この辺りは海賊出身なだけあります。

第千五百十二話　完

2010・8・1

第千五百十三話　また起源

第千五百十三話　また起源

「侍の起源は俺なんだぜ！」
「馬鹿言ってねえで生徒会の仕事しろ」
「今まで一度もやってねえのはある意味すげえぞ」
韓国の趣味である起源の主張にいつも通りイギリスとフランスがうんざりとした顔で突っ込みを入れます。本当にお約束の展開です。
「で、何で起源なんだ？」
「一応聞いてやるから言ってみろ」
「ウリナラには昔サムラビというのがいたんだぜ」
韓国は胸を張って二人に言います。尚仕事は全くしていません。というか生徒会長の机の上にあるのは携帯だけです。それで遊んでいるのです。
「それが侍の起源なんだぜ」
「サムラビ？何だそりゃ」
「はじめて聞いたぞ」
二人の全く知らないことでした。
「どうせまた何か小さなことなんだろうな」
「よく調べても出て来ないようなやつなんだろ」
「貴族の若い連中に関わりがあるんだぜ」
韓国の主張によればそうです。
「まあ日本刀と同じだぜ」
「じゃあ全然違うな」
「いつも通りだな」
二人はそれだけ聞いてもうｙわかってしまいました。韓国の趣味の起源の主張、とりあえず聞いておくだけに留めるのが吉のようです。

第千五百十三話　完

2010・8・2

第千五百十四話　出ている人達

「僕達は侍魂の方に出ていたんだよな」
「そうだったあるな」
「ああ、あのゲームか」
アメリカと中国、それにフランスがまた別のゲームのことを話しています。
「あれはかなり面白かったぞ」
「うん、白熱したある」
「斬った後で本当に真っ二つになったりしたしな」
三人にとってはかなり懐かしい思い出です。そしてこのゲームにはドイツも関わっていたりします。
「あのシリーズはな。俺もよくやったな」
「そうだったよな。御前の家のキャラクターも出ていたしな」
「うむ、いいゲームだった」
実際にこうフランスに対して答えます。
「あのシリーズは今もいいな」
「最近新作出てないのが寂しいけれどな」
「出て欲しいものだ」
ドイツも何気にこのゲームのファンだったりします。
「今度は全くダメージを受けずに完全クリアーを目指すぞ」
「ははは、それは僕のガルフォードがやるさ」
「僕の王虎ある」
二人の専用キャラになっています。やっぱりそれぞれの御国のキャラクターを使いたいということなのでしょう。
そんな話にもなりました。日本のゲームは本当に色々なものがあります。その中でも侍ものは独特の雰囲気を醸し出しています。

第千五百十四話　完

2010・8・2

第千五百十五話　格闘ゲームの常連

第千五百十五話　格闘ゲームの常連

「また僕の国のキャラクターですか」
「いいですよね、出させてもらっても」
「ええ、どうぞ」
タイはいつもの穏やかな調子で日本に対して言います。タイの国出身のキャラクターが格闘ゲームにはとても多いのです。殆どの作品に出ていると言っても過言ではありません。
「ええと、サガットにホア＝ジャイにシュラですか」
「他にもいましたよね」
「全てムエタイですが」
日本もはっきりと言います。
「タイさんといえばあれですので」
「確かに僕ムエタイ得意ですけれどね」
国技です。得意でない筈がありません。
「他にボクシングもしていますが」
「はい、ボクシングゲームでも出させてもらっています」
「あっ、そうだったんですか」
「タイさんの得意なことは存じておりますので」
この細かいところがです。やはり日本です。タイといえばムエタイですがそれだけではないのです。彼も中々深い人なのです。
「それで出させてもらいました」
「そうですか。流石は日本さんですね」
「いえ、私は」
「じゃあそのゲームをさせて下さい」
こうしてタイも日本のゲームをするのでした。日本の研究熱心さはゲームにも発揮されていました。

第千五百十五話　完

2010・8・3

第千五百十六話　格闘技は強いです

第千五百十六話　格闘技は強いです

実際にタイのムエタイの腕はです。かなりです。
「いや、タイガーショットとかは」
「撃てるじゃない」
ベトナムがさりげなくそのタイに言います。ここでもどうも微妙な関係が出ています。
「ムエタイかどうかわからないとか言っても」
「それはそうですが」
「気を使えるだけでも凄いわよ」
尚気を使うのは中国が本場ですが実際には日本もアメリカも使えます。タイもまた同じでこの人達は気を飛ばすこともできるのです。
「私は罠専門だけれど」
「そのトラップが怖過ぎない？」
「普通よ」
ベトナムの基準では、です。
「あれ位はね」
「そうかなあ」
「とにかくよ」
ベトナムは少し強引に話を進めさせました。
「あんたが強いのは確かじゃない」
「戦争とかは好きじゃないけれどね」
それでもです。格闘技はかなり強いです。何しろ。
試しに丸太をローキックで一撃するとです。それで太い丸太がぽっきりと折れました。一撃で真っ二つにしてしまうのです。
そんなタイです。弱いとはとても思えません。温和な人ですが喧嘩は強いみたいです。外交上手ですし侮れない人であります。

第千五百十六話　完

2010・8・3

第千五百十七話　出たことがなかったり

第千五百十七話　出たことがなかったり

「いつも出られてよかったじゃない」
「それはそうですけれど」
「私そういうゲームにはどうも縁がないから」
ベトナムはここで寂しそうな顔を見せました。
「羨ましくないって言ったら嘘になるわね」
「そういえばベトナムさんは出ておられませんね」
「どうも縁がないのよ」
また言います。
「格闘ゲームにはね」
「戦争ものではどうですか？」
「どういう訳かそっちもないのよ」
ベトナムはまた寂しい顔になりました。
「あの戦争でしょ？映画にはよくなるけれどね」
「日本さんのゲームにはならないのですね」
「怒とかはイメージしたっぽいけれど」
タイに対して話します。ゲームへの出演についてはベトナムは縁がないのでした。彼女にとってはいささか寂しいことであります。
「ないのよね」
「また出られる時があるのでは？」
「そう思いたいわ、本当に」
本音が出ています。
「アメリカとか中国とかあんたは常連だし」
「それはまあ」
こんなことを話していました。ベトナムの泣きどころです。

第千五百十七話　　完

2010・8・4

第千五百十八話　この漫画にはよく出ました

第千五百十八話　　この漫画にはよく出ました

タイがある漫画を読んでいます。それは日本のお家の漫画でスナイパーを主人公にしたかなり連載が続いている漫画です。日本では誰もが知っている漫画です。

「確かその漫画は」

「御存知ですよね」

「私よく出てるからね」

ベトナムはこうタイに対して話します。

「知ってるわ」

「それでなのですか」

「昔はもうかなり出てたわ」

連載してすぐの頃とかを思い出しながら話します。

「その頃まだ私戦争してたし」

「色々な相手とですね」

「アメリカとも戦争したし中国ともやったしね」

物凄い強豪ばかりです。

「カンボジアと揉めたり。色々あったから」

「その頃は特にですか」

「今も時々出てるしね」

今も出番があるのです。その漫画では。

「だから知ってるわ」

「僕も出る時がありますよ」

「出番があるのはいいことよね」

ここでベトナムは微笑みました。彼女もいつも出番がないわけではありません。こうした漫画には出番があるのです。忘れられているのではありません。

第千五百十八話　完

2010・8・4

第千五百十九話　恵まれている人

第千五百十九話　恵まれている人

ベトナムは格闘ゲームにはあまり縁がありません。それに対してアジアンガールズのもう一人である台湾はどうかというとです。

「結構コンスタントに出ていますよね」

「そうよね。拳法で」

「中国老師と一緒になってる感じがありますけれど」

「それでも出てることは確かね」

拳法を使うせいでなのです。台湾も結構出番が多いのです。

「色々出てるし」

「それは香港もですし」

「やっぱりあれね。独自の格闘技が必要よね」

ベトナムの今の言葉は結構切実です。

「マーシャルアーツでも拳法でもムエタイでもね」

「ベトナムさんはそういうの身に着けていませんでした？」

「軍隊の格闘術なら」

話がここで物騒なものになります。

「それは身に着けているわよ。私今までずっと戦ってきたから」

「それ、使えません？」

「どうかしら。日本さんが知っていてくれたらいいけれど」

「そうですよね。結局ゲームを作るのは日本さんのお家の人ですから」

問題となるポイントはここです。日本なのです。

「そこが問題ですよね」

「ええ、そうなのよね」

少し難しい顔になるベトナムでした。中々難しい問題であるみたいです。

第千五百十九話　完

2010・8・5

第千五百二十話　コマンドサンボ

第千五百二十話　コマンドサンボ

ロシアです。この人は物凄い格闘技を持っています。

「いやあ、大したことないよ」

「いえ、物凄く大したことがあるから」

太平洋で数少ないロシアと仲のいいベトナムが彼に対して言います。尚ベトナムだけはロシアと仲良くしてもアメリカからも中国からも日本からも怖い顔で見られません。実績がそうさせています。戦いに勝ったという。

「あのコマンドサンボ。他にはレスリングもしているわよね」

「まあ柔道も好きだけれどね」

やっぱり強いです。ロシアも格闘技は大好きなのです。

「けれどゲームだとやっぱりレスリングやコマンドサンボばかりだよね」

「そうよね。特にあのモヒカンのレスラーが有名よね」

「あの人実はインテリなんだよ」

何気にわかる衝撃の事実です。二メートルを超える筋肉ムキムキの肉体の持ち主ですがモスクワ大学を出ているのです。凄い設定です。

「頭いいんだよ」

「何かあんたそのものね」

「そうかな。まあ僕も格闘ゲームには縁があるということでね」

「身体が大きいから力技得意だしね」

ロシアといえばその大柄な身体です。これがものを言います。

「格闘技に向いてるからね。本当に」

「そうだね。じゃあちょっとその格闘技を皆に披露しに行こうかな」

ここから黒くなります。

「日本君にでも」

「絶対にどっちか死ぬから止めなさい」
これは流石に止めます。やっぱり怖いロシアです。

第千五百二十話　　完

２０１０・８・５

第千五百二十一話　爺ちゃん登場　☆

第千五百二十一話　爺ちゃん登場　☆

「御前は誰なんだ？」

ドイツは目が覚めると目の前にいた癖のある髪に髭の男の人に対して問いました。とりあえず彼が今まで会ったことのない人です。

「はじめて見るが」

「じゃあローマ帝国様を知らない御前の為に爺が特別にティーチしてやる」

「朝から鬱陶しいにも程があるぞ」

朝ぬけにいきなりなのでドイツも怒っています。

「一体何だこの展開は」

「まあ場所位は知ってんだろ？イタリアのローマが俺の心臓部でな」

「あの街のことは知り過ぎている」

何故か子供の頃は焦がれる程でした。ドイツは子供の頃のことは全く覚えていないのですけれど。それはイタリアも同じだったりします。

「昔は俺も小さかったんだぞ」

「そうだったな」

「そんで少しずつ大きくなってカルタゴぶん殴って酒飲んで」

「他には？」

「ええとな、ああもういいわ」

その辺りはもう自分でいいとしたのです。そして。

「毎日適当に飯食って戦って女の子といちゃいちゃして寝てたな」

「何だその自堕落な生活は」

「昔はそうだったんだよ」

何か違う、ドイツは真剣に思いました。何はともあれここでローマ爺ちゃんいきなり登場です。外見だけはやたらに渋いお人です。

第千五百二十一話　完

2010・8・6

第千五百二十二話　ローマ帝国の頃は

第千五百二十二話　ローマ帝国の頃は

「僕も若かったあるな」

「君その頃何歳だったんだい？」

ローマ帝国がいた頃から生きていた中国に対してアメリカが尋ねます。一緒に日本もいます。

「確か二千歳だったある」

「充分高齢じゃないかい？」

「仙人だから二千はまだ若いある」

実は中国は仙人だったりします。何気に日本にしろベトナムにしろかなりの高齢なのですが。尚ベトナムに歳のことを言うと確実に攻撃されます。

「あの頃はあいつが西で暴れているのを聞いていたある」

「会ったことはなかったのか」

「ないあるな。話を聞いていただけある」

中国は中国、ローマはローマだったのです。

「日本もまだ小さかったある」

「私中国さんからの使者が時々来ていたことを覚えています」

本当に小さい頃の日本です。

「あまり覚えていなかったりしますが」

「印鑑渡した記憶があるある」

「はい、そうです」

「そうかあ、僕はその頃いなかったからなあ」

アメリカはその頃いませんでした。

「何か遠い昔のことだな」

「僕にとっても昔ある。名前が漢とかだったあるよ」

そこまで昔のことです。ローマ帝国の生きていた時代は遥か彼方のことです。

第千五百二十二話　完

2010・8・6

第千五百二十三話　大体何故来た　☆

☆

「今から俺の質問にだけ答えろ」
「何だ、急に物騒になったな」
ドイツに銃を突きつけられながらも平気な顔のローマです。そうしたことにはかなり場馴れしているみたいです。やっぱり戦争を多くしてきただけはあるみたいです。
「まあそれはいいとしてだ」
「よくない。ローマ帝国と言っているな」
「さっきから言ってるだろ、それ」
「今の答えで御前の頭をぶち抜くことが決定した」
けれどまだ撃たないドイツです。ここで撃つような人ならそれだけでイタリアの相手ができなくなります。イタリアの相手は気が長くてはいけません。
それでさらに問います。
「何故俺の家に侵入した」
「ああ、そうだった」
ここでローマはふと言いました。
「思い出した、忘れるところだった」
「何をだ？」
「俺の可愛い孫に会いに来たんだよ」
こう言ってベッドに寝ているイタリアを見るのでした。
「いやあ、成長しても可愛いな」
「ちょっと待て、何でこいつがいるんだ？」
「あれ、いつもいないのか？」
「いるものか」
何か展開が凄くなってきました。ドイツもびっくりの展開です。

第千五百二十三話　完

2010・8・7

第千五百二十四話　やっぱりお年寄り

第千五百二十四話　やっぱりお年寄り

「日本さんって確か二千歳超えるばいね」
「皇紀では二千六百七十でしょうか」
こうニュージーランドの問いに答える日本でした。
「それだけなるかと」
「じゃあイギリスさんよりもずっと年上ばい」
「そうですね。それは間違いありません」
「何っ、それはほんまでごわすか？」
このことを聞いて驚いたのはオーストラリアです。
「じゃあおいどんよりもずっと」
「はい、年上です」
「何てことでごわす、おいどんよりずっと年下に見えるというのにごわす」
「私と同じ位に見えるばい」
ニュージーランドも言います。
「どげんしたらそんな若作りになるとですか？」
「それが知りたいでごわす」
「どうしたと言われましても」
日本にしても返答に困ることでした。
「私はずっとこのままなのですが」
「それめっちゃ凄いことばってん」
「その通りでごわす。そげん若作りなんて有り得んでごわす」
「ですがこれでも体力が。最近は」
そんなことを言って高く険しい山もすいすいです。日本は高齢なのは間違いありませんが肉体年齢は違うようです。まだまだ若いです。

第千五百二十四話　完

2010・8・7

第千五百二十五話　そういえば彼女がいない　☆

「ほーーら、俺の孫可愛いじゃろ可愛いじゃろ」
「ああ、そうだな」
ドイツは寝ているイタリアをいじくりながら孫自慢をするローマ帝国に対して突っ込みを入れます。
「せめて半分の強さがあれば俺も苦労しないんだがな」
「けれど爺ちゃんの孫だぞーーー、爺ちゃんのだからな」
「何故夜中にこんな親父に絡まれなければならんのだ」
ドイツは首を横に振って言うローマ帝国の相手をしながら思いました。
「どうしてだ」
「しかし御前も寂しい奴だな」
ここでローマ帝国は話題を変えてきました。
「ベッドに女の子も呼べないのか？」
「そんなことはしない」
「俺の孫が可愛いのが救いだけれどな」
「五月蠅い、用がないならもう帰ってくれ」
「俺が御前位の歳の頃はな」
ローマ帝国は勝手に話をはじめました。
「もうベッドでは美女に囲まれてたんだぞ」
「その頃ベッドでそういうことをしていたのか？」
「あれっ、違ったか？」
この辺りは記憶が微妙になっているようです。やっぱりローマ帝国は昔の国です。記憶が曖昧になってしまっているところもあります。
「まあいい。御前も経験あるだろ」

「誰がするか、このエロ親父！」
ドイツは怒っています。何とも軽いお爺ちゃんです。

第千五百二十五話　　完

２０１０・８・９

第千五百二十六話　昔はベッドでは

第千五百二十六話　昔はベッドでは

「昔はなあ。ベッドは小さかったからな」
「随分と懐かしい話ですね」
珍しいことにオーストリアさんがフランスの相手をしています。
実は昔の欧州ではベッドは背中をもたれさせかけて寝ていました。
敵に備えて完全に熟睡せずすぐに対応できるようにです。
「あの頃はそうでしたね」
「天幕のベッドなんてなかったしな」
「はい、十字軍以降でしたね」
そこから持ち帰ったのがはじまりだったのです。
「だからそういうことはな」
「言わなくてもわかりますが聞いてあげましょう」
オーストリアさん流石です。フランスのことがよくわかっています。
「ではどうぞ」
「昼に麦畑の中とかでだったな」
「あの時の麦は高くて隠れましたからね」
「ああ、便利だったな」
フランスはその頃を思い出す顔になっています。
「外でするってのも気持ちいいからな」
「貴方は今でもそうではないのですか？」
「ははは、それは置いておいてだ」
フランスもさるものです。何を言われても平気に返します。
「あの時はあれはあれでよかったな」
「ベッドが窮屈でも、ですね」
昔の欧州はこんな感じでした。随分と古いお話です。

第千五百二十六話　完

2010・8・9

第千五百二十七話　酒池肉林　☆

第千五百二十七話　酒池肉林　☆

「ああ、何だ御前少年や熟女が趣味の奴か」
「何故そうなる」
ドイツが女の子をはべらしていないと聞いての言葉です。
「ネアポリスで流行ったな。爺ちゃんも一回は経験しときゃよかったな」
「そういうアブノーマルな趣味はない」
ドイツは怒った顔で断言しました。
「俺にはだ」
「けれど暇な時とかにはしていたんだろ？」
「何をだ？」
「酒池肉林」
まさにそのものずばりです。
「違うか？してなかったか？」
「しない！」
また怒った顔で断言するドイツでした。
「誰がするか」
「何っ、じゃあ路上でしないのか？」
「するか！」
「プールの中は？それとも幼女は？後ろとか動物とかは？」
「どれもやってない！というか最後のは何だ！」
実際にあるところが世の中の怖いところです。
「まだあるのか？」
「いや、ない。しかし御前は聖人か？」
ローマ帝国はドイツを仰ぎ見るようにまでなっています。この人は何でもありだったみたいです。

第千五百二十七話　完

2010・8・10

第千五百二十八話　その語源は

第千五百二十八話　その語源は

「あれは元々老師の大昔の上司がやったことなのよ」

「へえ、そうやったんやな」

凄く珍しい香港とキューバの組み合わせです。キューバが彼の言葉を聞いています。

「あいつのかいな」

「そうなのよ。お酒の池に肉を木々に吊るしていたのよ」

「それで酒池肉林やったんやな」

「そういうこと。実際にそれやってみる？」

「何かあまり面白くなさそうやな」

これがキューバの感想です。

「無駄が多そうやしな」

「無駄が多い物凄い贅沢だったというわけ」

香港はこう話します。

「それで今もとんでもない贅沢とかの語源になったの」

「女関係で言われるのは何でや？」

「その中で宴会やったから。裸の女が乱れ飛んでいたらしいわ」

「ああ、成程な」

キューバはこのこともわかりました。

「それで女もかいな」

「そっちはどう？」

「そっちはよさげやけれどな。けれど俺そこまで女好きやないしな」

キューバはこの辺りはイタリアとかフランスと違います。きっぷはいいですが女の子に見境なしというわけではないのです。

「だからええわ」

「わかったわ」

これが酒池肉林のはじまりでした。こうしたことだったのです。

第千五百二十八話　完

2010・8・10

第千五百二十九話　ドイツの知ってること　☆

☆

「まずはだ」

「おっ？」

ローマ帝国はここでドイツが話しはじめたのを聞きました。

「何だ？」

「紀元前七百五十三年狼に育てられたロムルスとレムスが建国したと言われているな」

これがローマ帝国のはじまりだとされています。

「紀元前五〇九年頃エルトリアの王族を追放して共和制になった。それから」

「よく知ってるな」

「画期的な法と卓越した軍事力で国土を勝ち取り紀元前二七二年にイタリア半島を統一」

順調に勢力を伸ばしていっています。

「その後も地中海全域に勢力を拡大しカルタゴも倒した」

「御前本当によく知ってるな」

「これ位の知識は普通に持ってるだろう」

学校で勉強することだからです。

「そうじゃないのか？」

「御前俺のファンか！？ファンだったのか！？」

「いや、確かにローマ帝国は尊敬しているが」

それでも目の前のちゃらちゃらしたおじさんがそれとは夢にも思わなかったのは事実です。

「それでもだな」

「好きなだけ尊敬してくれ！爺感激だ！」

「ちょっと待て、離せ！」

ドイツは自分を抱き締めんばかりのローマ帝国に対して言い返します。何か雰囲気がまた変わってきました。そしてその中ですやすや眠っているイタリアでした。

第千五百二十九話　　完

２０１０・８・１１

第千五百三十話　皇帝というのは

第千五百三十話　皇帝というのは

「皇帝とはですね」
「欧州ではローマ帝国皇帝という意味でしたね」
「はい、そうです」
まさにその通りだと。オーストリアさんが日本に対して話しています。今や日本だけが上司に皇帝を戴いているのです。上司の上司で呼び名は皇帝ではありませんがそれでもです。
「神聖ローマ帝国は元々は西ローマ帝国にあたります」
「カール大帝もそうでしたね」
「そしてビザンツ帝国はそのまま東ローマ帝国です」
そのギリシアのお母さんです。
「その後継者となるのがです」
「ロシアさんのかつての上司だった方々ですね」
「そういうことになります。ロシア皇帝もまたそうです」
実はロシアもローマ帝国だったのです。
「ロシアの上司がローマ帝国を継承したと言っていましたね」
「そういえばそうですね」
「ですからロシア帝国は東ローマ帝国だったのです」
「では神聖ローマ帝国、そしてプロイセンさんの上司が建国したあのドイツ帝国は」
「はい、西ローマ帝国です」
ローマ帝国の後継者だというのです。
「ここが貴方や中国の帝国とは違いますね」
「はい、特に私の国とは」
この辺りはかなり複雑だったりします。日本の上司の上司の方は皇帝でありながら王の色彩も祭司長の色彩も併せ持っています。皇帝も国により様々です。

第千五百三十話　完

2010・8・11

第千五百三十一話　何かを出してきた　☆

第千五百三十一話　何かを出してきた　☆

ローマ帝国はジャガイモを生のまま林檎みたいに食べています。
それを食べながらドイツに対して尋ねるのでした。
「それにしても御前いつもこんなまずいもの食べてるのか？」
「ああ、それはだ」
「何だ、これ」
「ジャガイモだ」
こうローマ帝国に話すドイツでした。
「それは俺の家の主食みたいなものだ」
「二千年も経ったのにこんな食事じゃな」
「どうだというのだ？」
「可哀想だな」
真剣にドイツに同情しています。
「パンもあるだろうに」
「パンも食べてるが大体それは生で食うものではないぞ」
「よし、そんな可哀想な御前にだ」
ローマ帝国は話を聞いていません。そしてです。
「爺ちゃん料理しちゃうぞ！」
「いきなり何だこの展開は」
ドイツが呆気に取られている間にです。ローマ帝国は料理の準備をしました。そして包丁の他にドイツの前に見せたものとは。
「見て驚け、ここに取り出し足るわ」
何か目を光らせて言います。後ろから効果音まで聞こえてきます。
「一匹の活きのいい地中海でとれた魚だ」
何かが起ころうとしています。またしてもです。

第千五百三十一話　完

2010・8・12

第千五百三十二話　生のお魚は

第千五百三十二話　生のお魚は

日本はお魚大好きです。それでいつも食べています。

その日本にです。ベトナムが尋ねるのでした。

「お肉も生で、ですか」

「時々お刺身にして食べますが」

「馬刺ですよね」

ベトナムもそれが何かはある程度知っていました。

「日本さんっていうとやっぱりそれですよね」

「そう言われます。けれどお刺身のメインは」

「やっぱりあれですね。お魚の」

「はい、これです」

言いながら出してきたのは鮭のお刺身でした。まさにサーモンピンクと白の奇麗なストライブのです。見事なお刺身が出てきたのです。

「これとお醤油、それと山葵で」

「食べる。いいですよね」

「どうですか、ベトナムさんもご一緒に」

ここでベトナムにも勧めるのでした。

「今しがた切ったばかりの新鮮なものです」

「いいんですか？私も食べて」

「はい、どうぞ」

また勧めるのでした。

「食べるのは多い方が楽しいです」

「有り難うございます、それでは」

こうして日本と一緒に鮭のお刺身を食べるベトナムでした。それは最高の味でした。

第千五百三十二話　完

2010・8・12

第千五百三十三話　東にいます　☆

第千五百三十三話　東にいます　☆

ローマ帝国の出して来たきたその地中海の新鮮なお魚を見てです。ドイツにも緊張が走りました。一体何をするのかを見るからです。

「魚をどうするんだ？」

「まず鱗を取り」

物凄い包丁捌きでその鱗を取っていきます。それから。

「そして太刀筋を見極め」

「どうするんだ？」

「斬るんだ、それも細かくな」

細かく斬ってスライスになっていきます。そしてそこに。

「最後に魚醤かけてそれでできあがりだ」

「何と」

ここまで聞いてドイツは冷静さを取り戻しました。そのうえで爺ちゃんに言うことはです。

「こんな料理日本で食ったぞ」

「何だって！」

爺ちゃんもそれを聞いてびっくりです。

「こんな粋ない食い方してる奴がまだいるのか！」

「いるぞ。日本は知らないか」

「知らねえな。どんな奴なんだ？」

「真面目なんだがどうも掴みどころがなくてな」

友達になって長いですが日本を理解するのはかなり難しかったりします。

「何考えているかわからない奴だ。よく気がきくし温和だしいい奴なんだがな」

「そんな奴なのか」

ついでに一人知ったローマ爺ちゃんでした。世界は広いです。

第千五百三十三話　完

2010・8・13

第千五百三十四話　魚醤とは

第千五百三十四話　魚醤とは

ローマ爺ちゃんが使っていた魚醤ですが。実は日本も使っています。

「これのことですか？」

「ああ、これだ」

ドイツは日本に差し出されたそれで日本が作ったお刺身を食べながら答えました。

「これだ。そのままだ」

「これはしょっつるといいます」

日本はこうドイツに対して説明します。

「お魚から作ったお醤油です」

「あの大豆から作るのとはまた別だな」

「はい、お醤油でも原料が違いますので」

「味も全く違うな」

「そうです。そしてですが」

ここで日本はこのことも話しました。

「タイさんやベトナムさんも使っておられますよ」

「あの二人もなのか」

東南アジアの二人です。実はこっそりと仲が悪い二人ですがそれはあえて誰も何も言いません。本人達も何も言わないからです。

「そうなのか」

「そちらの名前はナムプラーといいますが」

「意外と色々な国で残っているんだな」

「ローマ帝国さんが使っておられたことには驚いていますが」

日本にしてみればそちらの方が驚くべきことだったりします。お醤油といえば自分達アジアの国で使うものと考えていたからです。

しかしそれは違っていました。

第千五百三十四話　完

2010・8・13

第千五百三十五話　急にしんみりと　☆

「じゃあ俺もう腹減ったしブッカ見たいし」
「だからどうだというのだ？」
「もう帰るわ」
爺ちゃんはこうドイツに対して言いました。
「それじゃあな」
「いきなり来ていきなり帰るかこの不審者」
「俺は不審者じゃないぞ」
「なら若し御前が本当にローマ帝国ならだ」
「それさっきから言ってるだろ？」
不審者と思っているので信じないドイツなのでした。
「ちゃんとな」
「それならだ。何故御前はいなくなった？」
「んっ？」
そう言われてローマ爺ちゃんも少し真面目な顔になりました。
「かつてあれ程の力を持っていながら何処に消えて」
「それか」
「そして御前は何処に行った？」
こう爺ちゃんに尋ねるのです。
「そして今は何処にいる」
「それか」
爺ちゃんは真剣な面持ちになりました。何処か悲しみを込めて。
「難しい質問だな」
こう前置きしてです。そのうえで話しはじめるのでした。

第千五百三十五話　　完

2010・8・14

第千五百三十六話　不死鳥といえば

第千五百三十六話　不死鳥といえば

国も消えることがあります。しかし中々消えない国もあります。

「俺大丈夫だしーーーー」

「よく今まで消えないでいられたね」

「まあ何とかなるしーーーー」

ポーランドです。能天気な調子でリトアニアの言葉に応えています。

「プロイセンだっているし。あいつ消えんの？」

「東ドイツだからね」

リトアニアはこうポーランドに話します。

「だからそう簡単には消えないんだよ」

「ちぇっ、不死身は俺の専売特許じゃないん？」

「違うみたいだよ。俺だって危ういところを何度も助かってるし」

この人にしろそうだったりします。

「だからそういうのはさ」

「ああ、リトも不死身だったん？」

「俺はそういう自覚はないけれど」

しかしそれでもかなりしぶとく生き残っています。

「ロシアさんのところにいた時も多いしね」

「その時消えそうだったんちゃう？」

「まあそうだけれど」

ロシアのお家にいるということはそれだけで厳しいことです。

「それでも。今もいるから」

「やっぱり不死身ちゃう？それって」

こうリトアニアに言うポーランドでした。不死身はこの人だけではないようです。

第千五百三十六話　完

2010・8・14

第千五百三十七話　爺ちゃんの語り　☆

☆

「俺は馬鹿だった」
「それは何となくわかるぞ」
ドイツはこうローマ爺ちゃんに言いました。
「それでどうしたんだ」
「気付かなかったんだよ。力も富も何時までもな」
その寂しい顔での言葉でした。
「あると思っていたんだよ」
「そうだったのか」
「気付いたら俺は老いて栄光は過去のものになっていたんだ」
栄枯盛衰はこの世の常です。
「それだな」
「うむ、それでどうしたんだ」
「ええとな」
ここで何か少しおかしくなってきました。
「それで何だったかな」
「俺に聞かれてもわからないが」
「いや、御前知ってるか？」
爺ちゃんは言われても笑いながらドイツに対して尋ねてきました。
「何だったかな。それで俺がな」
「だから俺に聞かれてもわからない」
ドイツは首を振って言いました。
「それで何だ」
「何だったかな」
最後はこうした結末でした。何ともはやです。

第千五百三十七話　完

2010・8・15

第千五百三十八話　己を見ない愚か者

第千五百三十八話　己を見ない愚か者

「あのガイエスブルグですけれど」
「あの作家さんですね」
忌々しげに言うフィンランドに対して日本はいつもの穏やかさです。
「またですか」
「何か日本は絶対に衰退するとか滅ぶとか。また言っていますけれど」
「あの人はそういう人ですので」
日本はわかっているといった面持ちです。
「気にしないで下さい」
「本当に日本さんのお家の人なんですか？あれで」
「はい、そうです」
一応そうだったりします。
「名前を見ればわかりますね」
「それでもあれは」
フィンランドは首を傾げさせながら言うのでした。
「何か日本さんの悪口ばかり。しかも全く勉強しないでいつも言いますよね」
「ですがその結果です」
「その結果？」
「ああなっています」
見ればです。日本のお家の人達がそのガイエスブルグ小説家を囲んで、です。その人が書いた小説を本人に対して投げ付けています。
「御前の小説もう小説になってないんだよ！」
「つまらない！もうこんなのしか書けないなら筆を折れ！衰えたな！」

自分がまず衰えてしまったようです。哀れ衰えたのは髪の毛だけではありませんでした。

第千五百三十八話　　完

２０１０・８・１５

第千五百三十九話　孫は能天気に　☆

そんな訳のわからない騒ぎが終わってドイツはまた寝ました。二度寝というやつです。

それでイタリアはです。目を覚ますと。

「おはよう、兄ちゃん」

隣にロマーノがいると思っています。実際いつも隣同士で同じベッドに寝ています。

「昨日のローマ爺ちゃんの夢見たんだ」

いつもの明るい笑顔で話します。

「それで昔みたいに手が大きくて優しくて」

二人にとってはとてもいいお爺ちゃんだったのです。

「温かかったんだ・・・・・あれっ」

ここで気付きました。隣にいるのは。

「ドイツ、それに」

寝ています。髪も後ろに撫で付けていません。

「寝てる。ってことは！」

ここで急いで日本に電話をかけます。

「おはよう、日本」

「はい、おはようございます」

「俺今日凄いことやったんだよ！」

こう日本に対して言うのでした。

「俺はじめてドイツより早起きできたんだよ！」

「何ですって、本当ですか！？」

日本もこれにはびっくりです。

「それではお赤飯を炊いてお祝いしましょう」

「うん、そうしてよ」

最後はイタリアでした。三人で食べるお赤飯がとても美味しかったです。

第千五百三十九話　　完

２０１０・８・１６

第千五百四十話　大体起きない

第千五百四十話　大体起きない

イタリアはよく寝ます。とにかく起きません。
「夜はやたら起きてるんだがな」
「その分寝てるんですね」
日本がドイツに対して言います。二人は今そのイタリアを見ています。ベッドの中でもう本当に気持ちよさそうに寝ているのです。
「朝に」
「昼も寝るぞ」
「シェスタですね」
「ワインを飲んでからじっくりと寝る」
それもまたイタリアです。
「だからだ。結果としてだ」
「かなり寝ていますね」
「寝過ぎという程な」
そこまで言います。
「全く、何処まで寝るんだ」
「いいのではないですか？イタリア君はそれで」
何か日本もイタリアがわかってきたみたいです。
「それに起こすのも可哀想ですし」
「全く。日本は甘過ぎるぞ」
その優しさは最早菩薩級の時すらあります。
「まあいい。寝かしておくか」
「はい、そうしましょう」
何だかんだでドイツもです。優しいのでした。

第千五百四十話　完

2010・8・16

第千五百四十一話　ゲルマンさん　☆

第千五百四十一話　　ゲルマンさん　☆

長い金髪に青い座った目の人がゲルマンです。今ローマ帝国と話をしています。この二人は結構いじょうな腐れ縁であるのです。

それでローマ爺ちゃんがあれこれと話をしています。その内容は。

「この間よお、とても可愛い女の子をナンパしてな」

「そうか」

「で、そこの魚がバカみたいに美味くてな。もう最高だったんだよ」

「わかった」

「いやあ、それから喧嘩して圧勝したんだよな」

「待て」

ここでゲルマンは話を止めました。

「たまにはだ」

「おお、何だ？」

「女と酒と戦い以外のことを話せ」

「他か？」

「そうだ。他にもあるだろう」

こうローマ爺ちゃんに対して言うのでした。

「政治とかな」

「何っ、それだったら」

そう言われて多いに驚いたローマ爺ちゃん、実際に驚いた顔で言うのでした。

「そうしたら後は」

「後は。何だ」

「魚介類の話しかできねえじゃねえかよ」

こういう人だったのです。とりあえず楽しく暮らしていた若き日の爺ちゃんとゲルマンです。

第千五百四十一話　完

2010・8・17

第千五百四十二話　ローマ爺ちゃんのライバル

第千五百四十二話　ローマ爺ちゃんのライバル

「ローマ帝国にも敵がいた」
「知ってるよ、カルタゴだよね」
イタリアはこうドイツに対して答えます。
「三回も戦争したんだよね」
「カルタゴ以上に長い間争ってきた国がある」
ドイツはそのイタリアに話しました。
「まさにローマの仇敵という相手だった」
「そこ何処なの？」
「パルティア、後にはペルシアになる」
ここで凄く古い国の名前が出てきました。
「その国と長い間激しい戦争があった」
「ペルシアってあの絨毯の」
「そうだ、あのマケドニアと戦ったペルシアとは別の上司だった」
当時そういう国もあったのです。かなり古い国です。それこそ伝説の時代からあったような。イタリアにとっては気の遠くなるような話です。
「その国と争ってきた」
「そうだったんだ」
「今の国名はイランだ」
ドイツはここで今の名前も話しました。
「あそこにあった」
「ふうん、イランって長生きなんだね」
何故かそれで話を終わらせてしまったイタリアでした。ローマ爺ちゃんといえど無敵ではなかったようです。やっぱりライバルはいたのです。

第千五百四十二話　完

2010・8・17

第千五百四十三話　落ち込む爺ちゃん　☆

第千五百四十三話　落ち込む爺ちゃん　☆

いつもかなり騒がしいローマ爺ちゃんですがそれでもたまには落ち込むことがありました。今日はたまたまそういう落ち込んでいる日でした。

「不意打ちとはいえよ」

「ああ」

いつも通りゲルマンが爺ちゃんの話を聞いています。

「一般人に喧嘩で負けちまったよ」

「それで落ち込んでいたのか」

「強かった。もう俺も歳かもしんねえな」

爺ちゃんは落ち込みながら言います。

「体力って落ちるものなんだな」

「落ち込むな」

ゲルマンはそんな爺ちゃんの肩をぽん、と叩いて言いました。

「次に会ったら勝てばいいだけの話だ」

「そうか？」

「そうだ」

こう爺ちゃんに言います。

「それだけだ」

「そうか、そうだよな」

こう言われてです。爺ちゃんは元気が出てきました。

「それだけなんだよな」

「そうだ」

けれどここで顔をぷい、と背けてしまうゲルマンでした。どうもこの人と爺ちゃんの関係は微妙なところがあるみたいです。腐れ縁というものでしょうか。

第千五百四十三話　完

2010・8・18

第千五百四十四話　その相手があれ

第千五百四十四話　その相手があれ

ゲルマンは爺ちゃんに尋ねます。その相手が誰かをです。
「で、一般人か」
「ああ、そうなんだよ」
こうゲルマンに話す爺ちゃんでした。
「チグリス＝ユーフラテス川の方でやられたんだよ」
「あそこか」
「誰かわかるか？そいつは」
「ペルシアだな」
ゲルマンにはすぐにわかりました。その辺りにいるとなればもうその人しかいません。ローマ爺ちゃんにとってはまさに仇敵です。
「あいつだな」
「何っ、あいつがペルシアだったのか」
「そうだ。パルミラとかじゃないな」
「何か違ったな」
パルミラとも以前派手にやりあったことがあったのです。パルミラの上司ゼノビアが非常に手強くて手を焼いたのです。爺ちゃんにとっては大変な喧嘩でした。
「そういえばあいつのいた場所か」
「強いのも道理だ」
ゲルマンは素朴な口調で言います。
「ペルシアだからな」
「くそっ、今度会った時こそは仕返しだ」
こう心に誓う爺ちゃんでした。この後爺ちゃんはペルシアと長い長い戦いに入ります。それはギリシアのお母さんにも受け継がれるのでした。

第千五百四十四話　完

2010・8・18

第千五百四十五話　髪を切って　☆

第千五百四十五話　髪を切って　☆

リヒテンシュタインはスイスの妹です。あの無愛想で物騒なスイスが大事にしている妹です。そうした意味で物凄く貴重な娘であります。

しかしそのリヒテンシュタインがです。いきなりおさげからショートヘアにしてきました。これに驚いたのはお兄さんであるスイスでした。

「その髪はどうしたというのだ！」

「切ってみました。さっぱりしたと思うのですが」

リヒテンシュタインはこともなく話します。

「どうでしょうか」

「確かにさっぱりしているが問題はそこではない」

「といいますと？」

「いきなり男の様な短髪にして何があったというのだ」

「兄様の真似です」

「我輩のだというのか」

「はい、可愛くはないでしょうか」

こう言われるとです。スイスは一呼吸置きました。そうしてそのうえで妹さんに対して言います。確かに普段のスイスとは違います。

「この髪型は」

「まあいいのではないか」

「有り難うございます」

「うむ、いいな」

スイスも妹さんに対してはかなり甘いです。何もいつも怒っている訳ではないようです。それでもこんなスイスはかなり貴重ではあります。少なくともフランスやイタリアが知っているスイスではありません。勿論オーストリアさんには絶対に向けない顔であります。

第千五百四十五話　完

2010・8・19

第千五百四十六話　スイスにおいてもやりたい放題

第千五百四十六話　スイスにおいてもやりたい放題

傍若無人な行動が目立つ韓国です。フランスの料理にいきなり唐辛子やコチュジャンをこれでもかと放り込んで流石のフランスもその目を真っ白にさせます。

「生きていてここまでやりたい放題な奴見たことねえぞ」

そんな彼ですがスイスに来てもです。やっぱり同じことをします。

「パンもチーズもまずいんだぜ。置いておいた麦とか使うから駄目なんだぜ」

「なら食わないでいい」

スイスはいつものむっとした顔で韓国に対して言います。韓国は今スイスの作ったチーズフォンデュを食べています。それを食べながら文句を言っているのです。

しかしスイスもさるものです。韓国の発言にあっさり返します。

ですが相手は韓国です。誰が何を突っ込んでも止まらない彼は。

そのフォンデュの鍋にも唐辛子とコチュジャンを大量に放り込んだのでした。

「今何をやったのだ」

「俺が食べやすいようにしたんだぜ」

実にしれっとした態度で言うのでした。

「やっぱりこうでないと食べられないんだぜ。唐辛子が最高なんだぜ」

「我輩が食べることは考えてないのか？」

「そっちはそっちで勝手に食べるといいんだぜ」

スイス相手に物凄い発言です。

「俺はこっちの鍋で好きに食べるんだぜ」

「太平洋の連中はこんなのを野放しにしているのであるか？」

スイスはこれ以上はないまでにむっとした顔で言いました。
「日本は何をしているのだ？」
「日本は俺の弟なんだぜ」
「年齢的に合わない話であるな」
スイスにおいても韓国は韓国でした。本当にある意味において凄い人ではあります。

第千五百四十六話　　完

２０１０・８・１９

第千五百四十七話　胸はちょっと　☆

第千五百四十七話　胸はちょっと

☆

「服もお揃いにしました」
「服もであるか」
「はい」
二人一緒に歩きながら。リヒテンシュタインはスイスに対して話します。
「夜こっそりと縫っていました」
「勝手にしたらいい」
見ればリヒテンシュタインの服はスイスのものとお揃いです。寒さに強そうな軍服のコートです。それを二人一緒に着ているのです。
その服で街を歩いているとです。
「どうも、スイスさん」
「うむ」
国民が笑顔で挨拶をしてきたのでスイスも返事を返します。
「可愛い弟さんだこと」
「あっ、こ奴は」
リヒテンシュタインだと言おうとしましたがここで、です。リヒテンシュタインは気付いてしまいました。自分のその胸のなさをです。
「そ、そうですか・・・・・」
「ま、まあその何だ」
愕然とする妹をです。アンティークショップに連れて行ってそのうえで、です。リボンを選ばせるのでした。
「好きな色を選ぶがいい」
「どんな色でもいいんですか？」
「うむ、そうだ」

お兄さんのささやかな気遣いでした。

第千五百四十七話　　完

２０１０・８・２０

第千五百四十八話　胸の小さい人達

「胸が小さいのは罪ではないですよ」
「私もそう思うけれど」
台湾とベトナムのアジアンガールズはこう主張します。
「別にそんなのは」
「私だってそうだし」
「そうなんですか」
リヒテンシュタインは二人の話を聞いて少しほっとした顔になります。
「別に胸が小さくてもいいんですね」
「胸が大きいのはいいですけれど小さいのもいいですよ」
「男ってそれぞれ好みがあるし」
二人はその辺りをよくわかっています。
「ウクライナさんは確かに大きいですけれどね」
「それでも私や台湾ちゃんはそれなり以上に声をかけられるし」
何故かというと美人だからです。台湾にしてもベトナムにしてもはっきり言って美人です。美人は常にもてるものであるのです。
「だから胸は別に」
「気にしなくていいわよ」
「わかりました」
リヒテンシュタインは二人の言葉にほっとした顔で微笑みました。
「それなら私もう胸のことは気にしません」
「それよりその笑顔ですよ」
「その笑顔だと誰もが陥落するわよ」
リヒテンシュタインの武器が今明らかになりました。その笑顔でありました。

第千五百四十八話　完

2010・8・20

第千五百四十九話　リボンを着けました　☆

第千五百四十九話　　リボンを着けました

☆

お兄さんの言葉に甘えてそのうえでリボンを着けてみたリヒテンシュタイン。そのうえでお兄さんに対して見せてから尋ねるのでした。

「どうですか？」

「うむ、そうだな」

お兄さんのスイスは少し口ごもっています。

「まあその。何だ」

「はい」

「よいと思うのである」

こう妹に対して言います。

「そう、中々」

「本当ですか？」

「むっ」

ここでスイスは気付きました。それでリヒテンシュタインの視界をさりげなく遮るのでした。

そしてそのうえで、です。あらためて妹に応えます。

「いいのである」

「そうですか」

「うむ、気に入ったぞ」

「有り難うございます」

お兄さんにそう言ってもらってです。リヒテンシュタインも笑顔になります。

「それではこれからもこのリボンを着けます」

「そうするといいのである」

そして視界を遮っているその先にいるのはオーストリアさんでし

た。どうやらこの三人の関係には因縁めいたものがあるようです。

第千四百四十九話　　完

２０１０・８・２０

第千五百五十話　モナコに対しての話では

第千五百五十話　モナコに対しての話では

日本がマグロ戦争においてモナコを一蹴した後です。スイスは日本に対してこう言うのでした。

「あれでいいのである」

「あれでなのですか」

「そうだ。確かに普段の貴様は自分の意見を言わない」

スイスはここでもこのことを言います。

「しかしだ。あのモナコとの勝負はだ」

「私も鮪がかかっていましたので」

「それで本気になったのか」

「はい」

日本は無表情で答えます。

「それでなのです」

「貴様は食べ物がかかれば本気になるのか」

「そうした時にはどうしてもです」

冷静そのものの表情での言葉です。

「そうなってしまいます」

「ううむ、そうだったのか」

「スイスさんもそうではないでしょうか」

「我輩も確かに食べ物には本気になる」

いざという時に備えてです。備蓄していたりします。スイスの防衛意識は半端ではありません。まさに要塞に立てこもっている感じなのである。

「だがあそこまで本気には」

「なれませんか」

それが日本だったりします。中々怖いところもある人です。

第千五百五十話　完

2010・8・20

第千五百五十一話　自宅講習　☆

何とかリヒテンシュタインの目からオーストリアさんを隠し通せたスイス、自分のお家に戻ってそのうえで妹に対して話をしています。お庭にボードを出しています。

「これから自衛の為の自宅講習をはじめるのである」

「はい！」

のどかなリヒテンシュタインも今は真剣な顔で応えます。

「宜しく御願いします」

「まず最初に怪しい奴には近付かないこと」

言いながらオーストリアさんの絵を描きます。

「そして家に入れぬこと、簡単に誘いに乗らぬこと」

「安易に信用するなというのですね」

「そうだ、わからなければ我輩に相談するのである」

今度はリヒテンシュタインの絵を描いています。

「とにかく知らない奴は疑ってかかれ、さもないと」

「あの」

「リヒテンシュタインには難しいかも知れんがこれ位はできんと」

「お兄様、ちょっと」

「何であるか」

「絵が可愛過ぎます」

リヒテンシュタインが言うのはこのことでした。

「後で別に書いて下さいまし」

「むっ、そうであるか」

「はい、ですから」

意外と絵が可愛いスイスなのでした。そこが思わぬネックになっています。

第千五百五十一話　完

2010・8・22

第千五百五十二話　この人も重装備

第千五百五十二話　この人も重装備

スウェーデンは日本では福祉で有名です。しかし他の国ではどうかというとです。

「今日も凄いですね」

「そか」

いつも通りフィンランドの言葉に応えています。

「普通だ」

「いえ、戦車も戦闘機も凄いですよ」

見れば自分で作ったかなり高性能の戦車や戦闘機を動かしています。

「ここまで持っている人はそうはいませんよ」

「昔の上司に教えられた」

ここでスウェーデンは言います。

「軍隊があってこそだ」

「グスタフ＝アドルフ王ですね」

「そだ」

最早伝説になっているスウェーデンの上司です。

「その頃からだ」

「福祉だけでは駄目ですか」

「守らないと意味はない」

このことは断言でした。

「そういうことだ」

「そうですか。まあ僕もそうですしね」

ここでフィンランドはスウェーデンの言葉に頷きました。

「まずは国防ですからね」

何故そうなのかはです。色々と複雑な事情があります。その事情はあえて話をすることはありませんが。

第千五百五十二話　完

2010・8・22

第千五百五十三話　だから絵が可愛い　☆

スイスはリヒテンシュタインに対して講習を続けます。
「それで次であるが」
「はい」
「注意するべきは野生動物である」
言いながら兎やリスを描いていきます。
「可愛い顔をして何をしてくるかわからんからな」
「そうなのですか」
「中には鋭い牙や猛毒を持ったものもいるのである」
猛毒を持った動物はスイスやリヒテンシュタインにはあまりいないような気もしますがそれでも妹に対して話を続けるスイスでした。
「後飼う時は一匹では飼わぬことだ」
「そうなのですか」
「左様である」
こうした話をしていますがここで。リヒテンシュタインは思わざるを得ませんでした。
「あのお兄様」
「何であるか」
「絵が」
やっぱりです。スイスの描く絵は可愛いのです。
「それで」
「ううむ、それではである」
スイスも妹のその言葉にあがらえず。
何か絵を描きはじめました。そうしてそれを描き終えてからそのうえでまた講習を再開するのでした。何かほのぼのとした講習です。

第千五百五十三話　完

2010・8・23

第千五百五十四話　毒を持った動物といえば

第千五百五十四話　毒を持った動物といえば

アメリカがこう日本と中国に言います。
「うちにはサイドワインダーがいるんだぞ」
「砂漠にいるあのガラガラヘビですね」
「何かかなり危険な奴らしいあるな」
「噛まれたら死ぬぞ」
アメリカは明るく怖いことを言います。
「それ以上にクロゴケグモが怖いんだけれどな」
「ああ、あの小さい蜘蛛ですか」
「あれもいたあるな」
「僕の国は結構毒を持った動物がいるんだ」
「うちも南の方はそうあるな」
中国も言います。
「台湾なんかは毒蛇が異常に多いあるがうちにも南の方はかなり毒蛇なり毒蜘蛛なりが多いあるぞ」
「そうですね。暑いとどうしても多くなりますね」
かく言う日本も。
「昔台湾さんのところによく行きましたがあの時は苦労しました」
「毒蛇は困るからな」
「あれの退治は大変あるぞ」
「はい、疫病だけでなく蛇にも悩まさせられました」
日本はこうアメリカと中国に話します。
「噛まれたら本当に死にますから」
毒を持った生き物は一杯います。確かにスイスの言う通りかなり危険です。そうした生き物が多くいる国ではまさに命懸けの話です。

第千五百五十四話　完

2010・8・23

第千五百五十五話　妹からの贈りもの　☆

第千五百五十五話　妹からの贈りもの　☆

「今日の訓練はここまでである」
「はい」
一日の終わりにスイスがリヒテンシュタインに告げています。敬礼もしています。
「よく睡眠を取るように」
「有り難うございました。それでなのですが」
「むっ？」
「よかったらこれを着て下さいまし」
こう言ってあるものを差し出してきました。
「これは何であるか？」
「いつもの御礼です」
「御礼であるか」
「毎晩こっそり縫っておりました」
随分と手が込んでいます。それが何かかなり気になるスイスですがあえて言葉には出しません。
「ではどうぞ」
「うむ、感謝する」
「それではお休みなさいませ」
それを渡してからようやくお別れです。
「また明日」
「別に気なぞ使わなくてよいのであるぞ」
こうは言っても嬉しいスイスでした。それで自分の部屋に入ってその贈りものが何なのか見てみます。するとそれは何とも意外なものでした。
パジャマです。しかもフリルひらひらの少女チックな。リヒテンシュタインの趣味がこれでもかと出ているとても女の子らしい白い

パジャマでした。

第千五百五十五話　完

2010・8・24

第千五百五十六話　女の子の趣味

第千五百五十六話　女の子の趣味

ハンガリーは女の子です。外見も性格も今ではかなり女の子らしいです。

ところが彼女を知るプロイセンは。こんなことを言います。

「昔は凄かったな、男そのものでな」

「昔は昔よ。兄さんは変わらないけれど」

ハンガリー兄のことも話したりします。

「けれどあれよね。私も変わったわよね」

「昔は剣の素振りや乗馬が趣味だったからな」

「今じゃこれよね」

こう言って出してきたのは。ルービックキューブでした。

「これいいわよ。頭の体操にもなるし」

「また随分と懐かしいもの出してきたな、おい」

「そう？私の国発祥なんだけれど」

実はキューブはです。ハンガリーの国でできたものなのです。それで彼女は今でもこのキューブをよくしているのです。これが今の彼女の趣味なのです。

「こうしてね。ぐちゃぐちゃになったのをちゃんと六面元に戻してね」

「早いな、おい」

「これもコツなのよ」

本当に手早く面を揃えていきます。

「はい、これで終わりよ」

「ひょっとしてそれ毎日やってるのか？」

「時間があればね。あんたもしてみる？」

「いや、俺はいいけれどな」

かなり引いてしまっているプロイセンでした。ハンガリーの趣味

は何といってもこれなのでした。

第千五百五十六話　　完

2010・8・24

第千五百五十七話　着ていました　☆

第千五百五十七話　着ていました　☆

「完成してはや五十二日」
リヒテンシュタインは自室で呟いています。
「やっと渡せました」
それだけ迷っていたということです。
「これでパジャマがお揃いです」
ところがここで。
「あっ、これって・・・・・・」
慌ててお兄さんの部屋に向かいました。そのうえで言います。
「申し訳ありません！」
「むっ、何であるか」
「先程間違って私の方のパジャマを渡してしまいました！」
「何っ、それはまことか？」
「はい・・・・・・えっ！？」
スイスは今着替えているところでした。その姿は。
「とてもよく似合っています」
「そうであるか？」
「後で写真撮らせて下さい」
「それは勘弁するのである」
「いえ、そこを何とか」
「仕方ないであるな。一度だけであるぞ」
「はい、それでお願いします」
こんな兄と妹です。スイスも妹さんにはとてもとても甘いです。
そしてリヒテンシュタインもそんなスイスが大好きなのです。とても平和です。

第千五百五十七話　完

2010・8・25

第千五百五十八話　イギリスと妹

「お兄様、お料理の味付けがなっていません」
「ああ、御前まで言うのかよ」
イギリスはイギリス妹に言われてです。うんざりとした顔になっています。
「そこまで駄目か？俺の料理」
「駄目過ぎます」
完全な駄目出しです。
「焼き過ぎですし調味料は使っていますか？」
「そんなのバターで焼いて後は塩か酢でさっとだろ」
「一体何時のお料理ですか？」
千年前を彷彿とさせる料理のようです。
「そんなものを人に食べさせているのですか」
「この前押しかけてきた韓国の野郎なんかいきなり唐辛子やコチュジャンをぶちまけてくれたよ。食う前からな」
「韓国さんが正しいです」
「あいつが正しいっていう人間はじめて聞いたぞ」
イギリスもこれには唖然です。
「っていうか俺の料理はそこまで駄目か。食う前から調味料とか香辛料ぶちまけられる位かよ」
「はい、お料理はもう少し勉強して下さい」
「糞っ、何でこんなのが妹なんだよ」
「駄目ですか？私が妹で」
「いや、そんなことはないけれどな」
「じゃあお料理を」
「ああ、わかったわかった」
この二人はこんな兄妹です。スイスのところとは随分違いますが

それでもです。言い合いながらも仲良くやっている二人なのです。

第千五百五十八話　　完

２０１０・８・２５

第千五百五十九話　一人で彷徨って　☆

第千五百五十九話　一人で彷徨って　☆

「さっきは言いそびれた、有り難う」
「って言ってもらえました」
リヒテンシュタインは自分のお部屋のベッドの中でお兄さんの言葉を回想しています。その有り難うという言葉がとても嬉しかったのです。
「兄様に喜んでもらえると私も幸せです」
そう思いながら寝るとです。昔のことを思い出すのでした。
第一次世界大戦が終わってからです。リヒテンシュタインは一人でした。一人で彷徨うその時に雨も降ってです。お腹も空いて家も何もかも。そんな状況でした。
「どうしましょう・・・・・・」
その中で呟く自分がそこにいます。
「恐慌でお家も周りもぼろぼろになっていて・・・・・・」
オーストリアさんもドイツもです。今にも死にそうな人ばかりだったのです。
「食べ物も満足にありません」
そんな絶望的な状況の中、遂にリヒテンシュタインはしゃがみ込んでしまいました。
「私これからどうなってしまうのでしょうか」
もう気力が尽きてきていました。
「私もう駄目かも知れません・・・・・・」
倒れ込むようになったその中での言葉です。
「もう少し国でいたかったです・・・・・・」
そんな中でした。
「おい」
その彼女に声をかけてきた人がいたのです。そしてその人こそが

です。リヒテンシュタインにとってはまさに運命の出会いだったのです。

第千五百五十九話　　完

２０１０・８・２６

第千五百六十話　日本に会って

第千五百六十話　日本に会って

「あの時のウリ達は本当に大変だったニダ」
「そうだったわよね、本当に」
台湾が韓国妹の話を聞いています。お兄さんはああですが妹さんはかなりまともです。
「お家もお庭も何もかもがどうしようもなくて。服も食べ物も満足になくて今にも倒れそうだったニダ」
「あんたもその時大変だったわよね」
「ロシアさんもすぐそこまで来ていたニダよ。けれど日本さんが来てくれて」
韓国妹はその時のことを思い出しました。
「うちに来られますか？上司が来てもらったらどうかと言っていますし」
「いいニダか？それで」
「お兄さんは是非にと言っていますよ」
韓国はこの時日本に入りたがっていました。一進会という自分の国の人達と一緒になってです。そのうえで日本に入りたいと言っていました。
「ですから貴女も」
「けれど日本さんに迷惑がかからないニダか？」
この時日本はロシアとの戦争に勝ったのはいいのですが戦費を使い過ぎてとてもしんどい状況でした。台湾もそれは知っていました。
「今だって痩せて」
「何、大丈夫ですよ」
それでも日本はにこりと笑って韓国妹に言うのでした。
「まだこの位は」
「そうニダか？」

韓国の兄妹が日本に入った時はこうした状況でした。日本は辛い中で今にも死にそうな二人を自分のお家に迎え入れたのです。

第千五百六十話　　完

２０１０・８・２６

第千五百六十一話　助けてくれた人　☆

☆

「御前、大丈夫であるか？」
（それはお兄様でした）
自分もぼろぼろな状況のスイスがリヒテンシュタインの前に現れたのです。
そうして自分のお家に迎え入れてです。そのうえで彼女に色々としてくれたのです。
「美味いか？」
「美味しいです。けれどお兄様は」
「ああ、もう食べたのだ」
（それから私は色々と面倒を見てもらいました）
リヒテンシュタインにとっての懐かしい思い出です。
「体調はよくなったのか？」
「ええ、とても」
（その後でわかったことですが）
リヒテンシュタインはさらに思い出しています。
（お兄様は自分が食べるものもないのに）
スイスも辛い状況だったのです。とても。
（私を助けて下さっていたのです）
リヒテンシュタインはそのことに気付いた時。心に宿るものがありました。
「お兄様」
「何であるか」
「有り難うございます」
こう言って頭を下げるのでした。
「本当に」

「気にしなくていいのである」
けれどスイスはこう言うだけです。本当にそれだけでした。

第千五百六十一話　　完

２０１０・８・２７

第千五百六十二話　義侠心

第千五百六十二話　義侠心

「あの、日本さん」
韓国妹がお兄さんには内緒でこっそりと日本に尋ねました。
「お聞きしてもいいニダか？」
「はい、何でしょうか」
「どうしてニムはあの時ウリと兄さんを助けてくれたニダ？」
尋ねるのはこのことでした。
「あの時どうして。日本さんも辛い状況だった筈ニダ」
「多分にその時の流れです」
本当にそこに至るまで色々あったのです。有り得ない出来事が。
「ですが」
「ですが？」
「上司が言ったのです。義を見てせざるはと」
「義を見てニダか」
「はい、そうです」
こう韓国妹に答える日本でした。
「あの時韓国さんも貴女も大変でしたね」
「はい、それはその通りニダ」
「上司がそれを見てです。それでなのです」
「そうだったニダか」
「もうその上司は誰もいませんが」
時代は変わりました。今は違う上司です。
それでもその時はその義侠心で韓国達を迎え入れた日本のお家なのでした。韓国妹もこのことを知りました。今では昔のお話です。

第千五百六十二話　　完

2010・8・27

第千五百六十三話　目が覚めて　☆

第千五百六十三話　目が覚めて　☆

目を覚ましたリヒテンシュタインは登校前にお兄さんのところに行きました。見れば丁度モーニングコーヒーを飲んでいるところでした。

「お兄様、今日昔の夢を見ました」

「そうであるか」

「それでお聞きしたいことがあるのですか」

「何であるか？」

「どうしてあの時私を助けて下さったのですか？」

かなり単刀直入に尋ねます。

「それはどうしてですの？」

「朝からいきなりそんな質問をするであるか！」

「あの時お兄様も大変と聞いたので」

このことを知ったうえでの質問なのです。

「それでなのですけれど」

「それはだな、人として国として当たり前の行為であり」

「そうなのですか」

「国としての使命である！」

スイスはこう断言します。

「だからその、何だ」

「何なのですか？」

「自分の正義に従った結果である」

こう言うのでした。スイスはかなり困っています。けれどそれでもです。リヒテンシュタインに対して誠実に答えるのでした。彼らしく。

第千五百六十三話　完

2010・8・28

第千五百六十四話　今から探してます

第千五百六十四話　今から探してます

生徒会長は選挙で代わります。それでイギリスとフランスはこの制度に対して何よりも感謝していると共に希望を見出しています。

「もうあいつだけは会長にしねえぞ」

「っていうか生徒会長にもなってサミットにも出るんじゃねえよ」

普通サミットは大きな国が出席します。遂に二十に増えています。しかし生徒会長になるのは基本的に小さな国です。韓国は自分をいつも大国と言っていますが何故か生徒会長でもあります。

「いざって時の発言はしねえしよ」

「っていうか皆が集まったら空気になるあの特殊能力は何なんだ？」

うざいまでの自己主張と異常なまでの強烈な個性を持っていてもです。韓国は何故か皆が集まると急に空気になってしまうのです。

発言もしません。

「まあ今度の選挙ではな」

「他の奴が会長だ」

もう二人の中では決定事項です。

「さて、誰がいいかな」

「とりあえずあいつ以外だな」

「太平洋でも欧州でも何処でもいいな」

「ああ、とにかくあいつじゃなかったらいいな」

こんなことを言っています。

「まあ具体的には誰がいいかだけれどな」

「リヒテンシュタインとかどうだよ」

ここでフランスが言います。

「可愛い会長なんてな」

こんな提案をするのでした。フランスはかなり真剣です。

第千五百六十四話　完

2010・8・28

第千五百六十五話　お兄様の本音　☆

第千五百六十五話　お兄様の本音　☆

スイスは目を閉じてです。こう妹に話しました。

「いや」

「いや？」

「あの時見た瞬間に放っておけぬと思っただけである」

「私をですか」

「そうだ。そして」

目を閉じたままです。言葉を続けます。

「こうして元気になってよかったと思う」

「・・・・・そうなのですね」

「そうである。本当によかった」

「お兄様」

リヒテンシュタインはとても温かい気持ちになって。お兄さんに言いました。

「私」

「何であるか？」

「幸せです」

こう言うのでした。

「今とても」

「そうか」

「はい、このままずっと幸せでいたいです」

「ならだ。ずっと一緒にいるである」

「・・・・・はい」

二人で一緒に並んで座ってそれで話をしています。二人を包んでいるものはとても温かくて優しくて。それが二人を幸せにしていました。

第千五百六十五話　完

2010・8・29

第千五百六十六話　候補者

第千五百六十六話　候補者

「モナコなんかどうだろうな」
「あの娘かよ」
「ああ、中々よくないか？」
次期生徒会長にです。フランスはイギリスにこの娘を薦めるのでした。
「あれでしっかりしていてな」
「けれどあの娘は日本と前採めただろ」
鮪の話です。
「あれはちょっとやり過ぎただろ。それで日本を必要以上に切れさせたしな」
「まずいか？」
「外交にちょっと問題ないか？まあ今のあの馬鹿はモナコよりも遥かにあれだけれどな」
そもそも外交以前の問題かも知れません。
「だからな。あの娘はな」
「そうか、駄目か」
「かといってセボルガとかもな」
「冗談でやるのならいいけれどな」
「ああ、本気であいつ以外の人間にしないとな」
そこまで今の会長が嫌なのです。
「とにかくな」
「そうだよな。本当に誰がいい？」
「誰かいないのか？これといったのがな」
「探せばいないな」
まだこうした状況の二人でした。探してみると案外候補者がいません。二人にとってはどうにも有り難くはない状況です。それで悩

んでいるのです。

第千五百六十六話　完

2010・8・29

第千五百六十七話　サッカーでのこと　☆

第千五百六十七話　サッカーでのこと　☆

リヒテンシュタインもサッカーをします。この日の相手はイギリスです。

「悪いがこの勝負は俺が頂いていくからな」

「はい」

イギリスとリヒテンシュタインはお互いに見合っています。

「私も負けません。お互いに頑張りましょう」

「ああ、スポーツマンシップにのっとってな」

こう言い合ってそのうえで、です。まずは両者の国歌斉唱です。

まずはイギリスの国家です。そして。

「あれ？」

イギリスはここで声をあげました。

「また俺の国歌が？」

「いえ、これは」

ここでリヒテンシュタインが何かを言おうとします。

「そのですね」

「何だ？同じ曲が二回も流れたぞ」

「今の私達の国歌なんです」

リヒテンシュタインがおずおずと答えます。

「メロディー同じなんです。イギリスさんのと」

「何っ、そうだったのかよ」

「はい、実は」

「そういうこともあるんだな」

イギリスも妙に納得したことでした。イギリスとリヒテンシュタインの国歌は同じメロディーなのでした。それで同じ曲が二回流れたのです。

第千五百六十七話　　完

2010・8・30

第千五百六十八話　サッカーの勝負は

第千五百六十八話　サッカーの勝負は

サッカーの試合が終わりです。イギリスとリヒテンシュタインは互いを讃え合ってグラウンドを後にしました。イギリスはその後で自分の妹に言われました。

「結構苦戦だったのでは？」

「ああ、意外と強かったな」

イギリスもこう妹に答えます。

「それもかなりな」

「そう。やっぱりね」

「堅実なプレイだったぜ」

イギリスは顔の汗をタオルで拭きながら言います。

「それもかなりな」

「そうですか。それ程ですか」

「ああ。これからもっと強くなるかもな」

「最近サッカーも色々な国が強くなっていますね」

イギリス妹の眼鏡が光りました。

「日本さんにしてもですし」

「あいつもそうだな。かなり強くなったよな」

前のワールドカップを思い出しての話です。

「何か欧州勢や中南米だけじゃなくなってきたよな」

「ですから。お兄様も」

「ああ、わかってるさ」

そんな話をした試合の後のことでした。イギリスもリヒテンシュタインとの戦いを経てです。結構以上に気付いたものがあったので

負は

「じゃあな」

「はい」

した。

第千五百六十八話　完

2010・8・30

第千五百六十九話　とにかくあいつは駄目

第千五百六十九話　とにかくあいつは駄目

今は韓国が生徒会長です。けれど彼は仕事をしません。

そのかわり自分の宣伝とかばかりしています。というかそれが生徒会長の仕事だと勘違いしています。非常に困ったことにです。

「あいつが動くと三人いなくなるしな」

「結果として俺達ばかり尻拭いさせられるからな」

イギリスとフランスがうんざりとしています。

「ったくよ、どうなんだよ」

「あいつだけはな」

こう言って不平たらたらです。それでなのでした。

「とにかくもうあいつだけはな」

「ああ、生徒会長の再選は駄目だな」

二人はこう話します。

「とにかく他の奴を会長にしないとな」

「俺達の身がもたねえよ」

それで今次期会長候補を探しているのです。ところがそれでもです。その候補者が何故か見つからないのです。二人にとってはまずいことに。

「誰かいねえか？」

「いても引き受けてくれないしな」

これも問題でした。

「とりあえずリヒテンシュタインに声かけてみるか」

「そうだな」

それでもまずはリヒテンシュタインに話をしてみることにしました。生徒会長を選ぶのもかなり難しいです。とりあえず韓国以外の人にすることは。

第千五百六十九話　完

2010・8・31

第千五百七十話　リヒテンシュタインその頃

「そういえばお兄様は」
「何であるか」
リヒテンシュタインは自分のお家のお庭でホットミルクを飲みながらお兄さんに対して声をかけていました。お兄さんも同じホットミルクを飲んでいます。
「あれなのですね。生徒会の仕事は」
「会長の話は来るのだが引き受けないのである」
「どうしてなのですか？」
「我輩の主義に合わないのである」
だから引き受けないというのです。
「ああして全体で守り合うのではなく」
「自分の身は自分で、なのですね」
「その通りである」
こう妹に話すのです。
「それで引き受けないのである」
「そうなのですか」
「自分の身は自分で守る」
スイスの言葉が強いものになります。
「そして御前もである」
「私もですか」
「兄が妹を守るのは当然である」
スイスは強い声で言いました。
そんな話をしながら今はお兄さんとホットミルクを一緒に飲むリヒテンシュタインでした。二人は今もとても幸せな時間を過ごしています。

第千五百七十話　完

2010・8・31

第千五百七十一話　思い立ったら

第千五百七十一話　思い立ったら

そのリヒテンシュタインに白羽の矢を勝手に立てたイギリスとフランスはすぐに動きました。

「よし、じゃあ行くか」

「ああ」

こうして二人はリヒテンシュタインのところに向かおうとします。しかしです。

「待つのですよ」

「おい、何で御前が出て来るんだよ」

「またいきなり出て来たな」

シーランドです。彼が出て来たのです。

「シー君も連れて行くですよ」

こうイギリスに対して言うのでした。

「何かよくわからないけれど行ってやるのですよ」

「ああ、御前には関係ないからな」

イギリスは弟をあしらうようにして彼に言います。

「だからな。帰った帰った」

「嫌なのですよ。連れて行くですよ」

「だから御前には関係ないんだよ」

「俺達は重要な用事があるんだからな」

フランスは比較的優しくシーランドに言います。

「わかったら早く帰れ」

「また後でな」

「ふん、イギリスの野郎は薄情なのです」

連れて行ってもらえなくてすねてしまったシーランドです。もっとも二人にとっては今は自分達にとってかなり重要なことだったのでこれも仕方ないことでした。

第千五百七十一話　完

2010・9・1

第千五百七十二話　阪神の虎

第千五百七十二話　阪神の虎

今日本ではあの何年か前は激烈に負けまくっていた虎チームの調子がいいです。大阪を代表とした関西勢の面々はこのことに大喜びです。

日本もまんざらではありません。その中で日本はふと言うのでした。

「この虎は韓国さんの虎なのですよね」

「へえ、そうやったんかいな」

これは大阪も忘れていたことです。

「そういえばあいつ昔はうちにおったしな」

「はい、だからです」

韓国自身が一番否定していることですが事実であります。

「それでその時阪神の社長さんか誰かが強いものをモチーフにしたいということで」

「で、虎になって」

「韓国さんのところに虎がおられたので」

それで決まったというのです。

「今となってはもう昔の話ですが」

「そやな。ほんまに昔やな」

「そういえばその虎ですが」

阪神から虎の話になります。

「まだいるのでしょうか」

「どやろな。動物園にはおるけれどな」

「野生のものはいるのでしょうか」

「いてもかなりやばいんちゃうか？虎自体減ってるしな」

その辺りが心配されています。阪神もここぞという時にはかなりの高確率で負けますが実際の虎もです。深刻な状態にあるようです。

第千五百七十二話　完

2010・9・1

第千五百七十三話　それで行ってみた

「おおいリヒテンシュタインいるか？」
「話があるんだけれどな」
イギリスとフランスは早速彼女の家に来て呼びます。
「ちょっといいか？」
「中に入ってもいいか？」
「あっ、はい」
その声を受けてリヒテンシュタインがお家の中から出て来ました。
そうしてそのうえでイギリスとフランスを出迎えるのでした。
そうしてです。二人はお茶を飲みながらお話をします。
「まあ話ってのはな」
「御前にとってもいい話なんだけれどな」
「といいますと？」
リヒテンシュタインはその大きな目を少ししばたかせました。
「何なのでしょうか」
「ああ、次の生徒会長だよ」
「どうだよ」
二人はいきなり彼女にこう提案しました。
「御前さえよかったらな」
「後の三人には俺から言っておくからな」
「はあ。そうなのですか」
リヒテンシュタインはそれを聞いても特にリアクションはありません。しかしここでこんなことを言い出してきたのでした。その言ったこととは。
「ではお兄様と相談してみます」
「お兄様！？」

イギリスとフランスは同時に声をあげました。そのお兄様とは誰か、二人は知らなかったのです。

第千五百七十三話　　完

２０１０・９・２

第千五百七十四話　三人の相談

第千五百七十四話　三人の相談

「次の生徒会長誰がいいかな」
「そうあるな。別にあいつでも構わないあるが」
「それでもいいんじゃない？」
アメリカ、中国、ロシアは二人がロシアに内心警戒しながら話をしています。何処にいてもあまり仲のよくない二人と一人です。これで日本が入れば完璧です。
「そうだな。別に韓国でもいいか」
「困るのはあの二人だけある」
「僕達は避けられるしね」
韓国が何かしようとすると常に何処かに去る三人なのです。それでこんなことを言えるのです。
「じゃあそれでいいか」
「うん、異論はないある」
「僕も賛成」
こうして三人は韓国の続投を支持します。そして韓国に言いますが。
「そういうことでいいな」
「御前は次もあるぞ」
「サミットはそのままいていいからね」
「当然なんだぜ」
こう言われても彼の中ではそれは規定事項でした。
「じゃあ次も俺がやってやるんだぜ」
「イギリスとフランスには言っておかないからな」
「安心して続けるある」
「僕達のことは全然気にしないでいいからね」

何気に二人への行動だったりします。生徒会は今日もこんな調子です。

第千五百七十四話　　完

２０１０・９・２

第千五百七十五話　推薦の前に

「おい、お兄様って」
「兄貴がいたのかよ」
「はい」
リヒテンシュタインは驚くイギリスとフランスに対してこくりと頷きます。
「そうですが」
「初耳だぞ、おい」
「そんな話はよ」
どうやら二人はこのことを知らなかったようです。どうも意外と身近なことは知らないようです。
「それで誰なんだよ、兄貴って」
「イタリアか？それともオーストリアか？」
「いえ、スイスお兄様です」
その人だと聞いた時のイギリスとフランスの顔は。もう目の前にいきなり武装した兵隊さんが団体で出て来た時のようでした。
「おい、スイスかよ」
「あいつなのかよ」
「はい、そうですが」
「これはまずいな」
「ああ、まずいなんてものじゃねえぞ」
イギリスとフランスはここでひそひそと話をします。
「あいつかよ」
「こりゃリヒテンシュタインは駄目かもな」
いきなり暗雲が漂うのでした。次期生徒会長候補選びはです。暗雲に覆われた展開となりそうです。この二人の生徒会での今をそのまま表すかのように。

第千五百七十五話　完

2010・9・3

第千五百七十六話　原作者様のキャラがいい

第千五百七十六話　原作者様のキャラがいい

韓国は確かに生徒会長の仕事は全然しません。しかもそれで自分の宣伝の仕事までイギリスとフランスにやらせています。無茶苦茶な生徒会長です。

しかしです。女の子達からの評判は。

「背は高いし」

「スタイルいいし。特に足長いわよね」

「顔も童顔でいい感じ？髪型もいけてるし」

「学校の成績もそれなりだし」

どうも上々のようです。

「いい感じよね」

「そうそう。彼氏として横にいるのはね」

「かなりさまになるわね」

こんな評判です。決して悪くはありません。

けれどそれを聞くイギリスとフランスはその度に思うのでした。

「頭があれでも学校の成績はそこそこいいんだな」

「それで外見かよ。俺よりもてる気がするのは気のせいか？」

物凄くやりきれない気持ちになるのでした。

「ったくよ、料理の方も俺の料理よりずっと評判いいしな」

「俺のファッションは常にトップモードなんだぞ」

こうも思います。しかしです。

「そこの役員黄色と黒、ちょっと俺のポスター作るの手伝うんだぜ」

「何でこんな奴が人気あるんだ」

「それがわからねえんだがな」

最後はうんざりとした顔で呟く二人でした。

第千五百七十六話　完

2010・9・3

第千五百七十七話　韓国よりも苦手

第千五百七十七話　韓国よりも苦手

「あいつかよ」

「あいつがお兄さんなのかよ」

イギリスとフランスはうんざりとした顔になっています。

「俺あいつはな」

「ああ、俺もだ」

そのうんざりとした顔でお互いに言います。

「苦手なんだよな」

「そうなんだよな、何かな」

「下手に家に入ったらすぐに撃ってくるしな」

「しかもやたら気難しいしな」

二人はスイスが苦手なのでした。その理由もここで自分達から話します。

「御前話せないよな」

「御前も無理だよな」

今度はお互いを確かめ合います。

「あの馬鹿会長はそもそも言っても無駄だけれどな」

「スイスはな。そもそも話さえな」

できないのでした。そうした相手です。

「まずいな。誰かあいつと話せる奴は」

「ドイツ呼ぶか？あいつとも付き合いあるぞ」

「生徒会に関係ないから来ないだろ」

「早いところ生徒会に入れておかないとな、あいつはな」

こんな話をしています。スイスはどうしても苦手な二人なのでした。言いにくい相手というものは誰にでもあるものです。この二人でもです。

第千五百七十七話　完

2010・9・4

第千五百七十八話　欧州には強い

第千五百七十八話　欧州には強い

韓国はとにかく欧州勢には強いです。アメリカや中国には敬語になりますが欧州のどの国にもそんなことはしません。あまつさえです。

「モーツァルトは知ってるけれどあんたは知らないんだぜ」

「礼儀作法を勉強しなさいお馬鹿さん」

オーストリアさんに対してもこんなぞんざいな態度です。

「人の名前位覚えて挨拶をしなさい」

「日本さんの横に物凄く失礼なのがいるって聞いてたけれど」

ハンガリーもオーストリアさんの隣で呆れています。

「噂以上に」

「そこの可愛いのは誰なんだぜ？」

「ハンガリーよ。だから人の名前は覚えておきなさい」

「どうせ日本より下なんだぜ」

ここで韓国のウリナラ物差しが出ました。

「欧州に日本より上の国はないんだぜ」

「だから何だってのよ」

「そんな連中のことはあまり考えなくてもいいんだぜ」

本人達を前にして物凄い発言です。

「だから名前はあまり覚えられないんだぜ。ましてや太平洋の身内でもないんだぜ」

「このお馬鹿さんにつける薬はありませんね」

オーストリアさんも匙を投げました。

「しかし。日本が全ての基準のようですが」

「どうしてなんでしょうか」

とりあえず日本より下と見ている相手は意に介さない韓国です。

だから欧州勢には強かったりします。

第千五百七十八話　完

2010・9・4

第千五百七十九話　それでスイスが来た

第千五百七十九話　それでスイスが来た

リヒテンシュタインがお兄様を呼ぶとです。本当にすぐでした。
「何であるか」
「出て来たよ」
「遂にな」
イギリスとフランスはスイスのその顔を見てうんざりとした感じになっています。
「リヒテンシュタインはいいとしてな」
「こいつはな」
「イギリスとフランスではないか」
スイスはその二人を見て言います。
「我輩に何の用であるか」
「あの、お兄様ではなくです」
ここでリヒテンシュタインがお兄さんに対して話します。
「私にです」
「御前になのか」
「それでお兄様もと思いまして」
「左様であるか。それではである」
「はい」
「リヒテンシュタインに話をしてくれ」
スイスはあらためて二人に対して言いました。
「是非な」
「できれば御前はいて欲しくないんだがな」
「それは無理だよな」
イギリスとフランスは何気に自分達の本音を言っています。二人にとってはどうにも困り果てた展開になってしまっているのでした。

第千五百七十九話　完

2010・9・5

第千五百八十話　生徒会長候補だった人

第千五百八十話　生徒会長候補だった人

今は韓国が生徒会長です。しかし最初の候補者は。

「どうも僕だったらしいですね」

「そう聞いてるわ」

香港がタイに対して言っています。同じタイヘイ戦隊です。

「けれどならなかったのね」

「何か韓国君が自分もと凄くてそれでアメリカ君達が折れましたからね」

そういうことになっています。一応三人が折れたことになっているのです。

「それで僕はというわけで」

「それ程悲しいようには見えないけれど」

「はい、悲しいとかそういうことはありません」

タイもこう答えます。

「別に」

「そうなのね」

「生徒会長はまず学校の皆さんの為にするものですよね」

いつもの穏やかな微笑で言います。

「僕にその力がないからということです」

「それでだというのね」

「そうです。御仏がそう導かれたのです」

タイは熱心な仏教徒です。それでここでは神様ではなく仏様が出て来るのです。この辺りとてもタイ的と言えばそうなるでしょうか。

「だからです」

「今の会長とえらい違いね」

これだけは確かです。会長は今日も会長の仕事をしませんから。

第千五百八十話　完

2010・9・5

第千五百八十一話　話せない

第千五百八十一話　話せない

「それで何であるか」
「ま、まあな」
「ちょっとな」
「リヒテンシュタインに用があるとのことだが」
イギリスはそのスイスに対して口ごもっています。
「それは何であるか」
「あれだよ。つまりな」
「その、まあ」
「あれとかそのではわからないのである」
この場合はスイスの方が正論です。しかしその口調に問題があります。クールというものを超えて突き刺さるような、そんな言葉なのです。
「それで何であるか」
「だからな。俺達とな」
「一緒に仕事をして欲しいんだよ」
何とかここまで言った二人でした。
「いいか？それで」
「とにかく。仕事をだな」
「仕事と言っても色々あるのであるが」
スイスはまた二人に言います。
「しかし。あれだな」
「あれ？」
「あれって？」
「あれも仕事をするのはいいであるな」
この言葉はです。二人にとって福音になるかも知れないものでした。今それが出て来たのです。

第千五百八十一話　完

2010・9・6

第千五百八十二話　面白くない相手

「あの、ベトナムさん」
「どうしたの？」
「あのですね」
台湾が少し戸惑った顔でベトナムに対して声をかけています。
「あまりロシアさんとお付き合いはしない方がいいかも知れませんよ」
「アメリカと中国が、っていうのね」
「はい、日本さんもですし」
とにかくこの三人とロシアは仲が悪いです。とりわけ日本はです。もう維新の時からロシアを恐れていました。その敵対心はかなりのものになっています。
「ですから」
「まあ他の国ならそうね」
ベトナムは涼しい顔でこう言うのでした。
「けれど私はね」
「違うんですか」
「だって勝ってるから」
だからだというのです。
「大丈夫よ。あの二人にもね」
「日本さんに対してもですか」
「そうよ。三人に対しても交流は続けてるでしょ」
「はい」
それは事実です。ベトナムの人付き合いはかなり広いです。あっという間に人脈を築くのが得意なのです。
「アメリカと中国のことを考えたらね。ある程度ロシアと付き合っていいのよ」

「そうでしょうか」
　これはちょっと台湾にはできないことでした。まさにその人だからこそ、というものでした。

第千五百八十二話　　完

２０１０・９・６

第千五百八十三話　やっぱり駄目

第千五百八十三話　やっぱり駄目

何とか力を振り絞ってです。イギリスとフランスはスイスに対してあのことを言うのでした。

「実はリヒテンシュタインをな」

「生徒会長にと思ってるんだがな」

「それで我輩に話をしに来たのか」

「ああ、どうだ？」

「悪い話じゃないだろ」

まずはこう言う二人でした。

「妹が生徒会長ってな」

「どうだよ」

「そうであるな」

スイスは二人の話を聞いてです。まずは一呼吸置きました。そうしてそのうえで出してきた言葉は何かというとです。

「あいつには向かないであるな」

「そうか、やっぱりな」

「駄目か」

「御前もどうなのだ」

落胆する二人に続いて妹にも尋ねるのでした。

「それでどうなのだ」

「私も。そういうことは」

リヒテンシュタイン自身もあまり積極的な様子は見せません。こうしたところは実に控えめな彼女らしいと言えばらしいと言えましょう。

「やっぱり」

「そういうことである」

こうしてあっさりとこの話は終わりました。何事もなかったかの

様にです。

第千五百八十三話　完

2010・9・7

第千五百八十四話　会長になる資格

第千五百八十四話　会長になる資格

実はオーストリアさんもかつて生徒会長をしていたことがあります。そのことを話すとです。

「普通にさせてもらっていましたが」

「そうですよね。まあ昔の上司のお話が出たりしましたが」

「それでもやらせてもらっている間は何もなく」

「はい、本当に」

いつも通りハンガリーがオーストリアさんの話を聞いて頷いています。

「ただ。あまり大きな国はなれませんから」

「つまり私は今は小さな国ということですね」

「人口はそれ程ではなくなりましたね」

「はい、確かに」

今ではハンガリーの方が若干多い程です。オーストリアさんは今は人はあまり多くはないのです。

「それでさせてもらったのですが」

「けれどそれを考えたらタイさんはオーストリアさんの六倍位はいますよ」

ハンガリーはここでこのことを言いました。タイは人口は結構多いのです。太平洋では他に多い人がこれでもかといますけれど。

「それでもなんですね」

「国の豊かさもありますしね」

「色々な方面からチェックされるんですね」

「それで大きいと駄目です」

「日本さんやドイツさんは絶対に駄目なんですね」

「はい、イタリアもです」

枢軸の三人も少なくとも駄目なのでした。こうした辺りのチェッ

クは中々以上に厳しいのです。けれど韓国は何故か今生徒会長です。

第千五百八十四話　　完

２０１０・９・７

第千五百八十五話　撃沈してもまだ

第千五百八十五話　撃沈してもまだ

スイスにリヒテンシュタインの生徒会長立候補を駄目出しされてしまったイギリスとフランス、二人はすごすごとリヒテンシュタインのお家から出ました。

しかしです。それでもまだ諦めてはいません。

「まだだぜ」

「ああ、話はこれからだ」

こんなことを言いながらです。

「次は誰の家に行く？」

「そうだな。モナコとかどうだ？」

フランスがここで言います。

「それか他の奴とかな」

「他の奴？誰だよ」

「御前の弟とかどうだ？」

こんなことをイギリスに対して言います。

「ほら、何とかいうのいただろ」

「シーランドなら止めておけよ」

イギリスはすぐに彼のことだと察しました。

「あいつはな」

「駄目か」

「大体あいつ全校集会にも出られないだろ。駄目だからな」

「そうか。じゃあ他の奴だな」

「ああ、誰かいる筈だよ」

かなり希望的観測になっています。とにかく韓国以外の生徒会長なら誰でもいい、今二人はこう切実に考えているのでした。かなり必死です。

第千五百八十五話　完

2010・9・8

第千五百八十六話　シーランド以外にも

第千五百八十六話　　シーランド以外にも
「えっ、シー君以外にもですか」
「んだ」
最近仲のいいスウェーデンがシーランドに対して話しています。
「いるだ」
「そんなの初耳ですよ」
「それでもいるだ」
かなりダイレクトに話すスウェーデンです。
「おめ以外にもそういう国があるだ」
「そうだったんですか、シー君だけじゃなかったんですね」
シーランドは何気にかなり嬉しそうです。
「それじゃあ会いに行ってもいいですね」
「好きにするといい」
スウェーデンはこうシーランドに言います。
「おめの好きなように」
「はい、じゃあそうしますね」
「悪いが俺は一緒に行けない」
ところがスウェーデンはそうだというのです。
「一人で行くといい」
「えっ、何でなんですか？」
「フィンランドのところに用事がある」
だからだというのです。
「車とか怖い国に気をつけて行って来い」
最後の言葉がかなり気になるものでした。実はスウェーデンのすぐ傍にはです。あのウォッカの人がでんといたりするのですから。

第千五百八十六話　　完

2010・9・8

第千五百八十七話　探せばいました

第千五百八十七話　探せばいました

諦めないイギリスとフランス、その中で見つけたのは。

「何かイタリアのところにもいるな」

「それにオーストラリアにもな」

二人共その人を見つけたみたいです。

「そっちに行くか？とりあえずな」

「そうだな。とにかくあいつ以外だったら誰でもいいからな」

二人共もうこんな考えになっています。

「幾ら何でもあいつよりとんでもないのはいないからな」

「ああ、そうだよな」

しかし世の中こうした考えでより酷い人間を引き当てたりするものです。安直な考えは何かと騒動や破滅の元になってしまうものなのです。

「とにかく行ってみるか」

「最初はどっちに行くんだ？」

「イタリアだな」

イギリスはそこを選びました。

「まずは近い場所から行こうぜ」

「ああ、じゃあそうするか」

フランスも彼のその言葉に頷きます。

「それじゃあ今からな」

「行くとしようぜ」

「生徒会長になってもらうか」

かつては学園で有無を言わせぬ力があった彼等もです。今ではこうして会長のなり手を捜しています。世の中変われば変わるものです。

第千五百八十七話　完

2010・9・9

第千五百八十八話　小さい国

第千五百八十八話　小さい国

「私小さいけれどね」
「人は結構多いじゃない」
台湾が香港に対して言っています。
「ちょっとしたものじゃない」
「そうかしら」
「そうよ。結構多いわよ」
また香港に言う台湾です。
「そのことへの自覚はないのね」
「特に。ただ」
「ただ？」
「モナコとかリヒテンシュタインは私より人が少ないのね」
「そうよ、少ないのよ」
その通りだといいます。太平洋の国々の特徴として人が多いことが挙げられます。台湾にしても二千万も人がいたりするのです。欧州だと多い方です。
「ずっとね」
「そうだったのね」
「まあ太平洋は人が多いから」
「校内の生徒の半分だしね」
そこまでいるのです。尚最近インドの生徒数が増えています。そのことが密かに話題になっています。インドがどういった人なのかまだ誰も知りませんが。
「あんたもその中にいるのよ」
「そうなのね」
その密かに人の多い香港でした。意外なことにです。

第千五百八十八話　完

2010・9・9

第千五百八十九話　そんな国があったのか

第千五百八十九話　　そんな国があったのか

「ええと、セボンガっていうのか」

「それとワイか！？」

この国はです。イギリスもフランスも。

「誰だよ、それ」

「っていうかそんな国あったのか？」

実は二人共そんな国があったことを全然知りませんでした。今はじめて聞いたのです。

「ええと、イタリアのところにいて丘の上にあるのか」

「オーストラリアの一家が上司か。何だこりゃ」

二人共これには首を捻ります。

「っていうかどっかの家族が勝手に自分達を国だって言ってねえか？」

「それで国が自我を持ったのかよ」

つまりです。これは。

「シーランドと同じパターンじゃねえかよ」

「イタリアもオーストラリアも何考えてるんだ？」

「この連中生徒集会に出てないよな」

「見たことねえぞ」

生徒集会に出ているかいないか、これはかなり重要なことです。例えば台湾は生徒集会には訳あって出られません。それで結構以上に彼女は困ったことにもなっています。

「とにかく。こいつ等はな」

「ああ、駄目だな」

二人は残念な顔で言いました。

「折角あの馬鹿会長の後任が見つかったって思ったのにな」

「何てこった」

こうして話はまた振り出しです。しかしそんな国があることはわかったのです。

第千五百八十九話　　完

２０１０・９・１０

第千五百九十話　シー君の友達探し

第千五百九十話　シー君の友達探し

「ラトビア、友達はいるですか？」
「一応ドイツさんと最近。ＥＵにも入られたし」
ラトビアも苦労しています。何とか友達を作ろうと苦労しているのです。
「リトアニアやエストニアみたいな親しい人ができたらいいんだけれどね」
「実はシー君もなのです」
ここで寂しい顔になるシーランドでした。
「親しいお友達が欲しいです。スーさん以外にも」
「そうだよね、気持ちわかるよ」
ラトビアにとってはお友達ができることは切実な話です。
「日本さんみたいにね。普通に人が寄ってきてくれるのだったら苦労はしないのに」
「けれど日本はお家の人が友達いないって言う人いるのです」
「日本さんのところのマスコミは滅茶苦茶おかしいから」
このことは有名だったりします。
「あと田中ガイエスブルグだよね。あれはもう作家として終わった人だから」
「そうなのですか」
「そういう人達の言うことは気にしなくていいからね」
「じゃあ日本は友達多いのですね」
「いつも何も言わなくても台湾さんと韓国君が来るからね」
この辺りかなり凄いです。日本の場合はいつも来る二人の相手が大変なのです。しかもこの二人お互いに仲がかなり悪かったりします。
「とにかく。シー君親しいお友達探すのです」

「うん、頑張ってね」
自分も同じ境遇だからこそ。応援せずにいられないラトビアでした。

第千五百九十話　　完

２０１０・９・１０

第千五百九十一話　保護者が問題

「そいつ等だけれどな」
「ああ」
フランスがイギリスの言葉に応えます。
「とりあえずいるのはわかった」
「俺もだ」
「何処にいるのかもな」
「そうだな。そうしたことはな」
いることといる場所はわかりました。しかしそれで全部終わりかというとそうではないのです。むしろそれからだと言っていい位です。
「で、生徒会長受けてくれるか？」
「その前に話ができるかだよな」
「またスイスみたいなのが出て来るとかじゃねえだろうな」
イギリスはこのことをかなり不安に思っているのでした。
「それで今回話がややこしいことになってるんだからな」
「イタリアにオーストラリアだからな」
今回の保護者はこの二人です。
「それとロマーノだけれどな」
「じゃあ大丈夫か？オーストラリアはオーストラリアで問題があるけれどな」
「太平洋の奴はそんなのばっかだな」
何気にこうも思ったフランスでした。
「とにかくそれじゃあな」
「保護者とも話するか」
話はそこに行きました。とにかく問題は保護者です。スイスがそのいい例です。

第千五百九十一話　完

2010・9・11

第千五百九十二話　保護者になってほしくない国ナンバーワン

第千五百九十二話　保護者になってほしくない国ナンバーワン

「俺は日本のところで地獄を見たんだぜ」

「そうなんだね」

リトアニアもただ聞いているだけです。韓国はいつもこう皆に言っているからです。実際は日本での生活では日本の上司にかなりよくしてもらっているのはその皆が知っているからです。

「それで俺こう思うんだぜ」

「何て？」

「ロシアのところに行った方がよかったってな」

「えっ、ええっ！？」

それを聞いてです。思わず飲んでいたコーヒーを吹き出してしまったリトアニアでした。こんな言葉を聞いたのは彼が国になってはじめてです。

「ロ、ロシアさんに！？」

「アメリカさんや中国兄貴のところに行くよりも俺に合いそうなんだぜ。だからこう思うんだぜ」

「そ、それは絶対に止めた方がいいよ」

リトアニアは真っ青になって顔中に汗を流しながら韓国に忠告します。

「あの、どうなっても知らないから」

「そんなに凄いんだぜ？」

「凄いよ。日本さんのところなんかよりずっと」

「じゃあやっぱり行けばよかったんだぜ」

韓国はリトアニアの言葉の意味を実に自分に都合よく脳内変換しています。この辺りの自分にとっての都合のよさはある意味見事です。

「そうしたら俺は今時は」
「死んでたよ、絶対に」
何故かこの場にはいない筈なのにあの強大なプレッシャーを感じるリトアニアでした。こんな言葉を聞いたのは本当にはじめてでした。

第千五百九十二話　　完

２０１０・９・１１

第千五百九十三話　シーランドの後輩　☆

第千五百九十三話　　シーランドの後輩　☆

ワイの話を聞いたシーランド、早速大騒ぎです。
「オーストラリアのところでワイ公国建国ですか！？」
ニュースを見て言っています。
「僕の正統な後輩ができたのですよ！」
そのことが物凄く嬉しいみたいです。その嬉しさのあまり。
「先輩として御前の友達になってやるのですよ！」
茶色の髪を後ろで束ねている大きな目が少したれ目になっている女の子です。眉毛がとても小さいです。背はシーランドより小さいです。スカートが女の子の証です。
「シー君の歴史は」
「言わなくていいよ、知ってるから」
シーランドのところにです。ずけずけと来て言ってきました。
「えっ、そうなのですか？」
「ひょっとして仲間だと思ってたの？」
「も、勿論なのです」
「あんたイギリスに認めてもらってないじゃない」
シーランドにとってはとても辛い現実です。
「私認められてるもん」
「な、何ですと！？」
シーランド、これにはさらにびっくりです。
「シー君もまだだっていうのに」
「私あんたと違うから」
こう言うのでした。シーランドにとっては後輩どころかとんでもない女の子です。何気にいつも持っている箒が魔女の女の子みたいです。

第千五百九十三話　完

2010・9・13

第千五百九十四話　寛容か狭量か

「おいどんの中に国ができようが構わんでごわす」
オーストラリアは豪快に笑って言います。
「面白いでごわす」
「そうばい。そうしたこともあってよかとよ」
ニュージーランドも彼の言葉に賛成です。
「私もそれでいいばいよ」
「世の中こうしたふうに色々とあるばい」
オーストラリアの豪快な笑いはそのままです。
「さあ、何かと楽しくやるでごわすよ」
「羊にキーウィもあるばい」
こう明るく豪快な二人です。ところがです。
いざ鯨のこととなると。今日もまた二人で日本と対峙しています。
「どうしても食べるでごわすな」
「日本さんも強情ばい」
「それが私の文化ですので」
日本はいつもの表情です。ポーカーフェイスと言うべきでしょうか。
「ですから」
「ふん、それは許さんでごわすよ」
オーストラリアも引きません。
「絶対に止めさせるでごわす」
「では私は何があっても食べるとしましょう」
鯨のことになるとこうなってしまいます。オーストラリアも意外なところでこだわります。自分の中に国ができても平気だというのにです。

第千五百九十四話　完

2010・9・13

第千五百九十五話　慌てて電話を　☆

ラトビアのところにニュースが入りました。
「オーストラリア政府は一家をワイ公国として独立を承認し」
「えっ、これはまずいよ！」
ラトビアはすぐに察しました。
「絶対にシー君そこに行ってるよ！」
彼にはすぐにわかることでした。伊達に苦労してきているわけではありません。苦労は人や国をみちびくものの一つですから。
それで慌ててシーランドに電話を入れます。
「そして間違いなく今泣いてる！」
本当によくわかっています。
「ああ何て君は手間がかかる子なんだ！」
こう言いながら電話をかけます。彼の方が泣いています。
「もしもし！シー君大丈夫！？」
そうしてかけるとです。意外な反応でした。
「えっ、仲良くなったの。そうか、よかったよ」
ところがです。シーランドはこう言い出しました。
「けれどもう一国いやがったのです・・・・・・」
「えっ、もう一国って？」
「セボルガが」
「セボルガ？何それ」
「セボルガ、セボルガなのですよーーーーーーーーっ！！」
やっぱり泣きだすシーランドでした。どちらにしてもです。シーランドにとっては弱った状況になってしまっているのでした。ラトビアはもっと弱りますが。

第千五百九十五話　完

2010・9・14

第千五百九十六話　友達？

第千五百九十六話　友達？

ラトビアはシーランドの面倒をよく見ています。しかしです。

「御前とあいつ国交あったか？」

「ないんですけれど」

ラトビアはイギリスの問いにこう返します。

「実は」

「そうか。そういや大使館とかねえよな」

「はい、ありません」

「それで何であいつが御前のところに電話かけるんだ？」

国交がなくてもです。実際にそうしたことがよく行われているのです。イギリスにしても気にならないわけではないことであるのです。

「それはどうしてなんだ？」

「まあお付き合いってことで」

「それだけか」

「はい、それだけですけれど」

「ううん、まあいいけれどな」

イギリスも特に咎めたりはしませんでした。

「それならそれでな」

「そうなんですか」

「あいつの相手は適当にしてやってくれ」

イギリスはここでラトビアにこんなことを言うのでした。

「宜しくな」

「わかりました」

最後は何かお兄さんっぽいイギリスでした。ラトビアも何だかんだでシーランドの相手をしています。確かに手のかかる子ではありますが。

第千五百九十六話　完

2010・9・14

第千五百九十七話　セボルガ

第千五百九十七話　セボルガ

イタリアによく似た髪とくるるんに穏やかな感じの優しい顔立ち、彼がセボルガです。

その彼が生まれた時はこんなのでした。

「そういえばうちってさ」

「そうよね。歴史的にね」

「イタリアじゃないんじゃない？」

「じゃあ独立しよう」

こう話してです。そのうえで何か気付いたら独立していたのです。

これにはイタリアもびっくりしましたがところが独立してからは。

「あのさ、君ってさ」

「はい。何でしょうか」

セボルガがそのイタリアに対して応えます。

「何かありますか？」

「独立したんだよね」

こう尋ねるイタリアでした。

「俺から」

「そうですけれど」

「じゃあ何で俺の家にいるの？」

怪訝な顔になっての言葉です。

「それがわからないんだけれど」

「僕の家はここですから」

「いや、ここ俺の家なんだけれど」

何と平気な顔でイタリアにいたままです。独立してもです。何故か自分のお家にいるセボルガが不思議でならないイタリアなのでした。

第千五百九十七話　完

2010・9・15

第千五百九十八話　いても変わらない

第千五百九十八話　いても変わらない

そんなセボルガです。しかし観光客が来て財政的には喜ばしい状況になっています。それでこんなことを言う程なのであります。

「いやあ、独立してよかったですね」

「っていうかさ。だからさ」

イタリアがまた彼に対して言います。

「何で俺の家にいるのかな」

「ですからここが僕の家ですから」

「俺の家の中に君の家があるって」

「いいじゃないですか。悪いことはしていませんしちゃんとイタリア市民として生きていますよ」

「いや、君独立したんじゃないの？」

イタリアにしては珍しくかなり率直な意見です。

「そうじゃないの？」

「それはそうですけれどね」

「何か言ってることが矛盾してるし」

「気にしないことです。それよりもイタリアさん」

「何？」

「お腹空きましたし何か食べませんか？」

にこりと笑って彼を食事に誘います。

「スパゲティでも。ワインもありますよ」

「そう。それじゃあさ」

「はい、ピザも一緒に」

何だかんだと言ってもセボルガを認めてはいるイタリアでした。

もっとも最初からそんなに強く言ってはいませんが。今日は二人でお食事なのでした。

第千五百九十八話　完

2010・9・15

第千五百九十九話　優しいイタリア

第千五百九十九話　優しいイタリア

「まあいいか」
「そうだな」
イタリアだけでなくロマーノもこう言っています。
「セボルガも悪い奴じゃないし」
「ああ、俺は別にいい」
ロマーノもこれで済ませています。
「それに観光客は俺の家にも来てくれるしね」
「だったらいいな」
「うん。じゃあ兄ちゃん」
イタリアはここで自分のお兄さんに対して言いました。
「これからだけれど」
「何だ？」
「マカロニ食べない？」
提案するのは食事でした。それもマカロニです。
「今から作るつもりだけれど」
「セボルガも呼んでか」
「うん、俺この前セボルガに御馳走になったからさ」
それで今度はそのお返しにイタリアがというのです。それでこうしてロマーノも誘って三人で楽しもうというのです。こういう辺り実にイタリアです。
そしてロマーノも。笑顔で応えます。
「今度だけはいいぞ」
「そう。それじゃあ」
実はこれは今回だけではないロマーノだったりします。けれど三人はとても幸せです。上手くやっていっていると言うべきでしょう。

第千五百九十九話　完

2010・9・16

第千六百話　そうした国も多い

「実は私もなのよね」
「そうよね」
ふう、と溜息を出す台湾に対してベトナムが応えます。
「生徒集会に出られないしね」
「そうした時はいつも出られないメンバーで集まって色々お話してるけれど」
「寂しい？やっぱり」
「ええ、結構ね」
こうベトナムに話します。
「けれど生徒集会に出られない子って結構多いから」
「そうなの」
「そう。とはいっても韓国の北のあそこは誰とも付き合わないけれど」
「あれはどうでもいいじゃない」
太平洋のメンバーの中でも除け者になっています。殆ど誰とも付き合わない、まさに真性引き篭もりなのがその北の方の誰かです。
「そうでしょ。あんなの」
「まあね。ただ私あの半島の面子とは腐れ縁だから」
「日本さんのお家にいた時からね」
「そうなの。それでもね」
ここでまた溜息を出す台湾でした。
「生徒集会に戻りたいわね」
「その気持ちわかるわ」
台湾も実はそうした悩みがあったりします。結構大きくなってきている彼女のお家ですが。それでも悩みはあるのでした。彼女にとっては深刻なものが。

第千六百話　完

2010・9・16

第千六百一話　まだ諦めていない

第千六百一話　まだ諦めていない

セボルガもワイも駄目とわかったのにです。イギリスとフランスはまだ諦めていませんでした。

「とにかくあいつ以外の生徒会長だ」

「誰かいないのかよ」

彼等にとっては切実な問題です。とにかく無茶苦茶な生徒会長だからです。タイプこそ違えど殆ど森長可な人だからそれも当然ですが。

「で、募集してもな」

「誰も来ないしな」

実際次期会長を募集してもです。いないのでした。

「となると何だ？またあいつか？」

「それは困るな。っていうか俺達が死ぬぞ」

フランスも韓国だけは駄目でした。

「またキムチだらけの飯を食うか？」

「勘弁しろ。俺の口には合わねえんだ、あいつの料理」

イギリスですらです。韓国の料理は口に合わないのです。

「とにかくあいつだけはな」

「ああ、駄目だからな」

「それで誰か来ないか？」

「知力武力魅力統率力政治力は問わないぞ」

物凄いハードルではあります。

「生徒会長になったら俺達が全力でバックアップするからな」

「何だったら座ってるだけでもいいからな」

こうした条件まで付けて募集する二人でした。とにかく誰でもいい、こういった心境にまで達する域になっている今の二人なのでした。

第千六百一話　完

2010・9・17

第千六百二話　朝に飲むもの

第千六百二話　朝に飲むもの

日本はお茶が好きです。それでいつも飲んでいます。特に朝です。飲んでからそうしてから一日をはじめます。それが日本ですがこれがオーストリアさんになるとです。

「はい、どうぞ」

「有り難うございます」

ハンガリーから優雅に受け取ったものはコーヒーです。それも上に生クリームをたっぷりと置いたウィンナーコーヒーです。オーストリアさんの朝はここからはじまります。

「味はどうですか？」

「いつも通りですよ」

オーストリアさんはハンガリーの問いに穏やかな笑顔で返します。

「素晴しいものです」

「有り難うございます」

「コーヒーの朝ですか」

日本はそんなオーストリアさんのお話を聞いて思うのでした。

「着物の朝には似合いませんね」

「そうですよね」

日本妹がお兄さんの言葉に応えます。

「それに私達の朝御飯は」

「お米に塩鮭にお味噌汁に納豆に海苔に」

「コーヒーは合いませんよ」

妹はまたお兄さんに言いました。

それでお茶なのです。しかしこのお茶がこれまた実に、です。心地よく心を癒してくれます。日本のいつもの朝のお友達なのです。

第千六百二話　完

2010・9・17

第千六百三話　会長の縛り

「日本だとなれるかな」
「性格的には向いてるあるな」
「まあそうだよね」
アメリカと中国、ロシアの生徒会さぼり組がこんな話をしています。アメリカと中国は今だけはロシアと馬が合っているようです。
「性格としてはいいよね」
「けれど力があり過ぎるからな、日本は」
「だから駄目ある」
その外見からは想像できないまでにです。日本は強いのです。
そのせいでなのです。彼は生徒会長にはなれないのです。生徒会長になるには力が強過ぎてはあまりよくないとされているのです。
暗黒の了解というやつです。
「だから会長を選ぶのはいつも苦労するんだよな」
「全くあるな」
「いつも何とかなってるけれどね」
三人はとても気楽に話しています。
「けれど韓国が本当になるなんてな」
「立候補するとも思わなかったある」
「そうそう。韓国君も結構力あるのにね」
それでもこう言うのでした。そして、です。
この日も生徒会の仕事をさぼる三人でした。そしてすることは。
「日本君のお家に行こうかな」
ロシアが黒い笑みと共に言います。たったそれだけのことでもです。彼が言えばとても不穏な空気に満ちるから恐ろしいものです。

第千六百三話　完

2010・9・18

第千六百四話　国でないとなれない

第千六百四話　国でないとなれない

生徒会長になるにはです。結構条件があります。例えばです。

「僕は会長になれないですよね」

「わいもやな」

「はい、残念ですが」

日本が能登と大阪に対して答えます。

「国ではありませんから」

「僕達日本さんのお家にいる地方ですからね」

「だから無理やな」

「その通りです。国でないとなれません」

そうだと。日本は話します。

「都道府県や州や省ではです」

「その辺り厳しいですよね」

「まあ当然って言えば当然やけれどな」

「ロシアさんがソ連のお家に皆で暮らしていた時はウクライナさんとベラルーシさんは国としての扱いも受けていたようなのですが」

日本はここでこうも話します。

「それでも今はです」

「ロシアさんだけになりましたからね」

「それはないか」

「その通りです。会長は国でないとなれないのです」

かといってその国があまりにも強かったらなれないわけで。何かと会長には制約が多くてそれが縛りになっています。日本もそのことはわかっています。

これがヘタリア学園の生徒会長です。なる条件はわりかし厳しいです。

第千六百四話　完

2010・9・18

第千六百五話　朝からお皿を　☆

第千六百五話　朝からお皿を　☆

ドイツは朝起きてです。まずはこう思いました。

「全く昨日もな」

思い出すのはです。彼のことです。

「イタリアがヘマして大変だったな」

本当にドイツに迷惑ばかりかけています。けれどそんなイタリアに対しても何だかんだで救いの手を差し伸べるのがドイツです。

そんなことを思いながら食堂に出るとオーストリアさんがいました。

何か食器をなおしています。ところが。

持っているお皿をです。落としてしまいました。

陶器のお皿を落とせばどうなるか。割れるに決まっています。それはドイツのお家でも当然ながら一緒のことで。その結果はといいますと。

割れてしまいました。派手な音を立てて。

ドイツはその場面を見てしまいました。

「・・・・・・おい」

そして何か言おうとします。

「何をした」

こうオーストリアさんに尋ねます。ところが。

「お忘れなさい！」

こう言ってきました。必死の顔で。

「今のはなかったことになりました」

「・・・・・・幾ら何でもそれは無理だろ」

ドイツはまだ半分寝ながらオーストリアさんに対して言いました。

そんな朝でした。イタリアだけではないドイツです。

第千六百五話　完

2010・9・19

第千六百六話　イタリアの朝

第千六百六話　イタリアの朝

イタリアは朝起きるとです。まずこう思います。
「今日は何して遊ぼうかな」
最初に遊ぶことを考えます。
そして朝食を食べてそれからです。
登校して日本にです。まず頼むことは。
「昨日の宿題見せてくれないかな」
「あの、私とイタリア君はクラスが違いますが」
「それでも。御願いできるかな」
日本にさらに御願いします。
「この宿題日本のいるクラスと同じだからさ」
「それでなのですか」
「それなんだ。御願いできる？」
「わかりました。ですが」
「ですが？」
「まず韓国さんにお見せしないといけません」
生徒会長も当然宿題なんかしてきません。そんなことよりも起源の主張が大事だと言わんばかりの日常を送っているのが彼なのです。
「ですからその後でなら」
「うん、じゃあそれで御願いするよ」
「そういうことで」
「本当にいつも助かるよ。有り難う、日本」
ドイツだけにお世話になっているのではありませんでした。日本にもです。けれどそんなイタリアが皆大好きだったりするのです。
これも人徳、いや国徳でしょうか。

第千六百六話　完

2010・9・19

第千六百七話　何故か人のせい　☆

第千六百七話　何故か人のせい　☆

お皿を落としたオーストリアさん、落ち着いてからドイツに対して言います。

「全部貴方のせいです」

「何で全責任が俺に押し付けられてるんだ」

「貴方が悪いからです」

「御前それが理屈になっていると思っているのか」

いい加減頭にきたドイツはです。このことを言いました。

「大体御前居候の癖に態度がでかいぞ」

「静かになさい」

しかしオーストリアさんの方が一枚上手です。こう返します。

「我が国の偉人が残した言葉があります」

「何だそれは」

「ベートーベンの言葉です」

これまた難しい人です。

「不幸の中にあっても王者の生活であった。この生活の核心は高貴であった」

「ちょっと待て」

ドイツはこのことにも突っ込みを入れます。入れずにはいられませんでした。

「ベートーベンはドイツの音楽家の筈だが」

「違いますよ、オーストリアです」

しかしオーストリアさんも反論します。

「このお馬鹿さんが」

「アホか御前はと言われてるのと同じだな」

全く同じ意味です。しかし今度はベートーベンです。ドイツとオーストリアさんの仲はどうも上手くいかないものであるようです。

第千六百七話　完

2010・9・20

第千六百八話　難しい人でした

「ベートーベンさんですが」
「まず気難しい人でした」
オーストリアさんが日本に対して話します。とにかくベートーベンという人は人間としてはとても付き合いにくい人だったのです。
「それに自信家で」
「尊大だったそうですね」
「はい、自分の音楽は万人がひれ伏すものだと考えていました」
これは本当のことです。
「しかも癇癪持ちでした」
「人付き合いが苦手だったと見受けられますが」
「シューベルトは多くの友人に囲まれながらも孤独だったと言われています」
オーストリアさんはシューベルトから話します。
「しかしベートーベンは多くの敵に囲まれ孤独でした」
「敵ですか」
「代表がゲーテです」
ある意味豪華過ぎます。
「彼とは散歩中に些細な理由で大喧嘩をしてからです」
「その前によくあの御二人が一緒に散歩できましたね」
「案の定そうなりました」
気難しい人物が二人揃えば、です。そうなってしまうのも道理でした。オーストリアさんはそのゲーテの言葉も日本に話します。
「彼は野獣だ。しかしいたわってやらねばならない。哀れむべき野獣なのだから」
「深い言葉ですね」
とにかく難しい人だったのは間違いありません。

第千六百八話　完

2010・9・20

第千六百九話　第三勢力登場　☆

「全く御前という奴は！」
ドイツはいつもイタリアに言う言葉をオーストリアさんに対して使っています。
「いいとこ取りするな。上司を押し付けた癖に！」
「マリアツェるを引っ張るのはお止めなさい」
しかしオーストリアさんは冷静なままです。本当にマイペースな人です。
「ベートーベンはボン生まれだ。だから絶対にドイツ人だ」
「いえ、彼は偉大なるオーストリア人ですよ」
「その根拠は何だ」
「彼はコーヒー豆を六十粒数えて飲んでいました」
非常に几帳面で厳格な人格でもあったのです。
「この生真面目さはまごうことなくオーストリア人です」
「それが根拠か」
「はい、根拠です」
こんな言い争いをしていました。二人は朝から元気です。しかしここで、です。窓が開いていたそこからフランスが顔を出して言うのでした。
じゃあフランス人でいいじゃない」
いつもの軽い調子での言葉です。
「フランス人ってことにしときなよ」
これには二人共顔が強張ります。そうして。
「今の言葉は」
「許せませんね」
いつも通りではありますが。それによって二人を怒らせたフランスでした。まさに口は災いの元、しかしついつい言ってしまう彼な

のでした。

第千六百九話　完

2010・9・21

第千六百十話　そもそもそんなことは

第千六百十話　そもそもそんなことは

結構フランス人にしときなとか言ってしまうフランス、その彼に対してイギリスは咎める顔になってそのうえでこう注意するのでした。

「御前、そのジョークは止めろ」

「駄目か？」

「あの馬鹿会長がだ」

「あいつがか」

「あの起源の主張を御前にしたらどうだ？」

彼の趣味であります。気が向けばいつも何かをそうだと言っているのが生徒会長です。

「すげえ嫌な気持ちになるだろ」

「ああ、確かにな」

それはフランスも頷くことでした。

「もうそうなったらどれだけ嫌かな」

「だからだよ。止めておけよ」

イギリスはかなり親身に彼に注意しています。

「それだけはな」

「軽いジョークのつもりなんだけれどな」

「それで御前自身を貶めても仕方ないだろ」

「そうか、じゃあ止めるか」

「さもないと御前を第二生徒会長って呼ぶぞ」

流石イギリスです。言葉がきついです。

「それでいつも辛くて熱い料理ばかりだ」

「絶対に嫌だな、それは」

こうして反省してそれからはそんなジョークを言わなくなったフランスです。これには彼もこたえました。

第千六百十話　完

2010・9・21

第千六百十一話　パパラッチ　☆

第千六百十一話　パパラッチ　☆

あえなく捕まってしまったフランス、ドイツとオーストリアさんの尋問を受けます。

「何で御前がここにいるんだ？」

「いや。イギリスがやれって」

まずはさりげなく彼のせいにすることからです。何処までも仲の悪い二人です。

「それで盗撮・・・・・いや諜報活動をだな」

「何だ、いつものことか」

「もう遅いぜ。俺は貴重なシーンを押さえたからな」

「貴重なシーン？」

「何ですかそれは」

二人がフランスの今の言葉にいぶかしんでいるとです。ドイツのお家の人が来てこう二人に対して言ってきました。

「フランスさんが撮った写真の現像終わりました」

「ふむ。どんなのだ？」

「見せて下さい」

こうして見てみるとです。オーストリアさんのプライベート写真ばかりです。かなり恥ずかしい写真もあったりします。

それを見たオーストリアさん、表情を一変させて。

「これはお仕置きが必要なようですね」

「よし、やれ」

ドイツも勧めてです。そうして。

「お覚悟なさい」

「違うって、イギリスが・・・・・うわあああああっ！！」

その手にはもう鞭があります。

かくしてお仕置きを受けるフランスなのでした。当然写真はネガ

ごと没収されましたしこの人にとってはふんだり蹴ったりな展開に終わりました。

第千六百十一話　完

２０１０・９・２２

第千六百十二話　写真の売り先

実はフランスはオーストリアさんに対してだけではありません。こっそりと他の人のプライベート写真も撮っています。勿論自分のもです。

そしてそれをです。売っていたりします。

「それじゃあいつも通りね」

「ああ、じゃあな」

ハンガリーと密談中です。普段はとても仲の悪い二人が今は親しく話をしています。

「これな」

「有り難うね」

フランスにこっそりとお金を払います。

「私こうした写真とか大好きだし」

「御前確かに結構以上にそういうの好きだよな」

「ロシアの下にいた時はこんなことできなかったしね」

かつてのソ連の頃です。ハンガリーはこの時ロシアの同盟者となっていましたが実質的には属国と言っていい情況だったのです。

それで何も自由にできなくて。今の反動があるのです。

「だから余計によ」

「まあ俺としちゃ写真が売れて何よりだけれどな」

「ただあんたの自分の写真って」

見れば大事な部分をちり紙で隠して猫耳になっています。

「滅茶苦茶変態ね」

「そうか？結構気に入ってる格好なんだけれどな」

「変態よ、どう見ても」

自分の姿が一番センスがありません。そんな彼です。

第千六百十二話　完

2010・9・22

第千六百十三話　夜のちびたりあ　☆

第千六百十三話　夜のちびたりあ　☆

イタリアが子供の頃です。神聖ローマがいない夜のことです。
イタリアは一人で寝ていました。けれど寂しがりでおまけに怖がりな彼のことです。とても寂しくて辛い気持ちを味わっていました。
「ひっくひっく神聖ローマ・・・・・・」
いつも何かと迫って来る彼がいないとです。普段は怖くてもやっぱり寂しいのです。
それでベッドの中で一人泣いていました。
「寂しいよ。一人じゃ眠れないよ」
このことに耐えられなくなってです。それでオーストリアさんを尋ねました。
「あの、オーストリアさん起きてますか？」
「はい？」
丁度本を読んでいるところでした。そこにイタリアの声です。
「何でしょうか」
「あ、あの」
出て来たイタリアはです。裸です。
「一緒に寝て下さい」
こう御願いするとです。オーストリアさんはすぐに。
「服を着なさい」
「えっ？」
「私にそんな趣味はありません」
怒っています。明らかに。
「早く服を着てお部屋に帰りなさい」
「わかりました・・・・・・」
こうしてこの日は一人で寝るしかなくなったイタリアでした。こんな日もあったのです。

第千六百十三話　完

2010・9・23

第千六百十四話　今も変わらない

第千六百十四話　今も変わらない

「おい、待て」
「あれっ、ドイツどうしたの？」
「何で御前が俺のベッドで寝ているんだ」
朝起きればです。何故か自分のベッドの中にいるイタリアを発見するドイツでした。それでその彼に対してクレームをつけるのでした。
「しかも何で裸なんだ」
「だって俺寝る時裸だし」
「そういう問題ではない」
やっぱり怒っているドイツです。
「全く。これで何度目だ」
「いや、数えてないし」
「だからそういう問題ではない」
また怒るドイツでした。
「御前は何でそう一人で寝るのを嫌がるんだ」
「だって寂しいじゃない」
イタリアは口を尖らせてドイツに言い返します。
「だからなんだけれど」
「寝る時位一人でいろ」
「えっ、それって寂しいよ」
「寂しい位我慢しろ」
「俺さびしいの苦手だし。だから」
こんな調子であります。本当にこうしたところは変わらないイタリアです。けれどそんなイタリアをあれこれ言ってもフォローするドイツなのでした。

第千六百十四話　完

2010・9・23

第千六百十五話　リトアニアの出稼ぎ

第千六百十五話　リトアニアの出稼ぎ

昔リトアニアは物凄く貧乏でした。どれだけ貧乏だったかというとです。何と当時お家にいた人の三分の一がアメリカに行かないといけない程だったのです。

それでイギリスに相談に乗ってもらって。こう言われました。

「御前も大変だな」

「はい、けれど」

「生きていく為にはだな」

「そうです。だからやるしかありません」

それでアメリカに行くというのです。

「ポーランドも見ていますし」

「しかしアメリカか」

「アメリカさんのところは移民を受け入れてくれるんですよね」

「ああ、あいつのところはな」

イギリスも親身になって彼に答えます。

「そうだよ。誰でも来ていいからな」

「じゃあ。俺やらせてもらいます」

「それでも大変だぞ」

イギリスはリトアニアを心配しています。それで言ったのでした。

「あいつと一緒にいるのはな」

「えっ、そんなにですか」

「まあ覚悟はしておいてくれ」

「はあ、そうなんですか」

不安を感じずにはいられないリトアニアでした。何しろ人間関係ではです。彼はかなり苦労してきた人であるからです。トラウマにもなっているのです。

第千六百十五話　完

2010・9・24

第千六百十六話　その相棒にしても

第千六百十六話　その相棒にしても

「なーーー、リト」
「どうしたの？何かあったの？」
「チュロス焼いてくれん？」
ポーランドはソファーに座ってテレビを観ながら彼に言います。
「今からさーーー、よくね？」
「そんなの自分で焼いたら？」
「リトが焼いたのがええんよ」
だからだというのです。
「だから焼いてくれん？」
「全く。そんなのでいいの？」
「ええんよ、俺だから」
物凄い理屈でリトアニアに答えます。この二人の間柄でないとそれだけで問題になってしまいそうな。そんな言葉でありました。
「だからさ。焼いてくれん？」
「仕方ないなあ」
溜息をつきながらもです。
そのチュロスを焼いてです。ポーランドに出します。
「はい、どうぞ」
「おっ、ありがと。じゃあさ」
ここでポーランドはまた言うのでした。
「一緒に食べん？」
焼いてもらいましたが一緒にというのは忘れないのでした。こうしたところもポーランドだったりします。リトアニアはいつも彼と一緒にいます。

第千六百十六話　　完

2010・9・24

第千六百十七話　紹介してみた　☆

第千六百十七話　紹介してみた　☆

イギリスはまずリトアニアをアメリカの前に連れて来てです。そのうえれ二人を会わせました。

「こいつがリトアニアでな」

「そうなのか」

「こいつを御前の家で働かせてくれないか？」

「ど、どうも」

リトアニアはぺこりと頭を下げます。

「いいでしょうか」

「丁度いいね。僕も人手が欲しかったんだ」

「そうか。それは何よりだな」

「それでリト何とかって何処にあるんだい？」

見るのは世界地図ではなくアメリカ地図です。自分のところだけでかでかとしているそこです。

イギリスはそれを見てまた呆れて言います。

「御前は世界地図買え！」

「馬鹿だなあ、ちゃんと世界地図だよ」

しかしリトアニアはです。こうアメリカに放します。

「俺の家はアメリカさんがここだとこの辺りですよ」

「へえ、ちょっと近いんだな」

「おい、待て」

イギリスはこのリトアニアの対応に目が点です。しかも彼はそのうえこんなことも言いました。

「アメリカさん何か真面目そうな人で俺安心しました」

「御前それお世辞だよな！そうだよな！」

イギリスにとっては思いも寄らない展開となりました。一体リトアニアはこれまでどんな人生、いや国生だったのでしょうか。そう

も思うイギリスでした。

第千六百十七話　　完

2010・9・25

第千六百十八話　馬鹿な上司はいらない

今日本も日本のお家の人達も皆怒っています。
彼等の上司達があまりにも愚かだからです。
「全く、騙されたわね」
「そうですよね、生活がよくなるって」
「それも嘘っぱちもいいところで」
しかもでした。
「今回の事態」
「あれは何なのよ」
「もう何それ？ってもんやで」
「最低だべさ」
そしてです。日本もです。
怒りをこらえながらです。こう言うのでした。
「これ程無能な上司ははじめてです」
「しかも卑怯だし」
「お金とかにも汚いで」
「嘘ばっかり言うし」
「責任転嫁はいつもで」
とにかく今の上司連中はそんなのばかりです。もうお家の人達は怒っています。
それで。皆上司達にです。抗議の声をあげます。
「ふざけるな！」
「もう許さないぞ！」
「何があっても！」
こんなに日本のお家の人達が怒ることは今までなかったことです。
果たして何が起こるのでしょうか。

第千六百十八話　完

2010・9・25

第千六百十九話　はじまってみると　☆

第千六百十九話　はじまってみると　☆

かくしてアメリカと一緒に住むことになったリトアニア。アメリカは朝起きてすぎにリトアニアに対してあることを尋ねたのでした。

「おはよう、ところで僕の」

「眼鏡でしたら洗面台にありましたよ」

「えっ、そうなんだ」

そして他には。

「もうこんな時間じゃないか。遅刻しそうだよ！」

「準備も食事もできてますから」

遅刻しそうでもこうでした。

「着替えだけして下さい」

「うん、じゃあ」

こんな調子です。イギリスはそんな完璧なフォローを見せるリトアニアを見てかなり不安になりました。

「あのアメリカと結構普通に暮らしているなんてよ」

そう思う彼でした。

「若しかしてあいつ相当無理してんじゃないのか？」

こう思ってです。本人に尋ねました。

「おい、リトアニア」

「はい」

「今の生活だけれどな」

「とても楽で楽で」

にこにことして血色のいい顔で言うのでした。

「俺幸せです」

「・・・・・嘘だろおい」

イギリスも唖然です。リトアニアはどういう過去があったのでしょうか。

第千六百十九話　完

2010・9・26

第千六百二十話　まさに猿以下

第千六百二十話　まさに猿以下

とにかくもう完全にお家の人達の信頼をなくしてしまった今の日本の上司達、しかしまだこんなことを言う人がいるから凄いです。

「私だったら解決できたよ」

「無理ですね」

日本はぴしゃりでした。

「貴方は普天間でも駄目でしたし」

「いや、それでもだね」

「そういえば貴方は脱税もしていますし私の旗を切って自分達の旗を作ってもそれでも何の処分も下さなかったような人でしたね」

悪事は今になって言われるのでした。

「そんな貴方に何ができるのですか？」

「それは」

「はとの物真似をしても駄目です」

日本、無表情で言います。

「泣いても許しませんよ」

「ううう、ママァ・・・・・」

「何故貴方の様な人が上司になったのか」

本当に怒っている日本です。

「マスコミの人達に騙され踊らされた結果ですが。私の一生の失態です」

「政権交代はよかったんだよ」

「今完全に結果が出ましたね」

もう何を言っても無駄でした。信頼は一度なくせば戻すのには時間と苦労がかかります。しかしこの人達はそのことすらわかっていません。信頼をなくしたことさえも。

第千六百二十話　完

2010・9・26

第千六百二十一話　コーヒーを出すな　☆

第千六百二十一話　コーヒーを出すな　☆

リトアニアの言葉がどうしても信じられないイギリス、それでリトアニアが今いるそのアメリカの家に行くのでした。するとです。

「あれっ、珍しいな」

「まあな」

「君が僕の家に訪ねてくるなんて」

まずはこのやり取りからでした。

「どうしたんだい？一体」

「ああ、ちょっとな」

イギリスはそのアメリカに対して話しました。

「リトアニアが元気か気になってな」

「リトアニアがかい？」

「ああ、そうだ。それでリトアニアは何処だ？」

「そうかい。コーヒーしかないけれど」

アメリカはわざとイギリスに対して答えずにです。コーヒーを勧めてきました。

「君飲めるかい？」

「誰が飲むか！」

コーヒーを出されたイギリス激怒です。

「いいから早くリトアニアを出せ！」

「ああ、やっぱりまだ飲めないだね」

「いいから早く出せ！あとコーヒーは飲まないからな！」

「じゃあレモンティーは？」

「一緒だろうが！俺はミルクティーなのは知ってるだろ！」

コーヒーもレモンティーもいらないというイギリスでした。勿論アメリカもこのことを知っていてわざとやっていたりします。この二人の関係は相変わらずです。

第千六百二十一話　完

2010・9・27

第千六百二十二話　禁治産者か

今回わかったことはです。今の日本の上司達はです。
「えっ、事前に何の根回しをしてこなかったのですか」
「はい、そうなんです」
「どうやら」
能登と仙台が日本に対して話しています。
「それで楽観してああしたんですよ」
「これって政治家なんですか？」
「そんな話ははじめて聞きました」
日本も呆れてしまいました。何と今の上司達はです。何も根回しや相手との舞台裏での話し合いとかを一切していなかったというのです。
「それが政治家の仕事なのでしょうか」
「日本さんもそう思われますか？」
「やっぱり」
「はい、これが政権交代の実態ですが」
今になってです。日本のお家の人達も気付いたのでした。
「何とまあ」
「どうしましょう、これは」
「大変なことになりますよね」
「ええ、私達の家の人の多くは騙されましたね」
このことにも気付きました。
「私の健康も今の上司になってから優れませんし」
「マスコミに騙されましたね」
能登が最後に言いました。本当にそうでした。

第千六百二十二話　完

2010・9・27

第千六百二十三話　遊ぶのも楽しく　☆

第千六百二十三話　遊ぶのも楽しく　☆

何はともあれです。イギリスはアメリカにリトアニアのところに案内してもらいました。

「リトアニアーー、イギリスが君に会いたいってさ」

「あっ、イギリスさん俺に何か」

「ああ、ちょっとな」

「少し待って下さいね」

見ればです。リトアニアは鯨と遊んでいます。

「この子が離してくれなくて」

「何で鯨が陸にあがってるんだ？」

イギリスがまず突っ込みを入れたのはそこでした。

「どういう現象だ？」

「あっ」

話をしている傍から今度はです。リトアニアはＵＦＯに上に運ばれていっています。これまた物凄いことになっています。イギリスの常識の範囲外です。

それで唖然となっているのですがリトアニアは笑ってリトルグレイに返します。

「いきなりキャトるのは止めてっていつも言ってるじゃない」

「ダッテリトガ鯨トアソンデバカリイルカラ」

だからだと。リトルグレイは言います。

そしてアメリカはそれを見て言うのでした。

「リトは本当に人気者だよな」

「おい、何なんだこれは」

イギリスは顎が外れんばかりになっています。

何はともあれアメリカのお家で楽しく過ごしているリトアニアです。イギリスの予想はこうした意味では外れてはいると言えました。

第千六百二十三話　完

2010・9・28

第千六百二十四話　怒りのあまり

第千六百二十四話　怒りのあまり

最近の日本は本当に怒っています。もう上司の言うことを聞こうとしません。

「貴方達はこれまでどれだけ嘘をついてきましたか？」

「何っ、我々が嘘をついてきていると言うのか」

「地検があんなこと言う筈がありません」

まさにこのことを言うのでした。

「あんなことは誰でもわかりますが」

「うっ・・・・・・」

「この一年で私の体調もかなり悪くなりましたし」

最初日本は自分達の手でかなりよくなると言っていたのです。ところが日本だけでなく他の都道府県の面々の調子も悪くなってきているのです。

それを見てです。日本は言うのでした。

「若しかしてですが」

「まだ何か言いたいのか」

「貴方達は私達の体調を悪くさせることが目的ではないのですか？」

こうも上司達に言いました。

「最近そうとしか思えません」

「な、何を根拠に」

「とにかく。貴方達のことはわかったつもりです」

ぴしゃりと一言でした。

「次の選挙は何時になるか。そして」

「そして、か」

「その結果が楽しみですね」

最早日本も堪忍袋の緒が切れました。この上司達は今誰からも信用されなくなってきています。

第千六百二十四話　完

2010・9・28

第千六百二十五話　何故適応できるか

「なあ、リトアニア」
「はい」
リトアニアはイギリスの言葉を聞くのでした。
「何でそんなに適応できるんだ」
「アメリカさんのお家にですか」
「これだけ色々な奴が一杯いてな」
そうした意味でもアメリカは凄いです。とにかくあちこちから集まってきてそのうえであれこれと生活をしているのです。そうした国なのです。
「それにあのアメリカだぞ」
「いえ、平気ですから」
「何でアメリカ相手に平気なんだ？」
「ポーランドと朝から晩まで一緒に暮らしてですね」
リトアニアが言うのはいきなり凄いハードルの話でした。
「ロシアさんに侵略されてみればわかりますよ」
「ポーランドにロシアか」
イギリスもこの二国の名前にはごくり、となります。
「あの連中とか」
「どうですか？それは」
「俺のところの兄弟仲も悪いがな」
何気にイギリスのお家も凄かったりします。一応末っ子のイギリスが代表になっていますが四人兄弟の仲は最悪だったりするのです。
「その二人はな」
「そういうことですから」
リトアニアが何故平気なのか、それがよくわかったイギリスなのでした。

第千六百二十五話　完

2010・9・29

第千六百二十六話　パイプもなしで

第千六百二十六話　パイプもなしで

その今の日本の上司達ですが。日本は彼等に対して言うのでした。

「中国さんから聞きました」

「何だって？」

「日本が独自に中国と話をしたって？」

「貴方達中国さんと直接お付き合いのある人はいないそうですね」

何とこの人達日本が中国と直接お話をすることが多いことすら知らなかったのです。よくこんなもので上司になれると悪い意味で感心できます。

「それで今回のゴタゴタになったとか」

「うっ・・・・・・」

「そ、それは」

「しかもです」

日本の言葉はさらに続きます。

「アメリカさんとも直接お知り合いの人はいないのですね」

「ア、アメリカとは」

「そもそも普天間は」

「言い訳はもういいです」

聞いても無駄だとわかっているからです。しかもこの上司連中こうした状況になると嘘や責任転嫁や自己弁護ばかりです。そんな人達なのです。

だから。日本は言いました。

「マスコミの人達に騙されました。今回のことは二度と忘れません」

「ううっ・・・・・・」

「折角手に入れた権力が・・・・・・」

最後の言葉が本音でした。世の中こうした無能で浅ましい連中もいるのです。マスコミはそうした人達こそ大好きなのです。

第千六百二十六話　完

2010・9・29

第千六百二十七話　そうさ百パーセント恐怖　☆

ロシアがアメリカのお家に来ました。
「こんにちは。アメリカ君ちょっといいかな」
「あれ？何で君が僕の家に？」
「リトアニアがお世話になってるって聞いたんだ」
それで来たというのです。見れば普段の素朴な笑顔です。
「それでどうかな」
「うん、彼は働き者だし性格もいいしね」
アメリカは上機嫌でロシアに話します。
「おかげで助かってるよ。今呼ぼうか？」
「ううん、仲良くやってるならいいんだ」
ロシアはそれはいいというのでした。
「それでね」
「そうなのか」
「リトアニアって我儘ばっかりして口下手だから僕心配で」
何か言うことが違います。アメリカとロシアとで。
「でも何だか君達上手くやってるみたいでよかったよ」
「うん、とても仲良くやってるぞ」
「アメリカ君」
ロシアはアメリカの両肩を抱いて言うのでした。
「あの子人よりちょっと心配性で世話好きだけれど」
「ロシア？」
「これからも大事にしてあげてね」
ここまではよかったです。ところが」
「僕のお古だけれどね」
いつもの恐い笑顔がここで出るのでした。やっぱりロシアはロシ

アです。このことはおそらく絶対に変わらないことなのでしょう。

第千六百二十七話　　完

２０１０・９・３０

第千六百二十八話　支持率暴落

「な、何故だああーーーーーーーーーっ！！」
「こんな筈ではーーーーーーーー！！」
日本の上司達が絶叫しています。集中砲火を浴びまくっているうえにです。今度は彼等が命よりも大事にしている、お家の人よりもずっと大事にしている支持率が暴落したのです。
「ついこの前まであんなに高かったのに」
「それが今ここまで落ちるか！」
「こんな筈では！」
「自業自得です」
けれど日本の声は冷静です。
「もう貴方達を支持する人は殆どいませんよ」
「な、何っ、それでは」
「次の選挙では」
「はい、もう二度と上司にならないで下さい」
お疲れ様、とも言わない日本でした。
「よかったら歴史に国賊として永遠に残してあげますが」
「こ、国賊だと」
「我々が」
「多くの人はそう思っていますから。どちらにしろ貴方達はもう終わりです」
「折角権力者になって美味い汁が吸えていたっていうのに」
「マスコミがグルだったから恐いものなしだったのに」
何気にとんでもない関係まで暴露しています。
「赤旗振っていればどんなことをしても許されていたんだぞ」
「それが。こんなことになるなんて」
信なくば立たず、彼等の無様な終わりの時は迫っています。

第千六百二十八話　完

2010・9・30

第千六百二十九話　相変わらず恐い映画は　☆

第千六百二十九話　相変わらず恐い映画は

☆

アメリカがです。リトアニアに対して気恥ずかしそうに言ってきました。

「な、なあリトアニア」

「はい」

「今日は一緒に寝てくれないかな」

「あっ、どうしたんですか？」

「ちょっと映画をね」

観ればテレビにです。ゾンビが映っています。何だかんだでとにかく怖い映画を観たがるアメリカです。実は好きだったりするのです。

「それでなんだ」

「あっ、はい」

リトアニアはここで頷きます。

「よくわかりました」

「済まないね」

「いえ、御気になさらずに」

このやり取りの後でそれで一緒にベッドに入ります。

そしてその中で。アメリカはまだ震えながらリトアニアに言いました。

「助かったよ」

「そうなんですか」

「今日は絶対に一人じゃ寝られなかったぞ」

「あの」

ここでリトアニアはアメリカに尋ねました。

「怖いの観るといつもこうなんですか？」

「ああ、子供の頃は」
そこからなのでした。
「イギリスと一緒に寝てもらってたんだけれどね」
何気に昔のことも言います。実は子供の頃はアメリも甘えん坊だったのです。

第千六百二十九話　　完

２０１０・１０・１

第千六百三十話　タニンガー

第千六百三十話　タニンガー

今の日本の上司達の醜い言い訳が続いています。
「それにだよ」
「そうだ、あの連中だって言ったじゃないか」
人間醜い者はとことんまで醜いようです。まだ言っています。
「早く何とかしろって」
「だから我々も」
「あの人達が言っていた時期は違いますが」
日本はまたこの人達に言いました。
「それは嘘ですか？責任転嫁ですか？」
「いや、事実だ」
「それで何で私達だけが」
「貴方達がしたからです」
だからだと。日本の怒りは収まりません。
「そういえば高速無料化も子供手当ても」
「な、何だ！？」
「それにまで文句をつけるのか」
「何かおかしいですよね。私のお家の人以外にも払ったり」
日本はこのことも指摘しました。
「ひょっとして私のことも周りの国々のことも一切勉強しないで上司になったのですか？」
「い、いやそんな筈が」
「そんな筈がないじゃないか」
「また嘘ですね」
日本はこのこともわかってしまいました。今の上司達はです。マスコミに甘やかされていただけで全く勉強していなかったのです。
呆れたことに。

第千六百三十話　完

2010・10・1

第千六百三十一話　思い出は　☆

第千六百三十一話　思い出は　☆

アメリカとリトアニアのベッドの中でのお話が続いています。

「けれどいつも彼の方が先に寝てさ」

「そうだったんですか」

「結局怖い思いしてたんだ」

「イギリスさんらしいですね、そういうところ。というか」

「というか？」

「アメリカさん子供の頃からだったんですね」

そんなアメリカに親しみを感じていたりもします。

「そうだったんですね。けれど俺も」

「君も？」

「子供の頃はポーランドといつも一緒に寝てましたよ」

「ああ、あの君の元相棒の」

「はい。いつも毛布取られてましたけれど」

こういうところがポーランドです。というよりかはリトアニアでないといつも一緒にいられそうもありません。ややこしい相手であります。

「そういえば何で君達はばらばらになったんだい？」

「そのことですか？」

「うん、大国だったんだろう？」

「ロシアさんやオーストリアさんに分割されたんです」

ここでリトアニアは暗い顔になります。

「それであいつはオーストリアさんのところに行って」

「それでだったのか」

二人も過去は色々ありました。いい思い出ばかりではありません。

第千六百三十一話　完

2010・10・2

第千六百三十二話　嘘が党是

第千六百三十二話　嘘が党是

日本達はあらためて今の上司達の発言を検証してみました。するとです。

「うわ、あれもこれも」

「全部嘘？」

「何これ」

「嘘ばっかりやないけ」

皆調べてみて愕然とさえします。何と今の上司達の発言は嘘ばっかりだったのです。殆ど詐欺師と言ってもいい位に嘘ばかりなのでした。

それを日本も知ってです。そうして言うのでした。

「最早一刻の猶予もなりませんね」

「はい、あの連中はです」

「上司にしていたら駄目よ」

「責任感全然ないし」

「当たり前のこともできへんしな」

つまり何から何まで駄目だというのです。ここまであれな人達だったとはです。日本もお家の人達も想像していなかったのです。流石にここまでとはです。

「選挙ですね、これは」

「政権交代ですよ、あれの連中が言っていた」

「これは」

「はい、しかし問題はです」

ここで日本は言いました。

「あの人達にそれをどうさせるかですね」

あれな人達程権力の座にはしがみつきたくなるのです。それがわかっているからこそ。日本は今は慎重に動いています。どうしよう

もない上司達を成敗する為に。

第千六百三十二話　　完

2010・10・2

第千六百三十三話　話は続いて　☆

リトアニアの話は続きます。
「元々農業で大きくなった国だったんですよ」
「それが君達だったんだな」
「はい、だから戦争はそんなに強くないんです」
それでだというのです。
「一応最後まで戦いましたけれど結局傷が増えただけですし」
「そうかあ、僕とはそこが違うんだな」
「そうですね。アメリカさんは強いですからね」
アメリカは建国の時から戦争をしています。西に西に行っていたその時もです。ずっと戦っていました。それがアメリカの歴史だったのです。
「けれど今思えばポーランドに振り回されてたあの頃が一番楽しかったかな」
「それなら」
「それなら？」
「また一緒になればいいじゃないか」
アメリカはこうポーランドに話しました。
「君達は」
「あはは、できたらいいですね」
「そうだよな、それはさ」
こうリトアニアに話すのでした。
「ポーランドとまた」
「縁があれば。絶対に」
リトアニアはこのことを一人密かに願うのでした。今は一人ですがまた二人になりたいと。こう思っているのでした。彼の願いです。

第千六百三十三話　完

2010・10・3

第千六百三十四話　そういえば報道されない

日本はここで、です。あることに気付きました。
「そういえばですが」
「何かありますか？」
「いえ、今の上司達はとにかく滅茶苦茶なことばかりしてきましたが」
日本はこう妹に話します。
「それは今まで報道されましたか？特にテレビでは」
「いえ、全然」
日本妹もそれに気付きました。
「前の上司の人達のことは嫌になるまで報道されてましたけれど」
「調べたら前の上司の人達なんて比べ物にならない位失言や贅沢や漢字の間違いや公私混同や意見の不一致があるのですが」
「それでもいいように報道されてますよね」
「ええ、確かに」
「これって一体」
日本妹もここで言います。
「どういうことなんでしょうか」
「わかりません。ただ」
「ただ？」
「もうマスコミは信用できないかも知れませんね」
日本は考える顔で言いました。
「これでは」
「そうですね。本当のことを報道しないんですから」
二人はそこにあるものを見たのです。最も信用できないのは誰なのかということをです。報道しない自由、これは何なのでしょうか。

第千六百三十四話　完

2010・10・3

第千六百三十五話　誓った直後に　☆

第千六百三十五話　誓った直後に　☆

アメリカはリトアニアの話を聞いていつもの様に言いました。
「よし、正義の為なら」
「はい」
「君に協力するぞ！」
ベッドの中でアメリカはアメリカです。こうしたところは見事なまでに変わりません。その正義の内容がいつも問題だったりしますけれど。
「そうですか。それじゃあ」
「うん、期待していてくれ」
「そんな日が」
リトアニアの目がとろんとなってきました。
「来た・・・・・ら・・・・・・」
「絶対に来るさ」
「またポーランドと一緒に」
リトアニアの目に彼の姿が浮かんでいます。
「麦畑を・・・・・・」
「ってあれ？」
リトアニアはそのまま寝てしまいました。アメリカはそれを見て。
「ちょっとリトアニア、僕を置いて寝ないでくれよ！」
こう言います。
「一人じゃ怖いじゃないか、リトアニアーーーーッ！！」
しかし彼は起きません。アメリカが何を言ってもです。
そのまま朝までぐっすりと寝たリトアニアでした。意外と肝は座っているみたいです。やっぱり過去のことが関係しているのでしょうか。

第千六百三十五話　完

2010・10・4

第千六百三十六話　テレビは

第千六百三十六話　テレビは

日本と日本妹は調べているうちにわかりました。そのマスコミについてです。

新聞よりもテレビです。そちらでした。

「前からやけに韓国さんを持ち上げていましたが」

「あれも極端過ぎましたしね」

「前の上司の人達はこれでもかと叩いたのに」

「今の上司の人達は」

このことに気付いたのです。

「全然叩きませんね」

「ネットを見たらこれでもかと疑惑があるのに」

前の上司の人達と比べるとその疑惑の多さと悪質さが酷かったりします。けれどテレビではそんなことは一切言わないのが日本の国の中です。

「これではテレビだけを観ていたら」

「騙されますよね」

「テレビは危険ですね」

日本は言いました。

「テレビだけを観ていたら駄目になります」

「明らかに何かおかしいですよね」

「はい、私はこれからは」

「兄さん、どうするんですか？」

「テレビはドラマとアニメとクイズ番組だけにします」

その三つだけというのです。

「それと歌番組。これだけでいいですね」

「ニュースは観ない方がいいですね」

観るとあれになる日本のニュース番組、この患部にメスが入るの

は何時の日でしょうか。

第千六百三十六話　　完

2010・10・4

第千六百三十七話　昔からポーランド

第千六百三十七話　昔からポーランド

ポーランドとリトアニアが一緒だった頃です。ポーランドが麦の収穫の時にリトアニアに対してこんなことを言いました。

「なあリト」

「どうしたの？」

「今考えたんだけれどさ」

こう前置きしてからの言葉です。

「青とかピンクとかさ」

「それって何の色？」

「そういう変な色の麦どうよ」

こんなことを言うのでした。

「売れると思わん？そういうの」

「駄目だよ、そういうのは」

リトアニアはすぐに彼に対して言いました。即刻否定です。

「誰が買うんだよ」

「あれ？興味持ったのが買わん？」

「買わないよ。ポーランドはそんな麦食べたいの？」

「そう言われたらいいわ」

答えはここにありました。

「俺そんな変な麦食わんしーーー」

「そういうことだよ。だからそんな麦は止めようね」

「何かそういうの面白くなくね？」

「そういう問題じゃないから」

こうポーランドに対して言うリトアニアでした。ポーランドは昔からポーランドなのでした。リトアニアはずっとこの彼と一緒にいました。

第千六百三十七話　完

2010・10・5

第千六百三十八話　報道しない自由

日本はテレビを観てです。妹に対して言います。
「やっぱりですね」
「はい、殆ど何処も報道しませんね。あれだけのデモなのに」
「我が国のマスコミがここまで異常だったとは」
「他の国のマスコミは報道しているのに」
こんなことがありました。
「それに今の上司の人達の不祥事のことは」
「前の上司の人達の報道を十、いえ十五とすれば」
「一位しか報道しませんね」
「グルなのでは？」
日本もいい加減こう思いはじめました。
「これは」
「兄さんもそう思いますか？」
「環もですか」
「ここまでくるとそうとしか思えません」
日本妹も怪訝な顔になっています。
「特定の人達と結託しているマスコミなんて」
「はい、その存在こそが癌です」
ちょうど目の前に癌になっているジャーナリストがいます。ノーネクタイで黒いものが残っている白髪がトレードマークです。今日もその上司達を擁護しています。
「こうした人達こそが私の家の問題かも知れませんね」
「そうですよね」
二人は段々気付いてきました。日本の問題は何か、テレビの報道です。

第千六百三十八話　完

2010・10・5

第千六百三十九話　ポーランド引取り

第千六百三十九話　ポーランド引取り

プロイセンとロシアがポーランドとリトアニアを引き離してそれぞれ自分達のお家に引き取ろうとした時です。オーストリアさんはその時の上司のマリア＝テレジアに言われました。

「息子が乗り気ですし」

「ヨーゼフ様がですか」

「そうです。仕方ありません」

こう溜息と共に言うのでした。

「ここはです」

「あの二人の家の者と土地を幾らかですね」

「はい、貴方に入れます」

そうするというのです。

「それで宜しいですね」

「私に異存はありません」

こう答えるオーストリアさんでした。

「それでは誰が来るのでしょうか、私のところには」

「ポーランドが来ます」

彼がだというのです。

「彼を引き取ります。宜しいですね」

「イタリアよりも手がかかりませんか？」

「どうでしょうか。色々と我儘なようですが」

「そうですか。まあイタリアと同じように接しましょう」

「そうしてくれると助かります」

こうしてポーランドはオーストリアさんのところに入ることになったのです。その時にポーランドとリトアニアは離れ離れになりました。

第千六百三十九話　完

2010・10・6

第千六百四十話　獅子身中の虫

第千六百四十話　獅子身中の虫

日本は今上司の人達をどうしても信用できません。この人達のやっていることもです。

それでまた妹に対して言います。

「あの人達のしていることですけれど」

「自分のことしか考えていませんね」

「はい、特にあの官房長官です」

この人が一番信用できないと考えているのは二人共です。

「あの人はあからさまにおかしいですね」

「全然反省していませんね」

「明らかに。放っていたらまた何かしますね」

「間違いありませんね。悪いことをしたとも思っていませんよ」

「上司の人の一人も問題でしたが」

この人はよりによって上司の上司の人に非礼を働きました。こうした人ばかりなのが今の日本の上司の人達なのです。呆れたことにです。

「あの人は今強制になりましたし」

「もう終わりですね」

「今度はあの人達を完全に終わりにさせたいものです」

「全くですよね、本当に」

「とにかく信用できません」

これに尽きました。

「上司にしたのは間違いでした」

「ああした人達は二度と上司にするべきではありませんね」

その為にはどうするべきか、もう日本はテレビのニュースなんかは観ていません。それがどういった代物なのかわかってきたからです。

第千六百四十話　完

2010・10・6

第千六百四十一話　嵐の前　☆

お家に帰ってきたアメリカは買って来た夕食の材料を出しました。
それを見たリトアニアは。
「あれっ、今日は随分いいお肉なんですね」
「うん、最近家の仕事が上手くいってさ」
この頃アメリカはまさに飛ぶ鳥を落とす勢いだったのです。
「それで奮発したんだぞ」
「そうだったんですか」
「工場を全部今流行の機械化にしてみたんだぞ」
アメリカは服を着替えながらリトアニアに話します。
「格好いいだろ」
「凄いですねえ」
「どんなものでも早く一杯作れるんだぞ」
アメリカはもう怖いものなしでした。しかし人も国もその栄光には波があります。浮かぶ時もあれば沈む時もあるのが常なのです。
それで次の日。買って来たのはミンチ肉でした。
「あれっ、今日はミンチ肉なんですね」
「ああ・・・・・」
「しかもアメリカさんどうしたんですか？暗いですよ」
「大量に作ったのはいいけれど」
アメリカは頭を抱えて言います。
「何処に売ればいいんだろう」
「えっ、それってまずいんじゃ」
これが大騒動のはじまりでした。アメリカからはじまった騒動が世界を大きく揺れ動かすのです。さあ、アメリカもリトアニアもどうなるのでしょうか。

第千六百四十一話　完

2010・10・7

第千六百四十二話　蒟蒻ゼリー

第千六百四十二話　蒟蒻ゼリー

「あのですね」
「一体何なんだ、最近」
上司の中でも今現在最も評判の悪い人が日本の言葉に過剰反応を見せます。何か物凄く卑しい顔に見えるのは気のせいでしょうか。
「私のやることに文句があるのか」
「あるからこうして言っています」
もう日本がこの人をどう思っているのかは言葉に出ています。
「蒟蒻ゼリーの規制ですが」
「それは我々でやる。いいな」
「そんなことをしている場合ですか？」
こうその上司に言います。
「貴方という人を見ていると」
「何が言いたい」
「強い相手には弱く弱い相手には強いですね」
普通はそういう人を人間の屑と言います。
「しかも今回は全く無意味なものと思いますが」
「無意味じゃない、食べて人が死んだらどうするんだ」
「お餅より安全でしょう」
「うっ、それは」
「どうやら私は私の国の中に生きてきた人の中で最も駄目な人を見ているようです」
日本は本気でそう思いはじめています。
「まあ身丈にあった行動ですね」
「まだ言うのか、私を侮辱するのか」
この人だけがわかっていません。そんな人なのです。

第千六百四十二話　完

2010・10・7

第千六百四十三話　そうなった経緯

第千六百四十三話　そうなった経緯

第一次世界大戦が終わってみるとです。アメリカは世界一の大国になっていました。世界のお金の半分を持っていた程です。

「僕も凄くなったぞ」

「それで兄貴、工業の機械化が進んでるけれど」

アメリカ妹がお兄さんに対して言います。

「それでどうするの？」

「ものを一杯作るんだ！」

アメリカは即答でした。

「安く早く作るんだ。そして売るんだ！」

「何か残りそうだけれど」

「そんなことないさ。どんどん作るんだ！」

こう言ってです。実際にものを大量に作りました。そう、誰もが買いきれないまでにです。そこまで作ってしまったのでした。

するとどうなるか。誰も多過ぎて買えませんでした。

「あれっ、何処に売ろうか」

「まさかと思うけれどロシアさんには売らないわよね」

「あいつ社会主義だから買ってくれないよ」

「じゃあどうするのさ」

「ええと、何か株価がどんどん下がってきてるし」

木曜日のことです。

「これってつまりは」

「うん、恐慌だね」

「大変だーーーーーーーーっ！！」

こうして世界恐慌となったのです。しかしまさに『本当の地獄はこれからだ』でした。

第千六百四十三話　完

2010・10・8

第千六百四十四話　公開せず

「ビデオはどうなりました？」
「公開しない」
日本にこう言う上司でした。
「君にとってよくないからだ」
「いえ、私にとってではないでしょう」
日本はクールな口調でこうその上司に言いました。
「それは」
「では誰にとってだというのだ」
「貴方達にとってですね」
こう言う日本でした。
「結局は。貴方達にとって不利になるからですね」
「な、何を根拠に」
「では早く公開して下さい」
日本の追求の言葉はかなり厳しいです。普段の日本とはうって変わってです。上司をあくまで許さないといった感じです。
「私だけでなくお家の人達の多くがそう思っていますよ」
「し、しかしだ」
「そこまで自分のことしか考えないのなら」
日本は上司にさらに言います。
「如何でしょうか。もう御自身だけで暮らされては」
「な、何を言うんだ」
「もう誰も貴方達を信用しなくなっていますから」
「くっ、どうしてこうなったんだ」
「禍福は己が招くものです」
ここでこの言葉でした。とにかく何処までも己しかない今の日本の上司達です。

第千六百四十四話　完

2010・10・8

第千六百四十五話　経済センスもなし

第千六百四十五話　経済センスもなし

日本が風邪で大変です。しかし今の上司達はこう言うだけです。

「様子を見る」

「あのですね」

そんなことばかり言うのでそれで、です。日本妹がお兄さんにお薬をあげながらそのうえでその上司達に文句を言うのでした。

「何か処方しようって思わないんですか？」

「えっ、だからしてるじゃないか」

「様子を見るとか言ってるだけじゃないですか」

お兄さんよりもさらに温厚な日本妹もいい加減怒ろうとしています。何しろ処方をするにしても軽いお薬をたまに出すだけだからです。これで完全に治る筈がありません。

「確か貴方達は風邪にも一家言ありましたよね」

「そ、そうだが」

「それを疑うのか？」

「はい、疑います」

本当にこう言ってしまいました。

「というよりか貴方達一体何ができるのですか？」

「私達は何でもできるぞ」

「本当にな」

「他人の言葉を遮ろうとしたり悪いことをするのはできますよね」

というか他のことをしていません。力とお金が大好きなことではこれまでの上司の人達の中でも一番ではないでしょうか。何故かマスコミは言いませんが。

「他は何もできないじゃないですか」

こう言ってお兄さんにお薬をあげる日本妹でした。この上司達は人の役に立つことは何一つできないようです。

第千六百四十五話　完

2010・10・9

第千六百四十六話　毎日風邪

第千六百四十六話　毎日風邪

日本は風邪をひいていますがテレビを観ています。そのテレビでは。

「毎日私の風邪のことを言っていますね」

「そうですよね。ほら、兄さんがずっと風邪をひいていた時」

かつて日本はずっと風邪をひいていた時期があります。日本妹はこのことを話します。

「あの時テレビは毎日延々と風邪風邪言ってましたよね」

「それで何か余計に身体の調子が悪かったです」

病は気からといいますがその通りでした。

「あの粂とか土筆とかいう人達が毎日私の風邪のことを楽しそうに言っていた時期ですね」

「本当に毎日でしたよね」

「あの人達の言葉を聞いていて余計に身体の調子が悪くなりました」

「私も。あれで」

「というかああいう人達は私の身体の調子がいいと何も言いませんから」

日本も最近このことに気付きました。

「それも全く」

「それで日本さんが風邪をひいていてそれでお家の人達の調子まで悪くなってる時に」

「あの人達だけ元気でした」

何と日本の調子が悪い時に何億ものお金を貰っていたのです。他にはある新聞社が親会社の野球チームは選手を金でかき集めていました。日本の身体の調子が悪いのにこの人達だけは、です。

「私の株価が下がるって楽しそうに話してた人いましたね」

「はい、粂の人ですね」

「あの人達だけ肥え太ってたんですね、あの時は」

このからくりに気付いたのです。日本が風邪になって喜ぶのは誰か、それはとても卑しく下劣な人達であることだけは問題ありません。

第千六百四十六話　　完

２０１０・１０・９

第千六百四十七話　一国だけ平気　☆

第千六百四十七話　一国だけ平気　☆

恐慌になってもです。ロシアだけは平気でした。

「皆そんなにアメリカ君を責めたらいけないよ」

「何故そう言えるんだ？」

この恐慌で最も危ない、というか死にそうになっているドイツがそのロシアに尋ねます。この時のドイツは本当に大変なのでした。

「そういえば御前顔色がいいが」

「うん、だって僕社会主義だから」

それで平気だというのです。

「だからなんだ」

「他の国と付き合いをしていなかったからか」

「うん、アメリカ君」

そのアメリカに対して言うのでした。

「もう二回か三回恐慌やってくれてもいいからね」

「そもそも御前は経済崩壊位でどうにかなるのか？」

ドイツはそもそもこのことを尋ねます。

「全く平気そうだが」

「だって。それよりも凄いことがこれまで何度も起こってきたし」

「何度もか」

「僕は経済崩壊位じゃ平気だよ」

これは冗談抜きで凄いです。ロシアは四十度の熱でも平気なのです。

「そんなことじゃね」

「そうだったな、御前は」

だから平気だったのです。なお社会主義を誤解した人はこの後世界中に嫌になる程出て来ました。

第千六百四十七話　完

2010・10・11

第千六百四十八話　まだ社会主義者

第千六百四十八話　まだ社会主義者

日本はまだ上司に言っています。

「そもそも貴方達はまだ社会主義者ですね」

「それの何処が悪いんだ」

「そうだ、社会主義はだな」

「ロシアさんもとっくの昔に止めてますよ」

ソ連も遠くになりにけりです。

「それでもなのですね。安保の頃から同じなのですね」

「それがどうしたというのだ」

「アメリカの基地はな」

「貴方達に国防という概念が全くないのはわかっていました」

そもそもそんなこと考える人達ではありません。政治の最重要事項の一つを放棄しているのです。こういう人達は日本には一杯います。

「しかし。ベトナム戦争の頃からではなく安保の頃からだったとは」

「頃からだと」

「それでどういうことなんだ」

「進歩がなかったのですね」

五十年近くです。何の進歩も勉強もしてこなかったのが今の上司達なのです。こうした人達をマスコミは『良識』と言っていたのです。

「私はこのことを絶対に忘れませんから」

「それでどうするというのだ」

「我々をどうするつもりだ」

「また言いますが次の選挙が楽しみですね」

これが日本の返答でした。本当に次の選挙はどうなるのでしょうか。

第千六百四十八話　完

2010・10・11

第千六百四十九話　ロシア絶好調　☆

第千六百四十九話　ロシア絶好調　☆

恐慌のお陰で大変なことになっているアメリカ、そのアメリカを見てリトアニアは物凄く心配しています。こうしたところはポーランドに対するのと同じです。

「アメリカさん大変なことになったなあ」

それで声をかけようとするとです。後ろから。

「リトアニアみーーっけ♪」

「うぎゃあぁ！」

まずは絶叫からです。

「ロ、ロシアさん！？」

「そうだよ、僕だよ」

こう言ってすぐにリトアニアを担ぎます。言葉は不要です。もうちょっと言葉を出せと言いたくなる人もいるかも知れませんけれど。

「アメリカ君、いいよね」

「ロシア、来たんだね」

「リトアニアは僕が預かるね」

もう話を決めてしまっています。

「君じゃもう面倒見られないもんね」

「ああ」

アメリカは力なく頷きました。

「彼を頼んだよ」

「やったあ」

「そ、そんな」

言われたリトアニアは愕然となります。二人が一緒だったその時間は急に終わろうとしています。リトアニアにとっては思いも寄らない展開でした。

第千六百四十九話　完

2010・10・12

第千六百五十話　とにかく選挙

第千六百五十話　とにかく選挙

日本もお家の人達も今の上司達の正体がわかってきました。
「結局自分のことだけなのですね」
「僕達のことなんて全く考えてないですね」
「あそこまで醜いなんて」
「票を入れるんじゃなかったわ」
そうしてです。日本は言いました。
「最早決めました」
「はい」
「それじゃあ」
「次の選挙に話を進めましょう」
そうするというのです。
「そしてです。その選挙において」
「あの人達をですよね」
「そこで」
「選挙での間違いは選挙で正すべきなのです」
間違った選択は元に戻すということです。日本の選択は妥当です。
そして日本は同時にこうも言うのでした。言わずにはいられませんでした。
「マスコミ、特にテレビはです」
「絶対に信用しないんですね」
「テレビはもうドラマにアニメに特撮にクイズ番組だけで充分です」
特に報道番組は、と言外にあります。
日本も多くの人達もわかってきました。テレビはもう真実を報道するのではなく自分達をペテンにかけるものだと。痛い目に遭ってわかったのです。

第千六百五十話　完

2010・10・12

第千六百五十一話　寂しいお別れ　☆

第千六百五十一話　寂しいお別れ　☆

アメリカが。リトアニアに対して言いました。
「リトアニア」
「はい」
「今まで色々有り難うな」
笑顔での言葉でした。
「このゴタゴタが終わったら何時でも遊びに来てくれよ」
「アメリカさん・・・・・・」
「待ってるからな」
「はい・・・・・・」
リトアニアはロシアに担がれながら別れの挨拶をしました。二人はこうして別れたのです。リトアニアの出稼ぎ生活は終わりました。
それでロシアのお家に戻ると。ロシアが笑顔で言うのでした。
「やっぱりリトアニアがいないとね」
「は、はあ」
元の生活に戻るということがどういうことかわかっている彼ですがまずはロシアの言葉を受けました。そうしてそのうえで、でした。
「頑張ります」
「宜しくね」
まずはお家の中を見回ります。あまり変わりないようです。
いえ、変わっているものがありました。それは。
「お、お帰りなさい」
「ど、どうしたの二人共！？」
ラトビアとエストニアがぼろぼろになって出迎えてきました。やっぱりロシアです。

第千六百五十一話　完

2010・10・13

第千六百五十二話　顔に出る

第千六百五十二話　顔に出る

日本は今の上司の人達の顔を見てみました。するとあることがわかりました。

「鳩が虚ろになったような顔やお遍路帰りの大仏の出来損ないみたいな顔に」

「そうですね。心臓が悪くなったみたいな顔に」

日本妹も言います。

「何かあまりいい人相の人がいませんね」

「そうした人達を擁護するマスコミの人達もですね」

「ええ。プロレスの実況中継というよりは痴呆めいた顔をしていたり」

「鳥というよりは苦虫みたいな顔をしていたり」

「そんな人相の人ばかりですね」

「生き方は顔に出るといいますが」

日本はこのことも言いました。

「それを考えますと」

「今の上司の人達やマスコミの人達は」

「そうかも知れませんね。特に」

「はい、あの人ですよね」

「仙人というよりはです」

日本の中で今一番批判されているその人の顔が最後に出ました。

その人の顔はどうなっているのかというとです。

「カメムシを踏み潰して皺だらけにしたみたいな」

「特に酷いですよね」

「はい、どうも生き方は本当に」

「顔に出るみたいですね」

日本と日本妹は今の上司の人達を見てこんなことも言いました。

とりあえずヤクザ屋さんはヤクザ屋さんの顔になるものなのでしょう。卑しい人は卑しい人の。

第千六百五十二話　　完

２０１０・１０・１３

第千六百五十三話　恐慌で

アメリカからはじまった世界恐慌、アメリカは新しく上司になった人の政策で、イギリスやフランスは植民地のお陰で助かりました。ついでにブロック経済もして自分達の経済も守りました。

しかし助からなかった人達もいます。

まずはドイツです。

「賠償金の支払いもある。どうすればいいんだ」

「うう、俺だってさ」

「死にそうになってるんだけれどな」

イタリアとロマーノもです。二人の場合は国の近代化が遅れていたのでそれで恐慌の前にどうしようもなくなってしまっていました。

そして日本です。この人も洒落にならない状況になっていました。

「私も。風邪から肺炎になりまして」

「それで済んでいるか？」

「肺膿になってない？」

ドイツとイタリアにこう言われる状況でした。

「俺はなってるが」

「俺も。そうかも」

「片岡仁左衛門さんの気持ちがわかります」

この時代にはまだ生まれていない人ですがそうだというのです。

「本当にどうするべきでしょうか」

「とりあえず生きないといけないが」

「それでもどうしよう」

困り果ててしまっている彼等なのでした。この窮地に追い詰められている人達がです。何とか生きようとそれぞれの上司達を選んだのでした。

第千六百五十三話　完

2010・10・14

第千六百五十四話　今の状況も

第千六百五十四話　今の状況も

また不況です。というか恐慌かも知れません。

日本もその中で苦労しています。風邪で身体の調子がかなり悪いです。

「やはり今の上司の人達は何もできませんか」

「あのな、上司だけでどうにかなるってな」

「それって凄い幸せなことなんだぞ」

日本なぞ比較にならない位風邪が重くなっているイギリスとフランスがその日本に対して言ってきました。二人共顔は真っ青で頭に氷を入れたビニールがあります。

「俺達なんてな、今な」

「本気で倒れそうなんだがな」

「大丈夫ですか？本当に」

「ＥＵは全員大丈夫じゃねえよ」

「風邪どころじゃねえんだよ」

そしてです。二人はこのことも言いました。

「イタリアとかスペインとかギリシアなんてな」

「もうベッドから起き上がれなくなってるんだよ」

「そこまでなんですか」

「アメリカにしても体調が悪い位で済んでるだろ」

「あいつが元凶でもな」

アメリカはまたやらかしたのです。その結果の今の状況だったりします。

「俺達なんてな。もうな」

「風邪どころじゃねえんだよ」

日本はまだ幸せなのでした。果たしてこの人達は大丈夫でしょうか。どう見ても大丈夫な状況ではありませんが。とりあえず熱は四

十度はあるようです。

第千六百五十四話　　完

２０１０・１０・１４

第千六百五十五話　ソビエトに帰って　☆

第千六百五十五話　　ソビエトに帰って　☆

ロシアの物凄く大きなお家に帰ったリトアニア、とても大きな階段のフランス調の建築のお家の中でふらふらになっています。

「帰ってきてからというもの寝る間もなく働きづめだよ」

これがロシアです。

「絶対にありゃロシアさん怒ってるなあ」

別に怒っていないかも知れません。何しろここはロシアですから。

「アメリカさんと仲悪いと聞いてたけれど」

これは事実です。

「酷過ぎるよ。昨日も寝てないもんなあ」

こう呟きながら位置や隅です。傍にあったソファーに座るとすぐにうとうとと居眠りをしてしまいました。リトアニアは本当に疲れていたのです。

そして夢の中で思い出すのはラトビア、エストニアと一緒にいた頃のことです。勿論ポーランドも一緒で彼に何かとされていたりします。

その中ではリトアニアはとても幸せでした。麦畑の中にいて。

「リト、それでどうするん？」

「そうだね。オランダに売ろうよ」

「ああ、最近出て来た奴」

「うん、結構いい値段で買ってくれるしね」

「それじゃあそいつに売るしーーーー」

ポーランドは夢の中でもポーランドです。

「後は茸採って」

「また食べようね、二人で」

懐かしい日々です。もう過ぎ去っていますがそれでもです。彼にとってはかけがえのない、とても幸せな日々だったのです。とても。

第千六百五十五話　完

2010・10・15

第千六百五十六話　二人の周りは

第千六百五十六話　二人の周りはリトアニアはポーランドと一緒にいてです。よく昔のことを話します。

「あの時はドイツ騎士団だったんだよね」

「そうだしーーー。けれど今は」

「東ドイツだったよね」

「もう統一したけど同じじゃね？」

「基本的にはそうだよね。ドイツ騎士団からプロイセンに名前が変わって」

「それで今は東ドイツ。場所は同じだしーーー」

まずはプロイセンのことを話します。

「あの時はデンマークさんが暴れてたしね」

「バイキングめっちゃ強かったし。あれには俺も参ったんよ」

「ああ、ポーランドのところにも来てたんだ」

「いきなり船でやって来て大暴れしてたんよ。しかも滅茶苦茶食うし」

「そうだったよね。俺のところにも時々来て大暴れしてたよ」

デンマークも昔はそうしたことをしていたのです。彼の他にはノルウェーもしていました。こうした意味でも二人は親友と言えるのでしょうか。

「他にもモンゴルがいたり」

「あいつ最近どないしてるん？」

「日本さんと仲良くなろうとしてるらしいよ」

「ふーーーん、それ結構よくね？」

「いいと思うよ。日本さんの周りも賑やかだけれどね」

「俺達の周りみたいなもんかな」

「それとはまた違うみたいだね」

こんな話もするのでした。リトアニアもポーランドもお互いの付き合いがかなり長くなっています。

第千六百五十六話　　完

２０１０・１０・１５

第千六百五十七話　起きると横に　☆

第千六百五十七話　起きると横に　☆

「もーーー、ポーランド・・・・・・」
寝てしまっていたリトアニアが起きるとです。そこにはロシアがいました。それに気付いたリトアニアは。
（ぎゃあああ。起き抜けにロシアさん！？）
これは怖いです。日本なら刀を抜いています。
「す、すいません！」
けれどです。ロシアは穏やかな声で彼に尋ねてきました。
「何の夢見てたの？」
「えっ！？」
「一体」
「い、いえその。まあその」
とりあえずです。ぼかしながら答えるリトアニアでした。こうしたことは日本を見て倣ったのでしょうか。それでロシアに言うのでした。
「小さい時の頃っていいますか」
「小さい頃の？」
「たまに見るんです」
こうロシアに放します。
「一番楽しかった頃のこととか」
「そうだったんだ」
「その時みたいになればいいなって」
リトアニアはこう話すのでした。
「そう思ったり。はは、無理ですよね」
リトアニアもそれはもう適わないと思っています。ただ思っているだけでそれが無理ではないとは。この時の彼はわかっていません

でした。

第千六百五十七話　完

2010・10・16

第千六百五十八話　寝られる人

第千六百五十八話　寝られる人

韓国が日本のお家にいた頃です。お仕事の時間になったので日本が韓国を起こそうとしたらです。実に気持ちよさそうに寝ていました。

「韓国さんが寝ていますが」

「そうか。そういえば仕事をはじめるにはまだ少し早いな」

上司もここでこう言いました。

「もう少し寝かせておこう」

「それでいいのですか」

「ああいい。昨日の仕事はかなり辛かったからな」

それを理由にする上司でした。

「台湾もだ。もう少し寝かせてやれ」

「わかりました」

「御前達三人は一緒なんだからな」

上司はここで日本にこんなことも言いました。

「だからだ。御前も休め」

「私もですか」

「今は休んで後で思いきり働いてもらう」

そうするというのです。

「三人でな」

「わかりました。それでは」

日本も上司のその言葉に頷きます。

「今からそうして」

「そうだ、休め」

日本のお家ではこんな感じでした。リトアニアとえらい違いでした。

第千六百五十八話　完

2010・10・16

第千六百五十九話　ロシアのささやかな夢　☆

第千六百五十九話　　ロシアのささやかな夢　☆

「って」
（駄目じゃないかロシアさんに言ったら！）
リトアニアは心の中で自分自身に突っ込みを入れました。
（話題変えないと、ここは）
「あの、それでロシアさんは夢とかありますか！？」
「僕の夢？」
「はい、それは何ですか？」
（し、しまった）
言った傍からです。リトアニアは後悔しました。
（話題間違えたかな。きっと怖いこと考えてるよ）
「是非聞かせて下さい」
それでもこう言うリトアニアでした。ここまで来たらまさに毒を食わらば皿までです。言うしかありませんでした。
「あったかい所で」
けれどです。ロシアは恥ずかしそうにこう言うのでした。
「ひまわりに囲まれて暮らすことかな」
「えっ！？」
「それと食べるものとウォッカがあればいいかなって」
こう言うのでした。
「僕はそれだけでいいよ」
「そ、そうなんですか」
「うん、それができたら他には何もいらないかな」
意外とささやかなロシアの夢でした。実は彼は物凄く無欲だったのでした。少なくとも中の人達はその様です。彼の近くに何でも俺起源なんだぜと言う人もいますが。

第千六百五十九話　完

2010・10・17

第千六百六十話　アメリカンアンドチャイニーズドリーム

第千六百六十話　アメリカンアンドチャイニーズドリーム

「えっ、僕の夢かい？」

「それはもう決まっているあるよ！」

アメリカと中国に夢を聞くと満面の笑顔での返答が来ます。

「大成功して大金持ちになることさ！」

「偉くなるか商売で成功して大金持ちになることある！」

返答はほぼ同じです。

「それ以外にはないね。ああ、あと正義も」

「皆で中華料理を腹一杯食べるあるよ。もう毎日飽きるだけあるよ」

「こういう人達だったりしますから」

日本はそんな二人を見ながらぽつりと話します。

「私の家にも結構以上に強引に商売に来てくれます」

「それって凄い災厄なのでは？」

日本の話を聞きながら二人を見てです。ハンガリーは思わずこう言ってしまいました。

「この二人って」

「まあ慣れてますから」

「しかし。随分と現実的な夢ですね」

ハンガリーは二人の夢についてこう思いました。

「大金持ちになることですか」

「お金をどんどん手に入れて使って何でもかんでも買ってとにかくどんどん大きくなるんだ！」

「お金が全てあるよ。この世はこれで動いているあるよ」

「ううん、確かにそういう一面はありますけれど」

それでもこの二人はちょっと極端なんじゃないかしら、ハンガリーは心の中でこう思いました。とはいってもこの二人の夢はそうし

たことですから言っても仕方ありませんが。

第千六百六十話　　完

２０１０・１０・１７

第千六百六十一話　起きると

第千六百六十一話　起きると

リトアニアはロシアの話を聞いてからまた寝てしまいました。ロシアはそれを見ても何もしませんでした。ただそっとその場を離れただけです。

ベラルーシがです。そのお兄さんに尋ねました。

「兄様、リトアニアは」

「ああ、いいんだよ」

穏やかな笑みで妹に告げます。

「今はね」

「左様ですか」

「代理人置いておいたしね」

「代理人とは？」

「今中国君のところからあの動物が来てるじゃない」

こう穏やかな顔で話すのでした。

「あれをね」

「あれは確か」

ベラルーシはその動物が何なのかすぐにわかりました。それは、です。

「猛獣なのでは？」

「あれっ、そうだったんだ」

「はい、実は肉も食べます」

「笹だけじゃなかったんだ。まあいいや」

それでいいというのが流石です。ロシアしかこんなことを平気でいいやとする人はいません。まず考えられないことであります。

実はパンダは猛獣です。大きくて爪も牙もしっかりとあります。お湯と水で性別が変わる人のお父さんを見てもわかることですが。

第千六百六十一話　完

2010・10・18

第千六百六十二話　最早夢じゃない

第千六百六十二話　最早夢じゃない

日本の周りにはまだ個性的な顔触れがいます。ある意味隣人達に恵まれているのでしょうか。ハンガリーもびっくりするこの二人です。

「俺の夢は世界のあらゆるものを俺の起源にすることなんだぜ！」

「私は。何時でも日本さんと一緒にいられたら」

韓国と台湾です。韓国は凄いハイテンションで、台湾は恥ずかしそうにです。それぞれの夢をハンガリーに対して語るのでした。

「それが俺の壮大な夢なんだぜ」

「台湾ちゃんはわかるけれど」

ハンガリーはここでも呆れています。ただしアメリカや中国のそれに対するのとは随分違ってです。かなり疲れたものも入っている呆れなのでした。

「あの、あんたの夢って」

「何だ？何処かおかしいんだぜ？」

「それ夢じゃないんじゃないかしら」

こう彼にも言います。

「それもかなり」

「んっ？おかしいところがあるんだぜ？」

それでわかる韓国ではありません。

「俺の夢はでっかくて凡人にはわからないんだぜ。生徒会にいる何かよくわからない二人なんて目じゃないんだぜ」

「イギリスとフランスがよくわからない二人って」

ハンガリーはこのことにも唖然でした。

「日本さんの周りってこういう国ばかりなのかしら」

「また。日本さんと一緒に暮らしたいですね」

台湾はちゃんとした夢です。けれどその夢はかなり乙女のもので

した。その夢を話すのでした。

第千六百六十二話　　完

2010・10・18

第千六百六十三話　またパートナーに

第千六百六十三話　またパートナーに

本当に色々な苦労を重ねてきたリトアニアは今はロシアとは一緒に住んではいません。独立してそれでいつもあの彼と一緒にいます。

「何か今はね」

「俺の方がフォローしてね？」

「あはは、そうだよね」

「昔と逆だしーーーー」

こんな話をしながらいつも一緒にいるのです。リトアニアとポーランドはお家こそ別々ですがそれでもです。今は一緒にいられるようになっています。

そのことが嬉しくてです。リトアニアはこう言うのでした。

「やっぱりポーランドといるとね」

「俺もリトといると」

二人で勉強や学校のお仕事をしながらにこりとしています。二人共です。

「何か違うんだよね」

「しっくりくるしーーー」

二人はまた一緒になれたことが幸せで仕方ありません。しかしです。

「あの、僕は」

ラトビアはです。完全に忘れられています。

そのリトアニアがポーランドと一緒にいてエストニアがフィンランドと一緒にいるからです。この人は完全に孤立してしまっているのです。

「誰かお友達になってくれません？さもないと」

ロシアの存在が気になって仕方ないのです。

そんなラトビアですがリトアニアもポーランドもエストニアも気

付いてくれません。果たしてこの人にパートナーができる日はあるのでしょうか。

第千六百六十三話　　完

２０１０・１０・１９

第千六百六十四話　実はパートナー不在

第千六百六十四話　実はパートナー不在

いつも傍に何人もいてお家も賑やかで新聞部では枢軸の三人の一角である日本です。何処かの誰かが言うような孤立とは全く無縁の人です。

しかしです。よく見ればです。

「パートナーとなってくれる方ですか」

「そういう人います？」

「そういえばいませんね」

こうハンガリーに答えます。

「今気付きましたが」

「イタちゃんとドイツさんみたいな関係の国ありませんよね」

「はい」

実はそういう人がいないのが日本です。アメリカも中国もオーストラリアもそうした意味ではちょっと以上に違う関係なのです。

「ハンガリーさんとオーストリアさんみたいな関係の人もいませんし」

「そんな、私達はですね」

ここでおのろけが入るハンガリーでした。

「別にそんなのじゃありませんよ」

「あっ、そうでしたか」

「そうですよ。確かにオーストリアさんは素晴しい人ですけれど」

日本以外の人だとこれでわかる致命的な一言です。

しかし日本はそうしたことには気付かずにです。こう言うのでした。

「パートナーですか。欲しいと思う時がないと言えば嘘になりますね」

「そうですか、やっぱり」

お友達やお家の人はとても多くてもパートナーはいない、日本にない数少ないものです。

第千六百六十四話　　完

２０１０・１０・１９

第千六百六十五話　かつてはいました

第千六百六十五話　かつてはいました

「そういえばなんですよね」

「そうなのよね」

タイとベトナムも日本にパートナーがいないことに気付いてです。

そのうえで話をするのでした。

「日本さんはお友達は多いのですが」

「私達も含めて」

「ええ、それでもです」

「パートナーになると」

いないのです。どうしてもです。

日本にパートナーはいないのです。太平洋には一人もです。それについてはこの人も同じです。

「おいどんも日本には吊り合わないでごわす」

「そうですよね。日本さんの力が強過ぎて」

「そのせいで」

それが理由です。日本の力はやっぱりとても強いのです。そのせいでパートナーができないというのも困ったことです。

それで、です。日本にはパートナーがいないのです。けれどふとオーストラリアが言いました。

「昔はイギリスがいたでごわすが」

「ああ、そうでしたね」

「けれど今は」

そうした関係ではありません。これもまた難しいところです。

「ＥＵに入っていますから」

「どうしても。私達は私達でＡＰＥＣにいるし」

そうした問題があるのでした。今では二人はいる組織も違っているのです。

とにかくパートナーについてはどうしてもいない日本です。果たしてこのことはどうなるのでしょうか。望みは薄いようでありますが。

第千六百六十五話　　完

２０１０・１０・２０

第千六百六十六話　正義の味方までいても

第千六百六十六話　正義の味方までいても

「まあパートナーがいなくてもだ」
「はい」
日本は今は脚本家さんのお話を聞いています。こうした人までお家にいるのは日本にとって幸せなことであると言えるでしょう。
その脚本家さんの言葉はです。
「色々な人間が周りにいるだろ」
「それは確かに」
「ならいいだろ」
こう日本に言うのです。
「それならな」
「そうですか」
「そうだ。俺はそう考えるがな」
いつもの俺様口調ですが日本に対して親身なのは確かです。
「それにだ。日本にはだ」
「私には」
「正義の味方までついてるじゃないか」
その言葉と共にあの四人のライダー達まで出て来ました。
「この連中がな」
「最近やっとこの人達の言葉がわかってきました」
「ああ、聞いてればわかるんだよ言葉ってのはな」
何かと変な言葉ですがそれでもなのです。
「だから聞けばいいんだよ」
「それについてはですね」
「パートナーがいなくても家族がいて友達が多い」
日本の状況です。
「それでいいだろ」

「そうですか」
これが脚本家さんの言葉でした。確かに一理あります。

第千六百六十六話　　完

２０１０・１０・２０

第千六百六十七話　パートナーになるには

第千六百六十七話　パートナーになるには

「私もパートナーを探しているのですが」
「なあ、日本」
イギリス本人が遂に自ら出て来てその日本に対して言ってきました。
「ものは相談なんだけれどな」
「はい、何でしょうか」
「御前今パートナーいないんだよな」
かなりダイレクトに尋ねる彼でした。
「そう聞いたんだがな」
「はい、実はそうなのです」
「じゃあな、もう一回どうだ？」
イギリスはここでもダイレクトでした。飾っていません。勿論いつもの素直でない趣も今はありません。
「俺とな。パー・・・・・・」
「あっ、日本さんここでしたか」
「探してやってたんだぜ」
しかしここで、でした。台湾と韓国が出て来てです。日本を左右から囲んでしまいました。
そうしてそのうえで、です。二人で日本を何処かに連れて行ってしまいました。
「こっちに美味しい点心用意しましたから」
「思いきり辛いラーメン作ったんだぜ。折角だから食わせてやるんだぜ」
「お、おい御前等」
イギリスはその二人に何か言おうとします。しかしそれよりも前にです。

日本は何処かに連れて行かれました。イギリスが何かを言う暇もありませんでした。

かくしてまた一人になってしまったイギリスでした。どうやら日本のパートナーになるには最初にやるべきことがあるようです。困ったことに。

第千六百六十七話　　完

２０１０・１０・２１

第千六百六十八話　太平洋での騒ぎが

第千六百六十八話　太平洋での騒ぎが

今アメリカも中国も日本も経済のことで揉めています。三国共上司の話も絡んでそれで余計にややこしい状況になってしまっています。

三人共それぞれ体調に問題を抱えていたりします。しかしです。そんな彼等を見てです。イギリスが死にそうな顔で呟くのでした。

「あの連中が静かにしてくれないとな」

「ああ、そうだよな」

フランスも同じ顔でイギリスの言葉に応えます。

「俺達はもうな」

「冗談抜きで冥界の門が見えてくるんだがな」

「俺もう黒い鎧の連中見たぞ」

所謂冥衣のことのようです。

「あの連中ってあれだよな」

「ああ、あっちの世界が棲家だよ」

「じゃあそれを見た俺ってまさかよ」

フランスがこう言った時です。イギリスも言いました。

「ああ、俺も今見えたぞ」

「妖精じゃなくてか」

「百八人全員見えたぞ、今」

ある意味レアであります。全員見たというのはです。

「しっかりとな」

「そりゃ貴重だな」

フランスもイギリスも太平洋の国々どころではない状況です。若し何かあればです。そこから本当に死んでしまいかねない今の欧州の国々でした。

第千六百六十八話　完

2010・10・21

第千六百六十九話　この人もパートナーなし

第千六百六十九話　この人もパートナーなし

「ああ、僕のパートナー」
「いなかったのでは？今は」
「そうだよね。昔はずっとオーストリアさんと一緒だったよね」
「はい、そうでしたね」
そのオーストリアさんとお話をしています。実はこの二人の付き合いは結構長いのです。それで今もロシアは結構オーストリアさんが好きだったりします。
「あとはフランスですね」
「そうだね。フランス君とも付き合い長いよね」
誰もが知っているフランスとオーストリアさんの仲ですがロシアはこの二人と伝統的に仲がいいのです。惜しむらくはそうした国がベトナムとお付き合いがある以外はないことです。
「そうした意味じゃフランス君とは今もパートナーなのかなあ」
「そうなりますか」
「ううん、その割には最近疎遠かなあ」
ロシアは首を傾げさせました。
「もっと仲良くしたいと思ってるんだけれど」
「難しいところですね、それは」
「欧州に誰かいないかな」
ロシアの今の言葉は結構切実なものでした。
「いたらね。とっておきのバレエを見せてあげるよ」
「それは非常にいいですね」
音楽といえば、のオーストリアさんもすぐに反応を見せます。けれどこれがです。
ロシアのその個性のせいでしょうか。中々その待望のパートナー

が見つからないのでした。この人もパートナー不在なのでした。

第千六百六十九話　　完

２０１０・１０・２２

第千六百七十話　絶対になれない

「ロシアさんとですか！？」
「日本君と！？」
お互いにパートナーになってはというお話が日本の上司から出ない訳でもありません。しかしその都度お互いにこうなってしまうのです。
「それだけは嫌です！」
「いやあ、僕もね」
互いに物凄い拒否反応を見せます。それにこの話が出たら常にアメリカと中国が二人を見ます。何しろロシアとは悶着のある人達ですから。
その二人が注目する中で、です。お互いに言うのです。
「あの人とは絶対にそうした関係にはなれません」
「日本君とはね」
「そうなる位ならいっそのこと」
「とことんまでやるしかないんじゃないかな」
睨み合いに入ります。そしてそんなことを言った日本側の上司はです。
何故か暗殺されたり失脚したりしています。奇怪な話もあるものですが実際にそうなっています。
今の上司の連中のうちの鳩なあれもです。能天気に言ってです。
「あれ、僕何で誰も相手にされなくなってるの？」
「自分の胸に聞いて下さい」
日本はその上司に冷たく言うのでした。
「誰がロシアさんなんかと」
「駄目だよ、それは。友愛でいかないと」
「それはポアという意味ですか？」

とにかくロシアとは絶対にパートナーになれない日本でした。それはロシアの方もです。まさに不倶戴天の敵同士です。

第千六百七十話　　完

２０１０・１０・２２

第千六百七十一話　ハロウィンの起源

第千六百七十一話　ハロウィンの起源

そろそろハロウィンの時期です。韓国は生徒会室でいきなり言い出しました。

「ハロウィンの起源は俺だからさっさとお菓子を寄越すんだぜ」

「手前の家にそんなものあった筈ねえだろうが」

「というか何だその無茶苦茶な理屈は」

イギリスとフランスがいつもの様にうんざりとした顔で突っ込み返します。

「とりあえず手前だけは家に来るなよ」

「言っても耳に入らねえのはわかってるがな」

「とりあえず今から寄越すんだぜ」

やっぱり話が耳に入っていません。韓国の耳はある意味物凄い高性能です。

そしてその高性能の耳をそのままにしてです。イギリスとフランスにさらに言います。

「御前等の菓子はまずいけれどそれでも食ってやるから感謝するんだぜ」

「それが人に言う言葉か？」

「だから来るなって言ってんだろうが」

しかしこう言われてはいそうですかと頷く韓国ではありません。挙句には勝手にイギリスとフランス名義でお菓子を買っています。

クッキーや飴やチョコレートを食べてです。それでまた言うのです。

「まずはこれだけで満足してやるんだぜ」

「おお、気付いたら俺の名前で買ってくれてんじゃねえか！」

「お兄さんここまで傍若無人な奴はじめて見たよ！」

少なくとも欧州にはない個性です。

「手前本当に来るなよ！」
「日本のところに行ってそのまま出て来るんじゃねえぞ！」
いきなり大波乱からはじまった今年のハロウィンです。とりあえずイギリスとフランスにとっては災厄からのスタートでした。

第千六百七十一話　完

２０１０・１０・２３

第千六百七十二話　美人幽霊

「これでいいかしら」
「はい、とても似合ってますよ」
台湾がベトナムに対して言っています。見れば二人はそれぞれの国の幽霊になっています。ところがその外見が、なのでした。
台湾にしてもベトナムにしてもかなりの美形です。それは幽霊になっても同じです。
同じどころかさらに際立ってです。物凄い美人さんの幽霊になっています。しかも二人です。
その二人の幽霊がです。今街にいるのです。そのうえで。
「じゃあ最初は」
「何処に行きますか？」
「日本さんのところはどうかしら」
ベトナムはまずはそこを提案するのでした。
「そこでどう？」
「あっ、いいですね」
日本のことを悪く思っていない台湾はベトナムの言葉ににこりでした。
「じゃあ最初は日本さんで」
「日本さんあれでお祭り好きだしね」
「そうですね。けれど最初はタイさんじゃないんですね」
「タイは後でいいわ」
ここで微妙な顔になるベトナムでした。やっぱりこの人とタイの仲は微妙なものがあります。
「そういうことでね」
「じゃあまずは日本さんのところで」
こうして二人のハロウィンがはじまりました。今年のハロウィン

も色々ありそうです。とりあえずは美人の幽霊さんが二人もでした。

第千六百七十二話　　完

２０１０・１０・２３

第千六百七十三話　日本のお家に着くと

台湾とベトナムが日本に着くとです。日本が早速出て来ました。
見ればこの人もお化けになっています。陰陽師の服を着てそして耳が。
「狐ですか」
「それになんですね」
「はい、なってみました」
こう二人に答えるのでした。
「如何でしょうか」
「金色の毛の狐」
「しかも尻尾は九本ですね」
「九尾の狐です」
まさにそれだというのです。日本にあるお話ではとりわけ強力だったことで知られている妖怪です。中国から来たと言われています。
「それになってみたのですが」
「ううん、何か」
「可愛いですよ」
これがその日本を見た二人の感想です。
「似合ってますし」
「日本さんに狐というのも」
「狸も考えたのですがこれにしました」
日本が言うにはその他の選択肢もあったというのです。
「御気に召されたのなら何よりです。それではです」
日本は二人にお菓子だけでなくお茶も振舞いました。二人のハロウィンは最初から随分と気分のいいはじまりとなったのでした。

第千六百七十三話　完

2010・10・24

第千六百七十四話　二人のところに来るのは

第千六百七十四話　二人のところに来るのは

イギリスとフランスはイギリスのお家にいます。そこで誰が来るのか待っているのでした。

「まああいつ以外だったらいいな」

「来たらお菓子にコチュジャン付けて出してやるよ」

フランスはわざわざその為にコチュジャンを用意しています。最早悪意とかそういうものを越えた何かが二人の中に芽生えています。

「まあとにかくだ」

「ああ、誰か来てくれるかな」

ここでチャイムが鳴りました。そして声が聞こえてきました。

「トリックオアトリートなのですよ」

「あいつかよ」

イギリスは今の言葉で誰かわかりました。

「全く。よりによってよ」

「イギリスの野郎、お菓子を貰ってやるのですよ」

「ああ、わかったわかった」

イギリスはうんざりとした顔で立ち上がりました。そうして白いシーツを被ってそれで幽霊になっているシーランドを出迎えるのでした。

「最初が御前かよ」

「それでお菓子を寄越すのですよ」

「ほらよ、持ってけ」

こう言ってチョコレートやクッキーやキャンディをどっさりと渡しました。

「好きなだけ食べろ」

「御礼を言ってやるのですよ」

こうしてまずはシーランドを出迎えたイギリスでした。お客さんはこれからです。

第千六百七十四話　　完

２０１０・１０・２４

第千六百七十五話　男のキョンシー

第千六百七十五話　男のキョンシー

二人が次に向かったのは中国のところです。すると彼の格好は。

「あっ、老師はそれなのね」

「それできたのね」

「定番あるがどうあるか？」

中国はキョンシーの格好です。ちゃんと額にお札まであります。

そのうえで顔を青く化粧しています。その姿で二人を出迎えます。

そして彼が出してきたお菓子は。

「これでいいあるか」

「月餅ね」

「うん、私これ大好きなのよ」

中国のお菓子の定番の一つが出てきました。台湾もベトナムもそれを見てすぐに笑顔になります。

「じゃあ有り難く頂くわ」

「是非共ね」

「たっぷりあるからどんどん食べるよろし」

中国は二人にとても気前のいいことを言います。

「お茶も飲むあるか？」

「じゃあそちらも」

「有り難く」

「ハロウィンのことはよく知らないあるが楽しいお祭りある」

中国はまだハロウィンについてはよく知りません。それでもなのです。明らかに楽しんでいます。そしてあるものさえ出してきました。

「爆竹も鳴らすあるか」

「それはちょっと。どうかしら」

ベトナムは爆竹には首を捻ります。流石にそれは、でした。

第千六百七十五話　完

2010・10・25

第千六百七十六話　今度はこの二人

第千六百七十六話　今度はこの二人

「何か面白そうだしーーー」
「お邪魔します」
イギリスとフランスのところに今度はポーランドとリトアニアが来ました。二人はとりあえず騎士の亡霊の格好をしています。流石に首は外れていませんが。
「トリックオアトリートだし」
「ああ、わかった」
「お菓子ならあるからな」
イギリスとフランスは二人にはかなり穏やかです。そうしてです。二人にそれぞれのお菓子をあげます。ただポーランドはイギリスのお菓子を食べようとはしません。そのかわりこんなことを言うのでした。
「何か口に合わんのよ」
「ああ、御前もそうか」
それがどうしてなのかわかっているので。イギリスも強く言いませんでした。
「それじゃあ仕方ないな」
「いや、プティングならもらうし」
「あっ、それならいいのか」
「あれよくね？」
ポーランドも認めるプティングの美味しさです。言い換えればイギリスにはそれ位しか得意料理がないと言えるのですけれど。
「だからそれ欲しいしーーーー」
「できれば俺も」
「ああいいぜ、好きなだけ食べてくれ」
食べ物のことで珍しく笑顔になるイギリスでした。というかこの

ハロウィンではじめての笑顔でした。

第千六百七十六話　　完

２０１０・１０・２５

第千六百七十七話　ジェイソンはアンデッド

第千六百七十七話　ジェイソンはアンデッド

台湾はベトナムにアメリカのところに行こうと言いました。しかしそのベトナムは。

「ううん、まあそれなら」

「やっぱり戦争のことが」

「派手にやったからね」

このことを言うのです。あのアメリカに土をつけたたった一人の女の子、それがベトナムです。尚男でもそういう人はいませんしこの人は中国も、ついでにフランスも倒しています。

「何か言われないかな」

「大丈夫ですよ。アメリカさんとは今はお付き合いがありますよね」

「ええ、それはね」

「それなら大丈夫ですから」

こう言ってです。そのうえでベトナムを連れて行きました。するとです。

アメリカはホッケーマスクにチェーンソーという格好で出て来て二人を笑顔で歓迎するのでした。

「やあ、楽しんでいってくれよ」

「ほら、大丈夫ですね」

「そうね。案外ね」

「お菓子ならたっぷりあるぞ。コーヒーかレモンティーもあるしな」

絶対にミルクティーとは言わないアメリカです。何はともあれそのお菓子ですが。

青やオレンジのケーキです。イギリスや日本ならまず食べません。しかし太平洋の女の子は違います。実に逞しいのです。それで。

「有り難うございます」

「それなら遠慮なく」
にこにことしてそのカラフルなケーキを食べていくのでした。太平洋でアメリカのケーキを食べないのはどうやら日本だけのようです。

第千六百七十七話　完

２０１０・１０・２６

第千六百七十八話　出て来た仮面ライダー

第千六百七十八話　出て来た仮面ライダー

いきなりイギリスの家の扉が破壊されました。そしてやって来たのは。

「ドゥディッグオア〝ドゥディードゥ！（翻訳：トリックオアトリート！）」

「オガジオ〝ヨゴゼ！（翻訳お菓子を寄越せ）」

仮面ライダーオンドゥルと仮面ライダーダディです。勿論仮面ライダームッコロと仮面ライダームッキーもいます。

その四人のライダー達がです。イギリスとフランスのところに来たのです。武器を構えたうえでお菓子を要求してきているのです。

その彼等に対して二人は。

「こいつ等が来るなんてよ」

「おいおい、扉完全破壊かよ」

二人はもう何が何かわからなくなっています。まさかの斜め上の展開にです。

「で、お菓子かよ」

「それが欲しいんだな

「ヨゴゼ！（翻訳：寄越せ！）」

「バヤグジド！（翻訳：早くしろ！）」

今度は仮面ライダームッコロと仮面ライダームッキーが要求します。勿論武器を構えてそれを二人に対して向けながらの要求です。

正義の味方にお菓子を要求された二人はです。うんざりとした顔で言うのでした。

「何で俺達は最近こんなのにばっかり絡まれるんだ？」

「韓国だけじゃねえんだな」

しかし今にも攻撃されそうな状況では取る手段は一つしかありません。二人は仕方なく彼等にお菓子をあげました。それも山程です。

「しかも食うしな、奴等」
「何がこれ食ってもいいかな、何だよ」
こうして二人は家の扉を換えることになりました。とんだ災難でありました。

第千六百七十八話　　完

２０１０・１０・２６

第千六百七十九話　それでも来た

第千六百七十九話　それでも来た

「ええと、タイさんのところですか」
「付き合いだから行かないとね」
ベトナムはこう台湾に言います。何だかんだでベトナムはタイとお付き合いがあるのです。確かにお互い微妙な感情を持っていますが。ただ二人共人付き合いが上手なので言葉に出さないだけです。態度にも。
それで行くとです。虎の皮を被ったタイが出て来ました。
「ああ、虎人ですか」
「はい、それになってみました」
タイはいつもの温和な微笑で台湾に答えます。注目すべきは何気にベトナムを見ていないことです。
台湾に話してからベトナムを見ます。そうしてなのでした。
「御二人はお菓子はかなり食べられましたね」
「ええ、そうよ」
ベトナムはタイと目を合わさずに答えます。タイもそうしています。
「日本さんと中国とアメリカのところでね」
「では僕は趣向を変えて果物にさせてもらいますね」
それだというのです。
「それで如何でしょうか」
「というとマンゴーですか」
「はい、勿論それもあります」
こう台湾に答えます。
「ドリアはいいですね」
「あれはちょっと」
「匂いが」

それでドリアはなしになりました。二人は今度は果物を御馳走になったのです。

第千六百七十九話　　完

２０１０・１０・２７

第千六百八十話　まともなお客さんとは

第千六百八十話　まともなお客さんとは

「凄いね、それはまた」
「ああ。何が何だかわからなかったよ」
フランスはお菓子を貰いに来たイタリアに対して話しています。
イギリスは今扉をつけている最中です。イタリアにお菓子とケーキを振舞っています。
「あいつ等って正義の味方なんじゃないのか」
「最近怪しいライダーもいるじゃない」
「映画だと特にそうだな」
フランスもイタリアに言われてこのことを思い出しました。
「しかしな。それでもな」
「扉壊すのはないよね」
「最初はシーランドだったしな」
「次の二人はまともだったんでしょ？ポーランドとリトアニアは」
「少なくとも仮面ライダーの連中よりはな」
まともなのでした。少なくとも仮面ライダーの四人は最凶でした。
「しかも異様に食ったしな」
「そんなに？」
「今お菓子を買いに行かせてるんだよ」
フランスはうんざりとした顔でコーヒーを飲んでいます。
「一人当たり十人分は食ったな」
「ううん、俺そこまで食べられないよ」
「そうだよな。ったくよ、本当にあれは最悪だったぜ」
何故かまともなお客さんにあまり会っていないイギリスとフランスです。特に仮面ライダー達には散々な目に遭ってしまいました。

第千六百八十話　完

2010・10・27

第千六百八十一話　それはＵＭＡ

第千六百八十一話　それはＵＭＡ

台湾とベトナムは今度はオーストラリアのお家に行きました。すると出て来たのは羊の角を付けた彼だけではなくニュージーランドもです。この娘もいました。

やっぱり頭には羊の角があります。その姿で言うのです。

「アメリカのところにいるっていう羊人間でごわす」

「どうばい？可愛いばい？」

「確かに可愛いですけれど」

「あれでしょ？何か軍の研究施設か何処かの跡地に出てるっていうあれよね」

台湾とベトナムはこう二人に返します。

「あれって本当にいるんですか？」

「モスマンとかチュパカブラみたいな都市伝説の可能性があるけれどね」

実際チュパカブラも見たという人がいたりします。都市伝説とＵＭＡの関係は結構微妙なものがあったりするのです。粉足りは複雑です。

「それでも。あの羊人間は」

「妖怪じゃないですよね」

台湾はベトナムに対して言います。

「そうですよね」

「ううん、多分」

「まあ小さなことにはこだわらないことでごわす」

「お菓子ならたっぷりあるから皆で食べるばい」

二人はそんなことはと言って台湾とベトナムにお菓子を勧めます。

「キーウイもあるでごわすよ」

「身体に凄くいいばいよ」

二人はこれも勧めるのでした。二人が勧めるキーウイはとても美味しいものでした。

第千六百八十一話　完

２０１０・１０・２８

第千六百八十二話　南方の妖怪

「トリックオアトリート」
「ああ、セーシェルか」
「思ったより普通だな」
イギリスとフランスのところに今度来た人はセーシェルでした。鮫の頭を被って三叉の矛を持った。その姿でやって来たのです。
「あれか？やっぱり海だから」
「鮫人間か」
「ええ、それになってみたのよ」
実際にそうだというのです。鮫の頭の中から言います。
「どう？似合う？」
「被りものだから似合うとかはないけれどな」
「それでもましだな」
フランスが今言ったのはお客さんという意味です。
「じゃあお菓子だよな」
「待ってろよ。どっさりと持って来てやるからな」
「御願いね」
実はこの娘は食べ物を全部イギリスとフランスから買って生きています。ですから二人との関係はかなり深いものであるのです。
しかもです。イギリスとフランスにしても彼女を可愛がっているので。それこそお菓子を山の様あげます。
そしてそのうえで、です。こう彼女に言います。
「足りなかったらまた来いよ」
「待ってるからな」
「有り難う」
二人はやっと落ち着いた感じでした。しかし油断は禁物なのでした。災厄は突然やって来るものですから。

第千六百八十二話　完

2010・10・28

第千六百八十三話　暑い国でも

第千六百八十三話　暑い国でも

「トリックオアトリート」
「ああ、来たんやな」
ベトナムと台湾は今度はキューバに来ました。早速彼が出て来て二人を迎えます。何故か彼もＵＭＡでチュパカブラの着ぐるみです。口のところから顔を出しています。
その彼が出してきたのはアイスクリームです。二人に御馳走しながら言うのです。
「まあ俺のところはアイスやろな」
「そうね、あんたのお家はやっぱりこれよね」
ベトナムはそのアイスを食べながらキューバに対して言います。
「昔からアイス好きだしね」
「そやな。ほんまに」
「それにしても」
二人の話を聞いている台湾はそんな二人を見て言いました。
「キューバさんとベトナムさんって昔からお付き合いあるんですね」
「そうよ、ロシアと仲がよかった時にね」
「付き合いができたんや」
二人はこう台湾に説明します。
「その時からの関係だからね」
「やっぱり仲はええで」
「そうなんですか」
台湾はそれを聞いて納得した顔で頷きます。
「それで今もなんですね」
「そういうこと。いい奴よ」
ベトナムはにこりと笑って台湾をキューバに紹介します。台湾もお付き合いを広げていっています。

第千六百八十三話　完

2010・10・29

第千六百八十四話　二人は二人で

第千六百八十四話　二人は二人で

「ハロウィンですね」
「はい、そうですね」
フィンランドとエストニアが笑顔で話しています。二人はハロウィンも一緒にいます。二人の関係もどんどん深いものになっていっています。
「それじゃあですけれど」
「僕達二人だけで楽しむのは少し悪いですよね」
人付き合いの上手な二人はこう話します。そしてです。
フィンランドがこう提案しました。
「スーさんのところに行きます」
「うっ、あの人ですか」
スウェーデンの名前を聞いて少しびくりとなるエストニアでした。
「あの人は結構」
「まあ怖いですけれどね」
フィンランドもこのことを否定できません。伊達に彼と一番長くお付き合いしているわけではありません。というかスウェーデンの相棒を務めていたその能力は凄いです。
「それでもいい人ですから」
「そうなんですか？ロシアさんと同じだけ怖いんですけれど」
「お仕置きしてきたり洒落にならない上司はいませんから」
ここが大きく違います。
「安心して下さいね」
「わかりました。それじゃあ」
こうして二人はスウェーデンのところに行くことになりました。
二人もまたこのハロウィンを楽しんでいます。楽しいお祭りであります。

第千六百八十四話　完

2010・10・29

第千六百八十五話　ロシアと付き合っても

第千六百八十五話　　ロシアと付き合っても

キューバからアイスを貰ったベトナムと台湾は今度は彼の国から正反対の方に向かいます。そこは。

「あの、ここって」

「そう、ロシアよ」

ベトナムは平然と台湾に答えます。

「凄く広くて雪ばかりでしょ」

「それはわかりますけれど」

「まあロシアと付き合ったらね」

太平洋ではそれだけで恐ろしいことになってしまうのです。

「日本さんだけじゃなくてアメリカも中国も嫌な顔するしね」

「それもありますけれど」

台湾は困った顔でベトナムに言います。それだけではないというのです。

「あの、ロシアさんって」

「私は大丈夫よ。台湾もね」

「どうしてなんですか？それは」

「ロシアって友達や利害関係のない相手には穏やかで親切だから」

そもそもお友達が伝統的に少なかったりします。フランスとかオーストリアさん位と言って過言ではありません。あとこのベトナムとキューバもそうなのですが。

あと利害関係が生じれば、ということでした。やっぱり怖いロシアです。

「安心していいわよ」

「そうなんですか」

「私がロシアと付き合ってもアメリカも中国も何も言わないしね」

何故かというと彼等との戦争で勝っているからです。喧嘩の強さ

でもかなりのものなベトナムなのです。人付き合いも上手で喧嘩も強い、ポテンシャルはかなりのものです。

第千六百八十五話　　完

２０１０・１０・２９

第千六百八十六話　スーさんにハロウィン

第千六百八十六話　スーさんにハロウィン

フィンランドとエストニアはスウェーデンのお家に向かっています。フィンランドはサンタになっていてエストニアはトナカイです。この格好で行くのでした。

「ハロウィンは妖怪でなくてもいいところがいいですね」

「そうですよね」

二人は笑顔でこう話しています。

「お陰で今の季節にサンタになれますし」

「こうした仮装もできますしね」

和気藹々とした雰囲気でスウェーデンのお家のところに来ました。するとです。

いきなり物凄いプレッシャーが来ました。まるで極盛期の大魔神佐々木が九回のマウンドにいる時の様に。そんなプレッシャーです。

「間違いありません、スーさんはです」

「お家の中にいますね」

「はい、では行きましょう」

フィンランドがスウェーデンと一番お付き合いが長いです。それで何とかこう言ってです。

扉を開けて言いました。

「トリックオアトリートです」

「スウェーデンさんいますか？」

「ん・・・・・・」

二人が言うといきなりでした。スウェーデンが出て来ました。

本人が出て来るとさらに凄いプレッシャーです。お付き合いの長いフィンランドもこれにはです。

「あはは、御本人はやっぱり違いますね」

「あの、もうここまで来たら引き返せませんよ」
エストニアも覚悟を決めます。二人はどうなってしまうのでしょうか。

第千六百八十六話　　完

２０１０・１０・２９

第千六百八十七話　フレンドリーロシア

第千六百八十七話　フレンドリーロシア

「いらっしゃい」
「ええ、来させてもらったわ」
熊耳のロシアにです。ベトナムは気さくに挨拶をします。
「どう？調子は」
「身体は悪くないよ。ただね」
「お客さんがなのね」
「うん、それが残念だったけれど」
「私達が来たからね」
ベトナムはここでロシアに対してにこりと笑ってみせます。そのうえでこう彼に言います。
「もう寂しくないわよね」
「うん、有り難う」
ロシアもにこりと笑ってベトナムに返します。
「ベトナムさんにそう言ってもらうと嬉しいよ」
「それじゃあ中に入っていいかしら」
「うん、どうぞ」
こうしてロシアは二人をお家の中に案内します。しかしです。とても友好的なロシアを見てです。台湾は驚きを隠せません。それでベトナムに対してこう囁くのでした。
「あの、この人本当にロシアさんですよね」
「そうよ。他の誰に見えるのよ」
「見えないから驚いてるんですけれど」
「驚く必要ないわよ。だから友達には優しいのよ」
「そうなんですか」
とりあえずお友達にはとてもフレンドリーなのです。尚そのお友達の中に台湾と縁のある人が殆どいないのは偶然ではありません。

日本もそうですし。

第千六百八十七話　　完

２０１０・１０・３１

第千六百八十八話　無愛想なのだけれど

第千六百八十八話　無愛想なのだけれど

スウェーデンが出て来てです。二人に言った言葉は。

「まあ入れ」

「えっ！？」

エストニアはこう言われてびっくりしました。

「中に入っていいんですか」

「そこだと寒い」

だからだというのです。

「んだから入れ」

「は、はい。それじゃあ」

こうしてエストニアはフィンランドと一緒にスウェーデンのお家の中に入れてもらいました。するとすぐに温かいお部屋の中でお菓子だけでなくコーヒーもふるまわれたのです。

そのうえで、です。スウェーデンはこう彼等に言うのです。

「好きなだけゆっくりしてけ」

「何かこういうところって」

「凄く驚きますよね」

「スウェーデンって若しかして」

「いい人なんですよ」

こうだと話すフィンランドでした。

「ですから安心して下さいね」

「怖いのは外見だけなんですね」

「それと話し方だけです」

スウェーデンのそうしたところを知ったエストニアでした。彼にとってはこのハロウィンは思いがねない収穫ももたらしたのでした。

第千六百八十八話　完

2010・10・31

第千六百八十九話　太平洋は全て回って

第千六百八十九話　太平洋は全て回って

これで太平洋の国は全部回ったと思っていた台湾とベトナム。ここで台湾はこうベトナムに対して言いました。

「もう一つ香港がありましたよ」

「あっ、そうね」

ベトナムも台湾の言葉で思い出しました。まだ彼がいました。

「あの子のところのお菓子もね」

「はい、美味しいですし」

「それじゃあ行きましょう」

「そうですね。それじゃあ」

こうして二人は香港のところに来ました。するとです。

香港は二人に対して杏仁豆腐を出してきました。それで二人に言います。

「面白いことやってるのね」

「まあね。あんたはお家で待ってる方にしてるのね」

「そっちなのね」

「何か外に出る気分じゃないから」

それでだというのです。

「だから」

「ううん、気分の問題なの」

「それなの」

「そう」

まさにその通りだというのです。

「だから。作って待ってたの」

「有り難うね」

二人はそんな香港に感謝してその杏仁豆腐を食べるのでした。こうして太平洋は全部回ったと確信した二人でした。一国忘れてます

が。

第千六百八十九話　完

2010・11・1

第千六百九十話　北欧が揃って

第千六百九十話　北欧が揃って

スウェーデンのところにです。またお客さんでした。
「あれっ、今度は」
「誰でしょうね」
フィンランドとエストニアが反応するとです。早速トロールやドヴェルグや巨人に扮した三人が来ました。デンマーク、ノルウェー、それにアイスランドです。
「よお、来てやったっぺ」
「とりあえずお菓子が欲しいだ」
「何かあるかな」
「ある」
スウェーデンは三人に対しても同じ無愛想な調子で返します。
「安心するだ」
「まあスウェーデンの無愛想はいつものことだ」
「そう。僕達驚かないから」
「一緒に食べよう」
こうして北欧メンバー勢揃いとなってスウェーデンのお家でお菓子とコーヒーを楽しみはじめました。エストニアはそんな彼等を見て言います。
「楽しいハロウィンですね」
「はい、来年も是非やりましょう」
「ええ、僕も何かこの顔触れと一緒にいたくなりました」
笑顔でフィンランドの言葉にも応えます。そうしてです。
エストニアはハロウィンを楽しく過ごせました。ただし一つ問題が。
「あれ、誰か忘れてたかな」
実はラトビアのことを忘れていました。尚リトアニアは相変わら

ずポーランドと一緒です。それではラトビアはどうなっているのでしょうか。

第千六百九十話　　完

２０１０・１１・１

第千六百九十一話　忘れられるのはお約束

第千六百九十一話　忘れられるのはお約束

「ねえクマ三郎さん」
「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」
いつものやり取りをするカナダとクマ二郎さんですがこの人達もハロウィンに参加しています。それで誰かがお家に来るのを待っています。
「誰が来てくれるんだろうね」
「さあ。それはわからない」
クマ二郎さんはこうカナダに返します。
「けれどお菓子多いな」
「たっぷり作ったんだよ。何人来てもいいようにね」
カナダも乗り気です。本当に誰かが来て欲しいのです。
その彼のお家の前をベトナムと台湾が通ります。しかしです。
「今度は欧州の方に行く？」
「トルコさんがいいと思いますけれど」
二人はカナダのお家の存在に気付かず通り過ぎます。
そしてそのまま何処かに行ってしまいます。それで終わりです。
けれどカナダはその二人に気付かずです。まだ待っています。
「それで誰が来てくれるかなあ」
「来なかったらどうする？」
「いや、絶対に来るよ」
そう願っているのです。
「だから今はね」
「待つんだな」
そのままずっと待っているカナダでした。けれど誰も来ないのでした。

第千六百九十一話　完

2010・11・2

第千六百九十二話　ロミオの青い空

第千六百九十二話

ロミオの青い空
「なあロマーノ」
「何だよ」
「ハロウィンの格好これでええんか？」
「いいんじゃないのか？」
見ればスペインは闘牛士の格好です。黄金に輝くその服と紅のマントが眩しいです。
「何か火葬してお菓子をあげたりもらったりするんだろ？」
「ほなこれでええんやな」
「いいんだろ。それで俺はな」
「御前その格好は何や？」
「ロミオだよ」
それだというのです。
「日本のアニメであったんだよ。ロミオの青い空ってアニメな」
「それかいな」
「そうだよ。見ていて泣けたぜ」
ロマーノも感動したのです。そのアニメに。
「それでこの格好なんだよ」
「ふうん、世界名作劇場やったな」
「そうだよ。俺の国が舞台だったから見たんだよ」
「で、御前お菓子は？」
「何かくれ」
こうスペインに返します。
「甘いお菓子な。食ってやるからな」
「ああ、たらふく食べてくれや」
こう言ってそのお菓子を出すスペインでした。二人も楽しんでい

るようです。

第千六百九十二話　完

2010・11・2

第千六百九十三話　そのままカナダに気付かない

「欧州行く前にトルコにしましょう」
「やっぱりそれがいいですよね」
アジアンガールズはカナダのお家の前を通りながら話します。
「それでだけれど」
「トルコさんっておもてなし好きなんでしたっけ」
「そうそう、だから楽しみなのよね」
「はい、トルコアイスですね」
二人はもうトルコに関心を向けています。既にです。
そしてカナダはというと。
「誰が来るのかなあ」
「具体的には誰に来て欲しい？」
「来てくれるなら誰でもいいよ」
こうクマ二郎さんに対して答えます。本人はとても乗り気です。
しかしです。カナダのお家の前からは二人の姿が消えました。そのままトルコの方に言ってしまうのでした。お家に気付くことなく。
「韓国はどうしましょうか」
「韓国は韓国で好きにやってるからね」
ベトナムはこう台湾に対して答えます。
「だからいいでしょ」
「そうですね。行ってもいないでしょうし」
「ええ、絶対にいないから」
韓国のことは絶対に忘れられない二人でした。しかしカナダのことはといいますと。この二人も他の人達と同じなのでした。カナダにとってはとても悲しいことに。

第千六百九十三話　完

2010・11・3

第千六百九十四話　上司の家の関係で

第千六百九十四話　上司の家の関係で

スペインはロマーノに対してこう提案しました。

「ほなオーストリアの家に行こか？」

「何でオーストリアなんだ？」

「昔上司が同じ家の人やったし結婚しとったからな。それでや」

その縁でというのです。

「どや？行くか？」

「そういえばあの家が上司だった時もあったな」

ロマーノは言われて思い出しました。

「何かかなり懐かしい話だな」

「それでどや？一緒に行くか？」

「そうだな。ここで二人でいても何か面白くないしな」

実は女の子がいなくて物足りないと思っていたのです。ロマーノも弟と同じく女の子が大好きです。尚これはスペインもそうだったりします。

「じゃあ行くか」

「ああ、行くで」

「しかし御前オーストリアと結婚してたんだな」

ロマーノはこうスペインに言いました。

「それでも夜は一人だったんだな」

「俺はそっちの趣味はないからな。オーストリアもな」

「じゃあ布団を敷こう。なっ！は嫌いか」

「見たらトラウマになったわ」

そっちの趣味はないスペインでした。少なくとも髭のおじさんとそうしたことになるのは勘弁して欲しいのでした。勿論やらないかもです。

第千六百九十四話　完

2010・11・3

第千六百九十五話　おもてなし大好き

「よく来たねい」
「あんたの仮装はそれなのね」
「おうよ、どうだい？」
「何かあんたらしいわね」
トルコはあのオペラ座の怪人の姿です。仮面がとても似合っています。その姿でベトナムと台湾を出迎えてきたのです。
それで、です。トルコは台湾に対して尋ねました。
「それでだけれどな」
「はい、何でしょうか」
「日本は来てねえのかい？」
こう台湾に尋ねるのです。
「あいつは自分の家かい？」
「はい、今は」
「そうかい。まあ時間があったら来るように言ってくれよ」
「わかりました」
「さて、それじゃあな」
トルコは早速トルコアイスを出してきて二人に差し出します。
「ほら、まだまだあるから遠慮するねい」
「機嫌がいいわね」
「おうよ、お客さんはアッラーの使いだからな」
言いながらベトナムと台湾を自分のお家に入れてです。そうしてです。
二人をこれでもかともてなすのでした。ベトナムの言った通りでした。
「もてなせて幸せだねい」
そのこと自体が大好きなトルコなのです。

第千六百九十五話　完

2010・11・4

第千六百九十六話　レッドデビル

第千六百九十六話　レッドデビル

スペインとロマーノがオーストリアさんのお家に来るとです。赤いワンピースと帽子に角、それとスコップを持ったハンガリーが出て来ました。

「あんたも来たのね」

「そや。楽しくやってるみたいやな」

「まあね。ドイツもいるわよ」

「へえ、あいつも来てるんかいな」

「ついでにプロイセンもいるけれどね」

彼の名前を出す時は不機嫌な顔になるハンガリーでした。

「東西ドイツも一緒よ」

「そうか。それで俺だけやなくてな」

「ロマーノ君もなのね」

「ああ」

そのロマーノがハンガリーに対して挨拶をします。

「来てやったぜ」

「わかったわ。それじゃあ中に入って」

「悪いな。ほなな」

こうして二人はオーストリアさんのお家に入りました。そのうえでハンガリーに対して言います。

「それにしても御前その服は」

「どう？似合うかしら」

「何か結構邪悪な感じがするな」

「悪魔だからね」

見ればちゃんと尻尾まであります。そうしたところまでしっかりと仮装をしているハンガリーなのです。彼女もとても楽しんでいます。

第千六百九十六話　完

2010・11・4

第千六百九十七話　日本で異変

「えっ、それは本当ですか！？」
「はい、本当です！」
「間違いありません！」
日本のところに人が続々駆け付けて言います。そしてです。
日本はすぐにユーチューブを見ました。するとそこには。
「故意ですね」
「そうですね。間違いありません」
「それにこの映像は」
「本物です」
この指摘も来ました。
「誰が流したかわかりませんが」
「しかしこれで今の上司連中が隠していたことがわかりましたね」
「俺達を騙そうとしていたんですよ」
「確かに」
日本も映像を観ながら言います。
「本当にあの人達は信用できませんね」
「信用できないどころじゃないですよ」
「耳かっぽじって聞けとか普通に言いますし」
「特にあいつは信用できませんね」
「はい、これで私も決めました」
日本は意を決した顔になっています。そうしてです。
「今の上司の人達は。追い出します」
遂にそこまで決めた日本でした。恐ろしいことが起こりました。
上司の人達の運命はまさに風前の灯となってしまったのでありました。

第千六百九十七話　完

2010・11・5

第千六百九十八話　ハロウィン再開

日本の国で異変が起こりました。しかしです。
ハロウィンはまだ続いています。日本もそれについて言います。
「上司の人達は置いておいてです」
「今はですか」
「とりあえずですね」
「もうあの人達の運命は決まりました」
本気になった日本は怖いです。少なくとも自分の国や国民の人達をたばかろうとしていたことは明らかになってしまったのですから。
「それは置いておきまして」
「他のことですか」
「じゃあまずは」
「ハロウィンはこのままです」
こう言うのです。
「皆さんそれは楽しんで下さい」
「上司の人達が出て来たらどうします？」
「このお祭りに」
「石でも投げてあげて下さい」
この言葉も本気の日本です。
「その時は」
「じゃあ遠慮なくやってやりますね」
「もう絶対に許しませんから」
とりあえずハロウィン再開です。国民を騙して上司になった人達はまだ騙そうとして天罰を受けた、このことだけは間違いありません。

第千六百九十八話　完

2010・11・5

第千六百九十九話　ギリシアにおいては

第千六百九十九話　ギリシアにおいては

「来たんだ」

「うん、そうだけれど」

「聖闘士の方々は何処ですか？」

「いないことになってるから」

ベトナムと台湾が次に来たのはギリシアでした。まずはひょっとするとギリシアで一番有名かも知れない人達のことはいないことにされます。

けれど今のギリシアの格好はといいますと。

「教皇ですよね、それ」

「仮面はしない」

原作の方の穏やかな格好でいるギリシアなのでした。法衣が重厚です。

「トルコと違うから」

「そういうことね。そういえばあんたのところの妖怪は」

「神話のが多い」

ギリシアはそっちだったりします。

「中には百の蛇の頭を持っていて両足は蛇の尾になっていて身体中に羽根が生えていて物凄く大きくてしかも嵐を巻き起こすのもいる」

「ゲームに出そうな妖怪ね」

「一応神様になる」

ギリシアはこうベトナムに話します。

「とんでもなく強い」

「流石にそれのコスプレは無理ですね」

台湾がしみじみと言います。最早そこまでいくと流石に人間では仮装できません。ギリシアの妖怪も結構凄い格好の妖怪が多いです。

第千六百九十九話　完

2010・11・6

第千七百話　ドイツもいる

第千七百話　ドイツもいる

「御前等も来たのか」
「ああ、そや」
「くそっ、御前もいるのかよ」
スペインとロマーノはドイツに会いました。ドイツの格好は狼男です。ドイツでは狼男の話が多いのです。本場と言ってもいい位です。
「それにしても御前その格好は」
「イタリアにどうしてもと言われてな」
「似合うな」
スペインはそのドイツを見て言いました。
「結構以上にな」
「そうか」
「ほんまや、似合うで」
また言うスペインでした。
「ええ感じや」
「それでなんだけれどな」
ロマーノは不機嫌な顔でドイツに対して声をかけます。
「他の奴もいるんだな」
「イタリアとプロイセンも来ている」
この二人もなのでした。
「それでお菓子はだ」
「オーストリアが作ったんやな」
「そうだ。手をかけてな」
かなり期待できそうです。スペインとロマーノもその話を聞いてすぐに笑顔になりました。尚オーストリアさんは期待は裏切らない人です。

第千七百話　完

2010・11・6

第千七百一話　今度の行く先は

第千七百一話　今度の行く先は

ギリシアまで行った台湾とベトナムですがここでふと立ち止まってです。そうしてそのうえで二人でこれからのことを話すのでした。

「次はですけれど」

「何処に行くかよね」

「はい、何処にしますか？」

台湾はベトナムに次の行く先を相談するのでした。

「一体何処にしますか？」

「ウクライナはどうかしら」

ベトナムはそこはどうかというのでした。

「あの娘のところね」

「ウクライナさんですか」

「ええ、いい娘よ」

ベトナムはウクライナとお付き合いがあるのです。これはロシアがソ連という大きなお家の中心だった頃からのことです。ソ連にはウクライナもいたのです。

「だからどうかしら」

「ええと、ウクライナさんって」

台湾は首を傾げさせました。

「どういう人なんですか？」

「それは言ってみればわかるわ。どうかしら」

「そうですね。それなら」

台湾はベトナムの言葉に頷きました。これで決まりでした。

アジアンガールズは今度はウクライナに行くことになりました。

果たして今度のコスプレはどういったものか、それが二人の楽しみでもありました。

第千七百一話　完

2010・11・7

第千七百二話　看護婦さんでした

「実は私の今の格好だけれど」
「レッドデビルやないんか？」
スペインがハンガリーに対して尋ねます。
「さっきそう言ってたやろ」
「違ったのよ。実はね」
「何なんや？それで」
「看護婦さんなの」
それだというのです。看護婦さんになっているというのです。
「真っ赤だけれどね」
「真っ赤な看護婦さんかいな」
「そうなの。結構面白いでしょ」
「そやな。見てたら何かそういうふうにも見えるな」
スペインもハンガリーの言葉に対して頷きます。
「看護婦さんかいな」
「何なら注射する？」
漫画に出て来るものそのままの巨大な注射を出してきました。それを見ていると何か邪悪なものを感じざるを得ません。赤い看護婦さんの服がそうさせています。
「今から」
「いや、俺別に病気ちゃうし」
「いいのね」
「っていうか何処にそんな巨大な注射があったんや」
そのこと自体がそもそも不思議なのでした。あと注射の中のお薬が何かということも気になることであります。やっぱり何かが違う看護婦さんです。

第千七百二話　完

2010・11・7

第千七百三話　凄い胸

「えっ、私のお家にお客さんって」
「そんなに驚くことですか？」
「そんなこと滅多に、いえ全然ないから」
ウクライナは二人が来たことにかなり驚いています。そうしてそのうえで台湾に対して答えています。とにかく本当に驚いています。
「だから。台湾さんとベトナムさんよね」
「はい、そうです」
「っていうか私のことは知ってるじゃない」
「それはそうですけれど」
それでもだというのです。
「本当に。お客さんなんてなかったから」
「あんたどういう人間関係なの？」
「友達できないんです」
ウクライナは泣きそうな顔でベトナムに対して答えます。
「それで」
「あんたも苦労してるのね」
「けれどよく来てくれました」
その涙顔で笑っての言葉でした。
「二人共歓迎させてもらいますね」
「ええ、それじゃあ」
「宜しく御願いします」
こうして二人はウクライナの歓迎を受けるのでした。ウクライナにとっては本当に嬉しい、そして思いも寄らないお客さん達の来訪でした。

第千七百三話　完

2010・11・8

第千七百四話　マッドドクター

いよいよオーストリアさんの登場です。その格好は。

「ハンガリーが看護婦さんで」

「あんたはお医者さんなんだな」

「はい、そうなります」

スペインとロマーノの言葉に応えるオーストリアさんの格好は確かにそうしたものに見えないわけでもありません。しかしそれ以上にです。

何かよくわからないものにも見えます。お医者さんというよりも悪魔か何かにもです。

けれどその中に気品もあってです。まさにオーストリアさんでした。

そのオーストリアさんが二人に対して言ってきました。

「よく来てくれました」

「ああ、ふと思いついてな」

「来てやったんだ」

「それではです」

オーストリアさんは本題に入りました。ハロウィンの本題というと。

「お菓子ですが」

「それで何や？」

「何を食わせてくれるんだ」

「ザッハトルテを」

オーストリアさんの象徴とも言えるそのお菓子をというのです。

「それで如何でしょうか」

「おっ、ええな」

「じゃあそれを貰ってやる」
二人はそのザッハトルテを楽しく頂きました。そうしてさらに人と会うのでした。

第千七百四話　完

２０１０・１１・８

第千七百五話　ウクライナのお菓子

第千七百五話　ウクライナのお菓子

ウクライナが台湾とベトナムにあげたお菓子はこれでした。

「クッキーですね」

「ケーキなの」

こう台湾に話すウクライナでした。

「美味しいわよ」

「ええと、クッキーに見えるんですけれど」

「ああ、ロシアとかじゃそれがケーキになるの」

ベトナムが戸惑っている台湾に対して答えます。

「その辺りは違うからね」

「そうなんですか」

「そうよ。それでね」

ベトナムは台湾にさらに話します。

「紅茶にも合うから」

「そうみたいですね。それはわかります」

「じゃあ二人共食べてね」

ウクライナはとても奇麗な微笑みで二人に対して告げます。

「遠慮しなくていいから」

「有り難うございます。それでは」

「このケーキ有り難く頂くわ」

こうして二人はウクライナのケーキを食べます。そしてそれが終わってからです。

今度は誰のお家に行こうかと思っていたらです。ウクライナがその二人に対してこう言ってきました。ここでも和やかな雰囲気です。

「ベラルーシはどうかしら」

あのロシアの妹です。果たしてどうなるのでしょうか。

第千七百五話　完

2010・11・9

第千七百六話　悪魔

第千七百六話　悪魔

オーストリアさんの美味しいザッハトルテ、それは最高でした。
スペインもロマーノも満足しました。その満足した二人のところにまた一人出て来たのです。白いフードを被ってあのフォークを持っているその人は。
「ああ、御前もおったんか」
「相棒に言われて来たんだよ」
プロイセンです。彼は悪魔になっています。
「あいつに言われたらな。嫌とは言えないからな」
「相変わらずドイツと一緒なんやな」
本当にいつも一緒のプロイセンとドイツです。この二人がいてこそのドイツのお家です。その関係はイタリアとロマーノのそれよりもずっと良好です。
そのプロイセンがロマーノに対して気さくに声をかけてきました。この人もまたイタリアが大好きなのです。当然ロマーノもです。
「ロマーノも来てたんだな。宜しくな」
「ああ。またうちにも来てくれよな」
「有り難くな。それでな」
「何だ？お菓子なら来た時でいいだろ」
「違う違う。イタちゃんも来てんだよ」
とてもフレンドリーにロマーノに対して話します。
「会うか？それで」
「何であいつも来てるんだ」
「そりゃかつてのハプスブルクだからだよ」
ハプスブルク家が治めていた領域はとても広かったのです。プロイセンも神聖ローマのお家にいましたしロマーノまでです。そしてイタリアもなのでした。ここで目出度く兄弟の再会となったのです。

ロマーノは歓迎していないようですが。

第千七百六話　　完

2010・11・9

第千七百七話　存在自体がホラー

第千七百七話　存在自体がホラー

「ああ、ベラルーシね」
「面白そうですね」
あの強豪揃いの太平洋で生きているベトナム、台湾にとってはベラルーシ位で驚くには値しませんでした。何しろ日米中三国が常にロシアと対立しているうえに生徒会長までいるのです。その顔触れを前にして今更ベラルーシ位で、というわけなのです。
そしてそのベラルーシについてです。二人は言いました。
「いいわ、それじゃあね」
「こちらで四人で楽しみましょう」
「えっ、本当にいいの？」
逆にウクライナの方が驚いています。
「あの、ベラルーシだけれど」
「いいからいいから」
「女の子同士ですしね」
二人はにこりとさえしています。ロシアとえらく違う反応です。
そしてその反応のままです。またウクライナに対して言いました。
「それじゃあ早速ね」
「呼んでくれますか？」
「ええ、わかったわ」
ウクライナは戸惑いながら二人の言葉に頷きました。そうしてでした。
ベラルーシ登場です。けれどやっぱり二人は動じず笑顔で言いました。
「一緒にハロウィン楽しもう」
「ウクライナさんがケーキ用意してくれてますよ」
「ええ」

そして何とベラルーシもにこりと笑うのでした。流石は太平洋の中で生きているアジアンガールズです。

第千七百七話　　完

２０１０・１１・１０

第千七百八話　犬！？

「あっ、スペイン兄ちゃんも来たんだね」
「おお、イタちゃんやないか」
ようやくイタリア登場です。その格好は。
手は肉球で耳に尻尾です。ドイツによく似ていますが何かが違います。それで今の彼を見たスペインはこう言ってしまいました。
「ああ、犬男やな」
「違うよ、狼男だよ」
それをすぐに否定するイタリアでした。口を尖らせています。
「犬じゃないよ」
「えっ、犬やないんか」
「そうだよ。狼だよ」
こう言い返しはします。
「他の何に見えるのさ」
「いや、だから犬に」
まだ言うスペインでした。
「それに見えるんやけれどな」
「ちぇっ、兄ちゃんも酷いなあ」
「まあなあ。ちょっと迫力ないからな」
身も蓋もない言葉でした。
「とにかく。イタちゃんもお菓子食べてるんやな」
「うん、オーストリアさんのザッハトルテをね」
犬に見えていてもお菓子はしっかりと食べているイタリアなのでした。オーストリアさんも何だかんだでイタリアに凄く優しいです。
これはスペインもドイツも同じですが。

第千七百八話　完

2010・11・10

第千七百九話　とにかく強い

第千七百九話　とにかく強い

「ベトナムさんって凄いわよね」
「うん」
ウクライナとベラルーシが本人を前にして話をしています。
「フランスさんに勝つなんてね」
「そうそうできないわ」
「あの五人の中じゃ一番弱いんじゃないの？」
そのベトナムが穏やかな笑顔で話します。
「アメリカや中国よりもずっと弱かったわよ」
「ううん、その二人に続けて勝つっていうのもね」
「凄いわ」
「しかも日本さんともあの時戦ってませんでした？」
「そうなるかしら。ちょっと揉めたけれどね」
今度は台湾に対して答えるベトナムでした。
「けれど。その揉めた時にわかったわ」
「日本さん強いですよね」
「剣の腕が尋常じゃないのよ」
ベトナムもいささか引いています。日本の剣道の腕は物凄いです。剣道だけでなく居合も身に着けています。その腕は壮絶なまでなのです。
けれどベトナムもです。
「外見は楚々としてるのに」
「お兄様にも臆しないしないし」
「だから大したことじゃないわよ」
本人だけが軽く言えることでした。とにかく強いベトナム、外見に騙されてはいけない女の子です。

第千七百九話　完

2010・11・11

第千七百十話　偉大な上司

第千七百十話　偉大な上司

「私達の共通の上司の人を思い出しますね」
「はい、確かに」
オーストリアさんがハンガリーの言葉に頷きます。かつてハプスブルク家を上司としていたイタリア、スペイン、そして神聖ローマのお家にいた面々が集まってそのオーストリアさんの作ったお菓子を食べながら話をしています。和気藹々とした雰囲気です。
「カール五世を」
「うちじゃ一世やったで」
スペインがここで話します。
「あの鰻とか蛙とか好きな人やろ？」
「はい、今は貴方のところで眠っておられる」
「うちのヴェルディさんのオペラにも出てるよね」
イタリアも言います。
「あの上司の人。いい人だったよね」
「へっ、まあそれは認めてやるさ」
プロイセンは少し素直ではありません。
「ルターとも揉めてたな」
「あれはな。教会もかなりだったしな」
ドイツはこの辺り複雑です。あの頃の記憶がかなりあやふやです。けれど今左手にフォークを持ってそれでザッハトルテを食べています。
「あの人も板挟みだったしな」
「そういうものか？俺は結構楽だったけれどな」
ロマーノも言います。とにかくこの人達を全部まとめていたことは確かです。それだけでも凄い人だったと言えるカール一世、または五世でした。

第千七百十話　完

2010・11・11

第千七百十一話　まだ忘れてる

第千七百十一話　まだ忘れてる

ウクライナとベラルーシの格好は何かというとです。

ウクライナが白い魔女、ベラルーシが黒い魔女です。それを見て台湾が言います。

「何かお二人の格好ってあれですよね」

「看護婦に見えるかしら」

「ゴスロリっていうのね、これって」

「はい、日本さんのお家でよく見ます」

特にゴスロリはなのでした。

「それに似てますよね」

「ううん、狙った訳じゃないんだけれど」

「私はメイド服でいることが多いけれど」

確かに狙った訳ではないですがそれでもなのでした。二人の今の格好は本当にそんな感じです。魔女というよりはそっちなのでした。

「私胸大きいから看護婦さんになると余計に言われるのよ」

「ゴスロリって胸が小さくてもいけるのね」

「ま、まあそういうことはね」

「胸は関係ないですよ」

ベトナムも台湾も胸のことはあえて言いません。言えないと言ってもいいです。

「とにかく似合ってるわよ」

「はい、それは間違いありませんから」

「そう？それじゃあ」

「また続きをしましょう」

こうして楽しい時間を過ごしていく女の子達でした。尚ベトナムも台湾もまだカナダのことを思い出してはいません。しかも一度もです。

第千七百十一話　完

2010・11・12

第千七百十二話　この人達もいたことが

第千七百十二話　この人達もいたことがオランダとベルギーもです。気付いたらオーストリアさんのお家にいました。オランダはやっぱりこれしかないさまよえるオランダ人の格好です。ベルギーは白い幽霊になっています。
その格好で来てです。オーストリアさんに対して言います。
「来たで」
「よろしゅう頼むで」
挨拶一つでも物凄く対象的です。オランダはお家の宗教の関係でオーストリアさんやスペインに対して今でもぎくしゃくとしたところがあるのでしょうか。
けれどオーストリアさんのお家に来て自分達のお菓子を出します。とはいっても全部ベルギーの作ったお菓子なのですけれど。
「ワッフルにチョコレート持って来たで」
「うわあ、ベルギー凄いや」
イタリアはベルギーのそのお菓子を見てまた笑顔になります。
「本当にいつもお菓子作るの上手いよね」
「ありがとなイタちゃん。それでや」
ベルギーはイタリアに言葉を返した後でにこりと笑ってオーストリアさんに顔を向けました。
「何かオーストリアさんとこうして一緒になるものな」
「久し振りですね」
「そやな。けれどうちはそれでええで」
こうオーストリアさんに言うのです。
「ほな楽しく過ごそか」
「まあ俺もそれでな」
オランダも視線は逸らしていますがそれでも妹に続きます。ハプスブルク家が上司だった人達はとにかく多いのでした。今は昔のこ

とですが。

第千七百十二話　完

2010・11・12

第千七百十三話　また二人出ました

第千七百十三話　　また二人出ました

台湾とベトナムがウクライナのお家から帰るとです。いきなり二人と会いました。

一人は黒髪を後ろで縛っていて細いですが濃い眉をした気さくそうなお兄さんにもう一人は黒髪をさらりと延ばした穏やかそうな女の人です。この二人は。

「インドネシアさんにマレーシアさんじゃないですか」

「よお、台湾ちゃん」

「おかえりなさい」

インドネシアは明るく、マレーシアは気さくに言葉を返してきました。

「何か随分楽しんでたみたいだよな」

「ハロウィンは面白い？」

「ええ、とてもね」

ベトナムも二人に応えます。

「楽しんできたわよ」

「そうか。じゃあそろそろな」

「太平洋は太平洋で楽しみましょう」

「そういえばもうＡＰＥＣね」

ベトナムがまた言いました。

「早いわね。もうなんて」

「今度の日本の上司はどうにもならない奴ばかりだけれどさ」

「それでも楽しくやりましょう」

もう誰からも相手にされていない日本の今の上司達です。人間も国家も信用をなくしてしまえばそれを取り戻すのにかなりの苦労が必要です。

何はともあれ東南アジアの二人が彼女達を出迎えました。アジア

ンガールズもこれでまた増えました。太平洋も人が多いです。

第千七百十三話　　完

２０１０・１１・１３

第千七百十四話　この二人は変わらず

第千七百十四話　この二人は変わらず

スイスとリヒテンシュタインはハロウィンでも一緒です。そしてスイスのお家から出ようとしません。

仮装もしていません。ただ静かにコーヒーを飲んでいるだけです。

そのお兄さんにです。リヒテンシュタインがそっと尋ねます。

「今日はハロウィンですけれど」

「そうであるな」

「何か静かですね」

「ハロウィンだからといって騒がなくてはいけないことはないである」

「そういえばそうですね」

リヒテンシュタインも言われて気付きました。

「確かに楽しくやるものですけれど」

「ただ。いつも騒がしい奴はいるものであるな」

「何かさっき生徒会長さんがイギリスさんのお家に向かってましたけれど」

「放っておくのである」

他の人が聞いたらこれは酷い、と思わず言ってしまう言葉でした。

「イギリスとフランスが一緒であるな」

「そうみたいです」

「やはり放っておくである。あの二人なら生徒会長相手でも何とかなるのである」

「あまりなっていないみたいですけれど」

韓国は強烈です。あれだけ個性の強い国は欧州にはありません。

スイスもそれはわかっていますがそれでもなのでした。

「いいんですね、それでも」

「いいのである。あの二人もあの二人で懲りない面々である」
「そうなんですか」
最後の最後で大きな災厄にみまわれそうなイギリスとフランスでした。果たしてどうなるのでしょうか。

第千七百十四話　　完

２０１０・１１・１３

第千七百十五話　この人達も気付かない

第千七百十五話　この人達も気付かない

ベトナムと台湾を出迎えたインドネシアとマレーシア、見ればこの人達もそれぞれの仮装をしています。

インドネシアはどうやらバロンみたいです。その頭のところに派手な仮面があります。マレーシアは夜叉の様です。こちらはお家にいる中国の人達の影響でしょうか。

それでこの人達も色々と回ってきたみたいです。けれどなのでした。

「何かまだまわってないお家あったか？」

「あったかしら」

マレーシアがインドネシアに対して首を傾げさせて返します。

「まだ」

「ほら、アメリカの北にあったよ」

「ああ、北極ね」

マレーシアははっきりと言い切りました。

「そこね」

「ああ、そこだった」

インドネシアもこんなことを言います。

「そうそう、そこだった」

「北極には白熊と白い狐がいるけれど」

所謂ホッキョクギツネです。真っ白い毛を持っているとても奇麗な狐です。北極の気候は独特なのでそこにいる動物もそうなのです。

「見に行く？今から」

「そうだな、行こうか」

インドネシアは笑顔で言いました。

「今からな」

こうして二人もまたカナダに気付くことがありません。北極の珍

しい動物達の方がずっと有名なのでした。

第千七百十五話　　完

２０１０・１１・１５

第千七百十六話　タキシードミラージュ

イギリスとフランスの前に来た韓国、仮装はしておりません。
「来るなって言ったのに来るのも大概だがよ」
「何だ、その格好は」
「ハロウィンだからめかしこんできたんだぜ」
韓国はいつも通り上機嫌で言います。
「それでこの格好なんだぜ」
「意味わからねえよ」
「ハロウィンはそういう祭りじゃねえだろうが」
見れば韓国はタキシードを着ています。背が高くてスタイルがいいので似合うことは似合っています。それとはまた別の問題ではありますが。
そしてその格好で、です。二人に対して言います。
「お菓子を貰ってやるんだぜ」
「あれだけ食ったってのにかよ」
「しかも俺達の金でな」
二人はこのお祭りの最初のことを思い出して返します。
「ったくよ、何処まで食うんだよ」
「手前はキムチでも食ってろ」
「キムチも美味いけれど今はお菓子なんだぜ」
皮肉とかそういうことは全く通用しない韓国でした。二人に対してまた言いました。
「ほら、早く出すんだぜ」
「ああ、わかったわかった」
「今食わせてやるよ」
二人はうんざりとした顔で韓国にそれぞれのお菓子を出すのでし

た。けれどお話はこれで終わりではありません。

第千七百十六話　　完

２０１０・１１・１５

第千七百十七話　韓国の妖怪

第千七百十七話　韓国の妖怪

ふとです。韓国妹が気付いたのでした。
「そういえばウリナラには妖怪といっても少ないニダ」
「あっ、そうよね」
台湾も彼女の言葉に応えて言います。
「韓国の妖怪っていっても」
「トッケビとかはいるニダ」
「けれど他は」
「ウリも特に知らないニダ」
実はそうだったのです。
「何かいたニダか？」
「いるんじゃないの？探せば」
「兄さんはそもそもハロウィンなのにタキシードを着てるニダ」
そもそも最初の時点で勘違いしているのです。この辺りが実に韓国です。
「だからお化けの仮装といっても」
「思いつかないのね」
「日本さんや中国さんのところの妖怪なら滅茶苦茶多いニダが」
「幽霊とかは？」
「それが一番ニダか？」
完国妹は台湾のその言葉に首を捻ります。
「ここは」
「そう思うけれどどうかしら」
「幽霊の話はそれなりにあるニダが」
それでもインパクトに欠けるような気がしているのです。韓国の意外な弱点でした。実は妖怪に関するお話が思ったよりも少ないのです。

第千七百十七話　完

2010・11・16

第千七百十八話　そんで食べまくって

第千七百十八話　そんで食べまくって

イギリスのお家にいきなり来てイギリスとフランスのお菓子を食べまくる韓国。その感想は。

「日本のお菓子の方がずっと美味いんだぜ」

「ああ、そうかよ」

「そんだけ食ってから言うか」

二人はまたうんざりした顔です。とにかく山みたいに盛り上げたお菓子を全部食べてそれからこう言うのですから。二人が言うのも無理はありません。

「ったくよお、来るなって言っても来るしよ」

「そもそも何で生徒会長なんだ？」

フランスはこの疑問についても言います。

「こいつ今Ｇ２０にいるよな」

「ああ、大国扱いだよ」

生徒会長には小国しかなれないのです。けれどなのです。

「それでもなってるんだよ」

「意味わかんねえよ」

こうしたことも気になりますが今はそれよりもです。とにかく韓国はお菓子を食べまくってそのうえでさらに日本を引き合いに出して言うのです。

「ちょっとは勉強するんだぜ、二人共」

「おい、ちょっと待て」

今の言葉に怒ったのはフランスです。

「俺のお菓子はイギリスと同じレベルかよ」

「所詮日本以下なんだぜ。俺の次に美味いお菓子と認めてやる日本の足元にも及ばないんだぜ」

この辺りはただ単に好みの問題のようです。けれど得意だと自負

しているお菓子で駄目出しを受けたフランス、そのプライドをかなり傷つけられたのでした。

第千七百十八話　　完

２０１０・１１・１６

第千七百十九話　五人と六人

第千七百十九話　五人と六人

ハロウィンが一段落ついてです。ふとイタリアが言いました。
「あのさ、日本呼ばない？」
「日本をか」
「うん。スペイン兄ちゃんもロマーノ兄ちゃんもお家に帰ったし」
それにオランダとベルギーもです。今はイタリアとドイツにプロイセン、それにハンガリーとオーストリアさんという顔触れです。何かいつもの顔触れです。
「だからさ。寂しいしさ」
「そうか。それならな」
ドイツがまず賛成してきました。
「いいだろう」
「うん、それじゃあね」
「ああ、五人より六人だからな」
「それで私もね」
「いいと思います」
他の面々もイタリアの言葉に賛成しました。こうして枢軸の面々で集まることになりました。枢軸といっても顔触れは多いようです。
こうして日本が来るとです。雰囲気が変わりました。
「私だけ和風で場違いではないでしょうか」
「いいよいいよ、似合ってるしさ」
「逆に色々な面々という感じでよくなったな」
イタリアとドイツがその日本に言います。いい意味で雰囲気が変わったのです。
こうして六人になった面々、何かと楽しげにもなってきています。この六人は今も仲がいいです。何処かの五人とは違ってです。

第千七百十九話　完

2010・11・17

第千七百二十話　その何処かの五人

第千七百二十話　その何処かの五人

韓国が帰ってです。イギリスとフランスは疲れを感じながらもこう話をしました。

「俺達二人だけじゃあれだしな」

「ああ、他の奴等も呼ぶか」

フランスが早速携帯を取り出してです。他の三人にメールを送ります。

「来るか？」

「来るだろ。お菓子用意しておいたしそれぞれ持って来いって言ったしな」

大事なのは食べ物なのでした。人間これがないと生きていけません。考えてみれば当然の話です。

そうして連絡をするとです。五秒後になのでした。

イギリスのお家のチャイムが鳴って三人が来ました。

「やあ、来たぞ」

「呼んだあるな」

「お菓子持って来たよ」

「って早いな」

「もうかよ」

イギリスとフランスはその三人を出迎えて少し驚いています。

「日本の特撮並に早いな」

「どうやって来たんだろうな」

それが気になるところでした。この早さはまさに井上ワープの展開でした。あの何処にいるとも言ってないのに呼んだらすぐに来るあれです。

「まあいい。それじゃあな」

「最後に楽しもうか」

何はともあれその三人をお家に入れる二人でした。けれどこれがまた新たな騒動のはじまりになるのでした。ハロウィン最後の大騒ぎに。

第千七百二十話　　完

２０１０・１１・１７

第千七百二十一話　枢軸ハロウィン

日本がです。ふと提案してきました。
「どうせですから他の人達も呼びませんか？」
「えっ、他の人達って？」
「はい、枢軸のメンバーが集まっていますし」
こうイタリアに対して答えます。見れば確かにこの集まりは枢軸のメンバーが揃っています。ハンガリーにオーストリアさんにしてもそうです。
「ですから。具体的にはロマーノさんや台湾さんを」
「じゃあ兄ちゃんは俺が呼ぶね」
「はい、では私は台湾さんを」
イタリアと日本がそれぞれ電話をするとです。一瞬で来ました。
「何だよ、いきなり呼んでよ」
「日本さん、何かあったんですか？」
ロマーノは嫌々、台湾はまさに飛んできました。やって来た二人ですがその態度は全然違います。
「ハロウィンだからお菓子か？」
「日本さんのお菓子はもう頂きましたけれど」
「折角ですから皆でどうでしょうか」
日本がその二人に言います。
「お祭りの最後に皆でお茶とお菓子でも」
「まあ日本が言うんならな」
「喜んで」
ロマーノも日本の言うことなら素直です。台湾はもっとそうです。
かくして枢軸のメンバーが集まってハロウィンの最後を楽しむことになりました。こちらはとても平和で穏やかな集まりなのでした。

第千七百二十一話　完

2010・11・18

第千七百二十二話　気付かれない人と関係ない人

第千七百二十二話　気付かれない人と関係ない人

連合でもです。アメリカが提案しました。
「よし、ここは他の面子も呼ぶぞ」
「ああ、オーストラリアにニュージーランドあるな」
「どうせだから賑やかに行こう」
中国に応えてです。こうして他の連合メンバーも呼ぶことにしました。ここまでの展開は枢軸のメンバーの集まりと同じだったりします。
しかしです。オーストラリアとニュージーランドはいいのですがこの人も来ました。
「また来てやったんだぜ。感謝するんだぜ」
「御前は連合じゃねえって何千回言えばわかるんだ？」
「枢軸にいただろ、日本のところによ」
韓国にはいつも通りイギリスとフランスが白い目になってクレームをつけます。この人はあくまで自分が連合のメンバーだと思っているのです。
これで八人ですが数えてみるとです。
「あれっ、今回も一人多いよ」
「そうだな。誰なんだ？」
「いつものことあるが不思議あるな」
ロシアが数えていぶかしみアメリカと中国が首を捻っています。
「いつもだから慣れたけれどな」
「おかしなこともあるものあるよ」
「けれど誰かいるぞ」
「誰あるか？」
今回も気付いてもらえないカナダでした。何故か集まりには呼ん

でもらってもです。誰もその存在には全く気付いてくれないのでした。

第千七百二十二話　　完

２０１０・１１・１８

第千七百二十三話　平和な枢軸

第千七百二十三話　平和な枢軸

「けれどあれだよね」
「何だよ」
ロマーノがイタリアの言葉に尋ねます。今枢軸のメンバーはそれぞれのお菓子を食べながら一緒のテーブルに座っています。和気藹々とした雰囲気です。
「どうしたんだよ、あれって」
「いやさ、こうして皆で集まるじゃない」
「ああ。それがどうしたんだ？」
「こういうのっていいよね」
イタリアは穏やかな顔で言うのでした。
「俺達って皆仲いいからね」
「そうね。喧嘩とかしないしね」
ハンガリーがイタリアに対してにこりと笑って返します。
「仲良くね」
「まあ俺はこいつは嫌いだけれどな」
プロイセンはオーストリアさんをちらりと見ました。
「けれどまあ相棒の顔を立ててやってるからな。イタちゃんとロマーノにも言われるしそれなら仕方ないなって思うしな」
「御前はどうしてそうイタリアが好きなんだ」
ドイツがそのプロイセンに尋ねます。
「というか人の好き嫌いが激しいぞ」
「まあ気にするな。楽しくやろうぜ、楽しく」
「はい、その通りですね」
最後に日本が頷きます。枢軸組のハロウィンはとてもいい雰囲気で終わろうとしています。彼等はとても平和に楽しめました。

第千七百二十三話　完

2010・11・19

第千七百二十四話　連合はカオス

「何かお菓子が一杯あっていいよね」
「そうでごわすな。最高でごわす」
オーストラリアがロシアの言葉に頷きます。ちょっと珍しい組み合わせです。二人は今目の前にあるお菓子を猛烈な勢いで食べています。
「色々な国の色々なお菓子があるというのはいいものでごわす」
「お酒もあるしね」
ここでもそれは忘れないロシアでした。
「それに何か見たこともない人もいるし」
「私ばい？」
ニュージーランドがロシアの言葉に応えます。
「ひょっとして」
「あっ、ニュージーランドさんじゃなくてね」
「違うばいね」
「うん、ほら、あの熊と一緒にいる人」
ある人を見ながら言います。
「あの人。誰だったかな」
「俺には何も見えないんだぜ」
韓国は基本的に日本をまず見ます。日本と自分を比べてです。その間にいるような人は目に入らないのです。
「熊は見えるけれど何かいるんだぜ？」
「いるみたいだけれど。誰かな、あれ」
「誰も僕に気付いてくれないよ、熊七さん」
「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」
まだ気付いてもらえないカナダでした。目立てないということは

悲しいことです。

第千七百二十四話　完

２０１０・１１・１９

第千七百二十五話　ハロウィンが終わり

第千七百二十五話　ハロウィンが終わり

長いお祭りが終わってお家に帰った日本は。まずこう思いました。
「さて、それではです」
「今の上司の人達をですね」
「今度は暴力装置ですか」
「それで自衛隊の人の胸倉を掴んで」
「最早人間ではありませんね」
こう妹に対して言います。
「それでは」
「もうどうしようもありませんね」
「醜いことこのうえありません」
日本も怒りを見せています。
「こうなったら。早いうちに」
「選挙しかありませんね」
「あの人達は間違いなくしがみつくでしょうが」
もうそれもわかっているのでした。醜く無能な人間程そうするものであります。これは奇妙な世の中の摂理であります。不思議なまでに逸脱しません。
「ですがそれでもです」
「はい、これ以上あの人達の顔は見たくありませんね」
「絶対にですね」
「じゃあ兄さん」
「はい、やります」
本気の言葉でした。日本はお祭りから帰ってけすぐに決意したのでした。もうあの上司達を一刻も早く何とかしなければいけないとです。そのことを決意したのです。

第千七百二十五話　完

2010・11・20

第千七百二十六話　上司に困った記憶すら

「そういえば御前の今の上司誰や？」
キューバがカナダに尋ねます。
「アメリカのと同じやないやろ」
「一番上の上司の人はイギリスと同じだけれど」
「えっ、そうやったんか」
「そうだよ。っていうか知らなかったの？」
「悪い、そういえばそうやったな」
物凄く忘れられてしまうことですがカナダの一番上の上司の人はイギリスのお家と同じなのです。これはオーストラリアやニュージーランドもです。
「御前のところの上司は」
「何で誰も覚えてくれないのかなあ」
カナダもいい加減悲しくなってきます。
「いや、日本の今の上司の人達有名じゃない」
「滅茶苦茶悪い意味でやな」
「けれどあれだよ。有名だよ」
悪名でも有名は有名なのでした。
「悪名は無名に勝るじゃない」
「そやな。それは確かやな」
「僕の家って。上司の人達からしてそうだから」
「難儀な話やな」
「ううん、どうしたらいいのかな。目立たない上司の人達ばかりだけれど」
国際的には誰も覚えてくれない上司ばかりなのがカナダです。とにかくどうしても誰にも気付いてもらえない、カナダの苦労は続き

ます。

第千七百二十六話　完

2010・11・20

第千七百二十七話　信義とは

第千七百二十七話　信義とは

日本はです。今回のことでとてもよくわかったのでした。

「マスコミの言葉は鵜呑みにしてはいけませんね」

「私達や国民の人達を意図的に騙そうとしてきますね」

「はい、確信犯でやっています」

日本はこう妹に対して答えます。

「何らかの意図があって」

「最近まで今の上司の人達への批判少なかったですよね」

「前の上司の人達でしたら今頃何度辞任になっていたか」

そもそも前の上司の人達への批判が普通ではなかったのです。

「庇いきれなくなって切り捨てたとしか思えませんね」

「切り捨てられたのは自業自得ですけれど」

日本妹も今の上司の人達には厳しいです。当然と言えば当然です。

「それでも。あれは」

「はい、マスコミも問題です」

「嘘がばれても平気で報道し続けますからね」

「確か強制とか連行とか」

「従軍とか慰安婦でもそうでしたね」

「あれは酷いものでした」

何と前科が既にあるのです。それで同じことを繰り返しているのですから悪質です。日本のマスコミはこの点において最低と言えます。

「今の上司の人達は追い出すとして」

「マスコミもですね」

信用がなくなるとどうなるか。日本の中で何かが起こるかも知れません。

第千七百二十七話　完

2010・11・21

第千七百二十八話　知識人も論外

第千七百二十八話　知識人も論外

とにかくマスコミが問題な日本ですが他にもです。患部はあります。

「この人本当に学者ですか？」

「職業的にはそうなっていますね」

日本がまた妹さんに答えています。テレビに眼鏡でいかつい顔の茸みたいな髪型のおばさんが吼えているのを見ながらです。

「果たしてまともな学識があるかどうか甚だ疑問ですが」

「学校の先生達もこんな感じの人多いですね」

「確かに。剣道でもです」

日本といえば剣道です。そちらでは達人と言えます。だからこそ言うことでした。

「竹刀を蹴飛ばしたり子供相手に突きを繰り出したり床で背負い投げを浴びせるような教師が普通にいたりしますからね」

「えっ、床で背負い投げですか」

「剣道でそれです」

勿論柔道の技です。尚柔道では畳は絶対に必要です。衝撃を和らげる為です。

「他にもうさぎ跳びをさせたり」

「あの、そんな人が私達の国の先生ですか」

「そうです。他にも漫画原作者で酷い人もいますね」

「ああ、あの山岡とか海原の人ですね」

そんな原作者の人もいます。暫くオーストラリアに行っていましたが目出度く帰ってきたのです。

「上司の上司の方が嫌いな」

「はい、どうやら私達の国には問題の多い人達が結構いるようですね」

「そうですね。何とかしないといけませんね」
特にそんな人間が学校の先生をやっているのです。それは若しかすると国民の、子供のすぐ傍にいるかも知れません。どんな暴力を振るってもお咎めなしの世界は確かに学校という身近な場所にあるのです。

第千七百二十八話　　完

２０１０・１１・２１

第千七百二十九話　思い上がりというのも

第千七百二十九話　思い上がりというのも

「高杉晋作といいますが」
「あの人は小村寿太郎って言ってますよ」
日本と日本妹は今の上司の人達が自分達をそれぞれなぞらえて言っている日本のかつての上司達のことを思い出しながら話をしています。
しかしです。二人共あからさまに不機嫌な顔になってこう断言するのでした。
「全然違いますね」
「はい、そうですよね」
「高杉さんも小村さんも確かな信念がありましたが」
「あの人達にあるのは自分だけですから」
本当に見事なまでに保身しか考えません。暴力装置の人に至っては自分の為ならそれこそ何でもするようなとても卑しい人です。
「あれで何処が小村寿太郎でしょうか」
「私は自分のお家で見るとは思いませんでした」
日本は残念な顔になって話すのでした。
「あそこまで無能で卑しく傲慢な人達を」
「そうですよね。思えばです」
「生き方がそのまま顔に出てますね」
「全くです。高杉さんや小村さんはいい顔をしておられましたけれど」
この場合は相という意味です。
「あの人達はとても卑しい顔をしていますね」
「はい、それで何処が高すぎさんや小村さんなのでしょうか」
そんな今の日本の上司の人達です。本当に日本がはじめて見たよ

うな、そこまで卑しくて無能で人間性が劣っている、そんな人達なのです。

第千七百二十九話　　完

２０１０・１１・２２

第千七百三十話　あの上司は

第千七百三十話　あの上司は

「思えばです」
「兄さん、どうしたんですか？」
「あの高知の人は立派でした」
日本は昔を思い出す顔になって妹さんに話すのでした。
「まさに龍でした」
「そうでしたね。鬣のある」
「あの人の心は今も忘れません」
忘れられるものではありませんでした。日本がこれからどうなるかわからない時に出て来てです。そうして日本の為に活躍した人なのですから。
「私はあの人と伊藤さんはです」
「忘れませんね」
「西郷さんと大久保さんもですが絶対に忘れません」
どの人も日本の為に必死になって動いてくれた人達です。この人達がいるからこそ今の日本が生きていると言って過言ではありません。
「あの今の上司の人達はそれこそです」
「あの人達と比べたらですね」
「まさに海と硯です」
そこまでの違いがあるというのです。
「私は。あの人達のことを思い出して」
「また。立ち上がりましょう」
「はい、それにはまずです」
「あの人達を我が家から追い出してですね」
二人は決意をあらたにしました。もう今の上司達では駄目だ、このことがよくわかったのです。

第千七百三十話　完

2010・11・22

第千七百三十一話　いきなりそうなってた　☆

第千七百三十一話　いきなりそうなってた　☆

ドイツがイタリアの言葉に応えています。日本もいます。見れば三人共かなりラフな格好です。
「隊長！」
「何だ！」
「見つけたのか」
「はい、蟹を見つけたのであります」
イタリアは砂浜にいました。そこで敬礼をしながらドイツに対して報告しています。
「目出度くであります」
「それはいいがはしゃぎ過ぎて溺れるなよ」
ここでも過保護なドイツです。
「泳げるとしてもだ」
「わかっているであります」
「ドイツさん」
日本もまたドイツに声をかけてきました。
「こんなものでいいですか？」
「ああ、上出来だ」
日本は色々なものを持っています。両手に何とか持っている程です。
そしてその色々なものを見ながら言うのでした。
「探してみれば結構あるものですね」
「うわあ、日本凄く一杯色々なの見つけてきたね」
イタリアは頭に蟹さんを置きながら日本を見ます。どうやらあまり食べるつもりはないようです。
「美味しそうだよ」

「まだまだ色々ありそうでしたよ」
「まあ一応何とかなりそうな感じだな」
三人はこんな話をしています。ただ、問題はいつもの場所ではありません。何処なのでしょうか。

第千七百三十一話　　完

２０１０・１１・２３

第千七百三十二話　島だらけ

第千七百三十二話　島だらけ

インドネシアといえばです。お家に島が一杯あります。もう数えきれない位です。

「そういうところ日本さんと同じなのよね」

「そうですね。確かに」

日本もインドネシアのその言葉に頷きます。

「私の家も島国ですし」

「何か親近感沸くのよね」

「有り難うございます」

日本はそのインドネシアに対して御礼も言いました。

「しかし島は結構」

「そうなんですよね。多いと一つ一つを管理するのが大変です」

「海は守りやすくていいのですが」

だから日本は海の戦力がかなり充実しています。守る為です。

「そうですね。一つ一つは中々」

「海は海で怖いですしね」

「鮫もいますし」

「日本さんのところにも鮫出るんですか」

「はい、出ます」

鮫の分布は広いです。こうした怖い生き物で分布が広いというのは困りものです。しかし実際にそうなっているからどうしようもありません。

「瀬戸内にもかなり」

「うわっ、そっちも大変ですね」

「島が多いとそうしたところも大変ですね」

そのことを強く思う二人でした。島国も中々大変です。

第千七百三十二話　完

2010・11・23

第千七百三十三話　いつもじゃないのか　☆

「ねえドイツ、日本」
イタリアが朗らかに二人に声をかけます。
「一緒に泳ごうよ」
「泳ぐのですね」
「うん、海がとても奇麗だよ」
日本に対してまた言いました。
「だからさ。どう？」
「そうですね。それでは」
「たまにはこういうのもいいよ」
「いや、御前はいつもではないのか」
ここでドイツの突込みが来ました。
「そもそも御前の国は三方が海に囲まれているぞ」
「それはそうだけれどさ」
「まあ私は四方ですが」
日本は島国です。イタリアよりも凄いです。
「ですが」
「どうしたの、日本」
「私も一度こういう南の島でのんびりとしてみたいと思っていました」
こう穏やかな顔で言うのでした。
「何分騒がしい家なので」
「御前の場合は中だけじゃないからな」
外にはアメリカと中国がいてしかも韓国と台湾がいつも一緒です。
とても賑やかな日本の周りです。
「そう思うのも当然だな。しかし」

「はい、ドイツさん」
「そろそろ来て欲しいんだがな」
「ええ、確かに」
ここで話が変わりました。
「救助が来るのは何時になるのか」
「全くですね」
実は遭難している三人でした。何気に凄いことになってます。

第千七百三十三話　　完

２０１０・１１・２４

第千七百三十四話　日本がいないと生きられないのか

第千七百三十四話　日本がいないと生きられないのか

「日本は何処に行ったんだぜ！」

「そうよ、日本さん何処なのよ」

韓国と台湾が日本を必死に探し回っています。

「とっとと俺に飯おごるんだぜ」

「あんたはその前に別れてる北の家族何とかしなさいよ」

何気にきついことを言う台湾です。

「砲撃あったけれどどうなったのよ」

「今継続中なんだぜ」

「で、それでも日本さんなのね」

この辺りが凄いです。韓国はとにかく日本を探しています。お家で砲撃があろうが何だろうがまず日本なのが彼の人生なのです。

「そっちは第二で」

「ふん、御前に言われたくないんだぜ」

「何よ、テコンドーのあれは何なのよ」

今度はスポーツで喧嘩する二人でした。

「この恨み忘れないわよ」

「ええい、テコンドーは俺の国の格闘技なんだぜ。反則負けする御前が悪いんだぜ」

「あれは日本さんの空手じゃないの、どう見ても」

「違うんだぜ、ウリナラ起源で千八百年の歴史があるんだぜ！」

「万能壁画は起源にならないわよ」

「何っ！日本よりまず御前を黙らせるんだぜ！」

「やってみなさいよ！」

日本を探しながら喧嘩をはじめる二人でした。本当に仲が悪いです。

第千七百三十四話　完

2010・11・24

第千七百三十五話　ナチュラルに食ってた　☆

第千七百三十五話　　ナチュラルに食ってた　☆

相変わらず遭難し続けている三人、今は砂浜に集まって食事中です。

「食べ物はお魚も椰子もバナナも取れますから困りはしないですけれど」

「それでもだな」

「はい、いい加減遭難に疲れてきました」

「俺はもうそういった食事に飽きた」

日本とドイツがそれぞれ言っています。

「ビールが飲みたい」

「椰子でお酒作りますか？」

「いや、それはいい」

「そうだよね、お魚はもう飽きたよね」

ここでイタリアが二人に声をかけてきます。

「餃子あるよ。餃子食べる？」

「えっ、イタリア君今何と」

「餃子だと？」

「そうだよ。ここにあるよ」

言いながらその餃子を食べはじめるイタリアでした。蒸し餃子です。

「食べないの？俺が全部食っちゃうよ」

「ちょっと待て、御前今何を食べてるんだ！」

「だから餃子だけれど」

大慌てのドイツにイタリアは穏やかに答えます。

「海老蒸し餃子。美味しいよ」

「いや、ですから」

ここで日本も言います。
「何故餃子がここにあるかというお話ですから」
いきなり物凄い謎が発生しています。何故こんなところに餃子があるのでしょうか。

第千七百三十五話　　完

２０１０・１１・２５

第千七百三十六話　今度はこの発言

第千七百三十六話　今度はこの発言

相変わらず仲の悪い韓国と台湾、日本がいなくなってそのことで言い争いながら二人で日本探索を続けています。

しかしその中で、です。韓国が激怒しはじめました。

「あいつには激辛キムチカレーウドンをホースで食わせてやるんだぜ！」

「あんたそれモモノキイエローさんのネタよね」

「そうなんだぜ。モモノキピンクさんのドサドっぷりが最高なんだぜ」

またしても日本のことを話す二人でした。何はともあれです。

何故韓国が怒っているかというとです。

「俺の家は今砲撃を受けているんだぜ」

「毎回思うけれど物騒な家よね」

「それは気のせいなんだぜ。とにかく日本の家の今の上司が」

「あの人達はあれだから気にしたら駄目なんじゃないの？」

「そんなの俺には関係ないんだぜ。とにかくなんだぜ」

「あの人達が今度は何したのよ」

丁度その上司達は今物凄いピンチの中にあります。しかしここで韓国が砲撃を受けたのです。それに対してなのでした。

「あの連中それで自分達が助かったとか言ったんだぜ。日本のお家の人達の目がそこにいくからなんだぜ」

「・・・・・あんた、それ怒っていいから」

台湾もそれを聞いてこう言いました。

「遠慮なくね」

「そのつもりなんだぜ。日本の今の上司は」

どうなのか。韓国にもわかったのでした。

「最低最悪なんだぜ」

「そもそも人間としてね」

台湾も怒っています。人間は醜い存在には怒るものなのです。それが例えどんなものであっても。

第千七百三十六話　　完

２０１０・１１・２５

第千七百三十七話　中国の別荘　☆

ドイツと日本に問い詰められたイタリア、その餃子の購入先を二人に案内します。どうやらお金は普通に持っているみたいです。
「確かここをまっすぐに行くとある筈だよ」
「本当にこんなところにあるのか」
ドイツはそのこと自体を疑問に思っているのでした。
「ここはジャングルではないか」
「そうですね。幾ら中国さんでも」
日本もそれは疑問に思っていました。ところがです。
何と二人の目の前に中国の街の巨大な門が出て来ました。しかもその後ろには街があります。世界の何処にでもある中華街です。
そしてそこにいるのは。
「あっ、いらっしゃいませある」
「あっ、さっきは有り難う」
イタリアはそこにいた中国に気さくに御礼を言います。
「お陰で助かったよ。美味しかったしね」
「御礼は別にいいあるよ。こちらこそ買ってもらって有り難いある」
二人のやり取りは普通です。しかしそれを見たドイツと日本は。
「お、おい」
「まさか本当におられるとは」
かなり驚いています。
「ここは無人島の筈だが」
「ここまで見事な街があるとは」
物凄い謎です。しかし中国は実際にここにいるのでした。

第千七百三十七話　　完

2010・11・26

第千七百三十八話　話を進めない二人

第千七百三十八話　話を進めない二人

とにかく日本を探している韓国と台湾。しかしです。

「御前の言ったところなんか行けないんだぜ」

「何よ、あんたの言う方向って出鱈目じゃない」

喧嘩ばかりしています。本当にいつも通りです。

「そもそも御前が何でいつも日本の傍にいるんだぜ」

「あんただって日本さん嫌いだって言ってるのに何でいつも日本の傍にいたがるのよ」

「それは気のせいなんだぜ」

「気のせいじゃないわよ。大体あんた生徒会長の仕事してるの？」

イギリスとフランスに聞くと確実に怒ってしてないと言うことでした。

「何かいつも日本さんの傍にいるけれど」

「それはいつもしてるんだぜ」

しかし本人にしてみればしているつもりだったりします。自覚していないだけですが。

「俺は天才なんだぜ。会長の仕事なんて誰よりも早くできるんだぜ」

「それって何処かの世紀末偽医者そのままの台詞にしか聞こえないけれど」

流石に身体が膨れてそこから手が爆発して指がなくなることはありませんが韓国は確かにそうしたところがないとは言えない部分があるかも知れません。

「とにかくよ。あんたの言う方向には行かないからね」

「俺もなんだぜ。御前の言うことなんか聞かないんだぜ」

「それはこっちの台詞よ」

「こっちも言うんだぜ」

こんな調子なのでした。

かくして二人は言い争いながら一行に先に進まないのでした。日本を探す前にこの二人の仲の方がかなり問題なのかも知れません。

第千七百三十八話　　完

２０１０・１１・２６

第千七百三十九話　韓国だけは無理だった　☆

第千七百三十九話　韓国だけは無理だった　☆

ドイツと日本が驚きながら中国に尋ねます。
「何故御前がここにいるんだ」
「本当ですよ。何でこんな無人島なんかに」
「何であるかとは？」
けれど問われた中国は至って冷静です。そうしてこう二人に話すのでした。
「僕は世界中に別荘を持っているあるな」
「まあな」
「私の家にも幾つかありますし」
これは二人も知っています。中国の別荘の数は尋常なものではありません。そこに中国の人達が大勢暮らしているのです。
「ここだって例外じゃないあるよ」
「それでここにおられたのですか」
「そうある、こんな小島に別荘つくるなんて」
胸を張って主張します。
「お茶の子歳々あるよ」
「それは凄いのですが」
「何あるか？日本」
「貴方の別荘は韓国さんのところではどうも」
「あ、あいつは特別ある」
中国の口調が一変しました。
「あいつのところだけは駄目だったあるよ」
「韓国？ああ、生徒会長のあいつか」
「そんなに凄いんだ、中国でも駄目って」
ドイツとイタリアは実は韓国のことをよく知りません。そのあま

りにも強烈な、それこそ中国ですら駄目な個性をです。

第千七百三十九話　　完

２０１０・１１・２７

第千七百四十話　中国だけでなく

第千七百四十話　中国だけでなく

「えっ、韓国のところかい」
「そうだ、少し出張に行ってくれるか」
アメリカが上司に言われています。
「事情はわかるな」
「あいつの家族のことだな」
「そうだ、また喧嘩になっている」
無茶苦茶複雑な韓国の家庭事情にはアメリカが関わる時もあります。それでアメリカのお家の兵隊さんも韓国のお家にいたりします。
「だからだ。いいな」
「ううん、僕はいいんだが」
「兵士達か」
「大丈夫なのかい？ストレス溜まってないかい？」
アメリカも彼等のことが心配なのです。
「何かと強烈な人間が多いからな、あそこは」
「それは私も同感だがな」
上司もそのことは知っています。
「だが。それでもだ」
「仕方ないか。あいつの事情を考えると」
「それで御前も行ってくれ」
「そうだな。ロシアに頼める筈もないし」
これだけは絶対にしないのでした。アメリカも。
「じゃあ行って来るぞ」
何かアメリカも乗り気でありません。そんな韓国行なのです。

第千七百四十話　完

2010・11・27

第千七百四十一話　この辺りは中国

第千七百四十一話　この辺りは中国

「とにかく助かるな」
「はい、確かに」
日本はドイツの言葉に頷きます。
「こうして他の食べ物が手に入るのは」
「しかも料理の素材が多いな」
「中華料理は何でも食べるあるよ」
中国はここでも胸を張って言います。
「だからある。何時でも来て欲しいある」
「はい、ではそうさせてもらいますね」
日本が彼の言葉に応えます。
「他にも色々と娯楽のものもあるようですし」
「何時でも来てくれていいある。僕もその方が嬉しいあるよ」
「それは何故ですか？」
「後でお金を請求できるからある」
にこりとして言うのでした。
「わかっていると思うあるがこれがただではないあるからな」
「そこは御前らしいな」
ドイツも中国のその言葉に頷きます。
「ではオーダーはもうか」
「書いているある。三人の家に送らせてもらうあるよ」
「わかりました。ではそういうことで」
日本も落ち着いて中国の言葉に応えます。
「御願いしますね」
「三人共ちゃんと払ってくれるから助かるあるよ」
こうして和気藹々とした雰囲気の中で話が決まるのでした。学園では不良グループとされている枢軸トリオ、実は紳士のようです。

第千七百四十一話　完

2010・11・28

第千七百四十二話　アメリカには低姿勢

第千七百四十二話　アメリカには低姿勢

「やあ韓国、来たぞ」
「あっアメリカさんどうも」
韓国はアメリカを出迎えてまずは一礼です。
「よく来てくれましたね」
「軍事演習で来たぞ。準備はどうなってるんだ？」
「はい、それはもう全部済んでます」
韓国はこうアメリカに返します。
「それじゃあすぐに」
「やろうか。そういえばなんだが」
アメリカはここで韓国に対して言います。とても明るく屈託のない顔で。
「君についてイギリスとフランスが言っていたぞ」
「誰ですかそれ」
二人のことは本当にどうでもいい韓国です。実は生徒会の中で二人雑用係がいるとしか考えていません。韓国にとって日本より下で太平洋にいないとそれだけで見えなくなるのです。
「知らない奴ですね」
「何かとてもぞんざいでいい加減な奴だって言ってたぞ」
「俺そんなこと言われてたんですか」
「そうなんだ。けれど君は生徒会長なのに低姿勢だしいい奴だな」
「いや、それ程じゃないですけれど」
「そうだよな。あの二人の言ってることがおかしいだけだな」
アメリカも何気に欧州に対してはきついです。
「まあとにかくはじめようか」
「はい、それじゃあ」
こうして演習をはじめる二人でした。韓国は目上の相手にはそれ

なりの態度を取るようです。

第千七百四十二話　　完

２０１０・１１・２８

第千七百四十三話　どうして運んでる　☆

第千七百四十三話　どうして運んでる

☆

中国から料理をたっぷり買った三人、その豪華な中華料理を車座になって囲んだうえで話をしています。

「これで当分食糧の心配はなくなったが」

ドイツが日本とイタリアに話しています。

「我々はこれからどうするべきか考えるか」

「それじゃあさ」

イタリアが言ってきました。

「いかだでも作って遊ばない？」

「そうだな。いかだか」

ドイツもそれに頷きます。けれどここで日本が言います。

「あのですね」

「何だ日本」

「ちょっと考えてみたんですけれど」

「ああ」

「ここ、中国さんがいますけれど」

このことからです。日本は考えたのです。

「それでこれだけ中華料理の素材があって料理も人もいますよね」

「そうだな」

「これって中国さんが普通にお家からここまで素材や人を輸送してるってことですから」

少し考えればわかることでした。そもそもです。

「あの人何らかの手段でそれをしてるんですよ」

「あっ、そういえば」

「そうだな」

二人もこのことに気付きました。言われてみればその通りなので

した。

第千七百四十三話　完

2010・11・29

第千七百四十四話　ワープを使える人

第千七百四十四話　ワープを使える人

日本が中国がどうして離れ小島にものを運んでいるのか疑問に思っているその時です。あの某脚本家さんが能登に対して言っていました。

「それじゃあ京都まで何か食いに行くか」

「あの、能登から京都にですか」

「そうだ、行くぞ」

実に気軽に言うのでした。

「わかったな」

「あの、ですからそんな簡単に行けないですけれど」

「安心しろ、俺が行くって言ったらな」

どうなるか。それは。

もうでした。二人は京都にいるのでした。脚本家さんは五重の塔を見ながら能登に対して言います。

「ほらな、この通りだ」

「何か物凄く滅茶苦茶なんですけれど」

「何、大したことじゃない」

脚本家さんは至って落ち着いています。

「それじゃあ何食う？湯豆腐にするか？」

「こうしたワープって普通に使えるんですか」

「俺は使えるんだよ。俺が呼んだらそれだけで俺のところに来られるしな」

「それも凄いですね」

「まあ気にするな、じゃあ湯豆腐でいいな」

強引にそれにしてです。しかもここで何人かに携帯で連絡をするとです。

その人達も一瞬で京都まで来るのでした。この能力は本当に凄い

です。どうやらこの人は書くのが速かったり料理が上手なだけではないようです。

第千七百四十四話　　完

２０１０・１１・２９

第千七百四十五話　のどかなドイツ　☆

日本はこう主張します。
「ですからここは中国さんにお話してですね」
「あの人に御願いして？」
「はい、おそらく船か飛行機です」
それかヘリか。とにかく離れ小島へとなるとそういうものになります。
「それに乗せてもらって」
「そうだよね。そういえば俺達って」
イタリアも日本の話を聞きながら述べます。
「食べることしか考えてなかったし」
「はい、ですからここは」
日本は必死に言います。
「三人で、です。御願いしてです」
「お金出せば送ってくれるだろうしね」
この辺りが中国です。後で絶対に請求してくることは誰でもわかります。
「それじゃあ。俺達三人で」
「はい、行きましょう」
イタリアはこれで納得しました。残るは。
日本はドイツに対してもでした。必死に言います。とにかく遭難しているという今の状況を何とかしたいからです。理由はそれに尽きます。
「それじゃあドイツさんも」
「だが。ビールがあるからな。これを飲めるのなら」
「それ位私が後で幾らでも奢りますから！」

日本も必死です。何かドイツが妙です。

第千七百七十五話　　完

２０１０・１１・３０

第千七百七十六話　まだ動いていない

第千七百七十六話　まだ動いていない

日本がいなくなって大騒ぎしている台湾と韓国、しかしです。

「で、あんたはいなくていいから」

「そういう御前こそ邪魔なんだぜ」

まだ喧嘩をしています。

「あのね、日本さんはそもそもあんたのことが大嫌いなのよ。ネットとかであんたへの悪口がこれでもかって書かれてるじゃない」

「御前は生徒集会に出られないんだぜ。その御前が言っても何ともないんだぜ」

「あんただって最近まで出られなかったでしょ」

「今じゃ生徒会長なんだぜ」

完全に二人の言い合いになっています。

「あんたテコンドーのあれは何なのよ」

「俺が勝って当然なんだぜ」

「私が勝ってたわよ、何よあの反則負け」

「いいや、どっちにしろ俺が負ける筈がないんだぜ」

言い合う二人を見てです。香港がぽつりと呟きます。

「またやってるのね」

そして次に呟いた言葉は。

「仲がいいんだから」

「悪いわよ」

「こいつ何とかするんだぜ」

二人同時に速攻で香港に突っ込みを入れます。

「何でこいついつも日本さんの傍にいたがるのよ」

「俺の邪魔ばかりして鬱陶しいんだぜ」

こんな調子で言い合ってなのでした。まずは二人は喧嘩を止めることからはじめないといけないようです。

第千七百四十六話　完

2010・11・30

第千七百四十七話　連合の面々まで　☆

☆

イギリスとアメリカもでした。この島にいたのです。
「何で御前なんかと一緒なんだよ」
「けれどこれ以上不幸にならないと思うんだ」
アメリカは愚痴るイギリスにこう返しました。
「君と一緒にいることが一番の不幸だからね」
「・・・・・だからかよ」
どうも日本以外には親切にしてもらえないイギリスです。最近学園でもフランス共々徐々に影が薄くなっていっているのではないかとも言われています。
しかしイギリスはアメリカが昼寝をはじめた横で島からの脱出を考えました。木を集めてそのうえで、です。
「あいつは頼りにならないし」
そもそもアメリカがイギリス、ひいては欧州各国の為に何の見返りもなしに何かをする筈もありません。中国に似ているのか意外と現金なのです。
「こんなところで暮らすのは御免だ。いかだを作ってとっとと脱出してやる」
こう言ってです。自分でいかだを作ってアメリカを起こして言います。
「どうだ、アメリカ」
「折角気持ちよく寝ていたのにどうしたんだい？」
「俺一人でいかだを作ったんだ、凄いだろ！」
何故か胸を張ってわざわざ自慢します。
「それでこれでだ」
「うわ、イギリス凄いじゃないか」

「こんなところからさっさとな」
二人で脱出するぞと言おうとしたのです。ところが。
アメリカはそのいかだの上に寝転がってです。それで笑顔で言うのでした。
「昔からこんなベッドが欲しかったんだよ。今日からここで寝るか」
「えっ、おい・・・・・・」
こうしていかだはアメリカのベッドになりました。イギリスにとっては予想外の展開になりました。

第千七百四十七話　　完

２０１０・１２・１

第千七百四十八話　四人不在でも

第千七百四十八話　四人不在でも

韓国が生徒会室に行ってみると。いたのはロシアだけでした。韓国はとりあえずそのロシアに対して尋ねるのでした。

「アメリカさんと中国兄貴は何処なんだぜ？」

「二人抜けてるけれどいいの？」

「あの名前もわからない連中はどうでもいいんだぜ」

後の二人はこれで終わらせる韓国でした。

「とにかく二人いないのはどうしてなんだぜ？」

「さあ。風邪じゃないかな」

ロシアもこんな調子です。

「学校にも来てないみたいだよ」

「日本もなんだぜ。これはどういうことなんだぜ」

「ちょっとおかしいよね。それでだけれど」

ロシアはここで韓国に対して言います。

「仕事する？今から」

「わかったんだぜ。とりあえず仕事なんだぜ」

「じゃあ。生徒会の仕事は」

ロシアが書類の山をイギリスとフランスの机に置きます。そうしてから笑顔で言います。

「これで終わりだね」

「後はあの二人が帰ったらサインさせて終わりなんだぜ」

「そうだね。何か生徒会長の仕事の様な気がするけれど」

「仕事はちゃんとしてるんだぜ。俺は俺の宣伝に忙しいんだぜ」

「韓国君のそういう傍若無人なところ好きだよ」

笑顔で何気に毒も言うロシアでした。生徒会は四人不在でもやっていけるようです。とりあえず二人程無茶苦茶損をしていますが。

第千七百四十八話　完

2010・12・1

第千七百四十九話　イカダ壊れました

第千七百四十九話　　イカダ壊れました

アメリカがベッドにしているイギリスが作ったイカダ、これがです。

「今何つったよ」

「だから壊れたんだよ」

「あれ、相当頑丈に作ったんだぞ」

海を渡るつもりで作ったのですから当然です。海のことをよく知っているイギリスはイカダもかなり強く作っていたのです。ところがなのでした。

「それが何でなんだよ」

「普通に寝ていたら潰れたぞ」

「有り得るか、そんなこと」

実際に見てみると本当に壊れています。バラバラです。

それを見てです。イギリスは唖然としながらも怒ってアメリカに対して言います。

「何処をどうやったらこうなるんだ」

「太平洋のイカダはもっと頑丈だぞ」

「そっちの人間は御前みたいなのばかりかよ」

こう言ったところである人物を思い出しました。今現在彼が最も思い出したくない人ですがそれでも思い出して話をするのでした。

「あの馬鹿会長もこんなのか」

「韓国かい？まあそうだな」

アメリカもそれを認めます。

「背は高いし筋肉質だしな。イギリスなんかのベッドじゃあっという間だな」

「太平洋ってのはそんな奴しかいねえのかよ」

何処が太平なのかわからなくなってきたイギリスなのでした。と

にかくイギリスの脱出用ベッドはあえなく壊れてしまったのでした。

第千七百四十九話　　完

２０１０・１２・２

第千七百五十話　やっと思い出した

第千七百五十話　やっと思い出した

生徒会で遊んだ韓国をです。台湾が呼び止めます。

「あんた、日本さん何処に行ったかわかったの？」

「んっ、生徒会にはいないんだぜ」

「新聞部だから当たり前でしょ。日本さん今のところ生徒会の常任役員じゃないのよ」

この問題も中々難しいところです。

「それでどうしているのよ」

「ああ、そういえばそうなんだぜ」

「とにかくあんた全然探してないのね」

これだけは間違いありません。

「全く。何やってんのよ」

「そういう御前は見つけたんだぜ？」

「見つけてないからあんたに聞いてるんでしょ」

台湾も言い返します。この二人本当にお互い引かないし負けません。仲の悪さが段々イギリスとフランスのそれに近付いてきているかの様です。

「あのね、その辺り考えられないの？」

「そんなの考えなくていいんだぜ」

「何でよ、それは」

「俺が日本を探せば日本は必ず見つかるからなんだぜ」

物凄い自信に満ちた言葉です。有り得ないまでに。

しかし日本はまだ見つかりません。台湾も首を捻っています。

「ドイツさんもイタリアさんもいないけれど」

「誰なんだぜ、その二人」

「・・・・・あんた本気で欧州の人達目に入ってないでしょ」

このことにも呆れる台湾でした。とにかく日本はまだ見つかりま

せん。

第千七百五十話　完

2010・12・2

第千七百五十一話　遭難しての夜　☆

第千七百五十一話　遭難しての夜　☆

イカダを壊してしまったアメリカ、全く悪いと思っていません。けれど何はともあれ夜になったので寝ることにしました。隣にはイギリスがいます。

そのイギリスがです。毛布の中からアメリカに言ってきました。

「おい」

「どうしたんだい？」

「昼間は暑いけれど夜は結構冷えるな」

「そうだね、確かにね」

アメリカもイギリスのその言葉に頷きます。

「不本意だけれどその意見には同意だよ」

「一言多いんだよ、御前は」

こうは言ってもでした。イギリスは。

「それでな」

「どうしたんだい？それで」

「風邪引くなよ」

アメリカに言うのでした。

「いいな」

「何でそんなこと言うんだい？」

「気にするなよ」

イギリスはここで顔を背けてしまいました。

「ただな。言っただけだからな」

「そうなんだ」

「そうだよ。じゃあな」

こうして寝てしまったイギリスでした。やっぱり素直ではありません。

第千七百五十一話　完

2010・12・3

第千七百五十二話　風邪を引いて欲しい奴

イギリスが遭難していない時です。生徒会室に行くと。
韓国が会長の席で豪快に寝ています。いびきが物凄いです。
「この野郎、一体何考えてやがるんだ」
「とりあえず風邪引かないのか？」
フランスも来て言います。二人共うんざりとした顔です。
「全くよ、何やっても風邪引かないからな」
「寒中水泳やろうが何しようがな」
二人にとってはその理由ははっきりしています。
「やっぱりあれだからな」
「それしかないだろ」
「で、どうする？起こすか？」
イギリスはとりあえずフランスにどうするか尋ねました。
「いびきが五月蝿くて仕方ないぞ、こいつ」
「こいつ起きないぞ。何やってもな」
そう簡単に起きないのが韓国です。とにかく寝たら起きません。
けれどこのままではいびきが五月蝿くてたまりません。それでどうするかということをフランスに対して尋ねたということなのです。
「窓から外に出すか？」
「外で寝てたら流石に風邪でも引くだろうしな」
こうして二人は韓国を担いでそれで窓の外から庭に出しました。
そこで寝かせたのです。
けれど韓国はです。ぴんぴんしてこう言うのでした。
「気がついたら外で寝ていたけれど外で寝るのも気持ちいいんだぜ」
「本当に何やっても風邪引かねえな」
「どれだけ丈夫なんだよ」

とにかく二人にとってはうんざりする会長です。こんなこともあったのです。

第千七百五十二話　完

２０１０・１２・３

第千七百五十三話　本当に歳なのか　☆

☆

「イギリス見てくれよ」
「何だ、何かあったのか？」
「ランプとマッチを見つけたよ」
アメリカは実際にイギリスにその二つを見せながら話します。
「凄いだろ」
「おお、御前にしてはやるじゃないか」
これがイギリス流の褒め言葉です。これで友人が日本以外にいないという恐ろしい状況になってしまっているのには自分では気付いていません。
「これで暗くても平気だな」
こう言ってです。
「じゃあ俺は早速森の中を探索してくるからな」
「ああ、頼むよ」
そしてアメリカも言います。
「できればさらに遭難してくれるといいんだけれど」
「・・・・・御前そんな言葉太平洋の連中に言ったことあるか？」
「友達には言わないさ」
「太平洋の連中は別か。あの馬鹿会長が普通にいるからな」
イギリスにとっては最早トラウマになっている現会長でした。
何はともあれ一時間程してイギリスが笑顔で帰ってきました。
「森の中はすげえ楽しかったぞ。何か可愛いのがいてな」
「君はどうして何かあると」
アメリカはその熱く語るイギリスを見ながら言います。
「何もないところを撫で続けるんだい？今といい」
「御前には見えないのかよ」

「別に。それでランプは？」
「あっ、忘れた」
肝心のものを忘れるイギリスでした。これでも日本よりずっと若いです。

第千七百五十三話　　完

２０１０・１２・４

第千七百五十四話　言われて思い出した

第千七百五十四話　言われて思い出した

仕事をする気のないロシアと仕事を完全に勘違いしている韓国という欧州の面々が見たら卒倒する、太平洋の面々は至って平気な顔触れしかいない現在の生徒会室にです。台湾が怒鳴り込んできました。

「あんた、いい加減に来なさい！」

「んっ、何なんだぜ？」

「だから日本さん探すんでしょ。忘れたの？」

「ああ、そういえばそうだったんだぜ」

ここで思い出す韓国でした。

「御前が探していたんだぜ」

「毎回思うけれど凄い幸せな思考回路してるわね、あんた」

そのことに驚嘆さえする台湾でした。

「けれど違うから。二人で探すことになってたでしょ」

「そうだったんだぜ？」

「そうよ。っていうか私だけが探してるって話はどうしてそうなったのよ」

「そうじゃなかったんだぜ？」

「違うから。とにかく行くわよ」

こうして韓国を引っ張って行きます。イギリスやフランスには絶対にできないことですが台湾は平気でできます。何かと強いです。

けれど何はともあれです。韓国と台湾は遂に本格的に日本を探すことになりました。それを見たロシアがぽつりと言います。

「日本君がいないんなら北方領土は僕のものに決まりだね」

こんなことを言うのでした。

「そのままいなくなってくれたら嬉しいな。あとアメリカ君と中国君もいないけれど二人共ずっといなかったら僕嬉しいんだけれどな」

にこりと笑っての言葉です。生徒会で今いるのはこの人だけです。

第千七百五十四話　　完

２０１０・１２・４

第千七百五十五話　妙に気付いたもの

第千七百五十五話　妙に気付いたもの

アメリカはです。ふと匂いを感じて言います。
「あれっ、この匂いって」
「急にどうしたんだよ」
「中国の家の料理の匂いがしたぞ」
こうイギリスに答えます。
「今さっき」
「そんな筈ないだろ。ここは無人島だぞ」
「けれど実際にその匂いがしたぞ」
「んっ、そういえば」
イギリスもです。ふと周りを見てです。何か思いはじめました。
「ここってセーシェルの家に似てるな」
「セーシェル？確かインド洋の国だったっけ」
「そうだよ。俺とフランスが面倒を見てる娘だよ」
「小島の国だったと覚えているぞ」
アメリカが知っているのはこれ位です。それ以上はあまり知らなかったりします。
「その娘の家だっていうのかい」
「違うか？そんな気がするんだけれどな」
「君の気のせいじゃないのか？」
「そうか？それにしても似てるな」
「とにかく魚を獲りに行って来る。君は君で自分の食べ物を見つけるんだ」
「おい、俺は俺でかよ」
アメリカもイギリスも少しずつ気付いてきました。若しかするとこの家は離れ小島でも無人島でもないかも知れません。若しかするとですが。

第千七百五十五話　完

2010・12・5

第千七百五十六話　三人の現状

イタリア、ドイツ、日本の枢軸トリオは中国の別荘から手に入れた食べ物を堪能しています。その中でイタリアがふと日本に言ってきました。

「あのさ、何か新鮮だよね」

「といいますと」

「ほら、日本の傍っていつも二人いるじゃない」

言うまでもなく台湾と韓国のことです。

「それに俺には兄ちゃんがいるし」

「そしてドイツさんにはですね」

「プロイセンとオーストリアさんがいるじゃない」

一人ずつでも全然寂しくはない枢軸トリオです。

「けれど今は俺達三人だけだからね」

「そうですね。何か久し振りに三人きりですね」

「新鮮に思えるよね。この組み合わせって」

「確かに」

「しかし特に悪い気はしないな」

ドイツも落ち着いています。

「この三人だけでいるのもな」

「私はむしろこちらの方が落ち着きます」

いつも横で台湾と韓国が喧嘩をしていることに比べればです。日本は静かでも周りは全然そうではないところが彼の悩みでもあります。

「本当に遭難さえしていなければ」

「いいのだがな」

こんな現状です。三人だけでも仲良く暮らせる人達なのでした。

第千七百五十六話　完

2010・12・5

第千七百五十七話　セーシェルでバカンス　☆

フランスはサングラスをかけてセーシェルと一緒にいます。場所は南の島の様です。椰子やマリンブルーの海が見えます。

その中で。フランスは明るい顔で言います。

「南の島にふらりと一人旅するのもいいものだよな」

「それで私のところに来たんですね」

「そうなんだよ。イギリスも馬鹿会長もいないいい場所だな」

「それでお魚食べます？とれたてピチピチですよ」

セーシェルはさりげなくお魚を勧めます。フランスもそれに応えようとします。しかしここで彼がその目に見てしまったものは。

「んっ、アメリカにイギリスか？」

彼等の姿を見てしまいました。

「こんな場所で何やってんだあいつ等」

彼等の姿を見てしまいじっくりと見ますと。こんなことを言っていました。

「大体御前が悪いんだぞ。あんな紛らわしいばしょにな」

「だからってトランクスとハンカチを間違えるなんて」

「五月蝿い、それはな」

「何でなんだ？」

フランスは二人を覗きながらいぶかしんでいます。

「何であいつ等がこんなところにいるんだ」

「あの、それで」

またセーシェルがフランスに声をかけてきました。

「飛び魚にします？そうします？」

「飛び魚って食えるのか？」

「はい、美味しいですよ」

何気にそんなことも知ったフランスでした。しかし彼もまた騒ぎに巻き込まれることになったのです。

第千七百五十七話　　完

２０１０・１２・６

第千七百五十八話　やっと出発

第千七百五十八話　やっと出発

全然動く気配のなかった台湾と韓国、やっとでした。
「じゃあこの船で行くのね」
「そうなんだぜ。名付けて独島」
何気に物凄い好戦的な名前です。
「これに乗って探しに行くんだぜ」
「その名前は駄目でしょ。他の船にしたら？」
「じゃあ何がいいんだぜ」
「世宗大王って船あったでしょ。あれにしなさい」
台湾は韓国に対して言います。流石にその名前の船で来たら日本も怒ると予想してのことです。そしてその見方は正しかったりします。
そうしてです。台湾は韓国に対してさらに尋ねます。
「で、日本さんのいそうなところわかってるの？」
「この地球の何処かなんだぜ」
物凄い返答が返ってきました。
「探していればそのうち見つかるんだぜ」
「あのね、事前に情報収集位しなさいよ」
そんな韓国に呆れ果てる台湾でした。
「全く。あんたときたら」
「そもそも日本のいるところには気付いたらいるんだぜ」
何故かこの二人はそうです。それで特に困ることなくいつも日本の傍に辿り着きます。これも考えてみれば不思議なことであります。
「だから行くんだぜ」
「今回はそう簡単には辿り着けないんじゃないかしら」
台湾は心配しながら韓国の船に乗り込みます。果たして二人は無事日本を見つけられるでしょうか。

第千七百五十八話　完

2010・12・6

第千七百五十九話　中国が発見

「何でこんなところにいるあるか」
「あれっ、中国じゃないか」
中国がアメリカとイギリスを見て二人に声をかけます。アメリカが彼に応えます。
「二人も旅行あるか？」
「いや、旅行じゃないんだこれが」
アメリカは正直に何があったのか話します。
「遭難したんだよ」
「遭難あるか」
「そうさ。彼が航路を間違えて台風の中に突っ込んでね」
アメリカはイギリスを指差しながら説明します。
「いやあ、大変だったよ」
「よく生きていたあるな」
「何とかね。それはそうと君はどうしてここにいるんだい？」
「僕は別荘に来ているあるよ」
その中国の世界中にある別荘にというのです。
「それでここにいるあるが」
「待て、ということはだ」
イギリスはそれを聞いてすぐにわかりました。あることについてです。
「御前はここに普通に行き来できるんだな」
「そうあるが」
「じゃあここは別に無人島でも何でもないんだな」
「ここはセーシェルあるぞ」
中国が告げる衝撃の真実です。何とここはセーシェルだったのです。

第千七百五十九話　完

2010・12・7

第千七百六十話　でかい海軍は持ったことなし

第千七百六十話　でかい海軍は持ったことなし

出港した台湾と韓国。しかしです。

何か船の動きがおかしいです。台湾はそれに気付いて韓国に尋ねます。

「この船の設計あんたがしたの？」

「何か不都合があるんだぜ？」

韓国は平気な顔で舵を取っています。その動きも何か微妙です。

「俺が設計した船なんだぜ。大丈夫なんだぜ」

「あの、あんたってそういえば」

ここで台湾はあることに気付きました。

「船とか作ったことあったっけ」

「あったんだぜ。亀甲船なんだぜ」

日本との戦いで作った船です。この船は韓国の誇りでもあります。

「あれは凄い船だったんだぜ」

「その他にはあったの？」

「それで充分なんだぜ」

韓国は自信満面に言い切ります。

「だから安心するんだぜ」

「この船バランス悪い気がするけれど」

台湾は本気で心配しています。

「こんな船で世界中回れるのかしら」

「全然平気なんだぜ。大船なんだぜ」

「大船でも沈む時は沈むけれど」

さて、航海に乗り出した台湾と韓国。そもそもからして仲の悪い二人ですが船も問題のようです。果たして無事日本を見つけられるでしょうか。

第千五百六十話　完

2010・12・7

第千七百六十一話　フランスとも会う

第千七百六十一話　フランスとも会う

こうして三人になった連合の三人、その次はです。
「御前もいたのかよ」
「ちっ、見つかったかよ」
フランスがイギリスに見つかってしまって思わず言ってしまいました。
「何でこんなところにいるんだよ」
「船が難破したんだよ」
イギリスはこうフランスに答えます。
「それでセーシェルのところまでな」
「そうだったのかよ。それでここにいたのかよ」
「御前は何でここにいるんだ？」
「ちょっとしたバカンスでな」
フランスがいる理由はこれでした。
「御前とは違うよ」
「違うっていうのは余計だよ」
「それでアメリカはこいつと一緒か」
「そうさ。縁あって一緒だったんだ」
アメリカはイギリスのとばっちりみたいな形です。
「それで中国は別荘か」
「そうある。たまたま来ていたあるぞ」
「いないのはロシアだけか。この顔触れも何かいつもだな」
フランスは腕を組んでこんなことも言うのでした。確かにいつもの顔触れではあります。場所が学校ではなくセーシェルというだけで。
そのことにどうにもあまりいい縁を感じないのはフランスだけで

はありませんでした。四人共だったりします。

第千七百六十一話　　完

2010・12・8

第千七百六十二話　最早超科学

日本を探す為に出航した台湾と韓国。しかし一番の問題はやはり日本が何処にいるかです。そのことこそが一番重要なのです。

しかしです。韓国はそんなことは全くお構いなしです。

「行けばそこにいるんだぜ」

「そのスーパーポジティブシンキングある意味凄いわね」

台湾も今回は呆然となっています。

「っていうかあんたどういう思考回路してんのよ」

「失礼な奴なんだぜ。俺は普通なんだぜ」

「普通じゃないから。それで日本さんを探すあてはあるの？」

「実はこれがあるんだぜ」

韓国は懐からあるものを出してきました。それは。

「東映ワープ装置なんだぜ」

「その携帯電話にしか見えないのが？」

「これで連絡をすれば何時でも何処でもあっという間に着くんだぜ」

「場所を言わなくても？」

「楽勝なんだぜ。俺の起源の凄いものなんだぜ」

「東映って日本さんのところじゃない」

けれど台湾はこのことを知っていました。

「全く。何でもかんでも起源の主張して」

「とにかくこれを使えば一発なんだぜ」

「そういえばあの会社ってすぐにキャラクター移動するわね」

台湾もこのことにふと気付いたのです。何はともあれ世の中便利なものがあります。場所を告げられなくてもあっという間にそこに到着できるのですから。

第千七百六十二話　完

2010・12・8

第千七百六十三話　枢軸動く

動く

「さて、お腹一杯食べましたし」

「そうだな。寝るのもあれだしな」

「えっ、シェスタしないの？」

日本とドイツ、そしてイタリアの間でちょっとした意見の食い違いが起こっています。

「折角のお昼なのに。寝ようよ」

「仕方のない奴だな」

ドイツはそんなイタリアに呆れながらもそれでもあまり強くは言いません。

「それなら御前はそこで寝ていろ」

「うん、そうさせてもらうよ」

イタリアはそのまま寝てしまいます。後に残ったのは日本とドイツです。日本はあらためてドイツに対して言うのでした。その言うことは。

「少し散歩しますか」

「そうだな。さもないと太る」

実はドイツは肥満を気にしています。

「だからだな」

「はい。それに新しい発見もあるかも知れませんし」

「この島も全て見回っているわけではないしな」

「ですから。ここはより多くを知る為にもです」

「散歩をするか」

「はい、それでは」

こうした話をしてから歩きはじめる二人でした。その途中で。

「話し声が聞こえませんか？」

「まさか。そんな筈がないが」
日本は話し声を聞いたのです。果たしてそれは何なのでしょうか。

第千七百六十三話　　完

２０１０・１２・８

第千七百六十四話　本当に着いた

第千七百六十四話　本当に着いた

「それ使ったらすぐに着けるの」
「東映のおっさんの話だったらそうなんだぜ」
「東映さんねえ」
「あの人の言うことなら嘘はないんだぜ」
「そうかしら」
台湾は韓国の言葉にかなり懐疑的です。本当にそれで辿り着けるのかどうか物凄く疑問に思っています。しかも使うのが韓国だからです。
その韓国を見ながら。台湾は言いました。
「若し辿り着けなかったらね」
「何かあるんだぜ？」
「あんたその遭難先から泳いで祖国に帰りなさいよ」
「御前はどうするんだぜ？」
「別荘あったらそこから帰るし」
中国の別荘は台湾も使えたりします。
「なくても何とかするから」
「それはかなり冷たいんだぜ」
「あんたはあんたでしっかりしなさい」
「御前ひょっとして俺のことが好きでないんだぜ？」
「はっきり言って大嫌いよ」
この大嫌いという言葉は韓国の耳に入りません。そんなことを話している間にです。
「何か小島に着いたんだぜ」
「まさかここに日本さんが？」
二人は気付いていませんがそこがセーシェルでした。本当に到着したのです。

第千七百六十四話　完

2010・12・8

第千七百六十五話　ここで遭遇

第千七百六十五話　ここで遭遇

日本とドイツが散歩をしているとです。その四人に会うのでした。

「えっ、貴方達もなのですか」

「遭難していたのか」

「俺は違うけれどな」

フランスはこう二人に返します。

「セーシェルのところにバカンスに来たんだよ」

「というとここは」

「セーシェルだったのか」

「言わなかったあるか？」

中国がここで二人に対して言います。

「そのことは」

「いえ、全く」

「初耳だぞ」

実際に中国はそんなことは言っていません。それも全くです。

何はともあれ二人はここが何処なのか知ったのです。セーシェルでした。

「気付けば三人揃ってここにいましたが」

「そうか、セーシェルだったのか」

「僕も気付いたらイギリスと二人でいて遭難していたんだぞ」

これはアメリカもでした。

「いやあ、不思議なことがあるものだ」

「っていうか考えてみたら怪奇現象じゃないのか？」

イギリスは真剣な顔で言います。どうして気付いたら人が揃っていてしかも遭難してしまっているのか、確かにそれは不思議なことです。何故なのか誰にもわかりません。

第千七百六十五話　完

2010・12・9

第千七百六十六話　セーシェルの言葉

第千七百六十六話　セーシェルの言葉

「あれ、あんた達も来たんだ」
「えっ、あんた達ってことは」
台湾はセーシェルと会ってすぐにその言った言葉に気付きました。
「つまりは」
「そうよ。皆いるわよ」
「日本さんもよね」
「ええ、さっき見たわよ」
セーシェルもまた散歩をしていたのです。それで、なのでした。
「ドイツさんと一緒よ」
「そうなの。日本さんここにいたのね」
「ほらな、俺の言った通りなんだぜ」
韓国は何故かここで胸を張ります。
「どうやら俺は名探偵なんだぜ」
「その名ってところを変えたら？」
台湾は韓国の今の言葉に速攻で突っ込みを入れます。
「迷ってね」
「それじゃあ天才に変えておくんだぜ。俺にかかればミルキィホームズだって相手にならないんだぜ」
「ある意味においてはね」
本当に韓国に対しては冷たい台湾です。この二人の仲も相変わらずです。
しかし何はともあれです。日本がここにいることはわかりました。
「それじゃあここを探して」
「すぐに日本を見つけ出すんだぜ」
この目的においては同じなのでした。台湾と韓国は遂に日本のいるところに辿り着きました。とはいってもあまり探していませんけ

れど。

第千七百六十六話　完

2010・12・9

第千七百六十七話　イタリアも呼んで

第千七百六十七話　イタリアも呼んで

「えっ、俺も？」

「はい、来て下さい」

ニッポンはイタリアのところに来てそれで彼を起こしながら言いました。

「すぐにです」

「若しかして助けが来てくれたとか？」

「それはまだわかりませんが」

それでもというのです。それでイタリアを起こしてそのうえで他の面々が集まっているその場所に彼と一緒に行く日本なのでした。

そのイタリアが見たものは。いつもの面子でした。

「フランス兄ちゃんまでいるんだ」

「ああ、ここセーシェルだぞ」

「えっ、そうだったんだ」

イタリアはフランスのその言葉に思わず驚きの顔でした。

「ここセーシェルだったんだ」

「そうだ。俺達は別にだ」

「遭難していた訳ではなかったのです」

「そうなんだ。よかったね」

イタリアはこのことに笑顔になります。

「しかしだ。問題は」

「どうして帰るかですね」

「それはどうにでもなるじゃない」

イタリアはこうドイツと日本に話します。

「だって俺達遭難してるんじゃないんだから」

だからだというのです。イタリアのお気楽さがここでも皆を包み

ます。

第千七百六十七話　完

2010・12・11

第千七百六十八話　ここでもキムチ

第千七百六十八話　ここでもキムチ

「さて、日本を探す前になんだぜ」
「いきなり座り込んでどうするのも」
「腹ごしらえなんだぜ」
韓国はこう言ってお弁当を取り出してきたのでした。
何か異常に大きなお弁当です。余裕で十人分はあります。韓国はその巨大なお弁当を前にして誇らしげに言うのでした。
「これ食ってから探すんだぜ」
「あんた相変わらず食べるわね」
「人間飯食えるうちは負けないんだぜ」
何気に自分のお家の北半分のことを言ってしまった韓国です。とりあえず彼はいつもお腹一杯食べることができています。有り難いことに。
それでそのお弁当を開きます。そこにまずあったのは。
「ここでもキムチなのね」
「何か悪いんだぜ？」
「いや、何処でもキムチ食べるなって思って」
台湾は首を傾げさせながら韓国に話します。
「そう思ってね」
「キムチは俺の原動力なんだぜ」
これは誰もが知っていることです。生徒会室で食べてイギリスとフランスにうんざりとされているのは彼の目には全く入らないことです。
「だからここでも食うんだぜ」
「本当に好きね、あんたって」
台湾は韓国のそのキムチ好きにいささか呆れた顔です。けれど今はそんなに強く言わないで彼が食べ終えるのを静かに待つのでした。

第千七百六十八話　完

2010・12・11

第千七百六十九話　セーシェルの証言

第千七百六十九話　セーシェルの証言

お弁当を食べ終えた韓国のところにです。セーシェルが来て尋ねてきました。勿論その場所には台湾も一緒にいます。

「それであんた達どうしてここに来たのよ」

「日本さんを探してるのよ」

台湾が答えます。

「それでなの」

「えっ、日本さんなの」

それを聞いてすぐにです。セーシェルは答えてきました。

「日本さんだったらあっちにいるわよ」

「あっ、そっちにいるの」

「そうよ。それじゃあ行ってみる？」

「ええ、そうするわ」

こう答える台湾でした。

「それじゃあね」

「何か凄く簡単に見つかったんだぜ」

韓国も巨大なお弁当箱を服の懐の中に収めながら言います。

「いいことなんだぜ」

「っていうかあんた達まで来るなんてね」

セーシェルが今言うのはこのことでした。

「皆集まってるって感じね」

「皆って？」

「フランスさんとイギリスさんもいるし」

セーシェルはまずはこの二人の名前を出しました。お話は台湾と韓国が予測していなかった方向に向かおうとしています。さて、一体どうなっていくのでしょうか。

第千七百六十九話　完

2010・12・13

第千七百七十話　証言は続く

セーシェルは二人に対してさらに話していきます。
「ドイツさんとイタちゃんもいるわよ」
「ああ、その二人の名前は聞いたことがあるんだぜ」
韓国が二人の名前に反応して言います。
「確か日本の仲間なんだぜ」
「っていうか枢軸の時にいたじゃない」
台湾が呆れた顔で韓国の今の言葉に突っ込みを入れます。
「何でそう言えるのよ」
実は台湾も韓国もあの戦争の時は日本のお家にいました。それで日本と一緒に戦ったのです。特に台湾と彼女のお家の人は大活躍でした。
「あんたもいたでしょ」
「俺は連合国なんだぜ」
けれど韓国はこう豪語します。
「だからそんなの知らないんだぜ」
「あんたの記憶回路って一体どうなってるの？」
台湾の呆れた言葉は続きます。けれどここでセーシェルがまた言うのでした。
「アメリカさんと中国さんもいるしね」
「その人達もなの。何か豪華メンバーね」
「二人程知らない奴がいるけれどわかったんだぜ」
「だからあんたいい加減イギリスさんとフランスさん覚えなさいよ」
「俺格下には全然興味がないんだぜ」
こんな会話が続きます。けれど何はともあれです。日本も他の人達も遭難からは救われそうです。彼等にとってはいいことに。

第千七百七十話　完

2010・12・13

第千七百七十一話　一行と会いに

「それじゃあ。何はともあれね」
「日本のところへ行くんだぜ？」
「その他の何処に行くのよ」
台湾はこう韓国に言い返します。
「そうでしょ」
「そういえばそうなんだぜ。日本を待っていても仕方ないんだぜ」
「待つより向かえよ」
台湾ははっきりと言い切ります。
「わかったわね」
「わかってるんだぜ。それじゃあ」
「行くわよ」
こうして二人で日本のいるところに向かうのでした。その時にです。
ふとです。韓国はこんなことを言うのでした。
「大きい船で来てよかったんだぜ」
「そうね。日本さん以外の人も乗せられるし」
「ついでに言えば食べ物も一杯持って来たんだぜ」
韓国はとにかく食べます。そのことを考えますと今回もかなりの量を持って来ているのも道理です。それでだというのです。
「だからどれだけいても平気なんだぜ」
「それはいいことね。けれどキムチばかりよね」
「他の味はどうでもいいんだぜ」
味はそれしかありませんでした。けれどです。
何はともあれ食べ物は一杯あるのでした。日本にとってさしあたっても不安材料である遭難の件は何とか終わろうとしています。

第千七百七十一話　完

2010・12・14

第千七百七十二話　遂に会えました

第千七百七十二話　遂に会えました

その日本のところに向かう二人、そしてそこには彼がいました。

「日本さん、大丈夫ですか？」

「あれっ、台湾さんじゃないですか。それに韓国さんも」

日本は台湾の言葉に振り向いてです。それで台湾と韓国に気付いたのです。

「貴方達も遭難ですか？」

「あっ、違います」

それは否定する台湾でした。

「日本さんを迎えに来ました」

「では私が遭難していることはもう」

「そこまで考えませんでしたけれどおられないので」

台湾はこのことを正直に話します。

「それでここまで」

「そうだったんですか。よくここまで辿り着けましたね」

「そんなことはワープでどうでもなるんだぜ」

韓国は平気にこの事実を話します。

「だからどうでもいいんだぜ」

「ううむ、東映ワープですね」

日本もその事情を察しました。

「それを使われましたか」

「はい、何はともあれです」

「これで遭難のことはどうでもなるんだぜ」

二人は笑顔で日本に対して言います。何はともあれこれで日本は助かることになりました。彼にはいつも傍にいてくれる人達がいるのは間違いありません。

第千七百七十二話　完

2010・12・14

第千七百七十三話　都合のいいことに

第千七百七十三話　都合のいいことに

そこには連合の面々もいました。とはいっても韓国が目に入るのはアメリカと中国だけです。イギリスとフランスは今回もこんなことを言われます。

「何だ、いつもの二人もいるんだぜ」

「俺達はついでかよ」

「久し振りに会っても失礼な奴だな」

けれど韓国には二人の言葉は耳に入りません。それでアメリカと中国に顔を向けて言います。

「アメリカさんと兄貴もどうですか？俺の家で帰りませんか？」

「ああ、乗せてくれるんだ」

「はい、よかったら」

この二人には低姿勢の韓国です。一応目上の人には敬意を払うみたいです。

けれどここで、です。中国が言いました。

「船なら僕の家から来ているあるぞ」

「えっ、そうなんですか？」

「けれどそれは一月先ある」

中国はセーシェルにはあまり馴染みがないようです。

「それで飛行機で帰るつもりだったあるが」

「何でしたら兄貴もどうですか？乗りますか？」

「そうあるな。飛行機は使うとお金がかかるあるからそうさせてもらうある」

中国も韓国の好意に甘えることにしました。こうして二人も決定です。

けれどここで。台湾がふと言うのでした。

「この人達はいいけれど」

「どうしたんだぜ？一体」
台湾が言うことは何でしょうか。それが問題なのでした。

第千七百七十三話　　完

２０１０・１２・１５

第千七百七十四話　キムチソーセージ

第千七百七十四話　キムチソーセージ

台湾はです。ドイツとイタリアを見て韓国にお話します。

「ドイツさんとイタリアさんはどうするの？」

「勿論いいんだぜ」

韓国は台湾のその問いに即答します。

「俺の船に乗って帰ってもいいんだぜ」

「そうなの。いいのね」

「俺はそんなケチなことは言わないんだぜ」

相手の存在を忘れてしまうか最初から目に入っていないことはあってもです。余裕のある時は吝嗇ではないのが韓国なのです。

「だから二人が望めばなんだぜ」

「そうか。それではだ」

「宜しく頼むよ」

「確かあんたはソーセージだったんだぜ」

韓国もドイツとソーセージの関係は知っています。

「それもあるから安心するんだぜ」

「そうか。それは何よりだ」

「キムチと一緒に食べると最高なんだぜ」

韓国はここでもキムチでした。

「それを楽しむといいんだぜ」

「それは遠慮しておくがな」

ドイツはあっさりと断ってしまいました。イタリアもこんなことを言います。

「まさかキムチパスタなんてないよね」

そしてその危惧は当たっていたりします。とにかく何でもキムチ、キムチがないと生きていけないのが韓国なのです。

第千七百七十四話　完

2010・12・15

第千七百七十五話　ツンデレは通じない

第千七百七十五話　ツンデレは通じない

かくして枢軸の三人とアメリカ、中国は韓国の船に乗って帰ることになりました。そして残る二人は。

「そこの名前がわからない二人はどうするんだぜ？」

「だからイギリスさんとフランスさんでしょ。あんた本気で言ってるでしょ」

台湾の突っ込みは恐ろしいことに事実です。韓国は本当にイギリスとフランスについては心の底からどうでもいいので名前も覚えないのです。二人の存在価値は韓国の中では日本のそれと比べるとまさに宝石と小石だけの違いがあります。

その二人はかなり怒っています。けれどここでイギリスが言いました。

「ま、まああれだ」

「眉毛は船で剃れるから安心するんだぜ」

「手前は何処まで人の神経を逆撫でできるんだ！」

いい加減切れたイギリスでした。フランスも今の韓国の言葉には唖然です。

「ここでよくそんなの言えるな、こいつは」

「そこの無精髭もさっさと船の中で剃るんだぜ」

「おう！俺もかよ！」

同時にフランスにも言います。本当に韓国は凄いです。

けれど何はともあれ、です。二人は韓国の船に乗るかどうか決断を迫られています。

ここでイギリスが、です。韓国に対して言います。

「ま、まあ俺はあまり乗りたくはないんだけれどな」

「わかったんだぜ。じゃあ二人共乗らないってことで話は決まったんだぜ」

韓国はイギリスの言葉をそのままストレートに解釈しました。
「じゃあそういうことで。早速出航するんだぜ」
「おい待て、そこから先は聞かないのかよ」
これにはイギリスも唖然です。とか何とか言っている間に韓国はもう船に戻っています。枢軸の人達もアメリカも中国もです。イギリスとフランスだけ残っています。

第千七百七十五話　　完

２０１０・１２・１６

第千七百七十六話　台湾の忠告

二人ぽつんと残されたイギリスとフランス。砂浜がやけに広く感じられます。

その砂浜においてです。二人は台湾にこう言われました。彼女はまだ残っていたのです。

「あいつに婉曲な表現は効かないですよ」

「いきなりあれで終わりかよ」

「あれはかなりわかりやすかったぞ」

「それが韓国なんです」

台湾は二人に話します。

「ですから」

「じゃああれか。皮肉とかもか」

「全然効き目がないのかよ」

「はい、全然」

ないといいます。

「あいつは言葉はそのまま受け取りますから」

「それであれかよ」

「こいつの言葉をそのまま受け取って」

「そうなんです。その辺り注意して下さいね」

こう言ってです。台湾も船に戻りました。彼女がいなくなって二人は本当に二人ぼっちになってしまいました。そのうえでイギリスが言うことは。

「セーシェルのところじゃなかったらこれで終わりだったな」

「そうだな。それにしてもあいつ皮肉とか通じないんだな」

「ああ、それがよくわかったよ」

「そうだな」

砂浜で二人話すイギリスとフランスでした。今の二人は一人でい

るよりずっと寂しいです。

第千七百七十六話　　完

2010・12・16

第千七百七十七話　こうして戻った

第千七百七十七話　こうして戻った

イギリスはです。とりあえずフランスに尋ねました。
「御前バカンスで来たんだよな」
「ああ、そうだ」
「船とか飛行機で来たんだよな」
バカンスと遭難は違います。帰られるから来るのです。それでイギリスはフランスに対してどうやって来たのか尋ねたのでした。
けれどです。フランスはこう答えました。
「全部なくなったよ」
「なくなったってどういうことだよ」
「船も飛行機もストに入ったってよ」
携帯を見ながらの言葉です。
「だから当分ここにいることになるぞ」
「おい、じゃあ遭難と同じかよ」
「どうするよ。それで」
「もう早く帰りたいんだよ」
これがイギリスの本音でした。
「おい、それじゃあな」
「どうするんだよ。それで」
「また筏作るぞ。御前も乗るか？」
「作るの協力してやるからいいか？」
「ああ、それじゃあ乗せてやる」
かくしてまた筏を作ったイギリスなのでした。この二人の帰国は枢軸組やアメリカ、中国とは違ってです。かなり困難なものになるのでした。

第千七百七十七話　　完

2010・12・17

第千七百七十八話　海水は飲めない

第千七百七十八話　海水は飲めない

ほぼ漂流に近い形で帰国することになったイギリスとフランス。その中で、です。

二人は釣りをしながら祖国に戻っています。獲ったお魚はそのまま食べます。フランスが生のお魚を食べながらイギリスに尋ねます。

「水あとどれ位ある？」

「ドラム缶にあるだけだ」

見れば筏にはドラム缶もあります。

「後は雨水だ」

「そうか。一応あるんだな」

「わかってると思うが海水は飲むなよ」

イギリスはこのことを注意します。

「飲んだらそれこそな」

「塩のせいで喉が渇いてだよな」

「洒落にならないからな」

こうフランスに言うのでした。

「わかってるならいいけれどな」

「わかってるさ。俺だって海には親しいんだ」

「くそっ、何でこんな帰国になったんだよ」

イギリスはうんざりとした顔で釣りをしています。

「あの時あいつに素直に言えばよかったか？」

「けれど御前素直に言うか？」

「そっからの駆け引きだろ。あいつには通じねえのかよ」

「通じる奴が生徒会長やりながらサミットに出るかよ」

今となっては後悔しきりなのでした。そんな話をしながらです。

二人は何とか帰国することができました。幸いなことに。

第千七百七十八話　完

2010・12・17

第千七百七十九話　帰ってみると

第千七百七十九話　帰ってみると

やっと帰ってきたイギリスとフランス、お家に入るとです。

「お帰りなさい、兄さん」

「バカンス長かったのですね」

妹達が仲良くお茶を楽しんでいました。

「お茶飲む？今淹れたところだけれど」

「美味しいですわ、この娘の紅茶って」

「おい、それだけかよ」

イギリスは妹達の落ち着いた対応にいささか不満な顔になって言います。

「俺は今まで遭難してたんだぞ」

「俺も筏で帰ってきたんだぞ。それで何だよその冷静さは」

「ああ、遭難してたのね」

「大したことないですわ」

二人はそう言われてもこんな対応です。

「けれど五体満足じゃない」

「バカンスを楽しんできましたのね」

「あのな、御前等な」

フランスもいい加減頭にきながら妹達に言い返します。

「自分達の兄貴が死にそうになってたのにそれで終わりかよ。どうなんだよそれって」

「だって。私達全体が今身体の調子が悪いから」

「スペインさんやギリシアさんは大変でしてよ」

「それ言うなよ。何か急に風邪気味になってきたからな」

実はバカンスどころではない体調でバカンスに行っていたフランスでした。今欧州の皆が洒落にならない位身体の調子が悪いのです。

第千七百七十九話　完

2010・12・18

第千七百八十話　生徒会室では

第千七百八十話　生徒会室では

登校して生徒会室に入ると。ロシアだけがいました。
「ああ、お帰り」
「あれっ、他の二人は何処行ったよ」
「もう帰ってきてるだろ」
「今太平洋の集まりで日本君とお話中だよ」
太平洋はその二人と日本が中心になってお話をします。生徒会のメンバーはそれぞれ色々と忙しいのです。
「僕はそのお話には関係ないから留守番してるんだ」
「そうだったのか。何かあの会長もいないな」
「肝心な奴がいねえな。まあいなくてもいいけれどな」
何気に本音を出すフランスです。しかしです。
自分達の机を見るとです。書類が山積みで天井にまで届いています。しかも何段もです。
それを見てです。二人はうんざりとした顔でロシアに尋ねます。
「何だよ、これ」
「何でこんなに仕事が溜まってるんだ？」
「ああ、それ韓国君の仕事」
今の生徒会では会長の仕事は実質二人がやっています。韓国は根本的に生徒会の仕事は自分の宣伝がそれだと考えているのでそうした仕事は一切しないからです。
しかしどう見てもです。今の書類の山は彼のそれ以上にあります。
それは。
「アメリカと中国の分もねえか？」
「それにしても多いだろ」
「生徒会のだけじゃなくて新聞部のも回ってきてるんだ。韓国君が遭難した二人がやればいいって言ってね」

「っておい！あの二人も遭難してただろうが！」
「新聞部の三人の仕事が何でこっちに来るんだよ！」
速攻で抗議するイギリスとフランスでした。しかし仕事は去りません。かくも強引な韓国の決定でした。

第千七百八十話　　完

２０１０・１２・１８

第千七百八十一話　猫までのほほん

第千七百八十一話　猫までのほほん

皆猫を飼っています。勿論イタリアもです。その猫を見てみますと。

「御前そっくりなんだが」

「うん、俺もそう思う」

イタリアはドイツの言葉に応えます。見れば本当にイタリアそのままの猫です。

目元が呑気でそれでいて妙に能天気な感じがして。白地に所々茶色いところがある。そんな猫です。二人はその猫を見てお話をします。

「飼い主に似るというがだ」

「それにしてもそっくりだよね」

「目元が特にそうだな」

見れば本当に目はそのままイタリアです。行動もです。

今はぐっすりとお昼寝中です。そんな猫です。

「やっぱりあれか。好きな食べ物はだ」

「うん。お魚とか海老とか」

「烏賊は食べないか」

「猫に烏賊は駄目なんだよ」

烏賊を食べると腰が抜けてしまうのです。猫の意外な弱点です。

「だから。それでね」

「そうか。一つ勉強になったな」

「ドイツ海のものはあまり食べないからね」

「それでだ。しかし本当にそっくりだな」

見れば見る程です。イタリアそっくりの猫です。

そんなイタリア猫、今日ものほほんと過ごしています。猫はどうして猫なのか、どうしていつもマイペースなのか、そんなことも考

えさせられる猫です。

第千七百八十一話　完

2010・12・19

第千七百八十二話　猫でも女の子好き

「ねえ君何処から来たの？」
「ねえねえ、今度一緒に散歩に行かない？」
イタリア猫がしきりに雌猫に声をかけています。
「俺いい場所知ってるんだ」
「日向ぼっこなんて最高だよ」
こんな調子です。そして雌猫の方もです。
「まあイタちゃんならね」
「じゃあいいんだ」
「日向ぼっこ位ならね」
穏やかな笑みでこう応えるのでした。
「いいわよ」
「やったあ、じゃあ今からね」
「ええ、行きましょう」
雌猫も笑顔で言います。
「他の娘も呼んでね」
「あっ、君だけじゃないんだ」
イタリア猫はそれを聞いてさらに楽しそうな笑顔になります。彼にとっては女の子は多ければ多いだけいいのです。こうしたところ本当に飼い主にそっくりです。
「それじゃあ皆呼んでね」
「ええ、日向ぼっこね」
「今からしようね」
こうして女の子達と楽しく日向ぼっこを楽しむイタリア猫なのでした。彼は今とても幸せです。いつも幸せと言ってしまえばそれまでなのですが。

第千七百八十二話　完

2010・12・19

第千七百八十三話　ドイツ猫

第千七百八十三話　ドイツ猫

ドイツもまた猫を飼っています。
「犬だけじゃなかったんだ」
「最近な。飼いはじめた」
こうイタリアに対して答えます。この二人は今日も一緒にいます。
「この猫だが」
「ああ、黒猫なんだ」
「そうだ。しかし飼っているとだ」
そのドイツのお家の猫を見ます。そうして見ますと。
目がドイツにとてもよく似ています。似ているというよりはそっくりです。何か仕草一つ一つまでがドイツそっくりな、そんな猫なのです。
その猫を見てです。イタリアはまた言います。
「真面目そうな猫だね」
「真面目か」
「うん、そう見えるよ」
イタリアから見れば特にです。
「俺の家の猫とは全然違うね」
「あの猫はかえってあれだな」
ドイツはここでもイタリア猫について言及します。
「御前そっくりだな」
「そしてこの猫はドイツにそっくりだよな」
「ううむ、似るものなのか」
ドイツはこのことを認識するのでした。飼い猫は飼い主に似る、一つの法則です。それはドイツについてもよく言えることなのでした。

第千七百八十三話　完

2010・12・20

第千七百八十四話　ドイツ猫とイタリア猫

第千七百八十四話　ドイツ猫とイタリア猫

「あれっ、何してるの？」
「何だ御前は」
ドイツ猫がイタリア猫とはじめて会った時のことです。ドイツ猫はイタリア猫に対してこう返しました。
「見たことのない顔だな」
「俺はイタリアにいたんだけれど」
「イタリアの猫か」
「うん、そうなんだ」
イタリア猫は能天気な感じでドイツ猫に対して述べます。
「ここってドイツだよね」
「そうだ。そして俺はドイツの猫だ」
「成程ね。何か俺達の御主人達ってさ」
「ああ、はじめて会った時のことだな」
その時のことは彼等も知っています。
「大騒動だったらしいな」
「そうらしいね。うちの御主人が泣き喚いて」
「俺の御主人が呆れたらしいな」
「俺も喧嘩は苦手だから」
イタリア猫はこのことも話します。
「だからお手柔らかにね」
「安心しろ、俺は無闇な暴力は振るわない」
その辺りはしっかりしているドイツ猫です。
「それでだ。何か食うか？」
「パスタあるけれどどう？」
「ソーセージがあるぞ」

二匹はお互いにそれぞれの好物を勧めます。イタリアでは猫でもパスタを食べるようです。そしてドイツ猫もまたソーセージが好きなようです。

第千七百八十四話　　完

２０１０・１２・２０

第千七百八十五話　飼い主そのまま

第千七百八十五話　飼い主そのまま

日本の猫はです。落ち着いていて静かな雰囲気の猫です。色は灰色と白の二色です。色こそ違いますが日本の国旗に似ています。

そんな猫です。日本妹がお兄さんと一緒にその猫を見ながら言います。

「前から思っていましたけれど」

「私に似ていますか」

「というかそっくりだと思います」

妹が見てもなのでした。

「兄さんに何もかもが」

「そういえばこの猫は」

「この家に来て長いですね」

「私が子供の頃からですしね」

「上司の上司の方の初代の方からおられたという話もありますけれど」

上司の上司の方は今現在で百二十代を越えています。そしてその歴史はといいますと。イタリアのお爺さんよりも古いとされています。

「まさかと思いますけれどこの猫は」

「仙猫でしょうか」

「わかりませんよね、その辺り」

「とりあえず尻尾は一本ですが」

二本以上だとまず普通の猫ではありません。

「しかし長生きの猫ですね」

「はい、本当に」

そんな猫です。飼い主と同じで物静かでそれでいてどれだけ生き

ているのかわからない、そんな日本のお家の猫です。本当に飼い主そっくりです。

第千七百八十五話　　完

２０１０・１２・２１

第千七百八十六話　食べ物には

第千七百八十六話　食べ物には

「こんにちは」
「こんにちわ」
「うむ、こんにちは」
日本猫はイタリア猫、それにドイツ猫と仲がいいです。それでよく一緒にいます。
そうして三匹で御飯を食べることも多いです。その時に。
「これは鮪ですね」
「うん、そうだよ」
イタリア猫が日本猫に対して答えます。
「日本これ好きだよね」
「はい、ツナも鮪も大好きです」
まさにその通りだというのです。
「イタリアさんのところの鮪ですね」
「日本が好きだから用意したんだよ」
「有り難うございます」
心から感謝する顔でイタリア猫に対して言います。
「それでは早速」
「皆で食べようね」
「ううむ、鮪か」
ドイツ猫は今一つはっきりしない感じでその鮪の前にいます。赤い見事な色の鮪です。
「美味いのか、これは」
「はい、とても美味しいです」
日本猫はもうその鮪にかぶりついています。食べ物については本気になるところも飼い主そっくりです。そうしてドイツ猫にもその鮪を勧めるのでした。

第千七百八十六話　完

2010・12・21

第千七百八十七話　目つき悪し

第千七百八十七話　目つき悪し

イタリアのお家にはもう一匹猫がいます。言うまでもなく彼のお兄さんであるロマーノの飼い猫です。この猫はイタリア猫のお兄さんにあたります。

この辺りイタリアとロマーノの関係と同じです。そしてお互いの関係も。

「また喧嘩してるよ」

「というか一方が一方的に攻撃していますね」

日本が困った顔になっているイタリアに対して述べます。

「あれは」

「あれがいつもなんだよ。困ったことに」

「その様ですね。ではここは」

「日本、何かいい考えがあるの？」

「とりあえず冷却期間を置いてはどうでしょうか」

日本らしい穏健なやり方でした。

「それで分けてです」

「様子を見るんだね、それで」

「それでどうでしょうか」

こうイタリアに対して提案します。

「あのままではどちらにとってもよくありませんから」

「そうだね。それがいいかな」

「猫もまたお付き合いです」

日本はこのポイントも指摘しました。

「ですから」

「ううん、じゃあやってみるね」

イタリアも猫達が心配です。色合いは同じですが目つきの悪いそ

の猫は。何もかもがロマーノそっくりな、そんな猫なのです。

第千七百八十七話　　完

２０１０・１２・２２

第千七百八十八話　寄ってくるから意味なし

第千七百八十八話　寄ってくるから意味なし

イタリアはイタリア猫とロマーノ猫を分けてみることにしました。日本の提案を受け入れた形です。確かにそうするのが一番の状況でした。

ところがです。そうしてみても。

「ねえ兄ちゃん遊ぼうよ」

「あっちへ行け」

ロマーノ猫がイタリア猫を跳ね除けます。何とイタリア猫が自分からお兄さんに対して寄っていくのです。

どけられても邪魔にされても。それでもでした。

「だから兄ちゃん、一緒にさ」

「俺は一人でいいんだよ」

「そんなこと言わないで」

「だからいいって言ってるだろ」

どれだけ邪険にされてもです。イタリア猫はお兄さんに近寄ります。そうした光景を見てです。イタリアは日本に対して相談するのでした。

「どうしよう、何があっても寄っていくんだよ」

「そうですか。弟さんはお兄さんのことが好きなんですね」

「うん。けれど兄ちゃんの方はね」

「ううむ、困りましたね」

日本もこの状況には顔を曇らせます。

「これでは分ける意味がありません」

「だよね。どうしたものかな」

何かイタリアとロマーノの関係そのままです。どうやら似てくるのは外見や性格だけではなくです。そうした関係まで似てしまうよ

うです。
　イタリアも日本も。このことには今のところ打つ手がないのでした。

第千七百八十八話　　完

２０１０・１２・２２

第千七百八十九話　スカーフェイス

第千七百八十九話　　ス
カーフェイス

ドイツのお家もまた猫がもう一匹います。その猫はといいますと。ドイツ猫が黒猫なのに対してその猫は白猫です。そしてドイツ猫よりもスマートで鋭い感じです。首に巻いているものがマフラーに見えます。

そしてその右目のところに縦の傷が一条あります。その猫はといいますと。

「やっぱり俺の猫は可愛いな」

「可愛いか」

「ああ。可愛くないか？」

「可愛いというよりは精悍だな」

ドイツがこうプロイセンに話します。

「そうした印象だがな」

「何だ、そっちかよ」

「そう思うが違うか」

「言われてみればそうか」

プロイセンもドイツの言葉を聞いてから頷きます。確かに言われてみればです。

「こいつは精悍って感じだな」

「何処か狼にも似てるな」

「まあ俺が一匹狼だしな」

プロイセンは何処か得意げに笑ってこんなことも言います。

「だからだな」

「一匹狼だったか？」

「相棒がいるからそれは違うか」

何だかんだで一人ではないプロイセンです。こうしてドイツと同

居していていつも一緒です。東西が一つになってからそうなので一人でないことは間違いありません。

第千七百八十九話　　完

２０１０・１２・２３

第千七百九十話　猫も相棒同士

第千七百九十話　猫も相棒同士

プロイセン猫はいつもドイツ猫と一緒です。そうしてお話もです。
「相棒、今度何処行くよ」
「飼い主が今度オーストリアに行くが」
「ああ、あそこは駄目だ」
何か飼い主そっくりです。彼もなのでした。
「あそこはな。飼い主も猫もな」
「嫌いか」
「昔から嫌いなんだよ」
本当に飼い主と同じことを言います。
「だから止めておこうぜ」
「そうか。なら何処に行く」
「イタちゃんのところがいいな」
こうドイツ猫に対して言うのでした。
「あそこはどうだ？あったかいし食い物もいいしな」
「そうだな。それではイタリアに行くか」
ドイツ猫もプロイセン猫のその提案に頷きます。ドイツ猫にしてもイタリアに行くことは好きなのです。もうしょっちゅう行っています。
それで二匹で、です。イタリアに行って。
「よお、イタちゃん」
「あっ、来てくれたんだ。それも二匹共」
「ああ、また宜しく頼むぜ」
イタリア猫には愛想のいいプロイセン猫なのでした。何もかもが、これまでの猫達よりもまだ飼い主にそっくりな、そんなプロイセン猫でした。

第千七百九十話　完

2010・12・23

第千七百九十一話　猫もマリアツェル

第千七百九十一話　猫もマリアツェル

「私も猫を飼っています」
「そうだったのか」
ドイツがオーストリアさんの言葉に応えています。見ればオーストリアさんの腕の中にはその猫がいます。落ち着いた感じの灰色が少し混ざった感じの黒と白の二色模様の猫です。顔立ちはやっぱりオーストリアさんに似ています。
「この子なのですが」
「似ているな、御前に」
「よく言われます」
実際にそうだというのです。
「特にここが」
「その癖毛は健在だな」
見れば癖毛もちゃんとあります。そこまでオーストリアさんにそっくりなのでした。
ドイツもそれを見てまた言います。
「飼い主に似てくるな、どの猫も」
「そうですね。貴方のところの猫もそうですし」
「じゃああれか。その猫はいつも音楽を聴いているか」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのです。
「ピアノもオーケストラも大好きです」
「本当に御前に似ているな」
「何でしたら貴方もどうですか？一緒に」
「待ってくれ。うちの猫を連れてくる」
猫にも聴かせてあげるというドイツでした。オーストリアさんの

ところの猫は音楽がとても好きです。飼い主の趣味は猫にまで行き渡るのです。

第千七百九十一話　　完

２０１０・１２・２４

第千七百九十二話　ピアノの傍で

「あっ、オーストリアさんそこだったんだ」
「はい、ここが一番落ち着きますので」
イタリア猫は今日はオーストリアさんのお家に遊びにきています。
オーストリア猫を探しますとお家のピアノのところにいたのです。
「それでここに」
「オーストリアさんって本当に音楽好きだよね」
「大好きです」
好きどころではないというのです。
「それは貴方もですね」
「俺の家も音楽が凄いんだよね」
イタリア猫は穏やかな笑顔で答えます。
「飼い主も歌が上手いしね」
「私の御主人様もですよ」
オーストリアさんはピアノだけではないのです。
「オーケストラの指揮も歌もどちらも」
「いいよね。音楽が好きな飼い主がいるって」
「そうですね。私は喧嘩は好きではありませんし」
「ああ、俺も俺も」
イタリア猫は喧嘩をして勝ったことがありません。この辺りも飼い主そっくりです。
「喧嘩なんかするよりはね」
「はい、音楽です」
この二匹は音楽のことについては非常に馬が合います。もっともその他のことでも何かと仲がよい彼等なのでありますが。イタリア猫を嫌いな猫はあまりいません。

第千七百九十二話　完

2010・12・24

第千七百九十三話　乙女チック

ハンガリーがオーストリアさんに自分の猫を見せています。
「どうですか？」
「可愛いですね」
見れば白と茶色、尻尾はストライブになっています。そんな猫です。
目がです。とても可愛いです。オーストリアさんもそのことを言います。
「特に目が」
「はい、自慢なんです」
「そうですか。やっぱり」
「とにかく可愛くて」
ハンガリーはニコニコとしながら自分の飼い猫を抱き締めます。
「大事にしてます」
「そうですね。猫はやはり大事にしないと」
「犬もですけれどね」
「それで名前ですけれど」
オーストリアさんはここでハンガリーにこのことを尋ねました。
「何というのですか？まさかまた」
「またといいますと」
「ルーマニアのところから名前を取っていませんね」
実はハンガリーとルーマニアは仲が悪いです。それでハンガリーは自分のところの犬にルーマニアのお家の人の名前をつけたりするのです。オーストリアさんが今言うのはこのことです。
「まさか」
「あっ、ちょっとあっちの女の子の名前を」
今度はそちらでした。猫の名前もそんなふうなハンガリーでした。

第千七百九十三話　完

2010・12・25

第千七百九十四話　猫まで強い

「おい、それよこせよ」
「そう言われる道理はありません」
オーストリア猫が御飯を食べているとです。プロイセン猫がつっかかってきました。どうも猫同士も仲が悪いようです。
オーストリア猫はつっぱねようとします。しかしプロイセン猫も諦めません。するとそこにです。
「ちょっと、あんた何やってるのよ」
「げっ、手前は」
「オーストリアさんに何かしたら許さないからね」
ハンガリー猫です。こう言ってプロイセン猫の前に来たのです。
それを受けてです。プロイセン猫は。
「やろうってのかよ」
「そうよ。どうしてもっていうのね」
「そうだよ。雌なんかに負けるかよ」
ハンガリー猫に対して向かいます。ところが。
一瞬でした。プロイセン猫はあっさりと負けてしまったのです。
「ちっ、何て奴だ」
「おといいらっしゃい」
飼い猫まで強いハンガリーの家でした。そして負けたプロイセン猫は。
相棒のドイツ猫に対してこのことを言います。するとドイツ猫はこう彼に返しました。
「それは御前が悪いぞ」
「相棒までそう言うのかよ」
「しかも相手を見ろ。あいつは強いぞ」
「ちっ、可愛いのは顔だけかよ」

実はとても男らしいハンガリー猫なのでした。顔はとても可愛くてもです。

第千七百九十四話　　完

２０１０・１２・２５

第千七百九十五話　垂れ耳最高

枢軸の面々だけでなく連合の面々も猫を飼っています。まずはイギリスです。

イギリスの猫は茶色いところもある全体的に白い毛です。その特徴は。

「耳がいいですね」

「そうだろ。この種類はやっぱりこれだよ」

見ればイギリス猫は垂れ耳です。しかも顔が丸いです。日本はその猫を見てです。その種類が何なのかすぐにわかったのでした。

「スコティッシュフォールドですね」

「そうだよ。兄さんから貰ったんだよ」

「最近人気の猫ですね」

「ああ、滅茶苦茶飼いやすいぜ」

そうやらかなりいい猫のようです。

「優しくて温和でな」

「それはいいですね」

「しかもとてもフレンドリーな性格なんだぜ」

「そうでしょうか」

しかしです。日本はそのイギリス猫を見ながらこう言うのでした。

「何か無愛想ですが」

「そうか？俺はそうは思わないけれどな」

「素直でないようですし」

「別にそれはないけれどな」

見ればソファーの上でふんぞりかえっています。それを見ればです。

何となく飼い主に似ています。眉毛まであってそれが太いです。この猫もまた飼い主に似てしまっているようです。まるで兄弟の様

に。

第千七百九十五話　完

2010・12・26

第千七百九十六話　スコティには思えない

「ねえイギリス」
「何だよ」
イギリス猫は遊びに来たイタリア猫に無愛想に応えます。
「何しに来たんだよ」
「遊ばない？これから」
イタリア猫はちょこんと座った姿勢で寝そべっているイギリス猫に対して言います。
「どうかな」
「仕方ねえな。それじゃあな」
「それで何して遊ぶ？」
「本当は遊びたくないけれどな」
とか何とか言いながらいそいそと立ち上がります。
「御前の遊びたいのでいいよ」
「じゃあ女の子のところ行かない？」
「女の子のところ？何処だよ」
「台湾なんてどう？」
そこはどうかというのです。
「あそこ飼い主の人も可愛いしね」
「台湾か。そういえばあまり行ったことないな」
イギリスと台湾のお家同士自体が今一つ交流がありません。それは猫同士も同じでイギリス猫も台湾猫とはあまりお付き合いがありません。
「何か馴染がないしな」
「じゃあ行かない？」
「いや、行く」

スコティらしくなく無愛想に見えるイギリス猫です。ただ単に素直でないだけでしょうけれど。

第千七百九十六話　　完

２０１０・１２・２６

第千七百九十七話　ペルシャ猫

第千七百九十七話　ペルシャ猫

フランスの猫は。やっぱりこれでした。
「どうだよ、俺の猫」
「ペルシャ猫ですか」
「そうだよ。俺っていったらこれだろ」
日本に得意満面で話しています。見れば白毛でしかもその毛がとても長いです。見るからに高級そうな、そうした猫が二人の前にいます。
フランスはその猫を見せながら日本に自慢を続けます。
「この猫はな、凄いんだぜ」
「どういった感じで凄いのですか？」
「賢くて俺の言うことも聞いてな」
そうした猫だというのです。
「悪いことなんか全然しないんだよ」
「そうなのですか」
「だってよ。いつも寝てるからな」
猫はとてもよく寝る生き物です。
「後は御飯を食べるだけだな」
「動かないのですか」
「ああ。そのせいで最近何かな」
どうかというのです。
「太ってきたんだよ。どうしたものかな」
「何かスコティッシュフォールドみたいですね」
「あの猫も太りやすいんだったな」
何気にイギリス猫と似ています。そんないつも寝てばかりのフランス猫です。

第千七百九十七話　完

2010・12・27

第千七百九十八話　猫同士も仲悪い

第千七百九十八話　猫同士も仲悪い

「だから御前とは一緒にいねえよ」
「こっちだってそうだよ」
イギリス猫とフランス猫が言い争っています。
「大体よ。御前その毛は何だよ」
「その垂れ耳全然似合ってねえよ」
「俺の垂れ耳をけなすかよ」
「俺の毛は猫で一番なんだよ」
こんな調子です。猫同士までが仲の悪い両国です。
そんな二匹を見ながらです。日本猫はぽつりと言います。
「ああいう関係は心当たりがありますね」
「御前の周りだな」
「はい、いつもですから」
こうドイツ猫に答えます。
「台湾猫さんと韓国猫さんが」
「あの連中は何であんなに仲が悪いんだ？」
「わかりません。何故か私を挟んで左右からいつも喧嘩をします」
何かこの辺り飼い主の人達と同じです。
「どうにかならないのでしょうか」
「難しいな。特に韓国猫はな」
「はい、言って聞く方ではありません」
尚日本のかつての上司は言って聞くと確信していました。そうして飼い主も猫も可愛がっていたのです。台湾と台湾猫よりももっとです。
そうお話する日本猫の前で喧嘩を続ける二匹、本当に飼い主達とそっくりです。

第千七百九十八話　完

2010・12・27

第千七百九十九話　猫も眼鏡

「何だよ、御前の猫ってよ」
「んっ、どうかしたのか？」
アメリカがイギリスの言葉に応えています。二人は今アメリカの猫を見ています。白地で首のところがマフラーみたいに黒くなっている猫です。
これだけではなくです。よく見ると。
「猫も眼鏡してるのかよ」
「そうだぞ。僕を真似てなんだぞ」
「猫がそんなのするか？」
イギリスはアメリカ猫を見ながら言います。
「普通はしないだろ」
「そうか？」
「そうだよ。しかしな」
あらためて見るとです。これが。
「まああれだな」
「あれって何だ？」
「似合ってなくもないな」
一応褒めています。
「それは認めてやるさ」
「そうか。似合ってるか」
「そうは言ってねえだろ」
「あはは、君は素直じゃないからな」
「だから違うって言ってんだろ」
「そういうことにしておくよ」
ここでも素直ではないイギリスです。けれどアメリカ猫、確かに眼鏡が似合っています。

第千七百九十九話　完

2010・12・29

第千八百話　猫も太ります

第千八百話　猫も太ります

アメリカ猫はとにかく食べます。しかもカロリーの高いものばかりです。

「あのアメリカさん」

「ああ、日本か」

日本猫がです。そのアメリカ猫に対して言うのでした。

「あまりにも食べ過ぎでは？」

「そうかい？僕は別に」

「猫がハンバーガーにケーキですか」

「アメリカじゃ普通だぞ」

こう言ってそういったものを食べていきます。

「特に何もないぞ」

「そうなのですか」

「そうだよ。君もどうだい？美味しいよ」

「いえ、私は」

青いケーキです。それを見て丁重にお断りする日本でした。

「ツナ缶を食べてきましたので」

「君それ好きだな」

こんな話をしています。しかしです。

アメリカ猫はとにかく食べて行きます。その結果。

「ううん、困ったなあ」

「どうされました？」

「最近太ったんだよな」

猫もそうなってしまうのです。やっぱりカロリーの高いものを食べ過ぎてはです。太ってしまいます。人間も猫もその辺りは一緒なのです。

第千八百話　完

2010・12・29

第千八百一話　後ろ毛が長い

第千八百一話　後ろ毛が長い

「うちでは昔から猫を飼ってるあるからな」
「そうなのよね」
中国の自慢に香港が頷いています。
「先生猫好きだから」
「可愛いものは大好きある」
「けれどこの猫は」
見ればです。その猫は。
黒猫です。顔が何処となく中国に似ています。何かすました感じもします。
「先生に似てる」
「それで可愛くないというあるか」
「そう」
はっきり言います。香港容赦がありません。
「先生にそっくりだと何か不気味」
「御前はもう少し口の聞き方を勉強するある」
「わかった。それはそうと」
「今度は何あるか？」
「この猫後ろ毛長い」
見ればそうです。この辺りも飼い主にそっくりです。
「飼い主に似過ぎてる」
「この後ろ毛は昔からあるぞ」
「じゃあこの猫一体幾つなの？」
この猫も何歳かわからなかったりします。とりあえず尻尾は二本になっていません。一応化け猫にまでなってはいないようです。

第千八百一話　完

2010・12・30

第千八百二話　商売にいい

第千八百二話　商売にいい

「そもそも君はどうして黒猫なんだい？」
「僕のこの毛あるか」
「そうだよ。黒猫ということで嫌われなかったかい？」
アメリカ猫が中国猫に尋ねています。
「うちの家じゃ飼い主がそうした本を読んで怖がっていたけれど」
「ああ、あの小説あるな」
ポーという人が書いた小説にそんなお話があるのです。それはそれは怖いお話です。
「日本にも確かそんな話があったぞ」
「知っているある。けれど同時にある」
「同時にって？」
「僕のこの毛の色は商売にいいとも言われているある」
中国は言わずと知れた商売の人です。その才能は学園随一とも言われています。
「だから飼い主には好かれているある」
「そうなんだ。商売にいいんだ」
「その通りある。こんな言葉もあったりするある」
ここで言う言葉は。
「黒い猫でも白い猫でも」
「色はどうでもいい？」
「鼠を捕るのがいい猫ある」
かつての上司が言った言葉です。
「そういうことある」
だから黒猫でもいいというのです。飼い主の考えが見事なまでに忠実に出ている、それが中国猫なのでした。黒猫もまたいいものです。

第千八百二話　完

2010・12・30

第千八百三話　猫も大きい

第千八百三話　猫も大きい

黒毛でところどころ白くなっている、カラーリングは結構アメリカ猫と正反対の大きな猫です。毛が長いのもまた結構目立ちます。その猫の飼い主は。

「いい猫だよねえ」

「あっ、そうですね」

リトアニアがびくりとする相手といえばロシアです。飼い主はこの人なのです。

「確かに。何か大人しそうですね」

「うん、とても大人しい猫だよ」

目が飼い主そっくりです。確かに一見するとです。

「だから僕大好きなんだ」

「そういえばロシアさんって動物好きですよね」

「犬も猫も好きだよ」

こうした素朴なところも確かにあるのです。

「だからこの猫だってね」

「そうなんですか」

「うん。リトアニアもどうかな」

こうリトアニアに言ってきました。

「猫、飼ってみないかな」

「そうですね。ちょっと考えてみます」

「猫はこの種類が一番いいと思うし」

見れば結構以上に大きいです。普通の猫の倍はあります。

「だから。どうかなあ」

今日は穏やかなロシアです。こうしていつも穏やかなら周りの国々も平和なのですが。けれど大人しいとそれはそれで抑止力にならないから困ったものです。

第千八百三話　完

2010・12・31

第千八百四話　怖がられる

「げげっ、ロシアだよ」
「ど、どうしよう兄ちゃん」
ロマーノ猫とイタリア猫がロシア猫が前から来るのも見て思いきり震えています。
「何か凄く怖いよ」
「俺達あいつに何かしたか？」
「そんなこと全然してないよ」
イタリア猫は涙目でロマーノ猫に答えます。
「されたこともないけれど」
「それで何であんなに怖いんだ？」
ただいるだけで怖い、それがロシア猫です。
「くそっ、フランスとは仲いいみたいだけれどな」
「うう、どうしよう本当に」
「あっ、君達どうしたの？」
ロシア猫はとてもフレンドリーにその二匹に声をかけます。
「何処か遊びに行くの？僕も一緒に行っていい？」
「あ、ああ。そうだな」
「じゃあ一緒に」
「それじゃあ日本君のところに行こう」
猫同士でも両者の関係は最悪です。とにかく日本猫はロシア猫を警戒しています。アメリカ猫や中国猫もそうですが。ロシア猫もまたお付き合いに問題があるようです。
「この前から色々あったんでお話しに行きたいんだ」
「絶対にお話しに行かないよ、だから怖いんだよ」
イタリア猫は泣きながら言います。こんな怖いところが多分にあるロシア猫です。

第千八百四話　完

2010・12・31

第千八百五話　連合にいました

「俺も猫飼ってる」
「そういえば何匹飼っておられました？」
「数は知らない」
ギリシアはこう日本にお話しています。ギリシアには猫がこれでもかといるのです。それは殆ど埼玉の白猫屋敷みたいな感じです。
そうしてギリシアはです。その中の一匹。黒い毛がふさふさとしていて顔や背中の一部、それに前足のところが白い猫を持ってです。日本に見せます。
「その中でこいつが」
「ギリシアさんに似ていますね」
「そう。猫達のリーダー」
ギリシアのお家の猫達のだといいます。
「俺に一番懐いてる」
「成程、そうなのですか」
「俺の好きな人にも懐く」
顔は何処かぼうっとした感じですがそうみたいです。のんびりとしたオーラを醸し出しているところは飼い主にそっくりだと言えます。
「だから日本にも懐く」
「そうですか。それでは私も」
「うん。ほら」
ギリシアから手渡させてです。猫を持ってみます。するとです。
実際に日本の手の中で落ち着いています。日本はそれを見て言いました。
「いい猫ですね」
「うん。俺もそう思う」

こんなギリシア猫です。静かな優しい猫です。

第千八百五話　　完

２０１１・１・１

第千八百六話　のんびり日向ぼっこ

第千八百六話　　のんびり日向ぼっこ

ギリシア猫はおっとりしています。やっぱり飼い主そっくりです。

それでイタリア猫が傍に来てもです。こんな感じです。

「遊ぶなら日向ぼっこしていよう」

「えっ、それだけ！？」

「静かにしているのが一番いい」

「どっかお散歩しようよ。それがいいよ」

動くことが好きなイタリア猫は困った顔になってギリシア猫に言います。

「だからさ。どっか」

「俺ここにいるから。イタリアは適当にしていたらいい」

「うう、何かギリシアって違うなあ」

「確かに違うけれど俺イタリア嫌いじゃない」

それは言うのでした。

「イタリアが俺のこと嫌いじゃないから」

「そうだよ。俺ギリシアも好きだよ」

イタリア猫もこう言います。ずっと寝転がって動こうとしないギリシア猫にです。

「だって。凄く古い歴史があって怒らないしさ」

「御前は女の子とパスタが好きなだけだから別に怒るところない」

「それでなんだね。じゃあさ、俺今さ」

「遊びに行くのか」

「ううん、ギリシアと一緒にいるよ」

こう言ってです。ギリシア猫の横に寝転がってです。

後は二匹で日向ぼっこなのでした。イタリア猫もシェスタが好きなので丁度よかったのです。二匹で過ごすのどかな昼下がりでした。

第千八百六話　完

2011・1・1

第千八百七話　猫も顔を

第千八百七話　猫も顔を

「どうでい、俺の猫は」
「顔が見えないのですが」
日本に自分の猫を誇らしげに見せるトルコ、日本はまずこう返しました。茶色い毛の猫ですがその顔には紙袋の覆いを被っています。
目のところだけ穴があります。そんな猫ですが。
「どういった猫ですか？一体」
「俺に似てイケメンでねい」
けれどトルコはこう言うのです。
「凄くいい猫でい。わかるだろ」
「ですからお顔が」
「わからないっていうんでい？」
「少し」
謙遜しています。それでもです。
トルコ猫はここで日本の足元に来てです。すりすりしてきます。
トルコはそんな自分の猫を見てです。笑顔でこう話すのでした。
「どうやら日本が好きなようだねい」
「それは何よりですが」
日本はその覆いをまだ見ています。
「しかし。どうしてお顔に」
「俺に似て恥ずかしがり屋でねい。そうしてるのさ」
そうだというのです。
確かに顔は見せませんがそれでもです。トルコ猫は日本が好きなようです。その辺りは飼い主と同じです。やっぱりトルコは日本が好きなのです。

第千八百七話　完

2010・1・2

第千八百八話　ギリシア猫とは

第千八百八話　ギリシア猫とは

トルコ猫もです。ギリシア猫とは。
「御前の隣なんかいたくないんでい」
「俺も」
お互いに距離を置いて言い合っています。
「だから何で隣にいるんでい」
「それはこちらが言いたい」
「ったくよお、いつも隣同士になるってのはよお」
「凄く迷惑」
「だから御前等どうしてそこまで仲が悪い？」
ドイツ猫がそんな二匹に対して述べます。
「少しは仲良くしたらどうだ」
「だからそれはできねえ相談でい」
「俺、こいつとだけは駄目」
「飼い主同士はわかるが」
因縁があり過ぎだからです。ギリシアはオリンピックの開会式においてもトルコのお家にいたことは全然触れなかったのです。その辺り徹底しています。
そして猫同士もです。凄く仲が悪いのです。
「それでも。少しはだな」
「へっ、日本に言われてもな」
「それだけは無理」
「日本を間に挟んで喧嘩もしていたな、そういえば」
この辺りも飼い主と同じでした。とにかく非常に仲の悪いトルコ猫とギリシア猫です。その仲の悪さはドイツ猫も日本猫もどうしようもないものなのです。

第千八百八話　完

2011・1・2

第千八百九話　闘牛士ではありません

第千八百九話　闘牛士ではありません

「どないや、俺の猫」
「うわあ、この猫も可愛いね」
「まあそうだな」
スペインが自分のお家の猫をイタリアとロマーノに見せています。ロマーノ以外はにこにことしてその猫を見てお話をしています。
見れば白地で上のところが灰色になっています。そしてそのお顔は。
「やっぱり兄ちゃんに似るんだね」
「そやな。猫って飼い主に似るんか？」
「そうみたいだよ。何処の猫も同じだし」
「フランスとかオーストリアもそうやしな」
「だからほら」
イタリアはそのスペイン猫を見ながら話します。
「この猫お昼だから」
「ああ、シェスタやな」
「それしようとしてるじゃない」
その顔が段々とうとうととなってきてです。そうしてそのうえでなのでした。
眠りだしています。それを見てです。
「おい、スペイン」
「何や、ロマーノ」
「俺も眠くなってきたぞ」
「そやな、ほな俺達もやな」
三人もシェスタの時間になったのでした。スペイン猫ものんびりとした性格です。情熱の国の猫ですがお昼はシェスタを欠かしません。

第千八百九話　完

2011・1・3

第千八百十話　オーストリア猫とは

第千八百十話　オーストリア猫とは

「御前と俺の飼い主結婚しとったんやな」
「私達もそうでしたが」
オーストリア猫がスペイン猫に応えています。
「それは忘れたのですか？」
「そういえばそやったかな」
「そうです。長い間一緒だったではないですか」
「何かお家の上司の関係で別れたんやったな」
「はい、そうです」
この辺りは結構複雑な事情があったりします。スペインはあまり上司には恵まれてこなかった人なのです。それもかなり酷い上司が多かったのです。
そのことが二匹にも影響して、なのでした。今の二人は。
「別々になったんやったな」
「その通りです」
「何かあの頃が懐かしいわ」
ここでこう言うスペイン猫でした。
「また一緒にはなれんけれどな」
「ですが友達ではいられますよ」
「そやな。そやったらそれでええか」
スペイン猫はオーストリア猫の言葉ににこりとなって言います。
「ほな。お昼やし」
「シェスタなのですね」
「一緒にどや？シェスタ」
「はい、それでは」
二匹は何処までも平和です。かつて一緒にいた時のことを思い出しながら。仲良くシェスタに入りました。

第千八百十話　完

2011・1・3

第千八百十一話　何か偉そう

「何か悪いのかしら」
「何も悪いと言っていませんが」
非常に微妙なやり取りをするモナコと日本、まだ鮪のことが影響しているようです。
そのモナコの前にはです。白い長い毛の猫がいます。
「私の猫、気に入ってくれてるかしら」
「何と言いましょうか」
言葉を濁す日本でした。
「私には合わない感じですね」
「そう言うのですね」
「はい」
見れば小さな眼鏡をして大きくつぶらな瞳をした猫です。リボンまであります。
「どうも」
「わかりました。私もです」
「貴女もですか」
「特に貴方に気に入ってもらわなくてもいいです」
「そうですか。それは何よりです」
実に剣呑なやり取りです。
「私の家の猫はここには近寄らせませんので」
「私もそうしますので」
「はい、それでは」
「そういうことで」
非常に剣呑なやり取りが続くのでした。日本とモナコは猫を通じても仲が悪くなっています。時間が経てば修復するものなのでしょうか。もっとも今の日本の上司の人達では何をやっても駄目でしょ

うが。

第千八百十一話　完

2011・1・4

第千八百十二話　やっぱり食べない

「あれっ、食べないの？」
「ええ、それは」
モナコ猫がイタリア猫のお勧めを断っています。
「そのお魚は駄目なのです」
「ツナ、とても美味しいのに」
「鮪は何があっても食べません」
こう言ってです。イタリア猫が勧めるツナ缶を食べようとしないのです。
「それよりもです」
「それよりも？」
「他の食べ物があるではありませんか」
何かフランスの上司の奥さんが言ったとか言わなかったとかの言葉になっています。実際は言わなかったというのが真相なのですが。
「ですからそれはです」
「そうなんだ。じゃあ俺だけで食べるね」
「本当は貴方が食べるのもよくありませんが」
「別にいいじゃない。そんなことばかり言ってるとさ」
イタリア猫は呑気な顔ですが言うことは言いました。
「また日本が怒っちゃうよ」
「構いません、その時はその時です」
「本当にどうなっても知らないよ」
「それでもツナは駄目です」
あくまでこう言うモナコ猫でした。彼女は何があってもツナ、鮪の類は食べないのでした。このことは見事なまでに徹底したものでした。

第千八百十二話　完

2011・1・4

第千八百十三話　偉そう

「どうだっぺ、この猫」
「これあんこの猫？」
「そうだっぺ。強くて賢そうだっぺ」
「そは思わね」
ノルウェーはデンマークに対して本当に素直に答えます。デンマークも何故かこの人が何を言っても全く怒りません。それどころか笑っています。
「そうだっぺ？いいと思うっぺよ」
「それ多分主観だから」
大きくて毛がかなり長い白と茶色の猫です。その顔はデンマークそっくりです。ノルウェーはそのデンマーク猫の顔を見て言うのでした。
「あんこそっくり」
「そうだっぺ？だから強くて賢そうだっぺ」
「おらそは思わねから」
本当に静かにきついことを言うノルウェーです。
「といかあんこ猫飼ってたか」
「最近誰でも飼ってるっぺよ」
「まあおらもそだけど」
何気に自分もだというノルウェーです。
「けどあんこもとは思わなかった」
「俺もノルウェーも猫を飼ってるとは思わなかったっぺよ」
「ドイツも飼ってる」
「あいつ犬だけじゃなかったっぺか」
二人の話をよそに非常に偉そうなデンマーク猫です。何か飼い主よりもそう見えます。

第千八百十三話　完

2011・1・5

第千八百十四話　チーズは

第千八百十四話　チーズは

デンマークといえば酪農です。それでデンマーク猫もです。

「やっぱりこれだっぺよ」

「チーズささみですか」

「そうだっぺよ。日本も食べるっぺか？」

「私はツナがありますので」

日本猫がこうデンマーク猫に返しています。日本は猫もお付き合いが広いです。その中にお隣の非常に騒がしい猫までいますが。

「ですから」

「美味いっぺよ。食べないっぺか？」

「いえ、満腹ですから」

こう言ってお断りする日本猫でした。そのうえでこうデンマーク猫に尋ねます。

「それでデンマークさん」

「ああ、何だっぺ？」

「デンマークさんはチーズの他にお好きなものはありますか？」

日本猫が尋ねるのはこのことでした。何しろデンマーク猫はいつもチーズを食べているからです。

「他には」

「ミルクが好きだっぺ」

それも好きだというのでした。

「あとはバターだっぺな」

「乳製品がお好きなのですね」

「飼い主もそうだからだっぺ。飼い主もいつも食べているっぺよ」

それで好きだというのです。そういえば日本猫も飼い主がお魚をいつも食べているので彼もお魚が好きです。好みは影響するものです。

第千八百十四話　完

2011・1・5

第千八百十五話　ぼんやりしてそう

第千八百十五話　ぼんやりしてそう

「御前に似てるっぺな」
「そか」
「そうだっぺ。そっくりだっぺ」
毛がかなり多くて長い白猫がいます。身体は大きいです。
顔立ちは目がかなり眠そうです。その猫を見てデンマークとノルウェーが話しているのです。
「やっぱり御前の飼い猫だっぺな」
「そだ。あんこを見て飼った」
「おお、俺みたいにだっぺか」
「あんこが飼えるなら僕も飼えると思った」
何気に生徒会長に匹敵する物凄い言葉を言っています。もっともデンマークはノルウェーには何を言われてもノープロブレムなのですが。
「そんで飼った」
「そうだっぺか。俺みたいに猫好きになるっぺな」
「というかあんこ猫好きだった？」
「動物は何でも大好きっぺよ」
この辺り如何にもデンマークらしいです。
「そうだっぺか。俺みたいになりたいっぺか」
「いんや、なりたくない」
本当に口があれなノルウェーです。
「違う意味で飼った」
「そうだっぺか。まあとにかく仲良くやるっぺよ」
ある意味凄いデンマークです。ノルウェーには何を言われても励ましに思うのです。ただノルウェーは他人が彼の悪口を言うと怒っ

たりします。訳がわかりません。

第千八百十五話　　完

2011・1・6

第千八百十六話　見える

「見えるっぺか」
「見える」
ノルウェー猫がデンマーク猫に答えています。猫同士であっても
この二人の関係は同じです。何だかんだでいつも一緒にいます。
「羽根の生えた妖精が見える」
「何人見えるっぺ？」
「五人」
それだけいるというのです。
「楽しそうにお空飛んでるだ」
「俺が見えるのは一人だけっぺよ」
猫はおおむねそうしたものが見えます。けれどなのです。
ノルウェー猫は他の猫達よりそうしたものが沢山見えるのです。
この辺り飼い主に似ています。
「何かそういうところイギリスに似てるっぺな」
「あいつのそうしたところわかるだ」
同じだからです。
「けれど見えて困ることない」
「そうだっぺか。俺も見たいっぺよ」
「あんこは多分無理」
「どうしてだっぺ、それは」
「あんこだから」
「そうか、俺だからっぺか」
これで納得するデンマーク猫でした。こんなところまで飼い主同
士の関係にそっくりです。これでうまくいっているのがこの二匹で
す。

第千八百十六話　完

2011・1・6

第千八百十七話　目が怖い

第千八百十七話　目が怖い

スウェーデンの猫は。フィンランドが最初に見て言いました。
「そっくりですね」
「そか」
「はい、スーさんに」
いささか引きながらの言葉です。見ればです。
黒猫です。それも目が鋭い。何か猫に見えません。
強烈なプレッシャーさえ漂わせています。あの連邦の白い流星以上の。
「この猫ってあの」
「生まれた時から俺の家にいる」
そうらしいです。
「そんでこうなった」
「そうなんですか」
「何か俺に似てる」
自分でも自覚があるのでした。
「だから好きだ」
「そうですね。何か外見はスーさんそっくりですけれど」
フィンランド言葉を選んでいます。
「中身もですね」
「そか」
「はい、優しい猫ですね」
意外と飼い主の傍から離れません。それを見てです。
スウェーデンの猫は他の人達のそれよりも飼い主に似ているようです。それがいいのか悪いのか。それは本人達が一番よくわかっていることです。

第千八百十七話　完

2011・1・7

第千八百十八話　怖いけれど

第千八百十八話　怖いけれど

「な、何か違うよね」
「ああ、違うぞこの野郎」
またイタリア猫とロマーノ猫が震えています。
「ロシアと同じで」
「いや、あいつとはまた違うプレッシャーだぞ」
スウェーデン猫を見てです。二匹で言い合っています。
「うちの近くでなくてよかったね」
「あ、ああ。全くだ」
「おめ等何話してるだ」
その二匹にスウェーデン猫が声をかけました。
「よかったら」
「な、何かな」
「喧嘩ならお断りだぞこの野郎」
「付き合え」
一言でした。
「うちに来」
「うちにって」
「スウェーデンにかよ」
「そだ」
口数が少ないです。この辺りも飼い主に実によく似ています。
「オイルサーディンある。一緒に食うだ」
「じゃ、じゃあお誘いなら」
「乗ってるやるぞ」
無愛想でプレッシャーを漂わせています。けれどそれでも親切な。
そんなスウェーデン猫です。怖いのは外見だけなのがロシア猫と違います。

第千八百十八話　完

2011・1・7

第千八百十九話　名前が心配

「それおめの猫か」
「はい、そうです」
フィンランドは明るい笑顔でスウェーデンに答えます。灰色が九で白が一の、二色の猫です。顔立ちがかなり可愛いのが印象的です。
その猫を抱きながら。フィンランドはさらに言います。
「この子、僕の家に最初からいまして」
「そだったか」
「スーさん知りませんでした？」
「おめと一緒にいた時はいなかったから」
その時はフィンランドはまだ猫を飼っていなかったのです。スウェーデンと一緒にいるプレッシャーで動物を飼うところまで精神的余裕がなかったのです。
「知らなかった」
「まあ僕も自分のお家できてからですし」
「そんでそいつの名前は」
ここでスウェーデンは真剣な目になります。
「おめが名付けたか」
「はい、それはですね」
「いや、いい」
聞こうとしません。
「それはいい」
「あれっ、いい名前なんですよ」
だからいいとまでは言わないスウェーデンでした。とにかくフィンランドの名前はです。他の人が聞くと妙なものであります。猫もです。

第千八百十九話　　完

2011・1・8

第千八百二十話　やっぱり粘り強い

第千八百二十話　やっぱり粘り強い

「中々獲れませんね」
「そうですね」
日本猫とフィンランド猫が一緒にお魚を獲ろうとしています。けれど水面のところに肝心のお魚が中々来ないのでした。待ってもです。
日本猫はここで。こうフィンランド猫に言いました。
「もう諦めますか」
「別のところに行きますか？」
「はい、そうしませんか」
こうフィンランド猫に提案するのです。
「ここは」
「もう少し待ちませんか？」
けれどフィンランド猫はこう日本猫に返します。
「もう少しだけ」
「様子を見ますか」
「お魚はいますし」
水面の下にはです。かなりいます。お魚がいるのは間違いありません。
「ですからここは」
「もう少しですか」
「はい、待ちましょう」
これがフィンランドの考えです。
「そうしませんか？」
「わかりました。それでは」
日本猫も彼に合わせます。猫もかなり粘り強い、フィンランドはそうしたお国なのでした。

第千八百二十話　完

2011・1・8

第千八百二十一話　右目だけ

「これ、僕の猫」
「御前の猫か」
「そう」
アイスランドがノルウェーにお話しています。白い小さな猫を見せてです。
ただその猫は。右目のとことだけ丸く茶色になっています。それで篭の中にいます。
「これが」
「何か似てるな」
「僕に？」
「ああ、御前に似てる」
こう弟に話します。
「けど僕のところの猫には似てないだ」
「それでも猫も兄弟」
アイスランドが言います。
「それは血統書にもあるから」
「そか。兄弟か」
「全然似てないけれどそう」
「わかった。じゃあ認知しておく」
「認知しなくても血統書にあるから」
弟から言います。そのもの静かな口調で。
「だからいい」
「そか」
こうその猫を見ながらお話をするのでした。アイスランドの猫もまた飼い主にそっくりです。けれどノルウェー猫には全く似ていません。

第千八百二十一話　完

2011・1・9

第千八百二十二話　本当に兄弟なのか

「御前等見る度に思うっぺ」
「何だ？」
「どうしたの？」
ノルウェー猫とアイスランド猫が同時にデンマーク猫に応えます。
「何かあるだ？」
「僕達に」
「兄弟には見えないっぺよ」
彼もまた言うのでした。
「ちょっと以上に」
「けど兄弟」
「それは間違いないから」
「けれど見えないっぺよ」
また言うデンマーク猫でした。
「もっとも俺達皆血縁みたいなもんだっぺか」
「それは信じないから」
「僕も」
二匹は同時にデンマーク猫に対して述べます。
「はっきり言ってあんことは似てない」
「何一つとして」
「そういうこと聞いたらっぺよ」
デンマークはここで二匹が兄弟だとわかったのでした。
外見でわからなくても他のところでわかったりするものです。デンマーク猫は今それをこの二匹からはっきりと学んだのでした。有り難いかどうかはわかりませんが。

第千八百二十二話　完

2011・1・9

第千八百二十三話　日本に自慢

「台湾さんの猫は」
「どうですか？可愛いですよね」
「はい、そう思います」
日本は台湾に白くてふわふわした毛の可愛い猫を見せてもらっています。彼はその猫を見てこう台湾に言葉を返すのでした。
「小さいですし」
「そういう種類なんですよ」
台湾はにこにことして日本にお話します。
「私もこの猫好きなんです」
「それで飼われたんですね」
「いい娘ですし」
雌猫の様です。見れば確かにそんな感じです。
「大人しいんですよ」
「そうした感じですね。ただ」
「ただ？」
「いえ、本当に小さいですから」
クッションの真ん中にちょこんといます。それを見れば確かに小さいです。
「私のところの猫よりも小さいですね」
「抱っこしてみますか？よかったら」
「いいですか、そうして」
「はい、どうぞ」
何気に日本との仲も親密にさせていっています。台湾にとっては本当にいい猫です。飼い主を助けてくれるのですから。そんな台湾の飼い猫です。

第千八百二十三話　完

2011・1・10

第千八百二十四話　抜け駆け狙い

「あの、日本さん」
「はい、何でしょうか」
日本猫は自分の傍に来た台湾猫に応えます。
「何かあったのですか？」
「いえ、ちょっと一緒にいたいって思いまして」
台湾猫はこう日本猫に答えます。
「それで」
「そうだったのですか」
「はい、それでなんですけれど」
日本猫の傍にそっと近寄ってから言います。
「いいですか？一緒にいて」
「ええ、私は構いませんが」
そうしたことであれこれ言う日本猫ではありません。台湾猫もそれがわかっていて日本猫のところに来ています。実は狙っています。
「では今から」
「一緒にお昼寝しましょう」
「いいお天気ですしね」
「じゃあ」
こうして二匹で仲良くお昼寝をします。けれど。
ハンガリー猫はそんな台湾猫を見てこっそりとオーストリア猫にお話します。
「あの娘絶対に日本さん好きですよ」
わかる人にはすぐにわかることなのでした。台湾猫にはライバルがいます。そのライバルとは誰なのか。身近にいる相手だったりします。

第千八百二十四話　完

2011・1・10

第千八百二十五話　やたら偉そう

第千八百二十五話　やたら偉そう

韓国が今日もまた日本のところに来ています。そのうえで何かを見せています。

やたら威張っている猫です。白地で頭や所々が黒くなっているその猫を見てです。日本は思わず言いました。

「韓国さんの猫ですか？」

「そうなんだぜ。わかったんだぜ？」

「そっくりですから」

そのぞんざいな仕草から一発でわかったのです。

見ればクッションの上でふんぞり返って座っています。ここまで偉そうな猫もそういません。日本はその猫を見ながら韓国に尋ねます。

「どうして飼っておられるのですか？」

「猫の起源は俺だからなんだぜ」

ここでまた起源でした。

「俺は動物も好きなんだぜ」

「それでなのですか」

「そうなんだぜ。それでどう思うんだぜ？」

日本に誇らしげに尋ねてきます。

「この猫。最高なんだぜ？」

「何といいますか」

日本は一呼吸置いてから答えます。

「韓国さんにあまりにもそっくりで」

「じゃあ最高なんだぜ」

「そう思っていて下さっていいです」

これ以上は言わない日本でした。とにかく猫まで凄くぞんざいな態度の韓国なのでした。見ればそのアホ毛までが一緒であります。

第千八百二十五話　完

2011・1・11

第千八百二十六話　仲悪過ぎ

台湾猫と韓国猫が喧嘩をしています。
「だからあんた何でいつもいつも」
「起源は俺にあるからいいんだぜ」
何か何処かで見たやり取りです。台湾猫はムキになって韓国猫に言っています。韓国猫も全く引くところがありません。そうしてお互いに言い合っています。
そんな二匹を見てです。日本猫が尋ねます。
「あの、どうされたのですか？今回は」
「どうしたもこうしたもないんですよ」
「こいつが悪いんだぜ」
二匹はそれぞれ日本猫に言います。
「また韓国が起源の主張をしてるんですよ」
「だから秋刀魚の起源は俺なんだぜ」
「秋刀魚に起源があったのですか」
日本猫はこのことに少し首を傾げさせました。
「それは初耳ですが」
「こいつ変なことばかり言いますよね」
「だから俺は何でも起源なんだぜ」
「はあ。そうなのですか」
日本猫も多くは言えません。いつものことですから。
「それはそうと韓国さん」
「何なんだぜ？」
「よく召し上がられますね」
見れば韓国猫は秋刀魚を何尾も食べています。日本猫はそのことの方が気になるのでした。喧嘩をしていても食べる韓国猫なのでした。

第千八百二十六話　完

2011・1・11

第千八百二十七話　イギリスの山　☆

☆

イギリスが日本とお友達になって彼の国に来た時です。
山を見てです。イギリスは少し驚いて言いました。
「おーー、あれがマウンド富士なんだな」
「あの山ですか」
「でっかいなあ、やっぱり」
「いえ、あれは只の山です」
日本はこうイギリスにお話します。
「名前は。確か」
「あれっ、富士山じゃないのかよ」
「富士山は静岡の方ですよ」
二人がいるのは他の場所なのです。ですからイギリスが今見ている山は間違っても富士山ではありません。これは間違いないです。
「今からそちらに行かれますか？」
「ああ、悪いな」
「そういえばイギリスさんのところには」
「山そんなにないんだよ」
日本程はです。
「日本って本当に山が多いんだな」
「島でしかも山が多いです」
「移動大変そうだな」
「はい、実は」
昔はそれで結構苦労してきた日本です。島国なのに山が異常に多い、富士山だけではないのが日本です。その分緑も多いですが。

第千八百二十七話　完

2011・1・12

第千八百二十八話　山には

第千八百二十八話　山には

日本は山が多いです。トルコも日本に来てびっくりでした。
「こんなに山が多いんでえ!?」
「そうですが」
「こんなところで生きていたってのかい」
日本に対して驚いた顔でお話します。
「おめえも大変だったんだな」
「移動に困ったことはありましたが」
「移動だけじゃねえだろ」
何処までも連なる山々を見ての言葉です。
「ここまで山ばっかりだったらよお」
「トルコさんのところにも山は」
「あるにはあるがここまでねえよ」
日本みたいに高い山々がこれでもかという訳ではないのです。
「国全体がカフカスってのかい」
「流石にあそこまではいかないと思いますが」
カフカスは昔はトルコの領土でした。今はロシアやソ連にいた人達の領土になっています。何かとややこしい場所として知られています。
「ですが山にもですね」
「何かあるんでい?」
「色々と食べ物もあります。茸や猪が」
「へえ、じゃあ山も迷惑なだけじゃないんだな」
「はい、そうです」
こうトルコにお話してです。彼にその牡丹鍋と茸の炒めものを御馳走する日本でした。味はトルコも満足するものでした。

第千八百二十八話　完

2011・1・12

第千八百二十九話　天狗の腰掛　☆

イギリスは日本と山々を巡り続けています。その時に日本に尋ねました。

「なあ、日本。あの変な奴気になるんだけれどな」

「ああ、あれですな」

山の上の方にです。平たい場所があったのです。日本はそこを見て答えます。

「あれは天狗の腰掛ですよ」

「天狗？何だそりゃ」

「昔天狗という妖怪が出て人々を困らせたそうですよ」

「悪い奴なのかよ」

「一概には言えないですね」

悪いかというとそうでもないというのです。

「山神でもあるので一概には天狗が悪とは言えないのです」

「そうか、あいつ天狗っていうのか」

ここでイギリスの言葉が少しおかしくなります。

「成程な」

「？イギリスさん一体」

「ああ、手を振ってら」

イギリスもそれに応えるようにして手を振り返します。

「いい奴みたいだな、結構」

「一体何をしているのですか？」

「挨拶を返してるんだよ」

こう日本に答えます。

イギリスはそうした存在が見えます。それで手を振り返しているのです。けれど殆どの人には見えないので。それでおかしく見えるのです。

第千八百二十九話　完

2011・1・13

第千八百三十話　天狗とは

第千八百三十話　天狗とは

「面白い存在ですね、それは」
「そう思われますか」
「はい、とても」
タイは温厚な顔で日本の説明を聞いています。そのうえで言うのでした。
「そうした存在もまた日本にはいるんですね」
「いえ、架空の存在ですが」
日本は実在については否定しました。
「妖怪は」
「そうですか。しかし山の神でもあるのなら」
それならばというのです。タイは考察しながら話していきます。
「一概に妖怪とは言えませんね」
「悪いこともしますがそれは自然としての話ですから」
「そこですね。自然でもあるんですね」
「天狗は自然をあらわした妖怪です」
つまり山の、というのです。
「ですから。中々一口では言えないのです」
「深いですね、そこが」
「はい、妖怪自体がそうです」
「何か妖怪は」
タイは日本とお話をして。この結論に辿り着きました。
「あれですね。イギリスさんのところで言う妖精ですね」
それだというのです。日本の感覚では少し違うとも思えるのですが。それでも他の国から見ればそうとも思えるのです。それが日本の妖怪なのでしょう。

第千八百三十話　完

2011・1・13

第千八百三十一話　今度は子供　☆

第千八百三十一話　今度は子供　☆

「なあ日本」
「はい、何でしょうか」
「さっきからガキが五月蝿いんだけれどな」
「そうですか、すいません」
一応こう返す日本でした。しかしここでこうイギリスに言うのでした。
「ただ。私この家に」
「んっ、何だ？」
「一人暮らしなのですが」
「ああ、そういえばそうか」
日本には日本のお家があるのです。能登や大阪とはまた違うお家に住んでいるのです。それで一人暮らしということになっています。
「何かいつも周りに誰かいるから忘れてたよ」
「はい、そうです」
「じゃああの子供は誰だったんだ？」
イギリスはいぶかしみながら述べます。
「一体な」
（きっと長旅で疲れているのですね）
日本はここでこう考えました。
（それで幻覚を見ておられるのなら）
「イギリスさん、先にお風呂どうですか？」
イギリスに疲れを取ってもらおうとの配慮です。
日本はイギリスに先にお風呂に入るように勧めました。しかしこれがまたイギリスがあらたなことを知るきっかけなのでした。日本の気付いていないところで。

第千八百三十一話　完

2011・1・14

第千八百三十二話　あの部屋に

第千八百三十二話　あの部屋に

「このお部屋で寝るとですね」
「はい、その子が出ると言われています」
日本は今日はベトナムを出迎えています。本当に日本のお家にはいつも誰かが来ます。
「本当かどうかわかりませんが」
「座敷童ですか」
「ですが見える人は少ないです」
日本はここでこうお話します。
「残念ですが」
「どうしてなんですか？それは」
「子供にしか見えないのです」
そうだというのです。
「その座敷童という妖怪は」
「子供にしかですか」
「学校に出たというお話もあります」
つまり比較的新しい時代のことです。
「その時も小さな子供にしか見えなかったそうです」
「不思議な話ですね」
ベトナムもそれを聞いて思うのでした。子供にしか見えない妖怪、それを聞くと彼女もこう思うのでした。
「妖精みたいですね、何か」
「それは言われますね、確かに」
「それじゃあ今夜はこのお部屋で」
ベトナムは実際にそのお部屋で一日を過ごすことにしました。けれど彼女にもその座敷童は見えなかったようです。大人だからでしょうか。

第千八百三十二話　完

2011・1・14

第千八百三十三話　河童　☆

イギリスは日本の様子におかしなものを感じながらお風呂に向かいます。日本のお風呂は何と温泉です。一人暮らしでもその生活は充実しているようです。

その日本の温泉に向かいながら。イギリスは思うのでした。

「何かさっきから日本の態度がおかしいな」

こう思うのでした。

「俺なんか変なことしたのかな、それともこれが文化の違いってやつか？」

こんなことを考えているとでした。お風呂場には。

いました。嘴があって頭がお皿になっている緑色の方が。一緒に玉葱頭の方までいます。

「あっ、人間の旦那がいらしまいやしたか」

「あれっ、御前等」

「すいやせん、今あがりやす」

「いや、別に一緒でいいんだけれどな」

そんな存在を邪険にするイギリスではありません。穏やかにこう彼等に返します。

「まあ一緒に入ろうな」

「有り難うございやす、旦那」

その方は笑顔でイギリスに応えます。

「旦那、お背中流しやしょうか」

玉葱頭の方も言ってきます。

「よかったら」

「ああ、じゃあ俺もな」

「何かこの旦那あっし等見えるようだし」

「いい方でやんすね」

早速打ち解けるイギリスでした。こうして楽しいお風呂に時間になりました。

第千八百三十三話　　完

２０１１・１・１５

第千八百三十四話　河童好きな作家

第千八百三十四話　河童好きな作家

「芥川ばい？」

「はい、芥川龍之介といいまして」

今日はニュージーランドと一緒にいる日本です。そうそういつもいつも韓国と台湾が傍にいるわけではないようです。確かにこの人達はいつも日本の傍に来ますが。

それでニュージーランドにです。日本の作家のお話をするのでした。

「その人はよく自分を河童に例えていました」

「自分を妖怪に例えていたばい」

「はい、そうです」

「おかしな人ばいな、どうも」

「河童はそれだけ親しまれていた存在ですので」

日本ではそうだというのです。

「今でも私達の間では人気がある妖怪の一つですよ」

「それで自分を河童にばい」

「そうなのです」

「ううん、日本さんの文化は奥が深いばい」

ニュージーランドも思わず言うことでした。

「勉強になるばい」

「ただ。芥川さんの後期の小説は読むにあたっては覚悟をされた方がいいです」

「何かあるばい？」

「前期、中期と作風が全く違いますので」

具体的に言えば何かおかしな作風になっているのです。それでなのです。

「できれば前期、中期を中心に読まれた方がいいです」

このことをニュージーランドにもお話するのでした。惜しむらくは芥川の精神の崩壊です。

第千八百三十四話　　完

２０１１・１・１５

第千八百三十五話　日本文化の縮図　☆

第千八百三十五話　日本文化の縮図　☆

一風変わった方々と一緒にお風呂に入ったイギリス、いぶかしむ顔になったうえでこう緑色の方に尋ねます。

「会ったばかりで悪いんだがな」

「はい、何でやんしょ」

「日本文化について教えて欲しいんだ」

こう言うのでした。

「俺にはどうもわかんねえんだ」

「合点でやんすよ」

緑色の方は気さくに返してきました。

「あっし等程日本文化を知り尽くしてる奴あいませんぜ」

「あっ、そうなのか」

「へえ、例えばでやんすね」

早速イギリスにお話するのです。

「旦那みたいな外人さんが想像する寿司っていうのは」

「あれか。俺もあれは好きだけれどな」

「意外にできたのは最近でしてね」

「へえ、それは知らなかったな」

「あっしは金沢のがお勧めでさあ」

玉葱に似た方もイギリスにお話します。

「魚が美味いとそれだけで違うでやんすよ」

「やっぱりそれか」

こんなことを三人でお話するのでした。

とにかくこの方々は日本文化についてよく知っています。細かいところまで古いことまで。イギリスにとっては物凄くためになる人達なのでした。

第千八百三十五話　完

2011・1・16

第千八百三十六話　寿司にも言う

第千八百三十六話

寿司にも言う

インドネシアが日本のお家でお寿司をご馳走になっていますと。そこにいつもの如くいぎなり韓国が出て来てこんなことを言うのでした。

「俺の国が起源の寿司は美味いんだぜ」

しかも勝手にお寿司を食べています。

「やっぱり最高なんだぜ」

「いつも言ってるけれど」

インドネシアはそんな韓国に呆れながら言い返します。

「日本さんのお寿司は元々馴れ寿司の代用で」

「はい、手早く作ったものです」

日本も言います。実はファーストフード系だったりするのです。

「それがこのお寿司ですが」

「慣れ寿司は元々こちらの食べ物だけれど」

大体東南アジアの食べ物だったりするのです。

「間違っても韓国が起源じゃ」

「いやあ、寿司は美味いんだぜ」

聞いちゃいません。

「日本、どんどん持って来るんだぜ」

「あの、私今日は韓国さんお呼びした覚えはないんですが」

「細かいことはいいんだぜ。はまちがいいんだぜ」

こんな調子です。本来のお客さんのインドネシアより偉そうです。

こうして今日も日本のお寿司を食べる韓国でした。しかも起源まで主張して。インドネシアもやれやれといった顔で彼の横にいます。

そして日本は。結局韓国にお寿司をご馳走するのでした。何だかんだでいつも一緒にいる人達です。

第千八百三十六話　完

2011・1・16

第千八百三十七話　驚く日本　☆

イギリスと一風変わった方々はお風呂の中で楽しく談笑を続けています。

「しかしまあ暮らしにくい世の中になったもんでさあ」

「わかる！凄くわかるぞ！」

すっかり打ち解けているイギリスです。

「旦那、酒の方もう一杯いきやす？」

「ああ、悪いな」

お酒まで楽しんで、です。イギリスは心地よく楽しんだのでした。

そうしてお風呂からあがってから。こう日本に対してお話しました。

「今あがった。中々いい風呂だったな」

「随分長く入っておられましたね」

「先にいた連中と話が弾んでな。すげー楽しかったんだ」

「そ、そうですかって！？」

日本はここで気付きました。というか思い出したのです。

「ですから私一人暮らしなんですが！」

「そうか？こんなの貰ったけれどな」

「そ、それは！」

何とそれは。日本が物凄く驚いています。

「河童の妙薬ですが！」

「何だ？そりゃ俺また変なことしたか？」

事情を知らないイギリスはきょとんとしています。

「日本文化ってやっぱり難しいな」

こう思っているだけでした。日本がどうして驚いているのか理解できていません。勿論河童の妙薬が何であるのかもです。知らないのでした。

第千八百三十七話　完

2011・1・17

第千八百三十八話　河童のお薬

第千八百三十八話　河童のお薬

「日本さんのお家の妖怪さん達って面白い人達ばかりですね」
「そうでしょうか」
「はい、とても」
今日は台湾が日本の傍にいます。本当に入れ替わり立ち代りで日本のところには色々な国が来ます。どっかのアナウンサーが夜の十時になったらいつも言うように孤立していません。
「河童さんのお薬ですか」
「そうです、どんな怪我や病気にも効くと言われています」
「そんなお薬があったら凄いですね」
「この前イギリスさんが持っておられたのですが」
ここで日本は首を傾げさせます。
「どうしてでしょうか」
「それってやっぱり河童さんから貰ったんじゃないですか？」
台湾はこう日本にお話します。
「それでなんじゃないんですか？」
「いや、そんな筈がないのですが」
日本は河童が本当にいるとはあまり思っていません。
「河童はあくまで空想上の存在で」
「けれどそう思っていてもいるってことはありますよ」
台湾はにこりと笑って日本にこう言います。
「ですから」
「だからですか」
「私はそう思います」
こう日本に言うのでした。かつては台湾も日本と一緒に住んでいました。だからそう思えるのでしょうか。

第千八百三十八話　完

2011・1・17

第千八百三十九話　夜の訪問　☆

第千八百三十九話

夜の訪問　☆

お布団で寝ているイギリスにです。誰かが声をかけてきました。
それでイギリスが目を覚ますとです。すっと出て来たのは。
「あっしです」
「ああ、御前か」
「先程は色々魯有り難うごぜえやす」
「どうしたんだ、こんな夜更けに」
イギリスは親しげにその方に声をかけます。
「御前河童っていったんだな」
「ええ、実は」
「今日は楽しかったな」
イギリスはその方、河童に対してまた言います。彼にとっては妖怪も要請も同じ存在です。ですから何も怯えるところはないのでした。
「明日も一緒に入ろうな」
「へえ、そうしたいんですが」
ですがここで、です。河童は寂しい笑顔になりました。頭のところにいるあの玉葱頭の妖怪もです。
見れば背中には風呂敷があります。そこに何かを包んでいるようです。
「あっし等今日で山奥に引っ込もうと思って」
「えっ、それはどうしてなんだ？」
「実はですねえ」
河童はこの時の日本についてのお話をはじめました。それはまさ

に光と影でした。日本にもそうしたところがあるのでした。イギリスがこれまで知らなかったような。

第千八百三十九話　　完

２０１１・１・１８

第千八百四十話　この時からの関係

第千八百四十話　この時からの関係

「日本とは一緒にいたくなかったんだぜ」
「そんな風には全然見えなかったわよ」
今日も日本を挟んで言い争う韓国と台湾です。この二人の仲の悪さだけはどうしようもありません。
そうして言い争いをしている中で、です。台湾は言うのでした。
「私日本さんとは明治からいるけれど」
「俺はその明治の頃から日本にいじめられてたんだぜ」
「だから何処がなのよ」
台湾はまた韓国に言い返します。
「日本さんに何かとよくしてもらっていたの間違いでしょ」
「そんなことないんだぜ。それはそれは酷い目に遭っていたんだぜ」
実際はどうかは言うまでもありません。それこそロシアのところにいたバルト三国が何と羨ましい、と言うような状況だったのです。
「御前も同じだったんだぜ」
「あんたと同じく日本さんに親切にしてもらっていたわよ」
「御前嘘はよくないんだぜ」
「あんたこそその記憶回路なおしなさいよ」
本当に仲が悪いです。
「むしろあの時の日本さんの上司の人達に可愛がられてたのあんたじゃない」
「何処がなんだぜ」
「ちゃんと証拠もあるわよ。ちゃんとね」
「あの、お二人共少し静かに御願いしますね」
そんな二人に対してこう言うだけの日本です。日本の取り合いをしているようにしか見えませんがそれでもです。昔からこんな二人

なのでした。

第千八百四十話　完

2011・1・18

第千八百四十一話　寂しいことに　☆

第千八百四十一話　寂しいことに　☆

イギリスはです。河童に対して理由を尋ねたのでした。
「何で引っ込むっていうんだよ」
「まあ今日は最後ってことで温泉に入らせてもらったんでさあ」
河童はイギリスに寂しい笑顔でこのことから話すのでした。
「大好きなこの土地もあっし等には住みにくくなりやしてね」
「何でそうなったんだ？」
イギリスは怪訝な顔になって河童に尋ねました。
「日本と喧嘩でもしたのか？」
「いえ、日本さんはそういう人じゃないでやんすよ」
それは違うというのです。
「昔はあっし等も怖い怖いと言われながらも」
「それは妖精と同じだな」
「何だかんだ言って人間様には信じてもらったり親しんでもらったりしてたんでさあ」
昔を懐かしみながらです。河童はイギリスにお話していきます。
「けれど時代はが変わりやしてね」
「明治になったんだな」
「何時しかあっし等の存在はただの迷信ってことになりやして」
そんな風になったのです。日本も変わったのです。
「誰もあっし等の存在を信じなくなったんですよ」
こんなことがあったというのです。
「時代は本当に変わりやした。日本さんも」
変わっていいことばかりではないようです。イギリスは河童のお話を聞いてそう思ったのです。そして日本の意外な一面も知ったのでした。

第千八百四十一話　完

2011・1・19

第千八百四十二話　昔の本では

第千八百四十二話　昔の本では

香港が日本の歴史の本を見ていてです。あることに気付きました。
「普通に出て来る」
「何がでしょうか」
「幽霊とか妖怪が出てきてるわね」
こう日本に言うのでした。
「まるで何でもないみたいに」
「はい、昔の歴史書はどれもそうです」
日本もそのことを認めるのでした。
「特に平安時代のそれは」
「怪奇小説みたいね」
香港は読んでいって本気でそう思いました。
「ここまでくると」
「普通の古典の作品にも出ていますし」
「源氏物語や平家物語にもね」
「特に今昔物語はそうですね」
「今昔物語は中国兄さんのところの聊斎志異みたいな本なの？」
「いえ、それは違います」
日本はそれは否定します。今昔物語は怪奇小説集ではないというのです。
「仏教の教えを基に書かれた本ですが」
「けれど妖怪や幽霊ばかり出るけれど」
「それだけ昔は普通の存在だったのです」
昔の日本ではそうだったのです。夜が今よりもずっと暗くて黒というよりも紫だった時代には。そうした存在がずっとずっと多かったのでしょうか。

第千八百四十二話　完

2011・1・19

第千八百四十三話　昔は話せた　☆

河童はイギリスに話し続けます。
「昔は日本さんとも喋れたんですよ」
「あいつも昔はそうだったんだな」
「へえ、旦那と一緒でやんした」
かつての日本はそうだったのです。妖怪や幽霊が見えて彼等とお話ができたのです。それもつい最近までそれができていたのです。
「けれどそんな世の中のせいか今は」
「そうか」
「それでやんすけれど」
ここでイギリスにです。河童はあるものを出してきました。
「この胡瓜の種日本さんに渡しといてくれやせんか」
「ああ、これをか」
「あっしの大好物でやんすよ。日本さんも御存知でさあ」
河童はこう言ってその胡瓜の種を日本に渡すのでした。そしてそのうえで。
イギリスにです。寂しい顔で告げました。
「最後にこうして旦那と会えて」
「ああ」
「あっし等も幸せでやんすね」
「別に止まってもいいんじゃないか？」
けれどここで。イギリスはこう言って河童達を止めようとします。
「あいつといたいんだろ？だったらな」
こう河童達に言うのでした。イギリスは本気で彼等を引き止めようとしています。そしてそのうえで。彼等にこんなことを言うのでした。

第千八百四十三話　完

2011・1・20

第千八百四十四話　まだたまには

第千八百四十四話　まだたまには

「おや？」
「んっ、どないしたんや？」
「いえ、そこにです」
日本はこうキューバに応えます。お家の物陰を見ながら。彼は今日はキューバをお家に招待しているのです。
「ちょっと面白い方がいまして」
「面白い方って誰や？」
「小柄なお爺さんとお婆さんです」
その二人だというのです。
「まさかと思いますが」
「その組み合わせってひょっとしたらあれか？」
キューバは今日本と一緒に観ているそのテレビドラマから言うのでした。
「このゲゲゲの旦那が描いてる漫画の」
「そうみたいですね。まさかと思いますが」
「日本のところには人間と動物以外にもおるんかいな」
「ううむ、そうは思いたくはないのですが」
日本は真剣な顔で言います。
「本当にそうした存在がいるのでしょうか」
「いや、あんた前は信じてたやろ」
「迷信だと思っていました。暫くは」
最近はその考えも変わってきているのです。
「けれど最近はまた」
「そういうことかいな」
日本はまたそうした存在を信じるようになってきているのでしょ

うか。今はたまにですが見えたりしています。そしてそんな存在が実は嫌いではない日本です。

第千八百八十四話　　完

２０１１・１・２０

第千八百四十五話　引き止めるイギリス　☆

第千八百四十五話　引き止めるイギリス

☆

「もうあっし等のいていい時代は終わったんでさあ」
河童が寂しく言うとです。イギリスは少し怒った顔で言い返しました。
「いや、それは違うからな」
「けれど実際にもう誰も」
「誰もじゃない。実際に本にも書かれて親しまれてるだろ」
イギリスはもう日本の本を何冊か読んでいました。それで妖怪達が日本においてどう思われているのかをわかっているのです。
それで、です。彼等にこう言うのでした。
「それに俺のところは今の日本よりもずっと凄いことになってるんだ」
産業革命の結果です。イギリスはこの時は世界で一番凄い国でした。
「けれどそれでも妖精達は俺と一緒にいるんだ。だから御前等も」
「いていいんでやんすか？」
「ああ、いていい。だから残るんだ」
こう妖怪達に言うのです。
「それとも御前等日本が嫌いになってあいつのところから去りたいのか？」
「そんな筈はないでやんすよ」
河童もそのことをすぐに否定します。
「日本さんみたいないい人はいやせんから」
「なら残れ」
イギリスは言います。
「絶対にだ」

こうしてイギリスは河童達を必死に引き止めるのでした。その彼の言葉を聞いてです。妖怪達も足を止めました。そうしてなのでした。

第千八百四十五話　完

２０１１・１・２１

第千八百四十六話　吸血鬼もいます

第千八百四十六話　吸血鬼もいます

「あっ、日本さんのところにもですか」
「はい、血を吸うような妖怪はいます」
今日はマレーシアとお話をしている日本です。
「ろくろ首がいますね」
「あの首が伸びる妖怪ですよね」
「あの妖怪の中で首が飛ぶものがいまして」
「それが血を吸うんですか」
「はい、人の首筋にかじりついてです」
そうして血を吸うというのです。かなり怖い妖怪の様です。
「そうした妖怪です」
「何か我が国のペナンガランに似ていますね」
「確かあれですね」
「はい、首が内臓と一緒に出てそれで空を飛んで人を襲って」
そのうえで血を吸う妖怪だというのです。想像するとかなり恐ろしい姿です。マレーシアのところにもそうした妖怪がいたりするのです。
「皆物凄く怖がっています」
「人の血を吸う妖怪はどの国にもいますが」
「どれもおっかないですね」
「全くです。私の国にもいる位ですから」
実はこうした妖怪は中国にもいます。何処かの作家がいないと言っていましたがキョンシーがそれだったりします。勿論他にもいます。
「血には色々とあるのですね」
「そうみたいですね」
吸血鬼までいるのが日本です。本当に色々な妖怪がいます。

第千八百四十六話　完

2011・1・21

第千八百四十七話　イギリスの説得

第千八百四十七話

イギリスの説得

イギリスは河童達に言います。

「御前等日本が本当に好きならな」

「ここにいていいでやんすか？日本さんのお傍に」

「ああ、あいつもこの国の連中も絶対に心の何処かで御前等をまだ信じてるんだ」

イギリスにはわかるのです。感性で。

「だからな。そんな寂しい思いを感じなくてな」

「ずっとここにでやんすか」

「ああ、いろよ」

イギリスははっきりと告げました。

「この国にな」

「どうする？」

「そうだなあ。旦那はこう言ってくれるし」

河童も玉葱頭もお互いに話してでした。

そうしてそのうえで。イギリスに顔を戻してこう言うのでした。

「わかりやした」

「それなら。ずっと日本さんのお傍にいやすね」

「ああ、それがいいからな」

イギリスはほっとした顔になって彼等に告げます。

「人間の他にも色々いていいんだよ。人間だけじゃ世の中寂しいからな」

「そう言ってくれて何よりでやんすよ」

「旦那、感謝しやすよ」

妖怪達は満面の笑顔でイギリスに対してお礼の言葉を述べました。

彼等にとっては非常に有り難い言葉でした。そしてそれが彼等をつ

なぎ止めたのでした。

第千八百四十七話　　完

2011・1・22

第千八百四十八話　ゲゲゲの方々

第千八百四十八話

ゲゲゲの方々

「日本さんのこの漫画面白いばい」

「はい、ずっと読まれている漫画です」

日本はお家に来ているニュージーランドに答えています。見ればニュージーランドはちゃんちゃんこと下駄の子が主人公の漫画を読んでいます。

「面白いと評判で」

「この妖怪さん達は本当にいる妖怪ばい？」

「主人公とそのお父さん、あと鼠の方以外はそうです」

実際にいるとされている妖怪達なのです。

「その御三方も何か」

「いるばい？」

「おられると思えばおられると思います」

そうだというのです。

「妖怪とはそうしたところがあるものですから」

「何かこうした妖怪が本当にいれば面白いばいね」

「タイプは全然違いますが」

ここで日本はまずはこう前置きしてきました。

「ピーターパンも妖精ですね」

「そうばい。イギリス兄さんのお家の小説から生まれた妖精ばい」

「その主人公達も同じですから」

妖精と妖怪は同じ性質のものだからだというのです。

「ですから。若しかしたらその方々もです」

もう妖怪として存在しているのではないかというのです。妖怪は死にません。それどころかどんどん生まれてくるものなのです。それが妖怪です。

第千八百四十八話　完

2011・1・22

第千八百四十九話　妖怪達が残って　☆

「じゃあ旦那、これからまた機会がありやしたら」
「ああ、俺が日本に来た時にはな」
河童達とイギリスはあらためて笑顔で話をします。
「楽しくやろうな」
「へい、お互いに」
こんな話をしていました。するとです。
イギリスはふとです。一人の小さな女の子が一緒にいることに気付いたのです。その娘は誰かというとです。
「あれっ、この娘何時の間に来たんだ？」
「あっ、座敷童でやんすね」
河童がすぐにイギリスに言いました。
「この娘は」
「そういえば何か部屋で騒いでいた感じがしたけれどな」
「ええ、この娘は姿が見えなくてもそこにいるんでやんすよ」
そうした妖怪だというのです。
「小さな女の子の幽霊だって話もありやすけれどね」
「ああ、俺の国のブラウニーみたいなやつなんだな」
イギリスは自分の国にいる妖精にあてはめて考えてみました。
「そういう感じだな」
「家にいてくれたら幸せをもたらせてくれる。有り難い存在でやんすよ」
「その辺りもブラウニーに似てるな」
イギリスはあらためて思ったのです。そのうえで座敷童を見ています。
イギリスにとってはとても楽しくて充実した日本への訪問となりました。そして新しいお友達もできました。それも心から分かり合

える。

第千八百四十九話　完

2011・1・23

第千八百五十話　子供には見えないのに

第千八百五十話　子供には見えないのに

イギリスはお家に帰ってから。こう妹に話すのでした。
「その座敷童ｔっていうのは子供にしか見えないらしいんだよ」
「面白い妖精ですね、それは」
「いや、向こうじゃ妖怪っていうんだけれどな」
妹にこのことは断ります。
「とにかく。子供にしか見えないんだよ」
「けれどお兄様は見えたのですね」
「何でだろうな、それは」
イギリスはこのことがどうしてもわからないのでした。それで首を捻りながら言います。
「俺子供って歳でもないだろ」
「精神年齢も高いですし」
少なくとも子供ではないのは妹も認めることです。
「私にも。それはちょっと」
「わからないよな」
「ただ。お兄様は妖精達といつも一緒にいられるので」
「それでなのか？」
「そうではないでしょうか」
イギリス妹の見たところではそうなのです。イギリスはとにかく妖精達といつも一緒にいられます。それは彼だけができることなのです。
「やはり」
「ううん、そうかもな」
イギリスもそれで納得するのでした。何故見えるのかはわからなくともです。それでも納得するものが妹の説にはあるのでした。

第千八百五十話　完

2011・1・23

第千八百五十一話　そりゃ駄目だ

第千八百五十一話　そりゃ駄目だ

中国は意外と可愛いものが大好きです。それで遊園地なんかもよく作って行きます。しかしです。

「あのさ、君さ」

「何あるか？」

アメリカがその中国に対して言います。

「幾ら何でもそれはまずいだろ」

「何があるか？全部オリジナルあるぞ」

「あの鼠は僕のものだろ」

見ればそのままのあの鼠や家鴨がいます。他には日本の青い狸や猫までいます。あまりにもそのまま過ぎてアメリカもいささか唖然としています。

けれどそれでも中国に対して言うのです。

「あのね、このままだったら上司も僕も怒るからさ」

「駄目あるか」

「弁護士来るよ」

アメリカで一番厄介な人達です。日本では時々犯罪者の如き弁護士がいてあろうことかそうした輩が日本の上司になります。

その人達の名前を出すとです。流石の中国もです。

「わかったある。それなら」

「そういうことだからね」

こうして中国のそっくりさん達は消えることになりました。

しかしです。

中国はまだです。こう思うのでした。

「可愛いものがもっとお家にいて欲しいある」

こう思って止まないのでした、果たしてどうなるでしょうか。

第千八百五十一話　完

2011・1・24

第千八百五十二話　本当に出ていた

第千八百五十二話　本当に出ていた

「それは怒られて当然ですね」
「むっ、しかし日本もある」
中国はアメリカに可愛いもので怒られたことを日本に話しています。しかし日本も中国に対してこう言葉を返したのでありました。
「私も怒っているではないですか、そうした時は」
「だから日本もあのアニメでやっていなかったあるか？」
中国はこうその日本に言います。
「僕のかつての上司の人達が女の子になっているあのアニメで」
「あれはその」
そう言われると日本もいささか困った顔になります。
「姿形は多少変えていましたし」
「だからいいあるか」
「それに少しだけネタで出しただけです」
こう中国に言い繕います。
「ですからいいのです」
「そうだよ。僕だってジャングル何とか何て観たことないぞ」
何故か当のアメリカまで出て来て言います。
「だからあのアニメは日本のぱくりじゃないぞ」
「あれはかなり危ないのでは？」
日本はアメリカにも言います。
「あの先生の作品では」
「僕もそう思うある」
どうもお互いに脛に傷があるようです。この三人実はこうしたところは似ているのかも知れません。

第千八百五十二話　完

2011・1・24

第千八百五十三話　猫じゃないだろ　☆

第千八百五十三話　猫じゃないだろ　☆

アメリカに言われて遊園地の怪しいことこのうえないキャラクターを外さざるを得なくなった中国、ベッドの中でまだこんなことを言っています。

「うう、憧れの鼠ランドにアメリカ鼠に日本の猫」

妙に多いです。

「やっぱり素直に香港に行けばよかったあるな」

こんなことを考えているとです。急に物音が聞こえてきました。

「んっ？何あるか？」

台所からです。起きてそこに行ってみますと。

「誰あるか？」

「あっ」

するとそこにいたのはです。身体は人間ですが頭はリボンをしたあの日本の猫です。冷蔵庫を開けて食べ物を漁っているところでした。

「アイヤーーー、見つかってしまったあるか」

こう言うのです。造詣が妙です。

しかも身体は人間です。言葉も中国のものです。

「いやあ、困ったある」

「むっ、御前は」

中国はその猫を見て言いました。

「まさか僕に」

「御免ある、中国さん」

その怪しい猫は中国に謝ってきました。

「悪気はなかったあるよ」

つまみ食いのことを謝っているのです。どこからどう見ても人間です。猫ではないです。

第千八百五十三話　完

2011・1・25

第千八百五十四話　今ではどうか

第千八百五十四話　今ではどうか

中国の憧れの鼠ランド、今はどうかというとです。

「いやあ、今度上海にできるあるよ」

「作るぞ」

中国とアメリカが実に楽しそうに日本に言っています。

「さあ、早速今から楽しみにしているある」

「今度もかなりのを作るぞ」

「そうですか。中国さんのお家にも遂になのですね」

日本もそれを聞いて言います。

「香港さんのところだけでなく」

「そうある。あの鼠は好きある」

「家鴨も犬も来るぞ」

「あとあのお姫様もですね」

日本もよく知っています。実は彼もあの鼠達は好きなのです。

「お城も」

「あのお城もいいあるな」

「何か白鳥みたいでとてもいいぞ」

「あのお城はドイツさんのお城がモデルでしたね」

日本はこのことも知っていました。

「あの王様が築いた」

「そう思うと色々と思うところもあったりするあるな」

「そうだな。あの王様のことは悲しいことだったと思うよ」

二人もこのお話になると寂しい顔になります。あのワーグナーが好きだった王様のお城は。今ではこうしたところにも影響を与えているのでした。

第千八百五十四話　完

2011・1・25

第千八百五十五話　実は只の盗み食い　☆

第千八百五十五話　実は只の盗み食い

☆

その猫人間が何か言いますがそれより前にです。中国は満面の笑顔で彼に飛びついてこう言うのでした。

「キティちゃん僕に会いに来てくれたあるか？」

「ちげーーある」

それははっきりと否定する猫人間でした。

「不法侵入ある。けどそういうことにしてやるある」

「可愛いある可愛いある」

本当に嬉しそうな中国です。可愛いものが大好きな彼ならではです。

「口に食べかすがついてるあるよ」

「ああ、それはある」

ここでその猫人間は言います。間違ってもハローな猫ではありません。

「私猫だからしょうがないある」

「そうあるか」

「そうある。お魚大好きね」

猫だからだというのです。

「あと鶏肉もある」

「他に好きなものは何あるか？」

「四本足のものは机や椅子以外ある」

まずはそれで。

「空を飛ぶものは飛行機以外、水にあるのは船以外ある」

「つまり何でもあるな」

「その通りある。野菜や果物も好きある」

間違っても猫ではありません。けれどそれでもこう言う猫人間な

のでした。この人の正体は何でしょうか。少なくともつまみ食いをしているのは確実です。

第千八百五十五話　　完

2011・1・26

第千八百五十六話　喜ぶ三人を見て

第千八百五十六話　喜ぶ三人を見て

「あのお城が一番いいですね」
「ああ、日本もそう思うんだな」
「僕もあるよ」
日本もアメリカも中国もです。そのアメリカ鼠の遊園地の中にある白くてとても奇麗なお城を見て笑顔になっています。とても楽しそうにです。
そしてそんな三人を見るドイツはです。暖かい笑顔になっています。プロイセンがその彼に問いました。
「あの人のことを思い出してるんだな」
「ああ。あの時あの人は誰にも理解してもらえなかった」
実はドイツもです。もう少し直接お話すべきではないかと思いもしましたが。結局はそうはなりませんでした。
そのことも思い出しながらです。ドイツはプロイセンに言います。
「けれど今ではな」
「ああして。お城をモデルにしてもらってな」
「それが皆を楽しませている」
「あの人も満足かな」
プロイセンも自然と暖かい笑顔になっています。
「今。こうして沢山の人に観てもらってな」
「あの人は城を爆破しろと言ったが」
自分が死んだならです。確かにそう言ったのです。
「けれどそれは」
「本当はわかって欲しかったのかもな」
「そうかもな。本当はな」
そんな風にも考えるドイツなのでした。少なくともあの人が築いたお城はです。今では遊園地でも多くの人達に愛されています。と

ても美しいものとして。

第千八百五十六話　　完

2011・1・26

第千八百五十七話　結構正直者　☆

第千八百五十七話　結構正直者　☆

中国ははしゃぎながら猫人間に尋ねます。
「キティちゃんはどうして僕の家に来てくれたあるか？」
「ぶっちゃけ私キティちゃんじゃないあるよ」
猫人間はその中国jに素直に答えます。
「中国で作られたパチモノあるね」
「えっ、そうあるか！？」
「そうある。中身も中国人のおっさんある」
こう正直に答えます。ところが中国はそれを否定してこう言うのである。
「嘘ある！信じねえあるよ！」
「この微妙な可愛くなさとチープ臭さが何よりの証拠ある」
その中国のおじさんは被りものを前に出してきて言います。
「日本には絶対に真似できねえある」
「確かに」
言われて見ればです。中国もその匂いたつ可愛くなさとチープ臭さに頷くものがあります。何しろ自分の国のことですから尚更です。
「じゃあ御前は何者あるか？」
「そうあるな」
猫人間はつまみ食いを続けながら中国に答えます。
「ギティちゃんかシナティちゃんって呼ぶといいある」
「可愛くねえある・・・・・」
「そう思ってくれて結構ある」
実に素直にその感想を述べた中国なのでした。本当に微妙に可愛くなくてしかもチープな感じのするその猫でした。これもある意味において凄いです。

第千八百五十七話　完

2011・1・27

第千八百五十八話　騎士がいない

第千八百五十八話　騎士がいない

ドイツはです。その鼠の遊園地のお城を見てこんなことも言いました。

「あの騎士はいないな」

「そうだな。あの白鳥の騎士はいないな」

プロイセンもこのことを言います。

「肝心のな」

「あの人はいつもあの騎士のことを考えていたのにな」

そのワーグナーの芸術をこよなく愛し続けたドイツのかつての上司の人です。その人は白鳥の騎士の姿になることもあったのです。

「あの泉の中でな」

「泉はあることにはあるけれどな」

「しかしあの泉ではないからな」

それはドイツが一番わかることです。

「だからあの騎士はいない」

「代わりにいるのは童話のお姫様に鼠や家鴨だな」

「モデルにしただけだから当然だがな」

その鼠のお父さんが考えたものだからだというのです。

「しかし。それでもな」

「寂しいか？その辺りは」

「いや、あの城が作られているだけでいい」

ドイツはこうプロイセンに答えました。

「あの人の想いが伝わっているのは確かだからな」

ドイツはそれで満足しているのでした。確かに寂しいと言えば寂しいです。けれどあの人の想いはお城から確かに広がっているからです。ドイツはそれで満足なのでした。

第千八百五十八話　完

2011・1・27

第千八百五十九話　戦国の日本

第千八百五十九話　戦国の日本

日本はふと。昔のことを思い出しました。
「私の国でも昔は戦争が多かったですね」
「戦と呼んでましたね、あの頃は」
「はい、私は平穏でも」
こうです。妹とお話をしています。
「国同士や上司同士で」
「源平なんかもありましたし南北朝も」
「まさか上司の上司の方々が二人になるとは思いませんでした」
そのうえでお互いに争っていたのです。日本もいつも平和だったわけではなくてです。それなりに戦争を経験してきているのです。
「その中でも特にですね」
「はい、戦国の頃は凄かったですね」
「それぞれの方々にそれぞれの上司がおられて」
そんな時代だったのです。
「常に戦争でした」
「けれど争っていたのは上司の人達だけで」
「そうですね。人は案外穏やかでした」
国の中の人達はです。何としょっちゅう起こる戦を観戦さえしていたのです。お弁当を持ってかなり呑気に戦を見物することができたのです。
「あの頃は騒がしかったですが」
「それでも。今思えば」
「あれで楽しかったですね」
そうしたこともあったのです。日本の戦国時代はそんな時代でした。

第千八百五十九話　完

2011・1・28

第千八百六十話　疎い

第千八百六十話　疎い

「そういうことには疎いので」
日本の上司の中で一番偉い人がこう言いました。
「いや、格付けとかは」
「もう言うことはありません」
日本はその人に告げました。
「最早貴方は私の国にいないで下さい」
「何っ、どうしてそう言うんだ。私は君の上司だぞ」
「貴方は前に財政を担当していて御自身では政策通と言っておられましたね」
それがこの無様な言葉です。
「前の方も国がわからないと言っておられましたが」
「だから私はだ。正直に」
「はい、素直に貴方という人間がわかりました」
これはです。最早言ってはならないことでした。例えるならコックがその白い長靴でそのままトイレに入るようなものです。絶対に言っては駄目なことでした。
「最早私の上司でいる資格はありません」
「しかし前の上司達は」
「いえ、貴方は前の上司の方々はおろか」
静かに怒っています。それだけに怖い今の日本です。
「私の今までの上司の方々の中で最低最悪です」
「馬鹿な、私は」
「いえ、もう貴方達の言葉は絶対に信じませんから」
覆水盆に帰らずとは言いますが。最早その無能、いえ禁治産者ぶりを露呈した上司でした。ここまで人間失格でも人間でいられる、摩訶不思議な現象です。

第千八百六十話　完

2011・1・28

第千八百六十一話　尾張と日本で　☆

第千八百六十一話

尾張と日本で　☆

戦国時代です。日本が尾張と草原で仲良く語らっています。

「今日も平和だぎゃ」

「そうですね、本当に」

日本は御握りを食べながら尾張の言葉に応えています。

「のどかなものです。

「けどこんなに平和なのに世は戦乱の渦だぎゃ」

一応戦があちこちで行われています。とはいっても庶民に手出しをする様な戦国大名は殆どいないので平和です。自分のところの領民になる人や田畑に何かする様な愚かな人もそうはいません。

「それってマジありえないぎゃ」

「私は御飯食べられてお金儲けできて格好いい男が傍にいりゃあ」

尾張はかなり勝手なことを言います。

「私はそれで幸せだぎゃ」

「私はできればまた皆さんが一つになってくれれば」

日本は天下統一を望んでいるのです。

「それでいいのですが」

「それ難しいと思うんだぎゃ。今は」

尾張にはその気はありません。

「それより日本さん」

「はい」

「うち昨日近江から鮒寿司を取り寄せたぎゃ」

「あの噂の」

「それ今から食べようぎゃ」

こんなのどかな二人です。もっともその二人の後ろからやけに目立つ人が来ていますが。

第千八百六十一話　完

2011・1・29

第千八百六十二話　戸籍がなくなるので

第千八百六十二話　戸籍がなくなるので

中国の中で戦争が起こったことは数多いです。それは中国にとっても非常に困ったことです。

「その度に大変なことになるあるよ」

「そうですね。人が多く死にますし」

日本もそれを聞いて言います。

「その度に人口が半分とか三分の一になってるんですよね」

「幾ら何でもそこまで減らないあるぞ」

ところが中国はこう日本に答えました。

「ドイツのところであった三十年戦争でそこまで減ってしまったという話を聞いているあるが」

「ですが中国さんのところの内戦も」

「あれは宗教が絡んだから滅茶苦茶になったあるよ。うちでもあそこまで物凄い内戦はなかったあるよ」

「しかし実際に人口は」

「戸籍の関係ある」

中国は戸籍を話に出しました。

「それが戦乱で失われてしまうあるよ」

「あっ、それでなのですか」

「昔は戸籍を作るのにかなり手間隙がかかったある」

今でもです。人口調査はどの国でも国を挙げた事業です。昔ならば余計にです。それはそれはかなりの手間隙がかかったものなのです。

「戦乱が続けば戸籍の帳簿も失うし正確な調査もできなくなるある」

「それであそこまで減ったのですか」

「そういうことある。三国時代でも実はそんなに減っていないあるよ」

そしてです。中国はこのことを言います。
「南北朝で南北合わせて九百万だったのが隋の上司が統一して一気に四千六百万になっているあるぞ」
「成程、全ては戸籍ですか」
日本は中国のそうした事情がわかりました。中国の戦乱が凄くとも流石に滅茶苦茶減らないのです。

第千八百六十二話　　完

２０１１・１・２９

第千八百六十三話　後ろから来たうつけ　☆

尾張はです。その彼に気付いて声をあげました。
「なっ、何でここでおみゃーーーが出るだぎゃ！」
「一体どうしたのですか？」
「後ろだぎゃ！日本さんの後ろ？」
「後ろ？」
日本が振り向こうとする前にです。彼は襟首を捕まれてしまいました。
それに驚いてそちらを見るとです。細面に色の白い中々の男前がいました。格好は随分とあれです。目立って仕方のないものです。
「こんな所に面白い獲物がおるのう」
「貴方は一体」
「道理で今日は狩りに出たくなった筈じゃ」
「に、日本さん早く逃げるぎゃ！」
尾張は日本に対して叫びます。
「そいつはこの辺りで一番のうつけだぎゃ！」
「うつけ？」
「そうだぎゃ。名前は吉法師」
どうやら幼名の様です。
「どうしようもない奴だぎゃ！」
「ははは、わしも有名なようじゃな」
そのうつけさんは尾張に言われて得意満面です。
「まあ今は尾張の上司でしかないがのう」
「何時そうなったぎゃ！」
随分尾張と仲の悪い人みたいです。尾張が一方的に嫌っているようですが。果たしてこの人は何者なのか、どうも日本はこの頃から

変わった人達と縁があったようです。

第千八百六十三話　　完

2011・1・30

第千八百六十四話　恐怖の南北戦争

「うちも内戦があったぞ」
「南北戦争ですね」
日本はアメリカであった内戦が何なのかすぐにわかりました。
「アメリカさんのお家が二つに分かれたあの」
「僕は北についていたんだ」
アメリカ自身はそうだったのです。
「いやあ、その時は凄かったな」
「戦闘がですか？」
「とにかく街を攻略したり進軍の時に」
所謂海への進軍のことのようです。
「建物もそこにいる人間もまとめて撃ったからなあ」
「えっ、一般市民もですか？」
「そうだぞ。だって戦争じゃないか」
アメリカは驚く日本に平気な顔で言います。
「誰が何処にいるかわからないじゃないか。戦争ならそれも当然だよ」
「しかし自分のお家の人達では？」
「戦争だからな。そういうこともあるさ」
実はアメリカ、インディアンの人達とも長い間戦争をしてきました。その時から実はアフリカ系の人達もアメリカと一緒に戦っています。アフリカ系の人達も他から来た人なのです。
「確かに内戦は二度としたくないけれどな、僕も」
「しかし。自分の国の一般市民もですか」
この辺り中国も同じだったりします。もっともこれはアメリカや中国だけではありません。内戦とはかくも恐ろしいものです。アメリカや中国が例外ではないようです。

第千八百六十四話　完

2011・1・30

第千八百六十五話　吉法師と別れて　☆

「とにかくぎゃ！」
尾張は吉法師に対して言います。
「日本さんを離すぎゃ！」
「何じゃ、随分怒っておるのう」
「当たり前ぎゃ。そもそも御前より弟さんの方がずっと私の上司に相応しいぎゃ」
この時はそう思われていたのです。
「御前はそのうちえらいことをしでかすぎゃ」
「えらいことのう」
「そうぎゃ。さっさとどっかに行くぎゃ」
日本を引き離してもまだ言います。
「御前は家臣達にも好かれていないぎゃ」
「おお、あの者達か」
彼は確かに最初はそうでした。
「それでどうしていくぎゃ」
「見ておれ。すぐにわかるわ」
「すぐ？」
「そうじゃ。わしはそのえらいことをするぞ」
不敵に笑ってです。尾張に対して言うのです。
「この天下に名を馳せるのよ」
「ふん、精々夢を見ているぎゃ」
「夢は大きくじゃな」
日本はそう話す吉法師を見ています。彼には何となくわかりました。この吉法師という人物がです。途方もなく大きな人物だということがです。

第千八百六十五話　完

2011・1・31

第千八百六十六話　ロシアは壮絶過ぎて

第千八百六十六話　ロシアは壮絶過ぎて

「内戦って嫌だよね」

「あの、ロシアさんのところの内戦って」

リトアニアが青い顔でロシアに応えます。

「あれですよね。いつもの」

「そうなんだ。もう大変なことになるから」

ロシアもブルーな顔でお話します。

「御互いに物凄く殺し合って」

「普通に人口が減りますよね」

中国みたいに戸籍の上だけとかアメリカみたいに仕方がない場合にというのではありません。ロシアではナチュラルにお互いが全域で殺し合うのです。

「この前の内戦では」

「千万死んだかな」

「それ位でした？」

「それがドイツ君との戦争だったかな」

「ええと。上司の人の粛清でもかなり死んでますけれど」

その前に内戦が起こっているのです。そこでも洒落にならないというか普通の国では有り得ないまでの数と割合で人が死んでいるのです。

「内戦では」

「本当にどれだけだったかな」

「動乱期のあれも凄かったですよね」

「うん、イワン様の後だったよね」

「あの時もかなりでしたし」

上司同士でも勿論壮絶に殺し合っています。ロシアの内戦は他の

国のそれよりもまだ、なのです。血生臭く恐ろしいものなのです。

第千八百六十六話　　完

２０１１・１・３１

第千八百六十七話　驚いていない日本

第千八百六十七話　驚いていない日本

吉法師のことを知った日本はそれから暫く彼の話を聞きませんでした。しかしある日尾張がいきなり彼のお家に来て言うのでした。

「た、大変だぎゃ！」

「どうしたのですか？大変の大安売りですか？」

「あのうつけがやらかしたぎゃ！」

尾張はこう日本に言います。

「あいつ織田信長って名前になって」

「元服されたのですね」

「そうだぎゃ。そうしてすぐに家の中をまとめて」

その際弟さんと悶着があり残念な結果になったり爺やさんがいなくなってしまったりといったこともありました。実はこの二つのことはその人にとっては消せないものになってしまうのです。

「それで本当に私の上司になったぎゃ！」

「そうですか」

日本は尾張の話を落ち着いて聞いています。

「あの人がやられたのですね」

「あれっ、日本さん驚いていないぎゃ？」

「はい、実は」

そのまま尾張に答えます。

「あの人ならそれ位は当然かと」

「何でそう言えるぎゃ？」

「何となくわかりましたから」

それでなのでした。日本は落ち着いているのでした。何はともあれです。織田信長の雄飛がはじまろうとしていました。日本はそれをはっきりと感じ取っていたのです。

第千八百六十七話　完

2011・2・1

第千八百六十八話　悪夢の三十年戦争

第千八百六十八話　悪夢の三十年戦争

ドイツはです。日本にあの戦争のことを話します。
「戦乱でも死んだが」
「それだけではなくですか」
「畑も荒らされ飢饉になって疫病まで起こった」
「疫病もですか」
「死体をそのまま置いておいたからな」
死体が腐ってそこからなのです。だから皆普通は死体を放置しないのです。
「そうしたことが重なってだ」
「大変だったのですね」
「大体人口が三分の二になったか」
ドイツはまずこの数字を出しました。
「最悪で四分の一になったと言われている」
「四分の一！？戸籍の問題ではないですよね」
「欧州に戸籍はないからな」
これは中国や日本のものなのです。欧州では戸籍というものがありません。教会の信者さんの数から人口を数えるようになっているのです。
「だからだ。一説にはだ」
「ううむ、中国さんのところの内戦より激しかったのですね」
「そうだ。最悪の内戦だった」
ドイツは忌々しげな顔で日本に話します。
「二度とあんなことは繰り返したくない」
「左様ですか」
ドイツにとっては忘れられない内戦だったのです。宗教や他の国

の介入もあってです。とにかくとんでもないことになったのがその戦争だったのです。

第千八百六十八話　　完

２０１１・２・１

第千八百六十九話　桶狭間だぎゃ

第千八百六十九話　桶狭間だぎゃ

「そんなの無理に決まってるぎゃ！」
尾張が家臣の人達と一緒に信長に言っています。
「向こうは二万五千、こっちは二千だぎゃ！勝てる筈がないぎゃ！」
「そうです、殿ここは」
「篭城しかありません！」
家臣の人達も言います。
「そうすれば何とか」
「何とかなります」
「ああ、もういい」
しかしです。信長はこう返すだけでした。
「もう寝るぞ。いいな」
「なっ、死ぬ気だぎゃ？」
尾張はそんな信長を見てこう思いました。
「このうつけ、本当に諦めたぎゃ？」
「織田もこれで終わりかのう」
「尾張が終わりじゃのう」
「そこ、冗談言うにも時と場合をわきまえるぎゃ！」
尾張は家臣の人にくってかかります。
「この状況は。本当にやばいぎゃ」
「そうですね。これは」
たまたまそこにいた日本も言います。ちょっと尾張のところに遊びに来ていたのです。その日本はこう言うのでした。
「今川さん、危ないですね」
「どうしてそうなるぎゃ？」
日本だけが落ち着いています。まるで何もかもがわかっているようにです。果たして信長は何をするのか。今日本が大きく変わる第

一歩がはじまろうとしていました。

第千八百六十九話　　完

2011・2・2

第千八百七十話　ベトナムでは

第千八百七十話　ベトナムでは

「元々私中国のところにいましたよね」
「そうでしたね。二千年以上前は」
日本がベトナムの言葉に応えています。今度はベトナムが自分のお家のことを日本にお話しているのです。
「あの姉妹の方々が立ち上がられて」
「私あの時はまだほんの子供でした」
つまりそれだけ年齢を重ねているということです。ベトナムも意外と年配者なのです。
「けれどその時にです。あの人達が立ち上がって」
「そうしてベトナムさんを導かれてですね」
「そうです。それから最近の内戦では」
長く苦しい内戦でした。外国も介入してきた。けれどベトナムはその長く苦しい内戦も乗り越えたのです。物凄く苦労しながらもです。
「私の上司の人が頑張ってくれましたから」
「ホー＝チ＝ミンさんでしたね」
「あの人と。そしてあの姉妹の人達がいてくれたから」
ベトナムは自然とです。優しい顔になっています。
「私の今があります」
「そうですね。それは本当にですね」
「ですから私忘れないです」
「あの人達を」
「はい、今の私を作ってくれたあの人達のことは絶対にです」
「そしてこれからも生きられますか」
それがベトナムなのです。彼女も今こうして明るく生きているのもそうした人達がいてくれたお陰なのです。独立と内戦を乗り越え

させてくれた人達がいてくれたからなのです。

第千八百七十話　　完

２０１１・２・２

第千八百七十一話　敦盛

第千八百七十一話　敦盛

信長は奥に引っ込んでしまいました。家臣の人達ももう項垂れるばかりです。

「これではもう」

「今川には勝てんわ」

「その通りだぎゃ」

尾張も溜息をつきます。彼女にしては珍しく。

「折角いいと思いだしたのに。あの公家眉が上司なんて気に食わないぎゃ」

「あの人は負けますよ」

けれど日本だけはこう言います。

「御覧になっていて下さい。もうすぐですから」

「そう言うけれど実際にもう」

尾張は反論しようとします。けれどそこで、です。

信長が奥の部屋で舞をはじめました。

「人間五十年下天のうちを比ぶれば」

こう謡いながら舞いです。そして。

すぐにでした。具足を着けて馬に乗り。家臣の人達に叫びました。

「出陣するぞ！」

「えっ、出陣！？」

「まさか！」

「今こそわしが勝つ！者共続け！」

こう叫んでです。信長は真っ先に駆けだしました。

家臣の人達は慌てて具足を着けて追いかけます。尾張はそれを見て唖然となっています。

「な、何が起こるだぎゃ？」

「はじまりますね、いよいよ」

日本はそんな状況を見て微笑んでいます。この人だけはわかっています。信長が何をするのか、そして何を手に入れるのか。全てわかっているのです。

第千八百七十一話　　完

２０１１・２・３

第千八百七十二話　信長の好物

日本は今おかずの一つに焼き味噌を食べています。それを食べながら一緒に食事を摂っている妹に対してこんなことを言いました。

「あの人も焼き味噌がお好きでしたね」

「そうでしたね。尾張の人らしく」

「あの頃は味噌は凄く高価でしたが」

江戸時代以降です。誰でも食べられるようになったのは。

「それでも。あの人は」

「はい、いつも召し上がられていました」

「今は何ともない食べ物ですけれどね」

味噌は日本の食卓においては基本です。欠かすことができないものの一つです。それでもその頃はまだとても高価なものだったのです。

それを食べながらです。日本はまた言いました。

「それでも。こうして食べていると」

「思いだしますか？あの人のことを」

「はい、どうしても」

思いだすというのです。やはり。

「他にも濃い味付けがお好きでしたが」

「その辺りも尾張の人ですね」

「そうですね。名古屋は今でも味噌ですが」

所謂八丁味噌です。名古屋はその味噌です。

「あの人が召し上がっておられました」

日本にとってはです。そういた意味でも思い出になっているのがこの焼き味噌なのでした。食べてみるとです。そこには懐かしい味がありました。

第千八百七十二話　完

2011・2・3

第千八百七十三話　まさかの大勝利

「な、勝ったぎゃ！？」
尾張がです。話を聞いて驚きの声をあげました。
「二千で。二万五千の今川に！？」
「はい、しかもです！」
「敵の上司も見事倒しました！」
「そこまで凄い勝ち方聞いたことないぎゃ！」
尾張にしてもそうです。十倍以上の敵を倒してしかもその大将まで倒すとは。ここまで凄い勝利は彼女もはじめて聞いたものでした。
「あのうつけ、どれだけ運がいいぎゃ」
「いえ、運ではありませんね」
日本だけはです。落ち着いたまま述べるのでした。
「あの方は全てわかっておられました」
「全部だぎゃ！？」
「はい、敵の動きも雨が降ることも」
その雨の中での奇襲で、です。信長は勝ったのです。そのことも伝わっています。
「全てわかっていたのです」
「まさか、じゃああいつは」
「間違ってもうつけではありません」
日本はそのことを確信と共に言い切りました。
「稀代の英傑の様ですね」
「そんな、あいつが」
尾張だけでなくです。皆呆然となっています。そして誰もがです。
もう信長をうつけとは見なくなりました。この日を境としてです。

第千八百七十三話　完

2011・2・4

第千八百七十四話　お相撲が好きでした

第千八百七十四話　お相撲が好きでした

今日本ではお相撲のことで大揉めに揉めています。もうそのことで国を挙げて上に下にの大騒ぎになってしまっているのです。

それを見てです。日本も困った顔です。

「折角の我が国の国技の一つなのですが」

「起源が俺だというのに悲しいんだぜ」

いつも通り日本の傍にいる韓国がこんなことを言いました。

「この前の賭博といい。困った話なんだぜ」

「いえ、私の国のものですから」

日本は韓国のいつもの起源の主張にいつもの言葉で返します。

「とにかく。困ったことです」

「それにしても日本は相撲が好きなんだぜ。皆観てるんだぜ」

韓国は起源の主張をしたことを忘れてこんなことも言いました。

「それは昔からなんだぜ？」

「そうです。あの人もでした」

日本はここで韓国に信長のことをお話します。

「信長さんもお相撲を観られることが好きでした」

「ふうん、本当に昔からだったんだぜ」

「そうです。信長さんの時代よりも遥かに昔からありましたが」

相撲の歴史はとにかく長いのです。千数百年はあります。

「信長さんは特に好まれていました」

「あの派手な人も。少し意外だったんだぜ」

韓国は信長のことは殆ど知りません。けれどそれでもです。日本のお話を聞いて少し意外な顔になりました。そのうえで今の日本のお家での騒ぎを見るのでした。

第千八百七十四話　完

2011・2・4

第千八百七十五話　飛ぶ鳥を落とす

「何か凄いことになってるぎゃ」
「もう上洛されたのですね」
「それだけではないぎゃ」
尾張が日本にお話します。声をうわずらせてです。
「伊勢も美濃も手中に収めたぎゃ」
「そして近江の半分もですね」
「足軽の数も増えたし家臣だって凄いのが揃ってきているぎゃ」
「そうですね。上司の方も擁立されましたし」
この時代の日本の上司の仕組みは複雑なところがありました。幕府というところがあってそこに一番偉いとされている上司の人がいたのです。信長はその人を擁立して上洛したのです。
しかもです。それに止まらずです。
「大和や摂津にまで勢力を伸ばしてきてるぎゃ」
「はい、どうやらこれは本当に」
「信長様が天下を統一するぎゃ？」
尾張も何時の間にか敬意を払うようになっています。
「これは凄いことになってきたぎゃ」
「これからですよ」
日本は微笑んでその尾張にお話します。
「まだこれからです」
「それははじまったばかりぎゃ」
「はい、全てはこれからです」
その通りでした。信長の天下布武はまだはじまったばかりでした。桶狭間の勝利から飛ぶ鳥を落とす勢いでもです。それでもなのでした。

第千八百七十五話　完

2011・2・5

第千八百七十六話　岐阜

第千八百七十六話　岐阜

「ここがそのお城です」
「うわあ、凄い山の上にあるんだね」
「ここにその信長ってのが住んでいたんだな」
イタリアとロマーノが日本と一緒に岐阜のお城に来ています。日本が案内してお城のあちこちを回っています。お城は山のところにあります。
「攻めるのが大変そうだね」
「そうだな。こんな場所にあったらな」
「はい、ここは堅城でした」
実際にそうだと話す日本です。
「信長さんは美濃を手に入れられて暫くここを拠点とされていました」
「尾張から出てだね」
「ここに入ったんだな」
「そうです。それまでこのお城は稲葉山といいましたが」
これがそのお城の前の名前でした。
「岐阜と変えられそこから天下を統一されると宣言されました」
「そうして実際に統一するところまでいったんだよね」
「有言実行か」
「そうです。このお城からです」
日本達は今天守閣のところにいます。このお城で一番高い場所にあります。
そしてそこからです。下を見渡しています。日本は二人にこうもお話しました。
「私達が今見ている様に。天下を見ていました」
三人が今見ている風景はその時とはかなり違っています。けれど

信長も見ていたのです。今三人が見ているのと同じものを。

第千八百七十六話　　完

２０１１・２・５

第千八百七十七話　金ヶ崎

第千八百七十七話　金ヶ崎

信長の天下布武は順調かに思われました。今度は北に兵を向けていました。しかしです。

ここで日本のところにもです。驚くべき話が届きました。

「えっ、近江の浅井殿がですか」

「そうや！叛旗を翻したんや！」

大和がです。日本に話すのでした。

「えらいこっちゃ！信長さんこのままやったら」

「前の朝倉、そして後ろの浅井に」

「挟み撃ちやで。それで」

「まさか。ここであの人が」

日本もすぐに悟りました。前後から攻められてはさしもの信長もひとたまりもありません。少なくとも彼が聞いた限りではそう思えるものでした。

日本はです。狼狽さえ見せて大和にお話します。

「あの人に何かあれば」

「織田は終わりやで！」

「それだけではありません。天下がです」

即ち日本がです。どうなるかというのです。

「一つにまとまろうとしていたのが」

「ばらばらになるんかいな」

「あの人に何かあれば」

日本はまた言います。

「そうなることが充分に有り得ます」

日本にとってです。信長は既にそこまで重要な人になっていたのです。その信長の危機がです。今伝えられてきたのでありました。

第千八百七十七話　完

2011・2・6

第千八百七十八話　近江といえば

第千八百七十八話　近江といえば

日本は今何か強烈な匂いのするものを食べています。トルコがそれを見て尋ねます。

「何でい、そのすげえ匂いのは」

「鮒寿司という食べ物です」

それだとお話する日本でした。

「私の国に昔からある食べ物でして」

「寿司!?握りでもちらしでもねえじゃねえかい。それで寿司っていうのかい?」

「はい、これは馴れ寿司の一つでして」

日本はトルコにこのことからお話します。

「こうして。御飯を入れて発酵させた食べ物なのです」

「発酵ねえ。おめえの国のあの納豆と同じかい」

「そうです。こちらは何ヶ月もかけて作りますが」

「手が込んでるねい、また」

「本来お寿司はこちらが主でした」

その馴れ寿司がだというのです。

「ですが時間がかかるのでその代用としてです」

「今の日本の寿司ができたってわけだな」

「そうです。江戸時代にです」

比較的新しいと言えます。少なくとも今の握り寿司や巻き寿司というものはです。昔からあったようなものでないのは間違いありません。

そのお話をしながらです。日本はトルコにその鮒寿司を勧めました。

「どうでしょうか、トルコさんも」

「ああ、悪いねい。じゃあ御言葉に甘えて」

トルコもその鮒寿司を食べてみました。これまで食べたことのない、とても独特な味がしました。けれどそれは。日本が勧めるだけのものはありました。

第千八百七十八話　　完

２０１１・２・６

第千八百七十九話　無事生還

第千八百七十九話　無事生還

信長が行方不明になってです。幕府の上司の人はやけに嬉しそうです。日本はそれを見てその人と信長が最近不仲なのを再認識しました。

「どうやら御二人はこのままですと」

「そうですね。対立しますね」

日本妹がお兄さんに答えます。

「間違いなく」

「はい、それにしても信長さんは御無事でしょうか」

「どうでしょうか。織田軍は今必死に撤退しているそうですけれど」

肝心の信長の行方がわからないのです。けれど。

数日後です。信長が京の都にその姿を現しました。彼の家臣達も一緒です。

「何と、生きていたのか」

「あの状況でか」

「無事だったというのか！？」

「しかも家臣達や軍勢まで」

誰もがこのことに驚いています。信長はその軍勢まで含めてほぼ無傷で姿を現したのです。

そしてです。日本に対して顔を崩してこう言いました。

「猿がやってくれたわ」

「羽柴さんがですか」

「そうよ。あ奴が殿軍を務めてくれたお陰でな」

それで無事撤退できたというのです。実際に信長は九死に一生を得ています。

かくして窮地を脱した信長はです。すぐに反撃に転じて反旗を翻した人達と戦い勝ちました。またいつもの信長に戻ったのでした。

けれどその信長にです。最大の敵が姿を現そうとしていました。

第千八百七十九話　　完

２０１１・２・７

第千八百八十話　信長の妹

第千八百八十話　信長の妹

「そこまで凄い方だったのですか」
「はい、信長さんも中々の美男子でしたが」
日本がインドネシアにお話しています。信長の妹だった人のことです。
「人目見たら忘れられないだけの美しさでした」
「凄い美人だったんですね」
「あの時で一番だったかも知れません」
そこまでの美貌だったというのです。
「背も高く。すらりとしていまして」
「今で言うとスタイルもよかったのですね」
「性格は信長さんとは違いましたが」
そこは違っていたというのです。
「大人しい物静かな方でした」
「信長さんはかなり気性の激しい方だったと聞いていますけれど」
このことはインドネシアも知っています。信長の気性の激しさは日本においては今でも語り継がれていることです。とにかく凄かったのです。
インドネシアはそのことを以前日本から聞いています。それで今自分でも言うのでした。
「妹さんは違っていたのですか」
「はい。ですが」
「ですが？」
「芯の強い方でした」
日本の言葉が懐かしむものになりました。
「悲劇に遭いながらも。それでも最後まで強い方でした」
そういう人だったというのです。その辺りはやはり妹なのでした。

第千八百八十話　完

2011・2・7

第千八百八十一話　一向宗

第千八百八十一話　一向宗

危機を脱したのも束の間、信長の前に恐るべき敵が姿を現しました。彼等は何かというとです。

「一向宗がですか」

「そうだぎゃ。物凄い数だぎゃ」

尾張が青い顔で日本にお話しています。

「それが一斉に放棄したぎゃ」

「一向宗は多くの上司の人が手を焼いていますね」

それこそ各地の人達がです。物凄い数で暴れ回っているのです。その彼等がです。信長に対して牙を剥いたのです。他には比叡山も怪しい動きを見せています。信長の敵は武士の上司の人達だけではなくなりました。

日本もです。今回は前の危機以上に危ういものを感じています。そのうえで、です。こう尾張にお話します。

「今回はです」

「流石に危ないぎゃ？」

「尋常な戦ではなくなります」

それは間違いないというのです。

「あの方も。これは」

「負けるぎゃ？ひょっとして」

「わかりません。ただ」

「やっぱり尋常なものではないぎゃ」

「それは間違いありません」

こうお話するのでした。

信長の最大の敵は何か、それは紛れもなく一向宗なのでした。そして信長の生涯最大の宿敵もまたその中にいたのです。本願寺が。

第千八百八十一話　完

2011・2・8

第千八百八十二話　お酒は駄目でした

第千八百八十二話　お酒は駄目でした

「へえ、そうだったのかよ」
「飲めなかったのか」
「はい、それは駄目でした」
日本はプロイセンとドイツに味噌煮込みうどんをご馳走しながらです。信長とお酒の関係についてお話しています。名古屋の食べ物を食べながら。
「お酒は飲めませんでした」
「話聞いてたら如何にも飲みそうだけれどな」
「下戸とはな」
「私も最初驚きました」
それは日本もなのでした。
「まさか飲まれないとは」
「じゃああれか。酒駄目だっていうと」
「甘いものの方か」
「そうです、甘党でした」
意外にもです。信長はそちらだったのです。
「果物やお菓子がお好きでした」
「まあなあ。そういう奴もいるけれどな」
「うちでは両方になるが」
ドイツではお菓子も非常によく食べます。そしてビールです。勿論肥満が問題になっています。他には髪の毛が抜けたりとか痛風がドイツの問題だったりします。
「それでも。本当にな」
「意外だな」
二人は信長の意外な一面を知ったのです。何と信長はお酒は飲めなかったのです。

第千八百八十二話　完

2011・2・8

第千八百八十三話　消耗戦

第千八百八十三話　消耗戦

信長の戦いは激しいものになっていました。
一向宗だけでなく他の上司の人達、そして今度はです。
「延暦寺もですか」
「そうだぎゃ。不穏な動きを見せているぎゃ」
尾張が今回も日本にお話しています。
「怪しいことこのうえないぎゃ」
「ううむ、延暦寺まで敵になると」
物凄い力を持っているお寺です。日本の上司の上司の方ですらどうしようもできなかった位の。そこまで物凄い力を持っているのです。
そのお寺までもがです。信長の敵になろうとしているのです。
「これは信長さんは」
「負けるぎゃ？」
「わかりません。今あの人は大変な状況です」
あちこちで一向宗と死闘を繰り広げている最中です。信長も部下の人達もです。
「このままいけばです」
「やっぱりまずいぎゃ」
「否定できません。果たしてどうなるか」
日本も深刻な顔で述べます。
「予断を許さないです」
「本当にどうなるぎゃ」
尾張も今では完全に信長のことを真剣に心配しています。彼女もわかったのです。信長がどういう人なのか。今では心から頼りにしています。だからこそ心配なのでした。

第千八百八十三話　完

2011・2・9

第千八百八十四話　お茶が好きでした

第千八百八十四話　お茶が好きでした

台湾が日本と一緒にお茶を飲んでいます。飲んでいるのは抹茶です。

その抹茶を飲みながらです。台湾が日本に尋ねました。

「このお茶は茶道でも飲みますよね」

「そうですね。私もその時によく飲みます」

「美味しいですね」

台湾はにこりと笑って日本に言います。

「飲むとすっきりします」

「このお茶も。あの人が好きでした」

「信長さんがですね」

「はい、あの人がです」

ここでもです。信長のお話が出ました。

「よく飲まれていました」

「お酒は駄目と聞いていますけれど」

「それでお茶をよく飲まれていました。茶道にも凝っておられました」

それで茶器を集めていたりもしていました。この茶道については信長の政治的な考えもかなりいっていたとも言われています。

「あの人が広めた一面もあります」

「千利休さんだけでなくですね」

「あの人もいてこそでした」

信長がお茶を好きだったからこそです。茶道も広まったのは確かなのです。

日本はそのことを考えながら。台湾にこう言いました。

「では歴史を飲みましょう」

「はい」

台湾はまたにこりと笑いました。そうして二人でお茶を飲むのでした。それはとても美味しいものでした。

第千八百八十四話　　完

２０１１・２・９

第千八百八十五話　焼き打ち

「こうなったらあれしかないわ」
「!?何をされるおつもりですか?」
日本は信長が何かを決めたのを察して尋ねました。
「それで一体」
「延暦寺の話を終わらせるのじゃ」
信長はこう日本に答えます。
「そうする。今からのう」
「?終わらせるとは」
何をするのか、日本には全くわかりませんでした。
そして、です。信長は早速軍勢を延暦寺に向けました。そして。
何とです。長い歴史を誇り多くの高僧を出してきた延暦寺を焼き打ちです。火をつけてそうしてです。完全に灰にしてしまったのです。
これには誰もが驚きました。
「お、鬼か!?」
「言葉もない」
「まさかそんなことをするとは」
皆唖然となりました。信長のその焼き打ちにです。
そうして批判の声が木霊します。けれど日本はこう思ったのです。
「こうなるのも運命でしょうか」
これまでの延暦寺のしてきたことを思い出してのことでした。
「信長さんがしたのではなく。天がしたことかも知れません」
延暦寺が自ら招いたことではないかと考えたのです。信長にとってはです。これも天下の為に必要なことだったのでしょう。少なくとも延暦寺の横暴はなくなりました。

第千八百八十五話　完

2011・2・10

第千八百八十六話　延暦寺とバチカン

第千八百八十六話　延暦寺とバチカン

「何と、バチカンはそこまで凄かったのですか」
「そうだ。それがバチカンだった」
ドイツが日本にバチカンの過去をお話しています。日本はそれを聞いて驚いています。
とにかくです。腐敗していたのです。その腐敗の凄さといえば。
「我が国の延暦寺の比ではありませんね」
「やはりそう思うか」
「あの、延暦寺のお坊さん達がそのことを聞いたら」
バチカンの腐敗を聞けばです。どうなるかというのです。
「腰を抜かして驚いてしまいますが」
「俺もそう思う。延暦寺の腐敗なぞはな」
ドイツはドイツで日本から延暦寺がどういった状況だったのか聞いていました。その他の色々なお寺のこともですが。それを踏まえての言葉でした。
「大したことではない」
「末世というものではありませんね」
「そうした状況がかなり続いた」
バチカンは腐敗したままだったのです。
「教皇もな。権力志向だったり陰謀家だったりな」
「メディチ家やボルジア家ですね」
「そうした家の教皇もいた。金銭や女性の問題も延暦寺の比ではなかった」
「それがバチカンだったのですか」
「そうだ。日本の延暦寺なぞ問題ではなかった」
それがバチカンだったのです。信長ですらそれを聞いたら唖然とするような、そこまでの腐敗が欧州に長い間はびこってしまってい

たのです。

第千八百八十六話　完

2011・2・10

第千八百八十七話　殲滅戦

第千八百八十七話　殲滅戦

延暦寺を焼いた信長、さらにでした。
一向宗に対してもです。徹底的な態度で挑んだのでした。
「最早容赦することはないわ！」
一向宗相手に多くの家臣を失っています、その中には実の弟も入っていました。それもあってでしょうか。信長の態度は本当に徹底していました。
数万単位で殲滅していきます。それは日本ではこれまでなかったことです。
それを見て多くの人が唖然となりました。日本妹もです。
真っ青になってです。日本に対して言います。
「兄上、あれではあまりにも」
「しかし。一向宗をあのままにしておけばです」
「より危険ですか？」
「はい、彼等も横暴を極めていました」
実際に加賀等でその素行はいいとはいえませんでした。しかも死ねば極楽に行けると思っていたので。それで余計にやりたい放題だったのです。
それを見てきたからこそ。日本は言いました。
「あの人達も。あの人達を操っているお坊さん達もです」
「ああなるのはですか」
「延暦寺と同じです」
具体的にはそういうことでした。
「ああなるべくしてああなっているのです」
「そうなのですか」
日本妹も頷くしかありませんでした。とにかく信長の壮絶な殲滅戦によってです。一向宗も大人しくなりました。このことは確かで

す。

第千八百八十七話　完

2011・2・11

第千八百八十八話　地獄の異端審問

「日本なんか甘い甘い」
「そうでしょうか」
「そや、信長さんも江戸の上司の人も優しいわ」
スペインがこう日本にお話します。
「それこそ欧州の異端審問はや」
「私のところどころではないですか」
「全然ちゃう。疑われるだけでや」
どうなってしまうかというのです。
「拷問のフルコースやで」
「そして火炙りですね」
「そや。それと比べたらどれだけ甘いか」
「信長さんはかなり凄かったですが」
「けど一向宗とか延暦寺だけやろ。わかってる奴だけを殺してたやろ」
信長とて無闇に殺した訳ではありません。はっきりとそうだとわかっている相手だけです。そうでなければ無闇に手にかけたりはしなかったのです。
「アルビジョワの時はや。殺してからそこからや」
「異端かそうでなかったかをですか」
「神様に選んでもらってたんや」
要するに無差別だったのです。
「日本ではそういうことないやろ」
「そこまでいくと無茶苦茶では？」
何かロシアと大して変わらない壮絶な、血も凍る様な歴史がです。欧州にもあります。これが各国というのが一番怖いことであります。

第千八百八十八話　完

2011・2・11

第千八百八十九話　はくだみ

第千八百八十九話　　はくだみ

遂に近江と越前を平定した信長、しかしです。
今回もまた、です。天下の多くの人達が顔を顰めさせるようなことをしたのです。
「御三方の髑髏をですか」
「そうだぎゃ、細工してはくだみにして晒しものにしたぎゃ」
「流石にそれは嘘では？」
日本も唖然となって尾張に問います。
「あの、そこまでするとは」
「その証拠があれだぎゃ」
こう言って尾張が指し示した三つのはくだみこそはでした。
「あれを見てそう言えるぎゃ？」
「あの三つがですか」
「その通りだぎゃ。信長はそんな恐ろしいこともするぎゃ」
尾張もこれまで以上に引いています。
「そのことを忘れてはいけないぎゃ」
「ううむ、まさか本当だったとは」
日本も青い顔になっています。
「信長さん、これは」
「ちょっと。幾ら何でもないぎゃ」
「そうですね。これは」
ましてやその髑髏の一つは妹婿だった人です。その人に対してそこまでする、これは流石に誰も支持できないものがあります。
細工をした人達もどう思ったのでしょうか。それはわかりません。
しかし髑髏をはくだみにして晒した、信長はそこまでしたのです。

第千八百八十九話　完

2011・2・12

第千八百九十話　けれどそれでは飲まなかった

第千八百九十話　けれどそれでは飲まなかった

「そういう話はうちにもあるあるぞ」
「ええ、そうでしたね」
日本は今は中国とお話しています。そのはくだみのことをお話するとです。中国は日本に対して自分のお家にもあったとお話します。
「刺客も出たりしたある」
「刺客列伝にありますね」
史記という本に残っているお話です。まだ中国が二千歳にもなっていない頃のことです。
「確かそうでしたね」
「そうある。けれどその髑髏で酒は飲まなかったあるか」
「信長さんはお酒は駄目でしたので」
とにかく下戸だったのです。
「それでなのです」
「そうあるか。うちはそれで飲んだあるが」
「実際に使ったのですか」
「その場面をこの目で見て覚えているあるからな」
かなり昔だけれど覚えているのです。
「しかし。日本でそこまでする人は」
「信長さんだけでした」
「平家の人が憎い相手の頭を蹴鞠にしていたあるな」
「あれは本当かどうか少しわかりませんが」
「とにかく。日本では珍しい話あるな」
こう言う中国でした。信長のしたことは日本の長い歴史において他にないことでした。そうした意味で苛烈な人でもあったのです。

第千八百九十話　完

2011・2・12

第千八百九十一話　鉄砲

第千八百九十一話　鉄砲

信長は一向宗の他にもです。色々な勢力と戦っていました。
ある戦においてです。
鉄砲をこれでもかと集めて。その三段射撃で勝ちました。
「三千の鉄砲ですか」
「もう凄かったぎゃ」
尾張がまだ驚きを隠せないといった顔で日本にお話しています。
「三段に撃って。それでぎゃ」
「勝ったのですか、あの赤い軍勢に」
「そうだぎゃ。確かに兵力は信長様の方が上だったぎゃ」
二倍以上の兵力差がありました。それを考えると何かもうはじまる前から戦の結果は決まっていた感じです。しかしそこに加えてなのでした。
信長は物凄い数の鉄砲を揃えてです。それで戦ったのです。
「あんな戦いは今までなかったぎゃ」
「そうですね。私もはじめて聞きました」
「これは凄いことになるぎゃ」
尾張の言葉は熱さえ帯びています。
「あの上司を破ったからには」
「そうですね。本当にいよいよ」
「天下が見えてきたぎゃ」
尾張はこう言いました。
「まさかとは思ったけれど遂にぎゃ」
「統一ですね。遂に」
日本もそのことを考えます。それが現実のものになろうとしていました。

第千八百九十一話　完

2011・2・14

第千八百九十二話　スウェーデンでは

第千八百九十二話　スウェーデンでは

スウェーデンは日本から信長の三段撃ちを聞いてからこう言いました。

「うちにもあった」

「三十年戦争の時だ」

「あのグスタフ＝アドルフさんのですね」

「そだ。立って撃つ奴と」

まずはその人でした。

「座って撃つ奴、寝て撃つ奴」

「それでなのですね」

「テルシオに勝った」

こちらは槍兵と鉄砲隊を混成させた巨大な方陣です。スペインが得意としていて三十年戦争ではオーストリアさんもよく使っていたのです。

当時はこのテルシオが無敵でした。しかしなのです。

スウェーデンはそのテルシオに対して。槍と鉄砲を分けて鉄砲の割合も多くしてです。その火力でテルシオを破ってしまったのです。

「ブライテンフェルトで勝ってそっからだった」

「その時私の国のことは」

「知らんかった。けれどできた」

「何処でも考えることは同じなのでしょうか」

日本はスウェーデンの話を聞きながら述べました。

「鉄砲の使い方は」

「沢山続けて撃つ。これが強い」

そこから考えるとです。鉄砲の使い方はおおよそわかってくるのでしょうか。スウェーデンもまた日本と同じことをして勝利を収めていたのです。

第千八百九十二話　完

2011・2・14

第千八百九十三話　越後も甲斐も

信長にとっての幸運は、です。
「あの人達が去られましたね」
「はい、甲斐も越後も」
日本妹がお兄さんに答えています。
「信長さんにとって一番恐ろしい人達が」
「あの人達も安芸もですね」
そこにも物凄い上司の人がいたのです。しかしなのでした。
「相模も。あの人がいなくなりましたし」
「信長さんに対抗できるだけの人はいなくなりましたね」
「これはあの人にとって有利です」
そのことからです。この結論が出ました。
「あとは。このまま」
「天下統一でしょうか」
「本願寺も降伏は時間の問題ですし」
遂にそこまで追い詰めたのです。多くの犠牲を払い殲滅戦を経たうえで、です。宿敵本願寺もそこまで追い詰めている状況なのです。
「後はです」
「本当に。信長さんが進まれるのは」
「天下統一だけです。それだけです」
最早信長の前に立ちはだかる相手はいないのでした。日本もこう言います。
「さて、どういった天下になるのか見せてもらいましょう」
彼も信長が天下を統一するのだと確信していました。思えば尾張と一緒にいた時にやって来たあのうつけがです。本当に大きくなったものです。

第千八百九十三話　完

2011・2・15

第千八百九十四話　宣教師から

第千八百九十四話　宣教師から

日本はスペインとお話しながらです。地球儀を観ています。その地球儀は何かというとです。

「これとこの時計がやねんな」

「はい、信長さんがフロイスさんから貰ったものです」

「あの時は贈りものとしてええもんやったからな」

スペインもです。こうした贈りものをよくしていたのです。

「中国の上司の人にもしてたなあ」

「あれはポルトガルさんだったでしょうか」

「ああ、あいつとは少しの間上司の人が同じやったんや」

それでスペインも信長のことはある程度知っています。覚えているといった方がいいかも知れません。もう昔のことになっていますが。

「それで俺もこの地球儀をや」

「贈りものにされていましたか」

「そうや。いや、ほんま懐かしいわ」

スペインはにこやかに笑って日本にお話します。

「信長さんやフロイスと一緒に日本にも会うたな」

「そうでしたね。そういえばあの時はよく御会いしましたね」

日本も微笑みになっています。

「懐かしいことです」

「そうして今もこうして二人で話するってな」

「妙に。懐かしいものを感じますね」

「ほんまやなあ」

二人は地球儀、それに時計を観ながらお話をします。信長が観たその地球儀はです。今もしっかりと回すことができるのでした。

第千八百九十四話　完

2011・2・15

第千八百九十五話　安土の城

第千八百九十五話　安土の城

おおよその敵を倒してしまったか追い詰めた信長はです。近江の地に凄いお城を築きました。

青い瓦に赤い壁、金箔まで貼ったそれを見てです。日本も驚きました。

「これは一体!?」

「おう、これがわしの新しい城じゃ」

信長が誇らしげに日本に説明します。

「安土城じゃ」

「安土城ですか」

「そうじゃ。わしはここから天下を見るぞ」

こう日本に言うのです。

「あと石山にもじゃな」

「あの本願寺の」

「あの場所にも城を築こうかと思っておるのじゃ」

そこにもだというのです。

「しかしまずはこの城じゃ」

「安土城ですか」

「わしの力を天下に知らしめる。その為の城よ」

「そしてここから政を執られますか」

「日本、御主の上司になるぞ」

信長はにこりと笑って日本にこうも言いました。

「わしが上司になったら何かと楽しいからな」

「一体何をされるおつもりですか?」

「それはもうすぐわかるわ」

日本に対して大きく口を開いて笑ってみせるのでした。信長は遂にこんなお城まで築いてしまったのです。まさに天下統一は目の前

でした。

第千八百九十五話　完

2011・2・16

第千八百九十六話　平安楽土

第千八百九十六話　平安楽土

信長の築いた安土城は今はもうありません。けれどです。
日本はアメリカに対してです。そのお城のことをお話します。
「とにかく。凄いお城でした」
「日本にもそんな城があったのかい」
「はい。夜になると灯りをつけたこともありました」
そうして天守閣を夜空に浮かび上がらせたのです。信長はそうした催しも大好きだったのです。それも皆にそれを見せたのです。
「それは見事なものでした」
「日本って大人しいと思っていたぞ」
「あの人は少し違っていました」
実際は少しどころではなかったりします。
「そうした派手なことも好きな方でした」
「面白い人だったんだな」
アメリカは日本のお話を聞いて信長についてこう言いました。
「僕の上司にもなれそうな人だな」
「そうかも知れませんね。思えば」
日本はまた、です。遠い目になりました。
そうしてそのうえで、です。こう言うのでした。
「不思議な方でした」
「お城はなくなったけれどその人は今も日本の心の中に生きているんだな」
「そうですね。その通りですね」
アメリカの今の言葉にです。日本は微笑みました。確かにお城はもうありません。けれど信長はです。今も日本の中にいるのです。

第千八百九十六話　完

2011・2・16

第千八百九十七話　夢幻の如く

第千八百九十七話　夢幻の如く

今にも天下を統一せんとしていた信長がです。急にいなくなってしまいました。

日本の上司はお猿さんによく似た顔の人になりました。陽気で気さくで気前のいい太閤さんです。この人も中々以上のやり手です。

けれど日本はです。信長を懐かしんでこう言うのでした。

「あの方が天下を統一されれれば」

「どうなっていたでしょうね」

「見たかったですね」

こう妹にも言います。

「あともう少しでしたが」

「それが急にですから」

「人間五十年ですね」

日本はあの人がよく舞っていた敦盛を思い出しました。

「まさに夢幻の如くです」

「本当に。四十九歳ですか」

「ほぼ五十年。その通りでした」

「けれどあの人もことは」

「はい、忘れられません」

忘れてしまうにはです。あまりにも強烈だからです。

それで日本はです。懐かしむ目でまた言いました。

「あの人とまた」

「御会いしたいですね」

遠くを見てです。二人で話すのでした。信長は急に日本の前からいなくなりました。けれど二人の中にはです。その記憶が残るのでした。

第千八百九十七話　完

2011・2・17

第千八百九十八話　超時空天下人ヒデヨシ

第千八百九十八話　超時空天下人ヒデヨシ

信長の次に日本の上司になった太閤さん、この人は韓国に物凄く嫌われています。

その理由は当時明という名前だった中国に攻め込む時に韓国のお家を通ったからです。韓国はそのことを今でも言うのです。

「あいつが俺の国の何もかもを破壊したんだぜ！」

「しかし一五七三年にはまだ信長さんの頃で私の国は統一されていませんでしたが」

日本が冷静に韓国に突っ込みを入れます。

「貴方は何かの映画でそう仰っていましたが」

「一万年の歴史を誇りユーラシア全土から北米にまで影響を及ぼした俺の国の文明も文化も根絶したんだぜ！」

しかし韓国はまだ言います。

「しかも素晴しい歴史を書き残した歴史書を全部燃やし」

「その一万年のですか」

「嘘の歴史書を置いて尚且つ華麗な建築物を全部焼いて壊したんだぜ！」

話が段々凄くなっていきます。

「技術も消し去り陶芸家を根こそぎ強制連行して！」

「とりあえず焼き物のことはある程度真実ですが」

捕虜として日本に連れて行ったのです。それが有田焼きとかのはじまりです。

「しかしそれは」

「あまつさえ全土を焼き尽くし禿山だらけにしたんだぜ！」

尚韓国は元々禿山だらけです。今もそれは同じです。

「三百年間何もできないまでに破壊してくれたんだぜ！」

「あの人はそんなに凄かったのですか」

ここまで聞いて日本も唖然です。どうも韓国の中で太閤さんは時空さえ超えた最凶最悪のコンキレスタドールの様です。ほぼＲＰＧのラスボスです。

第千八百九十八話　　完

２０１１・２・１７

第千八百九十九話　憎むべきジャビット

第千八百九十九話　憎むべきジャビット

奈良に大阪、それに尾張に三重といった人達がです。物凄く嫌っているものがあります。それは。

「何がジャビットじゃ！」

「いらんわあんなもん！」

「そうだぎゃ！巨人なんかこの世から消え去るぎゃ！」

「にーーーにーーー！（翻訳：その通り！）」

この人達は巨人が大嫌いなのです。その嫌いさというと。

「甲子園の一塁側で巨人なんか応援してみい！」

「即刻冥土送りや！」

「そうだぎゃ！もう一回杉下のフォーク見せてやるぎゃ！」

「にーーー！（翻訳：俺は中日も阪神も好きだ！）」

こんな感じです。大阪ではいつもです。あの六甲おろしがかかっていますし尾張では燃えよドラゴンズです。とにかくこの人達は巨人が嫌いです。

そんなこの人達を見てです。日本は言いました。

「何か。皆さん巨人が嫌いなのですね」

「好きになる要素がありませんわ！」

「そうだぎゃ！」

大阪と尾張が言います。

「南海は別所強奪されたんや！」

「落合も一時巨人に獲られてたわ！」

どうも巨人の無法な選手強奪が特に嫌われているようです。

「親会社赤字になったんや！もう汚い補強はできんで！」

「これから一億年はギッタンギッタンにしたるぎゃ！」

どの人達も実に素晴しいことに巨人が大嫌いです。この辺り地方色とさえ言えます。

第千八百九十九話　完

2011・2・18

第千九百話　博多も

第千九百話　博多も

九州にはホークスがあります。このチームは昔南海といって大阪にありました。けれど今は移転してそれで九州にあるのです。

このチームは博多の贔屓です。ところがこのチームもです。

「工藤に小久保のことは忘れんたい！」

「あの人達のことですね」

「そうたい！小久保は戻ってきたにしても」

謎の強奪と言われています。巨人は平気で他の球団の選手を汚い謀略で強奪するチームなのです。

「絶対に忘れんたい！」

「巨人は九州でも嫌われていますね」

そのことを再認識する日本でした。

「日本の各地で。それこそ」

「交流戦ではいつも叩き潰すことを念頭に置いているたい！」

巨人はパリーグでも嫌われています。

「絶対に！許さんたい！」

「ううむ、私は特に贔屓のチームはないですが」

国家としてです。流石に贔屓のチームはありません。

しかし各都道府県はです。それぞれの地域のチームを贔屓しているのです。だから巨人は何処でもかしこでも忌み嫌われているのです。

そしてです。博多は言います。

「今シーズンこそパリーグを制し巨人が来たら完全粉砕たい！」

「シリーズ、出たいものですね」

ホークスはまずはそこからなのでした。どうしてもクライマックスシリーズでは負けてしまう。何か呪いがかかっているのではないかとさえ思えます。

第千九百話　完

2011・2・18

第千九百一話　イケメンになっても

第千九百一話　イケメンになっても

あの憎むべき巨人のマスコットといえば兎です。ですがやはりこのマスコットも。

「そんなもん誰が好きになるかい！トラッキーに決まってるわい！」

「ドアラやなくて何がいいんだぎゃ！」

大阪も尾張もです。強烈な反発を見せています。二人共それぞれの贔屓のチームのマスコットを出して兎ことジャビットを嫌悪しています。

「不吉や！見るだけでもそうなるわ！」

「今年も中日優勝だぎゃ！」

とかく全国単位では不人気なジャビットです。そのせいでしょうか。

何か格好よくなりました。コミカルな外見が急に八頭身になりました。それで人気を得ようというのでしょうか。

しかしそうなってもなのでした。二人は。

「きもいわ！モナーの八頭身かい！」

「どうせなら千頭身いくぎゃ！」

こう言ってやっぱり否定します。

「八頭身のモナーは見慣れたけれどや」

「そんなの誰が見慣れるんだぎゃ」

「そやそら、きもいだけや」

「巨人のものは何でも駄目だぎゃ」

何か尾張が本音を出しています。

とにかくです。イケメンジャビットも不人気です。大阪と尾張では。

しかも見ればです。この二人だけでなくです。仙台も最近は。

「鷲が来てくれたからもう兎はいらないから」

こちらでも兎の人気は落ちているのでした。巨人の人気が落ちる、どうやら日本のプロ野球は健全な方向に進んでいるようです。

第千九百一話　　完

２０１１・２・１９

第千九百二話　止まらぬ不人気

第千九百二話　止まらぬ不人気

日本は野球自体は好きですが特に贔屓のチームはありません。この辺り国としてどのチームも贔屓する訳にはいかない事情もあります。

「どのチームも私のチームですしね」

「そうですよね。日本にあるチームですから」

妹がお兄さんの言葉に応えます。けれど彼女はここでこんなことを言いました。

「けれど。かつてはあんなに人気のあったチームなのに」

「巨人、大鵬、卵焼きでしたね」

「相撲はあの有様で。卵焼きは今でも人気がありますけれど」

「巨人は。もう」

「やっぱり。驕り昂ぶり過ぎたのですね」

これは否定できません。勝手に球界の盟主を自称してやりたい放題してきたのですから。それを傲慢と言わなければ傲慢という言葉は成り立ちません。

「マスコミでは持て囃されていましたけれど」

「ですがネットではですからね」

「親会社の社長さんの不人気も凄いですし」

死ねば国を挙げて祝勝会だとさえ言われています。

「何か。もうあのチームは」

「ですが嫌いな人が多くその負けを見てです」

日本はここで冷静に言います。

「国民の皆さんの元気が出るならです」

「それもいいのですね」

「そうも考えられますね」

ここに答えが出ました。巨人が負けてそれを見る国民の多くが元

気になる、巨人はそうしたチームなのです。まさにです。巨人には無様な負けがよく似合う、です。

第千九百二話　　完

２０１１・２・１９

第千九百三話　日本のお菓子

第千九百三話

日本のお菓子

日本はお菓子も随分と作っています。
そのお菓子もまた独特で。イタリアもそれを見て目を丸くさせています。
「うわあ、本当に日本らしいね」
「私らしいですか」
「うん、甘いけれど上品な味だし」
イタリアは実際に今和菓子を食べています。
「それに外観もいいしね」
「お菓子は奇麗でないと意味がないと思いますので」
それで外観も凝っているというのです。日本は料理の外観にもかなり凝ります。もうそれは芸術と言ってもいい位凄いものになっています。
「それでそうしているのですが」
「それが凄いよ。日本のお菓子って美味しいよ」
イタリアはにこにことしながら食べています。
「日本っていつもこんなお菓子食べてるんだ」
「まあそうです」
お饅頭に羊羹、砂糖菓子。本当に色々あります。
「よかったらもっと食べられますか？」
「うん、頂戴」
イタリアは笑顔で応えます。そうしてです。
何時の間にかお家の人達も呼んでです。皆でお菓子を食べます。
そんな大人気な日本のお菓子です。イタリアが食べても美味しい、外観も奇麗、そんな何もかもが揃っている素晴しいお菓子なのです。

第千九百三話　完

2011・2・20

第千九百四話　お菓子が栄えたのは

第千九百四話　お菓子が栄えたのは

「お茶やコーヒーがあるとですね」
「はい、それと一緒にです」
日本は今はオーストリアさんとお話しています。日本は抹茶、オーストリアさんはコーヒーを飲んでいます。そうしながらお話をしています。
「お菓子も食べたくなりますから」
「そうです。私もそれで」
「お菓子をですね」
「それで自分で作ってです」
「私と同じですね、それは」
オーストリアさんの前にはザッハトルテがあります。日本の前にはういろうです。尾張が大好きな羊羹によく似たお菓子です。これも美味しいです。
「お菓子があるとお茶は」
「引き立てられますね。それにお茶もです」
「お菓子があるとさらに美味しくなります」
「御互いにとっていいですから。ですから」
「お茶やコーヒーがあるとどうしてもお菓子を」
それでなのです。二人はお菓子が好きになったのです。
そうした事情がありますので。オーストリアさんはさらにお話します。
「貴方は最近はコーヒーも」
「はい、飲みます」
「ではこういったお菓子もお好きですね」
オーストリアさんは微笑んで日本にもザッハトルテを勧めます。
そして日本もです。オーストリアさんに対してういろうを勧めるの

でした。

第千九百四話　完

2011・2・20

第千九百五話　いつも食べる二人

第千九百五話　いつも食べる二人

「本当に美味しいですよ」
「いつも通りまずいんだぜ」
台湾と韓国です。それぞれ別々に日本のお家に来て二人で、です。
今日も日本のお菓子を食べています。本当にこの二人はいつも日本の傍にいます。
その感想がです。この言葉なのでした。
「日本さんはお菓子も繊細に作られますね」
「味が薄いんだぜ。自己主張が弱いんだぜ」
「あんたと一緒にしないの」
「俺は本当のことを言ってるだけなんだぜ」
ここで喧嘩をはじめるのもいつも通りです。相変わらず仲が悪いです。
けれど二人共です。日本のお菓子を食べていることは同じです。
そうしてです。
台湾がです。こんなことを言いました。
「和菓子や洋菓子だけ作られるのではないんですね」
「はい、最近は」
これまで二人を見ているだけだった日本も答えます。
「スナック菓子等も作ります」
「いいですよね、そちらも」
台湾はにこりと笑って日本に応えます。
「私も好きなんです」
「そうですか。台湾さんもですか」
「ですから。日本さんのスナック菓子も食べたいです」
にこりと笑っての言葉でした。台湾はこのことが言いたかったのです。日本のお菓子なら何でも好きな、そうした女の子なのです。

第千九百五話　完

2011・2・21

第千九百六話　スナック菓子も

第千九百六話　スナック菓子も

台湾と韓国は日本のスナック菓子も食べてみます。すると。

「これもいいですね」

「どれもこれもまずいんだぜ」

またこの反応でした。韓国はさらに言います。

「だから味が薄いんだぜ。日本はそこがなっていないんだぜ」

「そういうあんたの方が食べてるわね」

「育ち盛りだから当然なんだぜ」

「一万歳なのに？自称だけれど」

文句をつけながら日本のスナック菓子を食べ漁る韓国に対して突っ込みを入れます。台湾も韓国の自称はいつも聞いているのです。

「それでも成長期なの」

「国家も人間も細かいこと気にしたら駄目なんだぜ」

「そうは言うけれどね」

それでもでした。台湾は突っ込まざるを得ないのでした。無意識的に。

実際に韓国はお菓子を食べまくっています。台湾の何倍もです。日本のスナック菓子も食べているのです。

それを見てです。日本は無言でスナック菓子をまた出しました。台湾がその日本に対して言います。

「あの、こいつに気遣いは無用ですよ」

「いえ、そういう訳にはいきません」

しかし日本はこう台湾に述べます。

「御客様ですから」

「いつも来てますけれど」

「それでも御客様ですから」

こう言って韓国にスナック菓子をご馳走し続ける日本でした。何

だかんだで日本の作ったものを誰よりも食べる韓国であります。

第千九百六話　　完

２０１１・２・２１

第千九百七話　アメリカからの誘い

第千九百七話　アメリカからの誘い

台湾に言われてです。日本は自分のお家のスナック菓子に自信めいたものを持つに至りました。丁度そうした時になのでした。

日本にです。アメリカから声がかかりました。

「パーティーですか」

「そうなんだ。皆でお菓子を持って集まらないかい？」

笑顔で日本を誘います。

「他にも一杯来るけれど日本も」

「わかりました。それでは」

日本はすぐにアメリカの誘いに頷きました。

「出席させてもらいます」

「さて、これで日本も来るぞ」

アメリカは日本が頷いてくれてさらに明るい顔になります。

「他には中国や韓国やギリシアも来るんだ」

「ギリシアさんもですか」

「そうなんだ。何か来るって言って」

「ううむ、何か一人穏やかな方がですか」

他の三人はかなりあれです。特に韓国は。

「何か妙な組み合わせですね」

「そういえばそうだな。けれどそうした顔触れもいいと思うぞ」

「確かに。賑やかなばかりがパーティーではありませんし」

「のんびりもたまにはいいと思うぞ」

こうしてです。日本はアメリカ主催のお菓子パーティーに参加することになりました。ただ一人、ギリシアだけが変わった面子であります。

第千九百七話　完

2011・2・22

第千九百八話　トルコは来なかった

第千九百八話　トルコは来なかった

「何でい、ギリシアが来るってのかよ」
「そうなんだ、快く頷いてくれたぞ」
アメリカはトルコにも誘いをかけます。けれどなのでした。
彼はギリシアも来ると聞いてです。仮面の下の表情を一変させました。仮面だから当然顔は見えないのですけれど。それでも表情がわかる不思議です。
その表情で。トルコはアメリカに言います。
「じゃあ俺はいいでえ」
「あれっ、来ないのかい？」
「てやんでい、何でギリシアが来るんでい」
実に忌々しげに言っています。
「俺はあいつだけは駄目なんでい」
「そう言わずにだ。来たらどうだ？」
アメリカはわざと空気を読まずトルコに言います。
「きっと楽しいぞ」
「遠慮するぜ。折角だけれどな」
はっきりと断るトルコです。
「あいつと一緒にいたらそれこそ」
「喧嘩になるのかい？」
「絶対にだよ。だから断らせてもらうぜ」
「わかったよ。残念だけれどな」
「あまり残念に見えねえのは気のせいかい？」
こうしてトルコはパーティーに来ないのでした。ただし彼はです。日本も参加するということは全く聞いていませんでした。彼にとって残念なことに。

第千九百八話　完

2011・2・22

第千九百九話　アメリカが食べてみた　☆

第千九百九話　　アメリカが食べてみた　☆

日本が誇るたけのこのさとをです。パーティーに持って行きました。するとです。

最初に食いついたのはアメリカでした。

「あっ、これ食べていいかな」

「はい、どうぞ」

こうしてアメリカがまず食べてみました。するとです。

すぐに隣に行きました。そうして食べるのはです。

「これいいんだよな」

「それは確か」

「そうだよ、ハーシィズだよ」

アメリカお気に入りのです。そのお菓子なのでした。アメリカはそれがお気に入りなのです。

「美味しいんだよ、これ」

「甘いですね、確かに」

「その甘さがいいんだよ」

アメリカはこう言いながらそのお菓子を食べます。

「お菓子は甘くないとさ。やっぱり」

「たけのこのさとも甘いと思いますが」

「その甘さが違うんだよ」

「ううむ、確かにこれは」

日本もそのハーシィズを食べてみます。その甘さはといいますと。

少なくとも日本にはない甘さです。日本の作るお菓子にはない、とにかく強烈なまでの甘さがそこにあるのでした。

それを食べてです。日本も言います。

「凄く甘いですね」

「僕はこれがいいんだ」

かくしてアメリカはたけのこのさとは一口だけでした。どうやら彼には物足りなかったようです。

第千九百九話　　完

２０１１・２・２３

第千九百十話　ハーシィズ

第千九百十話　ハーシィズ

そのアメリカのお菓子のハーシィズはです。どんなものかというとです。

「チョコレートがメインでもですね」

「そうなんだ、中に色々入れているんだ」

アメリカは日本に誇らしげに話します。

「キャンディやキャラメルなんかをさ。凄いだろ」

「はい、本当に甘いです」

「僕は甘さを極めたいんだ。だからなんだ」

「ただ。あれですね」

「あれとは？」

「私の甘さとは本当に違いますので」

日本はどちらかというと控えめな甘さが好きなのです。この辺りは好みの違いです。

「ですからこの甘さは」

「嫌なのかい？」

「嫌ではありませんが抵抗はありますね」

そうだというのです。

「どうにも」

「そうなのかい」

「沢山は食べられません」

日本はそうなのでした。そもそもあまり沢山食べない人でありま す。

「一個でいいでしょうか」

「一個なら充分だぞ」

日本にとってハーシィズは少し甘過ぎるみたいです。この辺りの違いがどうしても出てしまいます。これは仕方のないことなのでし

ょう。

第千九百十話　完

2011・2・23

第千九百十一話　あるんだぜ　☆

第千九百十一話　あるんだぜ　☆

アメリカの次に来たのは韓国です。この人はまず文句からはじまりました。

「何でここでまで日本のものを食べなければいけないんだぜ？」

「嫌なら別にいいのですが」

「まあそこは仕方ないんだぜ。食ってやるんだぜ」

こう言いながらです。食べるのが韓国です。

かくしてたけのこのさとを食べます。そうしてです。韓国はこんなことを言うのでした。

「これウリナラにもあるんだぜ」

「本当ですか？それは」

「こんなことで嘘は言わないんだぜ」

嘘でなければ強烈な勘違いの場合もあります。韓国の言うことは今一つどころかかなりあてにならないところがあるのです。本人に自覚はありませんが。

「とにかくなんだぜ。俺今ここに持って来てるんだぜ」

「そうなのですか」

「そうなんだぜ。日本にも食わせてやるんだぜ」

そしてです。韓国はこんなことを言いました。

「早速なんだぜ。食べるんだぜ」

「どうも。変わった展開になりましたね」

「遠慮することはないんだぜ」

妙なところで気前のいい韓国です。

「じゃあ。少し待つんだぜ」

「わかりました」

かくしてです。韓国は日本にそのお菓子をご馳走することになりました。果たして本当にです。そのお菓子は実在するのでしょうか。

第千九百十一話　完

2011・2・24

第千九百十二話　本当にあった

第千九百十二話　本当にあった

韓国が戻ってきました。するとその手には。
「ほら、これなんだぜ」
「むっ、それは確かに」
「そうなんだぜ。ウリナラのお菓子なんだぜ」
見ればです。殆どそのままのお菓子がです。韓国の手の中にありました。誰がどう見てもです。日本のたけのこのさとでありました。
「ちゃんとうちにもあるんだぜ」
「ううむ、何時の間に真似をされたのか」
「何っ、真似ではないんだぜ」
韓国はそのことは必死に否定します。顔がムキになっています。
「ちょっと参考にしただけなんだぜ」
「ちょっとですか」
「そうなんだぜ。参考にしただけなんだぜ」
こう言うのでした。
「それだけなんだぜ」
「ではやはり」
「だから参考なんだぜ」
まだ言います。
「それだけだからいいんだぜ」
「いつものことだったのですね」
「だから参考にしただけなんだぜ」
何はともあれです。本当にそのお菓子はあったのでした。そして食べてみるとです。味も何だか。たけのこのさととそっくりなのでした。

第千九百十二話　完

2011・2・24

第千九百十三話　お持ち帰り　☆

アメリカ、韓国と続いてです。次にやって来たのは。
「これが日本のお菓子あるな」
「はい、たけのこのさとです」
中国でした。日本が何かを説明します。
「中国さんも召し上がられますか？」
「成程、チョコレート菓子あるな」
中国はお菓子のパックのその名前を確認しています。どんな種類なのかもです。
それを終えてからでした。
何とごそっと持って行こうとしています。日本がそれを見て尋ねました。
「召し上がられるのですね」
「そうある。とりあえず貰うある」
こう日本に言います。
「食べないということはないあるから安心するよろし」
「それはいいのですがお一人で召し上がられるのでしょうか」
「あっちに香港もいるある。二人で食べるあるよ」
彼だけで来てはいませんでした。香港も一緒でした。
「だからあっちで二人で食べるあるよ」
「そうですか」
「それじゃあこれだけ貰っていくあるな」
「はい、それでは」
「失礼したある」
何か妙に平和にです。中国はたけのこのさとを一杯持って帰ったのでした。そしてそのうえで、です。香港と二人でお菓子を食べるのでした。

第千九百十三話　完

2011・2・25

第千九百十四話　やっぱりお菓子も

第千九百十四話　やっぱりお菓子も

日本は中国のところに来てです。こう尋ねるのでした。

「中国さんは昔からお菓子は」

「そうあるぞ。色々作ってるあるぞ」

日本から貰ったたけのこのさとを食べながら日本に答えます。

「お茶があるからそれと一緒に食べるある」

「そうですね。それで、ですよね」

「その通りある。それで最近はある」

「そうしたスナック系もですね」

「食べるある。紅茶も飲むあるぞ」

食べ物に関しては造詣の深い中国、こだわりはありません。

「少なくともイギリスよりは美味しい紅茶やお菓子があるあるぞ」

「イギリスさんはちょっと」

日本も知っています。イギリスの料理が何かは。

「紅茶は流石に美味しいのですが」

「お菓子はまだましあるがな」

そんなイギリスの話から戻って、でした。あらためて日本のお菓子のお話になります。

「日本のこうしたものを食べていたら。僕も作ってみたくなるあるな」

「チョコレートのお菓子をですか」

「美味しいある。チョコレートもいいあるな」

「チョコレートは病みつきになりますから」

「カロリーが心配あるが本当に美味しいある」

中国はたけのこのさとに満足しています。香港もその横で一緒に食べています。二人にとってはいいお菓子なのは間違いないようです。

第千九百十四話　完

2011・2・25

第千九百十五話　見向きもしない　☆

第千九百十五話　見向きもしない　☆

パーティーにはイタリアも来ていました。そのイタリアは日本にすぐに挨拶してきました。

「日本もいたんだ」

「はい、イタリア君もだったんですね」

「そうなんだ。こうしてお菓子を皆で食べるのもいいよね」

「そうですね。これも面白いです」

「お菓子美味しいし」

イタリアは早速お菓子を食べだしています。

「ねえ、日本はどういうお菓子が好きかな」

「どんなものがですか」

「うん、どんなお菓子が好き？」

イタリアは日本に対して尋ねます。

「よかったら教えてくれるかな」

「そうですね。特に嫌いなものはないですね」

「けれど和菓子が一番？お饅頭とか」

「大好きです」

実際にその通りなので素直に答える日本でした。

「あれはいいものです」

「今度日本のお家に行った時にご馳走になっていいかな」

「御待ちしていますのでその時はどうぞ」

「期待してるよ。今こうして食べるお菓子もおいしいけれどね」

こんなことをお話しながらです。

イタリアはすぐ傍にあるたけのこのさとには気付きもしないですし見向きもしません。まるで石が道にあるかの様にです。全く気付かないのでした。

第千九百十五話　完

2011・2・26

第千九百十六話　何故気付かなかったのか

第千九百十六話　何故気付かなかったのか

イタリアは後で日本にです。たけのこのさとについて言われました。

話を聞いたイタリアはです。驚いて日本に言いました。

「えっ、そんなのあったんだ」

「お気づきになられなかったのですか」

「うん、御免御免」

イタリアは慌てながら日本に謝ります。

「折角だったのに気付かなかったよ」

「それにしても何故気付かれなかったのでしょうか」

「ちょっとどんなお菓子か見せてくれる？」

イタリアは日本に対してそのたけのこのさとを見せてくれるように御願いしました。そしてそのパッケージを見るとです。彼はこう言いました。

「地味だからかな」

「パッケージがですか」

「うん、味は美味しいけれど」

食べてもみます。確かに味はいいです。

「けれど。このパッケージじゃね」

「イタリア君には地味ですか」

「そうなんだ。俺の国じゃね」

「成程、地味ですか」

「だから気付かなかったんだ。けれど」

食べてみてです。美味しかったので。イタリアはその時気付かなかったことを残念に思いました。彼にとっても気付かなかったことはそうだったのです。

第千九百十六話　完

2011・2・26

第千九百十七話　スルーどころじゃない　☆

第千九百十七話　スルーどころじゃない　☆

イタリアの次に来たのは。フランスでした。
フランスが食べ物に関して造詣が深いのは誰もが知っています。
その彼が日本の前に来ました。
ところがです。フランスは。
そのまま素通りでした。見向きもしません。
そんな彼を見てです。日本も思わず言いました。
「あの、フランスさん」
「ああ、日本か」
声をかけられてようやく気付いたのでした。無気力な感じで彼に顔を向けます。
「どうしたんだ？一体」
「私のお菓子はどうでしょうか」
「ああ、御前も持って来てたんだな」
本当に何処か無気力な感じです。
「じゃあ貰おうかな。それでどれなんだ？」
「どのお菓子が、というのですか」
「ああ。どのお菓子が御前のお菓子なんだ？」
日本に尋ねながら自分も探しています。しかしです。やはりその視線は今一つ定まっていません。この人はあまり楽しんでいない感じです。
「それでどれなんだ？」
「これですが」
日本はたけのこのさとを手に取ってフランスに見せます。
「如何でしょうか」
「ああ、じゃあ貰おうかな」

フランスはいつもよりも元気がない様子で応えます。やはり何処か違う今日のフランスです。

第千九百十七話　　完

２０１１・２・２７

第千九百十八話　何故元気がないのか

第千九百十八話　何故元気がないのか

フランスはたけのこのさとを食べながらこう日本に話します。

「何か色々な奴が色々なお菓子持って来てるけれどな」

「はい、そうしたパーティーですから」

「それがな。どうもな」

フランスはたけのこのさともです。あまり元気なく食べています。もさもさとした感じで食べながら。そのうえで日本に話をするのです。

「口に合わないだよ」

「どのお菓子もですか」

「ああ、どれもな」

実際にそうだというのです。

「合わないんだよ。俺にはやっぱりな」

「フランスさんのお菓子ですね」

「それが市場だな」

この辺り好みに五月蝿いのがフランスなのです。この人はとりわけイギリスのものは食べません。大嫌いと言っていい位です。

実際にたけのこのさとについても。こう日本に言いました。

「悪いけれどな」

「お口に合いませんか」

「今一つな」

お菓子を取る手を止めての言葉です。

「これでいいな」

「そうですか」

こうして他の人のお菓子をあまり食べないフランスでした。それで自分のお菓子だけを食べています。

第千九百十八話　完

2011・2・27

第千九百十九話　ギリシア驚く　☆

第千九百十九話　ギリシア驚く　☆

最後に来たのはギリシアです。
「これ何だ」
「たけのこのさとといいます」
「そうか。日本のお菓子か」
ギリシアはのんびりとした調子で日本に応えます。
「食べていいか」
「はい、是非共」
日本も勧めてです。そのうえで、でした。
ギリシアはそのたけのこのさとを食べます。すると。
「これは」
「どうされました？」
「俺一人で食べるのは勿体無い」
何とです。こう言うのでした。そうしてです。
ギリシアは皆を呼びます。すぐにギリシアのお家の人達が集まってきました。その人達もそれぞれです。たけのこのさとを食べて言います。
「これ美味いな」
「そうだよな」
「こんな美味しいお菓子が日本にあるのか」
「日本はやっぱり凄いな」
「そうだな」
ギリシアとそのお家の人達にはです。たけのこのさとは大好評でした。これは日本にとってもです。想像していなかったことでした。

第千九百十九話　　完

2011・2・28

第千九百二十話　気に入った理由

第千九百二十話　気に入った理由

日本はギリシアです。このことを尋ねました。
「どうして御気に召されたのですか？」
「美味かったから」
だからだと話すギリシアでした。
「だから」
「そんなに美味しかったのですか」
「そう、美味しかった」
まさにその通りだと。ギリシアは日本にお話します。
「やっぱり日本はお菓子もいい」
「そこまで気に入って頂けるとは」
「よかったらまだあるか」
ギリシアは日本に対して尋ねました。今度はこの人からでした。
「よかったらもう一つか二つ」
「はい、あります」
日本もです。持って来ていました。たけのこのさとの箱が彼の懐からです。次から次にと出て来ます。結構な数を持って来ていたのです。
そうしてそのうえで、です。ギリシアに対して言います。
「では。お好きなだけ」
「有り難う。それじゃあ」
「皆さんもどうぞ」
日本はギリシアのお家の人達にも勧めます。こうしてです。ギリシアもお家の人達もです。たけのこのさとを好きなだけ楽しむのでした。

第千九百二十話　完

2011・2・28

第千九百二十一話　脚本家さんのお菓子

第千九百二十一話　脚本家さんのお菓子

一通り皆にお菓子を食べてもらった日本、お家に帰るとです。

あの脚本家さんが待っていました。相変わらず元気そうです。

「そういえば信長さんを映画に出されたそうで」

「ああ、書きがいがあったな」

ここでも信長です。今でも日本の心の中に生きている人です。

「まあそれでな。御前今日菓子のパーティーに出ただろ」

「はい、たけのこのさとを持って」

「お菓子か。俺も作るか」

脚本家さんはこんなことも言いました。

「じゃあ何食いたいんだ？」

「お菓子ですか」

「ああ、好きなの作ってやる。どうだ？」

「そうですね。それでは」

脚本家さんの言葉を受けてです。日本は少し考えてから。

このお菓子を出しました。そのお菓子は何かというとです。

「饅頭か。それでいいんだな」

「はい、あれでしたら皆さんと一緒に食べられますし」

それでお饅頭だというのです。お家の人にも気配りを欠かさない日本です。

「ですから。それを御願いできますか」

「わかった、じゃあ饅頭だな」

脚本家さんも頷いてです。そうしてでした。

実際にお饅頭を作りはじめます。その数はかなりのものでした。

日本はそのお饅頭をです。皆と一緒に食べるつもりなのでした。

第千九百二十一話　完

2011・3・1

第千九百二十二話　殆ど食べられました

第千九百二十二話　殆ど食べられました

脚本家さんが作ってくれたお饅頭をです。全部出して。日本はそのうえでお家の人達を集めてです。一緒に食べようとしました。しかし。

ここであの四人のライダー達が登場です。そのうえで。

「コレ食ッテモイイカナ」

いきなりお饅頭を貪りだします。四人共物凄い食欲です。

そうして気付いたら。殆ど食べられていました。

食べ終わるとです。四人は原子力のバイクで何処かに行ってしまいました。嵐と共にやって来て風と共に去りぬ。四人共まさにそんな感じでした。

そして残された日本達はといいますと。

「何食う？」

「って言われてももう殆ど残ってませんよ」

「困ったなあ、これ」

「ちょっとこれはないだぎゃ」

皆あからさまに不満そうです。しかしです。

ここでも脚本家さんが登場してです。皆に言います。

「安心しろ、こんなこともあろうかとまだ一杯作ってるからな」

「ほんまかいな、流石脚本家さんやな」

「伊達にずっとライダーに関わってる訳じゃないだぎゃ」

「親父の代からだからな。じゃあ皆食え」

先程と同じだけのお饅頭が出てきました。

「腹一杯食えよ」

こうして皆も脚本家さんのお饅頭を楽しむことができました。流石にこの人はライダー達の行動がよくわかっていました。何しろこ

の人達の映画の脚本も書いていますから。

第千九百二十二話　　完

2011・3・1

第千九百二十三話　寂しくなかった日本

日本

ふとです。台湾が日本に尋ねました。

「日本さんはずっと鎖国しておられましたけれど」

「はい、何でしょうか」

「寂しくなかったのですか？」

台湾が日本に尋ねることはこのことでした。

「ずっとお一人で」

「いえ、一人ではなかったです」

日本は台湾にすぐに答えました。

「妹がいますし」

「あっ、そうでしたね」

まずはです。妹さんがいたのです。

「あの方がおられましたね」

「上司の方もおられましたし国民の方々もおられました」

「三千万でしたね、その時は」

「それにそれぞれの方もおられましたし」

ここで、です。他の人達の存在もあったというのです。

「ですから寂しくはありませんでいｓた」

「そうだったんですね。それで」

「はい、寂しくはなかったです」

何時でも一人ではない日本なのです。何処かの古い館のキャスターや鳥を越えたキャスターは言うことが違いますが妄想を見ているのでしょうか。

お家の人も個性的で大勢いる、日本は幸せな国と言えるでしょう。

他の国の人達もいつも傍にいてくれているのですから。いつも一人ではいない日本です。

第千九百二十三話　完

2011・3・2

第千九百二十四話　黒歴史にしたいこと

第千九百二十四話　黒歴史にしたいこと

色々な人がお家にいる日本。しかしです。

かつて何処をどうやったらそんな器用なプロセスを辿れるのかわからない経緯で日本に来てしまった人もいたのです。

韓国です。この人は三十六年程日本のお家にいました。もっとも今では韓国はこんなことを言って騒がしかったりします。

「毎日が地獄だったんだぜ」

「そういえば昨日三月一日だったわね」

台湾がその韓国に対して言います。

「あんたのお家の人が煙草の値上げに反対して少し暴れたんだったわね」

「俺の偉大な独立運動だったんだぜ」

韓国はあくまでこう主張します。

「それを日本とあいつの上司が潰したんだぜ」

「私あの時はっきり覚えてるけれどあんたあの時何もしてなかったじゃない」

台湾も日本と一緒にいました。だから言えることでした。

「上司の人達だって優しかったし」

「世界一過酷な目に遭ったんだぜ」

「何処がよ」

こんなことをいつも言っています。そしてです。

韓国はこう言うのです。

「もう二度と。日本のところには行かないんだぜ」

「私もそうして欲しいと思っています」

そして日本も言います。

「あの併合は。私が今まで生きてきた中で最大の失敗でした」

韓国以上にです。日本にとっては非常に苦い記憶になっています。

日本はです。二度と韓国を併合しないと心に誓っているのです。お金も人も滅茶苦茶かかって大変だったからです。

第千九百二十四話　　完

２０１１・３・２

第千九百二十五話　都道府県

第千九百二十五話　都道府県

日本には四十七の都道府県があります。そのそれぞれがです。
「皆さん本当に個性的ですからね」
「そうやなあ。俺もやけれど」
「私もそれは自覚してるぎゃ」
「にーーー、にーーー（翻訳：その通り）」
大阪に尾張、それに赤福こと三重が日本に応えて言います。
「結構以上に色々な人がおるさかいな」
「福島のところには会津が同居してるし」
「にーーー（その辺りは色々なんだよな）」
「ですね。それにしても」
ここで日本は三重を見て言います。
「あの、三重さんは」
「にっ！？（翻訳：何かな）」
「どうしてその喋り方なのでしょうか」
日本は彼の喋り方に疑問を持ったのです。
「前から不思議に思ってたのですが」
「そういえばずっと覆面してるしな」
「放送部でもそうだったぎゃ」
大阪と尾張もそれを言います。
「俺こいつとは結構古い付き合いやけれどな」
「うちなんか信長さんの時からだぎゃ。その頃からだぎゃ」
その二人が日本にお話します。三重がどうしてこの喋り方なのかをです。思えばこの喋り方はです。かなりおかしなものであります。

第千九百二十五話　　完

2011・3・3

第千九百二十六話　覆面の理由

第千九百二十六話　覆面の理由

三重がどうしてこの喋り方なのか。それをお話したのはです。能登でした。三重と何処かの場所で浅からぬ縁を持っているこの人がです。日本達に対してその理由を説明するのでした。

「三重さんといえば伊賀ですから」

「ああ、そうでしたね」

日本は能登のその話を聞いて納得した顔で頷きました。

「忍者でしたね」

「はい、それで忍者のにーーなんです」

「にーーー（その通り）」

三重も誇らしげにです。そのことを言います。

「にーーー（俺は忍者だから）」

「成程、そうだったのですか」

「ええ。僕も最初何かわかりませんでした」

こう話すのでした。

「何を喋っているのか」

「私は何とかわかりますが」

日本がそれをどうしてわかるかというとです。

「やはり国ですから」

「他の人は中々わからないんですよね」

「そうですね。それはどうしても」

「その辺り難しいですよね」

「忍者ということもです」

それ自体がだというのでした。日本にはこんな人もいます。個性的と表現してもまだ余る様な、そうした人達です。

第千九百二十六話　完

2011・3・3

第千九百二十七話　最凶マスコット

第千九百二十七話　最凶マスコット

奈良は古い歴史のある県です。それは日本の中においてもかなりのものです。

その奈良のお祭りにです。マスコットが選ばれました。ところが。

「これ、まずいやろなあ」

「何ですか、そのマスコットは」

日本もそのマスコットを見て驚きを隠せません。

「妖怪ですか？」

「妖怪やないで。ちゃんとしたマスコットやで」

昔の仏教のお坊さんの子供に角が生えた姿をしています。それを見ればです。どうしても妖怪をイメージしてしまうのでした。日本もそれは同じです。

「これになったんやけれどな」

「どういった経緯でなったのですか？」

「上司が選んだんや」

それで決まったというのです。各都道府県にも上司がいるのです。

「それでや」

「そうなのですか」

「そや。けったいな経緯でなったわ」

こう話すのでした。

「それでまあ。これなあ」

「それでお祭りを過ごされるのですか」

「どないしよか、ほんまに」

奈良は真剣に困っています。どうしようかというのです。何はともあれ決まってしまったマスコット、果たしてどうなるのでしょうか。

第千九百二十七話　完

2011・3・4

第千九百二十八話　対抗して

第千九百二十八話　対抗して

不吉なマスコットを戴くことになってしまった奈良、これに反発してです。

奈良にいる人達がです。マスコットを次々に発案してきました。

「せんとならまんとだ！」

「よし、なーむだ！」

こう言ってです。次から次に可愛いマスコットを発案して出します。確かにそういったマスコット達の方がずっと可愛らしいです。

しかしです。インパクトでは。

「あかん、勝てんわ」

「何か一家までできていますが」

悪ノリしてです。そんなものまで出て来ているのです。日本もこの事態には何もできません。最早どうしようもなくなってしまっているのです。

「どうしましょうか」

「どないしよかな、とはいってもや」

奈良も頭を抱えています。

「あのインパクトには太刀打ちできんわ」

「確かに。あれは」

「手がないわ。このまま決まりか？」

奈良は困り果てた顔で呟く様に日本にお話します。

「どんなの出してもあのインパクトには勝てんで」

「ううむ、これはどうしたものか」

日本も考えてもでした。

どうしても対抗手段が思い浮かびません。そこまで強烈なインパクトを与えるそのマスコット、よくもあれだけ強烈なものがあるものです。

第千九百二十八話　完

2011・3・4

第千九百二十九話　お祭りで大活躍

第千九百二十九話　お祭りで大活躍

奈良の不気味なマスコット、何とです。
家族はできるわ様々なグッズになるわ。絶好調です。
「あの、どうなってるんですか？」
「あかん、恐ろしいことになってるわ」
奈良は日本に対してです。こう言うしかありませんでした。
「もう俺にもどうしていいかわからへん」
「家族にグッズですか」
「しかも他のマスコットを圧倒してしもうとるわ」
色々なマスコットが対抗されて出されてもです。彼等に圧勝してしまうのです。そのマスコットの破壊力たるや凄まじいものでした。
「このままお祭りに入ってもうたら」
「何か本人さんが出て来ていますが」
二人の目の前でマスコットが踊っています。
「どうされますか？」
「だからもうどないしようもなくて」
奈良は泣きそうな顔になっています。
「上司が何時の間にか決めてもうて。こうなるなんて」
「私の今の上司の人達もかなりですが」
「あれは問題外や。人間として最低や」
少なくとも今の日本の人達はです。そうです。
しかし奈良の上司もです。恐ろしいものをマスコットに選んでしまっているのです。
最早絶好調のマスコットです。奈良にも止められませんし奈良の人達もです。誰が拒否してもそれでもです。お祭りにそのまま入ろうとしています。

第千九百二十九話　完

2011・3・5

第千九百三十話　お祭りでは

第千九百三十話　お祭りでは

遂にお祭りになりました。すると。
マスコット達にです。人々が集まっています。
「へえ、これがなんだ」
「これがあのマスコットなんだ」
「噂通りだね」
「凄い外見だね」
何かやたら注目されています。というか人気があるみたいです。
マスコットの影響もあるのでしょうか。奈良のお祭りは盛況です。
しかしです。
奈良はマスコットを見てです。項垂れるばかりです。
「インパクトで選んでもあかんのや」
「はい、私もそう思います」
日本もです。マスコットを顔に汗を流しながら見ています。
「あれは。まさに」
「怪物にしか見えへん。何度見ても」
「だからこそ皆さん集まっておられるようですが」
「俺や奈良の人達はあかん。絶対に受け入れられへん」
例えお祭りが成功してもです。奈良と奈良の人達には絶対に受け入れられないマスコットなのです。外見がもう不気味過ぎてです。
「お祭りの最後までおるらしいし」
「お祭りだけで済むでしょうか」
日本はここでふと言いました。
何か奈良の上司の人の動きがおかしいです。マスコットをえらく気に入っているようです。皆にも注目されているのを見て。この人は何かをしようとしています。

第千九百三十話　完

2011・3・5

第千九百三十一話　これで終わりか

第千九百三十一話　これで終わりか

お祭りは終わりました。奈良はこのことにほっとしています。

「これであの不気味なマスコットともお別れや」

「遂にですね」

「そや。ほんまにやっとや」

心から嬉しそうにです。日本に答えます。

「何であんなんがマスコットになったんや。それ自体が間違いやった」

「私もあれはないと思いましたが」

「大事なんはインパクトやないんや」

少なくともインパクトということについてはあのマスコットは合格でした。合格どころかそれが強過ぎます。怪物じみたインパクトでした。

けれどそのインパクトはです。奈良はかえって忌々しく思っていたのです。本人にしてみればそんなことは迷惑以外の何者でもありませんでした。

そのほっとしている奈良にです。日本がふとした感じで言いました。

「ですが。ひょっとしたらですが」

「ひょっとしたら？」

「まだ残られるかも知れませんよ」

こう言うのでした。

「ひょっとしたら」

「いや、それはないやろ」

奈良はその可能性は否定しました。

「お祭り終わったんや。幾ら何でもな」」

「だといいのですが」
日本は不吉な予感を感じていました。そしてその不吉な予感がどうなるか。それがわかったのはすぐでした。

第千九百三十一話　完

２０１１・３・６

第千九百三十二話　居残った

第千九百三十二話　居残った

奈良の上司がです。マスコットを横に奈良と奈良にいる人達に宣言しました。

「正式に残ることになったよ」

「な、何でや！」

奈良は思わず目を飛び出させて叫びました。

「お祭り終わったやろ！何でや！」

「今度は宣伝担当になってくれるんだよ」

奈良の上司はにこにことして言います。

「これからもずっと。奈良にいるからね」

「おい、たいがいにせんかい！」

奈良は本気で抗議しました。

「何でそいつがずっと残るねん！気は確かかい！」

「だって。人気あるじゃない」

「気持ち悪いわ！」

奈良の本音が出ています。

「夜道で会ったら確実に妖怪に思えるわ！」

「酷いことを言うね。お祭りを成功に導いてくれたのに」

「怖いもの見たさで来たんや！」

まさにその通りです。その不気味さたるやですから。

「何でそいつなんや、ほんまに」

「何度も言うけれど功労者じゃないか。お祭りの最大の」

「ちゃうっちゅうねん。グッズとか完全にイロモノ扱いやったやろが」

奈良がどれだけ言ってもです。そのマスコットは見事奈良に残ってしまいました。そしてそのままです。奈良に巣食う悪霊か地縛霊になってしまうのでしょうか。はたまた魑魅魍魎か。

第千九百三十二話　完

2011・3・6

第千九百三十三話　何処が紳士だ

第千九百三十三話　何処が紳士だ

フランスがです。イギリスに対して言いました。
「最近の御前な」
「いきなり何だよ」
「あまりにも酷いだろ。何処の生徒会長だよ」
「何で俺が太平洋ダントツ馬鹿と一緒にされるんだ？」
「御前の旅先での行動だよ」
それがです。あまりにも酷いというのです。
「すぐ裸になって暴れるだろ。あれは最悪だぞ」
「御前だって裸になるだろうが」
フランスもそのことは言えなかったりします。裸といえば彼ですから。
「それで何でそんなこと言うんだよ」
「俺も確かにそうだけれどよ。御前は最近目に余るだろ」
「そんなに酷いか？」
「最悪だって言ってるだろ」
「何か外で飲む酒ってよくってな」
美味しいとは言わないです。いいというのです。
そしてです。イギリスはです。フランスに対して戸惑いながらもです。こう尋ねるのでした。
「最近の俺そんなに酷いか」
「日本の甲子園球場で虎のチームが兎のチームに負けた時の一塁側みたいな感じだな」
「それって最悪じゃねえかよ」
「こう言えばわかるな。最近御前最悪だからな」
何か紳士でなくなってきたイギリスです。とりあえず韓国と一緒にされたことがです。彼にとっては非常に癪に触ることだったよう

です。

第千九百三十三話　完

2011・3・7

第千九百三十四話　東方君子

第千九百三十四話　　東方君子

「俺は礼儀正しい男なんだぜ」
「あんた起きてるの？」
台湾が速攻で韓国に突っ込みを入れました。胸を張ってこんなことを言う韓国に対してです。台湾のいつもの突込みが炸裂です。
「あんたの何処が礼儀正しいのよ」
「俺は儒教を学んできたんだぜ。その礼節を完璧に身に着けてるんだぜ」
「そういえばイギリスさんもよくそんなこと言うけれど」
「イギリス？誰なんだぜそれ」
まだ彼とフランスのことを覚えていない韓国です。この人は太平洋以外の国のことは日本より下と見ると無意識のうちに眼中から外してしまうのです。
「聞いたことないんだぜ」
「だから生徒会の人じゃない」
「そんな奴知らないんだぜ、何か名前のないのが二人いるだけなんだぜ」
「だからその人達のうちの一人なんだけれど」
「とにかくなんだぜ」
韓国は強引に話を進めていきます。
「俺は君子なんだぜ。礼儀作法は完璧なんだぜ」
「本気でそう言えるの？」
「俺は何時でも本気なんだぜ」
「それ、日本さんやアメリカさんや老師にも言える？」
「何でその三人が出て来るんだぜ？」
三人のお家だけでなくあちこちで色々やっていることは自覚していません。ある意味においてです。韓国はかなりの大物であります。

第千九百三十四話　完

2011・3・7

第千九百三十五話　被害者の人達

第千九百三十五話　被害者の人達

実際にイギリスの被害に遭った人達はです。いたりします。

ポーランドがです。ポコポコ怒りながらリトアニアにお話しています。

「もうマジ最悪だし！」

「何か何時になく怒ってるね」

リトアニアもそんなポーランドを見て言います。

「やっぱりイギリスさんのこと？」

「そうだし。あいつ俺の家でやりたい放題やるんよ」

「そういえば暴れた後が一杯あるけれど」

それはリトアニアも見ました。暴れた後を。

「あれ、イギリスさんだったんだ」

「リト、あいつどうにかならん？」

ポーランドは真剣な顔でリトアニアに尋ねます。

「俺今それが知りたいんよ」

「ううん、どうしたものかな」

「それ俺も困ってる」

ギリシアもです。ここで出て来て二人の会話に加わります。

「あいつ、何処が紳士かわからない」

「そうだし、全然紳士じゃないんよ」

「イギリスさん。実はそうだったんだ」

これはリトアニアも少し驚くことでした。とにかく被害者の人は実際にいます。

それで、です。ポーランド達はお話していきます。

何かイギリスにとってあまりよくない展開になってきています。

自業自得ではありますが。それでもそうなってきているのでした。

第千九百三十五話　完

2011・3・8

第千九百三十六話　日本では

「私の国で困ったお客さんですか」
「ああ、誰だ？」
フランスは日本に対して尋ねています。イギリスのことを受けてです。
「大体察しがつくけれどそれは誰なんだ？」
「まあ。何と言いますか」
「あれか？あの会長か？」
最初に出て来たのはこの人です。
「他にもアメリカとか中国とかオーストラリアとか。人材豊富だよな」
「それはその」
流石に言えません。はっきりとはです。
「ですが。まあ」
「とりあえず御前の国も観光客一杯来るよな」
「はい、特に京都には」
そこがメッカです。何といってもそこに一杯来ます。その中でだというのです。
困ったお客さんは。誰かというとです。
「とりあえず。鶏のことから」
「あいつかよ」
フランスはこれだけでわかりました。見事なまでにです。
「やっぱりそうなんだな」
「あの時国民の皆さんと激しい喧嘩になりまして」
「というか貴族でそれするか。両班だったか？」
日本の場合は困ったお客さんに悩まさせられています。とはいっても日本の人達も外で多少の問題を起こしてはいるのですけれど。

第千九百三十六話　完

2011・3・8

第千九百三十七話　裸になる

第千九百三十七話

裸になる

具体的にイギリスが何をしでかしたか。ポーランドとギリシアがリトアニアにお話します。

「まず酒飲むんよ」

「そこからはじまる」

「それは普通じゃないかな」

一応皆学生なのですがそれは言わない約束です。そもそも中国に至っては四千歳ですから。

「けれど酒癖がなんだね」

「それなんよ。マジ最悪」

「飲んでそうして」

そこからです。何をしでかすかというと。

「全裸になるんよ、これが」

「トランクスさえ脱ぐ」

「えっ、トランクスまで！？」

これが最悪なのです。酔って裸になる、人間としても国家としてもです。お世辞にも褒められたことではないのは言うまでもありません。

「それまで脱ぐんだ」

「そんでそっから大暴れするしーーーー」

「暴れもする」

「裸で暴れるんだ」

リトアニアも呆然です。

「あのイギリスさんが」

「だからむかつくんよ」

ポーランドもギリシアも本気で怒っています。さてさてこのお話

どうなるか。とりあえずイギリスの酒癖が問題になってしまっています。

第千九百三十七話　　完

２０１１・３・９

第千九百三十八話　裸にはならない

第千九百三十八話　裸にはならない

確かに日本の観光客も問題を起こします。それをガイエスブルグの人は針小棒大に書いたりしていますがそれについてはです。

「あの作家はもう作家として完全に終焉ですからね」

「毛髪だけではなくですか」

「はい、気にしてはいけないと思います」

フィンランドが日本にお話しています。

「その証拠にドラゴン兄弟は十三巻があの出来で以降書かれていませんね」

「あれは。あまりにも酷かったので」

日本も読みましたが唖然なのでした。国民の人の多くが呆れてです。匙を投げてしまった作品なのです。

フィンランドはその人のことは置いておいてです。日本にお話します。

「あれですよ。日本さんのお家の人も確かに落書きとかしますね」

「はい、それは」

実は日本のお家で一番マナーが悪いのはマスコミの人だったりします。他人には偉そうにお説教をたれる人達こそ一番駄目というのは日本においてこそ最も言えることです。

「それ位じゃないですか。イギリスさんなんて」

「もっと凄いのですか」

「何ていうかその」

フィンランドも苦笑いで言葉を濁します。

「裸になってからさらにですから」

「裸になるのは流石に」

「日本さんのお家の人は酔ってそういうことしませんから。ずっといいですよ」

「それは幾ら何でも」
尚ガイエスブルグの人はやたらそのイギリスを褒めます。才能や毛根以外にも衰えてしまっている部分があるのかも知れません。

第千九百三十八話　　完

２０１１・３・９

第千九百三十九話　対策会議　☆

とにかく襲来してくるイギリスを何とかしたいポーランドとギリシア。対策会議に入りました。まずはポーランドが怒りながら言います。

「マジ腹立つし」

「とにかく奴を静かにさせる」

ギリシアが対策を述べました。

「そうするべき」

「じゃあこれよくね？」

ここでポーランドが具体的な案を述べました。

「俺も一応考えてみたんよ」

「どんなのだ？」

「イギリスにだけまずいもん出すんよ」

わざとまずく作った料理をだというのです。

「これで逃げ出すと思わん？」

「駄目だ、それ」

ギリシアはポーランドのその案にすぐに述べました。

「イギリスの舌は壊滅的だから」

「そういえばあいつ凄い味音痴だし」

「マクドナルドが美味いって大絶賛してた」

「あんなの普通に食えね？」

「そこが違う。イギリスは料理は何もかもが駄目だから」

味覚については悪い意味で誰の追随も許さないイギリスなのでした。かくしてです。

ポーランドのこの案は没になってしまいました。どんなまずいものでも平気なイギリス、そのことだけは素晴らしいと言えるでしょうか。

第千九百三十九話　完

2011・3・10

第千九百四十話　本当に日本の上司か

第千九百四十話　本当に日本の上司か

今の日本の上司の人の一人がです。またやらかしています。

「お家にいる韓国さんのところの人からお金を貰った人がいるかと思えば」

「次は島ですね」

日本も日本妹も呆れています。

「映像、残ってますね」

「はい、確かに」

そこで、です。その上司の人がとんでもないサインをしたのです。

「これは幾ら何でも」

「あの人私達のお家の人なんでしょうか」

「甚だ疑問に思えてきました」

日本も本気で考え込んでいます。

「あれは。私も長く生きてきましたが」

「はじめて見ましたね、ああした上司の人は」

「残念ながらそうです」

残念とさえ言います。

「そうした考えの方々だとは思っていましたが」

「それでも。実際にサインするなんて」

「言葉が見当たりません」

お家の人達はです。激怒しています。

夜にそれがわかって朝にはです。もう皆がお話しています。

「あの人達が上司になったのはマスコミのバックアップがあってでしたが」

「もうマスコミも信用できませんね」

このこともまた教訓になろうとしています。日本の今の上司の人達、マスコミのバックアップをいいことにしてか本当にやりたい放

題です。

第千九百四十話　完

2011・3・10

第千九百四十一話　まだ会議中　☆

「それじゃあこんなのどうよ」
「どんなのだ？」
ギリシアがポーランドに尋ね返します。二人はまだ会議中です。
「物価あげるんよ」
ポーランドの今度の提案はこれでした。
「それでイギリスがものとか買えんようにするんよ。そうしたらあいつ来なくなるしどうよ」
「それも駄目だ」
「駄目なん？」
「それだと他の観光客も困る」
ギリシアが指摘するのはこのことでした。
「観光客はあいつだけじゃないから」
「そっか。日本とか来るしーーーー」
「そっちもリトアニアが来なくなる」
「あっ、それまじやばいし」
こう言われたらです。ポーランドもわかりました。
「じゃあこれなしなん？」
「絶対にそうあるべき」
「ちぇっ、じゃあどうする？」
「そう。とにかく困っている」
けれどそれでもなのです。有効な対策が思い浮かびません。
「あいつの嫌いもの置く。どうだ」
「嫌いなもんつったら」
イギリスの嫌いなものは何かというとです。ギリシアもポーランドもこのことを考えました。すると一つの答えが出て来たのでした。

第千九百四十一話　完

2011・3・11

第千九百四十二話　今度は一番上の上司が

上司が

「あの、幾ら何でも有り得ないのですが」

「ですね。昨日の今日で」

「この一週間で不祥事が三つです」

日本は唖然としながら日本妹に言っています。

「それもこれまで有り得なかったことばかりで」

「しかも今度はです」

日本妹もです。唖然とした顔になっています。

そしてその顔でお兄さんに対して言いました。

「一番上の上司の人ですが」

「外国の方からの献金だったとは気付かなかった」

「そんなの普通調べますよね」

「私はそれは常識だと思います」

日本は唖然としたままお話します。そしてです。こうも言いました。

「若し。前の上司の方々がこうしたことをすれば」

「あの人達は間違いなく攻撃していましたね」

「それでも御自身のことになると」

「辞めないとか言いますね」

「自分には甘くて他人には厳しいのでしょうか」

日本は今の上司の人達はそれではないかと思いました。

「それは。人間としては」

「駄目というものではありませんけれど」

とにかくまたしても不祥事です。一体今まで幾つ洒落にならない不祥事をしでかしているのか、今の日本の上司の人達は少なくとも記録にも記憶にも残りそうです。凄く悪い意味で。

第千九百四十二話　完

2011・3・11

第千九百四十三話　東北無事か

「地震！？」
「大きいですよ！」
日本も日本妹もはっきりと感じ取りました。大地震です。
二人はまずはテーブルの下に隠れました。そうして暫く経って大丈夫であることを確認してから外に出てみます。するとなのでした。
大津波です。それが来た後でした。
「こ、これは」
「東北の人達大丈夫でしょうか」
「すぐに調べましょう」
日本は血相を変えて言いました。
「大変なことになっています」
「あの、宮城さんや岩手さんは」
「かなりの深手を負っておられます。仙台さんもです」
東北の人達がどうなっているか、日本はすぐにわかりました。
身体が痛みます。あの人達と日本は以心伝心なのです。
それですぐに。周りのお家の人達に言いました。
「救援活動です！急いで下さい！」
「は、はい！」
「わかりました！」
「この地震の被害、何としても避けなければなりません」
日本は既にヘルメットを被っています。服も作業服になっています。
日本にとっての戦争がはじまりました。被災者の人をどれだけ救うかです。それが本当に今はじまったのです。運命の戦いです。

第千九百四十三話　完

2011・3・12

第千九百四十四話　救援の言葉

「日本、大丈夫なのか！？」
「とんでもない地震だったらしいあるな！」
最初に飛び込んで来たのはアメリカと中国でした。
「うちの軍使ってくれていいんだよ！」
「人ももものも用意しているある。何でも言うよろし！」
「僕も。物資あるから」
何とです。日本とはまさに不倶戴天の敵同士であると言ってもいいロシアもです。救援物資を用意しているというのです。そして。
韓国もです。すっ飛んで来て言います。
「もう物資持って来たんだぜ！被災者の人達に使うんだぜ！」
「あの、皆さん」
今戦場に向かおうという日本はです。皆の救援に呆然となっています。
そこに台湾も来て。お金をそのまま手渡してくれました。
「これ、被災者の方々に使って下さい」
「とにかく、乗り切ってくれよ！」
「正念場あるぞ！」
「そうだよ。地震は大変だけれど」
「絶対に乗り切れるんだぜ！」
「今は一人でも多くの被災者の人達を！」
皆真剣に日本のことを思っての行動です。
今日本に続々と他の国から声が来ています。日本にとってのこの戦争、彼だけが戦う訳ではありません。他の国や人の声も来ています。
東北頑張れ！

第千九百四十四話　完

2011・3・12

第千九百四十五話　イギリス到着

「おい、まだ生きているんだろうな」
イギリスがです。険しい顔で日本のところに来ました。
「生きてたらな。助けてやらないこともないぜ」
「イギリスさんも来られたんですか」
「ああ、生きてるんだな」
イギリスは日本のその姿を認めて言いました。
「じゃあ助けてやるからな」
「まさか欧州から来られたんですか」
「欧州の人間が来たらいけないのか？」
イギリスは日本を見据えて尋ねます。
「そんな理屈聞いたことないんだがな」
「ですが。今の状況は」
「だから来たんだよ」
それでだというのです。
「気が向いたからな」
「では。本当に」
「ああ、専用の部隊も連れて来た」
他の人達と同じくだというのです。彼もそうしてきたというのです。
そしてそのうえで。また言うイギリスでした。
「早速はじめるからな」
「すいません」
「今は聞こえないからな、礼なんてな」
それどころではないというのです。イギリスもまたやって来ました。そうしてそのうえで、です。日本と彼のお家の人達の為に戦うのでした。

第千九百四十五話　完

2011・3・14

第千九百四十六話　ドイツ参戦

第千九百四十六話　ドイツ参戦

「相棒、いいんだなこれで」
「じゃあ断ったのか？」
「そんな筈ないだろ」
ドイツとプロイセンが。日本の空港に降り立ってからお話をしています。
「大体ここで何もしなかったら流石に相棒でもな」
「怒っていたか」
「そうだよ。日本のピンチなんだぞ」
だからだというのです。プロイセンも真剣な顔です。
「それで何もしないでいられるかよ」
「そういうことだ。だからだ」
「放射能とか。洒落にならないかもな」
「そんなことはどうでもいい」
ドイツ男前です。言い切ります。
「今はだ。それよりもだ」
「そうだな。日本と日本の人達の為にな」
「戦うぞ。これは戦争だからな」
「相手は地震と津波だな」
もうそれは収まったといってもです。それでも多くの被害がそのままになっています。彼等の今回の相手はそうしたものだというのです。
そしてです。また言うプロイセンでした。
「じゃあ。早速な」
「行くぞ、相棒」
今度はドイツから言いました。この二人も参戦です。日本の為に続々と勇士達が集っています。

第千九百四十六話　完

2011・3・14

第千九百四十七話　来ない筈がない

第千九百四十七話　来ない筈がない

「日本さん、大丈夫ですか！？」
台湾もです。駆けつけてきました。
「私にも作業をさせて下さい」
「あの、しかし今は」
「危険は充分承知しています」
それでもだと。台湾は強い決意を見せて言います。
「けれどそれでも今は」
「そうなのですか」
「私も皆と同じです」
見ればです。皆も危険を顧みず作業をしています。台湾も既に作業服です。つまり最初から作業に加わるつもりで来たのです。
「やらせて下さい」
「わかりました」
日本は台湾の決意を見て頷きました。
「それでは今から」
「はい、今は何があろうとも」
台湾は意を決した顔になっています。
「負ける訳にはいかないですからね」
「そうです。ここで負ければ」
「より多くの人達が困ります」
こう言ってでした。台湾も参戦です。
次々に日本の為に馳せ参じてくれます。これは日本の徳故でしょうか。とにかく今はです。多くの人達が日本の為に馳せ参じてくれています。

第千九百四十七話　完

2011・3・15

第千九百四十八話　来たんでぇ

第千九百四十八話　来たんでぇ

トルコもです。作業服で来ました。
「遅れて申し訳ねえな」
「トルコさん、原発は」
「それがどうしたってんでい」
そんなことはどうでもいい、まさにそうした口調です。
「他の奴等はそれで怖気付いてるってのかい？」
「いえ、それはありません」
「そういうことでい。俺もやらせてもらうんでい」
「すいません」
「何、前に随分世話になってるからねい」
和歌山沖のことをです。トルコは今も覚えています。
だからこそだと。彼は日本に言うのでした。
「何処までやれるかわからねえけれどやらせてもらうぜ」
「それでは」
「今は一人でも多くの人の命を助けて」
それからだというのです。
「弔ってやろうな、皆な」
「そうです。多くの人が亡くなられてしまいましたが」
「そうした人達には。せめて花をあげてやるってのが筋ってことでい」
「花ですか」
「死んでまで悲しい思いをすることはねえからな」
こう言ってです。トルコも参戦です。この人はやっぱり来てくれました。例え何があろうともです。彼は日本の為に戦う覚悟で来てくれました。

第千九百四十八話　完

2011・3・15

第千九百四十九話　大変な中で

第千九百四十九話　大変な中で

日本の戦いが続いています。フランスとスイスも来てくれています。

「何だよ、これ」

「こんなものははじめて見たのである」

二人も被災地の現状には唖然となっています。

「おい、本当に何とかしないと」

「これ以上に恐ろしいことになるであるぞ」

「はい、私もそれがわかっているからこそ」

日本はもうあちうこち傷だらけです。それでも気力で立ちながら言います。

「今はこうして」

「けれど御前少しはな」

「休むことも必要であるぞ」

「いえ、休んでなぞいられません」

目は死んでいません。飲まず食わずでもです。

「国民の皆さんが。今は」

「だからか」

「立つのであるな」

「はい、休んでなぞいられません」

日本が何といっても一番動いています。動かずにはいられないのです。

各地を回って被災している国民の人達を助けています。けれどです。

東北の都道府県があまりにも傷ついていて。そちらへの助けも必要で。

日本一人では限界があります。それでも頑張ります。

辛い戦いが続いています。何時終わるかわからない戦いが。それでも日本はまだ立っています。休んでなぞいられない状況なのです。

第千九百四十九話　　完

２０１１・３・１６

第千九百五十話　はっきり言って邪魔

第千九百五十話　はっきり言って邪魔

スイスがです。あることに気付きました。

被災地で皆が大変な思いをして戦っている中で、です。日本のマスコミの人達だけがです。暖衣飽食をして好き勝手なことをしているのです。

しかも被災者の人達に失礼なことばかりします。それを見てです。

「何をしているか！」

激怒したスイスはマスコミの人達を怒鳴りつけました。

「今の状況がわからないのであるか！」

「何っ、俺達は報道しているんだ！」

「それだけのことだ！」

「報道とは好き勝手やることではない！」

スイスはまた怒鳴りました。

「貴様等、しかも何を煽っているか！」

「ちゃんと報道しているだけだぞ！」

「原発のことをな！」

「流言蜚語の類を言っていることは報道ではない！」

スイスは本気で怒っています。それで殴り飛ばしたかったのですがかろうじてそれは自制してです。マスコミの人達に対して言うのです。

「貴様等のみ暖衣飽食とは何事か！」

「じゃあ俺達は何をしろってんだ！」

「失せろ！」

これがスイスの今の最大限の怒りでした。

「二度と我輩の前に姿を現すな！」

スイスは久し振りに怒りました。必死に頑張っている人達と裏腹

に。こうした輩もいることに対してです。

第千九百五十話　　完

２０１１・３・１６

第千九百五十一話　傷ついても

第千九百五十一話　傷ついても

「凄いな」

「全くあるな」

アメリカと中国がです。救助活動の中で思わず言いました。

「誰も悪いことをしないぞ」

「凄くまとまっているある」

被災した日本の人達がです。暴れたりせずにきちんとしていることにです。二人は驚きを隠せずこうお話をするのです。

「僕の国じゃとても」

「そうある。こんな事態になったら」

「とてもこうじゃいられないぞ」

「絶対に暴れてしまうある」

それでもなのです。日本の人達は。

「こんなにまとまっているなんてな」

「大変なことになっているというのにある」

誰も自暴自棄にならずです。粛々としています。

避難している人達も助け出された人達もです。本当に静かです。

「こんな人達だったらな」

「そうあるな。絶対になる」

二人はそんな日本の人達を見て確信しました。

「今は大変な時でも」

「絶対にまた立ち上がるあるよ」

そのことを確信したのです。

確かに大変な状況です。けれどそれでもです。今日本の人達は頑張っています。例えどんな状況であってもです。諦めたりはしていません。

第千九百五十一話　完

2011・3・17

第千九百五十二話　一番駄目なのは

第千九百五十二話　一番駄目なのは

あの上司が。またしてもです。

電力会社の人達にです。怒鳴っています。

「俺を誰だと思ってるんだ?」

「あの馬鹿は何やってんだ?」

フランスもそれを見て唖然となっています。

「話を聞いてるのか?それであんなことを言う奴がいるのか?」

「あの人は特別でして」

日本もこう言うだけです。そのカメムシを踏み潰して皺だらけにした様な悪相は健在です。見れば見る程その人間性が出ている顔です。

「もっとも。今は」

「一番上の上司もだよな」

「怒鳴っているだけです、今は」

「冗談抜きであの連中駄目過ぎるだろ」

フランスも上司には困ってきました。しかしです。

今の日本の上司達はです。論外でした。

「ああ、もうスルーされてるな」

「正直誰からも相手にされなくなっていますから」

その悪相の上司です。あまりにも人間性が卑しくしかも能力がないからです。とにかく何もかもがどうしようもない人間、人間と言ってもいい存在なのかどうかすらわかりません。そんな存在だからです。

「しかし。肝心の上司が」

「ああ、大丈夫なのか?」

フランスもそのことが不安になってきました。それで日本のところにいる自分の国の人達にです。注意をするように話をしたのでし

た。

第千九百五十二話　完

2011・3・17

第千九百五十三話　こんな時にこそ

第千九百五十三話　こんな時にこそ

音楽がです。日本のお家で奏でられています。
それを聴いてです。ドイツが言います。
「いいな」
「はい、心が癒されます」
「音楽はその人の心を癒してくれるものだ」
実はドイツもかなりの音楽好きなのです。彼の国には非常に有名な音楽家が輩出されてきています。それで彼も音楽に造詣が深いのです。
だからこそです。今その音楽を聴いて日本に言うのです。
「こうした音楽でな」
「心をですね」
「そうだ、癒すといい」
まさにそうするべきだというのです。
「これからも大変だからな」
「はい、話はまだ続きます」
「だが。御前と御前の国の人達ならだ」
どうなのか。ドイツは確かな顔で告げるのでした。
「必ず。復興できるからな」
「そうですね。私だけではありませんから」
「国の人達も頑張ってくれている」
「ですから。やります、最後まで」
日本もここで決意を見せるのでした。
そしてそのうえで、です。この長く辛い戦いを最後まで果たそうと決意するのでした。その心を癒してくれる素晴らしい音楽を聴きながら。

第千九百五十三話　完

2011・3・18

第千九百五十四話　真の敵

第千九百五十四話　真の敵

日本にとっても日本の人達にとっても。考えられない事態が起こりました。

「あの人がですか」

「はい、要職に復帰しました」

日本妹がです。作業中に同じく作業を続けている日本に対して告げています。

「あの人がですよ」

「信じられません。本当なのですか！？」

「本当です。本人もそれを受けました」

「あの人だけはないと思っていましたが」

あのカメムシを踏み潰して皺だらけにした様な醜い顔をしている徳島も自分のところが生んだ悪性腫瘍だと言っているあの人がです。復帰してきたのです。

これには日本も唖然です。不眠不休で作業をしている中で聞いてです。

そして国民の人達もです。これには呆れ。

そのうえで激怒です。上司の人達に非難轟々です。

「こんな時にあいつか！」

「冗談抜きに御前等もう総辞職しろ！」

「この戦争終わったら総選挙だ！」

「原発でも何やってんだ！」

「怒鳴り散らしている場合か！」

もう皆の怒り、いえ憤怒が爆発しています。

そんな無神経な有り得ない人事です。しかもその徳島本人が恥だの悪性腫瘍だの言っている輩はです。平気な顔でいたりします。

日本にとっての真の敵が誰なのか。日本もわかってきました。彼

はこの非常時にです。この連中とも戦わなくてはならないのです。

第千九百五十四話　　完

２０１１・３・１８

第千九百五十五話　自衛隊奮闘

上司達が有り得ないことをしている中で、です。現場は。
自衛隊の人達がです。必死に働いています。
「よし、何とか助かったな」
「ああ、原発も何とかしよう」
こう言ってです。まさに身を粉にして働いています。
それを見てです。日本は言いました。
「この人達がいてくれてこそですね」
「そうですね。若しいてくれなかったと思うと」
「はい、何もできませんでした」
こうです。日本は日本妹に対して答えます。
「危ういところでした」
「そうですね。阪神の時もそうでしたが」
「確かに今の上司の人達は何の役にも立ちません」
むしろ有害ですらあります。何しろこの時期にインドネシアのところでエステに通っていたりするような人達なのですから。ある意味において凄い人達です。
「ですが自衛隊の人達はです」
「物凄く頑張ってくれていますね」
「私の宝です」
国にこうまで言ってもらっています。
「これからも。大切にしていきたいです」
「是非共ですね」
日本も日本妹もこのことを実感するのでした。いざという時にどれだけ役に立つのか、人間や組織の価値はこういう時にこそわかるのでしょう。

第千九百五十五話　完

2011・3・19

第千九百五十六話　ジョークに聞こえない

第千九百五十六話　ジョークに聞こえない

被災者の人達も頑張っています。その人達を見てです。

ロシアの上司の人がです。こんなことを言いました。

「何ならうちに来るか？」

「ロシアさんのところにですか？」

「うちは土地が一杯あるんだ」

こう日本に対してもお話します。

「どうだろうか、シベリアにでも」

「・・・・・お断りします」

日本は暗い顔で答えました。

「あの、シベリアを開発されるのですか？」

「極東も。だからどうだろうか」

「ですからお断りします」

また答えた日本でした。

「それはいいですから」

「ううむ、いいのか」

「それとそれは冗談でしょうか」

日本は確かめずにはいられませんでした。シベリアといえばです。誰もが恐れる究極の流刑地だからです。数多くの人達が送られた恐ろしい場所です。

そこはどうかと言われて何も思わない人はいません。当然日本もです。それで確かめたのです。

「どうなのでしょうか、それは」

「そのつもりだが」

「本当ですか、それは」

冗談には聞こえませんでした。日本もそれはお断りしました。

第千九百五十六話　完

2011・3・19

第千九百五十七話　何とか希望が

第千九百五十七話　何とか希望が

自衛隊の人達の奮闘によってです。
原発が落ち着いてきたようです。それを見て日本も安堵しています。
「まだまだ予断は許しませんが」
「そうですね。何とかなるかも知れません」
福島は日本以上にほっとした顔を見せています。
「このまま冷却できて。然るべき作業が出来れば」
「自衛隊の人達も消防署の人達も立派です」
日本も心から感謝しています。
「お蔭で。私も希望が見えてきました」
「この世の様々な災厄の果てにですね」
「はい、まさに希望です」
日本は今その希望を見ているのです。
「後は。この希望を現実のものにするだけですね」
「そうですね。もう一踏ん張りです」
「そうです。ですが」
「ですが？」
「本当に油断してはいけませんね」
それは絶対にいけないというのです。日本は油断できない状況にあるということをよくわかっています。だからこその言葉でした。
「今は。何があっても」
「確かに。こうした時にこそ」
それは福島もでした。けれどです。希望が、その希望が何とか見えてきました。日本にとっても日本の人達にとっても幸せなことに。

第千九百五十七話　完

2011・3・20

第千九百五十八話　この上司はない

第千九百五十八話　この上司はない

日本が必死になっている時にです。ある上司、女の人がです。うきうきしながらです。こんなことを命令していました。命令です。

「インドネシアに行くからエステとショッピングをするスケジュールを作っておいてね」

「あの、今ですか！？」

「ええ、今よ」

平然としてです。こう言うのでした。

そして満面の笑みで。実際にエステとショッピングを満喫してきました。これを聞いてです。日本も開いた口が塞がりませんでした。

「こんな時期にですか」

「あの、何を考えているのでしょうか」

日本妹もです。唖然となっています。

「あのそんなこと言いましたっけの人といい」

「流石にそれはないと思いましたが」

「皆が苦しんで必死になっている時に外遊とは」

兄妹で、です。唖然となっているのです。

そしてお家の人はです。これまた激怒でした。

「あの徳島の腐れカメムシの系列の奴らしいな！」

「仕分けやってたあの婆か！」

「本当に今の上司は碌な奴がいねえな！」

「手前原発に行って作業しろ！」

「そのまま帰って来るな！」

本当に怒っています。よくもまあこんな劣悪な人間と言ってもいいか疑問の輩ばかりいるものです。日本の今の上司達はどうなっているのでしょうか。

第千九百五十八話　完

2011・3・20

第千九百五十九話　戻って来る

第千九百五十九話　戻って来る

時間が来ました。スイスは一旦自分の国に帰ることになりました。スイスの他にもドイツやイギリスも戻っています。その中でスイスは日本に対して言うのでした。

「健闘を祈る」

「有り難うございます」

「そしてである。我輩は」

いつもよりもさらに真剣な顔で。スイスは日本に告げます。

「必ず戻って来るのである」

「必ずですか」

「そうである。日本の為に戻って来るのである」

強い決意を見せて日本に言っています。

「その時まで頑張るのである」

「はい、必ず東北を復興させます」

日本も強い決意で言葉を返します。

「被災している方々も一人でも多く」

「我輩は確信しているのである」

スイスは。見ていました。

「日本は必ず復興するのである」

「少なくともそれを目指します」

「この戦争に勝つのである。だがその時までに我輩は」

「スイスさんは」

「また戻って来る。日本と日本人の為に」

こう言い残してです。スイスは日本を後にしました。そしてそのえうで、です。また日本に来ることを決意していました。日本の為に。

第千九百五十九話　完

2011・3・21

第千九百六十話　来ないでよかった

第千九百六十話　来ないでよかった

今東北ではあることが言われています。その言われていることとは。

「あいつは来ないらしいな」

「ああ、来ないんだ」

「来る来るって言ってて」

「雨が降ってるから来ないってさ」

日本の一番上の上司がです。被災地視察に来るという話が消えてしまったのです。理由は雨だからです。それで視察を中止にしたのです。

けれどそのことで、です。皆はこんなことを言うのでした。

「来ないでよかったよ」

「原発でも視察の間作業止めておかしなことになったし」

「怒鳴り散らすだけだし」

「邪魔だよ、邪魔」

「本当にね。いてるだけで邪魔」

こう言われています。誰も擁護しません。何かマスコミでは支持率があがっているようですがそのマスコミは最近日本のマスコミかどうかすら怪しくなっていたりします。

何はともあれです。雨で上司が来なくなったと聞いて。日本も言います。

「来ない方が本当にいいです」

「全くですよ。何の役にも立たないですから」

福島もこう言います。かなりやつれてしまっています。

「原発でもいつもの調子でしたから」

「カルシウムが足りない以前に人間として必要なものが殆ど欠けてしまっているのですね」

日本にここまで言われるその上司です。何はともあれ雨が降っただけで来ないというのです。その覚悟たるやです。さっさと甲子園の一塁側で巨人グッズに身を包んで阪神罵倒しろと言いたい位です。

第千九百六十話　　完

２０１１・３・２１

第千九百六十一話　健闘

第千九百六十一話　健闘

「有り難うございます」
日本がです。自衛隊とレスキュー隊の方々にお礼の言葉を述べています。
「かなりましになりました」
「いえ、仕事ですから」
「当然のことです」
「当然ではありません」
日本は謙遜するその方々に述べるのでした。
「命の危険を顧みずですから」
「日本さんと国民の方々がかかっていますから」
「そういう時にこその私達ではないですか」
「そう言えること自体が凄いことです」
日本の言葉はこうしたものでした。
「ですから。本当に有り難うございます」
「そうですか。それでなのですか」
「お礼を」
「確かにまだ予断を許さない状況です」
危機は去ってはいません。それでもです。この方々の健闘は讃えられてあるべきだと。日本は考えているのです。だからこその言葉でした。
「しかしそれでもです。よくやってくれました」
「これからですけれどね」
「まだまだ危機は去っていませんから」
現場ではまだ苦しい戦いが続いています。ですがその中で。日本は自衛隊やレスキューの方々に深くお礼を述べたのでした。

第千九百六十一話　完

2011・3・22

第千九百六十二話　御前が処分されろ

第千九百六十二話　御前が処分されろ

東京の上司の人が怒っています。何故怒っているかというと。

「誰が言わせたんだ、一体」

またしても日本の上司がやらかしたのです。何かをやらかす能力だけはあります。

「早くしないと処分するぞとか」

「あの、それはまさか」

「そうだよ。レスキュー隊に対して言ったんだよ」

こう日本にもお話するのです。

「必死でやっている人達にな。しかも彼等はあの連中の指揮系統にないんだぞ」

「貴方の指揮系統ですよね」

「そういうこともある。それにしても必死で働いている人に何てことを言うんだ」

それが許せないというのである。

「あの連中はどうなっているんだ」

「どうなっているか以上にです」

日本もお話を聞いているうちに怒ってです。こう言うのでした。

「あの人達が原発に行くべきですが」

「全くだよ。何処まで人の心がわかっていないんだ」

「そうですね。まさかあれだけ駄目だとは」

「能力だけじゃない、人間として駄目過ぎる」

東京の上司の人も本気で怒っています。当然と言えば当然ですが。

「あの人達は命懸けだったのにな」

「安全な場所で怒鳴っているだけの人とは違いますからね」

駄目人間の巣窟と言ってもいい今の日本の上司達はまたしてもしでかしたのです。本当に最悪の事態をしでかさないか心配な日本で

した。

第千九百六十二話　完

2011・3・22

第千九百六十三話　希望の灯火

原発にです。ようやくです。
「照明が点きましたね」
「そうですね。何とか」
日本妹が日本の言葉に応えています。
「そこまで至りました」
「後はここから順調に進めば」
「一応一番危ない状況は避けられたみたいですね」
「そうですね。それでもまだ油断はできません」
日本でなくともです。今ここで安心できるかどうかというとそうではありません。やはり不安が残ります。それで今こう言うのでした。
「まだまだこれからですね」
「確かに。けれど頑張ってくれた人達には」
「心から感謝しています」
そのことはなのでした。
「あの人達のお陰ですから」
「ですね。危険を顧みられずに」
「ようやくここまで来られました」
「それで兄上、いいでしょうか」
日本妹はお兄さんにふと尋ねました。
「福島さんはどうされていますか？」
「ほっとされています。油断はされていませんが」
「そうですか。この状況にですね」
とりあえずはですがそうなのでした。原発の照明はです。日本達にとってはまさに希望の灯火に他ならないものでありました。

第千九百六十三話　完

2011・3・23

第千九百六十四話　報道があまりにも

第千九百六十四話　報道があまりにも

今回もです。マスコミはです。
日本と福島が原発の報道を検証してからお話をしています。
「煽っていますね」
「はい、国民や県民の方々の不安を」
「それでいて上司の方々の不始末や失言には甘いような」
「それも何か気になりますね」
「いつもと言えばいつもですが」
「だからこそ今回は余計に気になりますね」
福島も顔が暗くなっています。今の東北の県は何処もそうなっていますがその素朴な顔が暗くなると余計に目だってしまうのです。
「あの上司の人の処分発言も」
「あまり報道されていないのでは？」
「他の上司の人達のエステやそういったことも報道されていませんよね」
「確かに。こんなことは前の上司の人達がしたら」
どうなるか。言うまでもありません。その頃の報道は何をしても蜂の巣をつついた様な騒ぎになってしまっていからです。今思うと奇怪なまでに。
「報道しない自由なら」
「そんな自由はいりませんね」
「これでは。テレビを観ていると本当に」
「頭が駄目になってしまいますよ」
そうした報道が今回も目だってしまっているというのが二人の検証の結果なのでした。どうもこれが事実らしいのが危険なことであります。

第千九百六十四話　完

2011・3・23

第千九百六十五話　凄い桁です

第千九百六十五話　凄い桁です

「日本さん、大丈夫ですか！？」
台湾は今日も日本の為に働いています。その台湾がです。
一旦自分のお家に戻ってから日本のところに来てです。そのうえで日本に言ってきたのです。
「募金集りましたんで持って来ました」
「えっ、それだけですか！？」
「少ないですよね」
台湾は申し訳なさそうに言います。けれどです。
その額たるやです。日本も思わずこう言ってしまうものでした。
「すいません」
「いえ、それだけ多くの額を寄付して下さるのですか」
多いのです。日本が驚いたのはそれが理由でした。
「何と。いいのですか？」
「多いですか？」
「はい、そこまで寄付して下さるとは」
「テレビで御願いしたんです。そうしたらこれだけ集りました」
所謂チャリティーです。そうした番組で集めたというのです。台湾もとにかく日本の為にです。必死に働いているのです。この状況において。
「是非、受け取って下さい」
「有り難うございます、本当に」
日本も受け取って。それからお礼を言うのでした。
台湾は救助活動だけでなく寄付もするのでした。何故かというとです。
全ては日本と日本の国民の人達の為です。困っている彼等を見るとどうしてもなのです。そうしないではいられないのが彼女なので

す。

第千九百六十五話　完

2011・3・24

第千九百六十六話　自粛し過ぎ！？

第千九百六十六話　自粛し過ぎ！？

大変な状況の今の日本です。けれどです。
そのせいでしょうか。今放送中のアニメが延期され続けています。
それを見てです。
日本もです。首を傾げさせるのでした。
「ニコニコでも延期ですか」
「何かおかしいで、これ」
大阪がぼやく感じで日本に言います。関西は今回無事です。それで後方から東北の人達を支えているのが今回の関西やそこの人達です。
「延期に延期って」
「野球のオーナーの人達の我儘ならともかく」
「アニメはええと思うんやけれどな」
「こうした状況ですから余計に放送して欲しいですね」
日本もこう言います。
「あの、あまり自粛しては」
「アニメが終わるかどうかが不安やし」
さらにでした。
「観られへんので落ち込むわ」
「全くです。かえってそうなってしまいます」
「確かに暗い展開のアニメやけれどな」
それでも楽しみにしている人達も多いのです。けれどなのでした。
延期に次ぐ延期です。多くの人達が落胆しています。
「自粛するのは捏造報道と偏向報道にしてくれや」
「それは止めないのですよね」
何はともあれニコニコも延期でした。アニメもどうなってしまうのでしょうか。

第千九百六十六話　完

2011・3・24

第千九百六十七話　元上司が

第千九百六十七話　元上司が

福島にです。あの人が来ました。
「えっ、いいのですか？」
「今は大変なのですが」
「大変だから来たんじゃないか」
あのマスコミによって散々に叩かれていた元上司の人はです。日本と福島に対してしっかりとした顔と声で答えたのでした。
「今こういう時期だからね」
「しかしここはです」
「今はかなり危険なんですけれど」
「そんなことを言ったら福島にいる人達はどうなるんだ」
その人は言いました。
「そうだろ？それで心配で来たんだ」
「今の上司の人は誰も来ないのに」
「来ても邪魔になるだけなのに」
それでもこの人は来たのです。危険を顧みずにです。福島はこの人の地元ではありませんし福島にもこの人を馬鹿にしていた人が多いのにです。
そうしたことを何処かに置いて。来てくれたのです。
「皆頑張ってくれよ」
「わかりました、では」
「まだまだ苦しい戦いが続きますけれど」
「俺も戦う。射撃はできないけれどな」
それは今の戦いでは使えません。けれどです。
この人も戦う為に来てくれたのです。本当に頼りにしていい人は誰だったのか、日本も福島もわかってきたのでした。今ここに至って。

第千九百六十七話　完

2011・3・25

第千九百六十八話　取り柄は怒鳴り散らすことだけ

第千九百六十八話　取り柄は怒鳴り散らすことだけ

相変わらずです。今の上司はです。
何の決断も下さずです。怒鳴り散らしているだけです。
それを見てです。日本は宮城に対して囁きました。
「何といいますか」
「そうですね。無様ですね」
「はい、大変なのはあの人ではなく被災者の方々だというのに」
「何をしているんでしょうか」
宮城も呆れています。勿論仙台もです。
「自分をみっともないと思わないのでしょうか」
「どうもプライドはかなり高いようなので」
もっと言えばプライドしかありません。それだけが異常に高くて人に何か教えてもらうとかえって怒鳴り散らすような人なのです。
「それで。意見を言っても」
「怒鳴られては、ですよね」
「誰も言いません。あれではです」
「はい、猿です」
宮城は怒った顔で言いました。
「猿が上司になっているだけですね」
「本来一番上の上司の人は怒鳴ったりしては駄目なのですが」
「それがわからない人が今の上司ですか」
「それが一番厄介です」
他にはお化粧をして作業服に襟を立てて決めているおばさんもいます。そして安全な場所からテコでも動かないのです。そうした人達が今戦争の指揮にあたっています。

第千九百六十八話　完

2011・3・25

第千九百六十九話　桁が違う

第千九百六十九話　桁が違う

マスコミがです。やたらチェリノブイリを言っています。まるでその大惨事が起こって欲しいかの如くです。

そんなマスコミを見てです。日本が宮城に言いました。

「あの人達は原発に悪意があるのですね」

「昔からそういう感じの人達はいましたね」

実はそうした人達が今の上司の人達のルーツだったりします。

「それにしても。そんなことになったら」

「あの人達も只では済まないのですが」

そうした時は普段は庶民の為とか言いながらその庶民を蹴飛ばしてでも逃げるのはもうわかっています。それが日本のマスコミです。

けれどです。ここで、です。日本が言いました。

「ですがチェリノブイリと今ではです」

「はい、そもそも事故の規模が違います」

「チェリノブイリはあまりにも酷い惨事でした」

「確かに上司の人が混乱させていますが」

特に一番上の上司が酷かったりします。

「それでも。あそこまではです」

「流石になりません」

ここが大事です。けれどマスコミは煽っているのです。

「どうせならあの人達が取材で原発に飛び込んで欲しいのですが」

「自分達は絶対に安全な場所からテコでも動きませんから」

酷いのになると東京から離れません。

この人達が煽っていたりするのです。日本もそのことには注意しています。しかも上司は頼りにならないどころか邪魔、日本にとって震災よりも厄介なことでした。

第千九百六十九話　完

2011・3・26

第千九百七十話　この方々は違う

第千九百七十話　この方々は違う

日本と国民の窮地を見てです。上司の上司の方がです。
あるものを出して下さいました。それは。
「えっ、御料牧場からですか！？」
「はい、ミルクやお肉が届きました」
何とです。ご自身のものを出してくれたのです。
「そこまでされなくてもいいのに」
「今の上司の人達なんてパフォーマンスばかりで身銭なんて一銭も出さないのに」
日本も宮城もこのことにはびっくりしました。
「それで出して下さるとは」
「何という御心遣い」
二人以外にもです。皆驚いています。
「私と国民の危機だからですか」
「それで、なのですね」
「やはり違います」
日本は感嘆と共に言いました。
「私の上司の上司の方はです」
「そうですね。流石に世界で唯一の方だけはありません」
「その御心遣い、何よりの力になります」
けれど一番上の上司の人はといいますと。
最近出て来なくて何処にいるんだと言われていて。やっと出て来ました。そして。
ただ記者会見です。それだけでした。
まさに月とスッポン、いえそれ以上のものがあります。そもそも人間として何かが全く違うようです。日本はそのことも見たのでした。

第千九百七十話　完

2011・3・26

第千九百七十一話　積極的な人達

第千九百七十一話　積極的な人達

「日本、僕の軍を好きなだけ使ってくれ！」
「ものは何でも送るあるよ！」
アメリカと中国が。かなり必死に日本を助けています。
そしてこの人もです。何か普段と全く違います。
「とにかく何でも言うんだぜ！何でもするんだぜ！」
韓国もです。この人達がとにかく必死に日本を助けてくれています。今の上司の人達よりもです。遥かに助けてくれているのが現実です。
これを見てです。日本妹がお兄さんに言います。
「兄さんとあの人達は色々ありますよね」
「最近は今の上司の人達の責任が大きいですが」
ここでも出て来る人達です。冗談抜きで禁治産な認定を受けかねません。
「それでも今は」
「そうですね。違いますね」
「オーストラリアさんやニュージーランドさんもですし」
「あとは台湾さんにタイさんも」
先の二人はともかく後の人達、特にタイとはこれといっていざこざがなかったりします。
けれどです。太平洋の人達が特になのです。
「今回お世話になっていますね」
「はい、とても」
こうお話する兄妹でした。
とにかく今回は太平洋の面々がかなり積極的に日本を助けています。それはもう必死と言っていいレベルなのでした。日本も日本妹もです。このことには本当に感謝しているのでした。とにかく大変

な状況が続いていますが。それでも日本は一人ではありません。

第千九百七十一話　　完

２０１１・３・２７

第千九百七十二話　現実問題として

第千九百七十二話　現実問題として

台湾がです。必死で働いたり義捐金を集めたりしている韓国に対して尋ねます。彼女も日本の為に韓国と同じことをしています。

「あんたがどういう風の吹き回しなのよ」

「死活問題なんだぜ」

韓国は切羽詰った顔で台湾に言います。

「俺にとっちゃまさに生きるか死ぬかなんだぜ」

「ああ、日本さんがいないとね」

「この前妹に言われたんだぜ。若し日本がこのまま倒れたら」

震災直後に言われたのです。

「俺、死ぬんだぜ」

「確実にね。あんたは間違いないわね」

「実は今上司が真っ青になってるんだぜ」

死相といレベルで、です。韓国の上司は蒼白になっているのです。

「若し原発が最悪の事態になるかこのまま日本がダメージ受けたままだったら」

「あんた、北みたいになるわよ」

間違いなくそうなるのです。

「それは嫌よね」

「だから今ここにいるんだぜ。笑い話じゃないんだぜ」

「まあ私もだけれどね。このまま日本さんの傷が治らないと」

これは彼女もなのです。そして他の人達も韓国や台湾と同じなのです。

「危ないのよね」

「あの上司の連中も何とかしてやりたいんだぜ」

しかしそれ以上に何だかんだで日本の為に動いている彼等でした。

彼等も生きるか死ぬかですし日本のことがいい意味で心配なのです。

第千九百七十二話　完

2011・3・27

第千九百七十三話　指揮系統はどうなっている

日本はです。あることに気付きました。
大変なことになっている原発の状況です。その作業についてですが。
「指揮が混乱していますね」
「あの、どうなってるんですか？」
日本妹も言います。
「統一して。誰かが指揮にあたっているのですか？」
「自衛隊ですか？レスキュー隊の人が指揮を執っているんですか？」
「それがよくわからないのですが」
「どうなってるんでしょうか」
「本来はです」
日本はさらに言いました。
「こういう状況だからこそ上司の人が頑張ってくれるのですが」
「今回。上司の誰が指揮官なんでしょうか」
「それが全くわかりません」
「本当にどなたが」
こう尋ねてもです。返答はありません。
上司の誰もです。答えないのです。これには日本も日本妹も唖然となりました。そうしてそのうえで二人でこうお話をするのです。
「まさかこれは」
「そうですね。誰も指揮にあたっていない」
「これでは。とても」
問題が解決するとは思えませんでした。原発はこれからどうなってしまうのか、日本は危機を抱かずにはいられないのでした。

第千九百七十三話　完

2011・3・28

第千九百七十四話　現場はです

現場の自衛隊の人達は本当に頑張っています。
上司の人達が勝手に自分達の手柄の様に宣伝していてもです。この人達はです。
率先して頑張ってくれています。日本もそれを見て安堵して言います。
「この方々がいてくれますから」
「はい、何とかなっていますね」
「はい、本当にその通りです」
こう宮城にもお話します。
「各国の救援隊の方々も戻ってきてくれましたし」
「ええ。被災者の人達も頑張っています」
本当にです。現場はまだまだ必死です。けれどなのです。
上司が何もしなくても。この人達は自分達で頑張ってそうして耐えてきているのです。それは他の国が見てもです。驚くべきものでした。
「あの、皆さんとても礼儀正しいですね」
台湾が驚いています。
「ここまで整然としているとは思いませんでした」
「私もです」
それは日本もです。思うことでした。
「素晴らしいです。神戸でもそうでしたが」
「国民の方々は危機にこそ頑張ってくれるのです」
日本のです。密かな誇りです。
「この方々さえいてくれれば」
「大丈夫ですよ、日本さんは」
台湾も笑顔で言いました。この人達が日本を支えてくれているの

です。

第千九百七十四話　完

2011・3・28

第千九百七十五話　野球も

第千九百七十五話　　野球も

震災の影響がです。スポーツにも出ています。
多くの選手が寄付をしてくれて気を使ってくれています。その中で。
シーズン開催も延期されました。そしてそのうえで。
ナイターもです。当面しないことになりました。日本もそれについて言います。
「今はこうした状況ですから」
「そうですね。仕方ないですよね」
日本妹がお兄さんに同意します。
「我慢しないと」
「野球がなくなる訳ではありませんから」
「だからこそですね」
「特にドームはです」
そこはどうかというのです。日本で最も敵が多いチームです。
「電気を多く使いますから」
「当分使わない方がいいですね」
「正直ドーム球場に電気を回す位なら」
それ位ならと。日本は言います。
「少しでも節約しないといけない状況です」
「確かに。それはそうしないと」
「買占めなり何なり起こっていますし」
「電気は今は節約ですね」
「はい、ここは我慢しましょう」
こうしてドームは暫く使わないことになりました。どうもそのチームの偉い人が怒っている様ですがそんな我儘が通用する状況ではありません。

第千九百七十五話　完

2011・3・29

第千九百七十六話　甲子園でも

第千九百七十六話　甲子園でも

震災の影響のない関西ではです。
今甲子園で高校野球が行われています。その試合は。
どのチームも頑張っています。けれどです。
「やっぱり。今は静かやで」
「そうやな。どうしてもな」
大阪と奈良がお話しています。その甲子園についてです。
「仕方ない状況やさかい」
「関西も自粛や」
「けれどや」
それでもだとです。大阪は言いました。
「皆ほんまに頑張ってるわ」
「必死に野球やってるわ」
「それでええんや」
大阪の言葉はしみじみとしたものです。
「そうした頑張りを人が見るとや」
「それだけで励ましになるわ」
「そういうものやさかいな」
「高校球児には頑張って欲しいで」
「こうした状況やから余計にや」
こう言ってです。二人だけでなくです。
他の都道府県も高校野球を応援しまし。必死に頑張って欲しいのです。
特に東北の学校にはです。皆が声援を送っています。こうした状況であるから余計に頑張って欲しい、人の心がそこには出ているのでした。

第千九百七十六話　完

2011・3・29

第千九百七十七話　勇者

第千九百七十七話　勇者

「来てくれたのですか」
「当然ですよ」
「その為の我々ではないですか」
自衛隊の方々は今も続々と被災地に来てくれています。そうしてそのうえで、です。立派そのものの顔で日本に対して答えるのです。
「危機を省みずですよ」
「国民の皆さんが大変な時にこそです」
「だからなのですか」
日本も自衛隊の方々の言葉に思わず唸ってしまいました。
「この様な危うい場所にまで」
「ですから。これは戦争ですよね」
「だったら当然じゃないですか」
また当然だというのでした。
「そうですよね。空も海も使えます」
「こうした時の私達ではないですか」
「すいません、それではです」
日本は自衛隊の方々の言葉を受けました。そしてなのでした。
自衛隊の方々と共にです。作業にあたるのでした。
「コンビニは復旧しましたがそれでもですね」
「はい、まだまだ予断を許しません」
「だからこそ頑張りましょう」
まさに日本の宝です。この人達がいてくれるからこそです。日本は今何とか立っています。自衛隊の方々は日本にとって勇者以外の何者でもありません。

第千九百七十七話　　完

2011・3・30

第千九百七十八話　少し勉強したい

第千九百七十八話　少し勉強したい

大変なことがわかりました。何とです。

原発が今大変なことになってしまっている原因ではないかと言われている一番上の上司の人の視察ですが。その人が言ったのです。

「少し勉強したかったんだよ。それでなんだ」

「視察したというのですか？」

「陣頭指揮はしたよ。しっかりとね」

けれどその時に作業は止まっていたと言われています。そもそも陣頭指揮というのなら三時間で終わるようなものなのでしょうか。

日本はそこにです。嘘を感じました。

それで上司の人をあからさまに疑う目で見てです。こう尋ねました。

「あの、少し勉強したくて陣頭指揮にあたられたのですか？」

「それがおかしいっていうのか！」

十八番の怒鳴り散らしが出ました。けれど日本には効果がありません。

「俺の言っていることに間違いがあるのか！」

「そもそも三時間で陣頭指揮を終わらせたのですか？」

「それの何処がおかしい！」

「おかしいのは貴方です」

日本は言い切りました。

「御自身の言葉をお考えになって下さい」

「一体何が言いたい！」

この人だけがわかっていないことでした。

何処までもあれな人です。果たしてここまで駄目な日本の上司が今までいたのでしょうか。本当に酷いことになってしまっています。

第千九百七十八話　完

2011・3・30

第千九百七十九話　遂に来られた

第千九百七十九話　遂に来られた

上司の上司の方がです。被災地に来られました。それを見て日本も自分で出迎えました。

「あの、宜しいのですか？」

「宜しいとは。どういうことでしょうか」

上司の上司の方は気品のある微笑みで日本に応えます。

「貴方も国民の皆さんも大変なのではないですか？」

「いえ、今ここはかなり危険です」

日本はできればです。今はなのでした。

原発のこともありますし危険です。ですから来られることには賛成できかねる状況だったのです。ですがそれでもなのでした。

上司の上司の方はお二人で来られたのです。だから驚いているのです。

「本当に宜しいのですか？」

「構いません。国民の皆さんが大変なのです」

だからだというのです。

「私でよければ」

「そうなのですか」

「皆さん、頑張って下さい」

上司の上司の方は日本と国民に対してお話をされます。

「私にできるのは。これ位しかありませんが」

「いえ、とんでもないです」

日本も慌てて応えます。

「来られて。どれだけ有り難いか」

遂に上司の上司の方が来られたのです。日本にとっても被災者の人達にとってもです。このことは素晴らしい励ましになったのでした。

第千九百七十九話　完

2011・3・31

第千九百八十話　そんなことはわかっている

第千九百八十話　そんなことはわかっている

上司の上司の方が動かれました。しかしです。

怒鳴り散らす以外何の取り柄もないこの上司はです。

暫く振りに出て来てです。こんなことを言うのでした。

「今日本は有史以来最大の危機に瀕している」

「御前のせいだ！」

「御前が言うな！」

皆すぐに言い返します。

「御前今何やってんだ！」

「何もしないで言うな！」

こうです。すぐに言い返すのでした。

「久し振りに出て来て言うことはそれかよ」

「本当に無能なんだな」

「もう早く辞めろ！」

「何時までしがみついてるんだ！」

そんなことはもう誰もわかっていたのです。それを今更言っても何にもなりません。かえって人の不安を煽るだけでしかないのです。

それでもこの人は言いました。それでなのでした。

皆怒ってです。言い返したのです。

「こいつ、本当に今まで何やって生きてきたんだよ」

「何も勉強しない、努力しないで生きてきたのか？」

「今の上司ってそんな奴ばかりだな！」

もう皆わかってきました。とはいっても何とか隠れ蓑を使って生き残ろうとしている人達もいるようですが。人の前歴はよく見ましょう。

第千九百八十話　完

2011・3・31

第千九百八十一話　ランドセルが

第千九百八十一話　　ランドセルが

日本の前にです。これでもかとランドセルが届けられました。

驚いた日本はです。届けてくれたお家の人に尋ねました。

「あの、このランドセルは」

「ええ、全国から被災した子供達と」

「それで来たのですか」

「皆届けてくれたんです」

こう笑顔でお話してくれるお家の人でした。

「凄いですよね、これって」

「はい。一体どれだけあるのか」

「三万はあるみたいですよ」

「三万・・・・・・」

その数を聞いて日本も絶句です。まさかそれ程あるとは思っていませんでした。

けれど嬉しくもあります。それでその人に言いました。

「これは最高のプレゼントです」

「そうですね。子供達にとって」

「大変なのはお年寄りと子供さん達です」

被災すると一番困るのはこうした人達です。そのことはいつもそうですが日本は今回とりわけそのことを認識することになったのです。

その子供達にです。これだけのものが来たのです。日本の喜びはどれだけのものだったでしょう。

「有り難いことです」

「本当にそうですね」

日本も届けてくれた人も感無量でした。これ程までのものを届けてくれた、お家の人達の心に日本は深く感じ入ったのでした。

第千九百八十一話　完

2011・4・1

第千九百八十二話　遅過ぎる

第千九百八十二話　遅過ぎる

上司の人達の対応がです。あまりに遅いです。
そのことにです。仙台が日本に言いました。
「あんまりにも遅いから大変だべ」
「確かに。これまで何をやってきたのか」
「対応があまりに遅くて人が困っているべさ」
「一体何をしているのでしょう」
日本も不思議に思わざるを得ませんでした。
「今更というようなことを今はじめていますし」
「かと思うと原発に行って作業を中断させたべ」
「あれは取り返しのつかないことです」
そもそもこれは人間としてです。取り返しのつかないことでした。
そうしたことをお話していて。日本はつくづく思ったのでした。
その思ったこととは。
「これは。阪神の時よりもです」
「対応がさらに悪いべ？」
「かも知れませんね」
その思ったことを言うのでした。
「会議の調整とかそうしたことを全くされていないとしか思えません」
「三週間経ったんだべ。それでやっとアメリカさんの軍と共同して捜索も」
「有り得ないですね。それはすぐにするべきでしたが」
「とにかく何もかもが遅過ぎるべ」
「何をしていたのでしょうか」
こんな話になってしまいました。とにかく変な人事ばかりしていて実際には何も動いていません。これでは被災地がたまったもので

はありません。

第千九百八十二話　完

2011・4・1

第千九百八十三話　共同作戦

第千九百八十三話　　共同作戦

「じゃあ日本行くぞ！」
「はい、アメリカさん」
懐かしい男どアホうなやり取りのうえで、です。アメリカは日本に対して自分の軍を出します。
そのうえで海にさらわれている人達の捜索にかかります。けれどです。
「三週間だからな」
「はい、遅いですね」
「僕達の共同作戦の決定も遅いぞ」
アメリカははっきりと言い切りました。
「それもかなり」
「そうですね。何もかもが遅いです」
「この三週間日本の上司は何をしていたんだ？」
「何もしていません」
こう言うしかありません。本当に何もしていません。
「女の人が作業服の襟を立てて決めていただけです」
「それで是非現地に行って欲しいな」
アメリカ怒ってます。それも当然のことです。
「よくそんな人が上司になったな」
「今では多くの人が後悔しています」
とはいっても後悔先に立たずです。しかし何はともあれです。アメリカ軍と日本の自衛隊の共同作戦が始動したのです。まさにそれは。
「戦いはこれからだな」
「その通りですね」
こう話してです。彼等はあらためて戦いに入ります。三週間経っ

てもです。戦いはまだ続いています。

第千九百八十三話　　完

2011・4・1

第千九百八十四話　何故西に

第千九百八十四話　何故西に

中国が油をタンカーで運んできました。けれどです。運んでから日本にです。いぶかしむ顔で言いました。

「僕は被災者の人達の為に持って来たあるが」

「どうしたのですか？」

「被災地は東あるな、日本の」

中国はそのことを日本に対して確認します。

「そうあるな」

「はい、その通りです」

日本もその通りだと答えます。

「本当に今東北の人達が大変なのです」

「それで何で愛媛に停泊させたあるか？」

中国が言うことはそのことでした。

「それがわからないある。場所が全然違うあるが」

「実はそれは私も」

日本もです。こう言うのでした。

「わからないのです」

「日本の上司は何を考えているあるか」

送った本人にしてみては送ればそれで話は終わりなのです。けれどこの行動にはです。流石にいぶかしまざるを得ないのでした。そしてです。

中国はまた日本に言いました。

「本当に訳がわからないある」

「私もそう思います」

おかしな事態が続いています。何故西になのでしょうか。

第千九百八十四話　完

2011・4・1

第千九百八十五話　タイもびっくり

第千九百八十五話

タイもびっくり

穏やかな人柄で知られるタイがです。びっくりした様子で日本に言いました。

「あの、この状況でここまで整然としていますと」

「私の国の方々のことですね」

「そうです。被災者の方々です」

他ならぬです。被災者の方々のことを言っているのです。

「本当に礼儀正しいですね」

「はい。皆さんこんな状況でも」

「乱れることなく過ごされています。こんなものは私も見たのは二度目です」

「二度目といいますと」

「神戸です」

かつてのです。関西の大震災の時だというのです。

この時も日本の人達は整然としていました。その時もタイは驚いたというのです。確かにこの状況でここまで落ち着いているというのは凄いことです。

そのことを日本に言ってなのです。

「あの時も凄かったですが」

「大変な時だからでしょうね」

「だからですか」

「皆さん頑張っておられます」

日本もです。けれど自分のことは言わないのでした。

「私も。あの方々と共に今は頑張ります」

「はい、そうして下さい」

タイも賞賛、いえ絶賛する今の日本と国民の人達。復興に向けて

頑張っています。その頑張りは必ず報われるでしょう。それだけのものがあるのですから。

第千九百八十五話　　完

２０１１・４・３

第千九百八十六話　来ても邪魔

第千九百八十六話　来ても邪魔

「何しに来たんだよ」
「どうせパフォーマンスだろ？」
「いるだけ邪魔」
「っていうか来るな」
一番上の上司の人が被災地に来ました。けれどです。
上司の上司の方と違いです。凄く冷たい対応を受けています。
皆白い目で見たり無視しています。まさに今のこの人の人望です。
それを受けてです。この人は怒るのでした。
「俺が来たのに何だってんだ！」
「原発のこともありますから」
日本もです。他の人には見せない冷淡さで迎えています。
「それでだと思いますが」
「原発！？あれは俺のせいじゃない！」
「いえ、貴方が視察に行っておられる間に作業を止めてのことですから」
つまり元凶はこの人なのです。皆そのことを知りだしているのです。今の危機はこの人のパフォーマンスで起こってしまったことなのです。
「貴方が放水に行かれたらいいのでは？」
「俺に死ねというのか！」
「それは国民の皆さんに聞いて下さい」
日本も本当に怒っているのです。
皆この人を無視したり冷たい目で見たりです。それが視察になりました。
そしてただのパフォーマンスが失敗に終わったこの人はです。東

京でも冷たく迎えられるのでした。自分の無様さに全く気付かないまま。

第千九百八十六話　　完

２０１１・４・３

第千九百八十七話　洒落になってないんだぜ

第千九百八十七話　洒落になってないんだぜ

韓国はです。日本が地震と津波に遭ってから元気がありません。それに日が経つにつれです。それが酷くなっていきます。その彼を見てです。オーストラリアが彼に声をかけました。

「どうしたでごわすか。やっぱり日本でごわすか」

「日本からものを造る部品が入って来なくなったんだぜ」

韓国は元気なくオーストラリアに答えます。

「それと芸能界も日本の人間が観てくれなくなって観光客もいなくなったんだぜ」

「日本からの観光客もでごわすか」

「結果として誰も観光客来なくなったんだぜ」

韓国に来る観光客は大抵日本から来ているのです。つまり日本がいないと韓国の観光産業は文字通り終わってしまうのです。

そして何よりも。

「日本があれになると俺の国の産業は全部駄目なんだぜ」

「大事な部品とかは全部日本でごわすからな」

「このままじゃ俺が先に死ぬんだぜ」

日本より先にです。

「とりあえず。日に日にやばくなっていくんだぜ」

「そういえばおいどんも」

それはオーストラリアもなのでした。

「身体の調子が。どうも」

「日本からの観光客減ったんだぜ、そっちも」

「そのせいでごわすな。これはまずいでごわす」

とはいっても韓国よりはまだましな状況です。とにかく今はです。韓国にとっては戦争が起こったよりも大変な状況になってしまって

います。

第千九百八十七話　完

2011・4・4

第千九百八十八話　上司の顔色が

第千九百八十八話　上司の顔色が

韓国がまずいのも怖いですが上司の顔もです。

蒼白になっています。にこりともしません。それで韓国に対して言うのです。

「日本に救援物資を送ってくれ」

「早く立ち直って欲しいんだぜ？」

「さもないと御前が本当に死んでしまう」

本気そのものの言葉で言ったのでした。

「大丈夫じゃないな」

「洒落になってない位に危機的なんだぜ」

韓国もこの状況で見栄は言えません。冗談抜きでまずい状況だからです。

「どうしたもんだぜ」

「だからだ。日本に救援物資を送れ」

蒼白の顔で言う上司です。

「いいな、ピストン輸送だ」

「わかったんだぜ。とにかく今は日本が復活しないと俺も死ぬんだぜ」

「誰が、日本なんて沈没しろと言った奴は」

韓国ではよくそんなことを言う国民がいます。とにかく色々なことがある日本と韓国です。韓国が一方的に架空戦記を読んで文句を言っているだけですが。

それでもこの上司の人は冷静なので。こう言うのでした。

「日本が沈没したら我が国はだ」

「俺も一緒に沈没なんだぜ」

韓国も蒼白になっています。

かくして今日も日本に必死に救援物資を送らせる韓国の上司でし

た。日本がまずくなったら韓国もです。物凄くまずいことになってしまうのです。

第千九百八十八話　　完

２０１１・４・４

第千九百八十九話　実は一蓮托生

第千九百八十九話　実は一蓮托生

アメリカと中国が生徒会に出ます。けれど二人共顔色がよくありません。真っ青になって今にも死にそうな生徒会長よりはましにしてもです。

イギリスとフランスは二人を見てすぐにわかりました。どうして二人の顔色がよくないのかを。

「御前等もだったよな」

「かなり日本に頼ってたよな」

「実は日本に産業のかなりの部分を頼ってたんだよ」

「事実上縁の下は日本だったあるよ」

この二人にしてもです。自分達の産業のかなりの部分を日本に支えてもらっていたのです。

けれど日本は今あの様子です。これではです。

「観光客も来てくれないんだよ」

「そっちも大変なことになったある」

「御前等までそうなるからな」

「まあわかってたことだけれどな」

この三人の関係についてはイギリスもフランスもわかっていたのです。

「御前等三人誰か一人が駄目になったら後の二人も駄目になるからな」

「それ思うとあれなんだな」

「そうなんだよ、一蓮托生なんだよ」

「そうなっているあるよ」

二人も今は隠せません。実はそうした弱点があったのです。

「日本、早く復興してくれないか？」

「さもないとこっちが大変ある」

その本音を言う二人でした。日本が困ると大変なことになるのは韓国だけではないのです。この二人にしてもそうなのです。それが事実です。

第千九百八十九話　　完

２０１１・４・５

第千九百九十話　だから救援も

第千九百九十話　だから救援も

アメリカも中国もです。自分達の上司の言葉を受けてです。日本に来てです。必死に救助やら救援を行っています。

「とにかく早く復興してくれないと」

「こっちまで潰れるあるよ」

作業服姿で作業をしながら言います。

「日本だけじゃ駄目なら」

「こっちも動くあるぞ」

「本当に必死だね」

ロシアがその二人を見て言います。

「君達にとって日本君ってそこまで重要なんだね」

「そうさ、何しろいないとこっちも消えるからな」

「そうなってしまうある」

「そうだね。君達三人の関係ってね」

ロシアはにこりと笑ってこのことを言うのでした。言うことはイギリスやフランスと同じですが。

「誰か一人がいなくなると残る二人もいなくなるんだよね」

「だから必死さ」

「何だかんだで助け合わないと恐ろしいことになるある」

「うん、誰か一人がいなくなったら」

ロシアはにこりと笑ったまま自分の言葉を続けます。

「三人共。いなくなるんだよね」

「何が言いたいんだ？」

「ロシアも手伝うよろし」

二人は気付いていませんでした。ロシアの後ろにあの黒いオーラが漂っていることに。ロシアは今三人の致命的な弱点に気付いたのでした。

第千九百九十話　完

2011・4・5

第千九百九十一話　マジでやばくなってきた

第千九百九十一話　マジでやばくなってきた

韓国がです。日本に絶叫しました。
「本当に今の上司は最悪なんだぜ！」
「私のところのですよね」
「原発への対応は何やってるんだぜ。指揮系統とかそういうのが全くわからないんだぜ」
「はい、どうなっているのか私も」
日本もです。もう蒼白になっています。そのうえでの言葉です。
「わかりません」
「日本もわからないんだぜ！？」
「残念ですが。何か会議やらをどんどん新設していますが」
「その前に動かないとどうしようもないんだぜ」
「それが全部後手なのです」
それもどうしようもないまでにです。
そうした事態が続いて水が漏れだしているのです。これは危険というよりも意図的に悪い状況にもっていっているのではないかと思える程です。
正直まずいです。日本がまずければ韓国もなのです。
韓国はその顔で日本に言います。
「俺の顔、どうなってるか見てみるんだぜ」
「死相が見えてますが」
「だからあの上司連中何とかするんだぜ！さもないと俺が本当に死ぬんだぜ！」
「私も。このままでは」
悪い方に悪い方に向かっています。これはまずいです。
しかし日本の上司の対応は全てが悪いです。一体どうなってしま

うのか、最早誰もが暗澹たる気持ちにならざるを得ない状況です。

第千九百九十一話　　完

２０１１・４・６

第千九百九十二話　考えてみたら

第千九百九十二話　考えてみたら

日本はです。ふと考えてみました。そのうえで妹に言います。
「若しかして今の上司の人になってから」
「そうですね。碌なことが起こってませんよね」
「何かあれば怒鳴り散らすだけですし」
「何もできない人ですし」
「しかもあの人がトップになってからです」
そのことにです。日本は気付いたのです。
「とんでもないことばかり起こっていますが」
「まさか。じゃああの人は」
「そうですね。疫病神かも知れません」
日本はいささか非科学的なことを思いました。思わざるを得ないのでした。
「それもかなり強力な」
「只でさえ何の能力もなくて人間としても駄目なのに」
日本妹も流石にこうなってはこうも言います。
「それで疫病神ですか」
「恐ろしい人です」
日本は唸る様に言いました。
「まさにこの世に生まれるべき人間ではありませんでした」
「あのカメムシを踏み潰して皺だらけにしたような顔の人もですけれど」
「作業服の襟を立てている人といいこの状況で外遊してエステで遊んだ人といいです」
「国会でこけた奇麗で可愛いとか言われている人もそれを言った人もですね」
駄目人間とかそういうレベルですらない人と言ってもいいかどう

かすらわからない面々がです。日本の今の上司連中なのでした。

第千九百九十二話　　完

２０１１・４・６

第千九百九十三話　民間では

第千九百九十三話　民間では

上司があてになりません。けれど復興はしなければなりません。そのパラドックスはです。まずは自衛隊の人達が埋めてくれます。そしてです。さらにです。

民間企業が次々にです。馳せ参じてきています。

「すいません、こんな状況で」

「何言ってるんですか、日本さんの為ですよ」

「そうですよ」

その人達は笑顔でこう言うのでした。

「俺達日本にいるんですから」

「こういう時にこそ何かをしなくてどうするんですか」

「だからですか」

「はい、そうです」

「だからですよ」

また笑顔で、です。日本に対して言います。その言葉を聞いてです。

日本もです。笑顔になります。そうしてなのでした。

「わかりました。それなら」

「日本さんも頑張っていますから」

「俺達も頑張りますよ」

民間の人達もです。頑張っています。

それも東だけでなく西からもです。立ち上がる人達が次々と名乗りを挙げています。

その人達の力を受けてです。日本は今また立ち上がりました。そうして。

まだ原発は大変ですがそれでもです。日本は自分にはそうした人達がいてくれているということがわかったのです。彼にとっては大

きな力です。

第千九百九十三話　完

2011・4・7

第千九百九十四話　流石に嘘と思いたい

第千九百九十四話　流石に嘘と思いたい

東北への物資が滞っています。そのことについてです。

ある人がです。強張った顔でそっと日本に囁きました。その囁きを聞いてです。

日本の顔色が見る見るうちに変わりました。そのうえで言いました。

「それは本当ですか！？」

「はい、どうやら物資をです」

「止めている！？あの団体がですか」

「そうみたいですよ」

「前から色々と噂のある団体でしたが」

日本もその団体のことは聞いています。ある上司が代表を務めていてしかもその上司は一度不正で捕まっています。マスコミに持て囃されている人なので助かりましたが。

その団体がです。物資を止めて自分達が流通させて手柄にしようとしているというのです。日本はそれを聞いてです。

蒼白になってです。その人に言いました。

「流石に嘘と思いたいですが」

「そうですよね。今は人の命がかかっていますから」

「ですがあの人は前科があります」

阪神の時にです。しっかりとあるのです。

「おまけに自衛隊に対して悪意を持っていますし」

「色々と怪しい人とのつながりが噂されていますね」

「そうした人ですから。今回も」

「はい、やっぱりって思われますか」

「否定できません」

流石に日本も嘘と思いたいお話でした。しかしその否定がどうし

てもできない、その人に関しては日本もそう思ってしまうのでした。

第千九百八十四話　　完

２０１１・４・７

第千九百八十五話　観光産業がもう

第千九百八十五話　観光産業がもう

イギリスとフランスが韓国に呼ばれました。まずは二人共不平たらたらで彼の国に向かいます。

「ったくよ、何だってんだよ」

「何で俺達が呼ばれるんだ？」

二人はまずこのことが不満でした。

「どうせ俺達の名前さえ覚えないってのによ」

「それで何の用なんだよ」

二人はぶつくさ言いながら韓国に来ました。するとです。

物凄く寂れています。何かゴーストタウンみたいになっています。

二人はこれを見てです。思わず声をあげて叫んでしまいました。

「っておい、こりゃ何だ！」

「誰もいないってどういうことだよ！」

「ああ、適当に呼んだのが来たんだぜ」

韓国がふらふらしながら二人の前に出て来ました。彼もかなりやつれています。

「まあ何か食ってくんだぜ」

「その前に御前何があった！」

「戦争か！？それとも震災か！？」

「震災なんだぜ」

それだという韓国でした。

「日本の震災のせいで日本から観光客が来なくなったんだぜ」

「おい、じゃああれか。日本からの観光客が来なくなってか」

「こうなっちまったのかよ」

「そうなんだぜ」

実はそういう理由なのでした。日本が震災になってそれで観光客も来なくなったのです。韓国の観光業界が未曾有の危機を迎えてい

るのです。

第千九百八十五話　完

2011・4・8

第千九百八十六話　日本が圧倒的に多い

第千九百八十六話　日本が圧倒的に多い

韓国はです。二人にチゲ鍋とマッコリを御馳走しながらです。今の彼の事情をお話しました。

「とにかく俺の国の観光業界は日本から来る奴で成り立ってるんだぜ」

「日本が今あれだからな」

「大変だからな」

「それで旅行を自粛するようになったんだぜ」

そうなればというのです。韓国は。

日本から観光客が来ないのです。その一番のお得意様がです。そのせいで。

観光業界が大変なことになってしまっています。それで言う韓国でした。

「この状況が続くと本当にまずいんだぜ」

「御前北斗七星の横の星見えてるだろ」

「神闘士の双子の白い方だけれどな」

「はっきりと見えてるんだぜ」

やっぱりそうでした。今の韓国には見えているのです。

それで、です。韓国はまた言いました。

「日本が立ち直ってくれないと観光業界だけじゃないんだぜ」

「他の産業もだよな」

「とにかくあらゆる話がだよな」

「とりあえず今観光客が欲しいんだぜ」

それで二人を呼んだのです。かなり適当に色々な人に声をかけてるみたいです。

かくして来た二人にです。韓国は言いました。

「また来て欲しいんだぜ。名前知らないけれどそれでもなんだぜ」
その名前をまだ知られていないことにかなりうんざりとした顔になるイギリスとフランスでした。しかし今の韓国には驚く彼等なのでした。

第千九百八十六話　　完

２０１１・４・８

第千九百八十七話　戦う人達までもが

第千九百八十七話　戦う人達までもが

「元気ですかーーーーーーーーーっ！！」

被災地にです。あの声が鳴り響きます。

やって来たのは伝説のプロレスラーです。他にも大勢来てくれています。

その人達がです。日本と被災者の方々に言うのでした。

「今は確かに大変だ、しかしだ」

「ここでが踏ん張りどころですね」

「そうだ。皆頑張れ！」

プロレスラーの人はこう言って日本も被災者の人達も励まします。

「俺も微力ながら助太刀させてもらう！」

「いえ、微力ではありません」

むしろその逆だと。日本は言うのでした。

「貴方まで来られるとは」

「励ましになったか？」

「勿論です」

日本もです。その人を見ているだけで元気が出てきました。この人のその存在はです。まさに誰もを元気にさせるものだからです。

日本はまた元気になりました。それでなのでした。

被災者の方々にもです。こう言いました。

「皆さん、今は確かに大変ですが」

「そうですね、ここで踏ん張りましょう」

「そして復興です！」

皆で言い合うのでした。プロレスラーの方々が来てくれただけで、です。日本も被災者の方々も元気が出たのでした。まさに百万の援軍です。

第千九百八十七話　完

2011・4・9

第千九百八十八話　黄金の鷲達

第千九百八十八話　黄金の鷲達

プロ野球の選手達、その被災地を本拠地としているチームの選手達もなのでした。

被災地においてです。被災者の方々をお見舞いしています。

「僕達も頑張ります」

「頑張ろう仙台です」

「よく来て下さいました」

日本もです。そのプロ野球選手の人達に御礼を述べました。

「特に子供達にとっては最高の励ましです」

「はい、後はです」

「野球で魅せます」

「御願いします、それも」

日本もです。この人達の頑張りを見たいと思いました。

それでなのでした。選手の人達に対してです。

手を差し出しました。そうして握手を求めるのでした。

「私も頑張りますので」

「仙台だけじゃなくて東北全体の為に」

「やらせてもらいます」

そしてなのでした。あの闘将も来てです。

日本に対してです。確かな声で言いました。

「今年は違う、何があっても魅せる！」

「見させてもらいます」

日本はその闘将の人とも熱い握手をしました。

スポーツ選手までもが日本、そして被災者の方々の為に頑張るのでした。頑張っていないのは上司の人達だけです。今日も何もしないのでした。

第千九百八十八話　完

2011・4・9

第千九百八十九話　癒し

第千九百八十九話　癒し

大変な状況の日本にです。あの脚本家さんが言ってきました。

「とりあえず今はだ」

「はい、今は？」

「これ食え」

こう言ってです。麻婆豆腐を出してきました。

この人は脚本だけでなく料理も凄いことで知られています。その中でも麻婆豆腐は得意なメニューの一つです。それを出してきてです。

日本に対してです。食べろというのです。

「いいな、たっぷりと食え」

「今ここでなのですね」

「そうだ、食え」

また日本に言うのでした。

「人間も国もまずは食うことだ」

「そういえば最近」

「御前まともに食ってないだろ」

言われてみればその通りです。食べることさえ忘れてしまっていたのが今の日本なのです。そこまで大変な状況だったからです。

けれどです。脚本家さんはその日本にです。食べろというのです。

「だからだ。食ってまた頑張れ」

「すいません、それでは」

「皆も呼んでそれで食うぞ」

日本だけでなくです。他の人達も呼ぶというのです。脚本家さんもです。日本のことを心配しているのです。口に素直に出さないだけで。

第千九百八十九話　完

2011・4・11

第二千話　辛いけれど

第二千話　辛いけれど

日本もお家の人達も脚本家さんの麻婆豆腐を食べます。すると。

「むっ、これは」

「辛いっ」

日本だけでなく日本妹も言ってしまいました。その麻婆豆腐が辛いのです。

ぴりりとしたその辛さにです。二人はまず声をあげました。けれどです。

美味しいです。その辛さが最高にいいのです。それで言ったのです。

「この辛さがいいですね」

「はい、そういえば辛いものにしても最近は」

「人間味覚がないと生きられないんだ」

脚本家さんは日本と日本妹にお話しました。

「だからな。それを忘れてるってことはそれだけで元気が出ないんだよ」

「最近の私はどうしても」

「日本は頑張り過ぎるからな」

脚本家さんから見てもなのです。とりわけ今はそうです。日本はいつもとても頑張っています。その日本に対して言うのでした。

「だから俺がこうしてな」

「御馳走して頂いたのですか」

「頑張り過ぎてその他のことを忘れたら話にならないんだよ」

食べることもです。

「だから今はこうして腹一杯食って」

「英気を養えというのですね」

「そういうことだよ。いいな」

笑顔で日本にお話する脚本家さんでした。その麻婆豆腐は日本がこれまで食べた麻婆豆腐の中で。一番美味しいものでした。

第二千話　　完

２０１１・４・１１

第二千一話　イギリスの天敵　☆

ギリシアはです。ポーランドに言いました。
「あいつを置く」
「イギリスの嫌なもんよね」
「そう。こいつ」
もう連れて来ています。その彼とは。
「こいつを魔除けに置いておけばいい」
「おおっ、それいいアイディアだし！」
ポーランドが賛成すると今一つよくないような気がするのはおそらく気のせいでしょう。少なくともギリシアは真面目に考えていますから。
見ればフランスは寝ています。寝ているところを連れて来たみたいです。
そのフランスを置いてからです。ギリシアはまたポーランドに言いました。
「多分これでいける」
「そうだよな。これならイギリスだって」
「誰にでも苦手なものはある」
イギリスの場合はフランスだというのです。
「とりあえずこれで様子を見る」
「流石ギリシアだし」
ポーランドはそのギリシアを素直に褒めました。
「そういう発想がよくね？俺できんし」
「ポーランドは少しリトアニアに頼り過ぎ」
ギリシアはそのポーランドに言いました。
何はともあれです。イギリス対策として彼が最も嫌うフランスを持って来たのです。寝ているからいいのですが起きていたらどうす

るつもりだったのでしょうか。

第二千一話　　完

2011・4・12

第二千二話　お互いは殆んどビザなし

第二千二話　お互いは殆んどビザなし

リトアニアは今日もポーランドと一緒です。それで彼と楽しくやっています。

コーヒーを二つ入れてからです。二人で一緒の席に座って言うのでした。

「俺達って一応さ」

「別の国なんよね」

「うん、一緒にいることが多くなったけれどね」

「元はそうだったしよくね？それで」

ポーランドは特に困ったこともなく言いました。

「俺とリト昔一緒に過ごしてたし」

「そうなんだよね。それで今もこうしてね」

「昔に戻っただけだし」

ポーランドにとっては本当にそれだけのことです。リトアニアに対してお話しながら彼が淹れてくれたそのコーヒーを飲んでいくのでした。

そのうえで、です。またリトアニアにお話します。

「むしろ俺としてはこのままでええんよ」

「俺と一緒にいることが？」

「そうよ。だって一人だと寂しいし」

人見知りなのに寂しがり、ポーランドも難しいです。

それでもなのです。こうしてリトアニアが一緒にいてくれるので。

彼は微笑んで、です。リトアニアに言いました。

「二人で過ごしてよくね？ずっと」

「そうだね。俺もね」

リトアニアも微笑みで返します。何だかんだで一緒に仲良くやっ

ている二人なのです。ただし二人共ラトビアのことは忘れていますけれど。

第二千二話　完

２０１１・４・１２

第二千三話　効果あるよう　☆

イギリスが二人のところに来ました。しかしです。戸惑った顔でうろうろしています。フランスを見てです。そのイギリスを見てです。ポーランドが会心の顔でギリシアに言います。

「何かこっち見とるよ」

「見てるだけだな」

ギリシアもそんなイギリスを見て言います。

「見てるけど寄って来ない。様子窺ってる」

「これって凄くね！？しかも」

ポーランドの声が自然にうわずってきています。そうしてなのでした。

イギリスはとぼとぼと帰っていきます。それを見てです。ポーランドは会心の笑顔で。ギリシアに言いました。

「イギリス帰ってるからあ！」

「そうだな」

「凄い！マジ成功してるし！」

「やはり弱点はフランスだったか」

このことがわかってです。二人は。

「じゃあ今度からフランス呼ぶしーーー」

「あいつも観光には来るから」

「ちょっと変なのが気になるけど」

「イギリスよりはましだからいいか」

こうしてなのでした。二人は祝杯を挙げました。

そうしてそのうえで、です。これからはフランスを観光に呼ぼうと決めたのでした。これでようやくイギリスの災厄から逃れることができたと思ったのです。

第二千三話　完

2011・4・13

第二千四話　観光客は大事

第二千四話　観光客は大事

オーストラリアも観光には力を入れています。彼の売りはといいますと。

「やっぱりこれでごわすな」

「それたいね」

「そうでごわす。オーストラリアの誇る大自然でごわす」

こうニュージーランドにお話します。彼の周りにはカンガルーにコアラ、ウォンバット、それにカモノハシといった彼の国にしかいない動物達がいます。

そうした動物達を置いてです。彼は言うのです。

「この動物達がおいどんの財産になっているでごわすよ」

「あとはディンゴたい」

「そう。動物あってのオーストラリアでごわす」

それは彼自身もよくわかっています。しかしです。

彼の周りにはです。蛇も一杯います。彼等についてはです。

オーストラリアは困った顔になって言うのでした。

「この連中はちょっと厄介でごわすよ」

「油断したらそれだけで」

「がぶりでごわす」

勿論毒のある蛇が多いです。オーストラリアは毒蛇の宝庫なのです。

おまけに後ろの海では。三角の背鰭がうようよしています。それは。

「鮫も一杯いるでごわすよ」

「中々デンジャラスな部分もあるたいな」

「観光客の人達にはいつも注意しているでごわす」

確かに珍しい動物達が一杯います。しかしその中には危険な動物

も一杯いる、それがオーストラリアの大自然なのです。カンガルーやコアラやウォンバット達だけではないのです。

第二千四話　　完

２０１１・４・１３

第二千五話　魔のオーラを身に纏い　☆

第二千五話　魔のオーラを身に纏い　☆

フランスをそこに置いたままでポーランドは笑顔でギリシアに言いました。

「やったわギリシア」

「うん」

「これで今日からゆっくり寝られるし」

こうです。まだ寝ているフランスをそこに置いたままで言うのです。

「いやあ、よかったよかった」

「そう。これで何の心配もいなくなる」

「さあ、これからリトと二人で仲良くやるし」

「ポーランド本当にリトアニアといつも一緒にいる」

「あいつと一緒にいるのが一番いいんよ」

「だからか」

そんなのどかなお話に入ろうとしていました。しかしです。

「あっ」

「あって？」

ギリシアが声をあげたその時にでした。前から。

どす黒い顔をしたイギリスが来ました。ぬらあ、と不気味なオーラをその全身に纏いです。そのうえで戻ってきたのです。そのイギリスを見てです。

ギリシアはぽつりと呟きました。

「駄目だった」

「じゃあこれからどうなるん？俺達の家」

「血だまりスケッチ」

そうなってしまうというのです。かくして酒に酔ったイギリスによってです。ギリシアもポーランドもさらに滅茶苦茶になるのでし

た。

第二千五話　完

2011・4・14

第二千六話　妹からの注意

第二千六話　妹からの注意

イギリスの度重なる他の国での破廉恥行為を聞いてです。イギリス妹がお兄さんに対して言いました。

「そうしたことはもう止めて下さい」

「だからよ。俺は別に」

「お話は聞いています。他の国ではお酒は駄目です」

「飲んだら駄目だってのかよ」

「はい、何処の鶏泥棒ですか」

「おい、待て！今何て言ったよ！」

鶏泥棒と言われてです。イギリスも心中穏やかではなくなりました。鶏泥棒といえば誰のことなのか。イギリスも知っていることなのです。

「じゃあ俺はあの馬鹿生徒会長と一緒かよ！」

「あの人も旅行先で暴れますから。しかも酒癖が」

「それでも同じにしていい相手か！」

イギリス、かなり頭にきたようです。顔にそれが出ています。

「実の兄貴に何てこと言うんだ！」

「なら外国では禁酒です」

イギリス妹はお兄さんにぴしゃりと言います。

「宜しいですね」

「くっ、流石に俺もあいつと比べられたら」

「韓国さんも御自身で東方君子の国と仰ってますし」

「何処がだよ」

「お兄様も同じです」

本当に何の慈悲もないイギリス妹のお兄さんへの言葉です。流石にこれにはです。イギリスも沈黙するしかありませんでした。そこまで言われてはです。

第二千六話　完

2011・4・14

第二千七話　誰でもいいから来るんだぜ

第二千七話　誰でもいいから来るんだぜ

イギリスの旅行先での悪行が皆の間で広まっています。しかしそれを聞いてです。

台湾と韓国がです。彼のところに来て言うのでした。

「あの、イギリスさん」

「そこの名前を知らない生徒会役員いいんだぜ？」

「台湾はいいが手前はいい加減俺の名前位覚えろ」

イギリスは韓国に突っ込みを入れざるを得ませんでした。何しろ生徒会長なのに役員の名前を覚えていないのです。実は日本と太平洋以外はあまり見ていない韓国なのです。

何はともあれ二人はです。こうイギリスに言うのです。

「よかったら我が国にです」

「来るんだぜ」

「あれっ、来ていいのかよ」

イギリスは最近皆からお断りを言われかけていて困っています。けれどそこでなのです。

二人はです。そのイギリスに対して誘いをかけてきたのです。

「俺がか？」

「はい、どうでしょうか」

「何時でもいいんだぜ」

「そういえばこいつ等」

イギリスは二人の事情を察しました。それは。

「今日本からの観光客来ないんだったな」

「日本さんが自粛ムードに入られて」

「こっちは今死活問題なんだぜ！」

こうした事情があるのでした。今二人の観光業界は大変なことになっているのです。全てはあの震災がもたらしたことなのです。

第二千七話　完

2011・4・15

第二千八話　それで呼んでみた

第二千八話　それで呼んでみた

イギリスは台湾と韓国の誘いを受けてです。実際にそれぞれの国に行ってみることになりました。そしてそのことをフランスに対してお話しました。

するとです。フランスはすぐにこうイギリスに言いました。

「ああ、御前あそこで酔って暴れると死ぬぞ」

「死ぬのかよ」

「台湾だよな、行く」

「ああ、それと韓国な」

「台湾はああ見えても強いからな。しかも気も強いぞ」

ただ身体能力だけではないのです。気も強いのです。

「何しろ太平洋にいるんだからな」

「あそこだからか」

「やる時はやるからな。酒飲んで暴れたら拳法でやられるからな」

台湾も中国と同じで拳法を使えるのです。それで。

「暴れるお客さんには容赦しない奴だからな」

「そうか、用心しないと駄目か」

「韓国の場合は酔って暴れたらあっちの酔っ払いに絡まれるからな」

韓国の場合はそうだというのです。

「それで道のど真ん中で喧嘩はじめる奴もいるからな」

「それでそこに酔っ払ったおっさんが運転してるバスが突っ込んではねられるんだな」

「そうだよ。だからどっちも死ぬからな」

「台湾はわかるが韓国のそれは何だ？」

とりあえずフランスの忠告を聞くイギリスでした。彼にとっては用心しないといけない旅行先の様です。もっとも常識の話なのです

が。

第二千八話　完

2011・4・15

第二千九話　そういえばこの辺りだ

第二千九話　そういえばこの辺りだ

韓国と台湾に囲まれてです。イギリスはふと思いました。というかこの人が忘れること自体冗談抜きでおかしい話だったりしますが。

「ここって香港もいるよな」

「はい、そうですけれど」

台湾がイギリスのその質問に答えます。

「そちらにも行かれますか？」

「ああ、ちょっと久し振りに顔出すか」

こう考えたのでした。

「あいつも日本が来なくなってやばいだろうからな」

「というか俺の方より絶対にましなんだぜ」

韓国が相変わらず死にそうな顔で言います。

「俺なんか日本が来なくなっただけで観光産業やばいんだぜ」

「御前の観光産業は一国に頼り過ぎだろうが」

観光産業だけでないところが韓国だったりします。日本に何かあればです。韓国は一発でひだまりスケッチから血だまりスケッチになってしまうのです。

「とにかく。ちょっとあいつのところにも顔出すか」

「そうされるんですね」

「ああ、元気だったらいいな」

何気に香港への心配も見せます。

「最近行ってないしな」

「何で来られなかったんですか？」

「こっちもやばいからだよ」

実は欧州全体がまだやばかったりします。それで最近香港まで顔を出さなかったのです。イギリスも大変なのです。

第二千九話　完

2011・4・16

第二千十話　その頃の香港

第二千十話　その頃の香港

香港はです。お家に来ていた中国に言うのでした。
「あいつ来るわね」
「あいつ？あいつとは誰あるか？」
「イギリスが来る」
こうです。直感で感じ取ったことをそのまま中国に言うのです。
「老師は帰った方がいい」
「あいつとはとにかく色々あるからな」
「あいつに何もないのは韓国と台湾位」
太平洋でもです。尚イギリスが苦手としているのは日本と韓国だったりします。前者はどうも考えが読めないところがあり後者は横暴に振り回されているからです。
中国もです。過去のことがあってです。こう言うのでした。
「今は連合の会議でもないし顔を見る必要もないあるな」
「じゃあ帰るのね」
「帰るある。商売に専念するある」
こうです。香港の作った中華料理を食べながら香港にお話します。
「それじゃあこれである」
「また来るのね」
「明日にでも来るある」
中国はしょっちゅう香港のところに来ています。そうして遊んでいるのです。
それでイギリスが来ると聞いてです。また明日となったのでした。
「イギリスには何も言うなある」
「わかったわ」
こうして帰った中国でした。彼が来ていたことは何も言わないことにして。香港はイギリスを待つのでした。

第二千十話　完

2011・4・16

第二千十一話　結構疎遠

イギリスは香港の中を観光しています。その中で、です。
ふとです。こんなことを言うのでした。
「何かこうして来てみたらな」
「どうしたの？」
「本当に中国だな」
もう紅くて漢字が一杯あります。そもそも香港の服自体が紅いです。そうしたものを見ればです。自然とそう思えるのも当然でした。
「俺の名残ないな」
「一応あるけれど」
「そうか？かなり消えたよな」
「それはその通りね」
否定しない香港でした。
「イギリスもうあまり来なくなったから」
「御前が中国の家に行ってからな。そうだよな」
「そう自然とそうなった」
「ああ。しかし本当に中国だな」
「日本さんやアメリカさんもよく来るけれど」
そうした人達がです。香港に観光に来るのです。
それとです。他には。
「映画も観る？」
「それもカンフーだよな。中国じゃないか」
もう香港にイギリスの名残はかなり消えてしまっていました。イギリスはそのことについてです。仕方ないとはいえ寂しいものを感じているのでした。

第二千十一話　完

2011・4・17

第二千十二話　料理は

イギリスは香港の料理を食べてみます。しかしです。
「これ美味いのか？」
「それ台湾さんのところでも言ったらしいけれど本当？」
「あの馬鹿生徒会長にも言ったんだけれどな」
「台湾さんに怒られなかった？」
「ああ、やっぱりなって顔で見てたな」
わかっているからです。台湾はあえて何も言わなかったのです。
ところが韓国はと言いますと。
「あの馬鹿会長は怒って辛いもん大量に俺の口の中に押し込んでくれたよ」
「自業自得」
「お蔭でずっと口の中がひりひりしてたぜ」
「だからそれは自業自得ね」
「何か御前すげえ冷たいな」
イギリスは香港のその態度に対してクレームをつけました。若しかしなくても香港のイギリスへの態度は微妙に冷たいものがあります。
「とにかくな。これが美味いんだよな」
「お兄さんいい加減料理美味くならないの？」
「何か皆食わないな」
「やっぱり」
「妹は妹で朝飯しか作られないしな」
朝昼晩、全て朝食のメニューなのがイギリスです。それで太平洋ではイギリスに行っても食べるものが朝食以外はないとまで言われています。そして実際に今も。
「何か味がわからないな」

「もう一回韓国行ってみる？」
「だから舌がひりひりするって言ってんだろ」
それは嫌だと言うイギリスでした。とにかく香港の料理の美味しさもわからない彼でした。

第二千十二話　　完

２０１１・４・１７

第二千十三話　タイも辛党

第二千十三話　タイも辛党

韓国の料理は辛いことで有名です。そしてこの人もまた。

「相変わらず見事ね」

「有り難うございます」

香港が褒めるその人ことタイです。この人の料理もまた辛いのです。

その唐辛子は赤いものだけではありません。青いものもあります。赤と青、両方の唐辛子を駆使してです。そのうえで辛い料理を作っているのです。

とりわけです。その青い唐辛子の辛さは。

「この辛さ、他では出せないわね」

「僕も使ってみて最初は驚きました」

タイ自身もだというのです。

「いや、ここまで辛いとは」

「赤いのよりさらにだからね」

「そうですよね。中々だせない辛さです」

そこまで凄いのです。つまり青とは辛さなのです。

その青を味わいながら。香港は言います。

「けれど。この辛さがね」

「最高に美味しいですよね」

「ええ。病み付きになるわ」

美食家の香港ですらこう評価します。それだけの味なのです。

そのタイの青い唐辛子、そしてそれを使ったタイ料理。それはまさに。

「どんどん食べたくなるわ」

「はい、どんどん食べて下さいね」

香港でさえ唸る味です。それがタイ料理なのです。

第二千十三話　完

2011・4・18

第二千十四話　もう一つの決め手は

第二千十四話　もう一つの決め手は

タイ料理にはです。唐辛子の他にです。

ふんだんに使うものがあります。それは。

「そう、これがないとタイ料理ではないですね」

「日本さんもおわかりになられますか」

「ようやくわかりました」

日本は謙遜して答えます。それは何かというとです。

「このコリアンダーですね」

「僕はそれがないとどうにもしまらないのです」

「つまり私の国で言うと葱の様なものでしょうか」

「近いですね。日本さんは葱をいつも使われますね」

「はい、そうしています」

日本はいつもうどんなりそばなりに葱を使っています。そうしてその他のものにもです。葱をとにかく使って料理を作っているのです。

それがタイではです。コリアンダーになる形なのです。そのコリアンダーを食べてです。

日本は微笑んでタイにお話します。

「この匂いがまた」

「いい感じですよね」

「最初は癖が強いと思ったのですが」

「これが慣れると」

「タイさんの料理にないと寂しくなります」

それがコリアンダーなのです。

そのコリアンダーがたっぷりと入ったタイの麺を食べながら日本は満足しています。タイ料理には唐辛子とコリアンダーなのです。

第二千十四話　完

2011・4・18

第二千十五話　美味しいものは多いけれど

第二千十五話　美味しいものは多いけれど

太平洋は美味しい料理を出してくれる国が多いです。そのことはとても有り難いです。

しかしイギリスはです。どれを食べてもこうでした。

「これ美味いのか？」

「御前はもうサプリメントだけにしとけ」

フランスが呆れ果ててイギリスに言いました。

「それだけで栄養摂ってろ」

「何かそれって日本の特撮にいたな」

「いたよ、味覚障害の奴だったよ」

実はその人は最後は人間ではなくなります。その人並の味覚の持ち主こそがイギリスなのです。とはいってもイギリスは国でありますが。

「御前それレベルじゃねえかよ」

「俺だって料理作るぞ」

「それ食って美味いって言った奴いるか？」

「いや、いない」

これが真相でした。

「残念な話だな」

「当たり前だろうが。とにかくだよ」

「ああ、とにかく？」

「御前もう栄養はサプリメントにして腹は水か何かで膨らませろ」

随分と味気ない生活です。

「それでいいな」

「何か随分な暮らしだな」

とにかく味のことは駄目なイギリスでした。これればかりはどうしようもありません。

第二千十五話　完

2011・4・19

第二千十六話　白米ばかりの様な

第二千十六話　白米ばかりの様な

日本の主食といえばお米です。とにかくお米ばかり食べます。

そんな日本にです。オーストラリアが尋ねました。

「日本は昔からお米好きでごわすか」

「はい、大好きです」

日本もこうオーストラリアに答えます。そしてそれだけではなくです。

「弥生の頃から食べています」

「それはかなり昔からでごわすな」

「そうですね。その弥生の頃からでしょうか」

日本は縄文の頃に生まれました。その頃の日本はまだ物心がついていない感じでした。物心ついたのは弥生の頃辺りからなのです。

「お米を食べるようになったのは」

「その頃にもその米でごわすか？」

「いえ、赤いお米もありました」

そうしたお米もです。あったというのです。

「それに麦を入れたり他の雑穀を入れたお米もです」

「そうだったのでごわすか」

「けれど今はやっぱりこれですね」

その白米をです。オーストラリアに見せながらお話します。

「白米は最高です」

「とはいっても白米ばかり食べているでごわすな」

「美味しいので」

とはいってもです。日本は白米ばかり食べていてもそれで何もないかというとです。これが実はです。彼にとって困ったことになったことがあったりします。そのお話とは。

第二千十六話　完

2011・4・19

第二千十七話　日本と白米

第二千十七話　日本と白米

日本は本当に白米が好きです。けれどです。実は白米をいつも食べるようになったのは。

「意外と遅いんだな」

「そうです。鎌倉の頃は玄米でした」

「あれだな。あの固い炊き方の米だな」

「当時は強飯といいました」

こうアメリカに説明しています。説明をしながらその白米を食べています。見れば玄米はです。全く食べようとしない日本なのでした。

「武士の方が食べておられまして」

「鎌倉武士だな。知っているぞ」

「それで私も玄米を食べていました」

「そうだったのか。美味しかったかい？」

「いえ、あまり」

本音を言う日本でした。

「固くて。今思うとです」

「美味しくなかったんだな」

「それで次第に白米を食べるようになっていきました」

そしてです。こんなこともお話するのでした。

「戦国の頃には余裕があればもう」

「白米だったんだな」

「太閤さんもそうでした。臼でひいた白米を好まれていました」

「玄米は好きじゃないのか、日本は」

アメリカはそのことを知ったのでした。確かに玄米を食べていました。けれど余裕ができるとです。日本は次第に白米を食べるようになったのです。

第二千十七話　完

2011・4・20

第二千十八話　白米でも何でも

第二千十八話　白米でも何でも

中国はです。日本について驚いていることが一つあります。それは何かというとです。

「お握りはわかるあるが」

「冷えたお握りはですか」

「そんなのとても食べられないある」

中国は冷えた御飯を食べません。だから驚いているのです。

そしてです。その驚きのままこんなことを言うのでした。

「日本は平気あるか？冷えたお握りなんて食べて」

「はい、大丈夫ですが」

「うちでは冷えた御飯は食べてはいけないある」

食べるとそれこそです。よくないことをした人だとなるのです。

それで親も子供に冷えた御飯を食べる人間にはなるなと教えているのです。

当然中国自身もです。冷えたお握りを見てこう日本に尋ねるのでした。

「温めていいあるな」

「ええ、どうぞ」

そうした御願いには特に反対しない日本です。

「電子レンジでも使われて」

「そうさせてもらうある。しかし日本は本当に白米が好きあるな」

「パンよりもこちらの方がずっと好きです」

「では餅や包や饅頭はどうあるか？」

どれも中国で麦を練って作ったものです。言うなら中国のパンです。それはどうかというのです。

「食べるあるか？」

「おかずとしてなら」

やっぱり主食は白米なのです。それはどうしてもという日本なのです。

第二千十八話　　完

２０１１・４・２０

第二千十九話　泰平になってから

第二千十九話　泰平になってから

戦国時代が終わってみるとです。日本の生産力はかなりあがっていました。各地の上司達が色々と頑張ったお陰です。

様々な特産品も出ていましたが何よりもお米です。それがなのです。

「ううむ、こうして白米がたらふく食べられるようになるとは」

「思いませんでしたね」

日本妹がお兄さんに答えています。二人共白い御飯を食べています。

そうしながらです。日本がまた言いました。

「戦国時代以前は雑穀をよく入れていましたが」

「もうこれからはその必要がないかも知れませんね」

「はい、少なくとも江戸や大坂では」

白い御飯がたらふく食べられるようになったというのです。

「なりましたね」

「そうですね。ただ」

「ただ？」

「村ではどうでしょうか」

日本妹が考えるのはこちらでした。

「まだ。食べられない場所もありますよね」

「確かに。東北等では」

「まだまだ努力が必要ですね」

「そうですね。皆が白い御飯を食べられる国」

日本の中で目標ができました。

「それを目指さないといけませんね」

「そうですね。本当に」

こんなお話をする二人でした。とにかく今はお米を食べているの

でした。白い御飯を。

第二千十九話　　完

2011・4・21

第二千二十話　茶粥

第二千二十話　茶粥

村でもです。確かに差はありますがそれでも。

大和とかそういった国でのお百姓さんは。こんなものを食べていました。

「何と、これは」

「どうでしょうか」

「凄く美味しいです」

日本もびっくりする味です。大和、つまり今で言う奈良に勧められて食べたあるものがです。日本をびっくりさせたのです。それは何かというと。

「いや、ただのお粥ではないのですね」

「お茶で味をつけてみました」

「つまり茶粥ですか」

「はい、朝はいつもこれを食べています」

村でもです。お米を食べられるようになっていたのです。

ただ普通のお粥ではなくです。お茶を使っているのです。そのお粥がです。

「御気に召されたのですね」

「いや、朝からお米が食べられるようになっただけでも驚きですが」

「こうしたお粥はなかったですよね」

「そうですね。お粥といえどです」

馬鹿にできなくなった、日本はそのことを知ったのです。

「お茶を使ってこんなものができるとは」

「最近近畿とその近辺は皆お米を食べられるようになってきまして」

「豊かになっていると思っていましたが予想以上です」

日本もびっくりする程なのです。とにかく江戸時代になってです。

日本の村でも場所によっては、人口の多い場所ではお米を食べられ

るようになっていました。その中にはこんな食べ物もあったのです。

第二千二十話　　完

２０１１・４・２１

第二千二十一話　玄米も食べない

第二千二十一話　玄米も食べない

天下泰平になり生産力もあがってです。日本は白米を食べられるようになりました。

それで、です。彼はもう雑穀のお米についてはです。

「食べることもありませんね」

「そやな。もう食べる必要ないで」

大阪が日本と一緒に白米を食べながら笑顔で言います。

それで、です。日本にこんなことを言うのでした。

「玄米ももう食べることないな」

「思えば。食べにくいですよね」

「固いしな」

「はい、それが問題です」

固いお米です。何しろ強飯とまで呼ばれる位ですから。

そのお米は食べないと言ってです。日本は白米ばかり食べるのでした。

そうしてです。こう大阪に言いました。

「今は江戸や大阪ではこうして白米ですが」

「まだまだ。雑穀入れて食べてる人は多いしな」

「それを何とかしなければなりませんね」

「近畿はええけど東北とかなあ」

「その辺りの方々も。白米を好きなだけ食べられる社会にしたいですね」

「ほんまやな」

こんなことをお話しながらです。二人は白米の御飯をどんどん食べていくのでした。ただしおかずは僅かでまさに一汁一菜です。

こうした御飯を食べている二人でした。そしてこの食卓はです。

この時代の江戸や大阪の人達にとってはごく普通の食事であったの

です。ここ重要です。

第二千二十一話　　完

2011・4・22

第二千二十二話　青木さん

第二千二十二話　青木さん

江戸時代は平和なまま続いていました。その中頃のことです。日本の上司、米公方とさえ呼ばれる程お米のことを考え続けていた上司の人がです。日本に対してある人を紹介したのです。その人とは。

「蘭学者の方ですか」

「そうだ、青木さんというのだ」

その人を日本に紹介したのです。

「この者がそなたと民によいものを紹介してくれる」

「といいますと？」

「食べ物だ」

それを紹介してくれるというのです。

「痩せた土地でも多く獲れしかも味がよいものだ」

「それは凄いですね」

「うむ、薩摩芋という」

それをです。日本と民に食べさせてくれるというのです。

実際にです。上司の横にいたその青木さんはです。日本にその薩摩芋、もう既に焼いてあるそれを日本に差し出して。こう言うのでした。

「皮を剥いて召し上がって下さい」

「はい、それでは」

その赤い皮を剥くと黄色い中身が出て来ました。それを食べると。

「むっ、これは」

「如何でしょうか」

「はい、とても美味しいです」

日本がはじめて味わう美味しさでした。その美味しさを知ってです。日本は薩摩芋を食べるようになりました。けれど江戸や大阪で

はやっぱり白米ばかりなのでした。

第二千二十二話　　完

2011・4・22

第二千二十三話　奇病！？

第二千二十三話　奇病！？

不意にです。日本においてです。
急に体調を悪くする人が出てきました。どういった状況かというとです。
「足がむくんで、ですよね」
「それで立てなくなって」
「しかもそれがさらに悪くなって」
「はい、そんな病気です」
突然です。そうした病気が流行しだしたのです。これにはです。
日本も困りました。首を捻って言います。
「何かの流行り病でしょうか」
「何処かにそのもとがあるのでしょうか」
「ううむ、これまで流行り病といいますと」
日本でそれが流行ったのはそれこそ天然痘位です。その他の病といいますと他の国に比べて非常に少ないのです。欧州と比べると特に少ないです。
「思いつきませんし」
「この病は一体」
「しかも江戸や大阪でだけ流行る」
このことがです。大きな謎なのです。
「おかしなお話ですね」
「全くです。どういった病でしょうか」
「わかりません。村では流行らない」
日本はこのことが気になって仕方がありませんでした。
急に出て来たこの謎の病が一体どういったものなのか、日本はどうしてもわかりませんでした。しかしこの病はです。日本を苦しめることになっていくのでした。

第二千二十三話　完

2011・4・23

第二千二十四話　江戸時代から

第二千二十四話　江戸時代から

日本の食卓がです。変わりました。
お醤油もあればお味噌もあります。そうしたものをです。
ふんだんに使うようになりました。おまけに食材も。
大豆を使ったものが多くなり西瓜やお菓子を食べるようになりました。砂糖を使ったお菓子もとても多くなってきたのです。その時代はというと。
江戸からです。日本はその豊かになった食材を前に妹さんにお話します。
「凄くなってきましたね」
「はい、おうどんやおそばも食べられるようになりましたし」
「お塩もかなり多く使えるようになりました」
「赤穂のお塩いいですよ」
日本妹は実際にお塩を舐めています。そのお塩が赤穂のものなのです。
「他にも一杯ありますし」
「天下泰平になって豊かになりましたね」
「そうですよね。鰻もこうして」
日本妹は今度はです。蒲焼を食べています。その蒲焼を食べながら言うのです。
「普通に食べられるようになりましたし」
「明日はお寿司を食べますか」
「いいですね。それと天麩羅も」
そうした食べ物のお話も出るのでした。
「食べましょう」
「いや、天下泰平になって本当に色々なものが食べられるようになりましたね」

本当に江戸時代からなのでした。日本の食卓が大きく変わったのはです。そしてその食卓はです。今も日本の食卓の基となっているのです。

第二千二十四話　　完

２０１１・４・２３

第二千二十五話　維新になっても

第二千二十五話　維新になっても

明治維新で日本は大きく変わりました。しかしです。
謎の病気はです。相変わらずでした。
「まだあの病気が流行っていますね」
「はい、町でだけですね」
日本も日本妹もです。このことに首を傾げるばかりです。
「村では何もありませんし」
「これもおかしなことですね」
「それがわからないのです」
日本は町にだけ流行る理由がわからないというのです。
「流行り病なら村にも流行りますよね」
「ですよね。他の病は全部そうですし」
「しかし流行るのは町だけです」
日本はまた言いました。
「それは江戸でも今でも変わりません」
「一体どういうことでしょうか」
「食べているものは町の方がずっといいのに」
日本がここで指摘したのはです。食べ物についてでした。
「町では白米なのに」
「けれど村では流行らないです」
「わかりません。本当に」
「どういう病なのでしょうか」
こうお話してです。二人で首を捻るのでした。とにかく江戸腫れ、大坂腫れはです。全く解決していませんでした。そもそも原因がさっぱりわからないのでした。

第二千二十五話　完

2011・4・24

第二千二十六話　上司の上司の好物

第二千二十六話　上司の上司の好物

明治になると上司の上司の方が急激にクローズアップされてきました。この方の一挙手一投足がです。物凄く注目されるようになりました。

その方が召し上がられるものもです。日本と国民に影響を与えるようになりました。

「ううむ、これは」

「はい、美味しいですよね」

「とても」

日本は国民の人達の声を聞いています。白くて冷たいお菓子を食べながら。

「これがアイスクリームですか」

「冷たくてとても甘いですね」

「これはいいものです」

日本も唸る美味しさでした。これだけではなくです。

「蒸しカステラや餡パンもいいですね」

「羊羹は昔から食べてますけれど」

「とにかく甘いものが多くなりましたね」

「あの方がお好きですから」

その上司の上司の方がなのです。

「だからですね」

「そうですね。甘党なのですね」

「日本酒もお好きだそうですが」

「これもまた文明開化ですね」

日本は食べながらわかりました。

上司の上司の方がお好きなものがです。日本や国民の人達もこぞって食べるようになってきていたのです。これも明治時代のお話で

す。

第二千二十六話　完

2011・4・24

第二千二十七話　軍においても

第二千二十七話　軍においても

明治になって軍ができました。陸軍と海軍です。

軍ではです。国の為に満足に戦ってもらう為に食事は奮発していました。白い御飯を好きなだけ食べられる、これが軍に入るメリットにもなったのです。

そして衛生にも気をつけました。しかし。

「軍でもですか」

「そうだ。やはりあの病気が発生している」

上司の人がです。日本にお話します。

「どういうことか止まらない」

「不思議ですね。それは」

「おかしい。衛生にも気をつけている」

伝染病ならば余計にです。ところがなのです。

その病気、脚気は軍においても流行っています。そしてです。

「まずい、倒れる者が多い」

「一体どうしたものでしょうか」

「わからない。今医師達も原因を究明している」

「あっ、お医者さんの方々もですか」

「とりわけ森がだ」

この名前が出てきました。

「絶対に脚気菌があると見てだ。調べているのだ」

「やはり脚気は伝染病でしょうか」

「わからないがな、まだな」

伝染病ではないかと疑われていたのです。そのうえでその森という人が脚気について調べていたのです。その間にです。日本は戦争に入ろうとしていました。

第二千二十七話　完

2011・4・25

第二千二十八話　壊血病

第二千二十八話　壊血病

壊血病と聞いてです。日本はといいますと。

腕を組み首を捻ってです。こうスペインに尋ねました。

「何でしょうか、その病気は」

「ビタミンを摂らんとなる病気やねん」

「ビタミンをですか」

「そや。脚がむくんで歯茎が腫れてな。あちこちあかんようになる病気や」

「随分怖い病気なのですね」

「よお船に乗ってる奴がなったんや」

何故スペインがこう言うかとです。それは彼の歴史が大きく関わっているのでした。

「俺ずっと船に乗ってあちこち行ってたやろ。それでな」

「その病気にかかられたのですね」

「そうやねんや。ほんまあれには参ったで」

スペインにとってはです。それこそ日本の脚気の様なものだったのです。

それで次から次にと人が倒れていってです。スペインは航海をする大切な人達に困ることになったのです。そしてそれは彼だけではなくです。

「ポルトガルも大変やったんや」

「あの人もですか」

「日本に来るのも大変やったんやで」

「そうだったのですか。壊血病で」

「オレンジとかな。ああいうのを食べたらええって知らんかったんや。それがわかってもや」

さらにだったのです。それでもだと。

「丘におる連中がそういうの買う金けちって。結局そのままやった」
「それで壊血病は減らなかったのですか」
スペインにも困らせられた病気があったのです。日本だけではありません。

第二千二十八話　　完

２０１１・４・２５

第二千二十九話　戦争よりも

第二千二十九話　戦争よりも

日本と中国の戦争が終わってです。調べてみるとです。
脚気になった人の数は。
「な、何ですかこれは！？」
「ですから脚気になってしまった人の数です」
「負傷した人達よりずっと多いのですが」
こうです。日本は自分のところに送られてきたデータを見てびっくりしています。
「まさかこれ程までとは」
「あの、信じられませんよね」
「これでは戦いどころではありません」
日本は真っ青になっています。無理もありません。
「ここまで多いとは」
「何としても脚気を解決しないといけませんね」
「ロシアさんが来ているのですよ」
日本の最大の脅威がです。今迫ろうとしていたのです。そんな中で脚気が多いとです。
「これでは戦えません」
「何としても脚気菌を見つけ出さないと」
「いえ、どうも何かおかしいですね」
ここで日本はふと思ったのです。
「戦場での脚気も多いのに。何故村ではないのでしょうか」
「確かにそれが謎ですけれど」
「ううむ、何かあるのでしょうか」
日本にはどうしてもわからないことでした。とにかく今はです。
脚気で倒れてしまう人があまりにも多く。戦えるかどうかという問題にまでなってしまっていました。

第二千二十九話　完

2011・4・26

第二千三十話　キャプテンクック

第二千三十話　キャプテンクック

「で、俺達のクック船長がなんだよ」
「果物を船に詰め込んでいってですね」
「ああ、その柑橘類をな」
イギリスは結構以上に自慢げに日本にお話しています。自分のお家のある船長さんのことをです。その人のことをお話しているのです。
「詰め込んでいったんだよ」
「それともう一つですね」
「ああ、キャベツを千切りにしてな」
そしてそのキャベツをどうしたかというとです。
「酢漬けにして持って行ったんだよ」
「つまりザワークラフトですね」
日本はその食べ物の名前をドイツの言葉で言いました。
「成程、そうしたものを持って行けば」
「壊血病にはならなかったんだよ」
「しかしよくそのことに気付かれましたね」
「経験論だな」
それによるものだとです。イギリスはお話します。
「柑橘類や野菜食ってると壊血病にならないって話を聞いてそうしたんだろうな」
「ああ、天然痘の時と同じですか」
「俺の家じゃそういう考えだからな」
「ううむ、確かに何でもやってみることですね」
日本にとってはです。実はこのことは大きなヒントになったのです。その恐ろしい脚気を解決させるです。大きなヒントがそこにあったのです。

第二千三十話　完

2011・4・26

第二千三十一話　食べているものの違い！？

第二千三十一話　食べているものの違い！？

ある日です。海軍の人が日本にお話してきました。
「実は海軍は将校と兵士で食べているものが違うのですが」
「そうですね。兵隊さんは白米ですね」
「それで将校は洋食です」
将校の方がずっと贅沢なものを食べているのです。これは海軍だけですがこの時代はイギリスをはじめとして殆んどの海軍ではそうだったのです。
その中で、です。海軍の人は気付いたのです。
「将校は脚気にならないんですよ」
「えっ、そうなのですか！？」
「はい、船の中ですから同じ空間にいるのに」
それでも。将校は脚気にならないのです。
「これはおかしいですよね」
「そうですね。伝染病なら将校の人達もかかる筈です」
「それがかからないです。どうしたことだと思われますか？」
「まさか」
ここで日本も気付きました。その気付いたこととは。
「食べ物に秘密があるのでしょうか」
「そうではないでしょうか」
「ううむ、まさかと思いますが」
日本もまだいぶかしむ顔です。しかしです。
その中で彼は海軍の人とお話をしてでした。
非常に重要なことがわかろうとしていました。脚気の原因は何なのか。海軍からそのことがわかろうとしていました。伝染病ではないのかも知れないのです。

第二千三十一話　完

2011・4・27

第二千三十二話　脚気とは何か

第二千三十二話　脚気とは何か

「脚気？それは何あるか？」
「御存知ないのですか」
「聞いたことないあるな」
中国はこう日本に対して答えます。
「日本だけの病気あるな」
「どうやらその様ですね」
日本は白い御飯を食べながら言います。しかし中国はです。
白い御飯ではなく包を食べているのです。中国のパンです。
それを食べながら日本に言うのでした。
「とにかく日本は白い御飯でないと駄目あるか」
「中国さんはそうしたものでもいいのですね」
「うちは最初は稗や粟だったある」
かなり昔のお話です。中国は最初は麦ではなくそうしたものを食べていたのです。日本が言うところの雑穀が主食だったのです。
「それで麦になったあるが」
「お米も召し上がっておられるのでは？そちらが一番多いですよね」
「北ではその米が採れないある。だから麦が主食あるよ」
「そうなのですか」
「うちは北と南で食べるものが違うある。米だけではないあるよ」
「成程、そうなのですね」
「そういうことだから米でなくてもいけるある」
こうした事情があるのです。何はともあれ中国は脚気というものを知りません。日本だけでかかるとても不思議な病気だったのです。

第二千三十二話　完

2011・4・27

第二千三十三話　麦

海軍の人がです。日本に言います。
「それで考えたのですが」
「兵隊さんに洋食をでしょうか」
「おかずをつけて食生活を改善させます」
白米だけではないというのです。
「それと洋食といえばやはりパンですね」
「はい、それは外せません」
「ですから。そのパンをです」
「兵隊さん達にも食べてもらうのでしょうか」
「いえ、麦です」
パンを作るです。それを食べてもらうというのです。
「それを食べてもらいます」
「麦といいますと」
「麦飯を導入します」
具体的にはこうするというのです。麦飯というと日本もかつてはよく食べていました。所謂雑穀入りの御飯です。ですがそれはといいますと。
「質素になりますね」
「しかしやってみる価値はあるかと思いますが」
「少なくとも脚気をこのままにするよりはですね」
「それでどうでしょうか」
「わかりました。それでは」
こうしてです。兵隊さん達に麦飯を出してみることになったのです。白米ばかり食べている人と比べてどうなのか。それが問題になるのでした。

第二千三十三話　完

2011・4・28

第二千三十四話　アメリカの悩み

アメリカもです。脚気は知りませんでした。
その代わりです。彼はこう日本にお話するのでした。
「僕も今悩んでいるんだぞ」
「肥満ですか」
「何でわかったんだ日本、凄いじゃないか」
「いえ、それだけ召し上がっていますと」
アメリカは今も大量に食べています。ハンバーガーにピザにフライドチキンにマッシュポテト、カラフルなケーキにコーラです。何かカロリーが不安になりそうなものを大量にです。
そんなアメリカを見てです。日本は言うのです。
「やはりそうなるかと」
「中国に薦められたお茶や羊の肉も食べているんだ」
「それ以上にハンバーガー等は」
「駄目なのかい？」
「カロリーが問題です」
日本の指摘はまさに正論でした。
「それとお野菜を」
「果物もだったな」
「はい。そういったものを」
「ちゃんと食べてるぞ。ハンバーガーの中のレタスやトマトにマッシュポテトにケーキの中のフルーツに」
「ですから。そういうものだけではなく」
日本は具体的にお話します。しかしその紹介された野菜や果物の料理もです。
アメリカはとにかく大量に食べていきます。しかもそこにドレッシングやシロップをこれてもかとかけてです。これでは痩せないの

も当然です。

第二千三十四話　完

2011・4・28

第二千三十五話　本当に治った

第二千三十五話　本当に治った

海軍が麦飯を導入するとです。すぐにでした。
脚気の人がです。殆んどいなくなりました。
「えっ、いなくなったのですか！？」
「はい、殆んどですが」
それでもだとです。海軍の人は驚いている顔で日本にお話します。
勿論日本もです。そのお話を聞いてかなり驚いています。
「いなくなりました」
「何と、それでは脚気は」
「どうやら食べ物に関係があったようですね」
「そういえばパンを食べていると脚気になっていませんね」
「それと玄米もでしょうか」
「ううむ、それではです」
こうしたお話を聞いていってです。日本はわかったのです。
「白米はかえって駄目なようですね」
「そうですね。脚気には」
「これまで白米が最高だと思っていました」
日本ではそう考えられていました。けれどなのでした。
「しかし。脚気には」
「よくなかったようですね」
「ですがこれでそれも終わりですね」
麦がいいとわかればです。もうそれで解決策が出ました。
かくして海軍では麦飯を食べることになりました。すると海軍では脚気の人はいなくなりました。ただしこれはです。あくまで海軍だけでのお話なのでした。

第二千三十五話　完

2011・4・29

第二千三十六話　豚肉にジャガイモ

第二千三十六話　豚肉にジャガイモ

「そうか、脚気か」
「それで困っていました」
日本は脚気のことをドイツにもお話しています。ドイツで御馳走になりながらです。
「一体どうすれば治るのか」
「日本の食事は健康的だと思うがな」
「ですが脚気にはよくなかったようです」
「意外だな。それで麦を食べてか」
「治りました。それでそれから脚気について調べてみるとです」
それによってです。多くのことがわかったのです。
「豚肉もいいですし鶏のレバーもです」
「豚肉というとだ」
「そうですね。ソーセージもですね」
今丁度二人はそのソーセージを食べています。勿論豚肉のソーセージです。それとジャガイモを茹でてその上にバターを乗せたものとビールです。まさにドイツの食事です。
それを食べながらです。二人はお話しているのです。
「ジャガイモもでしょうか」
「俺の家の食事は脚気によかったようだな」
「とにかく。白米ばかりというのもです」
「考えてみれば偏食になるな」
「主食とはいえ偏食はよくないのですね」
「そうみたいだな。俺も勉強になった」
こんなことをお話しながらです。二人はドイツの料理を食べていきます。それはとても美味しくて。しかも脚気にかなりいいものでした。

第二千三十六話　完

2011・4・29

第二千三十七話　陸軍では駄目でした

第二千三十七話　陸軍では駄目でした

海軍では脚気がなくなりました。けれどです。

陸軍ではです。残念ながらそうはなりませんでした。

何とです。軍医の人がこんなことを言っていたのです。

「絶対に脚気菌がある！それに白米を食べさせないと兵隊の士気が落ちる！」

「ですが実際に海軍では麦飯で脚気がなくなりましたが」

「海軍に何がわかるんだ！」

こう言っているこの人こそです。あの森さんでした。この人は文豪であるだけでなくです。日本の上司の一人でもあったのです。

この人がです。麦飯導入に物凄く反対していたのです。

「私はドイツで学んだんだぞ！医学の最高峰と言われたドイツ医学を！」

「それは知っていますが」

「あれは細菌だ！間違いない！」

あくまでこう言うのです。日本に対してもです。

「今脚気菌を探している！白米は栄養学的には問題ない！」

「そうなのですか？」

「和食も洋食も同じだ」

これがこの人の主張でした。

「だから安心するのだ」

「ですが今も陸軍では脚気が」

「それは伝染しているんだ。感染源が絶対にある！」

「だといいのですが」

こうしてです。陸軍では相変わらず脚気が猛威を奮っていました。

これをどうしたらいいのか、とりあえず森さんが一番の問題になってしまっていました。

第二千三十七話　完

2011・4・30

第二千三十八話　文豪としてはともかく

第二千三十八話　文豪としてはともかく

日本はです。森さんのことを思い出して妹にこう言うのでした。

「小説や随筆、評論はよかったのですが」

「御医者さんとしてはでしたね」

「まさか上司の人達のお話まで突っぱねるとは思いませんでした」

当時の陸軍のトップの人達の要求もです。突っぱねてそのうえで白米で通したのです。それが森さんがお医者さんとしてしたことなのでした。

「あの陸軍の法皇とまで言われた人の御言葉までも」

「ある意味凄い人でしたね」

「意志が強い人でした」

日本もそれは認めます。しかしなのでした。

「ですが意志が強いといっても」

「いい場合と悪い場合があるんですね」

「あの時はそのことを実感しました」

森さんがどちらかはもう言うまでもありません。

「いや、全くです」

「麦飯を送るのを邪魔しましたし」

「挙句には陸軍のトップの人達が怒りましたからね」

「それでも御自身の考えを変えられませんでしたし」

「はい、大変な人でした」

それが森さんだったのです。

「何故か外国へのお手紙には男爵と書いておられましたし」

「困った人でした」

どうも夏目さんよりも遥かに人間として問題があったようです。

夏目さんにしてもお世辞にも褒められた人ではなかったようですがそれ以上の人だったようです。

第二千三十八話　完

2011・4・30

第二千三十九話　森先生のお陰で

第二千三十九話　森先生のお陰で

とにかく麦飯導入を何としても認めない森さんがいるせいで。陸軍では。

これまで通り脚気が猛威を奮っています。そのせいで。

「戦争そのものでのダメージも大きいですが」

「脚気が凄いんですか」

「冗談抜きで戦局に影響していますよ」

日本に陸軍の人達がお話しています。

「このままではどうなるか」

「乃木閣下の第三軍の損害どころではありません」

「そうですね。乃木さんは頑張っておられます」

乃木さんも乃木さんなりにです。必死に戦っているのです。どうもこの人は司令官よりも教育者としての方が軍人として向いているようですが。

しかし白米のせいで。陸軍全体で。

どんどん脚気で倒れていきます。これまで通り。日本はそれを見て言います。

「何とかしたいのですが」

「しかし森さんの説得は無理です」

「あんな頑固な人はいません」

「頑固どころではないですね」

日本もこう言います。

「あの人はまさに」

「頑迷ですね」

「絶対に人の話を聞かないですから」

そうした人が陸軍のお医者さん達のトップなのでした。そのせいでしょうか。陸軍はロシアだけでなく脚気とも戦わないといけない

のでした。

第二千三十九話　完

2011・5・1

第二千四十話　ロシアもロシアで

第二千四十話　　ロシアもロシアで

日本が脚気に苦しめられている時にです。ロシアでは。

壊血病が流行っていました。彼も彼で大変だったのです。

「ううん、何か皆困ってるね」

「壊血病のせいですね」

リトアニアがロシアにお話しています。前線では壊血病で困っている人が一杯います。

「そのせいで戦局にも影響が出ています」

「勝てる戦いと思ったんだけれどね」

思わぬ苦戦を強いられているのでした。ロシアから見ればそうです。

「それでもこれだとね」

「日本さんも思ったより強いですし」

「とにかく壊血病はどうにかならないのかな」

ロシアは真剣に困っています。

「戦争じゃなくてもこの病気って物凄く怖いし」

「伝染病でしょうか」

「そうじゃないかな。昔から欧州には多かったし」

ドイツでもあったのです。スペインも船の中で苦しめられました。

「イギリス君はならないみたいだけれど」

「一度イギリスさんに聞けたらいいんですけれどね」

「駄目駄目。イギリス君は僕のこと大嫌いだからね」

この時ロシアとイギリスは仲がよくありませんでした。尚今この人と仲が悪いのは日本、アメリカ、中国、トルコとかなり多くなっています。

実はロシアは知らなかったのです。壊血病には柑橘類やもやしがいいということをです。それで壊血病に苦しめられていたのです。

彼も大変だったのです。

第二千四十話　　完

2011・5・1

第二千四十一話　戦争が終わって調べて

第二千四十一話　戦争が終わって調べて

日露戦争が終わりました。戦い自体は外交的努力もあって何とか日本が勝ちました。けれどその後で色々と調べてみるとです。

「財政負担はわかっていましたが」

「あの、とんでもないんですけれどこれ」

日本妹が青い顔でお兄さんにお話します。そのお話することとは。

「脚気の人が」

「陸軍においてですね」

「戦争での負傷者も深刻でしたけれど」

「これは。洒落になっていませんね」

脚気にかかった人の数を見てです。日本も真っ青になります。

「ここまでとは」

「やっぱり麦飯を導入するべきでしたね」

「それができたらよかったのですが」

日本も悔やんでいます。

「ですが。あの人がおられる限りは」

「それもできないですよね」

「全く。どうにかならないのでしょうか」

日本はこう言って溜息をつきます。

「あまりにも酷い結果です」

「あの人を説得できる人はいないんですね」

「自分が絶対に正しいという人もいますから」

森さんはそういう人だったのかもしれません。とにかく戦いが終わってみるととんでもないことがわかったのです。脚気は陸軍においては以前健在なのでした。

第二千四十一話　完

2011・5・2

第二千四十二話　無様な男

脚気は森さんの人災でした。そして今は。

何か漫画原作者の人がです。喚いています。

「原発のあれは前の上司の責任だ！」

あるグルメ漫画の原作者の人です。登場人物は食べるものがいないと今の上司の人みたいに怒鳴り散らす人ばかりです。しかもお店の中で。それで営業妨害にならないという摩訶不思議な漫画の原作の人です。

その人がです。喚いているのです。

「あの連中が原発に突っ込め！あの連中のせいだ！」

「黙ってろ！」

即刻です。国民の人に言い返されました。

「電波ばかり垂れ流すな！御前の原作も電波じゃないか！」

「何っ、俺の漫画の何処が電波だ！」

「書いてる内容はあっちの系統の捏造ばかりじゃないか！しかも勝つのは絶対に後出しの方で小さい企業や自然食が何があっても正しいテンプレ漫画だろうが！」

「自然食が一番なんだよ！」

「じゃあ原始時代に戻れ！」

とにかく野蛮な人だからです。遂にこう言われました。

「御前の漫画は野蛮人しか出ないのは何でだ！」

「俺は正義を言ってるんだ！」

「御前の言ってることは『電波な独善』なんだ！御前が原発に言って来い！」

「誰が行くか！」

こんな人です。日本もその人を見て呆れた顔で呟きました。

「まさに。本当の野蛮人ですね」

何しろ祖国が大嫌いな人です。こうした人が喚いているのでした。挙句には日本には言論の自由がないとか言います。言論の責任は取らない人ですが。

第二千四十二話　　完

２０１１・５・２

第二千四十三話　最後まで認めなかった

森さんは結局です。最後の最後までなのでした。
「脚気が栄養に基づくものだと認めませんでしたね」
「物凄く頑固な人でしたね」
「いえ、あの人の場合は頑迷でしょう」
それだとです。日本は妹さんにお話するのでした。
「あそこまでいきますと」
「頑迷ですか」
「はい、そう思います」
まさにそれだというのです。
「とにかく。凄い人でした」
「夏目さんも頑固でしたが」
「あの人は頑固です。けれど森さんは」
「頑迷ですね」
「しかもかなり酷い頑迷です」
頑迷にもレベルがあるというのです。森さんの頑迷さはかなり酷いレベルの頑迷だと。日本は森さんのことを思い出しながら言うのです。
「とにかく。森さんがおられる限り脚気の問題は解決しませんでしたね」
「それがやっと終わるんですね」
「もう二度と。こんなことは繰り返したくはないです」
「私もそう思います」
日本妹も言うのでした。困った顔で。
最後の最後まで脚気菌があると主張していた森さんでした。その歴史的評価はどういったものか、それはもうはっきりとしているこ

とでしょう。

第二千四十三話　完

2011・5・3

第二千四十四話　脚気以前の問題だ

第二千四十四話　脚気以前の問題だ

あの漫画原作者の人はです。とにかく自然食が大好きで大企業が嫌いです。それで野蛮人そのままの妄言と電波を垂れ流しています。

その内容を見てみるとです。

「ベトナム戦争の時の主張のままですが」

「ええと、べ平連ですよね」

「あの時も文明を否定する考えがありましたから」

日本と日本妹は気付きました。漫画原作者の人の主張の特徴にです。

「それと黒幕がいるというお話ですね」

「いつもそれですよね。権力者がいて」

「しかも国を裏で操るとか」

「権力は一つじゃないのに」

この辺り凄く単純です。国家権力だけなのです。しかもです。

「マスコミや学校の先生や学生は絶対に善ですよね」

「そんな筈ないんですが」

むしろマスコミや学校の先生ことです。問題になっているのが今の日本です。性犯罪や暴力を振るって捕まらないとてもいいお仕事なのがマスコミや学校の先生なのです。勿論他の悪いこともし放題です。

けれど漫画原作者の人はそうした人を正義だと主張するのです。しかもです。

「韓国さんの北にあるあそこの雑誌に載ってますけれど」

「ううむ、まさかこの人は本当に」

「危ない人ですかね」

「眉に唾をつけて見る必要があるのは間違いないようですね」

日本妹が紹介した雑誌を見てです。日本もわかりました。漫画原

作者の人はです。真性にあれな人なのです。田中ガイエスブルグの人とかと同じで。

第二千四十四話　　完

２０１１・５・３

第二千四十五話　あの人のご成婚

第二千四十五話　あの人のご成婚

イギリスにとってです。待ちに待った日が来ました。

上司の上司のお家の人がです。結婚するのです。イギリスは満面の笑顔、彼にしてはとても珍しいその笑顔で言うのでした。

「いや、遂にだよ」

「本当に嬉しいですね」

「全くだよ。あの方が結婚されるんだぞ」

こうです。妹にもお話するのです。

「こんな目出度いことがあるか？ないだろ」

「御父上も喜ばれてるでしょうね」

「ああ、上司の上司の方もな」

その人は女の人です。あの伝説の上司の上司のお名前を継いでいる人です。

「御喜びだろうな」

「これまで。ご成婚を待っていましたけれど」

「これで後は」

「もう一人の方も結婚されれば」

「俺も肩の荷が下りるってものだよ」

イギリスにとってやきもちきしていることの一つなのです。上司の上司のお家の方々のことはです。その中でも一番人気の方が結婚されますので。

彼は今とても上機嫌です。それで今からこんなことを言うのでした。

「お子さんができたらまたお祝いだな」

「お兄様、それはお話が早いですよ」

「おっと、そうか」

笑顔で妹に応えるイギリスでした。彼はとにかく喜んでいます。

第二千四十五話　完

2011・5・4

第二千四十六話　ただし髪の毛が

第二千四十六話　ただし髪の毛が

結婚される上司の上司のお家の方はとても奇麗な顔立ちをしています。そのことでもかなり評判の方なのです。

少年の頃からです。イギリスの自慢の一つでした。

「御母上に似てるよな」

「はい、背も高いですし」

妹もにこりと笑ってお兄さんの言葉に応えます。

「気品もおありですし」

「あれだけ奇麗な方だとそもそも女の子が寄ってきて仕方ないんだよな」

「性格も気さくな方ですし」

「あれだな。お父上とお母上のいいところをそれぞれ受け継いだよ」

「はい、ただ」

ここで、です。イギリス妹は言いました。

「髪の毛の色はお母上のものですけれど」

「質はな」

イギリスもその話になるとです。

顔を曇らせます。そしてこう言うのでした。

「お父上のものだよな」

「まだ。三十にもいっていませんよね」

「相当やばくないか？あれは」

「三十代でくる方は多いですけれど」

その方はまだ二十代です。しかしそれでもなのです。お父上の髪の状況にかなり近くなってきてしまっているのです。恐ろしいことに。

「あのままでは」

「まあ。ちょっとな」

流石のイギリスもこれ以上言えません。その方は最早二十代半ばの頃からです。髪の毛がかなり深刻なことになってしまっていたのです。こればかりはどうしようもないのでした。

第二千四十六話　　完

２０１１・５・４

第二千四十七話　世界的人気

第二千四十七話　世界的人気

イギリスのその人の結婚についてはです。世界中が報道しています。

イギリス妹はそのお話を聞いて満足の笑みでお兄さんにお話します。

「やっぱり。凄いですね」

「ああ、あの家の方々は昔から世界の名士だからな」

「特に上司の上司の方は」

「お母上もな。そうだったしな」

上司の上司の方のお母さんはまさに国母とまで呼ばれていました。百歳を超えていてその長寿もイギリスの国民の人達に喜ばれていたのです。

そして今の上司の上司の方も。

「あの方もこれからもな」

「まだまだ長生きして欲しいですね」

「ビクトリア様と同じだけな」

こうしたお話をしてです。その結婚する人のお話に戻ります。

「元々凄い男前だからな」

「御相手の方も美人ですし」

「美男美女のロイヤルファミリーの誕生だ」

「世界中で報道しない筈がないですね」

「あの馬鹿会長のところでもちゃんと報道されたしな」

普段イギリスには見向きもしない、日本だけ見ている様な国でもです。報道されているのです。

「よし、準備が大変だけれどな」

「結婚式楽しみですね」

二人で準備を進めながらお話をしています。確かにその準備は凄

く大掛かりなものです。けれそれでも。二人は今物凄く張り切っています。それだけめでたいことですから。

第二千四十七話　　完

２０１１・５・５

第二千四十八話　体調が悪くても

第二千四十八話　体調が悪くても

式の準備を進めるイギリス。けれどです。
お金の工面が大変です。しかもです。
今この人は体調がかなり悪いです。欧州の国は大抵がそうなってしまっていますがこの人もです。準備の間もこんな調子でした。
「うっ、ちょっと動きにくくなってきたな」
「大丈夫ですか？」
「無理はしないで下さいよ」
国民の人達が動きを止めたイギリスに対して言います。
「イギリスさんに何かあったら俺達も困りますから」
「死なないで下さいよ」
「死ぬところまではいってないけれどな」
その辺りはまだ何とかなのです。けれどです。
「何か。今の日本よりもな」
「体調、悪いですよね」
「顔色がかなり悪いですし」
「それでも。この式典はな」
休みながら言うイギリスでした。疲れきっている顔で。
「成功させないと駄目だからな」
「それでも無理は禁物ですから」
「少しずつやっていきましょう」
「ああ、そうさせてもらうな」
この人は今かなり体調が悪いのです。それでもこの最高の晴れの式典の為にです。その身体を何とか動かして頑張っているのでした。

第二千四十八話　完

2011.5.5

第二千四十九話　招待するのは

第二千四十九話　招待するのは

「で、次は」
「はい、どなたを呼ぶかですね」
「そうだよ。誰がいい？」
イギリスはパーティーの準備を進めながらです。妹に対して尋ねるのでした。
「やっぱり各国の上司の人達だよな」
「そういう方々が一番ですよね」
「ああ、それでだけれどな」
「欧州各国の上司の方々はどうでしょうか」
まずはその人達はどうかというのです。
「あの方々は」
「まああの人達は絶対だよな」
イギリスもそれを言います。
「というか呼ばないと駄目だろ」
「はい、それでは各国にお手紙を出しましょう」
「それと他の地域の上司の人にもだな」
イギリスの目は欧州以外にも向けられます。
「あの人達にも手紙を出しておくか」
「そうするべきですね。それでやっぱり」
イギリス妹はここで言いました。その欧州以外の他の地域でもとりわけ誰にお手紙を送るべきか。そのことをお話するのでした。
「日本さんにもですね」
「あいつも絶対にだよ」
こう言ってでした。日本の上司の人にもお手紙を出すのでした。イギリスにとってみればこれは好意だったのですが。

第二千四十九話　完

2011・5・6

第二千五十話　日本は残念なことに

第二千五十話　日本は残念なことに

上司の上司の方の跡継ぎの方にです。イギリスから招待状が届きました。

「是非いらして下さいとのことです」

「そうですね。お祝いするべきことですね」

「私がお伺いしていいですね」

「是非。そうあるべきかと」

日本がその方に答えます。こうしてなのでした。

日本からはその方がパーティーに出席されることになりました。

ところがでした。

お手紙を受け取った直後にです。あの地震が起こったのです。

醜い姿を晒す上司とその応援団をよそにです。跡継ぎの方は心配する顔になってです。日本に対してお話されるのでした。

「国民の皆さんがこうした状況なので」

「お止めになられますか」

「はい、お誘いを断るのも申し訳ないですが」

「仕方ありませんね」

日本も言います。

「この状況では」

「そうさせてもらいますね」

こうしてです。跡継ぎの方はイギリスのパーティーに出席されないことになりました。代理の人が出席することになったのです。

日本はこのことを残念に思いました。けれど跡継ぎの方の細心のお心遣いに感じるものがありました。それに引き換え今の上司連中は。

「醜いものです、実に」

相変わらず自分のことしか考えていない人達なのでした。お盆までにはとか言っていますが被災地の方々は夏まで待てということです。何を考えているのでしょうか。

第二千五十話　　完

２０１１・５・６

第二千五十一話　上司の人達は

第二千五十一話　上司の人達は

「やあ、凄いな」
「噂通りあるな」
「そうだね」
アメリカ、中国、ロシアの三人が式の会場を見てです。こう言うのでした。
「アメリカには上司の上司がいないから少し羨ましいぞ」
「僕のところはもういないあるからな」
「皇帝みたいな上司だけれどね、うちは」
「何か今一つ反応が薄いな」
イギリスは三人の反応を見て思いました。
「やっぱり上司の上司が現役でいないと違うのか？」
「一応童話とかには出ているぞ。オズシリーズだぞ」
「だから昔はいたあるよ」
「一応上司だよ。上司の上司に近いけれど」
三人はそのイギリスに対して答えます。けれどです。
イギリスはその三人の反応にもです。こう思うのでした。
「やっぱり反応が薄いな」
「こういう式典は僕の国にはないから実感が湧かないんだ」
「そもども文化が違うある。文明もあるが」
「僕の国は正教だったけれどイギリス君は国教会だからそこも違うよ」
「そういうのもあるのか。しかしどうにもな」
三人の反応の薄さにです。イギリスは思うのでした。
「まああの人の髪の毛よりは・・・・・言ったら駄目だな」
顔はいいのに残念なことにです。結婚するその方の髪の毛は三人の反応よりもなのでした。けれど何か少し増えたようにも見えるの

でした。

第二千五十一話　完

2011・5・7

第二千五十二話　以後その名前の人いない

第二千五十二話　以後その名前の人いない

結婚する方のお名前はイギリスでは結構多いです。その弟さんにしても同じです。もっと言えばお父さんの方もそうなのですが。

けれどその弟さんのお名前ですが。

「八人出て以降いないからな」

「四百年以上ですね」

「ああ、一人もいないんだよ」

八世で止まっているのです。イギリスとイギリス妹がそのことをお話しています。

「それまで一杯いたのにな」

「やはり。あの八世の方が」

「とんでもない人だったからな」

その人のことはイギリスにとってはあまりいい思い出ではなかったりします。

「女好きで自分勝手で浪費家ですぐに上司の人を処罰してな」

「無茶苦茶でしたからね」

「全く。離婚するとかで教会作ったしな」

「あの時は大変でしたね」

「しかもそれで結婚した人とはすぐに離婚したしな」

その離婚の時のお話も酷いものだったのです。

「イタリアの家のドニゼッティがオペラにしてるけれどな」

「マリア＝カラスさんの上演で有名なあれですね」

「とにかく。悪い意味で凄い人だったよ」

「その人以降ですからね」

ある意味においてジョンに匹敵するお名前になっているのがその弟さんのお名前です。上司の上司になれる資格はありますが本気でしようとしているのか、お名前の時点で疑問に思えるものがありま

す。

第二千五十二話　完

2011・5・7

第二千五十三話　家族は

第二千五十三話　家族は

イギリスにいるのはイギリスと妹さんだけではありません。一応兄弟で一緒に住んでいます。

ところがイギリスは兄弟仲がとても悪いです。それで今回もでした。

「やっぱり兄さん達はなあ」

「どなたもあまり、ですね」

「いつものことだけれどな」

イギリスは腕を組んでぼやくのでした。

「何せ昔は上司がそれぞれ違ってたからな」

「そうですね。それがお兄様の上司の方になって」

かつてはそれぞれに上司がいたのがイギリスの家だったのです。ついでに言えば別々に暮らしていました。それで国旗も違っていたのです。

「ですから。どうしても」

「わかってはいるんだよ」

イギリスはぼやき続けます。

「けれどな。兄弟仲ってな」

「いいに越したことはありませんね」

「上司の上司の人達もわかってくれてるんだよ」

「ですからプリンスオブウェールズですし」

「それでもな。中々な」

「アイルランドお兄様は家を出られましたし」

「だよな。それで今回も兄さん達はな」

あまり祝ってくれていないのです。

イギリスの兄弟仲の悪さはかなり深刻です。それこそスポーツになると別々のチームになってしまう程に。ですから今回の結婚でも

あまり好意的ではありません。

第二千五十三話　　完

2011・5・9

第二千五十四話　この程度の兄弟仲なぞ

第二千五十四話　この程度の兄弟仲なぞ

「相変わらずイタちゃんとロマーノは仲が悪いな」

「全くだ」

ドイツがプロイセンの言葉に応えています。

「仲良くできないのか」

「俺としちゃあれなんだよ」

プロイセンもいささか困った顔で言います。

「イタちゃんもロマーノも好きだしな。仲良くして欲しいんだけれどな」

「そうだな。俺もそれは同感だ」

やっぱりイタリアには優しい二人です。

「兄弟で喧嘩をしてもいいことはない」

「だからどうにかしてやりたいんだけれどな」

「難しいところだな」

「長い間別々だったしな」

このことも大きいのです。イタリアとロマーノは確かに兄弟ですが長い間別々に暮らしていました。それも仲の悪さにつながっているのです。

とはいってもロマーノが一方的に嫌っているだけです。それでもドイツとプロイセンが困った顔になるのには充分なのでした。

「まあ戦争しないだけましか」

「それはないからな」

「何だかんだで一緒にいてるしな」

「最悪の状況にはなっていない」

それがこの二人にとってはいいことでした。少なくともイギリスのところよりはずっとです。仲がいいとは言えるのがイタリアのところです。

第二千五十四話　完

2011・5・9

第二千五十五話　来る人は

第二千五十五話　来る人は

色々と問題があるイギリスの家族ですが何はともあれパーティーがはじまっています。その中でイギリスが呼んでいる主な人達はといいますと。

「よお、来たっぺよ」

「ああ、よく来てくれたな」

まずはデンマークでした。他には。

ノルウェーにスウェーデン、スペイン、オランダ、ベルギー、リヒテンシュタインといった国々とその上司の人達です。この人達の特徴は。

「皆上司の上司がいるっぺよ」

「そういう国を主に呼んだんだよ」

イギリスもこうデンマークにお話します。

「やっぱりこの場合はそれがいいだろ」

「そうっぺな。何しろイギリスの上司の上司となる人だっぺ」

「それでだよ。そうした人がおられる国をな」

「呼ばないとおかしいっぺな」

「昔はどの国もそうだったんだがな」

しかし今はというとです。

「やっぱり。減ったな」

「それが寂しいっぺな」

「まあソ連がなくなって見直す動きはあるけれどな」

「とりあえずは御前のところは健在っぺな」

「ああ、このままいて欲しいな」

こう思ってやまないイギリスでした。上司の上司がいる国が主に呼ばれています。この辺りはそうなって当然と言えることでありました。

第五千五十五話　完

2011・5・10

第二千五十六話　この二国は違う

第二千五十六話　この二国は違う

フィンランドがです。イギリスに対してお話しています。
「僕とアイスランド君は北欧の中ではそこが違うんですよね」
「上司の上司の人がいないんだったな」
「はい、共和国ですから」
それでだとイギリスにお話しているのです。
「上司の人を戴いたのも最近ですし」
「それまではスウェーデンと同じ上司だったな」
「若しくはロシアさんと同じ上司でした」
その時期はほぼほったらかしでした。フィンランドが彼だけの上司に来てもらうようになったのは本当につい最近になってからのことなのです。
「それで。上司の上司の人は」
「その時に来てもらわなくてそのままか」
「アイスランド君もです」
そしてそれはアイスランドもなのでした。
「デンマークさんの上司の上司の方はかなり長い歴史を持っておられますけれど」
「あの家は古いな」
「スウェーデンさんのお家はフランスさんのところから来られてますね」
「ああ、あの将軍のな」
その人がスウェーデンの上司の上司になったのです。その前の上司の上司の人には三十年戦争で活躍したグスタフ＝アドルフもいます。
「ノルウェーさんも上司の上司の方ですしね」
「北欧っていっても色々なんだな」

上司の上司がいる家といない家がある北欧なのでした。この辺りはそれぞれ違っています。

第二千五十六話　　完

２０１１・５・１０

第二千五十七話　上司の上司のご主人

第二千五十七話　上司の上司のご主人

今度結婚する人はイギリスの上司の上司のお孫さんにあたります。今の上司の上司の人は女の人なのは世界の誰もが知っています。

それでご主人もいます。その人は。

「俺の昔の上司の上司の」

「そうだよな。御前のところの人なんだよな」

イギリスがギリシアに応えます。

「元々はな」

「そう。それでそっちに留学してて」

「それで上司の上司の人に会ってな」

まだ上司の上司になる前に御会いしてなのです。

「今に至るからな」

「どう。あの人は」

「ああ、いい人だよ」

上司の上司のご主人に相応しい人だというのです。

「ああいう人がいてくれて有り難いよ」

「何でもお子さん達にかなりの力があるとか」

「凄いぜ。上司の上司の家でかなりの力があるな」

ご主人としてです。

「人格者だし締めるところは締めて下さるしな」

「頼りになる方と」

「だから凄くな。俺の家に必要な方だよ」

そこまでの人だというのです。上司の上司の方と共にです。イギリスにとっては誇りと言える、まさにそうした方であるというのです。

第二千五十七話　完

2011・5・11

第二千五十八話　真犯人！？

第二千五十八話　真犯人！？

この前イギリスの上司の上司の家でとても奇妙な事件が起きました。結婚する方のお母さんによからぬことが起こったのです。

そのことについては世界中があれこれとお話します。その中で。

「あの、ご主人ではないですよね」

「あの方はそうまでして何かをされる方じゃないだろ」

結婚する方のお父さんも疑われたのです。その事件において。イギリスは妹さんに対してその関与のことは否定するのでした。

「そうしたことは絶対にされない方だろ」

「確かに。言われてみれば」

「けれどな。若し巷で言われているような話なら」

イギリスも実際にその可能性はかなり疑っています。それで言うのでした。

「真犯人は」

「まさかと思いますけれど」

「あの方々じゃないよな」

とあるお二人、絶対にそうだと口に出しては言えない方々のお顔がです。イギリスの脳裏に浮かんだのです。

けれどそれはどうしても口に出せず。こう妹に囁くだけでした。

「大物過ぎたらかえって見つからないからな」

「それが事件というものですね」

「そうだよ。だからこのことはな」

「内密にということで」

「それでいいな」

こう妹さんに囁くのでした。イギリスにとってもイギリス妹にとっても。その方々のお名前はとても出せないのでした。何しろ表向きは『事故』でしたから。

第二千五十八話　完

2011・5・11

第二千五十九話　お兄さんも招待

第二千五十九話　お兄さんも招待

フランスもです。パーティーに招かれました。
そうして彼はです。イギリスにこんなことを尋ねるのでした。
「で、パーティーの料理は誰が作ってるんだ？」
「妹だ」
イギリスではなかったのです。
「俺が作ろうと思ったらあいつが作るって言い出してな」
「ああ、それは英断だな」
フランスは皮肉ではなくです。心からそう思ったのです。
それで、です。こうイギリスに言いました。
「御前は作らなくていいからな」
「何だよ、その言い方」
「言われたくなかったらいい加減まともな料理作れよ」
「俺はいつもまともな料理作ってるぞ。何処が悪いんだ」
「御前みたいに下手な奴はいないからだよ」
本当にです。身も蓋もない言葉です。
「だからだよ。ったくよ。何百年料理しても下手な奴は下手なんだな」
「御祝いの場で好き放題言ってくれるな」
「人間も国も言われるうちが華だぞ」
フランスは何気に人間の核心を言ってきました。
「少なくとも俺はずっと言い続けてやるからな。感謝しろ」
「忠告なのはわかるが随分な言い方だな」
この辺りとても微妙なイギリスとフランスです。けれどフランスはイギリスが作ったものを食べなかったことはなかったりします。
残したこともです。

第二千五十九話　完

2011・5・12

第二千六十話　やっぱりメニューは同じ

第二千六十話　やっぱりメニューは同じ

イギリス妹が作ったパーティーのメニューはといいますと。

フランスはそれを一瞥してです。こう言いました。

「いつものなんだな」

「私の得意料理です」

こうフランスに答えるイギリス妹でした。

「駄目でしょうか」

「まあな。そっちの兄貴の料理よりはずっとましさ」

味が、です。そうしたことにおいては誰もイギリスには勝てません。悪い意味で。

「けれどな。イングリッシュブレイクファストはな」

「我が国では朝昼晩これですので」

確かに色々なメニューがあって豪華です。けれどどれもなのです。朝食のメニューなのです。あまりパーティーに向いているとは言えないものです。

そのメニュー自体にです。フランスは難色を示して言うのです。

「ううん、まあいいけれどな」

「いいですか」

「少なくとも皆美味いって言うからな」

イギリスの料理とは違って、です。

「だからいいか」

「有り難うございます」

「じゃあ俺の妹もここに呼ぶな」

フランス妹も来ているのです。お兄さんがエスコートしているのです。

料理の方はこんな感じなのでした。とりあえずパーティー向きとは言えないですがそれでもです。味は納得できるものが用意される

のでした。

第二千六十話　完

2011・5・12

第二千六十一話　昔はどの国も

第二千六十一話　昔はどの国も

イギリスは少し遠くを見る目になってです。こう呟いたのでした。

「フランスも昔は上司の上司がいたよな」

「また随分と昔のことを言うな」

そのフランスがイギリスに対して返します。

「皇帝だっていたさ」

「ナポレオンだったな」

「三世な」

「昔は皆上司の上司がいたよな」

イギリスの様にです。かつてはそうだったのです。

ですが今はどうかというとです。アメリカの様に上司の中で一番偉い人がいてです。そうした人はいない国が多くなっているのです。

そのことを思ってです。イギリスは言うのでした。

「こうした豪華な式典ができるのもな」

「上司の上司がいてくれてるからなんだな」

「そう思うんだがどうだよ」

「残念だけれど否定はできないな」

フランスにしてもそうなのでした。

「俺だって昔は盛大にやったしな」

「けれど今はできないな」

「色々あってそうなったんだ」

フランスの場合は本当に国が二転三転しました。そうした結果上司の一番偉い人で止まってしまったのです。上司の上司の人はいなくなったのです。

昔はどの国もそうでした。けれど今は。これも時代の流れでしょうか。

第二千六十一話　完

2011・5・13

第二千六十二話　野心家だったその人

フランスはです。パーティーの中でイギリスに対して言いました。
「昔の。俺の国の太陽王なんてな」
「こんなものじゃなかったよな」
「毎日パーティーでな」
しかもなのでした。その人は。
「もう百皿は食っててな。凄い御馳走をな」
「おまけにしょっちゅう戦争してたよな」
「俺も最初は乗っていたよ。けれどな」
「疲れてたな、あの人の時代の最後の方の御前」
「戦争だかりだったからな。挙句には神聖ローマの上司になろうとしたしな」
オーストリアさんの上司に代わってです。三十年戦争に勝って波に乗るフランスの上司としてだけでなくです。神聖ローマの上司にもなろうとしたのです。
けれどフランスも疲れてきていて当然オーストリアさんも反発してそこにオランダや他ならないイギリスまで出て来てです。結局は。
「負けたからな」
「で、負けても今のパーティー以上の贅沢しょっちゅうやって建築やって御馳走食ってたんだな」
「あの時は死ぬかと思ったぜ」
フランスもです。疲れきっていたのです。
「パーティーもいいけれどな」
「結構体力使うからな」
「ああ、だから滅多にはできないんだよな」
パーティーも開くには色々とあるのです。実は今回のこのパーテ

ィーについてもです。イギリスは結構無理をしているところもあります。

第二千六十二話　　完

２０１１・５・１３

第二千六十三話　パーティー自体は

第二千六十三話　パーティー自体は

色々な人が来てそれで色々なことを言っているイギリスの上司の上司の家の人の結婚式、その式典自体はかなりまともに進んでいます。

それを見ながらです。イギリスは微笑んでいます。

「何はともあれだな」

「はい、お幸せにですね」

「これで後はもう一人の人だな」

「まずはあの方で」

イギリス妹も微笑んでいます。二人にとっては自分達の子供が結婚するようなものでしょうか。表情はそうした温かいものになっています。

その顔で、です。二人はパーティーも進めています。

パーティーはイギリス妹が作ったお料理を食べながら賑やかに行われています。その中で。

イギリスはここでも、です。ほっとした顔でお話するのでした。

「今日は最高の一日なんだ。皆楽しくやってくれよ」

「はい、ではそうさせてもらいます」

オーストリアさんがです。イギリスの言葉に応えます。この人も来ているのです。もっと正確に言えば呼ばれているのです。

「今回は貴方にとってもいい日ですね」

「とてもな。久し振りにそう思える日だよ」

最近身体の調子が悪くて、なのです。

「じゃあ音楽も聴いてくれよ」

「そうさせてもらいます」

オーストリアさんも微笑んで応えます。

パーティーはお料理に音楽、そうしたもので彩られています。イ

ギリスにとっても本当にです。今日は幸せな一日なのでした。

第二千六十三話　　完

２０１１・５・１４

第二千六十四話　招かれない人

第二千六十四話　招かれない人

台湾はです。お家で寂しくしています。お家の人がその彼女に尋ねます。

「あの、どうしてそんなに」

「私呼ばれなかったから」

こうです。そのお家の人に答える台湾です。

「それでなの」

「あっ、イギリスさんの」

「そうなの、いつもね」

台湾はその寂しい顔でお家の人にお話します。

「私ああしたパーティーには呼ばれないから」

「台湾さんは生と集会にも参加できないですね」

「学校にはいてもね」

この人の場合は色々と複雑な事情があってなのです。

「だから」

「それでテレビで、なのですか」

「そう。仕方なくね」

こう言ってです。テレビでそのパーティーを観ています。

けれど本当に寂しい顔で。こう言うのでした。

「私も参加できるかな」

「何時かは。きっと」

「そう思いたいわ。本当にね」

かなり切実な願いです。この辺りは可哀想な台湾です。

パーティーに参加できる人とできない人がいます。それはこの人だけではなくてです。他にもいます。学校にはいてもなのです。

それで寂しい台湾でした。彼女にとってはいい日ではなかったのです。

第二千六十四話　完

2011・5・14

第二千六十五話　呼んでないのに来る

第二千六十五話　呼んでないのに来る

「やあイギリスの野郎来てやったのですよ」
「何で御前が来るんだ？」
イギリスはうんざりとした顔でシーランドに言い返します。
「っていうか御前いい加減戻って来い。招待客の席にいるんじゃねえよ」
「何言ってるのです。シー君はちゃんとこうしているのです」
「まだ言うのかよ。しかもな」
「しかも。何です？」
「何度も言うが御前を呼んだ覚えはないんだよ」
またシーランドに言います。
「それで招待客の席に座るのはねえだろうが」
「細かいことは気にするななのです」
シーランドの態度はあくまでこんな感じです。イギリス相手に全く臆していません。
「シー君はそんな小さなことは気にしないのです」
「気にしろ。まあ来たなら仕方ないな」
イギリスは何だかんだでここで甘いところを見せます。
そうしてです。シーランドを片目で見て腕を組んで、です。こう言うのでした。
「まあ料理でも楽しめ。ジュースもあるからな」
「御前の作った料理はいいのです」
シーランド見事なまでの即答でした。
「まずくて食べられないのです」
「おい、御前も言うのかよ」
けれどイギリス妹の造った料理はよかったりします。シーランドからも駄目出しを受けるイギリスの料理、ある意味とても凄いこと

です。

第二千六十五話　完

2011・5・15

第二千六十六話　シーランドの上司

第二千六十六話　　シーランドの上司

シーランドはイギリス妹のお料理を食べながらお話します。

「シー君の上司は公爵なのです」

「だから公国なんだ」

「はい、そうなのです」

こうラトビアにお話しています。この二人は妙にお付き合いが深いようです。

「何処かの公国とはまた違うのです」

「あのサイド3のだね」

「どういう訳かあっちの方が有名なのです」

日本のアニメです。とにかくあまりにも有名なアニメのシリーズの最初に出て来た国です。独裁国家で何処かドイツを思わせる国です。

その国の方がです。シーランドよりもなのです。

「とにかく有名になり過ぎなのです」

「それは言ったら」

「シー君は負けないのです」

シーランドはここで燃えるものを見せました。

「あの国よりもずっと有名になってみせるのです」

「じゃあ上司の人も？」

「勿論なのです。あのあえて言おう、カスであると！の人よりも有名になってくれるのです」

「あの人は国家元首じゃなかったし。中の人が凄過ぎて」

勝てないんじゃないかとラトビアも思いました。国家元首よりもその息子である総帥が実験を握っていてカリスマだった、思えば変わった国です。

けれどシーランドはその国よりも有名になってみせると燃えてい

るのでした。その燃えるものを見てです。イギリスは困った顔でいるのでした。

第二千六十六話　　完

２０１１・５・１５

第二千六十七話　呼ばない訳にはいかない

第二千六十七話　呼ばない訳にはいかない

「おい、そこの知らない奴」
「はい、何でしょうか」
イギリス妹が韓国に応えています。韓国はタキシードで決めています。格好自体はです。決して悪くはないです。
その韓国がイギリス妹に尋ねるのです。
「俺の席は何処なんだぜ？」
「韓国さんの席はあちらです」
イギリス妹は事務的に答えます。そうしてその席に案内します。
けれど案内してからです。こうお兄さんに尋ねました。
「確か韓国さんは呼びたくなかったのでは？」
「それでも呼ぶしかないだろ」
イギリスはシーランドに対する以上にうんざりとした顔で妹さんに答えます。
「生徒会長なんだからな」
「だからですね」
「そうだよ。あれで結構国力もあるからな」
「ですが私のこともお兄様のことも御存知ないようですが」
「あいつの興味の殆んどは日本に対してなんだよ」
それでイギリスはというとなのです。
「俺達なんかあいつにとっちゃ空気なんだよ」
「それでも来られたんですね」
「そうだよ。まあ適当に相手しておいてくれ」
「わかりました」
韓国に対してはこんな対応のイギリスでした。実は彼にしてもフランスにしてもです。韓国はどうも苦手なのです。欧州にはいない

タイプだからです。

第二千六十七話　　完

2011・5・16

第二千六十八話　言ってはならないことを平然と

第二千六十八話　　言ってはならないことを平然と

　韓国はイギリス妹のパーティーのお料理を食べてもです。こう言うのでした。
「味がないんだぜ。もっと唐辛子や大蒜を利かせるんだぜ」
「ああ、手前だけ勝手にそれ食ってろ」
　イギリスは韓国を白目で睨んで応えます。
「遠慮はいらねえからな」
「ああ、気が利くな生徒会の役員の誰か」
「それが人に言う名前かよ」
「ところでこの結婚式のことなんだぜ」
　韓国は平然と大蒜と唐辛子を出してきたイギリスに対して言います。勿論そういった香辛料をお料理にこれでもかとかけてからです。
「誰が結婚するんだぜ」
「やっぱり知らないのかよ」
「とりあえず日本の上司の上司の家のそれよりは贅沢に見えるだぜ」
　日本の上司の上司の方のお家は質素です。それで御成婚も質素なのです。この辺りはそれぞれのお家の違いも出ているのでしょう。
　その豪華な結婚式を見たうえで、です。韓国は言うのでした。
「それであれは誰なんだぜ？」
「何だ？お妃さんか？」
　イギリスは普通の顔に戻って韓国の話に注目します。その人のことかと思ったからです。
　けれど韓国は。この人のことを言うのでした。
「あの赤い軍服の禿は誰なんだぜ。若いのに可哀想なんだぜ、あそこまで禿ているのは」
「よくもそこまで言ってはならないことを平気で言えたな、おい」

イギリスも流石に唖然となりました。実は韓国はです。誰が結婚するのかも気にかけていないのでした。欧州のことには本当に関心がないのです。

第二千六十八話　　完

２０１１・５・１６

第二千六十九話　ドレスアップ

第二千六十九話　ドレスアップ

リヒテンシュタインとハンガリー、この二人も来ています。しかし今日の二人は。

「今日は凄いですね」

「はい、お祝いの日ですから」

「この服で来たわ」

見れば二人は奇麗なドレスを着ています。リヒテンシュタインは彼女の国旗の、ハンガリーも同じく彼女の国旗のです。それぞれのドレスでイギリス妹の前にいます。

それで、です。こう言うのでした。

「新婦の方には及びませんが」

「あそこまで奇麗だとね」

「いえ、充分過ぎる程凄いです」

イギリス妹はこう二人に答えます。

「まさか。そこまで見事だとは」

「そんな。私達はそれ程」

「綺麗じゃないわよ」

「綺麗ですよ」

イギリス妹は謙遜なしにお話します。

「そうですね。こういう日にこそですね」

「男の人は皆タキシードですし」

「私達も頑張らないとね」

「それでは私も」

イギリス妹もです。ここで。

瞬時に着替えました。そうしてユニオンジャックのドレスに身を包んだのです。この娘も女の子です。ドレスアップした姿は見事なものでした。

第二千六十九話　完

2011・5・17

第二千七十話　ワッフルだけじゃない

第二千七十話　ワッフルだけじゃない

「どないやお兄ちゃん」
「いいんちゃうか」
オランダはベルギーに率直に答えています。
「似合うで」
「そやったらええんやけれどな」
ベルギーも自分の国旗をあしらったドレスです。オランダはタキシードですが長身の彼には実によく似合っています。こうした時はやっぱりスタイルです。
そのスタイルですがベルギーは。
「ええな、かなり」
「昔からスタイルには自信あるさかい」
ベルギーはにこにことして言います。
「このドレスかて特注やねんで」
「金かけたんか」
「普段はお菓子にかけるけれど」
今回はです。特別だというのです。
「うちかて女の子やさかい。ええやろ」
「悪いとは言ってへんで」
オランダは妹さんに朴訥に述べます。
「それで今日はおるんやな」
「お兄ちゃんと一緒やで」
「そか。余計に悪くないわ」
ドレスアップした妹と一緒にいてです。オランダも悪い気はしないのでした。この兄と妹はです。とても穏やかにパーティーに参加しています。

第二千七十話　完

2011・5・17

第二千七十一話　妹達は

第二千七十一話　妹達は

「貴女もドレスアップしましたのね」
「その声は」
ドレスに着替えたイギリス妹に後ろから声をかけてきたのは。フランス妹でした。
彼女はトリコロール、彼女の国の国旗のカラーリングのドレスです。その手にはダイアにサファイア、それにルビーもあります。こちらも国旗です。
そのフランス妹を見てです。イギリス妹は言いました。
「やはり来ていましたのね」
「先程からいましたけれど」
「そういえばフランスさんと」
「はい、お兄様は今貴女のお兄様と喧嘩中ですけれど」
見れば何か言い合っています。やっぱり仲の悪い二人です。
「それでわたくし一人になってしまいまして」
「それはよくないですね」
妹同士の仲はいいみたいです。イギリス妹は親密な態度で言いました。
「では私と一緒にいましょう」
「それでいいのですね」
「はい、私でよかったら」
謙遜するものさえです。イギリス妹は見せます。
そうしてそのうえで、です。彼女達は二人になりました。
「折角のパーティーです。楽しんで下さい」
「有り難うございます」
フランス妹は微笑んでイギリス妹に応えてです。二人はそのまま仲良く一緒にいるようになりました。二人の仲はいいです。お兄さ

ん達と違って。

第二千七十一話　完

2011・5・18

第二千七十二話　はしゃぐアメリカ妹

第二千七十二話　はしゃぐアメリカ妹

アメリカ妹も来ています。彼女も自分の国のドレスで着飾っています。同じく国旗のドレスの中国妹とロシア妹も一緒です。この三人もお兄さん達と違ってそれぞれ仲がいいようです。

残念ながらチャイナドレスではない中国妹がです。アメリカ妹に声をかけます。何かアメリカ妹は物凄くはしゃいでいるのです。

「そこまで嬉しいあるか？」

「嬉しいっていうかね。うちには上司の上司がいたことがないからね」

最初の上司からです。アメリカではそうなのです。

だから上司の上司という存在に憧れているアメリカ妹はです。パーティーにおいて物凄くはしゃいでいるのです。

「こういう時ばかりはイギリスが羨ましいのよ」

「成程、それであるか」

「けれどお兄さんはあまり喜んでいないようですけれど」

ここでロシア妹がアメリカ妹に言いました。

「そのことは宜しいのですか？」

「兄貴は兄貴、私は私」

アメリカ妹は陽気に笑って言います。

「だからいいのよ」

「何か自分もプリンセスになりたいようにも思えるあるが」

「そうではないのですか」

「そうかもね。オズシリーズなんかそれで好きだし」

アメリカの小説であるあのオズの魔法使いのシリーズです。このシリーズでは主人公のドロシーだけでなく沢山の女の子がお姫様になるのです。これもアメリカ妹の憧れが出ているのでしょうか。

かくして自分のお姫様への憧れを見せてはしゃいでいるアメリカ

妹でした。そうしてパーティーを楽しんでいるのでした。お兄さんとは違って。

第二千七十二話　　完

２０１１・５・１８

第二千七十三話　枢軸の妹達も

連合の五人だけではありません。やっぱり枢軸の三人も妹さん達をエスコートしています。イタリアは自慢の妹、やっぱり自分の国旗のカラーリングにしたドレスを着ている妹さんを横にしてご満悦です。それでドイツと日本に対してこんなことを言うのでした。

「どうかなうちの妹。綺麗だよね」

「そうだな。綺麗だな」

「御見事です」

ドイツも日本もこう言いはします。けれどです。

ドイツも自分の妹さんをエスコートしています。こちらも自分の国旗の柄のドレスです。黒に黄色、赤とかなり派手な柄になっています。

その妹さんを見てです。ドイツは言うのでした。

「俺の妹も負けてはいないと思うが」

「私の妹もです」

日本も日本で言います。何かお話はそれぞれの妹自慢になっています。

けれど妹さん達はそんなことにはお構いなくです。イタリア妹が陽気にドイツ妹に声をかけます。

「綺麗ね、今日も」

「貴女もね。お互いにいい感じね」

「お兄ちゃんが五月蝿いのよ。今日はこのドレスにしろって」

「うちもよ。兄さんがどうしてもって言って」

「確かにドレスを着るのは嫌いじゃないけれどね」

「私より五月蝿かったから」

何気にお兄さん達が強烈に言ったようです。

そのお兄さん達、それぞれの妹自慢をはじめたイタリアとドイツをよそにです。妹さん達は仲良く楽しくやっています。二国の仲は妹さん達のそれはさらにいいようです。

第二千七十三話　　完

２０１１・５・１９

第二千七十四話　振袖最高

第二千七十四話　振袖最高

日本も妹さんをエスコートしています。日本妹の服も国旗をあしらったものです。けれど何かが違います。

イタリア妹とドイツ妹はです。日輪だけでなく桜まであしらった赤と白、それに桜色の振袖を見てです。目を丸くさせて言いました。

「何か今日は何時にも増して」

「綺麗ね」

「そ、そうでしょうか」

日本妹は顔を真っ赤にさせて二人に応えます。

「何か私だけ振袖で恥ずかしいです」

「それがいいのよね」

「そうね。皆ドレスの中でかえってそれだから」

二人はその振袖を褒めます。

「日本さんの羽織袴もいいけれど」

「貴女のその振袖。綺麗よ」

「兄さんがドレスよりもいいって言いまして」

彼女の服もです。お兄さんが選んだのです。

「それでこうなりました」

「やっぱり日本さんのセンスっていいわね」

「ええ。何か図抜けているのよ」

実際に皆日本妹に注目しています。日本自身も一人羽織袴で目だっています。他の人達はタキシードですから余計に目だっています。

その日本妹を見てです。二人も感嘆するのでした。

けれど日本妹はかなり気恥ずかしくて顔を真っ赤にさせてしまっています。その恥じらいがまた、なのでした。日本妹を注目させているのでした。

第二千七十四話　完

2011・5・19

第二千七十五話　主役を奪われて

第二千七十五話　主役を奪われて

その結婚する方がです。パーティーの中でイギリスにこっそり尋ねます。

「あのさ、若しかして僕達ってさ」

「はい、若しかしなくてもですね」

イギリスもこの方には丁寧です。やっぱり上司の上司の家の方にはです。礼儀正しいです。

「俺達は主役じゃないですね」

「今回の主役は」

「お妃になる方と」

まずはこの方です。結婚式になるとどうしても男の人より女の人が注目されてしまいます。今回もまたそうだったのです。この方のお母さんの時と同じで。

「それと妹達ですね」

「そちらの方が注目されるね」

「仕方ないですね」

イギリスもこう言わざるを得ないことでした。

「向こうはドレスっていう武器がありますから」

「僕達は軍服かタキシードだからね」

「それじゃあ勝負にならないですよ」

「特に僕の奥さんはね」

その方はもうかなり見事なウェディングドレスを着ておられます。

「それじゃあとてもね」

「まあ主役はあちらでいいですよ」

「そうだね。花は向こうなんだし」

こう言ってこの方も今回は微笑んで奥さん達に主役の座を譲るの

でした。結婚式で男の人は脇役、このことはここでも同じなのでした。

第二千七十五話　　完

２０１１・５・２０

第二千七十六話　生徒会副会長

第二千七十六話　生徒会副会長

韓国妹も来ています。勿論この娘もドレスです。韓国の国旗をモチーフにしているドレスを見てです。フランスがイギリスにこんなことを言いました。

「確かあの娘生徒会で副会長だよな」

「ああ、そうだよ」

その通りだとです。フランスに答えるイギリスでした。

「あいつが強引に決めたんだよ」

「だよな。そういえば生徒会の役職ってどうなってんだ？」

「俺達が副会長で書記で会計なんだよ」

「俺達五人全員がか」

「そうだよ。って知らなかったのか」

「今はじめて知ったよ」

生徒会のメンバーですが実はなのです。五人共自分達の役職については詳しくないのです。特に韓国が生徒会長になってからはです。

「そうか。副会長って六人もいたんだな」

「本来は五人だけれどあいつが妹さん入れたからな」

「それでか。まあそれでいいけれどな」

何故それでいいのか、フランスはこのことも言いました。

「あいつだけじゃとてもな」

「困るからな」

「生徒会長が一番の爆弾だからな」

「しかも爆発した本人は何ともない爆弾だからな」

その会長をフォローする有り難い副会長なのがこの韓国妹なのです。その彼女も今はドレスを着てにこやかに笑っているのです。

第二千七十六話　完

2011・5・20

第二千七十七話　自然にもてる人

第二千七十七話　自然にもてる人

オーストリアさんのすぐ傍にはハンガリーがいます。この二人はここでも一緒にいます。

しかもオーストリアさんの周りにはです。ドイツ妹もいますし他の娘達もいます。この人は女の子に囲まれています。花が咲き誇っています。

それを見てです。フランスがいささか悔しそうに言います。

「他の娘はともかく妹まで行ったよ」

「御前の方には一人もいないな」

「くそっ、何でだよ」

イギリスにもその悔しさを見せています。

「お兄さんがもてなくてあいつがもてるんだよ」

「御前は何かと変態だからだろうが」

イギリスはそのままフランスの困ったところを指摘します。

「ったくよ、裸になったりするかだろうが」

「芸術がわからないんだな、皆」

「芸術というよりは猥褻じゃねえのか？」

何か谷崎潤一郎な話になっています。

「とにかくオーストリアはもてるな」

「ハンガリーだけじゃなくて妹達全員そっちにいったしな」

「気品があって背も高いしな」

しかもです。オーストリアさんといえば。

「音楽家でもあるしな。これじゃあな」

「もてない筈がないっていうんだな」

かくしてフランスの分まで女の子に囲まれているオーストリアさんでした。けれど本人はそのことに自慢もしません。この辺りももてる要因でしょうか。

第二千七十七話　完

2011・5・21

第二千七十八話　この兄妹

第二千七十八話　この兄妹

スイスとリヒテンシュタインも来ています。スイスは周囲を警戒しながら妹さんに言っています。

「フランスとオーストリアには注意するのである」

「御二人にですか」

「そうである。若し二人が御前のところに来れば我輩が容赦しないである」

こう言って二人を見ているスイスでした。けれどイタリアには。

「イタリアは安心していいである」

「イタリアさんはですか」

「あれにはドイツがいるのである」

それで目を光らせているのです。見れば実際にオーストリアさんの近くにいた妹さん達に声をかけようとしてドイツにスリーパーホールドをかけられています。

「だから安心である」

「そうなのですか」

「しかしフランスは違うのである」

見ればイギリスと二人でぽつんとなっています。

「オーストリアも危険であるがあいつはまさに野獣である」

「あの、そのオーストリアさん動けないみたいですけれど」

女の子に囲まれているからそれも当然です。

「それにフランスさんも何か」

「それでも注意するである。男は野獣である」

過保護丸出しで言うスイスです。

「我輩が傍にいるである。御前につく悪い虫は容赦しないから安心するである」

こう言って一歩も引かないスイスでした。しかしこの人がいるせ

いでしょうか。リヒテンシュタインにはです。実際に誰も声をかけようとはしません。

第二千七十八話　　完

２０１１・５・２１

第二千七十九話　パーティーから帰って

第二千七十九話　パーティーから帰って

イギリスでの御成婚パーティーが終わってです。日本は自分の国に帰りました。勿論妹さんも一緒です。

お家に帰ってです。日本は残念な顔で妹さんに言いました。

「楽しかったのはよかったですが」

「そうですね。あの方も来られれば」

「そう思います」

上司の上司のお家のです。次に主になる方のことです。震災の影響でこの方はイギリスには行かれなかったのです。それで日本と妹さんだけが行ったのです。

そのことをお話してです。日本は。

「仕方ないことですが」

「また機会があればその時は」

「そうしてもらいましょう。それにしても」

国に帰ってみると。またしてもなのでした。

上司の一番偉い人が何か喚いています。それは。

「サンライズ？アニメの会社でしょうか」

「ガンダムでしょうか」

「そうかも知れませんね」

とりあえずこう考えた日本でした。

「ガンダムを開発されるのでしょうか」

「そうだと面白いのですけれど。ですが」

日本妹はここで心配する顔で言いました。

「思いつきでしか言わない人ですし」

「原発も思いつきであしてしまいましたし」

もう日本も日本妹も匙を投げています。国に帰ればです。この人がまたいたのです。

第二千七十九話　完

2011・5・22

第二千八十話　この人のお料理が

第二千八十話　この人のお料理がお家に帰った日本と日本妹にです。某脚本家さんが声をかけてきました。
「よお、帰ったな」
「はい、ただいま帰りました」
「ただいまです」
「ああ。それにしても丁度いいところに帰って来たな」
脚本家さんは男の逞しい笑顔で二人に言ってきます。
「鮑を蒸してたところだ。食うだろ」
「鮑！？」
「鮑ですか」
「他にも麻婆豆腐も作ってる。どうだ？」
「何か凄いですね」
日本も脚本家さんの言葉にです。その目を丸くさせました。勿論日本妹もです。脚本家さんのお料理は絶品という言葉でもまだ足りない位ですから。
その脚本家さんはです。テーブルについた二人にその鮑と麻婆豆腐を出しました。そのうえで二人にこうお話したのです。
「鮑はやっぱりな。十時間蒸したのが一番美味いな」
「そこまで時間をかけたのですか」
「それで作られたんですか」
「御前等が帰って来る頃にはって思ってな」
祖国を御前と言える人はこの人だけです。それが許される人、そうした人はそうはいません。
その人がです。笑顔で二人に言うのです。
「丁度できたところだ。腹一杯食ってくれよ」
「有り難うございます。それでは」

「いただきます」
パーティーから帰った二人は脚本家さんの手料理で出迎えられたのです。確かに残念なところはありましたが。それでも楽しいパーティーでした。

第二千八十話　完

２０１１・５・２２

第二千八十一話　クリスマスはしないとは言う　☆

第二千八十一話　クリスマスはしないとは言う　☆

中国がです。こんなことを日本に言っています。
「クリスマスなんて西洋の祭りはしないあるよ」
日本は冷静に中国に突っ込みを入れます。
「それは何時のお話ですか？」
「確かピザを」
「それでもそういうことにしているあるよ」
建前と本音を使い分けて言う中国でした。
「それよりも正月あるよ」
「それは私もしていますが」
「勿論日本はそっちあるな」
クリスマスのお祝いをしてからこんなことを言う中国でした。
「僕と一緒に正月をお祝いするあるな」
「そうですね。実際にしていますし」
「それでいいある」
「それはそうとです」
見ればテーブルの前にこれでもかと料理が置かれています。全部中国が作ったものです。日本はそれを前にして中国に尋ねます。
「これ食べていいでしょうか」
「勿論ある。あっ」
「あっ？」
「ちょっと待つある」
中国は急に厳しい顔になって日本に言ってきたのでした。同じアジアでも違うところが多い。日本はそのことをあらためて知ることになるのでした。

第二千八十一話　完

2011・5・23

第二千八十二話　モミの木は使えない

中国のクリスマスはです。まずモミの木がありません。

「あれは燃えるあるからな」

「じゃあおもちゃのあれなんだな」

「そうある。まあそれで我慢しているある」

こうアメリカにもお話します。

「火事になったら大変あるからな」

「特に気にしなくてもいいんじゃないのかい？」

「隣に火事が大好きな奴がいても言えるあるか？」

韓国のことです。韓国では火事が異常に多いのです。無茶苦茶な理由で放火をする人が絶えません。そんな恐ろしい国が隣にいては。

「下手したら国自体が燃えるある」

「ああ、あいつがいたな」

「そうある。あいつの国では理由がなくても放火する奴がいるある」

本当にそういう人がいるから怖いのです。

「もっともそうでなくても火事には気をつけているある」

「そういうことだったのか」

「木は燃えるものある。ただやっぱり寂しいことは寂しいある」

本物のモミの木がです。やっぱり一番なのです。

「おもちゃのツリーでも飾れるあるが」

「やっぱり本物が一番だな」

「その通りある」

結局のところモミの木でのクリスマスを行いたい中国なのでした。

彼にとってはクリスマスに思うささやかな、それでいて強い夢だったりします。

第二千八十二話　完

2011・5・23

第二千八十三話　小言のはじまり　☆

中国はです。日本に注意しました。
「料理にそのまま箸をつけたら駄目あるよ」
「あっ、そうなのですか」
「そうある。小皿に取るある」
「わかりました」
日本は中国の言葉に頷きます。
「それでは」
「ああ、調味料かけ過ぎあるぞ」
また言う中国でした。日本がお醤油をかけたところで、です。
「小皿は一個あるから上にちょっと垂らすだけある」
「ちょっとですか」
「さもないと他の料理にも調理魅了の味がついてしまうあるぞ」
「わかりました。では」
日本はお醤油をかけるその手を慌てて止めながら応えました。けれどそれだけではなかったのです。中国の小言は続きます。
「お皿は持ったら駄目ある。基本あるよ」
「皿に取った分は残さず食べないと駄目ある」
「上手に食べているあるが海老はそのみそが美味しいある！」
「みそは捨てたら駄目ある！」
とにかく次から次に言う中国です。これには日本もです。
困っています。それでも何とか食べていきます。
見れば中国はそのマナーをちゃんとしています。けれど日本にとっては非常に困った展開です。とにかく小言の多い中国です。料理については。

第二千八十三話　完

2011・5・24

第二千八十四話　小言が多いのは

第二千八十四話　小言が多いのは

中国の料理の決まりについてです。ベトナムとタイがお話をしています。

「あれなのよね。やっぱり長く生きてるからね」

「その中で身に着いたものでしょうか」

「絶対そうだと思うわ」

ベトナムはこうタイにお話します。今二人はベトナムのお家でベトナムが作った生春巻きをナムプラーにつけて楽しく食べています。

「だってあの人もう」

「御爺さんですからね」

「外見はあれでもね」

学園の生徒でもです。実際はなのです。

「確か四千歳だったかしら」

「韓国君の半分以下ですけれどね」

「まああれは自称だし」

自称一万歳、韓国はそう言って憚らないのです。

「とにかくよ。長生きしていたらね」

「あれだけ色々なマナーを身に着けていくものなのですね」

「それでいつも品行方正かっていうとね」

「中国さんは違うんですよね」

「変なところでマナーがね」

「その辺り連合の人達全員ですけれどね」

何と五人全員がそうだったりします。

「けれどあの人は」

「そう、歴史が育てたマナーと無作法なのよね」

そんなややこしい中国でした。長生きは色々なところに影響するものです。

第二千八十四話　完

2011・5・24

第二千八十五話　日本のクリスマスプレゼント　☆

第二千八十五話　日本のクリスマスプレゼント　☆

中国のあまりの小言の多さに困った日本はです。肩で息をしながら中国に対してこう言うのでした。

「あの、中国さん」

「御馳走様あるな」

「それはそうですが」

何だかんだで食べ終えています。料理自体はよかったです。そう、料理自体はです。

それでも疲れきった日本はです。中国に対して言うのでした。

「私からクリスマスプレゼントがあるのですが」

「そんな西洋の風習なんていうのはいいある」

「ですからもうそれは知ってますから」

中国もクリスマスを楽しんでいることはです。それは置いておいてです。

「とにかくあげます」

「日本がくれるなら欲しいあるよ」

「それはよかったです」

何だかんだでにこにこしている中国の背中にです。サインをしました。

「サインあるな」

「はい、そうです」

そのサインはというと。

『この人箸奉行です』

しっかりと書いています。そして日本はこう心の中で呟いたのでした。

（中国さん、私クリスマスは他の人と過ごします）

とりあえず中国以外の誰かです。とはいっても誰がいいのか。日本はあらためてそのことを考えなければなりませんでした。相手は一杯いますがそれでもです。誰がいいかというと探さないといけないことでした。

第二千八十五話　　完

２０１１・５・２５

第二千八十六話　日本軍にクリスマスはない

第二千八十六話　日本軍にクリスマスはない

韓国がです。またしても変なことを言っています。

「俺はあの時代は日本にクリスマスでも何でも働かせられたんだぜ」

「あんたいつも豪快にお昼寝してたじゃない」

その韓国に台湾が突っ込みを入れます。

「何が働いていたっていうのよ」

「むっ、御前に言われたくないんだぜ」

「あんたの方がずっと日本さんの上司の人に可愛がられてたでしょ。それにクリスマスって」

「そうなんだぜ。酷い話だったんだぜ」

「その時の日本さんにクリスマスなんてなかったし」

台湾が話す衝撃の事実でした。

「だから。休み自体がね」

「なかったんだぜ？」

「そうよ。何処をどうやったらそんな奇想天外な歴史になるのよ」

クリスマス自体は明治維新から入っていましたがそれでもです。日本が大々的にお祝いするようになったのは戦争が終わってからです。韓国が言っていることは絶対に違うのです。

けれど韓国はです。まだ言います。

「もう無茶苦茶こき使われたんだぜ。強制的に行楽に行かされたり映画館に連れて行かれたりデパートに案内されたり。あいつの上司は最悪だったんだぜ」

「ってあんた遊んでばかりだったんじゃない」

台湾も唖然となりました。

「日本さんの上司の人達って何処まであんたに甘かったのよ」

「他にも学校に行かされたりしてたんだぜ。軍隊にも将校にされて

責任押し付けられた人が一杯いたんだぜ」
　こんなこともまで言います。とりあえず韓国にとって日本の上司の人達はです。物凄く優しかったのは間違いありません。

第二千八十六話　　完

２０１１・５・２５

第二千八十七話　アメリカに行ってみた

第二千八十七話　アメリカに行ってみた

中国のお奉行ぶりに辟易した日本は誰のところでクリスマスを過ごしたものかと考えました。そうして次にお邪魔したところは。

「ははは、中国らしいなそれは」

「少し困りました」

日本はこうアメリカにお話します。

「中国さんも意外と細かくて」

「そうなんだよ。あいつはあれで細かいんだ」

アメリカもです。同じ連合のメンバーとして知っているのです。

「だから一緒に食べるのは少し大変なんだな」

「そうですね。それでアメリカさんは」

「うちはそんなことないぞ」

アメリカは笑顔で日本に言いました。

「何の気兼ねもせずに食べてくれていいぞ」

「有り難うございます」

「クリスマス。何を食べようか」

お話はアメリカのペースで進んでいきます。

「やっぱりケーキだよな」

「はい、やはりあれは外せませんね」

「そうだな。今回のケーキは」

アメリカは少し考えてからまた日本に言いました。

「オレンジ色のケーキなんてどうかな」

「遠慮します」

日本はこの時不吉なものを感じました。アメリカさんもまさか、こう思ったのです。

第二千八十七話　完

2011・5・25

第二千八十八話　アメリカは気にしない

第二千八十八話　アメリカは気にしない

「日本の風習はわかっているあるが」
「それでも作法がなっていなかったのかい？」
「そうある。あれで案外そうしたところがあるから困るある」
中国がアメリカにお話しています。アメリカが中国に来てそれで中国に御馳走になりながらです。日本のことをお話しているのです。
「礼儀作法についても平均点はかなり高いあるが」
「それでもなんだな」
「そうある。それはそうとある」
「んっ、何だい？」
「それはアメリカにも言えるある」
彼もだというのです。
「もう少しマナーを大切にするあるぞ」
「いいじゃないか、そんなことは」
アメリカは小皿を幾つも使っています。そのうえです。
それぞれのお皿に調味料をたっぷりとです。そうしながら食べています。中国はそんなアメリカを見てです。少しぷりぷりして言っています。
「文明が違うことも考慮してさ」
「同じ太平洋あるが」
「ああ、それを言ったらそうだな」
「だからある。アメリカもある」
「気にしたらよくないぞ。人それぞれだぞ」
「自分のことはそう言うあるか」
中国の言葉にも秘密があるようです。その秘密とは何なのでしょうか。

第二千八十八話　完

2011・5・25

第二千八十九話　案の定

第二千八十九話　案の定

日本はアメリカのところにいてです。ふと彼に言われました。
「ああ、それは食べたらいけないぞ」
「えっ、チーズバーガーをですか」
「今は食べたら駄目なんだ」
何故かです。日本にこんなことを言ってきたのです。
「今ここにユダヤ系の奴がいるからな」
見ればです。髭を生やした人が場にいます。
「だから駄目だぞ」
「そうですか」
「それを食べるのは後にしてくれ」
とりあえずです。そのユダヤ系の人がいる間はというのです。
「その人が食べられないものを目の前で食べるのはあまりよくないことだからな」
「確かに。それでは」
「実はユダヤ系では食べられないものが多いんだ」
ユダヤ教独特の戒律によってです。アメリカではユダヤ系の人が結構多いのです。ここだけの話かなりの力も持っていたりします。
「他にも。魚介類の制約が多いんだぞ」
「それは困りますね」
魚介類大好きの日本にとってはでした。
「では鰻や海老は」
「勿論駄目だぞ」
見れば実際に今テーブルの上にはそうしたものは一切ありません。チーズバーガーにしてもです。何時の間にか何処かになおされています。アメリカも何かありそうです。

第二千八十九話　完

2011・5・27

第二千九十話　ハリウッドなんかは

第二千九十話　ハリウッドなんかは

「そういえばあの人はユダヤ系だったあるな」
「スピルバーグだな」
「そう、あの人ある」
中国がアメリカにお話しています。どうやら今回は映画のお話の様です。
「あの人はそうだったあるな」
「そうだぞ。ハリウッドには多いんだぞ」
「他にもマスコミや知識人にあるな」
アメリカではそうした方面にユダヤ系の人が目立ちます。他には企業家にもです。この傾向は欧州よりも強かったりします。アメリカは移民の国なのでそうなったようです。
「けれどまずはハリウッドあるか」
「スターウォーズのアミドラ王女もだぞ」
「ナタリー＝ポートマンあるな」
「そうなんだ。僕の国ではユダヤ系を積極的に受け入れたからな」
アメリカにとってはこのことは誇りでもあります。
「だから彼等は才能を発揮できているんだ」
「それはいいことあるな」
「ただし食べ物については制約が多いからな」
それを聞くとです。中国は顔を曇らせてこう返したのでした。
「それは勘弁して欲しいあるな」
「ははは、宗教には色々あるからな」
アメリカは明るく笑って言いました。
とにかくです。アメリカには色々なルーツの人達がいます。その中にはユダヤ系の人も多くいてです。才能を如何なくなっきして活躍しているのです。

第二千九十話　完

2011・5・27

第二千九十一話　色々な人がいるから

第二千九十一話　色々な人がいるから

アメリカはです。日本にさらに言います。
「豚肉にも注意するんだぞ」
「今度はイスラム系の人達ですね」
「そうなんだ。アメリカにはイスラムの人もいるからな」
それでだというのです。アメリカは移民でできた国ですからイスラム系の人達も移民してきているのです。モハメド＝アリみたいに改宗した人もいます。
「その他にもいるぞ」
「では食事の制限やマナーは」
「他の人が手で食べていても言ったらまずい時があるんだ」
今度は食べ方のことでした。
「インド系の人もいるしそのイスラム系の人もいるからな」
「だからですね」
「そうだ。カレーもあるけれど気をつけるんだ」
日本ではカレーはスプーンで食べます。けれどインドでは手で食べます。この辺りも文化の違いと言えます。箸と手の違いです。
「勿論中国や西洋のマナーもあるからな」
「ううむ、それではです」
お話をここまで聞いてです。日本は言いました。
「アメリカさんも複雑なんですね」
「色々な文化があるからな」
それがそのまま出ているからなのです。
アメリカもアメリカで複雑なのでした。日本にとってはこのことも困ったものでした。それでアメリカと一緒にクリスマスを過ごすのもどうかということになったのです。

第二千九十一話　完

2011・5・28

第二千九十二話　何故チーズバーガーは駄目か

中国は首を捻りながらです。アメリカに尋ねます。
「そもそもユダヤ系の人はどうしてチーズバーガーが駄目あるか？」
「ユダヤ教では親のものと子のものは一緒に食べないんだ」
それでだとお話するアメリカでした。
「ハンバーグに使う牛肉は親でチーズを作る牛乳は子供になるんだ」
「ではシチューなんかもあるな」
「君のところのトリガラスープに鶏肉を入れるのも駄目になるぞ」
「日本のところの親子丼もあるな」
「だから食べられないものが結構あるんだ」
その辺りとても厳しいのがユダヤ教なのです。
「うちではユダヤ系の人が多いから要チェックだ」
「その通りあるな。難しい話ある。それにしてもある」
「それにしても。どうしたんだ？」
「何故そうした食べ方は駄目あるか？」
中国にはそのことがわかりません。チーズバーガーも鶏を入れたトリガラスープも親子丼も駄目というその理由がです。どうしてもわからないのです。
それでアメリカに尋ねます。けれどアメリカもです。
「昔に色々と理由をつけたらしいんだ」
「けれど詳しい理由は知らないあるか」
「親と子を一緒に食べるのはどうかということでなったと思うんだ」
「それでもあまり神経質になる意味はないような気がするある」
「僕もそう思うけれど彼等は今もそうしているんだ」
こうしたことがあるのも宗教であり文化です。アメリカにはそうした様々な文化が内包されて存在しているのです。

第二千九十二話　完

2011・5・28

第二千九十三話　ロシアには行かない

第二千九十三話　ロシアには行かない

日本はアメリカでもクリスマスを過ごさないことにしました。それで次はといいますと。

「ロシアさんのところは」

「行きません」

妹に対して速攻で答えます。

「あそこは絶対に行きません」

「やっぱりそうなんですか」

「若し私がロシアさんのところでクリスマスを過ごすとします」

日本はその顔に暗い影を落としてお話します。

「恐ろしいことになるでしょう」

「刀を持って行かれるのですね」

「それと手裏剣も」

完全武装で行くというのです。間違っても宴会を楽しむ為に行くのではありません。そして日本がそんな状況なら相手もなのです。

「ロシアさんもバールの様なものでお出迎えしてくれますから」

「あの、それではロシアさんのところに行かれたら」

「別の意味でのパーティーになります」

そうなるしかないのです。

「ですからそれはです」

「わかりました。では絶対にですね」

「行きません。どうなるかわっていますから」

「そのことがわかりました」

かくしてロシアにだけは行かない日本なのでした。日本はロシアとだけはです。どうしても相容れないものを持っているのでした。相性は最悪です。

第二千九十三話　完

2011・5・29

第二千九十四話　ロシア式だと

第二千九十四話　ロシア式だと

ロシアではです。お料理は一つずつ出します。それを見てベラルーシが言います。

「寒いからですね」

「そうなんだよね。僕の国って寒いから」

寒くないとロシアではありません。その寒さはパリが宗谷岬よりも北にあるフランスが凍えてしまう程です。悪夢のロシア遠征は伊達ではありません。

「だからこうしてね」

「一つずつ出して冷えない様にするんですね」

「最初フランス君が料理を一度に出してくれたけれど」

そうなればどうなってしまったかというとです。

「けれど。冷えたから」

「そういうことがあってからですね」

「うん。一つずつ出してるんだ」

実際にスープ、サラダ、オードブル、メインディッシュと出されていっています。

「寒いのって嫌だね」

「そうですね。ただ」

「ただ？どうしたの？」

「お兄様のそのやり方がです」

お料理を一つずつ出していくやり方がだというのです。今では。

「主流になっていますから」

「フランス君が取り入れてね。嬉しいよね」

「はい、その方が優雅に思えます」

これはベラルーシの主観ですがそれでもです。食事の時は意外と優雅なロシアです。実は優雅で物静かな一面もあるのです。

第二千九十四話　完

2011・5・29

第二千九十五話　細かいのはわかっているので

第二千九十五話　細かいのはわかっているので

日本はです。フランスについても妹さんにお話しています。

「フランスさんが一番細かいので」

「マナーがですね」

「奉行というものではありません」

フルコースでのメニューを決めたのは他ならないフランスです。そのことは日本妹も知っています。それこそここまでするかという域にまで達しています。

だからクリスマスを気軽に過ごしたい日本はです。彼のところには最初から行かないというのです。この辺りロシアに対するのと同じであります。

「ですから今回はです」

「遠慮するんですね」

「はい、何かこうしてみますと」

日本はこれまで参加を取りやめた国を見ていって気付きました。

「連合の方々とは」

「そうですよね。何か何処もですよね」

「中国さんやアメリカさんとはお付き合いも深いというのに」

何だかんだです。この三国の交流はかなり深いです。けれどなのです。

「それでも。クリスマスはです」

「一緒に過ごしたくないですか」

「たまにはマナーに捉われないで楽しく過ごしたいです」

日本にとってはささやかですが切実な願いです。

「是非共」

それでフランスについても見送りということになりました。こう

して連合の面々も残るは一国となりました。友達がいないようでいつも誰かが傍にいるあの人がです。

第二千九十五話　　完

２０１１・５・３０

第二千九十六話　暇潰しから

第二千九十六話　暇潰しから

フランスはモナコと一緒にフルコースを食べています。優雅にワインも飲んでいます。そうしながらモナコに対してこんなことを言いました。

「俺の作ったマナーって五月蝿いか」

「凄く・・・・・・五月蝿いです」

モナコもこう返します。

「私はそれでいいですが」

「太平洋の連中は今でも軒並み文句だしな」

「イギリスさんは紳士の嗜みと言われて納得されましたが」

「あいつは紳士って言葉に弱いからな」

イギリスの意外な弱点です。実はイギリスはそうした言葉を言われるとついつい従ってしまうのです。マナーについてもそうなのです。

だからイギリスはそれで済みました。けれどでした。

「それでも困ってる奴は多いな」

「ドイツさんやオーストリアさんも納得されてますけれど」

規則に五月蝿いドイツや生粋の貴族のオーストリアさんも納得してくれました。けれどでした。

「ですが。太平洋の方々は」

「あの連中とはそもそも文明が違うけれどな」

「物凄く文句を言ってますね」

「中には最初から全然守らない奴もいるけれどな」

生徒会長のことであるのは言うまでもありません。そんなことをお話しながらです。フランスは言いました。

「折角俺が暇をもてあまして作ったものなのにな」

「それであそこまで細かくなったんですね」

昔のフランスの上司もお付き合いするフランスも暇だったからです。それであそこまでマナーを細かくしたのです。暇潰しとして。

第二千九十六話　　完

２０１１・５・３０

第二千九十七話　戻って来て欲しい人は来ない国

第二千九十七話　戻って来て欲しい人は来ない国

イギリスはです。日本がお邪魔した時怒っているところでした。
「ったくよ、あいつは家出して戻って来ないしな」
「シーランドさんのことですか」
「ああ、日本か」
イギリスもここで日本に気付きました。
「ちょっとな。いつも通りでな」
「シーランドさんはあのお家におられてですね」
「そのまま戻って来ないんだよ。本当に困った奴だよ」
「しかしシーランドさんは御自身を独立国家と思われてますが」
「あいつだけはな」
イギリスは言葉の弾みで言っただけで。実はシーランドを自分の国の家族だとみなしています。けれど彼はそうではないのです。
こうしたパラドックスの中で、です。イギリスは困った顔で言うのでした。
「絶対に連れ戻さないとな」
「クリスマスにはどうされてますか？」
「あいつか？あいつだけで祝ってるよ」
シーランドだけで、です。そうしているというのです。
そのイギリスはです。日本にも言いました。
「どうだよ。御前もクリスマス祝うよな」
「それはそうですが」
「じゃあ丁度いい。前祝いでな」
そうしてなのでした。日本はイギリスの応対を受けるのでした。
日本はこの時忘れていました。イギリスの致命的な弱点を。誰もが知っているその弱点をです。

第二千九十七話　完

2011・5・31

第二千九十八話　シーランドとラトビアのクリスマス

第二千九十八話　　シーランドとラトビアのクリスマス

シーランドはラトビアのお家にお邪魔してお菓子を食べながら言っています。

「シー君も何時かは盛大なクリスマスをするですよ」

「それが君の夢なんだね」

「そうなのです。イギリスの野郎よりもずっと盛大なクリスマスのお祝いをするです」

「その為にはもっと人が多くないと駄目じゃないかな」

ラトビアが最初に言うのはこのことでした。

「君のところ人口どれ位だったっけ」

「四人です」

イギリスとは比較するのも馬鹿馬鹿しい位開いているのは誰が見てもです。

「四人で楽しくやっているのです」

「何かそれって家族のお祝いなんじゃないかな」

「家族でお祝いするのが楽しいのです」

そうだとです。シーランドは楽しくお話します。

「だからなのです。それをもっと大きくするのです」

「うん、頑張ってね」

ラトビアはシーランドとは対象的に暗い顔で応えます。

「僕も頑張るから」

「何かラトビア暗いのです」

「まあ。クリスマスをお祝いしてもいつも一人だから」

隣にはロシアがいてリトアニアはポーランドと、エストニアはフィンランドといつも楽しくやるようになっています。それで彼はいつも一人なのです。

一人でも楽しくやれるシーランドと寂しくやるしかないラトビア、
一人でやるにしても立場も境遇も全く違います。ラトビアが楽しい
クリスマスを過ごせる時は来るのでしょうか。

第二千九十八話　　完

２０１１・５・３１

第二千九十九話　やっぱりまずい

第二千九十九話　やっぱりまずい

イギリスが出してくれたお料理。それを食べて。
日本はです。顔色を一変させてしまいました。
「うっ、これは」
「どうだ？気に入ってくれたか？」
イギリスにしてみれば必死に作った和食はです。天ぷらのお寿司とかそういうものでした。けれど外見はです。どう見ても天むすです。
しかもその味がです。壮絶なもので日本も絶句なのでした。
「あの、これは和食ですよね」
かろうじてこう尋ねられるだけでした。
「イギリスさんが作られた」
「和食ってはじめてだけれどな」
イギリスは少し照れ臭そうに答えます。
「どうだ？美味いか？」
「何といいますか」
「俺皆から料理がまずいって言われてるんだよな。それで努力してるんだよ」
「はあ、努力ですか」
「それでどうだよ。美味いか？」
日本の表情には気付いていません。元々無表情な日本ですがそれでもです。
しかも尋ねたのが日本です。その返答は。
「凄く・・・・・美味しいです」
青い顔で言うのでした。けれどそれを聞いたイギリスは。
上機嫌になってそれでよかったと言うのでした。こうして日本は決意しました。連合の五人のところでは絶対にクリスマスは過ごさ

ないと。

第二千九十九話　完

2011・6・1

第二千百話　連合の他の面子

第二千百話　連合の他の面子

連合は五人が有名ですがその他にもいます。まずはこの二人です。

「おいどん達も参加していたでごわすよ」

「そうたい」

オーストラリアとニュージーランドです。この二人もいたのです。

「かなり頑張ったでごわすな、あの時は」

「日本さんがすぐそこまで来ていた時もあったばい」

そうした状況の中で戦っていたのです。

「何か生徒会長も連合にいたと言っているでごわすが」

「あいつはあの時枢軸にいたとよ。はっきり見てるばってん」

「それと他には」

「もう一人いたばい」

ここで二人はこんなことを言うのでした。

「けれど。誰かというと」

「思いだせんたい」

「なあ、誰だったでごわすか？」

「わからんたい。思いだせんとよ」

二人はここで腕を組んで困った顔になります。そう、他に重要なメンバーがいたのです。けれどどうしても思い出すことができないのです。

「ポーランドやノルウェーやデンマークはイギリスに逃れて戦っていたでごわすが」

「オランダやベルギーもいたたい」

「けれど最後の一人で

「誰だったとよ」

たまにはカナダのことも思い出してあげて下さいとしか言えません。この二人ですら思い出せない、カナダは何処までも影が薄いの

でした。

第二千百話　完

2011・6・1

第二千百一話　かくしていつものメンバーで

第二千百一話　かくしていつものメンバーで

日本はクリスマスはイタリアのお家にお邪魔することにしました。

するとです。

イタリア、そしてロマーノがです。早速出迎えてくれました。

「よく来てくれたね」

「飯とワインは用意してあるからな」

ロマーノも日本には素直です。そうして日本を迎えてです。イタリアはその日本に対して残る面子のこともお話するのでした。その面子とは。

「ドイツとプロイセンにも電話しておいたからね」

「だからすぐに来るぞ」

「左様ですか」

お話を聞いた日本はすぐに頷き返しました。

「それは何よりです」

「やっぱりドイツ達もいないと楽しくないよね」

「俺はそうは思わないんだがな」

ロマーノはドイツに対しては相変わらずなのでした。

けれどそれでもです。この五人の面子だとです。ロマーノもこう言うのでした。

「少なくとも楽しいし退屈はしないな」

「そうだよね。俺達って仲いいしね」

「私も。皆さんと一緒なら」

枢軸の皆という意味です。

「楽しく過ごせますね」

「クリスマスは楽しく過ごさないとね」

イタリアも笑顔で応えてです。そうしてなのでした。

日本はクリスマスは枢軸組で過ごすことにしました。それも楽し

くです。

第二千百一話　完

2011・6・2

第二千百二話　最初から一人が問題

「ああ、ロシア来ないかも知れないんだ」
「そうあるか」
アメリカも中国もです。クリスマスにロシアが来ないかも知れないと聞いてもです。実にしれっとした調子です。むしろ嬉しいといった雰囲気さえ感じます。
「じゃあそれでいいと思うぞ」
「別に困らないある」
「こいつ等どんだけ仲悪いんだ？」
二人にお話したフランスも呆れています。
「というか連合の連中で何でこうなんだよ」
「そういう君はいいのかい？」
「クリスマスまで生きていられるあるか？」
「体調は悪いけれどまだ生きてるよ」
フランスはこう二人に返します。
「ついでにイギリスもな。大丈夫だからな」
「何だ、生きていられるんだ」
「それは残念あるな」
二人共実に残念そうに言います。
「まあとにかく四人でもいいじゃないのか？」
「そう思うあるが」
「だから何でこう団結しねえんだよ」
フランスですらこう言う始末です。
とにかく仲の悪さが目立つ連合の面々です。枢軸ののどかで仲のいい雰囲気は少なくともこの人達にはです。あまり縁がないものです。

第二千百二話　完

2011・6・2

第二千百三話　イタリアには凄く友好的

第二千百三話　イタリアには凄く友好的

「よお、イタちゃん楽しもうぜ」
「ああ、プロイセンいらっしゃい」
ドイツと一緒に来たプロイセンはです。にこにことしながらイタリアに言います。彼にしては珍しいにこにことした笑顔で、です。
「ドイツも一緒なんだね」
「そうだ」
そのドイツもいます。彼はいつも通りです。
けれどプロイセンはです。イタリアとロマーノに対して凄くにこにことしています。
そしてです。こんなことを言うのでした。
「やっぱりあれだよ。俺達はイタちゃん達と一緒にいたり組んだりするのが一番いいんだよ」
「何故そう言える？」
ドイツは真顔で相棒に問い返しました。
「相棒もかなり迷惑を受けたんじゃないのか？」
「あれを迷惑って考えるから駄目なんだよ」
プロイセンはこうドイツに返します。
「相棒もな。そろそろわかってくるさ」
「一体何がわかるんだ」
「イタちゃんとロマーノのよさがな」
言うのはこんなことでした。
「やっぱり俺達はイタちゃん達と組むのが一番なんだよ」
「そうは思わないがな」
ドイツはいささか憮然として返します。ドイツはまだわかっていないのです。そのイタリアのよさがです。彼がどれだけの長所を持

っているのかを。

第二千百三話　完

2011・6・3

第二千百四話　ロシアが来ても

第二千百四話　ロシアが来ても

「何とか来られたよ」
「おっ、来たか」
フランスがです。ロシアが来たのを見て彼の方に顔を向けました。
「これで五人揃ったな」
「うん。やっぱり皆とお祝いしないとね」
ロシアは素朴な笑顔でフランスに返します。そうしてです。
用意されている席に着きます。けれどアメリカも中国も彼には声をかけようとはしません。御互いに気まずいオーラが漂っています。
勿論ロシアもそんなことは意に介さずです。フランスに言うのでした。
「そういえばさ。日本君が皆のお家を回ってたんだって？」
「俺のところには来なかったけれどな」
フランスはロシアに答えました。
「来てたらしいな」
「ふうん、そうなんだ」
「クリスマスを誰と一緒に過ごそうかって考えてたみたいだな」
「僕は日本君と一緒に過ごしたいんだけれどね」
ロシアはお話を聞いてとても意外な言葉を出しました。
「日本君は嫌なのかな」
「あいつにも事情があるんだろうな」
「残念だね。若し日本君が来たら」
あの凄みのある笑みになってです。こんなことを言うのでした。
「是非共。楽しくやりたいんだけれどね」
「本当にどっちか死んで生き残った方も大怪我だから止めろよ」
フランスはドン引きになってロシアに突っ込みを入れました。やっぱり日本がロシアにお邪魔しなかったのは正解だったようです。

確実に大喧嘩になるからです。

第二千百四話　　完

2011・6・3

第二千百五話　枢軸は和気藹々

第二千百五話　枢軸は和気藹々

「オーストリアさんも呼ぼう」
「えっ、あいつも呼ぶのかよ」
プロイセンはイタリアの提案に一瞬嫌な顔になります。けれどその表情はすぐに消してです。イタリアに返すのでした。
「まあイタちゃんがいいっていうんならいいけれどな」
「じゃあ早速呼ぶね」
こうしてイタリアがオーストリアさんを呼ぶとです。ハンガリーも一緒でした。しかもです。
今度は日本がです。彼女を呼びました。
「台湾さんも来られるそうです」
「凄いね。可愛い女の子が二人も来てくれるんだ」
イタリアは日本の言葉に笑顔になります。
「こんないいことってないよ」
「それに妹達も来るようだな」
ドイツも言ってきました。
「さらに賑やかになるな」
「何かこの顔触れで集るとすぐそうなるよな」
プロイセンはドイツのお話を聞いて腕を組んで言いました。
「賑やかになるな」
「俺は可愛い女の子がいればそれでいいけれどな」
これはロマーノの言葉です。
「けれど何だな。ドイツやイタリアがいても特に嫌にならないな」
「そうですね。とても落ち着きますし」
日本は微笑んでロマーノに言葉を返します。枢軸のクリスマスはとても賑やかなものになるのでした。この人達はいつも和気藹々です。

第二千百五話　完

2011・6・4

第二千百六話　連合は殺伐と

第二千百六話　連合は殺伐と

ロシアとアメリカ、中国が何処の特撮番組の悪役の組織の幹部なんだと言わんばかりの剣呑さを醸し出している中で、です。イギリスとフランスもしっかりといがみ合っています。

何か紅茶かコーヒーかで揉めています。その中でイギリスが言うのでした。

「ああ、じゃあ御前はコーヒー飲んでろ」

「言われなくてもそうしてるからな」

フランスも買い言葉です。

「御前は御前で紅茶好きなだけ飲んでろ」

「ああ、じゃあこっちは人呼ぶからな」

「誰呼ぶんだよ」

「俺の連邦の連中だよ」

連合国でもあった彼等です。こうして来たのはです。

オーストラリアにニュージーランド、それにもう一人です。けれどオーストラリアとニュージーランドの二人は丁度今喧嘩中でした兄妹喧嘩です。

お互いに顔を背け合っています。イギリスもフランスもそんな二人を見て言います。

「何が原因で喧嘩してるんだ？」

「こっちもこっちで仲悪いな」

「別に何もないでごわすよ」

「気にすることはないばい」

お互いに顔を背け合ったままです。何もない筈がありません。

しかも残る一人はです。何処にいるのかわかりません。

そんな連合です。パーティーをしていてもギスギスとしています。

この雰囲気が連合と言えば連合でありますがここにさらに一人強

引に加わります。その一人とは誰か。間違っても連合の人ではないから困りものです。

第二千百六話　　完

２０１１・６・４

第二千百七話　オーストリアさんが来ても

第二千百七話　オーストリアさんが来ても

「まあイタちゃんに言われると俺もな」
「本当にイタリアに優しいな」
「悪いところあるか？」
プロイセンはこうドイツに返しています。イタリアに言われたのでオーストリアさんが来ても落ち着いて不平も言いません。本当にイタリアには優しいです。
「いつもお邪魔してるしな。和ませてもらってるしな」
「確かに。お互いイタリアにはよく行くな」
「やっぱりあれだよ。俺達は一緒にいるべきなんだよ」
プロイセンもこうした考えなのです。彼もイタリアは大好きなのです。
「まあオーストリアもそうみたいだけれどな」
「嫌いではありません」
オーストリアさんもイタリアについてはこう言います。
「何かと困った子ではありますが」
「御前もイタリアに甘いからな」
ドイツはオーストリアさんにも言います。
「何か俺の親戚はイタリアには皆甘いな。妹達もそうだしな」
「だからよ。イタちゃんの何処が悪いんだよ」
「戦争に弱くいい加減なところがあるだけではありませんか」
「その二つが大問題なのだが」
ドイツがこう言うとです。プロイセンはこの言葉を出しました。
「いいんだよ、イタちゃんはそういうのが面白いんだからな」
某脚本家さんの言葉をです。プロイセンも言うのでした。とにかくプロイセンもイタリアには凄く優しいです。そんなドイツ系の人達です。

第二千百七話　完

2011・6・5

第二千百八話　呼ばれてないのにジャジャジャジャーン

第二千百八話　　呼ばれてないのにジャジャジャジャーン

「来てやったんだぜ」
「やっぱり来たな、こいつは」
「呼んでねえんだけれどな」
イギリスとフランスは韓国が来てです。うんざりとした顔で呟きます。
「何度も言うが御前は連合国じゃねえだろうが」
「そもそもサンフランシスコ講和会議にいたか？」
「いたかいなかったかはどうでもいいんだぜ」
韓国にしてみればです。そんなことはまさにプランクトンより小さなことでしかないのです。まさに見なくて全く構わないものです。
そうして二人の言葉をスルーしてです。こんなことも言います。
「じゃあ御馳走食わせるんだぜ」
「その辺りにあるの適当に食ってろ」
「唐辛子好きなだけ使っていいからな」
出来るだけ相手にしようとしないイギリスとフランスです。
かくして連合のパーティーに入った韓国はやたら食べはじめます。けれどその中で、です。
ふと席が一つ空いていることに気付きました。その席を見てオーストラリアに尋ねます。
「誰か来る予定だったんだぜ？」
「アメリカ達の妹さん達が来る予定でごわす。もうすぐ五人共来るでごわすよ」
「妹さん達の席はもう用意されてるんだぜ？」
その空席の他に空いている席は五つあります。それで一目瞭然です。

けれどその空席は誰のものか。それがわかりません。
けれど韓国はその席に対しては自分の妹さんを呼びました。これで全ては解決したと誰もが思いました。気付かれていない人以外は。

第二千百八話　　完

２０１１・６・５

第二千百九話　皆個性的

日本は皆の中でぽつりと言いました。
「どうも私は地味で」
「いや、それはない」
ドイツがその日本に速攻で突っ込みを入れました。
「日本は充分過ぎる程目立っている」
「そうでしょうか」
「そうだ。一度見たら忘れられない位だ」
ドイツは日本に対して思っていることをそのまま告げます。この辺りとてもリーダーらしいです。
「自覚していなかったのか」
「自分では地味で普通過ぎると思っていますが」
「かなり独特だぞ。実際に今食べているものもだ」
和菓子にお抹茶です。日本だけ違います。台湾も中華菓子ですがイタリア、ドイツと欧州の中でもお菓子が好きな顔触れが作るお菓子の中でそれはかなり目立ちます。
そうしたものも見てです。ドイツは日本にお話します。
「やはり個性的だ」
「そうなのですか」
「しかし。何故自分を地味だと思える」
ドイツにとってはその時点でわからないことでした。
「皆日本を見るというのに」
「それがわからないのです。昔から」
自分ではどうしても気付かないものなのです。
とにかく日本は自分では地味で普通だと思っているのです。けれど実際は違います。枢軸組は誰もがかなり個性的なのです。

第二千百九話　完

2011・6・6

第二千百十話　いるのに誰も気付かない

第二千百十話　いるのに誰も気付かない

「ねえ熊九郎さん」

「ダリナンダアンタイッタイ（翻訳：誰なんだあんた一体）」

いつもの様にクマ二郎さんに返されるカナダです。実は連合のパーティーに彼も参加しています。クマ二郎さんと連れて参加しているのです。

けれど誰にも気付いてもらえないので寂しくクマ二郎さんに尋ねるのでした。

「何で皆僕に声をかけてくれないのかな」

「誰も気付いていないから」

だからだとです。クマ二郎さんはカナダに言います。

「だからだよ」

「気付いてもらってないんだ」

「そう、いつも通り」

これがいつも通りなのがカナダなのです。悲しいことに。

「だから特に気にしなくていいから」

「気にするから。何でいつもこうなんだろう」

カナダはとほほとなっている顔で呟きます。

「パンケーキ焼いたのに誰も気付いてくれないし」

「多分他の人が焼いたら食べてくれる」

「僕の唯一の得意料理なのに」

「他にないのか？」

「ないよ。誰も食べてくれないし」

折角作ってもなのです。

こんなカナダです。パーティーに参加していても誰にも気付いてもらえません。そうして今もです。寂しい顔で席に座っているのでした。

第二千百十話　完

2011・6・6

第二千百十一話　バルト三国の実態　☆

第二千百十一話　バルト三国の実態　☆

エストニアとラトビアがです。リトアニアを褒めています。

「いやあ、いつも格好いいよね」

「リトアニアさん凄いですよ」

「いや、そんなことないよ」

謙虚なリトアニアは二人の褒め言葉に気恥ずかしそうにしています。

そして相棒のポーランドが来たのを見てです。笑顔で彼に声をかけます。

「ポーランド、今日は何処に行くのかな」

「適当なところでよかね？」

ポーランドはリトアニアに対していつもの調子で返します。こうしてリトアニアはポーランドと一緒に何処かに行ってしまいました。するとです。

エストニアとラトビアは急に静まり返ってです。お互いに顔を背け合ってこんなことを言い合うのでした。

「君、ちょっとリトアニアに近付き過ぎだよ」

「それはお互い様ですよ」

こんな言い合いをはじめます。その中で、です。

ラトビアはエストニアにこんなことを言うのでした。

「エストニアさん最近いつもフィンランドさんといますよね」

「それがどうかしたのかな」

「いえ、リトアニアさんいなくてもいいじゃないですか」

「確かにね。フィンランドさん凄くいい人だし」

彼も彼でパートナーに巡り会えているのです。けれどラトビアは。

「君も誰かいるんじゃないかい？」

「どうでしょうか」

何かラトビアが凄いことになっているようです。全ては彼の国の場所のせいでしょうか。

第二千百十一話　　完

２０１１・６・７

第二千百十二話　幸せになろうよは嘘

第二千百十二話　幸せになろうよは嘘

ラトビアはソビエトから独立しました。その時彼はこう思っていました。

「これで僕達も幸せになれるんですよね」

「うん。今まで色々あったけれどね」

「やっとまた独立できたしね」

この時はリトアニアとエストニアも一緒でした。それでこんなことが言えました。けれどです。

リトアニアは昔と同じくポーランドと一緒になってしまいました。そしてエストニアはお隣さんになったフィンランドと物凄く仲良くなってです。気付けば。

ラトビアは一人になってしまっていました。その現実にです。泣きそうな顔になってです。ウクライナに零すのでした。

「独立した時は皆とお友達になれると思ったんですよ」

「私と同じじゃない、それって」

彼の話を聞いてです。ウクライナも泣きそうな顔になります。

「あの時は絶対に皆とお友達になれると思ったのに」

「こんな展開ってないですよ」

「ラブコメディと思ってたのにうんざりする位ドロドロとしたドラマになってるみたいな」

これが実際にあるから世の中怖いです。

「これが現実なのね」

「リトアニアさんとエストニア君はラブコメになってますけれど」

「私達はドロドロなのね」

「ドロドロというか氷河期です」

これが二人の現実なのでした。

かくしてラトビアは今日もお友達になってくれる人を探していま

す。こうして考えますと。いつも誰かが傍にいて韓国と台湾が絶対に離れない日本は幸せです。

第二千百十二話　　完

２０１１・６・７

第二千百十三話　台湾と韓国の仲の方がまだ　☆

第二千百十三話　台湾と韓国の仲の方がまだ　☆

凄く陰惨な顔で、です。エストニアは大好きなパソコンを叩きながらラトビアに言います。言う間もラトビアを見ようとは全くしません。

「ロシアさんとばかり仲良くするならね」

「それは主観ですよ」

「君僕と場所変われる？」

「フィンランドさんと仲良くできるならいいですよ」

「駄目だよ、フィンランドさんは僕の親友だから」

こうラトビアに帰すエストニアです。

「それにフィンランドさんは僕とスウェーデンさん達と一緒にいる方がずっと楽しいみたいだからね」

「だからそれは主観ですよ」

物凄く険悪なムードです。ラトビアもエストニアを見ようとしません。

「そんなにフィンランドさんと仲がいいんならリトアニアさんと仲良くしなくてもいいじゃないですか」

「そういう訳にもいかないから。大体君も仲良くできる人見つけたらどうだよ」

「今探してますよ」

「お勧めはベラルーシだけれど」

「嫌です」

ロシアの恐怖の妹です。論外なのは当然です。

「そういうエストニアさんこそベラルーシさんと仲良くされたらどうですか？」

「だから僕にはフィンランドさんがいるかあ」

「それじゃあリトアニアさんと仲良くしなくてもいいですよ」
「駄目だよ。僕は誰とでも仲良くなりたいから」
凄く険悪なムードが続いています。良く見ればこの人達色々なところが違っています。バルト三国といってもです。三国ではないようです。

第二千百十三話　　完

２０１１・６・８

第二千百十四話　誰もが知ってる二人

第二千百十四話　誰もが知ってる二人

インドネシアとマレーシアは今東南アジアの会合に出席しています。そのうえでタイとベトナムを見ますがこの二人はといいますと。

微妙に距離が開いています。お互いに笑顔ですがよく見ればです。

「絶対に目を合わせようとしないんだよな」

「いつも通りね」

そんな関係なのです。

「微妙に殺気も感じるし」

「それも二人共そうだから」

「それでお互い笑顔なのが余計に」

「怖いのよね」

タイとベトナムは交流はそれなりにあります。けれどなのです。

お互いに色々とあってです。その関係は微妙なのです。

けれど二人共言葉には出しません。それで笑顔でもいます。けれどです。

「何かあったら今にも揉めそうか危うい関係が続くね」

「お互いにそうならないように気をつけてるけれど」

だから喧嘩とかは絶対にしません。それがまた余計になのです。

二人の仲をです。周りから見て怖いものにしているのです。それをインドネシアもマレーシアも見てです。そうして言うのでした。

「まあ喧嘩しないならね」

「それでいいわね」

何とこれで納得するのでした。

かくして今も表面上は交流のあるタイとベトナムです。笑顔でお付き合いしています。けれどやっぱり微妙な隙間がです。二人の間には存在し続けているのでした。エストニア、ラトビアの関係よりも怖いです。

第二千百十四話　完

2011・6・8

第二千百十五話　誠氏ねがいないだけ　☆

第二千百十五話　誠氏ねがいないだけ　☆

かつてのソビエトのメンバーの写真を見てです。ラトビアはふと言いました。

「これって前日本さんのお家で見た」

「ああ、あれよね」

ウクライナもその写真を見て言います。階段のところに皆いるその写真をです。

見るとそれぞれの立ち位置や笑顔がです。それは。

「あの少し露出の多い場面もあるゲームよね」

「少しどころじゃないですけれど」

「まあそれを言ったらおしまいだけれどね」

「とにかく。あのゲームになっていますよ」

「ううん、しかも実際に」

ウクライナは暗い顔になってあの時のことを思い出してです。こう言うのでした。

「あの頃って」

「そうでしたね。色々なことがありましたよね」

「あのゲームと違うことは」

それは何かといいますと。

「主人公がいないだけよね」

「けれど女の子の関係は同じでしたよね」

「血生臭いことばかりだったから」

それこそ血も凍る様なことばかりでした。ソビエトが出来たその時点からです。革命で洒落にならない位の人が死んでしまっているのです。

そのソビエトのことを思い出してです。ラトビアとウクライナは。

かなり暗い顔になってしまいました。今になって思うとです。ソビエトにいた時のことは。何時包丁や鉈が出て来てもおかしくないようなものだったのです。

第二千百十五話　　完

２０１１・６・９

第二千百十六話　親兄弟はもっと酷い

第二千百十六話　親兄弟はもっと酷い

ソビエトの写真そのままのゲームについてです。ラトビアは日本に尋ねました。

「あまりにも血生臭い結末が多いですよね」

「アニメもそうでしたし交差も高品質版もそうなっていますね」

日本はアニメのお話や続編のお話もします。

「交差ではそれこそ男同士もありましたし」

「あれがあのシリーズのトゥルーエンディングですか？」

「そう思われるのならそう思われて下さい」

日本もこう言って否定しません。あまりにも強烈なルートだったからです。純愛ではありますがそうしたジャンルのゲームとしては何かが違うものだったのです。

そうしたお話の中で。日本はラトビアにこんなこともお話しました。

「実は主人公の親兄弟についてですが」

「あれっ、そうした設定があったんですか」

「あの会社の作品は全てつながっていまして」

所謂公式裏設定です。

その話をしてです。日本は主人公の家系図を出してきました。ラトビアはそれを見てです。

「うわあああああーーーーーーーーーーっ！！」

今まで生きてきた中で、です。最も凄い叫び声を挙げてしまいました。

そのうえで、です。日本に対して言います。

「これ何ですか！？無茶苦茶じゃないですか！」

「一見して誰が親か誰が兄弟かわかりませんよね」

「叔父と姪、姉弟とか親娘とか！孫娘はおろか曾孫に兄妹に！従兄

妹も従姉弟も何でもありじゃないですか！」

あまりにも恐ろしい家系図だったのです。ラトビアにおしおきされる時よりもです。真っ青な顔になってしまいました。何と主人公の親兄弟は主人公より遥かに酷かったのです。特に親父が。

第二千百十六話　　完

２０１１・６・９

第二千百十七話　トマト　☆

第二千百十七話　　トマト　☆

まだイタリアが小さかった頃のことです。スペインは時々イタリアにまで行ってイタリアと会っていました。既にロマーノはお家にいました。

そのうえで、です。イタリアに明るく挨拶をするのでした。

「元気かイタちゃん」

「いらっしゃい、スペイン兄ちゃん」

「おすそ分けやけどトマト食うか？」

「えっ、トマト！？」

この時のイタリアはまだトマトと言われてもです。何が何なのかよくわからないのでした。彼がトマトを知るのはこの頃のことだったのです。

そのイタリアはスペインに笑顔で応えました。

「それってどんなの？」

「赤くて丸くてな。めっちゃ美味いんや」

「じゃあ食べさせて」

こうしてイタリアはトマトを食べます。そうしてスペインの膝の上でこう言うのでした。

「このトマトって凄く美味しいね」

「おっ、気に入ってくれたか」

「うん、有り難う」

「まあそんなこと言うても何も出えへんけれどな」

スペインは自分の膝の上のイタリアに笑顔で言います。

「けれどやっぱイタちゃん可愛いわ」

「有り難う、兄ちゃん」

こんなほのぼのした関係なのでした。スペインはこの頃からあまり変わっていませんがイタリアは小さかったのです。そんな二人の

トマトの思い出です。

第二千十七話　　完

2011・6・10

第二千十八話　トマトがなかった

第二千十八話　トマトがなかった

イタリアはドイツと日本にパスタを御馳走しながら言います。
「昔の俺の家の料理はこれがなかったんだよね」
「そうだな。トマトはな」
「唐辛子もですね」
「この二つがないと。特にトマトはね」
イタリア料理ではないと言ってもいいです。トマトの赤とチーズの白、そしてアボガドの緑がです。イタリアの象徴とも言っていいです。
そのパスタの中のトマトを見ながらです。イタリアは言うのです。
「ないとお話にならないよ」
「しかしトマトが入ったのはつい最近だ」
「ではイタリア君の料理はかつては」
「そうだよ。今とは全然違うよ」
そうだったというのです。
「本当にね。何もかもが違っていたんだよ」
「トマトで全て変わったのか」
「イタリア君の食卓は」
「ドイツの家のジャガイモと同じかな」
分かりやすくです。こうお話するイタリアでした。
「俺の家はトマトの賜物なんだよね」
「まさにトマトから」
「そういうことですね」
そのことは二人にもよくわかりました。こうしたお話をしながらです。ドイツと日本はイタリアの御馳走するトマトのたっぷり入ったパスタを食べるのでした。

第二千百十八話　完

2011・6・10

第二千百十九話　掃除は駄目　☆

イタリアと楽しい時間を過ごしてからお家に帰ったスペイン。彼は帰路こんなことを考えていました。

「ロマーノは掃除ちゃんとやってるやろか」

何しろロマーノです。少し不安になります。

ちゃんとやっていればいいな、と考えながら歩いてお家に帰ります。そうしてお家に帰ると。

「ロマーノ、掃除とか終わったら・・・・・って！」

見るとです。お家の中がごちゃごちゃと滅茶苦茶になっています。

それを見てです。スペインはクッションを抱いて寝ているロマーノに問い詰めます。

「何やってんねん御前！」

「んっ？」

ここでやっと起きるロマーノでした。

「何だスペイン帰ったのか」

「帰ったのかちゃうわ！何でいつも御前はこうなんや！」

流石に今回ばかりはスペインも叱ります。

「ちょっとは仕事覚えんかい！」

「ちゃんとしたぞ」

「しとらへんやろが！こんなに散らかしてからに！」

スペインの小言は続きます。

「片付けるのは俺やんか！」

「そうだな。それじゃあな」

おやつを食べはじめるロマーノでした。そんな彼を見てスペインは一言。

「御前な、スペイン語の前に礼儀作法とかマナーとか教えたろか？」

「教えても身に着かないぞ」

自分からこう言ってのけるロマーノでした。本当にやる気も何もありません。兄弟とはいってもです。イタリアとロマーノでは全く違っていました。

第二千百十九話　　完

２０１１・６・１１

第二千百二十話　昔は大所帯でした

第二千百二十話　昔は大所帯でした

スペインはです。ベルギーとお茶を飲みながらこんなことを言いました。

「昔はうちにも一杯おったなあ」

「うちもおったしロマーノちゃんもおったし」

「そやそや。オランダもおったしな」

「あとキューバもおったし」

「しかも俺結婚しとったわ」

つまり今は独身というわけです。そのお相手は。

「オーストリアなあ。あいつとも結構長い間一緒やったな」

「そういえば結婚したことのある人って少ないんやな、これが」

スペインとオーストリアさんの他はポーランドとリトアニアの上司の人達が有名ですが実はこれといっていなかったりするのです。

「そやからスペイン兄ちゃんあの時は大所帯やったんやな」

「そやな。ほんま懐かしいわ」

スペインは昔を懐かしみながら温かい顔になっています。

その中で、です。彼はこんなことも言いました。

「俺とイギリスって仲悪いけれどオーストリアとあいつは仲ええからなあ」

「あまり喧嘩したことないんちゃう？あの二人」

「あいつ等いつもフランスと喧嘩しとったからな」

何故フランスがいつも強くなってもすぐに貧乏になったり身体の調子が悪くなってしまうかというとです。いつもこの人達に囲まれていたからです。

そんな話もします。そうしてスペインは言うのでした。

「今も今で楽しいけどな」

「昔の大家族も面白かったで」
二人でにこりとしています。懐かしい時代を思い出して。

第二千百二十話　　完

２０１１・６・１１

第二千百二十一話　トマト

ロマーノはとにかくお料理にトマトを使います。そのことについて彼はこう言います。

「これ位だな」

「スペイン兄ちゃんから貰ったものっていうんだね」

「そうだよ。あいつが俺にくれたものってこれ位だよ」

こう不機嫌な顔で言うのです。

「本当にな」

「そうかな。他にも色々貰ってるじゃない」

「俺はそう思っていないんだよ」

イタリアに対して言うのも不機嫌な顔です。その顔でお料理を作っていますがそのお料理にも当然ながらトマトをたっぷりと使っています。

そんなお兄さんにです。イタリアは言うのです。

「その割には今も仲いいんじゃないかな」

「仲よくなんかないぞ」

「じゃあトマト使うのは」

「それは絶対に止めないからな」

きっぱりとした口調です。

「俺からトマトを取ったら何が残るんだ」

「ええと、それは」

「料理にはトマトだ」

あくまでこう言って引きません。

「それがないとどうにもならない」

「それはそうだけれどね」

イタリアもトマトはたっぷりと使うから納得はできます。それで

もロマーノの素直でないのはあまり納得できないのでした。

第二千百二十一話　　完

２０１１・６・１３

第二千百二十二話　ギリシアも

第二千百二十二話　ギリシアも

ギリシアもです。そのお料理には。
「御前もトマト好きやねんな」
「大好き」
ギリシアはそのスペインに一言で答えます。
「けれど長い間知らなかった」
「そやな。御前の歴史は長いけどな」
「アメリカ大陸は知らなかった」
そうだったとお話するのです。
「それでずっと」
「そういえばトマト知るまでの御前の料理ってどんなんやったかな」
「今とは全然違う」
「主食はパンやったやろ？」
「それでも何もかもが全然違った」
トマトがないからです。だからです。
「母さんの料理は神話にもある」
「ああ、何かかなりワイルドな焼き肉やったな」
「果物があれば御馳走だった」
こんなことも言います。その頃甘いものは一番の御馳走とされていたのです。だから神様達はネクタルやアンブロジアとかを食べていたのです。
しかしもです。それに加えて。
「ワインは絶対に水で割ってた」
「そやったな。高価やったさかいな」
ワインもそうなのでした。昔と今では。ギリシアの食事も全く違うのです。

第二千百二十二話　完

2011・6・13

第二千百二十三話　引っ張る　☆

ロマーノのあまりものできなさと態度のでかさに怒ったスペインは彼の髪の毛を引っ張りました。イタリアにもあるあのくるるんをです。

「えい、これでどうや！」

「な、何すんだよ！」

引っ張られたロマーノはです。驚きの声をあげました。

けれどそれは一瞬で。引っ込んでしまいました。スペインはそんなロマーノを見て戸惑ってしまいました。予想していない事態にです。

それで。慌ててロマーノに対して。

「あっ、御免。痛かったか？」

「いや、これは」

「これは？」

「何か違うぞ」

見ればです。痛がっていません。それでこんなことを言うのでした。

「気持ちよかったぞ」

「髪の毛引っ張られてかいな」

「俺の場合はそうなんだよ」

何故かわからないですがその様です。

「とはいってもあまり引っ張るな」

「何かやばい話になってきたな」

「俺にとってこの毛はそうしたものなんだ」

よくわかりませんがその様です。

どうも秘密があるロマーノの髪の毛、スペインもそのことに気付きました。勿論イタリアも同じです。二人のくるるんには何がある

のでしょうか。

第二千百二十三話　完

2011・6・14

第二千百二十四話　オーストリアさんにも

第二千百二十四話　オーストリアさんにも

オーストリアさんにもです。出ている髪の毛があります。スペインは彼のそれを見てもです。思わず引っ張りそうになりました。けれどそれはオーストリアさん自身に止められて。こう言われるのでした。

「お止めなさい」

「すまんすまん、何か気になってな」

「これはマリアツェルなのです」

その出ている部分が何なのかをスペインに話すオーストリアさんです。

「あまり大したものではありません」

「何や、それはマリアツェルやったんかいな」

「何だと思っていました？」

「いや、別に何とも思ってなかったわ」

こう答えるスペインでした。

「けれど気になっててな」

「とりあえず引っ張るのは駄目です」

オーストリアさんはこのことは強く念を押します。

「いいですね」

「わかったわ。仕方あらへんな」

「貴方も引っ張りたければ自分で伸ばしなさい」

「それで自分の引っ張れっていうんやな」

「そうしなさい」

こう言ってです。スペインに引っ張らせないオーストリアさんでした。

この人の髪の毛にも秘密があるのでした。イタリアとロマーノだ

けではなくです。髪の毛に秘密がある人は結構多かったりするのでした。

第二千百二十四話　　完

２０１１・６・１４

第二千百二十五話　神聖ローマがいた　☆

第二千百二十五話　神聖ローマがいた

☆

またしてもイタリアに遊びに行ったスペイン、イタリアは今日は聖書を朗読しています。そのイタリアを見て彼はまたしても思うのでした。

「やっぱりイタちゃん可愛ええなあ」

「またそれか」

見ればです。イタリアの横には神聖ローマがいます。とにかくイタリアと一緒にいたがる彼です。

「御前はそれしかないのか？」

「ロマーノも可愛げがあればええんやけれどな」

「ロマーノで満足しろ」

「というか御前しょっちゅうイタちゃんとこにおるな」

スペインは少しむっとした顔でその神聖ローマに言い返します。

「自分の家はええんか」

「まずはイタリアだ」

腕を組んで言い切る神聖ローマでした。

「イタリアがなくては俺の国は成り立たない」

「いや、成り立つやろ。っていうか内政ちゃんとせんかい」

神聖ローマは自分の国よりもイタリアだったのです。

「何時までオーストリアの厄介になってるねん」

「あいつの上司が内政をやってくれているからいい」

「だから他人任せは止めんかい」

「御前に言われる筋合いはない」

この頃スペインと神聖ローマは同じ上司でした。けれどその彼に言い切る神聖ローマでした。

けれどスペインはイタリアのところにいるのでした。実は彼のお

家からもイタリアの上司の人が出ていたりします。お世辞にも評判のいい人ではありませんが。

第二千百二十五話　　完

２０１１・６・１５

第二千百二十六話　カンタレラ

第二千百二十六話　　カンタレラ

スペインのお家から出て来たイタリアの上司の人はといいますと。その名前を聞いただけで顔を顰めさせる人が大勢います。今になってもです。

スペイン自身も少し気まずそうにです。その上司の人達のことをお話します。

「ボルジアっていうんやけれどな」

「チェーザレ＝ボルジアさんですね」

「あと法皇さんな」

こう日本にもお話します。そのチェーザレ＝ボルジアという人は法皇さんの息子さんだったのです。法皇さんでも子供がいたのです。

「あの人等がおったんや」

「確か右手に奸智、左手に謀略」

「それが親父さんや」

法皇であっても当時は一級の政治家だったのです。政治に卓越していなければとても法皇になってそのうえ生き残ることなぞできなかったのです。それでその人もそうした人だったのです。

「ごっつい女好きで贅沢も好きやったなあ」

「その方が聖職者だったのですか」

「そうや。多分日本のお坊さん達よりもえげつなかったな」

あの比叡山のお坊さんが見ても腰を抜かして末世だと言う程です。当時の欧州のお坊さんは壮絶でした。

「それで息子さんもなあ」

「メフィストフェレスとさえ呼ばれてますね」

「得意技は暗殺やった」

この人もそうでした。とにかくその人達のことはです。

スペインにしても話しにくいことでした。聖職者である筈なのに

謀略家で女好きで贅沢好き、しかも子供までいて暗殺が得意技、そうした人達だからどうしてもなのです。

第二千百二十六話　　完

２０１１・６・１５

第二千百二十七話　ロマーノの里帰り　☆

第二千百二十七話　　ロマーノの里帰り

☆

ロマーノが里帰りをすることになりました。たまにはこうしたこともあります。

けれどスペインはそのロマーノを心配してです。こう声をかけました。

「ほんまに一人で大丈夫なんか？」

「やけに心配してるな」

「色々と危ないさかいな」

こう言って本当に心配している顔でロマーノを見ています。

「俺ついてこか？海軍あるで」

「大丈夫だって言ってるだろ畜生が」

ロマーノはそんなスペインの心配を振り切ってお家に帰ります。

けれどです。

ロマーノのお家の場所をあらためて地図で見てです。スペインは余計に心配になりました。

「大丈夫な訳ないやろ」

「はい、あまりにも危険です」

地図を一緒に見てくれているオーストリアさんも真剣な顔で言いきります。

「フランスにオスマン＝トルコまでいるではありませんか」

「そやな。これはやっぱり」

「貴方もついていくべきです」

オーストリアさんは的確なアドバイスを告げました。

「まだロマーノはここにいますか？」

「ちょっと探してくるで」

スペインはすぐにロマーノを探しました。けれどもう既にでした。

「あかん、もう出てるわ」
「いけません、すぐに追いかけなさい」
こうしてです。スペインはロマーノを追いかけることにしました。
ロマーノだけがわかっていない、あまりにも危険な状況を何とかする為に。

第二千百二十七話　　完

２０１１・６・１６

第二千百二十八話　狙う国が

第二千百二十八話　狙う国がスペインは昔を思い出しながらオーストリアさんとお話をしています。

「ロマーノはほんまよお狙われたわ」

「イタリアもですよ」

オーストリアさんもイタリアのことをお話に出します。

「何かと狙われました」

「まあ俺等も狙ってたくちやけれどな」

そして手に入れたのです。どうして手に入れたかといいますと。

「あの時の上司が上手くやってくれたさかいな」

「そうですね。私達の上司の方々が」

オーストリアとスペインの上司といえばあのハプスブルク家です。オーストリアさんのところではカール五世、スペインのところではカール一世と呼ばれている人にはじまります。

「それからでしたね」

「俺等が保護者になって終わりって思うたんやけどな」

「厄介はそれからでしたね」

「ほんまや、それからやったわ」

スペインは溜息と共に言います。

「そっからほんまに大変やったわ」

「何かを手に入れることは難しいことです」

オーストリアさんの言葉が哲学的なものになります。

「そしてその手に入れたものを手放さないことはです」

「同じ位かもっと難しいなあ」

こういうことなのでした。二人もそのことをよく実感したのです。イタリアの兄弟を手に入れてそれからも。二人は何かと苦労したのです。

第二千百二十八話　完

2011・6・16

第二千百二十九話　やっぱりいた　☆

第二千百二十九話　やっぱりいた　☆

スペインはロマーノを追いかけます。オーストリアさんも彼に同行します。

ロマーノを追いかけながらです。オーストリアさんがスペインに言います。

「私の予想が正しければですが」

「もう誰か狙ってるんやな」

「ロマーノはただでさえ油断しやすい子です」

まずは彼のそうした性格から指摘するのです。

「ですから。かなり危険です」

「やっぱり寝付くまで俺が傍にいた方がええやろか」

完全に保護者の立場で言うスペインでした。

「あいつの為にも」

「そうですね。それが最良の選択でしたが」

「今更言ってもしゃあないか」

「とにかく急ぎましょう」

オーストリアさんはスペインを急がせます。勿論自分自身も駆けています。

「もう一度言いますが私の予想が正しければです」

「誰や、誰が来てるんや」

スペインも次第に不安になってきました。その二人の前にいたのは。

フランスです。彼は涎を垂らさんばかりの顔になってこんなことを言っていました。

「ロマーノ、可愛いよロマーノ」

「やはり」

オーストリアさんはそのフランスを見て言いました。

「彼でしたか」
「俺の領土になればいいのに」
まだ諦めていないフランスでした。洒落にならない病気が蔓延してそれで逃げ出したというのにです。彼はまだ反省していませんでした。

第二千百二十九話　　完

2011・6・17

第二千百三十話　梅毒は滅茶苦茶怖い

フランスがロマーノから去る原因になった梅毒、この病気については誰もがよく知っています。

勿論日本もです。それで香港にこんなことを言っています。

「瘡蓋やできものがそれは酷いものですね」

「そうよね。身体中が爛れていって」

「鼻も落ちますし」

「脳にいって発狂したり目や脊髄にも影響が出て」

そうして苦しみ抜いて死ぬのです。それが梅毒です。

「恐ろしい病気です」

「この前日本さんのドラマでもあったわね」

「昔は多くて。上司の人も結構それで死んでいます」

「中国兄さんの上司の人でもいた」

それは中国の上司も同じだったのです。何しろ梅毒はどの国にもありましたから。

「十九歳で死んだ人」

「ああ、あの清王朝の」

「そう、けれど梅毒ってあんなに早く症状が出るものかしら」

「少し早過ぎると思います」

梅毒は十年かかる病気です。それで十九歳で死んだというのはどうかというのです。

「後はスペインさんのところから来たイタリア君の上司の人もそれだったそうですね」

「そう、チェーザレさんもそれだったから」

「おそらく長生きはできなかったでしょうね」

「昔は確実に死んだ病気だったから。悲惨な末路を辿った人は多か

ったわ」

他にもドイツの音楽家だったシューベルトもそれで死んだと言われています。とにかく梅毒はとんでもなく恐ろしい病気だったのです。

第二千百三十話　完

２０１１・６・１７

第二千百三十一話　四回も戦争しました　☆

第二千百三十一話　四回も戦争しました　☆

またいたフランスにです。スペインは早速掴みかかりました。
「また御前かいな！」
「げっ、スペイン！」
今更スペインに気付いたフランスびっくりです。しかもその隣には。
「オーストリアまでいやがるじゃねえか！」
「同じ上司ですから」
「糞っ。ハプスブルクなんか大嫌いだ！」
まずは二人の上司への悪口からです。そのフランスにスペインはさらに言います。
「もう四回目やぞ！」
「だってイタリア欲しいんだもん！」
「我儘言うなや！」
「じゃあロマーノ寄越せよ！」
「全く何回しめたら懲りるんや！」
そのしめる人はスペインだけではなくオーストリアさんもです。オーストリアさんは無言でフランスの後ろに回ります。そうしていつも通りしめようとしたら。
ロマーノが急にです。何処かに逃げていきました。
「っておいロマーノ！」
「私達に気付いた様ですね」
「ったく、フランスがおるからや！」
「いいじゃねえかよ。俺にもロマーノをな」
「あくかい！やっぱりここでしめる！」
こうして二人がかりでしめられるフランスでした。この時フラン

スはいつもこうでした。ハプルブルク家の前に常に負けていたのです。

第二千百三十一話　完

２０１１・６・１８

第二千百三十二話　フランスの戦争

第二千百三十二話　フランスの戦争

フランスが何処かと戦争すると常にでした。
「いつも複数の敵相手にしてるんだよな」
「そうですね。お兄様の戦争というと」
「百年戦争はイギリスだけだったのにな」
その戦争の後がです。凄かったのです。
「スペインとオーストリアに二人かかりでいつもやられてたな」
「その場合いつもイギリスさんともでしたね」
「そうだよ、三十年戦争は戦争が続いて弱っていたオーストリアとスペインと神聖ローマが相手でこっちにはスウェーデンとかいたから勝ったけれどな」
よく見たら一国では勝っていません。百年戦争もジャンヌがいてこそです。
「スペイン継承戦争とかオーストリア継承戦争とか七年戦争とかな」
「イギリスさんは常にしても」
「最初の二つはオーストリアもいて七年戦争じゃそれがプロイセンになってな」
「あと第一次世界大戦でもドイツさん、オーストリアさんでしたね」
「二次じゃイタリアともやったな」
こうして見るとです。実に凄いことです。
「何で俺の戦争っていつも複数が相手なんだよ。しかもどいつもこいつも真っ先に俺に来るしな」
「お兄様の人徳ではないでしょうか」
「来るのは女の子だけでいいんだよ」
けれど来るのは野郎ばかりです。しかも武器を持った。
気付いたらベトナムにも独立されていますから女の子には振られています。そのことにも言うフランスでした。

「ベトナムにまた声をかけるか。そうするか？」
「思いきりひっぱたかれて引っ掻かれますけれどいいんですか？」
ベトナムの時は一対一で惨敗でした。こうして見ると相手が一国でも負けるのがフランスなのでしょうか。

第二千百三十二話　　完

２０１１・６・１８

第二千百三十三話　振り切ってから　☆

第二千百三十三話　振り切ってから　☆

スペインを振り切ったロマーノ。後ろを振り向きながら言います。
「何だよ、あいつついて来やがったのかよ」
このことに驚いているのでした。額には汗をかいています。
その汗を拭うことなくです。彼は言うのでした。
「何であいついつも俺につきまとうんだ」
彼はスペインについてこう思っているのです。
「何考えてるんだよ。大体な」
ここからです。ロマーノは言うのでした。
「やっぱりあいつも」
ふと水たまりを見て。そこに映っている自分の姿を見ながら言うのでした。
「爺ちゃんの財産目当てなのかな」
彼には遺産があります。これはイタリアも同じです。
二人のお祖父さんのローマが残していった遺産、このことについて思ったのです。
「そりゃそうだよな。俺にあるのはそれだけだし」
そのです。ローマが残して言った遺産のことです。
「俺なんか戦っても弱いし」
「手だってそんな器用じゃないし」
水たまりに映っているロマーノも言っているように思えるのでした。
「何やってもヴェネチアーノには絶対勝てないしな」
考えていけばいく程マイナスの方向に向かっていきます。悪いことを考えるとさらに悪い方に向かってしまうのはロマーノも同じみたいです。
そうしてネガティブになっていきます。こんな自分なんか、どう

せお祖父ちゃんの遺産が目当てなんだろう、ロマーノはとても暗くなってしまいました。

第二千百三十三話　完

２０１１・６・１９

第二千百三十四話　ロマーノ妹も

第二千百三十四話　　ロマーノ妹も

イタリア妹はお兄さんと違って喧嘩はかなり強いです。勿論お兄さんよりも圧倒的にです。

イタリアはそんな妹にです。たまりかねた様に言います。

「だからどうしてそんなに強いんだよ」

「男が頼りないからね」

明るく笑ってです。イタリア妹は答えます。

「ヴェネチアーノ兄さんだけじゃなくてロマーノ兄さんもね」

「兄ちゃんもなんだ」

「だから。私達がしっかりしないとね」

「そういうことよ」

ここでロマーノ妹も出て来ます。勿論彼女もイタリアの妹です。

その彼女も出て来てです。イタリアに言うのです。

「全く。兄さん達はどうしてそんなに弱いのよ」

「えっ、だって戦争って痛いし下手したら死ぬんだよ」

こう言う辺り本当にイタリアです。イタリアはとても非力でしかも怖がりなのです。つまり戦争には元々全く向いていないのです。ロマーノも同じです。

だからだと。イタリアはびくりとした姿になって妹達にお話します。

「そんなのとても」

「だから。男がしっかりしていないと」

「女が強くなるのよ」

「そうだったんだ。じゃあ守りはお願いしようかな」

お兄さんとは思えない言葉です。

「俺弱いし」

「全く。こんなのだから私達が強くなるのよ」

ロマーノ妹も呆れ顔です。とにかく戦争は嫌い、それがイタリアです。

第二千百三十四話　　完

２０１１・６・１９

第二千百三十五話　昨日にしても　☆

ロマーノは昨日の自分を振り返ってみました。暗い心境はそのままです。

「昨日だってな」

何をしたかといいますと。

「掃除しようとしたらな」

それでスペインに怒られたのです。

「いきなり本棚ぶっ倒しちまったし」

もっと昔を思い出すと。

「それに昔から」

イタリアの方が上手かったのです。他には。

「絵って楽しいよね」

そっちも弟の方が上手だったのです。弟さんに対してコンプレックスがあるようです。

「そうだな」

自分自身の容姿も見てみます。するとです。

「兄ちゃん、儲かったよ」

小鳥に気付きました。その中で。

「そうか」

自分を卑下するしかありませんでした。その中で。

「貿易っていいよね」

「何をやってもあいつの方がよくて。しかも俺って」

「祖父ちゃんに全然似てねえよな。本当に俺ってな」

「御前みたいに気楽になれたらな」

小鳥はロマーノの言葉を聞きましたが何を言っているのかわからずです。首を傾げるだけでした。今はブルーなロマーノでした。

「チッ？」

第二千百三十五話　完

2011・6・20

第二千百三十六話　何が得意か

第二千百三十六話　何が得意か

弟さんにコンプレックスを持っているロマーノ。その彼の得意なことはです。

「そっちは兄ちゃんの方が上手なんだね」

「本場だからな」

パスタを茹でています。その時に弟さんに素直に尊敬されているのです。

「昔から作ってたからな」

「兄ちゃん料理上手だよね」

「自信があるさ」

彼もまた料理上手なのです。このことについては弟さんにひけを取りません。とりわけです。

トマトです。これを使わせるとです。

「どうだ？」

「うん、凄くいい感じだよ」

パスタにかけられているトマトソースを食べてみてです。イタリアはご満悦です。

「兄ちゃん俺よりずっとトマトの使い方上手だよね」

「これも昔からだからな」

「スペインさんに教えてもらったんだよね」

「そうだ。まあ感謝はしてるさ」

実はスペインのことは決して嫌いではないのです。素直に言いはしませんけれど。

「あいつにもな」

「だよね。スペインさんっていい人だよね」

「ああ、じゃあ俺もな」

「うん、一緒に食べようね」

ロマーノも得意なことがあります。決して弟さんと比べて劣っているわけではありません。ただ本人が思い込んでしまっているだけなのです。

第二千百三十六話　　完

２０１１・６・２０

第二千百三十七話　禁じ手　☆

スペインとオーストリアさんに撃退されたフランスはといいますと。お家に帰って悔しがることしきりです。その彼に妹さんが声をかけます。

「あの、少しは引かれることも」

「いや、ロマーノは絶対に俺が手に入れる」

こう言って引かないフランスでした。妹さんに言われてもです。

「イタリアはオーストリアに入ったんだ。じゃあロマーノは俺のだ」

「けれどまたスペインさんとオーストリアさんに怒られますよ」

「怒られて諦めて何になるんだ」

やっぱり引きません。そしてです。

伝書鳩のピエールを出します。そのピエールを見てです。

妹さんは眉を顰めさせてお兄さんに問いました。

「何処に使者を」

「こうなったら奥の手だ」

フランスも色々な手を使います。それでなのでした。

「あいつと手を組むからな」

「あいつ？イギリスさんですか？」

「そのあいつじゃねえ。大体俺はあいつとも揉めてるだろうが」

「それも自業自得では？」

この時フランスはスペインにオーストリアさんにイギリスとです。敵に囲まれていたのです。やたらと欲を見せているの原因でした。

しかし反省していないフランスはその鳩を放ちました。そのうえで言うことは。

「最強の助っ人だ」

その助っ人とは誰なのか。ブライアントやブーマー、はたまたあのバースの如き存在でしょうか。それは今はフランスだけが知って

いることでした。

第二千百三十七話　完

2011・6・21

第二千百三十八話　敵には恵まれています

第二千百三十八話　敵には恵まれています

フランスの周りはです。とかくです。

仲の悪い国で一杯です。剣を交えたことのない国がない程です。

「イギリスにオーストリアにドイツにスペインにオランダな。あとイタリアともやり合ったよな」

「特にイギリスさんとオーストリアさんですね」

「何で俺はこんなに敵が多いんだよ」

妹さんに対してぼやくことしきりです。

「っていうか敵しかいねえのかよ、近所に」

「ですから上司の人に従ったりしてあちこちに攻め込むからですよ」

フランソワ一世やルイ十四世、それにナポレオンです。こうした人達がとかく戦争をしたがって実行に移していたのです。その為です。

「しかも常に」

「負けてたよなあ、俺」

「ルイ十四世の頃はどうでした？」

「後半ずっと負けてたよ」

見事なまでに連戦連敗だったのです。

「あの時代三銃士やダルタニャンもいたんだけれどな」

「そうでしたね。ロシュフォール卿やシラノ＝ド＝ベルジュラックさんも」

「指揮官もよかったんだけれどな」

「結局です。戦争をし過ぎてお兄様も疲れてたのです」

幾ら何でも戦争をし過ぎだったのです。太陽王の頃のフランスは。しかも。

「それで敵ばかり作って」

「戦争って怖いな」
今そのことを噛み締めるのでした。周りが敵だらけになってから。

第二千百三十八話　　完

２０１１・６・２１

第二千百三十九話　後ろから来た　☆

第二千百三十九話　後ろから来た

☆

ロマーノはまだブルーでした。湖のほとりでまだ呟いています。

「俺これからどうしようか」

自分の駄目さ加減に嫌気がさしているのです。それでくよくよと悩んでいます。誰にもあることですが。彼にしては珍しいことではあります。その彼の後ろにです。

突然何かが来ました。水面に何かが見えました。

「んっ！？」

「ちょいと御免よ」

こう言ってです。後ろから斬りかかってきました。

その一閃を避けてからです。ロマーノは合われて後ろを振り向いて抗議しました。

「危ねえな。何すんだこの野郎！」

「別に斬るつもりじゃねえって」

いたのはトルコです。当事最強を誇っていた彼が仮面を被ってそこにいました。

けれどロマーノはその彼を知らないのでこう言い返します。

「誰だよ御前は！」

「まあ焦んねえでくれやい」

「焦るよ！お、俺は」

ロマーノはどうかというのです。

「怖いぞ畜生！」

「怖がる必要もないから安心しねい」

「できるか！その刀は何だよ」

三日月の形の刀です。トルコはそれでロマーノに斬りかかってきたのです。

何と欧州各国が最も恐れるトルコが出て来ました。勿論ロマーノの勝てる相手ではありません。彼は果たしてどうなってしまうのでしょうか。

第二千百三十九話　　完

２０１１・６・２２

第二千百四十話　ギリシアもエジプトも

第二千百四十話　ギリシアもエジプトも

物凄く強かったトルコでした。日本はその時のことを本人に尋ねます。

「あの頃は凄かったのですね」

「そんなことねえやい」

トルコは照れ臭そうに日本に答えます。

「まああの頃は俺もでかかったねい」

「エジプトさんもお家におられましたね」

「ああ。あいつとは長い付き合いになったんだよ」

「そうですよね」

そうしたお話をしていく中で彼の名前も出ました。

「あとギリシアさんも」

「ちょっと待ってくれねえかい？」

トルコは急に不機嫌な様子になって日本に言ってきました。

「あいつの名前はちょっと出すのは」

「駄目ですか？」

「ああ。よしてくれねえ」

こう言うのです。

「あいつの名前は聞きたくもないからねえ」

「あの、まだギリシアさんとは」

「相変わらずってことよ。聞かねえでくれよ」

そのことはというのです。

「もっともあいつとも長い付き合いになってそれでもああなんだよ。困ったことだねい」

「コンスタンティノープル陥落以来ですか」

その頃にお家に入れてもずっと仲の悪いトルコとギリシアなので

す。この仲の悪さは誰もどうにかできないままです。勿論日本にもです。

第二千百四十話　　完

２０１１・６・２２

第二千百四十一話　オーストリアさんの危惧　☆

第二千百四十一話　オーストリアさんの危惧　☆

スペインはオーストリアさんと一緒にロマーノを探しています。その途中にです。

オーストリアさんは懸念する顔でスペインにお話してきました。

「まさかと思いますが」

「まさかって何や？」

「私はフランスだけを相手にしている訳ではないのです」

こうです。その懸念する顔で言うのです。

「フランス以上の強敵を相手にしています」

「御前のところごちゃごちゃしてるからな」

スペインは最初オーストリアさんが管理をしている神聖ローマのことかと思いました。

「あそこは一筋縄じゃいかんわな」

「いえ、それも大変ですが」

お家の中が大変なのは確かです。しかしだというのです。

「それ以上にです」

「何かあるんかいな。他にえらい敵が」

「動いていなければいいのですが」

とにかく心配しているオーストリアさんです。

「ロマーノが心配ですね」

「ほんまや。一人やと危ないってのに」

「地中海には獅子がいますから」

こんなことまで言うオーストリアさんでした。

「ロマーノなぞひとたまりもありません」

オーストリアさんがこう言うとです。遠くからそのロマーノの悲鳴が聞こえてきました。スペインもオーストリアさんもそちらに急

行しました。顔を見合わせたうえで。

第二千百四十一話　　完

2011・6・23

第二千百四十二話　双頭の鷲は結婚

第二千百四十二話　双頭の鷲は結婚

フランスはオーストリアさんとスペインが一緒のお家の上司で挟み撃ちにあっていた頃です。とにかく大変な目に遭っていました。

「しかもイギリスまでいたからな」

「何かフランス君って敵多いよね」

「ああ、あの時は三人だったからな」

こうロシアに対しても言います。

「えげつなかったぜ」

「確かオーストリアさんとスペイン君って上司の人達が結婚して一緒になったんだよね」

「あの家は結婚で大きくなったからな」

それで有名なお家なのです。戦争は他の家にさせておけ、という言葉がある程です。

「俺の上司とも後で結婚したしな」

「あの王妃様だよね」

「ああ、あの時はイギリスとプロイセンが相手だったからな」

何気にイギリスが絶対に入っているところがフランスです。オーストリアさんと仲良くなってもこの人とだけは戦争をしていたのです。

そんなことをお話してです。フランスはふとロシアのことに気付きました。

「そういえばロシアはずっとオーストリアと仲良かったよな」

「うん。気品があって穏やかでとてもいい人だよ」

ロシアはにこりと笑って答えます。実はロシアとオーストリアさんは長い間お友達の関係にあって今も結構仲のいい感じなのです。この辺りフランスとロシアの関係に似ています。

「けれど上司の人達は結婚していないよ」

「それも珍しいな」
ふと気付いたことです。オーストリアさんの上司はロシアの上司とはです。結婚していないのです。

第二千百四十二話　完

２０１１・６・２３

第二千百四十三話　恐ろしい男　☆

「何だい、随分簡単に捕まっちまったい」
「畜生離せ」
ロマーノは捕まってもトルコに文句を言います。
「呪うぞこの野郎」
「こりゃ愉快だな」
「離せって言ってるだろ」
「やはり彼でしたか」
オーストリアさんはロマーノを捕まえている仮面の男を見て顔を曇らせます。そう、まさにその男こそがだったのです。
「トルコでしたか」
「おい、やばいでこれは」
スペインもトルコのことはよく知っていました。当時の彼は三つの大陸に領土を持ち圧倒的な国力を誇っていたのです。その彼がロマーノを捕まえているのです。
オーストリアさんはそのトルコを見て言います。
「フランスも禁じ手を使ってきましたね」
「まさかあいつを呼ぶなんてな」
「これはまずいです」
オーストリアさんも危惧する顔になっています。
「彼と戦うとなると」
「けどこのままやとロマーノが」
「はい、トルコのものになります」
そしてなのです。
そんな危険な相手が遂に出て来たのです。オーストリアさんにとってもスペインにとってもです。最悪の事態になろうとしています。

第二千百四十三話　完

2011・6・24

第二千百四十四話　イエニチェリ

「とにかくです。当時のトルコは凄かったのです」
「そや、無敵やったで」
オーストリアさんとスペインはその頃のトルコについて日本にお話しています。
「数が多くて。とても適いませんでした」
「大砲も持ってたし鉄砲もなあ」
「ああ、イエニチェリですね」
日本も鉄砲と聞いてわかりました。
「その部隊ですね」
「そうです。鉄砲の数も凄く」
「滅茶苦茶強かったんや」
「あのイエニチェリの音楽を聴くだけで逃げる人もいたとか」
そこまで恐れられていたのです。尚このイエニチェリの音楽からグラスバンドがはじまったのです。トルコは文化的でもあったのです。
「物凄く恐れられていたのですね」
「あとはあの旗を見てもです」
「皆怖がってしゃあなかったわ」
「確か。鍋でしたね」
何とです。イエニチェリの旗は鍋だったのです。
「つまりこれは」
「補給ですね。あの頃のトルコは補給も整っていました」
「とにかく何でも揃ってたわ」
兵士が強いだけではなかったのです。その数に装備に補給もです。当時のトルコはあまりにも凄く。欧州各国を震え上がらせていたのです。

第二千百四十四話　完

2011・6・24

第二千百四十五話　可愛いロマーノ　☆

第二千百四十五話　可愛いロマーノ

☆

ロマーノを捕まえているトルコを見ながらです。オーストリアさんはスペインに尋ねます。

「それでどうされますか？」

「ロマーノのことやな」

「そうです。このままではロマーノはトルコに取られてしまいますよ」

「わかっとるわ。けれどや」

そう、けれどなのです。トルコの強さはです。

「あいつとだけは戦いたくないんや」

「桁外れの強さですからね」

「できるなら相手にしたくない。フランスとは比べものにならへん」

フランスはあっさりとやっつけることができるのです。幾ら数や装備がよくても何故かフランスは戦争になると意外なまでにあっさりと負けます。これはこの頃からのことです。

けれどトルコはどうかといいますと。

「俺と御前でもや」

「大変ですね」

「そんなんとぶつかっても。洒落にならんで」

けれどロマーノは捕まったままです。そのロマーノを見るとです。

「畜生、スペイン早く助けに来いよ」

「ああいうの見てたらなあ」

スペインは保護者の顔で呟くのでした。

「何時も素直やったらええのになあ」

「貴方の教育が悪いだけでは？」

こう突っ込みを入れるオーストリアさんでした。とにかく今はロ

マーノをどうするかです。このままトルコに取られていいのか、スペインは決断を迫られていました。

第二千百四十五話　　完

２０１１・６・２５

第二千四十六話　優しかったトルコ

第二千四十六話　優しかったトルコ

ギリシアはトルコのところにいました。そしてそれはエジプトもです。

彼は日本にです。その時のことをお話します。

「弟みたいだった」

「弟さんみたいとは？」

「そんな感じで大事に育ててもらった」

そのトルコにだというのです。

「多分日本さんのところにいた台湾とか韓国みたいな感じ」

「韓国さんは私や私の上司の人に苛め抜かれたと主張されていますが」

「あんな血色がよくて何でも持っていて大事にされていた苛められっ子はいない」

どうやらエジプトも知っているみたいです。実際韓国は日本の上司の人、特に陸軍関係の人に随分と大事にされていたのです。そしてエジプトもです。

「俺も。あんな感じで」

「トルコさんにですか」

「同じみたいに寛容にしてもらってたから」

「よくトルコさんは厳しいとか残酷とか言われていますが」

欧州の面々はそう言うのです。あの時のトルコは酷かったと。けれどです。

エジプトはそのトルコについてこう言いました。

「それは嘘だから」

「嘘ですか」

「トルコは優しい。気さくで話もわかる」

「それにお花とお風呂と音楽が好きで」

「そういうことも全部教えてもらったから」
トルコはただ強いだけではなかったのです。その頃からきっぷがよくて気のいい兄ちゃんでもあったのです。そんなイスラムの覇者だったのです。

第二千百四十六話　完

２０１１・６・２５

第二千百四十七話　猛牛突進　☆

第二千百四十七話　猛牛突進　☆

ロマーノを捕まえて馬車に入れたトルコにです。馬が語り掛けます。どうもトルコには喋る馬がいるようです。

「こんなに南イタリアがあっさり捕まるとは思いませんでしたね」

「まあ何だい」

トルコも陽気に馬に応えます。

「それはひとえに俺が強いからだな」

「離せ！出せ！」

馬車の中ではロマーノが扉を叩きながら叫んでいます。

「何だってんだこの野郎！」

「まあ落ち着きねい。悪いことはしねえからよお」

トルコがそのロマーノに言っているとです。

遠くから何かが聞こえてきました。それは。

牛の鳴き声でした。そして実際に牛が突撃してきてです。

ロマーノを捕まえている馬車を破壊しました。その牛の背中から二人飛び降りてきました。

「むっ、手前等は」

「御前人の保護国に何やってんや」

「そうです。これは見過ごせません」

「オーストリアと。誰だ手前は」

トルコはまだスペインを知りませんでした。それで彼に尋ねます。

「はじめて見る顔だな、おい」

「そうか。じゃあ名乗ろうか」

「そうしねい。しかし手前」

スペインを見てです。トルコは彼がやけに細いと思ったのです。

その細いスペインとオーストリアさんがです。今向かい合うのでした。

第二千百四十七話　完

2011・6・26

第二千百四十八話　牛といえば

第二千百四十八話　牛といえば

日本がスペインにお話します。それは何かというと。

「昔大阪といえばです」

「虎やな」

「牛も勇者も鷹もいました」

こう言うのです。関西にはそうした動物が一杯いたというのです。

「そもそも虎は大阪ではなく甲子園にいますから」

「ちょっとちゃうんやな」

「はい、牛と勇者と鷹、まあ勇者も西宮でしたが本社は大阪でした」

「成程なあ。そこは色々やねんな」

「そうです。ですが鷹は福岡に飛びだっていって」

日本の顔が少し寂しいものになりました。

「勇者は波になって今は消えています」

「牛はどうなったんや？」

「何か波を飲み込んで訳のわからないことになっています」

日本の顔はかなり残念そうなものになっています。

「色々とありまして」

「そうなってんな」

「はい、これも時代の流れでしょうか」

「電車も弱くなったなあ」

「かつては。私の大動脈でしたが」

それぞれの会社がそれぞれの動物を飼っていたのがかつての日本だったのです。けれどその動物達も今ではいなくなってしまって。

日本は寂しい思いをしています。鷹は福岡に、牛はよくわからないことになって。勇者は完全に消えてしまったのです。

第二千百四十八話　　完

2011・6・26

第二千百四十九話　スペインの名乗り　☆

第二千百四十九話　スペインの名乗り

☆

トルコにひょろっちいと言われたスペインはまずこのことについて言い返します。

「何か今の言葉酷いやろ」

「そうかい？まあ思ったことをそのまま言っただけでい」

「それだけかい」

「特に悪気はないんでい。けれど気を悪くしたのならすまねえな」

「ああ。そんで俺はや」

あらためて名乗るスペインでした。その名は。

「情熱の国スペインや」

「それが手前の名前だな」

「そや。勝手にロマーノを自分の領土にするのはや」

それはどうかとです。トルコに言います。

「俺が許さへんで」

「ああ、手前があのスペインってわけかい」

どうやらトルコは彼の名前は知っていたみたいです。けれど会うのははじめてだったのです。そのスペインにトルコはあらためて言います。

「いいじゃねえか、ちょっとばっかしよお」

「あかん」

スペインはトルコに即答で返します。

「絶対にあかん」

「何でい、ケチだな手前は」

「じゃあ御前が逆の立場で言えるんかいな」

「それは絶対に無理な相談だな」

かくしてトルコとスペインはお互いに名乗り合うのでした。二人

の間に火花が散っていました。

第二千百四十九話　　完

2011・6・27

第二千百五十話　テルシオ

第二千百五十話　テルシオ

スペインといえば無敵艦隊ですがその他にです。
槍歩兵と鉄砲兵を合わせて作った巨大な方陣でも有名です。その方陣とは。
「ちょっと再現してみたんやけれどな」
「ううむ、大きいですね」
日本もその方陣を見て唸ります。二千人か三千人で長方形の方陣を組みその斜め四隅にそれぞれ鉄砲隊も置いています。それが何かというと。
「これがテルシオですか」
「昔はこれをぶつけて戦争してたんや」
「海軍は無敵艦隊があり陸はこれですか」
「結構頑張ってたんやで」
スペインはその頃のことを思い出しながら日本に言います。
「こんなん作ったりしてな」
「そうだったのですか」
「そや。これで三十年戦争も戦ってたんや」
スペインはオーストリアさんを助けていました。同じハプスブルク家の上司を持っているのとカトリックの関係でオーストリアさんの方にいたのです。
そしてこのテルシオをです。オーストリアさんもなのでした。
「あいつもテルシオ作ってたんやで」
「これで戦えばかなりのものですね」
「ああ。結構強かったで」
その自慢のテルシオを見て言うスペインでした。
彼は海だけではなかったのです。陸においてもこんな巨大な方陣を幾つも作ってそのうえで戦いです。多くの勝利を収めていたので

す。

第二千百五十話　完

2011・6・27

第二千百五十一話　強大な相手でも　☆

スペインは剣を抜きました。オーストリアさんもです。
そのうえでスペインがです。トルコに対して言うのです。
「とにかくロマーノのところに攻め込む様なことがあればや」
「その時はどうするってんでい？」
「俺が先に御前のことをボコボコにしたるわ」
こう言ってです。トルコと戦おうとするのです。
「その覚悟はあるんやろな」
「つまりそれはあれってことかい？」
トルコは仮面からもわかる不敵な笑みでスペインに返します。
「宣戦布告っつーー意味だよな」
「そう思うんやったら思えや」
「俺も元々欧州は攻めるつもりだったしな」
実際にこの時トルコは東欧を凄まじい勢いで席巻していました。
まさに暴風の様な勢いでそれを止められるのは誰もできないように思われていたのです。
そのトルコがです。圧倒的なオーラを放ちながらスペインとオーストリアさんに言うのです。
「ついでにスペインも手に入るって考えりゃお得な話だわな」
「くっ、こいつほんまに強いな」
「気をつけて下さい」
オーストリアさんが真剣な顔でスペインに囁きます。
「トルコはおそらく欧州全てを合わせただけの強さがあります」
「おい、そりゃ滅茶苦茶強いやろが」
まさにそれだけの圧倒的な相手がです。今スペインに誇り高き牙を剥こうとしていたのです。スペインは恐ろしい相手を前にしてい

るのです。

第二千百五十一話　完

2011・6・28

第二千百五十二話　魔王の如く

トルコの勢いがどうしたものだったかというと。

ハンガリーもオーストリアさんもです。その強さに呆然となっていました。

「あの、鉄砲は多いし」

「その前に軍の数が違い過ぎます」

「大砲も持っていますし。あれじゃあ」

「とても適いませんね」

二人はトルコの恐ろしい大軍を前にして満身創痍になっています。その中心には帽子を被り鉄砲を持った一軍が展開しています。

「指揮もしっかりしていて」

「補給も万全の様ですね」

「だからあんなに強いんですね」

「兵がそれぞれ強いだけではないです」

勿論兵も歴戦でしかもよく訓練されています。けれど何よりもその数と装備、補給に指揮系統といったものが万全だったのです。

そうした面からの強さで。トルコは勝ち進んでいるのでした。

「あの、このままですと」

「ウィーンです。ウィーンからは通しません」

オーストリアさんの首都です。そこで最後の決戦を挑むというのです。

二人も他の国も連戦連敗でした。あのワラキアのブラド四世も最後は力尽きたのです。

その大軍を率いるトルコは。馬上で誇らしげに言います。

「さあて、ウィーンの次はローマといこうかねえ」

何とロマーノだけでなくイタリアまで手中に収めようとしていた

のです。ウィーンからイタリア北部に入る、トルコの野心は恐るべきものでした。

第二千百五十二話　　完

２０１１・６・２８

第二千百五十三話　アシュレの方が大事　☆

第二千百五十三話　アシュレの方が大事　☆

一触即発となったスペイン、オーストリアさんとトルコ。双方の衝突が今まさにはじまろうとしています。

その中で、です。オーストリアさんがスペインに言います。

「いいですね。この相手は」

「ああ。今までの相手とは全然ちゃうな」

「私達二人でもどうなるかわかりません」

「ハンガリーとか呼んだ方がよかったか？」

「それでも勝てるかどうかは」

わからないというのです。トルコはそこまでの相手です。

二人は覚悟を決めています。ですが。

トルコは二人に背を向けてです。こんなことを言うのでした。

「でも今日はアシュレ食いたいしとっとと帰るわ」

「なっ！？」

「帰るというのですか！？」

驚く二人でした。けれどトルコはマイペースで。

颯爽と馬に乗りそのうえで二人に言います。

「じゃあ次に会う時は」

「その時はですね」

「ほんまにガチやな」

「戦場だな。楽しみにしてるんでい」

こう告げて去るののでした。かくしてです。

二人はこの危機的な状況を脱して何とかロマーノを保護することができました。

けれど恐ろしい敵を作ってしまったことには変わりありません。

圧倒的な力を持つ覇王トルコ、その彼が二人に刃を抜いたのです。

第二千百五十三話　完

2011・6・29

第二千百五十四話　スペインの剣

第二千百五十四話　スペインの剣

トルコは刀も見事でした。けれどそれはスペインも同じです。こんなことをです。その剣を日本に見せて彼にお話します。

「イギリスのあのシェークスピアっていう劇作家のオテロって作品あるやん」

「あの黒人の将軍のお話ですね」

「提督やったかな。けれど陸地でも戦ってたみたいやしな」

「では総督としておきましょう」

スペインも何気にヴェルディのオペラの方のタイトルで言っています。本当はオセローという題名ですがイギリスが嫌いなのでこう呼んでいるのです。

そんなことをお話してでした。

「そんでそのオテロの最後に出て来る剣な」

「彼が自害する場面のですね」

「あれは俺のところの剣やねん」

隠された事実です。

「よお斬れる剣ってことで出たんや」

「成程、それであの剣だったのですか」

「そや。うちの剣もよお斬れるで」

「ゾーリンゲンのものみたいな感じでしょうか」

「そやな。ああした感じでな」

斬れるというのです。

「結構自慢やってんで」

「そうですか。スペインさんは剣も」

そうしたことも得意だったのです。呑気ですが意外と芸達者なスペインです。伊達にかつては世界帝国だったわけではありません。

第二千百五十四話　完

2011・6・29

第二千百五十五話　スペインがいるから　☆

第二千百五十五話　スペインがいるから　☆

トルコが去り後にはスペインとオーストリアさんが残されました。スペインはトルコが乗っている馬の蹄の音を聞きながら呟きます。

「何なんやあいつは」

「トルコはああいう感じです」

「強いけど粘着やないんやな」

「はい、敵ですが男気があるところも認めます」

まさに味方であったなら、という人なのです。

「そういう相手ですから」

「そうなんやな。あっ、ロマーノが」

スペインはここでロマーノを見ました。見れば彼は。

やっと気付いた様です。それでスペインを見てです。

「あれここは天国か？」

「ああ、気付いたんやな」

「スペインがいるな」

ロマーノはそのスペインを見て言います。

「ってことは地獄だな」

「おい待たんかい」

スペインはロマーノに速攻で突っ込みを入れました。

「それはないやろ」

「けれど御前がいるから地獄だ」

「俺がいるだけでそうなるんかい」

ロマーノを助けたのにその本人にこう言われてしまうのです。スペインも不憫といえば不憫です。けれどロマーノはそのことに気付きません。

第二千百五十五話　完

2011・6・30

第二千百五十六話　トルコの性格

「少なくとも粘着じゃない」
「そうですか」
ギリシアが日本にトルコのことをお話しています。言うまでもなくギリシアとトルコはとんでもなく仲が悪いです。どうしようもない位に。
けれどギリシアはトルコはしつこい性格ではないというのです。
「あっさりとしている」
「そうですね。あの方は」
「あと。男らしい」
その長所も言うのでした。
「気風がよくてお客さんをもてなす」
「そして奇麗好きでお花も大好きで」
「特にチューリップが」
意外なことにです。トルコはチューリップが好きなのです。
「そういう感じの奴」
「それでどうしてギリシアさんは」
トルコと仲が悪いのか。ギリシア本人に聞こうとすると。
ギリシアはです。こう言うのでした。
「因縁」
「それでなんですか」
「だからどうしようもない」
トルコの長所がわかっていてもなのです。
「そういうことだから」
この二人の関係はどうしようもないのでした。対立は時としてどうしても起こってしまうものなのですから。

第二千百五十六話　完

2011・6・30

第二千百五十七話　やっぱりトルコは強かった　☆

第二千百五十七話　やっぱりトルコは強かった　☆

トルコと戦端を開くことになったスペイン、オーストリアさんと一緒にトルコと戦います。

しかしです。トルコの強さは。

「あれをチートっていうんやろな」

「はい、紛れもなく

無茶苦茶強かったのです。予想していましたがその予想を超えていたのです。

陸だけでなく海でも。トルコは強かったのです。

「地中海あいつのもんになりそうやな」

「そうですね。ウィーンを守るだけでも必死です」

二人共ぼろぼろになっていきます。戦いに次ぐ戦い、しかも敵は強大です。これではどうしようもないとまで思われる程でした。

そのスペインがお家に帰るとです。ロマーノがによによしながら彼に言ってきます。

「何だよ、ぼろぼろじゃねえかよ」

「ああ、ちょっとこけてな」

「だっせえな。それでそんな風になったのかよ」

「派手にこけてもうたわ」

口ではこう言います。

「いや、しもうたわ」

「しっかりしろよ。下手したら死ぬぞ」

「ほんまやな。あいつ相手は」

トルコの顔が脳裏に浮かびます。その仮面の顔が。

それだけでスペインの気が引き締まります。そのうえでロマーノにこう言いました。

「まあ。下手なこけ方はせんさかいな」
「気をつけろよ」
ロマーノは気付いていませんでした。スペインが今何をしているのかを。

第二千百五十七話　完

２０１１・７・１

第二千百五十八話　ハプスブルク家だから

第二千百五十八話　ハプスブルク家だから

オーストリアさんもでした。トルコと連戦でした。

スペイン共々その強大なトルコ相手にです。満身創痍となっていました。

その傷だらけのオーストリアさんにハンガリーが声をかけます。

勿論彼女もぼろぼろです。トルコ相手には彼女でも苦戦でした。

「あの、ここは外交で」

「駄目です。宗教が違いますから」

同じ欧州の国が相手ならオーストリアさんが得意とする外交で何とかなります。けれどトルコはイスラム教です。欧州の国ではないのです。

ですから外交はできません。あるのは。

「降伏か戦争か」

「それだけですか」

「確かに降伏すれば安泰です」

トルコは寛容です。降伏した相手を虐めることはしません。

「ですがそれは」

「誇りですね」

「私にも意地があります」

例え傷だらけになってもです。

「戦います、最後の最後まで」

「そうですね。ここで降伏したら」

「私は私でなくなります」

こうしてです。顔をあげてです。

強大な、あまりにも強大なトルコに向かうのでした。ハンガリーもそのオーストリアさんと一緒にです。敢然と立ち向かうのでした。

第二千百五十八話　完

2011・7・1

第二千百五十九話　庇っているスペイン　☆

第二千百五十九話　庇っているスペイン　☆

トルコから解放されたロマーノはスペインに戻っていました。それでやることといえば同じでお掃除です。

今日もお掃除をしています。それをしながら一人呟いていました。

「結局あいつの家に戻ってきちゃったぞこの野郎」

「あんな奴くれてやったれや！」

そしてここで、です。不意にスペインの上司の怒鳴り声が聞こえてきました。

「大して役にも立たんやろが！」

「何だ？」

ロマーノはその怒鳴り声がした方に行ってみました。すると。

そこでスペインの上司がスペインを怒鳴っていました。それはかなり凄い剣幕でした。

「折角大陸で稼いだ金をあんな奴の為に使うなんてアホか！」

「それはその」

「トルコ相手に何ぼ使うたと思うてるんや！」

そしてスペインの上司の言うことは。

「赤字やで赤字！」

「すまん、けど」

「どうやら御前には」

スペインの上司もです。ここで最終手段に出ました。

あるものを出してきました。それは。

「これしかないようやな」

「そ、それは！」

こうしてスペインは上司から折檻を受けました。けれどロマーノはわかったのです。

スペインが自分の為に必死に戦ってお金を使っていることにです。そしてその為にぼろぼろになっていることも。彼は知ってしまいました。

第二千百五十九話　　完

２０１１・７・２

第二千百六十話　凄い上司のオンパレード

第二千百六十話　凄い上司のオンパレード

スペインの上司といえばハプスブルク家の人とブルボン家の人、それにフランコさんが有名です。けれどその中にはかなり大勢いました。

「何か凄い人多かったわ」

「私の方はそうでもなかったですが」

「こっちに集中したんやな」

スペインはその上司の人達を思い出しながらオーストリアさんにお話します。

「いや、そうした人が」

「特にあの人ですね」

「カルロス二世なあ。明らかにおかしかったさかいな」

「確かに。あの方は」

「そんであの人がおらんようになってや」

スペインのハプスブルク家は断絶したのです。それでブルボン家になったのですが。

「何でブルボンでもああやったんや」

「確か。ナポレオンとの戦争の時は」

「あの時も凄い上司やった」

その奥さんもだったのです。

「ゴヤが絵に残してるけどな」

「そうですね。あれを見てもですが」

「上司がしっかりしてたら」

「ゲリラにならずに済んだかも知れませんね」

「そやな。考えてみればな」

ゲリラになって戦ってフランスに勝つことはできました。けれど

その時にもまた傷だらけになってしまったのです。スペインにとってはどれも辛い思い出です。

第二千百六十話　　完

２０１１・７・２

第二千百六十一話　折角のお金が

スペインもオーストリアさんもトルコとの戦争で。
多くのお金を使っていました。オーストリアさんにしても。
「折角神聖ローマをまとめようと思っていたのですが」
「お金もありませんしね」
「お金がないと何もできません」
諸侯の懐柔や内政、そういったものにです。お金が必要なのです。
けれどトルコとの戦争にお金を使ってしまいオーストリアさんも余裕がありません。一緒にいるハンガリーもそれは同じでした。それで。
「困ったことです」
「しかも神聖ローマの中で」
ここでまたオーストリアさんにとって都合の悪いことが起こりました。
「ルターが出て来てますけれど」
「ルター？確か聖職者ですね」
「はい、その人が教会を批判してます」
「まずいですね。それは」
オーストリアさんが盟主の神聖ローマは教会と密接な関係があるのです。その関係によって神聖ローマ帝国という国が成り立っているのです。
そんな訳で。オーストリアさんは。
「すぐに上司とお話しましょう」
「そうですね。さもないと」
「大変なことになりかねません」

お金もなくなり外にはトルコもいて。
そして今度は宗教問題です。オーストリアさんも大変だったのです。

第二千百六十一話　　完

２０１１・７・３

第二千百六十二話　免罪符

第二千百六十二話　免罪符

ルターは怒っていました。何か凄い剣幕です。
「今の教会は何だ！」
「教会の腐敗ですね」
「そうだ、あれは何だ！」
こうオーストリアさんにも言い返します。
「免罪符で罪が清められるものか！あれは只の金集めだ！」
「それはその通りですが」
オーストリアさんにしてもわかっています。その免罪符がどういった目的で売られているのか。ローマのサン＝ピエトロ寺院を建てる為です。
ルターはそのお世辞にも奇麗とは言えないお金の集め方に憤っているのです。確かにこの人の言うことは正論です。ですが。
この人が言うことはそのままバチカン、ひいてはオーストリアさんの上司、神聖ローマを束ねるその人の否定になります。これはまずいことなのです。
それでオーストリアさんは。ルターにそっと言います。
「ここはお静かに」
「静かにしていられるか！」
ルターは言われても激昂するばかりです。
「この腐敗！許せん！」
「しかし教会のことは」
「私は戦う！」
ルターは退くことを知りませんでした。
「この腐敗を消し去るのだ！」
その声を諸侯も聞きました。気まずい雰囲気が決定的なものにな

ろうとしていました。

第二千百六十二話　完

2011・7・3

第二千百六十三話　一日の終わりで　☆

第二千百六十三話　一日の終わりで　☆

スペインは一日の最後に自分のお部屋に入って呟きます。
「ああ、しんどかった」
勿論ロマーノのことで、です。只でさえトルコと戦争しているのに彼にまでお金を使って何を考えているかというのです。正論ではあります。
「今日も説教ばっかされた一日やったわ」
その彼のところにです。ロマーノが来ました。
「まあ寝よか。そんでまた明日や」
その彼に気付いてです。スペインは言いました。
「おい」
ロマーノは彼に答えずにベッドにあがって。寝転がりだしました。
「何や。若しかして」
その仕草が何処か猫めいています。
「借りるぞ」
その彼にです。スペインは怒ります。
「何人のベッド占領しとるんや！」
「五月蝿いぞ畜生」
態度は相変わらずです。
「いいから借りるぞ」
「借りるぞって御前」
「いいだろこの野郎」
「幾ら俺のことが嫌いでもな」
スペインも今回ばかりは言わずにはいられませんでした。
「そんなあからさまな嫌がらせはないやろ」
何か違うことにはまだ気付いていないスペインでした。ロマーノ

のそれに。

第二千百六十三話　完

2011・7・4

第二千百六十四話　日本も同じだった

第二千百六十四話　日本も同じだった

スペインとロマーノのお話を聞いてです。

日本はふと。台湾とのことを思い出しました。そのうえでロマーノにお話するのです。

「私も同じでした」

「何だ？日本は誰かの下にいたことないだろうが」

「いえ、台湾さんを引き取った時のことです」

その時のことを思い出したのです。

「あの頃は私も同じでした」

「どうだったんだよ」

「台湾さんは最初かなりお転婆で」

実際はそれどころではありませんでした。そのまま野生児で日本の言うことも日本の上司の人達の言うことも全く聞かなかったのです。

そのことを思い出してです。ロマーノにお話するのです。

「とにかく困りました」

「じゃあ俺みたいだったっていうのかよ」

「ロマーノ君よりも凄かったでしょうか」

その頃の。野生児そのままの台湾を思い出してお話するのです。

「ですが。それが」

「あそこまでなったんだな」

「はい、台湾さんもわかってくれました」

「そもそも御前はスペインよりずっと優しいだろうが」

「別にそうではありませんでしたが」

実は上司の人達が台湾に対してよりも韓国に対しての方がずっと優しかったのです。けれど台湾とずっと接していて。彼女も変わったのです。

第二千百六十四話　完

2011・7・4

第二千百六十五話　ロマーノのお礼　☆

「とよ」
「えっ！？」
スペインはベッドの中のロマーノの言葉を聞きました。
「今何て言うたんや？」
「ありがとよ」
ロマーノはとても小さい、下手をすると聞こえない声で言います。
「助けてくれてな」
「トルコのことかいな」
「そうだよ畜生」
彼がこう言うとです。スペインは。
笑顔になってそれで。彼の頭を撫でて言うのでした。
「何や、御前可愛いところあるやないか」
「うるせえ」
「そんなん別にええわ」
この辺りとてもスペインです。細かいところにこだわらないのが。
その彼はです。その明るい笑顔でまたロマーノに言います。
「俺が強くてかっちょええってことがわかればな」
こう言ってです。あの頭のくるるんを握ってしまいました。
「ロマーノもいつもこうやったらええのになあ」
「うわっ、そこは！」
くるるんを掴まれたロマーノはすぐに反応して。
飛び上がってそれでスペインにフライングヘッドバットを浴びせました。まさに人間魚雷のそれはスペインにとってはかなり痛いものでした。

第二千百六十五話　完

2011・7・5

第二千百六十六話　スペインのダンディズム

第二千百六十六話　スペインのダンディズム

一見しなくてもおちゃらけなスペインですが女の子には大人気です。何故かといいますと。

「やっぱり闘牛士よね」

「そうそう。あの格好は最高なのよね」

台湾とベトナムのアジアンガールズからもです。彼のマタドール姿は人気です。

「あの格好でマントを羽織ってひらひらと待って」

「それで猛牛を倒していくのがね」

その姿が最高だというのです。

「剣の使い方も華麗だし」

「スペインのああしたところは本当にいいわよね」

「それにね」

まだあります。彼のもてる要因は。

「フラメンコを踊る時もいいし」

「おまけに料理上手で性格も明るいし」

「日本さんの次位に来るかしら」

「そうね。嫌いにはなれないわね」

「ちぇっ、何かあいつばかり人気だよ」

アジアンガールズのスペイン評を聞いてすねているのはフランス兄さんです。彼にしてみると自分が一番もてないのが癪なのです。

けれど台湾とベトナムはこの人にはこうでした。

「だってあんた変態だから」

「黙っていて何もしないとスペインにも匹敵するわよ」

「けれど絶対に日本より上って言わないんだよな」

特に台湾はです。結局黙っていて何もしなければもてるフランス

ですがそれはどうしてもできない彼でした。

第二千百六十六話　　完

２０１１・７・５

第二千百六十七話　吸血鬼

第二千百六十七話　吸血鬼

皆が恐れている国が一つあります。そこは。

「ほ、本当に何もしないよね」

「何もしないけれど」

ルーマニアです。金髪をショートにしていて少しぼさぼさとした感じに見えなくもないです。肌は青白くて目が赤いです。いつもごついブーツを履いています。

その彼がです。イタリアにびくびくしながら言われているのです。

「いやさ、ルーマニアって」

「あの人だよね。それとうちの伝承の」

「血とかは」

「吸わないよ。そんなのしないから」

笑顔でこうイタリアに言います。

「というかあれ伝承に過ぎないから」

「そ、そうなんだ。よかった」

「そうだよ。というか僕も国だから」

注目すべきは人間とは言っていないことでしょうか。

「普通の食べ物食べてるよ。少なくともイタリアには何もしないから」

「そう。だったらいいけれど」

「イタリアは友達じゃない。同じラテン系だし」

ルーマニアは東欧にいますがラテン系の国です。ここでもローマ帝国が関係しています。

「これからもずっと仲良くやろうね」

「うん、じゃあ」

「イタリアはハンガリーと違うから」

こっそりと何か言っています。どうもかなり癖のある国の様です。

第二千百六十七話　完

2011・7・6

第二千百六十八話　目が赤いので

第二千百六十八話　目が赤いので

日本もです。ルーマニアを見て内心思うのでした。そのことをこっそりと大阪にお話します。

「まさかと思いますが」

「吸血鬼でやな」

「目が赤くしかも肌が青白いので」

「けれど日中普通に歩いてるで」

「ドラキュラ伯爵やカーミラも普通にそうしていましたが」

実は吸血鬼だからといって太陽の光に弱いとは限らないのです。この辺りは吸血鬼によります。吸血鬼の種類も様々なのです。

「あと大蒜や十字架を嫌わない吸血鬼もいます」

「何やそれ、ほな余計にわからへんがな」

「だからまさかと思っているのです」

日本も真剣に深刻な顔になっています。

「ルーマニアさんは実は」

「あの有名人がおるしな」

「はい。ルーマニアさんといえばです」

吸血鬼、代名詞になっています。

「もっとも吸血鬼は世界中にお話がありますが」

「まあなあ。うちにも話あるしな」

「ろくろ首で首が飛ぶものは要注意です」

ろくろ首は首が伸びるものだけではなかったりします。中には首が外れて飛ぶものがあります。これは飛頭蛮という呼び名もあります。

そうした存在を知っているからこそです。日本はルーマニアを見てまさかと思っているのです。普通は有り得ないことですがやっぱ

りそう思ってしまうのです。

第二千百六十八話　　完

2011・7・6

第二千百六十九話　ハンガリーとの関係

「あいつ？大嫌いですよ」
「顔も見たくないね」
ハンガリーとルーマニアはお互いに言い合います。
「あいつとはそれこそ何度も喧嘩しましたし」
「ロシアさんのところに一緒にいたこともありましたけれど」
それでもだというのです。かつては二人共共産圏ということで一緒だった時があったのです。この時は日本の左側の人達はハンガリーとルーマニアは一枚岩と思っていました。
けれど実際はといいますと。
「今度何かあったらこのフライパンで」
「使い魔って知ってるかな。蝙蝠とか狼とか」
「あいつは絶対に普通の人間じゃないですし」
「いや、僕のペットをそう呼ぶ人が多くてね」
素敵なまでに険悪な関係です。
「キューブを馬鹿にしたらそれこそ」
「ブラド四世はうちじゃ英雄なんですけれどね」
とにかく顔を見合わせればお互いに険悪です。オーストリアさんもそれを見て呟きます。
「喧嘩はよくないですが」
「ですから。喧嘩なんてしませんよ」
「そうです。ただ嫌いなだけですから」
「ふん、こっとは大嫌いよ」
「じゃあこっちは超嫌いだよ」
とにかく仲の悪い二人です。それでも国同士のお付き合いはあったりします。とはいっても多分にビジネスライクではあります。

第二千百六十九話　完

2011・7・7

第二千百七十話　ワインを飲んでいても

第二千百七十話　ワインを飲んでいてもルーマニアがワインを飲むとそれだけで、です。皆思いきり誤解します。

「ち、血！？」

「本当に血を飲んでたのね！」

あの気丈な台湾とベトナムもこれにはドン引きです。

「怪しいとは思っていたけれどやっぱり！」

「吸血鬼だったのね！」

「嫌だな、これ血なんかじゃないよ」

ルーマニアは苦笑いを浮かべてグラスの中にあるその赤いお酒を見せます。

「ワインだから」

「あっ、そういえば微妙に違うし」

「赤ワインだったの、只の」

「そうだよ。僕だってワインを飲むよ」

当然ながらルーマニアでもワインは飲まれます。ビールを飲む時もありますけれどその際は特に何も言われなかったりします。

「その度に言われるけれどね」

「まあ何ていうかね」

「誤解して御免なさい」

「いいよいいよ。それに」

ここでこんなことも言うルーマニアでした。

「ワインはキリストの血だしね」

「だから。そんなことを言うから」

「余計に誤解されるんだけれど」

流石に今の発言はまずかったです。ルーマニアが言うと洒落になりません。

第二千百七十話　完

2011・7・7

第二千百七十一話　本当に残酷でした

第二千百七十一話　本当に残酷でした

ルーマニアで最も有名な上司といいますとあの人しかいません。

「あの、ヴラド四世ってさ」

「あの人がどうかしたかな」

「本当にああいうことしてたの？」

「うん、してたよ」

ルーマニアは平然とびくびくしているイタリアに対して答えます。彼が今びくびくしているのはルーマニアに対してだけではありません。

そのヴラド四世という人は。それはそれは恐ろしい人だったのです。

「串刺しとか頭に釘を打ちつけたりとか火炙りとかね」

「普通に一杯してたんだね」

「あと。小鳥を殺して喜んだりとか」

とにかく血を見ることが好きだったようです。

「ちょっと言うのが憚れる様なことが」

「本当にやってたんだ」

「あの頃じゃ普通だったと思うけれど」

「いや、絶対に普通じゃないから」

イタリアはそのことは全力で否定しました。

「そんな残酷な人ってあの頃でもそうは」

「いなかったかな」

「人だけじゃなかったんだ、殺すの」

「うん、短気で怒ると凄かったりそうでなくても趣味とかで動物をね」

どうやらヴラド四世は本当に恐ろしい人だったようです。とりあ

えず現代だと確実に警察が来てしまうような。そんな人だったかも知れません。

第二千百七十一話　　完

２０１１・７・８

第二千百七十二話　血塗れの英雄

第二千百七十二話　血塗れの英雄

ヴラド四世についてはです。トルコもよく覚えています。
何故覚えているかというと。彼がその戦った相手だったからです。
「俺も数多くの相手と戦ったけれどよ」
「あの方は特別でしたか」
「あそこまで残酷な奴はいなかったねい」
こう日本にお話します。
「捕虜は取らないというか全員串刺しにしちまってよお」
「全員ですか」
「五万は殺してくれたんだよ」
今でも結構な町一つ分です。そこまで殺したのです。
「いや、凄かったなんてものじゃなかったぜ」
「それで串刺しにした人達を並べていたのですね」
「串刺しの他にも色々とんでもねえことしてたしな」
「だから覚えておられるのですか」
「あんな奴忘れられるかってんだ」
ましてや敵なら余計にです。忘れられる訳がありません。トルコにとってヴラド四世はまさに悪魔、いえ魔王の如き存在だったのです。宗教は違えど。
「てこずったにしてもそれ以上にあの残酷さには俺も引いたってことよ」
「ううむ。私の上司でも信長さんは苛烈なところがありましたが」
やるとしたら徹底的な人でした。けれどです。
「そうしたことはされませんでしたね」
「っていうかあいつはまた特別だったからな。精神的にどっかおかしかったんでねえかい？」
トルコも今思い出してこう言うのでした。とにかく恐ろしい人だ

ったのです。

第二千百七十二話　完

2011・7・8

第二千百七十三話　トルコと戦う時

第二千百七十三話　トルコと戦う時

ルーマニアがトルコと戦う直前の彼はといいますと。

それこそです。上司がしょっちゅう代わっていました。

しかも貴族の力が強くてです。どうしようもない状況だったのです。おまけに。

「トルコと戦いなさいよ」

「一緒に戦ってもらうからな」

ハンガリーに神聖ローマがです。しょっちゅう来てそれでトルコと戦うように急かしてきていたのです。そうした大変な状況だったのです。

ルーマニア自身も上司の多くもトルコとは戦うつもりでした。けれど。

「強制されるのはな」

「納得できませんよね」

ルーマニアもこう上司の一人に言っていました。

「まして連中は僕を利用しようとしているだけですし」

「そうだ。私達は駒だ」

ハンガリーや神聖ローマの、というのです。

「このままトルコの盾にするつもりなのだ」

「それは避けたいですね」

「あの連中も好きになれない」

上司は忌々しげにハンガリーや神聖ローマについて言います。

「利用されてたまるか」

「はい、僕は僕の意志で戦いたいです」

「しかし。それでもだ」

どうしようもない状況でした。結果として戦わないといけないのです。けれどそれでも。ハンガリーや神聖ローマに利用されたくは

なかったのです。

第二千百七十三話　完

2011・7・9

第二千百七十四話　神聖ローマにしても

第二千百七十四話　神聖ローマにしても

ルーマニアはトルコとの戦いで利用されたくはありませんでした。けれどです。

その利用する側の神聖ローマやハンガリーにしてみればです。

「トルコは強い、あまりにもな」

「そんな相手に団結するのは当然じゃない」

こう言うのです。そして彼等を束ねるオーストリアさんにしてもです。

「トルコは欧州全土を飲み込もうとしています。最早一刻の猶予もなりません」

幾度となく戦ってです。その恐ろしさをよくわかっていたのです。だからこそ少しでも味方、強制してでも欲しくて。

「ルーマニアを引き込みましょう」

「はい、当然ですね」

「あいつも必要だ」

ハンガリーも神聖ローマもオーストリアさんの言葉に頷きます。とにかく当時のトルコの強さたるやとんでもないものだったのです。

「もうトルコはすぐそこまで来ていますし」

「このままだと」

「そうです。ウィーンを奪われ」

オーストリアさんの帝都を。そして。

「そこから私、そしてハンガリーや神聖ローマもです」

「一気に蹂躙されかねませんね」

「ここで何とかしないと」

「そういうことです」

この人達にもこの人達の事情があったのです。トルコの猛威は誰にも止められるものではありませんでした。その彼がいたのです。

第二千百七十四話　完

2011・7・9

第二千百七十五話　部活は

第二千百七十五話　部活は

ルーマニアも部活に入っています。その部は。

魔術部です。部長はイギリスです。そのイギリスが妹さんにこっそり言います。

「あいつ、人間だよな」

「お兄様が一番御存知なのでは？同じ部ですよね」

「だから気になるんだよ」

イギリスもです。彼が人間かどうか確信を持っていないのです。もっと言えば彼が吸血鬼ではないのかと疑っているのです。吸血鬼はアンデットの一種ですから。

イギリスは怪訝な顔でイギリス妹に囁きます。

「大蒜とか聖水とかな」

「ロザリオや太陽の光ですね」

「ああいうの。苦手なのか？」

「実際に突きつけてみてはどうでしょうか」

イギリス妹はこうお兄さんに言いました。

「そうすればわかるのでは？」

「何かそれもな」

「お嫌ですか」

「若し本当に吸血鬼だったらな」

とにかくそのことが疑わしくて仕方ないのです。

「大変な話だろ」

「人間でない方が学校に通っておられるということですから」

「人間離れした奴は多い学校だけれどな」

それでも人間でない国家というといません。イギリスでさえもルーマニアが人間なのかどうか確信を持てないのでした。何しろ目が赤いですから。

第二千百七十五話　完

2011・7・11

第二千百七十六話　怖過ぎる吸血鬼

第二千百七十六話　怖過ぎる吸血鬼

吸血鬼のお話は世界中にあります。日本にもその首が飛ぶろくろ首がいます。想像してみるとかなり怖い吸血鬼ですがマレーシアにはです。

「ペナンガランっているのよ」

「どんな吸血鬼ですか？」

「日本さんのところと同じで首が飛ぶのだけれど」

マレーシアが日本にお話しています。そのペナンガランについて。

「日本さんのところのは首だけが飛ぶのよね」

「はい、そうです」

「うちのは内臓もついてくるのよ」

首の下にです。内臓が全部ついていてそれで飛んで来るというのです。その姿を想像して。

さしもの日本もです。青い顔になってマレーシアに突っ込みを入れました。

「あの、それはかなり怖いのですが」

「そうでしょ。それで子供を襲って」

「血を吸うのですね」

「それで自分の身体に戻る時に酢の中に内臓を浸すのよ」

何ともおかしな話です。日本も何故ここで酢なのか気になってです。マレーシアに対してその理由を尋ねます。

「何故そこで酢なのでしょうか」

「血を一杯飲んで消化を助ける為よ」

「だから酢なのですね。成程」

「どう？これがうちの吸血鬼だけれど」

「今夜寝られなくなりそうです」

その言葉通り日本はその夜寝られなくなってしまいました。その

ペナンガランの姿を想像してしまってです。とにかく怖過ぎるマレーシアの吸血鬼です。

第二千百七十六話　　完

２０１１・７・１１

第二千百七十七話　魔術部とは何か

第二千百七十七話　魔術部とは何か

イギリスが部長でルーマニアが所属している魔術部。この部活はといいますと。

「とりあえず色々な魔術を研究して実践していくんだよ」

「それ時代によっちゃ相当まずかっただろ」

「ああ、下手したらな」

どうなっていたか。イギリスはフランスにお話します。

「魔女だってみなされてな」

「異端審問が来たよな」

「そうなりゃ一巻の終わりだったな」

これが嘘ではないのが恐ろしいところです。実際に欧州では魔女狩りによってそれはそれは恐ろしいことになっていたのです。それもかなり長い間。

勿論イギリスやフランスにおいてもそうでした。それでこうしたことをお話するのです。

「拷問のフルコースで止めは」

「火炙りだったからな」

「今だからできるんだよ」

イギリスはきっぱりと言い切ります。

「昔にこんな部活あったらそれこそ」

「御前死んでたぞ」

「ルーマニアは生き残りそうだけれどな」

「いや、あいつも胸に杭を打たれたら死ぬだろ」

フランスも彼が人間かどうか疑っています。

「流石にな」

「そりゃ吸血鬼だろ」

「だからそうなんじゃねえのか？」

とにかくフランスもです。ルーマニアは本当に吸血鬼ではないのかと疑っているのでした。

第二千百七十五話　　完

２０１１・７・１２

第二千百七十六話　火刑法廷

第二千百七十六話　火刑法廷

実はフランスでもです。魔術で物凄い騒ぎがありました。それは何かといいますと。

「あの上司の頃だったよな」

「はい、ルイ十四世様の頃でしたね」

フランス妹がお兄さんに応えます。

「ラ＝ヴォワザンの」

「モンテスパン侯爵夫人だったか？あの人が関わってな」

この人はルイ十四世の愛人の一人だったのです。その寵愛が薄れたと思ってそのうえで。何とルイ十四世を暗殺しようとしたのです。

その暗殺の為の毒を造っていたのがラ＝ヴォワザンだったのです。表向きは占い師でしたがその実は。とんでもない人物だったのです。

「あの時懺悔で話が漏れていなかったらな」

「ルイ十四世様は暗殺されていたかも」

「それでだったよな」

話を聞いてびっくりしたルイ十四世がです。取調べを命じたのです。その結果。

「まさか本当にあんな奴がいるなんてな」

「まさに魔女でしたね」

「いや、魔女狩りで槍玉に挙がった人は皆冤罪だったんだよ」

冤罪で物凄い犠牲者が出ていたのです。けれどそのラ＝ヴォワザンはといいますと。

「けれどあの女はな」

「本物でしたから」

「ああ、とんでもない騒ぎだったよ」

尚事件があまりにも恐ろしいものだった為取調べ等の記録は残っていません。ルイ十四世、他ならぬこの人が記録を抹殺させたから

です。こうした事件がフランスにもあったのです。

第二千百七十六話　　完

2011・7・12

第二千百七十七話　学校の部活

第二千百七十七話　学校の部活

この学校には物凄く多くの部活があります。新聞部もその一つです。

新聞部のメンバーは枢軸の三人です。部長はドイツです。

そのドイツがです。部の会合の中でイタリアと日本に言います。

「ふと思ったのだが」

「何かあったの？」

「思われたこととは」

「この学校には幾つの部活があるんだ？」

ドイツが思ったことはこのことでした。

「普通に野球部やサッカー部の他にもかなりあるが」

「はい、文化部も充実していますし」

「そもそもどんな部かどうかわからないものが多過ぎるが」

ドイツはこう日本に言いました。

「果たしてどれだけの部活があるんだ」

「そうですね。言われてみれば」

「俺も幾つも掛け持ちしてるし」

日本とイタリアはドイツのお話に顔を見合わせてお話をします。

「私は剣道部に居合部に茶道部に華道部に」

「俺はシェスタ部なんかにも入ってるよ」

「シェスタ部も訳がわからないが」

ドイツはそのイタリアに応える形でさらに言います。

「誰が何の目的で作ったのかわからない部活が多過ぎるぞ」

「どんなのがありますか？」

日本はドイツにそのことを尋ねます。この学校にはどんな部活があるのでしょうか。今それが明らかになろうとしています。考えて

みれば変わった学園です。

第二千百七十七話　　完

2011・7・13

第二千百七十八話　部活が認められるには

第二千百七十八話　部活が認められるには

多くの部活がある学校ですが部活として成立するにはそれなりの手続きが必要です。その手続きとは一体どういったものかといいますと。

生徒会の許可が必要なのです。部活を立ち上げたい人が生徒会に申請を出してそれが認められればです。部活として成立するのです。

その許可はどういったものかといいますと。

「じゃあこれにサインしてと」

「これだけでいいあるからな」

「はい、お疲れ様」

アメリカも中国もロシアもです。どういった部活か確めることなくその許可申請書にサインをしてです。それで終わらせています。

この三人はこんな感じです。そしてイギリスとフランスはといいますと。

「只でさえ仕事が多いからな」

「部活許可？書けばいいんだろ書けばよ」

三人よりもずっとなおざりな態度で。誰がどんな部活を申請しているのか全く見ていません。出された書類にサインをしてそれで終わりです。

そのせいか学校には物凄く変な部活が増えています。その中で。

「・・・・・何だよこの部活」

「こんなの許可した覚えないぞ」

二人はある日部室が集められている校舎のそれぞれの看板を見て唖然となりました。どういった理由でできたのかわからない部活ばかりがったのです。とりわけ。

「全ての起源は俺部！？何だこの訳のわからねえ名前の部活は」

「何処の馬鹿が立ち上げたんだ？」

その中でも最も訳のわからない部活を見つけてしまいました。果たしてこの部活の活動目的、そして部員は誰なのでしょうか。

第二千百七十八話　　完

２０１１・７・１３

第二千百八十一話　部活が酷過ぎる

第二千百八十一話　部活が酷過ぎる

ドイツは学園にどんな部活があるのかを調べてです。
うんざりとした顔で日本とイタリアに言いました。
「どうなっているんだ、この学校は」
「多いとは思っていましたがこれだけあったのですか」
「本当に色々あるんだね」
「とりあえずラクロスだのホッケーだの相撲だのゲーム研究会だの折り紙だの占いだのはわかる」
そうした普通の部活はだというのです。しかし。
「何だ、この一連の訳のわからない部活は」
「ええと、島国愛好会に？」
「他にはあんこ嫌い部もありますね」
「誰がこんな部活を許可したんだ」
ドイツはそのことが不思議でなりません。
「特にこの全ての起源は俺部。普通はこんな部活を認める奴はいないぞ」
「そこの部活にだけは関わりたくないですね」
日本は青い顔でこう言いました。
「恐ろしい部活ですから」
「日本心当たりあるんだ」
「太平洋にいればわかります」
欧州にはいないタイプの国がその部活にいるのではないかというのです。日本はそのことを考えただけで不吉な気持ちになりました。
そのうえで他の部活を見てみますと。
「よくこんなに変な部活が揃ってますね」
「俺も調べて呆れた」
ドイツから見てもです。部活の数が多いだけでなくその異様さに

おいても。この学園は普通ではありません。

第二千百八十一話　　完

２０１１・７・１４

第二千百八十二話　あまりにも悪い予感

イギリスは不吉なものを感じてです。フランスに言いました。
「ひょっとしてここの部員ってな」
「あいつかも知れないっていうんだな」
フランスもです。イギリスに対して言葉を返します。
「あいつだよな」
「そうだよ、あいつだよ」
そのです。まさに彼だというのです。
「こんな馬鹿な部活あいつ以外に考えねえだろ」
「だよな。全ての起源は俺ってな」
「普通の人間が考えつくか？」
「いや、それはないな」
フランスも言います。
「絶対にな」
「そうだよ。どうしたものだよ」
こう言うのでした。そして。
イギリスはうんざりとした顔で部室の扉に手をかけました。そのうえで。
開けようとしたところで。フランスに言われました。
「本当に開けていいんだよな」
「正直かなり嫌だけれどな」
「仕方ないな。どんな部活かを確めないとな」
「どうしようもないからな」
こうして嫌々です。二人はその全ての起源は俺部の扉を開けるのでした。それはまさに禁断の扉を開ける、そうしたものでした。

第二千百八十二話　完

2011・7・14

第二千百八十三話　部活一覧

第二千百八十三話　部活一覧

ドイツはそうした変わった部活を部室の黒板に書いていきます。
そのリストは。
「ブブセラブーブー部にうさぎなでなで部に」
「あんこきらい部に島国愛好会ってのもあるね」
「ああ、私島国愛好会に入っています」
日本はこうイタリアにお話します。
「インドネシアさんやアイスランドさんもおられます。イギリスさんもです」
「ああ、島国だからだね」
「他に台湾さんも」
島国愛好会は結構豪華な顔触れです、そしてその他には。
「国旗の赤は血液部ですか」
「ここにはオーストリアがいたな」
今度はドイツが言います。結構色々な人がいる部活みたいです。
その他には。
「一国ぼっち部だな。ここはだ」
「あっ、イギリスとかプロイセンいない？」
「あの連中は一国ぼっちなのか？特にプロイセンは」
相棒のドイツにしてはそこが首を傾げるところです。この部活はどうやら多分に主観的なところがあるようです。こうした部活がすらっとあります。
その中で日本はシェスタ部を見て言います。
「イタリア君にロマーノ君にスペインさんがおられるのでしょうか」
「わかった？楽しい部活だよ」
「お昼寝するだけなのでは？」
そんな部活もあります。尚生徒会は部活の立ち上げは申請があれ

ば全くと言っていい位ノーチェックで通してくれます。そこにこんな変な部活ができる事情があるようです。

第二千百八十三話　　完

２０１１・７・１５

第二千百八十四話　やっぱりこいつだった

第二千百八十四話　やっぱりこいつだった

イギリスとフランスは全ての起源は俺部の部室の扉を開けました。するとそこにいたのは。

「やっぱりな」

「こいつだと思ったよ」

韓国がいました。彼の顔を見てすぐにうんざりとした顔になります。

そしてそのうえで。こう言うのでした。

「何だよ。ありとあらゆるものを俺が起源って書いてるだけじゃねえか」

「しかも日本のやつが圧倒的に多いな」

ソメイヨシノなり剣道なりお寿司なり盆栽なり折り紙なりです。他には柔道やそうしたものもです。俺が起源なんだぜと壁紙だのそんなのに書きまくっています。

そんな部室の中を見てです。二人はまた言いました。

「で、部員何人いるんだよ」

「御前だけか？」

「んっ？生徒会の名無しの役員なんだぜ？」

韓国はやっと二人に気付きました。それまで机に座って何かを書いていたのです。

彼等に気付いてです。こう言うのでした。

「部費上乗せしてくれるんだぜ？それなら歓迎なんだぜ」

「いや、それは絶対にねえから安心しろ」

「っていうかどうやったらそんな都合のいい発想を抱けるんだよ」

二人のうんざりとした顔はそのままです。とにかく部室の中を見回すと。

「いるの手前だけじゃねえのか？」
「活動内容はわかるにしても誰がこんな部活認めたんだよ」
二人はまだ知りませんでした。誰がこの部を認めたのか。そのことを知った時二人は奈落に落ちます。そしてそれはこれからなのでした。

第二千百八十四話　　完

２０１１・７・１５

第二千百八十五話　顧問いるのか

第二千百八十五話　顧問いるのか

こうした数多い訳のわからない部活の一覧を見てです。ドイツはふと言いました。

「部活には顧問が絶対にいるな」

「はい、先生の人がお一人は」

「こうした部活にはいるのか？」

日本にこう言います。

「そもそもだ」

「そういえばそうですね。島国愛好会にしても」

日本は自分が所属しているその部活から考えます。

「顧問の先生は見たことがありません」

「そうか。見たことがないのか」

「あれっ、そういえば」

イタリアはもっと凄いことに気付きました。そのことは。

「うちの学校って先生いるのかな」

「待て、先生のいない学校があるのか」

「だって。顧問の先生も見ないし」

そもそもです。この学校では。

「授業やってる記憶もないしさ」

「そんな学校があってたまるか」

「けれどさ。ドイツも授業受けた記憶ある？」

イタリアは話の核心を指摘しました。

「俺ないけれど」

「そういえばだ。ないな」

ドイツも気付いたのです。どうやらこの学校は生徒はいますが先生はいないかも知れないのです。だから顧問の先生も見当たらないのでしょうか。

第二千百八十五話　完

2011・7・16

第二千百八十六話　主張されない国

第二千百八十六話　主張されない国

全ての起源は俺部の部室に入ってみたイギリスとフランスはです。
部の貼り紙や会誌を見てです。あることに気付いたのでした。
「サッカーとかベッカムのことは書いてるけれどな」
「欧州のことは殆んど書いてねえな」
このことに気付いたのです。
「日本とか中国とかアメリカか」
「英語の起源っていってもアメリカを見てのことなんだな」
「兄さんは欧州に興味がないニダ」
二人の傍に韓国妹が来てお話します。
「だからニダ」
「そうか。そういえばいつも日本の傍にいるからな」
「だから日本が圧倒的に多いのか」
二人もこのことがわかりました。
「成程な、興味がないと起源の主張はされないのか」
「そういうものなんだな」
「そうニダ。とりあえずこの部活の活動は」
どういったものか。韓国妹は細かくお話します。
「兄さんがこれはと思ったものの起源を主張することニダ」
「こいつの趣味がそのまま部活になったのか」
「それにしても凄い趣味だな」
イギリスもフランスも理解はしましたが納得はしていません。
とりあえず韓国がイギリスやフランスにはこれといって興味がないことは二人にもわかりました。いいことか悪いことかは別にしまして。

第二千百八十六話　　完

2011・7・16

第二千百八十七話　先生はいた

第二千百八十七話　先生はいた

顧問どころか先生達すらいるかどうかわからなくなってきたこの学園。新聞部の面々もこの疑惑を前にして考える顔になりました。

イタリアもです。こう日本とドイツにお話しました。

「とりあえずさ。職員室探せばいいんじゃないかな」

「職員室。そうですね」

「先生はそこにいるものだからな」

日本とドイツもイタリアの言葉に頷きました。そうしてです。

新聞は職員室を探しに出動しました。そうしてすぐにでした。

目の前にです。そこがありました。

「あれっ、すぐに見つかったけれど」

「そうですね。正直驚きました」

「こんなに簡単に見つかるとはな」

ちゃんと職員室と書かれています。その札を見てです。

ドイツは考える顔になって日本とイタリアにお話しました。

「つまり先生はいるな」

「はい。職員室があるということはです」

「それは間違いないね。ただ」

ここでイタリアはこう言いました。

「どんな人達かな、うちの学校の先生達って」

「次の問題はそれですね」

「本当にどうした人達なのか。それが問題だ」

先生がいるということはわかりました。けれどその先生達がどういった人達なのか。学園最大の謎が今ここに明かされようとしています。

第二千百八十七話　完

2011・7・17

第二千百八十八話　許可した人達

イギリスとフランスは韓国に対してです。目を白くさせて問い詰めるのでした。

「それで誰がこの部活を許可したんだ？」

「アメリカか？中国か？」

自分達がしたとは考えてもいません。

「それともロシアか？御前最近あいつと付き合い深くなってきてるよな」

「一応言っておくがあいつと付き合うんだったらアメリカと中国に気をつけろよ」

「ああ、ちゃんと申請許可書があるんだぜ」

その部活の立ち上げを許可してもらう書類をです。今持っているというのです。

「ほら、ここに」

「ああ、それで誰がサインしたんだよ」

「あいつ等の誰なんだよ」

イギリスとフランスは半ばひったくるようにしてです。韓国からその許可書を受け取りました。そうして誰がサインしたのかをチェックしますと。

そこには二人の名前がありました。その名前とは。

「な、何でなんだよおい！」

「俺とイギリスになってるぞ！」

二人共髪の毛が逆立たんばかりに驚いています。

「俺こんな部活許可した覚えねえぞ！」

「サインもした記憶ねえぞ！」

「んっ？何か揉めてるんだぜ」

韓国はそんな二人を見てもあっけらかんとしています。
実はこの人はサインを貰ったらそれでよかったのです。何しろ生徒会役員のサインで部活の立ち上げが認められるのですから。本当にそれだけでよかったのです。彼にとっては。

第二千百八十八話　　完

２０１１・７・１７

第二千百八十九話　先生をしているのは

第二千百八十九話　先生をしているのは

新聞部の三人は職員室の中を覗いてみました。するとそこにいたのは。

三人の上司だったりかつてそうだった人達もいました。今日本の一番偉い上司の人もいますが誰からも相手にされていないのに舞い上がったことばかり言っています。

その人を見てです。日本は不機嫌な顔になってドイツとイタリアに言いました。

「まさかあの人がですか」

「そうだな。どうやらな」

「先生をやってるみたいだね」

「私の国ではいい鉄は釘にはならないしいい人は先生にはならないですが」

残念ですがそうした人が多いのも事実だったりします。日本の学校の先生の質は性犯罪者は暴力常習者が大手を振って歩ける程までなのです。

それで日本はです。妙に納得した感じで言いました。

「成程、あの人ならです」

「学校の先生に相応しいか」

「あの人ならなんだね」

「はい、最早自分が居座ることしか考えていない人です」

日本も上司に対する敬意を払っていません。

「何の教科を担当しているかは知りませんが」

「そもそも人に教えられる能力があるのか？」

「普通に生きていけるかどうかすらわからないような人だけれど」

「困ったら怒鳴って勝手なことを言うだけの人ですから」

世間はそうした人は誰にも相手にされません。普通は。
けれどあの人が教師をやっているとわかって妙に納得した日本でした。何はともあれこの学園の先生は各国の上司やそうだった人達が務めています。

第二千百八十九話　　完

２０１１・７・１８

第二千百九十話　許可した時は

第二千百九十話　許可した時は

とにかく全く身に覚えのないイギリスとフランスは韓国に対して抗議する口調で問い詰めます。

「だから俺達覚えがねえんだよ」

「こんな書類にサインした覚えはな」

「俺はちゃんと出したんだぜ」

けれど韓国は平然として二人に返します。

「だからこうして部として存在してるんだぜ」

「くそっ、これは確かに俺の字だ」

「使ってる文字だけじゃなくて筆跡も同じじゃねえかよ」

二人も認めるしかない、そのサインでした。

けれどどうしても記憶にない二人はです。まだ言うのでした。

「本当に何時サインしたんだよ」

「ずっと忙しくて書類の一枚一枚なんて碌に見ていないけれどな」

「その時ニダ」

ここで韓国妹が二人に突っ込みを入れます。

「兄さんが出した許可申請書を見ないまま」

「げっ、それでかよ」

「それでこの部活ができたのかよ」

二人もここでやっと気付きました。

「本当に忙しくてサインするだけで済ませていたからか」

「こんな部活認めちまったってのか」

「できた部はもうそのまま活動していくニダ」

二人は今になって恐ろしいことをしてしまったことを認識したのです。とはいってもこの人達は主張はされませんが。主に日本がされることです。

第二千百九十話　完

2011・7・18

第二千百九十一話　見れば色々

第二千百九十一話　見れば色々

ふとです。イタリアは職員室のある人に気付きました。その人は誰かといいますと。

「あの人って確かフランス兄ちゃんの」

「そうだな。ジャンヌさんだな」

生きていたという説もあるその人がです。職員室にいるのです。

「そうか。やはり生きていたのか」

「何か他にも色々な人がいるね」

「ああ。大抵はそれぞれの国の上司の中でも立派な人達だな」

日本の上司は除外されています。二人の中でも。

「流石に人に教えるとなるとな」

「立派な人じゃないと困るからね」

「そうであって欲しいものです」

日本は二人のお話にしみじみとした顔で応えました。

「私の家ではそうしたことにはなっていないので」

「そういえば日本のところの先生達って凄いよね」

「異常な人間が多過ぎるな」

「残念ですが」

日本においては学校の先生は本当に酷いです。その質の酷さが前の戦争が終わってからの日本の困っていることの一つなのです。

例えば今職員室の中で完全に孤立している今一番偉い上司みたいな人も一杯いるからこそ。

「どうにかしたいのですが」

「他にマスコミとか弁護士とかも酷くない？」

「日本にも泣きどころがあるのだな」

こうした職業の人達の酷さが日本の今の悩みなのです。特にフジ

は日本のテレビではないのではないかとさえ言われています。

第二千百九十一話　　完

２０１１・７・１９

第二千百九十二話　サインしたからには

第二千百九十二話　サインしたからには

忙しい中で書類の中身を全く見ずにサインしていたことがわかったイギリスとフランス。自分達が一番そのことに困ることになりました。

「しまった、っていうかな」

「とんでもねえことをしちまったな」

二人で言います。

「どうする？廃部とかってできたか？」

「生徒会にその権限ねえぞ」

何とこの学園は部活の立ち上げは申請すればまず確実に、どんな部活でも通ってしまうだけでなく生徒会に廃部の権限はないのです。つまり。

どんな部でも立て放題なのです。このことについです。

フランスは沈みきった顔でイギリスに言いました。

「とんでもねえことだよな。考えてみれば」

「洒落にならない不祥事起こさない限り廃部にはならないしな」

しかもその決定権は生徒会にはありません。

「つまりこの訳のわからねえ部活もな」

「このまま残るからな」

「ったくどうすればいいんだよ」

今度はイギリスが沈みきった顔で言います。

「他にも訳のわからねえ部活ありそうだしな」

「部活一覧見たらすげえのが山みてえにあるぞ」

何と生徒会は学園の部活を全て把握している訳ではないのです。

そんな二人が気付いた全ての起源は俺部の存在、韓国が熱心にありとあらゆること、その大半は日本に関することの起源を主張して

います。

第二千百九十二話　完

2011・7・19

第二千百九十三話　あんこについて

第二千百九十三話　あんこについて

日本のお菓子にはあんこがよく使われます。日本にとっては昔から非常によく使っている馴染みの甘みです。けれどこれが他の国には。

「最初は受け付けなかったよ」

「俺もだ」

イタリアとドイツが難しい顔で日本にお話します。

「何ていうかね。甘いことは甘いけれど」

「食感もその甘さもな」

「ううむ、意外ですね」

日本も二人の言葉を聞いてです。

難しい顔になってそれで、です。こう言うのでした。

「あんこは馴染めない方が多いようですね」

「癖がある甘さだから」

「最初は本当に驚いた」

「癖がありますか」

日本にとってはこれも意外なことでした。

「あんこには癖がありますか」

「結構以上にね」

「そう思うが」

「左様ですか」

そう言われても日本自身はぴんときません。実際にあんこをたっぷりと使ったおはぎを食べてみます。そうしてもやっぱりなのでした。

「そうは思いませんが」

どうもあんこは癖が強いようです。日本もはじめて知ったことでした。

第二千百九十三話　完

2011・7・20

第二千百九十四話　これはまだ許せる

第二千百九十四話　これはまだ許せる

オランダがです。アメリカと中国とロシアに部活申請書を出しました。その部活は。

「あっ、ナイスな部活じゃないか」

「うん、これはいいあるな」

「オランダ君センスあるね」

三人が手放しでいいと言うその部活とは。

何とうさぎなでなで部です。オランダは無表情な顔で三人に申請書を出したのです。

その無表情で無愛想な様子とは正反対に。オランダは物凄く可愛い部活を立ち上げようとしています。けれど三人はそのことについては全く言わないで。

そのうさぎについてです。こうオランダに尋ねました。

「サインしたからもう部活はできたぞ」

「それではこれからあるが」

「僕達もお邪魔していいかな」

三人にしても期待の部のようです。犬と猫と兎とハムスターは動物の中でも華です。だからなのでしょうか。

「いや、こんな部活を待っていたんだ」

「いい部活ができたあるな」

「オランダ君って凄くいい人だね」

「ペットは好きだからな」

オランダは感情の読み取れない声で述べます。けれどでした。

ここにうさぎなでなで部ができたのです。その人気は。

「入部させて下さい」

「御願いします」

部員が次から次にとやって来ます。オランダは忽ちのうちに一大

勢力を築いてしまいました。まさにうさぎ恐るべし、そうとしか言えません。

第二千百九十四話　　完

２０１１・７・２０

第二千百九十五話　あんこの意味が

第二千百九十五話　あんこの意味があんこきらい部にはノルウェーもいます。けれど彼はです。

「食べ物のあんこは好き」

「あっ、平気だ」

イタリアはノルウェーがそのあんこをたっぷりと使ったおはぎを食べるのを見て少し驚きました。彼はあんこ自体については何の問題もありません。

けれどです。あんこはです。

「それは嫌い」

「けどあんこ食べてるじゃない」

イタリアにはよくわからないことでした。

「訳がわからないよ」

「インキュベーダーの真似はよくないだ」

ノルウェーはイタリアに突っ込みを入れます。それで、でした。

そのあんこの意味をです。こう説明するのでした。

「あんたって意味だから」

「じゃああんた嫌いってこと？」

「そだ。僕が嫌いなのは」

誰かといいますと。その人は。

「言わずもがな」

「えっ、言わないんだ」

イタリアはこの展開にびっくりしました。ここまできたら絶対に言うと思ったからです。けれどノルウェーはそれについては何も言わずにでした。

ちょっとデンマークを指でつんつんとしだしました。デンマークはそんなノルウェーに笑っています。あんことは色々な意味がある言葉なのです。

第二千百九十五話　完

2011・7・21

第二千百九十六話　やはり策士だった

第二千百九十六話　やはり策士だった

うさぎなでなで部は物凄い勢いで部員を集めています。

オランダは忽ちのうちに一大勢力を築いてしまいました。そのうえで、です。

生徒会にも予算を認めさせます。勢力が大きいので生徒会としてもです。

「まあ他の訳のわからねえ部よりはずっとましだからな」

「別にいいけれどな」

イギリスもフランスも周りに兎達を置かれてすぐに許可します。

そのうえで兎達をなでなでします。これはある意味において凶器です。

こうして部費も手に入れてです。さらにでした。

オランダは兎の数も小屋の設備も充実させています。そしてそれがさらにでした。

部員を呼んでまた部費を手に入れて。これはまさに。

「何やこれ。順調な商売みたいやん」

「そやな。上手くいってる」

こうベルギーに返すオランダでした。

「全て順調や」

「兄ちゃんひょっとして」

「兎は可愛い」

まずはこれが第一にあります。

「人は可愛いものに惹かれるからや」

「そこまでわかって部を立てたんかいな」

「かもな」

そこはあえて否定しませんでした。

かくしてうさぎなでなで部はさらに大きくなりオランダの発言力

も拡大していっています。恐つべきはオランダです。やはり彼は策士でした。

第二千百九十六話　　完

２０１１・７・２１

第二千百九十七話　島国といえば

第二千百九十七話　島国といえば

次の部活は島国愛好会です。この部活は。
「僕もいるのですよ！」
「君誰なの？」
イタリアはいきなり出て来たシーランドにびっくりしています。
「何か最近結構見るけれど」
「シーランド、シー君なのですよ」
シーランドは胸を張ってイタリアに答えます。
「今は小さいけれどやがて世界一の大国になるのですよ」
「そうなんだ。君もこの学校の生徒だったんだ」
「そうなのか？はじめて聞いたぞ」
ドイツもです。こう言うことでした。
「こうした国もいたのか」
「そうなのです。よく覚えておくのです」
ドイツに対しても胸を張るシーランドでした。
「イギリスの野郎にも負けないのです」
「ああ、そういえばです」
日本はここで気付きました。その気付いたこととは。
「最近イギリスさんが全然言うことを聞かない方がおられると言っておられました」
「シー君はイギリスの野郎とは別なのです」
自分で言ってしまうシーランドでした。この辺りとても迂闊ですが本人は自覚していません。この辺りまだまだ子供だと言えます。
そして新聞部の面々はそのシーランド、そして日本に対してです。
島国愛好会とはどういった部活なのかを聞くことにしたのでした。

第二千百九十七話　完

2011・7・22

第二千百九十八話　海がない

第二千百九十八話　海がない

多くの部活の中に海欲しい部というものもあります。その部の構成員はといいますと。

「我輩である」

「私も在籍させてもらっています」

「おい、何やこの如何にも物騒な感じの部活は」

四方が海のキューバはスイスを見てすぐにこう言いました。とりあえず一緒にいるリヒテンシュタインのことは置いています。まずはスイスでした。

「物騒にも程があるやろ」

「むっ、貴様は確か島国愛好会の一員の」

「そや、キューバや」

葉巻をふかしながら堂々と言うキューバの姿は学生には見えません。

「日本もいればセーシェルもいてアイスランドもおる。中々ええ部活やで」

「貴様等にはわからん」

スイスはむっとした顔でそのキューバに返します。

「この部活のことはだ」

「まあ。島国は海に囲まれてるさかいな」

キューバにとって海は欲しいとは思わないものです。本当に四方が海ですから。

けれどスイスには海はありません。そのパラドックスの結果。

スイスはキューバを睨みつけてです。こんなことを言いました。

「海を寄越すのだ」

「俺に言うてもどうにかできる問題やないやろ、それは」

「そうであるな。失礼した」

「というかそこまで欲しいものなんやな」
キューバにもこのことはわかりました。スイスにとっては切実な願いなのです。

第二千百九十八話　完

２０１１・７・２２

第二千百九十九話　結構個性的な

第二千百九十九話　結構個性的な
島国愛好会は日本にイギリス、シーランドの他にもです。
「僕もいるしね」
「俺もやな」
インドネシアにキューバが出て来ました。この人達も部員です。
他には。
「私もそうよ」
「私も」
台湾にセーシェルもでした。
「島国だったら誰でも入られるのよ」
「入部基準はそれだけだから」
だからこんなに個性的な面々が集まっているのです。その他には。
「私もばい」
「そうそう。ニュージーランドもね」
インドネシアはそのニュージーランドを見て言います。
「一緒なんだよね」
「そうばい。ついでに言うと」
ニュージーランドはここで爆弾発言をしてきました。その発言は何かといいますと。
「私男たいよ」
「えっ、そうだったの！？」
「そうたい。今まで気付かなかったばい？」
「っていうか外見から女の子と思ってたけれど」
インドネシアは驚きながらニュージーランドに言葉を返します。
何とです。
ニュージーランドは男の子でした。これには皆騒然となりました。
そうした意味で彼はです。クー＝ロスチャや足利勇気と同じだった

のです。

第二千百九十九話　完

2011・7・23

第二千二百話　サウンドオブミュージック

第二千二百話　サウンドオブミュージック

海が欲しい部にはです。オーストリアさんとハンガリーは入っていません。それはどうしてかというとです。オーストリアさんが直接キューバにお話します。

「昔は海があったので」

「ああ、そういえば領土にあったな」

「そうです。バルカン半島の方に」

オーストリアさんの領土は昔は今よりずっと広かったのです。それでなのです。海があったのです。これは二重帝国だったハンガリーも同じです。だからオーストリアさんとハンガリーはその部活には入っていないのです。

「ハプスブルク家は海にも縁がありましたし」

「ああ、それは知ってるわ」

キューバもそのことは知っていました。

「スペインの上司でもあったからな」

「はい、それはオーストリアも同じでして」

「それでやったんやな。海が欲しい部にはおらへんねんな」

「その通りです」

オーストリアさんはまたキューバに答えました。

「今も川を使って移動しています。水には縁があります」

「ドナウ川なあ。あんた結構恵まれてるな」

「自覚はあります」

「まあ俺は四方海やしそのことは同じやけれどな」

キューバもこんなことを言います。

オーストリアさんは海が欲しい部には入っていません。今この人は海軍を持っていませんがそれでもです。歴史的な事情からそうな

のです。

第二千二百話　完

2011・7・23

第二千二百一話　それが活動なのか

シェスタ部の活動はといいますと。
「気持ちよくお昼寝することだよ」
「それが活動なのか？」
ドイツは呆れ切ってイタリアに突っ込みを入れました。
「部活になっているのか、それが」
「駄目かな、シェスタしたら」
「駄目ではないが部活にはならないだろう」
真面目なドイツから見ればです。それはとても部活ではありません。
けれどイタリアはです。いつもの能天気な調子で言うのです。
「いい部活だよ。とても楽しいよ」
「寝るだけだったらそれはそうだろう」
「だからさ。ドイツもどうかな」
「他にはどんな部員がいるんだ？」
ドイツは答える前にこのことを尋ねます。
「御前だけではないな」
「スペイン兄ちゃんとロマーノ兄ちゃんがいるよ」
どちらもシェスタ大好きな人達です。その他には。
「フランス兄ちゃんも時々ね。ワインを飲みながら楽しく寝るんだよ」
「遠慮する」
顔触れまで聞いてです。ドイツははっきりと答えました。
「俺がいれば確実に喧嘩になるからな」
イタリアとスペイン以外の面子を見るとそうなります。それに元々そうした部活はです。どう考えてもドイツには合わないものでし

た。

第二千二百一話　完

2011・7・24

第二千二百二話　一国ぼっちとはいっても

第二千二百二話　一国ぼっちとはいっても

一国ぼっち部。名前だけ聞くととても孤独そうです。しかし部員は。

「俺もいるんだがな」

「貴方は孤独ではないと思いますが」

オーストリアさんが胸を張って部員だと言うプロイセンに突っ込みを入れます。

「特には」

「まあな。俺には相棒がいるからな」

「ドイツですね。それでは孤独ではないでしょう」

「それでもいるんだよ」

何故か孤独と見られることを好むプロイセンです。けれど彼はいつもドイツと一緒にいるので間違っても孤独ではありません。そのことは間違いありません。

その他にもです。イギリスもいますが。

「あいつも妹さんいてシーランドみたいなのがいていつもフランスと一緒だからな」

「全然孤独ではないですね」

「日本はあそこの馬鹿上司やマスコミが言ってるだけだからな」

何処かのテロリストと付き合っていないと日本は孤立していると言う人達なのです。死ねば間違いなく舌を抜かれます。嘘吐きですから。それに日本はこの部活には入っていません。そもそも。

こんなのでどうもこの部活は構成員自体が孤独ではありません。ですが。

「何か一人いるんだけれどな」

「一人とは？」

「いつも熊と一緒にいるな。誰だろうな」
「ロシアではないですね」
ロシアもロシアで孤独ではありません。いつもフランスと同盟を結んでいますしこのオーストリアさんともお付き合いが深いです。では誰なのでしょうか。

第二千二百二話　完

２０１１・７・２４

第二千二百三話　赤い色は

第二千二百三話　赤い色は

国旗の赤は血液部。この部活についてはです。

日本があからさまに嫌そうなオーラを出してドイツとイタリアに言います。

「私がその部活にいればです」

「待て、あいつはもうあの国旗ではないぞ」

ドイツはその日本に言いました。

「あれだな。あの赤は労働者の血の色だったな」

「はい、ですから」

その国旗はどの国の国旗だったかというとです。

「あの人は赤を好んでおられたのです」

「クレムリンだったな」

「だからです。私がその部活に入れば」

何処からか刀まで出して。日本は本気モードで言います。

「ロシアさんと衝突するでしょう」

「何か日本ってロシアのことになると」

イタリアもそんな日本を見て言います。

「物凄く危険なんだけれど」

「それだけ因縁のある相手だからな」

「日本がそうした反応見せるのってロシアだけじゃない？何か今にも殺し合いはじめそうな雰囲気がいつも漂ってるしさ」

とにかくロシアとは仲の悪い日本なのです。もっともこれはこの人だけでなくです。ドイツはイタリアにこんなことを言いました。

「太平洋でロシアと仲良くすると日本だけではなくアメリカと中国も嫌な顔をするからな」

「あの二国もなんだ」

日本だけではなかったりします。もっともこの二国は必要に応じ

て表向きはロシアと仲のいいふりをしますが。

第二千二百三話　　完

２０１１・７・２５

第二千二百四話　赤は多い

第二千二百四話　赤は多い

赤は血の赤とされています。けれどそれ以外にもです。
日本はです。自分の国旗の赤についてお話します。
「太陽の輝きですから」
「日章旗はそうだったな」
「太陽そのものだったよね」
「それにドイツさんとイタリア君も国旗には」
二人共です。実は。
「赤がありますね」
「俺の赤は軍服の赤だった」
「俺の赤は俺への愛情を示してくれているんだ」
それぞれそうした意味があるのです。
「もっとも俺の赤も血の色だという説もあるが」
「俺も熱血だから血になるかな」
この辺り血液部になるかも知れません。
「とにかくだ。枢軸は全部赤が入っているな」
「ハンガリーと台湾も入ってるしね」
イタリアはスウジクファイブの女の子二人についてもそうだと言います。
「それとオーストリアさんも」
「赤は多いな」
「そうだよね。枢軸組皆だから」
何とです。全員に赤が入っているのです。
日本の赤は太陽の赤です。他の人は血だったり色々ですけれど。
とにかく赤は多くの国に使われている色なのは間違いありません。

第二千二百四話　　完

2011・7・25

第二千二百五話　オーストリアさんの赤も

第二千二百五話　オーストリアさんの赤も

何とか日本を説得してです。新聞部の面々は国旗の赤は血液部に行きました。部室に辿り着くと今度はドイツが暗い顔になりました。

それで、です。こう言ったのでした。

「そういえばこいつの赤もそうだったな」

「おや、新聞部の面々ではないですか」

オーストリアさんがいました。部室の中で優雅にコーヒーを飲んでいます。

そのオーストリアさんがです。ドイツに対して尋ねます。

「あれですね。私の国旗の赤は」

「血の色だったな」

「そうです。かの十字軍遠征の時にです」

話が滅茶苦茶昔に遡ります。

「その時にレオポルド大公の白い軍服が敵の返り血で」

「赤くなったことからだな」

「そうです。白は大公の軍服で」

そして赤はといいますと。

「赤が返り血です」

「そうだったな。御前の国旗はな」

「他にはハンガリーもそうですよ」

「そうだよね。オーストリアさんもハンガリーさんもだよね」

ドイツとは対照的に凄くお気楽そうなイタリアです。

「赤って確かに血の色だからな」

「はい、まさにその赤です」

意外にもです。優雅なオーストリアさんの国旗は血の色を描いているのでした。オーストリアさんの意外な一面です。

第二千二百五話　完

2011・7・26

第二千二百六話　連合にしても

第二千二百六話　連合にしても

よく見れば連合の面々もです。全員。
「赤はイギリスの赤だぞ」
「上司の色ある」
「愛と勇気と国民の色なんだ」
「四つの国を合わせて作ってその中にあったんだよ」
「博愛さ。俺に相応しい色だろ」
五人共です。その国旗の中にあるのです。
それを見てです。日本は言いました。
「では枢軸の私達も連合の皆さんも赤は」
「必須になっているな」
「思えば面白い一致あるな」
日本にアメリカと中国が答えます。
「何か他にもいなかったか？連合の国で赤は」
「一人いたと思うあるが」
「そういえば連合は皆さんの他にも」
大勢いるのです。オーストラリアやニュージーランドも連合です。
その他にも色々な国が連合に加わっているのです。
けれどここでもう一人というのは。連合の会議の中でいつも置いてある席の主です。その人はといいますと。
「誰だったかな。いつもいないんだよな」
「それが気になって仕方ないある」
「そういえば連合は元々六人だったような」
日本も腕を組み考える顔になります。
実はカナダのことは三人共忘れてしまっています。同じ太平洋にいてもです。それでもカナダのことは忘れてしまっているのです。

第二千二百六話　完

2011・7・26

第二千二百七話　部員が多過ぎます

オーストリアさんとハンガリーだけでなくです。この国旗の赤は血液部にはです。

ベトナムもいます。その彼女が日本に笑顔で言います。

「新聞部の取材ですね」

「そうです。それで来たのですが」

「私もいるんですよ」

ベトナムの国旗は赤地に中央に黄色い一番星です。とても目立ちそのうえ奇麗な。いい国旗です。

その彼女がです。日本にお話します。

「革命で流れた血です」

「独立と革命で色々ありましたね、ベトナムさんは」

「はい、本当に」

そのことを思い出してです。ベトナムはしんみりとした顔になります。

そしてその顔で、です。日本にお話するのです。

「だからこそその苦労を忘れない為にです」

「ベトナムさんの国旗にもですね」

「赤があります」

その血液の赤がなのです。

「そうなんですよ」

「そうですね。ベトナムさんの赤は貴重な教訓でもありますね」

それは独立と革命の苦労を忘れない為のものなのです。そうしてそのうえで、です。これからの時代を生きる為の戒めにもしているのです。

とにかくです。ベトナムは。

国旗の赤、この部活において最もその目的に相応しい国だと言えるのはベトナムでしょうか。あまりにも苦労してきた娘だということも皆知っています。

第二千二百七話　　完

２０１１・７・２７

第二千二百八話　国旗も忘れられる

「ええと、何だったかな。国旗は覚えてるんだよ」
「誰の国旗か言ってくれたら思い出すある」
アメリカと中国はある時か左右が赤くなり中央に赤い楓がある国旗を見て言っています。実は二人はまだカナダの国旗を覚えていません。
それでなのです。また言う二人でいｓた。
「ほら。君の名前ね」
「何というあるか？」
「カナダなんだけれど」
ここでようやく名乗れたカナダでした。
「やっぱり国旗まで目立たないんだね」
「いや、そうじゃないぞ」
「ちょっと忘れていただけある」
二人のコメントは最早火に油を注ぐものでした。
その言動で、です。カナダは二人にお話します。
「だから。カナダなんだけれど」
「ああ、アメリカの南にある」
「むっ、何処かの秘境だったあるな」
「北だし。うちは秘境じゃないし」
このことを言わずにおれないカナダでした。その話を偽りだと言う為に。
それで、です。また言うカナダでした。
「国旗までなんて。酷過ぎるよ」
流石に今回はかなりへこんでいます。誇りである国旗までそういう扱いだったので。

弟二千二百八話　完

2011・7・27

第二千二百九話　まさかの優勝

第二千二百九話　まさかの優勝

日本もそのお話を聞いてびっくりしました。何とです。
日本妹の女の子だけのサッカーチーム、なでしこジャパンがです。
優勝したのです。
「それは本当ですか！？」
「ああ、ホンマや！」
「優勝したんですよ！」
大阪と能登が日本にお話しています。
「アメリカ妹のチームを破ってな！」
「金です、金！」
「信じられません」
日本は思わずこう言ってしまいました。
「まさか。本当に優勝するとは」
「いやあ、決勝に行っただけでも驚きやったけれどな」
「しかも優勝しましたから」
「近頃よくないニュースばかりでしたが」
一番上の上司は居座り続けていますし。日本は確かに暗いニュースばかりです。けれどその中で、なのです。なでしこ達・Jはやってくれたのです。
「元気が出てきました」
「ああ、わいもやで」
「女の子達が頑張ってくれてますから」
それならというのです。
「ここはな」
「頑張っていきましょう」
日本全体が喜びに包まれています。日本にとって久し振りのいいニュースでした。

第二千二百九話　完

2011・7・28

第二千二百十話　元気なこと自体が害

第二千二百十話　元気なこと自体が害

なでしこの優勝にです。辞めるとか言っていた一番上の上司もです。

無闇にへらへらしてです。こんなことを言います。

「俺も頑張るか」

「いえ、もう結構です」

日本はこの人には冷たいです。

「一刻も早く辞めて下さい。そうして私から出て行ってくれても構いませんから。貴方を受け入れてくれる国があるかどうか疑問ではありますが」

「いや、俺はまだやることがあるんだよ」

けれどです。この人はまだ言います。その性根が人と呼ぶに値するかどうかは置いておきまして。

「復興もあるしな」

「貴方が復興の一番の障害です」

最早そうなっています。

「大体後進に責任を譲るって言っておられましたね」

「辞めるとは言ってないぞ」

「その言葉はそうした意味です」

最早詐欺師の言葉です。日本も指摘します。

「それははっきり聞いています」

「くっ、何故そこまで言われないとならんのだ」

「貴方がこのうえなく無能で卑怯で卑屈で下種で嘘吐きで怒鳴ってばかりだからです」

最早最低人間のサンプルです。

この人は無闇に元気です。そして。

日本と日本の人達はさらに冷たい目で見ています。それにしても

この人を一番上の上司にした人達は一体何なのでしょうか。マスコミの人達は。

第二千二百十話　　完

２０１１・７・２８

第二千二百十一話　国民栄誉賞

第二千二百十一話　国民栄誉賞

見事優勝した日本妹となでしこ達にです。賞賛の声が送られ続けています。

「凄いですね、何か」

「当然のことです。今の我が国は」

日本が賞賛に驚いている妹さんにお話します。

「暗いお話ばかりでしたから」

「そうですね。あの人はまだ上司にいますし」

「それが一番暗いお話です」

本人だけが無闇にへらへらしています。信頼をなくそうがどれだけ批判されようが居座れればいいという人も世の中にはいるのです。

けれどそうした中で、だからです。なでしこ達は。

「私も国民の皆さんも頑張れます」

「そこまでなんですね」

「そうです。貴女は本当にやってくれました」

日本も妹さんを褒めます。

「なでしこさん達も」

「まぐれかも知れないですけれど」

「いえ、実力です」

それは間違いないというのです。

「実力がない人が一番上の上司になれてもです」

「優勝はできないんですね」

「はい、だからです」

実力で優勝できたというのです。この活躍は今の日本にとってはまさにです。国民栄誉賞ものでした。これ以上はないまでのことでした。

第二千二百十一話　完

2011・7・29

第二千二百十二話　表彰は報道しない

第二千二百十二話　表彰は報道しない

おかしなことにです。なでしこの優勝をです。

あるテレビ局は表彰の場面は放送しませんでした。このことにです。

日本も首を捻って大阪に言います。

「妙ですね」

「というか最近あのテレビ局めっちゃ変やで」

大阪はそのテレビ局自体がおかしいというのです。

「フィギュアの人の写真こけてる場面わざと本人の前に出したリとかキムチチゲとかあっちのピザとかが全年代でトップとか。そもそもや」

「韓国さんプッシュが凄いですね」

「何かあるんちゃうか？」

大阪も真剣に疑っています。

「あのテレビ局は」

「そうかも知れないですね。最近のあそこは」

「月曜のドラマもコメディーとか言っておいてや」

「酷いどろどろドラマでしたし」

もうその作品の出来が最悪でした。見れば後悔するまでに。

「ドラマが看板のテレビ局だというのに」

「それの質も落ちてて」

「あとバスケでいじめでしたね」

「あんなん放送したらあかんやろ」

何か問題まみれです。

とにかくおかしなことになっているそのテレビ局です。日本も大阪もです。そのあまりもの異様な事態に気付いたのです。俳優さんのツィッターといいです。

第二千二百十二話　完

2011・7・29

第二千二百十三話　兄弟仲も酷かった　☆

第二千二百十三話　兄弟仲も酷かった　☆

イギリスの兄弟は多いです。
実は彼にはお兄さん達がいるのです。けれどその人達とは。
「俺見ると弓矢撃ってくるし」
そこまで仲が悪かったのです。
「フランスは攻めてくるしな」
こうユニコーンに漏らしています。
「一人は辛いよな。御前等がいないとな」
「おい」
そのカｒネイです。声をかけてきた人がいました。その人は。
「イギリス、いいか」
「えっ、御前は」
イギリスが声の方を振り向くとです。そこには。
神聖ローマがいました。それも人を大勢引き連れてです。
「神聖ローマ、何でここに！？」
「今日は御前に贈りものがある」
「贈りものって何なんだよ」
とはいってもです。贈りものを貰って嬉しくない人はいないので。
イギリスも素直にです。感謝の言葉を述べます。
「有り難うな、いきなり来てくれて訳わかんねえけれどな・・・・・・ってお い」
「かかれ」
神聖ローマは引き連れている大勢の人に命令してです。そうしてなのでした。
イギリスのお家に何かを築きはじめました。いきなり物凄い展開になっています。イギリスもこれには呆然となってしまいました。

第二千二百十三話　完

2011・7・30

第二千二百十四話　本当にやったことだから凄い

第二千二百十四話　本当にやったことだから凄い

イギリスは昔よりはずっと人付き合いがまともになっています。けれど中にはこんな国がお邪魔しに来ることがあったりします。

「知らない国だけれど来てやったんだぜ」

「いい加減欧州のこと覚える気にならねえのか？」

今日は韓国が来ています。上司の訪問に同行しているのです。

そしてその韓国の上司がです。イギリスの上司に贈りものをしました。それは。

「・・・・・何だよこれ」

「知らないのか？ＤＶＤっていうんだぜ」

「そんなのみりゃわかる。だから何でＤＶＤなんだよ」

普通国際関係においての贈りものではありません。しかもです。

そのＤＶＤはです。何と。

「御前のところのドラマじゃねえかよ」

「そうなんだぜ。俺が誇る韓流ドラマなんだぜ」

「それが御前の上司の俺の上司への贈りものかよ」

イギリスはいつもの白目なって韓国に言い返します。

「嘘じゃねえな、一応確認するが」

「まあ日本も観ているドラマを観て楽しむんだぜ」

「だから俺は日本じゃねえ」

まずこのことから突っ込みを入れるイギリスです。

「というかこんな贈りものはじめてなんだがよ」

「はじめてだから余計に嬉しい筈なんだぜ」

皮肉も何も通用しません。とにかくです。韓国も彼の上司も平然としてです。そのＤＶＤをイギリスの上司の贈りものにしたのでした。

第二千二百十四話　完

2011・7・30

第二千二百十五話　神聖ローマの贈りもの　☆

第二千二百十五話　神聖ローマの贈りもの　☆

「できたぞ」
「いきなり何しやがるんだ！」
神聖ローマにです。イギリスはまず抗議で返しました。
「という訳でだ」
「という訳で、じゃねえ！」
「このイタリア建築は俺からの贈りものだ」
「何勝手に家建ててんだあああ！」
イギリスもこれには抗議します。
「大体御前の家で建てればいいじゃねえか！」
「気候が合わない」
「じゃあ俺んちもっと合わねえよ！」
イギリスはとても残念な顔で合わないと言う神聖ローマに突っ込み返します。
「何考えてんだ！」
「じゃあどうするんだ」
「まあ折角作ってくれたからな」
ところがです。イギリスは素直ではないので。そのイタリアの家の中に入ってです。
「住んでやる」
「どうだ、イタリア建築はいいだろう」
「気候が合わねえ、やっぱり」
イギリスとイタリアでは気候が全然違うからです。それで実際に住んでみてもでした。
「何か違うんだよ」
お家もそれぞれの国の文化です。イギリスにはイギリスのお家が

あります。それでどうしても合わないのでした。残念なことに。

第二千二百十五話　　完

２０１１・７・３１

第二千二百十六話　この家は違う

第二千二百十六話　この家は違う

日本のお家にです。オランダがお邪魔して言います。

「この家もそうやな」

「忍者屋敷ですか」

「そや。和風やし」

オランダはお家の中のあちこちを見回しながら日本に言います。

「そこいらに抜け道があったり隠し通路があったりするんやな」

「いえ、そういうことはありませんが」

日本はそのことは否定します。

「ごく普通の家です」

「何や、そうなんかいな」

「確かにそうした屋敷もあることにはありますが」

伊賀の方にです。実際に再現しているのです。

「ですがここは私の家ですから」

「別に何もないんやな」

「どちらかというと武家屋敷です」

日本にいるのは忍者だけではないのです。武家屋敷もあります。

「私はお庭で毎日竹刀を振っていますよ」

「それはそれで面白いな」

オランダは無表情なまま今度はそのお庭を見ていいます。見事なまでに日本風のそのお庭をです。

「日本らしいわ」

「私らしくてですか」

日本のお家は忍者屋敷ではありません。けれどとても中身が整っている奇麗な武家屋敷です。日本はそこに静かに住んでいるのです。

第二千二百十六話　完

2011・7・31

第二千二百十七話　戦争になったら

第二千二百十七話　戦争になったら

神聖ローマからイタリア建築のお家を貰ったイギリスでした。ですがイギリスの気候に合わないことに苦しい思いをしているうちにです。

そのイギリスで戦争が起こりました。彼にとっては困ったことに。そしてその困ったイギリスのところにです。また神聖ローマが来たのです。

「何だよ。別に介入しに来た訳じゃないだろ」

「安心しろ。御前の国は雨が多いから興味がない」

「ああ、そうかよ」

イギリスにとっては何か嬉しいような嬉しくないようなコメントです。少なくとも彼がイギリスに対して攻め込んできたということはありません。

ではどうして来たかというとです。

「イタリアの家だが」

「ああ、あの家な」

「御前のところが戦乱になったから壊される恐れがある」

戦争になれば建物も壊されます。このことは昔から変わりません。

それでだと。神聖ローマは言います。

「だからだ。今から解体して持って帰る」

「おい、俺にくれたんじゃないのかよ」

「壊されるのは嫌だ。イタリアのものがそうなるのはな」

「俺はどうなってもいいのかよ」

「知らん。適当にやってろ」

「御前はイタリアさえよかったらいいのかよ！」

「そうだ。その通りだ」

堂々と言い切ってなのでした。神聖ローマはイタリア建築のお家

を解体してです。帰って行ったのでした。

第二千二百十七話　　完

2011・8・1

第二千二百十八話　面影？

イタリア建築を持って帰られたことはイギリスにとってはいい思い出ではありません。若しい思い出ならイギリスはかなりのマゾになります。

それでそのことをオーストリアさんにお話したことがあります。

「あいつにも困ったものだったよ」

「そうですね。あの子はあれで結構手がかかりました」

「御前のところにいたんだったな」

「そうです。けれど今は」

神聖ローマがどうなったかというとです。

「いませんが」

「そうだな。ドイツはいるけれどな」

「ドイツが彼にそっくりですが」

オーストリアさんはふとこんなことも言いました。

「ですがもう彼はいません」

「ああ。けれど不思議だな」

「不思議とは？」

「いや、あの頃の神聖ローマがどうなったかってことをな」

そのことについてです。イギリスはあることに気付いたのです。

「誰も覚えていないからな」

「そうですね。ドイツが彼に似ていると思いますが」

「あいつどうなったんだろうな」

「ドイツも急に出て来ましたし」

誰もその頃のことはよく覚えていないのです。そのドイツもイタリアもです。神聖ローマのことは果たして遠い昔のことなのでしょうか。

第二千二百十八話　完

2011・8・1

第二千二百十九話　ギャンブラー

第二千二百十九話　ギャンブラー

中国の親戚にです。香港以外にもこんな人がいます。
黒髪を七三分けにして眼鏡をかけた外見は真面目そうな青年です。
彼はといいますと。
「こいつが前から噂になっているマカオある」
「あのギャンブラーの」
「いきなりそれあるか。しかし否定はしないある」
こう日本にマカオを紹介しながら言う中国でした。
「外見は真面目そうでかなりの博打好きある」
「はじめまして。日本さん」
マカオはにこりと笑って日本に挨拶をします。
「マカオです。よかったら僕の家で遊びませんか？」
「はい、機会があれば」
「僕のところには楽しい場所が一杯ありますよ」
「そのせいで金をすってしまう奴がかなりいるある」
中国も何気に嫌なことを思い出して言います。
「運の悪い奴はこいつの家で遊ぶことはお勧めしないある」
「お金は儲かるのでは？」
「儲かるのはこいつであって僕ではないある」
中国はこのところは不機嫌な顔で言います。
「だから忠告するある」
「あの、若しかして中国さんも」
「マスターも結構負けてますよ」
「余計なことは言うなある」
今度はこのマオオが出て来ました。中国の親戚や弟分の人はかなり多いです。妹さんもいますし賑やかな家であるのは確かです。

第二千二百十九話　完

2011・8・2

第二千二百二十話　ギャンブル好きな面子

第二千二百二十話　ギャンブル好きな面子

太平洋にはです。中国もそうですがギャンブル好きな面子が多いです。

例えばこの人です。

「今日も勝ったぞ！」

「アメリカさん、一体どれだけつぎ込んだのですか？」

「覚えてないぞ」

アメリカは日本に山程のコインを抱えて見せながら言います。その顔は物凄く嬉しそうです。

「ラスベガスもいいけれどマカオもいいな！」

「それはいいですが程々に」

「いや、マカオはいいところですね」

タイもいます。

「僕の家も遊びには熱心ですがマカオさんは遊びをよく御存知です」

「そうよね。ここは凄く楽しいわ」

女の子では台湾もいます。

「マカオのこうしたところ。私も参考にしようかしら」

「今日もボロ勝ちなんだぜ！ウリナラマンセーーーーー！！」

この人までいます。

「今日は飲んで食って大騒ぎなんだぜ！」

「貴方の場合はいつもでは？」

「いいんだぜ。やっぱりギャンブルは最高なんだぜ！」

「あの、くれぐれも程々にですね」

日本はそんな韓国にそっと忠告します。

太平洋は太平洋でギャンブル好きな人がとても多いです。ただし博打で蔵を立てた人はいません。遊びに収めておくべきなのです。

第二千二百二十話　完

2011・8・2

第二千二百二十一話　ポルトガルのところに

第二千二百二十一話　ポルトガルのところに

マカオは長い間中国とは別々でした。ではどうしていたかというと。

「こいつはポルトガルのところにいたある」

「そうでしたね。マカオさんは」

日本は中国の説明に頷いています。

「香港さんと状況が似ていますが」

「いた国が違っていたある」

「それで香港さんは貿易で」

マカオはカジノになったのです。二人の境遇は似ていますが進んだ道は違うのです。

そして、です。今は。

「僕にとっては頼りになる弟分の一人あるよ」

「正直大変ですよ」

ここでそのマカオがにこりと笑って日本に言います。

「マスターは手間がかかりますから」

「何っ、それはどういう意味あるか」

「大人な様で結構子供ですから」

マカオはさらに言います。

「人の言うことも中々聞かないところがありますし」

「待つある。一体何を言うあるか」

「それに可愛いもの好きで」

「そうですね。中国さんはそうしたところが多分にありますね」

「日本まで何を言うあるか」

どうも中国にとっては一癖も二癖もある厄介な弟分の様です。この辺り香港も同じなので中国も何かと大変な様です。弟分という存

在自体にしても。

第二千二百二十一話　完

2011・8・3

第二千二百二十二話　悪魔が憑いているのか

イギリスもギャンブルをします。しかしこの人は。
「ちっ、また負けたよ」
常に負けています。彼がギャンブルで勝った試しがありません。
それはマカオでも同じで。こんなことを言う始末です。
「何で俺はいつも負けるんだよ」
「御前運が悪過ぎるんじゃねえのか？」
一緒にいるフランスが彼に言います。
「何しても負けるってある意味凄いぞ」
「トランプもスロットもルーレットも全滅だよ」
もっと言えば競馬とかもです。彼はギャンブルには弱いのです。
そしてです。マカオでも負けに負けまくっています。それこそ麻雀ギャグ漫画の主人公の如くです。
その負けまくっているイギリスを見てです。フランスも首を傾げさせています。そのうえで言うのでした。
「まあギャンブルは運だしな。読み以上にな」
「じゃあ俺の運が悪いっていうのかよ」
「さっきからそう言ってるじゃねえか」
フランスも容赦がありません。
「だからな。恐怖新聞でも読んでギャンブルは諦めろ」
「幾ら何でもそんなおっかない漫画読むかっ」
イギリスが読んでも寝られなくなる日本の漫画です。一説によると読んだだけで百日も寿命が縮まるというそれはそれは恐ろしい漫画だそうです。
けれどです。その恐怖新聞もびっくりする位にです。
イギリスは今日もギャンブルに負けています。そして恐怖新聞に

はです。イギリスがまた負けることが予言されていたと読んで暫くして死んだ人が言っていたそうです。

第二千二百二十二話　　完

２０１１・８・３

第二千二百二十三話　麻雀

第二千二百二十三話　麻雀

一言にギャンブルといっても様々です。例えば日本は今麻雀をしています。面子は彼の他には中国、台湾、それにアメリカです。ここで注目すべきはアメリカでした。

「アメリカさんも麻雀を御存知だったのですか」

「昔はよくやったんだぞ」

「ああ、二十年代あるな」

中国が指摘します。あの禁酒法の時代にです。アメリカは麻雀をよくやっていたのです。

それで彼は麻雀が得意なのです。隣では日本妹が中国妹、香港、マカオと卓を囲んでいます。

その麻雀をしながらです。アメリカは揃えてきました。

「緑一色、これはうちでできたんだ」

「そうだったのですか。それは知りませんでした」

「というかアメリカさん強くないですか？」

日本と台湾はそのアメリカに言います。

「アメリカさん起源のあれだったのですか」

「緑一色は」

今でも麻雀にも自信があるぞ」

ここで『も』というのが如何にもアメリカです。

そしてです。この勝負は。

四人が四人共麻雀に強く一歩も引きません。結果。

幾ら徹マンをしてもはっきりとした決着はつかずにです。お流れとなってしまいました。

それは隣の卓でも同じで。中国妹がやれやれといった顔で言います。

「日本妹も強いあるね」

「そんな、私は全然」
謙遜しますが日本妹の麻雀は実に粘り強いです。その辺り実に彼女らしいでしょうか。

第二千二百二十三話　完

２０１１・８・４

第二千二百二十四話　まさにカモ

第二千二百二十四話　まさにカモ

イギリスは香港に誘われて麻雀をしてみました。彼が卓に着くとです。

その香港にマカオに中国妹が卓に着きました。イギリスは三人を見て尋ねます。

「ルールよく知らねえけれど宜しくな」

「はい、細かいところまで教えさせてもらいます」

香港がにこりと笑ってイギリスに応えます。かくして麻雀がはじまりました。

けれどです。イギリスは。

勝負ごとに最下位を続け結果として。

「何だよこれ！滅茶苦茶難しいじゃねえか！」

「というかイギリスさん初心者とはいえ弱過ぎますよ」

散々搾り取ったマカオが突っ込みを入れます。

「あの、私これでもかなり手加減しましたが」

「何処がだよ！俺の予算がなくなったぞ！」

何と彼は予算を全てです。麻雀に注ぎ込んでしまっていたのです。イギリスの国家予算を。

「大赤字じゃねえか！どうなるんだ！」

「自業自得あるが普通予算をギャンブルに注ぎ込まないあるぞ」

これには中国妹も呆れています。

「そんなことしたら速攻で破滅するあるぞ」

「うるせえ！今度はポーカーで勝負だ！予算を奪い返すからな！」

こうして今度は得意と自分で思っているポーカーで三人に挑みました。ですが。

そのポーカーでもです。イギリスは惨敗しました。その結果。

「駄目だ、今年は大赤字だ」

「只でさえお財布が危ないのに何してるんですか」
ボロ勝ちした香港が思わず同情の言葉を出しました。借金が膨らんだイギリスは卓の上で死んでいます。この後で上司に物凄く怒られたのは言うまでもありません。

第二千二百二十四話　　完

２０１１・８・４

第二千二百二十五話　パチンコにしても

第二千二百二十五話　パチンコにしても

日本にはパチンコというものがあります。ただし日本はしません。

「韓国さんの親戚の方が経営されていることが多いです」

「何か毎日凄いお客さんですね」

「依存性があるらしくて」

こうマカオにも説明します。

「最近では漫画やアニメもパチンコになっています」

「何かファミコンとかそんな感じですね」

「そうですね。言われてみれば」

日本もマカオに言われてふと気付きました。

「ゲームと同じですね、そこは」

「そうですよね」

「最近ではパチンコからアニメにもなっていますし」

「リオや戦国乙女ですね」

「そうです。これが中々面白かったりします」

けれどなのです。パチンコは。

「ただ。ギャンブルですから」

「ああ、利権ですね」

「それでお金がよからぬ国に流れているという噂もあります」

韓国の北にあるあの国にです。

「ですから非常に問題なのです」

「何か政治家や警察やマスコミの一部とも結託していません？」

マカオは恐ろしい指摘をしました。実はそうした噂もない訳ではないのです。中には警察のパチンコ利権を批判しながら自分の作品をパチンコにしていいと許可を出した小説家もいたりします。

第二千二百二十五話　完

2011・8・4

第二千二百二十六話　モナコでも

第二千二百二十六話　モナコでも

イギリスは弱いのにギャンブルをします。何かもうムキになっています。

「今日こそは勝つぞ！」

「一番簡単なようにしていますので」

今日はモナコで頑張っています。モナコがこう彼に言います。

「ボーナスステージです」

「じゃあ楽勝だな」

イギリスもこれは勝てると思いました。そのうえでカジノでスロットをします。ですが。

惨敗でした。今日も全く勝てません。

「おい！何処がボーナスステージなんだよ！」

「いえ、確かにそう設定しましたが」

「滅茶苦茶簡単に勝てるんだけれどよ」

フランスが実際にやってみるとコインが次から次に出てきます。

彼はそのコインの海の中で呆然とした顔でイギリスに言いました。

「御前本当に弱過ぎるだろ」

「何で俺がやるとこうなるんだ？」

「だから運が悪過ぎるんだよ。それかな」

「それか。何だよ」

「何が取り憑いてるんだよ」

イギリスといえばそうした存在です。フランスももうわかっています。

それでイギリスに尋ねたのです。何が憑いているのか。

「死神でも憑いてるのかよ」

「死神は俺のスポンサーなんだがな」

何処かの美少年好きの少佐みたいなことも言うイギリスでした。
どうも彼には何かが憑いていてそれでギャンブルに負けるようです。

第二千二百二十六話　　完

２０１１・８・４

第二千二百二十七話　女の子の麻雀

第二千二百二十七話　女の子の麻雀

今日の面子は日本妹にアメリカ妹、それに中国妹と台湾です。女の子だけの麻雀です。

卓を囲みながらです。中国妹は日本妹に尋ねました。

「日本には昔脱衣麻雀というゲームがあったあるな」

「あっ、あれですか」

「そうある。あれはかなりいやらしかったあるな」

中国妹がこう言うとです。アメリカ妹が尋ねてきました。

「それってどういうやつなんだい？そういえば兄貴達が色々言っていた記憶があるけれどさ」

「ゲームに女の子が出て来てその娘と麻雀で勝負して勝ったら女の子が服を一枚ずつ脱いでいって最後は裸になるゲームある」

中国妹はアメリカ妹にこう説明します。

「そういうとてもいやらしいゲームある」

「えっ、日本さんってそんなゲームしてたのかよ」

「兄さんはしていません」

日本妹はこうアメリカ妹に反論します。

「他の人達がやっていました。国民の皆さんの一部ですよ」

「そうか。けれどそんなゲームあったんだな」

「日本さんも隅に置けないあるな」

「そうよね。そんな面白そうなゲームがあるなんて」

台湾も参戦してきました。

「日本さんも奥が深いわね」

「ですから兄さんが開発した訳でもやっていた訳でもないです」

思えばこれも文化だったのでしょう。今ではもう見なくなった脱衣麻雀、知っている人は懐かしさと共にお話してくれるものの一つです。

第二千二百二十七話　完

2011・8・6

第二千二百二十八話　妖精といっても

第二千二百二十八話　妖精といっても

イギリスには何か悪い妖精がついているみたいです。
それでフランスとフランス妹は二人で妖精について調べます。そうしてわかったことは。
「何か一杯いるな」
「そうですね。日本さんのところの妖怪と同じで」
「大体一緒のものだからな」
「ああいう感じですか」
「ああ。だからな」
調べてみてです。フランスもフランス妹もわかったのです。
「中には悪い奴もいるな」
「それも結構多いですね」
「何だよこのナックラビーってのは」
フランスが見た妖精の中にはこんなものもいました。
「皮膚がなくて筋肉剥き出しで一つ目の巨大なケンタウロスか」
「人を襲うらしいですね」
「こんなのに襲われたら洒落にならねえぞ」
明らかに危険な妖精もいます。他には。
「この赤い帽子で斧持ってる奴ってゲームの敵で出て来たよな」
「レッドキャップですね」
「自分の帽子の血を赤く染めたい為に人を襲うんだな」
「殺人鬼そのものですね」
こうした妖精もいるのでした。
調べてみるとです。フランスもフランス妹もイギリスをギャンブルで負けさせている悪い妖精は本当にいるみたいだとわかってきたのでした。とんでもない妖精も一杯いますから。

第二千二百二十八話　完

2011・8・6

第二千二百二十九話　花札も

第二千二百二十九話　花札も

ギャンブルといいましても様々で。日本にはこんなのもあります。

「これニダな」

「はい。御存知ですよね」

「兄さんがよくやってるニダ」

韓国妹は日本妹の見せる色々な絵が描かれた札を見ながら答えます。

「花札ニダな」

「はい。韓国さんはよくやられるんですか」

「そうニダ。何だかんだ言ってやってるニダ」

そうだというのです。

「だからウリも知ってるニダ」

「私はしないのですが」

日本妹はこれはしません。けれどです。

「昔ゲームで花札をモチーフにした方はおられました」

「サムライスピリッツだったニダな」

「はい、あのゲームで」

そうしたキャラクターが出て来ていたのです。

「刀の持ち方が左利きでした」

「あれで切れるニダか？日本さんのところの刀は」

「どうでしょうか。実際に見たことはない持ち方ですから」

日本の刀の持ち方は右手が前で左手が後です。けれどそのキャラクターは左手を前、右手を後にしていたのです。その持ち方で切れるかどうか疑問なのです。

そのキャラクターは技も勝った時も全て花札でした。特技といい趣向といい平和と思う時といい中々の風狂人なキャラクターでした。

日本妹はそうしたキャラクターも好きだったりします。

第二千二百二十九話　完

2011・8・7

第二千二百三十話　やっぱり悪い妖精だった

第二千二百三十話　やっぱり悪い妖精だった

イギリス妹がイギリスに憑いている妖精を見てみますと。
「あっ、この妖精は駄目ですね」
「何、悪い妖精が憑いてたのかよ」
「はい。それもかなり」
何と一人や二人ではありませんでした。
「家族というか学校のクラスみたいにいます」
「じゃあその連中がかよ」
「お兄様のギャンブルを負けさせていたのかと」
「くそっ、道理で何やっても負ける筈だぜ」
真相がわかりました。やっぱりイギリスには無数の悪霊が取り憑いていました。
そのことを知ったイギリスはです。こう妹に言いました。
「じゃあ早速取り払うか」
「取り払ってもです」
「何かあるのかよ」
「おそらく。取り払ったその傍から」
どうなるかといいますと。
「お兄様に取り憑きますから」
「おい、俺はアパートかよ」
イギリスは妹に言われてうんざりとした顔で返します。
「それも妖精専用のかよ」
「はい。ですからもうギャンブルは諦めて下さい」
こうして妹からも駄目出しを受けてしまいました。とりあえずイギリスにはギャンブルは鬼門の様です。悪い妖精達も大勢一緒にいますので。

第二千二百三十話　完

2011・8・7

第二千二百三十一話　この人の妹

第二千二百三十一話　この人の妹

ある日です。プロイセンがにやにや、本人はにこにこしているつもりですがどうしてもそうなってしまっている笑顔でドイツに声をかけてきました。

「相棒、御前に会わせたい奴がいるんだよ」

「誰だ？一体」

「俺の妹だよ」

いきなりです。爆弾発言です。

「ずっと生き別れだったけれど昨日偶然再会したんだよ」

「待て、そんな話はじめて聞いたぞ」

ドイツもびっくりです。何とプロイセンにも妹がいたのです。

「御前に妹がいたのか！？」

「ああ。言ってなかったか？」

「だから初耳だ。御前にもいたのか」

「他の連中と同じでな。いたんだよ」

今はじめて言うプロイセンの衝撃の事実です。

「それでどうする？会うか？」

「同じドイツの者だ。会わないといけないだろう」

この辺りは真面目なドイツです。それでなのでした。

「では早速だ」

「ああ、ここに呼んでくるな」

「しかし。妹が多いな」

ドイツも妹がいるから思えることでした。

かくしてプロイセンにも妹がいるとわかりました。こんな衝撃の事実がです。今になってわかるというのも物凄いことではありま

第二千二百三十一話　完

2011・8・8

第二千二百三十二話　リアル闇金ウシジマ君

ロシア妹はベラルーシとはまた違うロシアの妹さんです。ですが。
「あんたお兄さんにそっくりだね」
「えっ、そうかしら」
イタリア妹に言われてです。ロシア妹は少しおどおどとした感じで返します。
「私はあまりそうは思わないけれど」
「外見はお嬢様だけれどね」
これはイタリア妹も認めることです。
「けれど性格そっくりじゃない」
「そうなの？」
「この前エストニアに何したのよ」
「何って。エストニアが最近フィンランドとばかり仲良くしてお兄様と離れてるから」
それを咎にして何をしたかというと。
「縛って蜂蜜塗って外に転がしただけよ」
「それやったら虫が来て大変なことになるでしょ」
「けれど死なないから」
普通に死ぬのがロシアのお仕置きだから大したことじゃないというのです。
「別に構わないんじゃないの？」
「奇麗な顔して恐ろしいことするところがよ」
イタリア妹は少し呆れながらロシア妹に言います。
「お兄さんそっくりなのよ」
「兄さんは普通じゃないの？」
どうもお話が噛み合っていない感じです。ロシア妹というかロシ

アではそれが普通なのでしょうが。それでも世界の基準ではとんでもなく恐ろしいことなのです。

第二千二百三十二話　　完

２０１１・８・８

第二千二百三十三話　目が同じ

第二千二百三十三話　目が同じ

ドイツの前にです。そのプロイセンが出て来ました。
「あんたがドイツなんだな」
「そうだ」
見ればプロイセンの昔の軍服にチェックのスカートにブーツといった格好です。プロイセンと同じ白がかって光っている麻色のとても長い髪を持っています。
そして顔立ちは整っていますがとても勝気そうです。しかも。
「どうだ、目元が俺そっくりだろ」
「というかそのままだな」
ドイツはプロイセンの誇らしげな言葉に応えます。
「成程、兄妹だな」
「それがわかるだろ」
「これで俺の家は四人暮らしか」
ドイツにプロイセン、そこにドイツ妹もいるからです。
「中々以上に賑やかになってきたな」
「猫に犬もいるしな」
猫はドイツそっくりの猫とプロイセンそっくりの猫がそれぞれいます。
「元々人の数は欧州ではかなり多いしな」
「そうだな。ではな」
「ああ、これからはね」
「それで名前は何というのだ？」
「クリスタ＝バイルシュミットさ」
かつてワーグナーやドイツリートで有名だったメゾソプラノですがソプラノの歌も歌っていた歌手と同じ名前です。彼女もそういう名前なのでした。

第二千二百三十三話　完

2011・8・9

第二千二百三十四話　名前でわかること

第二千二百三十四話　名前でわかること

アメリカはふとです。日本に言われました。
「昔南海と近鉄にですね」
「ああ、ジョーンズだな。打率は今一つな感じだったがパワーヒッターだったな」
「はい、そうした助っ人がいました」
野球のお話をするのです。
「御存知でしたか」
「知っていたぞ。いい助っ人だったな」
「あとはあの人あるな」
「王さんですよね」
今度は中国と台湾が日本に言います。
「あの人は最早言うまでもないあるな」
「ソフトバンクの監督として大活躍されましたね」
「はい。選手時代はあまりにも有名ですし」
日本も二人の言葉に応えます。
「中国さんと同じ名字でしかもです」
「私のところに籍があったんですよ」
それが王さんです。その為韓国なんかはずっと王さんが台湾出身だと思ってＷＢＣの時も結構日本と台湾に言っていたりします。
「何か日本さんのところの助っ人や外国にルーツのある人のお名前って」
「偶然ですが縁がありますね」
日本も今気付いたことでした。ただしです。
「ウィリアムズという阪神の助っ人もいましたがどなたかと同じ名前だったような」

他の国もです。そのことには首を捻りました。カナダのことは忘れてしまっていました。

第二千二百三十四話　　完

２０１１・８・９

第二千二百三十五話　性格も付き合いもそっくり

第二千二百三十五話　性格も付き合いもそっくり

「じゃあ兄貴の相棒さん宜しくな」
「ああ。これからは一緒に住むからな」
ドイツはプロイセン妹を快く迎え入れます。こうして家族がまた一人増えました。
性格はプロイセンそっくりのプロイセン妹です。そして付き合う相手も。
「宜しくな、イタちゃん」
「あっ、プロイセンの妹なんだ」
「そうだよ。宜しくね」
「うん、こちらこそ」
イタリアにはとてもフレンドリーです。この辺り本当にプロイセンそっくりです。
そんな彼女を見てです。ドイツは言うのでした。
「まさかここまでそっくりとはな」
「俺に似て最高だろ」
「少なくとも頼りにはなるな」
「そうだろ。俺の自慢の妹なんだよ」
「それでどうして長い間生き別れだったのだ？」
ドイツはこの根本的な問題について尋ねました。
「ずっと妙に思っていたが」
「ああ、あいつも俺と一緒で戦ってばかりだったんだよ」
それでその中で、だったのです。
「気付いたらはぐれててな。あいつはロシアのところにいたんだよ」
「そういえばロシアにもドイツ系の人間が多いな」
それでずっと離れ離れだったのです。けれどこうしてです。プロ

イセン妹は家族のところに戻ってきたのです。急にではありますが。

第二千二百三十五話　　完

２０１１・８・１０

第二千二百三十六話　キューバからもいた

第二千二百三十六話　キューバからもいた

日本が助っ人のお話をしていたと聞いてです。キューバも日本に言ってきました。

「うちからも来てたやろ」

「はい、バルボンにデストラーデに」

パリーグの助っ人を挙げる日本でした。

「どちらもとても明るい性格でしたね」

「特にデストラーデは凄かったやろ」

「日本シリーズで奢り昂ぶる巨人を最初の一撃で粉砕したのは見事でした」

そのホームランで巨人をそれに相応しい無様な敗北においやったのです。デストラーデの果たしたことは素晴らしい行いでした。

「スイッチのパワーヒッターというのが大きかったですね」

「うちは昔から野球が盛んやからな」

「キューバさんも上司の方もお好きでしたね」

「そや、大好きや」

キューバもにこやかに笑って日本の言葉に応えます。

「野球だけやないけれどな」

「そうですね。それにしてもキューバさんのところからの助っ人は最高でした」

「今はおらんけどな」

残念ながら今はなのです。

「そやけど日本が覚えてくれてて何よりや」

「それだけ活躍してくれましたから」

日本は今も覚えているのです。彼等のことを。

瞼を閉じればバルボンの、デストラーデの活躍が蘇ります。そしてそれと共にです。巨人のあの痛快なまでの見事な惨敗ぶりが。巨

人には無様な負けがよく似合う。

第二千二百三十六話　　完

2011・8・10

第二千二百三十七話　ドイツではそうですが

第二千二百三十七話　ドイツではそうですが

お兄さんと同じく強いプロイセン妹、軍服姿も凛々しいです。

勿論ドイツ妹も強いのでドイツでは女性陣もタッグになりました。

そんなドイツを見てです。イタリアは羨ましそうに呟きました。

「何かドイツがどんどん強くなっていってるよ」

「というかうちはヴェネチアーノ兄ちゃんもロマーノ兄ちゃんも弱過ぎるから」

「そこが問題なのよ」

イタリア妹とロマーノ妹が同時にイタリアに言います。

「兄ちゃん本当に昔あのトルコさんに勝ったの？」

「とても信じられないんだけれど」

「勝ったよ、ってその時君達いたじゃない」

イタリアは泣きそうな顔になって妹達に返します。

「それで何で覚えてないんだよ」

「だって。兄ちゃん達いつも負けてばかりだから」

「死にかけのフランス兄ちゃんにもぼこぼこだったじゃない」

それで危うく逆に攻め込まれそうだったのはもう伝説になっています。

「本当に弱過ぎ」

「サッカーとかは強いのに」

「だって俺喧嘩嫌いだから」

イタリアはさらに泣きそうな顔になっています。

「暴力とか苦手だし」

「まあ日本さんのところによくいる暴力教師みたいになってもらったら困るけれどね」

イタリア妹はそんなお兄さんに対して言います。確かにきつい言

葉ですがそれでもお兄さんに対する思いやりが見られるのは気のせいでしょうか。

第二千二百三十七話　　完

２０１１・８・１１

第二千二百三十八話　フランス妹もそう

第二千二百三十八話　フランス妹もそう

フランスは案外戦争に弱いです。あの戦争でドイツにも日本にもこてんぱんにされていいところがなかったのはあまりにも有名です。その直後にベトナムにも負けています。そんなお兄さんです。けれどフランス妹はといいますと。

「パリは渡しませんわ！」

「はい、ジャンヌさん！」

昔からです。いつも果敢に戦っています。お兄さんが負けてもです。この人は勝っていたりしていました。ジャンヌさんもどちらかというとこの人と一緒にいることが多いようです。

そんな妹を見てです。フランスはこう呟きました。

「ひょっとして俺っている意味ないのか？」

「そうではありませんわ」

フランス妹はそのお兄さんにちゃんと言います。

「お兄様も頑張っているではないですか」

「けれど俺負けっぱなしだからな」

さながらドラクロワの絵画の如き戦いぶりの妹を見てまた呟きます。

「それに対して御前はいつも先頭に立って戦うからな」

「何か戦いになると気がはやりまして」

「そこは俺もだけれどな」

フランスも戦おうとはするのです。けれど。

結局彼はかなりの確率で負けてしまうのです。

それで妹を見て自分はふがいないな、と思ったりもするのです。

今もフランス妹はお兄さんより強く戦い続けているのでした。まさ

にドラクロワの絵の様に。

第二千二百三十八話　　完

2011・8・11

第二千二百三十九話　ロマーノ妹も

第二千二百三十九話　　ロマーノ妹も

イタリア妹も強いですがロマーノ妹もです。かなりの強さです。

それこそ不埒者の五人や六人はあっという間です。今日も町に一杯いるチンピラを懲らしめた妹を見てです。ロマーノは言いました。

「御前何でそんなに強いんだよ」

「イタリア女は昔から強いじゃない」

「そうか？俺は弱いぞ」

「兄貴が弱いからよ」

それで女が強いというのです。

「全く。いつもぼこぼこにやられるか逃げて」

「馬鹿野郎、戦争なんかしてられるかよ」

まさにロマーノそのものの言葉です。

「あんな怖いこと願い下げだよ」

「ほら、いつもそう言うから」

「御前が代わりに戦ってるっていうのかよ」

「そうよ」

理由はイタリア妹と同じです。

「全くヴェネチアーノ兄貴といいロマーノ兄貴といい」

「ひょっとして御前ローマ爺ちゃんの血が濃いのか？」

「そうかもね。強いところは受け継いだのかもね」

「で、何で俺達は受け継がなかったんだ？」

とにかく男は弱いイタリアです。

そのあまりもの弱さ故にです。バルカン半島に攻め込んでも惨敗してこづかれて泣き出したのでかえって同情されて助かってもいます。この辺りは運がいいのでしょうか。

第二千二百三十九話　完

2011・8・12

第二千二百四十話　中国娘強し

第二千二百四十話　　中国娘強し

中国妹はとても女の子らしくてかなり可愛いです。ですが。

「これ買ってくれたら嬉しいあるよ」

「ささ、おまけしておくあるよ」

商売が物凄く上手です。それでお家の売り上げにもかなり貢献しています。

そんな中国妹にです。日本妹とアメリカ妹が感心しながら言います。

「何かいつも思うのですが」

「あんたやり手だね」

「うちの家は昔から色々あったあるよ」

四千年の間にです。それこそ数えきれないだけの上司の交代やら内戦やらがありました。中国の歴史も平穏なものではないのです。

「その中で生きてきたあるからな」

「それでなのですか」

「逞しくなったんだね」

「しかも兄さんがあんな調子ある」

意外と抜けているのが中国です。不思議なことにどのお兄さん達も大なり小なりそうですが。

「兄さんをフォローしてきたし中国の女は大変あるよ」

「お料理も作らないといけませんしね」

「あんたの国は女も大変だね」

「というか女の方が大変ある」

これはどの国もそうかも知れません。

「あの国に生まれた女は強いあるよ」

こう言うのでした。そして確かにです。中国妹は逞しいです。ど

うもお兄さんよりもこの娘の方がしっかりしています。これもどの家でも同じかも知れませんが。

第二千二百四十話　　完

２０１１・８・１２

第二千二百四十一話　お兄さんもそうですが　☆

第二千二百四十一話　　お兄さんもそうですが　☆

少し昔のお話です。フランスは周辺諸国を振り返って少し溜息をつきました。

「最近何処もかしこも帝国主義だな」

実はこの人もです。

「どうにも居心地が悪いな。イタリアも入ろうとしてるしな」

けれどこの頃から弱かったです。イタリアはイタリアです。

とにかく自分のことは置いておいてです。フランスはぼやき続けます。

「何かこう愛があるようなな」

とか言いながらギリシアのお家を旅しているとです。そこで。

そのギリシアが何か掘っています。フランスはそのギリシアに尋ねました。

「何してんだ？」

「今母さんが残した遺跡の発掘してる」

「ああ、またか」

「そう、また」

ギリシアはお母さんが残していった遺跡がかなりあります。その質も量も相当なものでそれを見せるだけで観光産業が成り立っている程です。

そのギリシアがです。フランスにお話するのです。

「オリンピュアという」

「何かいい名前だな」

「ここはオリンピュアという祭りが行われていて」

そうしたお祭りが行われていたというのです。

「その遺跡がここ」

「ふうん、そうなのか」
ここからです。フランスは面白いことをはじめるのでした。それが今はじまったのです。

第二千二百四十一話　完

２０１１・８・１３

第二千二百四十二話　スペインオールスター

第二千二百四十二話　スペインオールスター

スペインでオリンピックが行われた時です。彼は物凄いことをしました。

「えっ、プラシド＝ドミンゴ！？」

「ホセ＝カレーラスか！」

イタリアもドイツもびっくりです。開会式にです。

スペインの誇るオペラ歌手達が勢揃いしたのです。それで歌を聴かせてくれるのでした。

「あれはモンセラート＝カバリエじゃないの！？」

「メゾ＝ソプラノはテレサ＝ベルガンサか」

「ハイメ＝アラガルもいるし」

「ファン＝ポンスまで出してきたか」

まさにオールスターです。スペインもドヤ顔です。

そしてそのドヤ顔で。こんなことも言うのでした。

「オペラハウスのこけら落としはもっと凄かったで」

「あのガラ＝リリカ？」

「まさかそれもか」

オリンピックの同じ年にあったそれはといいますと。

「アルフレード＝クラウスとペドロ＝ラビルヘンとピラール＝ローレンガーもおったで」

「何か俺のところの五十年代みたいじゃない」

「バイロイト黄金時代にも匹敵するぞ」

イタリアとドイツ、オペラ界の双璧から見てもです。それは恐ろしいまでのキャストでした。

「スペイン兄ちゃん凄過ぎるよ」

「全くだ。スペインの歌手はこんなにいるのか」

特にドミンゴです。その歌もレパートリーもさることながらハリウッドでも通用するルックスです。スペインのオリンピックはまず歌手で世界を唖然とさせたのです。

第二千二百四十二話　　完

２０１１・８・１３

第二千二百四十三話　それなら乗る　☆

フランスはギリシアのお話を聞き続けています。
「それでそのオリンピュアだが」
「どんな祭りだったんだ？」
「祭りの最中は」
その最中は何をしていたかといいますと。
「戦争をやめて青年達がスポーツに励んでいた」
「そんな祭りか」
「そう」
「ううん、悪いがな」
フランスはそこまで聞いて難しい顔になります。そうしてこうギリシアに言いました。
「あまり興味がないな」
「そうか。それでその祭りは」
ギリシアはここで。決定打を打ちました。
「出場者は全員男で」
「そういえば昔の御前の家って凄い男尊女卑だったな」
「しかも裸だった」
「おい、それ本当か！？」
裸にです。フランスは異常に反応しました。そうしてです。
ギリシアにです。満面の笑顔で言うのでした。
「最高じゃないか！」
「興味が出たみたいだな」
ギリシアは興奮しきっているフランスを見てぽつりと言いました。
狙っていた訳でもないですがここで反応するとは思っていたのです。

第二千二百四十三話　完

2011・8・15

第二千二百四十四話　実は夏もやってた

第二千二百四十四話　実は夏もやってた

カナダはです。ある時キューバにこんなことを言いました。
「実は僕の家って夏のオリンピック開いたあるんだよね」
「あれっ、そうやったか？」
キューバはカナダの今の発言を聞いてです。
少し驚いた顔になって彼に問い返しました。
「御前冬だけやったんちゃうんか」
「誰も覚えてないんだよね、何故か」
「夏いうたらアメリカの野郎に中国に日本に」
そうした国が挙げられていきます。
「スペイン親分にイタリアちゃんにドイツにロシアがあったやろ」
「大昔イギリスやフランスもしたよ」
今度はイギリスがすることになっています。
「他にもオーストラリアとかギリシアとか」
「けれど御前のところ夏もやってたんか」
「モントリオール。覚えてるかな」
「忘れてたわ、ほんま」
キューバはまた言いました。
「すまんすまん、ほんまに」
「やっぱり僕って影が薄いんだね。それで」
「気にするなっちゅう方が無理やけれどな」
キューバも忘れてしまっていました。カナダの存在を気付くことのできる数少ない彼ですらです。オリンピックでも影の薄いカナダなのでした。

第二千二百四十四話　完

2011・8・15

第二千二百四十五話　呼び掛けてみた

第二千二百四十五話　呼び掛けてみた

フランスはオリンピックを開こうと決意しました。それで、です。

「おい、参加しないか？」

「んっ、オリンピック？」

「スポーツの祭典？」

「ああ、こればかりは政治とかは忘れてな」

それでスポーツを楽しもうというのです。

そのフランスの呼び掛けにです。イタリア達が参加しました。そしてその中には。

「あれっ、御前も参加するのか」

「悪いのであるか？」

見ればスイスもいました。普段は孤立主義の彼がです。

参加しています。これはフランスにとっても意外なことでした。

だから首を捻ってです。彼に尋ねます。

「本当にいいんだな」

「よいのである」

「まあ。誰が参加してもいいしな」

平和の祭典だからです。

「じゃあはじめようか」

「それで場所は何処であるか」

「アテネだよ」

ギリシアの首都のそこだというのです。

「オリンピック発祥の地でな。はじめようぜ」

「わかったのである」

スイスは最初から参加しているのでした。こうしてはじまったオリンピックが今も続いているとはです。思えば素晴らしいことです。

第二千二百四十五話　完

2011・8・16

第二千二百四十六話　イタリアの上司の気前のよさ

第二千二百四十六話　イタリアの上司の気前のよさ

ある時日本はオリンピックを開こうと決意しました。ですが。競争相手にイタリアがいました。これはかなり強敵です。それで日本はです。ある上司に御願いしました。

「あの、イタリア君の上司の方に御願いしてもらえますか？」

「オリンピックを譲ってくれって？」

「はい、そうして頂けるでしょうか」

こう御願いしたのです。

「どうか是非共」

「わかったけれどそれでも」

しかしその上司の人は難しい顔になりました。そうして日本に言うのです。

「向こうも誇りとか意地とかがあるからね。うんと言うかは」

「望み薄ですか」

「うん。けれど言ってみるだけは言ってみるよ」

「頼みます」

こうしてです。その上司の人はイタリアに行ってです。イタリアの上司の人にお話するのでした。

「どうか。今度のオリンピックは我が国に」

「ふむ」

イタリアの上司の人はその人の態度まで見ます。実に立派な態度です。

その態度を見てです。イタリアの上司の人は決めました。

「わかりました。次のオリンピックは譲りましょう」

「えっ、いいのですか！？」

こうして日本でオリンピックが開かれることが決まったのです。

ただこの時は残念ながら流れて。それから二十年以上後になって実現したのです。

第二千二百四十六話　　完

２０１１・８・１６

第二千二百四十七話　せめてヤマジュン　☆

第二千二百四十七話　せめてヤマジュン

☆

遂にオリンピックがはじまりました。その競技場にです。
フランスは立ちそうして呟くのでした。
「オリンピック、男同士の熱い戦いの舞台になるんだよな」
その古代の趣が残る競技場を見ながらの言葉です。
「ぶつかり合う鍛え抜かれた肉体美、いいねえ」
「んっ、フランスがいたのかよ」
ここでひょっこりとイギリスが来ました。
「俺が一番だと思ったんだけれどな」
「ああ、来たか」
「まあな・・・・・っておい！」
イギリスはそのフランスを見てびっくりしました。
「御前何て格好してんだよ！」
「どうしたんだよ」
「だから今の格好だよ！」
見ればです。フランスは今全裸なのです。その姿を見てです。イギリスはよりによって世にも恐ろしい例えを口にしてしまいました。
「田亀さんかよ！それは止めろ！」
「この時代その人いねえぞ」
「うるせえ！それ以前の問題だ！」
その全裸のフランスを見て抗議を続けます。
「止めろよそれ！」
「オリンピックは神聖な儀式だから服は不要だったんだよ」
これは実際のことですがそれでもです。今のフランスの格好は有り得ないのでした。

第二千二百四十七話　完

2011・8・17

第二千二百四十八話　それぞれに趣向が

第二千二百四十八話　それぞれに趣向が

アメリカはこれまで何度もオリンピックを開いています。その中で。

ロスの時はです。こんなことをしました。

「ロケットマンよかっただろ」

「確かに。あれは驚きました」

日本もその時のことを思い出して応えます。そしてです。

中国もこの前開きました。そこでは。

「どうだったあるか、孔子と現代科学を合わせたのは」

「あれも面白かったですね」

いいことはいいと認める日本です。そして彼自身も。

冬のオリンピックではです。力士を出してきました。それへの評価は。

「最後のスケートの人もよかったけれどな」

「やっぱり力士って違うよな」

「日本独自の文化で」

「いい趣向だよ」

日本のそれもいい評価です。どの国もそれぞれ趣向を凝らしてオリンピックに挑んでいるのです。

イタリアもです。トリノでは。

あの有名なオペラ歌手が出て歌いました。その髭だらけの巨体を見てです。

日本はここで唸るのでした。

「パヴァロッティさんを出されるとは。流石はイタリア君です」

「えへへ有り難う日本。けれどね」

ここでイタリアは照れ臭そうに笑って種明かしをします。

「口パクなんだ。もうあの人も御歳だから」
「あっ、そうだったのですか」
実は以前も口パクをしていたことで話題になった人だったのです。
今思うとそのトリノがです。この歌手の人の最後の晴れ舞台でした。

第二千二百四十八話　　完

２０１１・８・１７

第二千二百四十九話　脱がそうとしたら　☆

第二千二百四十九話　脱がそうとしたら

☆

全裸のフランスがイギリスに歩み寄ってきました。そうして言うのです。

「ほら脱いだ脱いだ」

「だから何を脱ぐんだ！」

「服に決まってるだろ」

「誰が脱ぐか！」

早速喧嘩になります。

「世話の焼ける奴だな御前は」

「誰が脱ぐか！」

「だからそういう祭りなんだよ」

「御前だけヤマジュンになってろ！」

ここでもこの時代には存在しない筈の人の名前が出ます。

「俺は脱がないからな！」

「いいや、脱げ！」

「脱ぐか！」

フランスは何とかイギリスを脱がそうとします。しかし。

フランスの鼻の先を銃弾がかすめていきました。本当にかすりました。

それで動きを止めてしまったフランスが恐る恐る銃弾が来た方を見るとです。そこには牛の全身緑色の弁護士仮面ライダーみたいな重装備のスイスがいました。

そのスイスの左手には今煙を銃口から出している拳銃があります。まだ構えています。

銃をフランスに向けてスイスは言うのでした。

「見苦しいものは見せないでもらおう」

こうしてフランスの暴走は止まりました。しかもスイスは警察まで呼んでいました。一転して色々と困ったことになったフランスなのでした。

第二千二百四十九話　　完

２０１１・８・１８

第二千二百五十話　本当に全裸だった

ギリシアが日本にお話しています。
「オリンピックは本当に何も着なかった」
「では全裸というのは」
「事実。それで入られるのは男だけ」
そういう祭典だったのです。
「ただ。全裸は選手だけでコーチとかは腰巻を付けられた」
「では若し胸のない女の人なら」
「実際にそういうこともあった」
ギリシアは日本にそのことをお話します。
「息子の雄姿を見たい母親がこっそりと入った」
「胸がないからわからなかったのですか」
「そう。大きいとわかる」
胸が小さいことも悪いことばかりではないみたいです。
「ただ。結局はばれた」
「それは何故ですか？」
「動いた時代に腰巻が動いて」
それでだというのです。
「息子の活躍に駆け寄った時に翻ってわかった」
「成程。そういうことですね」
「大人しくしていれば多分大丈夫だった」
そしてギリシアは言うのでした。
「日本の家の声優さんの人達だと小柄なこと以外は大丈夫な人が多い」
つまり日本のお家の声優さんには胸が小さい人が多いというのです。何故かそうしたことまで知っているギリシアなのでした。

第二千二百五十話　完

2011・8・18

第二千二百五十一話　時代が違う　☆

☆

スイスからの通報で全裸のまま捕まったフランスは。お巡さんに対して弁明をします。

「お巡さんはわかってないんだよ」

「何がですか？」

「だから。古代ロマンがわかってないんだよ」

こう言うのです。

「わかる？これは愛なんだよ」

「愛だと全裸になるのですか？貴方は」

お巡さんの突っ込みはかなり厳しいです。流石市民の治安を守っているだけはあります。相手が国家でも何の躊躇もありません。

けれどフランスの弁明はです。そのまま聞くのでした。

「古代の神々と一体化する。それがこの裸という格好で」

「幾ら何でも全裸はまずいでしょう」

「違うんだよ。古代ギリシア人が追い求めていたロマンとか愛とか」

「時代が違いますから」

また突っ込みを入れるお巡さんでした。

「今は古代ギリシア時代ではないんですよ」

「いや、それはそうだけれどさ」

完全にお巡さんのペースです。そうして。

フランスはお巡さんにこっぴどく叱られて服を着させられました。

そのうえでオリンピックの競技場に戻って残念な顔で呟きました。

「皆愛がわかってねえな」

「裸は愛ではなかろう」

そのフランスにです。スイスが言うのでした。

第二千二百五十一話　完

2011・8・19

第二千二百五十二話　ベルリンが最初

第二千二百五十二話　ベルリンが最初

ドイツが自分のお家のオリンピックを振り返ってです。プロイセンとお話していました。

「あの時がリレーのはじまりだったな」

「あの上司の人が決めたんだったな」

「そうだった。確かに色々あった大会だった」

そのベルリン大会自体がです。何かと言われている大会なのです。ですがその大会で、なのでした。

「あの聖火リレーがはじまったからな」

「もうあれがないとオリンピックじゃないからな」

「それをはじめた人なのは間違いない」

あの上司の人がです。

「そのことは覚えておかないとな」

「だよな。まあ本当に色々あったさ」

プロイセンも今は真面目な顔になっています。あの笑みはありません。

その顔で。ドイツに言うのでした。

「けれど凄い大会だったな」

「あの頃は充実した日々だった」

「オリンピックだけじゃなくてな」

その充実はあの上司の人によってもたらされたものです。

このことも思い出しているドイツとプロイセンでした。二人にとっては否定できない事実です。あの充実していた日々のことはです。

「確かに色々あったがな」

「あの人がいないと俺達洒落にならないことになっていたしな」

恐ろしいことを一杯した人ですが。一度は彼等を救ったのも事実だったりします。

第二千二百五十二話　完

2011・8・19

第二千二百五十三話　暴君なのかというと

昔ローマにネロという上司がいました。この人は。
「暴君だったのか？」
「いや、全然そんなことはないぜ」
ローマはこうゲルマンに答えます。
「芸術好きで気前がいいしな」
「そういう人か」
「政治もそこそこいいしな。ただな」
「問題があるのか」
「芸術。スポーツもそうだけれどな」
ローマはここで難しい顔になってゲルマンにお話します。
「下手の横好きでな」
「自分でやるとか」
「よくないな。けれど火事の時も火の粉がかかっても陣頭指揮を執ったんだよ」
いざとなれば勇敢な人だった様です。
「薔薇も大好きだし悪い人じゃないぜ」
「噂と違うな」
「噂は噂だからな」
こう言ってです。ローマはゲルマンにこんなことを言いました。
「どうだよ。今からそのネロさんが開く劇を観に行くか？」
「劇か」
「俺達が観られるように開いてくれたんだよ。どうだ？」
こうしてゲルマンを観劇に誘うのでした。どうやらネロという人は本当は暴君ではなかった様です。誤解というものは歴史においてもあるようです。

第二千二百五十三話　完

2011・8・20

第二千二百五十四話　最早スポーツ観戦の資格すらも

第二千二百五十四話　最早スポーツ観戦の資格すらも

日本はです。あるラノベを読んで物凄く不機嫌な顔になっています。その日本に会津が尋ねます。

「何かあったのですか？」

「この本ですが」

「ああ、ガイエスブルグの人のあの竜の本ですか」

「この人は全く勉強しないで私のことを書く人ですが」

本人は勉強しているつもりでもその読んでいる本がトンデモ本ならそれは勉強したことにはならないのです。それがわかっていない人も多いですが。

「私がオリンピックが異常に好きと揶揄していますが」

「何か日本人自体がって書いていていますね」

会津も日本からその本を受け取って読んで見て言います。

「とりあえず十三巻なんか酷いですね」

「私を貶めたいのなら存分に貶めていいですが」

それ位で怒る日本ではありません。しかしです。

「自分以外の国民の皆さんまで全く勉強しないで貶めるのは」

「しかもスポーツをだしとして」

「この人は阪急ファンだったそうですが」

「阪急の監督や選手だった人が怒りますね」

「全くです。阪急は素晴らしいチームでした」

まさに勇者でした。後に猛牛も育て上げた名将が球史に残る選手達を育てて出来上がったチームです。ですがその作家さんがファンだったということに日本は思うのでした。

「こうした人が阪急ファンと自称するのは」

「阪急だけでなくあの人が育て上げられたもう一つのチームの近鉄

にとっても不快ですね」
　会津もこう思うのでした。人は書いてはいけないこと、言ってはいけないことがあるのです。その人はそれを見事なまでにしてしまったのです。

第二千二百五十四話　　完

２０１１・８・２０

第二千二百五十五話　その日が近付いてきた

第二千二百五十五話　その日が近付いてきた

次期生徒会長立候補の日が近付いてきました。それを受けてです。

イギリスとフランスは躍起になって会長候補を探しはじめました。

「おい、誰かいないか！？」

「なったら俺達が全力でフォローするから安心しろ！」

とにかくです。誰でもいいという感じです。

「立候補したらその時点で俺達が選挙活動もバックアップしてやる！」

「だから何の心配もいらないからな！」

この二人の発言にです。ドイツが唖然としながら突っ込みを入れます。

「選挙の中立性はどうなったのだ？」

「あんなの相手にそんなこと言えるか！」

「そんなに言うのなら御前も生徒会に入れ！」

「前から入れて欲しいと言っているが」

ドイツの他に日本も言っています。ですが諸般の事情でまだ実現していないのです。

何はともあれです。イギリスとフランスは形振り構わず候補者を探しています。それは何故かといいますと。

「このままじゃまたあいつになるからな」

「もうあの会長は沢山だ」

「ああ、韓国か」

ドイツもここで事情がわかりました。

「あいつが今の生徒会長だったな」

「そうだよ、だからだよ」

「あいつだけはもういいからな」

それで次の生徒会長を探しているのです。イギリスとフランスに

とっては死活問題です。何しろ仕事をしない生徒会長なのですから。
自分達がする破目になるのはもう沢山だというのです。

第二千二百五十五話　　完

２０１１・８・２１

第二千二百五十六話　生徒会長の仕事は

第二千二百五十六話　生徒会長の仕事は

韓国は生徒会長です。しかしです。

会長席には座っていますがそれでもです。することは。

「またそれニダか」

「今日の仕事はこれなんだぜ」

見ればです。自分の国のお茶の起源についての壁新聞を作っています。彼が創部して部長も務めている全ての起源は俺部の壁新聞です。

その新聞にはです。まず日本のお茶の起源を書いています。

「日本のお茶の起源は九世紀なんだぜ。それに対して俺は」

「何時ニダか？」

「一世紀！俺の方が凄いんだぜ！」

こう壁新聞に高らかに書いています。

「上司がインドから奥さんを呼んでそこからはじまったんだぜ」

「インド？中国さんを飛び越えてニダ？」

「それだけ俺に国際色があったということなんだぜ」

韓国はこう言います。しかしお話を聞いた韓国妹はです。

首を捻ってです。お兄さんに突っ込みを入れました。

「兄さんその頃生きていたニダか？そもそも」

「俺は一万歳なんだぜ。その頃もう九千八百歳だったんだぜ」

「中国さんよりもずっと年上ではないニダか」

「だから俺は凄いんだぜ。お茶も早いうちに知ったんだぜ」

こんなことをです。生徒会長の机で書いています。

尚韓国ですが実はお茶の味を長い間忘れていました。李氏朝鮮という上司の頃にはです。実はお茶を全く飲んでいなかったのです。

第二千二百五十六話　完

2011・8・21

第二千二百五十七話　とりあえず募集

第二千二百五十七話　　とりあえず募集

「本当に全部俺達がやるからな！」

「だから是非立候補してくれよ！」

イギリスとフランスはまずはＥＵ組の教室でメガホンを手に叫びます。

「次期生徒会長立候補はもうすぐだ！」

「待ってるからな！」

こう叫んでいます。しかしです。

それに応える人は一人もいません。それどころかです。

「生徒会長って普通再選されるし」

「じゃあそれでいいんじゃない？」

「そうだよな。別にな」

「ええと、今の生徒会長って誰だったかしら」

中には会長が誰かを知らない人さえいます。イギリスとフランスにとっては実に由々しき事態です。しかもそのうえ、なのでした。

二人にです。ドイツと同じことを言ってきます。

「生徒会の役員さんがそこまで露骨に立候補者募集したらまずいんじゃないの？」

「幾ら何でもやり過ぎなんじゃ」

「生徒会の役員さんは選挙には中立でないと」

「恣意的な生徒会運営ってやっぱり」

皆正論です。しかしです。

今の二人はその正論にです。あえて立ち向かわなくてはいけなかったのです。それでこう言って皆の問いに対して返すのでした。

「そんなこと言ってられないんだよ！」

「今の会長をよく見ればわかるからな！」

こう言って止まりません。二人の絶望的な戦いはもうはじまって

います。

第二千二百五十七話　完

2011・8・22

第二千二百五十八話　会長になる条件

第二千二百五十八話　会長になる条件

日本は生徒会の役員さんではありません。それに非常に近いと言える立場にいますがそれでも違います。そしてそれと共にです。

「私達は会長さんには立候補できませんからね」

「そうだよね。国が大きいとね」

「かえって駄目だからな」

イタリアとドイツが日本の言葉に応えます。

「大国の専横を避けるって意味で」

「生徒会が大国主導だから分けているからな」

「ですから私達は生徒会長にはなれません」

立候補すらできないのです。

「そういうことですね」

「考えてみたらオーストリアさんとかエジプトとかそれなりに小さい国だね」

「エジプトは今ではサミットにも参加しているが」

二十人で行われる方です。そこには日本を大好きなトルコもいます。もっと言えば今の生徒会長もしっかりと参加していたりします。

「オーストリアさんも昔よりは小さくなったけれど結構」

「影響力は残っているがな」

「それを考えますと」

日本は会長さんになった面子からお話します。

「小国といっても極端に小さな国からは選ばれませんね」

「というか立候補できる力の時点でない国も多いよ」

「選挙に勝ち抜くだけの体力も必要だからな」

会長になるのには色々な条件がある様です。この辺りは複雑です。

第二千二百五十八話　完

2011・8・22

第二千二百五十九話　何処も手を挙げない

第二千二百五十九話　何処も手を挙げない

身内のＥＵ組に生徒会長候補への名乗りを勧めるイギリスとフランス。しかしです。

本当に誰もです。手を挙げようとしません。二人はこのことに思いきり焦ります。

「おい、誰かいねえのかよ！」

「本当にいいのか！？」

「生徒会長になって何か面白いことあるっぺ？」

デンマークが二人に尋ねます。

「おめえ等がバックアップするっていうけれど」

「だから生徒会長だぞ」

「生徒の中で一番偉いってことになるんだよ」

『ということになる』という辺り微妙です。

「学園の為に働けるしな」

「結構皆からいい目で見られたりするだろ」

何か随分スケールの小さいお話です。

「だからどうだよ」

「デンマーク、御前が生徒会長にな」

「どうでもいいっぺ」

基本的に無欲なデンマークはこう二人に返します。実に素っ気無い返事です。その表情には欲というものが全く見られません。

「俺は北欧の１長兄だっぺ。それで満足だっぺよ」

「くそっ、こいつは駄目だ」

「何の欲もねえ」

デンマークには断られてしまいました。イギリスとフランスは必死に生徒会長を探し続けていますが序盤からこんな有様なのでした。

第二千二百五十九話　完

2011・8・23

第二千二百六十話　オーストリアさんだった頃

第二千二百六十話　オーストリアさんだった頃

オーストリアさんも生徒会長だった頃があります。その頃はといいますと。

「うわあ、今度の生徒会長さんって凄いわね」

「ノーブルよノーブル」

「頭がよくて容姿端麗で」

「しかも音楽家」

「紳士だし物静かだし」

「服もとても奇麗で」

女の子達から大人気でした。流石はオーストリアさんです。

とにかく一挙手一投足全てが注目されていました。

優雅にケーキとコーヒーを楽しみながら生徒会長のお仕事をする時もです。

「オーストリアさん、頑張って下さい！」

「私達の為に働いて下さるんですね！」

女の子達がお部屋の内外から黄色い声援を浴びせるのでした。

「何かもう日本さんの漫画に出て来るみたいな」

「チートな生徒会長さんよね」

ここまで言われていたのです。とにかく女の子達から大人気でした。

けれどそんなオーストリアさんを見てです。生徒会の役員さん達はとても微妙な感じでした。生徒会長が注目され過ぎて自分達が忘れられてしまったからです。

特にフランスはです。こうロシアに漏らすのでした。

「皆お兄さんに振り向いてくれなくなったんだよな」

「仕方ないんじゃない？オーストリアさんなんだから」

ロシアだけがそうなっても特に何も思っていませんでした。元々

無欲な人ですがそれ以上にです。実はこの人オーストリアさんとは長い付き合いなのです。だからオーストリアさんの幸せも喜んでいたのです。

第二千二百六十話　　完

２０１１・８・２３

第二千二百六十一話　欧州全滅か

第二千二百六十一話　欧州全滅か

生徒会長立候補をデンマークにとてもあっさりと断られたイギリスとフランスはそれでも諦めずにです。他の国に声をかけようとします。

そしてここで。この前やっと生徒集会に出るようになったスイスに気付きました。

それで、です。無謀にも彼に声をかけました。

「どうだよ。生徒会長な」

「御前ならいけるぜ」

というか韓国以外なら誰でもよくなっている二人です。かくしてです。

そのスイスに声をかけました。しかし。スイスはとてもはっきりと答えました。

「断るのである」

「おい、駄目なのかよ」

「生徒会長嫌か？」

「我輩はそうした役職には一切興味がないのである」

この辺り我が道を行くスイスらしいです。

「だからいいのである」

「そう言わずにな。だからな」

「生徒会長どうだよ」

イギリスとフランスはついつい一歩踏み出してしまいました。しかしその一歩が。

間合いでした。それに入ってしまって。

スイスはいきなりです。銃もライフルもマシンガンまで幾つも出してです。二人をホールドアップしてきました。そのうえでまた言うのです。

「断るのである」
「そ、そうかそこまで言うのならな」
「もういいからな」
二人はスイスの断りを受けました。そして前もこんなことになったと。今更思い出すのでした。

第二千二百六十一話　完

2011・8・24

第二千二百六十二話　もて過ぎる理由

第二千二百六十二話　もて過ぎる理由

オーストリアさんが生徒会長だった頃はとにかくもてていました。会長さんでなくても人形佐七みたいにもてていますがこの時は最強でした。

その頃です。オーストリアさんと因縁があり過ぎるフランスはいつもこんなことを言っていました。

「お兄さんの影が薄くなってないか？」

「もてなくなりましたわね」

フランス妹はあっさりとお兄さんにきついことを言います。

「オーストリアさんばかりが注目されて」

「何でだ？俺の何処が悪いんだ？」

自分の顔をチェックしながらまた言うフランスでした。

「お兄さんいけてるじゃないか。顔も髪型もファッションもな」

「まあ平均点は超えていますね」

「それで何でだよ。オーストリアが圧勝なんだよ」

「では御覧になって下さい」

フランス妹はお兄さんにオーストリアさんを見る様に勧めます。お兄さんもそれを受けて生徒会長を見てみました。するとです。

右手に楽譜を持ってフロックコートにズボンにアイボリーネックです。そのまさに貴族といった外見で涼しげな顔立ちで歩いています。それを見るとです。

フランスはそれだけでわかってしまいました。これで生徒会長とくればです。

「何処の青春ドラマの完璧生徒会長なんだよ」

「あれでは誰も勝てないですよ」

「うう、お兄さんも会長になれればいいんだがな」

挙句にはこんなことも言うのでした。とにかくこの頃のオースト

リアさんにはです。何をどうしても勝てないものがありました。只でさえ凄い人なのに。

第二千二百六十二話　　完

２０１１・８・２４

第二千二百六十三話　手当たり次第に

イギリスとフランスはまだまだ諦めません。それで、です。
今度はオランダに声をかけます。
「どうだよ、生徒会長だぜ」
「御前も一回やってみろよ」
二人は彼にも積極アプローチです。しかしです。
オランダは無表情でこう返すだけでした。
「別にええ」
「おい、御前もかよ」
「生徒会長にならねえのか？」
「選挙に勝てる筈がない」
オランダはこのことを指摘します。幾ら二人が支持をしてもです。
「今の御前等にはそこまでの力はない。誰かを生徒会長にできるだけの」
「い、いやそれはな」
「何とかなるからな」
けれど二人共体調がかなり悪そうです。というよりかＥＵ全体がそんな感じです。今にも学級閉鎖が行われそうな程の状況です。
オランダはその状況も見て言っているのです。
「絶対に無理だ。勝てない」
「しかしあいつも体調悪いからな」
「肝心の日本の上司があれだからな」
日本の影響をもろに受けるのが韓国です。だから彼も体調が悪いのです。
けれど誰がどう見てもです。体調はＥＵの人達の方が遥かに悪いです。今にも倒れそうでドイツに頼っている国が結構見られます。

第二千二百六十三話　完

2011・8・25

第二千二百六十四話　元ライバルとして

フランスとオーストリアさんはかつてはそれは仲が悪かったです。

けれどです。負けるのは大抵。

「お兄様の方でしたわね」

「何で俺があいつと揉めたら大抵色々な奴が同時に喧嘩売ってきたんだ？」

それはナポレオンの頃までのことです。とにかく彼がオーストリアさんと戦争となるといつも周りから敵がどんどんやって来たのです。その代表がイギリスでした。

「三十年戦争は勝ったけれどな」

「けれどその後のルイ十四世の頃に連敗して」

三十年戦争の貯金がなくなってしまったのです。

「零になりましたね」

「で、今あいつは生徒会長なんだがな」

喧嘩をしなくなったその相手を見ると。何か圧倒されます。もう女の子がダース単位でいて目をピンクや赤のハートマークにさせています。

それを見ればです。誰もがです。

「負けてるよな」

「百対一位ですね」

「惨敗なんてものじゃねえぞ」

「ですがお兄様は生徒会の役員ですが」

フランス妹はこのことははっきりと言います。

「それ程気になされなくても」

「あいつとドイツとイギリスのことはどうしても気になるんだよ」

オーストリアさんはイギリスと並ぶフランスのライバルだったからです。かつてのライバルのことは今でもどうしても気になってしまうのです。

第二千二百六十四話　　完

０１１・８・２５

2

第二千二百六十五話　バルト三国はやっぱり

第二千二百六十五話　バルト三国はやっぱり

オランダに断られたイギリスとフランスの次の御願い先は。この人達でした。

「どうだよ、それでな」

「三人のうち誰かな」

こうです。バルト三国に声をかけるのでした。

「安心しろ、俺達が全力でフォローしてやる」

「側面も後ろも安心しろ」

にこにことして三国に言います。ですが。

最初にです。リトアニアが凄く遠慮する顔で二人に言いました。

「あっ、俺ポーランドと色々やらないといけないんで」

「僕も実は」

次はエストニアです。二人から視線を逸らしながら言います。

「フィンランドさん達ともっとお付き合いを深めないといけないんで」

「そういうことなんで」

「すいません」

お友達がいる人達はあっさりとかわしてしまいました。それで、です。

二人は最後の一人ラトビアを見てです。これまで以上ににこにことして語り掛けるのでした。

「いいぜ、生徒会長はな」

「何ていっても学園のトップだからな」

「だからどうだよ。ラトビアな」

「生徒会長に立候補してくれよ」

「え、遠慮します」

ですがラトビアはです。がたがた震えながら二人に返します。
彼等は恐れていました。何しろ生徒会にはあの人がいるのです。
三国がその恐ろしさを骨身にしみて知っている人が。健在なのですから。

第二千二百六十五話　　完

２０１１・８・２６

第二千二百六十六話　これで生徒会長だから無敵

第二千二百六十六話　これで生徒会長だから無敵

今日もです。音楽部の部室からです。
オーストリアさんの奏でるピアノの音が聴こえてきます。それと共に。
「今日も素晴らしいです！」
「流石オーストリアさんです！」
学園の女の子達の黄色い声も聞こえてきます。
「音楽といえばオーストリアさんですね」
「何時聴いても素晴らしいピアノですね」
「この曲はモーツァルトに教えてもらいました」
オーストリアさんのお家の最高の音楽家と言われている人です。
「その曲ですが」
「凄い、モーツァルトって」
「本当にオーストリアさんらしいです」
ここでらしいと言われるのがオーストリアさんです。
美形で頭がよくてお洒落でしかも音楽家です。ですから。
これだけの人気があります。性格もいいので尚更です。
ですがそれに加えてです。この時のオーストリアさんは生徒会長だったのです。だから余計に。
女の子達の注目を集めていました。もう下駄箱を開ければ。
「今日もですか」
「おい、何だよそのラブレターの山は」
イギリスが見てもびっくりです。下駄箱を開ければそこからです。
ラブレターがどさどさと落ちてきます。何とか入れているという感じです。
オーストリアさんの下駄箱は今でもラブレターがいつも入れられ

ています。ですが生徒会長の頃はです。今よりもずっと凄かったのです。

第二千二百六十六話　　完

２０１１・８・２６

第二千二百六十七話　この二人はでか過ぎる

第二千二百六十七話　この二人はでか過ぎる

生徒会長候補を何とか欧州から擁立しようと必死な行動を続けるイギリスとフランス。その中でフランスがふとイギリスに提案しました。

「よし、イタリアかスペインでどうだ」

「あの二人か？」

「ああ。あの連中なら明るいし嫌われる様な連中じゃないしな」

「けど仕事の方は大丈夫か？特にイタリア」

「今の会長よりはずっとましだろ」

絶対の説得力を持っていました。今のフランスの言葉は。

「だからどうだよ」

「そうだな。じゃあどっちかに声をかけるか」

「ああ、それじゃあな」

こうしてです。二人はどちらかに声をかけようとしました。ですが。

声をかけようとしたその瞬間にです。フランス妹に止められてしまいました。

「あの方々は大きいですけれど」

「あっ、そうだあいつ等大国だぞ」

「特にイタリアはな。ＥＵで票の数俺達と同じだったんだ」

この二人にドイツとイタリアはＥＵで一番多くの票を割り当てられているのです。その次に来るのがスペインです。つまりＥＵ五大国です。

生徒会長には大国はなれません。韓国は自称だけでなくランキングでも大国っぽいですが。

けれどこの決まりがあるのです。従って。

「諦めるか」
「残念だけれどな」
こうしてこの二人もなくなりました。前回同様二人の選択肢はどんどん狭まっていっています。

第二千二百六十七話　　完

２０１１・８・２７

第二千二百六十八話　エジプトも会長だった

オーストリアさんの他にも生徒会長だった人がいます。
エジプトです。ですがこの人が会長だった時は。
「・・・・・・・・・」
「ええと、会長さん喋らないけれど」
「生徒会長の挨拶なのに」
日本のお家にルーツがあるのではと噂されている十三番目のスナイパーの人の如くです。全く喋らなかったのです。それこそ何があっても。
あまりにも喋らなくてです。皆困ってしまいました。
「スピーチでも喋ってくれないし」
「ええと、無言で帰ったけれど」
「いいのかな？」
「よかねえよ」
速攻で言ったのはイギリスでした。流石に頭を抱えています。
そして頭を抱えたままです。こう言うのでした。
「だからよ。何で喋らないんだよ」
「・・・・・・・・・」
エジプトは無言のままで何かを書いてです。イギリスに見せてきました。そこにはエジプトの言葉でこんなことが書かれていました。
『喋るのは好きじゃない』
「いや、そうも言ってられないだろ」
『喋らなくてもやっていける』
「って御前はこれはゾンビですかのネクロマンサーかよ」
この頃には連載もはじまっていない作品のことを出してです。イギリスは抗議しましたが効果はありませんでした。やっぱり無口な

ままのエジプトでした。

第二千二百六十八話　　完

2011・8・27

第二千二百六十九話　小さい娘達も

第二千二百六十九話　小さい娘達も

リヒテンシュタインもＥＵのクラスにいます。しかしです。
イギリスとフランスは彼女の後ろにいるスイスを見て首を空しく横に振ります。
「駄目だ、保護者があいつだ」
「絶対に許さないな」
実際にスイスは物凄いプレッシャーを発散させながら二人を見ています。仮面ライダーゾルダかカラミティガンダムみたいな装備は相変わらずです。
結果としてこの人は問題外でした。それでは。
「ああ、モナコどうだよ」
「あいつか？」
「御前の言うことなら聞くだろ。どうだ？」
「ああ、あいつもな」
どうかとです。フランスはイギリスにお話しました。
「駄目なんだよ」
「何でだ？」
「あいつはそういうのには興味ないからな」
「だから御前が話してもか」
「出ないさ、絶対にな」
かくしてこの人も駄目になりました。こうなると。
「いねえな、候補者」
「バルト三国も駄目だったしな」
「セボルガとかはどうだ？」
「じゃあシーランド坊主もいいことになるぞ」
本当に人がいなくなってきました。まさにジオンではなくＥＵに

人なしの状況です。

第二千二百六十九話　完

2011・8・28

第二千二百七十話　集会にも出ていないから

第二千二百七十話　集会にも出ていないから

シーランドは生徒会長の話を聞いてです。すぐにやる気になりました。

「やるですよ。シー君やるですよ！」

「けれど君は駄目だと思うよ」

ラトビアがこうそのシーランドにお話します。

「多分だけれどね」

「何っ、でjはイギリスの野郎が邪魔するのです！？あいつ絶対に許さないのです」

「いや、イギリスさん以前に」

確かにシーランドのことはイギリスにとってはあまり面白いお話ではありません。けれどシーランドの問題はそれ以上のものがあったのです。

実は彼はです。生徒集会に出られないのです。ですから。

「生徒会長になるには集会に出ないと駄目なんだよ」

「じゃあ出てやるのです」

「それ出来る？集会に入るのって結構難しいよ」

「けれどラトビアは出てるのです」

「僕の場合はロシアさんのお家から出ることに苦労したから」

その時のことはラトビアにとっては恐ろしい思い出です。けれどそれを乗り越えて何とか集会にも参加できるようになったのが彼なのです。

ですがシーランドはといいますと。

「できないんじゃないかな。セボルガ君やワイちゃんと同じで」

「集会に参加してないと会長になれないなんて不公平なのです」

「他には台湾さんもだけれどね」

集会に出ていないと会長にはなれない決まりになっているのです。
シーランドにとってはいささかどころかかなり面白くない事実です。

第二千二百七十話　　完

２０１１・８・２８

第二千二百七十一話　ピンチはさらに

第二千二百七十一話　ピンチはさらに

イギリスもフランスも欧州から生徒会長候補者を出して何とか韓国の再選を阻もうとします。けれど肝心の候補者がいないのでした。

「諦めろ」

「御前は役員じゃないから言えるんだよ」

「っていうか今の俺達にその言葉は言うな」

あまりにも冷酷なオランダの言葉にもムキになって返します。

「御前はやらないって言うしな」

「何か北欧の面子も全員嫌な感じだしな」

デンマークだけではありませんでした。

「ったくよ、フィンランドなんかいいと思うんだけれどな」

「興味ねえか」

「すいません。そういうのはちょっと」

遠慮する笑顔で、です。フィンランドは二人に返します。

「性に合わないので」

「だよな。フィンランドはトップというよりかはな」

「サポートするのがいいからな」

縁の下の力持ちなのです。それに控え目なところがあるので。

あの無意味なまでの個性の強さと五月蝿いまでの自己主張を併せ持っている韓国と比べるとです。インパクトがあまりにも弱いです。

けれどどうしても候補者を出したいイギリスとフランスは諦めません。それで。

「女の子にもっと声かけてみるか？」

「だよな」

こうしてです。女の子にもさらに声をかけることにしたのでした。

ナンパではないところがミソです。

第二千二百七十一話　完

2011・8・29

第二千二百七十二話　日本はどうしても駄目

第二千二百七十二話　日本はどうしても駄目

日本は生徒会長にはどうしてもなれないのです。力が大き過ぎてです。

「国力が高くてもいいことばかりではないのですね」

「とはいいましても私は役員さんには希望していますが」

タイに対してです。日本はお話します。

「会長さんになりたいと思ったことはあまりありません」

「そうですよね、そういえば」

「どうも。トップに立ってあれこれするのは苦手で」

そうしたところがです。日本にはあります。

「ですから会長さんより役員さんの方がいいと。自分では思っています」

「ううん、会長さんでもいけると思いますが」

気付いたら物凄く強くなっていてです。日本は会長にはなれなくなっていたのです。この辺りは頑張り過ぎたと言えるでしょうか。

その会長になれない日本ですがそれでもです。

払っている学費はかなりのものです。それこそ日本が払っている学費で学園がもっているのではないかと言われている程です。けれどそれでもなのです。

「何か日本さんに対する見返りが少ない様な」

「私も思う時がありますが」

日本はタイの言葉に応えます。

「ですが。今すぐどうにかなることではないので」

「少しずつですか」

「仕方ないですね」

日本も何処か諦めている感じです。この学園も色々あります。日

本にしてみれば内心釈然としないことも結構あったりするのです。

第二千二百七十二話　　完

２０１１・８・２９

第二千二百七十三話　女生徒会長も

第二千二百七十三話　女生徒会長も

イギリスとフランスはまずはハンガリーに声をかけました。
「御前ならできるよ」
「その強さでな」
「強いってのは余計だけれど」
ハンガリーはフランスの今の言葉には眉を顰めさせました。
そうしてです。そのうえでの返答は。
「そういうの興味ないし」
「ってないのかよ」
「生徒会長とかには」
「オーストリアさんと一緒にいられればいいから」
だからだというのです。
「あんた達には悪いけれどね」
「じゃあベルギーどうだ？」
「ワッフル食べ放題だぞ」
「もううち食べてるし」
ベルギーにとってワッフルは主食の一つです。今更それを食べ放題と言われても特にいいことはないのです。彼女にとっては。
「別にええわ」
「ううん、じゃあ誰がいるんだよ」
「いよいよ人がいなくなってきたぞ」
二人もやっとです。欧州でなり手がいないことを認めてきました。
しかしそれでも諦める訳にはいきませんでした。認めることと諦めることはまた違うのです。二人は諦めてはいませんでした。まだあがくのでした。

第二千二百七十三話　完

2011・8・30

第二千二百七十四話　秘書になりたかった

第二千二百七十四話　秘書になりたかった

オーストリアさんが生徒会長だった頃ハンガリーはロシアと一緒にいることが多かったです。そのせいで。

「あの頃はオーストリアさんのお傍にいること自体がね」

「難しかったんですね」

「そうなのよ。リトちゃんだってそうでしょ」

こうリトアニアに言うハンガリーでした。

「あの頃はポーランドと離れ離れで」

「はい、一緒にいればいればで大変ですけれど」

それは何故か。ポーランドだからです。

「けれどロシアさんのお家の中にいるともう」

「凄く大変よね」

「韓国君が何かロシアの家にいたかった、日本は嫌だったとか言ってた記憶がありますけれど」

「ロシアを知らないからよ」

ハンガリーはきっぱりと言い切りました。韓国について。

「そんなのロシアなんてもう」

「はい、今ポーランドと一緒にいて幸せです」

「あの頃はね」

そしてなのでした。ハンガリーはまたその頃のことを言います。

「オーストリアさんと一緒にいられなくて」

「寂しかったですか」

「ポーランドとかルーマニアの奴が一緒だったけれど」

所謂ワルシャワ条約です。ロシアを中心としてポーランドにそのルーマニア、ブルガリアやプロイセンがいたのです。つまり東欧です。

それでもオーストリアさんと一緒にいられなくて。当時のハンガ

リーは寂しい思いをしていたのです。

第二千二百七十四話　　完

2011・8・30

第二千二百七十五話　ボヨヨンの女にも

第二千二百七十五話　ボヨヨンの女にも

最早誰でもよくなってきた感じのあるイギリスとフランスはです。ウクライナにも声をかけました。

「で、生徒会長な」

「どうだよ」

そのばいーーーんとしたウクライナをです。生徒会長にしようというのです。

けれどウクライナは涙目で。こう二人に言うのでした。

「御免なさい、私は」

「えっ、ウクライナもかよ」

「やらないのかよ」

「色々あって」

今ここに弟さんはいませんがそれでもなのです。

「私はちょっと」

「何だよ、ウクライナも嫌なのかよ」

「本当になり手がいないな」

少なくとも欧州の面々はあらかたあたりましたが全くです。

とにかくウクライナはです。二人に言います。

「私以外に誰かいないの？」

「あの韓国なんだよ」

「だから困ってるんだよ」

「韓国って確か日本さんのお隣のあの騒がしい国よね。そんなに酷いの」

「一回会ってみてくれ。すぐにわかるからな」

「太平洋最強の個性の持ち主だからな」

よくも悪くもです。韓国の個性は強烈なのです。その強烈な個性は最早です。欧州の誰よりも凄まじいものになってしまっているの

です。

第二千二百七十五話　完

2011・8・31

第二千二百七十六話　柱に隠れて

第二千二百七十六話　柱に隠れて

オーストリアさんが生徒会長だった頃はそのお傍にいられなかったハンガリーは何をしていたかといいますと。

オーストリアさんをずっと見ていました。隠れて。

女の子に囲まれて黄色い声を浴びている生徒会長を見てです。とても残念そうでした。

「いいわよね、ああしてお傍にいられる人は」

「あの、ハンガリーさん」

そのハンガリーにリトアニアが声をかけます。

「探偵になられたんですか？」

柱に身体を隠して顔だけ出して覗いていればそう見られて当然です。それでリトアニアは少し驚いた顔になってハンガリーに言ったのです。

「生徒会長に何か」

「一緒にいたいけれど」

ハンガリーは実にあっさりと本音を言ってしまいました。

「できないからなのよ」

「そういえばハンガリーさんはオーストリアさんと一緒におられた時が長かったですね」

「上司の人が一緒でね」

「そうですよね」

この辺りは似ているハンガリーとリトアニアです。けれどです。

この頃のハンガリーはオーストリアさんと一緒にいられなくて。とても寂しかったのです。

「また一緒にいたいけれどね」

「その時が来るといいですね」

「リトちゃんもね」
何気にリトアニアのことも気遣うハンガリーでした。この頃はハンガリーもリトアニアも一緒にいたい相手とは離れ離れだったのです。

第二千二百七十六話　完

２０１１・８・３１

第二千二百七十七話　この娘はパス

第二千二百七十七話　この娘はパス

ウクライナにもばいーーーんと断られたイギリスとフランスはです。遂に本当に欧州では最後の一人に声をかけようと決意しました。

ベラルーシを見てです。イギリスが行こうとします。

「あいつしかいないからな、もう」

「ああ、あの娘は止めておけ」

けれどフランスがそのイギリスを止めます。

「命が惜しければな」

「命って何だよ、物騒なこと言うなよ」

「あの娘のこと言うぞ」

フランスはイギリスの耳元に口を近付けてお話します。

それを聞いてイギリスは暗い顔になってこう言うのでした。

「よくわかったぜ」

「バルト組の鬼っ娘だからな」

「本当に鬼だな」

「そうだよ、しかもバックにロシアまでいるからな」

まさに鬼に金棒です。

「そういうことだからな」

「ああ、けれどこれでな」

最後の一人も駄目でした。欧州では。

かくしてイギリスとフランスは今は奥州を出てです。他の国に頼むことにしました。

「誰かいるだろ、一国は」

「こうなったら全力でバックアップを約束するか」

実際にそうするつもりで、です。二人は欧州を出たのです。

第二千二百七十七話　完

2011・9・1

第二千二百七十八話　役員になっているのは

第二千二百七十八話　役員になっているのは

日本もドイツもずっと前から生徒会の役員になりたいと言っています。けれどです。

今の役員の顔触れを見ますと。

「連合の五人の方々ですから」

「ああ、見事なまでにな」

連合ファイブがです。占拠してしまっているのです。

「そこに枢軸の私達が入るとなると」

「難しいものがあるのは事実だな」

「インドさんやブラジルさんも誘っていますが」

「中々上手くいかないな」

しかもこの二人はいいのですが。

枢軸は基本三人です。イタリアはといいますと。

「イタリア君は無理でしょうか」

「あまりな。望みはないな」

「それで内心すねておられるようですし」

「困った奴だ。気持ちはわかるがな」

それでもです。イタリアは難しいのです。この二人ですら、ですし。

「とにかく。何かしたいですが」

「俺達は学費もかなり収めているしな」

「はい、ただ私の今の上司の方々ですと」

「できるものもできないな」

「前の方はわざととんでもないことをしているのではないかと思える程でしたし」

とりあえずその上司は遂にいなくなりました。もうその顔は二度

と見たくないという人までいます。実に最低最悪な上司でありました。

第二千二百七十八話　　完

２０１１・９・１

第二千二百七十九話　井上ワープの途中で

第二千二百七十九話　井上ワープの途中で

結局欧州組の誰も生徒会長選に立候補しませんでした。というか全員に断られてしまいました。

イギリスとフランスはここ至ってです。敵というか生徒会長の本拠地である太平洋組に行くことにしました。

「あれだけいるんだ、誰かいるだろ」

「人の数で言うと俺達の五倍位いるからな」

最早学校のクラスの数ではない位人がいるのが太平洋です。

そこに行ったら流石に誰かいるだろうと思って太平洋組に向かいます。欧州組とはかなり離れていますがそんなことは問題ではありませんでした。

あの某脚本家さんのマジックを使ったのです。

「携帯で呼んだらすぐに来るなんて凄いな」

「しかも何処か殆んど言わないのにな」

何処にいても瞬時で来られる、そんな便利なマジックなのです。

それを使って太平洋組に向かいます。ですがその途中で。

二人はある人の存在に気付きました。

「ああ、一人いたな」

「いたよ、あの娘だよ」

ある女の子の存在を思い出したのです。

「じゃああの娘に声かけるか」

「そうだな。それで受けてくれたら万々歳だしな」

「よし、じゃあまずはな」

「あの娘のところに行くか」

こうしてです。ワープを使って。

その娘のところに行く二人でした。果たしてその娘は誰なのか。

二人はよく知っている娘であることは間違いはないようです。

第二千二百七十九話　　完

２０１１・９・２

第二千二百八十話　そもそも小さ過ぎて

第二千二百八十話　そもそも小さ過ぎて

セボルガとワイがです。少し残念そうな顔でお話をしています。
まずはセボルガがこう言うのです。
「イタリア兄さんやロマーノ兄さんはなれないけれど」
「そうそう、オーストラリア兄さんはやっぱり無理だけれど」
ワイも彼に応えます。
「僕達は生徒会長になれるんじゃないかな」
「小さかったらいいのよね」
国として小さければです。それでいけるのが生徒会長です、ですが。二人はといいますと。
ラトビアが二人のところに来てお話します。
「生徒集会に出られないのも問題だけれど君達は」
「あれっ、何かあるんですか？」
「だから小さかったらいいのよね」
「家族単位の国家だと小さ過ぎるよ」
ラトビアが言うのはこのことでした。
「だからそれが問題になって」
「駄目ですか？」
「ひょっとして」
「うん、君達には残念だけれどね」
それでだというのです。二人は。
「生徒会長の選挙には出られないよ」
「ううん、やっぱりそうなんですか」
「わかってはいたけれどね」
二人もその辺りはわかっていたのです。けれどそれでもです。なれるのならなりたいという気持ちはあるので。そこが複雑なところ

です。

第二千二百八十話　完

2011・9・2

第二千二百八十一話　その娘セーシェル

第二千二百八十一話　その娘セーシェル

イギリスとフランスはワープでその娘のところに来ました。その娘はといいますと。

セーシェルです。瞬時にこの娘の前に来てです。

二人ですぐにです。頼むのでした。

「生徒会長だ！」

「生徒会長になってくれ！」

「あっ、そういえばもう選挙の時ですね」

セーシェルもそのことに気付いて言います。

「そうでしたね」

「ああ、そうだよ」

「それで来たんだよ」

「私が生徒会長にですか」

そう言われてです。セーシェルは。

何かあまり乗り気でない顔になってこう言うのでした。

「そんなの柄じゃないですよ」

「そこにいるだけでいいんだよ」

「スピーチとか仕事は全部俺達が代筆したりやっておくからな」

「じゃあ私は作文読むだけですね」

「それだけでいいからな」

「だから生徒会長になってくれないか？」

最早二人も意地になっています。それで。

セーシェルに必死に頼むです。とにかく今の二人は。

韓国にだけは生徒会長になっては欲しくないのです。それで必死に訴えます。しかしセーシェルは乗り気でないっぽいです。果たしてどうなるでしょうか。

第二千二百八十一話　完

2011・9・3

第二千二百八十二話　作文を読むのも

よくです。日本の今の上司の人達は。
「官僚の文章を読んでいるだけだ！」
「脱官僚主導！」
「上司中心でいく！」
こう言っていました。そうしたことをマスコミの人達とまさにグルになって吹聴して回って日本の上司に居座ったと言っていいです。
ところが。いざ上司になってみますと。
「俺のところにはもっと早く持って来い！」
「今持って来てもまだ時間があるだろ！」
同じ人の発言です。頭か人格が極めておかしくなければ言えない様な発言です。若しくはその両方に加えて品性までおかしくないとです。
とにかくです。作文があってもです。
読めません。漢字の間違いどころではありません。これは最早。
「無能ですね」
「そうですね。汚職をしてしかも人格にも問題のある」
日本も日本妹も駄目出しです。
「上司主導といいましても上司にそれなりの能力がないといけませんね」
「そうですね。最低限のことができるだけでないと」
そもそも上司中心でいけないのです。そして。
「作文を読むのにもそれなりの能力が必要だったんですね」
「そのことがよくわかりました」
「俺は素人だから文民統制だ！」
いきなりこんなことを言う人まで出て来ました。さて、今の上司

の人達はどうなるでしょうか。

第二千二百八十二話　　完

2011・9・3

第二千二百八十三話　セーシェルは乗り気でなくて

第二千二百八十三話　セーシェルは乗り気でなくて

「別にそんな」
「いいっていうのか？」
「生徒会長なんだぞ」
「私今のままで満足してますし」
その暖かいお家の中でのどかに暮らすことがだというのです。
「いいですよ、別に」
「だからよ、生徒会長になってもな」
「俺達が全部フォローするからな」
「そこまでしてもらうのも悪いですし」
イギリスとフランスの説得にもです。乗らないです。
「ですから」
「そうか、そうならな」
「いいさ。セーシェルがそう言うんならな」
二人も遂に折れました。彼女には優しい二人です。
かくして彼女も駄目でした。ここで二人はもう一人に気付きました。
「カメルーンもいたよな」
「あいつのところに行ってみるか？」
こう思った矢先にです。
そのカメルーンから二人宛に携帯メールが来ました。そこに書かれていることは。
『僕は会長とかには興味ないですから』
「先手打たれたな」
「こいつも駄目か」
この人は二人が来る前にもういいと言ってきたのでした。こうし

て二人はです。遂に最後の、そして絶望的な戦いに赴くのでした。

第二千二百八十三話　　完

２０１１・９・４

第二千二百八十四話　また急降下か

第二千二百八十四話　また急降下か

日本に新しい上司ができました。しかし。
「上司になった次の日にですか」
「他の国の人からお金貰ってましたね」
「しかも疑惑ではなく確定ですか」
「これって凄いことですよ」
日本も日本妹も唖然です。ここまで早い発覚はこれまでなかったからです。
しかもです。他の上司の人は。
「ええと。素人だから文民統制ですか」
「それって違いますよね」
こんなことを言う人もいるのです。
「あの、国防は勉強してもらわないと」
「他の政策と一緒に」
「素人だから文民統制ではなくて」
「そういうつもりで上司になってもらうとこれまでの繰り返しですから」
しかしです。上司になってしまったものはなってしまったのです。尚且つです。こうした人達以上にとんでもない人も色々います。
「黒幕にあのカメムシを踏み潰して皺だらけにしたみたいな顔の人もいますし」
「あの公安委員長の人ってどんだけ汚職のお話があるんですか？」
「どじょうではないです、これは明らかに」
「どす黒いですから。どじょうに対して失礼です」
あの襟立ておばさんも誇らしげな顔で参加しています。
とにかくです。上司になって次の日に確定のお話が出て尚且つ汚職の塊の如き人が公安委員長でしかも他にも色々な役職にあるので

す。下手をすると前の上司よりも酷いのではないのか、日本も日本妹も危惧を抱く他ありません。

第二千二百八十四話　　完

２０１１・９・４

第二千二百八十五話　何だこの数は

第二千二百八十五話　何だこの数は

イギリスとフランスが太平洋組の校舎に行くとです。まずは。

その巨大さにびっくりしました。

「おい、ＥＵの何倍あるんだよ」

「しかも設備もよくないか？」

設備までいいのです。何か何処かの学校のＡ組とＦ組と言えば言い過ぎでしょうか。少なくともＣ組とＤ組位の差はある感じです。

「日本がかなり寄付してるからか」

「あいつも頑張ってるんだな」

設備がいい、これは羨ましいです。

しかもそれだけではなくです。合同クラスは。

殆んど大講堂です。そこに入ると。

「ものすげえ巨大だな」

「っていうかどんだけの人間がいるんだよ」

もうそのクラスを見るとお腹一杯になれる位います。

「しかもどいつもこいつも個性的だな」

「何なんだよ、ここ」

尚二人共かつては太平洋でもぶいぶい言わせていました。けれどそれはもう過去のお話です。今では殆んど影響がありません。

ここに来たのも実はかなり久し振りです。それで来てみたらです。

「ここまで大きくなって変わっていってるなんてな」

「こりゃもう俺達じゃどうしようもねえかもな」

その巨大なグループに今から入りそうして韓国以外の生徒会長候補を探さないといけないのです。二人は今最大最悪の戦いを迎えようとしています。

第二千二百八十五話　完

2011・9・5

第二千二百八十六話　今は辛い

第二千二百八十六話　今は辛い

日本の寄付は凄いです。それこそ太平洋組の校舎を一変させる程です。彼によって太平洋組は変わったと言っても過言ではありません。

ですが今はといいますと。

「震災と上司の影響で」

「大丈夫ですか？」

「何か」

青い顔で気遣ってくれる台湾に応えます。

「立ってはいられますが」

「あの、せめて上司の人達だけでも何とかしないと」

「マスコミが何故か必死に応援して支えていますから」

日本のマスコミの多くは今の上司の人達と完全に『癒着』しているのです。尚日本のマスコミのダブルスタンダードはそれこそ世界最強です。

特にテレビが悪質で。日本も言います。

「テレビを観て信じる人も多くて」

「どうにもならないのですか」

「中々」

「あの、まさか日本さんのお家のテレビは」

どういったものなのか。台湾も察して言います。

「恐怖新聞みたいな感じですか？ただ観ると頭があれになるという」

「そうかも知れません。とにかくテレビのコメンテーターやキャスターの人達の言葉を信じる人が減ってくれないと」

日本自身が辛いというのです。

日本にも弱点はあります。それは何かというと今の上司の人達とマスコミ、とりわけテレビです。日本にとっての恐怖新聞となって

しまっているのです。

第二千二百八十六話　完

2011・9・5

第二千二百八十七話　これだけいれば

第二千二百八十七話　これだけいればとにかくです。太平洋組の人は多いです。その数を見てです。イギリスもフランスもです。こう思ったのでした。

「流石にこれだけいればな」

「一人位はいるだろ」

期待しだしています。明らかに。

「韓国以外の生徒会長に相応しい奴がな」

「絶対にいるだろ」

二人はこう言ってです。校舎の中に足を踏み入れました。するとです。

物凄く色々な国の文化や風習が複雑に絡み合った雰囲気にです。まずは唖然でした。明らかに欧州組の校舎とは違う雰囲気です。

その中で、です。イギリスが言いました。

「で、ここだけれどな」

「すげえことになってるな」

フランスも驚きを隠せません。

「っていうかどうなってんだ？」

「暫く見ない間に自己主張が壮絶になってるな」

「全員が自己主張してるのかよ」

まさにそんな感じになっています。見てみると。

日本もあればアメリカもあって中国もあって。オーストラリアやニュージーランドもあります。

当然ベトナムやタイもありますし台湾もしっかりといます。とにかくあらゆる国のあらゆるものが自己主張している感じであります。

その中に足を踏み入れたイギリスもフランスもです。迷路に入ってしまった様な感覚に捉われました。まずはそこからなのでした。

第二千二百八十七話　完

2011・9・6

第二千二百八十八話　コンドルと狼

あの某脚本家さんがです。久し振りにです。
戦隊で書きました。そのお話を見て日本は唸りました。
「見事です。キザですね」
「どうだよ。面白いだろ」
「はい、是非メインで書いて欲しい程です」
日本は感動しながらその某脚本家さんに言います。
「思えば貴方はこの作品から大きくなられましたが」
「あとあの能天気な探偵な」
「そうでしたね。また仮面ライダーでも書いて下さいね」
「機会があればな。あとな」
「あとは？」
「今度狼でも書くからな」
お料理をしながらです。日本にお話してきます。
「楽しみにしておけよ。最高に面白い狼になるからな」
「あの作品は貴方に会っていると思っていましたが書かれますか」
「ああ、楽しみにしてな」
脚本家さんは微笑んで日本に言うのでした。
そしてここで、です。日本に鮑を料理したものを出します。そうしてそのうえで笑顔で、です。日本に食べる様に言ってそれからでした。
「食って俺に笑顔を見せろ」
「その笑顔を見ることがですね」
「俺の楽しみなんだよ」
こんなことをお話してです。脚本を書く人です。日本はこの人の料理も楽しむのでした。

第二千二百八十八話　完

2011・9・6

第二千二百八十九話　石を投げればは嘘

第二千二百八十九話　石を投げればは嘘

イギリスとフランスはその巨大な校舎の中を歩きながら手当たり次第に声をかけていきます。

「なあ、よかったらな」

「生徒会長にならないか？」

こうやって声をかけていきます。けれどです。

誰も振り向いてくれません。本当に誰もです。このことにイギリスもフランスも苛立ちを覚えながらそれぞれ首を傾げさせて言いました。

「こんなにいるのに全然だな」

「ああ、俺達の誘いに乗らないな」

「何でなんだ？こんなにいて」

「一人も手を挙げないのは」

そのことがです。二人にとっては不思議で仕方ありません。

試しにです。通り掛かったタイに声をかけました。

「なあ、ちょっといいか？」

「生徒会長になってみないか？」

「いえ、アメリカさんか中国さんの推薦ならいいのですが」

タイは穏やかな笑顔でこう二人にお話します。

「イギリスさんやフランスさんですと」

「おい、俺達じゃ駄目なのか？」

「同じ生徒会の役員だぞ」

「まあそこは色々ありまして」

こう言ってです。そのまま立ち去ってしまうタイでした。

けれど彼の言葉で、です。太平洋の事情が少しわかったのでした。

欧州でもそうですが太平洋にもです。しっかりと顔役がいることがです。

第二千二百八十九話　完

2011・9・7

第二千二百九十話　戦争するより怖い

第二千二百九十話　戦争するより怖い

ベトナムはタイと少し離れた場所にお家があります。お互いに何も言いませんし周りの誰も何も言いませんが実は二人の関係は結構微妙だったりします。

そんな二人がです。タイは顔は微笑んでいますが何か警戒しているオーラを出して。ベトナムは無表情ですがやっぱり警戒しているオーラを出して向かい合って座ってお話をしています。

タイがです。ベトナムに尋ねます。

「ところで最近中国さんと色々あるようで」

「別に何も」

こう返すベトナムでした。

「よくあることだから」

「それでアメリカさんとは」

「心の中ではまだ色々思っているわね」

ベトナム戦争のことはアメリカにとってはあまり思い出したくないことなのです。

「けれど今はね」

「そうして時間が経てば中国さんとも」

「そうしていくわ。何時までも揉めても仕方ないから」

「そうですね。ですがベトナムさんも長い戦争をよく生き残られましたね」

今のタイは目が笑っていません。勿論ベトナムもです。

「いや、お見事です」

「アメリカも中国も内心私のことは色々思っているけれどね」

「御二人に勝たれましたからね」

「相手が誰でもやることはやるから」

こんなお話をしている二人でした。けれどそんな二人の近くには誰も近寄りません。本当にお互い何も言い合いませんがとにかく関係が微妙な二人です。

第二千二百九十話　　完

２０１１・９・７

第二千二百九十一話　他の東南アジアメンバーも

第二千二百九十一話　他の東南アジアメンバーも

タイに断られてしまったイギリスとフランスはなおも諦めずにです。とりあえず東南アジアのメンバーが集まっているところに向かってです。

そのうえで手当たり次第に声をかけました。

「どうだよ生徒会長にな」

「出てくれないか？」

「立候補したらバックアップするぞ」

「何から何まで全部面倒見るからな」

もう後先考えていない位必死です。とにかくまずは立候補して欲しい二人なのです。

ところがです。まずベトナムが言いました。

「興味ないわ」

「くっ、女生徒会長なしか」

「まずはこいつが駄目か」

そして次はです。インドネシアとマレーシアが。

「欧州の人から推薦受けてもね。ちょっと」

「アメリカとか中国とかとの付き合いもあるし」

「欧州にいないのかな。誰か」

「アジア枠はもう韓国で決まりだから」

現在の生徒会長をそのまま出すというのです。こうしてです。

アジア枠は空しく消えました。そうして残ったのは。

「オセアニアにアメリカ枠か」

「アジア全滅かよ。かなり痛いんだけれどな」

一番人口の多いアジアがまず全部駄目になりました。かくして二人はさらにです。アメリカ枠とオセアニア枠を探しに向かうことに

なりました。

第二千二百九十一話　完

2011・9・8

第二千二百九十二話　マレーシアのかつての親分

第二千二百九十二話　　マレーシアのかつての親分

マレーシアは昔はです。イギリスの植民地でした。
「あの時はゴムばかり作ってたのよね」
「プランテーションですね」
日本が彼女の言葉に応えて言います。
「オランダさんもかなりやっておられましたね」
「あの頃は本当にそればかりで」
マレーシアもそこで毎日働いていたのです。
「けれど今は全然違うから」
「かなり発展されましたね」
「独立してからも暫くはゴムばかりだったけれどね」
それが大きく変わったのはやっぱり独立してからです。マレーシアにとっても独立はかなり大きいことだったのです。他の国と同じく。
「日本さんの上司の人が来てくれたりしたお陰で独立できてから」
「あの時はイギリスさんと正面から戦いました」
「イギリスね。あいつとは今は何もないけれど」
そのイギリスのお話にもなります。
「あの時は色々あったわね」
「ですがそれもですね」
「独立して。今では歴史でのことよ」
ただし忘れないことではあります。
「これからはもっともっと発展していくから」
「頑張って下さいね」
日本も微笑んで応援します。マレーシアもこれからの国です。

第二千二千九十二話　完

2011・9・8

第二千二百九十三話　オセアニアは

第二千二百九十三話　オセアニアは

イギリスもフランスも後がありません。太平洋のメンバーから立候補者を出さないとまた韓国が生徒会長になってしまうからです。

それで、です。今度はオーストラリアとニュージーランドに声をかけました。

「二人のうちどっちかどうだ？」

「生徒会長にな」

「ああ、おいどんはＧ２０に出ているでごわす」

まずはオーストラリアでした。

「だから駄目でごわす」

「おい、それで終わりかよ」

「大国はなれないってのか」

「そうでごわす。最初からなれないでごわす」

「オーストラリアが言うならばい」

そのオーストラリアといつも一緒のニュージーランドも言います。

「僕も別にいいばい」

「っておい、もうか」

「二人共いいってのか」

「他の人をあたるでごわす」

「僕達はいいばい」

「糞っ、じゃあ他に誰がいるんだよ」

「誰もいないじゃねえかよ」

二人はもういい加減誰なのか思いつかなくなってきました。

遂にです。なり手が見つからないという最悪の状況が近付いてきました。その状況にです。二人は深刻な危機さえ感じていたのでした。

第二千二百九十三話　完

2011・9・9

第二千二百九十四話　オセアニアコンビと羊

第二千二百九十四話　　オセアニアコンビと羊

オーストラリアとニュージーランドはいつも一緒です。二人といえばです。

「今日も羊の世話でごわす」

「何かと忙しいばい」

こんなことを言ってです。二人は羊の世話に追われています。

そんな二人を見てです。日本は少し首を捻ってそれから言うのでした。

「羊は羊毛はいいとしてお肉は」

「だからラムを食べるといいでごわす」

「日本さんはマトンの匂いが苦手ばい？」

「どうも」

実際にです。日本は羊の肉はあまり食べません。従って羊の肉、マトンの匂いについてもです。どうも馴染みがなかったりするのです。

その日本がです。言います。

「申し訳ないのですが」

「だからラムでごわす」

「鯨よりもいいばいよ」

「いえ、鯨はこれまで通り食べますので」

何気に緊張がです。双方の間に漂います。

「御気遣いは無用です」

「やれやれ。日本も頑固でごわすな」

「羊なら幾らでも御馳走するばいよ」

「羊は鯨とは違いますので」

こう言って引こうとしない日本でした。オーストラリアとニュージーランドは食べ物のことでは日本とは上手くいっていないところ

があります。

第二千二百九十四話　完

2011・9・9

第二千二百九十五話　生徒集会に出てないんです

第二千二百九十五話　生徒集会に出てないんです

イギリスもフランスもです。顔が変わってきました。物凄く焦っているうえに真っ青になっています。勿論目は真っ白になっています。

太平洋でも生徒会長候補がいません。一人以外は。

「ちょっと待て、本当に一人もいねえぞ！」

「俺に聞くな！だから誰かいるだろ！」

挙句にはお互いで喧嘩寸前になってしまっています。何か船を沈められて周りに鮫がうようよしている中で何日も漂っている感じです。

その中で、です。二人の前に台湾に香港、マカオが通り掛かります。それで咄嗟に三人に声をかけます。けれど。

「私生徒集会には出ていないから」

「私も同じ？的な」

「すいません。生徒集会に出ていないと立候補できないんですよね」

三人の返答は内容は同じでした。

「それにアメリカさんや老師ともお話しないと」

「というかイギリスさん何でここにいるの？的な」

「欧州からどなたか擁立されてはどうでしょうか」

「ああ、あの連中と話しないと駄目かここは」

「それにな。欧州にいないからここに来たんだよ」

イギリスは理解してフランスがコメントします。

「あの連中に話するのも結構ハードなものがあるな」

「絶対あいつを擁立するからな」

そもそもその二人とロシアが韓国の立候補に乗って決まったこと

です。イギリスとフランスにとっては迷惑なことに。
けれどこの三人は集会に出ていないので生徒会長にはなれないことだけははっきりしています。生徒会長立候補者探しも苦境、いえ佳境になってきてはいます。

第二千二百九十五話　　完

２０１１・９・１０

第二千二百九十六話　福島さん呆然

第二千二百九十六話　福島さん呆然

ある上司の二つの発言にです。福島は。
呆然となっています。何も言えないです。その代わりにです。
会津が怒り狂っています。白虎隊の格好になって刀を抜いています。

そんな会津を日本が必死に止めています。
「待って下さい。軽挙妄動はいけません」
「止めないで下さい！許せません！」
「御気持ちはわかりますがそれでもです」
「ですが日本さん、死の街だのつけただの」
その二つの発言にです。会津は怒っているのです。
それで刀を抜いて成敗しようとしているのです。若し本当に成敗すればまさに下克上、ちょっと地域としてはやっちゃいけないかな、ということになります。
流石に国としては見過ごせないので日本は止めています。
「どうかここは落ち着かれて」
「しかし」
「あの発言は私も怒っています」
日本もそうなっているのです。
「ですがそれでもです」
「あの上司を放っておくというのですか」
「そのうち辞任しますので」
他にも辞任候補者がいるにはいます。マルチの人とか。
とにかくです。今日本は必死に怒っている会津を止めています。
止めないといけないからです。
けれど日本が怒っているのは事実です。何しろことの原因はです。
前の上司達の中で一番偉い人のです。「少し勉強したい」という無

意味なパフォーマンスなのですから。同じ政党の人の発言ですから怒って当然です。

第二千二百九十六話　　完

２０１１・９・１０

第二千二百九十七話　太平洋の顔役

第二千二百九十七話　太平洋の顔役

イギリスとフランスはです。ここで。
日本のところに行ってです。彼に言うのでした。
「生徒会長は韓国以外はいねえのか？」
「御前は出られないにしてもな」
「はい、実はですね」
日本も二人の問いに答えます。
「韓国さんでもう決まりでして」
「生徒会役員のあの三人が決めたんだな」
「それでなんだな」
「はい、太平洋はあの方々。もっと言えばです」
「アメリカと中国か」
「あの二人の発言力が大きいんだな」
欧州にしてもイギリスとフランス、それにドイツの発言力は大きいです。しかし太平洋は欧州どころではなくです。大国の力が強いのです。
それで、です。この二人が言えばかなり効くのです。しかし。
イギリスもフランスもです。日本に対して怪訝な顔で尋ねました。
「けれど御前も顔役の一人じゃないのか？」
「何だかんだでな」
「ですが私は生徒会役員ではないので」
ほぼ準と言っていいですが正式ではありません。それで。
「御二人に比べると」
「そうか。他にも核兵器とかあるしな」
「あの二人に比べれば弱いか」
日本は三番目位です。それで今一つ二人に比べて発言力が弱いのです。

第二千二百九十七話　完

2011・9・12

第二千二百九十八話　やることはマメ

第二千二百九十八話　やることはマメ

日本は太平洋の顔役の一人です。その彼がすることは。
「あの、こんなことまでされたんですか」
「はい、上司の方に言われまして」
インドネシアがびっくりしています。日本はインドネシアで橋をかけたりしているのです。その他にも学校を建てたりもしています。
そんな日本を見てです。インドネシアはさらに言うのでした。
「そういえば昔韓国に植林もされていましたね」
「あの時は六億本植えました」
「六億ですか」
その数にです。インドネシアはまた驚きました。
「あの何の資源もない禿山だらけの国に」
「国はまず木があってこそですから」
「そう考えられる日本さんって凄いですよ」
「江戸の頃の上司の方が植林に熱心で」
それからだというのです。
「それと韓国さんのところに赴かれた当時の上司の方がそう言われまして」
「だから六億本ですか」
「はい、そうです」
この上司の人は自分の頭への植林なぞそっちのけで韓国に植林したのです。
「木に橋、学校は国家の基礎ですから」
「そうしたことを言えて実行できるのが日本さんですね」
日本はまずそこからはじめるのです。韓国においてもそうでした。
尚韓国はこの頃日本とその上司にいじめ抜かれたとは言っています

けれど。

第二千二百九十八話　完

2011・9・12

第二千二百九十九話　顔役達のところに

第二千二百九十九話　顔役達のところに

「とりあえずこの件については私はです」
「ああ、関係ないんだな」
「生徒会長の件は」
「できればあの方々のところでお話されれば」
有り難いとです。日本はイギリスとフランスに言いました。それを受けてです。
二人は太平洋の生徒会役員達のところに向かうことにしました。けれど。
ふとです。二人はあることに気付きました。それは何かというと。
「太平洋に他に誰かいなかったか？」
「ああ、誰かいたよな」
「ほら、あのアメリカの近くにいる」
「眼鏡かけてなかったか？熊といつも一緒にいる」
ここまでは思い出せました。
「ええと？それでだ」
「誰だった？」
「ちょっと思い出せないな」
「本当に誰だった？」
二人共どうしても思い出せません。それが誰なのか。
「何とかいったよな」
「ええと、名前がどうしても思い出せないな」
「寒いところの奴だったな」
「ああ、やたら大きくてな」
ここまでは思い出せるのです。けれど頭の中に浮かぶ顔はぼやけていますしはっきり思い出せません。二人にも縁の深い国なのです

が。

第二千二百九十九話　完

2011・9・13

第二千三百話　オリンピックもＡＰＥＣも

第二千三百話　オリンピックもＡＰＥＣも

カナダはです。台湾にぼやいています。
「僕一応オリンピックもＡＰＥＣも開催したことあるんだよ」
「ええと、誰だったかしら」
ぼやく以前に台湾もカナダのことを忘れています。
「アメリカさんの北の方にいる、ええと」
「カナダだよ」
項垂れた顔で台湾に言います。
「覚えておいてね」
「で、そのカナダがどうしたの？あまり見ない感じだけれど」
「だから。僕オリンピックもＡＰＥＣも両方開催したことあるんだよ」
カナダは台湾にまたこのことをお話します。
「それでもどちらも皆から忘れられるし」
「そうだったの。あんたのところでどっちも開催してたの」
「君も両方に出てたんだけれど」
「あれっ、そうだったかしら」
何とです。台湾は出ていてもそれでも忘れてしまっていたのです。
「ＡＰＥＣは目立つ国ばかりで行われているから」
「それってつまり僕が目立たないってことだよね」
「この前の日本さんのところのあの上司は一目見ただけで碌でもない人だってわかったけれどね」
「あの人はもう人間として何もかもがおかしい人だから・・・・・・ってあの人より僕の方が目立たないんだ」
「悪い意味で目立ちたいの？ひょっとして」
そうした意味ではカナダが目立たないことはいいことでしょう。

あの上司の人は最低人間のサンプルという意味で目立っていたのですから。カナダはそこまでではありません。

第二千三百話　　完

２０１１・９・１３

第二千三百一話　話を聞く気なし

第二千三百一話

話を聞く気なし

イギリスとフランスは遂にアメリカと中国のところに来てです。

二人に対して言いました。

「だからな、生徒会長他の誰かにしろよ」

「あいつ以外の誰かな」

とにかく韓国の他の誰かにしろというのです。二人にとっては切実な要求です。

けれどです。アメリカと中国の返答は。

「何処が不満なんだい？いい会長じゃないか」

「問題は見当たらないあるよ」

「おい、それ本気で言ってるのか？」

「酔ってるのか？それとも寝てるのか？」

二人は一瞬でその目を真っ白にさせてアメリカと中国に言い返しました。

「あんな仕事しない会長今までいなかっただろうが」

「それでいいっていうのか？問題が見当たらないっていうのか？」

「だって僕達は仕事しなくて済んでいるんだぞ」

「だからいい会長ある」

「御前等あいつが何かやろうとすると絶対にいなくなるよな」

「しれはエスケープっていうんだよ」

二人はまたうんざりとなった顔でアメリカと中国に言い返します。

「とりあえず会長他の奴にする気はないんだな」

「太平洋ではそうなんだな」

「ああ、全くないぞ」

「このままいくある」

実にあっさりと言うアメリカと中国でした。よく見れば彼等の耳

には耳栓があります。最初からイギリスとフランスの話を聞く気はなかったみたいです。

第二千三百一話　完

２０１１・９・１４

第二千三百二話　実際のところは

第二千三百二話　実際のところは

アメリカが自分の妹に言われています。
「あの会長全然仕事しないんだけれどさ」
「あれっ、そうなのか？」
「それでもいいの？イギリスとフランスかなりうんざりしてるけれど」
「あの二人が嫌がってるのか。そうなのか」
「それでも何もしないんだね」
「役員は生徒会長の言うことを聞くものさ。僕だってそうしてるぞ」
ここまで自分のことを棚に上げた言葉もそうないでしょう。この学園は生徒会長より役員の人達の力の方が遥かに強いのですから。
けれどアメリカはです。二人がうんざりしているのをよそに。
「ここは二人に任せよう。何の問題もなしだ」
「まああたしもあの二人についてはどうでもいいけれどね」
アメリカ妹もです。実に素っ気ないです。どうもアメリカは本当のところ欧州各国に対してはあまりよくは思っていないのかも知れません。
中国もです。妹に言われました。
「今日は生徒会の仕事には出なかったあるか？」
「また韓国が起源の主張を言い出したある」
中国は自分の家でごろ寝したうえで妹さんに答えます。
「鬱陶しいから行かないある。言ったら変な仕事を押し付けられるあるよ」
「今回はまたまた日本さんのことで言い出しているあるがそれでもあるか」
「僕のことでなくとも鬱陶しいものは鬱陶しいある」

こう言ってです。この人も何かあると生徒会の仕事をさぼるのでした。どうも彼等にとって韓国は『普通とは違う意味で』いい会長みたいです。

第二千三百二話　　完

２０１１・９・１４

第二千三百三話　最後の顔役

第二千三百三話　最後の顔役

アメリカと中国に自分達の話を聞く気がないことがわかったイギリスとフランスは二人から別れてです。最後の一人のところに向かうことにしました。その太平洋最後の顔役とは。

「俺はあまり行きたくないんだがな」

「ああ、あいつとはまだか」

「御前はあいつと仲よかったよな」

「ドイツやプロイセンと対抗してずっと手を組んでたからな」

どうやらその人はフランスの友人の一人のようです。

「それでな。まああいつはオーストリアとも付き合い深いけれどな」

「けれど俺とはな」

イギリスとその人がどうかというと。

「一時期ことあるごとに対立してたしな」

「そういえば七年戦争でも御前等敵対関係にあったな」

「だからな。あいつのところに行くのはな」

「じゃあ俺が前に出てやろうか？」

「御前が前に出るのもな」

イギリスにとっては好ましいことではありません。やっぱり仲がいいとはお世辞にも言えないイギリスとフランスです。

ですがそうも言っていられず。イギリスは。

「まあそれじゃあな」

「ああ、任せてくれよ」

ここはフランスに任せることにしたのです。そして。

暑い国が多い太平洋においてそこだけ寒い場所に向かうのでした。

太平洋の人達の校舎は場所によって極端に暑くなったり寒くなったりするのです。ただしその寒い場所はです。校舎において例外の場所だったりします。

第二千三百三話　完

2011・9・15

第二千三百四話　台湾も敬遠する相手

第二千三百四話　台湾も敬遠する相手

台湾は苦労人でもあります。ですから人付き合いはかなり慎重です。

日本だけでなくアメリカとも中国ともお付き合いしていって尚且つ揉めてはいけないというハードな状況の仲にいつもいるのです。

ですが何とかやっていっています。その台湾にです。

ベトナムがです。ふと尋ねました。

「あんたあいつとは付き合わないの？」

「ああ、あの人ね」

これだけでわかるのでした。ベトナムが言っているのが誰のことか。

「あの人とはちょっと」

「友達になったら危ないっていうのね」

「私の主に関係ある人っていったら」

ここでもこの三人です。

「日本さんにアメリカさんに老師よ」

「その三人の間にあんたの家があるからね」

「それで若しよ。あの人と仲良くしたら」

流石の台湾もです。今は暗い顔になっています。その顔での言葉です。

「それこそどうなるか」

「韓国は仲良くしてるみたいだけれど。最近

「じゃあベトナムも今あの人と仲良くできる？本気で」

「本気で死にたいのならね」

ベトナムですらこう言う始末です。

そうした人もいるのです。台湾ですら仲良くしたらまずいという相手が。そしてその国と韓国が最近仲がいいようです。果たしてど

の国なのでしょうか。

第二千三百四話　　完

2011・9・15

第二千三百五話　その国ロシア

第二千三百五話　その国ロシア

太平洋で例外的に国の全てが寒い国ロシア。イギリスとフランスは遂に彼のところに来ました。

そうしてです。すぐに彼に言うのでした。

「なあ、生徒会長だけれどな」

「ちょっと考えてくれないか」

「うん、韓国君の再選で決定だね」

ロシアはにこりと笑って二人に答えました。

「彼も喜ぶと思うよ」

「いや、あいつは駄目だろ」

「だからあいつ以外に誰かいるだろ」

「そうかな。彼は適役だと思うけれど」

見事にです。双方の意見が食い違っています。

「いいじゃない、韓国君で」

「だから何がいいんだ？あいつが」

「何処がいいのか言ってくれるか？」

「だってさ。僕とも仲がいいし」

ここ重要です。あらゆる意味で。

「しかも君達にやりがいのある仕事をどんどん出してくれるし」

「というか御前等三人あいつが何かしようとすると絶対にいなくなるな」

「俺達ばかり仕事してるんだが」

だからです。二人は今ロシアに言っているのです。生徒会長を他の誰かにしろと。

けれどロシアもです。その誘いにはこうです。

最後の最後の人に至ってはです。これまで以上に何かが違う感じ

です。フランスも自分が話すつもりでしたが何か勝手が違っていました。

第二千三百五話　　完

２０１１・９・１６

第二千三百六話　韓国は違った

第二千三百六話　韓国は違った

韓国は最近です。周りに大声でこう言っています。
「俺の新しい友達は凄く頼りになるんだぜ」
「それは誰ニダか？」
韓国妹がそのお兄さんに尋ねます。
「日本さん以上に頼りになるニダか？」
「日本は友達じゃないんだぜ。あんな奴は願い下げなんだぜ」
とか何とか言いながらいつも日本の隣にいたりするのが韓国です。けれどです。
彼とはまた別にです。友達がいるというのです。その友達はといいますと。
「ロシアなんだぜ」
「えっ、ロシアさんニダか」
それを聞いてです。韓国妹がぎょっとした顔になりました。
そうしてです。お兄さんにあらためて言うのでした。
「兄さん、その人とは絶対にニダ」
「絶対に？何なんだぜ」
「御付き合いしない方がいいニダよ。絶対に」
「何でなんだぜ？何か俺に色々と親切にしてくれるんだぜ」
「シベリア知らないニダか？」
あの恐怖の流刑地です。そこがどういった場所なのかはリトアニア達がよく知っています。あとドフトエフスキーさんもいたことがあります。
「それにロシアさんと付き合うと日本さんにアメリカさんに中国さんが」
「そうなんだぜ。日本とも対抗できるんだぜ」
韓国だけがわかっていません。ロシアとお付き合いするとどうい

うことになるのか。それはあらゆる意味でとても怖いことなのですが。

第二千三百六話　完

２０１１・９・１６

第二千三百七話　善意のボランティア

第二千三百七話　善意のボランティア

ロシアもです。イギリスとフランスに言いました。
「僕としても韓国君でいいと思うよ」
「ああ、そうかよ」
「結局そうなんだな」
二人は完全に諦めきった口調でそのロシアに返します。
「何かよ、本当にどうでもいいんだな」
「っていうか何で韓国なんだ？」
「まあ韓国君がいてくれたら」
どうなのか。何かロシアの顔に怖いものが加わってきました。
「あれじゃない。いざという時に役に立ってくれるから」
「何だ？人間の盾か鉄砲玉か？」
「それとも地雷除去係か？何なんだよ」
「まあ色々とね」
ロシアはにこりとしながら言います。
「役に立ってくれるじゃない。何千万もいるんだし」
「その何千万が林業や漁業に従事するんだな」
「それと農業に土木作業か。賃金は幾らだ？」
「賃金？こうした場合ロシアではそんなの支払われないよ」
ロシアではそうなのです。シベリアとかでの作業になると。
「有り難いよね。何千万の人達がボランティアでやってくれるんだよ」
「それが本音か」
「相変わらずだな」
ロシアにとって韓国とは何かがよくわかる言葉でした。尚ロシアは昔からこうしたことをしてきています。そのことを知らない人は

いない筈です。

第二千三百七話　完

2011・9・17

第二千三百八話　だからそれは止めておけ

第二千三百八話　だからそれは止めておけ

日本は韓国がロシアと最近仲がいいことを聞くと。
瞬時にです。顔を曇らせて言いました。
「それは由々しき事態ですね」
「あの、日本さんひょっとして」
台湾がその日本に怖いものを感じて尋ねました。
「何かあった時は」
「百年前と同じです」
その百年前はというとです。
「坂の上の雲です」
「そうですか。やっぱり」
「ロシアさんがあの半島に進出することは絶対にあってはなりません」
それは即ち日本にとっては喉元に刃を突きつけられたに等しいことだからです。だからそれは絶対に許さないというのが彼の考えなのです。
ですが韓国はそんなことは全く知らずに考えないで。相変わらず能天気かつ誇らしげに言います。
「ロシアは頼りになるんだぜ。これからは俺とロシアのタッグなんだぜ」
「これはまずいわね」
台湾はその韓国を見ても言いました。
「あいつが本当に馬鹿なことをしたら」
「それじゃあ一緒に日本に対抗する手段を考えるんだぜ」
こんなことを言い続けています。そして。
それを聞いた日本が持っている刀に手をかけました。今にも抜か

んばかりです。
　そんな日本と韓国を見て台湾も流石に今は日本から離れました。
本当にロシアと仲良くするということは太平洋では命懸けです。

第二千三百八話　　完

２０１１・９・１７

第二千三百九話　そこが違う

第二千三百九話　そこが違う

イギリスとフランスは結局ロシアも説得できませんでした。かくして生徒会長は韓国のままでいることが事実上決まってしまいました。

そのことについて二人は無念で仕方ありません。ですが。

二人はあることに気付きました。それは何かといいますと。

「アメリカと中国、それとロシアじゃな」

「そうだよな。あの会長への見方が違うよな」

このことに気付いたのです。

「アメリカと中国は自分達の言う通りにある程度動いてくれなくもないからあいつを会長にしたな」

「アメリカは今のあいつの親分みたいなものだし中国は昔からあいつの兄貴分だしな」

韓国は結構目上やそうしたことを意識します。今の彼にとっては二人は目上にあたるということです。尚イギリスとフランスは彼にとってはそんな存在では間違ってもありません。

「だから口調もあの二人に対するのは違うしな」

「ああ、そこにもう出てるよな」

下手にタイとかベトナムとか癖のある国を生徒会長にするよりはいいというのです。

それに対してロシアはといいますと。

「あいつ絶対何時か韓国をよくて手下、悪くて自分の国に引き込もうって考えてるぞ」

「韓国は気付いてないみたいだけれどな」

「ロシアのやることは変わらねえからな」

「じゃあそれしかないな」

そのです。韓国をどうするかということはです。

既にロシアの中では結論が出ているみたいです。だからこそ。
韓国に対して何かと声をかけてバックアップしているみたいです。
イギリスとフランスはそうしたことに気付いたのです。韓国とその
周りについて。

第二千三百九話　　完

２０１１・９・１８

第二千三百十話　三国は知っている

第二千三百十話　三国は知っている

リトアニアはロシアが韓国に優しくしていると聞いてです。青い顔でラトビアとエストニアに言いました。

「これって大変なことだよね」

「えっ、韓国さんロシアさんと仲良くされてるんですか？」

「日本さん達に許可は」

「得てないよ、そんなの」

日本達と何もお話せずにです。そうしているというのです。

それを聞いてラトビアもエストニアもです。リトアニアと同じく顔を青くさせました。

「それって。ただロシアさんのお家の中に入るだけではなくて」

「そうですね。日本さん達も向こうについて」

「俺日本さんとは直接戦ったことないけれど」

一応ソ連の中にいる時にとはなりますがそれでも間接的です。けれどそれでも。リトアニアも日本のことは聞いています。

「本気になったら物凄く強いよ。とことんまで諦めないし」

「特攻ですよね、あれ怖過ぎますよ」

「一番怖いのはそれをする人達が完全に正気だったということですが」

日本の本気は半端ではありません。それこそ玉砕でも特攻でも何でもします。これはする方よりされる方、見る方が怖いものです。

そして日本だけでなくです。

「アメリカさんに中国さんもだから」

「ええと、韓国さん本当にロシアさんと手を切らないと」

「生徒会長どころではないのでは」

三人も本気で心配する程です。少なくとも日本とロシアの抜き差

しならぬ関係は今も同じです。それでロシアと仲良くするのは。やっぱり危険なのです。

第二千三百十話　　完

２０１１・９・１８

第二千三百十一話　決定

第二千三百十一話　決定

生徒会長選挙がはじまりました。結果は。

韓国しか立候補している人がいなかったので自動的に決定でした。

「やったんだぜ！再選なんだぜ！」

「ああ、それはよかったな」

「祝福してやるよ」

イギリスとフランスは喜び跳びはねている韓国に棒読みで応えています。

「じゃあまた会長か」

「とりあえず椅子に座ってるだけでいいからな」

「じゃあ全ての起源は俺部の部費をうんと増やすんだぜ」

いきなりこんなことを言い出します。

「あとは妹を正式に会長秘書にするんだぜ」

「あの娘にもう全部権限委任しろよ」

「俺達はそっちの方がいいからな」

二人も本音を全く隠していません。

「とにかくな。もう決まったからな」

「こっちは諦めるしかないからな」

「とりあえずこの眉毛と髭にはこれからも頑張ってもらうんだぜ」

韓国はまだ二人の名前を覚えていません。彼にとっては日本より下だとそれだけで限りなくどうでもいい相手になってしまうのです。

「俺はこれから全ての起源は俺部で活動するんだぜ」

「その部活も何時まで続くんだ？」

「部活の認可も考えておくべきだったな」

二人は不満で仕方ありませんが決まってしまいました。この二人はどうしても韓国が苦手でした。幾ら付き合ってみても。

第二千三百十一話　完

2011・9・19

第二千三百十二話　何故欧州に強いのか

第二千三百十二話　何故欧州に強いのか

太平洋の面々はかつて植民地だった国ばかりのせいか実は欧州に密かにコンプレックスを持っている国が多いです。けれどです。その欧州勢をあの戦争で蹴散らした日本と、それと韓国は無縁です。特に韓国はです。

「欧州？雑魚ばかりなんだぜ」

本気でこう思っています。それは何故かといいますと。

「日本に負けたし今もどの国も日本以下の力しかない奴ばかりなんだぜ。それで何で怖いんだぜ」

「兄さんにとっては欧州はそうニダか」

韓国妹がお兄さんの話を聞いて言いました。

「だから怖いとも偉いとも思っていないニダか」

「日本より弱い奴の何処が怖いんだぜ」

韓国は妹さんにもこう言い切ります。

「アメリカさんも中国兄貴も欧州には微妙なところがあるけれど俺は違うんだぜ」

「確かに全然違うニダな」

「名前も覚えていない奴ばかりなんだぜ」

それだけ軽く見ているということです。

「そんな奴等よりやっぱり日本なんだぜ」

「日本さんニダか」

「そうなんだぜ。何時かあいつを全てにおいて超えてみせるんだぜ」

「それで起源の主張ニダな」

「あれは趣味なんだぜ」

韓国はその起源の主張も欧州には殆んどしません。

彼にとってはやっぱりまずは日本なのです。その日本より下の欧州はというとです。彼にとっては本当にどうでもいい相手です。だ

から強いのでしょうか。

第二千三百十二話　　完

2011・9・19

第二千三百十三話　重病のフランス妹

第二千三百十三話　重病のフランス妹

ある日です。イギリスはフランスに呼ばれてベルサイユ宮殿に来ました。

鏡の間や様々な豪華な装飾で知られている巨大な宮殿です。そこに妹と二人で来ました。

その二人をです。フランス妹が出迎えてきました。ですが。

フランス妹のその顔を見てです。まずはイギリス妹が驚いた顔で尋ねました。

「どうしたのです？そのお顔は」

「いえ、少し」

「体調が悪いようですが」

「御前本当に大丈夫かよ」

イギリスもです。フランス妹に尋ねます。

「何処か悪いのか？死にそうなのか？」

「お兄様が御呼びです」

フランス妹はイギリスの問いに答えずにこう言うだけでした。

「ですからこちらに」

「ああ、わかったけれどな」

イギリスは一応フランス妹の言葉に頷きます。

「それにしても本当に大丈夫なのかよ」

「今は何とか」

「今はって」

「とりあえずですね」

イギリス妹もここで言います。

「貴女は兄さんを案内してくれた後でお庭で私とゆっくりお茶でも」

「はい、それでは」

何かあからさまに危ないフランス妹です。今にも死にそうな。イ

ギリス妹も彼女とは色々ありましたが流石に心配で仕方なかったのです。

第二千三百十三話　　完

２０１１・９・２０

第二千三百十四話　ベルサイユの庭

今日は日本がベルサイユ宮殿に来ています。そこでお庭の緑のところにです。日本が向かうとフランスがすぐにこう言ったのでした。
「その辺り行かない方がいいぜ」
「というとまさか」
「昔はそこがトイレだったからな」
だから行かない方がいいというのです。
「もう大きいのやら小さいのやらがだったからな」
「そうでしたね。この宮殿は」
「あと廊下の隅とかカーテンの奥とかもな」
そうした場所もだというのです。
「あちこちが凄いことになってたんだよ」
「設計ミスだったのでしたね」
「そうだよ。迂闊だったよ」
フランスはその頃のことを思い出して言います。
「舞い上がって設計して気付いたらだったからな」
「やはりおトイレは必要ですから」
「庭なんか凄かったんだよ」
もうそれこそはだったのです。
「特にその辺りな」
「ううむ、では入らない様にします」
「二百年以上前のことだけれどな」
それでもベルサイユの庭はとんでもないことになっていたのです。
尚今でもパリには犬のそうしたものが異常に多いことで知られています。

第二千三百十四話　完

2011・9・20

第二千三百十五話　全体的に不穏な

第二千三百十五話　全体的に不穏な

ベルサイユ宮殿の中を進みながらイギリスは感じていました。

「何か違うな」

宮殿全体の雰囲気がです。いつもと違うのです。

暗く沈んでいます。その空気を感じ取ってです。彼は案内役を務めてくれているフランス妹にこの雰囲気のことを尋ねたのでした。

「幽霊でもいるのか？」

「幽霊ですか。噂ではいるそうですね」

フランス妹は暗い顔で彼のその問いに答えます。

「あくまで噂ですが」

「それは俺も聞いたことがあるけれどな」

こうした話になるとやはりイギリスです。この宮殿にもそうした話があることは彼も知っています。ただ今こう言ったのは実はジョークだったのです。

けれどフランス妹は暗いその重病患者みたいな顔で答えたのです。

それを見てです。

イギリスは余計にです。怪しいものを感じたのです。

「本当に大丈夫なのか？明らかにおかしいだろうが」

「気のせいです」

「いや、気のせいじゃないだろ」

イギリスはまだ言おうとします。ですが。

フランス妹はそのまま案内役を務めるのでした。

「ではそろそろ兄さんのおられる部屋です」

「あいつもこんな感じなのか？まさか」

イギリスはふと思ったのでした。若しかすると彼もだと。

そんなことを思いながらです。彼はフランスと会うことになりました。

第二千三百十五話　完

2011・9・21

第二千三百十六話　ベルサイユの亡霊

第二千三百十六話　ベルサイユの亡霊

フランス妹が日本妹をです。ベルサイユ宮殿のお庭を案内しながらこんなことを言いました。

「この辺りでしたね」

「あれっ、誰かおられますか？」

日本妹はふと人の気配を感じました。ですが今ここにいるのは二人だけです。

そのことからです。日本妹はこうフランス妹に尋ねました。

「若しかしてここにおられるのは」

「はい、私のかつての上司の方がおられます」

つまりフランスの上司の人がだというのです。ですが姿は見えません。

「実体はなくされましたが」

「あのオーストリアさんのところから来られた」

「そう、あの方です」

日本では漫画のヒロインにもなっているあの人だというのです。

「もっとも白薔薇の方ではなく紅薔薇の方ですが」

「その方が今もここにおられて」

「時々絵を描かれてもおられるそうです」

そうしているというのです。

「私は見たことがありませんが」

「そうですか。ですが気配は感じますよね」

「あの方の気配を感じます」

フランス妹もそうだと日本妹に答えます。

「懐かしい気配ですね」

フランス妹はこう言って微笑みました。あの人達のことは今では

よい、それも麗しい思い出になっているのです。革命があったにしても。

第二千三百十六話　　完

２０１１・９・２１

第二千三百十七話　伝えたいことがあるんだ　☆

第二千三百十七話　伝えたいことがあるんだ　☆

イギリスは遂にフランスと会うことになりました。目の前にいるフランスもとても暗い顔をしています。イギリスはその顔に何かあると思いながらです。

そのフランスにです。紅茶を片手に尋ねました。

「御前が紅茶を出すなんてな」

「ああ、それな」

「いつもはコーヒーなのにな」

フランスはイギリスにはあえてそれを出すのです。

「こんなにもてなすなんて珍しいな」

「そうか」

「何か裏があるんだな」

その暗い顔を見てです。イギリスはフランスに尋ねます。

「で、何なんだ？聞いてやるよ」

「驚かないで聞いてくれ」

フランスはイギリスに言いました。

「いいか？」

「何だよ、それで」

「結婚してくれないか？」

地獄の奥底から響く様な声でした。

「俺と」

「・・・・・おい」

少し時間を置いてからです。イギリスはフランスに返します。その言葉を信じられないまま。

「エイプリルフールは今日じゃねえぞ」

こう返すのでした。こんな言葉はイギリスも生まれてはじめて聞

きました。しかもそれはフランスからの言葉だったのです。

第二千三百十七話　　完

２０１１・９・２２

第二千三百十八話　結婚は

日本は結婚についてこう語ります。
「したことがないので何とも」
「そうよね。日本さんは結婚の経験はなかったわね」
「はい、ですからよくわからないのです」
こうベトナムにも答えます。
「いいものでしょうか」
「その歳で結婚したことがないというのは」
「そう言ってしまうと行き遅れですが」
実際はそれどころではない年齢だったりします。
「本当に結婚はしたことがないので」
「一緒にいるのは都道府県ばかりだし」
「お家の人達は家族ですから」
大阪も福島もです。それは同じです。
「ですから結婚はできません」
「台湾や韓国とも家族だったわね」
「あの時も結婚はしてはいません」
あくまで家族として迎え入れたのです。あの時の日本の上司の発想には植民地とか結婚とかそうした考えはなかったのです。植民地とはいっても首輪さえしていませんでしたし。
「ですから今に至るまでです」
「結婚を知らないのね」
「いいものでしょうか」
日本は首を傾げさせながら言います。この人は結婚を知りません。生まれてこのかたずっと一人だったのです。独身という意味では。

第二千三百十八話　完

2011・9・22

第二千三百十九話　カレンダー　☆

第二千三百十九話　　カレンダー

☆

イギリスは今の場の雰囲気に耐えられずフランスに冗談で返しました。

「何だよ御前カレンダーも買えない程やばいのかよ」

「ああ、カレンダーか」

「どうなんだよ、そこは」

「カレンダー位は何とか買えるって」

フランスは暗く沈んだ顔でイギリスに返します。

「それはな」

「何だよ、おい」

イギリスはフランスのそのどんよりとした反応に返します。

「その薄い反応は」

「ほらな」

言いながらです。フランスはあるものを出してきました。

「これな」

「それ婚姻届だぞ」

今度は普通に突っ込みを入れるイギリスでした。

「カレンダーって言うには無理があるだろ」

「いや、これはカレンダーだ！」

ここでムキになって力説してです。イギリスの手を取るフランスでした。暗く沈んだ顔ですがそれでもそこには鬼気迫るものがあります。

「だからな。今からな！」

「おい、何ペン持たせてサインさせようとしてるんだ！」

恐ろしいことになってきました。何とフランスは婚姻届を出してそのうえでイギリスにサインさせようとしているのです。とんでも

ないことが起ころうとしています。

第二千三百十九話　　完

２０１１・９・２３

第二千三百二十話　男同士でも

第二千三百二十話　男同士でも

結婚は国家の場合は男同士でもできます。そして重婚も可能です。つまりは。

「私はあの時上司の方の御考え次第で」

「私と結婚してましたね」

「それと韓国さんと」

日本は考える顔になって台湾に答えます。

「そうなっていましたね」

「私はいいんですけれど」

密かに本音を出す台湾でした。

「あいつと結婚しなくてよかったとか思ってませんか？」

「何といいますか」

そこはあえて言わない日本でした。

「とにかく。私は今も独身です」

「これからもでしょうか」

「多分。家族も増えないと思います」

韓国のことで懲りているのです。それはもう心の奥底から。

「私はずっとこのままです」

「何かそれって寂しくないですか？」

「いえ、妹もいますし都道府県の方々もおられますし」

日本はこう台湾に答えます。

「国家同士のお友達も多いですし。今の上司の方は最低ですが」

「寂しくはないんですね」

尚上司やマスコミによっては日本は孤立していると言います。けれど何故かそうした場合は韓国の北にある問題児とのお付き合いの話が停滞している時です。そうした人達はその問題児と何か関わりがあるのかも知れません。

第二千三百二十話　完

2011・9・23

第二千三百二十一話　本人だって嫌々　☆

英吉利は何とか抵抗しながらフランスに言います。
「おい！どういうつもりだよ！」
「しょうがないだろ！」
フランスも必死の顔でイギリスに返します。
「俺だってこんなことしたくないんだ！」
「じゃあ何でこんなことするんだ！」
「今の俺の家スエズ運河の件で滅茶苦茶不況で」
「俺もだよ！」
エジプトは国営化してです。二人は絶体絶命の状況になっていたのです。
特にフランスは絶望的で。それでだというのです。
「上司に言われたんだよ！」
「どう言われたんだよ！」
「御前と一緒にならないと死ぬってな！」
「じゃあオルフェノクにでもなってろ！」
「あれ結局灰になって死ぬだろうが！」
「王を復活させたら死なないだろうが！まあ結局あの脚本家のライダーに倒されるだろうけれどな！」
何かもうこっちの方が滅茶苦茶になってきています。
そんな滅茶苦茶な攻防が暫く続きます。フランスは何とかサインさせようとしてイギリスはそれを拒む、二人にとっては必死の攻防です。
その中で遂にです。イギリスは。
「こんなのこうしてやる！」
「あっ、手前！」

婚姻届をぐしゃぐしゃに書いて汚したのです。とりあえずはイギリスが優勢になりました。

第二千三百二十一話　　完

２０１１・９・２４

第二千三百二十二話　日本にも似たお話が

第二千三百二十二話　日本にも似たお話が

ロシアとの戦争に何とか勝った日本にです。当時の日本の上司がこんなことを言ってきました。

「これから台湾だけでなくて韓国も一緒になったからな」

「えっ、確か韓国さんは保護国にされる筈では?その前は独立して発展してもらう予定だったと聞いてましたが」

「気付いたら一緒に住むことになってたんだ」

日本の上司も想像だにしない物凄いプロセスでお話が進んでしまったのです。それで日本も驚いて上司に尋ねたのです。けれどです。併合は決まっていました。しかも他の国はおろか韓国の人達も御願いしてきています。

それを受けて併合となりましたが当時の韓国は。

「ああ、宜しく頼むんだぜ」

物凄く不健康そうでした。というか本当に不健康でした。

そんな彼をです。見かねた日本の上司がです。本当に積極的にです。

「植林に学校にな。橋に線路に道路に」

「あの、土地制度も灌漑も滅茶苦茶なのですが」

「それを全部やる。いいな」

「お金が幾らあっても足りないですが」

日本も戦争の後でお金がなかったのですがそれが何とか持ち直していた時期だったのです。誰も戦争をしたら儲かるとは思っていませんでした。

けれどその中でもです。日本の上司は。

韓国にお金を、スペインがロマーノに注ぎ込んだのよりひょっとすると凄い規模で投入して技術者や教育者、軍人に官僚を送り込ん

で。

韓国を立て直したのです。韓国はこの併合がなければ生きられなかったかも知れません。

けれどこのことは日本にとって今ではあまりいい思い出ではありません。何故ならここから韓国とのお話がはじまったからです。

第二千三百二十二話　　完

２０１１・９・２４

第二千三百二十三話　何度目のピンチだ　☆

イギリスに婚姻届を滅茶苦茶にされたフランス、しかし彼はまだ諦めていませんでした。

泣きながらです。こうイギリスに言います。

「本当にマジで頼む！」

「だからその選択肢はねえだろ！」

「さもないと俺は本当に死ぬんだよ！」

「それでも嫌だ！」

「イギリス領フランスでもいいからな！ほら、百年戦争の時は御前俺の半分占領してたししかも御前の上司が俺の上司の家臣だったことあるだろ！」

「一体何時の話だよ！」

二人の腐れ縁はとても深く長いです。

「だから御前とはな！」

「駄目だっていうのかよ！」

「常識で考えろ！」

世界の常識という意味です。

「アメリカとロシア、中国とロシアが一緒になったらどうなるんだよ」

「そんなの決まってるじゃねえかよ」

その場合考えられることは一つしかありません。

「最後はスクールデイズだよ」

「どっちかが中に誰もいませんかだよ」

「じゃあ俺達もだっていうんだな」

「そうだよ。どっちにしろ上手くやっていける筈ねえだろ」

誰でもちょっと考えればわかることです。とにかくこの二人の結

婚は有り得ません。けれどそれでもフランスはイギリスに必死に御願いするのでした。

第二千三百二十三話　　完

２０１１・９・２５

第二千三百二十四話　日本とロシアの結婚も

第二千三百二十四話　日本とロシアの結婚も

日本はふとです。インドネシアに尋ねられました。

「僕達もロシアさんとはお付き合い深くないですけれど」

「賢明な判断だと思います」

この件に関して日本の目は笑っていません。日本にしてもアメリカにしても中国にしてもです。太平洋の国がロシアと仲良くすることは我慢できないことなのです。ベトナムはその辺り上手にしますが。

だからこそインドネシアにもこう答えたのです。インドネシアはその日本に尋ねます。

「若しもですけれど」

「ロシアさんんことですね」

「はい、日本さんがロシアさんと結婚されたら」

「その前に刺し違えます」

本気です。

「私がロシアさんと結婚なぞ」

「絶対に嫌なんですね」

「例えロシアさんの上司が私の上司の上司の方がなられようともです」

つまりロシアが完全に日本の下になろうともというのです。

「お断りします」

「やっぱりそうなんですね」

「ロシアさんとの結婚は絶対にありません」

日本は断言します。腕を組んで。

「それ位なら本当に南セントルシアになります」

「それだけ嫌なんですね」

結婚したら冗談抜きでスクールデイズ最終回になりかねない様で

す。とりあえず日本とロシアの結婚は危険な結果に終わることがわかります。

第二千三百二十四話　　完

２０１１・９・２５

第二千三百二十五話　気分はエヴァの緒方さん　☆

第二千三百二十五話　気分はエヴァの緒方さん

☆

イギリスはフランスに対して最後通告を突きつけました。
「とにかく。俺は絶対にイエスとは言わないからな」
「そうか。なら仕方ないな」
「ああ、諦めろ」
「やってくれ」
フランスがこう言った瞬間にです。何とジャンヌが出て来てです。イギリスを後ろから羽交い絞めにしてきました。イギリスは彼女に対して言います。
「何で御前がいるんだよ！」
「私生きていたんです。それで今はフランスさんの守護神になっているんです」
「そんな奇天烈な設定があったのかよ！」
イギリスもびっくりのことです。そしてそのイギリスにです。
フランスがゆらりと来てです。こう言うのでした。
「大丈夫、俺ならできる」
「できねえよ！」
「大丈夫、大丈夫」
「おい、何処の日本のアニメの主人公だよ！」
「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ」
遂にこの台詞を言うフランスでした。
「あの主人公はスパロボじゃしっかりしてるんだからな」
「そういう問題じゃねえだろ！」
「男八段、俺もなるんだ」
完全にその人になりきってです。フランスはもう一枚婚姻届を出してきました。イギリスは絶体絶命の状況に追い込まれたのでした。

第二千三百二十五話　完

2011・9・26

第二千三百二十六話　その中の人の話

第二千三百二十六話　その中の人の話

日本は台湾にあのアニメのことをお話しています。とりわけ主人公の男の子を演じていた声優さんについてです。

「お酒が凄く強いんですよ」

「何か全然酔われないそうですね」

「はい、そしてとてもしっかりしたお考えで礼儀正しい方で」

「何か凄い人なんですね」

「お考えが確かな人で」

それで何と言われているかというとです。

「男八段とさえ言われています」

「男らしい性格の方なんですね」

「女性の方ですが男前な方です」

こう台湾にお話します。

「一度とある酔いどれ魔人な中の人稼業の方にえげつなく絡まれたのですが」

「平気だったんですか」

「その方もかなりの方ですが」

酔ってその度に恐ろしい騒ぎを起こす人です。女の人ですが女性の胸を揉んだり他の人にジャンピングニーパットを浴びせたりとです。フル活動で暴れる人なのです。しかしの人の初対面からの絡みに対してもだったのです。

「あの方は平気でした」

「ううん、日本さんのところには凄い人が多いですね」

「あの脚本家の方も含めてですね」

「そう思います。あの脚本家さんも相当な方ですが」」

台湾も驚く程です。あの脚本家さんは。

あの弱々しい感じの内向的な男の子を演じていた方はキャラとは

全然違う方なのです。伊達にあの業界で大姉御になっている訳ではありません。かなり凄い方なのです。

第二千三百二十六話　　完

２０１１・９・２６

第二千三百二十七話　逃げ延びた

「俺なら大丈夫、俺なら」
「くっ、これは言っても無駄だな」
イギリスは相変わらずエヴァな状態のフランスを見てです。覚悟を決めました。そのうえで。
切り札を出すことにしました。すぐに召喚魔法を唱えます。
「出て来い、アーサー王！」
「えっ、アーサー王！？」
彼を後ろから羽交い絞めにしているジャンヌが驚きの声をあげます。アーサー王といえばイギリスの守護霊といいますか妖精になっている中でも最強の存在だからです。
程なくして威厳のある髭の人が出て来ました。その手には眩い剣があります。
そのアーサー王にです。イギリスは言います。
「頼む、この状況を何とかしてくれ！」
「わかった」
イギリスの頼みならばです。アーサー王も快く応えます。そうしてなのでした。
ジャンヌから彼を解放してです。そのまま。
「こっちだ」
「ああ、脱出だな」
「急げ。私が護る」
「済まねえ！」
アーサー王は剣でジャンヌと戦いながら部屋を脱出します。イギリスにはフランスが来ます。しかしその彼にも。
イギリスを守護する妖精達が向かい彼を足止めします。
「うわっ、出て来たかよ！」

「すぐにあいつとも合流しないとな」
イギリスは脱出する中で妹さんのことも考えます。ベルサイユから決死の逃亡劇がはじまりました。

第二千三百二十七話　完

２０１１・９・２７

第二千三百二十八話　迷宮の様な

第二千三百二十八話　迷宮の様な

日本はベルサイユ宮殿を見回ってこう言いました。
「あまりにも広いせいで」
「何だ？何かあったか？」
「迷路みたいですね」
こう案内役のフランスにお話します。
「宮殿の中もお庭も結構入り組んでいますし」
「迷路か。言われてみればそうだな」
フランスも日本のその言葉に頷きます。
「ここはまさしくそんな場所だよな」
「そう思います。お部屋も廊下も多いですね」
「かなりな。二百年かけて建てたからな」
それだけにです。途方もなく巨大なのです。しかもです。
この宮殿は内装も凄くてそれが目を眩ませてしまい余計になのです。
「おまけに装飾も色々だからな」
「目だけでなく感覚も何か」
「そうだよな。俺も最初は結構迷ったよ」
「フランスさんもですか」
「とにかく滅茶苦茶広いからな。間違って上司の寝室に入って怒られたり上梓の奥さんがトイレしている場面に来ちまったりしたな」
尚この宮殿は昔トイレがありませんでした。
「で、廊下の端の汚物に滑って転んだりな」
「トラップも豊富だったのですね」
まさに迷路だったのです。この宮殿はただ大きく豪奢なだけではありませんでした。危険なトラップにも満ちた迷宮でもあったので

す。

第二千三百二十八話　完

2011・9・27

第二千三百二十九話　妹さんも連れて

第二千三百二十九話　妹さんも連れて

イギリスはアーサー王に護られながらベルサイユ宮殿を脱出しています。その時に彼はエクスカリバーを振るうアーサー王に言いました。

「あいつも連れていかないとな」

「妹さんだな」

「ああ、何処にいるかわかるか？」

「こっちだ」

流石は妖精になっている人の中でもとりわけ強力な人です。広い宮殿の何処に誰がいるのかちゃんとわかっています。それでなのでした。

イギリスを妹さんのところに導くです。イギリス妹は丁度その時フランス妹と宮殿の奥にいました。

そのイギリスを見てです。フランス妹が残念そうな顔で呟きます。

「兄さん、逃げられたのね」

「おい、早く逃げるぞ！」

イギリスは必死の顔で妹さんに言います。

「さもないとフランスと結婚させられるぞ！」

「えっ、では私達がここに呼ばれた理由は」

「ああ、結婚させられる為だ！詳しい話は後だ！」

「わかりました。それなら」

「くっ、逃がす訳には！」

フランス妹の背中から何と四銃士が出て来ました。

「行かせません！」

「やらせはしないわ。サモン！」

フランス妹が四銃士を出すとイギリス妹もです。その背中からロビンフッドやピーターパンを出してきました。物凄い戦いがはじま

ろうとしています。

第二千三百二十九話　完

2011・9・28

第二千三百三十話　四銃士は

第二千三百三十話　四銃士は

日本がフランス妹に説明を受けています。その説明はといいますと。

「あの四銃士の方々も全てですね」

「勿論あの時の上司だったルイ十三世陛下も王妃様もリシュリューさんもです」

「ロシュフォールさんもですね」

「もっと言えば鉄仮面もです。皆さん実在しておられました」

あの小説に出て来る人達は殆ど実在人物だったのです。

「流石に主人公の方は実在とは思われませんでしたね」

「そうですね。流石にと思いまして」

ところが実在人物だったのです。勿論三銃士もです。

「そうだったのですか。あの作家さんは実在人物を効果的に使う方だとは聞いていましたが」

「その辺り面白いですよね」

「そうですね。私の国でもそうした作品はありますが」

日本においても実在人物を扱った物語はあります。歌舞伎なんかは表向きの名前だけは変えていますが実際は、なのです。

「しかし。リシュリューさんは作品の中では悪役ですが」

「実際は私達の為に色々尽くしてくれた方でした」

「そうでしたね。オーストリアさんやドイツさんは好きではないみたいですが」

何を隠そうこのリシュリューさんこそが三十年戦争の黒幕の一人だったからです。

「ですが物語とは違ってですか」

「陰謀家でしたがフランスの為に尽くされた方です」

「そうした意味で四銃士やロシュフォールさんもですね」

実在しただけでなくそれぞれフランスとフランス妹の為に尽くした人達だったのです。そうして今もフランス達を護っているのです。

第二千三百三十話　　完

２０１１・９・２８

第二千三百三十一話　何とか脱出

第二千三百三十一話　何とか脱出

フランス妹の召喚した四銃士達と戦いながらです。
イギリス兄妹は何とかベルサイユ宮殿から出ました。
「後は庭を突っ切るだけだ」
「はい、それでは」
イギリスもイギリス妹も駆けています。その後ろをアーサー王達が護っています。
ただお庭にです。今度は。
ああ無情のあの人です。ノートルダムにいる人もいます。
「今度はユゴーかよ！」
「フランスさんも文豪が多いですからね」
「くっ、けれどこっちだってな！」
イギリスはまた妖精を召喚しました。今度はオベローンにティターニアです。
「文豪の数でも負けちゃいないんだよ！」
「数でも、ですね」
「当然質もだよ。とにかく文学には文学だ！」
とはいってもバトルになっていますが。
「俺とフランスの文学どっちが上かここではっきりさせてやる！」
「とはいっても今は脱出することが大事ですから」
イギリス妹はお兄さんにこのことははっきりと言いました。
「バトルよりもですよ」
「わかってるさ。逃げるからな」
「そうしましょう」
遂に妖精の王と女王まで出してです。二人はベルサイユ宮殿から何とか脱出しようとします。二人の周りでは文豪の対決が行われています。

第二千三百三十一話　完

2011・9・29

第二千三百三十二話　オスカル

日本妹はふとです。フランス妹にあの漫画のお話をしました。
「ベルサイユのばらですけれど」
「あの漫画のことですね」
「はい、主人公の家は実際にあったのですよね」
「そうですね。あの主人公は架空の人物ですが」
それでも主人公のその家は実在していたのです。
「あの漫画は時代考証もかなり緻密でしたね」
「作者さんが本当に勉強されていて」
そうして描かれていた作品だったのです。そしてそれはその漫画家さんの特徴でもあります。
「あと絵も凄かったですよね」
「アニメ版の作画もでしたね」
後にあの聖衣のアニメの作画を担当したあの人だったのです。
その話からです。フランス妹はこう日本妹にお話しました。
「ただ。私にあの主人公はいません」
「じゃああの主人公がいるのは」
「はい、日本さんと貴女の方です」
それがどうしてかもです。フランス妹はお話します。
「日本さんのところでできたお話ですから」
「だからですね」
「そうです。あの主人公は日本さん達の守護者の一人になっている筈ですよ」
「何かそう考えると壮麗ですね」
見れば日本妹の背中に実際にです。あの麗しい男装の美女がいました。その姿はまさに白薔薇でした。日本にもベルサイユはあるの

です。

第二千三百三十二話　完

2011・9・29

第二千三百三十三話　円卓の騎士と魔女

第二千三百三十三話　円卓の騎士と魔女

妖精達に護られながらベルサイユ宮殿から脱出しようとするイギリスとイギリス妹、とりわけお兄さんの顔が必死です。

その中でようやくです。門が見えてきました。

「よし、もうすぐだ！」

「あの門を超えれば助かりますね」

「絶対あいつとは結婚しないからな！」

その為にです。何とか脱出しようとします。

そうしてです。門まであと数フィートのところまで来ました。しかしです。

その前にです。よりによってジャンヌが立ちはだかります。

「フランスさんの為にも！」

「くっ、何時の間に来やがったんだ！」

「兄さん、後ろからも！」

後ろからは四銃士にああ無情の人、ノートルダムの人、それに赤と黒に他には岩窟王なんかもいます。フランス文学オールスターです。

勿論フランスとフランス妹もいます。フランスが自分を護る妖精達に言います。

「フランス文学を護りたいよな！」

「無論！」

「では何としてもイギリスを！」

捕まえて彼と結婚させようとしています。フランスが消えたら彼等も消えてしまうからです。

そんな妖精達にです。イギリスもです。

「アーサー王だけじゃねえ！円卓の騎士も全員出すぞ！」

「では私もモルガン＝ル＝フェイを！」

イギリス妹はアーサー王の姉であり彼を憎みつつも愛した魔女を出しました。この人はアーサー王よりも強力かも知れません。ベルサイユの門において総力戦がはじまりました。

第二千三百三十三話　　完

２０１１・９・３０

第二千三百三十四話　妖精や妖怪も

第二千三百三十四話　妖精や妖怪も

日本は中国の古典である山海経を読んでです。中国に尋ねました。
「中国さんのところにも昔から妖怪が多いのですね」
「神がなったりとかそういう類が多いあるな」
「そうですね。妖怪のお話ばかりの本もありますし」
「聊斎志異あるな」
中国にもです。妖怪のお話は多いのです。
「怪力乱神を語らずといってもそれはあくまで儒教だけのことある」
「中国さんにあるのは儒教だけではありませんからね」
ここで重要になるのは道教です。中国には儒教だけでなく道教もあるのです。そして仏教もありますし政治では韓非子の法もあります。
その中で妖怪についてはです。道教が重要になります。
「仙人、中国さんもそうですが」
「山とかには妖怪が多いある。崑崙のことも書かれている書もあったりするある」
「それに最初の頃の上司の方は」
中国の最初の上司の人達はといいますと。伝説の頃のお話ではありますが。
「確か。上半身が人で下半身が蛇でしたね」
「その頃僕は生まれていたあるか？僕は四千歳あるが」
流石にその頃のことは中国もはっきりとは言えません。幾ら仙人でもです。
けれどです。妖怪のお話は多いので。中国はこう日本にお話します。
「まあ妖怪も妖精も文化だと思うある」
「人の想像がそのまま具現化していくものですからね」

そうした意味で中国にしても日本にしてもです。文化が豊かだと言えます。多彩な妖怪達が賑やかに動いているのもまた楽しいものです。

第二千三百三十四話　　完

２０１１・９・３０

第二千三百三十五話　怒りの脱出

第二千三百三十五話　怒りの脱出

ベルサイユの門において最後の激戦が繰り広げられています。
フランスとフランス妹はまさに鬼の形相でイギリス、イギリス妹に妖精達を仕掛けます。
「結婚してくれ！さもないと俺は本当に死にそうなんだよ！」
「そうです。兄さんが死ねば私も！」
「じゃあ御前今までどんだけ死んでんだよ！」
「死なないから安心して下さい」
イギリス兄妹は反論しながら自分達の妖精を出します。何とその中にはコカインをやっているあの探偵さんまでいます。この人も妖精になっているみたいです。
しかしそれに対してフランスはあの怪盗を出して対処しています。物凄いカオスな状況です。
その中で。です。イギリス妹がです。
究極の妖精を召喚しました。それは。
「出て下さい、ネルソン！」
「げっ、そいつか！」
「まさかあの伝説の提督までもが！」
フランス兄妹もこれには驚きです。イギリス兄妹の絶対の守護者ですから。
そしてイギリスもです。彼を召喚しました。
「頼むウェリントン！」
この人です。あのナポレオンを破った英雄です。
この二人が出てはどうしようもありません。如何にフランスといえど、というかフランスだからこそ。
敗れてしまいました。そして退けた一瞬を見てです。イギリスは妹さんに言いました。

「よし、今だ！」
「はい、今のうちに」
こう言い合い即座にベルサイユから出ました。こうして二人は窮地を脱したのです。

第二千三百三十五話　完

２０１１・１０・１

第二千三百三十六話　アメリカも増えてきた

第二千三百三十六話　アメリカも増えてきた

誕生してまだあまり時間が経っていないアメリカですがそれでもです。

「結構増えてきたんだ」

「そうですね。独特の方々ですね」

日本もアメリカの妖精や妖怪達を見て言います。チュパカブラやモスマンやそうした都市伝説めいたものが多いのが特色でしょうか。

その他にはです。こんな人達もいます。

「オズの国の方々もおられますね」

「文学の方も揃ってきたんだ」

見れば若草物語のあの四姉妹やドリトル先生もいます。

「他には探偵だとバージル＝ティッブスやマイク＝ハマーがいるぞ」

「多いですね。こうして見ると」

「そうだろ。こっちも頑張ったんだ」

ファンタジーに推理もです。

「まあ中にはおっかないのもいるぞ」

「あの、そちらの方々はあまり」

クトゥルフな方々には日本も顔を曇らせます。

「近寄らない方がいいですよね」

「そうだな。けれど僕の家の妖精や妖怪達には変わりないんだ」

これは事実です。

「だからこんな連中でも好きだぞ、僕は」

「そうですね。妖怪や妖精は親しみを感じるものだけではありませんから」

日本にもそうした妖怪が結構いるので頷けることでした。日本のそうした妖怪としては鬼でしょうか。鬼もまた妖怪の一種ですから。

第二千三百三十六話　完

2011・10・1

第二千三百三十七話　何とか逃げ延びて

第二千三百三十七話　何とか逃げ延びて

ベルサイユ宮殿から脱出したイギリス兄妹、お家に帰ってほっとしています。

紅茶を飲みながらです。イギリスは言いました。

「本当に危なかったな」

「そうですね。幾ら何でもフランスさんと結婚とは」

「俺は絶対に嫌だからな」

「私もです」

このことはイギリス妹も同意見でした。

「フランスさんがお兄様になるのは」

「そうなるよな。俺達が結婚したら」

「そうです。ただ昔の上司の方々は複雑な関係でしたね」

「百年戦争の頃はな」

イギリスの上司がフランスの上司の親戚だったりしたのです。それで領土問題やら何やらが複雑に絡み合っていたのです。そうした時代もあったのです。

けれど今は違います。イギリス自身にしてもです。

「まあ俺自身結構ノルマンの血が残ってるけれどな」

「アングロサクソンですよね」

「それとケルトだな」

お兄さん達はどの人もケルトの方が強いです。そしてそのケルトの血のお陰で。

「元々俺の周りの妖精達はケルトだからな」

「そうでしたね。ですから私も」

イギリス妹もその関係で妖精を見ることができるのです。

血は結構以上にモザイクなイギリス兄妹です。ノルマンも入っていますしケルトもです。アングロサクソンとは一口に言えないとこ

ろがあります。

第二千三百三十七話　完

2011・10・2

第二千三百三十八話　怖過ぎる妖怪

第二千三百三十八話　怖過ぎる妖怪

ルーマニアの妖怪といえばです。
「やはりあれですね」
「はい、そう言うと思っていました」
ルーマニアも落ち着いて日本に返します。
「吸血鬼ですね」
「あの上司だった方は本当に吸血鬼だったのですか？」
「一応生物学的には人間です」
ルーマニアのコメントは何か妙なものでした。
「その行動を見ていると違う様な気がしないでもありません」
「そういうことになりますか」
「ただ。モデルになったことは確かです」
その吸血鬼の、というのです。
「行動があまりにも恐ろしかったですから」
「当時としてもですね」
「少なくとも今出て来られたら大変なことになります」
人を串刺しにすることが趣味ではそれも当然です。しかもその串刺しの骸達を見て平然とワインを飲んで笑っていたというのですから。
それでルーマニアはこんなことも日本に言ってきました。
「吸血鬼をここに呼べますが」
「遠慮します」
日本は真顔で返しました。何しろ相手が相手です。
ドラキュラ伯爵みたいなのはまだましで中には殆ど人食いみたいなものもいます。ルーマニア名物吸血鬼は本当に怖いのですから。

第二千三百三十八話　完

2011・10・2

第二千三百三十九話　悪夢の招待状

第二千三百三十九話　悪夢の招待状

お家に帰ったイギリスにです。数日後フランスから封筒が来ました。

イギリス妹はお兄さんにそれを差し出しながら尋ねました。

「読まれますか？」

「中に何が入っていると思う？」

「間違いなく碌でもないものが」

イギリス妹はこうお兄さんに言いました。

「私達にとって」

「まだ剃刀とか爆弾だったらいいんだよ」

そうした物騒なものですらというのです。

「絶対にもっと酷いものだからな」

「中を開けられますか？」

「ちょっと軍の爆発物処理班呼んでくれ」

徹底しています。というか明らかに危険なものと認識しています。

そうしてそのイギリス軍の爆発物処理班が開いてみるとです。中から。

「婚姻届が出て来ました」

「一方のサインにフランスのものがあります」

「燃やしてくれ」

イギリスは軍人さん達の報告にすぐに答えました。

「いいな。それで忘れてくれ」

「わかりました。それでは」

「すぐに焼却します」

こうしてフランスからの婚姻届は完全に抹殺されたのでした。イギリスにとっては二度と思い出したくもないことでした。流石にこのことだけは。

第二千三百三十九話　完

2011・10・3

第二千三百四十話　妖怪も多いけれど

第二千三百四十話　妖怪も多いけれど

日本はロシアはとても仲が悪いです。ですから日本妹とロシア妹がお話しています。もっともこの二人の関係にも微妙なものがありますが。

「我が国も妖怪やそうした存在が多いですよ」

「地底の魔王でしたね」

「ブイイですね。他にも森にもいますし船が吸血鬼になったこともあります」

非常に珍しいケースですがそうした報告があるのです。

「船が吸血鬼になったことには私も驚きました」

「ううん、イワン＝ワシリー号とはどういった船だったのでしょうか」

「今尚不明ですね。それにです」

その他にはといいますと。

「シベリアにはマンモスの目撃談がありますし北極海の辺りでもまだステラーカイギュウが」

「他に湖の恐竜ですね」

ロシアは広いだけあってＵＭＡも多いのです。

「何かロシアさんのところも結構多いですね」

「それに」

ここでロシア妹の顔にです。お兄さんと同じく怖いものがさしました。そうして言うこととは。

「イワン雷帝にピョートル大帝に女帝エカテリーナに」

「その方々は人間では？」

「レーニン、スターリン、そして今の方も」

「人間もですか」

「凄いですよ。我が国は」

何か笑みを浮かべていますがお兄さんと同じ笑みです。ロシアでは人間、上司が一番怖かったりするのです。下手な妖怪よりも遥かに。

第二千三百四十話　　完

２０１１・１０・３

第二千三百四十一話　日本が好き　☆

ギリシアが猫達に囲まれながら言います。
「まあ日本のことはトルコより好きだと思ってる」
彼とトルコは相変わらず犬猿の仲です。
「昔から仲よかったし日本の文化も結構好き」
「ニャーーーーー」
「な方。侍には一度会ってみたいな、と思う」
こう語るのでした。
「それと日本にはとても感謝している」
今度は日本への感謝の言葉でした。
「最近の俺は他の国からの買い物が多くて毎年赤字を出していた」
実際はそれどころではありません。欧州全体から本当に大丈夫なのかと心から心配されていたりします。特にドイツからです。
そのギリシアがさらに言います。
「それを遠くから色々応援してくれたのは日本だったし」
さらにです。
「うん、中古車買う時も絶対に日本のにしている」
それは何故かといいますと。
「日本のは中古でも壊れにくいから」
こんなことを話すのでした。そうして。
猫達を見てでした。
「うちの猫達も日本が好き」
「アーーーーオ」
猫達も応えます。見れば滅茶苦茶多いです。所沢の様に猫が多いです。こちらの猫は何か審判に嫌われてしまっているようですが。

第二千三百四十一話　完

2011・10・4

第二千三百四十二話　燕に負ける猫

台湾が日本にお話しています。今日は野球のことです。
「私の国の選手は昔から日本さんのところで活躍してますよね」
「そうですね。竜の郭さんもそうでしたし」
「獅子のところの郭はどうでした？オリエンタル超特急」
「あの人は別格でした。速球だけでなく変化球も絶品でしたしコントロールが最高でした」
それこそ何だこのチートはという位凄かったのです。その後の十八番よりも凄かったかも知れない、とにかく滅茶苦茶凄い選手でした。
その超特急の人が活躍したチームですが最近は。
「流石に黄金時代程凄くはなくなりましたね」
「あれですよね。燕に負けてから」
「はい、二年越しのシリーズの後で何とかまたシリーズに出ましたが」
その時はどうだったかというと。
「正直驚きました」
「獅子が弱くなっていたんですか」
「燕圧倒的有利だと思いました」
日本はその時です。そのシリーズは燕が勝つと確信したのです。
「戦力差があり過ぎました」
「それでシリーズでは、ですね」
「やっぱり負けました」
監督にもキャッチャーにもピッチャーにも打線にもです。
「特にキャッチャーがどうしようもありませんでした」
「獅子の時代は終わってたんですね」

その時の燕のキャッチャーがとにかく凄かったのです。この時燕は虎もいつも叩きのめしていました。猫科の生き物にはとにかく強かった当時の燕です。

第二千三百四十二話　　完

２０１１・１０・４

第二千三百四十三話　トルコが嫉妬しそう　☆

第二千三百四十三話　トルコが嫉妬しそう

☆

日本のことが好きなギリシアはこの日日本に来ていました。
そうしてです。日本に御願いするのでした。
「今日は侍じゃなくて神社を見てみたい」
「わかりました」
日本も快く引き受けます。
「では案内させてもらいますね」
「有り難う」
「こちらです」
こうしたやり取りの後でギリシアは神社に来ました。そうしてお賽銭箱の前に来てです。
赤と白の紐を手にしながら日本に尋ねます。
「これが日本の神様？」
「それは神様を呼ぶ道具です」
日本はこうギリシアにお話します。
「お賽銭を入れてそれで呼び出すんです」
「金がないと神様も出勤しない」
「そうなりますね」
「中々人間らしい神様だな」
「そうですね」
言われてみてです。日本も気付きました。そのことに。そのうえでギリシアに対して再びお話します。今度お話することはといいますと。
「呼び終わったらお願いをします」
「わかった」
こうしてお願いに入ります。二人で。

第二千三百四十三話　完

2011・10・5

第二千三百四十四話　ギリシアの神様も

第二千三百四十四話　ギリシアの神様も

日本の神様はかなり人間らしい神様ばかりです。それはこれでもかという位神様が出て来る古事記や日本書紀にも書かれています。

そしてギリシアの神々もです。これがまた。

「浮気が滅茶苦茶多い」

「神様が浮気ですか」

「そう。特にゼウスという神が」

ギリシアが日本にお話します。それこそ何処のエロゲの主人公なんだという位壮絶に浮気をしまくる神様なのです。

「子供がどれだけいるか」

「わからないのですか」

「姉妹との間にも子供がいる」

実はそうだったりするのです。

「それと血縁者の間にも。人間だけれど」

「何か手当たり次第ですね」

「ニンフとの間にも一杯いる」

人間に手を出しているのならこれ位というのです。

「あと美少年も好き」

「節操はあるのですか？」

「俺の国の神話にはそんな言葉はない」

ギリシアは言い切りました。

「それで日本のエロゲそのままになった」

「リアルオーバーフローですね」

何とゼウスはその中心にいる沢渡止だったのです。むしろ沢渡止がゼウスでしょうか。伊藤誠なぞまだまだ序の口と言っていいのでした。

第二千三百四十四話　完

2011・10・5

第二千三百四十五話　そのお願いは駄目　☆

☆

ギリシアは日本と一緒にお賽銭を入れてからお願いをはじめます。ところがふとです。

何か気配が止まりました。それを察した日本が彼に尋ねます。

「どうかしたのですか？」

「少し思った」

こう前置きしてから日本に言います。

「トルコ死ねって願えばいいのか？」

「それは駄目です」

日本はそのギリシアに即座に答えます。

「人や国の不幸を願ってはいけません」

「それは駄目なのか」

「人を呪えば穴二つです」

これは日本で昔からよく言われていることです。他人を呪えばそれだけ自分が不幸になってしまいます。その心が歪んでしまって。

「ですから他のお願いをして下さい」

「そうか」

「例えば財政をよくするとか」

「それを願いたい。けれど」

今ギリシアにとって焦眉の急です。ですがそれは。

「絶望的」

「下手したら死にそうだと聞いてますが」

「かなり難しい」

ユーロが死にそうです。ギリシアがお願いすべきことはこれになりはしましたが。果たしてお願いして適うレベルなのでしょうか。

第二千三百四十五話　完

2011・10・6

第二千三百四十六話　日本国民の願い

第二千三百四十六話　日本国民の願い

「もうあの上司連中嫌だ！」
「とっとと全員辞職しろ！」
「何がお遍路だ！」
「マスコミもういらない！」
「瞬間辞職した奴がもう復帰なんてあるか！」
今の状況にです。もう日本国民は限界に達しようとしています。
それを見てです。日本も思うのでした。
「ああした市民系の勢力とマスコミは私にとってまさに頭痛の種でしたが」
「あのノーベル文学賞の人もですね」
「はい。あの人の人間性はどうでしょうか」
日本は眉を顰めさせて金沢に応えます。
「以前自分には帰る朝鮮はないとか言っていましたよね」
「それで韓国さんをかなり批判していましたが」
「今では韓国さんべったりになっています」
他には沖縄にもそうしたことをしています。どうやら文学賞と人間性は全く別物の様です。
そうした人達が集まって言っているデモにしてもです。胡散臭い人達がこれでもかと揃っています。
マスコミはそれを好意的に報道します。けれどネットで真実を知っている国民はというと。
「もうマスコミなんて潰せ！」
「日本にとっても俺達にとっても害だ！」
「嘘吐きはいらん！」
こう言って抗議の嵐です。日本にとって今一番の願いはマスコミがどうにかなることと現在の上司達の退陣でしょうか。少なくとも

マスコミが真実を隠すこと、自浄能力のなさはどうしようもないみたいです。日本は今鬘愛好家の八九三な人を親友に持っている人をテレビで観ながら思うのでした。

第二千三百四十六話　　完

２０１１・１０・６

第二千三百四十七話　ホワイトハウスで　☆

第二千三百四十七話　　ホワイトハウスで　☆

今日は国際会議がありました。場所はワシントンです。
この会議にはイギリスも参加しています。イギリスはアメリカに部屋に案内されながらいくとの憎まれ口を言います。とりあえず素直になることはない人なのは確かです。
「相変わらず安っぽい内装だな」
「ははは、君の家みたいに古臭くはないからな」
アメリカも負けていません。
「我が国では新しいのがいいからな」
「歴史がないっていうんだろ、それは」
「歴史はこれから作るものさ」
こう言えるところが凄いです。
「君の歴史は終わったのかい？」
「馬鹿言え、まだまだこれからだよ」
イギリスも言い返します。そんな話をしながらお部屋に案内しています。
そしてその部屋の前に来てです。アメリカが言います。
「くれぐれもな」
「何だよ」
「部屋の中で騒がないでくれよ」
「何で俺が騒ぐんだよ」
イギリスは平然としています。
「御前がいないと騒がないからな」
「じゃあ一緒にフランスと入るかい？」
「騒ぐぞ、おい」
フランスがいれば騒ぐというのです。やっぱりイギリスとフラン

スは仲が悪いです。

第二千三百四十七話　完

2011・10・7

第二千三百四十八話　何か幽霊の話が多い

第二千三百四十八話　何か幽霊の話が多い

日本はふと気付きました。その気付いたこととは。
「とにかく何処にもありますね」
「何がですか？」
「幽霊のお話です」
それがだとです。台湾にお話します。
「軍の施設には大抵ありますよね」
「特に江田島ですね」
「海自さんのところには船ごとにあったりしますし」
「はい、基地は特に」
とりわけ物凄い事故があった基地にはです。
「ありますよね」
「海軍関係が多いと思います」
「いえ、市ヶ谷にも」
ここで台湾は顔を曇らせてです。日本に囁きます。
「あのお話聞きましたよ」
「あの作家さんですか？それとも前の」
「あの作家さんその後でお世話になった先輩の作家さんや役者さんのところに行かれたというのは」
「それは私も聞いていますが」
その先輩の作家さんとはある世界的な賞を貰った人です。日本においても文壇に登場してから凄く有名になっている人なのです。
その人のところにもというのです。その作家さんは。
日本の軍関係にはこうしたお話が付きものです。とにかく何かとあります。それは海自関係だけには留まらずです。三つの自衛隊全てにあります。

第二千三百四十八話　完

2011・10・7

第二千三百四十九話　扉を開けると　☆

第二千三百四十九話　扉を開けると

☆

「じゃあゆっくりと休んでくれよ」

「そうしてやるよ」

イギリスはアメリカに応えながらお部屋の扉を開けます。ここまでは何もなかったです。

けれど扉を開けると。そこにいたのは。

何か邪悪な顔が出てきました。しかも無言で。

一瞬時間を置いてからです。イギリスは叫びました。

「な、何だよこいつ！」

「あれっ、どうしたんだい？」

「俺の部屋に何かいるぞ！」

「やれやれ。騒がしいなあ」

アメリカはそんなイギリスに呆れながら戻ってきます。

「あれだけ大丈夫だっていいながら君は」

「そういう問題じゃないだろ！本当にいるぞ！」

「何がいるんだい？」

「幽霊だよ！」

イギリスの親友とも言えるそれがいるというのです。

「何でいるんだよ！」

「ははは、そんなのいる筈ないじゃないか」

アメリカはイギリスのそんな言葉に笑って返します。

「このホワイトハウスには確かにいるけれどさ」

「あの上司じゃねえ！他の奴だ！」

こう言ってです。イギリスはアメリカを呼びます。実はホワイトハウスにはちゃんとアメリカの上司の幽霊がいたりします。だからアメリカも幽霊のことは信じてはいます。

第二千三百四十九話　完

2011・10・8

第二千三百五十話　ホワイトハウスの幽霊

第二千三百五十話　ホワイトハウスの幽霊

アメリカが日本にホワイトハウスの幽霊についてお話しています。
「あの凄く大きくてお髭の人なんだ」
「ああ、あの奴隷解放の」
「そうさ。あの人なんだ」
アメリカの上司の中でもとりわけ英雄視されている人がだというのです。
「今もホワイトハウスにいてくれてるんだ」
「そういえばあの方は生前からそうした話がありますね」
その上司の人には死の直前に色々なお話があるのです。
「死を知らせる夢があったりとか」
「それは僕も聞いてるよ。不思議な話だよね」
「そう思います。ただ」
「ただ。何だい？」
「そうしたお話は本当に何処でもありますね」
日本も心当たりのあることです。
「上司の方の幽霊にしても死を知らせるお話にしても」
「そういえば君のところにはそうした話が多いな」
「はい、枚挙に暇がありません」
長い歴史の中にはそうしたお話が多くなるのです。
「ですから」
「じゃあ僕のところにもそうした歴史ができていってるんだな」
「幽霊もまた歴史ですから」
それもまた歴史の一環なのです。実際に日本の歴史を読んでいるとです。結構以上に幽霊やそうした存在が出てきたりしています。

第二千三百五十話　完

2011・10・8

第二千三百五十一話　幽霊どころか　☆

「ははは、幽霊に会ったのかい」
「そうだよ。っていうか何だよその連中！」
アメリカの周りにリトルグレイや鯨がいます。イギリスはまずそこに突っ込みを入れました。
「幽霊どころじゃねえだろうが！」
「何言ってるんだ。僕の友達だぞ」
「御前は人間以外にも友達いるのかよ！」
かくいうイギリスもそうだったりしますがそれは置いておいてです。
イギリスはその幽霊のことをアメリカに言います。
「さっきいたんだよ！邪悪そうなのがな！」
「ああ、僕の上司の幽霊なら問題ないよ」
「御前にとってだろ？」
「まあ君にはどうかわからないけれどな」
この辺り結構微妙な二人の関係です。アメリカはここでこんなことも言います。
「そもそも君ユニコーンが見えるとか言ってるじゃないか」
「イギリスには本当にいるぞ」
「だからそれは幻想だよ」
「現実の世界と幻想の世界の違いなんて紙一重なんだよ」
イギリスは今かなり重要な発言をしました。
「それこそな。気の持ちようで見えたりできるんだよ」
「まあ僕もそうした世界のことは否定しないけれどね」
「だからユニコーンは本当にいるんだよ。御前の国にも妖怪とか一杯いるだろ」

都市伝説とかでいたりします。ですからアメリカもそうした存在は完全には否定しません。けれどなのでした。イギリスの言うことは否定するアメリカなのです。

第二千三百五十一話　　完

２０１１・１０・１０

第二千三百五十二話　縊鬼

日本が中国のお家に来た時です。ふとです。
中国の昔の服を着て真っ青な顔でやつれた感じになっている女の人を見ました。印象的だったのはその首に紐の跡があることです。
その人を怪しむ目で見てからです。日本は中国にこのことを話しました。
すると中国はです。血相を変えて日本に言いました。
「そいつには絶対に近寄るなある！」
「やはりまずい方なのですね」
「縊鬼ある！首をくくって自殺した人がなる怨霊ある！」
そうした存在だというのです。
「狐でも負ける位恐ろしい相手あるぞ！すぐに道士を三十人は送るあるよ！」
「三十人とはまた大掛かりですね」
「とにかく恐ろしい怨霊ある。うちには怨霊も多いあるが」
歴史があるだけにそうした存在も多いのです。
「あれはその中でも最悪の存在あるよ」
「自殺したその中でもですね」
「首をくくる苦しみと死ぬまでの色々な感情が混ざってそうなると思うあるが」
中国も真っ青になっています。
「その怨念はとにかくとんでもないものになっているある」
「ううむ。だから近寄ってはいけないのですね」
「さもないと御前も首をくくることになるあるぞ」
中国は日本に真顔で告げました。
「そうなってもいいあるか？」
「いえ、遠慮します」

日本もそれは嫌でした。この後道士と怨霊達の恐ろしいバトルが展開されました。

第二千三百五十二話　完

２０１１・１０・１０

第二千三百五十三話　部屋の前まで来た　☆

第二千三百五十三話　部屋の前まで来た　☆

イギリスはアメリカを連れてそのお部屋の前まで来ました。アメリカはそのお部屋の扉を見ながらイギリスに尋ねます。
「君が幽霊を見たのはこの部屋かい？」
「ああ、ここでさっき見たんだよ」
そうだとです。イギリスが答えます。
「ああ、嫌な幽霊を見たぜ」
「僕もたまにこの部屋は使うぞ」
けれどそれでもだとです。アメリカは言います。
「幽霊なんて出ないぞ」
「いや、いたんだ！」
イギリスは自分が見たから言えました。
「間違いなくな！」
「本当なのかい？」
「じゃあ御前この部屋の扉開けてみろよ！」
イギリスの力説が続きます。
「マジで変な気持ち悪いのがいるからな！」
「またそんなことを言って」
アメリカは全く相手にしていない感じです。
「魔女とかじゃないのかい？異空間にいる」
「そりゃ日本のアニメだ。っていうかそんなのいたらもっとやばいだろ」
「オクタヴィアちゃんだったら面白いぞ」
「何処がだよ」
何気にアニメのお話も入れながらです。イギリスはアメリカに対して言います。彼は確かに見たと主張します。その恐ろしい幽霊を。

第二千三百五十三話　完

2011・10・11

第二千三百五十四話　スカラ座の亡霊

第二千三百五十四話　スカラ座の亡霊

日本は今イタリアに案内されて彼が誇るミラノのスカラ座に来ています。

そのスカラ座に入ってすぐにです。イタリアは日本にこんなことをお話しました。

「ずっとさ。ここで椿姫を上演しようとしてもね」

「失敗が続いたのですね」

「そうなんだ。ギリシアのところのあの凄い歌手が大成功してからね」

マリア＝カラスです。二十世紀最高のソプラノ歌手とさえ謳われています。

「それ以来。他の歌手の人が歌っても」

「観客の方々が納得されなかったのですね」

「それでこう言われてたんだ」

イタリアは日本にさらに説明します。

「ここにはマリア＝カラスの亡霊がいるってね」

「それで椿姫は成功しなかったのですか」

「成功したのは新人の二人を主役にしてだったんだ」

そうした思いきった起用をしてだというのです。

「それで何とか成功したんだけれど」

「それでも、ですか」

「指揮者の人も歌った若いテノールもこのスカラ座から追い出されたしね、後で」

「確かリッカルド＝ムーティさんとロベルト＝アラーニャさんでしたね」

「それだけこのスカラ座は難しい場所なんだ」

イタリアも困った顔になっています。

「そうした意味でマリア＝カラスの亡霊ってまだいるのかもね」
　こうしたお話は日本にもない訳ではありません。歴史ある芸術の世界にはどうしてもそうしたしがらみが出来てしまうものでしょうか。

第二千三百五十四話　　完

２０１１・１０・１１

第二千三百五十五話　正体はこの人　☆

第二千三百五十五話　正体はこの人

☆

アメリカとイギリスがその扉の前で騒いでいるとです。
扉が急に開いてそこから何か出て来ました。
「あれっ、開いたぞ」
「だから言っただろ。この部屋にはな」
イギリスがアメリカにそれ見たことかと言っているとです。そこからとても怖い、本当に邪悪な感じの顔が出て来て二人に言うのでした。
「五月蝿いぞ・・・・・・」
「・・・・・わかったよ」
アメリカはその顔に応えてです。すぐに扉の前を去って。
自分のお部屋のベッドに潜り込んで震えました。リトルグレイが彼に尋ねます。
「ドウシタンダ？」
「いや、本当にいたからさ」
「アノ上司ノ人意外ノ幽霊カ？」
「まさか実際にいるなんて思わなかったよ」
こう宇宙人にお話するのでした。幽霊のことを。
イギリスは妙に納得していました。そしてそのお部屋にはです。
フランスがいました。実は彼も今アメリカにいるのです。そのフランスがぼやきながらです。ベッドに戻りながら呟くのでした。
「二度も起こされるなんてな。何なんだよ」
ぶつぶつと言いながらワインを飲んで寝ます。そして次の日です。
イギリスにです。こんなことを言いました。
「誰なんだ？昨日騒いでたのは」
「だから出たんだよ」

イギリスは何も知らないままフランスにお話します。まさか彼が幽霊の正体とはどちらも想像もしていません。

第二千三百五十五話　　完

２０１１・１０・１２

第二千三百五十六話　幽霊だけじゃない北海

第二千三百五十六話　幽霊だけじゃない北海

オランダは日本がかつてさまよえるオランダ人を探していたことを聞いてです。彼にこんなことをお話しました。

「あれは伝説やけれども」

「ワーグナーさんも見ましたし私も実際に」

「そや。あれはおる」

オランダも否定しないのでした。

「あの辺りにや」

「そうですね。間違いなく」

「あれは俺のところの人間やった」

オランダもこのことを認めます。

「あの頃はようさん海に出て稼いでたからな」

「あの人もそうした中のお一人だったのですね」

「海には色々なことがある」

オランダも真面目な顔でお話します。

「幽霊とかおっても不思議やない」

「はい。ＵＭＡも多いですし」

「あの辺りでは前の前の戦争でドイツが潜水艦からけったいなもん見たしな」

「けったいなものとは？」

「船を沈めた時に物凄く大きな生き物が吹き飛ばされてきたんや」

その生き物の大きさは十五メートル程度で四つの足を持つ鰐に似ていたといいます。少なくとも北海やそうした場所にはいない筈の鰐に似ていたということがまず疑問ですが。

「ドイツにドイツの軍人もおった。そやから」

「北海にも沢山の謎があるのですね」

日本の近くの海にもそうしたお話がない訳ではありません。海に

は多くの謎が残っているのでしょうか。

第二千三百五十六話　　完

2011・10・12

第二千三百五十七話　オーストラリアの海

第二千三百五十七話　オーストラリアの海

オーストラリアは四方を海に囲まれています。そしてその海はというと。

「今日も多いですね」

「そうでごわすな。かなりのものでごわす」

オーストラリアは日本の言葉に応えます。見れば海に三角の鰭が一杯あります。

その背鰭達を見てです。オーストラリアは言います。

「若しあそこに行けば大変なことになるでごわすよ」

「すぐに食べられてしまいますね」

「その通りでごわす。だから迂闊に海には行けないでごわす」

泳ぐ場所を選ばないとです。すぐに食べられてしまうのです。

「実際うちでは鮫の被害が多いでごわす」

「私の海にも鮫はいますが」

それでもなのです。

「ここまで多くはありませんね」

「物心ついて海を見たらもういたでごわす」

最初からうようよいたのです。

「だからこれが普通だと思っていたでごわすが」

「違いましたね」

「他の国の海にはこんなに多くなくてびっくりしたでごわす」

「オーストラリアさんの海は格別ですね」

「何かもう見慣れたでごわすが」

それでも怖いものがあります。

オーストラリアの海には鮫がこれでもかといます。そして実はちょっと国の奥に入ると毒蛇も一杯いたりします。そんなオーストラ

リアです。

第二千三百五十七話　完

2011・10・13

第二千三百五十八話　アメリカと鮫

第二千三百五十八話　アメリカと鮫

アメリカは鮫のお話をです。深刻な顔ではじめました。

「いや、あの戦争の時だけれど」

「ああ、太平洋のことだったわね」

アメリカ妹がお兄さんのお話に応えます。

「巡洋艦が沈められてね」

「そうだったね。単独行動だったから救援が遅れて」

「鮫がうようよ出てそれこそ」

「あれは怖かったと思うよ」

アメリカも珍しく深刻な口調です。

「いや、カリブ海なんかを見て思うけれど」

「兄貴鮫嫌いだよね」

「好きな人はいないじゃないか」

国でも同じです。理由は簡単でとても怖いお魚だからです。

「あんなのが周りをうろうろしたらもうそれだけで」

「怖くて仕方ないね。あたしもそうだし」

「そうだろ？だから遠洋で泳ぐのも本当は危険なんだよ」

「海水浴場もしっかりとした場所じゃないとね」

「鮫は本当に来るから」

コップ一杯の血を海の中に溢すとです。五キロ四方の鮫が寄って来るとも言われています。

「あの巡洋艦の報告を聞いて本当に怖かったから」

「映画にもなってるしね。それも作品多いし」

アメリカも鮫の怖さはよく知っています。あの名作白鯨を見てもです。鮫が出て来ていたりします。アメリカと鮫も結構縁があります。

第二千三百五十八話　完

2011・10・13

第二千三百五十九話　鮫だらけ

第二千三百五十九話　鮫だらけ

日本はオーストラリアの周りをうようよしている鮫を見ました。するとその中には。

「あの巨大な鮫がいますね」

「マンイーターシャークでごわすな」

滅茶苦茶怖い名前の鮫でした。

「日本ではホオジロザメとか言ったと思うでごわすが」

「はい、まさにそれです」

日本ではホオジロザメと呼ばれているあのとても危険な鮫までうようよしています。絶滅が危惧されているそうですがそれでも一杯います。そして他にも。

「アオザメにヨシキリザメもいますね」

「モロシャークにブルーシャークでごわす」

「それにイタチザメも」

「タイガーシャークというでごわす」

「本当に鮫が多いですね」

流石に日本も引いています。額に汗があります。

「それもどの鮫も」

「人を食うでごわす」

そんな鮫ばかりです。

「だからあそこに落ちたら終わりでごわすよ」

「まさに一巻の、ですね」

「海には気をつけるべきでごわす」

「オーストラリアさんの海を見ているとそう思います」

鮫、鮫、鮫、さらに鮫です。オーストラリアの海はとても危険です。人食い鮫がこれでもかという位数多くいるのですから。種類も豊富です。

第二千三百五十九話　完

2011・10・14

第二千三百六十話　フカヒレにしても

第二千三百六十話　フカヒレにしても

中国は自分のお料理にフカヒレを使います。けれどです。
「僕自身はあれは獲らないあるからな」
「あんな怖い魚どうして獲るあるか」
中国妹も怖がっています。
「人を食べるある。無茶苦茶な魚ある」
「全くある。海の虎や豹あるよ」
中国にはそうした動物もいます。特に虎は水滸伝の隠れた名脇役です。
「あんな悪魔の様な魚ヒレがないと食べないあるよ」
「そうした意味で鮫を獲る日本さんには感謝あるよ」
何気にこうしたところでは日本に依存している中国と中国妹です。
「けれど鮫は本当に」
「オニカマスと並んで最悪の魚あるよ」
バラクーダのことです。イタリアが昔映画にしたこともある魚です。
「あんな凶悪な魚他にいるあるか？」
「多分ないある」
「全く。鰐も怖いあるが」
中国の長江の鰐は冬眠します。唯一冬眠する鰐です。けれどこの鰐は小型なのでアフリカとかの鰐に比べればずっと安心できます。
「鮫は何とかならないあるか」
「食べるのいいけれど食べられるのは嫌ある」
「ヒレは美味しいあるがな」
中国も怖いものがあるのです。鮫は食べますが自分では獲りません。そして鮫が人を食べることはとても怖いと思っているのです。

第二千三百六十話　完

2011・10・14

第二千三百六十一話　んなこたーない

日本はオーストラリアの周りを我がもの顔で泳いでいる鮫達を見ながらオーストラリアに尋ねます。
「そういえばオーストラリアさんのところでは鮫と親しまれているそうですが」
「人を食う連中とでごわすか！？」
オーストラリアははぁ！？といった顔で日本に言い返します。
「そんな物好きがいるでごわすか」
「以前オーストラリアさんのところに移住しておられた私の国の漫画原作者が言っていましたが」
あの似非グルメ漫画の原作者でリアルでお店の食事がまずいとそれだけで怒鳴り散らして回っていたミスター営業妨害の人です。
「その人が言ってました」
「じゃあ日本はあの中で泳げるでごわすか」
オーストラリアはその鮫の三角鰭の群れを指差しながら尋ねます。
「どうでごわすか？」
「確実に死ねますね」
「そうでごわす。鮫は舐めてはいけないでごわす」
オーストラリアは真顔で言います。
「その人は嘘を吐いているか妄想をほざいているでごわすな」
「確かに。非常に粗野というか粗暴な人ですが」
「鮫は頭がよくないでごわす。そういうことを言う人間も」
「鮫と同程度ということですか」
「おいどんはそう思うでごわす」
これがオーストラリアの言葉でした。
鮫は少なくともおいそれと親しめる生き物ではありません。何し

ろ何でも食べるのですから。これはオーストラリアが一番よく知っていることです。

第二千三百六十一話　　完

２０１１・１０・１５

第二千三百六十二話　白は危険

第二千三百六十二話　白は危険

日本が着ている軍服は白です。大抵の国は陸軍の軍服を着るのですが日本は格好いいので海軍の、しかも夏の礼装を好んでいるのです。

けれどこの軍服についてです。日本は陸地の国家であるハンガリーにお話します。

「海に落ちた場合は危険です」

「あれっ、そうなんですか」

「はい。海は青いですね」

まずはこの青があります。

「それでこの白は非常に目立ちます」

「救助の時によく見えませんか？」

「それ以上に鮫に見られます」

ここでも鮫でした。

「鮫は動くものや青と白のコントラストを見ますので」

「それでなんですか」

「はい、白ければそれで喰らいついてきます」

血の匂いにも敏感ですが動きや色も見るのです。

「ですから実は海で白は鮫については危険なのです」

「だから海軍の作業服は青や紫なんですね」

「はい。私の国の海軍の昔の作業服は白でしたが」

物凄く危険だったのです。海に落ちた時は。

「今は全てそうした色にしています」

「鮫は色も考えないといけないんですね」

つまり嫌な奴には白い服なりそのままで遠洋で泳いでもらえばいいのです。それだけで鮫が寄って来て御飯にするので。鮫は色も見る生き物なのです。

第二千三百六十二話　完

2011・10・15

第二千三百六十三話　メガロドン

第二千三百六十三話　メガロドン

日本は鮫達の鰭の中にです。物凄く大きなものを見ました。

とにかく尋常な大きさではありません。それで眉を顰めさせながらオーストラリアに尋ねます。

「あのやたらと大きな背鰭の鮫は御存知ですか？」

「いや、おいも知らないでごわす」

何とオーストラリアも知らない鮫でした。

ホオジロザメの背鰭もありますがそれの三倍はあります。それを見てです。

日本はふと。あの昔の鮫を思い出しました。

「メガロドンでしょうか」

「確か四十メートルあったでごわすな」

「はい、怪物の様に巨大な鮫でした」

「あれは絶滅したのではなかったでごわすか？」

「その筈ですが」

実際に絶滅したと思っていた生き物が生き残っていることはよくあります。それが新発見となることもままにしてあるものです。

けれどです。今二人が見ているそれは。

「まさかとは思いたいですが」

「いるでごわすか？あの怪物が」

「いるとしたらＵＭＡどころではありませんよ」

「全くでごわす。調べたいところでごわすが」

けれど下手な船で鮫達のところに行っても御飯になるだけです。

二人は唖然としながらその巨大な背鰭を見続けています。本当にその大きさたるや。

小舟なんて問題になりません。ホオジロザメどころかジンベエザメよりも大きいです。その巨大な背鰭が悠然と泳ぎ回っています。

第二千三百六十三話　完

2011・10・16

第二千三百六十四話　泳いでいないと

第二千三百六十四話　泳いでいないと

日本の水族館にも鮫がいます。巨大な水槽の中を悠然と泳いでいます。

その鮫達を見てです。鮫のいない寒い国のフィンランドが尋ねました。

「鮫はいつも泳いでますね」

「はい、大抵の鮫は泳いでいないと駄目なのです」

「常にですか」

「そうです。身体を動かしていないと駄目なのです」

日本はこうフィンランドにお話します。

「身体の構造がそうなっていまして」

「じゃあ泳ぐのを止められると」

「死にます」

それだけで死ぬのです。大抵の鮫は。

「それこそ確実にです」

「そうなんですか。死ぬんですか」

「ですから鮫は捕まえられたらすぐに死んでしまいます」

猟師に捕まったらです。それで終わりなのです。

鮫の弱点ですがこのことがです。一つ問題になるのでした。

「ですから。水族館に運ぶのもです」

「大変みたいですね」

「大きな鮫であればあるだけ大変です」

何しろ常に泳いでいる状態にしておかないと駄目だからです。

日本もその鮫達を見ながらフィンランドにお話します。

「彼等をここまで連れて来るのも苦労しました」

ただ狂暴なだけではなくそうした弱点もあったりするのです。鮫

という生き物はかなり厄介です。飼育するのも大変だったりするのですから。

第二千三百六十四話　　完

２０１１・１０・１６

第二千三百六十五話　人食い鮫の割合

第二千三百六十五話

人食い鮫の割合

やけに巨大な背鰭の鮫を筆頭にとんでもない数の鮫がうようよ動いているのを見ながらです。日本はオーストラリアにぽつりと言いました。

「確かに人食い鮫は目立ちますが」

「何かあるでごわすか？」

「鮫の種類の中の一割位です」

全ての鮫が人を襲う訳ではないというのです。

「三百種の中の三十種程です」

「そういえばそうした鮫が目立つでごわすが」

「種類は少ないですね」

「そうでごわすな」

オーストラリアも日本に言われて気付きました。

「マンイーターシャークやそうしたものばかりでごわす」

「確かに目立ちますが種類としては少ないです」

「小さい鮫もいるでごわす」

「はい、それにそうした鮫は数も少ないですし」

鮫全体の数としてみればです。

「ですから鮫が全てそうではないということです」

「うちじゃ鮫は全部人を食うと思っていたでごわす」

「そうではないです。大人しい鮫の方がずっと多いです」

「鮫が人を食うものばかりというのも偏見でごわすか」

「はい、そうかと」

全ての鮫が狂暴なものばかりではありません。その殆どは無害なものなのです。確かに人食い鮫はとても目立ちはしますが。

第二千三百六十五話　完

2011・10・17

第二千三百六十六話　止まる鮫

第二千三百六十六話　止まる鮫

台湾は普通の水槽の中の鮫達を見て少し驚きました。そうして日本に尋ねます。

「あの小さい鮫達は」

「ネコザメにドチザメですね」

「止まってますよね」

コミカルな顔をしたブラウンの鮫に黒い鮫、どちらもかなり小さいです。その鮫達は水槽の下の方にいて殆ど動くことがありません。

台湾はその鮫達を見て日本に尋ねるのです。

「あの、全然暴れたりとかは」

「しません。ああして止まることもできますし」

「鮫でもなんですか」

「そうした鮫もいます」

鮫が全ていつも動いていないと死んでしまうという訳でもないのです。

「そしてこの鮫達は大人しいです」

「そうみたいですね」

そのことは台湾にもわかりました。

「全ての鮫がホオジロザメみたいなのじゃないんですね」

「あの鮫はまた特別ですから」

「特別狂暴な鮫なんですね」

「しかも数も少ないですから」

こう台湾にお話します。

ネコザメもドチザメも大人しく水槽の下の方に留まっています。そうして殆ど動くことはありません。

台湾もそうした鮫達を見て和むものを感じました。鮫も種類によっては人に癒しを与えてくれるのです。怖いだけが鮫ではありませ

ん。

第二千三百六十六話　完

2011・10・17

第二千三百六十七話　恐竜対鮫

第二千三百六十七話　恐竜対鮫

日本とオーストラリアのところにニュージーランドも来ました。
彼もまた鮫達を見ながらです。二人に対してこんなことを言いました。
「鮫も恐竜には勝てないでしょうね」
「いえ、結構苦戦したそうですよ」
日本がニュージーランドに答えます。
「私の家のフタバスズキリュウという恐竜の化石に鮫の歯が付いていまして」
「ということはですか」
「はい、鮫は古代からいまして」
かなり古い魚であるのです。
「そして恐竜とも戦っていました」
「じゃあ恐竜でもですか」
「何しろメガロドンみたいなのもいましたし」
その化け物みたいに巨大な鮫もです。
「ですから恐竜といえどもです」
「ううん、勝てないこともあったんですか」
「そうみたいです。今でも大きな魚でも食べられますし」
「そうですよね。鮫自体も大きいですし」
「確かに恐竜達も強かったですが」
実際には強いどころではありませんでした。
「しかし鮫には中々苦戦していました」
「そんなに強いんですね。奴等」
鮫は昔からいてとても強かったのです。それこそ恐竜ですら危ないことがあった位に。考えてみればとても怖いことです。恐竜並に怖い魚なのですから。

第二千三百六十七話　完

2011・10・18

第二千三百六十八話　古代の鮫

第二千三百六十八話　古代の鮫

日本妹は昔の鮫の本を読んで驚きました。何とです。
歯が異常に突き出た鮫や下顎が回転ノコギリみたいになった鮫までいたのです。特にその回転ノコギリみたいな顎の鮫を見てです。
日本に驚きながら言いました。
「あの、お兄様昔の鮫は」
「凄いですよね。私も驚きました」
日本もその鮫を見ていたのです。本で。
「そんな鮫がいたのかと」
「今いたら大騒ぎですよね」
「というか今の時代にそうした魚はいません」
そもそも存在すらしていません。今は。
「かつてカンブリア期には奇怪な生き物が多かったですが」
「アノマロカリスとかですよね」
その頃は勿論どの国も存在していません。といいますかどの国も恐竜はおろか哺乳類の最初の頃も知りません。そうした時代のことは。
「何か鮫もですよね」
「カンブリア期の頃の様にですね」
「今見ると変わった形の鮫がいたんですね」
「進化の試作でしょうか」
日本は首を傾げさせながら言いました。
「ああした鮫達がいたのも」
鮫といっても日本達が知っているあの形の鮫達だけではなかったのです。中にはシュモクザメよりも変わった形の鮫もいたのです。
大昔には。

第二千三百六十八話　完

2011・10・18

第二千三百六十九話　深海にも

第二千三百六十九話　深海にも

日をあらためてです。日本はオーストラリア、ニュージーランドと一緒に潜水艇を使って深海に入りました。そこで見たものはといいますと。

「あの白い大きな魚は何でごわすか？」

「幽霊みたいばい」

顔が怖いです。オーストラリアとニュージーランドはその魚を見て日本に尋ねます。

「見たこともない魚でごわすが」

「あの魚は一体」

「ミツクリザメです」

日本は二人にこの鮫の名前を教えました。

「それがあの魚です」

「鮫でごわすか、あの魚も」

「そうなのばい」

「はい。深海にも鮫はいます」

もっと正確に言えば鮫の種類がです。

「ただ浅い海にいるだけではないのです」

「成程、分布は広いでごわすか」

「深海にもいるばいね」

「そうです。鮫と一口に言ってもです」

日本もそのミツクリザメを見ながら言います。

「こうした鮫もいるのです」

「そういえば他にも鮫みたいなのがいるでごわすな」

「深海にもだったばい」

鮫は深海にもいるのです。本当に人食い鮫だけが鮫ではありません。

第二千三百六十九話　完

2011・10・19

第二千三百七十話　エイもそう

第二千三百七十話　　エイもそう

日本は韓国のホンタクを前にして唖然としています。
「あの、これは幾ら何でも」
「どうしたんだぜ？食わないんだぜ？」
「遠慮します」
日本もです。ホンタクは駄目でした。
かくしてホンタクの代わりに出された焼き肉を食べることになりました。それを食べながらです。日本は韓国にこんなことをお話しました。
「エイは鮫に近いのです」
「そうなんだぜ？外見が全然違うんだぜ」
「生物学的にはそうなっています。実際にです」
日本は焼き肉を食べていますがここでお話することは。
「味は鮫と近いものがありますね」
「そういえばそうなんだぜ」
韓国も言われてわかりました。韓国は日本のお家で鮫を食べたことがあるのです。
それで言うのでした。鮫とエイの味について。
「鮫とエイは近い味なんだぜ」
「アンモニアも多く含まれています」
「ううん、意外な接点なんだぜ」
「尚ノコギリザメですが」
よく漫画とかに出て来るあの頭のところが本当にノコギリみたいになっているその魚も。
「鮫ではなくエイに分類されます」
「あれもそうだったんだぜ。俺も知らなかったんだぜ」
韓国にとっては衝撃の事実でした。何と鮫とエイは近い関係にあ

るのです。

第二千三百七十話　完

2011・10・19

第二千三百七十一話　ミツクリザメ

第二千三百七十一話　ミツクリザメ

　日本は今彼等の目の前で泳いでいるミツクリザメについてです。オーストラリアとニュージーランドに対してお話をするのでした。
「この鮫は非常に珍しい鮫でして」
「深海魚だからでごわすな」
「はい、それもありますが」
　理由はそれだけではないというのです。
「古代からいて。しかも個体数が非常に少なくて」
「滅多に見られるものではないばいね」
「そうです。こうして出会うことはそれこそです」
　日本はこう例えるのでした。ミツクリザメに出会えることは。
「ファイナルファンタジーの三番目のお話でドラゴンに会う様なものです」
「おい一回しか会ったことないでごわすよ」
「おいどんもばい」
　こう聞くと二人にもよくわかりました。そのゲームを知っているからです。
「ううむ、そこまで稀少でごわすか」
「ではこうして見られること自体が」
「本当に幸運でした。私のお家の傍にもいますが」
　駿河湾辺りの深海にです。
「本当に出会えるのは稀ですから」
「なら写真を撮っておくでごわすよ」
「学術的な意味でもそうするばい」
　二人はこの出会いを逃しませんでした。実際にその鮫の写真を撮影したのです。まさに見られただけでも幸運な鮫ですから。

第二千三百七十一話　完

2011・10・20

第二千三百七十二話　イトマキエイ

第二千三百七十二話　イトマキエイ

日本は今海であの伝説の魚を見ています。
海面から出て空を舞うその魚こそは。
「素晴らしいですね」
「はい、こうして見られることは稀ですから」
「全くです。これがイトマキエイの飛ぶ姿ですか」
平べったく大きなエイ、それが今舞っているのです。日本はインドネシアが動かす船に乗ってそこからそのイトマキエイを見ているのです。
「感動しました」
「僕も久し振りに見ました」
インドネシアもその飛ぶ姿を見て感動しています。
「このエイはとても数が少ないですから」
「そうですね。ましてやこうして舞う姿は」
「そう見られませんよ。運がよかったです」
「全くです。ただ」
「ただ？」
「私はイトマキエイと呼んでいますが」
これは日本の呼び方で他の国では。
「マンタでしたね」
「そうです。これがあのマンタです」
「海のロマンの一つですね」
そのロマンが今日本とインドネシアの前で舞っているのです。
海には色々な生き物がいて神秘を見せていますがこのイトマキエイもなのです。空すら舞う巨大なエイは水滴を撒きそこに虹がかかっていました。

第二千三百七十二話　完

2011・10・20

第二千三百七十三話　深海魚ではなくとも

第二千三百七十三話　深海魚ではなくとも

日本とオーストラリア、ニュージーランドは深海でミツクリザメを観てからです。一旦海の上にあがってそこから船の上から海の鮫達を見ました。

その中で、です。日本はある鮫を見て言います。

「あの鮫ですが」

「ハンマーヘッドシャークでごわすな」

見れば本当にトンカチみたいな頭の形をしていてその両端に目がある変わった鮫がいます。

「あれは有名でごわすよ」

「我が国ではシュモクザメといいます」

勿論人食い鮫です。

「あれを見た時はかなり驚きました」

「おいもでごわす。あんな鮫がいるとはほんなごつ驚いたでごわすよ」

「深海魚でなくともいますからね」

そうした変わった形の鮫はです。

「鮫といっても色々ですが」

「それでも特にでごわすな」

「シュモクザメの形は変わっています」

かなり独特という意味です。

「しかも結構以上に大きいですし」

「三メートルや四メートルあるものもいるでごわす」

「ですから怖いです。あの大きな頭は視界を広くする為ですし」

そのトンカチみたいな形の頭の両端に目があるからです。その分広範囲に見られるのです。

シュモクザメは日本も知っていました。浅いところにいる、人が泳ぐ様な場所にもです。こうしたユニークな鮫がいるのです。ただし人を襲います。

第二千三百七十三話　　完

２０１１・１０・２１

第二千三百七十四話　瀬戸内海には一杯

第二千三百七十四話　瀬戸内海には一杯

日本はやや深刻な顔で自分の国の海を見ています。そこは瀬戸内です。

一緒にいるベトナムがです。こう日本に言います。

「ここは確か海軍兵学校がありましたね」

「はい、江田島にあります」

今は海上自衛隊幹部候補生学校です。歴史ある場所です。

尚この海は世界屈指の難所で小島も潮流も多くしかも漁船と網だらけです。そんな迷路みたいな複雑な海としても有名なのです。

その瀬戸内においてです。日本は言いました。

「ここは鮫もいまして」

「比較的暖かいからですね」

「シュモクザメが多いです」

そのハンマーヘッドシャークです。

「それが出た時は幹部候補生学校の遠泳訓練も中止になります」

「食べられたら終わりですからね」

そうした切実な理由があってのことです。

「だからですね」

「シュモクザメは群れを為します」

一匹でも怖いというのにです。

「それこそ何十匹も来ますので」

「何十もですか！？」

それを聞いて流石のベトナムも驚きます。

「それはまたかなり」

「だからこそかなり怖いのです」

日本近海にもです。そんな怖い鮫がいるのです。海には注意です。

第二千三百七十四話　完

2011・10・21

第二千三百七十五話　ハロウィンになると

第二千三百七十五話　ハロウィンになると

ロシアがです。にこにことして言うのでした。
「もうすぐハロウィンだよね」
「ロシアさんもハロウィンを楽しまれるんですか？」
「最近知ったんだ」
ラトビアの問いにこう答えます。
「いやあ、参加してみると楽しいよね」
「よかったですね、それは」
「うん。ハロウィンってあれだよね」
ロシアのにこにことしたままの言葉はどういったものかといいますと。
「怖がらせたらいいんだよね」
「えっ、そうなんですか？」
「そうだよね。だからね」
ロシアは言うのでした。
「この前のハロウィンじゃね。来てくれた子供に」
「まさかシベリアに」
「頭蓋骨を見せてあげたんだ」
いきなりホラーです。
「本物ね。サンクトペテルブルグのところ拾ったかなり古い頭蓋骨をね」
「あの、本当に子供に見せたんですか」
「凄く驚いて逃げていったよ。怖がってくれて何よりだったよ」
「そ、そうなんですか」
笑顔でそのことをお話するロシアでした。やっぱりロシアはロシアです。やること為すこと半端ではありません。というかハロウィ

ンを明らかに勘違いしています。

第二千三百七十五話　　完

2011・10・22

第二千三百七十六話　恐怖の人骨都市

第二千三百七十六話　恐怖の人骨都市

エストニアはとても怖い顔になってフィンランドにお話します。

「ロシアさんのお家の都市でサンクトペテルブルグという町がありますね」

「あの町ですよね」

「御存知ですよね、フィンランドさんも」

「はい、近いですから」

見ればフィンランドも怖い顔になっています。歴史のことをお話する筈なのに何故か怪談をする時の顔になっています。それも二人共。

「あそこは最初はただの雪原でした」

「けれどロシアさんの上司の方があそこに町を築こうと思われて」

あのピョートル大帝です。ロシアの上司だった人の中でもかなり有名な人です。

「そうしてできた町で」

「北極圏の泥と雪と氷の中での労働でしたから」

人がどんどん倒れていきました。作業に当たる、即ち死刑みたいなものだったのです。

「多くの犠牲を払ってできた町でしたね」

「しかもですよ」

エストニアはさらに言います。

「この前の戦争では激戦地の一つで」

「何年も包囲しましたからね」

ドイツだけでなくフィンランドも参戦してでした。

「もうそれで飢餓状態になって」

「そうしてまた多くの犠牲者が出ていますから」

そうした曰くつきの町なのです。よく見れば名前もかなり変わっ

ています。ですがその仇名は変わりません。人骨都市という仇名だけは。

第二千三百七十六話　　完

２０１１・１０・２２

第二千三百七十七話　ベラルーシとお菓子　☆

ベラルーシにもハロウィンはあります。しかしです。
ベラルーシはラトビアにです。怖い顔で言うのでした。
「お菓子はあげないわ」
「そうですか」
「私のところでもハロウィンをやるようになったけれど」
それでもだというのです。
「そういうことはしないから」
「わかりました」
「何も言わないの？そのことについて」
普通はハロウィンといえばお菓子だからです。それなのにお菓子をあげないというベラルーシにです。ラトビアは何も言いません。
そのことにベラルーシ自体も突っ込みを入れたのです。
「普通は聞くところだけれど」
「ベラルーシさんですから」
ラトビアは怯えながら答えます。
「そうだろうな、って思って」
「私だからなの」
「もっと言えば御自身でも当然だと思ってません？」
お菓子をあげない、そのことについてです。
「その辺りはどうなのでしょうか」
「確かに思っているわ」
ベラルーシ自身もそのことを認めます。
「そんな国じゃないから、私は」
「だからです」
そんなベラルーシです。彼女自体が怖いのでハロウィンもあまり

意味がないかも知れません。

第二千三百七十七話　　完

2011・10・23

第二千三百七十八話　ハロウィン前なのに

第二千三百七十八話　ハロウィン前なのに

「日本から貰ったものなんだぜ」
「ああ、あの泥鰌を自称する上司の人よね」
台湾がまさにマンセー状態の韓国に対して言います。見れば韓国はその手に抱えきれないだけのお菓子を持っています。全部日本のお菓子です。
「スワップでよね」
「そうなんだぜ。気前のいい上司なんだぜ」
「日本さんには気前がよくないみたいだけれど」
日本には増税という上司だったりします。
「何か庶民派っていう割には料亭行ってるし」
「そんなの俺の知ったことじゃないんだぜ」
他の国の上司の重要なことは自分自身にとってどうなのか、この辺りシビアです。
「俺にはこの通りなんだぜ」
「そういえばあの人もあんたと前から仲いいのよね」
台湾はこのことを言いました。
「前の上司の人もその前の上司の人も」
「そうなんだぜ。有り難いことに」
「日本さんの上司なのにあんたの方に肩入れするし」
「素晴らしい人なんだぜ」
「日本さんにとってはたまったものじゃないわね」
勿論台湾には冷たい人達です。そしてとりわけ。
「あんたの北にいるあいつには一番優しいし」
このことは口には出さない台湾でした。このことは日本も国民も真剣に疑っています。まさかあのならず者と今の上司の人達は癒着

しているのではないかとです。特に前の一番偉い上司はです。

第二千三百七十八話　　完

２０１１・１０・２３

第二千三百七十九話　秋月　☆

第二千三百七十九話　秋月　☆

ラトビアもハロウィンを楽しみます。彼のその時の格好は動物をモチーフにしたものです。その格好を見てエストニアが尋ねます。

「どうして動物なんだい？」

「僕の家じゃ昔から秋の月にお祭りする習慣があったから」

「ああ、それでなんだ」

「うん、それで妖怪じゃなくてね」

動物だというのです。

「ハロウィンもこれでいいよね」

「いいと思うよ。皆それぞれの格好してるし」

「そうだよね。それじゃあ」

こうしてラトビアは動物、何か狐か犬みたいな格好をしています。

そのラトビアにです。エストニアはこう言うのでした。

「じゃあハロウィンのことだけれど」

「普通に楽しんでいいよね」

「けれどロシアさんのところには行かない様にね」

このことは忠告でした。

「理由はわかると思うけれど」

「わかるよ。ロシアさんだから」

「怖いよ。ハロウィンのロシアさんは」

普段以上にです。

「怖い思いをしたくなかったらね」

「絶対に近寄ったら駄目だよね」

ラトビアは震えながら言います。いつもそうなのですが今の格好でしているとです。普段以上に小動物に見えます。ストレスで死にそうな。

第二千三百七十九話　完

2011・10・24

第二千三百八十話　本当に友達いないのか

第二千三百八十話　本当に友達いないのか

ラトビアはハロウィン前も一人です。そのラトビアを見てドイツとプロイセンが声をかけます。

「リトアニアやエストニアはいないのか？」

「一緒じゃなかったのかよ」

「リトアニアはいつもポーランドと一緒にいますから」

ラトビアはまずはリトアニアのことをお話します。

「エストニアはフィンランドさんと」

「そうか。それで一人なのか」

「バルト三国っていってもなんだな」

「あの、よかったらですけれど」

その一人のラトビアがドイツとプロイセンに言葉を返します。怯える様子で。

「一緒に・・・・・・」

「ドイツーーードイツーーーーー」

「ああ、来たか」

「よおイタちゃん元気か？」

ラトビアが言うより前にです。イタリアがドイツとプロイセンのところに来ました。二人の関心はラトビアから彼に移ってしまいました。

二人はイタリアのところに行きます。そうして彼に言うのでした。

「全く。今日は大丈夫なんだろうな」

「いいじゃねえか相棒、イタちゃんはイタちゃんのままでいいんだよ」

何だかんだで優しいドイツとイタリアにはあからさまに優しいプロイセンです。けれどです。

ラトビアは一人になってぽつりと言うのでした。

「誰か。友達になって欲しいんだけれど」
彼にとっては切実な問題です。お隣にああいう人がいることもあって。

第二千三百八十話　　完

２０１１・１０・２４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3541d/

ヘタリア学園

2011年10月24日16時03分発行